# 恋姫伝説　ＭＡＲＫ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＦＬＯＷＥＲＳ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋姫伝説　ＭＡＲＫ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＦＬＯＷＥＲＳ

【Ｎコード】
Ｎ４８６３Ｐ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
　これは外史の一つ。黒髪の山賊退治の英雄関羽はある少女の話を聞いた。そこからはじまる大きな渦とは何なのか。恋姫とＳＮＫ作品のクロスオーバーです。オリジナルキャラも大勢出ます。こちらにも掲載してもらっています。
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐａｉｎｗｅｓｔ．ｎｅｔ／

# 第一話　関羽二人の少女と会うのことその一

恋姫伝説　ＭＡＲＫ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＦＬＯＷＥＲＳ

第一話　関羽二人の少女と会うのこと

時は二世紀も終わり。この頃中国は戦乱の中に陥ろうとしていた。長きに渡って繁栄を極めた漢王朝も衰え国中に賊が蔓延り群雄達が台頭しようとしてきていた。その中で今闇の勢力もまた胎動しようとしていた。

「はい、左様です」

「俺達がそうさ」

闇の中である者達が話をしていた。

「あんた達の探していた人間よ」

「まあ一応は人間だけれどね」

「左様ですか」

殷懃な声が四人の声に応えていた。

「貴方達がですね」

「その通りです。こちらの世界に参りました」

「まあ俺達はここで復活させればいいだけだしな」

「それはそれで面白そうだし」

「ここにも強い奴は一杯いるんだよね」

四人はそれぞれその殷懃な声に応えていた。

「その通りです」

「それは安心してくれ」

殷懃な声だけではなかった。もう一人いた。

「女性が殆どですが」

「強い奴には事欠かない世界だ」

「そうですか。それは何よりです」

「まずは力と力のぶつかり合いからだからな」
「それが私達の神を復活させるさらなる力になるから」
「好都合だからね」
こう話す四人だった。そして彼等はさらに言うのであった。
「それにです。私達だけではありません」
「といいますと」
「そちらの世界からも来るのか」
「はい」
四人を代表して一人が答えてきた。
「その通りです。大勢の方がこちらに来られます」
「どうやら。私達の思惑は気付かれているようですね」
「そうだな」
二人はそれぞれ言った。
「既に彼等には」
「隠したつもりだがな」
「いえいえ、それはそれでいいことです」
また四人の方から声がしてきた。
「あの方々の目の前で私達のことを成就させるだけですから」
「自信がおありなのですね」
「見たところ」
「無論です」
こう二人に答える彼だった。
「まずは私の風と」
「俺の大地」
「そして私の雷」
「僕の炎があるよ」
四人は実に楽しそうに話してきた。
「あちらもまず四神がいて」
「四仏もいるわね」
「そして三種の神器もね」

「ふむ。あちらの世界も面白いのですね」
「そうだな」
二人は四人の言葉を聞いて述べるのだった。
「そうしたものが存在しているとは」
「どうやら。面白い戦いになりそうだな」
「はい、楽しませてもらいます」
「是非な」
四人のうちの二人が応えてきた。
「これから思う存分」
「そうさせてもらうからな」
「じゃあこれで決まりね」
「面白おかしくやろう」
後の二人も言ってきた。
「この私の雷も退屈で仕方がなかったし」
「僕も暴れたくてうずうずしていたし」
「はい、それでは」
「楽しくやるとするか」
闇の中で何かが胎動していた。そして今中原に謎の影達が降り立った。それに気付いた者は今は誰もいはしなかった。
幽州。ここは漢の北の端にある。太守は公孫賛というが彼女のことを知る者はまるでいない。その?県において今一人の長い黒髪の少女が三人の賊と対峙していた。

# 第一話　関羽二人の少女と会うのことその二

「何だ、おい」
「やろうってのか！？俺達と」
「戦うのではない」
その長い黒髪の少女は毅然として言い返した。きりっとした端整な顔立ちをしており目が鋭くしかも強い光を放っている。黒いミニスカードにブラウンのハイソックス、それと白と緑の丈の長い上着を着ている。その手には巨大な青龍偃月刀がある。かなりの重さであると思われるがそれを軽々と持っている。
「倒すのだ」
「何っ！？」
「倒すっていうのかよ」
「そうだ」
またしても毅然とした言葉で返してみせた。
「御前達賊を倒す」
「この小娘」
「よく言ってくれるな」
「名前は何ていうんだ？」
一人が彼女に問うた。
「冥土の土産に聞いてやるぜ。何ていうんだ？」
「関羽」
少女はその問いに応えて名乗った。
「関羽雲長だ。これが私の名前だ」
「何っ、関羽！？」
「関羽っていうとまさか」
ここで賊達はある名前を思い出したのだった。
「あの山賊退治で有名な」
「黒髪の絶世の美女か」

「ふっ、私の名前も知られるようになったものだな」
関羽は彼等の言葉にまずは笑った。
「何時の間にか」
「噂程じゃないよな」
「なあ」
「なっ・・・・・・」
こう言われてずっこけた顔になった。
「聞いていたのと違うしな」
「そうだよな」
「違う？」
関羽は山賊達の今の言葉に今度は眉を顰めさせた。
「何がだというのだ？」
「いやよ、背は高いし」
「胸もでかいし」
そのかなり巨大な胸もしっかりと見られていた。
「おまけにその馬鹿でかい得物だしな」
「刀じゃないのか？」
「刀も使うが私の武器はあくまでこれだ」
その青龍偃月刀を持ちながらの言葉である。
「この青龍偃月刀だ」
「しかも鷹連れてないしな」
「噂と全然違うぞ」
「鷹？話が全然わからないのだが」
関羽にしてはさらにわからない話だった。
「御前達は一体何を言っているんだ？」
「だからよ。黒髪の山賊退治のな」
「違うのか？」
「だから何を言っている」
やはり関羽にはわからない話だった。
「それは私ではないのだな」

「噂が尾ひれがついたのか？」
「そうかもな」
「ここにいたのですね」
そしてだ。また一人出て来た。
黒く長い髪に澄んだ瞳をした美しい少女だ。小柄で細い身体をしている。白地に赤を配した着物に近い上着とズボンである。その右手には短い刀があり鷹を連れている。その少女も出て来たのである。
「貴方達にも大自然のお仕置きを」
「あっ、そうだよこいつだよ」
「こいつなんだよ」
ここで言う山賊達だった。
「こいつがその山賊退治のよ」
「黒髪の女なんだよ」
「私以外にもそうした武芸者がいたのか」
「ナコルルといいます」
少女は自分から関羽に名乗ってきた。

# 第一話　関羽二人の少女と会うのことその三

「貴女は」
「私か」
「はい、貴女は何というのでしょうか」
関羽の横に来て問うのだった。
「宜しければお名前よ」
「関羽だ」
こう名乗るのだった。
「字は雲長」
「何っ、関羽!?」
「雲長っていったら」
ここでまた言う山賊達だった。その言葉はかなり驚いたものである。
「この国でも指折りの武芸者の」
「あの女かよ」
「そうかも知れん」
ここではあえてこう言う関羽だった。
「そしてだ。私はその山賊退治のだ」
「関羽さん」
ナコルルが構えながら言ってきた。
「気をつけて下さい」
「わかっている」
彼女が何を言いたいのか関羽にもわかっていた。
「この三人だけではないな」
「百人はいます」
周りを軽快する鋭い声であった。
「周りに」
「そうだな。わかっているのだな」

「気配でわかります」
まさにそれによってというのだ。
「例え何も言わずともです」
「そうだな。それではだ」
「はい」
「ナコルルといったな」
ここで彼女の名前を再度確かめた。
「聞かない名前だが共に戦おう」
「御願いします」
「さあ来い！」
その得物を両手に構えながら山賊達に告げる。
「命が惜しくなければかかって来い！」
「ママハハ！」
ナコルルも今度は鷹に対して言う。
「戦いましょう」
「なろお、女だからって容赦しねえぞ！」
「やっちまえ！」
ここで周りから山賊達が一斉に出て来た。そのうえで二人に襲い掛かる。しかしであった。
「ふんっ！」
関羽がその青龍偃月刀を振り回しすぐに何人も吹き飛ばす。
「貴様等なぞ相手ではない！」
「アンヌムツベ！」
ナコルルは姿勢を低くして突進し刀を振るいそのうえで山賊達を吹き飛ばす。関羽はそれを見て言う。
「強いな」
「アイヌの精霊の力です」
こう関羽に返すのだった。
「ですから」
「そうか、精霊の力か」

「はい、そうです」
こう話してであった。鷹の力も使い倒していく。忽ちのうちに山賊達は蹴散らされ残っているのはあの三人だけになっていた。
しかしその三人もだ。瞬く間に蹴散らされ慌てて遁走してしまった。
「お、覚えてやがれ！」
「今度会った時は容赦しねえからな！」
こう言って逃げ去るのだった。森の中は再び静かになった。
二人だけになると共に歩きはじめた。関羽はここでようやく落ち着いてその少女ナコルルと話すのだった。
「日本！？」
「はい、その蝦夷の地から来ました」
ナコルルは関羽と共に歩きながらこう答えるのだった。
「そこからです」
「日本。蝦夷」
「そこから海を越えてあらゆる国を巡っていました」
こうも言うのであった。
「よからぬ気配が世に満ちているのを感じまして」
「そしてこの漢の国にも来たのか」
「ですが不思議なのです」
ここでナコルルは首を傾げさせて言うのだった。
「それが」
「不思議！？」
「はい、この時代は私がいた時代とは違います」
「！？どういうことなんだ？」
「わかりません。ですが私のいた時代はです」
ナコルルはそのことを話す。

# 第一話　関羽二人の少女と会うのことその四

「この時代より遥かに先の時代です」
「言っていることがよくわからないが」
だからといってナコルルが嘘をついているとは思えなかった。少なくとも彼女がそうしたことをするような人間でないことはわかった。しかしであった。
「しかし」
「どういったことでしょうか」
「それすらもわからない」
こう言うのだった。
「しかしここで会ったのは何かの縁だ」
「宜しくな、ナコルルとやら」
微笑んで彼女に告げた。
「これからな」
「はい、御願いします」
「では行くか」
「そうしましょう」
こうして二人は街に入った。そうするとだった。門にいる衛兵達に声をかけられたのだった。
「待て」
「むっ！？」
「何ですか？」
「貴殿は確か」
関羽を見ての言葉だった。
「山賊退治の武芸者か？」
「ここでも言われたな」
「そうですね」
ナコルルと顔を見合わせて話す。

「この通り名はどうやらついて回るみたいだな」
「そうですね」
「それに」
衛兵はさらに言ってきた。
「二人だったのか。どちらも絶世の美女と聞いたが」
「そして」
「何でしょうか」
「ふむ、まあ噂通りだな」
二人を見ての言葉だった。
「美女なのは間違いないな」
「それはどうも」
「有り難うございます」
「しかし二人とはな」
衛兵はこのことに首を傾げさせるのだった。
「噂には尾鰭がつくものかそれとも事実とはまた違うのだな」
「それでは悪いが」
「通して頂けるでしょうか」
「ああ、いいぞ」
衛兵は気さくに返してきた。
「それじゃあな」
「わかった」
「それでは」
こうして二人は街に入った。するとその大通りで。
「どくのだどくのだ！」
ピンクがかった赤いショートヘアに八重歯が目立つ少女が豚に乗って駆けていた。その手には蛇矛がある。黒いスパッツに赤い上着を着ている。まだ幼い感じだが非常にはっきりとした可愛らしい顔をしている。
そしてだ。その周りには子供達がいつ。彼等は手に手に卵や野菜や肉を持っている。そのうえで威勢よく騒いでいた。

「鈴々山賊団のお通りなのだ！」
「どけどけ！」
「なっ、何だ！？」
「関羽さん、危ないです！」
ナコルルが慌てて関羽に言う。そうしてそのうえで二人は慌ててどいた。その横をその子供達が駆け去る。関羽はしゃがみ込んでしまっていた。
「な、何なんだ一体」
「子供達ですけれど」
「そうだな。それはわかるが」
「あの、それで」
ここでまた言ってきたナコルルだった。
「関羽さん」
「何だ？」
「見えてますけれど」
こう言うのである。見れば関羽のスカートがはだけてだ。白いショーツが丸見えになってしまっていた。
関羽もそれに気付いてだ。慌ててスカートをなおす。その顔は真っ赤になっていた。
「す、済まない」
「はい。じゃあまずは立って」
「そうだな。それでだが」
「それで？」
「貴殿金は持っているか？」
こうナコルルに問うのだった。
「路銀はだ。持っているか」
「あっ、はい」
ナコルルは彼女のその言葉に頷くのだった。

## 第一話　関羽二人の少女と会うのことその五

「あります」
「そうか。ならいい」
「路銀は笛を吹いて」
そうするというのである。
「それで貰っています」
「貴殿笛が吹けるのか」
「はい、これです」
言いながらその横笛を出してきた。そのうえで言うのであった。
「これを吹いてそれで」
「そうしているのか」
「関羽さんはどうして路銀を手に入れておられますか？」
「それはだな」
ここでバツの悪い顔になる関羽だった。
「店で働かせてもらったりしてだ」
「そうしてですか」
「そうだ。そうしていつも手に入れている」
そうしているというのである。
「それでだ」
「そうですか」
「しかし。笛か」
関羽は顔を上げて言った。
「いい感じだな。私も何かするか」
「何かありますか？」
「歌なら歌えるがな」
こう言うのだった。
「暫くはそうして路銀を手に入れるか」
「はい、そうしましょう」

こんな話をしながらそのうえで店に入った。こうして二人で食べてだ。路銀を稼いでそのうえで店の女主人に話を聞くのであった。
「ああ、あの娘達ね」
「そうだ。あれは何なのだ?」
「愚連隊ですか?」
「まあそういうところだね」
こう答える女主人だった。二人は今はラーメンに炒飯、それと水餃子を食べている。そういったものを食べながら話をするのだった。
「けれどね」
「けれど?」
「何かあるんですか?」
「前はああいう娘じゃなかったんだよ」
女主人が残念そうに首を捻って述べた。見れば恰幅がよく人のよさそうな感じである。その彼女が気さくな雰囲気で話をするのであった。
「昔はね」
「というと」
「どんな娘だったんですか?」
「やんちゃだったけれど素直な娘だったんだよ」
そうだったというのだ。
「けれどね。親が流行り病で死んでね」
「そうして孤児になったのか」
「それからは」
「ああいう風になったんだよ。鈴々山賊団なんて名乗ってそのうえであしして街で悪さをするようになってね。この前なんてねえ」
女主人の話は続く。
「県長さんのお屋敷の壁に派手に落書きをしてね。それで県長さん怒っちゃってね」
「県長さんが?」
「それで怒られたんですね」

「かなりね。それで怒ってね」
そう話すのだった。
「もう兵を集めて。そうしてね」
「それでどうなった？」
「兵を集めるなんて只事ではないですけれど」
「いや、捕まえて牢屋に放り込んでやるってカンカンなんだよ」
そうだというのだ。
「どうしたものかね」
「ううむ、それならだ」
「いいでしょうか」
関羽とナコルルは女主人に同時に言ってきた。
「私達に任せてくれないか」
「御願いします」
こう言ったところでお互いに気付いてだ。顔を見合わせて笑い合うのだった。
「どうやら同じだな」
「はい、一緒ですね」
そのうえでこう言い合った。
「それではおかみ」
「それでいいでしょうか」
「まあねえ。あの娘も悪い娘じゃないしね」
その娘をよくわかっていという言葉だった。

# 第一話　関羽二人の少女と会うのことその六

「穏健に済むならそれでいいよ」
「はい、それでは」
「そうさせてもらいます」
「よし、頼んだよ」
こう話してだった。二人で街を出る。その時にその少女の話も聞いた。
「名前は張飛っていってね」
「張飛か」
「それで字や」
「翼徳っていうんだよ」
字も聞いた。
「これでいいかい？」
「ああ、充分だ」
「それで」
こうして二人は彼女の名前も聞いてだ。そのうえで街を出た。そうしてそのうえで家に出てだ。二人はその張飛がいる山に向かった。
その張飛は今は自分の家でもあるアジトにいた。そこは洞窟を細工したものでありそれなりに快適になっていた。その広間で子供達と共にいた。
「ねえ親分」
「これっていいですよね」
「ゆで卵も」
「それに御芋も」
「あれっ、それでも」
ここでふと男の子の一人が言ってきた。
「何で御芋あるんですかね」
「ジャガイモと薩摩芋なんて」

「何であるんでしょうね」
他の子供達もふと気付いたのだった。
「この時代あったのかな」
「さあ」
「なかったんじゃ」
「細かいことはどうでもいいのだ」
しかし張飛はかなり強引にそれはいいとした。
「とにかく美味しいのだ」
「はい、そうですよね」
「この卵も鶏肉も」
「美味しいですよね」
「そうだ、美味しければそれでいいのだ」
それでいいとする張飛だった。
「それでとにかく皆で食べるのだ」
「はい、じゃあ」
「そうしましょう」
「それで親分」
女の子の一人が言ってきた。
「もうちょっとしたら夜ですから」
「私達それで帰ります」
「また明日」
「あっ、わかったのだ」
帰ると聞いて少しだけ寂しい顔を見せた張飛だった。
「それではまた明日なのだ」
「はい、親分」
「また明日」
食べて少しお喋りをしてから帰る彼等だった。張飛は彼等を見送りお互いに手を振って別れた。張飛は一人になると寂しい顔になり部屋に戻って寝た。
その次の日。関羽とナコルルは張飛にいる山に入った。しかしそ

れは既に。
「来たな」
「そうね」
「あいつ等、親分をやっつけに来たんだ」
子供達は二人を物陰から見ながらあれこれと話す。
「もう罠は仕掛けたよね」
「うん、落とし穴は作ったから」
「じゃあおいらは木の上に行くから」
「御願いね」
こんなことを話してそのうえでそれぞれ散る。そうしてだった。
関羽とナコルルがある大きな木の方に来る。ここでナコルルが言った。
「関羽さん」
「わかっている」
強い顔で応える関羽だった。
「いるな」
「はい、います」
そしてだった。ここで木の上から石が飛んで来た。二人はそれをそれぞれの得物で防ぐ。
「誰だ！」
「私達のことをわかってですね」
「親分のところになんか行かせるか！」
木の枝のところから子供の声が聞こえてきた。

# 第一話　関羽二人の少女と会うのことその七

「さっさと帰れ！」
「子供か」
関羽は子供の姿を認めて言った。
「そうか。あの山賊団の」
「そうだ。親分のところになんか行かせるか！」
男の子が懐に石を出して言ってきていた。
「帰れ！帰らないと酷いぞ！」
「そうか。ならだ」
「関羽さん、ここは任せて下さい」
関羽が得物をその得物を握ったところでナコルルが言ってきた。
「ママハハがいます」
「ママハハ！？あの鷹か」
「はい。ママハハ！」
早速彼に命じるのだった。
「あの子供を」
言うとすぐにであった。ママハハは子供に襲い掛かる。そのうえですぐに子供を吹き飛ばしたのであった。
「うわあっ！」
子供はそのまま石を落として地面に落ちようとする。だが寸前で何とか止まった。
「ふう、助かった」
「果たしてそうかな？」
しかしその後ろから関羽の声がしてきた。
「それは」
「えっ・・・・・うわあっ！」
「お仕置きの時間だ」
そこには真っ黒な顔になって目を半月にさせている関羽がいた。

子供はお尻を叩かれて懲らしめられた。二人はさらに先に進む。
今度は他の子供達がいた。その子供達が見るからに怪しい緑の草で何かを覆っている場所の前に立っていた。そのうえで言ってきていた。
「やーーーーい、おばさん！」
「貧乳！」
「悔しかったらここまでこーーーい！」
「やーーーいやーーーい」
「あのな」
その関羽が子供の囃しに顔を顰めさせながら返す。
「私はまだおばさんではないぞ」
「私そんなに胸小さいですか？」
「まあ気にするな」
ナコルルのフォローは入れた。
「とにかくだ」
「はい」
「行くとしよう」
「それでは」
関羽は緑の覆いの上を跳んだ。ナコルルはママハハに捉まって上を飛ぶ。しかしここで関羽は着地したところでまた子供達に言われるのだった。
「引っ掛かったね」
「そうだね」
「見事にね」
「何っ！？」
それを聞いていぶかしむ関羽だった。
「引っ掛かった！？私がか」
「そうだよ。あの小さいお姉ちゃんみたいに飛んでればよかったのに」
「残念だったね」

「一体何を言っているのだ？」
こう思った時だった。関羽の足元が落ちた。そうして。
「な、何っ！？」
「関羽さん！」
そのまま落ちる関羽だった。スカートの中の白いものを丸見えにさせて落ちる。穴の中ではさらに丸見えで全開になっていた。
「この関羽一生の不覚・・・・・・」
「引っ掛かった引っ掛かった！」
「ざまあ見ろ！」
子供達がここでさらに囃す。
「土かけてやれ！」
「おしっこだ！」
「こら待て！」
流石におしっこをかけられると聞いて尋常ではいられなかった。すぐに飛び出て反撃に出る。
子供達を捕まえてグリコに富士山にしっぺを浴びせて倒す。そのうえでさらに先に進むのであった。
「さて、行くか」
「大変でしたね」
「まあな」
土を払いながら横にいるナコルルに応える。

# 第一話　関羽二人の少女と会うのことその八

「それにしても」
「はい、いよいよですね」
「その張飛だ」
その彼女だというのである。
「いるな」
「奥にですね」
「そうだ。行くぞ」
こう話してそのうえで山の一番奥にいる。夕方になろうとしたところでそこに辿り着く。すると岩山になったそこの頂上に張飛がいるのであった。
「いたか」
「待っていたのだ」
張飛は関羽を見下ろしながら言ってきた。その手には蛇矛がある。
「御前が鈴々山賊団の首領鈴々だな」
「真名で呼ぶななのだ！」
張飛はすぐにこう言ってきた。
「真名は親しい者同士でしか呼び合ってはならない名前なのだ」
「それは知っているが」
「なら呼ぶななのだ」
こう関羽に言うのだ。
「絶対に言うななのだ」
「それはわかった。では御前の名前は」
「張飛なのだ」
こう名乗ってきた。
「字は翼徳なのだ」
「そうか、張飛か」

「そうなのだ。御前は誰なのだ？」
「関羽」
まずは彼女が名乗った。
「関羽、字は雲長だ」
「関羽なのか」
「そうだ。覚えておくのだ」
「私はナコルルです」
続いてナコルルも名乗ってきた。
「宜しく御願いしますね」
「それでどちらが来るのだ？」
張飛は二人にさらに問うてきた。
「鈴々は別に二人でもいいのだ」
「関羽さん、どうしますか？」
「私が行く」
そうするというのである。
「それでいいな」
「わかりました、それでは」
「では行くぞ」
関羽は一歩前に出て言う。そのうえで張飛を見上げて告げた。
「張飛よ、いいな」
「わかったのだ。それではなのだ」
張飛はすぐに岩山を降りてきた。素早い動きで、まるでカモシカの如く岩山の上を駆け降りて来る。ナコルルはその動きを見て関羽に言ってきた。
「関羽さん」
「そうだな」
彼女が何を言いたいのかはもう察していた。
「できるな」
「はい、かなり」
「そういえば聞いたことがある」

ここで関羽はまた言った。
「この幽州に一人の腕の立つ幼い武芸者がいる」
「武芸者ですか」
「そうだ。蛇矛を持ち」
その得物についても話す。
「そしてその蛇矛で八百人の賊を一人で倒したそうだ」
「八百人をですか」
「そうだ。そしてその首領も倒した」
「全員ですね」
「その武芸者が山賊団の首領になっていたとはな」
「ではこの張飛さんは」
「そうだ。かなりの強さだ」
それを言うのであった。
「かなりのな」
「でしゃやっぱりここは」
「しかしだ」
それでもだというのだ。
「ここは私がやらせてもらう」
「いいのですか？それで」
「この関羽、戦いで敗れたことはない」
その巨大な刀を手にしての言葉だ。

# 第一話　関羽二人の少女と会うのことその九

「それを言っておく」
「では。私はここで」
「立会人になって欲しい」
「わかりました」
「さあ、来るのだ！」
張飛が関羽を蛇矛で指差しながら言ってきた。
「この張飛翼徳にやっつけられるのだ！」
「ではだ。行くぞ」
こうして二人は闘いに入った。彼等はそれぞれの武器で激しく打ち合う。
関羽が得物を振るうとだ。張飛はそれを蛇矛の刃で受けてみせた。
「何っ、今のを受けたのか」
「くっ、何て重さなのだ」
その一合の後でお互いに言い合う。
「どうやら噂通りだな」
「ここまで強い一撃ははじめてなのだ」
「それならだ」
ここでまた言う関羽だった。
「これはどうだ！」
「まだなのだ！」
関羽の振り被ってからの一閃も防いだのだった。それもだ。
「今度はこっちの番なのだ！」
「くっ！」
「受けるのだ！」
張飛は蛇矛から突きを次々に繰り出す。しかしそれは関羽の得物を巧みに動かす動きで全て防がれてしまうのであった。
「鈴々の突きを！？」

「これだけの突きも見たことがない」
関羽をもってしてもだった。
「強いな、間違いなく」
「御前何者なのだ？」
自分の会心の攻撃を全て防がれて驚きを隠せなかった。
「この鈴々の突きを防ぐなんて奴はいなかったのだ」
「御前もだ。これだけの攻撃を繰り出してもまた」
関羽はその彼女にまた言う。
「息が切れていないのか」
「鈴々の体力は底なしなのだ！」
まさにそうだというのである。
「この程度で負けないのだ！」
「ならばだ。私もだ！」
関羽も攻撃をさらに繰り出してきた。そのうえでさらに激しい応酬に入る。
そしてだ。その闘いは続きだ。何時しか夜になっていた。
だがまだ闘いは続く。二人の闘いはまさに龍虎の闘いだった。
既に数百合になっている。だが決着はつかない。
しかしその中でだ。関羽はふと言うのだった。
「惜しいな」
「惜しい！？」
「そうだ、惜しいな」
こう言うのである。
「それだけの腕を持ちながらやっていることはだ」
「何だというのだ？」
「山賊の真似事か」
言うのはこのことだった。
「これだけの腕を持っていれば天下すら動かすことも夢ではないというのにだ」
「五月蝿いのだ！」

張飛は関羽の今の言葉に感情を露わにさせてきた。
「鈴々だって好きでこんなことやっているわけではないのだ！」
「何っ！？」
「鈴々には家族がいないのだ。皆死んでしまったのだ」
「その様だな」
「家族は皆流行り病で死んでしまったのだ」
この時代ではよくあることだった。
「それからはずっとここにいるのだ。一人で」
「一人か」
「そうだ、一人なのだ」
言いながらもまだ攻撃を繰り出し続けている。
「けれど寂しくはないのだ。鈴々には多くの手下がいるのだ」
「同じだな」
だがここでこう言った関羽だった。
「御前もまた。同じだな」
「同じ！？」
「そうだ、同じだ」
こう言うのである。

# 第一話　関羽二人の少女と会うのことその十

「御前もまた私と同じだ」
「どういうことなのだ？それは」
「私にも家族はもういない」
「それは何故なのだ！？」
「賊に殺された。私が子供の頃にだ」
それが関羽の過去だった。
「兄上も全てだ。賊との戦いで殺された」
「そうだったのだ」
「私もです」
立ち会っているナコルルもここで口を開いた。
「私も。お父さんとお母さんは」
「御前もいないのだ！？」
「はい、流行り病で死にました」
まさにそうだというのである。
「今は妹と祖父母、そして動物達と一緒です」
「御前もそうだったのだ・・・・・・」
「そうです。一緒です」
ナコルルの言葉は続く。
「私達は一緒です」
「けれど鈴々は」
「悪戯をするのは寂しいからだな？」
関羽はここでまた言ってきた。
「そうだな」
「それは・・・・・・」
「もう止めろ」
また張飛に言った。
「そんなことは。そんなことをしても何にもなりはしない」

「けれど鈴々は」
また言いはした。
「それでも」
「県長のところになら一緒に行ってやる」
「私もです」
二人の言葉は優しいものになっていた。
「ですから。もう山賊は」
「・・・・・・・・」
張飛の手が止まってしまった。
「わかったのだ。もう鈴々は」
「山賊はもう止めるのだな」
「もうしないのだ。ただ」
「ただ？」
「負けたのだ」
項垂れての言葉だった。
「勝負には負けてないけれど負けたのだ」
「では何に負けたのだ？」
「御前自身に負けたのだ」
こう関羽に言ったのである。
「だから。もう好きにするのだ」
「おい、だから私はだ」
ここでまた言う関羽だった。
「御前を捕まえるとかそういうのじゃない」
「県長に謝らせる為なのか？」
時間と場所を告げた。
「そうだ。明日の朝麓で待っている」
「そこで会おう」
「待つのだ」
しかしここで張飛は去ろうとする関羽とナコルルに言った。
「夜の山は危ないのだ」

「むっ！？」
「ここに泊まっていくといいのだ。二人でなのだ」
「ナコルル、どうする？」
「そうですね。ここは」
ナコルルはちらりとその張飛を見た。そして言うのだ。
「張飛さんの御言葉に甘えまして」
「そうさせてもらうか」
「はい、そうさせてもらいましょう」
こう話して今は張飛のアジトで休んだ。三人で簡単な食事を囲んだうえでまずはナコルルが風呂に入りだ。次は関羽が入るのであった。
「妙なことになったな」
つい風呂の中で言ったのだった。

# 第一話　関羽二人の少女と会うのことその十一

「全く。どういうことなのだ」
「あっ、いたのだ」
ここでその張飛の声がしてきた。
「探したのだ」
「探した？」
「一緒に入るのだ」
見れば彼女は全裸だった。身体が幼い。
「では行くのだ」
こうしてすぐに飛び込んでいた。関羽がその湯を浴びてしまった。
「あっ、こら！」
「どうしたのだ？」
「飛び込む奴があるか！」
言うのはこのことだった。
「全く。何を考えているのだ」
「駄目なのだ？」
「駄目だ。マナーがあるだろう」
彼女が言うことはこのことだった。
「全く。御前と言う奴はだな」
湯舟の中で立って説教をする。しかしここで張飛はその彼女の身体をまじまじと見た。そうしてそのうえでこんなことを言ってきたのだった。
「関羽だったのだ？」
「そうだが」
「どうしたら関羽みたいに胸が大きくなるのだ？」
彼女が今言うのはこのことだった。
「そこまで大きな胸に。どうしてなれるのだ？」
「あっ、これか」

「そうだ。かなり大きいのだ」
確かに見事な巨乳である。少し動いただけでかなり揺れる。しかも張りもある。
「どうやったそこまでなれるのだ?鈴々の胸は小さいのだ」
「こ、これはだな」
「どうしたらなれるのだ?」
「大志を抱くのだ」
苦し紛れに胸を張って強弁した。
「そうすればなれるのだ」
「大志を抱く?」
「そうだ。それを胸に抱けばだ」
「鈴々も胸が大きくなれるのだ」
「そうだ。そういう説もある」
そういうことにした。これで何とか誤魔化した。
そして三人で寝ることにした。しかしここで。
「やっぱり鈴々の服じゃ小さいのだ」
「いや、別にいい」
関羽が張飛から借りた寝巻きは確かに小さかった。ナコルルはそうではなかったが。
「それはだ」
「いいのだ?」
「心遣い感謝する。では寝よう」
「はい、では私はこれで」
すぐに眠りに入るナコルルだった。
こうして二人きりになる。すると張飛は関羽に対して言ってきた。
「一緒に寝るのだ」
「だから同じ部屋にいるのだな」
「その通りだけれど違うのだ」
だがここでこう言ってきたのだった。
「一緒の布団で寝るのだ」

「同じ布団でか」
「そうなのだ。鈴々は負けたのだ」
こう彼女に言うのである。
「だから同じ布団で寝るのだ」
「おい、それは」
関羽は彼女のその言葉に困った顔で返して言った。
「誤解されるような言い方はするな」
「誤解？何がだ？」
「だからだ。勝負で負けたからといって同じ布団で寝なければいけないなどと」
「駄目なのだ？」
「駄目ではないが」
困った顔でまた言う。

# 第一話　関羽二人の少女と会うのことその十二

「しかしだ」
「しかし？」
「言い方があるだろう。ナコルルが聞いたらどう思う」
「？悪いのだ」
「自分で考えることだ。だがいい」
関羽はここでこうも言った。
「寝るか」
「そうするのだ。それに」
「それに？」
「久し振りなのだ。こうして寝るのは」
「久し振り？」
「そうなのだ。一緒に寝るのはなのだ」
彼女が言うのはこのことだった。
「随分と久し振りなのだ」
「あの子供達はどうなのだ？」
「あいつ等は自分の家族がいるなのだ」
こう言うのだった。残念な顔になっているのが暗がりの中でも見える。
「だから鈴々はいつも一人だったのだ」
「そうか。一人か」
「けれど寂しくなんかないのだ」
一応こう強がりは言う。
「それでも今は」
「そうだな。同じ布団で寝よう」
「そうするのだ」
こうして二人で布団に入って眠りに入った。関羽は張飛のその安らかな寝顔を見て微笑んでから自分も心地よい眠りに入るのだった。

そして次の日に三人で県長のところに訪れて謝罪した。県長にしても確かに怒っていたがそれでも子供のしたことなので彼女を許した。

街の者達も彼女を快く許した。そのうえで山賊団は解散となった。そうしてだった。

「これからどうするつもりだ？」

関羽はこのことを張飛に問う。ナコルルも一緒である。

「それで一体」

「もう山賊団は解散したのだ」

彼女が最初に言うことはこのことだった。

「子分達ももういないのだ」

「そうだな。しかしまたあの山で暮らすのか？」

「それはもうしないのだ」

「ではこれからどうするつもりだ？」

「関羽はどうするのだ？」

「私か」

「そうだ。どうするのだ？」

このことを彼女に問うのであった。

「これからは」

「私は旅を続ける」

「私もです」

関羽だけでなくナコルルも答えてきた。

「これまでと同じだ」

「私にはやらないといけないことがありますし」

「やらなければいけないこと？」

「どうしてこの世界にいるのか」

ナコルルはこう張飛に述べた。

「それを確かめることも必要ですし」

「そうだったな。貴殿は他の時代から来たのだな」

「はい、そしておそらくは他の世界から」

このことも関羽に話すのだった。
「この世界に来ています」
「それが何故かだな」
「それを確かめないといけません。それに」
「それに？」
「禍々しい気配も感じます」
語るナコルルの顔が曇っていく。
「これは私達の世界にもあったものですが」
「同じものか」
「違う時代、違う世界にあったならそれはある筈はないものですが」
「そうだな。世界が違えば別の存在がいるのも道理だな」
関羽もナコルルのその言葉に頷いた。
「それで同じ気配を感じるというのは」
「普通はありません」
「それを確かめるのか」
「そして必要とあれば」
ナコルルの言葉が引き締まる。
「それを封印します」
「そうするのか」
「はい、その為に旅を続けます」
まさにそうするというのである。
「そうします」
「では私と一緒に来てくれるか」
関羽はここでナコルルを誘った。
「この御時世だ。貴殿も確かに腕が立つが一人より二人の方がいい」
「そうですね。それは確かに」
「だからだ。それでどうだ？」
またナコルルに声をかけた。

# 第一話　関羽二人の少女と会うのことその十三

「私と一緒に。それでだ」
「そうですね。確かに」
ナコルルも彼女のその言葉に頷いた。
「関羽さんはこの世界の方ですしお詳しいですし」
「では共に行くか」
「はい、御願いします」
「それなら鈴々も一緒なのだ」
ここで張飛も言ってきた。
「鈴々も二人と一緒に行くのだ」
「一緒にか」
「私達と」
「そうなのだ。これでどうなのだ？」
「わかった、それならだ」
「御一緒に」
「それで関羽」
同行が認められてすぐに関羽に対して声をかけた。
「真名は何なのだ？」
「真名！？」
「そうなのだ。一緒に行くのなら親しい間柄なのだ」
「そうだな。共に行くのならな」
「そして姉妹になるのだ」
自分からいきなり言ってきた。
「だから真名で呼び合うのだ」
「おい、姉妹か」
「ナコルルもどうなのだ？」
しかもナコルルも誘ってきた。
「一緒に。どうなのだ？」

「私はもう妹がいますけれどいいですか？」
「いいのだ。遠慮することはないのだ」
彼女にも明るく言う。
「さあ、どうするのだ？」
「そうだな。これからずっと行くのならな」
「それで御願いします」
二人は微笑んで張飛の言葉に頷いた。これで決まりだった。
「ではだ。私の真名はだ」
「何というのだ？」
「愛紗だ」
微笑みはそのままだった。
「愛紗と呼んでくれ」
「わかったのだ」
「私はナコルルです。他の世界の人間なので真名はありません」
「それでは何と呼べばいいのだ？」
「ナコルルと。そのままで御願いします」
こう言うのであった。
「それで」
「わかったのだ。ではそう呼ぶのだ」
「はい、それで御願いします」
「では鈴々」
関羽も彼女の真名を呼んだ。
「行くか」
「そうするのだ」
こうして三人はまた旅立ちはじめた。そして山道を行くところでだ。不意に関羽が張飛に対して言ってきたのである。
「どうした？暗いな」
「そうなのだ？」
「そうだ、暗いぞ」
横にいる彼女に対しての言葉だ。

「迎えに来てくれなくて辛いか？」
「別にそれはないのだ」
こう言いはするが俯いている。それが証になってしまっていた。
「そんなことはないのだ」
「見ろ」
その彼女への言葉だ。
「上を見上げろ」
「上！？」
「そうだ。上だ」
こう言うのである。
「上を見上げろ。今だ」
「何かわからないけれどわかったのだ」
関羽がどうしてこう言うのかわからなかった。しかしであった。
その言葉に従い上を見上げた。すると。
「親分、行ってらっしゃい！」
「また会おうね！」
「元気でね！」
「皆・・・・・」
皆いてそのうえで手を振っている。張飛はその皆の姿を見てだ。
目が滲んできた。だがここでまた関羽が言ってきた。
「人は別れの時の顔はずっと覚えているぞ」
「ずっと！？」
「そうだ。だから笑顔でいることだ」
そうしろというのだ。
「笑顔で今は別れるのだ。再会の時までな」
「わかったのだ」
関羽のその言葉に頷いた。
「それじゃあそうするのだ」
「では行きましょう」
ナコルルはもう笑顔になっていた。清らかな淀みなぞ全くない笑

顔である。
「これから」
「そうするのだ。行くのだ」
張飛も笑顔になった。そのうえでかつての子分達に思いきり手を振り別れの挨拶とした。三人の少女達の旅と運命はここにはじまるのだった。
今時代は大きく動こうとしていた。様々な少女、美女、剣豪、猛者達がこの世界に集っていた。そしてそれは大きな運命のうねりの中に集うものであった。

第一話　完

２０１０・３・１９

# 第二話　張三姉妹、太平要術を授かるのことその一

第二話　張三姉妹、太平要術を授かるのこと

今青州で三人の姉妹がいた。

三人共質素な旅の服を着ている。一人はおっとりとした顔でピンク色のロングヘアで胸がかなり大きい。そしてその服は淡い赤である。

一人は青い髪を束ねた元気そうな女の子である。顔立ちが明るい。横で束ねた髪は微妙に癖がある。青い服の下の胸はお世辞にも大きいものではない。

三人目は紫の髪を首のところで切り揃えたクールな感じの眼鏡の女の子だ。服は紫である。何処か落ち着き以上のものを見せている。

その三人がだ。街の人達の前である大きな箱を見せていた。

「はい、この箱ですが」

「見て見て」

まずはピンクの髪の少女と青い髪の少女が明るく言う。

「私の名前は張角」

「私は張宝」

「張梁」

それぞれ名乗りもした。

「張三姉妹」

「宜しくね」

「それで見せるのは」

「はいっ」

その張角が箱を開けて集まっている街の人々に見せる。

「中に誰もいませんよ」

「おい、その声で言うな」

「それは洒落にならないぞ」

すぐに街の人達が突っ込みを入れる。
「あんたの声だとな」
「まずいだろ」
「まずいっていうか何なんだ？」
また言う彼等だった。
「とにかくだ。何するんだ？」
「それで一体何をするんだ？」
「はい、じゃあ地和ちゃん」
「うん、姉さん」
張宝が姉の言葉に応える。
「中にどうぞ」
「わかったわ。じゃあ」
こうして箱の中に入る。それからだった。
「一、二の・・・・・って」
「またなのね」
張角は驚き張梁は冷静であった。
「ちょっと、地和ちゃん」
張角はすぐに箱に顔を寄せて囁く。
「まだなの？」
「ちょっと失敗して」
箱の中から小声で返す張宝だった。
「もう少し待って」
「もう、しっかりしてよ」
「姉さんに言われたくないわよ」
こんなやり取りをしてそのうえで何とか箱の外に出て来た。皆それを見てまずは驚いた。
「おお、これは中々」
「いいんじゃないか？」
「そうだよな」
「それにこのお姉ちゃん達奇麗だよね」

「そうだよね」
子供達も言う。
「青い髪のお姉ちゃん胸ないけれどね」
「ぺったんこだよね」
「それは余計よ」
張宝はむっとした声で子供達に返した。
「胸がなくなってやっていけるのよ」
「そうよ、姉さん」
張梁が次姉に対して言ってきた。
「気にすることはないわ」
「全く。何だってのよ」
「それでですけれど」
ここで張梁はざるを出してきた。後の二人もそれに続く。
「御願いします」
「食べ物を御願いします」
「よかったらお金も」
三人で言うのだった。

# 第二話　張三姉妹、太平要術を授かるのことその二

「私達旅芸人でして」
「ささやかな心尽くしをね」
「御願い」
「ふうん、そうなの」
「ちょっとねえ。今は」
「袁紹様はここの領主様にもなられたけれど」
領主の話も出て来た。
「どうされるかわからないからね」
「お金は」
ないという彼等だった。
「ちょっとねえ」
「悪いね」
「あっ、それなら」
「これ聴いて」
「音楽もあるから」
三姉妹は今度はそれぞれ楽器を出してきた。そのうえで演奏をはじめる。そして歌も歌う。しかし街の人々はそれを聴いてもであった。
「まあ上手いよね」
「けれどねえ。袁紹様がどう治められるかわからなくて」
「冀州はかなりよく治められてるけれどね」
「并州もそうなんだろ？」
「だけれどね」
それでもだというのである。
「気まぐれな方だしねえ」
「政治はともかく結構あれな人だしねえ」
「全くね」

こんな話をするのであった。
「だからどうなるかだよね」
「全くだね。だから今は」
「ちょっとね」
「こういうものしかね」
痩せた薩摩芋が数本ザルに入れられただけであった。その他には何もなかった。そんな有様であった。
「ええと、どうして食べる？」
「どうしてって。煮るのが一番でしょ」
「焼く？」
その薩摩芋が入ったザルを手に呆然とする張角に張宝と張梁が言う。
「とにかく。今日はこれだけね」
「寒いね」
「・・・・・うん」
木枯らしさえ吹く。その中で呆然とする彼女達だった。しかしここに一人の長い黒髪に眼鏡をかけた服も漆黒の男が拍手しながら来たのであった。
「いやいや、御見事」
「貴方は？」
「先程から貴女達の歌を聴かせて頂いていまして」
温和な笑みを作って言ってきたのであった。
「感服しました。それでなのですが」
「それで？」
「これをどうぞ」
言いながら一冊の書を出してきた。それには太平要術の書とある。
「この書を役立てて下さい」
「この本は？」
「私からのささやかなプレゼントです」
こう言うのである。

「それに貴女達は妖術も使えますね」
「えっ、それもわかったの？」
張宝は彼の言葉に驚いた顔になった。
「誰にも言わなかったのに」
「はい、わかります」
男は温和な顔で答えてきた。
「それはよく」
「何でわかったのかしら」
張角はそのことを不思議に思った。
「内緒にしてたのに」
「けれどその本くれるのね」
「はい」
今度は張梁の言葉に頷いてみせてきた。
「どうぞ」
「有り難う」
その本を受け取った張梁だった。
「じゃあ読ませてもらうわ」
「貴女達のこれからのさらなる御発展をお祈りします」
男はこう言うとすぐに姿を消した。三姉妹はまずは宿に戻った。
そうしてそのうえで三人で話をするのであった。

# 第二話　張三姉妹、太平要術を授かるのことその三

「天和姉さん」
「何、人和ちゃん」
張角が張梁の言葉に応える。
「どうかしたの？」
「この本だけれど」
「ああ、その本ね」
張角はその言葉に応える。彼女は部屋の真ん中に立っており張宝と張梁はベッドに間隔を置いて座っている。そのうえで話をしているのだ。
「その本どうなの？」
「ちょっと読んでみたけれどね」
張宝がここで言ってきた。
「凄いわよ」
「凄いの？」
「うん、凄い妖術が書かれているわ」
こう言うのである。
「何かこれ使えばね」
「どうなるの？」
「凄くなるかも」
こう姉と妹に話すのである。
「それこそね。成功できるかも」
「えっ、成功って」
それを聞いて驚きの声をあげる張角だった。
「私達売れっ子になれるの？」
「なれるかもよ」
張宝は明るい笑顔で話す。
「本当にね」

「成功って私達が」
張角はそれを聞いて目を大きく見開いた。
「嘘よね、そんな」
「嘘じゃないわよ。とにかく凄い術なんだから」
「そんなに凄いの」
「人和も読んでよ」
張梁にも言うのだった。
「読めばわかるわよ」
「そうなの」
「そうよ。これからはじまるのよ」
まずは彼女が乗り気になっていた。
「私達の時代がね」
こうしてであった。次の日。張宝はいきなり何かを買ってきた。
それは赤、青、緑のそれぞれの色をした小さな宝貝であった。それを買ってきたのだ。
「よし」
「何、これ」
ホテルのベッドの上に置かれたそれを見て言う張角だった。
「宝貝よね」
「そうよ、宝珠のね」
それだというのである。
「ありったけのお金はたいて買ったのよ」
「ちょっと姉さん」
張梁は次姉のその言葉を聞いてむっとした顔になった。
「買ったの」
「そうよ、買ったのよ」
「お金は」
「お金って？」
「だからお金」
張梁が問うのはこのことだった。

「お金はどうしたの？」
「ああ、それね」
ここでやっとわかった感じの張宝だった。
「それだけれど」
「どうしたの、それは」
「ヘソクリはたいたのよ」
そうしたというのである。
「ちょっとね。それ使ったわ」
「えっ、それって」
張梁はそれを聞いて眉を顰めさせてきた。
「私達の今の財産の殆どだけれど」
「いいじゃない、今が一か八かなのよ」
そうだと言って開き直る。
「けれどこれを使ってね」
「これはどういう力があるの？」
張角はその宝貝自体について尋ねた。
「お姉ちゃん妖術の勉強は苦手だったからよくわからないけれど」
「姉さんが一番妖術の勉強をした時間長かったんじゃなかったかしら」
「けれど歌や踊りや楽器の方が得意なのよ」
そうした長姉であった。

# 第二話　張三姉妹、太平要術を授かるのことその四

「あと鉈や鋸を使うことが」
「それがどうしてかわからないけれど」
張梁がそんな長姉に対しても突っ込みを入れる。
「とにかく姉さんは妖術は苦手なのね」
「うん、残念だけれど」
「まあ妖術は任せて」
張宝はそれだというのだった。
「そっちはね」
「うん、地和ちゃん御願いね」
「それでこの宝貝だけれど」
張宝はその話もするのだった。
「声を大きくするから」
「じゃあこれを使って歌えば」
「そうよ、かなり派手に声が聴こえるわよ」
張宝はまた張梁に話す。
「それと。後は」
「一ついいことを思いついたわ」
今度は張梁から言ってきた。
「一つね」
「それ何なの？」
張角はそのことも訪ねる。
「人和ちゃん、何を考えついたの？」
「服を変えよう」
こう言うのである。
「変えるっていうか。改造しよう」
「改造？」
「そう。服の色もチェンジして」

それもだというのだ。
「派手にしよう」
「派手にって。今の私達の服は」
張角はここで自分の服を見る。するとであった。
「ううん、確かに何か」
「地味よね」
「そうね、本当にね」
張角は次妹の言葉に自分の今の服を見たうえで頷く。
「普通の服だから」
「これじゃあ人気は出ないから」
「そうだよね。じゃあやっぱり」
「改造ね、ここは」
「よし、だったら」
張宝もそれに乗ってである。こうして今度は服の改造であった。
すぐに服を鋏で切っていく。それもかなり鋭くだ。
張宝と張梁がベッドにいて切っていく。張角はそれを見ているだけだ。
「ちょっと地和ちゃん、人和ちゃん」
「姉さんは見ていていいから」
「鋏使うの苦手よね」
「うん、苦手だけれど」
「じゃあ見ていていいから」
「私達でやるから」
「何かお姉ちゃんだけ除け者じゃない」
それはそれで嫌なのだった。張角も我儘である。
「何かできることない？・・・・・・あっ」
しかしここで黄色い布の切れ端を見つけた。それを髪につけてみてだった。
「どうかな、お姉ちゃんもしてみたよ」
「あっ、いいじゃない」

「そう思うわ」
二人も彼女がそれを髪でリボンにしてみたのを見て笑顔になる。
「髪も飾らないと駄目だしね」
「姉さんはそれでいって」
「うん、じゃあ」
こうしてだった。三人で改造した服を着てみた。しかも色も変えた。
張角はピンクで張宝は緑だった。そして最後の張梁は水色だ。それぞれ色をそうチェンジしてみたのである。
そのうえでお互いを見てだ。笑顔で言い合う。
「似合うね」
「そうよね、前よりずっと」
「いいと思うわ」
「出来上がり」
最後に張角が言ってであった。三人並んでベッドに背中から倒れ込んでだ。そのうえで互いに笑い合って話をするのだった。
「あははははは」
「これでまずはできたよ」
「後は町に出るだけね」
こう話してであった。その三人は河原に出る。しかしであった。
「ねえ、ちょっと」
「どうしたのよ姉さん」
「ここまで来て」
「この服って」
橋の下に隠れながら妹達に言うのだった。その短いスカートや丸出しの肩を見ながらである。

# 第二話　張三姉妹、太平要術を授かるのことその五

「短か過ぎない？」
「そうでもないと駄目よ」
「それに今は皆そうよ」
妹二人は長姉にこう言うのである。
「これ位は普通よ」
「そう。もうね」
「そうかしら。お姉ちゃん自信ない」
「もうこうなったら背水の陣よ」
また言う張宝だった。
「そうでしょ？やるしかないのよ」
「行きましょう」
妹二人が引っ張ってである。河原にあった白く大きな一枚岩の上に来た。中央に張角がいて彼女から見て右手に張梁、そして左手に張宝がいる。そのうえで準備に入っていた。
そしてだ。また長姉に言う張梁だった。
「行くわよ、姉さん」
「しっかりしてね」
「しっかりって言っても」
張宝にも言われたがここで、であった。
「無理だよ、そんなの」
「無理だよって」
「何が？」
「だってお姉ちゃん」
ここで泣きそうな顔になって両手を胸の前で拳に組んで言うのだった。
「生まれてこのかたしっかりしたことないのよ。無理だよ」
「無理ってそんな」

「大丈夫」
しかし妹二人はそんな姉に対してまた言う。
「いつも通りしていればいいから」
「それでいいから」
「そうなの。いつも通りなの？」
「そうよ。だからね」
「いくわよ」
こう言ってであった。三人は遂に歌いはじめた。その曲をあの宝貝を使って歌うとであった。
「おっ！？」
「この曲って」
「そうだよな」
「いいよな」
近くを通りかかった町の人々が次々に立ち止まっていく。
「可愛いししかも」
「歌も上手い」
「よくね？」
「っていうか凄いよ」
「しかも三人いるし」
こうして三人の前に集まってきた。そうしてである。
三人が歌い終わると拍手をする。これがはじまりだった。
「えっ、まさか」
「凄いことなったじゃない」
「成功ね」
三人で言い合う。そしてその日のザルの中は。
「凄いわ、姉さん達」
「うわ、今までの稼ぎより上じゃない」
「皆喜んでくれてたし」
張両の言葉に張宝と張角が驚く。その金の額にもだ。
「多いって思ってたけれどこんなにって」

「やったじゃない」
三人共素直に喜んでいる。特に張角はだ。
そしてだ。その中で彼女はこうも言った。
「うう、遂に私達の時代が来たのね」
「ってお姉ちゃんまだよ」
「そうよ、まだよ」
ベッドの自分達の横で涙を流しながら喜ぶ長姉に対して突っ込みを入れる。
「これからはじまりなんだから」
「そうよ、はじまりよ」
「えっ、はじまりなの！？」
それを言われて驚く長姉だった。

# 第二話　張三姉妹、太平要術を授かるのことその六

「私達って今からはじまるの」
「そうよ。もう派手にいくからね」
「頑張るわよ」
「何か凄いことになったの！？」
今更ながら驚く張角だった。
「私達って」
「よし、それならよ」
「明日も頑張りましょう」
「うん！」
妹達の言葉に頷く。そうしてその日から三人の活躍が本格的にはじまった。
彼等は青州だけでなく中原の至る場所で歌った。そうしてファンを次々と作っていき人気も爆発的なものになっていった。
金もできそれで衣装をさらによくして馬車も買った。そんな彼女達のところにある日二人の女がやって来たのであった。その二人とは。
「マイスと申します」
「バチュアです」
茶色のショートヘア、ブロンドの長い髪の女達であった。ショートヘアの女は赤と黒の長い服に半ズボンとストッキング、そしてブロンドの女は白と黒でその他はショートヘアの女と同じ格好である。その二人が来たのである。
二人はまず三人に恭しく一礼してからだ。そのうえで言ってきたのである。
「宜しければ私達をです」
「雇って頂けるでしょうか」
「えっ、雇うって！？」

「あんた達を！？」
「はい、そうです」
「御願いします」
バイスとマチュアがこう言うのである。
「マネージャー兼ボディーガードに」
「それでどうでしょうか」
「ボディーガードって」
それを聞いてもであった。張角にとってはよくわからない話だった。
「私達別にそんな」
「そうよ。いらないわよ」
張宝も首を傾げながら言う。
「それにマネージャーは人和がいるし」
「いえ、待って」
しかしであった。ここでその張梁が言うのである。
「それも必要かも」
「そうなの！？」
「今のままでも問題ないのに」
「私達もかなり忙しくなってきたから」
こう言うのであるう。
「だからね」
「そうなの？マネージャーさん必要なの」
「そこまで忙しいの、私達って」
「ええ、それに」
張梁の言葉はさらに続く。
「ボディーガードの人も必要よ」
「ううん、何か大袈裟になってきたみただけれど」
「どうかな」
「それって」
「そこまでって」

二人にしてみればまさにそこまでは、であった。
「確かに私達は戦えないけれど」
「妖術は使えるけれど」
「妖術だけでも心もとないわ」
しかし張梁はまた言った。
「だからよ」
「ううん、じゃあ」
「どうしてもなのね」
「そうよ。お金もできたし」
その心配もないのだという。そして張梁が二人に対して言ってきた。
「とりあえずは」
「はい、とりあえずは」
「何でしょうか」
「マネージャーとしては暫く見させてもらって」
それはまず置くというのであった。
「それよりもボディーガードだけれど」
「それですね」
「私達の腕を」
「そう。それはどうなのかしら」
まずはそれだというのである。
「腕の方は」
「はい、それでは」
「明日お見せしましょう」
明日だというのである。
「山に入り目の前に虎や熊を呼んで下されば」
「すぐにわかります」
「わかったわ」
張梁は二人のその言葉に頷いた。

## 第二話　張三姉妹、太平要術を授かるのことその七

「それじゃあ私の術で呼ぶから」
「それでは」
「その様に」
「ええ、明日ね」
こうして次の日に二人をボディーガードとしてのテストをすることになった。実際に緑の山の中で虎や熊を呼んだ。するとであった。
「ふん！」
「むん！」
まさに一撃であった。それでそれぞれ虎に熊を倒した。それで決まりだった。
「わかったわ」
「宜しいですね」
「これで」
「ええ、宜しく」
張梁は二人に対して微笑んで述べた。
「これからね」
「ではマネージャーとしても」
「その腕をお見せしましょう」
こうして二人は三人のボディーガード兼任マネージャーとして傍にいることになった。それは都に向かう途中の袁紹の耳にも入っていた。
派手なブロンドの長い縦ロールの髪に赤い上着と黄色の鎧に白いミニスカート。ブーツはかなり長くそれも白である。気の強そうな顔をしているが整ってはいる。目は奇麗な緑である。
その彼女がだ。都の中を二人の少女、片方は黒、もう片方は茶色のそれぞれツインテールの髪をした白と黒の服を着た彼女達に対して言ってきた。

「ねえ田豊、沮授」
「はい、袁紹様」
「何でしょうか」
名前を呼ばれた二人の少女はそれぞれ応えた。
「この三姉妹だけれど」
「ああ、彼女達ですね」
「今話題の張三姉妹」
丁度壁絵にその三姉妹が描かれている。田豊と沮授はここでまた言ってきた。
「今かなり話題なんですよ」
「大人気ですよ」
「そうですの」
袁紹は二人の言葉を受けてまた述べた。
「それでしたら一度領地に呼ぶのもいいですわね」
「そうですね、領民も喜びます」
「丁度青州を中心にしていますし」
「青州の統治も本格的に進めなければなりませんわ」
ここで袁紹は真面目な顔になった。
「三つの州にまずは磐石な統治を」
「わかっています」
「それは」
「相変わらずね、麗羽」
そんなことを話す三人の前から声がした。
「どうやら相変わらず政治と戦争は上手みたいね」
「あら、引っ掛かる言い方ですわね」
袁紹はその声の主に対して少し目を怒らせて返してみせた。
「貴女らしいといえばらしいですけれど」
「貴女は相変わらず自分に必要な才だけしか磨こうとしないのね」
「あら、他に何が必要でして」
袁紹は不敵にその声にまた返した。

「必要なものさえあればいいのでしてね」
「政治と戦争ね」
「そうですわ。美羽と違って」
その目に嫌悪が宿った。緑の目にだ。
「私は自分に必要な才以外はいりませんわ」
「私としてはアンバランスだと思うけれどね」
「所詮私は妾腹」
袁紹は不意にこんなことも言った。
「その私が何かになろうとするには余計なことを身に着ける暇はありませんことよ」
「あら、それを言ったら」
ここでまたその声は言うのであった。
「私だって宦官の家の娘。大した違いはないわ」
「そうですわね。思えば私は名門袁家といえど妾腹の除け者」
「そして私はあの曹家であっても宦官の孫。除け者ね」
「その除け者が何の用でして？」
「貴女が久々にこの許昌に来たと聞いて」
その声の主は小柄で胸が小さい。金髪を左右で巻いたテールにしている。青い目の光は澄んでいて尚且つ強くそのうえで聡明さを窺わせるはっきりとした美貌を見せている。紫の蝙蝠を思わせる上着に同じく紫のミニスカート、それと白いハイソックスである。その彼女であった。

# 第二話　張三姉妹、太平要術を授かるのことその八

「来たのよ」
「そうでしたの、曹操」
「あら、他人行儀ね」
曹操と呼ばれたその少女は楽しげに笑って袁紹に応えた。
「私達の中なのに」
「では何と呼べばいいのでして？」
「それは貴女もよくわかっている筈よ」
「そう。では華琳」
微笑んでこう呼んでみせたのだった。
「これでいいですわね」
「ええ、それでだけれど」
「私を迎えに来てくれたのでして？」
「そうよ。何なら一緒に飲まないかしら」
曹操はこう言って袁紹を誘った。
「部下達もいることだし」
「それは嬉しい誘いですけれど」
だが袁紹はここでうっすらと笑って曹操に返すのだった。
「私は今から都に行かなければなりませんのよ」
「都に？」
「そうでしてよ。何進大将軍に呼ばれまして」
「大将軍になのね」
「そうでしてよ。ですから急がなければなりませんの」
笑ってこう言うのである。
「それに今は領地の統治にも忙しいですし」
「三州の統治にね」
「華琳、貴女は今二州でしたわね」
「ええ。この予州と？州」

この二つの州なのだという。
「その統治を任されているわ」
「そちらも順調なようですわね」
「さて、それはどうかしら」
だが曹操は袁紹のその問いにはこう返したのであった。
「果たして」
「違うといいますの？」
「まだね。少なくとも貴女のところのようにはいっていないわ」
「見たところ」
しかし袁紹はここで町を見回した。町は人も多くまた賑やかである。繁栄していることは明らかである。
「栄えていますわ」
「まだまだよ。貴女の様にはいっていないわ」
「そうですかしら」
「それでよ。都に入ってもすぐに戻るのね」
「人材も来ておりますし」
そのことも言うのである。
「何かと」
「そう、そちらにも相変わらず余念がないのね」
「貴女もですわね、華琳」
また彼女の名を呼んでみせた。
「貴女の方も」
「ええ。この前も異国から来た人材が加わったわ」
「誰ですの？それは」
「確か名前はジョン＝クローリー」
この名前が出て来た。
「緑の服の黒い眼鏡の男よ」
「ジョン＝クローリー」
「参謀にも使えるし腕も立つ」
そうした人間なのだという。

「かなりの逸材よ」
「私の国ではリー＝パイロンやジャック＝ターナーが加わりましたわよ」
「聞かない名ね」
「けれど薬を使えたり腕もよくて」
その二人の話であった。
「申し分のない逸材ですわよ」
「貴女も頑張っているのね」
「ええ。ただ」
「ただ？」
「一つ気になることがありますわ」
不意にこんなことを言う袁紹だった。
「一つですけれど」
「あら、それは何かしら」
「近頃領内を怪しい男が歩き回っていますの」
怪訝な顔での言葉だった。
「赤い服に白いズボンの白髪の」
「白い髪の男！？」
「そうですの。何かと歩き回っていますの」
「その男だけれど」
ここで曹操もいぶかしむ顔で返してきた。

# 第二話　張三姉妹、太平要術を授かるのことその九

「まさかと思うけれど背の高くて筋肉質で」
「むっ！？」
「そして不敵な笑いを浮かべてはいなくて？」
「華琳、まさか貴女の領土にも」
「ええ、来ているわ」
そうだと袁紹に返してきたのだ。
「怪しい奴だから監視はしているけれど」
「そうでしたの。貴女のところにも」
「そうよ。まさか貴女の国にも出て来るなんて」
「それに」
曹操の話はさらに続く。
「その他にも青い服の金と黒の髪の男もいるわね」
「ああ、あの男もでして？」
二人の話はここでも一致した。
「顎鬚を生やしていますわね」
「そうよ。何なのかしら」
「わかりませんわね。ただ今は何かと物騒な時」
話す袁紹の顔はもう笑ってはいなかった。曹操も同じである。
「気をつけるに越したことはありませんわね」
「そうね。じゃあ私はこれでね」
「帰るのでして？」
「領主がこんな場所に一人でいては何かと騒動の種になりかねないし」
自分でそれはわかっていたのだ。
「だからね」
「そうでしてね。貴女も今では大変な立場ですわね」
「それは貴女もね」

ここでようやく笑顔に戻った二人だった。
「じゃあまたね」
「ええ、会いましょう」
「ただ。一つ言っておくわ」
曹操は別れ際にまた袁紹に声をかけてきた。
「私は今よりも上を目指すわよ」
「上を、ですのね」
「そうよ。それは貴女もね」
不敵な、それと共に楽しむ笑みで袁紹に言ってきたのである。
「麗羽、貴女も」
「勿論よ。確かに私は妾腹」
このことを言うと無意識のうちに顔を顰めさせる袁紹だった。
「けれどそれでも自負はありましてよ」
「だからなのね」
「そうですわ。私もまたさらに上を目指しますわ」
不敵な笑みが戻っていた。彼女もまた。
「貴女とはその時何があるのかしら」
「その時も楽しみね。じゃあまたね」
「ええ、それじゃあ」
こうしてであった。彼女達は今は別れた。そのうえで何進との面会を終えた袁紹は領土に戻った。そしてその本拠地で今は黒いボブの何処か大人しい感じの少女、それと緑の肩までの癖のある髪の威勢のよさそうな少女の応対を受けていた。
「お帰りなさいませ、麗羽様」
「お元気そうで何よりです」
ボブの少女は青紫の上着に白のミニスカート、黄金の鎧に緑の長いスカーフである。緑の髪の少女は緑の上着に白いミニスカート、青いスカーフである。二人がそれぞれその壮麗な宮殿に入った袁紹を出迎えてきたのである。
「何かありました？それで」

「大将軍は何か」
「特に何もありませんでしたわ」
まずはこう返す袁紹だった。赤い色の廊下を歩きながら話す。
「貴女達は先に戻っていて」
「はい、わかりました」
「それでは」
「顔良さん、文醜さん、それでは」
「お任せします」
田豊達は主の言葉に一礼してそのうえで場を去った。後はこの三人で話すのであった。
「それで斗詩、猪々子」
「はい」
「今度は何ですか？」
「私のいない間領土で何かありまして？」
彼女が尋ねるのはこのことだった。
「とりあえず平穏みたいですけれど」
「また人材が来たから入れておきました」
「別にいいですよね」
「人材？誰ですの？」
「はい、三人です」
「また異国の者達です」
こう主の問いに返す二人だった。
「御会いになられますか？」
「今丁度宮殿に来ていますけれど」
「ええ、それなら」
いいと返す袁紹だった。

# 第二話　張三姉妹、太平要術を授かるのことその十

「会いますわ。あと審配にですけれど」
「審配にもですか」
「何を」
「青州の治安を安定させるように言っておきなさい」
そうしろというのだった。
「宜しいですわね」
「わかりました。では彼女にも」
「そう言っておきますね」
「ではその三人と会いますわ」
あらためて言う袁紹だった。
「その様に」
「では謁見の間に」
「審配にはあたしが言っておきます」
こうしたやり取りの後で謁見の間に行く袁紹だった。するとそこには黒いジャケットにジーンズ、赤いバンダナに棒を持った鋭い顔の男と黒い肌のスキンヘッドで大柄な男、そして黒髪をオールバックにして髭をはやし右手に赤いマントを持ち派手に刺繍されたみらびやかな服を着た男、三人がいた。
三人はまずは階段の上の玉座に座り左右に顔良と文醜を置いた袁紹に一礼してきた。そのうえで話がはじまるのだった。
「貴方達がですのね」
「ああ、この世界は何かよくわからないがな」
「昔のチャイナらしいが」
「どうも我々の世界とは違うらしいな」
「また面白いことを言う者が来ましたわね」
彼等の言葉を聞いてもそれで驚くことはない袁紹だった。それはまるでもう先に出て来る言葉がわかっているかの様な様子であった。

「まずは貴方達の名前を聞きますわ」
「ああ、それか」
バンダナの男が袁紹のその言葉に応えた。
「それなんだな」
「そうでしてよ。それで貴方達の名前は？」
「ビリー＝カーン」
まずはそのバンダナの男が不敵に笑って応えてきた。
「この棒が武器だ」
「三節棍でしてね」
袁紹は彼のその棒を一瞥して述べた。
「そうでしてね」
「へえ、わかるのか」
「わかりますわ。見ただけで」
袁紹はここではうっすらと笑って返した。
「もうそれだけで」
「そうかよ。とりあえずあんたのところの世話になっていいな」
「無論ですわ。この袁紹誰も拒むことはありませんわ」
その笑みはそのままでの返答だった。
「無論俸禄の分は働いてもらいますけれど」
「リリィの奴はいないようだが」
ビリーはここでふといぶかしむ声になった。
「まあいいさ。それでも食わないといけないからな」
「それは私もだ」
髭の男も言ってきた。見れば背は隣の黒人と同じ程である。かなりの長身だ。
「生きる為にはな」
「貴方の名前は？」
「ローレンス＝ブラッド」
この男も名乗った。
「闘牛士だ。その為の戦いを心得ている」

「闘牛士!?」
「そうだ、スペインのだ」
そこだというのである。
「スペインという国はこの時代にはないがな」
「スペイン。羅馬なら知っていますわ」
こう返す袁紹だった。
「遥か西の国でしてよ」
「そうだ。その国が元になっている」
事情を察しきれない袁紹に対してこう返すローレンスだった。
「そう考えるといい」
「そうですの」
「そしてだ」
最後に黒人が名乗ってきた。

# 第二話　張三姉妹、太平要術を授かるのことその十一

「俺はアクセル＝ホークだ」
「アクセル＝ホークですのね」
「格闘ジャンルはボクシングだ。かつてはチャンピオンだった」
「ボクシング！？それにチャンピオンっていったら」
「そうよね」
ここで顔良と文醜がそれぞれ袁紹の左右から言う。
「ミッキー＝ロジャースと同じよね」
「マイケル＝マックスって奴もこの前来たしね」
「ミッキーにマイケル！？」
その男アクセルはこの二人の名前に顔を向けた。
「あの連中もこっちの世界に来ているのか」
「ええ、そうなの」
「若しかして知り合いなのか？」
「ああ、そうさ」
アクセルは上からの顔良と文醜の言葉ににやりと笑って返した。
「そうか、あいつ等もここにいるのか」
「何でしたら会いますの？」
袁紹は彼の今の言葉に興味を抱いた。
「それでしたら呼びますわよ」
「ああ、頼む」
こう返すアクセルだった。
「そうか、あいつ等もここにいるのか」
「へっ、何か別世界にいる気がしねえな」
「全くだな」
ビリーとローレンスもこう言い合う。
「俺達三闘士もここでまた揃ったしな」
「まさに縁だな」

「全くだ」
「ではあの者達をここへ」
袁紹はすぐに周りに声をかけた。
「何かよくわかりませんけれど感動の再会の様ですわ」
「そうですね。それじゃあ」
「すぐに」
こうしてその彼等が呼ばれた。いかつい顔で髪を短く刈った黒人に長身で細身のスポーツ刈りの黒人、そして仮面を着けた髷と長い中国の緑色の服を着た三人が来たのであった。
そのうちの二人の黒人がだ。アクセルの姿を見て驚きの声をあげた。
「おいおい、アクセルじゃないか」
「あんたもこっちの世界に来たんだな」
「ああ、その通りさ」
アクセルはその彼等に対して笑顔で応える。
「あらためて言うぜ」
ここでスポーツ刈りの黒人が袁紹達に顔を向けて言ってきた。
「俺はミッキー＝ロジャース」
「俺はマイケル＝マックス」
もう一人の黒人も名乗ってきた。
「俺もチャンピオンだったんだよ、世界のな」
「俺はアクセルのセコンドだった。俺もチャンピオンになったけれどな」
「つまりチャンピオンっていうのが三人揃った？」
「そうなるわね」
顔良は文醜の言葉に頷いていた。
「そうよね。三人か」
「うちの陣営もかなり凄くなったのかしら」
「俺はそのチャンピオンになるまでに色々あったけれどな」
笑って言うミッキーだった。

「金を持ち逃げされたり喧嘩で資格剥奪されたりしてな」
「!?そういうことがありましたの」
袁紹はそれを聞いていぶかしむ顔で返した。
「貴方も苦労しましたのね」
「まあな。しかしそれでこっちに来るなんてな」
今度は首を傾げさせるミッキーだった。
「こりゃ一体どういうことなんだ?」
「全くじゃ。しかし」
「よお、爺さん」
ビリーはその老人を見て楽しげに笑っている。

# 第二話　張三姉妹、太平要術を授かるのことその十二

「あんたも元気そうだな、こっちの世界でも」
「まあのう。しかしビリーよ」
その老人リー＝パイロンはビリーの言葉に応えながら話す。
「どうやら他の者も大勢この世界に来ておるようじゃな」
「へえ、そうなのか」
「そうじゃわし等だけではない」
そうだというのだ。
「どうやら何か賑やかなことになっておる」
「じゃあテリーもいるんだな」
ここでビリーの顔が少し鋭いものになった。
「あいつも」
「そうじゃろうな。しかし今のわし等はじゃ」
「そうだな。同じ窯で焼いたパンを食う仲になったな」
「うむ。ここでは米が多いようじゃが」
それでもそういう仲になったというのである。
「宜しくのう」
「ああ、それじゃあな」
「ふむ」
アクセルはここでもう一人来たのも見た。それは金髪で丸々と太った人相の悪い男である。一見するとまるで熊である。その男も来たのだ。
「確かジャック＝ターナーだったな」
「そういうあんたはローレンス＝ブラッドだったな」
ジャックは首を左に傾げさせながらローレンスに返した。
「あんたの話は聞いてるぜ。天才闘牛士だったな」
「向こうの世界ではな。そして貴殿は」
「今はここで飯を食わせてもらってるさ。とはいっても誰にも仕え

ているつもりはないけれどな」
それはないというのである。
「それでもここにはいるさ」
「そうか。では同僚ということでいいな」
「そう思うならそれでいいさ。しかしサウスタウンとはまた違ってな」
ジャックはここで周囲を見回す。そのうえでの言葉であった。
「ここもここで面白いみたいだな」
「その様だな。それではだ」
「ああ、これからもな」
「宜しく頼む」
こう話してであった。今はその会合を楽しむ彼等だった。だが大きな謎はそのままだった。袁紹は自室に戻ってから。一人の少女に対して言うのであった。
「どう思いますの？」
「彼等ですか」
「ええ、そうですわ」
その彼女に顔を向けての言葉だった。赤いロングヘアで青地で白いフリルの多い膝までのスカートの服と水色のストッキングの少女だ。青い目は澄んでいて純朴な印象を見る者に与える。そうした少女だった。
その少女に顔を向けたまま。また言ってきた。
「審配、どう思いまして？」
「真名で御呼び下さい」
審配と呼ばれた少女は静かにこう返してきた。
「いつもの様に」
「わかりましたわ。それでは神代」
「はい」
「貴方はどう思いまして？あの者達は」
「人間としてはです」

その少女審配はここでまた言ってきた。
「武勇が特にですが」
「凄いものですわね」
「はい、それにです」
さらに言う審配だった。
「どの者も頭の回転も悪くはありません」
「いい人材なのは間違いありませんわね」
「謀反の心配もないかと」
次にこのことについて話すのだった。
「そうした野心は見受けられません」
「しかしそれでもですわね」
「はい、問題はです」
審配の顔が曇った。
「それではありません」
「何故この世界に来ているかですわね」
「その通りです。それがわからないのです」
問題はそれなのだった。
「彼等の話によりますとこの世界とは別の世界から来た」
「そんな世界がありますのね」
「そのこと自体が信じられません」
審配の言葉はまた怪訝なものになっている。
「世界が複数あるのでしょうか」
「わかりませんわ。華琳、いえ」
ここで言葉を訂正させた。
「曹操のところにも何人か来ていますし」
「そうですよね。なぜここで急に何人も出て来たのでしょうか」
「これまでなかったというのに」
彼等はとにかく今の状況が理解できなかった。
「どうしてでしょうか」
「全くわかりませんわね。ただ」

ここでさらに話す袁紹だった。
「彼等自身もわかっていませんし。これからのことは」
「はい、これからは」
「まずは彼等はそのまま迎えますわ」
そうするというのである。
「このまま」
「はい、それではその様に」
こう返す審配だった。話はとりあえずはそれで終わった。
だが謎は解き明かされはしない。そのまま残っていた。そしてそれを解くことは今は誰にもできなかった。だが大きなうねりが生じ続けていた。それだけは間違いなかった。

第二話　完

２０１０・３・２２

# 第三話　関羽、趙雲と死地に赴くのことその一

第三話　関羽、趙雲と死地に赴くのこと

関羽達の旅は北に向かっていた。当然張飛とナコルルも一緒である。

歌っているのは張飛である。実に朗らかに歌っている。

その彼女にだ。後ろにいる関羽が問う。

「おい鈴々」

「どうしたのだ？」

「何故そんなに大声で歌うんだ？」

彼女が問うのはこのことだった。一行は林の中を進んでいる。

「それはどうしてなんだ？」

「熊や豹が来ないようにする為なのだ」

「それでなのか」

「そうなのだ。獣は何処から来るかわからないのだ」

こう言うのである。

「だからこうして大声で歌って近寄らせないのだ」

「成程、そうだったのですね」

ナコルルはそれを聞いて頷くのだった。

「けれど動物達なら」

「どうしたのだ？」

「何の心配はいりませんけれど」

これがナコルルの言葉だった。

「本当に」

「どうしていらないのだ？」

「動物達は私にとって家族です」

微笑んでの言葉だった。

「ですから」

「大丈夫なのだ？それで」

「はい、そうです」
そして実際にだ。周りに次から次に動物達が集まって来る。その中には熊や狼、豹、それに虎といった生き物達が集まってきていた。
「皆何の心配もいりません」
「そうなのか？」
「そうです。ですから御安心下さい」
また言うナコルルだった。
「動物達は」
「そうか。それは有り難いな」
関羽はナコルルのその言葉を聞いて頷いた。
「ナコルルがいてくれてそうした心配はしなくて済む」
「動物達にも心があります」
ナコルルは穏やかに微笑んでいる。
「ですから」
「鈴々も動物は大好きなのだ」
それは彼女もだという。
「けれど山道は危ないのだ。だからこうして歌っているのだ」
「余計な闘いをしなくていいしな」
「そうなのだ。動物達とはできるだけ戦いたくないのだ」
これは張飛の本音だ。
「悪い奴と戦うのならともかく」
「そうですね。ところで」
ここでまた言うナコルルだった。
「私達はこれから何処に」
「幽州の州都に行く」
そうするというのである。
「そこにだ」
「州都にですか」
「そうだ。そこに行く」
関羽はこうナコルルに話す。そのうえで彼女達は今は林の中を進

む。そうしてその州都に辿り着くとであった。門の兵士達に呼び止められたのだ。
「待て」
「何だ？」
「黒髪の美女か」
「私のことか」
「いや、もう一人いるのか」
こう関羽に対して言ってきたのである。
「二人いるとは思わなかったな」
「それか」
「私ですか？」
「そうだ。二人か」
また言う兵士だった。
「これはまたな」
「ううむ、私とナコルルは外見は全く違うが」
「それはそうだが美人なのは事実だと思うぞ」
兵士はそれは保障するのであった。

# 第三話　関羽、趙雲と死地に赴くのことその二

「二人共な」
「そ、そうか」
「そんな、私が美人だなんて」
「だが。子持ちだとはな」
兵士は今度はこんなことを言ってきた。
「いや、これは意外だった」
「待て」
関羽はすぐに兵士に言い返してきた。
「今何と言った！？」
「貴殿の娘ではないのか？こっちの娘は」
張飛を見ての言葉である。
「違うのか？それは」
「違う、絶対に違う！」
関羽は焦った顔になってそのことを必死に否定してきた。
「何故私が母親なのだ！？」
「違うのか」
「そうだ、違う」
とにかくこのことを必死に否定するのだった。そうしてそのうえで今城の中に入った。そうして領主の前に案内されるのだった。
「待たせて済まない」
暫くしてその声と共に二人の美女がやって来た。今三人は庭の天井がある円席に案内されていた。そこに座る三人に対しての言葉だった。
赤い髪を髷の様に後ろで束ね前の方は前髪立ちにしている。はっきりとした赤い目をしていて凛としたものを見せている。オレンジの肩のない上着に白い鎧、そしてスカートは短く紺色だ。スカートの前垂れはオレンジでブーツも同じ色だ。その彼女がまず名乗って

きた。
「私は公孫賛という。字は伯珪という」
「貴殿が公孫賛殿か」
「そうだ。関羽殿だったな」
微笑みながら関羽の名を呼んでみせてきた。
「名前は度々聞いている。山賊退治の黒髪の美女だったな」
「美女かどうかは知らないがな」
そこは微笑んで返す関羽だった。
「だが山賊退治はしている」
「そうか。そしてだ」
「趙雲だ」
次に名乗ったのは白く袖は長くスカートの部分は極端に短い着物を着た美女だった。袖のところには黄色い蝶の模様があり胸の部分が大きく開いている。帯は見事な紫だ。ハイソックスは白である。髪は水色で短く切り揃えている。紫の瞳を持つ目は一見すると楚々とした美しさを見せているが同時に知的なものも見せている。その美女がここで自らの名を名乗ってきたのである。
「字を子龍という」
「そうか。趙雲殿か」
「覚えておいてくれたら幸いだ」
「わかった。では覚えさせてもらう」
「ではかけてくれ」
ここでまた公孫賛が言ってきた。
「ゆっくりと話がしたい」
「わかったのだ」
「それでは」
張飛とナコルルが頷く。そのうえで席に座る。そうして五人で話に入るのだった。
「まずはだ。趙雲はだ」
「うむ」

「今は私のところで客将をしてくれている」
こう話す公孫賛だった。
「戦いだけでなく政治もできる。おかげで非常に頼りになる」
「どうということはない」
趙雲はクールな言葉でこう言うだけだった。
「それよりもだ。公孫賛殿」
「うむ、そうだったな」
公孫賛の方が逆に応える。そして話をはじめるのだった。
「それで関羽殿は山賊退治をしているとのことだが」
「うむ」
「それで貴殿に対して頼みがあるのだ」
こう切り出してきた。
「実は今は大変なことになっていてだ」
「山賊が出ているのか？」
「そうだ」
公孫賛は苦い顔になって関羽に述べた。
「その通りだ。本来なら私自ら出向いて向かいたいのだが」
「それができないのか」
「袁紹が青州まで勢力に収めたのは知っていると思う」
ここで袁紹の名前を出すのだった。

# 第三話　関羽、趙雲と死地に赴くのことその三

「あの女は野心が強い。今度は幽州を狙っているのだ」
「河北を全て手中に収めるつもりか」
「既に北の異民族とも手を結んでいるという」
「では今はか」
「そうだ。迂闊には動けない」
公孫賛はさらに苦い顔で言う。
「山賊退治にも行きたいのだが」
「だから私が行くと言っているのだ」
趙雲はこう言ってきた。
「それは駄目か」
「しかし趙雲殿一人では無理ではないのか？」
公孫賛はその趙雲を気遣う顔で見ながら言った。
「やはり。何というかだ」
「山賊なぞ私一人でどうとでもなる」
しかしその趙雲はこう言うのだ。
「だから行くというのだ」
「だが。一人では無謀だ」
あくまでそれは許さない公孫賛だった。
「やはりここはだ」
「兵を率いてというのか」
「できるがそうしたい」
これが公孫賛の考えである。
「私も行き、だ」
「しかし袁紹がいるからか」
「どうしたものか、ここは」
そんな話をしていた。そしてここで関羽が言った。
「待ってくれ、山賊ならだ」

「うむ」
「私が行こう」
こう言って出て来たのである。
「今からだ。すぐに退治してくる」
「はい、私もです」
「鈴々もなのだ」
ナコルルと張飛も名乗り出て来た。
「私も剣を持っています」
「腕には覚えがあるのだ」
「ふむ、これで三人か」
趙雲はここで足を組んだ。その時にスカートの奥からピンクのものが見える。
「少し見たいものがあるな」
「待つのだ、今三人と言ったのだ」
「うむ、言ったが」
「何故なのだ。四人の筈なのだ」
「貴殿は今回の作戦には不向きだ」
こう張飛に対して言うのだった。
「見たところな」
「見たところどうだというのだ」
「貴殿は落ち着きがない」
それを言うのである。
「だからだ。今回の参戦は見送らせてもらう」
「鈴々は強いのだ」
それでもムキになった張飛は言う。
「それでも駄目というのだ？」
「腕か」
趙雲はここで目を留めてきた。
「そうだな。それも見たいと思っていた」
「では早速やるのだ」

「いいだろう」
「ふむ。では少し外に出よう」
公孫賛が二人の間に立って言う。
「ではな」
こうして張飛と趙雲は手合わせをすることにした。張飛は蛇矛を持ち趙雲は先が波になっている槍を持っている。それを手に取ってだった。
「よし、それならだ」
「行くのだ！」
早速張飛が一直線に突進してきた。そのうえで槍を激しく繰り出す。
「ふむ」
「どうなのだ！」
「やるな」
趙雲は己の槍でその突きを防ぐ。関羽はそれを見て言う。
「あの趙雲という者、できる」
「確かに」
それはナコルルも言う。
「張飛さんの攻撃をここまで受けるのは」
「私かナコルルだけだと思っていたが」
「それに匹敵する程ですね」
「うむ、間違いない」
張飛の攻めは全て防がれる。そして彼女が息を切らせたところでだ。

## 第三話　関羽、趙雲と死地に赴くのことその四

「今度は私の番だ」
「何なのだ！？」
「行くぞ」
趙雲がその槍を幾度も縦横に振ってきた。そのうえで攻める。
だが今度は張飛がその槍を防ぐ、何度も何度も防ぐ。完璧と言ってもいい。
「ふむ。守りもできるのか」
「鈴々は攻撃を身体に受けたことはないのだ」
「そうなのか」
「そうなのだ。負けたことはないのだ」
「わかった」
趙雲は己の槍と張飛の蛇矛を交差させながら言った。
「貴殿の腕はな」
「わかったというのだ？」
「そうだ、わかった」
まさにそうだというのである。
「貴殿の腕はだ」
「ではどうするというのだ？」
「確かに腕はいい」
それは認めた。
「それはその関羽殿もだ」
「私もか」
「ナコルル殿もだ。三人共私と同じだけの強さだな」
趙雲はこう言うのだった。
「その腕は見事だ」
「そうなのか」
「しかし。やはり張飛は今度の戦いには向かない」

それは言うのだった。
「それはすぐにわかる」
「わかるとはどういうことなのだ」
「まずは席に戻ろう」
そうしろというのだ。
「それでいいな」
「そうだな。話をしよう」
公孫賛もここで言う。
「話の続きをな」
「わかった。しかし趙雲殿」
「どうした？」
「何故私達の強さがわかったのだ？」
そのことを問うのである。
「何故それがわかったのだ？」
「気だ」
それからだというのだ。
「それでわかったのだ」
「気か」
「貴殿達の気はそこの張飛と同じだけの気を出している」
それを見ての言葉だというのだ。
「だからだ。それはわかった」
「そうか、それでか」
「私自身の気は見られなくともそれは見ることができる」
「それでか」
「そういうことだ。では行こう」
こう言ってである。彼女達はまた席に戻った。席に戻ると趙雲はすぐに張飛に対して言うのだった。
「まずはだ」
「どうしろというのだ？」
「じっとしていてくれ」

こう言うのである。
「いいな、暫くじっとしておいてくれ」
「何だ、簡単なことなのだ」
張飛はそれを聞いて何でもないといった口調で返す。
「ではこのままじっとするのだ」
「実はだ」
また公孫賛が話してきた。
「今度の山賊退治は忍び込むことを考えている」
「忍び込むのか」
「宝を入れていそうな箱の中にわざと入り山賊に襲わせてだ」
公孫賛の説明が続く。
「そのうえで忍び込むつもりなのだ」
「作戦としてはいいな」
関羽はその話を聞いて納得した顔で頷いた。
「中から忍び込むのはいい」
「だからだ。張飛よ」
趙雲はまた彼女に声をかける。
「じっとしていてもらおうか」
「ふん、そんなこと簡単なのだ」
こうして張飛はそのまま腕を組んでじっとしだした。そして三分後。
「・・・・・・・・・」
いうらいらとしだした。そして五分後。
何か我慢できそうにもない様子になってだ。遂に。
爆発した。顔を真っ赤にさせたうえで本当に爆発してしまった。
関羽はそれを見て慌てて声をかける。
「り、鈴々！大丈夫か！」
「あああああ・・・・・・」
「それ見たことか」
その爆発した張飛を見て冷静に言う趙雲だった。

# 第三話　関羽、趙雲と死地に赴くのことその五

「だからだ。貴殿は今度の作戦には無理だ」
「そういうことだったのですね」
「だが。参加してもらうことにする」
それはだというのだ。
「ただ中に忍び込むだけではどうにもならない。外にも人材が必要だ」
「だからなのですね」
ナコルルが言ってきた。
「それで」
「そうだ。その張飛と。確か」
「ナコルルです」
ナコルルはまた名乗ってきた。
「宜しく御願いします」
「わかった。では頼むぞ」
こうして作戦は決まった。そしていざ出発の時にだ。城の門のところで三人の若い男達に出会ったのだった。
「むっ！？見慣れない顔だな」
「見たところかなりの腕前だな」
公孫賛と趙雲が彼等を見て言う。
「だが。何者なのだ？」
「俺か？俺はテリー＝ボガード」
まずは金髪を後ろで束ね青い精悍な顔をした青年が名乗ってきた。白いシャツに青いジーンズ、それに赤い背中に星があるジャケットと帽子という姿である。鋭く狼の様な印象を与える男だ。
「アンディ＝ボガード」
また一人名乗ってきた。白地に赤い模様のある上着と白いズボンだ。上着には袖がない。金髪を伸ばしており青い目をして整った涼

しげな顔をしている。その彼も名乗った。
「東丈」
赤いトランクス一枚の男だ。黒い髪を立たせて元気のいい顔をしている。見事な筋肉が露わになっている。その三人が名乗ったのだ。
「何か気付いたらこっちの世界にいたんだ」
「どうやら昔の中国らしいが」
「何だ？ここは」
「漢だが」
公孫賛がここで三人に対して告げた。
「それでわかるか？」
「そうか。かなり昔の中国だな」
「そうだね、兄さん」
アンディはテリーが腕を組んで述べた言葉に応えた。
「まさかこの時代だったなんて」
「よくわからないが俺達はタイムスリップしてきたみたいだな」
「そうだね」
「何か話が全然わからないんだけれどな」
丈は首を捻っている。
「しかし」
「しかし？」
「あんた達はこれから何処に行くんだ？」
このことを関羽達に対して問うのだった。
「一体何処に行くんだよ」
「これから山賊退治に行く」
三人を見ながら答える関羽だった。
「今からな」
「そうか、山賊か」
「兄さん、なら」
「やろうぜ、俺達もよ」
ここで三人はそれぞれ話す。そうしてだった。

「よかったら俺達も協力させてくれ」
「ここに来るまでに山賊達なら何度か倒している」
「だからな。俺達にも手伝わせてくれ」
こう言ってであった。彼等はこうして山賊退治への協力を申し出てきた。そうしてそのうえで公孫賛が三人に対して言ってきた。
「見たところ異国の者達だが悪い者達ではないな」
「そうだな、確かに」
趙雲もそれに頷く。
「怪しい者達ではない」
「ナコルルと同じか？」
関羽はこう感じ取った。
「そうなのか」
「ナコルル？聞いたことがあるな」
アンディがいぶかしむ顔になって応えてきた。

# 第三話　関羽、趙雲と死地に赴くのことその六

「舞が言っていたな。アイヌの伝説にある戦士だったな」
「はい、私はアイヌの者ですが」
「おかしいな。確か二百年以上前の人だった筈だけれど」
アンディもまた腕を組んで述べた。
「それが今どうして私達の前に」
「何かよくわからないが色々な人間が集まってきているみたいだな」
関羽はそれを聞いてふと察した。
「今は」
「それでどうするんだ？」
また言ってきたテリーだった。
「あんた達は俺達を雇ってくれるのか？どうなんだ？」
「お金の方は大して困ってないけれどね」
「山賊の奴等倒して手に入れてるしな。勿論殆どは村の人達に渡してるぜ」
「よし、わかった」
公孫賛はここで決断を下した。
「なら宜しく頼む」
こうして三人も山賊退治に加わることになった。張飛とナコルルは山賊のいる山の裏手に回り三人は入り口に潜伏することになった。そして関羽と趙雲が箱の中に入った。しかしであった。
「お、おい待て」
「どうしたのだ？」
趙雲はその箱の中で関羽を抱きながら楽しそうに言ってきた。
「一体」
「足の間に腰を入れないでくれるか？」
関羽は戸惑った声で言う。
「私は。そんな」

「そんな？」
「そうした趣味はないのだ」
「ふむ。どうやら」
ここでさらに楽しげな声を出す趙雲だった。
「貴殿はまだそうしたことは知らないな」
「私はまだだ」
「安心しろ、それは私もだ」
こうは言うが何故か楽しげな趙雲の声だった。
「しかしだ」
「しかし？」
「それは男とだけだ」
これが彼女の言葉だった。
「女とはだ」
「ま、まさか貴殿は」
「女もいいものだ」
声は暗い箱の中でさらに楽しげなものになる。
「そちらもな」
「まさかここで私を」
「安心しろ。そこまではしない」
こうは言った。
「だが」
「だが？」
「この感触は楽しませてもらう」
「ううう・・・・・」
こうして二人は箱の中に潜んでいた。そしてその箱が少し進むと早速山賊達が出て来た。そうしてそのうえで箱は荷馬車ごと山賊のアジトに入れられた。
箱はアジトの奥に入れられた。二人は気配が消えた時に出てだ。早速味との中に出たのだ。
「ふむ、こうなっているのか」

「洞窟をそのまま使っているな」
「そうだな」
アジトの中はわりかし入り組んでいて蝋燭で照らされている。そこを見回りながら話すのだった。
「だが山賊の気配はそれ程多くはないな」
「そうだな。数は多くないな」
「二百だ」
趙雲は言った。
「それだけの数ならばだ」
「戦えるか？」
「やはり私一人でも充分だ」
彼女は真面目な言葉で述べた。
「貴殿もそうではないのか？」
「武器があればな」
ここで関羽はふと述べた。
「容易いが」
「拳で闘うことは不得手か」
「できることはできる」
こうは言った。
「しかしそれでもだ」
「やはりあの巨大な得物が欲しいか」
「持って来れなかったのは残念だ」
「貴殿の胸が大きいからだ」
「それで箱の中に入れられなかったというのか」
「私も胸の大きさには自信がある」
見れば趙雲の胸もかなりのものだ。谷間がはっきりとしていてハリもある。

# 第三話　関羽、趙雲と死地に赴くのことその七

「しかしだ。貴殿は最早暴力的だな」
「胸の大きさが暴力か」
「公孫賛殿は胸はない。ついでに言えば影も薄い」
「何故ここで公孫賛殿の言葉が出る？」
「実はあの方は白馬がお好きでしかも弟殿が大好きなのだ」
「弟殿がいるのか」
「そうだ」
関羽はこのことを知った。
「その通りだ。あれでかなりな」
「そうは見えないがな」
「何しろ弟殿のベッドに飛び込んだり肩車をする程だ」
そこまでだというのだ。
「そういう方なのだ」
「随分と変わった趣味を持っておられるのだな」
「他には色々な変わった服を着るのもお好きだ」
次々にわかる公孫賛の嗜好だった。
「そうしたこともだ」
「ふむ、そうだったのか」
「さて、それでだ」
ここまで話したところで趙雲の目が鋭くなった。
「気配が集まっているな」
「近いか」
「そうだ、声は聞こえるな」
「ああ、聞こえる」
それは関羽も感じ取った。そうしてだった。
すぐにある部屋の前に来た。中を覗けば山賊達が賑やかに酒盛りをしていた。暗く灯りも少ないその中で銘々酒を飲み肉を食ってい

る。それが見えたのだ。
「それそれ飲め飲め」
「楽しくな」
こう言いながら飲み食いする彼等だった。
「さあ踊れ踊れ」
「姉ちゃん酌しろや」
「ほら、注げ」
頭目と思われる男は上座において娘に酌を強制していた。
「しかしな」
「はい」
「おめえ胸大きいな」
頭目はその娘の旨を見ていやらしそうな顔を見せていた。
そしてそのうえで。服の中に手を入れてきていた。
「あっ・・・・・・」
「おお、でけえでけえ」
「あの、手が」
娘はそれを露骨に嫌がる。何とか逃げようとする。
「それが」
「何だ？何か文句あるのかよ」
「止めて下さい・・・・・・」
「いいだろうがよ、減るもんじゃねえし」
言いながらその娘を抱き寄せる。そのうえでまた言うのだった。
「そうだろ？何ならよ」
「こういう手合いのいつものことだな」
趙雲はそんな彼等の有様を覗きながら呟く。
「さて、これからどうするかだな」
「おのれ」
しかしであった。隣の関羽はここで歯噛みしていた。そうしてそのうえでだった。すぐに飛び出てしまった。趙雲が呼び止める余裕もなかった。

「貴様等っ！」
「んっ！？」
「何だ！？」
「許さん！覚悟しろ！」
こう言ってであった。頭目のところに駆け寄ってである。そうして驚いて座ったままの彼に対して右足からソバットを入れた。それは見事なまでに彼の延髄に決まった。
「うぐっ・・・・・・」
「な、何だこいつ！」
「何処から出て来た！」
「させるか！」
こう言ってであった。一斉に立ち上がる。関羽はその間に娘を抱き寄せてだ。そうしてそのうえで彼女を後ろに庇ってだ。取り囲む山賊達に対して告げる。
「我が名は関羽雲長！」
「何っ、関羽！？」
「まさかあの黒髪のか！」
「そうだ！」
まさにそうだというのである。

# 第三話　関羽、趙雲と死地に赴くのことその八

「この青龍偃月刀の錆になりたくなければかかって来い！」
「何っ、青龍偃月刀！？」
「そんなのが何処にあるんだ！？」
「何っ！？」
言われてそのことに自分でも気付く関羽だった。
持っていない。そのことを思い出したのだ。
「しまった、持って来れなかったな」
「いきなり出て来て何かって思ったがな」
「飛んで火にいる何かだ。死んでもらうぜ」
「ふん、それでもだ」
腰にある剣を抜いての言葉である。例えいつもの青龍偃月刀はなくともだ。彼女も諦めるわけにはいかなかった。
「貴様等なぞこの剣で充分だ！」
「ふん、死ね！」
「たった一人で何ができるってんだ！」
こうして戦いがはじまろうとしている。しかしであった。
不意に灯りが消えた。趙雲が傍にあった小石を投げてだ。そのうえで灯りを次々に消していったのだ。
「何だ！？灯りが消えた！？」
「どうなってんだ今度は」
「関羽」
趙雲は彼等が戸惑っているその間にだ。すぐに関羽達のところに駆け寄った。そしてそのうえで関羽に対して言うのであった。
「こっちだ」
「趙雲か、済まない」
「話は後だ。いいな」
「ああ、わかった」

こうして二人は娘を連れてすぐにその場から消えた。そうしてそのうえで物陰に隠れてだ。あらためて三人で話をするのであった。
「しかしだ、関羽よ」
「何だ？」
「無鉄砲なのはあの張飛ばかりだと思っていたが」
こう言うのである。三人はその隅に座ってだ。そうして話をするのだった。
「だがそれは貴殿も同じだな」
「ついな」
関羽は唇を噛み締めて言葉を返す。
「それはだ」
「だが。あれでよかった」
「よかったのか」
「そうだ、よかった」
趙雲はこうも言うのだった。
「私も何らかの手段でこの娘を救おうとしていた」
「そうか」
「そしてだ。これからどうする？」
あらためて関羽に問うのだった。
「これからだが。どうするつもりだ？」
「この娘を連れて出る」
まずはそれだというのだ。
「とりあえずはな」
「そうだな。この娘を置いていくことはできない」
それに趙雲も頷く。二人で助け出した娘を見ている。見れば楚々とした可愛らしい少女である。
「そうするとしよう」
「ああ、では今のうちにだな」
「うむ」
「あの」

しかしであった。ここでその娘が言ってきたのである。
「私だけではありません」
「私だけではないとすると」
「まだ他に捕まっているのか」
「はい、実は」
娘は俯きながらそのうえで話すのだった。
「村の子供達が」
「子供達もか」
「あの連中に捕まっているのか」
「そうです、捕まっています」
こう話すのである。
「偶然山賊達の通り道を見つけてしまって。そこを通った山賊達に捕まって。一緒にいた私も」
「わかった。そういう事情か」
「ならばだ」
二人はそれを聞いてだ。あらためて言うのだった。
「その子供達のところに案内してくれ」
「すぐにだ」
「子供達のですか」
「そうだ、その子達も救う」
「だからだ」
二人はこう娘に言うのであった。そうしてである。

# 第三話　関羽、趙雲と死地に赴くのことその九

娘の案内ですぐに子供達が捕らえられている部屋に来てだ。彼等を救い出しそのうえでアジトから出ようとする。そしてその頃。

張飛とナコルルは山の裏手に回っていた。そこから山賊達の背後を攻めようというのだ。木々が生い茂る山道を進みながらの言葉だ。

「あの、張飛さん」

「どうしたのだ？」

「それも持って来たのですか」

「当然なのだ」

見れば彼女はその手に持っているのは蛇矛だけではなかった。青龍偃月刀も持ってそのうえで山道を進んでいるのである。

「それは」

「そうなんですか」

「愛紗はこれが絶対に必要なのだ」

こう言うのである。

「だからなのだ。それでなのだ」

「けれどそれは」

「どうかしたのだ？」

「かなり重いですが」

ナコルルは怪訝な顔で彼女に言葉を返す。

「それでもなんですか」

「鈴々は全然平気なのだ」

平然と返す張飛である。

「これ位の重さ何でもないのだ」

「あの、でもそれは」

「ナコルルはそこまで考えなくていいのだ」

ナコルルがまだ言おうとするのは止めた。

「それよりもなのだ」

「はい、これからですね」
「そうなのだ。そろそろあの三人も動くのだ」
「テリーさん達が」
「それでナコルル」
ナコルルの顔を見ながら言ってきた。
「あの三人もナコルルも真名をそのまま呼んでいいのだ？」
「はい、それが私達の世界では普通です」
「変わった世界なのだ。しかしそれならそれで言わせてもらうのだ」
張飛は首を傾げさせながら述べた。
「ナコルル。それでいのだ？」
「はい、それで御願いします」
あらためてこう話すのだった。そうして先に進むのだった。
その頃関羽は趙雲と共に子供達を救い出しアジトを脱出しようとしていた。しかし二人も娘も子供達も道はわからない。それで出て来たのは。
「くっ、しまった」
「まずいな」
外に出た。しかしそこは崖のすぐ前だった。そこに出てしまったのである。
「まずいな、後ろにはもう来ているぞ」
「テリー達がそろそろ来るにしてもな」
「あっ、張飛さん！」
「見えているのだ！」
しかしここでナコルルと張飛が二人と子供達の姿を認めたのだった。
「関羽さんと趙雲さんが」
「それに子供達もいるのだ」
「鈴々、それだ！」
関羽は彼女が蛇矛と共に手に持っているものを指差して叫んだ。
「それを投げてくれ！」

「これなのだ！？」
「そうだ、それだ！」
彼女自身が持っている青龍偃月刀を指差しての言葉である。
「それを渡してくれ、すぐにだ！」
「わかったのだ！」
こうしてだった。張飛はすぐにその青龍偃月刀を関羽に向かって投げた。それは凄まじい唸り声をあげ飛び関羽は右手で掴み取った。
「よし、これでいける！」
「これでいけるのだな」
「充分だ。これがあれば誰にも敗れることはない！」
こうしてだった。二人は今自分が出たその出口に立つ。そこには山賊達がいる。彼等は数を頼んで二人に迫る。
「よし、やっちまえ！」
「相手はたった二人だ！」
そのまま迫ろうとする。しかしだった。
「パワーウェーブ！」
「飛翔拳！」
「ハリケーンアッパー！」
三人の声が聞こえてきた。それと共に凄まじい爆音が響き叫び声もあがった。

# 第三話　関羽、趙雲と死地に赴くのことその十

「う、うわああっ！」
「な、何だ！？」
「後ろから三人出て来たぞ！」
「テリー達だな」
「ああ」
二人にはわかった。ここで三人がアジトに入って来たのだ。そうしてそのうえで攻撃を加えてきたのである。
三人は攻撃を浴びせてからだ。そのうえでそれぞれ言うのだった。
「アンディ、どうだ？」
「そうだね。相手としてはね」
アンディは兄の言葉に応えながら言う。既に技を出し終えていた。
「どうってことはないね」
「そうだな。所詮ただのチンピラだな」
「武器持ってるけれどそれはどうなんだ？」
丈はあえてこのことを言ってみせた。
「刺されたり斬られたらことだぜ」
「それで斬られるのか？」
テリーは不敵な笑みを浮かべてそのうえで彼に返すのだった。
「っていうかこんな連中に斬られるか？そんな簡単によ」
「いや、それはないな」
丈は軽く笑ってテリーのその言葉に返した。
「こんな連中どうってことはねえさ」
「よし、じゃあそれで決まりだな」
「やろう、兄さん」
また言うアンディだった。
「すぐにね」
「ああ、行くぜ！バーンナックル！」

「残影拳！」
「スラッシュキック！」
三人は今度は突進して技を繰り出した。山賊達は瞬く間に吹き飛ばされていく。戦いはこれで一変した。
関羽と趙飛もそれに勢いを得て山賊達を薙ぎ倒していく。なおこの時公孫賛は何をしていたかというとだ。
「さて、それではだ」
「あれ、何処にいかれるのですか？」
「何処に？決まっている」
白馬を用意させたところで役人の一人に言うのである。
「山賊達のアジトにだ」
「そこにですか」
「そうだ、行って来る。後は任せた」
こう言って今にも行こうとする。彼女もやる気ではあった。そう、それは確かにあった。
関羽と趙雲は背中合わせになっている。先程まで山賊達が宴を行っていたあの広間で彼等に囲まれている。テリー達もそこにいる。
「おい、今からそっちに行くからな！」
「少し待っていてくれ」
テリーとアンディがその山賊達を倒しながら言ってきた。拳と脚で敵を倒していく。その速さも威力もかなりのものであり鎧をものともしない。
「いいな、もう少しだ！」
「それまでだ！」
「いや、大丈夫だ」
「ここは任せておいてくれ」
しかし二人はこう三人に返すのだった。
「こうして背中合わせになっているとだ」
「負ける気はしない」
「その言葉信じさせてもらうぜ」

丈は今は百烈パンチで山賊達を殴り倒している。
「こっちもやらせてもらうからな！」
「さて、私の真名前はだ」
「むっ！？」
「星という」
それを自分から言ってみせたのだ。
「覚えておいてくれ」
「何故真名をここで言う？」
「命を預けるのなら当然だ」
微笑みを見せての言葉だった。
「違うか？それは」
「そうだな。それではだ」
趙雲の言葉を受けてだ。関羽も言ってきた。
「私の真名も言っておこう」
「うむ、何だ？」
「愛紗という」
彼女も名乗った。
「覚えておいてくれ」
「わかった、そうさせてもらう」
「それではだ。行くぞ」
「うむ！」
その手の得物をそれぞれ構えてだ。そのうえで突き進み山賊達を倒していく。子供達は既にナコルルと張飛が崖に丸太の橋をかけてそれで助け出していた。戦いは彼女達にとって満足のいくものになっていた。

# 第三話　関羽、趙雲と死地に赴くのことその十一

そしてだ。今まさに山賊達のアジトに向かおうとする公孫賛のところにだ。報告が入ってきた。
「御報告申し上げます」
「山賊達のことか」
「はい、退治されたそうです」
「そうか、退治か・・・・・・何っ！？」
夜の中剣を準備体操の様に振りながら驚いた声をあげた。
「終わったのか」
「はい、終わりました」
「いや、それでは私の出番は」
「なくなりました」
実に素っ気無い返答だった。
「これで」
「そうか、なくなったのか」
それを聞いて見ただけでわかるまでに落ち込む公孫賛だった。
「それでは白馬に乗って颯爽というのは」
「いつも通りです」
「いつも通りか。折角包丁まで用意していたのにな」
「あの、包丁は流石にまずいのでは？」
「ううむ、最近そちらの方が有名だからな」
何故かこんなことも言うのだった。
「だからなのだが」
「その最近ですがそちらの方も何か」
「ううむ、弟だけでは駄目なのか」
話が訳のわからない方向にいっている。
「しかし、そうか」
「はい、出番はなくなりました」

「何でいつもこうなるのだ・・・・・・」
がっくりと肩を落とす公孫賛だった。何はともあれ山賊達は退治され娘も子供達も無事に村に帰された。そしてであった。
「じゃあまたな」
「縁があればまた会おう」
「その時に宜しくな」
テリー達が関羽達に別れを告げている。丁度道の分かれめであった。
「俺達はこのまま旅を続けるが」
「君達もそうなのかな」
「今度は何処に行くんだ？」
「南に向かおうと思っている」
関羽が三人の問いに答えた。
「これからは」
「そうか、南か」
「私達は東に向かうとするよ」
「青州だったな」
こう話すのだった。
「じゃあそういうことでな」
「またね」
「うむ、機会があればまた会おう」
「楽しみにしているのだ」
皆笑顔で別れた。そのうえで関羽達は南に向かう。一行の中には趙雲も加わっている。関羽はその彼女に問うのであった。
「いいのか？」
「何がだ？」
「いや、公孫賛殿のところを離れてだ」
問うのはこのことだった。
「我々はまだ仕官するつもりはないが貴殿はだ」
「いい。公孫賛殿はどうもな」

「どうも？」
「悪い人物ではないし能力もそれなりにある」
「そうだな。悪人でも無能でもない」
それは関羽にもわかることだった。
「それにネタとしても面白い」
「ネタか」
「だが影が薄い」
趙雲が言うのはこのことだった。
「致命的なまでにな。何処にいるのかさえわからないのがいつもだ」
「気の毒な話ではないのか？それは」
「あれでは？何かをする以前のことだ」
何気に厳しいことを言う。
「私に相応しい主は他にいる。その主を探す」
「そうするのか」
「そうだ。それにだ」
その言葉はさらに続く。
「御主等とこうして一緒にいるのも悪くはない」
笑みを浮かべての言葉である。
「だからだ。同行していいか？」
「拒む理由もない」
関羽は微笑みながら述べた。
「それではだ。行くか」
「その言葉有り難く受け取らせてもらう」
こうして一行は趙雲も加えて旅を続けることになった。そしてその先でまたしても新たな出会いが一行を待っているのであった。

第三話　　完

2010・3・24

# 第四話　張飛、馬超と出会うのことその一

第四話　張飛、馬超と出会うのこと

この時曹操は多忙であった。とにかく仕事に終われていた。

「ふう、次から次に来るわね」

「はい、今や二つの州を掌握していますから」

「それだけに仕事の量も」

「わかってはいたわ」

こう己の両脇に立つ黒い長髪の紅のスリットのある服を着た気の強そうな顔立ちの美女と藤色の短い髪をして前だけを伸ばしたクールな印象の美女に対して返した。

「それでもね」

「うう、私は何か今にも飛び出て訓練に出たいですが」

「だから姉者、それは」

その藤色の髪の美女が彼女を嗜める。見れば二人の服はそれぞれ紅色と藤色であるがデザイン自体は同じである。それぞれ赤と青も入っておりスリットが強く丈も短い。そして前垂れがある。ハイソックスを着けているところまで同じである。

黒髪の美女の目は赤い。それが気の強そうな感じをさらに強くさせている。そして藤色の髪の美女の目は藤色である。それがさらに落ち着いた雰囲気を見せている。お互いに好対象である。

「今は止めるべきだ」

「書類仕事をせよというのか、この夏侯惇に」

「そうだ」

藤色の美女ははっきりと言い切った。

「この夏侯淵何度も言おう」

「秋蘭、御前はどうしていつも」

「姉者もたまには書類仕事をしてくれ」

冷静だが困った口調であった。
「曹仁や曹洪もしているではないか」
「あの二人もか」
「そうだ、だからだ」
諭す様な口調で夏侯惇に話すのだった。
「こうしてたまには曹操様と共にだな」
「だが私は」
「頼りにしているわ、春蘭」
ここでその曹操が夏侯惇の方を見上げて微笑んで告げた。
「今我々は少しでも手が欲しいところだから」
「はあ、だからですか」
「二つの州を掌握してさらに人材も入ってきている」
このことに満足はしている口調であった。
「けれどね。私達はこれで終わりではないわね」
「はい、それは勿論です」
すぐにこう答える夏侯惇だった。
「我等の望みは」
「そう、天下」
曹操の言葉はここでは一言であった。
「天下に平穏を取り戻すことよ」
「はい、それでは」
「今は少しでもですね」
「優秀な人材なら誰でもいいわ」
曹操は断言する。
「春蘭、貴女も事務仕事はできるわよね」
「一応は」
「じゃあすぐに取り掛かって」
そうしてくれというのである。
「そして後でね」
「はい、後で」

「また人材の面接をして」
それもだというのだ。
「人材のね」
「人材ですか」
「また来てるのよね」
「はい、三人来ています」
夏侯惇が話してきた。
「今度はかなり大柄な男が三人です」
「大柄ね」
「ヘビィD、ラッキー＝グローバー、そしてブライアン＝バトラーといいます」
「何かジョンと同じ感じの名前ね」
曹操はその三人の名前を聞いて述べた。
「まさかまた別の世界から来たのかしら」
「そう言っているそうです」
夏侯淵もそうだと話す。
「本人達は」
「そうなの」
曹操はそれを聞いてだった。そのうえでの言葉だ。
「わかったわ」
「わかったとは？」
「私が直接会ってみるわ」
そうするというのである。

# 第四話　張飛、馬超と出会うのことその二

「その三人にね」
「ですが華琳様はお忙しいのでは？」
「別にいいわ」
微笑んでそれはいいというのだ。
「麗羽も今はかなり人材が集まったそうね」
「はい、あちらもです」
「別の世界からの人材が来ています」
夏侯淵だけでなく夏侯惇も話す。
「随分と賑やかになってきています」
「ですから我々も」
「わかっているわ。この許昌を拠点として」
今曹操はこの街を拠点としているのである。
「そしてそれからね」
「そうですね。それからです」
「陳留も」
「あそこが本来の私達の本拠地だけれど」
今は違うというのだ。
「許昌は交通の要地だしね」
「それに袁紹殿の本拠地も今は中原に近いです」
「ですからそれも」
それについても話すのだった。
「あと都にも近いのがいいかと」
「今都はどうも問題もありますが」
二人の話は続く。
「都は今はかなり厄介なようですが」
「大将軍と宦官達の争いが」
「あの女はどうにもならないわね」

曹操は大将軍の話を聞いて頷いた。
「麗羽はあれで見るところがあるけれど」
「袁紹殿は。確かにそうですね」
「問題のある人物ですが」
それでもだというのだ。彼女達は何処か袁紹を認めている。それには理由があるらしい。
「しかし政治や軍事は上手いです」
「特に政治は」
こう話してである。あらためて話すのだった。
「擁州には董卓もいますし」
「あの女についてはよくわかりませんが」
「相手もいるし。人を集めて確実にね」
また話す曹操だった。
「足場を固めていきましょう」
「はい、それでは」
「今は」
こう話してそのうえで今は政治と人材の確保に励む曹操陣営だった。彼女達も着実に足場を固めていた。そして。
その袁紹の本拠地である?。そこに今関羽達が入った。
一行はその街を見てだ。そのうえでそれぞれ言うのだった。
「凄い街ですね」
「全くなのだ」
ナコルルと張飛は素直にその街並みに驚いている。人が多く活気があるだけでなくそのうえ街並みも立派だ。まさに大都市であった。
「こんな街もあるんですね」
「幽州よりもずっと凄いのだ」
「冀州はこの国の中でもとりわけ栄えている州だ」
趙雲はその二人に対して言ってきた。
「そして?はその州都だ」
「だからなんですか」

「ここはで凄いのだ」
「そうだ。しかし」
ここで趙雲はさらに言うのだった。
「それでもここまで繁栄しているとはな」
「そうだな。政治はしっかりしているな」
関羽もここで言う。
「この街は」
「そういえば幽州からここに入ると雰囲気が変わりましたね」
ナコルルはこのことを思い出した。
「何か急に華やかになったみたいな」
「幽州は人口が少ない」
また言う趙雲だった。
「それに対して河北の他の三つの州は人口がさらに多い。それに」
「それに？」
「他にあるのだ？」
「領主の袁紹殿は政治は上手い」
このことも言うのだった。
「それと戦争もそれなり以上にできる」
「では袁紹殿に仕官するのか？」
関羽はここまで聞いて趙雲に対して言葉を返した。

## 第四話　張飛、馬超と会うのことその三

「貴殿は」
「いや」
しかしであった。趙雲はここでこう返すのだった。
「それはしない」
「しないのか」
「言ったな。貴殿達と共にいると」
「ああ」
「それにだ。袁紹殿はだ」
ここで趙雲の眉が少し顰めさせられた。そのうえでの言葉だ。
「確かに政治や軍事は上手い」
「ではいいではないか」
「しかし。癖のあり過ぎる人柄なのだ」
問題としているのはそこであった。
「どうもな。何かあればすぐに騒ぐ。そして妙な劣等感も持っている」
「劣等感もか」
「袁紹殿は名門袁家の生まれなのは知っているな」
「うむ、それはな」
関羽もこのことは知っていた。それもよくである。
「四代三公の家だな。知っているが」
「だが母の身分は低い。だからだ」
「だからか」
「そうだ。それで何かあればすぐに騒ぐ」
劣等感故にそうするというのだ。
「だからだ。どうも性に合わない」
「そうか。だから仕官しないのか」
「そのせいで宦官の家の出の曹操殿とは妙に馬が合うようだが」

「お互い日陰者意識があるのか」
「そうだ、ある」
まさにそうだというのだ。
「二人共な」
「袁紹殿と曹操殿か。仲がいいとは思えないがな」
関羽はそれはあまり想像できなかった。
「だが。そういう事情があったのか」
「袁紹殿は本来はあそこまではなれなかった」
これも事実であった。
「曹操殿もだ。妾腹に宦官の家だからな」
「しかし大将軍に認められてだったな」
「気に入られたとも言うべきか。あの方も身分が低く譜代の側近がいない。だから少しでも有能な人材が必要だ。だからこそだ」
それで集めているというのだ。
「あの方も宦官との政争があるしな」
「都も物騒なものだな」
「そうですね。この国は何かと不穏な空気に満ちています」
ナコルルも顔を曇らせて述べる。
「それがどうなるか」
「それはいいとしてなのだ」
だがここで張飛が言ってきた。
「お腹が空いてきたのだ」
「いや、待て」
だがここで趙雲がその彼女に言う。
「今は路銀が少ないぞ」
「そうなのだ？」
「張飛が一度に何人分も食べるからだ」
「鈴々は知らないのだ」
自覚はない。
「そんなことは」

「いや、御前はかなり食べてるぞ」
関羽もここでその張飛に言う。
「十人分は普通ではないか」
「あれが十人分だったのか。鈴々はわからなかったのだ」
「全く。御前ときたら」
「ではここは」
ナコルルが言ってきた。
「また笛で」
「そしてだ。歌うのもいい」
趙雲は歌も提案した。
「愛紗、貴殿は声がいい」
「声がか」
「それに歌も上手い。だからナコルルの笛に合わせてだ」
「歌うのか、私が」
「そうだ。私はメイドでもして稼いでくる」
彼女はそうするというのだ。

# 第四話　張飛、馬超と会うのことその四

「それで結構な金が入る筈だ」
「そうか、わかった」
「では鈴々はどうするのだ？」
「貴殿は好きにすればいい」
それはいいというのである。
「メイドもできそうにないしな」
「歌はどうなのだ？」
「今は関羽がいる」
また彼女の名前を出した。
「だからだ。適当に休んでいてくれていい」
「何なのだ、それは」
「ではな。そうしよう」
「わかった。それではな」
「わかりました」
「何なのだ？」
関羽とナコルルは納得したが張飛はそうではなかった。それでむくれて街を歩きはじめた。そうしてそのうえで文句さえ言っていた。
「鈴々を必要としないなんて何なのだ。あいつは鈴々のことは何もわかっていないのだ」
そんなことを言いながらふと人の集まりを見てだ。そこの立て看板を見る。するとそこに書いてあったのは。
「んっ！？何か書いてあるのだ」
張飛はそれを読もうとする。しかし彼女は字は苦手だった。
「ええと、あれは」
「武闘会を開く」
その横から声がしてきた。
「今日だな」

「今日なのか」
「賞金も出る」
声はまた言ってきた。明るく威勢のいい若い女の声だ。
「それもかなりのものだな。流石袁紹気前がいいな」
「賞金!?じゃあ鈴々も出るのだ」
張飛はそれを聞いて述べた。
「今から賞金を手に入れるのだ」
「それは無理だな」
声はそれを否定してきた。
「残念だけれどな」
「残念!?どうしてなのだ」
「それは決まってるだろ?」
声は笑みを入れてきた。
「あたしが優勝するからだ」
「優勝!?誰だ御前は」
張飛はそれを聞いてだ。声の方に顔を向ける。するとそこにいたのは。
茶のかなり長い髪を後ろで束ね耳のところも束ねている。青緑の上着に袖は黒だ。その袖がかなり長く手の甲まで覆っている。
スカートは短く白いものだ。そしてブーツも白である。
顔立ちははっきりとしていて気の強そうな感じだ。そこに少女の凛としたものが備わり際立った美貌を見せている。目は茶色でそこから強い光を放っている。胸は服の上からでもはっきりとわかる大きさだ。スタイルは全体でもかなりいい。その少女が言ってきたのである。
「見ない顔なのだ」
「あたしか?あたしは涼州の出で馬超っていうんだ」
「馬超なのか」
「そうさ。字は猛起」
字も名乗った。

「あんたの名前は何なんだ?よかったら名乗ってくれよ」
「鈴々のことか」
「待て、それ真名か!?」
その少女馬超はそれを聞いてまずは引いた。
「いきなり真名を言うのはな」
「では名前を言うのだ」
「あ、ああ」
「張飛なのだ」
ここで名前を名乗った。
「字は翼徳なのだ」
「そうか、張飛か」
馬超はそれを聞いて頷いた。
「しかし。真名聞いちまったな」
「どうするのだ?それで」
「あたしも名乗るな。それでお互い様だからな」
「そうなのだ」
「あたしの真名は翠」
こう名乗った。
「よかったらそれで呼んでくれ。じゃあまた会おうな」
「優勝するのは鈴々なのだ」
「いや、あたしさ」
こんな話をしながらその武闘会に参加する。会場は四角く白い闘技場を観客達が囲んでいる。そして顔良達がその警護にあたっている。

# 第四話　張飛、馬超と会うのことその五

顔良と文醜の他にだ。もう三人いた。
「やれやれよね」
「まったく」
赤いロングヘアに青い目をした気の強そうな顔立ちの少女がいる。顔良達と同じような年齢に見える。赤い上着と銀の鎧、それに青のミニスカートである。ブーツは赤だ。
そしてもう一人は黄色い髪を左右でくくっている大人しげな感じの少女だ。目は黒くやや垂れ目だ。だがその服は顔良達と同じで露出は多めだ。黄色い上着に銀の鎧、そして黒の丈の短いスカートと黄色のハイソックスだ。その二人にだ。
黒く背の高い美女もいる。四人よりも年上に見える。落ち着いた雰囲気を持ち黒く膝まである豊かな髪に黒いワンピースのスリットが深く入った服とブーツだ。その彼女もいた。
文句を言っているのは二人だ。彼女達はそれぞれ顔良と文醜に言う。
「ねえ斗詩、猪々子」
「これも仕事なのよね」
「そうよ花麗、林美」
「今更何を言ってるんだ？」
顔良と文醜はこう二人に返した。
「貴女達もその為にここに来てるんじゃない」
「そうじゃないのか？」
「この張？がこんな雑用するなんて」
「全く。高覧ともあろう者が」
二人はこう言ってまた溜息をつく。
「戦場で戦うのならともかく」
「袁紹様も人使いが荒いのね」

「何言ってるのよ。今は州が三つに増えて大変なのよ」
「そっちに新入りが大勢行っただろ」
顔良と文醜はまた二人に話す。五人であれこれと荷物を持ったり観客席の誘導をしたりして働いている。そのうえでのやり取りである。
「袁紹様は今山賊退治を徹底しておられるし」
「それでだよ。あたし達は今はこうして本拠地に残ってな」
「それはわかってるけれど」
「訓練ならともかくね」
「文句は言わないことね」
しかしここで黒髪の美女が言ってきた。
「与えられた仕事は確実にこなす」
「うっ、黒梅さん」
「そう仰いますか」
「言うわ。まずは身体を動かす」
美女はまた言う。
「わかったわね」
「流石麹義さんよね」
「そうだよな」
顔良と文醜はその美女麹義の言葉を聞きながら話す。
「しっかりしてるわ」
「あたし達武闘組で最年長だけはあるよな」
「斗詩も猪々子もよ」
麹義の言葉は二人にもかけられる。
「真面目にやりなさい。いいわね」
「は、はい」
「わかってます」
二人も彼女には弱い。
「それじゃあすぐに」
「仕事終わらせます」

こう話してだ。そのうえで五人で仕事をする。そうしてそれが終わると会場整理についた。そして主賓席に袁紹が出て来た。その両脇には田豊達がいる。

「さて、皆さん」

「おお、袁紹様だ」

「相変わらず派手だな」

民衆はその彼女を見て言う。

「さて、それでは今から武闘会をはじめます」

「やれやれ！」

「早くはじめろ！」

こうして大会がはじまる。眼鏡のアナウンサーもいる。そしてその横には解説者として審配もいた。

「さて、はじまりました武闘会」

「はい」

審配がそのアナウンサーの言葉に応える。

「いよいよですね」

「まずは今大会最年小、いえ最年少の張飛選手と」

「アースクエイク選手ですね」

「いや、凄い大きさですね」

出て来たのはかなりの大きさの巨人だった。丸々と太ったスキンヘッドの男で顔には刺青がある。赤い胸と腹が露わになった上着にズボンだ。そしてその手には巨大な鎖鎌がある。

# 第四話　張飛、馬超と会うのことその六

「このアースクエイク選手は」
「今大会優勝候補筆頭です」
「はい、それに対して張飛選手がどう健闘するか」
「それに注目です」
こう話してだ。そのうえで闘いを見守る。アースクエイクは目の前に立つ張飛を見下ろしながらせせら笑って言うのであった。
「おいおい、子供かよ」
「子供でも鈴々は強いのだ」
「強いっていうのか！？」
「そうだ。かかって来るのだ」
「はっ、じゃあな。容赦はしねえぜ」
「はじめ！」
声がかかった。それがはじまりだった。
アースクエイクはすぐに鎌を出してきた。それは張飛に向かって飛ぶ。
「ぐっへへ！」
「さあ、早速鎌を出してきたアースクエイク選手！」
アナウンサーがそれを見て叫ぶ。
「鎖から伸びてきます！」
「これをかわすのは容易ではないわ」
ここでまた言う審配だった。
「そしてかわせなければ」
「まずいですか」
「ええ、間違いなく」
「さて、どうするか張飛選手」
アナウンサーの実況はその中でも続く。
「この鎌を。どう防ぐのでしょうか」

「こうするのだ！」
そしてその張飛が動いた。その手にある蛇矛を鎌に向けて一閃させた。
するとであった。鎌は吹き飛びだ。アースクエイクの手から離れた。
「何っ！？」
「今なのだ！」
張飛は前に突進しその足元を蛇矛で払った。それでアースクエイクを瞬くの間にこかせてしまった。それで決まりであった。
「うぐぐ・・・・・・」
「一本なのだ」
「何と、小兵張飛選手勝利です！」
アースクエイクは五体満足なままだ。しかしそれでも武器は飛ばされ倒れている。勝敗は誰の目から見ても明らかなものだった。
「何とも意外な展開になりました！」
「あの張飛という娘」
審配の目がここで強いものになる。
「どうやらかなりの強さのようね」
「はい、確かに。そして続きましては」
試合はさらに進む。馬超も闘いの場に出た。
対するは緑の肌に粗末な黄色い服を着た腰の曲がった小男だ。顔は醜く歪んでおりその左手には巨大な大きい爪がある。その男が彼女の相手だ。
「けけけ、主では無理じゃ」
「また随分と変わった奴が出て来たな」
「さあ、涼州の名門馬家の出身馬超選手と」
「馬超！？」
その名前を聞いた麹義がふと声を漏らす。
「まさか。こんなところまで来ているなんて」
「あれ、お知り合いだったんですか？」

「あのやたらと長いポニーテールの娘と」
「ええそうよ花麗、林美」
こう二人にも返す。
「私も涼州の出身だから」
「そういえばそうでしたよね」
「黒梅さんのお生まれは」
「ええ」
こう顔良と文醜にも返す。
「そうよ。今では馬家の若き当主」
「そんなのがここにですか」
「来ていたなんて」
「その腕は涼州でも随一」
「凄いことになってきたっていうか」
「この武闘会って」
高覧達も言う。
「しかし。涼州っていったら」
「そうそう」
そしてある話になるのだった。
「そこってこれから私達が進出しようとしているところだし」
「都の北からね」
「馬氏は今は」
麹義がここで言う。

# 第四話　張飛、馬超と会うのことその七

「当主の馬騰が急死して治める者がいないから」
「そうですよね、麹義さんの案内で進出しようっていうところで」
「名馬に西域との貿易」
袁紹はそれを狙っていたのである。やはり彼女はこと政治や戦争といったものに関しては少なくとも無能な人物ではないようである。
「それを狙って擁州の董卓に睨みを効かす」
「その為にも」
「その家の娘が来ているなんて」
また言う麹義だった。
「どうなるのかしら、本当に」
「それはそうとよ」
文醜がまた言う。
「はじまったわよ」
「あっ、今？」
「遂に」
五人はその闘いのはじまりを見る。まずはその緑の肌の男が名乗る。
「わしの名は不知火幻庵」
「それがあんたの名前か」
「左様、わしの名前を覚えておくケ」
「一応は覚えておくさ」
その十字槍を両手に持っての言葉である。
「それはさ」
「一応じゃと」
「そうさ。悪いがあんたは倒させてもらうよ」
悠然と構えての言葉である。
「それでいいよな」

「できたらな。では行くケ」
「はじめ！」
言葉と共に幻庵は一旦その顔を馬超から背けてだ。すぐに紫の息を吐き出してきた。
「毒霧か！」
「左様、かわせるケ？」
「こんなのはな！」
馬超は叫んでだ。一気に跳んでだ。そのうえで急降下して槍の攻撃を浴びせる。すると幻庵は彼女のその攻撃を左手の爪で防いだ。
「くっ、わしの毒霧をかわしたケ！？」
「確かに驚いたさ」
馬超もそれは認める。
「あんたどうやらまともな人間じゃないな」
「そうだケ。我が一族はケ」
それを自分でも認める幻庵だった。
「人ではない存在の血も引いておる」
「そうか、やっぱりな」
「しかしこの世界には気付けば迷い込んでいたケ」
「何っ！？」
「この世界では生きる為に金が必要だケ。だから闘うまでだケ」
「それだけだってのか」
「左様、それだけだケ」
こう言うのである。
「ではじゃ。今度はだケ」
後ろに着地した馬超に対してだ。今度は激しく縦に回転しながら転がってきた。その技で馬超を倒そうというのだ。
「ケケケケケケケケ！」
「転がってきたのか」
「さて、どうして倒すケ？」
転がりながら馬超に問う。

「このわしを」
「心配無用、こうしてな！」
馬超はこう叫んでだ。その幻庵に対して突進する。そうしてだ。
その槍を激しく突き出す。それで迫る彼を一気に弾き飛ばしたのだ。
「ピギャ！？」
「よし、一本だな！」
馬超は場外に弾き飛ばした幻庵を見て言う。
「あたしのな！」
片足を鶴の様に掲げさせての言葉だ。その時スカートが翻りエメラルドグリーンのものがちらりと見える。彼女の色はそれだった。
「見えた！じゃなくて一本！」
ここで審判の声が響く。馬超も見事勝利を収めた。
勝負はこのまま続く。張飛も馬超も順調に勝ち進んでいく。そして気付けばだ。勝負は決勝にまで進んでいる。その二人の闘う者は。
「さあ、瞬く間にここまで来ました！」
「凄いですね」
解説者の横で審配が言う。

# 第四話　張飛、馬超と会うのことその八

「張飛選手と馬超選手の強さは」
「はい、まさに快進撃でここまで来ました」
その決勝にである。
「ここまで強い人間がいることも驚きです」
「我が陣営でもここまでは中々いませんね」
審配も真剣な顔で呟く。
「これは」
「これは？」
「いえ、こちらの事情です」
今はこう言うだけだった。
「ただ。袁紹様にお伝えしなければ」
「あれ、神代が解説者だったの」
「あっ、斗詩」
たまたま傍に来た顔良に顔を向ける。
「丁度いいところに来てくれたわね」
「どうしたの？」
「あの二人のことを袁紹様のところに」
真剣な顔で言うのである。
「お考えになられてと」
「わかったわ。それじゃあ」
顔良も真剣な顔で頷く。これで彼女達の話は終わった。
そしてだ。最後の勝負がはじまろうとしていた。張飛と馬超はもう対峙している。
その対峙している張飛がだ。まず言ってきた。
「優勝は貰うのだ」
「おいおい、もう勝ったと思っているのか？」
「そうなのだ。鈴々は負けたことがないのだ」

こう馬超にも言ってみせる。
「だから絶対に優勝するのだ」
「悪いがあたしもなんだよ」
「それはどういうことなのだ？」
「あたしも負けたことがないんだよ」
にやりと笑って張飛に返すのだった。
「負けたことはね」
「じゃあ御前はここで今はじめて倒れるのだ」
「でははじめるのだ」
「ああ、どっちが倒れるかここで決まるな」
「はじめ！」
こうしてだった。闘いがはじまった。両者は互いに突進してだ。
そのうえでそれぞれの得物を繰り出し合う。激しい応酬が忽ちはじまった。
馬超が槍を突き出せば張飛がそれを防ぐ。張飛が蛇矛を横薙ぎに振るえば馬超はそれを受け止めてみせる。両者の実力は互角だった。
「これは凄い勝負になりました！」
解説者も言う。
「両者互いに譲らず、既に百合を超えていますがまだ決着はつきません！」
「予想以上ね」
それを見た審配がまた言う。
「二人共」
「予想以上ですか」
「進言して正解だったわ」
そしてこうも言うのだった。
「この二人、是非共」
「是非共」
「こちらのお話です」
その内容までは言わないのだった。

「ですから」
「はあ。そうですか」
「さて、この闘いは」
また言う解説者だった。審配をよそにだ。
「どうなるでしょうか」
二人の闘いは続く。やがて二百合を超えた。
だがそれでも決着はつかない。二人は業を煮やしそれぞれ跳んだ。
そして空中でも激しく打ち合う。
「こんな奴は三人目なのだ、いや四人目なのだ！」
「四人目！？」
「鈴々と闘える奴は四人目なのだ」
張飛は着地してから言う。
「御前、かなりやるのだ」
「そうだな。あたしもそう思うよ」
馬超もだというのだ。
「あんたみたいな相手ははじめてさ」
「そうなのだ」
「そうさ。それでもこれで終わらせるか」
あらためて構える馬超だった。

# 第四話　張飛、馬超と会うのことその九

「本気でな！」
「こっちもそのつもりなのだ」
そしてそれは張飛も同じだった。
「鈴々もこれで」
「決めるんだな」
「馬超といったな」
彼女の名前を呼んでみせる。
「では行くのだ」
「ああ、決めるか」
お互いに構えに入る。そのうえでまた激突しようとする。しかしだった。
急に張飛の腹が鳴った。それがそのまま水を差してしまった。
「あっ、これは仕方ないのだ」
「おい、御前」
馬超も呆れてその張飛に抗議する。
「闘いの中でだな・・・・・・あっ」
しかしであった。その馬超の腹も鳴った。これで緊張の糸は完全に切れてしまった。
「あはは、まああたしもだな」
「そうなのだ。仕方ないのだ」
二人共顔を赤くさせて手を頭の後ろにやって言う。
「これはまあ」
「そうなのだ。どうしようもないのだ」
「袁紹様」
「宜しいかと」
そして田豊と沮授がここで袁紹に言ってきた。彼女は主賓席でそのまま闘いを見続けていたのだ。

「そうですわね。それでは」
「はい、これで」
「終わらせましょう」
「両者これまで」
ここで袁紹は立ち上がって言う。
「双方優勝とします」
「おおっ、両者優勝！？」
「何と」
観客達も袁紹のその言葉を聞いて声をあげる。
「では賞金も？」
「二人に」
「二人に優勝の金額を」
「はい、それでは」
「その様に」
田豊と沮授が応える。こうして二人は優勝となりそのうえで袁紹に宴に招かれる。そのうえでその腹を満たすのであった。
そのテーブルの上に置かれている饅頭や豚の丸焼き、それにラーメンや餃子、炒飯といったものを食べていく。腹は急激に満たされていく。
「美味いのだ」
「ああ、最高だな」
二人は食べながら同席している袁紹に対して言う。
「袁紹殿のところじゃいつもこんなのが食えるのか？」
「いつもなのだ？」
「はい、何時でも好きなだけ食べられましてよ」
袁紹は微笑みながら二人に返す。
「もうどれだけでも」
「いや、そりゃ凄いな」
「そういえば街も凄かったのだ」
「袁紹様は政治と軍事は凄いんだぞ」

袁紹の左脇に立って控えている文醜が胸を張って言う。顔良は右脇である。その後ろには田豊と沮授が控えている。審配は少し離れた場所から見ている。

「そのかわり自分の興味のないことは全然しようとしないし駄目駄目だけれどな」

「余計はことは言わなくていいですの」

袁紹はむっとした顔になりすぐに文醜に返した。

「全く。いつもいつも」

「あっ、すいません」

「わかればいいですの。とにかく」

文醜を叱った後であらためて二人に声をかける。

「どうですの？御二人を我が袁家の客将に」

「そうしたらこんな美味いものが何時でも食えるのだ？」

「いや、涼州じゃこんなのないからな」

「そうですわよ。何時でもですわよ」

袁紹はここぞとばかりに二人に言う。

# 第四話　張飛、馬超と会うのことその十

「如何でして？それは」
「わかったのだ。では」
「喜んでな」
こうして二人は快諾した。しかしである。三人のやり取りを聞いていた顔良と文醜はそれを聞いてだ。二人になったところであらためて話すのだった。二人はある部屋で話をしている。そこは物置である。
「なあ、まずくないか？」
「まずいって何が？」
顔良は文醜にまずは怪訝な顔で返した。
「何がなの？」
「だからだよ。あの二人が入ったらな」
「いいじゃない。最近州を三つも抱えておまけに涼州にも進出するのよ」
袁紹陣営も何かと大変なのだ。
「人出は必要じゃない」
「だからそうじゃなくてだよ。あの二人が入ったらあたし達どうなるんだよ」
「どうなるって？」
「田豊と沮授は別格としてな」
その二人が袁紹のブレーンであり第一、第二なのだ。
「武じゃあたし達が袁紹様の第一、第二の側近だろ？」
「黒梅さんもいるけれどね」
「それでもだよ。側近だよ」
それを言う文醜だった。
「けれどあの二人が加わったらどうなるんだよ。尋常じゃない強さだぞ」

「だからいいじゃない。袁紹様にとっても」
「あのな、あの二人が入ったらあたし達は首にならなくても側近の座から外れるんだぞ」
「えっ、そうなの！？」
「そうだよ、だからここはな」
「え、ええ」
「手を打つんだよ」
こう顔良に言うのだった。そしてそのうえですぐに二人で袁紹のところに向かいすぐに話すのだった。
「あのですね」
「袁紹様、宜しいでしょうか」
「何ですの？」
袁紹は自分の席に座りながらそのうえで二人に対して言うのだった。
「匈奴が何かしてきましたの？涼州への道は確保しないといけませんわ」
「いえ、そうではなく」
「あの二人のことですが」
「ええ、登用しますわ」
張飛と馬超はそうするというのだ。
「あの二人、使えますわ」
「そのことですが」
「あの二人、どうなのでしょうか」
こう二人は躊躇いながら言うのであった。
「袁家の人材として相応しいかどうか」
「それですが」
「私は何かに優れた者なら誰でも使いますわ」
このことにおいては曹操と全く同じスタンスだった。
「ですから何の問題もありませんわ」
「いえ、それでもです」

「それは」
「何かありまして？」
「闘いの中で急にお腹を空かして中断するようなこともありましたし」
「登用には少し様子見をした方がいいかと」
「ふむ。そうですわね」
実は袁紹もこのことは少し気になっていた。それで二人の話に頷くところを見たのである。
そしてだ。袁紹は言った。
「では試験をしますわ。それに受かれば登用しますわ」
「はい、それでは」
「その様に」
「貴女達がその相手をしなさい」
ところが袁紹はここでこんなことも言うのだった。
「宜しいですわね」
「えっ！？」
「あたし達がですか」
「そうですわ。まずはね」
こう言ってである。さらに言う袁紹だった。
「そして登用すれば二人は私達の武の柱。貴女達は」
「私達は！？」
「どうなるんですか！？」
「降格及び減給ですわ」
それだというのだ。
「両脇から外れます。宜しいですわね」
「は、はい」
「わかりました」
二人にとっても正念場になってしまった。話はこうしてまた動く。
だが今度は闘いは闘いでも全く異なる闘いになろうとしていた。

第四話　完

2010・3・26

# 第五話　張飛、馬超、顔良及び文醜と競うのことその一

第五話　張飛、馬超、顔良及び文醜と競うのこと

「曹操様」

「宜しいでしょうか」

「ええ、いいわよ」

曹操はまた人と会っていた。相手は二人である。しかしその二人は夏候淳と夏候淵ではない。長身でスタイルに優れた二人とは違い小柄で可愛らしい二人だ。

一方は癖のある緑の肩までの髪をした垂れ目の少女で草色の上着に膝までの緑色のスパッツ、それにブーツといった姿である。目は緑でその顔立ちは幼く何処か頼りなげだ。鎧の色は金色だ。

そしてもう一人は黄色い髪をポニーテールにした吊り目の少女だ。黄色い目が印象的で気の強い印象を与える顔である。

レモン色の上着に黄色いスパッツである。そのスパッツはタイツの様に長い。彼女の鎧は銀色だ。その二人が曹操の前に来て言うのである。

「また人材が来ました」

「御会いになられますか？」

「今度は誰なのかしら」

それを問う曹操だった。自分の机で書類の整理をしながら応えている。

「最近やけに人が多いけれど」

「今度は我が国の人間の様です」

「名前を聞く限り」

「我が国の」

それを聞いた曹操の目がぴくりと動いた。

「そうなのね。名前は？」

「秦崇雷と秦崇秀です」
「その二人です」
「兄弟かしら」
曹操は名前を聞いてすぐにそれを察した。
「ひょっとして」
「はい、どうやら」
「その様子です」
「わかったわ」
それを聞いてまずは頷く曹操だった。そしてそのうえでまた言うのだった。
「それじゃあね」
「御会いになられますね」
「それでは」
「ええ、それじゃあ夏瞬、冬瞬」
二人の真名も言う。
「早速呼んできてくれるかしら」
「わかりました」
「それでは」
こうして二人がその彼等のところに来た。二人は待合室のテーブルでそれぞれ座っている。一人は黒髪に金色のメッシュを入れて立たせた青い服の少年だ。顔付きは鋭く今にも闘わんばかりだ。
もう一人は黒いおかっぱ頭の少年で何か企んでいる様な顔である。彼は赤い服を着ている。どちらも同じデザインの中国服である。
「秦崇雷殿、秦崇秀殿」
「宜しいでしょうか」
「曹仁殿に曹洪殿」
「どうなのでしょうか」
その二人は彼女達の名前を呼んで応えた。
「曹操殿は会ってくれるのか」
「それで一体」

「はい、御会いして下さいます」
「今から」
「わかった。それではだ」
「参りましょう」
こう話してであった。二人が曹操の部屋に案内される。見れば曹操は既にある人間と会っていた。それはスキンヘッドの大柄な男で左手には巨大な腕の様な武器を持っている。上半身は裸で下半身は赤いズボンだ。
そしてもう一人いた。もう一人は長い癖のある豊かなブロンドの長身の美女だ。青い膝までのスカートと銀の鎧を身に着けている。その二人と会っていたのだ。
「いいわ」
「それでは」
「登用して頂けると」
「ええ、ナイトハルト＝ズィーガーとシャルロットね」
二人の名前も呼んでみせた。
「わかったわ」
「はい、それでは」
「宜しく御願いする」
「夏侯惇、夏侯淵」
二人が彼等を曹操の前に連れて来たのだ。その彼女達にも声をかける。
「二人を兵達のところへ」
「はい、わかりました」
「それでは」
夏侯惇と夏侯淵が曹操の言葉に応える。そのうえで彼等を案内し場を去る。

# 第五話　張飛、馬超、顔良及び文醜と競うのことその二

それと交換にであった。曹仁と曹洪がやって来た。曹仁はその緑の目を輝かせている。

「あの曹操様」

「ええ、夏瞬」

曹操も彼女の真名を呼んで応える。

「連れて来てくれたのね」

「はい、では御二人共どうぞ」

「はじめましてだな」

「宜しく御願いします」

その崇雷と崇秀が来て曹操に対して一礼する。

「秦崇雷だ」

「秦崇秀です」

「話は二人から聞いているわ」

曹操はすぐに二人に対して言ってみせた。

「気を使った技を使うそうね」

「他にも色々とできる」

「それで宜しいでしょうか」

「ええ。見たところ二人共頭も悪くないようだし」

それは曹操が見抜いたことだった。一目で、である。

「いいわ。二人共登用させてもらうわ」

「その目で見ていないのにか」

「それでもなのですね」

「夏瞬と冬瞬は春蘭、秋蘭と同じく私の腹心中の腹心」

つまり絶対の信頼を置く相手だというのだ。

「その目と耳は絶対よ」

「有り難き御言葉」

「そう言って頂けるとは」

曹仁と曹洪がそれに対して応えてにこりと笑う。
「この二人の強さは問題ありません」
「間違いなく」
「そうね。ただ」
曹操はその二人を見てだ。こうも言うのであた。
「何か思うところはあるようね。権力やそういった野望はないようだけれど」
「この世界のことには興味がない」
「私達が興味があるのはあくまで私達の世界のことです」
こう返す彼等だった。
「今はただ飯を食う為に入った」
「それだけです」
「わかったわ。勿論俸禄はあるわ」
それはしっかりと保障する曹操だった。
「ただ」
「ただ？」
「何でしょうか」
「近頃貴方達の様な人材が多いのよね」
このことを言うのだった。
「次から次に出て来てね」
「そうだな。どうやら俺達が知っている人間も多いな」
「サウスタウンの方もいらっしゃるようですし」
「サウスタウンね。聞いているわ」
曹操はそのことも既に聞いていた。
「貴方達の世界のアメリカという国にある都市よね」
「そうだ。この世界の中国のこの時代にはないな」
「あの街は」
「そして私達の世界のこの国も貴方達の世界のこの国も違うわね」
「ああ、それはな」
「女の子が多いですし」

そんな話をするのだった。そうしてだ。
「とにかく貴方達には主に武将として活躍してもらうわ」
「よし、それではだ」
「そうさせてもらいます」
こうして秦兄弟もこの世界に入ることになった。そしてそれが終わってからである。曹操は曹仁と曹洪の二人を部屋に残して話をするのだった。
「麗羽はまた勢力を拡げているようね」
「はい、都の北を通ってです」
「そのうえで涼州に向かっています」
「わかったわ。あちらはかなり順調ね」
「そして揚州の孫策殿ですが」
「母の孫堅殿の跡を継いでからですが」
「あの急死はあの娘達には不幸だったけれど」
曹操は今は彼女達について言及する。
「それで暫くは勢力を弱めると思っていたけれど」
「そうはなりませんでした」
「孫策も思った以上にやります」
「まずは揚州を完全に手中に収め」
最初にそうしたのだ。
「そして今は」
「あちらも次々に人材が集まっています」
「そしてそのうえで」
「あそこにも異民族がいるし」
この世界でも中国の周りには異民族が存在しているのだった。

# 第五話　張飛、馬超、顔良及び文醜と競うのことその三

「山越だったわね」
「はい、山岳民族です」
「かなりの手強さです」
二人の話は続く。そうしてだった。
「その彼等を攻めようとしています」
「江南も統一されようとしています」
「そうね。私や麗羽だけでなく」
「そして擁州には董卓殿が」
「あの方もかなりの勢力を築いています」
その彼等もいるのだった。
「次第に勢力がまとまってきていますね」
「益州と徐州以外は」
「あと幽州に誰かいたような気がするけれど」
曹操も忘れている存在があった。
「麗羽はあそこも狙っているのだったわね」
「はい、涼州を手に入れればおそらく次は」
「それからどうなるかですが」
「麗羽とは本当に幼い頃からの付き合いだけれど」
実は二人の関係はかなり古いものだった。
「私達には攻めようとはして来ないようね」
「それよりも華琳様を配下にしようとしているのでは？」
「そうなれば」
「私は誰の下にもつくつもりはないわ」
このことははっきりと言うのだった。
「例え誰でもね」
「それでは私達も」
「このまま勢力をですね」

「そう、そうするわ」
こう言ってであった。彼女達も今は自分達の勢力の拡大にと充実に専念していた。群雄達も少しずつだが確実にそれぞれの地位を確立させていた。
そしてその袁紹は。まずはまた審配と話していた。
「匈奴は問題ないのですね」
「はい、彼等を兵とすることにも成功しています」
「わかりましたわ。では兵とした彼等は」
「はい」
「花麗達に訓練をさせて取りこまさせて」
そのうえで、だった。
「その分領民達の兵役を減らさせますわ」
「それで宜しいかと。民は街や村で仕事をさせるのが一番です」
「三つの州はそうして内政を整え」
「涼州もまた」
「その通りですわ。そしてそれからは」
「幽州を」
「あそこには誰かいたような」
曹操だけでなく袁紹も忘れていた。
「誰でしたかしら」
「さて」
しかも審配もだった。
「誰かいたような気がしますが」
「そうでしたわね。まあとにかくそちらは斗詩と猪々子に任せまして」
見事なまでに忘れてしまっている。
「着々と進めていきましょう」
「そうですわね。そして華琳は」
「曹操はどうされますか？」
「あの娘は特別ですわ。戦うことなく全て手中に収めたいですわ」

「そうされますか」
「ええ、それでは」
また言ってであった。袁紹の言葉は続く。
「はい、そして内政は」
「水華と恋花を」
二人の名前が出された。
「すぐに」
「はい、では田豊殿と沮授殿をこちらに」
「それと」
まだ言うのであった。
「陳花と青珠、赤珠もですわ」
「荀?殿に辛評殿、辛?殿もですか」
「無論貴女もですわ」
審配もだという。
「文章は善光に作成させ」
「陳琳殿に」
「まずは全員呼びなさい。宜しいですわね」
「わかりました」
こうしてまずは集められた。田豊と沮授、そして四人だ。まずは桃色の短い髪に丈の長い白いひらひらとした上着の胸の大きい少女だ。目は黒くにこにことしている。脚はスカートの中で見えない。

# 第五話　張飛、馬超、顔良及び文醜と競うのことその四

「善光参りました」
「青珠です」
「赤珠です」
続いて青い癖のある左右を輪にした小柄な目のはっきりとした少女と同じ髪型と顔で赤い髪の少女が挨拶をしてきた。青い髪の少女は青と白のメイド服である。そして赤い髪の少女はそのまま赤と白のメイド服だ。それぞれ目は青と赤になっている。
「陳花です」
最後の一人は黒の柔らかい短い髪にその後ろは赤い猫耳の帽子の華奢な印象の少しおどおどとした感じの少女だ。目は垂れ目で青い。白い膝までのズボンに黒いソックスである。そして上着は白いフリルの赤い上着である。シャツは青だ。
その彼女達がそれぞれ袁紹の前に来てだ。まず一礼した。そのうえで話に入るのだった。
「袁紹様、何の御用でしょうか」
「それで」
「もうすぐ涼州も併合しますわ」
言うのはこのことだった。
「そしてそれにあたって」
「内政のさらなる充実ですね」
「それですね」
「その通りですわ。まず農地の開墾、そして街への投資」
最初はそれだった。
「続いて治安の強化に衛兵を多くさせそして商業も発展させ」
「西域との貿易もですね」
「涼州が手に入りますから」
「その通りですわ。それに黄河の港湾も整え」

それもあるのだった。
「まずは内政を整える。戸籍もですわ」
「わかりました。それでは」
「まずは中を」
こうして袁紹は内政を優先させていた。そしてそれが終わってからだ。田豊と沮授をいつも通り左右に置いてだ。張飛と馬超がまた闘技場に出ているのを見ていた。
「さあ、またはじまりました！」
「おいおい、またかよ」
「好きだねえ」
観客達は実況を聞きながら話す。
「全く色々とやるね、袁紹様も」
「全く」
「けれど今度は闘いじゃないよな」
「そうだよな」
そんな話をしてだった。何が起こるか見守っていた。やがて場が用意される。
「あの、袁紹様」
「あれは幾ら何でも」
その田豊と沮授が袁紹に対して言う。
「猿の知能テストではありませんから」
「流石にあれは」
「猪々子のことを考えればあれも当然ですわ」
こう言う袁紹だった。
「だからですわ」
「そういえばあの張飛という娘も」
「見たところかなり」
二人の目も確かである。
「馬超にしても」
「馬氏の跡取り娘は学問の方はと聞いていましたし」

「だからですわ。あれでいいのでしてよ」
袁紹の考えは変わらない。
「それでは」
「はい、それでは」
「このまま」
こうしてそれがはじまるのだった。まずは。
「知力検査です！」
「知力！？」
「何だそりゃ」
観客達はそれを聞いて首を捻る。
「何かバナナあるしな」
「それに椅子？」
「あとマジックハンドか」
そういうものを見ているビリーが言う。彼は今は警備担当として三闘士と共に会場にいるのである。そうしてそのうえで言っているのである。
「この世界の中国ってどうなってんだ？」
「バナナってないよな、この時代」
「いや、マジックハンドもだが」
アクセルとローレンスもそれを言う。三人共いぶかしむ顔になっている。
「俺達の世界とは全く違っているな」
「いや、違い過ぎるぞ」
「しかもよ。ありゃ猿の知能テストか？」
ビリーにもそう見えるものだった。

# 第五話　張飛、馬超、顔良及び文醜と競うのことその五

「吊るしてるバナナに椅子にマジックハンドか」
「何なんだ？」
「人にやるものじゃないな」
「あの領主は何をするつもりだ」
三人にはわからない。全くだった。
そしてだ。試験を受ける者と相手がそれぞれ出て来た。
「さあ、いよいよはじまります！」
「何か妙なことになってるな」
「そうなのだ？」
張飛は馬超に対して平然と返す。
「何か楽しそうなのだ」
「これ何なんだ？」
馬超はその場所を見ながら話す。
「何か椅子があるな」
「バナナもなのだ」
「ってことはあのバナナ食っていいのか？」
「そうみたいなのだ」
二人がわかるのはここまでだった。それから先はわからない。
そしてだ。そこには顔良と文醜もいた。二人もそれを見て言う。
「あの、これって」
「バナナ食っていいのか？」
文醜の考えていることは張飛達と一緒であった。
「つまりは」
「そうみたいね。ただ」
「あのバナナどうやって取るからだよな」
「そうよね」
こう話してだった。それぞれバナナのところに来た。張飛と馬超

はそのバナナを見上げながら二人であれこれと話をしている。
「このバナナどうして取るのだ？」
「椅子のところに立つか？」
「鈴々の背では無理なのだ」
実際に立ってみるが届かない。そして馬超が入れ替わって椅子の上に立って背を伸ばしてみる。しかしそれでも無理なのだった。
「あたしでもだ」
「このマジックハンドも無理なのだ」
「だよな。どうやったら取れるんだ」
「ジャンプして取れるか？」
文醜もわかっていない。
「どうなんだ？斗詩」
「あの」
しかしここで顔良が言う。
「このマジックハンドでね」
「ああ」
「まずは持って」
実際に持っての言葉である。
「そしてこうして」
「椅子のところに立ってか」
「ええ、それで」
今度は椅子の上に立つ。そしてマジックハンドをバナナに近寄せてだ。そのうえで言うのであった。
「こうすれば取れるんじゃないかしら」
「あっ、そうなのか」
文醜はここでわかった。
「それで取れるのか」
「凄いのだ、あいつ天才なのだ」
「ああ、あんな奴がいるのか」
それは張飛と馬超も同感だった。二人を見て驚いてすらいる。

だがそれを見た田豊と沮授はだ。呆れながら言うのだった。
「あの、わかったのは斗詩だけなんですが」
「あの三人は幾ら何でも」
「私もつい最近までわかりませんでしたわ」
それは袁紹自身もなのだった。
「こういうことは苦手でしてよ」
「あの、麗羽様幾ら何でも」
「戦争と政治以外のこともしっかりとして下さい」
「貴女達がいるからいいのでしてよ」
しかし袁紹は人の話を聞かない。
「そんなことは」
「全く。御自身の興味のないことや必要のないことにはそうなんですから」
「それじゃあ曹操に負けますよ」
主にも呆れてしまう二人だった。そしてであった。
「続きましては」
「まだやるのかよ」
「好きだな、あの領主も」
「全くだな」
また三闘士が呆れながら話をしている。

# 第五話　張飛、馬超、顔良及び文醜と競うのことその六

「遊ぶの好きだな」
「しかも下らない遊びばかりな」
「あの武闘会はいいとしてだ」
それはいいというのであるがだった。どうも今行われていることには抵抗がある彼等であった。
その次に行われるのは。
「お、おい張飛」
「どうしたのだ？」
「あたし変じゃないよな」
衣装部屋で赤い顔をしながら張飛に言っている。
「特におかしくないよな」
「奇麗なのだ。いいのだ」
「そ、そうか？」
「早く行くのだ。鈴々はもう準備できてるのだ」
「御前はそれでいいのか？本当に」
「全然平気なのだ」
こんな話をしながら二人で出る。まずは張飛だった。
「あはは、何か最高に似合ってるな」
「だよな、もう異様にな」
「何であんなに似合うんだ？」
観客達が笑いながらその彼女を見ている。何とピンクの虎の着ぐるみを頭から被ってそのうえで楽しげに動いているのである。
「がおーがおーーー」
「えーー、張飛選手は虎になりました」
実況はここでも真面目に行われる。
「さて、そしてです」
「もう一人だよな」

「どんな格好で出て来るんだ？」
「一体」
「や、やっぱり恥ずかしいな」
馬超は舞台裏でもじもじとしている。
「何かな。やっぱりな」
「早く出るのだ」
だが張飛はその馬超のところに来て声をかける。
「恥ずかしがることはないのだ」
「どうしてもか」
「そういう話みたいなのだ。だからなのだ」
「わかった。じゃあな」
こうして何とか出る。するとだった。
淡い黄色のワンピースを着ている。その姿の馬超は誰がどう見ても美少女である。普段はない可憐さまで出ていて美しさが際立っている。
「あ、あまり見るなよ」
「おいおい、凄い美人だな」
「ああ、何だよあれ」
「予想以上だよ」
「へえ、これはまた」
ビリーはその馬超を見て言う。
「別嬪さんになったじゃねえかよ」
「おい、随分態度が変わったな」
「どうしたのだ？」
アクセルとローレンスはそのビリーに対して突っ込みを入れる。
「何かあったか？」
「気に入ったのか？」
「まあ俺のタイプだな」
右手のその棒を肩に担ぎながら楽しげに言う。
「リリィの次には可愛いな」

「相変わらずだな、御前のその趣味は」
「私には何処がいいのかわからないがな」
ローレンスはこんなことを言う。
「女子供というのは好きにはなれん」
「ローレンス、御前さん前から思っていたけれどよ」
「まさかと思うが」
ビリーとアクセルの目がここで不穏なものを見るものになった。
「あれか?そっちの趣味か?」
「反対はしないが拒否はするぞ」
「そうではない。私にはちゃんと妻がいる」
はじめてわかる衝撃の事実だった。
「しっかりとな。だからそれで充分なのだ」
「っていうか世帯持ちだったのかよ」
「はじめて知ったぞ」
こう言って唖然とする。二人も知らないことだった。
「俺なんかまだ相手すらいないんだぞ」
「俺もだ」
「二人共そういう機会はないのか?」
「あるわけねえだろうが」
「そうだ、ある筈がない」
何故かムキになる二人だった。

# 第五話　張飛、馬超、顔良及び文醜と競うのことその七

「ましてや俺達の世界にはいねえんだぞ、今は」
「それでどうするというのだ」
「私に言われても困る。とにかく私には妻がいる」
このことはしっかりと言うのだった。
「それは言っておく」
「へっ、何で俺にはいねえんだよ」
「できればマザーを大切にしてくれる人がいいのだがな」
さりげなく母親思いのところも見せるアクセルだった。そして会場は今は。
「さて、次は顔良選手と文醜選手ですが」
「あの二人のセンスはね」
解説者は今日も審配である。ふう、と溜息さえ出している。
「というか猪々子ときたら」
「文醜選手ですか」
「戦い以外はできないのよ」
まさにそれだけだというのだ。
「おまけに一か八かで。麻雀ばかりして」
「ギャンブラーなんですね」
「それもかなり下手な」
呆れた口調で言うのである。
「そういう娘だからね」
「では今回も」
「外すわね」
そう予想しているのだった。
「間違いなく」
「そうですか」
「さて、どんな格好で出てくれるか」

完全に諦めている顔である。
「見させてもらうわ」
「それでは。大好評の馬超選手に続いて顔良選手と文醜選手です」
その二人は今会場の物陰にいた。そこで顔良は恥ずかしい様子で文醜に言う。
「あの、これでいいの？」
「今更何言ってるんだよ」
顔良に対して文醜が言う。
「人生出たとこ勝負なんだよ」
「そう言っていつも失敗してるじゃない」
すかさず顔良は突っ込みを入れた。
「全く。猪々子って」
「とにかくだ。行くぞ」
「うん、じゃあ」
こうしてであった。二人で出る。その手にそれぞれの得物を持っているのはいつも通りだ。しかしその服は何処かで見たような服だった。
「愛と正義の美少女戦士！」
「月にかわってお仕置きよ！」
「うっ、あの二人」
袁紹もそれを見て思わず引く。
「また猪々子ですのね」
「全く。あの娘ときたら」
「また」
田豊と沮授も呆れている。
「斗詩も巻き込んで」
「賭けに負けて」
「どうやら次の戦いも」
袁紹はその呆れた口調で言うのだった。
「貴女達のコントロールが必要ですわね」

「政治は全然できないし」
「やれやれです」
そんなことを言う二人だった。そしてその間にも二人はあれこそ何処かで聞いたような台詞を次々と出している。しかしであった。
「ちょっとな」
「これはな」
「何ていうかな」
観客達の対応は実に醒めている。
「まあいつものことだし」
「慣れてるけれどな」
「それでも」
「採点はするまでもないわね」
審配も醒めている。
「これはね」
「ええと、その採点ですが」
実況はここでも真面目だ。
「ううむ、採決のチェックは野鳥の会が行ってくれていますが」
「それでもこれは」
「はい、張飛、馬超組の勝ちです」
結果としてそうなってしまった。顔良と文醜には殆ど票が入らなかった。
「ううう、折角センスのいいの選んだのに」
「だからあれじゃあ駄目よ」
顔良も言うがそれでもだった。採決は決まった。

# 第五話　張飛、馬超、顔良及び文醜と競うのことその八

そしてである。競技はまだ続いていた。
「さて、次は」
「これで終わりだけれど」
審配が実況に合わせて言う。
「どうなるかしらね」
「次の競技は何でしょうか」
「それは麗羽様が決められることだけれど」
審配はこう言うだけだった。
「さて、何かしら」
「それはまだわからないのですか」
「麗羽様は三番目はその時の気分で決めるから」
だからだというのだ。
「だから。何が出て来るかわからないのよ」
「そうなんですか」
「さて、何かしら」
また言う。
「何をしてくるのかしら」
「!?何か出て来ました」
やたら大きな桶が出て来た。それも二つだ。
そしてその中にはだ。無数の鰻が入っていた。
「麗羽様、では今回は」
「あれなのですね」
「その通りですわ」
田豊と沮授の問いにも応える。
「あれで決めます」
「猪々子には難しいと思いますが」
「それでもですか」

「ええ、それでもですわ」
それでもだというのだ。
「あれで決めますわ」
「わかりました、それでは」
「その様に」
二人は主のその言葉に頷く。それで決まりだった。
その鰻がこれでもかと入った桶を見ながら実況は審配に対して問うた。
「あの、審配さん」
「ええ」
「あれは何でしょうか」
「鰻捕りよ」
それだというのだ。
「ただ」
「ただ？」
「その方法が違うのよ」
「さて、その鰻を」
その袁紹が言ってきた。
「掴み取ってもらいますわ」
「何だ、そんなことなのだ」
「よし、今度もやらせてもらうぜ」
「ただし」
張飛と馬超のその言葉に応えるように話す。
「胸で掴んでもらいます」
「何なのだ！？」
「胸っ！？」
二人はそれを聞いてぎくりとした顔になった。
「鈴々胸なんてないのだ」
「あたしは胸はちょっと」
「さて、それでは」

袁紹は二人の言葉をよそに話を続ける。
「はじめ！」
「よし、じゃあ」
「やってやる！」
顔良と文醜は早速上着を脱いだ。そのうえでブラだけになり桶の中に入る。
「きゃっ、暴れないで！」
「な、中で動いてる！」
その鰻達を胸と胸の間に掴みながら戸惑った声を出す。
「ちょっと、鰻って」
「脈打って何なんだよ！」
「さて、貴女達はどうしますの？」
袁紹は張飛と馬超に対して問う。

# 第五話　張飛、馬超、顔良及び文醜と競うのことその九

「さあ・・・・・・むっ！？」
「あれ、いませんけれど」
「何時の間に」
田豊と沮授も言う。見れば二人はいなかった。
「ということは」
「ここは」
「棄権とみなして退場ですわ」
ここで袁紹も言った。
「それでは勝者は」
「私達ですか」
「つまりは」
こうしてだった。顔良と文醜の勝者になった。それで二人は鰻の桶の中で手と手を取り合ってそのうえで喜び合っていた。その全身に鰻達がこれでもかとまとわりついていてかなり大変な様子になっている。
「やったわね、私達勝ったのよ」
「ああ、ちょっと今やばい状況だけれどな」
「もう身体中にうねうねと」
それが蠢いているのだ。身体のあちこちを覆って。
「周りの目が気になるけれど」
「それでも」
何はともあれ二人は勝った。そしてその頃関羽達は。
歌おうとしたそこでだ。目の前に四人の男女連れが出て来た。一人は黒いボブカットに赤い中華風の上着、それと青いスパッツの少女だ。顔立ちははっきりとしていて可愛らしい感じだ。
一人は青と白の上着に膝までのズボンをして黒髪を真ん中で分けている少年だ。背はそれ程高くはないがそれでもひょうきんな印象

を受ける。
　三人目は白髪に白髭の老人だ。その手には瓢箪がある。アークブラウンの上着と白いズボンを着ている。そんな老人だった。
　最後の一人は黄色いシャツと半ズボンに帽子の小柄な少女だ。最初の少女とはまた違った幼い可愛さを見せている。その四人だった。
「むっ、あの四人は」
「どうしたのだ？」
　関羽が趙雲に対して問い返す。
「あの四人か」
「うむ、見たところできるな」
　こう返す趙雲だった。
「武芸もだが」
「それだけではないか」
「歌もな」
　それもだというのだ。
「かなりできる」
「そうか。あの四人か」
「特にあの娘だ」
　趙雲はボブの少女を見ていた。
「あの娘、かなりの歌い手だ」
「そうか。あの娘は」
「あっ」
　その娘がふと関羽達の方を見た。そして言ってきたのだ。
「ナコルル・・・・・・さん？」
「あっ、貴女は」
　そしてナコルルもまた彼女に気付いた。
「アテナさんですか」
「はい、お久し振りです」
「そうですね」
　笑顔で応え合う二人だった。

「ネスツとの戦い以来ですね」
「本当に」
「何だ、知り合いなのか」
趙雲は二人のやり取りを見ながら述べた。
「二人共。そうだったのか」
「はい、そうです」
「ナコルルさんとはその時にお知り合いになれました」
二人共趙雲の問いに応えて話す。
「まさかこんな場所で御会いできるなんて」
「本当に」
「ということはだ」
関羽もここで言う。
「そこの三人もや」
「そや」
少年が言ってきた。
「俺の名前は椎拳崇や。よろしくな」
「わしの名前は鎮元斎」
「包です」
後の二人も名乗ってきた。
「まさかナコルルとこんなところで会うなんて」
「奇遇じゃな」
「本当ですよ」
「それでナコルルさん」
アテナがナコルルに問うてきた。
「何をされているんですか？」
「実は路銀の為に」
そこから話すナコルルだった。

# 第五話　張飛、馬超、顔良及び文醜と競うのことその十

「それで私は笛を吹いて」
「私が三味線を出してだ」
見れば趙雲の手にはその三味線がある。
「そして私が歌ってだ」
「歌ですか」
関羽の言葉にも応える。
「そうだったんですか」
「そうだ。そして貴殿達はどうしてここに？」
「何か知らんけど気付いたらここにおったんや」
「どうやら昔の中国じゃな」
拳崇と鎮がここでこう返してきた。
「中国なのは事実やろけど」
「何か世界が違うようじゃが」
「若い女の人が多い世界ですよね」
包もそれを言う。
「そうですよね。この世界って」
「この世界のことはよくわかりませんが」
アテナはまずはそれはいいとした。
「ですが」
「ですが？」
「歌でしたら御一緒しませんか？」
こう言ってきたのだった。
「皆で歌えばもっと人が集まるのでは」
「あっ、いいですね」
ナコルルも笑顔でアテナの提案に頷く。
「アテナさんの歌って絶品ですから」
「そうか。貴殿歌が上手いのか」

「そんな、私は別に」
「アテナの歌は最高やで」
アテナ本人は謙遜しようとする。だがその横で拳崇が言ってきた。
「もうな。聞いてるだけでな」
「そうなのか。それではだ」
「は、はい」
アテナは拳崇の言葉を受けて言ってきた関羽のその言葉を受ける。
「何でしょうか」
「共に歌おう」
こう言うのであった。
「七人でだ。すぐにな」
「それでいいんですか？」
「是非にだ」
関羽の言葉は強くなってきた。
「共に歌おう。貴殿さえよければだ」
「そうですか。そこまで仰るのなら」
アテナもそれで頷くのだった。
「私でよければ。御願いします」
「うむ、それではだ」
こうして関羽とアテナが歌い他の面々が演奏する。こうして彼等は路銀を稼いだのだった。それは彼等が思っていた以上のものだった。
「うわ、凄いで」
「これだけあれば暫くは路銀に困らんぞ」
拳崇と鎮がその路銀を見て言う。
「さて、それじゃあ俺等はこっから東に行くけれど」
「御主等はどうするのじゃ？」
「今日はこの街にいる」
関羽は彼等の問いにこう返した。
「明日発つ」

「そうですか。ではこれでお別れですね」
「久し振りに御会いできたのに」
包とナコルルは名残惜しそうに言い合う。
「けれど。それならまた」
「はい、御会いしましょう」
こう話してだった。双方別れの挨拶をしてだ。そのうえで別れた。
アテナ達は東に向かいそうしてだ。関羽達はここで彼女のことを思い出したのだった。
「そういえば関羽はだ」
「何処に行かれたのでしょうか」
「迷子か？」
関羽は趙雲とナコルルの話を聞きながら述べた。
「また」
「それか何処かに勝手に言ったかだな」
趙雲はその可能性にも言及した。

# 第五話　張飛、馬超、顔良及び文醜と競うのことその十一

「どちらかだな」
「やれやれだ」
関羽は趙雲のその話を聞きながら溜息を出した。
「全く。何をしているんだ」
「それでどうするのだ？」
趙雲はあらためて関羽に問うた。
「探すのか？どうする？」
「宿の場所は行ってある」
だが関羽はこう答えた。
「流石にそれは覚えている筈だ」
「そうか」
「だから今は宿に戻ろう」
そうするというのだ。
「それでいいな」
「そうか、わかった」
「では夕御飯をですね」
ナコルルはそれを言ってきた。
「そういうことですね」
「そうだ。しかし鈴々の奴」
関羽は眉を怒らせて言う。
「相変わらずだな」
「そう言うな。まずは食べに行くぞ」
「またメンマか？」
「そうだ。私はあれがなくてははじまらない」
こんな話をしながら夕食を食べに向かう。そしてその頃張飛と馬超はだ。夕刻の街を二人で歩きながら話をしていた。
「ちょっとあれはないのだ」

「そうだよな。あたしもあれはな」
並んで歩きながら先程の競技の話をしていた。
「鰻を胸と胸の間に挟むなんて」
「ちょっとなあ」
「それで馬超」
「ああ」
馬超は張飛の話を聞きながら返した。
「これからどうするのだ？」
「そうだな。まあここには武者修行で来てるからな」
こう言うのである。
「それも一段落したし故郷に帰るか」
「確か涼州だったな」
「そうさ、そこさ」
彼女は涼州の生まれであった。
「そこに帰ろうかな。今父上がいなくなって主不在だけれどな」
「そうなのだ」
「それで今さっきのあの領主いただろ」
話が戻った。
「袁紹ってな」
「あの高飛車そうな女なのだ？」
「そうさ、あの人が軍を向けて自分のところに入れようとしてるらしいな」
「馬超の父上のものだったのにか？」
「今は主不在だからいいさ。あたしも領主とかには興味はないし」
それはないのだという。
「それでもな。故郷に帰ろうと思ってな」
「わかったのだ。ではそうするといいのだ」
「それではなのだ」
張飛は話を聞いてからまた述べてきた。
「夕食と宿を一緒にどうなのだ？」

「それか」
「一人より皆の方がいいのだ」
だからだというのだ。
「だからなのだ。一緒に行くのだ」
「そうだな、賞金はたっぷり入ったからな」
「楽しくやるのだ」
まずは食事を楽しむ。そしてそのうえで宿に帰るとであった。張飛を待っていたのだ。
「こらっ！今まで何処に行っていた！」
「あ、愛紗！？」
「全く、何処に行っていた！」
そのことを派手に叱るのだった。
「御前は。人が心配すると思わないのだ！」
「武闘会に出ていたのだ」
だが張飛はこう返すのだった。
「それでなのだ」
「それに出ていたのか」
「そうなのだ。それで優勝してきたのだ」
「ふむ。そういえばだ」
張雲はベッドの上に座っている。ナコルルは今は入浴中でいない。
そうしてそのうえで二人の話を聞いたうえで述べてきたのである。
「優勝は二人共女だと聞いたが」
「二人！？」
関羽はそれを聞いてふと声をあげた。
「一人は御前なのか」
「そうなのだ」
張飛は胸を張って関羽の問いに応えた。
「賞金もたっぷり持って帰って来たのだ。路銀にするといいのだ」
「ああ、済まないな」
「そしてなのだ」

張飛の話はさらに続く。
「そのもう一人も連れて来たのだ」
「むっ！？」
「ここにいるのだ」
「はじめまして」
そのもう一人が出て来た。頭を下げながら部屋に入って来る。
「馬超です。字は猛起」
「貴殿は」
これが関羽達と馬超の出会いだった。これもまた運命の出会いだった。

第五話　　完

２０１０・３・２８

# 第六話　馬超、曹操の命を狙わんとするのことその一

第六話　馬超、曹操の命を狙わんとするのこと

関羽達と会った馬超、まずは挨拶からだった。
「ええと、あたしはさ」
「うむ、貴殿の名前は」
「何というのだ？」
関羽だけでなく趙雲も彼女に対して問うた。
「見たところ我々と同じ武芸者の様だが」
「腕が立つな」
「あたしの名前は馬超」
こう名乗ったのだった。
「孟起ってんだ」
「何、馬超！？」
「貴殿がか」
その名前を聞いてだ。二人は少し驚いた声を出してだ。そのうえでまた言った。
「西涼の馬家の嫡女のか」
「そして西方で随一の武勇を誇るという」
「あれっ、あたしのこと知ってるのか」
「翠は有名人だったのだ」
横にいる張飛が彼女に顔を向けて言った。
「はじめて知ったのだ」
「みたいだな。あたしって結構有名だったんだな」
「その十字槍、確かにな」
「それを縦横に振るい戦うらしいな」
「そうさ。それであんた達の名前は何ていうんだ？」
今度は馬超から彼女達に問うた。

「どうやらあんた達もかなり強いみたいだな」
「うむ、私は関羽」
「趙雲だ」
二人は馬超の言葉に応えてそれぞれ名乗った。
「字は雲長」
「同じく字は子龍」
「関羽に趙雲かよ」
今度は馬超が驚く番だった。あらためて二人を見て言う。
「美髪公に北で最強の槍使いだったな」
「むっ、私のことを知っているのか」
「私も有名だったのだな」
「ああ、二人共涼州にまで名前は届いていたぜ」
馬超はこう二人に話した。
「山賊退治の英雄に。それで趙雲はええと、何とかいう領主のところの客将だったよな」
「誰だったのだ？」
張雲もそれを聞いて首を傾げさせる。
「誰かいたのだ。思い出せないのだ」
「公孫賛殿だ」
ここで関羽が呆れた顔で張飛に対して言った。
「ついこの前まで世話になっていたであろう」
「思い出せないのだ。かなり影の薄い人だったのだ」
「それを言うな」
今更であったがそれでも言うのだった。
「本人も気にしているようだったしな」
「私も忘れていた」
それは趙雲も同じだった。
「そうだ、公孫賛殿だったな」
「御主はわざとだな」
関羽はもうこのことを見抜いていた。既にである。

「全く。悪ふざけにも程があるぞ」
「いいではないか、別にな」
「よくはない。全く」
「ところであんたは？」
馬超は今度はナコルルを見た。彼女は四人が話すその傍に立っていた。その彼女に対して声をかけたのである。
「名前は何ていうんだ？」
「ナコルルです」
素直に自分の名前を名乗った。
「それが私の名前です」
「へえ、ナコルルっていうのか」
馬超はその名前を聞いてふと何かに気付いたような顔になった。そしてそのうえである者の名前を出したのであった。その名前は。
「そういえばな」
「そういえば？」
「ここに来るまでに。確か予州だったな」
目を上にやって思い出す顔でだ。出した名前は。
「リムルルっていう小さいのに会ったんだけれどな。知ってるか？」
「妹です」
すぐにこう返したリムルルだった。
「私の妹です」
「そうか、あんたの妹だったのか」
「そうですか、妹もこの世界に来たんですね」
「そうそう、何か違う世界から来たって言っていたな」
馬超はこのこともナコルルに話した。

# 第六話　馬超、曹操の命を狙わんとするのことその二

「他にもあたしが今日戦った不知火幻庵ってのも言ってたしな、そんなこと」
「他にも大勢いるぞ」
「近頃多い」
関羽と趙雲もこのことを話した。
「袁紹殿や曹操殿はその者達を多く召抱えてきているが」
「貴殿も会ったのか」
「そうなんだよな。そういえば武闘会場にもいたな」
馬超はこのことにも気付いた。
「最近本当に多いよな」
「世の中まことに変わった」
「ただ賊が増えただけではないようだな」
関羽と趙雲の顔が真剣なものになった。
「ナコルルだけではなくだ」
「他にも大勢いるしな」
「その様ですね」
ナコルルも不吉な顔で述べた。
「この国には今不吉な雲が漂っています」
「不吉な雲か」
「何もなければいいがな」
「ところで翠はこれからどうするのだ？」
張雲はここで馬超に対して尋ねた。
「今どうしているのだ？」
「ああ、実はな」
馬超はここで自身の身の上を話した。今度はそれだった。
「あたしの父ちゃん死んでさ」
「馬騰殿だったな」

「都でだったな」
「暗殺されてな。まあこのことはいいさ」
ここで馬超の顔が一瞬歪んだ。だがそれは一瞬だけでありすぐに元の顔に戻してだ。そのうえでまた言ってきたのであった。
「それで涼州は馬氏から離れてな」
「今は袁紹殿が進出しようとしているな」
「そうなんだ。まあ袁紹殿は政治は上手いしな」
彼女のそのバランスの悪い能力の一環である。
「涼州も立派に治めてくれるだろうしな。あたしはそれなら文句はないしな」
「今は北の方に進出し匈奴を取り込みながら向かっているそうだな」
趙雲は今の袁紹の同行を確かに知っていた。
「この国の脅威を飲み込みながらな」
「あの連中が一番厄介なのだ」
張飛も顔を顰めさせて言う。彼女も北の異民族のことはよくわかっていた。
「何かあるとすぐに攻め込んで来る。困った奴等なのだ」
「まあそれでさ。あたしはとりあえず仕官先も探すついでにこうしてあちこち回って腕を磨いてるんだ」
「成程、それでか」
「それでここにいたのか」
「そうなんだ。しかし冀州ってのは凄いよな」
ここで話が変わった。
「本当にな」
「そうだな。幽州とは全く違う」
関羽がその言葉に頷く。
「特にこの街はかなりの大都市だ」
「あの袁紹ってのは政治は確かに上手いんだな」
馬超もそれは認めた。
「村もかなり立派だしな。州全体が豊かで平和だからな」

「けれど馬鹿にしか見えないのだ」
張飛は身も蓋もないことを口にした。
「あんな訳のわからないことばかりしていて本当に大丈夫なのだ？」
「知力と政治力は別だ」
趙雲がこのことを指摘した。
「袁紹殿は政治と戦争については得意なのだ」
「では頭はどうなのだ？」
「少なくとも知力は期待しないことだ」
彼女らしい言葉であった。
「全くな」
「そういう方もおられるんですね」
ナコルルはそれを聞いてふと自分の知り合いのことも思い出した。
「そういえば右京さんも教養はおありでしたけれど政治には興味がありませんでしたし。そういうことなんですね」
「袁紹殿は複雑な方でな。名門袁家の出だが母上の生まれが悪く家の中ではあまり恵まれてはいなかった」
「ああ、そうらしいな」
馬超は趙雲の今の言葉に頷いた。
「それで今になるまで色々と苦労もしてきたらしいな」
「家の中で認められるまでにそれなりの努力もしてきた」
伊達に今広大な領土を治めているわけではないというのだ。
「しかし。劣等感故か歪な性格になってしまわれてな。御自身の興味のないことには全く努力をしないしそのうえ向き不向きの激しい方だ」
「それでああいう風になられたのだな」
「政治家、軍人としては優秀だが君主としては問題もある」
今度は関羽に述べたのだった。
「何しろあの性格だからな」
「仕えるには少し困った人物か」
関羽はそれを聞いて述べた。

# 第六話　馬超、曹操の命を狙わんとするのことその三

「そういえば曹操殿も宦官の家の出だったな。それで苦労されたのだったな」
「そうだ。二人共そうした意味ではあそこまでなれる方々ではなかった」
趙雲は曹操についても述べた。
「ただ、曹操殿は袁紹殿に比べてかなりバランスがいい。万能タイプだ」
「そうか。そうした違いがあるか」
「君主としてどちらがいいかはわからないがな。曹操殿にしてもそうした境遇だったから性格的には問題があってもおかしくはない」
「曹操・・・・・・」
馬超の顔が歪んでいた。
「あいつだけは・・・・・・」
「んっ？どうしたのだ翠」
その馬超の表情の変化に張飛が気付いて問うた。
「何かあったのだ？」
「あっ、何もないさ」
馬超は彼女の言葉にすぐに表情を戻して言葉を返した。
「気にするなよ」
「だったらいいのだ」
こんな話をしてからその日は寝た。その夢の中でだ。
馬超は幼い姿をしていた。そのうえで両手で棒を構え両足を踏ん張ってそのうえで身体を横にして顔は前に向けていた。そのうえで前に立つ妙齢の、彼女がそのまま成長した様な顔と髪の美女と対していた。
「翠、どうしたの？」
「えっ、どうしたって」

「乱れがあるわよ」
彼女に対して言ったのである。見ればその美女も彼女と同じ構えを取っている。だがその構えは彼女のものとは違って悠然としている。馬超のそれは手が震えているのである。そこが大きく違っていた。
「どうしたのかしら」
「えっ、別に何も」
「隠し事をしているわね」
悠然と笑ってみせての言葉だった。
「そうね」
「あ、あたしは別に」
その言葉を受けてだ。幼い馬超は慌てだしだ。我を失った様子になってそのうえで返した。だがその構えは完全に乱れ形を崩してしまっている。
「おねしょなんか別に」
「そう。おねしょなのね」
「あっ、いやその」
「隠さなくていいのよ」
だがだ。美女はその彼女に優しく笑って言ってきた。
「ベッドをすぐに乾かしなさい。それでいいわ」
「わかりました」
「心は構えに出るものよ」
そしてこう馬超に教えてきた。
「武芸はそのまま心が出るものよ。覚えておきなさい」
「う、うん」
幼い頃の思い出だった。涼州にあった屋敷の中でいつも母に武芸を教えてもらっていた。それが今の彼女を作っていったのである。
目を覚ますとだった。ベッドの中だった。部屋の中に二つあるベッドのうちの一つに横になっていた。隣のベッドでは関羽が張飛を抱き締める様にして寄り添って寝ている。そしてベッドとベッドの

間には。
「うむ、目覚めたか」
「あれ、趙雲か」
「うむ、私だ」
白い寝巻きの彼女が上体を起こして応えてきた。その胸が目立ち白いア脚が露わになっている。実に艶かしい姿であった。
その姿でだ。彼女に対して言ってきたのであった。
「よく寝ていたようだな」
「あんた何で床で寝ているんだ?」
「最初はベッドの中で寝ていた」
こう返した趙雲だった。そのうえで馬超を見る。見れば彼女は今はもう髪をほどいてそのうえで黄色い寝巻きを着てベッドの中で身体を起こしている。寝巻きは程よく乱れその脚も大きな胸もかなり見えてしまっている。
「ところがだ。貴殿に出されてしまってな」
「す、済まない」
それを聞いてすぐに驚きの声をあげる馬超だった。そのうえですぐに謝る。
「あたし寝相が悪くて」
「それはいい。だが」
「だが?」
「私も楽しませてもらった」
妖艶な笑みを浮かべての言葉だった。
「そうか、貴殿は生娘だったのだな」
「何でそれがわかったんだ?っていうか楽しんだって」
「最後まではしていない。安心するのだ」
「あんたまさか」
「気にするな」
そんな話をした朝だった。その朝は全員で食べてだ。関羽と趙雲はメイドのアルバイトを、ナコルルは街で笛を吹き、そして張飛と

馬超は二人で肉体労働のアルバイトに向かった。それで路銀を稼ぐのだった。

その時城の外の曹操軍の陣地ではだ。薄茶色の首の高さで切り揃えた柔らかい髪をして猫を思わせる草色のフードを被った青緑のやや垂れた目の小柄な少女が不安な顔で歩き回っていた。藤色の白いフリルのある上着と膝までの黒いズボンに黄緑の服、それと白いタイツといった格好である。その彼女がいた。

「どうしたの、荀？」

「ねえ文若」

「あっ、二人共いたの」

名前を呼ばれた少女は曹仁と曹洪に顔を向けた。二人に呼ばれたのだ。

# 第六話　馬超、曹操の命を狙わんとするのことその四

「華琳様はまだ戻られてないの？」
「華琳様ならもう戻られたわよ」
「既にね」
「けれどお姿が」
荀？はこう言って二人にも不安な顔を見せるのだった。
「全く見えなくて」
「今また新しい人材が来てね」
「直々に御会いしているのよ」
「また人材が入るの」
二人の言葉を聞いてまた述べた。
「そうだったの」
「ええ、そうなのよ」
「またね」
二人は荀？にまた話す。
「今度もかなり変わった面子よ」
「如何にも格闘家って感じのね」
「最近格闘家多過ぎない？」
荀？は二人の言葉を聞いてまた述べた。
「次から次にって」
「そうかもね。けれどかなりの強さよ」
「頭もよさそうだし」
「そう。とりあえず華琳様のところに行ってみるわ」
こうして彼女は曹操の天幕に向かった。すると彼女はそこで太った大柄な警官風の男とそれとは正反対に痩せた老人と会っていた。
二人はそれぞれ名乗っていた。
「ゴードンだ」
「中白虎じゃよ」

まずは名前からだった。そしてもう一人は黒いショートヘアの精悍な顔立ちの美女である。赤いシャツに青いジーンズである。男は帽子の奥にいかつい顔を見せており胸毛が目立つ。老人はサングラスをしている。

「そしてあたしがロサよ」

「そう。ところで貴方達は」

「そうさ、俺はアメリカから来た」

「わしは中国じゃ」

「あたしは中南米の何処かさ。自分でも生まれはわからないのよ」

「わかったわ」

曹操は三人の話を聞いてそのうえで頷いてみせた。

「貴方達もそうなのね」

「そうみたいだな。俺達は気付いたらこの国にいたんだよ」

「わしの国は中国、そしてここは漢代のようじゃが」

「あたし達の知ってる中国、いえ漢じゃないわね」

「そうね。私は貴方達の国のことは知らないけれど」

曹操は自身の席に脚を組んで座っている。そのうえで三人の話を聞いているのである。

「名前は聞いているわ。貴方達の他にも来ているから」

「ああ、色々来ているみたいだな」

「わし等以外にな」

「それも大勢ね」

「そうよ。それで貴方達はどうするの？」

曹操はあらためて彼等に問うた。

「行く宛がないというのならよかったら」

「ああ、頼むぜ」

「雇ってくれるのならその分は働かせてもらう」

「そういうことでね」

「よし、今から貴方達は私のところの人材よ」

曹操は三人の言葉を聞いて微笑を浮かべた。

「それじゃあね」
「よし、それならな」
「活躍させてもらうのじゃ」
「期待していていいわよ」
「さて、後は」
曹操は三人の言葉を聞くとだ。すぐに席を立った。そしてそのうえで天幕を出て周りの兵士達に告げる。
「都に向かうわ。許昌に戻る前にね」
「そして賊将を送るのですね」
「そうして」
「ええ、そうよ」
こう夏侯惇と夏侯淵にも述べる。
「すぐにね」
「わかりました、それでは」
「袁紹殿に別れの言葉を告げてから」
「ああ、それには及ばないわ」
曹操は思わせぶりな笑みを浮かべてその言葉に返した。
「それはね」
「宜しいのですか」
「それは」
「向こうもその必要はないって言うわ。麗羽もね」
「では再会の時まで」
「今はですか」
「そうよ。その時にまたね」
こう言うだけだった。

# 第六話　馬超、曹操の命を狙わんとするのことその五

「笑顔を交えるから」
「はい、それでは」
「今より都にですね」
「ええ、そうよ」
こうして曹操軍は撤収に入ろうとする。しかしであった。
曹操軍が帰路に着くそこでだ。そこに張飛と馬超が通り掛かった。
丁度仕事を終えた帰りであった。
「いや、中々お金を貰えてよかったのだ」
「そうだな、やっぱりあたし達は力仕事が一番合ってるよな」
笑顔でそんな話をしていた。ここで馬に乗り軍の先頭を進む曹操の横を通った。その後ろで馬に乗る荀?がただひたすら涙を流していた。
「折角華琳様と御一緒できると思ったのに」
「まあそう言うな」
「次がある」
夏侯惇と夏侯淵が左右からその彼女を慰める。
「今夜は私だがな」
「その次の夜は私だが」
「それで夏瞬と冬瞬も一緒になって」
荀?の嘆きは続く。
「私はその後だから、うう・・・・・」
馬上で両手にハンカチを持ちそれを口で咥えて嘆いている。そんな荀?だった。
曹操軍の雰囲気はまずはいいものだった。しかしである。
その曹操の顔を見てだ。馬超がその手の槍を持ってだ。そのうえで一旦天高く跳んで急降下してからそのうえで襲い掛かったのである。

「曹操、覚悟！」
「むっ！？」
「母ちゃんの仇！」
こう叫んで襲い掛かる。しかしであった。
「何奴！」
「華琳様！」
夏侯惇が馬超の槍を受ける。夏侯淵はすぐに主の方に跳び彼女を抱き締め地面に着地する。曹仁と曹洪は主の周りでそれぞれ矛と斧で護る。
「名を名乗れ！」
「馬超！」
馬超は夏侯惇とせめぎ合いながら名乗った。
「この名前を聞けばわかるな！」
「馬超？」
曹操は夏侯淵に護られながら立ち上がりだ。そのうえで彼女の言葉に応えた。
「貴女まさかあの涼州の」
「そうだ！母ちゃんの仇！」
夏侯惇を押し退け曹操に付き向かおうとする。しかしそれはその夏侯惇に阻まれる。馬超は相手の槍を防ぎ逆に攻めながら言った。
「あんた、かなりやるな」
「貴殿もな」
「けれどな、今は曹操を！」
まだ曹操に向かおうとする。しかしであった。
「待つのだ！」
「なっ、鈴々！」
「よくわからないが戦場以外で槍を振るうななのだ！」
張飛が馬超の前に出て叫ぶ。
「ここは落ち着くのだ！」
「黙れ！あたしは曹操を！」

そんなやり取りをしているうちに馬超は夏侯惇達曹操軍四天王に捕まえられてしまった。さしもの彼女も四人が相手ではどうしようもなかった。

一人残った張飛は宿に戻ってだ。一同にこのことを話した。関羽がそれを受けてすぐに曹操の下に向かった。丁度天幕を築いてそこで休息に入ろうとしていたところであった。

「貴女は？」

「関羽」

曹操の天幕に入ってだ。すぐに名乗った。曹操は己の席にいて左右にはそれぞれ夏侯惇と夏侯淵が立っている。曹仁と曹洪もいる。

「字は雲長だ」

「そう、貴女がなのね」

曹操は彼女の名前を聞いてまずは笑った。

「噂は聞いているわ。山賊退治の英傑ね」

「私を知っているのか」

「ええ。それに類稀なる美女だということも」

このことを言うと笑みを妖艶なものにさせる曹操だった。

「それも聞いているわ」

「そうなのか」

「噂の通りね」

そしてこうも言ってみせたのだった。

「かなりの美女だわ」

「そんなことはいい、それよりもだ」

「それよりも。何かしら」

「連れから聞いた。私の友人が貴殿を狙ったそうだな」

「馬超のことかしら」

「そうだ、彼女のことだ」

まさに彼女のことだという。こう答えたのだった。

# 第六話　馬超、曹操の命を狙わんとするのことその六

「馬超をどうするつもりだ？それで」
「決まっているわ。私を暗殺しようとした」
曹操は笑いながら話す。
「それなら。わかるわね」
「そこを何とかしてもらいたい」
関羽は単刀直入に述べた。
「頼む、馬超は悪い奴ではない」
「姉上」
「そうだな」
夏侯惇は妹の言葉に少し頷いた。
「馬超殿に真実を」
「お話すれば」
「二人共。静かにしていて」
だがここで曹操は二人を制止した。
「今は私が関羽と話しているのよ」
「は、はい」
「申し訳ありません」
「朝廷から麗羽の匈奴併合の様子を見るように言われてここに来たけれど」
曹操も多忙であるのだ。そしてその併合の様子については何の問題もなかった。しかしであった。
「まさか刺客に襲われるとは思わなかったわ」
「だからそれだが」
「関羽」
今度は曹操から言ってみせたのだった。
「私にあの娘を助けろというのね」
「そうだ、駄目なのか」

「条件があるわ」
妖しく笑いながら言ってみせてきた。
「それについてはね」
「条件だと？」
「そうよ。その為には」
「その為には」
「私と一晩共にしなさい」
こう言ったのだった。
「私とね」
「それをせよと」
「そうよ。見たところ貴女はまだそうした経験はないわね」
あえて関羽の肢体を上から下まで見回してみせる。そのうえでの言葉だった。
「そうね」
「それはそうだが」
「尚更いいわ。生娘なら余計にね」
「では私が貴殿のものとなればか」
「ええ、それで馬超は助けてあげるわ。それでどうかしら」
「ううう・・・・・」
そう言われてだった。関羽は余計に困惑した顔になった。曹仁と曹洪は妖しく笑う主を見てひそひそと話をはじめた。
「華琳様ってこうしたことをする方かしら」
「いえ、こんなことははじめてよ」
それぞれ顔を顰めさせて話すのだった。
「こうしたことは下衆だとこのうえなく軽蔑されているのに」
「それがどうして」
「二人もよ」
だが曹操はその二人にも言うのだった。
「今は私が関羽と話しているのよ」
「は、はい。すいません」

「それでは」
「いいわね、関羽」
また言ってみせる曹操だった。
「それでいいかしら」
「・・・・・私が貴殿と褥を共にすれば」
関羽は苦しい顔になった。だがここで意を決して言ったのだった。
「それでいいというのなら」
「わかったわ。では先にベッドに言っていなさい」
曹操は思わせぶりな笑みと共に彼女に告げた。
「私は後から行くわ」
「わかった・・・・・」
こうして関羽は兵士に案内されて天幕を後にした。曹操は彼女が去るとすぐに四天王に対して声をかけたのであった。
「暫くしたら行きなさい、いいわね」
「いいとは」
「一体？」
「私はここにいるわ」
動かないというのだった。
「関羽を馬超のところに連れて行きなさい。春蘭、貴女がね」
「は、はい」
命じられた夏侯惇が応える。そうしてであった。
関羽は一糸まとわぬ姿になりベッドの中に寝ていた。ベッドは四方をカーテンで仕切られている。天幕の中の曹操のベッドだ。顔は紅潮しこれから起こることに対して身体を震わせていた。覚悟は決めていてもだ。

# 第六話　馬超、曹操の命を狙わんとするのことその七

「私は。これから・・・・・・」
自分の身体を曹操に捧げることになる。馬超を助ける為とはいえだ。
「馬超の為だ。これも」
恐れを必死に押し殺してこう考えることにした。そのうえで曹操を待つ。
そして遂に天幕に誰かが入る気配がした。関羽はその気配を感じ取りすぐに確信した。
「来た・・・・・・！」
気配はベッドに少しずつ近付いて来る。関羽はその身体をベッドの中で縮ませる。だがその彼女に対してだった。声はこう言ってきたのだった。
「関羽殿、ベッドを出られよ」
「えっ！？」
「私は夏侯惇だ」
こう名乗ってきたのだった。
「貴殿に今から案内する場所がある。服を着られよ」
「服をか」
「そうだ、いいな」
「・・・・・わかった」
事情はわからないがそれでも頷いた。そうしてだった。
言われるままベッドを出て服を着た。夏侯惇は彼女が天幕から出ると入り口で立っていた。そのうえで彼女をある場所に案内しはじめた。
そしてそのうえでだ。関羽に対して言ってきた。
「これから私が話すことはだ」
「うむ」

「独り言だ。馬超殿の母上馬騰殿は実は重病だったのだ」
「重病か」
「そうだ、都の何進大将軍に呼ばれた時一見しただけではわからなかったが」
そうであったというのである。
「既に余命幾許もなかった。我等も最初気付かなかった」
「では馬騰殿は」
「都で病で亡くなられた」
そうだったというのだ。
「大将軍の宴に出られた帰りにだ。馬から落ちられたのだ」
「貴殿は何故それを知っている」
「私はその時都の警護に当たっていた。曹操様も一緒だった」
「それでなのか」
「それでわかった。馬騰殿が病であったこともな」
「ではそれを」
「それを？」
関羽は夏侯惇に対して言った。
「何故馬超に話さなかった」
「このことをか」
「そうだ、何故だ」
「言おうとした」
夏侯惇もこう返した。
「あの天幕でもな」
「天幕でも？」
「馬騰殿が亡くなられた時も」
その時もだという。
「このことを公にしようとした。しかしだ」
「しかし？」
「華琳様が止められたのだ」
そうだったというのである。

「あの方がだ」
「曹操殿がか」
「そうだ。馬騰殿は病を隠しておられた」
「うむ」
「それは武人としてだ。何としても隠しておられたのだ」
「自分の娘にも知られないようにして」
「華琳様はそれを知られてだ」
それからだという。夏侯惇はさらに話す。
「馬騰殿の御心を組まれ。あえて死因を公表しなかった」
「馬鹿な、それでは」
「普通に暗殺だと思われるな」
「うむ、確かに」
「嫌疑は自然に華琳様にかかる」
夏侯惇はこうも話した。
「その時の警護の担当は私だったしな。まして華琳様はだ」
「曹操殿は」
「何進殿にとっては両腕の一つとして頭角を表わしておられる。朝廷において代々重臣を務めている純粋な武の名門馬家とはな」
「対立すると見られているか」
「何進殿の生まれは」
今度は何進の話にもなった。

# 第六話　馬超、曹操の命を狙わんとするのことその八

「聞いているな」
「最初は都で肉屋の家に生まれられたのだったな」
「そうだ。それが妹君が宮廷に入られてだ」
「外戚として大将軍になったな」
「そうだ。何進殿は内心このことをかなり気にしておられる」
そうだというのだ。
「華琳様は宦官の家の出、そして何進殿が頼むもう一人の袁紹殿もだ」
「母上の出が、だったな。名門袁家であるが」
「生まれはよくないと言われる。御三方は名門とは言えないのだ」
それに対して馬家はというのである。
「馬家とは違う」
「では曹操殿はそれを嫉妬して、と考えられたのだな」
「実際にそれは風評になっている。袁紹殿という話もあったがあの方は無類の謀略下手だ」
「下手なのか」
「政治はともかく謀略は得意ではない」
袁紹のバランスの悪さがここでも出ていた。
「我が君とはそこが大きく違う。政治や前線指揮は得意だが奇計や謀略はかなり不得手なのだ」
「では袁紹殿の可能性は誰もが否定したか」
「それに対して華琳様はだ」
違うというのだ。
「智略の持ち主としても名高い」
「ならば余計にか」
「しかも華琳様はああした方だ。誤解を受けやすい方だ」
もう一つ問題があるのだった。

「実にな」
「ではそれによってか」
「そうだ、それによってだ」
また言う夏侯惇であった。
「馬騰殿のことを馬超殿は耳にされて。信じたのであろう」
「そうか」
「そうだ。そういうことだろう」
「わかった。では夏侯惇殿」
「むっ！？」
「その独り言をだ」
今度は関羽から夏侯惇に対して言ってきた。
「それを馬超の前でも話してくれないか」
「このことをか」
「そうだ、このことをだ」
こう言うのだった。
「頼めるか」
「・・・・・いいだろう」
夏侯惇も関羽の言葉に頷いた。
「それではだ。行こう」
「うむ」
こうして二人は馬超のところに向かう。彼女はある天幕の中で木の檻に入れられていた。そこでその独り言を聞いてである。
「そんな、じゃああたしは」
「そうだ、曹操殿ではなかったのだ」
関羽は穏やかな声で馬超に話していた。その檻の前にしゃがみ込んでだ。
「貴殿の勘違いだったのだ」
「我が君はそうしたことはされぬ」
夏侯惇はまた独り言を言った。
「貴殿の母上は立派だった。最後まで病であることを隠されていた

のだからな」
「嘘だ・・・・・・」
しかしだった。馬超はそれを聞いても信じられなかった。信じたくはなかったと言うべきか。これは感情としてそうなることだった。
「そんなことは嘘だ・・・・・・」
「いや、嘘ではなくだ」
「こいつは曹操の部下だろうが」
「それはその通りだ」
夏侯惇もそのことは認めた。
「それがどうかしたのか」
「それなら曹操のことを悪く言うものかっ」
馬超は当然の帰結としてこう考えた。
「そうだろ?そんなの」
「いや、しかしだ」
関羽は何とか馬超を止めようとして言った。
「そんなことはだな」
「関羽、あんただってな」
馬超の感情は関羽にも向けられた。
「実際どうなんだよ。曹操の奴にな」
「私が?」
「そうだ、丸め込められたんじゃないのか」
檻の中から彼女を見据えて言った。

# 第六話　馬超、曹操の命を狙わんとするのことその九

「実際どうなんだよ、それはよ」
「それは」
「そうじゃないのか？あいつはずる賢いからな、そうじゃないのか」
「待て、馬超」
夏侯惇の今度の言葉は独り言ではなかった。
「私を疑うのはいい」
「何っ！？」
「だが関羽殿は貴殿の友人だな」
馬超に顔と身体を向けてだ。両手を拳にしてそのうえできっとした顔になってだ。彼女に対して言うのである。最早独り言は言わなかった。
「その友人の言葉を疑うのか」
「何っ、あたしが疑っているというのか」
「そうだ、そうとしか聞こえぬ」
こう返す夏侯惇だった。
「それは許せぬ。檻から出ろ」
「檻をか」
「元より出されることになっていた。だがその前にだ」
そして言う言葉は。
「槍を取れ」
「槍を！？」
「貴殿の槍をだ」
それをだというのだ。
「その槍を取れ、いいな」
「それであんたと闘えっていうのか」
「そうだ、その通りだ」
まさにそうだというのだ。

「わかったな、闘え」
「ああ、まずは手前から血祭りだ」
馬超の目は血走っていた。その目で夏侯惇を見据えての言葉だった。
「曹操の前にな」
「外に出ろ」
夏侯惇の言葉は続く。
「それで教えてやろう」
「待て、夏侯惇殿」
関羽が二人の間に入ろうとする。
「それは幾ら何でも」
「口で言ってわからぬ者もいる」
だが夏侯惇ももう引かなかった。
「ならばこうするしかない」
「ああ、望むところだ」
馬超も完全に頭に血がのぼっている。
「檻から出たらな。やってやる！」
「馬超・・・・・・」
最早関羽の制止は無駄だった。二人は夜の平原に出た。白い満月を背にしてそれぞれ構えたのである。二つの槍の光が月夜の中に輝く。
「来い、馬超」
「あたしの槍に勝てる奴はいないからな」
「それはどうかな」
馬超は身体を右に向けて槍を下に持っている。やや屈んでいる。それに大して馬超は膝を落としたいつもの彼女の構えを取っている。
「私の槍に勝てる者は曹操軍にもいないのだぞ」
「その言葉通りにいくものか！」
行って向かおうとする。しかしだった。
「むっ！？」

「どうした?」
夏侯惇の構えを見てだ。そのうえでの言葉だった。
夏侯惇の構えはだ。澄んでいた。そこには何の淀みもなかった。
馬超はその構えを見ながら。母の言葉を思い出したのである。その母のだ。
「武芸は全てを語る。構えは嘘をつかない・・・・・・」
思わずこのことを話していた。そしてだ。
そのうえで向かおうとする。しかしであった。
動けなかった。真実がわかったからだ。そして自分の過ちをだ。
「ううう・・・・・・」
「どうしたのだ?来ないのか?」
「母ちゃんは死んだんだな」
「そうだが」
「病で。死んだんだな」
「何故それがわかった」
夏侯惇は構えを取ったまま馬超に対して問うた。
「そのことがだ」
「あんたの構えからだ」
それからだというのだ。
「あんたは嘘をついていなかったんだな」
「私とて武人、嘘はつかん」
夏侯惇はこうしたことも話した。

# 第六話　馬超、曹操の命を狙わんとするのことその十

「それがわかったか」
「わかった、そうだったんだな」
「ではこれでいいな」
二人は同時に構えを解いた。そうしてだった。
馬超はその場に崩れ落ちた。夏侯惇はそれを見ようとしなかった。
その彼女から背を向けてだ。関羽に対して言ったのである。
「関羽殿」
「う、うむ」
「後は貴殿に任せた」
こう告げたのである。
「それではな」
「ああ、わかった」
こうして二人だけにされた。馬超はそのまま泣き崩れた。関羽はその彼女の肩をそっと抱いて泣くに任せたのだった。これで全てが終わった。
翌日馬超はまず曹操の元に出向いた。曹操は彼女の姿を見るとすぐに周囲の者を下がらせた。だが荀?がそれを止めようとする。
「生かしておくだけでも危険だというのにそれは」
「いや、桂花これでいい」
「こうするべきなのだ」
夏侯惇と夏侯淵がその彼女に言った。
「ここはだ。華琳様の仰る通りにするのだ」
「いいな」
「そんな馬鹿なこと通るものですか」
しかし荀或も言う。
「華琳様を殺そうとした者と。しかもそれは昨日の話なのよ」
「いえ、ここはね」

「それがいいわ」
だが曹仁も曹洪も言ってきた。
「是非ね」
「二人だけで」
「貴女達まで言うの？そんなことは絶対に」
筍或も必死の顔である。彼女も曹操を心配しているのだ。
だが曹操にとっては血縁者であり無二の腹心である彼女達に言われてはだ。荀？にしても頷くしかなかった。しかも四対一であった。
「・・・・・わかったわ。それなら」
「うむ、我等は去ろう」
「それではな」
「馬超、いいわね」
荀？は去り際にきっとした顔で馬超を見て言った。
「華琳様に何かしたらその時は」
「安心しな、もうそれはないさ」
馬超もこう彼女に返した。
「何があってもな」
「その時は私が何があっても」
「だからわかったら行くぞ」
「いいな」
夏侯惇と夏侯淵は何とか荀？を連れて行った。曹仁と曹洪も去りだ。馬超は曹操と二人になってそのうえでまずは土下座をした。
「済まない！」
「間違いは誰にもあるものよ」
曹操はその馬超にこう告げた。何時の間にか自分の席から相手の前に来ていた。
「それだけよ」
「それだけ？」
「そして」
曹操は言葉を変えてきた。

「立ちなさい。貴女程の武人がそうした姿勢になるのはよくないわ」
「えっ、じゃあ」
「どうやら貴女は私の配下にはならなさそうだけれど」
顔をあげた馬超にさらに言う。微笑んでの言葉だった。
「それでもね。そうした姿勢はしてはいけないわ」
「曹操・・・・・・」
「だから立ちなさい。そして今度は他の、貴女に相応しい場所で会いましょう」
「あ、ああ」
これで二人の話は終わった。馬超は曹操の前を後にした。そのうえで関羽達の前に行きそのうえで彼女達にも別れの挨拶をするのだった。
「じゃあまたな」
「別れるのか？」
「ああ。一旦涼州に戻る」
まずはそうすると張飛に話す。
「母ちゃんのことを皆に話さないといけないからな」
「だからなのだ」
「そうさ。それからまた武者修行を再会するさ」
「また旅をするのか」
「涼州も袁紹の領土になっちまったしな」
ここでもこのことが影響していた。
「一族の人間も結構仕えるみたいだけれどあたしはちょっとな」
「あの方は癖が強過ぎるからな」
「あの鰻を胸で掴むのは無理だ」
それはどうしてもだと。趙雲に返す。
「絶対にな」
「それはそれで艶かしいと思うが」
だが趙雲は悪戯っぽく笑ってこう述べた。
「ふむ。貴殿はまことに生娘だな」

「じゃああんたはそういう経験があるのか？」
「それはな」
一瞬だけ頬が赤くなる趙雲だった。だがそれはほんの一瞬で誰も気付かなかった。それを隠してそのうえで話したのであった。
「とにかくだ。袁紹殿には仕えぬか」
「暫くは武者修行さ。それじゃあな」
「うむ。ではまたな」
「ああ、また会おうな」
こうして一行と別れる馬超だった。彼女は城の門を出てそのまま姿を消したのだった。こうして一行はまた四人に戻った。
「また機会があれば会えるのだ」
「そうですね」
ナコルルは張飛の言葉に頷いた。
「馬超さんとは絶対に会えますよ」
「そうなのだ？」
「はい、見えます」
こう言うのだった。
「暫くしてから」
「そうなのだ」
「そしてずっと一緒にいることになると思います」
ナコルルは話す。
「ですから安心して下さい」
「わかったのだ」
「それに張飛、いえ鈴々さん」
ここで張飛の真名を呼んで問うた。
「お顔が最初からかなり明るいですけれど」
「人は別れの時の顔を覚えているものなのだ」
ナコルルにもこのことを言うのだった。
「だからなのだ」
「そうなのですか。だからなのですか」

「その通りなのだ。ではまた行くのだ」
「はい、それでは」
こうして一行は再び旅をはじめることになった。今度は擁州に向かった。匈奴の勢力圏だった場所から黄河を超え山に入りだ。そのうえで擁州に入ったのである。

第六話　完

２０１０・４・１５

# 第七話　関羽、山で三人の戦士と会うのことその一

第七話　関羽、山で三人の戦士と会うのこと

「涼州からの人材ですわね」
「はい、麗羽様」
「その通りです」
田豊と沮授が袁紹に対して述べていた。
「そして匈奴の勢力圏からもです」
「他にも青州等から再び」
「最近実に多いですわね」
袁紹は二人の軍師の言葉を聞きながら述べた。
「次から次にと」
「しかもどれも他の世界の人材です」
「この世界の者ではなく」
「この時代のこの世界の我が国だけではなく」
袁紹もこのことは既に把握していた。彼女の下に来るその人材がそのことを何よりも雄弁に物語っていた。そういうことだった。
「日本という国にアメリカという国」
「他にも多くあります」
「今度はモンゴルという国の者もいます」
「モンゴル？」
その名を聞いてまずは首を捻る袁紹だった。
「何か匈奴を思わせる響きですわね」
「はい、確かに」
「実際に匈奴の国からの者です」
こうも話す二人だった。その通りだというのだ。
「その者の他にも多く来ています」
「御会いになられますか」

「ええ、いつも通りですわ」
つまり会うというのである。
「それではこちらに」
「わかりました。それでは」
「今呼んで参ります」
田豊と沮授は主の言葉に頷いてだ。数人呼んできた。まずは小柄で太った白いシャツに赤いズボンの者だった。随分と丸く人懐っこい顔をしている。
「テムジンだす」
「テムジン。モンゴルの者と聞いてますわ」
「その通りだす。モンゴルからここに来ただす」
「成程、では貴方がでしたのね」
「この国に来て驚いただす。子供達が困っているだす」
彼は悲しい顔になった。そのうえでの言葉だった。
「ワスはそれを何とかしたいだす。子供達の為に頑張るだす」
「いいですわ、孤児の救済も国の要の一つ」
袁紹もそのことはよくわかっていた。
「貴方にはそれをやってもらいますわ」
「有り難いだす。ワスは他にも戦うこともできるだす」
それもできるのだという。
「だから是非やらせてもらいたいだす。孤児院を作って子供達の為に戦うだすよ」
「わかりましたわ。では水華、恋花」
田豊と沮授の名前を呼んだうえでの言葉だった。
「孤児院の責任者にこの者を」
「はい、麗羽様」
「丁度責任者が不在でしたし」
「丁度いいですわ。そして」
テムジンの役職を決めてだった。他の者も見た。
奇麗なブロンドに青い目の奇麗な顔の少女だった。青い服に黄色

いスカート、左手には丸く赤い球を持っている。身のこなしが軽やかだ。
そして双子らしき者達もいた。それぞれ白い道着に黒い下着とスパッツだ。どちらも楯にアームガードを装備していて白い髪をした少年だ。一方は道着の淵と帯が赤くもう一方は青だ。それが二人だった。
「ニコラ＝ザザだよ」
「ミハル＝ザザだよ」
二人は明るくこう名乗ってきた。
「僕達も頑張るよ」
「この世界の為にね」
「私はキャロル＝スタンザック」
少女も笑顔で名乗ってきた。
「何かよくわからないけれどこの世界に来ていたのよ」
「俺もだ」
最後の一人は明らかにアジア系とわかる者だった。すらりとした長身に黒髪を左右で分けた精悍な顔立ちの男で青い上着に白い服とズボンを粋に着ている。その手には棒がある。
「キム＝スイルだ」
「貴方達もですのね」
「何か獅子王と闘っていたらこっちの世界に来てさ」
「訳がわからないよ」
ニコラとミハルが困った顔になった。
「本当にね」
「ここって中国みたいだけれど中国じゃないし」
「それでどうしたらいいかわからなくて」
「とりあえずここに来た」
四人が言うにはそうなのだった。

# 第七話　関羽、山で三人の戦士と会うのことその二

「それでここの領主様は人材を求めているって聞いて」
「来たんだ」
「よかったら雇って欲しいなって思って」
「どうだ。全員強いぞ」
「どの者も卓越した腕です」
「それぞれ兵士を百人程度一度に倒しています」
田豊と沮授が袁紹に話す。
「戦場の指揮官としていいかと」
「治安維持にも使えます」
「そうですわね。今は治安維持が至急の問題」
袁紹もこのことはよくわかっていた。
「山賊退治に異民族も」
「匈奴の取り込みは順調です」
「羯の方もです」
「その二つはまずは」
袁紹は彼等についての対策を話した。
「多くは農民として辺境の開拓をさせなさい」
「農具を渡していっています」
「農具が行き渡るまでの間は牧畜をさせています」
「宜しいですわ。そして開墾の為に移住させた民と同居させること」
袁紹の政策の指示は細かい。
「そして婚姻も進めなさい。そのまま牙を抜き取り込んでいきますわ」
「それで宜しいかと」
「その中の屈強な者は」
「十万の騎兵を用意しなさい」
袁紹は今度は軍事について命じた。

「匈奴も羯も騎射に秀でている。ならば」
「はい、屈強な者を選び兵士とします」
「その選別も今進めています」
「花麗と林美に命じておきなさい」
そのことも話した。
「その選んだ兵士達をさらに鍛えることを」
「では、確かに」
「そのことも」
二人もそれに頷く。このことも決まった。
「そして今領土としている四つの州から歩兵を選りましょう」
「その数は」
「十万ですわ」
今度は歩兵の話にもなった。
「武具の充実も急ぎなさい」
「城攻めの兵器も用意しておきます」
「槍や弓、鎧兜も」
「そして」
さらにであった。袁紹の言葉がさらに強くなった。そのうえでだ。
「羌を」
「はい、烏丸はこのまま取り込めます」
「さすれば次は」
「そうですわ。羌は歯向かう危険がありましてよ」
袁紹とて漢の者だ。ならば北や西の異民族達に対してどうするかはわかっていたし決めてもいた。そのうえで田豊と沮授に話しているのだ。
「その場合は」
「征伐しかありません」
「その為にも今は」
「その通りですわ。まずは兵を養うこと」
それであった。

「次は烏丸を取り込みそのうえで」
「羌を征伐するか取り込み」
「憂いを全てなくしましょう」
「そしてその民と兵を取り込む」
彼等もまたそうするというのだ。
「宜しいですわね。ところで」
「はい」
一人出て来た。審配であった。
「今四州の民はどれだけいますの？」
「涼州の調べも終わりました。そのうえで、ですが」
「ええ」
「合わせて千二百万になります」
それだけだというのだ。
「四州でそれだけです」
「わかりましたわ。四州でそれだけになると」
「はい」
「異民族の者達をさらに取り込めば千三百万、いえ四百万になりますわね」
「それを超えるかと」
審配は田豊達の後ろにいながら主に対して述べていた。
「千五百万になります」
「それは羌も入れてですのね」
「そうです」
その通りだというのだった。

# 第七話　関羽、山で三人の戦士と会うのことその三

「彼等の脅威を取り除きそのうえで力を蓄えることもできます」
「わかりましたわ。では水蓮、恋花」
「はい」
「内政ですね」
「取り込んだ者達は民として教化すること」
それも命じるのであった。
「取り込み婚姻を進め完全に我が民となさい」
「ではこのまま」
「そうしていきます」
「青珠と赤珠にも命じておきなさい」
二人にもであった。
「四州の内政はそれと共に進めるように」
「烏丸もですね」
「幽州は今は空き地ですけれど」
「はい、今は主がいません」
「ですが烏丸が傍にいます」
田豊と沮授も誰かの存在を完全に忘れ去っている。無論袁紹もだ。
「彼等の脅威を取り込み無力化してからです」
「幽州に進みましょう」
「まずは四州の安定化と異民族の取り込みですわ」
内政を優先させるというのであった。
「匈奴や烏丸を併呑し次は」
「そして羌を」
「そうしていきますか」
「ではこの者達はまずは将とします」
あらためてキム達を見ての言葉だった。
「そして内政に使えそうでしたらそちらも任せなさい」

「はい、それでは」
「その様に」
こうして新たに加わった彼等の仕事が決まった。袁紹軍の将となったのだ。
キムは袁紹の前を退いてからだ。テムジンに対して言っていた。
「あんたのことは聞いているよ」
「そうだすか」
「アメリカのサウスタウンで孤児院をやっているんだな」
「その通りだす。ギースの奴から何とか守っていただすよ」
こうキムに返すのであった。
「中々大変だっただす。あいつはあれやこれやと汚い手ばかり使ってきただすよ」
「ギース＝ハワードね」
キャロルもいた。彼女もこの名前は知っていたらしい。
「随分と汚い手を使ってのしあがって人よね」
「それに沢山の人を殺してきたよ」
「とんでもない奴だよ」
ニコラとミハルは露骨に顔を顰めさせていた。
「僕達気付いたらこの世界にいるけれど」
「あいつはいないよね」
「さて、それはどうかな」
キムは彼等の言葉にはいぶかしむ顔で返したのだった。その整った顔に陰がさす。似合っているが暗さは確かに増していた。
「ギース＝ハワードも真獅子王もいなくても」
「他にもいるだすか」
「俺達がただこの世界に来たとはとても思えない」
彼が言うのはこのことだった。
「何かあると思っていた方がいいな。ギースや真獅子王みたいなただ力があるだけの存在がいるかも知れないな」
「っていうと」

「一体何が」
「俺もそこまではまだわからないさ」
キムはそのさらに暗くなった顔でニコラとミハルに返した。
「ただ、俺達以外にもこの世界に来ちまった奴は多いみたいだしな」
「ミッキー君やリーさんもいると聞いただす」
テムジンは既に彼等が来ていることを聞いていた。
「ではやはり」
「ああ、何かあるのは間違いないな」
こんな話をしたのだった。彼等も今は気付こうとしていた。何故自分達がこの世界に来たのかをだ。大きな謎が存在しているのは間違いなかった。
関羽一行は今は戦いの中にはいなかった。丁度擁州に入ったところだった。
鬱蒼とした険しい山の中でだ。張雲は相変わらず歌い続けている。
「熊除けか」
「そうなのだ。山の中は何がいるかわからないのだ」
「それはその通りだな」
関羽も彼女のその言葉に頷く。
「熊だけでなく虎や豹、それに狼もいる」
「そうした相手とはいちいち闘っていられないのだ」
張飛はその手に蛇矛を持ちながら言った。
「動物にも動物の都合があるのだ。無闇に倒したら可哀想なのだ」
「そうだな。それは確かにな」
趙雲も頷いた。

# 第七話　関羽、山で三人の戦士と会うのことその四

「ではこのまま騒がしく進むべきだな」
「山賊が来れば倒すだけだ」
関羽は彼等についてはこう言い切った。
「容赦せずにな」
「そういえば袁紹さんの領土はかなり治安がよかったですね」
ナコルルは思い出した様に言ってきた。
「山賊や盗賊に遭ったことはありませんね」
「そうだったな。幽州にはそれなりにいたが」
関羽もこのことを言う。
「それだけ袁紹殿の政治が上手くいっているのだろうか」
「公孫賛殿も頑張ってはいる」
趙雲もこのことは認めた。
「だが。あの方は本質的に武人だ。政治はあまり得意ではない」
「それでなのか」
「山賊達は討伐するだけでは駄目だ。元を断たなければならない」
「民が山賊にならざるを得ない様な状況にしないことか」
「そうだ。そして公孫賛殿のところには人が集まらない」
趙雲はこのことも話した。その理由もだった。
「あまりにも影が薄く。誰にも気付いてもらえないからだ」
「待て星」
関羽も今の言葉には流石に唖然として突っ込みを入れた。
「幾ら何でもそれは酷いではないか」
「しかし事実だ。実際袁紹殿もその配下も最近ではあの方の存在を忘れかけているかもな」
その通りだった。趙雲の読みは流石だった。
「あの方にとっては気の毒だが」
「人材もいないとなるとか」

「一人でやれることは限られている」
趙雲の言葉は続く。
「それでだ。幽州はどうしてもその内政に限界が出て来ているのだ」
「それで山賊が多かったのですか」
「そうなる。袁紹殿や曹操殿はその領地を万全に治めようとされているがな」
趙雲はナコルルにも話す。そんな話をしながら山の中を進む。
夜を過ごしそれからまた歩きはじめる。その時だった。
「むっ！？」
「この声は」
前にある森の中から喧騒が聞こえた。その声は。
「戦いだな」
「そうなのだ」
「打ち合う音も聞こえる」
「ということは」
四人はそれぞれ言ってだ。そのうえで前に向かう。すると三人の美女達が柄の悪い粗末な武装の男達を次々と蹴散らしていた。
「ベノムストライク！」
「必殺忍蜂！」
「重ね当て！」
三人の美女達はそれぞれ技を放ち拳と脚で山賊達を薙ぎ倒していく。そして山賊達はすぐに捨て台詞を残して逃げ去ったのだった。
「くそっ、覚えてやがれ！」
「今度会った時は容赦しねえからな！」
「いいな！」
「ふん、情けない」
金髪のショートにブラウンのタキシードの長身の美女が逃げ去る彼等を見据えてこう言った。そのスタイルはかなりのものである。気が強くしっかりとした顔立ちは精悍さすらある。そうした美女であった。

「山賊なんてこんなものね」
「そうね。所詮はね」
「烏合の衆ですね」
やたらと露出の多い赤い服を着た黒髪を後ろで束ねた美女だった。気が強そうな顔をしているが金髪の美女のそれが西のものなのに対して彼女のそれは東のものだった。胸も脚も殆ど剥き出しである。腰には尻尾に見える長い布がある。
最後の一人は白い上着に紺の袴、胸当てをした烏の濡れ羽色の奇麗な神の少女だった。凛としていて気品もある。この三人だった。
「しかし。ここは何処だ？」
「道に迷ったのなら厄介ね」
「村も近くにないようですし」
「少しいいか？」
関羽がその三人に声をかけた。
「貴殿達は何者だ？」
「んっ、何だ？」
「あれ、貴女達は一体」
「誰ですか？」
「それはこちらも聞きたい」
関羽はこう三人に返した。
「私は関羽1雲長という。貴殿達の名前は」
「キングだ」
「不知火舞よ」
「藤堂香澄です」
三人はそれぞれ名乗った。

# 第七話　関羽、山で三人の戦士と会うのことその五

「三人でキングオブファイターズに向けた特訓をしていたらだ」
「この世界に来ていて」
「それで今はここいました」
こう話すのだった。張飛は三人の言葉を聞いてこう言った。
「ではナコルルやテリー達と同じなのだ」
「えっ、テリー！？」
赤い服の女不知火舞がその名前を聞いて目を丸くしてきた。
「あんたテリーのこと知ってるの」
「一緒に戦ったことがあるのだ」
張飛もこのことを話す。幽州での山賊退治のことだ。
「物凄く強い奴だったのだ」
「アンディ＝ボガードやジョー＝東もいた」
今度は趙雲が話す。
「三人共。相当な腕だったな」
「そうですよね、本当に」
「三人も知ってるなんて」
舞はその目をさらに丸くさせて述べた。
「あんた達と会っていたなんて」
「私達の他にもいたんですね」
香澄はこう他の二人に対して言っていた。
「この世界に来た人達が」
「そうだな。私達だけではない」
「この人達はそのことを知っておられるみたいだし」
「ねえ、いいかしら」
舞が関羽達に対して問うた。
「少し休んで。話しない？」
「そうですね。それがいいと思います」

ナコルルが舞のその提案に頷いた。
「では。今から」
「ああ、それではな」
キングも頷く。こうして彼女達は休憩に入り車座になって座りそのうえで話に入った。そしてお互いに話をするとであった。
「そうだったのか」
「うむ、そうだ」
関羽がキングに対して答えた。
「アテナという者達とも会った」
「そう、あの娘達もこの世界に来ていたのね」
「そしてその他の方も来ておられるなんて」
舞と香澄もそれぞれ言う。
「皆この世界に来ているのかしら」
「そんな気がしてきましたね」
「何かわからないけれど最近そういう奴が多いのだ」
張飛もここで話した。
「皆が皆それぞれ集まってきているのだ」
「お父さんもいるのかしら」
香澄はふと言った。
「若しかしたら」
「父君？」
「はい、実は私お父さんを探しているんです」
こう趙雲に対して答えた香澄だった。
「ずっと失踪していまして。お家はお母さんが取り仕切っています」
「そうなのか。貴殿も大変なのだな」
「サウスタウンの寿司バー『繁盛』というお店でして。そちらの方は順調なんですけれど」
「こう見えても香澄ってお嬢さんなのよ」
舞が笑ってこのことを関羽達に話す。
「もうかなりね」

「そうなんですか。そういえばキングさんの服は」
ナコルルはキングを見ていた。
「シャルロットさんのに似ているところがありますね。雰囲気も」
「シャルトロット？名前は聞いている」
キングも彼女の名前は知っているようだった。
「フランス革命の時の英雄だったな。民衆の為に戦ったという」
「御存知でしたか」
「ああ。あんたはその人と知り合いか」
「はい、親しくさせてもらっています」
このことも話すナコルルだった。
「若しかしたらあの人もこの世界に」
「有り得るんじゃないかしら、私達もいるんだし」
舞はその可能性を否定しなかった。
「テリーやアテナ達もいるとなると」
「そうですか、やっぱり」
「そして貴殿達は何故ここに？」
趙雲がキング達に問うた。
「この様な山の中に」
「最初は村を回っていた」
キングが話した。

# 第七話　関羽、山で三人の戦士と会うのことその六

「用心棒や技を見せたりし路銀を手に入れながらだ」
「それでここに入ったんだけれど」
「道に迷ってしまいました」
舞と香澄も話す。
「この山の中、どうして進むべきかわからず」
「それで前に出て来た山賊達と戦っていました」
「ふむ、そうであったか」
趙雲はここまで聞いて静かに頷いた。
「そういうことだったか」
「はい、そうなんです」
香澄がまた答えた。
「そして今ここに」
「大体わかった」
趙雲もまた頷いたのだった。
「それでな。では貴殿達さえよければだ」
「はい」
「我等と共にしないか」
こう誘ったのだった。
「道中だ。貴殿達の力は頼りになる」
「いいのか、それで」
「何、旅の道連れは多い方がいい」
関羽も微笑んで言った。
「それならばな」
「そう言ってくれるのか」
「そうなのだ。キング達も一緒に行くのだ」
張飛もまた言ってきた。
「鈴々達と旅をするのだ」

「わかったわ。じゃあ御言葉に甘えて」
舞も笑顔で返した。
「同行させてもらうわ」
「宜しく御願いします」
香澄は座ったまま一礼した。
「これから」
「七人になりましたね」
ナコルルも優しい笑顔になっている。
「賑やかになりますね」
「そうだな。さて、道は任せてくれ」
趙雲の言葉だ。
「私はこの辺りも通ったことがあるからな」
「では道は頼んだ」
キングがその趙雲に返す。
「山賊達は任せてくれ」
「いや、山賊達ならば私達もだ」
関羽の笑顔が不敵なものになった。
「腕には覚えがある。任せてもらおう」
「鈴々達も逃げないのだ」
張飛も話す。
「誰もやっつけてやるのだ」
「そういうことね。じゃあこれから宜しくね」
また笑顔になる舞だった。こうして一行は七人になりそのうえで旅を再開した。
進みはじめるとだ。暫くして七人の周りにだ。また山賊達が出て来たのだった。それぞれの得物を手にそのうえでだった。
「やいやいやい」
「さっきはよくもやってくれたな」
「数は増えてるけれどな」
「容赦しねえからな」

「やれやれ、また出て来たのね」
舞は自分達の周りを囲む彼等を呆れたような顔で見ながら言った。
「悪者ってのは懲りないのね」
「うるせえ、どっちにしろな」
「もう手加減しねえからな」
「一人残らず叩き斬ってやるからな」
「面白いのだ」
張飛が右手のその蛇矛を握りなおした。そしてだった。
「なら鈴々達も思う存分倒してやるのだ」
「カモンベイビー」
キングは不敵な笑みを浮かべて右手で手招きしてみせる。
「一人残らず倒してやるわ」
「その言葉忘れるなよ」
「それならな」
「死にやがれ！」
山賊達は七人に一斉に襲い掛かった。しかしであった。
舞が腰のその布を振った。身体を横に旋回させてだ。
「龍炎舞！」
「う、うわああっ！」
「炎が！」
山賊達のうちの数人がその炎を受けて吹き飛ばされる。その全身が燃えている。

# 第七話　関羽、山で三人の戦士と会うのことその七

「な、何だこいつ！」
「今度は火を使いやがった！」
「忍の技は縦横自在よ」
技を放った舞の言葉だ。
「炎も使えるわよ」
「こ、こいつ」
「強い！？」
「しかもかなりか」
「舞さんだけではありません」
今度は香澄であった。
「私もまた」
「な、何っこいつ」
「来やがった！？」
「自分からかよ」
「受けなさい！」
こう叫んでだった。山賊達に繰り出した技は。
「双掌弾！！」
「ぐはっ！」
これで何人も吹き飛ばされた。踏み込んで両手での掌打だったがかなりの威力であった。
そしてだ。香澄はその中でまだ立っている一人に続け様に技を繰り出したのであった。
「諸手返し！」
その山賊を掴み反対側に投げる。そしてその上から拳を打ち下ろした。
「甲割り！」
「ぐふうっ・・・・・・」

これでその山賊を完全に黙らせた。外見からは思いも寄らない強さだった。

キングは足技で山賊達を倒していく。そしてその技は。

「トラップショット！」

山賊の一人を巻き込みそのうえで激しい蹴りを何発も繰り出し倒してしまった。彼女の強さも他の二人と比べて何の遜色もないものだった。

その彼女達と共にだ。関羽達も得物を手に闘う。その結果であった。

山賊達は劣勢を悟ってだ。今回も逃げ去ったのだった。

「覚えてやがれ！」

「今度こそな！」

こう言って走り去る。そうしてだ。

残った関羽達は顔を見合わせて。そのうえで話をする。

「さて、闘いは終わったが」

「問題はこれからだな」

「そうだ、わかっているのだな」

関羽はキングの言葉を聞いたうえで述べた。

「貴殿もまた」

「では行くか」

「いいな、皆」

関羽はあらためて仲間達に告げた。無論新しく仲間に入った面々にもだ。

「追うぞ」

「そして隠れ家に行くのだな」

「そこで敵を一掃する」

こう張飛にも答える。

「いいな、すぐにだ」

「わかりました」

ナコルルはむべもなく頷いた。

「それなら今からすぐに」
「行くぞ、幸い奴等はまだ遠くへは行っていない」
「しかしだ。地の利は向こうにある」
趙雲はここであえて慎重案を述べてみせた。
「それは注意しなければな」
「ええ、伏兵なんていうのもあるから」
「はい、幾らでも」
舞と香澄も言う。
「それに気をつけてね」
「用心して、ですね」
「ママハハを偵察に向かわせましょう」
ナコルルは自分の右手にそのママハハを止まらせた。そのうえで仲間達に話した。
「ママハハは森の中でも気配でわかりますし」
「そうだな、敵は何処に潜んでいるかわからない」
関羽もそれを話す。
「ナコルル、それでは頼む」
「はい、それでは」
こうしてママハハが放たれそのうえで上から偵察された。そしてすぐに戻ってきてすぐにナコルルの耳元で囁くのだった。

# 第七話　関羽、山で三人の戦士と会うのことその八

「やっぱりでした」
「伏兵か」
「はい、百人程ここからまっすぐに行った場所にです」
「そこにいたのか」
「そうです、そこに隠れ家の洞窟がありまして」
「ふむ、隠れ家はそこか」
関羽はこのことも確かめたのだった。
「そこにあったのか」
「そしてその前に左右に隠れています」
「わかった。ではここはだ」
関羽はそれを聞いてだった。また慎重に話したのだった。
「まず隠れ家のその左側の奥に入る」
「奥にですか」
「そうだ、奥にだ」
こう言うのである。
「向こうが伏兵ならこちらはその裏をかく。背後から奇襲だ」
「そうだな。そして勢いを得てそのまま倒す」
「その通りなのだ。一気にいくのだ」
「ではな。回り込むとしよう」
趙雲に張飛、そしてキングが言った。
「百人か。数は多いが」
「鈴々達にとっては大した数ではないのだ」
「一人辺り十三人だな」
中でもキングは冷静だった。どうということはない口調で倒す数も言ったのだった。本当に何でもないといった口調だったのである。
「それか十四人だ。どうということはない」
「倒した後は近くのお役人に教えてね」

「それで捕まえてもらいましょう」
舞と香澄は倒した後のことも話した。
「それで全部解決ね」
「ここの領主がどういう人か今一つわかりませんけれど」
「確か董卓という人でしたね」
ナコルルはこの名前を出した。
「何か西の涼州出身だとか」
「噂では暴虐非道とも聞くか」
「だが噂は噂だ」
関羽の話に趙雲が言った。
「実際はどうかわかったものではない」
「そうだな。こうした山奥では政治もわかるものではない」
「ではまずは山賊達をやっつけるのだ」
張飛はこのことを優先させた。
「では行くのだ」
「よし、それならすぐに」
「行こうか」
こうして七人は密かに森の中に入ってだ。左側の山賊達の方に回り込む。細かい場所はママハハを何度も偵察に向かわせて確かめてだ。そのうえで向かったのである。
その頃山賊達はだ。潜みながらあれこれと話をしていた。
「間違いなくここに来るからな」
「そうだな、そうならな」
「ここで待つ」
「そして倒すぞ」
「ああ」
下卑た笑みを浮かべながらだ。そのうえで待っていた。
そしてだ。彼等なりにこれからのことを考えていた。その下卑た笑みでそのことも話すのであった。それは決して品のいいものではなかった。

「どいつもこいつも上玉だったよな」
「ああ、小さいのもいるけれどな」
「馬鹿、ああいうのがいいんだよ」
こうしたことも話すのだった。
「若ければ若い程いいんだよ」
「若ければ余計にか」
「そうなんだな」
「そうだよ、だから俺はあの赤い短い髪の女な」
「それじゃあ俺はあの胸のでかい黒髪の女だ」
「ああ、あいついいな」
何気に人気の関羽だった。
「女はやっぱり胸だぜ」
「いや、胸がないのもいいぜ」
「じゃああの白い服の黒髪か」
「あいつもいいよな」
「金髪もいるしな」
「あの青い服の女もかなりそそるしな」
「これからたっぷりと楽しめるよな」
そんな話をしていた。そしてだ。

# 第七話　関羽、山で三人の戦士と会うのことその九

「そろそろ来るか？」
「あの派手な狐みたいな女捕まえてな」
「袴の女、今度こそな」
舞と香澄のことも話される。
「楽しませてもらうぜ」
「怪我の恨み、晴らさせてやるぜ」
「よしっ、じゃあな」
「来やがれ」
こう言ったその時だった。後ろから来た。
「行くぞ！」
「一気に行くのだ！」
関羽と張飛がまず出た。その得物を手に山賊達を急襲する。
「関羽雲長見参！」
「張飛翼徳参上！」
そのうえで驚く山賊達に踊り込む。そのうえで彼等を次々と薙ぎ倒す。
「何っ、こいつ等！」
「後ろから！？」
「どういうことなんだ！」
「考えるのは貴様等だけではない！」
趙雲もまたその槍を縦横に振るいながら山賊達を倒しながら話す。
「それは我々も同じだ」
「糞っ、まさか俺達の隠れている場所がわかっていたのか」
「隠れてるってこともかよ」
「ママハハが教えてくれました」
ナコルルの横にそのママハハが来た。
「ですから」

「鷹にかよ」
「動物風情にかよ」
「動物と侮るからこそです」
香澄はその掌の打撃で山賊達を倒していく。重ね当ても出す。
「貴方達は駄目なのです」
「そりゃどういう意味だ!?」
「動物だから何だってんだ?」
「侮るなってことよ」
舞はその脚とセンスで倒していっていた。
「どんな相手でもね」
「侮るなだと!?」
「どんな相手でもかよ」
「そうだ。敵は誰でも侮っては駄目だ」
キングは脚であった。華麗な舞を舞うようにして倒していく。
「それがわからない御前等はだ。だからだ」
「敵を倒す」
「ちっ、糞っ!」
「しかしな、数は多いんだ!」
「やってやらあ!」
「無駄だ。数の問題ではない」
関羽は彼等を薙ぎ倒しながら述べる。
「私達を倒すには一人当たり百人は用意することだ」
「それに勢いはもうこっちのものなのだ。負ける筈がないのだ!」
張飛もだった。七人は隠れ家の前で山賊達を全て倒してしまった。
隠れ家の中には食べ物と宝があった。幸い捕らえられている者はいなかった。
山賊達を縛りそのうえで連行していく。ナコルルはその中でまたママハハの話を聞いていた。
「ここから山を降りてすぐに街があるそうです」
「そうですか、街がですか」

「はい、そこに行きましょう」
こう香澄に答えた。
「これから」
「そうですね。そこでお役人に引き渡せばいいですね」
香澄はそれを聞いてまた頷いた。
「それではそういうことで」
「よし、それならね」
舞は明るい笑顔でナコルルのその言葉に応えた。
「行きましょう、それならね」
「街へ」
こうして七人は山賊達を街の役人に引き渡した。それにより多くの賞金を得た。それで街の店で祝賀会を開いたのであった。卓を挟んで乾杯した。
「さて、まずは一件落着だな」
「ええ、そうよね」
舞が趙雲の言葉に応える。
「これでね。ただ」
「ただ？」
「この時代というかこの世界の中国って随分変わってるわよね」
こう言うのであった。

# 第七話　関羽、山で三人の戦士と会うのことその十

「女の子が物凄く多いし」
「そうか？」
関羽はそう言われても目をしばたかせるばかりだった。
「そんなに多いか？」
「気のせいではないのだ？」
張飛も言う。
「別にそうではないのだ」
「そうだな。ただ女であっても領主や武芸者になれる」
趙雲は言った。
「それだけだ」
「それだけか」
「男と女の割合は大体半々だ」
関羽はまた言った。
「その程度だ」
「そうなんですか。特に多くはないのですね」
「そうだ。多くはない」
関羽はナコルルに対しても述べた。
「それは事実だ」
「そうなのね。けれど奇麗な女の子が普通に領主とかやってるから凄いわよね」
舞は餅を食べながら話した。
「そんなの普通はないわよ」
「少なくとも私達の世界とは全く違うな」
キングはこのことは確かに言った。
「そうした世界なのか。それでだ」
「それで？」
「これからどうするのだ？」

キングが今度言ったのはこのことだった。
「これからだ。どうするのだ？」
「とりあえずはこのまま長安に向かう」
答えたのは関羽だった。
「それからだ」
「そうか、長安か」
「知っているのか」
「ああ、都だったな」
その街の話をしたのだ。
「確かこの国の前のな」
「そうだ。それはそちらの世界でも同じだったのだな」
関羽はキングの話を聞いてこのことがわかった。
「成程な」
「かなり栄えている街だったな」
「うむ、この国でも指折りの街だ」
趙雲もこのことを話した。
「ただ。今はな」
「領主の董卓は情け容赦のない暴君と言われている」
関羽がまたこのことを話した。
「恐ろしく強い胡の兵を率いな。空くの限りを尽くしているという」
「悪い奴ってことね」
「それはどうかな」
舞の言葉にすぐに趙雲が返した。
「噂だからな。実際に擁州の中により入らなければわかるものではない」
「ではこのまま中に入って見るのですね」
香澄はこう言った。
「そういうことですね」
「そうですね。行きましょう」
ナコルルは羊の肉を炒めたものを食べている。全員酒も飲んでい

る。
「擁州の中に」
「そうだな、行くか」
「中々楽しみなのだ」
関羽と張雲が話してだ。そのうえで向かうのであった。
その頃その長安はだ。中々繁栄していた。
「いや、どんな領主様かって思ってたけれどな」
「奇麗な方だしな」
「あれは奇麗じゃないだろ」
「可愛いだろ」
こんな話をしていた。
「どっちかっていうとな」
「そうだよな、可愛いよな」
「小柄だしな」
「武芸は全然駄目みたいだけれどな」
「どう見てもな」
「けれどな。それをフォローする人もいるしな」
「ああ、武は華雄将軍」
この者の名前が出て来た。

# 第七話　関羽、山で三人の戦士と会うのことその十一

「張遼将軍もいるしな」
「そして知恵は賈駆様がいて」
「万全だよな」
「ああ、それに御本人はとにかくお優しい」
何と董卓の評判は長安では悪いものではなかった。むしろかなりいい。
「お陰で俺達も安心して暮らせるしな」
「全くだ。ただな」
「ああ、最近どうもな」
「あちこちで山賊も出ているからな」
ここで彼等の顔が曇った。だが長安の街は栄え人々が明るい顔で行き交っている。その繁栄は都と比しても遜色ない程である。
「それがなあ」３０
「董卓様も頭を悩ましておられるらしいぜ」
「兵はどうなんだ？」
ここでこの話も為された。
「兵隊もいるだろうに」
「それが西の異民族に用心しないといけないらしくてな」
「あの羌だな」
「あいつ等か」
「ああ、何時来るかわからない奴等だからな」
だからこそ恐ろしかったのだ。この世界の中国も異民族に悩まされているという時点ではナコルルの世界の中国と同じであった。
「そっちに用心しないといけないからな」
「それで山賊達までにはか」
「そういうことなんだよ」
「辛いな、それは」

「それでも前よりは山賊も減ったぜ」
こうした意見も出ていた。
「前なんかかなりだっただろ」
「ああ、もう酷かったよな」
「董卓様が来られるまでな」
「全くだよ」
民達は困った顔で話をしていく。
「今はかなりましになったし」
「いるものはいるか」
「袁紹様や曹操様のところは人が多いからな」
「その分楽みたいだけれどな」
袁紹陣営や曹操陣営の話も為される。
「こっちは御二人だけだからな、実質」
「董卓様にお仕えしている確かな人材はな」
「それが辛いよな」
「そう、それにだよ」
ここで話が変わった。
「最近何か変わった連中が一杯出てるらしいぜ」
「変わった連中？」
「何だそりゃ」
ここで民衆達の顔が変わった。彼等は店で飯を食べながら話をしている。その中でのやり取りであった。
「変わった身なりでどいつもこいつも逞しい身体をしていてな」
「ああ、それで？」
「どうなんだ？」
「やたらと強い奴等らしい。曹操様や袁紹様はそうした連中を次々と迎え入れているらしい」
「董卓様のところにもそういうのが来て欲しいよな」
「そうしたらあの方も楽になれるのにな」
「だよな」

董卓は明らかに慕われている、それがわかる会話だった。
そうしてだ。ここでさらに話されるのだった。
「それにだよ」
「それに？」
「どうしたんだ？」
「何か化け物が出るらしいしな」
「化け物って何処にだよ」
「何処にそんなのが出るんだよ」
今度はこうした話になった。どんな時代でもどんな場所でもつきものの話である。化け物は人の世と表裏一体の存在であると言っていい。
「そんなのがよ」
「何処に出るんだ？」
「こっから北の方にな。何か凄い化け物らしいぞ」
「そんなに凄いのかよ」
「えげつない化け物なのかよ」
「ああ、滅茶苦茶強くてな」
まずはそこから話された。
「どんな奴が来ても叩きのめす位にな」
「どんな奴もって」
「そんなにやばいのかよ」
「身の丈二丈はあってだな」
大きさまで語られる。
「大きな岩まで平気で動かしてな」
「うわ、怪力かよ」
「強くてでかいだけじゃなくてかよ」
「らしいな。そういう奴が出ているんだと」
「山賊よりやばくはないか？」
こんな意見が出て来た。
「それだとな」

「ああ、そうだよな」
「そんなのがいたらな」
「まずいよな」
「全くだよ」
そして誰もがまた困った顔になるのだった。
「董卓様はどうされるんだろうな」
「無視もされないだろ」
「そういう方じゃないしな」
董卓の評判はやはりいい。慕われてさえいるのがわかる。
「それじゃあ手を打たれるか」
「けれどなあ。あの人って優し過ぎるよな」
「確かにな」
こうしたことも言われた。
「どうもな」
「それに真面目過ぎるしな」
「いい人過ぎるんだよ」
これが彼等の董卓の評価だった。
「あれで今の御時世大丈夫なのかね」
「利用されないといいけれどな」
「そうだよな、世の中悪い奴は多いぜ」
逆に利用する始末であった。
「ああいう人は利用され易いからな」
「何もなければいいけれどな」
「逆に俺達の方が不安になるぜ」
そんな話をする始末だった。彼等の方が心配する董卓はだ。決して評判の悪い人物ではなかった。むしろ領地ではその逆であった。

第七話　　完

2010.4.19

# 第八話　董卓、城を抜け出すのことその一

第八話　董卓、城を抜け出すのこと

「ちょっと華雄将軍」

「どうした？」

銀髪の短い美女がいた。鋭利な顔立ちに鋭い目をしている。胸はブラの如き鎧をしているだであり後ろに長いリボンが見える。目は鳶色だ。

スカートは深くスリットが入っており両足はタイツで包んでいる。腕にはそこだけの服がある。どの色もダークグレーとなっておりスカートには赤い蝶の模様がある。そうした格好の女が小柄で眼鏡をかけた緑の髪の少女に応えていた。

少女の髪は一見すると短いがそうではなかった。後ろで二つに分けて編んでいる。その前髪がぴんと張っていてやけに目立つ。黒いミニのスカートを着ていて上には白いエプロンの様な上着を身に着けている。脚は黒いストッキングで覆っていてブーツも黒だ。まだ幼さが残るが随分と気の強そうな表情をしている。黒い目の光も強い。細い眉があがっていて瞳は黒である。

「いきなり」

「月、いえ」

ここで自分の言葉を一旦訂正させた彼女だった。

「董卓様がいないのよ」

「何、またなのか」

「そうなのよ」

こうその華雄に言うのである。背の高い彼女を見上げてだ。

「またなのよ」

「ふむ、そうか」

「ちょっと、何で落ち着いてるのよ」

少女は怒った声で華雄に対して言ってきた。
「そんなに。どうしてなのよ」
「落ち着け賈駆」
華雄はその彼女の名前を呼んで逆に言葉を返した。
「そんなに慌てて怒ってどうする」
「これが慌てない状況！？」
しかし賈駆はまた華雄に言い返した。
「領主様がいないのよ」
「だからいつものことではないか」
二人は今屋敷の廊下にいる。そこであれこれと話をしているのである。賈駆の方がかなり焦ってそのうえで怒っているのである。
「それは」
「いつもでも何でも大変なのよ！」
賈駆の言葉は変わらない。
「そんなのわからないの！？」
「確かに領主がお忍びで城を出てな」
「そうよ、領内を見回ると言ってそれで共も連れずにって」
「あの方は真面目だからな」
「真面目とかそういう問題じゃないわよ。曹操も袁紹もね」
この二人の話もするのだった。
「そこまでしないじゃない。ちゃんと領地はまた経営してるでしょ」
「下々の暮らしを見て回るというのはいいことだろ」
「それはね」
これは賈駆も否定しない。
「領民と直接触れ合うのはいいことよ」
「まあそれはな」
華雄もそれは悪いとはしない。
「いいことだ。しかし最近はな」
「そうなのよ。領内の辺境の山賊討伐に忙しく」
賈駆は言う。

「そっちに人手を取られて逆に長安周辺の治安が悪くなってきているし」
「私だけで何とかしている状況だからな」
「それに物価があがって」
問題はそれだけではないのだった。
「そっちも何とかしないといけないし。問題山積みだっていうのに！」
「それはわかったが」
華雄はその賈駆が両手で自分の髪の毛を掻き毟りながら言うのを見ながら言ってもきた。
「賈駆、いいか」
「何よ」
「そんなに怒っては早死にするぞ」
言うのはこのことだった。
「そんなことだとな」
「いいわね、華雄将軍は」
賈駆は今度は華雄に対して言ってきた。
「悩みがなさそうで」
「私は武の方が専門だからな」
「そうね。私は文で」
「しかも鍛えているからな」
華雄は左手を出してそこに力瘤を作って言ってみせた。

# 第八話　董卓、城を抜け出すのことその二

「大丈夫だ」
「そうなの」
「そうだ。私は長生きするからな」
「だといいけれど」
「しかし。董卓様の行方を捜さないとな」
「行く先は大体わかってるわ」
それは察しているというのであった。
「すぐに行くから」
「そうなのか」
「留守を頼むわ。それでだけれど」
「それで？」
「最近あちこちで急に人材が出て来ているけれど」
賈駆の話が変わってきたのである。
「登用すべきかしら」
「するべきではないのか？」
華雄は考える顔になった賈駆に対してこう述べた。
「人手が足りないのは確かだしな」
「そうね。曹操にしても袁紹にしても」
「人材を広く集めているようだしな」
「江南の孫策もね」
この名前も出て来た。
「袁術はどうかわからないけれど」
「あと一人いたな。誰だった？」
「これだけよ。他はいないわよ」
「そうだったな。今空き地は徐州、交州、そして益州か」
「徐州は何か三人の芸人の姉妹がコンサートとか開いていることが多いらしいけれど」

賈駆はこの話もした。
「交州と益州は完全に空き地よ」
「そうだな。領主がいないのが問題だな」
「益州は広くて豊かだけれど」
賈駆は言いながら眉を顰めさせた。
「それでもね。あの国はねえ」
「広過ぎるな。しかも西と南に異民族がいる」
「私達の今の人手では無理よ」
「そうだな」
これは二人もわかっていることだった。
「今は擁州だけで手が一杯だ」
「擁州はややこしい場所よ」
賈駆は眉を顰めさせてきた。そのうえでの言葉だった。
「この長安もあって豊かだけれど」
「西には異民族もいるしな」
「袁紹はあの連中も征伐するつもりみたいね」
「涼州では飽き足らずか。西方にも己の力を誇示したいか」
「あの女は内政マニアなのよ」
賈駆は袁紹のその本質をよくわかっていた。
「曹操も内政好きだけれどね」
「それであの連中も併合してか」
「そうみたいね。月、いえ董卓様もだけれど」
「その董卓様もな」
「あの娘、いえあの人は少し違うわよ。大人しくて優し過ぎるのよ」
またその董卓の話になるのだった。
「西方の生まれなのに弱々しくて。それが」
「とにかく董卓様を見つけないとね」
「わかった。それでは留守を守ろう」
「じゃあ行って来るわね」
こうして賈駆は兵士達を連れてすぐに長安を発った。擁州も擁州

で騒動が起こっていた。その頃キング達をあらたに加えた関羽達は森の中を進み続けていた。

その中でだ。張飛は歌を歌い続けていた。

「例え今が壊れても～～～～♪」

「何の歌だ、それは」

「私が教えた歌だが」

キングが関羽に対して話してきた。

「それだが」

「それなのか」

「そうだ、ワールドヒーローズ2というが」

キングは自分の世界の話をするのだった。

# 第八話　董卓、城を抜け出すのことその三

「その世界での歌だ」
「そちらも貴殿達の世界と関わりがあるのだな」
「そうだな。あると言えばある」
「そうなのか」
「すぐに覚えてくれたな。しかも気に入ってくれたようで何よりだ」
「そうですね」
ナコルルもにこりとしている。
「本当に」
「私実はヘビメタ好きなのよ」
「ヘビメタ！？」
関羽はそのヘビメタと聞いてふと言った。
「ヘビのメタボリックか？」
「強引な言葉だな」
趙雲が横から言った。
「今のは随分と」
「そうか？しかしヘビメタとは何だ？」
「私の世界での音楽のジャンルよ」
舞は笑って説明した。
「そういう音楽もあるのよ」
「そうなのか」
「いいわよ。私も向こうの世界じゃ普通の服だしね」
「というと今の服は普通ではないのか」
趙雲は舞のその派手どころでは済まない服を見ながら述べた。
「そうなるか」
「否定しないわね。実際にこの格好かなり派手だし」
胸も脚も露わである。しかも脇もかなり見えている。非常識な格好だった。

「けれど私の家は代々この格好なのよ」
「そういえば私も以前舞さんと同じ服の人と会いました」
ナコルルもそうだというのである。
「不知火家の女性の方は本当に代々なんですね」
「そうなの。忍者の家でね」
「忍者というと」
今度言ってきたのは香澄である。
「如月さんもそうですしね」
「あの家とは流派が違うけれどね」
「そうなんですか」
「あの家は確か幕末から出た家で元々剣客なのよ」
「剣客だったのか」
「ええ。あの人も来ているかしら」
舞は関羽に応えながら述べた。
「やっぱり」
「その可能性はあるわね」
キングもその可能性は否定しなかった。
「その時は会えるかどうかね」
「そうね、その時は戦うかもね」
舞はそれは覚悟していた。そんな話をしている時だった。
不意に前から不穏な声が聞こえてきた。
「約束が違います」
「むっ、あれは」
「女の子の声なのだ」
関羽と張飛が最初に声をあげた。
「何だあれは」
「こんな森の中で」
「待て、他にも聞こえるぞ」
趙雲は耳を澄ませていた。
「これは」

「男の声だな」
「はい、それもあまり品のよくない」
キングと香澄はすぐに警戒する顔になった。
「山賊か」
「私達が倒したのとは別の」
「そうですね。そして若しそうだったら」
「ここでも退治ね」
舞はナコルルの言葉に応える。
するとだ。すぐにまた声がしてきた。
「おいおい、何だよ」
「折角案内してやったのによ」
その下卑た男の言葉だった。

# 第八話　董卓、城を抜け出すのことその四

「その言葉はねえんじゃねえのか？」
「どうなんだよ」
「村に案内して頂けるとは言われました」
一行がそっと見るとだった。薄紫の柔らかい髪を首のところで切り揃えた楚々とした少女がいた。小柄で顔立ちは優しい。髪にはリボンがある。
目はやや垂れ目で赤紫である。服は淡い白と薄紫の中間色である。その色の服を着ているのであった。
その少女が大木を背にしている。周りを三人の柄の悪い男達が囲みそのうえで言っているのであった。
「けれどここは」
「だから案内してやったんだよ」
「楽しい場所にな」
「今すぐ楽にしてやるぜ」
「楽に？」
少女は今の言葉を聞いてその眉をぴくりとさせた。
「まさか私をここで」
「ああ、そのつもりはないから安心しな」
「それはな」
山賊達もそれはしないというのだ。
「今から気持ちよくさせてやるからな」
「へっへっへ、安心しな」
「そうなのか」
関羽がここで彼等に声をかけた。
「そんなに気持ちいいのか」
「そうさ、もうな」
「病み付きになる程にな」

「わかった」
山賊達は三人だ。関羽の姿は見えていない。それでこう言葉を返したのである。
「それでは我々も混ぜてもらおう」
「何っ！？」
「誰なんださっきから」
「旅の武芸者達だ」
こう言ってであった。山賊達の前に出て来てみせたのであった。
「何処にでもこういう下衆はいるな」
「全くです」
ナコルルも怒った目をしている。そのうえで関羽の言葉に応えたのだ。
「こうした人達は何処にもいます」
「それでだ。どうするのだ？」
趙雲は既に槍を構えている。そのうえで山賊達に対して問うた。
「我々も入れてくれるのか。どうするのだ？」
「へっ、何かって思ったら女ばかりかよ」
「しかも上玉ばかり七人か」
「それならな」
「まとめて相手してやるぜ！」
こう言ってまずは関羽達に襲い掛かる。だが戦いは一瞬で終わった。彼等はあっという間に何処かに吹き飛ばされてしまったのである。
「ふん、情けない」
「日本一っ！って言う程もないわね」
キングと舞は戦いを終わらせたうえで素っ気無く言った。
「さて、この連中はいいとしてだ」
「ねえあんた」
舞が木のところにいる少女に対して声をかけた。
「またどうしてこんな場所にいるの？」

「それで名前は何ていうのだ？」
「名前ですか」
まずは張飛の言葉に応えた。
「名前はですね」
「何ていうのだ？」
「董・・・・・・ええと」
ふと考えてだ。こう言ったのであった。
「董々です」
「董々？」
「はい、そうです」
微笑んで述べた。
「それが私の名前です」
「いい名前なのだ」
張飛はその名前を聞いてすぐに笑顔になった。

# 第八話　董卓、城を抜け出すのことその五

「鈴々と似ている名前でいいのだ」
「そうですね。似ていますね」
「だから気に入ったのだ」
こう言うのであった。そしてこの少女はまた行って来た。
「それでなのですが」
「うむ、それで」
「最近この辺りでよくない噂を聞きまして」
「山賊のことですか？」
香澄はそれではないかと問うた。
「それでしたらもう私達が退治して役人に引き渡しました」
「先程の連中とは別のな」
キングもそれではないかと返す。
「話はそれで終わりだな」
「いえ、山賊ではありません」
だが少女はそうではないという。こう一行に言うのである。今は趙雲が案内をしている。彼女の両手には地図がありそれを見ながら進んでいるのだ。
「それは違います」
「というと？」
「この辺りに化け物が出ると聞きまして」
「えっ！？」
「化け物！？」
化け物と聞いてだった。関羽と張飛がすぐに声をあげた。
「それはまことか」
「困ったことなのだ」
「むっ！？」
今の二人の言葉を聞いた趙雲はすぐに怪訝な顔になった。そのう

えで二人に問うのであった。
「何故御主達がここでそんな顔になるのだ？」
「い、いやそれはだ」
「何でもないのだ」
「そうか。それならいいがな」
こうは返してもであった。趙雲は何かに気付いたらしく口元を微かに綻ばさせた。しかしそれは一瞬のことですぐに元の顔に戻って言うのであった。
「それでだ。董々殿」
「はい」
「貴殿はその化け物の話を聞いてここまで来たのだな」
「はい、長安にいたのですが」
「ふむ、長安に」
ここからかなり離れている。それはもう趙雲の頭の中に入っている。
「そうか、そこからか」
「そうです。それでここまで来て確かめたいと思いました」
「それはいいが」
ここまで聞いてだ。趙雲は言った。関羽とキングもだ。
「随分と行動力があるな」
「そうだな。ここから長安まで随分とあるが」
「しかもあんたが化け物を退治するのかい？」
三人はそれぞれ少女に対して言った。
「只怖いもの見たさで来るものだろうか」
「化け物退治には向かないと思うがね、あんたじゃ」
「私達でもないとね」
舞はこう言ってきた。
「化け物の相手なんて無理よ」
「あっ、それは」
少女は周囲の言葉に戸惑った。そしてそのうえでこう言うのであ

った。
「その。実家がこの辺りにありまして」
「そこから帰ったついでにだったんですね」
「はい、そうです」
香澄の言葉にすぐに頷くのだった。
「その通りです」
「そうですか。それではまず村に入って」
「そうなのだ。全部そこからなのだ」
張飛はナコルルの言葉に頷いた。
「化け物が本当にいたとしてもなのだ」
「あれ、張飛さん」
ナコルルはここで張飛が困った顔になったことに気付いた。
「どうしたんですか？さっきから」
「何でもないのだ。気にするななのだ」
「そうですか」
そんな話をしながらその村に辿り着いた、すると道に幾つもの巨大な石が置かれていた。一行はそれを見てまずは唖然となった。
「な、何だあの石は」
「人間の動かせる大きさではないのだ」
力の強い関羽も張飛も唖然となる大きさだった。その石は一行の中で最も背の高いキングよりも遥かに大きいものであったのである。

# 第八話　董卓、城を抜け出すのことその六

しかもその質量もかなりのものだ。ナコルルがその石を見て呟いた。
「アースクエイクさんよりも大きいかも」
「確かになのだ。あのデカブツ以上なのだ」
張飛は唖然とした顔で語る。
「誰がこんなのを置いたのだ」
「確かにな。化け物じみているな」
趙雲はぽつりと言った。
「では話を聞いてみるか」
「そうだな。とりあえずはだな」
関羽がその言葉に頷いた。そうしてであった。
一行は村の長老の屋敷に向かった。そしてそこで話を聞くのであった。
「実はですね。あの石もその化け物が置いていったのです」
「そうなのね」
「はい。我々が村に入った化け物を追おうとすると投げてきたものでして」
「あの巨大な石を」
「それを幾つも」
誰もがそれを聞いて唖然となった。趙雲も表情は変えないが目の色を怪訝なものにさせている。
「本当に化け物か？」
「まさか」
「はい、それで退治しようとしてもです」
ここで長老は困り果てた顔で言ってきた。
「役所に話をしても化け物なぞいるかと取り合わず」
「えっ、それは本当ですか！？」

この話を聞いた少女がすぐに驚いた声をあげた。そうしてであった。
「何て酷いことを」
「どうしたのだ、急に」
「はい、何かあったのですか？」
キングと香澄がその少女の急な変わり様に目を点にさせて問い返した。
「あっ、別に何も」
「そうですか」
「はい、それでその化け物ですが」
香澄に応えてすぐに長老に問いなおす少女だった。
「どういったものですか？」
「武芸者達に退治を頼んできたのですが」
「はい」
「誰も歯が立ちませんでした」
その強さからの話だった。
「まさに化け物の如き強さです」
「まさに、ですか」
「そうです、そしてその姿は」
今度はその強さの話だった。
「ある武芸者は角があると言い」
「角！？」
「角なのだ！？」
関羽と張飛がそれを聞いて青い顔になった。
「角が生えているとなると」
「本当に化け物なのだ」
「ある武芸者は全身毛むくじゃらだといい」
「毛が、か」
「まさかだけれど」
今度はキングと舞が言う。何気に声が似ている二人だった。

「雪男か」
「そうした相手なのかも」
「そしてある武芸者は身の丈三丈になると」
「三丈ですか」
「大きいですね」
ナコルルと香澄はそれを聞いてあることを考えた。
「大きな相手だと戦法もありますね」
「はい、素早く動き回って」
「まあ待て」
趙雲が一旦二人を制止した。
「焦らないで最後まで話を聞こう」
「はい、わかりました」
「まずはですね」
「そうだ。最後まで聞くべきだ」
「う、うむ。そうだな」
「その通りなのだ」
関羽と張飛がまた述べた。
「最後まで聞いてだな」
「それからなのだ」
「その化け物が村の食べ物を奪っていくのです。それを何とかしてもらいたいのですが」
「よし、わかった」
趙雲がそこまで聞いて述べた。

# 第八話　董卓、城を抜け出すのことその七

「それではだ。その化け物退治やらせてもらう」
「御願いできますか」
「最初からそのつもりで話を聞かせてもらった」
彼女は腕を組んでいる。そのうえでの言葉だった。
「では。皆もそれでいいな」
「化け物じみた相手はこれまでにも何度も会った」
「ええ、戦いには慣れているから」
「相手が誰でもやらせてもらいます」
キングに舞、香澄はそれでいいというのだった。
「私は行かせてもらう」
「私もよ」
「是非共」
「私もです」
ナコルルはにこりと笑って答えた。
「やらせてもらいますから」
「それではだ」
趙雲は四人の言葉を聞いてだった。そのうえで今度は関羽と張飛に顔を向けた。そしてあらためて二人に対して問うたのであった。
「御主達はどうするのだ？」
「どうするかとは？」
「何がなのだ？」
「御願いできますよね」
趙雲が言う前にだった。少女が出て来て二人に言ってきた。すぐにであった。これには趙雲も内心驚くものがあった。言葉としては出さないが。
「是非。村の人達の為に」
「村の人達の為か」

「人の為に」
「御願いします」
二人をじっと見詰めての言葉だった。目を潤ませながら。
「是非」
「そ、そうだな」
「鈴々達もやらせてもらうのだ」
二人に溢れんばかりの義侠心があるのは確かだ。そして少女の目に負けた。これで全ては決まりだった。
一行は化け物が潜んでいるというその廃寺に向かった。夜であり周りは真っ暗である。その仲であれこれと話しながら進んでいた。
「ううむ、暗いな」
「全くなのだ」
「今にも出てきそうなのだ」
「けれどそれでもなのだ」
関羽と張飛がやけに不安な顔になっている。
「行かなければな」
「その通りなのだ」
「二人共」
その二人に声をかけてきたのは趙雲だった。道中でありてもである。
「面白い話がある」
「話？」
「話があるのだ？」
「そうだ。あれは私がまだ若かった時だ」
こう話すのだった。
「何時だったかな」
「待て、貴殿はまだ十代の筈だぞ」
「愛紗とさして変わらない歳の筈なのだ」
「それはそうだ」
この辺りは趙雲の悪ふざけであった。

「しかしだ」
「しかし？」
「しかしというと」
「これから話すことはだ」
「う、うむ」
「何なのだ？」
二人は怯えるものを必死に隠しながら趙雲の話を聞く。その間に廃寺の中に入る。そのうえで話を聞き続ける。当然ナコルル達も一緒だ。
「私がある寺の中で宿を借りて休んでいるとだ。壁にあった穴の中から」
「穴の中から！？」
「どうしたのだ！？」
「女の首が出て来てだ」
「お、女！？」
「女の首なのだ！？」
「そう、そしてその口は耳まで裂けていて」
趙雲が話していくとだった。関羽と張飛の顔が見る見るうちに青ざめていく。そしてその中で趙雲はさらに話を続けていく。ナコルル達は黙って見ているだけだ。

# 第八話　董卓、城を抜け出すのことその八

「それが不気味に笑い私に襲い掛かり」
「き、来たのか」
「そして!?」
「私奇麗!?と叫んで喰らいついてきたのだ」
「あ、あわわわわわ・・・・・・」
「ううう・・・・・・怖過ぎるのだ」
ここで遂に意識を失ってしまった。しかし趙雲はその二人にさらに声をかけてきた。ただしその蝋燭をその手に持ってだ。そのうえでだった。
「二人共」
「う、うむ?」
「どうしたのだ?」
「目をさませ～～～～～～ぇ～～～～」
蝋燭の火を下からやっての言葉だった。それを仕掛けてきたのである。
それを見た二人はだ。慌てて飛び起きた。そしてまた趙雲に対して叫んだ。この時二人は互いに抱き合いそのうえでだった。
「なっ、止めろ!」
「怖過ぎるのだ!」
「ほんの冗談だ」
趙雲は無表情に戻って答えた。
「そこまで焦ることか」
「それで焦らないでどうする!」
「悪質過ぎるのだ!」
「ふむ、私はタチの悪い冗談が大好きでな」
「全く。何処まで悪趣味なんだ」
「やっていいことと悪いことがあるのだ」

「気にするな」
やってから言う趙雲だった。
「そしてだ。舞殿」
「何かしら」
「罠は張っておられるのだったな」
「ええ、地面に小石に混ぜてかんしゃく玉を撒いておいたから」
「かんしゃく玉？」
「私の世界にあるおもちゃでね。刺激を与えたら爆発するのよ」
そうしたものだと述べるのである。
「それを撒いておいたから」
「それを撒いてどうなるのだ？」
「それが知りたいのだ」
「踏んだら爆発して音が鳴るのよ」
それでわかるというのである。
「そういうものだから」
「そうか。ではすぐにわかるな」
「ええ。相手がそれに気付かない限りはね」
「相当な相手でもない限り気付かれませんね」
「はい。あとママハハは鷹ですけれど夜目が効きます」
香澄が応えナコルルが話した。
「見張ってもらっています。ですから出て来たら絶対に見つかります」
「そうですね。それに私達も気配を感じられますし」
香澄も話す。
「だから大丈夫ですね」
「いや、待て」
だがここで趙雲が真剣な顔で言ってきた。
「その気配だが」
「この気配は」
キングもまた顔を凄みのあるものにさせて述べた。

「これ以上にまでなく大きいな」
「そうだ、桁外れだ」
「何っ、来たのか」
「今ここになのだ！？」
「そうだ、御主達もそろそろ感じる筈だ」
「！？確かに」
「今感じたのだ」
関羽と張飛も言った。
「この気配は」
「今までここまでは感じたことがないのだ」
「そうだ、桁外れだ」
また言う関羽だった。
「化け物か！？まさしく」
「少なくとも気配は化け物クラスだ」
こう表現した趙雲だった。
「これはだ」
「来たか、それなら」
「行くのだ！」
「七人がかりなのは卑怯だがな」
「そうも言っていられる相手ではなさそうね」
キングと舞も険しい顔になった。
「この気配、ギース＝ハワードに匹敵するか」
「桁外れのものがあるのは確実ね」
「では行きましょう」
「すぐに」
ナコルルと香澄も続く。

# 第八話　董卓、城を抜け出すのことその九

「それでは今から」
「戦いです」
こうして戦いがはじまった。七人は寺の講堂から一斉に出てその前に展開する。彼女達の前には白虎の毛皮を頭から被った者がいた。その右手には何か得物を持っているのが見える。その化け物がいた。
「化け物かどうかはわからないが」
「そうだな、少なくとも強さは」
「化け物なのはわかるのだ」
趙雲、関羽、張飛は構えを取りながら話していく。キング達も同じだ。その圧倒的な気配に気圧されながらもその化け物を取り囲もうとした。
化け物が右手の得物を下に向けて一閃させた。それだけで、であった。
「かんしゃく玉に気付いていた!?」
「その様ですね」
それを見て舞と香澄が言った。
「既に」
「そう、どうやらただ強いだけじゃないみたいね」
「勘、いえ物事を察知する力も」
「尋常なものではありませんね」
ナコルルも目の前にいるそれが何処までの強さか感じ取っていた。夜の闇の中に浮かぶ化け物は身動きに乏しい。しかしであった。
その気配がまだ発せられている。関羽がそれを見て一同に言った。
「いいな、それではだ」
「行くのだ」
「倒すぞ」

こうして七人が一斉に襲い掛かる。まずは舞だった。
その手にある扇を持ってだ。化け物に対して投げた。
「花蝶扇！」
扇が一直線に飛ぶ。だがそれは化け物が右手に持っている得物を一閃させてあっさりと叩き落してしまった。それで終わりだった。
「当然みたいになのね」
「そうだな。飛び道具は通じないか」
キングも言う。実は彼女もベノムストライクを出そうとしたがそれは止めたのだ。
「少なくとも単発ではか」
「しかし向こうも出しそうだな」
「えっ！？」
「見ろ、あの動きを」
関羽が一同に言う。化け物の得物がゆっくりと動いた。そしてであった。
左から右に一閃された。すると凄まじい衝撃波が襲い掛かってである。
「来た！？」
「衝撃波！」
「皆跳べ！」
趙雲が叫んだ。
「そして避けろ。いいな！」
「はい！」
「それしかないわね！」
七人は一斉に跳んだ。それによって何とか攻撃をかわした。そしてそのうえで難を逃れた。関羽はそのうえで話したのだった。
「間合いを置いては駄目だ」
「そうなのだ。あの衝撃波をまた受けるのだ」
「かといってこちらの飛び道具も通じない」
その問題もあった。

「それではだ」
「間合いを詰めるしかありませんね」
ナコルルが言った。
「今はだ」
「はい、それでは」
「今から」
こうしてであった。七人で一気に間合いを詰めた。そのうえで一斉に攻撃を浴びせる。
だが化け物はその攻撃を全て受け止め続ける。七人で互角だった。
「そんな、七人でも」
「互角!?一体これは」
ナコルルと香澄は攻撃を仕掛けながら唖然となっていた。
「化け物!?本当に」
「速いだけではなくて・・・・・・くっ!」
香澄は攻撃を何とか防ぐ。防いでその衝撃に必死に耐えながら言った。
「この威力は」
「ここまでの力は受けたことはないな」
それを見て言った関羽だった。
「これは長い戦いになるな」
「そうね。これは」
「長い戦いになるのだ」
舞と張飛もそれを覚悟した。戦いは続く。

# 第八話　董卓、城を抜け出すのことその十

やがて朝になった。ここで化け物の顔が見えた。
「!?女?」
「まさか」
虎の毛皮の奥から顔が見えた。それは紛れもなく女のものだった。
赤紫の髪も見える。女であることは間違いなかった。
「しかも人か」
「では化け物ではない!?」
「けれどその強さは」
こちらの攻撃は防がれ続ける。こちらは防ぐだけで必死だ。その中での言葉だった。
赤紫の髪は肩までだ。頭から二条長く伸びて虫の触角の様になっている。上着は胸しか覆っておらず右が黒、左が白だ。腕の布も同じで所々に金の装飾がある。
スカートは白いミニでその上に黒い布で覆いを左右にしている。ハイソックスは黒でブーツも履いている。マントと上着に付けている長い布は赤紫色だ。表情は朴訥としている。少し黒い肌であり顔立ちは整っている。赤紫の目には血走ったものはない。戦っているというよりは起きぬけの顔であった。目は垂れ目でも釣り目でもない。口元も緩めだ。
その彼女だが強さはかなりだ。そのまま七人と互角の戦いを続ける。
しかしだった。ふとここで何処からか赤い犬が出てきた。赤毛の小さな犬である。
美女が得物をまた一閃させた。見ればその得物は槍に似ているがその横に三日月型の刃がある。関羽はそれを見て言ったのだった。
「方天戟!?」
「それなのだ」

「そうか、それを使うか」
張飛と趙雲も確かにそれを見た。
「この女は」
「その様だな」
キングも言った。
「かなり手強い武器か」
「突くことも斬ることも自由自在だ」
こう話す趙飛だった。
「どちらもだ」
「じゃあかなりまずいわよ」
「だから今まで」
舞と香澄がそれを聞いて言った。
「突いたり斬ったりもできた」
「そういうことなんですね」
「そうだ。そしてだ」
関羽は二人に応えながらまた述べた。
「また来るぞ」
「来た!?」
「また!」
「皆かわせ!」
衝撃波が来る。そうしてだった。
七人は一斉に跳んだ。至近での衝撃波を間一髪でかわした。
だがその衝撃波は後ろにあった木を真っ二つにした。そこに出て来た犬の上に落ちる。しかしそれは少女が出て来て慌てて助けあげた。
「危ない!」
「くっ!」
関羽がそれを見てだ。すぐに跳んでその木を下から両手で支えた。
咄嗟に戦いよりも少女と犬を救うことを優先させたのである。
「危ないところだったな」

「関羽さん・・・・・・」
「無事か？犬も」
「は、はい」
少女は犬を抱きながら言葉を返した。
「私もワンちゃんも」
「そうか。それは何よりだ」
「赤兎を助けた」
女はその関羽を見て言った。
「御前達悪い奴じゃない」
「！？悪い奴じゃない？」
「悪い奴じゃないって」
「悪い奴とは戦えない」
こう言ったのである。
「だから止める」
「何か急に終わったな」
「そうね」
「もう終わる」
女の方から終わらせてきたのだった。
「これで」
「終わったことはいいのだ」
張飛もそれはいいとした。
「けれど御前は何なのだ？名前は何というのだ？」
「呂布」
女はぽつりと名乗った。
「字は奉先」
「呂布奉先！？」
「それが貴殿の名前か」
「そう」
無表情な言葉で答えたのだった。

# 第八話　董卓、城を抜け出すのことその十一

「それが名前」
「しかし何故こんなことを」
「ここでしたのよ」
香澄と舞がそれを問う。
「村から食べ物を奪うなんて」
「あのワンちゃん一匹だけですか？」
「一匹だけじゃない」
呂布がこう言うとであった。不意に彼女の側に無数の犬達や猫達が出て来た。そのうえで彼女の足元にじゃれついてきたのである。
「皆いるから」
「皆さんがですか」
「皆養わないといけなかった。けれど恋」
少女に応える中で言ったのだった。
「メイドとかできないから」
「何となく以上にわかるな」
キングは彼女の言葉を聞いて頷いた。
「これではメイドは無理だ」
「しかし恋って何なのだ？」
「真名」
それだというのであった。
「一応言った」
「そうなのだ。それが御前の真名なのだ」
「そう。それが私の真名」
彼はまた言った。
「だから」
「事情はわかりました」
ここで少女が言った。

「呂布さんはそれで今まで」
「ああ、いたいた」
ここで兵士達達が来た。そしてである。
その先頭には賈駆が来た。そうして少女のところに来て。
「月！探したわよ」
「あっ、詠ちゃん」
「あっ、じゃないわよ。あっ、じゃ」
その少女に駆け寄りながらの言葉だった。
「もう、擁州の牧がこんなところまで何をしてるのよ」
「何っ、擁州の！？」
「やはりな」
関羽と趙雲の言葉は正反対だった。
「そうだったか」
「あれ、あんた達は」
賈駆は一行にも気付いた。
「何なの？」
「この人達はですね」
「見たところこの国の生まれじゃないのもいるわね」
賈駆はもうそのことを見抜いていた。
「擁州にも来たのね、そういう人が」
「そうね。それでだけれど」
「ええ、それでよ」
「この人達は私を助けてくれたの」
少女は賈駆にこのことを話した。
「そしてこの人はね」
「この人は？」
今度は呂布に顔を向けての言葉である。こうして一部始終を話してそのうえでだ。あらためて村の長老のところに戻ってあらためて話をするのだった。
「皆さん」

文官の服だった。丈が長いえんじ色のスカートに紫の上着、袖はダークグリーンで帯もえんじ色だ。白いマフラーまでしているという見事な服である。頭には冠とヴェールまである。その彼女が誰かというとであった。

「お待たせしました、董卓です」

「何っ、董卓だと!?」

関羽は董卓と聞いて思わず声をあげた。彼女は今は用意された見事な席の前にいる。その横にはしっかりと賈駆が控えている。

「擁州の牧のか」

「はい、隠していてすいません」

「月、いえ董卓様はね」

その横から賈駆が説明してきた。

「時々お忍びで外に出てそれで下々を見回るのよ」

「そうなのか」

趙雲はそれを聞いてふと呟いた。

「曹操殿や袁紹殿とはまた違うのだな」

「あの二人はあの二人よ」

すぐに賈駆が言ってきた。

# 第八話　董卓、城を抜け出すのことその十二

「董卓様は董卓様よ」
「それはその通りなのだが」
張飛はその賈駆の言葉を聞きながら首を少し傾げさせていた。
「けれど御前ムキになり過ぎなのだ」
「それは気のせいよ」
そう言われるとさらにムキになる賈駆だった。
「気にしないでいいから」
「気にするななのだ？」
「そうよ。あの連中も確かに頑張ってるわよ」
それは認めるのだった。
「けれどね。董卓様には董卓様のやり方があるのよ」
「そうですね。それでなのですけれど」
ナコルルが言ってきた。
「ここに化け物が出ると聞いて来られたのですね」
「はい、そのことですが」
董卓もナコルルに応えて述べた。
「呂布さんのしたことは確かに悪いことです」
「いえ、それは」
村の長老が董卓に対して穏やかに言ってきた。
「もう済んだことですし」
「いえ、それでもしっかりと終わらせないといけません」
董卓の声はしっかりとしたものだった。
「ですから」
「そうなのですか」
「はい。しかし身寄りのないワンちゃんや猫さん達を想ってのこと」
そのことも見ているのだった。
「それに呂布さんも反省されています。ここはその食糧の分を呂布

さんの給与から弁償するということで終わらせることとします」
「私の給与」
呂布は董卓の言葉を聞いて述べた。
「ということは」
「えっ、じゃあ呂布を？」
「はい。呂布さんさえ宜しければ私のところに来てくれませんか」
こう言うのである。
「それがお嫌でしたら弁償は私の方で」
「いや、御願いする」
呂布の方からの言葉だった。
「恋、悪いことした。それの弁償しないといけない」
それはわかっている呂布だった。
「それに董卓様いい人。仕えたい」
「そうですか。それでは」
「やっと人手が入ったわね」
賈駆はこのことを素直に喜んでいた。
「有り難いわ。華雄将軍もこれで楽になるわ」
「そしてです」
董卓の顔と言葉が変わった。厳しいものになったのだ。
「詠ちゃん」
「どうしたの？急に」
「村の人達がお役所にこのことを話しても化け物だと言って取り合わなかったそうだけれど」
「いえ、それは」
また長老が言ってきた。
「もう済んだことですし」
「いえ、そういう訳にはいきません」
董卓は真剣だった。
「どんなことでも民の言葉はおろそかにしてはいけません。民あっての国なのですから」

「だからですか」
「はい。だから詠ちゃん」
「え、ええ」
「二度とこういうことがないように厳しく注意しましょう」
自分に対する言葉だった。
「それはね」
「わかったわ。それはね」
「それと」
話はまだあった。
「ワンちゃんや猫さん達だけれど」
「どうしたの？」
「うちで飼わない？兵隊さん達と一緒に警護にあたってもらうってことで」
「犬や猫を？」
「ええ。それでどうかしら」
「けれどそれは」
賈駆はそのことを聞くと困った顔になった。
「それ位のお金はあるし」
「ううん、犬とか猫は」
何故か困った顔になる賈駆だった。
「僕、あまり好きじゃないっていうか」
「駄目なの？」
賈駆の言葉を聞いた董卓は困った顔になった。
「それは」
「駄目って訳じゃないけれど」
「御願い、詠ちゃん」
うるんだ目での言葉だった。
「放っておいても可哀想だし」
「ううん、そう言われたら」
「警護も手伝ってくれるし。それに皆も楽しめるし」

犬や猫はいるだけで人の癒しになるのである。賈駆もそれは知っているのだ。

「だから」

「わかったわよ」

遂に賈駆も折れた。

「それじゃあいいわ。擁州で置きましょう」

「有り難う、詠ちゃん」

「けれど勘違いしないでよ」

ここからが賈駆の真骨頂だった。董卓から顔を背け腕を組んで言い返す。

「今回だけだからね。本当だからね」

「詠ちゃん大好き」

しかし董卓は賈駆のその言葉を聞いて満面の笑みになってだ。そのうえで彼女に抱きついたのである。

「有り難う！」

「だから勘違いしないでよ」

まだ言う賈駆だった。

「今度だけなんだからね」

それでも董卓のその頬を摺り寄せてくるのにはまんざらではないようである。素直ではないがそれでもそれは誰が見てもわかるものだった。

そして呂布もそれを見てだ。静かに二人のところに来てだ。

そのうえで賈駆に頬を摺り寄せてきた。二人で彼女を囲む形になっている。

「ちょっと、何であんたまで入って来るのよ」

「皆でいると楽しい」

だからだというのである。

「だから」

「わかったから。犬も猫も面倒見るわよ」

賈駆は二人に抱かれながら言った。

「だからもう離れてよ。あっ、月はいいから」
「うん、詠ちゃん」
こうして化け物の話は終わった。関羽達は董卓達と別れ今度は洛陽に向かうことにした。そしてそこでは思わぬ再会が彼女達を待っていたのであった。

第八話　　完

２０１０・４・２１

# 第九話　陳宮、呂布と会うのことその一

第九話　陳宮、呂布と会うのこと

長安に戻った董卓はすぐに政務に戻った。そのうえで次々に政務を処理していく。だがその仕事ぶりは決して速いものではなかった。だが彼女はそれを少しずつでも確かにこなしてだ。時間をかけてしていくのだった。

その横にはいつも賈駆がいる。その彼女が心配そうに見ながら言ってきた。

「月、無理はしないでね」

「う、うん」

「身体を壊したら何にもならないから」

「けれど詠ちゃん」

董卓はその彼女に顔を向けて言ってきた。

「仕事は全部終わらせないと」

「私だっているから」

自分もいるのだという。

「だから安心して」

「安心していいのね」

「そうよ。華雄将軍もいるし呂布だっているじゃない」

この二人の名前も出すのだった。

「だから安心して。それに」

「それに？」

「州の治安には犬や猫達が役立ってくれてるし」

呂布と共に来たその彼等である。

「それに人材も入ったしね」

「キムさん達ね」

「そうよ、キム＝カッファンとあの三人」

賈駆の顔が笑顔になった。

「それと山崎竜二ね」
「あの人達強いから」
「山賊退治はお手のものだからね。ただね」
ここで賈駆の顔が曇った。
「あの面々はねえ」
「何をするかわからないの？」
「何かおかしいのよ」
腕を組んでの言葉だった。
「妙にね」
「他の世界から来たからじゃないの？」
「あのキムっていうのとジョン＝フーンだったわね」
この二人の名前が出て来た。
「あの二人が後の三人だけじゃなくて山賊達も更正させるとか言ってスパルタ教育をしているわけだけれど」
「いいんじゃないの？それは」
「それが永遠に続くっぽいのよ」
そうだというのだ。
「何か自分達が完全にそうだと認めるまでやるタイプらしくてね」
「山賊さん達を」
「そりゃ山賊達に同情はしないわ」
この言葉は正直なものだった。
「けれど。何か凄いことになってるのよ」
「凄いの」
「灌漑や街造りにしょっちゅう駆り出して」
そうしていると話される。
「四六時中こき使ってるのよ」
「そうなってるのね」
「それに修行も入れて」
しかもこれもあった。
「治水や灌漑や街にはいいけれど。あの連中は大変ね」

そんな話をするのだった。そしてその頃長安近郊の村では堤防が修理されていた。白いテコンドーの服を着た二人の男が柄の悪い男達を厳しく指導している。

「そこ、動きが遅い！」

「それでは日が暮れてしまいますよ」

一人は黒髪を中央で分けた精悍な男でありもう一人は見事な長い金髪のやや中性的な男である。二人が厳しい声を出していた。

「この後には修行がある！」

「それに間に合わせますよ」

「ううん、この世界でもキムの旦那と一緒かよ」

「しかもジョンの旦那までいるでやんすよ」

剥げた顎鬚の大男と帽子を被った小男がいる。二人もテコンドーの服を着ている。

「しかも今は修行だけでなくて勤労奉仕もかよ」

「あっし等の地獄は何時終わるでやんすか」

泣きながら作業にあたっている。山賊達もその周りでテコンドーの服を着せられてそのうえでこき使われている。かなり無惨な姿だ。

「起きて飯食ってすぐに修行と勤労奉仕」

「旦那達は同じことやっても全然平気でやんす」

「御前等はまだいいんだよ」

金髪をオールバックにし左右だけ黒いままだ。大柄で筋肉質のガラの悪い顔立ちの男もいた。彼の服だけシャツもズボンも黒である。

# 第九話　陳宮、呂布と会うのことその二

「何で俺もここにいるんだ？」
「ああ、山崎の旦那」
「そういえば旦那はどうしてここにいるんでやんすか？」
「気付いたらいたんだよ」
彼にしても身に覚えのないことだった。
「それでなんだよ、キムとジョンにいきなり出会ってな」
「袋にされてか」
「修行地獄に入れられたでやんすね」
「おい、逃げられねえのか？」
山崎は大きな丸太を両肩に一本ずつ担ぎながら二人に問うた。
「あの二人からよ」
「逃げられたら俺達とっくにそうしてるんだけれどな」
「そう思わないでやんすか？」
「じゃあ倒すってのはどうなんだよ」
「あの旦那達をか？」
「山賊四百人を二人で一瞬で倒すんでやんすよ」
無駄に戦闘力は高い二人であった。
「あのルガールの旦那でもな」
「一人で倒せそうでやんすよ」
「ちっ、俺でも負けるってのかよ」
「歯向かった山賊は何人いても返り討ちだからな」
「無駄な努力でやんす」
「じゃあ何かよ。俺達はこの異境の地でずっと勤労奉仕と修行かよ」
まさに地獄である。
「糞っ、どういうことなんだよこれはよ」
「言っても仕方ないからな」
「どうしようもないでやんす」

二人は既に全てを諦めている。
「戦いになったら最前線に立つらしいしな」
「旦那達が自ら申し出たでやんすよ」
「気晴らしはその時だけかよ」
三人も戦いは嫌いではない。だからこれははっきりと言えば有り難いことであった。しかしそれでも三人の愚痴は続くのであった。
「しかし。普段はこれかよ」
「ああ、起きて寝るまでこうして勤労奉仕と」
「修行でやんすよ」
「逃げたいんだけれどな」
山崎の本音である。
「俺はもうこんな生活は嫌なんだよ」
「俺達元の世界でもこうして生きているんだけれどな」
「修行地獄の無限ループでやんすよ」
「無限かよ」
「そうだよ。毎日夢にも出るんだぜ」
「何時まで経っても終わらないでやんすよ」
二人は完全に項垂れていた。そんな彼等だった。
そしてだ。その彼等にだ。キムとジョンの声が来た。
「そこ、手を休めるな！」
「さぼってはいけませんよ！」
こう言われるのだった。
「仕事はまだまだある！」
「そして修行もですよ！」
二人は自ら熱心に動きながら監督をしている。見事なプレイングマネージャーである。しかも一人ではなく二人もいるのである。
「ちっ、観念するしかないのかよ」
「もう全てを諦めてな」
「この世界で生きていくでやんす」
こんな調子だった。三人にとってはこの世界も地獄であった。

荊州に一人の少女がいた。名前を陳宮という。エメラルドグリーンの長い髪を左右でくくりまとめている。栗色の目に利発そうな顔をしている。ダークグレーの服に黒い帽子を被っている。その帽子にはパンダのマークがある。

彼女は孤児であった。村の牧場から採れる山羊の乳を売って暮らしている。いつも大きなセントバーナードと一緒にいる。

住んでいる場所は村の水車小屋を借りている。そこで住んでいるのである。

しかしだ。ある日その水車小屋が燃えた。責任は住んでいる彼女に向けられた。

「御前のせいだ！」

「御前が燃やしたんだな！」

「村の水車を！」

村人達は彼女を囲んで一斉に攻める。

「俺達に恨みがあったんだな！」

「それでか！」

「とんでもない奴だ！」

「ねねじゃないのです！」

陳宮はその彼等に必死に釈明した。

# 第九話　陳宮、呂布と会うのことその三

「ねねはその時村にいなかったのです。今帰って来たばかりなのです！」
「嘘つけ！」
「そんなこと信じるか！」
「御前は他所者だしな！」
このことも言われるのだった。
「だから何をしても平気だしな」
「ここにはただいるだけだからな」
「そんな、ねねは」
「出て行け！」
遂にこう言われたのだった。
「いいな、二度と来るな！」
「さっさと出て行け！」
「そんな・・・・・・」
こうして陳宮は村から追い出された。犬も一緒である。それからの彼女は酷い有様だった。
あちこちを放浪した。旅芸人の手伝いも煙突掃除もやった。へとへとになり真っ黒にもなった。だが荊州の牧袁術は問題のある人物である。景気は悪く孤児が生きるには難しい場所だった。
「来るな、帰れ！」
「うちには雇う余裕なんてあるか！」
ある料理店に雇ってもらおうとするとだった。店の者達に叩き出されたのである。
そしてだ。店の裏口で罵られたのだ。
「この不景気に他所者を雇う余裕なんてあるか！」
「とっとと行け！」
「邪魔なんだよ！」

「邪魔だなんてそんな」
陳宮は追い出され泥だらけになりながら店の者達に言った。何とか起き上がってだ。
「ねねはただ御飯を食べたいだけなのです。それだけなのです」
「じゃあ他に行け！」
「他に行って食え！」
「ここにはそんなものあるか！」
「この物乞いが！」
「ねねは物乞いじゃないのです」
こう言っても無駄だった。
「ねねはただ御飯を」
しかし彼女は追い出された。そして流浪の日々を送り続けた。空腹が限界に来たある日だった。
その時犬と一緒に森の中を歩いていた。森の中で犬がふと声をあげた。
「ワン」
「どうしたのです？」
「ワン、ワン」
こう言ってであった。すぐに森の中の紫陽花のところに駆け寄ってだ。そうしてそのうえでそこにいる蝸牛に近寄って食べるのだった。
「御前はそれを食べたらいいのです」
陳宮はその彼を見ながら寂しい笑みを浮かべていた。
「けれどねねは。今は」
その寂しい笑みのままだった。どうしようもなかった。そしてその日の昼だ。彼女は犬と共にある廃寺に入った。そしてそこで力尽きた。
「もう駄目なのです・・・・・・」
「ワオン・・・・・・」
「ねねはもう疲れたのです」

うつ伏せに倒れ伏しての言葉だった。
「このまま寝たいのです」
「わん・・・・・・」
犬も一緒だった。そのまま眠ろうとする。上から十二人の小さな天使達が舞い降りようとする。しかしその時にであった。
不意に寺の壁から光が差し込んでいるのに気付いた。そしてそこから。
「これは・・・・・・」
「ワン？」
「魚を焼く匂いなのです」
それに気付いたのだった。
すると急に元気が出た。犬と共に寺を出てそのうえで匂いがする方に向かった。そしてそこに辿り着くとそこには火で魚を焼く美女がいた。
そこに無意識のうちに駆け寄った。すると彼女が陳宮に声をかけてきた。
「食べる？」
「えっ・・・・・・」
「一人で食べるより皆で食べた方が美味しい」
こう言ってきたのである。
「だから」
「ね、ねねは物乞いではないのです」
しかし彼女はここで誇りを取り戻した。そうしてだ。
美女のその得物を自分の服の袖で磨きはじめた。そうして自分が物乞いなどではなくちゃんと働くということを示してみせたのである。
そのうえで言うのである。
「こうして働いているのです」
「そう」
美女はその彼女を静かに見ながら。そのうえで魚を差し出してき

た。
「磨いてくれた分」
「あ、有り難うなのです」
「お魚は幾らでもある」
見れば確かに何匹もあった。犬にも分けている。

## 第九話　陳宮、呂布と会うのことその四

陳宮はその魚を必死に食べている。それを見ながら名乗ってきた。
「呂布」
「呂布というのですか」
「恋の名前」
共に真名も言ってみせたのだった。
「字は奉先」
「陳宮なのです」
陳宮もそれに応えて名乗った。
「字は文遠なのです」
「そう」
呂布はそれを聞いてからまた言った。
「どうしてここに」
「それは」
「若し行く宛がないのなら」
こうその陳宮に対して話す。
「一緒に来るといい」
「呂布殿とですか」
「そう。一緒に来る」
陳宮に対して告げる。
「行く宛がないのなら」
「いいのですか？」
問い返さずにはいられなかった。
「それで」
「いい」
また言う呂布だった。
「だから来る」
「有り難うです」

「御礼もいい」
それもいいというのだった。
「だから来る」
「この子も一緒なのですか？」
「うん」
自分の愛犬を指し示した陳宮に対して静かに答えた。
「勿論。じゃあ行こう」
「わかりましたなのです」
こうして陳宮と愛犬は呂布と共に長安に戻ることになった。彼女はその戻る中でふと呂布に対してあることを尋ねたのである。それは。
「あのです」
「何？」
「呂布殿はどうしてここに？」
「どうして？」
「はい、どうしてここにいるのですの」
このことを問うたのである。
「それは一体」
「山賊退治」
それだというのだ。
「それと」
「それと？」
「おかしな気配も感じた」
このことも言うのだった。
「今までに感じたことのない気配」
「今までにですの」
「月と詠にも言った。人とは少し違う気配」
こう言うのである。
「それを感じたからここまで来た」
「山賊退治のついでにですか」

「そう」
ぽつりと答えた。
「その通り」
「おかしな気配ですの」
「蛇に似た感じ」
それだというのだ。
「それと」
「それと？」
「他にもいる。邪な存在が」
呂布の言葉が続く。
「この世のものではない存在や不気味な存在が」
「確かに今は不穏な情勢なのです」
それは陳宮もわかっていることであった。
「漢王朝の権威は衰えていますし」
「それだけじゃない」
「そして」
そしてであった。
「そうした存在も確かにいる」
「妖術使いの類ですの？」
「近い」
「それなら特に心配することはありませんぞ」
陳宮は腕を組んで胸を張って述べた。その小さな身体で言っているのだ。

## 第九話　陳宮、呂布と会うのことその五

「妖術使いなぞ所詮一人。邪教がこの世に栄えた試しはありませんぞ」
「それはその通り」
「なら大丈夫ですぞ」
「そう、一人だったらいい」
呂布の言葉は明らかに何かを感じ取っているものだった。
「けれど。それが何人もいて」
「何人も！？」
「そして人でなかったら」
「まさか。それは」
「人でない存在がこの世界にいる」
こう言うのであった。
「若しそうだったら危ない」
「まさか、それは」
「この国には何かがいる」
呂布の言葉は続く。
「そして恐ろしいことをしようとしている」
「ではどうすれば」
「戦う」
返答は一言だった。
「そんなこと許さないから」
「それが呂布殿が戦われる理由ですか」
「月や詠の為」
まずはそれであった。
「皆の為。犬や猫達の為」
「呂布は多くの為に戦われているのですね」
陳宮はこのこともわかったのだった。

「本当に」
「そう、恋は自分の為に戦いはしない」
「わかりましたぞ、ではこのねね」
陳宮はここまで聞いてであった。
「呂布殿と共に参ります」
「来てくれるの」
「呂布殿がその為に戦われるのなら。ねねもですぞ」
こう言ってそのうえで呂布と共に行くことにしたのだった。そして長安の董卓の屋敷に着くとだった。最初に会ったのは華雄だった。
「おい、呂布」
「何？」
「また連れて来たのか」
呆れた声と言葉であった。
「これで今月何匹目だ」
「一、二、三」
右手の指を折って数える。
「沢山」
「・・・・・いい加減数字は覚えろよ」
流石に今の呂布には呆れ返る華雄だった。
「一軍を率いるのだからな」
「うん」
「わかっているとは思えんが。まあそれはいい」
それは諦めてであった。話を変えた。
「とにかくまただな」
「うん」
「そうか。だが随分と汚いな」
陳宮と犬を見ての言葉だ。
「しっかりと洗っておくようにな」
「わかってる」
「ならいいが。最近何かとこの擁州に人が来るようになったな」

「そうなの」
「そうだ。嬉しいことだが面接担当がな」
それが問題であるというのだ。
「賈駆だが」
「そうなの」
「気が短い。もう何かあると騒ぐからな」
「では華雄がするといい」
「私はそういうことは苦手だからな」
こう答えて困った顔になる華雄だった。
「できればしたいが」
「なら新しく入ったのにやらせれば」
「余計に駄目だ。あの面子はそれ以前の問題だ」
「そうなの」
「そうだ、今も山賊達を二十四時間修行と強制労働に駆り出している」
そうしているのは誰かはもう言うまでもなかった。
「悪は許さんと言ってな」
「悪なの」
「キムとジョンに言わせればそうだ」
つまり主観のみであるというのだ。

# 第九話　陳宮、呂布と会うのことその六

「私も山賊はいなくなるに越したことはないがだ」
「やり過ぎなの」
「何でもあの二人は諦めることや妥協することを知らないらしい」
この世界でもそれは同じなのだった。
「そしてその結果山賊達はだ」
「未来永劫あのまま」
「そうだ、どうもそうらしい」
それが二人に倒された者の末路であるのだ。
「困ったことにな」
「ううむ、恐ろしい存在がいるようなのです」
陳宮も話を聞いてそれがわかった。
「キムとジョンなのですか」
「変わった二人」
呂布もこう見ているのだった。
「とりあえずそういうのいるから」
「わかりましたですぞ」
「それじゃあお風呂行く」
「ああ、今わいたところだ」
華雄はこのことも話した。
「すぐに入るといい」
「わかった。それなら」
こうして呂布は風呂に向かった。当然陳宮と犬も連れている。その前に出て来たのはその賈駆だった。相変わらずカリカリしている。
「人材が来るのはいいけれど」
一人で怒っている。
「何で変なのばかりなの！？うちに来るのは」
言うのはこのことだった。

「曹操や袁紹のところは何かいい感じのが来るのに。うちはイロモノオンリー！？これってどういうことよ。何でなのよ！」
「詠、静かにする」
呂布がその彼女に言った。
「怒っても何にもならない」
「あれ、恋今帰ったの」
「山賊やっつけた」
「そう。じゃあ後はキムとジョンに引き渡しておいてね」
「改心して村に戻ったからもう終わった」
「そうなの。だったらいいけれど」
あっさりと納得する賈駆だった。
「まああの二人に引き渡したらそれこそ永遠に修行と強制労働だからね。僕もあそこまでやることはないんじゃないかって思ってるし」
「そうなの」
「あの二人は極端よ」
賈駆から見てもそうであった。
「修行と強制労働地獄の無限ループだし」
「つくづく恐ろしい二人ですな」
「あれっ、そういえば」
賈駆はここで陳宮と犬に気付いた。
「また来たの。随分汚いわね」
「連れて来た」
「それはいいけれど」
むっとした顔で呂布に返す賈駆だった。
「いいわね、ちゃんと世話しなさいよ」
「してる」
「僕の部屋でおしっこさせるなってことよ！」
彼女が言うのはこのことだった。
「猫なんかうんちだってするし。僕の部屋はトイレじゃないのよ！」
「じゃあつまづいたりして汚くしなかったらいい」

「それよりもあんたの犬や猫を僕の部屋の中に入れないの！」
八重歯を剥き出しにしての言葉だった。
「いいわね、わかったわね！」
「わかった」
「ならいいわ。じゃあその子達だけれど」
「うん」
「お風呂わいてるから。早く入れなさい」
何だかんだで優しい賈駆である。
「いいわね、すぐにね」
「わかった。それじゃあ」
こうして呂布は陳宮と共に風呂に入った。そうしてであった。
陳宮と犬を洗う。そうしてであった。
陳宮の背中を洗う。そして言うのだった。
「奇麗にする」
「あ、有り難うですの」
「御礼はいい。けれど随分汚れている」
「長い間お風呂どころではなかったですの」
「なら今奇麗にする。女の子は奇麗な方がいい」
こう言うのである。

# 第九話　陳宮、呂布と会うのことその七

「だから」
「呂布殿・・・・・・」
「恋でいい」
真名も告げた。
「これからはこう呼ぶといい」
「そうなのですの」
「恋もねねと呼ぶ」
既にその名前は知っていた。
「ねね、これからずっと一緒」
「恋殿・・・・・・」
こうしてであった。犬と共に身体を清めた。そのうえでベッドに入った。二人は同じベッドの中にいた。
「ねねの部屋とベッドも用意する」
「今日はなのですか」
「そう。一緒に寝る」
そうするというのだ。
「部屋は分かれるけれどずっと一緒」
「ずっとですの」
「そう、ずっと一緒」
こう言って陳宮を抱いてそのうえで寝るのだった。陳宮は呂布の温かさを感じながら静かに眠った。それは彼女が今まで感じたことがないまでに温かかった。
その温かさを感じながら眠り起きてだ。翌朝呂布と共に董卓との面会になった。董卓は彼女を見て静かに微笑んで言うのであった。
「それならこれからは恋ちゃんと一緒にですね」
「はい、頑張ります」
董卓の顔を見上げての言葉だった。

「恋殿と一緒に」
「わかりました。では恋ちゃん」
「うん」
「陳宮さんを御願いしますね」
「恋殿は最高の武将、ならねねは」
ここで言った。
「最高の軍師になりますぞ！」
「あれ、あんた軍師だったの」
「そうですぞ！」
こう賈駆にも返す。
「これでも兵法を学んできておりますぞ。呂布殿の足手まといにはなりませんぞ！」
「だといいけれど」
賈駆の目はあからさまに疑っているものだった。
「あんたみたいな小さな娘がね」
「御前に言われたくないですの！」
早速言い返す陳宮だった。
「御前だって小さいですの。軍師は年齢ではないですぞ！」
「何ですって！？」
そしてそれに怒らない賈駆ではなかった。
「今何て言ったのよあんた！」
「御前が小さいって言ったのですの！」
本当に言う始末だった。
「御前なんかには負けないですぞ！」
「言ったわね！じゃあやってみなさいよ！」
引く賈駆ではない。
「若しできなかったらね！」
「大丈夫」
ここで呂布が言った。
「陳宮はしっかりとしている」

「そうですね。恋ちゃんが認めるのですから」
董卓は静かに微笑んでいる。
「間違いはありませんね」
「じゃあ月はそれでいいのね」
「はい」
賈駆の問いに微笑んで返す。
「それで」
「わかったわ。月が言うんだったら」
いいというのであった。
「好きにしなさい。僕はもう言わないから」
「有り難う、詠ちゃん」
「詠は月に弱い」
ぽつりと陳宮に言う呂布だった。
「覚えておくこと」
「わかりましたですの」
「ちょっと、わかったって何よ！」
すぐに突っ込みを入れる賈駆だった。
「僕はね、ただ月が牧だから仕方なくね」
「そうは言っても断ったことはないから」
完全にわかっている呂布だった。

# 第九話　陳宮、呂布と会うのことその八

「よくわかっておくこと」
「うう、何でいつもこうなるのよ！」
両手の指を曲げて上に向けて開いてその身体をわなわなと振るわせる賈駆だった。この期に及んでもう言い逃れはできなかった。
かくして陳宮は正式に董卓の部下、もっと言えば呂布専属の軍師となった。そしてすぐに荊州に使者として赴いた呂布について行くのだった。
その中でだ。呂布はふとある店に入った。そこは。
「ここは・・・・・・」
「何？」
「ねねが前に断られた店ですの」
彼女も覚えていたのだ。この店に働きたいと言ってそれで断られたことをだ。そのことは決して忘れられるものではなかったのである。
「ここは」
「そう。けれど」
「けれど？」
「気にすることはない」
こう陳宮に言うのである。
「そんなことは」
「けれどねねは」
「今のねねは違う」
だからだというのだ。見れば彼女は今は上が白になっている所々に金の装飾がある黒い上着に黒の半ズボン、それに黄色と白のストライブのハイソックスという格好である。かつてのみすぼらしい姿ではなかった。
「だから安心していい」

「そうですね」
「見えない人は外見でしか判断しない」
こうも言うのであった。
「だから」
「だからなのですの」
「そう、だから」
また言うのであった。
「気にしなくていい」
「ならねねがお店に入っても」
「気付かない。それに追い出されることは絶対にない」
それもないというのだ。
「恋がそんなことさせない」
「恋殿・・・・・・」
「安心していい」
そうしてだった。店の中に入る。店の者は陳宮の姿に気付いた。
しかしであった。
「あの時の・・・・・・」
「御前達が外見でしか判断しない」
呂布はその店員に対して言った。
「けれど恋は違う」
「ううう・・・・・・」
「今では擁州の軍師」
そして言う言葉は。
「この呂奉先のかけがえのない存在」
「えっ、呂奉先!?」
「まさかあの」
店の者だけではなかった。客達もだ。彼女の名前を聞いて一斉に顔をあげた。そのうえで二人を見る。見ずにはいられなかった。
「天下の飛将軍と言われる」
「豪勇無双の」

「まさかその呂将軍の」
「そう。恋はわかった」
店の者を責めていた。表情も言葉も変わらない。しかしである。
「ねねのことが。御前達とは違う」
「うう・・・・・・」
「そして」
「そして？」
「この店はまずい」
一言だった。
「碌なものが出ない」
「そうですの」
「そう。麺がのびている」
客の一人のラーメンを見ての言葉だった。
「出されてすぐなのにそうなっている。食べる価値もない」
「なら将軍、ここは」
「ねねが来るに値しない場所だった」
そうだったというのだ。
「出よう」
「わかりましたですの」
こうしてだった。二人はそのまま去った。後には呆然とする店の者や客達だけが残った。呂布は陳宮の仇を一つ取った。
そしてあの村に来た。今その村は大変なことになっていた。
「た、助けてくれ！」
「ゴ、ゴロツキが！」
丁度村の中でゴロツキ達が暴れていたのだ。

# 第九話　陳宮、呂布と会うのことその九

「畜生、飯を分けてくれって言ったから断ったら！」
「暴れるなんてよ！」
「何て奴等だ！」
「御前等何様だってんだ！」
「そのケチな性分許さないけ！」
アースクエイクと不知火幻庵であった。二人はその吝嗇な村人達に対して激怒したのだ。それでその鎖鎌や爪で暴れているのだ。
「こんな村よ！」
「皆殺しにしてやるけ！」
言いながら家を壊し村人達を吹き飛ばしていく。幸い今のところ怪我人はいない。しかしであった。
「待つ」
呂布が出て来て言うのだった。
「御前達やり過ぎ」
「むっ！？」
「御前は何者だけ？」
呂布は二人を呼び止めた。そのうえでの言葉だった。
「気持ちはわかるが御前達やり過ぎ」
「何だよ手前はよ」
「わし等を止めるのけ？」
「そう」
その通りだというのである。
「御前達暴れるの止める。食べ物はやるから村を出る」
「おいおい、そういう訳にはいかねえんだろ」
「わし等もこの連中は許せないけ。もうこうなったらとことんまでやるけ」
「それでも止める」

やり取りは平行線だった。
「暴れるのよくない」
「意地でもっていうのかよ」
「では主が相手になるけ？」
「暴れるというのなら」
そうだと返すのだった。
「容赦はしない」
「へっ、そうかよ」
「なら容赦はしないけ！」
こう言ってであった。二人で呂布に襲い掛かる。ここで陳宮が呂布に対して叫んだ。
「恋殿、まずは跳んで下さい！」
「跳ぶ」
「あの爪の男何か吐くつもりですぞ！」
幻庵の動きを見ての言葉だった。
「それを受けたらまずいですぞ！」
「わかった」
それを受けてだった。すぐに跳んだ。するとすぐに彼女がそれまでいた場所に紫の不気味な霧が吐かれたのである。危ういところだった。
「助かった。後は」
もう呂布の独壇場だった。そのまま急降下し方天戟を上から幻庵に突き出した。それで右腕と左足にダメージを与えたのである。
「けっ！？」
「これで動けない」
幻庵を動けなくしてそうしてだった。
次はアースクエイクだった。彼に関しては。
「足ですぞ！」
「足」
「巨体故に足元が弱い！そこですぞ！」

「それなら」
戟を右から左に払った。その風圧だけで倒れてしまったアースクエイクだった。
「おっ！？」
「勝負あった」
これで終わりであった。
「恋の勝ち」
「む、無茶苦茶強いけ」
「何だってんだよ」
「恋の勝利じゃない」
倒れる二人と周りにいる村人達への言葉だ。
「陳宮の勝利」
「えっ、陳宮！？」
「陳宮っていうと」
「そう、この陳宮」
彼女を見ながらの説明である。
「この陳宮が恋を勝たせてくれた」
「あっ、御前そういえば」
「あの水車小屋の」
村人達もここで気付いたのだった。今は黒と白の立派な服を着た彼女がその陳宮であると。ようやく気付いたのである。

# 第九話　陳宮、呂布と会うのことその十

「まさかこんなところで」
「何で呂布将軍のところに」
「御前達は陳宮を疑った」
その呂布の言葉である。
「そして追い出した。けれど」
「けれど？」
「何だっていうんだ」
「恋は陳宮を疑わない」
こう言うのだった。
「絶対に」
「疑った！？それじゃあ」
「あの水車小屋のことは」
「陳宮はそんなことしない」
呂布はまた言った。
「そう、絶対に」
「何でそんなことがわかるんだ」
「どうしてなんだよ」
「恋にはわかる」
呂布の凄まじいまでの直感故である。それでわかったのだ。
「だから」
「くっ、こいつはな」
「確かにあの時」
「燃やしたんだよ」
「御前達は見ていない」
村人達の疑いの目はあっさりと否定した。
「見ていないのに何が言える」
「あんたもそうじゃないか」

「そうだ、見ていないだろ」
「それでどうしてそう言えるんだ」
「恋は陳宮、ねねを見た」
愛称で呼んでさえしてみせたのだ。
「ねねを。だから言える」
「将軍・・・・・・」
「ねねはそんなことしない。絶対に」
あくまでこう言う呂布だった。
「何があっても」
「ううう・・・・・・」
「何故そこまで言えるんだ」
「こんな孤児を」
「何処でも生まれたかもわからないような奴なのによ」
「生まれも育ちも関係ない」
呂布はここでも言い切った。はっきりとだ。
「ねねはねね。恋の絶対の親友」
「友達!?このねねが」
「そう、ねねは友達」
はっきりと言った。陳宮殿に対して。
「これからも宜しく」
「将軍・・・・・・」
「恋でいい」
「は、はい」
「行こう」
そしてまた告げた。
「この村から。恋達の場所に」
「わかりました!」
最早陳宮にとってはこの村なぞどうでもよかった。明るい笑顔で呂布と共に二人の場所に向かうのだった。今彼女は呂布と共に彼女の人生を歩みはじめたのである。尚幻庵とアースクエイクも呂布に

誘われた。そして気付いたらキムとジョンの下に置かれていた。
辺境だった。異民族と言われる者達の場所だ。今その深い山の中で一匹の異形の存在が蠢いていた。
緑の嫌らしい肌に異常なまでに膨れ上がった腹、それに反比例して痩せた身体に光のない目、それに禍々しい長い舌と異様な形の右手、巨大な身体を持ったそれは明らかに人間ではなかった。
そしてその化け物の前に立つのはだ。青く丈の長い服にズボンの男だった。長身で逞しい身体をしている。髪は短く刈りオールバックにしている。上の方は金髪だが左右は黒である。鋭い目をしており顎鬚を生やしている。端整だがまるで剣の様に鋭い。その男が化け物の前にいた。
「おめえ誰だ?」
「名乗る程の者ではありません」
男は化け物に対して不敵な笑みで返した。
「ただ。貴方は」
「おらがどした?」
「妖怪腐れ外道ですね」
化け物の名前を知っているようである。
「そうですね」
「おらの名前知ってるのか」
「はい、よく」
知っていると。鋭い顔を笑みにさせての言葉だった。

# 第九話　陳宮、呂布と会うのことその十一

「我が子を喰らいそうして妖怪になりましたね」
「覚えていない」
「貴方が覚えていなくても事実はそうなのです」
男は腐れ外道に対してまた話した。
「私はそれを知っています」
「そうなのか」
「はい、そして貴方は」
「今度は何だ？」
「この世にいてはならない存在です」
こう彼に告げたのだ。
「我々が望むこの世界において貴方の様な存在は不要なのです」
「不要？おらが」
「はい、お引取り願います」
言葉こそ恭しいがそこにあるものは剣呑なものだった。
「そのまま消えてもらいます」
「おめ気に入らねえ」
腐れ外道はその男を本能的に嫌った。
「食ってやる」
「ふむ。やはりこうなりましたか」
己の倍以上もある異形の妖怪に食われると言われてもだ。男の平然とした態度は変わらない。それでこう言ってみせたのである。
「所詮はただの下等な妖怪。我等の目的を理解できませんか」
「くたばれ」
腐れ外道は高々と跳んできた。巨体からは想像できない敏捷さである。
その右手で襲い掛かる。だが男はそれに対して。
急降下してきた腐れ外道の方角にだ右手を軽くスナップさせた。

するとそれだけでそこに無数の鎌ィ足が生じてだ。腐れ外道を退けてしまった。
「なっ！？」
「動きは全てわかっています」
全身に傷を受け吹き飛ばされた腐れ外道への言葉だ。
「わかっていればどうということはありません」
「おめ一体」
「私が誰かですか？」
相手が何を言うのかもわかっていたのだった。言いながらまた右手をスナップさせた。すると腐れ外道の周りに無数の竜巻が起こりそれが彼を撃った。腐れ外道は為す術もなく一方的に傷ついていく。
「そう、私はですね」
「人でないな。何だおめは」
「こういう者です」
言葉と共にであった。目が変わった。
青いその目の瞳孔が細い、糸の様になる。その目は。
「蛇！？それは」
「ふふふ、この目を見せたからにはです」
男はその目で言ってみせたのだった。
「貴方は確実に死にます。そう」
「ぬっ！？」
男は前に出た。そして腐れ外道の巨体を掴み上げた。恐ろしいまでの怪力だった。
その掴み上げた腐れ外道に対してあの竜巻を出した。そして言う言葉は。
「お別れです！」
「おめ、ここで何をするつもりだ」
腐れ外道の身体が無惨に崩れていく。その竜巻に削られていく。肉も骨も砕け散っていく。その断末魔の中で男に問うたのだ。
「一体何を」

「人を滅ぼす」
男は滅んでいく妖怪に対して告げた。
「そうとでも言っておきましょうか」
「おめ、やっぱり人でないか」
「人？人とは愚かなものです」
人の姿を取っていながらの言葉だった。
「存在してはならないもの。この世界においても」
「オロ・・・・・・」
腐れ外道は最後の言葉を言おうとした。だがここで頭も砕け散った。髑髏も消え竜巻の中で何もなくなった。残ったのは男だけであった。
「さて、それではです」
男は腐れ外道を消し去ってからまた述べた。
「私のやるべきことをしに行きますか」
こう話してだった。彼は何処かへと姿を消した。腐れ外道がこの世界に来ていたことは誰も知らない。知っているのはこの男だけであった。

第九話　完

２０１０・４・２３

# 第十話　張飛、また馬超と会うのことその一

第十話　張飛、また馬超と会うのこと

関羽達は洛陽に入った。しかしそこは。
「ううむ」
「ここは一番酷いのだ」
関羽も張飛も洛陽の街を見て顔を曇らせていた。
「どうなのだ？この寂れようは」
「寂れるというか荒れているのだ」
店は何処も荒れており行き交う人々の顔も暗く貧しい身なりである。そんな街中を見てだ。一行はその顔を曇らせていたのである。
「袁紹殿や董卓殿のところは栄えていたのにな」
「それにだ」
キングも言ってきた。
「曹操だったな。そこの領地もよかったが」
「ええ、もうかなり栄えていてね」
「ここことは全く違いました」
舞と香澄もそれを言う。
「こんな荒れ果てた様子ではなかったわよ」
「もう全く別でした」
「都は今荒れている」
趙雲も言ってきた。
「皇室の外戚にして大将軍の何進殿と宦官達の争いが続いている」
「それで内政にまで手が回っていないのだな」
「そうだ」
こう関羽に対しても答える。
「その通りだ。その結果だ」
「そうか」

「政治は行われているがそうした政治は行われてはいない」
こうも言うのだった。
「それが影響してだ。徐州や益州、交州にも牧が回されていない」
「大変な状況なんですね」
「そうだ、曹操殿や袁紹殿は何進将軍の側だが」
ナコルルに対しても話す。
「しかし二人共それぞれの領地で内政や異民族の討伐に専念している。宦官達を抑えるだけの武力は今の大将軍にはないのだ」
「董卓殿はどうなのだ？」
「あの方がこうした抗争を好まれるか？」
また関羽対して述べた。
「思わないな」
「そういうことか」
「袁術殿は自分のことにかかりきりだ。そして江南の孫策殿は」
他の領主達の話も出た。
「江南、揚州全域の掌握に懸命になっておられるという。それに」
「それに？」
「あの地域にも異民族がいる」
異民族のことも言うのだった。
「山越がな。そうした意味では袁紹殿と同じだ」
「ああ、袁紹ね」
舞も彼女の名前は知っていたのだった。
「確かあれよね。北の方の」
「そうだ、今四つの州を掌握し異民族の討伐を続けている」
それが今の袁紹の動きだった。
「匈奴やそうした者達をだ。もっぱら武力は使われずに帰順させそのうえで鍬を持たせているらしい」
「あれっ、異民族を討伐しないのですか？」
香澄は趙雲の話を聞いてふと問うた。
「学校の授業で習ったことですけれど漢王朝も異民族には苦労して

いたって」
「それは事実だ。だが何も戦うだけではない」
趙雲はその香澄にも話した。
「帰順させ自らの中に取り込むのも手だ」
「そうなんですか」
「袁紹殿はそれにより多くの民を手に入れ」
さらにであった。
「兵も手に入れている。異民族の精悍な兵をだ」
「じゃあ袁紹はかなり強くなっているのだ？」
「そうだな。匈奴達の兵が加われば強いな」
関羽もそれを言う。
「四つの州に異民族の兵が加われば」
「もう敵なしなのだ」
「しかし曹操殿もその基盤を確かなものにしてきている」
趙雲は曹操のことも話した。
「あの方の掌握している二つの州は元々豊かな場所だ。袁紹殿に次ぐ勢力を築き上げることも可能ではある」
「そのお二人が何進将軍についているのは将軍にとっては有り難いですか？」
ナコルルがふと言った。
「それなら」
「そうかもな。だが宦官達は宮廷に隠然たる勢力を誇る」
趙雲の次の話は宦官についてだった。
「帝の御傍にいつもいる。そして陰謀にも長けている」
「予断は許さないか」
関羽もその事情はわかった。
「宮廷は混沌としているのだな」
「それが今都や司隷にも及んでいる」
そうなっているというのだ。

# 第十話　張飛、また馬超と会うのことその二

「それでこの有様だ」
「そうなのか」
「けれどそれでもなのだ」
張飛はそれでも明るいものを見つけてはいた。
「ちゃんと催しも開かれているのだ」
「あっ、これですね」
ナコルルは街の壁に貼られている掛け紙を見た。そこには三人の可愛らしい女の子達の絵が描かれている。そこにはこう書かれていた。
「数え役満☆シスターズですか」
「張三姉妹なのだ」
張飛もその紙を見て言う。
「歌を歌うみたいなのだ」
「歌か。そういえば」
関羽が歌と聞いてある者達を思い出した。
「アテナ殿達も元気かな」
「むっ、アテナ達とも会っていたのか」
キングは今の関羽の言葉にすぐに顔を向けた。
「そうか。この世界に来ていたのか」
「そうだ。いい人達だった」
関羽は微笑んでこのことも語った。
「また会いたいものだな」
「縁があれば会えるわよ」
舞は明るく話した。
「その時を楽しみに待っていればいいわ」
「そういうことですね。それで」
ナコルルの言葉だ。

「路銀はどうしますか？」
「そうですね。とりあえず何処か働かせてもらえる場所は」
「若しくはまた歌うか」
関羽はこれを考えた。
「そうするか」
「それもいいけれど」
ここで舞が提案した。
「私達の芸を見せるのもいいんじゃないかしら」
「武芸やそういったものをか」
「ええ。それでもお金は貰えそうよ」
こう言うのである。
「例えば私の扇とか火とか使った忍術とか」
「そうですね。私も技を出せますし」
「ママハハもいます」
香澄とナコルルも芸を持っていた。
「それを皆さんに見せれば」
「確かに暗い街ですけれど仮にも都ですし」
「そうだな。悪くないな」
趙雲も己の左手を顎に当てて述べた。
「では今回はそれでいくか」
「そうですね。後は私の笛も」
ナコルルは笛も持っていた。
「色々ありますから」
「よし、決まりだな」
関羽が頷いた。
「それでな」
「よし、それなら」
「そうしようか」
「鈴々も何か探すのだ」
張飛は自分で探すと述べた。

「また武闘大会があればそれで優勝するのだ」
「そうだな。ではそうしてだ」
「皆で路銀を手に入れるのだ」
こう話をしてそれぞれ路銀を手に入れる為に動きだした。そしてその張飛はである。都の中を少し歩いてある立て看板を見つけた。
「ええと、何々」
「大食い大会か」
その横で声がした。
「本日開催、飛び入り歓迎か」
「よかったですね」
声は一つではなかった。

# 第十話　張飛、また馬超と会うのことその三

「路銀手に入るわよ、姉様」
「そうだな、蒲公英」
「その声は」
張飛の覚えている声だった。それを見ると。
馬超がいた。そしてその横には小柄で可愛らしい少女がいた。白い半ズボンにオレンジの上着、肩と手の覆いは黒だ。茶色の髪を左で縛っている。明るく利発そうな顔をしており目は茶色である。
その少女を見てだ。張飛は少し怪訝な顔になり尋ねた。
「御前は誰なのだ？」
「馬岱です」
少女は明るく名乗ってみせた。
「馬超姉様の従妹なんです」
「あたしあれから涼州に帰ってさ」
馬超が事情を話してきた。
「母ちゃんのことな。そうしたら一族も納得してくれてな」
「殆どの人はそのまま残って袁紹さんにお仕えしたんですけれど」
「あたしとこいつはさ。それも何かって思ってさ」
「武者修行をしています」
「そういうことさ。宜しくな」
「そうだったのだ」
「まあ路銀には困ってるな」
このことも言う馬超だった。
「それで大食い大会にはな」
「鈴々も出るのだ」
「まあ優勝するのはあたしさ。食べる方にも自信があるんだよ」
「姉様ったら凄いのよ」
馬岱が両手を拳にして語る。

「もう馬みたいに食べるんだから」
「それって褒めてるのか？」
「一応は」
こう従姉に返す馬岱だった。
「褒めてるつもりよ」
「そうか？」
「そうよ。私はあまり食べられないから」
出ないというのだ。
「姉様、頑張ってね」
「負けないさ、絶対にな」
「それは鈴々の台詞なのだ」
張飛も強気で返す。
「何があっても」
「よし、勝負だ」
「それならなのだ」
こうして大食い大会に出た。二人はあらゆるものを凄まじい勢いで食べていく。
「ラーメンに水餃子に豚足に」
「焼売に炒飯、メニューも多いのだ」
「しかしな」
馬超がここで言う。
「あたしは食べることで負けたことはないんだ！」
「鈴々もなのだ！」
二人は横に並んで座って貪っていた。
「絶対に勝つ！」
「負けないのだ！」
「さあ、いよいよ最後のメニュー！」
食べているうちにであった。今は唐揚げを食べていた。その前は青梗菜であった。とにかく何でも貪っている二人であった。
「饅頭です！」

「むっ、饅頭!?」
「大好物なのだ!」
二人はそれを聞いても動じていない。
「それならな」
「どんどん来るのだ!」
「姉様頑張れ!」
観客の席から馬岱の声がする。
「おしっこは漏らしても食べることは残すな!」
「おしっこは関係ないだろ!?」
すぐにむっとした顔で返す馬超だった。
「全くよ」
「姉様は着替えるともう凄く奇麗なんだよ」
馬岱は勝手にそんな話もした。
「ワンピースとゴスロリも凄いんだから」
「ああ、そういえばそうだよな」
「あの娘かなり可愛いよな」
他の観客達も馬超の優れた容姿を見て言う。
「スタイルもいいしな」
「美人だよな」
「そうよ。セーラー服もブルマもビキニも」
「この時代そういう服あったのかよ」
誰かが突っ込みを入れた。
「どういう世界なんだ?」
見れば白い髪に赤い服と白いズボンの逞しい男である。

# 第十話　張飛、また馬超と会うのことその四

「まあ楽しい世界なのは確かだな」
「凄く似合うんだから」
馬岱の言葉は続く。
「武芸と食べるだけじゃないのよ」
「鈴々はどっちも負けないのだ」
張飛はその馬超の横で言う。
「さあ、お饅頭食い尽くすのだ」
「さて、残るは後三人！」
武闘大会の時と同じ解説者だった。
「さて、誰が勝つでしょうか！」
「何っ、あたし達だけじゃないのか」
「誰なのだ！」
「僕だよ」
いたのは一人の女の子だった。
「僕がいるから」
「むっ、誰だ？」
「御前誰なのだ？」
二人も相手を見た。
「気付いたらもう一人いるけれどよ」
「この展開は予想していなかったのだ」
「っていうかお決まりじゃないの？」
また観客席から馬岱が言う。少し冷めた目だ。
「こういう展開って」
「さて、最後だけれど」
ピンクの縮れた髪の毛を上で左右に角の様にしている。顔は明るくはっきりとしたものだ。淡いピンクの半ズボンと上着がよく似合っている。腕のところと腰や肩を覆う護りは紫色だ。その女の子で

ある。
「頑張るぞーーーー」
「こいつ、手強いのだ」
「尋常な奴じゃないな」
張飛も馬超もそれは嫌になる程わかっていた。彼女を強い目で見据えている。
「けれど負けないのだ」
「饅頭はあたしも好物だしな」
「さっきの麻婆豆腐もよかったけれど」
その少女は余裕であった。
「このお饅頭も美味しそうだよね」
「それでは勝負」
司会者がここで言う。
「はじめ！」
「よしなのだ！」
「食うぞ！」
こうして最後の戦いがはじまった。三人は早速皿の上にうず高く積まれたその饅頭を勢いよく食べて行く。だがその中でまずは。
「うっ・・・・・・」
「おおーーーーっと馬超選手！」
司会者は馬超の動きが止まったのを見逃さなかった。
「ここで動きを止めた！」
「そろそろ限界だ・・・・・・」
青い顔になっていた。そして今まで食べたものが走馬灯の様に湧き起こる。
「駄目だ、しかし」
踏ん張ろうとする。だがどうしても身体が動かない。
荒れ果てた戦場を彷徨う自分が見えた。そうして。
そのままゆっくりと前に崩れ落ちた。それが最期だった。
「翠が遂に倒れたのだ」

こう言う張飛も顔が青い。
「そして鈴々もそろそろ」
「おい、あれはもう無理だろ」
「兄さんでもそう思うんだ」
「ああ、絶対に無理だな」
黒いテコンドーの服の茶色がかった黒髪をやや立たせた明るい精悍な顔の若者が青っぽいテコンドーの服の女性的な流麗な顔の若者に応えていた。
「あそこまではな」
「食べられないんだ」
「ちょっとな。それでジェイフン」
「うん、ドンファン兄さん」
「これからどうするんだ？」
こう弟に尋ねるのである。
「これからな。どうするんだ？」
「そうだね。ここにいても仕方ないし」
「ああ」
「擁州は兄さんは絶対に駄目だよね」
「何で親父が若い姿のままでいたんだよ」
ドンファンは怒った様な顔でなって言った。
「しかもチャンさんやチョイさんもな」
「それにジョンさんもね」
「ジョンさんまでいるんだぞ、だったらな」
「だから駄目だね」
「ああ、他の場所に行くぞ」
それでこう言うのであった。

# 第十話　張飛、また馬超と会うのことその五

「東か北にな」
「曹操さんか袁紹さんのところだね」
「話を聞くとな」
ドンファンはここで腕を組んで述べた。
「袁紹さんの方が面白そうだな」
「面白そうなんだ」
「曹操さんの方も捨て難いけれどな」
「兄さんってグラマーな人好きだったね」
「あの人小柄だしな。左右にいる赤い人と青い人はいいんだがな」
「曹操さんのところにはシャルロットさんがいるし」
何故か彼女のことを聞いているジェイフンだった。
「あの人厳しいよ」
「ああ、怒られるのも嫌だから袁紹さんだ」
物凄い理由だった。
「あそこもあそこで問題ありそうだがな」
「とりあえず食べないといけないしね」
「ああ、北に行こうぜ」
「そうだね」
「少なくとも西は絶対に嫌だからな」
それは言うのだった。
「親父とジョンさんの二十四時間修行と強制労働地獄なんてよ」
「けれどチャンさんやチョイさんもずっと大変だね」
「あの人達何年ああやってるんだ？」
「さあ。僕達が子供の頃からだけれど」
その頃から地獄を味わっているのである。
「多分というか絶対一生あのままだろうね」
「悲劇だな、あの人達にとってはよ」

「北朝鮮に送られた方がましだって二人共泣きながら言っていたし」
その飢餓地獄の方がというのだ。
「壮絶なのは見てもわかるしね」
「ああ、じゃあ今から行こうぜ」
「うん、北にね」
こうしてこの兄弟は袁紹のところに向かうのだった。彼等もまたこの世界に来ていたのだ。だがそれがどうしてなのかはまだ二人にはわかっていなかった。
大食い競争は張飛と少女の一騎打ちになっていた。張飛は苦しみながらも尚も食べていた。
「くっ、こいつ・・・・・・」
その女の子を見ながら呟いた。
「まさに化け物なのだ」
何と張飛以上の食欲で食べていた。両手を縦横無尽に繰り出しだ。
「しかし鈴々も負けないのだ」
こう言ってであった。
「意地でも・・・・・・むっ！？」
ここで少女を見た。見れば動きが止まっている。
「遂にあいつも限界みたいなのだ。それなら！」
一気に攻勢に出た。そうしてだった。
己の皿のそれを食べ尽くす。これで勝ったと思った。
だが少女は己の皿の上の饅頭を流し込んでだ。そして言うのだった。
「おかわり！」
「何だって！？」
「今おかわりって言ったけれど」
丁度会場を後にしようとするドンファンとジェイフンが唖然となっていた。
「あの女の子何だ！？」
「あそこまで食べるなんて」

それで唖然となるのだった。
「この世界もとんでもないのが一杯いるな」
「本当にね」
「グリフォンマスクさんとどっこいどっこいか？」
「勝てるかも」
また新しい名前が出ていた。二人はそのまま袁紹の方に向かった。
戦いは終わった。優勝はその少女だった。
張飛と馬超は敗れた。だが満足はしていた。
「負けたのは残念なのだ」
「それでもな。たっぷり食ったし賞金も貰えたしな」
「まずはよかったのだ」
二人はこう話をして道を歩いている。
「それで馬超にそっちは」
「馬岱だよ」
馬岱はあらためて張飛に対して名乗ったのだった。
「蒲公英って呼んでくれていいからね」
「わかったのだ。なら蒲公英」
「うん、鈴々」
馬岱もまた張飛の真名を呼んでみせた。

# 第十話　張飛、また馬超と会うのことその六

「どうしたの？」
「これからどうするのだ？」
こう二人に対して問うのだった。
「とりあえず旅を続けるのだ？」
「そうだな。二人でもいいけれどな」
馬超は張飛の言葉に応えて言ってきた。
「よかったらそっちと一緒になっていいか？」
「鈴々達と一緒に？」
「ああ。旅は多い方が楽しいしな」
だからだというのである。
「それならどうだ？」
「鈴々はそれでいいのだ」
張飛はそれで異論なかった。
「それなら」
「ああ、宜しくな」
「こちらからもなのだ」
こうして馬超と馬岱は張飛達に加わることになった。そしてその三人の前に。
「あっ、あんた達は」
「むっ、御前は」
「さっきの大食い大会の」
「そうだよ。また会ったね」
あの少女だった。鳶色の目の光が奇麗である。
「さっきは凄かったね。僕あんなに食べる人達はじめて見たよ」
「それはこっちの台詞なのだ」
「まさかあそこまで食うなんてな」
二人はその少女に対して述べた。

「鈴々もはじめて負けたのだ」
「あたしもだよ。本当によく食ったな」
「そうだね。けれどここでまた会ったのも何かの縁だよね」
少女の言葉は明るい。
「どう?今から何か食べに行かない?」
「何っ、まだ食うのだ!?」
「よくそんなに食えるな」
「賞金もあるしね」
それもあるというのである。
「だから。どうかな」
「うう、食べるのはもういいのだ」
「お茶ならいいんだけれどな」
「じゃあコンサートはどうかな」
女の子はこちらも誘うのだった。
「張三姉妹のコンサートだけれど」
「ああ、それなら」
「あたしもお金あるしな」
「お金は僕が持ってるよ」
ここでも少女の言葉は明るい。
「優勝したしね」
「それでも自分の分は出すのだ」
「ああ、あたしもな」
「そうなんだ。ああ、あと僕の名前だけれど」
少女は今度は自分の名前も話してきた。
「許緒っていうんだ」
「許緒なのだ」
「へえ、いい名前だな」
「有り難う。真名も言おうかな」
その少女許緒は笑いながらこうも言ってきた。
「真名は季衣だよ」

「鈴々なのだ」
「あたしは翠」
「私は蒲公英よ」
三人共名乗ったのだった。こうして意気投合した四人はコンサートに向かおうとする。しかしここでその四人の目の前にだった。
「話が違うぞ！」
「違うんだよ」
「借金には利息ってのがあるんだよ」
男の子の声と下卑た声が聞こえてきた。見れば三人の粗暴な男達が小さな男の子を囲んで脅すようにして言ってきた。その三人は。
「あの三人は」
「ああ、前に見たな」
「ここに来るまでも会ったよ」
何と三人共見ている顔であった。

# 第十話　張飛、また馬超と会うのことその七

「また出て来たのだ」
「というか絶対に別人なのにな」
「声も外見も同じなんて」
張飛達もそれがどうしてかわからなかったが。それでも言うのであった。
「まあとにかくなのだ」
「悪い奴等なのは間違いないしな」
「ここは助けないと」
それぞれの得物を構えて前に出ようとする。それは許緒も同じだった。
「ねえ、そういうこと止めない？」
「んっ、何だおめえは」
「女ばかりじゃねえか」
「何しに来たんだ？」
「子供いじめるのはよくないよ」
こう三人に言うのである。
「だからここは帰ってくれないかな」
「そうなのだ、借金取りの様だが」
「あまり無茶なことはしないでおこうな」
「ここはね」
張飛達も言う。そしてその何処かで見た三人組は彼女達に対して言うのだった。
「こっちも慈善事業じゃねえんだよ」
「そうさ、女ばかりだが邪魔するなら容赦はしねえぜ」
「特にそこのちっこいの」
小さいのが言ってきた。
「手前は大人しくしてな」

「ちっこいの？」
「ちっこいのっていったら」
ここで張飛と馬岱が顔を見合わせた。
「蒲公英のことなのだ？」
「鈴々じゃないの？」
お互いにこんなことを言い合う二人だった。
「鈴々小さくないのだ」
「私だってそうよ」
「そこの手前だよ」
「ピンクの角のよ」
「一番のチビがよ」
「チビ！？」
ピンクでわかった。誰がどう聞いても許緒である。それを聞いた彼女の様子が変わった。
「チビって言ったな」
「ああ、言ったぜ」
「それがどうしたってんだ？」
「わかったならとっとと帰りな」
「ママのミルクでも飲んでな」
「許さないぞ！」
顔をあげてだ。怒った顔で何処からか出してきた銀色の鉄球を振り回してきた。鎖で手にあるけん玉につながれている。巨大な鋼のけん玉だった。鉄球には無数の棘まである。
それを振り回してだ。そうして三人に襲い掛かる。
鉄球が三人の前に落ちるとだった。それで終わりだった。
「ひ、ひいい！」
「こいつ等、それなら！」
「覚えてろよ！」
三人はそれを見てすぐに逃げ去る。後に残ったのは男の子だけだった。男の子は四人に対して事情を話した。

「お金は借りて利子も払ったんだ」
「それでもだというのか？」
「何か利子がまだあるとか言ってね」
「典型的な悪徳高利貸しじゃないか」
話を聞いて言う馬超だった。今一行は男の子に案内されて彼の家に向かっている。御礼におもてなしをするというのである。
洛陽の郊外だった。そこまで行く間に許猪は次々に食べ物を見つけてそれを背中の篭に背負っていた。様々な茸や野菜等である。
「随分とあるのだ」
「僕食べ物を見つけるのが得意なんだ」
笑顔で張飛にも話す。
「食べるからね。だからその為にこうしたことを身に付けたんだ」
「便利な特技なのだ」
「そうかもね。この子のプレゼントにね」
「有り難う」
「しかし。悪い奴は何処にでもいるね」
許緒の言葉がここで変わった。
「高利貸しだなんて」
「そうだよね。けれど連中すぐにまた来るんじゃないかな」
馬岱はそう見ているのだった。

# 第十話　張飛、また馬超と会うのことその八

「それだったら」
「そうなのだ。用心の為に鈴々達が家で張っているのだ」
「ああ、用心棒とかいそうだしな」
張飛と馬超もそうするというのだ。
「だからここは任せるのだ」
「誰が来てもな」
「本当にいいの？」
男の子は二人の言葉を聞いて申し訳なさそうな顔になった。
「そんなことまで」
「いいよ。困った人を助けるのは当然のことだよ」
こう言うのである。
「だからね」
「よし、それならなのだ」
「任せな、悪党退治はな」
こう話してだった。一行は男の子の家に入った。そこはごく普通の民家だった。中には黒髪の楚々とした美女がいて出迎えてきた。
「そうですか、御聞きしたのですか」
「そうなのだ」
「大変だな」
「あの連中借金のカタに姉ちゃんを貰うって言ってるんだよ」
男の子はその民家の中でも話した。
「お金を払ったのに」
「最初からそれが狙いだったんじゃないかな」
馬岱はここまで話を聞いて見抜いた。
「それでお金を貸したとか？」
「だとしたら余計に許せないね」
許緒もその顔をむくれさせていた。

「それだったら」
「どうせすぐに来るのだ」
張飛はこのことをここでも言った。
「その時にギッタンギッタンにしてやるのだ」
「そうだな。そろそろ来るんじゃないのか？」
馬超も言う。
「それじゃあな」
「うん、構えておくかな」
許緒も言った。丁度その時だった。
「やいやいやい！」
「大人しく出て来い！」
聞き慣れたその声だった。
「今度こそまとめて払ってもらうか！」
「いいな！」
「本当にもう来たね」
馬岱がそれを聞いて述べた。
「それじゃあ行こう」
「用心棒は鈴々がやっつけるのだ」
後の三人はというのだ。
「それじゃあ行くのだ」
「おい、用心棒はあたしが相手をするぞ」
「鈴々がやっつけるのだ！」
そんな話をしながら家を出る。するとそこに。
「さあ先生！」
「是非やっておくんなせい！」
「ああ、ほな行かせてもらうで」
紫の長い髪を後ろで束ねている紫の目の強い顔の女だった。不敵な笑みを浮かべ薄い紫の眉の下の緑の目が凛々しい。口は小さく引き締まっている。
胸は白いさらしだけであり下は黒い袴だ。青い上着を袖を通さず

羽織っている。そしてその手にあるのは。
「青龍偃月刀なのだ！？」
「ああ、これな」
張飛の言葉に応えて言ってきたのだった。
「結構気に入ってるんや。何か噂で聞く黒髪の山賊退治の女武芸者の話を聞いて撃ちも持ってみたんや」
「そうだったのだ」
「うちの名前は張遼」
自分の名前を名乗ってきた。
「字は文遠や」
「それがあんたの名前か」
「仕事はこうして日銭を稼ぐ剣客をしてるんや」
今度は馬超への言葉だった。
「それで今はこの連中の用心棒をしてるんやけれどな」
「じゃあ先生」
「やって下さい」
「そういうことや。あんた等には恨みはないけれどな」
「相手をするっていうのね」
「そういうこっちゃな」
馬岱に対してもそのまま言葉を返す。
「ほなやろか」
「それなら！」
最初に動いたのは許緒だった。
すぐにその鉄球を振り下ろしてきた。そのまま張遼の頭を砕かんとする。

# 第十話　張飛、また馬超と会うのことその九

だが速かった。張遼は素早く後ろに跳び退いてそれをかわしたのだ。
「僕の鉄球をかわした！？」
「ほう、かなりやるやんか」
張遼は着地してから述べた。
「ただの日銭稼ぎかと思うてたらこれは中々」
「行くのだ！」
次は張飛だった。
蛇矛を手に突き進んでだ。そうしてその矛を激しく繰り出す。
張遼はそれを自分の得物で防ぐ。次は。
「むっ！？」
「あたしもだ！」
馬超の槍も受ける。その速さにも驚く張遼だった。
「三人共この強さは」
「ここにもいるぞ！」
そして馬岱も槍を出してきた。それを受けても言うのだった。
「このお嬢ちゃんも。若いけれどかなり」
「この家は守るからね！」
許緒はまた鉄球を振り回す。
「絶対に！」
「おっと、そうはいかねえよ」
「残念だったな」
しかしであった。ここで後ろからその三人の声がしてきた。
見るとだった。あの三人が男の子と姉を捕まえてだ。不敵な笑みを浮かべてきていた。
「こっちにも都合があってな」
「金を手に入れないとな」

「卑怯なのだ！」
張飛がその彼等に対して叫ぶ。
「よくもそんな卑怯なことをして平気でいられるな」
「へっ、卑怯もヘチマもあるか」
「要は目的を達成できたらそれでいいんだよ」
三人は馬超に対しても返した。
「さて、大人しくしろよ」
「さっさと金をよ」
「どうせお金なんか最初から目的じゃないんでしょ」
馬岱は三人に対して自分の考えを言ってみせた。
「その美人のお姉さんが目的なんでしょ」
「へっ、どうとでも言いな」
「言ったって何もならないからな」
しかし三人の態度は居直りであった。
「こうなったらこっちの勝ちだからな」
「残念だったな」
「甘いな」
しかしここで。もう一人の声がした。
「悪党は滅びる運命にあるのだ」
「何っ！？誰だ！？」
「誰だってんだ！」
「この声は」
悪党共は周囲を見回す。だが馬超だけはその声を聞いて気付いた様に呟いた。
「まさかあいつかよ」
「誰なの？あいつって」
「ああ、すぐにわかるさ」
こう馬岱にも返す。
「すぐにな」
「すぐになの」

「何か変わったところのある奴だったけれどな」
馬超は彼女についてこんなことも言った。
「今度は一体何をするっていうんだ？」
「とうっ！」
いきなり白い影が現われた。そのうえでそれは姉と弟を助け出してそのうえで家の上に跳んだ。見ればその顔には黄色い鮮やかな蝶の仮面があった。だがどう見ても彼女は。
「手前誰だ！」
「誰だってんだ！」
「悪のあるところ現われる」
その美女が言う。
「愛と正義の使者」
「愛と正義の使者！？」
「だから誰なんだ！」
「人呼んで華蝶仮面！」
そして今その名前を名乗った。
「この仮面の輝きを恐れぬのならかかって来るがいい！」
「っておい」
馬超が呆れながら彼女を見上げて突っ込みを入れる。
「あんたどう見てもよ」
「誰か知ってるの？」
「ああ、知り合いでな」
呆れ果てながら許緒に対しても答える。
「まさかこんな趣味があるなんてな」
「変な人だよね」
「ああ、あらためてそう思うよ」
「御前は誰なのだ！」
だが張飛ぶその彼女を指差して問う。

# 第十話　張飛、また馬超と会うのことその十

「そんな変な格好をして！」
「何っ？」
「殆ど変態なのだ！」
見事に言ってはならないことを言う。
「変態仮面なのだ！おかしいのだ！」
「変態だと」
それを聞いた一応趙雲ではないことになっている彼女のオーラが一変した。
「しかもおかしいだと」
「そうなのだ、変態にしか見えないのだ！」
まだ言う張飛だった。
「それで何がしたいのだ！変態ごっこに付き合うつもりはないのだ！」
「変態ごっこか」
「まずいな、こりゃ」
馬超はわかっているだけに気まずかった。
「完全に怒ってるなありゃ」
オーラだけではなかった。表情も不機嫌そのものになっている。
その様子を見てすぐに察したのである。
しかしである。人質は救出された。それは大きかった。
「姉様、何はともあれ」
「人質の心配はなくなったよ」
馬岱と許猪がこのことを言う。
「もう一気にさ」
「やっつけちゃおうよ」
「ああ、そうだな」
馬超も形勢逆転ははっきりとわかっていた。

「それならな。あの用心棒を退けてな」
「その心配はもういらんで」
その張遼からの言葉だ。
「ちょっとやることができたわ」
「やること？」
「ああ、そや」
言いながら前に出るのだった。
そうしてである。何と馬超達の前をそのまま通り過ぎてしまった。
四人も彼女があまりにもあっさりと通り過ぎたので何もできなかった。
「例え雇われても身内は身内や」
「身内っていうと」
「そこの三人？」
馬超と馬岱が尋ねた。
「いつも見る顔だけれどさ」
「その連中？」
「そや。おどれ等」
そのいつもの三人の前に来ての言葉である。
「よおもやってくれたな」
「な、何だよ急に」
「その態度はよ」
見れば張遼の表情が一変している。目は吊り上がり怒らせたものになっている。憤怒と言っていい表情だった。
「だから俺達にも都合があるんだよ」
「それ言ったじゃねえか」
「人質取るなんてふざけた真似しおって」
その憤怒の顔での言葉だった。
「そこまで腐った奴等やったとはな」
「な、何だよ」
「俺達だって都合があるんだよ」

「そうか。都合か」
張遼の背中には炎があった。その炎を背負っての言葉である。
「じゃあうちの都合も言うな」
「い、言ってみろよ」
「聞いてやるからな」
「ああ、何でもな」
「何でもかい」
三人の言葉を聞く。見れば三人は完全に気圧されている。最早彼女の言葉が全て通るのは一目瞭然であった。人の質が違っていた。
「言うたな。そやったらや」
「そやったら？」
「じゃあ何だ？」
「借金の証文出し」
こう言ってきたのである。
「証文な。今すぐな」
「これかよ」
のっぽが出してきた。紛れもなく証文である。
「これがどうしたってんだよ」
「よお持っときや」
また彼に告げてであった。その得物を動かした。
一瞬であった。その一瞬で証文は切り刻まれた。そうして只のゴミになってしまった。
「お、おいこれじゃあよ」
「もう騙せねえじゃねえかよ」
「折角あの娘売り飛ばそうと思ったのによ」
「自分で言っているのだ」
「まあそうだと思ってたけれどな」
張飛と馬超の声は醒めている。

# 第十話　張飛、また馬超と会うのことその十一

「けれどこれで証文はなくなったのだ」
「自白もしたしな」
形成がはっきりとしたのだった。もう三人には何もできなくなっていた。
そしてである。張遼もその三人に対してまた告げた。
「さっさと去ね」
一言であった。
「もうあの姉弟の前に出るんやないで！」
「は、はい！」
「わかりました！」
三人は背筋を伸ばして敬礼して応えた。そのうえで逃げ去ったのだった。こうして姉弟は助かったのであった。
だが二人は屋根の上にいたままだ。いるのは二人だけだった。
「あれ、何時の間にかいないね」
「そうよね」
馬岱が許緒の言葉に頷く。
「気付いたら何時の間にか」
「何処に行ったのかな」
「まあそのうち出て来るさ」
馬超は誰かわかっていたので落ち着いたものだった。
「すぐにな」
「しかしおかしな奴なのだ」
張飛はまだわかっていなかった。顔がいぶかしむものになっている。
「風の様に現れて風の様に消えたのだ」
「ってまだわからないのかよ」
その張飛に少し呆れて返す馬超だった。しかし何はともあれ話は

終わった。
そしてここでだ。関羽とナコルルが一行のところに来た。
「ああ、ここにいたのか」
「探しましたよ」
二人は一行のところに来て言ってきた。
「だがどうやらいいことをしたみたいだな」
「それに馬超さんもおられたのですね」
「ああ、久し振りだな」
馬超もナコルルを見て言葉を返す。
「あんた達もいたのか」
「はい、お元気そうで何よりです」
「それに他にもいるな」
「うむ、そうだな」
今度は趙雲がさりげなくを装って出て来た。
「見たところ皆武芸者だな」
「私は馬岱」
「僕は許猪だよ」
まずは二人が名乗った。
「馬超姉様の従妹です」
「僕は旅の武芸者だよ」
「それでうちは張遼や」
彼女も名乗ってきた。
「うちも旅の武芸者や」
「そうなのか」
関羽が彼女を見てふと言った。
「貴殿もなのか」
「そや。しかしこれからどないするかやな」
張遼は今度は自分の身の振り方について考えた。
「何時までも旅の武芸者なのもあれやし。そろそろ誰かに仕官しようかいな」

「誰にするの？」
「そやな。何か最近擁州におもろい面々が集まってるらしいし」
許緒に応えての言葉だった。
「そこの領主さんのところにいこかいな」
「じゃあ僕も誰かのところに行こうかな」
も彼女の言葉を聞いてふと考えたのだった。
「曹操さんのところがいいっていうし。そこに行こうかな」
「そうか。そやったらここでお別れやな」
張遼は許緒のその言葉を受けて顔を向けた。
「縁があったらまた会おな」
「うん、またね」
許緒は明るく言葉を返した。
「皆、機会があったらまたね」
「再会の時を楽しみにしてるで」
許緒は手を振って、張遼は涼しい笑みでそれぞれ姿を消した。そして残った面々はというと。
「そうか、貴殿達も一緒なのか」
「ああ、それでいいかな」
「うむ、旅は多い方が楽しい」
関羽も馬超と馬岱に明るい言葉で返す。
「これから宜しくな」
「ああ。しかし何か増えたな」
馬超はここでキング達を見て言った。
「あんた達もやっぱりあれか？他の世界から来たのか」
「ええ、そうよ」
舞が笑顔で馬超に対して答えた。

# 第十話　張飛、また馬超と会うのことその十二

「日本っていう国からね」
「っていうとナコルルと同じか」
「同じだけれど時代が違うのよ」
舞はこう話した。
「大体二百年は違うのよ」
「そうなんですよね。まさか時代の違う人達と一緒になるとは思いませんでした」
ナコルルも言う。
「不思議ですよね、これも」
「本当に。私達だけではありませんし」
香澄も加わってきた。一行はまた旅を続けている。洛陽を出てまた新たな道を進んでいた。
「テリーさん達もおられるのですよね」
「そうだな。是非会いたいものだな」
キングも腕を組んで言ってきた。
「懐かしい顔触れが揃っているのならな」
「それでこれから何処に行くの？」
馬岱は一行の行く先を尋ねた。
「洛陽にはもう寄らないんだよね」
「そうだな。南に行くか」
趙雲がここでこう提案してきた。
「南にだ。そこでどうだ」
「南か」
「北も行ったし西も行った」
関羽に応えながらこれまで行った場所も話す。
「今度は南でどうか」
「そうだな。悪くないな」

関羽も趙雲のその言葉に頷いた。
「ではそこに行くか」
「南か。いいな」
「そこもそこで面白いことがありそうだしね」
キングと舞もそれに賛成した。
「では今からそこにな」
「行きましょう」
「ここから南というと」
張飛は話を聞きながらまた述べた。
「荊州なのだ」
「そうだ。どうも今一つ治安がよくないらしいがな」
関羽はそのことを不安に思っていた。
「だがそれでもだ。行って損はないだろうな」
「また出会いがありますね」
香澄はこのことをもう予感していた。
「今度は誰でしょうか」
「感じるのですが」
ここで言ったのはナコルルだった。
「これまで武芸や格闘技に長けた方ばかりでしたが」
「今度は違うのか」
「はい、違うものを持った方と出会うと思います」
「ふむ。一体誰なのかだな」
関羽はナコルルの話を聞きながら考えていた。
「楽しみではあるな」
「では南に向かいましょう」
ナコルルも南と言った。
「これから」
「うむ。行くか」
こうしてだった。一行は南の荊州に向かう。そこでまた新たな出会いがあるのだった。

その頃ある場所ではだ。ある者達が話をしていた。そこは闇の中で話している者達の姿は見えない。だがそれでも話はされていた。
「そうですか。そうした存在も来ていましたか」
「始末しておきました」
一人が答えていた。
「既に」
「始末ですか」
「処理と言ってもいいでしょうか」
実に素っ気無い言葉だった。
「所詮は妖怪です」
「そうですね。妖怪は妖怪です」
話を聞く方の返答も素っ気無いものであった。
「妖怪なぞ。我々の目的を理解できる筈もありません」
「ましてや餓えに敗れ人を捨てた者」
今の言葉には侮蔑がこもっていた。
「その程度の輩なぞ同じ世界にいるだけで邪魔です」
「我々の手駒を害される危険もありますしね」
「だからです。今のうちに始末しておきました」
また始末だと言うのであった。

# 第十話　張飛、また馬超と会うのことその十三

「芽は摘んでおきました」
「お疲れ様でした」
「ところで」
ここで声は問うてきた。
「あの三姉妹はどうしているでしょうか」
「彼女達ですか」
「私の同胞が二人ついたそうですが」
「今のところは何の動きもありません」
こう返答が来た。
「残念ですが」
「そうですか。何もですか」
「もっと動くかと思ったのですが」
「見込み違いですか」
「まだその判断は早いでしょう」
「ふむ。ではまだ引き上げるのは早いですか」
話を聞いての言葉だった。
「見たところあまり何も考えていない無邪気な三人ですが」
「しかし成功への欲は深いです」
それは見抜いているのだった。
「それを動かせば面白いことになるでしょう」
「わかりました。しかし三人だけではどうかと思います」
「他の方々もそれぞれ動かれていますね」
「はい、よく」
今闇の中にいる彼等の他の存在についても話される。
「動かれています」
「北もですね」
今度は場所のことも話に出た。

「北の方も」
「匈奴等は取り込まれていますので使えませんが」
「しかし北は匈奴だけではありませんね」
「烏丸もいます」
「では彼等を動かしますか」
「ええ。ではそちらは」
「一人行ってもらいます」
こう言われた。
「それでどうでしょうか」
「ええ。ではそれで」
「まずは乱れさせること」
声が楽しむものになっていた。
「ですから」
「そうですね。手駒も作っていきましょう」
「我等の目的の為に」
闇の中でのやり取りだった。この国で何かが起ころうとしていた。
それは闇の中から起こるものだった。何も見えないその中から。

第十話　完

２０１０・４・２５

# 第十一話　孔明、世に出るのことその一



荊州に入った一行はさらに先に進んでいた。その中でだった。
「なあ趙雲」
「星でいい」
趙雲はこう馬超に返していた。
「これからお互いに命を預けることもあるからな」
「だからか」
「そうだ。こちらも呼ばせてもらう」
また話す彼等だった。
「これからな」
「それじゃあこっちも真名で呼んでくれよ」
「それでいいな」
「ああ、あたしの真名は翠」
「蒲公英です」
馬岱も名乗ったのだった。
「これから宜しく御願いします」
「こちらこそな。ふむ、蒲公英か」
趙雲は彼女の顔を見下ろしてまずは楽しげに笑みを浮かべた。
「御主、見所があるな」
「見所ですか」
「そうだ、将来有望だ」
こう言うのであった。
「私が色々と手ほどきしてやろう」
「宜しく御願いします」
「翠も翠で面白いが」
「何だよ」

「御主は私の後継者にもなれるな」
趙雲は馬岱をそう見ているのだった。
「私の後継者がやっと見つかったな」
「こうは言っているがな」
「どうしたのだ?」
関羽はキングの言葉に耳を向けた。
「星は実際は何の経験もないな」
「そうなのか?」
「そうだ。ないな」
キングは趙雲の現実を見抜いていたのだった。
「だがそれは忘れておいていい」
「そうなのか」
「そうだ。忘れておいてくれ」
「わかった。では忘れることにする」
「それで頼む」
関羽は今はその話を忘れることにした。しかしキングが趙雲は実際にはそうした経験はまだ何もないことを見抜いたのは事実だった。
だが趙雲はキングのその言葉は耳に入っていなかった。そうして馬岱に対してその笑みのまま話を続けているのだった。
「私はこの通りだ」
「凄いスタイルですね」
「ふふふ、そうか」
まんざらではない言葉だった。確かに胸も脚も腰も見事なものだ。
「どう見える?」
「大人の女の人です」
「そうだろう。見ての通り私はだ」
「はい」
「大人の女だ」
誇らしげな笑みでの言葉である。
「この通りな」

「私もそうなれます？」
「蒲公英なら大丈夫だ」
目をかけているのは間違いなかった。
「必ず最高の美女になれるぞ。胸はもうあるしな」
「じゃあこれから頑張りますね」
「頑張って最高の美女になるのだぞ」
武芸者とは言わないのだった。
「いいな、これからな」
「はい、頑張ります」
「なあ鈴々」
馬超は張飛に声をかけていた。
「荊州ってな」
「どうしたのだ？」
「かなり広い場所なんだよな」
これを言うのであった。
「知ってるか？もう城だけで幾つもあってな」
「そんなに広いのだ」
「ああ、そこの何処に行くかだよな」
「そういえば袁術殿の統治も」
関羽はここで言った。

# 第十一話　孔明、世に出るのことその二

「北の方だけで南にはあまり及んでいないそうだな」
「そうなのですか」
「そうらしい。新野はその辺りは治めているそうだがな」
「精々長沙までだろうな」
趙雲もこう見ていた。
「袁術殿が統治しているのは」
「これが曹操殿や袁紹殿なら全土に統治を向けるが」
「だが袁術殿は御二人とは違うからな」
こう関羽に返す趙雲だった。
「元々袁家の嫡流だ」
「ああ、そうだったよな」
馬超は趙雲の今の言葉にあることを思い出した。
「袁紹ってお袋さんがな」
「生まれが低い。だから袁家ではあまり重く見られていなかった」
袁紹の生い立ちである。
「本人もそのことを強く意識していた」
「名門袁家でもなのか」
「名門でも妾腹だ」
趙雲は関羽に対しても答えた。
「本来は今の様に四つの州を治められる方ではないのだ」
「では実力ですか」
「実力はある」
ナコルルにもこう返す。
「少なくとも戦と政に関してはかなりのものだ」
「では優れた方なのですか」
「戦と政にはな」
趙雲はここでその二つに限定した。

「だが。かなりバランスの悪い方だ」
「そういえばあれなんだよな」
馬超がここでまた話した。
「何か妙にお嬢様ぶっていておかしなところがあるんだよな」
「けれど領内はかなり纏まっているのだ」
張飛はこのことを言った。しっかりと見ていたのだ。
「治安もいいし繁栄もしているのだ」
「しかし曹操殿と比べるとだ。いや」
関羽はすぐに自分の言葉を訂正させた。
「曹操殿もあれでな」
「そうですね。妙に肩肘張っているところがありますね」
ナコルルも曹操について述べた。
「お話を聞く限りでは」
「多芸多才な方だがな」
関羽もそれを言う。
「何か無理をしているな。そんな気がする」
「袁紹殿と同じだ」
趙雲は曹操をこう評した。
「曹操殿も名門、それこそこの国ができた頃からの名門曹家の者だ」
「そうだったな。しかし」
「祖父殿が宦官だ」
曹操の問題はこれであった。
「夏侯家から入られたな」
「曹家に夏侯家といえば物凄い名門なのだ」
張飛でさえ知っていることからそのことがよくわかることである。
「袁家よりも凄いのだ？」
「しかし宦官の家だ」
趙雲はこのことを強調して述べた。
「袁紹殿とそうした意味では同じだ」
「では昔はか」

「御二人共幼い頃は孤独だったらしい」
今でこそ飛ぶ鳥を落とす勢いの二人ではあるが。幼い時はそうだったのだった。
「蔑まれてもいた」
「それでかよ。二人共妙なところがあるのは」
馬超はここまで聞いてわかったのだった。
「子供の頃のことかよ」
「それで袁紹殿は政治と戦争のことを必死に学ばれた」
「その劣等感や自分の境遇を脱する為にだな」
「そうだ、そして今に至る」
「曹操殿もか」
「あの方はありとあらゆることにとにかく精を出された」
曹操もそうなのだった。

# 第十一話　孔明、世に出るのことその三

「あの方もそれでああなられたのだ」
「大変だったのだな、二人共」
「そういうことだ。しかし袁術殿はだ」
趙雲はあらためて袁術のことを話した。
「その袁家の嫡流だ。牧の座も袁家の長老達の推薦で自然となった」
「四代に渡って三公を出したその袁家のだな」
「そうだ」
また関羽に対して答えたのだった。
「将来最も三公の座に近いとまで言われている」
「袁紹殿も曹操殿も三公は無理か」
「少なくとも家柄はない」
それはないというのだった。
「袁紹殿はその袁家の長老達から見れば傍流だ。曹操殿は朝廷の清流派からは疎まれている」
どちらも痛い場所があるのだ。それも彼女達にとっては致命的なものだ。
「実力で手に入れるしかない。しかもかなりのだ」
「何かそれを聞くとなのだ」
張飛の顔がうなだれたものになっていた。
「二人共気の毒なのだ。けれど」
「けれど？」
「あまり仕えたいとは思わないのだ」
こう言うのだった。
「何か危ういのだ。それが怖いのだ」
「そうだな。曹操殿も袁紹殿も我々には合わないな」
関羽もそのことは感じ取っていた。
「やはり我々は暫くの間このまま武者修行を続けるべきか」

「見聞を広めるのもいいじゃない」
舞はあえて気楽に述べた。
「この世界も結構楽しいしね」
「そうだな。仕えるにしろ戦うにしろだ」
キングもあえて明るく言ってみせた。
「楽しまなければ何にもなりはしない」
「それでその袁術さんですけれど」
香澄は彼女のことについて問うた。
「袁家の嫡流で苦労知らずなのですか」
「そうだ。結論としてはそうだ」
まさにその通りだと答える趙雲だった。
「その結果歌や踊りに夢中で政を省みていない」
「それってまずいわよね」
「ええ、そうですよね」
それを聞いた舞とナコルルがそれぞれ言う。
「もうそれだけでね」
「危ない雰囲気だ」
「曹操殿や袁紹殿はまず政治を見られる」
それが彼女達である。
「しかし袁術殿はそういったことにしか興味がない」
「ではこの州は危ないな」
関羽はここまで聞いてこう述べた。
「まだ幼い方のようだしな」
「どうなるかはわからん」
趙雲はこう断りもした。
「しかし北の四州や中原の二州に比べると遥かに危うい」
「そうですね、本当に」
ナコルルがそれに頷いてだった。そうしながら森の中に入った。
森の中に入るとすぐに霧に包まれる。それはかなり深かった。
「何だこの霧は」

「かなり深いですね」
馬岱が関羽に対して応える。
「はぐれないようにしないと」
「そうだな・・・・・むっ！？」
ここで関羽は足を踏み外してしまった。そのままずり落ちていった。そこは急な坂道だった。ほぼ直角の浅い崖と言ってもいい場所だった。
「愛紗！」
「大丈夫ですか！？」
「あ、ああ」
霧の中である。何とか関羽の言葉が聞こえた。
「皆気をつけろ。急に坂になっている」
「それで怪我はないですか？」
「いや、それは」
馬岱の問いにまずは隠そうと思った。しかしそれは言ったその瞬間に左足に感じた鈍い痛みがそれをさせなかった。正直に言った方が仲間達の迷惑にならないと判断したのだ。
「しまった」
「骨折したのだ！？」
「そこまではないと思うが」
自分のところに下りてきた張飛に対して答える。霧の中でうずくまりながらこらえる顔をしている。
「だが。少しな」
「捻挫してしまったか」
「そうだ」
こう趙雲に答える。

# 第十一話　孔明、世に出るのことその四

「どうやらな」
「それは大変なのだ」
それを聞いた張飛はすぐに動いた。そしてである。
そのまますぐに関羽をおぶった。そのまま歩きだす。
「鈴々がおぶるのだ。大丈夫なのだ」
「いいのか？」
「いいのだ。愛紗は鈴々のお姉さんなのだ」
こう言ってであった。
「だから気にすることはないのだ」
「済まないな」
「だからそんな言葉はいいのだ。では行くのだ」
「そうだよな。まずはこの森を出ような」
馬超がここで言った。
「このままここにいてもまた誰か怪我するだけだからな」
「そうだよね。じゃあ鈴々ちゃん」
馬岱は関羽をおぶる張飛に対して言った。
「行こう、この森を出よう」
「わかったのだ」
こう話して先に進む一行だった。そして森を出るとだ。向こうの山の頂きに家が見えた。静かな大きい屋敷である。
「民家だね」
「あそこならお薬があるかも」
キングと舞がその屋敷を見て言った。
「それなら今から行くか」
「あそこまでね」
「はい、それがいいと思います」
ナコルルも二人の言葉に対して賛成して述べた。

「このままですと関羽さんの足も治りませんし」
「よし、ではあの屋敷に行こう」
趙雲も言った。
「あそこにな」
「それでナコルルさん」
「はい」
ナコルルは今度は香澄の言葉に応えた。
「少し見てくれますか？」
「わかりました。ママハハ」
右肩に停まっているママハハに声をかけてであった。
そのうえでママハハを飛ばしてその屋敷を見た。その結果山賊やそういった類のアジトではないことはわかった。そこにいたのは。
「女の子がいるだけらしいです」
右肩に戻ってきたママハハの言葉を耳元で聞いてからの言葉だった。
「どうやら」
「女の子だけ！？」
「それだけなの」
「はい、そして奇麗な女の人もいるそうです」
こう馬超と舞に答えたのだった。
「行かれますか？」
「仙人なのでしょうか」
香澄はナコルルの話を聞いてまずはこう思った。
「そしてそのお弟子さんでしょうか」
「有り得るな。しかし仙人なら余計に好都合だ」
趙雲はその話を聞いて述べた。
「では行くとするか」
「はい、それじゃあ」
「今から」
ナコルルと香澄が頷く。こうして一同はその山の頂にある屋敷に

向かった。
門の前に来て声をかける。
「誰かいないのだ？」
「すいません、おられますか？」
関羽をおぶっている張飛と香澄が言った。
「よかったら御願いするのだ」
「怪我人がいます」
「はい？」
それに応えて出て来たのは一人の少女だった。淡いピンクのワンピースの上着に青いミニスカートはどちらもひらひらとしている。紫のケープにも似た羽織っている服の淵にも白いフリルがある。ストッキングも白だ。首筋の鈴が可愛らしい。頭には緑のリボンがある紫のベレー帽がある。
金髪をショートにしており幼い顔立ちをしている。しかしその顔は楚々としておりまだ幼いながらも賢そうな印象を与える。気弱そうであるがその青い目の光も実にいいものである。
小柄でまだほんの少女である。その少女が一行の前に出て来たのだ。
「はわわ、皆さん随分多いですね」
「何だかんだで増えたのだ」
張飛がこう話したのだった。

# 第十一話　孔明、世に出るのことその五

「それで怪我人がいるのだ」
「怪我人がいるのですか」
「はい、それでなのですが」
今度はナコルルが話した。
「よかったらお薬を」
「少し待って下さい」
少女は一同にまずはこう告げた。
「先生を御呼びしますので」
「先生？」
「まさか仙人の？」
「あっ、仙人ではないです」
少女はそれは否定したのだった。
「仙術も学んでますけれど」
「仙術を学んでいるのに仙人じゃないんですか」
「うん、そうだよ」
馬岱が香澄に話した。
「こっちの世界じゃね。皆普通に勉強してるよ」
「そうなのね」
「そうよ。だから気にしないで」
また香澄に話す馬岱だった。
「そういうものだから」
「わかったわ。それならね」
「それじゃあ」
こうして話をしていってだ。一同はその先生の場所に案内されることになった。すぐに豊かな濃褐色の髪の妙齢の美女の前に案内された。落ち着いた佇まいの知的な美女である。
「そうですか。お連れの方が怪我を」

「申し訳ない」
その関羽が申し訳ない声で美女に応えた。今は椅子に座らせられている。
「こんなことになってしまって」
「いえ、怪我は付き物です」
だが美女はこう関羽に対して話した。
「ですからそれは」
「そう言ってくれるのか」
「それよりもです」
美女はさらに言ってきた。
「その怪我を早く治療しなければなりませんね」
「うむ、それだが」
「暫くこの屋敷に留まって下さい」
美女は一行にこう申し出てきた。
「薬草を用意しますので」
「いいのか、それは」
「そちらにも迷惑が」
「いえ、これも縁です」
微笑んでの言葉であった。
「それで私の名前ですが」
「はい」
「そういえば貴女の御名前ですが」
「何というのだ？」
一同はここではじめて美女の名前を問うた。
そして美女はだ。その問いに答えたのだった。
「私の名前は水鏡といいます」
「水鏡ですか」
「それが御名前ですか」
「司馬徽というのですがこう号しています」
こう一同に対して話す。

「水鏡と呼んで下さい」
「わかった、それでは」
「その様に」
「そしてです」
その水鏡の言葉である。
「あの娘の名前は諸葛亮といいます」
「諸葛亮」
「それがあの娘の名前なのか」
「字は孔明です」
水鏡は少女、諸葛亮の字まで話した。
「よければ孔明と呼んであげて下さい」
「わかりました」
「それでは」
「ではまずは夕食を」
水鏡は次に夕食を誘ってきた。
「御一緒しましょう」
「はい、それじゃあ」
「今から」
こうしてであった。全員でその夕食となった。円卓に出されたその料理は見事なものだった。量だけでなくその種類や調理具合もである。

# 第十一話　孔明、世に出るのことその六

「ううむ、これはかなり」
「凄いものだな」
舞と趙雲がその料理を見てそれぞれ言う。
「まさかこんなものが出るなんて」
「しかもメンマもだ」
趙雲はそのメンマを見ていた。ラーメンにあるそのメンマをだ。
「かなり見事なものだな」
「全部この娘が作ったんですよ」
水鏡が隣に座る孔明を左手で指し示しながら述べた。
「お料理も得意でして」
「いえ、私はそんな」
だが孔明は謙遜して言うのだった。
「ただ。先生の本通りに」
「いや、これはかなり」
「美味しいですよ」
だがキングと香澄がそれを食べながら言う。
「私は野菜料理には五月蝿いがな」
「ええ、かなりですよね」
「私お餅大好きなのよ」
舞はそれを笑顔で食べていた。
「いい感じね、このお餅も」
「そういえば舞はお餅好きだな」
関羽もこのことに気付いた。
「特に煮たものがな」
「ええ、お雑煮好きよ」
実際にそうだと答える舞だった。
「おせち料理作ることが趣味だしね」

「おせち料理は日本のお正月に食べる料理です」
同じ日本人の香澄が皆に説明する。
「舞さんはそれが大好きなんですね」
「お正月大好きよ」
また話す舞だった。
「まあそうじゃなくても作るけれどね、おせちはね」
「美味しいんだ、おせちって」
「何かそれも食べたくなったね」
馬超と馬岱がそれを聞いて言った。
「今度落ち着いたらな」
「食べてみたいよね」
「おせちも興味あるけれどこれもなのだ」
張飛は今食べているその料理に専念していた。
「この味、最高なのだ」
「ほら、がっつくな」
横にいる関羽が張飛を注意する。
「慌てなくても食べ物は逃げないからな」
「それはわかってるのだ」
「なら落ち着いて食べろ」
関羽はこう注意するのだった。
「いいな、落ち着いてだ」
「けれどこの料理美味しいのだ」
張飛の言葉はいささか言い訳めいていた。
「美味しいものは幾らでも食べたいのだ」
「そういえば鈴々って料理できるの？」
馬岱がここで張飛に問うた。
「そっちはどうなの？」
「鈴々だって料理はできるのだ」
すぐにむっとした顔で返したのだった。
「馬鹿にするななのだ」

「それで何を作れるの？」
「色々あるのだ」
一応こう言いはした。
「お握りにお茶漬けに」
「それって料理か？」
馬超がそこまで聞いて冷静に突っ込みを入れた。
「あたしだって一応それ位はできるぞ」
「だからそれが鈴々の料理なのだ」
まだ言うのだった。右手を拳にして真剣に離す。
「何処が悪いのだ？」
「悪くはないけれどな」
馬超はそれはいいとした。
「あたしだって同じだしな」
「けれどそれって料理じゃないから」
馬岱はこう突っ込みを入れた。
「孔明ちゃんのはちゃんとしたお料理だけれどね」
「そうだな。全く、御前ときたら」
関羽も隣にいる張飛を見て困ったように笑った。
「いつもそんなのだからな」
「何か悪いのだ？」
「悪くはない」
それは関羽も否定しなかった。
「しかし孔明殿とは全く違うな」
「こいつとなのだ？」
張飛はむっとした顔で孔明を見て述べた。

# 第十一話　孔明、世に出るのことその七

「こいつと鈴々は違うのだ」
「それはそうだがな」
それを言ってもだった。何か面白くなくなった張飛だった。そしてである。
怪我をしている関羽は寝巻きになってベッドに寝かされた。その彼女の側には水鏡がいる。そして孔明もいた。そのうえで怪我をした足に包帯を巻いていた。
「これで後は」
「後は？」
「サロンパ草を使えば問題ありませんね」
足も吊っている。その関羽への言葉だ。
「それで完治します」
「サロンパ草？」
「はい、ここから少し行った場所にありまして」
その薬草の話もする水鏡だった。
「今は屋敷にはありませんけれど」
「私が取って来ます」
孔明が自分から名乗り出た。
「明日にでも」
「けれどあの場所は」
「大丈夫です」
師匠にも笑顔で言うのだった。
「私いけますから」
「そう。だったら御願いするわね」
「はい」
にこりと笑って応える。水鏡はその彼女に対してまた告げた。
「それじゃあお風呂ね」

「はい、入らせてもらいます」
「あっ、愛紗」
ここで張飛の声が聞こえてきた。
「今あがったのだ」
「そうか・・・・・いや待て」
関羽はその張飛の姿を見て顔を顰めさせた。ライトイエローのショーツに同じ色のタンクトップだ。かなり無防備な姿で部屋に入って来たのだ。頭をタオルで拭きながら。
「何だその格好は」
「悪いのだ？」
「ここは人の家だぞ」
ベッドの中から彼女に顔を向けての言葉だった。
「それでそんな格好で」
「ああ、いいのよ」
しかしそれはいいという水鏡だった。
「そういうことは。くつろいでくれたらいいから」
「しかし」
「それはそうと関羽さん」
逆に関羽に声をかけてきた。
「貴女はどうするのかしら」
「私ですか」
「そうよ。お風呂は無理よね」
「はい、それは」
「だったらどうするかよね」
「それならなのだ」
張飛がここで出て来て言う。
「鈴々が入れるからいいのだ」
「いえ、それには及びません」
しかしここで孔明が言ってきた。
「私が拭かせてもらいますので」

「身体をか」
「はい、そうです」
笑顔に関羽に応えての言葉だった。
「ですから」
「そうか。それなら」
関羽は孔明の言葉を聞いてだ。そのうえで微笑んで言うのだった。
「御願いできるか」
「はい、それでは」
こうしてであった。孔明は関羽の身体を布で拭きはじめた。白い豊かな裸身が露わになる。張飛はその状況を見てあまり面白くなさそうな顔になっていた。
そして翌朝である。関羽のところに最初に来た張飛だが。まずは彼女に挨拶をした。
「おはようなのだ」
「ああ、おはよう」
笑顔で応える関羽だった。彼女も起きていた。
そのうえで挨拶をした。張飛似顔を向けていた。
「元気そうだな」
「鈴々はいつも元気なのだ」
明るい笑顔で関羽に応える。
「じゃあ今から御飯なのだ」
「ああ、それではな」
「鈴々がおぶっていくのだ」
そうするというのであった。

# 第十一話　孔明、世に出るのことその八

「じゃあ今から」
「悪いな」
「関羽さんおはようございます」
だがここで、だった。孔明がやって来た。そのうえで彼女も挨拶してきたのである。
「お怪我の方はどうですか？」
「ああ、随分楽になった」
その孔明に微笑みを向けての言葉だった。
「どうも済まないな」
「いえ、それではですね」
「ああ、それでは？」
「朝御飯ですけれど」
「鈴々がおぶって連れて行くからいいのだ」
「いえ、これがあります」
こう言って出してきたものは車椅子だった。板と車を合わせて作ったものである。
「これに乗って行けば楽ですよ」
「これは」
関羽もその車椅子を見て思わず目を丸くさせた。その切れ長の目が丸くなっている。
「孔明殿が作られたのか」
「はい、そうです」
「凄いな。発明もできるのか」
孔明のその知力に気付いたのである。
「貴殿は」
「いえ、私はただ」
「いや、これはかなりのものだ」

謙遜する彼女に対しての言葉だ。
「そうか。凄いことだな」
「はあ」
「それでこれを使ってか」
「おトイレにもこれで簡単に行けますよ」
孔明は用足しの話もした。
「ですから何かあったら遠慮なく使って下さいね」
「済まないな、本当に」
「いえいえ。それじゃあ今からいきましょう」
こう言って関羽をその車椅子に乗せてであった。彼女を食堂まで連れていく。一人残された張飛はまた不機嫌な顔になった。またしてもであった。
食事が終わり孔明は外で掃除をはじめた。その時もだった。
「おいおい、あの本ってよ」
「そうだな。論語だな」
趙雲が馬超に対して答えた。二人も彼女を見ているのだ。
「あれはな」
「論語なんて読んでるのかよ」
「貴殿は読んだことがあるか？」
「あたしはああいうの苦手なんだよな」
馬超は苦笑いで応えた。
「兵法書は読んでるけれどな」
「ふむ、やはりな」
「やはりってわかってたのかよ」
「貴殿にはああした本は向かない」
このことを本人にも言った。
「やはり兵法が一番合うな」
「ああ。そういえばあんたはどうなんだ？」
「読むことは読む」
趙雲はこう答えた。

「一応はな」
「そうか。あんた凄いな」
「しかしやはり一番合っているのはだ」
「兵法だっていうんだな」
「そうだ、それに槍だな」
彼女にしても武人だった。明らかに孔明とは違っていた。
関羽も部屋の窓からその孔明を見てだ。こう言うのだった。
「孔明殿は凄いですね」
「あら、そうかしら」
「あの歳であんなにしっかりして」
こう言うのである。その掃除の合間に書を読む彼女を見てだ。
「うちの鈴々とはえらい違いです」
「そうね。娘さんとはね」
「えっ！？」
今の水鏡の言葉には焦って顔を向けた。
「今何と」
「鈴々ちゃんのことだけれど」
「あの、私はまだ」
「随分と早い出産だったのね」
また言う水鏡だった。

# 第十一話　孔明、世に出るのことその九

「お相手は誰かしら。今もお元気かしら」
「あの、鈴々はですね」
「鈴々ちゃんは？」
「娘ではありません。妹です」
焦りきって顔を真っ赤にしての言葉だった。
「血はつながってませんが妹です」
「そうだったの」
「はい、大体私はですね」
顔を真っ赤にしながらの言葉が続く。
「そうしたこともまだですから」
「あら、それもなの」
「そうです。同性も異性もありません」
それも言うのであった。
「全く。何でそんなことに」
「いえ、あまりにも仲がよかったから」
水鏡は温かい笑顔で応えた。
「それで鈴々ちゃんだけれど」
「困った奴です。孔明殿とは全く違います」
「あら、鈴々ちゃんはいい娘よ」
水鏡はその温かい笑顔で関羽に返す。
「明るくて天真爛漫でね」
「そうでしょうか」
「朱里、あの娘はね」
孔明のことであった。
「幼くして両親と死に別れて孤児になって」
「そうだったのですか」
「姉妹とも別れて。それで私のところに預けられたの」

窓から見える孔明を見ながらの話だった。
「あの娘がしっかりしているって言ったわね」
「はい」
「それはそうならざるを得ずしてなったものなのよ」
「ならざると得ずしてですか」
「ええ、そうなのよ」
孔明を見る目は温かい。だが同時に悲しいものも見ていた。
「あの娘はね」
「そういえば鈴々も」
関羽は張飛のことも思い出した。
「孤児で。それで」
「そうね。誰もがそうしたことを抱えているのよ」
それも話すのだった。
「あの娘も鈴々ちゃんもね」
「そうなのですか」
「ええ。それでも鈴々ちゃんは天真爛漫よね」
「確かに」
「そうした状況で明るくなれるのは凄いことよ」
「言われてみれば」
それがわかった関羽だった。
「そうですね」
「そうよ。それでだけれど」
水鏡は言葉を変えてきた。
「暫くしたらあの娘にサロンパ草を持って来てもらうから」
「はい」
「それを使えばもう大丈夫よ」
「有り難うございます。それでは」
こんな話をしていた。そしてその孔明が山にまで薬草を採りに行っていた。しかしその後ろにであった。
「ねえ、鈴々ちゃん」

「何なのだ？」
「何で孔明ちゃんの後をつけていくの？」
馬岱が問うのだった。二人は一緒である。
「お散歩じゃないの？」
「散歩じゃないのだ」
それはしっかりと言うのであった。
「あのチビッ娘にこれ以上好きにはさせないのだ」
「好きにって？」
「そうなのだ。好きにはやらせないのだ」
木の陰に隠れて進みながらだ。孔明の姿を見ていた。
「何があってもなのだ」
「それで具体的に何をするの？」
「あいつより先にそのサロンパ草とやらを手に入れてやるのだ」
そうするというのだ。
「そう、その為に」
「あの娘が手に入れたら強奪するんだね」
馬岱が明るく話した。
「それだと確実だね」
「そうなのだ・・・・・って待つのだ」
今の言葉には速攻で突っ込みを入れた張飛だった。
「鈴々はそんなことはしないのだ」
「そうなの」
「そうなのだ、そんな卑怯なことは絶対にしないのだ」
このことはくれぐれも言うのであった。

# 第十一話　孔明、世に出るのことその十

「それでもなのだ。薬草は手に入れてみせるのだ」
「頑張ってね」
「頑張るのだ。しかし蒲公英」
張飛から馬岱に顔を向けての言葉だ。
「何で鈴々についてきているのだ？」
このことを問うのであった。
「それはどうしてなのだ？」
「だって面白そうだから」
無邪気な笑顔での返答だった。
「鈴々ちゃんと一緒にいたらね」
「鈴々は面白いのだ？」
「とてもね」
笑顔は無邪気なままである。
「悪いことしないし」
「鈴々は卑怯なことはしないのだ」
このことは眉をしかめさせながらはっきりと言った。
「けれど薬草は絶対に手に入れるのだ」
「わかったよ。それじゃあね」
「行くのだ」
こうしてであった。孔明を追う。その時にだ。
「きゃっ」
「あっ、こけたよ」
「うん、こけたのだ」
張飛は馬岱の言葉に応えた。孔明は進みながらこけてしまったのだ。
それを見てだ。二人は言い合う。
「何もないところでこけたのだ」

「運動神経は鈍いみたいなのね」
「鈴々とは大違いなのだ」
こう言って笑いもしている。
「よくそんなので薬草を手に入れようというものなのだ」
「けれどさ」
ここで馬岱はまた言ってきた。
ここに来るまでの箸だけれど」
「どうしたのだ？」
「ここに来るまでの橋だけれど」
「あのボロボロの橋なのだ」
「そう、あのあちこち壊れてる橋ね」
二人はその橋の話をはじめた。
「私達も通るのに用心したじゃない」
「それはその通りなのだ」
「けれどあの娘一人で通ってたよ」
「一人で。そういえばなのだ」
「確かに運動神経はないけれど勇気はあるみたいだよ」
馬岱はそう見ていた。
「それもかなりね」
「それがどうしたのだ？」
「性格はいいみたいだね」
馬岱はそれを見ていた。
「それはどうかな」
「そんなことは知らないのだ」
それを言われて余計不機嫌になる張飛だった。
「あいつがいい奴でも悪い奴でも鈴々はサロンパ草を手に入れるのだ」
「それはいいけれどね。あっ」
馬岱は今度は前に岩山を見た。白い石の聳え立つ様な岩山である。
その上の方に白い花が見える。

「あれよね」
「あれが花なのだ？」
「多分ね。そうだと思うよ」
こう話すのだった。
「それじゃあ手に入れに行く？」
「行きたいけれど行けないのだ」
張飛は不機嫌な顔で答えた。今も木の陰に隠れて様子を見ている。
「あいつに見つかってしまうのだ」
「それはまずいんだね」
「こっそりと近寄って抜け駆けするのだ。それに」
「それに？」
「あいつにあの薬草を手に入れることはできないのだ」
そう見ているのだった。
「あんな鈍い奴にあんな山を登れる筈がないのだ」
「そうだね。けれどさ」
「けれど？」
「危ないよ、あの娘」
馬岱は少し心配する目で見ていた。

# 第十一話　孔明、世に出るのことその十一

「あの娘じゃあの岩山を登ったらね」
「それは確かなのだ」
「けれど登るね」
馬岱は孔明を冷静に見て述べた。
「このままね」
「だったら下手をしたら」
「大丈夫じゃないね」
また言うのであった、
「落ちるかもね」
「そ、それはよくないのだ」
落ちるという言葉を聞くとだった。張飛は狼狽しだした。
そうしてである。はらはらしながら孔明を見だした。そしてであった。
孔明は岩山を登りはじめた。足場を何とか踏みながらそのうえであった。何とか上に上にと登っていく。だがそれはかなりたどたどしい。
時折足場を踏み外しそうになる。その度に張飛も真っ青になる。
「あいつ危な過ぎるのだ」
「そうだね。薬草に近付いているけれど」
「本当に落ちるのだ」
張飛は心から心配していた。
「けれど花はもう少しなのだ」
「もう少しだけれど帰りもあるし」
「とんでもないことなのだ。無謀過ぎるのだ」
そしてであった。孔明は何とかその花まで辿り着こうとしていた。
しかしであった。
ここで遂に完全に踏み外してしまった。そうしてだった。

「きゃっ！」
「危ないっ！」
「くっ！」
馬岱も思わず出ようとする。その前にであった。
張飛はそれよりも前に出ていた。そして落ちる孔明を掴んだ。何とか助けたのである。
「えっ、無事！？」
「無茶はするななのだ！」
張飛は両手に抱えている孔明に対して叫んだ。
「下手をしなくても死ぬところだったのだ！」
「す、すいません」
「怪我なかった？」
ここで馬岱も出て来て孔明に問うてきた。
「危ないところだったけれどね」
「蒲公英、こいつは任せるのだ」
張飛は馬岱に顔を向けて声をかけた。
「薬草は鈴々が採って来るのだ」
「そうなの」
「そうなのだ、では行って来るのだ」
孔明を立たせてすぐにであった。猿の如く岩山を登っていってそうしてだった。薬草を何なく手に入れてしまったのであった。
「これでいいのだ」
「有り難うございます」
「礼なんていいのだ」
岩山から飛び降りての言葉だった。その動きは孔明とは全く違っていた。
「この薬草で愛紗の怪我はなおると聞いているのだ」
「はい、そうです」
「それならすぐに戻るのだ」
張飛は今は多くは言おうとしなかった。

「愛紗の為なのだ」
「はい、それでは」
「今は」
こうしてであった。三人は帰路についた。ここで、であった。
夕暮れになろうとしていた。その橋のところに来た。
橋はあちこちが壊れ穴の様になっていた。吊り橋でありそれがかなり危険な状況だった。
「手を貸すのだ」
「はい？」
その橋の前でだ。張飛は孔明に顔を向けて言ってきたのだった。
「御前一人だと危なくて見ていられないのだ」
「あの、いいんですか？」
「あんな運動神経で岩山なんて登るななのだ」
「そういえばどうしてここに？」
孔明もここで気付いた。落ち着きを取り戻しての言葉だ。
「おられたんですか？」
「ああ、それだけれどね」
馬岱が笑いながら話してきた。
「ずっと後からつけていたんだよ」
「後から？」
「そうだよ。鈴々ちゃんったら途中から孔明ちゃんのこと凄く心配してね」
「余計なことは言わなくていいのだ」
張飛の頭の虎が怒っている。
「鈴々はそんなことはないのだ。笑ってやっていたのだ」
「そうだよ。心配し過ぎて笑っていたのよ」
あえてこう言ってみせた馬岱だった。

# 第十一話　孔明、世に出るのことその十二

「凄かったんだから」
「だから余計なことは言うななのだ」
また怒る張飛だった。
「鈴々はそんな奴じゃないのだ」
「そうそう」
そんな話をしながらだった。張飛は孔明の手を掴んでそのうえで屋敷に帰った。そして次の日であった。
「もう大丈夫です」
「サロンパ草はどうでした？」
「凄い効き目です」
見れば関羽はもう着替えていた。あのミニスカートにである。
そしてしっかりと立っていた。その右手にはあの得物もある。
「おかげでもう完全に」
「そうなの。それは何よりよ」
「お世話になりました」
そのうえでの言葉だった。
「おかげで」
「ええ。それでだけれど」
ここで水鏡は関羽に対して言うのだった。
「一つ我儘を聞いてくれるかしら」
「我儘？」
「ええ、そうなの」
こう話すのである。
「実はあの娘を」
「孔明殿を？」
「貴女達と一緒に旅に連れて行ってくれるかしら」
関羽に対しての言葉だ。

「貴女達とね」
「旅にですか」
「あの娘も前から言っていたし」
孔明もだというのである。
「それに」
「それに？」
「あの娘は羽ばたくべきだから」
こうも言うのであった。
「ここから。世の中にね」
「世の中にですか」
「見聞を広めながら。その為にも」
「私達と共に」
「一人で行くのはあまりにも危険だし」
そのことも踏まえていたのであった。
「あの娘は確かに賢明だけれど力はないわ」
「非力なのは間違いありませんね」
「それで一人旅はとても無理。特に今の様な戦乱の世では」
「だからこそ我々と共に」
「ええ、御願いするわ」
あらためて言うのであった。
「貴女達と一緒に。いいかしら」
「はい」
関羽の返答は快諾であった。
「仲間達に話してみてからですが旅は多い方が楽しいですし」
「そう。だったら御願いするわね」
「孔明殿の知恵、頼りにさせてもらいます」
こうも言うのであった。
「我々としても」
「あの娘は若しかしたら」
水鏡はふと言うのであった。

「江南の美周郎に匹敵、いやそれ以上の軍師になれるかもね」
「あの江南のですか」
「ええ、これは贔屓かも知れないけれど」
言いながら少し苦笑いにもなる水鏡だった。
「けれど。大きく育ってもらいたいわ」
「その為にもですね」
「ええ。御願いするわ」
こうして孔明は一行と共に旅に出ることになった。屋敷の門のところで水鏡と手を振り合う。そうしてそのうえで今果てしない旅をはじめるのであった。
「では行くか」
「はい」
関羽の言葉にも頷いてみせる。
「それじゃあ」
「戦いのことは任せてくれ」
キングがその孔明に言う。
「私達がやらせてもらうからな」
「けれど頭脳労働は頼むな」
馬超の言葉だ。
「あたしそういうのは苦手だからな」
「けれど。参謀が入ったのは有り難いですね」
香澄は素直に孔明のその知力に期待していた。

# 第十一話　孔明、世に出るのことその十三

「孔明ちゃんの知識と知恵はかなり大きいですよ」
「あの」
その孔明の言葉だ。
「皆さんと御一緒ですし。これからは」
「これからは？」
「真名で呼んで下さい」
こう一同に言うのであった。
「これからのことは」
「真名で？」
「それでなのか」
「はい、それで御願いします」
こう言うのだった。
「真名で」
「わかった。では真名は何というのだ？」
趙雲が問うてみせた。
「貴殿の真名は」
「朱里です」
孔明は自分の真名を名乗った。
「宜しく御願いしますね」
「わかったのだ」
張飛がその言葉に顔を向けないながらも最初に応えた。
「では鈴々も呼ぶといいうのだ」
「最初から言ってるではないか」
関羽が突っ込みを入れた。
「だから真名を人前で言うのはな」
「いいのだ。それでも呼ぶのだ」
孔明に対してあくまでこう言うのだった。

「いいな。それでなのだ」
「はい、鈴々ちゃん」
孔明はにこりと笑って張飛のその言葉に返した。
「これから御願いしますね」
「わかった。では朱里」
「はい」
「行くのだ。先に」
「わかりました」
二人は隣同士だった。そしてここでナコルルが一同に問うた。
「これから何処に行きますか？」
「そうだな。揚州に行くか」
まずはこう答えた関羽だった。
「しかしその前に曹操殿の領地を通ることになるな」
「曹操さんのですね」
「うむ。だが翠よ」
関羽はここで馬超に顔を向けて問うた。
「わだかまりはあると思うが」
「もう事実がわかったからいいさ」
馬超は微笑んで返した。
「あっちはどう思ってるかわからないけれどな」
「安心しろ。曹操殿はそんなことを気にされる方ではない」
「そうか」
「そうさ。全くな」
「そうか。ならいい」
関羽も馬超の今の言葉を聞いて納得した。
「では行くとするか」
「そうね。曹操ねえ」
舞がその名前を聞いて考える顔を見せていた。
「二つの州を治めている大きな領主さんだったわね」
「袁紹殿の次だ」

また趙雲が話した。
「もっとも孫策殿も広い揚州を治めているがな」
「揚州にも行くがそれでどうだ」
また言う関羽だった。
「長江を見てみたい」
「はい、それでいいと思います」
孔明が最初に関羽に対して答えた。
「見てみないとわからないこともありますから」
「そうですね。それじゃあ曹操さんの領地からその揚州ですね」
香澄が言ってきた。
「そういう道順ですね」
「どんな場所かな」
馬岱は純粋に揚州に期待していた。
「一体」
「それも見るのだ。だから今から行くのだ」
こうしてであった。一行は東に向かった。東にもまた出会いがあるのだった。

第十一話　完

２０１０・４・２８

# 第十二話　劉備、先祖伝来の宝剣を手放すのことその一

第十二話　劉備、先祖伝来の宝剣を手放すのこと

赤とピンクの中間色の長い髪にだ。優しい青い目をしている。細い眉も垂れていてそれもまた優しい印象を見る者に与える顔をしている。口元は常に微笑んでいる。

顔立ち全てが優しくだ。しかも整っている。質素な薄い草色の上着と膝までのスカートを身に着けている。かなり大きな胸が目立つ。

この少女は今川辺の港町の中にいた。そこで商人達と話をしていた。あまり大きくはない港町であるがそれでも行き交う人はそれなりにいる。

「あの、それじゃあお茶は」

「普通のお茶はあるんだがね」

商人がこう彼女に返していた。

「そのお茶はちょっとここじゃね」

「そうですか。ないんですか」

「この幽州は最近ね」

商人は曇った顔で少女に言うのだった。

「あれじゃないか。太守様がいなくて」

「あれっ、いないんですか」

「そうだよ、いないんだよ」

公孫賛のことは知らないのだった。

「実は」

「そうだったんですか」

「そうなんだよな。青州とかは袁紹様が領主だけれど」

「最近涼州にも出られているそうですね」

「そうそう。四つの州の御領主様なんだよ」

袁紹のことは知られているのだった。

「ところがね。この幽州は僻地だしねえ」
「そうですよね。異民族もいますし」
「領主様も不在ときた。景気がよくなる筈がないさ」
「困ったことですね」
「袁紹様が来てくれれば有り難いのじゃがな」
彼女は政治家としては評判がよかった。四つの州を万全にしていることが非常によく知られていた。それで彼女が来ることが望まれていたのだ。
しかしであった。それについてはこう言われるのだった。
「もっともじゃ。その袁紹様もお忙しくてじゃ」
「幽州はまで、なんですね」
「その通りじゃ。匈奴やら何やらを下に収めたりと大変じゃからな」
「それじゃあ当分は」
「うむ、誰もおらんままじゃ。それでもそこそこ上手くはいっておるがのう」
やはり公孫賛のことは忘れているのだった。彼女の政治はそれ程悪くはないガだ。それでも完全に忘れられてしまっているのだった。
しかしだ。少女はここで言うのだった。
「あれ、白々ちゃんは？」
右手の人差し指を唇に当てて青い目を上にさせての言葉だった。
「何処に行ったのかな。北の方の領主様になったって聞いたけれど」
「まあ今はそのお茶はないのう」
「そうですか」
「黄金茶はな。悪いがじゃ」
また言う商人だった。
「他のお茶では駄目なのじゃな」
「すいません、どうしてもお母様に飲んでもらいたくて」
「しかしないものはない」
商人の言葉は変わらない。
「そういうことじゃ」

「わかりました」
これで話は終わった。少女は商人と別れ港町も後にした。そして暫く山道を歩いているとだった。茶屋を見つけたのでそこに入った。するとだ。
金髪をリーゼントにさせた黒い目の精悍な男がいた。逞しい身体をしておりオレンジの道着に黒い帯とシャツを着ている。足には下駄がある。
もう一人は黒い髪を後ろでくくっている彫のある明るい顔の男だ。黒いシャツにオレンジのベスト、それと白いズボンという格好である。彼も逞しい身体をしている。
最後の一人は長い黒髪を後ろで三つ編みにしている少女だ。青いスパッツに白い道着という格好だ。靴はシューズで黒い目の光が生き生きとしている。
その三人が茶屋の中でだ。それぞれ餅や団子を食べながら話をしていた。
「それでロバート」
「何や？」
その彫のある顔の男が金髪の男の言葉に応えていた。
「どないしたんや？」
「どないしたも何もここは何処なんだ？」
「中国らしいな」
「中国か」
「けどお兄ちゃん」
今度は少女が出て来た。彼女は団子を食べている。
「ここって絶対に現代じゃないよ」
「じゃあ何時なんだ？」
「さあ」
少女は今の兄の問いには首を捻るだけだった。
「何処なんだろうね」
「わからないか」

「昔なのはわかるけれど」
「そやな。食べ物は今と同じみたいやがな」
黒髪の男がこれは言った。

# 第十二話　劉備、先祖伝来の宝剣を手放すのことその二

「焼きそばとか寿司はないのが残念やけれどな」
「ロバート、御前それ好きだな」
「そういうリョウ、御前もホンマ餅好きやな」
ロバートと呼ばれた彼は彼の名前を呼びながら彼が餅を次々に食べていることを指摘した。
「相変わらず」
「餅はいい食べ物だろ」
「まあそやけれどな」
「御前の場合はイタリア人なのに何で焼きそばや寿司なんだ？」
「ええやろ。美味いやろが」
ロバートは顔を少し顰めさせてリョウに言い返した。
「どっちもな」
「それでか」
「和食は最高や。特に大阪のはや」
「っていうかロバートさんって実は大阪人なんじゃないかしら」
少女は首を傾げさせながらこう言うのだった。
「喋り方だってそうだし」
「これはええやん」
ロバートは自分の喋り方について自分で弁護した。
「わい確かに日本好きやしな」
「けれど馴染み過ぎじゃないの？」
「ユリちゃんもそう言うんかいな」
「ちょっと」
ユリと呼ばれた少女も答える。
「やっぱりね」
「わい生粋のイタリア人やで」
「しかし完全に日本人になっているな」6

リョウはまたそれを言った。
「顔以外はな」
「顔も段々日本人になってきてるわよね」
「大阪のそれにな」
こう二人で言うリョウとユリだった。
「ロバートさんって前からそんなところあったし」
「かなりな」
「そやろか」
ロバートは首を傾げさせながら述べた。
「わいはそうは思ってないんやけどな」
「絶対にそうだ」
「そうよ」
二人が突っ込みを入れる。そんなやり取りをしながら店の中にいた。そこにあの少女が来たのだった。
丁度席は満席だった。それで店員から相席でもいいかと言われたのだった。
「それでいいですか？」
「あっ、はい」
特に思うことなく頷いて応えたのだった。
「わかりました。それじゃあ」
「はい、それではそれで」
「御願いします」
背中の荷物を背負ったまま席に向かう。そして席の傍でその荷物を下ろしてから。その話をしている三人に対して声をかけたのだった。
「あの」
「何や？」
ロバートが彼女の言葉に応えた。
「どないしたんや？」
「相席いいですか？」

こう三人に言うのだった。
「よかったら」
「ああ、ええで」
ロバートがすぐに返答を返した。
「そやったらな」
「はい、それでは」
「何か奇麗な娘ね」
ユリはその彼女を見て言った。
「胸も大きいし」
「ユリ、何処を見ているんだ」
リョウは少し呆れた顔でユリに対して告げた。
「一体何を考えているんだ」
「だって。たまたま目に入ったから」
だからだと返すユリだった。
「それでだけれど」
「それでなのか」
「そうよ。それでね」
「ああ、それでか」
「あの」
ユリから少女に声をかけた。そしてだ。

# 第十二話　劉備、先祖伝来の宝剣を手放すのことその三

「貴女この国の人ですよね」
「はい、そうです」
少女はこうユリに対して答えた。
「その通りです」
「そうなのね」
「貴方達は違うんですか？」
「それやけれどな。ここ何処なんや？」
ロバートがいぶかしむ顔で少女に対して問うた。
「それが気になるんやけれどな」
「ここ、ですか」
「そうだ。ここは何処なんだ？」
リョウも少女に対してこのことを問うた。
「一体どんな国なんだ？中国らしいが」
「中国？」
少女は注文したお茶を両手に持ちながら少しきょとんとした顔になった。
「何処ですか、そこは」
「俺達はアメリカから来たんだが」
「知らないかしら、アメリカ」
「アメリカ？」
少女の顔はさらにきょとんとしたものになった。
「はじめて聞く名前ですけれど。国ですか？」
「おい、まさかこの娘」
「そうよね」
リョウとユリがここで顔を見合わせて話をはじめた。
「どうやらアメリカを知らないらしいな」
「中国も知らないの？」

「ここは漢って国ですけれど」
こう話す少女だった。
「それで幽州っていいます」
「ああ、漢かいな」
ロバートがここで頷いた。
「それで幽州なんやな」
「はい、そこです」
「やっぱりめっちゃ昔やな」
ロバートはそれはよくわかった。
「ここは」
「昔？」
「まずわいから名乗るで」
ロバートは自分からそうすることにした。
「わいの名前はロバート＝ガルシアや」
「俺はリョウ＝サカザキ」
「ユリ＝サカザキよ」
後の二人も名乗ってみせた。
「気付いたらこのサウスタウンからこの世界に来ていた」
「これはどうしてなの？」
「あの、ええと」
言われながらきょとんとする少女だった。だが彼女もここで名乗るのだった。
「私は劉備玄徳といいますけれど」
「劉備！？」
「劉備っていったら」
ここから話は本題に入るのだった。三人と劉備はお互いについての話をはじめた。劉備と三人はお店を出てそのうえで道を歩きながら話していた。
その中でだ。リョウがその少女劉備に対して言うのだった。
「そうか、ここはそうした世界か」

「はい、そうなんです」
「わい等の世界とは全然ちゃうな」
ロバートも言う。
「何もかもがやな」
「そうよね。別の世界なのね」
ユリも言う。
「本当にね」
「そうなんですか。それで貴方達はアメリカっていう国から来て」
「ああ、そうなんだ」
答えたのはリョウだった。
「実はな」
「わかりました。それでなんですけれど」
劉備がおっとりした口調で三人に問うた。

# 第十二話　劉備、先祖伝来の宝剣を手放すのことその四

「貴方達はこの国に来てどれ位経つんですか？」
「二週間位ね」
こう答えるユリだった。
「それ位よ」
「二週間ですか」
「路銀は用心棒や山賊退治で稼いでいる」
こう話すリョウだった。
「それで何とかやっているが」
「行くあてがあるかっていうと」
「これがないんやな」
ユリとロバートが答える。
「何か南の方には大きな国があって領主もしっかりしているらしいが」
「私達道もあまりわからないし」
「それで困ってるんや」
三人はそれぞれ劉備に話す。
「とりあえずこれから仕事でも探さないとな」
「ここはそういうのあまりないし」
「どっかないやろか」
「そうですね。道もわからないんですよね」
劉備はこのことも話した。
「それだったら」
「どうしたらいいんだ？」
「それやったら」
「どうしたらいいかしら」
「そうだ、地図だ」
ここで言ったのはリョウだった。

「地図を手に入れればいいんじゃないか」
「あっ、そやな」
「そうよね」
それにロバートとユリも気付いたのだった。
「地図買うたらそれでや」
「充分行けるわよね」
「中国は広いしな」
リョウはこのことも言うのだった。
「そうしたところや地形は一緒らしいけれどな」
「そやな、そやったらや」
「まずは地図を買いましょう」
「地図でしたら」
ここで劉備が言ってきた。
「本屋さんで売ってますよ」
「それじゃあすぐに本屋さんに行って」
「今から」
「そうするか」
三人で話すのだった。そしてだ。
お菓子屋を出てそのうえでさらに先に進む。だがまだ山道である。
その中でだ。リョウは言うのだった。
「それで本屋は何処だ」
「本屋さんですか？」
「そうだ、それは何処にある」
このことを言うのだった。
「山道ばかりだが」
「何処でしょうか」
これが劉備の返答だった。
「一体」
「おい、待ってくれや」
ロバートが速攻で突っ込みを入れた。

「あんたが知らんで何でわい等が知ってるんや」
「そうよね。劉備さんが知らなくてどうして私達が」
「ここから少しいったら街があります」
しかしここで劉備が言った。
「そこに行けば多分」
「あるんだな」
「はい、あります」
こう話すのだった。
「多分ですけれど」
「何か頼りないわね」
ユリはそんな劉備の話を聞いて述べた。
「劉備さん自体がそうだけれど」
「まあそれはいいとしてだ」
「とにかく地図や」
リョウとロバートが言う。
「まずはそれを買ってだ」
「そないしよか」
「それじゃあまずは街ね」
三人はそれぞれ話してだった。劉備と共にその街に向かう。だがだ。

# 第十二話　劉備、先祖伝来の宝剣を手放すのことその五

その前に夜になった。夜は野宿だった。
四人で焚き火を囲んで捕まえた魚を焼きながら話をしている。劉備は三人を驚いた顔で見ながらそのうえで魚を食べつつ言うのだった。
「皆さん凄いですね」
「凄いか？」
「わい等がかいな」
「だってさっき」
彼女が見たものを見ての言葉だった。
「気を使われましたね」
「それか」
「ああ、そのことかいな」
二人もまた魚を食べつつ応える。見れば結構な数の魚達が木に突き刺されそのうえで焚き火で焼かれている。それを食べているのだ。
「あれは俺達の技だ」
「空手やねんや」
「空手？」
「私達の時代の格闘技、いえ武道ね」
ユリが話した。
「それなのよ」
「格闘っていうと」
「つまり戦う為の技だ」
リョウは劉備に簡単に説明した。
「それだな」
「それじゃあ皆さんは武人ですか」
「いや、武人ではない」
「それはちょっとちゃうんや」

リョウとロバートが劉備の今の言葉に答える。
「それとは別にだ」
「また別の。格闘家とか武道家いうてな」
「そういう人達なんですか」
「ああ、俺達の空手は極限流空手という」
「創始者は私達のお父さんなのよ」
ユリはこのことを話した。
「もうね。私達よりも強くて」
「厄介な親父だ」
「自分の正体ばれてへんって思ってたりするしな」
ここで三人はそれぞれ話した。
「蕎麦打ちしたら止まらないし」
「天狗のお面好きだしな」
「そもそも何時まで現役やねんやろな」
「何か凄いお父さんなんですね」
劉備にもこのことはわかった。
「その人って」
「ああ、ひょっとしたら親父もこの世界にいるかも知れない」
「その時は注意してね」
「結構以上に困った人やからな」
多少うんざりした顔で話す三人だった。
「しかも気を使うのもな」
「私達よりずっと凄いのよ」
「ほんまにな」
「気ですか」
劉備はここでそれも思い出した。
「さっき皆さんがお魚を捕まえる時に使ったあれですよね」
「そうだ、それだ」
リョウはまさにそれだと話した。
「さっき俺達は水面にいる魚に拳から気を放ってそれで水面に出し

て捕まえていたな」
「はい」
「あれが気なんや。他にも色々な技に気を込めて使ってるで」
ロバートはこう話す。
「それで戦ったりするんや」
「成程」
「かなり強い技やで」
また話すロバートだった。
「これで熊でも倒せるしね」
「熊もですか」
「俺達の武器はそれだ」
リョウがまた話した。
「これで戦っているという訳だ」
「それじゃあ私のこれと同じですね」
劉備はここで自分の腰にあるその剣を見るのだった。見れば大きさといい形といい装飾といい実に見事なものである。只の剣でないことは一目瞭然だ。

# 第十二話　劉備、先祖伝来の宝剣を手放すのことその六

「この剣と」
「あれっ、そういえば」
ユリがその剣を見て言う。
「劉備さんってかなり立派な剣持ってるわよね」
「はい、これですね」
「それ何なの？」
「宝剣かいな」
ロバートはその剣を見てまた言った。
「それは」
「我が家に伝わる剣です」
「伝家の宝剣か」
今度はリョウが言った。
「それがか」
「我が家は。まあ自称ですけれど」
ここで少し苦笑いになる劉備だった。
「王家の末裔でして。皇族になるんです」
「ああ、そういえばあんた」
「そやな」
ここでリョウとロバートが気付いた様な顔になった。
「名前が劉だな」
「ってことはや」
「はい、何でもそうらしいんです」
こう三人で話すのだった。
「それで御先祖様は随分前の時代の王に任じられていた人で」
「その人から伝わる宝剣か」
「そういうことなのね」
「そうなんです。それで」

「それで？」
ユリの言葉に応える劉備だった。
「何ですか？それでって」
「劉備さんって何か雰囲気が違うのよね」
彼女が言うのはこのことだった。
「それってそういうことから来てたのね」
「そうですか？」
「自分では気付いていないのね」
それをまた言うユリだった。
「成程ね」
「それで剣だが」
リョウがその剣に対して問うた。
「悪い奴に狙われたりしないようにな」
「わい等はそれこそ使う必要も持つ必要もないけれどな」
リョウとロバートは劉備に対してこう話した。
「それでもだ」
「悪い奴には気をつけるんや」
「悪い奴、ですか」
「見たところこの国ってあまり治安よくないしね」
ユリは顔を顰めさせて話した。
「どうもね。あまりね」
「あんたに会うまで随分と山賊にも遭った」
「全部のしてやったけれどな」
「山賊には今まで遭ってないですけれど」
「おい、それは運がいいだけだ」
「そうよ、いいだけよ」
リョウとルリが劉備に話す。
「それじゃあ何時どうなるかわからないわよ」
「はあ」
「特にその剣だ」

リョウはその剣を見てまた言った。
「狙われるからな」
「そんなにですか」
「それは気をつけてくれよ」
「まあとにかくわい等は今は街に行くけれどな」
その先に向かう街だ。そしてだ。
そのまま四人でその場に寝た。それから起きてまた街に向かう。
そこにだった。
やはり本屋があった。そしてだ。
「よし、地図もあるぞ」
「これ買っておこか」
「そうね、何種類かね」
三人はすぐに地図を買いはじめた。しかしだった。
劉備はふと近寄ってきた胡散臭げな男に声をかけられたのであった。
「もし」
「はい？」
「よければですが」
こう言ってきたのである。
「今お金に困っていまして」
「お金にですか」
「家が破産して何もかもなくなり借金に追われています」
こんなことを言う。今にも泣き崩れそうな様子である。
「本当にどうしたらいいのかどうか」
「そんなに困ってるんですか」
「はい、そうなんです」
実際にその場に崩れてみせていた。

# 第十二話　劉備、先祖伝来の宝剣を手放すのことその七

「どうしたらいいのか」
「お金が必要なんですか」
劉備はその男の言葉を聞いているうちに同情を覚えてだ。そうして言うのだった。
「それでしたら」
「それでしたら？」
「これをどうぞ」
こう言ってその宝剣を差し出したのだった。
「これを売ってお金の足しにして下さい」
「宜しいのですか？」
「はい、どうぞ」
本気で心配する顔での言葉だった。
「これを」
「いいのですか」
「私は構いません」
また言う劉備だった。
「ですから貴方が。どうか」
「有り難うございます」
男は差し出してきたその剣を受け取って恭しく述べた。
「それではこれで」
「はい、貴方が助かって下さい」
「すいません、本当に」
こう言って一礼してだった。彼はそのまま何処かに姿を消した。
そしてその彼と入れ替わりになる形で三人が戻って来たのだった。
それぞれの手には地図がある。
「あれっ、劉備さん」
「誰と話してたんや？」

ユリとロバートが彼女に問う。
「何かあったみたいだけれど」
「どないしたんや？」
「はい、実はですね」
天真爛漫そのもので今あったことを三人に話す。三人は彼女の話を聞き終えるとだった。苦い顔になってそうして言うのであった。
「おい、それはな」
「絶対に嘘やで」
「そうよ、怪し過ぎるわよ」
三人は呆れ果てた顔にもなっていた。
「どう考えてもな」
「それ詐欺師か何かやから」
「劉備さんのその剣を見て言ったのよ」
「そうなんですか？」
だが知らぬは当人ばかりあった。きょとんとした顔で返しもしている。
「あの人は」
「ああ、間違いない」
「確実やな」
「よくそんな人に騙されたわね」
こう口々に言うのだった。
「それでどうするんだ？」
「困るやろ」
「困ることは困りますけれど」
劉備の言葉は呑気なままだった。
「けれど大丈夫です」
「どうしてなの？」
「刀も持ってますし」
言いながらその豊かな胸から短刀を出してきた。丁度袖の中にあったのだ。

「護身用ですけれど」
「いや、あれは先祖伝来なんだろう？」
「それでもええんか？」
「はい、大丈夫だと思います」
劉備の言葉は変わらない。
「何とかなります」
「だといいんだがな」
「そうなるかしら」
「それでなんですけれど」
リョウ達の方が心配していた。劉備はその彼等に自分から言ってきた。
「これからですけれど」
「ああ、これから」
「どないするかやな」
「皆さんはどうされるんですか？」
こう三人に問うのだった。

# 第十二話　劉備、先祖伝来の宝剣を手放すのことその八

「地図は手に入りましたけれど」
「そうだな。とりあえずは道場でも開くか」
「どっかでな」
リョウとロバートが話す。
「何処か大きな街でな」
「この幽州はちょっと人が少ないしな」
「しかも寒いし」
ユリはこのことも気にしていた。
「だからここ以外で道場を開きたいけれど」
「道場ですか」
「ああ。それであんたはどうするんだ？」
今度はリョウが劉備に尋ねた。
「これから」
「お茶があればいいんですが」
「お茶？」
「はい、母にお茶を買って帰りたいと思いまして」
にこりと笑っての言葉だった。
「黄金茶という。物凄く美味しいお茶がありまして」
「黄金茶か」
「それってこれちゃうか？」
「そうよね」
ここで三人はあるものを出してきた。それは。
黄金の葉だった。まさしくそれこそはだった。
劉備はそれを見てだ。思わずその目を大きく見開いて言うのだった。
「あっ、これです」
「これか」

「これやったんやな」
「何処で売ってたんですか？」
劉備はその驚いた顔で三人に問う。
「こんな高価なのが。一体何処に」
「ああ、何か青州ってところでな」
「そこで買ったのよ」
リョウとユリが劉備に説明する。
「あそこはかなり賑わっていてな」
「それで買ったんだけれど」
「そこでなんですか」
「ああ。丁度何か張三姉妹っていうアイドルグループか？」
「この時代やと旅芸人やろ」
リョウとロバートはある三人のことも話した。
「その催しがやっていてな」
「そこで手に入ったんやったな」
「あっ、張三姉妹ですか」
劉備はその名前を聞くと顔を晴れやかなものにさせて述べた。
「今大人気の旅芸人ですよね」
「ああ、知ってたんだ」
ユリは劉備の今の言葉を聞いて述べた。
「劉備さんも」
「はい。何か歌も踊りも楽器も凄いらしいですけれど」
「確かにな。バランスはいいな」
「そやな」
リョウとロバートもそれを認める。
「俺達の時代でも充分通用するな」
「日本向けやな」
「そうね。ＣＤとかあったらかなり売れるわよ」
ユリも言う。
「あの三人だと」

「ＣＤ？」
「ああ、俺達の世界の話だ」
「気にせんといてや」
劉備にこのことは話さなかった。話せばそれだけ長くなるし難しい話だと思ったからだ。それでこれ以上のことは言わないのだった。
そしてだ。三人はここでその黄金茶を劉備に対して差し出したのだった。
「ほら、これ」
「あげるで」
「えっ、けれど」
「いいんだよ。今の俺達にはあまり飲む機会がないものだしな」
「そやからええで」
リョウとロバートはにこりと笑って述べた。

# 第十二話　劉備、先祖伝来の宝剣を手放すのことその九

「だからな。是非な」
「受け取ってくれや」
「そうなんですか」
「そうよ。お茶も劉備さんのお母さんが飲んでくれたら喜んでくれるわ」
ユリも温かい笑顔になっている。
「だからね」
「それじゃあ」
三人全員に言われてだ。劉備も受け取ったのだった。
そしてだ。四人で街の門のところに行ってだ。そこでそれぞれ別れるのだった。
「それじゃあな」
「またどっかで会おな」
まずはリョウとロバートが別れの言葉を述べた。
「何かまた会う気がするけれどな」
「縁があったらまたな」
「それじゃあね」
ユリは明るい顔であった。
「縁があったらまた会いましょう」
「はい、それじゃあ」
劉備もにこりと笑って三人に応える。
「また御会いしましょう」
「さてと、これからだな」
「道場開く場所探すか」
「とりあえず南に行く？」
三人は彼等の話をはじめた。
「南の方にね」

「そうだな。北は草原ばかりらしいしな」
「街なんか碌にないって聞いてるで」
「あっ、北は駄目です」
劉備の方からも言ってきた。
「北は匈奴や烏丸がいますから。行かない方がいいです」
「匈奴っていったら」
「遊牧民族よね」
リョウとユリは学校で習った知識を思い出して述べた。
「それでこの国の敵だったよな」
「そうよね」
「万里の長城の向こうにいる連中やな」
ロバートは長城をその言葉に出した。
「えらい強い奴等らしいな」
「最近は何か袁紹さんが服従させて大人しくしているらしいですけれど」
「それでも行かない方がいいか」
「そういうことやな」
「はい、長城から北は行かない方がいいです」
劉備もそれは言うのだった。
「絶対に」
「わかった。それじゃあな」
「やっぱり南やな」
「そうね」
ここでそれぞれ言う三人だった。そうしてだった。
三人と劉備は笑顔で別れた。その時手を振り合いだ。
「また会おうな」
「縁があったらな」
「その時にね」
「はい、さようなら」
四人はそのまま別れた。そして劉備は自分の家に帰った。その質

素な家で貧しい身なりながら不思議な気品を持っている初老の女に一部始終を話す。
そのうえで黄金茶を手渡す。ところがだった。
「桃香ーーーーーーーーーーっ！！」
「どうしたの、お母さん」
「この馬鹿娘！」
こう言って怒鳴るのだった。
「あの剣は我が家に伝わる家宝なのですよ！」
「それは知ってるけれど」
「それを騙されて手放すとはこの馬鹿娘！」
「えっ！？」
「覚悟しなさい！」
信じられない、猿の如き速さで娘に駆け寄りだ。そのうえで彼女の首襟を掴んでダッシュする。そうしてそのまま家を出て家の傍の小川のところまで来て。

# 第十二話　劉備、先祖伝来の宝剣を手放すのことその十

「そりゃーーーーーーーーーーっ！！」
「そりゃーーーーーーーーーーっ」
そのまま小川に放り込まれた。そうしてだった。
「すぐに取り返して来なさい！」
川の中の娘に対しての言葉だった。
「いいわね、すぐに！」
「すぐに」
川の中から頭を出して母に応える。とりあえず泳げるらしい。
「行くの？」
「それまで帰ってはなりません！」
こうも言うのだった。
「わかりましたね」
「わかったわ」
それに素直に応える劉備だった。
「じゃあ今から行って来ます」
「そもそも貴女は」
「うん」
川から出ながら母のことばに応える。
「一応皇族なのですよ。それに教育も受けていて」
母の言葉は溜息交じりであった。
「仕官しようと思えばできるのです」
「仕官のことね」
「それが何ですか。蓆や草靴を作って商いをしていて」
「だって買ってくれる人の笑顔が見たいから」
「それもいいけれどもっと人様の役に立つことをしなさい」
こう娘に言うのである。
「わかりましたね。それも探してきなさい」

「けれど私戦いとかは」
劉備はここで困った顔になる。
「嫌いだし」
「戦いはしなければならない時があります」
「そういうのあるの？」
「貴女は今人の笑顔が見たいと言いましたね」
強い目で娘を見ながらの言葉だった。
「確かに」
「そうだけれど」
「その人の笑顔の為に戦わなければならない時があるのです」
「そうなんだ」
「そうです。やがてわかるでしょう」
娘に対する言葉だった。まさにだ。
「貴女もまた」
「平和の為に戦う？」
「それもあるでしょう。若しくは」
「若しくは？」
「この世を乱しよからぬことを企てる者達を討つ為に戦う時もあるでしょう」
「この世を」
「その時は戦うのです」
劉備の目を、娘の目を見据え続けている。
「わかりましたね」
「わかりました」
劉備はまだ少しわかっていない様子だったがそれでも応えた。
「それじゃあそれも見つけるわ」
「では行きなさい」
また娘に告げた。
「これから。貴女の道を」
「うん、それじゃあ」

「剣のことも忘れないように」
このことも言い忘れなかった。
「わかりましたね」
「はい、わかりました」
「素直なのはいいけれど」
娘のその美徳は溜息と共に認めた。

# 第十二話　劉備、先祖伝来の宝剣を手放すのことその十一

「けれど」
「けれど？」
「人を疑うことも知らないのね」
「そういうのは好きじゃないし」
「好きじゃなくてもそれで貴女の身に何かあったらどうするのです」
それを咎めるのだった。
「そうなっては何もなりません」
「それでもそういうのは」
「わかりました。では桃香」
観念したような顔と言葉だった。
「貴女に天命があるのならそれに導かれて小難は避けられるでしょう」
「歩いていけばいいの？このまま」
「そうです。では行きなさい」
また娘に告げた。
「いいですね」
「じゃあ行って来ます」
こうして劉備はまた旅に出た。そしてそれは運命に導かれる大いなるはじまりの旅だった。彼女もまた運命の大きなうねりの中にいたのだ。
また闇の中に彼等がいた。そうしてだった。
「そうですか。剣がですか」
「あの娘の手から離れた」
闇の中での話だった。
「そしてどうやら」
「どうやら？」
「袁本初の元に渡りそうだ」

「あの娘のところにですか」
「あの娘はこそ泥の類を許しはしない」
このことも話された。
「必ず捕まりだ。剣はあの娘のところに入る」
「劉玄徳のところから離れればそれでよいな」
老人の声だった。不気味さと邪悪さに満ちた声だった。
「それでのう」
「そうね。それでいいわね」
「あの娘しか使えないし」
若い女と少年の声だった。
「袁紹が持っていても何の意味はないし」
「それならね」
「それでだけれどな」
若い男の声だった。
「今ミヅキと刹那はどうしているんだ?」
「南に行っておるようじゃ」
老人の声が答えた。
「遥か南の方にのう」
「そこか」
別の若い男の声だった。
「そこに行ったのか」
「南蛮ですね」
知的な、落ち着いた響きの言葉だった。
「あの地にですか」
「ああ、南蛮っていうのか」
若い男の言葉がここで弾むものになった。
「あそこは」
「はい、南蛮といいます」
「この国の周りの異民族は北や西にいるだけじゃないからな」
「そうか。じゃあ奴等も使えるな」

「そうね」
「面白い人間達かも」
若い男の次に女の声と少年の声が応えた。
「面白いことになりそうね」
「僕達が思っているよりも」
「周辺だけではありませんしね」
また落ち着いた声が言ってきた。
「さて、それでは」
「俺はまた動くな」
「わしもそろそろ動くかのう」
若い男と老人の声だった。
「バイスとマチュアもよくやってくれてるみたいだしな」
「たまには働くのもいいことじゃ」
「頼んだぞ」
「それではな」
こう話してだった。闇の中から気配が消えた。それは少しずつ大きくなろうとしていた。

第十二話　完

２０１０・５・１３

# 第十三話　曹操、袁紹と官渡で会うのことその一

第十三話　曹操、袁紹と官渡で会うのこと

「ねえ麗羽様」
「何ですの？」
「何進将軍から手紙が来てますよ」
文醜が君主の座にいる袁紹に対して述べる。隣には顔良がいる。袁紹の左右には田豊と沮授がいる。政治の話をしている時はこの二人だった。
「どうされますか？」
「大将軍からでして」
「はい、読まれますか？」
こう主に対して言うのだった。
「何ならあたいが読みますけれど」
「いいですわ。自分で読みますわ」
それは自分でするというのだった。
「それでは」
「はい、それじゃあ」
こうして文醜の手から袁紹に手渡される。そのうえで読まれるのだった。
読み終えるとだ。田豊と沮授がすぐに主に問うてきた。
「それでどう言っていますか？」
「大将軍は」
「異民族のことですわ」
それだと二人に返すのだった。
「そのことですわ」
「異民族ですか」
「そういえば烏丸が最近」

「ええ、不穏な空気を見せていますわね」
このことを話すのだった。
「それまでは異民族の中では比較的大人しかったというのに」
「はい、それでこのまま取り込めると思ったのですが」
「上手くいかなくなってきました」
こう話す田豊と沮授だった。
「それどころか攻め込んできかねません」
「ですから」
「ええ。征伐ですわね」
ここで結論を言う袁紹だった。
「ここは」
「それで大将軍からもですね」
「そのことで」
「では私達が出ます」
「すぐに征伐してきますよ」
顔良と文醜がこう言ってきた。
「花麗ちゃんと林美ちゃんもいますし」
「黒梅姉さんだって涼州から戻ってもらって」
「いえ、まずは華琳と話すように言ってますのよ」
ところが袁紹はここでこう四人に言うのだった。
「華琳と二人で準備をするように書いてますわ。この征伐は大将軍直々に出られるそうですし」
「えっ、大将軍がですか？」
「それ本当ですか！？」
顔良と文醜は今の袁紹の言葉にその目を思わず丸くさせた。
「普段は洛陽におられるのに」
「また今度はどうして」
「そうですね。おかしいですね」
「これは」
田豊と沮授もこのことにはいぶかしむ顔になっていた。

「宦官達との争いを放っておいてですか」
「それで都を出られて」
「そうした事情はわたくしも知りませんが」
「はい。都の内情は今神代ちゃんが調べてますし」
「もうすぐ戻ってきますけれど」
「そうですわね。ただ」
袁紹はここで考える顔で述べた。
「都を空けられるようになったのは間違いありませんわね」
「はい、そうでなければとても」
「そうしたことはできません」
それは田豊と沮授も頷く。少なくとも政治に関することでは袁紹は決して無能ではなかった。そのことは周りもよくわかっていた。

# 第十三話　曹操、袁紹と官渡で会うのことその二

「問題はそれが何かですが」
「そうですね。それが問題です」
「まあ今は神代が戻ってからですわね」
袁紹は審配の真名を言いながら述べた。
「さて、それでですけれど」
「はい」
「じゃあすぐに曹操さんのところに行きますか」
「会見の場所も指定されてますわよ」
それもだというのだった。
「場所は」
「はい、場所は」
「何処ですか？」
「官渡ですわ」
その場所だというのだった。
「そこで二人で話すようにとのことですわ」
「官渡ですか」
「そこなんですね」
顔良と文醜がそれを聞いて少し考える顔を見せた。
「何か戦場っぽい名前ですけれど」
「そこにですか」
「とりあえず同行は貴女達四人と」
「では花麗と林美は留守役ですね」
「ここは」
張？と高覧はそうであると確認される。
「そういうことですね」
「わかりました」
「あと。間も無く神代が戻ってきますし」

袁紹はまた彼女の名前を出した。
「あの娘も共にですわ」
「わかりました。それじゃあ」
「そういうことで」
「それで帰ったらまた人材との謁見でしたわね」
袁紹は会見の話が終わると今度はこのことについて話をした。
「それですわね」
「はい、また何人か来ています」
「それを御願いします」
「わかりましたわ。それでは」
こうして袁紹側は官渡に向かった。そして曹操側もだ。主立った将帥と兵達を連れてその官渡に向かっていた。その中でふと曹洪が曹操に対して問うてきた。彼女達は馬に乗っている。
「秋蘭だけ残ってもらったのは可哀想でしたね」
「そうですね」
曹仁もそれについて言う。
「見送りの時寂しそうでしたし」
「それを考えたら」
「けれど仕方ないわよ」
曹操はこう二人に返す。その左横には夏侯惇がいる。
「まさか首脳部を全員連れて行く訳にもいかないでしょ」
「それはそうですけれどね」
「じゃあやっぱり」
「秋蘭はまた今度よ」
微笑んでの言葉だった。
「そういうことでね」
「しかし華琳様」
ここで夏侯惇が言ってきた。
「何進大将軍が御自身から出征されるとは珍しいですね」
「そうね。普通なら私かその麗羽に命じて終わりよね」

「実際にこれまで北の胡人達に対しては袁紹殿に一任されていました」

夏侯惇もこのことを指摘する。

「それが都を離れられてまでというのは」

「ただ武勲を挙げたいだけではないかも」

「功績を作りたいだけではなくて」

「そうね。都を離れられるようにもなったってことだし」

曹操は奇しくも袁紹と同じことを見抜いていた。

「その根拠も知りたいわね」

「そのことですけれど」

荀？もいた。彼女も言うのだった。

「何でも新しい側近が加わったそうです」

「側近！？」

曹操は今の荀？の言葉に顔を向けた。

# 第十三話　曹操、袁紹と官渡で会うのことその三

「それが加わったの」
「はい、どうやら」
「側近、ね」
「司馬仲達という者だそうです」
「司馬仲達!?」
「仲達は字でして」
荀?はこう曹操に話していく。
「司馬懿というのが名前です」
「司馬懿!?」
「御存知ですか?」
「司馬氏のことは知っているわ」
こう荀?に答える。
「一応はね」
「そうですか」
「代々名門の家よ。高官も多く出しているわね」
「あっ、そういえばその名も」
「聞いたことがあります」
ここで曹仁と曹洪も言った。
「都で代々高官を出している」
「その家ですよね」
「そうよ。しかも清流派の人間でおまけに嫡流でね」
ここで曹操の目が曇った。
「宦官の孫の私や妾腹の麗羽とは全く違うわ」
「それにかなりの切れ者だそうですね」
荀?はこのことも言った。
「それで今は大将軍の第一の側近になられているそうです」
「それまでは私と麗羽が両腕ではなかったのかしら」

実は曹操も袁紹も何進の派閥にいるのである。彼女にとって二人は頼りになる存在だった。それは軍事的な意味におけるところが大きい。

「それでその人物も入れたのね」

「頭脳でしょうか」

荀？がここでまた言った。

「参謀として入れられたのでしょうか」

「そして名代にもなる。そうした人材でしょうね」

「だとすれば宦官達とも渡り合える」

「あの十常侍達とも」

「だとすればかなりの人間ね。ただ」

曹仁と曹洪に応えながら話す。

「何か不吉なものも感じるわね」

「不吉なものをですか」

「それを」

「ええ、何か感じるわね」

顔を曇らせながらの言葉だった。

「私の取り越し苦労ならいいけれど」

「そうですか」

「その人物に対して」

「少し調べておきたいわね」

また言う曹操だった。

「桂花、都の内情を探る時に一緒に御願いするわね」

「はい、わかりました」

荀？はすぐに頷いた。そんな話をしながら彼女達も官渡に向かう。そして袁紹達もだ。黄河を渡ってだ。そのうえで今官渡に向かっていた。

田豊や顔良の四人の他に審配もいた。その彼女が馬上の袁紹に話していた。

「その司馬仲達という者はです」

「司馬氏についてはわたくしも知っていますわ」
少しむっとした顔で言う袁紹だった。
「あれですわね。宮廷で代々高官を出している名門の」
「はい、そうです」
「そして清流派でしかも嫡流で」
言っていることは曹操と同じだった。
「わたくしや華琳とは全く違いますわね。しかも才気煥発だとか」
「大将軍の御前に出てすぐにその弁を認められまして」
こう主に話す審配だった。
「そして今やその参謀であり名代です」
「その人材がいるからこそ大将軍も都を離れられるようになったというのですね」
「どうやら」
「事情はわかりましたわ。ただ」
「ただ？」
「どうにも好きになれませんわね」
袁紹もまたその顔を曇らせていた。

# 第十三話　曹操、袁紹と官渡で会うのことその四

「話を聞く限りでは」
「そうなのですか」
「わたくしも華琳も所詮妾の子、そして宦官の孫」
「そのことは」
「事実ですわ。それでわたくし達は常に除け者でしたし」
幼い頃の記憶である。そのことに対する劣等感が今も彼女達の心の中にあるのだ。このことを忘れることは決してないのだった。
「それと比べたらその司馬仲達という者は」
「恵まれていますよね」
「確かに」
「ええ。本当にいけ好かない」
袁紹は顔良と文醜にも言う。
「大将軍も御自身の出自を気にされておられるというのに」
「元々は肉屋の娘でしたね、あの方は」
「それが妹君が宮廷に入られて皇后になられて」
「その通りですわ。それが今ですわ」
こう田豊と沮授にも答えるのだった。
「そうした方ですかわわたくし達を取り立てても下さいましたけれど」
「ですが袁術様も重用されていますし」
審配はこのことも話した。
「それを考えれば」
「人材は有能であればいいということなのですわね」
袁紹は忌々しく思いながらもこう話した。
「つまりは」
「そういうことではないでしょうか」
「もっとも袁術様はまだ幼い方ですが」

「あの方は嫡流ですし」
「美羽のことはいいですわ」
袁紹は彼女の話はそれでいいというのだった。
「それよりも。華琳ですけれど」
「はい、会談ですね」
「烏丸討伐に関して」
「その打ち合わせが大事でしてよ」
自分でそちらに話をやるのだった。気に入らない人物の話ばかりをしてそれで気が暗いものになったからである。だから変えたのである。
そんな話をしているうちにお互いに官渡に着いた。そうして会談となるのだった。
曹操と袁紹はお互いの顔を見ていた。双方馬上のままで見合っていた。
「久し振りね、麗羽」
「そうね、華琳」
まずは微笑みを交あわせる。
「元気そうで何よりだわ」
「貴女の方こそね」
「さて、それでだけれど」
ここであらためて話す曹操だった。
「烏丸が騒がしくなってきたそうね」
「ええ。そのことですけれど」
「私からも兵を出すわ」
曹操はこう言った。
「左軍を受け持つわ」
「ではわたくしの軍が右軍ですわね」
「何進様も来られるわ。直々の出征だから」
「わたくしだけでも充分ですのね」
「そう思うけれどね。それでも今回はこう決まったわ」

お互い都のことは知っていた。だがそれあえて言わずにだ。こう話をするのだった。
「だからね」
「わかっていますわ。ではそういうことで決まりですわね」
「そうね。会談するまでもなかったけれど」
「そうですわね。とはいいましても」
ここでだった。袁紹は微笑んでみせた。そのうえで曹操に対して言うのだった。
「どうも妙な気配がしますわね」
「そうね。春蘭」
「はい」
まずは夏侯惇に声をかけた。
「いいわね」
「わかっています。季衣」
「わかってますよ、春蘭様」
ここで許緒も出て来た。
「悪い奴等が周りに一杯いますね」
「貴女の関係者かしら」
「生憎思い当たる節は随分とありますけれど」
袁紹は今は顔は笑っているが目は笑っていなかった。

# 第十三話　曹操、袁紹と官渡で会うのことその五

「それは貴女も同じではなくて？」
「その通りね。十常侍かしら」
「そう考えるのが妥当でしょうけれど」
「麗羽様、御気をつけ下さい」
審配が彼女の横に来て言う。
「敵の数、多いです」
「曹仁さん、曹洪さん」
「ここは共闘ってことでいいよな」
顔良と文醜もそれぞれの武具を持ちながら二人に声をかける。
「敵の数、結構多いですし」
「そっちが嫌ならいいけれどな」
「いえ、こちらからも言おうと思っていたところよ」
「それはね」
言いながらだった。曹仁と曹洪も自分達の武具を出してきた。曹仁の武具は三つ又の鉾、曹洪の武具は二本の狼牙棍だ。夏侯惇も大刀を出し許緒もハンマーを出している。
そのうえでだ。それぞれ構えるのだった。
審配は袁紹の傍についてだ。そうして言うのだった。
「ここは動かれないで下さい」
「それがいいというのでしてね」
「はい、私達がいます」
真剣そのものの顔だった。右手には既に剣を持っている。
「ですから」
「ただ。我が身は自分で守らなければなりませんわ」
「そういうことね」
袁紹も剣を抜いていた。見事な大きな剣だ。
そして曹操もだ。その手に大鎌を持っている。二人も戦う態勢に

入っていた。
そのうえで二人はだ。田豊達に言うのだった。
「貴女達は兵士達の警護を受けなさい」
「狙って来るのは私達だしね」
「ですがそれは」
「華琳様達が」
「心配無用ですわ」
「そのことは」
こう返す二人だった。
「伊達にこれまで生き残ってきたわけではありませんわ」
「そこで見ていなさい」
二人はこう言ってお互いに身構えるのだった。そこにだった。
白い装束の一団が出て来た。覆面までしている。服は何か怪しげな法衣に見える。
それを見てだ。夏侯惇の顔が曇った。
「貴様等、名を名乗れ！」
「・・・・・・・・・」
だがその一団は何も言おうとしなかった。沈黙しているだけである。
夏侯惇もそれを見てだ。それを当然の様に言うのだった。
「これも当然のことか」
「そういうことですね」
「こうした連中が名乗った方がおかしいしな」
顔良と文醜が彼女の横に来て言う。
「それなら夏侯惇さん」
「ここはな」
「ああ、私達三人で迫る敵を倒す！」
夏侯惇は高らかに言った。
「夏瞬！冬瞬！」
「ええ、春蘭！」

「わかってるわ」
二人もこう夏侯惇に返す。
「華琳様は私達が」
「何があっても御護りするわ」
「そういうことね。頼りにさせてもらうわ」
審配も言う。
「私達三人で麗羽様達をね」
こうして戦いがはじまった。夏侯惇達はすぐに敵に斬り込む。そのうえで次々と倒していく。
「うおおおおおおおおおおっ！」
「麗羽様達はやらせないから！」
「覚悟しやがれ！」
それぞれの武具で縦横無尽に暴れる。その武勇は見事なものだ。
それは曹洪達も同じだった。彼女達もそれぞれの武具を振るい敵を寄せ付けない。曹操も袁紹もその手に持っている自分達の武具を振るう。
「くっ！」
「その程度で！」
二人は目の前に来たその白装束の者達をそれぞれ斬った。その中でお互いに言い合うのだった。

# 第十三話　曹操、袁紹と官渡で会うのことその六

「どうしましたの？前より腕が落ちていなくて？」
「貴女の方こそね。領主の座にいて腕がなまったのではなくて？」
憎まれ口を言い合う。
「それでは。志を果たせそうにもありませんわね」
「そちらこそね」
「あら、わたくしはここでは死にませんわよ」
袁紹は言いながらまた剣を振って敵を一閃した。
「悪運には恵まれていますし」
「それは私もよ」
曹操も鎌を振るっていた。
「こんな場所で死ぬのは予定にはないわ」
「それでは。いいですわね」
「ええ、生き残るわよ」
馬上ながら背中合わせになっていた。
「それじゃあね」
「何があってもね」
こう言い合い二人も自ら戦っていた。戦いは激しくなる一方であり二人もかなりの数の刺客達を斬っていた。
誰もがかなりの数の刺客達を倒していた。しかしであった。
「ちょっと、この連中」
「ええ」
「おかしくない？」
「そうよね」
曹仁と曹洪がここで気付いた。
「斬っても斬っても出て来るけれど」
「これってどういうこと？」
「数が減らないの？」

「そんなことは有り得ないわよ」
曹操は真剣な顔で言う。
「絶対にね。だから安心しなさい」
「その通りですわ。敵の数、決して多くはありませんわ」
袁紹も敵を倒しながらまた言う。
「ですから。今は弱音を吐かないことですわ」
「そうですね。ここは何があっても」
審配もその手の剣を振るい続けている。
「踏ん張らないと」
「くっ、敵の右を衝くのよ！」
「そこよ！」
軍師達も戦えないながらも指示を出していた。
「何としてもここは！」
「華琳様を護りなさい！」
「いい、荀？」
田豊は荀？に対して声をかけていた。
「今回は共闘よ」
「わかっているわよ。今は友若のことは忘れるわ」
荀？も戦局を見ながら田豊に返す。
「私だって。今は」
「そういうことよ」
「それじゃあ」
こうして三人も三人のできることをしていた。まさに正念場だった。
刺客達は次々と出て来る。いい加減彼女達にも疲れが出てきていた。
しかしここでだ。彼女達に思わぬ助っ人が出て来たのである。
「ふむ。これは」
「そうだな、我が師よ」
赤い髪で白い服の男が帽子を被り亀に乗った老人に応えていた。

男の顔は精悍なものであり老人は顔中に白い見事な髭を生やしている。
「常世とは関係ないしろだ」
「邪な者達じゃな」
「それなら答えは出ているな」
「その通りデス」
岩の如き顔の大男に小柄な少女が応えていた。
「ここはあの白い服の連中を」
「倒す」
その大男が答える。
「いいな」
「わかったデス。じゃあ親父」
「行くぞ」
「そうですね」
最後に青い髪で白い上着と青いズボンの少年があった。若々しい端整な顔である。
「あの女の人達が襲われているみたいですね」
「それにだ」
赤い髪の男はその鋭い目で応えた。
「あの白い服の者達はだ」
「そうじゃな。よからぬ気配に満ちておる」
「常世の者ではないにしろ」
それをまた言う。

# 第十三話　曹操、袁紹と官渡で会うのことその七

「それでもだな」
「うむ、怪しい者達であるのは間違いないからのう」
「それでは」
「行くぞ」
少年と大男が言った。それぞれ刀に釣竿といったものを出した。
戦いに加わる。
「!?あれは」
「新手ですの？」
「いえ、違います」
青い髪の少年が曹操と袁紹に答える。
「僕達は気付いたらこの世界にいたんですけれど」
「清か」
男はそこではというのだ。
「だが。随分と古さもあるな」
「漢よ」
審配がこう答えた。
「それがこの国の名前よ」
「漢じゃと」
老人はその国の名前を聞いて目を少し丸くさせた。
「ふむ、随分と昔じゃな」
「そうですね。けれど僕達の世界の清でも漢でもないようですね」
少年はそこを指摘した。
「この国は」
「しかもかなり厄介なことになっている」
大男は既に白装束の男達と戦闘に入っていた。彼等の方から来たのだ。
他の三人もそれは同じだった。こうなってはだった。

「それじゃあ」
ここでだ。少年の髪がだ。
変わった青から金色になったのだ。
そのうえで目の感じも変わりだ。刀を振るいながら言う。
「青龍の力見せてやるぜ！」
「！？髪の色が」
「変わった！？」
田豊と沮授もそれを見た。
「これは一体」
「どういうことなの！？」
「私達の世界とは全く違う世界から来ているのは間違いないけれど」
荀？もそれを見て怪訝な顔になっている。
「あれは一体」
「しかも。調べてみたら」
「この世界に来るのは時代こそ違うけれど」
「そうよね」
三人一緒になってそれぞれ話す。
「同じ世界から来ているし」
「それは何故かしら」
「何かあるというの？」
三人はそのことについても少し考えるのだった。だが今はそれよりもだった。戦いの方が重要だった。兵士達に命令を出さなくてはいけなかった。
四人が加わり戦局は少し楽になった。そしてそこにだ。
ふと到着した者がいた。それは。
「曹操殿、そちらか」
「あっ、貴方は」
「この辺りの民心の慰撫にあたっていました」
ズィーガーだった。彼が出て来たのだ。
そしてだ。その他にもいた。

一人は黒い髪を髷にして袖のない白地に端が黒い三角模様の服の男だった。もう一人は緑と薄い紺色の上着と袴を着て右目に眼帯をしている。最後の一人は赤く長い髪にその顔を白く塗り赤い隈取をしている。赤と金のやたらと派手な服と袴である。彼はその三人と一緒だった。

「アンブロジアとかそんなのか？」

「いや、違うようだが」

「賊なのは間違いないようじゃな」

その三人の男達がそれぞれ言う。

そしてだ。ズィーガーがここでその三人に対して告げる。

「宜しいでしょうか」

「ああ、いいぜ」

「この世界にどうして来たかはわからぬが」

「義を見てせざるは勇なきなりというが」

こう言うのだった。それでだった。

四人はそれぞれ白装束の男達に対して向かう。彼等の戦闘力もかなりのものだった。

これで戦いはかなり有利になった。敵は瞬く間に数を減らされていく。

そしてだ。何時しか誰もいなくなった。残っているのは曹操と袁紹の部下達と突如参戦してきたその戦士達だった。彼等だけであった。

# 第十三話　曹操、袁紹と官渡で会うのことその八

そしてだ。ズィーガーがまず言った。
「曹操殿、それでですが」
「ええ、丁度聞きたいと思っていたのよ」
曹操もズィーガーに応える。戦いは終わり周りには白装束の者達の骸が転がっている。その中で馬を降り彼の話を聞いているのだ。
「いいかしら」
「はい、彼等ですが」
「覇王丸っていうのさ」
「柳生十兵衛」
「千両狂死郎という」
白と黒の豪放磊落な雰囲気の男と隻眼の男と赤髪の男がそれぞれ名乗る。
「宜しくな」
「どうやら縁あってこの世界に来たが」
「いきなりこうしたことになるとはのう」
「けれどお陰で助かったわ」
曹操は微笑んで三人に応えた。
「貴方達のお陰でね」
「そうか。だったらいいがね」
覇王丸は微笑んで彼等に話した。
「それならそれで越したことはないさ」
「うむ、しかしこの者達は」
「何じゃろうな」
十兵衛と狂死郎はここで周りを見た。丁度骸が処理されているところだった。その白装束の者達のだ。
「刺客の様だが」
「乱派かのう」

「宦官かしらね」
曹操は彼等の話からそう考えたのだった。
「十常侍達の」
「確かに。わたくし達がここで会合をするのはわかっていることでしたし」
袁紹も言う。彼女も既に馬を降りている。周りには彼女と曹操の配下の者達もいる。
「刺客を送るには好都合ですわね」
「そうよね。ただ」
「ただ？」
「あの連中にしてはやることがはっきりしているわね」
曹操は鋭い目で述べた。
「どうもね」
「そういえば。十常侍といえば」
「もっと陰険なことをしてきますわね」
「今までもそうだったしね」
袁紹が自分の言葉に頷くのを見ながら話を続ける。
「それでも今のは随分と」
「はっきりし過ぎていますわね」
「それにここまでの数の刺客達を送るものかしら」
曹操はこのことも指摘する。
「殆ど一軍だったわよ」
「十常侍達の私兵でしょうか」
荀？はそれではないかと言った。
「そうした裏の力も持っていますが」
「私兵ね」
「はい、影の者達です」
「その可能性はあるわね」
曹操は真剣な顔で袁紹の言葉に頷いた。
「それもね」

「それでは」
「それでも数が多過ぎるわ」
曹操はまたこのことを指摘した。
「普通の刺客の数でもないし」
「袁紹様、それにです」
「この者達ですけれど」
今度は田豊と沮授が話す。
「動きがおかしくありませんでしたか？」
「次から次に。影みたいに出て来て」
「影、確かにそうですわね」
袁紹も二人の話を聞いて言う。
「それを考えれば確かに刺客ですけれど」
「正規軍の動きでないのは間違いありません」
「それにです」
二人は袁紹に対してさらに話す。
「十常侍は私達がここに来ることを知っています」
「それでここに刺客を送り込んでは」
「疑われますわね」
袁紹の目がぴくりと動いた。
「間違いなく」
「はい、特に張譲がです」
「確実に」
「如何に帝の信頼がありお傍にいるからといって」
袁紹はこのことも考えるのだった。

# 第十三話　曹操、袁紹と官渡で会うのことその九

「それでも。これだけのことはそうそう迂闊には」
「できないと思います」
「それを考えたら」
「十常侍ではないと」
袁紹もそれを言う。
「そういうことですわね」
「だとしたらこの連中は一体」
ここで言ったのは審配だった。
「誰の手でしょうか」
「異民族がここまで来ることは有り得ないぞ」
夏侯惇がそれを指摘する。
「こんな中原の深くまでだ」
「異民族はあたい達が上手く抑えてるぜ」
「はい、ちゃんと移住してもらってそれで平和に農耕をさせてもらってます」
顔良と文醜がこのことを話す。
「精強な奴は軍に入れてな」
「軍規軍律も厳しくしていますから」
「それにこの服って異民族の服？」
「絶対に違うわよね」
曹仁と曹洪もそこを指摘する。
「むしろ何か怪しい組織にいるみたいな」
「そんな連中の様な」
「そうね。考えたけれど十常侍の手の者じゃないわ」
「異民族は有り得ませんわね」
曹操と袁紹がここで結論を出した。
「だとしたら一体」

「何者でして？」
「どうやら今答えが出る話ではないな」
ここで赤髪の男が言った。
「長い時間がかかるようだな」
「そうじゃな。しかしさし当たっては話は終わった」
老人はそれでだというのだった。
「じゃが」
「じゃが？」
「この話は続くのう」
こう曹操と袁紹達に話すのであった。
「それではじゃ」
「そうだな」
「そうするデス」
大男の親子が言った。
「暫く間貴殿達とだ」
「一緒にいてもいいデスか」
「客将というのなら望むところですわよ」
袁紹が名乗り出るのだった。
「それでしたら」
「そうですか。それでは」
少年が袁紹の言葉に応える。
「宜しく御願いします」
「貴方達の御名前は？」
袁紹は自分が迎え入れると言った彼等の名前を問うのだった。
「何といいますの？」
「楓です」
まずは少年が名乗った。
「宜しく御願いします」
「直衛示源」
「その娘虎徹デス」

次には大男の親娘だった。
「宜しく頼む」
「御願いしますデス」
「玄武の翁という」
四人目は老人だった。
「それではのう。宜しくな」
「嘉神慎之介」
最後に名乗ったのは赤髪の男だ。長い白衣が風に翻る。
「宜しくな」
「貴方達はただの剣士じゃないわね」
審配はすぐにそれを見抜いた。
「何か背負っているわね」
「はい、実はですね」
「我等はそれぞれ四霊を司っている」
「四霊といったら」
審配だけではなかった。他の者達もここで言う。

# 第十三話　曹操、袁紹と官渡で会うのことその十

「あれ？あの四方を護る」
「その神獣達」
「それだっていうのか」
「はい、そうなんです」
楓が彼女達に話す。
「それで悪しき常世を封印しているのですが」
「常世！？」
その言葉を聞いてだった。曹操はすぐに察した。
「冥界のことかしら」
「簡単に言えばそうなる」
嘉神がこう話す。
「そこから来る存在も封じているのだ」
「そうですか。それがですか」
「貴方達の責務ですか」
「そういうことになる。しかし」
翁は田豊と沮授の言葉に応えながら述べた。
「わし等が何故この世界の来たのかは」
「全くわからない」
「それでもとりあえずは厄介をさせてもらうデス」
「それは遠慮なくですわ」
袁紹は微笑んで彼等を受け入れていた。
「仕事はしてもらいますけれど」
「これでまた新たな人材が入りましたね」
「いいことですね」
田豊と沮授はそのことを素直に喜んでいた。
「まずは何よりです」
「刺客にも狙われましたけれど」

「さて、会談も終わりましたし」
袁紹は満足した顔で述べていた。
「後は」
「はい、帰りましょう」
「？に戻りましょう」
顔良と文醜はこう袁紹に言った。
「政務がありますし」
「そういうことで」
「華琳様、私達も」
「そうしましょう」
曹仁と曹洪も曹操に話す。
「許昌に戻って」
「それで」
「そうですわね」
「それじゃあ」
二人もそれに頷きかけた。しかしここで、だった。
袁紹軍の黄色い服と鎧兜の兵士が一人来た。見れば曹操軍のそれよりもかなり重装備だ。見れば袁紹軍の兵士達は鎧も重厚で武器もいいものである。
その兵士が来てだ。袁紹に対して告げるのであった。
「袁紹様」
「どうしまして？」
「この辺りの村の長老に聞いたのですが」
こう袁紹に言うのである。
「どうやらこの辺りには」
「ええ」
「財宝が眠っているとのことです」
袁紹の前に片膝をついての報告だった。
「そう言っております」
「お宝が！？」

「はい、これです」
言いながらであった。地図も差し出したのだった。
それは一枚の古ぼけた地図だった。袁紹はそれを受け取りだった。
目を輝かせてだ。こう言ったのである。
「暫くここに残りますわ」
「あ～～あ、またですか」
「はじまっちゃったよ」
顔良と文醜はそんな袁紹を見て呆れた顔になった。
「あの、ではもう少しですか」
「ここに残るんですか」
「お宝があれば見つけなければ」
袁紹の言葉だ。
「是非共」
「やれやれ、その趣味は変わらないわね」
曹操はそんな袁紹を見ながら呆れながらも笑っていた。

# 第十三話　曹操、袁紹と官渡で会うのことその十一

「お宝探し好きなのね」
「全くです。袁紹殿」
夏侯惇は何とか真面目さを保ちながら袁紹に対して言う。
「いい加減いい歳なのですからそうしたことは」
「止めろといいますの？」
「はい、どうかと思います」
こう袁紹に言うのだった。
「ですからそれは」
「あら、夏侯惇」
袁紹は夏侯惇の嗜めに対して少しむっとした顔で返した。
「そういう貴女もいつもお宝探しに夏侯淵と一緒に参加していたじゃない」
「あれは華琳様がどうしてもというからです」
こう返しはした。
「ですから」
「その割にはいつも楽しんでいたのではなくて？」
微笑みながらこう返す袁紹だった。
「貴女も」
「ですからそれは子供の時ではありませんか。今は」
「では華琳」
今度は彼女の主に問う袁紹だった。
「貴女はどうでして？」
「言って聞かないのはわかってるわよ」
これが曹操の返答だった。
「こうしたことではね」
「では宜しいですわね」
「ええ、いいわ」

袁紹に対して微笑んで答える。
「それじゃあね。ただ」
「ただ？」
「もう将兵はいらないわね」
こう言うのだった。
「お宝探しならね」
「そうですわね。それじゃあ」
「えっ、まさか」
「華琳様まで」
それを聞いて大いに驚く曹仁と曹洪だった。
「御一緒にですか」
「お宝探しを」
「貴女も一緒よ」
曹操は微笑んで二人にも告げた。
「勿論桂花、貴女もね」
「はい、私は」
彼女に異存がある筈もなかった。顔を赤らめさせて応える。
「華琳様の仰ることなら」
「では麗羽様」
そして袁紹には審配がいた。傍に控えたうえでの言葉だ。
「私もまた」
「ええ、それに水華、恋花」
「はい」
「わかっています」
田豊と沮授は微笑んで応えた。
「では兵士達は戻ってもらい」
「そして客将の方々にも」
「貴方達は先に戻っていて下さいな」
袁紹から楓達に告げる。
「兵士達が先導してくれるから」

「わかりました」
「それなら」
彼等もそれで異存はなかった。五人だけになるのだった。
「もう刺客は来ないでしょうし」
「そうね。それじゃあ私も」
曹操も言うのだった。
「ズィーガーはこのままここで仕事を続けて覇王丸達はそれに加わって」
「ああ、わかったぜ」
「それでは」
こうしてこの三人も今の持ち場が決まった。こうして話を決めてであった。
「では華琳」
「ええ、見つけた方がそのお宝を手にする」
「それで勝負ですわよ」
お互い笑みを浮かべながらの言葉だった。
こうしてだった。曹操と袁紹は互いの部下達と共に宝探しをはじめた。刺客達との死闘の後は楽しい遊びとなったというわけである。
そしてその頃。新たに孔明を加えた関羽一行は今は予州にいた。
そうしてであった。
「さて、もうすぐだな」
「はい」
孔明が関羽の言葉に応えていた。
「もうすぐ官渡です」
「そうだな。しかし官渡には何かあっただろうか」
関羽はここで首を傾げさせるのだった。

# 第十三話　曹操、袁紹と官渡で会うのことその十二

「あそこは森や平原があるだけで」
「何もないのだ？」
「そうだ。一度行ったがな」
こう張飛にも答える。
「民家もないしな。戦場には向いているだろうが」
「そんな所に行っても何もないんじゃないのか？」
馬超がここで言う。
「じゃあそこから別の場所に行くか」
「そうですね。ここから何処に行きます？」
ナコルルはそこからの行く先を尋ねた。
「北ですか？それとも南ですか？」
「南がいいのではないのか？」
今言ったのは趙雲であった。
「北はもう行っているしな」
「そうだな。北に行けば袁紹殿の領地だが」
「ああ、あの変わり者の」
「領土は上手く治めているけれどっていう？」
キングと舞がそれを話す。
「鰻掴みをさせられそうだったらしいけれど」
「胸でって。あんまりじゃないの？」
「だから仕官止めたんだよ」
「とても無理なのだ」
馬超と張飛がここで言う。
「そんなのできる筈ないだろ？」
「鈴々でも駄目なのだ」
「しかも吊り下げたバナナ取れとかファッションコンテストって」
香澄はこのことに首を捻っていた。

「それをテストでしたんですか」
「何か武将での側近ナンバーワンを決めるつもりだったらしいのだ」
「今のところそっちの二枚看板の顔良、文醜とやったんだけれどな」
「あの曹操さんのところで言うと四天王に匹敵する人達ですよね」
孔明は二人の名前を聞いたところでこう述べた。
「あの人達ですよね」
「知ってるのだ？」
「あの二人のこと」
「はい、お話は聞いています」
この辺りは流石に孔明だった。
「袁紹さんのところには他にも武力に秀でた人がいますが」
「その中でも随一か」
「忠誠心も入れたら一番だと思います」
こう関羽にも話すのだった。
「文醜さんはかなり賭け事がお好きだそうですが」
「そういえばそんな感じなのだ」
「だよな。あまり考えてなさそうだしな」
「元々は馬賊出身ですけれど袁紹さんが河北に入られた時に登用されたそうです」
「へえ、あの二人馬賊出身だったのか」
馬超はその話を聞いて少し意外そうな顔になった。
「そういう風には見えなかったがな」
「しかし意外だな」
趙雲はここでこう述べた。
「名門出身の袁紹殿がそうした馬賊出身の人材を側近に置くとはな」
「いや、それも当然だろう」
「そうよね」
キングと舞はそれは当然と言うのだった。
「袁紹殿とやらは妾の子なのだろう？」
「この時代じゃそれってまずいだろうし」

「そうですよね。あまり出世できない立場ですし」
香澄もそれを言う。
「だったらそうした人材でも」
「登用して当然か」
趙雲も三人の話を聞いてあらためて頷いた。
「それも」
「そうですね。曹操さんも人材の出自にはこだわらないんですよね」
「あの方も宦官の家の出身だからな」
ナコルルには関羽が答えた。
「だからな」
「それでなんですか」
「二人共それであそこまでなってるんだからな」
馬超は顔を少し上げて言った。
「やっぱり凄いよな。涼州なんて豪族が一杯いてややこしいのにちゃんと治めていたしな」
「政治力は高いからな」
趙雲もそれは認めた。
「しかしな。癖の強い方でもあるからな」
「だから鈴々も仕官しなかったのだ」
「何でああいう風になったんだろうな」
「劣等感だね」
キングは張飛と馬超にこう述べた。

# 第十三話　曹操、袁紹と官渡で会うのことその十三

「妾の子ってことを意識してそれであそこまでなれるだけ頑張ったけれど」
「おかしな奴にもなったのだ？」
「何かバランスの悪い人だけれどな」
「そういうことだね。曹操ってのもそうじゃないかしら」
「そうだな。曹操殿もな」
今度は関羽が言った。
「あらゆる方面に才能を発揮しておられるが」
「それでもなのね」
「妙に危ういところのある方だ」
舞にも答える。
「肩肘を張っている部分もある。やはりそれも宦官の家だからか」
「そういう人って注意した方がいいわよ」
舞は曹操についてだけでなく袁紹についても話していた。
「本人に能力があっても出自を気にする人はね。私一人知ってるから」
「ああ、あの男か」
「そうですね、あの人は」
キングと香澄はすぐにそれが誰かわかったのだった。
「そうだったな。ああなるな」
「そうした意味では同じですね」
「んっ？誰だよそれ」
馬超は三人の言葉に気付いて尋ねた。
「あんた達の知り合いか？」
「ギース＝ハワードって言ってね。まあその曹操さんや袁紹さんと同じ様な立場でね」
こう馬超達にも話すのだった。

「桁外れに強くて本人もかなりの能力があったんだけれど」
「腹違いの弟は能力と立場だけでなくて家柄もあってね」
「ウォルフガング＝クラウザーって人ですけれど」
キングと香澄はクラウザーについて話した。
「そいつをかなり意識していてね」
「そこからおかしくなったのよ」
「では曹操殿や袁紹殿の前にそうした人物が出れば」
「まずいことになるか」
関羽と趙雲はすぐにそうなった場合のことを考えた。
「そういえは袁家の嫡流は袁術殿だったか？」
「あの方だったな」
「はい、ですがあの人はまだ幼いですし」
孔明がその袁術について話した。
「それに素質はありようですけれど何分気まぐれなところの多い方でして」
「二人のライバルにはならない」
「そういうことか」
「はい。ですが最近どうやら」
孔明の話は続く。
「御二人を両腕と頼んでいる何進大将軍の側近に司馬仲達という人が入ったそうです」
「司馬仲達！？」
馬超がその名前を聞いて声をあげた。
「司馬氏っていったら代々高官出してる家だけれどな」
「その家の方です」
「で、嫡流ってか」
「はい。しかもかなりの切れ者だとか」
家柄も血筋も能力もあるのだという。
「曹操さんと袁紹さんは血筋でかなり苦しんでおられますがその方は、です」

「しかし何進大将軍は確か肉屋の出でだ」
関羽は何進二ついて話した。
「それで出自により重く見られていなかった曹操殿と袁紹殿を重用されているのではなかったのか」
「ですが袁術さんも重用されてますし。それを考えますと」
「結局能力があればそれでいいというのか」
「敵の多い方ですし。人材は御一人でも多くだと思います」
孔明は関羽だけでなく他の面々にも話していた。
「そういうことかと」
「そうか。そういうことか」
「おそらく曹操さんと袁紹さんはその司馬仲達さんをかなり警戒しておられます」
孔明はこのことも話した。
「それがよからぬ方向に進まなければいいのですが」
「そうか」
「家柄では曹家も袁家も司馬家には負けてないんだけれどな」
馬超はこのことを指摘はした。
「それはな」
「しかしそれでもってことだね」
「出自も問題になる訳だから、この時代は」
キングと舞がこのことをまた指摘する。
「ややこしい話だけれどね」
「能力があるだけじゃ駄目なこともあるのね」
「牙神さんもそうでしたし」
ナコルルもある人物の名前を出した。
「あの人も。それであああなってしまってますし」
「色々な人間がいるものだがな」
趙雲はふと達観したように述べた。
「劣等感で伸びることもあればそれによりおかしな方向にいってしまうこともある」

「曹操殿も袁紹殿はそうした意味で危ういか」
「少し離れて見ておいた方がいいかも知れませんね」
関羽と孔明はここでこう言った。
「御二人共、特に曹操殿は仕官するのもいいのだが」
「その司馬仲達さんのことも気になりますから」
だからそれはしないというのだ。そして孔明はここでこうも言うのだった。
「そして南、正確には南西の揚州ですけれど」
「江南なのだ？」
「はい、そこは今孫氏が牧として治めておられます」
こう張飛に話す。
「孫策さんが御母上の孫堅さんの跡を継がれて」
「江南の小覇王だな」
趙雲が彼女について述べた。
「戦に強いだけでなく人材を見るのも確かで気さくな人柄で民からも慕われているという」
「へえ、そういう人なのかよ」
「そうだ。かなりの傑物だと聞く」
馬超に対しても話す。
「一度揚州に行ってみるのも悪くはないな」
「そうですね。それじゃあ官渡を一度見てから揚州に向かいましょう」
孔明がここで言った。
「長江を見るのもいい経験ですしね」
「河かあ。あたし河はあまり見てないんだよな」
馬超は何かまだ見ていないものを見に行くような言葉を出した。
「長江って黄河よりもまだ凄い河なんだよな」
「そうですね。あの地でその西楚の覇王項羽が生まれましたし」
「その孫策殿の通り名の元にもなっただな」
関羽も項羽について言う時は言葉が少し緊張していた。項羽の武

勇はこの時代においても伝説となって残っている。敗れはしたが史記においても屈指の英傑の名前は残っているのである。

その項羽の話も出てだ。皆緊張しながら言い合う。

「よし、それでは」

「行きましょう、江南に」

「そうしましょう」

こうして彼女達は官渡の次の行く先も決めたのだった。そうしてそのうえで官渡に進むのだった。そこで珍妙な騒動に巻き込まれるとも知らずに。

第十三話　　完

２０１０・５・１６

# 第十四話　袁紹、お宝を探すのことその一

第十四話　袁紹、お宝を探すのこと

「夏侯淵様、曹操様ですが」
「どうした？」
夏侯淵は廊下で兵士の言葉に応えていた。
「何かあったのか？」
「官渡におられる曹操様ですが」
「うむ」
「刺客に襲われました」
「何っ！？」
それを聞いてすぐに目の色を変える。表情こそは変えなかったが。
「それで御無事か」
「はい、夏侯惇様達もおられましたし」
「そうだな。姉者や夏瞬達がいたな」
夏侯淵はすぐにその目の色を元に戻して述べた。
「それに袁紹殿の兵達も一緒だったな」
「それに他の世界から来た方々やズィーガー様の援軍もありましたので」
「御無事か」
「はい、主だった方々は皆御無事です」
「そうか。亡くなった者達には丁重にな」
夏侯淵はそのことへの気配りも忘れていなかった。
「それはな」
「はい、わかりました」
「御苦労。それならばよい」
「いえ、まだあります」
ところがだった。兵士はまだ言うのだった。

「曹操様はもう少し官渡におられるそうです」
「というとだ」
「はい、袁紹様がどうやら」
「やれやれ、やはりか」
夏侯淵はそれを聞いてだ。困った顔で溜息を出した。
「やはりそうなったのか」
「おわかりなのですか」
「わかるさ。私は華琳様が御幼少の時から常に御傍にいたのだ」
「はい」
「あの方は子供の頃よく袁紹殿と一緒におられた」
幼い頃の二人の交流である。
「何しろお互いにな。おありだったから」
「ですね」
夏侯淵も兵士もわかっていたがあえて言わなかった。二人が何故幼い頃孤独だったのかはもう言うまでもないことであったからである。
「だからよく一緒におられたのだが」
「その時からですか」
「袁紹殿は宝探しがお好きでな」
このことを話すのである。
「そしてだ。華琳様も御一緒されてだ」
「では宝探しが」
「お好きなのだ。姉者も私もな。宝探しはいつもだった」
「そういうことがあったのですか」
「おかげで何かと大騒動に巻き込まれた」
夏侯淵のその落ち着いた美貌に優しい笑みも宿った。
「宦官の家の庭に入ったりな。そういえば花嫁泥棒もしたな」
「そうしたこともですか」
「華琳様が仰ってな。我等四人と袁紹殿でな」
「色々とされていたのですね」

「袁紹殿は今もお好きだということか。しかし」
「しかし？」
「まさかここでそうなるとはな」
今度は苦笑いであった。うっすらとではあったがそれは顔に出ていた。
「あの方々も変わらないな」
「それでその間ですが」
「わかっている」
すぐに真面目な顔に戻った。
「あの者達だな」
「既にこちらに来ていますが」
「少し話がしたい。私から行かせてもらう」
「それでは」
こうしてであった。彼女の方からそちらに行ってだ。そのうえで話をするのだった。そこにいたのは数人の屈強な男達だった。
「ああ、夏侯淵さんかよ」
「少し話がしたいと思っていてな」
「いいか？」
こうそれぞれ夏侯淵に対して言うのだった。見ればどれもかなり大柄である。

# 第十四話　袁紹、お宝を探すのことその二

「うむ。ロイ＝ウィルソン殿に、マスター＝バーンズ殿、ビッグ＝ボンバーダー殿にエチャック＝ビッグボム殿だな」
「ああ、名前も覚えておいてくれたのかよ」
「悪いな」
「名前を覚えるのは当然のことだ。これから共に戦う者同士なのだからな」
だから当然だというのである。
「だからだ」
「そうか、だからか」
「しかし戦う者同士ってことはな」
「もう採用は決定か」
「うむ、それはもう華琳様も決定しておられる」
こう四人に話す。
「だから安心してくれ」
「しかしその曹操さんはまだなんだな」
「まだ帰って来られないんだな」
「それは」
「うむ、もう少し待ってくれ」
流石に宝探しをしているとは言えなかった。今はまだだった。四人が曹操という人間についてまだ全く知らないからである。それでだった。
「もう少しな」
「じゃあそうさせてもらうぜ」
「もう少しか」
「早く仕事がしたいけれどな」
「とりあえずは身体を鍛えておいてくれ」
今はこう言うのに留めるのだった。

「それでな」
「ああ、じゃあそういうことでな」
「何なら一緒に飲むかい？」
「夜にでもな」
「悪くはないな」
四人の威勢のいい申し出にも笑顔で応える。
「それではだ。今はだ」
「ああ、楽しくやらせてもらうぜ」
「曹操さんを待ちながらな」
彼等はそんな話をしてからまた遊びに戻る。そしてその頃袁紹側でもだ。
「またか」
「あの方もな」
「困ったことだ」
辛評と辛？が困った顔で話をしていた。そこには高覧もいる。
「相変わらず遊び好きだから」
「暗殺されかけたというのにすぐになんて」
「全く」
「その通りね」
高覧もその顔で二人に対して言う。
「けれど戻られるのは伸びたのはね」
「そうなのよね、それはね」
「それまでは留守番をするしかないわね」
「まああれね」
ここで辛評が言った。
「向こうに文若ちゃんがいるから陳花を行かせなかったのは正解ね」
「そうね、あの娘陳花と犬猿の仲だから」
「それはね」
二人も辛評のその言葉に頷くのだった。
「出さなくてよかったわ」

「全く。私達ってそんなに曹操側の人達と喧嘩したくないのに」
「曹操様強いしね」
「だからね」
「それによ。今はね」
高覧の顔がここで曇る。
「烏丸何とかしないといけないから。その為にわざわざ官渡での御二人の話し合いになったんだし」
「そうよね、喧嘩より今は内政とその烏丸」
「あと西の方も」
彼女達も色々と問題を抱えているのだった。
そしてだ。ここで辛？が言った。
「それでまた来た異世界からの人材」
「今度もまた大勢来たしね」
「五人ね」
「あれ、六人じゃないの？」
ここで三人の話は少し混乱したものになった。５０
「確か」
「ああ、あれ本人が別人って言ってるだけだから」
辛評が顔を顰めさせて二人に話す。
「気にしないで」
「ああ、そうだったの」
「それだったの」
「だから五人よ」
そしてこうされるのだった。

# 第十四話　袁紹、お宝を探すのことその三

「五人ね」
「少し会って来るわ」
ここで高覧が二人に話した。
「その五人にね」
「そうそう、今度はレスラーって言ってるわ」
「全員ね」
こう話す二人だった。
「何でもね」
「何か取っ組み合って戦うらしいわ」
「取っ組み合いね」
「かなり頑健な人達だから」
「肉体労働にも戦いにも期待できるわよ」
そんな話をしてだった。高覧はその五人のところに来た。そこにいたのは大柄で逞しい身体をした男達だった。高覧はすぐに辛評から受け取った木簡を見ながらだ。そのうえで彼等の名前を言うのだった。
「テリー＝ロジャース殿」
「ああ」
「レオ＝ブラッドレイ殿」
「ここにいるぜ」
「ザ＝レッドドラゴン殿」
「うむ」
まずはこの三人だった。
「ザ＝ガンダーラ殿」
「ここに」
「そしてブラバーマン殿か」
「いや、俺はブルース＝ハブラムだがな」

強引にこう言うのだった。
「そこはちゃんと頼むな」
「ブルース＝ハブラム殿だな」
「ああ、そうだよ。ブラバーマンとは別人さ」
「わかったわ」８６
高覧は話を合わせることにした。二人から聞いていたからである。
そのうえでだ。あらためて話すのだった。
「それでだが」
「採用、いや登用だったか」
ロジャースが言うのだった。
「そうか」
「その登用だけれどね。それはもう決まってるわよ」
高覧は微笑んで五人に話した。
「五人共ね。宜しく頼むわ」
「それで袁紹殿は」
レッドドラゴンは彼女のことを問う。
「まだお戻りにはなられていないか」
「少しね。待っていて」
こう答える高覧だった。
「少しだけね」
「そうか。ならそれまでの間はトレーニングに専念するか」
「そうだな」
レオとガンダーラはこう話す。
「何か美味いものでも食いながらな」
「カレーでも」
「カレー？」
カレーと聞いてだ。高覧はある人物を思い出した。それは。
「ミッキーが好きなあれ？」
「ミッキー？ミッキー＝ロジャースかよ」
ブラバーマンはその名前に反応を見せた。

「あのチャンピオンの」
「あれ、知ってるの？ミッキーのこと」
「ああ、よくな」
笑って高覧に返すブラバーマンだった。
「ファンだしな」
「ファンって」
「応援してたんだよ。そうか、あいつもこっちに来てるのか」
「アクセル＝ホークってのもいるわよ」
「おいおい、それはまた豪華だな」
今度はロジャースが言ってきた。
「他にも誰かいそうだな」
「ボクサーっていうのやっているのなら他にも」
高覧もここでさらに話す。
「あれよ。マイケル＝マックスっていうのもいるし」
「豪華過ぎるな」
「そうだな」
「チャンピオンが三人か」
彼等はその話を聞いて顔を見合わせて話す。
「しかし何でこの世界にいるんだ？」
「どうしてなんだ？」
そしてこのことも考えるのだった。

# 第十四話　袁紹、お宝を探すのことその四

「一体どうして」
「こっちになんだ？」
「それ私も知りたいと思ってるのよ」
高覧はいぶかしむ顔で彼等に返す。
「それであんた達はレスラーよね」
「その通りだ」
レッドドラゴンが答える。
「我々はレスラーだ」
「身体は丈夫ね。それに食べる量は」
ここで言うのだった。
「猪々子と同じだけ食べるのね」
「レスラーは食べるのも仕事だからな」
ロジャースがこう言う。
「悪いがな。それはな」
「わかったわ。まあそれも踏まえてね」
こう話してだった。そしてだ。
「宜しく頼むわね」
「ああ、それじゃあな」
「これからな」
こうして彼等もこの世界に入るのだった。また多くの戦士達が加わっていた。そしてであった。曹操は今森の中を許緒達と共に進んでいた。
先頭を進むのは夏侯惇である。その手には巨大な刀がある。それを持って先に進んでいた。
そしてその中でだ。後ろにいる曹操に対して言う。
「何かこうしていたら」
「どうしたの？」

「昔を思い出します」
こう言うのである。
「何か」
「そうね。子供の頃のことをね」
曹操も微笑んで夏侯惇に返す。
「思い出すわね」
「はい、袁紹殿も相変わらずです」
「全くね。何時になっても子供なんだから」
「いつもどちらかに別れて」
「それで遊んでましたね」
曹仁と曹洪も話をする。
「この宝探しだけじゃなくて」
「他のことも」
「麗羽も一人だったから」
それも言うのだった。
「私達で集まってね。ところで桂花」
「はい」
最後尾には荀?がいた。彼女は両手に付け根を直角に曲げてそれを柄にしている針金を持っている。そのうえで先に進んでいるのだ。
「反応は?」
「今のところありません」
こう答える荀?だった。
「まだ」
「そうなの。まだなの」
「けれどこれを使えば絶対に見つかります」
「そうなんですか」
「ええ、そうよ」
こう許緒にも答える。
「ですから安心して下さい」
「それはそうと桂花」

「何、夏蘭」
彼女の言葉にも応える。
「前から不思議に思っていたがどうしてあいつとあそこまで仲が悪いのだ？」
「陳花のこと？」
「そうだ、友若だったな」
「あいつね」
言いながらむっとした顔になる荀？だった。その幼さが残るが可愛らしい美貌が歪む。
「あいつはね。ちょっとね」
「従姉妹同士なのだろう？それでどうしてだ」
「従姉妹同士でもよ」
それでもだというのだ。
「あいつとはね。昔から仲が悪かったのよ」
「それで袁紹殿のところには行かなかったのか」
「そうよ。もっとも袁紹殿のところには最初から行くつもりはなかったけれど」
それはないというのである。
「それでもね。あいつがいるって聞いて」
「それで余計にか」
「あいつだけは許さないから」
むっとした顔で言うのだった。

# 第十四話　袁紹、お宝を探すのことその五

「昔から。本当に」
「訳がわからないわね」
「そうね」
曹仁と曹洪も話す。
「何が何だか」
「もう」
「まあそれはいいとしてよ」
曹操がここで言った。
「麗羽よりも先に見つけるわよ」
「はい、わかっています」
「負けてはいられませんから」
こんなことを話しながら彼女達も進む。それと共にだ。
袁紹もであった。顔良達と共に森の中を進んでいた。そうしてだ。
「さて、こちらですわね」
「あの、違いますから」
「そっちではないですから」
田豊と沮授がすぐに言う。
「こっちですよ」
「方向が違いますよ」
「あら、そうでしたの」
二人に言われてだった。袁紹は足を止めた。見れば彼女だけ逆の方向に向かおうとしていた。本当に彼女だけがそこに向かおうとしていた。
「こっちでしたの」
「そうですよ、逆ですから」
「ちゃんとついて来て下さいね」
「わかりましたわ。それでは」

「何か麗羽様って」
「こういうところが抜けてるんだよな」
顔良と文醜も呆れた顔だった。袁紹の横にはすぐに審配がつく。
彼女を護って一歩も引かない感じで護衛を務めていた。
「他にも策謀とか下手だし」
「子供っぽいところあるしな」
「聞こえてますわよ」
袁紹が後ろから言う。
「全く。何ですの」
「けれど。今だって方向間違えるところでしたし」
「ちゃんとして下さいよ」
「いつもちゃんとしていますわ」
本人だけがわかっていない。
「わたくし、これでも」
「じゃあ私達についてきて下さいね」
「頼みますよ」
「わかっていますわ。それにしてもこの森は」
袁紹は森の中を見回しながらまた述べた。
「随分と深いですわね」
「そうですね。熊が出て来ても」
「おかしくないですね」
田豊と沮授もそれを言う。
「何時何が出て来ても」
「本当に」
言っている側からであった。前にだ。
巨大な熊が出て来た。全長二十メートルはあるだろうか。
田豊がそれを見てだ。まず言った。
「頭のところが赤くなっているけれど」
「これはまさか」
沮授もここで言う。

「あの伝説の」
「赤兜・・・・・」
「えっ、赤兜っていったら」
「あれかよ、この国で一番凶暴な熊じゃんかよ！」
顔良と文醜も唖然とした顔で言う。
「何でこの熊がここに！？」
「確か南蛮にいたんじゃねえのかよ」
「それはわからないけれど。ただ」
「ここにいるのは事実よ」
田豊と沮授はそれは間違いないという。
「あの赤い頭が何よりの証拠よ」
「だから」
「袁紹様、ここは」
審配はその手に剣を抜きながら後ろに護る袁紹に告げた。
「逃げましょう！」
「そうですよ、幾ら何でもこれは」
「相手が悪過ぎますよ」
「そ、そうですわね」
袁紹も真っ青になっていた。
「それではここは」
「はい、全速力で！」
「逃げましょう！」
こうして六人は必死に逃げる。流石に巨大熊が相手ではどうしようもなかった。
関羽達は官渡に入っていた。その中でだ。
張飛がまた歌っていた。関羽がその彼女に問う。
「熊や虎の為だったな」
「そうなのだ。ただ」
「ただ？」
「流石にいないとは思うなのだが」

「どうしたのだ？」
「鈴々も相手が何丈もあったらまずいのだ」
張飛のその言葉にすぐ返す馬超だった。

# 第十四話　袁紹、お宝を探すのことその六

「それはもう化け物だろ」
「そうなのだ。そこまであったら流石に勝つのは難しいのだ」
「難しいというよりは逃げた方がいいな」
趙雲はこう言った。
「流石にそれだけの相手だとな」
「そうですね。流石にそこまでの相手は」
香澄もそれを言う。
「けれどナコルルがいたらそれも」
「話をできる獣とできない獣がいます」
だがナコルルはこう言うのだった。
「ですから」
「そうなの。ナコルルでも話ができない獣がいるのね」
「人間と同じか」
キングはこう考えるのだった。
「それだとな」
「そうですね。人間と同じですね」
ナコルルはキングの今の言葉に頷いた。
「言われてみたら」
「人間も動物も一緒なのね」
舞もナコルルのその言葉を聞いて述べる。
「つまりは」
「そういうことか。どんな奴でも心はあるんだな」
馬超もそれに頷く。するとだった。
不意に目の前からだ。六人程が出て来てだ。全速力で一行の間を駆け去っていった。
「あれは？」
「袁紹なのだ」

関羽と張飛は彼女の姿を認めた。
「どうしてここに？」
「何をしているのだ？」
「それはわからないが」
関羽は眉を顰めさせながら述べた。
「だが。かなり焦っているな」
「何に焦っているのだ？」
「それだったらよ」
趙雲と馬超はそれを問題とした。
「あそこまで焦っているとなると」
「しかもあれだけ護衛がいるのにな」
「！？」
するとだった。ここでだ。一行の目の前にあの巨大な熊が出て来た。何と森の木々から身体が出てだ。その巨体を誇示するようにして見せていた。
「おい、何だよこれ」
「熊だな」
趙雲は冷静に馬超に返す。
「これは」
「いや、それでも大き過ぎるだろ」
「しかし熊だ」
「だから普通の熊じゃないだろ、あれは」
「そうだな」
わざとあえて冷静に返すのだった。
「ここまで大きいとな」
「どうするんだい、それで」
キングは熊を見上げながら一行に問うた。
「この熊を」
「駄目です、お話できません」
ナコルルがここで言う。

「どうやら冬眠しそびれた様で。それで」
「それじゃあここは」
「どうします？」
舞と香澄もその熊を見上げていた。
「これだけの相手を」
「一体」
「あっ、こいつは」
ところがであった。張飛がここで明るい顔になって言うのだった。
「ミーシャなのだ」
「ミーシャ！？」
「誰だよそれ」
「鈴々が昔一緒に暮らしていた熊なのだ」
こう趙雲と馬超に言うのだった。
「一緒にだと」
「あの化け物とかよ」
「そうなのだ。とてもいい奴なのだ」
こう話すのだった。
「少し見ない間に成長したのだ」
「成長どころじゃないぞ」
キングが突っ込みを入れる。
「あの大きさは」
「そうなのだ？熊は大きいものなのだ」
「あれは。赤兜じゃないんですか？」
ここで孔明が言った。

# 第十四話　袁紹、お宝を探すのことその七

「あの伝説の」
「赤兜だと」
「はい、何百年も生きたとてつもなく巨大な熊がいると聞いています」
こう関羽達に対して話す。
「しかしそれは南蛮の方にいた筈ですが」
「じゃあ何でここにいるのよ」
「それがわからないのですが」
舞と香澄が孔明の言葉に問い返す。
「それなら」
「どうして」
「それはわかりません。ですが」
何故その赤兜がここにいるのかはミーシャにもわからない。しかしであった。
「ただ」
「ただ？」
「普通の人間の相手になるものじゃありません」
このことを真剣な顔で言うのだった。
「ですからここは」
「そうだな。君子危うきに近寄らずだ」
趙雲がここで言う。
「だからだな」
「はい、これはもうすぐに」
「だから違うのだ」
しかし張飛はまだ言う。
「これはミーシャなのだ。鈴々の友達なのだ」
「それで何なんだよ、ミーシャって」

馬超がその張飛に問う。
「鈴益々と一緒に暮らしていたって？」
「そうなのだ。山の中で一緒に楽しく暮らしていたのだ」
そうだったというのである。
「けれど大きくなり過ぎてお爺ちゃんが山に戻してそれでお別れになったのだ」
「しかしそれは幽州の話だろう？」
関羽がそれを言う。
「ここは官渡だぞ。黄河を挟んでいるしだ」
「違うのだ、ミーシャなのだ」
あくまでそれというのだった。張飛はだ。
「絶対にそうなのだ」
「じゃあ証拠は？」
「あるのだ」
こう舞にも返す。
「その証拠に頭のところが白いのだ」
「赤いですよ」
今度は香澄が言った。
「見事なまでに」
「・・・・・違ったのだ。熊違いだったのだ」
「間違いありません」
そしてここでまた孔明が言う。
「あれはです。赤兜です」
「逃げるか、ここは」
関羽も流石に青い顔になっている。
「私達の相手になる存在じゃない」
「赤兜は殆ど不死身と聞いています」
孔明の説明が再び来た。
「ですから」
「そうだな、ここは」

「逃げるしかありません！」
こう言ってであった。彼女達も逃げ去る。何とか追って来るその赤兜から逃げようと全速力で駆けはじめた。
袁紹一行は森の中を駆ける。その中でだった。
「皆さんいますわね！」
「は、はい！」
「ここです！」
「います！」
五人から声がしてきた。
「ちゃんといますから」
「安心して下さい」
「それならいいですわ」
それを聞いてまずは安心した声を出す袁紹だった。だがその間も全速力で駆け続けている。当然熊から逃げる為である。その為だ。
「ですがそれでも」
「はい、あんな熊あたいの剣でも斬れませんよ」
「私の鎚でも」
文醜と顔良も駆けている。
「あそこまで大きいと」
「流石に」
「赤兜は不死身らしいです」
「そう書にありました」
田豊と沮授はよりによってこう言う。

# 第十四話　袁紹、お宝を探すのことその八

「殆ど神に近いです」
「荒ぶる神です」
「そんなもの相手にはできません」
審配は袁紹から離れない。
「ですからここは」
「とにかく逃げましょう！」
「絶対に！」
顔良と文醜が言ってであった。
「とにかく！」
「何とかまかないと！」
「よし、こっちですわ！」
袁紹は咄嗟にある場所に向かった。
「こっちに逃げれば」
「あっ、そっちは！」
「駄目です！」
田豊と沮授は主の動きを見てすぐに叫んだ。
「麗羽様、いけません！」
「地図を見ればそこは」
「えっ！？」
気付いた時にはだった。もう遅かった。
五人も慌てて袁紹のところに向かう。するとそこは。
足場がなかった。宙であった。そしてだ。
「えっ！？」
「つまりは」
「ここは」
そうなのだった。何もなかった。そうしてだ。
「きゃあああーーーーーーっ！」

「崖ーーーーーーーーっ！」
六人はそのままま逆さまに落ちていった。気付いた時には小川のほとりに見事に落ちていた。しかしそれで誰かが死んだかというとだ。
「皆さん大丈夫でして？」
「はい、何とか」
「生きています」
「無事です」
こう言ながらだった。六人共起き上がるのだった。
そしてそれぞれ周りを見渡す。そこは。
「小川？」
「そうですね」
「ここは」
「あの熊はいませんわね」
袁紹は周りを見回しながら述べた。
「何とかまいたようですわね」
「そうですね。熊は何とか」
「まいたみたいですね」
田豊と沮授も当然ながら無事だった。
「一時はどうなるかって思いましたけれど」
「それでも」
「まずはよしとしましょう」
審配もいた。
「全員五体満足で」
「それで地図にここ載ってるの？」
「それはどうなんだ？」
顔良と文醜が地図を持っている沮授に問う。
「ええ、そうね」
沮授がその地図を見ながら二人に返す。
そのうえでだ。こうも言うのだった。

「それにしてもね。麗羽様が御無事でね」
「ええ、そうよね」
「それはな」
二人も沮授の今の言葉にすぐに頷く。
「若しも何かあったら」
「一番困るからな」
「そうよね」
沮授はその袁紹を見る。彼女は今は田豊と審配が傍にいて世話をしている。その服の埃を払ったり怪我はないか必死に見ているのである。
「全く。あの戦いの時といい」
「無茶が過ぎます」
こう言って彼女の世話をするのだった。二人共心配する顔である。
「何かあってからでは遅いですから」
「気をつけて下さいね」
「え、ええ」
袁紹はその二人に応えてだ。そうして言うのだった。

# 第十四話　袁紹、お宝を探すのことその九

「お宝を探すのは好きですけれど」
「はい」
「ですから今も」
「しかしですわね」
田豊と審配だけではなかった。五人を見ながら言うのであった。
「最も大切なものはそれではありませんわね」
「といいますと」
「それは？」
「民と。そして」
そしてここからの言葉は。
微笑んだ。そして。
「いえ」
「いえ？」
「いえ、ですか」
「何でもありませんわ」
思わせぶりな微笑で言うだけであった。
「別に」
「えっ、何ですかそれ」
「ちゃんと言ってくれないと困ります」
文醜と顔良がすぐに文句を言う。
「とりあえず麗羽様が御無事で何よりですけれど」
「他にあるんですか？」
「ないですわ。それにしてもここなんですわね」
「はい、そうです」
沮授は袁紹に対しても述べた。
「この辺りなんですけれど」
「では探しますわよ。ここなら」

「はい、あの巨大な熊もいませんし」
「すぐに」
田豊と審配が応える。こうしてすぐに周囲を探しにかかる。そこには袁紹も加わっていた。彼女も自分からも探しにかかっていたのである。
「何か麗羽様って自分がやらないと気が済まないんですか？」
「戦いの時でもそうですよね」
「美羽とは違いましてよ」
こう文醜と顔良に返す。言葉を返しながらそのうえで小川のほとり、小石の場所を見回している。特に大きな岩が集まっている場所を見回している。
「自分から動かなくてどうしますの？」
「ですがあまり前線に立たれますと」
「それは」
田豊と沮授がすぐに言う。
「危ないですから」
「何かあったら」
「華琳もそうしていましてよ」
「曹操殿もですか」
「だから」
「そうですわ。前線で戦うのがわたくしのやり方でしてよ」
官渡のこともあるがどうやら実戦派でもあるらしい。そんな彼女であったが今ふと傍にあった大きな岩の一つに手をかけた。するとだ。
「えっ！？」
「なっ！？」
何とここでだ。岩が急に動いてだ。それが崩れ落ちてそれがあった場所から噴水の如く水が湧き出てきた。そしてその水はというと。
「温かい」
「ってことは」

「これは」
袁紹側が驚いているとだった。ここにだ。
「ここに何か反応がありますけれど」
「そうなのか」
夏侯惇が荀？の言葉を聞いていた。
「ここなのか」
「ええ、ここよ」
こう夏侯惇に返す。見ればその両手の針金がそれぞれ左右に開いている。
「ここみたいだけれど」
「そうなのか。ここか」
「しかし小川の辺りで？」
「その宝って何なのかしら」
曹操の左右を固めている曹仁と曹洪がここで話す。
「一体何があるのかしら」
「銀とか金とか？」
「食べ物だったらいいな」
許緒は笑いながら言った。
「それだったら」
「いや、それはないわよ」
「お宝にはないわよ」
曹仁と曹洪がそれはないという。

# 第十四話　袁紹、お宝を探すのことその十

「だって腐るから」
「それは」
「何だ、そうなの」
許緒は二人にそう言われてすぐに残念な顔になった。
「それだったらよかったのに」
「帰ったら私の料理か秦兄弟の料理を食べましょう」
曹操が微笑んで許緒に述べた。
「それならね」
「はい、わかりました」
許緒は曹操の言葉に笑って返した。
「それじゃあ」
「そうしましょう。ところで」
「はい、ところで」
「あれは何かしら」
前を指差しての言葉だった。その湧き出る間欠泉をだ。
「あれは」
「温泉では？」
夏侯惇が言った。
「あれは」
「温泉！？」
「あっ、曹操殿」
「いいところに来られましたね」
田豊と沮授が彼女達に気付いて声をかける。
「どうやら温泉です」
「凄いものを掘り当てまして」
「温泉！？」
温泉と聞いてだ。曹操も思わず声をあげた。

「そんなものが見つかったっていうの！？」
「どうですか？これから一緒に」
「入りませんか？」
「お風呂って」
荀？が困惑した顔で言う。
「何でこんなことに」
「よかったらだけれど」
「どう？」
「筍湛もいないわよ」
審配はさりげなくこのことも告げてきた。
「どうかしら、それで」
「そうね」
曹操がそれに応えた。
「悪くないわね。では私達も」
「お風呂ですか」
「今から」
「官渡で汗もかいていることだし」
このことを曹仁と曹洪に放す。
「今からね」
「はい、じゃあ」
「すぐに」
そしてであった。今度は。
「趙雲さんは何処に行かれたんでしょうか」
「ううむ、急にいなくなったな」
関羽が孔明の言葉に応えていた。
「何処に行ったのか」
「何をされているのでしょうか」
「あれじゃないのか？」
ここで馬超が言う。
「またな。あの仮面を着けてな」

「仮面って何なのだ？」
「御前本当にわからないのか！？」
少し呆れながら張飛に返す。
「だからあれはな」
「あの変態仮面は何者なのだ」
張飛は自分の顎に右手を置いて考える顔になっていた。
「おかしな奴なのだ、本当に」
「おい、それ本気で言ってるんだろうな」
「あの変態仮面の正体も気になるのだ」
彼女はわかっていなかった。全くである。
そんな話をしながら小川のところに来てだ。彼女達も見たのである。
「えっ、あれは」
「一体」
「温泉ですね」
孔明がすぐに言った。
「あれは」
「温泉ですか」
「何でこんな場所に」
「どうやらここにそうした水脈があったみたいですね」
こうナコルルと香澄に話す。
「それでみたいですね」
「そういえば硫黄の匂いもするわね」
「そうだな」
舞とキングはこのことに気付いた。

# 第十四話　袁紹、お宝を探すのことその十一

「ってことは」
「本当に温泉か」
「あれ、あんた達は」
「あの時の」
文醜と顔良がここで彼女達に気付いた。
「何でこんなところにいるんだ？」
「どうして」
「いや、たまたまここに来たのだ」
「熊やらに遭ったけれどな」
袁紹側と直接面識のある張飛と馬超が応える。
「これから南に行こうと思っているのだ」
「揚州の方にな」
「ふうん、そうなんだ」
「その前によかったら」
「ええ、いいですわよ」
袁紹も言ってきた。
「随分大きなお風呂になりましたしね」
「ううむ、まさかこんな展開になるとはな」
関羽は腕を組んで考える顔になっていた。
「温泉か」
「けれど悪いお話ではないですよ」
ナコルルが関羽に対して言う。
「ここは御言葉に甘えても」
「そうか」
「さあ関羽」
曹操は思わせぶりな顔で関羽に顔を向けて言ってきた。
「一緒に入りましょう」

「華琳様、では」
「私達も」
曹仁と曹洪はもう服を脱ぎはじめている。曹仁の下着はピンクのブラとショーツで曹洪はコバルトブルーである。それぞれ下着にはこだわりがあるようだ。
曹操も白い下着姿になっていた。そのうえでまた関羽に話す。
「入りましょう」
「是非」
「ええ、じゃあね」
「では鈴々達も入るのだ」
張飛も服を脱ぎはじめていた。
「今は一緒に」
「はい、それじゃあ」
「今から」
ナコルルと香澄もだった。こうして皆で風呂に入る。それからだった。
全員で風呂に入るとだ。袁紹はにこりと笑って言う。
「お宝は見つかりませんでしたけれど」
「温泉は見つけたっていうのね」
「華琳、わたくしに感謝しなさい」
その笑顔で曹操に言ってきた。
「今回はわたくしの勝ちになりますわね」
「あら、お宝は見つかっていないわよ」
「それでも温泉とさらに素晴しいものが見つかりましたわよ」
「成程ね」
曹操はその一言でわかったのだった。
「そういうことね」
「その通りですわ。それにしても」
ここで曹操側の面々を見てだ。続いて自分達も見てだ。こう言うのであった。

「胸に関しても」
「何よ」
荀?がすぐに反応を見せる。
「胸がどうしたのよ」
「荀?さんの穴でわたくし達の勝利になっていますわね」
「大きさは関係ないわよ」
その言葉にすぐにムキになって返す荀?だった。
「それは。そもそもそれを言ったらね」
「それを言ったら?」
「孫家には誰も勝てないじゃない」
こう言うのである。
「あんた達の誰もあそこには勝てないでしょ」
「うっ、あれは確かに」
孫家の名前が出るとだった。さしもの袁紹も怯みを見せた。
「かなりのものですわね」
「あの家の面々には何時か思い知らせてやるんだから」
何故か胸のことになると殊更ムキになる荀?だった。
「後何か黄忠とか厳顔っていうのが大きいらしいけれど」
「ああ、その人達ですね」
孔明はその二人の名前を聞いてすぐに応える。関羽一行は曹操側と袁紹側の間にいるようにしてだ。そのうえで少し離れた場所で風呂に入っていた。

# 第十四話　袁紹、お宝を探すのことその十二

「凄い弓の使い手らしいですね、黄忠さんは」
「そうらしいわね、それにおいては夏侯淵殿に匹敵するっていう」
「それだけ凄いって」
田豊と沮授も二人のことは知っているようだ。それでこんなことも言うのだった。
「確か南の方にいるっていうけれど」
「今は揚州の方にいるらしいわね」
「あと厳顔は益州にいるわね」
荀？がここでまた言う。
「あの地で城を一つ治めているわ」
「そういえば益州は」
「そうよね」
「今は特に領主もいなくて」
「結構治安が悪いらしいし」
「誰か治める人がいたら」
こんな話もするのだった。そしてだ。
「誰かいい人がいたらね」
「いいんだけれど」
「益州か」
関羽がその州の名前を聞いて述べた。
「一度行ってみたいな、あの地にも」
「そうですね。何かありましたら」
孔明が笑顔で応える。
「一度」
「そうだな。縁があればな」
「はい、是非」
そしてだ。ここでまた荀？が言うのだった。

「これでお酒があれば」
「またかよ」
文醜が彼女の言葉に呆れた顔になる。
「おめえ酒ばっかりだな」
「いいじゃない、お酒は止められないのよ」
「それだけはかよ」
「そうよ。お酒と華琳様はね」
少しツンとした顔で言うのであった。
「皆で飲むのもいいし」
「最近シャルロットやロサと一緒に飲んでいるのだ」
夏侯惇がここで一同に話す。
「妹は妹で何か見慣れない顔と飲んでいるしな」
「あれ誰かしら」
何と曹操ですらいぶかしむ顔になる。
「赤い髪の。見たことないけれど」
「そうですよね、白馬に乗ってますけれど」
「あれは」
曹仁と曹洪も知らないのだった。
「誰なんでしょうか」
「袁紹殿の配下の人ですか？」
「赤い髪の毛で白馬に乗っている？」
袁紹の方もそれを聞いて腕を組む。
「誰ですの、それは」
「御存知ないですか」
「それは」
「白馬が好きな人間もいませんし」
袁紹陣営においてはというのである。
「特に」
「そういえば我々には白馬を好む人はいませんね」
審配はその密かに豊かな胸を湯舟の中に入れつつ述べる。

「だとしたらそれは一体」
「密偵ではないのはわかるが」
夏侯惇は真剣な顔になっていた。
「誰だ、あれは」
最後の最後で謎が浮かび出ていた。そしてその夏侯淵はだ。一人で寂しい顔で仕事をしていた。そのうえで兵士達に対して言うのだった。
「これが終わったらだ」
「はい」
「飲みに行って来る」
こう言うのだった。
「少しな」
「左様ですか」
「丁度公孫賛殿も幽州からここに来ておられるしな」
「誰ですか、それは!?」
兵士達はその名前を聞いて驚いた声をあげた。
「我が軍の方でしょうか」
「袁紹殿か？」
「いや、孫策殿ではないのか」
「いや、幽州といえば今は太守もいない」
「そこの豪族の方か」
「幽州の太守だ」
これは曹操ですら知らないことだったりする。当然曹操の陣営においてもこのことを知っているのはこの夏侯淵だけであったりする。
「実はだ」
「幽州に太守がおられたのですか」
「そうだったのですか」
「そうなのだ。誰も気付いていないようだがな」
「何と・・・・・・」
「そうだったのですか」

皆それを聞いて唖然となる。驚いていた。
「幽州に太守がですか」
「おられたのですか」
「その通りだ。さて」
ここまで話してだった。丁度筆が置かれた。
「今から飲んで来る。そういえば擁州には華雄という武将もいるそうだな」
「ですが夏侯淵様は存在感ありますから」
「別にそれは」
「だといいのだがな」
兵士達の言葉に優しい微笑みになる。
「最近擁州では鬼が出るとも聞いているが」
「ああ、何か山賊やらを片っ端から捕まえて」
「休む間もなく働かせ修行をさせている鬼ですね」
「二人いるそうですね」
「世の中恐ろしいものもいるものだ」
夏侯淵は言った。
「我が陣営にはそこまで残虐なのはいないからな」
「全くです」
「擁州のことは中々わかりませんが」
そんな話もするのだった。こうして夏侯淵はその公孫賛と二人で飲むのだった。だが巷では彼女は今は一人で飲んでいたと言われるのであった。なお宝はあの巨大熊がねぐらにしていた。深い洞穴の奥にあり熊はそこでようやく冬眠に入った。だが誰も宝のことは忘れてしまっていた。

第十四話　　完

2010・5・18

# 第十五話　黄忠、思わぬ仕事をするのことその一

第十五話　黄忠、思わぬ仕事をするのこと

「アチャ、アチャチャチャチャ！」
「ピギャーーーーーーーッ！」
長安の郊外で奇声が響いていた。
「飛燕斬！」
「あーーーーーーーざーーーーーーーみーーーーーーーーーっ！！」
不知火幻庵が吹き飛ばされる。キムが鳳凰脚を叩き込んだのだ。
彼はそのまま地面に叩き付けられる。完全に白目を剥いている。
「砂時計一個分の遅刻だ！」
「ち、遅刻でここまでするケ・・・・・・」
「無論！一分たりとも遅れてはならないのだ！」
こう力説するキムだった。
「だからこそだ。わかったな！」
「お、鬼だケ・・・・・・」
かくして強制労働に従事させられる幻庵だった。彼の他にはアースクエイクや山崎達もいる。当然チャンとチョイも健在であり労働に従事している。
その中でだ。アースクエイクが幻庵に言ってきた。
「なあ」
「何だケ？」
「俺達ここから出られるのか？」
「ああ、それな」
「諦めた方が精神衛生上いいでやんすよ」
チャンとチョイが穴を掘りながら二人に言ってきた。幻庵達も同じことをしている。どうやら今は灌漑にあたっているらしい。キムとジョンが怖い顔で監督している。

「俺なんかもうどれだけいるんだか」
「十何年はいるでやんすよ」
「おい、何だよそれ」
山崎がそれを聞いて思わず声をあげた。
「刑務所でもそこまで長いのは滅多にねえぞ」
「刑務所の方がずっといいからな」
「刑務所にはあの旦那達はいないでやんすよ」
二人は衝撃の事実を語った。
「それ考えたらここはな」
「刑務所よりも酷いでやんす」
「えっ、じゃあ俺達は」
「ずっとここかよ！」
「何てこった！」
何処かで見た三人組はチョイの今の言葉に驚いた顔になる。
「あの旦那達とずっとかよ」
「幾ら元山賊でもそりゃないだろ」
「何であんな旦那達になっちまったんだよ」
「ああ、それな」
「知ろうと思ったことはないでやんす」
チャンとチョイがこう述べた。
「元からああだったんじゃねえのか？」
「多分でやんすが」
「あんな無闇に正義感が強くてかよ」
「しかも諦めることを知らねえ性格にかよ」
「ああ、なったんだよ」
「悲しいことでやんす」
こう言ってであった。しかもそこにだ。
「こら、そこ！」
「さぼるのは許しませんよ！」
キムだけでなくジョンまでいた。

「今は労働奉仕の時間だ！」
「頑張っていきましょう！」
「頑張らないとあれだよな」
「今さっきのわしだケ」
アースクエイクと幻庵が述べる。
「だよな、容赦なく超必殺技を浴びせられてな」
「身体で覚えさせられるケ」
「鬼だな」
山崎は今は一輪車を持っていた。
「二十四時間超必殺技かよ」
「ああ、悲しいことにな」
「何かがおかしいでやんすよ」
こんなことを言いながら泣きながら強制労働に従事する彼等だった。その彼等を見る者もいた。そして彼女はこう張遼に対して言うのだった。
「やり過ぎじゃないかしら」
「そう思うか？」
「ええ、幾ら何でも」
薄紫の長い髪を後ろで団子にしてまとめている。顔は董卓に非常によく似ているがさらに一歳か二歳幼く見える。黒い上着と丈の短いスカートである。生足が白い。そこに白いブーツを履いている。マントは黒であり紫の冠を被っている。その彼女が張遼に対して言っていた。

# 第十五話　黄忠、思わぬ仕事をするのことその二

「キム＝カッファンとジョン＝フーンだけれど」
「あの二人かいな」
「何かあったらすぐに折檻だし」
「体罰の限界超えてるわな」
「確かに元山賊だけれどやり過ぎじゃないかしら」
こう言うのである。
「強制労働と修行ばかりよね」
「あれな。うちもちょっとなあ」
張遼も困ったような顔で首を傾げながら言うのであった。
「やり過ぎや思うけれどな」
「そうね。じゃあ姉様に言ってみるわ」
「ああ、それは止めた方がええで」
張遼は彼女が行くというのはそれは止めた。
「ちょっとな」
「止めた方がいいの」
「そや、それは止めた方がええで」
また言う張遼だった。
「月はそういうの敏感やからな。凄い気にするで」
「姉様は優しい方だから」
少女もまた困った顔になるのだった。
「どうしてもね」
「そや。それに詠もおるんやで」
「詠さんもね。いたのね」
「そや。詠がまた騒ぐで」
「姉様と詠さんが政治をやってくれてるけれど」
「董白ちゃん、あんたもな」
「日でいいわ」

それでいいと返すのだった。
「真名でいいわ」
「それでええんかいな」
「ええ、それでいいわ」
実際にそれでいいというのだった。
「それでな」
「そやったらええれどな。じゃあ日ちゃん」
「ええ」
名前を言われてだった。そうしてである。
その少女董白は張遼に対してさらに話した。
「このことは放っておくしかないで」
「それしかないの」
「まず第一にあの二人は人の話を絶対に聞かん」
このことを見事なまでにわかっている張遼だった。
「何があってもや。己の正義しか聞かん」
「残念ながらその通りね」
「そや。しかもや」
「しかも？」
「絶対に諦めへん」
さらに悪いことだった。
「そやからや。放っておくしかあらへん」
「じゃああの人達は」
「可哀想やがな」
目を閉じての言葉だった。
「遠い星になったんや」
「無茶しやがってなのね」
「そや。それはそうとや」
「ええ」
「白ちゃん、あんたも治安維持頼むで」
「ええ、そうね」

「今文官は三人おる」
張遼は微笑んでこう述べた。
「月ちゃんに詠に音々音や」
「そして武官は」
「呂布にうち、それに華雄や」
「私はどっちもいけるけれど」
「そやから今は治安頼むわ」
あらためてこう言うのであった。
「頼むで」
「ええ。涼州から姉様のところに来たけれど人材も豊かになっているみたいね」
「そやな。最初は三人だけやったらしいけどな」
「姉様と詠と華雄だけだったわね」
「涼州からのな。けれどあんた涼州から出てんな」
張遼はこのことも言った。
「それ何でや？」
「姉様が困ってるって聞いたし。それに」
「それに？」
「馬騰さんもそうだったけれど袁紹さんもね」
「合わんかいな」
「合わないわね。特に袁紹さんはね」
そうだというのである。
「奇矯な振る舞いのある人だし」
「まあ変な人やのは聞いてるからな」
「だから姉様のところに来たのよ。勝手も知ってるし」
「そやったんかいな」
「そういうこと。しかし擁州っていうのは」
今度はその擁州についても話すのだった。

# 第十五話　黄忠、思わぬ仕事をするのことその三

「結構ややこしい場所みたいね」
「そやな。まあそれでも最近結構ましになったらしいで」
「そうなの」
「人材が増えたさかいな。うちもあんたも来たしな」
「姉様の頼りになってるのならいいわ」
董白はこう言って微笑みもした。
「それでね。じゃあ後は」
「ああ、治安維持に山賊退治やな」
「行きましょう」
こんな話をしてであった。二人も忙しく動いていた。
擁州が次第に人が集まってきていたその時。関羽達は予定通り南に向かっていた。そして徐州を越えようという時にであった。
「ここはどうもな」
「そうね」
「あまりいい場所ではありませんでしたね」
舞と香澄がキングの言葉に応えて言うのだった。
「太守がいないせいだな」
「これといった統治者がいないのが問題みたいね」
「誰かいないのでしょうか」
「どうやら曹操殿も二つの州の統治で大変らしいからな」
ここで関羽が三人に述べた。
「それで徐州まではだ」
「そうなのか」
「あの袁紹さんも忙しいみたいだしね」
「だからこの徐州までは」
「そのかわりにですね」
孔明がここで話す。

「張三姉妹っていうグループの活動が盛んですね」
「ああ、あの三人な」
馬超もその三姉妹の話に応える。
「何か凄い人気だよな」
「ここに来るまでも名前を何度か聞いているしな」
趙雲も話す。
「かなり有名な旅芸人だな」
「そうですね。機会があれば私達も」
ナコルルは考える顔で述べた。
「一度聴いてみたいですね」
「鈴々もそう思うのだ」
張飛もこう述べる。
「是非一度なのだ」
「路銀に余裕があればそうしたいな」
関羽も少し考える顔で述べた。
「一度な」
「そうですね。ところでそろそろ揚州ですよ」
孔明がここで場所について話した。
「そろそろですけれど」
「離しなさいよ！」
しかしここでだ。前から声がした。
「んっ！？」
「何だ？」
一同はその声を聞いてそれで前を見るとだった。そこには。
白と淡いピンクのドレスを思わせる上着に丈の短いスカートだ。上着の丈は短く臍が見えている。肌はやや黒い。目は見事な青であり紫の長い髪を左右でリングにしている。白いリボンが目立つ。胸には赤いリボンだ。顔立ちは幼く背も幼い幼女である。しかしその顔立ちは明るく可愛らしいものだ。その青い目が大きくかなり目立っている。

その彼女を見るとだ。髭の親父に手を掴まれていた。
「ちょっと、何するのよ！」
「ええい、離してたまるか！」
「私に何するのよ！」
見れば上着の袖はかなり広くなっている。あまり動くのに適している服ではないようだ。
その幼女を見てだ。張飛が最初に動いた。
「悪者なのだ！」
こう言って早速髭の親父を蛇矛の柄で殴り飛ばした。それで終わりだった。
「早く逃げるのだ！」
「え、ええ」
幼女はそれに応えて何処かに逃げ去った。そして一行で親父を取り囲むとだった。
「幼い女の子を捕まえて何をしようとしていた」
「何をだって！？」
「そうだ、何をするつもりだった」
関羽が親父に対して問う。

## 第十五話　黄忠、思わぬ仕事をするのことその四

「一体な」
「ああ！？勘定払わせるつもりだったんだよ」
「勘定！？」
「勘定って」
「あの娘食い逃げしようとしてたんだよ」
こう言うのである。
「だからだよ。捕まえようと思ってな」
「それでか」
「それでだったんですか」
「ほい、それでな」
親父は憮然とした顔でだ。一行に対して右手の平を差し出してきた。
「代わりに払ってもらおうか」
「代わりに？」
「代わりにって？」
「あの娘の代わりにだよ。お勘定をだよ」
「何で私達がなのだ！」
関羽はすぐに抗議した。
「全く、何故だ」
「あんた達のおかげでこうなったんだからな」
だからだという親父だった。
「ほい、じゃあな」
「ううう・・・・・」
「仕方ないわね」
舞が苦い顔で述べた。
「今回は私達のミスなんだし」
「だよな。しかしこれ物置か？」

馬超は茶店の横にある小屋を見て言うのだった。
「随分と古い場所だな」
「ああ、そこは昔の店だよ」
親父は関羽から金を受け取りながら馬超に応える。
「近いうちに取り壊すつもりなんだよ」
「そうなのか」
「ああ、まあそっちは気にしないでくれ」
そんな話をしていた。そうしてであった。
その娘の代わりに金を払ってだ。一行はあらためて揚州に入った。
そこに入るとであった。
「ちょっと」
「んっ？御前は」
「待ちなさいよ」
あの娘だった。こう言いながら一行のところに来た。そうしてだ。
「あんた達旅の武芸者よね」
「それがどうかしたのだ？」
張飛はむすっとした顔で娘に問う。
「御前のせいでお金を支払う破目になったのだ」
「そう、有り難う」
「有り難うではないのだ。全く御前のせいで」
「それはわかったわよ。ただ」
「ただ？」
「あんた達武芸者ならね」
こう言うのである。
「私の家来になりなさい」
「何でそういう理屈になるの？」
今の言葉に香澄もいぶかしむ顔になる。
「理屈がわからないけれど」
「理屈はいいのよ」
「よくないわよ」

今度は舞が突っ込みを入れる。
「っていうかあんた誰？」
「私？私はね」
娘は舞の問いにだ。胸を張ってこう答えた。
「孫家の末娘よ」
「孫家！？」
「っていったら揚州の」
「そうよ。名前は孫尚香」
胸を張ったままである。
「覚えておいてね」
「孫家の末娘ってよ」
「何故こんなところにいるのだ？」
馬超と趙雲がそれを聞いていぶかしむ。
「それって滅茶苦茶嘘臭いだろ」
「全くだな」
「あんた何でここにいるのかしら」
キングはかなりダイレクトに問うた。
「そもそも」
「そうですよね。お姫様がこんな場所に？」
「ちょっと考えられませんね」
ナコルルと孔明もこう話す。
「はい、ですから」
「若しかして」
「何よ、間違ってもね！」
だがここで孫尚香は言うのだった。

# 第十五話　黄忠、思わぬ仕事をするのことその五

「お城の暮らしがきつくて。張昭と張紘達が口煩くて逃げたわけじゃないわよ」
「ああ、そうだったのか」
「これでわかったのだ」
それを聞いてすぐに頷いた関羽と張飛だった。
「全く。何かと思えば」
「家出少女だったのだ」
「うっ、何でわかったのよ」
「自分で言ってますよ」
速攻で突っ込みを入れる孔明だった。
「それはもう」
「うう、しまったわ」
「まあとにかく。女の子一人旅は危ないわ」
香澄は常識の観点から述べた。
「だから今は」
「ええ、それはね」
「その通りだな」
皆それを聞いて香澄の言葉に頷いた。そうしてだった。
関羽がそれを聞いてだ。こう孫尚香に言ってきた。
「よかったら一緒に来るか？」
「ええ、家来にしてあげるわ」
まだこう言うのだった。
「シャオのね」
「一々口の減らない娘なのだ」
「そういえば聞いてたよ」
馬超が少しうんざりとした顔で話を出してきた。
「孫家の末娘は我儘だってな」

「何よ、我儘っていうの？」
「自覚はないみたいだな」
「そうですね」
ナコルルが溜息と共にキングの言葉に頷く。キングは腕を組んで呆れた顔になっている。
「全く。どういう人間だ」
「困った娘みたいですね」
「はい、じゃあ行きましょう」
まだこんなことを言う孫尚香だった。こうして彼女達は城に入った。しかしその門を入るのにだ。
「また随分とな」
「はい、警護が厳重ですね」
孔明が関羽に述べる。
「一体何があるのだ？」
「揚州は山賊も少なく治安がいいと聞いてましたけれど」
「河賊もかなり減ったわよ」
孫尚香がこう言ってきた。
「姉様達が討伐したから」
「姉様達？」
「ああ、こいつの二人の姉なんだよ」
馬超がナコルルに対して話す。
「孫策に孫権っていうんだよ」
「そうなんですか。二人ですか」
「上の姉が今のここの牧だったな」
馬超はこうも話した。
「母親の跡を継いでな」
「母親？」
「堅母様のことよね」
孫尚香が言ってきた。
「そうよね」

「ああ、あの人のことだよ」
「今はもういないけれどね」
孫尚香はここでは寂しい顔になって俯いた。
「母様は」
「そういえば異民族との戦闘で死んだのだったな」
「前ね。山越にね」
「山越か」
趙雲がその名前を聞いて考える目になった。
「あの者達はあまり攻撃的ではなかったと思うが」
「最近かなり凶暴なのよ。それで揚州を治める立場としてはね」
「討伐に向かったんですね」
「途中まで勝っていたけれど急に石弓が来てね」
「石弓!?」
石弓と聞いてだった。孔明はふといぶかしむ顔になるのだった。
そしてだ。孫尚香はまた言うのだった。
「そうよ。それに頭を撃たれて死んだのよ」
「何で石弓なんでしょうか」
「おかしいのだ?それが」
「山越って石弓は持っていない筈ですけれど」
「それ姉様達も言っていたわよ」
孫尚香もそれを言う。

## 第十五話　黄忠、思わぬ仕事をするのことその六

「おかしいって。賊にしても山越の勢力圏にいる筈がないって」
「孫堅殿の敵ではないのか？」
ここでやっと城に入られた。その中で趙雲が述べた。
「あの方も朝廷の宦官達とは仲が悪かったのではないのか？」
「けれどよ。あの連中でも山越の勢力圏まで来ないだろ」
馬超がそれはどうかと言ってきた。
「どうせならそこで補給減らさせるとかそういう嫌がらせして死なせるだろ」
「それもそうか」
「だよな。嫌がらせでな」
「じゃあ何なのでしょうか」
孔明も首を捻るばかりだった。
「その石弓の主は」
「それで今は孫策姉様が牧なのよ」
孫尚香はこう話す。
「跡を継いでね」
「そうなのか」
「そうよ。それでお金だけれど」
「ああ、御前ないのだったな」
「そうよ」
ここでもまた偉そうに張飛に応える。
「わかったわね、おチビその二」
「御前に言われたくないのだ、おチビは朱里なのだ」
「あの、鈴々ちゃん」
だがここでその孔明が苦笑いをして張飛に言ってきた。
「今その二って言われましたけれど」
「それがどうしたのだ？」

「その場合私が一で鈴々ちゃんがその二ですけれど」
「こいつもチビなのだ」
「私はいいのよ」
孫尚香はここで強引に言い切る。
「私はね。それにお金がないのはね」
「それはどうしてだ？」
「これ買ったのよ」
その金の眩く輝く小さな髪飾りを見せての言葉だ。見ればそれは小さな花を模したものだった。
「これをね」
「ひょっとしてそれにお金全部使ったのか？」
「何考えてるのよ」
馬超だけでなく馬岱も呆れた顔になる。
「本当に我儘過ぎるっていうかよ」
「今それにお金使って何になるのよ」
「お金なんて全然気にすることないじゃない」
天真爛漫ですらある言葉だった。
「そうでしょ？別に」
「いや、それは違うぞ」
「そうよ」
馬超と馬岱はすぐに反論する。
「幾ら何でもな」
「家出して旅してるんなら」
「お金なんてどうにもなるものじゃない」
やはり孫尚香はわかっていなかった。あっけらかんとした顔をしていることにそのことがこのうえなくはっきりと出てしまっていた。自覚はないがだ。
「そうでしょ？幾らでも」
「孫家ってどういう生活をしているのだ？」
「名門ではありますけれど」

関羽も孔明も流石に呆れていた。
「それでも。ここまで甘やかしてな」
「大丈夫なのでしょうか」
「甘やかされてはいないわよ」
それはすぐに否定する孫尚香だった。
「全然ね。婆や達が五月蝿いもの」
「その張昭殿達だな」
「もう忠義一徹でしかも頭もいいし」
そういう人材もいるらしい。趙雲に応えて自分で言うのだった。
「もうね。大変なのよ」
「そういえば揚州には忠義一徹の者が多いそうだな」
趙雲がここでこう言った。
「何でも団結はかなり強いらしいな」
「そうよ。孫家はしっかりしてるのよ」
孫尚香もそれは言う。

# 第十五話　黄忠、思わぬ仕事をするのことその七

「策姉様と権姉様もいるし」
「どうも姉二人の教育に問題があるみたいだな」
「そうみたいですね」
馬岱が関羽の言葉に応えて言う。
「甘やかしているな」
「その張昭さん達に任せた方がいいと思います」
「勝手なこと言わないでよ。あんな怖いの二人にいつも傍にいられたらたまったものじゃないわ」
孫尚香はそのことは全力で嫌がった。
「もうね。口煩いったらありゃしないんだから。シャオは野原とかで虎とかパンダと一緒にいたりする方がずっと好きなのよ」
「野生児なんですね」
「何か鈴々と似てるのだ」
孔明と張飛がこう思った時だった。その時だ。
上で目が光った。そうしてだ。
「！？」
「あれは」
烏が来た。そして孫尚香がまだその手に持ってみせていた髪飾りを取って行った。それはまさに一瞬のことだった。
「えっ、何よいきなり！」
「烏かよ」
「うっかりしてたらね」
馬超と馬岱がその烏を見て言う。
「光るもの好きだからな、烏は」
「どうする？捕まえる？」
「何なら扇放つわよ」
「ママハハに行ってもらいますか？」

舞とナコルルが名乗りを挙げる。
「今なら間に合うけれど」
「どうしますか？」
こう申し出たその時だった。不意にだ。
烏が飛んで来たその建物の二階からだった。不意に何かが飛んだ。
そうしてだ。
「外した！？」
関羽が思ったその瞬間にだ。弓矢が烏を掠めてだ。それで気絶させたのである。
急所を掠められて気絶した烏はそのまま落ちた。髪飾りは彼が持ったまま孫尚香の手に落ちた。孫尚香はそれで髪飾りを取り戻したのである。
それを手に持ってだ。彼女は笑顔になった。だが烏はすぐに意識を取り戻し飛び去ってしまった。
「ちょっと、謝りなさいよ！」
「それは無茶よ」
馬岱が文句を言う彼女に言う。
「幾ら何でもね」
「何でよ」
「烏に人間の言葉がわかる筈ないじゃない」
「ナコルルのママハハはわかってるじゃない」
「一緒にしないの、ママハハと」
こう孫尚香に返すのだった。だが何人かは気付いていた。
「今のは」
「ああ、そうだな」
「わざと掠めたわね」
「それで烏を殺さずに」
ナコルルの言葉にキングも舞も香澄も真剣な顔で応える。
「あんな弓の腕を持っている人は」
「まずいないね」

「神技ってところね」
「はい、本当に」
「愛紗、あれは」
「そうだな」
関羽はその窓を見ながら張飛の言葉に頷いていた。二人も真剣な顔だ。
「相当な手練れだな」
「あそこまでやれる奴はそうはいないのだ」
「天下に五人いるかどうかだな」
「そこまでの腕だよな」
趙雲と馬超もその窓を見ていた。
「あそこまでの弓の腕はな」
「その域だよな」
彼女達にはわかることだった。そこまでのものだった。
だがとりあえず今は落ち着くことが必要だった。一行は孫尚香が見つけてきた店に入ってである。それで昼食を採るのだった。
「美味しかったですね」
「はい、本当に」
「そうでしょ？だってシャオが見つけたお店なんだもん」
その孫尚香が明るい笑顔で孔明とナコルルに話していた。
「美味しくない筈がないわ」
「直感でわかったんですか？」
「それは」
「ああ、匂いでわかったのよ」
それでだというのだ。

# 第十五話　黄忠、思わぬ仕事をするのことその八

「それでなのよ」
「匂いで、ですか」
「そうよ。美味しいものは匂いでわかるわ」
まさにそうだというのである。
「それでね」
「何か犬みたいなのだ」
張飛は孫尚香のその言葉を聞いてこう言った。
「とはいっても鈴々もそうだから人のことは言えないのだ」
「そうよね。鈴々ちゃんも匂いとかでわかるわよね」
「匂いは大事なのだ」
こう馬岱に帰す。
「それで味も大体わかるのだ」
「そういうものなのね」
「その通りなのだ。しかしこいつは」
「シャオのことよね」
「そうなのだ。直感で何かをするタイプなのだ」
「ええ、そうよ」
実際に本人もそうだというのであった。
「孫家は元々そういう血筋なのよ」
「天才肌の家系ってことか？」
「そうよ。お勉強なんてしなくてもいいのよ」
こう馬超にも返す。
「権姉様は少し違うけれどね」
「それでも学問は多少でも必要だろう」
関羽は真面目にこう述べた。
「鈴々も直感ばかりだが」
「それが悪いのだ？」

「直感に頼り過ぎるのもよくない」
まさにそうだというのだった。
「朱里を見ろ、直感だけではなく学問もだな」
「うむ、それも一理あるな」
趙雲は相変わらずラーメンのメンマを楽しそうに食べながら述べていた。
「やはりそうした知識も必要だ」
「シャオにはあまり関係ないけれど」
「孫家ってどういう家なのだ」
「そうよね。直感だけって」
「幾ら天才の系列でも」
「それでいいのよ」
こうキングや舞、香澄にも返す孫尚香だった。彼女は今はその髪飾りを見ていた。その黄金の五つの花びらの中央に青いサファイアがある髪飾りをだ。
そして街に出るとだ。あらためて街の賑やかさに気付いたのだった。
「何か凄いけれど」
「何かあるのでしょうか」
「ああ、実はな」
舞とナコルルにだ。街の男が応えてきた。
「今ここに一人凄い人が来てるんだよ」
「凄い人って？」
「誰、それ」
「それって」
「ああ、揚州の姫様でな」
こう一同に話してきた。
「二番目の姫様なんだよ」
「あれ、権姉様？」
孫尚香は二番目の姫と聞いてすぐにこう言った。

「その方が主催の催しを開くってことでな。この街で」
「あれ、権姉様がなの」
孫尚香はそれを聞いて今度はきょとんとした顔になった。
「策姉様じゃなくて」
「孫家は美人揃いだからね。皆その姫様を見ようって今から集まってるのよ」
「そうなんですか」
「今は」
「そうなんだよ。ただね」
しかしここで男は困った顔になって言った。
「何でも姫様を暗殺しようっていう奴もいるらしくてね」
「またなの？」
孫尚香の顔が今度は曇った。
「また暗殺なの」
「また？」
「またとは」
「最近策姉様を暗殺しようって奴がいるのよ」
舞と香澄に顔を顰めさせて言うのだった。
「今度は権姉様なんて」
「何か揚州も大変ですね」
「そうですね」
そんな話になっていた。そして関羽はここでだ。あの建物の中に入った。するとそこには紫の長い見事な髪を持った妙齢の美女がいた。濃い青の瞳を持ち少し垂れ目の優しげなものである。左の見には白い羽飾りがあり薄紫のスリットが深いドレスを思わせる服を着ている。肩には緑のカーディガンを羽織り同じ色の腕の覆いをしている。豊かな胸が半分露わになっている。
その美女のところに来てだ。そうして言うのだった。

# 第十五話　黄忠、思わぬ仕事をするのことその九

「先程のことですが」
「あの烏のことですか」
「はい、連れの者が助かりました」
微笑んでこう述べるのだった。
「お陰で」
「いえ、気になっただけで」
「それだけですか」
「はい、どうもそういうものは見ていられない性格で」
美女はこう答える。答えながら関羽に席を勧めてだ。二人で向かい合って話すのだった。
「関羽といいます」
「黄忠です」
こうそれぞれ名乗るのだった。
「字は雲長です」
「字は漢升といいます」
お互いに字も名乗った。そしてここで、であった。
関羽は窓を見てだ。その上で言うのだった。
「いい場所ですね」
「はい、ここからの眺めはとても」
「それにです」
さらに話す関羽だった。
「大通りが奇麗に見えますね。遠くまで」
「!?」
「普通の者ならとても届かないでしょう。しかし」
「しかし?」
黄忠の顔が強張っていた。関羽はそれに気付かないふりをしながら話を続ける。

「あの李広の様な腕の者なら間違いなく」
「くっ！」
黄忠は関羽の言葉を受けて咄嗟に傍に立てていた薙刀を手に取ろうとする。しかしであった。
その前にだ。関羽が弓矢を持ってだ。それを制していた。
「うっ・・・・・・」
「薙刀も使えるとはな」
関羽は黄忠の整った顔が強張るのを見ながら言葉を返した。
「だが。こうなってはな」
「何故このことを」
「こちらが聞きたい。鈴々」
「わかったのだ」
ここで張飛達が部屋に入って来た。そうしてであった。
そのうえで黄忠の話を聞くその話はだ。
「何っ、娘さんをか」
「はい・・・・・・」
張飛の他に孔明に趙雲、それと馬超と孫尚香がいた。そのうえで話を聞いていた。
「主人に先立たれて娘と二人で暮らしていたのですがある日」
「誘拐されたってのかよ」
「そうです。それで脅されて」
「どんな奴なのだ、それは」
「顔はわかりません」
それはだというのだった。
「顔は。全く」
「そうですか」
「しかし。娘の命を助けたければと」
こう一同に話すのだった。
「孫権殿を」
「権姉様を暗殺するなんて絶対に許さないわよ」

それは怒った顔で言う孫尚香だった。
「まあ脅されてだから仕方ないけれど」
「娘は私の全てです」
俯いた顔で言う黄忠だった。
「暗殺は武芸者のすることではありません。ですが」
「卑怯な奴もいるな」
「しかし。誰だそれは」
馬超と関羽がここで言う。
「またあれか？宦官か？」
「十常侍か」
「それはわかりません。顔は仮面で隠していました」
黄忠は俯いたままこう述べた。
「ですが。娘の絵を持ってきて安全を保障をしたうえで」
「それ、絶対にまずいですよ」
孔明は強い顔で言ってきた。
「多分仕事の後で娘さんも黄忠さんも」
「そうだよな。暗殺をした人間なんてな」
「口封じをすることが常だからな」
馬超と趙雲もそのことはよくわかっていた。
「その後だとな」
「間違いないな」
「それでその絵だが」
関羽はその絵のことを問うた。

# 第十五話　黄忠、思わぬ仕事をするのことその十

「今ここにあるのか」
「はい、ここに」
こう言って何枚かの絵を出してきた。その中にある一枚の絵を見てだ。孫尚香が言ってきた。
「えっ、これって」
「どうしたのだ？」
「あの店の親父じゃないかしら」
こう張飛に言葉を返す。自分の手で絵を持って見せながらだ。
「これって」
「んっ、そういえば」
「その通りだな」
「はい、間違いありません」
孔明もそれを見て言う。
「それならここはまずは」
「まずは？」
「おじさんのところに戻りましょう」
こう一同に言うのだった。
「あそこに古い建物がありました。娘さんは多分あそこにいます」
「よし、馬だな」
馬超がここですぐに決断を下した。
「あそこなら馬だったらすぐだ」
「そうだな、よし今はだ」
「すぐに行くぞ」
関羽と趙雲が席を立ってだ。すぐに外に向かう。
その時にだ。孔明が黄忠に話す。
「黄忠さんはここで待っていて下さい」
「ここで」

「はい、街にも私達の仲間達がいますので」
「馬岱やキング達が他の賊をやっつけているのだ」
彼等がそうしているというのである。
「だから安心するのだ」
「はい、それでは」
「行くぜ、皆」
馬超がこう言ってだ。全員で部屋を出る。そうして馬で親父の場所に戻った。そうして親父にそのことを話すのだった。
「あの中にかよ」
「そうだ、それでだ」
「ああ、それで？」
「貴殿に協力してもらいたい」
関羽がこう話す。
「少しだ。いいか」
「俺がか」
「シャオが一肌脱ぐわよ」
孫尚香が言ってきた。そうしてであった。
まずは一同隠れた。そして孫尚香が店の前で親父と向かい合うのだった。
建物の中には三人いた。古ぼけ今にも崩れ落ちてしまいそうな部屋の中で紫の短い髪に同じ色の服を着た幼女を囲んでいた。幼女は俯いている。
「おい、何かよ」
「何だ？」
「店の方が騒がしいぜ」
それぞれこう言うのだった。そして隙間から店を見るとだ。
「だから御前だろうがよ」
「何よ、疑うっていうの！？」
「ああ、そうだよ」
親父が孫尚香に対して言っていた。

「御前この前だってな」
「この前はこの前よ」
「それで今もだろうがよ」
「今は違うわよ」
こんなやり取りをしていた。そうしてだ。
親父はだ。孫尚香に対してこう言ってみせた。
「それならだ」
「それなら？」
「見せてもらおうか」
孫尚香を見据えての言葉だった。
「今からな」
「証拠をってこと？」
「そうさ、証拠をな」
まさにそれだというのであった。
「見せてもらおうか」
「ええ、わかったわよ」
演技で売り言葉に買い言葉をやっていた。そうしてだ。
まずは上着を威勢よく脱いでみせたのだった。そこから白地に横に薄い赤のラインが入ったストライブのブラが出て来た。やはり胸は小さい。
「これでどう？」
「お、おい」
「ああ。脱いでるぜ」
「これはいいな」
三人はそのやり取りを見ながら神経を娘から離していた。

# 第十五話　黄忠、思わぬ仕事をするのことその十一

「どうなるんだ？これから」
「あの娘可愛いよな」
「ちょっと幼いけれどな」
こんなことを言いながらも見ていく。そうしてだ。
親父はさらにだ。孫尚香に対して言ってみせた。
「それだけでわかるかよ」
「まだ隠してるっていうのね」
「小銭なんか何処にでも隠せるだろうがよ」
あくまでこう言うのであった。怒った顔もしてみせている。
「だからだよ。信じられるかよ」
「わかったわよ」
孫尚香も合わせてみせる。
「それならね」
「おいおい、いったぜ」
「下もだよ」
「脱いだよおい」
三人の注目はいよいよ孫尚香に注目する。そうしてだった。
注意を完全にそっちに向けていた。そこでだ。
「よし」
それを見ていた孔明が言う。
「今です！」
「よし！」
「行くのだ！」
四人が一斉に建物の中に飛び込んだ。関羽が閉じられている窓を蹴破ってだ。そのうえで部屋の中に飛び込んできたのである。
「誰だ！」
「誰だ手前は！」

「普段なら名乗るところだが」
こう返す関羽だった。
「貴様等下郎に名乗る名前はない！」
「何っ！」
「言ったまでだ！覚悟！」
瞬く間に三人を吹き飛ばす。一人目を拳で、二人目を蹴りでだ。
三人目は肩から体当たりをしてだ。それで一瞬のうちに終わらせてしまった。
「うっ・・・・・・」
「つ、つええ・・・・・・」
「何だってんだ・・・・・・」
「またこの三人か」
関羽はここであらためてその三人を見て呟いた。
「同じ顔がよくもこれだけいるものだ」
「三人以外にはいなかったのだ」
張飛がここでこのことを告げてきた。
「それ以外は」
「そうか、この三人だけか」
「ああ。しかしこいつ等」
「本当によく見る顔だな」
馬超と趙雲も関羽と同じことを言った。
「あたし何回か見てるぜ」
「私もだ」
「そうだな。だが何はともあれだ」
「この娘ですね」
ここで孔明も来てだ。そのうえで言うのであった。
「黄忠さんの娘さんは」
「お母さんのこと知ってるの？」
見ればまだあどけない顔である。母親の艶はない。ピンクの地に紅の大輪が描かれた上着に下は丈の短いスカートである。ショート

の左右をテールにもしている。
「お姉さん達」
「そうだ、すぐに母上のところに戻ろう」
「急ぐのだ」
関羽と張飛が急ぐ声で告げる。
「いいな、それで」
「お母さんのところなのだ」
「そこに連れて行ってくれるの」
「ああ、馬も用意してあるからな」
「急ぐぞ」
馬超と趙雲も言ってきた。
「はい、それなら尚香さんと一緒に」
「行くとしよう」
関羽は倒れている三人を親父に任せてそのうえで孫尚香に服を着させてそのうえでだ。急いで馬を飛ばす。そしてそのうえですぐに街に戻ったのであった。
街ではだ。今その孫権の行列が来ていた。そして黄忠にもだ。
人相が見えない、まるで人形の様な男が彼女の背中から声をかけてきていた。
「いいな」
「ええ」
「孫権を射ろ」
こう彼女に言うのである。

# 第十五話　黄忠、思わぬ仕事をするのことその十二

「いいな」
「・・・・・もうすぐ来るのね」
「そうだ」
まさにその通りだというのである。
「間も無くだ」
「そして孫権を」
「御前なら確実に仕留められるな」
「ええ」
男を見ようとはしない。しかし頷いたのは確かだ。
「その通りよ」
「わかっているとは思うが」
男はこうも言ってきた。
「娘のことはだ」
「ええ、わかっているわ」
黄忠の言葉が険しいものになった。
「それはね」
「それならだ。外すなよ」
「私が弓を外したことはないわ」
黄忠はこう返してみせた。
「今まで一度もね」
「では見せてもらおう」
男は言った。
「それをな」
「わかったわ。それじゃあね」
こうしてであった。弓がつがえられる。そして遠くを見る。その彼女が見たものとは。
「！！」

大通りのところにだ。何と娘がいたのだ。関羽によって大きく掲げられている娘のその姿をだ。己の目に確かに見たのである。
「璃々！！」
それを見てだ。黄忠の表情が一変した。
顔をはっとしたものにさせてだ。そうしてだった。
動きを止めた。するとすぐに男の声が来た。
「おい、何をやってるんだ？」
「もうこんなことをする必要はなくなったわ」
「何！？どういうことだ」
「こういうことよ！」
こう言ってであった。振り向きざまにだ。その拳を繰り出した。
それで男の頬を思いきり殴り飛ばした。それで吹き飛ばした。
これで終わりだった。暗殺はしなくて済んだ。黄忠はその孫権が立ち去ったのを見届けてからそのうえで関羽達と会うのであった。
「有り難うございます」
「娘さんのことですか」
「はい、お陰で璃々が助かりました」
娘の手を持ったうえでの言葉だった。
「本当に」
「いや、貴殿が同じ立場でもそうしたのではないか？」
「そうでしょうね。同じ娘を持つ者同士」
「えっ！？」
その言葉を聞いてだった。関羽は驚いた声をあげた。
そしてだ。思わず問い返した。
「今何と」
「そこの赤い髪の娘は」
「鈴々のことなのだ？」
「ええ、随分大きな娘さんね」
こう言うのである。
「結婚されたのが早かったのね」

「うむ、こう見えても愛紗は随分早熟でな」
「変なことを言うな、私はまだ」
「ふむ、そうだったのか」
「そうだ。そうした経験は一切ないっ」
顔を赤らめさせて趙雲に抗議する。
「まだだ、そんなことはだ」
「あら、じゃあ一体」
「義姉妹だ」
そうだというのである。
「私と鈴々はだ」
「そうなのだ」
そして張飛はよくわからないまま言うのだった。
「愛紗と鈴々は床の中で誓い合った仲なのだ」
「あら」
それを聞いてだ。黄忠は両手で口元を軽く覆ってだ。そのうえで言うのだった。
「そうあったの、御二人は」
「おい、変なことを言うな」
また抗議する関羽だった。
「私はだ。別に」
「それでなんですが」
二人の話が複雑になると見てだ。孔明が言ってきた。

# 第十五話　黄忠、思わぬ仕事をするのことその十三

「黄忠さんはこれからどうされるんですか？」
「これからですか」
「はい、どうされますか？」
こう黄忠に問うのである。
「これから」
「とりあえず郷里に戻ろうと思ってますが」
「そうですか」
「よかったらなんですが」
今度は馬岱が言ってきた。
「私達と一緒に旅をしませんか？」
「一緒に」
「はい、よかったら」
「そうね。郷里でも特にすることはないし」
それは否定するのだった。
「それじゃあ」
「ああ、宜しくな」
馬超が微笑んで応えた。
「それじゃあな」
「あとね」
黄忠が加わったところでだ。今度は舞が言ってきた。
「シャオちゃん、いいかしら」
「どうしたの？」
「お姉さんが来てるわよ」
こう言ってきたのである。
「ここにね」
「えっ、権姉様が！？」
「そうよ。ほら、ここに」

そうして来たのはである。
「小蓮さまあ、駄目ですよお」
のんびりとした声でだ。エメラルドグリーンの長いやや癖が見られる髪に青い垂れ目のおっとりとした顔立ちの美女が出て来た。にこりと笑っていて優しそうな顔だ。小さい眼鏡が印象的である。
赤く袖の広い、臍も脚も丸出しの服である。しかも胸もかなり露わになっていてその胸がかなり巨大である。襟や胸、肩の部分は白でありブーツも同じ色だ。
その美女が来てだ、孫尚香に対して言ってきたのだ。
「家出なんかしたら」
「あっ、穏」
「はい、私ですう」
「御前真名小蓮っていうんだな」
馬超がこう孫尚香に声をかけた。
「そうだったのか」
「しかし。凄い服の人ですね」
「この人がお姉さんですか」
ナコルルと香澄がその彼女を見て言う。
「孫権さんですか」
「そうなんですね」
「違うわよ」
「違いますよお」
だがそれは二人同時に否定された。
「この娘は穏っていうの。陸遜っていうのよ」
「はい、陸遜といいます」
自分からも言ってきたのだった。
「宜しく御願いしますね」
「孫権殿ではないとすると」
「影武者か？」
「実は小蓮様をお探しする仕事を仰せつかっていまして」

「それで私達がここに来ました」
髪がかなり長い少女もいた。見事な黒髪である。
小柄で胸も小さい。半袖のダークパープルの服からは素足が露わになっている。太目の眉に切り揃えられた前髪が初々しさを見せる。黒く大きな目ににこやかで素朴な笑顔を見せている。
「穏さんがこうしたら小蓮様は絶対に出て来られると仰いまして」
「貴殿は？」
「周泰といいます」
関羽に応えて名乗ってきた。見れば背中には刀を背負っている。
「宜しく御願いしますね」
「こちらこそな」
「それで小蓮様あ」
また陸遜が孫尚香に言ってきた。
「帰りますよお」
「帰るって？」
「ですから揚州に」
そこにだというのである。
「帰りましょう」
「姉様達が仰ってるの？」
「はい、そうなんですう」
「私達も心配で」
「心配なんかいらないのに」
こまっしゃくれた態度で返す孫尚香だった。
「別に」
「いえ、そういう訳にはいきませんから」
「一緒に帰りましょう」
二人は優しかった。
「孫策様も孫権様も心配されてますよ」
「他の方々も」
「皆が心配してるの」

それを聞くとだった。孫尚香も悲しい顔になった。そうしてだった。
「わかったわ」
「では揚州に帰るのだな」
「ええ、建業にね」
こう趙雲にも答えたのだった。
「今からね」
「家出はこれで終わりなのだ」
張飛が笑って言う。
「では行くのだ」
「何かすぐに帰ることになったわね」
「はい、それじゃあ」
陸遜が応えてだった。こうして一行は今度は揚州に入るのだった。
そこでも新たな出会いと騒動があるのだった。

第十五話　完

２０１０・５・２１

# 第十六話　孫策、刺客に狙われるのことその一

第十六話　孫策、刺客に狙われるのこと

「うわ、凄いね」
「全くなのだ」
木の船、しかもかなり大きなそれに乗りながらだ。馬岱と張飛は驚きの声をあげていた。
「黄河も凄いけれど」
「この長江もかなりのものなのだ」
「確か中国の二大河川でしたよね」
香澄もここで言う。
「確か」
「そうよね。何回か見たことがあるけれど」
「そうなんですか」
「タンさんや秦兄弟と戦った時に見たのよ」
舞はこう香澄に話す。
「その時になのよ」
「あの人達とですか」
「そうなの。タンさん達も普通にこの国にいるのかしら」
「タンさんっていいますと」
ここで周泰が二人に言ってきた。
「タン＝フー＝ルーさんのことですか？」
「ええ、そうだけれど」
「御存知なんですか？」
「最近一緒に戦ってくれることになったんですよ」
「あら、そうだったの」
「タンさんもですか」
「他にもダックキングさんやビッグベアさんも」

彼等もだというのだ。
「皆さんとてもいい人達ですよ」
「ちょっと癖のある面々ね」
「そうかも知れませんね」
舞と香澄はその三人の名前を聞いて述べた。
「けれど元気でいるのね」
「この世界に」
「はい、揚州もいい人達が来てくれています」
そんな話をしていた。その中でだ。
陸遜は黄忠と話していた。その刺客の話だ。
「ではその男の人は」
「不思議な事に姿を消していました」
その殴り飛ばした男がというのである。
「私がそうしたらすぐに」
「そうですか」
「おかしなことですね」
「そうですねえ。逃げたんでしょうか」
「逃げるにしても早過ぎないか？」
馬超がそこに突っ込みを入れた。
「黄忠さんが殴ってすぐだったんだよな」
「その状況では狼狽しているのが普通だがな」
趙雲も腕を組んで述べた。
「それですぐに消えられるか？」
「相当な手練れか。黄忠殿を襲ったのは」
「真名で呼んでいいわよ」
二人に対してだけでなく一行に告げた言葉だった。
「紫苑でね」
「ああ、じゃああたしは翠」
「星という」
「愛紗だ」

二人だけでなく関羽も名乗った。
「宜しく頼む」
「ええ。それにしてもあの刺客は一体」
「普通に考えて宮廷の宦官の人達ですけれどお」
陸遜は右手の人差し指を自分の口に当ててだ。そのうえで言うのだった。
「何かおかしいですねえ」
「おかしいですか」
「あの人達は普通に自分達の刺客を送り込んでくるんですよお」
「普通にか」
キングがそれを聞いて剣呑な顔になった。
「随分と厄介な連中だな」
「それで孫策様も孫権様も大変なんですよ」
「じゃあシャオちゃんも危ないんじゃないの？」
馬岱がこのことを指摘してきた。
「それだったら」
「はい、それでなんです」
「私達も心配していたんです」
陸遜と周泰がここで言う。

# 第十六話　孫策、刺客に狙われるのことその二

「まだ小蓮様に刺客が来たことはありませんけれど」
「何時来るかわかりませんから」
「そうだな。十常侍は孫家そのものを敵視していたな」
関羽もそれを指摘する。
「他にも曹家や袁家もだな」
「あの人達も何進様に近いですからあ」
「孫策様と同じ位狙われてるみたいですね」
「母ちゃんのところにも来たしな」
馬超は自分の母のことも話した。
「誰のところにも来るんだな」
「そうですよねえ。ただ、本当に何か妙に思えるんですよ」
「妙ですか」
「あの人達って自分のそうした密偵を一杯持ってるんですよお」
「わざわざ紫苑さんを雇う必要はないんですね」
孔明もこのことを察した。
「それじゃあ」
「それにです」
「それに？」
「あの人達って弓とかは使わない傾向があるんですよね」
陸遜の指摘は武器にまで及んでいた。
「毒や暗器が多くて」
「あれっ、ですが」
「はい、孫堅様のことですよね」
「すいません、御言葉ですが」
「冥琳様とお話したんですけれどおかしいって」
「やっぱりそうですか」
「山越の人達も石弓は使いませんし」

彼女もこのことを言うのであった。
「ですから」
「そうですよね。やっぱりおかしいですよね」
「はい。黄忠さんの弓の腕は私達も聞いています」
「それ程だったのですか」
黄忠本人が陸遜のその言葉を聞いて述べた。
「私のことは」
「国で知らない人はいないと思いますよお」
にこやかに笑って彼女に告げる。
「黄忠さんのことは」
「どうも」
「ですが。あの人達はあくまで宮中のそうした自分達の手駒を使う人達ですから」
「考えれば考える程ですか」
「これまで十常侍の人達からの刺客も沢山来ました」
来ることは来ているのだという。
「ですから行動パターンはもうわかっています」
「ううん、じゃあ誰なんでしょう」
「曹操殿や袁紹殿でもないしな」
「御二人もそういうことはされないですしい」
そのこともわかっている陸遜だった。
「袁術さんは悪戯ばかりされますが」
「そういえば孫家は袁家本家とは仲が悪かったな」
「はい、あまりよくはありません」
「しかし暗殺はしないのか」
「袁術さんも暗殺とかはしない方ですよお」
少なくともそうした人間ではないというのである。
「董卓さんとはそもそも縁がないですしい」
「じゃあ普通は十常侍しかないよな」
「そうなるな」

馬超と趙雲はこう言いはするがそれでも自分達でそれは違うと思っていた。二人はその直感からそう悟っているのである。
「しかし。奴等じゃないってなると」
「誰なのか」
「ですよねえ。本当に誰の手の者でしょうか」
「何か不吉な気配は感じますけれど」
ナコルルが顔を曇らせて述べた。
「何か。アンブロジアにも似た」
「アンブロジアか」
「オロチ・・・・・はないですか」
関羽がいぶかしんだところで香澄はその名前を出した。
「あの一族は滅んだ筈ですし」
「そちらの世界のことはタンさん達から御聞きしていますけれど」
周泰の言葉である。
「色々とある世界なのですね」
「それは事実だ。特にサウスタウンはな」
「凄い物騒な街だったから」
キングと舞はサウスタウンの話をした。
「野心も渦巻いていた」
「ギース＝ハワードのことは」
「聞いてます。この世界にいたら覇者になっていましたね」
周泰は少し真剣な顔になって述べた。

# 第十六話　孫策、刺客に狙われるのことその三

「そこまでの力があれば」
「死んだことにはなってるけれどね」
「物凄く強くてしかも切れ者だったから」
「サウスタウンですかあ」
陸遜は少し憧れる様にして述べた。
「私も一度行ってみたいですねえ」
「そうですね。物騒ですけれど楽しそうな街ですよね」
周泰もにこやかに笑って述べる。
「そこも」
「ですよねえ。だから一度」
「私も行ってみたいわ」
孫尚香も言ってきた。
「アメリカって国自体にね」
「それより御前は家出から帰るのだ」
張飛がその彼女に言う。
「全く。家出するお姫様なんて何処のお話なのだ」
「ここにあるぞーーー」
馬岱が冗談で言った。
「ここのお姫様だよ」
「そうですよお。今度から駄目ですよお」
「怒られますよ」
陸遜と周泰がここで主の娘に言ってきた。
「張昭さん達に」
「物凄く」
「大丈夫よ」
しかし孫尚香は腕を組んで言う。
「こんなことで怒られたりしないわよ、あの二人にも」

「張昭殿といえばだ」
「そうだな」
「天下に鳴り響いた石頭だよな」
関羽、趙雲、馬超がここでひそひそと話す。
「揚州の三長老の筆頭格としてな」
「相当おっかないと聞いたが」
「どうなるかな」
しかももう一人いる。そしてであった。
「小蓮様！」
「一体何処に行っておられたのですか！」
玉座の左右からだった。厳しい声が響いた。
「それでも孫家の姫様ですか！」
「これでは民に示しがつきません！」
金髪を膝のところまで伸ばした緑の垂れ目の妙齢の美女がいる。背は高く青い深いスリットが左右まで入った服を着ている。ガーターは白である。左目の目尻に黒子がある。
左側には銀髪で青い目の少し吊り目の美女がいる。やはり妙齢である。口元が引き締まっている。髪は上で束ね耳には赤いイヤリングが数個ずつある。緑のスリットの深い服を着ていてガーターは赤である。睫毛が長い。
その二人がだ。孫尚香に対して叱責の言葉を浴びせていた。
「全く、これではです」
「孫堅様が見ておられたらどう仰る」
「そもそもです、私達はです」
「小蓮様にもしものことがあれば」
「ま、まあそれ位でね」
玉座に座る孫尚香と同じ紫の髪と青い目の美女が言った。目は吊り目であり如何にも気の強そうな感じを受ける。額には模様があり肌は褐色だ。髪は膝のところで切り揃えている。濃紫のドレスは袖が広くスリットが深い。胸がかなり大きく誇張されている。

「いいんじゃないかしら」
「そうね。小蓮も反省しているでしょうし」
玉座の美女のすぐ横に立つこれまたかなり長い紫の髪に真面目そうな強い青い目を持つ美女だった。歳は玉座の美女よりもやや若そうである。。肩のところが白くなっておりワンピースの、前が大きく開いた赤い服を着ている。臍のところが露わになっていてブーツは白だ。三角の帽子を被っておりやはり額には模様がある。
その二人がだ。妙齢の二人の美女に対して言うのである。
「許してあげましょう」
「これ位でね」
「全く、孫策様も孫権様も」
「お甘いのですから」
二人はその孫策と孫権の言葉に溜息と共に言うのだった。
「ですから小蓮様がです」
「何時まで経ってもこのままなのです」
「この二人があれか」
「そうだな。揚州三長老のうち文を司る二人」
孫尚香の後ろに控えたままの関羽と趙雲がここで話す。他の面々もそこに横に並んでいる。

# 第十六話　孫策、刺客に狙われるのことその四

「張昭殿と張紘殿か」
「そうだな」
「確か玉座から見て右手の方が張昭さんで」
「左手が張紘さんなのね」
孔明と馬岱もこう話をしていた。
「揚州では周公勤さんや陸遜さんと並ぶ知恵者で」
「相当頑固だっていうあの」
「こりゃ絶対の忠誠心の持ち主だな」
馬超もその二人を見て言う。
「それに相当口煩いな」
その通りだった。二人の長老達はまだ言っていた。
「孫権様に対する刺客といい」
「近頃物騒ですし」
「だからです」
「ここは一層」
「あの方々の忠誠心は揚州で随一なんですよお」
陸遜がそのにこやかな顔で一同に話す。
「もう凄いんですから」
「主に対しても直言を憚らないですね」
「だから」
「はい、そうなんです」
こうナコルルと香澄にも話す。
「凄い人達なんですよお」
「ううむ、しかし厳しいな」
「かなりね」
キングと舞も驚く程だった。
「その二人が教育係か」

「シャオも大変なのね」
「まあ菊」
「桜もね」
孫策と孫権がそれぞれ張昭と張紘に少し苦笑いを浮かべながら言う。二人共その口元をひきつらせてだ。そうして言うのであった。
「お客人達もおられるし」
「これ位でね」
「むう、わかりました」
「それではです」
二人もようやく矛を収めた。本当にようやくであった。
「では。お客人達」
「宜しいでしょうか」
二人はあらためてだ。一行に対して言ってきた。
「こちらにおられるのが揚州の牧であられる孫策様です」
「そして妹君であられる孫権様です」
「宜しくね」
「今後共宜しく」
二人はにこやかに笑って一行に挨拶をしてきた。
「小蓮が世話になったそうで」
「有り難うございます」
「いえいえ、それは」
関羽が謙遜して応える。
「縁あってのものですし」
「中々楽しい旅だったのだ」
張飛も言う。
「長江も見られたしよかったのだ」
「凄いでしょ、長江は」
長江の話が出るとだった。孫策の顔がさらに明るくなった。
「あの大河が孫家を育てたのよ」
「そうなのか。孫家は河で育ったっていうけれど本当なんだな」

「あれっ、貴女は」
「確か」
孫策と孫権がだ。馬超を見て言うのだった。
「西涼州の」
「馬超だったかしら」
「ああ、そうさ」
馬超もにこやかに笑って二人に応える。
「あんた達のことは涼州でも聞いてたよ」
「それじゃあ隣にいるのは」
「馬岱さんかしら」
「はい、そうです」
馬岱は元気よく二人の言葉に応えた。
「宜しく御願いします」
「それに天下屈指の弓の使い手黄忠もいるし」
「盗賊退治の黒髪の美女もいて」
「黒髪の美女！？」
その言葉を聞いてだ。すぐに明るい顔になる関羽だった。

# 第十六話　孫策、刺客に狙われるのことその五

「私のことでしょうか、それは」
「ええ、そうよ」
「噂に違わぬ奇麗さね」
孫策と孫権はここでもにこりとしていた。
「しかも趙子龍に猛猪将軍張翼徳」
「凄い顔触れが来てくれたものね」
「ふむ、私のことも知っていたのか」
「鈴々は猪なのだ？」
「それか虎ですよね」
孔明がこう話す。
「鈴々様は」
「それじゃあね」
「心ゆくまでゆっくりとして下さい」
こうして一行は揚州に客人として迎え入れられたのであった。すぐに白い豊かな髪を後ろで束ねた妙齢の美女が来た。紫の艶のある目に気の強そうな微笑みを浮かべている。濃紫のスリットが左右に入った服に桃色のガーターをしている。肌は薄い褐色だ。その美女が廊下を進む一行のところに来て声をかけてきたのだ。
「おお、御主達がか」
「むっ、貴殿は」
「誰だ？」
「わしか？わしは黄蓋という」
こう自分から名乗ってきた。
「孫家に昔から仕えている者じゃ」
「つまりあれか」
「孫家三長老の」
キングと舞がその言葉を聞いて話す。

「揃い踏みという訳だな」
「そうよね」
「話は聞いているぞ。相当な手繰れ揃いらしいな」
豪快な感じの笑顔と共にの言葉だった。
「最近この揚州にも色々人が来ているがのう」
「おいおい、久し振りだな」
「御前等も来たのかよ」
その黄蓋の後ろからだった。金色のモヒカンにサングラスの赤い上着と青いズボンの黒人と金色の髭だかけの顔にダブルモヒカンで上下つなぎのレスリングスーツの大男が出て来て言ってきた。キング達に声をかけてきたのである。
「こんなところで会うなんてな」
「元気そうで何よりだぜ」
「聞いていたよ」
「あんた達もいるってね」
キングと舞がにこやかに笑って二人に返す。
「そっちも元気そうで何よりだね」
「そうね。会えて嬉しいわよ」
「おう、ピーちゃん達も一緒だぜ」
モヒカンの黒人の上着のパーカーのところからひよこが数匹顔を出してきた。
「この通りな」
「この人達も香澄さん達の世界の人達なんですね」
「ええ、そうなの」
香澄は孔明の問いに顔を向けて答えた。
「ダックキングさんとビッグベアさんです」
「いい奴等じゃの」
黄蓋もその二人について述べた。
「明るくてそれでいて正義感があってのう」
「まあ俺達もこっちの世界に急に来てな」

「どうしていいかわからねえ時にこの黄蓋さんに声をかけられてな」
「何よりのことじゃった」
今度は白い髭の小柄な老人だった。優しい顔をしており青い上着とズボンは中国のものである。
「こうして今は客将として迎えてもらっておる」
「うむ、タン＝フー＝ルー殿にも活躍してもらっておるぞ」
黄蓋はさらに笑って話すのだった。
「どういういきさつでこの世界に来たかはわからぬがこうして巡り会うのも何かの縁」
「そうですよね。何か色々な人達がこの世界に集まってますけれど」
ナコルルも話す。
「皆さん楽しく過ごされてますよね」
「そうみたいだね。この連中も元気やってるし」
「へへへ、バターコーンもあるぜ」
「ステーキもな」
ダックとビッグベアが楽しく話す。
「よかったらこれから一緒にどうだい？」
「酒もあるしな」
「うむ、どうじゃ今から」
黄蓋もその酒を勧めるのだった。
「タン殿の茶玉子もあるぞ」
「作っておいたものじゃよ」
そのタンも話すのだった。

# 第十六話　孫策、刺客に狙われるのことその六

「美味いものじゃ」
「特に黄忠殿」
黄蓋は黄忠に顔を向けてきた。
「御主とは是非一度一緒に飲みたいと思っておったのじゃ」
「そうですね。私もです」
お互いに微笑み合って話した言葉だった。
「それでは今から」
「うむ、飲もうぞ」
しかしであった。ここでだ。長い黒髪に浅黒い肌の眼鏡の美女が来た。緑の目が涼しげであり眉の形も細く奇麗なものである。とりわけ目立つ顔立ちである。
そして長身で胸がかなり大きい。それを露わにさせた紫の服はスカートの部分の前がかなり深いスリットが入れられて黒いガーターが見える。その美女が黄蓋に対して言うのだった。
「祭殿、それは困ります」
「むっ、冥琳か」
「お仕事は終わられたのですか？」
「それは終わった。だから今からな」
「飲まれるのでしたら夜にして下さい」
その眼鏡の美女が眉をひそませて言うのだった。
「どうか」
「よいではないか。仕事は終わったのじゃぞ。それにじゃ」
「それに？」
「客人達を歓待しなくてはならん。だからじゃ」
「全く。そう仰っていつも飲まれるのですから」
美女は困った顔で述べる。
「困ったことです」

「この人は誰なの？」
馬岱がここで孫尚香に問う。
「凄い奇麗な人だけれど」
「ああ、周瑜っていうの」
孫尚香は馬岱の問いに応えて述べた。
「揚州の筆頭軍師で水軍の大都督なの」
「それに内政も見られますし」
周泰も話してきた。
「凄い人なんですよ」
「そうか、あれがか」
趙雲もその周瑜を見て言う。
「江南の美周郎か」
「噂に違わぬ切れ者のようですね」
孔明は彼女のことを一目で見抜いていた。
「どうやら」
「それに凄い美人なのだ」
張飛は彼女の美貌を褒めていた。
「凄く目立つのだ」
その周瑜がだ。黄蓋にさらに話していた。
「では。今回だけですよ」
「ははは、済まぬのう」
「全く。何かというと飲まれて」
「酒は人生の友じゃ」
黄蓋の豪快な笑みは変わらない。
「冥琳よ、御主もどうじゃ？」
「私もですか」
「そうじゃ、皆で楽しく飲もうぞ」
両手を腰にやっての言葉だった。
「それが一番美味いからのう」
「私はまだ仕事が残っていますし」

「それでか」
「はい、夜にでも」
「うむ、待っておるぞ」
こんな話をしてだった。一行は黄蓋に案内されダック達も交えて酒を楽しむのであった。様々なつまみも一緒になっていてそれも食べていた。
キングは黄蓋の勧める酒を飲みながらだ。ダックの前のバターコーンを見て言う。
「この世界で前から思っていたことだけれどね」
「何だよ」
「普通にトウモロコシやコーンがあるんだね」
彼女が言うのはこのことだった。
「それが凄い不思議なんだけれど」
「そういえばそうだな」
言われて気付いたダックだった。
「しかも美味いしな」
「ふむ。そういえばじゃ」
タンも言う。
「お茶も普通にあるしのう」
「お茶ってこの時代かなり高価だったんじゃなかったかしら」
舞が首を傾げながら述べた。

# 第十六話　孫策、刺客に狙われるのことその七

「確か」
「ううん、どういう世界なんでしょう」
香澄も腕を組んで述べる。
「私、コロッケ作りましたし」
「ジャガイモやトウモロコシが不思議なのだ？」
「そうなのか？」
張飛と馬超はその言葉に不思議な顔になった。
「普通にあるのだ」
「そうだよな」
「何かキングさん達の世界の私達の国ではそうした食材はこの時代になかったみたいですね」
孔明はこれまでの話を総合してこう述べた。
「そういうことですね」
「そういうことになるの？」
馬岱は蜂蜜水を飲みながら述べた。
「つまりは」
「そうみたいです。やっぱり私達の世界とは全然別ですよね」
周泰もそれを言う。
「ダックさん達の世界って」
「違い過ぎて楽しいぜ」
ダックは彼女の今の言葉に明るく笑って話す。
「何か知った顔触れもいるしな」
「そうだな。食い物も美味いのも変わらないしな」
ビッグベアはステーキを食べていた。その好物のそれをだ。
「そういえばテリー達もいるみたいだしな」
「あいつ等ともまた楽しくやりたいな」
「ふむ。ライバルというわけだな」

関羽は彼等のその話を聞いたうえでこう述べた。
「つまりは」
「ああ、そうさ」
「普段は楽しくやってそれで拳を交えるのさ」
「ふむ。つまりあれか」
趙雲はここまで聞いて述べた。
「強敵と書いて『とも』と呼ぶのだな」
「何か面白い表現ですね」
黄忠は今の趙雲の言葉を聞いて述べた。
「今のは」
「そうじゃな。わし等もそうなりたいものじゃな」
黄蓋はその黄忠を見て笑いながら述べてきた。顔は酒のせいで真っ赤になっている。
「是非な」
「そうですね。聞けば黄蓋殿の弓の腕前も」
「ははは、一度お互いに見てみるとしようぞ」
二人でこう話すのだった。
「是非な」
「はい、では明日にでも」
そんな話をするのだった。そしてその時だ。
張昭と張紘の二人はだ。同じ席に向かい合って座ってだ。そのうえであれこれと話をしていた。
「しかし」
「うむ、恐れていたことだったけれど」
それぞれ曇った顔で言っていた。
「蓮華様も狙われるとは」
「そして相手は？」
ここでだった。濃紫の髪を後ろで団子にして覆いを被せた女が出て来た。鋭い赤紫の目に引き締まった口元を覆った黒いスカーフ、それに赤く丈の短い服を着ている。その彼女が二人の前に片膝をつ

いて出て来たのであった。
「甘寧」
「わかったかしら」
「申し訳ありませんが」
その美女甘寧はこう二人に述べた。
「まだ何も」
「そうなの、じゃあ聞くけれど」
「まずは立って」
「はい」
二人は甘寧を立たせてさらに述べるのだった。
「それで席に座って」
「ゆっくりとお話しましょう」
「すいません、それでは」
こうして三人の席になってだ。さらに話すのであった。
「それでだけれど」
「十常侍の可能性は」
「それが今回は違うようです」
こう二人の問いに応える甘寧だった。
「どうやら」
「違うのね」
「では一体何者なのかしら」
「曹操や袁紹かとも思ったのですが」
「あの二人はないわね」
「どちらもね」
二人は両者である可能性は即座に否定した。

# 第十六話　孫策、刺客に狙われるのことその八

「どちらも私達に何かをする理由はないし」
「そういうことをすることもないわ」
「はい、ですからそれはないと思いまして」
「それが怪しいのなら袁術だけれど」
「あちらもそこまですることはないし」
袁術の可能性も否定された。
「嫌がらせならともかく」
「そこまではしないから」
「山越賊の可能性は有り得ませんし」
甘寧はこの可能性は自分から打ち消した。
「思えば文台様の時も」
「ええ、あれもね」
「不可解極まりないわ」
「あれも十常侍かと思ったのですが」
甘寧はどうしてもその集団のことを念頭に置いていた。
「それにしては」
「何か妙に引っ掛かるのよね」
「十常侍とは別に」
「そういえばです」
ここで甘寧は二人に話した。
「その山越の領土の近くで巨大な妖怪を倒す者がいたそうです」
「妖怪！？」
「熊ではなくて」
「はい、身の丈一丈、いえ二丈を超えんとする不気味な妖怪を倒す青い服の男を見たと。そうした噂があの辺りで少し出ていました」
「妖怪を倒した」
「青い服の男」

その男のことを聞いてだ。張昭も張紘も顔を曇らせて述べた。
「近頃あの于吉の動きが消えたけれど」
「そういえばあの者も」
「はい、正体が全くわかりません」
その者についても述べる甘寧だった。
「今だに」
「何なのかしら」
「ええ、正体がわからない者が多くなってきたわね」
「ダックキング殿達ははっきりしていますが」
「ええ、あの人達はいいわ」
「全然ね」
二人は彼等はいいとしたのだった。
「異なる世界から来ても」
「自分から素性を言ってくれるし心根もわかるし」
「はい、全く問題はありません」
甘寧もこう言い切る。
「ですが。どうも何か」
「引っ掛かるものが多いわね」
「本当にね」
「ではさらに調べていきます」
「ええ、それと」
「わかっているわね」
二人の重臣は甘寧の顔を見てだ。そしてまた言うのだった。
「雪蓮様に蓮華様、そして小蓮様は」
「何があってもね」
「お任せ下さい」
甘寧の目の色がさらに強くなった。
「何があろうとも」
「ええ、では頼むわ」
「今回もね」

「はい、わかっています」
甘寧はそれに頷いた。そしてだ。
部屋にだ。また一人入って来た。それは。
「遅れてすいません」
「いえ、いいわよ」
「仕事をしていたのね」
「いえ、飲んでいました」
周瑜であった。見れば顔が赤い。
「祭殿に誘われて」
「やれやれ、祭は相変わらずね」
「全く」
二人は黄蓋の真名を聞いて少し苦笑いになって述べた。
「天真爛漫というか」
「邪気がないというか」
「しかしあれが祭殿のよいところ」
甘寧の顔も少し微笑んでいるものになっていた。

# 第十六話　孫策、刺客に狙われるのことその九

「そうしたところが」
「その通りね。付き合いは長いけれど」
「あの陽気さにはいつも助けられるわ」
こんな話をしてであった。笑顔になる二人だった。
そのうえでだ。こんな話もした。
「文台様の頃からだけれど」
「本当にその時からね」
「おやおや、それでは相当昔になりますね」
周瑜はその話を聞いてこんな言葉で返した。
「それもかなり」
「確かに冥琳が幼い頃にはもう私達三人はいたわ」
「しかしそれでも」
その長老二人の言葉である。
「相当昔というのは」
「引っ掛かる言葉ね」
「いえいえ、悪い意味で言ったのではありません」
周瑜は笑顔のまま話す。
「それでなのですが」
「ええ、今回のことね」
「それだけれど」
二人は真面目な顔に戻った。
「孫策様とは既にお話をしているから」
「後は」
「それでは。すぐにでも」
「ただ、問題はですが」
ここで甘寧が言ってきた。
「我等はいいとして他の者の動きですが」

「それは問題ないだろう」
周瑜はそれはいいとしたのだった。
「別にな」
「構いませんか」
「明命や亞莎もな。生真面目だが暴走はしない」
「お客人達を切ることはないわね」
「あの二人ならそんなことは」
「はい、ですから問題はありません」
周瑜は二人の長老に話す。
「問題は誰が今回の黒幕か。それを見極めたいので」
「そうね。それが問題だから」
「今は」
そんな話をしてであった。四人はある策を練っていた。そうしてだった。
次の日だ。孔明は陸遜ともう一人のやや強いブラウンの目の少女と共にいた。
紫の袖の広い、肩が見え胸の前が開いている服にそれと同じ色の丸い帽子を被っていて薄茶色の髪を左右で輪にしている。目は強そうな感じだが細い眉は下がっている。その少女も一緒だった。
孔明はその少女の名前をだ。陸遜に対して問うのだった。
「あの、こちらの方は」
「はい、呂蒙ちゃんといいます」
「呂蒙さんですか」
「前は武官で親衛隊におられたんですけれど今は軍師なんですよ」
「見習いです」
呂蒙は小さい声で俯きながら答えてきた。
「まだ」
「凄く頑張り屋さんで」
陸遜は謙遜する呂蒙をフォローする形で孔明に説明していく。
「毎日夜遅くまで勉強してるんですよ」

「けれどまだまだで」
「頭もいいだけじゃなくて腕も立って」
陸遜のフォローは続く。
「雪華様も蓮華様も可愛がってくれてるんですよ」
「御二人には本当に」
「性格も凄くいいですし。皆から好かれてる娘です」
「揚州はそういう人多いですよね」
孔明はその呂蒙を見て述べた。
「皆さんとてもいい方ばかりで」
「そうですかあ？」
「凄く雰囲気がいいですよね。明るくてそれでいて頑張っていて」
「それはそうですね。私この雰囲気が大好きですう」
陸遜はいつものおっとりとした様子で話す。
「皆さんも」
「はい。そういえばここに」
「ここに？」
「お姉ちゃんも来ているそうですけれど」
孔明は不意にこんなことを話すのだった。
「今は建業にはいないんですか」
「諸葛勤殿ですか」
呂蒙が孔明の今の言葉に応えた。
「あの方でしたら」
「今は何処にいるんですか？お姉ちゃん」
「諸葛勤殿は太史慈殿と共に山越のところに行っておられます」
「異民族のところにですか」
「はい、そうです」
「何しろ平定しないといけないですから」
陸遜はこう話すのだった。

# 第十六話　孫策、刺客に狙われるのことその十

「お二人が雪蓮様の討伐の前の準備をされてるんです」
「それで今はいないんですか」
「はい、そうなんですよ」
「会えるかなって期待していたんですけれど」
「また来られたら御会いできるかと」
呂蒙は孔明を気遣ってこう述べた。
「ですからその時にでも」
「はい、じゃあ今は」
「はい、それでは今は」
「書庫にですね」
孔明の顔が明るい顔になった。姉に会えないとわかって寂しい顔になったのも一瞬だった。すぐに明るい顔に切り替わったのである。
「それではすぐに」
「凄い書庫なんですよお」
陸遜の目がきらきらとしていた。
「もう本当に」
「そんなにですか」
「はい、やっぱり本はいいですよね」
目がさらに輝いていた。
「読んでいると書いた人の心まで伝わってきて。それでその中に浸って」
「あの、穏殿」
呂蒙は我を失いそうになっている陸遜に対して突っ込みを入れた。
「孔明殿が」
「孔明さんが？」
「戸惑っておられますから」
だからだというのである。

「ですから落ち着かれて」
「私は落ち着いてますよう」
「はあ」
それを聞いてもあまり信じられない呂蒙だった。
「だといいうのですが」
「それでですね」
陸遜のおっとりとした声がまた孔明にかけられる。
「色々な本がありますから三人で」
「はい、読みましょう」
「お勉強しましょう」
そんな話をしてだった。そのうえで書庫に入る。その時キング達は黄蓋と周泰に案内されてだ。建業の街で遊んでいた。
「黄蓋さまーーーーっ」
「祭様ーーーーっ」
「こら、教えたからといって気軽に真名で呼ぶでない」
黄蓋は自分にまとわりついてくる子供達に困った顔で返している。
「それにじゃ。今は客人達の案内役なのじゃ」
「そうなんですか？」
「それじゃあ」
「そうじゃ。また今度遊んでやる」
その子供達に対しての言葉だ。
「だからじゃ。またな」
「はい、わかりました」
「それじゃあ」
「子供に好かれてるのね」
キングはそんな黄蓋を見て話した。
「それもかなり」
「好かれたくて好かれているのではない」
口ではこう言うのだった。
「それではじゃ」

「立派な市場ね」
案内されたのはそこだった。道の左右に店が連なっている。それは何処までも続いておりそのうえ品物が溢れかえっていて行き交う人々も多い。繁栄しているのは明らかだった。
そしてその中でだ。ナコルルは動物達に囲まれていた。彼女はその中に囲まれてそのうえで、である。しゃがんで同じ目線で相手をしていた。
周泰はそのナコルルの横に来てだ。寝転がる猫の腹を撫でてうっとりとしていた。
「やっぱり猫様はいいですよね」
「そうですね。私動物が大好きなんです」
ナコルルもこう返す。
「いつもこうして一緒にいます」
「猫様ともですね」
「はい、そうです」
にこりと笑って周泰に答える。

# 第十六話　孫策、刺客に狙われるのことその十一

「猫にも好かれています」
「いいですよね、猫様って」
周泰の顔は今にも溶けそうにまでなっている。
「こうして一緒にいてもらえるだけでも」
「動物は嘘をつきませんし」
ナコルルは温かい顔になっている。
「本当にいい子達ですね」
「はいっ」
二人は動物達と共に優しい顔になっている。そして香澄と舞は馬岱と共に市場の食べ物を見ている。舞は見事な川魚を見て言うのだった。
「これをあげて。あんをかけてね」
「美味しそうですね、それって」
「こっちの果物も凄いよ」
馬岱は八百屋の前で蜜柑を手にしていた。
「新鮮でしかもみずみずしくて」
「そうね、こっちの人参もね」
「お馬さんも喜びそうですね」
「江南では馬はあまりおらんがな」
黄蓋がこのことを話してきた。
「どうしても河が主になるからのう」
「船だね、じゃあ」
「うむ、北馬南船じゃ」
それだというのである。
「それがこの国の地形なのじゃ」
「そうだったね。やっぱり中国だからね」
黄蓋の言葉に納得した顔で頷くキングだった。

「そうなるね」
「どうもそっちの世界でも我が国は有名なようじゃな」
「ああ、その通りだよ」
キングもそのことを否定しなかった。
「歴史も長いしね」
「今で二千年じゃが」
「私達はその二千年後の世界から来たのよ」
キングはこのことも話した。
「それでもあまり違和感ない感じだけれどね」
「そうじゃな。不思議なまでにのう」
「コーンがあったりステーキが食えたりな」
「そこは有り難いけれどな」
ダックキングとビッグベアも一緒だった。
「タン爺さんの茶卵も美味いしな」
「河賊相手に大暴れもできるしいい世界だぜ」
「実はタン殿が一番激しいしのう」
黄蓋はここでタンを見て述べた。
「旋風剛拳には驚いたぞ」
「あれはここぞという時の技じゃがな」
「しかしそれでも凄い技じゃった」
黄蓋の言葉はしみじみとしたものになっていた。
「ダックの舞踏もビッグベアの炎も驚くものじゃが」
「へっへっへ、俺はダンスと一緒に戦うからなあ」
「昔は毒霧を吹いてたんだがな」
「毒霧!?」
「ああ、ビッグベアは昔はね」
舞は毒と聞いて驚く周泰に説明した。
「ライデンっていう覆面の悪役でね」
「悪い人だったのですか!?ビッグベアさんって」
「あの時の俺はぐれてたからな」

ビッグベアは自分でもそれを否定しなかった。
「それでな。そういうこともしてたんだよ」
「そうだったんですか」
「流石に今は違うぜ」
そしてこうも言った。
「今じゃ正統派に戻ったからな」
「火を吹くのは正統派ですか？」
「立場が正統派だからいいだろ」
香澄の突込みにも言葉を返す。
「別にな」
「そうなるのかしら」
「そう思っておいてくれ。さて、何を食うかだな」
「魚はどうじゃ？」
黄蓋が勧めるのはそれだった。

# 第十六話　孫策、刺客に狙われるのことその十二

「鰐の肉もあるがのう」
「じゃあ鰐の唐揚げとか？」
舞は首を少し捻ってから述べた。
「それにする？」
「鰐の唐揚げですか」
「知り合いが好きなのよ」
周泰にも話す。
「それでどうかしら」
「そうじゃな。悪くないのう」
黄蓋も舞のその話に頷く。
「それではじゃ。皆で鰐の唐揚げを食べるとするか」
「はい、わかりました」
黄蓋のその言葉に笑顔で頷いた。趙雲や馬超は孫尚香と璃々が遊ぶのを見ながらだ。そのうえで宮殿の庭で稽古をしていた。
そこに黄忠もいる。彼女はお茶を飲みながら張昭達と話をしていた。
「はい、そうですよね」
「そうよね、やっぱりね」
「胸が大きいと肩が凝って」
「それが困りますね」
そんな話をしているのだった。
「男の人の視線がそこにいったり」
「どうしてもそうなるから」
「それが問題なのよね」
「はい、本当に」
胸の話であった。完全にだ。
「そういえば揚州の方は胸が大きいですね」

「まあそうでない娘もいるわ」
「呂蒙もそうだし諸葛勤もそうだし」
「諸葛勤というと朱里ちゃんの」
「ええ、びっくりしたわ」
「まさか。あの娘の妹さんが来るなんて」
これは二人にとっても驚くべきことだったのだ。
「まさかと思ったし」
「本当にね」
「そうですか。あの娘のお姉さんがここに」
黄忠は娘が孫尚香と無邪気に遊んでいるのを見ながらまた述べた。
「これも縁ですね」
「そうよね。これがね」
「縁だと思うわ」
「それにこの世界にも別の世界から人が来ているし」
「実は三人だけじゃないのよ」
「これがね」
「そうなのですか」
今度はこうした話にもなった。別の世界から来ている来訪者達に関することだった。
「ナコルルちゃんみたいな人がここにもまだ」
「ええ、ほら」
「来たわよ」
言ったすぐ側からだった。三人来た。それはであった。１４中央にはダークブルーの髪を後ろで束ねた小柄な少女がいた。黒い大きな目の幼さの残る顔をしていて白い半ズボンの巫女の服を着ている。
右手には黒髪を短く刈った大男でいかつい顔に緑のズボンと赤い袖のない、胸が露わになって上着を着ている。手には金棒がある。
三人目は桜色の着流しの男手髪を後ろに撫で付けている。もみ上げが印象的な飄々とした顔立ちで右手には木刀がある。

その三人が来てだ。一行に明るい顔で挨拶をしてきた。
「はじめましてやな」
「おう、宜しくな」
「頼むぜ」
三人は明るく言ってだ。その上で名乗ってもきた。
「一条あかりや」
「神崎十三じゃ」
「天野漂っていうんだよ」
「この三人も別の世界から来たのよ」
「幕末という時代らしいわ」
「へえ、そうなのか」
「幕末か」
馬超と趙雲は稽古を止めて二人の長老の話を聞くのだった。
「そこから来たっていうのか」
「ナコルルと似た様な時代か」
「その様ね」
黄忠もそれを聞いて述べた。
「どうやら」
「ああ、何かナコルルって人のことは聞いたことあるで」
あかりが黄忠の言葉を聞いて述べた。その中庭になっている場所にまたしても運命の中にある者達が集っているのを感じながら。

# 第十六話　孫策、刺客に狙われるのことその十三

「蝦夷の方の凄い力持ってた人やな」
「それで知っていたのだな」
「そや。結構有名やで」
こう趙雲にも話す。
「うち等の世界のことやけれどな」
「お嬢はあれじゃ。巫女なんじゃ」
十三があかりのことを説明する。
「それでこういうことにも詳しいからな」
「まあうち等がここに集まってるのは偶然ちゃうで」
あかりはこのことも話してきた。
「絶対に何かあるで。それが何かまではわからんけどな」
「まあ俺達はたまたまここに来てな」
漂は飄々とした笑みで言ってきた。
「それでここに置いてもらってるってわけさ」
「お陰で頼りにさせてもらってるわ」
「三人にもね」
張昭と張紘は三人を微笑んで見ながら話した。
「何かとね」
「賊を退治もしてくれるし」
「働かんと食べられへんしな」
あかりは笑ってこう述べてきた。
「そやからな。充分やらせてもらうで」
「あれっ、このあかりって」
「そうだな。鈴々に似た感じだな」
馬超と趙雲はそのあかりを見て述べた。
「何かな」
「うむ、そういうこともあるか」

「お嬢には困ったもんでな」
十三はその二人にこう話してきた。苦い顔でだ。
「もう何かっていうとどっかに行ってじゃ。好奇心応戦なんじゃ」
「それを聞くと何かな」
「さらに似ているな」
二人はそれを聞いてまた述べた。
「ああ、どうもな」
「流石に声や戦い方は違うようだが」
「だからうちは巫女なんや」
あかりはこのことを自分から言う。
「そやからな。武芸者とはまた違うで」
「わしはその家の居候じゃ」
十三はこう話すのだった。
「それで一緒におったら何時の間にかここにおったんじゃ」
「俺は遊郭で飲んでたらな」
漂も自分のことを話す。
「起きたらここにいたんだよ」
「何かそういう話ばかりなのね」
黄忠はその話を聞きながら述べた。
「本当に」
「そうね。私達も話を聞いていると」
「そう思うわ」
張昭と張紘もこのことを認める。
「そして何かがある」
「だとすればそれは何かしら」
「そうだな。ここまで大勢の人間が来ているとな」
「絶対に何かあるだろ」
趙雲と馬超もこのことを察していた。
「問題はそれが何かだが」
「只でさえ漢王朝の力が衰えてるって時なのにな」

「けれど。そういう時こそ」
「よからぬ存在が何かをするには好都合ね」
張昭と張紘はこうも考えた。
「だとしたら何が」
「何があるのかしら」
そんな話をしているとだった。
一行のいる中庭にだ。兵士が一人やって来た。
「張昭様！張紘様！」
「ええ」
「そうね」
二人はこう言い合って目配せをした。だがそれには誰も気付いていなかった。
「孫尚香様もここですか」
「どうしたの？」
「大変です！」
兵士の声が上ずっていた。
「孫策様が！」
「えっ、姉様に！？」
驚きの声をあげたのは孫尚香だった。

# 第十六話　孫策、刺客に狙われるのことその十四

「まさか」
「はい、何とか一命は取り留めましたが」
「何っ！？」
「暗殺か！？」
趙雲と馬超もそれを聞いて稽古の手を止めた。
「またか」
「それで何でやられたんだよ」
「弓です」
兵士はそれだと話す。
「それに射られて」
「弓？」
「オーソドックスじゃがな」
「しかしそんなの使える場所っていったらな」
あかりに十三、それに漂も話をする。
「宮殿の中やろ」
「そんなにあるか？」
「そうそうないんじゃないのか？」
「そうよ。私の小弓ならともかく」
孫尚香もここで言う。
「それでも孫策姉様を射られるなんて相当な腕の持ち主よ」
「その通りです。あの方はです」
「尋常な勘の持ち主ではありません」
二人の長老もそれを言う。だがこれは演技である。
「黄蓋殿でもなければ」
「若しくは」
「そうね」
黄忠も二人の視線を感じながら静かに頷いた。

「私でもなければ」
「宮殿の中から射るなどはとても」
「できるものでは」
「いえ、どうやらです」
ここで兵士はさらに言うのだった。
「宮殿の中ではなくです」
「何処から？」
「何処から射られたと」
「山です」
そこからだというのである。
「宮殿の後ろにある。あの」
「あの山か」
「あの山からなのね」
「はい、そうです」
また二人の長老の言葉に応える。
「そこからです」
「待て、あの山というと」
「そうだよな。愛紗と鈴々がな」
趙雲と馬超が顔を見合わせた。
「あの二人がいてもか」
「確か甘寧殿もいたよな」
「その監視の目をかいくぐったんや。相当やで」
「ああ、甘寧っていったらな」
あかりと十三は甘寧について話した。
「うちと並ぶ勘の持ち主やで」
「わしなんかよりずっとな」
「そんな人の監視をかいくぐったねえ」
漂は左手で頭をかきながら述べた。
「どんな奴なんだろうな」
「それはわからないけれどよ」

孫尚香が必死な顔で言う。
「犯人捕まえないと駄目よ」
「はい、それでは」
「すぐに捜査を」
二人の長老が言ったその時だった。孫権が慌しく中庭に来てだ。
そうしてそのうえで一同に対して言うのだった。顔には明らかに狼狽があった。
「そこにいたか！」
「蓮華様」
「お話は」
「わかっている」
狼狽を何とか打ち消しながらの言葉だった。
「それではだ」
「はい、それでは」
「今から」
「下手人はわかっている」
孫権は今度はこんなことを言った。
「既にだ」
「わかっている？」
「誰だよ、それ」
「山からだな」
孫権は趙雲と馬超に応えながらだ。そのうえで兵士に顔を向けて問うた。

# 第十六話　孫策、刺客に狙われるのことその十五

「そうだったな」
「はい、そうです」
「ならそれしか考えられない」
こう言うのである。
「絶対にだ」
「絶対に？」
黄忠が孫権の焦りきった顔を見ていぶかしむ声をあげた。
「というと」
「あの二人のどちらか、いや両方か」
「何だ？」
「まさかって思うけれどよ」
趙雲と馬超もここで悟った。
「愛紗と鈴々とでもいうのか」
「まさかな」
「そうだ、すぐに門に兵を集めろ！」
孫権は命令を出した。
「何なら山にもだ。二人を捕まえるぞ！」
「しまった、蓮華様のことは」
「計算に入れてなかったわ」
張昭と張紘はここで作戦ミスに気付くことになった。
「まさか。この方がここまで」
「取り乱すなんて」
「まずいわね」
「これは」
「いいな、即刻取調べを行う！」
だがその間にも孫権の指示は続く。
「雪蓮姉様に害を為した罪、償ってもらう！」

「待ってくれ」
「それはないだろ」
趙雲と馬超がその孫権に対して言ってきた。
「愛紗が何故暗殺なぞするのだ？」
「鈴々だってよ」
「理由は後から調べる」
孫権は二人に対してもそう焦りに満ちた顔で返す。
「だが。今はだ」
「理由もなければだ」
「あいつ等はそんなことする奴等じゃねえよ」
「その通りです」
黄忠も立ち上がって言った。
「二人共そんなことは絶対に」
「黙れ！」
だが孫権は三人にきつい言葉で応えた。
「それは後で調べると言っている！」
「何っ、それではだ」
「ちょっと無茶なんじゃねえのか？」
「何もわかっていないうちからそれは」
「貴殿等にも嫌疑はかかっているのだぞ」
孫権は三人に対してもその疑いの目をかけていた。
「そもそもだ。他の国からの客人というのもだ」
「ちょっと。蓮華姉様」
次姉のあまりもの言葉にだ。孫尚香も流石に言った。
「この人達はそんな人達じゃないわよ」
「小蓮・・・・・」
「ちょっと落ち着いて。今の蓮華姉様おかしいわよ」
彼女から見てもそうなのだった。
「だから。ちょっとね」
「それは」

「そうです、蓮華様」
「まずは落ち着いてです」
張昭と張紘がタイミングを見計らって孫権に声をかけてきた。
「そのうえでゆっくりと」
「捜査を」
「そうね」
妹だけでなく二人の長老に言われてだ。孫権もやっと落ち着いてきた。
そのうえでだ。口調を幾分か穏やかなものにさせて言うのであった。
「それでは。これから」
「はい、捜査を」
「取り調べをしましょう」
こう話してだった。そのうえで孫権を向かわせる。後に残った趙雲達はそれぞれ難しい顔を見合わせていた。その彼女達に孫尚香が声をかけてきた。
「あの」
「済まないな」
「気を使ってくれるんだな」
彼女の気遣う顔での言葉だった。
「だがだ」
「あの二人がそんなことする筈ないってわかってるからな」
「そうよ。あの二人は絶対にそんなことしないわ」
それは彼女もわかっていることだった。
「けれど。蓮華姉様は」
「焦ってるわね」
黄忠は璃々を抱きながら言った。
「どう見ても」
「普段はあんな感じのよ」
困惑した顔で姉の弁護をする。

「優しくて。穏やかで」
「それがか」
「お姉さんのことでだよな」
「あんなに必死になって」
「そうなの。だから悪く思わないで」
それは絶対にというのだ。
「蓮華姉様のことは」
「わかっている」
「だからな。気にするなよ」
「それはね」
「有り難う」
三人の言葉を受けてだ。今度は小蓮が俯いてだ。そのうえで頷くのだった。
そんな彼女達を見てだ。あかりが言った。
「絶対犯人は別におるで」
「お嬢、わかったのかいな」
「ああ、今はっきりとわかったで」
腕を組んだ姿勢で十三の言葉に答える。
「あの人等の言葉聞いてたらな。絶対にちゃうや」
「じゃあ犯人は一体」
「それはわからへんけどな」
あかりにもそれはというのだ。
「けどな。あの人等のお友達やないで」
「そうなんだな」
「ああ、それはわかった」
こう話してだった。二人で話をする。そして漂も顎に右手を当てて言う。木刀は左手に持ち肩にかけている。その姿勢で言うのだった。
「まあ犯人が誰かなんていいよな」
「いいんかい」

「ああ。そんなのは後で絶対にわかるさ」
彼はあかりに対して言っていた。
「それよりもだ」
「それよりもか」
「あの人等のお友達が犯人じゃないってあの姫様にわかってもらうことが大事だな」
「そや、その通りや」
あかりもその通りだと頷く。
「あの姫様めっちゃええ人やけれどな。もうちょっと心の修行も必要や」
「真面目過ぎて今一つ周りが見えてないのは確かだな」
十三も孫権のそうしたところは見抜いていたのだった。
「それがよくない方向にいかないように」
「ここでちゃんとしとかなあかんな」
こう話彼等だった。また何かが動こうとしていた。

第十六話　　完

２０１０・５・２４

# 第十七話　孔明、推理をするのことその一

第十七話　孔明、推理をするのこと

紅葉が見える山でだ。関羽と張飛は甘寧の案内を受けながらだ。狩をしていた。

「ここにはそんなに獣が多いのだ？」

「左様」

甘寧が張飛の言葉に応えていた。今一行は山道の中を進んでいる。山の中は道がかなり広くあまり鬱蒼とはしていない。見事な木々が連なっていてもだ。

「その通りだ。この山はだ」

「そうなのか。それではだ」

関羽がその言葉に応える。見れば彼女も張飛も弓矢を身に着けている。

「今日の夕食を狩らせてもらうか」

「それはもう用意しているが」

甘寧は関羽のその言葉に顔を向けて告げた。

「既に」

「いや、それでもだ」

「ただ御馳走になるわけにはいかないのだ」

二人はこう甘寧の言葉に答える。

「だから。ここは」

「狩らせてもらうのだ」

そんな話をしているとだった。一行の目の前にかなり巨大な猪が出て来た。女としてはかなりの長身の関羽よりも遥かに肩の高さがある。

張飛はその猪を見てだ。甘寧に対して言うのだった。

「甘寧殿、あの猪は任せるのだ」

「貴殿が狩るというのか」

「鈴々は矛だけではないのだ」
それだけではないというのだ。
「紫苑程じゃないが弓も使えるのだ」
「そうなのか」
「愛紗もそうなのだ」
そしてそれは関羽もなのだという。
「もっとも蛇矛から衝撃波も出せるから普段はそれを使うことが多いのだ」
「衝撃波をか」
「そうなのだ。出そうと思えば何時でも出せるのだ」
そうだというのである。
「けれど弓も使えるのだ」
「ではここはか」
「そうだ、使うのだ」
こう言ってであった。弓をつがえてだ。猪のその額を一撃で射抜いてだ。それで終わらせたのだった。
「ふむ、見事だ」
「この通りなのだ」
「貴殿は弓も見事なのだな」
「何度も言うが愛紗はもっと見事なのだ。紫苑はさそれよりも遥かになのだ」
そんな話をしながらだった。そのうえでその猪を手に入れに行く。甘寧も一緒だ。そして関羽はふとここで立ち止まり左手を見た。
するとだ。下に宮殿が見えた。赤い屋根の左手に広い廊下がありそこにテーブルや椅子が置かれている。そうした場所であった。
「ふむ、あれは孫策殿の趣味かな」
開放的な彼女の性格を踏まえての考えだった。
「それであの場所で時々だな」
酒を楽しんでいると考えるのだった。
そのテーブルに今実際に孫策がいた。周瑜も一緒だ。

そのうえでだ。酒を飲みながらにこやかに話をするのだった。
「今のお客人達だけれど」
「関羽殿達ですね」
「ええ、そうね」
こう話すのだった。
「いい娘達ね」
「孫策様、それは腕だけではありませんね」
「そうよ。性格もいい娘達ね」
にこやかに笑いながら周瑜に対して話すのである。
「とてもね。ただ」
「ただ？」
「いつも言ってるじゃない」
その笑顔を今度は周瑜に向けて言うのである。
「二人きりの時は」
「すいません、そうでしたね」
「そうよ。真名でね」
こう周瑜に言うのである。
「呼び合うってね」
「はい、それでは雪蓮様」
「ええ、冥琳」
「特に気に入ったのはね」
「誰ですか？それは」
「あの張飛って娘ね」
彼女だというのである。

# 第十七話　孔明、推理をするのことその二

「あの娘って何かね」
「何か？」
「子犬みたいだから。飼って可愛がりたいわね」
「またその様なことを仰って」
言いながら実際に小屋につないで犬の様になっている彼女を想像しながら話す。
「御冗談が過ぎます」
「そうかもね。それと」
「はい、それで」
「藍里と飛翔はどうなのかしら」
「今報告が届きました」
周瑜はこう主に答えた。
「塞を築いたそうです」
「そう、それじゃあ後は」
「そこに入り山越を本格的に討つことができます」
周瑜は主に説明する。
「ですからこれから」
「そうね。それで今回はだけれど」
「今回は？」
「蓮華に小蓮も連れて行きたいわね」
「御二人もですか」
「ええ。蓮華は今一つ固いところがあるから」
孫策も孫権のそうした性格は把握していたのだ。
「だからね。それをどうかする為にもね」
「雪蓮様がおおらか過ぎます」
「そうかしら。私は別にそうは思わないけれど」
「自覚がないだけです」

きつい言葉で返す周瑜だった。
「雪蓮様は」
「やれやれ、相変わらず厳しいわね」
「厳しいも何も雪蓮様は。まあ」
ここでだ。言葉を代えたのだった。
「それでいいのですが」
「うふふ、そうでしょ。とにかく揚州はまとまってるし」
「はい」
「母様の遺産だけれどね」
彼女の母孫堅のことも話に出すのだった。
「これはね」
「しかし雪蓮様もこれまで多くの戦いを経て賊を下してこられました」
「それで小覇王になったっていうのね」
「あの西楚の項王にも例えられる程の」
「嬉しいけれどね。項王に例えられるのは」
それはだというのである。
「ただね」
「ただ？」
「項王になれるのはまだこれからよ」
こう言うのであった。
「天下を統一してからよ」
「この乱れた天下を」
「ええ、天下をまとめるわよ」
孫策のその目がだ。強いものになった。
「絶対にね。それで私はね」
「天下の覇者に」
「曹操も袁紹も前に立ちはだかるのなら」
「その時は」
「下すわ」

悠然とした笑みと共の言葉であった。
「それだけよ」
「そうですね。それでは」
こんな話をしていたのだった。しかしであった。
関羽達は門に戻ってきていた。それぞれ狩った獲物を背負っている。張飛はあの巨大な猪を背負っている。そのうえで言うのだった。
「今日はこれで牡丹鍋なのだ」
「猪料理か」
「そうなのだ、そうするのだ」
こう話していた。しかしその彼女達の前にだ。
孫権が来た。兵士達も一緒だ。甘寧は主の姿を見て言った。
「蓮華様、どうされたのですか？」
「詳しい話は後よ」
孫権は厳しい顔で彼女に応える。そうしてであった。
王の座の前にだ。関羽が手に鉄の索をかけられてだ。そのうえで連行されてきた。
王の座の前には揚州の主だった臣下と関羽の一行、それにダックやあかり達がいた。その関羽を見てまずは馬岱が言った。
「ちょっと、これってどういうこと！？」
「どういうことも何も」
陸遜もおろおろするばかりである。
「あの、何故ですか？どうして関羽さんが」
「姉様が暗殺されかけたのだ」
玉座の左手に立つ孫権がだ。厳しい顔と声で返してきた。
「それでなのだ」
「まさかと思うけれど」
「関羽さんがその犯人だっていうんですか？」
「そうだ」
孫権は馬岱と孔明の言葉にも同じ声で応えた。
「矢が後ろの山から射られたのだ」

「丁度その時にそこには私がいた」
甘寧もここで話す。
「そしてだ。私が張飛殿と共に猪を捕まえに行っていた時関羽殿は一人だった」
「それで愛紗が疑われているのだ」
張飛も俯いて言う。
「誰もそこにいなかったから。それで」
「話は聞いたが」
「それでもよ」
趙雲と馬超がここで反論する。
「だが。愛紗はだ」
「暗殺なんてしないぜ、絶対にな」
「証拠はあるのか」
孫権は二人を見下ろすようにして言ってきた。玉座は階段の上にありどうしてもそうした形になってしまうのである。その目は厳しいままだ。

# 第十七話　孔明、推理をするのことその三

「その証拠は」
「証拠だと！？」
「それかよ」
「そうだ。それはあるのか」
こう二人に問うのだった。
「この者が暗殺をしないという証拠はあるのか」
「それはだ」
「あるかって言われたらよ」
二人もだ。口ごもってしまった。
「私達もそこにいなかった」
「だからよ」
「ないな。そういうことだ」
孫権は見下ろす形のままだった。
「だからだ。この者をだ」
「何を言ってもわかってくれないのだ」
張飛もお手上げといった顔だった。
「全然駄目なのだ」
「そうなのか」
「仕方ないってなるのか？」
趙雲と馬超もいよいよお手上げといった様子になっていた。趙雲でもだ。
「しかし。それでもだ」
「愛紗はそんなことは」
「けれど。これはね」
「そうね。まずいわね」
キングと舞も今の状況を見て天秤を悲観の方に傾けさせた。
「このままだとね」

「愛紗本当に」
「けれど。証拠がないし」
「ですから」
ナコルルと香澄はそれを逆に言った。
「甘寧さんおられたのに」
「それでもなんですか」
「さっき言ったな。私はその時一時だが張飛と共にいた」
甘寧はまたこのことを話した。
「張飛の潔白は証明できる。しかしだ」
「愛紗さんは無理だと」
「その通りだ。いなかったのだからな」
「けれど。こういうことも言えますね」
孔明の言葉だった。彼女は意を決した様な顔で甘寧に対して言うのであった。
「甘寧さんも一時一人だったのではないですか?」
「何?」
「例えば用を足されるとか」
人ならば絶対に避けられないことだった。
「鈴々ちゃんもそれは覚えていますか?」
「そういえば一度あったのだ」
張飛は視線を上にやり左手の人差し指を口元に当てて述べた。
「けれどすぐに戻ったのだ」
「鈴々ちゃんもそうですよね」
「昨日飲み過ぎてなのだ」
このことを言われる前に話した。
「それで」
「御前はいつも酒を飲み過ぎる」
関羽は拘束されている今もこう注意するのだった。
「全く。飲み過ぎるのもだ」
「それでは全員が一人になる時があったということです」

孔明はここでまた言った。
「そう、つまりはです」
「鈴々はやっていないのだ」
八重歯を出して抗議した。
「そんなことは絶対にしないのだ」
「はい、それは私もわかります」
孔明は張飛のその言葉に頷いてみせた。
「よく。そして」
「そして？」
「まだ何か？」
「全員に嫌疑がかかるということになります」
「待て」
ここでだ。甘寧がそれを聞いて眉を顰めさせて孔明に返した。
「私を疑っているというのか」
「疑ってはいません」
「では何故そう言うのだ」
「あくまで可能性を言っているまでです」
孔明はその甘寧に顔を向けて言い返す。
「そう、三人全てにその可能性があります」
「馬鹿なことを言うな」
甘寧は目を鋭くさせて孔明に抗議する。

# 第十七話　孔明、推理をするのことその四

「私は孫家にお仕えしているのだぞ。しかもだ」
「わし等と冥琳の次に入ったからのう」
ここで黄蓋が言ってきた。
「幼い頃からな。河賊からなってな」
「そうだ。その私が何故だ」
怒った声での抗議だった。
「私は揚州の者だ。その私がだ」
「同じ場所にいれば様々なことがあるでしょう」
だがそれでも孔明は言うのだった。
「感情のもつれ、意見の相違、その他にも考えられます」
「貴様・・・・・・」
甘寧の怒りがさらに高まっていた。これは周囲の誰もがわかることだった。
あかりもそれを見てだ。眉を厳しくさせた。
「まずいで、あれは」
「ああ、甘寧も気が短いしな」
ダックが彼女のその言葉に応える。
「何が起こってもな」
「あの娘、斬られるかもな」
「それだけは止めるぜ」
「ああ、それはな」
漂とビッグベアも真剣な顔になっている。
「それはな」
「止めるか」
二人だけではない。十三とタンもだった。
「いざとなれば」
「行くとするか」

「はい」
周泰も彼等の言葉に頷く。
「若しもの時は」
「ああ、やろうか」
「七人おれば流石にのう」
止められると見ていた。そのうえで展開を見ていた。
そしてだ。甘寧はまた言うのだった。
「私がその様な感情を持っているというのか」
「あくまで可能性だけです」
「それはない」
孫権が甘寧を擁護してきた。
「思春、いや甘寧の忠義は揚州の者でも随一だ」
「そうですよねえ」
「はい、思春さんは」
陸遜と呂蒙も孫権の言葉に頷く。
「私達よりもまだ」
「凄い忠誠心ですから」
「ですが可能性は否定できませんね」
孔明はあくまでこのことを指摘する。
「そうですね」
「貴様・・・・・」
甘寧の怒りが遂に沸点に達した。
そしてだ。その剣を抜いたのである。
「このままで済むと思っているのか！武人の誇りを愚弄してだ！」
「待て！」
「朱里はやらせないからな！」
「その通りよ！」
趙雲と馬超、それに黄忠がまず出ようとした。
続いてキング達もだ。周泰やあかり達も出ようとする。
しかしだ。ここで孔明は周りにも言うのだった。

「大丈夫です！」
「何っ、だが」
「けれどよ」
趙雲と馬超も思わず足を止めた。孔明のその言葉に、いや剣幕にだ。それは彼女が普段見せることのない凄まじいまでのものだった。
「安心して下さい。何があっても」
「私は本気だぞ」
甘寧はその剣をだ。孔明の顔先に突きつけていた。今まさに斬ろうとしている。
「それでもか」
「はい、若し私の言っていることが御気に召されないなら」
甘寧を見据えての言葉だった。
「その時はです」
「覚悟はしているのか」
「今武人と仰いましたね」
孔明は今度はこのことを問うてきた。
「そうですね」
「それがどうした」
「武人の誇りと」
このことも言ってみせた。
「そうですね」
「そうだ。私とて武人」
甘寧はこのことも告げた。

# 第十七話　孔明、推理をするのことその五

「その誇りはだ」
「愛紗さんも同じです」
孔明はここで言った。
「愛紗さんもそれは同じです」
「何っ！？」
「武人です」
関羽への言葉だった。
「そうです。武人なのです」
「武人だというのか」
「貴女は今武人の誇りと仰いましたが」
「それがどうかしたのか」
「愛紗さんも持っておられます。武人が暗殺をするでしょうか」
「それは」
「しませんね」
甘寧を見据え続けていた。そのうえでの言葉だった。
「武人なら」
「その通りだが・・・・・・そうか」
ここでだ。甘寧も遂にわかったのだった。
「だからか。関羽殿は暗殺なぞされぬというのだな」
「そうです。おわかりになられましたね」
「その通りね」
ここで言ったのは周瑜だった。
「関羽殿はそういうことをする人物ではないわね」
「冥琳・・・・・・」
「蓮華様、そういうことです」
今度は孫権に顔を向けての言葉だった。
「多少先走りだったかと」

「それでは。関羽殿は」
「はい、暗殺なぞされていません」
そうだというのである。
「ですから。それは」
「そうか。決してか」
「はい、それはありません」
また言う周瑜だった。
「ですからここは」
「・・・・・わかった」
孫権は目を伏せさせた。そのうえでの言葉だった。
「それではだ」
「はい、では」
周泰がその鎖を解き放った。それで終わりだった。
そしてである。孫権は関羽のところに来て頭を下げるのだった。
「申し訳ない」
「いや、それはいい」
関羽はにこりとはしないがそれでも言葉を返した。
「疑いが晴れた。それでだ」
「それよりもです」
ここでまた孔明が言葉を出してきた。
「問題はです」
「問題は？」
「それは」
「真の犯人が誰かです」
それだというのである。
「それが問題です。そして」
「そして？」
「一体」
「その犯人はまだ捕まっていません」
このことも言うのだった。

「それが問題です」
「それがですか」
「今は」
「孫策さんの状況も心配ですし」
こう話すのだった。犯人が誰かというのもだ。それも問題なのだった。
関羽の疑いは晴れた。しかしである。謎がまだ残っていた。
孔明は自分達の部屋に戻った。そこに入るとすぐにふらふらになりだ。そのうえで傍にいた黄忠の方に倒れ込む。黄忠はその彼女を支えて言うのだった。
「頑張ったわね」
「怖かったです。とても」
「あの人もかなり感情的になっていたし」
「けれどこれで」
それでもだというのだ。
「何とか」
「そうですね。これで」
ナコルルが孔明の言葉に応えて言う。

# 第十七話　孔明、推理をするのことその六

「関羽さんの疑いは晴れました」
「しかし」
「しかし？」
「問題は犯人です」
それだというのである。
「犯人が誰かです」
「それですか」
「誰が孫策さんを、そして孫権さんを狙っているかです」
「最近どの太守も刺客に狙われているけれどな」
今言ったのは馬超だった。
「曹操にしても袁紹にしてもな」
「孫姉妹だけではない」
趙雲も言う。
「それを考えると十常侍と思えるが」
「何か違うみたいだし」
「そうですよね。微妙以上に」
舞と香澄もこのことはもう聞いていた。
「じゃあ誰なのか」
「それですよね」
「ここで重要なことはです」
孔明は何とか立ち上がりだった。そのうえで再び話してきた。
「孫策さんは生きておられます」
「つまりもう一度狙われる可能性がある」
「そういうことか」
「はい、そうです」
こう関羽と趙雲にも話す。
「仕事は確実に、ですから」

「では。孫策殿の下にまた」
「来るな」
関羽と趙雲はこう考えるに至った。彼女達はまずは仲間の疑いが晴れたことを喜んでいた。しかし事件はまだ終わっていなかった。
孫権は沈んだ顔になっていた。先程のことを反省していたのだ。
その彼女の傍には呂蒙がいる。彼女は必死の顔で主に声をかけていた。
「蓮華様、御気を落とされずに」
「ええ」
返事は弱いものだった。
「わかっているわ」
「それでなんですが」
「どうしたの？」
「これをどうぞ」
皿の上に置かれた数個のゴマ団子を差し出してきたのである。
「大喬ちゃんと小喬ちゃんが作ってくれたんですよ」
「そう、あの二人が」
「はい、お茶もありますから」
それも差し出すのだった。明らかに落ち込んでいる主に対してだ。
「ですから。これを食べて」
「有り難う」
こうは返してもその目は暗い。それでも呂蒙の気持ちを汲んでお茶を飲みゴマ団子に手をやる。そしてその時であった。
紫の髪を奇麗に上にまとめた濃青の目の可愛らしい二人の少女が来た。どちらも赤と白の可愛い服を着ている。その二人が部屋に来て言うのだった。
「蓮華様、こちらでしたか」
「雪蓮様ですが」
「菖蒲、菫」
二人の真名を言ってだった。

「まさか」
「はい、目を覚まされました」
「御無事です」
「それは本当!?」
今の言葉を聞いてすぐにであった。目に熱いものが宿った。
そのうえでだ。両手を口元に当ててだ。その熱いものを零れさす。
「姉様・・・・・・」
「蓮華様、よかったですね」
「ええ・・・・・・」
呂蒙の言葉にだ。涙を零しながら頷く。
「本当に。どうなるかって思ったけれど」
「後でお祝いをしましょう」
呂蒙は主に対して微笑みを向けながらまた述べた。
「大喬ちゃんと小喬ちゃんの歌もありますよ」
「はい、任せて下さい」
「歌わせてもらいます」
二人の少女も笑顔で応える。孫権にとっても非常によい流れになった。

# 第十七話　孔明、推理をするのことその七

そしてだ。孫策の寝室にだ。何者かが迫る。そのうえで両手に持っている禍々しい、出刃包丁に似た形の刃を振り下ろそうとする。しかしだ。

「甘いな！」

孫策はすぐに起き上がって傍に置いてあった剣でその者の胸を貫いたそこにいたのは白い髪に痩せた顔の男だった。身体も痩せており目は白く異様な光を放っている。紺のズボンに緑の上着という格好だ。

胸を貫かれた男はだ。血を流しながらも言うのだった。

「何だ！？元気じゃねえか」

「御前ね」

起き上がった孫策はベッドから出ながらだ。そのうえでその男に問うのだった。

「御前が私と、そして蓮華を狙っていたのね」

「ちっ、わかったのかよ」

「そんなことはすぐわかることよ」

鋭い顔で男に告げた。

「すぐにね。ただ」

「ただ？」

「目的が知りたいわね」

こう男に対して言うのだった。

「何故私達を狙っているのかしら」

「へっ、それはね」

「それは？」

「手前に言うかよ！」

言いながら再び襲い掛かろうとする。胸に傷を受けていてもそれでも動きは鈍っていなかった。

しかしだ。その刃は横から止められた。その刃の主は。
「遂に尻尾を出してきたな」
甘寧だった。孫策の横から出て来て言うのであった。
「刺客か」
「生かして捕らえなさい」
孫策はその甘寧に対して告げた。
「色々聞きたいことはあるわ」
「はい、それでは」
「ちっ、二人がかりかよ」
男はそれを見てだ。部屋から出ようとする。しかしその月明かりに照らされた部屋の外にはだ。もう人が待っていた。
「生憎だがだ」
「逃がしはしないわよ」
「それはね」
「いいタイミングね」
孫策はその三人を見て微笑んだ。周瑜に張昭、そして張紘の三人だった。周瑜はその手に鞭を持っていてそのうえで身構えている。
「これで逃げ道はないわよ」
「見ない顔だな」
周瑜は男の顔を見て言った。
「刺客に見覚えがある筈もないがな」
「その通りね。どうやら十常侍の手の者でもないみたいだけれど」

孫策は男に少しずつ近寄りながら述べていく。
「けれど。誰かしら」
「あれ、何やこいつ」
ここであかりが来た。十三も一緒である。
彼女はその男を見てだ。彼を指差して言った。
「紫鏡やないか。御前もここに来てたんかいな」
「おい、どういうつもりじゃ！」

十三は金棒を振りかざしながらその男紫鏡に対して問う。
「何で孫策さんを狙うんじゃ！」
「へっ、聞きたければ俺を倒すんだな！」
こう言ってであった。紫鏡は両手のその刃を出鱈目に振り回しはじめた。
「そうしたら教えてやるか！」
「どうやらこれはね」
「はい、仕方ありません」６８
甘寧が孫策の言葉に冷静に頷いた。
「ここは」
「覚悟しいや！」
「これでな！」
あかりと十三も参戦してであった。紫鏡を一気に叩き潰した。三人の技を受けてそれで事切れた。骸は数日晒されそのうえで河に捨てられることになった。
一連の事件は終わった。一行は宴の後でそれでまた旅に出ることになった。一行への見送りは孫権が陸遜達を連れて出ることになった。そこでだ。
孫権は弱い顔になってだ。港で関羽に対して謝罪していた。
「関羽殿、申し訳ない」
「いや、それはいい」
「いいのか」
「過ちを知れば正す。それが大事だ」
にこりと笑って孫権に言うのだった。

# 第十七話　孔明、推理をするのことその八

「貴殿はそれを認めてくれた。それで充分だ」
「そう言ってくれるか」
「そうだ。それに」
「それに？」
「笑顔でいてくれるか」
こうも言うのであった。
「笑顔でだ」
「笑顔か」
「人は別れる時の顔を覚えているものだ」
彼女にもだ。そんな話をするのだった。
「だからだ。ここはだ」
「笑顔でか」
「そうだ。それで頼む」
こう孫権に話す。
「是非な」
「わかった」
そして孫権もその言葉を受けた。そうしてであった。
笑顔になる。そのうえで関羽に話す。
「また会おう」
「その時を楽しみにしている」
「今度会った時は覚えていなさいよ」
「何をなのだ？」
「絶対にあんたより大きくなってやるんだからね」
二人の横では勝手についてきた孫尚香と張飛が言い合っていた。
「胸だってね」
「ふん、鈴々も負けないのだ」
張飛も言い返す。

「御前みたいなちんちくりんには負けないのだ」
「誰がちんちくりんなのよ」
「御前以外にはいないのだ」
「やれやれ、全く」
馬岱がそんな二人を見ながら呆れた顔をしてみせて言う。
「二人共子供ね、本当に」
「何よ、チビッコその三」
「御前には言われたくないのだ」
「ちょっと。待ちなさいよ」
馬岱はその言葉にむっとした顔ですぐに言い返した。
「誰がチビッコその三なのよ」
「あんたよ」
孫尚香はその馬岱を指差して言い切る。
「あんた以外にいるの？」
「私だってね。翠姉様と一緒でね」
「一緒って。何がよ」
「背だって大きくなるし胸だってね」
こう主張するのだった、ムキになってだ。
「ああした風に」
「そうなのか？」
「まあ馬家って基本的にはそうだけれどな」
馬超はこう趙雲の言葉に答えた。
「実際な。だから蒲公英もな」
「そうか」
「そうなる筈だけれどな」
「ほら、聞いたわね」
馬岱は従姉の後ろからの言葉を聞いたうえで前に向き直ってそのうえで二人に対して言う。
「私だってね。大きくなるのよ」
「それを言ったら私もよ」

孫尚香もだというのだった。
「私だってね。なるわよ」
「なる訳がないのだ」
「何でそう言えるのよ」
「雪蓮姉様も蓮華姉様も普通に胸が大きいじゃない」
やはりであった。二人の姉の話を出すのであった。
「それに母様だってね」
「遺伝にも例外があったりするけれどね」
「そうだったわね」
ここでキングと舞が言うのだった。
「実際家族の中で一人だけ小さいとか」
「そういう人もいるわよ」
「そんなことないわよ」
無理に強気に言う孫尚香だった。
「絶対に大きくなるんだから」
「そうですか」
「そうなるといいのですが」
ナコルルと香澄はその言葉には懐疑的だった。

# 第十七話　孔明、推理をするのことその九

「私は別に大きくなくても」
「普通にあれば」
「巨乳じゃないと駄目なのよ」
さらにムキになる孫尚香だった。
「それはね」
「何か話が無茶になってるな、向こうは」
関羽はそんな話を聞きながら言うのだった。
「何を話しているのだ？全く」
「小蓮は相変わらずね」
孫権はそんな妹を見て優しい苦笑いを浮かべていた。
「本当にね」
「昔からあんなのなの」
「そうなのか」
「困った娘よ」
しかしその顔は優しい。
「母様も一番手が掛かるって仰ってたら。けれど」
「けれど？」
「素質は一番いいのよ」
こう言うのだった。
「武も文もね。人を惹きつけるものもね」
「それもか」
「雪蓮様と蓮華様のいいところをバランスよく受け継いでおられてるんですよ」
陸遜がここでこう話してきた。
「ですからとても」
「雪蓮姉様と小蓮がいて」
孫権はさらに話す。

「それで皆がいてくれて。私は充分過ぎる程幸せよ」
「ではその幸せを守っていくのだな」
「ええ、それが私の夢よ」
こう関羽にも話す。
「姉様が築かれたもの、そして小蓮が受け継ぐべきものをね」
「蓮華様ならできます」
呂蒙がここで後ろから言ってきた。彼女もいたのだ。
「絶対に」
「有り難う、亞莎」
「孫家は御三方あってですから」
「私達三人が」
「はい、蓮華様も必ず」
こうだというのだった。
「果たされます」
「そうさせてもらうわ。じゃあ関羽」
「うむ」
「また会いましょう」
別れの挨拶は微笑んでいた。
「それじゃあまたね」
「再会の時を楽しみにしている」
そしてだ。孔明と陸遜も最後の話をしていた。
「じゃあまた御会いしましょう」
「はい、楽しみにしてますう」
別れの時も穏やかな陸遜だった。
「それでまた本を読みましょうね」
「はい、是非」
「あの曹操さんが書かれた本もありますよお」
「孟徳新書ですね」
「あと孫子の注釈も」
それもだというのだった。

「あるますよお」
「うわあ、曹操さんの本がそんなに」
「袁紹さんのところの陳琳さんの本もありますよ」
「あの人のもですか」
「はい、ありますから」
だからだというのだった。
「ですから是非」
「楽しみにしていますね」
こんな話をしてであった。それぞれ笑顔で別れた。彼等を見送る孫権の表情は。
「何か奇麗ですよお」
「えっ!?」
「今までよりもずっと奇麗になってますよ」
陸遜の言葉である。
「大きくなられましたね」
「大きくか」
「はい、なられましたね」
主を温かい目で見ての言葉だった。

# 第十七話　孔明、推理をするのことその十

「それでいいと思います」
「そうか」
「蓮華様はとてもお優しくて真面目な方ですし」
それが彼女の長所である。
「それに器の大きい方ですから。御心に余裕を持たれますと」
「さらにか」
「そうです。頑張って下さいね」
「うむ、それではな」
こう話してであった。皆で笑顔でいた。孫尚香も何だかんだで笑っていた。
陸遜は港から帰ってからすぐに周瑜のとことに来た。そうしてだった。
一礼してからだ。報告するのだった。
「皆さん無事に船に乗られました」
「そうか」
「はい。北に向かわれました」
「わかった。それにしてもだ」
「孔明さんですか」
「そうだ、あの娘だ」
周瑜の方からだった。孔明について話すのである。
「あの娘は。かなりな」
「知識や知恵だけでなく。それに」
「度胸もあるな」
「思春さんとあそこまで渡り合うなんて」
「そうはできるものではないな」
「しかも凄い向上心もありますし」
見ていたのだ。孔明のことを。

「このままいかれたら」
「私や御前に並ぶ軍師になるか」
「そう思いますう」
「それ以上かもな」
しかしであった。周瑜はここでこう言うのあった。
「あの娘は」
「それ以上ですか」
「然るべき主を見つけたならば」
その時のことを話し。周瑜のその目が光った。
「その時はだ」
「そうですね。一代の、いえ」
「この国を救うだけの者になる」
真剣な顔での言葉だった。
「間違いなくな」
「この国をですかあ」
「そうだ。それだけの英傑だ」
周瑜は言った。
「あの娘はな」
彼女は孔明をそう見ていた。その孔明はだ。
今は船の上にいた。そこで仲間達と共に北に進みながらだ。河を見ながら言うのだった。
「事件は終わりましたけれど」
「どうしたのだ？」
「何か本を読んでいるみたいでしたね」
こう張飛に話す。
「どういう訳か」
「本をなの」
「はい、誰かが筋書きを書いたみたいな」
馬岱に対しても言うのだった。
「そんな感じだったような」

「筋書きなのだ？」
「そういえば曹操さんと袁紹さんが襲われたお話も」
孔明はこのことも話した。
「筋書きが書かれていたような」
「そうした感じなのね」
「黄忠さんのことも」
その黄忠を見ても言うのだった。
「気のせいですかね」
「考え過ぎじゃないの？」
舞はこう述べた。
「幾ら何でもそこまでは」
「考え過ぎでしょうか」
「そうよ。怪しい事件が多いのは戦乱の時代だからでしょうし」
「こんな事件は何処でも起こっているしね」
キングもこう言う。
「だからそれはね」
「そうでしょうか」
「考え過ぎるのもよくないですよ」
ナコルルもそこまでは考えていなかった。
「ですから。今は」
「今は？」
「お茶でも飲みましょう」
そうしてはというのだった。

# 第十七話　孔明、推理をするのことその十一

「それで落ち着いて船旅を楽しみましょう」
「わかりました」
「お菓子もありますよ」
香澄はそれを勧めてきた。
「お饅頭が」
「えっ、お饅頭ですか」
饅頭と聞いてだ。孔明は明るい顔になって話すのだった。
「私お饅頭大好きなんですよ」
「では余計にですね」
ナコルルもいた。
「皆で食べましょう」
「はい、それじゃあ」
彼女達は楽しくお茶に饅頭を楽しむことになった。そして関羽達はだ。三人で船の中で一杯やっていた。
「美味いな」
「うむ」
「江南の酒もいいよな」
関羽と馬超が趙雲の言葉に応えていた。
「しかもこのメンマもだ」
「意外と合うんだな」
「メンマはいい食べ物だ」
趙雲はそのメンマを箸に取りながら言う。
「是非にと思ってな」
「そうか。しかし」
「そりゃ随分多くないか？」
二人は趙雲の前の皿の上のメンマを見て少し引いていた。何と山盛りである。

「そこまで食べるのか」
「メンマばかりな」
「私はこれで満足だ」
こう言ってそのメンマを食べる。
「メンマさえあればな」
「他のものもあるのだがな」
「干し肉だってな」
「干し肉も嫌いではないがな。だが」
「だが？」
「今度は何だよ」
「二人共中々のものだな」
話を変えてきたのである。
「あらためて見るとな」
「？何のことだ」
「何のことだよ」
「胸だ」
それだというのである。
「私もそうだが。二人もかなりだな」
「それか」
「そのことかよ」
「だが。紫苑殿はな」
ここで黄忠の話もした。
「それ以上だからな」
「そうだな。あの胸は」
「相当なものだよな」
「孫家に仕える面々もかなりだったが」
彼女達の話もする。
「しかし。あの方の胸はな」
「うむ。相当なものだ」
「流石に負けるな」

巨乳の三人も敗北を認めていた。流石にだった。
「胸には自信があったのだがな」
「実は私もだ」
「あたしも。形だってな」
そしてだ。趙雲は今度はこうも言うのだった。
「だが。まだな」
「まだ？」
「何かあるってのかよ」
「キング殿や舞殿も立派なものだ」
二人のそれも肯定したうえでの言葉である。
「しかし」
「しかし？」
「その先にある言葉は何だ？」
「もう一人いるのかもな」
こう言うのであった。
「もう一人。胸が大きい者に会うかも知れない」
こう言うのだった。
「もう一人だ」
「さらにか」
「会うのかよ」
「そんな気がする」
趙雲の顔は真剣なものだった。真面目に言っているのだ。

# 第十七話　孔明、推理をするのことその十二

「何故かわからないがな」
「少なくとも出会いはあるか」
「今度は誰だろうな」
「何の話してるの？」
そんな話をしているとだ。三人のところに璃々が来た。
「おっぱいの話してるの？」
「い、いやそれはだな」
「何というか」
「まあそうだけれどさ」
「そうなの」
「しかし。この娘は」
関羽はその璃々をちらりと見て二人に言った。
「紫苑殿の娘だからな」
「そうだな。有望だな」
「大きくなるな」
「うん、私胸大きくなるよ」
自分から言う璃々だった。
「お母さんにそう言われてるの」
「遺伝だな」
「そうだな」
「それしかないよな」
三人は黄忠がそう言う根拠をすぐに察して述べた。
「私もだ。母上はな」
「私もだった」
「やっぱりそれだよな」
「お母さんが大きいと大きくなるのよね」
璃々はかなり無邪気に述べた。

「じゃあ私も」
「そうだ。おそらくな」
「大きくなるからな」
「それは安心していいと思うな」
「うん、楽しみにしてるよ」
璃々は明るく笑って話した。
「そうなるのをね」
こんな話をしながらだ。一行は北に向かっていた。そこでまた出会いが待っていた。
その頃だ。また闇の中でだ。影達が話をしていた。
「そうですか。紫鏡はですか」
「しくじった」
一言だった。
「所詮はあの程度だ」
「そうですね。ただ」
「ただ、か」
「屍はまだあったな」
こう言うのであった。その影の一つがだ。
「そうだったな」
「ある。河に放り込まれたがすぐに回収した」
「ならそれを使えばいい」
「そうですね。あの様な男でも」
別の影も言うのであった。
「利用価値はありますから」
「ではそうするとしよう」
「そうされるとよいかと」
「ところでだ」
ここでまた一人が言ってきた。
「これからのことだが」
「これから？」

「貴殿は確か既に宮中に入っているな」
「はい」
影の一人が応えた。
「それが何か」
「それでどちらについている」
「大将軍の方に」
そちらだというのである。
「ただ。宦官の方にもです」
「関係は築いているのだな」
「そちらも」
「御安心下さい。どうも曹操殿や袁紹殿にはあまりよく思われていないようですが」
「だがそれは既にわかっていること」
「そうだな」
「はい、それもその通りです」
その影は周りの言葉に頷いたのだった。

# 第十七話　孔明、推理をするのことその十三

「既に」
「ならばいいな」
「それで」
「はい、それで」
その影は満足している声で答えた。
「このままいけば」
「それでは今は」
「どうされますか」
「このまま進めていきます。それと」
ここでその影が別の影に問うた。
「あの三姉妹は」
「バイスとマチュアがついていたな」
「そうだったよな」
「はい、二人から話を聞いています」
その影が同志達に述べた。
「順調に名前を知られるようになっているとのことです」
「そうか、それではな」
「それはいいことだな」
「はい。順調ですから」
「そして。烏丸じゃが」
別の影の言葉だ。
「間も無く兵を挙げる」
「ほう、そうか」
「そちらもですか」
「よいことにな。蔡文姫は袁紹めに保護されてしまったが」
「あれは迂闊でしたね」
宮中の話をしていた影が述べてきた。

「彼女を折角北にやったというのに」
「しかし袁紹は匈奴を取り込み」
「そのうえで」
彼女を保護されたというのであった。
「しかし。あの程度はどうにかなる」
「宮中の切れ者も宮廷にいなければ」
「どうということもありません」
「それでは」
ここまで話してであった。
「まずは紫鏡の屍をもう一度使い」
「宮中深く入り込み」
「そして烏丸をじゃな」
そんな話をしているのであった。
「おおよそ筋書き通り」
「進んでいます」
「ではこのままこの国に」
「神々が蘇る」
「そしてです」
影の一つの言葉に陰惨なものが宿った。
「この国は血に覆われます」
「そう、それを欲してもだ」
「この世界に来たんだからな」
邪悪な笑みもそこにはあった。
「何かと邪魔な奴等もいるが」
「わざわざ誰かが呼んでくれたみたいだがな」
「それでもです」
彼等はそれぞれ言う。
「この国の者達の血で」
「乾杯するとしましょう」
闇の中で何かが動いていた。それは明らかに一つになっていた。

誰も知ることのできない深い闇の底でだ。彼等は邪悪な夢を語り合っていた。

第十七話　完

２０１０・５・２７

# 第十八話　劉備、関羽達と会うのことその一

第十八話　劉備、関羽達と会うのこと

深い森の中にだ。二人の少女がいた。

一人は見事な金髪を腰まで伸ばし赤紫に輝く目をしている。背は高めであり黒いドレスでその身体を覆っている。顔立ちはまだ幼さが残りそれがいささか長身といささかアンバランスさを醸し出している。すらりとした身体だ。

もう一人は凛とした顔の青い髪を左右で団子にしてまとめた少女であり背はその金髪の美女よりも高い。青い目の光は濃くそして強い。かなり大きな目で口も大きめだ。耳には槍の形のイヤリングがある。

服は半ズボンでありそれは黒、そして上着は袖がなく紫である。その二人が今森の中にいた。

まずはだ。青い髪の少女が金髪の美女に声をかけた。

「諸葛勤殿」

「藍里でいいわよ」

美女はこう少女に返した。

「太史慈殿」

「左様ですか。しかし私も」

「貴女も？」

「はい、飛翔と御呼び下さい」

少女もこう言ってきた。

「真名で」

「わかったわ。では飛翔」

「はい、藍里様」

「もう少しだったわね」

諸葛勤はこうその少女太史慈に問うた。森は緑でありかなり深い。しかも温度もかなりのものである。その中を二人で進んでいるので

ある。
「その場所は」
「はい、砦を築くにはあそこが一番です」
「一度見てみないと」
ここで諸葛勤は考える顔になり右手を自分の口に当てた。
「そうでないとね」
「わからないというのですね」
「ええ、山越を攻める足懸かりとしての砦」
それだというのだ。
「それは是非とも築かないとならないから」
「思えば山越とも因縁がありますね」
「確かに」
諸葛勤は太史慈の言葉に頷いた。
「先代の孫堅様から攻めているけれど」
「容易に服属しませんね」
「粘り強いわね、実にね」
「強いだけでなく地の利もあります」
「この山の中は」
太史慈はその森の中を見回していた。遠くには山が幾つも連なっている。
「まだ我等の勢力圏ですが」
「しかしその境に砦を築く」
「はい、そのうえで山越を攻める」
太史慈も言う。
「その為にです」
「孫堅様もそうされたのだったわね」
諸葛勤はここでふと話した。
「この辺りに砦を築かれて」
「そのうえで攻められようとしたのですが」
「暗殺された」

諸葛勤のその声が曇る。
「何者かに」
「それが去年のことでした」
太史慈もだ。その声を曇らせる。
「そして今こうして」
「孫策様がまた攻められる」
「はい、今度こそ山越を服属させましょう」
太史慈は言葉を強いものにさせた。
「是非共」
「ええ、何があってもね」
そんな話をしてだ。山の中を進む。その中でだった。
ある山の頂上に出た。そこは広く開けていた。
二人はその頂上に出てだ。また話をした。
「ここです」
「いい場所ね」
諸葛勤は太史慈に対して満足した顔で頷いていた。
「ここなら遠くまで見渡せるし」
「大軍が入る砦を築けます」
「しかも山越の本拠地を見渡せる」
見れば連なる山の一つにだ。集落があった。二人は今はその集落を見ていた。
「充分にね」
「はい、ここしかありません」
「水はどうかしら」
諸葛勤は今度はこのことを尋ねた。

## 第十八話　劉備、関羽達と会うのことその二

「水は」
「あちらに」
太史慈は山のすぐ下を指差した。するとそこには川があった。
「あそこから軍を向かわせることもできます」
「移動にも使えるのね」
「はい、ここなら問題はないかと」
「そうね。ただ」
「ただ？」
「波止場が欲しいわね」
諸葛勤が今言うのはこのことだった。
「そうすればさらにいいわ」
「波止場ですか」
「ええ、波止場もね」
「確かに。言われてみれば」
太史慈は左手を自分の顎に当てて考える顔になって述べた。
「それがあった方が移動にいいですね」
「丁度いい場所もあるし」
森と川の接点の一つを見たうえでの言葉だ。諸葛勤はそこに開けた場所を見つけたのだ。
「あそこに波止場を築いて」
「はい」
「そしてここまでの道も築きましょう」
「そうしてそのうえで、ですね」
「ええ、山越を攻める」
あらためて山越の本拠地を見ての言葉だ。
「そしてこの川は」
「長江から分かれています」

太史慈はまた話した。
「そうなっています」
「なら尚更いいわ。建業から直接行き来できるわね」
「わざわざ陸路で向かうよりずっといいですね」
「ええ、この戦い思ったより」
そして言うのであった。
「楽にいくかもね」
「今まで攻めあぐねていた山越にですか」
「攻め方を変えればそれで楽になるものよ」
諸葛勤は微笑んで太史慈に話す。
「冥琳もよく言ってるわね」
「言われてみれば。確かに」
「そして山越を下したならば」
諸葛勤は既にそれからのことも考えていた。
「それからだけれど」
「それからどうされますか」
「揚州に組み込んでその大半は領民として扱い」
そうしてだった。
「政治に組み込んでいくわ」
「領民にしていくのですね」
「ええ、袁紹殿がしているやり方でいくわ」
ここで袁紹の名前も出た。
「あのやり方でね」
「では精強な者は兵にですね」
「そうよ。我が揚州の優秀な兵になってもらうわ」
やはりその山越の本拠地を見下ろしていた。
「是非ね」
「それを考えると出来るだけ痛めつけないでおきたいですね」
「そうね。領民になるのだし」
既にそれは決まっているかの様な言葉だった。

「出来るだけ無傷でね」
「あくまで理想ですが」
「それでもそうありたいわ」
また話す諸葛勤だった。
「ここはね」
「そうですね。そういえばその袁紹殿ですが」
「何進大将軍が烏丸征討の兵を起こされそれに従われるとか」
「はい、曹操殿も御一緒です」
「大将軍の両翼」
二人の評価は今ではこうなっているのだ。
「その二人を率いてわざわざ征討というわけね」
「はい。ただ」
「ただ？」
「大将軍が都を出られるのは珍しいのでは」
太史慈は怪訝な顔で話してきた。
「今まではそうしたことは全て袁紹殿や我々がしていましたし」
「異民族についてはね」
「はい、そして中原や曹操殿や袁術殿がいますし」
それで結果としてだ。都から動いていないというのだ。

# 第十八話　劉備、関羽達と会うのことその三

「それが今どうして」
「これまでは宦官達との抗争で都を離れられなかったけれど」
「はい」
「頼りになる腹心が加わったそうよ」
「腹心といいますと」
それを聞いてだ。太史慈が思い浮かべたのは彼女だった。
「擁州の董卓殿でしょうか」
「いえ、董卓殿は擁州から動いていないわ」
違うというのである。
「一歩もね。今は擁州を治めるのに専念しているわ」
「だとすれば一体」
「確か。名前は」
その名前から話すのだった。
「司馬慰だったかしら」
「司馬慰といいますと」
「ええ、あの司馬氏のね」
諸葛勤も太史慈もだ。この名前を出したところで顔を少し変えた。
真剣なものにだ。
「主よ」
「家柄では袁家や曹家にも匹敵するというあの名門の」
「そして代々高官を出している清流派の領袖のね」
こう話していくのだった。
「その彼が腹心になったらしいわ」
「名門司馬氏の主がですか」
「しかも嫡流で。相当な切れ者でもあるそうよ」
「ふむ。袁紹殿や曹操殿とは違いますか」
「そして我等が孫家とも」

諸葛勤は違うというのである。
「地方領主ともね」
「朝廷の名臣というのですね」
「そうよ。家柄も何もかもを備えているのよ」
「袁紹殿や曹操殿にとっては面白くないでしょうね」
太史慈はその話を聞いてまずこう思ったのだった。
「御二人にとっては」
「そうだと思うわ。今では大将軍の無二の腹心にして懐刀」
そうした立場にあるというのだ。
「絶対の権限を握ろうとしているらしいわ」
「その方が加わったからこそですか」
「ええ、烏丸の討伐に直々に出られるようになった」
諸葛勤はここでさらに話した。
「都を預けられる人材が加わったからこそ」
「そのうえで両翼を率いて、ですか」
「そうよ。都では比例的に大将軍の力が強まっているわ」
「それはいいことですね」
太史慈の今の言葉には理由があった。実は孫策も何進の派閥に属しているのだ。少なくとも宦官達との関係はよくはないのである。
「それは」
「そうね。さて、それじゃあ」
「はい、それでは」
「一旦下りましょう」
山を下りるというのである。
「一旦建業に戻ってね」
「はい、それでは」
こうして戻ろうとする。そして兵達と合流し建業に戻ろうとする。
その時に道を開き波止場を築くことも忘れない。しかしその時にであった。
「!?来た」

「山越か！？」
「まさかここで」
「うろたえるな！」
太史慈がすぐに槍を手にして叫ぶ。それで左右の森から跳んで来た弓矢に狼狽しようとする兵達を叱咤した。
「敵が来たなら倒すまでのこと！」
「総員集結せよ！」
諸葛勤もここで命じる。
「波止場まで行きそこで守る！」
「は、はい！」
「わかりました！」
兵達は諸葛勤の言葉に頷きすぐに集結し建設中の波止場に入る。そしてその建物を利用してそのうえで守りに入ったのであった。
すぐにだ。野蛮な鎧を着た男達が来た。諸葛勤はそれを見て言う。
「間違いないわね」
「はい」
「山越の兵ね」
それをすぐに見抜いたのである。数は百人程度だ。

# 第十八話　劉備、関羽達と会うのことその四

「どうやら偵察で来たみたいだけれど」
「それで今我々を」
「倒すつもりね。ならここは」
「応じるしかありません」
太史慈は槍を両手に持ちすぐに言った。
「ここは」
「そうよ。各自弓か槍を持て」
諸葛勤が命じる。
「そして建物を頼りに守れ。いいな！」
「はい、了解です！」
「それなら！」
「朱里が建業に来ていたらしいけれど」
「妹さんがですか」
「ええ、この場を乗り切ったら一度会いたいわね」
笑みを浮かべての言葉だった。
「是非ね」
「そういえばいつも話しておられますね」
「できれば揚州に来て欲しいのだけれど」
こう太史慈に話すのだった。
「妹さんのことを」
「天下にその名を轟かせる軍師になれるわ」
その妹のことをこうまで評するのだった。
「多分ね」
「そこまでの方なのですか」
「まだ小さいけれど絶対そうなるわ」
妹をかなり褒めていた。そのことを隠そうともしない。
「朱里はね」

「では。その妹殿に再び御会いできるように」
「そうね、その為にも今は」
「戦いましょう」
太史慈は微笑みを浮かべていた。
「そして生き抜きましょう」
「そうね、何があっても」
こう話しながら戦う。その時にだ。
「骸羅さん！」
「わかってるぜ！」
少年の声と男の声がした。
「あの人達は」
「ああ、そうだな」
「はい、その通りです！」
「我等の仲間です！」
道にだ。揚州の鎧を着た兵達が出て来た。
その後ろにだ。髪を短く刈り白い膝までのズボンと上着の上に赤い服を着て傘を持った小柄で中性的な少年と彼とは対象的に非常に大柄で巨大な数珠と青と白の法衣を着た男が出て来たのであった。
「あれが諸葛勤様と太史慈様です」
「どうかお助け下さい」
「はい、わかりました」
「それならな」
二人は兵達の言葉に頷いてだ。そうしてだった。
その傘と数珠を手にしてだ。山越の兵達の中に踊り込んだ。
少年はその傘を広げて縦横に乱れ舞い男は数珠を振り回す。それにより山越の兵達を忽ちのうちに全て退散させてしまった。
戦いは彼等の加入により諸葛勤達にとってことなきを得たものになった。闘いが終わって諸葛勤はすぐにその二人に声をかけた。
「そなた達は一体」
「緋雨閑丸です」

「花諷院骸羅だ」
「むっ、その名前は」
「そうですね」
二人の名前を聞いてだ。諸葛勤だけでなく太史慈も気付いた。
「あかり達と同じか」
「そうですね。別の世から来た者達ですか」
「ひょっとして御存知なんですか？」
「俺達気付いたらこの世界に来てるんだがな」
二人の返答は諸葛勤の予想通りであった。
「ここはそれで」
「どういう世界なんだ？」
「漢だが」
諸葛勤はわかっていた。それで落ち着いた顔で二人に話す。

# 第十八話　劉備、関羽達と会うのことその五

「とはいっても貴殿等の知っている漢ではない」
「漢っていうと清の」
「ああ、昔の名前だよな」
「それじゃあ僕達は」
「昔に来たってわけか？」
「昔であって昔でないようだな」
こう二人に告げる。
「どうやらな」
「あの、何かあまり」
「意味がわからないんだがな」
「そうでしょうね。私達も最初はそうでしたし」
今度は太史慈が二人に話す。
「しかし御二人だけではありませんので」
「他にも貴殿等と同じ者達がいる」
「というと」
「覇王丸達がいるのか？」
閑丸と骸羅は顔を見合わせる。身体の大きさが違い過ぎ骸羅は見下ろしている。
「そうなりますよね」
「そうだな」
「覇王丸という者は知らぬが」
諸葛勤はその名前には答えられなかった。
しかしそれでもだ。こう話すのだった。
「それでも。どうも多くの者がこちらに来ているようね」
「その様ですね」
「そういえばナコルルだったかしら」
建業からの早馬から聞いた話である。この早馬から妹のことも聞

いているのだ。
「その者も来ていたそうだけれど」
「ナコルルさんですか」
「あいつも来ていたのかよ」
「知っているようね」
諸葛勤は二人がその名前に反応したのを見て述べた。
「どうやら」
「ええ、よく」
「知ってるぜ」
二人はここでようやくはっきりとした顔になった。
「そうですか、ナコルルさんもですか」
「この世界に来ていたのか」
「藍里殿、やはり」
「そうね」
ここで二人も顔を見合わせて頷き合う。そのうえでまた二人に言う。
「それでだけれど」
「はい」
「それで何だ？」
「我が主に話してから正式に、となるけれどね」
こう前置きしてからだった。
「貴方達これから行くあてはあるかしら」
「残念ですがそれが」
「この世界のことはさっぱりわからないからな」
二人はまた困った顔になった。そのうえでの言葉だった。
「ですから。ちょっと」
「どうしたものか困ってたんだよ。そっちのお侍さんに声をかけられるまでな」
「侍というのはわかります」
太史慈が二人の言葉に答える。

「あかりさん達から教えてもらいましたので」
「あかりさん？」
「何か聞いたことねえな、その名前は」
二人にとってはその名前も不可思議なものであった。ついついいぶかしんでしまう程だった。
「とにかく。これからですが」
「どうしたものか困ってるんだよ」
「わかったわ。だから孫策様にお話してから正式になるけれど」
「私達と一緒に働きませんか？」
二人はこう閑丸達に提案する。
「孫策様のところでね」
「それでどうかしら」
「孫策様は確か」
「このお侍さん達の主君だな」
二人は兵というものをよく知らなかった。彼等を見ても侍としか思えない。これは彼等の時代の日本の感覚に他ならなかった。

# 第十八話　劉備、関羽達と会うのことその六

「その人がですか」
「俺達を召し抱えてくれるってのか」
「ええ、そうよ」
「その通りです」
諸葛勤も太史慈もすぐに答える。
「それでどうかしら」
「我が主に」
「はい、僕達も困っていましたし」
「喜んでな」
二人は明るい顔で即答した。
「是非御願いします」
「飯は食うけれど我慢してくれ」
「それはね。もうわかるわ」
諸葛勤は骸羅のその巨体を見上げて微笑んで述べた。
「言われなくてもね」
「ははは、そうか。やっぱりな」
「それじゃあ。早速だけれど」
「波止場と道を造って」
「もう砦も築いてそこで孫策様達をお待ちするのがいいかしら」
「そうかも知れませんね」
ここでこう話すのだった。
「その方が」
「よし、決めたわ」
諸葛勤は自分で頷いて決断を下した。
「それじゃあここはね」
「我々はここに留まり」
「そうよ、そのうえでね」

「砦を築いたうえで孫策様達を待ちましょう」
「そして」
今度は山の向こうに目をやった。そのうえでの言葉だった。
「今度こそ山越を征服しましょう」
「そうですね、今度こそ」
そうしてであった。彼女達は新たな仲間を手に入れてそのうえでこの地に留まり戦場に向かう用意をしていた。まずは砦を築くのだった。
関羽達は今は徐州にいた。そこから北に向かおうとしていた。
「ところでなのだ」
「どうした？」
「聞いた話では北に兵を向けるらしいのだ」
張飛がこう関羽に話していた。
「北になのだ」
「北というとだ」
関羽はそれを聞いてすぐに察した。
「あれか。異民族だな」
「そうだな。おそらく烏丸だな」
ここで趙雲も話に加わってきた。
「あの者達への征伐だ」
「それじゃあそっちに行くか？」
馬超は参加に考えをやっていた。
「あの連中はどっちにしても放っておけないしな」
「そうね」
黄忠は娘の手を取りながら述べた。
「私達も大人数だし。そろそろ仕官も考えて」
「仕官ですか。でしたら」
ナコルルは彼女達の話を聞いて考える顔で述べた。
「袁紹さんか曹操さんですか」
「どちらも癖が強いわね」

「そうね」
キングと舞が難しい顔になる。
「あの二人はどうにも」
「孫策さんよりもまだね」
「そうですよね。袁紹さんは何かお馬鹿なところがあるようですし」
香澄は袁紹のその性格をよくわかっていた。
「曹操さんも微妙に危ういところがあるような」
「少なくとも私達には合わない人達だと思います」
孔明がここで一同に話す。
「袁紹さんも曹操さんも」
「そういえば朱里」
関羽はその孔明に顔を向けて言ってきた。
「御主の姉上は揚州にいたな」
「はい、孫策さんにお仕えしています」
「御主はその縁で孫策殿に仕官できたのではないのか？」
「それはそうですけれど」
このことは認めるのだった。

# 第十八話　劉備、関羽達と会うのことその七

「ただ。あの方ではなく他の方だと思います」
「他の方？」
「はい、他に相応しい方がおられると思いまして」
こう一同に話すのだった。
「私達の主に相応しい方は」
「私達か」
「じゃあ誰なのだ？」
関羽も張飛もここで考える顔になる。
「我々の主となられるべき方は」
「とりあえず目立った諸侯は回ったがそれでも一人もいなかったのだ」
「諸侯でないのかも知れませんよ」
孔明はこうも話す。
「ひょっとしたら」
「ひょっとしたらですか」
「今はわからないんですか」
「誰かは」
「少し占ってみました」
この時代の軍師は占術も必要とされていた。孔明もまた軍師としてそれに通じていたのだ。それで今こう話したというわけである。
「それでこの地でその主と御会いできるようです」
「ここでか」
「この徐州で」
「その主と」
「はい、そう出ています」
占いでは、というのだ。
「ですから少しお待ち下さい」

「そういえばここではだ」
趙雲がまた話す。
「最近張三姉妹が人気だったな」
「ああ、都にまで来ることがあるっていう旅芸人の姉妹だよな」
「そうだ。ここが拠点だった筈だ」
趙雲は馬超にも話す。
「この徐州がな。そして青州もだ」
「青州もかよ」
馬超は青州と聞いてだ。あの名前を出したのだった。
「袁紹殿が治めてるよな、今」
「そうだったな。ややこしい方だが政治は見事だからな」
「それでもこの徐州は」
黄忠は徐州の話をした。
「これといった主もいなくて」
「あまりまとまっているとは言えませんね」
「そうね」
黄忠はナコルルの言葉にも頷いた。
「とても」
「賊こそ少ないけれどあまり治安はよくないよ」
馬岱がここではじめて口を開いた。
「何かあったらすぐに叛乱とか起こりそうよね」
「そうね。確かに」
「不穏なものも漂ってますね」
舞と香澄も眉をひそませた。
「このままだとね」
「しっかりとした牧がいないと」
「その袁紹さんや曹操さんじゃ駄目なのかい？」
キングはここで二人の名前を出した。
「あの二人じゃ」
「御二人共今はそれぞれの州の統治と賊や異民族の討伐にお忙しい

と思います」
「そうなの」
「はい、それに烏丸にも出陣されるようですし」
こう馬岱に話すのだた。
「ですから」
「そうなんだ」
「はい、ですから今は徐州まで手が回らないと思います」
そしてであった。もう一人話に出したのだった。
「孫策さんも今は山越征伐にお忙しいでしょうし」
「困った話よね」
馬岱は溜息をつきながら述べた。
「力のある諸侯が進出できる場所にあるのにそれができないから結果として何が起こってもおかしくないような状況になっちゃってるって」
「そういうこともあります。幽州等はやがて袁紹殿が治められるでしょうけれど」
「そういえばあそこも牧いなかったよね」
「はい」
孔明も馬岱も公孫賛のことを知らない。
「ですから」
「あれっ、誰かいたと思うのだ」
「だから公孫賛殿だ」
関羽が目をしばたたかせた張飛に話す。

# 第十八話　劉備、関羽達と会うのことその八

「もう忘れたのか」
「そういえばそんな奴もいたのだ」
「全く。忘れるなぞ失礼にも程があるぞ」
「そうだな。確か黒い馬に乗っておられたな」
趙雲も話す。
「確かな」
「星、御主はわざとだな」
「うむ、実はそうだ」
そんな話をしながら北に向かっていた。そうして山の中に入ると。
「やいやいやい」
「姉ちゃんいい顔してんじゃねえか」
「身体もな」
何処かで聞いた下卑た声だった。
「ちょっと遊ばねえか？」
「俺達とな」
「何処かで聞いた声なのだ」
「そうだな」
それを張飛と関羽も話す。
「ということはだ」
「いつもの展開なのだ」
「じゃあさっさとやっつけちゃおうよ」
馬岱はその槍を手にすぐに前に出る。
「いいわよね、悪党なんだし」
「絶対にいつもの三人ね」
「そうね」
舞にもキングにもわかっていた。
「あの三人何処にでもいるけれど」

「別人かしら、本当に」
「けれど今はすぐに何とかしないと」
香澄も前に出ていた。
「女の子が大変なことになっているみたいですよ」
「そうですね。それじゃあ」
ナコルルもだった。
「行きましょう」
「はい、すぐに」
最後に孔明が頷いてだった。その声がした方に向かう。岩山を背にしてだ。劉備がいつもの三人組に囲まれて困った顔になっていた。
「な、何ですか貴方達は」
「ああん？見ればわかるだろうが」
「悪者だよ」
「そんなことはよ」
こう返す三人だった。
「お金ならありませんよ」
「ああん？金なんかなくてもいいんだよ」
「楽しめるからな」
「それでな」
いいというのだった。
「さっきも言ったがいい顔してるな」
「身体もな」
劉備のその胸を見てまた言う。
「気持ちよくさせてやるぜ」
「これからな」
「そんなことを言うなら」
劉備はそのいつもの三人の言葉を聞いてだ。真剣な顔になった。
そして後ろの篭から何かを出してきた。木刀に見えるものだった。
それを両手に持ってだ。剣を持つ構えをしてきたのであった。
「何だ？一体」

「何をする気だ？それでよ」
「これをこうして」
見ればそれはムシロだった。それを頭から被ってだ。
「隠れれば大丈夫ですから」
しゃがんでそのままだった。足の付け根からピンク色のものが見えている。
その劉備に対してだ。三人もかなり呆れてしまった。
「っておい」
「それで何だ？」
「隠れたつもりか？」
「私は何処にもいませんよ」
「んなわけあるか！」
「何考えてやがる！」
思わず突っ込みを入れる三人だった。
「全くよ！」
「もう我慢できねえ！これで！」
襲い掛かろうとした。しかしここでだ。
関羽達が出て来たのだった。
「そこまでだ」
「やっぱりいつもの三人なのだ」
関羽と張飛はその彼等を見ながら話す。

# 第十八話　劉備、関羽達と会うのことその九

「では名乗りは不要だな」
「もう知ってる顔なのだ」
「おい、俺達は手前等と初対面だぞ」
三人のうちのいつものリーダー格が言う。
「言っておくがな」
「しかし何処にでもいるよな、あんた達」
馬超は冷静にこう突っ込みを入れる。
「本当にな」
「ええい、五月蝿いんだよ」
「女の数が増えたのならそれでいい」
チビだけでなく大きいのも言う。
「やっちまうぞ！」
「ハーレムだ」
「まあ待て」
だがここで趙雲が三人に話す。
「ここにいる女はだ」
「その黒髪の姉ちゃんかよ」
「美人だな」
「しかも胸でかいな」
「黒髪の美貌の山賊退治の豪傑だ」
ここまではよかった。
「しかし実はしっとりつやつやは上ばかりでなくだ」
「おい、待て」
すぐにむっとした顔で言う関羽だった。
「そこから何を言うつもりだ」
「うむ、下ばかりもだな」
「だからそれは言うな」

顔を赤くして趙雲に抗議する。
「私はだな。それは」
「しかし事実ではないか」
「事実でも言うな、絶対にだ」
「まあ何はともあれこれだけ美人がいればな」
「そうだよな。女には困らないな」
「よりどりみどり」
三人はいつも通り彼女達ににじり寄る。そうしてだった。
「やっちまえ！」
「いただきだぜ！」
「貴様等なぞ私一人で充分だ」
関羽が得物を手に一歩前に出た。
「所詮はな」
「何っ！？女なんかな」
「俺達の手にかかりゃあな」
「どうってことはないんだよ」
「そうか。なら来い。確かめさせてやろう」
こう言ってであった。襲い掛かる三人をあっという間に吹き飛ばしたのであった。
「な、何ィーーーーーーーーッ！？」
「これで終わりだってのか！？」
「嘘だろーーーーーーーっ！？」
「嘘ではない」
関羽は天高く吹き飛んでいく彼等を見送りながら述べた。
「貴様等に遅れを取る関雲長ではない」
「そういうことだな」
趙雲が彼女のその言葉に頷く。
「予想していたが見事だった」
「うむ、そうか」
「それでなのだ」

そしてだ。張飛は劉備に香を向けた。そのうえで彼女に問うのだった。
「名前は何というのだ？」
「はい、劉備といいます」
少女は立ち上がりながら名乗ってきた。もうむしろは頭からどけている。
「劉備玄徳といいます」
「劉っていったら」
馬超はその姓にまず反応した。
「あれか？皇族とかか？」
「はい、祖先はそうです」
実際にそうだったというのである。
「中山靖王の血筋になります」
「へえ、そうなのか」
「皇族だったんだ」
馬岱もここで声をあげる。
「そういえば奇麗な顔をしてるね」
「有り難うございます」
奇麗と言われてまんざらではない劉備だった。にこりと笑ってさえいる。
「それで今は家宝である剣を探していまして」
「ふむ、訳ありということか」
「それでなのですが」
劉備はここで趙雲の言葉に応えながら話す。
「こうした剣を見ませんでしたか？」
「剣？」
「剣というと？」
「実はです」
ここで剣を失くした経緯とそうして旅に出るに至るまでを一同に話す。話を聞いてまず黄忠がやや驚いた顔になってそのうえで言う

のであった。

# 第十八話　劉備、関羽達と会うのことその十

「それはまた」
「はい？」
「過激なお母上ですね」
劉備を川に投げ込む話を聞いての言葉である。
「随分と」
「普段はそうでもないんですが」
「いえ、普段でなくてもしないかと」
孔明も少し引きながら話す。
「幾ら何でも川の中に投げ込むというのは」
「それで今探してるのですが」
「その剣はかなり目立つのだ？」
「はい、鞘も柄も刀身もかなり立派でして」
こう張飛にも話す。
「それはもう」
「それじゃあ見つけるのは簡単なのだ？」
「見ただけでわかります」
また言う劉備だった。
「それで探しているのですが」
「それはいいのだが」
ここで関羽が劉備に対して言う。今一行は共に歩いている。その中でのやり取りだった。
「しかしだ」
「何かありますか？」
「危険過ぎるな」
劉備を心配する顔で見ての言葉だった。
「それは」
「危険っていいますと」

「だからだ。若い娘が一人で旅をするというのはだ」
それが危険だというのだ。
「私達の様に武芸を身に着けているのならともかく」
「はい」
「貴殿は武芸は身に着けているか」
「いえ、それは」
「そうだな。見たところそれは」
劉備の腕はもう見抜いていたのだった。既にだ。
「ないな」
「ですが私は」
「よければだが」
関羽はさらに言うのだった。
「我々と共に来ないか」
「関羽さん達とですか」
「そうだ、我々とだ」
こう劉備に提案したのである。
「それでいいか」
「ですがそれは」
「何、構うことはない」
関羽は微笑んで劉備に言う。
「旅は道連れという」
「そうなのだ。旅は道連れ」
張飛も笑顔で言う。
「世は。ええと」
「世は情け浮世の道連れだ」
「そうなのだ。世は情け浮世の道連れなのだ」
「おい、かなり入ってないか？」
そこまで聞いた馬超が趙雲が教えた言葉にすぐに言う。
「世は情けってのは何なんだよ」
「それって歌舞伎の言葉じゃなかったかしら」

舞も首を捻りながら話す。
「この時代の、しかも中国にあったのかしら」
「そうですよね。歌舞伎なんて」
それは香澄も指摘する。
「ここにはとても」
「いちいち気にしたら仕方ない？」
「そうですね」
キングとナコルルはこう考えることにした。
「この世界は私達の中国とは違うし」
「ですから」
「何はともあれですけれど」
黄忠は優しい微笑で劉備に声をかける。
「劉備さんは私達と一緒にどうでしょうか」
「本当にいいんですか」
「気にすることはない」
趙雲も笑顔で話す。
「それはだ」
「そこまで仰るのなら」
「一緒に北に行こう」
馬岱も笑顔で声をかける。
「とにかく北に行ってね」
「全てはそれからですか」
「剣は絶対に見つかりますよ」
孔明も明るく笑って劉備に告げる。
「きっと」
「きっとですか」
「はい、劉備さんの顔の相はとてもいいです」
これもまた軍師としての言葉だった。
「望むことが適いそして大志を為す相です」
「私が、ですか」

「こんな素晴しい相は私もはじめて見ました」
こうまで言うのだった。
「ですからきっと見つかります」
「そうだといいのですが」
「ですから今は御一緒に」
孔明もまたそれを勧める。
「行きましょう」
「はい、それなら」
「進む先に道があり剣もそこにある筈です」
孔明は今一行が進んでいるその道を見ていた。それは北に進んでいる。
「ですから」
「わかりました。それでは」
劉備は笑顔で頷いた。そのうえで、だった。
こうして劉備もまた一行に加わった。これこそが彼女等にとっての大きな運命の出会いだった。これまでで最も大きなものなのであった。

第十八話　　完

２０１０・６・１３

# 第十九話　劉備、張三姉妹を見るのことその一

第十九話　劉備、張三姉妹を見るのこと

劉備が加わった一行はだ。今は青州に入った。すると見間違えるばかりに豊かな田園と繁栄している街が次々に現われてきたのであった。

一行は今青州のある街に来ていた。そこは人も多く店は何処も賑わっている。そして子供達の顔も明るい。その中の飯店の一店に入り朝食を食べながら話すのだった。

「徐州とは全然違うね」

「確かに」

黄忠は馬岱のその言葉に頷く。

「何か。別の国に来たみたいに」

「それだけ政治が上手くいってるってことですね」

孔明は理由をそこに見出していた。

「やっぱりしっかりとした領主がおられるとそれだけで違います」

「そういうことね。それでだけれど」

「はい、それで」

「私達が行くその幽州だけれど」

キングはこのことを孔明に問う。

「領主はいなかったわね」

「そうなんですよね」

本当に公孫賛のことは忘れてしまっていた。

「牧がおられなくて」

「だから牧はいるぞ」

関羽がラーメンを食べながら話す。

「ちゃんとな」

「いましたっけ、牧は」

「だから公孫賛殿だ」

彼女だというのである。
「何度も言っているが忘れるのか？」
「すいません、他のことは中々忘れないんですけれど」
それでもだと。申し訳ない顔で話すのだった。
「どうしてもこのことは」
「そんなに忘れることか」
「覚えにくいです」
孔明は困った顔で話す。
「何か聞いても次には忘れてしまって」
「そうだよね、この話って」
「何でかしらね」
馬岱と舞もであった。
「どうしても。何度も聞いてもね」
「忘れるわよね」
「つまり忘れてもいいことでしょうか」
香澄もこんなことを言う。
「だから忘れてしまうと」
「そうですね。皆何度聞いてもすぐに忘れてしまうことですから」
ナコルルもそうだというのだった。
「それはやっぱり」
「人はどうでもいいことはすぐに忘れる」
趙雲も言う。
「そういうことだな」
「いや、御主はそうは言えないだろう」
関羽はメンマを食べているその趙雲に話す。
「客将として世話になっていたのだからな」
「しかしだ。影が薄いのも事実」
言ってはならない事実だった。
「それならばだ」
「忘れられるのも道理か」

「公孫賛も気の毒な方なのだ。派手に有能でも派手に無能でもない」
実際に公孫賛は無能でもない。しかし極めて有能でもないのだ。
ここが問題であった。
「バランスも普通だ。性格も悪くはない」
「けれど派手さがないから」
「それで目立たない」
「そういうことなのね」
「そうだ。気の毒なことにだ」
「公孫賛っていうと」
しかしであった。ここで劉備が言うのだった。炒飯を食べながら。
「ひょっとして白々ちゃんですか？」
「白々！？」
「劉備殿御存知なんですか？」
「はい、白々ちゃんならですね」
関羽と孔明の驚いた顔に答えての言葉だ。
「私一緒の塾で勉強していました」
「そうだったのか」
「お知り合いだったんですね」
「いい娘ですよ」
こう笑顔で話す。
「とても」
「そうか。しかし劉備殿」
「はい？」
「その白々というのは真名だな」
趙雲が指摘するのはこのことだった。

# 第十九話　劉備、張三姉妹を見るのことその二

「そうだな」
「はい、そうですけれど」
「それはいいのだが」
「はい」
「公孫賛殿の真名は白蓮だ」
指摘はこれであった。
「白々ではないぞ」
「あれっ、そうだったんですか」
今ようやくわかったという顔の劉備だった。
「ずっと白々ちゃんって思ってました」
「そうだったのか」
「そうですか。違ったんですね」
「そもそも真名を知っている者も非常に少ないのだがな」
趙雲はこのことも話す。
「しかしよく覚えておいてくれ」
「わかりました」
「白々だ」
「それはわざとだな」
最後は関羽が趙雲に突っ込みを入れる。そんなやり取りだった。
そうしてだ。そんなやり取りをしたうえで店を出る。すると一行の横の壁に一枚の貼り紙があった。そこには三人の少女達の絵があった。
「あっ、この三姉妹は」
「どうしたのだ？劉備殿」
「今人気急上昇中の張三姉妹ですよ」
その貼り紙を笑顔で見ながら関羽に話す。
「この街に来てるんですね」

「そういえばだ」
ここ趙雲は顎に左手を当てて考える顔で述べる。
「今この街に有名な旅芸人の一座が来ていると聞いたが」
「この人達みたいですね」
孔明も言う。
「そういえば私も聞いたことがあります」
「行きましょう」
劉備はすぐにこう皆に提案した。
「今からすぐに」
「何っ、催しにか」
関羽はそれを聞いて思わず驚きの声をあげた。
「そうなのか」
「はい、今すぐにです」
劉備は笑顔のままだ。
「行きましょう」
「しかしだ」
だが関羽はそう言われてだ。難しい顔になるのであった。
「それは。どうも」
「駄目、ですか？」
「ううむ、北に早いうちに行かねばな」
だからだというのであった。
「北で大掛かりな戦があるしな」
「ですが催しは今日中で終わりますよ」
「ううむ」
「少し急げば間に合いませんか？」
劉備は必死に話す。
「ですから今はですね」
「そうだよな、いいよな」
「その通りなのだ」
ここで馬超と張飛が劉備の側についた。

「たまにはな。催しを見るのもな」
「お金もこの前のナコルル達の歌でかなり手に入っているのだ」
最近彼女達もお金ということに困らなくなってきていた。賑やかになってそれぞれに芸が備わっているからだ。だからである。
「だからいいんじゃないか？」
「鈴々もそう思うのだ」
「しかし」
「どうしてもですか？」
劉備は今度は涙目になってきた。
「それは」
「それはその」
「駄目なんですか？」
劉備の目はさらに泣きそうなものになる。
「折角来てるんですけれど」
「それは」
「いいんじゃないかしら」
今度は黄忠が言う。
「娘にも。たまにはこういうことも」
「紫苑殿も言うのか」
「はい、いいと思いますよ」
「愛紗、そんなに堅苦しくなることはない」
趙雲も笑って話す。

# 第十九話　劉備、張三姉妹を見るのことその三

「何進大将軍殿はまだ都を発っておらぬそうだしな」
「まだ北に到着するまで時間があるか」
「そうだ。袁紹殿と曹操殿もまだ軍を南皮に向かわせている最中だ」
そこから北に向かうというのである。
「だからだ。時間はある」
「そうか。それなら」
「そうですね。この国の催しも興味がありますし」
「そうだね」
キングは笑顔でナコルルの言葉に頷く。
「それなら是非」
「行かないとね」
「そうね。私も賛成するわ」
舞もであった。
「それでね」
「今気付いたんですけれどナコルルさん達って声似てますね」
孔明はこのことを話した。
「それもかなり」
「そうなのよ。それで聞き間違えることがあるから注意してね」
香澄は孔明にこう話してから自分の意見を述べた。
「私も賛成だから。劉備さんに」
「わかりました。じゃあ賛成多数ですね」
孔明はここで話をまとめた。
「それなら」
「そうだな。たまにはいいか」
生真面目な関羽もここで遂に折れた。
「それならな」
「はい、じゃあ行きましょう」

劉備は笑顔であらためて話す。
「その催しに」
「それじゃあ今から行くとしよう」
趙雲が音頭を取る。
「その催しにだ」
こう話してだ。皆でその催しに向かう。するとそこに行くとであった。
「うわ、これはまた」
「かなり派手ですね」
「派手というものじゃない」
関羽は唖然とした顔で劉備に答える。そこは黄色い法被を着た男達で一杯だった。そして様々なものが売られているのであった。
その中にはだ。服もあった。そして張三姉妹の絵もあった。
「あれっ、この張角って娘」
「そうだな」
キングは舞のその言葉に頷いていた。
「劉備そっくりね」
「そうよね、髪の色は違うけれど顔もスタイルもね」
そうしたところまでそっくりだというのである。
「何もかもそっくりよね」
「この抱き枕も」
香澄はその張角の抱き枕も見る。見ればそれは彼女のピンクのビキニ姿が描かれている。その胸の大きさも確かに劉備そっくりだった。
「髪の色は違うけれど」
「それ以外は」
「それだったら」
今度は馬岱が何かを持って来た。それは。
「劉備さん、これ来てみて」
「それは？」

「服、ここで売ってる服よ」
それだというのだ。
「これ張角さんのデザインした服なんだって」
「それがなんですか」
見ればだ。えんじ色のスカートに白いシャツに緑の上着である。デザインは何処か関羽のそれに似ているものだった。それを出してきたのだ。
「張角さんデザインの」
「どうですか？これ」
「あっ、安いですね」
「そうですね」
ナコルルと香澄はもうこの国の貨幣の価値をおおよそわかっていた。
「ここで買ってもいいですね」
「これ位の値段なら」
「そうですね。絶対に似合いますよ」
孔明も服と劉備自身を見ながら笑顔で話す。
「劉備さんなら」
「そうですか。それじゃあ」
「その旅の服も随分とくたびれてきているしな」
趙雲は劉備今着ているその服を見ていた。

# 第十九話　劉備、張三姉妹を見るのことその四

「丁度着替えていいのではないのか」
「わかりました」
こう話してであった。劉備はその服を着てみた。するとそのデザインも関羽が着ているその服に実によく似ているものであった。
それを見てだ。関羽がまず言う。
「確かに似ているな」
「鈴々もそう思うのだ」
「私の服にな」
「あと張角に似ているのだ」
「ううん、そっくりですか」
「確かにそうだな」
趙雲は周りにある張角の内輪や絵も見て述べた。
「髪の色が違うだけでだな」
「そうよね。おっぱいだって」
馬岱は少し羨ましそうに劉備の胸を見ている。
「大きいし」
「そっくりだよな、そこも」
馬超もその胸を見ている。しかし彼女の胸も結構立派なので羨ましそうではない。
「何でなんだろうな」
「まあ話していても仕方ないから」
ここで言ったのはであった。黄忠だった。
「とりあえず会場に行きましょう」
「そうですね、それじゃあ」
「今から」
こうして全員で会場に向かおうとする。その時だった。
オレンジの棒型のキャンデーを見つけたのだった。

「むっ、これは」
「キャンデーなのだ」
すぐに関羽と張飛が答えた。
「ふむ、蜂蜜のキャンデーの様だな」
「これを買うのだ」
「全く。鈴々は食べることばかりだな」
「人間食べないと死ぬからいいのだ」
「全く。しかしまあいい」
関羽は苦笑いを浮かべながらもそれでいいとした。そうしてだ。
「人数分買おうか」
「そうですね。それじゃあ」
孔明が笑顔で言ってであった。そのうえでキャンデーを人数分買う。そうしてそのうえで楽しく舐めながら会場に向かうのだった。
その舐め方はだ。先を舐めたり咥えたり頬張ったり横からしゃぶったりだった。そうして舐めながらそれぞれ歩いていくのだった。
その時にだ。ふと劉備が言う。
「そういえばですけれど」
「どうしたのですか？」
「皆さん黄色いグッズに身を包んでますね」
こうナコルルに話す。
「黄色がトレードマークなんですね」
「そうですね。この三姉妹のイメージカラーみたいですね」
それを香澄も言う。
「どうやら」
「黄色い法被に黄色いメガホンに黄色い団扇」
どれも黄色だった。
「嫌でも目立つね」
「確かにね」
キングと舞も話す。そうしてだった。
会場に入るとだ。劉備がうきうきしながらまた話す。

「そうそう、三姉妹の舞台も凄いんですよ」
「ステージはそんなに変わらないが」
「私達の時代の舞台とね」
キングと舞はまた言う。
「演出か」
「それなのね」
「はい、演出が凄いんですよ」
そうだというのだった。
「妖術を使った演出で」
「妖術か」
「それなんだ」
「はい、妖術です」
劉備のうきうきとした言葉は続く。

# 第十九話　劉備、張三姉妹を見るのことその五

「それが凄いんですよ」
「それなら楽しみにしておくか」
関羽も言う。
「是非な」
「そうなのだ。さあ、はじまりなのだ」
張飛も言った。そうしてである。
歓声があがる。それは。
「ほおおおおおーーーーーーーーーーーーっ！！」
「ほおおおおおーーーーーーーーーーーーっ！！」
「むっ、この歓声は」
「また随分と独特だな」
趙雲と馬超がその歓声を聞いて述べた。
「しかもかなりの人数だな」
「これは」
「しかもですね」
今度は黄忠が話す。舞台に七色の光が乱舞し黄色い煙が沸き起こる。
それを見てだ。皆まずは大いに驚いた。
「おい、この舞台は」
「そうですね。想像以上です」
香澄が関羽に述べる。
「私達の時代のそれに匹敵します」
「こんな舞台は見たことがないのだ」
「ああ、そうだな」
張飛と馬超も話す。
「只の旅芸人のそれじゃないのだ」
「これが妖術を使った演出か」

「ふむ、凄いものだな」
趙雲も思わず唸る。
「これがこの舞台か」
「凄いですよね」
劉備はもう完全に舞台と一体になっている。
「楽しんで観られますね」
「何か劉備さんって」
「そうよね」
孔明と馬岱はその劉備を見て話す。
「思った以上に乗りやすい人ですね」
「けれどそれがいいよね」
そんな話をしてであった。三姉妹が出て来るのを待った。
三姉妹は派手な衣装を着てだ。賑やかに出て来た。
「皆お待たせーーーーーーーーーーっ！！」
「待ったーーーーーーー！？」
「はじめるわよ」
「あれがか」
関羽はその三姉妹を見ながらまた話した。
「あれが三姉妹か」
「はい、まずは張角ちゃん」
真ん中のその劉備によく似た少女を見て話す。
「癒し系ですよ。一番上のお姉さんです」
「本当に似てるね」
「そうですね」
舞とナコルルが言う。
「劉備にね」
「そっくりですよね」
「それで左にいるのがですね」
青い髪の明るい顔の少女を見ている。
「あれが張宝ちゃんです。ムードメーカーです」

「三人の中で一番明るい？」
「そうですね」
今度はキングと香澄が話す。
「胸はないけれどね」
「それでも」
「そして右手が張梁ちゃんです」
劉備は紫の髪の眼鏡の少女を見て話す。
「末っ子でまとめ役です」
「三姉妹勢揃い」
「これで」
「姉妹だけあって息も凄く合ってて」
劉備はうきうきした声で話す。
「それに歌も踊りも凄いんですよ」
「そうですね。あの人達は凄いですよ」
孔明もここで言う。
「かなり期待できます」
「さて、はじまるぞ」
「いよいよなのだ」
そうしてはじまるとだった。姉妹の歌も踊りもかなりよかった。
「んっ！？これって」
「凄いよね、これって」
関羽と馬岱が話す。
「ここまでとは」
「舞台もきらきらしてるし」
「かなり凄いね」
舞も思わず唸る。光が交差し黄色い煙がまた沸き起こる。そのうえでだ。

# 第十九話　劉備、張三姉妹を見るのことその六

観客達がまた歓声を起こす。
「ほおおおおおおおーーーーーーーーーーっ！！」
「ほおおおおおおおーーーーーーーーーーっ！！」
「天和ちゃーーーーーーーん！！」
まずはこの名前が出された。
「地和ちゃーーーーーーーーん！！」
「人和ちゃーーーーーーーーん！！」
「三人の真名ですよ」
今言ったのはまた劉備だった。
「それで呼び合うことになってます」
「そうなのか」
また頷く関羽だった。
「通称みたいになってるな」
「そうなんです、それが通称なんですよ」
「そうか。それにしても凄いな」
「アイドルだな」
キングは三姉妹をこう評した。
「これは完全にな」
「ううん、本当にこれ程なんて」
また言う舞だった。
「この舞台、想像以上よ」
「三人の息が合っているしね」
馬岱は三姉妹の動きを冷静に見ていた。
「それも大きいわよ」
「確かにですね」
孔明も頷く。そうして舞台を見ていく。一段落してからだった。
まずは張角が言ってきた。

「それじゃあ皆」
「いつもの行くわよ」
「いいかしら」
張宝と張梁も続く。そうして。
「皆大好きーーーーーーーーーっ！！」
「皆の妹ーーーーーーーーーっ！！」
「とても可愛い」
こう言うとだった。観客達がまたしても叫ぶ。
「ほおおおおおおーーーーーーーーーっ！！」
「ほおおおおおおーーーーーーーーーっ！！」
「この叫びは変わらないな」
趙雲はその叫びを聞いて言った。
「これが三姉妹の応援の特徴か」
「そうみたいね」
黄忠もそれに頷く。そして見ていると。
「あら」
「お母さん、どうしたの？」
「あそこで」
娘に観客席のある場所を指差す。するとそこで。
「おい、押すなよ」
「そっちこそ押すなよ」
悶着が起こっていた。
「押したのはそっちだろ」
「御前だろうが」
「何っ！？この野郎」
「やるのか！？」
「おう、やるか！」
「えっ、ちょっと」
舞台でそれを見てだ。張角は困惑した顔になった。
そのうえでだ。その場所に声をかける。

「皆、喧嘩したら駄目だよお」
「そうよ、そんなことしないでよ」
「明るく楽しく」
張宝と張梁も言う。しかし喧騒はさらに大きくなる。
「御前が悪いんだろ」
「いや、御前だろうが」
「御前だ」
こう話してだ。そのうえでだ。
つかみ合いになろうとする。それに周りも巻き込まれる。
「何だこいつ！」
「静かにしろ！」
「うるせえ！」
「やるのか！」
「おう、やってやらあ！」
「まずいね」
キングがそれを聞いて呟く。
「これは」
「止めましょう」
孔明が言う。
「ここは」
「いい加減にするのだ！」
すぐに張飛が怒った。

## 第十九話　劉備、張三姉妹を見るのことその七

「ここは皆で楽しくやる場所なのだ！喧嘩は止めるのだ！」
「そうだ、止めろ！」
馬超が続く。
「騒ぐのなら外でやれ！」
「外で？」
「そうだよな」
「騒ぐ場所じゃないだろ」
「なあ」
皆もそれを言うのだった。
「そんなことをしてもな」
「どうしようもないだろ」
「おい、止めろよ」
「それならな」
周りも落ち着きを取り戻した。そうしてだった。
彼等はだその騒ぐ面々に対してだ。静かに言った。
「騒ぐなら外でしろよ」
「いいな」
「だから落ち着け」
「わかったな」
「ああ、わかった」
こう話してだった。騒ぎを鎮めたのだった。
これで舞台は元に戻った。そうしてだ。
張角がだ。また話す。
「それじゃあ気を取り直してね」
「そうね、それだったら」
「賑やかな曲ね」
張宝と張梁も言ってだった。あらためて舞台で歌うのだった。

騒ぎを終わらせて舞台はまた賑やかになった。水を差されたことも忘れてそのうえで無事に終わったのだった。結果としていい舞台だった。

劉備達は舞台を見てからあらためて北に向かった。

「さて、これからだな」

「北の異民族の討伐なのだ」

関羽と張飛が言う。

「烏丸、敵としては手強いが」

「それでもやっつけてやるのだ」

「はい、さもないと幽州の人達が困ります」

孔明もこのことを言う。

「ですから絶対に」

「行くか。だが」

「どうしたんだ？」

「我々も馬が必要だな」

趙雲は馬超に告げる。

「相手は馬と共に生きているような連中だからな」

「そうだよな。匈奴とかと一緒だからな」

「匈奴は今は袁紹さんに組み込まれたけれどね」

馬岱もそれは話す。

「それで烏丸だけはなのね」

「何度考えてもおかしいんですよね」

孔明は歩きながら腕を組んで考える顔になっていた。

「烏丸は袁紹さんの懐柔策もあってむしろ匈奴よりも穏健だったんですが」

「それが暴れるというのは」

黄忠も難しい顔になって話す。

「おかしなことね」

「煽っている奴がいるのかしら」

「有り得るな」

キングは舞のその言葉に頷いた。
「それも」
「そうよね。それか袁紹がミスしたとか」
「袁紹さんは政治ではおかしなところはない人でしから」
孔明はそれは否定した。
「確かにムラッ気の多い方ですけれど」
「それじゃあ一体」
「どうしてでしょうか」
ナコルルも香澄も考える顔になる。
「こうなったのは」
「何があったのか」
「それも今はわからないですけれど」
孔明は腕を組んで一同に話す。

# 第十九話　劉備、張三姉妹を見るのことその八

「何はともあれ北に行きましょう」
「そうだね。それじゃあね」
「今から」
皆そんな話をしながら北に向かうのだった。
彼女達が幽州に向かったその時にだ。三姉妹は難しい顔で宿にいた。そうして黄色い服を脱いで普段着になって話をしていた。
「あの時は無事に収まったけれど」
「そうよね」
「一歩間違えてたら」
こう話すのだった。
「大騒ぎになってたし」
「今度あんなことになったらどうしよう」
「まずいけれど」
三姉妹が不安に思っているとだ。そこにバイスとマチュアが来て言う。
「その心配には及ばないわよ」
「安心して」
こう三人に言うのである。
「対策はあるから」
「だからね」
「対策？」
それを聞いた張梁が眼鏡の奥の目を向けた。
「何、それは」
「舞台を護る人を雇えばいいのよ」
「それでいいわよ」
こう話すのだった。
「それでね」

「充分だと思うわ」
「雇うの？お金大丈夫なの？」
張宝は自分のことは一旦棚にあげてその心配をした。
「雇うってなると」
「今なら大丈夫よ」
「それはね」
バイスとマチュアはまた話す。
「お金は今はたっぷりあるし」
「それ位何とでもなるわよ」
「そうなの」
それを聞いて最初に声をあげたのは張角だった。
「お金の心配はいらないの」
「所謂親衛隊ね」
「それを作ればいいのよ」
バイスとマチュアは彼女達の時代の言葉も出した。
「それでどうかしら」
「すぐにでも集めるけれど」
「そうね。それだったら」
「いいんじゃない？」
張梁と張宝がまず頷いた。
「今度あんな騒ぎが起こったら大変だから」
「それだったらね」
「そうよね、皆仲良くしないといけないし」
張角はこのことを心から願っていた。
「それならね」
「それじゃあ話は決まりね」
「そういうことね」
バイスとマチュアはここまで話を聞いて満足した微笑みになった。
「それじゃあ早速」
「人を集めるわよ」

「何かどんどん凄いことになってるね」
張角はこのことを実感していた。それを言葉にも出した。
「私達も」
「ついこの前までしがない旅芸人だったのにね」
「そうね。それが今や」
張宝と張梁もそのことを実感していた。
「親衛隊とかなんて」
「想像以上よ」
「それが貴女達の実力よ」
「そういうことよ」
バイスとマチュアは今度は二人を持ち上げてみせた。
「実力だからね」
「それに見合ったものなのよ」
「そう、だったらいいわ」
「そうよね、実力ならね」
「それでいいけれど」
三人はまずはそれは素直に喜んだ。

# 第十九話　劉備、張三姉妹を見るのことその九

「太平要術の書があるけれど」
「あれ、凄い力があるしね」
「そうね」
「ただ」
「どうにもね」
バイスとマチュアはここでは二人だけでひそひそと話をした。三人に聞こえないようにしてそのうえでだ。
「この三人は売れたいという気持ちは強いけれど」
「野心はないし」
「穏やかな性格だしね」
「邪気もないわ」
少なくとも人間としては悪人ではないことを見抜いていたのだ。
そうしてだ。二人は話を止めてそのうえでまた三人に話す。
「そういうことでね」
「いいわね、それで」
「三人共」
「うん、いいよ」
張角がにこりと笑って答えた。
「それでね」
「ええ、じゃあ」
「それでね」
「あとだけれど」
張角は頷いた二人にさらに言ってきた。
「二人共晩御飯は食べたの？」
「晩御飯？」
「それ？」
「ええ、それ食べたの？」

こう問うたのである。
「それはどうしたの？」
「ええ、それはね」
「もう食べたわ」
すぐに答えたのであった。
「だから気にしないで」
「貴女達も食べなさい」
「うん、わかったわ」
張角は二人の言葉に納得してにこりと笑って頷いた。
「それじゃあ」
「じゃあ何食べる？」
「何処に行こうかしら」
張宝と張梁もここで話にまた加わる。
「ラーメンがいいわよね」
「そうね。点心も」
「お姉ちゃん天津飯がいいなあ」
張角が言うのはそれだった。
「それがいいかなあ」
「まあとにかくお店に言ってね」
「それで決めましょう」
「そうね、そうしよう」
張角は妹二人の言葉ににこりと笑って応えた。そうしてだった。
「それじゃあ何処かのお店にね」
「行ってそれで」
「三人で楽しくね」
三人はいつも一緒だった。それが変わることはない。しかしその裏では。
また闇の中でだ。話をしている者達がいた。まずは一人が言った。
「北だが」
「はい、いよいよですね」

「烏丸だけでいいのだな」
こう相手に問うていた。
「それだけで」
「はい、今はそれでいいです」
「そうなのか」
「烏丸だけで」
「今は少しずつでもいいのです」
声は楽しげに笑っていた。
「少しずつ集めるだけで」
「戦を起こさせてそれで集める」
「怨嗟もまた」
「戦というものは我々の目的に非常に重要なもの」
こう言って笑いもしていた。
「ですから」
「それだけではありませんね」
女の声もしてきた。
「私が宮中に入った理由は」
「そうです、何進には気付かれていませんか」
「全く」
女の声は楽しげに笑っていた。そのうえで言っていた。
「気付かれていないわ」
「そうですか。それは何よりです」
「ただ曹操や袁紹には嫌われているわね」
「まだ面識がないというのに」
「それでもか」
「あの二人は所詮宦官の孫に妾腹」
二人が気にしていることを楽しげに言ってみせた。

# 第十九話　劉備、張三姉妹を見るのことその十

「私の様な完璧な血筋は持っていないわ」
「そして血筋だけでなく」
「力もまた」
「ええ、持っていないわ」
今漢に大きな勢力を築いている二人をもこう評していた。
「私程にはね」
「この世界の袁紹は思ったより有能だがな」
「袁術もそうみたいだな」
「そうね、確かに」
「ゲーニッツが言っていたね」
一人の名前も出て来た。
「この世界に無能な者は少ない」
「確かにそう」
「むしろその方が好都合かも知れませんね」
ここでまた声が言った。
「有能である方が」
「無能ならば何なく消える」
「しかし有能ならばあがく」
「だからこそ」
「はい、それだけ我等の糧を与えてくれます」
だからだというのであった。
「ですから」
「そういう考えもあるか」
考える声も出て来た。
「それも」
「そうね、それもね」
「あるよね」

他の声もそれに頷いたのだった。
「それじゃあここは朧に任せて」
「北は」
「それで左慈は」
この名前も出て来た。
「今は一体」
「御安心下さい。万事順調に進めていますよ」
一人の声がこう返したのだった。
「ミヅキさんでしたね」
「ああ、あいつだ」
「彼女も今は左慈と一緒だったわね」
「北で上手くやっておられます」
「そうか、ならいい」
「そういうことならね」
「そうです。左慈なら問題ありません」
また言われるのだった。
「ですから」
「烏丸は小手調べ」
「今はあの三姉妹に仕込ませている」
「そして次は」
「洛陽」
都の話もここで出て来た。
「洛陽はどうか」
「任せてもらうわ」
あの女の声がここでまたした。
「何進は今では私を腹心だと思っているわ」
「絶対の信頼を得たのですね」
「そうよ。そしてあの宦官連中は」
「ああ、何の問題もありません」
一人の男の声がそれはいいとした。

「あれはどうとでもなります」
「そうなのね」
「所詮は宮中に巣食う鼠に過ぎません」
宦官達についてはこう言うだけであった。
「ですから」
「わかったわ。じゃあそれでね」
「それで御願いします。そして」
「そして？」
「今度は何だ？」
「まだあるのかしら」
「この世界の英傑達も来ている戦士達も」
不意に話の対象を変えたのだった。
「最後には全員消えてもらいましょう」
「ええ、そうね」
「それはな」
「然るべき時に」
これは他の声達も頷いたのだった。
「しておくか」
「そういうことね」
「さて」
話をここでまとめてだった。
「ではまた会い」
「そして駒を置いておくか」
「今はね」
闇の中での話だった。それが行われているのであった。それは何かしら得体の知れない邪悪さも含んでそこに強く存在していた。

第十九話　　完

2010・6・15

# 第二十話　公孫賛、気付かれないのことその一

第二十話　公孫賛、気付かれないのこと

劉備達は幽州に入った。するとだ。

幽州には次第に物資が集まりだしてきていた。そして人も賑やかに動き回っている。一行が入った街中はそんな状況であった。

「戦が近いですね」

「そうだな」

関羽は孔明の言葉に頷いた。

「間違いなくな」

「はい、大きな戦いになりますね」

「それで烏丸の軍勢は今何処にいるのだろうな」

趙雲も慌しく動き回る人々を見ながら言った。

「それが問題だが」

「あいつ等全員馬に乗るから動きが速いからな」

馬超はこのことを言う。街中は食糧を運び込む者や槍や弓を持っていく者でごったがえしていた。そうしたものを見ながら話すのだった。

「だから。何処にいるのか調べるのは難しいぜ」

「そうなのだ。あの連中はとにかく動きが速いのだ」

張飛もそれを困った顔になって言う。

「それで何とかしないといけないのだ」

「そうなんだよね。匈奴といい烏丸といいね」

馬岱と溜息と共に話す。

「鬱陶しいったらありゃしないわよ」

「しかし今北で残っているのは烏丸だけだ」

関羽はこのことを話す。

「それならここで頑張るべきだな」

「そうね。さもないと困るのは民だから」
黄忠はまず彼等のことを考えて強い目になる。
「だから余計に」
「さて、それじゃあまずは宿なのだ」
ここで張飛が言った。
「それを決めるのだ」
「そうですね。何処がいいですかね」
孔明も周囲を見回しながら述べる。
「幽州は寒いですしあったかい場所がいいですけれど」
「おい、桃香じゃないのか？」
ふと一部には懐かしい声がやって来た。
「そこにいるのは桃香じゃないのか？」
「あの、真名を呼ぶのは」
流石にそれは劉備も少しむっとなった。
「失礼ですよ、それは」
「私ならいいだろう？」
しかし声の主はこう言うのだった。
「それは。私と御前の仲じゃないか」
「あっ、この声は」
最初に気付いたのはナコルルだった。
「確か」
「知ってるの？」
「お知り合いですか？」
「はい、そうです」
ナコルルは舞と香澄の言葉にも答えた。
「以前この幽州で聞きました」
「ってことは」
「関羽さん達ともお知り合いですね」
「そう思います。ただ」
「ただ？」

今度はキングがナコルルに問うた。
「どうしたんだい？」
「お名前がどうしても思い出せなくて」
ナコルルが思い出せるのはここまでだった。そうして困った顔になっていると。
あの彼女が来た。そして劉備のところまで笑顔で駆けてきたのだ。
「久し振りじゃないか、こっちに来ていたのか」
「あっ、白々ちゃん」
「白蓮だ」
それはすぐに突っ込み返す。見れば公孫賛だった。
「真名もいい加減覚えてくれ」
「えへへ、御免なさい」
「全く。本当に変わらないな」
公孫賛は舌をぺろりと出して謝罪する劉備に対して腕を組んで少しむっとした顔になって述べた。
「御前は」
「そうかなあ」
「ああ、全く変わってない」
また劉備に対して言う。
「何もかもな」
「何もかもって？」
「顔も髪型も」
まずはその二つだった。
「そして胸も」
次にその巨大な胸だった。

# 第二十話　公孫賛、気付かれないのことその二

「何一つ変わってないわ」
「そうかなあ。私も変わったけれど」
「変わっていない。だがそれでいい」
しかし公孫賛はここでこうも言ってみせた。
「御前は御前でな」
「そういえば白々ちゃんも変わってないね」
「白蓮だ」
このやり取りを繰り返す。
「だから子供の頃から何度間違えているんだ」
「ええと、確か」
「ああ、それは数えなくていいからな」
劉備が実際に目を上にやって考えそうになったところで注意した。
「もうな」
「うん、じゃあ」
「それでどうしてここに来たんだ？」
公孫賛はあらためてこのことを問うた。
「烏丸の討伐に参加するのか？」
「そのつもりだけれど」
「そうか、それは何よりだ」
公孫賛は劉備のこの言葉を聞いて笑顔になった。
「それならだ。丁度人手がなくて困っていた」
「困ってたの」
「桃家荘に基地を置きたかったがそこに人がいなくてな」
「そこに入って欲しいのね」
「前線基地にもなるし補給基地にもなる」
公孫賛は話す。
「そこに入ってもらえるか」

「うん、いいよ」
劉備はにこりと笑って答えた。
「丁度宿もこれから探すところだったし」
「宿どころかそこにずっといて欲しい位だ」
「ずっとなのね」
「とにかく今幽州は人がいない」
公孫賛はこのことを困った顔で話す。
「だからな。御前さえよかったらずっといてもらいたい位だ」
「幽州ってそんなに困ってるの？」
「牧がいませんからね」
孔明が馬岱の囁きに答える。孔明もまさか目の前にいる劉備と親しげに話す少女がその幽州の牧だとは夢にも思っていない。
「困ったことに」
「じゃああの人は何なのかな」
馬岱はこっそりとその公孫賛を指差しながらまた囁く。
「劉備さんとお知り合いみたいだけれど」
「多分幽州の豪族だと思います」
孔明はそう見たのだった。
「おそらくは」
「じゃあ今回は徴用されてなのかな」
「多分そうだと思います」
また答える孔明だった。
「あまり目立たないですし」
「その通りなのだ」
張飛も公孫賛をいぶかしむ目で見ながら話す。
「何処かで見た気がするのだ。けれど」
「そうだな。わからないな」
趙雲もここで言う。
「誰だったかな」
「おい、御主はわざとだろう」

関羽がその趙雲に対して言う。
「かつて仕えていたではないか」
「じゃああれが・・・・・・ええと」
馬超も名前を出せないでいた。
「誰だったかな」
「確か顔良さん？」
黄忠も思いきり間違える。
「袁紹さんの部下の」
「顔良はまた違う奴なのだ」
張飛は彼女のことは覚えていた。
「けれどあいつは間違いなく何処かで見たのだ」
「おお、関羽達もいたか」
その公孫賛は今度は笑顔で関羽達を見て言ってきた。
「久し振りだな。公孫賛だぞ」
「ああ、そうでした」
ナコルルがここではっとした顔になった。
「公孫賛さんでした」
「ああ、あれがその」
「影の薄い人ね」
キングと舞はかなり失礼なことを言う。

# 第二十話　公孫賛、気付かれないのことその三

「噂には聞いていたが」
「本当に誰だかわからなかったわ」
「何か目立たない人ですね」
香澄もこっそりと一同に囁く。
「側にいてもわからない様な」
「皆、白々ちゃんだよ」
その証拠に劉備はまた真名を間違えていた。
「私の古い友達なんだ」
「白蓮だ。同じ師匠の下で学んでいたのだ」
恒例のやり取りからだった。全てははじまった。
こうして劉備達はその公孫賛の行為で桃家荘に入ることになった。
すると孔明はこの村にすぐに城壁を築き壕を掘らせたのだった。
「はい、ここはこうですね」
「こうですね」
「これでいいんですね」
「はい、御願いします」
設計図を見ながら兵士達や協力を申し出た村人達に言う。兵達は公孫賛の兵達である。
「ここにかなりの物資や兵隊さん達が来ますし」
「それでこうして城壁や壕をか」
「それだけではありません」
孔明は関羽の問いに答える。
「まだあります」
「理由は他にもあるのか」
「この村の将来の守りです」
孔明はそこまで考えているのだ。
「ですからこうして壁と壕をです」

「築いておくのか」
「備えあれば憂いなしです」
孔明はまた言った。
「ですから」
「そうか、そこまで考えているのか」
関羽は孔明のその深謀に感心した。
「流石だな」
「いえ、そんな」
褒められるとだった。孔明はその顔を赤くさせた。
「私はただ」
「いや、これでこの村は守りを手に入れた」
関羽はこのことをまた話す。
「それはいいことではないか」
「はあ」
「貴殿によりこの村は救われる」
関羽は微笑んでさらに言う。
「これを善行と言わずして何と言うか」
「そうね。それはそうと」
「どうした？」
関羽は黄忠の言葉に顔を向けた。
「何かあったのだ？」
「斥候に出た鈴々ちゃんに翠ちゃんだけれど」
黄忠は二人のことを話すのだった。
「三日戻ってないけれど大丈夫かしら」
「そうだな。気になるな」
趙雲もそれを話す。
「少し見に行くか」
「そうだな、行こう」
関羽も趙雲の言葉に頷く。
「探索にな」

「そうするか」
こう話してだった。二人で馬を出して探索に出た。するとであった。
まず張飛はだ。一人の大柄な男と対峙していた。
その張飛に関羽が声をかけた。
「おい、鈴々」
「愛紗なのだ？」
関羽の言葉を背に受けながら問い返してきた。
「来てくれたのだ」
「何だ、この大男は」
「わからないのだ。もう三日こうして戦っているのだ」
「決着がつかないのか」
「何か物凄く強いのだ」
こう言うのであった。
「三日間時々御飯を食べながらこうして戦っているのだ」
「その通りだ」
男の方からも言ってきた。見れば日の丸の鉢巻をしていて下は白いズボンの様な服に下駄である。上半身は裸で細い目と四角い顔、角刈りである。

# 第二十話　公孫贊、気付かれないのことその四

「こうして戦っている」
「ふむ。貴殿名前は？」
「大門五郎という」
男はこう名乗った。
「不意にこの娘と会い喧嘩を売られたのだ」
「あからさまに怪しい奴なのだ」
「そうか？」
だが趙雲は張飛の今の言葉には懐疑的だった。
「あまりそうは見えないが」
「どうしてなのだ？」
「この御仁もあちらの世界から来たのではないのか？」
こう冷静に言うのだった。
「違うか？」
「んっ、そういえばなのだ」
こう言われて張飛もやっと気付いた。
「そういう外見なのだ」
「確かにわしはそうだが」
その彼も言ってきた。
「日本から来ているのだが」８
「日本というとだ」
趙雲はその名前にも反応を見せてその大門に問う。
「あれか。舞や香澄達と同じ国か」
「ナコルルもいるのだ」
「舞？香澄？」
大門はいぶかしむ声で趙雲のその言葉に応えた。
「というとまさか不知火舞と藤堂香澄か」
「知っているか」

「うむ、何度か拳も交えている」
こうも話す。
「それで知っているのだが」
「そうか。なら話は早いな」
「それならそうと早く言うのだ」
「熊と間違えて襲い掛かって来たのは御主ではないか」
大門はこう張飛に抗議する。
「それで今まで闘っていたではないか」
「強くてそれで闘っているうちに楽しくなったのだ」
「それでか」
趙雲はここまで話を聞いたうえで納得した。
「今まで連絡がなかったのは」
「翠が連絡に行っている筈なのだ」
「翠も知らないぞ」
だが趙雲は馬超についても話した。
「何処に行ったのだ？」
「何っ、翠は何処に行ったのだ？」
「私が知りたい」
「そうなのだ」
「何処にいるのか。それが問題だが」
「ううん、それでは早速探すのだ」
「ふむ、困っているのだな」
大門は二人の話からこのことを察した。そのうえでだった。
「それならだ」
「大門殿だったな」
「うむ」
「どうしたのだ？それで」
「人を探すのならわしも協力しよう」
こう名乗り出て来たのだ。
「それでいいか」

「貴殿も協力してくれるというのか」
「ここで知り合ったのも何かの縁」
彼は言った。
「だからだ。そちらさえよければだ」
「けれど鈴々は大門を熊と間違えてしまったのだ」
張飛はこのことを申し訳ない顔で話す。
「それでもいいのだ？」
「拳を交えればその相手がわかる」
大門もまたこのことを言う。
「それではだ」
「いいのだ？それで」
「喜んで協力させてもらおう」
大門はまた話した。
「今からな」
「よし、それでは早速探すとしよう」
「そうするのだ」
こう話したその時だった。そこにだ。
三人のところに二人の男が来た。それは。
一人は黒髪を中央で分けバンダナをしている。黒い詰襟の丈の短い服とズボンだ。もう一人は金髪を立たせた男ですらりとした長身に黒いシャツ、それに白いズボンという格好である。その二人が来たのである。

# 第二十話　公孫賛、気付かれないのことその五

「ああ、やっと終わったか」
「引き分けになったんだな」
「うむ、和解もした」
大門はこうその二人に話した。
「無事な」
「それは何よりだな」
「何かわからない闘いだったけれどな」
「すまなかったのだ」
張飛はあらためて三人に対して深々と頭を下げた。
「誤解してしまったのだ」
「まあわかってくれればいいけれどな」
「それでな」
二人もそれでいいとしたのだった。どうやら二人共あまりそうしたことにはこだわったりはしない性格であるらしい。張飛にとっては幸いなことに。
「それでな」
「面白いものを見つけたんだがな」
「面白いもの？」
趙雲がその言葉に顔を向けた。
「何だそれは」
「ああ、茸だ」
「変わった茸を見つけたんだよ」
二人はこうその趙雲に話す。
「んっ、そういえばあんた」
「誰なんだ？」
「私は趙雲という」
趙雲はこのことも話す。

「字は子龍だ」
「張飛なのだ」
張飛もなのった。
「字は翼徳なのだ」
「趙雲と張飛か」
「それがあんた達の名前か」
二人は彼女達の名前を聞いて納得した顔になった。そのうえだった。
「俺達も名乗るぜ」
「それでいいな」
「うむ、頼む」
趙雲も二人の言葉を受けて頷く。
「それで貴殿等の名は何というのだ?」
「草薙京」
「二階堂紅丸」
二人はそれぞれ名乗ってきた。
「宜しくな」
「三人共日本から来たんだがな」
「そうか、わかった」
趙雲はここまで聞いてそのうえで頷いた。そうしてだった。
二人に対してさらに問うた。
「それで茸というのは」
「ああ、こっちだ」
「ここにある」
こう言ってだ。そのうえで二人が案内するその茸がある場所に向かう。その途中に五人でお互いの世界のことを話すのであった。
「そうか、そういう世界なのか」
「そちらの世界はそうなんだな」
趙雲と草薙がそれぞれ話す。
「実に多くの者がこちらの世界に来ているが」

「俺達も同じさ。気付いたらここにいたんだよ」
また話す彼だった。
「訳がわからないがな」
「三人で修行していたんだがな」
「気付けばこの国にいた」
二階堂と大門も話す。
「全くな」
「どういうことかわからぬがな」
「鈴々もそれが不思議なのだ」
張飛は蛇矛を担いで持ちながら話した。
「ナコルルもキングも気付いたらこの世界にいたっていうのだ。訳がわからないのだ」
「そうだな。何だってんだろうな」
草薙も首を傾げながら応える。
「この世界に何かあるのか？」
「あるって考える方が不思議だな」
二階堂はこう言う。頭を動かすとその立たせている髪も動く。
「やっぱりな」
「何もなければこの世界に来ることはない」
大門も言う。
「その通りだな」
「何処の組織が動き回ってるんだ？」
また言う草薙だった、

# 第二十話　公孫賛、気付かれないのことその六

「それで俺達をこの世界に飛ばしたってのかよ」
「タイムマシンでか？」
「そんなことができるとなるとかなりのものだぞ」
二階堂と大門は草薙のその言葉に突っ込みを入れた。
「それはな」
「有り得ないぞ」
「そうれもそうか」
草薙はここでは腕を組んだ。
「考えてみればそうだな」
「まあそれでもこの世界にいるのは確かだ」
「それはな」
二階堂と大門はこの現実は受け入れていた。
「まあそれでな」
「茸か」
趙雲は草薙の言葉にまた顔を向けた。
「それだな」
「ああ、もうすぐだ」
「あれだよ」
早速二階堂が目の前を指差す。そこにだった。
茶色を基本として赤や青のカラフルな茸が一つあった。それを指差して言うのだった。
「あれだ」
「あの茸か」
「そうさ、あれだ」
「食えるとは思えないがな」
草薙もその茸について話す。
「とてもな」

「そうだな、あれはな」
趙雲もこう話す。
「見ただけで食べられるものではないな」
「食べられないのだ」
「ああした外見の茸は毒があるに決まっている」
張飛にも話す。
「絶対に止めた方がいい」
「鈴々だったら見ただけですぐに食べてしまうのだ」
「よくそれで今まで生きていられたな」
二階堂もこのことには呆れてしまった。
「大丈夫なのか？それで」
「今のところ生きているからいいのだ」
張飛の言葉はあっけらかんとしたものだった。
「だからそれでいいのだ」
「その考えは止めた方がいいぞ」
大門も張飛に対して言う。
「何時か死ぬぞ」
「全くだ。さて」
趙雲は茸の前で屈んだ。茸だけが彼女のピンクのものを見ている。
「この茸だが」
「それでどうするんだ？」
「少し見てみよう」
草薙に応えながら引っ張る。そうしてだった。
その茸を地面から引き抜くとだ。中から。
馬超が出て来た。何と茸の根から死人の様な顔で出て来たのだ。
「何っ」
「翠なのだ！？」
そのまま地面から出てだ。倒れ込んでしまった。
「死んでいるのかよ」
「まさか」

「いや、この程度で死ぬ様な奴ではない」
趙雲は落ち着いた声で草薙と二階堂に話した。
「しかし。何故茸の根になっていたか」
「それが問題なのだ」
かくして馬超は地面から出てそのうえで復帰した。彼女は趙雲達と共に桃家荘に入ってから一同に詳しいことを説明するのだった。
「それでな。鈴々と別れて皆に話を伝えに行く時にな」
「その時にですか」
「いや、腹が減ってさあ」
左手を頭の後ろにやりながら孔明に話す。細長い赤い机に一同が座っている。
「それでたまたま目に入った茸を食べたんだよ」
「呆れたな」
キングはここまで聞いて腕を組んで呟いた。
「そんなことをすればだ」
「下手しなくても死ぬわよ」
舞も話す。
「毒茸だったら」
「実際にそうみたいだってさ」
「それでどうなったの？」
黄忠がそれを問う。

## 第二十話　公孫贇、気付かれないのことその七

「茸を食べて」
「いや、何か急に周りでお祭りがはじまってさ」
馬超は食べてからの話もする。
「それでさ。鼠や家鴨が出て来て一緒に踊っていたら。気付いたらなんだよ」
「そのネタは危ないですから止めて下さいね」
香澄がすぐに注意した。
「洒落になりませんから」
「ああ、そうなのか」
「私達の世界では禁句です」
言いながら饅頭を食べている。
「そう、絶対に」
「そうか。まあそれでな」
「はい、それで」
今度は劉備が応える。
「どうなったんですか？」
「星に引っこ抜かれて助かったんだよ」
「そうだったんですか」
「いやあ、よかったよ」
馬超は笑顔で話す。
「許緒の真似したんだがやっぱり危なかったみたいだな」
「全く。お姉様って」
馬岱も呆れる顔になっている。
「相変わらず脳筋なんだから」
「何かジョーさん思い出すな」
「そうだな」
草薙と二階堂は馬超の話を聞いて述べた。

「あの人もそうしたことするからな」
「普通にな」
「そうだな。それでだが」
ここで話したのは大門だった。
「その茸は何なのだ？」
「その茸は明らかに毒茸ですね」
孔明が話す。
「食べると幻覚症状が出てそのまま仮死状態に置かれて栄養を取られてしまいます」
「げっ、そんなにやばい茸なのかよ」
「はい、そうなんですよ」
「そうだったのか。やっぱりやばいよな」
「はい、本当に運がよかったです」
当然馬超に対する話である。
「翠さん、よかったですね」
「ああ、本当にな」
「そうですね。それでなのですが」
話が一段落したところでナコルルが言ってきた。１２４
「敵はいましたか？」
「敵なのだ？」
「はい、それは」
「それは今のところいなかったのだ」
「それはな」
張飛と馬超はこのことはしっかりと話した。
「北は今のところ静かなのだ」
「何の問題もないぜ」
「そうですか。それは何よりです」
ナコルルはここまで聞いて微笑んであらためて一同に話した。
「それで朝廷の軍ですが」
「そろそろですか？」

「ママハハを飛ばして確かめたのですが今こちらに順調に向かっているとのことです」
こう一同に話す。
「この桃家荘にです」
「そうか、それならいいがな」
関羽はそれを聞いて微笑んだ。
「では我等は今のうちに」
「はい、ここの整備を完成させましょう」
最後に孔明が言う。そうしてだった。
曹操と袁紹達が来たその時にはだ。完全にその整備を終えていた。
二人は桃家荘に入ってまず関羽達を見つけて馬上から声をかけるのだった。
「久し振りね」
「元気そうで何よりですわ」
「うむ、貴殿達こそな」
関羽は右手の拳を顔の前で左手の平に当てて挨拶をした。
「達者な様だな」
「ええ。それでこれから薊に向かうけれど」
「ここも基地になりますのね」
「はい、そうです」
今度は劉備が出て来て話す。
「ここも前線基地と補給基地になります」
「そう。見たところ」
曹操はその城壁と壕、そして中を門のところからざっと見回したうえで述べた。

# 第二十話　公孫賛、気付かれないのことその八

「狭いけれどかなり立派にできているわね」
「大軍の基地としては狭いですけれど」
袁紹もこのことは指摘する。しかしだった。
「それでも基地の一つとしては充分ですわね」
「これはかなり優れた者が築城したのでは？」
「確かに」
荀？と田豊がここで言った。
「これだけの城を短期間で築城するなんて」
「相当の人物では」
「誰なのだ？それで」
「この城を築城したのは」
「ああ、それはですね」
劉備は夏侯惇と夏侯淵の言葉に応えて孔明をその手で指し示して話した。
「孔明ちゃんです」
「はわわ、ここで言っちゃうんですか？」
「だって本当のことじゃない」
慌てる孔明にこう返す。
「孔明ちゃんが全部やってくれたじゃない」
「孔明！？」
それを聞いてだ。審配がその眉をぴくりと動かして述べた。
「というと水鏡先生の弟子の伏龍」
「伏龍！？」
「というとまさか」
「あの伝説の名軍師！？」
「それがここに」
「幽州に来ているのか」

曹操陣営の者達も袁紹陣営の者達も一斉に騒ぎだした。
「揚州でも抜群の冴を見せたという」
「江南の美周郎も唸らせたというあの軍師がか」
「あれっ、そんなに有名人なのかよ」
しかし文醜だけがこう言った。
「この娘ってよ」
「何言ってるのよ、今や鳳雛と並ぶ名軍師よ」
顔良が咎める顔で彼女に突っ込みを入れる。
「それで何で知らないのよ」
「だってあたい最近ずっと匈奴とか涼州の方に出張ってたからな」
それで知らないというのである。
「中央の話とか知らないんだよ」
「麗羽は知っていたでしょうね」
「名前だけは聞いたことがありましてよ」
一応曹操にはこう言えた。
「この河北にも名前は轟いていましたし」
「それならいいけれど」
「知らないことあるしね、この人」
「困ったことにね」
曹仁と曹洪はその袁紹を見ながらひそひそと話す。
「子供の頃からそうだし」
「ムラの多い人だから」
「しかし。その様な軍師が関羽殿の配下になるとは」
「凄いことね」
高覧と張?は関羽を見ながら述べる。
「それに西涼の馬超と馬岱に天下で一、二を争う弓の使い手黄忠もいる」
「かなりの陣営になっているわね」
「いや、私は主ではない」
関羽は二人のその話は否定した。

「私はむしろ仕えている側だが」
「仕えている!?」
「一体誰に?」
麹義と許緒が関羽のその言葉に問うた。
「見たところ貴殿が首座だが」
「違うの!?」
「首座はこの方だ」
関羽は自身の右手にいる劉備を手で指し示して一同に紹介した。
「中山靖王の末裔である劉備玄徳殿だ」
「あらためてはじめまして」
こうして劉備が一同に紹介された。話を受けた曹操と袁紹は主だった家臣達と共に劉備達との話に入った。だが荀?と荀?はというと。
「だからあんたはどっか行きなさいよ!」
「あんたこそ!」
二人で取っ組み合いの喧嘩を演じていた。
「何であんたが参戦してるのよ」
「そっちこそよ。許昌で留守番していればよかったのよ」
「それはこっちの台詞よ!」
「何よ、言うの!?」
「言うわよ!」
「じゃあ言い返してやるわよ!」
猫の喧嘩の様だった。そんな二人だった。

# 第二十話　公孫賛、気付かれないのことその九

兵達もだ。そんな二人に呆れてしまっていた。
「全く、親戚同士だったな」
「ああ、そうだ」
曹操軍の兵士の一人が袁紹軍の兵士に聞いていた。
「それで何でこんなに仲が悪いんだ？」
「さてな、子供の頃からしいがな」
「そうなのか」
「いやな、荀？殿は最初こっちの殿様の配下になろうとしたらしいんだがな」
「それでどうなったんだ？」
「こっちには荀？殿がいるだろ」
ここで彼女の名前が出た。
「それを聞いて引き返して曹操殿に仕えたそうだ」
「そこまで仲が悪いんだな」
「そうみたいだな」
こんな話も為されていた。そうしてだった。
曹操と袁紹は劉備を交えてそのうえで宴を開いていた。その料理は。
「華琳、貴女の料理は相変わらずですわね」
「相変わらずなのね」
「ええ、見事ではありますわ」
袁紹は満足した顔で料理を食べながら話した。
「また腕をあげましたわね」
「そういう麗羽、貴女もまた舌がよくなったわね」
「そうなのですね」
「ええ、またね」
お互いに笑みを浮かべながらのやり取りだった。

「さらにね」
「貴女の料理がいいからでしてよ」
「お世辞はいいのだけれど」
「本当でしてよ、これは」
「あの」
そんな二人を見ながらだ。劉備が言う。
「曹操さんと袁紹さんってお知り合い同士だったのですね」
「そうよ、子供の頃からね」
「一緒にいることが多かったですわね」
二人は劉備のその言葉に応えて話す。
「私も麗羽もね」
「何かというと」
「うむ、実はそうなのだ」
「私達もだった」
夏侯惇と夏侯淵もいた。そのうえで曹操の料理を食べているのだ。
「華琳様や麗羽殿とはな」
「いつも一緒だった」
「よく六人で遊んだんですよ」
「あの頃は色々ありましたね」
曹仁と曹洪も話す。
「宝物を探したり熊の巣に忍び込んだり」
「蜂蜜を採ろうとしたこともありましたね」
「ああ、あの時ね」
蜂蜜と聞いてだ。曹操の顔が微妙に歪んだ。
「あの時は冗談抜きで死ぬかと思ったわ」
「蜂蜜？何かあったのでして」
「貴女が蜂蜜が食べたいとか言って蜂の巣を取ろうとしたでしょ
こう曹操に話したのである。
「それで蜂が怒って私達追っかけてきたじゃない」
「そういうこともありましたかしら」

「あの時は六人全員で逃げて大変だったではありませんか」
「全くです」
夏侯惇と夏侯淵もむっとした顔で袁紹に言う。
「麗羽殿がよりによって蜂の巣をつつかれたから」
「幾ら何でもあれはありません」
「ああ、麗羽様って子供の頃からそうだったんだな」
「そうよね」
文醜と顔良もいた。
「何かって言うとトラブル起こしたんだな」
「本当に変わらないわね」
「そこ、五月蝿いですわよ」
袁紹はその二人にむっとした顔で返す。
「大体あの時は助かったではありませんか」
「はい、危ういところでお池に飛び込んで」
「それで助かりましたね」
曹仁と曹洪もむっとした顔で返す。
「そしてお池の中には主がいて」
「それにも襲われて」
「そうそう、麗羽様がされることは続くから」
「全く」
田豊と沮授もいた。袁紹側は彼女の腹心達とも言っていい四人だった。

# 第二十話　公孫賛、気付かれないのことその十

「次から次に有り得ないトラブルが起こって」
「大変なんですよね、フォローが」
「貴女達が言うことでして？」
二人の言葉にさらにむっとした顔になる袁紹だった。
「全く。あの主からも逃げられたしよかったではないでして？」
「そうね、丘にあがったら全身濡れ鼠でね」
「震えながら都に帰って」
「それで笑いものにされましたね」
また夏侯惇と夏侯淵が話す。
「母上達には怒られましたし」
「その他にもそんなことばかりでしたし」
「麗羽様ですから」
「そんなことでいちいちめげてたらどうしようもないからな」
顔良と文醜も話す。
「オチが極めつけになりますよ」
「絶対最後に来るからな」
「それで麗羽様は無傷だし」
「運はかなりいいから」
田豊と沮授も容赦がない。
「その運だけは凄いのよね」
「自分の興味のないことには全く駄目なのに」
「そのまま大きくなるなんて思いも寄らなかったわよ」
曹操がまた言った。
「その貴女と付き合う私も私だと思うけれど」
「ううむ、不思議な関係だな」
「全くなのだ」
関羽と張飛はそんな彼女達を見ながら言う。

「曹操殿達は」
「とりあえず喧嘩はないみたいなのだ」
「喧嘩ねえ」
曹操は張飛の今の言葉に腕を組ながら応えた。
「喧嘩も何度もしたわね」
「ええ、本当に」
袁紹もそれに応える。
「その度に何か色々あったし」
「何か雷が落ちたり火事があったりして」
「御二人が喧嘩をされるとな」
「常に異常事態となったな」
夏侯惇と夏侯淵の言葉はしみじみとしたものだった。
「不思議なことにな」
「あれは何故だったかな」
「けれど仲は悪くないんですよね」
劉備はこのことはしっかりと確かめた。
「それは」
「まあ腐れ縁ね」
「そうですわね」
口ではこう言う二人だった。
「何だかんだで今も一緒に戦うしね」
「頼りにはさせてもらいますわ」
「はい、是非仲良く」
劉備はにこにことしている。
「美味しい御馳走を食べてそれから」
「そうだな。烏丸を討伐しましょう」
「是非になのだ」
関羽と張飛も言った。そんな楽しい宴だった。
そしてその宴の後でだ。新たな者達がやって来ていた。
「火月に蒼月」

「はい、それに後三人の方が」
「来てますよ」
顔良と文醜が天幕の中で袁紹に話していた。
「天童凱、パヤック＝シビタック、イワン＝ソコロフ」
「その三人が」
「またあちらの世界から来ましたのね」
袁紹は二人の話からすぐに察した。
「それなら」
「はい、こちらに案内しますので」
「御会いになってですね」
「また迎え入れますわ」
既に彼等を迎え入れることは決めていたのだ。
「それでは」
「はい、こっちですよ」
「入ってくれよ」
顔良と文醜が天幕の扉を開けてそのうえで招き入れるとだった。
燃え上がる様な赤い髪の毛に紅蓮を思わせる忍者の服、それといきり立つ顔の男がまず来た。

# 第二十話　公孫賛、気付かれないのことその十一

そしてその次は青く長い髪の涼しげな顔の男だった。こちらは知的な印象だ。
「風間火月だ」
「風間蒼月といいます」
二人はそれぞれ名乗ってきた。
「こっちで召抱えてくれるそうだな」
「食事と家があるとか」
「ええ、そうですわよ」
袁紹は二人に応えながら後から来た三人も見ていた。
最初に来たのは赤い髪と青いパンツの精悍な青年、次は黒い肌に黒い髪の青年、それと大柄な中年の男、この三人だった。
「天童凱」
「パヤック＝シュビック」
「イワン＝ソコロフ」
こう名乗る三人だった。
「何か知らないがこっちに来てたんだよ」
「とりあえず食べなくてはいけませんから」
「仕官という訳だが」
「俺達もそれでいいんだよな」
「そう聞いていますが」
また火月と蒼月が言ってきた。
「こっちで雇ってもらえるんだな」
「そうなのですね」
「ええ、その通りですわよ」
袁紹は彼等の問いにすぐに答えた。
「それでは間も無く戦ですし」
「ああ、暴れさせてもらうぜ」

「報酬の分は」
こうして袁紹のところにまた人材が加わった。そして曹操のところにもだ。
「わかったわ」
「それで宜しいのですね」
丈の長い黄色い服と青いズボンの辮髪の青年が曹操の言葉に応えていた。
「我等の仕官を受け入れて下さるのですね」
「喜んで」
こう答える曹操だった。
「貴方達の力、見させてもらうわ」
「わかった」
「それならばだ」
編み笠で顔があまり見えない緑の服の男と青と白の独特の模様をした着物に長く黒い髪の精悍な顔の男も曹操の前に立っていた。
「この斬鉄の技見せよう」
「新撰組副長付鷲塚慶一郎」
二人はそれぞれ名乗った。
「それでいいな」
「天念理心流の剣、見てもらおう」
「この李烈火もまた」
辮髪の男もいた。
「戦わせてもらいましょう」
「そして」
曹操は今度は残る二人を見ていた。
「貴方達もね」
大柄な力士と独特の存在感を見せる男の二人を見ていた。
「期待しているわよ」
「暁丸殿とロブ＝パイソン殿です」
「これがお二人の名前です」

曹操の左右にいる夏侯惇と夏侯淵が彼女に話す。
「この方々もですね」
「我等と共に」
「そうよ、また人材が加わったわね」
曹操はこのことに満足していた。
「さて、それなら」
「はい、それなら今は」
「我等も」
こう話してであった。その暁丸とロブ＝パイソンも話してきた。
「ここに来たのも何かの縁っす」
「戦わせてもらう」
「ええ、宜しくね」
曹操はここではにこりと笑ってみせた。
「本当に戦いが近いのだから」
「それではすぐにでも」
「進撃の用意を」
「そうね。大将軍が来られたらすぐにね」
曹操は自身の左右にいる夏侯惇と夏侯淵の言葉に頷いて述べた。

# 第二十話　公孫賛、気付かれないのことその十二

「出られるようにね」
「しておきましょう」
「是非」
こう話しながら新たな者達を迎え入れていた。そしてその翌日。
準備をする劉備達のところにだ。彼女が来た。
「おお、何時でも発てるな」
公孫賛だった。城と軍勢を見て満足した顔で言っていた。
「これではな。すぐにだ」
「あれっ、どなたですか？」
「見たことない奴だな」
顔良と文醜はその公孫賛を見てまずはこう言った。
「義勇兵の方ですか？」
「それなら受付はあってだぜ」
「待て」
二人の言葉にむっとした顔で返す公孫賛だった。
「私のことを知らないのか？」
「見たところ身分のある方のようですが」
「将校の募集もしてるからそっちに行くかい？」
「本当に私のことを知らないのか！？」
公孫賛は苛立ちを覚えていた。
「私のことを」
「ですから。どなたでしょうか」
「名前何ていうんだ？」
「公孫賛だ」
ここで名乗るのだった。
「知らないのか。この幽州の牧だ」
「えっ、それは嘘ですよ」

「そうだ、嘘に決まってらあ」
顔良と文醜は公孫賛の今の言葉をすぐに否定した。
「だってこの幽州は牧がいないことで有名ですよ」
「劉備さんだってこの戦いで武勲を挙げれば琢の相になれるみたいだけれど牧にはまだな」
「御前等、本当に私を知らないのか」
公孫賛はかえって唖然となっていた。
「それは本当なのか」
「あの、ですから本当に」
「あんた何しに来たんだ？」
二人は意識せず相手に止めを刺している。
「ですから将校の募集もしていますから」
「あっちに言ってだな」
「ちょっと、何騒いでるのよ」
ここでもう一人来た。
「今忙しいんだから。用事はさっさと済ませてね」
「あっ、荀？さん」
「そっちはもう済んだんだ」
「ええ、ああした仕事ならすぐよ」
荀？だった。二人のところに来てこう言うのである。
「何でもなかったわ」
「そうですか。それじゃあ」
「あたい達は兵を動かしておきますね」
「そうしてよ。それで今何してるの？」
荀？は少し咎める目になって二人に問う。
「誰かと話してるの？」
「何か幽州の牧だって名乗る人がいまして」
「来てるだけれどさ」
「幽州の牧！？馬鹿言わないでよ」
荀？は二人の言葉にすぐにむっとした顔になって言い返した。

「この幽州に牧はいないわよ。あんた達の主君がそのうちなるみたいだけれど」
「それでも何かそうだって言ってて」
「おかしなことになってるんだよ」
「そうなの。それで誰？それ」
荀？は二人の話を聞いたうえで辺りを見回しだした。
「幽州の牧だなんていもしない存在だっていうのは」
「私だ」
公孫賛は肩を怒らせて荀？に告げた。
「そういう御主は荀文若だな」
「私の名前を知ってるのね」
「そうだ、そして私の名前はだ」
「ええ。何ていうの？」
「公孫賛だ」
こう彼女に対しても名乗る。
「知っているな、白馬長史と謳われた」
「・・・・・・誰、それ」
これが荀？の彼女への返答だった。
「はじめて聞く名前だけれど」
「そうですよね、本当に誰か」
「わからなくてさ」
「そんな名前はじめて聞いたけれど」
荀？はいぶかしむ顔で二人に話した。
「一体誰なのかしら」
「とりあえず麗羽様に御報告しようかしら」
「ああ、そうだな」
顔良と文醜はひそひそと話しはじめた。

# 第二十話　公孫賛、気付かれないのことその十三

「何かおかしな人っぽいし」
「幽州に牧がいないなんてあたいでも知ってることだしな」
「貴女、一つ言っておくけれど」
荀？は今度は公孫賛を咎める目で見てきていた。
「身分の詐称は大罪よ」
「だから詐称ではない！」
公孫賛もいい加減参ってきていた。
「私はだ。本当にだ！」
「まあとにかく仕官なら木簡に名前を書いてね」
荀？は冷静に返す。
「わかったわね」
「ええい、曹操と袁紹に合わせろ！」
いい加減痺れを切らして言う。
「このままではラチが明かん！すぐにだ！」
「何か我儘言い出したし」
「だから何があるんだよ」
「そうよ。だから幽州に牧なんていないわよ」
三人は公孫賛を完全に頭がおかしい相手と思っていた。しかしあまりに騒ぐので曹操と袁紹のところに案内した。そうして話をするとだった。
「誰、それ」
「知りませんわよ」
二人も知らなかった。
「公孫賛？聞いたことないわね」
「白馬長官なんて名前もとても」
「長史だ！」
このことまで訂正させなければならなかった。

「ええい、だから私はだな、この幽州の」
「いや、幽州に牧といっても」
「そんな者はいないし」
「これはもう天下の誰もが知っていることよね」
「そうよね、確かに」
天幕の中に集う主だった将も軍師達も誰も知らなかった。
「それでその様なことを言っても」
「ちょっと。無理があるとしか」
「確かに」
「あのですね」
陳琳がここで言う。
「公孫賛殿でしたよね」
「うむ、そうだが」
「幽州には確かに公孫氏はいますけれど」
彼女はこのことは知っていた。
「しかし別に牧なぞ出してはいませんし。遼東にいる豪族ですが」
「あの家とは直接関係はないぞ」
また言う公孫賛だった。
「だから私は幽州のだな」
「頭がおかしいのかしら」
曹操もいい加減こう思いはじめた。
「やっぱり」
「そうですわね。頭がおかしいのならもう相手をしても仕方ありませんわ」
袁紹もおかしなものを見る目であった。
「それならもう」
「そうね、つまみ出しましょう」
「今は多忙ですし」
こうして公孫賛はつまみ出されようとしていた。しかしであった。
ここで天幕の中に劉備が入って来て。そして公孫賛に気付いて言

うのだった。
「あっ、白々ちゃん」
「白蓮だ」
むっとした顔で劉備の言葉に返す。
「いい加減覚えてくれ」
「あら」
「まさか」
ここで曹操も袁紹も気付いたのだった。
「劉備の知り合いなの」
「その様ですわね」
「はい、同じ先生に学んでいたんですよ」
劉備は明るく二人に話す。
「それで今はここにいまして」
「そうなの。貴女の知り合いだったらね」
「それならそうと言って下さればよかったのに」
「はい、じゃあ白々ちゃんを宜しく御願いしますね」
「何度も言うが白蓮だ」
こんなやり取りの後で公孫賛は今は迎え入れられた。しかし結局誰も彼女の言う身分はわからなかった。ごく一部を除いてだ。

# 第二十話　公孫賛、気付かれないのことその十四

しかしだ。ここでだった。
関羽がだ。夏侯惇と夏侯淵に話すのだった。
「あの方は本当に幽州の牧なのだが」
「本当にそうなのか！？」
「初耳だぞ」
二人も知らないことだった。どちらも驚きの顔になっている。
「幽州にも牧がいたのか」
「そうだったのか」
「私は前から知っていたが」
「大将軍はこのことを御存知だろうか」
「いや、おそらく知らないだろう」
夏侯淵はこう姉に返す。
「我等も麗羽殿の家臣達も誰も知らなかったのだからな」
「そうだな。それではとてもな」
「知る筈がない」
こう結論が出された。
「とてもな」
「我等も知らなかったしな」
「しかし。関羽殿は嘘はつかない」
夏侯淵はこのことは断言できた。
「決してな」
「ではやはり」
「そうだ、間違いなく幽州の牧だ」
こう姉に断言する。
「私も今までそんなものがいるとは知らなかったがな」
「おい、待て！」
いい加減公孫賛も切れてきていた。それで夏侯惇達に抗議する。

「私は何だ、未確認動物か！」
「未確認動物？まあ言われてみれば」
夏侯惇もそれを否定しようとしない。
「それに近いか？」
「姉者、幾ら何でもそれは酷いぞ」
「しかし私達の誰も知らなかったんだぞ」
「そうだな。申し訳ないが私もだ」
夏侯淵は少し済まなさそうな顔をしている。
「それはだ」
「全く。私は何なのだ」
「まあそう言わないでくれ」
ここで関羽が公孫賛を慰める。
「皆悪気はないのだ。許してやってくれ」
「悪気がないのはわかる」
それは彼女自身が最もよくわかっていた。しかしだった。
「だがそれでもだ」
「まあ今はだ」
「うむ、今は」
「飲まないか？」
微笑んでの提案だった。
「よければな」
「酒か」
「そうだな。よければ私もだ」
夏侯淵も名乗り出た。
「一緒に飲ませてもらえるか」
「貴殿もか」
「折角だからここで親睦を深めたい」
申し訳なさそうな微笑みを浮かべての言葉だった。
「だからな」
「わかった。それではな」

「それでいいな」
「うむ、頼む」
公孫賛からも言う。そうしてだった。
彼女達は飲むことになった。夏侯惇も一緒である。しかし彼女はというと。
「そうだな、次はそれを歌うか」
「春蘭様って歌大好きなんですね」
「うむ、大好きだぞ」
こう一緒にいる許緒に答える。許緒は相変わらず食べてばかりだ。
「子供の頃からよく歌っていたものだ」
「そうだったんですか」
「華琳様もよく褒めて下さってくれる。麗羽殿のおひねりの銭が頭にぶつかったこともあったがな」
ここでも袁紹はやらかしていたのだった。
「それでもいい思い出だ」
「そうですか。それじゃあ今は」
「うむ、どんどん歌うぞ」
酒で少し赤くなった顔で言う。

# 第二十話　公孫賛、気付かれないのことその十五

「さて、何がいいかな」
「それだったらこれなんかどうですか？」
「よさそうだな。それではだ」
許緒の薦めた歌を歌う。その頃夏侯淵は公孫賛と共に飲んでいた。
公孫賛は飲みながら非常に悲しい顔であれこれと言っていた。
「私は生まれた時から扱いが悪かった」
「生まれた時からか」
「劉備いたな」
「うむ、玄徳殿だな」
「幼い頃から真名で呼び合う仲だった」
まずはこう話した。
「しかしだ」
「しかしか」
「あいつはいつも真名を間違えてくれるのだ」
実に悲しい顔になって話す。
「一度も合っていたことはない」
「真名を覚えてもらえないのか」
「そんなことは一度もなかった。しかもだ」
「しかもか」
「あいつに悪気は全くないのだ。天然なのだ」
劉備の劉備たる所以である。
「完全に天然だ。悪気はない」
「だから怒るに怒れないのだな」
「困ったことにだ」
「そうだな。劉備殿は常に悪意はない」
それは関羽も認める。彼女も一緒である。
「善意の方だ」

「それはわかる。桃香には悪意はない」
これは公孫賛もわかることだった。
「しかしだ。それでもだ」
「どうにもならないか」
「うむ、困ったことにだ」
こう話すのであった。
「注意してもその都度間違えられる。しかもだ」
「しかも？」
「桃香だけではないのだ」
公孫賛の嘆きは続く。
「誰からも忘れられいることに気付かれなかった」
「不幸だったのだな」
話を聞く夏侯淵の顔もしんみりとしたものになる。
「これまでずっと」
「両親に一緒にいることに気付かれず街の中で置いてけぼりにされたり家の中に気付いたら一人放置されていたこともあった」
不幸はまだあった。
「友達は白馬のみだった。何とか努力して武勲を挙げてもだ」
「それはどうだったのだ？」
「いつも他の誰かがさらなる武勲を挙げて目立たなかった」
「申し訳ないが心当たりはある」
夏侯淵は酒を飲みながら話した。
「華琳様、それに麗羽殿だな」
「それに孫堅殿もおられた」
そうした面々のせいだった。
「いつもそういった面々がさらに武勲を挙げて政治でも派手に業績を挙げてだ」
「目立てなかったか」
「そうだ、私は帝にも何大将軍にもお声をかけてもらえなかった」
ここでも目立てない彼女だった。

「そしてようやく幽州の牧になればだ」
「誰にも知られていなかったか」
「困ったことにだ」
「そうか。私はまだずっとましなのだな」
「夏侯淵殿もというと？」
「私は子供の頃から華琳様や麗羽様と一緒だった」
「あの派手な顔触れとか」
「そうだ。そして姉者や夏瞬達もだ」
曹仁や曹洪のことである。
「一緒だった」
「そうか、一緒だったか」
「その通りだ。大変だったのだ」
また言う彼女だった。
「麗羽殿は次から次にトラブルを引き起こし姉者は突き進むだけだ」
「何だ、袁紹殿も夏侯惇殿も昔からだったのだな」
「幼い頃からな」
こう関羽にも話す。
「変わらずだった。華琳様は天才肌で色々なことをされる」
「それにも振り回されたか」
「華琳様は素晴しい方だ」
曹操をけなすようなことは絶対になかった。やはり彼女もまた曹操の絶対の忠臣であり良臣であった。このことは揺らぐことがない。
「だが。妹分の夏瞬と冬瞬の面倒も見てだ」
「合わせて四人か」
「大変だった。麗羽殿は何故か御自身はダメージを受けられないしな」
「あいつは桁外れに運がいい」
公孫賛もこのことはよく知っているようである。
「政治の現場を見ていて灌漑の時に巨大な魚が出て来て襲われても戦場で矢面に立っていても何があっても生き延びる」

「御本人がいると必ず何かが起こるがな」
「しかしあいつはダメージを受けない」
「受けていたのは私だ」
それは夏侯淵の役目だった。
「華琳様を御守りして姉者を止めながらだ」
「大変だったのだな、貴殿も」
「前にひたすら出るのは姉者のいいところだ」
姉のそうした性格は愛しているのだった。
「そして可愛いところでもある」
「そういえば貴殿達は袁紹殿も嫌いではないのだな」
「長い付き合いだからな」
だからだというのだった。
「よいところも悪いところも知っている」
「だからか」
「麗羽殿も悪い方でも無能でもない」
それは認めていた。
「あれで領民のことを念頭に置いていて戦場でも的確に指示を出し政治手腕もある」
「そういえば袁紹殿の領土も繁栄しているな」
「そうだ、しかしどうもな」
ここでその袁紹の問題点も言った。
「非常にバランスが悪い方だからな。トラブルを招き寄せるし」
「それも昔からか」
「華琳様も何かと敵が多い」
「翠が襲い掛かって来たこともあったな。あれは」
「あれはもういいことだ」
関羽に対して述べた。
「馬超殿も誤解を解いてくれたしな」
「だからいいのか」
「問題は宦官達だ。それに」

「それに？」
「司馬慰という男」
飲みながらだが夏侯淵のその目に警戒するものが宿った。
「あの男、どうしても気になるな」
「そうなのか」
「一体何者か」
夏侯淵は言う。
「華琳様に何かしようというのなら相手になるが」
「あくまで曹操殿を守るか」
「うむ、それが私の役目だ」
公孫賛の言葉にもはっきりと答える。
「だからこそだ」
「わかった。それなら応援させてもらう」
「済まないな」
「いいことだ。それではな」
「今日は最後まで飲むか」
「そうしよう」
公孫賛は笑顔でその夏侯淵と関羽に話した。そうしてだった。
戦士達は北に向かう。しかしここで思わぬ事態も起ころうとしていた。

第二十話　　完

２０１０・６・１８

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその一

第二十一話　劉備、友を選ぶのこと

何進が幽州に向かっている中でだ。桃家荘に次々と戦士達が集ってきていた。

「何だ、御前等もいたのか」

「そうよ、久し振りね

リョウに対してキングが微笑んで言葉を返していた。ロバートにユリも一緒である。

「こちらに来ているとは思ってたけれどね」

「そうなのか」

「他の軍にミッキー達もいるわよ」

「へえ、あいつ等も来てたのか」

「陣営は違うけれど今は一緒に戦うことになるわ」

リョウにこのことも話すのだった。

「どう？今から楽しみでしょ」

「ああ、凄くな」

まずはリョウ達だった。そして。

「へえ、あんた達もか」

「はい、そうなんです」

アテナが草薙の言葉に笑顔で頷いていた。勿論ケンスウや鎮、パオも一緒である。

「私達もこの世界に来ていまして」

「それで今こうしてここに来たって訳か」

「何か。よからぬ気配を感じまして」

ここでアテナの顔が曇った。

「まさかと思いますけれど」

「ああ、そうだな」

それに草薙も頷く。

「あの連中もいるっぽいな」
「そうですね」
アテナは暗い顔になった草薙に答える。
「どうやら。他にも大勢」
「色々とややこしい戦いになりそうだな」
草薙はその暗くなった顔で述べた。
「この世界でもな」
「はい」
彼等は何かを感じ取っていた。そうしてだった。
テリー達もだ。来たのだった。
彼等の姿が見えるとすぐに舞がアンディのところに来て怒る。
「アンディ、何処に行ってたのよ」
「何処って？」
「そうよ、何処になのよ」
怒った顔で彼に言うのである。
「一体何処になのよ」
「それはまあ」
「何？私に言えない理由？」
「まさか。そんなのじゃないよ」
「それじゃあ何なのよ」
「俺達もあちこちを旅していたんだよ」
テリーがその舞に対して話す。
「それでなんだよ」
「あれっ、そうだったの」
「それでここの話を聞いてな。来たってわけだ」
こうその事情を話すのだった。
「それでなんだよ」
「それならそうと早く言ってくれたらよかったのに」
「言う前に来たじゃないか」
アンディは困った顔でその舞に返す。

「それでどうしてそんなことを」
「御免なさい。後で納豆スパ御馳走するから許して」
「仕方ないなあ」
「鰐の唐揚げあるか？」
丈はそれを欲しがった。
「中国には鰐もいるよな。それだったらな」
「ここには鰐はいませんよ」
「何っ、じゃあ鶏の唐揚げだ」
こう香澄に返す。そうしてだった。
ここでだ。新たな人間も来た。
まずは曹操の方にだ。何人か来ていた。
「我もまたここに来た」
「宜しく頼む」
「それでいいかい？」
覆面の忍者に雲水姿の中年の僧侶にボクシンググローブを両手にはめた大柄の口髭の男の三人だった。彼等が曹操のところに来たのだ。
「如月影二」
「望月双角」
「フランコ＝バッシュってんだ」
「ここでまた面白い面々が来てくれたわね」
曹操はその彼等を見て微笑んだ。

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその二

「貴方達もあちらの世界の武芸者なのね」
「わかるというのか」
「ええ、よくね」
曹操は影二の言葉に対して微笑んで返した。
「知ってるかも知れないけれどここにはもう色々な人が来ていてね」
「おっ、何だ？」
ここでヘヴィ＝Ｄが天幕の中に入って来て声をあげた。
「あんた達も来たのかよ」
「ヘヴィ＝Ｄか！」
フランコは彼の顔を見て笑顔で声をあげた。
「そうか、あんたも来ていたのか」
「ああ、前からな」
「そうか。それなら楽しくやれるな」
「そうだな、宜しく頼むぜ」
ヘヴィ＝Ｄからも笑顔で言う。そうしてだった。
彼等も曹操の陣営に加わった。そして袁紹の方にも。
「ええと、今度はこの人達ですのね」
「はい、マルコ＝ロドリゲスさんに」
「押忍！」
髭だらけの顔に浅黒い肌に白い道着のむさ苦しい男だった。
「グリフォンマスクさんに」
「宜しく頼む」
レスラーの服に鳥の仮面の大男だ。
「北斗丸君です」
「御願いするね」
マントに青い服の男の子だった。
「今度はこの人達です」

「またしても個性派揃いですわね」
袁紹は顔良の言葉を聞いて少し困ったような顔になっていた。
「これはまた」
「気付いたらこの世界に来ていた！」
「何かと物騒な情勢のようだな」
「僕達でよかったら協力させて」
こう言ってきた三人だった。
「それでいいか」
「是非戦わせてくれ」
「この世界の平和の為にね」
「少なくとも民の為になるのなら」
袁紹はそれならというのだった。
「宜しいですわよ」
「袁紹様、じゃあこの人達も」
「ええ、宜しいですわよ」
それはもう決まっているといった口調だった。
「それでは」
「何かあっさりと決まりましたね」
審配もいた。
「この人達については」
「もうわかっていることでしてよ」
袁紹はいささか面白くなさそうにその審配に対して述べた。
「ですからもう遠慮なくですわ」
「成程、それで」
「それでなんですか」
「ええ、では貴方達も頼みましたわ」
顔良と文醜に返してだった。こうして彼等もこの世界で活躍することになった。
ジョンフンとジェイフンは次々に来る彼等を見てだ。首を傾げさせていた。

「何か向こうの世界にいるのと変わらなくなってきたな」
「そうだね。色々な人が来たしね」
「そうだよな。一番いいのは親父がいないことだな」
それも言うドンファンだった。
「確か董卓さんのところでやりたい放題やってるんだよな」
「何かジョンさんと一緒にね」
「それで相変わらずチャンさんとチョイさんをしごきまくってるんだな」
「他の人達もいるみたいだけれどね」
犠牲者はこの世界では遥かに多いのである。
「何かな、それってな」
「それって？」
「洒落にならないよな」
ドンファンは言う。
「本当に袁紹陣営に来なくてよかったぜ」
「そのうち会うかも知れないけれど」
「ああ、絶対に嫌だな」
ドンファンは心から言った。
「何があってもな」
「兄さんはさぼり過ぎるんだよ、修行でも何でも」
「いいじゃねえかよ。俺は実戦で磨かれるタイプなんだよ」
「おお、じゃあちょっと稽古がてら楽しくやるか？」
ここでアクセルがドンファンの前に出て来た。

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその三

「楽しくな」
「そうだな。やるか」
「おう、容赦はしねぜ」
「こっちこそな」
ドンファンはこの世界を心から楽しんでいた。少なくともチャンやチョイよりは幸せであった。そして劉備のところにも二人来ていた。
「あれ、お姉ちゃん」
「リムルル、貴女もこっちの世界に」
「うん、来ていたの」
茶色がかった髪を首のところで切った少女だった。その服はナコルルと一緒のものだ。その彼女もここに来たのであった。
「それで話を聞いてだったのだけれど」
「そうだったの」
「ええと、何か妖しい気配に満ちてない？」
「ええ」
ここで二人の顔が曇った。
「貴女も感じてなのね」
「来たの、それでなの」
「わかったわ。じゃあ今はね」
「御願いするわ」
こうして二人も加わった。そうしてだった。
もう一人は青い丈の短い学生服にズボン、黒く短く刈った髪にバンダナをしている。それなりに整っているが何か抜けている感じの顔である。
その彼が来てみるとだ。いきなりびびっていた。
「聞いてないよーーーーーーーーーっ！！」

「何が聞いてないの？」
「草薙さんがいるからって来たのに！」
何ともう一人いた。ブロンドの髪を切り揃えた青いめの美女だ。青のブラの上に緑のジャケットを着ている。そして青いズボンという格好だ。
その彼女を見てだ。彼は今にも逃げようとしていた。シェーーッのポーズになっている。
「何でマリーさんまで？」
「私も今来たのだけれど」
「あれ？この人は？」
劉備はブルーマリーを見て逃げようとしているその少年を見て言う。
「マリーさんのお知り合いですか？」
「ああ、矢吹慎吾っていうのよ」
ここでマリーが言う。
「草薙京の舎弟でね。まあお騒がせキャラよ」
「お騒がせさんなんですか」
「あまり強くないけれどそれなりに使えるから」
こう言うのである。
「それに悪い奴じゃないしね」
「いい人なんですね」
「そうよ。まあパシリにでも使って」
「ちょっと、俺パシリですか！」
こう言われてだった。慎吾は泣きそうな顔になる。
「何でなんですか！」
「何でってそれがあんたのキャラクターじゃない」
マリーの言葉は実に冷たい。
「だから受け入れるのね」
「とほほ、俺はこっちでもそんな役なんですか」
何はともあれ彼も加わった。そうしてだった。

遂にだった。何進も来たのだった。
「何か曹操さんと袁紹さんだけでいけるような気がするけれど」
「そこは政治的配慮ですから」
孔明が劉備に対して言う。
「ですから気にしないで下さい」
「そうなのね」
「全然気にしなくていいですから」
また言う孔明だった。
「というか気にしたら駄目ですから」
「そうなの、それじゃあ」
これで納得する劉備だった。そして彼女が来た。
薄紫の髪に長い睫毛の紫の目を持っている。妖艶な美貌をそこにたたえ胸は豊満である。胸と足がかなり露わになっているその姿でやって来た。
服は紫色で鎧は着ていない。その彼女がであった。
「大将軍、ようこそ」
「おいで下さいました」
曹操と袁紹がだ。それぞれ彼女の前にかしづいたのである。
「ではこれより北へ」
「そして烏丸」
「うむ、行こうぞ」
美女は妖しい微笑みと共に二人に告げてきた。
「今よりのう」
「はい、それでは」
「今から我等が」
「そして」
美女はここでだ。かしづく諸将の中に劉備の姿を認めて問うた。

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその四

「そこの者」
「私ですか？」
「そう、そなたじゃ」
劉備を見ての言葉である。
「そなた。名は何という？」
「はい、劉備といいます」
「劉備？」
「字は玄徳です」
自分からその字も話した。
「宜しく御願いします」
「はて、劉というとまさか」
「はい、皇族の血を引いています」
公孫賛が美女に話す。
「中山靖王の末裔です」
「それで今ここにおるのか」
「はい、義勇軍です」
それだと答える劉備だった。
「それで参加させてもらっています」
「皇室の血を引いて義勇軍というのもいただけぬな」
「では何進大将軍」
「ここはどうされますか？」
すぐに袁紹と曹操がその美女何進に問うた。
「この劉備玄徳」
「一体」
「一軍を与えよ」
何進はまずは二人にこう述べた。
「そしてじゃ」

「そして」
「どうされると」
「そのうえで武勲を挙げたならば然るべき官職を与えよう」
そうするというのだった。
「今はとりあえず本陣付の将校の一人に命じる」
「本陣付のですね」
「立場は」
「左様。しかし腕に自信があるのならばじゃ」
何進は柳眉を見ながらさらに話す。
「先陣を務めるがよい」
「劉備殿、ここは」
「任せるのだ」
その劉備に関羽と張飛がそれぞれ左右から言ってきた。
「私達だけでなく星や翠もいる」
「それに紫苑もいるのだ」
「けれど今は」
「いえ、今は先陣を務めるべきです」
孔明もこう言ってきた。
「ここで武勲を挙げれば道が大きく開けます」
「そう。それじゃあ」
「そして劉備よ」
何進はまた彼女に声をかけてきた。
「返答や如何」
「わかりました」
劉備は両手を合わせて何進に答えた。
「それでは」
「うむ、それでは今より軍議に入る」
何進は劉備の言葉を受けたうえで周りに告げた。
「それでよいな」
「はい、それでは」

「今より」
こうしてだった。彼等はその軍議に入った。その結果劉備の先陣が決まった。そして右軍は袁紹、左軍は曹操が指揮を執ることになった。何進は中央軍だった。しかし軍の要が左右にあるのは一目瞭然だった。
出陣の時にだ。劉備は孔明に対して言っていた。
「留守を御願いね」
「はい、お任せ下さい」
孔明はにこりと笑ってそのうえで劉備の言葉に応えていた。
「ここは」
「私達は今から行くけれど」
「蒲公英、大人しくしてろよ」
馬超は劉備の後ろから従妹に対して言った。
「留守も大事な仕事だからな」
「ちぇっ、私も出陣したかったのに」
「まあそう言うな」
その馬岱には趙雲が優しい笑みを浮かべて慰めてきた。
「御主の力は今ここで使え」
「ここで？」
「そう、ここでだ」
こう言うのである。

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその五

「わかったな」
「じゃあ蒲公英はここは留守番なのね」
「娘を御願いね」
黄忠は微笑んで馬岱に告げた。
「どうかね」
「うん、わかったよ」
この言葉には笑顔で返した。
「それじゃあ私頑張るから」
「テリー殿やナコルル殿達もいる」
「これなら盗賊達が攻めてきても大丈夫なのだ」
関羽と張飛も言う。兵のほぼ全てを率いて向かい護りは孔明と馬岱、それにナコルルや舞、テリー、それに草薙達に任せることにしたのだ。
そのうえでだ。孔明はまた言った。
「皆さん一騎当千ですし」
「そう簡単にはここは陥落しないな」
「城壁を築いて正解だったのだ」
「はい、それでは」
笑顔で言う孔明だった。
「皆さん頑張って来て下さいね」
「うん、行ってきます」
劉備もにこりと笑って返す。そのうえで出陣した。そしてその中でだ。何進はふとこんなことを言ったのである。馬に乗りながらだ。
「しかしのう」
「しかし？」
「将軍、一体何が」
「幽州も牧がおらん」

彼女が言うのはこのことだった。
「こうして烏丸がおるのにそれは不都合じゃな」
「そうですね、確かに」
「それは」
誰も公孫賛のことを知らない。尚彼女は劉備と共に先陣にいる。
しかしそのことにも気付いてもらえないままでいるのである。
「では幽州も袁紹殿にお任せしますか」
「そうしますか」
「そうじゃな。まずはこの戦を終わらせてじゃ」
「はい」
「そして袁紹が西の羌を押さえたならばじゃ」
その時だというのだ。
「褒美も兼ねて幽州のことを帝にお話しよう」
「はい、それでは」
「その様に」
「幽州はこれでよい」
何進はこの地はそれでいいとした。
「しかしじゃ」
「しかしですか」
「まだありますか」
「徐州も気懸かりじゃ。交州に益州もな」
「交州は孫策殿にお任せしましょうか」
部下の一人がこう言ってきた。
「ここは」
「それでどうでしょうか」
「そうじゃな。孫策じゃな」
何進もその名前に頷いた。
「あ奴が山越を討てばその時に交州の牧にも任じよう」
「はい、それでは」
「その様に」

「そしてじゃ」
何進は話をさらに進める。
「徐州はいづれ曹操にでも任せるとして」
「益州ですね」
「問題は」
「そうじゃな。あの地には？もいれば南蛮もおる」
何進の顔が曇る。
「治めにくい地じゃ」
「全くです」
「しかも土地は険阻です」
「人が多く豊かな場所ではありますが」
「誰か然るべき者がいればいいのじゃが」
何進は溜息交じりに述べた。
「誰かおらぬかのう」
「難しいところですね」
「全く」
「袁術は危ういし董卓は擁州だけで手が一杯のようじゃしな」
問題は山積みであった。
「どうやら」
「そうですね。益州は今は」
「どうしても人をやる余裕は」
「誰かおらぬかのう」
何進は困った声であった。

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその六

「あの地を任せられる者は」
「今は我慢するしかありませんか」
「仕方ありませんか」
「うむ。仕方あるまい」
何進も今は諦めるしかなかった。
「人がおらぬのではな」
「はい、司馬慰殿は都から動かせませんし」
「宦官達もいますから」
「せめて宦官共さえおらなければじゃ」
語るその顔がさらに忌々しげなものになる。
「全く違うのにじゃ」
「はい、まさに」
「今は」
「仕方がないのう」
溜息交じりにまた述べたのだった。
「今は」
「はい、それでは今は」
「まずは北をですね」
「烏丸を倒す」
何進は言い切った。
「よいな、今からじゃ」
「はい、それでは」
「その様に」
こんな話をしながら北に向かっていた。そうしてであった。
まずは斥候に出ていた高覧からだ。報告があった。
「敵、来ました！」
「遂にですのね」

「はい、数にして五万」
その数も述べられる。
「それだけです」
「五万？」
「それだけだというの？」
それを聞いてだ。進軍する袁紹の両脇にいた田豊と沮授が声をあげた。
「烏丸は数にして三十万近く」
「戦える者は十万近いと聞いていますが」
「それでは今目の前にいる敵は」
袁紹は二人の話を聞いて怪訝な目になった。
「一軍に過ぎませんわね」
「伏兵か、若しくは奇襲を仕掛けて来るか」
「そうしてくるかと」
「わかりましたわ。それでは」
二人の軍師の言葉を聞いてだ。袁紹はすぐに決断を下した。
「黒梅」
「はい」
傍にいた麹義に対して告げる。
「すぐに兵を率いてあの者達を討ちなさい」
「すぐにですね」
「そう、弓兵に騎兵を用いて彼等を倒しなさい」
こう麹義に告げるのだった。
「宜しいですわね」
「わかりました、ではすぐに」
「私達は正面から戦いますわ」
袁紹はその正面を見据えながら述べた。
「そしてその間に」
「今曹操殿から早馬が来ました」
田豊の言葉である。

「今から敵軍の側面を衝くとのことです」
「わかっていますわね、華琳も」
袁紹は田豊の言葉を聞いて満足した顔で微笑んだ。そうしてだった。
「我が軍はこのまま正面から向かいますわ」
「了解です」
「それでは今から」
「おそらく今先陣が敵軍と衝突している筈」
袁紹はこのことを既に予測していた。
「我が軍は後ろからフォローしますわ」
「じゃあ今から」
「行きましょう」
顔良と文醜が言ってであった。そうしてだった。
袁紹軍と曹操軍が敵に向かうその時にだ。劉備率いる先陣は烏丸五万の大軍と戦闘に入っていた。
五人は劉備を守るようにして戦う。槍に矛、それに弓が戦場で煌く。
「たあっ！」
張飛がその蛇矛を前に突き出して敵兵を突き落とす。他の四人も縦横無尽に暴れる。
しかしだった。数が多い。圧倒的な開きがあった。
「関羽さん！」
「心配無用！」
関羽はその手にある青龍偃月刀を振るいながら劉備に対して応える。

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその七

「この程度！」
「けれど数が」
「案ずることはない」
趙雲もその手にある槍を振り戦っている。
「この程度の数ならどうということはない」
「ああ、そうだ！」
馬超も槍を次々に突き出している。
「こんな戦い西涼じゃいつもだったからな」
「例え敵が多くとも」
黄忠の弓が次々に放たれる。
「これ位なら敗れはしません」
「鈴々達は一騎当千なのだ」
張飛は暴れ続けている。
「だからこれ位は何ともないのだ」
「張飛ちゃん・・・・・・」
「真名でいいのだ」
張飛はここでこう劉備に返した。
「鈴々は共に戦う人には真名を預けるのだ」
「それでいいの？」
「いいのだ」
「そうだ、我等もだ」
「それは同じさ」
趙雲と馬超も言う。
「この真名預けよう」
「何時でも呼んでくれよ」
「はい、これも何かの縁です」
黄忠も応えるようにして言う。

「ですから」
「それじゃあ。今から」
「うむ、宜しく頼む」
関羽もここで言ってきた。
「これからは真名同士で呼び合おう」
「わかったわ。じゃあ愛紗さん」
「うむ」
「鈴々ちゃん」
また呼ばれる。
「星さん、翠さん、紫苑さん」
「うむ」
「ああ、いい呼び方だな」
「そうね」
「御願いします」
あらためての言葉だった。
「ここは」
「わかっている、それではな」
「気の済むまで戦いましょう」
関羽と黄忠が言う。彼女達は見事踏ん張りそのうえで袁紹、そして曹操の援軍を得た。これで何とか凌ぎきったのであった。
このことは曹操達にも伝わった。彼女達は夜にそれを聞いて満足した顔で頷いた。
「中々やるわね」
「いえ、私はそんな」
「いえ、見事よ」
天幕の中でだ。曹操は劉備に対して微笑んで述べていた。
「おかげで緒戦はものにできたわ」
「私は助けられてばかりで」
劉備は謙遜したままであった。
「ですから本当に」

「指揮官は自ら武器を取らなくていいのよ」
しかし曹操はこうも言うのだった。
「だからね。それでいいのよ」
「そうなんですか」
「その通りですわ。貴女は見事耐え抜きましたわ」
袁紹もいた。そのうえで劉備に対して言うのだ。
「その指揮で」
「指揮っていっても」
そう言われてもだった。やはり劉備には頷けるものがなかった。
「私はただいただけで愛紗さん達が」
「いや、私達もここまで満足に戦えることはなかった」
「その通りなのだ」
関羽と張飛もまた彼女に言ってきた。
「劉備殿がいてくれると何か違う」
「不思議と身体が動くのだ」
「ということはだ」
公孫賛も一応いる。
「桃香は人を動かす何かがあるのだったな」
「そうね。ただ」
「そういう貴女は一体」
曹操と袁紹はその公孫賛を怪訝な顔で見ていた。

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその八

「誰なのかしら」
「見たところ一軍の将ですけれど」
「だから公孫賛だ！」
たまりかねた声で二人に返す。
「何故忘れる！前に話したばかりだぞ！」
「公孫賛？」
「やっぱり知りませんわね」
二人はそう言われても首を傾げさせるばかりだった。
「何処かで聞いたことがあるような」
「けれどそれでもどうしても」
「幽州の牧だ。しかもこの先陣は殆どが私の軍だぞ」
たまりかねた声になっている。
「幽州の軍二万だ。何故忘れる」
「だから幽州には牧はいないわよ」
「それでどうして二万もいますの？」
「何度言っても何故覚えてもらえないのだ」
公孫賛もいい加減困り果てていた。
「全く。これはどういうことだ」
「まあまあ白々ちゃん」
「白蓮だ」
劉備はいつもの様に慰めるが真名を間違えていた。
「ここで間違えるか」
「あれっ、間違えていたの？」
「間違えている。まあいい」
流石に今は言い返す気力もなかった。
「しかし。この戦いまずは勝利を収めて何よりだ」
「けれど。数が少ないわね」

「そうですわね」
曹操も袁紹も烏丸の軍について話した。
「十万近くいたそうだけれど」
「何処に行きましたのかしら」
「残りは何処かに行った」
「それが問題なのだ」
関羽と張飛も怪訝な顔になる。
「本軍に向かったか」
「嫌な予感がするのだ」
張飛は顔を曇らせて述べた。
「鈴々達にとってとてもよくないことが」
「それは一体何だ？」
「まだよくわからないのだ」
関羽に問われても暗い顔のままだった。しかしその時だった。
孔明達がいるその桃家荘にだ。突如として敵が来た。
「大変！何か来たよ！」
「えっ、敵ですか！？」
孔明は馬岱の声を聞いて驚いてベッドから出て来た。
「だとするとこれは」
「何！？盗賊！？」
「そんなものじゃありません！」
孔明は慌てて城壁の方に向かいながら共に来る馬岱に対して告げた。
「これはですね」
「うん、これは」
「烏丸の軍です！」
それだというのだ。
「それです！」
「えっ、けれどそれは」
それを聞いてだ。馬岱は驚きの声をあげた。

「大将軍達の軍と戦闘中なんじゃ」
「烏丸の武器はその速さです」
機動力だというのじゃ。
「ですからこうして桃家荘にも兵を送ってきたのです」
「兵をって」
「こうして後方の基地を陥落させて補給を絶つつもりです」
孔明はそこまで読んでいた。
「それが彼等の戦術です」
「じゃあまずいんじゃないの？」
馬岱は孔明のその言葉を聞いて暗い顔になった。
「この桃家荘もかなりの物資が集められてるし」
「はい、ここを陥落させられるとかなり危ないです」
孔明もこのことはよくわかっていた。
「戦全体に大きな影響を及ぼします」
「そうだよね、それに」
「はい、私達には数はあまりありません」
このことも話した。

## 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその九

「テリーさん達がいてくれていますが」
「そうだよね。流石に何万も来たら」
「こうした時に備えて城壁を築き壕を掘っておきましたけれど」
流石孔明だった。そうした備えは忘れていない。
「ただ」
「ただ？」
「烏丸は馬を使うので城攻めは不得手です」
まずはこう言った。
「けれど。何処かで攻城兵器を手に入れていたら」
「危ない？」
「かなり危険です」
こう馬岱に話す。
「その時は何とかしないと」
「あのさ、それでね」
「それで？」
「すぐに連絡しよう」
馬岱はすぐに言った。
「ナコルルにでも前線に行ってもらって」
「そうですね、援軍ですね」
「うん、それ」
まさにそれだった。
「それを呼ぼう」
「はい、それでは」
ナコルルが来ていた。それで頷いた。
「それじゃあママハハと一緒に」
「ああ、すぐに行ってくれ」
「頼んだぜ」

テリーと丈がナコルルに告げる。
「俺たちはその間守るからな」
「宜しく頼むぜ」
「こうなったことも何かの縁だしね」
アンディも言う。
「こうなったら」
「私達がいれば何とかなるわよ」
舞は口ではこう言っても真剣な顔をしていた。
「何があってもね」
「はい、敵がどれだけいても頑張りましょう」
「よっしゃ、やったるで！」
ケンスウはその顔に気合を入れている。
「何があってもな！」
「援軍が来るまで頑張りましょう」
アテナもいる。
「できたら来る前に」
「おいおい、それはまた強気だね」
紅丸も来ていた。
「けれどその強気がいいぜ」
「そうだな。打って出るのもまたよしだ」
大門は細い目で腕を組んでいる。
「守るだけでは限られている」
「よっし、じゃあ早速行くぜ！」
草薙の拳はもう紅蓮に燃えている。
「派手にやってやるか！」
「何か凄い戦いになりそうですね」
香澄は意を決した顔になっている。
「運命の分かれ道みたいな」
「そうかも知れんのう」
「そうですよね。生き残るかどうか」

鎮とパオはこう離す。
「しかしならばこそじゃな」
「はい、誰も死んではいけませんね」
「お姉ちゃん、御願いね」
リムルルは姉を見ていた。
「どうか劉備さん達に」
「とほほ、何かとんでもない場所に来たなあ」
「文句言わないの」
マリーが真悟に対して告げる。
「こうしたことは予想できたでしょ」
「まさかこんな大軍に囲まれるなんて」
「皆さん、それじゃあ御願いします」
孔明は生真面目な顔になっていた。
「何があっても守り抜きましょう！」
「よっし！打って出るぞ！」
「行くで！」
リョウとロバートは早速城壁から飛び降りた。そうして早速技を放つ。

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその十

「虎煌拳！！」
「飛燕龍神脚！！」
こう言ってそれぞれの技で烏丸の兵達を吹き飛ばす。そしてユリも続く。
「私も！」
「何か凄い人達ですね」
孔明も敵の中に飛び込んでいく彼等を見て驚きを隠せない。
「まさか空中から技を放てるなんて」
「おっと、それ位普通だぜ」
「私達もこうして！」
今度はテリーとアンディだった。二人も跳ぶ。
「パワーダンク！」
「龍撃弾！」
彼等は早速攻撃をはじめた。それが戦いのはじまりだった。そしてナコルルはママハハと共に前線に向かう。そうして事態を報告するのだった。
「えっ、桃家荘に！？」
「烏丸の軍がか！」
「はい、そうです」
ナコルルはこう劉備と関羽に対して告げる。
「数はよくわかりませんでしたが」
「間違いないな、別働隊の全てだ」
趙雲はこう述べた。
「それだけ来ている」
「それじゃあ数万なのだ」
「おい、洒落にならねえぞそれってよ」
張飛と馬超も狼狽しだした。

「それだけの数であそこに攻められたら」
「幾らキングや舞達がいてもよ」
「危険ですね」
黄忠も顔を曇らせていた。
「このままでは娘も」
「すぐに戻ろう」
劉備が狼狽する寸前の顔で言った。
「さもないと朱里ちゃん達が」
「いや、劉備殿」
だがここで関羽がその劉備に対して言う。
「今は戦いの中だ。ここで戻っては」
「駄目っていうの？」
「そうだ、作戦中だ」
こう言うのだった。
「だからだ。ここで戻ってはだ」
「けれどこのままじゃ」
劉備は困った顔で関羽に返す。
「桃家荘が」
「そうなのだ、ここは戻るのだ」
張飛も眉を顰めさせて言う。
「何があっても」
「そうだよ、朱里達が危ないぜ」
馬超も劉備、張飛と同じ考えだった。
「すぐに戻らないと」
「そうね。馬だと何とかまだ間に合うわね」
黄忠も述べる。
「今だと」
「そうよ、戻ろう」
また言う劉備だった。
「今のうちに」

「はい、今ならまだ間に合います」
ナコルルも言ってきた。
「ですから」
「愛沙は仲間を見捨てるのだ！？」
張飛はその関羽に対して問うた。
「真名まで預け合った仲間を」
「馬鹿を言うな！」
そう言われてはだった。関羽も怒った声で言い返す。
「私がその様なことをするか！しかしだ！」
「しかしどうだというのだ！」
「今は戦いの中だ。戻れる筈がない！」
「いえ、戻りましょう！」
劉備は言う。
「関羽さんは私が戦功を挙げて出世されることを望んでおられるんですよね」
「そ、それは」
「ですから。私の為に」
その関羽を見ての言葉だった。
「そこまでして」
「劉備殿はここで武勲を挙げられるべきだ」
関羽はあくまで話す。
「そして中山靖王の子孫として。皇室の方として」
「そんなものいりません！」
だが劉備は言った。

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその十一

「私は地位や権力より皆の方がずっと大事です！ですから」
「それで宜しいのか？」
関羽は真面目な顔で劉備に問うた。
「劉備殿はそれで」
「はい、構いません」
劉備も毅然とした顔で話した。
「ですから。ここは」
「しかし、貴殿は」
まだ劉備を気遣う関羽だった。
「このまま」
「話は聞いたわ」
「今しっかりと」
ここでだった。後ろで声がしてきた。
「そうなのね。桃家荘がね」
「お友達の危機ですよね」
「あっ、曹操さんに袁紹さん」
「貴殿達か」
劉備と関羽は二人が来ていたことに気付いた。
「何時の間にここに」
「来られていたのだ？」
「さっきだけれどね」
「作戦のことでお話に来たのですけれど」
こう話す二人だった。
「大変なことになってるわね」
「事情はわかりましたわ」
「い、いや別に」
関羽はそれは隠そうとした。

「何でもない。こちらのことでだ」
「桃家荘を陥落させられてはこの戦を続けられないわ」
「後方基地としても最大ですし」
「すぐに援軍が必要ね」
「その通りですわ」
だが二人はこう言うのだった。
「貴女達にすぐに行ってもらいたいのだけれど」
「宜しくて？」
「しかしそれでは」
関羽は二人の考えを察してすぐに言葉を返した。
「この戦自体が」
「あら、この程度の相手どうにでもなるわ」
「我が袁家の軍を甘く見てもらっては困りますわ」
二人は不敵な笑みと共に関羽に対して返した。
「さて、それじゃあ」
「ええ、今からですわね」
今度は二人でその笑みのまま言葉を交わした。そのうえで。
「烏丸の軍を一気に叩いて」
「わたくし自ら指揮しますわ」
「麗羽殿、それは」
「幾ら何でもよくないのでは」
曹洪と曹仁が袁紹のその言葉にすぐ突っ込みを入れた。
「どうしてそういつも前に出られるのですか」
「弓矢の前に」
「大将は前に出るものでしてよ」
しかし袁紹は得意そうに笑って述べる。
「ですからこうして」
「ですから。将が討たれてはどうしようもありません」
「何故昔から貴女は」
「ああ、高覧に張？だったわね」

「はい、曹操様」
「何でしょうか」
二人は曹操のその言葉に応えた。
「麗羽の悪い癖が出たから」
「そうなんですよね」
「戦になって波に乗るとすぐに先頭に立ちたがる方ですので」
高覧と張?は困った顔で話す。
「危なくて見ていられません」
「何かあったら」
「昔からそうなのよね」
曹操もこう言うのだった。
「全く。ここはね」
「はい、私達が抑えますから」
「流石に主を失うわけにはいきませんし」
何だかんだで呆れながらも家臣達に愛されているようである。

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその十二

「私達がこのまま右翼から敵の正面を引き受けますので」
「曹操様はまた側面から御願いします」
「ええ、わかったわ」
二人のその言葉に頷く曹操だった。そのうえで曹洪と曹仁に顔を向けて告げた。
「冬瞬、夏瞬」
「はい、それでは」
「すぐに軍に戻り動くわよ」
そうするというのだった。
「正面は麗羽の軍が引き受けるから」
「全く。将が前に出なくて何をしますの」
「ですから幾ら何でも矢面に自ら立たれないで下さい」
「麗羽様は剣しか使えないですし」
何気にそれが問題の袁紹だった。
「ですから今回は後ろの方で全体の指揮を御願いします」
「最悪弓矢が届かない場所にいて下さい」
「全く。それでは戦の意味がありませんわ」
まだ言う袁紹だった。極めて不機嫌な顔になっている。
「将たる者が前に出なくては」
「あのね、幾ら何でも限度があるのよ」
曹操も溜息混じりに袁紹に告げる。
「そういうことは貴女のところの顔良や文醜がやってくれてるでしょう」
「それはそうですけれど」
「ならそれでいきなさい。私だってそういうことは春蘭や秋蘭に任せてるのよ」
「あの二人にですのね」

「わかったら大人しくしておきなさい」
曹操は告げた。
「いいわね」
「わかりましたわ。それなら」
「はい、それじゃあ麗羽様」
「今はそうしましょう」
高覧と張?がまた主に告げる。
「騎兵隊だけじゃなくて黒梅さんが強弩も用意していますし」
「それで防いで」
「そうですわね。ではその様にして」
作戦のことにはまともに話を聞く袁紹だった。
「戦いますわよ」
「はい、それじゃあ」
「今から」
こう話してだった。劉備達を援軍に向かわせる。彼女達は曹操と袁紹に礼をするとすぐに桃家荘に向かった。だがここでだった。
公孫賛がだ。二人のところに来て言った。
「桃香達は何処だ?」
「あら、誰だったかしら」
「何処かで見たような」
曹操と袁紹はその彼女の顔を見てきょとんとした顔になる。
「見たところ一軍の将だけれど」
「どなたでして?」
「だからいい加減覚えてくれ」
公孫賛もいい加減泣きそうな顔になっている。
「私は公孫賛だ。白馬のだ」
「白馬っていっても多いしね」
「そうですわね」
二人は白馬といっても動じない。
「だからそれを言われても」

「特にこれといって」
「何故いつもこうなんだ」
公孫賛は歯噛みしてしまった。
「私は。何故いつもこうなんだ」
「さて、それじゃあね」
「ええ、烏丸の軍を叩きますわ」
二人はそんな公孫賛を他所に戦の話を進める。
「今すぐに」
「そして戦いを終わらせますわよ」
こうして公孫賛を蚊帳の外に置いて話すのだった。どうしても存在を示せない彼女だった。
桃家荘ではだ。激しい戦いが繰り広げられていた。
「ベノムストライク！」
「とおーーーーーーーーっ！！」
キングが脚から気を、舞が忍蜂を放って敵達を倒していた。
これで数騎馬ごと吹き飛ばされる。しかしだった。
敵は次から次に来る。門の前はまさに修羅場だった。
「くっ、幾らでも来るな」
「そうね」
キングも舞も苦い顔で歯噛みしている。
「昼も夜も来る」
「一体何時休んでいるのよ」
「どうやら交代して攻めてきていますね」
孔明が言った。今彼らは満月の下で戦っている。
「ですからこうして」
「数は向こうの方が圧倒している」
大門も言う。
「それならこれも当然のことだ」
「その通りですね。こちらは村の人達を入れても五百足らず」
兵としての数である。

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその十三

「それに対して彼等はです」
「四万はいるぜ」
二階堂紅丸は雷の拳で敵を倒していた。
「この数はな」
「ああ、そうだな」
草薙は地面に炎を放ちそれで敵を焼いている。
「洒落にならない数だな」
「けれど何とか防いでますね」
アテナは顔に汗をかきながらもこう述べた。
「今は」
「騎馬ですから」
孔明はだからだという。
「馬は城壁を攻めることに向いていません」
「梯子も城を攻める兵器もないからのう」
鎮はこのことがよくわかっていた。
「だからじゃな」
「そうやな。それが救いやな」
ケンスウは超球弾を放っている。
「せめてものな」
「いえ、待って」
しかしだった。ここでリムルルが言った。
そしてだ。戦場の後ろの方を指差した。そこには。
「あれってまさか」
「はわわ、あれは！？」
孔明がそれを見て驚きの声をあげる。
「あれは投石器です！」
「じゃああれで城壁を壊されたら」

「まずいですね」
「はい、危険です」
こうパオと香澄にも答える。
「ですからここは何とかしないと」
「じゃあ私が行くわ」
マリーが名乗り出た。
「ここはね」
「いえ、それは駄目です」
しかし孔明はマリーのその提案を退けた。
「それは」
「どうしてなの、それは」
「敵の真っ只中です。若しマリーさん御一人で行けば」
「死ぬっていうのかしら」
「はい、そうです」
まさにその通りだった。
「ですから駄目です」
「そんなこと言っていられる状況じゃないと思うけれど」
「それでも駄目です！」
孔明の言葉は彼女らしくない強さがあった。
「マリーさんを死なせるわけにはいきません」
「だからなのね」
「はい、そうです」
また強い言葉で言う孔明だった。
「ここはまだです」
「けれどこのままじゃ城壁やばいぜ」
丈もこのことを心配している。
「もう少しあそこに近付けば俺のハリケーンアッパーであんなのは一発で破壊できるんだけれどな」
「はい、もう少しなのですが」
孔明もその距離を見ていた。

「もう少しであそこにまで」
「しかし。その少しが辛いね」
アンディも残影拳で敵を馬ごと倒しながら難しい顔になっている。
「それがね」
「ちっ、そうだな」
テリーもそれは認めるしかなかった。
「この状況じゃな」
「しかも何かな」
草薙は難しい顔で周囲を見回す。
「敵がさらに増えてきたみたいだしな」
「このままじゃ門に帰るしかないかも」
リムルルは狼狽しだしていた。
「数が多過ぎるから」
「そうですね。残念ですけれど」
孔明もリムルルの言葉に傾く。
「ここは」
「じゃああれどうするの？」
真吾は投石器を指差して一同に問うた。
「五台もあるけれどさ」
「仕方ありません」
孔明もこう言うしかなかった。

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその十四

「今は」
「そんな、じゃあこのまま」
「まだに決まってるだろ」
その真吾に草薙が言う。
「城壁を破られたら俺達がその城壁になるんだよ」
「俺達がですか」
「戦えるなら戦うんだよ」
草薙はまた言った。
「それでわかったな」
「はい、じゃあ」
「この村は何があっても護る」
草薙は本気だった。
「いいな」
「はい、じゃあ」
「そうです。何があっても守り抜きます」
孔明も草薙のその言葉を受けて意を決した。
「私達で」
こう言って今は仕方なく下がろうとした。しかしその時だった。
「朱里ちゃん、皆！」
「無事か！」
何かが来た。それは。
騎馬の一団だった。それが烏丸の兵達を薙ぎ倒していく。
「まさかあれは」
「援軍！？」
「もう来たのか！？」
「それにあれは」
見ればだ。その先頭にいるのはだ。

劉備だった。そして。
「関羽さん」
「それに張飛も！」
「お姉様もいるわ！」
馬岱は従姉の姿を認めていた。そして瑠々も。
「お母さんも」
「その通りだ！」
そしてだ。何故か彼等がいる門の上の物見櫓ところからだ。あの声がしたのであった。
「今我々は義の為に来たのだ！」
「！？あんたは」
「一体」
キングと舞はその声の主を見た。するとそこにいたのは。
誰がどう見ても趙雲だった。ただ仮面をしているだけである。その彼女が櫓の上に颯爽と立っていたのである。
「おい、あれって」
「そうだよな」
「誰がどう見ても」
「やっぱり」
皆彼女を指差してあれこれと話す。それは最早誰がどう見てもであった。
「あの、趙雲さん」
リムルルが呆然としながら彼女を見上げながら問うた。
「何をされてるんですか？」
「あっ、リムルルちゃんそれは」
しかしだった。ここで孔明が言う。
「言ったらいけないことになっています」
「言ったらなんですか」
「はい、あの人は華蝶仮面さんです」
彼女は流石にわかっていた。

「ですから。ここはですね」
「華蝶仮面さんと御呼びするんですね」
「そうです。あの人に合わせないとメンマを取り上げられた時と同じだけ怒りますから」
「難しい人なんですね」
真吾も呆れながら言う。
「それって」
「まあ気にしないで下さい」
強引にそういうことにする孔明だった。
「それでなんですが」
「乱世に舞い降りた一輪の花」
趙雲の言葉は続いていた。
「人呼んで華蝶仮面！」
「という設定なんだな」
「成程」
「じゃあそういうことで」
「やっていきましょう」
皆それに合わせることにした。そうしてであった。
「それで華蝶仮面さん」
リムルルはこう言い換えた。
「それで私達をですか」
「そうだ、助太刀に参った」
まさにその通りだというのだ。白い満月を背にして颯爽と言う。
「今ここに！参る！」
天高く跳んでだ。そのうえで何処からともなく来た愛馬に乗った。

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその十五

そこから烏丸の兵達を手にしている槍で縦横無尽に突き崩す。少なくともそれで孔明達は助かった。

そして彼女だけではなかった。他の面々もだ。

「はあああああああっ！！」

「たあああああああっ！！」

関羽と張飛がだ。それぞれの得物から衝撃波を出してそのうえで投石器を一撃で叩き潰したのである。

それからだ。馬超もだ。

「あたしだってな！」

「翠、出せるか」

「ああ。星、そっちはどうだ！」

「いけるぞ！」

こう馬超の隣に来て言うのである。

「私もまたな」

「そうか、それならな！」

「やるぞ！」

「愛紗達と同じくな」

二人もそれぞれの槍を大きく振った。それによってだ。

凄まじい衝撃波を出してだ。彼等もその投石器を粉砕したのだった。

「何っ、投石器が！？」

「一撃でか！」

烏丸の兵達もこれには唖然となった。

「まさか、あいつ等」

「化け物か！？」

「化け物ではないわ」

黄忠は馬上から弓を放っていた。

「ただ」
「ただ！？」
「何だってんだ？」
「虎よ」
それだというのである。
「そう覚えておくといいわ」
「人が虎だって！？」
「どういうことだ、それは」
「それぞれが虎の強さと誇りを持っている」
言いながらだった。黄忠は最後に残った投石器に弓をつがえてだ。
そうして。
放った。するとそれは衝撃波そのものとなって投石器に突き刺さった。それで一撃で粉砕してしまったのである。
「これでよし、ね」
「紫苑さん、お見事です」
これには孔明もこう言うだけだった。８４
「これで投石器は全てですね」
「ええ、そうみたいね」
黄忠もその言葉に頷いた。
「これで」
「そうだな。後は敵の掃討だけだ」
関羽は周囲を見回して述べた。
「それで終わりだな」
「よし、行くぜ！」
「皆でやっつけるのだ！」
馬超と張飛が叫んでだ。そのうえで周囲の敵を倒していった。
桃家荘での戦いは劉備達の援軍により彼等の勝利となった。そして烏丸本軍との戦いもまた勝利を収めることができたのである。
「勝ちましたわね」
「全く。今回もやってくれたわね」

曹操が勝ち誇る袁紹の横で溜息をついていた。
「どうしてそう前線に出たがるのよ」
「ですから戦ですから」
「全く。命知らずとかそういう問題じゃないでしょ」
「全くです。何というか」
「何かあってからでは遅いのですが」
夏侯惇と夏侯淵もこれにはぼやいてばかりだ。
「麗羽殿は血気にはやり過ぎます」
「我等から見てもです」
「あら、前線で指揮を執るのは当然でしてよ」
まだ言う袁紹だった。
「それは」
「だから。総大将が出てどうするのよ。しかも」
曹操の溜息と共の言葉が続く。
「この戦いはそこまでする戦いじゃないでしょ」
「そうでして？」
「そうよ。まあとにかく戦いは終わったわ」
曹操はそのこと自体はいいとした。
「これでね」
「そうですわね。ところで」
袁紹はここで話を変えてきた。
「劉備さんはどうでして？」
「ああ、あのおっとりした方ですか」
「そういえばあの方は」
夏侯惇と夏侯淵も言われて思い出した。
「下手をすれば命令違反になりますが」
「どうしたものか」
「それならいい考えがあるわ」
しかしここで曹操が言った。

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその十六

「劉備は私達の命令で後方に攻撃をかけていた敵の別働隊を撃退した」
「あっ、それならいいですね」
「ですよね。武勲を挙げたことになりますよね」
顔良と文醜は曹操のその言葉を聞いて笑顔になった。
「命令違反にもなりませんし」
「劉備さんにとってかえっていいですよね」
「そうですわね。これでいいですわね」
袁紹もそれでいいとした。
「では大将軍にはその様に」
「ええ、そうしましょう」
こうしてだった。彼女達は何進に対して劉備について報告した。
これを受けて何進は劉備の功績を認め琢の相に任じたのだった。
「私が、ですか」
「はい、この度の武勲を認められてです」
「それによってです」
関羽と孔明がにこりと笑って劉備に告げていた。
「それでなのです」
「お受けされますか？」
「なっていいんですよね」
劉備は戸惑いながら二人の言葉に応えた。
「私が」
「是非にとのことです」
「何大将軍からですよ」
「ということは」
それを聞いてだ。黄忠が述べた。
「皇室の外戚である大将軍のお言葉だからそのままなりますね」

「それなら問題ないのだ」
張飛も笑顔で頷く。
「お姉ちゃんは是非なるべきなのだ」
「お姉ちゃん、そうだな」
今の張飛の言葉に趙雲がふと目を動かした。
「互いに力を合わせて勝利を収め救い合った。だからここは」
「ここはって何だ？」
馬超がその趙雲の言葉に顔を向けた。
「何するんだよ」
「ひょっとして義兄弟の契りとか？」
馬岱はそれではないかというのだった。
「それなの？」
「そうだ、それだ」
趙雲は微笑んで馬岱に述べた。
「どうやら我等も主に巡り会えたようだしな」
「主、そうですね」
孔明もその言葉に微笑んだ。
「劉備さんこそがですね」
「主って私が」
「そうだな、劉備殿なら問題はないよな」
馬超も笑顔で話す。
「援軍に戻るのを決めたのも劉備殿だったしな」
「よし、なら話は決まりだ」
関羽も優しい笑みになっていた。
「劉備殿を我等の主として」
「そして義兄弟の契りを結びましょう」
黄忠もいた。
「劉備殿が琢の相になったそのお祝いも兼ねて」
「さあ、それならいい場所がありますよ」
孔明が笑顔で話す。

「そこで宴を開きましょう」
「よし、じゃあ俺達もな」
「参加させてもらうか」
テリーと丈が笑顔で言ってきた。
「俺達は俺達で兄弟がいてそれには入られないがな」
「それでもな。酒に御馳走は頂くからな」
「何か現金ね。けれどいいわ」
舞は微笑みながら述べた。
「それでね」
「それじゃあ皆さん行きましょう」
孔明が笑顔で話した。
「是非」
「よし、それじゃあ」
「行くのだ！」
最後に関羽と張飛が応えた。そうしてだった。

# 第二十一話　劉備、友を選ぶのことその十七

全員で来た場所は桃園だった。そこは桃色の花が咲き誇る素晴しい場所だった。そしてそこで七人がそれぞれの武器、それに団扇を重ねていた。

「我等は生まれた時は違えども」

「生きる時は同じ」

「そして死ぬ時も同じ」

「それが分かたれることはない」

「例え何があろうとも」

頭上に掲げられたそれぞれの武器が重なり合っていた。そのうえでの言葉だった。

「今ここに誓おう」

「兄弟として」

「はい」

この言葉と共にだった。乙女達は義姉妹となった。

それを見てだ。馬岱が微笑んでいた。

「蒲公英は加わらなかったけれどいいものね」

「何で入らなかったんだ？」

二階堂がその馬岱に問う。彼等は桃の木のところに立っている。

「あんたは」

「蒲公英は翠お姉ちゃんともう義姉妹みたいなものだからね。だから」

「それでか」

「従姉妹同士だから」

だからだというのだった。

「だからよ」

「そうか、それでなのか」

「誘われたけれどいいかなって思ったのよ」

そうだとも二階堂に話す。
「だからね。蒲公英は見てるだけなの」
「それもありだな。じゃあな」
「そうね、誓いも終わったし」
「飲むぜ。刺身もあるしな」
「おいおい、相変わらず好きだな」
草薙は二階堂が笑顔で刺身と言ったことに少し呆れた声で述べた。
「生の魚は結構危ないぜ」
「へっ、俺がそれ位でどうにかなるかよ」
二階堂は笑いながら草薙に返した。
「もっとも変な魚は焼くがな」
「それがいい。そうした魚はわかるな」
「ああ、直感でな」
わかると。大門にも答える。
「とにかく早速飲んで食うか」
「そうだな。そうしよう」
最後に大門が頷いてだった。全員で宴に入る。戦士達は今集った。
だがまだ星が多く残っていた。その星達もまた集っていくのだった。

第二十一話　完

２０１０・６・２１

# 第二十二話　ガルフォード、見てはいけないものを見るのことその一

第二十二話　ガルフォード、見てはいけないものを見るのこと

「何だ？結構いるな」

「そうだな」

青い忍者装束の金髪碧眼の男がだ。黒い忍者装束に覆面の男に話していた。金髪の端整な男の傍には黒と白の毛の犬が合わせて四匹いる。

「こっちの世界に来たのは俺達だけじゃなかったか」

「うむ、それを思うと頼りになるか」

「そうだな。それでここの知事か？」

「大名だろう」

二人の言葉はここでは食い違っていた。

「それは」

「ああ、大名か？」

「確かそうだったな」

「そうだったか」

「違うわよ」

しかしだった。二人の前に立ち案内している荀？がそれを否定した。

「何かこっちの世界に来た人って知らない言葉よく使うけれど」

「あれっ、違うのか」

「では何というのだ」

「牧よ」

荀？は後ろの二人に顔を向けて述べた。

「それよ」

「ああ、そう呼ぶのか」

「そうだったのか」

「そうよ。ええと、それで」
荀？はその二人を見ながらだ。また述べた。
「あんた達の名前は」
「ガルフォードっていうんだ」
「服部半蔵という」
二人はそれぞれ名乗った。
「宜しくな」
「曹操殿だったか」
「そうよ、曹操様がこの二つの州の主よ」
荀？は二人にこのことも話した。
「あんた達の力、頼りにさせてもらうそうよ」
「そうか、それならな」
「我等の力存分に使わせてもらおう」
二人は言った。
「いいな、パピー」
「ワン」
ガルフォードは自分の傍のその犬に対して話す。するとそのパピーは嬉しそうに鳴いて応えてきた。
「パパー、ピピー、ピパーもそれでいいよな」
「ワン」
「ワン」
「ワン」
小さめの三匹の犬も嬉しそうに応える。ガルフォードはその声を聞いて笑顔で述べた。
「そうか、御前等もそれでいいか」
「犬との話ができるの？」
「ああ、そうなんだよ」
ガルフォードは笑顔で荀？に対して答えた。
「忍術以外にな。犬の話もわかるんだよ」
「ふうん、そうなの」

「ああ、他にもナコルルって娘も犬の言葉がわかるがな」
「ナコルル？あの娘ね」
荀？はその名前にはすぐに応えた。
「劉備殿のところにいる」
「知ってるのか」
「ええ、少しだけれどね」
荀？はこう半蔵にも応える。
「知ってるわ」
「そうか」
「それでだけれど」
荀？は二人にあらためて話した。
「あんた達もこれから宜しく頼むわね」
「ああ、宜しくな」
「それではな」
こうしてだった。彼等もまた曹操の陣営に加わったのだった。
そしてだ。彼等は鷲塚達と話した。場所は酒場だった。
「何だ？じゃあこっちの世界は随分物騒なのか」
「ああ、そうだ」
「曹操殿の領地は平和だがな」
鷲塚と双角がこう二人に話す。

# 第二十二話　ガルフォード、見てはいけないものを見るのことその二

「それでも確かな牧殿がいない国はだ」
「かなり酷いようだな」
「そうか、悪がはびこってるのか」
「厄介な話だな」
「うむ、今この国の王朝の力は弱まっている」
今いったのは十兵衛だった。
「それが厄介な問題となっているのだ」
「じゃあ俺達がここに来たのはそれを何とかする為か？」
「誰に呼ばれたのかはわからぬが」
「そうだな」
ここでだ。辮髪の上半身裸で白い服を下に着た筋骨隆々の男が来た。それは。
「御主達も来ていたか」
「ああ、王虎の旦那」
「貴殿も来ていたか」
「縁あってのようだな」
王虎は二人に対して述べた。
「どうやらな」
「ああ、そうだな」
「その様だな」
二人もそれに応えて話す。
「何か色々な面子が揃ってきているな」
「確かにな」
「我等だけではないぞ」
狂死郎がこう話す。
「ここにはおらぬが覇王丸もいるしのう」
「シャルロット殿もおられる」

ズィーガーもいた。
「とにかく多くの勇士が集ってきている」
「へえ、まだいるのかよ」
「そこまでいくと面妖ではあるな」
半蔵もそこまで聞いて流石にいぶかしむものがあった。
「何かあるのか」
「もしやと思うのだが」
ここで言ったのはズィーガーだった。
「アンブロシアがこの世界に」
「それは否定できんな」
十兵衛は服の袖の中で腕を組みながら述べた。
「我等がここに来たのは何もなくてではあるまい」
「そうじゃな。縁あってのことなのは間違いない」
狂死郎も彼のその言葉に頷く。
「それを考えればだ」
「今はだ」
双角が話す。
「ここに来たことを祝うとしようぞ」
「ああ、そうだな」
ガルフォードは双角の言葉には明るく返した。
「今はな」
「飲むか」
「ここはな」
こう話してだった。彼等はこの日はしこたま飲んだのだった。そうしてその夜のことだった。ガルフォードは実に奇怪な夢を見た。
「西暦一八四年」
何故かナレーションが入って来た。
「世界に二人の男が投下された」
かん高い声で告げられる。そうして。
不気味な、形容しがたい男達が出て来た。そうして。

「人類は恐怖に包まれた」
「何だこれは」
ここでガルフォードは思わず言ってしまった。
「それにあの連中」
「うっふ～～～～ん」
「さあて、行くわよ」
左右に辮髪にしてピンクのビキニの筋骨隆々の大男である。髭まであるが何故か化粧までしている。えも言われぬおぞましい姿だ。
そしてもう一人はだ。白い口髭に妙な髪形のこれまた筋骨隆々の大男だ。上はタキシードを羽織っているがその下は何と極めて小さい、乳首だけ隠したブラである。そして下半身は褌という格好である。
その男達がだ。身体をくねらせながら蠢いていたのだ。そして。
彼等が動く度にだ。周囲で大爆発が起き人々が吹き飛ばされていく。

# 第二十二話　ガルフォード、見てはいけないものを見るのことその三

「うわあっ！」
「ぎゃあっ！」
「この世界に平和をもたらす為に」
「私達、頑張っちゃうわよお」
「よ、妖怪だ！」
「お化けだ！」
しかし周囲の反応はこんなものだった。
「に、逃げろ！」
「殺されるーーーーーーーーっ！！」
「あら、失礼ね」
「こんな美女を捕まえて」
しかし男達の態度は変わらない。
「私達は平和の為にここに来たのよ」
「それでどうしてそんなことを言うの？」
「だ、駄目だ！」
ここでガルフォードも遂に見ていられなくなった。
その手にジャスティスソードを持ってだ。男達に向かった。
「何かわからないが放っておけない！」
「あらん、いい男」
「おのこは大歓迎よ」
「妖怪！いや怪物か」
一体どれなのか。ガルフォードには判断がつきかねた。
「とにかくだ。このままやらせはしない！」
「あらん、どうするのん？」
「顔もスタイルもいいおのこだけれど」
「成敗！」
こう言ってだ。走りながらブラズマソードを放った。

電流を帯びた苦無が男達に放たれる。しかしであった。
「むん！」
「ふん！」
男達はその苦無を一睨みした。それだけであった。
何と苦無が砕け散ったのだ。跡形もなく砕け散り地面に落ちたのだった。
これにはさすものガルフォードも唖然となってしまった。
「な・・・・・」
「おいたは駄目よお」
「私達は悪いことはしないから」
「嘘をつけ！」
今の言葉は姿形だけを見てのものではなかった。
「ならどうして世界を破壊しているんだ！」
「あらん、そういえば」
「何か爆発とか起こってるわね」
二人はガルフォードの言葉を受けて周囲を見回した。するとだ。
その周囲で次々に爆発が起こり人々が吹き飛ばされていっていたのだ。
二人はそれに気付いてだ。あらためて言った。
「これは大変ねえ」
「大きな戦でも起こってるのかしら」
「御前等のせいだ！」
ガルフォードは自覚のない彼等に対して叫んだ。
「一体何の為にここに来たんだ！」
「だから世界を守る為よ」
「その為に来たのよ」
「だから嘘を言うな」
ガルフォードは彼等の言葉を頭から信じようとしなかった。
「御前達は人間なのか？それとも本当に」
「人間よ」

「見ればわかるじゃない」
「いいや、わからない」
本気で言ったガルフォードだった。
「その姿で何を言うんだ」
「言ってもわからないみたいね」
「顔はいいのに話はわからないのね」
男達もまたガルフォードの言葉の意味がわかっていなかった。
そうしてだ。彼等はここで動いたのだった。
「それならよ」
「こっちにもやり方があるわよ」
「やり方だと！？」
「そうよ、行くわよ」
「この漢女道の力見せてあげるわ」
そしてだ。お互いの名前を呼び合うのだった。
「卑弥呼！」
「貂蝉！」
お互いの名前を呼び合ってだ。そうして。
黒い何かが放たれた。それは。

## 第二十二話　ガルフォード、見てはいけないものを見るのことその四

光だった。黒い光が今ガルフォードを襲ったのだ。
「何っ、これは!?」
「漢女道奥義!」
「黒い霹靂!」
それがガルフォードだけでなく世界を包み込んだ。それからまたあのナレーションがかん高い声で言ってきたのであった。
「文明は崩壊し海は枯れ山は死んだ」
そこに残っているものはなかった。
「世界に残ったのは絶望だけだった」
「う、嘘だろ・・・・・・」
ガルフォードはそのナレーション通りの世界を見てへなへなとへたれ込んだ。
「あいつ等、一体・・・・・・」
「あら、やり過ぎたかしら」
「そうみたいね」
二人に反省の色はなかった。
「けれど世界は奇麗になったし」
「これでいいわよね」
二人は意気揚々と何処かに消えた。後に残っているのは崩壊した世界だけだった。
ここで目が覚めた。すると。
枕元にだ。あの男達が座っていた。じっと彼の顔を見下ろしている。
ガルフォードはその二つの顔を見てだ。すぐにこう思った。
「夢の続きだな」
こう思うことにした。そうしてすぐにまた寝たのだった。
朝になった。最悪の寝覚めだった。それで朝の食事前のトレーニ

ングをするがだ。ジョンにこう言われたのだった。
「おい、ガルフォードとかいったな」
「ああ、ジョン＝クローリーさんだよな」
「ああ、そうさ」
緑の軍服のサングラスの男が笑って言葉を返してきた。
「宜しくな」
「ああ、こちらこそな」
「それはそうとどうしたんだ？」
ジョンはここで怪訝な顔になって彼に問うてきた。
「何か動きが悪いな」
「そうか？」
「ああ、寝不足か？」
ジョンはガルフォードを見ながらそうではないかと問うた。
「だったら気をつけろよ」
「いや、別にそうじゃないんだがな」
「そうか。だったらいいけれどな」
「特にな。それはそうとな」
「何だ、一体」
「あんたはアメリカ人だったな」
彼のことについて問うたのだ。
「確かそうだったな」
「ああ、そうだ」
その通りだと答えるジョンだった。
「アメリカ海軍にいたんだよ」
「へえ、ネービーかい」
「あんたの時代は相当昔で海軍っていっても小さかったよな」
「そうさ。街には荒くれ者が多くてな」
笑ってそんな話もするのだった。
「親父は保安官でな」
「そんな時代だったよな」

「そっちはどうだったんだい？」
「まあ治安はよくないな」
ジョンは苦笑いを浮かべてこのことは認めた。
「特に俺が最後にいた艦隊の港があったサウスタウンはな」
「サウスタウン？」
「南部の街でな。ルイジアナにあるんだよ」
その場所も話した。
「そこの港町でな。人は多いし賑わってるんだがな」
「悪い奴は多かったのか」
「そうだな。多かったな」
ジョンはガルフォードのその問いに対して頷いてみせた。
「ジェームスの奴は本当は根っからの悪人じゃないんだがな」
「ジェームス？」
「俺の古い友人でな。師匠でもあるんだよ」
笑ってこうガルフォードに説明する。
「オーストラリア生まれでな。色々と世話になったさ」
「そうなのか」
「曹操の姫さんのところで知ってる奴はあまりいないみたいだがな」
「それでもあんたにはかけがえのない相手なんだな」
「ああ、そうだ」
その通りだと。頷くジョンだった。

# 第二十二話　ガルフォード、見てはいけないものを見るのことその五

「できればこの世界でも会いたいがな」
「会えるといいな」
「そうだな、是非な」
「サウスタウンか」
ここでだ。二人のところに夏侯淵が来た。額にうっすらとかいた汗が妙に艶かしい。どうやら彼女も鍛錬をしていたらしい。
「ジョン殿のいた街だったな」
「ああ、夏侯淵さんか」
「そうだ。そのサウスタウンだが」
「そこがどうしたんだい？」
「そこから来た人間に今会った」
そうだというのだった。
「我が陣営に加わりたいとのことだ」
「へえ、それで誰なんだい？」
「何でもロディ＝バーツとレニイ＝クレストンというらしい」
「ああ、あの二人か」
ジョンは名前を聞いてすぐに応えた。
「探偵の二人だな」
「知っているのか」
「よくな」
こう夏侯淵に答えるのだった。
「拳を交えたことはないんだがな」
「それでもか」
「そうさ。それにしてもあの連中も来たなんてな」
「楽しそうだな」
「知ってる奴が来るのは楽しいさ」
その通りだと答えるジョンだった。

「やっぱりな」
「そうか」
「ああ、それでだけれどな」
ジョンはあらためて夏侯淵に対して問うた。
「二人は今何処なんだ？」
「今姉者に連れられて華琳様の面接を受けている」
「そうか」
「我々の陣営に迎え入れられるのは間違いない」
それはだというのだった。
「また面白い人材が来てくれたな」
「そうだな。俺も寂しくはないしな」
「ふふふ、貴殿がそう言うか」
夏侯淵はジョンの今の言葉についつい微笑みとなった。
「意外だな」
「意外かい？俺が寂しいって言うのは」
「どうもそういう印象ではなくてな。むしろ一匹狼の感じがする」
「空じゃそうさ。けれど海や陸じゃ違うさ」
「そうなのか」
「そうさ。それにしてもどんどん人が来るな」
ジョンはこのことを心から喜んでいるようであった。
「賑やかになってくるな」
「そうだな」
ここでだ。半蔵が来た。しかし三人の誰もそのことに驚きはしなかった。
「わかっていたか」
「特に気配は消してなかったよな」
ガルフォードはこうその半蔵に対して言葉を返した。
「そうだよな」
「うむ」
半蔵もガルフォードのその問いに対してこくりと頷いてみせた。

「その通りだ」
「ならわかるさ。確かに気配は感じにくかったけれどな」
「忍だったな」
夏侯淵はその半蔵にも顔を向けた。そのうえで彼にも声をかけた。
「貴殿もまた」
「その通り」
半蔵は彼女のその問いにこくりと頷いて答えた。
「伊賀の忍に他ならぬ」
「俺は一応甲賀なんだよ」
ガルフォードは笑って夏侯淵にこう話した。
「伊賀と甲賀はまあいいライバル関係にあってな」
「ライバル？競争相手のことだな」
夏侯淵はガルフォードの言葉に一瞬怪訝な顔になったがすぐにこう返した。
「そうだったな、確か」
「まあそういうところだな。俺も半蔵さんを目指して日々精進してるんだよ」
「それはいいことだな。それでガルフォード殿」
「ああ、何だ？」
「貴殿がいつも連れているその犬達だが」
夏侯淵は今度はパピー達を見ていた。

# 第二十二話　ガルフォード、見てはいけないものを見るのことその六

「その犬達は何かできるのか」
「勿論さ。忍犬なんだよ」
「忍犬！？」
「忍術を使える犬のことさ」
それだというのである。
「それなんだよ」
「ふむ。では貴殿と同じか」
「そういうことさ。頼りになるパートナーだよ」
笑顔で屈んでそのうえでパピーの背中や顎をさすっている。パピーはそれだけで尻尾を振って実に嬉しそうな様子を見せている。
「何時でも一緒さ」
「そうか。犬も一緒か」
「実はこの犬達は切っても炎を当てても死なないのだ」
半蔵は何気にこのことも話した。
「実に頑丈な身体をしている」
「では弓矢を受けてもか」
「そうだ。死ぬことはない」
半蔵は夏侯淵のこの問いにも答えた。
「見たところ貴殿は弓使いのようだがな」
「わかるか」
「その手は弓を使う手だ」
夏侯淵の指を見ての言葉だった。見れば右手のその指がへらの如く平たくなっている。半蔵はその指を見ていたのである。
「常に矢を持っているな」
「確かにな。私は弓が最も得意だ」
「だからだ。それでわかった」
「鋭いな。どうやら忍というものは頭もいいようだな」

「そうでなくれは生きられはしない」
半蔵の言葉はここでは真剣なものになった。
「影に生き影に死ぬのだからな」
「俺は影の方とは関係ないけれどな」
ガルフォードはそうだというのだった。
「誰にも仕えていない正義の為に戦う忍だからな」
「正義か」
「ああ、俺は正義の為に戦ってるんだ」
微笑んでシャルロットに話す。
「それが俺なんだよ」
「ふむ。今この世は乱れに乱れている」
夏侯淵はガルフォードのその言葉を受けてだ。今の彼女達の国のことを話した。「ならばガルフォード殿」
「ああ」
「その力と心、役立ててもらうぞ」
「ああ、こちらこそ宜しくな」
ガルフォードは夢のことを忘れて夏侯淵の言葉に笑顔で応えた。
そしてその頃夏侯惇はだ。金髪と立てた男と稽古をしていた。
「ふむ、やるな」
「おう、俺はやるぜ」
黒い上着に黄色いジーンズである。両手にはトンファーがある。
それを見守るブロンドの女は気の強そうな顔に赤いブラと青い上着にジーンズだ。彼女の手には長い鞭が持たれている。
「伊達にサウスタウンで探偵なんてしてねえさ」
「稼ぎは全然ないけれどね」
「レニイ、それは言いっこなしだぜ」
彼は女の言葉に少し口を尖らせた。
「あの街じゃ探偵は儲からないんだよ」
「あんたがいつも変なことするからじゃない」
「おいおい、俺は別にだな」

「してるわよ」
「おいおい、何を喧嘩しているんだ」
夏侯惇はそんな二人に対して言った。
「ロディ＝バーツにレニイ＝クレストンだったな」
「ああ、そうさ」
「名前覚えてくれたのね」
「そうだ。どちらも腕はかなりのものだな」
実際に剣を繰り出して確かめていた。
「ふむ。やはりあちらの世界から来た人間は違うな」
「へへっ、そりゃどうも」
「給料分は働くから安心してね」
二人は不敵に笑って夏侯惇に言葉を返す。
「しかし。こっちの世界は何か賑やかね」
「そうね。美人さんも多いしね」
「おいおい、稽古の時にそうした話は止めておけ」
夏侯惇は二人の今の言葉には苦笑いで返した。

# 第二十二話　ガルフォード、見てはいけないものを見るのことその七

「私とて気を引き締めているのだからな」
「おっと、悪いな」
「それは失礼したわ」
「全くだ。しかし」
夏侯惇はここでこんなことも言った。
「そうか、この世界は美女が多いか」
「俺のみたところはそうだな」
「こっちの。許緒ちゃんだったわね」
レニイは許緒を見ながらくすりと笑って述べた。
「数年経てばもう絶世の美女ね」
「えへへ、有り難うレニイお姉ちゃん」
許緒もそう言われてにこりと笑う。
「僕何かお姉ちゃん好きになったよ」
「私もよ。じゃあ許緒ちゃん」
「そうだね」
二人は笑みを浮かべ合って言い合う。
「稽古しましょう」
「朝御飯の後の稽古をね」
「手加減しないわよ、悪いけれど」
「それはこっちだってそうだよ。思いきりいくよ」
「ええ、こちらもね」
こう話してだ。二人も激しい稽古に入った。こうして曹操軍の朝は終わった。
そうしてその午後。荀?がだ。曹操の前に来て話をしていた。
「あの」
「どうしたの、急にあらたまって」
「実は華琳様に御会いして頂きたい者がいまして」

「昨日のガルフォード達や朝のロディ達とは別にかしら」
「はい、そうです」
こう主に答えるのだった。
「一人は私の姪ですけれど」
「姪？」
「はい、荀攸といいます」
その名前も話したのだった。
「御会いして頂けるでしょうか」
「ええ、いいわよ」
曹操はにこりと笑って荀？のその申し出に頷いてみせた。
「それならね。それに」
「それに？」
「貴女の姪ということは文官ね」
このことはもう見抜いているのだった。
「そうね。荀家の人間ならば」
「はい、その通りです」
謹んで答えた荀？だった。
「それで宜しいでしょうか」
「正直なところ文官が欲しかったところなのよ」
「文官ですか」
「ええ、武勇の者は確かに幾らでも欲しいわ」
彼等のことも話す。
「ガルフォード達も確かにね。けれどね」
「文官もですか」
「麗羽のところがそうじゃない。文官も多いでしょう？」
「はい」
「あの娘はその文官達に政治をさせて四つの州に異民族達を治めているし」
「そして烏丸もですね」
「そういうことよ。秋蘭も政治はできるけれど」

それでもだと。荀?を見ながら話す。
「今我が陣営で文官、そして軍師ができるのは」
「私だけ、ですか」
「それではこれから心もとないわ。だからこそ」
荀?を見てだ。あらためて述べた。
「その娘連れて来て」
「はい、それでは」
こうしてだった。荀?に似た栗色の柔らかい、だが長く伸ばした髪に薔薇色の膝までのドレスにピンクのストッキングの少女が来た。顔は荀?に似ていてその目の色も同じだが顔付きも目つきも彼女よりは幾分か穏やかである。その彼女が来たのだ。
「姪です」
「はじめまして、曹操様」
その少女は荀?の隣から曹操に対して一礼した。
「荀攸と申します」
「あら、姪と聞いたけれど」
曹操はその荀攸を見てまずはこう言った。
「歳は変わらないのね」
「そうなんです。叔母さんはお母さんと歳が離れていまして」
「叔母さんって言わないでよ」
そう言われてだ。荀?はすぐに言い返した。

# 第二十二話　ガルフォード、見てはいけないものを見るのことその八

「誰がおばさんよ。私とあんたは同じ歳じゃない」
「そうなんです。同じ歳なんです」
荀攸は笑って曹操に話した。
「私達は」
「そうだったのね。見てそうかしらとは思ったけれど」
「全く。叔母と姪でも一緒に育てられたじゃない」
「誕生日の方は私の方が先で」
「だからそういうこと言わないのっ」
荀？は姪に対してむきになって話していた。
「それに曹操様の御前よ。もう少し慎みなさい」
「それはいいわ」
曹操はそれはいいとした。
「別にね」
「そうですか」
「それで荀攸」
「はい」
「まずは桂花について色々と仕事をしなさい」
こう彼女に命じるのだった。
「それから然るべき役職に就いてもらうわ」
「わかりました」
「そして」
そうしてだった。さらに彼女に問うた。
「貴女の真名は何というのかしら」
「水花です」
こう名乗るのだった。
「宜しく御願いします」
「わかったわ。水花ね」

曹操は微笑んでその名前を復唱した。
「こちらこそ宜しく御願いしますね」
「はい、わかりました」6
「それでだけれど」
そうしてだ。今度は曹操の方から言ってきたのだった。
「私は貴女の真名を呼ばせてもらうわ。それでね」
「それで？」
「貴女にも私の真名を呼んでもらうわ」
そうしてもらうというのである。
「それでいいわね」
「いいのですか？それは」
荀攸も流石に曹操の今の申し出には驚きを隠せなかった。
「あの、まだ今家臣になったばかりですけれど」
「いいのよ」
しかし曹操は微笑んで彼女に答えた。
「私がいいって言ってるのだからね」
「そうなのですか」
「家臣には真名で呼んでもらうようにしているのよ」
曹操はこうも話した。
「だからね。それでね」
「はい、それでは」
「では水花」
「はい」
あらためての話だった。
「これから宜しくね」
「わかりました、華琳様」
こう話してだった。そのうえで荀攸は曹操の家臣となった。曹操にも一人あらたな人材が加わったのだ。しかしここでガルフォードが皆に話していた。
「辮髪のビキニパンツ一枚の髭の男？」

「それにタキシードに褌の男？」
「何だそれは」
誰もが彼の言葉に首を傾げさせる。
「一体全体」
「そんな不気味な男見たことないけれど」
「そうだよな。ちょっと」
「何、それ」
「いや、俺も最初は夢で見ただけなんだ」
酒場であった。ガルフォードはここで曹操陣営に加わっている主だった者達に対してあの夢のことをこと細かに話していたのだ。
そのうえでだ。かなり狼狽もしていた。
「その二人が国を破壊し尽くしたんだよ」
「凄い夢ね」
響も思わず言ってしまった。

# 第二十二話　ガルフォード、見てはいけないものを見るのことその九

「常世が出たみたいな」
「アンブロジアが復活したらそうなるのか？」
王虎は真っ先にその状況を考えた。
「やはり」
「そうだな。それだな」
十兵衛もそれだと話した。
「そうした世界なのだろうな」
「ううむ、面妖な」
狂死郎は首を捻っていた。
「予知夢にしては奇怪であるな」
「というよりかね」
荀？もいる。小柄だが酒をどんどん飲んでいる。大酒飲みで知られている覇王丸がその彼女の向かいからこう言ってきたのだった。
「随分飲めるんだな」
「そうかしら」
「酒好きか？」
「ええ、大好きよ」
にこりと笑って覇王丸のその問いに答えた。
「これだけは止められないの」
「そうか。こう言ったら悪いが人は外見に寄らないな」
「それは貴方もでしょ」
「俺も？」
「話は聞いたわ。立派ね」
覇王丸に対しての言葉である。
「恋人の人をあえて振り切ってって」
「よしてくれよ、その話は」
不敵に、だが寂しさも交えさせての笑みでそれを遮った覇王丸だ

った。
「俺の選んだ道だから」
「私男嫌いだけれど」
荀?はこのことは断った。
「けれどね。貴方やここにいる他の世界からの人達のことは認められるわ」
「認めてあげるじゃねえのかよ」
「言い換えるわ。認めさせてもらうわ」
謙遜になっていた。
「私にはそこまでできそうにないから」
「だからか」
「覇王丸、特に貴方にはね」
また覇王丸を見て言うのだった。
「その剣にかける心、見事よ」
「そりゃどうもな」
「だから。頼りにさせてもらうわ」
そしてこうも言うのであった。
「貴方の心と剣をね」
「ああ。じゃあ今日は飲むか」
「とことんね」
不敵な笑みを浮かべ合っての言葉である。
「飲みましょう」
「よし、容赦はしねえぜ」
「こちらこそね」
「凄いね。あの男嫌いの荀?さんを認めさせるなんて」
許緒は酒よりも料理をたいらげながら二人のやり取りを見て驚いていた。
「覇王丸さんも」
「そうだな、覇王丸殿の心を認めたからこそだ」
「覇王丸さんの心を」

「あそこまで至ることは容易ではない」
その剣一筋に生きることはだというのだ。
「そうそうできるものではない」
「けれど苟?さんだって華琳様のことを好きなんでしょう?」
「覇王丸殿にとってあの方はその曹操殿と同じだったのだ」
「その人を振り切ってなんだ」
「そのうえで剣を選んだのだ。あえてな」
「ううん、僕まだよくわからないけれど」
それがわかるにはだ。許緒はまだ長かなかった。だからである。
「それでも。凄いね」
「そうだ。覇王丸殿の心」
鷲塚はその覇王丸を見ながら述べた。
「それを蔑むことも貶めることもできはしない」
「僕鷲塚さんもそうだと思うよ」
「それがしもだというのか」
「そうだよ。鷲塚さんみたいに一途な信念持ってる人ってそういないよ」
こう話すのだった。
「とてもね」
「左様か」
「そうだよ。だから凄いよ」
また話すのだった。

# 第二十二話　ガルフォード、見てはいけないものを見るのことその十

「忠義と誠だよね」
「その二つによって生きている」
それこそが鷲塚なのだ。
「如何に時代が変わろうと変わらないものもある」
「うん、その心が凄いと思うよ」
「そうなのか」
「正直に言うけれど僕鷲塚さん達と会えてよかったよ」
彼だけではないというのだ。
「本当にね。今こうして話ができることもね」
「それがしもだ」
今度は鷲塚から言ってきた。
「許緒殿、御主の様な若い者がいれば」
「僕みたいな？」
「国は必ず立つ」
「立つんだ」
「そうだ、国は人によって立つもの」
実に鷲塚らしい言葉だった。その人を見ている彼らしい。
「だからこそだ。御主の様な若者こそが国を築き立たせるのだ」
「有り難う。それじゃあ鷲塚さんみたいな人がいる国はね」
「それがしの様な者がいる国は？」
「きっと立派な国になるね」
そうなるというのである。
「その心が永遠に残る国にね」
「だといいのだがな」
「ああ、なってるわよ」
ロサが言ってきた。
「神風特攻隊とか回天とかね。その心は歴史に残ってるよ」

「心はか」
「できはしないよ。命を捨てて敵にぶつかるなんてね」
その特攻隊のことをだ。ロサは話すのである。
「できはしないよ」
「それは当然だと思うが」
「いや、当然じゃないよ」
違うと。ロサは言った。
「そう思えることが凄いんだよ。許緒の言う通りね」
「忠義と誠。それは忘れはしない」
左手に杯を持ち酒を飲みながら。鷲塚は言った。
「それがしは。ただそれだけだ」
「そうだね。僕鷲塚さん大好きだよ」
許緒の顔は笑顔だった。
「ずっといようね。ずっとね」
「そうだな。それがしもそう思う」
こう話してだった。彼等も誓い合っていた。そしてその間にもだ。
ガルフォードは夢と目覚めてから見てしまったものについて話していた。
「それで目覚めたらな」
「いたのか」
「その怪物が」
崇雷と崇秀もそこにいた。
「そんな化け物がこの国にいるのか」
「天下の乱れより危険ですね」
「夢だと思いたいさ、俺も」
ガルフォードは真顔だった。
「けれどあれは本当に夢だったのか？」
「わからんな」
ロブが言った。
「今はそうとしか言えん」

「この世界は色々あるからのう」
中も言った。
「そうした妖怪がいても不思議ではない」
「けれど幾ら何でもそこまでおかしいのはいないわよ」
荀?は覇王丸と飲みながらこう話した。
「私も聞いたことないわよ、そんな妖怪」
「いないか?」
「いないと思うわ」
ガルフォードの問いに何故か弱気になる荀?だった。
「多分だけれど」
「多分なのか」
「この国の他にも国があって」
荀?は話す。

# 第二十二話　ガルフォード、見てはいけないものを見るのことその十一

「あんた達の世界の日本だってあるけれど」
「おお、そうなのか」
それを聞いてだった。応えたのは双角だった。
「確か倭だったな」
「そうよ、倭ね」
まさにその国だというのだ。
「あそこのこともよくわからないし南蛮が南の方にあるし」
「南蛮!?」
「っていうと南の辺境の？」
「そうよ。そこもかなり変わった風俗らしいけれど」
こう話すのだった。
「けれど。ガルフォードが言うみたいなそこまで変態なのはいないわよ」
「そうなのか。じゃあ何なんだ？」
「夢、じゃないの？」
荀？はこうガルフォードに返した。
「やっぱりね」
「それか？やっぱり」
「じゃあその妖怪二匹が今この許昌にいるっていうの？しかもあんた程の腕の持ち主の枕元に二人もいたなんてことがあるの？」
「それは」
「そっちの方が怖いわよ」
荀？はあくまで現実的な視野から話していた。
「どんな妖怪よ、本当に」
「だから俺もよくわからないんだけれどな」
「誰にも気付かれずにあんたの部屋まで忍び込んで」
荀？はさらに話す。

「そして誰にも気付かれずに消えたの？これだけいる一騎当千の連中をかわして」
「有り得ないっすね」
「そうだな」
暁丸とジャックも言う。
「そこまで考えるとっす」
「どんな怪物だ」
「だからよ。有り得ないのよ」
荀？はまたこう言った。
「そこまで非常識な怪物がいるなんてね」
「外見も能力も」
ロイも言う。
「有り得ないな」
「兵達も常時城壁や門で見回っているし」
「曹操軍四天王もいる」
「じゃあやっぱり」
コスターとゴチャックは荀？のその言葉に頷いた。
「普通に入るのは」
「相当な強さでも」
「っていうかよ。そんなのギース＝ハワードだって無理だな」
「そうよね。忍者でもね」
ロディもレニイもそれは有り得ないとした。
「ないな」
「絶対に不可能ね」
「しかもガルフォードは忍の者」
「その感性は眠っていようと研ぎ澄まされている」
半蔵と影二はほぼ証言だった。
「それに気付かれることなくして枕元に立つとは」
「魔神であろうと無理なこと」
「魔神までってことは人間じゃ絶対に無視だな」

ビッグ＝ボンバーダーは酒をかっくらいながら応えた。
「じゃあ荀？の軍師さんの言う通りだな」
「今はフランコが見回りだったわよね」
荀？はここでこう話した。
「確か」
「それと斬鉄だな」
「それだな」
「他の面々は山賊退治やら治水や都市の整備に行ってるけれど」
他の国から来た戦士達も何かと仕事をしているのだ。戦場だけでなく様々な内政の場面にも曹操や荀？の指揮の下で動いているのである。
「それでもあの二人の見回りで気付かれない人間なんていないわよ」
「そうだよな。じゃあ俺が見たのはやっぱり夢か」
「きっとそうよ。疲れているのではなくて？」
荀？はガルフォードを本気で気遣っていた。
「覇王丸程じゃないけれどあんたも立派な心の持ち主なんだから無理をしたら駄目よ」
「そこで覇王丸が出るのかよ」
「まあね。それはね」
それについてはいささかバツが悪そうに返す荀？だった。
「それでもよ。あんたも思うところがあってあえて故郷を出たのよね」
「ああ、そうさ」
「それで犬達まで助けて密航までして忍者になって正義の為に戦う」
それこそがガルフォードだった。
「そうそうできることじゃないから」
「だから無理するなっていうのか」
「少なくとも休める時には休みなさい」
やはりガルフォードを気遣っていた。

# 第二十二話　ガルフォード、見てはいけないものを見るのことその十二

「いいわね」
「ああ、そうだな」
ガルフォードは結果として荀？のその言葉に頷いた。
「そうするか」
「そういうことよ。じゃあ皆今日は」
「今日は？」
「これからは？」
「飲みあかしましょう」
満面に笑みを浮かべてだ。荀？は言った。
「いいわね。覇王丸と一緒にとことんまで飲むから」
「性格変わった？ひょっとして」
「最初来た時はかなりツンツンだったのに」
「それが」
一同でそんな荀？を見て話すのだった。
「随分変わったなあ」
「本当にね」
「随分と」
「私だって変わるわよ」
荀？は周りの言葉に少しむっとして返した。
「だって。人間なんだから」
「人間だからか」
「それで」
「そうよ、だからよ」
変わった理由をだ。人間だからだというのである。
「私だって変わるわよ」
「そういうことだな。じゃあ今日は仲良く飲むか」
「ええ、飲むわよ」

また笑顔で覇王丸の言葉に応えてだった。
「派手にね」
「よし、いい心掛けだ」
「言ったわね、容赦しないって」
荀?は不敵に笑って　覇王丸の顔をまじまじと見てきた。
「そういうことよ」
「そうだったな。よし、受けるぜ」
「流石ね。じゃあ飲むわよ」
「拙者は甘いものの方が好きだが」
「それがしもだが」３０
十兵衛と半蔵はこう零した。
「だから酒よりもな」
「茶の方がな」
「ああ、それだったら」
それを聞いてだ。許緒が早速言ってきた。
「僕と一緒に食べる?」
「そうだな。そうさせてもらうか」
「是非な」
二人は許緒のその言葉に乗った。そのうえで誰もが仲良く飲み食いを楽しむのだった。
そしてだ。フランコと斬鉄はこの時城壁を兵達を連れて見回っていた。夜の街は静まり返り何も聞こえはしない。街の灯りだけが見えるだけだ。
「今日も許昌は平和だな」
「うむ」
斬鉄はフランコのその言葉に頷いた。
「何もないな」
「そうだな。街は平和で村も平和だ」
「この国は平和そのものだ」
「曹操さんの政治がいいせいだな」

フランコは笑ってこう言った。
「いい政治家がいるとやっぱり違うな」
「その通りだな。そしてだ」
「そして？」
「近頃聞いた話だが」
こうフランコに前置きして話してきた。
「孫策殿の揚州でだ」
「ああ、南の方の国だよな」
「そこで紫鏡という外道が始末されたな」
「そうらしいな」
この話はフランコも聞いていた。それですぐに頷いて返した。
「何でもな」
「うむ、それは何よりだが」
「だが？何かあるのかよ、そいつに」
「我はあの男を知っている」
斬鉄はここでこう言うのだった。

# 第二十二話　ガルフォード、見てはいけないものを見るのことその十三

「知りたくはなかったがな」
「つまり腐れ縁ってわけだな」
「左様、およそ心を持たぬ外道だった」
それがその紫鏡だというのだ。
「剣の腕はそれなりだったがそれでもだ。一人であそこまでできはしないな」
「孫策のお姫様の城の奥深くに忍び込んだり何度も暗殺しようとしたりだったな」
「孫権殿の命も狙っていたな」
「それが一人でできることか、か」
「あの男は心がない。従って人を集められる男でもなかった」
「ってことはだ」
ここまで聞いてだ。フランコもわかった。
「その紫鏡の後ろには」
「誰かがいる」
斬鉄は言った。
「間違いなくだ」
「じゃあ誰だよ、そいつは」
「宮中に蠢く宦官共か」
まずは彼等の名前が出た。
「若しくは」
「若しくは？」
「我等が元の世で戦っていた者」
この存在の話も出した。
「常世か」
「そいつか？前話していた」
「それかも知れぬ」

「何か不気味な話が出て来たな」
「しかしだ。我等もただこうしてここに来た訳ではあるまい」
「ああ、それはな」
このことはフランコもわかることだった。
「何もなくていきなり違う世界に来ましたってのはな」
「ない。しかもこれだけの数の戦士達が来た」
「何かあるって思うのが普通だよな」
「左様、常世か」
またこの名を出した。
「それを出さんとする刹那か。アンブロシアか」
「他にも何かいそうだな」
「そうだ。何かがいる」
斬鉄は確信していた。
「この世界に何かが。我等がこの世界に来るきっかけになった何かがだ」
「いるってことか。どうなるかね、一体」
「それはこれから次第だ。それではだ」
「ああ、見回りを続けるか」
「今はな」
こうフランコにも述べる。
「そうするとしよう」
「やっぱりまずは目先の仕事だよな」
「うむ」
正論であった。何はともあれまずは今している仕事をこなすことだった。
しかしだった。ここでだ。その城壁の物見櫓のところにだ。彼等がいた。
「見えるわね、、卑弥呼」
「ええ、貂蝉」
こう二人で言い合う。

「それなら今から」
「いいおのこを探して」
彼等は闇の中で気配を消していた。そのうえで話をしていた。
そしてである。ここでその貂蟬が言った。8
「これからどうするの？」
「決まってるわよ。ここはね」
「ここは？」
「国中を回ってまずは私達と志を同じにする戦士達を集めましょう」
「そうね。オロチに常世が来ているし」
「アンブロジアもね」
「それにこの世界にも来ているわよ」
貂蟬はまた話した。
「あの二人が」
「わかってるわ。すぐに手は打つわ」
卑弥呼も貂蟬のその言葉に頷いた。
「とはいってもそれこそが戦士達を集めることだけれど」
「それにしても。スサノオといいあの連中といいね」
「そうね。何で色々な世界にも介入するのかしら」
「だありんのいた世界のうちの一つにも介入していたし」
まずはそこにもだというのだ。
「それにね。他の世界にも介入していたわね」
「外界の幾つにも来ているわね」
「スサノオのことはあの仮面の人達に任せていてもいいのよ」
その存在についてはというのだ。
「けれど。あの二人はね」
「私達の仕事だからね」
「そうよね。そしてあの世界の戦士達がオロチや常世を倒す」
「役割分担は万端ね」
「ええ。じゃあ私達は」
卑弥呼の言葉だ。

「今から同志達を集めましょう」
「そんなの私の魅力で一発よ」
「私だってそうよ」
ここで貂蝉も卑弥呼もその身体を不気味にくねらせて語る。
「さあ、誰でも篭絡するわよん」
「私のだありんは一体何処かしら」
こんな話をしてだ。二人はそこから大きく跳躍してそのうえで何処かに姿を消した。彼等が何者なのか。そもそも人間かどうかすら怪しかった。

第二十二話　　完

２０１０・６・２５

# 第二十三話　楓、思い出すのことその一

第二十三話　楓、思い出すのこと

袁紹の陣営は今何かと多忙だった。誰もが仕事を持っていて動き回っていた。

「善光、あの書はできまして？」

「はい、できました」

陳琳が袁紹の問いに答えていた。

「こちらに」

「わかりましたわ。ではすぐにそれを烏丸にいる青珠と赤珠に届けなさい」

「はい、すぐに」

「急ぎなさい。それと」

袁紹は険しい顔で陳琳に話す。

「次は西に向けて書きなさい」

「はい、涼州にですね」

「そうですわ。そこにも」

袁紹は言うのだった。

「兵を送りますわよ」

「ではいよいよ」

「ええ、討伐にかかりますわ」

こう言うのであった。

「姜への」

「はい、それではすぐに兵を」

「わたくしも行きますわ」

彼女もだというのだった。

「わかりましたわね」

「麗羽様もですか？」

「いけませんこと？」

「あの、それは」
「少し」
ここでだった。彼女の左右に控えていた田豊と沮授がすぐに彼女を止めにかかった。
「烏丸の時も出陣されましたし」
「今は」
「駄目だというのでして？」
袁紹は二人の言葉に面白くなさそうにその目を向けた。
「わたくしが出なくてどうするのでして？」
「ですが麗羽様は御出陣になるとすぐに前に出られますから」
「それでは何かあったら」
「大変だというのでして」
「はい、そうです」
「ですから今回はここに留まっておいて下さい」
二人は袁紹を必死に止める。
「御願いですから本当に」
「政治のこともありますし」
「いえ、そういう訳にはいきませんわ」
しかし袁紹は話を聞かない。
「わたくし自ら出陣しあの者達を討伐しますわ」
「全く。戦がお好きなんだから」
「困ったことですよ」
田豊と沮授も主のその性格には呆れるばかりだった。だが袁紹は言い出したら聞かない。それが袁紹陣営の悩みの種だった。
そうしてだ。袁紹自ら西方に出陣するという話は兵達にも伝わっていた。それはまだ烏丸の治安維持にあたっている者達のところにも届いていた。
「また袁紹の姫さん出陣されるそうだぜ」
「あの方も好きだよな」
「全くだ」

ビリーとアクセル、ローレンスが話をしていた。彼等は築いている城の城壁のところにいた。その城から烏丸を治めようというのである。

「戦場に出たらいつも前に出る人だしな」

「俺達はいいが周りははらはらしてるな」

「大将自ら前に出てはそれも当然だ」

三人はこう話していた。そしてジャックもミッキー、リーと話をしていた。

「今度は西か」

「ああ、そうだな」

「また大きな戦争じゃな」

ミッキーとリーは食事を採りながらジャックの言葉に応えていた。

「まあ俺達は戦うことが仕事だしな」

「それとこうした城壁を築いたりすることだな」

「わしは薬の仕事もあるがな」

リーはそちらの仕事もあった。見れば今何か手に薬草を持っている。

「これを飲めば二日酔いも一発じゃ」

「おっ、そりゃいい薬だな」

「俺にもくれるか？」

「よいぞ。しかしここでも戦いおかしなことがあったのう」

リーはここで首を捻るのだった。

「随分とな」

「ああ、そうですよね」

「それは」

ニコルとミハルが来てだ。リーのその言葉に応えた。

# 第二十三話　楓、思い出すのことその二

「烏丸の人達って温厚ですし」
「反乱を起こすような人達じゃないですよね」
「それが急に大暴れして」
「戦争が終わったらもう僕達と仲良くですし」
「普通ここまで変わるものかい？」
凱もこのことを指摘する。
「俺達のそれみたいにスポーツとか格闘じゃないだろ。戦争だろ？」
「まあ俺達の世界でもな」
ミッキーもここで話す。リーから受け取ったその薬草を食べながら。
「戦争は後々まで恨みとか残るからな」
「けれどこの人達はあっさりしてますし」
「戦死した人がかなり少なかったにしても」
ニコルとミハルはまた話す。
「それでも何か」
「この人達が反乱を起こしたなんて信じられません」
「突発的な暴動だったのか？」
レッドドラゴンはこう考えた。彼も来ていたのだ。
「今回のことは」
「暴動にしては少し組織的過ぎるんじゃないのか？」
テリー＝ロジャースはレッドドラゴンの言葉に首を捻った。
「今回のことは」
「そういえば動きがよかったな」
「そうだな」
ガンダーラとイワンはこう話した。
「敵の動きは統率が取れていた」
「妙なまでに」

「考え過ぎ、じゃねえな」
キムはすぐにその考えは否定した。
「裏に何かいたな」
「それが誰か」
「それが問題ってことか」
ジャックも腕を組んで考える顔になった。
「煽ってる奴がいたってことか、烏丸の連中を」
「だとすればそれは誰かだな」
マイケルも真剣な顔である。
「碌な奴じゃないのは間違いないにしても」
「手掛かりはあるのか？」
「だとしたら誰だ」
ブラバーマンとパヤックはその場合誰がいるかを考えた。
「一体全体」
「どういった者が」
「少し調べる必要があるな」
レオが言った。
「そうしたことも」
「じゃああれか。忍者の連中の仕事か」
「そうなるな」
凱とロジャースはこう話した。
「火月と蒼月か」
「あの連中も忙しいな」
こう話をしていた。そしてリーもだった。
「ふむ、この世界きな臭いにも程があるな」
「全くダス。だからワス達がここに来たダスか？」
テムジンは首を傾げさせながら話した。
「それで」
「そうなんだろうな。縁があってのことだろうな」
マイケルもその通りだというのだった。

「テリーやヘヴィ＝Dもこっちに来てるしな」
「ジョンとかな。ダックも南の方にいるってな」
「ああ、あの連中もか」
キムとイワンが話す。
「賑やかなのはいいがな」
「何だらけだな」
こんな話をしていた。そのうえで彼等は烏丸で仕事をしていた。
そしてこの時ドンファンとジェイフンはだ。古い知り合いと会っていた。
「あんた達も来てくれたか」
「お久し振りです」
見ればだ。鳥の覆面にレスラーの服の大男に金髪のいかつい男と少年、それと髭の老人だった。この三人がいたのであった。

# 第二十三話　楓、思い出すのことその三

「ああ、二人共そこにいたので」
「探したわよ」
彼等のところに辛評と辛?が来た。そのうえで声をかけてきたのだ。
「新しい人達が来たのね」
「その人達?」
「ああ、俺達の古い知り合いでな」
「いい人達ですよ」
ドンファンとジェイフンが二人に応えて笑顔で話してきた。
「頼りになるしな」
「力になってくれます」
そしてだ。その三人と少年が名乗ってきた。
「グリフォンマスクだ」
「ケビンだ」
「坂田冬二という」
「マーキーだよ」
最後に少年が名乗った。合わせて四人だった。
「気付けばこの世界にいたが」
「面白そうな世界だな」
「わし等は戦えばいいのじゃな」
「他にも力仕事をしてもらいたいけれど」
「いいかしら」
辛評と辛?は彼等にこうも話した。
「期待しているからね」
「是非共ね」
「わかった」
グリフォンマスクの返事である。

「それではやらせてもらう」
「さて、それで」
「ここでの戦後処理も終わりだし」８８
姉妹はこうも話した。
「後は帰ってね」
「そうね。また政治ね」
「何か政治ばっかだよな」
「そうですね」
ドンファンとジェイフンは姉妹の話を受けてこう言った。
「戦乱っていったのにな」
「戦争よりも政治の方がずっと多いですよね」
「そういうものよ」
「ねえ」
しかし二人はこう返すのだった。
「政治は止まらないし」
「いつもしておくものだから」
「それに戦は政治の一手段よ」
「だからこれも政治よ」
こうドンファン達に話すのだった。
「そうした意味で貴方達も政治をしてるのよ」
「そういうことになるの」
「そうだったのか」
「成程」
「とにかくね。今度は西よ」
「私達は南皮に向かうけれど」
二人はそこだというのである。
「麗羽様は冀州の内政をさらに充実させたいと考えておられるから」
「それでね」
「あの姫様も忙しいよな」
「そうだよね」

ドンファンとジェイフンは袁紹のその話を聞いて述べた。
「また随分とな」
「政治と。その戦争にって」
「あれでその二つはできるからいいのよ」
「確かに何をするかわからない方だけれど」
二人も袁紹についてはそうした認識だった。
「宝探しが趣味だしね」
「幼いところも多いし」
「そういえば普段あれなところも多いな」
ドンファンは腕を組んで述べた。
「お馬鹿っていうかな」
「兄さん、それ失礼だよ」
ジェイフンは兄のその言葉を嗜めた。
「幾ら何でも」
「ああ、悪い」
「まあ事実だけれどね」
「残念なことにね」
二人もそれは否定しない。

## 第二十三話　楓、思い出すのことその四

「水華と恋花はもっと大変だけれどね」
「軍師二人は」
「っていうかあの二人よくあの姫様に忠義尽くすよな」
「あれだけ振り回されてるのに」
「というか我儘でムラッ気がなかったら麗羽様じゃないし」
「あれで家臣思いでお優しいし」
袁紹の意外な長所である。
「劣等感もあったりしてそれがおかしなところになったりしたりもしてるけれど」
「基本的にはいい方でしょ」
「ああ、それはな」
「その通りですね」
ドンファンもジェイフンもそれには頷いた。
「悪い人じゃないな」
「領民を大切にしますし」
「烏丸の民だって万全かつ公平に統治されるしね」
「そういうところはいいのよ」
「ただ。多分にお馬鹿だからな」
「興味がないことは絶対にしないしね」
そうしたところが袁紹の問題点なのだ。
「それでも悪い姫様じゃないからな」
「僕達もいるし」
「そして俺達もだな」
ケビンが笑顔で言ってきた。
「この世界でもやらせてもらうぜ」
「わしのこの腕、見るがいい」
坂田も言う。

「老いていてもそれは鈍ってないぞ」
「ええ、それじゃあね」
「期待させてもらうからね」
こうして袁紹陣営にもまた人が加わった。そうしてであった。
楓達は既に西に向かおうとしていた。先遣隊というわけである。
ここで嘉神が不意にこんなことを言ってきたのであった。
「紫鏡が死んだ」
「そうだな」
「揚州じゃったな」
彼のその言葉に示現と翁が応えた。
「刺客として死んだか」
「あ奴らしいのう」
「しかしだ」
嘉神はここでまた言った。
「あの者がただ一人で何かをするとは思えぬ」
「では。やはり」
「裏におるか」
「それで間違いない。それに」
その言葉を続ける。
「烏丸も同じじゃな」
「気付いておったか」
翁は嘉神の今の言葉に笠の奥の目を光らせた。
「流石じゃな」
「何かがなくてあそこまでの大乱は起こりはしない」
嘉神は言った。
「それも突如起こり突如終わった」
「常世か？」
示現はその可能性を考えた。
「それでは」
「親父、それだったら大変です」

虎徹はそれを聞いて言った。
「刹那がこの世界に来ているです」
「間違いなく来ている」
嘉神は虎徹に対しても話した。
「さもなければ我等が揃ってこの世界に来ていると思うか」
「そうですよね」
楓はここでようやく口を開いた。
「やっぱり。来ていますよね」
「そうだ、だが何処にいるかだ」
嘉神が考えるのはこのこともだった。
「何処に潜んでいるかだ」
「そうじゃな。やがてわし等の前に出るにしても」
翁も言う。
「何処に潜んでおるかじゃ」
「そして刹那だけではない」
示現は他の存在のことも考えていた。
「他にも来ているか」
「どうやらこの世界、我等が考えている以上に危うい」
嘉神の目が鋭くなる。

## 第二十三話　楓、思い出すのことその五

「この世界の乙女達はそれに気付いているだろうか」
「気付かなくとも時が来れば気付くじゃろうな」
翁はそのことには楽観している向きがあった。
「やがてな」
「その時になればか」
「そうじゃ、その時は必ず来る」
また嘉神に話した。
「そのことは特に心配することはない」
「そうか」
「うむ、そしてじゃ」
また言う翁だった。
「今度の戦もじゃ。激しいものになるな」
「西の騎馬民族ですね」
楓が問うた。
「今度は」
「左様じゃ。強いぞ」
翁は楓に対して答えた。
「用心してかからねばな」
「はい、わかりました」
楓はその翁の言葉に素直に頷いた。
「それでは」
「それでだが」
今度は示現が言ってきた。
「少し休憩にするか」
「休憩か」
「そうだ。朝から歩き通しだ」
こう翁に告げる。

「我等はいいが兵達はな」
「そうだな。馬に乗っている者も多いにしてもな」
嘉神も話す。
「それでもな。馬も疲れるからな」
「今疲れてはどうにもならない」
また言う示現だった。
「だからだ」
「よし、そうじゃな」
翁はここで言った。
「ここは休憩じゃ」
「そうするか」
「いい時間じゃしな。食事にしよう」
こうも言うのだった。
「さて、何を食べるかじゃが」
「干し肉にするか」
嘉神はそれだというのだった。
「それと餅だな」
「餅？あれですね」
「そうだ」
嘉神は楓の言葉に応えた。
「あの餅だ」
「小麦の生地を焼いたあれですか」
「あれを餅というのじゃな」
翁も少し不思議そうに言う。
「ここでは」
「そうだな。餅といえばあの米のものだと思っていたが」
これは示現も同じだった。
「しかしそれとは別の餅もある」
「何か不思議ですよね」
楓はまだいぶかしむ声だった。

「それも餅だなんて」
「しかし食べられる」
嘉神は最初にこう述べた。
「しかも美味だ」
「確かに」
「火はある」
嘉神は次にこう言った。
「私の火を使うといい」
「朱雀の力か」
「こうした時にも使わなくてはな」
そしてこうも言うのだった。
「術はな」
「普段にもですか」
「まあ悪事に使わなければそれでよい」
翁の考えは寛容だった。
「少なくとも今の御主にはそれはないな」
「私は一時人というものを誤解していた」
嘉神は今はかつての自分を振り返っていた。
「人は醜く汚れたものだと思っていた」
「しかしそうした一面もあるということにですね」
「それがわかった。人は不思議なものだ」
楓にも言葉を返す。

## 第二十三話　楓、思い出すのことその六

「確かにそうした一面があるがそれと共に美しく清らかなものもある」

「そうだな、確かにな」

示現も頷くことだった。

「人は様々な顔を持っている」

「この世界の乙女達もだ。そこに美しいものを見せている」

これは容姿だけのことを言っているのではない。

「必ず。その目指すものを掴めるまでにな」

「そしてこの世界を脅かす存在にも気付くか」

「気付くだろう」

嘉神はこのことを信じていた。

「必ずな」

「左様か」

「そしてだ」

その言葉が続く。

「倒す。必ずな」

「敵はお互いではないんですね」

楓もわかったのだった。

「つまりは」

「本来天下を手に入れるものではないのじゃ」

翁がその楓に話す。

「この世界はそうじゃ」

「あの人達はお互いに争うのではなく」

「手を携えるのじゃ。世界を脅かす者達とじゃ」

「そう、それは」

「そうだな」

ここで嘉神と示現の目が光った。

「わかるな、二人共」
「迫っている」
「はい」
「感じておる」
楓と翁も二人の言葉に応えた。
「これはかなり強い妖気ですね」
「刹那にも匹敵しおる」
「夜だな」
示現は言った。
「戦うのは」
「親父殿、では夜に」
虎徹も言ってきた。
「やるですよ」
「うむ、そうするぞ」
こう話してだった。一行は休憩し昼食を採り次の休憩で夕食を食べ眠りに入った。その夜だった。
草原だった。周りには何もない。そこに陣を敷き天幕を設けてそれぞれ休んでいた。五人はそこから少し離れそのうえで待っていた。
「来るな」
「うむ」
嘉神は示現のその言葉に頷いた。
「間も無くだ」
「妖気がさらに強まっている」
「しかしこの妖気」
翁の目が強く光った。
「刹那とはまた違うが」
「禍々しいのは同じですね」
楓の目は険しい。
「何なのでしょうか」
「わからん。しかしじゃ」

「しかし？」
「明らかに只者ではない」
翁は言った。
「用心するのじゃ。これは恐ろしいぞ」
「その相手が来た」
示現は言った。するとだった。
それは小柄な老人だった。その周りに二本の禍々しい刀達が漂っている。
嘉神がだ。その彼の名を問うた。
「何者だ」
「朧という」
こう名乗ってきた。
「知っておるかのう」
「確か離天京の者だったな」
嘉神はすぐにこう述べた。

# 第二十三話　楓、思い出すのことその七

「三刃のうちの一人か」
「今は一人だけじゃがな」
「そうか」
「では後の二人は」
「さてな」
示現の問いに飄々として返すだけだった。
「わしは知らん」
「知らぬというのか」
「どうでもよい。今はわし一人で充分じゃ」
こう話すのであった。
「仲間達もおるからのう」
「仲間か」
「そうじゃ。わしに相応しい仲間じゃ」
これが今の彼の言葉だった。
「闇の者達じゃ」
「刹那」
楓はすぐに悟った。
「あいつもまた」
「ほう、わかったか」
朧はその名前を隠さなかった。
「無論あ奴もおるぞ」
「あ奴もということは」
示現はこの言葉からすぐにわかった。
「他にもいるか」
「オロチ、それに」
楓はこの世界で巡り合った者達の話を聞いて述べた。
「アンブロジア」

「色々おるのう。しかもじゃ」
「しかも？」
「それだけではないぞ」
「この世界に介入しようとしている者」
嘉神はすぐに悟った。
「そうした存在もいるな」
「鋭いのう、流石朱雀じゃ」
「皮肉か？」
「いや、純粋に褒めたのじゃがな」
こうは言ってもだった。その目には明らかな悪意があった。
「聞こえんかったかのう。そうした風には」
「聞こえぬな。貴様にあるのは悪意とどす黒さだけだった」
嘉神はこう返した。
「それしかない」
「わかるというのか」
「よくな。そしてだ」
「そして？」
「貴様だな」
その朧を見ての言葉だった。
「貴様が烏丸を操っていたな」
「さて、どうじゃろうな」
「とぼけるのか」
「さてな。しかし」
「しかしか」
「そうじゃ。どちらにしろ烏丸はもうどうでもいい」
こう話すのだった。
「どうでもな」
「いいというのか」
「そうじゃ。所詮はあの程度」
これだけで切り捨てていた。そしてだった。

朧のその刃達が舞っていた。まるで鮫の様に。
その刃を見ながらだ。朧はさらに言うのであった。
「さて、それではじゃ」
「それでは？」
「どうする？相手になるか？」
刃を見ながら楓達に問うてきた。
「今ここで」
「そのつもりだが」
嘉神が最初に刀を抜いた。
「まさかここまで来て何もない訳ではあるまい」
「如何にも」
それに朧も頷く。
「さて、四霊の剣達よ」
「さて、それではじゃ」
「戦わせてもらおう」
翁も示現もその目が鋭くなった。
「この者、刃もその者も尋常ではない」
「どちらも攻めるべきだな」
「それなら」
楓も刀を抜いた。するとだった。

# 第二十三話　楓、思い出すのことその八

青い髪が金髪になった。そうしてだった。
四人はそれぞれ散り朧を囲んだ。そのうえだった。
「行くぜ」
「貴様には色々と聞きたいことがある」
「それならばこそじゃ」
「ここで倒す」
「わしを倒す」
朧の言葉に邪なものが宿った。
「果たしてできるかのう」
「一つ言っておく」
嘉神の刀にはもう炎が宿っていた。
「我等とて伊達に四霊を司っている訳ではない」
「それはわかっておる」
朧の方からもこれは言ってきた。
「じゃが」
「じゃが？」
「わしはそれ以上じゃ」
「悪か」
示現は彼が身にまとっているものを見た。
「悪だな。その妖気は」
「悪か。そうじゃ」
朧はこのことも認めてみせた。
「わしをそう呼ぶのならそうじゃな」
「どちらにしてもこの世界でとんでもねえことをしようとしてるな」
楓は髪の色と共に性格を変えていた。
「それならだ」
「来るか」

「行く」
「それなら」
こうしてだった。彼等は戦いをはじめた。
四人はそれぞれ攻撃を放つ。しかしだった。
「くっ、この刃！」
「この強さ！」
「宙に浮かんでいるだけではないな」
「この強さは！」
「ほっほっほ、やはりやるのう」
朧は二本の刀を動かしながらだ。笑っていた。
「伊達に四霊ではないな」
「ふざけてるんじゃねえよ」
楓は朧のその刀を己の刀で受けながら言った。
「手前、この刀は」
「よく防ぎおるのう」
尚も笑う朧だった。
「この世界に来たのは刹那のことだけではないな」
「へっ、手前も潰すこともその中にあったんだろうな」
楓はこう朧に返した。
「だからだな」
「まあわしだけではあるまい」
朧の目が赤く光っていた。
「その他にもじゃな」
「オロチもアンブロジアも何もかも斬ってやるぜ」
楓は言い切った。
「全部な」
「言うのう。先程とは全く違うのう」
「俺の性格は二つあるんだよ」
朧の刀を防いでいるだけではなかった。攻撃も繰り出していた。
しかしそれでも朧はその攻撃をかわす。何なくだ。

「ちっ、何て動きだ」
「素早いな」
示現も言う。
「歳を思わせないな」
「わしを只の爺と思ってはおらぬ筈じゃがな」
「既に半ば以上人ではないな」
翁の言葉だ。
「その心がな」
「そうかものう。どちらにしろ今のわしはじゃ」
「化け物になってるのなら話は別だ！」
楓はまた刀から攻撃を放ったのだった。
「くたばれ！」
「ふむ」
姿を消した。それでだった。

# 第二十三話　楓、思い出すのことその九

そのまま気配も消えた。何処までもだ。
「消えた！？」
「一体何処に」
「行った！？」
「今日はこれで終わりじゃ」
朧の声だけがした。
「また会おう」
「手前、逃げるのかよ」
「逃げるのではない」
朧の声は楓のそれは否定した。
「去るだけじゃ」
「今日はほんの挨拶ということか」
嘉神はそれだと悟った。
「そういうことか」
「そうじゃ。ではな」
それだといってだ。気配も遠くへ行く。
「また会おう」
「朧、あの力」
「はいです」
虎徹が示現の言葉に頷く。
「ただこの世界に来ているだけではないです」
「何かを求めてのことだ」
示現はこのことを悟っていた。
「この世界でもまたな」
「そうじゃな。碌でもないことじゃな」
翁にとっては言うまでもなかった。
「この世界にとってな」

「そして我々がここに来た理由はだ」
「それじゃあやっぱり」
「そうだ、あの者達の行動を防ぐ」
嘉神は髪の色が元に戻った楓に対して述べた。
「そういうことだ」
「やはりそうですか」
「何はともあれ今は終わりじゃ」
翁はここで話を終わらせた。
「休むとしよう」
「その通りだ。戦いはまだある」
示現も言う。
「だからこそ今はな」
「西方ですか」
楓はまだ辿り着いていないその場所のことを考えた。
「どういった場所でしょうかね」
「砂漠だ」
嘉神はそこだと答えた。
「荒地だ。ここより遥かに過酷な場所だ」
「そうですか」
「そこで戦うことになる」
こう言うのであった。
「大軍と大軍の戦いだ」
「ここに来てからそうした戦争ばかりです」
虎徹が言った。
「続きますですね」
「まあそうじゃな。この国はこの世界でもじゃな」
翁が今言うのは中国のことである。
「北や西の異民族に悩まされておる」
「日本とは違うな、それが」
「全く違うのう、わしも来てはじめてわかった」

翁は示現にこうも述べた。
「まことにな」
「そうですね、本当に何もかもが違いますね」
楓も翁のその言葉に頷いた。
「世界も違いますし」
「それも大きいな。とにかくだ」
最後に嘉神が言った。
「今は休むとしよう」
「そういうことじゃな。それではじゃ」
翁が応える。そうして彼等は今は休息に入った。そうしてであった。

# 第二十三話　楓、思い出すのことその十

結局袁紹は出陣した。自ら大軍を引き連れ西に向かうのだった。
「やっぱり自ら行かれるんだから」
「行っても聞かない人だけれどな」
顔良と文醜がそれぞれ馬上で溜息をついていた。
「どうしてこう陣頭指揮がお好きなのかしら」
「あたい達だけでやるっていうのに」
「自ら行かなくてどうしますの？」
その袁紹がこう言うのだった。
「このわたくし自ら行かなくて」
「政治をされたらいいじゃないですか」
「そうですよ。内政もお好きでしょ？」
二人は主にこのことを言う。その後ろには黄色い鎧の大軍がいる。
見れば武器も鎧もかなり充実している。数だけではなかった。
「そちらもお仕事が沢山ありますし」
「ですから」
「無論出陣中もそちらの仕事もしますわ」
忘れられる筈のないことだった。
「しかしでしてよ」
「それでもですか」
「出陣もですか」
「その通りでしてよ。攻めますわよ」
その西をというのであった。
「私自ら」
「これで万が一のことがあったら」
「大変なんだけれどな」
二人のぼやきは続く。
「それでも水華と恋花が一緒なのは救いよね」

「全くだよな」
袁紹の側近の軍師二人も当然同行していた。
「神代もいてくれてるし」
「内政は陳花が留守番で仕切ってもくれるしな」
本拠地にいなければできないことはというのだった。
「それは救いね」
「頼むぜ、神代」
「わかっているわ」
審配は真面目な顔で二人の言葉に応える。今も袁紹の傍にいる。
「麗羽様は何があってもお守りするわ」
「麗羽様の親衛隊だしね」
「それに軍師でもあるしな」
「私は麗羽様の家臣だから」
このことは忘れないことだった。
「だからね」
「私達が前線指揮にあたるから」
「花麗や林美達と一緒にな」
「黒梅お姉様もよね」
「ええ、五人でね」
「袁紹軍五大明王勢揃いだぜ」
この二人とその三人でだった。袁紹軍の将軍達なのだ。
「それにあれよね。陳花の他にも」
「藍玉と黒檀が残ってるよな」
「ええ、あの二人も内政を担当してくれるから」
審配はその二人の名前にも頷いてみせた。
「安心していいわ」
「我が陣営は人が多くて助かるわね」
「ああ。麗羽様がどんなにムラッ気の塊でもな」
「それはどういう意味でした？」
袁紹は文醜の今の言葉を聞き逃さなかった。

「何か凄く馬鹿にされたような気がしますわ」
「あっ、気のせいですよ」
文醜はこれだけで誤魔化した。
「別に麗羽様が御自身の興味のないことは全然駄目でしかも変に子供っぽいとか騒ぎを引き起こすとか実はあまり周りを見てないとかそういうことじゃないですから」
「ちょっと、全部言ってるわよ」
顔良は彼女のその言葉に困った顔になった。
「何もかも」
「あれっ、そうか？」
「麗羽様のことを」
言ってしまっているというのだった。
「全く」
「悪い悪い、気付かなかったよ」
一応謝りはした。しかし顔も目も笑っている。

# 第二十三話　楓、思い出すのことその十一

「まあとにかく。あの連中を倒せばそれで北や西の馬に乗ってる連中は全部あたい達の配下になるわけだな」
「そうね。合わせて百二十万」
顔良はここで顔を微笑まさせた。
「兵士も手に入るし。これで国力がさらにあがるわね」
「まず国力あってのことですわ」
袁紹もそれを言う。こうしたことはわかっているのだ。
「五つの州で千五百万、それにその百二十万でしてよ」
「兵士は三十万ですよね」
「それだけは充分養えますよね」
「三十万以上いけますわね」
袁紹はそれ以上だと言った。
「ただ。無理はできませんから異民族の兵も合わせて三十万ですわ」
「民を駆り出さない、ですね」
「ですから」
「華琳はこのことで困っているようですけれど」
「曹操さんのところは異民族いませんからね」
「それで民から兵を集めるには限度がありますからね」
兵を集めるのも大変だった。そういうことだった。
袁紹が異民族を集めるのにはだ。そうした理由があったのである。
「この西への遠征が成功したら幽州の統治権も朝廷から貰えますし」
「本当に頑張りましょう」
「ええ、必ず勝ちますわ」
こう話しながら西に向かうのだった。今袁紹の大軍が西に向かっていた。
そしてその本拠地である？ではだ。今二人の美女が話をしていた。
「それで藍玉殿、今来た人材は」

「ええ、黒檀殿。もう会ったわ」
眼鏡をかけていて切れ長の黒い知的な目に緑の長い髪を上で束ねた美女が奥二重の緑がかった青い目に白く流麗な、絵を思わせる顔のブロンドの髪の美女の言葉に応えていた。
眼鏡の美女は胸が目立ちスリットのある黒いチャイナドレスである。ブロンドの美女は天女を思わせるふわりとした服を着ている。どちらも胸がかなり大きい。
「それでね」
「どうしたの。採用？」
「ええ、採用よ」
眼鏡の美女はにこりと笑って答えた。
「そうさせてもらったわ」
「そう、それでまたなのね」
「ええ、またよ」
眼鏡の美女蔡文姫はこう甄姫に答えた。
「あの世界から来た人達よ」
「最近続くわね」
甄姫はそれを聞いて静かに述べた。
「それもかなり」
「そうね。ただ」
「腕は立つ」
甄姫はまた言った。
「そういうことね」
「そうよ。それは見事なものだから」
「いいとするべきね」
「これで西方を制圧できるし」
蔡文姫の顔は知的な笑みを浮かべている。
「それに力仕事もできるし」
「ええ。灌漑も田畑を耕すのも街造りもね」
「だからいいのよ。それでね」

「そうね。ただ」
「ただ？」
「この世界にこれだけ来ているというのは不思議ね」
甄姫が今言うのはこのことだった。
「麗羽様は強い人材が加わるからいいって仰るけれど」
「そうね。それに」
「宮中のことね」
「私は気付けば匈奴のところに送られていたわ」
蔡文姫の顔がすぐに険しくなる。
「何者かに眠らされてね。大将軍に御会いする時に」
「そして私達が匈奴を服属させた時にここに戻って来れたわね」
「このことはよかったわ」
蔡文姫はこのことは確かによかったとした。
「けれど。それでもね」
「問題は誰が貴女を匈奴まで送ったかね」
「普通に考えれば宦官達だけれど」
「十常侍」
甄姫はこの名前を出した。
「彼女達かしら」
「そう考えるのが普通ね。けれど」
「けれど？」
「彼女達ではない気があするのよ」
蔡文姫はこう述べたのだった。
「どうもね」
「じゃあ一体誰だというの？」
甄姫は彼女のその言葉に問い返した。

# 第二十三話　楓、思い出すのことその十二

「貴女でないのなら」
「私が宮中からいなくなって得をする誰か」
「宮中きっての知恵者と言われた貴女がいなくなってそのうえで」
「得をする誰かよ。それ十常侍だったら拉致して送るなんてことは」
「しないわね」
甄姫もこのことはすぐに言った。
「間違いなく暗殺してるわね」
「毒なり刺客なり使ってね」
「そうするわね。あの連中なら」
「けれど拉致されたわ。それに私は確かに宦官達を好きではなかったけれど」
「対立はしていなかった」
「派閥争いは好きではなかったから」
これは彼女の性格から来るものであった。それで宮中では中立の立場でいたのである。
「だからね」
「つまり宦官達に貴女を害する理由はない」
「彼女達も私のことは嫌っていたけれど」
このことははっきり自覚していた。嫌えば嫌われるである。
「けれど。それでも対立はしていなかったから」
「無闇に害を及ぼすこともない」
「そういうことになるわよね。つまり宦官達ではないわ」
「では一体全体本当に誰が」
「私が宮中からいなくなってから」
蔡文姫の言葉がここで強いものになった。
「誰が宮中に出て来て頭角を現したか」
「ええと。それは」

「その誰かだけれど」
「誰だと思うの？貴女は」
「それが私にも」
ここでは首を傾げてしまった蔡文姫だった。
「わからないのよ。私は中立派だったし」
「まだ大将軍の陣営にいたらね」
「ええ。司馬慰殿かも、と思うけれど」
「大将軍の懐刀にして参謀の」
「彼女が来てから大将軍は常に御傍に置いているそうね」
「らしいわね。絶大な信頼を得ているとか」
このことは河北でもよく知られていることだった。
「頭が切れるうえに名門司馬家の嫡女で」
「そう、私よりも頭は切れるわ」
そして家柄もであった。
「聞いた話によるとね」
「そこまでなのね」
「私は本から得ているものよ。けれど彼女はそれだけじゃなくて」
「元々頭が冴えているのね」
「かなりね。我が陣営の水華や恋花よりも上ね」
「そして曹操殿のところの桂花さんよりも」
「間違いなく上よ、かなりのものよ」
そこまでの頭脳の持ち主だというのだ。蔡文姫は彼女をこうも評した。
「伏竜、鳳雛にも比肩する、恐ろしい才の持ち主よ」
「恐ろしい人物ね」
「しかもその名門の嫡女」
このことも重要なのだった。
「麗羽様や曹操殿にとっては間違いなく疎ましい存在よ」
「ええ、確かにね」
甄姫はこのことは実によくわかっていた。嫌になる程にだ。

「御二人にとってはね」
「だからね」
袁紹は妾の子、そして曹操は宦官の家の出である。二人はそうした意味でその立場は弱いのだ。家柄はあってもそれは清流ではないからだ。
「御二人は間違いなく司馬慰殿を嫌っておられるわ」
「かなりね。まだ御会いされていないけれど」
「けれど嫌っておられるわ」
これは間違いないというのだった。
「注意しておかないとね」
「そうね。御二人共繊細なところがあるから」
意外なことに袁紹もそうなのである。彼女は実は繊細な部分が多いのだ。
「注意しておかないとね」
「それにしても。司馬慰殿は」
蔡文姫はあらためて彼女のことを考えてた。
「どうされるのかしらね」
「大将軍の御傍において」
「それが問題ね。どういった方かわかっていないし」
「その通りね。よからぬ方ならばいいけれど」
二人はこのことを危惧していた。しかしであった。

# 第二十三話　楓、思い出すのことその十三

「まあ話はこれで終わって」
「ええ」
二人はふとここでまた言い合うのだった。
「陳花のところに行ってね」
「ええ、内政のことでね」
「それと西方攻略の後で手に入る幽州のこともね」
蔡文姫はその地のことにも言及した。
「ちゃんとしておかないとね」
「あの州もね。そうね」
「まだ決まっていないけれど袁家の統治下になるのは間違いないわ」
「我が河北袁家の」
ここで河北と断られた。ここにも袁紹の微妙な立場が出ていた。
「その為にね」
「ええ、だからね」
蔡文姫はまた言った。
「今のうちに戸籍等を調べておきましょう」
「各郡や県のことも調べて」
「劉備殿がおられるけれど州全体を管轄されているわけではないし」
「あの州は牧がおられないからね」
やはり二人も公孫賛のことは知らなかった。何処までも存在感の薄い公孫賛である。
「だから内政が滞っているでしょうし」
「余計に内政に専念しないといけないわね」
「今から準備をしておきましょう」
これが蔡文姫の主張だった。
「そういうことでね」
「わかったわ。それじゃあね」

「陳花とも話してね」
二人はこう話してその場を離れた。そして。
西に向かう者達がいた。一人は金髪碧眼に黒いその見事なスタイルにぴっしりとした服を着ている。そしてもう一人は黒いスパッツに赤と白の奇麗な上着の長い黒髪の美少女である。その二人がそれぞれ話していた。
「ねえ、凛花」
「何、沙耶さん」
「貴女とはここでも一緒ね」
「そうですね、確かに」
凛花と呼ばれた少女は自身が沙耶と呼んだ金髪の美女の言葉に応えていた。
「離天京からまた」
「ここはあそこに比べてどうかしら」
「この地はまとまっているようですが」
今は平原にいる。しかしそこには戦乱の空気はなかった。
「ただ。他は」
「随分と治安の悪い場所もあるみたいね」
「確かな大名のいない国では」
「そうね。ただここじゃ大名とは呼ばないみたいよ」
「そうなのですか」
「牧と呼ぶらしいわ」
沙耶はこう話した。
「そうね」
「そうなのですか」
「吉野殿、沙耶殿」
ここでだった。二人の後ろにいる槍を持った髭だらけのちょんまげの男が言ってきた。黒い袴に白の着物、そして緑のたすきをしている。その手には十字の槍がある。
「それはそうとでござる」

「はい、花房迅衛門殿」
凛花が彼の言葉に応えた。
「何でしょうか」
「やはり馬を貰った方がよかったのではないのか」
彼が言うのはこのことだった。
「どうも。それがしにはこれは」
「あら、歩くのは苦手かしら」
沙耶は悪戯っぽく笑って彼に問い返した。
「お武家様ともあろう方が」
「そうではない」
花房はそれは否定した。
「しかしだ」
「しかし？」
「果たしてこれで間に合うのか」
彼が危惧しているのはこのことだった。
「袁紹殿の奸賊討伐に」
「大丈夫よ。このままいけばもうすぐ軍と合流できるわよ」
「左様か」
「そうよ。安心していていいわよ」
こう花房に話すのであった。
「そんなに気になるんなら一人で駆けて行ったら？」
「一人でか」
「先にね。止めないわよ」
「ううむ、それならばだ」
花房はそれを聞いて髭だらけの顔をいぶかしめさせた。

# 第二十三話　楓、思い出すのことその十四

「ここはだ。先に向かわせてもらうとするか」
「おいおい、おっさんよ」
「幾ら何でもそれはないな」
彼のそれぞれ左右から青紫の服にざんばら髪の血走った顔の男と白髪の僧侶を思わせる服の白い肌の男が言ってきたのだった。
「あんた一人で行ったら絶対に道に迷うぜ」
「止めるべきだな」
「ううむ、そうか？」
「ああ、そうだよ」
「絶対にそうなるな」
二人はそれぞれ話した。見れば黒髪の男は腰にやけに大きな刀がある。白い髪の男の手には細く鋭い刀が握られていた。どちらも禍々しい感じがする。
「だからここはな」
「一緒に行こうぜ」
「そうするのが一番か」
「そういうこった」
「納得してくれよ」
「そうしよう」
花房も遂に頷いた。
「それではな」
「それはそうとですが」
凛花はその二人に言ってきた。
「十六薙夜血殿」
「ああ」
黒髪の男が応えた。
「七坐灰人殿」

「何だ」
白髪の男が応えた。
「急にあらたまってよ」
「どうしたんだ」
「御二人も共に来られるとは思いませんでした」
こう二人に言うのだった。
「失礼な言葉ですが」
「まあ気が向いたからな」
「俺もだ」
二人はそれが理由だというのだった。
「それでだ。気にするな」
「仕事でもあるしな」
「仕事、ですか」
「ここには那美も一緒だしな」
「自由なようだしな」
二人はここでこんなことも言った。
「俺はそれで満足だ」
「俺もだ。肌や目の色で何ともないらしいしな」
「だからですか」
「へっ、俺はあいつさえいればいいんだよ」
「俺は来られたんだな。その東の国に」
二人はこう言ってだ。満足している顔を見せた。
「そういうことだからな」
「やらせてもらう、やることはな」
「わかりました」
凛花は二人のその言葉に頷いた。
「では。このまま共に」
「行こうぜ」
「ここでは味方になってやるからな」
二人は笑いはしない。しかし敵意も見せなかった。

そのうえでだ。五人は進んでいく。その中でだ。
「ヂッ」
「鉄之介、どうしたの？」
凛花は己の左肩にいる銀の鼠の言葉に応えた。
「何かあったの？」
「ええ、ほら」
今度は沙耶が言ってきた。
「あそこに」
「うむ、軍だな」
花房もそれを見て頷く。見れば一行の前に大軍がいる。
「蔡文姫殿達から聞いてすぐに出発したが」
「案外すぐに合流できたな」
「そうだな」
夜血と灰人も言う。
「いいことじゃねえか」
「運がいいか」
しかしであった。ここでだ。

# 第二十三話　楓、思い出すのことその十五

一行は見たのだった。巨大な鳥の仮面の男にだ。
「何だありゃ」
「怪物かよ」
夜血と灰人がその男を見て顔を顰めさせた。
「この世界にはそんなのがマジでいやがるのかよ」
「とんでもない話だな」
「そうだな。しかしそうなればだ」
花房が早速槍を構える。
「そこの妖怪！成敗してくれる！」
「妖怪！？モンスターのことか」
しかしであった。ここでその鳥の仮面の男も周囲を見回すのだった。
「私が相手をしよう。何処だ？」
「あんたのことよ」
沙耶がその彼に突っ込みを入れる。
「っていうか自分で自分を探してどうするのよ」
「モンスター！？私がか」
だが男はまだ自覚していない。
「馬鹿な、私は人間だ」
「じゃあその鳥の顔は何なんだよ」
「それで人間っていうのか！？」
夜血はその鋸を思わせる禍々しいまでに歪な刀を抜いている。灰人はもう既に刀を抜いている。戦闘態勢に入っているのだった。
「若し人間っていうんならな」
「証拠を見せてみろ」
「ううむ、致し方ない」
それを聞いてだ。男は仮面を取った。そこにあったのは。

「ああ、人間だな」
「間違いないな」
夜血も灰人もこれで納得した。
「じゃあそれはお面か？」
「よくできてるな」
「グリフォンマスクの仮面だ」
この男グリフォンマスクは答えた。
「そして私自身でもある」
「ふむ。貴殿にとってはそれはだ」
花房はそれを聞いて言った。
「武士の心と同じものだな」
「そうなるな。見たところユー達も」
グリフォンマスクは五人を見てから言った。
「こちらに来たのだな」
「ええ、そうよ」
沙耶が答えた。
「あんたもそうなのね」
「そうだ。私もまた同じだ」
グリフォンマスクはまた答えた。
「この世界に来た」
「縁でしょうか」
凛花はそれを聞いて述べた。
「つまりこれは」
「そうね。縁なのは確かね」
沙耶は彼女のその言葉に頷いた。
「それはね」
「そうですか。それなら私達以外にもこの世界に」
「来てるでしょうね。乱鳳君達は間違いないわね」
彼等は絶対だというのであった。
「来てるでしょうね」

「何となくわかります」
凛花もそれは感じ取ることができた。
「彼等にはこうした世界の方が相応しいと思います」
「そうね。それでだけれど」
「はい」
「この人は一体」
「私か。私はグリフォンマスクという」
彼は自分から名乗った。
「宜しく頼む」
「グリフォンマスクさんですか」
「子供達と正義の為に戦っている」
こうも言うのであった。
「ユー達もそれは同じか」
「大儀の為に」
花房が答える。
「本来は幕府の為なのだがな」
「うむ、この国には幕府はない」
グリフォンマスクはこのことは断った。
「残念だがな」
「幕府を知っているのね」
「日本の武家政権だな」
グリフォンマスクは沙耶に対して答えた。

# 第二十三話　楓、思い出すのことその十六

「そうだな」
「正解よ。知ってたのね」
「歴史で習った。ユー達もそこから来たのか」
「そこからってことは」
「つまりは」
「ここにもそこから来た者がいる」
こう沙耶と燐花にたいして答えたのだった。
「何人かな」
「へえ、俺達だけじゃなくてか」
「この陣営にもいたんだな」
夜血と灰人が楽しそうに言う。
「じゃあ結構早いうちに馴染めそうだな」
「そうみたいだな」
「馴染むといい」
グリフォンマスクはそれは是非にというのだった。
「少なくともユー達は私の仲間だ」
「ふむ、仲間だ」
「共に戦うことになる。宜しくな」
言いながら花房に対して右手を差し出した。
「握手をしよう」
「握手とは？」
「手と手を握ることよ」
沙耶がいぶかしむ花房に対して述べた。
「それのことよ」
「挨拶か何か？」
「友への挨拶だ」
それだというのだった。

「これから共に戦う友に対してのな」
「友人ですか」
「そうだ」
こう凛花に対しても言っ。
「それでは駄目か」
「そうだな」
花房がだ。彼のその言葉に応えた。
「喜んでだ」
「そうしてくれるか」
「我等は仲間だ」
こうグリフォンマスクに答える。
「そしてだ。友だ」
「そう言ってくれるか」
「言うのではない。信じるのだ」
それだというのであった。
「貴殿を友として信じよう」
「そうしてくれるか。ならば」
「うむ、ならばだ」
こうしてだった。二人は互いの手を握り合った。
そのうえで彼等は共に戦場に向かった。それはまた一つのはじまりだった。

第二十三話　完

２０１０・６・２７

# 第二十四話　劉備、剣のことを聞くのことその一

第二十四話　劉備、剣のことを聞くのこと

劉備の元にだ。今は兵も集まってきていた。
「凄くなってきたよな」
「うむ」
関羽が馬超の言葉に応えていた。
「将だけでなく兵達もな」
「何か劉備殿が来てから凄くなってきてないか？」
「あの方には人を集めるものがあるようだ」
こう言う関羽だった。
「どうやらな」
「人をか」
「そうだ。その人間性故か」
関羽は人が来る理由をそこに求めた。
「何か。傍にいるとな」
「そうだな。落ち着く」
趙雲もいた。
「あの方の傍にいるとそれだけでな」
「そういえばそうだな」
ここで馬超も納得した顔で頷いた。
「あたしも。何か一緒にいたくなるな」
「鈴々もなのだ」
今度は張飛だった。
「あの人と一緒にいたいのだ、ずっと」
「ええ。若しかしたらあの人は」
黄忠も言う。
「大事を果たせるかも知れないわね」

「血筋だけではありませんね」
孔明は劉備のその血統について言及した。その皇室ということをだ。
「その心で」
「力や頭脳ではなく、か」
「そうしたものはどうとでもなりますから」
孔明はそれについては大きく見てはいなかった。
「それはあの方を慕う者がすればいいのですから」
「力や頭は必要ないのだ？」
「はい、確かに最低限は必要ですが」
孔明は一応張飛にこうは述べた。
「ですが。人をまとめ大事を果たすにはです」
「そうね。人を惹き付けて離さないものね」
黄忠はまさにそれを指摘した。
「それが必要になるわ」
「実際に今もです」
また孔明が言った。
「こうして多くの将兵が集まってきています」
「俺達も何かな」
テリーも来た。
「あのお嬢ちゃんは好きだぜ」
「見ていると危なっかしいんだけれどな」
「それが余計にだろうか」
ジョーとアンディもいる。
「力にならせてもらいたいってな」
「そう思うからだろう」
「はい、私達もそれは同じです」
孔明はにこりと笑ってテリー達のその言葉に応えた。そのうえでテリーに何処か似ていてより精悍な、金髪に青い目の黒いシャツとズボン、それに赤いジャケットの青年を見た。

「貴方もですか？ええと」
「ああ、ロックだ」
彼は自分から名乗ってみせた。
「ロック＝ハワードだ」
「そうでしたね、ロックさん」
「ああ」
「貴方も劉備さんは」
「嫌いじゃないな」
ロックは微笑んで孔明のその言葉に応えた。
「癒されるっていうのか？俺のあまり知らない感情だがな」
「では貴方も」
「ここにいていいか？」
逆に孔明達に対して問うロックだった。
「テリーと一緒にな」
「はい、勿論です」
孔明はにこりと笑ってロックのその言葉に応えた。
「是非。ご一緒に」
「よし、それじゃあな」
「御願いしますね」
「本当に。色々な人が集まってきていますね」
ナコルルの言葉である。

# 第二十四話　劉備、剣のことを聞くのことその二

「妹も来ましたし」
「リムルルだよな」
「はい」
ナコルルは馬超のその言葉に応えた。
「あの娘も来ましたし」
「何かあの娘いいよな」
馬超はそのリムルルを思い出して微笑んだ。
「蒲公英とは全然タイプが違うけれどそれでもな」
「それでもですか」
「ああ。妹っていいよな」
そしてこう言うのだった。
「あいつは従妹だけれどな」
「そういえばそのリムルルは何処だ？」
趙雲がこのことを一同に問うた。
「蒲公英といい姿を見ないが」
「今劉備さんのところにいるわよ」
舞が趙雲のその問いに答える。実は彼等は今募兵の場所にいるのだ。そこに若者達が次々と集ってきているのである。
「そこで一緒に勉強か稽古をしているわ」
「げっ、学校の勉強かよ」
丈はそれを聞いて嫌な顔になった。
「俺勉強は嫌いなんだよ」
「あんたはもうちょっと勉強した方がいいだろ」
「その通りだな」
二階堂と大門がその丈に突っ込みを入れる。
「高校、出てるんだよな」
「それはどうなのだ」

「一応出てるけれどな」
こう二人に答えはする。
「京とは違ってな」
「高校だったのだ？」
張飛は心配する顔になっていた。
「あいつはそこを卒業できるのだ？」
「無理じゃないの？」
ユリの言葉は素っ気無いと共にきつかった。
「だって。出席してないんだから」
「しかも今はこの世界にいるからな」
キングはこのことも話した。
「それで卒業というのはな」
「そうなのだ。じゃあ難しいのだ」
「中退とかになるんじゃないか？」
リョウもそれは心配していた。
「あのままだと」
「頭は悪くないんやけれどな」
ロバートはそれは保障した。
「とりあえず学校に行かへんとな。しゃあないわ」
「ううむ、京にとってはそれが最も為すべきことか」
関羽も彼のことを心配していた。
「どうしたものかな」
「あちらの世界も大変なんですね」
孔明はこのことを心から思った。
「本当に」
「こっちの世界も同じだけれどな」
こう言ったのはテリーだった。
「まあどっちもどっちだ」
「そうですか」
彼等はこんな話をしていた。そしてだ。

劉備はだ。その馬岱は矢黒い短い髪に白地に端が紫になったアイヌの服を着た黒い目の可愛らしい少女とそれと草薙と共にだ。あれこれとしていた。

馬岱と草薙が稽古をしていた。残る二人はそれを見ている。

「喰らえーーーーーっ!!」

草薙が炎を出しそれを地面に叩き付ける。その炎が血を走る。

馬岱はそれを跳んでかわす。そうしてだった。

上から草薙を狙おうとする。しかしだ。

ここで草薙も跳んだ。左手に炎を宿らせてそれを一閃させる。

「ほうりゃあっ!」

「あっ、鬼焼き!」

劉備がそれを見て言う。

「草薙さんの技の一つ」

「これでどうだ!」

草薙も技を放ちながら言う。

「かわせるか!」

「甘いよ!」

しかし馬岱もここで言ってだ。そうしてだ。

## 第二十四話　劉備、剣のことを聞くのことその三

その槍を守りの姿勢で構えて。それで草薙の鬼焼きを防いだのだった。
「私だってわかってたんだから！」
「へえ、わかったか！」
「わかるわよ！」
こう草薙にも返す。
「草薙さんのそのパターンはね」
「そのパターンはか」
「そうよ」
二人は着地した。そのうえでまた話す。
「だって草薙さんってさ」
「こうして闇払いと鬼焼きで飛ばせて落とす場合とか」
「それと闇咬みとかで接近して一気に畳み掛けるパターンがあるじゃない」
「ああ」
「このパターンって言葉は二階堂さんに教えてもらったけれど」
馬岱はついでにこのことも話した。
「どっちかだから。闇払いが来たらね」
「それでもうわかるっていうのか」
「そういうこと」
また構えを取りながら利発な顔で話す。
「それでね」
「果たしてそうか？」
だが草薙はここで不敵な笑みで返すのだった。
「それだけだって思うか？」
「違うの？」
「俺の攻撃はそれだけじゃないんだよ」

その不敵な笑みのまま再び馬岱に話す。
「残念だけれどな」
「じゃあ他には？」
「こうするんだよ。行くぜ！」
今度は草薙から跳んだ。そうしてだった。
馬岱に蹴りを仕掛ける。馬岱は斜め上からのその蹴りを防いだ。
しかしだ。
草薙は着地してからもさらに蹴りを仕掛ける。それから続けてだ。
「喰らえーーーーっ！！」
「えっ、接近して！？」
闇払いだった。それが来たのだ。
その攻撃を見せてだ。草薙はそれからまた告げた。
「こういうパターンもあるんだぜ」
「止めに闇払いをって」
「他にも空中だと朧車もあるしな」
「あの技もなのね」
「そういうことだ、俺だって二つのパターンだけじゃないんだよ」
こう馬岱に話す。
「こうして色々あるからな」
「そうだったのね」
「そうさ。しかし馬岱もな」
「私はどうなの？」
「やっぱり強いな」
彼女を認める言葉だった。
「伊達に槍を持ってる訳じゃないな」
「どっちかっていうと馬に乗った戦いが得意だけれどね」
ふとこんなことを言う馬岱だった。
「それでも。こうして立って戦うのもね」
「苦手じゃないか」
「そういうこと。それじゃあ今の稽古はこれまで？」

「ああ、そうするか」
草薙も馬岱のその言葉に返した。
「後はお茶でも飲んでな」
「夕食は焼き魚ですよ」
ここでその黒く短い髪の少女が言ってきた。
「黄忠さん達が作ってくれますよ」
「ああ、それはいいな」
草薙は彼女の言葉を受けてまた微笑む。
「魚好きだからな」
「そうですね。草薙さんって魚好きですよね」
「ああ、大好きだ」
また少女に応える。そのうえで彼女の名前も呼んだ。
「リムルルもだよな」
「はい、私もお魚好きです」
リムルルは素直な声でにこりと答えた。
「焼いても煮てもですけれど」
「火は任せておいてくれ」
言いながら右手に自分の火を出した。

## 第二十四話　劉備、剣のことを聞くのことその四

「こうしてな」
「それってどうやって出すんですか？」
劉備がふとそのことを尋ねた。
「草薙さんっていつも普通に出してますけれど」
「ああ、これな」
草薙は劉備に顔を向けてその問いに答えた。
「草薙家は代々こうして火を出せて操れるんだよ」
「代々ですか」
「草薙家は元々オロチを監視し倒す家でな」
「ああ、前話してたよね」
「そうですね」
馬岱とリムルルがそれを聞いて頷いた。
「他の二つの家と一緒に」
「私達の世界では」
「まあ八神の奴等とはおかしなことになっちまってるがな」
草薙はふとこんなことも言ったがここではこのことは多くは言わなかった。
「それでもな。そのオロチを倒す為にな。火を出せるんですよ」
「それって気を火にしているのよね」
馬岱はすぐにこのことを察して言ってみせた。
「それで出せるのよね」
「そうさ、草薙家の特別な素養でな」
それでだというのだ。
「草薙家は代々出せるんだよ」
「それじゃあですけれど」
ふとだ。劉備はそれを聞いてある人物の名前を出した。
「真吾君は」

「ああ、無理だ」
草薙の劉備への返答はここでは一言だった。
「あいつは草薙家の奴じゃないからな」
「そうなんですか」
「言ってるけれどわかってくれないんだよ」
草薙はここでは少し困った顔になった。
「何か憎めなくて相手をしてやってるけれどな」
「矢吹君って何か憎めないのよね」
「そうですね」
馬岱とリムルは顔を見合わせてにこりと言い合う。二人の背丈は同じ位だ。
「必死だし勉強家だし」
「怪談好きなのが困りものですけれど」
「真吾君の怪談って怖いわよね」
劉備は少し怯えた顔になっていた。
「聴く度に夜寝られなくなって」
「そうそう、物凄くね」
「怖いですから」
「あいつは怪談が趣味なんだよ。それでだ」
草薙は今は劉備の腰を見た。そしてふと言うのだった。
「なあ」
「はい？」
「劉備さんが持っていたっていうその剣な」
彼が今話すのはこのことだった。
「それは何処にあるんだ？」
「ええと、それは」
「わからないのか」
「すいません、今はちょっと」
「そうか」
草薙は困った顔になった劉備にまた返した。

「見つかればいいな」
「そう思います」
劉備もその困った顔で草薙の言葉に答えた。
「さもないと本当にお母さんに怒られますし」
「しかし物凄いお袋さんだな」
草薙は彼女の話からその母のことを知っていた。そうして言うのだった。
「実の娘を川の中にか」
「思い出す度にですよ」
「普通ないな。というか無茶苦茶だろ」
草薙はいささか呆れた顔になっていた。
「その度にあんたを掴んで全速力で川まで走って放り込むなんてな」
「力も素早さもね」
「私達よりも強いんじゃないでしょうか」
馬岱とリムルルもこう思った。

# 第二十四話　劉備、剣のことを聞くのことその五

「そうよね、それって」
「力も速さも」
「かもな。尋常じゃない人だな」
「何でも昔は」
劉備もここで話す。
「ガンダムとか何とかに乗っていた記憶があるとか」
「ってマクロスじゃないんですか？」
反応したのはリムルルである。
「私そちらなら何とかわかりますけれど」
「そこで何でわかるの？」
馬岱がそこに突っ込みを入れた。
「ガンダムとかマクロスって何？」
「ええと、何か記憶があって」
それでだというのだった。
「わかる気がしますから」
「ううん、不思議ね」
「まあよくあることだな」
草薙はこれで済ませた。
「俺もそうしたことあるしな」
「そうなのね」
「馬岱もそういうのないか？」
「言われてみれば」
彼女にしても言われると自覚できた。
「そういうのあるかも」
「まあ声の話は置いておいてだな」
草薙はそれは終わらせた。
「とにかく。お茶でも飲むか」

「はい、そうですね」
劉備がにこりと笑って頷いた。そのうえでだった。
四人でいつもの庭から建物の中に戻ろうとする。ここでだった。
バンダナをして青い短ランをした高校生と思われる元気のいい背の高い少年が走って来てだ。こう四人に対して叫んできた。
「草薙さん、劉備さん！」
「あれっ、矢吹君」
「真吾君じゃない」
劉備と馬岱がその彼を見て言った。
「噂をすればだけれど」
「どうしたのかしら」
「とんでもない人が来ました！」
その少年矢吹真吾は駆けながらまた話した。
「神楽さんがです！」
「神楽って？」
それを聞いて言ったのはリムルルだった。
「ええと、確か」
「ああ、そうだ」
ここで言ったのは草薙だった。真剣な顔になっている。
「その神楽だ」
「三つの家のうちの一つの人でしたね、確か」
「やっぱりこっちの世界に来てたか」
草薙はこうも言ったのだった。
「そうだろうって思ってたがな」
「草薙さん、それでなんですけれど」
また言ってきた真吾だった。
「どうします？」
「どうしますか」
「はい、やっぱり会いますか？」
こう彼に問うのである。

「どうします？」
「会うしかないだろうな」
これが草薙の返答だった。
「あいつが来るってことはそれだけでな」
「何かありますか」
「ああ、オロチか？」
草薙の脳裏にこの存在のことが浮かんだ。
「まさか。この世界でも」
「そうですよね。いてもおかしくないですよね」
「ああ。それを確かめる為にな」
「会うしかないんですね」
「そうする。じゃあ劉備さんよ」
草薙はあらためて劉備に声をかけた。
「その神楽ちづるってのと会ってくれるか？」
「その人もやっぱり」
「そうさ、俺達の世界の住人だ」
こう話すのだった。

# 第二十四話　劉備、剣のことを聞くのことその六

「よかったら会ってくれ」
「わかりました」
劉備も草薙のその言葉に頷いた。
「それじゃあ今から」
「頼むぜ。俺も同席させてもらっていいか？」
「はい、御願いします」
劉備は草薙のその申し出に対して頷いた。
「草薙さんのお知り合いですよね」
「よく知ってるさ」
草薙は冷静にこのことを認めた。
「話してただろ？因縁があるってな」
「因縁ですか」
「そのことも話させてもらうさ。それじゃあ行こうか」
「わかりました」
劉備達は一同が食事を食べる部屋で彼女と会うことになった。赤い扉に壁、それと机と椅子のだ。そこで主だった面々と草薙を交えて会った。
こうしてであった。その神楽ちづるが案内された。黒くすらりとした長い髪に髪と同じくすらりとした長身、それにはっきりとした顔立ちの美女である。目元がしっかりしている。白い巫女を思わせるシャツにだ。黒いぴっしりとしたズボンという格好である。
その彼女が劉備と草薙達の前に来た。まずはであった。
「久し振りね、京君」
「また君付けかよ」
「年上だからいいじゃない」
神楽は優しく笑って彼にこう返した。
「お姉さんみたいなものでしょ」

「誰がお姉さんだよ」
草薙は今の彼女の言葉には苦い顔で返した。
「俺は別にな」
「別に？何かしら」
「あんたと会いたくてここに来た訳じゃないしな」
「あら、それはどうしてかしら」
「あんたと会うと絶対に何か怒る」
草薙は怪訝な顔で述べた。
「だからな」
「そうね。確かにね」
神楽もこのことを認めて頷いた。
「それはその通りね」
「そうだろ、じゃあ今も」
「そうよ」
また認めてきた神楽だった。
「残念だけれどその通りよ」
「まさかと思うがな」
草薙の目が鋭いものになった。
「あれか？オロチがこの世界にも」
「可能性はあるわね」
神楽も真剣な顔で返す。
「それはね」
「それは、か」
「ただ。今のところオロチは感じないわ」
それはというのである。
「彼等もここに来ている可能性は高いけれどね」
「そうだろうな。俺達がこの世界に来ているとな」
「彼等も」
「来ているのが普通だろ」
草薙はこのことについては決して楽観していなかった。

「何処かに潜んでいやがるんだろうな」
「妖しい噂も聞いているわ」
神楽もこんなことを言う。
「それらしき影のね」
「そうか。じゃああいつも来ているな」
「八神庵ね」
「ああ、あいつは絶対に来ている」
草薙は彼に関してはさらに強い確信を持っていた。
「確実にな」
「間違いなくね。君と彼はオロチのそれよりも強い因縁があるから」
「あいつとの決着はな」
このことも話す草薙だった。二人は今向かい合って話をしている。
「必ず着ける」
「そうするのね」
「どっちが死んでもだ」
草薙の言葉は強かった。

# 第二十四話　劉備、剣のことを聞くのことその七

「やらなければいけないからな」
「わかったわ。けれどね」
「けれどか」
「貴方達は本来は戦う宿命にはなかった」
神楽の目が過去、それも遥かな過去を見るものになっていた。
「けれど今は」
「あいつとはな。草薙の家や八神の家やそういう問題じゃない」
「もっと強い何かね」
「それがある。だから俺達は闘う」
こう神楽にも話す。
「それだけだ」
「わかったわ」
「何か凄い因縁だな」
「そうだな」
馬超と趙雲が二人の話を聞いて話す。
「草薙ってそんなことがあったのか」
「八神家か。何か妙なものを感じる名だな」
趙雲は顎に右手を当ててそのうえで述べた。
「そして八神庵か」
「ああ、あたしも何か感じるな」
それは馬超も同じだった。
「そいつと草薙が会ったらどうなるかな」
「それが問題ね」
黄忠も話す。
「草薙家、八神家、そして神楽家」
さらにだ。
「あの三つの家とオロチのこともね」

彼女はこのことも考えていた。しかも深くだ。
そしてだ。ここで孔明が神楽に問うた。
「それで神楽さん」
「ええ」
「今回ここに来られたことはそのオロチと関係がないんですよね」
「ええ、そうよ」
その通りだと答える神楽だった。
「それはね」
「それじゃあどうしてここに？」
「仲間に入るのなら大歓迎なのだ」
張飛はこう神楽に話した。
「是非入って欲しいのだ」
「それも御願いできるかしら」
神楽は張飛の言葉にすぐに返した。
「このままどの陣営に属していないというのもいざという時に困るし」
「はい、わかりました」
劉備は神楽の申し出を笑顔で受けた。
「それじゃあ神楽さんは今から私達の仲間です」
「仲間なのね」
「はい、お友達です」
劉備はまた神楽に話した。
「それで宜しく御願いします」
「配下でなくて友達なのね」
「それが何か？」
「袁紹本初や曹操孟徳のところとは違うのね」
神楽が名前を出したのはこの二人だった。
「あの二人も孫策や董卓も私達の世界の人材を多く集めているけれど何処も配下だって言っているのに」
「だって。一緒にいるからお友達じゃないですか」

劉備はまさに何でもないといった口調で話した。
「だからです」
「そうなのね」
「はい、それで神楽さん」
劉備もまた神楽に尋ねた。
「今日ここに来られた理由は」
「それはね」
神楽は一呼吸置いてからだ。こう話してきた。
「劉備玄徳さん、貴女についてなのよ」
「私に？」
「そう、貴女になの」
また劉備に話した。
「貴女はかつて剣を持っていたわね」
「あの中山靖王のですか？」
「そうよ。あの剣よ」
話すのはこのことだった。
「あの剣だけれど」
「まさかあの剣が見つかったというのか」
これまで話を聞いていた関羽が述べた。

# 第二十四話　劉備、剣のことを聞くのことその八

「成程、そういうことか」
「見つかったというより手掛かりかしら」
「手掛かり？」
「そう、手掛かりよ」
また話す神楽だった。
「それが見つかったのよ」
「手掛かりか。それか」
「ええ。今は袁紹殿が持っているらしいわ」
「袁紹殿か」
関羽はその名前を聞いてだ。いささか難しい顔になった。
「あの方も難しい方だな」
「そうなのだ。気分屋で妙にお高く止まっているところがあるのだ」
張飛も困った顔になっている。
「とりあえず政や戦は得意みたいなのが救いだけれど困った奴なのだ」
「お母上のことが気になってですね」
孔明は袁紹がそうした性格になった原因を既にわかっていた。
「それでどうしても」
「妙に気を張ってだな」
「それでだよな」
趙雲と馬超も話す。
「そうでなければあの方ももっと安定した性格になっただろうがな」
「それで本人損してるよな」
「曹操さんもそうね」
黄忠は彼女についても話した。
「あの人も宦官の家だから」
「はい、あの人もそれを気にしています」

孔明は曹操のこともわかっていた。
「それがおかしなことにならないといいのですが」
「ううむ、全くだ」
また話す関羽だった。
「どうしたものかな」
「だから私はあの人達のところには行かなかったの」
神楽はここでその二人のところに向かわなかった理由も話した。
「それにね」
「それに？」
「劉備さんでなければ駄目だったし」
こうも言うのだった。
「それでなのよ」
「私でないと？」
「そうよ、貴女でないとね」
また話すのだった。
「貴女でないと駄目なのよ」
「その剣で、ですよね」
「その通りよ。貴女の剣でないと駄目なのよ」
「ううん、一体何が」
「貴女の剣には特別な力があるの」
劉備を見ての言葉だった。
「貴女が持つことによってそれが発揮されるのよ」
「特別な力が」
「この世界のことはまだよくわからないけれど」
ふとこんな話もした。
「ただ」
「ただ？」
「貴女の剣はこの世界を救うことができる。私はそうはっきり感じているわ」
神楽の今の言葉を聞いてだ。孔明が察した。

「まさかこの人」
「ああ、神楽は巫女なんだよ」
草薙がその事情を話す。
「巫女だからな。そうしたことがわかるんだよ」
「そうなんですか。やっぱり」
「ああ、だからこいつが来たってことはな」
草薙は神楽を見たままだ。言葉を続ける。
「それだけで何かがあるって言ったよな」
「はい、さっき」
「そういう理由だよ」
こう話してだった。さらに神楽の話を聞く。それはだった。
神楽はだ。自身の話をさらに続けていた。劉備に対して話していた。
「それでね。袁紹殿に会ってね」
「それで剣をですか」
「返してもらいましょう」
こう劉備に提案した。
「それでどうかしら」
「あの剣が戻れば」
劉備はかなり呑気に考えていた。

## 第二十四話　劉備、剣のことを聞くのことその九

「もうお母さんに川の中に投げ込まれなくて済むんですね」
「凄いお母さんね」
神楽もこの話には引いた。
「何かあると川の中に投げ込むの」
「剣を失ったことを思い出す度にです」
「その度になのね」
「はい。剣を見つけたらそれはなくなるんですよね」
「少なくともね」
神楽は表情を元に戻してそのことを保障した。
「ないわ」
「わかりました。それじゃあ」
「剣を取り戻すのね」
「袁紹さんに御会いすればいいんですよね」
やはり呑気な口調である。
「それじゃあ今から行きます」
「私が案内させてもらうわ」
神楽は劉備が行くと聞いてだ。にこりと笑って述べた。
「私が言い出したしね。是非ね」
「劉備殿が行くのならだ」
「鈴々も行くのだ」
関羽と張飛も名乗り出る。
「二人だけでは何かと不安だろう」
「是非そうさせてもらうのだ」
「なら私もだ」
「あたしもな」
続いて趙雲と馬超も名乗り出た。
「旅は多い方がいい」

「そういうことだからな」
「なら私も」
馬岱も右手をあげる。
「一緒に連れてって」
「御前は駄目だ」
馬超は自分の左にいる従妹を見て叱った。
「まだ小さいしな」
「小さいからって何よ」
「まだ修行中だ。ここに残れ」
咎める顔で話す。
「いいな、それは」
「何よ、それ」
馬岱はそれを聞いて口を尖らせてしまった。
「そんなこと言って。私だけ除け者にして」
「除け者じゃない」
また言う馬超だった。
「御前は残れ。いいな」
「ちぇっ」
不満に満ちた顔の馬岱だった。そうして。
黄忠と孔明も言う。
「私も行かせてもらうわ」
「私もです」
こう言うのだった。
「弓を使う人間も必要よね」
「私でよかったら。協力させて下さい」
「何で私だけなのよ」
ここでも不平を言う馬岱だった。
「私だけ居残りなのよ」
「他にも大勢いるだろうが」
馬超はまた従妹に言う。

「そうじゃないのか？」
「俺も残る」
草薙が言った。
「神楽がいれば充分だ」
「君は残るのね」
「ここに残る人間も必要だしな」
神楽に対しても言うのだった。
「だからな」
「とりあえず神楽さんと一緒に行くのは私達七人と」
劉備を含めてである。
「それでいいですね」
「では他の皆には残ってもらうか」
関羽がこれで話をまとめた。
「それで行くか」
「はい、じゃあこれで」
劉備も頷く。こうして決まった。

# 第二十四話　劉備、剣のことを聞くのことその十

次の日には早速一行が旅立つ。他の仲間達と兵士達が見送る。
「何か俺も出たいなあ」
「ああ、止めておけ」
真吾には二階堂が言った。
「御前が行くと何かトラブルが起こるからな」
「トラブルって」
「御前はそういう星の下にあるんだよ」
随分と物騒な言葉だった。
「動くとそれだけでな」
「そんなあ、そんな理由でなんて」
「残れ」
大門は一言だった。
「そして修行しろ」
「とほほ、何てこった」
「じゃあ瑠々ちゃんはね」
「私達が面倒見るわね」
舞とユリが黄忠に話す。
「黄忠さんは安心して」
「旅に出てね」
「有り難う」
黄忠は微笑んでその言葉に応えた。
「御言葉に甘えて」
「ええ、じゃあ」
「行ってらっしゃい」
「ただ」
黄忠はここでユリを見てだ。こう言うのを忘れなかった。
「ユリちゃん、いいかしら」

「どうしたの？」
「カレーを作るのはいいけれど」
少し咎める口調だった。
「ただね。それでもね」
「それでも？」
「あまり甘いものにはしないでね」
こう告げるのだった。
「それはね」
「えっ、甘口のカレー駄目なの？」
「ユリちゃんの作るカレーは甘過ぎるのよ」
「そうなのよね」
マリーも黄忠のその言葉に頷く。
「あんまりにも甘くて。あれは」
「子供の歯のことも考えないと」
黄忠はそこまで考えていた。
「だからよ。それは御願いね」
「じゃあカレーは俺が作るか？」
今度はリョウが言った。
「ユリのカレーは確かに甘過ぎるからな」
「リョウ君もね」
ところがだ。黄忠はリョウにも言うのだった。
「カレーは辛過ぎないようにしてね」
「俺もか」
「そうよ。リョウ君のカレーはまた辛過ぎるから」
カレはカレーは辛口派なのだ。
「だからね。いいわね」
「ううむ、俺も駄目か」
「じゃあカレーはどないするんや？」
二人の間にいるロバートが黄忠に問うた。
「瑠々ちゃんの大好物やし栄養摂れるしな」

「ロバート君頼めるかしら」
彼女が言ったのはロバートについてだった。
「瑠々のカレー。御願いできるかしら」
「わいかいな」
「ええ、いいかしら」
こう言うのである。
「よかったらだけれど」
「ああ、わかったで」
ロバートもそれに応えた。
「ほな大阪風のカレーでやな」
「それで御願いするわ」
まさにそれだというのだった。
「あれでね」
「御飯とカレーをまぶしてそこに卵を入れて」
ロバートはそのカレーについて具体的に話す。
「そんでソースをかけたあれやな」
「あれ美味しいわよね」
「そやな」
アテナと拳崇も話しながら頷く。
「あのカレー食べやすいし」
「俺も愛着あるで」
「大阪はいい街だからな」
テリーも悪い顔はしていない。
「留守番の間そのカレーをもらおうか」
「そうさせてもらうか。そういえば」
ロックは周囲を見回してだ。ふと気付いた。
「馬岱は何処なんだ？」
「むっ、そういえばだ」
「いないな」
関羽と趙雲が周囲を見回した。

# 第二十四話　劉備、剣のことを聞くのことその十一

「何処に行ったんだ」
「他の者はここにいるというのに」
「寝坊か？」
馬超は顔を顰めさせてこう推察した。
「ったくよ、仕方ない奴なのだ」
「全くなのだ。それにしても」
張飛はだ。背中にあるものを背負っていた。それは。
「この葛籠かなり重いのだ」
「その葛籠何なの？」
「お弁当を入れているみたいなのだ。けれどそれでも重過ぎるのだ」
こう劉備にも答える。
「食べ物にしてはなのだ」
「そうなの」
「けれど持って行くのだ」
決断した張飛だった。
「とにかく袁紹のところに行くのだ」
「むっ、そういえばだ」
ここで関羽がふとあることを思い出した。
「袁紹殿は今西の方に出兵していなかったか？」
「ああ、あれだよな」
馬超も関羽のその言葉に応える。
「羌のだよな」
「そう、それにだ」
このことを思い出したのである。
「だから今は西に行かないと会えないのではなかったのか？」
「あっ、それは大丈夫です」
だがここで孔明が一同に話した。

「袁紹さんはもう冀州に戻っておられます」
「戦に勝ったのだな」
「はい、そうです」
にこりと笑って趙雲の問いに頷く。
「西方は平定されました」
「早いな」
「確かに」
皆それを聞いてそれぞれ話す。
「西に向かったのはこの前だというのに」
「もうなのか」
「ただ。兵はまだ西にあります」
孔明はそれはだというのだ。
「戦には勝ちましたが完全な平定はまだですので」
「袁紹本人は冀州に戻っている」
「そういうことなのね」
「袁紹さんは戦だけしていればいいというわけではありませんので」
孔明はこのことも指摘した。
「政治もありますので」
「政治か、そうだったな」
関羽もその言葉に頷いた。
「あの方はただ戦をしていればいいのではなかったな」
「ですから。今はです」
「とりあえず冀州にいるのですね」
劉備はこのことを確認した。
「それなら」
「はい。主だった方々を連れて戻っておられます」
孔明は劉備にも話した。
「ですから今行けば御会いできますよ」
「何かと癖がある人だけれどな」
馬超はかつてのことを思い出して述べた。

「それでも悪い人じゃないしな」
「そうだな。会わないと何もできぬしな」
関羽も話す。
「まずは冀州に行こう」
「はい。では行きましょう」
最後に劉備が言ってだ。そのうえで神楽を入れたいつもの面々で冀州に向かう。しかし実はだ。彼女達だけがいるのではなかった。

第二十四話　完

２０１０・８・１１

# 第二十五話　公孫賛、同行を願い出るのことその一

第二十五話　公孫賛、同行を願い出るのこと

一行は冀州に向かおうとする。しかしその時にだ。

関羽はだ。ここでも思い出したのだった。

「そういえばだ」

「そういえば。どうしたのだ？」

葛籠を持っている張飛がその言葉に問うた。

「何かあったのだ？」

「公孫賛殿への挨拶がまだだったな」

言うのはこのことだった。

「それがだったな」

「そういえばそうだったのだ」

張飛もこのことに気付いた。

「あの人がいたのだ」

「白々ちゃんね」

「白蓮じゃなかったか？」

馬超が劉備に突っ込む。一行は平らな道を歩いている。左右には田畑がありのどかなものである。

「公孫賛殿の真名って」

「あれっ、そうだったっけ」

「何かどっかで聞いたんだよ」

また言う馬超だった。

「そういう真名だったよな」

「うむ、そうだ」

趙雲もその真名に頷く。

「あの方の真名はそれだ」

「そうだったよな。何か覚えにくいんだけれどな」

馬超は自分の十字槍を右手に話す。
「あの人のことってな。そもそも幽州にいることだってな」
「忘れてしまうか」
「一応この州の牧なんだよな」
馬超はこのことも話す。
「あの人が」
「殆どの人が袁紹さんって言うのよね」
黄忠もかなり酷いことを言う。
「この幽州の人でも」
「私もそう思っていたわ」
神楽もであった。彼女と孔明だけは得物を持っていない。
「けれど違ったのよね」
「影が薄いというのも困ったものだ」
趙雲は表情を変えずに述べた。
「私も一時あの方のところに身を寄せていたがな」
「今も一応はそうではないのか？」
関羽が言う。
「劉備殿は客将となっているのだしな」
「そうなるか。だがな」
「だが？」
「そのことについての実感はない」
趙雲はこう話した。
「それはだ」
「ないのか」
「厄介になっていた時もあの方のことはな。どうも忘れてしまいそうになった」
「それは失礼だろう」
「失礼だがそれでもだ。どうしてもな」
そこが難しいのだった。
「あの方はどうしても目立てないのだ。それなりに能力もあり悪い

方ではないのだが」
「特徴がないのね」
黄忠の言葉はそのものずばりだった。
「要するに」
「そう、まさにだ」
まさにそれだった。趙雲も話す。
「それが問題なのだ」
「けれど挨拶はしていきましょう」
孔明はこのことはしっかりと言った。
「考えてみたらこのまま何も挨拶せずに行くのも失礼ですし」
「そうよね。じゃあ白々ちゃんのところに行こう」
また真名を間違える劉備だった。そしてである。
山に入って暫くして一行が一休みしたところでだ。張飛も葛篭を置いた。左右には緑の木々が生い茂っている。そこでだった。
葛籠の中からだ。ある音が聞こえてきた。
「むっ？」
「これは」
最初に気付いたのは関羽と黄忠だった。
「いびき！？」
「一体誰かしら」
「翠だな」
「あたし起きてるぞ」
馬超はすぐに趙雲に返した。

# 第二十五話　公孫賛、同行を願い出るのことその二

「ほら、今ここで喋ってるだろうが」
「安心しろ。わかって言っている」
この辺りがまさに趙雲だった。
「それでだ」
「葛籠よね」
神楽がその葛籠を見て話す。
「あの葛籠の中から聞こえてくるわ」
「中を開けましょう」
孔明が話す。
「多分その中には」
「その中には？」
「いますから」
孔明はくすりと笑って劉備に話した。
「絶対に」
「絶対に？」
「はい、まずは開けましょう」
そして開けるとだった。やはりいた。馬超が彼女を見て大声をあげた。
「なっ、蒲公英！？」
「ふえ？」
その声を聞いてだ。馬岱はふと右目を開けた。
「朝？」
「朝じゃない、何で御前がここにいるんだ！」
「道理で見送りの時いなかった筈です」
孔明は少し笑って話した。
「あの時に」
「そうか。葛籠の中に隠れていたからだな」

関羽も納得した。
「私達に同行する為にか」
「呆れたのだ」
張飛は実際に呆れた顔になっている。
「けれど何か鈴々も同じことをしそうなのだ」
「はい、そうですよね」
孔明はここでも笑って張飛の言葉に頷いた。
「鈴々ちゃんもそうしますね」
「置いてけぼりは嫌いなのだ」
実に張飛らしい言葉だった。
「絶対について行くのだ」
「それでなんですけれど」
孔明は話の本題に入った。
「問題はですね」
「すぐに帰れ！」
馬超は従妹に対して言い返した。
「桃家荘にだ。すぐに帰れ！」
「嫌よ！」
馬岱は葛籠から飛び出て言い返す。
「蒲公英もついて行くから。いいわよね！」
「駄目だ！」
馬超もまた言う。
「すぐにだ。帰れ！」
「ここまで来て帰れないわよ！」
「じゃあどうするんだ！」
「はい、ここはですね」
また話す孔明だった。周りは呆れたり困惑したりしているがそれでもだ。彼女だけは温和な顔でにこにことしたままだった。
「決める人がいます」
「そうだな」

関羽にはそれが誰かすぐにわかった。
「ここはだ」
「はい、劉備さん」
またにこりと笑ってだった。今度は劉備に顔を向ける孔明だった。
「ここはどうされますか」
「私なの？」
「劉備さんが私達の主ですから」
だからだというのだ。孔明は劉備を見続けている。
「決断は劉備さんがです」
「そうなの。それじゃあ」
「どうされますか？それで」
「いいんじゃないかしら」
これが劉備の言葉だった。
「確かに黙ってついて来たことは仕方ないけれど」
「はい、それはですね」
「それでも。どうしてもっていうし。ここまで来たら」
「蒲公英ちゃんも一緒にですね」
「それでいいと思うわ」
劉備はまた話した。
「やっぱり旅は多い方がいいし」
「そういうことですね。では話はこれで決まりです」
「私も一緒に行っていいのね」
「はい、そうです」
孔明は今度は馬岱に答えた。しかしであった。

# 第二十五話　公孫賛、同行を願い出るのことその三

これまでの笑顔を叱る顔にしてだ。そしてあらためて馬岱に話した。

「けれど」

「うっ、けれど」

「今度からはこんなことはしないで下さい」

仁王立ちになって馬岱を叱る。

「何かの童話じゃないんですから」

「う、うん」

「わかってくれればいいですけれど」

わかっていないのはわかっていて話す。

「とにかく。これで話は終わりです」

「じゃあ白々ちゃんのところに行こう」

「白蓮殿だろう？」

今度は関羽が劉備に突っ込みを入れる。

「私も中々覚えられない真名だが」

「とにかく行くのだ」

葛籠が楽になった張飛が話す。

「挨拶をしてから冀州に行くのだ」

「ええ、そうね」

黄忠が張飛の言葉にうなずく。そのうえで彼女達は公孫賛のところに向かうことになった。そうしてそこに着くとであった。

公孫賛がだ。笑顔で一行を迎えた。特に劉備をである。

「おお桃香元気か？」

「うん、白々ちゃん」

本人にも真名を間違える。しかも満面の笑顔でだ。

「元気だった？」

「白蓮だ」

本人はむすっとした顔になって言い返した。
「子供の頃から言っているだろう」
「あれっ、そうだったっけ」
「何度言えば覚えてくれるのだ」
今度は泣きそうな顔になった。
「全く。子供の頃からの付き合いだというのに」
「御免なさい。それでだけれど」
「うむ、何だ？」
何はともあれだった。話は本題に入るのだった。
「それで」
「これから少し用があって冀州に向かうの」
「冀州にか」
「うん、それで挨拶に来たの」
こう公孫賛に話す。
「暫く桃家荘を離れるから」
「そうか、それでわざわざ挨拶しに来てくれたのか」
「愛紗ちゃんが気付いてくれて」
自然とこのことも話す劉備だった。
「それでなんだけれど」
「それはそうだな」
今の劉備の言葉には公孫賛は少し昔を思い出した感じだった。
「御前はそうしたことにはだ」
「そうしたことには？」
「昔から忘れるからな」
こう劉備に話すのだった。
「というより覚えてくれないからな」
「ううん、そうかな」
「まあ御前らしくていいがな」
また話す劉備だった。
「桃香はそうでないとな」

「話がよくわからないけれど」
「つまり劉備殿は昔から変わらないのだ？」
「そうみたいね」
張飛と馬岱が二人のやり取りを聞きながら話す。
「天然さんだったみたい」
「公孫賛殿も昔から影が薄かったのだ」
「まあそれでだ」
公孫賛は話を切り上げてきた。
「冀州に行くのだな」
「うん、そうだけれど」
「そうか、それならだ」
劉備の頷きを受けてだ。公孫賛はあらためて言ってきた。
「私も一緒に行っていいか」
「白々ちゃんも？」
「白蓮だ」
話は繰り返しだった。
「とにかくだ。私も一緒にだ」
「冀州になの？」
「袁紹に用事ができた」
だからだというのである。

## 第二十五話　公孫賛、同行を願い出るのことその四

「それでだ。いいな」
「公孫賛さんもですか？」
孔明はこのことを聞いてだ。ふと話した。
「というとやっぱり」
「むっ、その娘は確か」
「諸葛亮孔明です」
公孫賛が目を向けるとすぐに一礼して返す。その手に扇があるので頭を下げてだ。
「宜しく御願いします」
「水鏡先生の弟子のだな」
「水鏡先生を御存知なんですか」
「話は聞いている」
微笑んで言葉を返す公孫賛だった。
「そういえばまた新しい弟子が来ているそうだったな」
「そうなんですか」
「それで話を戻すが」
またこう言う孔明だった。
「私もよかったらだ」
「はい、行かないといけませんよね」
孔明は公孫賛の事情がわかっているようだった。見ればである。
公孫賛はだ。いささか困った顔をしていた。その顔での言葉だった。
「やっぱり」
「うむ、恥ずかしい話だが」
公孫賛は困った顔で話をはじめた。
「幽州は旱魃でな。凶作だったのだ」
「そうですね。私達のいる郡はよかったですけれど」
「うむ、しかし他の郡はだ」

「そうはいかなかったと」
「特に遼東はだ」
その地域はというのだ。
「かなり深刻だ。このままでは民が餓える」
「だから袁紹さんに御会いしてですね」
「米か麦の援助を貰いたい」
話が具体的なものになった。
「そうしたいのだ」
「それなら一緒ね」
また話す劉備だった。
「私達と冀州まで」
「そうさせてもらえるか」
また言う公孫賛だった。
「ここは」
「ええ、わかったわ」
劉備は公孫賛についても納得した顔で頷いた。
「それじゃあ一緒にね」
「いいのだな」
「旅は多い方が楽しいし」
劉備のその癒される微笑みも出た。
「じゃあね」
「うむ、悪いな」
こうしてだった。公孫賛も同行することになった。そうしてである。
一行はすぐに冀州に向かった。その時にだ。不意に目の前に大きな虎が出て来た。
「むっ、虎か」
公孫賛がすぐに腰にある剣に手をかけた。
「すぐに退治せねば」
「いえ、待って」

しかしそれはすぐに劉備が止めた。
「この虎さん何か」
「何か？」
「様子が違うけれど」
こう話すのだった。
「どうしたのかしら」
「様子が違うだと？」
「別に私達を食べようとはしていないみたい」
「そういえばそうなのだ」
張飛は劉備のその言葉に頷いた。
「この虎はただここにいるだけなのだ」
「そうよね。穏やかな雰囲気だし」
「確かにな」
公孫賛もここでわかった。
「この虎は餓えてはいないな」
「けれど何かあるみたい」
一同次々に察していく。
「それだと何が」
「ナコルルがいたらわかるのに」
ナコルルの話が出た。そこで、だった。

# 第二十五話　公孫賛、同行を願い出るのことその五

一人の男が出て来た。それは。
赤い髪を前に長く伸ばした鋭い目の男だ。黒く短い左前の上着に赤い細いズボンという格好だ。その男が出て来て言ったのである。
「その虎とは付き合いがあってな」
「貴殿の虎か」
「買っているわけではない。この山の中で少し知り合っただけだ」
こう関羽に話す。
「それだけだ。腹が減っているその時にお互いに餌をやり合っただけだ」
「虎となのだ？」
張飛はこのことに首を捻ってしまった。
「それはまた変わったことなのだ」
「俺にとっては変わったことではない」
男は何でもないといった口調で述べた。
「人間も動物も同じだ」
「そうね。貴方はね」
神楽はその男を見ながら口を開いた。
「戦う相手かそうでないか。それだけの違いというわけね」
「ふん、やはり御前も来ていたか」
「そうよ。八神庵」
神楽はここでこの名前を出した。
「貴方もこの世界に来ていたのね」
「来るつもりはなかったがな」
八神はこう神楽に返した。
「気付いたらここにいた」
「そう。私と同じね」
「貴様とは別に闘う理由はない」

八神はその鋭い目で神楽を見据えながら告げた。
「他の奴等ともだ。俺は相手が女でも闘うがだ」
「そうだな」
趙雲が応えた。
「どうやら貴殿はそうした者だな」
「闘うからには相手が誰でもだ」
八神はさらに話した。
「俺の前に立つのならその時は容赦はしない」
「その時はかよ」
「すぐに楽にしてやる」
馬超にも話したのだった。
「その時はだ」
「随分と物騒な奴だな」
馬超も思わず唸った。
「そうね。何か常に剣を持っているような」
黄忠もその八神を見ながら述べた。
「そうした鋭さを持っているわね」
「それで八神さん」
孔明は八神を見ながら彼に問うた。
「貴方は今どうされているのですか？」
「どう、か」
「はい。誰かのところにおられるのですか？」
「群れるのは嫌いだ」
八神の声もまた常に剣を持っているようなものだった。
「俺は誰の下にもつかん。そして仲間にもならん」
「そうなんですか」
「それよりもだ。神楽」
神楽に目を向けた。横にいる虎はそのまま彼の足元に猫の様に寝転がった。そしてそのうえでだ。ゆっくりと眠りはじめたのである。
「あいつも来ているか」

「ええ、その通りよ」
神楽は彼を見据えながら言葉を返した。
「来ているわ」
「そうか。それならだ」
それを聞いてだ。また話す八神だった。
「そこに行く」
「貴方達はこの世界でも闘うというのね」
「あいつがいるならだ」
八神の言葉は変わらない。
「そうする。それではな」
「今から行くのね」
「俺はそれだけだ。闘うだけだ」
また話す八神だった。
「それでだが」
「草薙京が何処にいるのか知りたいのね」
「行ってそこで殺す」
言葉は一言だった。
「あいつがいるならそこに行ってだ」
「悪いけれど居場所は言わないわ」
神楽はそのことは答えようとはしなかった。
「それはいいわね」
「安心しろ。最初から聞くつもりはない」
それはだというのだった。

# 第二十五話　公孫賛、同行を願い出るのことその六

「俺が探し出してそのうえで殺す」
「そう。じゃあこれでお別れね」
「そこの女達だが」
八神は今度はあらためて劉備達を見回した。目だけでだ。
「この世界でも女も闘うのだな」
「それが普通じゃないんですか？」
劉備はこの世界での常識を話した。
「それは違うんですか？」
「こちらの世界のことはまだよく知らないが」
八神はこう前置きしてから劉備に言葉を返した。
「俺の世界よりも闘う女は多いな」
「そうなんですか」
「そこにいる女達は」
関羽達も見たのだった。
「相当な腕を持っているな」
「それはわかるのだ？」
「わかる。見ただけでだ」
そうだというのだった。
「それはわかる」
「そうなのか」
「そういうあんたも相当な腕なのだ」
張飛もはなす。
「使うのは何なのだ？」
「これのことか」
八神は張飛の言葉に応えてだ。右手を胸の前に出した。そうしてそこにだ。青い炎を出してみせたのである。
「青い炎か」

「それがあんたの炎か」
「京の炎は既に見ているな」
「うむ」
「赤い炎だった」
二人はすぐに草薙の炎について答えた。
「だが貴殿のそれは青い」
「どうしてなんだ、それは」
「青い炎の方が熱いのですが」
孔明はこのことを話した。
「貴方の炎もそうなのですか？」
「さてな。熱さまでは知らないが」
それはだという八神だった。
「だが」
「だが、か」
「それでもなのだ」
「俺の青い炎は八神家の炎だ」
それだと今度は関羽と張飛に対して述べた。
「その炎だ」
「八神家の炎なのね」
黄忠もその青い炎を見ながら述べた。
「その青い炎こそが」
「どうして青いのかなんですけれど」
劉備は自分でも気付かないうちに確信を衝いていた。
「それはどうしてなんですか？」
「それを聞きたいか」
「はい、どうしてですかそれは」
「では話そう。かつて俺の祖先はオロチと血の契約を交えさせた」
劉備達にこのことを話すのだった。
「それからだ。八神家の炎は青くなったのだ」
「それまでは赤いものだったのよ」

神楽も話したのだった。
「けれどオロチの炎は青いから」
「オロチ、あれか」
関羽の顔がその言葉を聞いて険しくなった。
「草薙がいつも言っているあの一族か」
「そうだ。祖先はオロチと血の契約を交えさせた」
それを話す八神だった。
「だが。俺はオロチとも群れない」
「オロチとは違うのか」
「違う」
関羽への返答も一言だった。
「それどころかオロチの奴等は俺を憎んでいる」
「何をやったのだ？」
張飛は既に八神の剣呑さを実にはっきりと感じていた。だからこそこうしてだ。彼に対してかなりぶしつけに尋ねたのである。

# 第二十五話　公孫賛、同行を願い出るのことその七

「殺したのだ？」
「死にはしなかった」
八神も答えた。
「オロチの血が騒いでだ」
「おいおい、またそりゃ物騒だな」
馬超も今の言葉に眉を顰めさせる。
「そんなのが潜んでるのかよ」
「それじゃあ何時それが出て来るかわからないの？」
馬岱はこれまで話を聞くだけだった。だがここではじめて八神に問うのだった。
「八神さんのそのオロチの血って」
「安心しろ。俺はオロチではない」
八神自身それは必死に否定した。
「しかしだ」
「しかしって言われても」
まだ難しい顔になっている馬岱だった。
「何かあったらその時は」
「安心して。少なくとも今はそれではないわ」
神楽が槍を構えそうになる馬岱を制した。
「オロチの血が影響するのはオロチ一族が傍にいる時だから」
「オロチ一族。話に聞いているけれど」
黄忠はここでも草薙の話を思い出して考える目になっていた。
「この世に。よからぬ存在なのね」
「最初はそうではなかったわ。けれど」
神楽の言葉だ。
「それでも今はね」
「そうした存在なんですか」

「そうよ。私達はオロチを封じる為にいるのよ」
神楽はまた劉備にも話した。
「そう、アンブロジアを四つの宝珠を持つ如来達が封じていて」
「アンブロジアもなのだ」
張飛も話をした。
「ナコルルが言っていたあれなのだ」
「そうよ。そして常世は四神と巫女が封じている。それと同じで」
「オロチは貴殿達がか」
「ええ。私の神楽家と草薙家、そして八神家」
「その時は姓が違っていた」
関羽に述べる神楽に続いて八神が述べた。
「今の俺も本来はその名前らしいな」
「それに戻るつもりはないのね」
「ない」
八神ははっきりと答えた。
「俺の名前は八神庵だ。それ以外の何でもない」
「けれどそれは」
「関係ない」
今度も一言だった。
「俺はオロチもネスツもどうでもいい。ただ、だ」
「草薙ね」
「あいつを殺す。それだけだ」
あくまでそれだけだというのだった。
「この世界にも来ているならそれでもだ」
「そうするのね」
「俺はその為だけに生きている」
こうまで言い切るのだった。
「だからだ」
「貴方のその青い炎は貴方自身を焼くわ」
神楽の忠告だった。

「それでもなのね」
「それでもだ。それではな」
八神は一歩足を前に出した。虎も起き上がり前に出ようとする。
しかしだった。
八神はその虎に顔を向けてだ。そして告げた。
「いい」
「虎に対して言ったのね」
「御前は御前の居場所にいろ。ここがそうなのならな」
馬岱の言葉をよそに話すのだった。
「別れる。いいな」
虎に告げてだった。それで世界を離れるのだった。
そのうえでだ。劉備達とも離れる。背中を向けているがそこには
三日月があった。
三日月を見てだ。劉備はここでも言った。
「草薙さんの太陽と違うのね」
「そうよ。草薙は太陽よね」
また神楽が話す。
「けれど八神はね」
「月なんですか」
「草薙家は日輪、八神家は三日月」
この二つの違いがそのまま両者の違いだった。

# 第二十五話　公孫賛、同行を願い出るのことその八

「そういうことよ」
「そうなんですか。陽と陰なんですね」
「そして赤と蒼よ」
この二つだというのだった。
「それよ。ただ」
「ただ？」
「両家は闘う宿命ではないわ」
「けれど草薙さんと八神さんは」
「ええ。その両家の因縁を終わらせる為にも」
神楽の言葉が強いものになった。
「闘わなくてはいけないのでしょうね」
「そうなんですか」
その話を聞いて沈んだ顔になる劉備だった。
「それであの人達は」
「宿命なのね。八神家は罪を犯してきたし」
神楽はこのことも話した。
「その長い因縁もまた終わらせないといけないし」
「オロチと契約したことなのね」
馬岱もそのことについて言った。
「それが罪なのね」
「そうよ。罪よ」
神楽の言葉を続ける。
「一族の長い罪を。彼は終わらせないといけないのよ」
「八神さん自身はそのことをわかっておられるのでしょうか」
孔明はこのことを問題にした。
「どうなのでしょうか、それは」
「わかっていない筈はないわ」

「そうなのですか。それでもなのですね」
「そうよ。わかっていてもそれでも」
「草薙さんとの闘いを」
「それがそのまま彼の宿命を終わらせることなのでしょうね」
神楽は今ではこうも考えてもいた。
「だからこそ」
「しかしそれをすれば」
黄忠は眉を顰めさせて述べた。
「どちらか、あるいは両方が」
「死ぬな」
「ああ、どっちも尋常じゃない強さだからな」
趙雲と馬超も話す。
「それでもか」
「やらないといけないんだな」
「そういうことよ。けれどどちらも死なせないわ」
神楽の言葉もまた強いものになった。
「それはね。私が」
「神楽さんがですか」
「両家の宿命には神楽家も関わるものだから」
だからだと。劉備に話した。
「あの二人は死なせないわ」
「それが神楽さんの宿命なんですね」
「そうね」
神楽は今の劉備の言葉にだ。少し微笑んだ。
「そうなるわね」
「そうですよね、やっぱり」
「劉備さんもまたそうなのかも知れないわ」
今度は劉備にかかるのだった。
「貴女もまた」
「私もなんですか」

「だから今ここにいるのよ」
また話す神楽だった。
「そうなるわ」
「？」
劉備は今の神楽の言葉には首を捻った。その首を左に傾けさせて述べた。
「どういうことですか、それって」
「やがてわかるわ。それじゃあ」
「そうですね、袁紹さんのところにですね」
孔明がこのことに話を戻した。
「それじゃあすぐに」
「行きましょう。袁紹殿がどういう顔をするかわからないけれど」
「わからないところのある方だからな」
関羽も難しい顔になっている。
「あの人は。どうも妙なところが多い」
「またあの変な大会をするのだ？」
張飛もこのことを不安に感じていた。

## 第二十五話　公孫賛、同行を願い出るのことその九

「そういうこととか探検とか訳のわからないことをするから困るのだ」
「まあそれでも行きましょう」
孔明が話をやや強引に進めさせた。
「行かないとはじまりませんよ」
「そうよね」
「その通りね」
劉備と神楽が孔明のその言葉に頷いた。
「まずは袁紹さんのところへ」
「全てはそれからね」
「はい、その剣を取り戻しましょう」
「けれどどうしてなのかしら」
劉備は今度は首を右に捻った。
「どうして袁紹さんが私の剣を」
「多分勝ったんじゃないでしょうか」
孔明はそう推理した。
「袁紹さんの袁家はかなりのお金持ちですよね」
「そうだな。袁家はな」
関羽もこのことはよく知っていた。
「四代に渡って三公を出しているしな」
「それでそうしたお宝も集めているのだと思います」
こう話す孔明だった。
「それでなんですよ」
「だから私の剣も」
「多分盗んだ泥棒が売ったんだと思います」
孔明の推理は続く。
「そうして袁紹さんのところにも」

「天下の回りものなのだ」
張飛はここまで話を聞いて述べた。
「まさにそれなのだ」
「そうよね。それで劉備さんのところに戻る」
馬岱が笑顔で話す。
「それで見事大団円ね」
「そうだな。だが」
「袁紹殿だからな」
趙雲と馬超も袁紹を問題にしていた。
「何かあるな」
「絶対に何か引き起こすな」
「それは覚悟しないといけないわね」
黄忠も少し苦笑いだった。
「そうしていざ、といきましょう」
「そうだな。ところでだ」
ここで最後の一人が口を開いた。
「いいか」
「あっ、白々ちゃん」
「白蓮だ」
公孫賛が劉備に言い返す。
「これまで何度真名を間違えたんだ」
「御免なさい」
「まあいい。それでだが」
彼女は難しい顔になって一同に話すのだった。
「あの八神庵という男私には一度も声をかけなかったな」
「あっ、そうね」
馬岱も言われて気付いた。
「そういえば一度も」
「それは何故だ？」
このことを言うのだった。

「何故私には一度も声をかけなかったのだ？」
「ええと、それはですね」
孔明が苦笑いを浮かべ顔に汗を見せていた。
「やっぱり」
「影が薄いからか！？」
自分から言ってしまった。
「私の影が薄いからか。それで気付かれなかったのか」
「だから自分で言ったらだ」
「おしまいなんだけれどな」
「凄く気にしてるんだ」
その彼女に趙雲と馬超と馬岱が言う。
「しかし。確かにな」
「八神の奴一瞥もしなかったからな」
「そうだったわよね」
「何で私はいつもこうなのだ！」
今更ながら嘆く公孫賛だった。

# 第二十五話　公孫賛、同行を願い出るのことその十

「いつもいつも。何故気付かれない！」
「まあまあ」
その彼女を劉備が宥める。
「気を取り直して行こう。ねっ」
「そうね」
神楽が劉備のその言葉に頷いた。
「それじゃああらためてね」
「袁紹さんのところに行こう」
こう話してだった。一行は再び袁紹のところに向かうのだった。6
その頃だ。董卓のところではだ。いかつい何かふざけたところのある男がだ。キムの飛翔脚を受けて思いきり倒されていた。
「おいおい、またぜ」
「キムの旦那も容赦がないでやんす」
チャンとチョイがそれを見て言う。彼等は今は強制労働中である。
キムはその中でその男に対して思いきり必殺技を繰り出したのだ。
そのうえでだ。彼は言った。
「一体何をしている！」
「何って何だよ」
「そ、そうだよ」
「俺達だって真面目にやってるんだよ」
ここで三人出て来た。一人は女だ。
「それで三九六の親分を蹴り飛ばすなんて」
「あんた、鬼？」
「それとも悪魔か！」
「さぼっていて何が真面目だ」
キムは両手を腰に当てて四人に言い返した。
「萬三九六だったな」

「おうよ」
先程蹴ったその男に対して問う。男も答えてきた。
「そうだよ、旦那よ」
「貴様は特に許さん！」
こう彼に言うのだった。
「今もさぼる、そしてやること為すこと外道の限り！」
「まあそうだよな」
「あっし等より酷いでやんすよ」
これにはチャンとチョイも同感だった。
「捕まえた女は片っ端から売り飛ばそうとするしよ」
「おかげで華雄さんに斬られそうになっていたでやんす」
とにかくとんでもない男なのは間違いない。
「俺達暴れるだけだからな」
「最低でやんすよ」
「御前は特別に私が性根を叩きなおしてやる！」
「俺は特別かよ」
「そうだ、覚悟しろ」
キムはまた言った。
「わかったな。貴様は許さん」
「ちっ、覚えてろよ」
だがこれで反省したりする三九六ではなかった。
「何時かよ、これでよ」
「あっ、親分そんなの出しても」
「キムの旦那はちょっと」
「無理なんじゃ」
「うるせえ、最強の俺の手にかかればよ」
子分達に言われても勿論反省したりはしない。
「こんな奴よ」
「むっ、その銃は何だ」
そしてキムも当然の如く気付いた。

「それで何をするつもりだ」
「い、いやこれはよ」
「そうか。まだ反省していないのだな」
キムの顔に凄みのある怒りが宿った。
「どうやらここは」
「ここは？」
「さらなる制裁が必要なようだな。行くぞ！」
三九六に向かって跳んでだ。あの技が出た。
「アチャッ、アチャッ、アチャチャッ！」
「ぐ、ぐわっ！！」
蹴り回される。そして止めに。
「飛燕斬！」
これであった。三九六は無惨に吹き飛ばされたのだった。
「あがががががが・・・・・」
「一八、二四、五七だったな」
キムは三人に対して言った。
「この男を独房に連れて行くのだ。一週間程入れておけ」
「は、はい。わかりました」
「それじゃあ今から」
「行って来ます」
「それからすぐに戻れ」
キムはまた三人に告げた。

# 第二十五話　公孫賛、同行を願い出るのことその十一

「御前達はそのまま労働だ」
「わかりました。それじゃあ」
「まずは戻って」
「それでここにですね」
「急げ」
今度は一言だった。
「いいな、すぐにだ」
「わかりました」
こうしてだった。三人は重傷を負い気を失っている三九六を運んでいく。その周りでは山崎や幻庵達が働かせられていた。後ろにはジョンがいる。
「さあ皆さん頑張るのです」
その足元ではアースクエイクが転がっている。
「これが終われば次は楽しい稽古の時間です」
「休みねえのかよ」
「起きて寝て飯食う以外は何もないケ」
山崎と幻庵はツルハシを使いながら文句を言う。
「ったくよ、ちょっと怠けたらよ」
「ああなるケ」
幻庵はアースクエイクを見る。見れば気を失っている。
「恐ろしい場所だな、ここは」
「わし等にとっては地獄だケ」
「なあ、あの二人ってな」
「地獄から出て来たのか？」
「鬼なのか？」
三人の男が二人のところに来て問う。
「容赦なく働かせて修行させてよ」

「手加減なしで殴って蹴るしよ」
「おまけにずっとここから出られないしよ」
労働と修行の日々なのである。
「何だってんだよ」
「首刎ねられないで済むって聞いたのによ」
「何だよ、死ぬよりやばいだろ」
皆で話す。そしてだった。
ここにジョンが来てだ。彼等に言う。
「君達、わかっていますね」
「は、はい。よく」
「仕事はしてます」
「安心して下さい」
「それならいいのです。労働は美徳です」
見ればジョンにしろキムにしろ自分達もツルハシなりシャベルを持って爽やかに汗をかいている。ただし爽やかなのは二人だけだ。
「それでは今日もです」
「働きますです」
「その後は修行をさせてもらいます」
「笑顔で」
「そうです。笑顔で頑張りましょう」
こう話してだった。彼等はチャンやチョイ達を隔離して強制労働と修行をさせていた。そこには光なぞ一切なかったのだった。
そしてだ。それについてだ。董卓も気にかけていた。
「キムさんとチョイさんだけれど」
「ああ、あの二人ね」
「どないしたんや？」
今の彼女の前には賈駆と張遼がいる。二人が彼女に応えた。
「やり過ぎじゃないかしら」
「やり過ぎって？」
「そう思うんやな」

「うん。ずっと強制労働と修行よね」
董卓もこのことを聞いていたのだ。
「それはちょっと」
「仕方ないでしょ」
「人によるけれどな」
二人はそれについてはこう言うのだった。
「特にあの萬三九六っていうのは」
「うちが殺してもよかったんやで」
二人の目はここで剣呑なものになった。
「あんな奴。もうね」
「華雄やなくてもや」
「殺すべきだったというのね」
ここで董卓の顔が暗くなった。
「二人は」
「ええ、あいつだけはね」
「何やったら今から首刎ねて来るで」
「それはちょっと」
董卓は張遼の言葉にさらに暗い顔になった。

# 第二十五話　公孫賛、同行を願い出るのことその十二

「そこまでは」
「いいえ、あいつみたいな奴はね」
賈駆もまだ言う。
「本当に殺しておくべきよ」
「同感や。恋もそう言うで」
「ううん、それでも」
董卓はここでもだった。暗い顔を見せるのだった。
「そこまでは」
「だから。月は優し過ぎるのよ」
賈駆は困った顔で彼女を見て言った。
「ああいう奴は本当にさっさと処刑しないと」
「そや。むしろキムとジョンのところに入れたんは温情やで」
張遼もここまで言う。
「どうせ反省もせんしな」
「でしょうね。他の面々も大体同じやけれどな」
「特に山崎はね」
賈駆は彼も問題視していた。
「あいつ、相当悪事慣れしてるわよ」
「そやな。そういう目してるわ」
「ああいう奴も首を刎ねればいいのよ」
「むしろキムやジョンは更正させようとする分優しいで」
「優しいの？」
二人の言葉にだ。董卓は難しい顔になった。
「そうなの」
「そうよ。まあ二人のやることは口出ししないでおきましょう」
「したらややこしいことになるで」
また言う二人だった。

「そういうことでね」
「ほな次のことやけれど」
「治水よね」
董卓は政治の話をはじめた。
「黄河が。また荒れてきたし」
「そうよ。今のうちに何とかしましょう」
「どないする？お金はあるけれど人手は足りんで」
「人はいるわ」
だが董卓はこう返してきた。
「兵隊さん達が」
「えっ、兵を使うんかいな」
張遼はそれを聞いて目を少ししばたかせた。
「戦に使うんやなくてか」
「だって。戦は民を守る為にあるでしょう？」
これが董卓の考えである。
「そして治水もまた」
「そうよ、民を守る為よ」
賈駆もそのことはわかっていた。そしてだ。
「だから。同じだというのね」
「うん。それでどうかしら」
また言う董卓だった。
「人手はそれで」
「そうね」
「ええんちゃうか？」
二人はそれを聞いてまずは頷いた。
「それじゃあすぐにね。兵達を集めて」
「そないするか」
「そうして。治水はそれで行きましょう」
あらためて言う董卓だった。
「兵隊さん達を集めてね」

「うん、細かいことは私も手伝うから」
「うちが現場の指揮にあたるわ」
こうしてだった。キムとジョンのしごき地獄はとりあえず放っておいてだ。そのうえで内政にかかるのだった。董卓達も多忙だった。

第二十五話　完

２０１０・８・１３

# 第二十六話　袁紹、劉備を迎えるのことその一

第二十六話　袁紹、劉備を迎えるのこと

劉備一行はその袁紹の本拠地である？に着いた。そこは相変わらずの繁栄ぶりだった。

「政治はいいんだけれどな」

「そうだな」

馬超と趙雲もそれは認めた。

「あれで人間性がまともならなあ」

「何も言うことはないのだがな」

「けれどそれは仕方ないわね」

黄忠も言う。

「あの人がまともなら何かおかしな気がするわ」

「何か袁紹さんって凄く変な人なんだね」

馬岱もそれはわかった。

「涼州の内政もかなり上手くいってるらしいけれど」

「ですから袁紹さんですから」

孔明も袁紹自身に問題があるというのだった。

「政治と戦争はともかく人間性は凄くアンバランスなんです」

「だから妾の子なんかどうでもいいのだ」

「そう思うのだがな」

張飛と関羽も述べる。

「それでもあの人は違うのだ？」

「複雑な話だな」

「まあ人は色々あるわ」

神楽もそれを言う。

「とにかくね。今は袁紹さんのところに行きましょう」

「うん、早く剣を返してもらわないといけないから」

劉備も両手を胸の前で拳にして話す。
「早くね」
「そうだな、私も用がある」
公孫賛も話す。
「行くとしよう」
そしてここにだ。何人かやって来た。まずはだ。
「おっ、あんた達確か」
「そうだったな、前に大会に出てたのな」
「そっちの二人は」
ビリーにアクセル、ローレンスだった。
「何だ？何かあったのか？」
「俺達もやっとこっちに戻ってきたんだがな」
「それで今度は何の用件だ」
「袁紹さんに御会いしたいんですけれど」
劉備が三人に申し出た。
「それでこちらに来たんですけれど」
「ああ、袁紹殿な」
「丁度今こっちにいるしな」
「それなら案内をするか」
三人はそれぞれ顔を見合わせて話した。
「じゃあ今からな」
「こっちだ。来てくれよ」
「それで会うといい」
「有り難うございます。それじゃあ」
劉備は笑顔で三人に応えた。そうしてだった。
袁紹のその宮殿に入った。そこで袁紹と会うことになった。その時袁紹は政務にあたっていた。両脇には顔良と文醜達がいる。
「麗羽様、何かお仕事が凄くたまってますけれど」
「西に行ってる時も仕事してたのに何でですかね」
こう袁紹に言う二人だった。

「ちょっとこれはかなり」
「どんどん来てますよ」
「わたくしも不思議に思ってますわ」
袁紹にしろ実際そう思っているのだった。
「これはかなり」
「確かに四つの州と異民族の分ですから量は多くなりますけれど」
「これ多過ぎません？」
「そう、異民族ですわね」
袁紹はそこを指摘した。
「異民族のことが特に多いですわね」
「併合した後は仕事が多くなりますか」
「それでなんですかね」
「それでも多過ぎますわ。特に」
「特に？」
「何かありますか？」
「賊がその異民族の場所にやたら多いですわ」
こう話すのだった。
「平定してから。それでも」
「そういえば烏丸に匈奴のところが一番多いですね」
「仕事の七割はありますね」
「北にまた兵を送ることにしますわ」
袁紹はここで一つのことを決定した。

# 第二十六話　袁紹、劉備を迎えるのことその二

「この仕事が一段落したら。また将帥も兵卒も集めますわ」
「はい、それじゃあ私達も」
「水華達もですね」
二人もそれに応える。そうしてだった。
袁紹は事務処理を続けていた。そこに田豊と沮授が来たのだった。
「どうしましたの？」
「麗羽様、劉備殿が来られてます」
「その配下の人達もです」
こう主に話すのだった。
「それと。またあちらの世界から来た人もです」
「それともう一人いるみたいですけれど」
「劉備さんが？」
袁紹はそれを聞いてまずは手を止めた。
「あの人がなのですね」
「はい、どうされますか？」
「御会いされたいそうですけれど」
「わかりましたわ」
袁紹は二人の言葉にすぐに答えた。
「それでは。すぐに御会いしますわ」
「ではお仕事は」
「どうされますか、そちらは」
「今終わりましたわ」
見ればペースをあげていた。それで終わらせたのである。
そしてそのうえでだ。顔良と文醜を入れた四人にだ。あらためて話すのだった。
「ではすぐに劉備さんと」
「はい、それじゃあ」

「私達も」
「そうですわ。四人共来なさい」
やはり四人全員に対してであった。
「そのうえで劉備さんとお話しますわ」
「そういえば劉備さんのところには」
「あの張飛とか馬超がいたよな」
顔良と文醜はこのことを思い出した。
「確か」
「そうよね。あと他には」
「あの諸葛孔明もいるわね」
「はわわ軍師だったわ」
田豊と沮授は彼女の名前を出した。
「幽州にいるけれど人材はかなりのものね」
「その一行が来るなんて。何かしら」
「まずは御会いしてからですわ」
袁紹はまた四人に話した。
「それでいいですわね」
「はい、それじゃあ」
「今から」
こうして四人で向かう。そのうえで謁見の間で劉備一行と話す。
袁紹は四人をそれぞれ両脇に置いてだ。そのうえで劉備に対して声をかけた。
「暫くぶりですわね」
「袁紹さんもお元気そうですね」
「ええ、わたくしは元気ですわ」
微笑んで劉備に返す袁紹だった。
「ところで」
「はい」
「今日の御用件は何でしての？」
こう劉備に問うのだった。

「それを御聞きしたいのですけれど」
「はい、実はですね」
劉備も袁紹の言葉に応えて話しはじめた。袁紹は階段の上の座に座っている。そこに顔良達が共にいて劉備は後ろに一行を従えて立っていた。
「袁紹さん最近立派な剣を手に入れられましたそうですけれど」
「剣？」
「あれかしら」
それを聞いて田豊と沮授がふと言った。
「あの黒い柄と鞘の」
「あちらこちらに黄金の装飾もある」
「はい、それです」
二人の言葉を聞いてだ。劉備は声を明るくさせた。
「その剣ですけれど」
「ああ、あれですのね」
袁紹もここで気付いた顔を見せた。
「あの剣でしたら」
「あるんですか？」
「うっ・・・・・・」
だがここでだ。袁紹は一瞬停止してしまった。

# 第二十六話　袁紹、劉備を迎えるのことその三

「それですけれど」
「あるんですよね」
「え、ええと」
何故か今度は顔に汗を流す。
「何と言うのかしら。あれはですね」
「あるのなら返して欲しいんですけれど」
「袁紹様、あれは」
「昨日のことですよね」
顔良と文醜もここでひそひそと主に囁く。
「袁術様に」
「そうでしたよね」
「ま、まああれですわ」
袁紹は苦し紛れの顔で劉備に返した。
「返して欲しいのですわね、あの剣を」
「はい」
劉備の返答は明快であった。
「御願いします」
「そしてなのだが」
今度は公孫賛が言ってきた。
「いいか？」
「あら、貴女は」
袁紹は彼女を見ると少し怪訝な顔になった。そのうえで言う言葉は。
「どなたですの？見ない顔ですけれど」
「おい、待て」
公孫賛もすぐにムキになって言い返す。
「烏丸征伐の時に一緒だっただろうが」

「曹操殿の部下でしょうか」
「そうなのでしょうか」
田豊も沮授も知らない。
「一体誰なのか」
「しかし何処かで見たような」
「だとすれば何処で」
「思い出せませんが」
「何故だ！」
いい加減切れた公孫賛だった。
「田豊と沮授は袁紹配下での知の二枚看板ではないのか？」
「その通りでしてよ」
主の袁紹が答える。
「わたくしの擁する多くの人材の中でもこの二人は智恵の二枚看板でしてよ」
「そうでしたね。確か」
孔明もここで話す。
「その智謀は張良、陳平にも匹敵するという」
「いえ、流石に」
「それは」
二人自身はその言葉は謙遜して否定した・
「私達はとてもそこまでは」
「あの伝説の二人程には」
「それ以上でしてよ」
だが袁紹が二人を持ち上げて言い切った。
「この二人と貴女。どちらが上かわかりませんわよ」
「そうですね。私もそう思います」
孔明も真剣な顔で袁紹の今の言葉に返す。
「御二人は間違いなくこの国においてかなりの方々です」
「そう、それでなのですけれど」
袁紹はここでさらに話すのだった。

「劉備さんのその剣でしたわね」
「はい、それと白々ちゃんは幽州にお米か麦を欲しいとのことです」
「白蓮だ」
またしてもいつもの展開だった。
「全く。真名は覚えてくれ」
「お米に麦ですのね」
袁紹達の表情がここで少し変わった。
「そうですのね。それを」
「剣はともかくとしまして」
「お米や麦ですか」
田豊と沮授もここで少し難しい顔になって話す。
「そういえば幽州は旱魃が原因で凶作だとか」
「それも結構深刻な」
「やはり知っていたか」
公孫賛も二人の名軍師の言葉に難しい顔になった。
「そのことは」
「聞いてはいますわ。それでなのですわね」
ここでも劉備に話す袁紹だった。

# 第二十六話　袁紹、劉備を迎えるのことその四

「我が袁紹陣営に援助して欲しいと」
「貴殿の治める四州はかなり豊かだと聞いている」
関羽もここで話す。
「よければ援助して欲しいのだが」
「麗羽様、どうします？」
「ここは」
文醜に顔良も主に問う。
「受けますか？それとも」
「断りますか？」
「幽州の民が困っておりますのね」
まずはこう言う袁紹だった。
「そうですわね」
「そうだ、今のところ餓えている者はいない」
公孫賛が説明する。
「だが。このままではだ」
「わかりましたわ。それではでしてよ」
袁紹も彼女の言葉を受けてから述べた。
「その申し出受けさせてもらいますわ」
「そうか、有り難い」
公孫賛は袁紹の今の言葉を聞いて満面の笑顔になった。
「これで幽州の民も救われる」
「ただし」
しかしであった。ここで言う袁紹だった。
「それには条件がありましてよ」
「条件！？」
「条件っていうと」
「一体」

それを聞いて公孫賛だけでなく劉備達もいぶかしんだ。
「何だというのだ？悪いが幽州には金もないぞ」
「お金ではありませんわ。ええと、どなたか存じませんが」
袁紹はまだ公孫賛が誰なのかわかっていなかった。
「その、どなたでして？」
「やっぱりわかりません」
「誰なのでしょうか」
田豊と沮授も相変わらず首を捻っている。
「会ったことがあるのは間違いないですが」
「それでも一体。誰なのか」
「ああ、もういい」
公孫賛も完全にだ。諦めた顔になって述べた。
「いいから。とにかく条件とは何だ？」
「決まっていますわ」
袁紹は悠然とした笑みを浮かべてみせて返してきた。
「それは」
「まさか」
「あれか？」
張飛と馬超は今の袁紹の言葉にぎくりとした顔になった。
「あの大会なのだ？」
「あれをするのかよ」
「わたくし達と勝負をしてもらいますわ」
袁紹はこう言葉を続けてきた。
「知力、武力、服装のセンス、その他様々なことで」
「やっぱりそれなのだ」
「本当にこの人好きだよな」
張飛と馬超の顔がいよいよ本格的に曇ってきた。
「何かあるとすぐするのだ」
「最後は鰻だしな」
「ああ、あれか」

趙雲は既に二人からその話を聞いていた。
「鰻を胸で掴むのだったな」
「幾ら何でもそんな気持ち悪いことはできないのだ」
「身体中鰻に這い回られてぬるぬるになっちまうぜ」
「それはまた淫靡だな」
それを聞いてこうも述べた趙雲だった。
「面白そうではないか」
「そもそも胸で掴めない娘はどうするのかしら」
黄忠はこのことを問題にした。
「そうした場合は一体」
「その場合はですね」
「脚の間とか脇の下とかを使うんだよ」
顔良と文醜がこう彼女達に話した。
「そうするんです」
「それで鰻を捕まえるんだよ」
「どっちにしろ全身鰻に這い回られてぬるぬるになるんですね」
孔明はこう言って苦笑いになった。
「何か物凄く嫌らしい競技ですね」
「今回蛸や烏賊も一緒ですわよ」
袁紹はさらに面白そうに話してきた。
「海鼠も。如何でして？」
「何処までぬるぬるが好きなんだ？」
関羽も思わず突っ込みを入れてしまった。

# 第二十六話　袁紹、劉備を迎えるのことその五

「全身そうした生き物に絡まれて這われてなのか」
「鈴々もそれは嫌だったのだ」
「あたしもだったんだよ」
二人がここでまた話す。
「鰻なんてとてもなのだ」
「そこまではできないだろ？」
「確かに。ちょっとないよね」
馬岱もかなり引いている。
「っていうか袁家ってそういうのが好きなのかな」
「こいつだけだ」
公孫賛がうんざりとした顔で述べた。
「袁術はこんなことはしないぞ」
「その名前は出さないでもらいたいですわね」
袁紹は袁術という名前には眉を顰めさせてきた。
「宜しいですわね」
「むっ、そうだったな」
公孫賛もそれで納得したのだった。
「済まない、貴殿にとってはな」
「その通りでしてよ。まあ最近もっと気に入らない人もいますけれど」
「気に入らない人？」
劉備はそれを聞いて首を少し右に傾けさせた。
「それって誰なのかしら」
「言いたくもありませんわ、全く」
袁紹は声も不機嫌なものにさせていた。
「名門の嫡流であるだけでなく。大将軍のお傍にまで」
「ああ、あの方だな」

「そうですね」
趙雲と孔明はこの言葉でわかった。
「辣腕を振るい続けているな」
「はい、都で」
「だから聞きたくもありませんわ」
袁紹はここでも不快感を露わにさせたのだった。
「とにかく。剣はとにかくお米や麦ですわね」
「そうだ、それだ」
また応える公孫賛だった。
「よかったらだが」
「ですから。大会に参加されますの？」
袁紹が尋ねるのはこのことだった。
「さて、どうされますの？」
「受けるしかないな」
公孫賛は難しい顔になったがそれでも述べたのだった。
「民のことを思えば」
「宜しいですわ。では」
袁紹は公孫賛の今の言葉を聞いて満足した笑みを浮かべた。そうしてそのうえで自身の左右に控える田豊と沮授に対して告げた。
「ちょっと」
「はい」
「何でしょうか、麗羽様」
「幽州にですけれど」
劉備達に聞こえないように小声で話すのだった。
「すぐに手配なさい。宜しいですわね」
「はい、わかりました」
「それでは」
二人は主の言葉を受けて満足した笑みで頷いたのだった。
「そういうことで」
「すぐに手配します」

「御願いしますわ。さて」
ここまで話してあらためて劉備達に向かい直った。
「全部で八人ですわね」
「九人ではないのか？」
関羽がいぶかしみながら袁紹の今の言葉に返した。
「我等は今は」
「あっ、そうですわね」
言われて気付いた袁紹だった。
「そちらの影の薄い方がいましたわね」
「だから本当に覚えろ！」
また怒る公孫賛だった。
「私はその幽州の主なのだぞ！」
「まあとにかく九人ですわね」
公孫賛には実に素っ気無い袁紹だった。
「それに対してこちらは五人ですけれど」
「とりあえず誰か呼びましょう」
「そうしましょう」
田豊と沮授がこう話す。

# 第二十六話　袁紹、劉備を迎えるのことその六

「向こうにもあちらの世界から来ている者がいますし」
「こちらも」
「そうですわね。誰かいまして？」
また二人に問う袁紹だった。
「いればどなたか」
「はい、向こうは全員女の子ですし」
「できればこちらも全員そうしたいですけれど」
「いまして？」
袁紹は今度は少し不安そうな顔になった。７４
「果たして。あと四人ですけれど」
「ｔりあえずまた人材が来ましたし」
「その中から選びましょう」
二人の提案はこうしたものだった。
「既にいる人材の中からも選んで」
「それでどうでしょうか」
「そうですわね」
ここで頷いた袁紹だった。
「ではそれで」
「はい、わかりました」
「ではすぐに集めますので」
「こういうことですわ」
話が一段落してまた劉備達に顔を戻す袁紹だった。
「では。すぐに大会をはじめますわよ」
「後の四人本当に集まるのだ？」
「袁紹殿は何としてもって感じだけれどな」
張飛と馬超はこのことはいささか不安に思った。
「ううん、この人危ういところが多いから心配なのだ」

「そうだよな、本当に」
「そうだよね。噂通り変な人だね」
馬岱も袁紹をこう評する。
「一体どうなるのかな」
「けれど面白そうね」
神楽だけがいささか余裕を見せていた。
「こうした大会もいいわね」
「それでは明日でしてよ」
袁紹は期日も告げてきた。
「明日。宮殿の前で行いますわ」
「わかりました」
劉備がその言葉に明るい笑顔で返した。
「それじゃあ宜しく御願いします」
「とにかくだ。民の為だ」
公孫賛は両手を拳にして力を込めていた。
「何としても勝つぞ」
「それじゃあです。お互いに」
「頑張ろうぜ」
顔良と文醜は親しげな様子で一行に告げた。
「何か皆さんとはこうした状況で御会いすることが多いですけれど」
「まあそれも縁だよな」
「こういう縁もあるのね」
ここで黄忠も述べた。
「おかしな縁だけれど」
「確かに。おかしいにも程がありますね」
孔明はここでも苦笑いだった。
「袁紹さん、噂以上の人です」
「とにかく明日だな」
関羽も意を決した顔になっている。
「とりあえず今日は休息を取ろう」

「お部屋と食事は用意してありますわよ」
また言ってきた袁紹だった。
「皆さん、では今はゆっくりと」
「袁紹殿のところは飯は美味いからな」
「そこはいいのだ」
馬超と張飛はこのことはよしとしていた。
「じゃあ。たっぷりと食うか」
「それで明日に備えるのだ」
「メンマもあるな」
趙雲はこのことを確認した。
「それならいいのだがな」
「はい、勿論ありますので」
「それも楽しんでくれよ」
その趙雲に気さくに返す顔良と文醜だった。こんな話をしてからだ。劉備達はその袁紹に用意された部屋に入りそれから御馳走を食べるのだった。
まずは趙雲がだ。ラーメンの中のメンマを食べて言った。
「ふむ、これはだ」
「美味いか？」
「美味い」
関羽への返答は一言だった。

# 第二十六話　袁紹、劉備を迎えるのことその七

「見事だ、美味い」
「そうか。この炒飯もいいぞ」
関羽が最初に食べているのはそれだった。
「袁家だけはある。いい料理人がいるな」
「袁紹さんは美食家としても有名な方ですし」
孔明は海老蒸し餃子を食べている。
「ですから。私達への御馳走もですね」
「そうね。この家鴨もいいわ」
黄忠は家鴨のピータンと焼いたものを口にしている。
「素材も調理も見事ね」
「幾らでも食べられるのだ」
「全くだな」
張飛と馬超は貪っている。
「麻婆豆腐も美味いのだ」
「このチンジャオロースだってな」
「そうね。量も凄いわね」
当然神楽も食べている。
「これは満足できるわ」
「まずはたっぷり食べて明日頑張ろう」
馬岱は明るい顔で皆に言った。
「明日が正念場だしね」
「よし、民の為だ」
公孫賛はここでも話に力瘤を入れていた。
「ここは何としてもだ」
「そういえば白々ちゃんってさ」
「白蓮だ」
またしてもいつものやり取りである。劉備と公孫賛だ。

「いつも誰かの為に何かするよね」
「それはな。己のことだけを考える者は嫌いだ」
公孫賛は何気に己の哲学も語っていた。
「人は何の為に生まれ生きてそして死ぬかだ」
「何の為なの？」
「大義の為だ」
こう劉備にも話す。
「その為に生き、そして死ぬのだ」
「そうよね、やっぱりね」
「桃香、御前もそう思うな」
「うん」
今度は明るい返答だった。
「やっぱり私もそう思うよ」
「そうだな。御前も昔からそうだった」
酒もある。二人で飲みながら明るく話す。
「自分の為よりもまず誰かの為だったな」
「劉家の者はかくあれ」
笑いながらこんなことも言うのであった。
「お父さんやお母さんによく言われてたしね」
「先生にもだったな」
「先生元気かな」
劉備はこんなことも口にした。
「どうなのかな、最近元気なのかしら」
「都で将軍を務めておられるがな」
「あっ、そうなんだ」
劉備は公孫賛のその言葉を聞いて明るい笑顔になった。笑顔のままで酒を飲む。それはかなり甘い酒であった。それを飲んでいた。
「立派になられたのね」
「私も一つの州を任されているしな」
「おめでとう」

「次は御前だ」
ここで公孫賛の顔が真面目なものになった。
「御前も今みたいな一つの荘で終わるつもりはあるまい」
「私が？」
「そうだ。御前ならすぐに一つの州の主になれるぞ」
劉備を見込んでの言葉だった。
「間違いなくな」
「そうかな。私は別に」
「そうした志はないのか？」
「それよりも今よりもずっと。皆が笑顔で暮らせる国になればいいなって」
「思うことはそれか」
「その方が大事じゃないかしら」
こう公孫賛に話すのだった。
「やっぱりね。そっちの方がね」
「そうだな。だが御前自身はそれに対して己を立てようとは思わないのだな」
「全然。そんなことは」
思わないというのだった。
「思ったことないし」
「やれやれ。相変わらず欲のない奴だな」
今度は溜息と共の言葉だった。
「だがそうだからこそいいのかもな」
「いいのかな」
「いいのだ。御前はそれでいい」
劉備の顔をだ。微笑んで見ていた。
「だからこそいいのだ」
「そうなんだ」
「まあ今は飲んで食べよう」
公孫賛はこれで話を一旦切った。そのうえで話した。

「明日の為にな」
「うん、それじゃあ」
「それにしても」
ここでまた孔明が言った。

# 第二十六話　袁紹、劉備を迎えるのことその八

「鈴々ちゃんって」
「どうしたのだ？」
「食べるだけじゃないのね」
唖然とした顔と言葉であった。
「それだけじゃなかったのね」
「だからどうかしたのだ？」
「飲むのも凄いのね」
見ればだ。張飛は飲む量も凄かった。まさに鯨飲であった。
「どんどん飲めるのね」
「お酒は大好きなのだ」
天真爛漫そのものの言葉だった。
「だから幾らでもいけるのだ」
「だからなのね」
「そうなのだ、さあどんどん持って来るのだ」
実際にこんなことも言う張飛だった。
「二日酔いもしたことがないのだ」
「ああ、あたしもだよ」
「私もだ」
「私もよ」
ここで馬超に趙雲、それに黄忠も参戦してきた。
「じゃあな」
「酒も楽しむとしよう」
「そうね。それじゃあ」
こんな話をして今は休むのだった。彼女達はこれで終わりだった。
そして翌朝。袁紹はあらためて四人に対して問うていた。
「それで見つかりましたの？」
「あと三人ですよね」

「こっちから大会に参加するメンバーは」
「そう、三人ですわ」6
また言う袁紹だった。
「三人ですけれど」
「あの、麗羽様」
「もう一人いたような」
しかしここで田豊と沮授が言ってきた。
「あの影の薄い」
「包丁を持って誰かを刺すような感じの」
「ああ、あれですわね」
袁紹も言われて何となく思い出した。
「ええと、何でしたっけ。あの弟殿を好きそうな」
「何とかいいませんでした？」
「ほら、何とか」
顔良と文醜はわからなかった。
「あの人ですけれど」
「西園寺何とかとかいいませんでしたっけ」
「確かそういう名前でしたわね」
袁紹も他の四人も彼女の名前を覚えていない。
「それであの何とか世界とかいうのを入れて四人分ですわよ」
「まずはキャロルさんと凛花さんですね」
「その二人でどうでしょうか」
田豊と沮授がこの二人のン名前を出してきた。
「それとあとは、あの」
「この前に来た」
「ああ、あの一行の中からですわね」
袁紹もここでわかった。
「ではあの一行をここへ」
「わかりました」
「それでは」

こうして何人も連れて来られた。見ればだ。
金髪で鎧を着た西洋人だ。
「クロードさんでしたよね」
「ああ」
顔良の問いに頷いて返す。
「そうだ」
「それと後は」
「キム＝ヘリョン」
「キリアン」
どちらも黒髪の青年だ。だが棒を持った男の顔はアジア系であり何処かキム＝カッファンを思わせる面持ちであり流れる雰囲気だ。
そしてもう一人は細い剣を持ち口には薔薇がある。ズボンの腰には長い帯がある。

# 第二十六話　袁紹、劉備を迎えるのことその九

そしてだ。他にもいた。

「ガロス」

「ブラックホーク」

「ヴァルター」

斧と盾を持った巨体の男で顔中に髭があり兜には角が生えている。黒い大柄な身体に独特の髪型をしていて二本の斧を持つ。そして最後は甲冑を来た騎士であった。

「管又刃兵衛」

「ジェイ」

「ドラコ」

「ゴルバ」

着物に眼鏡、それに槍を持った老人にアフロの髪の黒人、西部を思わせる服に銃を持った男に軍服の男。彼等もそれぞれ名乗った。

そしてだ。

最後にだった。二人いたのだった。

「鈴姫です」

「アンジェリカよ」

金髪に桜色の丈の短い着物の上に緋色の上着を羽織っている少女だ。手には巨大な剣と笛がある。そしてもう一人は。

白い半裸の、脚が露になった服装に黒く短く刈った髪、それと爪を思わせる形の白い棒を持っている。最後に二人の女が来たのだった。

そしてだ。袁紹はその二人を見て言うのであった。

「今からですけれど」

「はい」

「何なのかしら」

「大会に出てもらいますわ」

こう話すのであった。
「それで宜しいですわね」
「大会というと」
「あれね」
「そう、あれですわ」
また二人に対して言った袁紹ですわ。
「それでいいですわね」
「私は。お世話になっていますし」
「仕事だから」
二人もそれぞれ異論はなかった。
「わかりました」
「やらせてもらうわ」
「では。他の者達ですけれど」
「どうすればいいのですかな」
刃兵衛が問うた。
「我々は」
「暫くしたら北に向かいますから」
「その時に備えて訓練をしていてくれねえかな」
顔良と文醜が彼等に話した。
「そういうことで」
「頼めるか？兵の訓練の方もさ」
「うむ、わかった」
頷いたのはクロードだった。
「さすればその様に」
「それで御願いしますね」
「あたい達も大会が終わったらすぐにそっちに行くからさ」
また彼等に言う顔良と文醜の二人だった。
そうしてである。袁紹はここでまた言った。
「さて、準備万端ですわね」
「そうですね。それでは」

「これから大会に」
「ええ。それにしても」
田豊と沮授の言葉に応えながら話す袁紹だった。
「我が袁家も本当に人材が多くなってきましたわね」
「一度にですし」
「来るのが」
「その通りですわね。それにですわ」
さらに話す袁紹だった。
「内政ですけれど」
「藍玉殿と黒檀殿がおられますし」
「そちらは麗羽様が留守の間も抜かりなく」
「青珠殿と赤珠殿もその為に残っておられます」
「ですから」
「ならいいですわ」
それを聞いて満足した顔で頷く袁紹だった。
「まずは政ですわ。わかっていますわね」
「はい、西域征伐の功績は朝廷にも届いていますし」
「その結果朝廷からは遂にです」
「幽州ですわね」
袁紹は満足した面持ちになっていた。

# 第二十六話　袁紹、劉備を迎えるのことその十

「あの州が遂にわたくしのものに」
「おって朝廷から正式に命じられます」
「幽州の牧にもです」
田豊と文醜も楽しそうに話す。
「これで麗羽様は五州の主です」
「おめでとうございます」
「五州を治めそうして」
袁紹は満足した顔のまま話していく。
「その功績で。わたくしはさらに上を目指しますわよ」
「やがてはですね」
「三公もですよね」
顔良と文醜も楽しそうに話す。
「これで袁家は五代三公ですよね」
「あの美羽様を差し置いて」
「ふん、美羽なぞ所詮は小娘ですわ」
袁紹の顔はここでは微妙に歪んでしまっていた。
「わたくしの相手ではありませんわ」
「はい、袁家の主は麗羽様ですね」
「何進様も認めてくれますわね」
「妾の子であろうとも」
自分からこのことを言う袁紹だった。
「それでも。実力で掴めるものは掴めましてよ」
「それはいいことね」
アンジェリカは袁紹のその言葉を聞いて述べるのだった。
「掴めるだけの力があるということは」
「貴女、そういえば貴女の世界では」
「私はそういう立場にいなかった」

こう言うだけのアンジェリカだった。
「だからそれはできなかった」
「奴隷だったそうですけれど」
「それで暗殺とかやってたんだよな」
「ええ」
顔良と文醜にも答えるアンジェリカだった。
「そう。あの世界じゃ」
「けれどこの世界じゃアンジェリカさんは」
「少なくとも奴隷じゃないからな」
二人はそのアンジェリカを慰めるようにして言うのだった。
「それは安心して下さいね」
「あたい達だって仲間だからな」
「ええ」
頷いて返すアンジェリカだった。
「それじゃあ」
「私もですか」
今度は鈴姫だった。
「私も。袁紹さんのところで」
「勿論ですわ。確かに働いてもらいますわ」
袁紹はこのことは言いはした。しかしであった。
「それでもですわよ」
「それでもですか」
「ええ、そうですわ」
悠然と笑いながら鈴姫に述べる。
「期待していますわよ」
「有り難うございます」
おずおずとだが確かに言った鈴姫だった。
「ではこの大会も」
「では皆さん」
ここでまた言う袁紹だった。

「宜しいですわね」
「はい」
「参りましょう」
田豊と沮授も言うのだった。
「そうして大会に出るからには」
「勝ちましょう」
「当然ですわ。さて」
袁紹の言葉は続く。また田豊と沮授に問うのだった。
「お米と麦ですけれど」
「はい、わかっています」
「御安心下さい」
微笑んで答える二人だった。
「そちらはもう」
「準備ができ次第発ちますから」
「宜しいですわ、それで」
満足した顔で頷く袁紹だった。

# 第二十六話　袁紹、劉備を迎えるのことその十一

「では幽州の民はこれで大丈夫ですわね」
「はい、抜かりなく」
「そちらも既に」
「では。心置きなくですわね」
ここで己の席から立ち上がった。
「行きますわよ」
「はい！」
「いざ出陣ですね」
こうしてであった。袁紹も大会に向かう。むしろ彼女達の方がである。大会のことが楽しみで仕方がないといった感じですらあった。
そしてその頃。国の中でまた一つ恐ろしいことが起ころうとしていた。
「ねえ卑弥呼」
「何、貂蝉」
あの不気味な二人が語り合っていたのである。
「これからだけれどどうするの？」
「そうね。まずはいいおのこを見つけないとね」
こう貂蝉に返す卑弥呼だった。
「まずはそれからよ」
「この世界は奇麗なおなごはいてもいいおのこは少ないのよね」
ここでこんなことを言う貂蝉だった。
「普通のおのこにとっては極楽だけれど」
「確かに」
どうやらこの二人は女には興味がないらしい。
「私達乙女にとってはね」
「地獄よ」
こう言ってやまない。そこにだった。

「んっ？あれは」
「あら、病気かしら」
ふと、である。道の端に倒れている者を見つけたのである。
見ればその者は老人だった。老人は腹を抑えて苦しんでいた。
「ううう・・・・・」
「御老人、どうしたの？」
「御身体が何処か」
「そうなのじゃ、これが」
心配する二人にこう答える老人だった。
「持病がのう」
「あら、持病？」
「それは困ったわね」
このことを聞いて実際に心配な顔になる二人だった。
「どうしようかしら、これは」
「お薬はないし」
「私達医術の心得もないし」
「あるのは乙女の心と武術のみよ」
かなり怖いことを言っている。
「それでどうしたものかしら」
「本当にね」
「ううう・・・・・」
この間にも苦しむ老人だった。
「普段は薬があるのじゃが丁度切らしておって」
「ううん、困ったわね」
「本当にね」
二人も今はどうしていいか悩んでいた。そこにだった。
「むっ、どうしたんだ？」
赤い髪の精悍な顔の若者が来た。白い上着の下に黒い服と茶色のズボンという格好である。そのエメラルドグリーンの目の光が強い。
「この御老人は」

「あら、いいおのこ」
「そうよね」
二人はその若者の姿形を見て言った。
「この人なら私のダーリンに相応しいわ」
「あら、私によ」
二人は言い争いもはじめた。
「私のダーリンにこそよ」
「駄目よ、私のよ」
喧嘩になりそうになる。しかしであった。
貂蝉がこう卑弥呼に提案したのである。
「喧嘩してもはじまらないわ」
「そうね」
「だからここはね」
「暫くダーリンと一緒にいてどちらがよりダーリンに相応しいかよ」
「確かにするのね」
「そうよ、そういうことよ」
こんな提案をするのであった。

# 第二十六話　袁紹、劉備を迎えるのことその十二

「それでどうかしら」
「いいわよ」
卑弥呼もそれでいいとした。
「それじゃあね。今からね」
「ええ、どちらがよりダーリンに相応しいか」
「勝負よ」
「一体何の勝負なんだ？」
若者だけがわかっていなかった。
「さっきから一体何の話なんだ？」
「何でもないわ」
「別にね」
その若者に対してはこう告げるのだった。
「それでよ」
「この御老人だけれど」
「ああ、見せてくれないか？」
若者は老人を心配する顔で見ながら言ってきた。
「ちょっとな」
「あら、お薬持ってるの？」
「ひょっとして」
「それも持っているが他のこともできる」
若者はこんなことも言ってきた。
「だから少し見せてくれ」
「ってことはまさか」
「貴方お医者様？」
「ああ、そうだ」
その通りだというのである。
「俺の名前は華陀という」

「華陀？」
「それがダーリンの名前なのね」
「ああ、そうだ」
二人を前にしても全く動じていない華陀だった。
「ゴオオオッド米道！の者だ」
「わかったわ。ゴオオオッド米道！ね」
「そこの人なのね」
「そうだ。その呼び方で頼むな」
二人が自分と同じ呼び方をしたことは嬉しいようであった。
「それで御老人だが」
「どうなの？それで」
「助かるの？」
「ああ、どうやらこれは心臓だな」
仰向けに寝ている老人の胸や腹をさすりながらの言葉である。
「そうか、これなら」
「治せるのね」
「ダーリンなら」
「任せてくれ」
強い言葉で応える華陀だった。そうしてだ。
「病魔退散！」
指を高々と掲げる。次に叫ぶ言葉は。
「光になれーーーーーーーーっ！！」
「指が光ったわ！」
「黄金色に」
実際にその輝きだった。そうしてである。
華陀がその指を老人の左の胸にやる。そうすればだった。
胸から何かが消えた。そのすぐ後にだった。
老人がゆっくりと目を開いてきた。穏やかな顔だった。華陀・Jはその老人に対して問うのであった。
「気分は」

「はい、有り難うございます」
穏やかな顔で礼を述べるのだった。
「お陰様でもう」
「そうか。それならいいんだ」
華陀は老人の今の言葉を聞いて彼もまた微笑んだ。
「俺の針は皆の為にあるからな」
「あら、針だったのね」
「そうだったのね」
ここで二人もわかった。
「それであの色の光だったのね」
「そういうことだったの」
「ああ、そうだ」
その笑みを二人にも見せる華陀だった。
「俺は針も使える。薬以外にな」
「これは凄いわね」
「そうね、名医ね」
二人から見てもそうであった。
「まさにね」
「その通りだわ」
「やっぱりこの方は」
「そうね」
そしてまた二人でひそひそと話すのだった。

# 第二十六話　袁紹、劉備を迎えるのことその十三

「ダーリンにね」
「相応しいわね」
「それに」
「この世界を救えるわ」
「さっきから何を話してるんだ？」
華陀はその二人を見ながら問うた。
「二人共、ところでだが」
「ええ、ところで」
「何かしら」
二人は華陀の言葉を受けて彼の方に顔も身体も向けた。
「二人共行く宛はあるのか？」
「行く宛？」
「それなの」
「ああ、この御時世二人だけの旅も危ないだろう」
彼は二人の恐ろしさを知らなかった。
「だから。ここはだ」
「一緒になのね」
「そういうことなのね」
「ああ、よかったらどうだ？」
また二人に言う華陀だった。
「三人でな。どうだ？」
「ええ、それじゃあ」
「喜んで」
二人はその不気味な姿をそれぞれもじもじとさせながら華陀の提案に頷いた。
「ダーリンがそう言うのなら」
「三人で旅をしましょう」

「俺は今困っている人達を助けながら旅をしている」
これが彼の旅の目的だというのである。
「二人の目的は何なんだ？」
「この世界を救うこと」
「それよ」
こうはっきりと華陀に話すのだった。
「それが私達の目的なのよ」
「実はね」
「そうか、わかった」
華陀は明朗に言葉を返した。
「なら目的は同じだな。三人で一緒にこの国を回るとするか」
「ええわかったわ」
「それじゃあね」
「それでだ。御老人」
華陀はここで自分が治療した老人に声をかけた。
「調子の方は」
「何と、これは」
明るい顔で応えて起き上がる老人だった。
「今までとは全然違う」
「そうか」
「何か若い頃に戻ったようだ」
「あら、じゃあただ元気になっただけじゃなくて」
「素からなのね」
「病は根からなおさないと駄目だ」
華陀はこう二人に話した。
「だからだ。俺の針はその根幹から治すんだ」
「名医ね」
「そうね」
そしてだった。二人は華陀をこう呼んだ。
「医者王ね」

「そうね」
「まさにそれよ」
「スーパードクターよ」
「それはどうかわからないが」
華陀はそうした言葉には興味がないようだった。今度の態度は素っ気無い。
「しかしだ」
「しかし？」
「どうなの？」
「医術は仁術だ」
これが華陀の考えであった。
「だからだ。俺はこの世のあらゆる病と戦うんだ！」
「やっぱり凄いわ」
「惚れて濡れちゃいそうだわん」
また身体をくねらせてのそれぞれの言葉だった。
「ダーリン、最高よ」
「もう惚れてどうしようもないわ」
「それじゃあ二人共行くか」
全く動じない華陀だった。
「この世のあらゆる病を倒しに！」
「ええ、行きましょう」
「それじゃあね」
こうしてだった。三人の旅もはじまった。これもまた運命の戦いのはじまりだった。戦いはこの国のあらゆるところで起ころうとしていた。

第二十六話　　完

2010・8・16

# 第二十七話　神楽、あらたな巫女を見るのことその一

第二十七話　神楽、あらたな巫女を見るのこと

袁紹達と劉備一行の戦いはだ。今はじまろうとしていた。
「何かな」
「どうしたのだ？」
「いや、悪ノリに過ぎないか？」
関羽は溜息と共に張飛に話すのだった。
「この大会は」
「そうですよね。袁紹さんらしいですけれど」
孔明も難しい顔をしている。
「けれど。それでも」
「それでもなのだ？」
「お米や麦を送るのなら別のことをしていいと思うんですけれど」
「そこがわからないんだよな」
馬超もここで話す。
「あの人ってよ。何かあると大会開くんだよな」
「おかしな趣味ね」
黄忠もこのことに言及する。
「何を考えてのことかしら」
「だが。面白くはあるな」
趙雲は微笑んでいた。
「こうした大会も」
「そうね。悪くはないわね」
神楽も微笑んでいる。
「楽しみましょう、折角だし」
「そうよね。楽しまないと損よね」
劉備も趙雲や神楽と同じ考えだった。

「折角なんだし」
「そうそう。それじゃあね」
馬岱も乗り気であった。
「皆で明るく楽しくね」
「八人でね」
「九人だ」
公孫賛が劉備に突っ込みを入れた。
「全く。私を忘れるな」
「そういえば公孫賛殿は元々袁紹殿と知り合いなのか？」
「向こうが全く覚えていないだけだ」
公孫賛は難しい顔で関羽の言葉に応えた。
「全くだ」
「そうなのか」
「そうだ。これは曹操も同じだがな」
「誰が覚えてくれているのだ？それでは」
「正直いない」
公孫賛の顔は困り果てているものになっていた。
「殆どな」
「それは困ったことだな」
「大体だ。幾ら何でもこれはないだろう」
袁紹側と向かい合った形になっている劉備側の席はだ。何と八つしかないのだった。その一つがどうしてないのかはもう言うまでもなかった。
「何故だ、何故一つない！」
「えっ、八人じゃねえのかよ」
「そう聞いていますが」
火月と蒼月がその公孫賛に言ってきた。
「それで席は八つだったんだけれどよ」
「そちらの方は」
「公孫賛だ」

公孫賛はその二人に話した。
「知らないのか、私よ」
「いや、知らねえな」
「何処のどなたですか？」
「貴殿等確か日本の忍者だった筈だな」
公孫賛はいぶかしむ顔で二人に言い返した。
「それでどうして知らないのだ」
「確かに忍ってのは情報収集が仕事さ」
「それは事実です」
二人もこのことは話した。
「しかし。あんたのことは本当に知らないぜ」
「袁紹殿のところにいる者は誰もです」
「隣の州なのにか」
余計に困った顔になる公孫賛だった。
「どういうことなのだ、全く」
「まあそれならだ」
ケビンがここで出て来た。
「あれだろ。椅子をもう一個出せばいいじゃないか」
「ああ、そうだな」
「どなたかまだわかりませんが」
二人はケビンのその言葉に頷いた。

# 第二十七話　神楽、あらたな巫女を見るのことその二

「それじゃあ席をもう一つだな」
「用意しましょう」
「釈然としないのだがな」
まだ難しい顔の公孫賛であった。
「何故私はいつもこうなのだ」
「皆さん」
しかもここでやたら目立つ袁紹が観客達と参加者達に対して告げる。
「これより大会をはじめます」
「おおーーーーーーーーっ」
「どんな大会なんだ？」
「知力、美しさ、服装、武力、そういったものを競います」
こう高らかに言うのであった。
「我が袁紹陣営が勝つか、それとも劉備さん達が勝つか」
「それを決めるんだな？」
「今度の大会は」
「そういうやつか」
「その通りですわ。それでは」
また言う袁紹であった。
「今よりはじめさせてもらいますわよ」
「おおーーーーーーーーっ！！」
「はじめろはじめろ！」
観客席から拍手が起こる。ニコルとミハルが看板を持って観客席の前にいる。その看板には拍手をするよう書かれているのであった。
そしてだ。その二人もここで話をしていた。
「わざわざこんなこと書かなくても皆拍手するけれど」
「お笑いだしね」

「そうだよね」
「何でだろうね」
二人にはこのことが理解不能だった。
「前から袁紹さんっておかしなところあるけれど」
「おかしなところやたら多いけれどね」
こんなことも言う彼等だった。
「それでもこれはねえ」
「やり過ぎだよね」
「注意し過ぎ」
「そうそう」
こんなことを話しながらもだ。彼等は己の仕事を果たしていた。
そうしてであった。
最初の対決がだ。ここで話された。
「では最初は」
「はい、これです」
「この競技です」
「あら、藍玉に黒檀」
袁紹は二人の姿を見て満足した顔になった。
「お疲れ様」
「まあ政の合間の息抜きってことで」
「楽しんでいて下さい」
二人の姫はこう話をしてだった。彼女達も雑用にあたる。そうしてだった。
「知力勝負です」
「それです」
二人がこう話す。
「頑張って下さい」
「どちらも」
「それじゃあだけれど」
劉備はまずは自分の家臣達を見て話した、

「こっちで出てもらう娘は」
「一人しかいないのだ」
こう言う張飛だった。
「ここはやっぱり」
「そうよね、朱里ちゃんよね」
劉備も笑顔で言う。
「御願いできるかしら」
「わかりました」
孔明もその劉備に笑顔で応えた。
「それじゃあ任せて下さい」
「それではですわね」
袁紹もここで配下の者を見回した。
「こちらは」
「やっぱり水華か恋花じゃないんですか？」
文醜が袁紹に言ってきた。

# 第二十七話　神楽、あらたな巫女を見るのことその三

「どっちかですよね、やっぱり」
「ええ、そうですわ」
袁紹にしてもそのつもりだった。文醜のその言葉に頷いて答えた。
「問題はどちらかですけれど」
「二人共同じ位のレベルですけれど」
顔良もここで言う。
「それでどっちかをですよね」
「さて、どちらにしたものかしら」
袁紹はいささか難しい顔になっていた。
「相手はあの諸葛孔明ですけれど」
「それなら」
ここで凛花が言ってきた。
「私にいい考えがあるけれど」
「あら、凛花さん」
袁紹はその凛花を見てふと述べた。
「若しかして貴女が出ますの？」
「それは違うわ」
凛花はそれは否定したのだった。
「だって。私じゃあの娘の相手はできないわよね」
「それはね」
「やっぱり無理だよな」
顔良と文醜もそれは言った。
「だって。天下一の軍師だし」
「あんた刀使うのが仕事だからな。軍師と知力勝負はな」
「だから。私は出ないわ」
また言う凛花だった。
「けれど決める方法があるわ」

「それはなのですね」
「ええ。鉄ノ介」
いつも連れている親友に声をかけた。
「選んで」
「ヂッ」
その鉄ノ介が応えてだ。二人の軍師の方に向かって歩いていく。
袁紹はそれを見ながらだ。凛花に対して言うのであった。
「あの鼠さんがどうかしましたの？」
「鉄ノ介が選んでくれる」
こう袁紹に話すのだった。
「これでどうかしら」
「あっ、それだったら」
「恨みっこなしでいいよな」
顔良と文醜も凛花のその行動に笑顔で頷いた。
「それじゃあどっちになるのかしら」
「今度は」
「決まったわ」
そしてであった。決まったのは。
何とだ。意外な人物であった。
「ええと、これは」
「どういったらいいのかしら」
袁紹配下のその看板軍師二人も鉄ノ介のその決定には首を捻ってしまった。
「斗詩になるなんて」
「これは一体」
「何でなんだよ、これって」
文醜も首を捻っていた。
「斗詩って知力三四なんだけれどよ」
「三六よ」
その文醜からの言葉である。

「覚えておいてよ、このことは」
「あっ、悪い悪い」
「それで麗羽様」
顔良も袁紹に申し出る。かなり困った顔である。
「あの、今回は」
「辞退したいのですね」
「はい、これはちょっと」
その子待った顔でまた主に話す。
「私じゃ。諸葛孔明の相手は」
「構いませんわ」
しかしであった。何と袁紹はこんなことを言うのであった。
「これが凛花さんのお友達の決定ならです」」
「そんな、本気ですか！？」
「勿論。本気ですわ」
袁紹は胸を張って答えた。
「そうでなければこんなこと言いませんわ」
「負けるけれどいいんですか？」
顔良はさらに言うのだった。
「絶対に相手になりませんよ」
「負けてもそれでいいのでしてよ」
また言う袁紹だった。

# 第二十七話　神楽、あらたな巫女を見るのことその四

「既に手配するものはしていますし」
「はい、それはですね」
「そのことは」
田豊達もこのことはすぐに答えた。
「もうそろそろお米や麦が集まりますから」
「安心して下さい」
「ここは楽しむべきですわ」
また言う袁紹であった。
「ですから斗詩さん。ここは鉄ノ介さんの決定に従いなさい」
「ヂッ」
その鉄ノ介も応えてきたのだった。
「わかりましたわね」
「鉄ノ介は意地悪で決めたりしないから」
凛花がここでまた話す。
「そう、絶対に」
「そうなの」
「だから安心して」
こう顔良に告げる凛花だった。
「ここは」
「わかったわ」
顔良も遂に頷いたのだった。
「それなら」
「さて、こちらは決まりましたわ」
袁紹が劉備達に対して告げた。
「こちらは顔良さんでしてよ」
「嘘でしょ」
馬岱が最初に驚いた。

「だって。そっちにはしっかりとした軍師が二人もいるじゃない」
「智の二枚看板じゃなかったのか？」
馬超も驚きを隠せない。
「その二枚看板を出さないのかよ」
「顔良殿では。こう言っては何だが」
関羽も困惑を隠せない。
「その。無理ではないのか」
「いいのでしてよ」
だが袁紹の決定は変わらない。
「ここはこうしますわ」
「何か最初から物凄い展開なのだ」
張飛も今回ばかりは驚きを隠せない。
「どうなるのだ？」
「まあいいではないか」
趙雲はここでも冷静だった。
「さて、楽しむとしよう」
「まずはそれなのね」
「我々は我々でやることがある」
趙雲は黄忠にも述べた。
「それに備えよう」
「そうね。そういうことね」
黄忠も笑顔で頷いた。そうしてであった。
最初の勝負である知力対決がはじまった。それはだ。
その問題を聞いてだ。孔明は唖然となった。
「えっ、何ですかこれ」
「何ですの、これは」
袁紹も憮然とした顔になっていた。
「この問題は」
「何でこの問題なんですか？」
「あれっ、入れる問題間違えたか？」

「何をやっとるのじゃ」
凱に坂田が言う。
「どうして袁紹殿に関する問題なのじゃ」
「まあいいや。入れたものは仕方ないな」
凱はしれっとしていた。
「じゃあこれでいくか」
「全く。まあいいわ」
坂田も適当なものであった。
「それでな」
「よし、決まりだな」
こう話してだった。その問題はそのまま通されたのだ。そしてであった。
「第一問は」
「言いますね」
ドンファンとジェイフンが司会進行であった。

# 第二十七話　神楽、あらたな巫女を見るのことその五

「袁紹様はお風呂で最初に何処を洗うか」
「それです」
「えっ、そんなのわかりません」
孔明は驚いた顔で叫ぶようにして言った。
「だって私袁紹さんじゃないですし」
「当たり前ですわ」
袁紹も憮然となっている。
「わたくしでも意識していませんのに」
「この問題を答えられる者がいるのか？」
「いないと思うのだ」
関羽と張飛も自分の席で言った。
「この問題はかなり」
「無茶もいいところなのだ」
しかしである。顔良が自分の席のボタンを押して名乗り出る。
「はい」
「おう、顔良ちゃん」
「どうぞ」
「頭からです」
こう答えるのだった。
「そこからです」
「おう、正解！」
「その通りです」
ドンファンとジェイフンは回答を見ながら答えた。
「こんなのよくわかったよな」
「そうだよね。何で顔良さん知ってるのかな」
二人はこのことに首を捻った。
「その理由を知りたいな」

「そうだよね」
「全くですわ」
袁紹も憮然としたままである。
「斗詩さんがどうして知ってますの？」
「まあ第二問な」
「今度は」
キム兄弟はさらに司会進行を続けていく。
「袁紹さんの今日の下着の色は」
「何色でしょうか」
「はわわ、私のならわかりますけれど」
孔明は完全に困惑しきっていた。
「白ですけれど」
「自分で言ってどうするんだよ」
馬超がその孔明に呆れていた。
「そんなのよ」
「はわわ、言っちゃいました」
「見ろよ。観客の人達興奮してるぜ」
当然その孔明を見てである。
「全くよ」
「失敗しました・・・・・」
「まあ白はいいけれどな」
何気にこんなことを言う馬超だった。
「あたしは最近着けないけれどな」
「翠さんはエメラルドグリーンですよね」
「ああ」
ついついこの問いに答えてしまった。
「そうだよ」
「それで桃香さんはピンクですし」
「私ピンク好きなの」
にこりと笑って答える劉備だった。

「何か女の子らしい色で」
「似合ってますよ、とても」
孔明もその劉備ににこりと笑って述べる。
「関羽さんも白がお好きですよね」
「清潔な感じが好きだからな」
関羽はいささか真面目な顔で答えた。
「だからな」
「清潔ですよね」
「うむ、それがいい」
また答える関羽だった。
「星は薄いピンクの時もあるな」
「白も好きだがな」
こんな話をする面々だった。そしてである。
クイズに戻る。袁紹はさらに憮然となっていた。
「だからどうしてわたくしの下着の色の話に」
「まあまあ」
「気にしない方がいいですよ」
田豊と沮授がその袁紹を宥める。

## 第二十七話　神楽、あらたな巫女を見るのことその六

「何かの手違いでそうした問題になったみたいですし」
「仕方ないかと」
「全く。凱さんは今日は晩御飯抜きですわ」
誰が選んだのかはもうわかっていた。
「御自身のお金で食べなさい」
「何かそれって処罰になってないですけれど」
「それでいいんですか」
「宜しいですわ。確かに気に入らないですけれど」
それは事実であった。
「けれどそこまではいきませんし」
「だからですか」
「それで宜しいのですね」
「ええ、それでいいですわ」
またいいと言う袁紹だった。
「それでなのですけれど」
「はい、クイズですね」
「そちらは」
「さて、斗詩さんが御存知とは思えませんけれど」
流石に自分の今日の下着まではと思ったのである。
「答えられるかしら」
「はい」
ところがだ。ここで顔良はまたボタンを押したのだった。そして答えると。
「黒です」
「ええと」
「正解です」
ドンファンとジェイフンは回答を見てから答えた。

「何でわかったんだ？」
「顔良さんも問題作った人も」
二人にはこのことが不思議だった。
「よくこんなのわかったよな」
「よりによって今日限定だしね」
「ああ、それな」
ここで凱が言うのだった。
「俺が作った問題でな」
「えっ、そうなのか」
「そうだったんですか」
二人は今の凱の言葉に顔を向けた。
「あんたが作ったのかよ」
「この問題集は」
「そうなんだよ。まあ興味半分でな」
そうだというのである。
「作ったんだよ。今日の下着は袁紹さんが着替えてるところをたまたま見てな」
「成程な」
「それでなんですか」
「それでわかったんだよ」
こう二人に話すのだった。
「袁紹さんって元々下着は黒が多いしな。他には紫もあるな」
「派手な下着が多いんだな」
「何かいつも見ている感じの話ですけれど」
「洗濯で干すだろ」
それを見てだというのである。
「それでわかるんだよ」
「ああ、そういえばそうだよな」
「洗濯ものはやっぱり干しますしね」
三人はこんな話をしていた。しかしである。当の袁紹はというと。

今度は明らかに怒った顔になってだ。田豊と沮授に言うのであった。
「凱さん、御飯抜きで入牢一週間ですわ」
「それが妥当ですね」
「あそこまでやると」
「そういうことですわ」
何気に処罰が重くなった。だがその間にもクイズは続く。
「袁紹さんの嫌いな食べ物は？」
「はい、ざざ虫です」
「正解」
また正解だった。
「袁紹さんのカップは？」
「はい、Ｆです」
「正解！」
顔良ばかりが答える。孔明は何も答えられない。終わってみれば顔良の圧勝だった。孔明は結局一問も答えられなかったのだった。

# 第二十七話　神楽、あらたな巫女を見るのことその七

それを見てだ。ビリーが思わず唸った。
「おいおい、顔良ちゃんが勝ったぜ」
「まさか孔明が負けるとはな」
「そうだな。予想外だ」
アクセルとローレンスも言う。
「まああの問題じゃな」
「それも当然か」
「全くだぜ。おかしな流れだ」
ビリー達から見てもだ。そう言うしかなかった。
そしてである。次はだ。武力対決だった。
だが今度はだ。出て来たのは殆ど鍋の大きさの丼に入れられたラーメンだった。当然その麺の量はとんでもないものであった。
「あれを食べろというのかしら」
「そうみたいね」
神楽が黄忠の言葉に応える。
「それが武力なのね」
「だったらこっちは」
「よし、鈴々が出るのだ！」
「あたしも！」
張飛と馬超が名乗りを挙げる。
「二人でいいのだ？」
「それはどうなんだ？」
「ああ、いいぜ」
「そう書いてますし」
ドンファンとジェイフンが二人の問いに答えた。
「じゃあ劉備さんのところはあんた達だな」
「袁紹さんのところは」

「まずはあたいだな」
顔良がにやりと笑って出て来た。
「あたいは食べるのと賭けにはちょっと五月蝿いぜ」
「いつも負けてるじゃない、賭けには」
顔良はここで文醜を横目でじっと見て述べた。
「勝てないんだから止めたらいいのに」
「いいんだよ、人生は一か八かなんだよ」
こんな言葉で返す始末だった。
「だからな」
「全く。また痛い目に遭うわよ」
だがこの話を聞く文醜ではない。何はともあれ袁紹の方から出る人間は一人決まった。そしてその次の人間も選ばれることになった。
「ええと、残る二人は」
「一体誰にしましょうか」
田豊と沮授が袁紹に問う。
「張飛さんと馬超さんはかなりの大食ですし」
「こちらも猪々子と同じだけの娘を出さないと」
「そうですわね」
袁紹もこのことはわかっていた。見れば考える顔になっている。
「ここは誰を出すべきか」
「どうされますか？」
「貴女達は大食ではないですし」
袁紹はまずはその軍師二人を見た。
「それに斗詩さんもそこまでは食べませんし」
「麗羽様もですし」
「となると」
「それならですけれど」
ここで名乗り出たのは。
「私でいいでしょうか」
「あら、貴女ですの」

袁紹はその鈴姫を見て声をあげた。
「貴女が出られますの？」
「はい、やらせて下さい」
こう静かな声で話すのだった。
「私も食べることには自信がありますし」
「あれっ、鈴姫ってそこまで食べるのか？」
文醜はそれを聞いてまずは目をしばたかせた。
「そんなに大飯喰らいなのかよ」
「食べようと思えば食べられます」
また答える鈴姫だった。
「ですからお任せ下さい」
「よし、それではでしてよ」
袁紹は鈴姫のその志願を受けて頷いた。

# 第二十七話　神楽、あらたな巫女を見るのことその八

「貴女が出なさい、宜しいですわね」
「はい、わかりました」
こうしてであった。袁紹からはこの二人が出ることになった。かくしてそのうえでラーメンを食べ合う。四人共凄まじい勢いで食べていく。
「どちらが勝つかしら」
「ちょっとわからないわね」
馬岱に黄忠が話す。
「四人共凄い食欲だし」
「鈴々ちゃんと翠お姉ちゃんは知っていたけれど」
馬岱は仲間である二人のことはわかっていた。二人共まさに電光石火の勢いで丼の中の麺を消していく。やはりそれは物凄い食欲だ。
「けれど文醜さんと鈴姫さんも」
「そうね。食べるわね」
黄忠も二人を見ていた。
「あの鈴姫って娘も」
「食べるのもあれですけれど」
ここで馬岱は言うのだった。
「あの娘強いですよ」
「ええ、そうね」
黄忠は馬岱のその言葉に目を鋭くさせて頷いた。
「それもかなりね」
「私達と同じ位ね」
「あのキャロルって娘もそうですよね」
「強いわね。戦ったらどちらも無事では済まないわよ」
「はい、間違いなく」
「どんどん強い人材が集まってきているわね」

黄忠はこうも話した。
「戦乱が戦乱を呼んでいるのかしら」
「そうなんですか」
「私の気のせいだったらいいけれど」
黄忠はここでだ。眉をさらに顰めさせた。
「それには何かあるのかしら」
「何かですか」
「戦乱よりもよからぬものがあるのかしら」
こう言うのだった。
「若しかして」
「ううん、戦乱よりもって」
こう言われるとだ。馬岱には想像がつかないことだった。
「それよりもよくないことって」
「何か。この国自体を滅ぼすような」
孔明が話に加わってきた。
「そういう存在でしょうか」
「それってまずいよね」
馬岱は孔明のその言葉に難しい顔になった。
「国を滅ぼす様な奴がいたとしたら」
「流石にそうした存在はいないと思いますけれど」
孔明も今はこう考えていた。
「やっぱり」
「そうよね。とにかく戦乱は終わらせないとね」
「皆の為にもね」
馬岱と黄忠はこう話していた。そしてである。
四人はラーメンを食べ続けている。二杯、三杯、そしてだ。全員遂に四杯目までいった。
ここでドンファンが呆れながら言った。
「俺並に食うな」
「そうだね。四人共かなり食べてるよ」

ジェイフンも言う。
「それで全然衰えないし」
「あの許緒って娘も俺と同じ位食ったけれどな」
「あの娘も驚いてたよ、自分と同じだけ食べるってね」
「俺も驚いてるんだけれどな」
ドンファンもであるというのだ。
「あの娘の食う量にはな」
「お互い様ってことかな。それでだけれど」
「ああ」
「そろそろ時間だよ」
こう言うのであった。
「終わらせようか」
「ああ、じゃあな」
こうしてだった。終了を知らせる鐘のことが鳴った。そうしてそれが終わった時にである。四人共五杯目も奇麗に食べ終えていた。

# 第二十七話　神楽、あらたな巫女を見るのことその九

「引き分けだよな」
「そうだね」
ドンファンとジェイフンはその空の四つの丼を見て述べた。
「武力対決は引き分けか」
「四人共凄く食べたし」
見ればスープすら残っていなかった。今回の勝負は完全に引き分けだった。
そしてだ。次の勝負はだ。
「ええと、美？」
「美しさっていうと」
「何をするのかな」
「決まっていますわ」
袁紹がここで高らかに言う。
「それぞれ着飾って美を競い合うのですわ」
「美をですか」
「その通りですわ」
劉備にも言葉を返した。
「それぞれ服を選んで着飾りなさい。いいですわね」
「ああ、あれか」
「あれなのだ」
馬超と張飛はこれでわかった。
「何かまたって感じだな」
「そうなのだ。とにかく着るのだ」
「何かわからないが服を着ればいいのか」
関羽は二人の話を聞きながら述べた。
「それでは服を選ぶとするか」
「うむ、そうしよう」

こうして劉備陣営は着替えに入った。袁紹陣営もである。
だがここで顔良と文醜はだ。困った顔になっていた。
「この前惨敗したし」
「あれにはへこんだよな」
二人は前回馬超一人に惨敗したことをまだ覚えていたのだ。
「今回もまずいかしら」
「何か向こう人材が多いしな」
「何を言っていますの」
だが主の袁紹は強気だった。
「こちらにも人はいますわ。大丈夫でしてよ」
「だといいんですけれど」
「向こうはもう破壊力抜群の人間が多いみたいですけれど」
何はともあれだった。袁紹陣営も着替えに入る。まず凛花はセーラー服、そしてキャロルがブレザーにプリーツスカートだった。
「おっ、これはかなり」
「いいよな」
「ああ、いけてるな」
「平均点かなり高いぜ」
観客達はその二人を見て口々に言う。
「今回は袁紹様のところも勝てるか？」
「この調子でいけばな」
「そうなるかもな」
「出足は順調ですわね」
ここで満足した顔で言う袁紹だった。だが彼女はまだ舞台裏にいる。着替えはしたがまだ出番は来てはいなかったのである。
「今回は勝てますわね」
「次はアンジェリカさんと鈴姫さんです」
「次もいけますね」
田豊と沮授がここで言う。当然二人も着替えている。
「アンジェリカさんの服も鈴姫さんの服も」

「平均点高いですし」
「素材もいいですわね」
袁紹は中身もしっかりと見ていた。
「それじゃあ次はその二人ですわね」
「はい、それじゃあ」
「二人共どうぞ」
アンジェリカは白衣の下に黒いボンテージ、そして鈴姫はくノ一の格好だった。向こうの世界から人材に教えられた服である。
それを見てだ。また言う観客達だった。
「おおっ、いいねえ」
「やっぱりこういう服だよな」
「そうそう」
「露出してナンボだよ」
「全く」
「今気付いたのですけれど」
ここで言う袁紹だった。

# 第二十七話　神楽、あらたな巫女を見るのことその十

「この国の男連中はドスケベですの？」
「男は皆そうですよ」
「そんなものですよ」
主に話したのは田豊と沮授だった。
「ですからこうしたことも気にしないで下さい」
「別に」
「わかりましたわ」
袁紹は眉を顰めさせて述べた。
「それじゃあこのことは気にしませんわ」
「そういうことで御願いします」
「それでは次は私達が」
こうしてだった。その二人も出た。二人の服は。
「いいねえ、メイド」
「うんうん、手堅いね」
「よくわかってるじゃないか」
「流石袁紹様の知の二枚看板」
二人の評判もよかった。そして問題の二人は。
「今回は大丈夫よね」
「だといいよな」
随分と弱気である。
「とりあえず着てみたけれど」
「どうなんだろうな、これで」
「出るのが怖いわよね」
「また白けさせないよな」
「早く行きなさい」
その二人の後ろから袁紹が言ってきた。
「出番ですわよ」

「それはわかってますけれど」
「けれど」
「けれどもそれでももありませんわ」
明らかに急かす声だった。
「今回はああした美少女戦士とかではないですわね」
「流石にあれはしてませんし」
「外しましたから」
さしもの文醜もこのことばかりは反省していた。
「けれど大丈夫ですか？」
「この服で」
「少なくとも前よりはいいでしてよ」
袁紹はこう二人に話した。
「だから胸を張って出なさい。宜しいですわね」
「はい、じゃあ」
「行かせてもらいます」
こうして二人も出た。その服は。
「へえ、そう来たか」
「成程な」
「露出は少ないけれどな」
「いいんじゃないのか？」
観客達の評価は上々だった。顔良は縦縞の野球のユニフォームである。勿論帽子も同じだ。白地に黒が実にいい感じである。
そして文醜は迷彩服だ。こちらも似合っている。
「可愛いよな」
「ああ、愛想のない服でも女の子が着たらな」
「よくなるな」
「可愛い女の子だとな」
「あれっ、いい感じ？」
「そうみたいだな」
顔良と文醜も評価に胸を撫で下ろした。

「よかった、成功ね」
「ああ、よかったよかった」
「さて、問題の二人はこれでよしですわ」
袁紹は満足した顔で述べた。
「わたくしも出ますわ」
こうして袁紹が最後に出た。その服は。
何と絹の金色のドレスである。手袋までしている。そのまま舞踏会に出そうな勢いだ。袁紹のその髪型と恐ろしいまでにマッチしている。
それを見てだ。まずは顔良と文醜が言った。
「何か麗羽様って」
「ああいう派手派手な格好じゃないと駄目なんだな」
「そうね。別の世界の人みたいだけれど」
「ベルサイユだったか？キャロルが言っていた」
「さて、これでどうでして？」
袁紹はかなり自信満々である。

# 第二十七話　神楽、あらたな巫女を見るのことその十一

「わたくしの美は」
「・・・・・とりあえずいいよな」
「一瞬何かって思ったけれどな」
「そうだよな」
これが観客席の反応である。
「奇麗なことは奇麗だよな」
「派手もいいところだけれどな」
「まあ袁紹様らしいよな」
「合ってる合ってる」
「じゃあいいか」
とりあえず及第点だった。しかし袁紹はここで言うのであった。
「如何でして？わたくしのこの美は」
「まあいいんじゃないですか？」
「とりあえずは」
顔良と文醜がまた話す。
「とりあえず私達は出し終わりましたし」
「後は向こうですね」
「けれど」
「そうだよなあ」
ここでまた顔を曇らせる二人だった。
「向こう、こういうことには強いですよ」
「勝てるんですかね、あたい達」
「勝てると思わなければ勝てませんわよ」
一応正論を言う袁紹であった。
「為せば成る、為さねば成らぬ何事もでしてよ」
「それはそうなんですけれど」
「敵は強大ですよ」

「ふん、質では負けていませんわよ」
袁紹だけはあくまで強気である。
「例え相手が誰であろうとも」
「そうだったらいいんですけれど」
「麗羽様がそう思っておられるなら」
そしてだった。ここで田豊と沮授も言う。
「今は何を言ってもはじまりませんし」
「見ているだけしか」
「そうですわね。じたばたしてもはじまりませんわ」
袁紹も二人のその言葉に頷いた。
「それなら。今は」
「はい、席に着いてそれで」
「お茶でも飲んでいましょう」
こうしてだった。袁紹陣営は落ち着いて自分の席でお茶を飲むことにした。その中でふとだ。アンジェリカが言ったのである。
「一人いるわね」
「一人とは？」
「誰かいるの？」
彼女のその言葉に鈴姫と凛花が問うた。
「まさかまた私達と同じ世界の人が来たとか」
「そうなの？」
「多分」
こう答えるアンジェリカだった。
「来ているわ」
「だとしたら一体誰が」
「誰なのかしら」
「それはね」
また話すアンジェリカだった。
「多分。巫女だわ」
「巫女？」

「巫女っていったら」
二人は今のアンジェリカの言葉に劉備陣営が入っている着替え室を見た。そこには既に一人の巫女がいるのはわかっていることだった。
そしてだ。二人はその巫女のことを話した。
「神楽さんかしら」
「やっぱり私達と同じ世界から来ている人だし」
「そうね。時は後だけれど」
彼女達が生きていた時代からかなり後である。神楽がいる時代はだ。
「それでも違う」
「違う」
「神楽さんとは」
「そう。また別の巫女だから」
その巫女が来たというのである。
「また一人」
「それじゃあその巫女は」
「何の目的で」
「そこまではわからない」
アンジェリカにはわかる筈もないことだった。それでこう答えたのであった。

# 第二十七話　神楽、あらたな巫女を見るのことその十二

「ただ。来た」
「それは確かですか」
「そうなんですか」
「私達がここに来た理由もまだわからない」
アンジェリカは言う。
「けれど必ず意味はあるから」
「そうじゃないと。この世界に来ませんし」
「そうよね。この世界は」
二人もこのことは頷けた。何の理由もなく別の世界に入ることはだ。決して有り得ないことだった。このことはすぐに察することができた。
「一体何がいるのでしょうか」
「いるとすれば何が」
彼女達も心に謎を感じていた。そしてだ。
キャロルもニコラとミハルの兄弟と話していた。その話すことは。
「獅子王だけれど」
「来ているのかもね」
「獅子王もなのね」
キャロルは二人のその言葉を聞いてまずは顔を曇らせた。
「この世界に」
「それも真獅子王がね」
「来ているのかもね」
「考えてみたら有り得るわね」
それにキャロルも頷くのだった。
「私達もこの世界に来ているし」
「そうだよね。やっぱり」
「それじゃあその時は」

「ええ。真獅子王と戦いましょう」
キャロルはまた言った。
「この世界でも絶対に何かをする筈だから」
「うん、その時はね」
「皆で」
「あと。獅子王も来ているわね」
キャロルはもう一人の獅子王についても話した。
「絶対に」
「やっぱりそうなんだろうね、真獅子王もいたら」
「そうなるよね」
「この世界って物凄く複雑じゃないかしら」
キャロルは腕を組んでその首を左に捻った。
「私達以外にも沢山の人達が来ているし」
「何が起ころうとしているのかな」
「本当にね」
ニコラとマルコもそれはわからなかった。だが彼等もまた何かが起ころうとしていることは察していた。そうしてであった。劉備陣営ではだ。
劉備は丁度着替えている最中だ。ピンクの見事なブラとショーツの姿が映える。その姿で今は自分が着るべき服を探しているのであった。
その中でだ。劉備は関羽に対して問うた。
「あの、関羽さん」
「どうしたのだ、劉備殿」
「何の服がいいかな」
こう関羽に問うのである。
「一体どの服が似合うかしら」
「難しいな」
見れば関羽も下着姿である。劉備に負けない豊かで張りのある胸と見事なプロポーションを包んでいるのは白のブラとショーツだけ

である。
「それは」
「難しいの？」
「劉備殿のスタイルは見事過ぎる」
これは関羽の素直な感想である。
「そのスタイルではだ」
「どうなの？」
「多少の服ではかえって服が負けてしまうのではないか？」
こう言うのである。
「だからな」
「そうなんですか」
「さて、どの服がいいか」
関羽はその下着姿の劉備を見ながら言った。
「劉備殿には」
「まずは下着の色に合わせたらどうでしょうか」
ここで孔明が提案してきた。彼女は可愛らしいフリルのある白のブラとショーツだ。そこには黄色い花の模様も入っている。

# 第二十七話　神楽、あらたな巫女を見るのことその十三

「そうすればいいですよ」
「下着の色に？」
「はい、まずは下着の色が透けません」
孔明が言うのはここからだった。
「それに下着の感じはそのまま着ている服にも出ますし」
「だからなのね」
「劉備さんは今ピンクの下着ですよね」
「うん」
「じゃあピンクか赤の系統の下着を選ばれるといいです」
「わかったわ。それじゃあ」
劉備は孔明のその言葉に頷いた。そのうえで服を選ぶのだった。
そしてだ。他の面々も服を選んでいた。その中でだ。
馬岱は馬超にある服を勧めていた。馬超はやはりエメラルドグリーンのブラとショーツである。馬岱のは薄めのライトグリーンである。
「だから翠お姉ちゃんはこれだって」
「おい、これかよ」
「お姉ちゃんは何着ても似合うけれど」
その馬超の抜群の顔立ちとスタイルを見ての言葉である。
「それでなんだけれど」
「それでこれか」
「これ来たらお姉ちゃんだけで圧勝できるわよ」
「けれどこれは」
「蒲公英も着るし」
馬岱もにこにことして話す。
「だからね」
「御前はそれか」

見れば馬岱は白い服をその手に持っている。
「それを着るのか」
「そうよ、じゃあお姉ちゃんはこれね」
「これか」
「だから絶対にいいから」
従姉には黒い服を勧めていた。右手で指差してだ。
「この服はね」
「ううん、それでもな」
「いいではないか。蒲公英の言う通りだ」
ここで趙雲が馬岱の助っ人に来た。彼女も下着姿のままだ。見れば今日の彼女の下着はライトブルーである。その服も似合っている。
「貴殿はその服が似合う」
「星まで言うのかよ」
「私は思ったことを言っているだけだ」
口元を微笑まさせての言葉である。
「それだけだ」
「じゃああたしはやっぱりこの服なのか？」
「ならこれはどうだ？」
趙雲が笑いながら勧めてきた服は白い体操服に緑のブルマーであった。馬超はその服を見てだ。これまで以上に狼狽した。
「おい、それは幾ら何でも」
「嫌か？」
「その服は恥ずかし過ぎるだろ」
顔を真っ赤にして趙雲に言うのだった。
「露出が凄過ぎるだろうが」
「そうだな。ある意味裸より刺激的だな」
「何でそんな服があるんだ」
「どうも聖フランチェスカ学園ではこの服を着ているらしい」
「どんな時にだよ」
「身体を動かす時にらしい」

そうだというのである。
「その時に着るらしい」
「こんな服を着て身体を動かすのかよ」
「女はそうらしいな」
「一体どんな世界なんだ？」
馬超もついつい首を捻る。
「その世界ってのは」
「聖フランチェスカ学園という名前は聞いたことがあるか」
「ないけれど何かそこにいるような気がするな」
馬超は自分でも不思議に思うがこう言ったのである。
「ちょっとな」
「そうだな。それは私もだ」
「星もかよ」
「不思議と愛着のある世界だ」
こう言うのである。
「その学園の世界はな」
「そうだよな。しかし星よ」
馬超はあらためて趙雲を見る。後ろ姿からは彼女の見事な背中から腰のラインが丸見えだ。とりわけ下着に包まれた尻のラインがいい。

# 第二十七話　神楽、あらたな巫女を見るのことその十四

「あんたってな」
「どうしたのだ？」
「あんたって髪短いんじゃなかったんだな」
「その話か」
「少しだけ延ばしている場所があったんだな」
見ればそうなっていた。趙雲はその翡翠色の髪を殆どボブにしているがそれでもだ。後ろの僅かな部分をかなり延ばしているのだ。
「そうしていたんだな」
「こういう髪型が好きなのだ」
「それでか」
「ああ、それでだ」
それでこの髪型にしているというのである。
「それでこうしている」
「成程な、それでか」
「さて、それでだが」
「それで？」
「貴殿はその服だな」
話が服のことに戻った。
「その黒い服だな」
「それしかないか」
「うむ、それしかない」
趙雲はまた言ってみせた。
「貴殿はだ」
「わかったよ。じゃあそれだな」
「私はこれにしよう」
趙雲もここで言うのだった。
「面白い服だ」

「ううん、何にするのだ」
張飛も黄色のブラとショーツのまま悩んでいた。ブラはスポーツブラである。
「正直迷うのだ」
「鈴々ちゃんはこれでいいかしら」
ここで黄忠が彼女に言ってきた。彼女は豊満な肢体をベージュのブラとショーツに包んでいる。その姿で張飛に言ってきたのだ。
「これでね」
「何っ、これなのだ？」
「そうよ。絶対に似合うから」
「似合うのだ」
「そうよ。だからこれにしたらどうかしら」
「ううん、正直迷うのだ」
張飛は馬超と同じ顔になっていた。
「この服よりもあの虎の着ぐるみの方が」
「それは止めた方がいいわね」
「私もそう思います」
孔明も参戦してきた。彼女は下着姿のままだ。
「その服だけは止めた方がいいです」
「しかしこうした服は着たことがないのだ」
「それでも着るべきよ」
「そうですよ。絶対に似合いますよ」
黄忠と孔明はあくまでその服を勧める。
「それじゃあ私も」
「紫苑さんはこれなんかどうですか？」
孔明は彼女にもアドバイスをした。
「絶対に似合いますよ」
「そうね。それじゃあね」
「はい、それで」
こんな話をしていた。神楽は既に着替えて部屋の隅で座っていた。

しかしここでだ。ある声を聞いたのである。
「神楽ちずるさんね」
「誰かしら」
「ここに来た者だけれど」
こう言ってきたのである。
「いいかしら」
「私になのね」
「ええ、貴女に」
声は楽屋の向こうから聞こえてくる。神楽はそれを聞いているのだ。
「いいわね」
「是非にというのね」
「そうよ」
まさにその通りというのだった。
「だからね」
「わかったわ。それじゃあ」
神楽はその言葉に頷いたのであった。
そして席を立ってだ。壁の方に顔を向けるのだった。
「いいわね」
「これから」
そうしてだった。神楽はここで話すのだった。また何かが起ころうとしていた。

第二十七話　完

２０１０・８・１８

# 第二十八話　ミナ、一行に加わるのことその一

第二十八話　　ミナ、一行に加わるのこと

神楽は少し楽屋裏に出た。そこにいたのは。

白い髪に長い腰巻を着けて上は短いブラを思わせる服を着た褐色の肌の女だった。白地に青で縁取りをしているのが見事に映える。

顔立ちは整っている。静かで楚々としたものすらある。その少女が神楽の前に来たのである。

「真鏡名ミナよ」

「それが貴女の名前なのね」

「ええ」

神楽の言葉にこくりと頷いて返す。そのうえで傍にいる犬に似た小さい生き物を見て言う。

「これはチャンプル」

「シーサーね」

「シーサーを知ってるの」

「沖縄の神の使いね」

こうその少女ミナに言ってみせたのである。

「そうね」

「沖縄じゃない」

だがミナはそれを否定したのだった。そして言うことは。

「琉球。私の国はそこなの」

「ああ、そうだったわね」

ミナに言われて神楽も微笑んで返した。

「沖縄の昔の名前はそうだったわね」

「私はそこから来たの」

また話すミナだった。

「この国に」

「そうなのね」
「貴女はヤマトンチューね」
今度はミナからの言葉だった。
「そうね」
「そうよ。そちらの人間よ」
神楽はミナに話を合わせてこう言った。
「そこからこの世界に来たの」
「やっぱり。そうなのね」
「時代は違うけれど」
このことは前置きした神楽だった。
「それでもそこからその国に来たの」
「私は妖術師なの」
ミナはこのことも神楽に話した。
「貴女の国じゃ巫女と呼ばれる存在ね」
「そうね。そのシーサーも一緒だし」
「感じるの、この国には」
「貴女もなのね」
「よからぬ存在が集まってきている」
「ええ」
二人は顔を真剣なものにさせていた。そのうえで話をするのであった。
「確かにね。集まっているわ」
「だからここに来たの」
また言うミナだった。
「貴女達のところに」
「そう、私達のところに」
「今は何かしているから後で」
「そう、後でね」
「貴女のお友達とも話をさせてくれるかしら」
「勿論よ」

神楽は真剣な面持ちでミナの言葉に頷いた。
「それじゃあね」
「ええ、それじゃあね」
「その時にまた会いましょう」
こうミナに話す。
「それじゃあ。今は私達のやるべきことをやるから」
「応援しているわ」
ミナはここで微笑んでみせてきた。優しい笑顔である。
「ミナという名前はね」
「ええ。何かしら」
「笑うっていう意味なの」
こう言ってみせたのである。
「だから私笑うの好きなの」
「ミナで笑う。ということは」
「何なの？」
「貴女は確かに琉球の人だけれどアイヌの血も入っているのね」
神楽にはすぐにわかることだった。彼女の知識の中にあったのだ。

## 第二十八話　ミナ、一行に加わるのことその二

「そうなのね」
「アイヌ。ナコルルやリムルルも」
「勿論いるわよ」
こうミナに告げた。
「私達の館に残ってるわ」
「そうなの。あの二人も」
「この世界にも貴女と同じ世界の人は多くいるわ」
「そうね。覇王丸達も」
ミナは彼の名前を出した。
「四人の如来の宝珠を持つ人達も」
「いるわ。他の人達も」
「私がこの世界に来たのはそれが理由ね」
ミナは静かに述べた。
「やっぱり」
「そうね。そして私もね」
「貴女は封じる者ね」
ミナは神楽を見て言った。
「そうね。貴女は」
「そう、私は封じる者」
実際にそうだと返す神楽だった。
「だから。ここにいるのよ」
「それなら私も一緒に封じさせて」
「この世界に集う魔を」
「この世界、この国には多くの魔が集っているから」
「わかっているわ。貴女も私も」
「封じる者」
二人で話す。こうしてミナもまた加わることになったのだった。

だが神楽は今はそれを劉備達に伏せてだ。楽屋に戻りそのうえで彼女達に言った。
「もういいかしら」
「はい、終わりました」
劉備が答えた。
「じゃあ皆で」
「そうだな。行くとしよう」
関羽が応える。見れば全員既に着替えている。
「しかし。どうにもな」
「どうにもって？」
「私はこういうことはかなり」
関羽は困った顔で劉備に言葉を返していた。
「苦手だ」
「そうなの」
「恥ずかしいな」
こう言って実際に頬を赤らめさせる。6
「それでもこれか」
「恥ずかしいと思うからこそいいのだ」
ここで言ったのは趙雲である。
「だからこそだ」
「それは何故だ？」
「恥じらいは色気を生む」
「色気？」
「愛紗は元が抜群にいい。そこに色気が加わればだ」
趙雲はよく見ていた。関羽のその女をだ。
「それだけで多くの者を悩殺できるぞ」
「人を悩殺してどうするのだ」
関羽にはわからないことだった。
「その様なことをしてもだ。何になるのだ」
「あたしもそう思うんだけれどな」

馬超も関羽の言葉に同意する。
「悩殺とかそういうのはな」
「戦の場で勝てばそれでいいではないか」
「それは武人としてだ。だが我等はそれと共に女でもある」
趙雲はその二人にまた話した。
「そういうことだ」
「よくわからないのだが」
「あたしも。それでこの服なのか？」
「だから。その服だと間違いないって」
横で馬岱が言う。
「もう袁紹さんのところなんか一発なんだから」
「そうなのか？」
「よくわからないが」
「まあとにかく行きましょう」
孔明がいぶかしむ馬超と関羽に対して告げた。
「それからですよ、本当に」
「そうなのだ。鈴々も着慣れない服だけれど行くのだ」
張飛も言う。

# 第二十八話　ミナ、一行に加わるのことその三

「じゃあ最初は誰なのだ？」
「私が行くわ」
名乗り出たのは神楽だった。
「それでどうかしら」
「あら、その服なのね」
黄忠がその彼女を見て声に笑みを含ませた。
「また凄い服を選んだわね」
「やっぱり私はこれだから」
こう言うに止めた神楽だった。
「それでだけれど」
「いいと思うわ」
黄忠は今度は目を細めさせて述べた。
「それじゃあ。最初は御願いね」
「ええ、それじゃあ」
こうしてだった。まずは神楽が出て来た。するとであった。
「えっ、おい」
「これはまた」
「ああ、凄いな」
「似合ってるなんてものじゃない」
「必殺技だな」
観客達が思わず息を呑む。何と彼女は巫女の服で来たのだ。
その白を基調とした赤もある服を見てだ。観客達は呆然となった。
これで流れは完全に劉備側のものとなったのである。
「次は誰なんだ？」
「一体誰なんだ？」
「それで」
「さて、それじゃあ」

黄忠は大人の微笑みを浮かべて前に出た。
「私が行くわ」
「あっ、私も行きます」
孔明も名乗り出た。
「それでいいですよね」
「ええ、いいわよ」
「それじゃあ二人で」
「行きましょう」
今度は二人であった。その格好は。
「むっ、黒いスーツにタイトスカートか」
「それに黒縁眼鏡」
「おまけにストッキングもか」
「ポイント押さえてるな」
黄忠の服である。彼女はその姿にしたのである。
「女教師ってやつか」
「いいねえ、刺激的で」
「わかってるよな」
「ああ、本当にな」
「さて、授業をはじめるわよ」
そしてこんなことも言ってみせたのであった。
「皆いいわね」
「は、はい！」
「わかりました、先生！」
観客達も思わず言う。そして孔明も見るとだ。
「へえ、この娘もわかってるな」
「ああ、おっとりしてそうだけれどな」
「わかってるわかってる」
「本当にな」
「はわわ、何か大反響ですう」
孔明はそんな彼等の声を視線を受けて戸惑った声をあげる。見れ

ば彼女の服は水兵の服だ。白地にズボンだがそれがまたよかった。
「私の格好そんなにいいですか？」
「凄く可愛いわよ」
黄忠はその彼女を見て微笑んで話すのだった。
「その服で正解だったわね」
「そうですか」
「これで流れをさらに掴んだし」
「私の服ってそんなにいいですか」
「ズボンにはズボンの色気や可愛さがあるのよ」
黄忠はこのことを指摘した。
「そういうことだからなのよ」
「ズボンにはズボンの、ですか」
「そういうこと。いいわね」
「はい、わかりました」
こんな話をして観客の心をさらに掴んだ彼女達だった。そして次は。
「おおおっ、メイド！？」
「それにお嬢様の格好か」
「これまた押さえてるよな」
「ああ、いいよいいよ」
趙雲と張飛だった。趙雲はメイドの格好をしていて張飛は黄色いふりふりのドレスである。二人はその格好で一緒に出たのである。

## 第二十八話　ミナ、一行に加わるのことその四

張飛は観客達のその言葉にまずはその目を点にさせた。
「そんなにいいのだ？」
「言った通りだろう？」
趙飛はその彼女を見ながら微笑んでみせてきた。
「御主にはその服もいいのだ」
「スカートなんて穿くのはじめてなのだ」
「だがそれでもなのだ」
「違和感があるのか」
「下がすーーすーーするのだ」
こう言って困った顔を見せる。
「星はその服を着ても平気なのだ？」
「慣れればどうということはない」
趙雲は悠然と笑って言葉を返した。
「スカートもな」
「そうなのだ」
「それよりもだ。張飛よ、聞いているか」
「うん、凄い歓声なのだ」
彼女達もかなりの拍手と歓声を受けていた。
「鈴々達ってここまで凄いのだ」
「いやいや、まだ究極の人材がいるぞ」
「究極の？」
「そうだ、あの二人が勝利を決める」
こうまで言うのであった。
「間違いなくな」
「そうなのだ、あの二人なのだ」
「凄いぞ、あれは」
そうしてだった。この二人の次にその二人が出て来たのであった。

そしてその二人を見た観客達の反応はどうかというと。
「うおおおおおおおおおっ！！」
「これは凄い！」
「ないだろこれは！」
「もう最強だぞ！」
「そ、そんなにか！？」
馬超が彼等の歓声に呆然となった。
「そんなに凄いのか？あたし達」
「ほらね、蒲公英の言った通りでしょ」
馬岱がその従姉の横から言う。
「この服だと間違いないって」
「そうなのか」
「そうよ。だからお姉ちゃん普通に滅茶苦茶可愛いから」
「そうか？」
「そういうこと。だからその服だともう完璧なのよ」
見れば馬超は黒いゴスロリである。帽子までである。それに対して馬岱は白いゴスロリである。黒と白で見事に対比を見せているのだった。
「ほら、お客さん達凄い声じゃない」
「まるで雷だな」
「お姉ちゃんと蒲公英がそこまで凄いってことよ」
馬岱はにこにことして話す。
「そういうことなのよ」
「御前もかよ」
「そうよ。だからこの歓声なんじゃない」
「何かかえって怖いな」
「怖い位がいいのよ。さて」
馬岱はまた笑って言う。
「次は劉備さんと関羽さんよ」
「そうだな。じゃああたし達はこれでな」

「退散しよう」
こうして劉備と張雲の番になった。今度は。
「すげえ・・・・・・」
「胸でけえ・・・・・・」
「しかもあの黒髪の娘凄い色気だな」
「ああ、何か我慢できなくなった」
「あそこまで凄いとな」
「なっ、何を言っているんだ」
関羽も観客席の言葉を聞いて声をあげた。
「私をどうするつもりだ」
「別にどうするつもりはないんじゃないかな」
その横にいる劉備はいつもの調子である。
「関羽さんが奇麗で可愛いっていうだけで」
「そ、そうなのか」
「そうよ。だってその格好って」
関羽のその服を見ていう。見ればその服はだ。

# 第二十八話　ミナ、一行に加わるのことその五

水色の軽やかなワンピースだ。ただそれを着ているだけでも関羽はいつもと違う服なので恥ずかしいのである。だがその恥じらいがさらに得点を高くさせていた。

そして劉備はだ。淡いピンクのチャイナドレスである。ただしガーターストッキングは緋色で髪の毛は団子にしている。これまた刺激的な姿である。

「凄く似合ってるわよ」

「そ、そうなのか」

「関羽さんって凄く奇麗だし」

確かに美貌も傑出している。

「それならこの歓声も間違いないわよ」

「それは劉備殿もではないのか？」

「私も？」

「そうだ、その姿では男が目を奪われない筈がない」

そのチャイナドレスの劉備を見ての言葉である。

「私も。目のやり場に困る」

「どうしてなの？」

「その、胸に脚が」

彼女のそうした部分を見てさらに顔を赤らめさせる関羽だった。

「あまりにも凄くてだ」

「そうなの？」

「翠や蒲公英も凄かったがそういうものを見てはだ」

「私ってそんなに凄いかな」

「女の私から見てもな」

こう劉備にまた言う。

「女を好きになる趣味はないのだが」

「私は関羽さん好きだけれど」

「何っ！？」
劉備の今の言葉にぎくりとした顔になる。
「劉備殿、まさかそれは」
「だって関羽さん友達じゃない」
劉備が劉備たる由縁の言葉だった。
「だからね」
「そうなのか。それでなのか」
「そうよ。だからなのよ」
「それならいいのだが」
こう言われてほっとする関羽だった。何はともあれこれで美を競う競技は終わった。と誰もが誤認してしまっていたのだった。
「待て、私はどうなる！」
「あれっ、誰だ？」
「まだいたのか？」
「誰なんだ、あれ」
観客達は慌てて出て来た公孫賛を見て目をしばたかせる。
「見たことないよな」
「劉備殿のところにいたのか？」
「そうじゃないのか？あれは」
「そうなのか」
「だから何故私はそうなんだ」
そしてだ。司会のドンファンとジェイフンも言ってきた。
「あのさ、悪いけれどさ」
「飛び入りは認められていないのですが」
「だから飛び入りではない！」
公孫賛はその二人にも言い返した。
「御主等は既に私を知っている筈だぞ」
「いや、だからさ」
「貴女はどなたでしょうか」
「公孫賛だ」

名前を告げた。
「名簿に書いてあるだろう、劉備の方にだ」
「あっ、本当だ」
「そういえばそうですね」
ここで二人もやっと頷いた。
「最後の一人誰かなって思ってたけれど」
「貴女だったんですか」
「何故こうまで忘れられるのだ？」
いつものことながら嫌になっていた。
「私はいつもいつも」
「まああんたも出るってことだよな」
「それではどうぞ」
二人はその公孫賛を舞台に出した。観客達の反応は。
「ふうん、そうかあ」
「あれって制服だよな」
「そうだよな」
「そこそこいいんじゃないのか？」
「なあ」
こんな反応だった。かなり薄い。見れば彼女の服は黒いハイソックスに黒いスカートと制服、白いブラウスである。それであった。

# 第二十八話　ミナ、一行に加わるのことその六

「学園の日々かあ」
「その作品でしか攻略できないしな」
「まあそれならそれでいいんじゃないか？」
「なあ」
「うう、確かに私はあの作品でも不遇続きだ」
悔しささえそこにはあった。
「だが。それでも一作目ではしっかりとヒロインだったのだぞ」
「まあアンチも多かったけれどな」
「そんなに気にしないで下さい」
ここでまた司会の兄弟が言う。
「まあそういうことでな」
「有り難うございました」
「結局私はこれだけなのか」
こうしてであった。劉備側の出番は終わった。その採点はどうかというとだ。
「くっ、仕方ないですわね」
「やっぱり。向こうは凄過ぎますよね」
「ありゃ反則だろ」
顔良と文醜も仕方ないといった顔で袁紹に話す。
「特に馬超さんが」
「あれはないだろ」
「まあいいですわ」
袁紹はとりあえずは敗戦を受け止めた。
「それでは次ですわ」
「はい、それではです」
「次の勝負といきましょう」
軍師二人が言ってであった。こうして次の勝負に入る。

箱の中身を当てる勝負や腕相撲、それに連想問題が行われた。それぞれ一進一退であり戦いは最終戦にまで持ち込まれたのであった。

その最後の戦いはだ。一騎打ちだった。

「さて、袁家伝統の決闘を行いますわよ！」

「ああ、あれなのだ」

「あれかよ」

張飛と馬超はうんざりとした顔で言った。

「鰻なのだ」

「あれはあたし駄目だ」

こう言って二人は退くのだった。

「大体胸でなんか掴めないのだ」

「あっても恥ずかしくてできないぜ、ありゃあよ」

「そうですよね。胸で鰻を掴む競争ですか」

孔明も困惑した顔で話す。

「袁家ってそんなことまでしてるんですね」

「ううむ、かなり変態じみているな」

趙雲もそれを言う。

「どうしたものかな、これは」

「私はあれは」

関羽も張飛達と同じ顔になっていた。

「無理だ。あまりにも恥ずかしい」

「私も。ちょっと」

黄忠もであった。

「あそこまでは無理ね」

「こちらの世界には慣れたつもりでも」

神楽も難しい顔をしている。

「そういうのは。格闘ならいいのだけれど」

「それじゃあ私が」

ここで名乗り出たのは劉備だった。

「行くわ。それでいいかしら」

「いや、待て」
しかしであった。ここで出て来たのは公孫賛であった。
「ここは私が行こう」
「白々ちゃんが？」
「白蓮だ」
まずはいつものやり取りからだった。
「私が行こう」
「どうしてなの？私が大将だし」
「ことのはじまりは私が幽州の飢饉を救わんとした為だ」
「あれっ、劉備さんの剣のことがはじまりだったのでは？」
孔明が的確に突っ込みを入れた。
「確かそれは」
「だから幽州のこともあっただろう。何故私の話はそう簡単に忘れる」
「間違いなく公孫賛殿以外が話していたら誰も忘れなかった」
趙雲の突っ込みは厳しい。

# 第二十八話　ミナ、一行に加わるのことその七

「その様な重要なことはな」
「私だからなのか」
「そうだ。とにかく幽州の民の為か」
「そうだ、だから私が行く」
こう言う公孫賛だった。
「それでいいな」
「うん、わかったよ」
劉備はその公孫賛の言葉を笑顔で受けた。
「じゃあ白々ちゃん、頑張ってね」
「何度も言うが白蓮だ、間違えるな」
「悪気はないんだけれど」
黄忠はそんな劉備を見て言った。
「それでもそれが余計に」
「困ったことね。そこが」
神楽も少し呆れていた。何はともあれ公孫賛が出ることになった。
彼女と袁紹はは鰻がこれでもかと入れられたその水槽を囲んで対峙した。
「貴女ですのね」
「そうだ、袁紹」
「名前は存じませんが」
袁紹は公孫賛の名前をどうしても覚えられなかった。
「それでも相手をして差し上げましてよ」
「だから御主といい曹操といい何故私のことを覚えられないのだ」
「だからどなたか存じませんことよ」
袁紹の今の言葉に全てが出ていた。
「まあ名前のことはいいですわ」
「それはか」

「それよりも。はじめますわよ」
こう公孫賛に言ってみせた。
「鰻対決、袁家伝統の」
「鰻を胸で掴んでそれでその捕まえた数を競うのか」
「これに勝てたら剣にお米や麦は貴女達のもの」
「よし、それならばだ」
「わたくしに勝って御覧なさい。是非」
こうしてであった。公孫賛と袁紹の鰻対決がはじまった。二人はそれぞれビキニに着替えてそのうえで水槽に入る。それからはじめるのだった。
鰻を胸で掴みそうして捕まえる。口で言うのは簡単だがこれが難しかった。
「くっ、胸で暴れて」
「こらっ、そんなに動くな」
ビキニの中で暴れ回る鰻達は二人にとって非常に厄介な相手であった。
「身体中にも絡みついてきますし」
「だから下には入るな！前にも後ろにも！」
「な、なあ」
「あ、ああ」
「これはまたえぐいな」
「エロ過ぎるだろ」
観客達はこれまた呆然となった。
「鰻対決、いつもやって欲しいよな」
「本当にな」
「ここまできわどいとな」
「そそられるなんてものじゃないぜ」
「全くだよ」
二人は何とか鰻を捕まえていく。だがそれは非常に厄介であった。胸だけでなく腕や脚、腰や尻にも絡みついてくる。しかもそこに

は蛸や烏賊まで入れていた。そうしたものにも捕まりさらに困ったことになっていた。
「れ、麗羽様・・・・・・」
「何か物凄く淫らなんですけれど」
袁紹側もこれには呆然だった。
「それでいいんですか？」
「あの、その」
「これが袁家の決闘のやり方でしてよ！」
まだこう言う袁紹だった。
「それならば受けるのが道理でしてよ」
「ううっ、何か凄い気迫」
「それはあるけれど」
袁紹の家臣達もそれは認めた。
「けれど。何ていうか」
「これって」
「見ているだけで」
顔を赤らめさせている彼女達だった。そして観客達も。
「いやらし過ぎるよな」
「これはかなり」
「やり過ぎじゃないか？」
「確かに」
劉備達もだ。これには唖然としていた。

# 第二十八話　ミナ、一行に加わるのことその八

「いいんでしょうか。あそこまでして」
「ううん、かなりまずいと思うわ」
黄忠も難しい顔で孔明に対して述べた。
「これはね」
「そうですよね。見ているこっちが」
孔明も顔を真っ赤にさせている。
「恥ずかしくなります」
「本当にね」
「これでいいのかしら」
また言う黄忠だった。
「公孫賛さんも」
「止めた方がいいだろ」
馬超も言う。
「この状況はよ」
「そうだよね。これ夢に出るよ」
馬岱はこう言った。
「いやらしい意味でね」
「そう思うのだ。これは出るのだ」
張飛も顔を赤くさせている。
「同じ女でもそう思うのだ」
「まあそれもいいとは思うが」
趙雲は僅かだがこの状況でも余裕があった。
「それでも。これはな」
「劉備殿、これは」
関羽は見かねて劉備に言った。
「止めた方がいいのでは」
「そうよね。二人共これは」

ほぼ裸で鰻や蛸や烏賊に絡められている。その中でのたうっているのだ。胸や腰だけでなく腕や脚にも絡み付いている。
「こ、こら口に入るな！」
「きゅ、吸盤が！」
「だからいやらしいにも程があるだろ」
「何かもう見ているとな」
「我慢できないっていうかな」
「洒落にならないぜ」
だが二人は真剣だった。そしてだ。
公孫賛は目を光らせた。そうしてだった。
「くっ、ここで負けては」
「袁家の意地にかけてここは負けませんわよ」
袁紹がその彼女に意地を見せてきた。その豊かな胸で鰻をまた一匹捕まえていた。そのうえで己の水槽の中に放り込むのだった。
「何かあろうとも！」
「私はこれまで」
公孫賛の中でこれまでの人生がフラッシュバックする。
「何処にいても忘れられ両親に置いてけぼりにされることも常だった」
とにかく昔から目立たないのである。
「このまま終わるのか」
「わたくしは負けませんわよ！」
また言う袁紹だった。
「決して！」
「いや！」
公孫賛はここで声をあげた。
「私はまだだ！」
「！？」
「何だ！？」
「やらせはしない！やらせはしないぞ！」

こう叫んでだった。己のそこそこの胸を使ってだ。凄まじい勢いで鰻を掴み取りはじめたのである。
「白々ちゃん！？」
この場面でも真名を間違える劉備だった。
「底力？これって」
「うむ、そうだな」
関羽は劉備のその言葉に頷いた。
「これこそが公孫賛殿の」
「それじゃあここは」
「勝てる」
関羽は断言した。
「これはだ。公孫賛殿の勝利だ」
「そう、いけるの」
「まさかこれ程の底力があるとはな」
関羽も驚くものだった。

# 第二十八話　ミナ、一行に加わるのことその九

「公孫賛殿もやる」
「麗羽様！」
「そっちの人が！」
まだ公孫賛の名前を覚えられない袁紹陣営だった。
「追い上げています！」
「油断しないで下さい！」
「くっ、わかってますわ！」
歯噛みしながら応える袁紹だった。
「ここは」
「はい、頑張って下さい！」
「負けないで下さい！」
「御覧なさい、わたくしの底力！」
袁紹もだった。その力を見せた。
彼女もまた凄まじい勢いで鰻を捕まえていく。そうしてであった。

両者は鰻はおろか蛸や烏賊まで捕まえていく。水槽の中にあるものは瞬く間になくなってしまった。だが問題はそれで終わりではなかった。
「数は？」
「一体どちらが」
「どちらが上？」
「一体」
その数は火月と蒼月が数える。火月はその中で言った。
「何か全部食いたくなるな」
「それは後にするのです」
蒼月は弟の言葉に突っ込みを入れた。
「まずは仕事です」

「わかってるさ。じゃあ今日は蒲焼にたこ焼きにいか焼きの祭だな」
「焼いてばかりですね」
「火しか使えないからな、俺は」
こんな話をしながらそれぞれ袁紹が捕ったものと公孫賛が捕ったものを数える。その数は。
「互角だ」
「同じです」
二人はそれぞれ言った。
「どっちもな」
「同じ数でした」
「くっ、引き分けか！」
「無念ですわね」
公孫賛も袁紹もそれを聞いて同時に眉を顰めさせた。
「ならどうなる？」
「勝負は」
「もう終わりでいいんじゃないかしら」
ここで言ったのは劉備だった。
「白々ちゃんも袁紹さんも皆も力を尽くしたし」
「白蓮だ」
また言い返す公孫賛だった。
「だからね。ここは」
「そうですよね。それに」
孔明も話してきた。
「もうお米や麦は幽州に向かいはじめてますしね」
「何っ、気付いていたの？」
「まさか」
これには田豊と沮授が驚いた。
「どうして気付いたというの？」
「それには」
「何かお話されていてそうじゃないかなって思ったんです」

孔明は温和な笑顔で話を続ける。
「それで今釣りをかけたんですけれどその通りだったんですね」
「うっ、やられたわ」
「まさかそう来るなんて」
「流石は諸葛孔明」
「私達を」
「どうやら一枚上手ですわね」
袁紹は溜息と共に言った。既に水槽から出ている。だが全身ぬるぬるのままである。
「水華や恋花を出し抜けるなんて華琳のところのあの猫耳軍師でも無理ですのに」
「申し訳ありません、麗羽様」
「失態でした」
主に謝る二人の軍師だった。
「いいですわ」
しかし袁紹はその二人を許したのだった。言葉も穏やかである。

# 第二十八話　ミナ、一行に加わるのことその十

「次がありましてよ」
「次ですか」
「では次は」
「あの娘に勝ちなさい、いいですわね」
こう言うだけであった。
「さて、それにしても」
「そうですね」
「引き分けですけれど」
田豊と沮授はあらためて主に告げた。
「どうすればいいでしょうか」
「残る剣は」
「仕方ありませんわね」
袁紹はここでまた溜息をついて言うのであった。
「ありのままを言うしかありませんわ」
「ありのまま？」
「ありのままって？」
劉備側はそれを聞いてまずは目をしばたかせた。
「一体何が？」
「何かあるんですか？」
「お話しますわ。実はですね」
まずは着替えてそのうえで謁見の間に入ってだ。袁紹は劉備達に詳しいことを話すのだった。それは劉備達にとっては驚くべきことだった。
「えっ、袁術殿のところに？」
「あの剣がある？」
「そんな事情で？」
「はい、そうなんです」

「それでなんだよ」
顔良と文醜が申し訳なさそうに劉備一行に話す。
「張勲さんの目に見えない服と交換で」
「それでだったんだよ」
「それ、絶対に詐欺だよね」
「間違いありませんね」
孔明は馬岱の言葉に頷いた。
「その服ありませんよ」
「裸の何とかみたいだよね」
「それでその服はどうなったのだ？」
関羽は呆れながら袁紹に問うた。
「今は一体」
「今こうして着ていましてよ」
袁紹はいつもの服で関羽に応える。
「こうして」
「・・・・・そうか」
それを聞いてもう突っ込むのを止めた関羽だった。袁紹という人物がさらにわかったのである。やはり何処かが妙な人物である。
そしてだ。袁紹は今度は申し訳ない顔で劉備に話した。
「劉備さんには悪いことをしましたけれど」
「私にですか？」
「最初から言うべきでしたけれど」
それはわかっている袁紹なのだった。
「ついつい。楽しみを優先させて」
「麗羽様はああした大会が好きなので」
「気にしないでやってくれないかな」
顔良と文醜がすぐにフォローを入れる。
「また宴を用意してますし」
「美味いものを腹一杯食って機嫌をなおしてくれよ」
「いや、別に」

「そう言われても」
「別に気分は悪くしていないし」
「そうなのだ」
劉備達はこう袁紹達に返す。特に機嫌を悪くはしていない。
そしてである。また劉備が話してきた。
「袁紹さん最初から幽州にお米や麦を送るつもりだったのですよね」
「えっ？」
「そうですよね」
にこりと笑って彼女に問うのであった。
「それならです」
「いいといいますの？」
「はい、私達も楽しませてもらいましたし」
だからいいというのである。
「ですから」
「そうですの」
「はい、剣は袁術さんのところですよね」
「ええ、そうですわ」
袁紹はありのまま答えた。

# 第二十八話　ミナ、一行に加わるのことその十一

「そちらにでしてよ」
「じゃあ今からそちらに行きます」
また言う劉備だった。
「そういうことで」
「よし、それなら今からだな」
「行くのだ」
関羽と張飛が笑顔で頷いてだ。劉備達は袁術のところに向かうことになった。
ここで公孫賛は別れた。こう劉備達に言う。
「それでは私はこれでな」
「幽州に戻るのだ？」
「そうだ、民も救われた。後は私が戻る」
こう張飛に返すのだった。
「政務があるからな」
「うむ、おそらく貴殿が幽州を去ったことは殆どの者が知らないと思うが」
「だからそれを言うな」
困った顔で趙雲に返す。
「だがとにかくだ。これで暫くお別れだな」
「うん、それじゃあね」
劉備が天真爛漫そのものの顔で公孫賛に話す。
「白々ちゃんも元気でね」
「白蓮だ、本当に覚えてくれ」
「何か最後まで変わらなかったな」
「そうだな」
関羽は馬超のその言葉に頷く。
「劉備殿のこれはな」

「悪意がないだけに困ったことだ」
こうした話の後で劉備達と別れる公孫賛だった。そしてその彼女達のところにである。神楽に連れられてミナが来たのであった。
「若しかしてその娘も」
「あちらの世界の方ですか」
「ええ」
神楽は黄忠と孔明の言葉に頷いてみせた。
「そうよ」
「そうなのね、それじゃあ」
「私達にお話が」
「話はないわ」
ミナはそれは自分から否定した。
「それはないわ」
「じゃあどうしたんですか？」
「まずは私の名前から言わせてもらうわ」
ミナは劉備に対して話してきた。
「それでいいかしら」
「うん、御願い」
劉備は微笑んで彼女の言葉に応えた。
「何ていうの？貴女のお名前は」
「真鏡名ミナ」
その名前を名乗った。
「そしてこれはシーサーのチャンプル」
傍らにいるチャンプルの名前も話したのだった。
「宜しくね」
「わかったわ。それでお話はないって聞いたけれど」
「一緒に行かせて欲しいの」
ミナはこう劉備達に申し出た。
「理由は」
「ナコルルさん達と同じかな」

馬岱がミナの口調からこのことを察した。
「やっぱり」
「ナコルル。そうね」
ミナもナコルルの名前に反応して応えた。
「同じなの。それは」
「そうか。それでか」
「鈴々達と一緒に旅をしたいのだ」
「そうなの。駄目？」
ミナは関羽と張飛荷対しても問うた。
「それは」
「いや、それはない」
「むしろな」
趙雲と馬超がミナの申し出に対して答える。
「貴殿の様な者が集うのも運命だ」
「それに旅は多い方が楽しいしな」
だからいいというのであった。
そして劉備もだ。微笑んで話す。
「ミナちゃんよね」
「ええ」
「これから宜しくね」
いつものにこりとした笑みで告げた。

# 第二十八話　ミナ、一行に加わるのことその十二

「一緒に旅をしましょう」
「有り難う。それじゃあ」
「ミナちゃんもやっぱり日本の人なのかしら」
「この娘のいた時代ではまだ違うのよ」
神楽がここで劉備に話した。
「その時はまだ琉球という国だったのよ」
「琉球？」
「詳しいことは後で話すわ。とにかくね」
「違う国なのね」
「そう考えて。それじゃあ」
「うん、それじゃあ」
話がここでまとまった。そうしてであった。
劉備達はその袁術のところに向かうのだった。旅はまだ続くのだった。
そしてである。あの一行もだ。旅を続けていた。
「さあ、何処に行こうかしら」
「病に苦しんでいる人はいないかしら」
怪物二人が身体をくねらせて言っている。
「ダーリン、心当たりはあるの？」
「そうした人に」
「病で苦しんでいる者は何処にでもいる」
華陀は真面目な顔で二人に話す。
「身体だけでなく心もだ」
「心の病ねえ」
「確かに多いわよねえ」
怪物達は華陀のその言葉に頷いた。
「それじゃあそういう人も」

「助けないとね」
「俺は心の病も治せる」
それもだというのである。
「それが誰かだな」
「そうよね。そういえば」
「前から見慣れないカップルが来るわね」
白い肌と赤い目に金髪の男だ。胸をはだけさせた濃紺の服を着ている。
そしてもう一人はだ。白い肌に青い着物から素足を出した薄紫の髪の美女である。その二人が一行の前にやって来たのである。
「あちらの世界から来ていたわよね」
「ええ」
ここで怪物達の目が光った。
「今この世界ではあちらの世界のよからぬ者達が集っているし」
「その者達と戦う者達みたいね」
「むっ、あの白い男は」
華陀はここで男を見てその目を鋭くさせた。
「まずいな」
「あら、ダーリンにもわかった？」
「あのおのこのことが」
「心を病んでいるな。それに」
華陀は今度は女を見て言った。
「女の方もまた」
「そうなのよねえ」
「二人共ね」
怪物達はここでまた話すのであった。
「心に問題があって」
「運命的なもので」
「ここは何とかするか」
華陀は言った。

「俺の医術で」
「じゃあ私達も協力するわ」
「ダーリンの為に一肌も二肌も脱ぐわよお」
こう言ってだった。怪物達は男に襲い掛かった。
「ねえ貴方」
「ちょっといいかしら」
「何奴！」
男はその二人にいきなり切り掛かった。
「怪物か！」
「あら、嫌ねえ」
「こんな美女を捕まえて」
こんなことを言う二人だった。
「怪物だなんて」
「失礼しちゃうわ」
「あやかしか」
男は二人を人間とは見ていなかった。
「ここにはそうした者もいるのか」
「だから違うわよ」
「むしろ私達はね」
二人はその男に対して言うのだった。

# 第二十八話　ミナ、一行に加わるのことその十三

「貴方を助けに来たのよ」
「そうよ、九鬼刀馬さん」
「!?俺の名前を知っているのか」
九鬼刀馬は名前を言われてその眉を動かした。
「何故だ」
「私達はそちらの世界も知ってるから」
「だからなのよ」
「何故知っている」
刀馬は至極妥当な問いを出した。
「俺のいるその世界を」
「あら、それは簡単よ」
「だって私達あらゆる世界を行き来できるから」
だからだという怪物達であった。
「それでなのよ」
「だから知ってるのよ」
「そうだったのか」
華陀は二人のその話を聞いても平気なものだった。
「二人共凄いんだな」
「あら、凄くないわよ」
「ダーリンだったら楽にできるわよ」
二人はその華陀に対してさらっと話す。
「もうね。気合一つで充分だから」
「それはね」
「そうなのか」
やはり平気な華陀である。
「俺もありとあらゆる世界を行き来できるようになるのか」
「そう。ただスサノオみたいな存在もいれば」

「聖杯を守る王もいたりするし」
二人の話はここで微妙に複雑なものになった。
「その辺りはややこしいのよね」
「そうなのよね」
「そうか、他の世界も色々あるんだな」
「けれどダーリンと私達がいれば大丈夫」
「それは安心して」
またしても身体をくねらせて述べる。
「もう誰が来てもノックアウトしちゃうから」
「私達の美しさでね」
「何が美しいというのだ」
刀馬が顔を顰めさせて二人に言う。
「貴様等何だ。魔界の住人なのか」
「確かに。そうかも知れませんね」
女も真剣にそう考えていた。
「二人から妖気を感じますし」
「そうだな。尋常じゃないまでにな」
「刀馬様、ここは」
女は彼を守るようにして前に出て来た。
「私が」
「案ずるな。この九鬼刀馬相手が誰であろうと背を向けることはない」
「しかし私は刀馬様の為に」
女はまだ出ようとする。しかしであった。
ここでまた二人がだ。今度は女に対して言うのであった。
「命ちゃん」
「貴女はやるべきことがあるのよ」
「私のやるべきこと」
その女命は二人の言葉に思わずその手を止めた。
「それは一体」

「刀馬さんは大河よ。けれどそれはまだ凍り付いているのよ」
「そしてその大河の氷を溶かすのが貴女なのよ」
こう命に言うのであった。
「貴女こそがね」
「そうするのよ」
「私がですか」
命はだ。動きを止めて二人のその話を聞くのであった。
「刀馬様の」
「そして刀馬さん」
「貴方もよ」
怪物達は今度は刀馬に対して声をかけてきた。
「貴方もまた絶対の零ではなく」
「他のもの。流れる大河を目指してみればどうかしら」
「戯言を。俺が目指すのはあくまで絶対」
だが刀馬はこう言って引かない。

# 第二十八話　ミナ、一行に加わるのことその十四

「それは零だ。それ以外の何者でもない」
「だから。それを見極める為にもね」
「私達と来ない？」
二人はあらためて刀馬を誘う。
「決して悪いようにはならないから」
「それに貴方が決着をつけたい相手にも会えるわよ」
「何っ！？」
今の言葉を聞いてだ。刀馬も目を止めたのであった。
「今何と言った」
「だから。決着をつけたい相手によ」
「会えるわよ」
二人はまた言ってみせた。
「それでも私達と一緒に行かないの？」
「それでもなの？」
「会えるかどうかはわからないがだ」
刀馬はこうは言った。
「だが。それでもだ」
「そうよね。来るわね」
「私達と一緒に」
「あの男を斬るのは俺だ」
その赤い目に憎悪が宿った。
「それならばだ」
「そうそう、一緒にね」
「来てね」
「命、御前はどうする」
華陀達と共に行くと決めた刀馬はここで命に顔を向けて問うた。
「御前はだ。どうするのだ」

「私はもう決めています」
命は静かに、だが確かに答えた。
「私は常に刀馬様と共にです」
「そうか」
「共に参ります」
こう言うのである。
「そうさせて頂いて宜しいでしょうか」
「好きにしろ」
これが刀馬の返答だった。
「俺は止めはしない」
「わかりました、それでは」
「さて、これでまずは二人ね」
「そうね」
化け物二人が笑いながら言う。
「こうして私達と同行するべき人達もね」
「どんどん集めるわよ」
「そうだな、世界の為だ」
華陀はここでまた言った。
「この二人の心は徐々になおしていこう」
「まあ刀馬さんの本当の相手はね」
「彼じゃないけれどね」
二人はこっそりとこんな話をした。
「本人にはあえて居間は話さないけれど」
「時が来ればわかることだから」
「そうなのか」
華陀は二人の話を聞いてまた述べた。
「あの男、随分と根が深いな」
「そうなのよね。いいおのこなのにね」
「陰があるのもいいけれど」
二人の見たくない部分が元気になっていた。何故か目も光ってい

る。
「まあ命さんがいるから私達はいいわ」
「泣いて身を引くわよ」
「そうだな。二人の絆は強い」
やはりこうしたことは何かが決定的にずれている華陀である。
「それに入ったら駄目だな」
「そういうことよ」
「ダーリンもわかってるじゃない」
「わからない筈がない。それではだ」
声は明るく前を向いている。
「行くか、次の場所に」
「ええ、それじゃあね」
「今からね」
こうしてであった。彼等は何処かへと向かうのであった。そうしていく先々でだ。常に恐ろしい騒動を引き起こしていくのであった。

第二十八話　完

２０１０・８・２１

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその一

第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのこと

貂蝉と卑弥呼はだ。今度は上半身裸で刀を持っている男に会っていた。下は袴で見れば上着は脱いでいる。長い髪を髷にして険しい顔をしている。

「牙神幻十郎さんね」

「何故俺の名前を知っている」

その男幻十郎は鋭い目で貂蝉の言葉に返した。

「それを聞こう」

「だって私達そっちの世界に行ったことあるから」

「知らなかったの？」

卑弥呼も言ってきた。刀馬と命も一緒だ。当然華陀もだ。

「それでなのよ」

「皆知ってるわよ」

「貴様等どうやら」

幻十郎はこの左手に持つ刀を構えた。

「人間ではないな」

「確かに怪しいがな」

刀馬もそれは否定しない。

「この容姿といいな」

「妖気を感じる」

幻十郎もそれは感じ取っていた。

「アンブロジアか、それとも壊帝の手の者か」

「だからどちらでもないわよ」

「れっきとした人間なのよ」

「嘘をつけ」

あくまで信用しようとしない幻十郎だった。

「そんな姿の人間がいつものか」

「失礼ねえ」
「こんな美しい乙女を捕まえて」
「少なくとも貴様等は乙女ではない」
全力で否定する幻十郎だった。
「俺は男でも構わぬが貴様等は許さん」
「そういえばこの人千人斬りだったわよね」
「男女問わずだったわね」
幻十郎のことはよく知っているらしい。
「危険な香のするいいおのこだけれど」
「今回はダーリンにはできないの。御免ね」
「生憎だがこちらから断る」
二人にはあくまで厳しい幻十郎である。
「そもそも何故俺の前に出て来た」
「斬りたい彼に合わせてあげるわよ」
「それで来たのよ」
二人はこう幻十郎に話すのだった。
「それでなのよ」
「どうかしら」
「斬りたい奴か」
「いるでしょ、ずっとそう思ってる相手が」
「こっちの世界にも来ているわよ」
「そうか」
その言葉を聞いてだ。幻十郎はその目を光らせた。
「そう言うのか」
「どうかしら、一緒に来る？」
「歓迎するわよ」
「いいだろう」
幻十郎は刀牙より素直だった。
「それではだ。共に行くとしよう」
「わかってくれて何よりだわ」

「私も声をかけたかいがあったわ」
二人は幻十郎が誘いを受けてくれたので自分達ではセクシーに笑ってみせた。
「本当にね」
「感謝しているわよ」
「しかし言っておく」
幻十郎は何とか気を保ちながらその二人に返した。
「俺の前にそうした仕草を見せるな」
「あら、何故？」
「どうしてなの？」
「斬らずにはいられぬ」
だからだというのである。
「あまりものおぞましさにだ」
「だからそれは失礼じゃないかしら」
「そうよ」
まだこう言う二人であった。
「そこの貴方も」
「いるのはわかってるわよ」
「何故わかった」
黄金の鎧と仮面を着け巨大な剣を持った大男であった。藍色の髪が目立つ。

## 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその二

「私の居場所が」
「ついでに言えば名前もわかるわよ」
「獅子王さんね」
二人はその名前も言ってきた。
「貴方もまたこの世界に来ていた」
「わかっていたわよ」
「そうか」
それを聞いて静かに頷く獅子王だった。
「私のことをか」
「そうよ、それでだけれど」
「話は聞いていたわね」
「私の望みは頂点に立つこと」
それだというのである。
「わかるな」
「よくわかるわよ」
「充分ね」
こう返す二人であった。
「それじゃあいいわね」
「一緒に来るかしら」
「いいだろう」
獅子王は幻十郎よりも素直であった。
「それでは私もだ」
「さて、どんどん同志が増えていくわね」
「そうね」
二人はこのことを心から喜んでいた。
「まだ出て来るしね」
「そうした人達も仲間にしていきましょう」

「不幸な者達がいるな」
「全くだ」
刀馬と幻十郎は二人の言葉を聞いてこう述べた。
「犠牲者が増えていくか」
「俺達もどうなるかだな」
「あら、私達は身も心もダーリンに捧げているから」
「貴方達の愛の告白は受けられないの」
二人は至って平気であった。何を言われてもだ。
「御免なさいね」
「悪いけれど」
「別に悪いとは思っていない」
「気にするな」
刀馬と幻十郎の返答は冷たい。
「何はともあれあの男を」
「斬る」
二人が考えているのはこのことだけだった。だが彼等と貂蝉、そして卑弥呼の思惑は違っていた。だが二人はこのことには気付いていない。
そうしてである。命がここで貂蝉に問うた。
「あの」
「何かしら。そういえば」
「そういえば？」
「貴女以前ゼオラ＝シュバイツァーと名乗っていたわね」
こう命に返すのだった。
「そうだったわね。フェアリだったかしら」
「えっ、それは？」
「知らないのかしら、それは」
「あの、そう言われましても」
首を傾げさせての返答だった。
「私は命ですから」

「そっちの世界での記憶はないのね」
「そうだったのね」
「私はこの世界に来たこともよくわからないのですが」
首を傾げさせたまま話す。
「この世界は一体」
「すぐにわかるからね」
「それで貴女の役目は」
「刀馬様ですね」
ここで彼を見るのだった。
「あの方を」
「そうよ、彼の氷を溶かすのはね」
「貴女なのよ」
こう話すのである。
「だから。いいわね」
「貴女は彼を離したら駄目よ」
「はい」
命は今度はしっかりとした顔で頷いた。

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその三

「わかりました。それでは」
「貴女にとっても彼にとってもこの世界に来たことはいいことよ」
「当然あの彼にもね」
刀馬だけでなく幻十郎も見ての言葉だった。
「獅子王さんにとってもね」
「この世界はね」
「それは少しずつわかってくるものなのですね」
命は考える顔で述べた。
「そうなのですね」
「ええ、そういうことよ」
「それじゃあ行きましょう」
「はい、ところで」
ここでだった。命は話を元に戻してきた。
「華陀さんは」
「ダーリン？」
「ダーリンなの？」
「はい、どちらに行かれたのですか？」
このことを尋ねるのだった。
「一体どちらに」
「ダーリンは今出張中なのよ」
「それでいないのよ」
こう話すのであった。
「急病の人を見つけてね」
「今治療中なのよ」
「そうなのですか」
「もうすぐ戻ると思うわ」
「少し待って」

二人はまた命に話した。
「そうして戻って来たらね」
「また旅立ちましょう」
「わかりました」
そんな話をしながら今は待つ一行であった。程なくして待ち人が来た。そうしてそのうえで再び旅立つのであった。何処かへと。
劉備一行は曹操の拠点である許昌に近付いていた。そこでだ。
「あれっ、今日はここでなのね」
「そうですね」
張三姉妹の宣伝の絵を見つけたのである。
「何かどんどん人気出てるよね」
「時間があったら行きますか？」
孔明はこう劉備に問うた。
「袁術さんのところに行く前に」
「そうよね。息抜きでね」
劉備はこう言う。しかし関羽は。
「急いだ方がいいのではないのか？」
「急ぐべきですか？」
「行くのなら早い方がいいのではないのか」
また言う関羽だった。
「そう思うが」
「息抜きも必要ですよ」
だが孔明の主張はこれだった。
「コンサートを見るのも」
「コンサート？」
馬岱がその言葉に反応する。
「コンサートって何処の言葉なの？」
「はい、テリーさん達に教えてもらいました」
こう馬岱に答えるのだった。
「向こうの世界で皆の前で歌を歌うことです」

「それをそう呼ぶのね」
「そうみたいですね。あっちの世界では」
「確かテリー殿の世界はアメリカだったな」
今度言ってきたのは趙雲だった。
「あの国はかなり大きいらしいが」
「向こうの世界じゃダントツの大国なんだろ？確か」
馬超もそのことは知っていた。
「あと向こうのあたし達の国もでかいそうだけれどな」
「確か中国といったのだ」
張飛も言う。
「それと日本が大きな国と聞いたのだ」
「日本は神楽さんの国だったわね」
黄忠はここでその神楽を見た。
「草薙君や真吾君もよね」
「そうよ。皆日本人よ」
実際にそうだと答える神楽だった。
「舞ちゃん達もね。広い範囲でナコルルちゃんやミナちゃんもそうよ」
「そうなの。私も日本人なの」
微笑んで言うそのミナだった。
「神楽さんやそのナコルルさんと同じなの」
「日本人って個性派が多いのかしら」
馬岱がここでこんなことを言った。

## 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその四

「何か一番多くの人が来てるけれど皆が皆個性強いし」
「丈とは気が合うのだ」
張飛は笑顔になって語った。
「いい奴なのだ」
「学校が嫌いだと聞いたが」
関羽は彼のそのことを知っていた。
「学問は苦手か」
「何でも本を読むと死ぬらしいのだ」
張飛は丈のこんなことも話す。
「鈴々もそこまではいかないのだ」
「そうだな。御前はまだ兵法の本は読むからな」
「あいつはどんな本を開いても駄目らしいのだ」
「それはまた凄いな」
関羽はある意味驚いていた。
「あの御仁は特異体質なのか」
「そうみたいなのだ」
「それはまた難儀な話だな」
「そしてそのせいで」
張飛はさらに話す。
「学問は全く駄目なのだ」
「字は読めるのだったな」
「難しい字は読めないのだ」
レベルはその程度なのだった。
「鈴々よりも酷いかも知れないのだ」
「それはある意味凄いな」
それを聞いた趙雲はあらためて言った。
「そこまでいくとな」

「そういえば京もあれだろ？」
馬超も話す。
「確か高校って場所をまだ卒業してないんだったよな」
「京さんはただ出席日数というものが足りないだけみたいです」
孔明がこう話す。
「学問はそれなりにできるとのことです」
「そうよ。あの子は勉強はそこそこなの」
神楽もこう話す。
「特別できる訳ではないけれど」
「そうなんですか」
「ただ。丈君はね」
そして彼はだという。
「全然駄目だから」
「ううん、そこまでできないっていうのも」
「ある意味凄い？」
「確かに」
こんな話をしているとであった。不意に一行の前にだ。後ろに星のマークがある暗い赤のジャケットに黒のズボンの青年が来た。短い金髪に青い目、狼を思わせる精悍かつ端整な顔立ちをしている。その彼を見てだ。
馬岱がまず言った。
「テリーさんに似てる？」
「ああ、そういえば」
「そんな感じ？」
「確かに」
他の面々も彼女のその言葉に頷く。
「雰囲気が似てるけれど」
「けれど何か少し違うのだ」
「そうだな。だが似ている」
「確かに」

「何だ?あんた等」
その青年がだ。彼女達の言葉に応えてその前で立ち止まる。
「テリーを知ってるのか」
「はい、私達のお友達です」
劉備がその彼に話す。
「それで今は幽州の桃家荘におられます」
「幽州。確か北の方だったな」
「はい、そうです」
にこりと笑って青年に対して応える。
「今はそちらに。それでテリーさんとお知り合いですか?」
「ああ、俺の師匠みたいなものだな」
青年はテリーについてこう話した。

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその五

「そんな感じだな」
「師なのか」
それを聞いて関羽が青年に言ってきた。
「それでか。貴殿がテリーに雰囲気が似ているのは」
「ああ。俺はロック＝ハワード」
青年はこう名乗った。
「技はテリーに教わった」
「そうなのか」
「雰囲気が似ているのはそのせいだな」
自分でこう話すのだった。
「それでテリーは今はそこにいるのか」
「そうなのだ。それでどうするのだ？」
今度は張飛がロックに問うた。
「御前はテリーのところに行きたいのか？」
「できればな」
その通りだと答えるロックだった。
「そうしたいがその前にだ」
「その前に？」
「どうしたってんだ？」
「今一緒に旅をしている奴が厄介なことになっている」
ロックはここで困った顔を見せた。
「ちょっとな」
「困ったこと？」
「一緒に旅をしている者がか」
「そうだ。他にも色々といるけれどな」
また話すロックだった。
「ちょっとな。どうしたものかってなってな。俺も蒼志郎も弱っ

てるんだ」
「蒼志郎」
「また一人出て来たのか」
「ああ、俺と一緒でな。他の世界から来た奴だ」
ロックから話してきた。
「こっちの世界にな。他にも結構いるぜ」
「どんどん来ているわね」
黄忠はロックのその話を聞いて述べた。
「あちらの世界から腕の立つ者が」
「そうだよな。これはやっぱり尋常じゃないぜ」
馬超もその目を顰めさせて言う。
「ここでまた会ったしな」
「何があるのだ、本当に」
趙雲もいぶかしむ声である。
「この状況は」
「そうだよね。それでだけれど」
馬岱はすぐに話を変えてきた。
「あのさ、ロックさんだよね」
「ああ、そうだ」
「それでお連れの人はどうなったの？」
こうロックに問うのだった。
「その人は一体。どうなったの？」
「俺達が戻って来たらもう血の海の中だった」
「血の海の？」
「その中にいたとは」
「死んだのか？」
「まさか」
「いや、まだ息はある」
それはだというのだ。
「だが。危ないかもな」

「何かわからないですけれど大変なことになっているみたいですね」
孔明はこのことはわかった。
「ええと、それじゃあロックさん」
「ああ」
「その人のところに案内してくれますか？」
こうロックに頼み込むのだった。
「宜しければ」
「ああ、それで頼めるか」
ロックも心配する顔で返す。
「ちょっとな。もう一人の連れも今はいなくてな」
「もう一人って」
「結構大人数で旅してる？」
「若しかして」
「ああ、その通りだ」
また話すロックだった。
「こっちだ、来てくれるか」
「はい」
劉備が応えた。

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその六

「それじゃあ御願いします」
「有り難い、恩に着る」
こうしてロックは劉備達を森の中に案内した。するとそこにはだ。茶色の髪を上で束ねて眼鏡をかけた美女が本当に血の海の中に沈んでいた。
青緑の上着に緑のかなり短いスカート、それに黒の手袋とストッキングという姿である。ストッキングは何とガーターにしている。
「こいつだ。郭嘉という」
「郭嘉さんですか」
「ああ、そうだ」
ロックは劉備に対してまた答えた。
「生真面目だがいい奴だ。頭もいいしな」
「そういえばそうだな」
関羽がここで話す。
「かなり切れそうな顔をしているな」
「そうだ。今は蒼志郎はいないがな」
「その蒼志郎殿は何処におられるのだ？」
趙雲は彼の所在を問うた。
「姿が見えないが」
「そうだな。何処に行った？」
ロックもこのことには首を傾げさせている。
「いない。何処だ」
「いえ、もうすぐ来るわ」
ここで言ったのはミナだった。
「その人は」
「何だ、あんたわかるのか」
ロックはミナの言葉を受けて彼女に顔を向けた。

「人の気配は」
「人以外の気配もわかるわ」
ミナはロックに対してこう答えた。
「それもなの」
「そうか。何かこの世界のことはまだよくわからないが」
「ええ」
「俺達の世界とは全然違うな」
ロックもこのことはもう感じ取っていた。
「それもかなりな」
「ああ、それはこっちもよくわかるさ」
馬超もロックに言う。
「あんた達の世界とあたし達の世界ってな。全然別物だよな」
「そのこともじっくり話したいな」
ロックはここで考える顔を見せた。
「機会を見つけてな」
「そうね。確かに」
黄忠も考える顔を見せる。
「けれど今はね」
「郭嘉さんを何とかしないといけませんね」
「だよね」
馬岱が孔明の言葉に応えた。
「本当にこの人どうしたの？」
「あっ、ロックさん」
「戻っていたのかよ」
ここでだ。少女の声と若い男の声がした。
「少し探しました」
「何処に行ったのかって思ってな」
「この連中に会ってな」
ロックはその声に対して述べた。５０
「それで話していたんだよ」

「そうだったんですか」
「まあ戻って来て何よりだ」
その二人が出て来た。一人はだ。
長いブロンドの青い目の少女である。水色のかなり丈の服を着ておりそのうえで頭に何かの芸術の様な小さい人形を乗せている。
そしてもう一人はだ。長い黒髪を後ろで束ねた青年だった。細い眉に黒い目の鋭利な顔をしている。青い袴に水色と白の上着にだ。その手に青く輝く刀を持っている。その彼もまた来たのだった。
「それじゃあですね」
「郭嘉を何とかするか」
「貴方は」
ミナがその青年を見て述べた。
「蒼い剣の」
「何だ？俺を知ってるのか？」
「蒼い刃と紅い刃」
ミナはまた言った。
「そのうちの一人。九葵蒼志狼」
「ああ、そうだ」
彼、蒼志狼はここでふとロックを見た。
「俺は狼だ。郎ではない」
「ちっ、何か複雑な名前だな」
「それでも人の名前は覚えておくことだ」
こうロックに注意するのだった。

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその七

「御前も名前の綴りを間違えられたら嫌な筈だ」
「随分間違えられたしな」
「ロックさんの世界の文字もやっと慣れました」
少女がふとした感じで言ってきた。
「最初は何かと思いました」
「そこまでややこしかったか？」
「はい」
その通りだとロックにも返す。
「しかし今はです」
「慣れてくれたか」
「ロック、岩ですね」
そしてこうも言うのだった。
「そうなりますね」
「そうだけれどな。しかし妙な感じだな」
「気にしないで下さい」
少女はここではこう言った。
「悪気はありません」
「そうか」
「はい。それで凛ちゃんですけれど」
「そうだ、その郭嘉殿だ」
関羽はこれまで三人の話を聞いていたが少女のその言葉に我に返った。
「大丈夫なのか？それで」
「死んでないかしら」
神楽も本気で心配している。
「これは」
「安心して下さい」

だが少女はこう彼女達に返す。
「全然平気です」
「全然平気なのか」
「本当に」
「はい、平気です」
そしてだ。郭嘉のその頭を抱え上げてだ。首の後ろを叩いた。
「はい、とんとん」
「おい、待て」
「何だそれは」
ロックと蒼志狼が郭嘉の首の後ろを手刀で叩き始めた少女に突っ込みを入れた。
「それでどうなるんだ？」
「郭嘉は死ぬかも知れないんじゃないのか？」
「いえいえ、死にません」
またそれはないと否定する。
「いつものことですから」
「いつも？」
「いつもだったのか？」
「御二人は見るのはじめてでしたか」
おっとりとした口調で話す。
「そういえば」
「はじめても何も」
「それだけ血が出れば死ぬぞ」
二人は二人の常識の中で少女に返した。
「普通はな」
「それで死なないのか」
「ですから凛ちゃんにとっては普通ですから」
また二人に話す少女だった。
「これも」
「ううむ、信じられないが」

「全くだ」
二人は少女の言葉にいぶかしむばかりだった。
「郭嘉は冷静で落ち着いた奴だが」
「だが。血は何だ？」
「鼻血です」
少女はまた話した。
「実はこれ鼻血なのです」
「何っ、鼻血！？」
「それが！？」
「それだけの量が！？」
ロック達だけでなく劉備達もこれには驚いた。
「そこまで流す鼻血！？」
「そんなのあるのか！？」
「まさか」
「凛ちゃんは特別でして」
相変わらず落ち着いている少女であった。

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその八

「鼻血も多いんです」
「いや、多いというレベルじゃ」
「それが鼻血って」
「有り得ない」
「何、それ」
「凛ちゃんは普通の人より遥かに血の量が多くて出やすいんです」
そうだというのである。
「それでこうして血も流します」
「凄いですね」
劉備は比較的驚いていない。趙雲の次位である。趙雲は少し声をあげただけだった。彼女だけは相変わらずのポーカーフェイスである。
「それはまた」
「はい、もうすぐ起きますよ」
また話す少女だった。
「凛ちゃん、起きた？」
「んっ、風？」
郭嘉は目を開いた。青く奇麗な瞳である。
「まさか私」
「そのまさか。けれどもう大丈夫よ」
「そうなの。御免なさい」
「謝らなくていいから」
それはいいというのであった。
「それよりおお客様だけれど」
「あっ、はじめまして」
ここでだった。劉備達に気付いた。そのうえで慌てて挨拶をする。
「郭嘉と申します」

「はい、はじめまして郭嘉さん」
劉備がにこりと笑って郭嘉のその挨拶に応える。
「劉備です。字は玄徳といいます」
「劉備玄徳殿ですか。名前は覚えさせてもらいました」
もう、であった。郭嘉のその青い目に鋭い知性が宿っていた。そうしてその知性を宿らせた瞳をだ。劉備に対して向けていたのだった。
「そして他の方は」
「うむ、まずは私だが」
関羽をはじめとして他の面々も名乗った。そして。最後には少女が名乗った。
「程?と申します」
「程?さんですか」
「はい、そして」
そうしてであった。程?は己の頭の上にあるその人形を見上げた。するろであった。
「これはです」
「よお、はじめまして」
明らかに程?の声色で名乗ってきた。
「俺の名前は宝?ってんだ」
「なっ、何!?」
「またとんでもない名前だな」
関羽と馬超がその名前を聞いて思わず声をあげた。
「ホ、ホウケイとは」
「そりゃちょっとな」
「おう、そう思うかい?」
人形は二人の言葉に応えてきた。一応人形ということになっている。
「俺はそうは思ってねえんだがな」
「そ、そうか」

「あんたがそうならいいんだけれどな」
「おうよ、いい名前だろ」
また人形が言ってきた。
「これから宜しくな。頑張るからよ」
「うん、お互い頑張るのだ」
張飛はその名前の意味を知らない。
「それじゃあそういうことなのだ」
「嬢ちゃんも宜しくな」
「だとのことです」
程?が人形を見上げながら述べてきた。
「これが私のもう一人の相棒です」
「まあ気にしないでくれよ」
「この人形のことはな」
ロックと蒼志狼もここで言う。
「特にな。考えることなくな」
「そうしてくれ」
「う、うむわかった」
「そうさせてもらうな」
関羽と馬超もここで話した。
「それでだが」
「あんた達は何をしているんだ?」
二人だけではなかった。他の面々も話す。
「旅をしているみたいだけれど」
「目的はあるのですか?」
「はい、それですが」
郭嘉は真面目な顔になって話してきた。今一同は川辺にいる。そこの岩のところにそれぞれ座ってだ。そのうえで話をしていた。郭嘉の鼻には栓がしてある。

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその九

「実はこれから曹操様のところに行こうと考えています」
「ふむ。曹操殿のところにか」
「はい、そうです」
こう趙雲に対して述べるのであった。
「そうするつもりです」
「そうか。曹操殿のところか」
「曹操殿は必ずやこの世を変えて導かれる英傑になられます」
郭嘉はこう熱く語る。
「ですから私はその曹操様、いえ殿のお役に少しでも立ちたいと思い」
「実はですね」
ここで程?がそっと劉備やロック達に話す。
「凛ちゃんはですね」
「はい」
「どうなんだ?実際は」
「曹操さんの熱狂的な信者さんなんです」
そうだというのである。
「それで今回私と一緒に許昌に行き仕官しようということになって」
「ああ、それでか」
「それでだったのか」
ロックと蒼志狼もここで頷く。
「あそこに向かうって言って聞かなかったのか」
「長安でも建業でもなく」
「まあ袁紹さんは癖の強い人ですい」
程?もこのことは知っているようだった。
「お仕えするのに疲れそうだと思いまして」
「あの方はね」

黄忠もここで言う。
「かなり難しい方だから」
「それで私は親友でありいつも一緒にいる凛ちゃんと行動を共にすることにしました」
「それでなのか」
ここで納得して頷く趙雲だった。
「ここにいるのか」
「それで俺達とたまたま会ってな」
「合流したってわけだ」
ロック達もここで話す。
「しかし俺達は別に曹操さんのところには興味はないしな」
「何処に行くかは決めていないんだよ」
「それじゃあさっきお話しましたけれど」
劉備がここで二人に言う。
「テリーさんのところに行かれてはどうでしょうか」
「つまりあんた達の場所だよな」
ロックがその劉備に応えて言う。
「そこだよな」
「はい、それはどうでしょうか」
「俺はそれでいい」
ロックはこう劉備に返した。
「蒼志狼、御前はどうするんだ？」
「そうだな。俺もだ」
彼にしても異存はないようであった。
「それでいい」
「そうか。じゃあこれで決まりだな」
「あんた達ともここでお別れになるな」
蒼志狼は郭嘉達に顔を向けて述べた。
「機会があったらまた会おうか」
「はい、宜しくお願いします」

程?が二人に対して返した。
「また御会いした時は楽しく過ごしましょう」
「それじゃあな。あと郭嘉」
「はい」
「鼻血出すのも程々にな」
蒼志狼はいささか真面目な顔で彼女に告げた。
「幾ら何でもあれは出し過ぎだぞ」
「はい、それはわかっています」
ここでは普通に返す郭嘉だった。
「私にしても」
「だといいんだがな」
「曹操様にお仕えしてそして」
ここからが問題だった。
「ああ、曹操様」
「んっ!?」
皆ここでいぶかしむ顔になった。

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその十

「何か様子がおかしい？」
「変わってきた？」
「いけません、なりません」
顔を急に赤くさせて両手で拒もうとする動作を見せだした。
「その様なことは。私はあくまで」
「妄想中です」
程？が皆に説明する。
「凛ちゃんの癖です」
「癖か？」
「そうなんですか」
「はい、いつもこうなんですよ」
彼女は普通に話す。
「そうしてこのまま」
「貴女様にお仕えする胸のない」
「いや、胸はあるぞ」
「そうだな」
ロックと蒼志狼は郭嘉のその胸を見て言う。見れば胸を強く前に出したデザインの服だ。そしてその胸はかなり形がいいし大きい。
「それでないのか？」
「何故そんなことを言う？」
「中の関係です」
だからだという程？だった。
「凛ちゃんの声を聞いてわかれば凄いです」
「ああ、そうか」
「それでか」
趙雲と馬超はこれでわかった。
「それはよくある話だな」

「あたし達にとってもそうだしな」
「そこの方もそうではないですか？」
程？はミナを見て話す。
「貴女も声では」
「あるわ。確かに」
そしてそれを認めるミナだった。
「そう、声の関係なのね」
「そういうことです。それで凛ちゃんはこう言うんですよ」
「胸、ね」
神楽も胸については少し考える顔になった。
「舞ちゃんの胸も凄いけれど」
「私達って結構以上に。胸は格差がありますよね」
孔明は寂しそうに話をした。
「私はないですけれどそれでも劉備さんなんかは？」
「私？」
その劉備の胸が揺れる。その横には関羽がいる。
「私なの」
「何か皆私も見ているが」
その関羽も言う。
「何かあるのか？」
「あります」
孔明は実に寂しそうに話す。
「紫苑さんもそうですし星さんや翠さんだって」
「私もなのね」
「ふむ、私もか」
「あたしも入るのか」
三人はそこそこ自覚はしていたのか納得した顔で頷く。
「まあそれはね」
「そのうち大きくなる」
「そういうもんじゃないのか？」

「そうよね」
三人に神楽も参戦してきた。
「胸はね。けれどそれにしても」
「はい、凛ちゃんですね」
「さらに凄いことになってるけれど」
見ればであった。彼女の妄想は続いていた。そしてさらに言っていた。
「いけません、ああ・・・・・。その様なことは」
「一体何を想像しているのかしら」
神楽は唖然とした顔で言った。
「頭の中で」
「とてもいやらしいことです」
程?は言う。
「あまり突っ込まないで下さい」
「ううん、困った人なのね」
「これはこれで愛嬌がありますしいい娘なんですよ」
程?は一応はフォローをした。

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその十一

「そういうことで」
「それでどうなるのかしら」
「はい、こうしてですね」
そしてであった。またしてもであった。
鼻血を出した。栓も無視して吹き飛ばしてだ。そのうえで血の海の中に倒れるのであった。
「おい、またかよ」
「またか」
ロックも蒼志狼も呆れる顔になっている。
「じゃあまた介抱しないとな」
「本当にな」
「はい、凛ちゃん」
その程?が郭嘉のところに来て頭を上げさせた。そうしてであった。
「とんとん、とんとん」
「それで鼻血が止まるんだ」
「あるお医者さんに教えてもらいました」
程?はこう馬岱に話す。
「それで止めてます」
「お医者さん?」
「赤い髪の若い姿のお医者さんです」
そうした姿をしているのだという。
「ゴオオオオオッド米道の人です」
「何か凄い名前なのだ」
張飛が突っ込んだのは五斗米道の名前についてであった。
「叫んでるみたいなのだ」
「実際に叫ぶのが好きなお医者さんです」

「そうなのだ。面白そうなお医者さんなのだ」
「一度御会いしてみるといいです」
実際にこう述べる程？だった。
「それでは私達もこれから」
「ああ、じゃあな」
「また会おうな」
ロック達もここで席を立った。
「劉備さん、そこで待ってるからな」
「宜しくな」
「また二人凄い人達が加わりましたね」
孔明は明るい顔で劉備に話した。
「桃家荘にまた」
「そうよね。何か凄いことになってきたよね」
劉備は少しにこりとして孔明の言葉に返した。
「私達の周りって」
「何か劉備さんの傍にいたら落ち着くのよね」
「そうね。確かに」
ミナが黄忠のその言葉に頷いた。
「嫌いにはなれない人ね」
「私がですか？」
「うむ、劉備殿を見ているとな」
「守りたくもなるのだ」
関羽と張飛も話す。
「そして常に共にいたくなる」
「そういう人ははじめてなのだ」
「私も。曹操様をお慕いしていなければ」
復活した郭嘉もここで話すのであった。
「若しかしたら劉備殿のところに入っていたかも知れませんね」
「劉備さんも大きなことをされますね」
程？も言う。

「是非。大きく羽ばたいて下さいね」
「有り難う、私も私のやることを果たします」
二人の言葉ににこりと笑って返す劉備だった。そのうえでロック達と別れて曹操のところに向かう。曹操の本拠地許昌は見事な繁栄を見せていた。
「袁紹さんのところも凄かったけれど」
「ここも凄いよね」
馬岱が劉備の言葉に応えて言う。
「人も多いしお店も多いし」
「物凄い街よね」
「政治がいいからですね」
孔明はこう二人に話した。

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその十二

「曹操さんの政治が上手くいっている証です」
「だからこそ我々もです」
「曹操様のところに来たのです」
郭嘉と程?がここでまた話す。
「さて、それでは今から」
「参りましょう」
こう話してであった。劉備達は二人に続く形で曹操の宮殿に入ったのであった。曹操は彼女達の話を聞くとであった。すぐにだった。
「あら、あの面々が来たのね」
「はい、そうです」
「劉備殿と関羽殿の一行がです」
曹仁と曹洪が主の座にいる曹操に対して報告していた。
「ここに来られました」
「どうされますか?」
「それで人材も来ているのね」
曹操がここで言うのはこのことだった。
「そうだったわね」
「はい、そうです」
「その通りです」
また言う二人だった。
「ではやはりここは」
「会われますか」
「勿論よ。人材がいるならね」
悠然と笑って返す曹操だった。
「会わない道理はないでしょ」
「そうですね。それではです」
「その二人を」

「あっ、待って」
ここでだ。曹操は曹仁と曹洪を呼び止めた。
「関羽もいるのよね」
「今述べた通りです」
「関羽殿も来ておられます」
「そう、わかったわ」
それを聞いてだ。悠然と笑う曹操だった。
そうしてである。曹仁と曹洪は劉備達のところに来てだ。関羽に話すのであった。
「関羽殿、華琳様が御呼びです」
「おいで頂けますか」
「私もなのか？」
「はい、そうです」
「是非にというのですが」
「ふむ。曹操殿が」
関羽は曹操の名前を聞いてだ。不安を感じる顔になっていた。
「何かな」
「あっ、それは御安心下さい」
「華琳様は無理強いはされない方です」
二人はそれは保障したのであった。
「関羽殿がそうしたことを望まれない限りはです」
「されませんので」
「そういう方なのはわかっているがな」
それでも不安を隠せない関羽だった。
「ううむ、どうするべきか」
「関羽さんが不安なら」
ここで言ったのは劉備だった。
「私も一緒に行く？」
「劉備殿が？」
「曹操さんは悪い人じゃないけれど」

劉備もこのことはわかっている。前に会ったその時に感じ取ったのである。

「それでも関羽さんが一人で会うのが不安なら」

「来てくれるのか？」

「それでいいですか？」

劉備は曹仁と曹洪に対して問うた。

「私も一緒に来て」

「はい、いいですが」

「関羽殿御一人でとは申されていませんし」

二人は劉備に対してこう返したのだった。

「それでは劉備殿も」

「こちらにどうぞ」

「はい、わかりました」

劉備は二人の言葉に笑顔で応えた。そうして関羽と共に案内される場所に向かうのだった。そうしてその案内された場所とは。

## 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその十三

「お風呂？」
「そうだな。風呂場だ」
二人が案内されたのは風呂場の脱衣所であった。そこに郭嘉と程?も来た。
「劉備殿もですか」
「こちらに案内されたのですね」
郭嘉達は劉備と関羽を見て目をしばたかせた。
「どうしてなのでしょうか」
「曹操様にここに来るように言われたのですけれど」
「まさかと思うが」
関羽も頭の中に不吉なものが走った。
「風呂場で。私達四人を相手に」
「何とっ、その様なことが」
「はい、ストップ」
程?はすぐに郭嘉を止めた。
「今それやったらややこしくなるから」
「うっ、そうなの」
「そう。だからとりあえずお風呂の中に入りましょう」
「そうよね。じゃあ服を脱いでね」
すぐにそのピンクのブラとショーツだけになる劉備だった。
「中に入りましょう」
「劉備殿のスタイルは凄いですね」
「関羽さんも」
二人にとっては彼女達のスタイルは驚くべきものだった。実際に郭嘉の目は大きく見開かれている。そのうえで話をするのだった。
「そこまでスタイルがいいと」
「もう犯罪ですよ」

「犯罪？」
「そうなのか？」
「私もそう思います」
「それで魅了される人も絶対にいます」
程？に至っては断言であった。
「男女問わず」
「うっ、では私はどうすれば」
ここで言ったのは関羽だった。
「やはりここで曹操殿に」
「ううん、それは絶対にないと思うわ」
劉備は右手の人差し指を自分の口元にやって視線を上にして言った。不安げな顔になっている関羽とは対象的な表情だった。
「だから曹操さんはそうした人じゃないわよ」
「そうだな。不安になっても仕方ないか」
「はい、それではです」
「中に入りましょう」
見れば郭嘉と程？も下着姿になっている。郭嘉は見事なコバルトブルーのブラとショーツである。程？はフリルのある白いブラとショーツだ。
劉備はその二人の姿を見ても言うのだった。
「二人共奇麗ね」
「いえ、私なぞはとても」
「お世辞は駄目ですよ」
「ううん、郭嘉さんっておっぱいも大きいしウエストもくびれてるし」
確かに彼女のスタイルは素晴しいものである。
「程？さん可愛いし。お肌も奇麗だし」
「私、いけてますか！？」
「私もですか」
「いいと思うよ。二人共ね」

「ううん、劉備殿有り難うございます」
「何気に人たらしですね」
こんな話をしてであった。彼女達はその下着も脱いでそのうえで風呂場に入った。その中にいたのは。
「よく来てくれたわね」
「あっ、曹操さん」
「私に会いたいそうね」
広い風呂の中には既に曹操がいた。
「二人だったかしら」
「は、はい」
「そうです」
郭嘉は直立不動になって、程?はいつもの調子で曹操の言葉に応える。見れば曹操は既に一糸まとわぬ姿になって湯の中に立っている。小柄で胸は小さい。だが均整の取れた素晴しいスタイルである。
「その通りですっ」
「御会いして頂いて光栄です」
「名前は何というのかしら」
「はい、郭嘉といいます」
「程?です」
二人はすぐにそれぞれ名乗った。見れば人形には目隠しがされている。

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその十四

それを見てだ。劉備と関羽はこっそりと話した。
「見ないようにとの配慮ね」
「その前にの人形は本当に動くのか？」
関羽はそもそもその時点から疑問であった。
「まさかとは思うが」
「だって程？さんが言ってるから」
「いや、あれは」
関羽にはもうわかっていた。
「おそらくは」
「おそらく？」
「それは」
だが言う前にだ。曹操が言ってきたのだった。
「劉備殿と関羽も一緒なのね」
「はい、そうです」
「貴殿が呼んでくれて招きに応じたが」
「わかったわ。それじゃあ五人でね」
「はい、お願いします」
「お風呂を馳走になる」
こうしてであった。五人で湯舟の中に入る。そこでだった。
曹操はだ。郭嘉と程？に問うた。だが当の郭嘉は。
「ああ、曹操様」
「どうしたの？郭嘉さん」
「いえ、曹操様があまりにも御奇麗なので」
湯舟の中の曹操の見事な裸身を見ながら恍惚となっているのだ。
「素晴しいです、本当に」
「それでなの」
「はい、そうです」

また話す郭嘉だった。
「まさかこうしてお傍で見られるなんて」
「そうですよね。曹操さんって奇麗な人ですよね」
「あら、お世辞かしら」
曹操も劉備の賞賛にはこう返す。ただし彼女は冗談が入っている。
「それは」
「いえ、本当に」
劉備は嘘を言わない。こう返すのも真剣だった。
「曹操さんの御身体も」
「手入れは欠かしていないけれどね」
「そうなんですか」
「最近都ではかなりの美人が出て来たそうだし」
「ああ、あの人ですね」
程?が曹操のその言葉にすぐに反応を見せた。
「聞いた話によると絶世の美女だとか」
「司馬慰仲達。一度会ってみたいわ」
こう言う曹操だった。
「是非ね、色々と話したいこともあるし」
「そうなんですか」
「ええ。まあその話は置いておいて」
曹操は劉備の言葉に応えて顔に出ていた剣呑なものをすぐに消した。
「それで二人は私に何の用で来たのかしら」
「は、はい。それはですね」
「お仕えしたく参上しました」
二人はすぐに曹操の問いに応えた。
「それで、あの」
「軍師としてお仕えしたいのです」
「そう。軍師に」
曹操は程?のその言葉に目を動かした。

「私に軍師として、なのね」
「そうです」
「なら聞くわ」
曹操はその程?にすぐに問うてみせた。
「今の世についてどう思っているのかしら」
「は、はいそれですが」
「落ち着いてね」
劉備は緊張して顔を真っ赤にさせてしまっている郭嘉にそっと囁いた。
「落ち着いて言えばいいよ」
「落ち着いて、ですか」
「ええ、そうよ」
優しい笑みも向けての言葉だった。

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその十五

「郭嘉ちゃん頭いいし。落ち着いて話せば曹操さんも喜んでくれるわよ」
「曹操様がですか」
「そうよ。だから落ち着いてね」
「わかりました」
劉備に言われて意を決した顔になる。そうしてだった。
「まず貴女は」
「はい」
早速だった。曹操から声がかかった。
「名前は何というのかしら」
「郭嘉といいます」
劉備に言われた通り何とか落ち着いて言うのだった。言うその前に手の平に人という文字を書いて飲み込む動作をする。それも何度もだ。
「字は」
「字はまた後でいいわ」
曹操は今はそれはいいとした。
「そうなのね。郭嘉ね」
「はい」
「見たところ武芸者ではないね」
郭嘉のその肉付きを見ての言葉である。
「では。軍師かしら」
「はい、そうです」
まさにその通りだというのであった。
「私は今の戦乱の世を憂いていまして」
「そしてその為にはどうするべきというのかしら」
「残念ながら漢王朝はその力を衰えさせています」

「それが問題だというのね」
「はい、次に天下を支えるべき存在が必要です」
ここで曹操を見るのだった。
「そしてそれこそがです」
「私だというのね」
「曹操様には二つの道があります」
郭嘉はこうも言う。
「その衰えた漢王朝を蘇らせる能臣となるか、若しくは」
「私自身がというのね」
「それを選ばれるのは曹操様御自身です」
「私自身が」
「今民は苦しんでいます」
民衆についての言葉も出た。
「曹操様なら民を救われます」
「果たして私にそれだけの力があるかしら」
曹操はここでは笑ってみせた。そうしてわざとこう言ってみせたのである。
「それについてはどう思うかしら」
「いえ、まだです」
郭嘉はそれはないとした。
「まだ足りないものがあります」
「それは何かしら」
「人です」
こう言うのであった。
「人です。曹操様を支えるべき人材がまだ足りません」
「そして貴女はその人となる為に来たのね」
「そうです。それで如何でしょうか」
「わかったわ。では郭嘉」
「はい」
「貴女を軍師の一人に迎えるわ」

悠然と笑ってそのうえで郭嘉に告げた。
「そしてその試験として」
「試験ですか」
「城壁の修復をお願いするわ」
それをだというのである。
「三日でそれをやりなさい」
「三日ですか」
「そうよ。それができれば軍師として迎えるわ」
興味深そうな笑みを浮かべながら郭嘉に告げる。
「それでいいわね」
「はい、有り難き幸せです」
「そういうことよ。さて」
曹操は次はだ。程?に顔を向けた。そのうえで彼女にも問うのであった。

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその十六

「名前だけれど」
「程？と申します」
「わかったわ。それじゃあ程？」
「はい」
「我々はこれからどうするべきかしら」
彼女に問うのはこのことだった。
「まずは」
「はい、政です」
程？が答えたのはこれだった。
「政をすべきです」
「兵を鍛え戦に勝つことは？」
「それはその後で宜しいかと」
程？はいつもと全く同調子で答える。
「まずは田畑を耕し町を栄えさせることです」
「それが天下の平定につながるのかしら」
「それをせずして兵は養えません」
その言葉は強くはないがしっかりとしていた。
「兵糧、そして資金なくしてはです」
「そうね。まさにその通りよ」
「戦はそれからでいいです」
この考えは変わらない。
「私はそう考えます」
「わかったわ。なら貴女には」
「はい」
「その町のことを頼むわ」
それをだというのである。
「既に田畑のことは人を回してあるし」

「人？」
「それは誰ですか？」
「韓浩という娘よ」
曹操はにこりと笑ってその娘の名前を話した。
「その娘が今しているのよ」
「開墾と治水ですか」
「その二つを」
「それに加えてね」
それだけではないのだという。
「屯田もしているのよ」
「屯田といいますと」
「何でしょうか、それは」
「いい質問ね。どうやら口だけではないようね」
二人が屯田という言葉に興味を持ったのを見てだ。曹操はまた微笑んだ。二人の反応は彼女にとっては合格であったのだ。
「それは兵に田畑を耕させるのよ」
「兵にとは」
「そうした方法があったんですか」
「ええ。兵に田畑を耕させいざという時は戦ってもらうのよ」
こう二人に話す。
「それが屯田なのよ」
「成程、それはいいですね」
「私もそう思います」
二人は説明を聞いて感心した顔になっていた。
「兵は戦場で戦うだけではない」
「田畑を耕すのも仕事ですか」
「そうよ。私の国では今それをしているのよ」
「袁紹殿は胡の者達を馬から下ろし領民としていますが」
「それに匹敵しますね」
「麗羽はそういうことは得意だからね」

袁紹の政治力についてはだ。曹操は決して甘く見てはいなかった。
「ただ。私も国を富ます義務があるのよ」
「はい、その通りです」
「それが牧の務めですから」
「そうよ。そして」
曹操はさらに言った。
「私は牧では終わらないわよ」
「ではその為にも」
「及ばずながら私達が」
「それじゃあお願いね」
曹操はまた二人の言葉を受けて話した。
「郭嘉は城壁を、程?は町をよ」
「はい、それでは」
「今より」
こうしてであった。二人は早速それぞれ与えられた仕事に取り掛かった。するとであった。
郭嘉は約束通りだ。三日で城壁を修復させた。程?もまた三日で町を脅かしていた盗賊達を見事捕らえたのであった。
「何と、三日だと」
「三日でなのか」
これには夏侯惇と夏侯淵も驚きの声をあげた。

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその十七

「あの破損していた城壁をか」
「盗賊達をか」
「はい、させて頂きました」
「これで宜しいでしょうか」
「ううむ、これは凄い」
「全くだ」
姉妹は曹操の両脇で思わず唸っていた。
「一体どの様にしたのだ」
「そうだな、それが知りたいのだが」
そしてどのようにしたのか興味も持った。
「よかったら教えてくれるか」
「これからの参考にしたい」
「はい、私はです」
最初に話してきたのは郭嘉であった。
「実際に作業に当たる者達を幾つかの班に分けました」
「班にか」
「つまり隊だな」
「そうです。そのうえでそれぞれの班に早く見事にできた班には特別に報償を弾むと伝えました」
そうしたというのである。
「そしてそれによってです」
「作業にあたる者達の士気をあげてか」
「三日でか」
「そうです。それによってです」
こう話すのであった。
「それで三日で終わらせました」
「ううむ、そうしたやり方があったとは」

「気付かなかったな」
夏侯惇も夏侯淵もまた唸った。
「よし、今度私もそうしてみよう」
「私もだ」
二人は郭嘉の話を聞き終えて意を決した顔になった。そうしてそのうえで、である。今度は程?に対して詳しい話を聞くのであった。
「程?だったな」
「貴殿からも話を聞きたい」
まずはこう切り出した。
「あの賊達をどうして捕らえた」
「随分と厄介な連中だったのだが」
「はい、まずはわざと財宝を置きました」
そうしたというのであった。
「まだ狙われていない商人の屋敷にです。見えるように財宝を昼に入れたのです」
「昼にだと?」
「賊が出て来るのは夜なのだが」
「ですが昼に前以って偵察をするものです」
程?はこのことを指摘した。
「賊達が捕まらないのは彼等が慎重であらばこそでしたね」
「それで我等も苦労していたのだ」
「中々尻尾を出さなくてな」
「彼等はまず昼に下準備で偵察等を行い夜に来ます」
程?はこう話す。
「ですから昼にあえて見せたのです」
「そうだったのか」
「それで昼なのか」
「はい、そして」
話は続く。
「その屋敷に腕利きの兵を何人も忍び込ませました」

「そして賊が来たところを」
「一気にか」
「そういうことです」
ここまで話した。
「それで捕まえました」
「まあ考えたのは俺だけれどな」
急に人形が話しだした。
「こいつは何もしてねえよ。俺の手柄だ」
「そうかも知れませんね」
程?も自分の頭の上の人形を見上げて応える。

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその十八

「ですがお陰で無事成功しました」
「そうだろ。よかっただろ」
「腹話術だな」
「そうだな」
夏侯惇も夏侯淵もこのことはすぐにわかった。
「何かと思ったが」
「それか」
「いえいえ、これは私のもう一人の相方です」
程?はあくまでそういうことにする。
「多少口が悪いのが困りものですが」
「そうみたいね」
曹操は笑って彼女に合わせた。
「けれどこれで賊は捕まったわね」
「はい、ガルフォードさんや斬鉄さんが活躍してくれましたし
「あの二人も使ったのね」
「身のこなしが盗賊を思わせるものでしたので」
だからだというのである。
「半蔵さんも」
「忍者をなの」
「あの人達は忍者というのですか」
「そうよ。あちらの世界にはそうした者達もいるらしいわ」
「それであああした動きをされるんですか」
「そうみたいよ。そういえば郭嘉も」
「はい」
郭嘉への話にもなった。
「ブライアンや王虎、それにロイ達を使ったそうね」
「あの人達は百人に匹敵する力があると思いましたので」

郭嘉も答える。
「実際には百人力どころではありませんでしたが」
「二人共人を見抜く目もあるのね。わかったわ」
そうしたことも確かめて言う曹操だった。
「二人共合格よ」
「えっ！？」
「そうなのですか」
「我が曹操軍の軍師に任命するわ」
「ああ、身に余る光栄です」
「誠心を以てお仕えします」
そしてであった。曹操はふと郭嘉に声をかけた。
「ところで郭嘉」
「はい、曹操様」
「貴女の服だけれど」
彼女のその服についての話をするのだった。
「それは自分で作ったのかしら」
「は、はい」
先程までは喜びでとろけそうな顔になり両手を握り合わせていたがすぐに直立不動になる。
「その通りです」
「そう。器用ね」
曹操はまずこのことに感心した。
「私もその服を着たくなったわ」
「曹操様が私の服をですか！？」
「ええ、それでね」
ここでさらに言おうとする曹操だった。
「よかったら私に仕立てて」
「曹操様が私の服を着られて・・・・・・」
また恍惚となった顔になって言う郭嘉だった。
「そのお肌に触れた服をまた私が着る。ああ、いけません」

「何だ？様子がおかしいぞ」
「うむ、何があった？」
夏侯の姉妹は彼女の異変に気付いた。
「妄想をしているようだが」
「大丈夫なのか？」
「その様なこと。私は常に貴女様に全てを捧げていますので・・・・・」
こう言ってだった。ここでもやってしまった。
鼻血を噴き出して倒れた。郭嘉は血の海の中に倒れ込んだのだった。
「鼻血だな」
「うむ、そうだな」
夏侯淵が姉の言葉に頷いた。

# 第二十九話　郭嘉、鼻血を出すのことその十九

「その中に倒れた」
「いきなり何なのだ？」
「はい、いつものことですから」
程？は落ち着いて驚く二人に述べた。
「御気になさらずに」
「気にするなというが」
「これはかなり」
「はい、とんとん」
ここでも郭嘉の首の後ろを叩く。
「凛ちゃん、起きて」
「え、ええ」
「さらに面白くなってきたわね」
曹操はそんな二人を見てさらに笑うのだった。
「それじゃあ二人共これから宜しくね」
「は、はい」
「わかりました」
こうして二人は曹操の軍師となったのであった。このことをあらためて劉備達に話す。
劉備達はこの時宿にいた。そこで二人から話を聞くのであった。
「そうだったんですか、おめでとうございます」
「望みが適って何よりだな」
劉備が満面の笑顔で、関羽が微笑みで二人に言う。
「じゃあこれからは御二人は」
「曹操殿の下で活躍するのだな」
「はい。曹操様、ひいては天下万民の為に」
「働きます」
「じゃあ頑張ってね」

「うむ、期待しているぞ」
劉備と関羽はまた二人に言った。そうしてであった。
「じゃあ私達はもうちょっとここにいるけれど」
「それまでの間宜しくな」
「はい。それでなのですが」
ここで言ってきたのは郭嘉だった。
「あの、劉備殿」
「どうしたの？」
「あの時は有り難うございました」
畏まっての言葉だった。
「劉備殿に言われなければあそこまで曹操様とお話できたかどうかわかりません」
「お風呂の時のことね」
「はい、あの時です」
まさにその時だというのである。
「あの時に言って頂いたからこそ今の私があります」
「ううん、郭嘉さんが自分で掴んだものよ」
しかし劉備はあくまでこう言う。
「私は別に」
「いえ、劉備殿のお陰です」
だが郭嘉はこう言って引かない。
「それでなのですが」
「それで？」
「御礼をしたいと思います」
微笑んでの言葉であった。
「是非共」
「御礼って？」
「実は凛ちゃんはですね」
程？がいぶかしむ劉備に話してきた。
「歌凄く上手なんですよ」

「えっ、そうなの」
「はい。歌を歌うことも好きで」
こうも話すのだった。
「ですからここは」
「それじゃあここでも？」
「それでいいでしょうか」
郭嘉はまた劉備に尋ねた。
「歌で」
「うん、是非共」
劉備はここでも満面の笑顔を見せた。
「郭嘉さんの心尽くし、聴かせて」
「そうだな。是非な」
「聴いてみたいのだ」
関羽と張飛もここで言う。
「郭嘉殿のその歌を」
「聴かせて欲しいのだ」
「わかりました、それでは」
二人にも言われてであった。郭嘉は歌うのだった。その歌は確かなものであった。劉備達はその歌を聴いてそのうえで次の運命の出会いに向かうのだった。

第二十九話　　完

２０１０・８・２４

# 第三十話　典韋、曹操に試されるのことその一

第三十話　典韋、曹操に試されるのこと

曹操はこの時。配下の曹仁と曹洪から報告を聞いていた。
「そう、麗羽はまたなの」
「はい、北にです」
「北に行っています」
二人もこう曹操に報告する。
「また匈奴です」
「そちらに出陣しています」
「匈奴？ということは」
二人の話を聞いてだ。曹操はすぐに察したのだった。
それで言う。こうだった。
「あれね。北匈奴ね」
「はい、北です」
「南匈奴は無事併合を進めていますが」
「北匈奴が攻めてきているのね」
「ここにきて帰順させた部族も反乱を起こしているそうですし」
「麗羽殿もその対処に追われています」
「わかったわ。とりあえず麗羽にはね」
曹操はここまで聞いてまた述べた。
「そちらを頑張ってもらいましょう」
「麗羽殿なら無事平定してくれるでしょうし」
「それなら」
「そうよ。ただ暫くの間中原で乱が起こってもあの娘は兵は出せないわ」
曹操はこのことも気にかけていた。
「それが問題だけれどね」

「その為に我等がいますし」
「その時は」
「ええ。孫策殿の方も山越征伐に出ていますし」
「後は」
「董卓は西方だし」
曹操は今度は彼女の名前を出した。
「中原に来るには時間がかかるわね」
「あとは袁術殿ですが」
「あの方は」
「頭が痛いわね」
曹操はその袁術の名前が出ると難しい顔になった。
「ちょっとね」
「はい、全くです」
「それでなのですが」
「そうね。また人材が来ているわね」
曹操の顔がここで綻んだ。
「今度も来たのだったわね」
「御会いになられますか」
「それで」
「勿論よ」
微笑んでの二人への返答だった。
「それじゃあね」
「はい、それではです」
「こちらに」
「ええ」
曹操はまた人材と会うことになった。その彼等もまた、であった。
そしてである。関羽はだ。二人を曹操に合わせたその後で自分達の宿に戻った。するとそこには全員集まっていたのであった。
「よお、お帰り」
「待っていましたよ」

すぐに馬超と孔明が彼女に声をかける。
「どうやら二人共上手くいったみたいだな」
「曹操さんに登用されたのですね」
「うむ、無事な」
関羽は微笑んで二人の言葉に答えた。
「それでだが」
「晩御飯を食べに行きましょう」
黄忠が優しく微笑んで述べた。
「それじゃあ」
「そうなのだ、もう鈴々お腹ぺこぺこなのだ」
「鈴々ちゃんそれでもさっきからずっとそう言ってるじゃない」
馬岱が張飛に突っ込みを入れる。
「本当に」
「それは気のせいなのだ」
「それで関羽さん」
劉備はすぐに関羽に問うてきた。

# 第三十話　典韋、曹操に試されるのことその二

「どのお店に行きますか？」
「そうだな。ここは」
「それならだけれど」
「いいお店があるわ」
神楽とミナが言ってきた。
「私達がお昼に行ったお店だけれど」
「そこはどうかしら」
「ほう。どんな店なのだ？」
「いいお店よ」
「かなりいい味を出しているわ」
こう関羽だけでなく全員に話す。
「だからそこはどうかしら」
「チャンプルも気に入ってるし」
「そうか。それならだ」
関羽は二人の言葉を受けてだった。それに頷く。
そしてそのうえで他の面々に尋ねた。
「ならそこでいいか」
「うむ、メンマが美味ければな」
趙雲はまずはそれだった。
「それでいい」
「じゃあそういうことでな」
「行くのだ！」
馬超と張飛が笑顔で言う。そうしてであった。
一行はその店に行く。許昌はこの日も賑わっていた。
その中でだ。一行は不気味な二人と擦れ違った。
「な、何ですかあの人達！？」
「す、凄い格好だったわよね」

孔明と馬岱が驚いた顔で言う。
「男の人みたいだけれど」
「人間なのかしら」
「恐ろしい気を感じるわ」
ミナも顔を蒼くさせている。
「只者ではないわね」
「私一人では相手になれないな」
「私もね」
関羽と黄忠も険しい顔になっている。
「あの辮髪にビキニの巨漢には」
「その横の白い褌の髭の人もね」
「あの格好、何なんだろうな」
「尋常な人間ではないが」
馬超と趙雲もいささか引いた顔になっている。
「怪物かって思ったけれどな」
「うむ、私もそう思っていた」
「変態にしても恐ろしいものがあるのだ」
張飛も恐怖を感じていた。
「何か最近この国に変態が揃ってきたのだ」
「個性が強い人が集まるっていいことじゃないの？」
劉備だけがこう考えることができていた。
「それって」
「それ自体はいいのですけれど」
孔明はまだ青い顔になっている。
「あの御二人は明らかに何かが違います」
「そうだよね。多分あのうちの一人に私達全員があたっても勝てないよ」
馬岱はこう見ていた。
「そこまで強いよ」
「蒲公英ちゃん達全員って」

「いや、確かにそこまでの力がある」
関羽も真剣な顔で劉備に答える。
「あの二人はな」
「そうなんですか」
「まあとにかくなのだ。行くのだ」
張飛は考えを別の方に向けた。
「御飯を食べに行くのだ。どのお店なのだ？」
「ええ、ここよ」
「このお店よ」
神楽とミナが言うとであった。一行の目の前にだ。
大きな門構えの店があった。紅の門の色が麗しい。
「このお店だけれど」
「どう？」
「美味しそうな匂いがするのだ」
張飛がまず言った。

# 第三十話　典韋、曹操に試されるのことその三

「それじゃあすぐに入るのだ」
「そうね。それじゃあね」
劉備が頷いてであった。皆でその店に入る。そうして全員で一つの席に着いてそこからメニューを頼んでそのうえで全員で食べるのであった。
「おっ、これは」
「凄く美味しいのだ」
まずは馬超と張飛が笑顔で言った。
「庶民的な味がいいよな」
「それでいてしっかりとした味付けなのだ」
「そうよね。凄く食べやすいし」
馬岱も笑顔である。
「どんどん食べられる感じよね」
「瑠々にも食べさせてあげたいわね」
黄忠は母親の顔であった。
「それが残念だわ」
「ううむ、このメンマの味は」
趙雲はここでもまずメンマを食べている。
「わからない者、味わえない者は不幸だ」
「はい、この麻婆豆腐もラーメンも蒸し餃子も」
孔明は小柄だが結構な量を食べている。
「凄いですよ」
「朱里ちゃんの言う通りよね」
劉備もどんどん食べている。彼女は今は炒飯を食べている。
「どれも凄く美味しいわ」
「ううむ。これ程までとはな」
関羽も唸っている。

「私は料理ができないから余計に感じるところがある」
「関羽ちゃんはちょっとね」
「あれは一種の才能だから」
神楽とミナは少し苦笑している。
「切るのは得意だけれど」
「調理は駄目なのね」
「残念だが私はそういうことは駄目なのだ」
関羽は目を伏せて悲しい顔になった。
「どうしてもな」
「そういえば昔から武芸に学問だったよな」
「うむ」
馬超の問いにも答える。
「その通りだ」
「そういえばあたしも家事したことないな」
「お姉様お料理作ったことあったっけ」
「ないんだよ、これは」
こう従妹の問いにも答える。
「ちょっとな」
「そうよね。ないよね」
「家事全般駄目なんだよ。まずいよな、やっぱり」
「鈴々もなのだ」
それは張飛もであった。
「家事はしたことないのだ」
「この面々で家事ができるのはおそらく紫苑だけだ」
趙雲は静かに述べた。
「残念ながらだ」
「私とりあえず一通りできますけれど」
劉備がここで自分を指差しながら話した。
「お料理も。一応は」
「あら、そうだったの」

「はい」
神楽の問いにも答える。
「特に靴を作ったりお裁縫はです」
「靴を売って生きていたからなのね」
「はい、それで暮らしてきましたから」
ミナにも答える。
「ですからそれは特にです」
「それでは今度から劉備殿も家事をしてくれるのか」
趙雲がうっすらと笑って述べた。
「楽しみにしておくか」
「やらせてもらいますね」
こんな話をしていたのだった。
そうしてだ。そんな話をしているとだ。そこに鮮やかな青い髪を短くして上で髷を作っている女の子が来た。赤がかった鳶色の目をしていて顔立ちは幼いがとても可愛らしく明るいものである。小柄でエプロンをしている。エプロンの下には袖のない上着と黒いローライズの半ズボンが見える。

# 第三十話　典韋、曹操に試されるのことその四

その少女が来てだ。一行に声をかけてきたのだ。
「皆さんとても召し上がられていますね」
「むっ、貴殿は」
「誰なのだ？」
「はい、典韋といいます」
少女はにこりと笑って関羽と張飛の言葉に答えた。
「このお店の料理人です」
「ではこの料理は貴殿がか」
「作ったのだ」
「はい、そうです」
その通りだという典韋だった。
「皆さん私が作ったお料理をとても美味しそうに沢山召し上がられてますよね」
「だって美味いからな」
「その通りだ」
それでだという馬超と趙雲だった。
「これじゃあ幾らでも食えるよな」
「うむ、メンマもな」
「堪能させてもらっているわ」
「はい、とても美味しいです」
黄忠と孔明も話す。
「御礼を言わせてもらうわ」
「有り難うございます」
「いえ、御礼を申し上げるのはこっちです」
だが典韋は笑顔でこう話すのだった。
「私の料理をここまで美味しく召し上がってもらって。それで」
「それで？」

「今度は何なのかな」
劉備と馬岱が言う。するとであった。
一同にだ。あるものを出してきたのだ。
「お饅頭？」
「そうね」
神楽とミナがそれを見てすぐに言った。
「これは頼んでないけれど」
「どうして」
「私からの皆さんへの御馳走です」
満面の笑顔で話す典韋だった。
「どうぞ召し上がって下さい」
「凄い太っ腹なのだ」
張飛は典韋のその饅頭を前にして彼女もまた満面の笑顔になった。
「それじゃあ遠慮なく頂くのだ」
「はい、皆さんもどうぞ」
こう話してだった。彼女達は皆その饅頭を食べはじめた。その味は。
「美味いな」
「そうだな」
「コクのある味だけれどあっさりしていてな」
「凄く食べやすいのだ」
「これ何かな」
一同はそれぞれ言う。
「そうね。牛でも豚でも羊でもないわね」
「何のお肉でしょうか」
「はい、それはですね」
典韋がにこりと笑って話す。
「頭に『に』が付く生き物です」
「に！？」
「日本語ね」

神楽とミナがそれに気付いたのだった。
「とりあえずそれはいいとして」
「何の生き物かしら」
「それはですね」
何故かここで典韋はその両手の指を禍々しく曲げて前にやってきた。両手は胸の前の位置だ。肘は曲げてあまり強く前には出していない。
そして顔を不気味な笑みにさせてだ。さらに言うのであった。
「四文字で」
「ええと、四文字？」
「四文字で頭に『に』というと」
「まさか・・・・・・」
劉備に関羽、孔明の顔が真っ青になる。
「それって。出したらいけないんじゃ」
「そうだ、食べるのはかなりな」
「そういう話はありますけれど」
「はい、鶏です」
フェイントだった。
「鶏なんです」
「お、おい。それか」
「それだったの」
「全く」
馬超に馬岱、それに黄忠はほっと胸を撫で下ろした。

## 第三十話　典韋、曹操に試されるのことその五

「驚かせてくれるよ」
「まさかと思ったけれど」
「本当にね」
「そうだな。私もな」
趙雲も今は笑っていない。
「今のはぎくりとしたぞ」
「流石に人間は食べたことはないわ」
「私もよ」
神楽とミナも他の面々と同じ顔になっていた。
「けれど鶏ならあるから」
「そうだったら喜んでいいわ」
「そうなのだ。美味しいのだ」
張飛だけが平然としていた。話を聞かずに食べることに専念しているからだ。
「このお饅頭とても美味しいのだ」
「はい、召し上がって下さいね」
笑顔で言う典韋だった。
「どうか」
「わかりました」
劉備が頷いてだった。皆で食べるのだった。そして宿に帰るとだ。
一行の下にだ。夏侯淵が来た。そうしてだった。
「宜しければですが」
「明日か」
「お食事にですか」
「はい、曹操様は月に一度御自身が作られたお料理でお客人を接待されます」
そうするというのである。

「ですから。それに皆さんを」
「いいのですか?それは」
劉備が遠慮する顔になっていた。
「あの、私達ってただこの街に来ただけですし」
「はい、構いません」
夏侯淵は微笑んで劉備の言葉に返した。
「曹操様はお客人をお招きするのが趣味でして」
「そうなんですか」
「是非皆様いらして下さい」
こうも言う。
「そして曹操様が作られた御馳走を堪能しましょう」
「よし、わかったのだ!」
張飛はたらふく食べたばかりだがもうそちらに考えをやっていた。
「明日はお腹を空かせる為に朝御飯はお代わりを三杯までにしておくのだ」
「あたしもだ!」
馬超も言うのだった。
「明日は楽しみにしておくか!」
「おお、馬超殿」
夏侯淵は彼女の姿を認めて優しい笑顔になった。
「姉者が貴女と会いたがっていましたよ」
「夏侯惇がかよ」
「はい、また貴女と機会があれば槍を交えたいと」
だからだというのである。
「それでなのです」
「そうか、あいつもいるんだよな」
「はい」
「会うのが楽しみだぜ。元気だといいがな」
「うむ、私は元気だ」
ここで本人が出て来た。

「馬超、久しいな」
「おお、夏侯惇！」
「明日は宜しくな」
「ああ、こっちこそな！」
二人はお互いの右手と右手を絡め合わせて言い合う。
「できれば槍の手合わせといきたいな」
「全くだよ」
「ふむ、この二人は馬が合うのだな」
趙雲はそんな二人を見て言う。
「仲良きことはだな」
「同じ槍使いだしな」
「それに馬超の性格は嫌いではない」
その二人がそれぞれ言う。
「こうして会えたからにはな」
「一緒に楽しみたいものだ」
「そうだな、姉者」
夏侯淵も姉の横で優しい笑顔になっている。
「そうしたところが姉者のいいところだ」
「そして夏侯淵さんはあれだよね」
馬岱は彼女を見ながら笑顔になっている。

# 第三十話　典韋、曹操に試されるのことその六

「そんなお姉さんが大好きなんだね」
「う、うむ」
馬岱の言葉に頬を赤らめさせる。
「姉妹だからな」
「そうですよね。姉妹っていいですよね」
孔明もここで笑顔になる。
「私もお姉ちゃんがいますから」
「揚州の諸葛勤さんね」
黄忠が言う。
「また会えるといいわね」
「はい、その時を楽しみにしています」
そんな話を聞いてだった。神楽はふと呟いた。
「そうね。姉さんだって」
だがこの言葉は誰にも聞こえなかった。何はともあれその次の日だった。
曹操はだ。昨日会った人材とまた会っていた。彼等は。
一人は覆面をした忍者、一人は頭に頭巾のある上半身裸の男だ。
三人目は顎鬚を生やした赤いスーツに白いズボンの端整な男、最後の一人は太って家鴨を連れた青年だ。その四人であった。
「如月影二に不破刃」
曹操は彼等の名前を呼んでいく。
「それにカーマン＝コールに王覚山ね」
「それに私達もよ」
「遅れてすまん」
紫と白のアラビアの服に曲がった刀を持った美女、それとやたらと大きな禍々しさを感じさせる男、その二人も来たのであった、
「シンクレアよ」

「ワイラーだ」
「ええ、覚えてるわ」
曹操は悠然と笑って二人にも言葉を返した。
「ちゃんとね。安心して」
「そう、それならね」
「いい」
「それでだけれど」
ここであらためて言う曹操だった。
「貴方達もどうかしら」
「どうかとは」
影二が曹操の言葉に応える。
「何かあるのか」
「これから私が料理を作るのだけれど」
「料理をか」
「貴方達も食べるかしら」
こう言うのであった。
「それはどうかしら」
「いや、拙者はいい」
影二が最初に断った。
「貴殿の料理となるとかなり豪奢なものだな」
「腕によりをかけて作るわよ」
「拙者はそうしたものは食べぬ」
「じゃあ何を食べるの？」
「保存のきくもの、腐りにくいものがいい」
これが彼の言葉だった。
「だから馳走や美食といったものは合わぬ」
「貴方、凄い人生を歩んできたみたいね」
曹操にもそのことはわかった。
「まあいいわ。食べたくないのならそれはいいわ」
「済まぬ」

「謝らなくてもいいわ。無理強いはしないから」
だからいいというのである。
「けれど他の人はどうかしら」
「よかったらな」
「是非」
「御相伴に」
「御願いします」
「わかったわ。それじゃあ今回は量も奮発してね」
曹操は目を細めさせて言うのだった。
「腕によりをかけるわよ」
こうしてだった。曹操は料理を作ることにした。そしてその宴席ではだ。曹操側の家臣達と客将達が横一列に並んでいる。客将達の数がかなり多い。
そしてもう一方には劉備達がいる。こちらは九人だ。

# 第三十話　典韋、曹操に試されるのことその七

「あっち側多いのだ」
「そうよね。何かはじめて見る人も多いし」
「増え過ぎではないのか？」
張飛と馬岱、趙雲がその客将達を見て言う。
「向こう側の人間ってあんなにいるのだ」
「あの人が覇王丸さんかな」
「ナコルルの言っていたあの御仁か」
「おっ、あんた達ナコルルを知ってるのか」
その覇王丸が自分の席から彼女達に言ってきた。
「へえ、そりゃまた奇遇だね」
「何か凄く豪快そうな人ですね」
孔明がその覇王丸を見て言う。
「剣の腕もかなりですね」
「おっ、わかるか」
「私は武芸の心得はないですけれど」
「それでもわかるか」
「はい、その気配で」
わかるというのである。
「他の皆さんもですね」
「うむ、皆それぞれ一風変わった者達だが」
夏侯惇が微笑んで彼女達に話す。
「いい連中だぞ」
「そうなのか。それはこっちと同じだな」
「そうだ、馬超」
夏侯惇は今度は馬超に対して微笑みを向けた。
「貴殿も元気そうで何よりだ」
「夏侯淵から話は聞いてるぜ」

「よし、それじゃあ後で槍を交えるか？」
「楽しみにしているぞ」
こんな話をする二人であった。そしてだ。
荀？も言うのだった。
「そういえばこの面々が来てから男とも普通に話すようになったのよね」
「それは物凄い変化ではないかしら」
「そうよね」
曹仁と曹洪がそんな荀？の言葉を聞いて話す。
「随分変わったわね」
「確かに」
「十兵衛さんはお酒より甘いものが好きなのが残念だけれど」
無類の酒好きである荀？らしい言葉だった。
「覇王丸はお酒大好きだし。それに」
「それに？」
「さらに？」
「あんな話聞いたらね。どうしても嫌いになれないわよ」
「おしずさんのことですね」
「あれはちょっと凄いです」
郭嘉と程？が言う。
「そこまで剣の道を求められるとは」
「覇王丸さんは漢ですね」
「そこまで突き進むのなら何処までも突き進めばいいのよ」
荀？はこんなことも言った。
「全く。おしずさんが可哀想よ」
「しかし覇王丸さんは嫌いじゃないのね」
「大嫌いよ」
許緒にこう返す。
「大嫌いだから。つい話を聞いてやりたくなるのよ」
「こう言って最近他の世界から来た面々と飲んでるからな、こ奴は」

夏侯惇がいささか呆れながら言う。
「人は変われば変わるものだ」
「姉者も覇王丸達とよく飲むな」
「正直嫌いじゃない」
こう言ってであった。
「だからだ。共にいる」
「そうか。実は私もだしな」
「秋蘭もよく飲むな、最近」
「うむ、ズィーガー殿の騎士道は勉強になる」
こんな話をしながら曹操を待つ。その曹操が黒いマントを羽織って来た。

# 第三十話　典韋、曹操に試されるのことその八

そして多くの食材に囲まれてだ。まずは梅をかじった。
それからだった。こう一同に宣言する。
「それじゃあ美食の会をはじめるわよ」
「よし！」
「待ってました！」
覇王丸達から歓声が起こる。
「食うぜ！」
「たっぷりとな！」
「そうよ。さあ関羽」
曹操は微笑みを浮かべて関羽を見て言う。
「今日は私の料理を楽しんで頂戴ね」
「曹操殿かたじけない」
「劉備殿もね」
彼女にも顔を向けた。
「堪能してね」
「は、はい」
「馬超」
今度は馬超を見た。
「貴女もね」
「あ、ああ」
因縁のあった二人だがだ。今は違った。誤解は解かれどちらかというとである。馬超の方が顔を赤らめさせていた。
そうしてである。曹操が料理を作る間にだ。一同に酒が出された。
「曹操様が好物の蜜柑から作ったお酒です」
「あっ、お酒なのだ」
張飛がその酒を見て笑顔になる。
「それじゃあ早速飲むのだ」

「では般若湯を飲むとしよう」
双角はこう理由をつけていた。
「これは曹操殿が自ら作られたものだったな」
「左様、曹操殿が自分の足で蜜柑を踏んでそこから作りしもの」
狂死郎が話す。
「葡萄の酒と同じであるな」
「ああ、曹操様が自ら作られたお酒」
「美味いな、この酒」
荀？がうっとりとしたところで覇王丸が一気飲みした。
「もう一杯」
「うむ、私もだ」
夏侯惇も一気だった。
「もう一杯くれ」
「あのね、あんた達」
荀？はそんな二人に呆れながら注意を入れる。
「折角華琳様が自ら作られたお酒なのに味わって飲みなさいよ」
「んっ？酒ってこうやって飲むものだろ」
「違うのか？」
「違うわよ。全くあんた達は」
「もう一杯なのだ」
それは張飛もだった。
「鈴々はお酒も幾らでもいけるのだ」
「全く、この面々は」
荀？はここで完全に呆れてしまった。
「無作法にも程があるわね。ズィーガー殿みたいに紳士的にね」
「何でしょうか」
そのズィーガーが応えてきた。彼は穏やかに飲んでいる。
「曹操殿が作って頂いたこの蜜柑酒見事です」
「そういえばあんたあれじゃったな」
中が彼に言う。

「ビール作りが趣味だったな」
「はい」
笑顔はないが実に丁寧な返答である。
「そうです。ですからお酒のことはわかるつもりです」
「成程、そうなのじゃな」
「よし、それじゃあまずは」
ここで曹操が言った。そうしてであった。
どんどん料理が来る。
「西方から取り寄せたトリュフを焼いたものです」
「熊の手の刺身です」
「海亀の卵の似たものです」
「燕の巣の湯です」
次々と運ばれてくる。荀?は恍惚としている。しかしである。

# 第三十話　典韋、曹操に試されるのことその九

張飛と馬超は不満な顔であった。
「何かちまちまとしているのだ」
「もっとがっつり食いたいよな」
「そうなのだ、これなら」
ここで言う張飛だった。
「街の典韋の料理の方が美味しいのだ」
「何ですって！？」
そしてであった。それを聞き逃す曹操ではなかった。
強い顔になってだ。張飛に顔を向けて言った。
「聞き捨てならないわね、張飛」
「けれど本当のことなのだ。あの料理は美味しかったのだ」
「わかったわ。それじゃあ」
そしてだ。曹操は言うのだった。
「その典韋という料理人をすぐに連れて来なさい」
「何か凄い展開になってきたわね」
黄忠はぽつりと呟いた。そうしてであった。
その典韋が連れて来られる。彼女は周囲を見回しおろおろとしている。
しかしだ。その中でだ。
「あれっ、季衣ちゃん」
「流琉ちゃんじゃない」
お互いを確認して笑顔になる。
「曹操様のところにいるって聞いたけれど」
「ここに来ていたの」
「うん、そうなの」
料理人の場所と食事の席からそれぞれ話す。
「ねえ、今度ね」

「御馳走してね」
「知り合いみたいだな」
グローバーはそんな二人を見て話す。
「また奇遇だね」
「はい、私達実は故郷が一緒なんです」
「親友同士なんですよ」
「世界は狭いわね」
「本当にね」
神楽とミナがそんな二人を見て言う。
「私達もこの世界に来ているし」
「そうね」
「そう。二人は同郷だったの」
曹操は二人のやり取りを見て笑顔になる。
「それでだけれど典韋」
「は、はい」
「貴女が作りたいものを作ってくれるかしら」
こう言うのであった。
「量は多いだけいいわ」
「多いだけですか」
「何しろ数が多いから」
見ればだ。とりわけ曹操の客将が多い。
「御願いするわね」
「そう言われましても」
何を作るかだった。それがわからなかった。
しかしである。ここで張飛が狼狽して周囲を見回し続ける典韋に対して手を振って言ってきた。
「典韋、頑張るのだ！」
「張飛さん、それに」
「頑張れよ！」
「期待してるからね！」

それに馬超と馬岱の話も聞く。彼女達を見てだった。
「それじゃあ」
典韋は明るい顔になってすぐに料理を作りはじめた。それは。
「お饅頭？」
「そうね」
黄忠が劉備に応える。
「中は」
「メンマと鶏肉と麻婆豆腐ね」
それだった。

# 第三十話　典韋、曹操に試されるのことその十

「美味しい、あのお店の味がそのまま」
「そうね」
「確かに美味しいけれど」
荀？は少し辛口の顔になる。
「曹操様のものと比べると」
「凄く美味しいのだ！」
「うむ、そうだな」
張飛と趙雲が笑顔になっている。
「鶏肉が美味しいのだ」
「メンマもな」
「それに麻婆豆腐も」
孔明も満面の笑顔である。
「この味、やっぱりいいですよね」
「そうだな。本当にな」
「そうよね」
関羽と劉備も満足している。しかしだ。
荀？はまた言った。
「やっぱりこの勝負は」
「いいえ、私の負けよ」
ここでこう言う曹操だった。
「今回の勝負はね」
「えっ、負けって！？」
「負け！？」
「どうしてですか！？」
「今回の宴会は劉備殿や関羽をもてなす為のものだったのよ」
曹操が言うのはこのことだった。
「けれど私は自己満足で料理をしたわ。けれど典韋は」

「私なんですか」
「そう。貴女は劉備殿達のことを考えて料理をしたわ。お客人をもてなす為にね」
「だからなんですか」
「そうよ、私の負けよ」
こう言う曹操だった。しかしである。
今度は劉備が言うのだった。
「それも違うんじゃないですか？」
「違うというの？」
「だって曹操さんも私達をもてなす為に作ってくれましたよね」
「そのつもりだったけれど」
「だったら同じです」
にこりと笑って話す劉備だった。
「それに」
「それに？」
「料理に勝ち負けなんてありません」
これが劉備の考えだった。
「ですから」
「そうなの。そうね」
それを聞いてだった。微笑む曹操だった。
「私もまだまだ未熟ね。それはそうと典韋」
「はい」
「見事よ」
こう言ったところであった。いきなりだ。
「そ、曹操様！」
「どうしたの？」
「牛が！食材の牛が！」
その牛がだ。宴会の場に飛び込んで来たのだ。
「牛！？」
「おいおい、暴れ牛だな！」

ヘヴィDとロイが言う。
「じゃあ俺が止めるか」
「いや、俺が！」
「こういうときにローレンスがいればな」
今言ったのはフランコである。
「面白いんだがな」
「ここは私が行く」
「いや、客人の手をわずらわせてはならない」
関羽は夏侯惇が制する。
「ここは私がだ」
「というか誰でもいいから早く行った方がいいですよ」
孔明が正論を言う。
「さもないと牛さんは」
「ここは僕が！」
許緒が出ようとしたその時だった。典韋がだ。
自分の前に突っ込んで来る牛の角を掴んでだった。
「てえええええええええええいいっ！！」
思い切り上に放り投げた。牛はそのまま天高く上げられそして。
地に叩き付けられたのだった。

# 第三十話　典韋、曹操に試されるのことその十一

「ステーキだな」
「ああ」
「それかすき焼きだな」
「シェラスコでもいいんじゃないか？」
別の世界から来た面々はその落ちてきた牛を見てそれぞれ言う。
「じゃあ食うか」
「後でな」
「それはまた後の話でね」
曹操はそんな彼等を見て話す。
「典韋」
「はい、何でしょうか」
「その怪力と料理の腕見事よ」
こう言うのだった。
「丁度料理を語り合える相手も欲しかったし季衣の親友でもあるし」
「また一緒に遊ぼうよ」
「そうよ。私のところに来て頂戴」
許緒と共に言う曹操だった。
「どうかしら、それは」
「あの、私まだお店が」
「わかってるわ。それじゃあその話はそっちでしてね」
「そうしてですか」
「御願いするわね」
「は、はい」
こうしてであった。典韋も曹操の配下になることになった。そうしてであった。
劉備達はあらためて旅をはじめることになった。曹操が彼等を見送る。

「ところで噂だけれど」
「はい？」
「何か私の領内に不気味な男が二人徘徊しているそうね」
「あっ、若しかして」
ここでふと思い出した劉備だった。
「昨日か一昨日に擦れ違ったあの？」
「間違いないですね、あの人達です」
孔明が顔を青くさせて言う。
「絶対に」
「知ってるのかしら」
「知ってるというかちょっと街で擦れ違ったんです」
孔明はこう曹操に話す。
「一人はピンクのパンツに辮髪の人で」
「辮髪ね」
「もう一人はお髭に褌の人で」
「変態なのかしら」
「多分」
孔明もその可能性を否定しなかった。
「そうだと思います」
「そう、わかったわ」
話を聞いて頷く曹操だった。
「何者かわからないけれど警戒が必要ね」
「ところで曹操さん」
馬岱が曹操に尋ねた。
「お姉様が見えないんですけれど」
「ああ、馬超ならね」
「はい」
「今夏侯惇と槍の手合わせをしてるわよ」
こう馬岱に話すのだった。
「だから今はね」

「そうなんですか」
「もう少し待ってね」
微笑んで馬岱に話す。
「馬超も欲しかったりするけれど」
「あの、曹操様」
「今度は馬超殿ですか？」
曹仁と曹洪は今の主の言葉に困った顔になる。
「私達もいますし」
「ですから」
「それでもよ。やっぱり奇麗で優れた娘は好きなのよ」
曹操のこの嗜好は変わらない。

# 第三十話　典韋、曹操に試されるのことその十二

「どうしてもね」
「それでもです」
「あの」
「わかってるわよ。貴女達の相手は忘れないわよ」
微笑みを困った顔の二人にも向ける。
「じゃあ今夜はね」
「は、はいっ」
「御願いしますっ」
顔を赤らめさせて応える二人だった。そうしてだ。劉備達は彼女達に別れを告げた。
一行はまた旅を続ける。そこで、である。
「さて、いよいよだな」
「そうだな。その袁術殿の下にだ」
趙雲が関羽に対して述べる。
「行くことになるな」
「何かここまでの道中でも色々あったな」
「そうね」
黄忠が二人の言葉に微笑む。
「袁紹さんのところに曹操さんのところに」
「あと白々ちゃんも」
「白蓮だ！」
劉備が言うと何処からか声がした。
「桃香、本当にいい加減覚えてくれ！」
「あっ、御免なさい」
「いや、問題はそこじゃなくて」
「そうですよね」
馬超と孔明が目を点にして言う。

「あの人今幽州に戻ってるんだろ？」
「どうして聞こえたんでしょうか」
二人が言うのはこのことだった。
「よくわからないけれど聞こえたみたいなのだ」
「凄い耳だよね」
張飛と馬岱は特に驚いている様子はない。
「とにかくなのだ」
「その袁術さんのところよね」
「大丈夫かしら」
「そうね」
神楽とミナは不安な顔になっていた。
「あの袁紹さんの従妹だというけれど」
「いい予感がしないわ」
「実際に結構問題のある人みたいですね」
孔明がその二人に話す。
「ですからちょっと注意しておいた方がいいかも知れません」
「わかったわ。それじゃあ」
「少し覚悟を決めてね」
ミナはここで自分の足元のチャンプルを一瞥した。
「いざその地へ」
「今から」
「じゃあ行きましょう」
劉備はここでも天真爛漫である。
「いざ、袁術さんのところに」
「うむ、それではな」
「行くのだ！」
関羽と張飛が彼女の言葉に応える。そのうえで乙女達は目的地に向かうのであった。

第三十話　完

2010・9・11

# 第三十一話　張三姉妹、書に気付くのことその一

第三十一話　張三姉妹、書に気付くのこと

バイスとマチュアを専属のマネージャーにした三姉妹は順調、いやまさに破竹の勢いで人気を上げていた。それは最早国で知らぬ者はない程だった。

「嘘みたいよね」

「そうよね」

張角が張梁の言葉に笑顔で頷いている。

「私達のこと知らない人って」

「もう漢にはいないわよ」

「ついこの前までしがない旅芸人だったのに」

本当についこの前まで、である。

「何とか生きている感じだったのにね」

「それが今じゃ食べるものにも着るものにもこと欠かない」

切実な問題である。

「しかも宿だってね」

「これまで野宿も普通だったのに」

「今じゃ上等のお宿のそれも一番いいお部屋よ」

「そうしたお部屋って何ていうんだっけ」

「確かあれよ。スイートルームよ」

張梁はこう姉に話す。

「バイスが言ってたけれどね」

「そうよね。それにしてもバイスさんとマチュアさんがマネージャーになってくれて」

「人和も楽になったんじゃないの？」

「ええ」

その通りだとだ。これまで黙っていた張宝が静かに頷く。

「歌と踊りに専念できるから」
「そうよね。三人共そっちにね」
「集中できるのって大きいわよね」
「そうね。それは大きいわ」
張宝もこのことを認めて頷く。
「私かなり楽になった」
「そうそう。何か私達絶好調って感じ？」
「このままいける？何処までも」
「油断は禁物」
張宝はここで手綱を引き締めた。
「そこから全部駄目になっていくから」
「あっ、そうね」
「慢心は駄目よね」
二人の姉は末妹の言葉にはっとなった。
「私達の夢って大きいからね」
「漢だけじゃなくて西秦や倭にもね」
「そこでも舞台やってね」
「皆に私達の歌を聴いてもらわないと」
「そういうこと」
張宝は姉達の言葉に頷く。三姉妹の夢はとにかく大きいのだ。
「だから」
「そう。まだまだ私達の夢ははじまったばかり」
「こんなところで得意になったらね」
「駄目よ」
こんな話をしながら旅を続け各地で舞台を開いていた。そしてだ。
この日は幽州に来ていた。ここに来るとすぐにだった。
「やっぱり寒いよね」
「そうだよね」
まずその寒さを感じるのだった。
「話には聞いてたけれどね」

「やっぱりよね」
「はい、これ」
張宝は姉二人にすぐに上着を差し出した。
「二人共これを着て」
「あっ、有り難う」
「それじゃあ」
「私達の服はお肌をよく出す服だから」
だからだというのである。
「風邪をひかないようにね」
「有り難う、人和ちゃん」
「それじゃあね。有り難く」
張角と張梁はすぐに妹が出したその服を着る。ここで、だった。
バイスとマチュアが三人のところに来て告げるのだった。
「それじゃあ燕都に行くわよ」
「いいわね」
「そこなのね」
張宝が彼女達の言葉に応える。
「今話題の桃家荘には行かないのね」
「あそこには剣がいるわ」
「それに鏡も」
ふとこんなことを言う二人だった。顔が歪んでいる。
「だから」
「今はね」
「今は？」
張宝はその言葉にふと問うた。

# 第三十一話　張三姉妹、書に気付くのことその二

「何かあるの？」
「いえ、何もないわ」
「気にしないで」
彼女の問いにはこう返すのだった。
「あそこは人が少ないから」
「だからコンサートはもっと他の場所がいいわ」
「えっ、最近話題の劉備さんがいるのに！？」
「何で皇室の人らしいじゃないの」
張角と張梁も劉備のことはもう聞いていた。
「おっぱいが凄く大きくて可愛いっていうのに」
「それに劉備さんのところに人が一杯来てるって話よ」
「皇室の方だったらおひねりも弾んでくれるのに？」
「人がいてくれてこそのあたし達なのに」
「その人が問題なのよ」
「私達にとってはね」
ぽつりと呟く二人だった。
「そう、今はまだね」
「気付かれては駄目だから」
「何かよくわからないけれど」
「そこは駄目なのね」
「そうみたいに」
しかし根は人のいい三人はだ。二人の反対を受け入れたのだった。
「じゃあ他のいい場所に？」
「その燕都よね」
「そこなのね」
「そうよ、そこよ」
「ここは牧がいなくて今一つはっきりしない場所だけれど」

バイスとマチュアも公孫賛のことは知らなかった。
「近いうちに袁本初がここも治めることになるようだけれど」
「それでも今はね」
「ふうん、そういう場所なんだ」
「ここってもう袁紹さんの治める場所って思ってたわ」
「私も」
勿論三姉妹も公孫賛のことは知らない。何処までもその存在感が残念な彼女である。
とにかくだ。彼等はその燕都に入る。そこに入るとだ。
「天和ちゃーーーーーーーーーーん！」
「地和ちゃーーーーーーーーーーん！」
「人和ちゃーーーーーーーーーーん！」
三人を出迎えるファン達だった。
「待ってたよーーーーーーー！」
「ようこそこの幽州へ！」
「ほっほーーーーーーーーーーーう！！」
こんな叫び声もあがっていた。そうしてだ。
旅用の荷馬車から降りた三人のところにだ。三人の少女が来た。
三人は彼女達の前でそれぞれ片膝を着いてだ。名乗ってきた。
「はじめました」
「我々はです」
「貴女達の親衛隊の者です」
「あっ、そういえば最近できたのよね」
張角はその三人の言葉を受けて言った。彼女らしくゆったりとした口調だ。
「張三姉妹親衛隊よね」
「はい、まず私はです」
灰色の長い黒髪に緑の目の凛々しい顔立ちである。背は三人の中で最も高く黒装束であるが右足のところが半ズボンになっている。
斧を持っている。

「程遠志といいます」
「同じく?茂」
「同じく下喜」
茶色の髪を後ろで束ね槍を持った赤い目の小柄な少女である。白い上着に赤いミニスカートと白のブーツである。最後の一人は分銅を持った青い髪のやや年長の女だ。青い髪は腰までありやや巻いている。目は緑であり細面に高い鼻、豊かな胸をドレスを思わせる赤い長い服で覆っている。
その三人が来てだ。言うのであった。
「これからはです」
「我等三人常にです」
「御三方を御守りします」
「えっ、本当!?」
張梁は三人のその言葉を聞いてすぐに満面の笑顔になった。
「私達の護衛をしてくれるんだ」
「はい、そうです」
「それで宜しいでしょうか」
「我等で」
「そうね」
今度は張宝が考える顔で言った。

## 第三十一話　張三姉妹、書に気付くのことその三

「ボディーガードが必要かしらと思ってたし」
「そうよね。いいわよね」
張角も言う。
「どうかしらバイスさん、マチュアさん」
「ええ、そうね」
「いいと思うわ」
二人のマネージャーもそれでいいとしたのだった。
「三人共それでね」
「いいんじゃないかしら」
二人も賛成した。こうしてであった。
三人は三姉妹の親衛隊長兼護衛役となった。そのうえで常に同行することになった。
それが決まったその日にだ。三人は三姉妹と共に料理店で昼食を食べていた。ただしバイスとマチュアはそこにはいなかった。
「あれっ、あのお二人は」
「一体どちらに？」
「ああ、バイスさんとマチュアさんはね」
張角がいぶかしむ三人に対して話す。
「お食事はいつも二人だけなの」
「そうなのですか」
「それでおられないのですか」
「そうよ。大抵お昼の時も食べながらお仕事してるみたい」
「大変ですね、マネージャーも」
「そうですね」
三人は張角の言葉に納得した顔で頷いた。
「それでなのですか」
「とても真面目ですね」

「はい、勤勉です」
「そうそう、あの二人て凄いのよ」
張梁は五目そばをすすりながら話す。
「もう物凄い仕事できるんだから」
「敏腕マネージャーなのですか」
「そうなるわね。ほら、あたし達ってさ」
張梁はさらに話す。
「これまでしがない旅芸人だったけれど」
「売れるまではそうですよ」
「誰だって」
「ですがそこからですから」
「そうなのよね。それで今のお仕事は全部あの二人が管理してくれてるの」
そうだというのだ。
「これまではあたし達自身でやってたけれどね」
「具体的には私が」
張宝は餃子を食べている。海老蒸餃子だ。
「やってたのよ」
「しかし今では専属マネージャーが来てくれるまで、ですか」
「凄い躍進ですよね」
「まだまだこれからよ」
張角は満面の笑顔で言う。そこで胸が揺れる。
「私達は漢以外の国にもデビューするわよ」
「はい、私達はいつもです」
「貴女達についていきます」
「不束者ですが宜しく御願いします」
「有り難う。それじゃあね」
張飛はにこにことしたまま三人に話す。
「三人共これからはね」
「はい、これからは」

「一体」
「何でしょうか」
「お食事の時はいつも一緒に食べましょう」
そうするというのである。
「それはいいかな」
「えっ、お食事をですか」
「今だけではなくですか」
「いつもですか」
「ええ、そうよ」
そうだというのであった。
「だって私達の護衛役よね」
「はい、そうです」
「その通りです」
このことは忘れていなかった。三人は真面目な顔で話す。

# 第三十一話　張三姉妹、書に気付くのことその四

「ですから。何があろうともです」
「私達は貴女達を御護りします」
「ですから御安心下さい」
「だからよ」
また言う張角だった。
「御飯の時も私達と一緒だったらいいわよね」
「はい、言われてみれば」
「その通りです」
「じゃあ決まりね。三人共食事はいつも一緒だよ」
「仲良くやろうね」
「宜しく」
張梁は右目をウィンクさせて、張宝は静かに言った。
「あたしも友達は多い方がいいしね」
「人は大いに限るわ」
「私達を友とは」
「何と有り難い御言葉」
三人は三姉妹のその飾り気のない親しい言葉に感動を覚えた。
「では私達これからです」
「張角様達を御護りします」
「何があっても」
こうしてであった。三人は三姉妹と食事を常に共にするようになった。そしてであった。
張角は三人に問うてきた。
「あのね」
「はい」
「何でしょうか」
「三人共真名は何ていうの？」

このことを問うのであった。
「これからはお互いにそれで呼び合いましょう」
「何と、真名で」
「私達をそこまで」
「そこまでして下さるのですか」
「勿論私達も真名で呼んでね」
張角は左目をウィンクさせている。
「もうファンの皆からそう呼ばれてるけれどね」
「だからいいわよ」
「それで御願いね」
張梁と張宝も言う。これで決まりだった。
「それではです」
「言わせてもらいます」
こう前置きしてだ。三人はそれぞれその真名を名乗るのだった。
「心水です」
程遠志が言った。
「宜しく御願いします」
「明命です」
？茂も名乗った。
「以後はこの真名で」
「澄日です」
最後に下喜だった。
「それでは」
「わかったよ」
張梁が頷いた。
「それじゃあね」
「はい、それでは」
「天和様、地和様、一和様」
「これからも」
こうして互いに真名で呼び合うことにもなった。彼女達お互いに

とってだ。非常に頼りになる仲間達と出会い友となったのであった。
そしてだ。燕都のコンサートはだ。三人と彼女達が率いる親衛隊の面々が舞台を警護してだ。これまでにない統制を見せているのであった。
「うわあ、凄いね」
「そうね」
「もう喧嘩はないわね」
三姉妹は熱気はこれまで以上だが整然とした舞台を見て素直に驚いていた。
「こんなのってね」
「ええ、今までなかったわ」
「凄く安心できるわ」
三姉妹は舞台の上からこの状況を見ている。そうしてであった。
「これならね」
「そうね、歌に専念できるわ」
「踊りにもね」
こうして三人で歌って踊ってだった。舞台はこれまで以上の成功だった。
「予想以上ね」
「そうね」
バイスとマチュアはその舞台の夜に夜空の下で二人で話していた。

## 第三十一話　張三姉妹、書に気付くのことその五

「まさかここまでなんて」
「ええ」
「思わなかったわ」
まずはこうそれぞれ話すのだった。
「あの三人が加わったこともね」
「大きいけれどそれ以上にね」
「そうね。あの三姉妹」
「予想を超えてるわ」
二人が主に話すのは三姉妹についてであった。彼女達だ。
「そのカリスマ性、ね」
「実際大平要術の書がなくてもね」
「そうね。成功していたわね」
「それは時間の問題だったわ」
三姉妹の能力も見極めていた。それは確かだった。
「そしてそこにあの書を加えると」
「恐ろしいまでの力を発揮する」
「三人のカリスマ性と」
「歌と踊りの力も加わって」
「それによって」
三姉妹はだ。只カリスマだけではなかった。その本業である歌と踊りもである。やはり只ならぬ力がありそれもまた人を引き寄せているのである。
「恐ろしい力を生み出すわね」
「そしてその力こそが」
「私達をね」
「よお」
ここでだった。何者かが二人のところに来た。

「上手くいってるみたいだな」
「ええ、社」
「その通りよ」
二人は闇の中に出て来たその白い髪の男に対して告げた。
「予想以上よ」
「あの三姉妹はね」
「正直どうかって思ったんだけれどな」
ここで白い髪の男はこんなことを言った。
「あの三人はな」
「野心がないからなのね」
「無邪気だし」
「ああ。人間としちゃ只の女の子だからな」
三姉妹の人間性もよくわかっていた。
「自分達が有名になって人気者になりたいだけだからな」
「けれどそれでもね」
「そのカリスマはね」
「歌と踊りもね」
「ああ、凄いな」
男はこのことも認めた。
「思っていた以上だな」
「へえ、あんたがそう言うなんてね」
「ということは本物ってことね」
「向こうの世界でも間違いないな」
男はまた言った。
「トップアイドルだ」
「そうね。アイドルね」
「あの三人はまさにそれね」
「アイドルは馬鹿にはできないぜ」
男の顔は自然に笑みになっていた。そのうえでの言葉だった。
「さて、それじゃあこれからもだな」

「ええ、そうよ」
「あの三人と一緒にいるわ」
こう答えるバイスとマチュアだった。
「貴方はそれで」
「自分の仕事をってことね」
「そうするさ。シェルミーとクリスもな」
「そういえばゲーニッツも動いているのだったわね」
マチュアがここで言った。
「そうだったわよね」
「ああ、あいつも宜しくやってるさ」
その通りだと。男は答えた。
「あいつの仕事をな」
「それじゃあ私達もね」
今度はバイスだった。

## 第三十一話　張三姉妹、書に気付くのことその六

「楽しくやらせてもらうわ」
「そうしな。この世界でこそやるぜ」
「ええ」
「オロチの復活を」
「俺達だけじゃない」
男はさらにだった。その笑みを深くさせて言う。
「刹那もいればミヅキもいるからな」
「あらゆるものが集まりそして」
「この世を塗り変えていく」
「左慈、あの男も考えるものだ」
「ええ、確かに」
「私達と手を組んでくれるし」
彼等にとってもだった。非常に有り難いことであった。そしてだった。
彼等は闇の中で何かを考えていた。そのうえで動いていたのだ。
闇が蠢くことを知っているのはだ。彼等だけであった。
怪物達は今日もまた漢の中を旅をしていた。ここで。
「おのこはいた？」
「ええ、いたわよ」
卑弥呼が貂蝉に対して話す。
「今度はね」
「ええ、誰なの？」
「ギース＝ハワードよ」
この名前を出すのだった。
「そしてウォルフガング＝クラウザーよ」
「あら、豪勢ね」
貂蝉はその名前を聞いて身体をくねくねとさせた。

「それじゃあ今度のダーリンはね」
「そうよ。会いに行きましょう」
「そうね。ところで華陀のダーリンは？」
貂蝉はこんなことも話した。
「今は何処にいるの？」
「面接中じゃないかしら」
卑弥呼はそれではというのだ。
「また新しい人材のね」
「そうなの」
「確か。今度の人は」
卑弥呼は少し考える顔になってのべた。
「庵さんよ」
「あら、彼なの」
「そうよ、彼よ」
こう話すのだった。
「どう？豪勢でしょ」
「ええ。私達のところにも人材が集まってくるわね」
「そうよね」
「人材はいいがだ」
ここで言ったのはだ。刀馬だった。
「御前等の目的はそもそも何だ」
「目的？」
「あら、それの話なの」
「そうだ、それは何だ」
刀馬の聞きたいことはそれだった。
「一体何だ」
「何と言われても」
「ねえ」
ここで二人は顔を見合わせる。
「決まってるじゃない」

「一つしかないわ」
「一つでは、ですか」
命が二人の言葉に問うた。
「といいますと」
「この世界を救うことよ」
「それよ」
「俺には興味のないことだな」
刀馬は二人の話を聞いてまた言った。
「俺はそれよりもだ。あの男を」
「まあまあ」
「そう言わないで」
二人はその刀馬を宥める様にして話した。

## 第三十一話　張三姉妹、書に気付くのことその七

「その中で貴方の意中の相手にも会えるから」
「その時にね」
「本当だな」
「私達嘘はつかないわよ」
「そういうことはしないから」
また言う二人だった。
「誰に対してもね」
「言わないわよ」
「ふん、世界がどうなろうと知ったことではないがな」
幻十郎も言う。
「だが。それでもだ」
「貴方は覇王丸さんよね」
「あの人よね」
「俺がここにいるということはだ」
彼が言うのはここからだった。
「あいつもいる筈だ」
「ええ、そうよ」
「その通りよ」
それで間違いないというのだった。
「だから待っていてね」
「いいわね」
「では暫くは貴様等と旅を続けよう」
幻十郎は納得する言葉で返した。
「こうした旅もいいものだ」
「そうだな」
獅子王もであった。
「この国は中々面白い国だな」

「そうでしょ。幾つかの世界があるけれどね」
「この国がある世界も」
二人はふと妙なことを話しだした。
「私達はこの世界にも来たのよ」
「彼等を防ぐ為に」
「彼等？」
命は今の二人の言葉にふと目を止めた。
「誰ですか、それは」
「そのうちわかるわ」
「そうそう。ただ」
「貴女が思っている人もいるわよ」
「ちゃんとね」
「お父様にお母様も」
命はそれを聞いてだった。考え、そして懐かしむ顔になった。
「この世界にも」
「そうよ。今この世界で起こっていることはね」
「かなり色々だから」
「けれど難しいことは考える必要はないわよ」
「そう、戦えばいいから」
二人も難しいことは言っていなかった。それはだ。
「それじゃあね」
「華陀のダーリンが来たらまた出発よ」
「ふん、いいだろう」
刀馬は二人の言葉を一応だが受けた。
「それではだ」
「ええ、それじゃあね」
「行きましょう、その時に」
こんな話をしていた彼等だった。
三姉妹は親衛隊の三人が来てから舞台を安全に続けていた。しかしだった。

この日はだ。三人は外の騒動を収めに行っていてだ。たまたま舞台の中にいない日もいた。しかしここで、であった。
「おい、押すなよ」
「そっちが押したんだろ」
「何っ?そっちだろ」
「いや、そっちだろ」
押したの押さないのでだ。騒動になろうとしていた。
それに舞台の三姉妹も気付いてだ。最初は張角が言った。
「ちょっと、皆駄目だよお」
「そうよ」
張宝も言う。
「喧嘩したら駄目だよ」
「仲良くね」
しかしであった。騒ぎは大きくなるばかりだった。

# 第三十一話　張三姉妹、書に気付くのことその八

「謝れ！」
「御前が謝れ！」
「何で俺が謝らないといけないんだ！」
「御前が押したんだろうが！」
「いや、御前だろうが！」
こう騒いでだった。どうにもならない状況だった。
それを見てだ。張角がおろおろしながら話しだした。
「ど、どうしよう」
「親衛隊の人達呼ぼう」
張宝はその長姉に落ち着いて言う。
「そうしよう」
「けれどその前に騒ぎが大きくなりそうだよ」
「それはないわ」
やはり冷静な彼女である。
「だから」
「けれど」
「まああれよね」
ここでそれまで黙っていた張梁が言った。
「騒ぎはすぐに収めるに限るわ」
「地和ちゃんもそう思うよね」
「勿論。だからね」
張梁は自分が持っていた声を大きく出させる宝貝でだ。こう言うのだった。
「喧嘩なんて止めようよ」
「おっ？」
「地和ちゃん？」
「私達の歌聴いて。いいかな」

「そ、そうだよな」
「やっぱりな」
彼女の言葉でだ。騒いでいた面々も静かになった。
「俺達その為に来ているんだしな」
「三姉妹の歌を聴く為にな」
「それだったらな」
「ああ、喧嘩なんて止めるか」
「そうだな」
こう話してであった。彼等は穏やかになった。場は静かになった。
しかしだ。それを見た張角と張宝はきょとんとした顔になった。
そうしてそのうえで、であった。張梁を見るのだった。
「あの、地和ちゃん」
「これってまさか」
「うふふ、そうよ」
張梁は姉妹に右目をウィンクさせて応えた。
「ちょっとね。宝貝を使ってね」
「成程、この場合はね」
「使いようね」
「これ位はいいでしょ」
張梁は嵐を止めたまま言う。
「歌以外にもね」
「そうね。これ位だったらね」
「いいわよね」
二人も納得した。こうしてコンサートは再び行われだ。今回も成功のうちに終わった。
その次の日であった。上等なホテルの一等室で寝ている三姉妹のところにだ。扉のドアをノックしてそのうえで声がかけられたのだった。
「あの」

「はい？」
「えっ、随分早いわね」
三姉妹は目をこすりながらその声に応えた。
「一体何かな」
「ファンのお手紙かな」
「それか贈り物かしら」
張宝はこう考えた。その通りだった。
「はい、これです」
「あっ、お饅頭」
「それも中にあんこが入ってるやつね」
「そうね」
三姉妹はホテルの従業員が持って来たその饅頭を見て喜びの声をあげた。
「私これ大好きなのよ」
「私もよ」
「私も」
これは三姉妹共通だった。そうしてだった。
その饅頭を笑顔で受け取る。だが。

# 第三十一話　張三姉妹、書に気付くのことその九

それだけではなかった。次々にであった。
「どうぞ」
「差し入れです」
「ファンの人達からです」
「来ています」
こんな感じでだ。饅頭の箱だけでもう部屋が一杯になってしまった。三姉妹はその饅頭を食べながらだ。そのうえで話をするのであった。
「これって一体」
「そうよね」
張角が張宝の言葉に応えて言う。
「どうしてこんなに一杯来たのかしらね」
「まさか」
ここでだった。張宝はふと気付いたのだった。
「天和姉さんか地和姉さんが間違えて」
「間違えて？」
「どうしたの？」
「宝貝の力をそのままにして何か言ったとか」
「あっ、そういえばだけれど」
ここで気付いたのは張梁だった。
「この前歌の合間にこのお饅頭が食べたいって言った時に」
「やっぱりその時なのね」
「多分ね」
こう話すのだった。そうしてであった。
これでわかった。今回の原因がだ。
「この宝貝って」
「いえ、ひょっとしたら」

「あの書？」
「あの太平要術の書？」
「あの力だったの」
このことに気付いたのだった。
「声を大きくする宝貝だけじゃ大きな声しか出せないし」
「それじゃあまさか」
張梁はこのことにも気付いた。
「あの喧嘩を収めた時も」
「その時も？」
「やっぱり」
「きっとそうよ」
こう姉妹に話す。
「それでなのよ」
「ううん、本当にあの書って」
「凄い力を持っているのね」
このことに気付いたのだった。しかしである。
元々欲がないと言えばなく邪気のない三姉妹はだ。こう考えるだけだった。
「贈り物貰い放題よね」
「そうよね。お客さんの喧嘩も収められて」
「助かるわ」
これで終わらせたのだった。書の力への認識はこの程度だった。
そしてだ。三姉妹は別の話もするのだった。
「このお饅頭食べきれないよね」
「どうしよう」
「そうよね」
あまりにも多い饅頭の処遇のことだった。
「ええと、親衛隊の人達にも分けてあげて」
「ホテルの人達にも？」
「それでもあったら街の困っている人達にも分けてあげて」

そんな話をしてであった。饅頭の処遇について話すのであった。
そしてこの頃劉備一行はだ。
「段々あったかくなってきたよね」
「南に来ていますからね」
孔明が劉備に話す。
「北は寒くて南が暖かいものですから」
「それは知っていたけれど」
「劉備さんはこのことをはじめて実感されたんですね」
「うん。幽州にいただけじゃわからないのね」
「はい、世間は広いです」
笑顔で劉備に話す。

# 第三十一話　張三姉妹、書に気付くのことその十

「特に南蛮はかなり暑いそうですよ」
「そんなになの」
「南蛮って何か色々いるらしいよな」
馬超もここで問うのだった。
「動物もそうだし鳥も」
「あとそこにいる人間も変わっているというが」
趙雲はこんなことを言った。
「同じ顔で増えるというが」
「同じ顔で増えるのだ？」
張飛はそのことを聞いて首を捻った。
「何なのだ、それは」３４
「ううん、南蛮も異民族だしね」
馬岱はこのことを言った。
「私達と風俗とか全然違うよ」
「そうよ。そのことは考えておくべきね」
黄忠も言う。
「漢とはまた違う場所だから」
「南蛮。そこにまさか」
ミナはふと思ったのだった。
「誰かいるかも」
「誰かなのね」
「そう。この世界に来た誰か」
その誰かがだというのだ。
「来ているのかも」
「その可能性はあるわね」
神楽もそのことは否定しなかった。
「やっぱりね」

「そうね。それは」
「それとなんですけれど」
ここで孔明が劉備にまた言った。
「袁術さんのところに行く前にですね」
「行く前に？」
「水鏡先生のところに行っていいですか？」
こう提案したのである。
「そこに。少し寄って」
「水鏡先生のところに？」
そう言われて少しきょとんとなる劉備であった。
「どうしてなの？それって」
「はい、久し振りに荊州に来ましたし」
「あっ、そうだったな」
ここで関羽も言う。
「朱里のいた場所はここだったな」
「はい、生まれは徐州ですが」
「それでも故郷と呼べるのは」
「この荊州です」
そうだというのである。
「そして水鏡先生の屋敷は私にとっては」
「家なので」
「実家も同じです」
劉備にもにこりと笑って話す。
「私の我儘ですけれど」
「いいよ、我儘でもいいじゃない」
劉備は優しい笑顔で孔明に応えた。

# 第三十一話　張三姉妹、書に気付くのことその十一

「誰だって故郷、それに実家は大切だからね」
「それじゃあいいんですか？」
「ええ、勿論よ」
いいというのだった。
「それじゃあ袁術さんのところに行く前にね」
「まずは水鏡先生のところに」
「そういえば水鏡先生の屋敷には」
黄忠がふとした感じで言った。
「新しい弟子が来たらしいけれど」
「新しい弟子？」
「誰なのだ、それは」
馬超と張飛がその黄忠に問い返す。
「朱里みたいにすげえ頭のいい奴か？」
「だとしたら凄いのだ」
「多分そうね。水鏡先生のところに来る娘は皆出来物だから」
「そうなんですか」
孔明はそれを聞いて少し考える顔になった。
「それじゃあそのことも楽しみですね」
「そうなのだ。誰がいても楽しくなるのだ」
「鈴益々ちゃんって人見知りしないからね」
馬岱が張飛に対して言った。
「けれどそういうのっていいと思うよ」
「そうなのだ？」
「少なくとも御主らしくはないな」
趙雲が笑ってその張飛に話す。
「人見知りする御主なぞ考えられるものではない」
「ふふふ、そうね」

「その通りね」
神楽とミナも笑って今の趙雲の言葉に応える。
「そんな鈴々ちゃんはね」
「考えられないわ」
「全くだ。しかしそれがいいな」
関羽も温かい笑顔になっている。
「御前はな」
「何かよくわからないが褒められているのだ」
少なくとも悪口を言われているのではないことはわかった。
「それじゃあとにかくまずはなのだ」
「うん、行こう」
劉備が応える。
「水鏡先生のところにね」
「うむ、そうだな」
「何か楽しみになってきたのだ」
その劉備の言葉に関羽と張飛が応えてであった。
乙女達は旅を続ける。その中でだ。
ふとだ。趙雲が言った。
「我々も多くの場所を旅をしてきたが」
「んっ、どうした？」
「益州はまだだな」
気付いたのはこのことであった。こう馬超にも返した。
「そうだったな」
「ああ、そういえばそうだよな」
馬超も言われて気付く。
「何か山が凄く多いんだってな」
「あそこは山岳地帯よ」
黄忠もこう話す。
「私の知り合いがいるけれどね」
「そうなんですか」

「そうなの。厳顔っていうのよ」
こう孔明に話すのだった。
そんな話をしてそのうえで向かっていたのであった。

第三十一話　　完

２０１０・９・１５

# 第三十二話　孔明、妹を得るのことその一

第三十二話　孔明、妹を得るのこと

この時だ。許昌に恐ろしいものが来ていた。
「か、華琳様！」
「大変です！」
夏侯惇と夏侯淵が慌てふためいて曹操のところに来た。
「恐ろしい魔人が二人」
「この街に殴り込んで来ました」
「魔人？」
それを聞いて眉を顰めさせる曹操だった。
「誰なの、それは」
「はい、一人は下着一枚の辮髪の大男です」
「もう一人は褌に髭のやはり大男です」
「？」
今度は首を傾げさせる曹操だった。
「何、それ」
「わかりません」
「しかしです」
二人は狼狽しきった声でさらに話す。
「恐ろしい速さで街に入りです」
「門を突破しました」
「門を」
それと聞いてまた眉を顰めさせる曹操だった。
「衛兵は何をしていたの？」
「全員叩きのめされました」
「一撃で吹き飛ばされました」
「そんなに強いの」
「恐ろしいまでの強さです」

「まさに怪物です」
二人はさらに言う。
「今夏瞬と冬瞬が必死に食い止めています」
「ですがそれも」
「あの二人なら大丈夫でしょ」
曹操は彼女達の名前を聞いて安心した。
「貴女達もそうだけれど武芸で天下に轟いているじゃない」
「ですが今は」
「まことに」
「木花」
ここでだ。背が高く豊かな胸を持つ淡い茶色の髪を長く伸ばした美女に顔を向けた。今曹操の傍にいるのは彼女だけであった。豪奢な青いビロードの服にはフリルがあちこちに付いている。膝までの水色のズボンにそれに編み上げ靴である。そうした格好である。
「誰だと思うかしら」
「そうですね。門を僅か二人で突破したことを聞くと」
「ええ」
「曹仁殿や曹洪殿だけでも危ないかも知れません」
「あの二人でもというのね」
「はい」
その通りだと答える美女だった。
「ここは曹操軍四天王全員でかからなければ問題かと」
「わかったわ。それじゃあね」
「はい、それでは」
「春蘭、秋蘭」
その四天王の残る二人に声をかけた。
「いいわね」
「まさか四天王全員で、ですか」
「我等で」
「そうよ。その方がいいかも知れないわ」

曹操の顔は真剣そのものだった。
「その怪物が本当なら」
「か、華琳様！」
ところがだった。ここでまた一人飛び込んで来た。
許緒がだ。慌てふためいた顔で来たのだ。
「夏瞬様と冬瞬様が！」
「な、何っ！」
「あの二人がか！」
夏侯惇と夏侯淵が驚きの声をあげる。
「まさか敗れたのか」
「まことなのか」
「それで魔人達が」
そしてであった。その彼等が来たのだった。

# 第三十二話　孔明、妹を得るのことその二

「さあ、曹操さん」
「お話したいことがあるのだけれど」
「くっ、来たか！」
「ここまで！」
二人の武人が思わず身構えた。
「おのれ、華琳様にはだ」
「指一本触らせぬ！」
「あら、つれないわねえ」
「全くよ」
二人の怪物は跳躍した。何丈も跳んでだった。
一気に曹操のところに来て。その唇を。
「さあ、挨拶の接吻を」
「遠慮はいらなくてよ！」
「か、華琳様！」
「華琳様ーーーーーーーーーーっ！！」
誰もが曹操に対して叫ぶ。しかしその操は。
「！！」
ここで曹操の目が覚めた。思わずベッドから起き上がる。
「何なの、その夢は」
「？華琳様」
「どうされたのですか？」
ここで荀？とあの美女がいた。曹操のベッドの中にそれぞれだ。
見れば三人は誰もが一糸纏わぬ姿だ。その姿でいた
「何か夢でも見られたのですか」
「まさか」
「いえ、何でもないわ」
ここでこう返した曹操だった。

「気にしないで」
「そうですか」
「わかりました」
「ところで木花」
曹操は己の左にいるその美女に声をかけた。
「明日また人材が来るそうね」
「はい、そうです」
美女はこう述べた。
「この私荀攸の友人でして」
「木花、貴女のお友達なのね」
「はい、叔母上」
荀攸は微笑んで荀？に返した。
「その通りです」
「あのね、木花」
「何か」
「私を叔母上と呼ぶは止めなさい」
彼女が言うのはこのことだった。
「まだそんな歳じゃないんだから」
「しかし続柄は」
「そういう問題じゃないの」
また返す彼女だった。
「とにかくね。その呼び方はよ」
「では何と御呼びすれば」
「姉上とでも呼んで」
その呼び方でというのだった、
「わかったわね、それで」
「わかりました、それでは」
こんな話をする彼女達だった。そうしてである。
次の日。曹操はまずはまた来た他の世界の者達と会っていた。
「真田小次郎」

「李烈火」
「徳川慶寅」
女と見まごうばかりの美貌の男に凛々しい辮髪の男、そして最後は凛々しい若者だった。李と名乗った男は丈の長い黄色の服に青いズボンだが他の二人はそれぞれ着物を着ている。
その三人を見てだ。曹操は話した。
「貴方達どれも」
「ん？何だ？」
「剣を使うわね」
慶寅のその言葉に応えてだった。
「そこの李は扇子みたいな得物ね」
「おわかりですか」
「大体ね。ただ」
「ただ？」
「貴方、まさか」
小次郎を見ての言葉であった。

## 第三十二話　孔明、妹を得るのことその三

「どうやら」
「曹操殿」
しかしだった。ここで小次郎の声が強くなった。
「そこから先は」
「そうなの」
「はい、そういうことで」
こう言うのであった。
「御願いします」
「わかったわ。ただ」
「ただ？」
「その服を見ると」
見ればその小次郎の着物は袖に独特の模様があった。その模様を見ての今の曹操の言葉である。
「貴方も鷲塚と同じなのね」
「鷲塚殿もここにですか」
「ええ、そうよ」
こう小次郎に話すのだった。
「その通りよ。いるわ」
「左様ですか」
「今陳留に行っているわ」
そこにいるというのだ。
「またすぐに会えるわ」
「鷲塚殿も」
「そうよ。どうやらね」
ここでさらに話す曹操だった。
「貴方の知り合いの者も多いわね」
「左様ですか」

「そうよ。それじゃあ宜しくね」
ここで微笑む曹操だった。
「貴方達三人共召抱えるわ」
「有り難き御言葉」
「それでは」
こうしてだった。彼等も曹操の配下になった。そしてだ。
小柄で八重歯のある金髪の少女だった。黒い半ズボンに緑の上着である。靴は青いブーツだ。
そしてその手には斧がある。かなり大きな斧で槍の様な柄がある。
その彼女がだ。こう名乗ってきたのだった。
「徐晃です」
「徐晃ね」
「はい、左様です」
まだ幼い声で礼儀正しく話すのであった。
「この度荀攸殿の推挙により参りました」
「そう。貴女がね」
「宜しければ曹操様の軍の末席にお加え下さい」
右膝をつき右手の平に左手の拳を当てて述べる。
「御願いします」
「ええ、それではね」
「早速武芸をお見せしますが」
「いえ、それはいいわ」
いいと返す曹操だった。
「それはもう木花から聞いているから」
「左様ですか」
「あの娘と桂花の人選に間違いはないわ」
二人の人物眼には絶対の信頼を置いていた。
「だからね」
「有り難き御言葉。それでは」
「さて、それでね」

「はい」
「貴女の真名を聞かせて」
話はそこに至った。
「何というのかしら」
「歌です」
徐晃は慎んだ声で曹操に述べた。
「それで御呼び下さい」
「わかったわ。では歌」
「はい」
「これから宜しくね」
こう話してであった。曹操のところにまたあらたな人材が加わったのであった。
劉備達は遂に水鏡先生のその屋敷に来た。するとだ。
濃紫の大きな縁のとんがり帽子に同じ色のドレスを思わせる上着と白のワンピースの女の子がいた。ストッキングは白であり翡翠色の髪に弱い感じの緑の目を持っている。
表情は弱々しいがそれでもだ。整い可愛らしい感じである。

# 第三十二話　孔明、妹を得るのことその四

その彼女はだ。一行を見てまずは怯える様子を見せた。
「あわわわわ・・・・・・」
「あわわ？」
「あわわなのだ」
関羽と張飛が彼女の言葉を聞いて言った。
「朱里と違うな」
「けれど似てるのだ」
「あの、私なんですか？」
孔明は二人の言葉に少し困った顔になった。
「私の口癖は確かに」
「まあそれで思ったのだが」
「朱里ははわわなのだ」
こんな話をしてだった。中に入ろうとする。それを見た紫の少女はさらに怯えてであった。屋敷の中に逃げる様に駆け去ったのであった。
それを見てだ。今度は馬超が言った。
「何だよ、あたし達が盗賊みたいだよな」
「そうよね」
馬岱も怪訝な顔で話す。
「何かあれじゃあね」
「別に襲ったりしないけれどな」
馬超は首を傾げさせていた。そうしてだった。
「とにかくだ」
「そうね」
黄忠が趙雲の言葉に応える。
「何はともあれ今からだ」
「お屋敷の中に入りましょう」

「はい、それじゃあ」
孔明が笑顔で応えてであった。
一行は屋敷の中に入った。そして先生のところに行くとだった。
あの女の子がだ。先生にしがみついて震えていた。
「あの人達・・・・・・」
「あら、関羽さん」
先生はまずは関羽に気付いた。
「お久し振りですね」
「はい、こちらこそ」
関羽も微笑んで先生の言葉に応えた。
「お久し振りです」
「それに朱里も」
次に彼女に気付いた。
「来ていたのね」
「はい、先生」
孔明はにこりと笑って師の言葉に応えた。
「用がありここに来ました」
「そうだったのね。見たところはじめての人もいるわね」
「はいっ」
劉備が満面の笑顔で応える。そうしてであった。
一行は先生の歓待を受けた。女の子は先生の左隣に小さく座っている。
そこから動かない。それを見てだった。
張飛は首を傾げさせてだ。こう言うのであった。
「随分と気の弱い女の子なのだ」
「この娘は鳳統っていうのよ」
「鳳統なのだ」
「そうなの。この前屋敷に来た娘でね」
「あっ、お話は聞いてます」
こう返す孔明だった。皆今は円卓に座りそこでお茶を飲みながら

話している。
「それがこの娘なんですか」
「そうなの。貴女の妹弟子ね」
「妹ですか」
その言葉を聞いた孔明の顔が晴れ渡った。
「私の」
「そうよ。妹よ」
「妹、私の」
幼い時のことも思い出す。その時はだ。
「あの時は」
「そうだったわね。貴女妹がいたわね」
「はい、お姉ちゃんもいます」
孔明の姉妹関係についても話される。
「お姉ちゃんは今孫策さんのところにいまして」
「そうだったわね」
黄忠がそれを聞いて述べた。
「諸葛勤さんだったわね」
「はい、この前は会えなかったですけれど」
ここで寂しい顔になる孔明だった。
「今度は会いたいです」
「そうよね。姉妹なんだから」
劉備はその言葉に笑顔になる。

# 第三十二話　孔明、妹を得るのことその五

「会いたいわよね」
「はい、そして今は」
孔明はその晴れ渡った顔で鳳統を見る。するとだった。
鳳統はだ。ここでまたびくりとなった。
「？どうしたの鳳統ちゃん」
「あわわ・・・・・」
孔明は怯えた様な態度の彼女にきょとんとなった。
「後でお料理一緒に作ろうね」
「あら、作るのね」
先生は彼女のその言葉に優しい微笑みを見せた。
「この娘もお料理上手よ」
「そうなんですか」
「そうよ。じゃあ三人で作りましょう」
「わかりました」
こう話してであった。三人は厨房に入った。それを見届けてからだ。
趙雲はだ。少し怪訝な顔になって言うのであった。
「危ういかもな」
「そうね」
神楽が彼女のその言葉に頷く。
「あの娘の態度は」
「朱里は妹弟子の存在を見て喜んでいるがな」
「あの娘自身は」
「怯えている」
鳳統のそのことである。
「只でさえ気が弱いようだしな」
「そうね。孔明ちゃんもあまり気は強くないけれど」

孔明の弱点である。
「あの娘はそれ以上だし」
「そうだな。しかしだ」
ここでまた言う趙雲だった。
「筋はいいな」
「そうね」
今度応えたのはミナだった。
「孔明ちゃんと同じだけね」
「大きくなる」
趙雲の言葉は真剣そのものだった。
「必ずな」
「二人共ね」
「そういえばだけれど」
馬岱もここで言った。
「朱里ちゃんが伏龍よね」
「ええ、そうよ」
黄忠が彼女のその言葉に頷く。
「それじゃああの娘は」
「鳳雛よね」
馬岱は鳳統をこう評した。
「それよね」
「鳳雛か」
「合ってるよね」
こう従姉にも返す馬岱だった。
「朱里ちゃんが伏龍なんだし」
「あの娘は鳳雛なんだな」
「そう思うよ」
「朱里も凄いがあの娘も凄いか」
関羽も話す。
「将来が楽しみだな」

「お料理も楽しみなのだ」
張飛はここでも食べ物だった。
「早く食べたいのだ」
「待つ間何かする？」
劉備はこう皆に提案した。
「おはじきでも」
「稽古でもしないか？」
「そうだな。いいな」
趙雲は馬超のその言葉に頷きだ。ふと悪戯っぽく笑ってこう話した。

# 第三十二話　孔明、妹を得るのことその六

「翠、共に床に入ってだな」
「おい、何の稽古だよ」
「だから夜のだ。私はおなごでもいいのだ」
「おい、ちょっと待て！」
馬超は今の趙雲の言葉に顔を真っ赤にさせて返した。
「あたしはまだそういうことはだな！」
「安心しろ、私もだ」
「おい、それは本当か？」
「実はな。そうなのだ」
見れば趙雲も顔を少し赤らめさせている。
「しかしだ。御主の身体は何時見てもかなりいい」
「あのな、その稽古はやったらマジでやばいだろ」
「そうか」
「そうだよ。やるなら槍にしないか？」
「そうだな。お互い槍だしな」
趙雲にしても馬超にしてもその手に持っている武器は槍である。
形こそそれぞれ違うがそれでもだ。槍なのは事実である。
「そうするか」
「身体を動かせば腹も減るしな」
「うむ、そうだな」
「それなら私もだな」
「私もね」
関羽と黄忠も稽古に入ることにした。
「そういえば紫苑は薙刀も使ったな」
「ええ、そうよ」
その通りだとにこりと笑って返す黄忠だった。
「弓程得意ではないけれどね」

「弓か。私も弓は使うが」
関羽にしてもだ。武芸者のたしなみとして弓を使うのだ。
「だがな。それでもな」
「愛紗は気も放てるからね」
「そうだ。飛び道具はそれで間に合う」
これができるのは関羽だけではない。ここにいる面々では劉備以外は全員できる。誰もがそれだけの域に達しているということなのだ。
「だからな。どうしても弓はな」
「鈴々も使えることは使えるのだ」
だが張飛の顔は曇っている。
「しかしなのだ」
「やはり弓は紫苑さんが一番よね」
馬岱がここでこう言う。
「もう何といってもね」
「ふふふ、有り難う」
「それじゃあ皆で稽古をするのだ」
張飛があらためて提案する。
「それでお腹を空かせるのだ」
「そうね。それじゃあ」
「私達も」
神楽もミナも頷いてだった。皆で行こうとする。しかしだ。
一人だけ取り残される面子がいた。彼女こそはだ。
「あの、私は？」
「あっ、劉備殿」
「忘れていたのだ」
「私武芸はあまり得意じゃないから」
困った顔になって言う。
「その、どうしようかしら」
「お料理を手伝うのは。駄目よね」

馬岱は言ったその傍から気付いた。
「それって」
「そうなの。それはちょっと」
やはり難しい顔での言葉だった。
「朱里ちゃんがやってくれるって言うし。どうしようかしら」
「それならだけれど」
馬岱は少し考えてからまた劉備に述べた。
「劉備さんって蓆とか靴作るの得意よね」
「ええ、それで生きてたし」
「それならそういうの作って時間を潰したらどうかな」
こう提案したのである。
「それならどうかしら」
「そうね」
劉備も視線を上にやって右手の人差し指を顎に当てて考える顔になって述べた。

# 第三十二話　孔明、妹を得るのことその七

「それが一番よね」
「そうでしょ？だからね」
「うん、わかったわ」
劉備はここで頷いた。
「それじゃあそうするわね」
「ええ、それじゃあね」
こうして劉備は蓆や靴を作ることにした。そうしてそのうえで皆それぞれ時間を潰すことにした。そしてその間だ。孔明達は料理を作っていた。
鳳統が野菜を切っているとだった。孔明が出て来て言うのだった。
「あっ鳳統ちゃん駄目だよ」
「えっ・・・・・・」
「そんな切り方じゃ怪我するよ」
こう言ってだった。その鳳統から包丁を取って切りはじめるのだった。
「こうするのよ」
「あわわ・・・・・・」
「こっちは私がやるから」
鳳統が困った顔になっていることには気付かない。
「鳳統ちゃんは向こうでお米洗って」
「そんな・・・・・・」
「先生」
孔明は包丁を切りながら先生に言う。
「次は何をしますか？」
「そうね、次はね」
「・・・・・・・・・」
鳳統は困った顔のまま弱ってお米を洗うだけだった。そんな中で

孔明は先生と笑顔で話す。鳳統はその様子を見詰めるだけしかできなかった。

こうして料理ができた。その味は。

「美味いのだ」

「そうだな、やはり朱里の料理は見事だ」

満足した顔で言う張飛と関羽だった。

「味付けがしっかりしていていいのだ」

「鈴々に合わせているな。いや」

ここで関羽は気付いたのだった。そうしてだった。

「私達全員に合わせてくれたか」

「はい、皆さん稽古をされてましたよね」

孔明はにこりと笑って関羽のその問いに応えた。

「ですから塩分を強くしたんです」

「そうしてくれたのか」

「はい。お料理は美味しく食べてもらうものですよね」

孔明の持論である。

「ですから」

「それでなのか。流石だな」

「とにかく美味しいのだ」

「そういえば鈴々はだ」

関羽はいつも通りガツガツと食べる張飛を見ながら言う。

「料理はできるようになったのか？」

「できるようになっているのだ」

「お握りとお茶漬けなのだ」

その二つだけだと思ったら違っていた。

「あと卵かけ御飯なのだ」

「お握りって中国人食べない筈だけれど」

「そうよね」

ここで神楽とミナが言う。

「確か。冷えた御飯はね」

「食べないのじゃ」
「そうなのだ？」
しかし張飛には自覚がなかった。
「そんなことはじめて聞いたのだ」
「私もだが」
「あたしもだけれどな」
「私もよ」
趙雲に馬超、それに黄忠も言う。

# 第三十二話　孔明、妹を得るのことその八

「冷えた御飯でもだ」
「食べるよな」
「ええ」
「この世界の中国は私達の世界の中国とは違うのかしら」
「そうしたところは」
いぶかしみながら考える神楽とミナだった。
「トウモロコシやジャガイモもあるし」
「唐辛子もあるし」
「そういうのは普通にあるよ」
馬岱もその通りだと話す。
「この国はね」
「そういえば黄河流域でもお米が採れるし」
「そこも私達の世界とは違うのね」
このことを感じ取った二人だった。
そんな話をしながら皆で食事を食べる。ここでだった。
先生がだ。孔明を見ながら笑顔で話す。
「朱里はどんどん料理が美味しくなるわね」
「有り難うございます」
孔明はその先生の横で笑顔になる。そして鳳統は俯いている。実に対象的だった。
そしてだ。次の日には。
鳳統は厨房にいる先生の袖を引っ張って言うのだった。
「あの、先生」
「どうしたの？雛里」
「今日は」
「あっ、そうだったわね」
先生も鳳統に言われて思い出した顔になる。

「今日は山に行って薬草を摘む日だったわね」
「一緒に」
先生を見上げて御願いするのだった。
「だから」
「けれどね」
しかしであった。ここで先生は言うのだった。
「今日は駄目なの」
「駄目って・・・・・・」
「お客さんがいるから」
そのお客さんが孔明達であることは言うまでもない。
「だから今はね」
「そんな・・・・・・」
「いい娘だから聞き分けて」
母親の顔で鳳統に言う。
「わかるわよね」
「あうう・・・・・・」
「あっ、それなら」
丁度その場にいた孔明がここで言ってきた。
「私が一緒に行くわ」
「えっ・・・・・・」
「そうね、朱里が一緒ならね」
先生は彼女の申し出を聞いて穏やかな笑顔になる。
「御願いできるかしら」
「はい、わかりました」
明るい顔で応える孔明だった。そうしてだった。
鳳統に顔を向けてだった。彼女に問うたのだ。
「鳳統ちゃん、それでいいよね」
「私は・・・・・・」
「じゃあ行こう」
俯いている彼女の気持ちは気付かないうちにの言葉だった。

「一緒にね」
「うう・・・・・」
こうしてであった。孔明は鳳統と一緒に薬草を摘みに向かった。
その時だった。
微笑んでだ。そうして呟いた。
「妹、かあ」
鳳統についてこう考えていた。しかしであった。
その鳳統はだ。暗い顔であった。その顔で孔明の後ろについて行っていた。その姿は今日も外で稽古をしている関羽達にも見えた。

# 第三十二話　孔明、妹を得るのことその九

最初にだ。馬岱が言った。
「あれっ、鳳統ちゃんって」
「そうなのだ。何か暗いのだ」
彼女と槍を交えている張飛も話す。
「孔明と一緒にいるのに」
「だからなのかな」
ここでふとこんなことを言う馬岱だった。
「若しかして」
「馬鹿言え、姉貴分だぞ」
馬超はこう考えていた。
「それで何でそんな風になるんだよ」
「いや、わからんぞ」
だがここで趙雲が言った。
「それはな」
「それは？」
「そうだ、どうも孔明は今はしゃいでいる」
彼女はこのことに気付いていたのだ。はっきりとではないがだ。
「それで鳳統は除け者にされている感じだからな」
「そうね。朱里ちゃんには悪気がなくてもね」
黄忠も言う。
「自然とそうなっているかもね」
「だとすれば問題だな」
関羽も青龍偃月刀を動かすその手を止めて述べた。
「朱里にとっても鳳統にとっても」
「じゃあちょっとついて行くのだ」
張飛がこう言った。
「鈴々も行ってそれで仲直りさせるのだ」

「この場合は仲直りじゃないんじゃないかしら」
神楽が今の彼女の言葉に首を傾げさせる。
「ちょっと」
「そうなのだ？」
「親密にさせることよね」
「そうね。けれど」
ミナはここで他の面々とは違う考えを述べた。
「安心していいわね」
「安心していい」
「どうしてなの？」
「それは」
「二人共。悪い気配は感じていないわ」
そうだというのである。
「だからね。私達は動かなくていいわ」
「そうなのかな」
「安心していいのかしら」
「本当に」
「そうね。私もそう思うわ」
今日は皆と一緒に稽古をしている劉備はミナの話に頷いた。
「ここは孔明ちゃんと鳳統ちゃんに任せよう」
「それでいいのだ？」
「ここは」
張飛も関羽も柳眉の今の言葉には複雑な顔になった。
「何かそれだったら」
「私達はここに残るが」
「そうね、ここはね」
劉備は笑顔になった。そうしてであった。
こう皆に提案した。
「二人が帰ったらその時はね」
「うむ」

「何をするのだ？」
「皆でお風呂に入ろう」
これが劉備の提案だった。
「それでどうかしら」
「お風呂か」
「それを皆でなのだ」
「ええ、そうよ」
そうしてだった。また話すのであった。
「皆でね」
「ううむ、どういうことかわからないが」
「とりあえずそうするのだ」
皆いぶかしむながらそのうえで劉備の言葉に頷くことにした。そうしてだった。

# 第三十二話　孔明、妹を得るのことその十

彼女達は今は二人を待つだけだった。そしてその二人は。
薬草を摘んでいた。そこでだ。
孔明は上機嫌で傍に立っている鳳統に話していた。
「ねえ鳳統ちゃん、これがね」
「・・・・・・・・・」
黙っている彼女には気付かない。
「ペニシリン草でこれがインシュリン草で」
「・・・・・・・・・」
「物凄い効用があるのよ。だからね」
「知ってる」
「そう、知ってるの」
「全部知ってる」
立ったまま孔明の方を見ない。
「全部」
「そうよね、鳳統ちゃんもお勉強してるもんね」
「だから」
そしてだった。公明にこう言うのだった。
「言わなくていい」
「そうなの。だったらね」
孔明はここで上を見た。太陽が中天にある。それでだった。
弁当箱を出してだ。鳳統にこう申し出た。
「お弁当食べない？」
「お弁当・・・・・・」
「一緒にね。私が作ったんだけれど」
「いい」
「いいって」
「持ってるから」

だからだというのだ。
「私もお弁当持ってるから」
「そうなの・・・・・・」
「構わないで」
そしてだった。鳳統は孔明に対して告げた。
「私に構わないで」
「えっ・・・・・・・」
「嫌い・・・・・・」
山ではじめて孔明の方を見て告げた。
「大嫌い！」
「えっ、鳳統ちゃん・・・・・・」
嫌いと告げるとだった。鳳統は孔明の前から駆け去ってだ。帰ろうとする。
「待ってよ、鳳統ちゃん！」
しかし鳳統は待たない。そうして橋に来た。かつて孔明と張飛が通ったその橋をだ。
その橋に来た。孔明はここで追いついた。
「鳳統ちゃん、待って！」
また鳳統に対して言う。
「私が悪かったらなおすから！」
彼女にしてもだ。どうして鳳統に嫌いと言われたかわからなかった。それで狼狽した顔になってだ。彼女に対して言うのだった。
「だから。待って！」
「待たない。待たなくていい」
しかし鳳統も聞き入れない。
「もう私に構わないで」
「そんな・・・・・・」
「いいから」
あくまでこう言う鳳統だった。
「私のことはいいから」

「その橋は」
孔明はここで橋のことを思い出した。
「気をつけて！」
「知ってるから」
鳳統もこのことは知っていたのだった。
「だから私にはもう」
「そんな、だから」
「あっ！」
鳳統の足元の板が落ちた。腐っていたのだ。
片足が落ちた。そして両足も。
何とか両手で板の場所を掴んで助かった。しかしだった。

# 第三十二話　孔明、妹を得るのことその十一

今にも落ちそうである。落ちればその下は谷底だ。
「あわわ・・・・・・」
「待って、今行くから！」
ここで孔明は前に出た。無意識のうちにだ。
そしてその何とか手で止まっている鳳統のその手を掴んでだ。引き上げようとする。
「ううう・・・・・・」
「そんな・・・・・・」
「今あげるから」
全身に力を入れたあまり目を閉じていた。その中での言葉だった。
それで何とかあげてだった。ことなきを得た。そして二人でだった。
橋を超えたその場所で二人並んで座ってだ。弁当を食べながら話すのだった。
「私ね」
「うん」
「ずっと。色々な場所を盥回しにされてたの」
それが鳳統の過去だった。そうだったのだ。
「親戚のところも。施設も」
「そうだったの」
「けれど。何処も私が何も話さない、動かないって言って」
「邪魔にしたの」
「誰も相手にしてくれなかったし除け者にされて」
俯いたまま孔明に話す。
「それで水鏡先生のところに連れて来られたの」
「私と同じね」

「そうだったの」
「私も。色々な場所を盥回しにされて」
孔明もだった。そうされてきたのだ。二人山の中に並んで座って話す。
「それで先生のところによね」
「うん」
鳳統はさらに話す。
「先生がはじめて優しくしてくれたから」
「それも私と同じなのね」
「貴女が先生と親しくしてるのを見て」
それでだというのだ。
「先生を取られると思って」
「私も。そうなったら」
その場合はというのだった。
「多分。同じ気持ちになってたわね」
「そうなの」
「御免なさい」
孔明は鳳統に対して謝罪した。
「このことに気付かなくて」
「えっ・・・・・・」
「鳳統ちゃんに嫌な思いさせて」
「それは・・・・・・」
「私、浮かれてたの」
そして自分のことを話すのだった。
「ずっとね。妹ができたと思って」
「妹・・・・・・」
「そう、鳳統ちゃんをそう思って」
「そうだったの」
「それに先生に久し振りに会えて」
それもあった。

「それでだったの」
「本当に御免なさい」
鳳統に対して謝罪の言葉を述べた。
「私・・・・・本当に」
「いいわ」
鳳統はその孔明に対してこう返した。
「もう」
「有り難う」
「じゃあこのお弁当食べたら」
鳳統からの言葉だった。
「帰ろう」
「そうね。もう夕方だし」
「皆待ってるし」
それもあった。
「それじゃあね」
こう話してだった。二人で並んで先生の屋敷に帰ったのだった。

# 第三十二話　孔明、妹を得るのことその十二

そして屋敷に帰るとだった。
「おかえりなさい」
「さああ、こっち来て」
劉備と馬岱が二人を出迎えてだ。ある場所に連れて行った。そこは。
「お風呂？」
「どうしてここに」
「いいからいいから」
「今入れたばかりだからね」
劉備と馬岱は笑顔で二人の服を脱がせる。孔明も鳳統もまだ幼い身体をしている。下着は白でそれぞれの白い肌に実によく似合っている。
その下着も脱がされてだ。一糸まとわぬ姿になる。そしてだった。
劉備と馬岱も服を脱いでだ。四人で風呂に入るとだ。
「おお、来たか」
「待っていたのだ」
まずは関羽と張飛だった。そして。
皆いた。そこに。
「ほう、二人共中々奇麗な身体をしているな」
「ああ、肌も白いしな」
趙雲と馬超も言う。
「これは将来が楽しみだな」
「そうだな・・・・・・ってまたそっちかよ」
「だから私はおなごでもだ」
「そのネタはあたしか愛紗だけにしとけ」
「おい、何故そこで私が出る」
三人は風呂場の中で裸のまま言い合う。三人共胸がやけに目立つ。

「全く。大体だな」
「うむ。何だ」
「星も翠も最近特に悪ノリが過ぎるぞ」
「あたしはそんなのしてねえ」
馬超がこう反論する。
「星だろ、問題があるのは」
「いや翠御主もだ」
「あたしは星に振り回されてるだけだっ」
「しかし何だかんだでいつも乗っているではないか」
「乗らせてるのは誰なんだよ」
こういい合う二人だった。そしてだ。
黄忠は笑顔で孔明と鳳統に対して声をかけてきた。無論彼女も全裸である。
「いらっしゃい。待っていたわよ」
「うわ、凄い・・・・・」
「黄忠さんの胸って」
二人は彼女のその胸に唖然となる。
「大きいですね」
「どうやったらそんなに大きくなるんですか」
「そうよね」
劉備も言うのだった。
「黄忠さんの胸って本当にね」
「いえ、劉備さんの胸も」
「確かに」
二人は劉備の胸も見て呆然となっていた。
「大き過ぎます」
「本当に」
「そうかな」
劉備は二人の言葉を受けて自分の胸を見る。そのうえで自分の両胸を触ってみせる。触るとそれだけで弾力がはっきりとわかる。

「そんなに大きい？」
「大きいでしょ」
「私達も人のこと言えないかも」
神楽とミナもいた。
「あまりにも大きくてね」
「目のやり場に困るわ」
「ううん、特に気にしたことはないけれど」
そうしたことへの自覚は乏しい劉備であった。
「とにかくね。孔明ちゃん、鳳統ちゃん」
「はい」
「一体」
「背中流してあげるね」
にこりと笑ってタオルを出してきた。そうしてだった。

# 第三十二話　孔明、妹を得るのことその十三

二人の背中を流す。他の面々も出て来た。
「愛紗も身体を洗うのだ？」
「うむ、そうだな」
関羽は張飛に対して微笑んで返す。
「鈴々、背中を流すぞ」
「鈴々は愛紗の前を洗うのだ」
「いや、それはいい」
関羽は顔を赤らめさせてそれで張飛の申し出を断った。
「前は自分で洗う」
「そうなのだ」
「では私はだ」
趙雲は妖しい笑みを浮かべて馬超に後ろから囁いてきた。
「私自身の身体を使って翠の身体を洗うとするか」
「おい、それやったら完全にまずいだろ」
馬超は顔を真っ赤にさせて言い返す。
「だから御前何で最近あたしにばっかり来るんだ！？」
「気のせいだ」
「気のせいじゃないだろ」
「じゃあ私が洗おうか？」
馬岱は趙雲の援護に出て来た。
「お姉様の身体」
「いいよ、自分で洗うからさ」
「そうなんだ」
「では私は蒲公英の身体を洗うとするか」
趙雲の矛先は馬岱に向かった。
「そうするか」
「御願いします、星さん」

「あら、何か妖しい感じね」
黄忠は自分の身体は自分で洗っている。
「皆何か」
「そうね。どうにもね」
「おかしな感じね」
神楽とミナも話す。二人はまだ湯舟の中にいる。
「それでもね」
「今はこれでいいわね」
「はわわ、これでいいんですか？」
「物凄い状況なんですけれど」
孔明と鳳統は今の状況に赤面することしきりだった。
「それにしても皆さん」
「物凄く奇麗です」
全員髪を解きその上で身体を洗っている。それがとても奇麗だった。
そしてだった。二人はそれぞれ顔を見合わせてだ。こう話すのだった。
「凄過ぎよね」
「本当に」
何時しか意気投合していた。そしてこの日は二人で同じベッドで休んだ。その次の日だった。
「私もですか」
「ええ、卒業よ」
先生が笑顔で鳳統に話す。
「だからね」
「だからですか」
「ええ。劉備さんと一緒に旅をしなさい」
そうしろというのである。
「それにね」
「それにですか」

「そうよ。仕官しなさい」
それもなのだった。
「いいわね、それで」
「仕官ですか」
鳳統にとってはまだ先のことだった。しかしである。
今先生に言われてだ。それを確かなものに感じたのだ。
そしてだ。左隣にいる孔明に顔を向けてだ。先生に話した。
「じゃあ朱里ちゃんとずっと」
「そうよ、ずっと一緒よ」
先生は微笑んで答えた。
「ずっとね」
「わかりました。それじゃあ」
「雛里ちゃん、これからも宜しくね」
孔明は笑顔で鳳統に対して応えた。
「頑張ろうね」
「うん、雛里ちゃん」
「あら、二人共」
ここで先生が笑顔で言った。
「もう真名で呼び合うようになったのね」
「あっ、そういえば」
「そうだな」
劉備と関羽もここで気付いた。
「仲良くなったのね」
「よかったな」
「あっ、確かに」
「そういえば」
二人は言ってから気付いた。
「じゃあ私達これからも」
「ずっと一緒ね」
二人で笑顔で言い合ってだ。にこりと微笑む。鳳統もまた屋敷を

出ることになった。そうしてそのうえで彼女も運命の中に入るのであった。

第三十二話　完

２０１０・９・１６

# 第三十三話　孫策、山越を討つのことその一

第三十三話　孫策、山越を討つのこと

孫策は建業を発った。その時にだ。
「じゃあ留守番御願いね」
「はい」
「それでは」
張昭と張紘が彼女の言葉に応える。
「留守はお任せ下さい」
「ではこれよりですね」
「ええ、今度こそ山越を討つわ」
孫策のその顔が強いものになる。
「そして山越を討てばね」
「その功績で朝廷より交州の牧の座も貰えるでしょう」
「ですから」
「ええ、何としてもね。後は」
孫策は今度は孫尚香を見る。彼女は二張の間にいる。
「小蓮も御願いね」
「はい、無論です」
「小蓮様は我々が御護りします」
「何で私も出陣しないのよ」
孫尚香はこのことが不満で仕方がないらしく腕を組んでむくれた顔になっている。
「私だって孫家の娘なのに」
「小蓮様、我儘はいけません」
「その通りです」
早速二人に怒られる。
「留守役は大事なのですよ」
「それにです。御政務もありますし」

「わかってるわよ」
むくれた顔のまま返す孫尚香だった。
「そんなことは」
「はい、それでしたら」
「早速政務に」
「ええっ、もうなの！？」
孫尚香は政務と聞いて困った顔になった。
「私政務嫌いなのに」
「ですから孫家の方ならです」
「御政務は必ずしなければなりません」
「ううん、何でこうなるのよ」
「ふふふ、大喬と小喬も残しておくから」
二人も置くというのだった。
「それじゃあね」
「姉様、早く帰って来てね」
孫尚香は長姉にこうも話した。
「御願いよ」
「わかってるわ。じゃあね」
「蓮華姉様もね」
孫尚香は孫権に言うことも忘れていなかった。
「絶対によ」
「わかっているわ。それで孫尚香」
「何？」
「貴女も無茶をしたら駄目よ」
孫権はこう妹に言った。
「いつもみたいにお転婆は慎みなさい」
「ううん、姉様までそう言うの」
「遊びたい年頃なのはわかるけれど」
こうも言う次姉だった。
「それでもよ。出来るだけ静かにしていなさい」

「わかったわよ。じゃあ弓の稽古だけにしておくわ」
「政務も忘れないようにね」
「わかってるわよ」
「まあ蓮華、戒めはこれ位にしてね」
孫策は孫権に顔を向けて微笑んで述べた。
「行きましょう」
「ええ、姉様」
孫権は微笑んで姉の言葉に応えた。
「それでは」
「貴女も出陣は久し振りだったわね」
「あの時は母様がおられたけれど」
「懐かしいわね。その時が」
「はい。ですが今はです」
「私達がやるのよ」
孫策がこう妹に返す。
「だからいざ」
「山越に」
こう話してであった。孫策は軍を率いて南下する。川を船で下りそうしてだ。一路山越に向かうのだった。

# 第三十三話　孫策、山越を討つのことその二

孫策に仕える主だった面々が揃っている。軍師はやはり彼女だった。

周瑜はだ。船の甲板に出て行く先を見ている。そうして傍にいる陸遜に対して言うのであった。

「ねえ穏」

「はい。何でしょうか」

「今回の出陣こそはね」

「そうですよね。何とか山越をやっつけないといけませんよね」

「そうよ。一度の出陣で終わらせるわ」

腕を組み前を見据えたまま言う周瑜だった。

「絶対にね」

「はい。それで飛翔さんと藍里さんにはずっと用意してもらいましたし」

「それに別の世界から来た面々もね」

彼等の名前も出て来た。

「皆来てもらったしね」

「かなりの数の人達ですよ」

「ええ、彼等も頼りにしているわ」

こう話すのだった。

「実際ね」

「ちょっと癖のある人達が多い気もしますけれど」

「どうも揚州に来る面々はその様だな」

ここでこう言う周瑜だった。

「他の陣営に比べてな」

「何か董卓さんのところは壮絶みたいですね」

「そうだな。キム＝カッファンとジョン＝フーンの二人がな」

「それは恐ろしい恐怖政治を敷いているとか」

「その二人のせいで今董卓のところにいる他の世界から来た者達は地獄を見ているそうだが」
「私達のところとは全く違いますう」
陸遜は穏やかな声だがそれでも言うのだった。
「私達のところは」
「雪蓮はそういうことはしないからね」
「ですよね。蓮華様もとてもお優しい方ですし」
「そう、二人共心がいいから」
孫姉妹は決して悪人ではないのだ。
「だからね」
「そうですよね。それでなんですけれど」
「うむ、山越に着いたらな」
「早速戦いですね」
「穏、策は考えているかしら」
周瑜は陸遜に顔を向けて問う。
「それは」
「とりあえずは幾つかは」
「そう。後は飛翔と藍里の話を聞いてね」
「そうしましょう」
こう話をしながら南下していく。その時別の船中ではだ。
周泰がだ。あたふたと狼狽していた。何故かというと。
「あ、あの祭さん」
「そうです、あまりにもこれは」
周泰だけでなく呂蒙もだ。あたふたとなっていた。
「飲み過ぎですよ」
「そうです。船の中なのに」
「船の中だからどうだというのじゃ」
黄蓋は平然とした顔でその二人に返す。
「お酒ちゃんはわしに飲んで欲しいと言っておるのじゃぞ」
「いえ、お酒はそんなこと言いませんよ」

「そうですよ」
あくまでこう言う二人だった。
「ですから。船酔いしますから」
「あまり飲まれては」
「御主等それでも揚州の者なのか？」
黄蓋は眉を顰めさせて二人に問うた。
「船酔いを気にするなどとは」
「祭様はそれでよくても」
「あの、他の方々は」
「あっ、俺？」
「俺か？」
漂とダックもいた。黄蓋と同じ席に座ってだ。そのうえで話している。
「俺がどうしたんだ？」
「別に何ともないぜ」
そしてだ。他の面々もいた。
赤髪の女にモヒカンの黒い肌の大男、茶色の髪をオールバックにした巨漢、白い髪の青年、金髪の眼帯の男、そして辮髪の男だった。
「ヴァネッサ、セス、マキシマ、ケーダッシュ、ラモン、そして鱗じゃったな」
「ええ、そうよ」
まずは赤髪の女ヴァネッサが応えた。
「宜しくね」
「御主等気に入ったぞ」
黄蓋は酒を飲み続けながら上機嫌で話す。

# 第三十三話　孫策、山越を討つのことその三

「酒と腕の強い者は好きじゃ」
「そうか」
鱗が応える。彼は辮髪だ。
「それは何よりだ」
「そういうこっちゃ。それでは」
「ああ」
セスが応える。
「今度の戦いだな」
「頼むぞ。わし等は先陣じゃ」
「はい、祭様がです」
「そして第二陣はです」
周泰と呂蒙また話す。
「私達が務めます」
「宜しく御願いします」
「頼んだぞ。さて、そういえばじゃ」
ここでまた言う黄蓋だった。
「藍里はかなり残念がっていたそうじゃな」
「はい、妹さんに出会えなくて」
「それで」
それが理由だというのだった。
「そのことをかなり残念がっているそうで」
「今はどうかわかりませんが」
「気持ちはわかるのう」
黄蓋は諸葛勤のその気持ちを汲み取って述べた。
「しかしじゃ」
「はい、それでもです」
「また機会がありますから」

「諸葛亮じゃったな」
ここで黄蓋はその妹の名前を出した。
「まだ子供じゃがかなりの傑物じゃったな」
「冥琳様が認められる程の方です」
「そこまでの方だと」
「それだけの人材、揚州に欲しいのう」
黄蓋は酒を飲みながら話した。
「今は各地を歩き回っているそうじゃな」
「はい、袁紹殿の次は曹操殿のところに」
「そして袁術殿のところにと」
「ややこしい面子ばかりじゃな」
黄蓋はその顔触れを聞いてふとした感じで述べた。
「特に袁紹に曹操はのう」
「はい、どちらも人間的に危ういものがありますね」
「特に袁紹殿は」
呂蒙は袁紹の方を問題視していた。
「実力はあるのに妙に劣等感が強く。歪な行動をさせています」
「いや、曹操もあれで危ういぞ」
黄蓋は曹操も同じだけだというのだった。
「宦官の家の娘ということを気にし過ぎて気負い過ぎておる」
「確かに。そういえば」
「曹操殿もですね」
二人は黄蓋のその言葉に気付いた。そしてだった。
「そこが孫策様と違いますね」
「安定感のなさもあるかと」
「あの二人とは距離を置きたいのう」
これが黄蓋の本音だった。
「袁術とは国境の問題があるしのう」
「はい、それも解決しないと」
「いけませんし」

「全く。世間はややこしい話ばかりじゃ」
黄蓋はまた言った。
「全く以てな。そしてじゃ」
「そして？」
「そしてといいますと」
「今からそのややこしい話を一つ終わらせることになるな」
こう言ったのだった。

## 第三十三話　孫策、山越を討つのことその四

「今からのう」
「そうですね。山越をですね」
「討伐して」
「うむ、我等の長年の仇敵よ」
揚州の面々にとってはまさにそうであった。
「先代孫堅様の時からのう」
「大殿の御無念、ここで」
「是非晴らしましょう」
「あれはわしも不覚じゃった」
黄蓋の顔が怒りで歪んだ。
「わしが御傍にいながら。石弓を防げなかった」
「いえ、あれは」
「私達も」
周泰と呂蒙もそのことには申し訳のない顔になった。
「迂闊でした」
「まさか山越が石弓を持っていたなど」
「それじゃ」
黄蓋は呂蒙のその石弓のことについて話した。
「前から妙に思っておったのじゃが」
「そのことですね」
「そうじゃ。亞莎よ」
「はい」
「山越に石弓はあったかのう」
「いえ、ありません」
言葉は現在形であった。
「今もです」
「そうじゃな。山越にはそうしたものはない」

「我が国にはありますが」
「だとすればあれは何じゃ」
黄蓋は酒を飲むその手を止めて言うのだった。
「あの石弓は。そして」
「そして？」
「そしてといいますと」
「それを放ったのは誰じゃ」
こう言うのであった。
「しかも石弓には毒まであったのじゃぞ」
「はい、大殿は石で受けた傷から毒も受けていました」
「それもかなり強い毒でした」
「わしは山越とは幾度も戦ってきた」
伊達に古くから孫家に仕えてきているわけではないのだ。蓋は孫家の宿将としてだ。その先代の孫堅の頃から戦場にいたのである。
「しかし毒を使ったことはなかった」
「一度もですか」
「では」
「山越ではないじゃろうな」
これが黄蓋の見立てだった。
「孫堅様を殺めたのは」
「では一体」
「誰なのでしょうか」
「それはわからん」
黄蓋も首を捻ることだった。
「しかしじゃ」
「はい、山越はですね」
「我等の軍門に下しましょう」
「そしてあの者達もわし等の民とするぞ」
「はい、そして交州も手に入れましょう」
「そちらは朝廷が認めてくれますし」

ほぼ規定事項だった。山越を倒せばだ。その褒美として交州のことも任せられるということがもう決まっていたのである。袁紹の時と同じだ。

「それだからこそ」

「何としても今回こそ」

「さて、雪蓮様の戦はお見事なものじゃ」

その能力は既に天下に知られていることだった。

「わし等もやろうぞ」

「ああ」

ケイダッシュが黄蓋の言葉に応えた。

「わかっている。やらせてもらう」

「うむ、御主等にも期待しておる」

黄蓋は彼等のその顔を見て笑顔になった。

# 第三十三話　孫策、山越を討つのことその五

「是非やろうぞ」
「ああ、やらせてもらう」
「当然俺もだ」
マキシムも言ってきた。
「食べさせてもらっているだけはな」
「はい、皆で頑張りましょう」
「是非共ですよね」
周泰と呂蒙は彼等の言葉に明るさを取り戻した。
「そして平和な国をですね」
「築いて」
「いい娘達ね」
ヴァネッサはそんな彼女達の言葉に目を細めさせた。
「真面目で純真で。気に入ったわ」
「い、いえ私達はそんな」
「別に」
褒められて顔を赤らめさせる二人だった。
「ただ。前から思っているだけで」
「深くは」
「それが純真だというのよ」
ヴァネッサの目は細まったままである。
「その清らかさ大事にしておいてね」
「大事にですか」
「そうなんですか」
二人は顔を赤らめさせたままだった。そんな話をしてだ。
遂に山越に着いた。すぐに全軍船を下りる。
そしてだ。孫策は全軍の先頭に立って話した。
「さて、それじゃあすぐにね」

「はい」
甘寧が孫策の言葉に応える。
「ではすぐに」
「そうよ、一気に本拠地を攻撃するわよ」
実に孫策らしい言葉だった。
「いいわね」
「はい、ところで姉様」
孫権が姉に言う。
「飛翔と藍里ですが」
「前線にいるのね」
「砦にいます」
いるのはそこだというのだ。
「二人はどうされますか」
「そうね。二人にはね」
「はい」
「蓮華、貴女が向かって」
そうしてくれというのである。
「それでね」
「二人と共になのね」
「別働隊を率いて山越を攻撃して」
これが孫策の作戦だった。
「私は主力を率いて向かうから」
「二手に別れて同時に」
「ええ、そうよね冥琳」
孫策はここで周瑜に顔を向けた。
「今回の作戦は」
「はい、まずは孫策様が敵の本拠地を攻撃されます」
「その後は」
孫権はその周瑜に問うた。
「どうするの？私の部隊は」

「それによって本拠地を追い出された山越の軍に攻撃を仕掛けます」
「砦から出てなのね」
「そうします。これは敵が本拠地に止まっている場合です」
その場合というのだ。
「そしてうって出た場合はですが」
「その場合は策は二つあります」
今度は陸遜が話すのだった。
「まず孫策様の方に敵が来た時はです」
「私が攻めるのね」
「はい、そうです」
そうであると孫権に話す陸遜だった。
「そして蓮華様のおられる砦に攻め寄せた場合はです」
「私が攻めるのよ」
孫策が微笑んで話す。

# 第三十三話　孫策、山越を討つのことその六

「そうするから」
「わかりました」
孫権は姉のその言葉に頷いた。
「では私はすぐに砦に」
「貴女には甘寧に呂蒙を預けるわね」
その二人だというのだ。
「主力は私が率いるわ」
「はい、それでは」
「あと別の世界から来た面々はね」
孫策は彼女達のことも忘れていなかった。
「ダックとタン、それにビッグベアに」
「あの三人ですか」
「三人を預けておくわ」
こう話すのだった。
「それでどうかしら」
「はい、それでは」
孫権は右手を月に、左手を日にして打ち合わせて応えた。
「その様に」
「これは難しい作戦ですけれど」
陸遜は実に呑気な口調で話す。
「けれどお二人ならできますよお」
「それはどうしてなの？」
「だって雪蓮様と蓮華様は御姉妹じゃないですか」
彼女が話すのはこのことからだった。
「それもとても仲のいい」
「そうね。蓮華は少し堅苦しいけれど」
「姉様は少し奔放に過ぎます」

そうは言っても微笑み合う二人だった。
「それでもね。私も蓮華は好きよ」
「私も。雪蓮姉様は」
「だからですよ。息がぴったり合ってますから」
陸遜はこのことを指摘した。
「御二人のその息が合っていることがこの作戦の秘訣なのですよ」
「そういうことです」
周瑜も言う。
「蓮華様、別働隊はお任せしました」
「わかったわ」
孫権は周瑜のその言葉に頷いた。こうしてだった。
孫策は主力を率いて山越の本拠地に向かう。そして孫権は別働隊を率いて太史慈達が築いた敵の本拠地の傍にある砦に入った。そしてそこでだった。
「久し振りね、二人共」
「はい、蓮華様」
「お久しゅうございます」
その太史慈と諸葛勤が孫権に応える。三人共笑顔だ。
「策のことは御聞きしております」
「ではその様に」
「はい、それで行きましょう」
孫権に同行している呂蒙が二人に話す。
「そして勝ちましょう」
「ううん、亞莎はいつも通り真面目ね」
「そうね」
「そ、そうですか？」
「その真面目さがね」
「いいのよ」
太史慈と諸葛勤も彼女のその性格には好意を持っていた。
「その真面目さと賢さがあればね」

「きっと素晴しい軍師になるわ」
「いえ、私はそんな」
謙遜して顔を赤らめさせ呂蒙だった。
「とても。そんな軍師には」
「そういう性格がいいのよね」
「そうそう」
こう砦の中で話すのだった。砦は木で作られていて堅固である。
そこに彼女達や兵士達がいていい意味での活気に満ちていた。
彼女達はこんな話をしてだ。戦の用意をしていた。そこにだ。
「来たのね」
「はい」
「来ました」
甘寧と太史慈が孫権に応える。

# 第三十三話　孫策、山越を討つのことその七

「敵の数三万」
「それだけです」
「そう、わかったわ」
孫権は二人の話を聞いて頷いた。
「山越の兵は四万、そのうちの三万ね」
「対する我等は一万です」
「それで砦にいますが」
「守るには充分ね」
孫権はこう決断を下した。
「そしてその間にね」
「はい、雪蓮様が来られて」
「そうして」
「作戦通りね。それで行きましょう」
「はい、それじゃあ僕達もです」
「やらせてもらうぜ」
閉丸と骸羅が来て言う。
「山越は確かに手強いですけれど」
「俺の力見せてやるぜ」
「ええ、御願いね」
孫権は彼等にも笑顔を見せて言った。
「この戦い、負ける訳にはいかないから」
「ええ、揚州の人達の為にもですね」
「絶対だな」
「そう。そして降伏させた山越の民はね」
孫権も孫策も彼等の戦後を考えているのだ。
「私達の民にするの」
「つまり取り込むってんだな」

「そういうことじゃな」
今度はダックとタンが言ってきた。
「皆殺しにするとかじゃねえんだな」
「そうなのね」
「それはしないわ」
孫権はそうしたことは否定したのだった。
「彼等の揚州への侵攻を止めて私達の民を増やしたいだけだから」
「それは普通だしな」
「そうじゃな」
この時代ではということだった。ダック達もそれは理解していた。
そしてであった。そのうえでだ。
「よし、じゃあ姫様よ」
「孫権でいいわ」
こうビッグベアに返す。
「敵が来たからお願いね」
「ああ、派手に暴れさせてもらうぜ」
彼等は城門を精鋭達と共に出た。そうして門で敵を待ち受ける。
山越の兵達が殺到して来る。すぐに砦を囲む。
「来たわね」
「はい」
「はじまりですね」
「全軍迎撃用意！」
孫権も剣を抜いた。そうしてだった。
自ら砦の壁の上に立ちだ。敵を迎え撃つ。
敵兵は弓を放ち壁に梯子をかけようとする。しかしそこにだ。
「レディーーーーー、ゴーーーーー！！」
ビッグベアが最初に突撃を浴びせた。それで敵兵達が吹き飛ぶ。
続いてダックとタンがだ。その拳を振るう。
「よし！暴れるぜ！」
「わしも身体を動かすとしようかのう」

回転して体当たりし前に出て拳を放つ。彼等も山越の者達を倒していく。
そこに閉丸と骸羅も来る。彼等の戦闘力もかなりのものだ。
その思わぬ攻撃を受けてだ。山越の者達も狼狽する。
「な、何だこの連中は！」
「かなり強いぞ！」
「まず連中を何とかしろ！」
「ああ、今行く！」
こんな話をして向かう。しかしだった。
彼等は強い。まさに一騎当千だった。そしてそのうえだった。

# 第三十三話　孫策、山越を討つのことその八

「今よ」
「はい！」
「それでは！」
孫権が指示を下す。それによってだ。
砦の壁に陣する孫権軍が一斉に弓矢を浴びせる。それが山越軍を襲う。まるで雨の如き攻撃を受けてだ。彼等は浮き足立った。
「糞っ、漢の奴等！」
「今度はとりわけ強いな！」
「そう、強いからこそよ」
孫権はその彼等を見下ろしながら言うのだった。
「勝たせてもらうわよ」
「敵将はあれか！」
「あの青い目の女だ！」
山越達も孫権に気付いた。
「あの女を射ろ！」
「そして倒せ！」
「そうはさせん！」
弓矢が孫権に向かって放たれる。しかしであった。
その彼女の前に甘寧が出てだ。その手に持っている剣で弓矢を全て叩き落す。見事な剣の腕である。
「蓮華様には傷一つつけさせぬ！」
「何っ、またか！」
「あの女将軍、あの！」
ここで山越兵の一人が言う。
「江南の鮫か！」
「甘寧か！」
「そうだ、私が甘寧だ！」

自らもこう名乗る。
「この剣を恐れぬならば来い！」
「抜かせ、今こそだ！」
「その首貰い受ける！」
「絶対にだ！」
こう言って一斉に壁に梯子をかけ登ろうとする。しかしであった。
呂蒙がだ。遠くを見て言った。
「来ました」
「姉上ね」
「はい、来られました」
こう孫権に言うのだった。
「この戦い、これで」
「ええ、勝てるわね」
「ここまでは手筈通りです」
呂蒙は冷静に述べた。
「問題はこれからですが」
「姉上ね」
「雪蓮様は見事勝たれます」
それは呂蒙も確信していた。
「ただ。勝ってからですが」
「そういうことなの」
「はい、敵の本拠地をどうするかですね」
「ええ、それからのことも考えているわよね」
「はい、既に」
「ならいいわ」
孫権は呂蒙のその言葉に頷いた。そのうえで、であった。
戦い続ける。そしてそこにだ。
攻める山越軍の後方からだ。鬨の声があがった。
「さあ、行くわよ！」
孫策が軍の先頭に立ち指示を出す。

「この山を登ってね。一気に討つわよ！」
「了解です！」
「それでは！」
「全軍突撃！」
剣を抜いて兵達に命じる。
「今こそ我等に勝利を！」
「それにしても雪蓮様」
陸遜が孫策のところに来て話してきた。
「山越は相変わらず凄い山ばかりですね」
「そうね。それがねえ」
孫策も苦笑いになる。彼等の周りは緑の木々ばかりである。その山の中を駆け登っているのである。肉体的にかなり辛い戦いであるのだ。

# 第三十三話　孫策、山越を討つのことその九

「山越との戦いでは厄介なのよね」
「そうですよね。けれど今回は」
「ええ。別の世界の面子が来てるしね」
「あの人達の強さはかなりですう」
陸遜はにこにことして話す。
「それにまた新しい人材が来ましたし」
「そうね。我が軍も人材豊富になったわ」
孫策はこのことを素直に喜んでいた。
「ただね」
「ただ？」
「妙と言えば妙よね、やっぱり」
こうも言うのだった。
「ああして色々な面子が私達の世界に来るっていうのはね」
「そうですよねえ。それはどうしても気になりますう」
「まあそれは後で考えてもいいしね」
「はい。じゃあ今は」
「冥琳にも伝えて」
剣を手に言う。
「ここは全軍でね」
「はい、攻撃ですね」
「そうよ。私達もね」
こうして自ら軍の先頭に立ち戦うのだった。そうしてであった。
砦を囲む三万の山越軍を攻撃する。そこには十三やあかりもいた。
「お嬢、無理するなや！」
「アホ！それはこっちの台詞や！」
こう十三に返すあかりだった。
「十三、御前死んだら怒るからな！」

「死んだら怒るって」
十三はあかりのその言葉に首を捻って言う。
「死んだら怒られてもなあ」
「つまり絶対に死ぬなってことや」
「言いたいことはそれか」
「そや」
その通りだというのである。
「わかったな」
「ああ、それやったらな」
十三もわかるというのだ。
「わかるわ」
「そや。しかしこの戦い」
「何かあるか、この戦い」
「今度はおかしなもんは感じへんな」
陰陽師としての言葉だった。
「別にな」
「それはないか」
「ああ、ない」
実際にないと言う。
「ただの異民族との戦いや」
「けれど国自体におかしなものは感じるか」
「この世界の漢にはや」
そうだというのである。
「びんびん感じるで」
「びんびんか」
「がんがんでもええで」
それでもとにかくだ。
「感じて仕方ないわ」
「刹那がここにも来てるんじゃねえだろうな」
漂がここで言った。

「それってまずいだろ」
「刹那だけちゃうかもな」
あかりは目を顰めさせながら述べた。
「他にもうじゃうじゃ来てるかも知れんで」
「じゃあここでの戦いは」
「かなり厄介なものになるな」
「そやろな」
あかりは十三と漂のその言葉に頷いた。
「ここは気合入れていかなあかんな」
「それでまずは」
「この連中に勝つことだな」
「そや。あの孫策さんな」
あかりは孫策についても話した。

# 第三十三話　孫策、山越を討つのことその十

「きっとこの世界で大きな役割を担うで」
「楓達みたいにかあ」
「ああしたことをしてくれるってのか」
「多分な。あの人は絶対に守らなあかん」
あかりは決意も見せた。
「ほなそういう訳でや」
「ああ、やるか」
「女の子の為なら一肌も二肌もってな」
こうした話をしながらだ。彼等も山越の兵達を倒していく。その彼等の活躍もあってだ。孫策軍は山越の軍勢を次第に押してきていた。
そしてだ。その中でだった。黄蓋が弓矢を放つ。
「わしの弓、避けられるものなら避けてみよ！」
こう言いながら攻撃を仕掛けてだった。
山越の兵達を次々に倒していく。そうして彼等をだ。遂にだった。本拠地まで押し返した。孫策はそれを見てまた言う。
「じゃあ今度はね」
「はい、本拠地まで進軍ですう」
それだと話す陸遜だった。
「皆で行きましょう」
「そうね。そしてね」
「はい」
『本拠地を包囲したら次の策ね』
「はい、それで終わりですよ」
陸遜の言葉はここでもおっとりとして癒しを感じさせるものだった。
「ここの戦いは」

「戦いが早く済むのはいいことじゃ」
黄蓋はこのことはいいとした。
「それだけ無益な血が流れずに済む」
「はい、そうですよね」
周泰も黄蓋のその言葉に頷く。
「ただ」
「ただ。何じゃ」
「本拠地を包囲してもそう簡単に終わるでしょうか」
周泰はこう言って顔に不安なものを見せた。
「果たして」
「心配無用だ」
周瑜が周泰に対して告げた。
「そこからも既に考えている」
「そうなんですか」
「戦いは次で確実に終わる」
断言であった。
「だからだ。行くぞ」
「わかりました」
こう話してであった。孫策の軍と孫権の軍は合流してそのうえで山越の本拠地である城を取り囲んだ。そうしてそのうえで、であった。
孫策が黄蓋に対して話す。
「それじゃあね」
「この弓矢をですな」
「ええ、御願いするわ」
微笑んで彼女に言うのだった。
「敵のお城の中にね」
「打ち込みそれで」
「それでいいわ」
「わかりました。では」

黄蓋は主の言葉に頷いてそのうえで文がくくられたその弓を城の中に放った。そうして包囲して三日後だった。山越の方から使者が来てだった。

「宜しければです。我々を」

「ええ、いいわよ」

孫策はその使者と会ってだ。穏やかな笑顔で話すのだった。彼女が今いる本陣には将や他の世界からの者達が揃っていた。

その彼等を左右に置いてだ。孫策は使者に応えていた。

そしてだ。満足している顔で使者の話を聞いていた。

「孫策様の軍の末席に加えて下さい」

「条件は読んだわね」

「はい」

使者は神妙な態度で答えた。

# 第三十三話　孫策、山越を討つのことその十一

「読ませて頂きました」
「降伏するなら命は奪わないわ」
まずはこのことだった。
「そして貴女達の風俗文化は一切禁じない」
「読ませてもらいました、それも」
「そしてね」
孫策はさらに話した。
「貴方達は今度揚州に入り」
「そうですね」
「そして私が治める中に入れられるけれど」
「領地や財産もそのままだと」
「奴隷は解放してもらうけれどね」
それはだというのだった。
「私そういうの嫌いだから」
「承知しています」
「他の財産には一切手をつけないわ」
そしてこうも話した。
「保障するわ」
「では」
「ええ、降伏を歓迎するわ」
ここでまた微笑んでみせる孫策だった。
「宜しくね」
「御願いします」
こうしてだった。山越族は孫策の陣営に加わった。孫策は父孫堅以来の宿願である彼等を下すことをだ。遂に果たしたのであった。
戦後処理も終え建業に戻る。その時だった。
周泰がだ。周瑜に対して尋ねた。

「あの」
「あのことか」
「はい、あの頑固な山越がです」
周泰はその山越が実に容易に下ったことが信じられなかったのだ。
それで今も周瑜に対して尋ねるのだった。どうしてもわからずにだ。
「ああも容易に」
「政だ」
「政といいますと」
「戦もまた政なのだ」
こう話す周瑜だった。
「ここではそれを使ったのだ」
「といいますと」
「つまりだ。戦に勝ったな」
「はい」
「そしてそのうえで本拠地の城を取り囲んだ」
それが第二の策のはじまりだったのだ。
「そのうえで敵に心理的圧迫を加えた」
「そして」
「そうだ、敗れた敵にそうしてだ」
追い詰めたというのだ。
「これで敵は追い詰められるな」
「そうですね。困り果ててしまいますよね」
周泰もこのことはすぐにわかる。
「本当に」
「ただでさえ飛翔と藍里が以前から戦の用意をしていたしな」
「あれも策のうちだったのですか」
「攻める動きを見せて敵の心を働かせたのだ」
「働かせた」
「休ませずにだ。それで疲れさせたのだ」
そうしていたと。周瑜はまた話した。

「そこまでしてだ」
「そうして」
「寛大な条件を出す。これで話を決めたのだ」
「つまり私達は今回は山越の軍を攻めたんじゃないんですね」
「心を攻めたのだ」
周瑜は断言した。
「それが我々の策だったのだ」
「成程、随分と深い策だったんですね」
「そういうことだ。我々はそれで勝った」
「ううん、深い戦いだったんですね」
「その通りだ。戦で兵や城を攻めるのはだ」
「はい」
「それは下策だ」
まさに孫子であった。
「しかし人を攻めるのはだ」
「上策なんですね」
「人の心を攻めることはだ」
まさにそれだというのである。

# 第三十三話　孫策、山越を討つのことその十二

「そういうことだ」
「わかりました。物凄い勉強になりました」
周泰は目を輝かせながら話した。
「とても」
「そうか。それは何よりだ」
周瑜も周泰のその言葉に頷く。そうしてだった。
そのうえでだ。こう彼女に告げるのだった。
「いいか」
「はいっ」
「学ぶべきことは多い」
軍師らしく言う言葉はこれであった。
「そしてその全てを身に着けんとすることだ」
「全てをですか」
「そう思わなければだ」
言葉は厳しいものだった。
「学び取れるものではないのだ」
「それが学問なのですね」
「貴様の術も同じだと思うが」
対術に秀でた彼女への言葉として相応しいものだった。
「相関枯れレればどうか」
「あっ、そういうころなんです」
そう言われてだった。納得した顔になる周泰だった。
そして周瑜にだ。こう話した。
「じゃあ私」
「うむ。何だ」
「頑張ります」
まずはそこからだった。

「本当に」
「そしてだ」
さらに言う周瑜だった。
「より高みを目指せ」
「これまで以上の力をですね」
「備えるのだ。そして孫家の柱石となれ」
「わかしました。では」
「さて、それではだ」
ここで周瑜の言葉が変わった。
「中に入ろう」
「はい、中にですね」
「そうだ、中に入ってだ」
そうしてだというのだ。
「飲むとしよう」
「お酒ですね」
「バターコーンもあるぞ」
それもあるというのだ。
「それもな」
「ダックさんあれがお好きですよね」
「そうだな。中々おつなものだ」
「お酒と合いますしね」
「ではな」
「わかりました」
こう話してだった。彼女達も船の中に入って勝利の美酒を楽しむのであった。そうしてそのうえでだった。凱旋を果たしたのである。

孫策が勝利を収めたその時だった。華陀はだ。
金髪のオールバックに白い着物と赤い袴の男、それに黄金のヨロイに赤いマントにズボンの紫の髪の口髭の大男と会っていた。そうしてだった。

「俺達と共に来てくれるか」
「うむ」
「そうさせてもらう」
二人はこう彼に返した。
「二言はない」
「我々も言葉は守る」
「そうか、それは有り難い」
華陀は二人のその言葉に顔を明るくさせた。
「それなら共に旅をしよう」
「まさか。私の腕の傷を癒してくれるとはな」
「私の足の傷もだ」
二人はこのことに感謝しているのだった。

# 第三十三話　孫策、山越を討つのことその十三

「その恩だ」
「それを果たさせてもらう」
「何、当然のことだ」
華陀はここでも笑顔だった。
「俺は医者だからな」
「そうか。医者だったのか」
「あまりそうは見えないが」
「そうか。まあそうかもな」
華陀もこのことは幾分か自覚しているようだった。そしてだった。
自分でだ。こんなことも話した。
「旅もしているしな」
「旅か」
「それで身体も鍛えられているか」
「そうだな。長い間国中を歩いてきたしな」
華陀はさらに話す。
「それで鍛えられたもした。後独自の医術を自分でもやっているしな」
「それでか」
「それで医者とは思えぬ身体をしているのか」
「そういうことさ。それでだが」
華陀はここで話題を変えてきた。
「ギース＝ハワード」
「うむ」
「ウォルフガング＝クラウザー」
「そうだ」
二人の名をそれぞれ言った。二人もそれに応えた。
「あんた達も俺達と共にこの国を救ってくれるな」

「そのことに興味はない」
「私もだ」
それはだという彼等だった。
「しかしだ」
「恩は受けた」
それはだとも話す。
「ならばだ。この恩」
「必ず最後まで果たさせてもらおう」
「悪いな。じゃああいつ等と合流するか」
華陀は微笑で述べた。
「今からな」
「その者達か」
「話をしていた」
「ああ、その二人だ」
華陀の言葉はさらに明るいものになった。
「自分達から来るかもな」
「自分達からか」
「そうなのか」
「気が早い連中だからな。むっ」
こう言った途端にだった。
華陀は何かを察した顔になってだ。東の草原に目をやった。
するとだ。そこにだ。
「ダーリン、そこにいたのね」
「二人も一緒ね」
その彼等が来た。その姿は。
ギースとクラウザーをして身構えさせるものがあった。そうしてそのうえでそれぞれ言うのであった。
「怪物か！？」
「我々を取って食うというのか」
「あら、そんな訳ないじゃない」

「そうよ」
その怪物達こと貂蝉と卑弥呼が言い返す。その巨大な姿でだ。
「こんな乙女を捕まえて」
「怪物だなんて」
「人間なのか？」
「違うようにしか見えないが」
こう言ってだった。二人は警戒を緩めない。そうしてそのうえで、
である。身構えたままでそのうえで華陀に対して問うのであった。
「この者達か」
「その二人というのは」
「ああ、そうだが」
華陀の返答だけが素っ気無い。

# 第三十三話　孫策、山越を討つのことその十四

「何かおかしいか？」
「おかしいどころで済むものか」
「ギース＝ハワード」
クラウザーは彼のそのフルネームを口にしてみせた。
「この場だけは貴様に同意する」
「そうか」
「貴様との因縁は忘れた訳ではない」
二人は腹違いの兄弟であるのだ。その因縁はかなり根深いものがある。
「しかし今だけはだ」
「そうだな。力を合わせなければだ」
「この怪物達は倒せはしないな」
「その通りだ」
こう話してであった。彼等に向かおうとする。しかしであった。
貂蝉と卑弥呼の目が光った。それだけで。
「むっ！？」
「何っ！？」
「悪いけれどね」
「動きを止めさせてもらったわよ」
怪物達の言葉だ。
「話聞いてもらいたいしね」
「だからいいかしら」
「くっ、妖術の類か」
「やはり人間ではないか」
どうしてもこう考える二人であった。
「しかし。それでもだ」
「我々の力を侮るな」

「だから何もしないわよ」
「むしろ力を貸して欲しいのよ」
意固地になる二人への怪物達の言葉だ。
「あのね、貴方達の力はね」
「この世界を救うものなのよ」
「それは先程華陀からある程度聞いたが」
「それでもだ」
信じられなかった。とてもだ。
「くっ、来るならばだ」
「何としてもこの妖術を破ってみせようぞ」
二人の全身を気が包み込む。それを見た貂蝉と卑弥呼もであった。
「あら、凄い力」
「何か濡れてきたわ」
身体をくねくねとさせながらの言葉だった。
「流石はサウスタウンの帝王ね」
「欧州の影の支配者ね」
「けれど私達もね」
「尋常じゃないわよ」
こう言って戦おうとする。しかしであった。
「ああ、待ってくれ」
ここで華陀が言うのであった。
「どっちもな」
「あら、ダーリン」
「何かあったの？」
こう双方に言うのである。
「またな」
「あら、本当」
「確かにね」
二人は地平線の遥か彼方を見て述べた。そこに何かを見ていたの

である。
「スキンヘッドにサングラスのおのこね」
「ええ、間違いないわ」
「スキンヘッドにサングラス」
「というとだ」
ギースとクラウザーはそれだけでわかった。
「ミスタービッグか」
「あの男か」
「知っているのか」
華陀がまだ動けない二人に対して尋ねた。
「その男」
「一応はな」
「知らない訳ではない」
憮然とした顔で返す二人だった。
「あの男もか」
「この世界に来ていたのか」
「こっちに来てるわね」
「そうね、それなら」
貂蝉と卑弥呼は楽しそうな声をあげて。そうしてだった。
跳躍した。まさに一気であった。
「ああしたおのこもね」
「いいわよね」
「馬鹿な、あの跳躍は」
「百メートルは跳んだぞ」
ギースとクラウザーはこのことにも驚かされた。
「やはりあの二人」
「人間ではないのか」
「いや、人間だぞ」
華陀だけがそう思っていた。
「れっきとしたな」

「そうなのか？」
「私にはそうは思えないが」
「ちゃんと目が二つあって鼻もあるだろ」
華陀はこうした当たり前のことを話す。
「耳も二つに口が二つ。手足は二本ずつちゃんと身体から生えてるじゃないか」
「私が言っているのはだ」
「あの身体能力なのだが」
「ああ、あれな」
本当に何でもない調子の言葉だった。
「ああいうこともあるだろ」
「それだけか」
「それだけで済ませるか」
「まあ大したことじゃない」
あくまで華陀の主観での言葉である。
「気にするな」
「いや、気にするぞ」
「やはりな」
「いい奴等だ」
こんなことも言う華陀だった。
「きっとこの世界をいい方向に導いてくれる」
「そうは思えないがな」
「全くだ」
彼等はこう考えていた。その彼等はだ。ミスタービッグをその容姿と接吻でのしてしまいだ。そのうえで彼もまた仲間とした。彼等もまた仲間を増やしていたのだった。

第三十三話　　完

2010・9・19

# 第三十四話　田豊、策を用いるのことその一

第三十四話　田豊、策を用いるのこと

袁紹は劉備達を見送った後すぐに顔良や文醜達を連れてそのうえで冀州を発った。冀州の兵達も引き連れたうえで北に向かうのだった。

その時にだ。ふと文醜が言った。

「そういえば麗羽様」

「どうしましたの？」

お互い馬に乗りながらそのうえで話をするのだった。

「神代は匈奴の方に残してましたけれど」

「ええ」

「それ結構危なかったですよね」

このことに気付いての言葉だった。

「護衛役を置いてなくて」

「それは貴女達の仕事でしょう」

こう文醜と顔良に話す袁紹だった。

「確かにあの娘は親衛隊長ですけれど」

「それでもですか」

「あの娘は今はですか」

「ええ、匈奴に」

袁紹の目が強いものになった。

「向けなければなりませんでしたから」

「ううん、難しいところですね」

「そうですよね」

文醜だけでなく顔良も言った。やはり彼女も馬に乗っている。

「あいつ文武両道ですしね」

「剣の腕も軍略も優れてますし」

「だからですわ。西方の鎮圧には必要だと思いましたの」
これが袁紹の考えだった。
「だからでしてよ」
「そうですね。そのおかげで匈奴にも送れましたし」
「それでよかったかと」
田豊と沮授がここで話してきた。無論彼女達も馬上にいる。
「北匈奴、かなり手強いですし」
「あの娘も送れて正解でした」
「そうですわね。花麗も林美も武略はありますわ」
それはだというのだ。
「黒梅も。ですけれど」
「軍師ではありません」
「武将ですから」
「そうですわ。貴女達二人はどうしても傍に置かなくてはいけませんし」
それだけ田豊と沮授を信頼しているということである。
「他に軍師といえばです」
「はい、善光と陳花は政治向けですし」
「軍師とは少し違いますから」
「赤珠も青珠も」
袁紹は難しい顔で話していく。
「藍珠も黒檀も。軍略には疎いですから」
「はい、ですから」
「あの娘に残ってもらうしかありませんでした」
「辛いところですわね」
袁紹は馬上で腕を組んでいた。
「そこが」
「はい、あの娘には悪いですが」
「今回は仕方ありませんでした」
「そういうことですわ。それで」

袁紹はここで二人に別のことを尋ねた。
「匈奴。北匈奴ですけれど」
「複数の部族に分裂しています」
「そうしてお互いにいがみ合っています」
二人はこう袁紹に答えた。何時しか一行は草原に入ろうとしている。
「そしてそのうちの幾つかの部族がこちらに攻めてきています」
「その数十万です」
「一つの部族ではないのでしてね」
袁紹が注目したのはこのことだった。
「そうでしてね」
「はい、そうです」
「幾つかの部族の連合軍です」
「では水華、恋花」
二人の真名を呼んでからであった。
「策はありまして」
「それは本軍と合流してからでいいでしょうか」
田豊がこう袁紹に述べた。
「それで」
「わかりましたわ。それでは」
「はい、それではその時に」
こんな話をしながら袁紹達は本軍と合流した。そうしてそのうえでだった。袁紹は主だった顔触れと再会するのであった。

## 第三十四話　田豊、策を用いるのことその二

「麗羽様、おひさしゅうございます」
「お元気そうで何よりです」
張？と高覧が袁紹の前に進み出て片膝を折ってきた。
「今はです」
「敵に対して方陣を組み守りに徹しています」
「わかりました。それで黒梅は」
「騎兵隊を率いて敵の霍乱にあたっています」
「神代の策で」
「わかりました」
二人の話をここまで聞いたうえで、であった。
「ではあの娘の騎兵隊を呼び戻しなさい」
「はい」
「わかりました」
張？と高覧は袁紹のその言葉に応えた。そうしてだった。
すぐに麹義が戻って来た。そして彼女も袁紹と会った。
その場でだ。こう主に問うのであった。
「これからどうされるのですか？」
「では水華」
袁紹は彼女の問いに答えずにだ。まずは傍らにいる田豊に顔を向けた。そのうえでだ。彼女に対して問うのであった。
「その策は」
「はい、まずはです」
田豊はその問いに一礼してから述べた。
「それぞれの部族に流言蜚語を流してです」
「そうして？」
「そのうえでお互いに争わせます」
そうするというのである。

「そしてです」
「ええ、そして」
「彼等をお互いに争わせ弱ったところをです」
「攻める」
「そういうことか」
顔良と文醜はここまで聞いてわかった。
「それで匈奴を退けるのね」
「そういうことか」
「北匈奴の領土まではとても領有できません」
今度は沮授が話した。
「南匈奴の併合はまだできますが」
「確かに。北匈奴の地はさらに寒冷です」
審配もいた。
「長城からさらに離れたあの地はとても」
「それに他の部族は特に攻撃的ではありませんし」
田豊はさらに話す。
「今攻めてきている彼等を退けるだけでいいですから」
「わかりましたわ。それでは」
袁紹は頷いて田豊の策をよしとした。そうしてだった。
袁紹は守りを固めた。そうして田豊に任せた。
暫くするとだ。匈奴達の間で異変が起こった。
偵察隊を出していた顔良と文醜がだ。本陣にいる袁紹に告げてきた。
「麗羽様、匈奴の軍でです」
「動きがありました」
「お互いに争いだしましたのね」
袁紹は二人の話を聞いて述べた。
「そういうことですのね」
「はい、それぞれ攻撃し合っています」
「あたい達のことを放っておいて」

「成功ですわね」
袁紹はここでまた田豊を見た。
「水華の策が」
「はい、それでなのですが」
田豊は畏まってだ。主に対して話した。
「暫くこのまま争わせてです」
「そのうえで疲れきったところをですわね」
「攻めましょう。そうすれば楽に勝てます」
これが田豊の考えだった。
「では戦いの用意は」
「わかりましたわ。全軍戦闘態勢に入りなさい」
袁紹は全軍にあらためて告げた。
「そして機が来れば」
「はい、それでは」
「その時に」
五将が応えてだった。そのうえで用意をするのであった。

# 第三十四話　田豊、策を用いるのことその三

そしてだ。匈奴達がお互いの争いで傷ついたその時にだった。攻めるのであった。
「よし、今でしてよ！」
「はい！」
「わかりました！」
全軍で応えてだった。
匈奴の軍勢に攻撃を仕掛ける。無論そこにはだ。
「文ちゃん！」
「ああ、わかってるさ！」
顔良と文醜もいる。馬上からその武器を繰り出す。
「えい！」
「喰らえ！」
鎚と巨大な剣でだ。匈奴の者達を吹き飛ばす。
そして高覧もだ。自身の武器を振るう。
そこでだ。張？に言うのだった。
「ねえ花麗」
「どうしたの？」
「この戦い思ったより上手くいったわね」
「そうね」
張？も高覧のその言葉に頷く。
「これでね。ただ」
「ただ？」
「おかしなところはあるわよね」
張？は首を傾げてこう言うのだった。
「匈奴の侵攻は」
「確かに。最近の匈奴は大人しかったし」
「北の方もね」

「それが急に十万もの大軍で攻めて来るなんて」
「ちょっとおかしいわよね」
「それに」
高覧もここで気付いたのだった。
「黒檀を捕らえて連中に送ったのは誰かしら」
「誰って」
「何者かにさらわれてそれで匈奴に売られるなんて尋常じゃないわ」
「そうね。あの娘は洛陽の名門の娘だし」
「そんな娘に手を出せる相手って誰かしら」
高覧は戦いながら考えていた。
「それって」
「考えれば考える程わからないことね」
「麗羽様も首を傾げてらしたけれど」
袁紹もだ。彼女を保護したうえで奇妙に思っていたのである。
「こんなことってないわよね」
「ちょっとね」
「最近匈奴がおかしいわね」
「ええ、確かに」
頷く張?だった。彼女達は明らかにおかしなものを感じだしていた。
戦い自体はあっさりと終わった。田豊の策が奏した袁紹軍の勝利であった。
袁紹は勝利を収めてだ。すぐに兵を戻して帰るのだった。その時にだった。
「善光と陳花ですけれど」
「はい」
「どうされますか」
「西方の政が一段落したら戻るように伝えなさい」
そうせよというのである。
「これからは冀州において政治ができますわ」

「わかりました、それでは」
「使いの者を出しておきます」
「そうなさい。さて」
袁紹はここでだ。にんまりとして笑って言うのだった。
「これでわたくしは幽州の牧になりますわね」
「はい、それは間違いありません」
審配がこう答えた。
「西方だけでなく北匈奴も追い返しましたし」
「武勲としては充分ですわね」
「それにです。幽州は劉備殿がおられますが」
幽州のその事情も話すのだった。
「牧はいませんし」
「劉備さんが牧に任じられることも有り得ましたけれどね」
「まああたい達の方が勢力はずっとでかいし功績もできたしな」
顔良と文醜が言う。
「けれどあの人達は」
「どうします？」
「別にどうでもいいですわ」
袁紹は彼女達のことには悠然と笑って述べた。

# 第三十四話　田豊、策を用いるのことその四

「あのまま桃家荘にいても」
「いいんですか」
「別に」
「わたくしは寛大ですわよ」
自分から言うのがやはり袁紹だった。
「劉備さん達にはそのままいてもらっても構いませんわよ」
「配下にはならないかと」
「あの方々は」
田豊と沮授がこう話す。
「それでもよいのですか」
「置かれても」
「ええ、構いませんことよ」
やはりいいというのであった。
「あの方々。どうも憎めませんし」
「確かに。悪い娘達じゃないわね」
「むしろいい娘達よね」
「本当に」
高覧達もそれはよくわかっていた。
「じゃああのままいてもらってもいいわよね」
「山賊とかじゃないし」
「むしろいざという時は協力してくれるしね」
「そういうことですわ。さて、幽州ですけれど」
袁紹はその幽州のことに話を戻した。６
「治めるにはどうなのかしら」
「そうですね。治安は比較的安定していますし」
「まずは入りやすいかと」
田豊と沮授が答えた。

「人口こそ少ないですがです」
「治めればそれなりのものになります」
「わかりましたわ。それでは」
「はい」
「それでは」
「帰りましたらすぐに政務に戻りますわよ」
こう言ってであった。袁紹は本拠地に戻りすぐに政治に取り掛かった。その日に早速であった。またあらたな面々が彼女のところに来た。
「あら、今回もですのね」
「はい、そうです」
「何人か来てますよ」
顔良と文醜がこう彼女に話す。
「それでどうされますか」
「やっぱり会われますか？」
「勿論ですわよ」
返答は当然といったものだった。
「ではこれから」
「こちらに呼びますね」
「それでいいですよね」
「ええ。では貴女達は」
その顔良と文醜に対しても告げた。
「いつも通りわたくしの左右に控えなさい」
「わかりました」
「今日はあたい達ですね」
「水華と恋花は政務で忙しいですし」
軍師二人は政治も担当しているのだ。そうした面からも袁紹を支えているのである。
「あの二人も呼びたいところですけれど」
「まあ仕方ありませんね」

「あたい達は今日は訓練がなくて暇ですし」
武官達はだ。休息していたのだ。
それでだった。袁紹は二人に言うのであった。
「だからでしてよ。いいですわね」
「はい、わかりました」
「それなら」
こうしてであった。二人が袁紹の左右を固めてだ。別の世界から来た者達に会う。その話を聞いてテムジンはイワンにこう話すのだった。
「どんどん賑やかになるダスな」
「確かに」
イワンはテムジンのその言葉に頷いた。
「ここまで色々な人間が来るとはな」
「知り合いがおおくて何よりダス」
テムジンは笑顔になっている。

# 第三十四話　田豊、策を用いるのことその五

「寂しくなくていいダスよ」
「その通りだ。ところで」
「ところで？」
「テムジンはモンゴルの生まれだったな」
彼の出身地について尋ねるのだった。
「そうだったな」
「その通りダス」
テムジンもそのことを認める。
「それがどうかしたダスか？」
「いや、少しな」
イワンはこう前置きしたうえでだった。彼に言った。
「馬に乗るにはだ」
「馬ダスか」
「その体形は合わないのではと思って」
「いやいや、ワス馬にも乗れるダスよ」
「そうなのか」
「モンゴル人の足は四足ダス」
そしてこのことを言うのであった。
「馬にも普通に乗れるダスよ」
「生まれた頃から乗っているのか」
「当然ダス」
そうだというのである。
「モンゴル人ダスから」
「そうだったか。失礼した」
「気にしなくていいダス。もっとも」
今度はテムジンから話す。
「あれダス」

「あれとは？」
「馬よりも相撲の方が得意ダス」
こう話すのだった。
「そちらの方がダス」
「そうなのか」
「モンゴルでは相撲が特に盛んダス」
「モンゴル相撲だな」
「モンゴル人は馬と相撲で身体を鍛えているダス」
これは昔からだ。チンギス＝ハーンの時代からなのだ。
「それでワスは」
「相撲の方がか」
「どちらかというかダスが」
「成程な。やはりモンゴル人か」
「その通りダス。それでこれからダスが」
「何をするのだ？」
「少し相撲をしてくるダス」
こうイワンに話した。
「大会に出るダスよ」
「わかった。それではな」
「ではダス」
こうして彼は相撲に向かった。彼等はこの日は穏やかに過ごしていた。
そして袁紹はだ。その彼等と会っていた。
「この者達がです」
「今回のです」
「わかりましたわ」
まずは己の席から左右に控える顔良と文醜に応えた。
「それではですわ」
「はい」
「それで」

「貴方達は」
あらためて彼等に声をかけた。
「何というのかしら」
「はい」
まずはだ。ダークパープルの軍服の美女が応えてきた。その手には鞭がある。
「ウィップです」
「ウィップ？」
「はい、それが私の名前です」
こう袁紹に話すのだった。
「宜しく御願いします」
「ええ。その鞭が武器なのでしてね」
「はい」８
その通りだというのである。
「そうです」
「成程、見たところ」
「そうですね」
「ああ、あたいもそう思うぜ」
ここで顔良と文醜も話した。

# 第三十四話　田豊、策を用いるのことその六

「私達の世界の将ですね」
「そんなところか？」
「将軍ではありませんよ」
ウィップは笑顔でこう彼女達に返した。
「軍人ではありますが」
「軍人？そちらの世界の兵でしたわね」
袁紹はこの呼び名は聞いていた。
「それはもう聞いてますわ」
「そうですか。それは何よりです」
「それと」
いるのはウィップだけではなかった。
「貴方達は何といいまして？」
「ああ、俺はラルフ」
「クラークだ」
ラフなジーンズ姿の二人だった。どちらもたくましい長身であり。
一人は赤いバンダナを巻きもう一人は青い帽子だ。どちらも彫の深い顔だ。
「戦うのが仕事さ」
「そういうことだ」
「そうですわね。それでは」
袁紹は二人にも話した。
「その力見せてもらいますわよ」
「ああ、ちなみに好物はガムだ」
「俺はオートミールだ」
「ガム？オートミール？」
袁紹はこの二つの単語には眉を顰めさせた。
「何ですの、それは」

「ああ、知らないか」
「こっちの世界の食べ物だ」
二人はこう袁紹に話した。
「ガムってのはお菓子だ。噛んで楽しむものでな」
「噛んで」
「餅のしつこいやつだと思ってくれ」
ラルフの説明ではそうである。
「中々いいものだぜ」
「そうなのですの」
「それとオートミールはだ」
今度はクラークが説明する。
「大麦に牛乳を入れた粥だ」
「それならすぐにできますわね」
袁紹は大麦に牛乳と聞いてすぐに述べた。
「わたくしの国では山羊の乳の方がよく飲まれますけれど」
「ああ、それでもまあいける」
クラークは山羊の乳でもいいとした。
「とにかくだ。俺はそれが好きだな」
「成程、では後で料理人に作らせますわ」
「いや、それはいい」
クラークは袁紹のその申し出を断った。
「自分で作れる」
「そうですの」
「自炊も得意なんでな」
笑ってこう話す。
「二人だけで何度も何万も敵がいる場所で戦ってきたしな」
「ははは、あの時はいつも大変だったな」
笑って応えるラルフだった。
「死んでもおかしくないだけのな」
「そうだな。それでも楽しい戦いだったな」

「確かにな」
二人で話す。そうしてであった。
最後の青髪を後ろで束ねた半ズボンの軍服の少女だった。研ぎ澄まされた美貌をそこに見せている。
袁紹はその少女にも名前を問うた。
「貴女は」
「レオナ」
こう名乗った。
「宜しく」
「ええ、わかりましたわ」
右手で敬礼する彼女に応えた。
「それでは貴女も」
「戦う」
「まあこの世界に来たのもな」
「何かの縁だしな」
ラルフとクラークは笑いながらこう話した。
「しかしまああれだよな」
「俺達の他にも色々来てるんだな」
「ああ、かなりいるぜ」
文醜が笑ってラルフとクラークに述べた。

# 第三十四話　田豊、策を用いるのことその七

「あんた達も知ってる顔が多いと思うぜ」
「さっきあそこでグリフォンマスク見たけれどな」
「子供達と一緒に遊んでたな」
「はい、とてもいい人ですよ」
顔良がにこりと笑って二人に応えた。
「子供好きでとても正義感が強くて」
「あいつはな。子供の為に戦うヒーローだからな」
「その為に生きている奴だからな」
二人はグリフォンマスクについてこう話す。
「そうか、じゃあ後で一緒に飲むか」
「再会を祝してだな」
「ええ、そうされるといいですわ」
袁紹もそれを許す。
「では貴方達はこれで」
「ああ、宜しくな」
「戦の時はな」
こうして彼等も袁紹の陣営に加わった。二つの世界が確かに融合してきていた。
その中でだ。袁紹はだ。政務の時に田豊達に問うた。
「それで北匈奴の反乱と侵攻の理由はわかりまして？」
「いえ、それがです」
「どうも」
こう答える田豊と沮授だった。
「捕虜に聞いてもです。要領を得ない返答でして」
「食糧もありますし交易で潤っていたそうですし」
「では何故ですの？」
袁紹は二人の話を聞いてまたいぶかしむ顔になった。

「匈奴が来る理由は略奪以外にはありませんのに」
「何者かが主導した侵攻の様ですが」
「一人の老人がいたともいいますし」
「老人」
老人と聞いてだ。袁紹はその筆を止めた。
そのうえでだ。あらためて二人に尋ねた。
「誰ですの、その老人は」
「何でも小柄で不気味な老人らしいです」
「その老人が出て来て急に攻めるという話になったそうです」
「おかしな話ですわね」
袁紹でなくともこう思うことだった。
「それはまた」
「はい、その老人の正体もです」
「全くわかりません」
二人は袁紹にこのことも話した。
「一体何者なのかです」
「それに今入った話ですが」
沮授が話してきた。
「今度は茶色の髪の少年が各地で見られています」
「茶色の？」
「小柄でいつも笑みを絶やさない少年だそうです」
「あちらの世界の者でして？」
「そう思われます。ただ」
「ただ？」
「何かを探しているようだとのことです」
沮授はこう袁紹に話す。
「何かを」
「宝探しではありませんわね」
「はい、それとはまた別のようです」
「それを聞いて安心しましたわ」

宝探しが趣味の袁紹にとってはまずは朗報だった。彼女は隠された財宝が自分より先に誰かに見つけられることを好まないのである。
しかしだ。その安心をすぐに消してだ。沮授に問い返す。
「では」
「はい」２４
「何を探していますの？」
「どうやら人か場所を」
「どちらかの様です」
「人？場所？」
さらにいぶかしむ顔になる袁紹だった。
「人にしても場所にしてもよからぬものかも知れませんね」
「嫌な予感がしますか」
「やはり」
「どうにも。ではその少年は」
「はい」
「どうされますか」
「見つけたら職務質問ですわね」
そうするというのである。

# 第三十四話　田豊、策を用いるのことその八

「とりあえずは」
「左様ですか」
「今はそれだけですか」
「それだけでいいと思いますわ」
あらためて言う袁紹だった。
「では。政務の続きですわね」
「仕事はです」
「次から次にありますので」
二人は言いながら早速その木簡を出してきた。
「さあ、御覧になって下さい」
「サインを御願いしますね」
「四つの州に征服した異民族の土地」
袁紹の治める世界もかなり大きく広くなっているのだ。
「その全てのものですわね」
「はい、ですから」
「サイン御願いしますね」
「仕事をしなければ何も動きはしない」
袁紹は一つの定理を話した。
「そういうことですわね」
「ですから御願いします」
「仕事は追ってきますし」
「あの頃が懐かしいですわ」
ふとだ。幼い時を思い出したのである。
「全く」
「曹操殿とおられた頃ですね」
「確か」
「春蘭達と六人でいつもいましたわ」

彼女達はその頃から一緒だった。長い付き合いなのだ。
「あの頃は国も平和で穏やかでしたし」
「今は大変ですね」
「とんでもない状況ですから」
「全く。漢王朝も揺らいでますし」
「せめて帝がしっかりして下されば」
「これは言ってはならないことですが」
皇室に関することへの発言は禁句である。それでだ。二人もここでは口ごもりを見せていた。
しかしここは洛陽ではない。それで幾分か落ち着いて話されていた。
袁紹も強く咎めずにだ。二人の話を聞いた。
「宦官の跳梁もありますし」
「張譲達が」
「大将軍の邪魔ばかりしてますわね」
「今は司馬慰殿がいますが」
「あの方が大将軍をかなり助けられています」
「できる人物とは聞いてますわ」
しかしであった。袁紹の顔は明るくはない。
その顔でだ。こう言うのであった。
「ただ。気に入りませんわ」
「司馬慰殿はですか」
「どうしても」
「ええ、どうしてもですわ」
その通りだというのである。
「所詮私は妾腹。名門袁家においても除け者でしたわ」
「ですが麗羽様は今では四州の主ですし」
「烏丸や匈奴も下してます」
「その権勢で大将軍を助けています」
「そのことは揺ぎ無いのでは」

「司馬家が相手でもでして？」
袁紹は不機嫌を隠すことなく二人に返した。
「代々清流の家にあり高官を出し続けている名門の。それも嫡流の」
「それは」
「確かにあちらも名門ですが」
「華琳もあの女は嫌っているようですわね」
袁紹はここで曹操の名前も出した。
「どうやら」
「嫌わない筈がありません」
「それは間違いありません」
二人にとっては実に容易に察しがつくことだった。すぐに主に述べた。
「曹操様は宦官の家の出です」
「漢王朝創業以来の家である曹家の方であっても」
「夏侯家もありますわ」
どちらにしてもである。曹操も名門の生まれである。それは間違いない。

## 第三十四話　田豊、策を用いるのことその九

「ですがそれでも」
「はい、宦官の出ですので」
「風当たりは強いですわね」
「私は妾の子、華琳は宦官の家の娘」
袁紹は自分自身と曹操のことを話してみせた。
「お陰で幼い頃、いえ今でも何かと言われてますわ」
「それに対し司馬慰殿は名門の嫡流ですね」
「全く隙がありません」
「しかも有能ときてわ」
袁紹にしても曹操にしても己の資質や功績には自信も自負もある。
しかしである。この時代では絶対のものを持ち得ないのである。
それがわかっているからこそだ。彼女は今実に忌々しげに語るのだった。
「忌々しいことこの上ありませんわ」
「ではどうされますか」
「司馬慰殿については」
「あの女を超える功績を挙げますわ」
これが袁紹の考えだった。
「四州、それに幽州を加えた五州を治め」
「それと異民族の土地もですね」
「そちらも」
「北の護りを固めますわ」
こう田豊と沮授に話す。
「大将軍の片腕として」
「そしてもう一方の片腕の方も」
「功績を」
「そうなりますわね。とにかく司馬慰の好きにはさせませんわよ」

彼女には強い敵意を見せている袁紹だった。そしてそれを隠せないのはだ。実に彼女らしい状況であると言えた。
北はそんな状況だった。そして南は。
「ここは何処なのだ？」
「また霧が出て来たな」
山道の中で張飛と関羽が話す。一行は白い霧の中に包まれている。
「この展開は好きではないな」
「星、いるのだ？」
「安心しろ、いる」
趙雲の返答が来た。
「一体何を警戒しているのだ」
「そう言ってまたとぼけるのだな」
いささか呆れた口調の関羽だった。
「全く。御主は」
「だから何なのだ」
「まあ本人がいいって言うんならいいじゃない」
馬岱は趙雲の味方だった。
「それで」
「蒲公英は完全に星の妹分になったのだ」
「気のせいだよ、それって」
自分ではこう言う。
「私そういうのないから」
「そうか？最近どう見ても星べったりだよ」
横から馬超が言う。
「全く。二人であたしをからかうからな」
「翠は何かと面白い」
趙雲もこのことを隠さない。
「それにだ」
「それに？」
「愛紗といい。いい身体をしている」

「お、おいちょっと待て」
「私もか！？」
馬超だけでなく関羽も慌てる。
「じゃあ何か。あたしと愛紗をか」
「一緒に、あの、その、あれをというのか」
「私は何も言っていないが」
趙雲だけが悠然と微笑んでいる。
「二人共慌て過ぎだぞ」
「あたしはな。女はその」
「大体まだそういう経験がないしだ」
「あら、二人共まだ生娘なのね」
黄忠がその慌てる二人を見て微笑みを見せる。
「初々しくていいわ」
「まあ。やがては旦那さん迎えないといけないがな」
「そういうことは想像できないな、どうにもな」
「そうか。夫か」
趙雲もその存在について考える。
「私もそうした相手が出て来るのか」
「ううん、若しかしてだけれど」
馬岱はふと孔明を見てだった。

# 第三十四話　田豊、策を用いるのことその十

「私と朱里ちゃん同じ旦那さん迎えたりしてね」
「何故かそれを否定できません」
孔明は困った顔になっている。
「白い服の人でしょうか」
「黒い服だったら草薙なのだ」
張飛は彼の名前を出した。
「そういえばあいつは何時高校というのを卒業できるのだ？」
「さあ。何時なのかしらね」
神楽の言葉は実に薄情なものだった。
「そのうちでしょうけれど」
「確か向こうの世界の高校って」
劉備は視線をやや上にやって考える顔で述べた。
「三年で卒業できるんですよね」
「ええ、そうよ」
神楽も劉備にその通りだと返す。
「三年でね、普通は」
「それで五年ですか」
「出席日数が足りなくて」
草薙が卒業できない理由はそれであった。
「残念なことにね」
「馬鹿とかが理由じゃないのだ」
張飛もそれはわかった。
「そういえばあいつ丈とはそこが違うのだ」
「丈は。どうもな」
関羽も彼については難しい顔になる。
「頭が。そのだ」
「鈴々よりずっと酷いのだ」

つまりあれだというのである。
「本を読むと蕁麻疹が起こるってどういう体質なのだ？」
「多分。学問に拒否反応があると思います」
鳳統はそれではというのだった。
「そのせいで」
「学問に拒否反応」
「はい、それではないかと」
こうミナに話す。
「その丈さんという人は」
「だからなのね」
「ううむ、ではあの御仁はずっとあのままか」
関羽は困った顔になっていた。
「騒動を起こすのは問題だな」
「桃家荘大丈夫かな」
「安心していいわ。他の皆もいるから」
黄忠はこう馬岱に話す。
「だからね」
「そうですか。じゃあ丈さんのことは心配しなくていいですね」
「何か猿だな」
「そう言えば似ているな」
馬超と趙雲は丈と猿とイメージを重ね合わせていた。
「まあテリーにアンディもいればな」
「安心していいな」
「それでなんですけれど」
劉備が呑気な調子で言ってきた。
「あの、前に」
「前に？」
「何なのだ？」
「誰かいますよ」
見ればだ。あの三人組だった。

太ったのと小さいの、それにリーダー格の三人がだ。女の子に絡んでいた。
「それ寄越す」
「その背中に持ってる餅をな」
「俺達に寄越せってんだよ」
こう言ってであった。

# 第三十四話　田豊、策を用いるのことその十一

「俺達腹減った」
「餅だけでいいって言ってんだろうが」
「それ渡せば帰っていいからな」
「けれど・・・・・・」
しかし女の子はだ。困った顔で言うのだった。
「これはお婆ちゃんが皆にって」
「はあ！？それがどうしたってんだよ」
チビが言う。
「そんなの俺達の知ったことか」
「そんな・・・・・・」
「さっさと渡さねえと痛い目を見るぞ」
拳を振り回しての言葉だった。
「それもいいのかよ」
「うう・・・・・・」
「またあの三人か」
関羽はその彼等を見て呆れた顔になる。
「全く。何処にでもいるな」
「それでやることは変わらないのだ」
張飛も言うのだった。
「何でいつもいつも出て来るのだ？」
「一族か何かでしょうか」
鳳統はそうではないかと話す。
「それで各地に散って」
「そうかのかしら」
孔明は首を捻りながら彼女の言葉に応えた。
「ううん、こういうのって何か」
「クローンみたいね」

神楽は彼女の生きている時代と世界の言葉を出した。
「そっくりってことは」
「クローン？」
「クローンとは？」
「後で詳しく話すわ。とにかくね」
神楽は他の面々にこう返したうえでまたその三人を見た。
「それでだけれど。放ってはおけないわね」
「無論だ」
関羽はその手に持っている得物を握り締めなおした。
「あの三人、成敗してくれる」
「それなら行くのだ」
張飛も言う。蛇矛を持ってだ。
「あの三人の実力ももうわかっているのだ」
「本当にいつもいつもだからな」
馬超も前に出る。
「誰が行く？あの連中なら一人で楽勝だしな」
「ここにいるぞ！」
馬岱が右手を上げた。
「私が言っていいかな」
「そうだな。ではここは蒲公英に任せるとしよう」
趙雲は微笑んで彼女に任せることにした。
「それではな」
「有り難う、星さん」
「何、御主も戦わなければ腕がなまるだろう」
それを考えての言葉であった。
「だからだ。やるといい」
「うん、それじゃあ」
こう話してであった。馬岱が前に出た。
そしてであった。三人に対して言おうとする。
「やい、わるもの・・・・・」

しかしであった。ここでだ。
「待て」
一人出て来た。赤い髪に日本の白い着物に赤い袴と黒いマントのだ。凛々しい顔の青年であった。
彼が出て来てだ。そのうえで三人に言うのであった。
「何をしている」
「ああ？何だ御前」
「何だってんだよ」
「子供をいじめているようだが」
これが誰が見てもわかることだった。
「下衆だな。呆れるまでに」
「おい、待てよ」
そのいつものリーダー格の男が顔を顰めさせて青年に言い返す。
「下衆ってのは誰のことだ」
「私の目の前にいる連中だ」
誰か言うまでもなかった。

## 第三十四話　田豊、策を用いるのことその十二

「わかるな」
「この野郎、何かよくわからねえが」
「むかつく」
チビとデブも言う。
「まずは手前からだ！」
「痛い目に遭わせる」
「ふん」
三人が前に出たところでだ。青年の持っている剣が一閃された。
そうしてであった。
三人は瞬く間に叩きのめされてしまった。そうしてだ。
「お、覚えてやがれ！」
「この借りは絶対に返すからな！」
こう言って逃げ去る。そうしてであった。
馬岱はその逃げ去る三人を見送って言うのであった。
「逃げる動きも相変わらず同じなんだ」
「そうね。本当に同じ人達じゃないかしら」
黄忠も半分本気でこう考えだしていた。
「出る場所がいつも違ってるけれど」
「そうかも知れないのだ」
張飛もこう考えだしていた。
「とにかくなのだ。子供は助かったのだ」
「そうだな。しかしあの男」
関羽はその青年を見ていた。
「かなりの腕だな」
「見たところまた、だな」
趙雲はここでその青年を見て言った。
「他の世界からの者か」

「そうだろうな。じゃあ」
馬超は一歩前に出た。そうしてだった。
「声かけるか」
「そうよね。それだったら」
劉備が馬超の言葉に応えてだった。
「私が」
「うむ、では御願いする」
関羽はその劉備に対して頷いてみせた。
「こういうことは劉備殿が一番合うようだしな」
「ええ。それじゃあ」
こうしてだった。劉備はその青年に声をかけた。
「あの、そこの方」
「私か」
「はい、どうしてここにおられるのですか？」
「気が付いたらいた」
そうだというのである。
「この国にだ」
「そうなんですか」
「清の古の時代のようだが」
青年はいぶかしむ目で劉備に返した。
「しかし。私が書で読んだこととは違う部分が多いな」
「何かよく言われます」
「よく、か」
「他の世界から来られた方ですよね」
こう青年に問い返した。
「そうですよね」
「私の国は日本という」
青年の返答は劉備達がこれまで数多く聞いてきたものだった。
「そして我が名は」
「はい、御名前は」

「御名方守矢という」
そうだというのだった。
「それが私の名前だ」
「御名方守矢さんですか」
「詳しい話を聞きたいか」
劉備の目を見ながらの言葉だった。
「見たところ悪い者ではないようだが」
「我々はだ」
関羽は強い顔で守矢に応えてきた。
「この漢に再び平和をもたらすのげ願いだ」
「それがだというのだな」
「そうだ。それで貴殿の願いは何だ」
「私の願いはか」
「そうだ、見たところ貴殿もひとかたの人物」
関羽もまた守矢の目を見ていた。そのうえでいうのだった。
「何かを目指しているな」
「私だけではないようだしな」
守矢はここで神楽達も見た。
「この国に。他の世界から来ている者達は」
「その通りだ。わかるのだな」
「うむ。そしてだ」
守矢の言葉が続く。
「やはり。この世界にも二人共いるな」
「二人？」
「それを話そう。今から」
こうしてだった。守矢は近くにあった茶屋に入ってそこでだった。
劉備達に話した。己のこととだ。その二人のことも。星達は集っていった。

第三十四話　完

2010・9・21

# 第三十五話　守矢、雪を止めんとするのことその一

第三十五話　守矢、雪を止めんとするのこと

孫策は建業に帰るとだ。すぐに政務の日々に入った。
己の席で木簡を見ながらだ。うんざりとした顔になっていた。
「あ～～～あ、いつもながら」
「何でしょうか」
「嫌になるわね」
こう左右にいる張昭と張紘に対して言う。
「政務はね」
「雪蓮様、しかしです」
「政務こそはです」
「わかってるわよ」
長老二人の言葉に今度は苦笑いになる。
「絶対にしないといけないのよね」
「戦も大事ですが政もです」
「怠ってはなりません」
「わかってるけれどどうもね」
また言う彼女だった。
「私はこういうのが好きになれないのよ」
「我儘を言わずにです」
「しっかりとやって下さいませ」
「ええ。しかしこういうのってね」
何だかんだで手を動かしながら話す。
「蓮華の方が好きみたいね」
「蓮華様は真面目な方ですから」
「それにどちらかというと政務の方がお好きです」
それが孫権だというのだ。

「しかし雪蓮様も真剣にやられれば政務はお見事です」
「ですから頑張って下さい」
「ううん、わかってるけれどね」
それでもだというのだった。
「こういう仕事はどうもね」
「あの、雪蓮様」
ここで陸遜が来た。
「いいですか？」
「いいですかってまたなのね」
「はい、またなんですう」
陸遜はおっとりとした声でにこにことして話す。
「お仕事が来ました」
「仕事ってのは減らないものね」
「だからです」
「怠ってはならないのです」
ここでまた二人の長老が言う。
「遊んでいる暇はありませんから」
「今日の分は今日終わらせましょう」
「やれやれ。貴女達には適わないわね」
孫策も揚州の二人の長老には頭が上がらなかった。
「それでこれが終わったらよね」
「はい、また人材が来ていますので」
「御会い下さい」
「今度は誰かしら」
少し首を傾げさせて言う孫策だった。
「揚州もそれなりに集まりだしてるけれど」
「それは御会いしてからですね」
「見極められるといいかと」
「そうね。それにしても本当に」
孫策は木簡を一つ処理し終えてから話す。

「これだけ色々な人材が来るのもね」
「凄いですよね」
陸遜がここで言う。
「ユニークで楽しい人達ばかりだし」
「袁術のところはさらに壮絶らしいけれどね」
「その様ですね」
「董卓殿のところも」
「董卓のところには鬼が二人いるらしいけれど」
その鬼達の噂も遠く揚州にまで聞こえてきていた。
「どんな連中なのかしら」
「何でも情け容赦が全くないとか」
「冷酷にして凶悪だとか」
張昭と張紘もこう聞いていた。
「規律に厳格なこと鬼の如し」
「しかも疲れを知らないとか」
「絶対に会いたくないわね」
孫策は難しい顔になって述べた。

# 第三十五話　守矢、雪を止めんとするのことその二

「揚州に来ても入れないわよ」
「雪蓮様の為にはいいかと」
「そうした鬼達がいても」
「冗談じゃないわよ」
孫策の言葉は半分本気だった。
「何でそんなおっかない連中入れるのよ」
「ですから雪蓮様のお目付けにです」
「それと小蓮様もです」
「蓮華はいいのね」
「蓮華様は真面目で素直な方ですから」
「別に」
だから彼女はいいというのである。
「しかし雪蓮様は違いますので」
「ですから」
「全く。信頼がないのね」
「雪蓮様に対する信頼が揺らいだことはありません」
「それは御安心下さい」
二人の長老はこう返すのだった。
「我々のこの絶対の忠誠」
「疑われている訳ではありますまい」
「ええ、それを疑ったことはないわよ」
これは孫策もわかっていることだった。
「お母様の頃からの家臣だしね」
「大殿は立派な方でした」
「そして雪蓮様はです」
ここからが二人の忠義だった。その絶対のだ。
「その大殿を超える方になってもらいますので」

「是非共」
「で、そんなおっかないのがこっちに来ればなのね」
孫策は多少うんざりとした顔になっていた。
「そういうことなのね」
「左様です」
「だからこそ」
こう話してであった。二人は孫策に政務をさせるのだった。孫策は仕事自体は速かった。そしてそれが終わってからであった。
「さて、終わりよ」
「では次は」
「人材とですね」
「ええ、会うわよ」
機嫌が急によくなった。それでだった。
謁見の間に向かう。その時だった。
「ねえ姉様」
「あら、小蓮じゃない」
「これから何処に行くの？」
こう長姉に問うてきたのである。
「若しかして人と会うの」
「あら、聞いてるのね」
「うん。何かまた別の世界の人が来たってね」
「そうよ。それでこれから用いるかどうかを決める為にね」
「会うのね」
「そうよ。小蓮もどうかしら」
「勿論行くわよ」
にこりと笑って応える孫尚香だった。
そうしてだ。二人で行く時にだった。孫策はここで御供をしている長老達に問うのだった。
「それで蓮華は？」
「蓮華様も謁見の間に御呼びしています」

「今向かってもらっています」
「そうなの。じゃあ三姉妹揃ってというのね」
「左様です。蓮華様も孫家の方としてです」
「学ばれることは多いので」
それでだというのだ。
「無論小蓮様もです」
「遊ばれてばかりでは駄目ですから」
「何でよ、遊んだら駄目なの？」
「駄目ではありません」
「しかしです」
それでもだというのである。
「ですからここはです」
「宜しいですね」
「断ったら駄目？」
「駄目です」
「当然です」
二人の厳しさは小蓮に対しても健在だった。

# 第三十五話　守矢、雪を止めんとするのことその三

「小蓮様も孫家の方なのです」
「それでは。遊んでばかりでは」
「ちぇっ、人と会うのとか戦なら大好きなのに」
孫尚香は廊下を歩きながら口を尖らせる。今はその謁見の間に向かう廊下を進んでいるのである。
「何でそんなのしないといけないのよ」
「政務も忘れてはなりません」
「決してです」
「まあまあ二人共」
ここで孫策が妹に助け舟を出してきた。
「この話は今はこれでね」
「全く。雪蓮様もですよ」
「もう少し政務も熱心にです」
「わかってるわよ。まあとにかくね」
自分にも矛先が来たのはかわした。
「今度はどういった相手かしら」
「また剣を使う者です」
「一人は居合というものを使うそうです」
「居合？」
居合と聞いてだ。孫策の目が興味深そうに動いた。
「面白そうね、それって」
「はい、刀を抜き一気に斬るそうです」
「そういった技だとか」
「やっぱり面白そうね。何はともあれね」
「はい」
「それで、ですね」
「その人材と会いましょう」

こう話してだった。そうして謁見の間に入った。
入る時にだ。孫権と会った。
「あっ、姉様」
「こうして姉妹三人揃うのがやっぱり一番いいわね」
「はい」
孫権は静かな微笑みを浮かべて姉の言葉に応えた。
「確かに」
「そうそう。ちゃんと三姉妹でね」
「共にいるのが一番ですね」
「そうよね。じゃあこれからね」
「人材と会いましょう」
こうしてだった。三姉妹でその彼等と会う。すぐにだ。
呂蒙がだ。畏まって彼等を連れてきた。
「案内してきました」
「お疲れ様」
主の座に座る孫策が優しい声をかける。右に孫権、左に孫尚香がいる。そして主の座の下の階段の終わりにだ。二人の長老がそれぞれ控えている。
その座にいる孫策はだ。こう彼等に言ってきた。
「それでだけれど」
「ああ」
中央のだ。精悍な男が応えた。
「何だ」
「居合の使い手がいるそうね」
「私のことだろうか」
静かな趣の青い長髪の男だ。肌は紙の様に白くやつれた感じである。白い着物に青い袴だ。
「それは」
「貴方は何というのかしら」
「橘右京」

男はこう名乗った。
「これが私の名前だ」
「そうなの。橘というのね」
「そうだ」
「居合の腕、かなりだそうね」
「自信はある」
「その腕、見せてもらうわ」
孫策は口元に笑みを浮かべて男に応えた。そうしてだった。
後の面々にも声をかける。まずはだ。
先程の中央の男にまた声をかける。癖のある黒髪を後ろで束ね袴である。やはり手には剣がある。

# 第三十五話　守矢、雪を止めんとするのことその四

「貴方は何というのかしら」
「榊銃士浪」
「榊ね」
「そう呼んでくれ」
こう返すのだった。
「俺はそれでもいい」
「何かわからないけれど過去があるわね」
孫策は直感からこのことを察した。
「心に傷を負った」
「言うつもりはない」
榊はぶっきらぼうに返した。
「生憎だがな」
「別にいいわ。過去は過去よ」
あっさりとした性格の孫策らしい言葉だった。
「とにかく。貴方もね」
「雇ってくれるか」
「そうよ。これから宜しくね」
彼もであった。そしてだ。
残る三人は中華風の赤い上着に白いズボンという格好で黒髪を左右でリングにした少女に上半身裸の白髪の男、それと見事な金髪に青紫の服の勝気な顔の女だった。
その三人はだ。それぞれ名乗ってきた。
「李香緋よ」
「リック＝ストラウド」
「B＝ジェニーよ」
「貴方達は拳で戦うみたいね」
孫策は三人を見てすぐに言った。

「そうね」
「ええ、そうよ」
「この拳で戦っている」
「あたしは海賊だけれどね」
「あら、海賊なの」
孫策はとりわけジェニーの言葉に注目した。
「そうなの」
「そうよ。ここは河が多いけれど」
「もう河ばかりよ。だったらね」
「私も活躍できるわね」
「できるんじゃなくてしてもらうわ」
これが孫策の返答だった。
「それでいいわね」
「ええ、それじゃあね」
「貴方達もよ」
この三人もだというのだ。
「働いてもらうわ」
「よし、じゃあ早速だけれど」
香緋は大喜びで言うのだった。
「御馳走食べよう、御馳走」
「いいわね。さっき馬で当てたしね」
ジェニーが彼女に同意して続く。
「それならね」
「それで何食べる?」
「豚なんてどう?」
ジェニーのお勧めはそれだった。
「それかステーキでも」
「ジェニーってそれ好きよね」
「イギリスで数少ないまともな料理よ」
随分な言葉である。

「だからなのよ」
「まともな、ね」
「イギリスに美味しい食べ物なしよ」
これまた随分な言葉だ。
「そういうことよ」
「そうなんだ」
「そうなのよ。ステーキはいけるけれど」
それはだというのだ。
「けれどそれ以外は」
「凄い絶望的な話ね」
「そう、イギリス料理は絶望の味よ」
まさにそうだと。断言であった。
「食べられたものじゃないから」
「イギリス人というのは不幸ね」
それを聞いた孫権の言葉だ。
「そういえば我が陣営にイギリス人は」
「オーストラリア人はいるけれどね」
孫尚香も言う。

# 第三十五話　守矢、雪を止めんとするのことその五

「ビッグベアね」
「そうね。あの人がいるけれど」
「イギリス人ははじめてだし」
「そんな国だったの」
「シャオそんな国行きたくないわ」
「ううん、食べ物は勧めないから」
ジェニーは二人にもこう言った。
「それ以外はともかくね」
「ステーキは食べたことがあるわ」
孫策はジェニーにこのことを話した。
「あれはいいわね」
「そうでしょ。じゃあ今度一緒にね」
「ええ、食べましょう」
「それじゃあ私達全員」
「さっき言ったでしょ。登用よ」
そうだというのだった。
「それでいいわね」
「わかった」
右京が頷いてだった。そうしてだった。
彼等も孫策の配下になった。客将として彼女と共に戦うことになったのだった。
劉備達はだ。守矢と話をしていた。
団子に茶を楽しみながらだ。そこで彼は話すのだった。
「人を探している」
「人？」
「人というと？」
「雪という」

こう一行に話した。店の席に座って周りにいる乙女達にだ。
「金髪の女だ」
「金髪っていうと」
「キングがそうだな」
「ええ、そうね」
彼等は金髪と聞くと彼女を思い出した。
「それとマリーもな」
「そうよね、あの人も金髪だし」
「目立ちますよ」
「そうした人ですか」
「そうだ、そして髪はかなり長い」
こうも話す守矢だった。
「そして薙刀を持っている」
「ふむ、こうしたものだな」
関羽がここで自分の得物を見た。
「これと同じようなものだったな」
「そうだ。それよりも小振りだが」
守矢もその青龍偃月刀を見ながら答える。
「ああしたものを持っている」
「そうか。それでだが」
「次は服か」
「うむ、どんな服を着ているのだ？」
関羽が今度聞くのはこのことだった。
「それで」
「白だ」
守矢は色で答えた。
「白い服を着ている」
「金髪に白い服なのだ」
張飛はその二つを頭の中に入れてから述べた。
「それって凄く目立つのだ」

「そうだな。もう見つかるとなればすぐだろ」
「うむ、特徴はわかった」
馬超と趙雲も言う。
「問題は何処にいるかだな」
「この国は広い。探すのは用意ではないぞ」
「大体察しはついている」
だが守矢はここでこう言うのだった。
「この辺りにいる」
「調べたのね」
「最初は洛陽という街にいた」
こう黄忠に話す。

# 第三十五話　守矢、雪を止めんとするのことその六

「そこで話を聞いてだ。ここまで来た」
「そうなのね」
「そうだ、間違いなくこの辺りにいる」
「だからここにいるんだ」
馬岱もそれがわかった。
「成程ね」
「探している。ここでな」
「それだったらですね」
「私達も」
孔明と鳳統が言ってきた。
「私達も協力させて下さい」
「是非」
「それでいいのか」
守矢は二人の言葉に問い返した。
「私はこの世界の人間ではないのだが」
「私達だってそうよ」
「その通りよ」
こう話すのは神楽とミナだった。
「私達だってね」
「劉備さんのところにいるから」
「劉備。聞いたことがある」
ここで守矢の言葉が少し変わった。
「確か北にいる皇族の姫将軍だったな」
「あれっ、私将軍だったの？」
劉備は今の守矢の言葉にきょとんとした顔になった。
「そうだったの」
「そう聞いているが違うのか」

「だって私ただ桃家荘にいるだけだし」
劉備はありのままこのことを話した。
「そんなことは」
「ないか」
「全然。そんなのありませんよ」
こう守矢に話す。
「官位もありませんし」
「そうだったのか」
「はい。それでなんですけれど」
劉備も彼に言うのだった。
「その雪さんですよね」
「そうだ」
「この辺りにおられるんですよね」
またこの話になった。
「それだったら本当に」
「探すことに協力してくれるか」
「はい、それでよければ」
「よければ？」
「私達のところに来ませんか？」
無自覚のうちに勧誘もしている。無自覚なのが劉備らしい。
「桃家荘に」
「そこにか」
「ここからかなり離れていますけれど」
このことを話すことも忘れない。
「幽州ですし」
「幽州といえばかなり北だな」
「はい。そこにどうでしょうか」
笑顔で彼を誘う。
「宜しければ」
「そうだな」

守矢は一呼吸置いてから彼女の言葉に応えた。
「そちらさえよければ」
「はい、じゃあ御願いしますね」
「済まないな。人探しだけでなく宿まで貸してくれるとは」
「いえ、それはいいです」
それはだというのだ。
「それじゃあこのお話が済みましたら」
「北に行かせてもらう。既に地図は持っている」
地図のことは守矢から話してきた。
「だから自分で辿り着ける」
「随分としっかりとした御仁だな」
関羽はそんな彼に感心している。
「腕が立つだけではないか」
「中々切れ者なのだ」
張飛も言う。

## 第三十五話　守矢、雪を止めんとするのことその七

「それによく見れば鋭いけれど奇麗な目をしているのだ」
「目、か」
「悪いことはできない目なのだ」
こう言うのであった。
「けれど誤解を受けそうな感じがするのだ」
「そうかもな。しかし」
「しかし？」
「私は誤解なぞ怖れはしない」
守矢の考えである。
「それよりもだ」
「己の果たすべきことを果たすか」
関羽が言った。
「貴殿はそうした人物か」
「そう考えている。駄目か」
「いや、ただ」
「ただ、か」
「生きにくい生き方だな」
彼のその考えを知ってであった。
「私も人のことは言えないだろうが」
「そうかも知れない。しかし私はそうしたことしかできない」
「難儀なものだな。だが」
「だが？」
「その生き方気に入った」
関羽は微笑んで彼に告げた。
「これからも宜しくな」
「かたじけない。それではだ」
団子を食べ終わった。茶も飲んだ。

それが終わってからだ。守矢は言うのだった。
「食べ終わってから。はじめるとしよう」
「そう思うんですけれど」
「あの」
ここでだった。孔明と鳳統が言うのであった。
「若しかしてですね」
「あそこから来られる人は」
「むっ」
見ればだ。店の右手から続く道からだ。ある者が来た。
守矢の言った通りだ。長い金髪に白い服とズボン、鉢巻もしている。そして右手には薙刀を持っている。すらりとして整った顔立ちである。
その少女が来てだ。守矢は言った。
「雪、遂にか」
「やはりな。あの者か」
「へえ、奇麗な顔してるな」
趙雲はその雪の凛とした顔を見て言う。
「腕もかなりのものだな」
「ああ、凄い気配だな」
「それで守矢さん」
馬岱は守矢に声をかけた。
「早速なのね」
「そうだ。それではだ」
雪の前に出た。そうしてだった。
「久し振りだな」
「兄さん・・・・・」
雪はだ。その彼を前にしてこう言葉を出した。
「まさか。兄さんもこの世界に」
「楓達もいる」
彼は妹にこのことを話した。

「御前はまた」
「・・・・・・・・・」
雪は兄と呼ぶ男の問いに沈黙してしまった。それを見てだ。
黄忠はいぶかしむ顔になってだ。一同に話すのだった。
「そうやらあの二人は」
「ええ、そうね」
「兄妹ね」
こう神楽とミナが返す。

# 第三十五話　守矢、雪を止めんとするのことその八

「ただ。全然似ていないから」
「血のつながりはないのかも」
「それも。色々とあるみたいね」
黄忠はこのことも察していた。
「どうやら」
「ええと、それじゃあ」
劉備は少し考えてから述べた。
「あの、守矢さん」
「何だ」
「お団子とお茶、またどうですか？」
こう彼に勧めたのである。
「雪さんも」
「私もですか」
「はい、立ったままお話するのもあれですし」
だからだというのである。
「御一緒に。座って」
「そうだな。話は長くなる」
「はい、それに」
雪はここで劉備の顔を見た。そうして言うのだった。
「貴女は」
「私が？」
「どうやら貴女がですね」
「私がどうしたんですか？」
「この国を大きく変えられます」
そうだというのである。
「その運命を担う方です」
「私がなんですか」

「とにかく。兄さん」
「ああ」
劉備と少し話してからまた守矢に顔を向けた。
「私も話すことはあるわ」
「それならばだな」
「ええ、座って。お話しましょう」
「それならばな」
こうしてだった。二人は団子と茶を食べながらそのうえで話を始めた。その時にだ。守矢はこう妹に対して話したのであった。
「感じ取っているな」
「ええ」
「刹那が来ている」
こう妹に話していた。
「あの男もまた、だ」
「なら。私はまた」
「よせ」
妹を止める言葉だった。
「私が御前を探していたのはだ」
「それを止める為に」
「御前は巫女だ。それはわかっている」
「それならどうして」
「それでもだ。御前は私の妹だ」
言うのはこのことだった。
「妹がむざむざ命を犠牲にして喜ぶ兄がいるか」
「けれど私は」
「刹那は私が倒す」
守矢は言った。
「四霊の力を使わずともだ」
「常世も」
「それも封じる」

そうするというのである。
「私のこの力でだ」
「兄さん、まさか」
「私もまた力を得た」
そうだというのである。
「黄龍の力をだ」
「父上のその御力を」
「この力があれば誰も犠牲にすることなく刹那を倒し常世を封じられる」
「だから私を」
「そうだ、今度は命を捨てるな」
また告げた。

# 第三十五話　守矢、雪を止めんとするのことその九

「わかったな」
「だから私を止めに」
「命を粗末にするな。いいな」
「いえ、けれど私は」
「どうしてもか」
「ええ。私はその為に生まれ生きているから」
だからだというのである。
「だから」
「それなら御前がそれを行う前にだ」
「行う前に」
「私が封じてやる」
強い決意の言葉だった。
「それでいいな」
「・・・・・・ええ」
雪もここで折れた。
「それなら」
「わかった。しかしだ」
「そうね。この世界はね」
「邪悪な存在が集まってきているな」
守矢の言葉が強くなる。
「これだけそれが集まっている世界はだ」
「私達の世界以上に」
「オロチ」
この名前も出た。
「邪神アンブロジアもいるな」
「そう、他にも」
「この世界で何かをしようとしている。止めなければならない」

「私もそう思っているわ。それで」
「それで、か」
「それを止められる方は」
二人の話はわからないがそれでも話を聞いている劉備に顔を向けた。そうして言うのであった。
「見つけたわ」
「劉備殿がか」
「ええ、この方なら必ず」４０
こう言うのである。
「それをしてくれるわ」
「そうだな。劉備殿はな」
「兄さんも感じるわね」
「うむ」
その通りだというのだ。そしてだ。
彼もだ。言った。
「私は既に劉備殿に誘われている」
「そうなの」
「これも神の導きだ。共に戦わせてもらう」
これが彼の言葉だった。
「御前はどうするのだ」
「私は」
「そうだ、御前はどうするのだ」
「ええとですね」
劉備が言ってきた。
「何のお話かはよくわからないですけれど」
「私もです」
「私も」
孔明と鳳統は困った顔になっている。
「あの、刹那とか常世って」
「不吉なものは感じますが」

それでもだった。
「けれど。具体的に何なのかは」
「わからないです」
「申し訳ないがこちらの話だ」
守矢は彼女達にこう返すのだった。
「また時が来れば話させてもらう」
「そうなんですか」
「それなら」
「それでだ」
また雪に話すのだった。
「御前も劉備殿と共に行くか」
「それは」
「はい、いいですよ」
劉備の方から返事が来た。
「雪さんもどうですか、私のところに」
「いいんですね」
「はい」
また答える彼女だった。

# 第三十五話　守矢、雪を止めんとするのことその十

「人は多い方が楽しいですね」
「そうですか。それでは」
「決まりだな。では私はだ」
「兄さんはどうするの？」
「私は今から幽州に行く」
そうするというのだった。
「その桃家荘に向かう」
「そうするのね」
「そうだ。それで御前はどうするのだ」
「私は。劉備さん達と」
その劉備達の顔を見てだった。そうしてである。
「共に」
「そうか。ならそうするといい」
「ええ」
「そしてだ。私はだ」
「私を止めるというのね」
「その時が来てもだ。もう御前が犠牲になることはない」
だからだというのだった。
「わかったな」
「それはわからない。けれど」
「それでもか」
「この世界も。救わないといけないから」
思い詰めた顔になって俯いてであった。
「だから私は」
「しかし私もいる」
今は止めなかった。かわりにこう言うだけだった。
「それは忘れるな」

「ええ、有り難う兄さん」
「御前に兄らしいことはしてやれなかった」
雪から顔を離してそれで空を見上げての言葉だった。
「だがこれからはだ」
「違うのね」
「私は御前の兄だ」
こう言うのであった。
「それならばだ。当然のことだ」
「有り難う」
雪はその兄に礼を告げた。
「けれど兄さん」
「何だ？」
「楓は」
「あいつか」
「楓も同じなのね」
こう兄に問うのだった。
「そうなのね」
「そうだな。そして私達もだ」
「そうね。この世界でも」
「それは覚悟のうえだ。だからこそここに来たのだろうな」
「だからこそなのね」
「誰が私達をこの世界に呼び寄せたのか」
守矢はこのことも考えた。
「それが気になるが」
「そういえばそうですよね」
「確かに」
ここで孔明と鳳統が気付いた。
「皆さんどうしてこの世界に」
「偶然来られたというのもおかしいですし」
「そうよね、だとしたらやっぱり」

「誰かが皆さんをこの世界に」
「目的があってそれで」
「そしてその目的とは」
二人は考えていく。しかしだった。
答えが出ずにだ。それでまたそれぞれ言うのだった。
「皆さんは悪い方ではないですし」
「むしろ。正しい力と御心を持っておられます」
そこから考えるとだった。
「何かを止める為に呼ばれた」
「そうですよね」
「ということは」
「その刹那、常世でしょうか」
「あの、それでなんですけれど」
劉備は二人の言葉を聞いてから雪に問うた。

# 第三十五話　守矢、雪を止めんとするのことその十一

「雪さん、刹那というのは」
「その常世の者です」
まずはこう答える雪だった。
「元は戦乱で死んだ赤子に常世の思念が取り憑いたもののようです」
「？では常世というのは」
「この世とは違う世界ですね」
孔明と鳳統はこのことにも気付いた。
「そしてどうやらその世界は」
「冥界やそうした世界ですね」
「そうです、まさにそうした世界です」
雪は二人のその言葉に頷いて答えた。
「その世界は」
「ううん、じゃあその刹那という人は」
「この世界と常世をつなげるつもりですね」
「はい、その通りです」
雪は二人のその危惧にその通りだと返した。
「それが常世の狙いなのです」
「はわわ、それって恐ろしいことですよ」
「ええ。そんなことになったら」
二人は雪の言葉を完全に理解してだ。顔を青くさせた。そうして誰が見てもすぐに狼狽とわかる有様でだ。こう言うのであった。
「この世界は破滅しますよ」
「死んだ人達がどんどん出て来て」
「おそらくそれだけではあるまい」
ここでまた言う守矢だった。
「刹那だけではない」
「ということは」

「他にも」
「いるだろう。私達はその多くの存在と戦う為にこの世界に来たのだ」
これが彼の考えだった。
「それでなのだ」
「そして劉備殿」
「はい」
今度は雪だった。彼女が劉備に声をかけるのだった。
劉備もそれに応える。そしてその話を聞く。
「この世界自体もです」
「この世界も？」
「大きな危機が訪れようとしています」
こう彼女に話すのだった。
「そしてそれにです」
「それに」
「貴女は大きく関わるでしょう」
こう劉備に話す。
「そして。貴女はその危機からこの世界を救い」
「私がですか」
「そうです、そのうえでこの世界を導かれます」
「そんな、私ただの蓆売りですよ」
「今はそうでもです」
それでもだというのだ。
「貴女はやがてそうされるでしょう」
「何かお話がわからないんですけれど」
「今はおわかりになられなくともやがては」
「そうなんですか」
「はい、それでなのですが」
態度があらたまってだ。そうしてであった。
「私は。貴女と共にこの世界で戦わせて頂きます」

「はい、宜しく御願いします」
劉備はこのことは笑顔で迎え入れたのだった。
「ではこの旅もですね」
「劉備殿さえよければ。先程もそうお話しましたが」
「あらためて御願いします」
劉備はにこりと笑っていた。
「多い方が楽しいですから」
「はい、それじゃあ」
こうしてだった。雪も劉備達と行動を共にすることになった。そして守矢は。

# 第三十五話　守矢、雪を止めんとするのことその十二

「ではな」
「ええ」
「先に桃家荘に行っている」
「そこで待っていてくれるのね」
「そうさせてもらう」
こう妹に対して告げていた。雪の後ろには劉備達がいる。
「これからな」
「わかったわ。じゃあ兄さん」
「ああ」
「また会いましょう」
兄に笑顔で告げた。
「それじゃあ」
「また会おう」
こうして兄妹は別れた。守矢は幽州に先に向かい雪は劉備達と行動を共にするのだった。そしてその時にであった。
劉備がだ。こう皆に言うのだった。
「じゃあこれからいよいよね」
「そうですね。袁術殿のところに」
「そこに行くのだ」
関羽と張飛が応えてだった。そうして。
一行は袁術のところに向かう。そこでだった。
馬岱がだ。不意に言った。
「これで終わりじゃなくてね」
「何だ？蒲公英」
「まだ旅が続いたりしてね」
こう言うのだった。
「袁術さんのところだけじゃなくてね」

「まさか。それはないだろ」
馬超は従妹のその言葉を否定した。
「だってよ。袁術が剣を持ってるんだろ?劉備殿のその剣を」
「それは間違いない」
趙雲が馬超に対して答える。
「剣は袁術殿のところにある」
「それならそれで終わりじゃねえか」
馬超は言った。
「剣を取り返したらな」
「ただ。問題はです」
「その袁術殿です」
孔明と鳳統はその袁術を問題視していた。
「どうもかなり癖のある方のようなので」
「そうおいそれと剣を返して頂けるかどうか」
「またあの催しかしら」
黄忠はこう考えた。
「袁紹さんの時みたいに」
「あれはね。疲れたわね」
「ええ、確かにね」
神楽とミナは苦笑いになっていた。
「あれやこれやとあって」
「本当に」
「何か袁家ってそういうところが不安なのだ」
張飛も困った顔になっている。
「何があるかわからないのだ」
「しかしそれでも行くしかないな」
関羽は正論を口にしていた。
「ここはな」
「そうよね。それじゃあね」
最後に劉備が言った。

「行こう、袁術さんのところに」
こうして雪も加えた一行はいよいよ袁術のところに向かうのだった。劉備の剣はその主のところに戻ろうとしていた。だがそれにはまだ困難があるのだった。

第三十五話　　完

２０１０・９・２３

# 第三十六話　親父達、新たに加わるのことその一

第三十六話　親父達、新たに加わるのこと

袁紹は匈奴達を平定し終えはした。しかしであった。
「まだここを去る訳にはいきませんわね」
「はい」
「今度は戦後処理を徹底させましょう」
田豊と沮授がこう袁紹に話す。彼女達は今天幕の中にいる。
「この度の匈奴の侵攻、どうもおかしなことが多過ぎますし」
「ですから」
「そうですわね」
袁紹も二人のその言葉に頷く。彼女は今主の座にいる。
「北匈奴もこれまで大人しかったというのに」
「それが急にです」
「しかもあれだけの大軍で」
田豊と沮授は袁紹にまた話した。
「ですからここはです」
「侵攻が二度と起こらないようにです」
「戦後処理の徹底ですわね」
袁紹も真剣な顔になっている。
「そうしますわよ」
「はい、それでは」
「今から」
二人の軍師は主の言葉に頷いてだ。そうしてであった。
「まずは降った者達は我等の民としまして」
「その中の精強な者達は兵としましょう」
「ええ、そしてそのうえで」
袁紹もここで言った。

「騎兵にするのがいいですわね」
「やはり匈奴の者は精強です」
「是非そうしましょう」
「騎兵の充実はいいことですわ」
袁紹もこのことは喜んでいた。しかしであった。
「ただ」
「ただ？」
「といいますと」
「民にしてそれで元の民との軋轢は避けたいですわね」
彼女が懸念しているのはこのことだった。
「それは注意しなければなりませんわね」
「はい、それについてもです」
「既に考えてあるます」
二人は袁紹にすぐにこう答えた。
「彼等の村を用意してです」
「それも国境からできるだけ離れた場所に置きます」
その村をだというのだ。
「そしてそこで鍬を持たせて畑を耕させます」
「それでどうでしょうか」
「そうですわね。悪くありませんわね」
袁紹は二人のそのことばに頷いて答えた。
「ではそうなさい。いいですわね」
「はい、わかりました」
「それでは」
二人もそれに頷いてだった。この話はこれで終わった。だがそれでも袁紹は動けなかった。戦後処理はこれで終わりではなかったからだ。
今度は顔良と文醜にだ。問うのであった。
「斥候からの報告は」
「はい、敵軍はもういません」

「反乱を起こした奴は全員降りました」
こう答える二人だった。
「北の方の部族は何処も落ち着いてますし」
「とりあえずは安心していいみたいですよ」
「今のところは、ですわね」
袁紹はそれを聞いても楽観していなかった。そうしてだった。
二人にだ。さらに言うのであった。
「それでその北の部族にですけれど」
「攻めますか？」
「まさか」
「いえ、それはしませんわ」
攻めることは否定したのだった。
「ただ」
「といいますと」
「何をしますか？」
「誓約を誓わせるべきですわね」
真剣な顔での言葉だった。

# 第三十六話　親父達、新たに加わるのことその二

「今後漢の領土に入らないということを」
「そうするんですか？」
「何かそこまでって気もしますけれど」
「そのかわりこちらも匈奴の領内には入りませんわ」
袁紹はこうも言った。
「決して」
「つまりお互いがですか」
「約束するってことですね」
「その通りですわ。後は南匈奴の勢力圏だった場所を開墾し」
袁紹は同時にこのことも考えていた。
「我が勢力圏として確固たるものにさせますわよ」
「それは赤珠と青珠にも伝えて」
「そのうえで」
「そうしますわ。そのうえでそこに兵も常駐させ」
さらに言う袁紹だった。
「この際。長城も修復しておきたいのですけれど」
「麗羽様、それは流石に無理です」
審配がここで彼女に言ってきた。
「そうするべきなのですが」
「お金が、ですわね」
「長城の修復には多額の費用がかかります」
こう主に言うのであった。
「ですから。本来はそうすべきでも」
「私の四州だけではやはり」
袁紹もそれはわかっていた。だからこそ今は苦い顔になっていた。
そのうえでだ。こう言うのであった。
「無理がありますわね」

「はい、それについては」
「やはり」
他の臣下の者達もここで彼女に言う。
「民への負担が大きいですし」
「せめて漢が以前の力であれば」
「今は懐柔策が一番ですわね」
袁紹が出した結論はこれであった。
「南j匈奴の地を漢に入れそしてそこに兵を置くと共に」
「それしかないかと」
「今は」
「硬軟両方で」
「わかりましたわ。ここに砦を築きなさい」
袁紹はこうも命じた。
「いいですわね。そうして」
「いざという時に備え」
「我々は」
「また戻りますわ」
臣下の者達に答えた。
「冀州に」
「わかりました」
「では砦を築いてから」
「幾つか築いて」
このことは忘れなかった。しかも一つではなかった。
「それを備えとしましてよ。幸い高句麗との関係は良好ですし兵は匈奴に向けるだけでいいですし」
「そういえばよ、姫さん」
「いいでしょうか」
ここでドンファンとジェイフンが袁紹に言ってきた。
「その高句麗だけれどな」
「僕達の祖国でもありまして」

「あっ、そうね」
「そういえばそうだったわね」
張？と高覧がこのことを思い出して言った。
「貴方達の国はね」
「その時代は名前は変わってるらしいけれど」
「ああ、そうだよ」
「それである程度はわかっているつもりなんですが」
「とりあえず今は関係は良好だけれど」
「それでも」
張？と高覧はあることを思い出したように話していく。
「私達あの国のことは知らないから」
「西方とかならともかく」
「まああれだよ。何もして来ないと別に軍を動かさないからな」
「このままの関係を維持していればいいですよ」
二人の高句麗への言葉はこうしたものだった。
「だから高句麗の方はな」
「気にしなくていいです」
「わかりましたわ。ではこのままで」
このことを再確認して述べた袁紹だった。
「いきますわ」
「ああ、そうしてくれ」
「負担が減りますしね」
「それはそうとです」
今度は麹義が彼女に言ってきた。

# 第三十六話　親父達、新たに加わるのことその三

「その高句麗と接している幽州ですが」
「そういえば劉備殿達がいて」
「あの人達が」
蔡文姫と甄姫が言った。
「中々いい政をしておられますが」
「あの方々はどうされますか？」
「別にどうもしませんわ」
袁紹の劉備達への言葉はここでは素っ気無いものであった。
「劉備さん達があの場所にいるならそれで構いませんわ」
「いいんですか、それで」
「別に」
「そうですわ。構いませんわ」
また言う袁紹だった。
「幽州の牧になるのは私ですし。あの方々は言うならば豪族に過ぎませんし」
「半ば治外法権でも与えて協力してもらう」
「そういうことですわね」
「そうしますわ。むしろ」
袁紹はここでこんなことも言った。
「今は牧のいない徐州か益州の牧に推挙したい位ですわね」
「あっ、それはいいですね」
「確かに」
蔡文姫と甄姫は袁紹のその提案に賛成した。
「劉備殿の出世になり恩を売れますし」
「あの方々を体よく幽州から出せますし」
「それならですね」
「いいですね」

「まあその時でいいですわ」
袁紹はこのことは特に急いでいなかった。無論この時点で誰もその幽州に牧がいるとは考えていない。そんなことは想像だにしていない。
そしてだ。袁紹はここで話を変えてきた。
「それよりもです」
「はい」
「私達ですか」
「貴女達にもここに来てもらったのはです」
このことも話すのであった。
「おわかりですわね。この地をです」
「治める」
「そのことですね」
「政は貴女達と水華、それに恋花」
二人の軍師も見る。
「それに陳花に任せますわ」
「お任せを」
その黒い猫耳の少女も応えたのだった。
「北の三州と西方の連携にもなる場所です。しかと治めなさい」
「わかりました」
「それでは」
言われた者達はそれに頷いたのだった。これでこの話も終わった。
だが話はまだ続きだ。袁紹はまた話すのだった。
「それなのですけれど」
「はい、今度は」
「何のことですか？」
顔良と文醜が袁紹に問うた。
「何かありますか？まだ」
「もうないんじゃないんですか？」
「匈奴のところにしてよ」

袁紹は顔を曇らせながらその二人に語るのだった。
「何か一人の老人がいたそうですわね」
「あっ、何か聞いてます」
「そうした報告はありますね」
「明らかに匈奴の服ではない」
袁紹が言うのはこのことだった。
「そうした輩が」
「一体何者なのでしょうか」
「まあまた別の世界から来た奴でしょうね」
「老人？」
その言葉に反応したのは沙耶だった。そして言うのであった。
「というと」
「あれっ、沙耶さん」
「何か知ってるのか？」
「まさかと思うけれど朧かしら」
こう言うのだった。
「死んだ筈だからそれはないと思うけれど」
「朧！？」
「朧っていうと」
「誰なの、それは」
袁紹の家臣達が沙耶に口々に問う。

## 第三十六話　親父達、新たに加わるのことその四

「何か不吉な名前だけれど」
「そうよね、何か」
「この世にいてはならないような」
「一体何者なの？それって」
「かつて私達が戦った者達のうちの一人」
沙耶はこう彼女達の言葉に答える。
「その中でも最も嫌な奴だったわ」
「嫌な」
「そういう奴なのね」
「そう、二度と会いたくないわ」
「そうね」
それに凛花も頷く。
「あんな奴には二度と会いたくないわ」
「けれど死んだ筈だから」
沙耶の今の言葉は半ば自分に言い聞かせているものだった。それを無意識のうちにしてしまっていたのだ。そうなってしまっていた。
「だから。いる筈がないわ」
「そうですのね」
袁紹は彼女の言葉を眉を顰めさせながら聞いていた。そうしてそこから言うのだった。
「その朧という者は確かに死んでいますのね」
「ええ、ただ後の二人は生きているけれど」
「後の二人とは？」
「九鬼刀馬と命」
この二人だというのである。
「この二人は朧程問題ではないから」
「この世界に来ていても安心していいと思う」

沙耶だけでなく凛花もそうだと話す。
「刀馬は多分に危険なところもあるけれど」
「それでもね」
「何かそっちの世界って」
「そうだよな。話聞いてたらな」
顔良と文醜が二人の言葉をここまで聞いたうえで話した。
「物凄くとんでもない存在が大勢いるわよね」
「それもどんな時代でもな」
「それは否定できないな」
グリフォンマスクもそのことを認めた。
「実際に私も多くの敵を倒してきているしな」
「一番やばかったのはオロチか？」
「そうだな」
クラークはラルフの言葉に頷いた。
「あの連中がここに来てたらな」
「洒落にならないな」
「オロチ？蛇ですわね」
袁紹はそのオロチという名称からすぐにこう連想した。
「それが何か」
「もうな。桁外れの力持った奴等ばかりでな」
「俺達人間を滅ぼそうとしてるんだよ」
二人はこのことを袁紹達に話した。
「まあその連中も滅んだ筈だからな」
「安心していいと思う」
「それを聞いて安心しろと言われましても」
袁紹の顔は曇ったままだった。
「貴方達が来ているのにそうした者達が来ていないという保障は一切ないのではなくて？」
「だから死んでますから」
ウィップがそうだと話す。

「滅んでますよ、オロチは」
「だといいのですけれど」
「まあ蘇ったりとかするかもな」
「よくある話だしな」
ジャックとミッキーがこんなことを話す。
「俺達の世界じゃそういうの結構多いしな」
「死んだと思ってたら生きてたりとかな」
「ってそれ洒落になってないしさ」
「そうですよ」
文醜と顔良は彼等のその言葉にすぐに突っ込みを入れた。
「何か本当にそっちの世界やば過ぎだろ」
「私達の世界以上に」
「まあそれでも結構楽しい世界ですよ」
楓がこう話す。微笑んでもいる。
「僕達も生きることを楽しんでますし」
「だといいけれど」
「それにしても無茶苦茶な面子が揃ってるし」
「悪い意味で」
「さて、お話はこれまでですわ」
袁紹がここで話を切ってきた。

# 第三十六話　親父達、新たに加わるのことその五

「では皆さん」
「はい」
「もう終わりですね」
「夜も遅いですしそれぞれの天幕にお下がりなさい」
そうしろというのだった。
「いいですわね。そして休みなさい」
「わかりました。それじゃあ」
「お言葉に甘えまして」
皆袁紹のその言葉に頷く。そうしてであった。
それぞれの天幕に戻り休息に入った。袁紹も自身の天幕の中で休息に入った。この夜はそれで終わったのであった。
その草原にだ。今三人の男達がいた。
「タクマ殿、ここは何処だ」
「ううむ、わしにもわからん」
「私にもだ」
見れば三人共中年であった。一人は白い道着に黒い髪を後ろに撫で付けている。逞しい顔をしている。
一人は黒い着物に灰色の袴だ。そして着物の背には日輪がある。髭の顔に黒い髪をしている。
最後の一人はグレーの軍服にベレー帽の隻眼の男だ。右目には眼帯をしている。この三人の男達がだ。草原の中であれこれと周囲を見回しているのだ。
ここでだ。道着の男が着物の男に問うた。
「それで柴舟殿」
「うむ」
「我等はそもそもどの国にいるのだ」
まずはこのことから話をしていた。

「それがわからないのだが」
「わしもだ」
柴舟と呼ばれたこの男もこう返す。
「一体何処だ、ここは」
「見たところだ」
眼帯の男が言う。
「ここは」
「ハイデルン殿、わかるというのか」
「そうなのか」
「おそらく中国だ」
ハイデルンと呼ばれた男はこう二人に答えた。
「この国はだ」
「中国なのか」
「そういえばここは」
二人はハイデルンのその言葉を受けて周囲に顔を向けた。そうしてだ。
草原を見てだ。そして言うのだった。
「モンゴルなのか」
「そうだな。外モンゴル辺りか」
そこではというのだった。
「先にあれが見えるな」
「壁、つまり長城だな」
「あれが見える。それに」
ハイデルンはここで懐から磁石を取り出した。そうしてそれで方角を確かめてだ。それからまた二人に対して言うのだった。
「北が向こうだからだ。長城は南にある」
「ではここは中国の北だな」
「そうなるか」
「そうだ、中国の北だ」
そこだというのだった。

「今我々がいるのはな」
「ううむ、それはわかったが」
「それでもな」
二人は腕を組んで考える顔になって話す。
「何かが違うな」
「そうだな、中国にしては何かがだ」
「まず空気がいい」
ハイデルンはこのことを指摘した。
「それもかなりな」
「確かにな。空気がいいな」
「日本よりもずっといい」
「ここまで奇麗な空気は有り得ない」
ハイデルンはさらに話した。
「我々の時代の中国ではないな」
「そういえばあの長城は」
「うむ、違うな」
二人は長城を見て話した。遥か南にあるがそれでもだ。二人の目には見えているのだ。
「あの城の如きものではない」
「ただの壁だ」
「あの長城は二千年程前のものか」
ハイデルンは左目でその長城を見ていた。

# 第三十六話　親父達、新たに加わるのことその六

「始皇帝の頃、いやそれよりも後か」
「むっ、では我々は」
「タイムスリップしたのか」
「そうだな。おそらくはな」
ハイデルンも話す。
「しかし。只過去に来ただけではないかもな」
「むう、まだ何かあるのか」
「そうなのか」
「これは私の勘だが」
こう前置きしてからの言葉だった。
「何か違うな、私達の世界と」
「そう言われると雰囲気がな」
「そうだな、何かが違うな」
「何処か花の香りがする」
「どういう世界なのだ」
「それを確かめる必要があるな」
ハイデルンはここでも二人に話す。
「これからな」
「そうだな。それではだ」
「そうするとするか」
こう話してだった。三人は草原を歩くのだった。そうしてだった。
彼等の前にだ。二十騎程の兵達が来た。黄色い鎧を着ている。
彼等を見てだ。すぐに道着の男が声をかけた。
「そこの者達・・・・・むっ？」
「そうだな、あの服は」
ここで髭の男も気付いた。
「明らかに我等の時代のものではない」

「あれは中国漢代の服だな」
「如何にもそうだが」
兵達の方からも言葉が返って来た。
「我等は漢の兵だ」
「袁紹様の下にいる」
「袁紹だと。その名前の形式は」
ハイデルンはその名前を聞いてだった。すぐに言ったのだった。
「やはり中国の昔の名前だな」
「中国？」
「何処だその国は」
兵達はハイデルンのその言葉にいぶかしむ顔になった。
「いや、ジャック殿も最初にそう言っていたな」
「そうだな、ラルフ殿もな」
「そうだったな」
ここで兵達はこうした名前を出した。
「この国を最初は中国と言っておられたな」
「あの人達の世界ではその呼び名らしいが」
「ではこの者達も」
「待て、ジャックといったな」
道着の男が言うのはそこだった。
「今確かに」
「言ったが」
「それが何か」
「ジャック＝ターナーというな」
男はジャックの正式な名前を話した。
「その者の名前は」
「その通りだが」
「それは」
「ううむ。ではだ」
「我等だけではないか」

「それにだ」
今度はハイデルンだった。
「ラルフとも言ったが」
「そうだ。クラーク殿もおられる」
「レオナ殿とウィップ殿もおられるが」
「まさか御主はあの方々と知り合いなのか」
「どの者も私の部下だ」
ハイデルンはそうだと返した。

## 第三十六話　親父達、新たに加わるのことその七

「そうなのだが」
「そうだったのか」
「では。やはり」
「そうだな。貴殿等も」
「あちらの世界からか」
兵士達はこのことを察していった。
「来たというのだな」
「そうだな」
「話がわかってきたな」
髭の男がここで言った。
「どうやらこちらの世界にはわし等の世界の人間が大勢来ているらしい」
「そうだな。この世界がどういった世界かまだ完全にわからないが」
「それは間違いないな」
「うむ」
髭の言葉は頷いた。そうしてだった。
三人はだ。それぞれ兵士達に名乗った。まずは道着の男だ。
「わしの名はだ」
「うむ、何というのだ」
「それで」
「タクマだ」
まずは名からだった。
「タクマ＝サカザキだ」
「それが貴殿の名前か」
「わかったぞ」
「うむ、宜しくな」
「そしてだが」

今度は髭の男が話す。
「わしの名前だが」
「貴殿は何というのだ」
「それで」
「柴舟」
自分でもこの名前を出した。
「草薙柴舟だ」
「その名前は日本人のものか」
「そうだな」
その柴舟の話を聞いてこう話す兵達だった。
「天道殿と同じか」
「凱殿とな」
「むっ、確かその男は」
柴舟がここでその名前を思い出した。
「あれだな。最近売り出し中の若い格闘家か」
「本人はそう言っておられるが」
「知っているのか」
「名前は聞いている」
そうだと返す柴舟だった。
「一応はな」
「そうなのか」
「それでなのか」
「そうだ、名前は聞いている」
柴舟はまた兵達に話した。
「会ったことはないがな」
「ううむ、ではやはりか」
「貴殿もまたあの世界から来たのか」
「そうなのだな」
「そういうことになるようじゃな」
柴舟は自分の顎に自分の左手を当てていぶかしむ顔になっていた。

「これはのう」
「我々もそれはわからないが」
「そうだな、そうなるな」
「確かにな」
「そしてだ」
最後はだ。ハイデルンだった。
「私だが」
「そのラルフ殿の知り合いのか」
「それで貴殿は」
「見たところ我々の同業者だが」
「そうだな。こちらの世界では軍人という」
ハイデルンは己の職業を話した。
「傭兵をやっている」
「ラルフ殿達もそう言っていたな」
「そうだったな」
兵達は傭兵という言葉にも反応を見せた。
「では貴殿はやはりラルフ殿達とか」
「顔見知りなのか」
「如何にも。そしてだ」
ハイデルンの言葉は続く。

# 第三十六話　親父達、新たに加わるのことその八

「私の名前はハイデルンという」
「ハイデルン殿、貴殿がか」
「ラルフ殿から話は聞いています」
兵たちの言葉が急に変わった。丁寧なものになった。
「あの方々の上官だと」
「傭兵達の司令官という立場だと」
「如何にも。その通りだ」
ハイデルンは兵達のその言葉に頷いてみせた。
「それが私だ」
「お名前は聞いていました」
「その技も」
「それもか」
ハイデルンはそれを聞いてだ。また話すのだった。
「では話が早いな」
「それでよければなのですが」
「これから我等と共に来て頂けますか」
兵達は三人に対してさｒない述べてきた。
「袁紹様のところに」
「来られますか」
「そうだな。それではだ」
タクマが最初に言った。
「その袁紹殿のところにな」
「うむ、参るとしよう」
柴舟も話す。
「この世界のことを詳しく知りたいしな」
「それではだな」
「同行させてもらおう」

最後にハイデルンが言ってだった。三人は兵達に案内されようとしていた。しかしここで、だった。周りに急に何かが出て来た。
「むっ!?」
「何者だ!?」
まず兵達が声をあげた。
「匈奴か?」
「いや、違う」
「あれは」
見るとであった。白装束の怪しい一団だった。彼等が出て来たのである。
兵達は彼等の姿を見てだ。いぶかしむ顔になって話す。
「匈奴ではないな」
「明らかにな」
「そうだな、馬に乗っていない」
見れば馬に乗っている者はいない。一人もだ。そしてだった。
「数はだ。百か」
「多いな」
「どうする?」
「ここは一時撤退するか?」
「そうだな。この者達」
兵達は本能的にだ。その白装束の者達が敵だと判断した。その怪しい雰囲気からだ。そう察したのである。
「明らかに何かが違う」
「敵だ」
「間違いない」
「何者かはわからないにしてもだ」
「それではだ」
ここでまた話す彼等だった。
「敵の数も多い」
「ではやはり」

「ここは」
「いや、待て」
だがここでだった。ハイデルンが言うのだった。
「それには及ばない」
「というと」
「まさか」
「そうだ、我等が相手をする」
そうだというのだった。
「百人だな」
「そうですが」
「数は我等の五倍です」
「とても相手には」
「いや、できる」
ハイデルンは落ち着いた声で兵達に話す。

# 第三十六話　親父達、新たに加わるのことその九

「安心していい」
「ではここは」
「貴方達もですか」
「戦われるのですね」
「そうだ、戦う」
ハイデルンははっきりと言い切った。
「私達もそうさせてくれ」
「しかし」
「それは」
「何、構うことはない」
ハイデルンだけではなかった。タクマも言うのだった。
「わし等は格闘家だ。だからだ」
「本当にいいのですか？」
「貴方達の手をわずらわせる訳にはいきません」
「やはりここは」
「いや、退くのはよくないな」
柴舟も話した。
「それはだ」
「何故ですか」
「敵の数は多いですが」
「いや、それでもだ」
柴舟はあくまで放す。
「ここはよくない」
「ですが。本当に数がです」
「数が多過ぎますし」
「ですから」
「この者達尋常な者達ではないぞ」

柴舟は剣呑な目で白装束の者達を見ていた。
「そう、妖かしに近い」
「人ではあるようだが」
ハイデルンもその彼等を見ていた。
「だがそれでもだ。住んでいる世界が我等ともまた違う」
「では一体何者ですか？」
「この者達は」
「それはまだわからない」
ハイデルンもこのことには答えられなかった。
「だが、だ」
「だがですか」
「それでは」
「一切不明だ」
こう言えるだけだった。
「しかし。あの者達が逃がさないことは確かだ」
それはだというのだった。そうしてだった。
身構える。他の二人もだ。
「この者達を倒さなければな」
「わし等がやられる」
「ならば容赦はしない」
こう言ってであった。戦いをはじめようとする。兵達もその彼等を見てだった。
「それでは我等も」
「共に戦いましょう」
「ここは」
「そうだ、それがいい」
タクマはその彼等の言葉を受けてにやりと笑ってみせた。そうしてだった。
「ここは戦わなければ生きてはいけんぞ」
「そうですね、やはり」

「ここは」
兵達はそれぞれ槍を握った。そうしてであった。
ハイデルンが彼等に言った。
「貴殿等はだ」
「はい」
「何でしょうか」
「陣を組んでそのうえで動き弓を放つのだ」
槍ではなく弓だというのである。
「いいな、弓だ」
「弓ですか」
「それをですか」
「そうだ、弓だ」
また彼等に告げた。
「騎射はできるな」
「はい、それについては」
「お任せ下さい」
自信のある言葉が返って来た。

# 第三十六話　親父達、新たに加わるのことその十

「我等生まれた頃より馬に乗っております」
「そして弓にも慣れております」
「その言葉信じさせてもらう」
「そして貴方達は」
「どうされますか」
「知れたこと。暴れさせてもらう」
柴舟が楽しげに笑って話した。
「こういうことは親父狩り狩りで慣れておるわ」
「親父狩り狩り？」
兵達はその聞き慣れない言葉にいぶかしんだ。
「何でしょうか、それは」
「一体」
「要するにあれじゃ」
柴舟がその彼等に説明する。
「年長者を襲って金を巻き上げる不届きなガキ共がおってのう」
「そういう奴は何処にでもいますね」
「全く」
兵達はそうした者達を嫌っているようだった。
「そうした連中は容赦なく成敗するべきです」
「袁紹様もそう言っておられます」
「そしてわしはじゃ」
「そうした不届き者達を成敗している」
「そういうことですね」
「そうじゃ。糞ガキ共を日々叩きのめしておる」
随分と物騒な話である。
「だからじゃ。こうした大人数相手にはじゃ」
「慣れている」

「そうなのですね」
「わしもじゃ」
それはタクマもだった。
「ヤクザ者の事務所によく単身突入したものだった」
「ならず者の溜まり場にですか」
「そこに御一人で」
「それも修行のうちじゃ」
これまた随分物騒な修行であった。
「だからこうした状況も慣れておるわ」
「無論私もだ」
ハイデルンも同じだった。
「この程度のことではだ。どうということはない」
「何か凄い人達だな」
「そうだな」
「頼もしいというか何というか」
「怖くもあるがな」
「ははは、それではじゃ」
柴舟が笑いながら話す。
「戦うとしようぞ」
「うむ、それではな」
「今からな」
こうしてだった。彼等はその謎の一団と戦うのだった。まずはだ。
タクマがだ。彼等の前にさっと来てだ。そうしてだった。
「虎煌拳！！」
手から気を放ってだ。それで白装束の一人を吹き飛ばした。
そのうえでだ。両手を前に出し。
「覇王至高拳！！」
「ぐふっ！」
「うわっ！」
今度は数人単位でだ。敵を倒す。そのうえで言うのだった。

「さあ、これからぞ！」
「そうじゃ、わしもいるのだぞ！」
柴舟はだ。足元に炎を繰り出したのだった。
「どうじゃ！闇払いじゃ！」
その炎で白装束の者達を焼くのだった。彼は続いてだった。
敵の中に飛び込み。そのうえで拳に炎を帯びさせて闘っていく。
「ボディがら空きじゃ！」
こう言いながらだった。そしてハイデルンもだった。彼は。
鎌ィ足を出しそれで倒していく。しかも。

# 第三十六話　親父達、新たに加わるのことその十一

接近して手刀を突き刺しだ。言うのだった。
「ストームブリンガー！」
「な、何！？」
「まさか体力を吸い取ってる！」
「間違いない！」
兵達はそれを見て驚きの声をあげる。
「人間なのか！？」
「いや、そうらしいが」
「ううむ、何という人達だ」
彼等も戦っている。しかし三人の戦闘力は桁外れだった。
「これは俺達出る幕ないかもな」
「そこまでだよな」
「これはな」
実際に三人だけで充分だった。その三人の活躍で戦いは終わった。
百人程いた白装束の者達は瞬く間に倒されだ。そうしてだった。
「ふむ、終わったな」
「そうだな」
「これでな」
三人がそれぞれ話す。
「ではだ」
「よいか？」
タクマと柴舟が兵達に声をかける。
「その袁紹という御仁にだ」
「会わせてもらえるか」
「あっ、袁紹様はですね」
「女の方です」
兵達はこのことを話した。

「ですから御仁と言うと失礼にあたりますので」
「このことは覚えておいて下さい」
「ふむ。そうなのか」
ハイデルンはそれを利いて言った。
「どうやらそこはかつての中国と違うな」
「よくそう言われます」
「あっちの世界の人達に」
こんな話をしてだった。彼等はその袁紹のところに来た。すると袁紹はちょうど四人程の者達と会って話をしているところであった。
「テムジンだす」
「ホア＝ジャイだ」
「双葉ほたるです」
「マルコ＝ロドリゲス！」
太った辮髪の小柄な男に髪を剃った痩せた男、青い髪をくくった服の可憐な少女、赤い肌に濃い髪と髭の道着の男、この四人だった。
袁紹は彼等と会っていたのだ。
「では貴方達は私の軍に加わるのですね」
「そうだす」
テムジンはその通りだと話す。
「匈奴の人達が降るのならわす達もだす」
「その通り！」
マルコが大声で話す。
「宜しく頼む！」
「え、ええ」
袁紹はその大声にいささか引いた。左右の田豊や顔良達もだ。
「わかりましたわ」
「かたじけない！」
「最初草原にいて何かと思ったがな」
「はい、確かに」
ホアとほたるが話す。

「匈奴の旦那達にはよくしてもらったよ」
「いい人達ですよ」
「そういえば降れば」
「奴等大人しいですよ」
顔良と文醜も袁紹に話す。

# 第三十六話　親父達、新たに加わるのことその十二

「どうして侵攻して来たのかわからない程に」
「その朧って奴のせいですかね」
「んっ？そういえば何か爺さんがいたらしいな」
ホアが朧という名前に反応を見せた。
「俺達はいつも前線だったからわからなかったがな」
「そうだすな。いたらしいだすな」
テムジンも話す。
「そうらしいだすな」
「貴方達は見ていませんのね」
「何十万もいたからな」
マルコが袁紹に答える。
「ただ。部族の長達が誰かと会っていたらしいな」
「そうですのね」
袁紹はここで顔を顰めさせた。
「その部族の長達の話、一度聞いてみるべきですわね」
「いえ、それがなのですか」
「既に話は聞きましたが」
田豊と沮授が主に話してきた。
「彼等の誰もそのことは覚えていません」
「それどころか現実に戻った様でした」
そうだったというのである。
「不思議なことにです」
「ですからそのことは」
「妙な話が続きますわね」
袁紹は二人の言葉にまた顔を顰めさせた。
「全く」
「はい、私達もそう思います」

「これはどういうことでしょうか」
「麗羽様」
ここで、だった。蔡文姫が袁紹達がいるその天幕の中に入って話をしてきた。
「また別の世界からです」
「そうですの」
もう慣れている袁紹だった。
「それではその者達もここに」
「わかりました」
こうして三人も来たのだった。すぐにタクマとマルコが話しハイデルンはラルフ達と話した。そうしてそのうえでだった。三人は袁紹に白装束の者達のことを話した。
それを聞いてだ。袁紹は言った。
「またですのね」
「またなのか」
「前に一度戦いましたわ」
顔を顰めさせたうえでタクマに話す。
「その者達とは」
「その者達がここでまた出て来たというのだな」
「そうなりますわね」
柴舟にも答える。
「怪しいことこのうえありませんわね」
「ふむ。どうやらこの世界も」
ハイデルンも話す。
「怪しい存在が蠢いているな」
「そうですわね。そうでなくとも宦官共が宮中に蔓延っていますけれど」
袁紹は宦官には嫌悪感を見せていた。
「私も華琳もあの者達には手を焼いていますし」
「それでなのだが」

「よいかのう」
「我々も」
三人はここで袁紹に話すのだった。
「戦わせてもらえるか」
「貴殿の幕下に加わってだ」
「そのうえでだが」
「ええ、宜しくてよ」
即答する袁紹だった。
「それでは。今より貴方達もまた」
こうしてだった。彼等も袁紹の下に加わった。そしてそれは大きな一つの戦いへと向かう、運命の導きに従ったことでもあったのだ。

第三十六話　　完

２０１０・１０・９

# 第三十七話　呂布、張飛から貰うのことその一

第三十七話　呂布、張飛から貰うのこと

劉備達はだ。ようやく袁術の下に来た。そこは荊州の南陽であった。

まずはだ。鳳統が劉備達に話す。

「袁術さんですけれど」

「確かあれだったよね」

馬岱が彼女に応えて言う。

「袁紹さんの従妹よね」

「はい、そうです」

「だったらかなり癖のある人ね」

馬岱はすぐにこう察した。

「袁紹さんがあんな感じの人だし」

「筋はいいみたいです」

それはいいという鳳統だった。

「まだ若いですが牧ですし」

「ただ。州全体は治めていません」

孔明もここで話す。

「あくまで荊州の北部だけです」

「何でなんだ?それは」

馬超がそのことに問う。

「何で北だけなんだ?」

「荊州は広くて」

「袁術さんはそこまで手を広げられないんです」

そうだというのだった。

「それで南部はです」

「統治を広げられないんです」

「つまり人材がそこまでいないのだな」
趙雲が言った。
「そういうことだな」
「はい、そうです」
「その通りです」
こう話す二人だった。
「そういうことでして」
「ですから南部は」
「誰も治める者がいないか」
関羽は腕を組んで考える顔になっている。
「それは問題だな」
「それに何かこの街もおかしいわね」
「そうですね」
神楽と月が話す。
「賑わってはいるのに」
「何か偏っているような」
「っていうか何なのだ、一体」
張飛は店の中を見て呆れた声を出した。
「女の子の絵やそうしたものばかりあるのだ」
「金髪の小さな女の子ね」
劉備はその女の子の絵を見て言った。
「何かしら、これって」
「あっ、それがです」
「袁術さんです」
孔明と鳳統が話す。
「この荊州の牧です」
「その癖のある人なんです」
「この少女がか」
関羽は湯呑みに描かれているその少女を見て言う。
「確かに袁紹殿に似ているな」

「袁家の嫡流らしいわね」
黄忠がこのことを言った。
「確かね」
「そういえば袁紹さんって」
「そうなのだ。妾の子だったのだ」
馬岱と張飛もこのことを知っていた。
「だからあそこまでなるのに苦労したらしいけれど」
「その袁紹殿と違うのだ」
「袁家の嫡流っていったらな」
馬超の家である馬家にしても名門である。だから言うのだった。
「そりゃ相当なものだろ」
「それもあってまだ幼いのに牧なのだな」
趙雲も言う。
「それでだな」
「けれどそれだけでまだ幼いのに牧はなれないわよ」
黄忠はこのことを指摘した。

# 第三十七話　呂布、張飛から貰うのことその二

「だからそれなりにできるのは間違いないわね」
「けれど何でそれで北にばかりなのだろう」
関羽はこのことが不思議だった。
「何かあるのか？」
「そのことも一緒に聞きましょう」
「これから袁術さんのところに行って」
孔明と鳳統がここでまた話す。
「一体どうしてなのか」
「剣のことと一緒に」
「あっ、そうね」
劉備は剣のことをここで思い出した。
「剣があって来たのだったわ」
「いや、劉備殿それは」
「幾ら何でも有り得ないのだ」
関羽と張飛も劉備の今の言葉にはいささか呆れていた。
「御自身の剣のことだから」
「それは困るのだ」
「つい皆と楽しく旅してたから」
忘れていたというのである。
「御免なさい」
「ううむ、仕方ないな」
「劉備殿らしいといえばらしいのだ」
こう言うしかない二人だった。
「だが。それでもだ」
「行くのだ」
「ええ、それじゃあ」
「今から」

最後に神楽とミナが言った。そうしてだった。
袁術の宮殿に向かおうとする。だがここで。
「むっ！？」
「あれは」
関羽と張飛が最初に声をあげた。
「呂布だな」
「そうなのだ」
「あれが呂布さんですね」
劉備がそれを聞いて言った。
「あの赤紫の髪の人が」
「そうだ、間違いない」
「ここに用があるのだ？」
張飛が前に出てだった。
「呂布、どうしたのだ？」
「んっ？」
呂布が張飛に顔を向けようとした。しかしその時だった。
何処からか陳宮が来てだ。そうしてだった。
「陳宮・・・・・・」
「んっ！？」
「陳宮って？」
「キィーーーーーーーーック！！」
皆がその声に耳を向けているとだった。そこで。
張飛に蹴りを入れた。その背中に思いきり入った。
「ぐわっ！」
「恋殿に気安く声をかけるななのです！」
蹴ってからの言葉だった。
「恋殿はこのねねが御護りしますのです！」
「護る必要あるのか？」
馬超も呂布のことは聞いて知っていた。
「洒落にならない位強いだろうに」

「ええい、それでも御護りするのです！」
まだ言う陳宮だった。
「恋殿はこのねねが！」
「大体あんた誰よ」
馬岱はそのことから尋ねた。
「呂布さんの関係者みたいだけれど」
「ねねですか」
「そうよ。それ真名よね」
「そうなのです。それでねねはなのです」
「名前は？」
「陳宮なのです」
ここで名前を言った。

# 第三十七話　呂布、張飛から貰うのことその三

「覚えておくのです」
「それでなのだが」
趙雲がここで話す。
「貴殿は呂布の何なのだ？」
「聞いて驚くです」
誇らしげな笑みを浮かべて腕を組んでだ。そのうえでの言葉だった。
「ねねは呂布殿の軍師なのです」
「軍師？」
「そうなのね」
神楽と月が話す。
「呂布さんの」
「軍師なの」
「そうなのです。呂布はまさに天下随一の武勇の持ち主」
これはもう言うまでもないことだった。誰もが知っている。
「その恋殿の軍師なのです」
「軍師いるのか？」
「そもそもそれが問題なのだ」
関羽と張飛が言う。その蹴られた張飛もだ。
「呂布は頭も凄いぞ」
「勘も桁外れなのだ」
「その様ね」
ミナもそのことを見抜いていた。そうして話すのだった。
「見たところ」
「それにしても」
黄忠が話す。
「いきなり蹴るというのはどうかしら」

「そうなのだ。思い出したのだ」
それを思い出した張飛だった。
「御前何なのだ、いきなり蹴るなんて論外なのだ」
「ふん、当然なのです」
陳宮は腕を組んだまま悪びれない。
「恋殿に気安く声をかけるからなのです」
「ううん、口の減らないチビなのだ」
「チビは御前なのです！」
「御前の方がチビなのだ！」
「チビじゃなくて小柄なのです！」
言い争いになった。しかしであった。
ここでだ。呂布がやっと口を開いた。
「ねね」
「れ、恋殿！？」
劉備達はここで蹴られたことを怒ると思った。しかしであった。
「チビと小柄は」
「は、はい」
「同じ意味」
彼女が言うのはこのことだった。それを聞いた一同は。
思いきりこけてしまった。その思いも寄らぬ言葉にだ。
「そ、そこ！？」
「言うのはそこなのか」
「これは予想しなかったわね」
「し、しかも」
月が起き上がりながら劉備達に言う。
「劉備さん達」
「え、ええ」
「下着見えてたし」
「えっ！？」
「劉備さんはピンクで」

まずは彼女の下着の色からだった。
「それがばっちりと」
「あっ、見られた？」
「関羽さんと趙雲さんは白ね」
「うっ、見られてたか」
「困ったことだ」
「孔明ちゃんと鳳統ちゃんはそれぞれ熊とお花の柄ね」
「はわわ、その通りです」
「あわわ、恥ずかしいです」
「最後に馬超さんがいつものエメラルドグリーンで」
「あたし緑好きだからな」
全員その通りだった。まさにだ。
「ずっこけるのはいいけれど」
「ううん、見られるのは」
「恥ずかしいものだな」
劉備と関羽は頬を赤らめさせていた。

# 第三十七話　呂布、張飛から貰うのことその四

「スカートが短いのは好きだけれど」
「いつもこれが気になるな」
「そうね。私はスカートの丈が長いけれど」
黄忠はそれで助かっていた。
「気をつけないとね」
「呂布さんのスカートも短いけれどね」
馬岱はスカートを見ていて話す。
「それでも見えないのかしら」
「それが困ってるです」
陳宮はその困った顔で話す。
「恋殿は無防備なのでしょっちゅう見えてしまうです」
「それは大変なことなのだ」
張飛もこのことには同情した。
「洒落にならないのだ」
「ところで」
ここで趙雲が言ってきた。
「何故貴殿等がいるのだ？」
「そのことなのですか」
「そうだ、どうしてなのだ？」
このことを陳宮に問うた。
「何故ここにいるのだ？」
「使者」
呂布が答えてきた。
「それで来た。朝廷の使者として」
「朝廷？ああ、そうだな」
関羽はすぐにわかった。
「貴殿は朝廷の官位も授かっていたな」

「うん」
呂布は関羽の言葉にすぐに頷いた。
「だから」
「それでだったな。朝廷の使者もできるな」
「呂布は凄いのです」
陳宮がその呂布の傍でまるで己のことのように誇らしげに語る。
「僅かな兵で一万の賊を征伐したのです」
「僅かって」
「どれだけで？」
「五百です。ねねも一緒だったのです」
つまり二十倍の敵を倒したのだというのだ。
「その強さ、まさに鬼神だったのです」
「流石だな」
関羽も唸る話だった。
「呂布、さらに腕をあげたな」
「悪い奴は許さない」
その呂布がぽつりと呟く。
「けれど」
「けれど？」
「悔い改めたらいい」
呂布はこうも言うのだった。
「その時はそれで」
「いいのだ？」
「そう、いい」
また言った。
「だから確かにやっつけたけれど」
「恋殿はその賊達を赦したのです」
また陳宮が誇らしげに話す。
「ねねは呂布殿のお優しさにも感動したのです」
「呂布はいい奴なのだ」

張飛も笑顔でこう言った。
「このチビとは全く違うのだ」
「ねねはチビではないのです！」
「チビなのだ。どっからどう見てもチビなのだ！」
「まだ若いだけなのです。チビではないのです！」
「じゃあ子供なのだ！」
「御前に言われたくないのです！」
「ねね、落ち着く」
その陳宮を呂布が嗜める。
「怒っても何にもならない」
「恋殿、しかし」
「お茶飲む」
陳宮が言い返してもだった。まだ言う。

## 第三十七話　呂布、張飛から貰うのことその五

「そして落ち着く」
「うう、わかったなのです」
呂布にこう言われてはだった。陳宮も弱かった。
そうしてだ。陳宮が落ち着いてからだ。呂布はこう一同にも話した。
「それで」
「それで？」
「今度は何だ？」
「とりあえず袁術には伝えた」
こう一同に話すのだった。
「朝廷からの言葉は」
「その袁術殿にか」
「南部もちゃんと治める」
そうしろということをだ。
「それを伝えた。袁術はやればできる」
「少なくともこの街を見ればな」
「ああ、そうだよな」
趙雲と馬超も話す。
「中々以上によく纏まってる」
「最初噂聞いてどれだけやばいかって思ったけれどな」
「けれど南部は」
ここでまた話す呂布だった。
「大変なことになってるから」
「そうね。治める者がいないとね」
黄忠が考える顔になって話す。
「そうなるわよね」
「その通り。だから伝えた」

呂布はぽつりとした感じで述べた。
「南部のこと」
「けれどどうしてなんですか？」
孔明は袁術がどうして南部を治めないのかを呂布に尋ねた。
「それは」
「それが下らない理由なのです」
陳宮がむっとした顔で話す。
「それもかなり」
「下らないですか」
「そうなのです。下らなさ過ぎて涙が出ます」
こう鳳統にも言う。
「お化けが出るとかで」
「お化けって！？」
馬岱がそれを聞いてまずは唖然となった。そうしてだ。
鳳統に顔を向けてだ。くすくすと笑いながら言うのだった。
「何かそれって子供みたいよね」
「袁術さんは実際にまだそういう御歳ですが」
「あっ、そういえばそうね」
「はい。それは仕方ないかと」
「けれどお化けなんていませんよ」
孔明は自信に満ちた声で言い切った。
「そんなの絶対に」
「いないのだ？」
「はい、いません」
張飛に対しても断言だった。
「いる筈がありません」
「そうなのだ。それだったらいいのだ」
孔明の断言にまずは落ち着いた顔になる張飛だった。そのうえでだった。
「だったら鈴々も安心するのだ」

「そ、そうだな」
関羽も不安を何とか隠したような顔で言った。
「それだったらな」
「お化けね」
だが神楽はそうしたものを聞いてこんなことを話した。
「そういえばかつて」
「そう、妖怪がいたわ」
ミナが神楽のその言葉に応えた。
「私も戦ったあの」
「腐れ外道ね」
「人を襲い喰らう邪悪な妖怪だったわ」
その妖怪のことを話すのだった。
「巨大な餓鬼の姿をしていて」
「はい、私も聞いたことがあります」
月もミナのその言葉に頷いてきた。

## 第三十七話　呂布、張飛から貰うのことその六

「そうでなくとも。常世という世界は」
「だ、大丈夫ですよ」
孔明は三人の話を耳にしてだ。不安になった顔になったがそれでもその不安を何とか押し隠しながらこんなことを言うのであった。
「それは。この世界にはいませんから」
「他の世界にはいるかも」
しかし鳳統が話す。
「そう。神楽さん達みたいにこの世界に」
「はわわ、そうなったら大変ですよ」
孔明は鳳統のその言葉に狼狽を見せはじめた。
「私達の世界が無茶苦茶になってしまいます」
「もう既に滅茶苦茶」
また呂布が言う。
「漢王朝の力が衰えてるし」
「それでなのです」
陳宮もだった。
「袁術殿には南部もなのです」
「けれど袁術はお化けが退治されない限り嫌だと言う」
「なら退治すればいいだろう」
「そうだよな」
趙雲と馬超が二人の話にすぐに突っ込みを入れた。
「その場合は」
「何ならあたし達がやらせてもらうしな」
「どっちにしろ袁術さんとは会わないといけないしね」
「そうよね。それはね」
馬岱の言葉に黄忠が頷く。
「だからここはね」

「袁術さんに提案してみようよ」
「ただ。袁家の人ですから癖の強い人なのは間違いありません」
「それは確実です」
孔明と鳳統はこのことを問題として述べた。
「ですからここは」
「何か考えて」
「贈り物を渡すといい」
呂布は言った。
「袁術に」
「贈り物！？」
「贈り物っていうと」
「恋は果物をあげた」
それをだというのだ。そうしてである。
「桃を」
「贈り物っていうとそんなのでいいの？」
劉備がすぐに呂布に問い返した。
「桃ならお店に」
「そう、それを贈る」
まさにそうだという呂布だった。
「袁術は蜂蜜水とかそうした甘いものが好き」
「じゃあここは？」
「甘いものを？」
「お店はそこ」
呂布は左手を指差した。するとそこに確かに店があった。果物屋である。葡萄や西瓜が置かれている。当然桃もである。
その桃を見てだ。劉備はまた言った。
「まさかあそこで桃を」
「そう、買って贈った」
「袁術殿はそのこと自体は喜んでくれたのです」
陳宮も話す。

「ただ、お化けはどうしてもと言って」
「袁術さんのところに人はいないのかしら」
劉備は少しきょとんとなって首を傾げさせた。
「関羽さんや張飛さんみたいな強い人は」
「う、うむ」
「お化けなのだな」
関羽と張飛はここでも少し戸惑ったような顔になってだった。
「そうだな。それはな」
「怖くとも何ともないのだ」
「本当？」
鳳統が少し怪訝な顔でその二人に問うた。

# 第三十七話　呂布、張飛から貰うのことその七

「あの、まさか」
「い、いや別に」
「何ともないのだ、へっちゃらなのだ」
「だといいのですけれど」
「ふむ、これは」
「そうですよね」
だが、だった。趙雲と馬岱はその二人を見てくすくすと話す。
「この二人どうやらな」
「あれですよね」
「あれって何だ？」
馬超には従妹達のやり取りの意味がわからない。
「何かよくわからないんだがよ」
「まあとにかくね」
黄忠が言った。
「まずは何か贈り物を買いましょう」
「それなら果物にしましょう」
神楽がこう提案した。
「それをその袁術さんにあげましょう」
「そうですよね。じゃあ桃は呂布さんが贈ったから」
劉備が明るい顔に戻って言う。
「私達は他のものを」
「葡萄？」
「それとも梨？」
ミナと月がそれぞれそうしたものを話に出す。
「甘いものは多いし」
「それならここは」
「西瓜がいいかしら」

劉備が言うのはそれだった。
「贈り物は」
「いいと思う」
彼女の提案に最初に賛成したのは呂布だった。
「袁術は西瓜も好きだから」
「そうなんですか」
「会った時西瓜も食べたいとか言ってた」
「はい、言ってましたです」
陳宮もその通りだというのだった。
「袁術殿、西瓜をやたらと欲しがってましたのです」
「そう。じゃあ決まりね」
劉備は呂布と陳宮の言葉を受けて笑顔になった。
「西瓜。袁術さんに贈りましょう」
「よし、そうだな」
「それでいいのだ」
関羽と張飛もここでは明るい顔になっていた。
「では早速西瓜を買おう」
「あのお店に行くのだ」
「ただし西瓜は」
また話す呂布だった。
「当たり外れがあるから」
「袁術殿は特に黄色い西瓜が好きなのです」
陳宮は一行にこのことも話した。
「だからそれを持って行くといいのです」
「そんなの外からじゃわからないのだ」
張飛は陳宮のその言葉に困った顔になって述べた。
「西瓜の中身の色なんて」
「そうだよな。切らないどうしてもな」
「わからないものよね」
馬超と黄忠もそのことに言及する。馬超はとりわけ困った顔にな

っている。
「そんなのどうやって調べるんだ？」
「それが問題だけれど」
「大丈夫」
だがここでまた呂布が話すのだった。
「それは」
「若しかして西瓜の中の色がわかるのか」
「そう」
こう趙雲に対してこくりと頷いてみせる。
「その通り」
「それはかなり凄い才能だな」
「っていうか呂布さんって天才なんじゃないの？」
馬岱は呂布を尊敬の目で見ていた。
「西瓜の中身がわかるなんて」
「勘」
呂布は一言だった。
「それでわかる」
「あわわ、勘で西瓜の色がわかるなんて」
「凄いなんてものじゃないですよ」
鳳統と孔明も驚くことだった。

# 第三十七話　呂布、張飛から貰うのことその八

「私達それがわかる方法を知りたいのに」
「勘でわかるなんて」
「恋の勘は当たる」
ここでも言う呂布だった。
「外れたことがない」
「その通りなのです」
また腕を組んで自信たっぷりに言う陳宮であった。
「恋殿の勘はまさに百発百中なのです。恋殿の弓の腕と同じなのです」
「そういえば呂布は弓の名手でもあったな」
「そのこと聞いてるのだ」
これは関羽と張飛だけでなく誰もが知っていた。
「しかし。勘がそこまで凄いとなると」
「若しかして軍師はいらないのだ？」
「そ、そんなことはないのです」
陳宮は張飛の今の言葉を必死に否定しようとする。
「ねねはちゃんと。呂布にとってかけがえのない」
「そう。ねねは大事」
ここで呂布も言った。
「恋の。家族」
「恋殿・・・・・・」
「かけがえのない家族」
こう言うのである。
「必要。離れられない」
「その通りなのです。だからこそねねは恋殿の為なら火の中水の中なのです」
「お互いに幸せなんですね」

劉備はそんな二人のやり取りを聞いてにこりと笑って述べた。
「呂布さんと陳宮さんは」
「幸せなのですか！？ねね達は」
「はい、お互いを信頼し合って大事に思えるのは幸せです」
まさにそうだというのである。
「ですから。御二人はとても幸せです」
「そう、恋は幸せ」
実際に言う呂布だった。
「ねねがいてくれて。幸せ」
「ねねもです」
そして陳宮もだった。
「呂布と御会いできて一緒にいられて。幸せなのです」
「その幸せ、永遠に続くといいですね」
劉備はここでもにこりをしている。
「御二人が」
「そうですね。それじゃあ」
「西瓜、買いましょう」
話が一段落したところでだ。孔明と鳳統が言ってきた。
「あちらのお店で」
「その黄色い西瓜を」
「恋も一緒に行く」
呂布はこう言うと席を立った。
「見分ける。その西瓜を買う」
「かたじけないな」
「では早速なのだ」
関羽と張飛が頷いてだった。一行は呂布が選んだその西瓜を買った。それ自体はすんなりと終わった。だがそれからであった。
店を出たところでだ。劉備が言うのだった。
「あっ、あれ」
「あれ？」

「はい、あのお店です」
こう呂布に答えながらさっきまでいた喫茶店の左手にある店を指差す。その店は土産ものを扱っている店だった。そこだったのだ。
「あのお店に行きませんか？」
「そうですね」
「何か面白いものがあるかも知れませんし」
孔明と鳳統がそのことに頷いた。
「行きましょう」
「二人で」
「よし、それなら」
「今から」
こうしてだった。一行はその土産ものの店に入った。その時だった。
関羽はふと呂布の方天画戟を見た。その刃の付け根にだった。
「待て、呂布」
「何？」
「前にあった犬の作りものはどうしたのだ？」
「赤兎のあれ？」
「ああ、あの犬の名前だったか」
関羽はこのことを思い出して頷いた。

# 第三十七話　呂布、張飛から貰うのことその九

「そうだ、あの犬のだ」
「なくなった」
「なくなったのか」
「そう、なくなった」
そうだというのである。
「その賊との戦いの時に」
「残念だな、それは」
「恋、悲しい」
実際に呂布はここで俯いてしまった。
「赤兎がいないと思うと」
「恋殿、きっとまた見つかります」
陳宮がその俯いた呂布を励ます。
「悲しまれてはなりません」
「うん、陳宮」
「ですからまずはこの店にです」
「入ろう」
こうしてだった。呂布は劉備達と共に店の中に入った。するとだった。
店の中には色々なものがあった。その中には。
「これなのです」
「この芸人みたいな幼い娘がなのか」
「はい、袁術殿なのです」
陳宮はこう関羽に述べる。金髪のこまっしゃくれた感じの幼女が描かれている湯呑みを手に取ってだ。
「この人がなのです」
「何か袁紹に似てるのだ」
張飛もその湯呑みを見て話す。

「袁紹が子供になったらこうなると思うのだ」
「ですから袁家の人ですから」
孔明はこのことを指摘した。
「それも当然です」
「本当に癖が強い人が多い家なのね」
神楽はある意味感心していた。
「袁家っていうのは」
「四代三公の家柄です」
鳳統はこのことを話す。
「家柄は見事です。ですが」
「ですが？」
「そこでなのね」
「はい、代々妙な癖や趣味を持っている方ばかりなのです」
こうミナと月に話す。
「困ったことにです」
「袁紹さんだけじゃなかったのね」
「はい、それでこの国でもお騒がせ一族でもあるんです」
「ううん、それは何か」
「問題だと思うけれど」
ミナと月は自分達の本来の世界でないのにそれでも親身になっている。
「それでも深刻じゃないみたいだし」
「そうですね。それは」
「はい、悪い人達じゃありませんから」
だからだと。鳳統はまた話す。
「それは曹家と同じです」
「そういえば曹操さんも」
劉備が鳳統の話を聞きながら言う。彼女は袁術が描かれた手拭いを手に取っている。
「悪い人じゃなかったし」

「た、確かに」
だが関羽は困った顔を見せる。
「悪い人ではないのだが」
「操を捧げるところだったしな」
「そうだ・・・・・いや待て翠」
関羽は横にいる馬超にすぐに言った。
「元々は貴殿が」
「悪い、あの時は」
手を合わせてそれを顔の前にやって謝る馬超だった。
「本当にな」
「全く。曹操殿を仇と誤解してだ」
「わかったよ。曹操はそんな奴じゃない」
今は彼女もよくわかっていることだった。

## 第三十七話　呂布、張飛から貰うのことその十

「それに愛紗も何だかんだで手を出さなかったな」
「そうだな。無理強いはしないと」
「それ考えるとやっぱりいい奴だな」
「うむ。どうも宦官の孫ということを異様に気にしておられるがな」
「あれはかなり問題だな」
趙雲はおもちゃを見ていた。
「曹操殿にとってな。厄介な話だ」
「私達が想像している以上にか」
「そうだ、厄介だ」
「劣等感ね」
神楽がここでこう言った。
「要するにね」
「自分のそうした部分を忌む気持ちですね」
「そうよ。それを何とかしたいのよ」
神楽はそのことをはっきりと指摘したのだった。
「曹操さんはね」
「そして袁紹殿もか」
「あの人もなのだ？」
「そうだ、劣等感だったな」
関羽毛は張飛に答えながら神楽に問うた。
「それだったな」
「ええ、そうよ」
「それだったのか」
また言う関羽だった。
「あの方も袁紹殿も」
「そうしてね」
ここでまた言った神楽だった。

「劣等感が強い人はね」
「うむ」
「そうしたことを持っていない人には」
「そうした者にはか」
「かなり強い対抗心を燃やすわ」
そうだというのである。
「それが問題ね」
「そうなのか。では袁紹殿は袁術殿に」
「いや、それはないな」
「ないのか？」
「歳が離れ過ぎている」
趙雲が言ったのだった。
「だからだ」
「それでないのか」
「ないな。嫌っていてもだ」
「ううむ、そうしたことも関係あるのか」
「そういえばあたしもな」
馬超は槍を見ていた。子供用のおもちゃであるがそれでもだった。
「蒲公英を見てもな」
「その劣等感を抱かないの？」
「ああ、歳が離れてるとな」
こうその従妹を見ながら話す。
「別にだよな」
「そういうものなのね」
「ああ、そうだな」
また従妹に告げる。
「別にな」
「歳って大事なのね」
馬岱は自分の手を自分の口にやりながら述べた。右手は自分の槍を持っている。

「それを考えたら」
「そうね。本当にね」
黄忠はだ。お菓子を見ていた。
「私も瑠々が私より凄くなってもね」
「嬉しいんですか？」
「やっぱり」
「そうよ。娘の成長は当然ね」
嬉しいとだ。孔明と鳳統に話す。
「嬉しいわ」
「私まだよくわかりませんけれど」
「そういうものなんですね」
その孔明と鳳統はガイドブックを見ている。
「親子って」
「子供が自分を超えることが嬉しいんですか」
「劣等感を抱く対象にも条件があるのよ」
また話す神楽だった。

## 第三十七話　呂布、張飛から貰うのことその十一

「袁紹さんも袁術さんもお互いに対抗意識はあってもね」
「劣等感は抱かないんですか」
「そう、劣等感はもっと複雑で深刻なものなのよ」
神楽は今度は劉備に話していた。
「特に曹操さんや袁紹さんみたいな人にとってはね」
「袁紹は妾腹で」
「曹操殿は宦官の家の娘か」
張飛と関羽がまた述べた。
「それが二人には」
「深刻なのだな」
「そういうことよ。若し完璧な相手が出たら」
そうした相手が出たならばと。神楽は話していく。
「二人がどうなるかね」
「そういえば何か」
劉備がきょとんとしたような顔で話す。
「都に何か凄い人が出て来たらしいけれど」
「司馬慰さんですね」
「あの人ですね」
孔明と鳳統が言った。
「名門司馬家の嫡女の方で」
「物凄い切れ者だとか」
「凄い人なんだ」
劉備にとってはこの程度で終わる存在だった。しかしである。
神楽はその司馬慰のことを聞いてだ。顔を曇らせて言った。
「まずいわね。そうした人こそなのよ」
「問題なんですか？」
「曹操さんや袁紹さんにとってはね」

そうだというのである。
「厄介なのね」
「そうなんですか」
「何もなかったらいいけれど」
神楽は期待する言葉を出した。
「本当にね」
「そうね。この国自体に不吉なものを感じるし」
「それがよからぬことにならなければいいのですが」
ミナと月はあるものを見ていた。
「それが本当に」
「そうならなければ」
「あの、それでなんですけれど」
劉備はその二人に顔を向けて尋ねた。
「御二人は今何を見ておられるんですか？」
「ええと。動物の」
「おもちゃを」
「あっ、これですね」
見ればだった。十二匹の動物達の小さな置物である。それぞれ紐が着いていてだ。それを見るとであった。彼等は話すのだった。
「十二匹ですか」
「干支ね」
「それですね」
ミナと月がここでまた話す。
「鼠に牛に」
「他の生き物も」
「ええと、鼠は」
劉備がその鼠の置物を見ながら言う。
「子沢山の効用があるんですね」
「お守りの意味もあるのね」
神楽が話す。

「この置物は」
「あっ、この犬の置物いいのだ」
張飛がその置物を見てすぐに手に取った。
「可愛いのだ」
「むっ、その置物は」
関羽はその置物を見て話した。
「似てるな」
「そうなのだ」
張飛も関羽の言葉で気付いた。
「赤兎に似ているのだ」
「というよりかそっくりだな」
「全くなのだ」
「むっ、赤兎なのです！？」
陳宮もそれを聞いて二人の方に顔を向けた。

# 第三十七話　呂布、張飛から貰うのことその十二

「見せるのです、早く」
「何なのだ、急に」
「むむっ、これは確かに」
陳宮がその置物を見ながら話すのだった。
「赤兎なのです」
「そっくりなのだ」
「寄越すのです！」
陳宮は急にだった。張飛にその置物を渡すように迫った。
「早く、それをねねに！」
「一体何を急に言うのだ！？」
「そうなのです、寄越すのです！」
また言う陳宮だった。
「ねねに。早く！」
「嫌なのだ、これは張飛のものなのだ！」
張飛も陳宮に対してムキになって言い返す。
「それで何で渡すのだ」
「お金はもう払ったのか？」
「払ったのだ」
こう関羽にも言うのだった。
「とっくの昔になのだ」
「ううむ、それではだ」
関羽は腕を組んで難しい顔になってだ。そうして言った。
「鈴々が正しいな」
「そうね。ここは」
「間違いなくですね」
ミナと月も話す。
「張飛ちゃんが先に見つけて先に買ったから」

「それは」
「けれどそれでもなのです！」
その言葉を聞こうとしない陳宮だった。
「ねねはそれを恋殿に！」
「いい」
だがここでだ。呂布が話した。
「恋は別にいい」
「いえ、そういう訳にはいきません」
陳宮はその呂布に顔を向けて返した。
「恋殿と赤兎の絆、それを見ればわかります」
「わかる？」
「この置物、恋殿にとって必要なのです」
陳宮は確信していた。
「ですからどうしてもなのです」
「しかしそれは」
ここで言ったのは神楽だった。
「陳宮ちゃんが間違ってるわ」
「はい、私もそう思います」
「私も」
月とミナも神楽のその言葉に同意して頷く。
「陳宮ちゃん、だから」
「ここは」
「ううん、我慢するしかないですか」
「そうだな。残念だがな」
関羽も同情する顔になっていたがそれでも言うのだった。
「珍しく鈴々が正しい」
「珍しくなのは余計なのだ」
「しかし正しいことは事実だ」
それはだというのである。
「そういうことだ。陳宮殿、ここは諦めてくれ」

「諦める訳にはいかないのです」
「それでもだ。諦めるのだ」
また言う関羽だった。そうしてだった。
陳宮を諭そうとする。だがここでだ。
張飛は先程聞いた呂布と陳宮のこれまでの出会いと絆のことを思い出した。そうしてであった。
陳宮にだ。手に持っている犬の置物を差し出したのだった。そしてだ。
「ほらなのだ」
「何ですか、急に」
「やるのだ」
こう陳宮に言うのである。
「好きなようにするのだ」
「ねねにあげるのですか？」
「急にいらなくなったのだ」
憮然としたような顔で話す。
「だからだ。やるのだ」
「御前、本当に」
「さあ、気にすることはないのだ」
こうも言ってであった。

# 第三十七話　呂布、張飛から貰うのことその十三

「さっさと受け取るのだ」
「わかったのです」
陳宮も頷いてだった。その置物を受け取るのだった。
それからだ。こう張飛に言った。
「御礼は言ってやるのです」
「ふん、そんなものいらないのだ」
「恋殿、これを」
「有り難う」
まずは礼を言う呂布だった。だがこう陳宮に言うのだった。
「ただ」
「ただ？」
「もう二度とこんなことはしないこと」
抑揚がないのは相変わらずだが厳しい言葉だった。
「絶対に」
「は、はい」
「恋の為でもこんなことはしたらいけない」
「も、申し訳ありません」
「そういうことだから」
呂布が言うのはここまでだった。そうしてだった。
呂布と陳宮は店を出る。劉備一行もそれぞれ欲しいものを買って店を出ていた。外はもう夕刻になっていた。赤い世界の中だった。
その中でだ。彼女達は話すのだった。
「恋達はこれで帰る」
「そうされるんですね」
「うん、帰る」
「この街も出るのです」
陳宮も話す。

「そういうことなのです」
「そうなのですね。ただ」
劉備が一行を代表してだ。そのうえで二人に話す。
「これで永遠のお別れではないですよね」
「多分」
呂布はぽつりと答えた。
「そうなる」
「そうですね。それじゃあまた」
「うん、また会おう」
「その時を楽しみにしてますね」
「うん」
呂布がここでにこりと笑った。微笑みだったが確かにだ。
そしてだ。陳宮にも言うのだった。
「ねねも」
「ねねもなのですか」
「お別れの言葉を言う」
こう話すのだった。
「早く」
「そう言われてもなのです」
陳宮は俯いて難しい顔になって話した。
「ねねはこの連中とは」
「置物貰った」
呂布はこのことも言った。
「だから」
「ううん、それじゃあ」
「早く言う」
「お別れの言葉を」
「少しだけ別れる言葉を」
その時のことをというのだった。
「言う」

「わかったのです」
「笑顔で言う」
呂布はこのことも言い加えた。
「そう、笑顔で」
「笑顔でなのですか」
「人は別れる時の顔を覚えている」
関羽と張飛の話をそのまま告げたのだった。
「それじゃあ今から」
「今からなのですか」
「そう。お別れの言葉を言う」
「笑顔で」
「そう。言って別れる」
そう告げてだった。陳宮を見てであった。

## 第三十七話　呂布、張飛から貰うのことその十四

「いい」
「わかったのです。それじゃあ」
何とか笑顔を作ってだ。そうして告げたのだった。
「また会うのです」
「わかったのだ」
張飛が挨拶を返した。お互い笑顔になっている。
そうして言い合ってだ。別れたのだった。
お互いに手を振り合って別れた後でだ。孔明がにこりと笑ってその張飛に言ってきた。
「それで鈴々ちゃんは」
「何なのだ？」
「優しいんですね」
こう彼女に言うのである。赤い夕焼けの中でだ。
「本当に」
「鈴々が優しいのだ？」
「はい、とても」
「それは気のせいなのだ」
ムキになった顔で言い返す張飛だった。
「鈴々は全然優しくないのだ」
「そうなんですね」
「そうなのだ。だからそれは気のせいなのだ」
「わかりました」
笑顔のまま頷く孔明だった。
「それじゃあ今はですね」
「今はなのだ？」
「晩御飯食べましょう」
こう提案した。

「いいですね」
「晩御飯なのだ」
「はい、何がいいですか？」
「何でもいいのだ」
料理の種類にはこだわらないというのだ。
「ただ」
「ただ？」
「たっぷり食べるのだ」
そうするというのである。
「もう嫌になるまで食べるのだ」
「はい、じゃあそうしましょう」
「全く。御前は」
関羽はそんな張飛を見て優しい笑顔になっていた。
「相変わらずだな」
「相変わらずとはどういう意味なのだ」
「言ったそのままだ」
こう言うのだった。
「本当にな」
「そうなのだ」
「じゃあ早く行くか」
馬超も笑顔で言った。
「あたしもお腹ぺこぺこだしな」
「そうだな。メンマをだな」
趙雲はここでもそれだった。
「食べに行くとしよう」
「そうですね。それじゃあ」
最後に劉備が言ってだった。
「明日の袁術さんとの面会の為に」
「英気を養いましょう」
黄忠が応えてだった。一行は夕食を食べに向かったのだった。そ

うしてその袁術とだ。いよいよ会い剣の話をするのであった。

第三十七話　　完

２０１０・１０・１２

# 第三十八話　袁術、劉備達と会うのことその一

第三十八話　袁術、劉備達と会うのこと

三姉妹はだ。ある富豪のところで歌を披露した後でそれぞれ話していた。

「そういえばだけれど」

「うん、どうしたの？」

「姉さん、また唐突ね」

張梁と張宝が長姉の言葉に応える。

「昨日食べたラーメンの話？」

「あれは美味しかったけれど」

「違うわよ」

張角はこのことは否定した。そのうえであらためて妹達に対して言うのだった。

「バイスさんとマチュアさんだけれど」

「あの人達のこと？」

「一体どうしたの」

「この前私が董卓さんのところに行こうって言った時なんだけれど」

こんな話をしたというのである。

「その時ね」

「ええ。何かあったの？」

「それで」

「何か二人共急に難しい顔になって」

張角は特にこれといって考えていない顔で話す。

「それでね。それは止めようって言ったのよ」

「擁州に行くのは」

「嫌なのかしら」

「ほら、擁州って長安があるじゃない」

その擁州でも最大の都市である。この国でも屈指の都市だ。
「あそこに行こうって思ったんだけれど」
「長安いいわよね」
「確かに」
妹達も姉のその言葉に納得した顔で頷く。
「あそこは前都だったしね」
「今もかなり栄えてるっていうし」
「それで私も提案したんだけれど」
張角は今は自分の口に右の人差し指の先を当てて話す。
「二人共結局ね」
「ううん、折角そっちまで行けそうだったのに」
「残念ね」
「こうして中原を回るのもいいけれど」
今の彼女の活動範囲はそうなっているのだ。
「それでも。西の方にもね」
「そうよね。行くべきよね」
「私もそう思うわ」
「二人にも何か考えがあるのかしら」
ただそう思うだけの張角だった。事情を知らない為これも当然であった。
「やっぱり」
「よくわからないけれどそうなんでしょうね」
「そうね、多分」
妹達もこう考えた。
「気にはなるけれどね」
「今はお仕事の管理はあの人達に任せてるし」
かつては張宝がしていた。だがそれが変わったのだ。
「それならね」
「私達が言うのは止めましょう」
「ううん、そうなるのね」

「そうよ。だってあたし達はもう」
「仕事の管理は自分達ではしていないから」
そのバイスとマチュアがしているのである。だからだ。
「あの人達に任せてね」
「そうしてね」
「そうね。じゃあ」
ここでだ。張角は少しだけ考える顔になって述べた。
「長安はいいわよね」
「そうよ。他の国でもいいじゃない」
「何処でも」
「それで何処に行くのかしら、今度は」
張角はもう長安のことは忘れてそのうえでまた話した。
「それでだけれど」
「確かね」
張梁が答えた。
「揚州よ」
「そこなの」
「孫策さんのところ」
張梁はまた話した。
「そこだから」
「じゃあ建業かしら」
そこではないかと言う張宝だった。

# 第三十八話　袁術、劉備達と会うのことその二

「それじゃあ」
「建業って確かお魚が美味しいんだっけ」
張角が言った。
「何か楽しみね」
「そうよね、じゃあ」
「楽しみに行きましょう」
こうしてだった。三姉妹は何の心配もなく活動を続けていた。しかしだった。
張角が行きたいと言っていた長安ではだ。相変わらず地獄が繰り広げられていた。
「うう、俺達この地獄から何時出られるんだ？」
「安心しな、ずっとだからな」
「永遠に終わらないでやんすよ」
チャンとチョイが山崎に話す。三人は今鉄の下駄を履いてそのうえで山を駆け足で登らさせられているのだった。相変わらずの苦行だ。
「俺達なんかもう何年だ？」
「覚えてないでやんす」
「来る日も来る日も修行と重労働の日々だよ」
「まさに起きたら寝るまでこんな調子でやんすよ」
「何で俺までそうなるんだよ」
山崎は涙を流しながら話した。
「こんなところに出て来てよ」
「運が悪かったんだよ」
「その通りでやんすよ」
それだというのだった。
「残念だがな」

「諦めるでやんすよ」
「うう、何てついてないんだ」
山崎もこの運命にはぼやくしかなかった。その間にもだ。
キムが来てだ。厳しく言うのだった。
「こら！」
「うわっ、出た！」
「出たではない！」
いきなり蹴りだった。山崎の顎に奇麗に決まった。
「喋りながら修行をすると怪我をするぞ！」
「じゃあ蹴るなよ！」
「これは愛の鞭だ！」
こう主張するキムだった。
「だからいいのだ」
「糞っ、無茶苦茶な意見だな」
「無茶苦茶と言うのか。私が」
「それ以外に何だってんだよ」
「その屁理屈許せん！」
そう叫んでだった。今度はだ。
「半月斬！」
「ぐわあああああああっ！」
必殺技を浴びせる。本当に容赦がない。
そんな修行地獄だった。そしてその中でだ。チャンとチョイは暗い顔になってだ。そうしてそのうえでこんなことを言うのだった。
「山崎の旦那も諦めないとな」
「この地獄は無限ループでやんすよ」
二人は既に諦めていた。修行地獄は永遠なのだ。
そしてであった。長安の地獄とは正反対にだ。
今荊州太守の館ではだ。音楽が聴こえてきていた。そうしてある。
金髪を長く伸ばして巻かせた小さな幼女が歌っていた。黄色の丈の長いふわふわとした感じの服を着ている。オレンジも入っている。

顔立ちは幼いがはっきりとした顔である。眉目は整っている。
その彼女がだ。歌っていた。
その前には青い髪を短くして白と青の上着に赤い丈の短いスカートの少女がいた。顔は少しだけ垂れ目で穏やかな顔をしている。しかし何処か癖がありそうだ。胸は大きい。そこが幼女と違っていた。
そうしてである。彼女はこう己の前にいる幼女に言ったのだった。
「美羽様、お見事ですよ」
「うむ、そうか」
美羽と呼ばれた幼女はその言葉に笑顔で応える。
「歌はよいのう」
「はい。この張勲感服しました」
「もっと褒めるがよいぞ」
幼女は笑顔のまま話す。
「この袁術褒め言葉は大好きじゃ」
「はい、それじゃあ」
「それにしてもじゃ」
だが、だった。袁術はここで困った顔になって話すのだった。

# 第三十八話　袁術、劉備達と会うのことその三

「昨日の呂布じゃが」
「あの人ですか」
「そうじゃ、どうもな」
「どうも？」
「五月蝿いのう。州の南部まで統治せよとは」
「そのことですか」
「お化けが出るのに行けるものか」
こう張勲に話す。
「とてもじゃ」
「それじゃあこのことは」
「お化けを退治する者はおるか？」
「では紀霊殿や楽就殿を向けられては」
「それものう」
袁術はこの提案に難色を示す。そうしてこう言うのだった。
「今はな」
「賊に対してですね」
「そうじゃ。そっちに兵を回したい」
「じゃあとりあえずは」
「そうじゃ。ましてわらわ自ら行くとなるとじゃ」
「美羽様戦えませんからね」
「政ならできるのじゃがな」
そのことには自信ありげな顔で話した。
「しかし戦はじゃ」
「ううん、私もお化けの退治は」
「できぬな。そうじゃな」
「はい、そういうのはちょっと」
張勲も困った顔で話す。

「何でしたら昨日の呂布殿に御願いしてもよかったのですが」
「忘れておった。不覚だったぞ」
今になってこのことを後悔する袁術だった。
「参ったのう」
「そうですよね、本当に」
「どうすればよいかのう」
「あの」
ここでだった。黒い髪を肩で切り揃えた小柄な幼女が入って来た。
赤い半ズボンを履き黒い上着である。その手には先が三つに別れた剣がある。
その彼女がだ。こう言ってきたのである。
「あの、美羽様」
「あっ、紀霊殿」
「どうしたのじゃ？皐」
「御会いしたい人が来ております」
その紀霊が言ってきた。
「どうされますか？」
「むっ、誰なのじゃ？」
「はい、劉備玄徳という方です」
「劉備とな」
「御存知ですよね、やはり」
「話は聞いたことがある」
こう答える袁術だった。
「異民族征伐で功績を挙げたそうじゃな」
「はい、袁紹殿と曹操殿が出兵されたあの時にです」
「姉様がじゃったな」
袁術は袁紹の名前が出ると嫌な顔になった。
「そうじゃったな」
「はい、その時にです」
「その劉備がここに来たのか」

「やはり御会いされますか？」
「うむ、会うとしよう」
袁術はすぐに決めた。
「それではじゃ」
「そうされますか」
「劉備だけではないな」
袁術はこう察しをつけてきた。
「他の者達もじゃな」
「はい、関羽殿達もおられます」
「関羽殿といいますと」
張勲が言ってきた。
「あれじゃないですか。山賊退治の」
「そうじゃったな」
「美羽様、ここはですね」
張勲はここで言うのだった。
「その関羽殿達にですね」
「うむ、その者達に」
「お化けを退治してもらいましょう」
こう提案するのだった。
「それでどうでしょうか」
「おお、それは名案じゃな」
話を聞いてだ。笑顔になる袁術だった。

# 第三十八話　袁術、劉備達と会うのことその四

「それではじゃ」
「ただ、美羽様」
「どうしたのじゃ、七乃」
「御会いする前に少し時間があればですけれど」
「あっ、それだったら」
紀霊は張勲に対してすぐに答えてきた。相手が同僚なら話し方は普通だった。
「劉備殿達は今お昼を食べてるから」
「あっ、そうなの」
「ええ。時間は少しあるわ」
こう張勲に話すのだった。
「それがどうかしたの？」
「諸将を集めてお話したいのだけれど」
こう白手袋の手のうち右の方の人差し指を上に示させて話した。
「美羽様、それでいいですか？」
「何じゃ？何かあったのか？」
「はい、これからのことです」
言葉の調子は穏やかなものだった。表情もだ。
しかしだ。微妙に緊張を漂わせてだ。張勲は言うのであった。
「昨日都から呂布さんが来られましたけれど」
「あ奴は確か董卓の臣下であったな」
袁術もこのことは知っていた。
「それがどうかしたのじゃ？」
「いえ、董卓さんではなくですね」
「では誰のことじゃ？」
「はい、都のことです」
そちらだというのである。

「都のことでお話が」
「というと何のことなのじゃ？」
「まずは皆を集めましょう」
いぶかしむ袁術にまた話した。
「それからです」
「何かよくわからぬがわかったぞ」
こう答えた袁術だった。
「それではじゃ」
「はい。では皐ちゃん」
「そういうことなのね、七乃姉さん」
「ええ、皆を集めましょう」
「わかったわ。それじゃあ」
こうしてだった。袁術の諸将が集められた。まずは茶色の髪を腰まで伸ばした長身の少女であり緑のチャイナドレスに黒いタイツという格好である。目は紫であり顔立ちははっきりしている。切れ長の目だ。
「楽就、只今参りました」
「うむ、黄菊よ」
こう返す袁術だった。
「よくぞ参った」
「はい、美羽様それでお話は」
「まずは集まってからじゃ」
「わかりました」
楽就は頷き袁術の前に控えた。その次にだった。
今度は赤い燃える様な短い髪に左目だけ眼鏡をかけている少し大人の女だった。年齢は袁術の周りの者達の中で最も年長だろうか。鳶色の垂れ目であり眉は細くこれも垂れている。口は大きく一文字である。
服は白い看護士の様な服だ。その女も来たのだった。
「揚奉、ここに」

「菖蒲も来たのう」
「はい、後は」
「あの者達じゃな」
袁術はここで難しい顔になった。そうしてだった。
張勲にだ。こう話すのだった。
「のう、七乃」
「何でしょうか、美羽様」
「何故あの様な者達が来たのかのう」
「何か他の世界から来られてるそうですが」
「一体どういう世界なのじゃ？」
袁術はかなり困った顔であった。
「ああした者達がいる世界というのは」
「さて。何か色々と物騒な世界のようですね」
「それもわからん」
袁術は難しい顔でまた話す。
「戦とは別に。得体の知れぬ者達が多くいるそうじゃが」
「はい、私達のこの世界とは全く違うとか」
「しかしこの世界に来た」
「その来た理由もわかりませんね」
「全くじゃな。妙なことばかりじゃ」
「ええ。それでは美羽様」
「何じゃ、今度は」
「それでもあの人達は召抱えられるのですね」
にこにことした顔で主を見ながら問うた。

# 第三十八話　袁術、劉備達と会うのことその五

「そうされるのですね」
「その通りじゃ。折角わらわを頼ってきたのじゃ」
それは当然だと。胸を張って話す袁術だった。
「だからじゃ。それはそれでよい」
「はい、ならそれでいいです」
張勲もそれはいいとした。
「ではあの人達もこれから」
「うむ、来るのじゃな」
「はい、すぐに」
こうしてだった。何人か来た。まずはだった。
「激ヤバじゃないか、こんなことになるなんて」
「一体何がやばいのかしら」
「さあ」
白い顔に毛髪のない頭である。青い化粧を少ししている。黄色を主として白もある服を着ている。この男が言っているのを聞いてだ。
楽就と紀霊が言い合うのだった。
「何かよくわからないわね」
「いつものことだけれど」
「このままじゃ全てが終わってしまう」
男はまだ言うのだった。
「激ヤバだ！どうしたらいいんだ！」
「こ奴はまたなのか」
袁術もその彼を見て呆れ顔であった。
「全く。何なのじゃ」
「相変わらずよくわからない人ですよね」
張勲こう言う。
「ターションマオさんでしたね」

「呼び名は我が国の名前じゃな」
「はい、それは」
「しかしこんな奴知らんしな」
「ですからあちらの世界からの人ですから」
「ううむ、変な奴ばかりのようじゃな」
「美羽様と同じく」
さりげなく毒を吐く張勲だった。しかもにこにことしながらだ。
そうしてそのうえでだ。騒ぐターションマオをそのままにしてまた来たのだった。
今度は青緑の髪に白い服の幼女にハンマーを持った男の子だった。それに太った小男と小柄な老人である。そういった面々であった。
「お尻ぶりぶり！胸ぼいんぼいん！」
「新曲だな、眠兎」
「そうだよ、乱童」
幼女と男の子がこうやり取りをしていた。
「私が考えた曲」
「いい曲だよな」
「そうだね」
もう一人いた。青い服にダークブラウンの髪を立たせた少年だ。ズボンはライトグレーである。白いマフラーが目立っている。
その少年は乱童と眠兎にだ。笑顔で言うのだった。
「歌いやすそうだね」
「そういえばアルフレドって」
「最近お空飛んでる？」
「ああ、勿論だよ」
その少年アルフレドは笑顔で頷くのだった。
「やっぱり空はいいよね」
「そうそう。おいら達に止められるのは」
「何もないから」
「しかし何故じゃ？」

「全くでしゅ」
老人と太った男がいぶかしむ声を出した。
「この連中は普通に空を飛べるが」
「全く以て謎でしゅ」
「いや、十兵衛さんチンさん」
アルフレドはその山田十兵衛とチン＝シンザンに話す。
「それはコツがありまして」
「コツで飛べるのじゃな」
「私も飛べるでしゅか」
「多分」
アルフレドはチンのその肥満体形を見ながら話した。
「もっと痩せれば」
「痩せるのは無理でしゅよ」
それは否定するチンだった。
「だって私は食べないと身体がもたないでしゅよ」
「ううん、飛ぶにはそのお腹が」
また言うアルフレドだった。

# 第三十八話　袁術、劉備達と会うのことその六

「ですからもう少し」
「もう少しでしゅか」
「はい、痩せればいいですよ」
「じゃあ諦めるでしゅ」
チンは残念そうな顔で話した。丸いサングラスの奥の目が悲しそうである。
「仕方ありませんでしゅ」
「そうですか」
「わしは別にいいのじゃ」
十兵衛はそれはいいというのだった。
「飛ぶことには興味がないからのう」
「女の子だよね、十兵衛さんが興味あるのは」
「それもぷりぷりの」
「その通りじゃ」
笑って乱童と眠兎に話す。
「わしが興味があるのは可愛い娘だけじゃ」
「じゃあこの世界は」
「最高だよね」
「最高じゃ！」
大きな声を出して言い切ったのだった。
「こんな世界があるとは。夢みたいなのじゃ」
「しかしセクハラじゃったな」
袁術は難しい顔でその十兵衛に対して告げた。
「そうじゃったな」
「それがどうかしたのかのう」
「それをやってみよ。許さぬぞ」
袁術のその顔は厳しいままだった。

「百叩きじゃ」
「何でそこまで言われるのじゃ」
「わらわもおなごとしてそうしたことは許さん」
だというのである。
「だからじゃ。よいな」
「ううむ、折角百花繚乱の国じゃというのに」
「覚悟しておれ」
「はい、皆さん集まりましたね」
張勲がここでまた言うのだった。
「それではお話をはじめましょう」
「それで何の話なのじゃ？」
「話はです」
「うむ。何のことじゃ？」
「都では相変わらずの状況が続いています」
張勲はここから話した。
「何進大将軍と宦官達の争いがです」
「鬱陶しい奴等じゃ」
「全くですね」
「本当に」
楽就と揚奉が袁術の言葉に頷く。
「全く。宦官というものは」
「どうしてあそこまで有害なのか」
「あんな連中は皆殺しにすればいいのじゃ」
袁術は不快感を露わにさせていた。
「さっさとな」
「そうしてです」
張勲は主の怒りをよそに話を続けていく。
「大将軍の側近にです」
「あっ、司馬慰ね」
紀霊が言った。

「あの人のことね」
「はい。名門の出身でありしかも抜群の切れ者で早速大将軍に重く用いられているその人です」
「何か知らんが凄い奴だそうじゃな」
袁術も言った。
「そうじゃな」
「そうです。この人の登場で大将軍は懐刀を得られました」
「それでどうなったのじゃ？」
袁術は張勲に問うた。
「話は」
「大将軍は宦官達を締め付けられようとしておられます」
「いいことじゃ」
袁術はこのことを素直に喜んだ。
「あんな連中に好き勝手させていてはならん」
「はい。ですが司馬慰殿ですが」
「その者に何かあったのか？」
「何しろ立場的にも能力的にも何の問題もない方です」
張勲が指摘するのはここだった。

# 第三十八話　袁術、劉備達と会うのことその七

「ですから曹操さんと袁紹さんがです」
「ああ、御二人が」
「成程」
ここで皆わかった。こちらの世界の面々はだ。
「やっぱりね。嫌うわよね」
「当然ながら」
「それで御二人は司馬慰殿を警戒しておられます」
「まあ当然じゃな」
袁術も話をここまで聞いて述べた。
「麗羽姉様と華琳殿ではのう」
「御二人共劣等感の強い方ですから」
「所詮わらわと違うわ」
袁術はこうも言った。
「わらわの様に袁家の嫡流ではないからのう」
「そうですよね。けれど」
「けれど？」
「その司馬慰殿美羽様の為にもならないかと」
張勲はこのことも言うのだった。
「そうした方が大将軍の傍におられると」
「ううむ、そうかものう」
袁術も張勲の言葉に考える顔になった。
「わらわの夢は相国になることじゃ」
「はい」
「三公より上になるぞ」
「ではその為には」
「司馬慰は敵になるのう」
「そうですね。それは」

紀霊は袁術のその言葉に頷いた。そうしてだった。
「では我等の方針は」
「基本はここを治めるのじゃ」
袁術も政を忘れてはいなかった。
「そしてそのうえで姉様や華琳殿と協力するぞ」
「そして司馬慰殿に対しますね」
「あと宦官は主だった奴は全員処罰じゃ」
このことも忘れていなかった。
「十常侍は全員処刑じゃ」
「はい、ではその時が来れば」
「その様に」
「南部は」
ふとだった。揚奉が言ってきた。
「どうされますか？」
「あれはとりあえずじゃ」
袁術は彼女の言葉にもすぐに答えた。
「劉備殿達に化け物を退治してもらってからじゃ」
「それからですか」
「お化けはどうにもならんのじゃ」
怖がる顔であった。
「だからじゃ。仕方ない」
「ううむ、そうですか」
楽就はそれを聞いて複雑な顔になった。
「それでは」
「そういうことじゃ。さて」
ここまで話してだった。袁術はあらためて一同に話した。
「劉備殿と会おうか」
「はい、それでは」
張勲が笑顔で応えてだった。そうしてだった。
袁術は張勲と紀霊を連れて謁見の間に入ってだ。主の座に着いて

そこで劉備達と会うのだった。張勲を右、紀霊を左にそれぞれ置いてだ。そのうえで劉備一行を出迎えた。
程なくしてその劉備達が来た。まずは袁術の前に控える。
その袁術はだ。すぐに劉備に言ってきた。
「苦しゅうない、立つがいい」
「はい」
「それでは」
程なくしてだ。劉備達を立たせてだ。そのうえで話を聞くのだった。
「まずはですね」
「まずは。何じゃ？」
「これを」
劉備はあるものを出してきた。それはだった。
手紙だった。袁術はその差出人を見てまず顔を曇らせた。
「むむっ、これは」
「袁紹殿からのものですね」
「ううむ、不吉じゃな」
張勲の言葉にも嫌そうな顔で返す。

# 第三十八話　袁術、劉備達と会うのことその八

「それでも読まないといかんのじゃな」
「はい、読まないと袁紹殿が」
「わかった。それではじゃ」
「はい」
「全く。いきなり美人だの何だのと自分を褒めておるわ」
袁術は自分で手紙を読みながらぼやく。
「それで何じゃ？また大会を開いたのか」
「あの鰻のですか」
「あれは袁家伝統のじゃがな」
「それでも袁紹殿はあれが好き過ぎますよね」
「全くじゃ。ふんふん、それで」
紀霊とも話をしながらだった。そうしてであった。
手紙を読み終えた。それから劉備達に話すのだった。
「話はわかったぞ」
「それはですか」
「あの剣を返して欲しいのじゃな」
「御願いできますか？」
「美羽様」
「ここは先程のお話通り」
張勲と紀霊がここで袁術に耳打ちした。
「お化けを退治してもらって」
「それを条件として」
「うむ、そうじゃな」
袁術も二人の言葉に頷いた。そうしてだった。劉備にまた声をかけた。
「劉備殿」
「はい」

「あれは貴殿の家の宝なのじゃな」
「その通りです。ですからこちらにお伺いして」
「遠い幽州からの旅大変だったであろう」
労いの言葉も言う。
「そして名前を聞いてじゃが」
「私のですか？」
「そうじゃ。貴殿は劉家の者じゃな」
「はい、その通りです」
「皇室の方か」
このことを確認したのだった。そのうえでだった。
袁術はだ。ここで左右の二人に囁いた。
「無碍にはできぬのう」
「はい、そうです」
「それではここは」
「それにわざわざ幽州までここに来てくれたしのう」
「ではここは」
「やはり」
「うむ、返す」
これはするというのだった。そうしてだった。
「ではここはじゃ」
「お化け退治と共に」
「そうして」
「その通りじゃ。ではな」
こう話をしてだった。また劉備との話に戻った。
「では劉備殿」
「はい」
「剣は返そう」
劉備に対して微笑んで告げた。
「貴殿の宝はな」
「そうしてくれますか？」

「うむ、ただしじゃ」
この言葉を聞いてだった。関羽達は劉備の後ろでひそひそと話をした。
「やっぱりそう来たな」
「全くなのだ」
「返すには条件がある」
「そう来たな」
「そうね」
こう話をしてだ。袁術を見るのだった。
「癖のありそうな人物だしな」
「やっぱり袁家の人間なのだ」
「用心してかかるべきだな」
「ああ、そうするか」
「それなら」
そうしてだ。孔明と鳳統を見た。するとであった。

# 第三十八話　袁術、劉備達と会うのことその九

孔明と鳳統は。すぐにあれを出してきた。
「あの」
「これですけれど」
「むっ、それは」
袁術はそれを見てだ。すぐに笑顔になった。
「西瓜じゃな」
「はい、黄色い西瓜です」
「それです」
「おお、それはいいのう」
黄色い西瓜と聞いてだ。袁術はより明るい顔になった。
そのうえでだ。二人に言うのであった。
「ではその西瓜有り難く受け取らせてもらうぞ」
「はい、どうぞ」
「お召し上がり下さい」
「さて、後で桃に西瓜に」
その西瓜は絶対に忘れなかった。
「蜂蜜水じゃな。豪勢にいこうぞ」
「それは駄目です」
「そうですよ」
だが、だった。張勲と紀霊がだ。袁術に言ってきた。
「三つも一片に食べたらお腹壊しますよ」
「どれか一つにして下さい」
「ううむ、それは困るのう」
袁術は二人のそのことばに難しい顔になって述べた。
「どうするかじゃな」
「はい、どれか一つです」
「くれぐれもです」

「悩むのう、ここは」
「それでです」
「どうされますか？」
二人はすぐに話を戻してきた。
「劉備殿の剣は」
「どうされますか？」
「うむ、最初は条件付で返すつもりじゃったが」
袁術は考えを明らかに変えていた。単純ではある。
「わらわの気分がよくなった」
「それではここは」
「返されますか」
「いや、少し変える」３６
流石に最後の一線は守っていた。
「返しはするがじゃ」
「お返しはされますか？」
「それは」
「ただし。化け物を退治できなければ貰い受ける」
そうするというのである。
「それでどうじゃ」
「そうですね。それだと」
「いいと思います」
こう答えてだった。二人も賛成した。
そのうえでだ。袁術はまたしても劉備との話に戻ってだ。こう言うのであった。
「劉備殿」
「はい」
「剣は返そう」
思わせぶりな微笑みと共の言葉だった。
「それはじゃ」
「そうしてくれますか？」

「うむ。ただし条件がある」
「条件といいますと」
「若し化け物を退治できなかった時はじゃ」
「その時は」
「その剣はわらわのものとなる」
こう劉備に言うのだった。
「それでどうじゃ？」
「つまり私達がお化けを倒せばそれでいいんですね」
「うっ・・・・・・」
劉備の明るい顔と返答にだ。袁術も引いた。
「それはその通りじゃが」
「わかりました。ではそうさせてもらいます」
「それでよいのじゃな」
「はい、御願いします」
実際に笑顔で答える劉備だった。
「それで」
「では七乃、皐」
「わかりました」
「それでは」
左右の二人も袁術の言葉に頷いてだ。そのうえでだった。

# 第三十八話　袁術、劉備達と会うのことその十

剣は劉備に返された。大ぶりで黒い柄と鞘である。所々に金が施され赤や青の宝玉もある。実に見事で華麗な装飾であった。

その剣を見てだ。孔明が言った。

「はわわ、これは」

「そうよね」

鳳統もだった。

「かなり凄い剣ですよ」

「装飾だけでもかなりの価値があります」

「わらわもこれ程までの剣は見たことがないぞ」

袁術も言う。

「手放すのが惜しいがまあ致し方ない」

「袁術さん、有り難うございます」

「礼はよい。ただしじゃ」

「はい、ただしですね」

「化け物を退治できなかったらじゃ」

「その時はですね」

「わらわのものとなるぞ」

このことを念押ししてだった。そのうえで袁術は剣を手渡したのだった。そうしてそのうえでだった。

劉備達は化け物退治に向かった。その道中関羽と飛は浮かない顔だった。その彼女達を見て黄忠と馬岱がひそひそと話をする。

「二人共何か様子がおかしいわね」

「そうですよね。どうしたんでしょう」

「化け物も山賊も同じなのにな」

馬超はこう考えていた。

「それでどうしてなんだ？」

「まあ行ってみればわかる」

趙雲はわかっていて言わなかった。
「そこにな」
「そうなのね」
「お化けの前でってことね」
「何かよくわからないけれどそうなんだな」
「その通りだ。では先に進もう」
「それにしてもですね」
孔明は明るい顔であった。
「剣を返してもらったのは成功でしたね」
「うん。やっぱり西瓜をあそこで出したのがよかったかも」
「そうよね。最初に出すのじゃなくて」
「状況をあえて見計らって」
二人はそうしたのである。
「あそこで出して」
「それがよかったわね」
「作戦成功ね」
神楽もその二人に言った。
「お陰で剣は手に入ったわね」
「はい、ただお化けを倒せないと」
「同じです」
「そういうことね。けれどお化けなら」
「ミナさんは倒せるんですね」
「ええ」
こう月に答えるミナだった。
「弓で。それは」
「そうですか。それなら大丈夫ですね」
「ただ」
「ただ？」
「若しも人がしていたのなら」
ミナは既にこの場合を考えているのだった。

「少し厄介なことになるわね」
「人ならばですか」
「そういうことも有り得るから」
ミナは話す。
「だからその時は」
「その時はです」
月の顔が厳しいものになった。そうしての言葉だった。
「賊ならば退治するだけです」
「そうね。そうするしかないわね」
神楽も月のその言葉に頷いたのだった。

# 第三十八話　袁術、劉備達と会うのことその十一

「ここはね」
「そういうことになります」
「私としては賊の方が気が楽だけれど」
「私もです。できれば」
こんな話をしながらだった。その南部に向かった。そしてだった。
化け物が出て来るその廃寺に来た。既に夜になっていた。
「暗いな」
「そうなのだ」
まずは関羽と張飛が言った。
「ううむ、この寺は」
「ボロっちいにも程があるのだ」
見ればだ。暗闇の中でシルエットになっているがそれはだ。屋根も柱も壁もだ。見事なまでに朽ち果ててしまっているのがわかるものだった。
その廃寺を見てだ。二人はまた言った。
「ここはな」
「そうなのだ」
「行くか」
「それしかないのだ」
「そうよね」
二人に劉備が話してきた。
「何があってもね」
「剣を取り戻す為ですか？」
「それで」
孔明と鳳統がこう劉備に問うた。
「ですから絶対に」
「ここは」

「ううん、それもあるけれど」
しかしだった。劉備はここで言うのだった、
「やっぱり。お化けだから」
「はい」
「それで、ですか」
「放っておいたら他の人とか襲いそうだし」
劉備は化け物をそうしたものだと考えていた。そのうえでの言葉だった。
「だから。退治しておかないとね」
「ううん、劉備殿って凄いですよね」
「そうよね」
二人は劉備その言葉を聞いて感心して言った。
「そうしたことをちゃんと考えておられて」
「御自身のことよりも」
「だって誰かの為に何かしないと」
また言う劉備だった。
「駄目じゃない」
「そう考えられる人って中々いませんから」
「はい、本当に」
「自分のことしか考えない人って」
「確かにいます」
孔明と鳳統はそうした人間のことを話すのだった。
「そうした人と比べて劉備さんは」
「本当に素晴しい人です」
「そうかしら」
自分ではその自覚はあまりないのがまさに劉備だった。そうしてだった。彼女はあらためて一同に対して言うのであった。
「それじゃあここは」
「はい、行きましょう」
「お化け退治です」

孔明と鳳統が言ってだった。一行は寺の中に入った。寺の中はしんと静まり返っていた。暗闇の中に廃墟だけがあった。
その中を通りながらだ。馬超が言った。馬岱もである。
「本当に何か出そうな場所だな」
「そうだね。お化けがね」
「出るよな、これは」
「うん、私もそう思う」
「そう、例えば後ろから」
趙雲も思わせぶりに囁く。
「うらめしや〜〜、とな」
「ま、まさかな」
「そんなことはないのだ」
関羽と張飛はそれを必死に否定しようとする。
「と、とにかくだ」
「何時出て来てもいいようにするのだ」
「ええ、それはね」
黄忠のその手にはもう弓がある。
「何時でも。何処から来てもね」
「それでどんな化け物でしょうか」
月はこのことを考えていた。

# 第三十八話　袁術、劉備達と会うのことその十二

「一体」
「そうね。例えばだけれど」
神楽が言ってきた。
「身体は虎、頭は狸、尻尾は蛇で」
「それはあれですね」
「しかも声はとらつぐみで」
「鵺ですよね」
月は神楽の話にこう突っ込みを入れた。
「それって」
「ええ、それよ」
まさにその鵺だというのだった。
「それの可能性もね」
「零ではないですよね」
「はい、そういう場合は」
「私がこの弓で」
ミナも既に弓を持っている。傍にはチャンプルもいる。
「倒すわ。むしろ」
「むしろ？」
「むしろといいますと」
「鵺ならまだいいわ」
そうだというのであった
「若し腐れ外道やそうした相手なら」
「話には聞いてるわ」
「恐ろしい妖怪だったそうですね」
「人を喰らう餓鬼」
それがその腐れ外道だというのである。
「私達が退治してよかったわ」

「っていうかそんな恐ろしい存在がいたんですか！？」
「そちらの世界には」
孔明と鳳統はそのことの方が怖かった。
「あの、お化けが本当にいるって」
「それはかなり」
「もういないわ」
ミナは怯える二人にこう話した。
「だから安心して」
「それでもです」
「妖怪がいたなんて」
「この世には色々なものがいるから」
ミナは二人にさらに話した。
「だから。そうした存在も」
「いるんですか」
「怖過ぎです」
そんな話をしているうちに道観の前に来た。するとであった。
何処からかだ。声がしたのだった。
「帰れ～～～～」
「うっ、遂に」
「出て来たのだ」
関羽と張飛が青い顔になる。
「どうする？それで」
「どうするのだ」
「いや、それは決まってるだろ」
馬超がその二人に言う。彼女は既に槍を構えている。
「退治しないとな」
「そ、それはそうだが」
「わかっているのだ」
「前からよ」
黄忠がここで言った。するとだ。

その道観からだ。出て来たのだった。
巨大な顔が出て来てだ。そうして巨大な顔で叫ぶ。
「帰れ～～～～」
「あれはまさか」
「そうよね」
孔明と鳳統はその顔を見て二人で頷き合う。
「只の」
「間違いないわ」
「じゃあどうしようかしら」
神楽もわかっているようだった。その証拠に二人に言ってきた。
「ここは」
「私達はいいのですけれど」
「ただ」
孔明と鳳統は関羽と張飛を見た。見れば二人はだ。
全く動かない。構えさえ取っていない。それを見てだ。
ミナと月がだ。二人に言った。
「二人共、私が援護するから」
「一緒に行きましょう」
「あ、ああ」
「わかっているのだ」
二人は一応請う言いはする。それで構えは取った。
しかしだ。二人はそれでも動こうとしなかった。
そんな二人を見てだ。今度は馬岱が言ってきた。
「愛紗さん、鈴々ちゃん」
「こ、今度は何だ？」
「何が言いたいのだ」
「何がって行こうよ」
彼女もこう二人に言うのだった。

# 第三十八話　袁術、劉備達と会うのことその十三

「早いところ化け物退治をしようよ」
「行くぞ」
最後に趙雲が言った。彼女は両足に力を溜めてだ。そのうえで跳躍しようとした。しかしここで彼女にとって思わぬ事態が起こった。
「ま、待ってくれ！」
「一人にしないで欲しいのだ！」
その関羽と張飛がだ。彼女をそれぞれ左右から抱き締めてきたのだ。
趙雲はそれで動きを止めてしまった。止められたと言うべきか。
「待てっ、いきなり何をする！」
「だからお化けだぞ！」
「ちょっとそれは勘弁して欲しいのだ！」
「それはわかるが」
趙雲は左右から抱かれながらも何とか言った。
「それでもだ」
「そうだよ。早く行くぞ」
馬超がその二人に言ってきた。
「こんなことしててもな」
「翠もいてくれ！」
「御願いなのだ！」
「うわっ、あたしもかよ！」
今度は馬超も抱き締められた。四人で絡み合う。
「待て愛紗、脚と脚の間に身体を入れるな！」
「そ、そんなつもりはない！」
「鈴々、何処触ってるんだよ！」
「翠こそ鈴々の上に跨るななのだ！」
無茶苦茶なことになっている。

「わ、私は胸は駄目なのだ・・・・・・・」
「そう言う星も首筋を触るのは」
「あのな、あたし背中は・・・・・・・あっ！」
「翠、耳を噛むななのだ・・・・・・・」
しかもだ。二人同士だけでなくだ。
「翠、胸に手が入ってるぞ」
「鈴益々、スカートの中は駄目だ」
「愛、だからよ、お尻触らないでくれよ」
「星、太腿と太腿が」
そんな四人を見てだ。孔明と鳳統は真っ赤になっていた。そのうえだった。
「はわわ、こっちも大変ですう」
「どうしよう、これは」
「一時撤退しかないわね」
黄忠はいささか残念そうに言った。
「幾ら何でもこれじゃあね」
「いやらし過ぎるわね」
「浮世絵みたいですね」
神楽と月もそんな四人を見て話す。
「この状況はちょっと」
「どうしたものでしょう」
「お化けどころじゃないし」
馬岱もは為す。
「撤退しかないよね」
「いえ、ここは」
だが、だった。劉備があの剣を手に言うのだった。
「お化けを絶対に」
「そうしたいのはやまやまだけれど」
その劉備にミナが話す。
「主力の四人があれだから」

「え、ええと」
劉備もだ。今の四人を見て真っ赤になった。
最早それぞれ下着も露わになってほぼ半裸になってだ。鰻がそれぞれ絡み合うようになってしまっていた。そうした状況だったのだ。
そんな四人を見てだ。孔明が言った。
「とりあえずは」
「どうしよう、朱里ちゃん」
「四人に言おう。大声で」
「一時撤退ね」
「劉備さんは雛里ちゃんが言ってあげて」
劉備には彼女だというのだ。
「四人はどうしてもというのなら」
「どうしてもなら？」
「皆でこのまま担いで行こう」
「それしかないのね」
「ええ、だから」
「それも一つの手ね」
黄忠は孔明のその言葉に頷いた。
「それじゃあね」
「はい、とにかく撤退です」
「得物は全部拾っておかないと」
最早構えるどころではなくだ。四人は絡み合い続けている。
「うっ、くぅ・・・・・・・・」
「はう、あっ・・・・・・・・」
「あひっ、ふっ・・・・・・・・」
「あう、ああ・・・・・・・・」
「何処をどうやったらここまでなるのかしら」
馬岱はそんな四人を見てまた言う。
「とにかく姉様達を持って行こう」
「ええ、じゃあ」

「私達も」
「協力させてもらいます」
馬岱に神楽、ミナ、それに月が頷く。そうしてだった。
四人でそれぞれを引き離してそのうえで担いで行く。得物は黄忠が持った。鳳統はまだ残ろうとする柳眉に対して話した。
「劉備さん、あの」
「どうしたの？鳳統ちゃん」
「もう帰りましょう」
彼女のスカートを両手で引っ張っての言葉だった。
「皆さんも撤退に移られましたし」
「そうなの」
「はい、ですから」
鳳統はまた話した。
「劉備さんも」
「それじゃあ」
それに頷いてだった。劉備も遂に戦線を離脱したのだった。
ここでは退治どころではなかった。撤退するしかなかった。一行は拠点にした宿に戻りだ。とりあえずは体勢を立て直すことになった。

第三十八話　完

２０１０・１０・１５

# 第三十九話　幽霊、袁術を驚かせるのこと一

第三十九話　幽霊、袁術を驚かせるのこと

宿でだ。趙雲と馬超が二人に怒っていた。
「全くだ」
「ありゃないだろ」
「め、面目ない」
「返す言葉もないのだ」
関羽と張飛は困った笑顔で彼女達に返す。今一行は宿の一室にいる。言うまでもなく彼女達が宿にしているその部屋の中にいるのだ。
「どうしてもな」
「お化けは苦手なのだ」
「それでもだ」
「何であんなことになるんだよ」
趙雲と馬超もまだ言う。
「犯されると思ったぞ」
「しかも三人がかりでな」
「全くだ。四人共それぞれから犯されるなぞ」
「そんなの普通ねえだろ」
こう言う二人を前にしてだ。関羽と張飛は困った顔になってきた。そうして少しずつだが小さくなってきていた。肩身が狭いからである。
そんな話の後でだ。孔明があらためて一行に話した。
「それでは皆さん」
「今後のことね」
「ええ、それだけれど」
鳳統に答えながら話すのだった。
「とりあえず対策を考えました」

「お化けのね」
「うん。雛里ちゃんもよね」
「多分。朱里ちゃんと同じ」
鳳統は孔明のその言葉にこくりと頷いた。
「ここは」
「一つ工夫をしてね」
「工夫って？」
馬岱がその二人に尋ねた。
「お化け相手に策をなのね」
「はい、そうです」
「策を仕掛けます」
実際にそうだという二人だった。
「ただ。問題はです」
「あれはお化けではありません」
「何っ、そうだったのか！？」
「お化けじゃなかったのだ」
関羽と張飛はそれを聞いて思わず声をあげた。
「しかしあれは火を噴いていたぞ」
「目もぎらぎらとしていたのだ」
「あの、火は噴いていませんよ」
「目も輝いていませんでした」
孔明と鳳統は二人にすぐに突っ込みを入れた。
「ただ出て来ただけじゃないですか」
「それで帰れって叫ぶだけで」
「そういえばそうか」
「そうなのだ」
関羽と張飛はここでやっとわかったのだった。
「それではだ。我々は」
「おもちゃに驚かされたのだ」
「それであああした事態になるのだからな」

「頼むからしっかりしてくれよ」
陵辱されそうになった二人の言葉だ。
「それはな。いい加減な」
「何とかしてくれよ」
「あ、ああ。済まない」
「今度から絶対にしないのだ」
「化け物が怖いといってもだな」
「ああいうことはな」
だが、だ。趙雲はここでくすりと笑ってだ。こんなことも言った。
「しかし。それでもだな」
「どうしたんだよ星」
「うむ、私は女も好きだ」
「それは聞いたぜ、前に」
「だからだ。ああして四人で絡み合うのもだ」
こう馬超達に話すのだった。

## 第三十九話　幽霊、袁術を驚かせるのこと二

「いいものだな」
「おい、何言ってるんだよ」
「どうだ翠、今晩にでも」
「あたしはそんな趣味はねえっ」
馬超は戸惑った顔で誘う目をしてみせてきた趙雲に言い返した。
「女同士だろ、それにあたしまだそういうことはな」
「安心しろ、それは私もだ」
「経験ないのにどうしてそこまで言えるんだよ」
「知識はあるからだ」
こんな話をする二人だった。そしてだ。
黄忠は劉備に顔を向けてだ。こう言うのだった。
「そういえば劉備さんは」
「私ですか？」
「ええ、見事だったわ」
彼女に優しい笑みで告げる。
「最後まで踏み止まって」
「だって私のことですから」
こう答える劉備だった。
「だからでしたけれど」
「けれどそれがいいのよ」
「いいんですか」
「滅多にできることじゃないわ」
こう話すのだった。
「そういうことはね」
「そうなんですか」
「そうよ。とりあえずだけれど」
黄忠は孔明と鳳統の二人に顔を向けた。そのうえでだった。

こう二人に尋ねたのだった。
「あの、それでだけれど」
「はい」
「お化けのことですよね」
「今夜また向かうのね」
尋ねたのはこのことだった。
「そうなのね」
「はい、そうです」
「そのつもりです」
はっきりと答えた二人だった。
「こうしたことは早いうちにですから」
「ですから」
それでだというのであった。
「今夜また行きましょう」
「そしてです」
「そして、ね」
黄忠の流麗な眉が鳳統の今の言葉にぴくりと動いた。
「その工夫ね」
「はい、それはですね」
「それは」
二人は一行に話していく。そうしてだった。
その夜だ。一行はまたあの廃寺に入った。しかしである。
関羽と張飛はだ。今夜はかなりリラックスしていた。そうしてその中でこう言うのだった。
「いや、本当にな」
「お化けじゃなかったら怖くないのだ」
「全く。驚かさせられたがな」
「もう全然平気なのだ」
「ああ、もう動じないでくれ」
「頼むからな」

その二人にだ。趙雲と馬超が話す。
「もう多くは言わないが」
「せめて朱里達の工夫には従ってくれよ」
「わかっている。それではだ」
「行くのだ」
二人は今は確かだった。そうしてであった。
一行はまた道観のところに来た。するとすぐにだった。
「帰れ～～」
「では皆さん」
「ここは」
孔明と鳳統が言うとだ。一行はだ。
その出て来たものを見てだ。まずは悲鳴をあげた。
そのうえでそれぞれその場に崩れ落ちる。気絶したように見えた。

# 第三十九話　幽霊、袁術を驚かせるのこと三

そうなるとだ。急にその道観からだ。子供達が次々に出て来た。
「よし、やったな」
「ああ」
「気を失ったな」
「ざま見ろってんだ」
こうそれぞれ言ってだ。倒れている劉備達を取り囲む。そうしてそのうえでまた話をするのだった。
「お金あるかな」
「あるだろ、少しは」
「それよりも武器凄いのばかりだよな」
「ああ、そうだよな」
「特にこのお姉ちゃんの剣な」
劉備の剣が最も注目されていた。
「これ、高いよな」
「ああ」
「かなりな」
「凄い値段で売れるぜ」
「服だって」
それも見る。一行の服は子供達が着ているみすぼらしいものと比べると確かに立派である。そうした服を見てまた話すのだった。
「この服もな」
「ああ、売れるよな」
「じゃあ早速な」
「身ぐるみ剥がして」
「おい、待て」
だがここでだ。関羽が最初に起き上がった。
「それは駄目だ」

「えっ、起きてきたぞ！」
「気絶したんじゃなかったのか！？」
「嘘だろ、こんな」
「嘘ではない」
こう返す関羽だった。
「全く。何を考えているんだ」
「全くなのだ」
今度は張飛だった。
「泥棒は駄目なのだ」
「うわ、次から次に起きてきたぞ」
「このお姉ちゃん達何なんだ？」
「悪い奴等か？」
「おいら達をどうするつもりなんだ」
「あの、別にそんなことは」
怯えだした彼等に劉備が告げた。
「ないから」
「ないって言われても」
「俺達をやっつけに来たんじゃないのか？」
「そうじゃないのか？」
「それはないから」
また彼等に言う劉備だった。彼女はにこりと笑って言っている。
「私達はお化けを退治しに来たけれど」
「じゃあやっぱりじゃないか」
「俺達をやっつけに来たんじゃないか」
「そうよそうよ」
「だからそれは違います」
「お化けじゃありませんでしたから」
孔明と鳳統も子供達に言ってきた。
「それよりもどうしてここに？」
「こんな場所で一体何を」

「あの」
そしてだ。ここで道観から女の子が出て来た。胸が大きく楚々とした外見のだ。その彼女が出て来てそのうえで劉備達に言ってきたのだった。
「それは」
「貴女は」
「お話させてもらいます」
彼女が言うとだった。その左右に青い服と赤い服の男達が出て来た。そしてもう一人いた。赤と白の派手な服を着た白塗りの男である。
彼等がだ。劉備達に言うのだった。
「知恵を入れたのは俺達だ」
「この子達にな」
「そうしたんだよ」
「あら、貴方達は」
神楽は彼等の姿を見てすぐに言った。

# 第三十九話　幽霊、袁術を驚かせるのこと四

「ゴズウにメズウ、それにジョーカーね」
「そういう御主は神楽家の」
「双子のか」
「ええ、そうよ」
その通りだとだ。そのゴズウとメズウに返す神楽だった。
「私は神楽ちずるよ」
「御主もこの世界に来ていたのか」
「そうだったのか」
「そうよ。貴方達もだったのね」
「いや、困ってるんだよ」
今度はジョーカーが二人に話す。
「僕達どうしてここにいるんだろってね」
「それはお互い様よ。ただね」
「うん、ただ？」
「僕達悪気はないんだよ」
ジョーカーはこのことも話すのだった。
「それを今から言っていいかな」
「ええ、御願いするわ」
神楽が応えてだった。そのうえでだった。
「それじゃあね」
「お知り合いなんですか？」
劉備がここでその神楽に尋ねた。
「神楽さんとこの人達って」
「ええ、そうなの」
神楽は微笑んで劉備のその問いに答えたのだった。
「実はね」
「そうだったんですか」

「少しだけだけれど」
こう前置きもした神楽だった。
「知り合いなのは確かよ」
「何か怪しい人達だけれど」
馬岱は三人の格好を見て言った。
「大丈夫なのかしら」
「確かに表の世界にはいないわ」
神楽もそれははっきりと答えた。
「けれど根は悪くはないから」
「そうなんですか」
「特に警戒する必要はないわ」
こうも言う神楽だった。
「それは安心して」
「わかりました」
神楽のその言葉に頷く馬岱だった。そのうえでだった。
一行はその道観の中に入った。そうして三人と子供達の話を聞くのだった。
「この子達は可哀想なんだよ」
「そうだ」
「その通りだ」
ジョーカーの言葉にゴズウとメズウが頷く。見ればもう一人いた。
「ええと？」
「そっちの人は？」
「またお面付けてるけれど」
劉備達はそのもう一人の仮面の緑の男も見て話す。
「ゴズウさんとメズウさんの御兄弟ですか？」
「若しかして」
「その通りだ」
「よくわかったな」
二人からの言葉だった。

「これはガズウ」
「俺達の弟だ」
「宜しく頼む」
そのガズウからも言ってきた。
「俺達はここに気付いたらいたのだ」
「私達と同じね」
また神楽が言った。
「それも」
「同じなのか」
「何もかもが同じね」
「何故ここに来たんだろうね」
ジョーカーもそれがわからないようだった。

# 第三十九話　幽霊、袁術を驚かせるのこと五

「僕にここでも何かをさせたいのかね」
「それはないわね」
神楽はそれは全否定だった。
「絶対にね」
「ないんだ」
「貴方のそれは犯罪よ」
こうまで言う神楽だった。
「最早ね」
「そうかな。ほんの些細な悪戯だよ」
「悪戯じゃないから」
また言った神楽だった。
「だから何度も捕まりそうになってるじゃない」
「ううん、皆心が狭いね」
「そのうち大変なことになるわよ。それにしてもね」
神楽はここで話を変えてきた。子供達を見てだった。
「この子達はどうして」
「そういえばこの人達も」
「一緒にいるのでしょうか」
ミナと月はジョーカーに三兄弟を見て話す。
「それもちょっとね」
「わかりませんし」
「ああ、それはね」
ジョーカーが話をはじめた。
「この子達ってあれなんだよ」
「孤児なんですね」
孔明が言った。
「そうなんですね」

「そうだ、その通りだ」
「この子達は全員だ」
「そうなのだ」
ゴズウ、ガズウ、メズウの三人が話した。
「それでこの女の子が面倒を見ていた」
「俺達はたまたま一食一晩世話になってだ」
「それで協力しているのだ」
「意外といい奴なのだ？」
張飛がそれを聞いてこう言った。
「外見は怪しいぇれどそれでも」
「怪しいか」
「確かにそうだな」
「それは否定しない」
彼等もそれはだった。
「別にな」
「だが、だ。一食一晩の恩を受けたのは事実だ」
「だからこの子達を助けているのだ」
「僕も同じだよ」
それはジョーカーもだった。
「やっぱりね。子供好きだしね」
「そうなのだな」
関羽はそれを聞いて少し微笑んだ。
「それはいいことだ」
「外見は怪しいけれどな」
「それでも根はいい人達なんだね」
「それは間違いないようだな」
馬超に馬岱、趙雲がそれぞれ話す。
「それでか」
「お化けになってるのにも」
「協力していたのか」

「お化けのおもちゃは僕達が作ったんだよ」
ジョーカーもここで話す。
「実はね」
「道理でよくできていた筈です」
「確かに」
孔明と鳳統も頷く。
「子供達が作ったにしては」
「そうだったんですね」
「ちなみに最初のアイディアは僕がだったんだよ」
そうだったというのである。ジョーカーの言葉だ。
「どうかな」
「中々面白かったけれど」
黄忠はこう前置きしてから話した。
「それでもあまり趣味がよくはないわね」
「そこがいいんだよ」
ジョーカーは笑いながら話した。
「だって僕の趣味は悪戯なんだから」
「そこが問題なのよ」
それを見て話す神楽だった。

# 第三十九話　幽霊、袁術を驚かせるのこと六

「ジョーカーはね」
「僕達ここで畑仕事もしてるし」
「そうして暮らしてるんだ」
「釣りや狩りもしてね」
「大変ね」
それを聞いてだ。劉備は心から同情した。
そしてだ。一同に話すのだった。
「あの、これでお化けのことは終わったし」
「はい、そうですね」
「それは」
「袁術さんにはこのことを話して」
こう言うとだった。孔明と鳳統が言うのだった。
「あっ、そこはですね」
「ありのまま言うよりは」
二人はこう劉備に話す。
「お化けを退治したと」
「そう言っておくべきです」
「そうするの？」
「その方が袁術さんも南部に進出してくれますし」
「全体的にいい流れになります」
「そうなのね」
劉備は考える顔で述べた。
「それだったら」
「ただ。この子達はかなり多いですけれど」
「ここまで孤児が出る理由は」
「それなのですが」
女の子が難しい顔で話してきた。

「実は近頃」
「賊でも出ているのか？」
「それならすぐに退治するのだ」
「南部に妖怪が出るという噂がありまして」
「うっ、それか」
「それなのか」
関羽と張飛は妖怪と聞いてまた青い顔になった。
「やはりいるのか！？」
「それは勘弁して欲しいのだ」
「乱れていまして」
「乱れている」
「そうなのか」
「はい」
女の子はさらに話すのだった。
「それを袁術様が聞かれて中々統治に出られなくて賊が出たり政がされていなくて」
「ううむ、そういう話だったのか」
「袁術にも困ったものだ」
「それを何とかしないといけませんから」
「ここは」
こう話す孔明と鳳統だった。
「お化けを退治したということにしてです」
「袁術さんにお話しましょう」
「ええ、わかったわ」
劉備もこれで賛同した。そうしてだった。
一行は子供達とジョーカー達を連れて袁術の下に戻った。話は孔明と鳳統がだ。彼女達の考えた通りに袁術に話すのだった。
「ということで」
「お化けは退治しました」
「うむ、それは何よりなのじゃ」

左右に張勲と紀霊を置く袁術はそれを聞いて満足した顔で頷いた。
「では剣は劉備殿のものじゃ」
「有り難うございます」
「礼はよいぞ」
それはいいという袁術だった。
「これで一件落着だな」
「では美羽様」
「ジョーカー殿達は」
「そうじゃな。召抱えるとしよう」
袁術は機嫌のいい顔のまま話した。

# 第三十九話　幽霊、袁術を驚かせるのこと七

「子供達については救済処置じゃ」
「はい、それでは」
「その様に」
「では袁術さん」
「南部にもですね。統治の手を」
「い、いやそれはのう」
ところがだった。袁術はこのことには難しい顔になった。そうしてそのうえでだ。劉備達に対してこんなことを言うのであった。
「南部に妖怪がいたのじゃな」
「はい、そうです」
「その通りですが」
「では行かぬ」
今度は困った顔になってであった。
「それではじゃ」
「どうしてですか？」
「お化けは」
「お化けは一匹おれば十匹はおるのじゃ」
こう言うのだった。
「それでどうしてじゃ。統治を進めるのじゃ」
「えっ、もういませんよ」
「はい、間違いありません」
あえて南部での噂は話さない二人だった。話せば袁術は確実に統治の手を進ませないと思ったのだ。だからなのである。
「ですから普通に」
「進められても」
「絶対に嫌じゃ」
怯えた顔にもなる袁術だった。

「そんなことはじゃ」
「ううん、そうなのですか」
「それは」
「そうじゃ。お化けがいる場所に行ってたまるものか」
袁術は妖怪が大嫌いなのだった。
「北部だけで充分なのじゃ」
「仕方ありませんね」
「それじゃあ」
「えっ、待て」
「これで終わりなのだ！？」
引き下がった二人を見てだ。関羽と張飛は思わず声をかけた。
「これでは話は終わらないぞ」
「それでもいいのだ！？」
「いえ、ここはです」
「これで」
いいという二人だった。
「また後でお話しますので」
「今は」
「ううむ、そうなのか」
「それならいいのだ」
関羽も張飛もこれで頷いたのだった。そうして劉備達は今は剣を手に入れ子供達の保護を引き受けてもらっただけで下がった。しかしだった。
「剣は戻ったけれど」
「そうよね。子供達のこともいいとして」
劉備と黄忠が話す。
「南部のことがどうにかならないと」
「同じことが起こるわ」
「はい、それですけれど」
「考えがあります」

ここでだった。孔明と鳳統が話すのだった。
「毒には毒です」
「それで行きましょう」
「毒！？」
「毒って何なんだ！？」
趙雲と馬超がここで話した。
「そう言われてもだ」
「何をするんだよ」
「ですからお化けです」
「皆でお化けになってです」
孔明と鳳統がまた話す。
「袁術さんを驚かせてです」
「そうして南部の統治をしてもらいます」
そうだとだ。そうするというのだった。
「ですから毒には毒をです」
「そうします」
「それなら今から？」
馬岱が話した。

## 第三十九話　幽霊、袁術を驚かせるのこと八

「今から用意するのね」
「はい、はじめましょう」
「私達で」
こうしてだった。彼女達は早速その準備に取り掛かるのだった。
その時だった。
そしてである。この時だった。袁術は張勲と紀霊の話を聞いていた。その手には蜂蜜水がある。
その蜂蜜水を飲みながらだ。袁術は満足していた。そのうえで二人の話を聞いていた。
「あの、美羽様」
「南部のことは」
「お化けが出るから嫌なのじゃ」
袁術はその話が出ると急にその顔を青くさせた。
「絶対にじゃ」
「けれど退治されましたよ」
「それでもですか」
「そうじゃ、絶対にまだいるのじゃ」
また言う彼等だった。
「だから何があっても嫌なのじゃ」
「ううん、それなら」
「今は」
「ずっとじゃ。わらわは何もしないのじゃ」
こう言うのだった。
「お化けがいる場所には絶対に行かないのじゃ」
「それじゃあ仕方ありませんね」
張勲もこう言うしかなかった。
「私もここはです」

「どうするのじゃ？」
「いえ、何もしません」
こう言うのであった。
「そういうことで」
「あの、七乃さん」
紀霊が難しい顔で張勲に話した。
「それでいいんですか？」
「はい、いいです」
いいというのであった。張勲の言葉は平然としている。
「何の心配もいりませんよ」
「美羽様はどうも」
ここでまた話す紀霊だった。袁術にも聞こえるように話している。
「怖がり過ぎですよ」
「それは違うのじゃ」
袁術は必死に強がって話す。
「わらわはじゃ。怖がりなのではない」
「妖怪がいても私達が相手をしますが」
「それでも嫌なのじゃ」
駄々をこねるようにして主張する。
「お化けとか幽霊とかの話はするななのじゃ」
「そうですか」
「左様、ではこの話はこれで終わりじゃ」
話を強引に終わらせた。
「よいな」
「はい、わかりました」
「そうですか」
張勲の声は明るく紀霊のそれは暗いものだった。だがこれで話は確かに終わったのだった。少なくとも袁術はこう考えた。
しかしであった。その時劉備達はだ。準備に余念がなかった。
「なあ朱里」

「はい」
馬超が孔明に声をかけていた。
「こんなんでいいのか？」
「あっ、ばっちりですよ」
見れば馬超は髪を解いてそのうえで白い服を着ていた。そして頭には三角の布がある。
「神楽さんが仰った通りです」
「だといいがな」
「はい、とても奇麗ですし」
「いや、奇麗っていうのはな」
馬超はこう言われて顔を赤くさせた。
「それはいいけれどな」
「いいのですか」
「けれどあたしはこれでいいんだな」
「はい」
孔明は笑顔で馬超に対して頷いた。

# 第三十九話　幽霊、袁術を驚かせるのこと九

「万全です」
「他の人は」
鳳統は周囲を見ていた。そのうえでだった。
神楽、ミナ、それに命は頭から白い布を被っている。そして目だけを開けていた。鳳統はそれを見て満足した顔で言うのだった。
「万全ですね」
「そう、それならね」
「私も」
「これでいきます」
「はい、後は」
「私の方もできたわ」
黄忠はだった。顔を白く塗って赤く縁取りしてだ。如何にもという格好になっていた。服も異様に派手な赤いものである。
「これでいいかしら」
「うわっ・・・・・・」
「これはかなり」
鳳統だけでなく孔明もいささか引いてしまった。
「怖いです」
「というかこれ程までとは」
「夜叉を想像してきたけれど」
それでだというのである。
「どうかしら」
「はい、万全です」
「これなら」
「私もだ」
今度は趙雲だった。
「できたぞ」

「あっ、いいですね」
「星さんも万全です」
「うむ、それは何よりだ」
彼女もあえて不気味な化粧をしていた。口元に派手に大きく紅に口紅をしてた。そして目も青く縁取りして爪も大きいものを付けている。
そしてだ。こう言うのだった。
「実は私はだ」
「はい」
「こうしたことはなのですね」
「そうだ。こうした性質の悪い冗談が大好きなのだ」
実に楽しそうに話す。
「さて、楽しませてもらうか」
「皆さんいけてますね」
「後は」
張飛を見た。しかしだった。
二人はだ。張飛に対しては難しいような困ったような笑顔になってだ。そうしてそのうえでこう彼女に対して言うのであった。
「あの、鈴々ちゃん」
「その格好は」
「これなのだ？」
「ええ、それは」
「一体」
見ればだ。張飛の格好は蓑を着て頬に左右に三本ずつの髭を描いている。そして鼻を赤くさせている。そうして言うのであった。
「これははんにゃもんにゃなのだ」
「はんにゃもんにゃ？」
「確かそれは」
「そうなのだ。夜に便所に行くといるのだ」
こう二人に話すのだった。

「そしてお尻を撫でる。恐ろしい妖怪なのだ」
「恐ろしいって」
「それなんですか」
「そうなのだ。それなのだ」
また言う張飛だった。

# 第三十九話　幽霊、袁術を驚かせるのこと十

「それになったのだ」
「そうなんですか」
「それでそれなんですか」
「これは怖いのだ」
とにかく張飛はそれだった。そうしてだ。
今度は関羽を見た。彼女の姿は神楽達と同じだった。二人はそれを見てこう言うのだった。
「愛紗さんはそれでいいですね」
「それじゃあ」
「ううむ、私はどうもな」
関羽はその被りものの中から言うのだった。
「こうしたことは苦手でな」
「ええ、私も」
「私もなの」
そうだとだ。神楽とミナも話す。
「だから悪いけれど」
「チャンプルもいるし」
「私も。これで許して下さい」
月も少し申し訳なさそうである。
「ちょっと」
「あっ、いいですよ」
「気にしないで下さい」
孔明と鳳統もだ。彼女達と同じものを被って話す。
「私達も同じですから」
「そういうことです」
「ただ」
「問題は」

ここでだった。最後の一人だった。
劉備をだ。ここで呼ぶのだった。
「劉備さん、もう少しですか？」
「もう少しかかりますか？」
「すいません」
劉備からの言葉だった。部屋の隅の囲いの中からである。
「もう少しです」
「わかりました」
「落ち着いてやって下さいね」
こう彼女に声をかけた。
「劉備さんがこの策の軸ですから」
「ここは」
「私が軸なんですか？」
「だって劉備さんって」
「可愛いだけじゃなくて化粧映えもしますから」
だからだというのである。
「もううんとしてもらわないと」
「いけませんから」
「だからなんですね」
「はい、だからです」
「宜しく御願いします」
こう彼女に言うのであった。そうしてであった。
一同は準備を進めてだ。袁術の寝室に向かう。袁術は気持ちよさそうにベッドの中で寝ていた。
「うう、もう食べられないのじゃ」
「寝てますね」
「そうですね」
まず孔明と鳳統が確かめた。
「今です」
「それなら皆さん」

「うむ、行こう」
趙雲が言った。
「宴のはじまりだ」
「趙雲ちゃんって本当に楽しそうね」
「うむ、うきうきしている」
趙雲は実際に神楽にこう返した。
「実にな。しかし」
「しかし？」
「私のことは真名で呼んでくれ」
こう彼女に言うのだった。
「ミナ殿も月殿もだ」
「それでいいの？」
「私も名前で呼んでいるからな」
この話もするのだった。

# 第三十九話　幽霊、袁術を驚かせるのこと十一

「だからだ」
「そうそれじゃあだけれど」
「うむ」
「星ちゃんでどうかしら」
幽霊のその被りものの下からの言葉だった。
「それで」
「うむ、いい感じだ」
趙雲は真名を呼ばれてにこりと笑った。
「それではだ」
「これからはそれでね」
こうしたやり取りの後でだった。一同は相変わらずベッドの中で実に気持ちよさそうに寝ている袁術を囲んだ。それからだった。
「さて、一二の」
「三で」
驚かそうとした。しかしであった。
「起きるのだ、袁術よ」
「えっ」
「あれっ!?」
「もう!?」
一同今の言葉にきょとんとなった。それは劉備のものだったのだ。
「劉備殿もうか?」
「出番早いんじゃないのか?」
「ちょっとね」
「どうなってるの、これって」
孔明と鳳統もだ。劉備の声には少し戸惑っていた。
「はわ?劉備さんちょっと早いですよ」
「そうです。劉備さんらしくないです」

おっとりした劉備にしてはだと。二人もおかしいと思った。
しかしであった。劉備の声はまたしてきた。
「起きるのだ」
「起きるって」
「脚本とも違いますし」
孔明と鳳統はまた話した。
「脚本通りにしてもらわないと」
「困ります」
だが。それでもだった。
話は続く。袁術の上にその劉備が出て来てふわふわと浮かぶ。淡い白い服を着て何処か虚ろな顔で髪を漂わせてだ。そうしていた。
「浮かんでいる?」
「糸を使っているのだ?」
関羽と張飛はこう考えた。
「何時の間にあんなことを」
「凄いことになってるのだ」
「劉備さん何時の間に?」
「こんなこと考えてませんでした?」
また言う孔明と鳳統だった。
「けれどこれは」
「かなり凄いことになってます」
結局二人は劉備に任せるしかなかった。ここはだ。
「もうこうなったら」
「劉備さんにどんどんやってもらいます」
こう言って覚悟を決めた。劉備を見守るのだった。
その劉備はだ。袁術にまた言った。
「起きるのだ」
「さっきから何じゃ?」
ここでやっと起きた袁術だった。
「わらわを呼ぶのは」

「目を開けるのだ?」
「だから何じゃ。急な政か?」
こんなことを言いながら目を開けるとだった。そこにだった。
「な、何じゃ御主は!」
「化け物なぞ怖がるでない」
「そういう御主は何なのじゃ!」
「幽霊だ」
そうだというのだった。
「私は荊州の南部にいた」
「あ、あの場所か」
「そなたが牧として統治しない為に賊が蔓延りそれに殺されたのだ」
「何っ、賊に」
「そうだ」
その通りだというのだった。
「そのことを言いに来たのだ」
「わらわにか」
袁術はここでベッドから起き上がった。そのうえでまだ自分を見下ろしている幽霊を見る。だが恐怖のあまりその顔が劉備そっくりとは気付いていない。

## 第三十九話　幽霊、袁術を驚かせるのこと十二

「そうだ、そなたが治めていれば私は死ななかったのだ」
「し、しかしじゃ」
袁術は青い顔で言い訳に入った。
「あの地にはお化けがいるではないか」
「妖怪か」
「その様な場所に行けるものか」
こう言うのであった。
「わらわはそうした相手が大の苦手なのじゃ」
「化け物が怖くて政ができるのか」
幽霊の声は厳しいものになった。
「それを言うのならだ」
「どうするというのじゃ」
「私がそなたをじゃ」
声が一層怖いものになった。
「ここで取り憑いてもよいのだぞ」
「な、何っ！？」
「そなたを祟り殺し七代まで祟る」
この言葉と共にであった。
顔が一変した。劉備のその整った顔からだ。急に痩せこけて髑髏の顔になってだ。その顔で袁術に対してさらに言うのだった。
「それでもよいのか」
「た、祟り殺すじゃと！？」
「この世で最も恐ろしい目に遭わせてやろうぞ」
こんなことまで言った。
「それでもよいのか」
「い、嫌じゃ」
それはすぐに否定した袁術だった。

「それは勘弁するのじゃ。わらわは怖いものが大嫌いなのじゃ」
「ではどうするのだ？」
「な、南部じゃな」
「そうだ」
まさにそこだというのだった。
「私はそこで死んだのだ」
「それではじゃ。わらわはそこも統治しようぞ」
恐怖で青くなった顔で話す。
「それでよいのじゃな」
「その言葉偽りはないな」
「ない、ないぞ」
こくこくと必死の顔で頷く。
「絶対にない。安心するのじゃ」
「嘘は許さぬ」
また言う幽霊だった。
「そのことしかと誓うがよいぞ」
「誓う、誓う」
袁術はここでもこくこくと頷く。
「だからもう帰ってくれ。わかったから」
「ならばよい」
幽霊もこれで頷いたのだった。
「では。南部も治めるのだ」
「わかったぞえ・・・・・」
泣きながら言う袁術だった。何とか失禁はせずに済んだがそれでもだった。彼女にとってはこの上ない恐怖の夜であった。
そうして次の日だった。袁術は朝起き朝食を食べながらだ。共に朝食を食べている張勲に対して言うのだった。二人共粥を食べている。
「七乃よ」
「はい、美羽様」

「わらわは決めたぞ」
こうその睡眠不足でやつれ気味になっている顔で話した。
「南部も治める」
「お化けはいいんですか？」
「よい、よいのじゃ」
ここでも必死の顔だった。
「もうよい。これでじゃ」
「わかりました」
張勲は袁術のその言葉ににこりとして頷いた。
「それでは皐ちゃん達にお話しておきますね」
「役人を派遣し兵達に賊を退治させよ」
袁術はまずはこう命じた。
「街も田畑もじゃ。整備して開墾していくぞ」
「城壁もですね」
「うむ、それも整える」
このことも忘れない。

# 第三十九話　幽霊、袁術を驚かせるのこと十三

「修復するぞ。よいな」
「はい、わかりました」
張勲はここでもにこりとしていた。そのうえで主の言葉を受けるのだった。
こうして袁術は南部も治めることにした。このことは帰路についた劉備達の耳にも入った。
「何はともあれよかったですね」
「はい」
孔明と鳳統はこのことに素直に喜んでいた。
「袁術さんはやればできる人ですから」
「後は大丈夫です」
「そうか。それは何よりだ」
関羽も二人の笑顔と言葉に笑顔になった。
「これで荊州全域が無事に治まるな」
「そうなのだ。しかし」
張飛は視線を上にやって考える顔になって述べた。
「劉備殿はあの時恐過ぎたのだ」
「うむ、あれはな」
「凄かったよな」
趙雲と馬超もそのことに頷く。
「あそこまでいくとはな」
「予想以上だったよ」
「というか予想を遥かに超えていたわね」
黄忠はこう言った。
「私自信あったけれどそれ以上だったわ」
「そうですよね。あれはもう」
馬岱も話す。

「本物並でしたよ」
「本物って？」
だが、だった。当の劉備はきょとんとした顔で返すのだった。
「あの、昨日ですけれど」
「主役だったわね」
「凄かったですよ、本当に」
神楽と命も彼女に話す。
「一人で話を終わらせるなんてね」
「八面六臂とはあのことでしたの」
「すいません、実は」
両手を顔の前で合わせて目を閉じて言う劉備だった。
「昨日幽霊になった後で寝てしまいました」
「寝たって」
それを聞いてだ。ミナはきょとんとなった。
「どういうことなの、それは」
「お化粧して行こうって思ったらそこで」
「そこで？」
「一体？」
「寝ちゃったんです」
そうだったというのである。
「本当にすいません」
「ということはなのだ」
「あの人は」
ここでだ。勘のいい張飛と馬岱はわかった。その瞬間に真っ青になった。
「まさか本物なのだ！？」
「本物の幽霊！？」
「ち、違うと思いますよ」
「私もです」
孔明と鳳統は慌てて二人の考えを打ち消そうとした。

「お化けとか幽霊はこの世界には」
「いないですから」
「けれど私の世界には」
ここでまた言うミナだった。
「いたから」
「ですからそれはミナさん達の世界ですから」
「私達の世界には」
「こっちに来てるかもね」
神楽はここでまた二人にとっては余計なことを言った。
「ひょっとしたら」
「そうよね」
黄忠も話す。
「ミナちゃん達が来てるんだし」
「はわわ、じゃああの人は本当に」
「幽霊だったんですか」
「ううむ、何ということだ」
そうしたことが苦手な関羽も真っ青になっている。だがここで言うのだった。

# 第三十九話　幽霊、袁術を驚かせるのこと十四

「まあ気にするな」
趙雲がその関羽に言う。一行は今帰路を歩いている。左右は見渡す限りの水田だ。農民達がその中で田の手入れに余念がない。
「結果はよかったのだからな」
「結果はなのか」
「そうだ、袁術殿は南部も治められることになったのだ」
「それはな」
「それはいいことではないか」
彼女が言うのはこのことだった。
「そうではないのか？」
「ううむ、そうなるのか」
「だよな、確かにな」
馬超も趙雲の言葉に頷く。
「結果としてな。いいことになったよな」
「そうだ。幽霊と言っても悪い存在ばかりではない」
趙雲の話のポイントはここだった。
「いい幽霊もいるのだ」
「しかしあの幽霊は誰だったんだろうな」
馬超は腕を組んで考える顔になって述べた。
「それが問題だよな」
「南部の人だったのかな、本当に」
馬岱はこのことを少し疑問に思った。
「やっぱり」
「違うかも知れないわね」
だがだった。黄忠はこう言った。
「袁術さんを導く為の守護霊だったのかもね」
「それにしては劉備さんそっくりでしたけれど」

「あの人は確か」
ここでだった。孔明と鳳統はこの名前を出した。
「漢の高祖劉邦様に」
「そっくりだったような」
「私のそもそもの御先祖様に」
劉備は中山靖王の子孫である。その王の祖先がその劉邦であるということなのだ。
「そうなのね」
「ううん、となるとやっぱりこの世界にも」
「幽霊がいます」
孔明と鳳統はあらためてこの結論に至った。
「守護霊ですけれどそれでも」
「いますよね」
「けれどいい幽霊もいますから」
月はこう話した。
「ですから特に」
「そうですね。それじゃあ」
「そう考えます」
孔明と鳳統もここで遂に納得して頷いたのだった。
そんな一行だった。そしてだ。
劉備がだ。ここで元気に話すのだった。
「じゃあ長い旅でしたけれど」
「そうなのだ」
「それもこれで終わりなのだ」
関羽と張飛が明るい顔になって話した。
「ではだ」
「桃家荘に戻るのだ」
「はい、皆さん待ってますよ」
劉備もまた明るい顔になっていた。
「それで帰ったら」

「宴を開こうか」
「帰還の宴なのだ」
「いえ、まだあるわ」
神楽が言葉を加えてきた。
「劉備さんの剣が戻ったことをね」
「そうだったな。まずはな」
「それなのだ」
「とにかく。皆で派手にお祝いしましょう」
神楽も明るい顔で話す。
「仲良くね」
「そうしましょう。じゃあ御馳走を用意して」
「お酒にお菓子も」
孔明と鳳統もにこにことしている。
「皆でお祝いですね」
「楽しくなりますね」
「さて、問題はお魚ね」
神楽はここで魚を話に出した。
「草薙君に二階堂君の大好物だし」
「鰐の唐揚げも」
「納豆スパゲティにハンバーガーも」
「肉饅も」
残っている面々の好きなものが次々と挙げられていく。
「とにかく色々用意しないと」
「大変だな、こりゃ」
皆笑顔で話していく。こうして劉備の剣が元に戻った。だがこれはだ。幸せな結末ではなく新たな物語のはじまりだった。だがこのことはまだ誰も知らない。

第三十九話　　完

2010・10・16

# 第四十話　曹操、華陀に会うのことその一

第四十話　曹操、華陀に会うのこと

曹操はだ。今一人の少女と会っていた。

見れば緑の髪をシャギーにして肩の長さにしてだ。大きな青い目をしている。鼻は少し大きく口は小さめのものである。

赤と白のタートンチェックのスカートに同じ柄の制服の様な服だ。黒い太腿までのハイソックスに靴という格好である。その足元には大斧がある。

彼女はだ。曹操の前に片膝をついて控えてだ。こう名乗ったのだった。

「徐晃といいます」

「話は聞いてるわ」

曹操は己の座から彼女に言葉を返した。

「かなりの武芸の持ち主だとのことね」

「世間ではそう言われているようですが」

「それでどうしてなのかしら」

曹操は彼女に問うた。

「私のところに来たのは」

「それは曹操様がです」

徐晃は曹操を見上げながら話すのだった。

「天下の乱を治めるのに相応しい方だと思ったからです」

「それで私なのね」

「はい、曹操様ならばそれができます」

そうだというのである。

「ですから」

「その言葉受け取らせてもらうわ」

曹操はここでは笑っていなかった。

「けれど」
「けれど？」
「その武芸は本物かしら」
彼女は少し挑発する感じになっていた。
「斧を使わせては大陸一というのは」
「ではお見せして宜しいでしょうか」
徐晃もだ。曹操のその挑発に不敵な笑みで返した。
「それを見せてくれるのね」
「はい」
その通りだというのだった。
「今から」
「わかったわ。それじゃあね」
この言葉と共にであった。後ろからだった。
扇が来た。それが徐晃に迫る。
徐晃は振り向かない。そのまま足元の斧を手に取りだった。
振り向きざまに一閃した。それで扇を叩き潰した。
「むんっ！」
かなりの重さがある斧をだ。両手に持ちそのうえで一閃した。しかしそれで終わりではなかった。
斧の先にある槍でだ。さらに突くのだった。
「そこね！」
「うむ、左様なり」
それは残念ながら受け止められてしまった。見ればだ。狂死郎がそこにいた。彼は薙刀でその斧を受け止めてみせたのである。
狂死郎はだ。落ち着いた声で言うのであった。
「わしの扇を潰すとは御主見事なリ」
「貴女もね」
徐晃も不敵な笑みで彼に言った。
「私の突きを防ぐなんてね」
「どうやら五分と五分」

「ええ、確かに」
その二人を見てだ。曹操はあらためて述べた。
「わかったわ」
「おわかりになられましたか」
「千両狂死郎の扇はそう簡単には避けられないわ」
このことは曹操も知っていることであった。
「それを叩き潰したうえでさらに突きを入れるなんてね」
「はい」
「見事よ。噂通りね」
ここでだった。曹操はこの場ではじめてにこやかに笑った。そのうえでの言葉だった。
「徐晃」
「はい」
「真名を聞きたいわ」
彼女にこう言うのだった。
「何ていうのかしら」
「歌です」
徐晃はあらためて曹操の前に控えて名乗った。

# 第四十話　曹操、華陀に会うのことその二

「これが私の真名です」
「ええ。それなら歌」
「はい」
「貴女を迎えるわ」
にこやかな笑みはそのままだった。
「これからは将軍として活躍してもらうわ」
「有り難き御言葉」
「おお、また人材が来たか」
「そうだな」
それを見てだ。双角とフランコが話していた。
「それは何よりだ」
「俺達もどんどん賑やかになっていくな」
「あの、フランコさん」
そのフランコにだ。典韋が声をかけた。
「この前ですけれど」
「ああ、何だ？」
「この前教えてもらったタバスコという調味料ですけれど」
彼女が話すのは料理のことだった。
「あれって凄く辛いですね」
「だがその辛さがいいだろ」
「はい、とても」
典韋はにこりと笑って答える。
「益州の料理を作るには」
「益州？ああ、あれか」
フランコはそう聞いてすぐにわかった。
「四川のことか？」
「そちらの世界ではその呼び名なんですね」

「そうだよ。俺達の世界と国じゃな」
そうだと話すフランコだった。
「まあこっちとそっちじゃ違うことが多いけれどな」
「呼び名でもですね」
「そうだよ。それでな」
「はい、それで」
「今日は何を作ってくれるんだ？」
「そうですね。このタバスコで」
「ああ」
「タコスでしたっけ」
少女が出した料理はそれだった。
「それを作っていいですか？」
「おっ、タコスか」
「はい、それを」
「この前俺が言ったレシピを再現してくれるか」
「やってみますね」
こんな話をしていた彼等だった。彼等は和気藹々とやっていた。
しかしである。曹操はだ。徐晃との話が終わると不機嫌そうな顔になった。そうしてそのうえでこんなことを漏らすのだった。
「しかしな」
「しかし？」
「華琳様、まだですか」
「そうなのよ、まだなのよ」
その顔で夏侯惇と夏侯淵に話す。二人はいつも通り彼女の左右に控えている。
「それがね」
「ううむ、深刻ですね」
「それはまた」
「参ったわね」
顔が憂鬱なものになっている。

「何かいい解決法はないかしら」
「先日また加わった者達に聞いてはどうでしょうか」
「それは」
こう話す二人だった。
「あちらの世界では何かいい解決法があるかも」
「それにつきましても」
「あちらの世界ね」
曹操は二人の言葉を受けて考える顔になった。
「そうね。いい考えね」
「はい、それでは」
「呼びますか」
「わかったわ。じゃあ彼等を呼んで」
「はい、それでは」
「すぐに」
こうしてだった。曹操の前に何人か集められた。その彼等はだ。
大柄なスキンヘッドの男に飄々とした小柄な老人、それと辮髪の精悍な若者に筆を持った丸い眼鏡の着物の男、がっしりとした身体に黒と白の服の男に若々しくきりっとした顔の黒髪に赤いシャツの男、合わせて六人だった。

## 第四十話　曹操、華陀に会うのことその三

曹操はだ。彼等の名前を言ってみせた。まずはスキンヘッドの男からだった。
「パトリック＝ファン＝ヒディングだったわね」
「そうだ」
「そして宋玄道」
「そうです」
まずは二人だった。
「李烈火に八角泰山」
「はい」
「その通りです」
「それとつむじ風の臥龍にハヤテ＝ジョーね」
「臥龍でいい」
「俺もハヤテでいい」
最後にこの二人だった。その彼等が曹操の前に来たのだ。
そして曹操はだ。彼等にすぐに問うた。
「あの、一つ聞きたいけれど」
「ああ」
「何だ姫さん」
「一体何がありましたか？」
「貴方達は皆抜群の健康を誇っているわね」
こう彼等に言った。
「それはね。それでなのだけれど」
「それで」
「一体何なんだ？」
「普段何をしているのかしら」
また彼等に問うた。
「それでだけれど」

「それで？」
「それでとは」
「何が一体」
六人はそう言われてもわからない感じだった。
「それだけではわかりませんが」
「そうだな」
烈火とジョーが言った。
「申し訳ありませんが」
「何が何なのかな」
「まず身体は鍛えているわね」
曹操が言うのはこのことだった。
「身体を常に動かして」
「当然だな」
パトリックが答えた。
「それはな」
「そうよね。確か身体を動かすことは」
曹操はパトリックの話からまた述べた。
「身体によかったわよね」
「その通りです」
宋が答えた。
「それはです」
「確かにね。そちらの世界ではそれははっきりしてるわよね」
また言う曹操だった。
「身体を動かすと健康になる」
「そしてです」
今度は烈火だった。
「食べ物も大事ですね」
「あっ、それはね」
曹操は烈火の今の言葉に目を向けて述べた。
「それについては私の世界でもわかってるわ」

「医食同源でしたね」
泰山も言った。
「確か」
「ええ、そうよ」
その通りだと返す曹操だった。
「それはね。私達のこの時代、この世界でも同じよ」
「なら食べ物にも気をつけるんだな」
臥龍が曹操に告げた。
「というかあんたはそれに気をつけてるだろ」
「まあね」
その通りだと答えはした。

# 第四十話　曹操、華陀に会うのことその四

「それはね」
「だから健康なんじゃないのか？」
「なあ」
「それだと」
「ま、まあね」
一応はこう答えはした。しかしその顔は浮かないままである。
「それはね。わかったわ」
「わかってくれたか」
「ええ」
ハヤテに対しても答えた。
「そういうことね。それじゃあ」
「ああ」
「後は？」
「話はこれで終わりよ」
今一つ浮かない顔だがそれでも彼等に述べた。
「それじゃあね。お疲れ様」
「よし、じゃあな」
「またトレーニングだな」
「これからまたな」
こう話してだった。そのうえでだった。
六人はそれぞれのトレーニングに入った。曹操は彼等を行かせた。
しかしであった。その顔はだ。まだ浮かない顔のままであった。
その顔でだ。彼女はまた夏侯惇と夏侯淵に言うのだった。
「やっぱりね」
「聞けませんか」
「それは」
「貴女達は別だけれど」

こう二人に言う。
「夏瞬と冬瞬もね」
「我等は気心が知れてますから」
「だからですね」
「その通りよ。後は麗羽だけね」
実際のところだ。曹操が何処までも気を許せる相手は少ない。このことは彼女にとって悩みの一つであった。そのことは自分でもわかっているのだ。
ただしかなりのことは話せた。しかしそれでもだった。
「こうしたことを話せるのは」
「あの方ですか」
「あとは」
「あの娘はね。それでもね」
曹操はこれまた困った顔で述べた。
「どうせ同じ問題でしょうし」
「それか正反対の話か」
「そうですね」
「だから話すにもできないわ。同じ問題だったらふてくされるし」
袁紹はそうした人間である。何かと難しいのだ。
「逆だったら羨ましいとか言うし」
「相変わらず困った方ですね」
「全く以って」
「だからなのよ。本当にね」
曹操は困った顔になっていた。
「誰かいないかしら」
「ではそれでは」
「ここはです」
夏侯惇と夏侯淵はその主を気遣いここで話した。
「ここは医師を呼ばれては」
「そうされますか？」

「医者ね」
曹操は二人の提案に考える顔になった。
「そうね。それじゃあね」
「はい、それでは」
「すぐに」
「とはいっても」
二人の言葉を受けることにしてもだ。曹操は難しい顔で述べる。
このことはどうにも変わらない。その顔でさらに言うだけだった。
「今まで結構なお医者さんに見てもらってるけれど」
「そうですね。それでも」
「どうしても」
「治ってないから。誰がいいお医者さんはいないかしら」
曹操はまた困った顔になった。

# 第四十話　曹操、華陀に会うのことその五

「本当にね」
「この国で一番の医者は」
夏侯惇の言葉だ。
「その医者を呼んではどうでしょうか」
「一番ね」
「はい、もうこうなったらそれしかありません」
これが彼女の考えだった。
「それでどうでしょうか」
「ううん、じゃあ誰がいいかしら」
「誰か、ですか」
「そうよ。誰がいいかしら」
彼女は言うことは今度はこれだった。
「誰がいいの？その一番の医者は」
「ええと、それは」
「姉者、それならだ」
夏侯淵は曹操の問いに困った顔になった姉に告げた。
「華陀殿はどうだ？」
「華陀！？あの者か」
「うむ、あの者なら華琳様のお悩みを解決できるのではないのか」
「そうだな。あの御仁しかいないか」
夏侯惇も姉の話しに考える顔になった。
「ここは」
「そうだな。では華陀殿を呼ぶとしよう」
「それで今何処にいるの？」
曹操は彼の居場所を尋ねた。
「人をやって探すのならそれでね」
「はい、では」

「その様に」
二人は曹操の言葉に頷いてだった。すぐに各地に人をやって探そうとした。しかしここでだ。許緒が来て曹操に言ってきた。
「華琳様、お客様です」
「お客様!?」
「はい、何でもお医者さんだとか」
それだと話す許緒だった。
「お名前はですね」
「ええ、名前は？」
「華陀さんといいます」
その彼だというのだ。
「どうされますか？それで」
「好都合ですね」
「そうですね」
夏侯惇と夏侯淵がここで曹操に耳打ちする。
「まさか向こうから来てくれるとは」
「それでは」
「ええ、そうね」
曹操も二人に対して納得した顔で返す。
「それじゃあね」
「会われますね」
「ここは」
「当然よ。それじゃあね」
二人の言葉に頷いてだ。あらためて許緒に顔を向けて言うのだった。
「季衣」
「はい」
「すぐにその華陀を連れて来て」
こう彼女に告げた。
「御願いするわ」

「わかりました、それじゃあ」
「ええ、そういうことでね」
そしてだ。次はだった。
左右の二人に顔を向けて彼女達にも告げた。
「貴女達もね」
「わかりました」
「では外で」
「何かあればね」
その時はと言うとだ。目が鋭くなるのだった。
「御願いね」
「お任せ下さい」
「すぐに駆け付けます」
主の危機には駆け付ける、それは絶対にだというのだ。二人の曹操への忠誠心、愛にもなっているそれはだ。まさに絶対であった。
そしてであった。その華陀が連れられてきた。曹操は彼と二人になって話すのだった。
「貴方が華陀なのね」
「その通りだ」
華陀は明るい笑みで曹操に答えた。

# 第四十話　曹操、華陀に会うのことその六

「俺が華陀だ、宜しくな」
「何でも天下一の名医だというけれど」
「そうなのか？」
「そう聞いてるわ」
「そうか、俺は天下一の名医なのか」
それを聞いて気付いたといった趣だった。
「そうだったのか」
「自覚はないの？」
「そういうことには興味がない」
「そうなの」
「俺が興味があるのは一つだけだ」
こう曹操に言うのだった。
「ただ一つだけだ」
「その一つとは何かしら」
「患者がいれば治す」
満面の笑みと共の言葉だった。
「ただそれだけだ」
「そうなのね」
「そう、それがだ」
「五斗米道の考えなのね」
「違う！」
華陀の言葉がいきなり強いものになった。
「その言い方では駄目だ！」
「駄目って？」
「ゴオオオオオッド米道だ！」
それだというのである。
「そう呼んでくれ、いいな！」

「ゴオオオオオッド米道！ね」
「そうだ、ここは重要だからな」
「そうだったのね」
「そうだ、よく覚えていてくれ」
「貴方、ひょっとして」
ここでだ。曹操はあることに気付いた。そうしてだった。
華陀にだ。こう問うのだった。
「あの、貴方まさか」
「何だ、一体」
「昔勇者王とか言われてなかったかしら」
こう彼に問うのだった。
「そうじゃなかったかしら」
「さてな。そうだったかな」
「それで獅子だったわよね」
「むっ、詳しいな」
「他には黒い龍を操ってたわよね」
曹操の指摘は続く。
「それと星の海の中で鎧で戦ってたわよね」
「そこまで知っているのか」
「アズとかラエルとか」
「ふふふ、そこまで知っているとは面白い」
「っていうか貴方他の世界にかなり縁があるわよね」
「それはお互い様じゃないのか？」
「私よりずっと多いじゃない」
そのことがだ。曹操はどうも今一つ面白くないようである。それが言葉にも出ていた。
「はっきり言って」
「まあ気にしないでくれ」
「そうね。言っても仕方ないことよね」
「その通りだ。それでだが」

「ええ」
「俺を呼んでくれたのはどうしてなんだ？」
話はようやく本題に入った。
「あとさっきの話は一応別人になってるからな」
「それはお互い様だけれどね」
「それも重要だからな」
「貴方の場合声で誰でもわかるでしょ」
「ははは、名前が違うじゃないか」
「じゃあ医者王って何よ」
何だかんだでその話に戻る。
「もう誰かって一発でわかるじゃない」
「最近はゲームとアニメでわかるからな」
「そっちの世界の名前と本来の世界の名前が一緒に出てね」
「それでもわからないこともあるし別人だと言い切れるじゃないか」
「貴方の場合は無理でしょ」
また華陀に告げる。

# 第四十話　曹操、華陀に会うのことその七

「本名で出てたこともあるし」
「ううむ。まあいいじゃないか」
「そうね。それで今度だけれど」
「今度は何だ？」
「よくここに来たわね」
曹操が次に言うことはこのことだった。
「偶然って言えば偶然だけれど」
「そのことか」
「そうよ。今まで何処にいたの？」
「広州にいた」
そこだと話す華陀だった。
「今まではな」
「広州？随分遠いわね」
「ああ、三日前まではそこにいた」
「三日って」
華陀のその言葉を聞いてだ。曹操は唖然となった。それが事実とはとても思えずにだ。彼に対してこう問い返したのだった。
「ちょっと、それは嘘でしょ」
「嘘に聞こえるか？」
「三日で広州からこの許昌まで来たって」
「信じられないか？」
「そんなのできる筈がないじゃない」
「この前まではできなかった」
それはそうだというのだった。
「だが二人の仲間ができてな」
「二人？」
「そうだ、頼もしい仲間達ができたんだ」

「じゃあその人達の助けでなのね」
「そうだ、三日でここまで来れることができるようになった」
こう曹操に話す。
「実はな」
「それでここまで来たの」
「病で悩んでいる者の声を聞いたからだ」
「声を」
「おそらく。それはだ」
曹操を見てだ。言い切ったのだった。
「曹操殿、貴殿だな」
「その通りだと言えば？」
「だからここまで来たんだ」
そうだと言い切る華陀だった。
「俺はな。声を確かに聞いた」
「どうして聞こえたのかは知れないけれど」
「そうなのか」
「けれどその通りよ」
曹操は答えた。
「私はね」
「貴殿は？」
「実は、その」
ここでだった。曹操は急にもじもじとしだした。そして気恥ずかしい顔になってだ。こう華陀に対して話をするのだった。
「あの、私ね」
「貴殿はか」
「最近ないのよ」
「おお、それはいい」
華陀は曹操の今の言葉に笑顔になった。
「できたのだな」
「できたって？」

「だからあれが来ないのだな」
明るい顔でだ。曹操に言うのだった。
「できたのだ。子供がな」
「ちょっと、そんな筈ないでしょう」
曹操はこのことは顔を真っ赤にさせて否定した。怒っているのではない。彼女は恥ずかしくなってそれで顔を赤くさせているのである。
「何で私に赤ちゃんができるのよ」
「むっ、違うのか」
「私が閨に入れるのはね」
「うむ」
「女だけなのよっ」
このことは強調したのだった。

# 第四十話　曹操、華陀に会うのことその八

「それで何で子供ができるのよ」
「しかし貴殿は」
「何？」
「確か教師になれる資格も持っていたな」
曹操にこんなことを言う華陀だった。
「確かそうだったな」
「どうしてそのことを知ってるの？」
「あとあれだな。故郷にはあの角が生えた人形がいたな」
「ああ、あれね」
ここで曹操の顔が曇った。
「あの気持ちの悪い人形ね」
「あれはどうだ？」
「正直言ってどうにかして欲しいわ」
曹操は不機嫌を露わにさせていた。
「誰があんなのを考えだしたのよ」
「俺も同意だ。それでだ」
「教師のことね」
「子供は嫌いじゃないな」
「子供はね」
それはだとだ。腕を組んだうえで返す曹操だった。
「嫌いじゃないわ」
「しかし閨にはか」
「それとこれとは話は別よ」
「そういうことか」
「その通りよ。だからよ」
「ふむ。ではそうしたことではないな」
華陀もそれを聞いて納得したのだった。

「では何だ？」
「まあ、ちょっとね」
曹操の言葉が濁ってきた。顔も困ったものになっていく。
「何ていうかね」
「何ていうかとは？」
「あれなのよ。出ないのはね」
「何だ？そちらではないとすると」
「だから。あれなのよ」
困った顔はそのままだった。
「あれが。その」
「ああ、そうか」
ここでやっとわかった華陀だった。
「そちらのことか」
「そうなのよ。もう一ヶ月なのよ」
顔を少し赤くさせてもじもじとして語る。
「一ヶ月もね。出なくて」
「またそれは長いな」
「そうなのよ。それでいらいらして」
曹操の意外な悩みだった。
「仕事も手につかないし食事も進まなくて」
「重症だな、それは」
「それで貴方にね」
「治して欲しいか」
「できるかしら」
真面目な顔に戻っての言葉だった。
「それは」
「うむ。それなら話は簡単だ」
「できるのね」
「そういった患者は多いからな」
胸を張ってだ。それでだというのだった。

「任せてくれ」
「そう、それじゃあ」
曹操は明るい顔になってだ。華陀に顔を戻した。
「どうやって治してくれるのかしら」
「食事療法という手もあるがな」
「できれば今すぐにして欲しいのよ」
曹操はここで注文をつけてきた。
「一ヶ月よ。いい加減にね」
「乳や果物を多量にでもか」
「そんなのとっくにしたわよ」
既にというのだった。

# 第四十話　曹操、華陀に会うのことその九

「けれど駄目だったのよ。何を食べてもね」
「ううむ、そうだったのか」
「すぐにして欲しいしそれは駄目だったの」
「そうか。なら食事療法は駄目だな」
「私としても残念なことにね」
「わかった。ならだ」
「なら？」
華陀の言葉を待つ。その彼の言葉はこうしたものだった。
「いっそのこと腹を切るか」
「えっ、お腹を！？」
「そうだ、腹をだ」
華陀は自分の右手でその自分の腹をさすりながら言うのだった。
「切ってだな。出すのだ」
「な、何言ってるのよ」
曹操は飛び上がらんばかりになって華陀に言い返した。
「そんなことをしたら死んじゃうじゃない」
「曹操殿、注意して欲しい」
「んっ、何になの？」
「見えているぞ」
話を少し入れてきたのだった。
「今日は黒か」
「し、しまったわ」
我を失って飛び上がってしまってだ。見せてしまったのだ。
「こ、これはその」
「安心しろ、医師として患者に服を脱いでもらう時は多い」
「それでどうしたのよ」
「別に下着を見てもどうとは思わない」

「そうだというのね」
「だから安心してくれ」
「それはそれで問題じゃないの？」
曹操はとりあえず自分のスカートを下げてそのうえで座りなおしてからまた華陀に対して言うのだった。対象ではないとはいえ見せて恥ずかしかったのだ。
「私の下着を見て何も思わないって」
「何もとは何がだ？」
華陀は曹操の今の言葉にきょとんとさえなる。
「何がどうしたんだ？」
「ああ、それはもういいわ」
華陀が本当に鈍感なのがわかったもう言わないことにしたのだ。
「もうね」
「いいのか」
「ただ。貴方どうも生涯の伴侶は得られそうにないわね」
いぶかしむ目での言葉だった。
「顔はいいのに」
「ははは、俺はこれでも百年生きているからな」
「そんなに生きていたの」
「俺の医術を自身にやってだ。それでそれだけ生きているのだ」
「仙人じゃないわよね」
「近いかもな」
このことを否定することはなかった。
「だから伴侶とかはな」
「そうなのね」
「そういうことだ。それでだが」
「ええ。お腹を切って大丈夫なの？」
「俺の調合する薬がある」
華陀は明るい笑いと共に話してみせる。
「それを飲んで眠れば起きた時にはだ」

「お腹が元に戻っているの？」
「切って中のそれを取り出して縫ってだ」
「それで終わりなの」
「後で糸を取って終わりだ」
そうだというのである。
「これはどうだ？」
「それで大丈夫なの？」
「ああ、腹を切ってか」
「まずはそれよ」
曹操が気にしているのはやはりこのことだった。

# 第四十話　曹操、華陀に会うのことその十

「しかもお薬って。切られて気付かないって」
「そうだ、全く気付かないまま眠るんだ」
「そんなお薬を使ってもう一度起きられるの？」
「そのことか」
何故かだった。華陀は不意にどす黒い微笑みになった。そうして時間を少し置いてだ。そのうえで曹操にこう答えたのであった。
「大丈夫だ」
「本当に？」
「・・・・・多分な」
「じゃあそのタイミングと笑顔は何なのよ」
「気のせいだ」
「気のせいじゃないでしょ」
曹操は華陀の今の言葉にそう返さざるを得なかった。
「あんた、ひょっとしてそれで失敗したことない？」
「一回だけしたことがあるが失敗はしなかったぞ」
「一回だけでわかる筈ないじゃない」
曹操はこう反論した。
「それで死んだら冗談じゃないわよ」
「じゃあこれはしないのか？」
「ええ、しないわ」
はっきりと言い返す曹操だった。
「絶対にね」
「そうか、わかった」
「他にはないの？」
曹操は華陀にあらためて問うた。
「他にはないの？治し方は」
「あるぞ」

「あっ、そうなの」
そう言われてだ。また笑顔になる華陀だった。
「それじゃあそれはどういうの？」
「針を使う」
「針をなの」
「しかも特別な針をだ」
それをだというのだ。
「それを使えば一発で終わるぞ」
「そんなに効くのね」
「一ヶ月だろうが二ヶ月だろうが出る」
「それはまた凄いわね」
「しかもすぐにだ」
「じゃあそれを御願いするわ」
曹操は華陀に対して飛びつかんばかりになって言った。
「それでね」
「うむ、それではそれをだ」
「それでどういう針なの？」
慎重な曹操はそれを聞かずにはいられなかった。
「その針って」
「うむ、俺は普段は普通の針を使うのだがな」
「ええ」
「ここでは中から薬が入る針を使う」
「随分変わった針みたいね」
「浣腸と言う」
そうしたものだというのだ。
「それを使う」
「浣腸？」
「まずは身体の下を温めだ」
左手の人差し指を上にやって説明をはじめる。
「そして腹や尻を摩りだ」

「うっ、そうなの」
「そしてそちらにその針を入れて」
「えっ、何ですって？」
「薬を入れて出すのだ。これなら一発だぞ」
「な、なな・・・・・」
華陀の話を聞いてだ。曹操の顔が一気に赤くなった。
そうしてだ。彼に対して言うのだった。
「あんたそれ何なのよ！」
「何とは？」
「そんな変態みたいなことできる筈ないでしょ！」
「変態ではないぞ。これはかなり効果があってだな」
「後ろの穴に突っ込むって。そんなこと出来る筈ないでしょ！」
これが曹操の言い分だった。
「あんたまさか」
「まさかとは？」
「私を辱める為に。しかもそんなえげつないことで」
曹操にはそうとしか思えないことだった。まさにだ。
「どうやらここは」
「どうしたんだ？急に鎌なぞ出してきて」
曹操は何処からか己の大鎌を持って来てだ。全身に紅蓮の炎を帯びさせてそのうえで華陀に向って突き進む。そうしてだった。

# 第四十話　曹操、華陀に会うのことその十一

「死になさい！」
「うわっ、いきなり何をする！」
「この変態！ここで成敗してあげるわ！」
「待て、それで本当にだ」
「できる筈ないでしょ！」
怒りに燃えながらまた鎌を繰り出す。右から左に、左から右にだ。
「後ろの穴に。そうして」
「だからそれは誤解だ！」
「誤解じゃないわ！そこになおりなさい！」
首を切ろうとするがだった。それは身体を屈めてかわす。しかし鎌が頭上を一閃してだ。赤い髪の毛が僅かに切られてしまった。
「ううむ、危ないところだったな」
「逃げるのね！」
「だから話を聞いてくれ！」
「効いたわよ、だからよ！」
「何て理不尽な話だ！」
「春蘭！秋蘭！」
曹操はここで二人を呼んだ。
「この狼藉者を成敗しなさい！」
「はい、華琳様！」
「まさかその者！」
「私を辱めようとした不埒者よ！」
完全にそうみなしている曹操だった。
「容赦する必要はないわよ！」
「何と、華琳様をとは」
「許し難い男だ」
夏侯惇と夏侯淵も曹操の言葉に怒りを帯びた。そうしてだった。

それぞれ大刀と弓を構えてだ。倒そうとする。
「死ね！その首叩き落してやる！」
「心臓はそこだな！」
華陀はまさに絶体絶命だった。しかしであった。
ここでだ。いきなり天井を突き破ってだ。二人の男がやって来た。
「はい、ダーリン」
「迎えに来たわよ」
「な、何だこの連中は！」
「妖怪か！？」
夏侯惇と夏侯淵は彼等を見てすぐにこう断定した。
「何故ここに出て来た！？」
「それも天井を破ってだと」
「それがどうかしたのかしら」
「ねえ」
貂蝉と卑弥呼は二人の驚きの言葉に自分達がきょとんとなっていた。
「こんな天井なんてね」
「私達にとってはないのと同じよ」
「くっ、この連中まさか」
「本当に妖怪か」
「だから妖怪じゃないわよ」
「失礼しちゃうわね」
二人はまだ言う。
「こんな乙女を捕まえて妖怪だなんて」
「あまりにも酷いわ」
「どう見ても男だろうが！」
「そうだな、姉者の言う通りだ」
夏侯惇と夏侯淵はまた言った。
「どちらにしろ華琳様にはだ」
「指一本触れさせぬ！」

「安心しなさい、その娘には何もしないわ」
「私達おなごには興味がないのよ」
そうだという彼女達だった。
「好きなのはあくまでおのこだから」
「今はダーリンね」
「とにかく人間ではないな」
「少なくとも女ではない」
これは誰がどう見てもであった。この姉妹だけではない。
「妖怪退治も武人の務め」
「ならばここで」
「だから妖怪じゃないわよ」
「乙女なのに」
二人はまだこう主張する。自分達は乙女だとだ。

## 第四十話　曹操、華陀に会うのことその十二

「とにかくよ。ダーリン」
「また私達の仲間となるべき戦士が見つかったわ」
「そうなのか」
華陀は曹操達と自分の間にいて自分を守っている二人の言葉に応えた。
「またなのか」
「ええ、すぐに行きましょう」
「仲間達のところに戻ってね」
「わかった」
華陀は二人の言葉に頷いた。そうしてだった。
「ならすぐそこにだ」
「行きましょう」
「じゃあすぐにね」
「それでは曹操殿」
曹操に言うことも忘れなかった。
「今日は残念だったが」
「残念でも何でもないわよ」
「病を治すのは俺の義務だ」
確かな言葉で彼女に言うのだった。
「何時か必ず癒してみせよう」
「よくそんなことが言えるわね」
「何かおかしいのか？」
「何処か抜けてるのかしら」
曹操はここでようやく華陀のこのことに気付いたのだった。
「この男、まさか」
「さて、じゃあね」
「行きましょう」

貂蝉と卑弥呼がここでまた華陀に声をかける。そのうえでだ。
彼をそれぞれ左右から掴む。貂蝉が右、卑弥呼が左だった。
そのうえでそれぞれ右手と左手をあげてだ。そこから。
飛んだ。何もないというのにだ。
「いざ、次の仲間のところに！」
「行くわよ！」
そうしてその開けてしまった天井から抜けてだ。何処かに飛び去ったのだった。
曹操は彼等が消え去ったその空を見上げてだ。こう呟くのだった。
「今のは何だったのかしら」
「わかりません。ただ」
「あの二人は間違いなく」
その曹操にこう話す夏侯惇と夏侯淵だった。
「人間ではありません」
「それだけは確かです」
「ええ、そうね」
曹操もそうとしか思えなかった。
「それは間違いないわね」
「そうです。しかし」
「天井ですが」
二人も天井を見上げる。本当に見事な穴が開いている。
そこを見上げながらだ。曹操に対して言うのだった。
「放ってはおけませんね」
「これは」
「すぐに修理を命じましょう」
曹操の決断は早かった。
「いいわね、それで」
「はい、それでは」
「すぐに人を集めます」
曹操はこうして天井を修理させてこの話を終わらせた。尚このこ

とは彼女と夏侯姉妹の二人だけの秘密となったのであった。
曹操のところから離れた華陀はだ。空を飛びながら貂蝉と卑弥呼に問う。彼等はまだ空を飛んでいるのだ。上には青い空が広がっている。
「それでなんだが」
「ええ」
「どうしたの、ダーリン」
「どれ位で着くんだ？」
彼が今考えているのはこのことだった。
「一体どれ位でなんだ？」
「すぐよ」
「一瞬よ」
こう答える彼等だった。

# 第四十話　曹操、華陀に会うのことその十三

「今マッハ三で飛んでるから」
「本当にすぐだからね」
「マッハ三？」
華陀は二人の言葉にまずはいぶかしんだ。そのうえで問い返すのだった。
「それはどれ位の速さなんだ？」
「音の三倍よ」
「それ位よ」
「音の三倍か」
そう聞いても全く動じない華陀だった。そしてこう言うのだった。
「じゃあかなり速いんだな」
「だからもうすぐよ」
「この国なんてひとっ飛びよ」
「それは凄いな」
やはり動じないのだった。
「それならだ」
「ええ、すぐに戻ってね」
「また旅を続けましょう」
「俺達のやるべきことは多いからな」
華陀はまた言った。
「この国を救う為にな」
「そしてこの世界を救うのよ」
「私達の力でね」
「俺達の旅はまだはじまったばかりだ」
何処か打ち切られるような言葉だった。
「頑張らないとな」
「そうね。けれど」

「あのお嬢様は残念だったね」
「そうだな。だがそれも運命だ」
曹操のことはこう言って諦めていた。
「また会ったその時にだ」
「病を治す」
「そうするのね」
「それが俺の務めだからな」
「偉いわ、流石私達のダーリン」
「本当にね」
ここで二人同時に華陀に顔を向けてにこりと笑うのだった。その瞬間空が真っ二つに割れた。その向こうで超獣が悶絶して死んでいる。
「なら私達はそのダーリンの為に」
「一肌でも二肌でも脱ぐわよ」
「ははは、済まないな」
彼だけは二人の笑顔を見ても平気だった。
「それではここはだ」
「ええ、任せて」
「それじゃあね」
「仲間達のところに戻ろう」
こう話してだった。彼等は空を飛んでいくのであった。これは彼等にとっては至極当然の行動だった。何とも思ってはいなかった。

第四十話　完

２０１０・１０・２０

# 第四十一話　周喩、病が治るのことその一

第四十一話　周喩、病が治るのこと

建業に戻った孫策は早速戦後処理を書類のうえで進めていた。その時にであった。

「やれやれね」

「やれやれとは」

「何か？」

「戦はよかったけれど」

こう今己の左右に控える張昭と張紘に対して言うのである。

「こうしたことはね」

「書のことですか」

「それをですか」

「ええ、それを」

実際には木簡であるがそれでもこう話す二人だった。

「するのはどうもね」

「嫌というのですね」

「そう仰るのですね」

「そうよ」

その通りだというのだった。

「全くね。好きになれないわ」

「またその様なことを仰って」

「全く」

二人は主のその言葉にだ。すぐに怒った顔を見せた。そうしてそれからすぐにであった。その主に対して諫言をはじめたのである。

「雪蓮様、宜しいですか」

「仮にも牧たるものはです」

「戦だけでなく書もです」

「万全にしないと駄目なのです」

こう言ってであった。そのうえでさらに言うのだった。
「ですからそうした仕事もです」
「行って下さい」
「わかってるわよ」
一応はこう返す孫策だった。
「それはね」
「雪蓮様はやればできるのですから」
「そうした書の仕事もです」
それもだとだ。二人は話していく。
「しっかりとです」
「やって下さい」
「ええ、わかってるわ」
また返す孫策だった。
「まあこうした仕事はね」
「的確にです」
「宜しいですね」
「それで素早くやる」
実際にその書く手は速い。曹操や袁紹のそれと比べても遜色はない。
「だからね」
「雪蓮様はどうして幼い頃からそう落ち着きがないのか」
「それが心配でなりません」
まだ言う二人だった。やはり小言が多い。
「これでは若し私達がいなくなれば」
「そう思うだけで不安になります」
「私は子供なの？」
思わずこう言ってしまった孫策だった。
「それじゃあ」
「そうではありませんが」
「それは」

一応このことは否定された。そしてであった。
孫策のところに次から次に木簡が来た。彼女はそれを全て整理した。そしてそれが終わるとだ。自分の右手でその左肩を叩きながら言うのだった。
「今日の木簡はこれで終わりね」
「はい」
「これで全て終わりました」
その通りだとだ。張昭と張紘は答えた。
「では後は」
「これからですが」
「ええ、そうだったわね」
孫策は不機嫌なものから穏やかなものになっていた。
「また来たのね」
「はい、またあちらの世界から」
「何人かですが」
「本当に多くなってきたわね」
孫策の顔がここで考えるものになった。
不自然なまでにね」
「確かに。どうも今は」
「何かと大勢になり過ぎです」
二人の長老も主の今の言葉に頷く。

# 第四十一話　周喩、病が治るのことその二

「これは何があるのでしょうか」
「やはり」
「とりあえず人材は多くなってるけれど」
孫策はこの面から話した。
「ただ。腑に落ちないことではあるわね」
「全くです」
「ここまで続くと」
「他の世界から人が来るだけではなくて」
孫策はまた言った、
「国も時代も違うしね」
「そして数も」
「多いとなれば」
「何もないじゃ信じられないわ」
強い顔になっての言葉だった。
「本当にね。それで今度の人材だけれど」
「ではどうぞ」
「そちらに」
「蓮華と小蓮を呼んで」
その二人をだというのだ。
「あの娘達と一緒に会うことにするわ」
「あの方々とですか」
「会われるのですね」
「あの娘達にも経験を積ませないとね」
くすりと笑っての言葉だった。
「やっぱりね」
「蓮華様はいいのですが」
「ただ」

ここでだった。二人の言葉が孫策に対するそれに近いものになった。そのうえでだった。
「小蓮様は」
「どうにも」
「私に似てるっていうのかしら」
「いえ、それ以上にです」
「やんちゃと言うのでしょうか、あの方は」
「そうね、やんちゃね」
そうだとだ。答える孫策だった。
「あの娘はね」
「そうね。あの娘はね」
「これからが心配です」
「全く」
「まあそれは大丈夫よ」
しかし孫策は楽しげに笑ってこう返した。
「小蓮もね」
「大丈夫とは」
「何故そう言えるのですか」
「筋がいいからよ」
だからだというのだった。
「だからよ。安心していいのよ」
「だといいのですが」
「本当に」
孫家に仕える二人の長老達は不安な顔のままだった。だがそれは心から心配している顔であった。まるで母親のような、そんなものだった。
孫策はその二人から別れてだ。そうしてある場所に向った。そこは謁見の部屋だった。
そこにはもう孫権と孫尚香がいた。二人はすぐに長姉に挨拶をしてきた。

「こんにちは、姉様」
「じゃあ会おうよ」
「ええ、そうするわよ」
孫策は気さくに二人に返した。その後でまずは孫権に言うのだった。
「蓮華はねえ」
「私は？」
「生真面目よね」
妹のそうした気質はよくわかっていた。
「本当にね」
「それが何か？」
「誰に似たのかしら」
少し困ったような笑顔になっての言葉だった。
「そこは」
「それは」
「菊と桜のせいかしら」
孫策は張昭と張紘の真名を出して話す。

## 第四十一話　周喩、病が治るのことその三

「あの二人の教育の結果なのかしら」
「それは」
「まあ私がこんなので」
孫策はさらに言うのだった。
「だから調和が取れていいのかも知れないけれどね」
「調和とは」
「だから調和よ」
こう言うのであった。
「それが取れてね」
「仰る意味がわかりませんが」
「それで小蓮は」
次妹の言葉には今は答えず末妹にも言った。
「やんちゃでね」
「私やんちゃなのよ」
「そうよ、やんちゃよ」
その通りだというのであった。
「私達三人はこれでいいのかもね」
「いいのですか」
「そうなの？」
「三人揃っての孫姉妹ね」
そしてこうしたことも言うのであった。
「本当にね」
「三人揃って、ですか」
「そうなのね」
「そうよ。逆に言えば誰か一人欠けても駄目ね」
二人の妹達を見ていた。
「若し一人欠ければ」

「そうですね。私達は」
「寂しくて嫌になるわ」
「後の二人が悲しくなって仕方なくなってしまうわ」
これが今の孫策の言葉だった。
「二人は。三人よりずっと寂しいから」
「はい、では我々は」
「何があっても一緒よね」
「そういうことよ。一緒にいないとね」
その通りだと返す孫策だった。
「ずっとね」
「では姉様」
「もうすぐ来るよ」
「ええ」
素直な笑顔になって妹達に応えた。
「そうね。来るわね」
「何でも結構癖の強い者達らしいけれど」
「どんな人達かな、今度は」
「前から思っていたけれど」
孫策は己の席に着いた。そうしてである。
そのうえで右に孫権、左に孫尚香がつく。それからまた二人に話すのだった。
「私達のところに来る人材はね」
「どうだというのですか」
「それで」
「癖のある人材が多いわよね」
こう言うのだった。
「本当にね」
「そうですね。そういえば」
「他の勢力の人材はどうなのかしら」
「何か袁術のところは変わり者ばかりらしいわね」

まずは彼女のところから話す孫策だった。
「変態みたいな」
「変態とは」
「そんな人材ばかりなのね」
「それで董卓のところは罪人が多いらしいし」
その罪人達をだ。キムとジョンが締め上げているのがその董卓のところなのである。
「曹操や袁紹のところは色々らしいし」
「色々ですか」
「あっちは」
「劉備玄徳だったわね」
彼女の名前も出て来た。
「確か」
「幽州のですね」
「あそこに張飛達もいるのよね」
「あっちは何か正統派らしいわね」
そうだというのだった。彼女のところは。

# 第四十一話　周喩、病が治るのことその四

「それでこっちは個性派ばかり」
「そういう巡り合わせでしょうか」
「それを考えると」
「そうかもね。けれど面白いわね」
孫策は己の座で笑みを浮かべた。そしてであった。
「これも個性よね」
「我が陣営には我が陣営の個性ですか」
「そうなんだ」
「そうよ。それでだけれど」
孫策はふと話を変えてきた。今度の話はだ。
「冥琳はどうなのかしら」
「冥琳ですか」
「今日は体調が悪いのね」
こう孫権に対して問うた。
「そうなのね」
「はい、それで休んでいます」
「風邪でもひいたの？」
「そうらしいわね」
こう妹に答える孫権だった。
「どうやらね」
「冥琳が風邪をひくなんて珍しいわね」
「そうよね、それはね」
孫権もこのことには首を捻る。
「どうもね」
「まあそういうこともあるわ」
だが孫策はこう返した。
「たまにはね」

「たまにはですか」
「ええ、そういうこともあるわ」
「風邪なら休めばいいですね」
「そうね。後でお医者さんを送りましょう」
こんな話の後でその人材に会う。今度来たのはだ。
小柄で太った身体の僧侶だった。目は白くかなり独特な顔をしている。
そしてドレッドヘアに緑の袖のない上着と白いズボンの明るい顔立ちの黒い肌の青年に髭の中年の男だ。それとだった。
銀髪に剣を、ただし紫の輝きを持つ服を着た少女もいた。この四人だった。
彼等はそれぞれ名乗ってきた。
「陀流磨という」
「ボブ＝ウィルソンといいます」
「リチャード＝マイヤーだ」
まずは三人が名乗った。
「ここに来たのじゃが」
「何か凄い世界ですね」
「知った顔に会ったのが幸いだったが」
それは喜ぶリチャードだった。そうしてこう話すのだった。
「ダックやタンだが」
「あの二人を知ってるの」
「同じ街に住んでいる」
孫策にこう答えるリチャードだった。
「何度か拳を交えたこともある」
「サウスタウンね」
「あっ、御存知なんですか」
今度はボブが言った。明るい声でだ。
「サウスタウンのことを」
「ええ、知ってるわ」

その通りだと返す孫策だった。
「今は私のところにいるから」
「あっ、だからさっき会えたんですか」
だからだとだ。ボブは納得した。
「そういうことだったんですね」
「そういうことね。それにしてもね」
「それにしても？」
「面白い巡り合わせが続くわね」
孫策はくすりと笑ってこう述べたのだった。
「何かとね」
「世界は広いようで狭い」
陀流磨の言葉である。
「だからじゃ。こうしてわし等も巡り会った」
「それにしても最近凄いんだけれど」
孫尚香は姉の隣でふとしたように言った。

# 第四十一話　周喩、病が治るのことその五

「次から次に来るしね」
「というか気付いたらなんですけれど」
ボブの言葉だ。
「この世界にいたのは」
「全くだな。パオパオカフェにいたのにな」
「そうしたら急に」
リーチャドと話をしている。
「この世界に来てだ」
「呆気に取られていたらダックさんに会って」
こう話しているのだった。そうしてだ。
「バターコーン食べて一緒に踊って」
「周りは違うが知っている人間がいるのは有り難いな」
「そう」
クーラが言ってきた。
「それがわからない」
「貴女は」
孫権はクーラの言葉に顔を向けた。
「確か」
「クーラ」
孫権に対して答えもした。
「それが私の名前」
「そうだったわね。クーラだったわね」
「うん」
「貴女もこの世界に来たの」
「その通り」
こう返す彼女だった。
「気付いたら」

「そう。同じなのね」
「同じ」
孫権の言葉にこくりと頷くのだった。
「ここにいるのは」
「わかったわ。それで貴女も」
「ここにいていい？」
クーラは孫権に顔を向けて問うてきた。
「クーラもここに」
「ええ、それは」
「勿論よ」
孫権だけでなく孫策も応えた。
「貴女がそう願えば」
「是非ね」
「では我々もか」
「いいんですね？」
二人がクーラに言ったのを受けてだ。リチャードとボブが言ってきた。
そのうえでだ。孫策にあらためて問うのだった。
「ここにいて」
「本当に」
「ええ、腕が立つわね」
孫策は彼等の腕は既に見抜いていた。その眼力は見事である。
「そして人間性も悪くないみたいね」
「そうよね」
孫尚香も彼等を見ながら言った。
「いい人達よね」
「それならよ」
ここでまた言う孫策だった。
「貴方達さえよければね」
「よし、それならだ」

「是非」
こうしてだった。彼等は孫策の幕下に加わった。孫策達のところにもあらたな人材が加わったのである。
そしてだ。さらにであった。
また一人来ていた。黒い髪を鬣の様にして黒い袴とズボンを合わせたような服を着ている。鋭い目が印象的である。
その彼はだ。ふとやって来た赤い髪の男に声をかけた。
「待て」
「んっ、どうした?」
「貴様は誰だ?」
その男銃士浪はこう男に声をかけるのだった。男はすぐに彼に顔を向けてきた。
「我々と同じ世界の人間か」
「ああ、それか」
男は銃士浪の言葉に応えてきた。
「実は違う」
「そうなのか」
「少し感じてな」
「感じた?」
「ああ、病に苦しんでいる者がいるな」
こう彼に言うのだった。

## 第四十一話　周喩、病が治るのことその六

「そうだな」
「まさかと思うが公勤殿の風邪のことを」
「風邪、か」
銃士浪の今の言葉に、だ。男の顔が鋭くなった。そうして言うのだった。
「そう言っているのだな」
「違うというのか？」
「いや、何でもない」
そこから先は言わない彼だった。しかしであった。
銃士浪に対してこう言ってもきた。
「それでなんだが」
「うむ。どうしたのだ」
「ここの主の孫策殿に会いたい」
「孫策殿にか」
「医者が来た。こう言ってくれ」
「御主は医者だったのか」
「そうだ、名前は華陀」
ここで自分の名前も名乗った。
「こう言ってくれ」
「華陀か。名前は聞いている」
「俺のことを知っているのか」
「各地で病を治している医者だな」
「ああ、そうだ」
まさにそうだというのである。
「だから来たのだがな」
「話はわかった。それではだ」
「案内してくれるか」

「俺も周瑜殿の風邪はな」
「どうにかしたいんだな」
「風邪は寝ていればなおる」
銃士浪はこうも言った。
「しかしそれだけで不十分な場合もあるからな」
「そうだ、風邪は万病の元だ」
「だからこそ油断せずにだな」
「その通りだ。風邪はすぐに完治させる」
「ではな」
「行くとしよう」
こんな話をしてだ。華陀は周瑜のところに向かった。その時にだ。
廊下を進む彼等の前に孫策がたまたま来た。するとい彼女はまず
銃士浪に対して声をかけた。
「あら、こちらの格好いい人は誰かしら」
「医者らしい」
こう孫策に返す彼だった。
「名前は華陀だ」
「あっ、そういえばその赤い髪は」
ここで孫策も気付いたのだった。
「そうね。あの天下の名医華陀ね」
「名前も知ってるのか」
「ええ、有名だからね」
それでだというのである。
「私も聞いたことはあるわ。会うのははじめてだけれど」
「そうか」
「ただ。見たところ本人らしいけれど」
孫策はその勘からこのことを見抜いていた。
「それでも確かめたいけれどいいかしら」
「ああ、いいぞ」
華陀も笑顔で彼女の言葉に応えた。

「それでどうやって確かめるんだ？」
「五斗米道ね」
「違う！」
華陀はその呼び方にはムキになって言い返すのだった。
「その言い方は違う！」
「じゃあ何て呼ぶのかしら」
「ゴオオオオオオオッド米道！だ！」
ここでもこう力説する彼だった。

# 第四十一話　周喩、病が治るのことその七

「いいな、ここは重要だからな」
「わかったわ。ゴオオオオオオオッド米道！ね」
「そうだ、ゴオオオオオオオッド米道！ね」
「その通りだ」
「わかったわ本物ね」
この一連のやり取りからの言葉だった。
「貴方は間違いなく本物の名医華陀よ」
「俺が名医かどうかはともかくわかってくれたか」
「ええ、十分にね」
そうだというのだった。
「わかったわ」
「そうか、それは何よりだ」
「今のでわかったのか」
銃士浪はいぶかしむ顔で満足している顔の孫策に問い返した。
「そうだったのか」
「ええ。華陀はゴオオオオオオッド米道！というのよ」
「それが特徴なのだな」
「そう、本人ならばそれは絶対なのよ」
「その前にだ」
ここで銃士浪はこんなことも言った。
「こんな誰でもわかる声の持ち主が他にいるのか」
「それは言わない約束だから」
「気にするなか」
「そう、気にしたら駄目よ」
そうだというのである。
「よくわかっていてね」
「名前は違っていてもだな」

「そう、それは言わない約束だから」
孫策はここで自分の話もした。
「私達だってそうだし」
「しかしもう誰もわかってることじゃないのか」
「だから言わない約束でね」
こんな話をしてだった。そうしてであった。二人は華陀をだ。周瑜の部屋に連れて行くのだった。
そうしてそこに行くとだった。周瑜は己の部屋のベッドの中にいた。そうして席をしていた。
「おい周瑜殿」
「榊殿か」
「そうだ、俺だ」
銃士浪はまずはこう返すのだった。
「医者を連れて来た」
「そうか、悪いな」
「ええ、そうよ」
ここでだ孫策も言ってきた。
「貴女がずっと風邪だとね」
「困るというのね」
「だからよ。たまたまこの国に来た華陀に来てもらったのよ」
「華陀というと」
周瑜もだった。その名前に反応を見せた。
「まさかあの天下の」
「本物かどうか確かめたい？」
「ええ」
周瑜は孫策の言葉にこくりと頷いて応えた。
「それなら」
「言うのね」
「五斗米道」
こう言うとだった。早速だった。

「違う！」
「では何手言うの？」
「ゴオオオオオッド米道だ！」
ここでもこうであった。
「ここは重要だ、忘れてもらったら困る」
「わかったわ。それじゃあ」
周瑜も彼に合わせて言う。
「ゴオオオオオッド米道ね！」
「そうだ、それでいい」
「本物ね」
これで周瑜も安心したのだった。
「間違いなくね」
「だから安心していいわよ」
孫策はにこりと笑って己の軍師に話した。
「そういうことだからね」
「しかしだ」
ここでまた言う銃士浪だった。どうやら突っ込み体質らしい。
「周瑜殿は風邪だったな」
「そうだ」
本人がベッドの中から上体を起こした姿勢で応える。

# 第四十一話　周喩、病が治るのことその八

「それはその通りだ」
「それで今かなりの大声で叫んだがいいのか」
「だからそういうことは気にしないの」
孫策もまた彼に言う。
「そう、気にしたら駄目よ」
「そういうことなのだな」
「世間っていうか世の中ってあれじゃない」
孫策はさらに言う。
「突っ込んだり考えたら駄目なことってあるじゃない」
「それはわかるつもりだが」
「特に声のことはね」
「それは駄目か」
「そういうことだから」
こう話す彼女だった。
「わかっておいてね」
「意識はしておく」
これが銃士浪の返答だった。
「それではだ」
「それでだが」
華陀がまた言ってきた。
「いいか」
「ええ」
「何だ？」
「患者を診たい」
こう言う彼だった。
「その時に服を脱がせるからな」
「それでか」

「そうだ。二人は退室してくれ」
銃士浪の言葉に応えてだった。
「そうしてくれるか」
「わかった」
「それじゃあね」
銃士浪だけでなく孫策も頷く。しかしだった。孫策はこんなことも言うのだった。
「ただ。冥琳の裸だと」
「雪蓮、それは」
周瑜はそのベッドの中から孫策を咎めてきた。
「言ったら駄目よ」
「あら、そうなの」
「そうよ、駄目よ」
目もだった。咎めるものだった。
「言わないでおいてね」
「わかったわ。それじゃあね」
「では俺達はだ」
銃士浪は部屋を出ようとしていた。
「部屋を後にしよう」
「ええ、それじゃあね」
孫策も彼の言葉に頷く。そうして二人で部屋を後にする。こうして華陀は周瑜と二人だけになった。そして二人になるとであった。
彼はだ。あらたまった調子になって周瑜に問うのだった。
「一つ聞くが」
「何かしら」
「風邪ではないな」
こう問い返すのである。
「そうだな。違うな」
「わかるのね」
「だから俺は医者だ」

これが周瑜への言葉だった。
「その顔色でわかる。咳も出ているな」
「ええ、前からね」
「では間違いない。あんたの病気はだ」
「何だというの？」
「労咳だな」
それだというのである。
「それだな」
「ええ、そうよ」
周瑜も華陀のその言葉にこくりと頷いた。
「その通りよ」
「言っておくがこのままだとだ」
「長くないというのね」
「労咳は確実に死に至る病だ」
そうだというのである。

# 第四十一話　周喩、病が治るのことその九

「しかもあんたの顔色だとだ」
「本当にまずいのね」
「そうだ、時間は少ないな」
「じゃあ私は」
「安心しろ。今なら充分間に合う」
この言葉はだ。周瑜にとってはまさに福音だった。しかし彼女はこの言葉に表情をみせずにだ。表情を消して華陀に返すのだった。
「そうなのね」
「そうだ、まずはだ」
「まずは？」
「まずは服を脱いでくれ」
そうしてくれというのである。
「まずはだ。そうしてくれ」
「服を」
「あまり脱がなくていいような気もするがな」
周瑜のその服を見ての言葉だった。確かに露出はかなりのものだ。
「それでもだ。脱いでくれ」
「ええ、じゃあ」
周瑜は彼の言葉に頷き服を脱ぎはじめた。ブラは着けていなく胸が露わになっている。紫の面積の少ないショーツだけになっている。
その姿で仰向けになってベッドに横たわる。するとだった。
華陀はあるものを出していた。それはだ。
「針か」
「まずはこれを使う」
そうだというのである。
「これで労咳を吹き飛ばす」
「針でできるのか？」

「俺の針は特別だ」
「労咳は針で治る病だったのか」
「普通は違うがな」
　このことは断る華陀だった。
「だが俺のこの針に治せない病はない」
「では本当にだな」
「手遅れでない限りは治せる」
「そうか。手遅れではないのか」
「できる。それではだ」
　こう話してであった。華陀はあらためて針を構えた。そうしてだった。
「病魔よ！」
　右手に持った針を高々と掲げてだった。彼はここでも叫んだ。
「光になれーーーーーーーーーっ！！」
　こう叫んで周瑜のその豊かな胸と胸の間に針を打ち込んだ。するとだ。
　黄金の光がそこから放たれた。するとだった。
　周瑜の顔色がみるみるうちに明るくなった。日が差してきたようにだ。するとだ。
　華陀は彼女のその顔を見ながらまた言ったのである。
「これでまずはいい」
「いいのね」
「そうだ、それでいい」
「いいの」
「そうだ、いいんだ」
　そうだというのである。
「これでな」
「それでは私は」
「これで助かった。だが、だ」
「だが？」

「暫くはこれを飲んでいてくれ」
言いながらあるものを出してきた。それは緑色の丸薬だった。数粒ある。
「この丸薬をだ」
「それをなのか」
「ぺにしりんという」
それだというのである。
「ぺにしりん草を元に色々な薬を調合したものだ」
「それを飲めばいいんだな」
「ほぼ完治したがそれでもまだだ」
「まだなのか」
「そうだ、まだだ」
こう言うのだった。
「病魔の残りはまだ残っているからな」
「わかったわ。それじゃあ」
「あんたは生きる運命なんだ」
華陀は周瑜にこうも話した。
「おそらくな」
「生きる運命、私が」
「だから俺があんたのところに来た」
「そうだというのね」
「どうやら俺は天命のままに動いているらしい」
ここではだ。華陀は運命論を述べた。しかしそれは己の責任を回避するものではなくだ。そこに己の義務を感じながらの言葉だった。

# 第四十一話　周喩、病が治るのことその十

「生きるべき者を生かす為にな」
「では私はか」
「生きる運命なんだ」
「そうなのね」
「そうだ、だから病は癒された」
他ならぬ彼によってである。
「これからあんたの果たすべき役割を果たすんだ」
「わかったわ。それじゃあ」
「それじゃあな」
「ただ。一つ守ってくれるかしら」
周瑜は起き上がって服を着ながらだ。そうして彼に言うのだった。
「私が労咳だったことは」
「言わないでおくんだな」
「ええ、誰にもね」
これが彼女の願いだった。
「言わないでくれるかしら」
「それはわかっている」
華陀の返事は強いものだった。
「俺は医者だ。そうしたことは絶対に守る」
「そうしてくれると助かるわ」
「あんたは優しい人だな」
華陀は周瑜にこうも言った。
「本当にな」
「私が優しいというのね」
「それはあんたの友人達を気遣ってのことだな」
華陀はこのことをもう見抜いていたのだ。
「既にだな」

「それは違うわ」
「違うのか？」
「ええ、違うわ」
自分ではこう言う周瑜だった。
「それは絶対にね」
「そう言うんだな」
「ただ。誰にも言わないことはね」
「それは安心してくれ」
「貴方を信じるわ」
こう話す彼だった。
「そうさせてもらうわ」
「信じてくれ。それでは俺はだ」
「御礼は」
「ああ、それはいい」
笑ってそれはいいという彼だった。
「別にね。それはいいから」
「いいというのね」
「俺はその為に医者をやってるんじゃないからな」
「では何の為にかしら」
「決まっている。病に悩み苦しむ者を救う為だ」
その為だというのである。
「医術は仁術だからな」
「それでだというのね」
「そういうことだ。わかってくれたか」
「まさに名医ね」
周瑜は華陀のその言葉を聞いて微笑んで述べた。
「貴方は。天下の宝ね」
「ははは、褒めたって何も出ないぞ」
「それはわかっているわ。私が思ったことを言っただけよ」
「そうなのか」

「そうよ。ただ御礼はさせて欲しいわ」
「だからそれはいいのだが」
「遠慮はよくないわ」
ここではだ。周瑜も引かなかった。そうしてまた言うのだった。
華陀に対してだ。あるものを出してきたのだ。
「これは」
「宝玉よ」
何個かあった。それを彼に差し出してきたのだ。
「まずはこれよ」
「まずは」
「それでだけれど」
さらにだ。周瑜は彼にさらに言ってきたのだった。

# 第四十一話　周喩、病が治るのことその十一

「もう一つね」
「もう一つ？」
「目を閉じて」
こう華陀に言うのである。
「その目をね」
「目を」
「そう、目を」
それをだというのだ。
「目を閉じてくれるかしら」
「？どうしてなんだそれは」
「いいから閉じてくれるかしら」
周瑜の言葉はここでは強いものだった。
「御願いがあるけれど」
「御願いか」
「そう、それよ」
まさにそれだというのである。
「それは御願いできるかしら」
「どうしてもだな」
「そう、どうしてもね」
「わかった」
周瑜の強い願いの言葉にだ。華陀も遂に頷いた。そうしてだった。
目を閉じるとだ。そこにだ。
周瑜は己の唇と自分の唇を重ね合わせた。一瞬だったが確かにそうしたのである。
それからだ。華陀に言うのだった。
「もういいわ」
「？さっき何か」

「気にしないで」
華陀に考えさせなかった。それ以上はだ。
「終わったから」
「一体何が終わったんだ?そういえば唇には」
「何もなかったわ」
やはりこう告げる周瑜だった。
「だからね」
「そうなのか。じゃあそう考えさせてもらう」
「そうしてもらうと助かるわ。御礼はこれで終わりよ」
「そうか」
「ええ。また機会があればね」
「そうだな。機会があればまた会おう」
華陀は周瑜の今の言葉には笑顔で応えた。
そうしてそのうえでだ。その周瑜にこうも言うのだった。
「今度は病のことではなくだ」
「病ではなくか」
「楽しく酒でも飲もう」
こう話すのだった。
「それでいいな」
「酒か。酒は好きだ」
「そうか、あんたもか」
「ええ。じゃあその時はね」
華陀を見てだ。笑顔で話す彼女だった。
「楽しくやりましょう」
「それじゃあな。俺はこれでな」
「また別の場所に行くのね」
「俺にはまだ治すべき者と倒すべき病がある!」
言葉は強いものになった。
「だからな」
「その貴方だから天下も救えるわ」

「天下もか」
「ええ、必ずね」
そうなるというのである。
「必ずね。できるわ」
「そう言ってもらうとやはり嬉しいな」
「そうなのね」
「ああ。じゃあ俺はだ」
旅立つというのであった。そうしてだった。
彼はあらたな場所に向かうのだった。その彼のところにだ。
あの二人がだ。早速来たのである。
「ダーリン、やったのね」
「また病を倒したのね」
「ああ、そうだ」
華陀は自分の左右にいるその彼等に応えたのだった。

# 第四十一話　周喩、病が治るのことその十二

「その通りだ」
「また一つ善行を行ったのね」
「やったわね、本当に」
「ああ、それでだ」
華陀は二人に対してまた言う。
「次の行く先は」
「待って、その前に」
「また来てくれたわ」
二人はこう言ってきたのだった。
「新たな仲間がね」
「来てくれたのよ」
「そうなのか、また来てくれたんだな」
華陀は二人の言葉に笑顔になった。
「俺達のところに」
「そうよ、三人ね」
「来てくれたのよ」
「三人もか」
華陀は三人もト聞いてさらに明るい顔になった。
「それは何よりだ」
「勿論会うわよね」
「そうするわよね」
「ああ、当然だ」
また答える華陀だった。
「それで彼等は今何処にいるんだ」
「いらっしゃい」
「こっちよ」
二人が自分達の後ろに声をかけるとだ。そこからだった。

三人来た。まずはだ。
瞳のない鋭い顔をした大柄な力士だった。腰に女ものの服を巻き浅黒い肌に得体の知れない雰囲気を漂わせている。背中には刺青がある。
金髪に青い目と女の如き流麗な顔に白い服のすらりとした身体の青年、それと黒いマントに赤いズボンの仮面の大男、この三人だった。
その三人がだ。それぞれ名乗ってきた。
「無限示」
「カイン＝R＝ハインライン」
「グラントだ」
「そうか、あんた達はどうやら」
華陀はその彼等の目を見てだ。すぐにあることに気付いた。
それでだ。こう言うのだった。
「それぞれ過去があるな」
「過去か」
「それか目指すものがあるな」
華陀は今はカインを見ていた。
「特にあんたは」
「少なくともだ」
そのカインがだ。彼の言葉に応えてきた。
「私は人が真の意味で堕落しない街を作りたい」
「それがあんたの目指すものか」
「そうだ。だが」
「だが？」
「この世界では少し違うようだな」
こう言うカインだった。
「その様だな」
「違うって何がだ？」
「ちょっとね」

「彼は色々と考えてるのよ」
貂蝉と卑弥呼がこう二人に話してきた。
「人が戦いを通じて己を高め合う世界っていうかね」
「そういう世界を目指しているのよ」
「戦いはともかくだ」
華陀はその点については顔を顰めさせた。彼は戦は好きではないのだ。
「しかし己を高め合うのはだ」
「いいことよね」
「そうよね」
「ああ、そうだ」
貂蝉と卑弥呼にもはっきりと答える。
「そのこと自体はな」
「それでさっきお話してね」
「私達の仲間になることになったのよ」
「敗れたのだから仕方がない」
カインはいささか無念そうであったがこう言うのだった。
「この私がな。敗れるとはな」
「あら、強かったわよ」
だがその彼にだ。貂蝉はこう言うのだった。
「私久々にときめいちゃったから」
「私もよ」
卑弥呼も言うのだった。二人共照れた顔でもじもじとして話す。
「グラントさん強くて。痺れたわ」
「強かった」
グラントもそれは否定しなかった。

# 第四十一話　周喩、病が治るのことその十三

「実にな」
「そうだな。だが、だ」
無限示も言うのだった。
「この二人は我を受け入れてくれた」
「私達誰でも受け入れるわよ」
「拒みはしないわ」
「この我をだ」
無限示はそれがいいというのであった。
「だからだ。我はいさせてもらう」
「宜しくね」
「それじゃあね」
「醜い我を」
無限示はここでこんなことも言った。
「受け入れてくれた。有り難いことだ」
「人の容姿なんて違っていて当然じゃないのか？」
華陀もそうしたことにはこだわらなかった。それを言葉にも出す。
「そんなのであれこれ言う必要があるのか？」
「そう言うのだな」
「ああ。俺はそう思うがな」
実際に彼は貂蝉と卑弥呼を見ても何とも思っていない。
「言う奴の方がおかしいだろう」
「かたじけない」
無限示はここで華陀のその器の大きさを知ったのだった。そのうえでの言葉だった。
「それではだ」
「ああ、それでは？」
「御主名前は」

「華陀だ」
無限示に対して己の名前を言ってみせた。
「覚えていてくれるか」
「是非。この世界では御主に全てを捧げよう」
「いや、捧げる必要はないさ」
「それはいいのか？」
「捧げるって言ったら家臣か何かだからな」
「それではないというのだな」
「俺達は仲間だ」
華陀は闇のない笑みで言い切った。
「だからだ。俺達はそれでいいんだ」
「そういうことか」
「そうさ。仲間だからな」
だからいいというのである。
「捧げるんじゃなくて一緒に頼むな」
「わかった」
無限示もそれで納得したのだった。
「それではだ」
「それでな。それとだ」
華陀は今度はグラントを見る。そしてであった。
「あんた」
「何だ」
「まずい状況にあるな」
彼のその左の胸を見ながらの言葉だった。
「そうだな」
「わかるのか」
「ああ。このままだと死ぬぞ」
華陀の言葉が強いものになった。
「間違いなくな」
「だがどうにもならない」

グラントの言葉はまさに達観しているものだった。それを華陀に言うのだった。
「これはだ」
「いや、なる」
「なるだと」
「そうだ、なる」
こう話す華陀だった。
「俺に任せてくれるか」
「いいのか」
「心臓に鉛が迫っているな」
華陀はそこまで見抜いていたのだ。
「それならだ。すぐにそれを取り除く」
「できるのか」
「そうだ、できる」
その通りだとだ。また話す華陀だった。

# 第四十一話　周喩、病が治るのことその十四

「任せてくれるか」
「いいのか」
カインがだ。ここで華陀に言ってきたのだ。
「グラントは私達の時代と国でもどうにもならなかったのだが」
「そちらの世界のことはわからないがな」
それはだというのだった。
「だが、それでもだ」
「頼めるか」
カインの言葉に切実なものが宿った。
「本当にグラントの命を救えるか」
「あんたにとってはなんだな」
「親友だ」
それだとだ。カインは言い切った。
「かけがえのないな」
「だからなんだな」
「助けてくれ」
カインの言葉に切実なものが宿った。
「救えるのならだ」
「わかっている。それではだ」
「じゃあ私達がね」
「アシスタントをするわ」
貂蝉と卑弥呼も出て来た。そうしてであった。
「ダーリン、麻酔使いましょう」
「それと刃も一旦火で熱してね」
「頼む、すぐに終わらせるがだ」
それでもだというのだった。華陀は今明らかに緊張の中にあった。
その緊張の中でだ。彼はグラントの手術をはじめた。そうしてだ

った。
数刻か経てだ。グラントは目を覚ました。その時にはだ。
華陀はその手に鉛の弾丸を持っていた。赤く塗れたそれをだ。
グラントに見せてだ。こう話すのだった。
「これだな」
「本当に取り出せたのか」
「厄介な場所にあったさ」
華陀もこのことは否定しなかった。
「だがそれでもだ」
「ダーリンの腕は誰にも負けないものよ」
「こうしたこともできるのよ」
「それでなのだな」
また言うグラントだった。胸には手術の後すらない。
その胸も見てだ。彼は言うのだった。
「俺はこれで」
「もう大丈夫だ」
華陀は満面の笑顔で彼に話す。
「心臓は何ともない」
「そうか、それではだ」
「それでは？」
「俺も。真の意味で仲間になりたい」
こう華陀に申し出るのだった。
「いいか、それは」
「ああ、宜しく頼む」
華陀はここでも笑顔であった。
「俺達は仲間だ」
「うむ」
「そしてだ」
カインもここで出て来た。そうしてだった。
彼もであった。華陀達に言うのだった。

「よくグラントを助けてくれた」
「医者として当然のことだ」
「だが。助けてくれたのは事実だ」
カインがここで言うのはこのことだった。
「どれだけ礼を言っても足りない」
「いいからいいから」
「気にしなくていいのよ」
貂蝉と卑弥呼もそのカインに話す。
「それよりもよ」
「貴方もなのね」
「本当の意味で仲間にさせてもらいたい」
こう申し出るカインだった。

# 第四十一話　周喩、病が治るのことその十五

「そちらがよければな」
「勿論歓迎だ」
これが華陀の返答だった。
「宜しく頼むな」
「心を見た」
カインは三人を見ながらこうも言うのだった。
「君達のその心をな」
「だからなのね」
「私達と一緒に来てくれるのね」
「確かに戦いに敗れた」
またこのことも話す彼だった。
「だがそれ以上にだ」
「心か」
「そうだ、心が君達の方に完全に傾いた」
こうなってしまったとだ。華陀に言うのである。
「グラントを救ってくれたことによってな」
「そうなのか」
「それでだ」
カインはここでさらに言ってきた。
「君達の目的は何だ」
「目的か」
「そうだ。それは何だ」
「この世界を救う為だ」
そうだというのである。
「その為に今戦っている」
「そうなのか」
「今この国は危機的な状況にある」

「そうなのよ」
「実は色々とあってね」
貂蝉と卑弥呼も話すのだった。
「それでなのよ」
「私達は今動いてるのよ」
「世界を救うことには興味はない」
カインはこのことには前置きしてきた。
「そのこと自体はだ」
「そうなのね」
「それはなのね」
「そうだ、だが君達は私のかけがえのない友人を救ってくれた」
それが理由なのだった。
「だからだ。それに協力させてもらおう」
「それならだ。旅を続けるが」
華陀はそのカインだけでなくグラントと無限示にも話した。
「それでいいんだな」
「一人でいるよりはいい」
無限示の言葉だ。
「我は長い間一人だったからな」
「孤独だったのね」
「その中で沈んでいたのね」
「その苦しみは忘れられない」
だからだというのだ。それが彼の言葉だった。
「だからこそ」
「そう。それなら」
「一緒にいきましょう」
「無論俺もだ」
グラントもだった。
「命を救ってくれた恩人とだ。友人でありたい」
「そうだ、俺達は友だ」

華陀はまさにそれだというのだ。
「そのところは宜しくな」
「うむ」
「じゃあ行くわよ」
「次の場所にね」
また二人が声をかけてきた。
「皆宿屋に待ってるし」
「そこに入ってそれからよ」
出発するというのだった。そうしてだった。
彼等はまた新たな仲間を迎え入れた。彼等も動いていた。
劉備達は幽州に戻ろうとしていた。しかしそこで、だった。
ふと月がだ。こんなことを言ってきたのだ。
「聞いた話によるとです」
「んっ？」
「どうしたのだ？」
皆今は出店で饅頭を食べていた。その時にだった。

# 第四十一話　周喩、病が治るのことその十六

不意にだ。彼女がこう言ってきたのである。
「何かあったのか？」
「悪い奴でも出て来たのだ？」
「危機を感じている村があります」
こう関羽と張飛に対して話すのであった。
「この近くにです」
「感じ取られたんですか」
「はい」
その通りだとだ。月は今度は劉備の問いに答えたのだった。
「ここから東に一日です」
「一日なんですか」
「はい。一日です」
また劉備に答える月だった。
「どうされますか」
「放ってはおけませんね」
孔明がすぐに答えた。
「それは」
「うん、じゃあ」
鳳統も孔明のその言葉に頷く。そうしてだった。彼女も言うのだった。
「行こう、その村に」
「はい、それじゃあ」
「今から」
こうしてだった。彼女達はその東に向かうのだった。そこでだった。
馬岱がだ。その道中で仲間達に話した。
「ねえ」

「んっ、どうした？」
「何かあったのかよ」
「うん、私達って何かあったらいつも誰かに会ってるじゃない」
こう趙雲と馬超に話すのである。
「だからその村でもやっぱり」
「そうだな。有り得るな」
「その村でもってな」
二人もだ。馬岱のその言葉に頷くのだった。黄忠も劉備に話す。
「若し新たな出会いがあったら」
「はい、その時はですね」
「一体誰になるのかしら」
「楽しみですよね」
そうなったらだとだ。もう期待しているのだった。
そしてだ。神楽がこう話した。
「それにしてもこの国って」
「そうね」
ミナが彼女に応える。
「色々な出会いがあるわね」
「私達もそうだしね」
「そうよね。草薙君のこともあるし」
「私も」
少しずつだ。彼女達も運命を感じだしていたのだった。
だが劉備はだ。明るい顔でこう言うのだった。
「このまま旅が終わるのは寂しいかな」
「寂しいか」
「そうなのだ」
「はい、寂しいですよね」
関羽と張飛にも話す。
「色々ありましたけれどそれでも」
「そうだな。私もそう思う」

「考えてみればそうなのだ」
二人もだ。こう言うのだった。
「長い旅だったが」
「そう思えるのだ、今は」
「帰りもありますけれど」
劉備はまた話した。
「それでもですね」
「また何かあるかも知れないのだ」
ふとだ。張飛はこう話したのだった。
「その村で」
「何かか？」
「多分村は悪い奴等に狙われているのだ」
張飛は関羽にその予測を話した。
「そこで鈴々達が悪い奴等をばったばったとなのだ」
「まあそうだろうな」
関羽もその考えに頷く。
「本当に賊というものは減らないな」
「減って欲しいけれどね」
神楽は少し溜息混じりに述べた。
「私達の世界もね。悪党は多いし」
「私の時代もよ」
「同じです」
ミナと月もだというのだった。そしてだった。
一行は旅立つその中でだ。進んだ。そしてだった。また新たな出会いに向かうのだった。だが誰と出会うのかはだ。まだわからないことだった。

第四十一話　完

2010.10.22

# 第四十二話　于禁、事実を知るのことその一

第四十二話　于禁、事実を知るのこと

馬超が張飛の言葉に頷いている。一行は旅を続けている。その中で歩きながら話をしているのだ。

「あそこの飯ってな」

「何か妙に量が少なかったのだ」

「一口分だけれどな」

「けちっているのだ」

張飛は不満な顔で言う。

「それは許せないのだ」

「ああ。せこいよな」

馬超は張飛の言葉に全面的に賛成だった。

「そんなことってな」

「全くなのだ。けれど安かったのだ」

「それはよかったな」

「だから許してもいいのだ」

「それはいいけれど」

こんなことを話す二人にだ。馬岱が言ってきた。

「翠姉様達って」

「んっ、何だ？」

「何かあるのだ？」

「食べ過ぎよ」

彼女が言うのはこのことだった。

「もうね。何人前食べてるのよ」

「そんなに食ってるか？」

「最近食欲がなくて困ってるのだ」

「何処がよ。平気で十人前食べてるじゃない」
馬岱は呆れた顔で二人に言う。
「物凄い勢いで食べるし」
「食わないともたないしな」
「これでも最近食欲がないのだ」
「だからその言葉信じられないから」
馬岱は張飛に対して言う。
「十人前なんてね」
「ううん、それでも最近朝御飯三杯までしか食べられないのだ」
「そこまで食べてだ」
趙雲が参戦してきた。
「何故御主はそんなに小さいのだ」
「まだ子供だから仕方ないのだ」
「そうか？確か十八歳以上ではなかったのか？」
趙雲はこのことを指摘した。
「我々は一応そうなっているのだぞ」
「けれど鈴々は一年生だったのだ」
張飛は眉を少し顰めさせて反論する。
「確か星は三年生だったのだ」
「私は一年生でしたよね」
孔明は自分を指差しながら話した。
「聖フランチェスカでしたっけ」
「何か聞いたことのある名前だな」
趙雲は少し考える顔になって述べた。
「妙に縁を感じる」
「確かあの学校って」
劉備も言うのだった。
「体操服ブルマですよね」
「人によっては物凄くいやらしくなるのよね」
馬岱はその劉備に話を合わせて言う。

「愛紗さんとか姉様とか星さんが着ると」
「私もなのだ」
「だって愛紗さん達って」
馬岱はその関羽に顔を向けて話す。
「胸大きいし」
「むっ」
ここで実際に関羽の胸が揺れ動いた。
「それに」
「まだあるのか」
「お尻の形もいいですしお腹だってくびれてるし」
要するにスタイルがいいというのだ。

## 第四十二話　于禁、事実を知るのことその二

「脚も長くてすらりとしてるし」
「ううむ、それでなのか」
「それでブルマって滅茶苦茶いやらしいですよ」
「それであたしもか」
「私もなのか」
馬超と趙雲も言ってきた。
「ブルマだとか」
「いやらしくなるのか」
「ブルマって存在そのものが武器だから」
こうまで言う馬岱だった。
「スタイルいい人が着ると滅茶苦茶なことになるのよ」
「それにしても」
ここで言うのは神楽だった。
「この世界ってブルマもあるのね」
「おかしいですか？それ」
「ううん、私の世界ではもう」
神楽は劉備の怪訝な言葉に返す。
「殆どないのよ」
「身体を動かす時に着るといいんですけれど」
「そのいやらしいってことで皆着なくなったの」
「そうなんですか」
「そうなの。私もスパッツだったしね」
「スパッツだったんですか」
「そう、それだったの」
彼女の通っていた学校ではそうだったというのである。
「私の学校ではね」
「神楽さんの世界ではそうだったんですね」

「ええ。ただ」
「ただ？」
「こっちの世界にもブルマはあるのね」
神楽は首を傾げさせながらこう言った。
「他にも色々な服があるし」
「それにです」
月も話す。
「この世界では色々な食べ物がありますが」
「それもなんですか？」
「ええ。それもなの」
こう鳳統に話すのだった。
「ジャガイモやサツマイモがあるのも」
「そちらの世界ではないんですね」
鳳統もそれはわかった。
「私達の世界は服や食べ物が相当発達しているんですね」
「そうなるわ。どちらもね」
そうだと話す月だった。
「こちらの世界はね」
「ううん、そういえば」
「私達の服はどうも」
孔明と鳳統が話す。
「そちらの世界の漢のそれとは違いますね」
「それもかなり」
「そうね」
黄忠も言う。
「私達の世界は違う部分の方がかなり多いわね」
「けれどこの世界に来ている」
ミナが言った。
「それはどうしてなのかしら」
「本当に幾ら考えてもわかりませんね」

「はい、何があるんでしょうか」
孔明と鳳統もそれはわからなかった。それでだった。
一行は歩いているうちにだ。ある村に来たのだった。そこは。
「むっ、この村は」
「かなり警護が厳しいな」
趙雲と関羽が言う。見ればその村はだ。
周囲に空壕がある。横にも広くしかも深い。
そして橋があるが吊り橋だった。しかも木で壁までである。四方をそうして厳重に護っている。そうした村であったのである。
「何かあるのか？」
「賊でもいるのか」
「そうでしょうね」
鳳統が言った。
「そうでないとここまでは」
「この辺りはまだ袁術さんの統治が及んでいませんし」
所謂南部なのだ。袁術の治めているそこのだ。孔明はそこを指摘するのだった。
「ですから。賊もまだ」
「いるんだと思います」
「そういうことかと」
「残念なことですが」
「袁術にも困ったことなのだ」
張飛は眉を顰めさせて言った。
「早いうちに南部まで治めていればこんなことにはならなかったのだ」
「それも理由がお化けが怖いっていうんだからな」
馬超は呆れた顔になっている。
「ったくよ、それってかなり恥ずかしいぜ」
「まだ子供だから仕方ないか？」
「いや、それは甘いだろう」

趙雲が今の関羽に対して告げる。

# 第四十二話　于禁、事実を知るのことその三

「やはりな」
「甘いか」
「仮にも牧なのだからな。州全体を治めなくてはいけない」
「それでか」
「そうだ、それでだ」
これが趙雲の主張だった。
「幼いといってもだな。少なくとも曹操殿や袁紹殿はそうしている」
「あの御二人はそうだな」
「基本的に空白地を作ったりはしない」
あればすぐにそこに人をやって治めるのが彼女達なのだ。
「徐州はともかくとしてな」
「そういえばあそこは」
黄忠もその徐州について話す。
「袁紹さんや曹操さんだけでなく孫策さんの領域にも接してるけれど」
「それでも誰も進出しない」
「どうしてなのですか？」
ミナと月が黄忠に問うた。
「何故なのかしら」
「あそこだけは」
「三人共今はそこまで統治の手を進められないのだ」
趙雲がこう指摘した。
「袁紹殿は北の胡の対処に忙しく孫策殿も山越を平定したばかりだ」
「それに曹操殿はだ」
関羽は曹操について話した。
「牧となっている二州の統治に今は専念しておられるからか」
「それで結果としてね」

黄忠が話す。
「徐州には誰も今は進められないのよ」
「何進さんが言っても」
「そうなんですね」
「そういうことなの。色々と難しい事情があるのよ」
こう話すのだった。そしてだ。
門の橋のところに行く。するとだった。
「待て」
白い髪を基本的に短くして後ろ髪だけを伸ばして三つ編にしている小柄な少女が出て来た。強い光を放つ黒い目はやや鋭く身体中に傷がある。そして黒い服に半ズボンという格好だ。身体は引き締まっていて表情もだ。
その少女が出て来てだ。一行に声をかけてきたのだ。
「貴殿等は何者だ」
「私達ですか」
「見たところ山賊ではないようだが」
それは少女もわかることだった。
「それは何よりだ」
「それは見てわかるのか」
ここで言う関羽だった。
「我々が賊ではないのは」
「雰囲気でわかる」
少女は関羽に対して述べた。
「それはな。だが」
「だが？」
「一体何者なのだ」
それを問う彼女だった。
「賊ではないにしてもだ」
「私の名前でいいですか？」
劉備が言ってきた。

「それで」
「うむ、頼む」
「劉備といいます」
劉備は自分の名前を話した。
「字は玄徳といいます」
「劉備？」
少女はその名前にふと眉を動かした。その眉の色も白だ。
「若しかして貴女は」
「私のこと知ってるんですか」
「幽州での烏丸征伐での英雄か」
こう言うのだった。
「そうだな」
「あのことをですか」
「ここにも伝わっている」
そうだというのだ。
「そしてだ」
「そして？」
「貴女が劉備殿だとすると」
今度は関羽達を見る。そうして言うのだった。
「他の方々は」
「鈴々は張飛なのだ」
張飛が右手をあげて言ってきた。
「知っているのだ？」
「あの猛豚将軍か」
少女は彼女の仇名を話した。
「貴女がか」
「猛豚将軍？」
張飛はその呼び名に怪訝な顔になった。

## 第四十二話　于禁、事実を知るのことその四

「それが鈴々の仇名なのだ」
「そう聞いているが」
「不思議な仇名なのだ」
今度は首を傾げさせる張飛だった。
「どうしてそうなったのだ」
「馬ではなく豚に乗っているからではないのか？」
関羽がこうその張飛に話した。
「だからだろう」
「それでなのだ」
「前から思っていたがどうして豚なのだ」
「何となく乗りやすいのだ」
だからだと話す張飛だった。
「それで乗っているのだ」
「それでか」
「馬にも乗れるのだ」
それはできるというのだ。
「それでもなのだ。豚が一番いいのだ」
「それでだ」４０
「それで？」
「それでというと」
「貴女は」
少女は今度は関羽を見て述べた。
「関羽雲長殿なのですね」
「わかるのか」
「山賊退治の黒髪の美貌の英傑」
「むっ！？」
少女の今の言葉にだ。関羽はその表情を晴れやかにさせた。

そのうえでだ。こう彼女に言うのだった。
「貴殿がはじめてだ」
「はじめてとは？」
「はっきりとそう言ってくれたのは」
「そうなのですか」
「そうだ、私は美貌なのだな」
そのことにやけに嬉しそうな顔を見せるのである。
「いいことだ。それを認めてくれるか」
「違うのですか？それは」
「いや、その通りだ」
こう主張する関羽だった。
「そうなのだな。私には美貌があるのだな」
「はい、確かに」
「いいことだ。貴殿はいい者だな」
満面の笑みで言う関羽だった。
「まことにな」
「とりあえずなのですが」
また言ってきた少女だった。
「あの」
「あの？」
「まだ何か」
「私が名乗っていません」
彼女が言うのはこのことだった。
「私の名前ですが」
「あっ、そういえば」
「そうでした」
孔明と鳳統もここではたと気付いた。
「貴女のお名前は」
「何というのですか？」
「楽進といいます」

こう名乗るのだった。
「宜しく御願いします」
「わかりました、楽進さん」
劉備がにこりと笑ってその楽進に答える。
「こちらこそ宜しく御願いします」
「はい、それでは」
「それでなのだけれど」
黄忠が楽進に言ってきた。

# 第四十二話　于禁、事実を知るのことその五

「この村はやけに物々しいけれどやっぱり」
「はい、賊に狙われています」
こう話す楽進だった。
「それでこうして守りを固めています」
「やっぱりね。そうだと思ったわ」
それを聞いて納得した顔で頷く黄忠だった。
そのうえでだ。劉備にそっと囁くのだった。
「劉備さん、ここは」
「はい、そうですね」
劉備の返答は天真爛漫としたものだった。
「あの、楽進さん」
「はい。何でしょうか」
「よかったらここは」
その山賊を退治することを申し出るのだった。するとだった。
すぐに詳しい話をすることになった。楽進は一行を村の中に入れた。そうしてそのうえで彼女達に対して今の村の事情等を話す。そしてだった。
「まあそういうこっちゃ」
「大変なの」
紫の髪を無造作に左右で束ねた威勢のよさそうな表情の青い目の少女と茶色の髪を編んでいる緑の目の眼鏡の少女だ。紫の髪の娘は虎縞のビキニに黒い半ズボンとブーツである。胸がやけに大きい。
緑の目の少女はピンクの上着に草色の丈の短いスカートと白いソックスという格好だ。その二人もそれぞれ劉備達に名乗ってきた。
「あっ、うち李典っていうんや」
「于禁っていうの」
「李典殿に于禁殿か」

関羽が二人の名前を聞いて頷く。彼等は今村のある家の中で車座になって話をしている。
「それで今はか」
「そや、曹操様のとこに仕官に行く時にな」
「この村に通り掛かったの」
「そんでや」
「この人達も一緒だったの」
ここでだ。三人の屈強な男達が出て来た。
白い道着の褐色の肌の髭の男だ。顎鬚まである。
そして人間離れしたいかつい顔の大男に最後は赤いシャツの顔立ちはいいが何処かひょうきんな面持ちのヌンチャクを持った男だ。
彼等は。
「マルコ＝ロドリゲス！」
「柳生磐馬」
「ホンフゥっちゃ」
それぞれ名乗ってきたのだった。
「うち等益州の方旅してやんやけど」
「この人達とばったり会ったの」
「話してみるといい方々で」
楽進もこう話す。
「意気投合して旅をしていたのです」
「うち等は曹操様のとこに仕官するつもりやねんけどな」
「この人達もお誘いしたの」
「それはいいことだな」
関羽は三人のその言葉に笑顔で答えた。
「あの方なら貴殿等を温かく迎えてくれるだろう」
「袁紹殿や孫策殿のところも考えたのですが」
「袁紹さん言うたらあんまりにも独特なお人やからな」
「おっぱいで鰻を掴むのは嫌なの」
それが大きかったのだった。

「幾ら何でもそれはないやろ」
「それで止めたの」
「まあ正解だな」
馬超が三人のその言葉に頷く。
「あの人も悪い人じゃないんだけれどな」
「あんまりにも趣味が悪いのだ」
張飛もそこを指摘する。
「正直あの人の趣味に会う奴じゃないとな」
「お勧めできないのだ」
「それで止めました」
はっきりと答える楽進だった。
「それで孫策殿ですが」
「あの人なら問題ないんじゃないの？」
「そうだな」
馬岱と趙雲が言う。

## 第四十二話　于禁、事実を知るのことその六

「悪い人とは聞かないわ」
「かなりいい方だぞ」
「何か揚州に無茶苦茶な化け物が出たって聞いたんや」
「それも二匹も」
二人はあの怪物二匹の噂を聞いていたのだ。
「そんなのおるとこはな」
「ちょっと怖いの」
「何でもほぼ裸で筋肉モリモリの肉体を持つ怪しい大男達だとか」
楽進の言葉はまさにその通りだった。
「空を飛び素手で何もかもを粉砕するとか」
「それは完全に人間じゃないですね」
孔明も言い切る。
「また他の世界からの人達でしょうか」
「そんな奴等知らんっちゃよ」
ホンフゥが言う。
「確かに色々いる世界っちゃ。それでも」
「いませんか？」
「何処の世界に空飛ぶ人間がいるっちゃ」
ホンフゥはそもそもの大前提から放す。
「化け物っちゃよ、それは」
「そうとしか思えないぞ」
マルコも言う。
「そんな奴がいると聞いてな。それでだ」
「揚州には行かなかった」
柳生も言った。
「止めたのだ」
「何か世の中変な人が一杯いますね」

鳳統も今はこう言うしかなかった。
「本当に」
「それでなのです」
「孫策さんのとこも行かんことにしてや」
「曹操さんのところにしたの」
そうしたことからだったのだ。
「今から許昌に向かうところでしたが」
「それでもな。この村に立ち寄ったらや」
「大変なことになってたの」
三人は次に村のことを話すのだった。
「放っておけずにです」
「留まって賊と戦ってるんや」
「マルコさん達と一緒に」
「とんでもない奴等でな」
マルコがここでその賊について話す。
「この村を手に入れて自分達の根城にしようとしているのだ」
「そんな悪い奴等は許せないっちゃよ」
ホンフゥは本気で怒っている。
「俺のこの手で逮捕してやるっちゃ」
「逮捕っていうと」
神楽はホンフゥの今の言葉からあることがわかった。
「貴方は警官なのね」
「そうっちゃよ。香港警察の看板刑事っちゃよ」
「看板ね」
「そうっちゃよ」
自分で言う彼だった。胡坐をかいているが胸を張る。三人も話に参加してそれでそれぞれ胡坐をかいて座っているのである。
「俺が検挙した犯人の数は半端じゃないっちゃよ」
「そういえば何か」
ここでだ。神楽も思い出したのだった。

「香港にやけに威勢のいい刑事さんがいると聞いたけれど」
「誰に聞いたっちゃ？その話」
「チンさんに」
彼だというのだ。
「聞いた話だけれどね」
「ああ、あいつっちゃね」
「やっぱり知ってるのね」
「あいつとは腐れ縁っちゃよ」
ホンフゥは顔をいささか顰めさせてそうだと話す。
「何かっちゅうとお金っちゃ。それと食うことばかりっちゃ」
「そうそう。困った人よね」
「けれど根っからの悪人じゃないっちゃ」
そうではないというのである。
「だから付き合ってそれで悪い奴の話を聞いてるっちゃ」
「それはいいことね」
「自分でもそう思うっちゃよ」
「刑事さんだからそれでなのね」
「賊は一人残らず退治っちゃ」
「それでだ」
柳生も話す。

## 第四十二話　于禁、事実を知るのことその七

「捕まえて擁州に送ることになっている」
「擁州。董卓さんのところね」
「そうらしいな」
柳生は黄忠の今の言葉に応えた。
「そこに悪人を更正させる場所があると聞いてだ」
「全員捕まえてそこに送ろうと考えています」
楽進もこのことを話す。
「そうなのですが」
「処刑はしないのか」
関羽がこう問う。
「賊なら別に斬ってもいいだろうね」
「どうにもならない奴はそうするで」
「それは当然なの」
関羽の言葉にこう答える李典と于禁が答える。
「けれどや。それでもや」
「そうでもない人は殺したくないの」
「優しいのね」
黄忠が二人の話を聞いて述べた。
「無駄な命は取らないのね」
「戦いは必要です」
これは楽進も認める。
「しかし無益な殺生は好みません」
「そやからや」
「そこに送ることにしたの」
「既に連絡はしてある」
柳生が語る。
「おいおい人が来てくれることになっている」

「ふむ。それではだ」
「ここはあれですね」
関羽と孔明が言う。
「我々もその賊退治にだ」
「協力させて下さい」
「宜しいのですか？」
楽進がその言葉を聞いて思わず問い返した。
「貴女達は何の関係も」
「義を見てせざるは勇なきなりだ」
「そういうことなのだ」
今度は関羽と劉備の言葉だ。
「そういうことだ。それでいいか」
「悪い奴等は全部やっつけるのだ」
「そういうことだな」
「ああ、また派手に暴れてやるか」
「どちらにしろ放ってはおけないわ」
趙雲、馬超、黄忠も言う。
「是非だ。我々もだ」
「賊退治に協力させてくれよ」
「よかったらだけれど」
「わかりました」
楽進も彼女達の言葉を聞いてだった。
そのうえでだ。その意気を受け取ったのだった。そうして。
「それでは御願いします」
「よろしゅう頼むで」
「一緒に悪い奴等をやっつけるの」
「私達もね」
「戦わせてもらうわ」
神楽とミナも参加を申し出る。
「賊が何人いてもね」

「及ばずながら」
「私達は戦えないですけれど」
「他のことで」
孔明と鳳統もいる。
「協力させて下さい」
「是非」
こうしてだった。劉備達も賊退治に協力することになったのだった。そうしてだった。

## 第四十二話　于禁、事実を知るのことその八

村の警護をさらに固めそのうえでだ。地図も見るのだった。
「これがこの村とその近辺の地図です」
「あっ、これは」
「泉ですね」
孔明と鳳統がその地図を見て楽進に問う。
「この村の水源ですか」
「この泉が」
「はい」
その通りだと答える楽進だった。
「この季節は水はあまり豊かでないそうですが」
「それでも間も無くかなりの量の雨が降るらしい」
柳生も話す。
「雨季に入ってな」
「するとだ。その時にだ」
マルコの顔が曇る。そのうえでだった。
「賊達が来るのだ」
「水もついでに手に入れる為か」
「せこい奴等なのだ」
関羽と張飛はその理由を見抜いて眉を顰めさせる。
「人の水を奪おうなどとはな」
「真面目に働けなのだ」
「擁州に行ったら好きなだけ働かせてくれると聞いてるっちゃ」
ホンフゥが言うのは所謂強制労働である。
「是非そこに行ってもらうっちゃよ」
「その為にはですね」
劉備が言った。
「まずはこの村を守って」

「賊を倒しましょう」
最後に楽進が言った。これで決まりだった。
孔明と鳳統はすぐに泉を観に行った。そこは山の上で盆地状になっている。そこから村の前につながっているのであった。
そこに入ってだ。まずは鳳統が言った。
「ここの水をですね」
「どないするんや？」
「賊が来たら流しましょう」
こう提案するのだった。
「賊の数は多いですね」
「これが結構おるんや」
困った顔で話す李典だった。左手でその頭をかきながら話すのである。
「困ったことにな」
「それでは余計にです」
「水攻めで一気にかい」
「はい、それで倒しましょう」
こう話すのだった。
「それでどうでしょうか」
「ええな、それ」
李典もそれに賛成するのだった。
「ほな水を貯めてそれを一気に出す堤を作っておこか」
「そうですね。それなら」
孔明はここで名乗り出ようとする。彼女はそうしたものを作ることも得意だからだ。しかしここで李典が笑いながら話すのだった。
「ああ、それはうちがや」
「李典さんが？」
「そや、作るで」
笑顔で話す彼女だった。
「それはまかせとき」

「李典さんって」
「そういうものを作られるんですか」
「見るか？結構色々なもの作られるで」
こう話してだ。場所を変えた。三人は村に戻って小屋の中に入ってだ。李典のそのからくりを見るのだった。その三人でだ。
「へえ、この針金をですか」
「曲げて輪にしていってですね」
「それでからくりの中に入れてや」
その丸くした針金を見せての話だった。
「そんで動かすのに使うんや」
「成程、そうなんですね」
「凄いですね、これって」
「まあ作ろうと思えば作れるで」
「けれど実際にそれをやるのって」
「やっぱり凄いです」
二人は色々なからくりを見ている。どれも二人にとっては驚くべきものだった。

## 第四十二話　于禁、事実を知るのことその九

それを見てだ。また言う彼女達だった。
「それなら水攻めも」
「予想より確実にいけますね」
「ほなやろか」
李典がにんまりと笑う。その白く奇麗な歯が見える。
「三人で。悪い奴等をいてこます仕掛けを作ろうな」
「はい、それじゃあ」
「今から」
二人も頷いてだった。すぐに用意にかかるのだった。
楽進は馬岱と手合わせをしている。その時にだった。
槍を振るう馬岱はだ。彼女の戦い方を見て言うのだった。
「楽進さんって武器は使わないのね」
「一応槍は剣は使えますが」
「それでも拳が主なのね」
「はい」
両手を拳にして構えながらの言葉だった。
「そうです。気を使います」
「それと体術ね」
「そうです。その二つで戦います」
「気も使うっていうと」
馬岱が注目したのはここだった。
「やっぱり。その気を飛ばせるのね」
「はい、飛ばせます」
「今できる？」
「使わせて頂いて宜しいでしょうか」
「うん、御願い」
笑顔で答える馬岱だった。

「是非見せて」
「わかりました。それでは」
楽進は馬岱のその言葉に頷いた。そうしてだった。
すぐにだ。両手首の付け根を合わせて掌を縦に上下にしてだった。
そこから白く大きな気を飛ばしてみせたのだった。
「うわ、本当に凄いね」
「まだ完全に使いこなせていませんが」
「ううん、滅茶苦茶凄いよ」
馬岱は完全に驚嘆する顔になっている。
「楽進さん最高よ、滅茶苦茶凄いじゃない」
「私は別に」
「だって私なんてね」
「馬岱殿は？」
「気はまだ使えないから」
そうだというのである。
「姉様達は使えるけれどね」
「槍や弓に気を込めて放たれるのですね」
「うん、それはまだできないの」
「そうなのですか」
「できるようになりたいけれどね」
「そうなるにはです」
「修業よね」
どうしたらできるようになるのかはもうわかっていた。やはりそれだった。
「それをしていけばなのね」
「はい、私もまだまだですから」
「修業してるんだ」
「人生は常に修業です」
随分と厳しい言葉だった。自分自身に対して。
「ですから日々です」

「真面目だね、そういうところ」
「そうでしょうか」
「うん、真面目だよ」
馬岱はにこりとした笑顔で楽進に対して話した。
「とてもね。それがきっとね」
「きっと？」
「楽進さんを立派な人にしてくれるよ」
「私はそんな」
「謙遜しなくていいから」
またにこりと笑っての言葉だった。
「だって本当のことだし」
「ですからそれは」
「いいっていいって。それじゃあね」
「はい、それでは」
「何か食べる？」
馬岱は話を変えてきた。

# 第四十二話　于禁、事実を知るのことその十

「ラーメンでもね」
「そうですね。もうお昼ですね」
気付けばだ。もうそんな時間だった。水時計が完全に落ちてしまっていた。
「それでは」
「うん。それで何食べるの？」
「麻婆豆腐はどうですか？」
楽進はそれはどうかというのである。
「唐辛子と山椒を効かせた」
「いいわね。じゃあそれとね」
「それと？」
「炒飯はどうかな」
馬岱はそれを提案するのだった。
「それはね」
「炒飯ですか。それならそれも」
「それも？」
「思いきり辛くしたものを」
そちらもだった。
「それを」
「ひょっとしてだけれど」
馬岱もここで気付いたのだった。それで少し探るような顔で楽進に対して問う。
「楽進さんって辛いの好き？」
「えっ！？」
「だって。さっきから唐辛子とか山椒とか言うし」
ここから察することができることだったのだ。
「だからね。そうじゃないかなって」

「確かに。実はです」
「やっぱり好きなのね」
「そうした刺激のあるものが」
やはり好きだというのであった。
「口に親しみます」
「そう。それじゃあね」
「それでいいでしょうか」
「私も辛いの好きだし」
それでだというのだ。
「益州風のお料理もね」
「そうですか。それでは今から」
「うん、食べようね」
「麺もいいですね」
楽進は微笑んでこうも述べた。
「そしてやはりそちらも」
「辛いものをね」
「はい、食べましょう」
こうしてだった。彼女達はその辛い料理を楽しむのだった。そしてだ。
劉備はだ。于禁と話していた。その話題は。
「あっ、于禁さんもなのね」
「そうなの」
笑顔で劉備に話す于禁だった。
「張三姉妹大好きなの」
「凄く歌が上手くて」
「可愛くて」
「舞台も凄くてね」
「一度都で見て凄く好きになったの」
于禁は眼鏡の下でにこにことして話す。
「グッズも全部持ってるわよ」

「実は私も。ほら」
ここで団扇を出してみせる劉備だった。
「張角ちゃんのね」
「あっ、それ私も今持ってるの」
「張梁ちゃんと張宝ちゃんもそれぞれね」
「違った魅力があっていいの」
「そうそう。本当に最高の三人よね」
「私もそう思うの」
まさに意気投合であった。その中でだ。于禁はふと言うのだった。
「けれど」
「けれど？」
「私歌や踊りは大好きなの」
それはだというのだ。
「観るのも自分がするのも」
「私もよ」
「そうよね。私達って何か」
「似てるわよね」
「劉備さんもひょっとして」
ここでさらに言う于禁は言うのだった。

# 第四十二話　于禁、事実を知るのことその十一

「あれなの？女の子の服装とか流行とか」
「大好きなの、そういうのって」
「やっぱりなの。一緒なの私達」
「うん。ただ」
「ただ？」
「私ちょっとね」
困った笑顔になってだ。于禁に話すのだった。
「武芸とか下手だし孔明ちゃんみたいに頭がいい訳でもないし」
「それでなの？」
「何か皆に迷惑ばかりかけていて」
「それは私もなの」
ここでだった。于禁は困った顔になって話すのだった。
「楽進ちゃんと李典ちゃんに迷惑ばかりかけて」
「迷惑って？」
「私戦うの苦手なの」
自然と顔を俯けさせてしまっての言葉だった。
「だから。それで二人の迷惑になってて」
「そうなの？」
「うん。山賊達はこれまで何度か退治してきたけれど」
「じゃあいいじゃない」
「それでも。あまり倒せなくて」
そのことをだ。明らかに負い目に感じているのだった。
「だから。それでなの」
「それ、私もだから」
「劉備さんもなの」
「だからそんなこと言わないで」
それを話す彼女だった。

「これから頑張ればいいんだし」
「そうなの？」
「うん、だからね」
劉備は自然とにこりとした笑顔になって于禁に話す。
「それは気にしないの」
「これからなの」
「そう、これからね」
「それでいいのなら」
不安げな顔だがだ。それでも柳眉の言葉を受けて頷く于禁だった。
そうしてそのうえでだ。あらためて劉備に対して述べるのだった。
「私、頑張るの」
「そうするといいと思うわ」
「劉備さん、有り難うなの」
于禁はようやく顔をあげた。そのうえで劉備に言葉を返した。
「私頑張るの」
「一緒にね。頑張ろう」
「わかったの」
ようやくにこりと笑えた于禁だった。彼女もこれからが決まった時だった。
そうしてだった。その夜だ。楽進は服を脱ぎそしてだ。風呂に入る。　するとそこにだった。もう張飛がいたのであった。彼女は楽進に手を振ってきた。
「待ってたのだ」
「張飛殿？」
「そうなのだ、待ってたのだ」
また言ってきた張飛だった。
「一緒に入るのだ」
「湯を共にとは」
「おかしいのだ？」
「いえ、それは」

ないとは言う。そうして言う言葉は。
「ありません」
「ならいいのだ」
「真桜や沙和とはよく一緒に入りますので」
「そうなのか」
ここでもう一人の声が聞こえてきた。それは。
趙雲だった。彼女もいたのだ。湯舟の中に見事な胸が見える。
「ならいいな」
「けれど誰なんだ？」
馬超もいた。その長い髪を上で束ねている。項が見事だ。それは趙雲も同じにしている。

## 第四十二話　于禁、事実を知るのことその十二

「さっきの名前は」
「あっ、真名です」
それだと答える楽進だった。そうしてそのうえで湯に入る。それから皆で話すのだった。
「李典と于禁の」
「ちょっと、そこで言うのはうっかりやで」
「そうなの」
ここでその李典と于禁も出て来た。二人も湯舟の中にいるのだった。
「真名は自分で言わんとな」
「駄目なの」
「うっ、済まない」
楽進は俯いた顔で二人に謝る。
「つい言ってしまった」
「まあ皆にはここでうちが自分から言ったしな」
「いいの」
「何だ、もう言ったのか」
「お風呂の中でさらに仲良くなってな」
「それでなの」
さらに話す二人だった。そうしてであった。
今度は関羽が湯舟の中に入って来た。その見事な裸身が露わになっている。そしてその自慢の黒髪を馬超のそれと同じく上で束ねている。
その彼女がだ。楽進に対して言うのだった。
「楽進殿」
「はい、何でしょうか」
「貴殿はどうも私に似ているのかもな」

「関羽殿にですか」
「硬いところがあるな」
言うのはこのことだった。
「どうもな」
「そうだな。硬いな」
趙雲がその通りだと言ってきた。
「二人共な」
「もう少し柔らかくいくのだ」
これは張飛の言葉だ。
「鈴々なんか滅茶苦茶柔らかいのだ」
「そやそや。人生真面目だけやあかんで」
「もっと楽しく活きるの」
「あんた達はまた気楽過ぎないか？」
馬超がその三人に突っ込みを入れた。
「もうちょっと真面目になった方がな」
「そか？うちもやる時はやるで」
「そのつもりなの」
一応はこう返す李典と于禁だった。
「ちゃんとな。戦いは手を抜かんし」
「私きめたの。必死に頑張るの」
「そうあって欲しいが」
楽進は心配する顔でその二人を見ていた。
「しかし私は硬いか」
「時々酒を飲むのもいい」
趙雲は酒を勧めるのだった。
「それでゆっくりとするのもな」
「いいのですね」
「酒は百薬の長だ」
こうまで言う。
「飲めば飲む程いい」

「うちもお酒大好きやで」
「お茶と同じ位好きなの」
この二人もだった。
「どんどん飲まなな」
「飲むとなればとことんなの」
「それはいいことなのだ」
張飛はそれはいいこととした。しかしだった。
ふと李典の胸を見てだ。眉を顰めさせて言うのだった。
「真桜の胸は酷いのだ」
「んっ？これか？」
「どうやったらそんなに大きくなるのだ」
「まあ山羊のお乳とかキャベツ飲んだり食うてたらな」
「大きくなったのだ？」
「そや」
その通りだというのである。

# 第四十二話　于禁、事実を知るのことその十三

「それでなんや」
「それでそこまで大きくなるのだ」
「少なくともうちはそやで。それに」
「それになのだ？」
「あと名前を換えたせいかもな」
こんなことも言う彼女だった。
「実はうちアルバイトでメイドとかやる時最近まで鏡水って名前にしてたんや」
「それを変えたのだ？」
「五郎八にしてん」
それに換えたというのだ。
「そのせいちゃうか」
「それも関係あるのだ？」
「ひょっとしたらな」
そうではないかというのである。
「あるかもな」
「いや、ないだろそれは」
すぐに関羽が突っ込みを入れた。
「私はだ。メイドの時の名前は美奈だがな」
「そのままじゃないのか？」
馬超がこう突っ込みを入れた。
「それだと」
「ううむ、姓はともかく名を換えるのは好きではない」
「それでか」
「そうだ。だから好きではない」
また言う彼女だった。
「だからこの名前でいっているのだ」

「誰かすぐにわかるな」
趙雲もそこを指摘する。
「もっと違う名前にすればどうだ」
「そういうものか」
「まあ結構ばれるもんやけどな」
「私もすぐにばれたの」
李典と于禁もここでこの話に入る。
「うちなあ。隠したつもりやったけどな」
「しっかりばれてたの」
「こうしたことはわかってしまう」
「そうだな」
趙雲と馬超も頷く。
「袁紹殿はお忍びの名前の方が有名なようだしな」
「張勲殿なんか幾らそういう名前あるんだろうな」
「鈴々もあからさまにわかってしまったのだ」
困った顔になっている。実は彼女もそうした名前を使ってきたのだ。
「本当にすぐばれるのだ」
「まあよお考えたら顔は同じやさかい」
「声は特になの」
李典と于禁がまた話す。
「それは仕方ないな」
「割り切ってやるしかないの」
「そういうことか。しかし本当にだな」
関羽も李典のその胸を見て話す。
「大きな胸だな」
「関羽さんには負ける思うで」
「そうか？かなり見事だな」
あらためて見るとまさに見れば見る程だった。そんな胸だった。
「それでもか」

「うちは胸が大きいだけやけど」
李典も李典で関羽を見ている。そしてだった。言う言葉は。
「関羽さんはスタイル全体がええしな」
「確かにな。絶妙なまでだな」
「腰もくびれてるしな」
趙雲と馬超もそれは言う。
「劉備殿とどちらがな」
「凄いスタイルだろうな」
そんな話をしていたのだった。それが彼女達の入浴だった。
それから夕食を皆で食べてだ。寝る時になる。全員髪を解いて寝巻きになるとだった。今度は黄忠とその劉備を見ての話になった。
「胸、一番やろ」
「圧倒的なの」
まずは黄忠を見てだった。彼女は薄い赤紫の色の寝巻きだ。

# 第四十二話　于禁、事実を知るのことその十四

「ここまででかいとな」
「目がいって仕方ないの」
「あら、そういう李典さんも」
黄忠は微笑んで李典に対して返す。
「立派だけれど」
「いやあ、負けるわ」
「私もそこまで大きくなりたいの」
「なれるわ」
笑顔で言う黄忠だった。
「ちゃんとね」
「なれるの？」
「そう、なれるわ」
また言う。
「ちゃんとね」
「そうだったらいいけれど」
「それでね」
「はい」
「胸を大きくするには」
于禁にその秘訣を話すのだった。
「恋をすることを」
「恋をなのですね」
「そうよ。恋をよ」
「わかりました。それならなの」
于禁は真剣な顔で黄忠の言葉に頷く。そうしてだった。
「私そっちも頑張るの」
「何ごとも努力が重要だ」
ここでも真面目な楽進だった。

「それはな」
「そうなの。私頑張るの」
「沙和にはいつも助けられている」
これは于禁には想像もできない言葉だった。
「よくな」
「そうなの？」
「戦いの時も横を守ってくれる」
「そやな」
李典も楽進のその言葉に同意してきた。無論この三人も髪を解いている。解けばだ。三人共かなりの長さである。特に楽進と于禁の髪は普通に腰まである。相当な長さだ。
「お陰でうちも気楽に戦えるわ」
「感謝しているのだがな」
「そうなの？」
二人の言葉を聞いてだ。于禁は目を丸くさせて驚いた。
そしてだ。彼女はその驚いた顔で二人に問い返した。
「私、二人の役に立ってるの」
「気付いてなかったんかいな」
「そのことに」
「全然。今言われてびっくりしてるの」
「うち等だけやないで」
「マルコ殿達もだ」
彼等もだというのだ。
「感謝してくれているのだぞ」
「あんた本人には言ってへんけれどな」
「どうしてなの？それは」
「あんた照れ性やさかいな」
だからだというのだ。
「それでや」
「それでなの」

「そういうこっちゃ。まああれや」
「沙和は自分で思っている程弱くはない」
それはないというのだ。
「頼りにしているからな」
「二人共有り難うなの」
于禁は泣きそうな顔で二人に言う。
「私これからもっともっと頑張るの」
「ああ、よろしゅう頼むで」
「これからもな」
二人も彼女に微笑みで返す。そうしてだった。
于禁は笑顔で眠りに入った。その昨夕を二人が囲んでだった。そうして眠るのだった。
そして劉備達も寝る。しかしだった。
劉備は中々眠れなかった。目を閉じていてもだ。
その彼女にだ。関羽が言ってきたのだ。

## 第四十二話　于禁、事実を知るのことその十五

「劉備殿」
「関羽さん？」
「うむ。どうしたのだ？」
関羽は劉備の隣に寝ている。この時も張飛にまとわりつかれている。その見事な胸が半分見えている。他の面々もそれぞれ寝ている。李典と馬超の寝相の悪さが目立っている。
「眠れないのか」
「于禁さんはお二人に頼りにされてたんだね」
「その様だな」
「けれど私は」
自分はだというのだ。
「そうしたことは」
「できていないというのだな」
「関羽さんも迷惑ですよね」
目は既に開けている。そうして暗い天井を見ながら話すのだった。
「やっぱり。私なんかと一緒で」
「いや、それは違うぞ」
「違うんですか？」
「劉備殿には助けられている」
そうだというのである。
「精神的にな」
「精神的にですか？」
「そうだ、助けられている」
そうだというのである。
「それもかなりな」
「そうだといいんですけれど」
「劉備殿のその明るさ」

関羽が言うのはそのことだった。
「そして穏やかさと優しさ」
「そうしたものがですか」
「私の心を癒してくれる」
さらにであった。関羽は言葉を続ける。
「私だけでなくだ」
「関羽さんだけでなくですね」
「鈴々も。朱里達も皆劉備殿に癒してもらっている」
「癒しですか」
「それは何にも替えられないものだ。そう」
「そう？」
劉備もだ。関羽のその言葉を聞いていた。そうしてだった。
自然と彼女に顔を向けていた。そのうえでの問いだった。
「そうといいますと」
「劉備殿に魅かれているのだ。是非共にいたいとな」
「皆さんがですか」
「劉備殿は劉備殿だからいいのだ」
「私だから」
「そうだ。だから気にすることはない」
「わかりました」
劉備もだ。関羽のその言葉に頷いたのだった。
そうしてだ。微笑んで言うのだった。
「私は私で皆さんに」
「そうしてくれるな、これからも」
「そうさせてもらいます」
劉備もまた同じだった。自分のことには気付いていなかった。そしてそのことに驕ることもなかった。そうしたこと全てが彼女の最大の武器であることもだ。彼女は気付いていなかったのだった。

第四十二話　完

2010・11・8

# 第四十三話　劉備、妹達を得るのことその一



遂にだ。雨が降ってきた。
「来たわね」
「そうね」
孔明と鳳統がその雨を家の中から見ながら話す。
「それじゃあいよいよ」
「来るわね」
「賊がだな」
マルコが二人に後ろから応えてきた。
「来るのだな」
「はい、間違いありません」
「おそらく数日中に」
「わかった」
マルコは二人のその言葉に頷いた。
そうしてだった。彼はあらためて言うのであった。
「それならばだ。極限流空手思う存分使わせてもらおう」
「えっ、今極限流って仰いましたけれど」
「確かに」
二人はマルコの今の言葉にはっとした顔になってだ。そのうえで彼に顔を向けて問い返した。
「マルコさんまさか」
「リョウさんやロバートさんの」
「御二人を知ってるのか？」
「はい、ユリさんも」
「知ってますけれど」
「今あの人達は何処にいるのだ？」

マルコも真剣な面持ちになって二人に問い返す。
「それで。何処になのだ」
「幽州の桃家荘にです」
「私達の本拠地に」
「何と、貴殿等のところにおられたのか」
「はい」
「私はまだそこには入ってませんけれど」
鳳統はそれでも知っているというのである。
「その通りです」
「世界は狭いな」
マルコは話を聞いて思わずこう言ってしまった。
「まさか師匠達までこの世界に来ておられるとはな」
「他にもです」
「ロック＝ハワードさんとも御会いしてますけれど」
「おお、ロックもか」
ロックの名前を聞いてだ。マルコの顔が晴れやかなものになった。
そのうえでだった。彼は笑顔になってそのうえで言うのだった。
「あいつもか。それは何よりだ」
「他にも大勢の方がこの世界に来られてますし」
「マルコさん達だけではなく」
「やはり何かあるな」
マルコもこのことを確信せざるを得なかった。
「我々がこの世界に来るということはだ」
「そうですね、それは」
「間違いありませんね」
二人もマルコのその言葉に頷く。
「前から思ってましたけれど」
「マルコさんのお話を聞いて余計に思いました」
「そうだな。それでだ」
マルコは二人に応えながら話を変えてきた。

「そろそろというがだ」
「はい、そうです」
「そのことですけれど」
二人も表情を険しいものにさせていた。その人形の様に整った顔がそうなったのである。そのうえでマルコに応えるのだった。
「賊はまず夜に来るでしょう」
「それも雨の時に」
「そうだな」
マルコも二人のその言葉に頷いて返す。
「それは間違いないな」
「夜と雨に紛れてです」
「それで村を攻略しようとしてきます」
二人はそのことは既に読んでいたのだ。そうしてだった。
「しかもそのうえです」
「既に私達が村に来ていることは知っているでしょう」
「俺達もか」
「はい、そうです」
「その通りです」
こうも話す二人だった。

# 第四十三話　劉備、妹達を得るのことその二

「先日怪しい者を村の近くで見ましたし」
「おそらくは偵察に来たのかと」
「敵も馬鹿ではないか」
マルコはこのことを悟らずにはいられなかった。
そしてだった。彼はまた言うのだった。
「考えているか」
「残念ですが」
「そうして攻めてきます」
「激しい戦いになるな」
マルコもまた悟るのだった。
「この戦いは」
「ですが村は」
「何があろうとも」
「わかっている」
マルコの言葉が強いものになる。
「この戦いはな。負けられはしない」
「村の人達の為にも」
「頑張りましょう」
彼等もまた誓い合うのだった。戦いの時は迫っていた。劉備もまたその中にいてだった。己のその剣をじっと見るのであった。
その彼女にだ。神楽が声をかけた。
「その剣で戦うのね」
「はい」
神楽は劉備のその言葉に対してこくりと頷く。
「私も。戦います」
「激しい戦いになるわよ」
神楽もまた孔明達と同じことを言う。

「下手をすればね」
「死ぬかも知れないですね」
「ええ、わかってると思うけれど」
「わかっています」
劉備は神楽のその言葉にこくりと頷いて返した。
「それは」
「それでもなのね」
「私、逃げないです」
劉備の言葉にもだった。強いものが宿った。
そして鞘から剣を抜くとだ。白銀の光がそこから放たれた。
その光を見ながらだ。彼女はまた言った。
「この剣は我が家に代々伝わるものですけれど」
「けれど？」
「実際にこれで人を斬ったことはないそうです」
「それはないのね」
「はい、ありません」
実際にはそうだというのだった。
「宝剣っていう理由もありますけれど」
「斬ったことはないのね」
「そうなんです。母も言いました」
「お母様もなの」
「この剣は人を斬る為のものではなく」
劉備の言葉は続く。
「この世を乱す存在を払うものだと」
「払う」
「払い、清め、そして封じる」
今度の言葉は三つだった。払うだけではなかった。
「そうするものだと言われました」
「同じね」
劉備のその言葉を聞いてだった。神楽はふと言うのだった。

「それだと」
「神楽さん達とですね」
「ええ。私達三つの家も同じだから」
それは神楽の家だけではないのだった。
「今桃家荘に残っている草薙君にしろ」
「京さんですね」
「彼と。そして」
「八神さんですね」
「彼の家もなの。三つの家はそれぞれオロチと戦う宿命にある家だから」
そのオロチのことはだ。神楽の中から消え去ったことはない。それが彼女をして彼女たらしめている。そこまでのものであるのだ。

# 第四十三話　劉備、妹達を得るのことその三

「それと同じね」
「そうですね。ただ」
「貴女はオロチは見ていないわね」
「そうした存在はこの世にいるのでしょうか」
劉備はここではこんなことを話した。
「この世界には」
「いるかも知れないわ」
神楽は劉備のその懐疑に返した。
「私達の世界にオロチ達がいたようにね」
「この世界にも」
「感じるものもあるから」
神楽の目にも強いものが宿った。
「だから。それは気をつけておいて」
「そしてですね」
「貴女のその剣は言うならば私達よ」
「神楽さんや京さん達なんですね」
「この世界におけるね」
神楽は真剣だった。心からそう話していた。
「そういうものなのでしょうね」
「では私は」
「貴女の剣はこの戦いだけではないわ」
神楽もまたその白銀の光を見ていた。それはあくまで澄んで清らかだった。その光は幾億の星達を集めたかの如き眩しさだった。
その眩しい光を見てだ。また言う神楽だった。
「これからの。大きなうねりの為にあるのよ」
「うねりですか」
「そう、そのうねりが何かまだわからないけれど」

それでもだというのだ。
「きっとね。その為にね」
「この剣がある」
「それはわかっておいてね。じゃあね」
「はい、次の戦いですね」
「まずはその戦いについて考えましょう」
「わかりました。それじゃあ」
劉備は神楽のその言葉にこくりと頷いた。そうしてだった。
雨が激しく降りだした。それが三日になったその夜だった。
物見櫓からだ。声がしてきた。
「来ました！」
「来たか！」
「遂に！」
関羽達はその言葉に一斉に反応した。
「総員配置につけ！」
「戦いだ！」
「行くぞ！」
「私は櫓に上がります！」
孔明もまた雨の中に飛び出た。そしてだった。
雨に打たれながら周囲にだ。次々に告げるのだった。
「紫苑さんは私と一緒に櫓に上がって下さい！」
「そこから弓をね」
「はい、御願いします」
まずは彼女だった。
「星さんと翠さんは楽進さんと一緒に正門に」
「わかった」
「じゃあ行くぜ」
「わかりました」
三人が一斉に頷く。そうしてだった。
三人も門に向かう。孔明の駆けながらの指示は続く。

「愛紗さんと鈴々ちゃんは東門です」
「そこか」
「わかったのだ」
「李典さんと于禁さんは西門を御願いします」
「ほな凪行ってくるな」
「頑張るのなの」
「わかった」
楽進は真名を呼ばれたうえでそれで彼女達に言葉を返した。
「頼んだぞ」
「ああ、そっちも頑張りわ」
「死んだら許さないの」
こう言い合ってだった。彼女達も戦場に向かう。孔明の指示は続く。

# 第四十三話　劉備、妹達を得るのことその四

「マルコさん、ホンフゥさん、柳生さんは裏門です」
「うむ！」
「やるっちゃよ！」
「では我々もだな」
「蒲公英ちゃんは遊撃、雛里ちゃんは今から劉備さんと一緒に」
「泉のところね」
「そこに向かって」
二人はそこなのだった。
「そして堤を」
「わかったわ」
鳳統がその言葉に頷く。
「けれど私達だけじゃ」
「ええ。神楽さん、月さん」
孔明はここで二人の名前を呼んだ。
「御二人を御願いします」
「わかったわ」
「それでは」
「最後にミナさんも櫓に御願いします」
「ええ」
孔明は既にびしょ濡れだった。しかしそれには構わなかった。
それは他の者達もだった。最早雨はどうでもよかった。
そのうえでだ。それぞれ配置についてだった。戦いに向かうのだった。
賊達は来た。二百人を超えていた。その先頭にはがっしりとした身体で白と黒の法衣の如き服を着た短い黒髪の男がいたのだった。
賊達がその彼に対して言っていた。
「臥龍兄貴」

「今からですね」
「あの村を」
「おお、そうだ」
臥龍は威勢のいい声で彼等の言葉に応えた。
「占領して俺達の村にするぞ」
「それで村人はどうします？」
「連中は」
「手荒な真似はするんじゃねえぞ」
ここでこう言う彼だった。
「絶対にな」
「それはですかい」
「村を俺達のものにするだけで」
「村人はですか」
「手荒なことはですか」
「そうよ、そうしたことはするな」
それはくれぐれもなのだった。
「わかったな。それはな」
「まあ俺達も食えればいいですしね」
「人を殺したことはないですし」
「手荒な真似もちょっと」
そうした意味ではだ。この者達は根っからの悪人ではなかった。
そしてそれが臥龍も同じなのだった。とんでもなく歯が出てやけに痩せて小柄の禿げた男が横にいるが彼にも言うのであった。
「おい」
「へい兄貴」
「わかってんだろうな」
こうその彼に声をかけるのだった。
「くれぐれもだぞ」
「悪いことはするなってんですね」
「村を手に入れたら毎日畑仕事だ」

つまり真っ当に働くというのである。
「それはいいな」
「へい、わかってやすよ」
子分も彼の言葉に頷く。
「それは」
「ったくよ、何でこんな世界にいきなり来たんだ」
臥龍はここで首を捻りながらぼやいた。
「とりあえずこの連中の頭にはなったがな」
「それでも食うのって大変ですね」
「元の世界じゃそんな心配しなくてよかったんだがな」
「全くですよ」
「食うのはどうとでもなったからな」
お世辞にも奇麗なことはしていなくてもそれでもなのだった。彼等も食べられてはいたのだ。しかしこの世界では、なのであった。

# 第四十三話　劉備、妹達を得るのことその五

「しかし今はな」
「何もかもがわかりませんしね」
「全くだよ。どうだってんだよ」
臥龍のぼやきは続く。そうしてだった。
村を囲んでだ。一斉に攻めるのだった。
「やれ！」
「合点だ！」
「それなら！」
「叩きのめすだけにしとけよ！」
臥龍はとにかく殺すことは避けるのだった。
「どうしてもって場合は仕方ないがな」
「それでもなんですね」
「殺すことは」
「ここの村人になるんだからな」
だからだというのだった。
「それは止めておけよ」
「へい、わかってやす」
「それは」
「わかってればいいんだよ」
それならばなのだった。臥龍の厳命に従うことにしてだ。彼等は村を攻めはじめた。そうしてその彼等に対してであった。
「紫苑さん、ミナさん」
「ええ、わかったわ」
「それなら」
二人は孔明の言葉に頷く弓を引いた。その弓がだった。
放たれそして賊達を射抜くのだった。
「ぐわっ！」

「うわっ！」
「急所は外しておいたわ」
「それはね」
二人はそれは避けたのだった。
「けれど。それでもね」
「動くことはできないわよ」
まずは二人が賊達を射ていく。そうして数を減らしていくのだった。
そのうえでだ。門に迫る者達はだ。
「来たな」
「ああ！」
趙雲と馬超が言い合う。そしてその手の槍を煌かせてだった。
敵を次から次に叩きのめす。一撃で次々とだった。
「安心しろ、みね打ちだ」
「それでも痛いぞ、覚悟しろ！」
「はあっ！」
楽進は両手を合わせそこから気を放った。それでだった。
賊達を吹き飛ばしていく。正門での戦いもはじまった。
それは四つの門全てで同じだった。戦いはこちらが優勢だった。
だがそれでもだ。賊の数は多く中々決められなかった。孔明はそれを見てだった。
「そろそろですね」
「水ね」
「それをなのね」
「はい、水です」
その通りだとだ。黄忠とミナの言葉に応える。
「それで一気に決めましょう」
「合図は」
ミナが言ってきた。その弓矢に光を込めている。
「これでいいわね」

「それで御願いします」
孔明も彼女のその言葉に頷く。
「今ここで」
「わかったわ。それじゃあ」
「はい」
こうしてだった。光の矢が放たれた。それが泉の方からも見えた。
しかしなのだった。
「くっ、この堤は」
「駄目ですね」
神楽と月が困っていた。堤は巨大な岩をそれにしている。李典がそれを使ったのである。しかしその岩がなのだった。
びくともしないのだ。二人のその技をもってしてもだ。
「あまりにも大き過ぎて」
「割れないですね」
「私達の技ですら」
「けれどこのままでは」
「ですがここは」
鳳統も狼狽した声で話す。

# 第四十三話　劉備、妹達を得るのことその六

「この岩を何としても」
「それはわかっているわ」
「けれどこれは」
「梃子もありませんし」
こんなことも言う鳳統だった。
「やはり割るしか」
「ええ、そうね」
「それしかありませんけれど」
「けれど。どうしたら」
鳳統もだった。ここは困っていた。
その時だ。月はその手に持っている薙刀を高く掲げていた。鳳統はそれを見て困った顔で言ったのだった。
「あわわ、月さんそれは駄目です」
「一体何が？」
「今お空に雷が鳴ってますよね」
「はい、それは」
「雷は金属に落ちます。ですから」
「こうして高く掲げたらですか」
「危険です」
そうだというのである。
「ですからそれは」
「わかりました。それなら」
「さもないと大変なことになります」
鳳統はそのことを恐れていたのだった。
「雷が落ちて」
「そうだったわね」
「ただ」

そしてだった。ここで鳳統は閃いたのだった。
それでだ。劉備を含めた三人に対して話した。
「雷を岩に落とすことができればです」
「岩が割れる」
「そうなりますね」
「はい、いけます」
そうだというのである。
「それをするならですけれど」
「それなら」
月がすぐに名乗り出た。右手にはその薙刀がある。
「この薙刀を岩の上に突き刺して」
「いえ、その薙刀は柄のところが木なので」
「駄目ですか」
「雷が岩に全て伝わりきれないかも知れません」
鳳統はこう言って薙刀は駄目だというのだった。
「申し訳ありませんが」
「そうですか」
「それじゃあ」
月が退けられるとだった。劉備が言うのだった。
「私のこの剣で」
「えっ、けれどそれは」
鳳統は劉備の申し出にはさらに困った顔になった。普段からそうした感じの顔なのだがそれが余計にそうなってしまったのである。
「劉備さんが折角その手に戻された」
「けれど今は村の人達や関羽さん達が」
だからだというのだった。
「そんなこと言ってる場合じゃありません！」
「ですがその剣は」
「剣よりも！」
最早劉備にとって制止は無意味だった。

そしてだった。すぐに動いてなのだった。
岩の上にだ。普段の彼女からは信じられないような身のこなしであがった。そしてそこに剣を一気に突き刺してなのだった。
「これで！」
「劉備さん、すぐに退いて！」
神楽がその劉備に叫ぶ。
「この天候ならすぐに雷が来るわ！」
「は、はい！」
劉備は神楽のその言葉に頷きすぐに飛び退いた。スカートが翻りピンク色のものも丸見えになる。だが今はそれには構わなかった。
そうして飛び退き着地する。やはり普段の彼女からは想像できない身のこなしである。その身のこなしで着地した瞬間だった。
雷が落ちたのだった。剣に。
黄色い光が全てを包んだのは一瞬だった。それが終わるとだ。
岩が瞬く間に割れた。そして砕け散り。
水がそこから溢れ出たのだった。まさに一瞬のことだった。
「これで村が・・・・・・」
劉備は呆然となりながらもほっとしたような顔になってその流れ出る水を見て呟いた。

# 第四十三話　劉備、妹達を得るのことその七

「救われるわよね」
「はい、ですが」
鳳統はここでも困った顔であった。
「劉備さんの剣は」
「けれど」
それでもだというのだった。
「村の人達がこれで」
「そうですか」
「ええ、これでね」
劉備は微笑んでいた。
「何とかなるわ」
「それでいいんですね」
鳳統はその劉備の顔を見て問うた。
「劉備さんは」
「確かに剣は大事だけれど」
「村の人達の方が」
「それでお母様に怒られるのなら仕方ないわ」
それはいいというのだった。
「それよりもね」
「わかりました」
鳳統は劉備のその言葉に頷いた。そうしてこう言うのだった。
「劉備さんが」
「私が？」
「はい、わかりました」
そうだというのである。
「ですから御願いします」
「有り難う、鳳統ちゃん」

「御礼はいいです」
それはいいという彼女だった。
「それは」
「どうしてなの？それは」
「劉備さんがわかったからです」
何につけてもそれだった。
「ですから」
「それでなのね」
「そうです。それじゃあ」
こうしてだった。このことはよくなった。そしてだった。
村での戦いは進んでいた。関羽もその得物を振り回す。
「てやあーーーーーーーーーーっ！」
「う、うわああっ！」
「だ、駄目だ！」
誰も彼女のその攻撃に敵わない。次々に吹き飛ばされてしまう。
それに戸惑っているがだ。ここで臥龍が出て来た。
「おい、そこのでかい女！」
「何なのだ！」
「いや、手前じゃねえ」
張飛が出て来たか彼女ではないというのだった。
「手前はチビだろうがよ」
「何っ、鈴々がチビというのだ」
「どっからどう見たってそうじゃねえかよ」
臥龍も言い返す。
「違うか？」
「チビって言うななのだ！」
張飛は戦いながらムキになる。
「鈴々は全然チビじゃないのだ！」
「いや、どう見たってチビだよ」
臥龍も引かない。

「違うってのかよ」
「ぬうう、こうなったら容赦しないのだ！」
完全に頭に来た張飛だった。そうしてだった。
その蛇矛を手に臥龍に向かおうとする。しかしだった。
「待て」
「愛紗！？」
「挑まれたのは私だぞ」
呆れた顔で彼女に話す。

# 第四十三話　劉備、妹達を得るのことその八

「それでどうして御前が行くのだ」
「けれどあいつは鈴々をチビと言ったのだ」
「それでか」
「そうなのだ。だからあいつは絶対にやっつけてやるのだ」
「だから挑まれたのは私だ」
関羽もムキになって言う。
「だからここはだ」
「むむっ、愛紗もどうしてというのだ？」
「そうだ、ここは任せろ」
「ううん、わかったのだ」
張飛は憮然とした顔で頷いた。
「そこまで言うのなら。仕方ないのだ」
「御前は門を守っていてくれ」
こう張飛に頼む。
「それでいいな」
「承知したのだ。雑魚は任せるのだ」
「うむ、それではだ」
張飛との話を決めてだった。あらためて臥龍に香を向ける。そうしての言葉だった。
「我が名は関羽！」
「それが手前の名前か！」
「そうだ、字は雲長！」
字も言うのだった。
「覚えていてもらおう」
「そうか。俺の名は臥龍ってんだよ」
彼もまた不敵な笑みと共に名乗ってみせた。
「そのことは覚えておきなよ」

「一応名前は覚えた」
それはだと返す関羽だった。
「しかしだ」
「しかし？」
「貴様はここで倒す！」
彼を見据えて言い切ってもみせた関羽だった。
「それは言っておこう」
「へっ、よく言えるな」
臥龍もまた不敵な笑みで言葉を返す。
「そんなホラがな」
「そうだそうだ」
ここであの子分も横から出て来た。
「兄貴は強いんだぞ。誰よりもな」
「そうだ、手前なんぞに負けるかよ」
「そうか。話は聞いた」
関羽は一応そうだと返しはした。しかしだった。
「では来るがいい」
「じゃあな。行くぜ！」
「来い！」
こうしてだった。お互いに突き進む武器を打ち合わせた。二人の戦いもこれではじまったのだった。
豪雨の中での戦いが続く。しかしその中でだった。
于禁はふとだ。戦っている最中にバランスを崩してしまったのだった。
それを見てだ。賊の一人が槍を突き出してきた。
「隙あり！」
「アホ！させるかい！」
ここで李典が出て来てだった。そのドリル状の槍でその敵を吹き飛ばしたのだった。
「ぐはっ！」

「沙和に手ェ出したらうちが許さんで！」
こう言ってだった。
「友達はやらせるかい！」
「真桜ちゃん・・・・・・」
「もうちょいや！」
于禁にも顔を向けて告げる。
「もうちょっと待ったらや」
「そうね、お水が来るの」
「うち等の勝ちや」
「ええ、わかったわ」
于禁も態勢を立て直す。そうしてだった。
その両手の剣を握りなおしてだ。それでだった。
「やるの！」
「くっ、こいつ！」
「まだ立っているのかよ！」
「女の癖に！」
「女だからって甘く見るななの！」
これが今の于禁の言葉だった。

# 第四十三話　劉備、妹達を得るのことその九

「私だってやる時にはやるなの！」
「そやで、その髑髏の髪飾りに誓うんや！」
また李典が彼女に言ってきた。李典もその槍で必死に戦っている。
彼女達はずぶ濡れになることにも構ってはいなかった。
「曹操様のところに行くってな！」
「うん、わかったの」
于禁も李典のその言葉に頷く。
「曹操様にちなんで付けたこの髑髏のアクセサリー」
「そやろ。曹操様が好きやさかいな」
「あえて選んで付けたからなの」
それでなのだった。彼女がそのアクセサリーをしているのはだ。
髪飾りである。
「だからこれに誓って」
「そや、頑張るんや」
「うん、じゃあ真桜ちゃんも」
「うちもやるで！」
こう言ってまた槍を振ってだった。賊を吹き飛ばす。そうして戦っているとだった。
遂に来た。最高の援軍がだ。
「来たぞ」
「ああ、来たな！」
「うん、やったわ！」
趙雲と馬超に馬岱が言う。馬岱は遊撃に来ているのだった。
「これでね」
「水が来ればな」
「賊が吹き飛ばされてな」
「何とかいけるね」

実際に水が来てだ。それで賊達が実際に退けられてだ。戦局が一変したのだった。
賊達は多くが流されていく。それを見てだった。
臥龍もだ。狼狽した顔で言う。
「糞っ、ここはだ」
「兄貴、ここはどうしやす？」
「馬鹿野郎、今退けるか！」
こうムキになって子分に返す。
「ここまで来てな！」
「それじゃあここは」
「ああ、何としてもな！」
「村を占領するんでやすね」
「そうだよ。やってやらあ！」
言いながらまだ関羽と戦うのだった。それはまだ続けていた。
「絶対にな！」
「いいんですね、それで」
「そうだよ。おいでかい女！」
「他に呼び方はないのか？」
関羽は臥龍の言葉にまた言い返す。
「私の名前は関羽というのだが」
「ええと、何て名前だ？」
二回言われてもまだ覚えられないのだった。
「手前の名前は」
「だから関羽だ」
関羽も親切に話しはする。
「いい加減覚えてもらおうか」
「俺は人の名前覚えるのは苦手なんだよ」
「むむっ、鈴々と同じなのだ」
張飛がそれを聞いて言う。彼女は賊達が減っていてかなり楽になっていた。

「それは」
「そういう問題ですか？」
楽進が来ていた。彼女の戦っている場所が楽になったので援軍に来たのである。これは彼女の気遣いによるものであった。
「違うと思いますが」
「違うのだ？」
「おそらくは」
そうではないかと。楽進は張飛に話した。
「そうなのだ」
「とにかくです。今は」
「ケリをつけるのだな」
「はい、そうしましょう」
また張飛に話す。
「ここは」
「雑魚は水でかなり減ったのだ」
「このまま勢いに乗ってです」
「決めるのだ！」
「はい！」
二人で突き進んでなのだった。敵を倒していく。

# 第四十三話　劉備、妹達を得るのことその十

そしてその時にだった。関羽と臥龍の戦いもだった。決着がつこうとしていたのだった。

蛾龍がだ。前に出た。そして得物を横薙ぎに繰り出す。

「くたばれ！」

「むっ！？」

「これで終わりだぜ！」

「何のっ！」

しかしここでだった。関羽は跳んだ。それでその臥龍の攻撃をかわす。

そこからだった。己の得物を大上段に振り下ろしてだった。彼を打ち据えたのであった。

「ぐわあああっ！」

「勝負ありだな」

関羽もここで言った。

「これでな」

「ぐはあっ・・・・・・」

「安心しろ、みね打ちだ」

前のめりに倒れていく臥龍への言葉だった。言いながら着地していく。

「死にはしない」

「あ、兄貴・・・・・・」

「まだ戦う奴はいるか」

関羽は前に倒れた臥龍を眼下に見据えながら周りに問うた。

「ならばこの関羽雲長が相手をするぞ！」

「お、お頭がやられた！？」

「まさか」

「こんなことになるなんて」

「戦いたくなければ投降しろ！」
関羽はさらに言う。
「今すぐにだ！」
「わ、わかりやした！」
「それじゃあ！」
こうしてだった。残った賊達は投降した。これで深夜の豪雨の中の戦いは終わったのだった。
その翌朝だった。彼女が来たのだった。
「これで全員かいな」
「そうだ」
張遼だった。彼女が兵達を連れて村に来ていたのだ。それで関羽が彼女に応えていたのだ。
「死んだ者はいない」
「へえ、一人もかいな」
「溺れた者も打たれた者もだ」
「殺さんかったんかいな」
「そうだが。そちらの要望を聞いてな」
「ああ、実はこっちはな」
ここで張遼は難しい顔で話すのだった。
「キムとジョンが悪党は一人でも多く更正させたい言うてな」
「それでか」
「そうなんや。難しい注文つけて悪いな」
「いや、それはいいが」
関羽はそれはいいとしたのだった。しかしさらに言うのだった。
「だが」
「だが。何や？」
「随分と変わった注文だな」
それが関羽の言うことだった。
「それは」
「まあな。うちもそう思うわ」

実際にそうだと認める彼女だった。
「けれどあの連中は違ってな」
「更正か」
「それにこだわってるんや」
「ううむ、変わった者達だな」
「そんでその賊共は今や」
「更正させｒたれているのか」
「そういうこっちゃ。ずっと修業と肉体労働の日々や」
それを聞いてだ。孔明が言った。
「それって滅茶苦茶辛くないですか？」
「何せ起きてから寝るまでやさかいな」
「鬼ですね」
孔明はそこまで聞いてこう言った。
「それって」
「うちもそう思うで。あれはうちでもあかんわ」
「あいつ等はそういう連中っちゃ」
ホンフゥが忌々しげに言ってきた。
「キムとジョンは。名前聞いただけで悪寒がするっちゃよ」
「お知り合いですか」
「残念ながらそうっちゃよ」
その忌々しげな顔で楽進にも話す。

# 第四十三話　劉備、妹達を得るのことその十一

「あの二人は手前勝手な正義の名の下に悪人を片っ端から捕まえて」
「そうしてですか」
「それから相手が死ぬまで強制労働と修業漬けっちゃよ」
「地獄やないか、それって」
「そうっちゃ、地獄っちゃよ」
李典にもその通りだと返す。
「そんなのおいでもせんっちゃよ」
「最悪じゃねえのか？それって」
「そんでこの連中は今からその地獄送りや」
張遼も言う。
「キムもジョンも強いうえに頑固やさかいなあ」
「私もそう思うの」
馬超と于禁も言う。
「まあ悪事働いたら仕方ないけれどな」
「当然の報いなの」
「それじゃあうちはこの連中擁州に送るわ」
張遼はここでは真面目な顔である。
「ほなな。関羽もあんじょうな」
「うむ、それではな」
「しかし。あれやな」
張遼は帰る時に劉備を見た。そうして言うのだった。
「そこのあんた」
「私ですか？」
「あんたが水を流させたんやってな」
言うのはこのことだった。
「やるやん」
「そうですか？」

「ああ。あんたのほほんってした感じやけど」
それは否定できなかった。誰でもだ。
「それでも頑張ったな。よおやったわ」
「有り難うございます」
「うち月と仲良うやってるけれど」
彼女も董卓のところに馴染んでいた。しかしそれを踏まえて話すのだった。
「それでも。あんたも好きになったで」
「えっ、私をですか」
「そや、だから頑張りや」
満面の笑顔で劉備に話す。
「これからな」
「はい、それじゃあ」
劉備はにこやかに笑って張遼に返す。
「私これからも」
「また会おうな。劉備ちゃん」
最後に名前を告げて別れるのだった。こうして臥龍達強制収容所に送られ楽進達も村に向かうことになった。その時だった。
張飛がだ。楽進達と別れるその分かれ道で寂しげに呟くのだった。
「それにしてもなのだ」
「どないしたんや？」
「劉備殿の剣は残念だったのだ」
彼女が言うのはこのことだった。
「村は助かったけれど剣は」
「そやな。ああなったらな」
李典がここで話すのだった。
「もう南蛮に行ってそこの水に漬けるしかないな」
「南蛮の？」
「水に？」
「そや、南蛮には五つの泉があってな」

李典は劉備達に対して話す。
「そこに全部漬けたら。あらゆる武具が元に戻るんやで」
「それは凄いわね」
黄忠もそれを聞いて言う。
「それで何でも元に戻るなんて」
「そやからそこ行ったらどや？」
李典は右手の人差し指を上にやって話す。
「そないしたら剣かてな」
「そうだな。ここはな」
関羽がその話を聞いて頷いた。
「是非そうするとしよう」
「そないしたらええわ。旅は続くけれどな」
「それは構わないわ」
神楽がそれはいいとした。
「旅が続くのはね」
「そうなの」
「劉備さんの剣が元に戻ることを考えればね」
こう于禁に対しても話す。

# 第四十三話　劉備、妹達を得るのことその十二

「それでいいわ」
「そうですか。それでは」
楽進は彼女達の決意を見た。関羽や神楽達だけでなくだ。他の面々の顔も確かなのを見てそうしてからの言葉だった。
「南蛮までの道中も頑張って下さい」
「有り難うございます。それじゃあ」
「はい、それでは」
笑顔で劉備の言葉に応えてだった。
「また御会いしましょう」
「元気でね」
劉備達も笑顔で別れの挨拶をする。そうして再会を約束してだった。お互いの道を進むのだった。
その南蛮への道中でだった。関羽が劉備に行ってきた。
「劉備殿のしたことは」
「軽率ですよね」
「滅多にできることではない」
劉備の言葉を否定してだ。褒め称えるのだった。
「それはな」
「滅多にですか」
「そうだ。できはしないことだ」
こう言うのであった。
「私にはできないな」
「鈴々もなのだ」
張飛も言ってきた。
「家の宝を捧げるなんてとてもできないのだ」
「あれは咄嗟に」
「それなら余計にだ」

「余計にですか」
「できはしない」
また言う関羽だった。
「劉備殿は凄い。皆の為にそこまでできるのはな」
「関羽さん・・・・・」
「私は劉備殿に惚れた」
そして言ったのだった。
「その御心にだ」
「鈴々もなのだ」
「ずっと傍にいたくなったが」
「それならですね」
劉備はここで二人に対して言った。右手の人差し指をあげて。
「いい考えがありますけれど」
「いい考え？」
「はい、姉妹になりましょう」
こう言うのであった。
「私達三人で」
「そうだな。それならな」
関羽も劉備のその言葉に頷いた。
「生きる時も死ぬ時もな」
「一緒にですね」
「そうなろう。私達はこれからだ」
「姉妹なのだ」
「じゃあ私は」
ここで三人は少し話し合った。それでわかったことは。
「何っ、劉備殿がか」
「一番年上なのだ」
このことがわかったのだった。関羽はかなり驚いている。
「私の方が年上だと思っていたが」
「違ったのだ」

「私よりもだったか」
「あたしよりもだよ」
趙雲と馬超も話を聞いていて驚いていた。
「まさかな」
「同じ歳でもな」
「そうですね。私そうだったみたいですね」
劉備だけが驚いていなかった。穏やかな顔のままでいる。
「お姉ちゃんだったんですね」
「では私が妹になるのか」
「鈴々もなのだ」
「はい、そうなりますよね」
また言う劉備だった。

# 第四十三話　劉備、妹達を得るのことその十三

「私も驚いてますけれど」
「そうなの？」
劉備の今の言葉に驚いたのは馬岱だった。
「あの、そうは見えないですけれど」
「ううん、驚いてるわよ」
「そうかなあ」
劉備の今の言葉に難しい顔にもなる馬岱だった。
「劉備さんって結構」
「まあそこから先は言うな」
趙雲がそれを止める。
「むしろそういうところがいいのだからな」
「それは確かに」
「鋭い者ばかりでは面白くない」
趙雲はこうも言う。
「劉備殿の様な方もな」
「いてくれてなのね」
「むしろ。こうした方だからこそ」
劉備を見てだ。そして言うのだった。
「傍にいたくなるな」
「そうなんだよなあ。不思議にな」
馬超も話す。
「劉備殿の傍にいると落ち着くんだよな」
「そうですよね。何か劉備さんの為にって」
「自然に思えてきます」
孔明と鳳統も話す。
「曹操さんや孫策さんとはまた違って」
「そうした癒しを感じます」

「じゃあ今からね」
黄忠は優しい笑顔で皆に話した。
「姉妹の契りを結ぶのね」
「そうだな」
「それではなのだ」
まずは関羽と張飛が応えた。
「私達三人の新たな門出だ」
「何処かで宴をするのだ」
「それじゃあですけれど」
劉備がだ。丁度前を指差した。そこには。
「あそこにお店がありますし」
「むっ、凄まじいまでに都合がいいな」
「気付いたらあったのだ」
「ええと、トシちゃん感激って書いてますね」
看板を見ての言葉だった。黒い眼鏡の男と中年の男の顔まで描かれている。
「あそこにしますか？」
「いや、止めておいた方がいいわ」
神楽がそれを止めた。
「あのお店はね」
「駄目なんですか？」
「凄まじく不吉な気配がするわ」
険しい顔での言葉だった。
「だから。あそこは」
「そういえば何かあのお店って」
「そうよね」
孔明と法統は怯えた感じでその店を見ていた。
「前に通っただけで」
「そのまま妖術で連れ込まれそうな」
「前を通るだけでも危険ですね」

月も言った。
「あそこは止めておきましょう」
「そうだな。道を少し変えよう」
「そうするのだ」
関羽と張飛も頷いてだった。その店に行くことは止めたのだった。
道も変える。そこは。
「ここからの方が近いですね」
「そうなります」
孔明と鳳統が地図を拡げて歩きながらそれを見ていた。そのうえで他の面々に対して話をするのだった。
「南蛮にはこちらがです」
「近道ですから」
「じゃあそこでいいわね」
馬岱も笑顔で二人の言葉に応える。

# 第四十三話　劉備、妹達を得るのことその十四

「皆、行こう」
「けれどその前に」
ここぞとばかりに言ってきた劉備だった。
「三人の」
「そうだな。店だな」
「そこで宴を開くのだ」
関羽と張飛も義姉の言葉に頷く。
「まずは姉妹の絆を誓ってだ」
「それからでないと話ははじまらないのだ」
「ええと、何処がいいでしょうか」
店を探す。道中を進みながらだ。
やがて益州への手前の街に入ってだった。そこに店を見つけたのだった。
「ここがいいですね」
「そうだな」
「たっぷりと食べるのだ」
店の名前はだ。何と。
「王将ね」
「どうかしましたか、神楽さん」
「いえ、このお店だけれど」
神楽はその店の看板を見ながら劉備に話す。街には人々が行き交っている。その街の大路にその店があったのである。
「この国のあちこちに同じ名前があるけれど」
「あっ、そういえば」
「確かに」
「今までも何度かこのお店の名前見てきたよな」
「そうよね」

皆ここでこのことに気付いたのだった。
「一族なのでしょうか」
「おそらくは」
「天下一品という名前も時々見るが」
「それと一緒なのか？」
「私の時代の日本にはあるわ」
こう話す神楽だった。
「こうしたお店がね。まあとにかく」
「ここでいいですよね」
劉備は店の看板を見上げながら神楽に尋ねた。白い木の板に黒く大きい文字で王将と書かれていた。それを見ながらなのだった。
「このお店で」
「いいと思うわ」
神楽はそれ自体はいいとしたのだった。
「それじゃあ」
「はい、入りましょう」
「そして三人のだな」
「姉妹の契りを結ぶのだ」
三人で笑顔で言い合ってだった。そのうえで店の中に入り宴を開く。今ここに三人の姉妹が生まれたのだった。これも運命の導きだった。

第四十三話　完

２０１０・１１・１１

# 第四十四話　怪物達、北にも出るのことその一

第四十四話　怪物達、北にも出るのこと

「何か帰って来てもなあ」
「忙しいって？」
「そうだよ。匈奴を征伐しておしまいじゃないからな」
文醜が顔良にぼやいていた。
「そっからが本番って感じだよな」
「そうよね。それはね」
「あたい達武官でも書く仕事するなんて思わなかったよ」
「それもここまでね」
二人は今お互いに机に座っていた。そのうえで木簡を開いてそこにあれこれと書いている。顔良は丁寧に書いているが文醜は雑な動きだった。
「四州に烏丸に匈奴かよ」
「これまで使った兵糧の帳簿整理なんてね」
「いつも黒梅姉さんがしてたしな」
「書類整理はね」
そうしたことでは軍では彼女の担当だったのだ。しかしなのだった。
「けれどな。四州に二つの異民族だからな」
「軍も大きくなったし最近兵を動かすことも多かったし」
「兵糧の規模も消費もでかくなってか」
「私達もこうしてね」
「でかくなったのはいいさ」
文醜もそれはいいとした。
「あたい達袁紹軍の威光も高まったしな」
「そうよね。けれどお仕事はね」

「こんなに増えちまったよ」
「花麗ちゃんと林美ちゃんも今忙しいみたいよ」
「あの二人だろ？幽州に兵隊進めるのは」
「ええ、そうよ」
その通りだと話す顔良だった。手は止まらない。
「あの二人がね。今その準備をしてるわ」
「朝廷から正式に話が来たらすぐにか」
「ええ、幽州もね」
「袁紹様の統治下になるってか」
「そういうことよ」
「本当にそれ自体はいいんだけれどな」
文醜のぼやきが続く。だが彼女も手は止めない。
「仕事が増えてなあ」
「袁紹様も今仕事に追われてるしね」
「ってそれまずいだろ」
文醜はここでこう言った。
「麗羽様のストレスが溜まったらな」
「爆発するわよね」
「あの人そういうところが問題だからなあ」
文醜は明らかにぼやいていた。
「変なストレス解消ばかり考えるし」
「あの鰻大会またやるんじゃねえか？」
「あれ？」
「そうだよ。鰻を胸で掴むあれだよ」
「麗羽様鰻お好きだしね」
「それか罰ゲーム大会な」
それも有り得るというのだ。
「くじ引きに当たった奴がどんな罰ゲームを受けるか」
「足の裏をくすぐったりとかのあれね」
「とにかく変なことばかりするからね」

「ああいうムラっ気がなかったらいいんだけれどな」
「ただ。それだと」
それはそれでと話す顔良だった。
「麗羽様らしくないし」
「袁家のお姫様らしくないよな」
「そうだからね。本当に難しい人よね」
「全くだよ」
こんな話をしながら仕事をする二人だった。そして仕事をしているのは彼女達だけではなかった。常に袁紹を護る審配もだった。
彼女はこの時も袁紹の部屋の前に立っている。それで主を護っているのだ。それが彼女の仕事だった。そうしているのだった。
その彼女のところにだ。兵達が来て言ってきた。
「あの、今です」
「おかしな話が伝わってきたのですが」
「おかしな話？」
「はい、そうです」
「何でも青州にです」
兵達は審配に対して話していく。
「奇怪な者達が現れたそうです」
「赤い髪の男に」
まずは彼だった。

## 第四十四話　怪物達、北にも出るのことその二

「それに裸の大男が二人」
「その三人だそうです」
「赤い髪の男といえば」
審配はそのことを聞いて察した顔になった。そうして話すのだった。
「あの華陀かしら」
「名医のですか」
「針を使うという」
「あの男ではないかしら」
こう予想を述べる彼女だった。
「赤い髪の若い男よね」
「はい、そうです」
「その通りです」
「それならそうかも知れないわ」
華陀ではと話し続ける。
「けれど。何かしら」
「ではここは」
「どうされますか」
「華陀だったら問題はないわ」
彼ならばというのだ。
「名医よ。誰かの病を癒してくれるから」
「だからですか」
「その者はいいのですね」
「ええ。けれど」
しかしなのだった。審配は怪訝な顔になってだ。それで話すのだった。
「問題はその後だけれど」

「裸の大男達ですか」
「その二人ですね」
「何なの、それは」
審配の怪訝な顔は変わらない。
「裸っていうのは」
「それがです」
「どうも妖術を使うそうで」
「妖術！？」
「はい、絡んだ悪党を忽ちのうちにです」
「その目だけで倒したとか」
そうだというのである。
「そうした恐ろしい術を使うそうです」
「そうした者達だとか」
「その者達が我々の勢力圏に来たので」
「それでどうされますか」
「ここは」
「そうね。ここはね」
考える顔になった。審配は参謀の一人でもあるのだ。それでだ。
「監視役をつけましょう」
「そうしてですか」
「今は」
「ええ、警戒にあたらせて」
こう話すのだった。
「とりあえずはね」
「はい、それでは」
「その様に」
こうしてだった。とりあえずの方針が決まったのだった。
早速二人青州に派遣された。それは夜血と灰人だった。
二人はぼやきながら道を歩いていた。
「何かかったるいな」

「そうだな」
それぞれの剣を手にぼやいている。
「わざわざ青州に行くなんてな」
「これも仕事かよ」
「っていうのが審配さんの話だけれどな」
「引き受けるのもどうなんだ？」
こんな話をしながら歩く二人だった。
「俺も丸くなったぜ」
「俺もだ」
「昔だったら絶対に引き受けない仕事だったな」
「言ってきた奴を斬ってたな」
それがかつての彼等だった。しかし今は違っていた。
仕事を引き受けてだ。そのうえで青州に向かっていたのだ。
そうしてだった。ある街に入るとだった。
大騒ぎになっていた。何か前にいるらしかった。二人はこのことにいぶかしんだ。
「何だ？」
「何があったんだ？」
「前に何かいるのか？」
「何かあるのかよ」
それぞれ首を傾げさせながら言う。そうしてだった。

## 第四十四話　怪物達、北にも出るのことその三

自分達の方に来た町人に尋ねる。その町人もかなり我を失っている。
その狼狽した有様でだ。二人に話してきた。
「あの、あそこにです」
「あそこ？」
「前にか」
「はい、怪物で出てるんですよ」
こう言うのである。
「もう何が何かわからない怪物が二人も」
「怪物に人間の呼び方はあれだろ」
夜血はそこに突っ込んだ。
「違うだろ」
「一応姿形はそう見えないこともないので」
こう返す町人だった。
「それで」
「人間の形をした妖怪か？」
灰人は話を聞いてこう述べた。
「つまりは」
「まあそんなところです」
「そういえばな」
「ああ、そうだな」
ここで二人は頷き合った。そうして話すのだった。
「審配の嬢ちゃんも言ってたな」
「怪物が二人ってな」
「それか？」
「そうじゃないのか？」
こう言い合ってだった。前に向かうのだった。

人ごみを分けてそのうえで前に来た。するとだった。
そこにいたのは。確かに怪物達だった。
「あら、皆恥ずかしがり屋ね」
「全くね」
彼等は周囲が自分達を見て逃げ惑うのを見てこんなことを言っていた。
「私達があまりにも美しいからって」
「見ないようにすることはないのに」
「そうよ。ほら、よく見て」
「減るものじゃないわよ」
こう言ってポージングまでする。するとだった。
彼等の周りで大爆発が起こる。恐ろしいまでの破壊力だった。
「ほら、私達の美しさに世界も感嘆しているわ」
「この爆発が何よりの証拠よ」
「あ、あれは！」
「ああ、間違いない！」
夜血と灰人は彼等とその爆発を見て確信した。
「怪物だな！」
「どう見たってな！」
「おい、そこの怪物！」
「一体何だ貴様等は！」
それぞれの得物を手に彼等に問う。
「何処から来た！」
「そして何だ今の爆発は！」
「あら、そんなの決まってるじゃない」
「そうよ」
怪物達は平然としてその彼等に返す。
「私達の美しさを讃えた花火よ」
「今のはね」
「何が花火だ」

「今のはどう見ても違うだろうがよ」
平然と言い切る怪物達に二人はムキになって言い返す。
「どうやら貴様等」
「この街を破壊するつもりらしいな」
「どうしてそう思うかしら」
「失礼しちゃうわ」
「失礼なのは手前等自身だ！」
「この化け物共が！」
まさに誰がどう見てもなのだった。
それで構えて戦おうとする。怪物達もそれを見てだった。

## 第四十四話　怪物達、北にも出るのことその四

不敵な笑みを浮かべて言うのだった。
「おいたは駄目よ」
「そんなことしたらよくないわ」
不敵というよりは不気味な笑みだった。そうしてであった。
彼等は構えを取らない。そのかわりにだった。
それぞれウィンクしてみせた。するとだった。
夜血と灰人のいたそこにも大爆発が起こった。それで吹き飛ばされたのだった。
「な、何っ！？」
「ここでも爆発が！？」
「私達の視線は何よりも凄いのよ」
「まさに百億ボルトの衝撃よ」
彼等だけがこう言うのだった。
「そのあまりもの美しさによってね」
「祝福の花火があがるんだから」
「くっ、こいつ等やっぱり」
「妖術を使うんだな」
二人は何とか立ち上がりながら言う。全身ボロボロである。
そのうえで戦おうとする。しかしなのだった。
怪物達はその彼等を見てだ。まだ言うのであった。
「私達の魅力があまりにも凄くて立つのね」
「もっと見たくて」
「どうしてそう言えるんだ、こいつ等」
「おかしいんじゃないのか？」
これが二人の反論だった。足元がふらふらになっている。
「だがこいつ等を放置したらな」
「ああ、洒落にならないことになるな」

「俺達どころか何もかもがな」
「破壊されちまう」
こう言ってだった。まだ戦おうとする。しかしここで、なのだった、
「ああ、そこにいたのか」
「あっ、ダーリン」
「戻って来たのね」
「また見つかったぞ」
何でもないといった調子で言う華陀だった。
「俺達の仲間がな」
「あら、そうなの」
「またなのね」
「ああ、見つかった」
笑顔で二人に話すのだった。
「そっちに行くか」
「ええ、それじゃあね」
「今からね」
怪物達も彼の言葉に頷く。そうしてだった。
華陀の左右を固める。そして何処かに行こうとする。しかし華陀はだ。
夜血と灰人に気付いた。そうして彼等に声をかけたのだった。
「あれっ、あんた達」
「何だ？」
「何だってんだ、手前は」
「そこの怪物達の仲間だな」
「そうだな」
「怪物？何処にそんなのがいるんだ？」
彼もまたわかっていなかった。
「そんなの何処にもいないぞ」
「こいつ、おかしいのかよ」

「自分達の左右が見えないのかよ」
「やっぱり何もいないぞ」
左右を見回してから答える彼だった。
「怪物なんてな。まあいい」
「いいって何がだ」
「まだか手前も」
「あんた達怪我をしてるな」
彼が言うのはこのことだった。
「特にそこのあんた」
「俺か」
「ああ、あんただ」
灰人に対しての言葉だった。
「あんた今薬を飲んでいるな」
「それが悪いのかよ」
「まずいな。止めた方がいい」
真剣な顔で彼に告げる。

# 第四十四話　怪物達、北にも出るのことその五

「絶対にな」
「へっ、そんなの俺の勝手だろ」
話を聞こうとしない灰人だった。
「誰にも迷惑をかけてないだろうが」
「いいや、そうじゃない」
華陀はそれを否定した。
「あんたは絶望しているな、これまでのことに」
「手前、何を言ってるんだ」
「誰かに言われた筈だ。あんたは絶望しちゃ駄目だ」
確かな表情で彼を見据えての言葉だった。
「何があってもな」
「じゃあどうするんだ」
「とりあえず薬を止めるんだ」
その薬をだというのだ。
「それにだ」
「それに？」
「その中毒症状と病気もな」
こう言ってであった。
「治しておく」
「んっ、何だ。針かよ」
夜血がそれを見て話す。
「それを使ってか」
「そうだ。じゃあはじめるぞ」
「わかった。それじゃあな」
灰人もそれを受けることにした。そうしてだった。
華陀は構えを取った。そこからだった。
右手に持った針を突き出し。そして叫んだ。

「光になれーーーーーーーーーーっ！」
「むっ！？」
「これで終わりだ！」
華陀はさらに叫んでだった。灰人のその胸が光った。それが終わった時だった。
灰人の顔色がだ。見る見るうちによくなりだった。彼も言うのだった。
「何かな。実感できるな」
「自分でもわかるな」
「ああ、わかる」
こう華陀に対しても話す。
「もう薬は必要ないな」
「そういうことだ。薬なんかなくてもな」
「戦えるんだな」
「あんた自身ともだ」
目の前の敵だけではないというのだ。
「だから安心してくれ」
「礼を言うな」
灰人ははじめて微笑んだ。この場ではじめてだった。
「あんたのお陰で。何かが見えてきた感じだ」
「医者は身体を癒すだけじゃない」
「心もっていうんだな」
「ああ、そうだ」
まさにその通りだというのである。
「だからこそだ。俺は今な」
「わかった。それじゃああんたは悪い奴じゃないんだな」
「そうよ。そんなの見ればわかるじゃない」
「違う？」
また怪物達が言ってきた。
「私達だってね。善意の塊なのよ」

「それわかって欲しいわ」
「いや、手前等は違うだろ」
「そもそも人間かよ」
灰人だけでなく夜血も彼等には警戒を怠らない。
「大体名前は何なんだよ」
「化け物でもそれ位あるよな」
「だから化け物なんかじゃないわよ」
「失礼しちゃうわ」
まだ言う彼等だった。
「私達の名前はね」
「それを言うわね」
「だから早く言えよ」
「とにかく話はそれからだ」
「貂蝉よ」
「卑弥呼っていうのよ」
ここでやっと名乗る彼等だった。
「宜しくね」
「いい名前でしょ」
「この連中は俺の仲間なんだ」
華陀がここで二人に話す。

# 第四十四話　怪物達、北にも出るのことその六

「この連中も宜しくな」
「あんた何も思わないのか？」
「その連中を見て何も思わないのか？」
「んっ？何をだ？」
華陀だけが気付いていない。
「いい連中だぞ。空も飛べるしな」
「いや、空を飛べること自体がな」
「そもそも人間じゃないだろ」
二人の突っ込みは正論だ。しかしであった。
華陀はわかっていなかった。そしてわかっていないまま話を続けるのだった。
「それでなんだが」
「ああ、それで何で青州に来たんだ？」
「悪事を働きに来たんじゃないのはわかったけれどな」
「袁紹殿に会いたい」
こう言う華陀だった。
「それでだ」
「ああ、あの人にか」
「それで来たってことか」
「そうだ。それとだ」
華陀の言葉が続く。
「仲間も見つけた」
「仲間！？」
「仲間っていうと？」
「この人よね」
「そうよね」
出て来たのはビロードのある赤いやたらと派手な着物を着てメイ

クをした男だった。その男が何者かというとであった。
「天草四郎時貞さん」
「いらっしゃい」
「気付いたらこの世界にいたが」
その男天草が貂蝉と卑弥呼の言葉に応えて言う。
「ここは日本ではないな」
「そうよ、貴方が本来いる世界とは別の世界よ」
「その世界の漢なのよ」
「漢というと」
天草はその国名を聞いただけでわかった。
「古に来たのだな」
「そうよ」
「これでわかってくれたわね」
「うむ、わかった」
その通りだと頷いてみせる天草だった。
「そういうことか。私は故あってこの世界のこの国に来たのか」
「おい、やけに素直だな」
「簡単に話を受け入れたな」
「この世のあらゆるものを見てきた故」
灰人と夜血の突っ込みにもこう返す。
「受け入れられるようになった」
「それでか」
「そのせいでかよ」
「そうだ。それでだが」
天草はあらためて華陀達を見てだ。そうして言うのだった。
「私を必要としてくれているか」
「ああ、是非来てくれ」
こう返す華陀だった。
「俺達と一緒にこの世界を救おう」
「わかった。それではな」

「宜しくな」
「さあ、これでまた頼もしい仲間が増えたわよ」
「しかも凛々しいね」
貂蝉と卑弥呼も言う。
「有り難いわ」
「本当にね」
「それで袁紹殿だが」
華陀はいきなり話を元に戻してきた。
「いいか？」
「あんたはいいさ」
「そう、あんたはな」
灰色と夜血は華陀はいいとしたのだった。だが、だった。
「そっちの連中はな」
「問題外だろ」
その顔をそれぞれ思いきり顰めさせてだ。怪物達を見て言うのだった。

# 第四十四話　怪物達、北にも出るのことその七

「絶対に大騒ぎになるぞ」
「だから駄目に決まってるだろ」
「言っている意味がわからないな」
やはりわかっていない華陀だった。
「あんた達の言ってることがどうもな」
「・・・・・あんた目悪くないか？」
「それか相当な大物か？」
二人もいい加減華陀のことがわかってきた。
「まあとにかくあんたはいいさ」
「袁紹さんのところに行くのはな」
「じゃあこの連中もいいな」
「だから何でそんな話になるんだ」
「だからその連中はな」
しかし幾ら言ってもであった。その二人がなのだった。
「嬉しいわ。袁紹さんって相当変わった方らしいけれど」
「一度会いたいって思ってたのよ」
「いや、あんた達の方が変わってるからな」
「いい加減自覚しろよ」
二人の突っ込みもよそにだった。華陀達は冀州に向かった。その道中もだった。
「っておい」
「今さっき話したばかりだろうが」
灰人と夜血が驚いた顔で言う。
「何でもう冀州に着いてるだよ」
「しかも袁紹さんの宮殿の前だろうがよ」
「テレポーテーションを使ったのよ」
「大したことじゃないわ」

いきなり超能力を使ったのであった。
「こっちの世界じゃ縮地法っていうのかしら」
「確かそうだったわね」
「こいつ等やっぱり人間じゃねえな」
「ああ、確信したよ」
はじめて見た時からだった。それでもなのだった。
そうしてそれに頷いてだった。華陀に対して言う。
「じゃあ行くか」
「それでいいな」
「ええ、私達もね」
「行くわよ」
まだ言う貂蝉と卑弥呼だった。
「袁紹さんのところにね」
「今からね」
「あのな、人の話聞いてるか？」
「さっきから何度も言ってるだろうがよ」
二人はまた呆れながら怪物達に対して突っ込みを入れる。
「人間じゃない連中は無理だよ」
「流石にな」
「だから乙女なのよ」
「失礼しちゃうわ」
「こいつ等まだ言うかよ」
「斬っておきたいが何か死にそうにもねえしな」
死なないというのは当たっていた。実はこの二人は不死身なのだった。例え何があっても死にはしないのが彼等なのである。
「まあとにかくどっかで飯でも食ってて待っててくれ」
「それでいいな」
「そこまで言うのなら仕方ないか」
華陀もここで頷いたのだった。
「じゃあ行くか、袁紹殿のところにな」

「私もこの者達と共に時間を潰させてもらう」
天草は残ると言うのだった。
「この国の料理を楽しみながらな」
「あんたは物分りがいいな」
「お陰で助かるよ」
灰人と夜血は天草の分別のよさに心から感謝した。そうしてだった。
そのうえでだ。彼等はさらに話すのだった。
「じゃあな」
「行こうか」
「ああ、それじゃあな」
こうしてだった。華陀は袁紹のところに案内されることになった。
しかしその怪物達がどうかというとだった。これが問題なのだった。

# 第四十四話　怪物達、北にも出るのことその八

一応天草と共に料理店に入る。そうしてだった。ふとだ。怪物達はこんなことを言うのだった。

「諦めてないわよね」

「勿論よ」

卑弥呼はこう貂蝉に返す。

「乙女に諦めるという言葉はないわよ」

「その通りね。それじゃあ」

「はい、それじゃあね」

「ここは姿を消して」

「それで行きましょう」

こうしてだった。彼等はカメレオンの如く姿を消してだった。それで何処かへと向かうのだった。そんな術も使えるのである。

天草は二人が消えたがさして驚かずだ。こう言って席に着くのだった。

「用足しか」

彼も流石に知らなかった。彼等が異常な術を幾つも使えるということをだ。そうしてそのまま落ち着いて料理を楽しむのであった。

華陀は袁紹謁見を受けていた。袁紹の左右には今は田豊と沮授が控えている。主の座の階段の下のところには顔良と文醜がいる。

その四人を傍に置いている袁紹がだ。華陀に対して言うのだった。

「灰人さんの病を治してくれたそうですわね」

「ああ、それか」

「話は聞きましたわ」

こう返す袁紹だった。

「それで貴方は」

「華陀だ」

自分から名乗った彼だった。

「宜しくな」
「名前は聞いてますわ」
袁紹は彼の名乗りにこう返す。
「天下の名医だとか」
「名医とかそういうのはどうでもいい」
彼は名声にはこだわらなかった。
「ただな」
「ただ？何ですの？」
「俺がここに来た理由がだ」
「私に会いに来たそうですわね」
「その通りだ」
それはその通りだというのだった。
「あんたに用があってな」
「私は特に病気は持っていませんわよ」
袁紹はそれは断った。
「家臣達も。灰人さん以外には」
「そうですね。とりあえず問題は」
「麗羽様のこの気まぐれな御気性だけで」
ここでこんなことを言う田豊と沮授だった。
「まあそれは不治の病ですから」
「どうしようもありませんが」
「聞こえてますわよ」
その二人にむっとした顔で返す袁紹だった。
「しっかりと」
「あっ、これはすいません」
「失言でした」
「全く。わざとですわね」
それはわかっていてもあえてこれ以上は言わない袁紹だった。そうしてである。
あらためてだ。華陀に対して問うのだった。

「それで」
「ああ、俺がここに来た理由だな」
「病はもう治したのにですわね」
「そうだ、あんたに会いに来た」
上にいる袁紹を見上げてそのうえでの言葉だった。
「絶対にと思ってな」
「絶対にといいますと」
ここで袁紹もわかった。
「国家のことですわね」
「ああ。あんたは北を押さえてるな」
「その通りでしてよ」
これは言うまでもなかった。今更といった感じだった。
「それは」
「それでだ。そのあんたに話があって来た」
「ということはだよな」
「そうよね」
ここで文醜と顔良も話す。
「胡の連中のことか」
「それしかないわよね」
「そう、その胡だ」
まさに彼等のことだと。華陀も言うのだった。

# 第四十四話　怪物達、北にも出るのことその九

「最近あんたは匈奴に烏丸、それに西方と立て続けに出兵してるな」
「ええ、その通りでしてよ」
袁紹自身もそのことを認める。
「ですがそれは」
「ああ、わかっている」
華陀も彼女の言葉に頷いてみせる。
「君主として当然のことだな」
「胡を何とかしなければこの国は持ちませんわ」
「まずは外敵を何とかしないといけないからな」
「それが何か？」
「そのこと自体はいい」
華陀もそれは否定しなかった。
「だがな」
「だが？何でしての？」
「最近の胡には注意してくれ」
「また攻めて来ると」
「流石に暫くは大人しい」
暫くは、という限定であった。
「あんたがかなり叩いたからな」
「しかしこれからは」
「どうも向こうに人がいるようだ」
「人が？」
「簡単に言うと優れた主だな」
「それがいるのでしてね」
「優れただけじゃないかも知れないしな」
ここでだった。華陀の顔が曇った。
「その辺りはどうもよくわからないところがあるがな」

「とにかく。あれですのね」
袁紹にしても華陀の言葉が完全にわかったわけではなかった。しかしだった。
彼のその言葉のうちわかる部分を頭の中で反芻してだ。そのうえで言った。
「とにかく」
「ああ、とにかくな」
「胡にはこれからも気をつける」
「そういうことだ」
「特に優れた主がいるかどうかですわね」
「よく見てくれないか」
「わかりましたわ」
華陀の言葉にだ。頷いたのだった。
「それでは引き続き胡への警戒は続けていきますわ」
「そうしてくれ。あんたの役目は非常に大事だからな」
「自覚していますわ。それで」
「ああ。それで？」
「華陀さんだけでして？ここに来られたのは」
袁紹はここでこの質問をしたのだった。
「ああ、それか」
「何か聞いたところによると」
いぶかしみながらだったがそれでも言う袁紹だった。
「怪物が一緒にいるとか」
「確かそれが二人？」
「そう聞いているけれど」
田豊と沮授も話す。
「それはどうなのですか？」
「今ここに？」
「この城には来ているが宮殿の中には来ていない」
こう二人に話す華陀だった。

「俺だけだ」
「えっ、けれど」
「何か気配を感じるけれどな」
ここで言ったのは顔良と文醜だった。
「圧倒的な気配が」
「異様に感じるんだけれどな」
「これって明らかに誰かが」
「あんた以外にここにいるってことだけれどな」
「いや、いるのは俺だけだ」
こう言われてもこう話す華陀だった。
「実際にいるのは俺だけじゃないか」
「けれど気配が」
「じゃあ何だってんだよ」
顔良と文醜がいぶかしむ。するとだった。
不意にだ。彼等が出て来たのだった。そうしてだ。
「はぁ～～い、出て来たわよ」
「ダーリン、来ちゃったわよ」
「ああ、いたのか」
二人を見てもだった。華陀はここでも動じない。

# 第四十四話　怪物達、北にも出るのことその十

「それで気配がしたって言われたんだな」
「これでも消したのよ」
「随分と腕の立つ人がいるのね」
「そうみたいだな」
何ともない調子で話す彼等だった。
しかし袁紹達は違っていた。血相を変えて叫ぶのだった。
「!?これは」
「妖怪!!」
まずは田豊と沮授だった。
「いけません麗羽様!」
「この者達は!」
「ええ、そうです!」
「ここはあたい達が!」
顔良と文醜もだった。袁紹を護る場所に出てそのうえでそれぞれの得物を出す。
「化け物、ここは行かせないわ!」
「絶対にな!」
「くっ、その妖怪達は!」
袁紹も剣を抜いて主の座から立っていた。
「一体何処から!」
「姿を消してここに来たのよ」
「そんなの簡単じゃない」
実に素っ気無く返す二人だった。
「だってダーリンだけ会うなんて酷いじゃない」
「私達だって袁紹様と御会いしたいのに」
「ああ、この連中は気にしないでくれ」
華陀が袁紹達に落ち着いて話す。顔良と文醜だけでなく田豊と沮

授もそれぞれ袁紹の前に出てそれで主を護ろうとしている。
「何もしないからな。気のいい連中だ」
「そんな言葉信じられないわ」
「明らかに人間じゃねえだろ」
顔良と文醜がすぐに華陀に突っ込む。
「しかも姿が消せるなんて」
「妖術まで使えるのかよ」
「やっぱり、この二人」
「化け物かよ」
「いや、違うぞ」
華陀だけがそれを否定する。
「だからこその二人はだ」
「人間と言うのなら」
袁紹がここでその華陀に言う。
「その証拠を見せて御覧なさい」
「証拠？そんなの私達自身がよ」
「そうよ、証拠よ」
臆面もなくこう返す二人だった。
「この美貌を見てもそう言えるの？」
「人間としても最高の美貌の持ち主よ」
「見えませんわ」
袁紹ははっきりと言い切った。
「全く」
「ううん、悲しいわ」
「そう言われるなんて」
「とにかくでしてよ」
袁紹は剣を抜いたまま四人に告げる。
「その怪物二人は」
「退治ですね」
「やはり」

「その通りですわ」
こう田豊と沮授に答える。そのうえで顔良と文醜に話した。
「いいですわね」
「はい、わかりました」
「化け物退治も武将の務めですしね」
「覚悟しなさい！」
「成仏しやがれ！」
「仕方ないわね、これじゃあ」
「無駄な戦いをするつもりはないし」
こう言った二人にだ。華陀は落ち着いて問うた。

# 第四十四話　怪物達、北にも出るのことその十一

「帰るんだな」
「ええ、そうするわ」
「ここはね」
「わかった。それでなんだが」
「天草さんね」
「あの人もよね」
「そうだ。折角巡り会えた仲間だ」
もうそうなっていたのだった。彼等はだ。
「別れたら辛いからな」
「ええ。運命の出会いは大切にしないと」
「私達と同じくね」
「それではな。あの人も一緒にな」
「ええ、行きましょう」
「今から」
こう言ってであった。三人は姿を消したのだった。まさに煙の如くであった。
それを見てだ。袁紹達はまた驚いたのであった。
「消えた！？」
「一体何処に」
田豊と沮授が最初に言う。二人はまだ袁紹の前に立ち主を護っている。
「気配は」
「それはどうなの？」
「消えたわ」
「この部屋の何処にも感じねえ」
問われた顔良と文醜はすぐに答えた。顔は正面を向いたままだ。
「まさかと思うけれど」

「本当に妖術なのかね、こりゃ」
「そうかも知れませんわね」
袁紹もいぶかしむ顔で言う。
「これは。とにかくですわ」
「はい、ここは」
「どうされますか」
「あの二人の顔、絶対に忘れられませんわ」
華陀はこの時はどうでもいいのだった。それよりもだった。
「あの怪物達を手配なさい」
「そして捕まえれば」
「その時は」
「即刻生き埋めになさい」
極刑であった。
「そうでもないと。この世に大きな災厄をもたらしかねませんわ」
「はい、わかりました」
「それでは」
田豊と沮授がすぐに頷いた。しかしなのだった。
ここでだ。顔良と文醜はこう言うのだった。
「けれど。あの二人って生き埋めにされても」
「それで死にそうにもないですけれど」
「刃も毒も効かなさそうですし」
「人間の力で死にますかね」
「それでも何としてもこの世から抹殺なさい」
袁紹は最早生理的な嫌悪の域に達していた。
「わかりましたわね」
「じゃあ。手配ですね」
「とりあえずは」
「そういうことですわ」
こう話してであった。二人の怪物達は袁紹領全土で指名手配されることになった。その不気味な顔が各地の壁に貼られる。

しかしだった。その二人はだ。
華陀は勿論天草と一緒に旅立っていた。今いるのは。
「ここは何処なのだ」
「ええ、建業よ」
「その郊外よ」
そこだと答える二人だった。緑の中にいる。
「ここはお水が多くてね」
「いい場所よ」
「そうか。水か」
天草はそれには特に感情を見せなかった。だがこう言うのだった。
「私のいた国は海に囲まれていたな」
「日本だったわね」
「そうだったわね」
「そうだ。この時代ではだ」
「私がいたわ」
卑弥呼が言ってきた。

# 第四十四話　怪物達、北にも出るのことその十二

「この時代もいい国よ」
「そうか。貴殿がなのか」
「そうよ。それでね」
「うむ。何だ今度は」
「また一人来たわね」
卑弥呼がこう言うとだった。彼等の前に右京がいた。
彼は怪物達の姿を見てだ。すぐに刀に手をかけた。
「あやかしか」
「ああ、それは違う」
華陀は彼にもこう話した。
「この連中が違うんだ」
「そう言えるのか」
「言えるさ。それよりもあんたも」
右京のその白い顔を見ての言葉だった。
「胸を患ってるな」
「わかるのか」
「わかるさ。俺は医者だからな」
ここでもこう答えた。
「それはな」
「医者か。そうは見えぬが」
「だが本当のことだ。それでだ」
「うむ、それでか」
「その胸の病、治させてもらっていいか」
「私の病をか」
「ああ、いいか？」
あらためて右京に対して問う。
「あんたにとっても悪い話じゃない筈だ」

「この胸の病は」
右京自身が最もよくわかっていることだった。他ならぬ己のことだからだ。
「不治だ。それを癒せるというのか」
「癒すんじゃない、治すんだ」
そうだと答える華陀だった。
「完全にな」
「そうしてくれるか」
「ああ。じゃあいいな」
「頼む」
右京も華陀のその言葉に頷いた。
「若し治せるというのなら」
「よし、それならな」
「さあ、ダーリン頑張ってね」
「ここでもね」
「よし、行くぞ！」
華陀が身構える。その手にまた黄金の針を持つ。
そしてだった。右京のやつれた胸にその針を刺して叫ぶ。
「光になれーーーーーーーーっ！！」
その胸から黄金の光が放たれそれが辺りを包んだ。それが消えた時。
右京の顔色がだ。見る見るうちに変わっていった。血の気が戻ってきたのだ。
それを感じてだ。彼は言うのだった。
「確かにな」
「わかるな。病が消えたのが」
「うむ、よくわかる」
その通りだと言うのだった。
「病が本当に消えるとはな」
「どうやらあんたはこれからも生きないといけないらしいな」

「これからもか」
「俺はあらゆる病を治せる」
それはできると言うのだ。
「しかしだ」
「しかし？」
「北斗の神に魅入られた人間の病は無理だ」
「七つの星の脇にもう一つ星が見えてる人はね」
「無理なのよ」
怪物達も右京に対して話す。
「残念だけれどね」
「それはできないのよ」
「そうなのか」
「そうだ。だがあんたの病は治った」
言うのはそこからだった。
「それはあんたがまだ死ぬ運命になり証だ」
「そうか。私はまだ生きられるのか」
「あんたのするべきことをするんだな」
華陀は言う。
「この世界でもな」
「そしてか」
「そういうことだ。じゃあまたな」
華陀はその右京に微笑んで話した。

# 第四十四話　怪物達、北にも出るのことその十三

「また会おうな」
「さあ、皆と合流してな」
「そこからまた行きましょう」
華陀に二人が声をかけてきた。
「またすぐに新しい仲間が来るわよ」
「私達の前にね」
「そうだな。運命が導いてくれるな」
華陀も二人の言葉に微笑んで応える。
「俺達をな」
「ええ、それじゃあね」
「行きましょう」
「わかった。じゃあな」
また右京に言うのであった。
「機会があればまた会おう」
「またな。それでだが」
「ああ、何だ？」
「次に会った時にだ」
微笑んで言う右京だった。
「一杯奢らせてもらいたい」
「御礼にか」
「そうだ、それでいいだろうか」
「ははは、酒は嫌いじゃないがそれは遠慮しておこう」
「いいのか」
「医術は仁術だ。御礼を求めるものじゃない」
これが華陀の返事だった。
「だからな。それはいい」
「そう言うのか」

「そうだ。その酒はあんたが飲むといい」
そうだと言うのだった。
「そういうことでな。いいな」
「わかった。ではそうさせてもらう」
「それじゃあ今度こそ本当にな」
「また会おう」
こう挨拶を交えさせてだ。彼等は別れたのだった。そうしてであった。
華陀達も旅に入る。ここで彼が言う。
「じゃあ次は何処に行く？」
「益州に向かいましょう」
「そこにしましょう」
こう話す彼等だった。
「ここから西にね」
「それでどうかしら」
「そうだな。俺も少しな」
華陀もここで考える顔になって応えた。
「ゴオオオオオオッド！！米道の本部に戻りたいしな」
「そこになのね」
「一旦戻るのね」
「思ったよりも連中の浸透が深くなっている」
こう言うのだった。
「そのことを伝えたい」
「よし、それならね」
「そこもなのね」
「そうだ。そこにも寄ってくれるか」
「ダーリンの為ならね」
「何処でも行くわよ」
これが二人の返事だった。
「それじゃあ最初に行きましょう」

「そのゴオオオオオッド！米道にね」
「済まないな。皆もそれでいいか」
「断る理由もないな」
「そうだな」
ギースとクラウザーが答える。
「私はいい」
「私もだ」
「俺もだ」
刀馬も答えてきた。
「そうするといい」
「私もです。この国を覆わんとしている禍々しいものを」
命もだった。それを感じていたのだ。そして感じたうえでだ。こう言うのだった。
「消し去る為に行かれるのですかな」
「済まないな」
華陀は仲間達の言葉を受けて言った。
「共に来てくれて」
「これも縁だ」
ミスタービッグの言葉だ。

# 第四十四話　怪物達、北にも出るのことその十四

「気にするな」
「そういうことだな」
「では行こう」
獅子王と無限示も言う。
「その地にな」
「今からな」
「益州まで一瞬に行けるわ」
「すぐにね」
また怪物達が話す。
「それならね」
「今から行きましょう」
「よし、それならな」
こうしてまた旅をはじめる二人だった。そしてまた新しい仲間と巡り会うのだった。
そして劉備達もだ。その益州に向かっていた。
その中でだ。劉備が言うのだった。
「何か少し暑くなってきたような」
「はい、それはですね」
孔明がその劉備の言葉に答える。
「南方に来ているからです」
「それでなの」
「私達は益州でもかなり南に向かっています」
「北に行けば寒くなり南に行けば暑くなります」
鳳統も話す。
「ですから」
「そういうことね。それじゃあね」
「はい、それじゃあ」

「服とか脱いだらよくないわよね」
「脱がない方がいいですね」
孔明はすぐにそれを止めた。
「やっぱりそれは」
「そうなの」
「さもないと蚊に襲われますよ」
何故脱いだらいけないのかも話すのだった。
「ですから」
「蚊、そんなに多いの」
「はい、ですから脱がない方がいいです」
また言う孔明だった。
「さもないと大変なことになりますから」
「ううん、やっぱり蚊に刺されるのは」
劉備もそれを聞いて困った顔になる。
「遠慮したいし」
「そうですよね。ですからここは」
「わかったわ」
劉備は仕方ないといった顔で頷いた。
「じゃあ脱がないわ」
「それがいいですね」
「けれど。南蛮よね」
「はい、そこの五つの泉です」
「南蛮ってまだ遠いの？」
今度は距離のことを尋ねるのだった。
「それは。まだ遠いの？」
「っていうか益州って無闇に広いしな」
「そうなのよね」
馬超と馬岱がこんなことを言う。
「ここからでも南蛮まで結構あるだろ」
「ううん、そうかも」

「それにだ」
趙雲も話す。
「まだ益州に入ったばかりだしな」
「まだこれからなのね」
黄忠もいる。
「南蛮への道は」
「そうなります。ですから道中は何かと御気をつけ下さい」
「お水は特にです」
鳳統と孔明が話す。

# 第四十四話　怪物達、北にも出るのことその十五

「絶対にまずは沸かしてお湯にしてから」
「そうして飲まないといけませんよ」
「水か」
「そういえばいつもそうしているのだ」
関羽と張飛がここでこのことに気付いた。
「お茶を飲む為だがな」
「それはいいのだ？」
「はい、とてもいいです」
「お茶も身体にいいですし」
二人は関羽達の問いにこう答えた。
「とにかく生水は危ないですから」
「絶対にそのまま飲まないで下さいね」
「そうね。下手をすると命に関わるからね」
神楽もこのことを知っていた。
「だからそれが一番ね」
「ええ。火はあるし」
「絶対にそうしましょう」
ミナと月もだった。
「シーサーに飲ませるお水もね」
「注意してですね」
「とにかくお水なのね」
劉備も言った。
「気をつけないといけないのは」
「はい、お腹を壊すだけでは済みませんから」
「食べ物も」
それもだというのだ。
「何かにつけて気をつけて」

「そうしていきましょう」
「ううむ、食べ物はそういえばな」
「これまで美味しければいいと思っていたのだ」
関羽と張飛の言葉だ。
「だがそうではなくか」
「気をつけないと駄目だったのだ」
「特に生肉は駄目よね」
「はい、お魚はとりわけです」
「絶対に火を通して下さいね」
孔明と鳳統は神楽の問いにも返す。
「河のものが危ないです」
「虫がいますから」
「虫って」
劉備は二人の言葉にぎょっとした顔になる。色は白くなっている。
「そんなのまでいるの」
「ですから本当にです」
「危ないですから」
「わ、わかったわ」
劉備は声も少し震えていた。
「それじゃあ本当に」
「これは兵隊さん達もですね」
「そうなるわね」
二人はこのことを軍にも当てはめて考えていた。
「生水は厳禁ということで」
「絶対に沸かしてから」
「それで食べ物も火を通して」
「そうして食べないと」
「さもないと大変なことになっちゃうのね」
劉備も二人の話を聞いてわかったのだった。
「それだけで」

「戦う前に戦力を消耗してはどうにもなりませんから」
「ですから」
それでなのだった。とにかく二人が考えを及ばせている事柄は広く深かった。
そしてそんな話をしながらだった。一行はさらに進む。そうしてだった。
ある郡に向かおうとしていた。そこでもまた彼女達は出会うのであった。新たな仲間に。

第四十四話　完

２０１０・１１・１３

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその一

第四十五話　魏延、一目惚れするのこと

擁州に送られた臥龍達を待っていたのは。まさに地獄であった。

「うう、起きたらすぐに修業」

「そして飯食ったら夜まで強制労働」

「晩飯からまた寝るまで修業」

「雨の日も雪の日も」

「何だってんだよ」

かつて賊だった者達が嘆いていた。

「ここはよ」

「鬼がいるしよ」

「しかも二人な」

「まさに地獄だよ」

「どういう場所なんだよ」

「ねえ兄貴」

子分が臥龍に話す。彼等は今大雨の中働かさせられている。城壁の修復をしているのだ。

その中で土を担ぎながらだ。前にいる彼に尋ねたのである。

「ここに来てから思ってたんですけれど」

「何だ？」

「あっし等ずっとこのままですかねえ」

こう彼に言うのだった。

「ひょっとして」

「そうみたいだな」

臥龍は実に面白くなさそうに述べた。

「どうやらな」

「あの二人の考えじゃですか」

「あの姫様はわからねえよ」
臥龍は既に董卓に会っていた。彼女には特に悪いものは感じなかった。むしろ非常にいいものを感じていた。しかしなのだった。
「けれどな」
「あの二人はですね」
「キムとジョンか」
この名前が出て来た。
「あの連中は何なんだろうな」
「あの連中も別の世界から来たそうですけれど」
「時代は違うが俺達と同じ世界みたいだな」
「あっ、そうなんですか」
「どうやらな」
そうだと言うのだった。
「そうみたいだな」
「そうなんですかい。あっし等と」
「ああ、それでだ」
「それで？」
「手を休めるんじゃねえぞ」
忠告だった。実際に二人は今もっこを担いでいる。そうしながら話をしているのである。あちらこちらを動き回りながらである。
「それはいいな」
「そうでやすね。若し手を休めれば」
「地獄だからな」
だからというのだ。
「速攻で鳳凰脚だぞ」
「あれ喰らったら痛いでやすよ」
「だからだよ」
二人のところに山崎が来た。それで言ってきたのだ。
「いいな、絶対に休むなよ」
「おお、あんたか」

「ああ、新入りわかってるな」
臥龍に挨拶を返しながらまた言う山崎だった。
「その辺りはな」
「嫌でもわかるさ。初日にやられたからな」
いきなりであったというのだ。
「いきなりよ。休んでたらよ」
「鳳凰脚だったんだな」
「あの連中容赦って言葉知らねえのかよ」
「ああ、そうさ」
まさにその通りだというのだった。
「そんな言葉は一切な」
「知らねえか」
「だからやばいんだよ」
山崎はこう話す。
「あと休憩もな」
「そういえばねえな」
「朝起きて飯食って昼に飯食って」
スケジュールはそうしたものだった。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその二

「それで晩飯食って寝る前に風呂入ってまでな」
「便所以外にはだよな」
「ああ、強制労働と強制修業だ」
どっちにしろ強制だった。
「それが普通だからな」
「恐ろしい世界でやんすねぇ」
「っていうかよ」
臥龍は子分に続いて言う。
「あの二人はそれで平気なのかよ」
「そうでやすね。あっし等と同じことをしていて」
「何で平気なんだ？」
「監督までやってるのに」
「あの二人は疲れを知らないんだよ」
そうだと話す山崎だった。
「そういうことだよ」
「迷惑な話だな」
「全くでやんす」
「だからだ。もう楽しみとかは諦めろ」
非常に残酷な言葉だった。
「いいな、希望も何もかもな」
「じゃあ生きているだけか」
「酷い話でやんすね」
「俺はもうそんなのは忘れたぜ」
楽しみという言葉をというのだ。
「チャンもチョイもな」
「あの二人もか」
「そうだよ、忘れたぜ」

まさにそうだというのである。
「わかったな。そういうことだからな」
「ふう、早く元の世界に戻りたいぜ」
「全くでやんすよ」
「こらっ、そこ！」
「さぼっていてはいけませんよ」
キムとジョンから怒鳴り声が来た。
「手を休めるな！」
「それは絶対にいけません」
「あの二人千里眼だからな」
山崎はこんなことも話した。
「何処にいても誰がさぼってるかわかるからな」
「本当に迷惑な奴等だな」
「全くでやんす」
とにかく彼等もまた強制労働に従事するのだった。それはもう逃れられるものではなかった。まさに地獄と言っていいものだった。
そんな地獄を見てだ。張遼は華雄に話した。二人で外で飲みながらだ。
「なあ、華雄ちゃん」
「何だ」
「キムとジョンやり過ぎやろ」
こう彼女に言うのだった。
「あれは」
「私もそう思うがな」
「ああ、やっぱりそうか」
「確かに問題のある連中ばかりだ」
山賊や盗賊、ゴロツキ達ばかりだ。それは言うまでもなかった。
「だがな」
「朝早く起きて夜遅う寝るまでやさかいな」
「始終労働と修業だからな」

「あれはないやろ」
こう言うのであった。
「やっぱなあ。うちやったら三日で逃げるで」
「実際に脱走者も多いしな」
「全員捕まっとるけれどな」
千里眼は伊達ではなかった。
「それで折檻の嵐やさかいな、脱走者の末路は」
「私もあれは勘弁して欲しい」
華雄もだった。
「絶対にな」
「そうやな。あの二人止められるか？」
「それは無理だな」
華雄はこのことは断言した。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその三

「絶対にな」
「そうやな。人が言うてもなあ」
「聞く連中ではないな」
「キムもジョンもな」
「それは絶対にない」
また断言する華雄だった。
「何があってもだ」
「そうやなあ。月ちゃんも実はな」
「困っておられるしかん」
「あの人は優しいさかい」
そこが問題だった。董卓はあまりにも心優しい少女なのだ。しかし二人はというとだ。残念ながらまた違った『優しさ』の持ち主なのだ。
「そやからな」
「あそこまでのことはな」
「正直することはないと思うてるんや」
「詠もだしな」
彼女もだというのだ。
「内政は助かっているがそれでもな」
「やり過ぎやさかいな」
とにかくこれが問題だった。
「董白ちゃんもやしな。後は」
「あいつか」
「ねねは賛成しとるからな」
これが問題なのだった。
「しっかりとな」
「あいつはそこが問題だな」

「ほんまやな。恋以外にはきついわ」
「逆に言えば恋には優しい」
「何処までもな」
それが陳宮なのだった。あくまで呂布に対して一途なのだ。その一途さが彼女にとって長所であり短所であるというのである。
「悪党には容赦するながあの娘の持論やからな」
「ううむ、それはその通りだが」
「それでもあれはな」
「やり過ぎや」
陳宮の場合はそうなのだった。
「困った話やで」
「全くだ。それでだが」
「ああ。それで？」
「最近この擁州もよおなったけれどな」
内政面の話だった。
「何か近頃な」
「妙な輩の噂も聞くからな」
「青い服の金髪の男な」
「知っているか？そういう奴は」
「いや、知らん」
張遼は華雄の言葉に首を横に振って応えた。
「けれどそれでもな」
「怪しいものは感じるな」
「他にも目を髪の毛で隠した派手な服の女とかな」
「何処からか出て来て何処かに消える」
「どういう奴等やろな」
「キム達と同じか？」
華雄はここでこう言った。
「他の世界から来た者達か」
「多分そやろ」

張遼はそれは間違いないと見ていた。
「服装の話も聞いたらな」
「そうだな。あちらの世界の服だな」
「けれど。キム達とは何かちゃうな」
「あちらの世界の人間も色々な奴がいるからな」
「ええ奴もおれば悪い奴もおる」
「よくわからない奴もな」
こうも言う華雄だった。
「いるからな」
「その中には洒落にならん奴もおる」
「そういうことだな。それではな」
「それでは?」
「飲むか」
微笑んで、であった。華雄はこう張遼に言ってきた。見れば杯を持つその手は止まっていた。それは二人共もであった。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその四

「あらためてな」
「そやな。つまみは」
「これでいい」
干し肉を刻んだものとそれと木の実だった。
「充分だ」
「酒もこれでええな」
「こうした酒こそ美味い」
「質素なんがか」
「二人ならそれで充分ではないのか？」
微笑んで言う華雄だった。
「宴なぞしなくともな」
「まあそやな。そやったら」
「飲みなおすぞ」
「ああ、それやったらな」
張遼は笑顔で応えた。そうしてなのだった。
二人はのどかな雰囲気の中で飲んでいく。それが今の彼女達だった。
そしてだ。劉備達はだ。益州の中を進んでいた。
ここでだ。馬岱が言うのだった。
「お腹空いたね」
「うっ、確かにそうなのだ」
張飛が彼女の言葉に気付いたように頷く。
「もうすぐお昼なのだ」
「そろそろお弁当食べない？」
馬岱はここでこう話した。
「もうね」
「そうですね。それじゃあ」

「もう少し行ったら」
孔明と鳳統も話す。
「何処かに腰を下ろして」
「それでお弁当にしましょう」
「そういえば弁当もな」
趙雲がふと気付いたようにして言ってきた。
「最近あまり食べていなかったな」
「店に入ったり狩りとかで手に入れたりだったからな」
馬超も話す。
「弁当ってなかったよな」
「しかしだ。弁当屋というのものだ」
関羽の言葉だ。
「あれは便利なものだな」
「そうね。お店の外でも食べられるから」
黄忠も話す。
「適当な場所でね」
「ええ。ただ」
ここで言ったのは神楽だった。
「ここは中国だけれど」
「それがどうかしたんですか？」
「中国じゃ冷えた御飯は食べないのじゃなかったかしら」
こう劉備にも言うのである。
「それでも平気なのかしら」
「あれっ、何かおかしいですか？」
劉備はいぶかしむ顔になった神楽にきょとんとした顔で返す。
「冷えた御飯を食べるのって」
「こっちの世界はいいのかしら」
「そうなんでしょうか」
ここでミナと月も話す。
「食べ物に関する習慣が私達の世界とは違う」

「そういうことでしょうか」
「少なくとも私達は平気ですよ」
こう話す劉備だった。
「冷えた御飯でも」
「ううん、そうしたところは違うのね」
神楽は腕を組んで言った。
「何かご都合的ではあるけれど」
「話を聞けばな」
「そうなのだ」
ここで関羽と張飛も話す。
「私達の世界の料理は神楽殿のいる世界の私達の時代の料理よりも」
「ずっと進んでいるみたいなのだ」
「ううむ、それもあるしな」
「冷えた御飯も美味しいのだ」
また冷えた御飯の話にもなる。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその五

「それが食べられないのか」
「それは残念なのだ」
「ただ。変わった食べ方があるんですね」
劉備は神楽達に話してきた。
「お茶漬けですか」
「あれね」
「あれってあっさりしていて凄く美味しいですよね」
こう神楽に話すのだった。
「冷えた御飯に漬物とか乗せてそこにあったかいお茶をかけるだけなのに」
「そうでしょ。お湯でもいいでしょ」
「はい、本当に」
「あれはね。中々いいものなのよ」
神楽は微笑みながら劉備に話す。
「もう簡単に済ませたい時とかね」
「そうですよね、あれはかなり」
「じゃあ今はね」
「はい、お弁当ですね」
「それですね」
孔明と鳳統がここでまた言ってきた。
「それでしたら」
「あそこはどうでしょうか」
丁度ここで一行の目の前に岩場が見えてきた。それを指し示してなのだった。
「あそこで皆で座って」
「それでお弁当にしましょう」
「じゃあ私トンカツ弁当ね」

「鈴々はドカベンにするのだ」
馬岱と張飛が目を輝かせて話す。
「肉餅弁当も捨て難いけれど」
「まずは量なのだ」
「ではだ」
「ああ、あたし達もな」
趙雲はクールに、馬超は朗らかに話す。
「メンマ弁当を食べるとするか」
「馬の煮付け弁当をな」
「本当に食文化はかなり進んでるわね」
神楽はこのことをあらためて認識した。
「この世界のこの国は」
「そうみたいね」
黄忠も彼女の言葉に頷く。
「今まで自覚していなかったけれどね」
「まあとにかく私もね」
神楽もだというのだ。自分でだ。
「お弁当にさせてもらうわ」
「そうだな。それではな」
「皆で食べましょう」
関羽と劉備も笑顔で言う。そうしてだった。
一行は岩場に腰を下ろしそこで皆で弁当を開き食べる。それが終わってだ。
少し休息を取った後でまた歩きはじめた。そこでだった。
馬岱がここでミナと月に言うのだった。
「あのですね」
「ええ」
「どうしたんですか？」
「さっきのおやつですけれど」
彼女が今言うのはこのことだった。

「お団子どうでした？」
「ああ、あれね」
「美味しかったですよ」
二人は笑顔で馬岱の問いに答えた。
「あっさりとした甘さでね」
「よかったですよ」
「そうですか。それじゃあ」
馬岱もそれを聞いてだった。懐から団子を出したのだった。
そしてそれを食べようとする。しかしここで、であった。
「！？」
「殺気！？」
「これって」
劉備に孔明、鳳統以外の面々が一斉に身構えた。当然馬岱もだ。
右手に槍を構え左手に団子を持ったままで、である。
そうしてだ。彼女はその姿勢で言うのだった。
「何か凄い殺気だけれど」
「これはな」
「相当な奴が来たみたいだな」
趙雲と馬超も言う。彼女達は戦えない劉備達を囲んで円陣を組んで警戒している。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその六

そしてそこに、であった。
「ひえええええええええーーーーーーーーーっ！！」
「んっ、あれは」
「何だ！？」
「鳥！？いや違う」
「人だ！」
あの巨大な太った男が飛んで来てだった。
一行の方に来る。それを見てだ。
「危ない！」
「逃げろ！」
皆一斉にその場から飛び散る。そこに男が落ちたのだ。
土埃があがる。だがそれが消えた時にだ。
男は上半身を地面に突き刺してだ。足だけを出していたのだった。
「こいつまた見たのだ」
「そうね」
ミナが張飛の言葉に頷く。
「あちこちにいるわね」
「一体どういう奴なのだ？」
「この男がいるということは」
黄忠もその男を見て言う。
「後の二人もいるわね」
「あれではないのか？」
関羽が上を指差した。するとそこからだった。
残る二人も飛んで来てだ。墜落するのだった。
一行はそれもかわした。そして再び足が地面から出ることになった。
それを見てだ。月が言う。

「この人達はどうしてここに」
「そうですよね。どうしてでしょうか」
劉備も首を傾げながらだった。
「空から降って来るなんて」
「普通ないですよね」
「だから普通ではないな」
関羽がいぶかしながら述べた。
「これはな」
「そうですよね・・・・・・あっ」
ここで馬岱は足元を見て驚いたような声をあげた。
「しまった！」
「どうした？蒲公英」
「お、お団子が」
泣きそうな声で従姉に話す。
「落としちゃったのよ」
「ああ、そりゃまずったな」
「うう、折角今から食べようと思ったのに」
「残念なことだな。しかし」
趙雲も言う。
「今一番考えるべきことはだ」
「はい、この人達が飛んできたことです」
「それです」
軍師二人もこの考えだった。
「本当に普通はないですから」
「ですから」
「これは何故起こったか」
「それが問題なのですけれど」
「それは簡単なのだ」
ここで言うのは張飛だった。
「この連中は誰かにぶっ飛ばされたのだ」

「ううん、そうですね」
「多分それです」
二人の軍師もこう言うのだった。
「この人達と同じ顔の人達っていつも悪いことしてますから」
「それでまたなんでしょうね」
「それしかないのだ」
また言う張飛だった。
「だから近くにぶっ飛ばした奴がいるのだ」
「じゃあそいつね」
馬岱は張飛の話を最後まで聞いて言った。
「そいつが私のお団子を落としたのね」
「言うのはそれかよ」
馬超が従妹に突っ込みを入れる。
「何か器が小せえな」
「食べ物の恨みは恐ろしいのよ」
こう従姉に言い返す従妹だった。
「だからよ」
「まあそれはそうだけれどな」
馬超もそのことは認めた。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその七

「しかし。それじゃあな」
「いや、蒲公英に同意する」
今度は趙雲が話す。
「私とてメンマをそうされたらだ」
「切れるもんな、毎度毎度」
「そうだ、だからこの場合は蒲公英が正しい」
そうだというのである。
「私はそう思うがな」
「ううん、やっぱりそうなるか？」
「それでだ。問題はだ」
「そうよ。近くにいるのは間違いないわよね」
馬岱は孔明と鳳統に対して問うた。目の光が強い。
「そうよね、やっぱり」
「こんな大きい人達そんなに吹き飛ばせませんから」
「それを考えましたら」
二人は常識から馬岱に話した。
「やっぱり」
「そうなります」
「わかったわ。じゃあ何処にいるのよ」
二人の言葉を受けてすぐに周りを見回す。
「やい！私のお団子を取った奴は！」
「団子なぞ知るか！」
ここでだ。中性的な、それでいてすぐに女のものとわかる声が返ってきた。
「私は団子なぞ取ってはいないぞ！」
「あら、貴女は」
黄忠が彼女の姿を見た。黒いショートヘアでその前髪の一部を白

くさせている精悍で何処か男に近いものを思わせる顔立ちをしている。狼を思わせるものである。目の光はルビーの色だ。

黒い袖のない上着は襟を立てており白い下の服が露わになっている。胸が実に目立つ。下は半ズボンでそこの上に前が開いたスカートを着けている。その手には巨大な金棒がある。

その金棒を見てだ。ミナが呟いた。

「鬼ね」

「ええ、そうね」

「確かにそれですね」

神楽と月も彼女の言葉に同意して頷く。

「あの金棒はね」

「まさに鬼のものですね」

「あれで三人を吹き飛ばしたのだな」

関羽がその彼女と金棒を見て目を鋭くさせる。

「力はかなりのものだな」

「それだけじゃないわね」

黄忠もその目を鋭くさせている。

「身体つきを見ると」

「そうだな、身のこなしもかなりのものだ」

関羽はまた言った。

「あの女、かなりの者だな」

「ええ、間違いないわ」

「あんたね！」

馬岱が女に対して問うた。

「あんたが私のお団子を」

「何だ、それは」

しかしだった。女はいぶかしむ顔になって馬岱に問い返す。

「団子？私は団子なんか取っていないぞ」

「さっき私が食べようとしていた団子よ」

「御前とは今会ったばかりだぞ」

「それでもよ。あの三人よ」
「ああ、あの連中か」
女はいつもの三人のことを言われると納得した顔になって頷いたのだった。
「あいつ等か」
「そうよ、あの連中ぶっ飛ばしたじゃない」
「いつも喧嘩を売ってくるからやり返しただけだ」
そうだというのであった。
「それだけだ。いつものことだ」
「そのいつものことでね」
「団子か」
「そうよ、落としたのよ」
その団子を指差す。みたらしで三個串に連なって刺さっている。
それを指差して言う馬岱だった。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその八

「あんたのせいでね」
「だからそんなこと私が知るか」
「あんたのせいよ」
まだ言う馬岱だった。
「あんたがね。あの連中を考えなしにぶっ飛ばしたから」
「だから何度も言うがな」
「いいえ、あんたのせいよ」
「私が知るものか」
「あんたのせいよ」
「知るかっ」
「まだ否定するのね」
いい加減頭にきてだ。馬岱はその手の槍を構えた。
するとだ。女も構えるのだった。
「ううむ、下らぬことで争うものだな」
「そうね」
神楽が関羽のその言葉に頷く。
「これはね」
「しかし。こうなったらだ」
関羽は呆れながらさらに言う。
「どちらも引かないだろう」
「徹底的にってことね」
「やらせるしかない」
「あの、それって」
しかしここでだ。劉備が困った顔で話に加わってきた。
「何の解決にもならないんじゃ」
「それはそうなのだが」
「今は仕方ないわ」

その劉備にこう返す二人だった。
「姉者の気持ちもわかるがだ」
「ここは蒲公英ちゃんにやらせましょう」
「そんなのよくないです」
それでもまだ戦いを避けようとする劉備だった。それでだ。
女に対してだ。こう言うのであった。
「あのですね」
「んっ！？」
「ここは収めてくれないでしょうか」
こう女に対して言う。
「どうか。ここは」
「えっ、貴女は」
「私は？」
「はい、貴女は」
戸惑った声になっていた。
「何と・・・・・・」
「あの、私に何か」
「いえ、貴女はそれで」
「はい、喧嘩を止めて下さい」
女に対して切実に話す。
「どうかここは」
「は、はい」
劉備に言われるとだ。女は急に大人しくなった。
それで金棒を収めてだ。あらためて言うのであった。
「それでは」
「それじゃあ馬岱ちゃんも」
「ああ、蒲公英でいいわよ」
馬岱は自分の真名を呼ぶことをよしとしたのだった。
「それはね」
「あっ、そうなの」

「私も桃香さんって呼びたいし」
こう劉備に言うのあった。
「だからね」
「それでなのね」
「そう、だから蒲公英って呼んでね」
「ええ。じゃあ蒲公英ちゃん」
実際に真名で呼んでみた。
「ここはね」
「仕方ないわね。桃香さんが言うのならね」
馬岱もここで劉備に応えた。
「それじゃあね」
「ええ。それじゃあここはね」
「貴女がそう仰るのなら」
また応える女だった。馬岱より彼女の方がだった。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその九

「それでは私は」
「あれっ、あの人って」
「うん、何か」
最初に気付いたのは孔明と鳳統だった。
「劉備さんが言われると」
「急に態度が変わって」
「何かあるのだ？」
張飛も薄々気付いた。
「これは」
「何ていうのでしょうか。劉備さんを見る目が」
「初対面の相手とは思えないです」
「いやいや、あれは初対面の相手のものだぞ」
だが、だった。趙雲は楽しげに話すのだった。
「明らかにな」
「どういうことだ、それは」
「意味がわからないんだけれどよ」
関羽と馬超は首を傾げさせている。
「初対面なのに熱い眼差しだと」
「それっておかしいだろ」
「あら、そうなのね」
黄忠はわかったらしく楽しげに微笑む。
「あの娘ったら劉備さんに」
「あのですね」
劉備はここで黄忠の言葉に応えて言った。
「皆さんこれからは私のことを」
「劉備さんのことを？」
「真名で呼んで下さい。私もそうさせてもらいますから」

「それでいいのね」
「はい。愛紗ちゃん達と姉妹にもなりましたし」
それもあるというのである。
「ですから」
「わかったわ。それじゃあね」
黄忠が穏やかに微笑んで頷いたのがであった。一行も劉備とお互いに真名で呼び合うことになったのだった。
そしてであった。とりあえず馬岱と女の喧嘩は起こらずに済んだ。しかしであった。
一行はとりあえず茶屋に入った。それで団子を食べるのだった。
「ふん」
「ふん」
女と馬岱は同じ席に着いてもだった。互いに顔を背け合う。馬岱のその手には団子がある。しかも五本も六本もあった。
それをまとめて食べながらだ。彼女は言うのだった。
「まあさ」
「何だ？」
女は顔を背けさせたまま馬岱に応える。
「一体」
「お団子弁償してくれたのはいいわ」
「そうか」
「それは許してあげる」
こう言う馬岱だった。彼女も同じだ。
「ただね」
「今度は何だ」
「私あんたのこと嫌いだから」
団子を食べながらの言葉である。
「それは言っておくから」
「安心しろ、私もだ」
「そうなの」

「そうだ、大嫌いだ」
「私もあんたのこと大嫌いよ」
これがお互いの言葉だった。そしてだ。
女は馬岱から顔を背けさせたままだ。自分の隣にいる劉備を見る。
するとだった。
熱い目になってだ。彼女に問うのであった。
「あのですね」
「はい？」
「貴女のお名前は」
いささかおどおどとした調子で尋ねる。
「何とおっしゃるのですか」
「はい、劉備ですけれど」
劉備は女に顔を向けて答える。
「字は玄徳といいます」
「そうですか。劉備殿ですね」
「はい、そうです」
「私の名前は魏延といいます」
女の方も名乗ったのだった。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその十

「字は文長といいます」
「そうですか。魏延さんですか」
「はい」
熱い声で劉備に応える魏延だった。
「宜しく御願いします」
「はい。こちらこそ宜しく御願いします」
「それで劉備殿は」
魏延は劉備に対してさらに問う。その熱い声でだ。
「どうしてここに」
「はい、実はですね」
劉備はその事情を細かく話す。するとだった。
魏延はその身体を乗り出してだ。彼女にさらに言ってきた。
「あの、それではです」
「それでは？」
「どうか南蛮まで私を。いえ」
「いえ？」
「これからもずっと私を」
「魏延さんをですか」
「はい、どうか同行させて下さい」
こう申し出るのだった。
「御願いできますか」
「あの、魏延さんはまさか」
「はい、今は浪人です」
そうだというのである。
「少し前まで劉表殿のところにいたのですが」
「ああ、あの人ですか」
「袁術さんの前の牧だった」

孔明と鳳統がここで話す。
「もうお亡くなりになられましたけれど」
「それで袁術さんが来られて」
「袁術殿は何分非常に癖のある方なので」
つまり合わないというのである。
「ですから去りです」
「去りですか」
「はい、それで益州で武者修行をしていました」
そうだったというのである。それが魏延のこれまでのことだった。
「しかしここで」
「ここで？」
「貴女に御会いできました」
また熱い顔で語る魏延だった。
「劉備殿に」
「むっ、これは」
「ああ、間違いないな」
ここで関羽と馬超もようやくわかったのだった。
「この者、姉者にだ」
「ベタ惚れだな」
「そういう趣味だったのだ」
張飛も納得した顔になる。
「ううん、そういえばかなり凄い惚れ方なのだ」
「そうですよね。あの人って」
「もう桃香さんに」
二人の軍師もここで話していく。
「惚れ込んでますよね」
「何もかもが」
「あの、それでなのです」
魏延は一直線に劉備に話していく。
やがてその両手を取ってだ。さらに言うのだった。

「いいでしょうか」
「あっ、はい」
劉備はむべもなく頷く。
「私達も旅は多い方がいいですし」
「おやおや、桃香殿はこう仰っているがだ」
趙雲はそんな魏延を見て楽しそうに笑っている。
「果たしてどうなるかな」
「反対か？星は」
「いや、大賛成だ」
こう関羽にも返す。
「是非来てもらいたい」
「是非か」
「面白いことになった」
またこう言うのであった。
「実にな」
「悪趣味ではないか？そういう楽しみ方は」
「そうか？」
「そうだ。どうもな」
「けれどまあそうだよな」
馬超も己のことを話す。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその十一

「仲間が多い方がいいのは確かだしな」
「そうなのだ」
張飛も馬超の言葉に頷く。
「やっぱり多い方がいいのだ」
「そうだよな。それじゃあな」
「鈴々は賛成なのだ」
「私もね」
神楽も微笑んで言う。
「それでいいわ」
「他の者はどうだ？」
趙雲は他の面々に顔を向けて尋ねた。
「この魏延、仲間に加えていいか」
「ええ、いいわ」
「是非ね」
「来て下さい」
まずは黄忠にミナ、月が頷く。そして孔明と鳳統もだった。
「私もです」
「私も」
「さて、それではだ」
趙雲は最後の一人に顔を向けて問うた。
「御主はどうなのだ？」
「私？」
「そうだ、御主だ」
彼女に顔を向けて問う。
「それでどうなのだ？」
「皆が賛成するから仕方ないじゃない」
一応これを理由にするのだった。

「そうでしょ？結局は」
「よし、話は決まったな」
馬岱の言葉を受けてだ。趙雲は微笑んで話すのだった。
「それではだ。桃香殿」
「はい」
「魏延と共にな」
「一緒にですね」
「そうだ。それでだ」
趙雲は今度は魏延に顔を向けて問うた。
「魏延よ」
「はい」
「これからも宜しくな」
「う、うむ」
その言葉に応えて頷く魏延だった。これで彼女は劉備達と共に旅をすることになった。
そうして旅に入る。ここでだった。
その魏延がだ。一行に話すのだった。
「ここから先には」
「先には？」
「私の知己の方がおられます」
こう話すのだった。特に劉備を見ながら。
「そこに行かれますか」
「あっ、そういえば」
黄忠も魏延の言葉に何かを思い出したようであった。ふとしか感じで言うのだった。
「もう少ししたら巴蜀だけれど」
「そこに何かあるんですか？」
「あそこの太守は厳顔だったわね」
この名前を出すのだった。
「彼女がいたわね」

「はい、その厳顔殿です」
魏延も黄忠の言葉に応えて話す。
「あの方がおられます」
「懐かしいわね。どうしているかしら」
「元気です。ただ」
「ただ？」
「近々太守を辞められるそうです」
魏延はこう黄忠に話すのだった。
「何やら思うところがあるらしく」
「それでなの」
「郡は然るべき者に任せて」
それでだとも話すのだった。
「そうしてです」
「成程ね。それじゃあね」
「あの方も私達の仲間に加えてはどうでしょうか」
魏延はまた一行に話した。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその十二

「非常に腕が立ち人望もある方ですから」
「そんなに立派な方なんですか」
「ええ、そうよ」
黄忠が劉備に答える。
「丁度浪人になるし声をかけてもね」
「いいんですね」
「相手の立場にはこだわらないし」6
そういう人物であるとも話された。
「だからね。いいと思うわ」
「わかりました。それじゃあ」
そこまで聞いてだった。劉備はあらためて頷いた。
こうして一行はそのまま巴蜀に向かうことになった。その中でだった。
魏延は馬岱と隣同士になる。するとすぐにだった。
「ふんっ」
「ふんっ」
顔を背け合う。お互いにだった。
「何故御前と一緒なんだ」
「それはこっちの台詞よ」
「それだけが不愉快だ」
「そうね。それは同意するわ」
「ううむ、この二人は」
「どうしようもねえな」
関羽と馬超はそんな彼等を見て苦笑いになっていた。
「こういうのを言うのだろうな」
「犬猿の仲ってな」
「ほう、間違えなかったな」

趙雲がここで馬超に突っ込みを入れた。
「犬猿の仲と言ったな」
「そうだけれどよ。おかしいか？」
「御主は何かと言い間違えるからな」
「あたしだって勉強はするさ」
それはだというのだった。
「それはな。鈴々と違ってな」
「どうしてそこで鈴々なのだ」
「いや、あたしと頭は似たものだからな」
「確かに頭はよくないかも知れないのだ」
自分でもいささか認めるところではあった。
「しかしそれでもなのだ」
「それでも？どうしたんだよ」
「腕は立つのだ」
それはだというのだった。
「そっちでは翠に負けないのだ」
「いいや、あたしの方が強いのだ」
「鈴々の方が強いのだ」
「あたしだっての」
お互いに言いはじめた。ここでも不毛なやり取りになる。
しかしだった。馬超は切り札を出したのだった。
「これだけは負けないぞ」
「何がなのだ？」
「胸だよ、胸」
自分の胸を左手の親指で指し示して話す。
「それは負けないからな」
「うっ、それはなのだ」
「見ろ、この胸」
怯む張飛に指し示してみせる。その胸は上下に揺れてさえいる。
身体を動かせばそれだけで揺れるまでの胸だったのだ。

「どうだよ」
「うう、そこでそれを出すのだ」
「幾らでも出すぞ。どうだよ」
「いいや、それでもなのだ」
「それでも。何かあるのかよ」
「志では負けないのだ」
今度言うのはこのことだった。
「鈴々の志は。誰にも負けない位大きいのだ」
「大きいっていうんだな」
「そうだ、大きいのだ」
今度は張飛が胸を張って言い切る。
「それは胸を張って言えるのだ」
「あたしだってな」
「翠はどういった志なのだ」
「決まってるだろ、天下に平和を取り戻すんだよ」
それを言うのであった。
「それしかないだろ、やっぱり」
「それは同じなのだ」
「そうだな。それは同じだな」
「だからこれからもなのだ」
「どうするんだよ」
「たっぷりと食べるのだ」
そうするというのである。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその十三

「あの許緒に負けない位食べるのだ」
「あいつは凄かったな」
それは確かにだと。頷いて応える馬超だった。
「何処まで食うのかって言う位だったな」
「全くなのだ。今度会ったら絶対に勝つのだ」
「ああ、絶対に勝とうぜ」
「そうするのだ」
何故か話の展開はそちらになった。だが志があるのは確かだった。
とにかくそんなことを話しながら先に進んでいく。そしてその許昌ではだ。
崇雷がだ。許緒に対して尋ねていた。彼女の前には巨大な丼がありそこにラーメンやチャーシューや葱がこれでもかと入っていた。
彼女はそれを満足した顔で食べている。その彼女に問うていた。
「どうだ？美味いか？」
「うん、美味しいよ」
笑顔で答える彼女だった。箸がひっきりなしに動いている。
「とてもね」
「量はどうだ？」
「もう一杯あるかな」
「ああ、あるぞ」
それは大丈夫だというのだった。
「安心しろ」
「そう。じゃあもう一杯ね」
「食べたらすぐに出すからな」
「うん。崇雷ってそれにしても」
「それにしても。何だ？」
「料理上手いんだね」

彼女が言うのはこのことだった。
「技だけじゃなくて」
「料理には自信がある」
実際にそうだと話す彼だった。
「将来は店を持つのが夢だ」
「うん、崇雷だったら大丈夫だよ」
「まずは屋台からだな」
「そこからなんだ」
「弟と二人でやるつもりだ」
「崇秀とだね」
「それでいいな」
見れば隣にその彼がいた。そうして話を振るのだった。
「二人でな」
「わかってるよ、兄さん」
崇秀も微笑んで応える。
「それじゃあね」
「四川料理をメインでいくか」
崇秀の好みを考えての言葉だった。
「そうするか」
「いや、むしろ」
「むしろか」
「広東料理の方がいいかな」
それがいいというのである。
「むしろね」
「そちらか」
「広東料理の方が人気があるしね」
それでだというのである。実際に彼等の生きている時代の中国では広東料理の方が人気がある。それでこう話をするのだった。
「だからそれにしよう」
「そうか、わかった」

崇雷は弟の言葉に頷いた。
「ならそうするか」
「うん。ところで兄さん」
今度は弟の方から兄に問うた。
「今のラーメンだけれど」
「これか」
「うん、そのラーメンはスープは何かな」
「トリガラだ」
それだというのである。
「それで味付けは醤油だ」
「広東じゃないね」
「オーソドックスなものにした」
そうしたラーメンだというのであった。それでだ。
許緒にだ。あらためて問うのだった。
「それでいいな」
「美味しかったら何でもいいよ」
これが彼女の返答だった。
「それでね」
「広東でも四川でもいいんだな」
「いいよ。美味しかったらね」
笑顔でまた言うのであった。
「それでいいよ。それでね」
「それでか」
「もう一杯ね」
ここでだった。全て食べ終えたのだった。スープまで全てだ。

## 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその十四

「おかわり頂戴」
「よし、これだ」
まさにすぐだった。彼女の前にもう一つ巨大な丼を出したのだった。
「ラーメンはかえたぞ」
「今度は何ラーメンなの？」
「豚骨ラーメンだ」
見ればだ。スープが白かった。さっきのラーメンのスープは黒っぽく透明感のあるものだったが今度は違っていたのである。
「これでどうだ」
「うわあ、こっちも美味しそうだね」
「さあ、食え」
崇雷はにやりと笑って言った。
「これもな」
「うん、じゃあ早速ね」
こう話してだった。許緒はその豚骨ラーメンも食べはじめるのだった。その中であることに気付いた。
ラーメンの中にだ。あるものが入っていたのである。
「あっ、これって」
「紅生姜だがな」
「それも入れたんだ」
「豚骨ラーメンにはそれだからな」
「これって中国じゃなくて日本の薬味だよね」
「実際に日本風のラーメンだがな」
「さっきのは中国ので？」
こう崇雷に対して言う。
「それで今度はこれなんだ」

「ああ、日本のラーメンだ」
また話す彼だった。
「そっちも食べてみるといい」
「うん、じゃあね」
実際に食べてみる。その感想は。
「こっちのラーメンも美味しいね」
「そうだろうな。美味いように作った」
自信に満ちた言葉だった。
「少なくともまずい料理を作るつもりはない」
「まずい料理はなんだ」
「時々そういう料理しか作れない奴もいるがな」
「うん、夏蘭さんのお料理って凄いからね」
「あいつはそもそも戦い以外にできるのか？」
いぶかしむ顔で言う崇雷だった。
「できないだろ」
「ううん、からくり作るのは上手だけれど」
「ああ、あれですね」
崇秀が今の許緒の言葉に顔を向けて言った。
「あのからくり曹操さんですね」
「手先は器用なんだよ」
「意外ですね」
崇秀はふと毒のある微笑みを見せた。
「あの人に器用さが備わっているとは」
「待て待て待て！」
ここでだった。本人が出て来た。
「崇秀！今何を言った！」
「あっ、おられたのですか」
「何か私の話をしているような気がしてな」
腕を組んでこう話す彼女だった。
「それで来たのだが」

「耳はいいのですね」
「そうだ。私の身体は万全だ」
「身体はいいのですが」
「だから何が言いたいのだ」
夏侯惇はむっとした顔で崇秀に問い返す。
「引っ掛かる物言いだがな」
「そうでしょうか」
「私は確かに智略は苦手だ」
それは自分でもわかっていることだった。
「しかしだ」
「しかし？」
「それでも華琳様を想う気持ちは誰にも負けない」
「いやいや、姉者。私もいるぞ」
今度は夏侯淵が出て来た。
「勝てないにしても負けはしないぞ」
「むっ、そうだったな」
「そうだ。忘れてもらっては困る」
「済まない、それに夏瞬や冬瞬もいたな」
「我等の想う気持ちの強さは同じだぞ」
「そうだったな。済まない」
それは謝る彼女だった。しかしだった。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその十五

そのうえでだ。また崇秀に話すのだった。
「崇秀、御主はどうもだ」
「私が何か」
「何かと毒を見せるな」
「悪気はありませんよ」
「いや、あるだろう」
夏侯惇の言う通りだった。
「それもしっかりとな」
「そう思われますか」
「大人しそうな顔をしてな」
こうも言う夏侯惇だった。
「全く。油断も隙もない」
「そうだな。崇秀の悪いところだ」
夏侯淵は彼にこう告げた。
「そこはだ」
「気をつけてはいます」
「そうならいいがな。しかし」
ここでまた言う夏侯淵だった。今度はだ。
「姉者もな」
「私もか」
「少しは料理を身に着けるのもいいかも知れないな」
こう姉に話すのだった。
「そう思うがな」
「料理か」
「それはどうだ？」
あらためて姉に問う。
「料理も少しはだ」

「ううむ、どうもな」
「どうもか」
「私はそういうのは苦手なのだ」
夏侯惇はその顔に珍しく困惑した顔を見せていた。
「女らしいことはな。昔からな」
「いや、料理はあれだぞ」
崇雷の言葉だ。
「経験だ」
「経験だというのか」
「そうだ、経験が大事だぞ」
そうだというのである。
「とにかく何でも何度も作ることだ」
「そうすればいいのか」
「ああ。よかったら何か作ってみるか？」
「ううむ、最初は何から作るか」
「いや、待て」
夏侯淵はすぐに姉を止めてきた。
「考えてみればそれは危険だ」
「危険だというのか？」
「私も一緒にいよう」
そしてこう言うのだった。
「私もだ。一緒に料理をしよう」
「秋蘭もか」
「そうだ、そうする」
切実な言葉であった。
「それでいいか」
「俺はいい」
崇雷に反対する理由はなかった。だからいいとしたのだった。
「それはな」
「そうか。それならな」

「では三人でだな」
「では私はです」
笑いながら話す崇秀だった。
「兄さんと秋蘭さんのお料理を待たせてもらいます」
「おい、私ではないのか」
「それは遠慮します」
今度の顔は笑ってはいなかった。
「絶対にです」
「何故だ」
「食べたら死ぬからです」
だからだというのであった。
「ですからそれは」
「失礼な奴だな、本当に」
「いや、それは当然だろう」
また言う妹だった。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその十六

「姉者、今まで料理をしたことはあるか？」
「いや、ないが」
「そうだ。だからだ」
「華琳様のお料理は食べたことがある」
話がかなりずれてしまってきていた。
「それでは駄目か」
「それとこれとは話が別ではないのか？」
夏侯淵はいぶかしむ目で姉に返した。
「食べるのと料理はだ」
「全然違うぞ」
崇雷も言う。
「全くな」
「そうなのか？同じではないのか？」
「いや、違うからな」
「姉者、それはわかってくれ」
「全くです」
三人で攻撃を浴びせるのだった。
「まあとにかくだ」
「姉者、一緒に作ろう」
「待ってますので」
こうしてだった。とりあえず三人で料理をすることになった。そしてであった。
崇秀はだ。豚骨ラーメンを食べ終えた許緒に対して問うのであった。彼女の隣に座ってだ。
「まだ食べられますね」
「うん、いけるよ」
笑顔で応える許緒だった。

「充分ね」
「そうですか。では私もです」
「一緒に待つのね」
「そうさせてもらいます」
「春蘭様のお料理かあ」
「召し上がられたことはありませんね」
「ないよ。さっき春蘭様も仰ってたけれど」
こう正直に話す彼女だった。
「全然ね。ないよ」
「はじめてのお料理ですか」
「壮絶らしいけれど」
「ですから。夏侯惇さんのお料理はです」
どうかというとなのだった。
「召し上がらないということで」
「そうするんだね」
「まだ死にたくはないですね」
毒舌はここでも健在だった。
「そういうことです」
「それでなのね」
「はい、それでは今から」
「待とうね」
「兄さん達のお料理は期待できますね」
「そうそう、そっちはね」
「残念なことはです」
ここでこんなことも言う崇秀だった。
「典韋さんがおられないことです」
「流琉ちゃん今陳留に行かれてますからね」
「だから仕方ないんだよね」
「はい、お仕事ですから仕方ありませんが」
「ううん、それでもね」

「はい、それでも残念なものは残念です」
とにかくそうだというのであった。
「あの人のお料理も美味しいですから」
「元々料理人だしね」
「勿論曹操さんのお料理もいいですが」
彼女のもだというのだ。
「それでも典韋さんもです」
「今度食べようね」
「そうしよう」
こう話してだった。彼等は今は料理を待つのだった。そしてであった。
厨房ではだ。死闘が展開されていた。
「・・・・・・おい」
「何だ？」
「包丁を逆手に持つか」
「駄目なのか？それは」
「問題外だろうが」
こう夏侯惇に言う崇雷だった。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその十七

「幾ら何でもな」
「幾ら何でもか？」
「普通はしないぞ」
「しかし刃物だろう？」
「刃物でも料理だぞ」
こう言うのであった。
「それはないぞ」
「そうなのか」
「そうだ。そこからか」
崇雷は呆れてしまっていた。
「全く。どうなのだ」
「どうなのかと言われてもだ」
「言われても？」
「包丁を握るのははじめてだぞ」
珍しく困った顔になっている彼女だった。
「それでどうしろと」
「あんた本当に女か？」
ついつい言ってしまった崇雷だった。
「包丁を今はじめて握ったってな」
「刀ならいつも握っているぞ」
「そういう問題じゃないだろ」
「まあ待て崇雷」
妹が姉のフォローに来た。
「誰にもはじめてのことはあるではないか」
「しかしな。男でも普通この歳には包丁位握ってるぞ」
「姉者はずっと華琳様を御護りしていたのだ」
「それはあんたもだろ？」

「私以上にだ」
そうだというのであった。
「だからだ。こうしたこともだ」
「あるっていうのかよ」
「そういうことだ。姉者には姉者の得意なことがある」
「戦うことだな」
「そうだ。それにだ」
「今度は何だよ」
「貴殿も姉者は嫌いではないな」
微笑んでだ。こう彼に問うたのである。
「それはその通りだな」
「まあ嫌いじゃないけれどな」
やや婉曲的だが、だ。崇雷もそれは認めた。
「裏表がなくてあっさりとしているしな」
「それが姉者のいいところだ」
そうだというのである。
「そういうことだ」
「まあとにかくな」
崇雷は夏侯淵の話を聞きながら述べた。
「俺とあんたでメインでやるぞ」
「うむ、それではな」
「あんたはまああれだ」
「あれとは何だ？」
夏侯惇は崇雷に問い返した。
「私は何をすればいいんだ」
「素材とか持って来てくれ」
そうしてくれというのである。
「その都度な。それだけでいいからな」
「包丁は？」
「持たなくていいからな」

彼にしては歪曲的な表現であった。
「それじゃあな」
「それでは私はそれをするぞ」
「ああ、頼むな」
「ではだ。料理はだ」
夏侯淵が崇雷に言う。
「何にする」
「豚バラを煮込むか」
それだというのであった。

# 第四十五話　魏延、一目惚れするのことその十八

「それと蒸し餃子だな」
「ふむ。では残りの素材を使って炒飯もだな」
「それでいくか」
こう話してであった。二人で料理を作りはじめた。夏侯惇は結局素材を運ぶだけであった。しかしそれでもなのだった。
「何か厨房から音が聞こえるね」
「夏侯惇さんですね」
崇秀が許緒に言う。
「あれは。豚肉を落とされましたね」
「何かを落としたまでわかるんだ」
「音でおおよそ」
それでだというのだ。
「それは許緒さんも同じですね」
「僕は匂いでわかるよ」
にこりと笑って崇秀に話す。
「それでね」
「それで、ですか」
「そうだよ。崇秀さんは耳だね」
「はい、耳には自信があります」
「僕は鼻ね」
「お互いいいものを持っていますね」
「うん、そうだね」
崇秀の言葉にまたにこりと笑って話す。
「それじゃあだけれど」
「ここは楽しく待ちましょう」
「それで食べた後だけれど」
「稽古をしますか」

「手加減しないよ」
にこりと笑った笑顔はそのままだ。純粋な少女の笑みである。
「それでいいよね」
「私も手加減しません」
崇秀も言うのだった。
「さもないと面白くありませんからね」
「うん、じゃあね」
こう話してだった。彼等は食事を楽しみに待っていた。その味はよかった。とりあえず夏侯惇も料理をした気になって機嫌はよかった。

第四十五話　　完

２０１０・１１・１８

# 第四十六話　馬岱、乳を羨むのことその一

第四十六話　馬岱、乳を羨むのこと

劉備達は魏延に道案内を受けながら巴蜀に向かう。その中でだ。

「しかし益州ってのは」

「凄い山道だね」

馬超と馬岱が周りの険阻な岩山や深い森を見ながら話をした。

「話には聞いてたけれどな」

「ここまでなんて」

「そんなに凄いか？」

魏延は馬超に対して返す。馬岱はあえて無視している。

「ここは」

「だから凄いだろ」

「そうなのか。特にそうは思わないがな」

「これで凄くないとするとだ」

趙雲もその山には言う。

「南蛮はどうなるのだろうな」

「南蛮はこんなものではない」

実際にこう言う魏延だった。

「それこそ木々がさらに鬱蒼と茂りだ」

「鬱蒼とか」

「そして山ももっと険しい」

そうだというのである。

「おまけに猛獣も多いぞ」

「猛獣なのだ」

「そうだ、大勢いる」

張飛にもこう話すのだった。

「虎も豹も。大蛇もだ」

「そんなにいるのだ」

「だからここはまだ険しいうちには入らない」
そうだというのであった。
「この程度はな」
「そうか。私は北の方しか知らなかったが」
関羽は北の生まれだ。ここに来たのもはじめてだった。それで言うのだった。
「北とは木も違っているな」
「ええ。木も国によって違うのよ」
黄忠がその関羽に答える。
「北と南でね」
「そうだったのか」
「北に行けば暑くて南に行けば寒くて」
黄忠は気候についても話した。
「そうなるのよ」
「そうだったのか」
「ううん、それにしても」
劉備はいささか困った顔になっていた。
「暑いわね」
「暑いですか」
「うん、暑いわ」
こう魏延にも答える。見れば額にはうっすらと汗がある。
「私の服じゃちょっと」
「それはいけません」
すぐに心配する顔になって言う魏延だった。
「ではすぐに」
「すぐに？」
「脱ぎましょう」
こう劉備に言うのだった。
「上着でも」
「あっ、はい」

「そうすれば涼しくなります」
魏延は実際にだ。劉備の上着に手をかけようとしていた。
「では私が今から」
「有り難う、魏延さん」
「あのですね」
しかしだった。ここで孔明が魏延に言ってきたのだった。
「幾ら何でもここでは」
「むっ、何かあるのか」
「魏延さん桃香さんの服を脱がそうとしてますよね」
「そ、そうだが」
「あの、上着を脱がせたら」
「ブラだけになってしまいます」
鳳統も話してきた。

# 第四十六話　馬岱、乳を羨むのことその二

「それはかなり」
「危ないです」
「いや、しかしだ」
魏延はかなり焦りながらだ。二人の軍師に対して言い返す。
「私はただ劉備殿のことを考えてだ」
「それにしては顔が赤いですし」
「あの、ただ」
「ただ。何だ？」
「ブラウスだけでなく羽織ってるのを脱げばいいんじゃないですか？」
「それでいいと思います」
上着を全て脱がそうとする魏延にだ。こう指摘するのだった。
「それで済むと思います」
「魏延さん若しかしてスカートまで狙ってません？」
見ればだった。魏延は劉備のスカートまで狙っていた。それもだった。鳳統はそれも見ていた。かなり怪しい光景であった。
「幾ら暑くても」
「そこまでは」
「だから違う」
まだこう言う魏延だった。
「私はただ。劉備殿の為にだ」
「そうですか？」
「だといいのですけれど」
二人も怪しむがさらにだった。張飛も魏延をかなり疑う目で見て呟いた。
「怪しいことこの上ないのだ」
「私もそう思うな」

そしてそれは関羽もだった。
「魏延、姉者に対してだ」
「普通の感情を持っていないのだ」
「面白いことだ」
趙雲は楽しそうに笑っている。
「もっとも劉備殿は気付いておられぬがな」
「あたしでも気付くけれどな」
馬超も今は腕を組んで考える顔になっている。槍を抱いてだ。
「劉備殿だけ何でなんだ？」
「そこがまた面白いわね」
黄忠は趙雲と同じ顔になっている。
「さて、どうなるかしらね」
「ううん、まあ魏延さんって最後までは突っ込めない人みたいですし」
「とりあえずは見ているだけでいいでしょうか」
軍師二人は的確に見抜いていた。
「それじゃあ今は」
「とりあえずは巴蜀に入りましょう」
一行はこんな話をしながらその巴蜀に向かう。そしてであった。
そこに入るとだ。すぐにであった。
「何かここは」
「そうね」
「活気のある街ですね」
神楽の言葉にミナと月が応える。
「結構人が多いし」
「色々なものもありますね」
「政治が上手くいってるのね」
神楽はこのことを察して述べた。
「だからここまで」
「益州は元々豊かな国です」

鳳統がこのことを話す。見れば一行が今通っている村は左右に水田が広がりそこで人々が明るい顔で働いている。その数も多いのである。

「それに人も多いんです」

「そうだったの」

「はい、ただ今この州にはです」

鳳統は劉備に応えながら話していく。

「牧がいません」

「誰もいないの」

「太守の方も少ないですし」

この問題もあるのだった。

「今治める方が求められています」

「そうなの」

「はい、そうです」

また劉備に話す鳳統だった。

「牧がいればいいんですけれど」

「袁術殿が妥当だがな」

ここで関羽が言った。

「この益州に近いしな」

「しかし袁術殿は自分の州で手が一杯ですから」

「とてもここまでは」

鳳統と孔明がこう話す。

「益州の牧になるとです」

「人が見当たりません」

「厄介な話なのだ」

張飛が困ったような顔で話す。

# 第四十六話　馬岱、乳を羨むのことその三

「お姉ちゃんが牧になればいいのに」
「私？」
「そうなのだ。そうなったら鈴々達が全力で支えるのだ」
「私はそんな。牧なんて」
そのおっとりとした調子で話す劉備だった。
「とても」
「いえ、そうでもないわ」
だが、だった。黄忠がここでその劉備に対して言うのだった。
「桃香さんは皇室につながる方だし」
「それでなんですか？」
「それに人柄もいいから。絶対にいい牧になれるわ」
「けれど私何もできませんよ」
ここでもこう言う劉備だった。そして自分でさらに話す。
「政も戦も。曹操さんや袁紹さんみたいには」
「できなくてもいいの」
また言う黄忠だった。
「それは私達がやるから」
「紫苑さん達がですか」
「桃香さんは桃香さんのやることがあるのよ」
「そうなの？」
「そう。だから政とか戦のことは気にしないで」
ただしだ。このことは言い加えたのだった。
「最後に裁可してくれればいいから」
「それだけですか」
「政や戦についてはね」
こう言うのであった。
「それだけでいいから」

「はい、その通りです」
ここでまた魏延が劉備に言う。
「私達がです。劉備殿を全力で支えますから」
「魏延さんもですか」
「是非。お任せ下さい」
己の右手をその己の胸に当てての言葉である。
「この魏延文長が命にかえても」
「それはよくわかるな」
関羽の言葉だ。
「魏延の姉者への想いは若しかすると」
「鈴々達以上なのだ」
「それがおかしな方向に向かっているがな」
「それが心配なのだ」
「だから私は何も」
「まあとにかくだ」
「先に進むのだ」
二人も魏延にはあえてこれ以上言おうとしなかった。そしてだ。
そのうえでだ。さらに先に進むとであった。
一行はある場所に来た。そこは。
「ほう、これは」
「いい場所に来たよな」
趙雲と馬超がそれぞれ笑顔になる。一行の前に温泉があったのだ。
「丁度汗をかいていたところだ」
「入るか？」
「うん、そうしよう」
馬岱が笑顔で二人の提案に頷く。
「皆で入ろう」
「そうね。それじゃあね」
「入りましょう」
神楽と月も頷く。二人はここでこんなことを話した。

「日本でも温泉は人気があるのよ」
「皆大好きです」
「そうなのか」
魏延が二人の言葉を聞いて言う。
「貴殿達の国でもそうなのか」
「ええ、そうよ」
「それでは皆さんと一緒にですね」
「劉備殿、それではです」
魏延はここでも劉備であった。すぐに彼女に声をかけるのだった。
「今から一緒に温泉に」
「あっ、はい」
劉備は相変わらず魏延のその熱い視線に気付かない。
「それじゃあ今から」
「そうです。それでは」
魏延は劉備の背中に回ってだ。彼女の両肩から押すのであった。
「一緒に入りましょう」
「は、はい」
「放っておいていいの？」
馬岱はそんな彼女を見ながら眉を顰めさせていた。

# 第四十六話　馬岱、乳を羨むのことその四

「桃香さんの貞節が危なくない？」
「それは大丈夫ですよ」
「魏延さんはそういう人ではありませんから」
孔明と鳳統はここでもこう話すのだった。
「確かに危険な香りはしますけれど」
「むしろ」
「そうなのよね」
「そっちの方がね」
不意にだった。楽しげな顔で言い合う二人だった。
「楽しいし」
「見ていてね」
「あら、二人共わかってるわね」
黄忠はそんな二人の笑顔を見て口元を綻ばさせる。
「そうなのよね。そういうのが面白いのよ」
「今の言葉は何かな」
関羽が黄忠の言葉に突っ込みを入れる。
「何処かの書き手みたいな言葉だな」
「妙に男らしい言葉なのだ」
張飛も突っ込みを入れる。何はともあれであった。
一行は温泉に入った。服を脱ぎ髪の長い面々は上で束ねそれで入る。その中でだった。
ふとだ。張飛が馬岱を見て言う。彼女の髪も上で束ねられている。
「蒲公英も髪長いのだ」
「あれっ、今気付いたの？」
「何かそういうイメージがないのだ」
「普段は後ろで束ねてるからね」
にこやかに笑って話す馬岱だった。二人も他の面々も既に湯舟の

中にいる。そうしてその中で話をしているのであった。その中でだった。
「だからそれはね」
「そう見えないのだ」
「そうなの。それにしても」
馬岱は馬岱で趙雲を見て言うのだった。
「星さんも髪の毛長かったんだ」
「ふふふ、今気付いたか」
「後ろを一条伸ばしてるんですね」
「そうだ。短く見せているが実はだ」
「そうしてるんですね」
「そうだ。それでどうだ」
こう話す趙雲だった。
「面白い髪型だろう」
「そうですね。短いようでそれでいて長いっていうのは」
「私自身これが気に入っている」
そうだというのであった。
「だから続けているのだ」
「私もそうしようかな」
馬岱はここでこうも考えるのだった。
「髪の毛を一条だけ伸ばすの。しようかな」
「止めた方がいいじゃないのか？」
従姉が彼女に言ってきた。彼女も髪を上で束ねている。
「似合わないと思うぞ」
「似合わないかな」
「ああ、そう思う」
こう従妹に話すのだった。
「御前にはな」
「そうかな」
「蒲公英は髪全部伸ばしてる方がいいと思うな」

「姉様みたいに？」
「まあそうだな」
実際にそうだという馬超だった。
「髪型って結構難しいからな」
「そうだな。私もな」
今度は関羽だった。
「実は短くしようと思うこともあるがな」
「絶対に止めた方がいいですよ」
馬岱がそれを止めた。
「愛紗さんはやっぱり髪が長い方が」
「それを常にそう思う」
実際にこう言う関羽だった。
「それでだ」
「その髪型でいくんですね」
「そうする」
これが関羽の自分の髪への考えだった。
「どうも短くしてはならない気もする」
「それはいいのだが」
「何だ、星」
「枝毛には気をつけることだな」
趙雲が今指摘するのはこのことだった。

# 第四十六話　馬岱、乳を羨むのことその五

「それにはだ」
「むっ、わかっていたのか」
「髪が長いとどうしてもなってしまうからな」
「これでもかなり気をつけているのだがな」
「それでもだ」
また趙雲だった。
「いいな、それは」
「じゃああたしもやばいか？」
「私もなのね」
馬超と黄忠もだった。
「髪が長いとどうしてもな」
「星もその一条の髪が気になるわよね」
「実はそうだ」
趙雲もそれを隠さない。
「これでも髪の毛にはかなり気を使っているのだ」
「わかります、それは」
「私も」
月とミナもであった。見れば彼女達もその髪は長い。
「どうしても。気になります」
「それは」
「ロングヘアは好きだけれど」
神楽にしても髪は長い。
「けれど拭くのも乾かすのも」
「そして手入れもね」
「手間がかかるから」
三人もなのだった。しかし一人例外がいた。
「そうなんですか？」

「むっ、そういえば姉者の髪は」
「長いだけでなくかなり多いのだ」
「はい、私髪の毛の手入れとかは特に」
考えたことはないと。妹達に話す。
「してないんですけれど」
「それでその髪なのか」
「凄いのだ」
しかもよく見ればだ。
「枝毛は全くない」
「ツヤも凄いのだ」
「本当に何もしていないんですよ」
劉備はさらに話す。
「スタイルについても」
「何かそれって凄過ぎます」
「本当に」
孔明と鳳統もこれには驚く他なかった。
「桃香さんは天性のものですね」
「自然と輝いている原石ですね」
「私は別に」
また言う劉備だった。
「特にそれは」
「しかしです」
ここで魏延が彼女に言う。
「だからといって手入れを怠ればです」
「怠れば？」
「よくありません」
そうだというのであった。
「ですから」
「ですから？」
「これから私がです」

すぐに迫ってきたのだった。
「お手入れを」
「魏延さんがですか」
「はい、お任せ下さい。それでは」
「それでは？」
「まずはあがりましょう」
こう言ってだ。劉備を風呂からあがらせた。当然自分もだ。
そして、であった。まずはその髪を念入りに洗うのだった。
劉備のその髪を後ろから丹念に洗いながらだ。魏延はうっとりとして話すのだった。
「劉備殿の髪は本当に奇麗ですね」
「魏延さんまで」
「いえ、本当に奇麗です」
そのうっとりとした顔で話していく。
「こんな髪ははじめてです」
「はじめてですか？」
「枝毛が一本もありません」
まずはそれだった。
「本当に一本も」
「ううむ、有り得ないな」
「お姉ちゃんは完璧過ぎるのだ」
また唸る妹達だった。

# 第四十六話　馬岱、乳を羨むのことその六

「私はいつもそれで悩んでいるのだが」
「鈴々みたいに短い髪でもそれはできてしまうのだ」
「しかしそれがない」
魏延はまた指摘する。その髪を洗いながら。
「ここまでの髪があるとは。こうして手入れをすれば」
「よくなるんですか？」
「磨かれます」
また劉備に話す。
「そしてそれは」
「それは？」
「髪だけではないです」
うっとりとした言葉はそのままだった。
「では次は」
「次は？」
「お背中流します」
こう話すのだった。
「そちらも」
「いえ、それは」
「お気遣いなく」
劉備の遠慮はすぐ消したのだった。
「ではすぐに」
「ううん、だったら」
「はい、それでは」
こうして今度は背中も流す。するとだった。
魏延はさらにうっとりとした顔になってだ。劉備のその背中を見て話した。
「お肌も奇麗ですね」

「そうですか？」
「はい、白くて」
まずはその色からだった。
「それにとてもきめ細かいです」
「確かにな」
「桃香さんの肌って凄いんだよな」
趙雲と馬超は湯舟の中からその劉備を見て話す。風呂の椅子に座りそうして後ろから魏延に洗ってもらっている彼を見ながらだ。
「白くてきめ細かいだけではなく」
「肌触りもいいんだよな」
「確かに」
魏延も今それを感じていた。
「まるで餅だ。水の弾きもいい」
「ううん、何かそこまで言われると」
「美味しそうな」
つい出してしまった言葉だった。
「ここまでとは」
「えっ、美味しそう？」
劉備は魏延の今の言葉にふと顔を向けた。
「美味しそうって？」
「あっ、いえ」
「いえって」
「何でもありません」
自分の言葉を慌てて打ち消す魏延だった。
「お気遣いなく」
「そうですか」
「はい、そうです」
また言う魏延だった。
「それで次は」
「次は？」

「前を洗います」
劉備にさらに言うのであった。
「いいですね」
「あっ、いえ」
今の申し出にはだ。魏延は慌てて断ろうとした。
「それはいいです」
「いえ、遠慮なく」
「遠慮なくですか」
「そうです、遠慮することはないです」
魏延も魏延で引かない。
「ですから」
「あっ・・・・・・」
劉備にその身体を摺り寄せる。身体全体で洗わんとする勢いだった。
「あの、魏延さん」
「ではいいですか?」
劉備に小声で囁く。

# 第四十六話　馬岱、乳を羨むのことその七

「今から」
「じゃあ」
「はい、では今から」
こうしてだった。劉備の肩や手を洗う。自分の手でだ。
その光景を見てだ。孔明がその顔を真っ赤にさせていた。
「はわわ、何か今のお二人は」
「恥ずかし過ぎます」
鳳統も真っ赤だった。
「魏延さんってあからさまに」
「劉備さんに対して」
「わかり過ぎる位わかるわ」
神楽は流石に赤面していないがそれでも言うのであった。
「好きとかそういうレベルではないわね」
「このままいったら」
「危ないのんじゃないですか？」
ミナと月は本当に心配していた。
「この状況は」
「かなり」
「そうよね。じゃあ何かあったら」
馬岱は湯舟から今にも出ようとしている。
「私がね」
「いや、それには及ばない」
趙雲がそれを止める。
「魏延は最後までは絶対にいけない」
「絶対になんですか？」
「そうだ。そこまでの勇気はない」
そうだというのだった。

「精々胸止まりだ」
「じゃあいいんですか」
「そうだ、いい」
また言う趙雲だった。
「見ているだけでな」
「ううん、そうなんですか」
馬岱は今は動かなかった。しかしその間にもだった。
魏延はさらに洗っていく。そしてだった。
今度は劉備の腹、そして遂に胸だった。その胸の感触は。
「こ、これは」
「あの、胸は」
「大きいというものではありません」
まさにそうだというのだった。
「大きいだけでなく」
「弾力が半端ではない」
「あれは素直に羨ましいのだ」
関羽と張飛がまた話す。
「あそこまでの胸はな」
「けれど愛紗お姉ちゃんも」
張飛はふとだ。関羽を見て話すのだった。
その胸は」
「私の胸か」
「凄過ぎるのだ」
それを言うのだった。
「桃香お姉ちゃんとどっこいどっこいなのだ」
「私の胸はだ」
「お姉ちゃんは？」
「自然とこうなったのだがな」
「そうなのだ」
「そうだ。気付いたらこうなっていた」

そうだというのであった。
「それは駄目なのか」
「私もだが」
「あたしもだよ」
「私もよ」
ここで趙雲、馬超、黄忠も言う。
「胸というものは自然にだ」
「大きくなるんだけれどな」
「子供が生まれたら特にね」
「それはないのだ」
「絶対にないわよ」
張飛と馬岱が三人の言葉をすぐに否定した。

# 第四十六話　馬岱、乳を羨むのことその八

「幾ら努力してもなのだ」
「大きくならないけれど」
「そうですよね、それは」
「二人の言う通りです」
孔明と鳳統は困った顔で話す。
「胸なんて。そう簡単には」
「大きくならないです」
「そうかしら」
劉備は四人の言葉に首を傾げさせている。
「本当に気付いたら大きくなるけれど」
「その通りだ」
関羽が巨乳組を代表して劉備に続く。
「そんなものは自然にだ」
「はわわ、世の中不公平過ぎます」
「そうです」
軍師二人も言う。
「何でこんなことになるんですか」
「私達なんてとても」
「とにかくこの胸は」
魏延はまだ劉備の胸をまさぐっている。最早洗ってはいない。
「恐ろしいまでの威力が」
「威力だなんて」
「威力があり過ぎます」
魏延はさらに言う。
「劉備殿、こうなれば」
「こうなれば？」
「この魏延、何があろうとお仕えします」

「お仕えだなんて」
そう言われるとだった。劉備はそれは否定するのだった。
「それはいいです」
「いいとは」
「魏延さんは友達だから」
こう言うのだった。
「だからそれで」
「友達ですか、私が」
「ええ、だから」
それでだというのである。
「お仕えだなんて」
「では。私は」
「友達。だからね」
「はい、だから」
「真名で呼んでいいかしら」
こう魏延に顔を向けて言った。
「それでどうかしら」
「真名で」
「ええ。まずはね」
自分から名乗った劉備だった。
「私の真名はね」
「はい、確か」
「桃香」
それをそのまま告げたのだった。
「宜しくね」
「桃香様ですか」
「そう、桃香よ」
またぎ延に話す。
「それで魏延さんの真名は？」
「は、はい」

座りながら姿勢を正す。そして劉備から手を放してだ。こう名乗るのであった。
「私の真名は」
「何ていうの？」
「焔耶です」
「焔耶ちゃんね」
「はい、宜しく御願いします」
姿勢を正したままで話す。
「それではこれからも」
「ええ。それにしても焔耶ちゃんって」
劉備は彼女の身体を見てだ。こう言うのだった。
「あれよね」
「あれとは？」
「スタイルいいわよね」
「そ、そうでしょうか」
「胸は大きいし」
それはその通りだった。胸は確かにある。

# 第四十六話　馬岱、乳を羨むのことその九

しかもだった。それは全体もであった。
「腰もくびれてるしお尻だって」
「お尻もですか」
「いい形しているわ」
前から見てもおおよそわかることだった。
「美人だしもてるわよ」
「い、いえ私は」
「焔耶ちゃんは？」
「もてるとかそういうことは」
「いいの？」
「はい、興味がありません」
座りながら直立不動になって劉備に話す。
「全くです」
「男の人は？」
「はい、全くです」
そうだというのである。
「ありません」
「ううん、そうなの」
「どう見たってそうですよ」
「一発でわかります」
孔明と鳳統がここでまた話す。
「魏延さんってどう見ても」
「女の子が好きですよね」
「というよりかは桃香さんが」
「好きで仕方ないとしか」
「本人は否定したいみたいだけれど」
神楽がその二人のところに来て言う。

「それはどうかしら」
「否定できません」
「とても」
こう返す二人だった。
「だって。あれでは」
「丸わかりもいいところですから」
「な、何を言ってるんだ」
魏延は彼女達も顔を向けてそれは否定した。
「私はだ。桃香様に対して純粋に」
「愛情を向けている」
「絶対にそうですね」
ミナと月もそうだと言うのであった。
「けれど別にいいわよね」
「はい。女同士も男同士も同じですから」
月はこんなことも言った。そしてであった。皆にこう話すのだった。
「私の時代の日本では男同士でも女同士でも普通でしたから」
「私の時代もよ」
ミナもであった。
「別にそれはね」
「数十年しかかかってないからそれは当然ですね」
「ええ、そうなるわ」
「私の時代もよ」
ここで神楽もであった。
「日本ではそんなこと普通よ」
「何か素晴しい世界ですよね」
「ええ。神楽さんの時代の日本って」
孔明と鳳統はそのことを素直に羨ましいと思っていた。
「私達の世界って男同士はあまりないですから」
「けれどそれが普通だなんて」

「素晴しい世界ですね」
「行ってみたいです」
「来れたら是非ね」
神楽も彼女達のその言葉を受ける。
「色々と案内させてもらうわ」
「はい、それでは」
「縁がありましたら」
軍師二人も笑顔で応える。そうしてだった。
劉備と魏延はお互いの真名を知った。そして互いに呼び合うようになった。
しかし馬岱とはだ。相変わらずであった。
「あのね、あんたね」
「何だ」
道中でまた言い合う。
「何でそんなに胸があるのよ」
「知るものか」
「そんな筈ないでしょ」
こう言い返す馬岱だった。

# 第四十六話　馬岱、乳を羨むのことその十

「何も知らないなんて」
「実際に知る筈がないだろ」
魏延も言い返す。
「どうしてそんなことを知っているんだ」
「あのね。私なんてね」
「何だというのだ」
「幾ら努力しても大きくならないのよ」
自分の胸を見て言うのであった。
「何をしてもね」
「そうなのか」
「そうよ」
また言う馬岱だった。
「何をしてもなのよ」
「自業自得だ」
「何でそうなるのよ」
「日頃の行いが悪いからだ」
「私が？」
「そうだ、御前の日頃の行いがだ」
また言う魏延だった。
「その顔を見ればわかる」
「顔ってね。あんたの顔こそ」
「何だというのだ」
「碌なものじゃないじゃない」
いよいよ本格的に喧嘩になりだしていた。
「その胸だってね」
「胸がどうした」
「大きければいいってものじゃないのよ。大事なのは形よ」

「御前の胸は形も悪いだろうが」
「いいわよ」
力説だった。魏延の顔を見据えてだ。
「それじゃあここで見せてやるわよ」
「ああ、風呂場で見たがな」
これは確かだった。見ない筈がなかった。一緒に入っていてだ。
「もう一度見てやる、その形の悪い胸をな」
「あんたも見せなさいよ」
馬岱も言い返す。言い返さない筈がなかった。
「いいわね」
「おう！見せてやる！」
「今ここでよ！」
「ああ、待て待て」
「いい加減にしろっての」
だがここで、だった。関羽と馬超が二人の間に入ってきた。
「こんな道の真ん中で胸なぞ出すな」
「人が来たらどうするんだ」
「来ないわよ」
「そうだ、多分な」
二人にも言い返す彼女達だった。
「こんな山の道の中に」
「何で来るんだ」
「いつもの三人なら出て来るのだ」
張飛は彼等の話をした。
「何処でも出て来る奴等なのだ」
「そういえばそうですよね」
「あの人達って何処にもいますから」
孔明と鳳統もあの三人のことを話す。
「一体どういう人達なんでしょうか」
「別人なんでしょうか、本当に」

「わからないな。だが」
趙雲は考えるふりをしていた。
「話しをすれば本当に出て来るぞ」
「出て来るかしら」
「噂をすれば何とやらだ」
こう黄忠にも返す。
「すぐにでもだ」
「ん？おいら達呼ばれたか？」
「そうじゃねえのか？」
早速二人出て来た。太いのと小さいのだ。
「何か旅してるだけだけれど」
「何だってんだよ」
「噂をすれば」
「本当に出て来たなんて」
魏延も馬岱もこれには少し驚いた。

# 第四十六話　馬岱、乳を羨むのことその十一

「御前等もうここまで来たのか」
「動くの速くない？」
「んっ？初対面だぞ」
「っていうか御前等何者だよ」
彼等の返答はこうだった。
「おいら達これから袁術さんのところで兵になりに行くんだよ」
「その途中なんだけれどよ」
「とりあえず俺達は真面目に生きてるぜ」
いつもの真ん中の男も出て来た。
「どっかの誰かと間違えてるみてえだがな」
「しかし似ているな」
「そっくりじゃない」
魏延と馬岱はまだ言う。
「世の中似ている者は何人もいるか？」
「私あんた達とそっくりの人達に何度も会ってるけれど」
「だから初対面だぞ」
「そうだよ。俺達今まで益州にいたんだからな」
また太いのと小さいのが話す。
「牧様がいなくなって頼りなくなったから」
「それで袁術様のところに行くんだよ」
「また癖の強い人のところに行くな」
馬超はそのことが気になって述べた。
「あの人結構あれなところあるぞ」
「けれど食えることは確かだからな」
真ん中の男はそのことを考えて動いていた。
「だからな。それでだよ」
「それでなのか」

「ああ、じゃあこれでな」
彼は関羽に対しても言葉を返した。
「また縁があればな」
「すぐに会える気がして仕方ないのだ」
張飛はその三人を見て呟く。
「というかあんた達の顔は本当に何度も見るのだ」
「んっ、そういえばあんた」
「あれか？」
太いのと小さいのがその張飛の顔を見てふと言うのだった。
「華雄将軍か？」
「違うか？」
「誰なのだ？それは」
張飛は彼女のことを知らなかった。
「聞いたことがあるようなないようななのだ」
「ええと。もう一人の鈴々ちゃん？」
劉備は視線を少し上にやって話した。
「若しかして」
「ううむ、それはあるかもな」
これは関羽も考える顔で述べた。
「公孫賛殿も以前あの張遼と似ていたと思ったしな」
「あれっ、そういえば急に声が変わった？」
劉備も関羽の言葉で気付いたのだった。
「パイパイちゃんって」
「姉上、白蓮殿ではないのか？」
ここでも名前を間違える劉備だった。
「私もあの方のことはどうしても忘れてしまうが」
「包丁を持っていれば思い出すのだけれど」
黄忠はそれで思い出すというのだった。包丁でだ。
「それだったな」
「そういえば。あの人って電車が似合いそうね」

神楽は神楽でこんなことを言いはじめた。
「人を後ろから押すような」
「何か知らないが物騒だな」
関羽もこう指摘する。
「あの方にまつわる話は」
「あと何気に。天和ちゃんも？」
劉備は張角の話もした。
「結構聞くけれど」
「何をなのだ？」
「ええと。鉈とか鋸とか刀とか」
確かに物騒なものばかりである。
「それとかバールのようなものとかクラブとか」
「全部人を殺すものね」
神楽がそうしたものを聞いたうえで述べた。
「アイドルがそんなもの使うのかしら」
「それで中に誰もいませんよって」
劉備はさらに言った。
「そうした感じで」
「んっ？そういえば姉上は」
「その張角に似てるのだ」
関羽と張飛はこのことに気付いた。

# 第四十六話　馬岱、乳を羨むのことその十二

「髪の色が変われば」
「それでそっくりなのだ」
「えっ、そうかな」
だが本人に自覚はなかった。
「私天和ちゃんにそんなに」
「そっくりだな」
「ああ、言われてみればな」
趙雲と馬超もこのことに気付いた。
「あの先程の三人程ではないが」
「似てるなんてものじゃないよな」
「そういえばそうだな」
真ん中の男が言った。三人はまだいた。
「そこの胸の大きい姉ちゃん」
「はい」
「あんた天和ちゃんにそっくりだな」
「同一人物に見える」
「ああ、全くだぜ」
太ったのと小さいのもここで言うのだった。
「サイン欲しいな」
「けれど別人だよな」
「はい、私は劉備といいます」
名前を出してそうではないと断るのだった。
「ですから。天和ちゃんではないです」
「三姉妹みたいだけれどあれだな」
また真ん中の男が言ってきた。
「地和ちゃんと人和ちゃんでもないしな」
「私のことか」

「鈴々みたいなのだ」
「ああ、地和ちゃんの胸は全然ないけれどな」
このことであまりにも有名な張梁だった。
「そっちの黒髪のでかい姉ちゃんは胸もでかいしな」
「むむむ、言うのはそこか」
「で、人和ちゃんは眼鏡だけれどな」
張宝のトレードマークはそれだった。
「そっちの姉ちゃんは違うしな」
「鈴々に眼鏡なんて必要ないのだ」
「そうだろ。だから絶対に違うな」
「本当にサインが欲しいところだな」
「本人だったらよかったのにな」
また言う太いのと小さいのだった。
「まあ袁術さんも歌が上手いし」
「そっちも楽しみにするか」
「そういえばあの人って」
「そうよね」
孔明と鳳統がここでまた話す。
「歌と踊りはかなりですから」
「異常に上手で」
「張勲さんもかなり」
「上手ですよね」
ミナと月は彼女のことも話す。
「お二人の歌はね」
「見事なものです」
「それで歌も楽しみにして行くんだよ」
また言う真ん中のだった。
「そういうことでな」
「はい、それじゃあですね」
劉備は明るい笑顔で彼のその言葉に応えた。

「また御会いしましょう」
「それじゃあな。しかしあんた」
「私ですか？」
「天和ちゃんと同じで胸が大きいな」
最後に言うのはこのことだった。
「本当に何もかもそっくりだな」
「けれど声は違いますよ」
「それで別人だってわかるけれどな」
「そうですよね。声って大事ですよね」
「ああ、全くだぜ」
彼がこう言うとだった。また孔明と鳳統が二人で話す。
「この人達って声も同じだから」
「本当に同一人物としか」
思えないのだった。ここが奇怪なのだった。
何はともあれ三人は劉備達と別れ袁術のところに向かった。そしてだった。

# 第四十六話　馬岱、乳を羨むのことその十三

劉備達はだ。あらためて巴蜀に向かうのだった。その途中でだ。
劉備は先程の三人の言葉を思い出してだ。こう言うのだった。
「そういえば」
「はい、何かありますか？」
「一体」
「私と天和ちゃんがそっくりってことだけれど」
このことをだ。孔明と鳳統にも話すのだった。
「それってやっぱり嬉しいなって」
「思えるんですね」
「そのことが」
「うん。私天和ちゃんのファンだから」
だからだというのだった。
「いいなあって」
「それでなんですか」
「だから」
「ええ。また今度舞台を観たいなって思うし」
「私そういえば」
劉備の今の話を聞いてだ。鳳統は弱った感じになって言うのだった。
「三姉妹の歌は今まで直接聴いたことは」
「なかったの？」
「そうなの」
こう孔明にも話す。顔は俯き気味になっている。
「今度機会があれば」
「そうね。その時はね」
「ええ、その時は」
「一緒に聴こう」

孔明は鳳統ににこりと笑って話す。
「皆と一緒にね」
「ええ、それじゃあその時は」
「一人で聴くだけじゃなく皆で聴いたら」
孔明はさらに話す。
「余計に楽しいからね」
「皆でだとなのね」
「そうよ。一人で聴いてもいいけれど」
それでもだというのだ。
「皆で聴いたらもっといいから」
「うん。じゃあ皆で」
「聴こうね、雛里ちゃん」
「ええ、朱里ちゃん」
お互いに微笑み合い真名も呼び合う。二人の仲はさらによくなっていた。
そうして進みだ。遂にであった。
趙雲が道の左に見える立て札を見て言った。
「よし、巴蜀だ」
「遂に来たわね」
黄忠も言う。
「桔梗ちゃんのところに」
「桔梗？」
「桔梗っていうと？」
「あっ、その厳顔ちゃんの真名なの」
それだと話す黄忠だった。
「私達昔から知り合いなのよ」
「そうだったんですか」
「ええ。長い付き合いね」
劉備に対しても述べる彼女だった。
「どれ位になるかしら」

「ここで詳しく聞いたら駄目よね」
「命の保障はできないのだ」
馬岱に張飛が話す。
「黄忠さんってそうした話すると凄く怖いから」
「射られても不思議じゃないのだ」
それはもうわかっている二人だった。そして黄忠はさらに話すのだった。
「元気かしら、本当に」
「はい、お元気です」
魏延が彼女に話してきた。
「では今から」
「それじゃあね。今からね」
「会いましょう、これから」
「また一緒に飲むわよ」
こう話してだった。彼女達はいよいよ小古曽顔に会うのだった。
そしてその時だ。袁術は張勲と話していた。今は仕事中で木簡を読んでいる。
そうしながらだ。困惑した顔を見せていた。
「うう、嫌なのじゃ」
「お仕事が嫌ですか？」
「そうなのだ、嫌なのじゃ」
その通りだというのであった。
「ここまで多いといい加減うんざりするのじゃ」
「南部の統治もはじめましたからね」
「それはいいのじゃが仕事が倍になったのじゃ」
「ですが麗羽さんもこれだけのことをされてますよ」
張勲は何気なくを装って彼女の名前を出した。

# 第四十六話　馬岱、乳を羨むのことその十四

「それもちゃんと」
「麗羽姉様はじゃと」
「はい、今度幽州の牧にもなられますし」
「ううん、それならじゃ」
それを聞くとだった。袁術の顔が変わった。うんざりとしたものから引き締まったものになった。そのうえでこう言うのであった。
「姉様には負けられないのじゃ」
「そうですよね。袁家の嫡流として」
「はい、麗羽様は嫡流ではないですから」
「嫡流はわらわなのじゃ」
このことを強く言う袁術だった。
「年少だからといって侮られては困るのじゃ」
「じゃあわかりますね」
「うむ、わかったのじゃ」
その真面目な顔での言葉だった。
「姉様に負けてはいられないのじゃ」
「それとですね」
「何じゃ、今度は」
「人が来ていますよ」
今度言うのはこのことだった。
「また。あちらからの方です」
「ほう、またなのじゃな」
「はい、来ていますけれど」
「ならばじゃ。これを終わらせてじゃ」
袁術のその手が速くなった。筆を動かしだしている。
「その者に会おうぞ」
「ええ。それじゃあ」

「姉様や曹操のところには随分と人材が来ておるそうじゃな」
袁術はここでこのことも話した。
「そうじゃな」
「はい、かなりの人達が来ていますね」
「それが腹が立つのじゃ」
今度はむっとした顔になる袁術だった。
「全く以てじゃ」
「まあ今は落ち着かれて」
「仕事をしてじゃな」
「会うぞ」
「そしてその後は」
「蜂蜜水じゃ」
これも忘れていないのだった。
「よいな、七乃」
「はい。ただし一杯だけですよ」
「ううむ、二杯は飲みたいのじゃ」
「虫歯になりますけれどいいですか？」
「何っ、虫歯とな」
「それでもいいのならいいですけれど」
にこりとして怖いことを話す張勲だった。
「それでもいいというのなら」
「わ、わかったのじゃ」
袁術は虫歯と聞くとすぐに青い顔になった。そのうえで答えるのだった。
「それでは一杯だけにしておくのじゃ」
「はい、わかりました」
「虫歯は嫌なのじゃ。あんな痛いものは二度と御免なのじゃ」
「ですから。蜂蜜水はです」
「一杯だけじゃな」
「はい、そういうことで」

これは譲らないのであった。
「それとですけれど」
「今度は何じゃ？」
「何か曹操さんのところで凄い歌手が加わったとか」
「歌手じゃと」
「何か胸が凄く小さい」
このことも忘れない張勲だった。
「そうした歌手だとか」
「ふむ。胸が小さいのか」
「はい、自分でもそれを気にしているとか」
「そんなものはどうでもいいではないか」
袁術は何気に自分の胸も見て言うのだった。

## 第四十六話　馬岱、乳を羨むのことその十五

「わらわも小さいぞ」
「そうですね。胸は小さく大志は少しだけ大きく」
「大志は一番大きくなのじゃ」
袁術も言う。
「袁家の棟梁として三公の一人になるのじゃ」
「そして四代から五代に」
「姉様には負けぬのじゃ」
ここでも袁紹を意識していた。
「しかし。胸が小さいとな」
「はい、とても」
「ふうむ。胸というのは難儀なものじゃな」
袁術はここでも己の胸を見る。まな板そのもののその胸をだ。
「これ程人によって差があるものもないぞ」
「ですよね」
張勲は何気に己のその豊かな胸を揺らしている。にこりとしながら。
「それは」
「七乃はあるのう」
「そうですか？私はまだ」
「姉様もそうじゃし孫策の奴もじゃ」
何故かここで孫策の名前も忌々しげに出すのであった。
「あの胸は気に入らんのじゃ」
「では孫尚香さんは？」
「あれはよいのじゃ」
彼女については寛大な顔で語る。
「わらわと同じだからじゃ」
「美羽様らしいお言葉で何よりです」

「もっと褒めてたも」
ここでは得意げな顔で言う袁術であった。
「わらわは満足じゃ」
「左様ですか」
「そうじゃ。胸が何だというのじゃ」
袁術はさらに言う。
「違うか」
「小さくともですね」
「そうじゃ。大きい胸が何だというのじゃ」
また言うのであった。
「御主に言ってもわからんじゃろうがのう」
「はい、それはですね」
にこりと笑うのはそのままにして話す張勲だった。
「申し訳ありませんが」
「その点だけは曹操に同意じゃ」
「そういえば曹操さんも」
「左右のあの二人は論外じゃ」
彼女達はというのであった。
「全く。胸ばかり大きい奴等じゃ」
「けれど最近曹操さんの陣営でも」
「胸が小さいのが増えておるか」
「はい、かなり」
「ならばよいのじゃがな」
「そういうことですね。それでは」
ここまで話してだった。そうして。
袁術はまた言うのであった。
「ではその者に会おうぞ」
「はい、それでは」
「楽しみじゃ。その後の蜂蜜水ものう」
それを楽しみにしながらだった。袁術は向かうのだった。彼女も

彼女で何かと悩みがあるのだった。完全な能天気ではなかった。

第四十六話　　完

２０１０・１１・２１

# 第四十七話　顔良、仲間外れになるのことその一

第四十七話　顔良、仲間外れになるのこと

「えっ、曹操さんのところにですか」
「今からですわ」
「そうですわ」
袁紹が顔良と文醜に告げていた。彼女の左右は今は田豊達である。
後ろにはいつも通り審配がいて彼女を護衛しているのだった。
「使者として。宜しいですわね」
「今度の幽州のことでしょうか」
「それで前以て話しをですか」
「その通り。そのことでしてよ」
まさにそれだと話す袁紹だった。
「華琳には前以て」
「お話しておくんですか」
「何か律儀ですね」
「暫く私達は動けませんわ」
袁紹はここでは少し困った顔になった。
「異民族を落ち着かせることと」
「それとその幽州のことで」
「暫くそうですよね」
「中原で反乱が起こっても」
その時にもというのであった。
「動けませんわ。それを伝えておきますわ」
「ううん、そういえば孫策さんのところも」
「今動けないんでしたっけ」
顔良と文醜はここで孫策のことも話に出した。
「山越を平定して」

「それで御褒美に交州を貰ってその統治をはじめるから」
「私達が動けないとなると」
袁紹はここでは孫策もその話に入れていた。
「中原の有事は華琳だけで対処しなくてはなりませんから。前以てですわ」
「それを考えますと」
田豊がここで袁紹に話してきた。
「今は危険な状況ですね」
「確かに」
沮授も言う。
「何者かが反乱を起こすとなるとこの時にこそですね」
「それにです」
審配も袁紹に言ってきた。その顔を彼女の顔に近付けてだ。
「徐州と益州にはまだ牧がいません」
「徐州に行くのは」
袁紹はその州のことを聞いて難しい顔を見せた。
「無理ですわね」
「はい、四州とその幽州、異民族の統治だけで」
「今は手が一杯です」
田豊と沮授がここでまた話す。
「ですからそこまではとても」
「無理です」
「そうですわね。参りましたわね」
それがわかっているからこそだ。袁紹もそこまでは進出できないのだった。そしてであった。
「華琳はあそこには」
「曹操殿も今は二つの州で手が一杯のようです」
「ですから」
軍師二人が袁紹にこのことを話した。
「孫策殿はこちらと同じ状況ですし」

「徐州には誰も」
「あそこに反乱が起これば どうにもなりませんわね」
袁紹が危惧しているのはまさにこのことだった。
「頭が痛い話ですわ」
「そうですよね」
「そっちも何とかしないといけませんよね」
顔良と文醜も言った。
「じゃあそのこともですね」
「曹操さんに話しておきますか」
「そうですわね。ここは」
少し考えてからだ。袁紹は二人に述べた。
「誰か適当な人がいれば」
「その人を徐州の牧に薦める」
「そのことですね」
「そうですわ。ただし」
ここでだった。袁紹の目の光が強くなった。今度はその顔に嫌悪の色を見せる。
「間違っても宦官達やその息のかかった者は」
「絶対に薦められませんね」
「牧には」
「それは絶対ですわ。最悪でも中立ですわ」
実は袁紹は宦官達と対立する立場にいる。これは曹操も同じだ。

## 第四十七話　顔良、仲間外れになるのことその二

「そうした方でなければいけませんわ」
「それに益州もありますし」
「問題山積みですね」
「洛陽も今はさらにややこしいようですし」
このことも話す袁紹だった。
「ですがさしあたっては」
「はい、それじゃあ」
「あたい達は今から」
「頼みましたわよ」
こうしてだった。二人は曹操のところに向かった。そしてすぐに曹操にそのことを話すのだった。彼女は今は左右に曹洪と曹仁を擁している。
そのうえでだった。二人の話を聞くのだった。
「成程ね、わかったわ」
「はい、それではです」
「そういうことで」
二人は微笑んで曹操に述べていた。
「申し訳ありませんがその際はです」
「そちらで御願いしますね」
「ええ。わかってるわ」
曹操も微笑んで二人に返す。己の執務室のその机に座りながらの話だった。
「それは安心して。それと」
「徐州のことですけれど」
「それもそういうことで」
「私も考えていたところなのよ」
曹操は溜息めいた口調で述べた。

「あそこにしっかりした人が来てもらいたいってね」
「やっぱりそうなんですか」
「曹操様も」
「そうよ。今は只でさえ混乱しているのね」
漢王朝の力が衰えているからだった。
「帝もね」
「帝、そうですね」
「あの方はまあ」
皇帝の話になるとだ。口ごもる彼女達だった。
「宦官達の言いなりですから」
「どうにもなりませんね」
「宦官の中でもね」
曹操は憂いのある顔で話していく。
「張譲がね」
「聞いています」
「相当やばい奴なんですよね」
「そうよ。だからね」
それでだというのであった。
「何とかしたいところだけれど」
「何進将軍もどうしようもないですか」
「あいつだけは」
「司馬慰がいるようだけれど」
曹操はこの名前を言う時その顔を微妙に歪ませた。
「それでもみたいね」
「司馬慰さんですか」
「あの名門の嫡流の」
「そうよ。清流のね」
曹操の口調が忌々しげなものになってきていた。
「麗羽も言っているわね」
「はい、何かと」

「すっごく面白くなさそうに」
「ちょっと文ちゃん」
顔良は文醜の今の言葉を咎めようとしてきた。
「その言葉は」
「いいじゃねえかよ、本当のことなんだし」
「そういうことじゃなくて。曹操様の御前よ」
「あっ、そうか。そうだったな」
「だからね」
「ああ、それはいいわ」
曹操は微笑んで二人の言葉はいいとしたのだった。
「私達も言ってることだし」
「そうなんですか」
「そっちもですか」
「そうよ。私もあの女は嫌いよ」
嫌悪を見せた言葉だった。

## 第四十七話　顔良、仲間外れになるのことその三

「どうもいけ好かないのよ」
「麗羽様も仰ってます」
「名門の嫡流で大将軍のお傍にあって」
「しかも頭が凄く切れるんですよね」
「何でもある感じですよね」
「そんな人間だからよ」
また言う曹操だった。
「私も嫌いよ。どうせ私はね」
「華琳様、それ以上は」
「やはり」
曹仁と曹洪が話すのだった。
「仰らぬ方が」
「そう思いますが」
「そうね。失言だったわ」
曹操もここで止まった。二人に言われてだった。
「仕方ないわね。それじゃあ」
「はい、話を戻して」
「それで」
「話はわかったわ」
曹操はあらためて顔良と文醜に述べた。
「私の方はそれでいいわ」
「はい、それでは」
「そういうことで」
「ここまで来て御苦労だったわね」
二人に微笑みを向けての言葉だった。
「それじゃあこれからだけれど」
「また御会いしましょう」

「そういうことで」
「待ちなさい。すぐに帰るつもり？」
微笑みはそのままだった。
「ここに来てすぐに」
「はい、そうですけれど」
「それが何か？」
「水臭いわね。折角ここに来たんだし」
「折角といいますと」
「何かあるんですか？」
「少し楽しんでいきなさい」
こう二人に話すのだった。
「いいわね。何かね」
「えっ、ですが」
「何かそれって」
「図々しいとかいう言葉はなしよ」
二人の言葉を事前に察してであった。
「いいわね」
「ううん、それじゃあ」
「それでいいですか？」
「文醜を満腹にさせてあげるわ」
こうも言ってみせる曹操だった。
「楽しみにしていなさい」
「そりゃ凄いですね」
文醜は曹操のその言葉を聞いて明るい顔になった。
「じゃあ曹操様、お言葉に甘えまして」
「顔良もね。楽しんでね」
「すいません、何かあって来た時はいつもですよね」
「それが礼儀よ」
何でもないといった感じの曹操の今の言葉だった。
「私達だってあれじゃない」

「こちらに来た時は」
「まあそうですけれどね」
「お互いにそうしてるじゃない。だからいいのよ」
こう話すのだった。
「そういうことでね。それじゃあね」
「有り難うございます」
「たっぷり食わせてもらいますね」
「じゃあ二人共ね」
「楽しみましょう」
曹仁と曹洪も笑顔で二人に話してきた。そうしてだった。
二人は曹操に御馳走による歓待を受けた。その後でだった。
文醜は許緒とだ。笑顔で話をしていた。
「いやあ、満腹満腹」
「たっぷり食べたね」
「ああ、全くだよ」
二人で向かい合って座りながらの話だった。

# 第四十七話　顔良、仲間外れになるのことその四

「お互いよく食べたよな」
「だよね。そういえばさ」
「んっ、何だ？」
「これから面白い集まりがあるらしいよ」
こう文醜に言ってきたのだった。
「何かね」
「面白い集まり？」
「うん。何か胸がどうとかね」
「胸？胸がどうしたんだ？」
「僕もよく知らないけれどね」
許緒はここで首を傾げさせた。
「何か桂花様が主催になってね」
「ああ、あの猫耳がかよ」
「そうなんだ。それでなんだ」
「一体何なんだ？」
「顔良さんもどう？」
許緒は顔良にも声をかけた。彼女も満腹して休んでいたのだ。
「これからだけれど」
「胸なの」
「そう、胸らしいよ」
また顔良に話した。
「その胸のことでね」
「一体何かしら」
「行けばわかるだろ」
文醜はいささか適当な調子で彼女に話した。
「そんなことはさ」
「何かいい加減ね」

「いいじゃねえかよ。出たとこ勝負でよ」
「またそんなこと言うんだから」
「いいのいいの」
勝手にこう言う文醜だった。
「じゃあ許緒、行くか」
「うん、そうしよう」
許緒はにこりと笑って文醜に話す。
「何か春蘭様や秋蘭様はお断りらしいけれどね」
「あの二人が？」
「どうしてかしら」
そう言われて首を捻る二人だった。
「あの二人って曹操殿の腹心中の腹心だろ」
「そうよね。曹仁さんと曹洪さんと並ぶね」
「曹操殿の四天王が？」
「来たらいけないって」
「僕のその辺りの事情は知らないけれど」
それはという許緒だった。
「とにかくそうらしいよ」
「そういう集まりなの」
「何かさらに面白くなってきたな」
顔良はいぶかしみ文醜は楽しげな感じになってきていた。
「何なのかしら」
「あたいうきうきしてきたぜ」
「僕もだよ」
許緒が同意したのは文醜に対してだった。
「今からとてもね」
「だよな。あたい達気が合うよな」
「だよね。ずっと一緒にいたい位にね」
「全くだぜ。あとな」
ここでさらに言う文醜だった。

「ほら、張飛な」
「ああ。あの娘ね」
「あいつとも馬が合うよな」
「御飯一杯食べるしね」
「それに胸が小さい」
「だからね」
それでだという二人だった。
「似た者同士だからね」
「だよな。考えるのだってな」
「そんなこと面倒だし」
この辺りも同じだった。
「あれだよ。あまり考えてもな」
「仕方ないしね」
「ちょっとは考えて欲しいけれど」
顔良は二人、特に文醜を横目でじとりと見ながら呟いた。

## 第四十七話　顔良、仲間外れになるのことその五

「文ちゃんって。いつも猪突猛進だから」
「それがあたいなんだよ」
「許緒ちゃんも。それさえなかったらいいのに」
「僕は僕だよ」
許緒も許緒で言う。
「他の誰でもないしね」
「だよなあ。だからな」
「僕達はもう突っ込むだけだよ」
「それでどうして死なないのかしら」
顔良はこのことが不思議になってきていた。
「しかもいつも傷一つつかないし」
「運もあるからな」
「そうそう」
それもあるというのであった。
「あたい達戦うしかできないからな」
「お仕事はそうだよね」
「ううん、それで私はあれなのかな」
顔良は少し困った顔で話すのだった。
「そんな文ちゃん達のフォローがお仕事？」
「そういやそうだよな」
文醜もここで話す。
「昔から斗詩はあたいと一緒だけれど」
「何かっていうと。文ちゃんが無茶やって」
顔良はその昔のことを思い出しながら話すのだった。
「それでね」
「斗詩があたいを助けてくれてな」
「そんな関係なのかしら」

顔良はいささか困ったような顔になっていた。
「やっぱり」
「そうかもな。まあそれでもさ」
「それでも？」
「あたいもそれなりに斗詩助けてると思うけれどな」
文醜の今の言葉はいささか申し訳なさそうなものだった。
「それはどうかな」
「確かにそうだけれど」
それは認める顔良だった。
「実際にね。それに」
「それに？今度はどうしたんだ？」
「文ちゃんと一緒にいて嫌だって思ったことはないし」
「袁紹軍五人衆の中でもあたい達は特に絆が深いしな」
「馬賊の頃から一緒だったし」
実は二人は馬賊出身なのだ。名門の生まれやそうしたものではないのだ。そこを袁紹に誘われて彼女の配下になったのである。
「だから」
「だよなあ。じゃあ斗詩」
「ええ」
「これからも頼むな」
「わかってるわよ。それはね」
こんな話をする二人だった。そうしてだった。
二人は許緒に案内される場所に向かう。そこは。
「あれっ、街かよ」
「そこに出てなの」
「そうなんだ」
こう二人に話す許緒だった。
「それで場所は」
「ああ、何処だ？」
「何処かのお店かしら」

「そうみたいだよ」
許緒は地図を見ながらまた二人に述べた。
「桂花さんがいるお店はね」
「何だよ、ここって」
「飯店じゃないのね」
文醜と顔良はそれを見て話すのだった。その地図をだ。
「何だ？飾りものの店か？」
「ええと、それも怪しい店みたいだけれど」
「何か髑髏とかそういうのを売ってる店だよ」
許緒もこう話す。
「そういうのを元にして作ったのを売ってるお店だよ」
「ああ、曹操さんが身に着けてるみたいなやつだよな」
「ああいうのが売ってるお店ね」
「僕はそういうのは身に着けないけれど」
これは許緒の趣味だった。
「けれど沙和さんは結構行くね」
「んっ？あの眼鏡っ娘か」
「曹操さんのところに新しく入った」
「うん、あの人そういうのが好きだから」
こう話すのだった。

## 第四十七話　顔良、仲間外れになるのことその六

「それでなんだ」
「成程な。そういえばあたいもそうした装飾って着けないんだよな」
「私も」
二人はそういうものには興味がないのだった。
「髑髏とか。そういう怖可愛いっていうのか？」
「何か合わないから」
「僕もね」
それをまた言う三人だった。
「まあ。そこでやるのが楽しいのならいいがな」
「何か心配だけれど」
「そう？僕すっごく期待してるけれど」
許緒は文醜と同じ意見だった。
「桂花さんが何をしてくれるかってさ」
「あの猫耳軍師あれで結構腹黒いからなあ」
「陳花ちゃんと仲悪いしね」
文醜と顔良も荀？のことはよく知っていた。袁紹陣営と曹操陣営は共に何進の下にあるのでその関係で交流が多いのである。それでだ。
「あの二人顔を見合わせたら喧嘩するからなあ」
「何とかならないのかしら」
「桂花さんって強情だしね」
許緒も言う。
「おまけに陳花さんもだし」
「似た者同士だよな」
「姉妹で」
「あとね」
「ああ、今度そっちに加わった姪の人のことだよな」

「叔母さんって言ったら凄く起こるのね」
「そうなんだ。それも注意してね」
許緒は二人にこのことを囁いた。
「言ったら凄く起こるから」
「やっとあの極端な男嫌いがかなりましになってもか」
「相変わらず難しいのね」
「覇王丸さん達と一緒に飲むようになったよ」
それはできるようになったのである。
「あの人お酒好きだし」
「私も好きだけれど」
「あたいもだけれどな」
顔良と文醜も酒は好きなのだった。
「幾らでも飲めるし」
「食う方も好きだけれどな」
「僕もそっちは好きだけれどね」
許緒もだった。酒好きなのであった。
「お酒っていいよね。ただ幾ら飲んでも酔ったりしないけれど」
「えっ、それって」
「かなり凄いな」
「そうよね、許緒ちゃんってまさか」
「うわばみかよ」
「違うよ、僕は猪だよ」
わかっているのかわかっていないのかだ。彼女は笑ってこう言うのだった。
「文醜さんと同じだよ」
「おっ、あたいと同じかよ」
「うん、そうだよ」
その通りだとだ。許緒はにこりと笑って話すのだった。
「一直線に進むからね」
「だよな。やるからには一直線だよ」

文醜も楽しい顔で応える。
「そういうことだからな」
「うん、じゃあ着いたよ」
「おっ、早いな」
まず看板が目に入った。黒い看板に何かわざと赤い血をイメージするような文字で描かれている。そうしてなのであった。
外観もだ。蔦があったり髑髏が飾られたり蝙蝠があったりしてだ。何かが違っていた。
顔良がそれを見てだ。怪訝な顔になってこう言うのであった。
「何か中にいるみたいね」
「だよなあ。何だよここって」
文醜もそこを見て言った。
「見ているだけでうきうきしてくるな」
「えっ、そうなの」
「そうだよ。あの猫耳軍師いい趣味してるじゃねえか」
「本当にそう思うの？」
「ああ、そうだけれどよ」
「そうなの」
「だってよ。中にお化けでも何でもいておかしくないだろ」
だからだというのであった。

# 第四十七話　顔良、仲間外れになるのことその七

「だからだよ」
「だよね。若しお化けが出たら」
許緒も同じであった。にこにことしている。
「僕の鉄球で退治してやるよ」
「おう、あたいの剣もな」
文醜もにかっと笑ってその巨大な剣を背負うのだった。
「化け物の血に餓えてるぜ」
「うん、それじゃあね」
「入るか」
こう話してだった。三人は店の中に入った。そしてだった。
「桂花さん、いる？」
「よお、来てやったぜ」
許緒と文醜が笑顔で話すのであった。
「それで何するの？」
「酒でも飲むのか？」
「あっ、いらっしゃい」
典韋が三人の前に出て来た。
「季衣ちゃんだけじゃないんだ」
「おう、あたい達もな」
「お邪魔します」
「文醜さんと顔良さんも来てくれたんですね」
典韋は二人の顔を見てにこりと笑って述べた。
「それじゃあ中に」
「うん、それでさ」
許緒が典韋に尋ねた。
「何するんだよ、一体」
「それが私も知らないの」

そうだというのであった。
「今来たばかりで」
「えっ、流琉ちゃんもなの」
「そうなの。けれど桂花さんはもう用意されてるらしいよ」
「ふうん、そうなんだ」
「行こう」
典韋は笑顔で三人に告げた。
「お店の奥にね」
「ああ、じゃあな」
「お店の中にね」
「お店の人には許可を取ってるから」
典韋は三人にこのことも話した。
「だからそれは安心してね」
「そうなんだ、じゃあ気兼ねなく遊んでいいんだね」
「そうみたいよ」
典韋はまた笑顔で許緒に話す。
「それじゃあね」
「何をするのかな」
うきうきとして話しながらだった。四人で店の奥に行くとであった。
そこには郭嘉と程?がいた。そしてこう言うのであった。
「桂花さんに呼ばれましたが」
「一体何なのでしょうか」
「それがわからなくて」
「期待できます」
二人の言葉はここでは確かな違いがあった。
「ただの親睦会ではないようですし」
「桂花さんもわからない人ですから」
「あれじゃねえのか?」
ここで程?の頭の上の人形が言ってきた。勿論腹話術である。

「酒じゃねえのか？」
「宝？、そうなの」
程？はその人形に対して目を向けて尋ねた。
「お酒なのですね」
「だってよ。あの猫耳軍師無類の酒好きだぜ」
人形のふりをしてさらに話す。
「だったらそれしかねえだろ」
「そうでしょうか」
自分で言っておいてとぼけてみせる程？だった。
「何か違う気もしますが」
「ううむ、怪しいものでなければいいのですが」
郭嘉は困った顔で話してきた。
「桂花さんも突拍子のないところがありますし」
「だからそういうのがいいじゃねえの？」
文醜が郭嘉の言葉に突っ込みを入れてきた。
「出たとこ勝負って感じでさ」
「そんでそっから先は考えてるのかい？」
人形ということで問う程？だった。
「あんたは」
「いいや、全然」
「僕もだよ」
それは許緒もだった。
「全然ね。もう何が起こるか楽しみでさ」
「こりゃこの二人戦しかできねえや」
また人形のふりをした。

## 第四十七話　顔良、仲間外れになるのことその八

「厄介な話だよ」
「そろそろのようですが」
郭嘉がここで言った。
「では。それぞれの席に座って」
「はい、わかりました」
典韋が素直な声で応える。
「じゃあ今からですね」
「桂花さんを待ちましょう」
こうして一同は着席して荀?を待つ。見れば彼女達の前に壇がある。そしてだった。
そこに荀?が出て来たのであった。
「皆いるわね」
「ああ、ここにな」
文醜が笑顔で荀?に声をかける。
「で、何するんだよ」
「あら、貴女達も来てたの」
荀?は文醜と顔良の顔を見て声をかけた。
「成程ね」
「別にいいよな」
「私達がいても」
「ええ、いいわ」
それはいいとだ。目を少ししばたかせてから述べる荀?だった。
「この会には一つ条件があるけれどね」
「条件?」
「条件って?」
「それはこれから話すわ。それじゃあね」
「ああ、じゃあな」

「何なのかしら」
こうして二人も荀?の話を聞くことにした。するとだった。
彼女はだ。こう言うのであった。
「諸君!」
「えっ、諸君!?」
「諸君って」
「いきなり物々しいよな」
皆この言葉にすぐに驚きの声をあげた。
「何なんでしょうか」
「わからないです」
「けれどさ、何か」
「凄く真剣なのはわかりますね」
曹操陣営の四人はそれはすぐにわかった。
「けれど何でしょうか」
「妙な劣等感も感じます」
「何かあるのかな」
「怒ってません?桂花さん」
「胸についてどう思うであろうか」
荀?が言うのはこのことだった。
「胸が大きい。このことについてだ」
「胸?」
「胸が?」
今度は袁紹陣営の二人が言う。
「胸か」
「そのことについてどう思うかって」
「世間では大きい胸を持て囃す」
今度はこう言う荀?だった。
「山女に壁女という言葉もある」
「最低の言葉だよね」
「そうよね」

許緒と典韋が顔を見合わせて話す。
「そんな言葉って」
「人間として間違ってるわ」
「そう、胸が大きいのが何だというのだ！」
荀？は右手を拳にしてそれで壇を叩いた。
「胸が大きければそれだけ肩に負担がかかる」
「実感できませんね」
「凛ちゃんもよね」
曹操陣営の軍師二人の話であった。
「外はいいけれど中が」
「だから。胸が大きいことを自慢することは」
「最低よね」
「確かに。最低よ」
これが二人の意見であった。そうとしか思えない彼女達だった。
「そう、それで肩が凝る」
「そういえば春蘭様も」
「秋蘭さんも」
また許緒達が言う。
「何か胸が重いとか言う時あるよね」
「御身体を動かしておられるから肩は凝ったりされないらしいけれど」
「それの何処がいいのか」
荀？の言葉は続く。
「しかもだ。ものを書く時に邪魔になる」
「そういえば袁紹様もだよな」
「確かにね」
今度は文醜と顔良だった。

# 第四十七話　顔良、仲間外れになるのことその九

「書く仕事の時胸が大きくてな」
「それが邪魔になってるように見えるわよね」
「そう、胸が大きいのは余計である」
荀?は断言した。
「それを持て囃す男達、そして女達は何か！」
「何かというと」
「それは」
「それって」
「つまりは」
「愚かである！」
そうだというのであった。
「愚かでしかない！間違っているのだ！」
「よし、そうだよ！」
文醜は彼女のその言葉に両手を拳にして叫んだ。
「あんたわかってるじゃないか！」
「ひょっとして文ちゃんも」
「そんなの見ればわかるだろうがよ」
こう顔良に顔を向けて話す。
「あたいに胸はねえよ」
「私もです」
郭嘉もだった。
「それはありませんから」
「あれっ、けれど」
顔良は彼女の胸を見て怪訝な顔になって述べた。
「郭嘉さんは胸は」
「いえ、外見はそうなのですが」
「外見は?」

「中がなのです」
困った顔になって話す郭嘉だった。
「ですから」
「胸、ないですか」
「はい、ありません」
こう顔良に話す。
「まな板とも呼ばれています」
「それでなんですか」
「それでなのですが」
ここで郭嘉はさらに言うのであった。
「噂によると袁術殿もかなりのものだとか」
「あっ、袁術さんですか」
「あの方か」
顔良だけでなく文醜も言ってきた。
「あの人はまだ幼いですし」
「隔世遺伝だから絶対に将来もそうだよな」
「是非御会いしたいですね」
こんなことを言う郭嘉だった。
「同じ仲間として」
「そういえば郭嘉さんと袁術様って」
「だよなあ」
顔良と文醜は顔を見合わせて話をはじめた。
「意外と気が合いそうだけれど」
「絶対に仲良くなれるよな」
「私もそう思います」
郭嘉自身も思っていることだった。
「実際に」
「ううん、まだ一度も御会いしていないのに」
「そう思えるなんてな」
「それだけ相性がいいってことかしら」

「だよなあ、やっぱり」
「機会があれば本当に御会いしたいですね」
郭嘉は真剣だった。
「お話したいです」
「そういえば袁術さんも何進様のところにおられるし」
「会っても問題ないか」
二人もそれを聞いて話す。
「それじゃあ縁があればな」
「会うといいな」
「はい、その時を楽しみにしています」
何気に色々なパートナーのいる彼女だった。決して孤独ではない。
胸は寂しくともだ。

# 第四十七話　顔良、仲間外れになるのことその十

そしてだ。荀?の演説は最後に向かっていた。

「今私は言おう」

「むっ、それで」

「何と」

「その言葉は」

「どういったものでしょうか」

「巨乳は不要である！」

断言であった。

「何故必要なのか、邪魔なものが！」

「その通りです！」

「よくぞ仰いました！」

「荀?様！」

気付けばだ。六人以外にも娘達が集まっていた。皆胸が寂しい。

「流石曹操軍きっての名軍師！」

「偉大なる先生！」

「貧乳の救世主！」

「私は戦う！」

こんなことまで言う荀?だった。

「貧乳の為、何があろうとも！」

「ハイル荀?！」

「ジーク荀?！」

「貧乳万歳！」

「今こそ貧乳の時代よ！」

「諸君、私と共に来てくれるだろうか」

荀?は歓喜の声の中で同志達に問うた。

「この戦いに。巨乳に対する闘争に！」

「今こそ我等の立ち上がる時！」

「巨乳信仰への反撃ののろしの時！」
「そうだ、今こそ！」
「立ち上がるのよ！」
「では諸君」
荀？の手にだ。何時の間にか杯があった。そこには赤いワインがある。
「その誓いのしるしとしてだ」
「飲むんだな」
「如何にも」
その通りだと文醜に答える彼女だった。
「文醜、貴女もわかってくれたのね」
「当たり前だろ。あたいだってな」
自分はどうかというとであった。
「見ればわかるだろ」
「胸ね」
「ああ、ないんだよ」
そういうことだった。
「全然な」
「貴女を今まで誤解していたわ」
急に会話の調子が変わってきた。
「頭があれだとしか見ていなかったけれど」
「確かに考えるのは苦手だけれどさ」
「けれど。同志だったわ」
こう文醜に言うのである。
「では同志文醜よ」
「おう、同志荀？よ」
「貴女を巨乳撲滅委員会袁紹陣営支部長に任命するわ」
「おっ、格好いいねえ」
「では同志よ」
荀？の暴走は続く。

「共に！巨乳を撲滅せんことを！」
「わかったぜ、ところでな」
「ええ、何かしら」
「あたいが袁紹陣営の支部長だよな」
今任命された無茶苦茶な役職についての問いであった。
「それはわかったんだけれどな」
「言っておくけれど本部は曹操陣営にあるわよ」
荀？はこのことも話すのだった。
「当然委員長は私よ」
「いや、袁紹陣営だけかって思ってさ」
文醜が言いたいのはこのことだった。
「やっぱりあれか？孫策さんのところや董卓さんのところにも支部あるのか？」
「ええ、あるわよ」
何とあるというのであった。
「勿論ね。それでね」
「ああ、それで支部長はどうなってるんだ？」
「孫策陣営は周泰よ」
彼女だというのであった。

# 第四十七話　顔良、仲間外れになるのことその十一

「そして董卓陣営は陳宮よ」
「陳宮？」
「小生意気なチビよ」
荀？の顔がここで忌々しげなものになった。
「性格はかなりむかつくけれどね。いつもあのぼーーーっとしたのと一緒にいて」
「何か知らねえがすげえ嫌ってんだな」
「あっ、それはです」
「この前の話ですけれど」
いぶかしむ文醜にだ。曹操陣営の残る二人の軍師が話してきた。
「董卓殿のところからその呂布殿と陳宮殿が来られた時にです」
「桂花さん陳宮さんと大喧嘩しちゃったんですよ」
「向こうが悪いのよ」
口を尖らせてこう言う荀？だった。
「私が呂布と話そうとしたらムキになって言ってきてね」
「それでなのです」
「大喧嘩になったんですよ」
「何か些細な理由で喧嘩になったんだな」
それを聞いてこう言う文醜だった。
「それって」
「まあとにかくよ」
荀？は話を変えてきた。
「袁紹陣営は貴女に任せるわ」
「ああ、巨乳をぶっ潰すぜ」
こう話す彼女だった。
「任せてくれよ」
「御願いするわ。ところでね」

「ああ、今度は何だ？」
「同志になったからにはね」
荀？は微笑んで文醜に話すのだった。
「お互い真名で言い合いましょう」
「そうするんだな」
「ええ、同志だからね」
それでだというのであった。
「それでいいかしら」
「ああ、いいぜ」
文醜も明るい笑顔になって承諾した。
「それじゃああたいからな」
「真名は何ていうのかしら」
「猪々子ってんだよ」
こう名乗るのだった。
「宜しくな」
「猪々子ね」
荀？もその名前を確かに聞いた。
「わかったわ。それじゃあね」
「ああ、あんたの名前は何ていうんだ？」
「って聞いてない？周りの話から」
「あっ、そうだったか」
「そうよ。桂花っていうのよ」
荀？もまた名乗るのだった。
「宜しくね」
「ああ、じゃあ桂花よ」
「ええ、猪々子」
もう二人で真名を言い合っていた。
「お互い巨乳をな」
「やっつけましょう」
「何か物凄い話になってるけれど」

話から放っておかれている顔良がここで呟いた。
「文ちゃんと荀?さんって意外と仲良くなれるのね」
「うん、そうだね」
許緒が彼女のその言葉に頷く。
「けれど仲良くなれてよかったじゃない」
「ええ、確かに」
「ただ。顔良さんだけれど」
ここで許緒は彼女に声をかけてきた。
「多分。委員会には入られないよ」
「うっ、そうなるの」
「だって。貧乳じゃないから」
それでだというのだ。見れば彼女の胸はそれなりにある。許緒もそれを話すのであった。
「だから悪いけれどね」
「ううん、じゃあ私は」
「話は聞いていいのよ」
荀?からの言葉だ。

## 第四十七話　顔良、仲間外れになるのことその十二

「それはね。ただ」
「委員会には入られないんですね」
「その通りよ。悪いけれどね」
「そうなの。じゃあ」
「ええ、私はこのことでは貴女の真名を聞かないから」
実にしっかりしている荀?だった。
「だから私もね」
「真名をね」
「お互いにそうしましょう。他に何かがあればね」
「ええ、その時に」
「話して。聞かせてもらうから」
「わかったわ」
顔良は荀?のその言葉に微笑んで返した。
「それじゃあ。その時に」
「そうしましょう」
顔良は駄目だった。二人はそれを話しても笑顔で言い合うのだった。文醜にとっては楽しい、顔良にとっては心地よく終わった会合だった。
そしてこの時だ。袁術はだ。
張勲にだ。こう話していた。
「ううむ、さっき会ったあの者じゃが」
「藤堂竜白さんですか？」
「あの者のこと、中々覚えられぬ」
腕を組んで難しい顔で言う袁術だった。
「目立つ顔なのにのう」
「口髭で黒髪を伸ばしていて」
張勲はこう彼の容姿について話すのだった。

「それで白い着物に赤の胸当てをしていて黒い袴ですね」
「外見は目立つのにのう」
「それでもですね。実は私も」
「七乃もか」
「はい、今一つ覚えにくいです」
実際そうだというのであった。
「どうしても」
「何故かはわからぬがのう」
「まあとにかくですね」
「うむ」
「我が陣営にもまた一人人材が加わりましたね」
それは間違いないというのであった。
「それはよしとしましょう」
「そうじゃな。それでなのじゃが」
「はい、それで」
「とりあえず蜂蜜水をじゃ」
それが欲しいというのであった。
「それを飲んでから仕事じゃ」
「一杯だけですよ」
「ううむ、一杯だけか」
「飲み過ぎると後でお腹が痛くなりますよ」
にこりと笑って怖いことを話す張勲だった。
「ですから」
「仕方ないのう。それではじゃ」
「はい、一杯飲まれてから」
「お仕事の再開ですね」
「そうしないと今は駄目じゃな」
それは確かに話すのだった。
「南部の統治もあるからのう」
「何しろ今までさぼってたから大変ですよ」

ここでもにこりと笑ってこんなことを言う張勲だった。
「それを埋め合わせる為に今はがんがん働いてもらわないと」
「ううむ、お化けがいたからのう」
「お化けですねえ」
「そうじゃ。あれは真に噂だったのか？」
「あれは噂でした」
それはなのだった。
「しかしです」
「しかしとは？」
「どうやらお化け自体はいたみたいですよ」
こんなことを話す彼女だった。
「どうやら」
「何っ、それはまことか」
「はい、辺境の地、場所はよくわかりませんが」
それでもだというのだ。

# 第四十七話　顔良、仲間外れになるのことその十三

「ですが何かいたようですよ」
「お化けがのう」
「巨大な。腹が膨れてそれでいて身体は痩せ細った」
「餓えておるのか？」
何故そんな姿になるのかは袁術も知っていた。餓えの極限になればそんな姿になってしまうのである。それは知っていたのである。
「それでなのじゃな」
「どうやら。それで人を襲い食うとか」
「むむむっ、そんな化け物が実際にこの国におるのか」
「そう聞いています。ただ」
「ただとは？」
「何か退治されちゃったみたいですよ」
張勲はここでこう主に話した。
「どうやら」
「そうか。退治されたのか」
袁術はそれを聞いてだった。ほっとした顔になって言うのだった。実は失禁しそうになっていたがそれもせずに済んだのである。
「それは何よりじゃ」
「何か退治した方も謎みたいですけれどね」
「あれか？近頃国中をうろついておる白い髪の男か」
「違うみたいです。青い服で金色の髪をした」
「むっ？その者のことも聞いたことがあるぞ」
袁術は己の席でいぶかしむ顔になった。張勲は彼女の前に立って話をしているのだ。
「その者もうろついておるそうじゃな」
「そうみたいですね」
「どうも近頃この国には怪しい者が多くうろついておるのう」

「はい。ですからこの州の統治も」
「わかっておるぞ。わらわとて牧じゃ」
その自覚はある袁術だった。
「しかと治めるぞ。よいな」
「はい、それではお仕事を」
「歌の稽古もしたいのう」
「それはまた時間があれば」
「やれやれじゃ。そういえばなのじゃが」
「はい、今度は何でしょうか」
「曹操の陣営に郭嘉とかいう者がおるそうじゃな」
奇しくも袁術も彼女の名前を口にしたのであった。
「その者に一度会いたいのう」
「あっ、それは私もです」
「七乃もか」
「どういう訳かわかりませんけれど」
張勲は前置きしてから話す。
「それでも。機会があれば」
「そうじゃな。会ってみたいものじゃ」
「はい、一度曹操さんのところに行くことがあれば」
「会うとしようぞ」
「特に美羽様はあの人と相性がいいと思いますよ」
「わらわもそう思うぞ」
袁術の顔がにこにこしている。実際にそう思っているのである。
「郭嘉か、いい名前じゃな」
「以前は戯志才と名乗ってたそうですけれど」
「ううむ、何かと仲良くなれそうじゃ」
「陣営は違ってもですね」
「うむ、ではその時のことをじゃ」
「楽しみにしておきましょう」
二人で言い合うのであった。そうして袁術は大好きな蜂蜜水を飲

んだ後で仕事に戻る。彼女達も楽しみにしていることがあるのであった。

第四十七話　　完

２０１０・１１・２３

# 第四十八話　厳顔、主を見つけるのことその一



劉備達はその厳顔に会うことにした。そこでだった。

「そういえばですね」

「そうだな。紫苑がだったな」

「その厳顔と知り合いだったのだ」

劉備に関羽、張飛が言う。一行は今宿の部屋の中にいる。そこでくつろぎながら話をするのだった。

「それでなんですけれど」

「その厳顔という者」

「どんな奴なんだ？」

「話のわかる人よ」

まずはこう話す黄忠だった。

「豪放磊落な性格でね」

「ふむ。ということはだ」

その話を聞いてだ。黄忠はある者のことを思い出した。それは。

「孫策殿のところの黄蓋殿と似た性格か」

「そうね。性格だけじゃなくて喋り方も似てるわ」

実際にそうだと話す黄忠だった。

「細かいところは違うけれど」

「太守としてだけでなく武人としても立派な方だそうですね」

孔明がこう言ってきた。一行は今は寝巻きになっている。風呂あがりなのか身体が桃色にほてっている。その姿でベッドに座りながら話している。

「智勇兼備の方だとか」

「へえ、そんなに立派な人なのか」

馬超もその話を聞いて言う。

「本当に一度会ってみたいな」
「そうね。少なくとも」
馬岱はその従姉を見ながらくすくすとしている。
「姉様みたいに脳筋の方じゃないみたいだし」
「おい、何だよ脳筋って」
馬超は従妹のその言葉に顔を顰めて言い返す。
「あたしが筋肉馬鹿っていうのかよ」
「その通りではないのか？」
趙雲がくすりと笑ってここで言う。
「貴殿はだ。何かと猪突猛進だからな」
「そういうところ鈴々ちゃんとそっくりだし」
馬岱は趙雲に合わせる。
「まあそれはそれでいいんだけれど」
「悪くないのかよ」
「それでいいのだ？」
「個性だからな」
「それでいいと思うわよ」
趙雲と馬岱は馬超だけでなく張飛にも話す。
「少なくとも貴殿等が理知的だったりするとだ」
「かえって怖いしね」
「何か馬鹿にされてねえか？」
「そんな気がするのだ」
突撃派の二人は顔を見合わせて話す。
「だよな。何かな」
「確かに考えることは苦手にしてもなのだ」
「とにかくですね」
鳳統が話を元に戻してきた。
「明日、その厳顔さんと御会いしましょう」
「そうよね。本当にどんな人かしら」
劉備は素直に期待していた。

「優しい人だったらいいけれど」
「いえ、とても厳しい人です」
その劉備に話すのは魏延だった。彼女は黒い寝巻き姿である。
「それはもうかなり」
「えっ、そうなの！？」
「私が喧嘩をすればです」
魏延は驚く劉備にさらに話す。
「すぐに捕まえてお仕置きです」
「いや、それは普通ではないのか？」
関羽は魏延の話を聞いて述べた。
「確か厳顔殿は貴殿の師だったな」
「その通りだ」
「ならば弟子が悪さをすれば叱るのは当然ではないのか？」
「私もそう思うわ」
神楽も関羽の言葉に頷く。
「それはね」
「しかし喧嘩なぞ」
「いえ、喧嘩は流石に」
月はそのことを指摘する。

# 第四十八話　厳顔、主を見つけるのことその二

「悪いことだと思いますけれど」
「喧嘩は女の華だ」
魏延の言葉だ。
「それでどうしてお仕置きをされなければならないのだ」
「っていうか喧嘩なんて悪いに決まってるじゃない」
馬岱は呆れた目で魏延を見て話す。
「そりゃ怒られるわよ」
「何っ、御前に言われたくはない」
「それは私の台詞よ」
二人は向かい合って言い合いだした。
「私はな。これでもだ」
「何よ、私に文句でもあるの！？」
「最初見た時から思っていたがな」
「そうね、あんた何かむかつくのよ」
完全に二人での言い合いに移っていた。
「そのいけ好かない態度はだ」
「桃香さんにばかりべたべたして」
「私は劉備殿に忠誠を誓っているのだ」
「あんたのは忠誠じゃないでしょ」
「では何だというのだ」
「自分の胸に聞いてみなさいよ」
延々と言い争う二人だった。周りはそんな二人を見てだった。
「犬と猿ね」
「そうね」
神楽がミナの今の言葉に頷く。
「これはどう見ても」
「そのままね」

「蒲公英がこんなに言う相手なんてそういないぜ」
馬超も呆れながら見ている。
「よっぽど相性が悪いんだな」
「というか仲が悪過ぎるのだ」
張飛も困った顔をしている。
「どうなっているのだ、この二人」
「まああれだ」
趙雲だけはそんな二人を見て微笑んでいる。
「喧嘩する程というやつだな」
「それは違う」
「絶対に有り得ませんから」
二人はその趙雲に顔を向けて即座に否定した。
「そんなことは絶対にだ」
「本当に嫌いですから」
「まあそう言うのならいいがな」
趙雲はそんな二人の言葉を余裕の顔で受けている。
「さて、それではだ」
「ええ、そうね」
黄忠が趙雲の今の言葉に頷く。
「寝ましょう。夜も遅いし」
「明日に備えてな」
「お二人はどうしますか？」
劉備が趙雲に問うた。
「あの、このままじゃ」
「何、心配無用だ」
実に素っ気無く言う趙雲だった。
「そのことはだ」
「心配いらないんですか」
「そうだ、このまま寝ればいい」
「寝られます？」

「二人は外に出す」
やはりその言葉は素っ気ない。
「それで終わりだ」
「そうなんですか」
「ではだ」
「そうだな。私がやろう」
関羽が出てだった。二人を掴んでだった。
部屋に出して終わりだった。後は扉を閉めた。
「これでよし」
「あの、お二人は」
「どうなるんですか？」
「飽きたら中に入って寝るだろうな」
関羽は孔明と鳳統に答える。
「それでは。寝よう」
「何はともあれですね」
「明日に備えて」
「そういうことだ。では明日はいよいよ厳顔殿だな」
こんな話をして休息に入る一行だった。喧嘩をしている二人はそのままだ。

## 第四十八話　厳顔、主を見つけるのことその三

そして翌朝である。一行は城の中の太守の屋敷に向かった。その途中である。

「全く。昨日はだ」

「あんたのせいでね」

魏延と馬岱が憮然とした顔で見合って言い合っている。

「寝不足ではないか」

「夜遅くまで言い合ったせいでね」

「御前がそもそもだ」

「何よ、私が悪いっていうの！？」

「そうだ、悪い」

「悪いのはあんたよ」

こんな調子である。道の中でも言い合う二人だった。

しかしそんな話をしている中でだった。一行は厳顔の屋敷に来た。その屋敷を見るとだった。

「質素だな」

「そうなのだ」

関羽と張飛がその屋敷を見て言う。確かにその屋敷は他の太守のものに比べてかなり質素だった。壁も瓦も全てがそうだった。

「厳顔殿は贅沢は好まれないようだな」

「だとしたらいいことなのだ」

「これが普通ではないのか？」

魏延はそれを聞いて少しきょとんとした顔になって言った。

「太守の屋敷は」

「全然違うぞ、それは」

馬超が話す。

「あたしの家ずっと立派だったけれどな」

「そうよね。馬家の屋敷って凄かったから」

それは馬岱も言う。
「涼州の牧だったしね」
「この屋敷は」
馬超はさらに言う。
「涼州のどの太守の屋敷よりも小さいな」
「だよね。こんな小さな太守の屋敷はじめて見たよ」
「幽州にいた時の私の屋敷と同じ位か」
趙雲もこんなことを言う。
「これ位だとな」
「桃々ちゃんのところにいた時ね」
「桃香さん、また真名間違えてるわよ」
黄忠がすぐに突っ込みを入れる。
「それは」
「あっ、すいません」
「ううむ、公孫賛殿はな」
「いつも間違えられて可哀想なのだ」
関羽と張飛もその公孫賛に同情する。
「まあとにかくだ」
「ここは屋敷の中に入るのだ」
こう話してだった。一行は厳顔の屋敷に入る。するとだった。
すぐにだ。紫の波がかったやや長い髪に大人の顔をしている。細く形のいい切れ長の眉は髪と同じ色で目は勝気な漢字の琥珀の色だ。
脚がかなり露わになっている黒い服は胸が実によく見えている。かなりの巨乳だ。赤紫の帯はリボンの様子になっており髪にはかんざしがある。
そして左肩に酸と書かれた肩当がある。その彼女が一行を出迎える。一行は屋敷の中の広間で茶を前にして話をするのだった。
彼女はだ。すぐに魏延を見つけて言うのだった。
「何じゃ、御主暫く見ぬと思っておれば」
「はい、桔梗様」

魏延はその女に右膝をつき右手の平に左手を拳にして合わせて応える。
「私は今はこの方と共にいます」
「共にか」
「はい、この方とです」
こう言って劉備の方を見るのだった。
「劉備様とです」
「劉氏か」
それを聞いてだ。女の顔がぴくりと動いた。
「では皇族の方は」
「何かそうみたいです」
劉備はおっとりとした調子で答える。
「名前は劉備玄徳といいます」
「聞いたことがある」
女はまた言うのだった。

## 第四十八話　厳顔、主を見つけるのことその四

「幽州での烏丸との戦いで功績を挙げたのだったな」
「むっ、そのことを知っているのか」
「そうだったのだ」
女の言葉に関羽と張飛も眉を動かした。
「遠く益州にいてもか」
「それを知っているのだ」
「話は聞いておる」
女は二人にも答えた。
「天下のことはおおよそ知っておるつもりだ」
「相変わらずね、そうしたところは」
その女にだ。黄忠が微笑んで言ってきた。
「桔梗の耳がいいのは」
「ふむ、久しいな紫苑」
女は黄忠の顔を見ると微笑になった。
「御主もおるか」
「最初から気付いていたのではなくて？」
「そうじゃがな。しかし御主がおると話が早い」
「そうね。昔馴染みがいるとね」
「では名乗ろう」
ここでだった。女は一同にこう話した。
「わしの名は厳顔という」
「ああ、名前は聞いてるさ」
「ここの太守様ですよね」
「左様」
馬超と馬岱の言葉にも微笑んで返す。
「とはいってももうすぐ太守を辞するがな」
「それは魏延から聞いていたが」

趙雲が厳顔のその言葉に応える。
「それは何故だ？」
「うむ、ここのことも気懸かりだが」
「それでもなのか」
「そうじゃ。中原が乱れようとしている」
厳顔はこのことも知っているのだった。
「それをわしなりに何とかしたいと思ってな。中原に出てじゃ」
「それでなのか」
「そうじゃ。そこでわしに合う主の下で戦おうと思ってじゃ」
「それでしたら」
劉備がすぐに厳顔に話した。
「孫策さんはどうですか？」
「ふむ。悪くはないのだがな」
厳顔は孫策の名前を聞くと少し考える顔になって述べた。
「じゃが」
「何かありますか？」
「わしは泳げぬのじゃ」
そうだというのである。
「孫策殿のところは水軍が主じゃな」
「そうよ」
その通りだと答えたのは黄忠だった。
「黄蓋殿もおられるし」
「おお、あの御仁もおったな」
厳顔の顔が明るくなる。
「懐かしいのう」
「黄蓋殿ともお知り合いなのですか」
「ふむ、若い頃何度か会ったことがある」
関羽に答えながら笑顔で茶を飲む。
「心地よい人物じゃな」
「そういえばこの二人似てるのだ」

「そうだよな」
張飛と馬超がここで話す。
「喋り方といい」
「酒好きみたいだしな」
「そういえばそうじゃな」
それは厳顔自身も認めることだった。
「わしと黄蓋殿は似ておるわ」
「そうだな。しかし貴殿は泳げないのか」
「そうなのじゃ」
厳顔は趙雲の指摘に曇った顔を見せる。
「だからじゃ。わしは孫策殿のところはな」
「そういうことか」
「曹操殿や袁紹殿はじゃ」
厳顔はその二人の名前を出した。
「会わぬのがわかるからのう」
「二人共個性が強いからね」
黄忠もそのことはわかっていた。

# 第四十八話　厳顔、主を見つけるのことその五

「多分桔梗の個性にはね」
「合わぬ。だからこの二人もじゃ」
「じゃあ袁術さんのところも」
「もっと合わぬな」
馬岱に話した。
「絶対にな」
「そうよね。董卓さんもね」
「あそこはどうもよからぬものを感じる」
董卓についてはそうだというのだった。
「董卓殿達だけでなく他の者達も悪い御仁達ではないようだがな」
「それでもなんですか」
「よからぬものを感じる」
また言う厳顔だった。劉備にだった。
「不吉なものをじゃ」
「不吉なもの」
「まさか」
ミナと月が彼女の顔のその言葉に顔を曇らせる。
「この国を覆うそれなのかしら」
「その可能性はありますね」
「とにかくそれでなのですね」
神楽も厳顔に話す。
「仕えるべき主は」
「どうも見当たらん」
厳顔は首を傾げさせてもきた。
「中原に向かうと決めたがな」
「そういえばこの益州は牧の人がいませんね」
「そうよね」

孔明が鳳統の言葉に頷く。
「交州は孫策さんで決まりそうですけれど」
「徐州と益州は。今のところ」
「それも何とかならぬかのう」
厳顔はこのことにも難しい顔を見せた。
「それでこの州は今一つ落ち着かん」
「厳顔さんは牧にはなられないんですか」
劉備がふと尋ねた。
「申し出て。それには」
「ははは、わしの性に合わん」
そのことは一笑に伏す厳顔だった。
「そうした偉い立場にいる人間ではない」
「だからなですか」
「そうじゃ。だからこそここの太守を辞めてじゃ」
「中原になんですか」
「そうする。まあ話はこれで終わりじゃ」
厳顔はここで話を終わらせた。そうしてだった。あらためて劉備達に話す。
「さて、茶の後はじゃ」
「むっ、何だ」
「何かあるのだ?」
「街に出ぬか?」
一行をこう誘った。
「ここに閉じ篭って話してばかりというのも面白くなかろう」
「それはそうだな」
「その通りなのだ」
「だからじゃ。街に出て見回ろうぞ」
こう劉備達に話す。
「それではな」
「わかりました。それじゃあ」

こうしてだった。劉備達はだった。厳顔と共に街に出る。そこはかなり賑わっていた。
「ほほう、これは」
「いい感じだね」
趙雲と馬岱が左右に連なる店を見て話す。どの店も活気に満ちており客が盛んに出入りしている。そうしたものを見てだった。
「ものも豊富にある」
「この辺りで一番いい街じゃないかな」
「桔梗様はああ見えてもだ」
魏延がここで話す。
「いい太守なのだぞ」
「ああ見えてもというのは余計じゃ」
そこに突っ込みを入れる厳顔だった。
「全く。言うにこと欠いてのう」
「これはすいません」
「まあよいがな。しかしこの街ともすぐにお別れじゃ」
「後任の太守は誰なのだ？」
「とりあえず袁術殿のところから張勲殿が来るそうじゃ」
趙雲の問いに答える。
「それで後任が来るまで治めるらしいな」
「また癖の強いのが来るな」
馬超は張勲の名前を聞いてすぐにこう言った。
「あの人もかなりアクが強いからな」
「そうだよね。それなりに能力はあるけれど」
「黒いところもあるが根っからの悪人ではない」
厳顔は彼女のこともよくわかっていた。

# 第四十八話　厳顔、主を見つけるのことその六

「とりあえずこの街が困ることはない」
「それはそうね」
それは黄忠もわかっていた。
「それじゃあとりあえずは大丈夫ね」
「うむ。わしが中原に向かった後でもな」
「しかし袁術殿も思い切ったことをしたな」
関羽は袁術の立場になって考えてみて述べた。
「懐刀の張勲殿を送られるとはな」
「そうですよね。袁術さんにとっては一番頼りになる臣下の人ですけれど」
「その人をなんて」
「まあ一時的なことじゃ」
厳顔は孔明と鳳統にも話す。
「それはな。しかし益州の牧となるとじゃ」
「いないんですね」
「これといった人が」
「そうじゃ。そこが問題じゃ」
またこのことが話される。
「困ったことじゃ」
「誰か本当にいないと」
「益州が大変なことになりますね」
「今のうちはまだいい」
あくまで今のうちは、なのだった。
「しかしこれがじゃ」
「長引けばですね」
「よくありませんね」
「それを何とかせねばならんがのう」

深刻な話もしていた。しかしおおむねはこんな感じであった。
「あら太守さんこんにちは」
「今日は寄ってかないの？」
「どうするの？」
「うむ、今日は客人達がおるからのう」
こう店の者達に返すのだった。
「悪いがまたじゃ」
「そうなの。じゃあまたね」
「また来てね」
「ここにいる間はね」
「そうさせてもらうぞ。さて」
店の者達に応対しながらだった。劉備達に顔を向けてそのうえでこんなことを言ってきた。
「それでなのじゃが」
「はい。何か」
「この店に入ろうぞ」
見ればだ。厳顔は前にある店を指し示していた。そこは。
「この店の麺が実に美味くてのう」
「そんなにですか」
「美味くて安くて量も多い」
厳顔は満面に笑顔をたたえて勧める。
「特に特製大盛ラーメンがよいぞ」
「それ程いいのか」
「何か楽しみになってきたのだ」
「天下一品のラーメンもよいがじゃ」
こんな名前もさりげなく出る。
「ここの麺もよいぞ」
「ええと、益州というと」
「確か」
孔明と鳳統はそこから考えて言う。

「辛い味ですよね」
「それが特徴でしたけれど」
「うむ。無論この店も唐辛子と山椒をふんだんに使っておる」
その二つで辛さを出しているというのである。
「よいぞ。どうじゃ？」
「甘いお菓子はありますか？」
「そちらは」
「無論ある」
孔明と鳳統に胸を張って答える厳顔であった。
「ここは菓子もよいのじゃ」
「はわわ、それじゃあ」
「是非このお店に」
「むっ、御主達はどうやら」
厳顔は二人のことばを聞いてそうして言うのだった。

## 第四十八話　厳顔、主を見つけるのことその七

「甘いものが好きか」
「はい、作るのも食べるのも」
「どちらも大好きです」
「それはわしもじゃ」
厳顔はここで笑顔になっていた。
「甘いものも好きじゃぞ」
「そうよね。桔梗は昔からお酒もいけるけれど」
「甘いものも好きじゃ」
こう黄忠にも答える。
「しかしそれは紫苑、御主もではないか」
「そうよ。どちらもいけるわ」
「因果なものよ。どちらも好きなのは」
笑顔で話す厳顔だった。
「まあそれでじゃ」
「そうね。それじゃあ」
「ラーメンを食べに入ろうぞ」
こうしてであった。彼女達はそのラーメン屋に入った。そうしてだった。
一行の前に一つずつだ。途方もない大きさのラーメンの丼が出て来たのであった。そこには麺も具もスープも満ち満ちていた。
「ううむ、これは」
「二十玉はあるな」
関羽にその麺の数を言う趙雲だった。
「そしてチャーシューはだ」
「一キロはないか？」
関羽はそのチャーシューの量を見て述べた。
「これはかなり」

「葱にモヤシも尋常な量じゃないな」
「ゆで卵がそのまま五つも入っているのだ」
馬超と張飛もまじまじと見ている。
「これはかなりな」
「食べがいがあるのだ」
「うっ、これだけ食べたら」
劉備はその圧倒的なラーメンを前に引いている。
「間違いなく太るよね」
「はい、確実に」
「カロリーは相当なものですから」
孔明と鳳統もそれを予測していた。
「けれど物凄く美味しそうですし」
「お腹も空いてますし」
誘惑は強かった。それでだった。
「それじゃあやっぱり」
「ここは」
「うん、食べよう」
馬岱の言葉は明るい。顔もだ。
「張り切ってね」
「御前にこれが食べきれるのか」
魏延はここでも馬岱につっかかる。
「その小さな身体で」
「甘く見ないでよ」
馬岱もきっとした顔で言い返す。
「私だってね。この位はね」
「そうか、食べきれるのだな」
「そういうあんたこそどうなのよ」
「こんなものは実に軽い」
素っ気無く言ってみせる魏延だった。
「まあそこで見ていることだ」

「見なさいよ、私だってね」
二人はここでもいがみ合う。そうしてであった。
黄忠と厳顔はだ。笑顔で話をしていた。
「相変わらずラーメンも好きなのね」
「その通りじゃ。御主もそうじゃな」
「ええ、勿論よ」
「さすればじゃ」
「喜んで食べさせてもらうわ」
「そうするとしよう」
こうした話をしてだ。二人もまた食べようとする。
そしてであった。神楽達もであった。
「このラーメンは」
「辛い味付けね」
「唐辛子ですね」
それぞれ話すのだった。

# 第四十八話　厳顔、主を見つけるのことその八

「この味もいいのよね」
「そうなの」
「そんなにですか」
「ええ、そうよ」
神楽は笑顔でミナと月に話す。
「量はあるけれどそれは大丈夫ね」
「ええ、それはね」
「大丈夫ですから」
「それじゃあね」
三人も食べることを決意する。そしてであった。
全員でラーメンを食べる。その味は。
「うっ、確かに」
「美味しいです」
「それもかなり」
孔明と鳳統が劉備に話す。
「辛いのが食欲をそそって」
「どれだけでも食べられます」
「ううう、美味しいのはいいけれど」
劉備は箸を勧めながら言う。
「これだけ食べると本当に」
「それは心配ないだろ」
「そうなのだ」
馬超と張飛が劉備に言う。当然二人も食べている。しかもその勢いはかなりのものだ。
まるで稲妻の如き速さで食べながらだ。二人は劉備に話す。
「食べた分動けばな」
「それでいいのだ」

「食べた分だけ動く」
劉備も二人のその言葉に顔を向けた。
「それじゃあ食べた後は」
「というよりか姉者は」
「身体は太らないようだが」
関羽と趙雲は劉備のある部分を見ていた。そこは。
「ただ。食べた分はだ」
「胸にいっているようだが」
「これですか」
劉備もその胸を見る。己のその大きな胸をだ。
「ええと、これはですね」
「愛紗も人のことは言えないがな」
「むっ、私もか」
「見事なものだ」
その通りだった。確かに関羽の胸は大きい。それもかなりだ。
劉備に負けないだけの見事な自分の胸を見てだ。彼女は言った。
「しかしこれは」
「私も胸では不自由していないがどうすればそこまで大きくなるのだ」
「自然にだ」
実はあれこれしたことはないのだった。
「こうなったのだが」
「ほう、そうなのか」
「胸は何かすれば大きくなるものなのか」
「さてな。しかし困っている者もいるな」
「ううむ、それは」
「違うか、朱里」
趙雲はここで楽しげに笑って孔明に話を振った。
「それは」
「どうして私なんですか？」

「だから胸でだ」
その笑みのまま言う趙雲だった。
「それだが」
「それは関係ありませんっ」
やや強く断言する孔明だった。
「私はですね。まだ成長期ですから」
「そうなのか」
「そうです。ですから何の問題も」
「その通りです」
鳳統は孔明の援護に回る。
「私達は。別に」
「そうよね。私もだし」
「鈴々もなのだ」
馬岱と張飛も援軍に来た。

## 第四十八話　厳顔、主を見つけるのことその九

「まだまだこれからよ」
「こう御期待なのだ」
「何か顔触れが偏っておるのう」
厳顔はその顔触れを見て首を捻る。
「わしの気のせいか」
「まあそう思っていていいんじゃないかな」
馬超はさりげなく一方の味方をする。
「別にさ」
「それもそうか。さて、それではじゃ」
「それでは？」
「それではというと」
「あらためて食うとしよう」
今言うのはラーメンのことだった。
「ではな」
「そうね。それじゃあね」
「気合を入れて食おうぞ」
こうしてだった。一行はその巨大ラーメンを食べるのであった。
そうしてであった。
一行はラーメンを食べ終え店を出た。劉備は苦しい顔で言う。
「うう、全部食べちゃったよお」
「私もです」
「私も」
孔明と鳳統もであった。
「結局全部食べちゃいました」
「あれだけ一杯あったのに」
「大丈夫かなあ」
劉備はここで困った顔になった。

「本当に」
「だから痩せようと思えばだ」
趙雲がその彼女に話す。
「歩けばいい」
「それだけですか」
「そうだ、歩けばいい」
こう話すのだった。
「それだけでも身体をかなり使うからな」
「だといいんですけれど」
「実際姉者はだ」
今度は関羽だった。
「旅をはじめてから腰が引き締まってきているぞ」
「えっ、そうでしょうか」
「しかもだ」
関羽の指摘は続く。
「臀部の形もよくなり」
「お尻も」
「脚も奇麗になってきたのではないか？」
「何かいいこと尽くめですね」
「旅で歩くとそれだけ身体が引き締まる」
また言う関羽だった。
「それが出て来ている」
「お姉ちゃん元々奇麗なのだ」
張飛は劉備のスペックから話す。
「それが余計になのだ」
「旅をすればそれだけ」
「自信を持っていいのだ。お姉ちゃんは凄く奇麗なのだ」
「その通り」
何故かここで魏延が出て来る。
「劉備殿はまさしく天下一の」

「絶対にこいつはな」
「そうよね」
馬超と黄忠はそんな魏延を見て囁き合う。
「桃香さんのことな」
「心底からね」
「ですから自信をお持ち下さい」
とにかく魏延は必死である。
「劉備殿だけお美しければ」
「だといいんですけれど」
「はい、是非です」
「さて、それではじゃ」
ここで厳顔が足を止めた。

# 第四十八話　厳顔、主を見つけるのことその十

「次は甘味じゃが」
「はい、何処ですか」
「それでそのお店は」
「ここじゃ」
右手を指差す。するとそこに黄色い看板の店があった。
「ここの菓子は絶品じゃぞ」
「ううん、何かお店の前に来ただけで」
「凄くいい匂いがします」
とろけそうになっている孔明と鳳統であった。
「ここは期待できますね」
「それもかなり」
「左様。それではな」
「はい、入りましょう」
「今から」
「あのさ」
馬岱が目をきらきらとさせている二人に問うた。
「二人共いいかな」
「えっ、蒲公英ちゃん」
「一体何が」
「二人共さっきのラーメンの時太ったらどうしようって言ってたじゃない」
彼女が二人に今尋ねるのはこのことだった。
「そうだよね」
「ええ、そうだけれど」
「それが」
「満腹だとも言ってたよね」
馬岱はこのことも話した。

「確かに」
「ええ、確かに」
「それは」
「それじゃあさ」
馬岱はここで首を左に捻ってだ。また二人に尋ねた。
「ここで甘いものは」
「大丈夫、それは」
「平気だから」
こう言い切る二人だった。
「甘いものは別腹だから」
「それに甘いものでは太らないから」
「別腹？太らない？」
「女の子はそうだから」
「だからいいの」
「そうかなあ」
馬岱は二人の返答に今度は右に捻った。
「だったらいいけれど」
「そうなの。ですから厳顔さん」
「ここは」
「うむ、入ろうぞ」
至って平気な顔の厳顔であった。
「油っこいものの後は甘いものじゃ」
「そうですね。ですから」
「お菓子を」
「杏仁豆腐かごま団子か」
厳顔はまずこの二つを話に出した。
「どれがよいかのう」
「ええと、私は」
劉備もにこにことして話しはじめる。
「桃饅頭を」

「ふふふ、桃だからじゃな」
厳顔は劉備の真名からこう言って笑ってみせた。
「面白いことじゃな」
「えっ、面白いですか」
「どうやら劉備殿は面白い方のようじゃ」
今度はこう言う厳顔だった。
「さて、それではじゃ」
「はい、それでは」
「今度はこの店に入ろうぞ」
こう話してであった。一行は今度は菓子を楽しむのだった。そんなことをしてこの日は心ゆくまで楽しんだ一行なのであった。
そしてその日の夜。一行は厳顔の屋敷で休んだ。その時だった。
ふとだ。神楽が言うのだった。
「あの厳顔さんもまた」
「何か感じられましたか？」
「ええ、若しかしたら」
こう月に返してからだった。また言う。
「私達と一緒に戦う人なのかも」
「私達とですか」
「そんな雰囲気がするわ」
これが神楽の見たところだった。

## 第四十八話　厳顔、主を見つけるのことその十一

「まさかと思うけれど」
「そうなのですか」
「勿論ね」
神楽はここで劉備達も見る。今は皆同じ部屋にいて楽しくお茶を飲んでいるのだ。
「皆も」
「私達全員がですか」
「そうよ。一緒にね」
「私は刹那を感じますが」
「私はオロチよ」
「私はアンブロジアを」
ミナも加わってきた。
「少しずつ強くなってきている」
「それじゃあ今この国は」
「多くの魔が集まってきているわね」
神楽の顔が曇ってきた。
「間違いなくね」
「そしてこの国にも元々」
「いるわね」
「強力な魔が」
「そしてその魔は」
どうかとだ。神楽はさらに言う。
「おそらく一つ一つがそれぞれね」
「手を組み合っていますね」
「そうしているわ」
そうだというのである。
「そうしてそのうえでね」

「この国で恐ろしいことをしている」
「おそらくは混沌」
神楽は言った。
「それを為そうとしているわ」
「アンブロジアは世界を己の色で塗り潰そうとしている」
「刹那もまた」
「オロチも結局は同じね」
三人の見立てはここで一致した。
「人をこの世から消し去り」
「そのうえで自分達の望む世界を創る」
「闇の世界を」
「だからこそなのね」
神楽はここで察した顔になった。
「私達がこの世界に来た理由は」
「それを防ぐ為に」
「それで」
「そうよ。他の皆も」
草薙やテリー達のことであった。
「だからこそこの世界に」
「そうして皆その魔と戦う」
「それがこの世界での私達の運命」
「間違いないわ」
「それなら」
「私達は」
「命を賭けても」
三人の顔がそれぞれ強いものになった。
「この世界の為に」
「はい、そうですね」
「戦おう」
「ただ。月、貴女は」

神楽はここで月を見た。そのうえでの言葉だった。
「命を賭けても捨ててては駄目よ」
「捨ててては」
「知っているわ。貴女のその封印はね」
どうかというのであった。
「命を捨てるものね。貴女自身の」
「それは」
「隠す必要はないわ」
それはさせなかった。何としてもだ。
「わかっているから」
「そうですか」
「だからよ。生きなさい」
彼女への言葉だった。
「絶対に」
「けれど」
「守矢さんが言っていたわよね」
「兄さんが」
「それを忘れないで」
語る神楽もだ。優しい顔になっていた。

# 第四十八話　厳顔、主を見つけるのことその十二

「命は賭けても。捨てないで」
「決してですね」
「そうよ。決してよ」
まさにそうだというのである。
「わかったわね」
「けれどそれはどうしたら」
「答えは必ずあるから」
「答えは」
「そう、この世界に」
こう月に告げる。
「だから。いいわね」
「兄さんが仰っていたのと本当に」
「あの人は心から貴女を心配しているわ」
神楽にもよくわかることだった。痛いまでに。
「兄として」
「兄さんだから」
「そうよ。だからね」
「では私は」
神楽の言葉を受けてだ。それでなのだった。
「その考えを受けて」
「そうよ。何があってもね」
「生きるのね」
こんな話をしていたのだった。彼女達はだ。
そこにだ。厳顔が来た。それで三人に声をかけてきた。
「面白い話をしておるようじゃな」
「あっ、厳顔さん」
「聞いていたのかしら」

「まさか」
「殆ど聞いておらん」
こう返す厳顔だった。
「しかも何の話かさっぱりわからん」
「そうだったのですか」
「そうじゃ。何はともあれじゃ」
月に述べてからだ。三人の前に座りそうして言うのであった。
「御主等も目的があるのだな」
「ええ、そうよ」
神楽が答えたのだった。
「それはね」
「そして劉備殿と共におるのか」
「縁ね」
ミナが答えた。
「これはね」
「縁あって劉備殿のところに加わったか」
「不思議なことに劉備さんのところには人が集まるのよ」
神楽はこんなことも話した。
「私達にしてもそうだったし」
「そうじゃな。あの紫苑にしてもじゃ」
「黄忠さんが」
「一体？」
「あ奴はあれでも難しい奴でな」
こう黄忠に対して話すのだった。
「今まで誰にも仕えたことはないのじゃ」
「そうだったんですか」
「うむ、それは一度もなかった」
そうだったというのだ。
「しかしその紫苑がじゃ」
「ああして劉備さんと一緒にいるのは」

「それは」
「はじめて見たことじゃ。あの紫苑がな」
「それじゃあ」
「劉備さんは」
「本当に」
それをだ。三人も悟ったのだった。そしてであった。
厳顔はだ。今度は魏延を見た。そのうえでまた言うのであった。
「あの焔耶にしてもじゃ」
「魏延さんね」
「あの人は」
「あそこまで人に懐く者ではないのじゃ」
今彼女は劉備の横にいる。そこであれやこれやと世話をしているのだった。その彼女を見てだ。厳顔は今それを言うのであった。

# 第四十八話　厳顔、主を見つけるのことその十三

「全くな」
「それがああしてですか」
「劉備さんの傍にいるのは」
「あの人も」
「これは面白いのう」
厳顔は楽しげに微笑んだ。
「ではわしもじゃ」
「厳顔さんもっていうと」
「まさか」
「ご一緒に」
「うむ、行かせてもらう」
こう言うのであった。
「劉備殿と共にな」
「じゃあまたお一人ですね」
月もまた微笑んで言う。
「私達と一緒に」６６
「そういうことになるのう。さて」
「さて？」
「では飲むか」
厳顔は三人の前にあるものを出してきた。それは。
「お酒？」
「お酒ですか」
「そうじゃ。飲むか？」
巨大な徳利を三人の前に出してきたのである。
「益州の酒じゃ」
「益州のお酒というと」
ミナがそれを聞いて言った。

「あれね。お米のお酒ね」
「左様、美味いぞ」
厳顔はにこりと笑って話す。
「しかも強い」
「そんなに強いのね」
「そのお酒って」
「そうじゃ。それでどうするのじゃ？」
厳顔はまた三人に問うた。
「飲むか？どうする？」
「ええ、それじゃあ」
「喜んで」
三人も笑顔で頷く。そうしてだった。
彼女達はその酒を飲む。そこに劉備達も来る。
「あっ、お酒」
「何か美味そうだな」
「うむ、美味ぞ」
厳顔はその劉備達に対しても話す。
「では皆でな」
「あっ、有り難うございます」
「それでは」
こうしてだった。彼女達も飲むのだった。そうしてであった。
厳顔はその一行の中に加わった。それでであった。
「太守様またね」
「縁があったら来てね」
「また会おうね」
「うむ、皆も達者でな」
厳顔は郡を去る時に領民達に手を振って挨拶をするのだった。
「ではまたな」
「元気でね」
「じゃあね」

こうしてだった。彼等とも別れる。そしてだった。
劉備達の中に入る、するとだった。厳顔がここで魏延に声をかけられたのだった。
「あの、桔梗様もですか」
「そうじゃ。まあさしあたっては」
「さしあたっては」
「御主を見ねばのう」
その魏延を楽しげに見ての言葉だった。
「全く。油断も隙もないからのう」
「あの、私がですか」
「誰でもわかるぞ」
こう言うのであった。
「劉備殿じゃな」
「そ、それは」
「気持ちはわかるがもう少し目立たないようにせよ」
そっと囁くのだった。

# 第四十八話　厳顔、主を見つけるのことその十四

「よいな」
「目立たないようにですか」
「誰が見てもわかるわ」
こうも囁くのであった。
「御主のその様子はな」
「そうだったのですか」
「気付いておるのは本人だけだ」
そうだというのである。
「劉備殿だけじゃ」
「劉備殿御自身は」
「あの方はどうもな」
その劉備を見ての言葉だった。
「おっとりしておるな」
「それがまたいいのですか」
「緩くないか？多少」
「それがとても」
とにかく劉備を褒めまくる魏延だった。
「いいのでは」
「御主、べた惚れも過ぎるぞ」
そうだというのである。
「だから慎め」
「ですから私は」
「だから誰が見てもわかるぞ」
「だからですか」
「そうじゃ。まあ言っても無駄じゃろうな」
厳顔はそれもわかっているのであった。
「御主の場合は」

「左様ですか」
「本人はわかっておらぬしな」
またこのことを言う。
「本人だけはな」
「ですからそれがまた」
「だからそれはわかっておる」
劉備のその話はなのだった。
「わかっておるからじゃ」
「左様ですか」
「言っておくぞ。よいな」
「は、はい」
そんな話をしておくのだった。そのうえでだ。
その劉備にだ。行く先を尋ねたのであった。
「南蛮に行くのか」
「はい、そこです」
「ふむ。厄介な場所に行くな」
「厄介なんですか？」
「あそこは漢ではない」
厳顔は難しい顔で述べた。
「それにじゃ」
「それに？」
「あの国はしかも妙な者達がおる」
「妙な？」
「妙なとは誰なのだ？」
今度は関羽と張飛が問う。
「あの国は漢とは全く違う風俗習慣なのは聞いているが」
「どういった連中がいるのだ？」
「人間なのは間違いないがじゃ」
厳顔の顔は曇ってきていた。
「それでもじゃ」

「それでも」
「それでもというと？」
「猫じゃな。それに似ておるか」
猫だというのだった。
「それがな」
「猫？」
「猫なのだ」
「本人達は虎のつもりかのう。とにかく妙な者達じゃ」
「そういえば北の胡とはまた違うんだったな」
「そうよね。何もかもがよね」
馬超と馬岱がそれを話す。
「漢に攻めてきたことはないか」
「そうよね」
「自分達だけで生きてるよな」
「だから何もね」
こう話してだった。そうしてなのだった。
「今からそこにね」
「行くんだよね」
「覚悟しておれよ」
厳顔は話した。

# 第四十八話　厳顔、主を見つけるのことその十五

「悪い者達ではないようだがな」
「ふむ。ではどうしたものか」
今はだ。趙雲が話した。
「南蛮では」
「行くしかないですよ」
「それでも」
ここで孔明と鳳統が話す。
「劉備さんの剣を元に戻す為に」
「ですから」
だからだというのである。
「劉備さんの剣は」
「さもないと」
「まあ南蛮の地理は知っておる」
厳顔がまた話す。
「それはな」
「では案内してもらえるのね」
「うむ、任せておけ」
こう黄忠にも話す。
「ではな」
「ええ。それじゃあね」
「しかし。北の幽州から南蛮までか」
「長い旅になっているのだ」
そうだというのだった。関羽と張飛がこう話す。
「この国の北から南だからな」
「思えば遠くへ来たものなのだ」
「けれど。それだけにね」
「多くのものが手に入ったわ」

神楽とミナも話す。
「劉備さんも」
「輝きが増してきているし」
「えっ、私ですか！？」
そう言われてだった。劉備は驚いた顔になった。
「私は。そんな」
「いえ、変わってきていますよ」
そうだとだ。月も話す。
「最初は朧だった光が。強くなってきています」
「光って」
「劉備さんはこの旅で大きく変わられました」
「そうなんですか」
「御自身では気付かれていませんね」
「そんなことって」
きょとんとした顔にそのことが如実に出ている。
「ううん、私が別に」
「ではこう言いましょうか」
突きはにこりと笑って話すのだった。
「私達がこうして劉備さんのところにいますね」
「それがなんですか？」
「はい、それです」
まさにそれだというのである。
「私達が劉備さんと一緒にいることがです」
「私の光が強くなっている」
「そういうことです」
「ううん、なのかなあ」
まだそれがよくわかっていない劉備だった。自分はだ。
しかしその彼女にだ。魏延が来て言うのだった。
「あのですね」
「はい、魏延さん」

「私はです」
その劉備の顔を見ながらの言葉である。
「劉備殿の為ならば」
「私の為に」
「はい、火の中水の中」
これが魏延の言葉である。
「例え嵐であろうともです」
「何か凄いですね」
「劉備殿の為ならば何でもしますので」
「有り難うございます、魏延さん」
劉備はにこりと笑って魏延のその言葉に応える。
「ではこれからも」
「はい、この身を粉にして」
「こら、言ったであろう」
その魏延を己のところに引き寄せてだ。厳顔は言うのだった。
「あからさまにするなとな」
「それはですが」
「それは？」
「ですから隠れてです」
「隠れておらぬではないか」
これもまた誰が見てもであった。
「何一つとして」
「そうでしょうか」
「そうじゃ。全く御主は」
「はい、申し訳ないですけれど」
「誰が見てもわかります」
孔明と鳳統もこう魏延に話す。
「あの、魏延さん」
「積極的なのも程々に」
「しかし私はあくまで」

「それはわかります」
「わかり過ぎます」
そうだというのである。
「ですから本当にです」
「程々に」
「ううう・・・・・。何ということだ」
二人にまで言われ愕然となる魏延だった。しかし何はともあれだった。
一行は南蛮に向かうのだった。旅はまだ続くのであった。

第四十八話　　完

２０１０・１２・９

# 第四十九話　馬岱、真名を言うのことその一

第四十九話　馬岱、真名を言うのこと

南蛮への旅の中でだ。魏延の劉備への献身は凄まじいまででであった。

「あっ、それでしたら私が」

「私が持ちますので」

「いえいえ、私が御護りしますので」

とにかく朝から晩まで何かにつけだった。寝ても起きても劉備であった。

「わしは言ったぞ」

厳顔も呆れ果てている。

「しかとな」

「けれど効果はないのね」

「あそこまでとはのう」

こう言って呆れるばかりなのである。

「思わなかったわ」

「そうなのね」

黄忠も旧友の言葉に頷く。

「けれど魏延さんって」

「劉備殿を心から愛しておる」

それはわかるというのだ。

「しかしのう」

「度が過ぎるというのね」

「そう思わぬか、御主も」

こう黄忠に話す。今二人は森の中で横に並んで座っている。最早そこは密林で二人は倒れている木に腰掛けているのだ。

「あれはじゃ」

「それはそうだけれど」
「そう思うじゃろ」
「けれど私はいいと思うわ」
ところがだった。黄忠はここでこう言うのであった。
「あれでね」
「よいのか？」
「あくまで私の考えだけれどね」
こう断ってからさらに話す黄忠だった。
「別に何もする訳でもなし」
「実はあれでじゃ」
厳顔はその魏延のことを話す。
「あ奴は奥手なのじゃ」
「あら、そうなの」
「自分から手出しはようせん」
そうだというのだ。
「劉備殿から誘わぬ限りはな」
「それなら絶対に大丈夫ね」
「結果としてそうなる」
それを厳顔も認める。
「全く。喧嘩や戦闘では積極的じゃがな」
「色恋になるとなのね」
「あの通りだ」
別の意味で呆れている様子の厳しい顔であった。
「全く。わからぬ奴じゃ」
「けれどそう言っても」
「何じゃ、今度は」
「優しい感じよ、今の貴女は」
黄忠は旧友のその顔を見て微笑むのであった。
「とてもね」
「そ、そうか」

「そうよ。やっぱり嬉しく思ってるのね」
「まああ奴は弟子じゃからな」
一応はこう言う厳顔だった。
「わしとても見捨てることはせん」
「それも可愛い弟子ね」
「直情的に過ぎるが筋はよい」
それも認める厳顔だった。
「武芸も人間としてもな」
「そうよね。それでだけれど」
「うむ、それでじゃな」
「あの娘はこれからも見守るのね」
「釘を刺すのは忘れぬ」
これはしっかりと言うのであった。
「あそこまであからさまだと。言わずにはおれん」
「うふふ、それはそうなのね」
「そういうことじゃ」
こんな話をしてであった。厳顔は弟子を温かい目で見ていた。しかしそうではない者もいたのだった。
「全く何よ」
「どうしたのだ、蒲公英」
「あのブラックジャックよ」
馬岱は頬を膨らまさせて張飛に話す。
「あいつ何だってのよ」
「何時もお姉ちゃんの傍にいることなのだ？」
「そうよ。鈴々ちゃんは何とも思わないの？」
張飛に対して問う。

# 第四十九話　馬岱、真名を言うのことその二

「あいつのこと」
「別に何とも思わないのだ」
こう返す張飛だった。魏延は道中でも劉備にあれこれと尽くしている。その彼女を横目で見ながら話をしているのである。
「焔耶はいい奴なのだ」
「何時の間に真名で！？」
「今さっきなのだ」
張飛はあっとした顔で驚く馬岱に素っ気無く答えた。
「そうなったのだ」
「今さっきって」
「話してみるといい奴なのだ」
張飛は持ち前の天真爛漫さで話すのであった。
「それは翠も言っているのだ」
「じゃあ姉様も」
「勿論なのだ。今ではお互い真名で呼び合っているのだ」
「ちょっと、何であんな奴に」
「鈴々にとってはどうして蒲公英があいつをそこまで嫌うのかわからないのだ」
「決まってるじゃない、あいつは」
「嫌い過ぎなのだ」
張飛の顔は少しむっとしたものになっていた。
「それはかえってよくないのだ」
「けれど」
「言っておくのだ。焔耶はいい奴なのだ」
また言う張飛だった。
「それは鈴々が保障するのだ」
「だからそれは」

「いえ、そうだと思います」
「私もです」
まだ言おうとする馬岱に今度は孔明と鳳統が話す。
「魏延さんは頭が絶壁なのが気になりますけれど」
「あれは反骨の相ですね」
二人はその相も見ていた。
「誰かに逆らうものがあります」
「それが気になりますけれど」
「ほら、やっぱりそうじゃない」
馬岱はその反骨の相という言葉に食いついて話した。
「だからあいつは一緒にいたら」
「ですが顔の相全体はとてもいい方です」
「星やお名前の文字、陰陽五行から見ましても」
二人はとにかく様々な方面から人を見るのだった。まだ小さいながらも伊達に軍師をしているというわけではないのであった。
「桃香さんとの相性は最高です」
「何があろうと裏切られはしません」
「確かに多分に危険な香りはしますけれど」
「桃香さんには絶対です」
「だからいいっていうの！？」
馬岱はこのことにも不満を感じるのだった。それを顔にはっきりと出す。
「皆一体何だっていうのよ」
「だから嫌い過ぎると駄目なのだ」
またこう言う張飛だった。
「何度も言うのだ」
「何だっていうのよ、本当に」
「まあ蒲公英、あれだ」
馬超もまた従妹に話す。
「相性だろ」

「相性って」
「あいつは桃香さんとは抜群に相性がいいんだ」
それは彼女も見てわかることだった。
「けれどその代わりな」
「私とはなの」
「そういうことだろ。御前もつっかかるな」
「けれど見てるだけで」
「じゃあ見るな」
今度はこう言う馬超だった。少し怒った顔になって小柄な従妹を見下ろしている。
「全く。御前はすぐに誰かにちょっかいかけるからな」
「まあそれがいいのだがな」
趙雲はその馬岱を見て微笑んでいる。
「蒲公英はな」
「星は結構蒲公英の肩持つよな」
「嫌いではない」
実際にこう言う趙雲だった。

# 第四十九話　馬岱、真名を言うのことその三

「むしろ好きだな」
「その好きってのはどういう意味で好きなんだ？」
「色々な意味でだ」
ここでは思わせぶりな笑みを見せる趙雲だった。
「色々な、な」
「何か怪しいな」
「それは気のせいだ」
「そうは思えないけれどな」
馬超はこう言いながら首を傾げさせるのだった。
「まあとにかく。変な喧嘩はするなよ」
「その通りなのだ」
馬超と張飛が馬岱に注意する。
「戦う時は絶対に来るからな」
「無意味な喧嘩はしないに限るのだ」
「ちぇっ、鈴々ちゃんに喧嘩のことで言われるなんて」
無類の喧嘩好きである張飛にまで言われて不満を隠せない馬岱だった。
「何だっていうのよ、私って」
「鈴々が相手にするのは悪い奴とか大軍だけなのだ」
そうした相手だけだというのである。
「仲間や正しい人間とは喧嘩したりしないのだ」
「そうなの」
「そうなのだ。あと飯を奪った奴だけなのだ」
何気にこんなことも言うのであった。
「そういう奴は容赦しないのだ」
「最後は駄目ではないのか？」
趙雲がすぐに突っ込みを入れる。

「それは」
「そうなのだ？」
「そう思うがな」
こう話す趙雲だった。
「まあ私もメンマは別だが」
「星はそれにこだわり過ぎだろ」
「何を言う、メンマはだ」
馬超に対して熱く語りはじめる。
「まさに食の芸術だぞ」
「あたしもメンマは好きだけれどな」
それでもだと返す馬超だった。彼女達は食べ物の話になっていった。だが結局馬岱の魏延嫌いは変わらなかった。それは相手も同じであった。
「ふんっ」
「ふんっ」
顔を見合わせれば即座に背け合う。そんな関係であった。
「いけ好かない奴」
「腹の立つ奴だ」
馬岱も魏延も背中を向け合って言い合う。
「別について来なくてもいいのに」
「私と桃香様の邪魔をするのか」
「自分で言ってるし」
「ならば容赦はしないぞ」
「ううん、何かあの二人って」
劉備はそんな二人を見ながら呑気な調子で言うのだった。
「仲悪いのかしら」
「今気付いたの！？」
神楽もその鈍感さには驚愕であった。
「まさか」
「はい、何かそう思うんですけれど」

「あの、それはもう」
神楽は慌てた調子で劉備に話していく。
「何て言うか。一目瞭然というか」
「そうなんですか？」
「こ、この人って本当に」
「凄い天然ね」
ミナも呆然となっている。
「これまた壮絶な」
「ここまでの人はそうはいませんよ」
月も同じであった。
「私も。ここまでの人は」
「そうよね。見たことがないわね」
「私もよ」
神楽とミナもであった。

# 第四十九話　馬岱、真名を言うのことその四

「けれど。だからこそ」
「そうね」
「そこに安らぎを感じますね」
それもまた劉備なのであった。
「それが劉備さんのいいところね」
「確かに」
「そう思います」
こうも話されるのが劉備であった。
「そういう人だから」
「きっと」
「果たされますね」
また彼女達の話をするのだった。
「それは間違いないわね」
「そうね。まずは南蛮に言って」
「そこから」
「さて、南蛮までまだ少しあるのう」
今度は厳顔が周囲を見回しながら話す。木から立ち上がってであった。
「もう少しじゃがな」
「そうなのね」
「そうじゃ。しかしちと難しい場所がある」
厳顔はこう黄忠に話すのだった。
「谷があってのう」
「谷がなの」
「それが五つ」
そうだというのである。
「あるのじゃが」

「確か益州南部の五つの谷って」
「そうよね」
孔明と鳳統はそれであることを思い出した。それは。
「その全部に毒があって」
「渡ることが困難だって」
「そうなのじゃ。それが問題なのじゃ」
実際にそうだと話す厳顔だった。
「谷に落ちればそれでじゃ」
「毒にやられてしまいます」
「ましてやそこのお水を飲めば」
どうなるかということも。軍師二人は話す。
「あっという間に死んでしまいます」
「それも注意して下さい」
「ふむ、それはまた実に厄介だな」
関羽もそれを聞いて述べる。
「その五つの谷を越えなければならないとはな」
「橋はないんですか？」
劉備は厳顔にこのことを尋ねた。
「そういったものは」
「あるにはあるが」
しかしといった口調であった。
「かなり古くなっておってのう」
「そうなんですか」
「危ないのじゃ」
そうだというのである。
「渡るだけでも」
「しかも修繕の望みはないか」
関羽が考える顔でまた述べた。
「そういうことだな」
「何度も言うが益州には牧がおらん」

厳顔の顔がいささかきついものになった。
「だからじゃ。橋の修理も為されておらんのじゃ」
「困った話だ」
それを利いて腕を組む関羽だった。
「何とかしなければならないというのに」
「けれど行かないといけないのだ」
張飛が困った顔で話す。猫を思わせる顔になっている。
「お姉ちゃんの剣の為にも」
「わかっている。それはな」
「すいません」
劉備は二人の妹の言葉に暗い、申し訳のない顔になった。
「私のせいで」
「いや、義姉上の為なら」
「そんなことはいいのだ」
これが二人の返答だった。

# 第四十九話　馬岱、真名を言うのことその五

「それにその剣はだ」
「何かあると聞いているのだ」
「ええ、そうよ」
その通りだとだ。神楽が話すのだった。
「劉備さんの剣には間違いなく。この国を救うだけの力があるわ」
「この国をとなると」
「やっぱりそうしないといけないのだ」
こう言う妹二人であった。そうしてなのだった。
一行はあらためて南蛮に向かうことにした。その五つの谷を越えようというのである。まずは最初の谷に入ったのだった。
谷には橋があった。しかしだった。
「これは」
「まずいな」
趙雲と馬超が暗い顔になって述べる。
「あちこち壊れてるな」
「ここを渡るとなると」
木と縄の吊り橋だった。しかしそのあちこちが切れかけていたり壊れていたりしている。渡るにしては極めて危険な場所であった。
それを見てだ。二人は話すのだった。
「渡るにはだ」
「これは用心しないとな」
「はい。ここはですね」
「まずは鈴々ちゃんか蒲公英ちゃんに先に渡ってもらって」
「んっ？何なのだ？」
「何かあるの？」
張飛と馬岱は公明と鳳統の言葉に香を向けた。
「鈴々が先に渡るのだ」

「それで何かあるの？」
「はい、皆で命綱をしてです」
「それで先に身のこなしのいい二人に行ってもらって」
これが彼女達の考えであった。
「そのうえで安全に渡ろうと」
「それでどうでしょうか」
「いい考えね」
黄忠がその案に賛成した。
「それじゃそれでいったらどうかしら」
「はい、それじゃあ」
「二人はそれでいいでしょうか」
「何の問題もないのだ」
「喜んで行かせてもらうよ」
張飛と馬岱は快く引き受ける。そうしてであった。
命綱をした二人が先に行きそのうえで一人ずつ渡る。そうして最初の谷を越えるのだった。
その時にだ。魏延は最後に渡ろうとする劉備の傍にいた。そのうえで彼女に話すのだった。
「では参りましょう」
「はい、それじゃあ」
「何でしたら」
その劉備を護るようにしての言葉だった。
「私がこの手に持って」
「魏延さんがですか」
「お任せ下さい」
真剣な顔で言う魏延だった。
「私はこれでも力がありますから」
「それ幾ら何でも」
「お気遣いなく。それでは」
魏延は実際に劉備を抱えてそれで橋を渡った。彼女はここでも劉

備を護るのだった。
それを見てだ。関羽が唸るのだった。
「本当に見事だな」
「そうね。あそこまで桃香さんに尽くすなんて」
「忠誠心は本物だな」
「それ以上のものも強いけれど」
「確かにな」
こうしたことに今一つ疎い関羽にもわかることだった。
「あそこまで露骨だとな」
「困ったことね」
「全くだ。だが」
それでもなのだった。関羽は納得するしかないといった顔で話すのだった。
「あそこまで見事だとな」
「認めるしかないわね」
「幸い奥手の様だし」
「安心していいわね」
こんな話をしてだ。そのうえで二人も魏延を認めるのだった。しかし馬岱はこの時も嫌な顔をしていた。そうしているのであった。
何はともあれ最初の谷は越えた。しかしすぐにだった。

## 第四十九話　馬岱、真名を言うのことその六

次の谷が出て来た。今度は橋自体が消えていた。
「これはだ」
「はい、御願いします」
「是非愛紗さんに」
孔明と鳳統は声をあげた関羽に対して述べた。
「傍の丸太を切って」
「それを橋にしましょう」
「そうだな。それでは」
「ただ。それだけでは不安定ですので」
「丸い丸太一本だけですと」
軍師二人はそこまで考えていたのだった。
「ですから縦にも真っ二つにして」
「それで二本並べて」
こうも言うのだった。
「それでいきましょう」
「それでどうでしょうか」
「考えるな」
関羽も二人のことばには思わず驚嘆の声をあげた。それで言うのだった。
「そうだな。それはいいな」
「はい、それでは」
「それで」
「うむ。それではだ」
関羽は二人の言葉に頷いた。そうしてであった。
彼女はすぐに構えてだ。そのうえでまずはその得物を横に一閃させた。
その直後に跳んだ。驚くべき跳躍力だった。

「はぁっ！」
そしてそれでまた得物を一閃させ縦にも切った。丸太はそのまま落ちていき谷の上に二本並んで落ちた。それがそのまま橋になった。
「これでいいな」
「はい」
「有り難うございます」
こうしてだった。橋ができ一行は二番目の谷も越えたのだった。
そしてであった。彼等は三番目の谷に来た。今度はだ。
「これはまたな」
「そうだよな」
趙雲と馬超が声を顰めさせる。馬超の方がその色は強い。
その二人が見る橋はだ。見れば縄の橋だった。それが一本木と木につながっているだけであった。
孔明と鳳統それを見てまた言うのであった。
「ここはまた命綱です」
「今度は最初に腕力の強い人に行ってもらいたいのですけれど」
「それは何でなんだ？」
馬超が二人に対して問う。
「何で腕っぷしなんだ？」
「はい、綱渡りは手の力だけで行いますので」
「それで」
「ああ、それでか」
ここまで聞いて納得した馬超だった。そうしてだった。
彼女はだ。すぐに自分から手を挙げて言うのだった。
「それなら今度はあたしに行かせてくれ」
「馬超さんがですか」
「今度は」
「ああ。腕っぷしには自信があるからな」
左手を拳にして顔の前で振って右手はその手に添えて話す。
「だからな」

「わかりました。それじゃあ」
「ここは御願いします」
「行って来るな」
こうして今回は彼女が最初に行くのだった。そうしてであった。
この橋も渡ったのだった。また次だった。
四番目はだ。橋はなくだ。泉の上に石が何個かあった。それを見て言うのは黄忠だった。
「ここを一つずつ跳んでなのね」
「そうなのじゃ」
厳顔が答える。
「この谷はそうじゃ」
「それで落ちたら」
「終わりじゃ」
まさにそれだというのである。
「わかっておると思うがこの泉もじゃ」
「毒泉なのね」
「水が口の中に入れば死ぬ」
まさに毒故である。

# 第四十九話　馬岱、真名を言うのことその七

「だからここはじゃ」
「わかったわ。それじゃあね」
こうしてだった。一行は一つ一つ跳んでそれで進んでいく。そしてだ。
劉備は何とか慎重に進む。魏延がその彼女を見て言う。
「大丈夫です、桃香様」
「けれど何か」
「いざとなれば私がいますから」
だからだというのである。
「ですから御安心下さい」
「魏延さんが」
「いざという時は御身体を御護りします」
こう言ってやはり劉備の傍を離れないのだった。この時もだった。
劉備は無事渡り終えた。それを見てほっとする魏延だった。
「無事で何よりです」
「何が魏延さんって本当に」
「いえいえ、御気になさらずに」
劉備にはあくまで忠義である。
「それではいよいよですね」
「そうですね。五つの谷の最後ですね」
「そこを越えれば」
「いよいよ南蛮なんですね」
劉備のその顔に期待するものが宿る。
「それじゃあ」
「はい、参りましょう」
四つ目の谷も越えたのであった。そして。
最後の谷であった。ここは。

「ここなのだ？」
「何か下の泉真っ赤なんだけど」
「しかもぶくぶと出ているのだ」
「沸騰してる？まさか」
張飛と馬岱が下のその泉を覗いて言う。
「ここって」
「とんでもない場所なのだ」
「言うまでもないことじゃが」
ここで厳顔も話してきた。
「ここに落ちればじゃ」
「死にますよね」
「骨も残らん」
素っ気無いがとんでもない言葉だった、
「あっという間にだ」
「ここを渡らないといけないのだ」
「ここを渡ればいよいよ南蛮じゃ」
厳顔は張飛にこうも話した。
「それではわかるな」
「わかってはいるのだ」
張飛はそれは間違いないというのであった。
「要は落ちないといいのだ」
「怖くはないな」
「鈴々はお化け以外は怖くはないのだ」
何気に自分の弱点まで言ってしまった張飛だった。
「だからここも大丈夫なのだ」
「その割りには怯えているように見えるが？」
「鈴々はいいのだ」
自分自身はというのだ。それは確かな声によるものだった。
「けれど。お姉ちゃんは」
「劉備殿か」

「ここを渡れるのだ？」
「それは任せてくれ」
ここで言うのは魏延だった。
「私がいる限り劉備様は何があろうとも」
「それは私が言おうと思っていたのだが」
関羽は魏延の今の言葉を聞いて面白くなさそうな顔で述べた。
「どうも最近姉者の傍にいることが少なくなったな」
「それは気のせいではないのだ」
張飛はここでも困った顔を見せる。
「焔耶があまりにもおねえちゃんを独占し過ぎるのだ」
「いや、これは独占ではない」
本人はそれを否定する。
「私はただ、だ。劉備様を」
「ばればれだがな」
「あたしでもはっきりわかるぜ」
趙雲と馬超も呆れてしまっている。
「それでも桃香殿の安全は保たれているがな」
「けれど殆ど独占だよな」
「まあとにかく」
黄忠は穏やかな調子で話してきた。
「ここはね。慎重に渡りましょう」
「さて、橋はあるがじゃ」
厳顔は吊り橋を見ていた。

# 第四十九話　馬岱、真名を言うのことその八

「しかしあの橋で大丈夫だと思うか」
「難しいな」
関羽がきつい目になって答えた。見ればその吊り橋は今にも落ちそうである。縄も木の板もだ。どれもが酷い有様である。
「一人でも渡ればそれでだ」
「崩れてしまうのう」
「そうだ、危険だ」
関羽はそのことを見抜いているのだった。
「ここはどうするべきか」
「そうだな。さしあたって木はある」
趙雲は周りを見回す。それは豊富にあった。
「それではだ」
「またあれだよな。橋を作るか」
「そうするべきだな」
趙雲はこう馬超にも帰す。顔は真面目なものになっている。
「ここは」
「それじゃあ今度はあたしがやるな」
馬超は名乗り出てからその十字槍を構える。それからだった。
前にあった大木に対して突き進みそのうえでまずは横に一閃する。
「はぁっ！」
それからだった。高く跳躍しそのうえで縦にも一閃する。それで関羽と同じ様に大木で橋を作ってだ。谷にかけたのであった。
「これでいいな」
「うむ、上出来だ」
趙雲が着地した馬超に述べる。しかしであった。
「ただ、だ」
「んっ？何だ？」

「愛紗もそうだったが」
彼女の名前も出すのであった。
「見えていたぞ」
「見えていた！？何がだよ」
「相変わらず見事な緑色だな」
趙雲の顔はここでは微笑んだものになっていた。
「愛紗は奇麗な白だな」
「えっ、まさか見えてたのか！？」
「私もか！？」
馬超だけでなく関羽も趙雲の今の言葉には赤面になる。
「あたしの下着」
「斬った時にか」
「言っておくが二人共動けばすぐにだ」
趙雲は妖しげな微笑みのままその二人に話す。
「ちらちらと見えているぞ」
「じゃあ戦いの時なんかは」
「敵味方に丸見えだったのか」
「無論私もそうだろうがな」
趙雲はここで自分の服を見る。彼女の服も丈は短い。
「これではな。私も白だがな」
「いや。下着の色よりもだよ」
「見られていたのか」
二人の真っ赤な顔はそのままである。
「何てことだよ」
「この服は気に入っているのだが」
「何、気にすることはない」
趙雲の微笑みはそのままである。
「見えていても何の問題はないではないか」
「いや、あるだろ」
「それはだ」

すぐに反論する二人だった。
「見せるものじゃないんだからな」
「それでどうしてそう言うのだ」
「気にするな。見せる為のものだ」
「いや、だから下着ってのはな」
「そうではない筈だ」
二人のその反論は続く。
「あたしは見られたら恥ずかしいぞ」
「むしろ恥ずかしくない者がいるのか」
「そう思うからこそいいのではないか」
二人は趙雲にあしらわれている。そんなやり取りであった。
しかし何はともあれだ。橋はかかった。それでだった。
「念には念を押してじゃな」
「そうね」
また厳顔と黄忠が話す。
「命綱は忘れないでおこう」
「今回は特にそうしないとね」
「ここが一番危ないですね」
「私もそう思います」
孔明と鳳統も話す。
「用心には用心を重ねて」
「そうしないと」
「それじゃあ」
ミナがその弓矢に命綱をつけた。そうしてであった。

## 第四十九話　馬岱、真名を言うのことその九

谷の向かい側の大木の一本に狙いを定めてだ。そのうえで矢を放った。

矢は一直線に大木に向かい突き刺さった。そうしてからだった。

「それじゃあ」

「はい、今度は蒲公英ちゃんが御願いできますか」

「最初に行ってくれますか？」

「うん、わかったよ」

馬岱は孔明と鳳統の願いに笑顔で応える。

「それじゃあ向かい側に言ってだよね」

「そうです。命綱を大木に何重も括り付けて下さい」

「それも御願いします」

「用心に用心を重ねてだよね」

こんな話をしてであった。今回はまず馬岱が橋を渡った。彼女は何なく渡りそのうえでだった。大木に命綱を何重にも括り付けた。

それからだった。

「それじゃあ皆さん」

「渡りましょう」

軍師二人の言葉と共にであった。一行は橋を渡るのだった。

一人また一人と渡り最後はいつも通り劉備だった。やはりその横には魏延がいる。彼女は腰の命綱を見ながら劉備に話す。

「それではですね」

「はい、いよいよ」

劉備も両手を拳にして異を決した顔になる。

「ここを渡って」

「南蛮に行きましょう」

「南蛮に行けば」

どうかというのだった。

「皆で美味しい果物が食べられますね」
「はい、その通りです」
向かい側にいる他の面々は劉備の今の言葉にずっこける。しかし魏延だけは真面目な顔でだ。彼女のその言葉に頷くのだった。
「参りましょう」
「それでは」
「全ては私にお任せ下さい」
魏延の熱さはここでも変わらない。
「それでは」
「いつもすいません」
「ですからそれは御気になさらずに」
「けれど」
「私は私のしたいようにしているだけですから」
それが彼女だというのである。
「しかし何はともあれです」
「橋を渡ってですね」
「はい」
劉備に対してこくりと頷いて述べる。
「渡りましょう」
「それじゃあ」
劉備を護るようにしてそのうえでだった。二人もまた命綱を着けてそのうえで橋を渡ろうとする。二人はすぐに橋の真ん中まで来た。
「劉備さんも渡ったらいよいよね」
「そうですね」
神楽と月はその二人を見ながら話をしていた。
「南蛮ね」
「もうここが南蛮ですよね」
「その通りじゃ」
厳顔もこう二人に答える。
「ここがまさにそれじゃ」

「じゃあいよいよ剣が」
「劉備さんの剣が元通りに」
「なるぞ。ではじゃ」
「劉備さんが渡ったら」
「いよいよ」
彼女達は安心していた。これで谷は終わったと思った。だが。
劉備が足を滑らせてしまった。そしてだ。
左手から落ちようとする。一行はそれを見て慌てた。
「まずい！」
「これは！」
だが魏延がいた。彼女はすぐに劉備のその手を取った。
「劉備様！」
「ぎ、魏延さん！」
「危ない！」
慌てて彼女のその右手を掴む。そのうえで引き上げようとする。
しかしだった。
彼女は何とか劉備の手は掴めた。しかしだ。
橋に何とかしがみついているだけだった。彼女も落ちようとしている。劉備の下はその沸騰する赤い泉が顎を開いていた。
「くっ・・・・・・」
魏延は何とか劉備を引き揚げようとする。しかしだった。
中々引き揚げられない。その顔に苦渋が浮き出る。
「まずい、このままでは」
「魏延さん、ここは」
その劉備がだ。彼女の顔を見上げながら言う。

# 第四十九話　馬岱、真名を言うのことその十

「私を放して下さい」
何時の間にかその命綱は切れてしまっていた。二人共だ。
「そうすれば魏延さんは」
「嫌です」
だが、だった。魏延はその申し出はすぐに断った。
「それだけは」
「けれどそうすれば」
「大丈夫です、私は必ず」
こう言う彼女だった。
「劉備様をお護りします」
「私を」
「そうです。私は劉備様の為に」
その劉備を見ながらの言葉だった。
「この手は放しません」
「けれど」
「お助けします」
魏延の言葉は変わらない。
「この命にかえても」
「魏延さん・・・・・」
「何やってんのよ」
そしてだった。馬岱が言う。
「このままじゃ」
「どうするのじゃ、それで」
「決まってるじゃないですか」
厳顔の言葉にもすぐに言い返す。
「ここはですね」
「ふむ、ここは」

「私が行きます！」
こう言ってだった。真っ先に飛び出る彼女だった。
そのうえでだ。魏延のその身体を掴んで思いきり引き揚げたのであった。
「うんしょっと！」
「！？」
「蒲公英ちゃん！？」
「これでどうよ！」
馬岱の力が加わるとだった。魏延は劉備を引き揚げることができた。劉備はすぐに橋の上に戻ってだ。そうして魏延に付き添われながら橋を渡り終えた。
それを見てだった。既に橋の向かい側に戻っていた馬岱が言うのだった。
「よかったわね」
「御前、まさか」
「そうよ、劉備さんを助けたのよ」
こう魏延に返す馬岱だった。
「あんたじゃないわよ」
「ふん、それはわかっている」
ここではいつものやり取りだった。
「だが、だ」
「何よ」
「礼を言う」
それは言う魏延だった。
「お陰で劉備様が助かった」
「御礼なんていいのよ」
それはいいと返す馬岱だった。
「桃香さんが助かったんだからね」
「そうだな」
「あの」

その劉備がだ。魏延のところに来て言うのだった。
「魏延さん、よかったら」
「はい、何でしょうか」
「今度のことは本当に有り難うございます」
まずは礼を述べてからなのだった。
「それでなのですけれど」
「それで？」
「私を真名で呼んでくれませんか？」
「真名で、ですか」
「それで私も」
彼女自身もだというのであった。
「魏延さんのことを真名で」
「何と、私の真名を」
それを聞いてだ。魏延は目を瞠ってだ。こう劉備に問い返した。
「呼んで下さるのですか」
「いけませんか、それは」
「滅相もありません」
魏延が断る筈がなかった。

# 第四十九話　馬岱、真名を言うのことその十一

「それではですね」
「はい。それじゃあ」
「是非お呼び下さい」
これが魏延の返答だった。
「それは」
「そうですね。それじゃあ私の方も」
「桃香様とお呼びしていいのですね」
「はい、お願いします」
「信じられません」
今の魏延はまさに天にも昇らんばかりであった。
「私が。こうして」
「そうね。それはよかったじゃない」
馬岱もここで魏延に言う。
「桃香さんに真名を呼んでもらってね」
「そうじゃな。それでじゃが」
ここでまた出て来る厳顔だった。
「そなた達もじゃな」
「そなた達というと」
「私達ですか？」
「そうじゃ。仲間なのじゃ」
穏やかな笑みで二人に話すのであった。
「もうよいじゃろ。真名で呼び合え」
「しかしそれは」
「だって。あれですよ」
二人は厳顔の今の言葉には難色を示す。
「私達は」
「こいつとは」

「互いに助け合ったではないか」
しかし厳顔はまだ二人に言う。
「それではじゃ。そうせよ」
「左様ですか」
「どうしてもですね」
「反論は許さん」
厳顔の言葉が強いものになった。
「わかりました」
「それなら」
「では言い合ってみよ」
早速であった。
「よいな」
「は、はい」
「それなら」
二人はそれぞれ顔を顰めさせながらだ。こう呼び合うのだった。
「蒲公英だったな」
「焔耶よね」
「そうだ」
「そうよ」
こう言い合うのであった。
「ではだ。これからはだ」
「真名で呼び合うのね」
「そうせよ。蒲公英よ」
ここで厳顔は馬岱に顔を向けて放す。
「そなたもわかっておる筈じゃ」
「わかっているって何がですか？」
「焔耶のことじゃ」
他ならぬ彼女のことをだというのだ。
「この者は桃香殿に対して絶対の忠誠を誓っておる」
「それはそうですけれど」

「それは本物じゃ」
「はい、わかってます」
馬岱も不承不承ながら頷く。
「それは」
「そういうことじゃ。だからよいな」
「桔梗さんがそこまで仰るのなら」
「そなたもじゃ」
厳顔は魏延に対しても話すのを忘れない。
「わかっておるな」
「はい・・・・・・・」
魏延は渋々ながらも頷いた。
「蒲公英はわるいものではないな」
「それはその通りです」
「ではじゃ。よいな」
「はい、わかりました」
そうして頷いてであった。二人はまた向かい合って話す。
「それではな」
「こっちこそね」
「何かまだ違和感滅茶苦茶あるな」
馬超がそんな二人を見てぼやく。
「大丈夫かね、本当に」
「ふふふ、あれ位でいいのだ」
しかし趙雲は余裕の笑みである。
「かえってな」
「そういうものか？」
「まあ御主はあれだな」
趙雲の言葉がここで変わった。その目もだ。

# 第四十九話　馬岱、真名を言うのことその十二

「親密な方が合っているようだな」
「それはそうだけれどな」
「では御主と愛紗とでだ」
「むっ、私もか」
「今宵でも褥の中でだ。どうだ」
「えっ、まさか」
「それは」
馬超と関羽は趙雲の今の言葉にぎょっとした顔になった。
「あたしを、その」
「貴殿が」
「女三人でどうだ？面白いぞ」
「い、いや。あたしはその、あれだよ」
「私もだ。そうした趣味は」
「知るのはいいことだ」
趙雲は二人を手玉に取り続ける。
「それではだ。どうだ」
「だからいいって」
「そういうことはだ」
「やれやれ。面白くないことだ」
「そういう問題じゃないだろ」
「冗談が過ぎるぞ」
少しムキになって抗議する二人だった。
「ったくよ、いつもだけれどな」
「それでもだ」
「私はわりかし本気なのだが」
しかしまだ言う趙雲だった。
「幸いまだそうした経験はないしな」

「それでそう言うのかよ」
「全く。どういうことだ」
そんな三人のやり取りであった。そしてである。
一行はだ。あらためて周りを見回す。そこは。
「雰囲気が変わりましたね」
「明らかにですね」
孔明と鳳統が話す。見れば木々も草花もだ。これまでの場所とは違っていた。
「徐々に違ってきていましたけれど」
「それが本格的になりましたね」
「左様、ここがじゃ」
二人にもこう返す厳顔だった。
「南蛮じゃ」
「そしてここに、ですね」
「桃香さんの剣を元に戻す術がありますね」
「いよいよなんですね」
劉備もその顔を少し引き締めさせる。
「南蛮に来てそれで」
「ただ。どうしてそれが行われるか」
「それがわかりません」
軍師二人の顔がここで曇る。
「とりあえず南蛮王猛獲さんのところに行ってです」
「その人からお話を聞くべきですけれど」
「そうですね。それじゃあ」
「はい、行きましょう」
「今から」
こうしてだった。南蛮に着いた一行はこの国の王猛獲のところに向かうことになった。何はともあれ遂に南蛮に着いたのであった。

第四十九話　完

2010・12・14

# 第五十話　タムタム、子供を可愛がるのことその一

第五十話　タムタム、子供を可愛がるのこと

劉備達は南蛮に着いた。そしてである。
その中を進みながらだ。馬岱が困った顔で言うのだった。
「暑いね」
「南蛮だからね」
黄忠が彼女の言葉に応える。
「それはやっぱりね」
「当たり前なんですか」
「そうよ。南にあるから」
それでだというのである。
「それは我慢しないとね」
「ううん、私北で育ってきましたから」
見れば馬岱はぐっしょりと汗をかいている。本当に辛そうである。
「暑いのはどうも」
「北といえば私もだが」
「鈴々もなのだ」
それは関羽と張飛もであった。
「しかし特にな」
「何とも思わないのだ」
「私もだ」
それは趙雲もだった。
「幽州生まれだが。特にな」
「そうだな。特に苦しくはない」
「どうして蒲公英だけそうなのだ」
「しかもだ」
趙雲はここで馬超を見て言う。

「同じ場所で生まれ育っている翠は何ともないようだが」
「あたしは暑くても寒くても平気なんだよ」
「そうなのか」
「っていうか涼州の砂漠ってな」
そこはどうかと。馬超は一同に話す。
「昼は暑くて夜は寒いんだよ」
「はい、砂漠はそうした場所ですね」
「温度差がかなり激しいです」
孔明と鳳統が砂漠について説明をはじめた。
「水がなくて砂ばかりで」
「太陽がなくなるとです」
「気温が急に下がります」
「逆にお昼は太陽のせいで気温が高くなります」
「そう、その通りよ」
神楽が軍師二人のことばに太鼓判を出した。
「砂漠はそうした場所なのよね」
「そういう場所でずっとやってきたからな」
また話す馬超だった。
「別にこれ位はな」
「平気か」
「そうさ。それとな」
馬超はここでさらに話す。
「蒲公英って実は暑がりなんだよ」
「暑がり！？」
「そうだったのだ」
「そうなんだよな。こいつ昔っからな」
「姉様、そんなこと話さないでよ」
馬岱は従姉の言葉に困った顔で返す。
「暑がりとかそういうのって」
「けれど実際にそうだろ」

「それはそうだけれど」
「隠したって仕方ないだろ。御前昔から寒いのは平気でもな」
「暑いのはね」
実際にそうだと話す馬岱だった。
「何ていうか。じりじりとやられる感じで」
「すぐに慣れるぞ」
その馬岱に話すのだ。厳顔だった。
「三日もすればな」
「慣れますか？」
「うむ、慣れる」
そうだとも話す厳顔だった。
「だから安心せよ」
「だといいですけれど」
「とにかくじゃ。行くぞ」
また言う厳顔だった。
「猛獲の宮殿はまだ先じゃ」
「南蛮王の人ですよね」
劉備が言う。
「その猛獲さんが」
「その通りじゃ」
「一体どういう人なんでしょうか」
ここで劉備はその首をやや右に傾げさせた。

# 第五十話　タムタム、子供を可愛がるのことその二

「それで」
「わしもそれはよくわからん」
「よくですか」
「うむ。まあ人間とは聞いておる」
厳顔の口調は今一つはっきりとしないものだった。彼女にしては珍しくである。
「だから安心することじゃ」
「そこは安心するところじゃないような」
「そうですよね」
ミナと月がその彼女に突っ込みを入れる。
「人間なのは間違いないし」
「はい、ですから」
「いやいや、それがだ」
だが、だった。ここで魏延がそのことを話す。
「南蛮はとにかく謎に包まれていてだ」
「謎に」
「それでなんですか」
「そうだ。象がいて大蛇がいる」
まずはこうした動物達だった。
「巨大な鰐もいれば変わった鳥もいる」
「他の猛獣達も多いそうね」
黄忠の目が少し鋭くなる。
「何時何処から出て来てもおかしくないだけいると聞いているわ」
「毒蛇も多い」
魏延はさらに話す。
「そうした場所だ。例え王が人間でなくともだ」
「おかしくはない」

「そう仰るんですね」
「一応猛獲とは人の名前だ」
魏延はそれは確かだというのだった。
「だが、だ」
「それでもだな」
「人間とは限らないのだ」
関羽と張飛もそう思いはじめていた。
「では虎や豹が玉座にいてもだ」
「おかしくはない国なのだ」
「それかそうした猛獣に近い者だ」
魏延自身の考えである。
「そうした輩と話ができるかどうかだ」
「難しいな」
「鈴々でもそんな奴との会話は無理なのだ」
「ううむ、際悪の場合は」
「また一戦なのだ」
関羽と張飛もそのことを覚悟していた。そんな中でだった。
一行は密林の中を進んでいく。その彼等を見てだ。
虎、いや豹のそれに近い模様の服を着てブーメランを持った少女がいた。長くざんばらとした髪に澄んだ目に幼い顔をしている。その少女がだ。
隣にいる黒い髪に赤い仮面の大男に声をかけた。
「ねえタム兄ちゃん」
「チャムチャムどうした?」
「何かおかしな奴等がいるよ」
「あの連中か」
「兄ちゃんにも見えるんだ」
「タムタム見た」
こう答える仮面の男だった。
「間違いなく見た」

「そうよね、何かなあの連中」
「わからない」
まずはこう言うそのタムタムであった。
「だが」
「だが、よね」
「怪しい奴」
これは確かだという口調だった。
「猛獲に知らせるべき」
「そうだね。それでどうしようか」
「話してみる」
これがタムタムの意見だった。
「そうしてそのうえで」
「そのうえで？」
「いい奴なら何もしない」
こう妹のチャムチャムに話す。
「タムタム善人には何もしない」
「そうよね。僕だってそうだよ」
それはチャムチャムもだというのだ。
「悪い奴としか戦わないよ」
「そう。悪い奴ならやっつける」
これがタムタムの言葉だった。

# 第五十話　タムタム、子供を可愛がるのことその三

「このヘンゲハンゲザンゲで」
「そうしよう。それじゃあね」
「まずは知らせる」
タムタムはまたチャムチャムに話した。
「そうしてそのうえで」
「うん、あの連中と会って話をしよう」
こう二人で話してだった。二人は一旦その場から姿を消した。劉備達は密林の中で休憩に入ってだ。食事をはじめるのだった。
「鰐の唐揚げね」
「油はどこにあったのかしら」
神楽とミナが今食べているその鰐の唐揚げを見てそれぞれ言う。
「美味しいけれど」
「油は何処に」
「はい、それはです」
「木の油を使いました」
ここでまた孔明と鳳統が話してきた。二人は果物を食べている。
「それで調達しました」
「木を切ってそれで」
「二人共凄いよね」
劉備はその唐揚げを食べながら二人に対して述べた。
「ちゃんと油が採れる木までわかるんだから」
「水鏡先生に教えてもらいました」
「だからです」
劉備にこう答える二人だった。
「南方にはそうした木があるって」
「その通りでした」
「そうなのね。それで」

「油を」
これで神楽とミナも納得した。そうしてだ。
神楽はその唐揚げを食べながらだ。こんな話をした。
「この鰐の唐揚げはね」
「うむ」
「何かあるのかよ」
趙雲と馬超が彼女の言葉に応える。
「この唐揚げに」
「思い出とかか？」
「違うわ。ほら、東君よ」
神楽はここで彼の名前を出すのだった。
「ジョー＝東君ね」
「ああ、あの人」
馬岱が神楽のその言葉に応えた。
「ムエタイっていう蹴り技が多い格闘技使う人よね」
「彼が好きなのよ」
その鰐の唐揚げがだというのだ。
「その彼が食べているものなのよ」
「そうなんだ」
馬岱もその唐揚げを食べながら言う。
「あの人これが好きなんだ」
「ええ。確かにこの味はね」
「美味しいですね。鶏肉みたいな味で」
「それでいて癖もあってね」
「面白い味ですよね」
こう言う馬岱だった。
「とても」
「ええ、だからこれは」
「あの人が好きになるのもわかりますね」
「最初思ったわ」

ここで神楽の顔が苦笑いになった。
「そんなの美味しいのかしらって」
「けれど食べてみるとですね」
「美味しいのよね」
「それじゃあですけれど」
馬岱からの言葉である。
「大蛇の煮付けなんてのも」
「どうかしらね、それは」
「何かそういうお料理もあるんでしょうか」
「あると言えばあるじゃろ」
厳顔が話してきた。当然彼女もその唐揚げを食べている。
「ここでは蛇が多いからのう」
「それでなんですか」
「そうじゃ。ここでは蛇も多い」
そうだというのであった。
「それでは食べるのも道理じゃろうからな」
「ううん、それじゃあ大蛇の煮付けもですね」
「あるじゃろうな。まあそれでもじゃ」
「それでも？」
「蛇以外にも色々と食うものはあるぞ」
こう言ってだった。厳顔は馬岱にあるものを出してきた。それは。
「バナナですか」
「うむ、食うな」
「はい、是非」
「バナナはよいぞ」
厳顔は馬岱にそのバナナを一房与えながらそのえうで笑顔で話す。

# 第五十話　タムタム、子供を可愛がるのことその四

「美味いししかも栄養がある」
「栄養もですか」
「左様。身体にもよいからじゃ」
「どんどん食べればいいんですね」
「しかもじゃ」
厳顔はこんなことも言った。
「食べればそれでじゃ」
「まだ何かあるんですか」
「胸も大きくなる」
厳顔の胸が大きく縦に揺れる。ゆさゆさという音が聞こえんばかりだ。
「だからよいぞ」
「胸もですか」
「そうじゃ。蒲公英よ」
馬岱の真名も呼んでみせる。
「御主もじゃ。食べ続ければじゃ」
「わかりました」
馬岱は目を輝かせて頷く。
「じゃあ私頑張って」
「食べるがよいぞ」
「バナナってそんなに凄い食べ物なんですね」
「そうじゃ。では食うな」
「はい、是非」
早速そのバナナを貪り食う馬岱だった。そしてだ。
張飛に孔明、それと鳳統もだった。バナナをせっせと食べはじめていた。
「胸が大きくなるのなら」

「頑張って」
「食べないと」
「何かバナナの人気があがってきましたね」
劉備はその彼女達を見ていささか能天気に話す。
「それでおっぱいって大きくなるんですか」
「関係ないのではないのか？」
関羽の胸もここで大きく動く。
「私はバナナはあまり食べてはいないが」
「それでも胸はですよね」
「自然とこうなった」
関羽のだけでなく劉備の胸もまたここで揺れ動く。
「気付けばだ」
「私もです。本当に気付いたら」
「そういうものだと思うが」
「違うんでしょうか」
「私もそうだな」
「あたしもだよ」
このことは趙雲と馬超も同じだった。
「胸はな」
「気付けば大きくなるよな」
「そういうものだと思うが」
「違うのか？本当に」
「ははは、持っている者にはわからんことじゃ」
厳顔が破顔でその持っている者達に話す。
「そういうことはのう」
「あら、そういう桔梗も気付けばでしょ」
「それはそうじゃがな。何も胸だけに限らん」
こう黄忠に返すのだった。
「だからのう」
「そうね。何でも持っているって人はいないからね」

「そういうことじゃ。持っているとわからん」
また言う厳顔だった。
「しかし持っていなければじゃ」
「わかるもよね」
「そういうことじゃ。それではじゃ」
「ええ。ここはね」
「そういう話は止めじゃ」
厳顔は話をいささか強引に止めた。
「それでじゃな。バナナに鰐を食べ終えればじゃ」
「また出発ですね」
「もう少し行こうぞ」
こう劉備に提案する。
「桃香殿はそれでよいな」
「はい、私は」
劉備はそれでいいというのだった。
「それで御願いします」
「よし、それではじゃ」
「まずは食べましょう」
月は赤い果物を食べている。それを両手に持って自分の口に運んでいるのだ。

# 第五十話　タムタム、子供を可愛がるのことその五

「それからですね」
「そういうことじゃな。それではな」
「はい」
劉備等はそのまま食べ終え出発するつもりだった。しかしである。
ふとだ。ミナが立ち上がるのだった。
「むっ、ミナ」
「どうしたのだ？」
「シーサーがいないわ」
こう関羽と張飛に答える。
「何処に行ったのかしら」
「シーサーなら」
魏延がバナナを食べながらミナに話す。
「向こう側に行ったぞ」
「向こう側に？」
「ああ。用足しじゃないのか？」
左手を指差しながらの言葉だった。
「そんなに遠くに行っていないと思うけれどな」
「そう。わかったわ」
それを聞いて頷くミナだった。そうしてだ。
そのうえでだ。そちらに向かいながらまた皆に話す。
「シーサー。呼んで来るわ」
「うむ、それではな」
「達者で行くのだ」
こうしてだった。ミナは席を外した。
一行はとりあえずまだ食べていた。するとそこにだ。
「御前達なのだ」
「怪しい奴は」

「あれっ、この人達って」
劉備がその二人を見て言う。
「まさかと思いますけれど」
「南蛮の者か」
「絶対にそうなのだ」
関羽と張飛も言う。
「では使者か？」
「猛獲という奴からなのだ」
「猛獲？」
その名前を聞いてだ。チャムチャムがふと声をあげた。
「あんた達猛獲のこと知ってるの？」
「名前は聞いています」
劉備がチャムチャムのその言葉に応える。
「私達今からその猛獲さんに会いにいくんですけれど」
「あれっ、そうなの」
「猛獲、知ってる」
チャムチャムだけでなくタムタムも話してきた。
「あんた達も」
「それでここに来た」
「はい、そうなんです」
また二人に答える劉備だった。
「実はそれで南蛮まで」
「ふうん、そうだったんだ」
「猛獲に会いに来た」
チャムチャムとタムタムはその話を聞いてあらためて述べた。
「成程ね」
「そうだったか」
「あれっ、この人達って」
それを聞いてだ。馬岱が話す。
「まさかと思うけれど」

「うん、僕達その猛獲のところにいるの」
「世話になってる」
二人もこう話す。するとだった。
ここでだ。ミナがシーサーと共に戻って来たのだった。
「あれ、貴方達は」
「あっ、ミナ！？」
「ミナ、いたのか」
「貴方達もこの世界に来ていたのね」
こうだ。二人に対して話すのだった。
「そうだったのね」
「気付いたらここに来ていたんだ」
「そうだった」
二人はこうミナに話した。
「何か面白い世界だね」
「色々歩いてここに来た」
「それで猛獲に会って」
「今は世話になっている」
「私と同じね」
ミナは二人の話を聞いてこう言った。

## 第五十話　タムタム、子供を可愛がるのことその六

「それは」
「じゃあミナも？」
「誰かの世話になっている」
「この人に」
こう言ってだった。左手で劉備の手を指し示したのだった。
「お世話になっているの」
「そうしているか」
「そうなのか」
「そう。そうなっているの」
また話すミナだった。
「今はそうしているから」
「それはわかったけれど」
「ミナのことは」
二人はそれはわかるというのであった。そしてそのうえで彼女に更に尋ねた。
「けれどそっちのおっぱいの大きい可愛い人は」
「どうしてここに来た？」
「ええ、実はね」
ミナは劉備と自分達がここに来た理由を二人に対して細かく話した。それを聞いてだ。二人は腕を組んでこう言うのだった。
「それでなんだ」
「それで猛獲のところに行くか」
「そうなの。それでなの」
また話すミナだった。
「別に悪いことをしに来たのではないわ」
「それはわかった」
タムタムはミナの言葉に頷いて返した。

「ミナは悪人と手を組まない」
「そうよね。それじゃあこの劉備さん達もね」
「悪い奴等じゃない」
「うん、絶対にね」
「それはわかった」
「充分に」
二人はこう話していく。
「それならこれからね」
「猛獲のところに案内する」
話は決まった。そうしてであった。
二人は一行を猛獲のところに案内することになった。話は劉備達が驚く位あっさりと決まった。そうしてその案内される道中でだった。
張飛がだ。こう言うのだった。
「最初見た時は驚いたのだ」
「驚いたって？」
「チャムチャムはともかく」
そのチャムチャムに対して話す張飛だった。
「そっちのタムタムは人間には思えなかったのだ」
「そうなの」
「まずやけにでかいのだ」
その背丈はだ。張飛の優に倍以上はあった。異常なまでの大きさだった。
「大門より大きいのだ」
「大門って？」
「大門五郎。鈴々達の仲間の一人なのだ」
そうだというのである。
「そいつよりもまだでかいのだ」
「タム兄ちゃんってそんなにでかいんだ」
「大きいなんてものじゃないです」

「そうですよ」
孔明と鳳統もだ。そのタムタムを見上げて話す。
「こんなに大きいし」
「お腹は細いし」
二人はタムタムの身体全体を見て話しているのだった。
「何か凄いんですけれど」
「本当に」
「タムタム凄いか？」
そのタムタムからの言葉である。
「タムタム別におかしくない」
「おかしくはないのだ」
張飛もそれはそうではないという。
「ただ」
「ただ？」
「大きいにも程があるのだ」
こう張飛を見上げてまた言うのだった。
「多分体重も物凄いのだ」
「ああ、それは全然なの」
タムタムの体重についてはチャムチャムが話す。

# 第五十話　タムタム、子供を可愛がるのことその七

「ええと、誰か。何か白い髪で褌の人に聞いたけれど」
「白い髪で褌！？」
「凄い格好ですよ、それって」
軍師二人はその姿を聞いたうえで首を傾げさせた。
「男の人ですよね、その人って」
「そうなんですか？」
「そうなの。燕みたいな服着てそれでお髭も生やして」
チャムチャムはこう話していく。
「その人から聞いたけれど」
「ううん、何か凄い人みたいです」
「人間なんでしょうか」
「多分そうだよ」
チャムチャムの言葉だけが素っ気無い。
「だってちゃんと手足が二本ずつあって」
「あの、それだけじゃ」
「あまり断定は」
「目と耳も二つずつでお鼻とお口があって五体しっかりしてたわよ」
「それだけで人間とは言えませんよ」
「他の生き物かも知れません」
「それで人間の言葉喋ってたし」
チャムチャムと軍師二人のやり取りは見事なまでに噛み合っていなかった。しかしそれでもそのやり取りは続くのだった。
「絶対に人間だから」
「そうなんでしょうか」
「本当に」
「そうだよ。大丈夫だよ」
チャムチャムは根拠のない太鼓判を押した。

「だからね。その人がね」
「その人が？」
「何と仰ってたんですか？」
「タム兄ちゃんの身長は二メートル八十八」
まずは身長からだった。
「それでウエストは三十三センチで」
「えっ！？」
それを聞いてだ。神楽が眉を顰めさせた。
「それ本当なの！？」
「うん。体重は五十五キロだって」
「有り得ないわ」
神楽はチャムチャムの話を聞き終えて呆然となって話した。
「そんなスタイルって」
「ないの？」
「絶対に有り得ないわ」
実際にタムタムのその長身と細い腰を見て話す。
「人間の身体じゃないわよ、絶対に」
「タムタム人間」
そのタムタムが神楽に言ってきた。
「それ間違いない」
「けれど。人間の身体にはとても」
「信じる。タムタム人間」
本人はあくまで主張する。
「信じて欲しい」
「ううん、けれど」
「あの、そんなにですか？」
「タムタムさんって有り得ないんですか」
孔明と鳳統は怪訝な顔になって神楽に尋ねた。
「腰と体重が」
「そこまで」

「身長もだけれどね」
神楽はそれについても話した。
「どういった身体の構造なのかしら」
「だから普通の身体」
本人の主張は変わらない。
「それ信じる」
「ううん、それはかなり」
無理があると。神楽は腕を組んで怪訝な顔になって話す。
「無理があるけれど」
「タムタム悲しい」
実際にタムタムの言葉にそうしたものが宿った。
「神楽信じてくれない」
「それだけは」
どうしてもという彼女だった。

## 第五十話　タムタム、子供を可愛がるのことその八

「あまりにも無理があり過ぎて」
「無理なのか」
「悪いけれどね」
申し訳なさそうな顔でタムタムに話すのだった。
「それはね」
「それはなのか」
「他のことはね」
ここでだった。神楽は話を変えてきたのだった。そうして言うのだった。
「信じられるわ」
「信じてくれる、タムタムを」
「悪人では絶対にないわ」
神楽の言葉がしっかりとしたものになった。
「仮面の奥のその目を見ればね」
「わかるのか、タムタムのこと」
「ええ」
その通りだというのだった。
「わかるから」
「それはいいこと」
タムタムの声にも明るさが戻った。
「タムタム信じてもらえる。嬉しい」
「私だって人を無闇に嫌ったりはしないわ」
「そうなのか」
「タムタムもチャムチャムも。これから宜しくね」
「こちらこそ」
「宜しくね」
タムタムだけでなくチャムチャムも神楽のその言葉に応える。

「それでさっきのバナナは」
「まだあるかな」
「バナナ？」
「そう。タムタムバナナ大好き」
「僕もね」
それは二人共であった。
「バナナがあれば幸せになれる」
「美味しいよね、あれ」
「バナナだったら」
バナナについては馬岱が答える。
「私が持ってるけれど」
「本当か！？」
「持ってるの」
「うん、それに」
ここでだった。馬岱は前を指差した。するとそこには。
木があった。そしてそれにだ。バナナが房になって数えきれないだけ実っていた。
そのバナナ達を指差しながらだ。馬岱は二人にさらに話す。
「あそこにあれだけあるし」
「むっ、多いな」
「そうね。一杯あるね」
二人もそれを見て言う。
「あれだけあれば」
「皆お腹一杯に食べられるよ」
「うん。じゃあ採りに行く？」
「タムタムが行く」
「僕もね」
兄妹で同時に名乗りを挙げるのだった。
「皆そこで待っている」
「そうしたらいいよ」

「えっ、お二人がですか」
「お二人だけで」
孔明と鳳統は二人の申し出に申し訳なさそうな顔で返した。
「あの、それは」
「私達もいますから」
「いい。気にしない」
「あんなのすぐに簡単に取れるからね」
だが、だった。二人は気さくに返すのだった。
「すぐに終わる」
「じゃあ行って来るからね」
こう言ってだった。二人は跳びそれぞれの得物を使ってだ。全てのバナナを瞬く間に切り取りそのうえで両手に抱えてだ。一行の前に出してきたのだ。
「じゃあ食べる」
「すぐにね」
「ううむ、凄い跳躍だな」
「そうね」
関羽と黄忠は二人のその運動神経に注目していた。

# 第五十話　タムタム、子供を可愛がるのことその九

「これは二人共な」
「かなりできるわね」
「そう、タムタム強い」
「僕だってね」
二人の言葉はここでは得意そうなものだった。
「戦うことは好きじゃない。けれど」
「戦うからには負けないから」
「ふむ。そうした考えなのか」
趙雲が二人のその言葉に感心したような声で述べた。
「いい考えだな」
「だよな。無闇に争っても仕方ないしな」
それは馬超も言うのだった。
「確かに仮面は怖いけれどいい奴等だよな」
「とにかく皆で食べよう」
「楽しくね」
二人の言葉は変わらない。そうしてであった。
実際にそのバナナを全員で食べる。一行は車座に座りそのうえでだ。バナナを一本一本手に取って食べていくのであった。
その中でだ。タムタムはにこりとした声で言うのであった。
「楽しい」
「楽しいのだ？」
「そう、楽しい」
こう黄忠にも話す。
「タムタム今とても楽しい」
「バナナを食べているからなのだ」
「それだけじゃない」
「それだけじゃないのだ？」

「そう、子供が楽しく食べている」
見ればだ。仮面の奥の目は今は張飛達を見ていた。そのうえでの言葉だったのだ。
「それを見て。タムタム楽しい」
「子供達？というと」
張飛は一行を見回してそのうえでだった。孔明達を見て言った。
「朱里達なのだ」
「あの、鈴々ちゃんもですよ」
孔明は呆れた顔でその張飛ノ言葉に応える。
「子供なのは」
「何っ、鈴々もなのだ」
「だって。誰がどう見ても」
「鈴々は子供じゃないのだ」
自分ではこう言い張る。
「ただ小柄なだけなのだ」
「ですからそれが」
「ううむ、知らなかったのだ」
「それ本気ですか？」
鳳統はそれが信じられないといった顔であった。
「あの、私達と全然変わらない背丈と胸で」
「胸はそのうち大きくなるのだ」
かなり無茶な主張であった。
「だから子供ではないのだ」
「ううん、ですからそれは」
「無理がありますから」
「そうよ。認めるしかないじゃない」
今度は馬岱が話す。
「それはね」
「ううう、何ということなのだ」
張飛も遂に膝を屈した。そうなるしかなかった。

そうしてだった。その中でだった。タムタムはこうも言うのだった。
「五人もいる。チャムチャムも入れて」
「僕もまだ子供だからね」
「タムタム子供大好き。子供はとても大事なもの」
「大事なのね」
「そう、大事」
こう主張するタムタムだった。
「タムタム子供好き。けれど」
「けれど？」
「けれどっていうと？」
「皆タムタム怖がる」
その声が悲しげなものになってきた。
「タムタム優しいのに子供逃げる。これとても悲しいこと」
「それは間違っているのだ」
張飛は強い声でそのことを否定した。
「タムタムを怖がるのは間違っているのだ」
「間違っている？」
「そうなのだ。タムタムはとてもいい奴なのだ」
強い声での言葉だった。

# 第五十話　タムタム、子供を可愛がるのことその十

「そのタムタムを怖がるなんて間違っているのだ」
「張飛はそう思うか」
「その通りなのだ」
言い切る張飛だった。
「少なくとも鈴々はそんなことは絶対にしないのだ」
「そうよね。鈴々ちゃんってそういうことは絶対にしないわよね」
それは馬岱も保障するのだった。
「偏見とかはないから」
「偏見って何なのだ？」
張飛はこの言葉は知らなかった。
「何の言葉なのだ」
「後でじっくりと教えてやる」
呆れながら言う関羽だった。
「全く。少しは学問はだな」
「学問がなくても生きていられるのだ」
「そういう考えが駄目なのだ」
関羽は少し厳しいことを告げた。しかしだった。
彼女もタムタムを見てだ。それでこう言うのだった。
「その通りだな。タムタムは悪い者ではない」
「関羽もわかってくれるのか」
「わかる。貴殿から放たれている気は悪いものではない」
それは言う彼女だった。
「むしろ善だな」
「わかる。タムタムが」
「そうだ。それでなのだが」
「それで？」
「猛獲のいる場所は何処なのだ」

「あっちだよ」
チャムチャムが遠くを指差して言う。
「ここからすぐだよ」
「思ったより簡単に辿り着けそうだな」
関羽はチャムチャムの話を聞いて述べた。
「最初はどうなるかと思ったが」
「てっきり猛獣や蛇に悩まさせられると思ったがのう」
厳顔も言う。
「しかし思ったより楽にいったのう」
「そうだな。本当にな」
「ここまではじゃな」
しかしだった。ここでこうも言う厳顔だった。
「問題は猛獲じゃが」
「そうだな。どういった者か」
「それがわからん」
「普通の人間だよ」
またチャムチャムがこう言う。
「だから安心していいよ」
「全然あてにならないんだけれどな」
馬超も彼女の今の言葉は信じようとしない。
「さっきの褌のおっさんの話だってな」
「絶対に普通の人ではないですね」
それは月も言う。
「そんな奴がいるのかよ」
「私達の世界にはいませんでしたけれど」
「力士ではないわね」
神楽は自分が言った言葉をすぐに否定した。
「多分」
「力士にしては」
「髷をしていないようですね」

ミナと月もそれはないと見ていた。
「むしろ」
「おかしな人では」
「そういえば髷とかはなかったよ」
それは目撃者であるチャムチャムも言う。
「覇王丸とか十兵衛みたいなのはね」
「そう。やっぱりね」
ミナはチャムチャムのその言葉を聞いて頷いた。
「それじゃあその人達は」
「変態なのかしら」
「人ではないかも知れませんね」
そんな話をしてだった。とりあえずその怪人のことは放っておかれたのだった。
そしてそのうえでだ。一行はその孟獲のところに向かうのだった。
そこでまた騒動が起こるのであった。

第五十話　完

２０１０・１２・１６

# 第五十一話　孫尚香、立ち上がるのことその一

第五十一話　孫尚香、立ち上がるのこと

「胸がない人達のですか」
「はい、そうらしいですよ」
周泰にだ。呂蒙が話していた。今二人は揚州の官邸において話しているのだ。
「曹操さんのところでそんな話をしていたそうです」
「何か変わった話ですね」
呂蒙はその話を聞いて首を捻るのだった。
「けれどそれは」
「そうですよね。いいお話ですよね」
「胸は。私も」
呂蒙は困った顔になっていた。
「自信がありませんし」
「私もですよ、それは」
周泰は呂蒙以上にそうした顔になっていた。
「胸のことになると」
「どうしてもですよね」
「胸はなくてもいいと思います」
周泰の言葉は意固地なものさえあった。
「そんなもの。なくても別に」
「私もそう思います」
その考えは呂蒙も同じだった。
「けれど揚州は」
「言えないですけれどね」
「どうしても。それは」
「言えるわよ」
しかしここでだ。二人のところに孫尚香が来た。そうしてその二

人にあらためて言うのだった。
「胸なんてね、別になくてもね」
「小蓮様」
「おられたのですか」
「今この部屋の前を通り掛かったのよ」
そうだったとだ。二人に話すのだった。
「そうしたらあんた達が胸のことを話しているのが聞こえたのよ」
「すいません、下らない話をしていまして」
「今止めますので」
「いいわよ。私だってそうだし」
ところがだ。孫尚香はその話を制止しなかった。それどころかだ。
二人に対してだ。こう言うのであった。
「それでだけれどね」
「はい、それで」
「何なのでしょうか」
「胸なんてなくてもいいのよ」
彼女もこの意見であった。
「別にね。それはね」
「それはですか」
「そうなのですか」
「そうよ。胸なんてどうでもいいのよ」
孫尚香の言葉はさらに強いものになる。
「っていうか何よ。あっても邪魔でしょ」
「それは」
「何といいますか」
「大体ね、姉様達にしても」
まず指摘するのは二人の姉達であった。
「冥琳様にしても」
「あの方は特に」
「凄いですよね」

「穏もね」
陸遜もであった。
「お化けみたいな胸持って。何だってのよ」
「それで許昌で」
「胸のない人達が集まっていたそうでして」
「そうみたいね」
孫尚香はこのことも知っているのだった。話を聞きながら頷いた顔であった。
「面白い集まりじゃない。シャオそれに大賛成よ」
「大賛成とは」
「それでは小蓮様は」
揚州の貧乳組は孫尚香の言葉に顔を向けた。
「この揚州にですか」
「その貧乳の同志達を集めて」
「そうよ。やってやるわよ」
はっきりとした顔での言葉だった。
「絶対にね」
「では今から」
「そうされますか」
「そうよ。後は」
ここでだった。孫尚香の目が光ったのだった。

# 第五十一話　孫尚香、立ち上がるのことその二

そのうえでだった。大喬と小喬の二人も呼ばれてだ。孫尚香に告げられるのだった。

「いいわね。胸がなくてもね」

「はい、そうですよね」

「胸がある人だけじゃないですよね」

二人も彼女のその言葉に頷くのだった。

「小蓮様の仰る通りです」

「私達も賛成です」

「有り難う。また同志が二人増えたわね」

孫尚香は二人の参加も得てまた笑顔になった。

「見てなさいよ。巨乳に対して反旗を翻すわよ」

「あの、謀叛じゃないですから」

「反旗とは」

「謀叛じゃないけれど反旗よ」

これが今の孫尚香の言葉だった。

「巨乳。それが何だっていうのよ」

「確かにそうですね。巨乳の人達って」

「私達の気持ちがわかりませんよね」

二喬もまた言うのであった。

「胸が小さい人間のことなんて」

「それも全く」

「その通りよ。大体何でなのよ」

孫尚香の言葉はムキになっていた。

「母様も姉様達も胸大きいのにシャオだけ」

「蓮華様のおっぱいはそれ程大きくないですけれど」

「まだ」

しかしなのだった。孫権の胸はだ。

「けれど形いいですよね」
「張りも凄いですし」
「そうよ。だから蓮華姉様も敵よ」
この場合はだというのだ。
「胸がある相手は。全員敵よ」
「そういえば関羽さんにしても黄忠さんにしても」
「一緒にいた不知火舞さんやキングさんも」
二喬は彼女達のことも思い出して言う。
「凄い胸ですよね」
「あの人達もそういう人多いですよね」
「胸が大きければ何でも許されるの！？」
孫尚香の眉が顰められている。
「何だっていうのよ」
「あちらにも敵はいますね」
「それもかなり」
「それと袁術のところの」
孫尚香の強い言葉が続く。
「張勲よ。あいつだって」
「ああ、あの歌の上手い」
「あの側近の人ですよね」
「袁術はこの場合はいいのよ」
孫尚香は今は彼女についてはいいというのだった。
「中身も同じだしね」
「はい、袁術さんは中身もですよね」
「胸は」
「だからいいのよ。とにかく胸がないのを集めるのよ」
完全にムキになっている。そしてであった。
「揚州のそうした面々をね。集めるわよ」
「それだけでは駄目ではないでしょうか」
しかしだった。ここで三人のところに呂蒙が来た。周泰も一緒だ。

そしてだ。三人、とりわけ孫尚香に対して言うのであった。
「ここはです。私達だけではなく」
「どうするっていうの？」
「その許昌の方々と連絡を取り」
そうしてはというのだった。
「あとは劉備さんのところの方々ともです」
「そういえばいたわね」
孫尚香は呂蒙の言葉にすぐに思い出した。
「虎女と。あのはわわ軍師ね」
「はい、あの方々もいますから」
「味方になりそうな人は多いです」
呂蒙の言葉は真面目なものだった。
「曹操さんにしても。胸はあれですし」
「牧にもいるのね」
「その通りです。胸が小さいとはいってもです」
どうかとだ。呂蒙は彼女にしては珍しく強く話した。

# 第五十一話　孫尚香、立ち上がるのことその三

「心の中に大きなものがあればです」
「そうよね。胸が小さくてもね」
「はい、ですから」
だからだとだ。呂蒙の言葉は続く。
「小蓮様、ここは大きくいきましょう」
「そうね。これからはあれよ」
孫尚香は腕を組んで言い切った。
「貧乳の時代よ」
「では私はこのことについては」
呂蒙も必死である。
「小蓮様に全てを捧げます」
「ええ、御願いね」
そんな話をしていたのであった。そしてだ。
袁術のところにだ。早速孫尚香からの手紙が来た。それを見てだった。
「ほほう、面白い話が来たぞ」
「面白い話とは？」
「そなたには関係のないことじゃ」
傍にいる張勲には今は冷たかった。
「全く。世の中不公平じゃ」
「不公平とは？」
「わらわはわらわ自身も中身もない」
「あの、何がないんでしょうか」
「しかしそなたはそなた自身も中身も見事なものじゃ」
そうだというのであった。じとっとなった目は張勲のその目にいっている。
「だからじゃ。このことはそなたには関係のないことじゃ」

「はあ。そうなんですか」
「安心せよ。兵を動かすとかいう話ではない」
「そうですね。そんな話は聞いたことがないですし」
張勲は胸のことは知らなくともそれは知っていたのだった。
「今は揚州も北方も静かですしね」
「戦後処理だけじゃな」
それはまだ続いていた。
「しかしまあ。兵は動いてはおらん」
「はい、やっぱり平和が一番です」
張勲はにこりと笑ってそのうえで右手の人差し指を立てて離す。
「戦乱なんてない方がいいです」
「その通りじゃ。わらわは戦は好かん」
袁術はだ。それは好きではないのだった。
「歌や踊りの方がどれだけいいか」
「そうですよね。そういえばです」
「歌のことか？」
「そうです。曹操さんのところに凄く歌の上手い人がいるそうですよ」
「ふむ。そうなのか」
「何か私達と凄く縁のある人みたいです」
張勲はこんな話もするのだった。
「一度御会いしたいですよね」
「そうじゃな。わらわと仲良くなれるかも知れん」
袁術は不思議とそんな感じがしていたのだ。
「一度会ってみたいのう」
「そうですよね。けれど美羽様」
ここではだ。張勲はその大きな目をしばたたかせながらそのうえで主に問うた。
「そのお手紙は本当に」
「だからそなたには関係のないことじゃ」

内容についてはあくまで言おうとしない袁術だった。
「だから言わぬぞ」
「送り主は誰でしょうか」
内容は絶対に言わないとみてだ。張勲は尋ねる内容を変えた。
「その人は」
「孫尚香じゃ」
袁術はそれ位はとして言うのだった。
「あの者からの手紙じゃった」
「あっ、あの人からですか」
「そうじゃ。言うのはそれだけじゃ」
「わかりました。そうなのですね」
「謀叛とかいう話でもない」
袁術はそれも否定した。
「物騒な話ではないから安心せよ」
「はい、それはわかります」
しかしであった。張勲はにこやかな笑顔の中にだ。瞳の奥に何かしら光るものを含ませていた。そうしてそのうえで、なのであった。
孫策のところにだ。一通の手紙が来たのだった。それは。
「あら、珍しいわね」
「珍しいとは？」
「そうよ。ほら、袁術のところの」
傍らにいる妹にだ。こう告げるのだった。二人は今孫策の執務室にいる。そして孫権は姉のすぐ傍らに立っているのである。

## 第五十一話　孫尚香、立ち上がるのことその四

「いるでしょ。張勲」
「あの者ですか」
「あの娘からの手紙よ。袁術からじゃなくてね」
「何の手紙でしょうか」
張勲と聞いてもだ。孫権はいぶかしむばかりであった。
そしてそのいぶかしむ顔でだ。姉に対して問うた。
「一体」
「胸ね」
まずはこう言う孫策だった。
「胸の大きい面々でね」
「胸の大きい面々で、ですか」
「一緒に仲良くしないかって言ってきてるのよ」
「何故でしょうか、それは」
話を聞いてだ。孫権はさらにいぶかしむ顔になった。
「胸が大きいということで、ですか」
「そういえばだけれど」
ここでだ。孫策の目が動いた。そのうえでの言葉だった。
「小蓮があれこれと動き回っていたわね」
「そういえば最近」
孫権も姉の言葉で気付いた。
「あの娘が大喬や小喬と会っていましたね」
「そこで辻褄が合うわよね」
孫策はまた妹に話す。
「これでね」
「それでは」
「そうよ。三人の共通点は何かしら」
孫策は楽しそうに話すのだった。

「それは一体何かしら」
「胸でしょうか」
孫権もふと考えて言った。
「それは」
「そうね。私や蓮華にはあって小蓮にはないものね」
「そうですね。胸ですね」
「それよ。胸のない面々が集まってね」
「謀叛でしょうか」
「やると思う？」
孫策は今の妹の言葉には楽しげな笑顔で返した。
「あの娘が」
「シャオがですか」
「あの娘がそういう風に見えるかしら」
「いえ、それは」
そのことについてはだ。孫権もよくわかることだった。
「全くです」
「そういうことよ。あの娘はそんなことは全く考えていないわ」
「では何が目的でしょうか」
「あれよ。胸がない娘達を集めて」
どうかというのだった。
「それで胸の大きい面々と張り合うつもりなのよ」
「そんなことを考えていたのですか」
「そうよ。それを考えているのよ」
「謀叛やそうしたことではありませんが」
「気になるのね」
「どうしてその様なことを」
孫権はいぶかしむままだった。
「あの娘は。胸が小さいことなぞ」
「どうでもいいわよね」
「私はそう思います」

「私もよ」
孫策もだった。今は首を捻っている。左手でその頭を支えてだ。
そうしてそのうえで話すのだった。そのうえでの言葉であった。
「胸なんてね。本当にね」
「そうです。自然と大きくなりますし」
「あっても肩が凝るだけよ」
持っている者の言葉である。
「もう昨日だって」
「私はそれ程でもありませんが」
「貴女はあれよね」
孫権の胸を見ての姉の言葉だ。

# 第五十一話　孫尚香、立ち上がるのことその五

「大きさは程々だけれど形ね」
「形ですか」
「美乳ね。いつも思うけれどいい形よ」
「そこまでですか」
「その形のよさ、罪よ」
ここでは楽しげに笑う姉だった。
「知ってるかしら。妹でも女同士ならね」
「あの、私はそういう趣味は」
「冗談よ。それはしないから安心しなさい」
「当然です。ですから私は」
「そうよ。それでだけれど」
「それで？」
「交州はどうなったのかしら」
話すのはこのことだった。政治の話になった。
「そっちの方は」
「はい、それですが」
孫権は姉の言葉に応えてすぐに述べてきた。
「間も無く朝廷の方からです」
「話が来るのね」
「正式にです」
「そう。これで交州も治めることになるのね」
孫策は話を聞いて笑顔で言うのだった。
「遂にね」
「山越の件での功績が認められましたね」
「そうね。ただ」
「ただ？」
「暫く兵は動かせそうにないわね」

ここでこんなことを言うのだった。
「揚州と交州の二つ以外にはね」
「そうですね。今は」
「それは袁紹もだったわね」
孫策は今度は彼女の名前を出したのだった。
「あの娘の場合は私のところよりややこしかったわね」
「北と西の諸民族ですから」
「そうだったわね。それで幽州の牧を任されることになって」
「しかも今治めている四つの州が既にありますし」
「こりゃあの娘も当分動けないわね」
「そうですね。ただ」
「ただ？」
妹の今の言葉に顔を向ける。
「何なのかしら」
「あの方にとってはその方がいいのでは」
「いいっていうのに」
「あの方が政に専念されれば奇行がなくなります」
だからだというのである。
「おかしな催し等も」
「あれねえ。余裕があったらすぐにするからね」
「それがなくなりますから」
だからいいというのが孫権の言葉だった。
「だからどうでしょうか」
「確かにね。けれどあの娘も今何かがあってもね」
「動けませんか」
「残念なことにね。動けるのは」
「曹操殿と董卓殿と」
「あれね」
孫策の顔が今度は困った笑顔になった。
「その袁術ね」

「あの方ですね」
「あそこの南部の統治は楽だから」
問題はないというのである。
「兵位は出せるからね」
「何かあればですね」
「そういうことよ。中原で何かあったら」
その場合の話にもなる。
「兵を出せるのはこの三つね」
「我々と袁紹殿は今は無理と」
「その通りよ。今は徐州が危ないのかしら」
そこがだというのだった。
「牧もいないしね」
「そうですね。益州もそうですし」
「あそこはまた今のところどうにもならないわね」
「せめて徐州だけでも」
「誰かいないかしらね」
孫策は腕を組んでぼやきだした。
「本当に。牧できる人がね」
「曹操殿はどうでしょうか」
孫権は彼女の名前を出した。

# 第五十一話　孫尚香、立ち上がるのことその六

「あの方に徐州もまた」
「ああ、それね」
「はい。そうすれば問題は解決しますが」
「残念だけれどそれはできないのよ」
孫策はこう言って孫権のその言葉を退けた。
「宦官が五月蝿いのよ」
「あの張譲がですか」
「あの娘は昔張譲の親族と衝突しましたね」
「私達は只でさえ張譲に睨まれてるけれど」
それは袁紹や袁術も同じであった。州牧達は全員宦官達と対立しているのだ。そこには複雑な政治的事情があるのであった。
「私達は大将軍の派だからね」
「確かに何進将軍も問題のある方ですが」
「特に私腹を肥やしたり悪事をする方ではないからね」
「はい、ですから」
「あの人についてるけれどね」
「我々は特に深くはありませんが」
孫策達はだというのだ。
「曹操殿は」
「それに袁紹もね」
「だからですか。曹操殿に徐州は」
「そうよ。決してね」
「張譲が許さないと」
「向こうは帝を抑えているわ」
その問題もあった。事情はとかく複雑だった。
「だからそう簡単にはね」
「いきませんか」

「勿論袁紹もよ」
彼女もだというのだ。
「あの娘も曹操と同じ位張譲に嫌われてるからね」
「だからですね」
「ええ。だからね。あの娘も徐州の牧にはね」
「なれないのね」
「それで私も」
孫策自身もだというのだ。
「只でさえ交州の牧にすることさえ渋っていたのにね」
「これ以上はですか」
「そうした意味では曹操と袁紹もなのよ」
その二人もなのだった。
「特に袁紹なんて幽州も入れたら五州よ」
「勢力が大きくなり過ぎると」
「張譲の弱みは自分の兵を持っていないことよ」
それがだというのだ。
「朝廷の兵は大将軍が掌握しておられるから」
「兵を持っていない」
「帝は篭絡しているけれどね」
それでもだというのだった。その張譲はだ。兵を持っていないのである。
「それでも兵はね」
「ですね。だからこそ我々の勢力拡張を好まない」
「だからこそ徐州もまた」
「そういうことなのよね。私達三人は徐州は治められないのよ」
「本当に誰かいればいいのですが」
孫権は憂いのある顔になっている。
「さもなければ徐州の民が」
「そうよね。しっかりと治める人がいないとね」
「それは宦官にとってはどうでもいいのですね」

「あの連中は自分のことしか考えていないわ」
孫策の今の言葉は厳しいものだった。
「自分立ちの栄耀栄華だけね」
「それ以外にはですね」
「そうよ。その為にはね」
「他人がどうなってもですね」
「勿論民なんかどうでもいいわよ」
辛辣だった。彼女達にはだ。
「全くね」
「そうですね。そうした意味ではわかりやすい面々ですね」
「あまりにもね。けれどそうした連中のせいで」
孫策はその目を鋭くさせていた。そうしての言葉だった。
「民達が苦しむ道理はないわね」
「全くです。本当に」
「そうよね。まあ徐州も問題だけれど」
そしてなのだった。さらにだ。

# 第五十一話　孫尚香、立ち上がるのことその七

「貧乳ね」
「あの娘のことですか」
「変なことするわよ。全く」
孫策は今度は苦笑いであった。
「だから胸なんてどうでもいいのにね」
「その通りです。胸なぞ」
どうかというのだった。孫権も言う。
「どうでもいいのですけれど」
「自然と大きくなるわよね」
「全くです」
その通りだというのであった。二人にとってはだ。
「普通に大きくなりますが」
「あの娘だってそのうち大きくなるんじゃないの？」
「そうですね。大きくなりますね」
「それがわからないのかしら。何故かしら」
「理解できません」
二人はそんな調子だった。胸に対してあまりにも楽観的だった。
しかしだ。
孫尚香はだ。危機感を抱いていた。それも強烈なまでの。
この日は周泰と呂蒙を前にしてだ。険しい顔で話すのだった。
「それで袁紹のところはなのね」
「はい、文醜さんがです」
「協力してくれるそうです」
「そう。それはいいわ」
それを聞いてだ。満足した顔で言うのだった。
「袁紹のところにも同志がいたのね」
「そうです。私達のお友達です」

「大切な。胸のない」
「そして遂にです」
「董卓さんのところも」
そしてだ。三人の前に出て来たのはだ。彼女であった。
陳宮はだ。真剣な面持ちで三人に話すのだった。
「ねねもわかりましたです」
「私達の仲間に加わってくれるのね」
「胸が大きいことにこだわる奴は許せないのです！」
こう孫尚香に対して叫ぶ。
「揚州への使者に来たらそんな素晴しい組織があったとは知らなかったのです」
「あれっ、組織だったの？」
孫尚香はそれを聞いてきょとんとした顔になった。
「初耳だけれど」
「はい、今さっき組織になりました」
「貧乳の会です」
周泰と呂蒙が話す。
「勿論首領は小蓮様ですよ」
「おめでとうございます」
「首領？会なのに？」
孫尚香はそのことがそもそも疑問だった。
「何かおかしくないかしら、それって」
「いえ、細かいことは御気になさらずに」
「ここでは」
「何かよくわからないけれどわかったわ」
腕を組んでこう言う孫尚香だｔった。
「それじゃあね」
「はい、首領就任おめでとうございます」
「スサノオみたいになって下さいね」
何故かそんな名前も出て来た。

「あと。この方も」
「加わって下さいます」
今度出て来たのはだ。あかりだった。
彼女もだ。元気のいい声でこう言う。
「よっしゃ！来たで！」
「あかりじゃない」
「そや。胸がでかいのが何やっちゅうねん」
これが彼女の主張だった。
「そんなことにこだわる奴はアホや」
「その通りなのです！」
陳宮も言う。
「そんなことにこだわる奴に正しいことを教えてやるのです」
「その通りや。あんたもわかっとるやないか」
「そう言う御前もです」
あかりと陳宮はお互いを見て笑顔になる。
「貧乳のことがよくわかっているのです」
「貧乳こそが正義やで。うち等のこの正義、貫くで」
「そうなのです。ねねは」
彼女はだ。どうかというのだった。

# 第五十一話　孫尚香、立ち上がるのことその八

「恋殿の次に貧乳が大事なのです」
「大事なのね」
「その通りなのです」
こう言うのだった。
「この世の胸の大きい奴は恋殿以外許せないのです」
「そうです。今こそ貧乳の権利を勝ち取りましょう」
「はい、絶対に」
周泰と呂蒙もそれを言う。
「胸がないのも大きいのと同じ位素晴しいのですから」
「権利を勝ち取りましょうね」
「そうよ。同志も集まってきたし」
孫尚香はさらに自信に満ちていた。
「いよいよね。正義の名の下に」
「そや。うちの全力を使ってや」
「貧乳の王道楽土を作るのです」
この二人も加わるのだった。貧乳の輪は確実に大きくなっていた。
それはだ。遠いこの地においてもだ。孔明がふと言うのであった。
「何かどうしても」
「どうしたの？朱里ちゃん」
「どうしてかわからないけれど」
こう前置きしてから鳳統に話すのだった。
「胸のことでね」
「胸？」
「やっぱり私の胸って大きくならないのかしら」
困った顔での言葉だった。
「このままずっと」
「そうよね。私も」

「雛里ちゃんもなの」
「大きくならないのかしら」
鳳統もだ。困った顔になっている。
「どうしても」
「愛紗さんなんか」
まずは彼女の名前が出て来た。
「あんなに大きいのに」
「桃香さんも」
次は彼女だった。
「何もしないでもああなったのよね」
「そう言ってるけれど」
「そうなるのかしら」
二人でだ。俯いて暗い顔になって話すのだった。
「あそこまで」
「大きくなれるのかしら」
「若しかしたら」
ここでだ。鳳統が言った。
「あれじゃないかしら」
「あれって？」
「紫苑さんだけれど」
彼女の名前も出る。
「お子さん生まれたら胸が」
「大きくなるの？」
「そうなのかな」
こう孔明に話す。
「それで大きくなるのかしら」
「ううん、そうなのかな」
孔明は暗い顔で彼女の言葉を聞いていた。
「じゃあ私も結婚して」
「子供ができたら」

「大きくなるの？」
「そうなのかな」
こう二人で話すのだった。そしてだ。
その二人のところに張飛と馬岱も来た。そして二人に尋ねるのだった。
「どうしたのだ？暗いのだ」
「そうよ。ほら、これ食べようよ」
馬岱はここで二人にバナナを一房出す。
「元気が出るよ」
「あっ、バナナ」
「それなんですか」
「そうよ。これ食べるとね」
馬岱はもうそのバナナを剥いている。まずは先を舌でねぶっている。
「大きくなれるらしいよ」
「えっ、大きく」
「大きくなれるんですか」
「うん。神楽さんがさっき言ってたよ」
今度は先から頬張っている。そのバナナをだ。
「バナナって大きくしたい時に食べるものなのよ」
「そうなんですか」
「バナナが」
「うん。それでどう？」
あらためてだ。二人に対して問う。
「二人も食べる？」
「は、はい」
「是非共です」
二人の返答は即座であった。

# 第五十一話　孫尚香、立ち上がるのことその九

そのうえでだ。早速それを剥いて食べはじめる。それぞれ横からねぶってからだ。

「はううう、とても美味しいです」

「それに大きい・・・・・・」

「何でこんなにいやらしいのだ？」

張飛もそのバナナを勢いよくしゃぶっている。

「バナナを食べるのは」

「そうよね。何かそう思えるよね」

馬岱は今度は左右それぞれ一本ずつ持って交互に舐めている。

「バナナってね」

「けれどとても美味しいです」

「大きいですし」

「うん。ただ固さはね」

それについてはとだ。馬岱は言う。

「柔らかいよね」

「それがかえっていいんですけれど」

「食べやすいですし」

「何本でもいけるのだ」

三人はそれぞれ話す。

「だからバナナは大好きなのだ」

「それでだけれどね」

また馬岱が言ってきた。

「まだまだあるよ。それもどう？」

「はい、じゃあ」

「御願いします」

また応える軍師二人だった。そしてである。

二人はだ。もう一つ言うのであった。

「飲み物は」
「何かありますか？」
「うん、これ」
今度出してきたのはだ。白い液体だった。杯の中にある。
「これどう？」
「それは椰子の」
「椰子の実の中の」
「そう。お汁よ」
まさにそれだというのだ。
「白く濁ってるけれどどうかな」
「何かそれも凄くいやらしいのだ」
またこう言う張飛だった。
「バナナもあってそれだと余計にそう思えるのだ」
「けれど美味しそうね」
「うん、とても」
孔明と鳳統は椰子の汁についても目を向けた。
「白く濁っているだけじゃなくて」
「どろりとして粘り気があって」
「この液って普通のよりずっと粘りがあるのよ」
また言う馬岱だった。
「もうね。濃くて喉の奥に絡み付いてね」
「そこまでなんですか」
「ねばねばとしていて」
「うん。それじゃあどう？」
また二人に問う馬岱だった。
「これ飲む？」
「はい、是非」
「飲ませて下さい」
二人は目を輝かせんばかりになっている。そのうえでの言葉だった。

「私最近そうした白いのが大好きになったんです」
「どうしてかわからないけれど」
「ううん、ただ飲んでいると」
張飛はだ。実際にその汁を飲みながら話す。
「妙な感じなのだ」
「これって本当にお汁かな」
馬岱は首を傾げさせている。
「何か別の。椰子じゃない気もするけれど」
「それは気のせいですよ」
「間違い無く椰子のお汁ですよ」
軍師二人はそれは保障するのだった。
「それじゃあ今から」
「飲みましょう」
「うん、じゃあどうぞ」
笑顔で差し出す馬岱だった。
「飲んでね」
「はい、それじゃあ」
「御願いします」
こうしてだった。二人はその白く濁った濃い汁を飲むのだった。
それとバナナもだ。
「何か大きくならなくても」
「そうよね」
そしてそのうえであらためて言うのだった。

2014

# 第五十一話　孫尚香、立ち上がるのことその十

「これを飲んでると」
「自然に」
「美味しいし」
「いやらしい気持ちにもなってきたかしら」
こんなことも言うのだった。
「不思議と」
「どうしてかわからないけれど」
それはというのだった。そしてだった。
飲んで食べながらだ。二人はこんなことも話した。
「大きくならなくても」
「そのままでも認めてもらえれば」
「どうなの？」
「それでいいんじゃいかなって」
「思いはじめました」
また馬岱に対して話すのだった。
「どうでしょうか、それは」
「小さいままでも。それを主張して肯定すれば」
「ううん、何のことかはわからないけれど」
しかしなのだった。馬岱はこう言うのだった。
「そうよね。小さくてもいいよね」
「はい、蒲公英ちゃんも同じですね」
「私達と」
「多分ね」
無意識でわかっている馬岱だった。
「それはね」
「そうなのだ。鈴々もそう思うのだ」
張飛も無意識からだった。

「小さくても別にいいのだ」
「私達それを認めてもらう為に」
「頑張ります」
軍師二人は言った。言い切った。
「きっと明るい未来が待っていますから」
「必ずですね」
「そうそう。人って目指せばね」
馬岱はここでまた言う。
「その目指すものになれるしね」
「手に入れることもできますし」
「だからこそ」
「誰かから聞いたのだ」
張飛もいる。ここでは四人は一つだった。
「希望は人といつも一緒にいてくれるのだ」
「はい、ですから」
「頑張りましょう」
「そうね。絶対にね」
こう四人で言い合う。そしてであった。
劉備がだ。その四人に言ってきた。
「あの、そろそろですよ」
「出発なのだ？」
「はい、いよいよ南蛮の都だそうです」
そうだとだ。四人に言うのだ。
「そこに」
「都って？」
馬岱はそれを聞いて目をしばたかせた。
「あの、街って南蛮にあるの？」
「というか人自体いないんですけれど」
「これまで」
軍師二人もそれを言う。

「何処もかしこも密林で」
「人すらも」
「そうなのだ。いるのは動物ばかりなのだ」
張飛も首を傾げさせながら話す。
「人なんていたのは」
「タムタムさんとチャムチャムさんの」
「お二人だけです」
「本当にいるのかしら」
馬岱はこうまで言う。
「ここに人なんて」
「いるよ」
「タムタム嘘吐かない」
その二人が答えてきた。
「だから安心していいよ」
「しかも孟獲いい奴」
タムタムはこうも言ってきた。
「何の心配もいらない」
「いい人なんですか」
孔明はそれを聞いて少し考える顔になった。そうしてだった。
そのうえでだ。こう話すのだった。
「それだと話は簡単に進むでしょうか」
「ただ。初対面だから」
鳳統はこのことを問題にしていた。
「打ち解けていく必要がありますね」
「とりあえず話していこう」
「そうしよう」
こう話してだった。軍師二人でだった。
そのうえであれこれと話してだった。その孟獲の宮殿に向かうのだった。

第五十一話　完

2010・12・18

# 第五十二話　パヤパヤ、噛まれるのことその一

第五十二話　　パヤパヤ、噛まれるのこと

木の上にだ。その宮殿はあった。やたらと巨大な木のその上にだ。
質素な場所である。だが後ろに象を描いたと思われる壁画もある。全体的にこじんまりとしているが中々快適そうな場所である。
そこの主の座、木のベッドにだ。緑の長い髪の少女が寝ている。栗色の目に幼さの残る横に長めの童顔に胸のところとスカート、それに手足が白虎の模様の服で覆われている格好である。尻尾まである。耳も虎のものだ。
その横になっている少女と共にだ。小さなピンク色の象も寝ている。象の頭には金色の王冠がある。
その少女がだ。ふとだった。
「むにゃむにゃ・・・・・・」
象の尻尾に顔を近付けてであった。いきなり。
その尻尾に噛み付いたのであった。
「パヤ！？」
噛まれた象はだ。慌てて起き出した。そしてだ。
「パヤ！パヤ！」
「何にゃ？」
「パヤ！パヤ！」
起きた少女に抗議する。泣きながらだ。
少女も起き上がってだ。象に応える。
「何にゃ、パヤ」
「パヤ！パヤ！パヤ！」
「何にゃ！？美衣が御前の尻尾を噛んだにゃ！？」
「パヤ！」
その通りだと頷く象だった。

2019

「パヤ！パヤ！パヤ！」
「だから気をつけて欲しい？」
「パヤ！」
今度は飛び上がって叫ぶ象だった。
「パヤパヤ！」
「ええい、五月蝿いにゃ！」
遂に怒った少女だった。
「美以は御前の尻尾なんか噛んでいないにゃ！」
「パヤ！パヤ！」
「違うというにゃ！？」
「パヤ！」
その通りだと頷くのだった。
「パヤーーーーーー！」
「そんな筈ないにゃ！」
少女はまた怒って言う。
「美以は御前の尻尾なんか噛まないにゃ！」
「パヤ！」
「そこまで言うのなら！」
さらに怒ってだ。象に怒鳴る。
「ここから出て行くにゃ！」
「パヤ！？」
「この南蛮の主は美以にゃ！」
つまりこの少女が孟獲なのであった。南蛮王である。
「その美以に従えないのならとっとと出て行くにゃ！」
「パヤヤ！？」
「さあ、どうするにゃ！」
「パヤーーーーーーッ！」
そう言われてだった。象は泣いて何処かに行ってしまった。孟獲はそれを見てだ。ふてくされた顔になり腕を組んで言うのだった。
「暫く何処かで頭を冷やすにゃ」

こう言ってまた寝る。そこにだった。青髪に茶髪、それにピンクの髪の虎の被り物の三人の少女が来た。どの娘も小柄で可愛い顔をしている。青髪の娘は勝気な顔をしており鳶色の目である。茶髪の娘は赤紫の目で元気そうな顔だ。ピンクの少女は緑の目でおっとりとした顔だ。その三人が孟獲のところに来て言うのだった。

「美以様、トラはお魚を」

「ミケは果物を」

「シャムは何も。けれど」

三人はそれぞれ言う。

「とても頑張ったの」

「皆ご苦労だったにゃ」

孟獲は自分にそうした獲物を差し出す三人にまずは労いの言葉をかけた。

「では後で皆で食べるにゃ」

「はい、それで」

「あの、パヤは？」

「何処ですか？」

「あいつは追い出したにゃ」

孟獲はむっとした顔になって三人に答える。

「無礼にも美以が尻尾を噛んだと言ったにゃ」

「尻尾？」

「尻尾を？」

「それを？」

「そうにゃ。美以はそんなことはしないにゃ」

自覚していない。

# 第五十二話　パヤパヤ、噛まれるのことその二

「そんな失礼なことを言う奴は頭を冷やすにゃ」
「トラこの前」
青髪の少女が言う。
「手を噛まれました」
「にゃ！？」
「ミケは頬っぺたを」
今度は茶髪の少女だった。
「大王様が寝ている時に」
「寝ている時にゃ！？」
「シャムはお尻を」
ピンクの髪の少女もだった。
「やっぱり寝ている時に」
「それはまことかにゃ！？」
「はい、いつも寝惚けていて」
「その時にいつも」
「がぶりと」
「じゃあパヤパヤは」
ここで孟獲もわかったのだった。わかればだ。
顔が真っ赤になる。自分の非に気付いてだ。
「大変にゃ！美以の間違いだったにゃ！」
「間違えたらどうしますか？」
「その時は」
「パヤパヤは」
「すぐに探し出すにゃ！」
即決だった。決断力は早い。
「そして謝るにゃ！」
「じゃあトラも御供します」

「ミケも」
「シャムも」
三人もだというのだった。
「それじゃあ大王様」
「パヤパヤを探しに」
「今から」
「行くにゃ！」
こうしてだった。三人で飛び出していくのであった。
その頃劉備達は。川で身体を清めていた。全員一糸纏わぬ姿になってだ。それぞれ身体を洗い清めているのだった。
その中でだ。魏延が劉備の身体を見て恍惚となっていた。
「桃香様、本当に何時見ても」
「だからあんた桃香さんばかりじゃない」
「だ、だから私はだ」
ここでも馬岱に反論する。無論二人も今は何も着ていない。
「桃香様のことを想ってだ」
「どう想ってるのよ」
「家臣として。忠義をだ」
「本当に忠義だけ？」
「そうだ、それの何処が悪い」
「忠義だけならね」
馬岱のその目は横に細くなってじとっとしたものになっている。
「けれどそれだけじゃないじゃない」
「何を、私はただ桃香様を」
「だからそれだけじゃないでしょ」
「では他に何があるのだ」
「自分の胸に聞いてみなさい」
「くっ、またそう言うのか」
本当にいつもの二人だった。そして孔明と鳳統は。
黄忠と厳顔の胸を見てだ。溜息をつくばかりであった。

「本当に不公平です」
「人間の世界って」
「あら、どうしたの？」
「何かあったのか？」
二人はその見事な胸を無意識のうちに誇示しながら二人の少女に問う。
「二人共汗は奇麗に洗い落としてるかしら」
「身体も清潔にせねばならんぞ」
「それはわかってます」
「しっかりと」
それを忘れる二人ではなかった。身体は洗い続けている。
「けれど。紫苑さんと桔梗さんって」
「胸が」
「胸？」
「胸がどうしたのじゃ？」
二人は無自覚なまま問い返す。
「特に何もないわね」
「うむ、別にな」
黄忠と厳顔はお互いの胸を見合いながら話す。

# 第五十二話　パヤパヤ、噛まれるのことその三

「もう洗ったし」
「奇麗なものじゃ」
「はうう、洗う場所が多い胸って」
「羨ましいですう」
これが二人の意見だった。そしてだ。
馬超と関羽はだ。趙雲に絡まれていた。
「だ、だからいいって」
「身体を洗うこと位一人でできる」
「まあそう言うな」
必死に拒もうとする二人にだ。趙雲は妖しい笑みで返すのだった。
そのうえで二人に自分の身体を絡みつかせてだ。こう囁くのだった。
「真名で呼び合う仲ではないか」
「それとこれとは別だろ」
「何故身体を洗い合う必要があるのだ」
「それもまた親睦のうちだ」
自分の胸を馬超のその胸と重ね合わせ前から囁く。
「違うか？翠よ」
「だ、だからあたしはいいって」
「こら、星」
左手は関羽の胸にいっている。
「そこは止めろ。そんなことをすれば」
「どうだというのだ？」
「そ、そこは・・・・・・」
胸をまさぐられてだ。関羽は困った顔になる。
そのうえでだ。頬を赤らめさせて言うのだった。
「だからそこは・・・・・・」
「ふむ。そこは？」

「弱いのだ・・・・・・」
こう言うのだった。
「だからだ。触るのはだ」
「ふむ。御主の弱点はそこか」
趙雲は目を少し見開いて述べた。
「成程な。よくわかった」
「何がわかったのだ」
「何、こちらの話だ。それに」
今度はだ。馬超のその背筋のところに手を回して上から下になぞる。すると。
「はうっ・・・・・・」
「御主はここだな」
「待てよ、背中は」
「背中は駄目か」
「ちょ、ちょっとやばいだろ」
いじらしげな、かつ悩ましげな顔での言葉だった。
「そこは。だから」
「御主は背中か」
「だから何だってんだよ」
「何、身体を洗っているだけだ」
あくまでこう言う趙雲だった。
「それは嫌か」
「だからそんなのは自分でするからよ」
「構わないでくれ」
二人で趙雲に言う。
「それはもうな」
「頼むからだ」
「わかった。ならこれでだ」
頃合いと見てだ。それでだった。
趙雲は二人から離れた。そのうえで言うのだった。

「これ位にしておこう」
「だから何で最近あたし達にそんなに絡むんだ?」
「何を狙っている」
「だから私はどちらもいけるのだ」
思わせぶりな笑みでだ。二人に話す。
「男でも女でもな」
「だからだというのか」
「それでかよ」
「その通りだ。無理強いはしないがな」
「今のはそれではないのか」
「どう見たってそうだろ」
これが二人の抗議だった。しかしそれは平然と無視する趙雲だった。
一行はそれぞれ楽しくやっている。男のタムタムは当然いない。しかしチャムチャムもいてミナと川の中で身体を洗っているのだった。
そうしながらだ。そのうえでミナに言う。

# 第五十二話　パヤパヤ、噛まれるのことその四

「ねえ、ミナ」
「どうしたのかしら」
「もうすぐ孟獲だけれど」
彼女のところだというのだ。
「特に何も思わない？」
「別に」
こう答えるミナだった。
「悪い人じゃないのね」
「うん、とてもいい奴だよ」
それは確かだというのである。
「ちょっと食いしん坊だけれどね」
「それは誰でもだから」
構わないというのである。
「いいわ」
「そうなの」
「それでその娘のところに行ったら」
「劉備さんの剣だよね」
「ええ。それを何とかしないと」
こう話すのだった。
「その為に来たのだから」
「問題はその剣の直し方よね」
「そうね。どうして直すのかしら」
ミナはここで首を傾げさせた。
「一体」
「僕にはわからないけれど」
チャムチャムはであった。しかし彼女は同時にこうも言うのだった。

「けれど孟獲は絶対に知ってるよ」
「彼女ならなのね」
「うん。とにかく劉備さんの剣」
チャムチャムもだ。劉備のことを真剣に気にかけていた。
「どうにかなればいいね」
「本当にね」
こんな話をする二人だった。そしてだ。
神楽と月はもう服を着ていた。髪はまだ少し濡れてはいる。
その二人がだ。周囲を見回して話をする。周りは密林だ。見渡すばかりの木々である。
「とりあえず虎や豹はいないみたいね」
「はい、蛇も」
「鰐がいてもおかしくはないけれど」
「そうしたのもいませんでしたね」
「まずは何よりね」
それを確かめながらだ。とりあえずは安心する二人だった。
「熱帯は何がいてもおかしくはないけれど」
「どんな猛獣がいても」
「ええ、けれどいなくて何よりよ」
また言う神楽だった。
「本当にね」
「はい。それじゃあ皆身体を洗い終えたら」
「いよいよね」
「はい、孟獲さんのところに」
行こうというのだった。そしてそこにだ。
何かが飛んで来た。それは。
「パヤーーーーーーーーーッ！」
「あれは」
神楽はそれを見てすぐに言った。
「象！？」

「えっ、あれがなのだ」
丁度今川から出た張飛が応える。
「あれが象なのだ」
「ええ、あれがね」
「何かあれみたいなのだ」
ここでこう言う張飛だった。
「身体の真ん中にある」
「そ、それはだ」
関羽は義妹のその言葉に顔を赤くさせた。
「言うな。私達にはないのだからな」
「そうなのだ」
「そうだ。それは言うな」
「よくわからないけれどわかったのだ」
「これが象さんなんですか」
劉備がその象を抱き止めていた。彼女のところに来たのだ。
「話に聞いていた」
「そうよ」
チャムチャムがその劉備に答える。

# 第五十二話　パヤパヤ、噛まれるのことその五

「それがなの」
「見たこともない形をしてるんですね、象さんって」
「うん。僕も故郷じゃ見なかったけれどね」
タムタムの故郷ではというのだ。
「けれど実際に見たら面白い動物でしょ」
「ええ、確かに」
その通りだと答える劉備だった。
「特にこのお鼻が」
「そうでしょ。それでね」
「それで？」
「その象あれよ」
チャムチャムの話が微妙に変わってきた。
「孟獲のところの象よ」
「そのチャムチャムさんの」
「そうなの。何でこんなところに来たんだろう」
チャムチャムは首を傾げさせながら言った。
「いつも孟獲のところにいるのに」
「とりあえずはですね」
「ここはです」
軍師二人がここで言う。
「まずは川から出ましょう」
「それで服を着て」
実際に二人は川から出て来た。そうしてだった。
身体を拭いて下着を着ける。二人共白だ。
だが張飛は二人の下着を見て言った。
「二人共その下着なのだ？」
「えっ、何かおかしい？」

「何処か」
「朱里は熊で」
見ればだ。彼女のショーツにはそれがプリントしてあった」
「雛里は兎なのだ」
「だって。可愛いから」
「それで」
「鈴々はもっと簡単なのがいいのだ」
それが張飛野下着の嗜好だった。
「明るい黄色の。いつものがいいのだ」
「そうかなあ。私はやっぱり」
「私も」
しかし軍師二人は言う。
「そうした可愛いのがいいけれど」
「駄目かしら」
「駄目とは言っていないのだ」
それは違うという張飛だった。
「ただ鈴々の趣味なのだ」
「そうなの」
「趣味はそれぞれなのね。下着も」
「そういうことなのだ」
そんな話をしてだった。彼女も服を着る。他の面々も続いてだ。
全員服を着てそうしてであった。チャムチャムの先導で孟獲のところに向かうのだった。
タムタムも来た。そのうえで向かうのだった。
そしてだった。そこにだった。
「あれっ、あれは」
「孟獲だ」
チャムチャムとタムタムが前に出て来た面々を見て言う。
「トラにミケもいるね」
「シャムもいる」

こうも話す。彼女達もいた。
そしてだ。そのうえでだった。その孟獲に対して声をかける。
「パヤパヤのこと？」
「探してたのだ」
「そうにゃ」
その通りだという孟獲だった。
「そこにいたのにゃ」
「こいつは御前のなのだ？」
「そうにゃ」
象は今張飛が持っている。その彼女への返答だった。
「それは間違いなく美以のものじゃ」
「その証拠はあるのだ？」
張飛は眉を顰めさせてそのうえで孟獲に問う。

# 第五十二話　パヤパヤ、噛まれるのことその六

「それはあるのだ？」
「あるにゃ。それは」
「それはなのだ？」
「美以が言うからその通りなのだ」
これが彼女の返答だった。
「それ以外に何の理由があるのだ」
「そんなの理由にならないのだ」
張飛は孟獲の言葉にむっとして返す。
「この象？は鈴々に懐いているのだ。だから鈴々のものなのだ」
「そんなの出鱈目にゃ」
「出鱈目だというのだ？」
「そうにゃ。美以のものだと言ったらそうなのだ」
孟獲も負けてはいない。
「だから早く返すのだ」
「嫌なのだ」
張飛はパヤパヤを意地でも返そうとはしない。その手に強く持ってだ。
「何があっても返さないのだ」
「返すにゃ！」
「嫌なのだ！」
何時しかだ。二人はパヤパヤを手に取ってだ。両端から引っ張りだした・
「これは美以の象にゃ！」
「鈴益々のものなのだ！」
「これは一体どうなんでしょうか」
劉備が象を引っ張り合う二人を見て話をする。
「あの、このまま終わりそうにないですけれど」

「そうだな。これはな」
関羽も難しい顔で劉備に応える。
「鈴々もあれで意固地なところがあるからな」
「そうですよね。困ったことになっちゃいましたね」
「いえ、これは」
「大丈夫です」
しかしだった。軍師二人は落ち着いた声でこう劉備に言うのだった。
「このことはすぐに終わります」
「それも簡単に」
「簡単にですか」
「はい、もうすぐです」
「終わります」
二人はまた劉備に述べた。
「まあ見ていて下さい」
「安心していいです」
「そうなんですか」
「はい、ですから」
「ここは」
こう話してであった。二人は劉備だけでなく一行にここは静かに見るように話した。一行はその間にも状況を見るしかなかった。
二人はだ。その間にも引っ張り合う。そうしてパヤパヤは。
「パヤ！？」
左右から引っ張られだ。目を丸くさせる。
張飛が前足から、孟獲が後ろ足から引っ張り合いだ。それぞれ言い合う。
「返すにゃ！」
「鈴々のものなのだ！」
こう言い合い続けてだった。
「ええい、パヤパヤは美以のものにゃ！」

「それは間違いなのだ！」
「パヤ！」
次第にだ。パヤパヤの身体がきつくなる。伸びはじめていた。
伸びながらだ。苦しんでいた。それを見てだった。
馬超がだ。怪訝な顔で仲間達に言った。
「あの象、あのままだとな」
「そうね」
「危険ですね」
ミナと月が彼女のその言葉に応える。
「身体が伸びだしていますから」
「あのまま続けば」
「真っ二つか？」
馬超は最悪の事態を想定しだした。
「そうなったらどうするんだよ」
「流石にそんな漫画みたいな展開はないでしょうけれど」
神楽は現実的な案を述べた。
「けれど。このままいったら」
「間接外れるんじゃないの？」
馬岱が考えた事態はこれだった。

# 第五十二話　パヤパヤ、噛まれるのことその七

「足とか背骨の関節が」
「そうなったら同じよ」
黄忠も怪訝な顔で話す。
「間接が外れたら」
「ううん、この状況は」
「まずいな」
神楽も趙雲も楽観視していない。
「二人共必死で気付いていないけれど」
「このままでは」
「いかんな、止めよう」
関羽が前に出ようとする。
「象の取り合いで象が死んでは話にならない」
「そうだよね。この状況じゃ」
「美以様にとってもよくないし」
「ここは」
「止めましょう」
トラ、ミケ、シャムに続いて劉備も出ようとする。
「象さんが本当に」
「いえ、大丈夫です」
「もうすぐですから」
しかしだった。軍師二人はここでも一行を止めるのだった。
その二人にだ。関羽がたまりかねた口調で言う。
「しかしこのままでは象がだ」
「ですからその前にです」
「話は決まりますから」
「そうなるというのか」
「はい、御安心下さい」

「是非」
二人だけが動じていない。実に落ち着いたものだった。そしてその中でだった。二人の引っ張り合いがまだ続いているのだった。
だが、だった。パヤパヤが叫んだところでだった。
「パヤーーーーーーッ!?」
「!?パヤパヤ!」
それを見てだった。孟獲が咄嗟に動いた。その動作は。
手を離したのだ。その両手をだ。
必死に引っ張っていた張飛はもう一方の力がなくなり急に後ろに倒れていった。そうしてそのまま尻餅をついてしまったのであった。
だがその手にはだ。パヤパヤがある。それを手にしてだった。
「やったのだ!鈴々のものなのだ!」
「ち、違うにゃ!」
「鈴益々のものになったのだ!これで勝ちなのだ!」
「いえ、そうはなりません」
「それは違います」
孔明と鳳統がだ。張飛のところに来てこう言うのであった。
「その象さんは孟獲さんのものです」
「そのことは間違いありません」
「何故そう言うのだ」
「手を放されたからです」
「だからです」
だからだとだ。二人は起き上がってきた張飛に対して述べるのだった。
「それでなのです」
「その象さんは鈴々さんのものではありません」
「手を放したからなのだ」
「はい」
「何故なら」
その理由もだ。二人は話すのだった。

「このまま引っ張り合いを続けていれば象さんが苦しみます」
「孟獲さんはそれを見られたからです」
「だからだというのだ」
「はい、象さんが可哀想になって止められた」
「それこそが」
二人はそれぞれ羽根の扇と帽子を手に取ってだ。前にかざして宣言した。
「孟獲さんが象さんの主である何よりの証です」
「その通りです」
「ううん、そうなるのだ」
「じゃあこれではっきりしたにゃ」
張飛は口を波線にさせてうなだれ孟獲・Jは晴れやかな顔になっていた。二人の表情はまさに正反対のものになってしまっていた。
「パヤパヤは美以のものにゃ」
「ううん、残念なのだ」
「話はこれで一件落着ですね」
「これで」
二人は今度はにこやかに笑って放した。

# 第五十二話　パヤパヤ、噛まれるのことその八

「象さんのことはこれではっきりしましたね」
「間違いなく」
二人で話す。そしてだった。
孟獲はだ。ここで言うのであった。
「それで御前達は何にゃ？」
「何とは？」
「だから何者にゃ」
こう関羽にまた言う。
「何でこの南蛮まで来たにゃ」
「まさか攻めてきたの？」
「この南蛮に」
「だったら敵？」
トラ達がここで警戒を見せる。
「悪い奴は許さないぞ」
「それならもう」
「数で勝負するよ」
いきなりであった。三人がすぐに増えてきた。次からつぎにだ。
三人はどんどん増えてきてだ。あっという間に密林を埋め尽くしてしまった。
「な、何なんだ」
「急に増えてきたのだ」
その彼女達に囲まれてだ。関羽と張飛が驚きの声をあげる。
「同じ顔の者達が急に」
「次から次になのだ」
「そうにゃ。南蛮を甘く見るにゃ」
ここで孟獲が高らかに言うのであった。
「攻めて来る悪い奴には容赦しないのだ」

「容赦しない？」
「攻めて来る場合はなのだ」
「そうにゃ。自分達の身は自分で守るにゃ」
腕を組んでだ。そのうえでの言葉だった。
「それが南蛮の掟にゃ」
「ですからそれはですね」
劉備はだ。周囲が警戒するその中でもいつもの調子だった。
「私達は別に攻めたりとかは」
「違うというにゃ？」
「はい。御願いがあってここまで来ました」
「本当にゃ？」
孟獲も最初はそのことを信じようとしなかった。目を顰めさせての言葉だった。
「御前達が悪い奴じゃないっていう証拠はあるにゃ？」
「あるよ」
「それ確かなこと」
ここでだ。孟獲に対してチャムチャムとタムタムが言ってきた。
「僕が話そうか」
「タムタムそのこと知っている」
「二人共いたにゃ」
孟獲はここで二人のことに気付いたのだった。
「今まで何処にいたにゃ」
「だから。この人達と会って」
「それでここまで案内した」
「そうだったにゃ」
それを聞いてだ。孟獲も納得したのだった。
「二人がそう言うのならそれなら」
「そうだよ。この人達ね」
「剣をなおしに来た」
二人は孟獲にこのことも話した。

「こっちの桃色の髪の人」
「劉備という」
「こっちの人がね」
「自分の剣をなおしに来た」
こう孟獲に話していく。
「自分の剣をね」
「それで来た」
「剣をにゃ？」
それを聞いてだ。孟獲は首を傾げさせながら述べた。パヤパヤは既に彼女の頭に来てだ。被りものの様になってくつろいでいた。
その象を頭にやってだ。そうして話すのだった。
「それなら鍛冶屋に行くといいにゃ」
「それがなんです」
今度は劉備が話してきた。
「私の剣は特別な剣でして」
「特別にゃ」
「はい、劉家の家宝でして」
「劉家なら知ってるにゃ」
その家については流石に孟獲も知っていた。

# 第五十二話　パヤパヤ、囓まれるのことその九

「漢王朝の皇帝の家にゃ」
「流石にそれは知っていたか」
「勿論にゃ。美以は皇帝から南蛮王に封じられているにゃ」
こう関羽に対しても述べる。
「だから勿論知ってるにゃ」
「ふむ。そういえば南蛮は」
関羽は孟獲の話を聞きながら静かに述べた。
「漢に攻め込んだことはなかったな」
「南蛮は楽しく過ごせればそれでいいにゃ」
これが孟獲の考えであった。
「他の国に攻め込んだりとかは特にしないにゃ」
「そうだよ。だって南蛮は食べ物が一杯あるし」
「楽しい遊びも一杯あるし」
「ここで平和に暮らしているから」
トラ達もここで話す。
「無意味な喧嘩なんてしないよ」
「この国で生きていければいいから」
「だから戦争なんてしなくてもね」
「特に好戦的な人達じゃないですね」
「そうですね」
孔明と鳳統もそのことに気付いた。
「悪意やそういったものもありませんし」
「お話すれば楽しい人達ですし」
「それじゃあお話は」
「簡単に進むでしょうか？」
「そうであればよいな」
厳顔もこのことを願っていた。

「さて、それではどうなるかのう」
「それでなのですけれど」
劉備はまた孟獲について話した。
「南蛮に来れば剣はなおると聞いたのですけれど」
「確かにその通りにゃ」
孟獲はここでまた話した。
「この南蛮では何でもなおすことができる方法があるにゃ」
「そうなんですか！？それじゃあ本当に」
「このパヤパヤのヘソのゴマをにゃ」
孟獲は自分の頭の上に寝ているその象を指差して言う。その手も指もどう見てもだ。ネコ科の、虎のものに他ならなかった。その指で、であった。
「南蛮の王宮の傍にある水と混ぜてそうしてその水をかけるとにゃ」
「それでなんですか」
「そうにゃ。どんなものもたちどころになおるにゃ」
こう劉備に話すのだった。
「それこそ何でもにゃ」
「それじゃあ本当に」
「その通りにゃ。美以は嘘を吐かないにゃ」
胸を張っての言葉だった。
「それでなのじゃ」
「それじゃあ申し訳ありませんがすぐに」
「けれど駄目にゃ」
しかしであった。孟獲は強い顔でそれは断るのだった。
「それはどうしてもにゃ」
「どうしてですか、それは」
「パヤパヤ。南蛮象はにゃ」
その象のことである。
「この南蛮の宝にゃ。決して外に出すことはできないにゃ」
「だからなんですか？」

「そのゴマを水に入れてかけると何でもなおすことができるにゃ。つまりそれはにゃ」
どういうことなのかと。孟獲は急に真面目になって劉備達に話していく。
「どんなとんでもないものでもなおすことができるということにゃ」
「そうね。劉備さんの剣ならいいけれど」
神楽もだ。ここで話の意味がわかった。
「恐ろしい魔剣やそうしたものだったら」
「だからにゃ。このヘソのゴマは使わせないにゃ」
そうだというのであった。
「絶対ににゃ」
「あの。けれど」
「駄目にゃ」
孟獲はそれは何としてもであった。
「何と言われても駄目なものは駄目にゃ」
「けれどそれじゃあ剣は」
「どうしてもというのなら」
ここでだ。孟獲はこう劉備達に言ってきた。

# 第五十二話　パヤパヤ、噛まれるのことその十

「この美以に渡すと言わせるにゃ」
「孟獲さんにですか」
「そうにゃ。それならいいにゃ」
これが孟獲の言葉だった。
「それなら渡してやらないこともないにゃ」
「ううん、ですか」
「しかし姉者」
「ここはなのだ」
義妹二人が困った顔の劉備に言ってきた。
「どうにかするしかあるまい」
「剣をなおしたいのだ？」
「はい、どうしても」
ここでは自分の意を出す劉備であった。困りながらもしっかりとした声である。
「ここまできましたし」
「それにヘソのゴマなぞ」
「どう見ても簡単に手に入るのだ」
二人もこう考えていた。
「それ程吝嗇になることもあるまい」
「孟獲もおかしなことを言うのだ」
「そうですね。孟獲さんは意固地になっておられますね」
「あの象さんを大切に思うあまり」
軍師二人もそう見ているのだった。
「ですからここは」
「別におヘソのゴマ位いいと思います」
「それでどうされますか？」
「ここは」

「やっぱり同じです」
こう答える劉備だった。
「剣を何とかしたいです」
「よし、それじゃあな」
「やるとするか」
馬超と趙雲は早速槍を構えた。
「命を取るわけじゃないからな」
「少しだけ我慢をしてもらおうか」
「いえ、それはちょっと」
「下策だな」
しかしそれは黄忠と厳顔が止めたのであった。
二人はだ。馬超と趙雲を窘めるようにしてだ。こう話すのだった。
「力で手に入れてもあの娘達の反感を買うだけよ」
「それではあまり得策とは言えん」
「それはそうだけれどさ」
「今回は仕方あるまい」
だが二人はこう返す。いささか釈然としない顔ではあるがだ。
「やっぱりここはな」
「この腕でだ」
「いえ、やっぱりそれはです」
「止めた方がいいです」
孔明と鳳統もそれは止めた。
「孟獲さんは今の私達と戦うつもりはありません」
「それなら。こちらもそうしたことは」
「それじゃあどうするの？」
「そうだな。何もしないではどうにもならないぞ」
馬岱と魏延がこう軍師二人に問う。
「喧嘩は駄目で話し合いもできないし」
「それならどうするのだ」
「はい、ここはです」

「私達に任せて下さい」
軍師二人はだ。こう皆に述べるのだった。
「少し考えがありますから」
「ですから」
「考え」
「それは何なのだ？」
関羽と張飛が彼女達に問う。
「策があるようだが」
「一体どうするのだ？」
「はい、まずはです」
「孟獲さんのところに行かせて下さい」
こう言う二人だった。

# 第五十二話　パヤパヤ、噛まれるのことその十一

「そのうえで、です」
「行わせてもらいますから」
「ううん、そこまで言うんならね」
「頼めるか」
馬岱と魏延が二人の言葉を聞いて述べた。
「朱里ちゃん、雛里ちゃん」
「今回はあんた達がやるんだな」
「私達は素手では戦えませんけれど」
「それでも。やり方はありますから」
こう言ってであった。そのうえで孟獲の前に来た。そうしてであった。
「あのですね」
「いいでしょうか」
「何にゃ、パヤパヤのおヘソのゴマは駄目にゃ」
まだ言う彼女だった。
「何があっても」
「何があってもですか？」
「そうにゃ」
意固地な返答であった。
「何があってもそれは駄目にゃ」
「どうしてもですか？」
「それは」
しかしであった。二人はその孟獲にさらに問うのだった。
「孟獲さんって何か」
「そうよね」
そしてだった。二人はここでこんなことを話すのであった。その孟獲の前でだ。

「とても心の広い方だと聞いてたけれど」
「実はそうではなかったのね」
「何ていうか意外と」
「ケチというか」
「にゃっ!?」
自分のことを悪く言われてだ。孟獲の目の色が変わった。
「今何と言ったにゃ」
「えっ、私は別に」
「私もです」
二人はわざとだ。孟獲に顔を向けて述べた。
「別に孟獲さんがケチだなんて」
「言ってません」
「いや、今言ったにゃ」
孟獲は耳はいい。聞き逃す筈がなかった。
それでだ。二人に対してムキになって言い返した。
「美以がケチとは許せないにゃ!そんな言葉は放っておけないにゃ!」
「それじゃあどうしますか?」
「それが許せないとなりますと」
「ええい、それならにゃ」
売り言葉に買い言葉だった。孟獲はここで言い切ったのであった。
「パヤパヤのおヘソのゴマはにゃ」
「はい、それは」
「どうされますか?」
「持って行くがいいにゃ。ただし」
ただしだと。ここでまた言う。
「美以にそう思わせることにゃ」
「孟獲さんをですね」
「そうなのですね」
「手に入れたければ美以を捕まえてぎゃふんと言わせてみるにゃ」

腕を組んで胸を張っての言葉だった。
「それは言っておくにゃ」
「わかりました。それではです」
「そうさせてもらいます」
話は何時の間にか決まっていた。
「孟獲さんを捕まえればいいんですね」
「それでは」
「わかったにゃ。美以は絶対に捕まらないにゃ」
「おい、これで決まったのかよ」
「早いな」
これには馬超も趙雲もいささか驚いた。
「こいつってまさか」
「頭の出来はあれか」
そこからだ。二人も察した。
「袁紹殿のところの文醜とかな」
「鈴々と同じ程度だな」
「どうしてそこで鈴々の名前が出るのだ」
「まあ成り行き上な」
「気にするな」
その張飛にはこう返す二人だった。そしてその時にはだ。

# 第五十二話　パヤパヤ、噛まれるのことその十二

トラ達はだ。劉備と遊んでいた。劉備はだ。
「いないいない」
自分のその豊かな胸を両手で隠してから。その手をどけてだ。
「おっぱーーーーーい」
「凄い大きさにゃ」
「隠していても隠していないにゃ」
「一家に一つにゃ」
「あれっ、あんた達」
そんな三人の言葉を聞いてだ。馬岱が突っ込みを入れる。
「言葉遣いが変わってるけれど」
「実は元はこの喋り方にゃ」
「今元に戻ったにゃ」
「それでなのにゃ」
こう話す三人だった。
「実は驚いたら喋り方が変わるにゃ」
「美以様以外はそうなるにゃ」
「そのことを言い忘れていたにゃ」
「そうだったんだ。成程ね」
今わかったことだった。そしてその三人にだ。
孟獲がだ。言ってきたのだった。
「じゃあ者共、これでにゃ」
「これで？」
「美以様もこのおっぱいと遊ぶにゃ？」
「他にも一杯いいおっぱいがあるにゃ」
「おっぱいも大事にゃが今はにゃ」
どうだとだ。孟獲は話すのだった。
「おヘソのゴマにゃ」

「それにゃ？」
「そういえばそんな話をしていたにゃ」
「それにゃら」
「確かに美以はパヤパヤの尻尾を噛んだにゃ」
何気にこのことを話す孟獲だった。
「けれどそれでもにゃ」
「あっ、そういえばなのだ」
張飛はここでそのパヤパヤの尻尾を見た。そこにはなのだった。
葉型がだ。はっきりとあるのだった。それを見て言うのであった。
「これなのだ」
「何か人間の歯形に見えないな」
魏延もその歯形を見て言う。
「猫のそれに似ているな」
「そうなのだ。猫のそれにそっくりなのだ」
「おかしな奴だな。何かと」
「人間離れしているにも程があるのだ」
何気にそんなことも指摘される孟獲だった。しかし何はともあれだった。
「捕まる訳にはいかないにゃ」
「トラ達もにゃ？」
「そうなのにゃ」
「勿論にゃ。南蛮の頭を見せてやるにゃ」
こうしてだった。南蛮組は劉備達に挑むのだった。そして気付いた時にはだ。
「あら、あれだけいた猫ちゃん達が」
「いなくなっておるのう」
黄忠と厳顔がここでそのことに気付いた。彼女達を取り囲んでいた面々が何処にもいなくなっていたのだ。三人だけが残っていた。
それを見てであった。二人は話すのだった。
「何か南蛮っていうのは」

「思っていた以上に変わっておるのう」
そのことにだ。あらためて気付いたのであった。
そしてだった。そんな話をしたうえであった。
「それじゃあ捕まえてみるにゃ」
「妙な話になったわね」
「そうね。捕まえるなんて」
神楽とミナはこの状況に首を傾げさせている。
「けれどそれで劉備さんの剣が元に戻ったら」
「誰も傷つかないし。いいことね」
かくして劉備達は孟獲を捕らえることになった。話は思わぬ方向に向かうのであった。

第五十二話　　完

２０１０・１２・２０

# 第五十三話　孟獲、七度捕らえられるのこと一

第五十三話　孟獲、七度捕らえられるのこと

劉備達に挑戦状を叩きつけた形の孟獲達は一旦宮殿に戻った。そうしてそこにおいてだ。四人でこれからのことを話すのであった。

「何かおかしなことになっちゃったね」

「本当にだ」

チャムチャムとタムタムもいる。兄は妹のその言葉に頷く。

「タムタム今回は」

「今回は？」

「孟獲強情だと思う」

彼もまたそう見ているのだった。宮殿の一室に胡坐をかいて座ってだ。そのうえで自分の左隣にいる妹に対して話すのであった。

「ヘソのゴマ位気前よく渡せばいい」

「そうよね、それは」

「タムタム劉備達嫌いでない」

それも言うタムタムだった。

「だから今回は」

「この話には加わらないの」

「タムタムそうする」

これが彼の今回のことについての決定だった。

「チャムチャムはどうする」

「僕もそうする」

彼女もなのだった。

「劉備さん達嫌いじゃないから」

「それじゃあタムタム達は」

「見ているだけね」

彼等の方針は決定した。そしてそのことを玉座兼ベッドにいる孟

獲に対してだ。話すのだった。
「それでいいか」
「今回は」
「仲間に入りたくなければそれでいいにゃ」
孟獲はここでは普段の孟獲だった。
特に咎めることなくだ。こう二人に言うのだった。
「遊びたくないならそれでいいにゃ」
「ならここに残る」
「留守番しておくね」
「そうするといいにゃ。御飯は好きなだけ食べるにゃ」
孟獲も彼等を邪険になぞしはしない。そうしてだった。
あらためてだ。トラ達に顔を向けてだ。こう言うのであった。
「とにかくにゃ」
「はいにゃ」
「絶対にあのおっぱい達に捕まらない」
「そうするにゃ」
「その通りにゃ。美以も絶対に捕まらないにゃ」
腕を組んでだ。そのうえでの言葉だった。
「美以の知恵を見せてやるにゃ」
「そうにゃ。じゃあトラ達も」
「そうさせてもらうにゃ」
「絶対ににゃ」
こうしてだった。三人もなのだった。
絶対に捕まらないと強く誓う。そのうえで宮殿を出るのだった。
しかしだった。孔明と鳳統はだ。一行を草陰に入れてだ。そのうえで自分達も入ってである。目の前にあるものを見ながら話すのだった。
「これでいいですね」
「後は孟獲さんを待つだけです」
「おい、これはだ」

しかしだ。その二人に魏延が言う。
「幾ら何でもあれではないのか」
「あれですか」
「そう思いますか？」
「あれでは鳥の罠だぞ」
見ればだ。バナナがありその上に巨大なザルがある。ザルは棒で支えられており棒には縄がある。縄を引っ張ればそれでザルが落ちる仕組みであった。
「捕まる筈がない」
「そうよね。鳥じゃないんだから」
それを馬岱も言う。
「ちょっと。有り得ないんじゃ」
「大丈夫です、これで」
「絶対に捕まります」
しかしだ。軍師二人は自信に満ちた声でこう答えるのだった。

# 第五十三話　孟獲、七度捕らえられるのこと二

「孟獲さんならこれで」
「絶対に捕まりますから」
「だといいのだがな」
「本当に上手くいくかしら」
「孟獲さんの知力はどうやら鈴々ちゃんや文醜さんと同じ位です」
「夏侯惇さんにもひけを取りません」
あまりいい意味でないのは間違いなかった。
「ですからこれで」
「確実に捕まえられます」
「だといいがな」
「捕まるんならね」
魏延と馬岱だけでなく他の面々も捕まえられるとは思っていなかった。しかしだった。
孟獲が来た。そしてだった。
「あっ、バナナにゃ！」
その罠のバナナに飛びつく。その瞬間だった。
「はい、それじゃあ」
「こうして」
孔明と鳳統が縄を引っ張るとだった。それで終わりだった。
「にゃ！？急に真っ暗になったにゃ！」
ザルの中から孟獲の声がする。
「どういうことにゃ！何が起こったにゃ！」
「ほら、言った通りになりましたね」
「無事捕まえられました」
軍師二人はにこやかに笑う。まさに少女の屈託のない笑みだった。
しかしだ。その孟獲を見てだ。他の面々は唖然となっていた。
「嘘だ、これは」

「まさかと思ったけれど」
「あれで捕まるか」
「お猿さんじゃない」
まさにそのレベルであった。孟獲はだ。
そしてその頃だ。許昌ではだ。
その夏侯惇がだ。檻の中にいた。そのうえで吼えていた。
「こら！何だこれは！」
「姉者、何をやっているのだ」
その木の檻の前に夏侯淵がいる。彼女は呆れた顔で姉を見ながら言うのだった。
「まさか捕まるとは思わなかったぞ」
「うう、饅頭がある空手に取ってみればこれか」
「いい加減書類の仕事をしてもらいたくて罠を張って捕まえようと思ったが」
「本当に捕まるなんてね」
「思わなかったわ」
曹仁と曹洪もいる。二人も呆れている。
「こんなのお猿さんでもないとね」
「捕まらないわよ」
「私が猿だというのか！」
本人は檻の柵を両手で掴みながら抗議する。
「聞き捨てならんぞその言葉は！」
「そう言いたいならばだ」
「何だ、秋蘭」
「せめて捕まらないでくれ」
これが妹の言葉だった。
「こちらも驚いているのだ」
「ううん、何という不覚」
「けれどそれでもこれでね」
「書類の仕事してもらえるわね」

曹洪と曹仁はこのことを素直に喜んでいた。
「じゃあ。名前を書いてもらうだけの仕事だから」
「春蘭、頼むわよ」
「だからだ。私はそんな仕事はだ」
ムキになって言う夏侯惇だった。
「絶対に嫌だ！そうした仕事をするとだ！」
「身体中に蕁麻疹ができるのだな」
「そうだ。だから嫌だ！」
「それはわかるがそうも言っていられんのだ」
妹は今は心を鬼にしていた。
「だからだ。今は仕事をしてくれ」
「ううん。何ということだ」
「あの文醜殿ですら書類の仕事はしているのだぞ」
「何っ、あいつがか」
「嫌々だがな」
それでもだというのである。

# 第五十三話　孟獲、七度捕らえられるのこと三

「しているのだ。だから姉者もだ」
「仕事をしろというのか」
「そういうことだ。頼んだぞ」
「嫌だ、私は嫌だ！」
しかしだった。夏侯惇は強制連行されていくのであった。
そんなことがあった。そしてである。
孟獲はだ。捕まり縄で縛られている。しかしなのだった。
「まだにゃ！」
「まだか」
「諦めないのだ？」
「こんなことで美以はぎゃふんとは言わないにゃ」
こう関羽と張飛に返す。確かにその目は死んではいない。
「この程度ではくじけないにゃ」
「わかりました。それなら」
「縄をほどかさせてもらいますね」
孔明と鳳統はだ。ここでこう言うのだった。
「それでまたですね」
「挑まれますね」
「今度は捕まらないにゃ」
孟獲は少なくともそのつもりだった。
「それを言っておくにゃ」
「はい、それでは」
「今は縄を」
実際にだった。孟獲は縄をほどかれた。そのうえで彼女はすぐに密林の中に消えた。そしてそのうえでだ。二度目になるのであった。
二度目はだ。張飛と馬岱が出ていた。そしてだ。
「それじゃあね」

「やるのだ」
張飛が馬岱のその言葉に頷いてだった。その前にはだ。
あからさまな罠があった。そこだけ濃い緑の覆いがしてある。
「これに引っ掛かるかな」
「絶対に引っ掛かるのだ」
張飛は断言してみせた。
「これなら絶対になのだ」
「ううん、けれどここまであからさまって」
「愛紗はこれで捕まったのだ」
「おい、私なのか」
その時のことを思い出してだ。関羽は草陰から張飛に抗議した。
「私がなのか」
「けれどあの時実際に捕まったのだ」
「そ、それはそうだが」
そう言われるとだった。関羽も弱った顔になる。
「しかしだ。私はだ」
「そういえば御主はだ」
趙雲がここでその関羽に対して話す。
「その時落とし穴に落ちてだ」
「何だというのだ」
「丸見えだったそうだな」
彼女が今言うのはこのことだった。
「そうだったらしいな」
「な、何が丸見えなのだ」
「御主は白だからな」
あえて何かは言わず色を言うのであった。
「まあ私もその色が多いがだ」
「子分達が言っていたのだ。本当に丸見えだったのだ」
また言う張飛だった。
「白お尻の形まで丸見えだったと言っていたのだ」

「くっ、あの時の不覚がまだ」
そのことをまだ言われる関羽だった。しかしであった。
何はともあれ罠は仕掛けられている。そのうえでだ。
張飛と馬岱がだ。こう叫んだ。
「やーーーーい孟獲！」
「知力一桁！」
こう叫ぶのだった。
「猫の額と頭！」
「悔しかったらここまでこーーーい！」
「これで来るのね」
「さっきもそうじゃったしな」
黄忠も厳顔もわかってきていた。
「それじゃあここはね」
「見させてもらうか」
こんな話をしてだった。そうしてであった。

# 第五十三話　孟獲、七度捕らえられるのこと四

孟獲はだ。実際に来たのだった。
「何にゃ！美以を馬鹿にするにゃ！」
「そうなのだ、この猫頭！」
「言って悪いか！」
「何！もう許せないにゃ！」
こう言ってだ。二人に向かう。しかしだった。
目の前にある覆いを見てだ。楽しげに笑ってだった。
「こんなのに引っ掛かる筈ないにゃ！」
覆いの上を飛び越える。それで難を避けたと思った。ところが。
張飛と馬岱の前に着地するとだ。そこは。
「にゃにゃ！？」
「この通りなのだ」
「前のは偽物でこれが本物なのね」
「落とし穴ば見えないことにこそ価値があるのだ」
張飛は誇らしげに馬岱に話す。
「そういうことなのだ」
「成程ね。けれどこれで捕まえたね」
「一件落着なのだ」
しかしだった。まだ孟獲は諦めない。それで孔明と鳳統はだ。また彼女を解き放つのであった。
「後悔するにゃ、美以は絶対に諦めないにゃ」
こうしてまた密林の中に消える彼女だった。そして次は。
劉備が出てだ。そのあまりにも豊かな胸を震わせて言った。
「皆ーーーー、それじゃあはじめるよ」
「むっ、まさか」
「おい、焔耶落ち着けよ」
馬超が興奮しだした魏延に対して言う。

「まさかと思うけれどな」
「あの胸は至宝だ」
こう言う魏延だった。
「他の者に渡してなるものか」
「ってまさかおい」
馬超が止めるのも聞かずだ。彼女は姿を消した。そしてその間にもだった。
「揺れて揺れて」
劉備はその豊かな胸を左右に震わせていた。
「縦に縦に」
今度は上下にであった。
「斜め斜め」
次はそちらであった。
「はい、おっぱい体操だよ」
「にゃにゃーーーーーーーーーっ！」
「おっぱいだにゃーーーーーーーっ！」
「大きいにゃーーーーーーーーーっ！」
そしてそれを見てだった。
孟獲が飛んできた。四人程一緒である。
そしてだ。足元にあった縄にその足をかけて。
下に仕組んであった。網に吊り上げられてだ。一網打尽だった。
「これで三度目なのだ」
「そうね」
馬岱が張飛のその言葉に頷く。
「それはいいけれど」
「そうなのだ。それ自体はいいのだ」
「そうよ。何であんたがいるわけ？」
馬岱はじとっとした目で網の中を見ていた。そこにはだった。
魏延もいた。彼女はふてくされた顔でそこにいるのだった。
「どういうことよ、これって」

「ま、まあそれはだ」
魏延はバツの悪い顔で馬岱に返す。
「色々あってだな」
「色々って何よ」
何はともあれ三度目だった。しかし孟獲はまだ諦めない。
今度も解き放たれる。そして次は。
魏延が釣りをする。河の中で魚を仕込ませていた。
それを離れた場所で見てだ。神楽が怪訝な顔で孔明と鳳統に問う。
「あの、今度は釣りなの？」
「はい、そうです」
「その通りです」
その通りだと答える二人だった。
「孟獲さんはお魚が大好きなようなので」
「猫ですから」
だからだというのである。
「それで今回はです」
「お魚で」
「何かもう何でもありね」
こう言う神楽だった。その顔はいささか呆れているものだった。

# 第五十三話　孟獲、七度捕らえられるのこと五

「けれどこれで捕まったら」
「はい、絶対に捕まりますから」
「安心して下さい」
二人がこう言った途端にあった。魏延が釣った。
「よし、来た！」
「嘘っ・・・・・・」
これには驚くしかない神楽だった。今度は釣りであった。
これで四度目だ。しかし諦めない孟獲だった。
五度目はだ。バナナを上から吊り上げていてだった。
「バナナにゃ！」
飛びつくとそこに眠り薬があって捕まる。だがやはり諦めない。
六度目はだ。また落とし穴だった。今度も引っ掛かったのだ。
「どうしてこんなところににゃ！？」
「また引っ掛かるか？普通」
「ちょっとないだろ」
趙雲と馬超も呆れてしまった。しかし捕まったのは確かだった。
だがまだ諦めない孟獲はまたしても逃がされた。しかし七度目はだった。
「今度はこれか」
「これなのね」
関羽と劉備がその罠を見ていた。通り掛かればそこに張った糸に反応してだ。吹き矢が飛んで来る仕掛けの罠を張っていたのだ。
「今度も確実にいけるな」
「そうよね、これまでの流れだと」
「けれどなのだ」
張飛は少しばかり困った顔になっていた。
「あいつ凄く諦めが悪いのだ」

「そうだな。六回も捕まっているのにな」
「何か可哀想な感じもするし」
関羽と劉備も末妹の言葉に応える。
「そろそろ終わりにしたいが」
「どうなのかしら」
「流石に。そろそろと思いますけれど」
「今度で七度目ですし」
孔明と鳳統も考える顔になっている。
「けれど孟獲さんのあの諦めの悪さって」
「物凄いです」
「そこまで諦めの悪い人はね」
「そういないと思います」
ミナと月も言う。
「けれど。変に力で訴えるよりも」
「ずっといいですよね」
「はい、そうです」
「その通りです」
軍師二人もそれが言いたいのだった。
「力で強制しても孟獲さんとの間に後までいざかいを残すだけです」
「それでは何にもなりません」
「城を攻めるのではなく心を攻めるのです」
「大事なのはそれです」
これが二人の狙いだった。
「ですからここはです」
「孟獲さんが本当にぎゃふんと言うまでです」
「やるしかないのね」
「どれだけ時間がかかっても」
黄忠と厳顔もここで考える顔になった。
「だからこうして何度も罠を張って」
「それでじゃな」

「しかしそれでもな」
「ここまで来たことを考えたらな」
趙雲と馬超は幽州からこの南蛮まで来た旅路を考えていた。
「これ位はな」
「何でもないか」
「幽州からか」
魏延にとってはだ。信じられない長さだった。
「この国のまさに北から南だな」
「そうだよ。その間本当に色々あったんだよ」
馬岱が驚く魏延に話した。
「袁紹さんのところや曹操さんのところにも行ったしね」
「二人共ややこしい人物と聞いているが」
「それに袁術さんのところにも」
「余計にややこしい人物と聞いているぞ」
これが彼女から見た三人だった。
「本当に色々あったのだな」
「確かに癖のある方々だが」
「悪い奴等ではないのだ」
関羽と張飛がそれは保障した。

## 第五十三話　孟獲、七度捕らえられるのこと六

「色々と楽しいこともあったしな」
「無茶苦茶なこともあったけれどなのだ」
「そういえば近頃」
魏延は腕を組んでだ。こんな話をはじめた。
「その方々が支えている何進大将軍と宦官達の対立がさらに激しくなっているそうだな」
「その様じゃな」
魏延の言葉にだ。厳顔が応えた。
「それで都は大変なようじゃな」
「天下は今は各州によってばらばらになっているわ」
黄忠はそのことを憂いていた。
「牧のいない州は何かと困ったことになっているわ」
「賊も増えている」
「確かな牧のいる州はいいんだけれどな」
趙雲と張飛も憂いのある顔を見せている。
「天下は不安定になってきている」
「それで肝心の都がそれじゃあな」
そんな話をしていたらだった。また孟獲が捕まった。だがやはり諦めなかった。それでまたしても解き放たれる。これでこの日は終わった。
その次の日の朝。孟獲は三人に対して叫んでいた。
「悔しいにゃ！」
「そうにゃ、七度も捕まったにゃ」
「何か凄い流れだったにゃ」
「あの手この手で」
「このこと、絶対に忘れないにゃ」
怒ることしきりの孟獲だった。

「こうなったらにゃ」
「どうするにゃ？それで」
「美以様、それで」
「何をするにゃ？」
「こうなったら悪霊を呼ぶにゃ」
こんなことを言い出すのであった。
「そしてそれで奴等に復讐するにゃ」
「悪霊っていうとあれにゃ？」
「あっかんこーの神様に御願いして」
「そうするにゃ」
「その通りにゃ。では早速そうするにゃ」
まさに思い立ったらすぐにであった。彼女は三人を連れて密林の奥に向かう。ここでもタムタムとチャムチャムは留守番であった。
「何か変なことになった？」
「けれど大丈夫」
兄は妹を見下ろしてこう話した。
「孟獲悪い奴じゃない。大したことにならない」
「だといいけれど」
「この話もうすぐ終わる」
タムタムはここでこうも言った。
「それも幸せに」
「そうなの」
「そう。タムタムわかる」
また妹に話すのだった。
「だから安心していい」
「タム兄ちゃんがそう言うのならね」
チャムチャムもそれで納得するのだった。そうしてだった。
彼等は宮殿で待ち続けた。バナナやマンゴーを食べながら。
そして孟獲はだ。白い石が何十段も積まれところどころに何かの動物を思わせる像が飾られている場所の真ん中、一番上に登ってだ。

そうしてだった。
パヤパヤをそこに置きだ。両膝をついて腰を完全に曲げて両手を投げ出してだ。そのうえで恭しく礼拝しながら言っていた。
「うらううらうら」
「うらううらうら」
「うらううらうら」
三人がまず詠唱していた。そしてだ。
孟獲がだ。槍を右手に持って立ち上がりだ。
あちこちを走り回ってだ。叫んでいた。
「うら！うらううらうら！」
そしてだ左目をウィンクさせて舌を出して叫ぶのであった。
「あっかんこーーーーーーーーーー！」
するとだ。快晴だというのに雷が落ちたのであった。
その雷と音は劉備達からも聞こえた。それを聞いてであった。

# 第五十三話　孟獲、七度捕らえられるのこと七

孔明と鳳統がだ。眉をしかめさせて言った。
「こんな晴れに？」
「おかしいですね」
「雲一つないのに」
「それで雷なんて」
「何かあるのか？」
魏延も言う。
「よからぬことが」
「少なくともいいことではないな」
「そうなのだ。晴れなのに雷様なんてないのだ」
関羽と張飛もそれを言う。
「何もなければいいのだがな」
「ううん、不吉な予感がするのだ」
こう言っているとであった。そこにだ。
「にゃにゃーーーーーーーーーーっ！」
「逃げるにゃーーーーーーーーーっ！」
「大変にゃーーーーーーーーーっ！」
孟獲達が来た。一行にぶつかり吹き飛ばしてしまった。
「な、何っ！？」
「何が起こったのじゃ！？」
倒れたが何とか起き上がり問う黄忠と厳顔だった。
他の面々も起き上がる。その彼女達に対してだ。
孟獲は狼狽しきった様子で。両手を振り回しながら一行に話す。
「パ、パヤパヤがにゃ」
「あの象さんがですか？」
「そうにゃ、悪霊を取り憑かせたらにゃ」
こう一行に話すのだった。

「化け物になって大きくなってそれでにゃ」
「悪霊」
「まさか」
それを聞いてだ。神楽と月の顔色が一変した。
「オロチが」
「刹那が。ここに」
「今パヤパヤは化け物にゃ！暴れ回って大変にゃ！」
「だったら」
それを聞いてだ。ミナが己の弓を構えて言う。
「すぐに退治を」
「パヤパヤに傷をつけたら許さないにゃ！」
それは絶対に許さない孟獲だった。
「そんなことをしたらそれこそにゃ」
「それならどうしろっていうのよ」
馬岱が眉を顰めさせて彼女に問う。
「傷つけたら許さないって」
「そもそもその象さんは」
「何処ですか？」
軍師二人が尋ねるのはまずはそこからだった。
「大きくなったとはいいますけれど」
「どれだけですか？」
二人が言うとだった。一行の前にだ。
密林の木々を遥かに超える巨大さでだ。漆黒の象が現れた。目は赤く牙が長く曲がっている。その象が出て来て彷徨するのだった。
その象を見てだった。軍師二人は。
「はわわわわ、大変じゃないですか！」
「あんな大きさだとちょっとやそっとじゃ」
「一人では相手はできないな」
それを言う関羽だった。
「どうすればいい、ここは」

「そうね。とりあえずはあの象を囲んで」
「それからじゃな」
黄忠は弓矢を、厳顔は巨大な砲を出していた。それが二人の得物である。
「本当にあれは一人や二人ではね」
「どうにもならんぞ」
険しい顔になってだ。こう話すのだった。
そしてここでまた。孟獲が言うのである。
「あれはパヤパヤにゃ。傷つけたら駄目にゃ！」
「それはわかったが」
「じゃあどうすればいいんだよ」
趙雲と馬超は具体的に何をすればいいのかを尋ねた。当然二人もそれぞれの槍を構えている。そして他の面々も同じであった。

## 第五十三話　孟獲、七度捕らえられるのこと八

「何かあるのか、それは」
「あったらそれでやらせてもらうけれどな」
「尻尾にゃ！」
孟獲が言うのはそこだった。
「尻尾にゃ、尻尾が悪霊の力の源にゃ」
「尻尾！？」
「象の尻尾に」
「そうにゃ、そこを打てば」
どうなるかというのである。
「悪霊の力は消えるにゃ。それで終わりだにゃ」
「わかったわ」
「それなら」
神楽と関羽が頷く。それでだった。
二人はその象の後ろに回り込んだ。そして尻尾を見るとだった。
「二本あるわね」
「赤と青と」
二人の見た通りだった。巨象の尻尾は二本あった。
それを見てだ。いぶかしんですぐに孟獲に問うた。
「どっちなの、それで」
「悪霊の力の源は」
「どっちかなのにゃ」
こんな返答だった。
「どっちかを打てばそれでパヤパヤは元に戻るにゃ」
「それで間違った方を打てば」
「その場合はどうなるのだ」
「その場合はもっと大変なことになるにゃ」
孟獲も三人と共にだ。巨象の周囲を囲んでいた。そのうえで二人

に話すのだ。
「悪霊の力が強まってパヤパヤがもっと大きくなって凶暴になるにゃ」
「それって洒落にならないんだけれど」
「今よりもか」
馬岱と魏延がそれを聞いて言う。
「それなら余計に」
「失敗は許されないぞ」
「それでどっちなのかしら」
「どちらの尻尾だ」
一行はそれがわからなくなっていた。巨象を囲みながら困惑する。しかしここで、であった。あの二人が来て言うのであった。
「待ってよ、確か孟獲ってさ」
「パヤパヤの尻尾噛んだ」
チャムチャムとタムタムが来た。そうして一行に話すのだった。
「それなら歯形がついてるわよね」
「まだ尻尾に」
「あっ、そういえばそうにゃ」
言われてそのことを思い出す孟獲だった。彼女の周りには既に三人が増殖してだ。彼女を護っていた。
「今思い出したにゃ」
「それならそっちを打てば」
「それでいい」
「そう。それなら」
ミナが動いた。彼女もまた巨象の後ろに回り込む。そうしてだった。
弓を斜め上に構える。象の尻尾に。その一方、赤いものを見てだ。
「あれね」
歯形をはっきりと見た。もう間違えようがなかった。
そのうえで弓矢を放つ。光が象の尻尾に迫る。

そしてだ。その尻尾を見事に射抜いたのであった。
これで決まりだった。巨象は咆哮をあげるとそこからすぐに姿を小さくさせて色が戻ってだ。元のパヤパヤになったのであった。
孟獲はそれを見るとだ。泣きながらパヤパヤに抱きついて叫ぶのだった。
「よかったにゃ！もう二度とこんなことはしないにゃ！」
これで一件落着であった。そうしてだ。
孟獲はだ。落ち着きを取り戻した劉備達にだ。こう言うのだった。
「パヤパヤを助けてもらった御礼にゃ」
「御礼？」
「というと？」
「パヤパヤのヘソのゴマをやるにゃ」
今は快く告げるのだった。
「それを水に入れて剣にかけるといいにゃ」
「いいんですか、それで」
「けれどまだ」
「確かにぎゃふんとは言ってないにゃ」
孟獲もそれは言う。
「けれどにゃ」
「けれど？」
「けれどっていうと？」
「パヤパヤを助けてもらったにゃ」
彼女が今言うのはこのことだった。

# 第五十三話　孟獲、七度捕らえられるのこと九

「その御礼にゃ」
「それでなんですか」
「けれどにゃ」
ここで孟獲の言葉と目が強いものになった。
「一つ条件があるにゃ」
「条件ですか」
「そうにゃ。南蛮象は南蛮の宝にゃ」
孟獲が今言うのはこのことだった。
「その南蛮象がどうなるのか美以は確かめる必要があるにゃ」
「トラもにゃ」
「ミケもにゃ」
「やっぱりシャムもにゃ」
三人もだというのだ。
「だからにゃ。ここはにゃ」
「ここは？」
「名前は何といったにゃ？」
劉備に対してそれを問うた。
「そういえば聞いていなかったにゃ」
「劉備といいます」
そのまま素直に答える劉備だった。
「そういえばまだ名前はお話していませんでしたっけ」
「そうだったにゃ。その劉備がにゃ」
あらためて彼女に言うのであった。
「パヤパヤのヘソのゴマをどう使うか」
「剣に使ってもまだあまるからですね」
「それを見届けないといけないにゃ。だからにゃ」
それでこう劉備に告げた。

「ここは一緒に行かせてもらうにゃ」
「同行、ですか」
「そうにゃ。それが条件にゃ」
これがなのだった。彼女の言う条件であった。
「それでいいにゃか？」
「はい、それでは」
劉備はだ。孟獲のその条件に対して頷いたのだった。
そしてそのうえでだ。孟獲達の同行についても述べた。
「それなら。これから宜しく御願いしますね」
「うむ、頼むにゃ」
こうしてだった。孟獲達も加わるのだった。
タムタムとチャムチャムもだった。一行はその大人数で幽州に帰ることになった。
南蛮を発つ時にだ。ふと神楽が言うのだった。
「ここから幽州はかなり遠いけれど」
「どうしたのにゃ？」
「貴女達はそこまで言ったことはないわね」
彼女が言うのはこのことだった。
「それはそうね」
「これでも美以達も旅をしたことがあるにゃ」
しかし孟獲は神楽に対してこう言うのだった。
「だから大丈夫にゃ」
「あら、そうだったの」
「成都まで出たことがあるにゃ」
「ほう、あの街にか」
それを聞いてだ。関羽がその目を動かした。
「思ったより遠出しているな」
「だからにゃ。外に出るのも慣れてるにゃ」
こう話すのである、
「その北のところはまだにゃが」

「一つ言っておくのだ」
張飛ガ話してきた。
「寒いのは覚悟しておくのだ」
「寒い？」
寒いと聞いてだ。孟獲はきょとんとなった。そのうえでの言葉は。
「寒いって何にゃ？美味いにゃ？」
「あれっ、ひょっとして」
劉備は孟獲のその言葉を聞いてあることに気付いた。
「孟獲さんって寒いという言葉は」
「寒いって本当に何にゃか？」
「食べ物にゃか？」
「お魚にゃ？」
「それとも果物にゃ？」
「どうやら孟獲さん達は南蛮にずっとおられるので」
「そうしたことは御存知ないみたいです」
孔明と鳳統がこう指摘した。
「寒いという感覚自体も」
「そうみたいです」
「そうなのか。だが北に行けばだ」
「多分わかるのだ」
関羽と張飛も今はそれでいいとした。そしてであった。
タムタムとチャムチャムもであった。二人も言う。
「ではタムタム達も」
「一緒にね」
「そうにゃ。タムタム達も大切な仲間にゃ」
孟獲も二人の申し出に笑顔で応える。
「じゃあ一緒に幽州に行くにゃ」

「ではいざ」
「北に行こう」
「はい、わかりました」
劉備は二人も受け入れてだ。そうして笑顔になってだった。
一行は幽州に戻る。それもまた旅であった。そしてその旅から帰るとだ。戦いが彼女達を待っていた。だが彼女達はそのことを知らなかった。

第五十三話　完

２０１０・１２・２２

# 第五十四話　三姉妹、変装するのことその一

第五十四話　三姉妹、変装するのこと

剣を修復するという目的を果たし孟獲等を仲間に加えた劉備達は幽州に戻っていた。その時にだった。

「何か帰り道は」

「あっさりとしているな」

「そうですよね」

劉備が関羽と話していた。勿論他の面々も一緒である。

「何か順調にいっていて」

「不思議な位だ」

「あまり面白くないのだ」

張飛はふてくされたような顔で述べるのだった。

「帰り道も派手じゃないと面白くないのだ」

「だよなあ。折角漢を北から南にだったからな」

馬超も張飛のその言葉に頷く。

「何かこうな」

「帰り道も派手になのだ」

「ふむ。それではだ」

二人にいつも通り乗る趙雲であった。

「二人共今夜はだ」

「今夜は？」

「何だってんだよ」

「風呂の中でもいいが」

思わせぶりな笑みでだ。こう二人に言うのである。

「どうだ？肌を重ね合わせるか？」

「そんなことして何になるのだ？」

「お、おいそれはまずいだろ」

張飛と馬超で全く違う言葉を返す。

「一緒に寝るのならいいのだ」
「だからあたしは別にそんなことは」
「ふむ。鈴々はわかっていないから別にいいが」
趙雲は馬超を妖しい笑みで見ていた。
「翠はわかっているな」
「わかっているんならどうだってんだよ」
「それでいい」
いいというのである。
「では今夜。愛紗も入れて三人でだ」
「だから三人で何するんだよ」
「何故そこでいつも私が入るのだ」
「大きい胸同士三人で楽しもうではないか」
こんなことを言うのであった。
「どうだ?それで」
「だからいいっていってんだろ」
「私はその趣味はないぞ」
「今はなくてもそれでもだ」
ここでも二人を手玉に取る趙雲だった。
「よいではないか。それもまた」
「うう、駄目だ星には」
「勝てん」
少なくとも二人には無理な話であった。
「あたしはまだそうした経験は全然ないんだよ」
「私もだ」
「安心しろ、私もだ」
妖しい笑みはそのままの趙雲である。
「だからだ。はじめて同士でだ」
「星ちゃんは相変わらずね」
「そうじゃな」
そんな趙雲を見てだった。暖かい笑みで話す黄忠と厳顔であった。

「実はそうしたつもりはないのに」
「ああして二人をいじっておるからのう」
「そうして楽しむのも」
「よいことじゃ」
「そうなんですか？」
「翠さんも愛紗さんも困ってますけれど」
孔明と鳳統はいぶかしみながら二人に問うた。
「それでもなんですか」
「いいんですか」
「そういうのもまたね」
「友の付き合いぞ」
大人の余裕で話す二人であった。
「そういうこともそのうちわかるわ」
「大きくなればのう」
「私できれば」
「私も」
軍師二人は大人二人の言葉を受けてこう言うのであった。思い詰めたような顔になってだ。
「胸がそうなれば」
「本当にそうなれば」
「またその話なのね」
「好きだな、二人共」
馬岱と魏延がその軍師二人に言ってきた。

# 第五十四話　三姉妹、変装するのことその二

「こだわり過ぎじゃないかな」
「そう思うがな」
「何か蒲公英ちゃんも最近」
「私達よりも」
孔明と鳳統はその馬岱の目を横目でじっと見て話した。
「大きくなってない？」
「そうよね。やっぱり」
「私だって胸ないわよ」
二人にだ。馬岱は眉を顰めさせて返した。
「桃香さんや愛紗さんみたいにはいかないから」
「ううん、そういえば桃香さんのおっぱいって」
「大きいだけじゃなくて」
それに止まらないのが彼女の胸だった。
「弾力もあるし」
「お椀みたいになってて」
「凄過ぎるわよね」
「どうやったらあそこまで」
「だから胸の話はそこまでにしてね」
馬岱がまた二人に言う。
「まあそれはそうとしてね」
「そうとして？」
「何かあるの？」
「うん、その桃香さんだけれどね」
馬岱がここで話すのは劉備自身のことだった。
「数え役萬三姉妹の一人に似てない？」
「あっ、そういえば」
「そうね」

「確かに」
神楽にミナ、月が馬岱の今の言葉に頷いた。
「長女の張角ね」
「あの娘に顔も胸も」
「背丈もですよね」
「違うのは髪の色だけで」
馬岱はさらに話す。
「もう何もかもが」
「あっ、それ最近言われます」
劉備自身もそうだと言ってきた。
「私と張角ちゃんそっくりだって」
「そうですよね。本当に似ていますから」
馬岱は劉備本人にも話した。
「そっくりさんっていう位に」
「おっぱいがもう一つあるにゃ！？」
孟獲は話を聞いてこう考えた。
「それは最高にゃ。もう一つあったらもっと幸せになるにゃ」
「大王様、この場合はにゃ」
「二つになるにゃ」
「おっぱいは二つあるものにゃ」
トラ、ミケ、シャムは孟獲にさりげなく話す。
「奇麗で大きいおっぱいがさらに二つ」
「二つと二つで沢山」
「凄くいいことにゃ」
「そうにゃ。おっぱいが沢山あるにゃ」
孟獲は劉備のその胸を自分の頭で下から突き上げながら笑顔でいる。
「美衣はそれだけで幸せになれるにゃ」
「ふむ。そういえばだ」
趙雲がここで言う。

「これから徐州に入るがだ」
「何かあるのかよ、徐州に」
「その三姉妹が来ているそうだな」
趙雲は馬超の問いにこう答えた。
「それで舞台を開くそうだ」
「あっ、そうなんですか」
それを聞いてだ。目を輝かせる劉備だった。
「じゃあここはですね」
「その舞台をね」
「観たいというのじゃな」
「はい、それでいいですか？」
劉備はにこにことして黄忠と厳顔にも尋ねる。
「張角ちゃん達とても可愛いですし」
「そうね。旅も長かったし」
「ここで皆のご褒美によいのう」
二人も笑顔で劉備のその提案に頷く。
「じゃあ。徐州に入ればね」
「舞台を観るとしようぞ」
「あの三姉妹もかなり凄くなったな」
今言ったのは関羽である。

# 第五十四話　三姉妹、変装するのことその三

「最初はしがない旅芸人だったそうだが」
「そうなのだ。今じゃ誰でも知っているのだ」
張飛も言う。
「国の誰もがそうなのだ」
「知っているだけではないな」
魏延も話に加わる。
「その歌と演出も有名だな」
「何かお金とか管理している人が凄いみたいね」
馬岱が指摘するのはそこだった。
「ええと、黒と白の服の格好いい女の人達だって」
「黒と白なのね」
「はい、あまり表に出ないそうですけれど」
馬岱は神楽に対しても答えた。
「凄い人達みたいです」
「そうなのね」
「他にも応援団が一杯ついてますし」
「それは私達の世界と同じね」
その話になるとだ。神楽は笑ってこう言った。
「私達の世界もね」
「ああした娘達には応援団がなんですね」
「ええ、つくわ」
神楽は劉備にもこう話した。
「人気が出るとね。実力があると余計にね」
「あの娘達歌も凄く上手ですから」
肝心のそれもだというのだ。
「もう誰が聴いてもっていう位に」
「鬼に金棒ね」

「じゃあその舞台に」
「ええ、行きましょう」
こんな話をしていた。一行だった。そしてその中でだ。
タムタムはだ。こうチャムチャムに話した。
「チャム、ここは」
「お兄ちゃん、どうするの？」
「先に行く」
そうするとだ。妹に話すのだった。
「タムタム先にその幽州に行く」
「そうするの」
「北に悪い奴いる」
だからだというのである。
「それで行く」
「そう。それじゃあ」
「劉備達には話しておいて欲しい」
「お兄ちゃんからも話したら？」
「確かに。じゃあそうして」
「うん、行ってらっしゃい」
「また会う」
こんな話をしてだった。タムタムは先に桃家荘に向かった。一行は徐州に入った。
その頃だ。三姉妹の間では。こんな話をしていた。
「折角徐州に来たし」
「どうしたの、姉さん」
「何かあるの」
張梁と張宝が張角に問う。三人は今自分達が泊まっている立派な宿の中にいる。それぞれ天幕のベッドに座って話をしているのだ。
「ここ何度か来てるけれど」
「それでも」
「街を見回りたいの」

こう二人に言う張角だった。
「駄目かな、それ」
「別にいいけれど」
「一人で？」
「そう、一人で」
また言う張角だった。
「駄目かな、それって」
「それじゃあ姉さんだってすぐにばれない？」
「私達もうかなり有名になってるから」
二人も姉の我儘な性格は知っていたので止めなかった。言っても結局のところ外に出るとわかっていたからだ。だがそれでもだった。
二人はだ。姉にこのことを言うのだった。
「ばれたら大変よ」
「それこそ何が起こるか」
「うん、だから」
不意にだ。張角はあるものを出してきた。それは。
「これ被ってね」
「髪の毛？」
「それなの」
「これをこうして」
ピンク色の長い髪の鬘を頭に被った。それで言うのだった。

# 第五十四話　三姉妹、変装するのことその四

「どうかな、これで」
「髪の色変わっただけじゃない」
「どう見ても」
醒めた言葉で言う妹二人だった。
「全然変わってないし」
「私もそう思う」
「ここで服も着替えて」
しかしまだ言う張角だった。白と緑の服も出しての言葉だ。
「どうかな、これで」
「下着は元々ピンクだけれど」
「それはいいの」
「下着なんて見せないとわからないから」
能天気に言う長姉だった。
「だからこれで問題ないわよ」
「ううん、それでも姉さんにしか見えないけれど」
「それでもなのね」
「そう、これで大丈夫よ」
こう言い切る張角だった。とりあえず髪はピンクになり服も着替えた。
「私が天和だってわからないわ」
「じゃああれよ。鋸とか鉈とかは振り回さないでね」
「それは御願い」
「お姉ちゃんそうしたのは」
「だって。姉さん何かあったら」
「そっちの方にいくから」
だからだという二人だった。
「中に誰もいませんよとか」

「それは絶対に止めて」
「わかったわ。じゃあ」
いい加減諦めた張角だった。否定できないからだ。
「そういうのはね」
「そう、絶対にね」
「気をつけて」
「何ならね」
「私達も」
心配でだ。妹二人もこう言わずにはいられなかった。
「一緒に行く？」
「やっぱりそうした方が」
「ううん、いいかな」
張角はここで迷いを見せた。
「お姉ちゃんだけだと何か」
「そう、不安だから」
「どうしても」
やはりであった。そうなるのだった。
「一緒に行こう」
「三人でね」
「ううん、じゃあそうしよう」
そして二人の言葉に頷く張角だった。そうしてであった。
三人はそれぞれ変装をした。張角はそのままの格好で後の二人は。
張梁は髪の色を黒くしてそれで上で束ねて黒い眼鏡をしている。
服は赤にしている。そしてネクタイはかなり派手な黒と黄色の柄だ。
張宝は髪を青くして眼鏡を外してだ。青と白の服である。
「あれっ、一和ちゃんの服って」
「どうしたの」
「綾とか波とか？」
こんなことを言う張角だった。末妹のその姿を見てだった。
「そんな格好？」

「何、それ」
「何となく思ったけれど」
それでだと言う張角だった。
「そんな感じ？」
「そうなのね」
「それで地和ちゃんは」
真ん中の妹についても言うのだった。
「バイスさん達が言うあっちの世界の悪い人みたいだけれど」
「イメージはしたけれど」
「やっぱりそうなの」
「どう、この格好」
黒眼鏡の中で誇らしげな顔をしている次妹だった。
「中々似合ってるでしょ」
「何でその格好なのか気になるけれど」
「何となくだけれど」
張梁もこう言うのであった。
「それでなの」
「そうなのね」
「そういうこと。それで姉さん」
「うん、それで」
「何処に行くの？」
張梁は姉に具体的に尋ねた。

## 第五十四話　三姉妹、変装するのことその五

「それで」
「ええと、それは」
「それは？」
「何処に行こうかしら」
張角の返答は実にいい加減なものだった。
「それで」
「ひょっとして外に出たいだけで」
「何も考えてなかったの」
「だってお姉ちゃん」
ここで本領を発揮する彼女だった。まさに張角だった。
「自分でそういうの考えたことないし」
「やれやれね」
「姉さんらしいわ」
そんな長姉に呆れて返す妹二人だった。
「そういうところ本当に姉さんね」
「全く」
「駄目かな、やっぱり」
「一緒に来てよかったわ」
「地和姉さんに同じ」
怒りはしない。慣れているからだ。しかし言わずにはいられないのだった。
「子供の頃からずっとそうだったし」
「放っておけないから」
「そうなの？」
「そうよ、絶対に」
「だから一緒に来たし」
それでだとも話す二人であった。

「まあとにかくね」
「それなら」
「うん。何処に行くの？」
「街に行きましょう」
「そこにね」
二人の提案はこうであった。
「彭城の街にね」
「ここだけれど」
「ええと、彭城って」
その名を聞いてだ。張角はふと考える顔になって述べた。
「どんな街だったかな」
「項羽のあれじゃない」
「本拠地だった場所よ」
「あっ、そうだったわね」
言われてやっと思い出す張角だった。
「あの西楚の覇王ね」
「滅茶苦茶強かったのよ」
「それで一旦は天下を治めたのよ」
この人物のことはこの時代においてもよく知られていた。その強さは伝説にさえなっていた。そしてその名前はどうなっているかというとだ。
「そのまま孫策さんの仇名にもなってるし」
「小覇王」
「それって孫策さんはまだ項羽さんにまでなってないってこと？」
張角は何気にこう言った。
「流石にそこまではなの」
「まあそうね」
「確かに孫策さんも強いけれど」
妹二人もここで姉に話す。
「項羽まではね」

「いってないわ」
「三万で五十万以上の大軍を破ったからね」
「それもあっという間に」
「そんなに強かったのね」
そのことをあらためて知った張角だった。
「西楚の覇王って」
「袁術も覇王って自分で言ってるけれどね」
「どうしてかわからないけれど」
実はそんなこともやっている袁術だった。
「あの人も歌上手いらしいけれど」
「それもかなり」
「ライバルとか？」
張角はふと言った。

# 第五十四話　三姉妹、変装するのことその六

「そういえばお姉ちゃんもそうだけれど」
「そうだけれどって？」
「今度はどうしたの」
「違う名前で舞台やったことあるけれど」
「楚四義だったわね」
「あれ、誰でもわかってたから」
また突っ込みを入れる二人の妹だった。
「だって。顔そのままだったから」
「わからない人いない」
「袁術さんもそうなのかな」
張角はさらに話すのだった。
「違う名前でお忍びでとか」
「それ言ったら皆そうよ」
「地和姉さんは違うけれど」
また言う二人の妹達だった。
「姉さんだってそうだし」
「そう。違う名前は言わないこと」
「ううん、妙は本名で」
しかしまだ言う張角だった。
「他の羽由とか真白とか凛とかは」
「姉さん違う名前多過ぎ」
「そんなのあったの」
「気付いたら」
そうだというのである。
「増えてて」
「全く。違う名前一杯用意しても」
「皆すぐにわかるから」

「変装よりも？」
「そう、そっちよりももろばれ」
「今の方がましな位」
その下手な変装でもだというのだ。見れば長姉が一番変装が下手だ。ただ色違いにしか見えない。
「けれどそういう人が多いのもね」
「事実だし」
「多いの」
「っていうか私達の殆どがよ」
「それまた言うけれど」
「お姉ちゃんだけじゃないのね」
それを聞いてまた能天気に笑う張角だった。そしてだ。
「よかったわ。それじゃあ」
「よくないから」
「中の話は洒落にならないから」
「中はなの」
「そうよ。それ注意してね」
「姉さんも中の話は」
妹二人は厳しい一面もあった。しかし能天気なままの長姉であった。
そして劉備達もだ。今彭城に来ているのだった。その話すことは。
「じゃあここが」
「はい、そうです」
「ここがです」
孔明と鳳統が劉備に説明していた。街を歩きながら。街は人が多いが今一つ活気がない。何かが足りない感じがそこにはあった。
「西楚の覇王項羽の本拠地だった場所です」
「そうだったんです」
「歴史のある街なのね」
「そうなります」

「項羽が死んでもこの街は残っていますし」
「項羽はとにかく強かったそうだな」
関羽は強い顔で語った。
「我々が束になっても敵わない程にな」
「それは鈴々も思うのだ」
張飛ですらであった。
「項羽の強さは尋常ではなかったと聞いているのだ」
「今天下で最強と言われているのは」
「呂布だろうな」
趙雲と馬超は彼女の名前を出した。
「あれでようやくか」
「相手にできる位じゃねえのか？」
「そうね。項羽は別格ね」
黄忠もそれを認める。

# 第五十四話　三姉妹、変装するのことその七

「歴史にもそう書いてあるし」
「まああれじゃ」
厳顔も話す。
「項王は別格じゃな」
「別格なのだ」
「あそこまで瞬く間に果たせた者はおらん」
それは厳顔も認めることだった。張飛にも返すのだった。
「敗れはしたがのう」
「それでもなんですね」
「やはり大した者じゃった」
劉備にも話すのだった。８
「強さもな」
「けれど。愛紗ちゃんでも勝てないって」
「いや、ここにいる全員が向かってやっと五分だな」
趙雲も項羽についてはこう話した。
「話を聞いているとだ」
「やっとって」
「項羽の強さはそこまでだった」
趙雲はまた話すのだった。
「一人であそこまでできたのだしな」
「まあなあ。正直今の時代にいても凄かっただろうな」
馬超も考える顔で述べる。
「項羽だけはな。洒落にならないよ」
「その項羽のいた場所だけれどね」
黄忠は周りを見回していた。その城のだ。
「牧がいないせいね。今一つ活気がないわ」
「そうですよね。そこそこ栄えていても」

「しっかりとした牧がいないから」
黄忠は馬岱にも話した。
「そのせいでね」
「誰かいないかしら。牧は」
「曹操殿か袁紹殿は駄目なのか？」
魏延は二人の名前を出した。
「あのお二人のどちらかで」
「それか孫策殿じゃな」
厳顔は彼女の名前を出した。
「三人の治める場所の丁度間にあるがのう」
「その間にあるのがまずいと思います」
「それがです」
ここでだ。孔明と鳳統が指摘した。
「お互いに影響し合う場所にありますから」
「簡単に牧に名乗り出られないんです」
「三人共何進大将軍の下にいるのにか？」
魏延はいぶかしむ顔で二人に問い返した。
「それでもか」
「三人共自分達の勢力を持っておられますから」
「ですからそれもあって」
事情は複雑なのだった。
「ここは誰か牧になるのに相応しい方がおられれば」
「三人以外の」
「袁術殿は・・・・・無理だな」
関羽は彼女の名前を出したがすぐに自分で引っ込めた。
「御自身の場所だけで手が一杯だな」
「はい、そう思います」
「袁術さんも」
二人も彼女についてはこう見ていた。
「あの州は治める領域も人も多いですから」

「それに南部を治めはじめられたばかりですし」
「ですから今は」
「徐州までは」
「そうだな。公孫賛殿も幽州におられるしな」
関羽がこの名前を出すとだった。孟獲がきょとんとして言うのだった。
「誰にゃ？それは」
「そうにゃ。聞いたことがないにゃ」
「何処の誰にゃ？」
「全く知らないにゃ」
トラ、ミケ、シャムも続く。
「誰も知らないにゃ？その人」
「多分存在感が薄いにゃ」
「そうに違いないにゃ」
「その通りだ」
趙雲も彼女達のその言葉を認めて言う。

# 第五十四話　三姉妹、変装するのことその八

「あの方は。残念だが」
「そういえば何か幽州の牧に袁紹さんがなるらしいですね」
馬岱はふとこのことを皆に話した。
「そんなこと話してる人いますよね」
「ああ、烏丸とか匈奴とかの征伐の功績でだな」
馬超はその根拠はそれだと見ていた。そしてその通りだった。
「確かに充分な功績だけれどな」
「けれど。そうなったら公孫賛はどうなるのだ？」
張飛はいぶかしむ顔で言った。
「鈴々も忘れていたのだ」
「絶対に忘れられてますね」
「朝廷にも」
孔明と鳳統はそう見た。
「多分。朝廷も袁紹さんも幽州に牧はいないと考えておられます」
「ですからそこに袁紹さんを」
「気の毒な話だな」
ここまで聞いてだ。関羽は憂いのある顔を見せた。
「公孫賛殿にとっては」
「桃々ちゃんって何か」
また真名を間違えている劉備だった。
「悪い娘じゃないけれど」
「存在感がないわね」
神楽もこのことは熟知していた。
「それもかなり」
「そういう人っているわね」
「そうですね」
それはミナと月も言う。

「中にはそうした人も」
「やっぱり」
「そうした人は何をどうやっても目立てないのよ」
神楽が今話すことは厳しい現実だった。
「どう努力してもね」
「希望はないのか」
「残念だけれど」
首を横に振って関羽にも述べる。
「そうした場合は」
「本当に気の毒だな」
また言う関羽だった。話をここまで聞いてだ。
「悪い方ではないし無能でもないのだが」
「だから器用貧乏なのだ」
趙雲が指摘するのはそこだった。
「曹操殿の様に何でもできる訳でも袁紹殿の様にやたらとムラがある訳でもないな」
「それか」
「かといって孫策殿の様に武勇に秀でている訳でも袁術殿の様に芸がある訳でもない」
「噂ではふがふがと言う癖があるそうだけれどね」
黄忠は公孫賛のこんな噂を話した。
「あとは包丁を使うのが得意だったかしら」
「弟を溺愛しているともいうがのう」
厳顔も話す。
「しかしそれはあくまでのう」
「中の話だから」
「少なくとも今の本人の話ではないからのう」
「どうしようもないわね」
こんな話をしながら街を歩いていた。そしてだ。
バイスとマチュアはだ。三姉妹がいなくなったのを見てだ。こう

話すのだった。
「また勝手に出ていったわね」
「そうね」
別に困ったものは見せていなかった。ただこう話すだけだった。
「さて、それならね」
「ええ、それはかえって好都合ね」
こう話してだった。二人で向かい合ってだ。
あらためてだ。こんなことを話すのだった。
「状況はいいかしら」
「どうかしらね」
こう話していくのだった。
「あの三姉妹の力は確かに凄いけれど」
「特に長姉はね」
張角のその潜在能力にはとりわけ注目しているのだった。
「けれど。性格が」
「ええ。無邪気だから」
「それも三人共ね」
「有名になって遊びたいだけだから」
それが三人が基本的に願っていることなのだった。

## 第五十四話　三姉妹、変装するのことその九

「ここで野心を出して乱を起こしてくれたらいいのだけれど」
「そうは上手くいかないみたいね」
「おい、それは困る」
ここでだ。二人の前に小柄な緑の髪の男が出て来た。服は白い。
その男はだ。怪訝な顔で二人に話すのだった。
「何の為の太平要術の書だ」
「あら、左慈ね」
「来たのね」
「進むのが遅いな」
ここでこう言う左慈だった。
「それで気になってだ」
「わざわざここまで来てなのね」
「私達にハッパをかけにきたのね」
「そういうところだ。この国は騒乱に向かうと思われたが」
「思ったようにはいっていないわね」
「想像以上にしっかりしてるわ」
バイスとマチュアはこう言うのだった。
「どうもね」
「上手くいかないわ」
「そうだな。俺もだ」
左慈も眉を顰めさせて話す。
「各地の群雄が思った以上に優れている」
「そのせいで異民族に乱を起こさせても失敗するし」
「国は安定してきているわね」
「しかもだ」
左慈はその目を怒らせてきた。
「御前達の世界の奴等も次々と来ているな」

「ええ、どうやらね」
「気付いている存在がいるわね」
二人もここで警戒する顔を見せた。
「私達のことにね」
「それで彼等をこの世界に呼び込んでいるのね」
「どうする、ここは」
左慈は二人にあらためて問うた。
「何かいい考えはあるか」
「とりあえずは様子見かしら」
「それしかないわね」
二人は今はこう言うしかなかった。
「あの三人の力をどうにかしてそちらに向けて」
「やっていくしかないわね」
「あの三人は何だ」
左慈は三姉妹についても言及した。
「能天気な普通の女達でしかないぞ」
「そうね。性格はね」
「本当にその通りよ」
「あの連中で本当にいいのか」
左慈はさらに言う。
「宮廷にいる張譲の方がだ。余程使えるぞ」
「あの宦官ね」
「確かに性格的にも私達の目的に相応しいわね」
「それはそうだけれど」
「それでも今はね」
「ふん、まあいい」
左慈はここで話を打ち切った。
「御前達に任せる」
「ええ、是非ね」
「そうしてもらえると助かるわ」

二人もそれでいいとするのだった。それが彼女達の考えだった。
何はともあれだ。今はであった。
「とりあえずはね」
「このままいくわ」
「それではな。俺はこれで帰る」
「ええ、またね」
「社達に宜しくね」
左慈は右手を握り締める。するとそこから闇が生じその中に消えていく。それを見届けてからだ。二人はまた話すのだった。
「きっかけがあればね」
「すぐに火が点く話ね」
「ええ、何かしらのきっかけがあれば」
「それを待つとしましょう、今は」
こうしてだった。二人は今は待つのだった。そのきっかけが生じる機会が近いことを感じながら。そうして待つのであった。不気味な笑みと共に。

第五十四話　完

２０１１・１・１１

# 第五十五話　華陀、徐州に入るのことその一



華陀はだ。相変わらず各地を旅していた。
共にいるのはだ。やはりこの二人であった。
「ねえダーリン」
「今度は何処に行くのかしら」
「そうだな。最近どうもおかしい」
腕を組んでだ。彼は貂蝉と卑弥呼に話した。
「あちこちでな」
「そうよねえ。どうやら」
「間違いないわね」
ここで話す二人だった。
「あの連中がね」
「蠢いているわね」
「そうだな」
華陀もだ。二人の話に応えて言う。
「怪しいとは思っていたがな」
「確信持っていいわね」
「もうね」
「そうだな。じゃあ今はだ」
「どうするの、それで」
「今度は何処に行くのかしら」
「あの書を手に入れる」
こう二人に話す華陀だった。
「そしてだ」
「力を封じるのね」
「あの書の」

「そうしてそのうえでだ」
華陀の話は続く。
「連中を何とかしないとな」
「あの書だけじゃないからね」
「オロチだっているし」
「最初は信じられなかった」
華陀はだ。真剣な顔で二人に語っていく。
「まさかな。そんな奴等がこの世界に来ているなんてな」
「けれど本当よ」
「本当のことなのよ」
二人は乙女の仕草で華陀に説明していく。
「この世界に来てね。そのうえでよ」
「この世界を彼等の思うままにしようとしているのよ」
「人間達を消してしまう」
「ええ。それを考えているのよ」
「彼等はね」
そうだと話すのだった。
「彼等は文明を嫌っているの」
「大自然の神々の一柱だから」
「それでか。自然か」
華陀は二人の話を聞いてまた述べた。
「自然は時として人と対するか」
「ううん、人も自然の一部よ」
「この世界のね」
「それじゃああれか」
二人の話を聞いてまた述べる華陀だった。
「自然の中での対立か」
「そうなるわね」
「結局のところはね」
二人はこう結論付けて話した。

「人間は自然と対立する存在じゃないの」
「この星ともね」
「そしてこの世界ともだな」
「私達の知ってる世界じゃ人間が世界の敵だなんて」
「そんなこと言う人間もいるけれど」
「安っぽい話なんだな」
華陀はこれで終わらせるのだった。
「そんな主張は」
「そうよ。鳩の出来損ないも言うけれどね」
「所詮その程度の人間もどきでしかないのよ」
二人はその鳩の様な存在はこう言って切り捨てる。
「まあ。そんなのはいいとして」
「ダーリンも熱くなってきたわね」
「ああ、燃えてきた」
実際にそうだという彼だった。
「この世界、何としても救う」
「そうそう。そんなダーリンだから」
「私達もついていくのよ」
ここでも乙女の仕草をする二人だった。
「問題はあの書が何処にあるかね」
「それが問題だけれど」
「怪しいのは」
華陀はまた考える顔になった。そのうえで二人に話した。

# 第五十五話　華陀、徐州に入るのことその二

「あれだな。数え役萬三姉妹か」
「ああ、最近大人気の」
「旅芸人の三人ね」
「確かに素質はあったが」
華陀も三人のその力は認めていた。
「それでもだ。あの急な売り出しはだ」
「何かある」
「そう見るのね」
「ああ、絶対に何かあるな」
また言う華陀だった。
「ここはあの三人を探すとしよう」
「問題は何処にいるかね」
「それだけれど」
「飛べるか、今」
華陀は二人に問うた。
「この国の空を」
「ええ、勿論よ」
「任せて」
身体をくねらせながら応える二人だった。
「何時でも飛べるわ」
「この大空を」
「そうか、それならだ」
華陀も二人の言葉を聞きながら話していく。
「空からだ。何処にいるかな」
「調べるのね」
「そうするのね」
「それが一番だからな」

それでだというのである。
「上から見ると横から見るよりわかりやすい」
「そうそう。何でもそうよ」
「色々な場所から見るといいのよ」
「そうだな。それじゃあな」
「ええ、今すぐね」
「飛びましょう」
こうしてだった。二人はそれぞれ両脇から華陀を掴んでだ。そのうえでだった。
空を飛ぶ。そうして上から国を見てだった。すぐに貂蝉が言った。
「あそこにいるわ」
「あの場所か」
「ええ、あそこよ」
こうだ。華陀に話すのだった。
「あそこにいるわね」
「あそこは確か」
「徐州ね」
今度は卑弥呼が話す。
「あのお城にいるわね」
「そうね。間違いないわね」
「見えるんだな」
華陀は何千メートルも下から人を見つけ出せる二人の目について言う。
「凄いものだな」
「私達の目は特別よ」
「そうなのよ」
目だけではないがこう言うのだった。
「だからね」
「普通に見えるのよ」
「そうなんだな」

「そうよ。じゃあ」
「ダーリン、あそこに行くのね」
「とりあえずあの州に入ろう」
こう二人に話した。
「話はそれからだ」
「ええ、じゃあね」
「降りるわよ」
こうしてだった。二人はその場所に降り立った。降り立ってからあらためて話をするのだった。
「皆は後でね」
「ここに呼べばいいわね」
「ああ、それにしてもこれは便利だな」
薄く細長い銀色のものを出して話す華陀だった。そこには押す場所が多くある。
「これを使って呼べばか」
「そうよ、何処にいてもね」
「あっという間になのよ」
「東映の携帯か」
それがその宝貝の名前であった。

# 第五十五話　華陀、徐州に入るのことその三

「そっちの世界にあるものだな」
「そうなのよ」
「東映のね」
「東映というのは人の名前か？」
華陀はそこまでは知らなかった。
「凄いものを造る仙人もいるな」
「他には腰巻もあるのよ」
「それを着けるとね」
どうなるか。二人はさらに話すのだった。
「変身できるのよ」
「仮面の戦士にね」
「腰巻を使って変身できるのか」
それを聞いてだ。華陀は興味深そうな声をあげた。
「それは凄いな」
「そうでしょ。よかったらダーリンも」
「それ使ってみたらどうかしら」
「ううむ、俺はそれよりもだ」
だが、だった。彼はここでこんなことを話すのだった。
「この前話してくれたあれだな」
「勇者ね」
「それになりたいのね」
「そっちの方が会っている気がするな」
これが王の言葉だった。
「そう思うがな」
「そうね。ダーリンだったらね」
「最高の勇者になれるわ」
二人も華陀のその言葉に笑顔で頷く。

「あたしはあれよ。聖戦士やコーチにね」
「あたしは東方何とかとか衝撃とか」
「そういうのが合ってるかしら」
「そうよね」
「何か面白そうだな」
華陀は二人の言葉をそのまま受け入れていた。
「何にしても自分に合っているものがあるのはいいことだな」
「そうよね、やっぱりね」
「それはね」
二人もまた言う。
「まあお話はそれ位にして」
「今からこの徐州で」
「捜すか、あの書を」
三人は徐州でも旅を続ける。しかしだ。
その三人のところにだ。ある二人が来た。
見れば呂蒙と周泰である。二人は道を歩きながら話すのだった。
「洛陽に行くのははじめてですけれど」
「あっ、そうなんですか？」
周泰はおずおずと話す呂蒙に対して問うた。
「呂蒙さんは」
「私。最近まで一士官でしかなかったですし」
それでだというのである。
「ですから」
「そうだったんですね」
「はい、都どころか揚州の外に出たことも」
「なかったですか」
「そうなんです」
「けれど今からですね」
「はい、何か楽しみです」
こう話してだった。二人で向かう。そしてこんなことを話すのだ

った。
「それでなんですけれど」
「何かありますか？」
「洛陽はどうした場所ですか？」
呂蒙は周泰に尋ねるのだった。
「やっぱりかなり」
「そうですね。凄く繁栄しているのは確かです」
「やっぱりそうなんですね」
「ただ。気をつけて下さいね」
周泰は真面目な顔になって呂蒙に話してきた。
「悪い人間も多いですから」
「ヤクザ者やすりとか？」
「はい、お世辞にも治安はいいとは言えません」
まず話したのはこのことだった。

# 第五十五話　華陀、徐州に入るのことその四

「それは注意して下さい」
「わかりました」
「私も気をつけてますし」
「そうなんですね」
「すりが多いですから」
それが特にというのである。
「お金とか気をつけて下さい」
「うっ、そういえば私結構そういうことは」
「そうですよね。宮中はもっと危ないですし」
「宦官ですか」
「孫策様も宦官によく思われていませんし」
この事情も話す周泰だった。
「曹操殿や袁紹殿とそこは同じですから」
「今回も交州の牧になることも」
「かなり渋っていましたし」
宦官達がだというのだ。とにかく宮中での彼等の力は大きいのだ。
「それで私達があらためて」
「大将軍にお話してですね」
「帝に直接認めて頂きますから」
その為にだ。二人は洛陽に向かうのだった。
そしてだ。あらためてこんなことも話された。周泰からだ。
「それは私達だけではないですし」
「そうですね」
呂蒙は軍師の、彼女の本来の顔になった。目が鋭くなる。
「先にお話に出た曹操殿に袁紹殿も」
「それに袁術殿もですね」
「袁紹殿も幽州牧になられるのに」

「やはり大将軍にお話されていますし」
「何かと厄介な事情が続いてますね」
「そうですよね。宮中の対立は深刻ですね」
「このまま」
呂蒙の顔にだ。今度は憂いが宿った。
「最悪の事態になることも」
「最悪の事態とは」
「はい、宮中での全面衝突です」
それだというのだ。
「それが問題です」
「大将軍と宦官達の」
「そうなり宦官達が勝利を収めれば」
呂蒙の危惧する言葉は続く。
「その場合は私達にとって危険です」
「大将軍の派である私達は」
「彼女達は必ず孫家にも何かをしてきます」
「ううん、それだけは」
「ただ」
ここでさらに話す呂蒙だった。
「宦官達には武力はありません」
「あるのは」
「帝の寵愛だけです」
それだけだというのである。
「ですから。武力ではどうにもできません」
「軍は大将軍が持っておられますしね」
「武力が無い権力には限度がありますから」
「ですか」
「それに」
呂蒙の言葉は続く。
「今の帝は」

「宦官達を寵愛されているその帝ですね」
「御身体が宜しくないそうですね」
「はい、それは私も聞いています」
諜報を担当する周泰ならばだ。知っていることだった。
「どうやら本当にお命が」
「危ないそうですね」
「じゃあ次の帝は」
「陳留王の様ですね」
この名前が出て来たのだった。
「どうやら」
「陳留王といいますと」
「非常に利発で聡明な方のようです」
呂蒙はこのことも頭に入れていた。やはり彼女は軍師であった。

# 第五十五話　華陀、徐州に入るのことその五

「ですから宦官達にも」
「惑わされることはないですか」
「そう思います」
これが呂蒙の見たところだ。
「ですが問題はです」
「帝が代わられてもですか」
「宦官達が武力を持てば」
その場合のことをだ。さらに考えていく呂蒙だった。
「帝から疎んじられてもです」
「力を持ちますか」
「大将軍との政争に勝たれれば余計に危ういです」
その話を続ける呂蒙だった。
「天下にとって」
「そうですね。今の宦官達は自分達のことしか考えていませんし」
「その欲望を満たすことだけ考えていますね」
「そうなんですよ。とにかく酷いんですよ」
周泰は眉を顰めさせて話していく。
「今の宦官達は」
「そんなに酷いんですか」
「私腹を肥やすなんてものじゃなくて」
そうだというのである。
「もうやりたい放題で」
「民を虐げているんですね」
「はい、もう徹底的に」
そうだというのだ。
「流石に大将軍はそこまで酷い人じゃないですし」
「それでかろうじてその専横が止められていると」

「それが今の都です」
周泰は話していく。
「本当に大変なんですよ」
「困ったことですね」
「各州の方がずっと平穏だと思います」
「私達の揚州もですね」
「そうですね。孫策様は善政を心掛けておられますし」
それは間違いなかった。孫策はどちらかというと武の人間だが政治家としても決して劣っている人物ではないのである。しかもだった。
「それに張昭さん達がいますから」
「人材もですね」
「はい、及ばずながら私達も」
呂蒙の顔が真面目なものになった。
「頑張ってそうして」
「孫策様と民達の為に」
「やっていきましょう」
「是非共」
こんな話をしながら都に向かう二人だった。だがその話は怪物達に聞かれていた。
「ううん、都ねえ」
「相変わらず大変なのね」
木の陰から出て来てそれぞれ言うのだった。
「あそこも何とかならないかしら」
「むしろ他の州の方がずっといいからね」
「ええ、この徐州や益州は牧がいないから今一つだけれど」
「それでも他の州はね」
「それも危険だからな」
二人のところにだ。華陀が出て来て話す。
「中央の力が弱く各州が強いとな」

「そうそう、群雄割拠ね」
「それになるからね」
「この国は中央集権だからな」
この世界の中国もこれは同じだった。
「中央が地方をまとめる形だからな」
「それで中央が混乱して地方がまとまっていたら」
「まずいのよね」
「このままだと本当に」
「大変なことになるかも」
「兵乱が起こるな」
華陀も眉を顰めさせていた。
「特に危ないのはだ」
「さっき話してたけれど」
「この徐州や益州よね」
「そこから兵乱が起こる」
「そうね」
「もう一つは中央と地方の対立だな」
それもあるとだ。華陀は話す。

# 第五十五話　華陀、徐州に入るのことその六

「中央を掌握した勢力が専横と悪政を極めてだ」
「地方を圧迫してね」
「それでなのね」
「今の牧達は全員宦官達と仲が悪いしな」
そうした意味で彼等は同じなのだった。
「擁州の董卓は比較的いいようだが」
「軍師の女の子が宦官に必死に働きかけてるからね」
「それでだからね」
「あの眼鏡の少女だな」
華陀は彼女のことも知っていた。そのうえで二人に話すのだった。
「真面目で友達思いのいい娘だがな」
「それがかえってね」
「問題になったりするから」
「そうだ。裏目に出なければいいが」
華陀は彼女のことを真剣に憂慮していた。
「それがな」
「そうよね。擁州は都にも近いし」
「董卓ちゃんは曹操ちゃんみたいに果断なところはないし」
董卓自身も問題だというのだった。
「そこも危ないわね」
「そうよね」
そんな話をしているとだ。彼等のところにだ。
まず刀馬と命が来た。そうして彼等に声をかけるのだった。
「呼んだか」
「何かあるのですか？」
「ああ、これからある」
華陀が真剣な顔で二人に話した。

「これからな」
「では今のうちにか」
「何かをするのですね」
「ええ、そうよ」
「まあ情報収集ね」
それだとだ。二人が話すのだった。
「ここで怪しい人達がいるかね」
「調べてそれからよ」
「表立っては動かないな」
獅子王も来ていた。そうして話すのだった。
「そうだな」
「ああ、潜伏という形になる」
実際にそうだという華陀だった。
「表に出るのはここぞという時だ」
「わかった」
「では。今は」
「とりあえず目立たないようにしてくれ」
華陀はとにかくこのことは念押しした。
「いいな」
「しかし。この国で起こっていることはだ」
「考えれば考えるだけ不穏なものだな」
ギースとクラウザーも来た。
「私はそれについては特に思わないがな」
「俺もだ」
刀馬もそれは同じだった。
「だが。テリー＝ボガードとまた会いだ」
「俺は蒼志狼だ」
「倒せればいいのだがな」
「その助けをしてくれるのならそれでいいが」
「ああ、それはおいおいわかるわ」

「少しずつね」
貂蝉と卑弥呼が彼等に話す。
「だから待って」
「今はね」
「わかっている。今はだ」
「そうさせてもらう」
二人も彼等のその言葉を受けて頷く。
「とにかく今はな」
「静かに調べるとするか」
「ふん、まあいいだろう」
ミスタービッグも話す。

# 第五十五話　華陀、徐州に入るのことその七

「これも何かの縁だ」
「悪いな、何かと助けてもらって」
華陀はそのミスタービッグに礼の言葉を述べた。
「別の世界から来たのにな」
「乗りかかった舟だ」
ミスタービッグは華陀にこう答えた。
「それを断る程薄情ではないつもりだ」
「貴方って悪いことをしてるけれど」
「そうした筋はあるのよね」
貂蝉と卑弥呼もそのミスタービッグに話す。
「そうしたところいいわよ」
「私感じるわ」
「その言葉はいいが」
ミスタービッグはかろうじて表情を消しながら二人に返した。
「しかしだ」
「しかし？」
「何かあるのかしら」
「私はそちらの趣味はないからな」
それは断るのだった。
「間違ってもな」
「あら、言うわね。こんな美しい乙女達を捕まえて」
「ショック受けちゃうわ」
二人はここでも身体をくねらせて話す。
「これでも数多くの美男子達を篭絡してきたのよ」
「もう星の数程ね」
「篭絡か」
ミスタービッグはその顔を青くさせていた。

「それは絶望ではないんだな」
「絶望？違うわ」
「悩殺よ」
あくまでこう言う二人だった。
「私達のこの美貌でね」
「そうしてきたのよ」
「まだ言うのか」
ミスタービッグも言葉がなくなってきた。
「ここまで手強いとはな」
「さて、それではな」
華陀だけが動じてはいなかった。
「早速動くとしよう」
「そうね、それじゃあ」
「はじめましょう」
貂蝉と卑弥呼もだった。頷いてだった。
彼等は早速行動をはじめたのだった。だが華陀を見てだ。命は考える顔で刀馬に話した。
「あの」
「わかっている」
「はい、どうして華陀さんは平気なのでしょうか」
怪物達を見ての言葉である。
「あの人達を見てそれでも」
「わからない。だが」
「だが？」
「あの華陀という男」
刀馬は彼を見て話すのだった。
「かなりの器だな」
「大器だというのですね」
「無限に大きな器の男だな」
まさにそれだというのだ。

「凄い男だ」
「そうですか。あの人は」
「見ていきたい」
そしてだ。刀馬はまた言った。
「あの男をな」
「そうされるのですね」
「最初は何とも思わなかった」
刀馬は華陀と最初に会った時のことを思い出しながら話していく。
「だが。共にいるうちに」
「変わられたのですね」
「自分でもわからないが」
「では私は」
命は微笑んでだ。その刀馬に話すのだった。

# 第五十五話　華陀、徐州に入るのことその八

「その刀馬様と共に」
「俺とか」
「はい、共にいさせて下さい」
こう彼に言うのだった。
「それは駄目でしょうか」
「好きにしろ」
彼は拒まなかった。
「御前がそうしたいのならな」
「はい、それでは」
「だが。俺はあくまでだ」
その赤い目を強くさせての言葉だった。
「絶対を目指す」
「それを」
「それは零だ」
この考えは変わらないというのだ。
「それを目指す。絶対をだ」
「あくまでそれをですか」
「それは変わることはない」
頑なな口調で話す。
「わかったな」
「はい」
命はここでは目を伏せて頷いた。
「それでも私は」
「あの男は必ず斬る」
憎悪も見せていた。
「必ずだ」
「刀馬様・・・・・・」

「彼もねえ」
「そうよね」
貂蝉と卑弥呼は実は刀馬も見ていた。そのうえで話をするのだった。
「筋はいいのにね」
「ねじれてるわね」
「ええ、ねじれてるだけだけれど」
「そこが問題ね」
「けれど」
「そうね」
ここでだ。二人の話の感じが変わった。
「そこを上手くやるのもね」
「私達の仕事なのよね」
「運命だな」
華陀は微笑んで述べた。
「こうした巡り合わせもな」
「そうなのよ。それは」
「私達もなのよ」
二人はまた身体をくねらせて華陀に話す。
「ダーリンと出会えたこと」
「それも運命なのよ」
「そうだな」
そしてその言葉に頷く華陀だった。
「御前達二人と出会えてよかったと思っている」
「そうよ。運命の神様はね」
「私達を絶対に見捨てないのよ」
「妙なことを言っているな」
クラウザーはその彼等の話を聞いて述べた。
「あの三人は」
「そうだな。しかしな」

ここでギースも話す。
「納得できる」
「うむ。思えばだ」
クラウザーはここでギースを見てだ。こう話すのだった。
「貴様と今こうして共にいるのもだ」
「運命か」
「そういうことになるな。あの三人の話によれば」
「うむ、確かにな」
ギースもその通りだと頷く。

# 第五十五話　華陀、徐州に入るのことその九

「貴様とは何時か決着をつけようと考えているが」
「それは私も同じだ」
「だが。それはだ」
「また先にしよう」
こう二人で言い合うのであった。二人の間にはかつての様な剣呑なものはなかった。憎悪といったものもだ。それも見られなかった。
そしてその中でだ。彼等はまた話すのであった。
「あの華陀という男」
「かなりの傑物だな」
「それは間違いない」
「大器だ」
こう話していくのであった。彼等もまた運命の中にあった。
そしてだ。劉備達はであった。相変わらず遊んでいた。
「凄く楽しいね」
「全くなのだ」
張飛が劉備の笑顔に同じ笑顔で応える。
「このお菓子とても美味しいのだ」
「ええと、このお菓子は」
「あっ、これはですね」
三人共同じお菓子を食べている。他の面々もだ。
白と黄色の中間色の、焦げ目のある魚の形のお菓子をである。それを食べながら孔明が話すのだった。
「鯛焼きです」
「鯛焼き？」
「そういうのだ」
「そうです。中に入っている餡子がいいですよね」
「そうよね。これ凄く美味しい」

「幾らでも食べられるのだ」
「私も鯛焼き大好きです」
孔明もにこにことしてその鯛焼きを食べている。尻尾のところからだ。
「特にこの尻尾の辺りが」
「私頭がいいけれど」
見れば劉備はそちらから食べている。
「けれどどちらにしても」
「美味しいことには変わりないのだ」
「そうだな。こうした菓子もいいな」
関羽も右手に取って食べながら話す。
「手軽で」
「だよなあ。涼州にはこうしたお菓子なかったからな」
「大秦からのお菓子はあったけれどね」
馬超と馬岱も食べている。
「あれな。ケーキな」
「あれも美味しいけれどね」
「ケーキなら」
今度言ったのは鳳統だった。
「私作られます」
「私もです」
また孔明が出て来た。
「お菓子作るのは得意ですから」
「ですからケーキも」
「あっ、そうなのか」
「だったら今度」
「そうだな」
馬超と馬岱だけでなく趙雲も言ってきた。
「食べたいものだな、そのケーキを」
「はい、桃家荘に戻ったら」

「作らせてもらいます」
笑顔で言う二人だった。そしてだった。
黄忠がだ。その鯛焼きを食べながら彼女も言った。
「鯛焼きの後は」
「うむ、お茶じゃな」
「それ飲みに行きましょう」
厳顔に応えながらこう皆に話すのだった。
「丁度あそこに茶屋があるし」
「中々よさそうな店じゃ」
厳顔はその店の立派な看板を見ながら笑顔で話す。
「ではあそこにじゃな」
「それでは劉備殿」
魏延はこの時も劉備の傍にいる。
「早速あのお店に」
「はい、それじゃあ」
劉備も笑顔で頷く。そうしてその店に入るのであった。
そしてそこにはだ。新たな出会いがあった。これもまた運命であった。

第五十五話　完

２０１１・１・１３

# 第五十六話　劉備、張角と会うのことその一

第五十六話　劉備、張角と会うのこと

三姉妹はだ。相変わらず楽しんでいた。
「姉さん」
「うん、何？」
「楽しんでる？」
「ええ、とてもね」
張角は満面の笑顔で張宝の言葉に応える。三人は茶屋の中で楽しくお茶を飲んでいる。勿論その場所には張梁もいる。三人はいつも一緒だ。
「こうして三人でゆっくり過ごすのって」
「最近あまりなかったわよね」
張梁もここで言う。
「どうもね」
「そうよね、忙しいから」
「忙しいのはいいけれど」
それでもだと姉に返す張梁だった。
「たまにはよね」
「そう」
その通りだと。張宝も湯飲みを両手に持って話す。
「息抜きも必要」
「バイスとマチュアには抜け出て悪いけれどね」
一応二人のことも気にしていた。
「けれどね」
「そうそう。たまにはこうして」
張角の調子はいつもと同じである。
「のんびりとね」
「それで姉さん」

また長姉に声をかける張宝だった。
「これから何処に行くの」
「ううんと、何かね」
張角は末妹の言葉に応えて考える顔になって話した。
「ここって凄く美味しいお菓子があるらしいの」
「お菓子が」
「そう、鯛焼きっていうお菓子がね」
それがあるとだ。末妹に話すのである。
「凄く美味しいらしいのよ」
「ふうん、それだったら」
それを聞いてだ。張梁は興味のある顔で言ってきた。
「次はそれ食べる？」
「そうね」
そして張宝も頷く。
「それじゃあ今度は」
「鯛焼きね」
「食べに行こうね」
最後に張角が言ってであった。
こうして三姉妹は外に出てその鯛焼きを食べに出たのだった。
劉備達もだ。茶屋に入ろうとする。魏延が劉備に声をかける。
「では桃香様、今度は」
「そうですよね。お茶を」
「飲みましょう」
こう劉備に声をかけていた。
「是非共」
「はい、じゃあ焔耶ちゃんと一緒の席で」
「有り難き幸せ」
劉備からそう言われてだ。魏延はその顔を輝かせていた。
天にも昇る気持ちでだ。こうも言うのであった。
「桃香様と一緒の席でお茶とは」

「あんた本当に桃香さん好きね」
馬岱はそんな彼女を横目で見ながら述べた。
「お茶もいいけれど」
「むっ、何だ」
「一番したいのは同じベッドに入ることでしょ」
こう彼女に言う。
「そうでしょ」
「うっ、それは」
「否定しないし」
「も、若しそうなってもだ」
魏延は顔を真っ赤にさせて言い出した。
「私はあくまで桃香様を御守りしてだ」
「そう言うのね」
「そうだ、絶対に御守りする」
それは断言するのであった。
「この命にかえてもだ」
「けれど一緒のベッドに入ったら」
「ま、まああれだ」
腕を組んで足を閉じて姿勢を正して。バツの悪そうな顔で話す。

# 第五十六話　劉備、張角と会うのことその二

「桃香様さえよければ」
「自分では動かないんだ」
「そんな恐れ多いことするものか」
「しないのね」
「そうだ、私はあくまで桃香様の忠実な家臣なのだからな」
何処までも劉備が好きなのである。
「ならばだ。絶対にだ」
「あんたのそうしたところだけは認めるわ」
馬岱はそれはいいというのであった。
「そこまでいけば立派よ」
「御前に褒められても嬉しくないぞ」
「だからそこだけって言ってるでしょ」
「ふん、そうか」
「そうよ」
こんなやり取りを続ける二人だった。しかしここでだった。
厳顔がだ。こう二人に言ってきた。
「二人共今からじゃ」
「はい、桔梗様」
「何ですか？」
「少し行ってもらいたいところがあるのじゃが」
二人に対してさらに話す。
「よいか」
「行ってもらいたいとは」
「何処ですか？」
「うむ、神楽がじゃ」
その神楽が出て来て話すのだった。
「少しね。付き合って欲しいところがあって」

「付き合って欲しい？」
「っていいますと？」
「忘れ物をしたみたいなの」
そうだというのである。
「さっき入ったたこ焼き屋でね。買った耳飾りをね」
「それをですか」
「じゃあすぐに」
「ええ、御願いね」
こうしてであった。魏延と馬岱は神楽についてそのたこ焼き屋に向かうのだった。そして残った面々で先に茶屋に入ろうとする。しかしであった。
ここで三姉妹が出て来てだ。劉備と張角がだった。
鉢合わせしてぶつかってだった。それで。
「痛っ」
「きゃっ」
それぞれの胸がぶつかり合いそうして後ろにしゃがみ込む。二人共お尻から落ちたのだった。
それからだ。二人は言うのだった。
「ご、御免なさい」
「ううん、怪我とかない？」
こう相手に声をかける。しゃがみ込んだまま。
「私、不注意だから」
「急に前に出て来たから」
「むっ？これは」
趙雲はここで二人を見て言った。
「鏡か？」
「はわわ、桃香さんが二人になっちゃいました」
「どういうことなんでしょうか」
孔明と鳳統も驚いている。
「どっちがどっちなんでしょうか」

「全然わからないです」
「顔も髪も全部同じね」
黄忠も目を見開いて言う。
「本当に何もかもが」
「服もじゃな」
厳顔は二人の服を見た。見ればどちらも全く同じ服だった。しかもだ。
「下着もじゃな」
「ああ、桃色だな」
「そうだな」
馬超と関羽は丸見えになっている二人の下着の色を見ていた。お尻からしゃがみ込んでいる二人は足を少し開いていたので全開になっていた。
「全く同じだからなあ」
「これではだ」
「本当にお姉ちゃんが二人になったのだ」
張飛も困るばかりだった。
「妖術なのだ？」
「まさかと思うけれど」
「そうですね」
ミナと月も眉を顰めさせて二人を見ている。

# 第五十六話　劉備、張角と会うのことその三

「妖怪が化けた」
「まさか」
「お化けなの？」
チャムチャムも二人を見ていぶかしむ。
「これって」
「ええと、姉さんが二人」
「妙なことになってるわね」
張梁と張宝も今の事態に戸惑っている。
「この状況は」
「何が何だか」
「私がもう一人！？」
「これってどういうこと！？」
そして二人もだ。こう言い合うのだった。
「ええと、私はここにいるけれど」
「私もここに」
「それでどうして私が」
「目の前にいるの！？」
お互いに顔を見合わせて言い合う。二人の顔は突き付け合うまでになっている。その状態でさらに言い合うのだった。そうなっていた。
「まさかと思うけれど」
「ここに」
二人同時にだ。両手を上にやった。同じ速さで同じ動きをしたのだった。
今度は両手で壁をつく動作をする。これまた二人同時であった。
そうした動作を続ける。何をやっても二人同時だった。
それを見てだ。関羽達はいぶかしみながら言うのであった。

「どちらが姉上だ？」
「わからないのだ」
張飛も困り果てた顔になっている。
「何もかも一緒ではないか」
「そうなのだ」
「胸も同じだにゃ」
孟獲は二人の胸を見ていた。動く度に大きく揺れる。
「凄く大きいにゃ」
「おっぱいが増えたのにゃ」
「凄くいいことにゃ」
「お姉ちゃんが二人になったのにゃ」
トラ、ミケ、シャムはこのことを喜んでいるだけであった。
「だからいいことにゃ」
「おっぱいが二つから四つにゃ」
「お茶もいいけれどこれもいいにゃ」
「素直に喜んでいいのか？」
馬超はそんな彼女達を見て首を捻る。
「本当にどっちが桃香さんかわからねえぞ」
「そうだな。ここまで何もかもが同じだとだ」
趙雲も区別がつきかねていた。
「私にもだ」
「困ったわねえ、こんなことになるなんて」
「そうね」
張梁と張宝もそれぞれ腕を組んで困った顔になっている。とはいっても張宝は表情ではなく目の色でそれを見せているのだった。
「また舞台があるのに」
「どちらかわからないと」
「剣も同じだな」
関羽は二人の腰にある剣を見た。するとそれもだった。
「これでは本当にどちらが姉上か」

「ええと、何か」
「思うんですけれど」
だがここで孔明と鳳統が言うのだった。
「右の劉備さんのお声と左の劉備さんのお声が」
「違いますけれど」
こう指摘するのだった。
「それに目の色も」
「違いますよね」
二人がそれに気付いたところでだ。神楽達が戻ってきたのだった。
「よかったわね」
「ああ、確かにな」
「見つかってよかったですね」
ほっとした顔の神楽に笑顔の二人が左右から話していた。

# 第五十六話　劉備、張角と会うのことその四

「耳飾り。ちゃんとお店の人が預かっていて」
「いい店員さんで何よりだった」
「三人いたけれど三人共ね」
どうやら店員は三人だったらしい。
「あの顔は何処かで見たがな」
「三人共ね」
「世間には同じ顔の人間がいるというが」
「あの人達結構見るよね」
「全くだ」
「そうよね」
こんな話をしていた。そうして一行のところに来た。するとだ。
魏延はだ。右側の劉備を見てすぐにこう言うのであった。
「桃香様、どうされたのですか？」
「あっ、焔耶ちゃん」
右側の劉備はしゃがみ込んだまま魏延に顔を向けた。
「神楽さんの耳飾りはあったの？」
「はい、ありました」
こう劉備に答えるのだった。
「無事に」
「そう。それは何よりね」
「それはそうとです」
魏延はそっと劉備のところに来てその両肩を抱いて言う。
「こんな場所で座ったままではいけません」
「そうね。じゃあ」
「はい、すぐに立たれて」
「えっ、まさか」
「若しかして」

その魏延を見てだ。一行はすぐにわかった。
「焔耶はわかるのか？」
「どちらが桃香殿か」
「まさか」
「んっ？何かあるのか？」
魏延は彼女達の言葉に目をしばたかせた。そのうえで自分の後ろにいる彼女達を見て怪訝な顔と声でこう言うのであった。
「桃香様に」
「だから。前を見るのだ」
張飛がここでその魏延にいう。
「お姉ちゃんが二人いるのだ」
「ああ、よく似ているな」
魏延はその左側の張角を見て述べた。
「桃香様にな」
「どちらがどちらかわかるみたいね」
「そうね」
張梁と張宝もわからないことだった。
「この黒服の人って」
「姉さんかそうでないか」
「わからないか！？」
だが魏延はこう言うのだった。
「桃香様のこの素晴しさが」
「ふむ。焔耶は桃香殿を想うことこの上ないからのう」
厳顔がここで気付いた。
「それでじゃな。見分けがつくのじゃ」
「それって滅茶苦茶凄いですよ」
「一瞬でどちらがどちらかわかるなんて」
孔明と鳳統は声からだった。だが魏延はなのだった。
「これが焔耶さんのですか」
「桃香さんへの想いの強さなんですね」

「ううむ、よく聞けばだが」
趙雲はここで気付いた。彼女もようやくだった。
「声は確かにだな」
「ああ、違うな」
馬超もようやくだった。
「右の桃香さんと左の桃香さんでな」
「そこだな」
「声なんだな」
「ええと」
左の劉備が動いてであった。
「確かに私と声が違うけれど」
「そうよね」
右の劉備も言う。
「声はね」
「だから。私達は」
「別人よね」
「間違いなくね」
お互いもこんな調子なのだった。そしてだ。

# 第五十六話　劉備、張角と会うのことその五

張宝がだ。ここでこんなことを言うのであった。
「ここは」
「何かあるの？」
「鉈、出そう」
こう言うのであった。
「それならすぐにわかるわ」
「ああ、そうよね」
張梁も妹のその言葉に同意して頷く。
「姉さんそれ持ったら変わるから」
「そう。刀とかクラブでも」
「じゃあ早速な」
「はい、これ」
何処からかだった。張宝はその鉈を出してきた。そうしてそれをだ。左の劉備に差し出すのであった。
「持って」
「うん、じゃあ」
左の劉備も頷いてその鉈を持っている。するとだった。
目の光が消えてだ。不気味な微笑みになり。こう言うのだった。
「仲に誰もいませんよ」
「はい、こっちが姉さん」
ここで言う張宝だった。
「間違いなく」
「そうよね。これでわかったわ」
張梁もここで頷く。
「姉さんは左側ね」
「うん、これで」
「何か物騒な区別のつけ方だな」

馬超はそれを聞いて首を傾げさせながら述べた。
「鉈って何だよ、鉈って」
「姉さんを覚醒させる道具」
それだと答える張宝だった。
「それなの」
「おかしな話だが納得できるな」
関羽はここで何故か頷いた。
「そういえば私は何処かで」
「どうしたの？」
「貴殿に切られた気がするが」
関羽はこうその張角に話すのだった。
「気のせいか？」
「あれっ、初対面だけれど」
「そうだな。それでどうしてだ」
「何かあるのだろうな」
横から趙雲が言ってきた。
「日々とかそういうことだ」
「日々か」
「御主はそちらの方では弟がいるのではないのか」
「そういえばそんな気がする」
実際に否定できない関羽だった。
「おかしな話だ」
「まあとにかくよ」
ここで言ったのは張梁だった。
「あんた達旅の武芸者よね」
「ええ、そうよ」
黄忠が答える。
「少し用事があって南蛮まで行ってたけれど」
「南蛮まで！？」
それを聞いてだ。張梁は驚きの声をあげた。

「また随分遠くまで行ってたのね」
「幽州からなのだ」
今度は張飛が言う。
「そこからなのだ」
「この国を上から下までじゃない」
張梁は驚きを隠せないままま言う。
「凄い旅してたのね」
「ねえ、よかったら」
張角がここで劉備達に話す。
「そのお話聞かせて」
「お話って？」
「そうよ、その旅のお話をね」
「それならばじゃ」
厳顔が言う。

# 第五十六話　劉備、張角と会うのことその六

「茶でも飲みながらどうじゃ？」
「私達丁度そこのお店に入ろうとしてたところだし」
馬岱がそれを言う。
「どうかな、お茶でも飲みながら」
「あたし達さっきこのお店に入ってたけれどね」
ここでこう話す張梁だった。顔は店の看板に向けている。
「けれどここのお茶美味しいし」
「そうよね。また飲もう」
「それじゃあ」
張角と張宝も頷いてだった。そうしてだった。
一行はその茶屋に入って茶を飲みながら話をするのであった。劉備達が旅の話をして張角達がそれを聞く。そうしてだった。
張角がだ。目を輝かせて言うのだった。
「何か凄い旅だったのね」
「ううん、色々あったけれどね」
劉備は微笑んで彼女に言う。
「それでも。楽しいことは楽しいよ」
「私も旅大好きなの」
ここでこう言う張角だった。
「元々旅芸人だけれどね」
「まさかここで貴殿達と会うとは思わなかった」
関羽は腕を組んで真剣な面持ちで語った。
「あの張三姉妹とな」
「それはあたし達もよ」
張梁が言葉を返す。
「あの山賊退治の黒髪の豪傑と会うなんてね」
「しかもあの西方の馬家の姫様二人」

張宝は馬超と馬岱を見ている。
「北の槍使い趙子龍」
「私だな」
「そう、凄い顔触れ」
「おまけに大陸一の弓使いまでいるしね」
張梁の目は今度は黄忠を見ている。
「益州の暴れん坊に太守さんもいるし」
「伏龍に鳳雛まで」
軍師二人についても言及される。
「しかも他の世界の人達までなんて」
「僕達もなんだ」
「うん、凄い顔触れよね」
張角はチャムチャム達を見ている。
「私こんな豪華な顔触れにはじめて会ったわよ」
「ちょっと待つのだ」
「そうにゃ」
しかしだった。ここで張飛と孟獲達が講義の声をあげてきた。
「鈴々はどうなったのだ」
「美衣もにゃ」
「そうにゃ、忘れるなにゃ」
「ミケ達もいるにゃ」
「いるにゃ」
「あっ、あんたまさか」
張梁が最初に気付いた。
「あれ？あの燕の」
「そうなのだ、鈴々は燕人なのだ」
「猛豚将軍」
それだというのである。
「それよね」
「豚！？」

「そうよ、猛豚将軍よね」
それだというのだ。
「話は聞いてるわ」
「何で豚なのだ！？」
張飛はそのことに首を傾げさせる。
「鈴々は虎なのだ。豚ではないのだ」
「豚に乗って戦うからじゃないですか？」
「ですから」
孔明と鳳統がそうではないかと指摘した。
「だからそれで」
「その仇名に」
「むむっ、豚の方が乗りやすいのだ」
しかし張飛はむっとした顔でこう言うのだった。

# 第五十六話　劉備、張角と会うのことその七

「だからいいのだ」
「あの、だからそれじゃあ」
「やっぱり豚って言われるから」
「仕方ないのだ。じゃあ今度から馬に乗るのだ」
「うん、その方がいいよ」
「やっぱり戦場には馬だから」
「この前見た黒く大きな馬がいいのだ」
そしてこんなことを言い出す張飛だった。
「黒王とか言ったのだ」
「あの馬は無理だと思うぞ」
魏延はこう張飛に話した。
「どうやらあの馬は主を選ぶ」
「鈴々では駄目なのだ！？」
「世紀末覇者でもなければ無理だろうな」
これが魏延の見立てだった。
「あれだけの馬は」
「ううむ、諦めるしかないのだ」
「流石にな。御主でも無理だな」
「そうなのだ」
「ああ、それとね」
馬岱が張角達に話す。
「この娘達は南蛮の娘なの」
「南蛮の？」
「あの国のなの」
「そうだよ、南蛮王なの」
こう張角達に説明する。
「名前は孟獲っていうの」

「トラにゃ」
「ミケにゃ」
「シャムにゃ」
三人は彼女達から名乗った。
「大王様のお供にゃ」
「大きなおっぱいが大好きにゃ」
「あと美味しいものもにゃ」
「こうした娘達なの」
笑顔で話す馬岱だった。
「宜しくね」
「うん、宜しく」
張角が笑顔で応えたのだった。
こんな話もした。そして話は元に戻った。
「それでだけれど」
「うん、それで？」
劉備が張角の言葉に応える。
「どうかしたの？」
「あんたの名前は何ていうの？」
こう劉備に問うのだった。
「他の娘達はわかったけれど」
「劉備っていうの」
こう名乗る劉備だった。
「劉備玄徳っていうの」
「劉備ね」
「そう。宜しくね」
「劉っていうと」
張角が注目したのはそこだった。
「若しかしてあれ？皇族の人？」
「一応は」
そうだと。微笑んで返す劉備だった。

「そうだけれど」
「じゃあ偉い人なの？」
「ううん、家は靴とか筵を作ってるの」
素直にこのことも話す劉備だった。
「皇族っていっても末裔だし」
「そうだったの」
「今はあれなの。幽州に置いてもらってるの」
「その幽州ね」
「そう、白々ちゃんに」
「誰？それ」
「ええと、名前は確か」
「公孫賛殿だ」
関羽が劉備に代わって話す。

# 第五十六話　劉備、張角と会うのことその八

「知っているか」
「そんな人いたかな」
「幽州って今度袁紹さんが牧になるんでしょ？」
「それは知ってるわ」
張梁と張宝も知らなかった。
「けれど公孫賛さんって？」
「誰なのかしら」
「むう、知らないか」
関羽は彼女達の言葉を聞いた。そのうえで妙に納得もした。
「やはりな」
「幽州にも行ったことあるよ」
「寒い場所よね」
「そうよね」
「それはそうだが」
それでもだと。少し困りながら話す関羽だった。
「本当に知らないのか」
「だから誰なの？その公孫賛さんって」
張角は本当に知らないという顔である。
「朝廷の将軍さんかな」
「そうじゃないの？あまりぱっとしない」
「影の薄い」
「影が薄いのは間違いないですね」
「そうですね」
それは孔明と鳳統も認めるしかないことだった。
「あの人は」
「どうしても」
「ううん、それじゃあこのお話は」

「ちょっと訂正する必要がありますね」
こう言ってだ。二人が舵を切るのであった。
「私達その幽州で民の為に戦っています」
「山賊達と」
こうした風に話すのだった。
「それで今は一緒にいる人達に留守をお任せして」
「旅をしていました」
「そうだったのね」
ここまで聞いて納得する張梁だった。
「これでわかったわ、あんた達のこと」
「私も」
張宝もだった。
「いい人達なのね」
「そうよね。そんな感じ全然しないし」
張角の言葉が一番能天気であった。
「劉備って名前何かいいし」
「有り難う」
「じゃあさ、劉備さん」
「劉備でいいわ」
気さくにこう返す劉備だった。
「宜しくね」
「うん、じゃあ劉備」
満面の笑顔で返す張角だった。そのうえでの言葉だ。
「私のことはね」
「何て呼べばいいの？」
「張角って呼んで」
こう劉備に話すのだった。
「それでね」
「ちゃん付けでいい？」
「うん、いいよ」

まさに女の子同士の会話であった。
「それじゃあ呼んでみて」
「うん、じゃあ張角ちゃん」
二人でお互いの名前を呼び合う。容姿が似ているせいか彼女達はすぐに仲良くなった。
そのうえで一行で楽しい時間を過ごしてだ。夕方になりだ。
「それじゃあ私達はこれで」
「幽州に帰るのね」
「うん、これでね」
そうだとだ。張角に話す劉備だった。その後ろに関羽達がいる。

# 第五十六話　劉備、張角と会うのことその九

「また会おうね」
「また今度幽州に行くから」
張角はにこりと笑って劉備に述べた。
「その時はまたね」
「うん、こちらこそね」
「宜しくね」
「それにしても凄いおっぱいだったにゃ」
孟獲はここでこんなことを言った。
「桃香お姉ちゃんとそこまで一緒だったにゃ」
「胸はねえ」
張梁は眉を顰めさせてその姉の胸を見た。
「どうしようもないからね」
「気にしない」
張宝はそんな姉に話す。
「姉さんはそれでファンがついてるから」
「そうなの？」
「小さい胸が好きな人もいる」
こうも話す末妹だった。
「それをわかっておくこと」
「だったらいいけれど」
「胸の好みは人それぞれ」
また言う張宝だった。
「鉄板が好きな人もいる」
「とか何か言いながらあんた今」
張梁は妹の視線の先に気付いた。
「関羽達の胸見てるじゃない」
「目立つから」

それでだと。凝視しながら話すのだった。
「それで」
「確かにね。あの胸はね」
「姉さんよりもまだ大きい人もいるし」
黄忠と厳顔である。
「けれどそれも」
「人それぞれなのね」
「そういうこと」
彼女の言う結論はこれであった。そんな話をしてだ。
劉備達は張角達と別れだ。北に進路を取り幽州に向かうのだった。
彼女達の長い旅もようやく終わるのであった。
そして三姉妹はというとだ。この後すぐにバイスとマチュアに捕まった。
「ここにいたのね」
「探したわ」
「あっ、見つかっちゃった」
あっけらかんとして返す張角だった。
「折角遊んでいたのに」
「遊ぶのもいいけれどね」
「周りには気をつけてね」
その彼女にこう言う二人だった。
「もっとも地和と人和がいれば大丈夫だけれど」
「いくら天和でもね」
「あっ、酷いそれって」
張角は今の二人の言葉に目を少し顰めさせて言い返した。両手を拳にしている。
「私だってお姉ちゃんなのに」
「いや、姉さん今までずっと」
「一番頼りないから」
妹達にも言われる。

「もうね。放っておいたら」
「どうなるか心配で」
「全くね。天和の売りはそこだけれど」
「極端だから」
バイスとマチュアもまた言う。
「困ったことにね」
「本当に」
「そんなあ、私だって頑張ってるのに」
張角がこう抗議するとだ。ここで、であった。

# 第五十六話　劉備、張角と会うのことその十

バイスとマチュアはだ。彼女に今度はこう言ったのだった。
「その頑張りは舞台でね」
「思う存分しなさい」
これが二人の彼女への言葉だった。
「いいわね、それじゃあ」
「今度の舞台でね」
「うん、私頑張る」
天真爛漫に応える張角だった。
「今度の舞台も」
「じゃあ今はね」
「これで帰ろう」
こうしてであった。三姉妹は三姉妹の場に戻るのだった。しかしだ。
バイスとマチュアはだ。三人を宿に入れてからこう話すのだった。
「順調ではないわね」
「そうね。思ったよりね」
暗闇の中でだ。二人だけで話をしていた。
「それじゃあここは」
「仕掛ける？」
マチュアがバイスにこう提案した。
「そうする？」
「ええ、それがいいわね」
実際にそうだと述べるバイスだった。
「一番てっとり早いのは兵を起こさせることだけれど」
「あの三人と追っかけには無理なのではなくて？」
「いえ、手はあるわ」
こう答えるバイスだった。

「しっかりとね」
「あるのね」
「ええ、あるわ」
バイスの返答はしっかりとしていた。
「役人を使いましょう」
「役人を？」
「操りやすい人間は多いわ」
バイスの笑みに邪悪なものが宿ってきた。
「だからね」
「成程、そうね」
ここでマチュアも笑みになった。バイスと同じ笑みだ。
「それじゃあここはね」
「丁度この州には牧もいないし」
「役人もたがが緩んでるし」
「やりやすいからね」
「それならここで」
「仕掛けようかしら」
こう話しているとだ。左慈が二人のところに来た。煙の様に現れてた。
「そうか、いよいよだな」
「あら、来たのね」
「痺れを切らしていたってところかしら」
「実際にそうだ」
二人の言葉を否定しない左慈だった。
「今か今かと思っていたがな」
「それがいよいよよ」
「遂にね」
「そうだな。それではだ」
左慈はだ。二人の言葉にさらに笑みになってだ。
そのうえでだ。こう言うのであった。

「任せたぞ」
「ここで乱を起こし」
「そのうえでこの世界のこの国をね」
「混乱の坩堝にする」
そうしてだと。左慈はさらに言うのだった。
「我等の目的はそこからはじまるのだ」
「そうね。ただ」
「貴方達は最近苦労しているみたいね」
二人はここでこう左慈に話すのだった。
「ことが順調にいかない」
「そうなのね」
「残念だがそうだ」
忌々しい顔だがそれを認める左慈だった。
「あの男達にな」
「あの男達？」
「というと？」
「いい。話したくもない」
だからだというのであった。ここではだ。
そしてそのうえでだ。左慈は二人に一方的に話した。
「ではな。俺はこれでだ」
「帰るのね」
「本来の場所に」
「そうさせてもらう」
こうしてであった。彼は姿を消した。やはり煙の様にだ。
残った二人はだ。妖しげな微笑みを浮かべ合いだ。こう話すのだった。
「ではね」
「ええ、手頃な役人を捕まえてね」
早速動こうとする。闇がまた動こうとしていた。

第五十六話　完

2011・1・15

# 第五十七話　豪傑達、荘に戻るのことその一



長い旅の末にだ。ようやくであった。
劉備達は懐かしい桃家荘に戻った。するとだ。
「ああ、戻ってきたな」
「待っていたぞ」
まずはテリーとリョウが出迎えてきた。
「結構時間がかかったな」
「やっぱり国を端から端はそうなるな」
「皆さんお元気でしたか？」
劉備は彼等に優しい笑顔で応えた。
「どなたか病気には」
「ああ、その心配はないぜ」
「病気になるようなやわな奴は一人もいないからな」
二人は気さくな笑顔で劉備に返した。
「それは安心していいぜ」
「そういうことだ」
「そうですか。じゃあ安心していいですね」
「ああ。ただな」
「ちょっと妙な話が出てるな」
ここで二人はこう劉備に言ってきた。
「何でもここに牧さんが入るらしいな」
「あの袁紹さんだ」
「ああ、それは聞いてるぜ」
馬超が二人のその話に応えた。
「匈奴とか烏丸討伐の功績でだな」
「あの姫さんもあれで結構やるからな」

「この州にとってもいいことだな」
二人も袁紹を評価することは評価していた。
「確かにおかしなところの多い人だけれどな」
「それでもやることはやるんだな」
「まあこの州は今まで牧がいなかったしな」
「いいことだな」
だが、だった。二人はここでこんなことも言うのだった。
「これでこの州もな」
「万全の統治が行われるんだな」
「あの、実はですね」
「もう牧さんおられるんですけれど」
その二人にだ。孔明と鳳統はこう話すのだった。
「ちゃんとおられますよ」
「公孫賛さんが」
「誰だよ、それ」
「聞いたことないんだが」
二人はいぶかしむ顔で軍師二人に返した。
「公孫賛!?」
「朝廷の将軍の人か?」
「だとしても相当影の薄い人だな」
「ああ、俺達が知らないんだからな」
挙句にはこんなことを言う彼等だった。
「朝廷が荒れてるのは知ってるさ」
「残念な話だな」
「これが冗談ではないからなあ」
関羽も溜息をつくしかなかった。
「公孫賛殿も不憫だ」
「悪い人じゃないんだけれどね」
黄忠も関羽の言葉に同意して言う。
「それでもね」

「しかも無能でもないのだな」
魏延も実は彼女のことを全く知らない。
「それでなのか」
「個性がないのであろうな」
厳顔は一言で本質を突いた。
「それではどうにもならぬわ」
「そもそも公孫賛って誰なのだ？」
張飛に至っては忘れていた。
「何か聞いたことのある名前なのだ」
「だから袁紹さんのところに行く時に一緒にいたじゃない」
馬岱がその張飛に話す。
「あの人よ」
「神楽は覚えているのだ」
彼女のことは忘れる筈がなかった。
「けれどそんな奴は」
「実は私もね」
ここでその神楽が苦笑いと共に話す。
「あの人のことはあまり」
「そうなんですか」
「どうも存在感がないのよ」
月に核心を話す。
「だから。ちょっとね」
「何か可哀想な人ですね」
「そうね。私達外から来た面々は皆目立つけれど」
「そうですね。私達も言われます」
「確かにね」
ミナもそれは同じだった。
「私もそうだから」
「それにしても白桃ちゃんは」
ここでまた真名を間違える劉備だった。

## 第五十七話　豪傑達、荘に戻るのことその二

「牧じゃなくなったらどうなるのかしら」
「その前に朝廷があの方が牧だと知っているのかどうかが問題だな」
趙雲の言うことは厳しい。
「大将軍も宦官達もな」
「どちらもですか」
「御存知ありませんか」
「知っていれば必ず声がかかる」
趙雲はこう軍師二人に話す。
「あれだけ激しい争いを続けていればな」
「そうですね。確かに」
「どちらも少しでも味方を増やしたいと思っていますし」
軍師二人もここでこのことを理解した。
「特に大将軍は各地の牧の方々を多く部下にされています」
「その袁紹さんだけでなく曹操さんに孫策さんに袁術さんに」
牧達の大半である。
「地方と兵権を握っておられます」
「力はおありですが」
「あの大将軍も基本的には悪人ではないわ」
黄忠はこのことを話した。
「生まれはよくないし判断力がないところもあるけれど」
「けれど外戚というだけで簡単に大将軍にはなれませんから」
「流石に」
軍師二人もそこを指摘する。
「ですからそれなりに」
「能力もあると思います」
「完全な馬鹿が大将軍にはなれないからな」
それは馬超もわかることだった。

「兵権を預かって朝廷でも三公の上に立つからな」
「そうよね。そこまでなる人だったら」
馬岱も考える顔で話す。
「幾ら皇后様のお姉さんってだけの人なら」
「そこまではなれんな」
厳顔も言う。
「ましてや肉屋の娘あがりで。そこまではのう」
「その大将軍が気付かないということは」
魏延も周りの話を聞いて述べた。
「そこまで存在感がないのか」
「だから誰なのだ？公孫賛は」
まだこう言う張飛だった。
「鈴々は知らないのだ」
「だから御前は一緒にいただろうに」
関羽も呆れる他なかった。
「何故知らないのだ」
「けれど結局はそういうことです」
「そうなります」
孔明と鳳統はその張飛の言葉について言った。
「鈴々ちゃんも忘れてしまう」
「それが公孫賛さんなんです」
「誰か知らないけれどな」
「何か不憫な人だな」
テリーとリョウも変わらない。
「まあとにかくな」
「話はそれ位にしてな」
「そうだよ。皆で来たんだから」
チャムチャムが笑顔で言う。
「皆でね。楽しくやろうよ」
「何か増えたしな」

「こっちに先に来た奴もいるしな」
テリーとリョウは彼等のことも話す。
「それならな」
「早速な」
こうしてだった。全員で劉備達の帰還を祝福してだった。
即座に宴の場が用意された。出されたものは。
「ううむ、馳走も」
「随分と変わったのだ」
関羽と張飛が思わず言う。見れば彼女達の世界にあるものばかりではない。
ロバートはだ。満面の笑顔でその二つを食べていた。
「やっぱこれやで」
「焼きそばにお寿司ですね」
「そや、この二つや」
こうアテナに話すのだった。
「わいはこの焼きそばと寿司が大好きなんや」
「ええと、ロバートさんって確か」
「そやったな」
ここでアテナとケンスウが眉を少し顰めさせて言う。

# 第五十七話　豪傑達、荘に戻るのことその三

「イタリア人ですよね」
「それも大金持ちの」
「イタリア人なのは確かや」
ロバートはそれはその通りだというのだった。
「そやけどや」
「日本の食べ物ですけれど」
「大好物なんやな」
「寿司は江戸前ちゃうで」
しかも寿司に対してこだわりまで見せる。
「やっぱりあれや。上方や」
「大阪ですか？それだと」
「そっちなんかいな」
「そや、大阪や」
やはりそうだというのだ。
「大阪の寿司が最高やで」
「そういえば焼きそばもそうですよね」
「大阪やな」
「大阪最高や！」
挙句にはこんなことまで言い出す始末だった。
「食は大阪にありや！」
「それはいいんですけれど」
「ちょっとイタリア人には見えへんで」
「けどわいはれっきとしたイタリア人や」
「あの、ですけれど和食ばかり召し上がられて」
「イタリア料理あんまり食べとらんちゃいます？」
「そういえばそやな」
言われてやっと思い出す始末であった。

「何かわい空手やってからこうなったわ」
「そうだったんですか」
「極限流空手なんですな」
「そや。空手からや」
言うまでもなく日本文化である。空手もまた、だ。
「そっからやな。ここまで日本人になったんわ」
「日本人っていうか大阪人ですよね」
「もう骨の髄まで」
「ええこっちゃ」
しかもそれを肯定するのだった。本人から。
「わいはイタリア人であると共に大阪人になったんや」
「それがロバートだな」
リョウもここで言う。
「こいつはやっぱり大阪なんだよ」
「最近一段と凄くなってるし」
ユリは甘口のカレーを食べながら話す。
「お兄ちゃんは普通なのに」
「俺は普通か」
「だってロバートさんみたいに骨の髄まで大阪じゃないから」
「そういう意味でか」
「かといっても高知の匂いもしないけれど」
サカザキ家の出自はそこなのだった。ただしリョウはアメリカ人とのハーフでありアメリカでは日系人ということになっている。日系アメリカンなのだ。
「これといってね」
「鰹のたたきは好きだぞ」
「それでもよ。高知弁出さないし」
「そういえばそうだな」
「ロバートさんは大阪弁丸出しだけれどね」
「というか何であなったんだ？」

リョウは餅に納豆を食べながら話す。
「日本文化、いや大阪文化がそれだけあいつに合ったのか」
「やっぱりそうなるわよね」
「大阪か」
かえすがえすもそれであった。
「大事なのは」
「そうなんでしょうね。大阪ね」
「大阪なあ」
「大阪ってどんな場所なのだ？」
張飛は焼きそばを豪快にすすりながら二人に問うた。
「楽しいところなのだ？それとも美味しいところなのだ？」
「どっちもだな」
「大阪はね」
これが二人の返答だった。
「美味いものは一杯あるし楽しい場所だらけでな」
「凄くいいところよ」
「それなら鈴々も行ってみたいのだ」
それを聞いてだ。張飛は明るい笑顔で言った。
「是非共なのだ」
「そうだな。機会があればな」
「鈴々ちゃんもね」
「けれど他の世界には行けないのだ」
ここで張飛の顔が困ったものになる。
「だからそれは」
「ああ、そういえばな」
「そうだったな」
草薙と大門がふと言った。

# 第五十七話　豪傑達、荘に戻るのことその四

「聖フランチェスカ学園って学校があったな」
「そこの生徒達にそっくりな面々がいた」
「ああ、あそこな」
二階堂も二人の話から気付いた。
「あの学校に関羽達にそっくりな娘いたよな」
「っていうか皆いたぜ」
「うむ、間違いない」
「むっ、別の世界に別の我々がいるのか」
趙雲はやはりメンマを食べている。
「そうなのか」
「じゃあ私もいるのかしら」
「あっ、黄忠さんそういえば」
矢吹は鰯を貪りながら黄忠を見て言った。
「あの学校の保健の先生そっくり」
「ああ、そうだな。そういえばな」
「全くの生き写しだ」
草薙と大門も続く。
「そっくりさんなんてものじゃないな」
「ここまで同じとはな」
「あの、ひょっとして」
矢吹はだ。今度はうどんをすすっていた。とにかく彼等の世界の料理が揃っている。彼等は何でも食べているのであった。
「皆さん向こうの世界と行き来してません？」
「そんな器用なことができたら凄いぞ」
厳顔は酒を楽しんでいる。
「わし等は仙人ではないからのう」
「仙人は流石にいないな」

キングは豆腐のステーキを食べている。ここでもベジタリアンだ。
「それに近い人はいるが」
「ああ、タンさんね」
舞が食べているのはお雑煮だ。
「あの人なんかは」
「チンさんも？」
パオはチンを見ていた。
「それって」
「わしは仙人ではないぞ」
チンは笑いながらそれは否定した。
「決してのう」
「そうなんですか」
「わしは格闘家であって仙人ではないのじゃ」
これがチンの言葉だ。
「タンも同じじゃよ」
「玄武の翁は」
守矢が話す。
「どうなのだろうな」
「近いわね」
雪も考える顔で義兄に応える。
「あの人は」
「そういえば翁は今は」
「袁紹さんのところにおられるわ」
「そうか、あそこにか」
「ええ、元気らしいわ」
微笑んで彼に話す。
「だから安心してね」
「誰もがこの世界に来ているのだな」
守矢はここで少し俯く。
「そうなのだな」

「そうね。確かにね」
「しかし今はいいな」
だが、だった。守矢はここで話を打ち切った。
そしてそのうえでだ。こう言うのであった。
「今はそれよりもだ」
「この宴をね」
「楽しむ方が先だ」
微笑みながら。義妹に話す。
「その方がな」
「そうね。今はね」
「私も変わったか」
そしてだった。彼はこうも言うのだった。
「やはりな」
「いい方に変わったわ」
「そちらにか」
「以前の兄さんは張り詰めていたわ」
それがかつても守矢だというのだ。

## 第五十七話　豪傑達、荘に戻るのことその五

「私達に迷惑をかけまいとして一人だけで先に進んで」
「だがそれは」
「よくなかったの。それは」
彼のそれをだ。否定する言葉だった。
「兄さんにとっても私達にとっても」
「御前や楓に。迷惑がかかっていたのか」
「結果としてね」
そうだったというのである。
「けれど今の兄さんならね」
「それはないか」
「そうなったわ。だから安心して見られるわ」
「そうか」
「だから私も」
上を見上げてだ。そうしてでの言葉だった。
「一人にならないわ」
「そうするといい」
静かに酒を飲みながらの言葉だった。
「そういうことか」
「そうね。そうなるわね」
彼等はそんな話をしていた。宴はそれぞれの話の中で行われていた。そしてだ。
劉備がだ。香澄からこんな話を受けていた。
「色違いですか」
「そうなんです。色違いなんです」
香澄は劉備に話す。
「私達の世界にはそういう人が多いんですよ」
「色が違って能力は同じなんですね」

「そうなんですよ。私達全員にいるんですよ」
「それも何人もですか」
「おかしな話ですよね」
「はい、そう思います」
その通りだと答える劉備だった。
「そんなことがあるんですね」
「それで偽者がどうとかって話にもなって」
香澄はさらに話す。
「結構複雑なんですよ」
「私もそっくりさんいましたけれど」
「誰ですか、その人は」
「はい、張角ちゃんです」
やはり彼女であった。
「もう髪の毛の色と声以外は本当にそっくりで」
「それってそのまま色違いですね」
「そうですよね。私もびっくりしました」
「ううん、世の中って本当に」
「いや、そっくりではなかったぞ」
ここで魏延が話してきた。
「私にはすぐにわかった」
「わかったんですか」
「桃香様のことなら何でもすぐにわかる」
魏延はここでは断言してみせた。
「何故なら私は常に桃香様のことを想っているからだ」
「はい、ここ重要」
お約束の馬岱の突っ込みであった。
「香澄さん、今こいつ想ってるって言いましたよね」
「はい、それは確かに」
「普通ここじゃ『思ってる』っていうけれど」
馬岱が指摘するのはこのことだった。

「こいつ今『想ってる』って言いましたね」
「それが何か」
「つまりこいつは桃香様のことが」
「ば、馬鹿を言え」
本人が顔を真っ赤にさせて文句を言ってきた。
「私はだ。あくまで桃香様の家臣としてだな」
「はい、じゃあ聞くわよ」
「むっ、何だ」
「桃香さんの今日の下着の色は？」
「白だ」
すぐに答える魏延だった。
「上下共にだ。純白の木綿のものだ」
「昨日の下着の色は？」
「薄い青だったな。どんな下着もよく似合われる」
「寝る時どうなってたの？昨日は」
「随分と寝乱れてておられた」
問われるままに話すのであった。
「おかげで太腿はおろかその薄い青の下着まで露わだった」
「こういう奴なんです」
ここでまた香澄に話す馬岱だった。
「最後の一線を踏み越えないのはただ度胸がないだけで」
「度胸といいますと」
「あっ、まさか香澄さんも」
馬岱は香澄もまた疎いことに気付いた。

# 第五十七話　豪傑達、荘に戻るのことその六

「そうしたことは」
「何かあるんですか？それが」
「ああ、いいです」
わからないことがわかってだ。話を打ち切った馬岱だった。
「まあこいつはとにかく桃香さんのお傍にいたがるんで」
「主を御護りするのは当然のことだ」
「お風呂を一緒に入るのも？」
「その時が一番危険だからだ」
もっともな理由であった。
「だから私はだ」
「全く。そこまで想ってるのなら」
それがわかっている馬岱だった。
「さっさと一線越えたらいいのに」
「だから私はだ。あくまでだ」
「桃香さんの家臣だっていうのね」
「そうだ、それはだ」
「肝心なところで逃げ腰なんだから」
魏延のそうした性格を実によく把握している馬岱だった。
「そんなのじゃ何時までも同じだよ」
「貴様、一体私を何だと思っているんだ」
「皆気付いてるから」
しかし馬岱は容赦がない。
「本当に誰もがね」
「だから何に気付いているんだ」
「言うまでもないでしょ」
「くっ、何故ここまで言われるのだ」
「ばればれだからよ」

馬岱の方が二枚も三枚も上手であった。そんな状況だった。
しかしそんな中でだ。宴は楽しく進んでいた。そしてである。
張飛はだ。こんなことを言った。肉を食べながら。
「そういえばなのだ」
「そういえば？」
「どうしたんだよ、急に」
関羽と馬超が彼女に問う。
「何かに気付いたのか？」
「だとしたら何だよ」
「最近何だかんだで落ち着いてきているのだ」
張飛はこう言うのだった。
「天下は乱れていると思ったら案外そうでもないのだ」
「地方はそうですね」
「確かに」
それにだ。軍師二人も言う。
「都はともかくとして」
「各州は」
「そうなのだ。それはいいことなのだ」
「ただ。注意して下さいね」
「肝心の都が危ないですから」
孔明と鳳統は少し厳しい顔になってそのことを指摘する。
「ですから決してです」
「油断できません」
「ううん、じゃああれなのだ？」
張飛は難しい顔になって述べた。
「この穏やかさも何時どうなるか」
「はい、残念ですが」
「その通りです」
やはりこう話す孔明と鳳統だった。
「都が安定しない限りは」

「本当にどうなるか」
こう話すのであった。そんな状況なのだ。
しかし今はであった。幽州も穏やかである。平穏の中にあった。
桃家荘に戻ってから一週間が経った。その間劉備はだ。
のどかにその日々を過ごしていた。桃の木々の中で呑気にお茶やお菓子を食べながらだ。
「ううん、何かこのまま」
「このままとは？」
「どうかしたのだ？」
「平和に時間が過ぎたらいいなあって」
劉備もまたこんなことを言うのだった。
「そう思うけれど」
「確かに都は不穏だそうだが」
「それでも確かに平和になってきているのだ」
関羽と張飛も長姉のその言葉に頷く。
「我々もこのままな」
「仲良く暮らしたいのだ」
「そうよね。本当にね」
劉備は穏やかな笑顔であった。しかしだ。
その彼女達のところにだ。馬岱が来た。そうして三人に言うのだった。
「あっ、ここにいたんだ」
「あれっ、蒲公英ちゃん」
「どうしたのだ？」
「朝廷の人が来てるけれど」
こう三人に話すのである。
「桃香さんに御会いしたいって」
「私になの」
「そう。それでどうするの？」
「朝廷からの人がなんて」

劉備はだ。このことに驚きを隠せなかった。そのうえで馬岱に返すのだった。

# 第五十七話　豪傑達、荘に戻るのことその七

「絶対に会わないと」
「そうよね。それじゃあね」
「ええ、それじゃあ」
こうしてだった。劉備は馬岱に案内されて館の客室に向かった。
無論関羽と張飛も一緒である。するとそこにいたのは。
「むっ、御主は」
「呂布なのだ」
「そう」
呂布がそこにいた。そして陳宮もだ。
「用事があって来た」
「しっかり聞くのです」
当然陳宮も言う。
「今日恋殿が来られたはです」
「用件があるとのことだが」
「何なのだ、それで」
「反乱が起こった」
三人にこう話す呂布だった。
「それで」
「反乱！？」
「では都でか」
「遂になのだ」
「だったら何でねね達がここまで来られるのです」
陳宮はむっとした顔で三人に返した。
「恋殿はその朝廷の使者として来たのです」
「恋実は」
その呂布の言葉である。
「朝廷の官位持っているから」

「だから朝廷の使者として来たのです」
「むっ、そうだったのか」
「呂布は官位持っていたのだ」
「そう」
その通りだとだ。関羽と張飛に話をするのだった。
「その通り」
「確かにその強さではな」
「官位を貰えるのも当然なのだ」
「恋殿は強いだけではないのです」
あくまで呂布を褒め称える陳宮だった。
「優しくて賢いのです」
「賢いのだ！？」
それには疑問符を投げかける張飛だった。
「あまり喋らないからわからないのだ」
「将棋で誰にも負けたことがないのです」
「むっ、将棋強いのだ」
「そうなのです。何をやっても一番強いのです」
「じゃあ兵法もなのだ」
「そうなのです。とにかく何でも強いのです」
ただ武勇が凄いだけではないというのである。
「それが恋殿なのです」
「呂布は想像以上に凄かったのだ」
「どうなのかです。恋殿こそは最高の武将なのです」
「じゃあ軍師は必要ないのだ！？」
あっさりと核心を言う張飛だった。
「御前はどうなるのだ？」
「うっ、それは」
「そこまで凄かったら軍師は必要ないのだ」
「それは違う」
陳宮が困っているとその呂布が言ってきた。

「恋、ねねが必要」
「けれど呂布は凄過ぎるのだ。それだったら」
「違う。人は誰かが絶対に必要だから」
こう言うのである。
「恋、ねねが傍にいないと」
「駄目なのだ！？」
「何時も傍にいて欲しい」
これが呂布の言葉だった。
「そういうもの」
「そうなのだ」
「そう。恋、ねねが好き」
ぽつりとだが確かな言葉だった。
「そのねね、いつも恋のことを考えてくれて」
「そうなのね」
「そして助けてくれる。ねね、とても大事」
こう言ってだ。その陳宮を見下ろす。

# 第五十七話　豪傑達、荘に戻るのことその八

「ずっと一緒にいて欲しい」
「恋殿・・・・・・」
陳宮もその呂布の言葉を受けて暖かい顔になる。そしてであった。
あらためてだ。劉備達に対してこう言うのであった。
「それで反乱のこと」
「あっ、ああそうだな」
「そうでどうなったのだ！？」
関羽と張飛がふと気付いた顔になって言った。
「何処で反乱が起こったのだ」
「都でないのはわかったのだ」
「徐州」
そこだとだ。呂布は答えた。
「そこで反乱が起こった」
「えっ、徐州って」
それを聞いてだ。劉備は思わず驚きの声をあげた。
「あそこでなんですか？」
「そう」
呂布は劉備に対しても口調を変えない。
「あそこで」
「けれどあの州は」
「そうだな、我々は前に通ったが」
「平和だったのだ」
関羽と張飛もそれぞれ言う。
「それで反乱が起こるとは」
「信じられないのだ」
「けれど起こった」
しかしだという呂布だった。

「それでここにいる面々に」
「兵を出してもらいたいのです」
そういうことだというのであった。
「すぐに徐州に向かって欲しい」
「いいのです？」
「はい、わかりました」
即答する劉備だった。
「反乱が起こったら何の罪もない人達が巻き込まれますか」
「そう、それが問題」
呂布もそれを指摘する。
「悪い奴等をやっつけるだけならいいけれど」
「そうですよね、本当に」
「だから御願い」
呂布は劉備にさらに話す。
「反乱平定の為に徐州に」
「それじゃあすぐに」
「幽州は牧がいなくてそれでなのです」
陳宮はここでこんなことを言った。
「幽州で一番力のある劉備殿に白羽の矢が立ったのです」
「むっ、幽州の僕は公孫賛殿だが」
「そちらには声はかけないのだ？」
「誰なのです？それは」
陳宮は関羽と張飛の言葉に目をしばたたかせる。
「聞いたことないのです」
「幽州には今のところ牧はいない」
呂布も言う。
「今度袁紹がなるけれど」
「そうなのです。だからねね達はここに来たのです」
そうだというのだ。
「牧がいればそこに行っているのです」

「朝廷はここに来るように言ってたから」
「公孫賛殿はどうやら本当に」
二人の言葉からだ。関羽はある事実を理解した。
「朝廷にも忘れられているようだな」
「だから誰、それ」
「知らない名前なのです」
やはりこう言う呂布と陳宮だった。とにかく誰からも忘れられている公孫賛だった。しかし何はともあれだった。彼女達の出陣が決まった。
「じゃあ出陣するのは」
「はい、そうですね」
「誰が出るのかを決めましょう」
皆宴が行われている部屋に集まっていた。そのうえで席について話すのだった。
孔明と鳳統がだ。劉備に話すのだった。
「まず愛紗さんに鈴々ちゃんですね」
「お二人は外せません」
その二人は絶対にだというのだった。

# 第五十七話　豪傑達、荘に戻るのことその九

「それと星さんに翠さんですね」
「お二人も」
「うむ、わかった」
「それじゃあ行かせてもらうな」
それぞれ笑顔で応える二人だった。
「それと紫苑さんもですね」
「御願いできますか？」
「ええ、わかったわ」
すぐに頷く黄忠だった。
「この五人の方が軸で」
「そして軍師の私達に」
彼女達自身もだというのである。
「あとは」
「他には」
軍師二人は席を見回す。そうしてまた言うのであった。
「草薙さんにテリーさん、リョウさん」
「アテナさんにナコルルさん、ケンスウさんに舞さんですね」
他の世界の面々の名前も挙げていく。
「御願いできるでしょうか」
「ここは」
「ああ、わかった」
草薙が笑顔で二人の言葉に応えた。
「じゃあ暴れさせてもらうな」
「他の人達は留守番を御願いします」
「兵は三割置いていきますので」
「えっ、じゃあ蒲公英は！？」
「だから留守番だろ」

従妹にすぐに告げた馬超だった。
「御前呼ばれなかっただろ」
「そんな、折角の戦なのに」
「ちょっとは大人しくしてろ」
こう自分の左隣に座っている従妹に言うのだった。
「今まで散々悪戯してたんだからな」
「うう、何か面白くない」
「まあ蒲公英くちゃんはですね」
「ここは留守番を御願いします」
軍師二人はわかっていて言う。
「そういうことで」
「それじゃあ」
「俺留守番なのかよ」
矢吹はだ。ここで実に落胆した顔をみせた。
「折角草薙さんと一緒にって思ったのにな」
「そういうのは火を出せるようになってからだな」
「うむ、そうだな」
その矢吹に二階堂と大門が言う。
「それからだな」
「今は修業だ」
「そうですね。火が出せるようになってから」
二人の言葉にすぐに元気を取り戻す矢吹だった。
「俺、その時に頑張ります」
「だから出ねえって」
草薙の言葉は容赦がない。
「この火は特別なんだからな」
しかし矢吹の耳には入らない。そしてである。
劉備がだ。こんなことを二人に言うのであった。
「あの、私は？」
「えっ、桃香さんですか」

「一体何でしょうか」
「私呼ばれなかったけれど」
きょとんとして二人に尋ねるのであった。
「それじゃあ私は」
「あの、桃香さんは」
「勿論なんですけれど」
孔明と鳳統はきょとんとした顔で劉備に返す。
「出陣を御願いします」
「絶対にです」
「そうなんですか」
「総大将ですから言うまでもないって思ってましたけれど」
「あの」
軍師二人も驚きを隠せない。
「ですから」
「それは」
「そうだったんですか」
「はい、そうです」
「じゃあ御願いします」
これで話は決まった。しかしであった。
ここでまた一人だ。名乗り出てきたのであった。
「待ってくれないか」
「あっ、焔耶さん」
「やっぱりなんですね」
「そうだ、桃香様が出陣されるのならだ」
魏延は身を乗り出しながら二人に言うのだった。
「私もだ」
「あの、けれど」
「もう人は」
「桃香様は私が御護りする」
あくまでこう言うのであった。

「だからだ。何があってもだ」
「そうですか。じゃあ」
「御願いできますか？」
「桃香様、ご安心下さい」
魏延は今度は劉備に顔を向けて断言した。
「この焔耶、何があろうと桃香様を」
「はい、じゃあお願いね」
桃香だけがにこやかである。
「焔耶ちゃん、出陣の時もね」
「わかりました、それでは」
「ちぇっ、焔耶はよくて私は駄目なの」
それが面白くない馬岱だった。
「何だってのよ」
「だから諦めろ」
またここで従姉が言う。
「全く御前は」
「だって戦だから」
「それでも今度は留守番しろ」
あくまでこう言う馬超だった。
「いいな、絶対にだ」
「ちぇっ、つまんないの」
「とにかくですね」
「それではすぐに準備をしましょう」
孔明と鳳統は話を中断させてとりあえず馬岱を援護した。
「用意ができ次第出陣です」
「徐州に」
「はい、わかりました」
劉備が笑顔で応える。こうして出陣が決定したのだった。
劉備達は徐州に出陣する。そしてまたしてもだ。彼女達は運命と巡り会うのだった。

第五十七話　完

2011・1・17

# 第五十八話　三姉妹、反乱を起こすのことその一



三姉妹はだ。何気にであった。
舞台で宝貝を使ってだ。こんなことをいつも言っていた。
「あそこのお饅頭美味しいんだって？」
「うん、そうらしいのよ」
「とてもね」
張角の言葉にだ。張梁と張宝が応えている。
「何か食べたくない？」
「そう思う」
「そうよね。私お饅頭大好きだし」
ここぞとばかりに言う張角だった。
「食べたいよね」
「甘いもの大好き」
「私も」
こう話すとであった。それがだ。
すぐに観客達に影響してだ。それによってだった。
次の日の朝三姉妹は饅頭に囲まれた。そしてそれを満面の笑顔で食べるのだった。
「ううん、こんなにあったら」
「あたし達じゃ食べきれないわね」
「絶対に」
三人のいる部屋が完全に埋まっている。それではだった。
「じゃあどうしようかな」
「そうね、捨てるのも勿体ないし」
「それなら」
こう話してだった。出された結論は。

「皆にあげる？」
「そうよね、応援してくれる皆にもね」
「そうするといい」
こうしてだった。その饅頭は観客達にも振舞われることになった。
しかもだ。
「うわ、これただかよ」
「舞台の応援に来たらただかよ」
「凄いな、これって」
「ああ、普通ここまでしないって」
「やっぱりあの娘達違うよ」
こうしてだった。彼等は三姉妹のその気風のよさにさらに惚れ込むのであった。三姉妹にとってはいいこと尽くめの展開だった。
そんな彼女達を見てであった。
「どう思うよ」
「どう思うって？」
「どうかしたの？」
白い髪の男にだ。黒髪の小柄な少年と前髪で目を隠した妖しい女と話をしていた。そうしてそのうえでだ。男は二人にこう言うのだった。
「バイスとマチュアがついてるあの三人だよ」
「うん、あの三姉妹だね」
「あの娘達ね」
「そうだよ、あの三人どう思うんだよ」
男はまた二人に問うた。
「何か思うようにいってないんじゃないのか？」
「自分達の欲望には忠実だけれどね」
「っていうか何も考えてないわね」
二人もそれは見抜いていた。
「普通の女の子達だね」
「何処にでもいる」

「そうだよ、あれじゃあどうしようもないんじゃないのか？」
男は首を捻りながら言った。三人は今暗闇の中にそれぞれ立って向かい合っている。そうしてそのうえで話をしているのだった。
「反乱を起こすとかな」
「そうだね、それはね」
「普通の女の子三人じゃね」
「妖術を使えるっていってもだ」
三姉妹のその妖術についても言及がされる。
「遊び程度だしな」
「うん、自分達の舞台に使える程度のね」
「他愛のないものね」
「おまけに術を使って観客共に何をするかって思えば」
どうかというのだ。
「饅頭だの菓子だの取り寄せさせてな」
「それをお腹一杯食べてね」
「そうしてからね」
さらにであった。
「その観客共に配ってなあ」
「そこで捨てたりしたら面白かったのに」
「何か変に無邪気だから」
そこもまた三人について言うのであった。

## 第五十八話　三姉妹、反乱を起こすのことその二

「あの連中、放っておくべきだろ」
「うん、バイスとマチュアにも言おうか」
「手を引くようにね」
「いえいえ、そう判断を下されるのはです」
ここでだ。あの黒髪の眼鏡の男が三人のところに来た。そうして彼等に言うのであった。
「まだ早いのではないでしょうか」
「あんたか」
「そう思うの？」
「まだ早いって」
「そうです。私も彼女達はどうかと思いますが」
こう微笑んでだ。彼は言うのであった。
「それは」
「だろ？本当に普通の連中だろ」
「何処にでもいる女の子達じゃない」
「我儘で無邪気なだけの」
まさにその通りだった。三人の指摘は正しいと言えた。
それを口々に話してだ。男がその男于吉に言うのであった。
「于吉さんよ」
「はい」
「ここに反乱を起こして混乱を引き起こさせて」
こう彼に話すのだった。
「それはいいんだけれどな」
「それが順調に進んでいないと」
「そう思うんだけれどどうだ？」
また于吉に言った。
「本当によ」

「まあここはです」
「ここは？」
「ここはって？」
「どうするの？」
三人が于吉に問い返した。
「それでだよ」
「これまでこれといって何もしてこなかったけれど」
「どうするの？」
「既にバイスさんとマチュアさんが動いておられます」
于吉は穏やかな笑みで話した。
「それ次第ですね」
「あの二人が上手にやればいいんだがな」
男は腕を組んで不安な顔を見せている。
「あの二人についてはな」
「よく御存知ですね」
「ああ、同じオロチの血を持つ奴等だ」
こう言うのである。
「その強さも頭も確かだ」
「そうですね。お二人はやり手です」
「ルガール。あいつの執事もやっていた」
「はい、それは御聞きしています」
「あの二人がやることは問題ないんだよ」
またこう言う彼であった。
「けれどあの三人はな。能天気過ぎるからな」
「ですから今は様子見です」
于吉は決して焦ってはいない。落ち着いてすらいる。
その落ち着きのままでだ。彼はさらに言うのであった。
「これで駄目ならです」
「あの三姉妹から手を引くんだな」
「それも考えておきましょう」

「音楽を使っての洗脳とかなら俺達にもできるからな」
男は真剣な顔でこう于吉に話した。
「あっちの世界じゃ表向きはバンドだったからな」
「そうだよ、三人一緒にね」
「やっていたのよ」
後の二人も話す。
「だからよかったら僕達がさ」
「やるけれど」
「ですから焦ることはありません」
まだこう言う于吉だった。
「ここはです」
「まあそうさせてもらうか」
男は釈然としないながらも納得することにした。そうしてであった。
彼等は今は様子を見ることにした。そしてであった。
徐州ではだ。三姉妹が相変わらず笑顔で歌っていた。それを見た観客達は。
「ほっほおおおおおーーーーーーーーっ！」
「天和ちゃーーーーーーーん！」
まずは彼女であった。
「可愛いよーーーーーーーーーっ！」
「皆大好きーーーーーーーーーっ！」
張角も笑顔で応える。

# 第五十八話　三姉妹、反乱を起こすのことその三

「今日も頑張るからねーーーーーーーっ！」
「地和ちゃーーーーーーん！」
「皆の妹ーーーーーーーーーっ！？」
張梁は左目をウィンクさせて応える。
「じゃあ歌うよ！」
「人和ちゃーーーーーーん！」
「とても可愛い」
張宝はいつもの口調のままだ。
「今日も最後まで」
「アンコールーーーーーーーール！」
「アンコールーーーーーーール！」
何故かこんな言葉が出ていた。そうして三人もそれに応えてだった。
「じゃああの歌にする？」
「そうね、ここはね」
「あの歌にしよう」
こうしてだった。歌う曲は。
「愛はだってだって最強」
「世界だって救うの」
ハイテンションでノリのいい曲を歌う。舞台はさらに盛り上がる。
しかしここにだ。突然だった。
「待て！」
「ここで舞台を開くな！」
「すぐに解散しろ！」
鎧の役人に兵達が来てだ。こう言ってきたのだ。
「許可は得ているのか！」
「得ていないなら解散しろ！」

「いいな！」
「えっ、そんな」
それを聞いてだ。三姉妹は言うのであった。
「もう許可は得ているけれど」
「舞台を開く前にちゃんとお役所に言ったわよ」
「間違いないわ」
三姉妹は言うのであった。
「バイスさんとマチュアさんがね」
「それあたし達も見たし、許可の書もね」
「間違いないわ」
「そんなことは知らん」
きつい顔で言う先頭に立つ役人だった。
「得てはいない」
「だからそんなの」
「何、言い掛かり？」
「まさか」
「そんなに言うんならな」
役人はここでだ。いやらしい笑みを浮かべてきた。程遠志達親衛隊が慌ててやって来た。
「何故役人達が！？」
「そんな、これって」
「どうしたんですか！？」
「どうしたもこうしたも」
張角が自分達の前に来た彼女達に対して言う。
「お役人さん達がおかしいのよ」
「おかしい！？」
「おかしいっていうと」
「許可は得ていますよ」
「それがないっていうのよ」
張角は困った顔で彼女達にまた話す。

「何でなのよ、一体」
「バイスさんとマチュアさんは？」
「一体何処に？」
「あの人達がそうしたことをしているのに」
その二人は何故か来ない。それが余計に事態を混乱させていた。
そしてだ。役人はさらに増長して言うのであった。
「舞台を続けさせたければだ」
「何だっていうのよ」
「あるものを出すのだな」
こう三姉妹に言うのだった。怖気付く彼女達にだ。
「金なり」
「そんなのないわよ」
張梁がきっとした顔になって言い返す。
「お金なんて」
「そうよ、あれば全部使うんだから」
「それは姉さん達が悪い」
そんなことを言う張角には張宝が突っ込みを入れる。
「お金は節約するもの」
「えっ、使うものじゃないの」
「違うの！？」
これが二人の返答だった。
「お姉ちゃんお金使わないと死んじゃうのよ」
「そうよ。あたしだって」
「あの、それは幾ら何でも」
「問題がありますよ」
？茂と下喜が呆れた顔でだ。二人で突っ込みを入れる。

# 第五十八話　三姉妹、反乱を起こすのことその四

「少しは節約をですね」
「されては」
「ほら、二人も言っている」
張宝も二人の援軍を見て言う。
「だからここは」
「うう、そんな」
「お金はあったら使いたいのに」
「金はないのか」
役人は暫く呆れていたがあらためて彼女達に問うた。
「そうなのだな」
「だからないの」
張宝が答える。
「そういうこと」
「それならばだ」
また言ってきた役人だった。
「そうだな。見たところ」
「な、何よ」
「今度は何だってのよ」
張角と張梁は本能的に危機を察して身構える。
「だからお金はないから」
「もっともあっても出さないけれど」
「そうだ、何なんだ！」
「一体何だ！」
「舞台を乱すな！」
「いい加減にしろ！」
ここで観客達も言ってきた。それまで沈黙していたがここでだった。遂に立ち上がったのであった。

「出て行け！」
「そうだ、出て行け！」
「天和ちゃん達をいじめるな！」
「悪いことをするな！」
「五月蝿い！」
役人はだ。今度は観客達に言うのであった。
「全員捕まえるぞ！」
「何かおかしくない？」
「そうよね」
ここで程遠志と？茂は顔を見合わせて話す。
「この役人ここに来る時に最初に会ったけれどね」
「そうよね、凄く温厚で話がわかる人なのに」
「それで何でなの？この態度」
「別人みたい」
実は目が妙なことになっている。しかし今の緊迫した状況に誰も気付かなかった。それでなのだった。
「どうしよう、こんなの」
「こんなことになるなんて」
誰もどうしようかわからなくなっていた。そしてだ。
役人はだ。親衛隊が護る三人の方に足をずい、とやってだ。こう言うのであった。
「ではだ」
「今度は何よ」
「金がないなら別のものだ」
好色そのものの目で三人を見たうえでの言葉だった。
「見れば三人共かなりの上玉だな」
「まさかこいつ」
張梁はだ。役人の言葉で完全にわかった。
「あたし達を」
「えっ、お姉ちゃんまだ口付けもまだなのよ」

「そんなのあたしもよ」
「私も」
これは三人共同じであった。
「それでこんな脂ぎったおじさんとなんて」
「願い下げよ、絶対に」
「何があっても」
「それでは舞台を開けないな」
役人は今度は底意地の悪い笑みを見せる。
「さて、どうする？」
「もう頭にきたわ」
張梁が切れた。
「それならよ」
「どうするつもりだ？」
「皆、いい！？」
観客達への言葉だった。宝貝を使って叫ぶ。
「この連中ね！」
「うん、地和ちゃん！」
「どうするんだ！？」
「やっつけちゃって！」
こう叫んだのだった。
「もう容赦しなくていいから！」
「よし、わかった！」
「それなら！」
「やってやる！」
こうしてだ。彼等は役人達に一斉に襲い掛かりそのうえでだ。袋叩きにして叩き出したのであった。まずは一件落着であった。

# 第五十八話　三姉妹、反乱を起こすのことその五

しかしだ。これは大きな問題であった。
「やっちゃった？」
「うん、やっちゃったわ」
張宝が次姉に言う。二人は今楽屋にいる。舞台の休憩時間だ。
「お役人をああしたら」
「まずいわよね」
「下手したら打ち首」
張宝はぽつりと怖いことを口にした。
「恐ろしいことになる」
「な、何よそれって」
「そうよ、とんでもないことじゃない」
張梁だけでなく張角も言う。
「どうしよう、これって」
「お姉ちゃん打ち首になんかなりたくないわよ」
「そんなのあたしもよ」
「私も」
張宝も言う。口調は同じである。
「だからここはどうするか」
「あたし打ち首だけは嫌だからね」
「お姉ちゃんもよ」
「だから絶対によ」
「どうしよう、本当に」
「もう。こうなったら」
また言う張宝だった。
「やるところまでやるしかないかも」
「ううん、じゃあこうなったらね」
「どうするの、地和ちゃん」

「反乱よ、反乱」
張梁は半ばやけくそになって言った。
「それしかないわよ」
「そうね、それじゃあ」
張角が最初に乗った。
「お姉ちゃんも打ち首は嫌だからね」
「仕方ないのね」
「そうよ、打ち首は嫌だから」
「もっともっと楽しいことしたいのに」
張角はここでもこんなことを言う。しかしだった。
それでも実際に反乱になったのであった。三人は忽ちのうちに観客、最早信者となっている彼等を集めてだった。
徐州で兵を起こした。そうして忽ちのうちに一大勢力となったのだった。
それはだ。すぐに都にも話が届いた。
それを受けてだ。大将軍である何進は周りにいる側近達に話した。
「それではすぐにじゃ」
「討伐軍を差し向けますね」
「そうじゃ。ここは」
そしてだ。その将はというとだ。
「袁紹と孫策はあれじゃからのう」
「はい、お二人はどちらも異民族の征伐と後の処理にかかっておられます」
「ですから今は」
「だから二人はまず外す」
こう言って二人をまず除外したのだった。
「仕方ないがのう」
「そうですね、ここはです」
「お二人はです」
「統治に専念してもらいましょう」

「ましてやじゃ」
何進はさらに言った。
「二人はそれぞれ異民族の統治もあるしこれから他の州の牧にもなる」
「袁紹殿は幽州、孫策殿は交州」
「そこにですね」
「ですから」
「そうじゃ。今動いてもらう訳にはいかぬ」
つまり政治的な事情であるのだ。
「どうしてもじゃ」
「はい、その通りです」
「どうしても」
「二人にも伝えよ」
何進はこのことも述べた。
「今は異民族の統治と新たに治める州の牧になる用意をしておれとな」
「はい、わかりました」
「それでは」
周りの者達も頷く。そうしたのだった。
しかしここでだ。そのうちの一人が言ってきた。
「しかし孫策殿はいいとしてです」
「袁紹じゃな」
「はい、あの方はです」
まさにその袁紹のことだった。

# 第五十八話　三姉妹、反乱を起こすのことその六

「何かというと出たがる方ですので」
「ですからここもです」
「出陣しようとされるのでは」
「そうされるのでは」
「家臣達が止めるであろう」
こう見る何進だった。
「あ奴が戦の場で政務を執ると言ってもじゃ」
「あの方ならそうしかねませんね」
「そうしてでも出陣を」
とにかく下世話な言葉で表現するとでしゃばりの袁紹であるのだ。
「しかしそれは流石にですね」
「ですから」
「そうじゃ。だからそれはない」
また言う劉備だった。
「安心してよい」
「わかりました。それでは」
「袁紹殿の件はそれで」
「そういうことで」
「さて、それでじゃ」
孫策、そして袁紹の話を終わらせてからだ。何進はさらに言うのだった。
「実際に向かわせる者はじゃ」
「誰にしますか、それでは」
「それは」
「まずは曹操じゃな」
彼女だというのである。
「今回もな。行ってもらおう」

「そうですね。あの方なら安定した戦をしてくれますし」
「それならですね」
「ここは」
「そうじゃ。また行ってもらう」
あらためて言う何進だった。
「あ奴には苦労をかけるがのう」
「ではすぐに」
「あの方にお伝えしましょう」
「頼んだぞ。そしてじゃ」
「そして？」
「そしてといいますと」
「曹操だけではあ奴に負担がかかる」
何進はこのことも頭に入れていた。そのうえで話すのだった。
「だからもう一人か二人に行ってもらおう」
「一人か二人ですか」
「となるとまずは」
「あの方ですね」
一人の名前が出て来た。それは。
「袁術殿ですね」
「あの方ですね」
「そうじゃな。ようやく牧を務めておる州の全域を治めるようになったが」
何進はそのことを喜んでもいた。彼女にしても天下のことを何一つとして考えていない訳ではないのだ。そこまで腐ってはいない。
「しかしそれでもじゃ」
「ここはですね」
「出陣してもらいますか」
「あの方に」
「そうしてもらう」
また言う何進だった。

「ここはのう」
「ではあの方にも文を送りましょう」
「そうしてそのうえで出陣してもらうということで」
「これでまた一人ですね」
「さて、もう一人じゃな」
何進は話を進めてきた。
「それは誰がいいかのう」
「そう仰ってもです」
「それはもうです」
「御一人しかおられませんが」
部下達はこう何進に話していくのだった。
「董卓殿です」
「あの方にも出陣してもらいましょう」
「ここは」
「そうじゃな」
そしてだった。何進もその案に頷くのだった。

# 第五十八話　三姉妹、反乱を起こすのことその七

「あ奴はどうも戦は好きではないようじゃが」
「えっ、そうなのですか！？」
「それは初耳ですが」
「武の方では」
「いや、あ奴は戦をしたことはない」
それは大将軍である何進ならば知っていることだった。
「官位も文官のものじゃしいつも着ている服もじゃ」
「そうなのですか」
「噂では血を好むと言われていますが」
「そうではないのですか」
「意外ですが」
「擁州自体も平穏というしのう」
彼女の統治の結果である。そうなっているのだ。
「だから戦には不向きじゃが」
「しかしあの方の下には優れた将がいます」
「それも一人ではありません」
このことはよく知られていることだった。
「あの飛将軍呂布にです」
「そして張遼将軍」
「二人がいます」
「ですから」
こう話していく。しかしであった。
ここでだ。一人が言った。
「いや、もう一人いなかったか？」
「もう一人とは？」
「妹君の董白殿ではないのか？」
「軍師の賈駆殿ではなく」

「いや、他に一人いた筈だ」
こう話すのだった。
「誰だった？あの銀髪の」
「銀髪？」
「銀髪なのか？」
「そして髪が短い」
このことも指摘される。
「しかも斧を使ったな」
「ううむ、誰だそれは」
「そういえばいたような気がするが」
「一体誰だった？」
「その人物は」
「そういえばいたような気がするのう」
何進もいぶかしむ顔で首を捻るのだった。
「何か随分と目立たぬのがじゃ」
「まあ目立たないですし」
「特に気にすることもないですね」
「それでは」
その人物についてはこれで話が終わったのだった。しかしだ。
話は決まりかけていた。何進は意を決した顔になって述べた。
「ではもう一人はじゃ」
「はい、それでは」
「董卓殿にも」
部下達も頷き話が決まろうとしていた。しかしである。
ここでだ。ある少女が出て来た。白く丈の長い、そしてゆったりとした見事な服である。
背はあまり高くはない。黒髪を長く伸ばし切れ長の琥珀を思わせる目をしている。顔は白く顔立ちはまだ幼い。その少女が出て来て言うのであった。
「将軍、お待ち下さい」

「司馬慰か」
「はい」
少女は何進に名前を告げられ静かに頷いたのだった。
「私の考えを述べさせてもらいたいのですが」
「うむ、何じゃ」
何進の顔に微笑みが宿った。司馬慰を見ると急に笑顔になるのだった。
「申してみよ」
「ここは董卓殿よりもです」
「他に相応しい者がおるのじゃな」
「はい、その通りです」
こう何進に言う司馬慰だった。
「ですからここはその方に」
「そんな者がいたか？」
「いや、知らない」
「そうだな。董卓殿よりもとは」
「一体」
「北にいます」
司馬慰は美しいが冷たい響きのする、氷を思わせる声で述べた。

# 第五十八話　三姉妹、反乱を起こすのことその八

「その方はです」
「誰じゃ、それは」
何進は彼女に問うた。
「それで」
「はい、劉備玄徳殿です」
司馬慰はこの名前を出した。
「あの方です」
「ふむ。覚えておるぞ」
劉備という名前を聞いてだ。何進は実際に思い出した顔になった。
そのうえでの言葉だった。
「あの烏丸討伐の時に活躍した娘じゃな」
「あの方のところには多くの軍師や名将が集まっています」
「そして豪傑もじゃな」
「はい、近頃よくいる他の世界から来た者達も」
「ならばじゃな」
「はい、ここはあの方に出陣してもらいましょう」
こう言うのであった。
「それに董卓殿は今は」
「長安で大掛かりな開拓をしておったな」
「それに専念してもらいましょう」
それで彼女は、というのである。
「あの方の好きな内政にです」
「そうじゃな。ではここは劉備じゃな」
「はい、そうです」
こうしてだった。劉備に出陣を要請することになったのであった。
そうした経緯があった。何進は司馬慰の言葉に満足していた。
「流石よのう」

「はい、全くです」
「流石は司馬慰殿です」
部下達も彼女の言葉に続いてこう言うのだった。
「切れ者ですね」
「いつもながら」
「ただ切れるだけではないしのう」
何進はその満足した顔でまた言った。
「名門司馬家の嫡流じゃしな」
「はい、清流の」
「まさに完璧ですね」
「何の落ち度もありません」
「しかも人柄もよい」
何進はそれも見ているのだった。
「切れ者で名門の出身だというのにじゃ」
「はい、謙虚で温厚で」
「しかも公平な方です」
「それでいて締める部分は締められますし」
「素晴しい方です」
部下達も彼女を口々に褒める。
「あの方が我等のところにいてくれる」
「それだけでも非常に有り難いです」
「全くです」
「まさにわしの懐刀じゃ」
そこまでだというのだった。何進もだ。
「何かあればすぐに知恵を出してくれるしのう」
「今回もですしね」
「劉備殿をあそこで話に出されるとは」
「意外です」
「それでいて的確です」
「その通りじゃな。ではじゃ」

ここまで話してであった。何進はだった。
司馬慰に対する信頼をさらに強いものにさせた。そうしたのであった。
しかしその司馬慰はだ。今は。
何故かバイス、マチュアと共に密室にいた。そこで三人で話していたのだ。
「そう、上手くいったのね」
「ええ、徐州の役人をね」
「洗脳してね」
バイスとマチュアは満足している顔で彼女に話すのだった。
「そうしてよ」
「あの三人にけしかけたらね」
「そして反乱が起こったのね」
このことも述べられる。
「上出来ね」
「それであの娘の出陣を進言したのね」
「そうしたのね」
「ええ、そうよ」
二人に答える司馬慰だった。

# 第五十八話　三姉妹、反乱を起こすのことその九

「その方が面白くなりそうだから」
「そうね。ただ兵を送って戦わせるよりはね」
「賑やかな面々に暴れてもらう方がいいのだからね」
「あの書にはね」
「だから」
「さて、後は」
ここで笑みを浮かべて言う司馬慰だった。
「その兵乱で書の力を高めて」
「ええ、その力も使って」
「オロチをね」
「オロチだけではないし」
また言う司馬慰だった。
「切り札が多いのはいいことね」
「ええ。ただ」
「貴女はまだ手を考えているようね」
バイスとマチュアは司馬慰にあらためて言った。
「そうなのね」
「これが失敗したら」
「ええ、そうよ」
その通りだと答える司馬慰だった。自信に満ちた笑みでだ。
「それはね」
「流石ね、失敗した場合も考えておくなんて」
「そうしているなんて」
「当然のことよ」
司馬慰はその笑みでまた話した。
「先の先を読んでそうしてね」
「動いていく」

「そうするのね」
「ええ。ただ一つ気になるのは」
ここでだった。司馬慰はその切れ長の流麗な目を顰めさせてだ。
こう言うのだった。
「貴女達が来ているだけではなくて」
「他の面々もね」
「こちらの世界に来ていることね」
「ええ、それよ」
司馬慰が今言うのはまさにそのことだった。
「それは何故かしらね」
「私達がここに来たのは于吉によるものだけれど」
「それでだけれど」
「けれど彼等は」
また言う司馬慰だった。
「どうしてなのかしら」
「謎ね。けれどね」
「それでもね」
「来てしまったからにはね」
司馬慰が二人に言った。
「そういうことね」
「ええ、そうよ」
「会ったその時はね」
二人は司馬慰に対して不敵な笑みを浮かべた。そのうえでの言葉だった。
「任せておいて」
「倒させてもらうから」
「期待するわ。そして」
「そして、なのね」
「貴女もなのね」
「私はただの文官ではないわ」

冷たい美貌の顔に凄みを宿しての言葉だった。
「そう、術もね」
「妖術も使えるのね」
「それもなのね」
「そうよ。それもまた見せるわ」
こう話すのだった。
「時が来ればね」
「ええ、それじゃあね」
「それも楽しみにしておくわ」
また話す二人だった。
「戦いは大好きだし」
「それを見るのも」
「私はそれよりも」
その顔の凄みがさらに強まる。
「血や人が死ぬ姿を見る方が楽しいのだけれどね」
「あら、そうなの」
「それだったら」
「同じだというのね」
司馬慰は二人の言葉の先を既に読んでいた。そのうえでの言葉だった。

# 第五十八話　三姉妹、反乱を起こすのことその十

「私達気が合うわね」
「ええ。それじゃあね」
「とりあえずは」
「徐州のことは御願いね」
その兵乱のことである。
「動きだしたけれど」
「後はあの三姉妹の好きにさせるけれどね」
「彼女達のね」
そうするというのだった。
「さて、じゃあ」
「今は」
そしてだった。こうしてであった。
司馬慰は闇の中で彼女と話してだった。そのうえでだった。
そこから出てだ。仮面を被ってであった。
宮廷に出る。今度は宮廷の何進の部下達。同志とされている者達と会うのだった。
そのうえでだ。こんなことを言うのであった。
「皆さん、それではですね」
「はい、それでは」
「これから大将軍のところに向かい」
「そうしてですね」
「また将軍にお話しましょう」
清らかな笑顔での言葉だった。
「どうやら宦官達はまた増長していますし」
「懲りない者達です」
「全くです」
彼等は宦官達への嫌悪を見せた。

「帝を惑わし国政を乱し続ける」
「許せない者達です」
「そうです。だからこそです」
司馬慰は言うのであった。
「我々が大将軍をお助けしてです」
「国を守りましょう」
「是非共」
「そうしなければなりません」
既に彼等のまとめ役にもなっていたのだった。
「是非共」
「その通りですね」
「あの者達の相手は容易ではありませんが」
「それでもですね」
「漢王朝の為には」
「帝の御身体もよくありませんが」
「帝ですね」
司馬慰はその顔に曇りを作ってみせた。あくまで表面だけである。
「帝の御身体は確かにですね」
「言葉に出すのもはばかれますが」
「どうやら、なのですね」
「最早」
「おそらくは」
その作った顔でまた言うのであった。
「間も無く」
「左様ですか。それでは」
「次の帝は」
「陳留王ですね」
その人物だというのである。
「あの方は非常に聡明な方です」
「それならばです」

「最早宦官達も」
「はい、惑わされることはありません」
こう言うのであった。
「ですから次の帝はです」
「安心できますね」
「これまでの様なことはありませんね」
「はい、これで宦官達の時代は終わりです」
これが司馬慰の言葉だった。
「ですからご安心下さい」
「そうですね。それでは」
「今は待ちましょう」
「次の帝が即位されるその時を」
「確かに帝は心配ですが」
今の皇帝への忠誠は確かにある。しかし彼等は今はそれ以上に宦官達との対立に疲れを感じていた。それでこう思うのだった。
「ですが今は本当に」
「宦官共の壟断を止めなくてはなりません」
「さもないと国が本当におかしくなります」
「これ以上おかしくなれば」
「その通りです」
司馬慰が話をまとめて述べた。
「ですが今はです」
「今は」
「今はといいますと」
「帝のご病状の回復をお祈りしましょう」
表向きに過ぎない言葉だった。しかしであった。
「是非共」
「そうですね。それは」
「決して忘れずに」
「そうしましょう」

誰もが司馬慰の言葉に頷く。そこでだった。
「では皆さん。祈祷に専念されて下さい」
「帝のことをお祈りして」
「そうですね」
「はい、そうして下さい」
こう言うのであった。
「宦官達は私にお任せ下さい」
「そうして大将軍をですね」
「御護りされて」
「そうしますので」
彼等のことは自分に任せろというのであった。
「必ずや。この国をです」
「はい。お願いします」
「それでは」
彼等の間でもだ。司馬慰への信頼と人望はかなりのものになっていた。そして司馬慰自身もそれを頭に入れてだ。動くのであった。
闇の中で。

第五十八話　完

２０１１・１・１９

# 第五十九話　張勲、袁術と郭嘉を取り合うのことその一

第五十九話　張勲、袁術と郭嘉を取り合うのこと

反乱平定の為に徐州に入った劉備達はだ。最初にあることに気付いた。

「あれっ、何か」

「そうだな。見たところ」

軍の先頭に立つ劉備と関羽が最初に気付いた。

「若い男の人達だけが」

「異様にいないな」

見ればだ。徐州の至る町や村でそうだったのだ。

「やっぱりこれって」

「反乱のせいか？」

「多分そうなのだ」

二人の横で豚に乗る張飛も言う。二人は馬だが彼女は豚だ。しかもその背には大きなつづらがある。

「それでなのだ」

「ううん、だとすると」

「敵兵の数は多いか」

二人は次にこのことを危惧した。

「私達数が少ないけれど」

「それは兵法で補うか」

「そうするしかないのだ」

張飛も言う。

「戦は兵の多さが大事だけれどそれだけではないのだ」

「できれば」

ここでだ。劉備は顔を曇らせて言うのだった。

「戦わなくて済んだらいいけれど」

「反乱軍が降伏してくれればか」

「うん、できればそれで」
「確かにそれで済めばいいな」
関羽は姉のその言葉にまずは賛成した。
「だが。そうならないのが常だ」
「どうしてもなのね」
「話がそれで済めば苦労はしない」
関羽も顔を曇らせていた。そのうえでの言葉だ。
「何ごともな」
「そうなのね。じゃあ」
「姉上、覚悟はしておいてくれ」
劉備のその曇ってしまった横顔を見ての言葉だ。
「最悪の事態はな」
「ええ、それじゃあ」
こんな話をしてだった。そのうえであった。
一行は情報収集もした。その結果だ。
野営の天幕の中でだ。孔明と鳳統が居並ぶ諸将に話した。
「敵の数は数十万です」
「その殆ど全てが若い男性です」
まずは兵についての話だ。
「三姉妹の周りに集まってです」
「その数は日増しに増えています」
「若い男だけか？」
皆卓に座っている。馬超はそこで言うのだった。
「敵の兵隊は」
「はい、十代から二十代前半のです」
「独身の者ばかりです」
「何か偏ってるな」
馬超はその話を聞いて腕を組んでこう思った。
「普通反乱軍って後がないからな」
「そうだな。引っ張れる者は誰でも引き込む」

趙雲も言う。
「しかしこの反乱はだ」
「若い奴ばかりってな」
「しかもです」
「その入っている人達ですが」
ここでまた話す孔明と鳳統だった。
「自分達からどんどん入っています」
「まるで引き寄せられるようにです」
「そこも変わっているわね」
黄忠は話を聞いてまた述べた。
「無理矢理入れられるっていう話もないのは」
「しかも三姉妹を中心にして絶叫しているだけで」
「今はこれといって動きがありません」
「役人達は寄せ付けませんが」
「凶暴さや残忍さもありません」
「何だ、そりゃ」
ここまで話を聞いてテリーが言った。
「それじゃああれだな」
「そうだな、コンサートだな」
リョウも言う。
「俺達の世界で言うな」
「こっちだと舞台だな」
「はい、そのままです」
「三姉妹の舞台そのままなんです」
軍師二人もそうだというのだった。
「かなり特殊な反乱です」
「数は多いのですが」
「それならだけれどな」
草薙は話の根本から考えて述べた。
「三姉妹を黙らせたら話は終わるだろ」

「はい、その通りです」
「あの三姉妹がこの反乱の中心に他なりません」
また言う孔明と鳳統だった。

# 第五十九話　張勲、袁術と郭嘉を取り合うのことその二

「そうすればこの反乱は収束します」
「それだけで」
「言葉ではめっちゃ簡単やな」
ケンスウは首を捻りながら述べた。
「頭何とかしたら終わりやさかいな」
「けれどそこに行くまでが大変よ」
アテナは現実を語った。
「その三姉妹を何とかするにしてもそこまで行くのは」
「そうだな。やはり戦うしかないか」
魏延は言った。
「ここはな」
「そうよね。敵の中心まで一気に突っ切ってね」
馬岱は積極案を出した。
「三姉妹やっつけちゃって」
「敵兵の殆どは素人みたいだし」
黄忠は反乱軍の質を見抜いていた。
「それは楽にいけそうね」
「はい、話は曹操さんの軍と合流してからです」
「詳しくお話をしていきます」
そこからはそうするとだ。孔明と鳳統が話す。
「作戦についてはです」
「そのつもりです」
「ううん、あの娘達をやっつけるの？」
劉備がここで暗い顔で話す。
「そうするのは」
「姉上、気持ちはわかるが」
関羽がまたそんな顔になった劉備の肩に手を当てて言う。

「しかし反乱を収めなければだ」
「どうしようもないのね」
「そうだ。天下の乱れは放っておけない」
これが関羽の考えであり言葉だ。
「だからこそだ」
「ううん、けれど」
「あの三人は悪い奴等じゃないのだ」
張飛はどちらかというと劉備寄りだった。
「やっつけても何にもならないのだ」
「ですが反乱の平定はです」
「絶対にしないと駄目です」
孔明と鳳統も困った顔でこう話す。
「ですからここは」
「仕方ないです」
「本当に何とかならないかしら」
まだ諦められない劉備だった。
「ここは」
どうしてもだった。劉備は戦いを避けたかった。そのうえで曹操軍の駐屯場所に入った。彼女達はすぐに曹操自らの出迎えを受けた。
「よく来てくれたわね」
「曹操さん、お久しぶりです」
「ええ。元気そうで何よりだわ」
何処か困った顔で劉備に応える曹操だった。
「本当にね」
「それで曹操さん」
劉備はここで曹操に対して尋ねた。
「今ここに来ているのは曹操さんだけですか？」
「主だった面々は連れて来ているわ」
そうだという曹操だった。
「春蘭や秋蘭達はね」

「そうなんですか」
「ただねえ」
困った顔のままだ。曹操は言うのだった。
「麗羽や孫策が動けないから」
「あっ、異民族の平定で」
「そうなのよ。それの後始末とかでね」
それは曹操もわかっていることだった。
「それでなのよ」
「御二人はなんですか」
「どっちかでも来てくれればよかったんだけれど」
「しかし今はだ」
関羽がその曹操に話す。
「袁術殿が来ておられるのだろう？ここに」
「あのちびっこい奴がなのだ」
張飛はとりあえず自分のことを置いている。
「だったら兵の数は困らない筈なのだ」
「兵の数は今回はどうでもいいのよ」
曹操はこう張飛に返した。

# 第五十九話　張勲、袁術と郭嘉を取り合うのことその三

「ただね」
「ただ？」
「袁術がああなるなんて」
こんなことを言い出す曹操だった。
「意外だったわ」
「むっ、袁術殿は確かに癖は強いが無能ではないぞ」
趙雲がそれを指摘する。一行は駐屯地の陣中の道を進んでいる。
左右には兵達のいる天幕が連なり曹操軍の黒い武装した兵達が並んでいる。どれも見事な兵達だ。
その中を進みながらだ。ここで趙雲がこのことを指摘した。
「基本的には文の方のようだがな」
「袁術のことも昔から知っていたわ」
それはだというのだ。
「あの困った性格もね」
「なら何でそんなに困った顔になってるんだよ」
馬超もそれを指摘する。
「一体何があるんだ？」
「凛がねえ」
曹操は無意識のうちに溜息を出した。
「ああなるなんて？」
「凛って？」
「郭嘉のことよ」
馬岱に応えて彼女のことだというのだった。
「あの娘の真名よ」
「そうだったの」
「あれっ、そういえば」
ここで曹操は馬岱の顔を見てふと気付いたのだった。

「貴女もこの反乱平定に参戦するの」
「そうだけれど？」
「参戦する武将の知らせに貴女の名前はなかったけれど」
「あっ、予定が変わったの」
平気な顔でこう言う馬岱だった。
「それでなの」
「それでって」
「こいつまた黙ってついてきたんだよ」
馬超が顔を顰めさせて曹操に説明した。
「それでいるんだよ」
「黙ってって」
「またつづらの中に入ってたんだよ」
具体的にはそうしてだというのだ。
「全くよお」
「それでいるの」
「そうなんだよ。困った奴だよ」
馬超は今度はその従妹を見て言う。
「留守番しろって言ってたのにな」
「いいじゃない、別に」
馬岱は従姉にも平気な顔だ。
「武将の数は多い方がいいじゃない」
「そういうものじゃないだろ」
「まあわかってましたから」
「絶対にこうなるのは」
少し微笑んで言う孔明と鳳統だった。
「ですからあの時はあれで終わらせました」
「しょうがないですけれど」
「まあいいけれどね」
曹操はこのことには多くは言わなかった。
「とりあえず今は頭痛の種ができたし」

「その郭嘉さんのことね」
「あれじゃあ褥にも呼べないわ」
相変わらずの趣味の曹操である。それは変わらなかった。
「あそこまで露骨にだと」
「露骨って」
黄忠も話がわからずきょとんとしている。
「郭嘉さんは曹操さんに絶対の忠誠を誓っているのではなかったかしら」
「それは変わらないけれど」
「それでも褥には呼べなくなったの？」
「そうなのよ。どうしたことやら」
また溜息を出す曹操だった。
「あの三人は」
「三人で？」
劉備がそれを聞いて目をしばたかせた。
「三人っていうと」
「妙な話になってきたな」
魏延もそれを感じ取った。
「どうなっているのだ、一体」
「それは見たらわかるわ」
曹操の顔がうんざりとしたものになっていた。話をしているうちに一際大きな天幕の前に来た。そうしてだった。
「それじゃあね」
「ここにその問題があるんだな」
関羽はその天幕の入り口を見ながら述べた。
「それが」
「そうよ。どうにもならないわ」
こんな話をしてだった。そのうえでだった。
一行はその天幕に入った。するとそこでは。
曹操と袁術のそれぞれの配下の者達がだ。困り果てた顔でいた。

皆曹操と同じ顔になっている。

# 第五十九話　張勲、袁術と郭嘉を取り合うのことその四

「やれやれだな」
「どうにかならないのか？」
「どうしようもないんじゃない？」
「そうよね」
「これは」
どちらもだ。こう話すのだった。
「この状況は」
「まさかこうなるなんて」
「この三人が」
見ればだ。袁術と張勲がだ。郭嘉を挟んで何かを言い合っていた。
張勲はだ。いつものにこにことした顔で主に言っている。
「私と凛ちゃんはもうできているんですよ」
「だからそれは駄目なのじゃ！」
袁術は泣きながら張勲に抗議していた。
「凛は取るななのじゃ！」
「だって私達仲いいんですから」
「わらわと凛はもっと仲がいいのじゃ！」
「私達同じ二十三歳の教えに入っていますから」
「何っ！？何じゃそれは」
それを聞いてだ。袁術の顔が強張った。
そのうえでだ。楽就に問うた。
「黄菊、何じゃそれは」
「七乃さんが提唱している集まりなんですけれど」
「そんなものがあったのか」
「何でも十七歳に対抗してのそうです」
こう主に話す楽就だった。
「二十三歳から永遠に歳を取らないとか」

「わらわ達は全員十八歳以上になっておるのじゃが」
こんなことを言う袁術だった。
「そんなものがあったのか」
「はい、どうやら」
「ううむ、ではあと五年じゃな」
あくまで自分を十八歳とする袁術だった。
「わらわがそれに入られるのは」
「っていうか美羽様」
「入られるのですか？本当に」
それを聞いてだ。楽就だけでなく紀霊も彼女に問うた。
「その二十三歳とやらに」
「まことに」
「あと五年後じゃ」
本気の顔で言う袁術だった。
「そうする」
「ううん、それならいいのですが」
「いいの？本当に」
思わず揚奉に問う紀霊はこんなことも言った。
「美羽様がまた怪しげなことしだすけれど」
「けれど美羽様らしいから」
「いいっていうのね」
「私はいいけれど」
それでだというのだった。とにかくであった。
袁術と張勲はだ。まだ言い合っていた。袁術はだ。
いきなり郭嘉を抱き締めてだ。こう言うのであった。
「凛は誰にも渡さないのじゃ！」
「あっ、美羽様」
そしてだ。郭嘉もまんざらではない顔で顔を赤らめさせて言う。
「そんな、私には華琳様が」
「主はおるのはわかっているがわらわと凛は親友同士なのじゃ」

こう言う袁術であった。
「だから絶対に誰にも渡さんのじゃ」
「ですから」
しかし張勲は余裕の表情のままた言う。
「凛ちゃんと私はもうですね」
「ええい、それならじゃ！」
勢い余ってだった。袁術は。
卓の上にあった。菓子を一つ手に取ってだ。郭嘉に手渡してだ。
「さあ、これをじゃ」
「はい、そのお菓子を」
「まずは食うのじゃ」
こう彼女に言うのであった。
「よいな」
「はい、それでは」
こうして郭嘉にその菓子を食べさせる。それからだった。

# 第五十九話　張勲、袁術と郭嘉を取り合うのことその五

自分もだ。向かい側からその菓子に食らいのであった。誰もがそれを見てだった。

「な、何と」

「そこまでする！？」

「っていうかもう」

「完全にこれは」

誰がどう見てもであった。

「怪しいっていうか妖しい」

「どうなっていくのかしら」

「ここまでいくと」

「えっ、そんな・・・・・・」

そしてだ。張勲もぎょっとした顔になっていた。そのうえで言うのだった。

「私だってそこまではまだなんですよ」

「そんなこと知ったことではないわ！凛は絶対に渡さぬのじゃ！」

小さな身体で郭嘉を抱き締めながらだ。あくまで言う袁術だった。

そんな彼女達を見ながらだ。曹操はまたしても溜息を出すのだった。

「こうなってるのよ」

「ううむ、これは」

「予想外なのだ」

「私もよ」

曹操は唖然となっている関羽と張飛に述べた。そうなっているのは二人だけではなく劉備達全員がであった。そうなってしまっていた。

「まさかねえ。この三人が」

「しかしそれでいてだ」

「妙に納得できるのだ」
こうも言う関羽と張飛だった。
「この組み合わせは」
「何か入られないものがあるのだ」
「そうなのよ。だからね」
曹操も納得しざるを得ないという顔である。
「どうしたものか困ってるのよ」
「とりあえず置いておくしかないんじゃないのか？」
馬超の考えはこうしたものだった。
「こりゃどうしようもないだろ」
「そうだな。まさか袁術殿と郭嘉殿がだとは思わなかったがな」
趙雲も今は何もしようとしない。
「だが私も納得しているのは確かだ」
「けれど何か危なくないですか？」
「そうです」
孔明と鳳統は困った顔になっている。
「袁術さんと張勲さんも危うかったですけれど」
「郭嘉さんが入ると余計に」
「まさかああして食べ合うなんてね」
黄忠はそこを指摘する。
「初対面の筈なのに仲がいい・・・・・どころじゃないわね」
「ううむ、私もできれば」
魏延はそんな二人を羨ましそうに見ている。
「桃香様とああして」
「あんたどさくさに紛れて何言ってんのよ」
馬岱はそんな魏延を横目で見ながら突っ込みを入れた。
「そうなったら本当に言い逃れできないわよ」
「まあとにかくここは」
劉備が最後に言った。
「三人はそっとしておいてあげて」

「それしかないわね」
曹操も完全に匙を投げてしまっている。
「作戦会議ね」
「むっ、これからのことか」
「そうですね」
曹操の言葉でようやく我に返る袁術と郭嘉であった。
「それでは凛よ」
「はい、席に着きましょう」
「そうですね。反乱平定が第一ですから」
張勲も二人のその言葉に頷く。
「では今から」
「うむ、では曹操よ」
袁術は何もなかったかのように曹操に対して言う。
「作戦会議をはじめようぞ」
「全く。この小娘は」
曹操はここでも溜息だった。
「こんな反応見せるなんて思わなかったわよ」
「じゃあお話をはじめましょう」
しかし劉備はこんな状況でも自分のペースである。
「今から」
「そうね、それじゃあ」
こうしてだった。三人が席に着きそれぞれの家臣がその後ろに立ちだ。話をはじめるのだった。

# 第五十九話　張勲、袁術と郭嘉を取り合うのことその六

まずはだ。袁術がこう曹操に問うのであった。
「あの三姉妹は元々旅芸人だったそうじゃな」
「ええ、一介のね」
「最近物凄く売れてきておるのは聞いておった」
それはだというのである。
「わらわのところにも来ておったしのう」
「そうだったのね」
「中々いい歌を歌いおる」
袁術は納得している顔で述べる。
「わらわ程ではないがのう」
「あんた昔から歌は上手いからね」
曹操は何気に袁術のその歌は認めていた。それを言葉に出す。
「そっちの張勲もね」
「有り難うございます」
「それで話は元に戻すけれどね」
曹操はここでそうしてきた。
「その只の旅芸人が反乱を起こしたのよ」
「考えてみれば妙な話じゃな」
「そうなのよ。何か役人が言い掛かりをつけてきたのが理由らしいけれど」
「その役人はどうなったのですか？」
関羽が曹操にそのことを問うた。
「事件の元凶は」
「これがさらに妙なことになっててね」
曹操は言いながらいぶかしむ顔を見せていた。
「その時のことを覚えていないのよ」
「まさか、そんなことが」

「それが事実なのよ」
荀？も今は困惑したものをその顔に見せている。そのうえでの言葉だった。
「何かね。何をしていたのかも覚えていないみたいで」
「だとするとそれは」
孔明はその話を聞いてすぐにあることを察した。
「操られていたんですか？誰かに」
「ええ、そうみたいなのよ」
荀？も孔明に応えてこう話す。
「これだけでもおかしなことよね」
「誰かが反乱を仕組んでいるんでしょうか」
鳳統も言う。
「だとすると」
「あの三姉妹を使って？」
「それも妙な話だ」
今度は夏侯姉妹が言う。
「無害な三人にしか思えないが」
「ただの旅芸人に反乱を起こさせてどうするのだ」
「大体あれだろ？」
馬超も姉妹に続いて話す。
「反乱軍、名前は何ていったかな」
「黄巾賊です」
張勲がその名前を話す。
「自分達では黄巾党と言っています」
「そうなのか。黄巾賊っていうのか」
馬超はその名前を聞いてそれを頭の中に入れた。
「あの三姉妹の色をそのまま使ってるんだな」
「しかもそもそも只の観客達だったな」
趙雲はこのことを指摘した。
「数は多いが質は大したものではないな」

「はい、それはです」
程?が趙雲のその指摘に答える。
「既に戦術は決定しています」
「どうするのかしら、それは」
「袁術さんと劉備さんの軍で敵の注意を引き付け」
まずはそうするというのである。
「そして後方から我々が回り込み一気に中央を攻略します」
「それで簡単に終わる話なのよ」
曹操もここで言う。
「実際のところね」
「そうか。それならすぐにね」
黄忠もその話に乗る。
「準備に入りましょう」
「では作戦開始じゃな」
袁術も言う。
「取り掛かろうぞ」
「あの、それでなんですけれど」
「いいでしょうか」
ここで孔明と鳳統が問うてきた。

# 第五十九話　張勲、袁術と郭嘉を取り合うのことその七

「その黄巾賊は戦を知らない人が殆どの言うならば烏合の衆ですね」
「そんな人達がずっと集まっていてしかも増えている理由は」
「歌って聞いていますけれど」
「そうですね」
「ええ、そうよ」
曹操がその通りだとだ。二人の問いに答えた。
「あの三姉妹、ここでも歌ってね」
「それで人をどんどん引き寄せている」
「そうなんですね」
「厄介なことにね」
また二人に話した。
「だから数は無視できないのよ」
「それだったら。雛里ちゃん」
「そうよね、朱里ちゃん」
二人は顔を見合わせて言い合った。
「歌には歌で」
「それができるわよね」
「うん、それじゃあ」
「それでいこう」
こう二人で話してから。曹操に顔を戻してこう言うのだった。
「あの、曹操さん」
「考えがあるんですけれど」
「何かしら」
曹操も二人の話を聞く。
「策を閃いたみたいね」
「はい、実は」
「戦わなくて済むかも知れません」

「えっ、どういうこと!?」
それを聞いてだ。驚いたのは荀?だった。
「戦わずに済むって」
「ですから。三姉妹は歌を歌って人を集めていますよね」
「それならこっちもです」
これが二人のその策だった。
「歌を歌ってそれで」
「彼等を解散させましょう」
「そんなことできる筈ないじゃない」
荀?は二人のその考えを否定した。
「あの三人は歌だけじゃなくて妖術と宝貝も使ってるんだから」
「それってそんなに凄い妖術でしょうか」
「私達の見た限りですと」
二人は三姉妹と会った時のことを思い出して話す。その妖術や宝貝はというとだった。
「あまり大した術じゃないですよね」
「三人が歌を広める為だけの」
「それで人を引き付ける」
「それ位だと思いますけれど」
「それなら対抗できるっていうのね」
曹操は二人のその話を聞いていた。そのうえでの言葉だ。
「私達にも」
「はい、そうです」
「できると思います」
「向こうが妖術と宝貝なら」
今度は曹操が考えてだ。そうして言うのだった。
「こちらはね」
「どうしますか、それで」
「華琳様、お考えが」
「ええ、あるわ」

曹操は今度は曹洪と曹仁に述べた。四天王はここでも全員彼女と行動を共にしている。
「からくりよ」
「からくりですか」
「今度は」
「ええ、それを使うわ」
また二人に話した。
「ここはね」
「ほなここは」
李典が早速楽しそうな声を出してきた。
「うちの出番やな」
「そうよ。真桜御願いできるわね」
「はい、わかってます」
李典はその明るい声で曹操に応える。
「ほな早速」
「とびきりのものを頼むわね」
曹操も笑顔で李典に話す。
「あの三姉妹に対抗できるようなね」
「わかってます。最高のからくり見せますわ」
こうして対策は決まった。そしてであった。

# 第五十九話　張勲、袁術と郭嘉を取り合うのことその八

劉備達は今度はだ。歌手を選ぶのであった。
「さて、歌手ですね」
「そうね」
紀霊と楽就がこのことを話す。
「三姉妹に対抗できる歌手をこちらも出しましょう」
「三人ですね」
「二人はもう決まっているわ」
こう二人に述べる曹操だった。
「もうね」
「となると」
「それは」
曹操の今の言葉を受けてだ。袁術と張勲が目を輝かせる。
「わらわ達じゃな」
「そうですよね」
「正直あんた達二人は外せないわ」
まさにそうだという曹操だった。
「絶対にね」
「当然じゃな」
「頑張りますから」
「全く。袁家ってのは癖の強い娘ばかりだから」
「全くですね」
曹操のその言葉に頷いたのは荀?だった。
「どういう家なんでしょうか」
「麗羽がここにいたらもっとややこしかったわね」
「あの方なら絶対に御自身も出ようとされますね」
「間違いなく」
夏侯姉妹が言う。

「絶対に」
「そうしますね」
「そうね。あの娘がいないのは結構寂しいけれどね」
曹操はこんなことも言った。
「けれど言っても仕方ないわね」
「はい、また機会があればですね」
「共に」
夏侯姉妹も何気に袁紹には好意を見せていた。そしてやはり寂しさも見せていた。
そんな話をしているうちにだ。人選はというとだ。
二人が決まった。残るは一人であった。
「さて、最後の一人だが」
「誰にするのだ？」
関羽と張飛が話す。
「袁術殿と張勲殿と肩を並べる歌の歌い手となると」
「そしてあの三姉妹に対抗できる奴なのだ」
「かなり限られるが」
「誰なのだ」
「うむ、それなら」
何気に出て来る夏侯惇だった。
「一人いい者がいるぞ」
「姉者、まさかと思うが」
「秋蘭、いいだろう？」
咎めようとする妹にすがる目で訴える。
「私とて女だぞ。歌は好きだ」
「それは知っているが」
「だからだ。ここはだ」
「やれやれ。仕方ないな」
妹に対して優しい笑顔を向けてだった。
「そこまで言うのならだ」

「済まない、秋蘭」
二人で話を決めた。しかしであった。
ここでだ。程?が夏侯惇より先に言ってきたのだった。
「あっ、それでしたら」
「風、推挙ね」
「はい、凛ちゃんがいいです」
彼女を推挙するのだった。
「凛ちゃん実は歌も凄く上手いんですよ」
「ちょ、ちょっと風」
その推挙を受けてだ。郭嘉はあからさまに狼狽を見せて言うのだった。
「私はそんな」
「じゃあ試しに今ここで歌ってみたら」
「そうね。袁術も張勲もだけれど」
曹操は二人も見て述べた。
「三人共ここで歌ってみて」
「わかったのじゃ」
「それでしたら」
袁術達二人は早速それにかかるのだった。

# 第五十九話　張勲、袁術と郭嘉を取り合うのことその九

「歌わせてもらうのじゃ」
「今から」
「凛、貴女もよ」
曹操は当然のように彼女にも声をかけた。
「いいわね」
「わかりました」
主に言われてもだった。彼女も頷くしかなかった。それでだ。
三人で実際に歌ってみる。するとだ。誰もが感嘆して言うのだった。
「えっ、これって」
「三人共かなり」
「上手いじゃない」
「そのまま歌手になれるっていうか」
「そこまで」
特に劉備達が驚いている。
「これはいけるな」
「いけるのだ」
関羽と張飛も認める。
「確実にな」
「あの三人に対抗できるのだ」
「当然じゃ」
歌い終わった袁術はふんぞりかえって二人に応えた。
「わらわだけでなく七乃と凛もおるのじゃ」
「それならですね」
「何かお二人が凄くて負けそうですけれど」
郭嘉は謙遜を見せている。
「この三人で」

「いきましょう」
「決まりね」
曹操も笑顔で言う。
「この三人とからくりで対抗するわよ」
「では任せるのじゃ」
「けれど。凛がねえ」
ここでだ。曹操は難しい顔も見せた。
「このままじゃ二人のうちのどっちかに取られるわね」
「あの、華琳様私は」
郭嘉は曹操の今の言葉にすぐに真剣に言う。
「華琳様の臣です。そのことは何があろうとも」
「それはわかってるわよ」
その彼女にこう返す曹操だった。
「だから。違うのよ」
「違うとは」
「褥は共にできないわね」
曹操が言うのはこのことだった。
「本当に張勲とできてないでしょうね」
「そ、そんなことは」
「すいません、曹操殿」
しかもだった。ここで張勲が満面の笑顔でわざと言うのだった。
「凛ちゃんとは末永く幸せに」
「怨むわよ、本当に」
曹操も笑顔を作って彼女に合わせる。
「凛を泣かせたら許さないからね」
「はい、わかっています」
「あ、あのですから私達はそんな」
郭嘉は顔を真っ赤にして何とか言おうとする。
「張勲さんとは別に」
「そ、そうなのじゃ！」

その郭嘉と同じ位慌てているのが袁術だった。
「凛は取るななのじゃ、七乃だろうが曹操だろうが許さんぞ！」
「すいません、美羽様」
このことについては主にも容赦ない張勲だった。
「私達もう」
「だから凛だけは駄目なのじゃ。凛とずっと一緒にいるのはわらわなのじゃ！」
「あの、美羽様私も」
郭嘉はもじもじとしてその袁術に言う。両手の人指し指の先を胸の先で合わせながら。
「美羽様と一緒にずっと」
「そうじゃ。七乃も大事じゃが凛も大事なのじゃ」
袁術は言い切った。
「だから絶対に離れるななのじゃ」
「はい、わかっています」
「この三人大丈夫なのかい？」
「どうしたのですか、宝？」
程？が己の頭の上の人形に問う。

# 第五十九話　張勲、袁術と郭嘉を取り合うのことその十

「何かあったのですか？」
「いやよ、何かどろどろの三角関係ってよ」
「しかも女同士で」
「華琳様を置いてけぼりでどうなんだろうねえ」
「確かに。凄いものがありますね」
「野放しにしてちゃまずいんでねえかい？」
一応人形が言っていることになっている」
「これはよう」
「確かに。何か暴走していますし」
「止める奴はいねえのかい？」
「この三人は難しいですねえ」
「困ったことだねい」
「はい、けれど見ていて飽きないです」
何気に本音を出す程？だった。
「これは」
「というか一人で喋っていないか？」
魏延がその程？突込みを入れる。
「人形のふりをして本音も交えて」
「気にしないで下さい」
慣れているのかこう返す程？だった。
「そういう設定ですから」
「設定なのか」
「はい、そうです」
また魏延に述べる彼女だった。そんな話をしていてだった。
その中でだ。相変わらず郭嘉を取り合う二人であった。
「だから凛は」
「いえいえ、こればかりはです」

張勲は明らかに遊んでいるが袁術は必死である。
「私も凛ちゃん好きですから」
「ぬうう、凛は誰にも渡さぬのじゃ」
「あのね、美羽」
曹操が呆れながら彼女に突っ込みを入れる。
「忘れてるかも知れないけれど」
「むっ、曹操ではないか」
「さっきも言ったけれど華琳でいいから」
本名で言うことを許してはいる。
「けれどよ。凛はね」
「そなたの家臣じゃったな」
「そうよ。それは覚えておいてね」
「わかっておるわ。安心せい」
「けれどこれじゃあ」
曹操も珍しく難しい顔をして述べる。
「凛を褥にはっていうのは絶対に無理ね」
「申し訳ありません、華琳様」
「いいわよ。こんなの見せられたらどうしようもないわ」
郭嘉には笑顔で応える。
「ただし。条件があるわ」
「条件ですか」
「そうよ。美羽とも張勲とも仲良くしなさいね」
言うのはこのことだった。
「どっちも外も中も強烈な個性だけれど」
「っていうかあのお二人って」
「郭嘉さんもですけれど」
孔明と鳳統がその三人を見ながら話す。
「物凄い個性です」
「あの、どういう人達なんでしょうか」
「袁術は多分他にも色々やっているのだ」

張飛は本当的にそのことを察していた。
「楽器を演奏している人間をいじっていたのだ」
「むっ、何故わかったのじゃ」
袁術もその張飛の言葉に顔を向けて言う。
「あの陽子じゃな」
「ちょっとは捻ったら？」
曹操はまた呆れた声を出した。
「そのままじゃない」
「むっ、左様か」
「幾ら何でもそれはまずいでしょ」
「しかしあ奴はうい奴でのう」
袁術の笑顔が黒いよこしまなものになってきていた。そのうえでの言葉だ。
「中々いじりがいがあるわ」
「そうなんですよ。美羽様その娘をですね」
張勲もここで話す。

# 第五十九話　張勲、袁術と郭嘉を取り合うのことその十一

「ことあるごとに可愛がられているんですよ」
「どういう風に可愛がってるんだよ」
馬超がすぐに問うた。
「何か怪しいな」
「それはあれじゃ。胸がないのを言ったりじゃ」
まずはそこだというのだ。
「七一六とのう」
「ない胸ってことだな」
「そうじゃ。他には管で麺を吸わせる芸を身に着けさせ」
「それいじめじゃないの？」
今突っ込みを入れたのは許緒だった。
「何かそれっぽいけれど」
「いじめではないぞ」
袁術はそれは否定する。
「あくまで芸を教えておるのじゃ」
「そうなんだ」
「そうじゃ。他には胸をいじったりスカートをめくったりじゃ」
「そうして遊んでるのね」
「うむ、陽子はうい奴じゃ」
曹操に胸を張って述べるのだった。
「帰ったらまた遊んでやるとしようぞ」
「いいの？これで」
馬岱がそっと郭嘉のところに来て囁く。
「怪しいみたいだけれど」
「あっ、それは大丈夫です」
しかし郭嘉は微笑んでそれはないというのだ。
「美羽様は本気なのは私だけですから」

「あんただけって」
「はい、美羽様はそうした方です」
こう笑顔で述べるのだった。
「ですから私もそうしたことでは」
「これは本物ね」
馬岱はそのことを完全に理解したのだった。
「この三人、もう何ていうか」
「面白いことだ」
趙雲はそんな三人を見て楽しそうに笑っている。
「このままいけばさらによいな」
「そうなんだ」
「そうだ。それではそろそろ準備にかかるか」
趙雲はこう面々に述べた。
「舞台のな」
「はい、それじゃあ」
劉備が彼女の言葉に応えてだ。そのうえでだった。
一同は三人の舞台の準備にかかろうとする。しかしであった。
ここでだ。徐晃が天幕に入って来てだ。こう曹操に言うのであった。
「華琳様、怪しい者を捕らえました」
「怪しい者？」
「赤い髪の若い男です」
「まさかと思うけれどそれは」
「名前は華陀と言っています」
こう述べる徐晃だった。
「どうされますか？」
「華陀ね」
その名前を聞いてだ。すぐに言う曹操だった。
「その者、すぐにこちらに連れて来て」
「はい、それでは」

「あれっ、華陀さんっていったら」
「そうよね」
ここで孔明と鳳統がまた言った。
「天下第一の名医っていう」
「あの人ね」
「そうよ。そして」
曹操は今度は怒りを見せるのであった。そのうえでの言葉だ。
「私に恥をかかせた破廉恥な男よ」
「破廉恥？」
関羽は曹操の今の言葉に怪訝なものを見せた。
「どうしたのだ、一体」
「とにかく。その男はね」
「はい」
「すぐにここに連れて来て」
曹操はこう徐晃に告げた。
「いいわね、すぐに」
「わかりました、それでは」
こうしてだった。華陀がすぐに連行されてきた。するとだった。
夏侯姉妹がだ。すぐに彼に躍り掛かった。
「貴様！よくもあの時！」
「華琳様に恥を！」
「あら、夏侯淵さんまでなの？」
黄忠は姉だけでなく妹も彼に掴みかかったのを見て驚きの声をあげた。
「いつもあんなに冷静なのに」
「秋蘭は実は華琳様のことになりますと」
「春蘭よりも熱くなるんです」
曹洪と曹仁がこう彼女に話す。
「それでなんです」
「今は」

「ううん、そうなのね」
そしてであった。華陀は。
捕まれ首筋に巨大な刃を突きつけられてだ。曹操の前に膝をつかされていた。そうしてそのうえでだ。曹操は残忍な笑みを浮かべて声をかけるのだった。
「久し振りね、華陀」
「曹操殿だな、実はここに来たのはだ」
「ええ、理由はわかっているわ」
笑みはそのままでの言葉だった。
「私に殺されに来たのね」
「おお、これは衝撃の展開が待っているねえ」
人形がこんなことを言う。
「首をすぱっとやられちまうかい？」
「これ、そんなことを言ってはいけません」
また主が彼に突っ込みを入れる。頭上の彼を見ながらだ。
「何か事情がありそうですし」
「事情って何だい？」
「とりあえずそれを聞くのです」
こう言ってだ。それでだった。
華陀はだ。曹操に対して話をはじめるのだった。その話とは。ここで一つの話が終わりまた新しい話がはじまろうとしていた。

第五十九話　完

２０１１・１・２１

# 第六十話　楽進、辛い料理を作るのことその一

第六十話　楽進、辛い料理を作るのこと

かくして袁術達三人を軸とした歌を使った策が決まった。
だがだった。三人の一角の郭嘉がだった。
妄想に耽っていた。そしてこんなことを言っていた。
「駄目です美羽様、華琳様が見ておられます」
顔を真っ赤にしてだ。あらぬことを口走っていた。
「主の前でその様な、ああ御無体を」
「ううむ、最早ここまでくると」
「危ないというものではないな」
夏侯姉妹も唖然となっていた。
「華琳様の御前で袁術殿に迫られているのか」
「いや、しかもだ」
「しかも？」
「どうもそこに張勲殿が入っているようだ」
見ればその通りだった。郭嘉の妄想が続いていた。
「七乃殿、ですからそこは」
「ううん、中の関係なのね」
曹操は今の郭嘉の暴走の原因をこう把握したのだった。
「そのせいね」
「しかしそれを言うとだ」
「そうだな」
関羽と趙雲がその曹操に突っ込みを入れてきた。
「我々も所属している場所がだ」
「同じになるのだが」
「あの三人も前はそうだったらしいけれど」
曹操はとりあえず郭嘉を見ながら話す。

「けれど。あれは」
「それ以上のものがあるな」
「そうだな」
関羽と趙雲もそれはわかった。
「何処かで一緒だったな」
「特に袁術殿と郭嘉殿はな」
「あれじゃあ凛は褥には本当に呼べないわ」
曹操はそのことを真剣に考えていた。
「全く。主というのに。あの娘は駄目なのね」
「というかあの三人の関係は」
「最早手がつけられないものがあるぞ」
その郭嘉の妄想を見ながらの話だった。
そんな話をしているうちにだった。華陀は。
捕まったままだ。李典の尋問を受けていた。
「で、あんたここに来た理由は」
「それだというのか」
「そうだ、別に悪意があってじゃない」
こうその李典と楽進に話す。
「その太平要術の書のことだ」
「あの書のことね」
曹操が華陀が尋問を受けているその天幕の中に入って来た。そのうえで彼に対してこう言ってきたのだ。
「前に話していた」
「そうだ。それで曹操殿」
華陀はここで失態を犯してしまった。
「その便秘は」
「それ以上言うことは許さないわよ」
曹操は赤い気を身にまとい目も紅にさせて彼に顔を突きつけて告げた。
「本気で殺すわよ」

「なっ、言ってはまずいのか」
「私だって女の子なのよ」
それでだというのである。
「それでそんな話をされていい訳ないでしょ」
「むう、そうなのか」
「そうよ。というか貴方そういうことわからないの？」
「ああ。俺は医者だ」
「医者だから？」
「患者のことは包み隠さず話さないといけないからな」
少なくとも彼はこれまでそうしてきている。彼にとっては曹操も患者の一人に過ぎない。しかし彼は自分のデリカシーのなさは自覚していない。
その彼がだ。また曹操に話した。
「わかった。では言わないでおこう」
「言ったら本当に首ないわよ」
「ううむ、俺とて首がなくなれば死ぬからな」
「あれ、あんた確か死なないんちゃうんか？」
李典がこう華陀に突っ込みを入れた。
「勇者は死なへんのやろ」
「いや、俺とても流石に首をはねられるとだ」
「死ぬんやな」
「そうだぞ。幾ら何でもな」
「ううん、そうやったんか」
それを聞いて納得はする李典だった。しかしである。
ここでだ。李典はこんなことも言うのだった。
「そういやあんた宇宙で攻撃受けて光になったことあったな」
「その話か」
「そんでライオンがどうとかも言うてたな」
「よく知ってるな、あんた」
「あんた有名人やからな」

少なくとも知らない人間はあまりいなかった。この国でだ。

# 第六十話　楽進、辛い料理を作るのことその二

その彼がだ。何とか釈放されてだ。曹操に対して話すのだった。
「その書だが」
「私は持ってないわよ」
「それはわかっている。しかしだ」
「ああ、わかったわ」
すぐに答える曹操だった。
「あの三姉妹が持ってるのね」
「そういうことだ。どうやらな」
「それでなのね」
曹操は彼の話から全てを察した。この辺りの鋭さは流石だった。
「あの三人があそこまでなったのは」
「そうだ。確かにあの三人の歌い手としての技量は凄い」
それは認める。しかしそれ以上のものがあるとだ。華陀は話すのだった。
「しかしそれだけであそこまでなるのはだ」
「流石にないわね」
「そうだ。やはりそこにはあの書の存在がある」
「あの書はそこまでの力があるのね」
「それが問題なのだ。あれは人が持つには力が大き過ぎる」
「そうなのよね」
「本当にね」
ここでいきなりあの二人の怪物が出て来た。何処からともなく。
「だからあの書は何としてもね」
「封印しないといけないのよ」
こう言ってだ。怪物達は姿を消した。一瞬のうちにだ。
だが曹操達はその姿を見ていた。そのうえで真剣な顔で華陀に問うた。

「何や今のは」
「前に見たような気がするが」
「強制的に記憶から消したような気がするわね」
曹操達は無意識のうちにそうしていたのだ。何はともあれ彼女達の前から怪物達は姿を消していた。何処に消えたのかは誰にもわからない。
何はともあれだった。彼等が消えてだ。華陀はまた曹操に話した。
「それでなんだが」
「ええ。それで？」
「どうやら三姉妹に対して歌で対するようだな」
「ええ、そうよ」
その通りだと答える曹操だった。
「ちょっとした経緯からね。そうなったのよ」
「それが一番いい」
華陀は曹操の話を聞き終えてこう述べた。
「歌には歌だ。剣や弓では駄目だ」
「そうだったのね。正解だったのね」
「そうだ。ただ貴殿もだ」
「私も？」
「歌を歌えたと思うのだが」
曹操のそのことを話すのだった。
「違うか、それは」
「それを言うと貴方もでしょ？」
曹操は華陀の言葉に目をしばたかせながら返した。
「歌えるでしょ」
「私達もよ」
「ちゃんと歌えるわよ」
ここでまた出て来たあの二人だった。
「乙女の歌をね」
「歌えるわよ」

こう言ってまた姿を消す。曹操はまたこの話をする。
「人間じゃないのが見えた気がするわね」
「いや、あの二人は人間だ」
華陀だけが主張できることだった。まさに彼だけができることだった。
「それは俺が保障するぞ」
「ううん、何かこのおっちゃんかなり」
「大物だな」
李典と楽進はその華陀の器を認めた。
「やっぱ医者王はな」
「何かが違うか」
「うむ、それでだが」
彼等の言葉をよそにだ。さらに話す華陀だった。
「あの書はかなりの力がある」
「それに対抗するにはなのね」
「そうだ。だからこれを持って来た」
華陀は懐から何かを出して来た。それは。
赤と青、それに紫のだ。小さな宝玉だった。それを曹操に差し出すのだった。
「宝貝だ」
「宝貝ね」
「これで三人の歌の力を強めるんだ」
「成程ね。それならね」
「まだ色々と必要だがな」
「ううん、歌は私が作るわ」
曹操は歌の話に入った。
「ちょっと。後は劉備達と話してみるわ」
「ああ、劉備殿か」
「知ってるのね」
「ああ、旅の途中で会った」

ここでその縁を話すのだった。
「いい御仁だな」
「そうね。いい娘達よ」
そんな話をしてだ。華陀は曹操に案内されて劉備達の前に出た。
そのうえで天幕の中でだ。彼女達とも話をするのだった。
「あれっ、じゃあ首は大丈夫だったんですか？」
「何とかな」
こう劉備に話す華陀だった。劉備と曹操の主だった臣下達も揃っている。
「いや、あの時は殺されるところだった」
「全く。あの時のことは」
「何故か思い出せないけれど」
曹仁と曹洪が話す。

# 第六十話　楽進、辛い料理を作るのことその三

「怪物が急に出て来た様な」
「そんなことがあったわね」
「そうだったか？」
華陀は二人にも平然として返す。
「まあとにかくだ。大事なのはあの書のことだ」
「天下泰平の書なのだ？」
張飛が名前を間違えて言った。
「何か凄い書みたいなのだ」
「凄いなんてものじゃない」
こう張飛に話す。
「あの書があれば天下を左右することもできる」
「えっ、そんなに凄いのかよ」
それを聞いた馬超が思わず声をあげた。
「その書って」
「だからだ。俺もあの書の力を封じておきたいのだ」
「それでその書はあの三姉妹が持っているね」
黄忠が話す。
「そうなのね」
「そうだ。だから歌には歌で対して」
それからだとだ。華陀は話す。
「あの書の力を一時抑えてその間にだ」
「華陀さんが書の力を完全に封じられるんですね」
「そうするつもりだ。それでいいか」
「はい、いいと思います」
「それで」
孔明と鳳統が華陀の案に賛成の言葉を述べた。
「ただ。問題は」

「あの三姉妹の力は尋常なものではありません」
このことがだ。問題だというのだ。
「袁術さん達が勝たれればいいですが」
「三姉妹に」
「あの三人の歌もかなりのものだけれど」
今言ったのは荀？だった。
「けれど。それでもね」
「万全ではない」
「互角といったところか」
夏侯姉妹は双方の力を冷静に見て述べた。
「確実に勝つ為にはだ」
「まだ足りないな」
「あっ、それなら」
ここでだ。劉備はふとした感じでこう話した。
「テリーさん達がいますよ」
「テリー？あの異界から来た面々ね」
「あの人達楽器の演奏ができますから」
こう曹操に話すのだった。
「だからあの人達も加えて」
「そうね。それじゃあね」
それに頷く曹操だった。劉備はその曹操にさらに話した。
「後はですね」
「後は？」
「それぞれの楽器を決めましょう」
「ああ、俺も楽器できるからな」
草薙がここで言った。彼等もいるのだ。
「俺はギターだ」
「その俺はドラムできるからな」
草薙に続いてテリーが述べた。
「後は他には」

「アテナも歌できたよな」
「はい、ですが私は」
アテナはいささか謙遜した様子で述べた。
「今回は袁術さん達がおられますから」
「歌わないか」
「そうするんだな」
「はい、そうさせてもらいます」
こう話すのだった。
「ですがギターとドラムだけだと」
「ベースにキーボードだな」
「その二つも必要だな」
草薙とテリーは話しながら難しい顔になっていた。
「ベースか」
「誰かいないか？」
二人がこんな話をしているとだった。アテナがここで言った。
「あっ、キーボードでしたら」
「誰かいるか？」
「それで」
「ナコルルちゃんがいますけれど」
彼女だというのである。

# 第六十話　楽進、辛い料理を作るのことその四

「あの娘が」
「ああ、ナコルルか」
「あいつ楽器もできたのか」
「この前私がキーボード触っていたらそこに来て」
そうしてだというのだ。
「してみたいっていうんで」
「させてみたんだな」
「そうしたのか」
「はい、上手でしたよ」
ナコルルの意外な素養の一つだった。彼女はそうしたこともできたのだ。
「ですからここに呼びますか？」
「そうね。それじゃあ」
劉備が応えてだった。実際に文を書こうとする。
しかし天幕にだ。ナコルルが出て来たのだった。
「呼びましたか？」
「おいおい、いきなり来たな」
「幽州から徐州までかなりの距離があるが」
馬超と趙雲が思わず突っ込みを入れた。
「瞬時かよ」
「どうして来たのだ」
「はい、ママハハを掴んで」
そうして来たというのである。
「それでここまで来ました」
「あの、それでも一瞬は」
「流石にないです」
孔明と鳳統は常識から話した。

「どういう現象なんでしょうか」
「これって」
「しかもキーボードとかベースって」
馬岱はそのことに首を捻っていた。
「私達の世界にそんな楽器あったのね」
「ああ、俺達が持って来たんだ」
「向こうの世界からな」
草薙とテリーがまた話す。
「まあ気がついたら持ってたっていうか」
「そんな感じだけれどな」
「俺作詞できるぜ」
草薙がここでさらにこのことも話した。
「だから歌詞の方は任せておいてくれ」
「あら、そうなの」
曹操がその話を聞いてだ。少し目をしばたかせて述べた。
「じゃあ私は作曲に専念できるわね」
「そやな。俺は応援に専念してや」
ケンスウもいるのだった。
「何か楽しいことになってきたな」
「いえ、まだあるわ」
ところがだった。ここで一言加える曹操だった。
「そのベースがまだよ」
「ベースか」
「それだけはないな」
「どないしよか」
ケンスウを含めて三人で話す。
「誰かいるか？」
「ベースできる奴」
「俺は応援だけしかできんし」
「御主戦い以外には応援しかできぬのか？」

「黙って見ていればそうにしか思えないが」
夏侯姉妹がそのケンスウに問う。
「楽器はできないのか」
「それは」
「ああ、俺そういうのあかんのや」
実際にそうだとだ。平気な顔で話すケンスウだった。
「応援やったら一流やけどな」
「とにかくベースだな」
「誰かいないか」
「ベース？」
ここで言ったのは紀霊だった。袁術達が歌や舞に打ち合わせでいないのでだ。彼女が今は袁術側の代表になっているのだった。
その彼女がだ。ここでこう言うのだった。
「それはあの。琵琶に似た楽器ですね」
「ああ、まあ似てるな」
草薙がその通りだと答えた。
「それ使える奴。誰かいるのか？」
「それを持っている方なら先程陣の外を見回っている時に見かけましたけれど」
こう一同に話すのだった。

# 第六十話　楽進、辛い料理を作るのことその五

「赤い前が異常に長い髪で鋭い目の若い男の人が」
「んっ？赤い髪！？」
それを聞いてだ。草薙の顔がすぐに顰められた。
「そいつはまさか」
「御存知ですか？その人のこと」
「ああ、ひょっとしたらな」
こう前置きしてから答える彼だった。
「八神か。奴もここに来ていたのか」
「その人御呼びしますか？」
「いや、どうするべきかな」
草薙は真剣な顔でこう紀霊に答えた。
「あいつか」
「本当に知り合いみたいね」
曹操が草薙のその顔を見てそのことを見抜いた。
「貴方とその八神という人物は」
「ああ、そうだ」
その通りだとだ。その顔で答える草薙だった。
「正直なところな。因縁がある相手だ」
「因縁ね」
「俺達の家は何百年も前から殺し合ってきた」
その関係を話すのだった。
「そういう相手なんだ」
「宿敵ってことね」
「そうなるな」
そのことをだ。草薙は認めるしかなかった。
「あいつがか。本当に因果な話だな」
「しかしだ」

「そのベースを演奏できるのはだ」
関羽と趙雲が言う。
「その者しかいないのだな」
「ここにいる者では」
「色々と問題のある奴だ」
草薙はその彼のことをさらに話した。
「俺の命も常に狙っているしな」
「何か凄い物騒な人なんですね」
「そうみたいだね」
典韋と許緒も言う。
「草薙さんも大変ですね」
「そんなのにいつも狙われてるなんて」
「けれどその人がですか」
「一番ベースが上手なんだ」
「そのあいつがいるなら」
草薙はまた話す。
「ここは力を借りるのが一番なんだがな」
「じゃあ草薙さん死ぬな」
程?の頭の上の人形がこんなことを言った。
「いい人なのに残念だな」
「これ、そんなことを言ってはいけません」
程?がその人形を叱る。
「せめて殺し合うと言っておきなさい」
「おっと、俺としたことがこれは失言だったな」
「そもそも草薙さんの強さだと死なないのでは?」
「どっちも死ぬってことだよ」
「成程」
「おい、待てよ」
草薙が一応二人ということになっている彼女達に突っ込みを入れた。

「さらっと凄いこと言うな、あんたも」
「そうでしょうか」
「ああ。まあとにかくな」
「とにかく？」
「俺とその八神はそれこそ数百年の因縁がある相手なんだよ」
草薙は程？にもこのことを話した。
「そういう相手と一緒だったらそれこそな」
「修羅場になると」
「これまで何度も闘ってきた」
草薙のその顔が鋭いものになる。
「けれどそれでもな。決着はついていないんだ」
「実力伯仲ですね」
「そうだな。そうした相手なんだ」
「ではここは」
程？はここまで聞いたうえでこう草薙に話した。

# 第六十話　楽進、辛い料理を作るのことその六

「八神さんとは会われない方がいいですね」
「いや、けれどベースがな」
「そこまで因縁のある方ですと間違いなく修羅場になります」
程?の指摘は冷静なものだった。
「下手をすれば演奏どころではありません」
「そうね。風の言う通りね」
曹操も彼女のその言葉に同意して頷く。
「殺し合いしながら音楽なんてできる筈がないわ」
「じゃあベースは抜きか?」
「そうなるのだ?」
馬超と馬岱は眉を顰めさせて述べた。
「残念だけれどな」
「演奏できるのだけで」
「別にそれでもいけるわよね」
曹操は草薙達にこのことを確認した。
「それで」
「不十分だけれどな」
「ベースがないとな」
「どうしてもです」
草薙だけでなくテリーとナコルルも話す。
「けれどそう言うのならな」
「やっぱりここは」
「ベース抜きで」
「安心しろ」
しかしだった。ここで、だった。
その赤い髪の男が天幕の中に来た。徐晃が案内してきたのだった。
「俺は今は貴様とは闘わない」

「八神、来たのかよ」
草薙はその彼に顔を向ける。警戒する顔になっている。
「手前もまた」
「久しいな、京」
八神もだ。険しい顔で草薙に言葉を返す。
「貴様もこの世界に来ているのだな」
「そうだな。ここでもな」
「それでだ」
八神からの言葉だった。
「俺の今の言葉だがな」
「俺とは闘わないっていうんだな」
「そうだ。少なくとも俺は嘘を言う趣味はない」
それは確かだというのである。
「この世界には御前より先に俺に借りのある奴がいる」
「そいつ等を倒してからっていうんだな」
「そうだ。だから今は貴様とは闘わない」
こう草薙に話す。
「それは言っておこう」
「それはわかった」
草薙もだ。八神のその言葉を受けて述べた。
「手前は少なくとも嘘は言わないからな」
「そういうことだ」
「それでだ」
ここまで話してだ。八神に対してあらためて言うのだった。
「何でここに来たんだ」
「そのことだな」
「そうだ。俺とやり合うつもりがないならどうして来たんだ?」
二人の間には緊迫した空気が漂っている。それは誰が見てもわかることだった。見ている者達もだ。緊張した面持ちでことの成り行きを見守る。

その中で徐晃がだ。こう曹操に話すのだった。
「何でも用があるとのことで」
「それでここまで案内したのね」
「はい、そうです」
「それはいいわ」
曹操は徐晃のその判断はいいとした。しかしこうも言った。
「けれどね」
「けれど？」
「あの八神って男」
その彼を見ながらだ。あらためて話すのだった。
「かなり危険な男ね」
「それは私も」
感じていたというのだ。徐晃も彼を見ながら警戒する顔になっている。
「感じました」
「しかも強いわね」
「そうですね。それもかなり」
「草薙と同じ位ね」
曹操はその強さの域も見抜いていた。草薙と同じ位だというのだ。

# 第六十話　楽進、辛い料理を作るのことその七

「本当にお互いに闘えばね」
「どちらもですね」
「死ぬわ。確実にね」
「けれど今は」
「ええ。草薙と闘わないって言ったわね」
曹操は八神のその言葉について言及した。
「確かにね」
「では今は」
「あの男尋常な危険さではないわ」
そのことはだ。曹操は嫌になる程わかった。流石に彼女の目はそれだけのものを見抜いていた。
「けれどね」
「嘘はですか」
「それは言わないわ。絶対にね」
「じゃあ言葉は」
「嘘を言わないっていうのは信じられるわ」
それはだというのだ。
「ただ。話が終わればいきなり、ってのはあるわね」
「それではやはり」
「信用できませんか」
「あの男は野獣ね」
夏侯姉妹への返答だった。
「牙と爪を剥き出しにしたね」
「若し華琳様に何かをすれば」
「その時は」
二人は既に心に剣を持っていた。曹操を護る為にだ。
「我等がいます」

「ですから御安心を」
「ええ、私もその時はね」
曹操もだ。既にその手に鎌を持っている。八神のその危険さを感じ取りながら。
「闘うわ」
「しかし今はですか」
「向かって来る危険はありませんか」
「とりあえずはね。じゃあ」
あらためて草薙にだ。声をかけたのだった。
「草薙、それではだけれど」
「あんたはいいっていうんだな」
「ええ、私はいいわ」
微笑んでだ。こう草薙に述べた。
「楽器が揃うのならね」
「そうか。じゃあ劉備さんは？」
「姉上には指一本触れさせぬ」
「その赤い髪の奴」
関羽と張飛が劉備の前に立っていた。彼女達も八神がどれだけ危険な男か察していた。だからこそ警戒の念を露わにしているのだ。
「いいな、そこから動くな」
「動いたら承知しないの」
「この男、野獣だ」
「ああ、こんな危険な奴はそうはいないな」
趙雲と馬超も槍を構えている。
「一瞬でも油断すればな」
「あたし達もやられちまうな」
「剣を抜いたままで持っているような」
黄忠も弓を携えて厳しい顔になっている。
「そうした感じね」
「俺がそこののろそうなのや小さいのを手にかけると思っているの

か」
　八神はその鋭い目で彼女達を見ながら述べた。
「安心しろ。それはない」
「ないっていうの？」
「そうだ。俺は今は誰ともつるむことはしない」
　こう馬岱に答える。
「そしてだ」
「そして？」
「この男よりもまずだ。俺が礼をしなくてはならない相手もいる」
　今度は草薙を見ながらの言葉だった。
「貴様等が何もしない限り俺からは何もしない」
「その言葉、信じろというのか」
「それだけ殺気を撒き散らしておいてなのだ」
「俺は暴力は嫌いだ」
　また関羽と張飛に話した。
「殺すことはするがそれは必要な時だけだ」
「人を殺すことは厭わない」
「暴力は嫌いでも」
　孔明と鳳統は何とか踏み止まっていた。八神のその殺気を感じてもだ。
　そしてそのうえでだ。彼女達もこう話すのだった。
「そう言うんですね」
「貴方は」
「そういうことだ。厭いはしないが自分から進んではしない」
　草薙を見てだ。また話すのだった。
「こいつは殺すがな、何時か必ず」
「八神はそういう奴だ」
　草薙も周囲に八神のそうした性格を話してきた。
「確かに危ない奴だがな」
「そこまで危ない奴はいないのだ」

張飛にしてもはじめて見る程であるのだ。

# 第六十話　楽進、辛い料理を作るのことその八

「本当に何時何をしてくるかわからないのだ」
「否定できないけれどな。とにかく今は大丈夫だ」
「ああ、あとな」
ここでテリーが八神について一言話した。
「こいつが闘うのは自分と同じ位強い奴だけだ」
「何だよ。じゃあ暴力が嫌いってのは」
「そうさ。弱い奴はいたぶったりしないんだよ」
テリーはこう馬超にも話した。
「卑怯なところはないから安心してくれ」
「そうなのかよ」
「とにかくだ。音楽だな」
八神からだ。言ってきたのだった。
「それなら俺もだ」
「協力してくれるんですね」
「そうさせてもらう」
劉備に対しても答えた。
「それではな」
「有り難うございます」
劉備は八神のその言葉を受けて笑顔で礼を述べた。だが八神は劉備のその笑顔を見てだ。いささかいぶかしみながらこう言った。
「礼か」
「どうかしたんですか？」
「いや、俺は礼を言われたことが殆どない」
「そうなんですか」
「その俺が礼を言われるとはな」
そのことにだ。違和感を見せているのであった。
「妙な感じだな」

「そうなんですか」
「だがいい。それではだ」
劉備の礼を受けてだ。それからだった。
彼もまたベースを持つのだった。それを聞いてだ。
それまで陣中で袁術達が乗る車を作っている李典がだ。楽進からその話を聞いてだ。笑顔でこう言った。
「よかったやないか」
「よかったのか」
「そや。これで楽器は全部揃うたんやな」
「それはそうだが」
「ほなええやん。これで話が進むで」
「しかし。あの八神という男はだ」
楽進もだ。警戒する顔でこう話した。
「あまりにも危険だ」
「そやから気をつけろっていうんやな」
「そう思うがな。私も」
「まあそやろな」
李典もだ。それは否定しなかった。そして彼についてこう話すのだった。
「あの兄ちゃんな」
「うむ」
「相当やばいで。強いだけやなくて」
「性格もだな」
「その性格が問題や。あの兄ちゃんは人間の世界の外にいる」
そうした人間だというのである。
「本能で闘う。そんな人やな」
「本能か。そうだな」
「そんなんと闘ったら洒落にならんで」
「御前も私もだな」
「ほなあの兄ちゃんに勝てるか？」

李典は真剣な顔で楽進に問うた。
「勝てても生きられるか？あの兄ちゃんとやり合って」
「それは」
「そやろ。死ぬの覚悟せなあかんで」
そこまでの相手だというのだ。八神はだ。
「そういうこっちゃ。あの兄ちゃんはほんまにやばいお人や」
「出来るなら相手に回さないことか」
「敵におったら。覚悟するこっちゃな」
「そういうことになるか」
「そういうこっちゃ。まあ何はともあれ」
李典はだ。明るい声で話した。
「楽器も揃ったし。うちも車作れるし」
「いよいよだな」
「この乱、終わらせるで」
「それで真桜」
楽進は李典に対してあらためて言ってきた。
「もうお昼だが」
「ああ、もうそんな時間かいな」
「一緒に食べるか？作るぞ」
「あんたがかいな」
「そういうだ。だから一緒にどうだ」
微笑んでだ。李典にこう言って誘うのだった。

# 第六十話　楽進、辛い料理を作るのことその九

「昼食を」
「そやな。ほな一緒にな」
「食べるとしよう」
「他の人も呼ぶか？」
李典はこんなことも言った。
「飯は大勢で食べる方が美味しいしな」
「そうだな。それではな」
「とりあえず呼べるだけ呼ぶで」
「そうするとしよう」
こう話してだった。楽進が料理にかかり李典が人を呼ぶ。そうして集められたのは。
「えっ、楽進の料理？」
「っていうとどんなのだ？」
「どんな料理なんだ？」
「中華料理だよな、やっぱり」
こう言ってだ。寄ってきたのは。
「何かおもろい顔触れやな」
「あっ、そうか？」
「別にそうではないと思うが」
「そうだ。たまたまだ」
「そう思いますが」
ガルフォードに王虎、それに秦兄弟だった。それにだ。
「あんたもやねんな」
「うむ、おなごの料理とはよいものよ」
狂死郎も来ていたのだった。相変わらず派手である。
「いや、有り難たや」
「五人やな。ほな早速食べるか」

「それでどんな料理なんだ？」
ガルフォードがそれを尋ねた。
「楽進が作るんだよな」
「ああ、その通りじゃ」
「じゃああれだよな」
ガルフォードは彼女が作ると聞いてだ。すぐにこう述べた。
「辛いんだよな」
「あれか。麻婆豆腐か」
「私の好物です」
秦兄弟はそれぞれこう言った。
「俺もよく作るな」
「あれはいいものです」
「ふむ、豆腐は身体にもいい」
王虎は豆腐について述べた。
「では有り難く頂くとしよう」
「そういうこっちゃ。ほな皆で食べるか」
「あいや、待たれよ」
ここで狂死郎が一行を止めてきた。
「楽進殿の料理ならば」
「どないせいっちゅうねん、一体」
「これだけで食するのはいささか勿体無い」
こう言うのであった。
「より多くの者にだ。味わってもらうべきだ」
「そやな。言われてみればそうやな」
李典も狂死郎のその言葉に納得して頷いた。
「大勢で食う方が美味いしな」
「そうであろう。ではより多くの者を呼ぶとしよう」
「ほな。もっと呼ぶか」
こうして呼ばれたのはだ。フランコやホンフゥといった面々だった。他には夏侯姉妹もいる。

「ううむ、この顔触れで食うのも」
「面白いな」
姉妹は集まっている面々を見ながら微笑んでいる。
「しかし。狂死郎は名前に反して」
「いつも気配りをしてくれて有り難いな」
「いや、これこそ日本男子の心遣い」
それだとだ。狂死郎は見得を切りながら述べた。
「わしとてその端くれよ」
「ふむ。傾きだったな」
夏侯淵がそれだと述べた。

# 第六十話　楽進、辛い料理を作るのことその十

「貴殿のそれは」
「左様。歌舞伎よ」
「中々面白いものだな」
「その真髄はかなり果てにあるにしても」
いささか芝居がかった動きと共にだ。狂死郎で話す。
「目指しておる」
「目指しているのだな」
「そうじゃ。それが我が道なり」
姉の方に対しても述べたのだった。
「歌舞伎の道よ」
「歌舞伎か。面白そうだな」
「今度演じるが見えるか？」
「うむ、それではな」
「喜んでそうさせてもらおう」
姉妹で応える。そうした話をしているうちにであった。
楽進がだ。巨大な鉄の鍋を持って一行の前に出て来たのだった。
「皆、待たせたな」
「いや、今来たばかりだからな」
「待ってはおらん」
ガルフォードと王虎がこう彼女に述べた。
「それよりもだよ」
「御主も早く座るのだ」
二人が言うのはこうしたことだった。
「それでな。皆でな」
「楽しく食おうぞ」
「そうか。それではな」
いつもの服の上に赤い三角布を被り白いエプロンを着けている。

それが今の楽進の格好だった。
その姿を見てだ。秦兄弟がこんなことを言った。
「へえ、楽進さんもな」
「意外と家庭的なところがあるのですね」
「べ、別に私は」
そう言われるとだ。顔を赤くさせる楽進だった。
「そうしたことは。別に」
「こんなこと言ったら照れるところがな」
「さらにいいのです」
まだ言うこの兄弟だった。
「いや、強くて可愛いってな」
「しかも料理上手とは」
「褒めても何もでないのだが」
その二人にだ。困った顔で返す彼女だった。
「それでも言うのか」
「何度でも言うぞ」
「事実ですから」
まだ言う兄弟だった。
「俺も料理には自信があるが」
「兄さんのそれに比肩しますね」
「ああ、そういえばあんた」
李典が秦崇雷に対して述べた。
「料理の腕めっちゃ凄かったな」
「そちらには自信があるからな」
「何かうちの陣営って料理上手多いな」
「例外もいますがね」
秦崇秀は何気に夏侯惇を見る。
「まあ誰とは言いませんが」
「どうしてそこで私を見る」
「いえ、別に」

「御主、前から思っていたがだ」
夏侯惇は秦崇秀に言った。その料理を前にしたうえでだ。
「性格が悪いぞ」
「いや、口ではないのか？」
夏侯淵はそれではないかというのだった。
「この者の毒舌は。桂花よりも上だからな」
「あ奴も常に言い負かされるからな」
「あの方は詰めが甘いですから」
秦崇秀は微笑みながら荀？に話した。
「言い負かすのは簡単です」
「つうとこいつはや」
李典が彼の話を聞きながら呆れながら話した。
「桂花より性格が悪いんやな」
「性格か？」
「それなのか？」
ガルフォードと王虎はそのことには首を傾げさせた。

# 第六十話　楽進、辛い料理を作るのことその十一

「性格はそれ程な」
「悪くはないと思うがな」
「口は確かに悪いけれどな」
「それでも性格自体はな」
「崇秀は性格は悪くないぞ」
それは兄が証明した。
「特にな」
「そうか？」
「あまりそうは思えないがな」
夏侯姉妹はそうは思えずだ。こう言った。
「確かに私は料理はできないがだ」
「姉者は家事はな」
「いや、これでもそういうことは嫌いではないぞ」
「華琳様のことを思えばだからな」
「私とて女だ」
「それは確かだ」
「それはいいんじゃないのか？」
フランコもそれはいいとした。
「ただな。それでもな」
「それでもだというのか」
「あんたが料理が下手なのは事実だな」
それはだという彼だった。
「俺達じゃなければ食ってそれで死んでたぞ」
「そこまで言うのか」
「俺は嘘は言わないからな」
本当に嘘を言わないフランコだった。
「だからそれはな」

「ううん、私は言われるのも仕事なのか」
「姉者、それは諦めてくれ」
妹も今回はそれを否定できなかった。
「姉者は言いやすい相手だからな」
「だからだというのか」
「そうだ。しかしだ」
「しかし。今度は何だ」
「それが姉者のいいところだ」
微笑んでだ。姉に告げた。
「姉者のその言いやすさは親しみやすさでもあるのだ」
「ううむ、そうなのか」
「安心しろ。誰も姉者を嫌ってはいない」
それはないというのである。優しい笑顔でだ。
「むしろ好きだ」
「私は好かれているのか」
「そうだ。だからこそ言うのだ」
「はい、私も嫌いではありません」
ここでだった。秦崇秀も微笑みで話した。
「夏侯惇さんのことは」
「本当にそうか？」
「では毒舌を抜きにお話しましょうか」
「うむ、頼む」
「曹操さんに対してあくまで一途で」
まずはそれがいいというのである。
「それに純真で天真爛漫で」
「そういったところがいいというのだな」
「そうです。だからこそいいのです」
「褒められているのはわかるな」
それは夏侯惇本人にもわかった。実によくだ。
「ではいいとするか」

「はい、誰にも向き不向きがあります」
秦崇秀はだ。何処か邪な笑みになって述べた。今度はそうなっていた。
「夏侯惇さんはあくまで。脳筋であるべきなのです」
「それは毒舌だな」
「そう思われて結構です」
「全く。つまり私はあれか」
困ったような顔でだ。今共にいる仲間達に話した。
「女らしいことよりも。力仕事がいいのか」
「それはまあ。あれだな」
ここでガルフォードの言葉が濁った。
「あんたはいつも通りやってくれればいいからな」
「では女の仕事は」
「絶対にするべきじゃないな」
「はっきり言うな」
「けれどはっきり言わないとあんた怒るだろ」
「私は優柔不断やそういったことが嫌いだ」
本人もそれは否定しない。腕を組んで言い切る。

# 第六十話　楽進、辛い料理を作るのことその十二

「積極果断だ。それこそがいいのだ」
「竹を割った様にだな」
王虎はそれだというのだった。
「成程な」
「さて、それでなのだが」
楽進がここで述べる。
「冷めないうちにだ」
「ああ、そうだな」
フランコが笑顔で応えた。
「熱いうちに食べるか」
「それでこれはどういった料理なのだ」
狂死郎は怪訝な顔で楽進に問う。
「鶏肉に魚に野菜、それに豆腐が入っておるのう」
「唐辛子に山椒か？」
フランコは鍋から漂う香りからそこまで察した。
「この香りは」
「そうだ、私の好みの味にさせてもらった」
実際にそういったものを入れているとだ。楽進も話す。
「口に合うかどうかはわからないが」
「辛いのは事実よのう」
それはすぐにわかるという狂死郎だった。
「ふむ。それではその辛さを楽しむとしよう」
「そうだな。それではな」
夏侯淵も頷いてだった。こうして一同で楽進が作った鍋を食べ始めた。その味は。
「美味いな」
「はい」

まずは秦兄弟が言った。
「確かに辛いがな」
「非常にいい味です」
「楽進さん、やっぱりあんた料理上手いぞ」
「いい奥さんになりますね」
「お、奥さんか」
そう言われるとだ。楽進の顔が桜色に染まった。
「私はそんな」
「いや、これだけのもの作れるしな」
「その心根もいい」
ガルフォードと王虎も秦兄弟の言葉に頷く。
「絶対になれるさ」
「よい奥方になれる」
「いや、全くよ」
狂死郎も太鼓判を押す。
「貴殿を妻にできる者は。まことに」
どうかとだ。立ち上がって言った。
「果報者よのう」
見得を切っての言葉だった。そんなやり取りをしながらだ。一行は今は食事を楽しんでいた。楽進が作ったその辛い鍋をである。

第六十話　完

２０１１・２・８

# 第六十一話　袁術、歌で仕掛けるのことその一

第六十一話　袁術、歌で仕掛けるのこと

荀？はだ。この夜は真田小次郎達と共に飲んでいた。自分の天幕の中に彼女達を招いてだ。そのうえで飲みながら彼女の話を聞いていた。

「あんたも大変だったのね」

「そうでしょうか」

「御兄さんのこと、大切に思っていたのよね」

彼女の兄のことをだ。それを話すのだった。

「それで御兄さんの意志を継いで」

「けれどそれは」

「あんたが選んだ、それが凄いのよ」

荀？は真剣な顔で小次郎に述べる。

「私には。そこまではね」

「そうですか」

「あんた、何があっても生きなさい」

荀？はまた小次郎に告げた。

「それが御兄さんにとってもいいことだからね」

「だからですか」

「そうよ、あんたもね」

荀？は今度は鷲塚を見た。そこには覇王丸もいる。

「小次郎のこと知ってたのよね」

「無論」

鷲塚は真剣な面持ちでだ。その通りだと答えた。

「だからこそこうして真田殿と共にいる」

「あんたも。その一徹さはね」

「いいというのか」

「誠ね」
荀？の言葉はここでは一文字だった。
「あんたのその誠、それも凄いわよ」
「そうなのか」
「正直ね。私男嫌いなのよ」
自分のその嗜好をだ。荀？は露わにさせた。
「けれどね。あんた達はね」
「嫌いではない」
「そう言ってくれるんだな」
鷲塚だけでなく覇王丸も応えた。
「我等のことは」
「そうなんだな」
「そうよ。確かに褥を共にとかはないけれど」
あくまで男相手にはだ。それはないというのだ。
「けれど。その心を見てるとね」
「済まぬな」
「そう言ってくれるか」
「そうよ。覇王丸もよ」
今度は覇王丸への言葉だった。
「恋人のこと、本当は」
「ははは、それは言ってくれるなよ」
「そう言うのなら言わないわ」
荀？も微笑んで応える。
「あんたの言葉じゃね」
「しかし叔母上も」
荀攸もいた。彼女は叔母のその横顔を見ながら微笑んで話してきた。
「変わられましたね」
「変わったかしら」
「前は殿方は誰も近寄せませんでしたね」

「それはそうだけれど」
「けれど今は」
「だから。こうしてその心がわかったらね」
覇王丸たちを見ての言葉だった。
「どうしてもよ」
「それに頷きざるを得ないと」
「そうよ。私だって人の心がわからないわけじゃないのよ」
それを話すのだった。
「だからよ。そういうことなのよ」
「成程、そうでしたか」
「そうよ。ところでね」
「はい、ところで」
「私のことを叔母さん呼ばわりは止めなさい」
姪にだ。咎める顔で言った。
「私はまだ華の十代なのよ」
「一応十八歳以上ですよね」
「そうよ。だからね」
それでだというのである。
「叔母さん呼ばわりは止めなさい」
「はい、桂花お姉さん」
姪は叔母の言葉を受けて素直にこう述べた。

# 第六十一話　袁術、歌で仕掛けるのことその二

「こう呼ばせてもらいますね」
「ええ、そうしてよね」
「ううむ。しかしだ」
鷲塚はその二人を見ながらこう言ってきた。
「こう言っては何だか貴殿等は」
「んっ、どうしたの？」
「私達に何かありますか？」
「本当に叔母と姪なのか？」
怪訝な顔でだ。二人に問うのだった。
「逆ではないのか？」
「その前に血縁関係あるのか？」
覇王丸はここまで言った。
「義理の姪とかじゃないよな」
「それはないわよ」
「私達は本当に叔母と姪ですから」
「信じられねえなあ」
覇王丸は本気で言っていた。
「血縁関係っていうのはな」
「まあ昔からそう言われてるけれどね」
「それは」
その通りだという二人だった。そのことは否定できなかった。
「私の姉さん私よりかなり年上だったのよ」
「それで私と叔母上の歳が近いのです」
こう話すのだった。
「それでなのよ」
「歳も近いんですよ」
「っていうかだからな」

覇王丸は呆れながら話す。
「本当に血縁関係にあるのかって」
「私母親似なんです」
荀攸がこう話す。
「それでなんです」
「私は御婆様に似てるの」
叔母も話す。
「それでこうしてね」
「容姿が全然違うんです」
「それでか」
「成程な」
覇王丸と鷲塚もこれで納得した。そしてだ。
小次郎がだ。二人に対して述べた。
「それで御二人は」
「私達が？」
「あの、今度は何が」
「お酒好きなのですね。どちらも」
彼女が二人に言うのはこのことだった。
「荀？さんだけでなくて」
「私の一族ってそうなのよ」
「皆お酒好きなんです」
「新撰組でもそうでした」
小次郎は微笑んでこう述べた。
「よく飲みました」
「そうだったのね」
「元の世界でもでしたか」
「はい、京の都でよく飲みました」
「そうだったな。都の酒もよかったな」
「はい」
鷲塚にも答えるのだった。

「あの頃は。確かに殺伐としていましたが」
「酒も楽しんでいたな」
「そうでしたね」
そんな話をしていた。そのうえで酒を飲んでいたのだった。
その次の朝だ。袁術達はだ。今度は振り付けの話をしていた。
「そうじゃな。わらわが真ん中か」
「はい、それで私が左で」
「私が右ですね」
張勲と郭嘉が袁術と話している。
「それでいきましょう」
「その位置がいいと思います」
「はい、私もそれでいいと思います」
振り付けの相談役は于禁だった。彼女は笑顔で三人に話している。
「あとは踊りは」
「踊りは于禁の話通りでよいな」
「そうしましょう」
「それで」
三人もだ。彼女に任せるというのだった。
「こういうことは得意じゃ」
「何か自然に身に着きますよね」
「本当に」
三人は既に舞台の服になっている。そのうえでの話だった。

## 第六十一話　袁術、歌で仕掛けるのことその三

「それとじゃ。後は」
「車ができてからですね」
「それで相手の陣に入るんですね」
「それがいいと思いますの」
于禁は笑顔で三人に話す。
「真桜ちゃんが今作っていますし」
「ほな待っておいてや」
李典も出て来ている。それで五人で話している。
「もうすぐできるさかいな」
「じゃあいよいよなの」
「そうやな。ほんまやな」
李典は笑顔で于禁に応えた。
「何か色々あったけれどな」
「そうじゃな。何故か色々あったのじゃ」
袁術もこう話す。
「七乃は凛にちょっかいを出すし」
「ですから私と凛ちゃんはもう深い仲になってますから」
「あ、あのそれは」
その話になるとだ。郭嘉はその顔を真っ赤にさせる。
「私はそんな。七乃殿のことはお好きですが」
「そうじゃ。凛はわらわのものじゃ」
あくまでこう言う袁術だった。
「例え七乃であろうと渡さぬぞ」
「あらあら、美羽様私達の仲に妬いておられるんですか？」
「妬いてはおらぬわ。だから凛だけは渡さぬのじゃ」
余裕の表情の張勲に顔を突き出して主張するのだった。
「わらわと凛はじゃ。同じ褥でお休みする仲じゃぞ」

「けれどそれは私と美羽様も同じですよ」
「それでもじゃ。わらわと凛はじゃ」
「私と凛ちゃんもそうですよ」
三人の関係はさらに深く怪しいものになっていっていた。それを見てだ。
李典がだ。呆れながら言うのであった。
「この三人何処までいくんやろな」
「三人共生娘なの？」
「それは間違いないんやけれどな」
李典は首を傾げさせながら于禁に述べる。彼女の手は自分の腰の横にある。
「けれどこれは」６８
「もうあれやな」
「完璧百合なの」
「うち等ってそういう陣営やけれどな」
主の曹操自体がそうだからである。このことは天下の誰もが知っていることでもある。
「けど。この三人は」
「もう陣営の問題じゃないの」
「特に凛と袁術さんやな」
この三人がとりわけ問題だというのだった。
「何やろな。この関係は」
「もう夫婦みたいなの」
「そや。何でこうなったんやろな」
「ここまでいくとわからないの」
そんな話をしながらだ。振り付けもしていくのであった。
他の面々もそれぞれ作業をしていっている。その中でだ。
華陀がだ。曲を作っている曹操に話すのだった。二人は今天幕の中にいる。
「少しいいか」

「何かしら」
「あんた、今は大将軍についてるな」
「ええ、そうよ」
そのことにはそのまま答える曹操だった。
「他の牧達と同じよ、それは」
「それは天下を憂いてのことだな」
「ええ。大将軍にも問題がないわけじゃないけれど」
何進もだ。完璧ではないというのだ。
「けれどあの人は己の私腹ばかり肥やしたりしないから」
「天下のことも考えているな」
「そうよ。だから宦官達よりはずっとましよ」
「その宦官か」
「私の家は宦官の出だけれど」
自分でこのことも言う曹操だった。
「けれど。今の張譲達はね」
「帝の周りを固め私を欲しいままにしているな」
「あの連中は放っておけないわ」
琴を弾きながらだ。曹操は難しい顔になっていた。
「若し放っておけばね」
「天下万民が苦しむな」
「何とかしたいけれど」
今度はだ。顔を曇らせた曹操だった。

# 第六十一話　袁術、歌で仕掛けるのことその四

「中々難しいのよ」
「あの連中は狡猾だからな」
「それに帝を押さえられているわ」
これが辛いというのだ。
「だからね。迂闊にはね」
「手を出せないか」
「ええ、残念ながらね」
「しかしあの連中はだ」
華陀は腕を組んで真剣な顔になって述べる。
「天下にとっては病と同じだ」
「そうね。それも死に至るね」
「いや、そこまではいかない」
「軽いっていうの？」
「あの連中は言うならばできものだ」
それに過ぎないというのだ。
「取り除くことはだ。まだできる」
「随分と軽く見ていると思うけれど」
「死に至る病は他にある」
「他に？」
「そうだ。宦官も問題にならない位の病がある」
それがあるというのだ。こう曹操に話すのだった。
「俺は今それを探しているんだがな」
「じゃああの書がそれなの？」
「そうだな。そのうちの一つかもな」
「他にもあるのね」
「それが問題なんだ」
曹操に対して話す。考える顔でだ。

「どうも俺が考えているよりも深く暗いものがあるような気がする」
「随分深刻な話ね」
「そうだな。とにかく今はだ」
「とりあえずは三姉妹を何とかすることね」
「正直あの三人はただの女の子だ」
華陀は三姉妹についてはそう考えていた。何でもないというのだ。
「無欲じゃないが野心はない」
「天下をどうこうというのは、なのね」
「ああ。そういう考えは全くない」
「じゃああれなのね。自分達が売れればいいって思ってるのね」
「それで旅をして美味しいものを食べられればな」
「それじゃあ普通の女の子と変わりないじゃない」
「その通りだ。あの三人は放っておいて何ともない」
こう曹操に話すとだ。曹操も考える顔になって述べた。
「むしろあの歌は使えるわね」
「そう思うか」
「ええ。処罰するには惜しいわね」
曹操も三人の力は認めた。そして三人のその性格もだ。
「野心もないし。それならね」
「ただ。利用されやすいところはあるな」
「それは何とでもなるわ」
三人のそうした性格については特に気にしないという曹操だった。
「目付でも付ければね」
「それで済むか」
「ええ。まあこれからのことはそうして」
おおよそを決めた話だった。
「後はね」
「後はか」
「言葉だけでは駄目よ。実際に動かないとね」
こう華陀に話す。

「動いてことを為さないとね」
「そうか。でははじめるか」
「そう。はじめないと何にもならないわ」
よく言われることをだ。曹操も言葉にして出した。
「だからね。はじめるわ」
「わかった。それじゃあな」
「ええ。けれど」
曹操は華陀の顔をあらためて見た。そうしてそのうえでこう話した。
「貴方もまた」
「俺も？」
「何かと沢山のものを背負ってるみたいね」
「ははは、俺は医者だからな」
曹操は笑ってこう答えた。
「それは当然のことだ」
「医者だからなの」
「医術は仁術だ」
それだというのである。

# 第六十一話　袁術、歌で仕掛けるのことその五

「人を助けるものだからな」
「人の命を背負っているのね」
「それが医者だからな。背負っているさ」
「そういうことなのね」
「だから俺は戦う。病魔とな」
「天下の病魔ともね」
「そういうことだ。俺の背負っているものはそういうものだ」
笑顔でだ。曹操に話す。
「それじゃあ俺もな」
「ええ。行ってらっしゃい」
曹操は天幕を出る華陀を笑顔で見送った。そうしてだった。
車もだ。遂に完成したのだった。李典が皆に話す。
「遂に完成やで！」
「できたか」
「ああ、できたで」
こう楽進にも答える。
「ほな乗ってや。それで出発や」
「動かすのは誰なんだ？」
馬超が李典にこのことを尋ねた。
「それで」
「勿論うちや」
李典は満面の笑顔で馬超に答えた。
「それは決まっとるやろ」
「作った人間だからかよ」
「そや。ほな皆乗ってや」
「わかりました」
ナコルルが最初に応えた。

「では楽器を持って」
「ああ、そうだな」
「それじゃあな」
草薙とテリーも応える。
「それで行くか」
「すぐにな」
こう話してだった。彼等はまず楽器を乗せた。
演奏する人間とだ。三人も乗った。
「では行くぞ」
「はい、美羽様」
「それでは」
袁術に二人も続く。この三人も乗りだ。
他にはだ。劉備達もであった。
「私もなの」
「雛里ちゃんも歌えるっていうから」
「けど私」
鳳統は俯きながら孔明に答える。この二人も同行するのだった。
「歌はあまり」
「自信ないの？」
「いつも微妙に外してるって言われるから」
だから自信がないというのである。
「それでもいいの？」
「私もあまり自信はないけれど」
彼女もだった。それはだというのだ。
「けれどそれでもね」
「一緒になの」
「この策が失敗したら」
どうなるか。孔明はこのことも話した。
「すぐに戦になるから」
「戦になれば」

「うん、沢山の人が死ぬから」
「そうよね」
二人はこの話になると顔を曇らせた。二人は確かに軍師だが決して好戦的ではないのだ。むしろ戦いは嫌いと言っていい程だ。だからだ。二人はその顔を曇らせて話すのだった。
「歌で済むなら」
「それに越したことはないよね」
「いざという時はね」
「私達も歌うのね」
その為の二人だった。そしてだ。
趙雲はだ。仮面を着けてだ。車の上にいた。馬超が彼女に突っ込みを入れた。
「おい星、何やってんだ」
「私は星ではない」
堂々と立ちながら馬超に返す。

# 第六十一話　袁術、歌で仕掛けるのことその六

「私は華蝶仮面だ」
「あくまでそう言い張るんだな」
「だから私はだ」
「わかった。それで何でそこにいるんだ？」
「うむ、今は大勝負だからな」
「それでそこにいるってのかよ」
「いざという時は私も出る」
こう話す彼女だった。
「無論そこの茶色の髪の少女」
「ひょっとしなくてもあたしのことか？」
「そうだ。御主も出るのだ」
こう話すのだった。
「いいな、心構えはしておくことだ」
「歌えってのかよ」
「左様。御主も歌えるな」
「歌か。まあ歌うことはあるけれどな」
「私はサド、御主はマゾだ」
「それ何なんだよ」
「とりあえずだ。用意はしておけ」
こんな話をしてだった。趙雲と馬超も乗る。そしてだ。
李典の横にいる黄忠がだ。微笑んで彼女に話していた。
「何か面白くなりそうね」
「ほんまやな。賑やかになりそうや」
「ええ。歌だけではなくね」
「成功させなあかん策やけれど」
それを踏まえてもだというのだった。
「それでも。何かな」

「わくわくしてくるわね」
「そうやねんな。うちこういうの大好きやねん」
李典は満面の笑みでこう言った。
「賑やかで楽しいのはな」
「そうね。私も今はね」
「うきうきしてるんか」
「そうなのよ。楽しみだわ」
黄忠もにこにことしている。乗る場所には于禁と楽進がいる。楽進は難しい顔になってだ。そのうえで于禁に対して尋ねるのだった。
「関羽殿も乗られると聞いたが」
「けれどまだなの」
「まだ物見から帰られぬか」
「春蘭さん達と一緒だったけれど」
「ううむ、御二人と共だと速いと思うのだが」
「もうすぐ出発なの。どうするの？」
「そうだな。来られぬのなら」
楽進は腕を組み難しい顔になって述べた。
「出発するしかあるまい」
「仕方ないの？」
「残念だがな」
こんな話をする二人だった。だがその二人に共に乗り場にいた張飛が言う。
「愛紗なら大丈夫なのだ」
「間に合われるか」
「そうなの」
「そうなのだ。愛紗は来ると言ったら絶対に来るのだ」
関羽への絶対の信頼がここでも出ていた。
「だから安心して待っていればいいのだ」
「わかった。それではだ」
「待つの」

二人は張飛の真剣な強い言葉に頷いた。そのうえで関羽を待つことにした。するとすぐにだった。その関羽が来たのだった。
「済まない、遅れた」
「いえ、時間通りです」
「問題ないの」
二人は傍らにあった水時計を見た。確かに時間丁度だった。
「それでは参りましょう」
「今から」
「うむ、それではな」
「けれどどうしてなのだ？」
張飛がその関羽に尋ねた。

## 第六十一話　袁術、歌で仕掛けるのことその七

「愛紗はいつも五分前行動なのだ。けれど今は時間きっちりだったのだ」
「うむ、実はな」
「実は？」
「姉者が落ち込んでいてな」
夏侯淵も来た。彼女が一同に話すのだった。
「そのせいで馬の進みが今一つだったのだ」
「春蘭殿が」
「そうだったの」
「その通りだ。歌えなくて気落ちしていてな」
夏侯淵はこのことも話した。
「そのせいでなのだ」
「春蘭さんって歌えたの？」
「姉者はあれで歌が好きだ」
夏侯淵が話す意外な事実だった。
「それも乙女心を歌うものが大好きなのだ」
「何か意外にも程があるのだ」
張飛は夏侯淵のその話を聞いて実際に眉を顰めさせている。
「あいつが乙女なんて考えもしなかったのだ」
「姉者はあれで少女趣味なところがあるのだ」
さらに話される衝撃の事実だった。
「だからだ。歌もだ」
「とにかくそれでなのですか」
「少し遅かったの」
「その通りだ。姉者のことは許してくれ」
「いや、それはいいのですが」
楽進はそれはいいとした。しかしであった。

「ですが」
「ですが？」
「春蘭殿は大丈夫なのですか？」
彼女が心配するのはこのことだった。
「見たところ」
「ううむ、姉者はあれで落ち込みやすいからな」
見ればだ。当人は話す一行から少し離れた場所で落ち込んでいた。
すっかり小さくなってその場にしゃがみ込んでしまっている。
それを見ながらだ。一行は話すのだった。
「後でな。慰めが必要だな」
「そうですか。やはり」
「今夜の伽は姉者に譲ろう」
具体的にはそうするというのである。
「致し方あるまい」
「それは仕方ないことなのだ？」
「本来は私が今夜の華琳様のお相手だったのだが」
夏侯淵は顔には出していなかったが声には僅かに出していた。
「だがそれもだ」
「そこでそんな話になるのが本当に曹操軍なのだ」
そんなことを言いながらだ。張飛は関羽に話した。そうしてそのうえでだった。一行は車に乗った。そうして黄巾軍の陣に向かった。
彼等は穏やかなものだった。特に騒いでいる様子もない。
「また歌ってくれるんだよな」
「ああ、午後もな」
「やってくれるってさ」
呑気にだ。こんな話をしている程だ。
「舞台開いてな」
「歌ってくれるからな」
「じゃあ今は待つか」
「そうするか」

こんな話をしているだけだった。彼等は平和であった。
見れば武器も持っていない者も多い。鎧もだ。そうした呑気な状況だった。
その彼等はだ。それぞれ三姉妹のグッズや飴を持っている。どう見ても戦う様な状況はない。それは車の上に立ったままの趙雲にもわかった。
「ふむ、これは」
「どうなんだ?星じゃなかった華蝶仮面」
「相手に戦意はない」
こう下の物見の場所にいる馬超に話す。車は赤と白の派手なものだ。四角くだ。かなりの大きさである。
「只の集まりだ」
「何だよ、軍勢とかじゃないのか」
「そんな感じはないな」
「じゃあやっぱり戦は」
「いや、剣や槍を持っている者もいる」
趙雲はこのことは油断せずに述べた。
「それはだ」
「用心しろってんだな」
「その通りだ。いざという時のことはな」
「ああ、わかったよ」
馬超も華蝶仮面の言葉に頷いた。とりあえず相手に戦意が見られないことはわかった。そのことはすぐに劉備達にも伝えられた。

# 第六十一話　袁術、歌で仕掛けるのことその八

「そう。それだったら」
「予定通りいけますね」
「このまま」
劉備に孔明と鳳統が答える。
「それじゃあそろそろ車を停めて」
「それで」
「わかったで」
李典が軍師達の言葉に応える。
「ほなそれやったらな」
「はい、御願いします」
「それじゃあ」
こうしてだった。黄巾軍の真ん中でだ。車が停まったのだった。
「んっ、何だあの車」
「随分派手な車だな」
「だよな。天和ちゃん達の舞台か？」
「そうじゃないのか？」
彼等はただそう考えただけだった。怪しんでもいない。それを見てだ。
黄忠が満足した顔で話した。
「それじゃあ今からね」
「そうですね。それじゃあ」
「今からなの」
楽進と于禁が応える。そうしてだった。
すぐに劉備達が出てだ。黄巾軍の面々に青い飴やそうしたものを渡していく。
「飴？」
「黄色じゃないよな」

「ああ、何なんだ？」
「青い飴って」
彼等は受け取りながら怪訝な顔になる。三姉妹の飴は黄色だからだ。橙と言ってもいい。しかしその飴は青だった。そのことにまず戸惑いを見せた。
「何でだろうな」
「これってな」
「ああ。けれどな」
「あの娘達もな」
「いいよな」
飴を配る劉備達がだ。まず注目されるのだった。
「可愛くないか？」
「あの娘胸凄く大きいしな」
「っていうか天和ちゃんか？」
「そっくりだけれどな」
ここでもこう言われる劉備だった。
「何かおっとりした外見といいな」
「顔立ちだってそうだしな」
「髪の色とかは違うけれどな」
「それでも。そっくりだよな」
「声以外はな」
声でわかるのだった。何につけてもそれだった。
そんな話をしながらだった。彼等は次第に車に集まってきていた。それを見てだ。
李典がだ。楽進と于禁に話した。
「今やな」
「わかった。それではだ」
「動かすの！」
二人はすぐにだ。車にあった大きな取っ手を押した。するとだ。
車の上の部分が開きだした。それを受けて趙雲が飛び地面に着地

した。
「危ないところだったな」
「あれっ、何時の間にか」
「華蝶仮面がいなくなってるのだ」
劉備と張飛は既に車の外にいる。それで着地した趙雲を見ながら述べた。
「何処に行ったのかしら」
「謎なのだ」
「まあわからない者はだな」
「わからないからな」
もうあえて何も言わない関羽と馬超だった。
「とにかくだ。はじまったな」
「いよいよな」
「うむ、そうだな」
趙雲は何食わぬ顔で関羽と馬超に話す。
「三人の歌がな」
「さて、どうなるか」
「対抗できるか？あの三姉妹に」
「そうだな。歌の実力は問題ない」
三人の歌唱力がだというのだ。

# 第六十一話　袁術、歌で仕掛けるのことその九

「それはだ」
「歌自体はか」
「いいっていうんだな」
「そうだ。しかしだ」
趙雲は難しい顔になってまた二人に述べた。
「問題はだ」
「三姉妹が持っているというその書か」
「それだよな、やっぱり」
「その通りだ」
華陀も出て来ていた。そのうえで述べたのだった。
「あの書は俺が封じる」
「頼んだぞ、それは」
「絶対にな」
趙雲と馬超も彼に言う。
「貴殿のその針だけだからな」
「その何とかって書をどうかできるのはな」
「太平要術の書だ」
華陀は馬超にその書の名前をあらためて話した。
「覚えておいてくれよ」
「ああ。あんたのそのゴオオオオオオッド米道と同じ位大事なんだな」
「いや、そっちの方が重要だ」
その呼び名の方が大事だというのである。
「それは絶対に間違えないでくれ」
「そっちの方がかよ」
「そうだ。思いきり力を入れて言ってくれ」
注文までするのだった。

「呼ぶ時はな」
「わかったよ。それじゃあな」
馬超も頷く。こんな話もした。
そしてだ。遂に演奏がはじまったのだった。
「おっ、何だ？」
「天和ちゃん達じゃないな」
「ああ、誰だあの三人」
「楽器も演奏しているぞ」
「何なんだ？」
黄巾軍の面々がそちらに顔を向けた。そしてだった。
その歌がはじまる。するとだった。
彼等の反応が変わった。歌を真剣に聞く。
「いいな」
「ああ、上手いよ」
「しかも三人共可愛いな」
「俺真ん中の小さい娘がいい」
まずは袁術の話だった。
「小さいけれど上手だしな」
「あの娘が中心みたいだな」
「そうみたいだな」
袁術のことを話す。そしてだった。
そのうえでだ。彼等はだった。今度は張勲を見て話す。
「胸、大きいだけじゃないな」
「歌、あれはプロだろ」
「しかも上手に動くしな」
「天才みたいだな」
「凄くないか？本当に」
「いや、凄いよ」
「左の娘だってな」
三人目は郭嘉だった。

「どうやら本当の胸は小さいみたいだけれどな」
「それはそれでいいんじゃないのか？」
「俺胸小さい方がいいしな」
「地和ちゃんだってそうだろ」
張梁のことが引き合いに出される。
「だからいいんだよ」
「そういうものか」
「ああ、そうだよ」
「まあ胸だけじゃなくてな」
それだけではないというのだ。胸だけではとだ。
「あの娘も歌上手だぞ」
「三人共凄いな」
「相当な歌い手か？」
「そうなのか？」
「わらわ達の歌を聴くのじゃ！」
そして袁術が言った。

# 第六十一話　袁術、歌で仕掛けるのことその十

「よいな、聴くのじゃ！」
「ほっほーーーーーう！」
「聴くぞ！」
「聴かせてもらうぞ！」
そしてだった。彼等もこう応えてだった。その歌を聴くのだった。
そして演奏もだ。見事だった。
「京、遅れるなよ」
「へっ、わかってるぜ！」
ベースの八神にだ。ギターの草薙が応える。三人の左後ろに八神がいて右後ろに草薙がいる。そしてその後ろにナコルルとテリーがいる。
「御前とこうして組むのもな！」
「久し振りだな」
「こっちの腕も落ちていないんだな」
草薙は八神の演奏を聴きながら述べた。
「安心したぜ」
「俺を誰だと思っている」
八神はその草薙にこう返した。
「ベースもだ。誰にも負けはしない」
「ベースもかよ」
「少なくとも御前に遅れを取ることはない」
音楽にしろその他のことにしてもだ。そうだというのである。
そして演奏を続けながらだ。三人の横に来てだ。
ベースをかき鳴らしてみせる。すると黄巾軍の面々は。
「すげえぞ、おい！」
「あの赤い髪の奴の演奏な！」
「演奏もできるのかよ！」

「すげえ奴がいるな！」
「おい、八神！」
草薙は八神が歓声を浴びているのを見てだ。早速対抗心を燃やした。
そしてだった。彼もなのだった。
「俺も行くぜ！」
「それで俺に勝てるのか」
「ああ、勝ってやるさ！」
その負けん気を露わにしてだ。彼も前に出て演奏する。
するとだ。それでまた黄巾軍の面々が歓声をあげる。
「あの黒髪もいいな！」
「センスあるぜ！」
「あんた楽器上手だな！」
「やってくれんじゃねえか！」
「おう、どんどん聴いてくれ！」
草薙は誇らしげに彼等に応える。
「俺達の音楽をな！」
「むっ、待つのじゃ！」
袁術は自分の横に来ている彼に顔を向けて言った。
「今はわらわ達の歌じゃぞ」
「わかってるさ」
「わかってるならわらわ達より目立つことは許さん！」
こう我儘を言うのであった。
「どういうつもりじゃ！」
「いえいえ美羽様、それなら」
「はい、それならです」
張勲と郭嘉がここでその袁術に話した。
「私達がもっといい歌を歌えばいいんですよ」
「そうすればいいですから」
「むっ、そういえばそうじゃな」

袁術は二人のその言葉に納得できるものを見た。
そしてだ。実際に納得した顔になってこう二人に述べた。
「それではじゃ。わらわ達もじゃ」
「歌いましょうね」
「心を定めて」
「御主達に言われると納得できるから不思議じゃ」
とりわけだ。郭嘉を見ての言葉だった。
「凛とはのう。陣営の違いさえ構わぬ程じゃしな」
「そうですね。私もそれは」
郭嘉はここでも顔を赤らめさせて話す。
「美羽様とは。まことに」
「うむ。七乃も大事じゃがな」
彼女もだというのだ。
「御主とは。これからもな」
「はい、末永く」
「共にいようぞ」
こんな話をしながらだ。三人も歌う。そしてテリーとナコルルもだった。
ドラムとキーボードを演奏していく。彼等も乗っていた。
「いいねえ、こうした感じ」
「そうですね」
ナコルルはにこりと笑っててリーに応える。

# 第六十一話　哀術、歌で仕掛けるのことその十一

「上手い具合にまとまってな」
「三人だけではないですしね」
「草薙と八神もだな」
そのギターとベースの二人もだというのだ。
「いい感じでな」
「まとまってますね。ただ」
「ただ。何だ？」
「不思議ですね。御二人がまとまるのは」
ナコルルはそのことを言うのだった。
「あれだけいがみ合っているのに」
「そのことか」
「はい、どうしてでしょうか」
また言うナコルルだった。
「御二人は。互いに命をやり取りしているというのに」
「強敵ってやつだな」
テリーは微笑んでだ。それだというのである。
「つまりな。あの二人はそれなんだよ」
「強敵ですか」
「ああ、『とも』なんだよ」
それだというのである。
「つまりはな」
「『とも』ですか」
「そうなんだよ。だから命のやり取りをしていてもな」
「いざとなればですか」
「ああして息を合わせられるんだよ」
こうナコルルに話す。その二人のことをだ。
「そういう関係なんだよ」

「成程、深いんですね」
「深いさ、あの二人はな」
また言うテリーだった。
「俺達の入ることのできないものがあるな」
「そうですか」
そんな話もしていた。彼等の出だしはいいものだった。そしてだ。
曹操の本陣ではだ。一人腕を組んで立っているだけの男がいた。
リョウである。
彼は動かない。その彼に許緒が声をかけた。
「あれ、リョウさんは行かなかったの」
「ああ、ちょっとな」
こう許緒に答えるのだった。
「音楽とかはな」
「駄目なの？」
「よくわからないんだよ」
こう話す。
「ちょっとな」
「リョウさん音楽駄目だったんだ」
「妹がいてな」
「確かユリさんだったよね」
「あいつは歌うのは好きなんだけれどな」
話をしながらだ。顔を曇らせるのだった。
「それでもな」
「下手なんだね」
「一言で言えばそうだ」
「歌うの好きで音痴っていうのは」
「困ったことだ」
「春蘭さんなんか結構上手だけれどね」
「そうなのか」
何気に彼女の歌のことがこの二人の間でも話される。

「あの人も歌は上手だったのか」
「そうだよ。機会があればね」
「聞くといいのか」
「そうだよ。そうしたらいいよ」
「だから俺は音楽はな」
「駄目なんだね。やっぱり」
そうした話をしていた。そしてだ。
許緒はだ。話を変えてこんなことを言ってきた。
「ところでさ。お腹空かない？」
「そうだな。そういえばな」
「リョウさん何好き？僕何でも好きだけれど」
「餅が好きだな」
「あっ、お餅が好きなんだ」
「ああ。米をついて作った方がな」
「そっちのお餅だね」
「ああ、それがいい」
こう話すのだった。実はこの国の餅は二つある。その米のものと小麦を練って作ったものの二つがある。後者はそれを焼いて食べる。
「ただ。小麦の方もな」
「あれも美味しいでしょ」
「ああ、美味い」
実際にこう述べるリョウだった。
「それじゃあ。どちらにするか」
「どっちも食べたら？」
許緒は天真爛漫にこう答えた。
「流琉ちゃんどっちも作ってくれるよ」
「それで三人で食べるか」
「うん、そうしよう」
「そうだな。それじゃあな」
「一緒にね」

こんな話をしてだ。リョウもリョウで楽しんでいた。そうした中で時間が過ぎていく。しかしだった。それで話が終わりではなかった。

第六十一話　　完

２０１１・２・１０

# 第六十二話　三姉妹、書から離れるのことその一

第六十二話　三姉妹、書から離れるのこと

三姉妹は今自分達の天幕にいた。そこは流石に立派なものだった。赤い絨毯が敷かれ幕も絹だ。それを天幕の中で飾ってだ。その中で大きな円卓に座ってだ。そのうえで三人でその卓を囲んでお菓子を食べていた。

その中でだ。張角が妹達に尋ねた。お菓子は四角く黄色い麦を焼いたものだった。

「このお菓子美味しいね」

「そうね」

張梁が姉の言葉に応える。

「このお菓子何ていったっけ」

「カステラよ」

それだとだ。張宝が答える。彼女もそれを食べている。

「それよ」

「カステラなの」

「そう。カステラ」

こう話すのだった。

「バイスさんとマチュアさんが作ってくれた」

「あの人達ってお菓子作れたのね」

「そうみたいね」

張角と張梁が二人のことを話す。

「御姉ちゃんそういうことは駄目だけれど」

「姉さん自分でお料理したことある？」

「ないよ」

あっけらかんと答える張角だった。

「そういうことはね」

「でしょ？それじゃあ駄目よ」
「だって。私食べる方が好きだから」
それが理由だというのだ。
「そういうのは」
「全く。そんなことだから」
「駄目だっていうの？」
「そうよ。姉さんもしっかりしないと」
「だって。御姉ちゃんしっかりしたこと一度もないのよ」
「だから。それが駄目なのよ」
張梁は呆れた顔で姉に言う。三人はこの状況でも呑気なものだった。
そしてだ。外での騒ぎが耳に入ってだった。
「あれっ、外が騒がしいよ」
「何かしら」
張角と張梁その騒ぎに気付いて顔をあげた。
「まさか官軍？」
「遂に来たとか」
「少し見て来る」
張宝がここで言った。
「姉さん達は待ってて」
「うん、それじゃあ」
「人和、御願いね」
「わかったわ」
こうしてだった。張宝が見に行った。二人は相変わらずそのカステラを食べ続ける。暫くして張宝が顔を曇らせて天幕に戻ってきて言う。
「姉さん達大変よ」
「まさか官軍！？」
「本当に来たの！？」
「官軍が来たのは確かみたいだけれど」

それはもう察している張宝だった。だがここではだった。
「けれど」
「けれど!?」
「何かあったの?」
「来てみて」
こう姉達に言う張宝だった。
「大変なことになってるから」
「大変なことって」
「だから何よ」
「いいから。とにかく来て」
こう言って姉達を連れ出す。そして目の前にだ。袁術達を見たのだった。
「な、何よあれ!」
「歌ってるの。あの娘達が」
張宝はこう張梁に話す。
「そうしてるの」
「あの娘達凄く上手いね」
張角は無邪気に自分の手と手をその胸の前で組み合わせて言った。
「三人共」
「姉さん、何呑気なこと言ってるのよ」
しかしだった。張梁はその姉にきつい顔を向けて告げた。
「若しここで黄巾軍が向こうになびいたらどうなるかわかってるの?」
「どうなるの?」
「そこに官軍が来て」
張宝も長姉に話す。

# 第六十二話　三姉妹、書から離れるのことその二

「私達捕まって」
「捕まって？」
「終わりよ」
こう長姉に話した。
「そうなったら」
「終わりっていうと」
張角は末妹の言葉を聞いてその視線を一旦上にやった。そうしてそのうえでだ。
右手を自分の首のところにやってだ。左から右に引いた。
「こういうこと？」
「だからそうよ！」
張梁がまた告げた。言葉が荒くなっている。
「姉さんそうなっていいの！？」
「そんな、御姉ちゃんまだ死にたくないよ」
やっと状況を理解した張角だった。
「もっともっと歌いたいし美味しいもの食べたいのに」
「そうよね。だったらよ」
「私達も対抗しないと」
「そ、そうね」
遂に意を決した顔になる張角だった。そしてそこにだ。
程遠志達が来てだった。三姉妹に話してきた。
「天和様、ここは」
「是非です」
「舞台を！」
「う、うん。そうだね」
張角が最初に応えた。
「それじゃあ今すぐに」

「いい、行くわよ」
「ええ。それじゃあ」
張梁と張宝も続いてだった。そうしてであった。
三人も舞台を出した。そのうえでだ。
歌いはじめる。それを聴いてだ。
黄巾軍はだ。そちらにも顔を向けてだ。歓声をあげた。
「ほっほーーーーーう！」
「天和ちゃーーーーーん！」
「地和ちゃーーーーーん！」
「人和ちゃーーーーーん！」
三人それぞれへの応援もある。その後ろではだ。
今では程遠志達が楽器を演奏している。彼女達はそれも担うようになっていたのだ。当然三姉妹の傍にいて護衛する意味もある。
その中でだ。張梁が言う。
「皆あたし達の歌を聴いて！」
「ほっほーーーーう！」
「聴くよ！」
「三人の歌！」
こうしてだった。流れは三姉妹の方に流れた。それを見てだ。
袁術がだ。あたふたとなりながら左右の二人に問うた。
「う、やっぱり凄いのじゃ。どうすればいいのじゃ？」
「いえ、ここはです」
「はい、一つしかありません」
張勲と郭嘉もいささか狼狽しながら袁術に答えた。
「私達も歌いましょう」
「このまま」
「それしかないのじゃ？」
「そうです、やはり」
「それしかありません」
これが二人の言葉だった。

「ですからここは」
「御気を確かに」
「わ、わかったのじゃ」
二人に言われてだ。袁術は何とか気を取り戻した。
そしてだ。二人にあらためて言った。
「それではじゃ。さらにじゃ」
「はい、歌いましょう」
「ここは」
「後ろも頼むぞ！」
草薙達にも声をかける。

# 第六十二話　三姉妹、書から離れるのことその三

「そなた達の力も必要じゃ！」
「おっ、あの姫様あれで」
「そうですね」
袁術の今の言葉にだ。テリーとナコルルが話す。
「いいところあるな」
「仲間思いでもあるんですね」
「はい、美羽様はですね」
二人に張勲が話してきた。
「人見知りなんですよ、あれで」
「へえ、誰にもって訳じゃないんだな」
「繊細な方なんですか」
「はい。ただ」
ただしというのであった。ここで。
「慣れると。ああですから」
「ううん、ややこしい人だな」
「けれど。悪い人じゃないんですね」
「美羽様は悪人ではないです」
張勲はそれは確かだと言った。
「けれど」
「そこでけれどなんだな」
「袁術さんは」
「好きな相手をいじるところがありますから」
「それでその陽子さんって人か」
「いつもなんですね」
「はい、そういうことです」
こうだ。にこりと笑って話すのだった。しかもそれをだ。
郭嘉がだ。微妙な顔で見てだ。そのうえで袁術に話した。

「あの、美羽様」
「ん？どうしたのじゃ凛」
「いえ、やはり七乃さんの方が私よりも」
「な、何故そう言うのじゃ！？」
そう言われてだ。袁術は明らかな焦りを見せた。
「わらわは凛はじゃ。何よりも大切にじゃ」
「ですが七乃さんは美羽様をよくご存知です」
困ったような顔でだ。袁術を見ての言葉だった。
「それは」
「それはじゃな。七乃はわらわが幼い頃から共にいてじゃ」
「ご幼少の頃から。ではやはり」
「いや、だからわらわはじゃな」
「駄目ですよ、美羽様」
ここで張勲が来て煽りにかかる。
「凛ちゃんはもう私といい仲なんですから」
「何ィ！？凛は取るなと言った筈じゃ！」
「ですがもうなってしまいましたから」
「凛、それはまことか！？」
「いえ、私はそんな」
舞台でだ。何やら妙な言い合いをはじめた。そしてそれがだった。
「何かああしたやり取りもな」
「可愛いよな」
「そうだよな」
「本当にな」
それも受けたのだった。見事なまでにだ。
「いいぞ！」
「その調子だ！」
「どんどんいけ！」
「人気がさらに出てるの」
于禁がそれを車の中から観て笑顔になる。

「この調子なの」
「ううん、見ているこっちが恥ずかしゅうなるわ」
李典も見ていた。そのうえでの言葉だった。
「あの三人。完璧百合やん」
「曹操殿と同じだな」
趙雲は彼女尾名前を出した。
「ただ。あの三人はな」
「まんま痴話喧嘩やな」
李典は一言で切り捨てた。
「それも愉快なな」
「見たところ張勲殿には余裕があるが」
楽進が見てもそうだった。
「しかし。袁術殿と凛殿は」
「ううん、真剣に焦ってるの」
「完璧青煽らさせられてるな」
「だがそれがいい」
趙雲は楽しげに笑って述べた。
「それが受けているしな」
「そうだな。歌以外でもいけるのだな」
楽進は納得した顔で述べた。
「ああしたやり取りもか」
「ええんやな。ちょっと勉強になったわ」
李典が言うとだ。ここでだ。
馬超がだ。こう言ってきた。
「おい、何かな」
「どうしたの？」
「ちょっと車の札の調子がおかしいんだけれどな」
こう于禁に答える。

# 第六十二話　三姉妹、書から離れるのことその四

「あのおっさんの札な」
「誰がおっさんだ！」
すぐに華陀から声が来た。
「御兄さんと呼べ！」
「では幾つなのだ？」
張飛がその年齢を尋ねた。
「考えてみればそれが一切わからないのだ」
「うむ、百二十歳だ」
素直にその年齢を述べた華陀だった。
「独自の運動をしていてな。病気一つしたことない」
「待たんかい」
すぐにだ。李典が顔を顰めさせて突っ込みを入れた。
「あんた百二十歳やったんか」
「そうだが？まだまだ若いな」
「立派なお爺ちゃんやろが。何や百二十って！」
「だからだ。俺はお兄さんだ」
「全然ちゃうわ！仙人か！」
李典はここまで言った。
「何処まで若作りなんや！」
「そうなの、ちょっと有り得ないの」
于禁も顔を顰めさせて言う。
「華陀さんどうやったらそこまで若いままでいられるの」
「うむ、だからそれは独自の運動でな」
「それ是非教えて欲しいの」
何時の間にか話が変わってきていた。
「沙和もそれして。ずっと可愛いままでいたいの」
「うむ、それではだな」

「だからな。ああ、華陀兄さんな」
馬超はその華陀に気を使ってこう呼んだ。そのうえでだった。
「それで札がな」
「まずいな、思ったより長引いた」
馬超の話からだ。華陀も悟って言った。
「札の効き目が切れてきたか」
「じゃあもうすぐ」
「ああ、術が解ける」
こう黄忠にも話す。
「歌や演奏はできるがな」
「けれど術はなのね」
「そういうことだ。あの三姉妹にはあの書がある」
華陀は危惧する顔で話していく。
「術の効果は無尽蔵だ」
「何っ、それではだ」
「このままだと」
「そうだ、負ける」
華陀は関羽と楽進にも話した。
「三姉妹にな」
「撤退することも考えるか」
趙雲は真剣な顔になって述べた。
「それもな」
「残念やな。折角ここまできたのにな」
「けれどよ。術が切れたらよ」
馬超が眉を顰めさせる李典に話す。
「あたし達黄巾軍のど真ん中にいるからな」
「只では済まないわね」
黄忠もその流麗な眉を顰めさせている。
「それなら。安全なうちに」
「そうするしかないんやな」

「けれど残念なの」
于禁は心から残念そうであった。
「本当にもう少しだったのに」
「けれど仕方がないな。それならだな」
華陀も撤退に傾いた。そうした話をしているうちにだ。
遂に札の力が切れた。するとだ。
観客である黄巾軍の面々がだ。目が覚めた様な顔になった。
「んっ、何だ？」
「何か急にな」
「ああ。落ち着いてきたな」
「そうだよな」
こうそれぞれ話すのだった。そしてだ。
そんな彼等を見た張梁がだ。会心の笑みを浮かべて言った。
「どうやら向こうも術使ってたみたいね」
「そうね」
張宝も次姉の言葉に頷く。
「どうやらね」
「けれどそれが切れたみたいね。それならよ」
「それなら？」
「こっちの勝ちよ」
こう姉妹に言うのだった。その会心の笑みで。
「こっちの術は無尽蔵だからね」
「それなら姉さん」
「ええ、やるわよ！」
そしてだった。宝貝を使って叫んだ。
「皆、いい！？」
「おっ、地和ちゃん」
「何だ？」
「どうしたんだ？」
「あの連中やっつけて！」

こうだ。袁術達を指差して叫んだのだった。

## 第六十二話　三姉妹、書から離れるのことその五

「追い出して。ここから！」
「追い出すって」
「ちょっとなあ」
「あの娘達も歌上手いし」
「可愛いしな」
「そこまではなあ」
「そうだよな」
しかしだ。元々只の追っかけである彼等はだ。そう言われてもすぐには動かなかった。好戦的な人間は殆どいない状況なのである。
「仲良くやればいいじゃないか」
「そうそう」
「御互いの歌を聴いてさ」
「楽しくさ」
こう言う有様だった。しかしだ。
袁術達はだ。術が切れてあたふたとなっていた。
「ど、どうするのじゃ！」
「ど、どうしましょう」
流石に張勲も今は焦ってどうしようもない。
「このままですと」
「そうじゃ、あの連中に捕まってしまうぞ！」
「捕まったらそれこそですよ」
「ええい、わらわはまだ死にたくないのじゃ！」
袁術は真っ青になって叫ぶ。
「とにかくじゃ。どうにかするのじゃ！」
「撤退しかありません！」
郭嘉は流石に軍師だった。冷静さを保ちながら言う。
「今のうちに」

「それしかないな」
「今はな」
草薙と八神が彼女の言葉に頷く。
「とりあえず後詰は任せろ」
「容赦はしない」
それぞれの手に赤と青の炎を出しての言葉だった。
「大抵の奴ならな」
「幾ら来ても問題ではない」
二人も覚悟を決めていた。しかしだ。
黄巾軍はまだ動かない。張梁もそれを見て焦りを感じていた。
そしてその焦りを顔に見せてだ。また宝貝を使って叫んだ。
「皆、やっちゃえーーーーっ!!」
するとだ。張梁を中心としてだ。黒い波動が湧き起こった。
そしてそれが黄巾軍を覆いだ。そうして。
彼等がだ。明らかに変わった。
「そうだよな」
「ああ、あの連中な」
「追い出そう」
「歯向かうならな」
「やってやろうか」
「ああ、そうしような」
こうしてだった。車を徐々に取り囲んでだ。迫ってきていた。
「あいつ等、敵だ」
「俺達の敵だ」
「それならだ」
「追い出せ」
「最悪殺してもな」
「構うものか」
虚ろな声で言いながらだ。迫って来る。それを見てだった。
「まずい、このままじゃあ」

「ああ、そやな」
「これ以上ここにいては危険だ」
李典と楽進が華陀に応える。
「今ならまだ間に合う！」
「ほな、全速力で行くで！」
「真桜、頼んだぞ！」
車を出そうとする。そしていざという時に備えて。
関羽達も得物を手にする。草薙達が身構える。
「今日、無様な姿を晒すか」
「へっ、それは手前が一番許さねえことだろ」
「当然だ。貴様を倒すのはだ」
二人は車のすぐ後ろに立ちそれぞれの炎をたゆらせながら話す。
「この俺だ」
「ああ、手前を倒すのもな！」
草薙も八神に言い返す。
「この俺だからな」
「どちらにしてもやるか」
テリーも出て来ている。
「手荒な真似はしたくないがな」
「この場合そうも言ってはいられぬ」
「やるしかないな！」
趙雲と馬超もそれぞれ槍を手にしている。全員戦うつもりだった。

# 第六十二話　三姉妹、書から離れるのことその六

しかし一人だけ違っていた。劉備がだ。車から出てこう言うのだった。
「ここはね」
「ここは？」
「御姉ちゃんは中にいるのだ」
その彼女に関羽と張飛が慌てて言う。
「姉上は中におられよ！」
「武器なしでは危ないのだ！」
「ううん、それはかえって駄目よ」
こうだ。二人の妹に話すのだった。
「歌には歌でよ」
「し、しかし今は」
「とてもそんな状況じゃないのだ」
「歌が好きな人に悪い人はいないから」
「リョウ殿は例外だな」
「あいつは音楽の才能がないだけなのだ」
さりげなくリョウのことも話される。
「とにかくだ。今は」
「物凄く危ないのだ」
「いえ、けれど」
それでもだと言ってだ。劉備は迫る黄巾軍の前に出てだ。
微笑み。そのうえで歌いはじめたのだった。
その歌を聴いてだ。黄巾軍の動きがまた止まった。
「なっ！？」
「この歌もな」
「ああ、いいよな」
「何か。聴いてると」

「落ち着くよな」
「そうだな」
彼等はだ。それまでの野蛮さからだ。元の穏やかさを取り戻して話すのだった。
「何か追い出すとかな」
「馬鹿馬鹿しいよな」
「全くだな」
「それは」
彼等は動きを止めてしまった。そうして。
袁術達もだ。それを聴いてだった。
「いい歌じゃな」
「そうですね。劉備さんの歌ですけれど」
「心に滲み入ります」
二人が袁術に話す。
「黄巾軍の動きも止まりましたし」
「凄いことです、これは」
「わらわ達も歌うのじゃ」
ここで袁術はその二人に言った。
「そうするのじゃ。こんないい歌歌わずにいられないのじゃ」
「そうですね。じゃあ私達も」
「歌いましょう」
こうしてだった。三人も歌う。そして。
「ふむ。これはな」
「そうだな。あたし達もな」
「歌おう」
「そうするのだ」
趙雲の言葉にだ。馬、関羽、それに張飛が続く。黄忠もだった。
「歌は。あまり歌わないけれど」
「けれど。この歌は」
「めっちゃええ歌やし」

「歌わずにいられないの」
楽進、李典、于禁と共にだ。歌いはじめた。テリー達も。
「演奏に戻るか？」
「戦わなくていいんだな」
「あれだけの数でもか」
「じゃあ戦いたいか？今」
テリーは微笑んでだ。こう草薙と八神に問うのだった。
「この歌を聴きながらな」
「いや、それは」
「俺もその気はなくなった」
「そういうことだ。じゃあな」
「戻るか。演奏にな」
「音楽を邪魔することは俺の流儀じゃない」
こうしてだ。彼等も演奏に戻った。ナコルルが言う。

# 第六十二話　三姉妹、書から離れるのことその七

「じゃあまた」
「ああ、はじめような」
テリーが笑顔で応えだった。演奏をはじめた。するとだ。
歌と演奏でだ。何もかもが変わった。殺伐なものは完全に消えて。
そうしてそのうえで和が世界を支配した。そしてその和は。
三姉妹にも届いていた。それを聴いて最初に張宝が言った。
「この歌を聴いてると」
「何よ、あの連中追い出したくないっていうの！？」
「ええ」
その通りだとだ。張宝は張梁に答えた。
「聴いているだけで」
「何言ってるのよ！ここで諦めたら！」
張梁の顔が変わっていた。その顔は。
ドス黒く険のある顔になってだ。そうして姉妹に言うのだった。
「終わりなのよ、あたし達！」
「けれどもう」
「駄目よ、まだ！」
その顔でだ。妹に言う。
「こんなところで！」
「姉さん」
妹が次姉を止めようとする。そうして。
張角はその音楽を聴いていた。それと共に。
これまでのことを思い出すのだった。
幼い時に三人で仲良く歌いはじめた時のこと。旅芸人をはじめた時、そして人気が出て応援する者達と楽しくやっていた時、そうしたことを思い出して。
そのうえでだ。こう妹達に言った。

「もういいじゃない」
「えっ、どういうことよ！」
「姉さん、一体」
「この歌、邪魔できないから」
まずは劉備の歌について言った。
「それにね」
「それに！？」
「それに」
「今こうして暴れるのって。私達の欲しいものじゃないから」
そのことも言うのであった。
「だから。もう止めましょう」
「な、何言ってるのよ！」
張梁は姉に対しても言った。
「姉さん、今諦めたら」
「皆を巻き込んで。何かをするのってよくないわ」
だが、だった。張角の言葉は変わらない。あくまでこう穏やかに言うのだった。
「だからね」
「それでって」
「いいっていうの」
「そうよ。もう」
「だから駄目よ！」
まだ言う張梁だった。その顔はさらに険しいものになる。
「あたし達、絶対・・・・・・」
「姉さん・・・・・・」
ところがだった。ここでだった。
張梁は急に力を失いだ。前に倒れていく。その彼女を張角が受け止めた。
「まさか」
「そうね。あの書の力で」

姉妹で次姉を支えながら話す。
「地和ちゃん、おかしくなっていたのね」
「じゃああの書は」
「元々。私達が持ったらいけないものだったのよ」
張角は目を伏せてこう言った。
「あの書は」
「じゃあやっぱり」
「ええ」
こう張宝に応えてだ。意を決した顔になってだ。
宝貝を手にだ。こう言うのだった。
「皆、聞いて！」
「あれっ、天和ちゃん」
「何だ？」
「どうしたんだ？」
皆その彼女に顔を向ける。そしてその言葉を聞く。

# 第六十二話　三姉妹、書から離れるのことその八

「黄巾党はこれで解散します！」
「えっ、解散！？」
「そうするって！？」
「まさか！」
「そんな、天和様！」
程遠志もだ。彼女に声をかけてきた。
「解散とは」
「宜しいのですか？」
「折角ここまで来たのに！」
下喜達も言う。しかしだった。
それでもだった。張角は晴れ渡り、そして確かな顔で続けた。
「もういいの」
「そんな、あれだけ苦労されてきて」
「それでここで解散とは」
「そうされるとは」
「今こうして暴れ回っても。誰も幸せにならないから」
それでだとも話す張角だった。
「だから」
「そうですか」
「それでなのですか」
「だからこそ」
「ええ。三人共今まで有り難うね」
親衛隊の三人にもだ。笑顔で話した。
「じゃあこれからは」
「わかりました」
「それなら」
三人も納得した顔になり頷いた。そうしてだった。

彼女達ももう何も言わなかった。三姉妹を見守るだけだった。
彼女達を後ろにしてだった。張角はさらに言った。
「私達普通の女の子に戻ります！」
「じゃあ本当に」
「これで解散なんだ」
「本当なんだ」
「皆今まで有り難う！」
張角はまた言った。
「これで。さようなら！」
「また会おうな！」
「忘れないから！」
「ずっと！」
黄巾軍の面々も声援を送る。こうしてだった。
黄巾軍は解散となった。そしてだ。
物見をしている馬岱と典韋は少し能天気にだ。森の中で話していた。
「皆何か凄く楽しそうだね」
「そうだよね」
こうだ。にこにことして二人で話していた。
「何か私達もね」
「行きたかったよね」
「けれどこれも仕事だし」
「仕方ないわね」
「そうそう、それでね」
馬岱はここで話を変えてきた。
「典韋ちゃんって元々料理人だったよね」
「うん、そうなの」
料理の話になった。すると典韋の顔がさらに明るいものになった。
「ずっとね。陳留で働いていたの」
「そうなんだ。お料理自身あるんだ」

「それなりにだけれど」
「うちにも料理得意な人がいるけれど」
「黄忠さんよね」
「あとね。ロック君とか」
「ロック君っていうと別の世界から来た？」
「そうだよ。ロック＝ハワードっていうんだ」
こう彼のことを話すのだった。二人は狼煙に使う台を囲んで座って話している。
「強いだけじゃなくてお料理もできるんだ」
「あっ、それって華琳様みたいね」
「曹操さんに似てるからな」
「馬岱ちゃんのお話聞く限りはね」
「そうかな。性格は全然違うから」
「そうなんだ」
「うん。格好いい性格だよ」
ロックの性格をだ。こう典韋に話した。

# 第六十二話　三姉妹、書から離れるのことその九

「テリーさんに似た感じでね」
「じゃあいい人なんだ」
「元々あっちの世界でテリーさんと一緒にいたらしいし」
「だからなんだ」
「そうだよ。あっちの世界も色々ある世界みたいだけれど」
「そうだよね。あっちの世界は格闘家が多くて」
このことは二人もよくわかっていた。実に多くの格闘家達が来ているからだ。その彼等と実際に会いそして話をしているからだ。
そのことを話していた。するとだ。
許緒がだ。二人のところに来た。そしてこう言った。
「向こう終わったよ！」
「あっ、終わった！？」
「凛さん達上手くいったの」
「うん、狼煙があがったよ！」
こう二人に言うのだった。満面の笑顔で。
「成功の赤い狼煙がね」
「そう、じゃあ」
「そうね。すぐに私達もね」
馬岱と典韋は顔を見合わせてだ。満面の笑顔で言い合った。
そしてそのうえでだった。彼女達も狼煙をあげたのだった。
それを本陣で見た曹操はだ。満面の笑みでだ。こう傍らに控える程？に話した。
「成功したわね」
「はい。凛ちゃんやってくれました」
「そうね。あの娘は鼻血と策だけじゃなかったのね」
「彼女の歌は絶品ですから」
程？は穏やかな笑みで曹操にこのことを話した。

「そう簡単に負けることはないと思っていましたから」
「そうね。袁術と張勲も上手だったし」
「草薙さんの作詞もよかったかと」
「彼ね。私はそっちの趣味はないけれど」
それは前置きしてからの言葉ではあった。
「けれどそれでもね」
「いいと思われますね」
「大事を成すことのできる者ね」
草薙をだ。こう評するのだった。
「必ずね」
「はい。華琳様とはまた違う日輪かと」
「ええ。彼もまたね」
「それでなのですが」
ここでだ。程?は曹操にこう言ってきた。
「黄巾軍の処罰ですが」
「それね。ちょっと詳しく話し合いましょう」
「わかりました。それでは」
「ただ、ね」
曹操はここでだ。程?にふとした感じで述べた。
「あの三姉妹だけれど」
「彼女達ですか」
「黄巾軍の面々も含めて簡単に処罰するのもね」
「よくないというのですね」
「首を切るのは簡単よ」
一応この処罰も述べはした。
「けれど、ね」
「そもそも三姉妹はあの書をどうして手に入れたのでしょうか」
「それも気になるし」
「思うのですが」
程?の目が少し顰めさせられた。

「あの三姉妹が書を手に入れた訳ではないと思います」
「自分達で望んでではなくね」
「誰かに手渡されたのでは」
こう述べる程？だった。
「そんな気配がしますが」
「あの書はそれこそ天下を左右できるだけの力があるわ」
「しかし彼女達にそんな野心はありません」
「ただ。旅芸人として有名になりたいだけよね」
「そして美味しいものを食べて人気者になりたいだけです」
「そんな娘達が天下を乗っ取るとか」
「考えられません」
程？は三姉妹のことを読みきっていた。まさにその通りだった。
「張角に鉈や刀を持たせたら危険でしょうが」
「けれどそれ以外はなのね」
「はい、何の危険もない娘達です」
まさにそうだというのであった。

# 第六十二話　三姉妹、書から離れるのことその十

「ですから。三姉妹を処罰してもです」
「問題の解決にはならないわね」
「そう思います」
「わかったわ。とにかく」
曹操はあらためて程?に述べた。
「劉備達が戻ってきたら。あらためて話し合いましょう」
「御意」
こうしてだった。曹操は劉備達の帰還を待ってそのうえで話をするのだった。天幕の中でだ。曹操が話を切り出したのであった。
「さて、乱の処理だけれど」
「乱を起こしたのは事実ですね」
「それは」
孔明と鳳統がまず言った。
「ですからそれへの処罰は」
「絶対にですね」
「ええ。ただ」
ここでだ。曹操はこう一同に言った。
「あの三姉妹と黄巾軍よりもね」
「といいますと?」
「その後ろにいる人間を処罰すべきね」
こうだ。荀?に述べたのだった。
「彼女達よりもね」
「後ろのですか」
「貴方はどう思うかしら」
曹操は華陀を見た。そのうえで彼に問うのであった。
「あの娘達が自分の意志で乱を起こしたと思っているかしら」
「それはないな」

華陀もすぐに答えた。
「おそらくな。あの書はより大きな力の中にある」
「その力の持ち主こそが問題ね」
「そうだ。あの三姉妹はただ操られていただけだ」
「けれど。乱を起こしたのは事実よ」
荀？はそれを言う。
「処罰はしなければいけないわ」
「けれど。あの娘達は自分達から解散して書も手渡してくれるっていうし」
劉備は三姉妹の擁護に回っていた。
「だからここは」
「貴女はそう言うのね」
「いけませんか？」
「前の私だったらそう言ってたわね」
ところがだった。ここで荀？はこう言うのだった。
「三人は斬首、黄巾軍の面々は生き埋めよ」
「乱を起こしたから」
「けれどね」
ここでだ。荀？は覇王丸達を見た。彼等も共にいるのだ。
「全く。私もおかしくなったわよ」
「おいおい、俺のせいかよ」
「あんたの話を聞いたらどうもね」
こうだ。苦笑いと共に覇王丸と話すのだった。
「そうした処罰をしてもね」
「ああ。大事なのはな」
「人を斬るんじゃなくてその後ろにいる邪なものを斬るのね」
「アンブロジアがそうだったからな」
彼がかつて戦ったその邪神の名前を出した。
「まあこの世界にはいないがな」
「あんな無茶苦茶な存在がこの世界にもいたらたまったものじゃな

いわよ」
荀？はその邪神がこの世界には絶対にいないと確信していた。それは他の面々も同じだ。
「けれど。今回もそれよね」
「ああ。天草達と同じでな」
「その後ろにいる存在が問題であって」
「三姉妹はそんなに重い処罰をしなくてもな」
「いいわね」
「そういうことね」
曹操は二人の話がまとまったところで述べた。
「三姉妹の処刑も黄巾軍の生き埋めもしないわ」
「そうですか」
それを聞いてだ。劉備はほっとした顔になった。そのうえで言うのだった。
「曹操さん、有り難うございます」
「その後ろにいる誰かは絶対に処罰するけれどね」
彼はそうするというのだった。

# 第六十二話　三姉妹、書から離れるのことその十一

「容赦しないわ」
「ああ、そういう奴は斬らないとな」
ガルフォードが述べた。
「どうしようもないからな」
「その通りね。何もならないわ」
曹操もそれは同意だった。
「だからその誰かは徹底的に探すわ」
「ではそれを大将軍にもですね」
荀？がまた話す。
「お伝えしてですね」
「そうするわ。もっとも」
ここでだ。曹操は目を顰めさせてこんなことを言った。
「宦官の連中が仕組んだ乱っていうのも考えられるわね」
「確かに。あの連中がこの乱を口実に大将軍を攻撃して失脚させるということも」
「考えられますね」
夏侯姉妹も曹操の今の言葉に応えて述べた。
「とりわけ乱の平定を命じられた我々がそれをしくじれば」
「そうなれば奴等の思う壺です」
「その通りよ。まあ確かなことはこれから調べるけれどね」
曹操は姉妹にこう述べた。
「とりあえず処罰はだけれど」
「はい、それは」
「どうされますか？」
曹仁と曹洪がそのことを問う。
「その処罰は」
「どのようなものを」

「まずは黄巾軍ね」
彼等から話すのだった。
「彼等は。罪の軽い、とはいっても全員どうも大したことはしてないみたいだけれど」
「軽い面々は」
「どうされますか？」
「このまま徐州に帰っていいわ」
要するに処罰はしないというのだった。
「叱責程度でね」
「わかりました」
「彼等はそれで」
「それで罪が重い連中は私達で預かりましょう」
彼等はそうするというのだった。
「まあ。労働でもしてもらいましょう」
「あの、それでしたら」
ここでだ。韓浩が出て来た。そうして曹操に話した。
「一つ考えがあるのですが」
「凛、何かしら」
「はい、労働は土地を耕させましょう」
まずはその労働の内容から話した。
「そしてそれと共にです」
「それと共に？」
「兵役にも就かせましょう」
それもだというのだ。
「いざという時の戦力にするのです」
「つまり兵に開墾等をさせるのね」
「はい、まだ予州等は土地が荒れているところがありますし」
「そうね。いい考えね」
「はい、それでは」
「ええ。黄巾軍はそれでいいわ」

彼等への処罰はこれで決まった。
「それで三姉妹は」
「適当に歌わせておけばよいではないか」
袁術がここで素っ気無く言った。
「あの連中元々歌が好きなのじゃ。罰としてあちこちを回らせて慰問でも何でもで歌わせておけばいいではないか」
「!?そう言うのね」
これには曹操もだ。目を瞠った。
「各地の慰問に」
「処罰だから金は渡さずともよいではないか。それで終わりじゃ」
「貴女それ考えずに言ってない?」
荀?が怪訝な顔で袁術に問い返した。
「第六感で」
「美羽様はいつもそうなんですよ」
張勲はいつもの笑みでこう荀?に話す。

# 第六十二話　三姉妹、書から離れるのことその十二

「主語がないんですよ」
「全く。感性だけなのね」
「わらわはそれでいいのじゃ」
呆れる荀？に胸を張って返す袁術だった。
「褒めるがいいぞ」
「貴女を褒めるのはうちの陣営じゃ凛だけよ」
その細い眉を顰めさせてだ。荀？はまた言った。
「全く。妙に波長が合うんだから」
「私は別に」
その本人が顔を赤くさせて否定しようとする。
「美羽殿とは」
「けれど口移しで食べ合うし」
「それはその」
「ああ、いいから」
曹操がその二人を止めた。
「そうね。三姉妹はそれでいいわね」
「流石に衣食や移動の車等は用意しないといけないですが」
徐晃が話す。
「それは」
「それ位はいいわ。まああの三姉妹いつも美味しいもの要求するだろうけれど」
それは簡単に予想できることだった。
「まあそれ位はね」
「いいかと」
「食べるもの位は」
流石にこれ位は誰も反対しなかった。そうしてだった。
三姉妹についてはそれで終わった。黄巾軍についてはだ。楽進、

李典、それに于禁が調練にあたることになった。話はこれで完全に終わった。

そしてその三姉妹はだ。今は。

「これが私達の車になるのね」

「そうよ」

袁術達が舞台に使っていた車がそのまま与えられることになった。

張梁はその車を見て妹の言葉を聞いていた。

「これに乗って各地を慰問することになったから」

「命が助かって。処罰がそれなの」

「そう。衣食はくれるらしいから」

「じゃあ待遇いいかしら」

「破格だと思うわ」

落ち着いた声で述べる張宝だった。

「もうね」

「食べるものの心配しなくていいから」

「服もね」

「じゃあいいかしら」

張梁は納得しかけた。しかしだ。

張角がこんなことを言うのだった。

「美味しいもの。食べられるかな」

「安心していいわ、それも」

張宝はそれも保障した。

「それ位は大目に見てくれるから」

「そう、よかった」

「ただ。太らないように気をつけないと」

それはだというのであった。

「天和姉さんただでさえ胸大きいから」

「大丈夫よ。お姉ちゃんおっぱい以外は太らない体質だから」

「だといいけれど」

「まあとにかく。これからもね」

張梁が笑顔で話す。
「三人でやっていきましょう」
「うん、そうだね」
「いつも一緒でね」
こう話す三人だった。そしてだ。
その三人のところに親衛隊の面々も来てだ。再出発をきる三人だった。

第六十二話　完

２０１１・２・１２

# 第六十三話　劉備、牧になるのことその一

第六十三話　劉備、牧になるのこと

乱は終わった。しかしであった。
まだ最後の仕事が残っていた。朝になり華陀が言うのであった。
「それではこれからだ」
「あの書をだな」
「封印するのだ」
「そうだ。最後の大仕事だ」
こう関羽と張飛にも言う。
「このゴオオオオオオッド！米道のな」
「だからどうしてそこで大声で伸ばすのよ」
突込みを入れたのは張梁だった。三姉妹が曹操の天幕の前に来てだ。そのうえで書を直接手渡すことになっているのだ。それで来ているのである。劉備や曹操、袁術、その家臣達も集まっている。
「やけに格好いいし」
「こう言うべきだから言うんだ」
こう張梁にも話す。
「重要だから忘れないでくれよ」
「何か納得できるよね」
「そうね」
張角と張宝が顔を見合わせて話す。
「それに何か言い方が」
「やけに楽しいし」
「さて、それでだ」
ここまで話してだ。また言う華陀だった。
「その書をな」
「ええ、そうね」
曹操もそれを言う。

「封印してなのね」
「そうだ。それではな」
張角からその書を受け取りだ。そのうえで。
「病魔よ！」
何故かここでも病魔であった。
「光になれーーーーーーーーっ！」
「ちょっと待った」
ところがであった。ここで、であった。こう言って今まさに針を書に繰り出そうとする華陀を呼び止める声がしてきた。その声の主は。
「病魔を封印するのにまた大袈裟ですね」
「いや、それが俺のやり方だからな」
「封印するのに光になれというのもおかしな話です」
「そうか？俺は別に」
「この場合解放するでは？光になれとは」
「それもそうか」
「さて」
そんな話をしているうちにだ。于吉が出て来たのだった。
その彼を見てだ。三姉妹が言った。
「あっ、于吉」
「何でここに出て来たの？」
「また急に」
「この書は返してもらいますよ」
于吉はその三姉妹に穏やかに話して述べた。
そしてそのうえでだ。書を華陀から取ってだ。そのうえでだ。
「ではこれで」
「待て、まさか御前は」
「さて。どうでしょうか」
華陀に言われてもだ。とぼけてだった。
姿を消してだ。彼はその中で一行に告げた。

「では皆さん、縁があればまた会いましょう」
「あいつ、ひょっとして」
「そうね」
「おそらくはね」
怪物二人が何処からか出て来て話す。
「彼はその一人ね」
「間違いないわね」
こう話してだ。何処かに姿を消したのであった。
その二人を見てからだ。袁術が顔を顰めさせて言う。
「今、物凄く気色悪いものが見えたのじゃ」
「はい、私もです」
「私も見ました」
紀霊と楽就も応える。
「正視に耐えないものが」
「確かに」
「今のは何だったのじゃ？」
袁術はそのことを言わずにはいられなかった。

# 第六十三話　劉備、牧になるのことその二

「怪物にしか見えなかったぞ」
「ああ、俺の仲間達だ」
しかし華陀はへ依然としてこう袁術に話すのだった。
「気のいい奴等だ」
「あの、それで済ませるには」
「かなり無理があるかと」
紀霊と楽就は戸惑いながら華陀に返した。
「あの二人は」
「言い様がありませんし」
「そうか？何かおかしいところはあるか？」
だが、だった。彼にはわからないことだった。
「空も飛べるし。頼りになる連中だぞ」
「いや、それは幾ら何でも」
徐晃も突っ込みを入れずにはいられなかった。
「空を飛べるとなると。人間では」
「術だろうな」
そのこともこれで終わらせる華陀だった。
「見事な術だな」
「この男、違うわね」
曹操も華陀のその器には唖然となっていた。
「妖怪を仲間にしてもこの平然さ。有り得ないわ」
「今の絶対にそうよね」
「そうだよね」
馬岱と許緒もそれを話す。
「人間じゃないわよね」
「妖怪よね」
そんなことを話してだ。あの二人のことは殆どの者が人間ではな

いと断じた。だが問題はそれで終わりではなくだ。他にもあった。
三姉妹がだ。下喜にこう言われたのである。
「えっ、バイスとマチュアが？」
「はい、急にです」
「いなくなったの？」
「何でよ、それって」
「マネージャーがいなくなるなんて」
張梁と張宝も話す。
「これからまたお仕事がはじまるのに」
「おかしな話ね」
その三人の怪訝な話を聞いてだ。草薙がいぶかしむ顔になってだ。
彼女達に問うたのだった。
「おい、今バイスとマチュアって言ったな」
「うん、そうだけれど」
「あたし達のマネージャーよ」
「色々としてくれてるけれど」
「そうか。あいつ等も来ていたんだな」
「いるとは思っていたがな」
草薙だけでなく八神も言ってきた。
「あんた達についてたのか」
「そうしていたか」
「何かあるの？」
張角は二人の剣呑な様子にきょとんとした顔で返した。
「あの人達に」
「ある、だから言うんだ」
「それでだ」
こう話す二人だった。
「あの連中がいるということはな」
「他のオロチの奴等もいるか」
「オロチ？」

「何、それ」
張梁と張宝も怪訝な顔になってだ。草薙と八神に尋ね返した。
「蛇がどうかしたの？」
「怪しい感じはするけれど」
「簡単に言うとな」
草薙は自分でもわかるようにだ。こう三姉妹達に話した。
「あの連中は世界を破壊しようとしている奴等だ」
「この世界をって」
「ああ。人間の世界をな。破壊しようとしている奴等だ」
「あの連中も人間ではないの？」
「そうよね」
曹仁と曹洪は二人のことを知らないがそれでもこう言った。
「同じ人間なのに」
「そんなことをしてどうなるの？」
「あの連中は厳密に言うと人間じゃないからな」
草薙はオロチについてこう述べた。

# 第六十三話　劉備、牧になるのことその三

「オロチ一族っていってな。別の奴等だ」
「別の、ですか」
「じゃあ人の形をしているだけで」
孔明と鳳統もここでわかった。
「その存在は人ならぬもの」
「邪神の類なんですね」
「近いな」
草薙は鳳統の邪神という言葉に答えた。
「まあそういうところだ。どちらにしろあの連中も来てるとなるとな」
「はい、危険ですね」
「姿を消したといっても」
孔明と鳳統は目を伏せさせながらも強い声で述べた。
「ここはやはり」
「逃してはいけません」
「その通りね。それじゃあここはね」
曹操は劉備の軍師二人の言葉を受けてだ。すぐにこの断を下した。
「あの二人はお尋ね者ということでね」
「はい、では国中に」
「手配書や人相書きを配布しましょう」
夏侯姉妹も主にすぐに応えた。
「大将軍にもお話して」
「捕まえましょう」
「麗羽や孫策にも伝えておくわ」
曹操は彼女達にもだというのだった。
「美羽は丁度ここにいるし」
「任せてたも」

袁術は胸を張って曹操の言葉に応えた。
「わらわの治める地で勝手なことは許さん」
「とりあえずこれで殆どの州は大丈夫ね」
曹操は袁術に話してからこう述べた。
「ただ。徐州や益州は」
「誰か治めるに相応しい人物がいればです」
荀?がその曹操に述べた。
「その人物を牧に推挙すべきかと」
「そうね。この二州の牧ね」
曹操は考える顔になっていた。そうしてだ。
とりあえず今ここにいる面々を見回した。そのうえでだった。
劉備を見てだ。こう話したのだった。
「この乱の平定は貴女の功績が大きいし」
「私ですか?」
「ええ。今貴女官位とかはないわよね」
「そういうのは」
「このまま幽州にいるままじゃね」
このことも話す曹操だった。
「人材も多いし勿体ないわね」
「といいますと?」
「貴女、牧をやってみる?」
微笑んでだ。劉備自身に話した。
「何なら推挙するけれど」
「えっ、私が徐州にですか」
「そうよ。どうかしら」
「むっ、劉備が牧か」
袁術もそのことを聞いて明るい顔になる。
「よいのう。そなたが隣にいれば楽しいぞよ」
「楽しいのですか?」
「そなたはいい奴じゃ」

明るい顔でだ。劉備を見ての言葉だった。
「少なくとも孫策の奴よりはよっぽどいい奴じゃ」
「いいか？」
関羽は袁術の今の言葉を聞いてだ。そっと張勲に尋ねた。
「袁術殿と孫策殿は上手くいっていないのか？」
「ついこの前まで領地のことでいがみ合っていまして」
そうだと話す張勲だった。
「それで今もそのことで」
「御互い仲がよくないのか」
「些細なことですので御気になさらずに」
「まあ早く仲直りしてもらいたいところだな」
「とりあえず時間が回復してくれます」
笑顔で話す張勲だった。袁術も袁術で牧としての問題を抱えているのだ。
そうした話も交えてだ。そのうえでだった。
劉備はだ。また曹操に告げられた。
「それでどう？徐州の牧にね」
「どうしよう」
曹操の言葉にだ。劉備はまず戸惑う顔を見せた。しかしその彼女にだ。

# 第六十三話　劉備、牧になるのことその四

孔明と鳳統がだ。こう言ってきた。
「御受けするべきだと思います」
「ここは是非です」
これが軍師二人の言葉だった。
「このまま幽州で公孫賛さんのお世話になっている訳にもいきませんし」
「それに今この徐州は牧がいません」
「徐州の人達の為にもです」
「ここは御受けするべきです」
「徐州の人達の為にも」
そう言われるとだ。劉備もだ。
考える顔になってだ。こう述べたのであった。
「じゃあここは」
「そうだな。受けるべきだ」
「悪い話じゃないな」
趙雲と馬超も劉備に話した。
「桃香殿の為にもな」
「この徐州の人達の為でもあるしな」
「それじゃあ」
劉備は二人にも言われた。無論黄忠もだ。
「桃香さんが徐州の牧にならられたら」
「私がなったら」
「御母上も喜ばれるわね」
「御母さんも」
母のことを言われるとだ。自然に明るい顔になる彼女だった。
そしてであった。関羽と張飛もであった。
「姉上、是非御受けするべきだ」

「御姉ちゃんが牧になるなんて夢みたいなのだ」
こうだ。姉を笑顔で迎えて話した。
「天下万民の為にな」
「是非なのだ」
「わかったわ。じゃあね」
「話は決まりね」
曹操は劉備が頷いたのを見て笑顔で述べた。
「とりあえず徐州は決まりね」
「そうですね。益州については」
「また考えましょう」
荀?に応えてだった。そのうえでだった。
曹操は何進に劉備を徐州の牧にするように推挙した。そしてそれがすぐに受け入れられてだ。彼女は徐州の牧に任じられたのだった。
「おめでとう」
「よかったのです」
呂布と陳宮がだ。まだ徐州で乱の処理をしている劉備達に告げた。
「これからこの徐州の牧」
「頑張るのです」
「はい、わかりました」
劉備は笑顔で二人の言葉を受けた。
「私、頑張ります」
「それはいいのだが」
「けれどなのだ」
ここでだ。関羽と張飛が顔を顰めさせてだ。呂布と陳宮に尋ねた。
「何故呂布殿が使者なのだ?」
「それにそのチビも」
「ねねはチビではないのです!」
陳宮は張飛の今の言葉に怒って反論する。
「ねねにはちゃんと名前があるのです。このチビ!」
「何っ、鈴々をチビと言うのだ!」

「チビをチビと言って何が悪いのです！」
「御前に言われたくはないのだ！」
「それはこっちの台詞なのです！」
ムキになってだ。顔を見合わせて言い合う二人だった。関羽はその二人に呆れた顔になる。
だがとりあえずだ。呂布に対してまた問うのだった。
「何故使者としてここまで来たのだ」
「そのこと」
「そうだ。貴殿は董卓殿の配下ではないのか？何故朝廷の使者に」
「官位あるから」
それでだという呂布だった。
「だから。それで」
「朝廷の使者として来たのか」
「そういうこと。だからここに来た」
「ねねは御供なのです」
陳宮もここで言った。喧嘩は何時の間にか取っ組み合いになっている。
「そういうことなのです」
「そうだったのか」
「それで来たのだ」
関羽と張飛もこれで納得した。

# 第六十三話　劉備、牧になるのことその五

「そして我々は」
「徐州に入るのだ」
「劉備殿は左将軍にもなる」
呂布はこのことも話してきた。
「皆その配下ということになる」
「そうか、我々もか」
「徐州に入るのだ」
「皆で頑張る」
呂布は今度は二人に告げた。
「そうするといい」
「そこのチビも精々頑張るのです」
取っ組み合いは終わっていた。だがまだ張飛に言う陳宮だった。
「酒でも飲んで失敗するのです」
「鈴々はそんな失敗はしないのだ！」
また言い返す張飛だった。
「そういう御前も失敗なんかするななのだ！」
「ねねは失敗なんかしないのです！」
陳宮もまたムキになる。
「御前とは違うのです！」
「鈴々も御前なんかと違うのだ！」
「御前みたいに馬鹿ではないのです！」
「馬鹿に馬鹿と言われたくないのだ！」
あくまで仲の悪い二人であった。そんな二人をよそにだ。
劉備は晴れて徐州の牧になった。そしてだ。
それと共にだ。他のことも呂布によって話された。
「そう、正式にね」
「何か頭にくるのじゃ」

曹操と袁術がそれぞれ話す。
「美羽と孫策もね」
「二人がいい目を見るのは癪なのじゃ」
「それぞれ幽州と交州にね」
「牧になるとはなのじゃ」
「けれどそれはわかっていたでしょう？」
曹操はここで袁術・jに尋ねた。
「そのことは」
「確かにその通りなのじゃ」
このことは袁術も認めた。ただし渋々である。
「では納得してやるのじゃ」
「どうしてもというのなら」
呂布はここでその袁術に対して言った。
「益州の牧になるといい」
「それはいいのじゃ」
だが、だった。袁術はその案は断るのだった。
そのうえでだ。彼女はこんなことを言った。
「わらわは今の州だけで手が一杯なのじゃ。益州までとても手が回らないのじゃ」
「わかった。それなら」
「益州は他の誰かが治めるといいのじゃ」
何はともあれそこまでは求めない袁術だった。そうしてだ。
曹操と袁術はそれぞれが治める州に戻った。そして三姉妹もだ。
あらためて慰安の旅芸人となった。その再出発の際だ。
劉備達にだ。見送りを受けてだ。そこでだ。
「じゃあまたね」
「うん、またね」
劉備と張角が笑顔で応える。
「また舞台観ていいわよね」
「是非観てね」

こう話をするのであった。
「楽しみにしてるからね」
「うん、天和ちゃん」
劉備はここで張角の真名を呼んだ。
「これからも頑張ってね」
「そうするわ。ところでね」
「ところで？」
「今私の真名呼んでくれたよね」
満面の笑みでだ。劉備にこのことを話した。
「それじゃあね」
「天和ちゃんもね」
「劉備ちゃんの真名呼んでいい？」
こう劉備に問うのだった。
「私もね」
「うん、いいわよ」
劉備もだ。満面の笑顔で言葉を返した。

# 第六十三話　劉備、牧になるのことその六

「私の真名だけれどね」
「何ていうの？」
「桃香っていうの」
ありのままだ。名乗ったのであった。
「それが私の真名だから」
「わかったわ。じゃあ桃香」
張角は劉備その真名を実際に呼んでみた。
「またね」
「うん、またね」
こうしてであった。劉備は三姉妹と別れた。お互いに手を振り合ってだ。
黄巾の乱は終わり劉備は晴れて徐州の牧になりだ。すぐに幽州の仲間達を呼んだ。そうして程なくして皆彼女の下に集まったのだった。
「ううむ、想像以上じゃな」
「そうよね」
劉備の前でだ。厳顔と黄忠が笑顔で話をしている。
「桃香殿が牧になるとはのう」
「しかも左将軍にも任命されたわ」
「今では将軍様か」
厳顔は悪戯っぽい笑みも浮かべてみせた。
「大したものじゃ」
「ううん、何か私それでも」
だが、だった。劉備自身はこう言うのだった。
「これまでとあまり」
「変わってはおらん」
「そう言うのね」

「私は私だから」
こう言うのだった。
「そんな。特には」
「いえ、これも全てです」
その劉備にだ。魏延が強い声で話す。
「桃香様の人徳があらばこそです」
「私の？」
「はい、そうです」
こう劉備に話すのだった。
「だからこそ我々もそうして」
「私に。そんな」
「いえ、自信をお持ちになって下さい」
あくまでこう言う魏延だった。
「桃香様は本当に」
「だといいですけれど」
「ですから御自身に対して自信を持たれることです」
また言うのであった。
「桃香様は必ず。天下を治めるに足る器の方になられます」
「はい、それまでね」
魏延の言葉がさらに熱くなろうとしたところでだった。馬岱が言ってきた。
「あんたもう言い過ぎ」
「何っ、私の何処が悪い」
「悪いとは言わないけれど」
「では何だ」
「あんたの桃香様を見る目違うから」
こうだ。いささか呆れながら話すのだった。
「もうね。こんな目になってるから」
「どんな目だというのだ」
「こんな目よ」

実際に今の魏延の目になってみせる。熱くただ一点を凝視している目だ。
「本当によ。どんな目なのよ」
「私がそんな目をしているというのか」
「そうよ。全くあんたはねえ」
「臣下が主に忠義を誓うのは当然のことだ」
「あんたは忠義の限界超えてるから」
そんな話をするのであった。しかし何はともあれだった。
劉備は晴れて徐州の牧になった。それは確かであった。彼女は早速政治をはじめた。それについては孔明と鳳統が言うのであった。
「徐州の人口ですが」
「おおよそこの位です」
「えっ、もうできたの？」
劉備は自分の執務用の机で二人の話を聞いた。そこで言うのだった。
「早いわね」
「元々の戸籍がありましたので」
「それを元に統計を取りました」
そうだというのである。

# 第六十三話　劉備、牧になるのことその七

「およそ三百万です」
「それが徐州の人口です」
「わあ、多いね」
劉備はその人口を聞いて驚きの声をあげた。
「幽州の倍近くいるんじゃないの？」
「そうですね。徐州は土地がいいですし」
「住みやすい場所ですから」
軍師二人は人口が多い理由をそこに求めた。
「寒く土地が痩せた幽州とはやはり」
「かなり違います」
「じゃあ治めるのは」
「はい、それなりに難しいです」
「それは注意して下さい」
「そうよね。異民族はいないけれど」
それでもなのだった。
「この州は長い間牧がいなかったですし」
「それで政治が滞っていました」
「それをしっかりと立て直すことがです」
「桃香様の務めです」
「大変ね」
それは劉備にもわかることだった。
「けれどやらないとね」
「はい、頑張って下さい」
「及ばずながら私達も」
「皆もいてくれるから」
「ですから。本当にです」
「頑張って下さい」

こうしてだった。軍師二人は劉備の政治を助けるのだった。
それは彼女達だけでなくだ。関羽達もだった。
五人で兵を連れて見回りをしている。その中でだ。張飛が言うのだった。
「結構荒れているのだ」
「そうだな。長い間牧がいなかったからな」
関羽もだ。少しぼやきながら話した。
「そのせいか。どうもな」
「田畑も街もだな」
趙雲もいる。
「どうもな。長い間ほったらかしにされていたせいか」
「寂れてるな」
馬超は関羽と同じ顔になっている。
「どうしたもんだよ」
「けれど。荒廃というところまではいかないから」
黄忠は少し楽観的に述べた。
「それに人もそんなに減っていないし」
「何とかなるか」
「ええ、少し時間はかかるけれどね」
それでもだというのだ。
「この州は上手にまとめられるわ」
「けれど鈴々は政治のことはわからないのだ」
実に張飛らしい言葉だった。顔も困ったものになっている。
「街造りも感慨もできないのだ」
「それあたしもだよ」
馬超もだった。ぼやく顔になっている。
「政治って言われてもな」
「そうなのだ。さっぱりわからないのだ」
「田畑とかな。そういうのどうやれば」
「それは安心していいわ」

その二人にだ。黄忠が微笑んで話す。
「朱里ちゃん達がいるし」
「あの二人がなのだ」
「しっかりしてるからか」
「ええ。それに私や星も政治のことは少しはわかるから」
「そうだな。私も公孫賛殿のところで多少していた」
趙雲もここでそれを話した。
「あの方のところには人材がいないからな」
「言葉は現在形なのだな」
「そうだ。幽州は実質あの方が一人で切り盛りしている」
そうした状況だというのだ。
「それなりに優れた方だが」
「目立たないのだ」
「どうしてもだよなあ」
張飛と馬超も話す。

# 第六十三話　劉備、牧になるのことその八

「けれど星も政治できるのだ」
「そうだったんだな」
「とはいっても朱里や雛里程ではない」
それを言う趙雲だった。
「私は政治はあくまでできる程度だ」
「そうなのだ」
「あまりできないんだな」
「そうだ。これは謙遜ではない」
趙雲はそこを念押しした。
「決してな」
「やっぱり政治は難しいのだ」
「あたし達にはさっぱりだな」
「それはそれでいいのよ」
黄忠はぼやく二人にまた話した。
「貴女達には貴女達ができることがあるから」
「だったらいいのだ」
「本当にそうならな」
「政治ができるのはあの二人の他にはだ」
趙雲も考える顔で話す。
「私と紫苑、それに桔梗殿に愛紗だな」
「私もなのか？」
「御主は政治の書も読んでいるな」
「それはそうだが」
「ならある程度はできる筈だ」
こう話すのだった。
「それはな」
「だといいのだが」

「少なくとも今はわかる者は全て働いてもらわないといけない状況だ」

それは間違いないというのである。

「だから御主もだ」

「わかった。それではだ」

関羽もここで話した。

「私も政治をやらせてもらおう」

「そうだ。それでいい」

また言う趙雲だった。

「御主も働け。充分な」

「そうさせてもらう」

こんな話をしながら国を巡回していた。そうして賊達を平定しながらだ。国を安定させだしていた。徐州の政治ははじまったばかりだった。

徐州の政治がはじまった前にだ。曹操はその帰路は途中まで袁術達と同じだった。そこでだった。

別れの前の宴の場でだ。曹操は呆れた顔で曹仁と曹洪に話していた。

「凛はねえ」

「はい、わかります」

「あの娘は」

二人は呆れた顔で曹操に応えていた。

「お酒には弱かったのですね」

「そうだったのですね」

「そうね。気付かなかったわ」

曹操もだ。呆れた顔になっていた。

「それはね」

「けれど。それでも」

「あれはないのでは？」

「ないわね、本当に」

その郭嘉を見ての言葉だった。
郭嘉は袁術のところにいた。そしてだった。
彼女にもたれかかりだ。真っ赤な顔になっていた。
「美羽様、あのですね」
「うむ、何なのじゃ？」
袁術もだ。笑顔で応えている。
「それで」
「今日でお別れですね」
「そうじゃのう」
その話をされるとだ。袁術は悲しい顔になった。
「折角凛と一緒になれたのにな」
「そうですね。私は華琳様の家臣ですが」
「しかしそれでもだというのじゃな」
「はい、美羽様の友です」
それだというのである。
「それは確かです」
「そうじゃ。わらわ達は親友同士じゃ」
それを言う袁術だった。

# 第六十三話　劉備、牧になるのことその九

「永遠にじゃ」
「はい、これからも永遠に」
「それは約束じゃぞ」
「わかりました」
こうだ。酒に酔った真っ赤な顔で袁術に言うのであった。
そんな彼女を見てだ。張勲がこんなことを言った。
「私と凛ちゃんなんか昨日一緒の褥で寝ましたし」
「ああ、あれね」
曹操がそれを聞いて言う。
「二人で昼寝してたわね。木陰で」
「あれは普通では？」
「褥という程のものではないのでは？」
夏侯姉妹が話す。
「別にあれは」
「肌を重ね合うというものでは」
「けれどそれがいいのよ」
曹操は楽しげに笑って話すのであった。
「美羽の態度が見ものよ」
「ううむ、美羽殿もあおちらの気が強いですが」
「華琳様もやはり」
「ええ。何か可愛い娘はね」
多少だ。嗜虐性のある笑みを浮かべて話す曹操だった。
「いじめたくなるのよ」
「ですから我々もですか」
「褥においては」
「そうよ。そうしているのよ」
こう話すのであった。二人にもだ。

「そしてそれはあの娘も同じなのね」
「張勲殿もですか」
「そちらの方でしたか」
「そうなるわね」
こう話してであった。三人の成り行きを見るのであった。
そしてだ。三人はというとだ。やはり袁術が言った。
「ええい、幾ら七乃といえどもじゃ！」
「私がですか」
「そうじゃ。凛は渡さぬからな！」
このことを力説するのであった。
「何があってもじゃ。誰にも渡さぬ！」
「あらあら。我儘ですね」
「我儘ではない！」
あくまでこう言う。
「凛とじゃ。これからもずっといるのじゃ！」
「だから私の家臣なんだけれど」
曹操が横から言う。
「その辺り忘れないで欲しいわね」
「あの、ですが」
「今の三人は」
「わかってるわよ。だから見てるだけにしてるのよ」
何だかんだで楽しんでいる曹操であった。三人を見てだ。
袁術は明らかに張勲に対抗心を燃やしていた。郭嘉を自分の左肩にもたれかけさせてだ。そのうえで張勲に対して言うのであった。
「わらわ達は口移しで食べ合った仲じゃぞ」
「ですから私達は一緒に寝た」
「わらわ達の方が上じゃ！」
「いえいえ、私達の方が」
「どっちでもいいんじゃないの？」
許緒は率直な感想を述べた。

「何か。凛さんの取り合いになっていて」
「そうよね。仕方ないわね」
韓浩も苦い顔になって笑っている。
「見ていて微笑ましくはあるけれど」
「微笑ましいの？」
「ああ言い合う程仲がいいのはね」
「それがいいんだ」
「そうよ。いいの」
こう話すのだった。彼女も三人を見ている。
しかしだった。ここでだ。
それまで酔っていてもたれかかっているだけだった郭嘉がだ。不意に動いてだ。
そうしてだった。袁術の左頬に顔を寄せてだ。
接吻した。そうしたのだった。これには誰もが驚いた。
「な、何と！？」
「そうする！？ここで」
「何ということを！」
「それは幾ら何でも！」
皆唖然とする。それは曹操と張勲も同じだった。
「そう来たの！？」
「まさか」
唖然となってだ。同時に声をあげたのであった。

# 第六十三話　劉備、牧になるのことその十

「そのタイミングでの接吻は」
「ないのでは」
「美羽様、またお会いしたら」
郭嘉はとろんとした目になって両手で袁術を抱き締めてだ。そうして話すのだった。
「宜しく御願いします」
「う、うむ」
袁術本人もだ。これには唖然となっていた。
そしてその唖然となっている顔でだ。郭嘉に応えていた。
「そうじゃな。わらわもな」
「文を送りますので」
「わらわもじゃ」
戸惑いながらも応える袁術だった。とりあえず顔は今は蒼白だ。驚きによってだ。
だがそれが次第に赤くなりながらだ。こう言うのであった。
「送るぞ。ただじゃ」
「ただ？」
「わらわの唇に接吻したのはじゃ」
それをだ。郭嘉本人に話す。
「凛がはじめてじゃぞ」
「私はですか？」
「そうじゃ。凛がじゃ」
こう言うのである。
「ううむ、しかし」
「しかしなんですか」
「接吻とは。よいものじゃな」
真っ赤な顔になっていた。そのうえでの今の言葉だった。

「凛、よいぞ」
「私も接吻ははじめてでした」
「ではお互いはじめて同士じゃな」
「はい、そうですね」
「さらによいぞ。わらわ達の仲は永遠じゃ」
こんな有様になってしまっていた。
それを見て。落ち着きを取り戻した曹操が言う。
「これはねえ」
「何といいますかですね」
「ええ、そうね」
こう張勲に応える。二人とも笑顔が引きつっている。
「凛はまだ全然手をつけていなかったけれど」
「そうだったのですね」
「何か全部美羽に取られちゃったわね」
「そうなってしまいましたね」
「仕方ないわね」
今度は困った笑顔になる曹操だった。
「こうなったらね」
「ですが主従関係は続けられますね」
「ええ、それはね」
続けるというのである。
「けれど。褥はね」
「諦めるしかありませんか」
「残念だけれどね」
また言う彼女だった。
「けれど。あの二人は」
「異常に仲がいいと仰るのですね」
「ええ。貴女も入れてね」
さりげなく張勲を見ることも忘れない。
「それはまたどうしてかしら」

「色々とありまして」
にこりと笑って話す張勲だった。
「私達には」
「三人で、よね」
「はい、私達三人は」
まさにそうだというのである。
「他の世界でもです」
「それを言うと複雑そうね」
「偶像支配者という世界で」
「おい、それ英語読みしたらどうなるんだ？」
ヘヴィ＝Ｄが思わず突っ込みを入れた。
「洒落にならないだろうが」
「確かにそうかも知れませんね」
張勲はにこりと笑って返す。
「ですからそれはあえて言わないということで」
「それでもあの二人は凄いな」
「そうだな」
ラッキーとブライアンもそれを話す。
「っていうかこの世界ってな」
「女同士もいいのか」
「別に男同士でもいいわよ」
それを言うのは曹操だった。
「とはいってもあんた達はそっちの趣味はないのね」
「俺はな。そういうのには興味はないな」
ヘヴィ＝Ｄが答える。
「特にな」
「そうね。ただそういうことに縛りはないから」
「そのことはか」
「覚えておいてね」
「一応わかった」

多少ぶっきらぼうに返すヘヴィ＝Dだった。
「それはな」
「俺もな。一応はな」
「わかった」
ラッキーとブライアンも応える。
「まあ乱もすぐに終わったしな」
「何よりだったな」
「そうね。それはね」
そのことは素直に喜んでいる曹操だった。
「処罰も軽いもので済んだし」
「では国に帰りましたら」
「すぐにですね」
「ええ。政治よ」
こう夏侯姉妹に返す。
「また忙しくなるわね」
「はい、ではそちらにも」
「励みましょう」
相変わらずの袁術と郭嘉を見ながら話すのであった。黄巾の乱は完全に終わった。しかしであった。それは新たな乱のはじまりでもあった。

第六十三話　完

２０１１・２・１５

# 第六十四話　公孫賛、誰からも忘れられていたのことその一

第六十四話　公孫賛、誰からも忘れられていたのこと

袁紹と孫策はこれまでの勲功によりそれぞれ幽州、交州の牧になった。

孫策はそれでよかった。しかし袁紹はだ。

「客が来ていますの？」

「はい、そうです」

「今ここに」

こうだ。顔良と文醜が話す。

「来ていますが」

「どうされますか？」

「誰なのでして？」

二人の言葉にだ。いぶかしみながら返す袁紹だった。

「華琳からの使者ではありませんわね」

「はい、本当によく知らない人です」

「どっかで見た気もしますけれど」

「何処かで？」

袁紹は文醜のその言葉に反応を見せた。

「といいますと私も何処かで会った可能性もある方ですわね」

「麗羽様、とりあえずはです」

「御会いされてはどうでしょうか」

彼女の左右に控えている田豊と沮授が進言してきた。

「どなたかわかりませんが」

「今は斗詩達もいますし」

部屋には護衛役である審配もいた。彼女の目が光った。

「警備は万全です」

「何かあってもです」

「安全だというのですね」
袁紹は軍師二人の言葉を聞いて述べた。
「そうですわね」
「はい、ですから」
「ここは会うべきです」
「わかりましたわ。それでは」
こうしてだった。袁紹は彼女達を傍に置いたうえでその人物と話をした。それは。
「あら、貴女は」
「おい袁紹、幾ら何でも酷いぞ！」
公孫賛であった。彼女は右手を拳にしてそれを振りかざして袁紹に抗議してきた。
「どうしてだ、幽州を私から奪った！」
「誰でして？」
しかしであった。袁紹は怪訝な顔で彼女にこう告げた。
「貴女は」
「えっ、まさか御前も」
公孫賛はここでわかった。袁紹が自分をどう見ているのかをだ。
「私のことを覚えていないのか？」
「だから誰でして？」
本気で怪訝な顔で言う袁紹だった。
「覚えがありませんわよ」
「そうですよね。何か何処かで御会いしたとは思うのですけれど」
「誰だったっけ」
顔良と文醜も階段の下でそれぞれ言う。階段の上の袁紹の左右には田豊と沮授がいる。そして部屋の扉には審配が控えている。
「ええと、何処で御会いしました？」
「ちょっと行ってくれないかな」
「おい、顔良と文醜までそう言うのか」
「あれっ、私達の名前を知ってるのね」

「いやあ、あたい達も有名になったもんだぜ」
二人はこう言うだけであった。
「ううん、それは嬉しいけれど」
「あんたはそれで誰なんだ？」
「だから公孫賛だ！」
自分の名前を必死に訴える。
「白馬長史だ。知らないのか！？」
「白馬長史？」
「誰だったでしょうか」
今度は田豊と沮授が怪訝な顔で言った。
「そんな人は知りませんけれど」
「そうよね。公孫賛という人も」
軍師二人も知らなかった。尚この二人が袁紹陣営の頭脳である。
「それに幽州の牧は長い間空席でしたし」
「それで麗羽様が入られたし」
「そうですわ。幽州はそれが問題でしたのよ」
そのあらたに幽州の牧となった人間の言葉だ。

# 第六十四話　公孫賛、誰からも忘れられていたのことその二

「それで私が任じられたのでしてよ」
「牧は前からいたぞ！」
公孫賛も必死だ。
「私だ、この公孫賛だ！」
「だから誰なのですか？」
「貴女の名前なのはわかりますけれど」
相変わらずの調子の軍師二人である。彼女達も怪訝な顔になっている。
「幽州は以前烏丸討伐の時にも入りましたけれど」
「劉備さんがいましたね」
「そうそう、劉備さん達がね」
「いい奴等だよな」
顔良と文醜は軍師二人に顔を向けて応えた。
「あの人徐州の牧になったのよね」
「凄い出世だよな」
「ですが劉備さんには相応しい地位ですわね」
袁紹も言う。劉備については彼女も笑みを浮かべて話す。
「牧も」
「そうですね。優れた人物は必ず世に出ます」
「ですから牧になられたのも当然です」
田豊と沮授も主の言葉に賛同して述べる。
「あの方には優れた臣が揃っていますし」
「若しかすると牧以上の方になられるかも」
それ以上の人物だというのである。劉備については彼女達もよく知っている。そのうえ実に好意的で高い評価も与えていた。
「末が楽しみですね」
「まことに」

「だから桃香は知っていて何故私を知らない！？」
公孫賛はいい加減苛立ってきていた。
「私がだ。幽州のだな」
「あの、だから幽州には」
審配も彼女に言ってきた。
「牧は本当に誰も」
「いたんだ！何故誰もそれを知らない！」
「麗羽様、どうされますか？」
「ここは」
軍師二人はラチが明かないと判断してだ。袁紹に問うた。
「この方は」
「どうされますか？」
「見たところ無能ではありませんわね」
袁紹は公孫賛の素質は見抜いた。
「それに品性も卑しくはありませんわね」
「ではここは」
「用いられますか」
「そうですわね。悪くありませんわね」
こう判断してだ。そのうえで公孫賛にあらためて声をかけた。
「そこの貴女。名前は確か」
「だから公孫賛だ！」
抗議めいた口調で袁紹に言い返す。
「いい加減覚えてくれ！」
「それでどうしますの？私の配下になるのなら歓迎しますけれど」
「だからどうしてそんな話になるんだ。だから私は幽州の牧だ」
「ではお嫌ですの？」
「そうした問題ではない！私はだ」
「あの、我が陣営に加わるつもりはないみたいです」
「そのつもりはないようですが」
ここでまた主に言う田豊と沮授だった。

「どうされますか、それでは」
「一体」
「仕方ありませんわね。それではですわ」
袁紹も眉を顰めさせていささか残念な顔になってだ。こう田豊達に対して述べた。
「そちらの何とかさんに路銀と食事を。そうしてから見送りなさい」
「わかりました」
「じゃああんた、一緒に食おうな」
「だからどうして皆私のことを知らないのだ!?」
公孫賛は顔良と文醜のエスコートを受けながらまだ言う。
「ましてや袁紹!御前何度私に会った!」
「初対面ですわよ」
本気で言う袁紹だった。
「いえ、本当に」
「そうですよね。本当に誰なんでしょうか」
最後に審配が言う。かくして公孫賛は袁紹陣営の誰からも忘れられ覚えてもらえないまま。止むを得なく袁紹の領地を後にした。そうして次に向かったのは。
曹操に対してだ。一連の自分自身に起こったことを話していた。
「だからあいつは酷いんだ!勝手に幽州の牧になったうえに私のことを全く覚えていないんだ!曹操、このことについてどう思う!」
「あの娘らしいわね」
曹操は玉座に座りながら左手を拳にしてそれで頭を支えながら述べた。

# 第六十四話　公孫賛、誰からも忘れられていたのことその三

「麗羽はね。時々普通にそうしたことがあるから」
「困りものです」
「全くです」
曹操の左右に控える曹仁と曹洪が応える。ここでは荀？と荀攸が階下に控えている。
「あの方らしいですが」
「本当に相変わらずですね」
「そうね。気持ちはわかるわ」
「そうだろう、曹操ならそう言ってくれると思っていた！」
曹操の言葉を受けてだ。公孫賛は満面の笑顔になった。
そうしてそのうえでだ。さらに言うのであった。
「いや、本当にだ。幽州の牧は私、この公孫賛なのだ！」
「話は聞いたし気持ちはわかったわ」
ところがだった。曹操はここでこんなことを言い出した。そのうえで公孫賛を見てだ。怪訝な顔になって、彼女もその顔になってこう言うのであった。
「貴女は。誰なの？」
「な、何っ！？」
「見ない顔だけれど。誰なの！？」
「ちょ、ちょっと待て。曹操までそう言うのか！？」
「だから誰なのよ、貴女」
荀？も真剣に怪訝な顔で彼女に問うた。
「全然知らないわよ」
「そうだ。誰なのだ？」
「見たところ武人らしいが」
曹洪と曹仁も同じことを言う。
「それに幽州に長い間牧はいなかった」

「そのことが朝廷にとって悩みの種の一つだったわ」
「だから麗羽殿の牧就任は」
「朝廷にとっても渡りに舟だったのだけれど」
「そうよね、その通りだわ」
曹操は従妹達の言葉に応えて頷いた。
「それで劉備が徐州に入ったしね」
「喜ばしいことが続きますね」
「全くです」
荀？とその姪も言う。
「こちらの武人が誰かは知らないけれど」
「私もです」
「けれど。見たところそれ程悪い人物ではないようです」
「資質はそこそこといったところでしょうか」
二人は今度は公孫賛を見ながら話した。
「それでどうされますか？」
「この人物は」
「そうね。何だかんだで人材は一人でも多く必要だし」
曹操も袁紹と似たようなことを言う。
「貴女、よかったら私の陣営に来る？」
「私の名前を言ってみてくれ」
公孫賛は曹操の誘いにこう返した。
「答えてくれたら考えさせてもらうが」
「だから誰なの？」
これが曹操の返答だった。
「名前言ったかしら」
「言ってないですよね」
「そうですよね」
「幽州の牧なんてＵＭＡを出す始末だし」
「一言も」
「な、言った筈だ！」

曹操だけでなく他の面々もそれぞれ顔を見合わせながら話す。
だが本人には確かに記憶があった。それで言い返す。
「公孫賛だ！白馬長史のだ！」
「だから知らないわよ、そんな人」
荀？がまた怪訝な顔で言う。
「最近噂になっているあの人？袴で胴当てを身に着けた口髭の男」
「あの男一体何者かしら」
「時々見るけれど」
曹洪と曹仁もその人物のことは知っていた。彼のことはだ。
「一説によるとその名前は藤堂だとか」
「娘さんがいるらしいわね」
「そうよね。その人のことかしら」
「何故そんな怪しい人間のことが知られていて私のことは知られていないのだ！」
ここでもいい加減嘆きが入った。

# 第六十四話　公孫賛、誰からも忘れられていたのことその四

「曹操、御前とも何度も会っているんだぞ！」
「だから覚えてないわよ」
彼女も本気で返す。
「誰なのよ、本当に」
「こんな有様だったんだ」
場所は変わる。公孫賛は残念といった顔で酒場にいた。そうしてそのうえで夏侯淵に対して話していた。横では夏侯淵のその姉が歌っている。
その歌を聴きながらだ。公孫賛は彼女に訴えていた。
「酷いと思わないか。誰も私のことを覚えていないんだ」
「わかるぞ、その気持ち」
夏侯淵は彼女のその言葉にしみじみとした口調で返す。
「全くな。酷いものだ」
「夏侯淵殿、わかってくれるか」
「わかる。私もそういうところがあるからな」
それでわかるというのである。
「全くな。実にな」
「済まない、しかし貴殿は私の名前を覚えていてくれるか」
「忘れる筈がない。私も色々と苦労してきた」
「そうだったのか」
「幼い頃から姉者と」
実際に姉をちらりと見ての言葉だった。
「麗羽様もおられたのだぞ」
「二人もか」
「そうだ。何かをする度に私はとばっちりを受けていた」
「私はいつも忘れられていた」
「同じだ。だからわかる」

「そうだったのか」
「しかも貴殿はあれだったな」
夏侯淵はここで公孫賛に対してこんなことを話した。
「学園の日々ではまだよかったな」
「しかし夏や交差になるとだ」
「扱いが悪くなっていっているな」
「張角の方が扱いがいいのだぞ」
公孫賛にとってはそれも嫌なことであった。それも実にだ。
「どうなのだ、これは」
「そうだったな。貴殿の苦労は続くな」
「困ったことだ。それにだ」
「これからのことか」
「どうすべきだろうな」
飲みながら真剣に夏侯淵に相談する。
「これからだが」
「一度朝廷に行ってみたらどうだろうか」
夏侯淵はこう提案した。
「貴殿の資質なら朝廷でも用いられるだろう」
「朝廷か」
「そうだ。大将軍も何かと大変だ」
宦官達との対立故である。政治だけではないのだ。
「だからだ。そうしてみてはどうか」
「そうだな」
公孫賛も夏侯淵のその言葉に頷いた。
「そうするとするか」
「それがいい。それではな」
「うむ、そうしよう」
こうしてだった。公孫賛の次の行く先が決まったのだった。そして決まったその時にだ。それまで歌っているだけだった夏侯惇が彼女に言ってきた。

「そこの御主」
「私か？」
「そうだ、御主だ」
名前は言わないのだった。
「御主も歌うか？どうだ？」
「歌か。歌は好きだが」
「私と共に歌うか。どうだ？」
「悪くないな、それではな」
「凛には負けていられないからな」
何気に密かな対抗心も見せる夏侯惇だった。
「だからだ。共にな」
「うむ、そうさせてもらおう」
「歌はいいものだ」
夏侯淵もここでは微笑む。
「気持ちが晴れる」
「そうだな。それでは一曲な」
「一曲と言うな」
夏侯惇がまた公孫賛に告げた。
「何曲でも歌おうではないか」
「そうだな。それではそうさせてもらうか」
公孫賛も頷いてだ。そうしてであった。

# 第六十四話　公孫賛、誰からも忘れられていたのことその五

二人で歌いその憂いを和らげた。そのうえで都に向かった。しかしであった。

いきなりだ。何進の屋敷に入ろうとしたところでだ。彼女が見たこともない美女にこう言われたのだった。

「待て、貴殿は駄目だ」

「何っ、どうしてだ？」

「貴殿、何者だ」

こうだ。その女に鋭い目で言われたのである。

「素性がはっきりしない者を大将軍のお屋敷に入れる訳にはいかぬ」

「私は公孫賛だ」

こう己の名を名乗って返した。

「それでわかる筈だ」

「知らぬな」

だが女は鋭い目でまた返す。

「そうした名はな」

「馬鹿な、何故知らないのだ」

「知らぬものは知らぬ」

また言う女だった。

「とにかくだ。素性のわからぬ者を入れる訳にはいかぬ」

「どうしてもというのか」

「そうだ、どうしてもだ」

「くっ、御主何者だ！」

たまりかねてだ。女の名を問うた。

「見たところ文官だが」

「私か。私の名はだ」

「何だというのだ」

「司馬慰だ」

こう名乗ったのであった。
「司馬慰仲達だ。覚えておくのだな」
「司馬慰だと？あの宮中で近頃名を知られてきている」
「名を知られているかどうかは知らぬ」
それはだというのであった。
「だが。司馬慰は私だ」
「そうか。御主がか」
「とにかくだ。貴殿が入ることはだ」
「駄目だというのか」
「そういうことだ」
こう告げてであった。司馬慰は公孫賛を屋敷には入れなかった。
そうしたことがあった。
そしてであった。彼女は何進の屋敷から己の屋敷に戻った。そこで影達と会っていた。
「姉上、何かあったのですか」
「大将軍のところで」
「ええ、少しね」
こうだ。影達に話すのだった。
「公孫賛が来ていたわ」
「あの幽州のぼくちくだった」
「あの女がですか」
「大将軍の屋敷に入ろうとしていたわ」
このことを話した。
「けれど。名前を知らないということにしてね」
「追い出しましたか」
「そうされたのですね」
「今。大将軍の傍に武人を置くことは避けないとならないわ」
それでだというのであった。
「だからね。排除したわ」
「よい御考えかと」

「それで」
影達も司馬慰のその言葉に頷く。
「張譲殿もそろそろ動かれますし」
「ですから」
「そうよ。だから今はね」
公孫賛はだ。彼女の傍にいてはならないというのである。
「去ってもらったわ」
「では我々もですね」
「今は」
「ええ。病になるわ」
不穏な笑みを浮かべてだ。司馬慰は言った。
「そうなるわよ」
「わかりました。それでは」
「私達も」
影達も司馬慰のその言葉に応えた。
「そうしましょう」
「そうしてですね」
「今は隠れ。そして」
「ことの成り行きを見守りましょう」
こんな話をしてだ。彼女達は闇の中に消えた。そうしてであった。
司馬慰は病を得て姿を現さなくなった。それが宮中にさらに不穏な空気を増させていた。

# 第六十四話　公孫賛、誰からも忘れられていたのことその六

公孫賛はだ。司馬慰に追い出されだ。仕方なく洛陽を出てだ。
何処かに向かおうとしていた。だが、だった。
「困ったな。どうしようか」
都に行ってもどうにもならなかった。それで、であった。
正直行く先に困ってしまっていた。白馬に乗って何処かに行こうとするがだ。
何処に行こうか決めかねてだ。困惑していたのだ。
それでも前に出ようとする。しかしここで、であった。
「待つのだ、そこの者！」
「むっ！？」
声がした方に顔を向ける。するとそこには。
洛陽の城壁の上にだ。仮面を着けた白衣の女が立っていたのだった。公孫賛はその彼女の姿を見てだ。顔を顰めさせながらこう言った。
「御前、趙雲だな」
「違う！」
それは否定する美女だった。
「私はだ」
「何だというんだ、それで」
「愛と正義の戦士華蝶仮面！」
それだというのである。
「それが私の名だ！」
「ああ、わかった」
一応それは聞く公孫賛だった。呆れながらだ。
「そういうことか」
「そうだ。そして御主」
「公孫賛だが。知っているな」

「安心しろ、知っている」
こう返すその美女だった。城壁の上でだ。両手を腰にやってそのうえで立ってその姿で公孫賛に対して告げているのである。槍はその背にある。
「それはだ」
「そうか。それは何よりだ」
名前を知ってもらっていると聞いてほっとする公孫賛だった。しかしだ。
ここでだ。美女はわざとこう言った。
「公孫白だな」
「御前、わざと間違えているだろう」
「気のせいだ」
こう返すのだった。
「それはない」
「本当か？」
「そうだ。そして御主行き先に困っているな」
話は本題に入った。
「そうだな」
「そうだ。一体どうしたものか」
「言っておくが袁紹殿や曹操殿だけではないぞ」
美女の言葉は釘を刺すものになっていた。
「孫策殿や袁術殿もだ」
「まさか私のことを知らないのか」
「その通りだ。全く知らない」
そう話すのであった。
「御主のことはな」
「だからどうして誰も私のことを知らないのだ」
それがだ。公孫賛にはたまらなく嫌だった。顔にその苦悩が出ている。
「私はこれでもいつも頑張っているのだぞ」

「それは仕方ないとしてだ」
「おい、仕方ないのか」
「そうだ。だが御主に行く先が一つだけある」
「董卓殿か？」
もう一人の群雄の名前がここで出た。
「あの御仁のことはよく知らないのだが」
「違う、御主はあちらでも知られていない」
ここでも駄目出しであった。
「全くだ」
「全くなのか」
「そうだ。だからあちらにも行かない方がいい」
「ではあそこか」
董卓も駄目となるとだ。公孫賛にもわかったのだった。
「桃香のところか。徐州の牧になったのだったな」
「その通りだ。そこに行くといい」
「ううむ、そうか」
「そうだ。それでどうだ？」
「わかった。桃香ならばな」
公孫賛はようやく笑顔になって述べた。

# 第六十四話　公孫賛、誰からも忘れられていたのことその七

「仲良くやれるしな」
「その通りだ。では今から徐州に行くといい」
「わかった。では今から行くとしよう」
「それではだ。さらば！」
美女は公孫賛に告げ終わるとだ。早速城壁の上から姿を消したのだった。
そして公孫賛はすぐに白馬を徐州に向かわせた。彼女も劉備の下に加わることになったのである。
馬超は洛陽を後にしようとしていた。丁度馬に乗ったところだ。
だが、だ。彼女は周囲を見回してだ。その太い眉を顰めさせている。
そしてそのうえでだ。こんなことを言うのであった。
「星の奴何処に行ったんだ？」
同行している趙雲のことを気にかけての言葉だった。
「全く。急にいなくなるな」
「呼んだか？」
しかしであった。その趙雲が出て来た。己の馬に乗ってだ。
そしてそのうえでだ。馬超に対して言うのだった。
「済まないな、少し寄るところがあった」
「何だよ、厠か？」
「まあそんなところだ」
微笑んでこう馬超に返す。
「だがもう済ませた」
「そうか。じゃあ行くか」
「そうするとしよう。しかし翠よ」
「んっ、何だよ」
「御主今厠と言ったが」

趙雲が言うのはこのことだった。
「御主の方は大丈夫なのか？」
「厠かよ」
「そうだ。また漏らすようなことはしないな」
「ば、馬鹿言うなよ」
馬超は趙雲の今の言葉に顔を真っ赤にさせて反論する。
「そんなのもう済ませたよ、とっくにな」
「そうか。ならいいのだがな」
「そっちこそメンマは持ってるよな」
「安心せよ。それはある」
趙雲は妖しさを漂わせた妖艶な笑みでだ。馬超に返して述べた。
「ここにな」
「ああ、もうあるんだな」
「そうだ。これは外せぬ」
趙雲にとってはだ。まさにそうしたものだった。
「あれがなくては私は生きてはいけぬのだ」
「メンマってそこまで凄いんだな」
「御主も食べればわかる」
「あたしもメンマは好きだけれどな」
「そうだな。しかし御主の分はない」
それはだというのである。
「悪いがな」
「ああ、そこまでは言わないからな」
「そうか。では出発しよう」
あらためて馬超に告げる。そうしてであった。
二人は馬を進ませだした。そしてその夜は。
野宿だった。二人はそれぞれ横になる。ところが。
趙雲が寝転がる馬超のところに来てだ。そっと囁くのであった。
「寒くないか」
「んっ、これ位平気だけれどな」

「いやいや、寒いだろう」
妖しげな笑みでだ。馬超の耳元で囁く。
「だからだ。ここはだ」
「ここはって何だよ」
「添い寝をしてやろう」
こうだ。馬超に囁くのである。
「どうだ。それで」
「ま、まさかそれは」
「そうだ。真名で呼び合う名前だ」
そのことを理由にしてだ。寝ている馬超に己の身体を添わせてだ。
さらに言うのであった。
「どうだ?今晩は」
「お、おい。それってまさか」
「そのまさかだ。だからだ」
「あたしはまだそういうこと経験ないんだよ」
「安心しろ。それは私もだ」
「ならどうしてそんなこと言うんだ」
「いいではないか。どうだ、今夜は二人で」
自分の胸をだ。馬超の右手に当てさせる。さりげないが露骨なアプローチである。

# 第六十四話　公孫賛、誰からも忘れられていたのことその八

「楽しまないか？」
「それ本気で言ってるのかよ」
「いや、冗談だ」
ここでこう言う趙雲だった。
「安心しろ、それはな」
「冗談なのかよ」
「本気にしたか？」
妖しい笑みで馬超に問うた。
「私の誘いは」
「当たり前だろ。目が本気だったぞ」
「確かに私は女でもいける」
それもだというのである。
「御主も悪くはないがだ」
「やっぱり本気なんじゃないのか？」
「半分はそうだった」
「やっぱりそうかよ」
「だがそれでもだ。御主が嫌だというのならな」
「しないってのかよ」
「そうだ。それはいい」
また言う趙雲だった。
「御互いに気が向いたその時にだ。するとしよう」
「あたしはその趣味はないんだけれどな」
「しかし女同士というのもいいものだぞ」
妖しい笑みをさらに深くさせて述べる。
「御互いに感じる場所がわかっているのだからな」
「だから御前経験ないんだろ」
「そうだがな。それでもな」

「ったくよ、どういう趣味なんだよ」
そんなことを話して夜を過ごす二人であった。そしてだ。
公孫賛はだ。徐州に着いた。そうして劉備と会うのであった。
「あっ、白々ちゃん」
「白蓮だ」
まずはいつものやり取りからだった。
「それで桃香、いいか？」
「何がなの？」
「暫くこちらで世話になりたいのだが」
こう話すのだった。
「頼めるか」
「あっ、徐州で働いてくれるの？」
「そうだ」
その通りだというのである。
「御前の配下としてな」
「配下って。そんなの徐州にはいないわよ」
「いない？どういうことだそれは」
「だって。白々ちゃんはお友達じゃない」
真名は間違えているがそれでもだ。
「だから。配下なんて」
「違うというのか」
「そうよ。だからお友達だから」
「この徐州にいていいのか」
「うん、また仲良くやりましょう」
「桃香・・・・・」
公孫賛はだ。劉備のその言葉に心を打たれた。そうしてだった。
そのうえでだ。彼女はこう言った。
「済まない、本当に」
「気にすることなんてないから」
「そう言ってくれるか」

「また一緒にね。楽しくやろうね」
公孫賛も劉備の下に来た。彼女の下にまた一人人材が集まった。
しかしであった。彼女の存在はこの徐州においてもであった。
「誰だありゃ」
「うむ、知らぬな」
二階堂と大門が公孫賛を見かけてこう話す。
「見たことない奴だな」
「そうだな。一体誰なのだ？」
「ええと、確かですね」
真吾が二人に話す。
「何とかいう人ですよ」
「何とかでわかるかよ」
「そうだ、わかるものではない」
「けれど本当に誰か知らないんですよ」
何かとメモをする彼でもなのだった。
「名前何ていいましたかね」
「劉備さんのお友達らしいけれど」
香澄もだ。首を傾げさせている。

# 第六十四話　公孫賛、誰からも忘れられていたのことその九

「何という方かは」
「知らないんだよな」
「前に会った気がするな」
「そういえばそうだな」
二階堂と大門は今度はこんなことを話した。
「何処だった？それで」
「思い出せん」
「そうですよね。かなり影の薄い人で」
「どうしても思い出せないわ」
真吾と香澄もであった。とにかく彼女の存在はここでも同じだった。
しかしだ。孔明と鳳統はだ。笑顔で劉備に話していた。
「公孫賛さんは武も文もされます」
「派手さはありませんが堅実です」
こう劉備に話す。二人は今は執務用の机に座っている劉備に対して話している。劉備はその手に筆を持って木簡に書いている。
そうしながらだ。二人の話を聞くのだった。
「立派な方です」
「安定感は抜群です」
「けれどどうしてなのかしら」
首を傾げさせてだ。こう話す劉備だった。
「白々ちゃんって皆目立たないっていうけれど」
「ですから白蓮さんですよ」
「真名は」
軍師二人も突っ込むことだった。
「間違えられると」
「幾ら何でも」

「けれど。何となくわかります」
「公孫賛さんのことは」
軍師二人は劉備に述べてから公孫賛についてまた話した。
「あの人は。何でも問題なくこなされます」
「安定してです」
「ですがそれがあまりに安定していますので」
「結果として目立たないんです」
「何でも安定してこなすからなの？」
劉備は二人の話にきょとんとした顔になって返す。
「それでなの」
「はい、それでです」
「そのせいでかえってなんです」
これが軍師二人の見たところだった。
「あの方を目立たなくさせています」
「そうしているんです」
「多分。桃香さんと一緒にいらした時もそうだったかと」
「何でもそつなく安定してこなされるので」
「あっ、そういえば」
二人の話でだ。劉備も思い出した。
「白々ちゃんって塾でも成績はよかったけれど」
「どんなものでもまんべんなくですね」
「けれどトップクラスにはなれませんでしたね」
「ええ、そうだったわ」
このことを思い出してだ。孔明と鳳統に話した。
「そういえばね」
「それがかえって目立たないんです」
「そうなってしまうんです」
「その辺り難しいのね」
劉備は眉を顰めさせて述べた。
「とても」

「あとは運命の星です」
「それも関係あります」
「運命？」
「目立てる人と目立てない人がいます」
「そうした人もいます」
孔明と鳳統はまた話す。
「目立てる人は何をやっても目立てますけれど」
「目立てない人は本当に何をしても」
「じゃあ白々ちゃんは」
ここでまた真名を間違える劉備だった。
「そういう運命の下にあるのかしら」
「絶対にそうだと思います」
「確かめてはいませんけれど」
それでもだ。おおよそわかるというのだった。それは普段の彼女を見ればわかることだった。とにかく何をしても目立たないのである。
ただしだ。二人は劉備にこんなことも話した。
「ただ。桃香様はそれでも」
「ずっと公孫賛さんのことは覚えておられているんですね」
「だって。友達だから」
にこりと笑って答える劉備だった。

# 第六十四話　公孫賛、誰からも忘れられていたのことその十

「だから。忘れることなんてないわ」
「そうですか」
「御友達だからなんですね」
「ええ、だからね」
こう二人に話す。
「忘れる筈がないわ」
「わかりました」
「そういうことなんですね」
軍師二人も微笑んだ。二人は劉備のこともだ。あらためてわかったのである。
劉備の治世は順調にはじまり軌道に乗ってきていた。それは他の州から見てもだ。実に見事なものだった。
孫策がだ。こう孫権に話していた。
「徐州のことだけれどね」
「劉備殿が牧になられましたね」
「ええ。かなりの善政を敷いてるみたいね」
微笑んでこう孫権に話すのだった。
「それで徐州はかなりよくなっているそうだけれど」
「その様ですね。あの方の下には人材もいますし」
「そうね。どうやらあの娘は文も武も秀でてはいないけれど」
少なくともだ。傑出しているというところまではいかない。
「けれどあの娘にはそれ以上のものがあるのね」
「人を惹き付けるものね」
「そう、それがあるのよ」
それがだというのだ。
「それがあるからね。ああした人材がね」
「集まりますか」

「南蛮からも来ているそうね」
猛獲達のことである。
「そこからもね」
「南蛮からもですか」
「ええ、そこからもね」
「それはまた」
それにはだ。孫権も驚きを隠せない。
「かなりのものですね」
「そうね。揚州でもそこまではね」
「はい、山越の人材は」
「下級士官ではいるけれどね」
「いません」
「それも自分から仕官してくるのはないわ」
この辺りに異民族統治の難しさが出ていた。孫策にしても袁紹にしてもである。その統治にはそれなり以上の苦労を抱えてしまっているのである。
「それがあるっていうのはね」
「劉備殿の人徳故ですか」
「ええ。若しかしたらあの娘は」
孫策は腕を組んでだ。考える顔になって妹に述べた。
「私なんかよりもずっと凄い娘かもね」
「姉上、幾ら何でもそれは」
「だって。私にはそこまで人を惹き付けるものはないから」
こうだ。軽い苦笑いを浮かべて妹に話す。
「それを考えたらね」
「武や文の問題ではありませんか」
「私が武で貴女が文でね」
孫家はおおよそそうした割り当てになっている。もっとも二人共それなり以上に武も文もできる。だが孫策は基本的に武の人間なのも事実である。

「それで小蓮はこれからね」
「そうですね。ただ小蓮の素質は」
「凄いわね」
「はい、私達以上です」
姉達だからこそだ。その素質はよくわかっていた。
「まさに天才です」
「武も文もね」
「あの娘はやがて天下に比類なき英傑になります」
「そうね。けれど人を惹き付ける力はね」
「身に着けようとしてもですね」
「そういうものだからね。それを考えたら本当に劉備は凄いわ」
また劉備について話す孫策だった。
「あの娘、多分今以上の存在になるわ」
「徐州の牧、左将軍では留まりませんか」
「ええ、この天下を救う様な」
そこまでの人物だというのである。
「なるわね」
「では姉上、これからはどうされるおつもりですか？」
「どうするかって？」
「はい、劉備殿が天下を左右する存在になられれば」
その時はだとだ。姉に問うのだった。

# 第六十四話　公孫賛、誰からも忘れられていたのことその十一

「どうされますか、その時は」
「そうね。その時はね」
「その時は」
「天命に従うわ」
微笑んでだ。妹にこう話した。
「そうさせてもらうわ」
「天命にですか」
「天命には逆らえないから」
だからだというのである。
「だからね。そうするわ」
「わかりました」
孫権もだ。微笑んで応えた。
「では私もまたそれに従います」
「私にかしら」
「姉上に、そして天命に」
双方にだというのだった。
「従います」
「その二つになのね」
「はい、双方にです」
また言う孫権だった。顔は微笑んだままだ。
「私も天命には逆らえませんので」
「それだけにはね。人間は誰であっても逆らえるものではないわね」
「はい、まさに」
「ただ。冥琳だけれど」
ここで孫策の言葉が微妙に変わった。
「近頃顔色がいいわね」
「そういえば確かに」

「前よりも元気になったわ」
彼女のことをだ。こう話すのだった。
「いいことね」
「はい、冥琳は我が国の柱ですし」
こう言って微笑む孫権であった。
「やはり。元気でなければ」
「その通りね。それじゃあ私達もね」
「姉上、そうです」
ここでだ。孫権は真面目な顔になった。そのうえで姉に言うのだった。
「ですからお酒はです」
「控えろっていうの？」
「そうです。祭と共に昨日も朝まで」
「いいじゃない、お酒は」
苦笑いになってだ。妹に返すのだった。
「百薬の長じゃない」
「そう言っていた者は実際は酒浸りになっていましたが」
「王莽ね」
「はい、あの者です」
前漢末期の人物だ。国を簒奪し皇帝になったとして稀代の悪人とされている。
「あの者と同じです、それでは」
「何か最悪な例えね」
「ですがお酒はです」
「気をつけろっていうのね」
「はい、あまり飲み過ぎぬように」
「やれやれね。最近この国も口煩い者が増えたわね」
また苦笑いになって言う孫策だった。
「最初から二人いたけれど」
「菊と桜ですか」

「そうよ。お母様の頃から仕えているあの二人ね」
揚州においては黄蓋と並ぶ長老である。ただし性格は彼女と違いかなり真面目で口煩い。その口煩さには孫策も勝てない程だ。
「あの二人は最初からいるけれど」
「彼女達の言うことは正論です」
「それはその通りよ」
「ですから聞かなければ」
「それでも厳しいからね」
それがだ。孫策にとっては辟易すべきものであるのだ。
「どうにもならないわね」
「そして私もというのですね」
「そうよ。まあとにかくね」
「とにかく？」
「徐州の民にとってはいいことね」
話をそこに戻した。

# 第六十四話　公孫賛、誰からも忘れられていたのことその十二

「徐州はね。ちょっとね」
「あの地に進出してもよかったのですが」
「袁紹や曹操と境を接することになるからね」
それがだ。困ったことであると。孫策は顔に出していた。
「あの二人はややこしいからね」
「だからこそ御二人も徐州にはでしたね」
「進出しなかったのよね」
「我等三人にとってはあの地は」
「進出しにくかったのよ」
そうした事情があったのである。
「御互いに意識してしまうからね」
「そうですね。まことに」
「うちは只でさえ山越に袁術と接しているしね」
ここでは異民族と袁術は同列だった。
「どちらも揉めるタイプではないけれど」
「烏丸や匈奴に比べれば」
「それでも。安心はできないからね」
「袁術殿もややこしい人物ですから」
「目立ちたがりで気に入った相手をいじめたがるしね」
袁術のその性格をだ。見事に見抜いていた。
「第六感で動くからね、いつも」
「時折、いえいつも突拍子もない行動に出られます故」
「それが問題なのよ」
「そうした方が隣に控えていますので」
「そこで曹操や袁紹と接するのは」
余計に厄介な話を持ってしまう。だから徐州には進出しないのだった。

そうしてだった。孫策は今度はその曹操や袁紹の立場になって考えて述べた。
「袁紹は異民族の問題が多いしね」
「そこで我々や曹操殿と接しては」
「異民族の問題がおろそかになるから」
「それで避けたい」
「曹操は曹操でね」
「あの方の治められる州はまだ荒廃が見られています」
漢王朝の衰退で賊が多く起こっていてだ。それで牧に任じられ治めることを任せられたのがその曹操だというのである。それではであった。
「そこで徐州に進出されては」
「予州とかの統治どころじゃなくなるから」
「何処も。勢力の拡大は限界ですか」
「少なくとも徐州に進出できる余裕はなかったわ」
「それで劉備殿が入られた」
「本当にいいことよ」
孫策はにこりと笑って述べた。
「誰にとってもね」
「その通りですね。本当に」
「ええ。それでね」
「それで？」
ここで孫策の話がまた変わった。今度の話は。
「藍里だけれどね」
「あの娘ですか」
「あの孔明は妹だからね。再会させてあげようかしら」
「それはいいことですね」
姉のその提案にだ。孫権も笑顔になって述べた。
「あの娘も喜びます」
「そうよね。じゃあ使者ということでね」

「再会させますか」
「そうしましょう。じゃあね」
「はい、それでは」
諸葛勤をだ。徐州に向かわせることが決まったのだった。孔明にとってはだ。まことに思わぬ、そして嬉しい再会が来ようとしていた。

第六十四話　　完

２０１１・２・１８

# 第六十五話　孔明、姉と再会するのことその一

第六十五話　孔明、姉と再会するのこと

孔明はだ。この日も徐州の政務にあたっていた。

劉備を助けてだが。それでも実質には彼女と鳳統がかなりの部分を担っていた。

木簡や竹簡を手にしてだ。それに書いたり読んだり運んだりしてだ。あちこちを動き回っていた。

「はわわ、今日も大忙しです」

「そうよね」

その彼女に共にいる鳳統が声をかける。二人共その両手に山の如き木簡を抱えている。

「御仕事を幾らしても」

「次から次に来るし」

「それをやっていかないといけないから」

「大変ですう」

そんな話をしながら劉備のところに向かう。そこでだった。

劉備がだ。にこりと笑ってこう孔明に言うのであった。

「あのね、孫策さんのところからね」

「揚州からですか」

「うん、使者の人が来るそうなの」

こう孔明に話すのだった。

「今そのお話が来たわ」

「使者がですか」

「何か私が徐州の牧になったことのお祝いみたい」

表向きの理由をそのまま話す。劉備も細かい話はまだ聞いていない。

「前の陳琳さんや夏侯淵さんと同じでね」

「それと楽就さんとですね」

鳳統は袁術配下のその人物の名前も出した。
「その人達と」
「うん、お祝いの使者みたい」
こう話すのだった。
「だから。応対の準備をしないとね」
「わかりました。それじゃあ」
「そちらの用意も」
「ええ。あと今日のお仕事は？」
劉備は二人に自分の仕事のことを尋ねた。
「どれだけあるのかしら」
「はい、これだけです」
「宜しく御願いします」
出されたのはだ。二人が抱いているその木簡全てであった。
どさりと机の上に置かれたそれ等の木簡をだ。劉備はうっとした顔になって見た。そうしてそのうえで二人に対して尋ねるのだった。
「これだけあるの！？」
「はい、これだけです」
孔明が答える。
「これが今日の分です」
「こんなにあるなんて」
「昨日もこれ位でしたけれど」
今言ったのは鳳統であった。
「違いましたか」
「昨日大変だったし」
その仕事がだという劉備だった。
「それで今日もなんて」
「けれど御願いします」
「民の為に」
仕事に関しては引かない二人だった。
「それぞれの政への対策はまとめておきましたので」

「桃香様はそれを参考にされて」
「決断を下すのね」
「はい、そうです」
「後はそれだけです」
軍師二人はこう劉備に話した。二人は既に全ての政治について見てだ。そのうえで的確な対策を決めてそれをまとめてだ。劉備には決断だけをすればいいようにしているのである。
「そういうことで」
「御願いします」
「わかったわ。私頑張るわ」
劉備は気を取り直してだ。真剣な顔になって述べた。
「皆の為に」
「はい、是非」
「御願いします」
こうしてだった。劉備もまた仕事に取り掛かるのだった。そうした意味で彼女も他の群雄達と肩を並べる存在になっているのであった。
孔明と鳳統は劉備の前から退室してだ。牧の屋敷の渡り廊下を歩きながらそのうえでこんな話をしていた。右手には緑の庭が見える。
「それにしても揚州の使者の人って」
「そうよね。誰なのかしら」
「ううん、若しかして黄蓋さんとか」
「あの凄く胸が大きいっていう人？」
「あの人が来られたら負けそう」
孔明はこう鳳統に弱った顔で述べた。

# 第六十五話　孔明、姉と再会することその二

「大人の人だし胸、凄く大きいし」
「そうよね。私達まだ子供だから」
「胸だって小さいし」
孔明はその弱った顔で話す。
「だから。あの人が来られたら」
「私、揚州の人達のことはよく知らないけれど」
鳳統も弱った顔で話す。
「胸大きい人が多いのは本当なの？」
「うん、本当よ」
その通りだと話す鳳統だった。
「もうね。凄く大きい人ばかりで」
「そんなに凄いよね」
「愛紗さんみたいな人が一杯いるの」
実にわかりやすい例えだった。
「紫苑さんや桔梗さんみたいな人が」
「えっ、そんなになの」
「そうなの。もう凄いから」
「そんな、そうした人が来られたら」
そのことにだ。怯えた顔になってしまった鳳統だった。
「私、負けるから」
「私も。胸のことはどうしようもないから」
「そうよね。胸、本当に大きくならないから」
「大きくなればいいのに」
孔明は自分の胸をその両手で押さえてだ。弱りきった顔になっていた。
「もっと。大きく」
「身体も大きくなれば胸もっていうけれど」

「じゃあ私達も何時か桃香さん達みたいに」
「なれたらいいけれど」
そんな話をしていたのだった。そうしてであった。
その使者が来る日になった。まず来たのはだ。
「おう、はじめて見る顔もいるな」
「やっぱり・・・・・」
黄蓋だった。相変わらずの明るさで劉備達を見回して言っていた。
孔明はその彼女を見てだ。しおしおとなってしまっている。
「黄蓋さんが使者の方でした」
「あわわ、物凄いおっぱい」
鳳統ははじめて見るその胸に圧倒されてしまっている。
「あんなのじゃとても」
「そうよね。とてもね」
「勝てないわ」
こう話す二人だった。しかしだ。
猛獲達はだ。黄蓋の周りに来てだ。楽しそうにはしゃいでいる。
「凄い胸だにゃ」
「巨大なおっぱいだにゃ」
「桃香のもいいけれどこっちも凄いにゃ」
「おっぱいおっぱい」
「ほほう、わしの胸が気に入った様じゃな」
黄蓋もだ。その彼女達を見て満足そうに笑っている。
「好きなだけ見てもいいぞ。減るものではないしのう」
「しかも気前もいいにゃ」
「おっぱいが大きいと心も大きいにゃ」
「だからおっぱいが好きにゃ」
「そうだにゃ」
こんなことを楽しそうに言って黄蓋の周りを跳ね回る猛獲達だった。そしてそのうえでだ。黄蓋は劉備達にこんなことも言った。
「わし等が今日ここに来た理由はじゃ」

「うむ。何だ？」
関羽が彼女の言葉に応える。今彼女達は牧の謁見の間にいる。だが主の階段もその上の座もない。階段がなくそのまま座になっているのだ。その為劉備と黄蓋は同じ高さで顔を見合わせていた。
しかもである。劉備は席に座らずに立っている。そこが他の牧達と違っていた。
「その理由とは」
「御祝いの使者じゃ」
笑顔でだ。それだというのであった。
「それはもうわかっていると思うがな」
「確かにな。それはな」
関羽も微笑んで黄蓋のその言葉に応える。
「おおよその察しがついていた」
「そういうことじゃ。劉備殿、おめでとう」
こう祝賀の言葉を告げた。

# 第六十五話　孔明、姉と再会することその三

「我が主孫策から。そう伝えてくれとのことじゃ」
「有り難うございます」
劉備も笑顔で黄蓋、そして彼女の主の孫策に応える。
「御礼を述べさせてもらいます」
「うむ。わしが伝えるのはそれだけじゃ」
とりあえず仕事は終わったというのであった。しかし話はこれで終わりではなかった。
「さて、それでじゃ」
「それで？」
「孔明殿に用がある者がおってのう」
こうだ。孔明を見ながら話すのであった。
「少しな」
「私にですか？」
「ここに呼んでいいかのう」
黄蓋は孔明にこうも言った。
「御主さえよければじゃ」
「誰なんでしょうか」
孔明は黄蓋の言葉の中身がわからず首を捻った。
「揚州の方なら」
「察しがつくか？」
「ふむ、そうか」
ここで言ったのは厳顔であった。
「そういうことじゃな」
「おっと厳顔殿今は言わないでくれるな」
黄蓋は微笑んで彼女に釘を刺した。
「それはな」
「うむ、わかっておるぞ」

厳顔も含んだ笑顔で彼女に返した。
「それではな」
「そうしてくれ」
「揚州の方となると」
孔明もだ。考えながら述べた。
「となると」
「おっと、察するのは止めた方がいい」
孔明が答えに辿り着くと読んでだ。それは止めた。
「その前に呼ぶとするか」
「ええっ、今すぐにですか」
「そうじゃ。さあ入るがいい」
黄蓋は部屋の入り口に顔を向けてその者に声をかけた。
「もう遠慮はいらんぞ」
「わかりました、それでは」
その言葉に従いだ。入って来た者は。
孔明はその彼女の顔を見てだ。飛び上がらんばかりに驚いたのだった。
「御姉ちゃん!?」
「朱里!」
諸葛勤だった。彼女は孔明の方に駆けてだ。その小さな身体を抱き締めたのだった。
そしてだ。驚いている妹に対してこう言うのであった。
「会いたかったわよ、ずっとね」
「揚州で孫策様にお仕えしてるのは聞いてたけれど」
「この前は会えなかったからね」
「けれど。まさかここで」
「会えるなんて思わなかったでしょ」
「ええ、とても」
その考えに至る前にだ。相手が出て来たのである。
「それでも。会えて」

「嬉しい？」
「嬉しくない筈ないよ」
孔明の顔がだ。次第に驚きのものから喜びのものになってきていた。
そして姉を抱き締め返しながらだ。こう言うのだった。
「御姉ちゃんも元気よね」
「ええ、とてもね」
「よかった、また会えて」
「そうね、本当にね」
「あわわ、こうなるなんて」
鳳統はだ。今の事態に慌てふためいていた。彼女にとっても思わぬ事態なのだ。
「感動の姉妹の再会ですか」
「そうじゃ。こうしたことはいきなりの方がよいのじゃ」
満面に笑みを浮かべて言う黄蓋であった。
「奇襲は大成功じゃな」
「成功し過ぎて壊滅したのだ」
張飛もこれには唖然となっている。
「朱里に御姉ちゃんがいるのは知っていたのだ。それでもなのだ」
「まさかここで会うなんてな」
「予想外にも程がある」
馬超も趙雲もこれには驚きを隠せない。

# 第六十五話　孔明、姉と再会するのことその四

「けれど。姉妹か」
「やはりいいものだな」
「全くだ。涙が出て来たぞ」
「むっ、御主は誰じゃ？」
黄蓋は涙ぐみ目尻を己の指で拭く公孫賛に声をかけた。
「見慣れぬ顔じゃが」
「そうか。揚州の者なら知らなくて当然だな」
公孫賛は顔を戻してこう黄蓋に返した。
「私は公孫賛だ。白馬長史と呼ばれている」
「白馬長史？」
「そうか、知っているか」
「いや、知らぬ」
はっきりと答える黄蓋だった。
「だから問うておるのじゃ」
「な、何故知らない？幽州の牧だった私を」
「幽州の牧なら袁紹殿であろう」
ここでもいつものやり取りであった。
「あの御仁がなるまであの州には牧はおらんかった」
「くっ、私は揚州でも無名だったのか」
「見たところ相当影の薄い御仁の様じゃが」
それは黄蓋にもわかることだった。
「頑張る様にな。人生色々とあるぞ」
「ううん、私はこの世界では有名になれないのか」
「そうは言っても日々の方でも何かないがしろになってきていないか？」
容赦のない突込みを入れたのは関羽だった。
「私もあの世界のことは少しわかるような気がするが」

「否定できないぞ。今度は電車突き落としか」
「あれだけだったな」
「私の持ちネタはどうなるんだ。弟だけか」
こんな話を嘆きながらする公孫賛であった。そしてその間にであった。
孔明と諸葛勤は感動の再会を堪能していた。それは謁見の間で終わらずにだ。
使者を招待する宴の場においてだ。姉妹並んで仲良く話をするのだった。
「私達元々はこの州の生まれで」
「幼い頃は三人一緒だったんですよ」
こんなことをだ。周りに話すのだった。
「それが私達はそれぞれの主や先生のところに向かって」
「今に至るんです」
「そういえば朱里ちゃんのところって」
鳳統が言う。彼女も宴の場にいるのだ。
「三人姉妹だったよね」
「うん、そうなの」
孔明がその問いに答えた。
「実はね」
「私が長女で朱里が次女でね」
諸葛勤も話をする。
「それで黄里が末っ子でね」
「その人が三女さんですね」
「ええ、そうなの」
諸葛勤も鳳統に話す。
「あの娘は確か曹操殿のところにね」
「仕官するみたいですね」
「三人共別々ね」
「そうね」

姉妹でも話すのだった。
「生まれは同じだけれど」
「今はそうなっちゃったね」
「けれど今こうして会えるのは」
「やっぱり嬉しいし」
「わかります」
月がその二人を見て微笑む。
「私も今は兄さんとは一緒ですが」
「そうだな。だが楓はな」
「曹操殿のところにでしたね」
「その様だな」
その兄の守矢と話すのだった。
「この世界でも私達はな」
「別れ別れですね」
「何で弟さんは曹操のところにいるのだ？」
張飛はそのことがわからずだ。いぶかしんで言うのだった。
「それがわからないのだ」
「そこは色々とありまして」
「それでだ」
二人がこう張飛に話す。
「また縁があれば」
「会うと思うが」
「あっ、そういえばだけれどな」
馬超がここであることに気付いた。それは。

# 第六十五話　孔明、姉と再会するのことその五

「前曹操のところに行った時にな」
「弟殿とは会われなかったのか」
趙雲もそのことに気付いた。
「その時はどうしたんだ？」
「会えたのか？」
「いえ、弟は山賊退治に出ていまして」
それでだというのであった。
「残念ですが」
「そうか。それならな」
「仕方ないな」
「また機会があります」
月は微笑んで述べた。
「その時を楽しみにしています」
「そうか。じゃあその時にな」
「盛大に祝うことにしよう」
二人は月のその言葉と心を受けてこう返した。彼女もまたそうしたものを持っているのだ。
宴は続く。その中でだ。
諸葛勤はナコルルとリムルルを見てだ。二人に言うのだった。
「そういえば貴女達も」
「はい、姉妹です」
「私達もです」
その通りだと。二人も答える。
「二人で精霊を使って」
「そうして戦ってきました」
「そうらしいわね。精霊ね」
「この二人は少し特別なんだ」

チャムチャムがここで話す。
「神様の使いでもあるしね」
「じゃあ巫女みたいなものかしら」
諸葛勤はチャムチャムの言葉を聞いてこう考えた。
「それだと」
「はい、巫女なんです」
「村の」
「成程ね。けれどこの世界にどういう訳か来た」
諸葛勤は考える顔で述べた。
「そうしたことね」
「そうなります」
「そこは他の方と同じです」
「揚州にも巫女がいるけれどね」
諸葛勤は笑いながらある少女の話を出した。
「あかりという娘だけれど」
「あっ、あかりさんですか」
雪が彼女の話を聞いて声をあげた。
「そういえばあの娘も巫女ですね」
「まだ小さくて。小蓮様みたいな感じだけれど」
諸葛勤は己の主の一人の名前も微笑みながら話す。
「それでも。力は凄いわね」
「天才と言ってもいいな」
守矢も彼女について言う。
「あの力はな」
「そうね。まさに天才ね」
それは諸葛勤も見てわかることだった。そのうえで彼女をこう評した。
「あのままいけば。凄い巫女になるわね」
「そうですね。本当に」
「将来が楽しみだ」

「この世界に来ている他の世界の人達は」
黄忠は彼等全体を一括りにして話をした。
「誰もが凄い力を持っているわね」
「そうですよね。特に草薙君がね」
馬岱はくさなぎを観て話す。
「火を自由に出せるし」
「俺のこれはちょっと特別だからな」
草薙はこう馬岱に話す。
「草薙家のな。オロチを払う為の炎だからな」
「オロチねえ。何度か聞いてるけれど」
「とんでもない相手じゃな」
厳顔もそのことは聞いていた。だからこそ言うのだった。
「その力だけではなくな」
「そうよね。怪物じみてるっていうか」
「いや、怪物どころではないな」
「それ以上ですか？」
「神じゃな」
厳顔はオロチをそれだというのだ。

# 第六十五話　孔明、姉と再会するのことその六

「まさにな」
「神様なんですか、オロチって」
「神といっても色々おる」
ここからはだった。難しい話になる。厳顔もそれを自覚しながら話す。
「中にはよからぬ神もおる」
「そうなんだよな。あのオロチってのはな」
「人の文明や文化そのものの敵だ」
二階堂と大門もそのオロチについて話した。
「そうしたものをとことん嫌っててな」
「全てを破壊しようとする」
「それならばだ。我々のこの世界にオロチがいたならば」
魏延はそれを仮定として話した。
「この世界も何もかも」
「ああ、ぶっ壊されるな」
「間違いなくだ」
二階堂と大門も話す。
「その場合はな」
「そうなる」
「今天下は確かに乱れているが」
魏延は二人の話を聞いたうえで深刻な顔になって呟いた。
「そうした存在がいないだけましか」
「いえ、何か」
「よからぬものは感じ続けられます」
ところがだった。彼女のその呟きにナコルルとリムルルが述べた。
「この世界にも」
「何か。絡み付いて蠢く様な」

「随分と禍々しいものの様だな」
関羽が二人のその話を聞いて述べた。
「その存在は」
「はい、どうやら」
「尋常なものではありません」
「天下を覆うこの大乱がそれなのか」
関羽はそれではないかと考えた。
「それで今天下は」
「それで済めばいいのだけれど」
神楽は自分の口元に自身の手を当てて述べた。
「私も。何かそれ以上の」
「感じるわね」
「そうね。もっとね」
こうミナとも話す。
「どうにもね」
「あまりにも不吉な」
「それあかりも言っていたわ」
諸葛勤もここで話す。
「何なのかしら、本当に」
「宦官ではなかろうか」
黄蓋は彼等ではないかと考えるのだった。
「あの連中はとかく暗躍し私腹を肥やしておる」
「宦官は帝の御傍にいつもいるので」
「そして宮廷という特異な場所にいて中々手が出せないので」
孔明と鳳統は困った顔になって話をする。
「それで邪な心があれば」
「容易に権力や富を得られます」
「厄介な話じゃ」
黄蓋は溜息を出して忌々しげに言う。
「帝をたぶらかしやりたい放題じゃ」

「そうですね。始皇帝に仕えた趙高もそうでしたし」
「宦官達は何かと問題があります」
「特に今の十常侍は」
「その中心にいる張譲は」
二人はだ。この者に行き着いた。
「策謀に長け悪い意味で政治に長けています」
「何かあると隠れ、そして帝の裏で囁きます」
「それ最悪じゃねえか」
丈は二人の話を聞いて呆れた様に言った。
「何なんだよ、それ」
「ですから。宦官はそうした存在ですから」
「厄介なんです」
「どうにかならないのかよ、本当に」
丈は怒った顔になって二人に解決案を尋ねた。
「そうした連中こそ何とかしないと駄目だろうが」
「帝がしっかりとされればいいのですが」
「宦官達に惑わされずです」
二人は丈に対して弱りきった顔で話した。

# 第六十五話　孔明、姉と再会することその七

「それが宦官に対する一番の対策です」
「それこそがです」
「けれどそれは難しいわね」
マリーは二人のその言葉に難しい顔で述べた。
「人間はいつも自分の傍にいる相手の言葉を信じるから」
「特に馬鹿な奴はそうだな」
ロックは多少辛辣に述べた。
「簡単にな」
「信じていい奴といない奴がいる」
蒼志狼も呟く様に言う。
「それを見極めなければだ」
「そういう者が偉い立場におればのう」
チンは酒を飲みながらここで話す。
「厄介なことになるわ」
「それが今やな」
ケンスウは肉まんを食べている。無論他のものもだ。
「だからおかしなことになってるんやな」
「帝ですか」
アテナはその皇帝について考えるのだった。
「この国の今の帝は」
「こう言っては何だけれど」
「そうなのじゃ」
諸葛勤と黄蓋が苦い顔でアテナに話す。
「あまりね」
「察してくれ、これだけで」
「わかりました」
「そういう方なんですか」

アテナだけでなくパオも頷いた。
「だからこそですか」
「今の状況に」
「しかも今病に臥せっておられる」
黄蓋はその皇帝の今の状況についても話をした。
「明日をも知れん命だという」
「明日をもかよ」
「それだと」
「ああ、そうだな」
「何時皇帝が代わってもおかしくはない」
テリーとアンディも話す。テリーはハンバーガー、アンディは納豆スパを食べている。そうしたものを食べながら話をするのだった。
「問題は次の皇帝だよな」
「どういった人物がなるかだな」
「今の太子は非常に聡明な方だと聞いています」
「まだ幼いですが」
孔明と鳳統がその太子について説明する。
「あの方でしたら」
「宦官達に惑わされることはありません」
「ほな状況はよくなるんやな」
ロバートは二人の話を聞いてこう述べた。
「次の皇帝になったら」
「そうだな。宦官達に惑わされなかったらいいからな」
「それだと問題はないわね」
リョウとユリもロバートの言葉に頷く。
「ならだ。もうすぐだな」
「この国のおかしな状況も終わりね」
「じゃあ俺達も後は平和に暮らせますね」
真吾はうどんを食べながら能天気に話す。
「何でこの世界に来たのかはわかりませんけれど」

「そうじゃな。天下泰平が一番じゃ」
黄蓋はそんな真吾の言葉に頷き目を細めさせる。
「そこの子供、いいことを言うのう」
「えっ、俺子供なんですか？」
「わしから見れば立派な子供じゃ」
右手に杯を持ち豊かな胸を震わせて言う。
「ふふふ、御主の様な者の相手も楽しいものじゃ」
「楽しいってまさか」
「どうじゃ？よかったらわしと二人でじっくりと話をするか？」
「黄蓋さんとですか」
「しっぽりとのう」
「あの、祭殿」
思わせぶりな流し目さえ送る黄蓋に諸葛勤が横から止めに入った。

# 第六十五話　孔明、姉と再会することその八

「そうしてからかうのは」
「からかってはおらんぞ」
「そうですか？」
「そうじゃ。わしは実際にこうした子供が好きでのう」
「年下趣味だったのですか」
「おなごもよいがな。何ならじゃ」
今度はだ。諸葛勤を見て囁く。
「藍里でもよいぞ」
「なっ、私もとは」
「どうじゃ？わしと今晩」
諸葛勤のその顎を手に取る。そのうえで顔を近寄せて囁く。
「同じ褥でのう」
「は、はううそれは」
「お姉さんははううか」
「そうみたいだね」
キングとナコルルが二人のやり取りを見て慣れた様に話す。
「姉妹で言葉が違うな」
「微妙にだけれどね」
「私はそうした趣味は」
「はじめては誰でもそうじゃ。しかしじゃ」
黄蓋の攻めはさらに続いている。
「一度知れば。その快楽にじゃ」
「ですからそれは」
「な、何か凄い展開になってきたけれど」
「大丈夫でしょうか」
劉備も鳳統も顔を真っ赤にさせている。
「黄蓋さんってこうした趣味もあったの」

「女の人もなんですか」
「ははは、普通ではないか」
黄蓋は諸葛勤から離れて笑って話す。
「おなご同士というのものう」
「確かにそうですが」
解放された諸葛勤はほっとした顔になって話す。
「雪蓮様と冥琳殿もですし」
「そうじゃ。至って普通じゃ」
「ソレガコノ国ノ普通」
タムタムは仮面の下から麺をすすりながら話す。
「タムタムヨクワカラナイ」
「俺の国じゃ昔から結構あるけれどな」
草薙がタムタムのその言葉に言う。
「そっちの話はな」
「ソウナノカ」
「結構多いな、本当に」
「えっ、そうなんですか！？」
「それは凄いです」
孔明と鳳統は草薙の話を聞いてだ。それぞれ手と手を組み合わせてそのうえで目を輝かせている。さながら十字架の神への祈りである。
「男同士が多いんですか」
「草薙さんのお国は」
「ああ。俺はそっちの趣味はないけれどな」
「そうだな。普通にあるな」
蒼志狼もそうだと話す。
「それを日記に書いてた公家の人もいたしな」
「はわわ、最高ですう」
「そこまであからさまだと」
二人はその目をさらに輝かせている。

「縁があれば是非」
「私達もその世界に」
「何か凄い憧れてるんだな」
草薙はそんな二人を見ていささか呆れながら言った。
「男同士とか好きか」
「はい、どっちが攻めでどっちが受けとか」
「大好きです」
「ああ、つまりな」
草薙はそんな二人を見てこの言葉を出した。
「あんた達腐女子だな」
「そのものね」
舞も苦笑いで言う。
「まさかこの世界にもいるなんて」
「凄いですね、ある意味」
香澄もだ。呆れた様な顔で話す。

# 第六十五話　孔明、姉と再会することその九

「この世界にもいるなんて」
「腐女子は次元を超えるのね」
「そうみたいですね」
「あの、腐女子って」
「何でしょうか、それは」
孔明と鳳統はその言葉に目をしばたかせて返す。
「何か妙に妖しい響きですけれど」
「一体」
「ああ、気にしないでいいわ」
舞が笑ってそこは誤魔化した。
「こちらの世界の言葉だから」
「そちらの世界のですか」
「そうした言葉もあるんですね」
「そうよ。それにしてもこちらの世界は」
舞はその世界自体について思うのだった。
「私達の知ってるこの時代の中国とは」
「全然違うな」
「そうなのよね」
こうアンディにも話す。
「だからかなり戸惑うところがあるわ」
「前から思ってたところはだ」
大門は炒飯をもりもりと食べながら述べる。
「北でも米がある」
「しかも俺達の時代の料理が普通にあるしな」
二階堂は刺身を食べている。中華風の刺身である。
「不思議っていえば不思議だよな」
「その通りだ。書も想像より遥かに多い」

「服だって違うしな」
「そうした違いの多い世界だな」
「何かよくわからぬがだ」
関羽も首を傾げさせている。
「我々の世界の漢とあちらの世界の漢はかなり違う部分があるのだな」
「考えていくと別物だな」
草薙が話す。
「俺は学校は殆ど行ってないがそれでもわかるな」
「あの、それで草薙さん」
真吾は彼が学校の話を出したところでそっと囁いた。
「いい加減。先生が怒ってますけれど」
「何でだよ」
「卒業しろって」
言うのはこのことだった。
「何年留年したら気が済むんだって」
「またそれかよ」
「はい、本当に卒業してくれないと困るって怒ってますから」
「わかってはいるんだよ」
草薙はバツの悪い顔で真吾に言い返す。
「卒業もな。
「ええ、御願いします」
「卒業した先も決まってるしな」
「草薙道場ですよね」
「ああ。親父の跡を継いでな」
そうなるというのである。
「そうなるからな」
「そうですよね。俺も道場通いますから」
「御前草薙流好きだな」
「大好きですよ」

好きどころではないとだ。真吾も言う。
「だから草薙さんと今こうしてるだけでも」
「いいのかよ」
「はい、とてもです」
明るい笑顔で話す真吾だった。
「あといわしとうどんもあれば」
「そういえば好きだな」
関羽が真吾のその食べ物の嗜好に言及する。
「御主魚はそれが一番好きだな」
「そうなんです。いわしって美味しいですよね」
「うむ、確かにな」
それは関羽も認める。実際に食べての言葉である。

# 第六十五話　孔明、姉と再会することその十

「しかもあれは身体にいいのだったな」
「はい、お肌も奇麗になりますよ」
「えっ、そうなんですか？」
それを聞いてだ。声をあげたのは劉備だった。
「じゃあ私いわしもっと食べます」
「そうしたらいいですよ。あれは食べても太りにくいですし」
「じゃあ余計に」
ここでまた話す劉備だった。
「食べさせてもらいます」
「それとあとは」
真吾は笑顔でさらに話す。
「俺の趣味のあれですね」
「それは言うな、なのだ」
「全くだよ」
張飛と馬超が顔を顰めさせて真吾に言う。
「真吾の怪談は怖過ぎるのだ」
「聞いたら夜寝られないんだよ」
「怖いのがいいんじゃないですか」
だが真吾は笑顔でこう話す。
「そうじゃないですか？やっぱり」
「そんなことを言うのは変態なのだ」
「怪談なんて何処がいいんだよ」
「全くだ」
関羽もその顔を暗くさせている。
「あんなものを聞いてもだ。何にもなりはしない」
「そういえば関羽さんって」
「何だ？」

「俺が怪談話したら何処かに行かれますね」
「そ、それは」
「ひょっとして怖いとか？」
何となくだがそのことに気付いた真吾だった。
「関羽さんも怪談が」
「いや、そんなことはないぞ」
関羽はそのことを必死に否定した。
「決してだ。それはない」
「ないんですか？」
「私はだ。怪談なぞ怖くはないぞ」
「実はだ」
ここで趙雲がさりげなく真吾のところに来て囁く。
「愛紗はこれで怖がりなのだ」
「あっ、やっぱり」
「うむ。怖い話をすると怯えるからな」
「成程、それでだったんですね」
「そうだ。だからもっとしてやれ」
「おい星！」
関羽はたまりかねた顔で趙雲に言う。
「私はだ。だからそんなことはだ」
「ほう。怖くないのだな」
「そうだ、怖くとも何ともない」
真っ青になって引き攣った顔で話す。
「断言してもいい」
「鈴々もなのだ」
「あたしもだよ」
張飛と馬超も必死の顔で主張する。
「あんなもの怖くとも何ともないのだ」
「そうだよ。真吾がどれだけ怖い怪談を言ってもだ」
「何か面白そうね」

そんな彼等の話を聞いて諸葛勤がそちらに顔を向けた。
「怪談なのね」
「お姉ちゃん怪談好きだったの」
「特に好きじゃないけれど興味はあるわ」
それでだと妹に話すのだった。
「だから。ええと」
「はい、矢吹真吾です」
真吾は笑顔で諸葛勤に対して名乗った。
「宜しく御願いします」
「ええ。じゃあ矢吹さん」
諸葛勤も微笑んで真吾に言葉を返す。
「よかったら貴方の怪談を」
「あっ、聞いてくれます？」
「そうさせてもらえるかしら」
こう彼に頼むのだった。
「この宴の後で」
「わかりましたっ」
満面の笑顔で応える真吾だった。実に嬉しそうである。
「じゃあそうさせてもらいますね」
「ええ。御願いね」
「さて、じゃあどんな怪談にしようかな」
制服のポケットからメモ帳を出してチェックする。

# 第六十五話　孔明、姉と再会するのことその十一

「とびきりに怖いものにしますから」
「真吾さんの怪談って凄いのよ」
孔明はにこにことして姉に話す。
「もうね。本当に震える程にね」
「怖いの」
「だから楽しみにしていてね」
「ははは、ではそうさせてもらうか」
黄蓋も笑顔である。
「是非な」
「う、うむ。それではな」
「期待しているのだ」
「ああ、あたしもだ」
そうは言ってもであった。関羽と張飛、それに馬超えはだ。顔を真っ青にさせてそのうえで表情を引き攣らさせている。そうしているのだ。
そしてだ。三人は虚勢を張って言う。
「真吾の怪談なぞな」
「何も怖くはないのだ」
「ああ、全然平気だからな」
「三人共怪談の前に厠に行った方がいいよ」
馬岱が彼女達に突っ込みを入れる。
「特に翠姉様はね」
「あたしかよ」
「おしっこ大丈夫よね」
「大丈夫に決まってるだろ、それは」
「だといいけれど」
「まあどうしてもというのならだ」

趙雲は今度は馬超の傍に来ている。
「おむつもいいな」
「あたしは赤ん坊かよ」
「どうしてもならだ。私も共についていこうか？」
さりげなくこんなことも言う。
「そして私が出させてやろう」
「おい、厠も一緒っていうのかよ」
「厠でする者もいるぞ」
「だから何をだよ。それにだよ」
馬超はたまりかねた口調になって趙雲に反撃した。何とかだ。
「御前ずっとあたしに絡むよな」
「いや、翠だけではないぞ」
「あたしだけじゃないって？」
「愛紗もいいな」
その関羽をちらりと横目で見てだ。微笑んで話すのであった。
「あの熟れた身体は味わいがいがある」
「ま、待て」
それを聞いてだ。関羽は怪談に対するのとはまた違った焦りを見せて言う。
「私を味わうだと？」
「そうだ。私はそちらもいけるからな」
「だから何がいけるのだ」
「おなごであってもだ。いけるぞ」
「うう、まさかと思うが」
「あたし達二人を一度にかよ」
「悪くはない」
二人に言われても平然としている趙雲だった。
「今夜辺り面白いかもな」
「あら、女の子同士なのね」
諸葛勤は今度はそちらに顔を向けた。関羽達にだ。

「それもいいわね」
「結構きますよね」
「はい、とても」
今度は孔明と鳳統も話す。
「女の子同士でというシチュエーションも」
「興奮するものがあります」
「あの娘達わかっているわ」
諸葛勤は妹達以上にその目を輝かせている。その口元には涎さえ出ている。
「女の子三人で絡み合う。素晴しいわ」
「あれ、まさか」
鳳統はここで諸葛勤のあることに気付いた。
「まさかお姉さんも」
「実はそうなの」
孔明も鳳統に話す。
「お姉ちゃんもそういうお話が大好きで」
「あわわ、やっぱり」
「そのお姉さんの影響を受けてなのね」
黄忠は孔明を見て微笑んで述べた。
「朱里ちゃんの趣味がそうなのは」
「えっ、私の趣味もですか」
「腐女子というのはこのことなのかしらね」
そしてこんなことも言う彼女だった。そんな話をしてであった。
宴の後は怪談になった。そして孔明達は怪しい絵のある書を手に怪しい会話に入った。その次の日の朝。朝食の席において。

# 第六十五話　孔明、姉と再会するのことその十二

関羽と張飛、馬超はだ。目が真っ赤だった。そして何処かやつれている。

その三人を見てだ。マリーがいぶかしみながら言った。

「目の下にクマまでできているわね、三人共」

「眠れなかったのだ」

「昨日はずっとなのだ」

「ああ、とてもな」

こうだ。三人で声を揃えて言う。

「真吾のせいね」

マリーはその三人を見てすぐにこう察した。

「あの子の怪談は確かに凄いから」

「だ、だからそうではない」

「それは違うのだ」

「怪談なんか怖くとも何ともないからな」

しかし三人はそのことはムキになって否定する。

「全くだ。どうして怪談なぞだ」

「この鈴々が怖がるのだ」

「そんな筈がないだろ？」

「しかし御主達は」

趙雲がまた三人に言う。

「真吾の怪談の時真っ青だったではないか」

「そ、そうか？」

「そんな筈がないのだ」

「そうだよ。怖くとも何ともなかったんだからな」

三人は強がって反論する。

「あんなものはだ」

「全然怖くなかったのだ」

「むしろ退屈したぜ」
「ふむ。それではだ」
三人の虚勢は想定の範囲内だった。それで趙雲は今度はこう言った。
「真吾、今晩も怪談を話してくれるか」
「はい、わかりました」
真吾も満面の笑顔で応える。
「今夜も楽しみにして下さい」
「い、いや今夜はな」
「遠慮するのだ」
「そういう気分じゃないからな」
速攻で言う三人だった。かくしてこの三人は予想通りの結果になった。
そして諸葛勤はというとだ。
「じゃあ今日はね」
「何処に行くの？」
姉妹でだ。仲良く話をしている。朝からだ。
黄蓋もだ。その二人を見ながら笑顔で話す。
「藍里は昨夜ずっと二人でいたそうじゃな」
「はい、そうです」
鳳統がその黄蓋に答える。
「諸葛勤さん昨夜は朱里ちゃんと一緒に寝ましたし」
「仲がいいのう」
「そうなんです。夜遅くまで三人で本を読んで」
どういった本かはあえて言わない。
「それで二人で」
「そうか。実はのう」
ここで黄蓋はこんなことも話した。
「我が揚州の孫策様達もじゃ」
「あっ、三人姉妹ですよね」

「そうじゃ。今でも同じベッドで寝ることがあるのじゃ」
このことをだ。鳳統に話すのだった。
「三人一緒にのう」
「三姉妹仲良くですか」
「やはり兄弟は仲がいいに限るじゃろ」
「はい、確かに」
その通りだった。これは鳳統もわかることだった。
「私は。兄弟はいませんけれど」
「いや、もうおるではないか」
「いますか？」
「兄弟とは血がつながっているとは限らんのじゃ」
そうだと話すのであった。
「例え血がつながっておらずともな」
「兄弟になれるんですね」
「そういうことじゃ。大事なのは絆だ」
それだというのである。

# 第六十五話　孔明、姉と再会することその十三

「御主はそうした意味でだ。既に兄弟がおるぞ」
「そうなんですか」
「御主もわかる。やがてな」
「実は俺達もな」
「そうなんだよ」
テリーとアンディがここで鳳統に話してきた。
「俺とアンディは実は血はつながっていないんだ」
「けれどそれでもこうして」
「兄弟なんですね」
「それと同じさ」
「大事なのは絆なんだ」
「そうですか。絆ですか」
鳳統は二人の話も聞きながらだった。彼女はその仲睦まじい二人を見た。そこには絆があった。確かにだ。
そうした楽しい日々も終わりだ。諸葛勤は揚州に戻ることになった。無論黄蓋もである。
黄蓋がだ。劉備達に対して別れの挨拶を述べる。
「ではまたな」
「はい、また御会いしましょう」
劉備が微笑んで彼女に応える。
「それでは」
「そうじゃな。また会う時が来る」
黄蓋もだ。その顔が微笑んでいる。
「その時を楽しみにしておこう」
「その時まで暫しですね」
「うむ、ではな」
そしてであった。この姉妹もだ。

お互いに笑顔でだ。こう言い合うのだった。
「じゃあ朱里、またね」
「うん、お姉ちゃんまたね」
二人も別れの挨拶をする。そしてこう話をするのだった。
「人は別れる時の相手の顔を覚えている、ね」
「そうね。だからね」
「こうしてお互いに笑顔で」
「また。その時まで」
「いい話だな」
蒼志狼は二人の別れを見ながら述べた。
「別れの時は笑顔か」
「その通りだな」
リョウは明らかに微笑んでいる。そのうえでの言葉だった。
「人間っていうのは最後のその時を一番覚えているからな」
「だからあえてか」
「ああ。御前もそう思うだろ」
「否定はしない」
こう答える蒼志狼だった。
「だからいい話だと言った」
「そうだな。本当にな」
暖かい雰囲気のまま諸葛勤達は帰った。そしてそれを見送った孔明は。
すぐにだ。笑顔のまま劉備に言うのだった。
「では桃香様、すぐにです」
「政治よね」
「はい、今日は灌漑のことでお話があります」
「灌漑ね。あれもかなり大変よね」
「はい、国家の政治の根幹の一つです」
中国においてはとりわけそうである。黄河や長江といった大河を抱えている国だからだ。

「ですから余計にです」
「しっかりしないと駄目よね」
「はい、それではです」
「ええ。じゃあすぐにね」
笑顔のままだ。孔明は政治に戻る。姉妹の再会の楽しい時をそのまま胸に収めて。そうしたのである。

第六十五話　完

２０１１・２・２０

# 第六十六話　バイスとマチュア、闇の中で話すのことその一

第六十六話　バイスとマチュア、闇の中で話すのこと

張三姉妹は乱の後でだ。曹操達の後援を受けながら慰問の舞台を開き続けていた。その中でだ。

舞台が終わってから張角がだ。楽屋で妹達に言っていた。

三人共同じ部屋だ。あちこちに衣装やら何やらが散らかっている。その中でお菓子を食べながらだ。彼女は妹達に話すのだった。

「あの、今ね」

「何、姉さん」

「どうかしたの？」

「私達のマネージャーってどうなってるの？」

彼女が尋ねるのはそのことだった。

「親衛隊の人達は健在だけれど」

「まあね。あの娘達は頑張ってくれてるけれど」

「マネージャーになると」

「曹操さんのところの人が許昌で取り仕切ってくれてるらしいけれど」

所謂中央のマネジメントはだ。そうなっているのだ。

「あの中になると胸の小さい人とか猫が好きな小さい人とかがよね」

「ええ、そうよ」

「凛さんと風さんがね」

その二人がしているというのだ。

「軍師の仕事の合間にね」

「してくれてるわ」

「けれど現場は？」

そこはどうかとだ。張角はそれを尋ねるのだった。

「誰が仕切ってくれてるの？」

「私」
ここで言ったのは張宝だった。
「私がやってるの」
「あっ、人和ちゃんがだったの」
「そうだったのね」
張角だけでなくだ。張梁も気付いたのだった。
そうした声でだ。あらためて妹を見て言うのだった。
「じゃあ最初と同じね」
「そうなのね」
「そうね。けれど曹操さん達が助けてくれるから」
末妹は姉達にこのことを話した。
「それに。固定のファンもついたから」
「前の。無名だった頃とは」
「そこが違うのね」
「そう」
少なくともだ。かつてとは違っていた。
そしてだ。さらにであった。
「カーマンさんもいてくれるから」
「カーマンさんね」
「あの人もついてくれてるわね」
「実質私はマネージャーの仕事はしていないから」
張宝も実はそうだというのだった。
「あの人が全部してくれるから」
「凄いよね、あの人って」
「強いし」
マネージャーとして優秀なだけではないというのだ。
「あの人がいてくれたら」
「安心できるわね」
「そうそう。何か今まで通り？」
「楽しくやれるわね」

「けれど」
それでもだと。ここで張宝は妹達に言った。
「気になることは」
「あっ、そういえば」
「バイスとマチュア何処に行ったのよ」
二人もそのことに気付いた。
「あの乱が終わったら急にいなくなったけれど」
「どうしたのかしら」
「それがわからないの」
張宝もそれは知らないというのだった。
「曹操さん達も。わからないって」
「そうよね。どうしていなくなったのかしら」
「おかしな話よ、それって」
バイスとマチュアの失踪にだ。二人の姉もいぶかしんで話す。
「折角これからもマネージャーを御願いしようって思ったのに」
「どうしてなのかしらね、消えたのって」
「死んだ訳じゃないみたいだけれど」
張宝はその可能性はないと見た。

# 第六十六話　バイスとマチュア、闇の中で話すのことその二

「それだと死体があるし」
「ううん、じゃあやっぱり何処かに行ったの？」
「そうよね」
「それに」
ここでだ。張宝はあることを話した。
「あの時草薙さんと八神さんがいたけれど」
「あっ、あの火を使う人達」
「あの人達ね」
「あの人達はバイスさん達の名前を聞いて」
どうなったかというのである。このこともまた話される。
「顔を曇らせてたわね」
「草薙君だけじゃなくて」
「八神の奴もね。さらに険しい顔になってたわよね」
「オロチがどうとか言って」
「何よ、オロチって」
二人の姉は腕を組んでいぶかしむ顔になって述べた。
「蛇？お姉ちゃん蛇苦手」
「鰻を食べるのは大好きだけれど」
「本当に何なのかしら」
張宝はここでもいぶかしんで述べた。
「あの二人の失踪とオロチは」
「蛇なんて山に入れば一杯いるわよね」
「飽きる程ね」
「それじゃないのかしら」
「ううん、幾ら考えても」
「わからないわね」
三人も考えてもどうしてもだった。そしてだ。

その三人のところにだ。カーマンが来た。まずは部屋の扉をノックした。
「はい」
「どうぞ」
張角と張梁がそのノックに応える。
「カーマンさんですか？」
「そうだ」
その通りだとだ。彼は張角に対して述べた。
「私だ」
「どうぞ。入って下さい」
「とりあえず着替え終わったし」
張角と張梁がまた話す。それを受けてだ。
カーマンは三人の楽屋に入った。そうして言う言葉は。
「もう少し奇麗にしてもらいたいがな」
「ううん、そういうの苦手なの」
「別にいいじゃない」
張角も張梁もものぐさを見せる。
「だからそれはまあ」
「言いっこなしでね」
「仕方ないな。せめて下着は隠しておくようにな」
「それはしてます」
張宝がそれは大丈夫だと述べた。
「流石に」
「その様だな。それでだ」
「それで？」
「どうだっていうの？」
「舞台も終わった。早く宿に帰ることだ」
彼が三人に言うのはこのことだった。
「いいな、そして休め」
「そんな、これから町に出ようって思ったのに」

「それで遊ぼうって思ったのに」
この辺りは実に能天気な二人の姉達だ。
「お金もあるし」
「何か食べようって思ってたのに」
「店はもう予約している」
この辺りは流石と言えるカーマンだった。
「料理もな。それを食べてすぐに宿に入れ」
「安全の為ですか？」
張宝がそれを尋ねた。
「それでなんですか」
「そうだ。それに夜更かしはよくない」
それも駄目だというのだった。
「早寝早起き、さもないと肌が荒れるし身体にもよくない」
「ううん、何かお坊さんみたい」
「そんな生活じゃない」
「仕方ないわ。私達アイドルだから」
張宝がまた話した。
「カーマンさん達が言うには」
「私達の世界ではそう呼ぶ」
三姉妹はそれだというのだ。

# 第六十六話　バイスとマチュア、闇の中で話すのことその三

「アイドルならアイドルらしくすることだ」
「恋愛禁止？」
「ってあたし達男の子と付き合ったことないけれど」
「それもですね」
「そうだ。わかったら早く寝ることだ」
カーマンはまた話した。
「いいな。健康と安全の為だ」
「わかりました。残念だけれど」
項垂れて答えた張角だった。
「そうします」
「料理はいいものを予約しておいた」
それは保障するカーマンだった。
「存分に楽しむといい」
「ええ、それはね」
「期待しています」
張梁と張宝が述べる。
「カーマンさんの仕立てなら」
「絶対に確かですから」
「絶対ではないがな」
それは違うというカーマンだった。笑顔はないがだ。
それでもだ。三姉妹を飯店に連れて行ってだ。美味いものを食べさせる。そのうえで宿で休ませてだ。三人を完璧にマネージングしていた。
三姉妹は至って平和であった。だが、だ。
八神はだ。ふと立ち寄った町でだ。こんな話を聞いていた。
何処かで見た様な三人組がだ。店で飯を食いながら話をしていた。
「何かよ、青い服の男がな」

「兄貴、青い服か？」
「その男なんだな」
「ああ、南の方で化け物を退治したらしいな」
そんな話をするのだった。
「白い髪の毛に赤い服の奴な」
「何か目立つ奴だな」
「そいつがどうしたんだな」
「あちこち歩き回ってるって話だな」
そんなことを話していた。
「最近何かと物騒だけれどな」
「何だろうな、一体」
「気になるんだな」
「その二人を洛陽で見たって話もあるんだよ」
今度はだ。帝都のことも絡んできた。
「最近洛陽って物騒だけれどな」
「ああ、大将軍と宦官の対立が激しくなってるよな」
「帝大丈夫なんだな？」
「あと数日らしいな」
口髭の男が暗い顔でこのことを話した。
「いよいよな」
「崩御かよ」
「お亡くなりにならられるんだな」
小さいのとでかいのも暗い顔になった。本当に何処かで見た顔だ。
それは八神が見てもだ。そう言わざるを得ないことだった。
「じゃあ。帝が崩御されたら」
「いよいよ」
「大変なことになるかもな」
そんな話をしていた。それを聞いてだ。
八神は静かに店を後にしてだ。何処かに向かうのだった。
そしてその洛陽ではだ。

何進がだ。難しい顔で司馬慰に話していた。彼女のその屋敷でだ。
司馬慰をわざわざ招きだ。そうして話すのだった。
「では帝は」
「はい、明日にでもです」
帝がだ。どうなるかというのである。
「崩御されます」
「左様か。それではじゃ」
「その時に備えますか」
「新しい帝になられる時に奴等を除く」
具体的にはどうするかというのである。
「そうするぞ。よいな」
「では兵を用意しておきますか」
「そうじゃな。近衛の者達を集めておけ」
こう述べる何進だった。
「よいな」
「いえ、将軍」
しかしだ。司馬慰はここで彼女に言うのだった。

# 第六十六話　バイスとマチュア、闇の中で話すのことその四

「近衛の者達だけではです」
「不十分だと申すのか」
「はい」
まさにだ。その通りだというのである。
「数が足りませぬ」
「宦官達を捕らえるだけじゃぞ」
何進はいぶかしむ顔で述べた。
「それだけじゃが」
「兵は多い方が宜しいかと」
策士の顔を作っての言葉だった。
「ですからここはです」
「より多くの兵をか」
「はい、都に集めましょう」
「しかし。都におるのは近衛の者達だけじゃぞ」
何進が直接率いている。彼女の意のままになる兵達だ。
「さらにと申すと」
「牧達の兵を集めましょう」
具体的にはだ。それだというのだ。
「そうしましょう」
「あの者達の兵をか」
「はい、袁紹殿や曹操殿達がいます」
まず挙げられるのは何進の両腕とも言えるこの二人だった。
「袁術殿や孫策殿もおられますね」
「確かにのう。あの者達の兵は多い。それにじゃ」
ここで何進も話す。
「徐州に劉備も入ったしのう」
「彼女達の兵を集めてはどうでしょうか。とりわけ」

「とりわけ？」
「擁州の董卓殿です」
司馬慰が挙げたのはこの者のことだった。
「あの方の兵は如何でしょうか」
「董卓か」
「猛将呂布もいます。あの天下随一の武勇を誇る」
「何でも相当な強さだそうじゃな」
「しかも兵も精強です」
それもあるというのだ。
「今現在内政に多忙な他の牧達とも違い擁州は治まっていますし」
「呼びやすくもあるな」
「はい、ですから董卓殿で如何でしょうか」
あらためて彼女が推挙される。
「おまけに兵も多いですし。どうでしょうか」
「別にいらぬと思うが」
しかしだ。何進はまだこう言うのだった。
「大袈裟に兵を都に入れるのものう」
「十常侍達は油断できないかと」
「それもわかっておる」
そのことはだ。彼女自身が最もよくわかっていることだった。だからこそ今も司馬慰の言葉を聞いてだ。考える顔になって話をするのだ。
「だがのう」
「止められますか」
「しかし。それでもだというのじゃな」
「はい」
司馬慰も引かない。どうしてもだというのだ。
「是非共」
「そう言うか」
「それでどうされますか」

「猶予はならんしな」
帝の崩御は間近い。それではだった。
「では。ここは」
「はい、ここは」
「呼ぶとするか」
何進もだ。遂に決断した。
そのうえでだ。司馬慰に対して述べた。
「董卓をな」
「はい、それでは」
「出来るなら曹操か袁紹を呼びたいのじゃがな
これは何進の望みに他ならなかった。
「あの者達は部下の者達までよく知っておるしのう」
「しかし将軍」
司馬慰は誠実の仮面を被って彼女に述べた。

# 第六十六話　バイスとマチュア、闇の中で話すのことその五

「御二人は今は」
「うむ、曹操は乱を平定したばかりじゃ」
その黄巾の乱だ。それによってだ。
「新しく兵を得たとはいえその統率や出兵の疲れがあるのう」
「ですから曹操殿を洛陽に入れるのは気の毒です」
「袁紹は袁紹でまだ異民族征伐の後始末があるか」
「それは孫策殿も同じです」
「袁術も黄巾の乱に出した直後じゃ」
各地の牧達もそれはそれで動かしにくい事情があるのだ。
「後は劉備だけじゃな。徐州の」
「牧になったばかりですから」
「結果として董卓だけか」
「そうです。あの方だけです」
「そうじゃな。ではそうしよう」
自然とだ。司馬慰によって選択肢を狭められていることに気付いていない何進だった。そうしてそのうえでだ。彼女は話すのだった。
「ではわらわはじゃ」
「どうされますか、これからは」
「まずは董卓とその兵を洛陽に入れる」
細かい話をしたのだった。
「そしてそのうえでじゃ」
「宦官達を倒されますね」
「どちらにしてもあの者達は退けなければならん」
真剣な顔でだ。こう言うのだった。
「漢王朝の為にもな」
「そうです。国はようやく落ち着いてきました」
弱まっていた権威がだ。そうなってきたというのだ。

「乱も収まりましたし」
「そうじゃ。ここで帝を惑わす宦官達を一掃すればじゃ」
「国の憂いは消え去ります」
「漢は再び完全に力を取り戻すからのう」
こう言ってだ。彼女は国の為に動こうとする。しかしであった。
司馬慰は彼女の前から去るとだ。すぐに。
闇の中に消えた。そしてその闇の中でだった。
そこにはバイスとマチュアがいた。彼等と話すのだった。
「戻って来たのね」
「如何にも」
「その通りよ」
妖しい笑みでだ。こう答える二人だった。
「あの三姉妹のところからね」
「気付かれないようにしてね」
「そう。乱は不首尾に終わったわね」
司馬慰はそのことについても言及した。
「残念だったわね」
「いえいえ、そうではありませんよ」
于吉がだ。闇の中に来た。
そしてそのうえでだ。こう司馬慰に述べるのだった。
「あの娘達はかなりの力がありましたから」
「それで書にはなのね」
「はい、かなりの念が溜まりました」
そうなったというのである。
「その通りです」
「そう。ならいいけれど」
「そして宜しいでしょうか」
今度は于吉が司馬慰に問うた。
「貴女の方はどうなのでしょうか」
「私ね」

「はい、そちらの首尾はどうでしょうか」
「あの将軍はあれで」
何進のことだ。彼女が今仕えているその主のことだ。
「慎重なのよ。そして無能ではないわ」
「一介の肉屋の娘だったのに？」
「妹のお陰で大将軍にまでなったのになのね」
バイスとマチュアが話す。
「無能ではないの」
「そうなの」
「皇后の姉というだけで大将軍にはなれないわ」
司馬慰はこのことを指摘した。
「大将軍は国の柱石よ。三公と並ぶかそれ以上のね」
「そこまでにはなのね」
「無能では決してなれないのね」
「そうよ。ただね」
また言う司馬慰だった。

# 第六十六話　バイスとマチュア、闇の中で話すのことその六

「何とか。話を進ませたわ」
「それはいいことです」
また一人出て来た。今度はだ。
青い丈の長い服の男だった。黒い顎鬚を生やしている。髪は上が金色で左右が黒い。その男が闇の中に出て来たのである。
彼の姿を認めてだ。于吉が言った。
「ゲーニッツさんですか」
「はい、お久し振りです」
ゲーニッツは恭しく一礼して述べた。
「そちらの首尾はどうでしょうか」
「上手くいっているわ」
司馬慰はそのゲーニッツに対して不敵な笑みを浮かべて述べた。
「あと一歩よ」
「では。後は」
「張譲が動いて終わりよ」
それでだというのである。
「彼、彼女というのかしら」
「宦官ですから彼でいいでしょう」
于吉が宦官についてはこう述べた。
「元は男なのですから」
「そうね。それで」
それでだと言ってだ。司馬慰はさらに話す。
「董卓とその兵を都に入れるということは必ず張譲の耳に入るわ」
「私が入れておきましょう」
また于吉だった。
「彼とは既に接触しています」
「じゃああの書は」

「彼の手に渡すのね」
「いい手駒です」
于吉は張譲をこう評した。上から見る笑みでだ。
「悪い意味で政治力と知略があり」
「そして欲望が強い」
「己に関する欲望が」
「さらに我々の陰謀に気付いていない」
それがまだあるのだった。
「そうした人物こそが最高の手駒です」
「そうね。確かにね」
司馬慰もだ。今度は楽しげな笑みになった。
「己のことしか考えない悪人は。使い勝手がいいわ」
「彼には書を渡しておきます」
「それはするのね」
「はい、欲望を集め力を強くしていく書」
それをだ。張譲に渡すというのだ。
「彼がそれを手にすればです」
「張譲はその書の力を使うわ」
間違いないというのだ。それをするとだ。
「国を。己のものとする為にね」
「己の欲望の為に」
「張譲の頭の中にはそれしかないのだから」
つまりだ。完全な利己主義者というのだ。
そしてだ。その張譲をだ。どう使うかというのである。
「非常に使い勝手がいいわね」
「宦官というのはいいものね」
「そうね」
バイスとマチュアはその宦官についてほくそ笑んで話す。
「隠れられる場所にいて蠢くことができる」
「私達の様にね」

「ただ。権力を握ることには私達は興味はないけれど」
「それはね」
「はい。そしてです」
ここでまた話す于吉だった。
「あの方はどうでしょうか」
「刹那さんですね」
ゲーニッツが彼のことを話した。
「あの方はあの方で、です」
「順調に動かれていますか」
「そろそろ私達と合流します」
そうなるというのである。
「よいことにです」
「確かに。それではです」
さらにだった。于吉はその言葉を続ける。

# 第六十六話　バイスとマチュア、闇の中で話すのことその七

「北方から。骸さんもですね」
「あとは社達もね」
「ここに呼びましょう」
そうするというのだった。
「私達の仲間達をね」
「洛陽に集めて」
そしてだ。そのうえでだった。
彼等はさ。何をするかというのであった。
「復活させましょう」
「そうしましょう」
「そして。そのうえでね」
「それからだけれど」
「この世界でしていいのね」
「それを」
二人はだ。于吉と司馬慰に対して問うた。
そしてそのうえでだ。尋ねるのだった。
「私達は別に問題はないけれど」
「そちらの世界はいいのね」
「ええ、いいわ」
「全然構いません」
司馬慰とだ。于吉がすぐに答えた。
「私達もそれが望みだからね」
「この国に混乱ともたらすね」
こう話していく。そしてだった。
また一人来た。今度はだ。
小柄な男だった。砂色の髪に紫の目、そして鋭いが中性的な顔をしている。頬や額に赤い模様がある。黒と白、所々に金の模様があ

る。
その男が出て来てだ。そうして話すのだった。
「そうだ。そしてだ」
「あら、左慈」
「戻って来たのね」
「そうだ。バイスにマチュアだったな」
その男左慈はだ。二人に応えて述べた。
「元気そうだな」
「ええ、そうよ」
「こちらはね」
「俺もだ。それで于吉よ」
「何かあったのですか？」
「気付いていると思うがあの連中も来ている」
左慈は今度は于吉に対して述べた。
「厄介なことにな」
「そうですね。彼等も我々に気付いた様ですね」
「全く。忌々しい奴等だ」
左慈は顔を顰めさせて言った。
「何処でも俺達の邪魔をしようとする」
「我々と彼等の目的は違いますから」
「彼等は調和が目的です」
「そして俺達は破壊だ」
「我々は混沌ですが」
「奴等は秩序だからな」
それもまた話す。そうしてだった。
左慈はさらにだ。彼の名前も出した。
「華陀とかいったな。あの医者の力も侮れない」
「しかもバイスさん達と同じ世界からも大勢来ておられますし」
「誰かが気付いた？」
「それは一体」

「彼等と考えるのが妥当でしょう」
于吉がこう言うとだ。左慈もだった。
その顔を険しくさせてだ。また述べたのだった。
「そうだな、奴等と考えるのが一番だな」
「そうです。では我々はです」
「奴等を出し抜いてだ」
「はい、我々の目的を達しましょう」
「動きは着々と進んでいます」
ゲーニッツは不敵な笑みのまま話した。
「司馬慰さんのお言葉に。大将軍も乗りましたし」
「これで張譲が焦るわ」
そこまで読んでだ。司馬慰は何進に話したのである。そこまで計算してだったのだ。
「そして。大将軍を宮中に読んで」
「その口実は何だ」
「口実は色々とあるわ」
司馬慰は楽しげな笑みで左慈に話した。

## 第六十六話　バイスとマチュア、闇の中で話すのことその八

「特に今はね」
「今はだな」
「皇帝が死ぬわ」
皇帝に仕える者だがそれでもだ。司馬慰は皇帝への敬意を見せなかった。
そしてだ。そのうえでだった。
「そうなれば大将軍は必ず宮中に赴かなくてはならないわ」
「皇帝が死ねば。臣下としてですね」
「そうよ。だからよ」
また言う司馬慰だった。今度はゲーニッツに対してだ。
「赴かないわけにはいかないわ」
「けれどその時は貴女も」
「行かなくてはいけないわ」
ここでまた問うバイスとマチュアだった。
「それはどうするの？」
「そのことは」
「簡単よ。いなくなればいいのよ」
それで済むと。司馬慰は素っ気無く答えた。
「私はいなくなるわ」
「流石ですね」
于吉は司馬慰のその言葉を聞いて楽しげに笑ってみせた。
「重病ということにしてですね」
「療養に出たということにしてね」
「そうされますね」
「ええ、そうするわ」
こう話すのだった。そしてだ。
次にだ。司馬慰はこうも話した。

「ただ。皇帝はもうね」
「死んでいるかも知れないな」
左慈の言葉も素っ気無い。
「既にな」
「そうかもね。本当に明日も知れない命だから」
「美食と美酒と美女」
于吉がここで話に出したのはこの三つだった。
「それに溺れていては倒れるのも道理です」
「実は毒を盛ろうとも考えていた」
左慈はその陰謀を話した。
「だが。それはだ」
「するまでもありませんでした」
「その三つは何よりもの毒だからな」
「好都合でした。本当に」
「ええ。暗君だったけれど」
司馬慰の言葉はここでは過去形だった。しかも皇帝への忠誠は微塵もなかった。それをはっきりと出してしまっている言葉だった。
「あっさりと死んでくれそうで何よりだわ」
「さて、それではです」
ゲーニッツが笑みを浮かべながら述べる。
「我が同胞達、同志達は洛陽に集うのですね」
「ただ。気付かれないようにね」
「それは注意しないと駄目ね」
バイスとマチュアはそのことは忘れなかった。
「董卓の軍の中にも私達の世界から来ている人間は多いわ」
「彼等に見つかればことよ」
「ふん、忌々しい奴等だ」
左慈は言い捨てた。
「あの連中がいなければより簡単に進められたのだがな」
「そこは仕方ありませんね」

そのことにはこう返す于吉だった。
「むしろ面白くなっていいではありませんか」
「俺はそうは思わないがな」
「何、やるからには楽しむことです」
于吉は実際に楽しげな笑みで話す。
「私はそう考えます」
「ふん、まあいい」
于吉にはだ。左慈もそれ程尖ったところは見せなかった。
そのうえでだ。彼はこう于吉に言うのであった。
「どちらにしろだ。あの連中はだ」
「はい、退けなければなりません」
「それは絶対にだな」
「その通りです。それにしても多いですね」
「そうですね。確かに」
ゲーニッツが于吉のその言葉に応えて述べた。

# 第六十六話　バイスとマチュア、闇の中で話すのことその九

「皆さん来られたようですし」
「それであの妖怪はどうしたの？」
「腐れ外道は」
「もう蘇ることはありません」
今度はバイスとマチュアに述べるゲーニッツだった。
「完全に消し去ってあげました」
「魂までね」
「そうしたのね」
「この世界に妖怪は不要です」
実に素っ気無く述べるゲーニッツだった。
「ですから消えてもらいました」
「人食いには興味はない」
左慈も言う。
「そんな奴が来ればかえって邪魔だ」
「その通りですね。我々は破壊と混沌を求めはします」
于吉もそれについて話す。
「しかし。人間を食事の素材にすることはです」
「何の意味もない。ただしだ」
「人が人を喰らう」
「その世の中にすることは望むがな」
二人の笑みが変わった。邪なものにだ。
そしてそのうえでだ。さらに話す彼等だった。
その話になってからだ。バイスがこう一同に話した。
「ところで。話が一段落したし」
「そうね。だったらね」
「食事にしないかしら」
「それを提案するけれど」

「いいわね」
最初に頷いたのは司馬慰だった。
「それじゃあ。私がいい店を紹介するわ」
「洛陽のレストランですか」
ゲーニッツはその店をこう表現した。
「そこにですね」
「ええ。どうかしら」
また言う司馬慰だった。
「洛陽で。最もいいお店よ」
「そうね。人目を忍んで入ってね」
「それで頂きましょう」
「ええ。人目も気にしなくていいわ」
それも大丈夫だと話す司馬慰だった。
「そのお店は私の馴染みだから。裏手から入ってね」
「それから個室に入ってですね」
「それも用意してもらえるから。それじゃあね」
こう話してだ。そのうえでだった。
彼等は芝居が勧めるその店に向かう。そうして馳走を楽しむのだった。
馳走を楽しんでいるのはだ。魏延もだった。彼女は劉備の手料理を食べながらだ。満面の笑顔で彼女にこう言うのであった。
「桃香様、お見事です」
「美味しいの？」
「最高です」
こう言うのである。
「桃香様はお料理も得手とされているのですか」
「私のお家ってお母さんと二人だけだったから」
つまり母子家庭だったのである。
「それで。お料理もね」
「しておられたのですか」

「ええ、そうなの」
こうだ。エプロン姿で話す劉備だった。
「けれど。そんなに作ったことないけれど」
「いえ、最高です」
魏延はあくまでこう言うのだった。
「これ程までの料理は食べたことがありません」
「そんな、大袈裟よ」
「大袈裟ではないです」
「そうじゃな。それは確かじゃ」
このことは厳顔も認めた。彼女も同席しているのだ。

# 第六十六話　バイスとマチュア、闇の中で話すのことその十

「焔耶にとってはのう」
「そうよね。誰がどう見てもね」
馬岱はその魏延を横目に見ながら話す。
「焔耶は味覚以上にね」
「好きな相手の手料理を食べる」
「それでよね」
「絶対にそうじゃな」
「わ、私はただ」
本人の必死の言い訳が来た。
「本当に。美味だからこそ」
「いや、そうは見えん」
「どう見てもね」
しかし二人の言葉は冷静だ。それで魏延に言うのだった。
「まあそれでもよいがな」
「わかってるしね」
「何をわかっているというんだ」
「言わせるか？それを」
「今更」
二人の言葉は実に醒めたものだった。
「最早殆どの者がわかっておるぞ」
「御本人以外はね」
「な、何が言いたい」
言われてもまだ白を切ろうとする魏延だった。
「私はだ。桃香様の手料理に感謝してだ」
「そもそも何故それを食したいのじゃ？」
「御料理ならね。お店に言って食べてもいいし」
「そうじゃ。紫苑もいつも作るじゃろう」

「それで桃香様って」
「主の御心を食べているのだ」
強引にこう言う魏延だった。
「だからだ。私は嬉しいのだ」
「そういうことにせよというのじゃな」
「何か強引ね」
「強引って？」
しかしだ。劉備は気付いていない。きょとんとした顔でだ。
三人、特に魏延に対してだ。尋ねるのだった。
「何がなの？」
「あっ、いやそれは」
魏延は主のその言葉にだ。慌てふためきながら返した。
「何でもありません」
「何でもないの？」
「はい、桃香様の御心」
それだというのである。
「堪能させてもらっています」
「そう。じゃあまだまだあるからね」
魏延のその言葉にだ。劉備はにこりとして返した。
「じゃあね」
「はい、頂きます」
魏延にとってもだ。願ってもない言葉だった。そうしてだ。
劉備の手料理を貪る。そして食べ終わってから。
待ち足りた顔と声だった。目がきらきらと輝き顔にも照りがある。
喜びを全面に出し。言う言葉は。
「我が生涯に一片の悔いなし！」
「いや、まだ望みがある筈だ」
今度は趙雲が彼女に突っ込みを入れる。
「まだな」
「それは何だというんだ？」

「寝屋だな」
くすりと笑ってだ。こう魏延に言うのだった。
「それではないのか？後は」
「な、何が言いたいのだ」
「だからだ。桃香様と褥を供にだな」
「そ、それは別に」
ここでも白を切ろうとする。だが顔は真っ赤だ。まるで林檎の様だ。
「違うというのだな」
「私にそうしたやましい気持ちはないっ」
強引に断言する。
「桃香様に対する赤い心があるだけだ」
「ではこう言おう」
趙雲の方が一枚上手だ。これはどうしようもないことだった
その一枚上手の趙雲がだ。魏延に述べる。

# 第六十六話　バイスとマチュア、闇の中で話すのことその十一

「桃香様を御護りする為にだ」
「褥をというのか」
「それならどうだ？」
妖しい微笑みでだ。魏延に問う。
「私は愛紗と翠とそうしたいのだがな」
「ま、待て」
「何でそこであたしなんだよ」
名前を出された二人は戸惑いながら趙雲に言い返す。この二人も供にいるのだ。
「私はそうした趣味はないのだぞ」
「前から何かっていうとあたしに絡んでくるな」
「顔だけではないからな」
二人の整った顔を見ているだけではなかった。
その肢体も見てだ。話すのだった。
「美味そうな身体をしているな」
「私は料理ではないぞ」
「何だよ、食おうってのかよ」
「違う意味で食したいものだ」
妖しい流し目がだ。来た。
「二人共な。二人一度でもよいがな」
「だからどうして食するのだ」
「あたしの何を食うってんだよ」
「唇に」
二人のその麗しい唇を実際に見る。
「それに耳に」
「耳！？」
「それもかよ」

「それに胸に」
次はそれだった。
「腰、尻。脚もよいな」
「全てではないか」
「丸焼きにでもするのかよ」
「いや、生け造りだ」
それだというのである。
「おっと、腹に背中、指もいいな」
「全部ではないか」
「じゃあ醤油かけて食うのかよ」
「醤油はかけない」
それは違うというのである。
「だが。堪能できるな」
「ううん、まさかと思うが」
「そういう意味で食うってのかよ」
「そうだ。最初からそう言っているが」
「だから私はだ。まだそうした経験はだな」
「女同士の趣味はないって言ってるだろ」
「いいものだぞ。おなごの味も」
顔を真っ赤にして戸惑う二人を手玉に取り続ける趙雲だった。しかしである。
ここでだ。黄忠が出て来てだ。趙雲に述べる。
「それ位にしておきなさい」
「むっ、からかうのはこれ位にというのか」
「そうよ。二人共困っているじゃない」
「幾らか本気を入れているのだがな」
まだこう言う趙雲だった。
「まあ蒲公英も悪くはないが」
「守備範囲広いのね」
「男もおなごも好きだ」

黄忠にもこう返せる。
「今はおなごの方がいいか」
「とはいってもまだ経験はないわよね」
「それはそうだが」
それを言われるとだ。趙雲も辛い。言葉がいささか濁る。
「どういったものかは知らないが」
「それなら一度誰かと寝てみたらいいわ」
「いや、私は決めた相手とでないと駄目だ」
何故か少し大人しくなる趙雲だった。
「やはりな。互いに想い合う相手でないと」
「あら、星も意外と純情なのね」
「どうでもいい相手とは寝たくない」
趙雲はまた言った。
「やはりな。それは」
「そうね。私も同じだし」
「紫苑もか」
「そうよ。想う相手でないとそうしたことはね」
駄目だというのだ。そうした意味で黄忠も同じなのだった。
そしてだ。あらためて言う黄忠だった。
「若し無理にというのなら」
「叩きのめすな」
「弓だけじゃないから」
黄忠は確かに弓の使い手だ。しかし弓だけではないのだ。
「刀も拳もね」
「そうだな。弓だけでやっていけるものではないしな」
「そうよ。流石に皆程ではないけれど」
それでもだというのだ。
「使えるからね」
「私もおかしな男が何人言い寄ろうともだ」
これは趙雲もである。今度は不敵な笑みで述べる。

「勝手な思い通りにはならないからな」
「そうね。絶対にね」
「とにかくだ。私はだ」
「そんなつもりはないからな」
話が一段落したところで反撃に出た関羽と馬超だった。
「想う相手とだ」
「最初はだからな」
「焔耶は特にじゃな」
厳顔はまた魏延を見て述べた。
「桃香様以外は駄目じゃろ」
「私の主は桃香様だけだ」
こう言い換える魏延だった。
「それ以外の者にはだ」
「有り難う、焔耶ちゃん」
劉備はその言葉をそのまま聞いて笑う。
「これからも宜しくね」
「はい、この焔耶何があろうとも」
魏延は劉備のその言葉に熱い言葉で応える。
「桃香様に全てを捧げます」
「まあ忠誠心が高いのは確かね」
馬岱もそれは認めた。
「それは認めてもいいかな」
「けれど。何かが決定的に違うのだ」
張飛もそれはわかる。
「御姉ちゃんを見る目が違い過ぎるのだ」
「そうね。それはね」
こう話してだった。その魏延を見るのだった。あくまで劉備を熱く見る彼女をだ。

第六十六話　完

2011・3・10

# 第六十七話　何進、陥れられるのことその一

第六十七話　何進、陥れられるのこと

皇帝がだ。遂にだった。
「えっ、陛下が！？」
「はい、そうです」
「崩御されました」
孔明と鳳統がだ。劉備にこのことを話していた。
「病に倒れられ」
「そうして」
「以前から御身体が悪いとは聞いていたけれど」
劉備もだ。それは聞いていた。
「こんなに早くなんて」
「病に臥せっておられる間も女性の方をお傍に置かれ」
「お酒と御馳走を楽しんでおられたそうなので」
「それが駄目だったの」
「はい、何事も過ぎたるは及ばざるが如しです」
「特にその三つはです」
駄目だというのである。
「ですから。帝は」
「悲しいことですが」
「わかったわ。じゃあ喪に服してね」
劉備は牧として話した。
「そうしましょう」
「はい、すぐに」
「州としてですね」
「それと」
劉備はだ。続いて話す。
「次の帝は」

「それはもう決まっています」
「すぐに即位されます」
孔明と鳳統の言葉が明るくなった。一転してだ。
「陳留王がです」
「皇帝になられます」
「そう。あの方がなの」
「とても聡明な方だとのことです」
「まだご幼少ですが」
それでもだというのだ。
「ですから。宦官達の横暴は」
「かなりましになると思います」
「そう。宦官はね」
彼等の存在は今や国の癌となっていた。中央からなのだった。
「どうにもならないのね」
「はい、ただ」
「帝が代わられるその間にです」
孔明と鳳統は困った顔に戻った。そのうえでの言葉だった。
「都でおかしなことにならなければいいのですが」
「それが心配です」
「っていうと？」
劉備はその二人に問うた。都で何が起こるのかをだ。
「何か。洛陽で起こるの？」
「はい、先帝は宦官を重用されると共に大将軍を外戚に持っておられました」
「それで微妙な均衡が生じていました」
二人は劉備にこのことを話す。
「宦官と外戚」
「この二つの勢力がです」
「ですが。その帝が崩御されてです」
「新しい帝が即位されます」

本来なら慶賀にすべきことがだ。危うさの種となるというのだ。
「宦官達は新帝に取り入らなければなりません」
「大将軍も。新帝を擁立し己の地位を確かなものにしなければなりません」
「だからです」
「御互いに。帝が必要なのです」
そしてだ。さらにだというのだ。
「御互いが。さらに邪魔になります」
「だからこそ。動きがあるかも知れません」
「動き？」
「それが陰謀や武力を伴うものになれば」
「大変なことになります」
これがだ。二人の危惧していることだった。
「天下の騒乱になりかねません」
「そうならなければいいのですが」
「折角何とか収まりかけているのに？」
劉備もだ。乱と聞いて暗い顔になった。
「そんな、困るけれど」
「はい、ですから」
「今は。危うい状況です」
「私達に何かできるかしら」
劉備も暗い顔になって述べた。

# 第六十七話　何進、陥れられるのことその二

「何かあるかしら」
「残念ですが今は」
「徐州を治めるしかありません」
牧とその臣としてはだ。それしかないというのだった。
しかしだ。二人はここでだった。
劉備に対してだ。こんなことを言った。
「あの、それでなんですけれど」
「いいでしょうか」
「どうしたの？」
「水鏡先生の弟子で」
「私達の姉弟子にあたる娘ですけれど」
こう話していくのだった。
「徐庶ちゃんといいます」
「その娘がいるんですけれど」
「徐庶ちゃん？」
劉備もその名前を口にした。
「朱里ちゃんと雛里ちゃんのお友達なの」
「はい、その娘から文が来まして」
「桃香様のお話を聞いて」
「徐州に来たいと」
「そう仰っています」
それでだ。どうかというのだった。
「桃香様さえよかったら」
「如何でしょうか」
「うん、いいわよ」
劉備はだ。笑顔で即答した。
そしてだ。二人に対してあらためて述べた。

「朱里ちゃんと雛里ちゃんのお友達よね」
「はい、少しの間一緒にいました」
「私は。あの娘が先生のところに戻って来た時に何度か会ってます」
二人はそれで知っているというのだ。
「とてもいい娘です」
「御料理も上手で頭もよくて」
「そうなの。それなら」
「はい、それじゃあ」
「有り難うございます」
劉備が受け入れたのを受けてだ。軍師二人も笑顔になる。
劉備達は明るい話もあった。しかしだ。
各地の牧達はそれぞれだ。警戒の念を強めていた。皇帝の死がだ。
確実に騒乱の元になるとだ。そう確信してのことだった。
そしてその警戒の元はだ。どうかというとだ。
洛陽の何進の屋敷。そこにおいてだ。
屋敷の主はだ。ここに呼んだ司馬慰にだ。こう言うのだった。
「帝がか」
「はい、崩御されてです」
「そして陳留王が即位されるか」
「将軍、それでなのですが」
「わかっておる。董卓の兵を呼びじゃな」
「そうです。そして」
さらにだとだ。司馬慰は言うのだった。
「一度宮廷に行かれるべきです」
「宮廷にか」
「文武百官を集めましょう」
こうだ。司馬慰はもっともな声で話す。
「その為にもです」
「待て、しかしじゃ」
だがここでだ。何進は警戒する顔になってだ。司馬慰に言った。

「今宮廷に行けば宦官達がじゃ」
「罠を張っているというのですね」
「そうじゃ。今行けばわらわの命が危うい」
こう言うのだった。彼女も真剣に危惧している。
「今宮廷に行けばまずいじゃろ」
「いえ、そうではありません」
ところがだ。司馬慰は落ち着いた顔で彼女に言うのだった。
「むしろです。ここで宮廷に行かれない方がです」
「危ういというのか」
「そうです。今は将軍のお立場を固めなおすべきです」
また言う司馬慰だった。
「ですから。何としても」
「ふむ。そうか」
今や彼女の頭脳とも言っていい司馬慰の言葉だ。聞けない筈がなかった。

# 第六十七話　何進、陥れられるのことその三

「言われてみればそうじゃな」
「はい、ですから」
「わかった。それではじゃ」
彼女は司馬慰の言葉を受けることにした。そうしてだった。
すぐにだ。こう司馬慰に言った。
「では明日じゃな」
「明日にですね」
「宮廷に赴こう」
実際にそうするというのだ。
「そして文武百官をそこに集めよう」
「それでなのですが」
「それで？」
「まず将軍が赴かれます」
まずは彼女がだというのだ。
「そこから百官を呼ばれるのです」
「事前に呼ばぬのか」
「そうです。そこが肝心です」
「わらわがあの者達を呼ぶのか」
「そして百官を迎え入れます。そうすればです」
「そうじゃな。あの者達をそのまま呼ぶよりよいな」
話を聞いてだ。もっともだと頷く何進だった。
「それぞれの顔を見てじゃ。帝への忠誠を確かめるのはのう」
「そしてです」
さらにあると述べる司馬慰だった。
「宦官達への対応も確かめることになります」
「よし、わかった」
司馬慰のその策にだ。満足した顔で頷く。

そしてそのうえでだ。あらためて話すのだった。
「そうするとしよう。御主の言うままにな」
「有り難き御言葉。それでは」
「今が肝心じゃからのう」
それはよくわかっていた。何進もだ。
「油断すればそこで、じゃな」
「これまでのことも何もかも水泡に帰します」
「ようやく天下が収まりつつある」
とりあえず彼女は天下のことも考えていた。確かに己のことを強く考えている。しかしそれだけではないのである。
「ここでしっかりせねばな」
「では。明日」
「宮廷に赴く」
あらためてその決意を述べた。
「そうしようぞ」
「それでは」
「してじゃ」
ここで司馬慰にさらに言うのだった。
「そなたも共に来てくれるな」
「無論です」
それは確かにだと。司馬慰は断言した。
「将軍お一人ではやはり」
「危険じゃな」
「ですから。私もまた」
「うむ、頼むぞ」
こう話すのだった。これで何進の方針は決まった。
それで翌朝すぐに屋敷を出てだ。司馬慰と合流してそのうえで宮廷に参内しようとする。しかしだった。
待ち合わせの場所にだ。彼女はいなかった。そしてだ。
そこに彼女の家の者がいてだ。こう告げるのだった。

「御主人様はお帰りになられてから急に」
「どうしたのじゃ？」
天幕の車からだ。その者の話を聞く。
「まさか病にでもなかったのか」
「はい、そうです」
まさにその通りだというのである。
「それで今日は」
「参内できぬか」
「申し訳ないとのことです」
「致し方ないのう」
何進は残念に思った。しかしそれでは仕方がなかった。
「では。わらわだけでじゃ」
「行かれますね」
「宮廷に」
「うむ、そうする」
こう護衛の兵士達にも述べた。
「そしてじゃ。宮廷じゃから」
「帯剣なく」
「そして我等も宮廷にはですね」
「門のところで待っておれ」
そうせよというのだった。

# 第六十七話　何進、陥れられるのことその四

「わかったな」
「いえ、将軍ここは」
「誰か護衛につけられるべきでは？」
「そうです」
しかしだった。ここでだ。
兵士達は口々にだ。こう言うのであった。
「武官の方でどなたか御呼びして」
「剣や槍は使えずとも武芸に秀でた方をです」
「そうして護衛とされては」
「今ならまだ間に合います」
こう進言する。そしてその理由も話す。
「十常侍は危険です」
「宮廷こそは奴等の根城ですし」
「今も。どんな罠を仕掛けて来るかわかりません」
「ですから」
「いや、ここはそれではならん」
何進は司馬慰の言葉を思い出しながら述べた。
「ここはわらわ一人で入るのじゃ」
「宮廷に」
「あくまで、ですか」
「そしてそこから文武の百官を呼ぶ」
司馬慰に言われたことをそのまま話す。
「そうするのじゃ」
「そうされますか」
「あの、どうしてもですか」
「ここは」
「そうじゃ。そうする」

また言う何進だった。
「わかったのう。司馬慰の言った通りにするのじゃ」
「あの方のですか」
「そうされると」
「あの者は切れ者じゃ」
彼女に対する絶対の信頼も見せる。
「その言った通りにして間違えたことはない」
「左様ですか」
「司馬慰殿が仰るからこそ」
「そうされますか」
「そうする。大丈夫じゃ」
司馬慰への信頼のまま述べる。
「門で待っておれ。よいな」
「はい、わかりました」
「それならですね」
「今は」
「そういうことじゃ。ではな」
こう話してだ。彼等は宮廷に向かう。しかしだった。
ふとだ。兵士の一人が馬上で行った。
「そういえば司馬慰様の真名は」
「むっ、そういえば誰も知らないか？」
「そうだな。何と仰ったか」
「聞いたことがないぞ」
「そうだ、ない」
「何というのだ？」
兵士達の誰もがだ。それは知らなかった。
「それで御呼びすることは駄目だとしても」
「真名は知っていていいのにな」
「誰も知らないのか？」
「そうだな、誰も」

「知らないのか」
彼等の話にだ。何進もだった。
ふと気付いた顔になってだ。こう述べた。
「そういえばわらわもじゃ」
「将軍もですか」
「御存知ありませんか」
「そうでしたか」
「後で聞いておこう」
特に深く考えることなく述べた言葉だった。
「腹心の真名を知るのは当然じゃな」
「そうです。それでは」
「聞かれますね」
「そうする。思えば迂闊じゃった」
何進は眉を顰めさせて述べた。

# 第六十七話　何進、陥れられるのことその五

「そんなことを知らないでのう」
「では。あの方が戻られたら」
「そうされますか」
「ではな」
こんな話をしながらだ。宮廷に着いてだ。そしてだ。
その巨大な門の前に兵士達を待たせてだ。そのうえでだった。
何進は車から出て一人で宮廷に入る。程なくしてだ。
不意にだ。周囲にだった。
兵士達が来た。そのうえで彼女を取り囲んだ。
「むっ、何じゃ御主達は」
「逆賊、覚悟するのだ」
「神妙にしろ」
「わらわが逆賊だと！？」
その言葉にだ。何進はその目をきっとさせた。
そしてそのうえで彼等に言い返す。威圧感も出してだ。
「わらわを誰と思うておる」
こう言い返すのだった。
「大将軍にして先帝の義兄にあたる者ぞ。そのわらわを逆賊と言うか」
「その通りだよ」
その何進の目の前にだった。
白い、丈の長い法衣を思わせる服に薄紫のショートヘアの小柄な者が来た。
その服は白だけでなく胸や腹の辺りは赤井。スカートもだ。
目は赤く瞳は小さい。少女にも見え少年にも見える。そうした顔だ。
その顔の者が来てだ。こう彼女に言うのだった。

「君は逆賊だよ」
「張譲、御主か」
「そうだよ。一人になったのが運の尽きだね」
その者張譲は残忍そうな笑みを浮かべて何進に話す。
「ここでこうして」
「わらわを殺すつもりか」
「殺す？ただ殺すなんて面白くないじゃないか」
こう言う張譲だった。
「それよりも」
「嬲り殺しにするつもりか」
「それも好きだけれど。君とは色々あったからね」
政敵同士としてだ。いがみ合ってきたのだ。
それを踏まえてだ。今張譲は話すのだった。
「だから殺しはしないよ」
「殺さないというのか」
「そうじゃ。それはしないよ」
張譲の言葉が続く。
「ただ。君は猫が嫌いだったね」
「わらわは犬派じゃ」
そちらだというのである。
「猫なぞ。見るのも嫌じゃ」
「そうだね。だから」
「だからだと？」
「これを飲ませてあげるよ」
笑みの残忍さが一層深くなった。そしてだ。
兵士達にだ。こう命じた。
「捕まえるんだ」
「はっ、わかりました」
「それでは」
兵士達が彼の言葉に頷きだ。そうしてだった。

何進は捕らえられだ。そのうえで。
張譲は彼女の口を強引に開けさせ何か黒く丸いものを入れさせ飲ませた。それ以降何進を見た者はいない。
新帝が即位した。しかしだ。
大将軍何進の姿は見えずだ。逆賊として処刑されたと公表された。
彼に従う朝廷の官吏達は全員追放された。そしてさらにだ。
擁州の牧である董卓がその家臣達や兵士達と共に洛陽に入れられだ。彼女が相国となった。彼女の家臣達も国の要職を占めた。
ここまで瞬く間であった。これに対してだ。
各州の牧達も驚きを隠せなかった。それは曹操も同じだった。
彼女は腹心達を集めてだ。こう彼女達に言うのだった。
「まさかとは思ったけれどね」
「はい、確かに」
「この事態はです」
まずは夏侯姉妹が述べた。
「張譲が動くとは」
「危惧はしていましたが」
「正直なところね」
曹操もだ。己の席からだ。考える顔で述べた。

# 第六十七話　何進、陥れられるのことその六

「宦官達が動くことは考えていたわ」
「それも帝が崩御された時に」
「それはですね」
「ええ。大将軍だけだったら危うかったけれど」
謀略の専門家と言っていい宦官達相手にはだ。そうだというのだ。
「けれどそれでもね」
「はい、今は司馬慰殿がおられますので」
「謀略にも対すると思えたのですが」
「彼女はどうしたの？」
曹操はその司馬慰について尋ねた。
「大将軍の傍にいつもいた筈だけれど」
「それがおかしいのです」
「妙なことになっています」
今度は曹洪と曹仁が話す。
「あの方の姿が見えません」
「全くです」
こう話すのだった。
「将軍の処刑直前から」
「病ということで御自身の屋敷に引き篭もられ」
「そして今はです」
「洛陽におられない様です」
「？妙ね」
曹操はその話を聞いて眉を顰めさせた。
「急に病になって。しかも洛陽にいない」
「おかしいというものではないのでは？」
「どうしてそんなことが」
「大将軍の処刑の直前からいなくなる」

「そうなったというのは」
「一体」
いぶかしみながら考えていく彼女達だった。そしてだ。
さらにだ。こうも話していくのだった。
「司馬慰殿がいればこそ宦官達に対することができたのに」
「その司馬慰殿がいなくなり」
「今も姿を見せない」
「どうしてなのでしょうか」
「しかもよ」
また言う曹操だった。
「大将軍は処刑されたわね」
「はい、確かに」
「そう言われています」
「それでどうして首が晒されていないのかしら」
曹操はいぶかしんだままこのことも話す。
「逆賊として処刑されたのなら」
「そうですね。必ずです」
ここで言ったのは荀?だ。
「その首が。然るべき場所に晒されます」
「ばらばらにするにしてもね」
そうなってもだというのだ。
「屍が晒されるけれど」
「それがありません」
「おかしな話だわ。それも」
「司馬慰殿の急の失踪といい」
「そして大将軍の首がない」
「考えれば考える程」
「おかしなことが続きますね」
「極めつけにおかしなことは」
さらにだと。曹操はまたしても述べた。

「あれよ。董卓よ」
「都に入っちゃいましたね」
「擁州から」
許緒と典韋が言った。
「これも何か」
「妙ですよね」
「しかも相国になったわ」
曹操は彼女の今も話す。
「瞬く間にね」
「華琳様、どうも」
「おかしな感じです」
郭嘉と程?は不穏なものを感じる顔を見せている。
「あまりにも上手く出来過ぎています」
「誰かが脚本を書いた様な」
「ええ。宦官達にとって都合のいいね」
曹操は軍師二人の言葉にこう言い加えた。
「あの者達は政敵を取り除き」
「そして自らの兵も手に入れました」
「擁州の」
「董卓は間違いなく宦官達と手を組んでいるわ」
曹操はそれは間違いないと言った。
「擁州の兵はもう宦官達の私兵よ」
「それはまずいですね」
夏侯淵が述べた。
「あの者達の弱みは己の武力を持たないことでしたが」
「では鬼に金棒ではないか」
妹の今の言葉に姉が眉を顰めさせて述べた。
「大将軍という目の上のたんこぶもいなくなった。それでは」
「ええ。少なくとも洛陽ではね」
曹操も彼女のその言葉に応えて述べる。

# 第六十七話　何進、陥れられるのことその七

「誰も。宦官達には逆らえないわ」
「では次は」
荀？は先を読んで述べた。
「各地の牧達を」
「そうしてくるわね」
曹操もだ。呼んでいた。
「私に麗羽、美羽」
「それに孫策殿」
「劉備殿もですね」
「その力を奪いに来るわね」
それは間違いないというのだ。
「特に私と麗羽はね」
彼女達二人は。とりわけだというのだ。
「消そうとしてくるわ」
「何という奴等だ」
「華琳様、それはです」
夏侯姉妹がだ。ムキになって述べてきた。普段は冷静な妹もだ。
「我等がいる限りです」
「華琳様には指一本触れさせません」
「有り難う。頼りにしているわ」
曹操は彼女達の忠誠を受けてこう返した。
「ただね。露骨には来ないね」
「露骨にはですか」
「それはありませんか」
「おそらく。こう来るわ」
曹操は宦官達のことを考えだ。家臣達に話した。
「何だかんだと難癖をつけて」

「力を削いでくる」
「そうしてきますか」
「ええ、それに従わなければ謀反人として征伐する」
そうしてくるというのだ。
「こう来るわね」
「力を削いでやがて口実をつけて滅ぼすか」
「謀反人として滅ぼすか」
「どちらにしてもですか」
「滅ぼしにかかると」
「私達各地の牧はそもそも大将軍の派だったし」
政敵の残りだ。これが大きかった。
「それに力も持っているわ」
「それぞれの州を掌握し」
「そして兵もですね」
「あの連中が何もしてこない筈がないわね」
そうしたことを考えてだ。当然として考えられることだった。
「絶対にしてくるわ」
「ではそれに対して」
「どうするか」
「それですが」
「座して死を待つことはしないわ」
それはないと言う曹操だった。
「絶対にね。けれど」
「けれど？」
「けれどといいますと」
「先に動いたら負けよ」
それはしないというのだ。
「絶対にね。動いたらね」
「それで大義名分がなくなる」
「だからですか」

「ええ。だから今はどの娘達も動かないわね」
曹操以外の牧達もというのだ。
「麗羽は危ういけれどね」
「あの方は。確かに」
「そういうところがありますから」
彼女を幼い頃から知る曹仁と曹洪が話す。
「下手をすると」
「先に動かれるかも」
「あの娘には一応釘を刺しておくべきね」
曹操は袁紹についてはそうするというのだ。
「絶対に向こうから仕掛けてくるから自分では動くなってね」
「はい、念の為に」
「そうしておきましょう」
「はい、それでは」
「麗羽殿には」
曹操が直接手紙を書くことになったのだった。これで袁紹には釘が刺された。

# 第六十七話　何進、陥れられるのことその八

しかしだ。それでもなのだった。
「とにかく。これで」
「折角収まりかけた天下は」
「また複雑なことになりますね」
「ええ。間違いなくね」
それは確実だというのだった。戦乱が再び起ころうとしていた。
そしてだ。その袁紹がだ。曹操からの文を見ながら言うのだった。
「華琳も。言いますわね」
「何と書かれてたのですか？」
審配が主に対して問うた。
「それで」
「今は自重しろと書いてますわ」
そうだというのだ。
「そしてそのうえで」
「そのうえで？」
「時が来れば動くことになると」
そうしたことも書いてあるというのだ。
「だから。今は」
「自重せよというのですね」
「ええ。ただ」
ここでだ。袁紹はまた言った。
「私達の力を削ぐ口実が問題ですわね」
「ですよね。異民族でやばいのはあらかた潰しましたし」
「今仕掛けるとしたら」
文醜と顔良が話す。
「万里の長城を修復しろとか？」
「そういうのでしょうか」

「どうかしら。むしろ」
「他のことの方がいいのじゃないかしら」
ここでこう言ったのは辛評と辛?だった。
「建築は遅らせることができるから」
「それよりも確実な方法が」
「それが問題ですわね。とにかく」
また言う袁紹だった。その眉には剣呑なものが宿っている。
「私達は。何かとまずい状況にありますわね」
「確かに。それはです」
「間違いありません」
「水華さん、恋花さん」
袁紹は軍師二人に声をかけた。
「情報は集めておきなさい」
「洛陽のですね」
「それを」
「丁度それに長けた方々も来ていますし」
別世界から来た面々にだというのだ。
「わかりましたわね」
「御意」
「それでは」
軍師二人も主の言葉に頷く。
「蒼月殿や火月殿達も」
「そうしておきましょう」
「頼みましたわ。ただ」
ここでまた言う袁紹だった。
「若しかするとですけれど」
「若しかすると?」
「といいますと」
「大将軍は生きておられるかも知れませんわね」
こんなことを言うのだった。

「ひょっとしたらですけれど」
「まさか、それは」
「幾ら何でも」
高覧と張?がそれはないのではと言う。
「それはないのでは?」
「そうです、張譲が生かしておくとは考えられません」
「あの者は非常に底意地の悪い男でしてよ」
しかしだ。袁紹はここでこのことを話した。
「これ以上はないまでに」
「だからですか?」
「そうだからこそ」
「ええ、確かに可能性は低いですけれど」
それでもだというのだ。
「生きておられるかも。ただ」
「ただ?」
「ただですか」
「あの底意地の悪い張譲のこと」
それが問題であった。彼のその性格こそがだ。
「必ず。何か悪意を以てそうしていますわね」
「そうですね。それは間違いありません」
「張譲がそうするとなると」
辛姉妹が主のその言葉に頷く。

# 第六十七話　何進、陥れられるのことその九

「大将軍に対して必ず」
「そうしている筈です」
「そしてその底意地の悪さは」
どうなるか。袁紹は忌々しげな顔になって話す。
「私達にも向けられますわよ」
「ではここは」
「警戒すべきですね」
「軍師達は情報収集」
それに徹せよというのだ。
「五人衆を筆頭とした将軍達は兵の備えを」
「はい、わかりました」
「それでは」
家臣達は一斉に主の言葉に頷いた。
「備えさせて頂きます」
「今より」
「何かして来ないと思わないことですわね」
それだけは間違いないというのである。
「絶対に。してきますわよ」
「そうですね。宦官の残る敵は我々」
「それなら」
袁紹達もだ。警戒体制に入った。そうしてだ。
董卓達はだ。いぶかしみながらも洛陽に入っていた。その中でだ。
呂布がだ。栄えている筈のその街の中でだ。こう言うのだった。
「嫌な街」
「恋殿、どうされたのですか？」
「何かあったの？」
供にいた陳宮と董白が彼女に問うた。

「洛陽に何か」
「密偵でもいるの？」
「密偵みたいなのがいる」
こう二人に言うのだった。
「白い。嫌な奴等が」
「白！？」
「白っていうと」
そう言われてもだ。二人はだった。
いぶかしんでだ。こう言うだけだった。
「白い色の者なぞ」
「何処にもいないわよ」
「そうなのです。確かに民の顔は晴れませんが」
「それのことなの？」
「その民を苦しめている奴等」
それだといった口調だった。
「その連中がいる」
「白がなのです？」
「その連中がって」
「注意しておかないと駄目」
今度はこう言う呂布だった。
「特に月の周りは」
「月様の」
「お姉様の周りは」
「そう、詠だけじゃ駄目かも知れない」
呂布の口調はいつも通りだ。しかしなのだった。
何か警戒する様な素振りでだ。二人に話していくのだった。
「これから。大変なことになる」
「そういえば宦官達が」
「急にいなくなったけれど」
「それもある。とにかく今は」

「警戒しないと駄目なのですね」
「そういうことね」
「そう。月は恋が守る」
そうするともいうのだった。
「月も。恋の大切な友達だから」
「じゃあねねもなのです」
「勿論私もね」
二人も強い声で言う。
「恋殿と共に」
「この世でたった二人の姉妹よ。だったら」
「そう。守ろう」
こう話すのだった。彼女達は決意していた。
しかしその決意が実るかどうかは。彼女達は知らなかった。怪しい悪意はだ。洛陽を中心として。国を覆おうとしていたのであった。

第六十七話　完

２０１１・３・１２

# 第六十八話　華陀、益州に戻るのことその一

第六十八話　華陀、益州に戻るのこと

華陀と愉快な怪物達は黄巾の乱の後また病人達を助ける旅に入っていた。しかしである。

貂蝉がだ。天地を覆していた。

何とだ。地中をだ。クロールで進んでいたのだ。

それを見てだ。華陀は言うのであった。

「それは何の術なんだ？」

「この術？」

「ああ。何ていう術なんだ？」

こう彼に問うのである。

「それで何の術なんだ？」

「地行術よ」

貂蝉は泳ぎながらその問いに答えた。

「最近ちょっと運動不足だったから」

「それで泳いでるんだな」

「そうなの。運動は美容の共よ」

こう言って泳ぐのである。

「ダーリンもどうかしら」

「生憎俺はその術は知らなくてな」

平然とした顔で答える華陀だった。

「したくてもできないんだ」

「あら、じゃあ教えてあげるのに」

「あたしもできるわよ」

卑弥呼もいた。

「ダーリンにはあたしが教えてあげるわ」

「そうだな。じゃあ気が向けばな」

「できるようになるのね」

「そうするのね」
「水の中を泳ぐことはできるんだがな」
それはできるというのだ。
「けれどな。そういうのはな」
「だから。教えてあげるわよ」
「手取り足取りね」
二人はこう言って華陀を誘うのだった。そしてだ。
そんな彼等を見てだ。刀馬は怪訝な顔になってだ。そのうえでギースに問うのだった。
「こうした術もあるのか」
「知らん」
腕を組み困惑している顔のギースだった。
「人間にできるのかどうか」
「それ自体が疑問だな」
「この様な術は聞いたことがない」
クラウザーはこう言う。
「気を使うことはできるが」
「それでもだ。地面の中を泳ぐのはだ」
「できないな」
「そうだ、できない」
こう刀馬に話すギースだった。
「とてもな」
「全くだな。しかし」
「しかし?」
「こうした術は役に立つ」
ギースはそのことは認めた。
「確かにな」
「そうだな。少なくともだ」
クラウザーは自分も泳ぎはじめた卑弥呼を見ていた。
「この二人は。術だけでなくだ」

「それだけでなくだな」
「その心も確かだ」
そうだというのだ。
「悪人ではない」
「ふん、私には合わんな」
ギースはこれまでの生き方から述べる。
「しかし。この連中はだ」
「どうなのだ？貴様は」
「少なくとも貴様よりはましだな」
ギースがクラウザーに返した言葉はこれだった。
「嫌いではない」
「そうか」
「無論貴様よりもだ」
ギースは今度はミスタービッグを見て話した。
「貴様まえ来ているとはな」
「ふん、腐れ縁だな」
ミスタービッグはギースを一瞥してから述べた。
「貴様と。この世界でも一緒になるとはな」
「何時かのキングオブファイターズ以来だったな」
「そうだな。あの時以来だな」
「あれはあれで悪くなかった」
クラウザーはその時のことを思い出しながら述べた。

## 第六十八話　華陀、益州に戻るのことその二

「楽しませてはもらった」
「そうか」
「そうだ、楽しんだ」
クラウザーはまた言った。
「そうさせてもらった。だが」
「だが？」
「やがては決着をつけなければならんな」
ギースを見てだ。クラウザーは述べるのだった。
「貴様とはな」
「それはこちらも同じことだ」
「そうか。同じか」
「貴様を倒すのは私だ」
「御互いにそうだな」
「ボガード兄弟もそうだが」
無論彼等のことは忘れてはいなかった。しかしだというのだ。
クラウザーを見据えてだ。ギースは話すのだった。
「貴様もだ。私が倒さなければならない相手だ」
「血は争えぬな」
クラウザーも彼に応える。
「やはりな」
「その通りだな。我等はな」
御互いに火花を散らすのだった。彼等は今は供にいるがそれでもだった。その中にある因果は何があろうとも消えないものだった。
幻十郎がだ。彼等のところに来た。そうして言うのだった。
「面白い話がある」
「何だ？」
「この国の都で動きがあった」

そうなったというのだ。
「董卓とかいう小娘が宰相になったらしいな」
「董卓？」
「董卓というと」
その名前を聞いてだ。まずはギースとクラウザーが述べた。
「あの擁州のか」
「牧だったな」
「そうだ。その小娘がだ」
宰相になったと。話すのである。
「そしてだ。それまで力を握っていた大将軍がだ」
「死んだか」
「殺されたか」
「そうらしいな。それにだ」
さらにだとだ。幻十郎は話していく。
「どうも都では怪しい動きが続いているな」
「怪しいか」
「俺には関係の話だが」
幻十郎はそれは断った。そのうえでの言葉だった。
「しかしだ。それでもだ、話は聞いた」
「戦乱になるか」
刀馬は幻十郎の言葉の調子からそれを察した。
「都での乱れがそのまま」
「そうなるかもな。では俺は」
「どうするつもりだ、それで貴様は」
「機が出来るかもな」
酷薄な笑みでの今の言葉だった。
「あいつを斬る機会がな」
「覇王丸という男か」
「あの男を斬るのは俺だ」
幻十郎は今度は真剣な顔になっている。

「俺以外の誰でもない」
「そうは。では俺もだ」
「貴様もそうした相手がいるな」
「俺の刃は何の為にあるか」
そのことから話すのだった。
「それはあいつの刃を斬る為だ」
「だからだな」
「俺は零だ」
刀馬は己をそれだと話す。
「絶対のものだ」
「零が絶対だというのだな」
「そうだ、それは不動」
零はだ。それだというのだ。
「何があろうとも動かないものだ」
「ではその不動により斬るか」
「あいつを。そうする」
「ならそうするがいい」
幻十郎はそれはいいとした。

# 第六十八話　華陀、益州に戻るのことその三

「俺は俺の斬りたい奴を斬る」
「果たして本心からそうなのか」
その彼にだ。ミスタービッグが言ったのだった。
「貴様等はな」
「何が言いたい」
「俺達の本心は違うというのか」
「斬ればそれで終わりだ」
ミスタービッグが言うのはこのことだった。
「しかしだ。その相手が永遠にいればだ」
「どうだというのだ」
「それで」
「その相手と戦える悦びがあるな」
「俺はただ斬るだけだ」
「俺もだ」
二人はこう返してミスタービッグの言葉を否定する。
「それで何故だ」
「そうしたことを言う」
「私の間違いだというのだな」
「そうだ。俺はあの男を斬りたいだけだ」
「剣はその為だけにあるものだ」
「かもな。だが本心はどうかだ」
まだ言うミスタービッグだった。
「それが問題だが」
「安心しろ、俺はだ」
「俺もだ」
また言う二人だった。
「嘘はつかない」

「決してな」
「そう言うのだな」
「何度も言わせるか」
「くどいと思わぬか」
「そうだな。ではこれで止めておこう」
ミスタービッグもだ。ここで言葉を止めた。
そのうえでだ。彼はその場を去った。そしてだ。
幻十郎のところにだ。泳ぎ終えた貂蝉が来た。そのうえでだ。
彼に対してだ。こう尋ねたのだった。
「ねえ、今だけれど」
「都のことか」
「そうよ。何があったの？」
問うのはこのことだった。
「よかったら教えてくれないかしら」
「だからだ。怪しい動きがあった」
こう彼にも話す幻十郎だった。
「これまで権力を握っていた大将軍が処刑されてだ」
「そして宦官達がなのね」
「あの連中ではに」
「違うの？」
「董卓という娘が権力の座に就いた」
そうなったとだ。貂蝉にも話すのだった。
「そうなった」
「そう。それじゃあ」
「それでは？何だ」
「やっぱり動いたのね」
ここでだ。貂蝉の目が光った。
そのうえでだ。彼はこんなことを言った。
「時が来たわね」
「時だと？」

「そうよ。時よ」
こう言うのである。
「その時がね」
「どういうことだ、それは」
「そうだ、それはだ」
刀馬も貂蝉に対して問うた。
「どういうことなのだ」
「わかるわ。ただ」
「ただ？」
「今度は何だ」
「少し用ができたわ」
こんなことを言う貂蝉だった。
「少し。皆とはお別れね」
「そうね」
貂蝉だけでなく卑弥呼も言う。
「行かなきゃいけないところができたわ」
「これからね」
「何だ？何処かに行くのか？」
華陀も二人のところに来た。そのうえで問うのだった。

# 第六十八話　華陀、益州に戻るのことその四

「今度は何処だ？」
「あらダーリンいいところに来たわね」
「丁度いいわ」
「何だ、俺も行くのか」
「ええ、そうなの」
「少しいいかしら」
「ああ、いいぞ」
華陀は微笑んで二人に答えた。
「何かはわからないけれどな」
「わからないが行くのか」
「相変わらず大物だな」
ギースもクラウザーも彼の器は認めるしかなかった。
「しかしだ。では我々は」
「暫くはここに留まることになるか」
「ああ、済まないな」
華陀はその彼等に対して答えた。
「度々こうなるがな」
「全てはね」
「この世界の為だから」
怪物達も言う。
「少しだけね」
「待っていてね」
「ふむ。何かはわからないがな」
「いいだろう」
ギースとクラウザーはそれでいいとしたのだった。
「少し。その辺りのゴロツキ達と賭けでもしてだ」
「金を巻き上げるとしよう」

「いかさまをしたり難癖をつければだ」
どうするか。幻十郎が話すのはそのことだった。
「斬るだけだ」
「あら、物騒ね」
「簡単に殺したら駄目よ」
一応は止める怪物達だった。
「あくまで穏健にね」
「優しくよ」
「ふん、向こうが斬りつけてくればだ」
どうなるか。幻十郎は悪びれずに話す。
「斬られても文句は言えまい」
「俺もそうする」
そしてそれは刀馬もだった。彼も言うのだった。
「容赦なくな」
「少なくとも半殺し程度はさせてもらう」
ミスタービッグも伊達にそうした世界で生きている訳ではない。
こう言うのだった。
「そうした奴はな」
「まあ人は殺さないでくれよ」
華陀が言うのはこれ位だった。
「手の切断位は俺が治せるからな」
「それはか」
「できるのだな」
「ああ、できる」
自信を持っての返事だった。
「流石に首は無理だがな」
「そんなの糊着ければくっつくから」
「全然平気よ」
どうやら怪物達の世界ではそうらしい。平然として言っている。
「そんなの。首が切れてもね」

「全然平気よ」
「平気だとは思えないがな」
流石にこれにはミスタービッグも引く。
「それは確実に死ぬだろう」
「いや、大丈夫だ」
しかし華陀はまだ言う。
「俺の医術は。それ位じゃまだ助けられる」
「ある意味において仙術だな」
「それに近いようだな」
ギースとクラウザーは華陀の術をそれだと述べた。
「そしてその術でか」
「人を助けるか」
「ああ、それが俺の役目だ」
そしてだ。こうも言うのだった。
「この世も。そうして救う」
「だから今もか」
「こうしてここにいるか」
「ああ、そうだ」
「だからよ」
「いいわね、ダーリン」
また怪物達が彼に声をかける。

## 第六十八話　華陀、益州に戻るのことその五

「これからね」
「洛陽に行きましょう」
「わかった、それならな」
こうしてだった。三人は一旦洛陽に入ったのだった。その洛陽は。
沈みきっていた。何かが違っていた。
「ううむ、これは」
「まずいわよ」
二人でだ。こう話すのだった。
「この状況は」
「予想していたけれど」
「そうだな、おかしいな」
華陀もだ。その暗澹としている都を見て話す。
「人の顔が暗いな」
「ええ。ただ」
「ダーリン、話によるとね」
貂蝉と卑弥呼が華陀に話す。
「洛陽では暴虐の限りが行われていると言われていたわ」
「そう言われていたわね」
「そうだったな。董卓の軍によってな」
「暗澹とはしているわ」
それは事実としてもだというのだ。
「けれど。それでもね」
「暴虐が行われた後はないわね」
「人々の顔は暗いがな」
それでもだと。華陀も話す。
「怯えたものはないな」
「そうよね。全然ないわよね」

「何もね」
「怯えじゃない」
そうではない。華陀は言った。
「ただ、心が死んでいるな」
「そうよ。空も暗いわ」
「真っ暗になっているわ」
そのことも話される。確かに空は暗澹となっている。
そしてだ。その空はだ。
「あの空はね。妖術が行われている時の空よ」
「それが今の空よ」
「じゃあ洛陽には」
「ええ、間違いなくいるわ」
「この都にね」
「その妖術を行っている人間は誰か」
華陀が考えたのはそのことだった。
「果たして誰かだよな」
「そう、それを調べるのよ」
「その為にここに来たのよ」
貂蝉と卑弥呼がそれを話す。
「若しも。あたし達が思っている通りだったら」
「大変なことになるのよ」
「そういえば御前達は」
「ええ、あたし達も別の世界から来たのよ」
「そうなのよ」
それだと話す二人だった。
「別の世界からこの世界に来て」
「この世界を害する存在を止める為に働いているの」
「じゃあ今の戦乱はか」
「そうよ、誰かが蠢いているわ」
「闇の中でね」

「そいつも他の世界から来ているんだな」
華陀は二人の話からこのことを察した。
そしてだ。彼は二人に対してまた話すのだった。
「その連中かも知れないな」
「そう、様々な世界を旅して蠢く存在はね」
「色々いるのよ」
「色々か」
「そう、スサノオやケイサル＝エフェス」
「そうした連中よ」
華陀の知らない名前だった。
その名前についてもだ。華陀は二人に対して尋ねた。
「何だ？スサノオ？それにケイサル＝エフェス？」
「ダーリンはケイサル＝エフェスとは面識があるわ」
「その筈よ」
「いや、俺は知らないが」
そのケイサル＝エフェスをだ。知らないというのだった。

# 第六十八話　華陀、益州に戻るのことその六

「そんな奴はな」
「ダーリンの魂がよ」
「その魂が知っているのよ」
「魂がか」
「そうよ、あたし達もよ」
「魂は声を通じて様々な世界の中にあるのよ」
こう話すのだった。その華陀に対してだ。
「だからダーリンもね」
「そのケイサル＝エフェスを知っている筈よ」
「そうなのか。そいつをか」
「ええ、そうなの」
「そういうことなのよ」
「成程な、俺の魂は他の世界にもあるんだな」
華陀はそのことがわかった。そしてだ。
そんな話をしながらだ。三人は洛陽の中を巡っていく。兵達の姿は多い。しかしだった。
彼等は何もしない。全くだった。
「動きがないな」
「そうね、全くね」
「予想通りね」
また話す彼等だった。
「兵達は何もしないわ」
「暴虐も何もね」
「略奪もしていないし」
「規律が取れているな」
兵達はだ。そうだというのだ。
「しかし。町は」

「かなり寂れているわね」
「何もかもがなくなっているわ」
「重税をかけられているな」
華陀はそのことを察した。
「それも相当な」
「見て、あれ」
「あの宮殿よ」
二人が指差したそれはだ。巨大かつ壮麗な宮殿だった。それが暗澹たる場所だった。それを指差してだ。二人は華陀に話すのだった。
「随分と立派ね」
「あれだけの宮殿を築くにはね。相当なお金がかかるわ」
「人手も必要だな」
華陀はこのことも言った。
「かなりのな」
「そうよね。つまりは」
「人も徴用してるわね」
「建築は国を衰えさせる」
華陀は深刻な顔で述べた。
「権力を持つ者の病だ」
「ええ、それでだけれど」
「あれは誰が建築させているか」
「それが問題だけれど」
「ダーリンは誰だと思うのかしら」
「普通に考えれば董卓だな」
華陀は考える顔で述べた。
「宰相になった彼女がな」
「そうね、普通はそう考えるわね」
「今一番力を持っているし」
「しかしだ」
それでもだとだ。華陀はここでこう話すのだった。

「俺は董卓のことは聞いているが」
「それでもよ」
「今回はおかしいわよね」
「ええ、董卓にしては」
「何かがおかしいでしょ」
こう話すのだった。三人でだ。
そしてだ。華陀は二人に対してまた話した。
「董卓は善政を愛しているからな」
「擁州はそれでかなりまとまっていたわね」
「彼女の善政のお陰で」
「その董卓が洛陽に来て急にこんなことをするかどうか」
華陀は考える顔で述べていく。
「甚だ疑問だな」
「そうよね、ちょっとね」
「考えられないわよね」
「だとすれば誰だ？」
考えをさらに深めていく。そしてだ。
華陀はだ。この名前を出すのだった。

## 第六十八話　華陀、益州に戻るのことその七

「張譲か？」
「宦官のね」
「彼よね」
「あいつならやりかねないな」
語る華陀のその顔は深刻なものになっていく。
「贅のことしか考えていないからな」
「自分自身のね」
「その資質を全てそこに使っている位よ」
「その張譲ならやりかねない」
こう話すのだった。
「そう考えるのが妥当だが」
「けれど張譲は妖術は使えたかしら」
「それはどうだったかしら」
二人が指摘するのはこのことだった。
「それは一体ね」
「どうだったかしら」
「いや、聞いたことはない」
まさにその通りだと答える華陀だった。
「確かに陰謀家だが。妖術を使うとはな」
「そうよね。彼はね」
「妖術を使えないわ」
それはだ。間違いないというのである。
そしてだ。華陀はさらに話すのだった。
「つまり彼とは別にね」
「妖術を使う存在がいるのよ」
「！？そいつは」
ここでまた察した華陀だった。すぐにこの名前を出したのだった。

「まさか。于吉か」
「そうよ、彼よ」
「彼は間違いなくここにいるわよ」
二人が指摘した。そのことをだ。
「この洛陽の何処かにね」
「潜んで。そうしてこの都をね」
こう華陀に話していく。
「暗黒の世界にしているのよ」
「絶望で覆っているのよ」
「絶望か」
また言う華陀だった。
「じゃあ太平要術の書は」
「間違いなくここにいるわ」
「そうよ」
二人の指摘は続く。
「洛陽の何処かにね」
「潜んで。よからぬことをしようとしているわ」
「そうだな。あの書を封印する」
華陀の言葉が強いものになる。
「その為にも」
「ええ、じゃあダーリン」
「いいかしら」
ここでまた話す二人だった。
「この洛陽の何処かにいる于吉とその書を探し出して」
「封印しましょう」
「わかった。それならだ」
すぐに動きをはじめる三人だった。しかしそこに。
白装束の一団が来た。瞬く間に三人を取り囲んだ。
そのうえでだ。華陀が身構えながら述べた。
「何だ、この連中は」

「決まっているわ。悪の手先よ」
「それよ」
こう話す二人だった。
「あたし達のことに気付いたわね」
「相変わらず目ざといわね」
「まさかこの町に来るとはな」
「また出て来たか」
白装束の男達は貂蟬と卑弥呼を見ながら述べた。
「どうやらこの世界でもか」
「邪魔をしに来たというのだな」
「邪悪な謀略を阻止しに来たのよ」
「そういうことよ」
しかしだ。二人はこう彼等に反論するのだった。

# 第六十八話　華陀、益州に戻るのことその八

「貴方達のその邪な陰謀」
「この世界でも防がせてもらうわ」
「そうか。御前等は」
華陀もだ。鋭い顔になって述べる。
「于吉の配下の者か」
「その通りだ」
「我等は于吉様達にお仕えする者」
実際にそうだと答える彼等だった。
「しかしだ。我等だけではない」
「それも言っておこう」
「オロチね」
貂蝉が言った。
「彼等もこの世界に来ているのね」
「そして刹那や他の存在も」
卑弥呼も話す。
「一緒に来ているわね」
「その通りだ」
「どうせここで死ぬのだ」
男達はこう彼等に話していく。
「我等はこの世界においてだ」
「その望みを全て適えるのだ」
「それではだ」
そこまで聞いてだ。華陀がであった。
その白装束の男達に対してだ。こう問うたのである。
「貴様等がその望みをこの世界で達成する」
「うむ」
「そうすればだな」

「この世界はどうなるか」
「聞きたいのはそこだな」
「そうだ。その場合はどうなる」
華陀が問うのはこのことだった。
「この世界、そしてこの世界の人間達は」
「そんなことは我等の知ったことではない」
「全くな」
これが男達の返答だった。
「この世界の人間なぞだ」
「何程の価値がある」
「人そのものがだ」
何の価値があるかと。こう華陀に答えるのである。
「何の価値もない」
「全くな」
「そういうものでしかない」
「そうか、わかった」
そこまで聞いてだ。まずは頷いた華陀だった。
そしてそのうえでだ。彼は言うのだった。
「では俺はだ」
「どうするのだ？」
「医者よ、貴様は」
「その企み、阻止してやる！」
高らかにだ。こう叫んだのである。
「この俺が！黄金の医術でだ！」
「偉いわ、流石はダーリン」
「そうこなくっちゃね」
貂蝉と卑弥呼は華陀のその言葉に感激していた。
「じゃあ及ばずながらあたし達も」
「頑張っちゃうわよ」
こう言ってであった。

二人はその全身に力をみなぎらせ。高らかに叫んだ。
そしてだ。口から凄まじい光を放ったのであった。
「さあ、これを受けなさい！」
「神の浄化の光よ！」
「何っ、口から！？」
「口から光を出しただと！？」
男達はそのことに驚きを隠せなかった。
「どういうことだ！」
「そうした力も持っているのか！」
「その通りよ」
「あたし達はただ拳法を使えるだけではないの」
「こうした力もね」
「備えているのよ」
「くっ、怪物が！」
男達のうちの一人が言った。
「まさかこうした力まで使えるとは」
「我等の想像を超えている」
「そしてこの力で」
「この世界も守るわよ！」
そしてだ。二人はお互いの両手を重ね合った。そのうえで。

# 第六十八話　華陀、益州に戻るのことその九

左右に駒の如く回転してだ。周囲に光を放つのだった。
「神罰！」
「今ここに！」
「う、うわあああああ！」
その光を受けてだ。男達は消え去ってしまった。
だが、だ。すぐにであった。
男達はまた出て来た。次から次にだ。
そのうえで三人を取り囲む。だが二人は光を放ち続け華陀はその針を周囲に投げてだ。男達を黄金の光に変えていくのだった。
だが、だ。それでもだった。
彼等は次から次に出て来る。その攻防が続く。
「ううん、ここは」
「ちょっとね」
貂蝉と卑弥呼はだ。その彼等を見て言った。
「洒落にならないわね」
「ここはちょっと」
「どうする？まだ戦うか？」
華陀は二人に対して問うた。
「そして何としても于吉を」
「いえ、ここはね」
「退いた方がいいわね」
「そうか。退くんだな」
「ええ。考えてみたら今は何の用意もしてこないから」
「だからね」
それでだというのだった。二人はだ。
回転を止めてだ。そしてだ。
華陀をその両脇から掴んでだ。それぞれ右手と左手を高々と掲げ

る。
そのうえで。空に飛ぶのだった。
「さあ、ダーリンまずは」
「皆のところに戻りましょう」
こう華陀に言った。
「いいわね、今は」
「この町を去るわよ」
「ああ、わかった」
華陀も二人のその言葉に頷く。
「今度は。備えをしてだな」
「またこの町に来ましょう」
「そうしましょう」
こう言ってだ。そしてだった。
彼等は空を飛びその場を後にした。後には男達が残った。
彼等はだ。その暗澹たる町の中で述べるのだった。
「逃げられたか」
「どうする？」
こう話す彼等だった。
「追うか？」
「そして消すか？」
「いや、ここは左慈様に報告しよう」
こうするというのだった。
「それからだな」
「どうするか決めるか」
「そうするとしよう」
こうしてだった。彼等は宮廷の奥に入った。そしてだ。
そのうえでだ。そこにいる左慈に報告した。話を聞いた左慈はまずは顔を顰めさせてだ。そうしてそのうえでこう言うのだった。
「やはり気付いたか」
「そうですね」

傍らにいた于吉が彼に応えた。
「予想はしていましたが」
「この世界でも。邪魔をするか」
「さて、どうします？」
ここで尋ねる于吉だった。
「ここは」
「ああ、ここはな」
左慈はその于吉に対して述べた。
「とりあえずは追う必要はない」
「その必要はありませんか」
「左様ですか」
「そうだ、その必要はない」
こうだ。彼は男達に答えた。

# 第六十八話　華陀、益州に戻るのことその十

「またここに来た時にだ」
「その時に倒す」
「そうされますか」
「そうだ、そうする」
左慈は断言した。そうしたのである。
「わかったな」
「了解です」
「それでは今は」
「この洛陽に留まるのですね」
「そうです。話は着々と進んでいます」
于吉が妖しい笑みを浮かべながら述べた。
「それも順調に」
「そうだな、順調だな」
左慈もその通りだと述べる。
「あの書の力も増幅し」
「そしてオロチに常世もです」
「どれも順調に進んでいる」
「ならです。我々はです」
「特に焦る必要もないな」
「焦ればそれで全てを失ってしまうでしょう」
于吉は今は余裕を見せている。
その余裕を顔に浮かべてだ。彼は話すのだった。
「むしろ落ち着くべきです」
「わかった。では于吉よ」
「はい」
「酒でも飲むか」
仲間にだ。それを誘うのだった。

「そうするか」
「そうですね。ではオロチ一族の方々もお誘いして」
「それで飲むとしよう」
「はい、それでは」
こう話をしてだ。彼等は今は悠然としていた。そしてその頃。
華陀達はだ。都を脱して別の世界の仲間達と合流してだ。そのうえだ。
彼等に対してだ。こう話すのだった。
「それで漢中に行くことになった」
「益州の北にね」
「そこに一旦行きましょう」
華陀だけでなく怪物達も刀馬達に話す。
「支度を整えてからまたね」
「活動を再開しましょう」
「用意か」
ギースはそれを聞いて鋭い目になって述べた。
「この世界では何かとあるのだな」
「ああ、そっちの世界と同じだろうな」
華陀が微笑んでギースに話した。
「その辺りはな」
「我々の世界よりも多くのことがある様だな」
クラウザーは冷静な顔で述べる。
「むしろな」
「まあそっちの世界の話もまとめて来てるからね」
「かなり凄いことになってるのは確かね」
怪物達はクラウザーにこう答えた。
「それでその対策の為にね」
「一旦そこに行くのよ」
「わかった」
最初に頷いたのはミスタービッグだった。

「それでは。そこに行くか」
「よし、じゃあ出発だ」
華陀は微笑んで仲間達に話した。
「俺にとっては戻るってことになるがな」
「戻る。そうですね」
命は華陀のその言葉に頷いてから述べた。
「華陀さんにとってはそこが拠点ですからね」
「ああ、そこに五斗米道の本山があるんだ」
実際にそうだと話す華陀だった。
「だからだ。俺にはそうなる」
「ではそこに皆で行くとしよう」
今言ったのは獅子王だった。
「是非な」
「左様だな。では我々も」
天草もだ。彼等と共にいる。
そして彼等はだ。皆華陀達と行動を共にすることになった。
こうして彼等は一旦益州に入った。これもまただ。大きなうねりの一つなのだ。

第六十八話　完

２０１１・３・１５

# 第六十九話　徐庶、徐州に来るのことその一

第六十九話　徐庶、徐州に来るのこと

袁術がだ。難しい顔で張勲達に述べていた。
「最近の出来事は洒落になっておらんのう」
「はい、本当に」
「今の事態は」
張勲だけでなく紀霊も述べる。
「まさか大将軍が処刑されるとは」
「そして董卓殿が宰相にならられるとは」
「それであの連中はどうなったのじゃ」
ここで袁術は二人にさらに問うた。
「宦官の連中は」
「十常侍ですね」
「あの者達ですか」
「そうじゃ。あの者達はどうなったのじゃ」
袁術は怪訝な顔で己の執務室の机から問うた。
「話がないようじゃが」
「殺されたという噂があります」
張勲がここでこう主に話した。
「その董卓殿にです」
「そういえば董卓は大将軍が都に入れられたのじゃったな」
「はい、それで董卓殿は大将軍の仇討ちにです」
「宦官達を皆殺しにしたのじゃな」
「そういう話があります」
こう主に話す張勲だった。
「あくまで噂ですが」
「しかし実際に宦官達は出ておらんな」
袁術が指摘したのはこのことだった。

「それではじゃ」
「やはり宦官達は」
「己の兵を持っておらんのが仇になったのう」
袁術は強い目になって述べた。
「いざという時はやはり兵じゃからな」
「そうですね。ただ」
ここでだ。紀霊が難しい顔で話す。
「問題はです」
「董卓は兵を持っておるな」
「はい、そのことです」
それがだ。問題だというのである。
「しかも宰相になっています」
「では何でもできるな」
袁術は宰相でしかも己の兵を持っていることからこう指摘した。
「やろうと思えば何でもな」
「では考えようによっては」
「宦官達よりも厄介ですね」
張勲と紀霊が怪訝な顔になっている。
「擁州の兵は強いですし」
「配下にはあの呂布がいます」
「むう、ではわらわ達はどうなるのじゃ」
袁術は腕を組んで難しい顔になって述べた。
「董卓がその気になって取り潰すとか言えばまずいぞ」
「はい、言い掛かりをつけてくる危険はありますね」
張勲は実際にそれを恐れていた。
「そうなればです」
「どうするのじゃ、その時は」
袁術は怪訝な顔で己の軍師に問う。
「わらわは三公になるのじゃ。名門袁家の嫡流として当然のことじゃ」

「はい、少なくともここで終わられるつもりはありませんね」
「その通りじゃ。絶対にじゃ」
袁術の言葉が強いものになる。
「董卓め、言い掛かりをつけてくればじゃ」
「その時はですね」
「相手になってやるわ」
こう言うのである。
「あの小娘の勝手にはさせんぞ」
「あの、美羽様」
袁術の今の言葉にはだ。紀霊はいささか唖然となって突っ込みを入れた。
「そのお言葉は」
「何じゃ?不都合があるのか?」
「董卓殿の方がです」
「うむ、あの小娘がじゃな」
「美羽様より年上なのですが」
「何っ、そうじゃったのか」
言われてはじめて気付いたといった感じである。

# 第六十九話　徐庶、徐州に来るのことその二

そうして驚いた顔でだ。袁術はまた言うのだった。
「わらわもはじめて知ったぞ」
「そうかと」
「ううむ、そうじゃったのか」
袁術は驚いた顔のまま話していく。
「わらわの方がじゃったか」
「はい、実は」
「しかしじゃ。それでもじゃ」
だからといってだ。それで収まる袁術ではない。
それはそれでだ。こんなことを言うのであった。
「わらわに対して何かをするならばじゃ」
「その時はですね」
「絶対に容赦はせぬぞ」
こう言うのであった。そしてだ。
ここで張勲がだ。主に対して言う。
「美羽様、おやつの時間ですよ」
「むっ、その時間か」
「はい、何を召し上がられますか？」
「蜂蜜水はあるかのう」
何につけてもまずはそれであった。
「それを所望じゃ」
「はい、では蜂蜜水ですね」
「それを飲むとしようぞ」
「わかりました。それでは」
「そなた等も相伴せよ」
袁術はにこりと笑って二人にも言った。
「わかったな。それではじゃ」

「はい、わかりました」
「それでは」
「他の者も呼ぶじゃ」
二人だけでなくだ。さらにだというのだ。
「食べることも多くの方が楽しいからのう」
「そのことがわかってきたのですね」
「うむ、そうじゃ」
満面の笑顔で張勲に答える。
「美味なものを一人で食べても何にもならんわ」
「では。あちらの世界の方々も御呼びして」
「楽しくやろうぞ」
こう話してだ。そのうえでだ。
袁術は皆を呼び蜂蜜水を楽しく飲む。ところがここで。
大きな卓の主の席でだ。こんなことも言うのであった。
「凛がおらぬのが残念じゃのう」
「そうですね。私もそう思います」
また話す張勲だった。
「彼女は一緒にいて楽しいですから」
「そうじゃ。凛はわらわの嫁じゃ」
勝手に言っているのではないのが凄いところである。
「だから共にいたいのじゃがのう」
「私もです」
「凛はわらわのものじゃぞ」
すぐに張勲に釘を刺す彼女だった。
「よいな、それはじゃ」
「いえいえ、凛ちゃんは私とできてますから」
にこやかに笑って言う張勲であった。
「それはもう手遅れかと」
「手遅れではないわ。凛とわらわは何よりも強い絆で結ばれておるのじゃ」

あくまでこう返す袁術だった。
「それは誰にも壊せぬものじゃぞ」
「曹操さんにもですね」
「そうじゃ。例え凛の主であろうともじゃ」
彼女のことになるとムキになる袁術だった。
その感情を見せながらだ。さらに話すのだった。
「凛は絶対に渡さんからのう」
「ううむ、これは」
「恋でしょうか」
楽就も楊奉もそれを察した。
「美羽様の」
「それなのでしょうか」
「というかね」
眠兎が話す。
「この世界も女同士もいいんだ」
「そうじゃ。別に構わんのじゃ」
まさにその通りだとだ。袁術は眠兎に話す。

# 第六十九話　徐庶、徐州に来るのことその三

「女同士でも男同士でものう」
「ふむ、寛容だな」
藤堂は腕を組んで納得した顔で述べた。
「そうしたところは」
「あれっ、藤堂さんですよね」
張勲は彼女にしては珍しくきょとんとした顔を見せて述べた。
「今ここにおられたんですか」
「いるが。最初からな」
「そうなんですか。何かいつも後ろにおられる気がして」
「わしもちゃんと戦うしこうして甘いものも食べるぞ」
「ですが」
それでもだというのである。
「何か。こうして同席するのは違和感がありますね」
「どういうことだ、それは」
「いえ、何かそんな感じがしまして」
張勲は藤堂の顔を見ながら話す。
「それだけですけれど」
「わしは失踪されたと思われていたがな」
「何かそういう感じがしますから」
実際にそうだと話しながらだ。彼等は蜂蜜水を飲んでいくのだった。
そしてだ。徐州ではだ。
魏延がだ。またしても劉備の傍にいた。そのうえでだ。
彼女に対してだ。必死の顔で話すのであった。
「いえ、お一人で行かれるのはです」
「危ないの？」
「そうです、何処に行かれるにしても」

こう話すのだった。
「何時何処に誰がいるかわかりませんから」
「けれど。ちょっとお昼寝するだけなのに」
「いえいえ、寝るなら余計にです」
必死の顔で言う魏延だった。
「一人では危険です」
「だからなの」
「はい、私もご一緒させて下さい」
これが魏延の本音だった。
「身辺警護は」
「そのまま怪しいことになるわね」
黄忠がそんな魏延を見ながら述べた。
「焔耶ちゃんのことを考えたら」
「わ、私は別に」
「焔耶、口を拭け」
今度は厳顔が言うのだった。
「御主の今の口はじゃ」
「口は？」
「涎が出ておるぞ」
こう彼女に告げる。
「だらだらと犬みたいに垂れ流しおって」
「な、何と」
言われてだ。咄嗟にだった。
彼女はだ。自分の口元を右手の甲でぬぐった。その甲を見ればだ。
そこには涎はない。それを見て話す彼女だった。
「あの、別に涎は」
「冗談じゃ」
こう素っ気無く返す厳顔だった。
「しかし。それでもじゃ」
「それでもとは」

「全く。桃香様がそこまで好きか」
「だから私は桃香様の」
あくまでだ、忠臣だと言うのである。
「それだけであって何もやましいところは」
「やましいところしかないではないか」
厳顔はもうわかっているという口調だった。
「まあしかしじゃ」
「そうね。お昼寝の時でもね」
厳顔と黄忠の言葉の調子がここで変わった。
「護衛は必要じゃからな」
「それはいいことね」
「では。今は」
「うむ、よいぞ」
「是非共ね」
「それでは早速」
何故かだ。ここで枕を出して来た魏延だった。

# 第六十九話　徐庶、徐州に来るのことその四

しかも二つだ。そのうちの一つを出して劉備に言うのであった。
「では劉備様、今より」
「はい、少しだけですけれど」
「お休みしましょう」
「わかっておるとは思えんから言うぞ」
また言う厳顔だった。
「そなた、間違ってもじゃ」
「間違っても？」
「桃香様と同じ褥には入るでないぞ」
かなり直接的な言葉であった。
「よいな、護衛をするのじゃが」
「そ、それは当然として」
「本当にそう思っておるか？」
「無論、それは」
「ならいいがのう」
「確かに。今はおかしな時期だから」
黄忠は今の状況を真剣に憂いている。
「気をつけないとね」
「都はどうなってるのかしら、今」
劉備は政治の顔になった。そのうえでの言葉である。
「董卓さんが宰相になられたのは聞いてるけれど」
「それだけではないからのう」
「董卓殿が専横を極めているとか」
二人の顔が曇る。
「途方もない贅沢をしており」
「民を苦しめているそうね」
「董卓さんが？」

そう言われてもだ。劉備はだ。
きょとんした顔になってだ。こう述べるのだった。
「あの人がそんなことをするかしら」
「そうなのだ。それはないのだ」
張飛がここで出て来て話す。
「董卓はいい奴なのだ。民を苦しめる娘ではないのだ」
「それでどうしてそんなお話が？」
「都には今は舞が行っているが」
魏延が話す。
「もうそろそろ帰って来る頃か」
「あの娘の情報待ちじゃな」
厳顔がこう話す。
「それ次第じゃな」
「そうね。今はね」
「それしかないのう」
こんな話をしているうちにその舞が戻って来た。彼女の話によれば。
「董卓の姿が見えない！？」
「ええ、そうなの」
彼女はこうアンディに話す。
「何か。呂布や陳宮といった面々はいるけれど」
「それでもか」
「ええ、肝心の董卓がいないのよ」
今度はテリーに話す舞だった。
「おかしなことにね」
「董卓が専横を極めてるんじゃねえのかよ」
丈は舞にこのことを話した。
「違うのかよ、それは」
「宮中のあちこちを捜したけれど」
この辺りは流石忍である。

「見当たらなかったわ」
「宰相がいない！？」
「どういうことだ、それは」
関羽と趙雲が驚きの声をあげる。
「しかも董卓殿はだ」
「自ら政務にあたる方だが」
「っていうか何かおかしくないか？」
馬超もここで言う。
「何で宦官も董卓もいないんだよ」
「そういえば宦官って粛清されたって聞いたけれど」
馬岱が言うのはこのことだった。
「董卓さんってそういうことする人だったっけ」
「いえ、そんな話は」
「聞いたことがありません」
孔明と鳳統がそれはないと言う。
「あの人でしたら追放で止めますが」
「宦官は宮廷を追い出されれば何の力もありませんし」
「考えれば考える程」
「おかしな話が多いですね」
「怪しいな」
ここで言ったのは二階堂だ。

# 第六十九話　徐庶、徐州に来るのことその五

「陰謀の匂いがぷんぷんするな」
「そうだな」
大門は彼のその言葉に頷いた。
「これまで以上にな」
「何だ？この感じは」
草薙の目がここで顰めさせられた。
「匂うんだよな」
「匂うっていうと？」
「オロチだな」
こう劉備に話すのである。
「その匂いがするな」
「オロチ？」
「簡単に言うと俺の一族の宿敵だ」
かなり明解にだ。劉備達に話す。
「それは前話したか？」
「あっ、そういえばそうですね」
「前に」
孔明と鳳統は草薙の今の言葉でふと思い出した。
「何か。京さん前に」
「人類の文明を破壊しようという一族がいるって」
「ああ、その一族が復活させようとしている神様がな」
「オロチだ」
「それなのだ」
二階堂と大門も話す。
「邪神って言うかな」
「自然神と言おうか」
「自然が人を襲うのだ？」

張飛は彼等の説明を受けて微妙な顔になった。
「自然は人と一緒じゃないのだ？」
「そうよね。人間も自然の一部だと思うけれど」
馬岱もそう考えている。そのうえでの今の言葉だ。
「何でその自然が？」
「それぞれ考えがあります」
ナコルルがその彼女達に話す。
「私の仕えているアイヌの自然は人と同じですが」
「そのオロチは違うのだ」
「そうなんだ」
「はい、千八百年程前。この世界だと今の時代でしょうか」
ナコルルは彼女達の時代とこの世界の時代の双方を考えてから話す。
「オロチはそれまでは人と共にありましたが」
「それが人が文明を持ったことでな」
草薙も話す。
「人を滅ぼそうと考えるようになったんです」
「そういうことだ」
「文明と自然を対立するものと考えている」
「それがオロチなんですね」
孔明と鳳統はオロチのその考えを理解した。
「ううん、人間は自然の中にはいない」
「そういう考えですか」
「オロチの考えは頷けるか？っていうところもあるさ」
「ない訳ではない」
二階堂と大門はオロチのその考えを完全に否定しなかった。
「けれどな。こっちも滅びる訳にはいかないんだよ」
「オロチの一存でだ」
「よくいるんだよな、そういう奴がな」
ロックはいささかシニカルに話す。

「人間さえいなければ地球、この世界がどうとか言う奴がな」
「何かそれって」
「結構傲慢な考えです」
孔明と鳳統は眉を顰めさせた。
そのうえでだ。彼女達はこう言うのだった。
「自分が人間を超えた存在みたいな」
「傲慢な神様みたいですね」
「だからそういう考えは嫌いだ」
ロックははっきりと言い切った。
「五流の悪役の言葉だ」
「どっかの首相が言いそうですね」
真吾は自分の世界のことを思い出して話した。
「訳のわからない科学者とか」
「あの、政治をする人がそれ言ったら」
「お話にならないですけれど」
孔明と鳳統は今度は呆れた。

# 第六十九話　徐庶、徐州に来るのことその六

「だって。政治は人間の世界のものですから」
「そんなことを言ったらもう」
「だろ？本当によくわからない奴なんだよ」
その人間がだと話す真吾だった。
「俺の世界じゃそうした人間もいるんだよ」
「そして政治に携わっているんですか」
「恐ろしい話ですね」
「とにかくだ。そのオロチがだ」
草薙がここでまた話す。
「蠢いているかもな」
「そう考えて間違いないわ」
神楽がその草薙に告げた。
「この世界でもね」
「そうか、そういえばあんた前言ってたな」
「そうよ。あの時はまだ確信していなかったけれど」
「今は違うか」
「ええ」
その通りだとだ。草薙に対してこくりと頷いてみせる神楽だった。
「そうよ。今はね」
「あの三姉妹の反乱もあれか？」
「関わっているわね」
それも間違いないというのだ。
「バイスとマチュアかしら」
「あいつ等かよ」
草薙はその二人の名前に眉を顰めさせた。
「八神に殺されたと思ったんだけれどな」
「生憎。彼女達も生命力が強いから」

「しぶとい奴等だな」
草薙はこう評した。
「ったくよ、面倒な話だぜ」
「面倒でもね」
それでもだと話す神楽だった。
「実際に動いているとなるとね」
「俺達がやることは一つだな」
「そういうことよ。この世界でもね」
「やるか」
草薙の目に強い光が宿った。
「奴等を。全員薙ぎ払ってやる」
「はい、じゃあ俺も」
真吾もここで元気よく言う。
「草薙さんと一緒に頑張りますから」
「しかしあんたってよ」
「そうだな」
馬超と趙雲がその真吾に声をかける。
「炎出せないだろ」
「それは無理だったな」
「いや、絶対に出せるからさ」
本人はあくまでこう言うのである。
「絶対にな、できるよ」
「そうか？」
「何時かはできるようになるのか」
「ああ、できるんだよ」
彼も確信している。それは確かだ。
しかしだ。草薙は馬超と趙雲にだ。そっとこう囁くのだった。
「火を出せるのは俺の一族だけなんだよ」
「じゃあ特異体質か」
「そういうものなのだな」

「ああ、だからあいつは出せないんだよ」
ここで真吾をちらりと見る。
「あいつには言ってないけれどな」
「言えないか」
「夢を奪う訳にはいかないか」
「何かそのうち出せるようになるかも知れないしな」
草薙は実はそうした風にも思いはじめていたりする。
「だから言わないようにしているんだ」
「そうか」
「そういうことだったか」
「まあ悪い奴じゃないしな」
今度は真吾のその人間性について話す。
「だから俺も色々と教えてるんだよ」
「成程なあ」
「そういうことか」
「しかし。オロチの奴等がこの世界にいるとなると」
「何かと厄介な話になる」
二階堂と大門もその顔を曇らせている。

# 第六十九話　徐庶、徐州に来るのことその七

「あの連中が何処に潜んで何を企んでいるか」
「それが問題だが」
「多分」
「あの場所です」
孔明と鳳統がまた話す。
「都にいます」
「その奥深くに」
「都というのか」
関羽が軍師二人の言葉に眉を顰めさせた。
そのうえでだ。こう言うのだった。
「では。洛陽が今ああなっているのは」
「関係があるかも知れません」
「それもその可能性は濃厚です」
「董卓殿とも関わりがあるのかもな」
「もしやと思いますが」
「怪しいのではないでしょうか」
「それではだ」
ここでだ。関羽はこんなことを言うのだった。
「洛陽に行きオロチを討つか」
「そうなのだ。そんな奴等放ってはおけないのだ」
張飛も次姉の言葉に頷く。
「今すぐ洛陽に行ってそのオロチとかをやっつけるのだ」
「あの、それはちょっと」
「難しいと思います」
孔明と鳳統は眉をひそませてそれはできないと述べた。
「舞さんも洛陽のことは完全に見られませんでした」
「オロチが何処にいるのか、実際にいるかどうかさえも」

「わかっていませんから」
「それに洛陽は今多くの兵達がいます」
鳳統がこのことを指摘した。
「彼等の相手もしなくてはいけません」
「ですから。私達だけで洛陽に入っても」
孔明もそれは駄目だと話す。
「どうにもなりません」
「ううむ、それではだ」
「どうすればいいのだ」
「待つしかない」
守矢はそれしかないと話した。
「時を待つことだ」
「それしかないか」
「今は」
こうしてだった。彼等は今は国を覆う不穏な空気に耐えるのだった。まさにだ。今はそうするしかない状況であった。そうしてだ。
話が一段落したろころでだ。リョウが一同のところに来て話してきた。
「お客さんが来たぜ」
「お客さんって？」
「ああ、小さい女の子でな」
彼はまずはユリに対して話した。
「孔明や鳳統と同じ位の背でな」
「まさか」
「その娘って」
軍師二人はここで気付いた。
「黄里ちゃん？」
「そうかしら」
「何や、その娘」
ロバートが二人の言葉に問うた。

「あんた等の知り合いかいな」
「はい、水鏡先生のところの同門の娘です」
「私達の姉妹弟子の娘です」
「あっ、その娘なのね」
劉備は二人の話から察して述べた。
「徐庶ちゃんって」
「そうなんです。その娘です」
「今来たんですね」
「それでどうするんだ？」
リョウは劉備と軍師二人に問うた。
「その娘。こっちに案内するのかい？」
「はい、御願いします」
劉備が笑顔で答えた。
「朱里ちゃんと雛里ちゃんの姉妹弟子ですから」
「だからか。わかったぜ」
リョウは微笑んで彼女のその言葉に応えた。

# 第六十九話　徐庶、徐州に来るのことその八

「じゃあ今からこっちに案内するな」
「黄里ちゃん元気かな」
「元気だといいね」
軍師二人は女の子らしい顔になって話をはじめる。
「随分会ってないけれど」
「どんな感じになってるかな」
その再会を楽しみにするのだった。そしてだ。
その徐庶が来た。彼女は。
赤い長い髪を後ろで束ねておりセーラー服を思わせる膝までの赤いリボンに黒の上着とスカートを着ている。
顔立ちは孔明や鳳統と同じく気弱な感じである。眉は細く長い。口は小さく奇麗な紅色をしている。白い顔はやや丸い。目は大きく黄色い。その少女が来たのである。
「黄里ちゃん久し振り」
「前に会った時より奇麗になったわね」
「あっ、朱里ちゃん雛里ちゃん」
徐庶は二人の姿を認めて笑顔になった。
そのうえでだ。三人で手を握り合ってだ。こう話すのだった。
「私も。二人と一緒にいたくて」
「それで来てくれたのね」
「この徐州に」
「ええ、そうなの」
その通りだというのだ。
「ずっと。袁術さんの領地にいたけれど」
「あいつには仕えなかったのだ？」
「何か。癖の強い人だから」
それでだと。張飛に答えるのだった。

「だから。仕えなかったの」
「つまり合わないと思ったのね」
「それでなのね」
「そうなの」
その通りだとだ。孔明と鳳統に答える。
「けれど。二人が徐州の劉備さんにお仕えしてるから」
「来てくれたのね」
「有り難う、来てくれて」
「うん、それで」
ここでだ。その徐庶はだ。
劉備に顔を向けてだ。おずおずとこう尋ねたのだった。
「私も。よかったら」
「うん、いいよ」
にこりと笑ってだ。すぐに答える劉備だった。
「一緒にね。仲良くやろう」
「有り難うございます」
「朱里ちゃんと雛里ちゃんのお友達なら大歓迎よ」
劉備はそのにこりとした笑顔でさらに話す。
「皆で楽しくやろうね」
「はい、それでは」
こうしてだ。徐庶は劉備の配下となった。孔明達と共にだ。
その彼女が加わってからだ。張飛がこんなことを言った。
「何か朱里のところは背の低い奴ばかりなのだ」
「御前が言うか？」
関羽は彼女のその言葉に呆れた顔で返す。
「御前も小さいではないか」
「鈴々はあそこまでチビじゃないのだ」
こう言って自分のことは棚に上げる張飛だった。
「だから言ってもいいのだ」
「全然変わらないと思うが」

張飛から見ればだ。まさにそうであった。
「大きさは」
「そうニャ。胸の大きさも同じニャ」
猛獲はそこまで指摘した。
「美衣小さい胸には興味がないニャ」
「胸は小さくても心は大きいのだ」
こう猛獲に返す張飛だった。
「だからそれはいいのだ」
「そうよ。胸は関係ないのよ」
リムルルが張飛につく。
「胸が小さくてもね。別にいいのよ」
「何か最近胸であちこちで話が出ていないか？」
関羽がここでこんなことを言った。
「大きい小さいで。どうなっているのだ」
「それ曹操さんのところで大問題になってるみたいよ」
香澄がこのことを話した。

# 第六十九話　徐庶、徐州に来るのことその九

「もうね。大きい派閥と小さい派閥でね」
「しかも外と中の関係も加わってるのよ」
舞もこのことは知っているのであった。
「ほら、私達ってそれが関係してるじゃない」
「むっ、そういえば」
関羽がここであることに気付いた。それは。
「舞とキングの声は似ているな」
「そうなのだ。そっくりなのだ」
張飛も言う。
「あとナコルルもなのだ」
「ええ、よく言われるわ」
その通りだと述べる舞だった。
「私達ってね。何かっていうと似てるって言われてきたのよ」
「あとマリーもだな」
関羽はさらに話した。
「声が似ている」
「中身もなのだ」
「思えば不思議な話だ」
「全然違う人間の筈なのに妙なのだ」
「それが胸にも関係しているとなると」
関羽は腕を組んで考える。その腕の上に見事な胸が乗る。
「話は複雑になるな」
「ほら、曹操さんのところのあの眼鏡の軍師の娘」
舞は彼女のことを話に出した。
「実際は胸がないそうだけれど」
「そうだな。あの御仁はな」
「実際の胸はないよな」

趙雲も馬超もそれは察していた。
「外はともかくとしてだ」
「中はな」
「胸は外と中があるのよ」
また話すリムルルだった。
「私はどっちもあれだけれどね」
「まあ気にしない気にしない」
ユリがそのリムルルを慰める。
「胸がないこともいいって人もいるしね」
「いるのかな、そうした人って」
「多いわよ、そういう人も」
その辺りは嗜好であった。その相手のだ。
「だからね。別にね」
「気にしたら駄目なの」
「曹操さんのところの猫耳軍師は異常に気にしているけれど」
このことも有名になってしまっているのだった。
「それでもね。胸はね」
「そうだな。気にしては駄目だ」
関羽がこう言って動いただけで彼女の胸が派手に揺れる。
「そんなことよりも大事なことがある」
「愛紗が言っても説得力ないのだ」
「それはどうしてだ？」
「大き過ぎるのだ」
張飛はその派手に揺れるものを見ている。
「桃香お姉ちゃんと一緒なのだ」
「確かにな。愛紗はな」
「大き過ぎるだろ」
それを趙雲と馬超も指摘する。
「私もそれなりに自信があるが」
「あまりにもな」

「何がなのだ？」
やはり自覚のない彼女であった。
きょとんとした顔でだ。周りに問う。
「私は別に」
「まあいいだろう」
キングがここで間に入る。
「とにかく。また一人人材が加わったからな」
「そうだな。いいことだ」
関羽が微笑んでキングの言葉に頷く。
「また我々の層が厚くなった」
「軍師三人よね」
馬岱が言う。
「これってかなり凄いんじゃない？」
「伏龍に鳳雛」
関羽がまた言う。
「そこにもう一人か」
「天下の軍師が三人って。無敵じゃないかな」
馬岱はこうまで評する。

# 第六十九話　徐庶、徐州に来るのことその十

「かなり心強いのは間違いないよ」
「そうね。これから何があってもね」
黄忠も明るい笑みになっている。
「乗り越えられそうね」
「しかも五人の虎がおるぞ」
厳顔はその虎達を見ている。
「数は少ないが天下無双の顔触れじゃな」
「例え何があってもね」
「そうだな。乗り越えられるな」
ユリとキングが笑顔で話す。
「この顔触れなら」
「充分にな」
「何かまた大変なことになりそうだけれど」
リムルルもだ。それでもだというのだ。
「やっていけそうね」
「鬼でも蛇でも出て来いなのだ」
張飛の顔も明るい。
「絶対にやっつけてやるのだ」
「そうだな。人だ」
趙雲も微笑んで話す。
「人こそが最も大事だからな」
「そうだよね。人が駄目だったらどうしようもないよね」
馬岱も笑顔で趙雲の言葉に頷く。
「今だってそうだし」
「宮廷なあ。そこだよな」
馬超は少しぼやいた感じだ。
「とにかく。こっちに何時来るかだよな」

「そうだ、絶対に来るな」
関羽はここで顔を顰めさせた。
「董卓殿の性格からは想像できないが」
「あの、思うんですけれど」
「ひょっとしたら」
孔明と鳳統はぼやきながら話す。
「十常侍はまだ洛陽にいるんじゃないでしょうか」
「それで董卓さんと関わっているんじゃ」
「黒幕じゃな」
厳顔は二人の言葉からそれを察した。
「それで董卓殿を操っておるか」
「その危険はあるわね」
黄忠も難しい顔になっている。
「宦官達は謀略が仕事だから」
「はい、何をしてきてもです」
「おかしくないです」
軍師二人はまた言った。
「やがて私達にも」
「仕掛けてきます」
「私達以外にも」
徐庶も来た。そのうえでの言葉だった。
「仕掛けると思います」
「他の牧達にもか」
「はい、そうです」
その通りだとだ。徐庶は公孫賛に対して答えた。
「その通りです」
「むっ、私のことをわかっているのか」
公孫賛は徐徐が自分に反応を見せたことにだ。いささか驚いた。
そしてだ。あらためて笑顔になって彼女に問うのだった。
「まさか。本当に」

「公孫賛さんですね」
笑顔で応える徐庶だった。
「かつて幽州で牧を務めておられた」
「そうだ、そして乗る馬は」
「白馬ですね。弟さんおられますよね」
「その通りだ。私のことをそこまでわかってくれているか」
そのことがだ。公孫賛にとってはだ。何より嬉しいことだった。
それでだ。公孫賛は思わず徐庶の両手を自分の両手で握り締めてだ。こう告げるのだった。
「嬉しいぞ、私のことを知っていてくれていたとは」
「あの、有名ではないんですか？」
「誰も知らないのだ。宮廷でさえもだ」
こうだ。泣きながら話すのだった。
「袁紹も曹操もだ。二人の軍師の連中もだ」
「誰もなんですか」
「そうだ。知らなかったんだ」
そうだったというのである。

# 第六十九話　徐庶、徐州に来るのことその十一

「だが。御主は知っていてくれたか」
「あの、牧を知らない人がいるんですか？」
「何故か私だけはそうなのだ。桃香でさえも」
その幼馴染のだ。彼女でさえもだ。
「真名を間違える始末だ。それなのに御主は」
「ううん、何か随分と」
徐庶はだ。そんな彼女の泣く姿を見て話すのだった。
「苦労されたんですね」
「苦労というものではない」
それ以上だというのだ。
「私は。本当に誰からも知られていなかったのだ」
「むしろ中の方がでしょうか」
「知られていると思います」
孔明と鳳統がそれを話す。
「あと別の世界の方は」
「かなり知られていますが」
「それとフガフガですね」
「そちらもですけれど」
「だが私はそうではないのだ」
彼女自身はだ。違っていたのだ。
「何故だ、私の何が悪い」
「特徴がないからでしょうか」
「そのせいで」
「うう、確かに私は他の牧達まで個性は強くない」
流石にだ。あの面々と比べるとだった。
「しかし。私には特徴がないのか」
「そ、それはまあ」

「御気になされずに」
「だが。それでもだ」
しかしなのだった。公孫賛は再びだ。徐庶を見る。そうしてだ。
そのうえでだ。また言うのだった。
「御主は知っていてくれたか」
「はい、ですから普通なのでは？」
「そう思うが。知っていてくれたのは夏洸淵殿だけだった」
彼女だけだった。本当にだ。
「気付いたら幽州の牧は袁紹になっていたのだ」
「誰も公孫賛殿が牧だと気付かなかったな」
それを話す関羽だった。
「実は私もかなり忘れていた」
「そうだ。忘れられていたのだ」
完全にだ。忘れられてしまってだ。
そのうえでだ。気付いたらだったのだ。
「私は宮廷に直々に牧に任じられたのだぞ」
「任じたのは誰だったのですか？」
「大将軍だった」
処刑されたと言われている何進である。
「あの方が直々にだ。私の異民族討伐の功を認めて下さってだ」
「そして大将軍はそのことをですか」
「完全にだったのですね」
「奇麗さっぱり忘れてしまわれていた」
まさにだ。完全にだったのだ。
「私の顔を見ても気付かれなかった」
「大将軍ってそんなに物忘れ激しい人だったの？」
馬岱は首を傾げさせながら話す。
「自分で牧に任じたのに？」
「あまりにも影が薄いからだ」
趙雲がそのことを指摘する。

「だからだ。忘れてしまわれていたのだ」
「それだ。無論隣国の袁紹もだ」
その彼女もだというのだ。
「何度会っても忘れるのだ。曹操でさえもだ」
「けれどなんですね」
「黄里ちゃんは」
「よく知っていてくれた。私は嬉しい」
また泣いてだ。そうして話すのだった。
「我が生涯に一片の悔いなし！」
「ああ、その台詞駄目だろ」
馬超がそのことを指摘する。
「それ行ったら死ぬぞ」
「ううん、そうか」
「そうして死ぬ旗を自分で立てるのはよくないのだ」
張飛は眉を顰めさせて言った。
「本当に死んでもおかしくないのだ」
「私にはその危険があるのか」
「あるわね」
神楽がずばりといった口調で指摘した。

# 第六十九話　徐庶、徐州に来るのことその十二

「そんな空気がするわ」
「そうか。では気をつけないとな」
「そうですね。お腹を切られたりとか何かにはねられたりとか」
「首を切られたりとか」
軍師二人がこんなことを話す。
「そうなったらです」
「大変ですから」
「どれも嫌な死に方じゃのう」
厳顔がその死に方を聞いて言う。
「白蓮殿も難儀なことじゃ」
「妙にあの張角に縁も感じるのだ」
公孫賛はこんなことも言う。
「あの娘に切られるのではないのか？」
「そこまで言われるともう」
「ごちゃごちゃになってしまいますけれど」
孔明と鳳統がそれはと言って彼女を止めた。
「ですからもうです」
「そうしたことは忘れて」
「うむ、飲むか」
公孫賛はあらためてだ。そちらに考えを向けるのだった。
そのうえでだ。彼女はこう周りに話した。
「折角徐庶殿も加わってくれたしな」
「あっ、私はですね」
「御主は？」
「真名で呼んで下さい」
徐庶からだ。笑顔で公孫賛に話すのだった。
「黄里と」

「呼んでいいのか？」
「はい、どうぞ」
その笑顔でまた本人に話す。
「呼んで下さい」
「わかった、それではだ」
「はい」
「呼ぶぞ」
公孫賛も笑顔になってだ。徐庶に話した。
「黄里。そしてだ」
「そして？」
「私の真名も呼んでくれるか」
こう徐庶に告げた。
「そうしてくれるか」
「公孫賛さんの真名をですね」
「そうだ、呼んでくれ」
笑顔で告げる。
「是非な」
「わかりました。それでは」
「うむ、それではだ」
「白蓮さん」
にこやかに笑って。徐庶は公孫賛の真名を呼んでみせた。
「あらためて御願いしますね」
「わかった。それではこれからな」
「はい、これからもずっと」
「そしてですね」
「いいでしょうか」
軍師二人がだ。周囲に話す。
「私達もよかったら」
「公孫賛さんと黄里ちゃんの真名を呼ぶことにしませんか？」
こう周囲に提案するのだった。

「それでどうでしょうか」
「御二人はそれでいいですか？」
「ああ、いいぞ」
「是非呼んで下さい」
二人は淀みのない笑顔で孔明と鳳統に応えた。
「真名でな」
「これから御願いします」
「わかったのだ。それならなのだ」
張飛が最初に応えた。
「白蓮だったのだ？」
「そうだ、やっと言ってくれたな」
「それと黄里なのだ」
「はい、そうです」
二人でだ。張飛に対して応える。
「宜しくなのだ」
「こちらもな」
最後に公孫賛が微笑む。そうしたのである。
そんな話をしてだ。徐庶は劉備の下に加わった。劉備の下にまた一人人材が加わった。それがまた大きな力となるのである。

第六十九話　完

２０１１・３・１７

# 第七十話　何進、姿を現すのことその一

第七十話　何進、姿を現すのこと

貂蝉がだ。急にこんなことを言った。
「ダーリン、わかったわよ」
「何がだ？」
彼等は今漢中にいる。そこでだ。五斗米道の活動をしているのである。
「あの人のことがよ」
「大将軍のことか」
それですぐに察した華陀だった。
「わかったのか」
「ええ、今予州にいるわ」
「あそこか」
「それで曹操さんのところに身を寄せようとしているけれど」
「曹操殿は受け入れられるな」
それはだ。間違いないというのだ。
「確実にな。だが」
「だがなのね」
「それはどうかというのね」
卑弥呼もだ。ここで出て来てだ。華陀に対して話すのだった。
「曹操さんのところに身を寄せるのは」
「最良の選択ではないのね」
「ああ、そう思う」
華陀は考える顔になって述べた。
「袁紹殿や袁術殿もだ」
「最良ではないの」
「そうなの」
「孫策殿も同じだ」

彼女にしてもだというのだ。
「どうもな。それはよくない」
「じゃあ誰のところがいいの？」
「誰のところに身を寄せるべきなのかしら」
「劉備殿だな」
彼女だというのだ。華陀は考える顔で述べた。
「あの方のところに向かう方がいい」
「そうなの。劉備殿ね」
「あの御仁のところなのね」
「そう思う。あの御仁の持つ剣は」
どうかというのだ。その剣はだ。
「二人共それを言ったな、前に」
「ええ、そうよ」
「劉備殿が持っているあの剣ならね」
どうかというのだ。二人はだ。
「あの連中を封じられるから」
「それはここに来た時に話した通りよ」
「なら劉備殿だ」
それならばだというのだ。華陀は言い切った。
「劉備殿しかない」
「わかったわ。それじゃあね」
「大将軍は劉備殿のところに案内するのね」
「そうする。それではだ」
ここまで話してだ。すぐにだった。
華陀はだ。あらためて二人に話した。
「予州だったな」
「ええ、そこよ」
「そこに身を隠しておられるわ」
「ならすぐにそこに向かいたい」
思い立ったらであった。華陀の動きは速かった。

「今すぐにな」
「それじゃあ今からね」
「行きましょう」
「瞬間移動ですね」
命が三人の会話を聞いて述べた。
「これからそれを使われて」
「その通りよ」
「どんな遠くに離れていてもね」
貂蝉と卑弥呼は楽しげに笑いながら話す。
「あっという間にね」
「辿り着けるのよ、私達って」
「超能力だな」
ミスタービッグは二人のその能力をそれだと評した。
「それで移動できるのか」
「そう言うかも知れないわね」
「仙術とも魔術とも呼ぶかも知れないけれど」
二人も肯定する様にして話す。
「私達も長い間生きててね」
「そうした術を学んだのよ」
「そもそも一体何歳なのだ」
刀馬はそのことも疑問に思うのだった。

## 第七十話　何進、姿を現すのことその二

「戦国時代から生きているとは聞いているが」
「もっと前からよ」
「伏儀様の頃からよ」
その頃からだというのである。
そしてそれを聞いてだ。華陀は話すのだった。
「ああ、あの伝説の三皇五帝の一人のか」
「そう、その三皇の一人」
「あの方の頃から生きているわ」
「そうだったのか」
「待て」
話をそこまで聞いてだ。ギースが言った。
「今三皇五帝と言ったな」
「ええ、そうよ」
「その通りよ」
二人は何でもないといった口調でだ。ギースに答えた。
「天地開闢から少し経ってね」
「その頃に生まれたのよ」
「その皇は確か上半身は人間だったが下半身は蛇だったな」
「よく知ってるわね」
「そこまで知ってるのね」
「カレッジの講義で学んだ」
そうだとだ。ギースは話す。
「チャイナ、この国の神話のことはな」
「神話じゃないわよ」
「事実なのよ」
「それだけの古の時代からいたのか」
クラウザーもだ。唸る様にして述べた。

「二人は。それでは」
「いえ、人間よ」
「そうなのよ」
それは確かだというのだ。
「だって心は人間だから」
「だから人間なのよ」
「そうだな。二人共間違いなく人間だ」
華陀は微笑んでだ。二人の言葉に応えて話した。
「少し長生きしているだけだ」
「それだけだというのか」
「ああ、それだけだ」
華陀は獅子王の問いに対しても答えた。
「他に何かあるのか？」
「いや、いい」
獅子王は華陀にこれ以上言わなかった。言うのを止めたのだ。
そしてだ。そのうえでだった。こう華陀に話した。
「とにかくだ。また出発するのか」
「ああ、暫くしたらここに戻る」
「一旦ね」
「そうするわ」
こう言ってだ。三人はだ。
すぐにだ。漢中を後にしたのだった。
まさに瞬間移動だった。それによってだ。
予州に辿り着いた。そこに着くとだ。
いきなりだ。目の前にだ。
曹操の兵達がいた。彼等は華陀よりも二人を見てだった。
「な、何だあれは！」
「怪物か！？」
「人間ではないな！」
「絶対にそうだ！」

誰もがだ。二人を人間とは見なさなかった。そしてだ。すぐにだった。
「将軍の方を御呼びしろ！」
「そ、そうだな！」
「軍師の方もだ！」
「御呼びしろ！」
こうしてだ。怪物達を囲んでだった。
そのうえでだ。然るべき相手を呼んだ。そうしてなのだった。
来たのは。彼女達だった。
「な、何だと！？」
「また出て来たの！？」
夏侯惇と荀？だった。来たのは二人だった。
「おのれ、死んだのではなかったのか！」
「んっ！？死んだ？」
荀？は夏侯惇のその言葉に眉を顰めさせた。
そのうえでだ。彼女に顔を向けて尋ねた。
「何で死んだってなるの？」
「違ったか？」
「少なくとも死んだってことにはなってないじゃない」
荀？はこう彼女に言った。

## 第七十話　何進、姿を現すのことその三

「消えてはいるけれど」
「そうだったか」
「そうよ。あの時大暴れして空に消えたじゃない」
「ううむ、あまりにも異常な状況だったからな」
「勝手にそう思ったのね」
「間違いだったか」
「そうよ。そう思いたい気持ちはわかるけれど」
それでもだというのである。
「とにかく。また出て来たから」
「ううむ、怨霊め」
「あら、失礼ね」
「うら若き乙女を捕まえて怨霊だなんて」
「私傷ついちゃったわ」
「私もよ」
「ええい、黙れ黙れ！」
夏侯惇は怪物達に対して怒鳴った。
そのうえでだ。大刀を構えて。こう告げるのだった。
「ここで会ったが百年目！成敗してくれる！」
「御札も用意してあるわよ」
荀？はそれを出してきていた。
「妖怪を封印する為のね」
「よし、それでは今はだ」
「ええ、怪物退治よ」
二人は勝手にそう思い込んでいた。
「それで」
「だから失礼しちゃうわねえ」
「こんな乙女を捕まえて」

「まだ言うか！」
いい加減激怒した夏侯惇だった。
「何処の世界から出て来た怪物かは知らないがだ！」
「また出て来るなんていい度胸ね！」
「貴様等にこの国を荒らさせはしない！」
「さっさと成仏しなさい！」
「悪いけれど今はね」
「あんた達の相手をする暇はないのよ」
怪物達は落ち着いて二人に述べた。
「だから。これでね」
「さよならな」
「そうだな。とにかくだ」
華陀もここで言う。
「あの御仁を探すとしよう」
「むっ、そういえば」
「あんたもいたの」
夏侯惇と荀？はようやく華陀に気付いたのである。
「何故だ？妖怪の餌になったのか？」
「どうして一緒にいるのよ」
「ああ、この二人は俺の友だ」
それだとだ。華陀は二人に話すのである。
「ある事情から行動を共にしているんだ」
「魔界にでも行くのか？」
「本当に食べられても知らないわよ」
「だからそういうのはないからな」
彼だけが落ち着き払っている。
「安心してくれ」
「むう、そういえば御主以前には」
「華琳様に随分失礼なこと言って怒らせたわね」
「それだな。まあ曹操殿のそのこともやがて何とかしないとな」

「まさか便秘のことか？」
「ちょっと、それ言ったら駄目じゃない」
夏侯惇と荀？はひそひそと話をはじめた。
「また悩んでおられるからな」
「どうしたものかしら」
「一応言っておくが芋や南瓜、牛乳がいいぞ」
「それを食べるとか？」
「あれにいいのね」
「ああ、そうだ」
まさにその通りだというのである。

# 第七十話　何進、姿を現すのことその四

「そうしたものがいい、あれにはな」
「そうか。しかし華琳様はそれを仰るとな」
「本当に激怒されるから」
この辺りがだ。実に難しいというのである。
「それが問題だな」
「そうね。誰が言えばいいのか」
「麗羽殿が仰ればかなりいいのだが」
「けれどあの人無神経に高笑いで人前で言うから」
それがだ。袁紹の難しいところなのだ。
そしてだ。そうなればどうなるか。二人はよくわかっていた。
「そうなればだ」
「二人で大喧嘩ね」
そうなれば洒落にならないことはだ。猪武者の夏侯惇でもわかることだった。無論軍師である荀?ならばだ。それは余計にであった。
「だから麗羽殿に御願いしてもな」
「駄目ね。けれどあんたあの人とも幼馴染だったわよね」
「うむ、、その通りだ」
「昔からああいう人だったのね」
「全然変わっていないぞ」
「厄介な話ね。あんたもそうみたいだけれど」
荀?は何気に夏侯惇のことも言う。
「秋蘭も大変だったのね」
「だからどうしてそうした話になるのだ」
「いいじゃない、事実なんだし」
「事実とは何だ事実とは。私は幼い頃より華琳様をだな」
「ああ、いいか?」
勝手に二人で話をしだしている彼女達にだ。華陀が言うのだった。

「俺達はこれからな」
「むっ、まだいたのか」
「それで何なのよ」
二人は華陀の言葉を受けて彼に顔を戻して問うた。
「我々に用はないのだな」
「じゃあ早く何処かに行ったら？」
「だからそうしようと思ってな」
「御別れの挨拶をしたいのよ」
「そういうことなのよ」
それでだと。怪物達も言うのである。
「それでね。どうかしら」
「今から兵隊さん達、どけてくれるかしら」
「そうだな。それではな」
「そうするわ」
随分とだ。物分りのいい調子になっている二人だった。
そのうえで兵達に包囲を解かせてだ。あらためて華陀達に告げた。
「さあ、行け」
「そっちの妖怪達も今は見逃してあげるわ」
「だから妖怪じゃないのに」
「傷ついちゃうわ」
身体をくねくねとさせながら悲しい顔を見せる乙女達だった。
そしてその乙女達を見てだ。兵達のうち何人かが卒倒した。
それを見てだ。夏侯惇が驚いて彼等に駆け寄って叫ぶ。
「どうした、しっかりしろ！」
「まさか、こいつ等の妖術で！？」
荀？もびっくりした顔で兵達の傍に来て言う。
「倒れたというのか！？」
「一体何をしたのよ！」
「あら、何もしてないわよ」
「この美しい姿を見せているだけじゃない」

「黙れ、どうやら貴様等は！」
「その存在自体が破壊みたいね！」
あらためて言う二人だった。
「やはり人間ではないな！」
「一体どの世界の魔物なのよ！」
「今度は魔物って」
「だから違うわよ」
「くっ、こいつ等本当に何者だ！？」
「尋常な存在じゃないのはわかるけれど」
「まあとにかくだ」
相変わらずだ。華陀だけが冷静だ。そうして夏侯惇達に話すのだった。
「行っていいんだな、もうな」
「あ、ああ。とにかくだ」
「早く行きなさいよ」
それはいいという二人だった。
「この兵達の手当てもしないといけなくなった」
「とりあえずそこの妖怪達がいなくなって欲しいから」
「何度も言うけれど乙女なのに」
「どうしてそんな酷いことを言うのよ」
「だからそれはいい！」
「早く行きなさい！」
いい加減切れた二人だった。かくしてだ。

## 第七十話　何進、姿を現すのことその五

華陀達は半ば強引に解放された。そうしてである。
行く先々で勝手に騒動を起こしながらだ。探す相手のところに来たのだった。
何進は今は森の中を彷徨っていた。服はあの時のままだ。
しかしその頭にだった。頭巾を被っていた。
その彼女を見てだ。華陀が声をかけた。
「大丈夫か？」
「むっ、張譲の刺客か？」
「いや、俺はそうじゃない」
こうだ。その何進の前に出て答えるのである。
「俺は医者だ。華陀という」
「華陀？あの天下の名医のか」
「名医かどうかは知らないが俺は医者だ」
こう何進に話すのである。
「そう、医者王だ」
「医者王か」
「ゴオオオオオオオッド米道のな。医者王だ」
それだというのである。
「それでだ。いいか？」
「御主はいいのじゃが」
何進はここで彼の左右を見た。やはりいた。
「そこのあやかし共は何者なのじゃ？」
「あら、古い付き合いじゃない」
「超機械大戦の世界でね」
ここでこんなことを言う怪物達だった。
「ダーリンとも貴女とも随分と競演してるのに」
「仲間だったこともあったじゃない」

「これで信じてくれるか？」
華陀も言う。
「この連中もな」
「不思議なことに信じられるのう」
何進は腕を組んだ姿勢になって答えた。
「そう言われるとな」
「そうそう、付き合いはこの世界だけじゃないのよ」
「中の存在の付き合いは重要なのよ」
怪物達はこんなことも言うのであった。
「私なんてね。コーチ、いえ教官やってたし」
「あたしは東方不敗だったわよ」
「俺は医者王の他にも出ていたな」
「わらわものう。子供になっておったりしておった」
何進も理解できることであった。不思議とだ。
「この世界ではあの憎むべき張譲しかおらんかったが」
「まあそれは仕方ないな」
「そうそう、中の存在はね」
「色々とあるから」
「そういうことじゃな。しかしじゃ」
ここで何進は話を戻してだ。そのうえでこう話すのであった。
「わらわはこのまま曹操のところに身を寄せるつもりじゃが」
「そうみたいだな」
「そうじゃ。曹操の本拠地の城はもうすぐじゃ」
地理のことはだ。頭の中に入っているのである。
「だから向かっておるのじゃが」
「曹操殿のところもいいがな」
「よりよいところがあるのじゃな」
「だからここに来た」
こう何進に話す華陀だった。
「そういうことだ」

「ふむ。では袁紹のところか？」
まずはこう考えた何進だった。
「若しくは孫策、袁術か」
「その四人のところに行くのも悪くない」
華陀はそれ自体はいいとした。
「四人共絶対に貴殿を匿ってくれる」
「そのうえで兵を起こし宦官達をじゃ」
何進はこう話しながらだ。目を怒らせるのであった。
「今度こそ一掃してやるわ」
「それねえ。気持ちはわかるけれど」
「あの人達処刑されたって話があるわよ」
あえてだ。二人はその宦官達についてはこう説明するのだった。
「今洛陽は董卓さんが掌握しているわよ」
「状況が変わったのよ」
「何っ、それはまことか！？」
それを聞いてだ。思わず驚きの声をあげた。彼女の知らないことだったからだ。
「董卓がか」
「貴殿は董卓のことはよく知らないんだな」
「うむ。確かにわらわについてはいたが」
それでもだというのである。

## 第七十話　何進、姿を現すのことその六

「それでもじゃ。中央から距離を置いていた故にじゃ」
「よく知らないんだな」
「しかし暴虐の者ではない筈じゃ」
このことは何進も知っていた。
「色々よくない根も葉もない噂があるがじゃ」
「とにかくその董卓が今都を掌握している」
また何進に話す華陀だった。
「宦官達はな」
「ふむ。ではわらわは匿われてそれで終わりじゃな」
話を聞いてだ。何進は自分のこれからのことを察した。
そのうえでだ。こう言うのであった。
「大将軍には戻れぬか」
「どちらにしろそうね」
「貴女の天命はもう官位とは関係なくなっているわ」
「左様か。なら仕方あるまい」
怪物達の話を聞いてだ。何進は達観した様にして述べた。
「大将軍として国を正しくしたかったが」
「それはまたね」
「他の人がやる運命にあるから」
「わかった。ではそれならそれでよい」
己の運命を素直に受け入れた何進だった。その顔には未練がない。
「また肉屋に戻るだけじゃ」
「それでいいんだな」
「うむ。それも気楽でよい」
肉屋もだ。悪くないというのである。
「どのみちそちらでそこそこ繁盛しておったしのう」
「これからはそうするのね」

「そちらで生きるのね」
「そうさせてもらう。しかしじゃ」
ここでだ。何進は再び怒った顔を見せてだ。こう三人に話すのだった。
「それもこれもじゃ。まずはじゃ」
「そういえばその頭巾はどうしたんだ？」
華陀がここでやっとこのことを尋ねた。
「また一体。どうしたんだ？」
「御洒落じゃないわね」
「それとは違うわね」
「わらわは頭巾は好きではない」
だからだ。違うというのである。
「これはあれじゃ。隠しておるのじゃ」
「隠すっていうと」
「角でも生えたの？」
「そんな生易しいものではない」
何進のその顔が忌々しげなものになる。そのうえでの言葉だった。
「張譲めはわらわにとんでもないことをしてくれたのじゃ」
「とんでもないことか」
「そうじゃ。それでじゃ」
忌々しげに語り続ける何進だった。
「そのうえでわらわを都より追放したのじゃ」
「随分なことがあったのね」
「そうなのね」
「そうじゃ。今はとてもじゃ」
どうかと話すのである。
「この頭巾を外せぬ」
「病気なのか？」
華陀は何進の口調からそれを察した。
「それでそうしているのか」

「病気、違うな」
「じゃあ何だっていうんだ?」
「これは呪いじゃ」
それだというのである。
「呪いになっておるのじゃ」
「呪いだというのか」
「そうじゃ。御主は医者だったな」
「ああ、そうだ」
またこの話になった。その通りだというのである。

## 第七十話　何進、姿を現すのことその七

「それはその通りだ」
「それなら観ればわかるか」
「ああ、呪いの類もな」
それについてもだ。どうかと答える華陀だった。
「学んでいる。解くことができる」
「では。見てもらえるか」
「見せてくれるか」
是非そうしてくれとだ。答える華陀だった。
そうしてだ。何進に対してあらためて言うのだった。
「貴殿のその頭のことをだ」
「私達も呪いには強いから」
「医術のこともわかるわよ」
妖怪達も言う。
「だから見せてくれるかしら」
「マジカルナースにね」
「そうじゃな。御主達にもわかるのならじゃ」
どうかとだ。話す何進だった。
「見てもらいたい」
「それではな」
「見せて」
「是非ね」
「ではじゃ」
こうしてだ。何進はその頭の頭巾を外した。そうしてだ。
彼女のその頭を見る。そうしてだ。
華陀がだ。こう何進に対して述べた。
「それは治るぞ」
「治るというのか」

「ああ、それは薬を飲まされてそうなったな」
こうだ。何進に対して言うのだった。
「そうだな。薬を飲まされたな」
「その通りじゃ。あの張譲めにじゃ」
「それだ。それは猫子丹だ」
「猫子丹じゃと」
「人を猫に変えてしまう薬だ。そういうものもある」
何進のその頭を見ながらの言葉だった。その耳が猫のものになってしまい頭の上に生えてしまっているものを見ながらである。
「そうした薬は。封印されてきたのだがな」
「ええ。妖術師達が持っていたけれどね」
「魔道にいる仙人とかがね」
「となるとやはりそうか」
ここでだ。華陀は確信したのだった。その顔が鋭くなる。
「今は」
「そうね、間違いなくね」
「裏にいるわね」
「政の話じゃな」
何進は三人の今の話はそれだと察した。そのうえで三人に言うのだった。
「それか」
「いや、もっと根が深いな」
「政治ではあるけれどね」
「もっと複雑な話よ」
「ううむ、ややこしいことになっておるのかのう」
何進は事態を完全には把握し理解してはいなかった。だがそうした状況であることはだ。おおよそだが察することができたのである。
しかしだ。彼女は今はこう言うのだった。
「しかしそれはじゃ」
「いいんだな」

「うむ、わらわが知っても関係のないことになっておるな」
「ええ、もう貴女は政には大きく携わらないから」
「だからね」
「ならよい。それを知るべき者に伝えるがよい」
彼女以外のだ。そうした相手に話せというのだ。
「とにかくじゃ。この耳は」
「貴殿はこのままだと完全に猫になる」
華陀はこのことを指摘した。
「猫になりたいのならいいが」
「わらわは猫は大嫌いじゃ」
何進は忌々しげな顔で言い返した。

# 第七十話　何進、姿を現すのことその八

「それだけは勘弁して欲しいのじゃ」
「そうか。それなら余計にだ」
「余計にというと」
「俺達に付き合ってくれ」
こう何進に話すのだった。
「そうしてくれるか」
「うむ、わかった」
今度も素直に頷く何進だった。
「それではな」
「じゃあ行くわよ」
「今からね」
「それで何処に行くのじゃ？」
何進は三人にその行く先を尋ねた。
「四人のどの場所でもないとすると」
「残る一人の場所だ」
そこだというのである。
「そこに行くつもりだ」
「残る一人。というと」
「そうよ。最後の一人よ」
「こう言えばわかるわよね」
「左様か。あの娘か」
何進もだ。実際にわかった。そのうえでの言葉だった。
「そうじゃったな。あの娘もな」
「知ってはいるのだな」
「うむ。戦も政もあまり長けてはいないようじゃが」
それでもだというのである。何進もだ。
「しかし。人を惹き付けるものを持っておる様じゃな」

「そこに行くがいいか？」
「この耳は治るのじゃな」
「ああ、そこに行けば間違いなく治る」
それは間違いないと言う華陀だった。
「あそこには医術にも長けている軍師が二人もいるからな」
「その者達が薬を持っておるのか？」
「その薬自体は持っていなくても材料は持っている筈だ」
それがだ。あるというのである。
「だからだ。そこに行けば俺が薬を調合できる」
「それでなのじゃな」
「そうだ。貴殿のその耳は治る」
こう断言する華陀だった。
「だから安心してくれ」
「わかった。それではじゃ」
ここまで聞いてだ。頷く何進だった。
そのうえで再び頭巾を被ってだ。三人に言うのであった。
「行くとしようぞ」
「ええ、あの州にね」
「今からね」
「しかし。御主等はじゃ」
何進は難しい顔になった。そのうえで貂蝉と卑弥呼に言うのである。
「人目につく場所には。出ぬ方がいいじゃろ」
「そうよね。この美しい姿を見たら」
「誰でも悩殺されちゃうわよね」
「いや、まあそう思うのならそれはそれでよいが」
いい加減言うことを諦めた何進だった。しかしだ。
彼女はあらためてだ。華陀に対して言った。
「では今からじゃな」
「ああ、徐州に向かおう」

「しかし。劉備とは」
そのことがだ。以外といった顔であった。
「また思わぬことになったのう」
「そうかもな。しかしだ」
「しかしなのじゃな」
「いい娘だ。貴殿にとっても悪いことじゃない筈だ」
「そうじゃな。それではな」
「行くわよ」
「今からね」
こうしてであった。何進は華陀に案内されて徐州に向かうのだった。ただし怪物達も一緒である。それが問題だが華陀は自覚していなかった。

第七十話　　完

２０１１・３・１９

# 第七十一話　劉備、何進を匿うのことその一



貂蝉と卑弥呼はだ。予想通りだった。
行く先々でだ。その姿だけで騒動を引き起こしていた。
「な、何だあいつは！」
「妖怪か！？」
「怪物か！？」
誰もがだ。その姿を見て恐慌状態になる。
「ど、道師を呼べ！」
「坊さんだ！」
「怨霊退散！」
「御札はあるか！」
「あら、失礼ねえ」
「こんな美しい乙女達を捕まえて」
やはり動じない彼等だった。その恐慌状態の中で言うのであった。
「私達の美しさがわからないのなら」
「わからせてあげるわ」
こう言ってであった。それぞれ両手を己の口にやってだ。
投げキッスを飛ばした。それだけでだ。
人々はだ。爆発の中で吹き飛ばされた。
「う、うわあああああああっ！」
「な、何だ今のは！」
「妖術か！」
こう言うのであった。
そのうえで大地に倒れ伏す。死者がいないのが不思議な程であった。
「この連中、やっぱり」

「人間じゃない」
「悪魔か！？」
「それとも魔物か！？」
「だから。絶世の美女貂蝉よ」
「可憐な乙女卑弥呼よ」
彼等だけが言う。
「覚えておいてね」
「この天下を救う存在よ」
「か、漢が滅びるっていうのかよ」
「バケモノに滅ぼされるんだな」
彼等はこう判断するしかなかった。とにかくだ。徐州は彼等の手によって恐ろしい状況になっていた。そしてそのことはだった。
劉備のところにも話が入っていた。彼女はその話を聞いて言うのだった。
「妖怪がなんですか？」
「はい、そうです」
「大暴れしているようなのだ」
関羽と張飛がこう姉に報告する。
「西から攻め込んで来ています」
「ここまで一直線に迫って来ているのだ」
「困ったわね、それは」
そこまで聞いてだ。劉備は顔を曇らせる。
そのうえでだ。新たに軍師の一人に加わった徐庶に問うのだった。
「どうすればいいかしら」
「はい、お話を聞く限りではです」
「大変なことよね」
「妖怪、ですか」
徐庶もまた顔を曇らせている。そのうえでの言葉だった。
「それならです」
「御札が必要かしら」

「いえ、報告を聞く限りではです」
どうかとだ。彼女は主に話す。
「御札ですら効き目はないようです」
「じゃあどうしたらいいの？」
「倒すしかありません」
これが徐庶の考えだった。
「ありったけの将を出してです」
「それで倒すしかないのね」
「恐ろしいまでの力を持った妖怪達です」
そう見るのだった。彼女もだ。
「このまま放置していては大変なことになります」
「もう大変なことになってるけれどな」
馬超が困った顔になって話す。
「死人こそ出てないけれど妖術であちこち爆発させてるからな」
「しかも恐ろしいまでの速さだ」
趙雲はそのことを話した。
「人の速さではない。馬の倍以上の速さでこちらに向かっている」
「一体何者なのかしら」
黄忠もその流麗な眉を顰めさせている。

# 第七十一話　劉備、何進を匿うのことその二

「その妖怪達は」
「とにかくです。皆で行きましょう」
徐庶はまた告げた。
「そして何としてもです」
「そうだな。妖怪は退治せねばな」
「これも武人の務めなのだ」
関羽と張飛が強い顔で述べる。その時だった。
馬岱が来てだ。こう話すのだった。
「お客さん来たよ」
「お客さん！？」
「お客さんって？」
「うん、華陀さん」
彼だとだ。にこりと笑って話すのだった。
「それとあと三人ね」
「三人！？」
「三人っていうと」
「そうよ、あたし達よ」
「お邪魔したわ」
いきなりだ。彼等が出て来たのだった。
そしてだ。彼等が出たその瞬間にだった。その場が大爆発に包まれた。
劉備達はその中で吹き飛ばされる。だがそれでもかろうじて立ち上がりだ。黒焦げになった顔で彼等に対して問うのだった。
「あ、あの一体」
「何だこの連中は」
「バケモノなのだ」
劉備と関羽、張飛が言う。

「まさかこんなところで来るなんて」
「おのれ、不意を衝かれた」
「迂闊だったのだ」
「あれ？どうしたの？」
しかしである。馬岱だけはだ。
平然としてだ。何とか爆発から立ち直った劉備達に問うのだった。
「皆急に爆発して。大丈夫？」
「おい、何だよその連中」
馬超が従妹に対して問う。彼女も顔や身体のあちこちが黒焦げになっている。
「見るからにおかしいだろ」
「貂蝉さんと卑弥呼さんだよ」
相変わらず平然としている馬岱である。
「何でも華陀さんのお友達なんだって」
「いやね、お友達なんてものじゃないわよ」
「もっと深い絆で結ばれてるのよ」
こう返す二人だった。
「そう、ダーリンなのよ」
「絆と絆で結ばれたね」
「そうらしいのよ」
また言う馬岱だった。
「この人達も来たから」
「あの、人間ですよね」
「それを確かめたいですけれど」
孔明と鳳統は服のススを払いながら問うた。
「あまりそうは見えませんけれど」
「どうなのでしょうか」
「そうよ。人間よ」
「年齢は聞かないでね」
身体をくねくねとさせながら話す二人だった。

「伏儀さんの頃からいるけれどね」
「うら若き乙女よ」
「ううん、仙人でしょうか」
「妖怪仙人かも」
孔明と鳳統は二人の話からこう考えた。
「とりあえず。普通の人じゃないです」
「それは間違いありません」
「そうだな。少なくとも常人ではない」
それは趙雲も認めることだった。
「何者かはわからないが」
「それでね。あたし達がここに来た理由はね」
「とても大事なことがあってなのよ」
「大事なこと？」
黄忠がその言葉に眉を動かした。彼女も他の面々も何とか立ち直ってきている。そのうえでだ。二人の話を聞くのだった。
「っていうと」
「ええ。ダーリンが来るから」
「ちょっと待ってね」
「ああ、二人共もうそこにいたんだな」
馬岱以上に落ち着いた様子でだ。華陀が来た。
後ろには頭巾を被った女がいる。彼女を連れてであった。

# 第七十一話　劉備、何進を匿うのことその三

彼は劉備達の前に来てだ。こう話すのだった。
「劉備殿、久しいな」
「あっ、華陀さん」
劉備も彼に顔を向ける。そのうえで言うのだった。
「お客様というのは」
「多分俺のことだな」
「そうなんですか」
「そうだよ。華陀さんもだよ」
馬岱がまた劉備に話す。
「ここに来たお客さんだよ」
「そっちの二人はともかくとしてだな」
「絶対に違うと思いたいのだ」
関羽と張飛はまだ貂蝉と卑弥呼への警戒を解いてはいない。そのうえでの言葉だった。
「華陀殿はか」
「ここに来たのだ」
「そうだ、実はだ」
華陀は劉備達に対して話をはじめた。
「この御仁だが」
こう言ってだ。その後ろの頭巾の女に手を向けた。
「匿ってもらいたいのだが」
「むっ、貴殿は」
厳顔が女を見て眉をぴくりと動かした。
そのうえでだ。こう言うのだった。
「何進大将軍ではないのか？」
「わかるか」
その女からの言葉である。

「それは」
「うむ、わしのことも御存知だな」
厳顔はまた女に話した。
「厳顔じゃが」
「益州で太守をしておったな」
「その通りじゃ。その厳顔じゃ」
「知っておる。何度か会ったことがあったな」
「その通りじゃ。しかし貴殿は」
「処刑されたと聞いていました」
徐庶がそのことを話す。
「ですが。大丈夫だったのですか」
「大丈夫ではないが命はある」
こう答えた何進だった。
「こうしてじゃ」
「死体が晒しものになってないと聞いたが」
「本当に生きていたのだ」
関羽と張飛はそのことが意外といった顔で言った。
「まずは何よりだな」
「その通りなのだ」
「しかしよくないこともある」
華陀がまた一同に話す。
「少しな。困ったことになっている」
「困ったこと？」
「というと」
「いいか？」
華陀は何進本人に尋ねた。
「それを見せて」
「仕方あるまい」
憮然とした声で答える何進だった。
「だからな」

「わかった。それではだ」
「うむ」
こうしてだ。何進はその頭巾と取った。するとだ。
その頭には。それがあった。
「えっ、耳!?」
「耳って!?」
「猫の耳」
「何でそれが」
「まさかと思うが」
魏延が眉を顰めさせながら話す。
「大将軍は南蛮出身だったのか」
「言っておくが違うぞ」
本人からの言葉だ。
「わらわは洛陽の生まれじゃ」
「そうだったな。肉屋をやっていたのだったな」
「そうじゃ。繁盛しておった」
こう趙雲にも答える。

# 第七十一話　劉備、何進を匿うのことその四

「妹が先の帝の后になってじゃ。肉屋は他人に譲ったが」
「そうでしたよね。将軍は洛陽の方でしたね」
「そもそも猫の耳はなかった筈です」
孔明と鳳統がまた話す。
「それで何故」
「どうして耳が」
「俺から話そう」
華陀がまた話してきた。
「将軍のこの耳は薬によってだ」
「猫子丹ですか？」
「それですか？」
孔明と鳳統がすぐに察して話した。
「それを飲ませられた」
「相手は宦官ですね」
「よくわかったのう」
何進もだ。思わず言うことだった。
「その通りじゃ。忌々しいことにじゃ」
「そうですか。やはり」
「それで追放されて」
「ふむ。察しがいいな」
何進は二人のその話に感心すらしている。
そのうえでだ。こう述べるのだった。
「まさにその通りじゃ。全てな」
「そうですか。あの薬をですか」
「飲ませられて」
「けれどあのお薬は」
徐庶が暗い顔で話す。

「妖術の類で。普通の仙人や道師は」
「その通りだ。使うのは妖術使いだ」
華陀がその通りだと話す。
「左道そのものだ」
「宦官達が左道に通じていたのでしょうか」
「いや、その道に通じている奴と結託しているようだ」
また話す華陀だった。
「どうやらな」
「そうなのですか。厄介ですね」
そこまで聞いてだ。徐庶は眉を曇らせる。
「只でさえ陰謀に長けた宦官達にそうした存在がつくと」
「全くな」
「ただ」
しかしだった。ここでこうも言う徐庶だった。
「宦官達は。もう董卓殿に一掃されたことになっています」
「気付いているな」
華陀は彼女の今の言葉から述べた。
「されたことになっている、だ」
「はい、違うのですね」
「どうやらな。奴等はまだ宮廷の奥深くにいる」
「そこで陰謀を巡らせてますか」
「その様だ。董卓殿との関係はわからないがな」
「それってまずくない？」
馬岱が顔に嫌悪を浮かばせて話す。
「あの連中が生きてたら。しかも大将軍がおられないなんて」
「その通りじゃ。まずいことになっておるのじゃ」
何進もこう話す。
「このままでは天下がじゃ」
「ですが。今はです」
「迂闊に動けないです」

孔明と鳳統が今の状況を鑑みて述べる。
「ここで動けば叛乱と見なされます」
「すぐに討伐軍を向けられます」
「それに。今は董卓さんの軍もありますから」
「討伐に向けられる軍もありますから」
「そうよ。動いたら駄目よ」
「絶対にね」
それは貂蝉と卑弥呼も止める。
「動いたら謀反人よ」
「董卓さんの軍が来るわよ」
「少なくともこちらから動けません」
徐庶もそれはわかっていた。わかっているからこその言葉だった。
「あちらから動くのを待つしかありません」
「私もそう思います」
「今は待つしかありません」
孔明と鳳統もこの考えだった。
「機を待ちましょう」
「あちらから絶対に仕掛けてきますから」
「その通りだな。そしてだ」
華陀がだ。話を変えてきた。

# 第七十一話　劉備、何進を匿うのことその五

「何進殿の耳は。治せるか」
「はい、大丈夫です」
「猫子丹を治せる薬ですね」
「そうだ。それの素材はあるか？」
華陀は孔明と鳳統に対して問うた。
「材料さえあれば俺がすぐに調合するが」
「はい、あります」
「めぼしいものは全て」
あるとだ。明るい声で答える軍師二人だった。
「それじゃあすぐに材料を持って来ます」
「では何進さんの猫化を防ぎましょう」
「わかった。それならすぐにな」
こうして話が進みだした。そうしてだ。
薬の調合が進めていく。その中でだ。
ふとだ。華陀が言うのだった。
「一つ足りないな」
「一つ？」
「一つっていいますと」
「南蛮象のヘソのゴマだ」
それがないというのである。
「それはあるか？」
「南蛮象？」
「南蛮象っていいますと」
「桃色の身体に猫程の大きさの象だ」
こう話すのである。
「その象のヘソのゴマだが。あるか？」
「ええと、その象は」

「確かそれは」
ここでだ。二人は気付いた。その象とは。
「美衣ちゃんがいつも頭に乗せている？」
「パヤパヤちゃん？」
「むっ、ここにいるんだな」
「はい、います」
「その象でしたら」
「ならその象のヘソのゴマを貰いたい」
まさにそれをだというのだ。
「そうすれば何進殿の猫化は収まる」
「わかりました。それじゃあ」
「美衣ちゃんにお話します」
「頼むぞ。何しろわらわはじゃ」
切実な声で言う何進だった。
「猫が大嫌いなのじゃ」
「嫌いな存在に変える」
「宦官達も意地が悪いですね」
「宦官にはそうした奴が多いのじゃ」
何進は顔を顰めさせて話す。
「陰険で執念深くてじゃ」
「ううん、あまり知り合いになりたくないですね」
「本当に」
「だからわらわは宦官は猫よりも嫌いじゃ」
猫よりもだというのである。
「猫は二番、宦官は一番じゃ」
「じゃあ将軍はその」
「宦官みたいには」
「あれを切り取ることはせん」
それははっきりと言い切ったのだった。
「そもそも最初からないわ」

「ですよね。女の人ですから」
「やっぱり」
「たまにある奴もいるがのう」
何気にこんなことも言ったりする。
「それは例外中の例外じゃ」
「所謂ふたなりですね」
「それですね」
「左様、わらわも見たことはない」
「俺はあるぞ」
華陀がここで言う。
「実際にな」
「何と、見たことがあるのか」
「ああ、ある」
何進にも答える華陀だった。
「中々凄いものだった」
「凄いどころじゃないだろ」
馬超がかなり引きながら述べた。

# 第七十一話　劉備、何進を匿うのことその六

「あのよ、両方あるんだよな」
「そうだ、男のものも女のものもな」
華陀だけが平然としている。
「両方あるのだ」
「うわ、何か全然信じられないな」
馬超はまた唖然となっている。そしてだ。
華陀はだ。また話すのだった。
「それでだが」
「はい、ふたなりですよね」
「そのお話ですよね」
「いや、猫子丹のことだ」
そちらだというのだ。華陀はあっさりと話を変えていた。
「その南蛮象だが」
「あっ、それですか」
「そのことですか」
孔明と鳳統は二人の言葉に我に返って話す。
「南蛮象でしたら」
「すぐにこちらに呼べますけれど」
「では頼む」
華陀は医者の顔になっている。とはいっても何処かヒーローめいている。
「人が猫になろうとしているからな」
「世の中猫好きの娘もいいけれどね」
「そうよね。風ちゃんとかね」
ここでまた怪物達が話す。
「周泰ちゃんもそうだし」
「董卓ちゃんもね」

「何処でそうしたことを知ったのだ？」
趙雲はそのことを問わずにはいられなかった。
「一体全体」
「あたし達人の心が読めるのよ」
「それでわかったのよ」
またわかった二人の異常能力であった。
「勿論貴女達の心もね」
「読もうと思えばわかるわよ」
「何っ、では私の心もか」
魏延がついつい余計なことを言ってしまった。
「私の桃香様への赤い心を」
「赤っていうか桃色ね」
「そちらね」
二人はそれだというのだった。赤ではなく桃だとだ。
「もういつもね」
「見ているし想ってるわね」
「赤ではなく桃色だというのか」
「妄想は禁物よ」
「度が過ぎてるし」
「やっぱりね」
馬岱がその魏延を横目で見ながら述べた。
「あんた、桃香様と頭の中で」
「違う、私は桃香様に何かしたりはしない」
頭の中でもだというのだ。
「あくまで。桃香様からお誘いがありだ。この心も身体も」
「つまり桃香様のお誘いを待ってるのね」
「桃香様に何かする輩は絶対に許しはしない」
確かに忠誠心はある。見事なものがだ。
「だが。お許しがあれば。私はこの全てをだ」
「全く。完全にそのつもりじゃない」

「私の全ては桃香様の為にあるのだ」
劉備の真名をだ。これでもかと出す。
「だからこそだ。私はだ」
「はいはい、わかったから」
いい加減呆れてしまっている馬岱だった。横目で見るその表情にもそれが出ている。
「あのね、それあの人達に読まれているのよ」
「おのれ、やはり人間ではなかったか」
「まあ蒲公英もあの人達が人間かどうか疑問だけれど」
「恐ろしい奴等だ。しかも」
「隙ないしね」
この二人を以てしてもだ。怪物達に隙はなかった。
「わかる、尋常でない強さだ」
「この国を二人で破壊し尽くせるかも知れないわね」
「あら、あたし達そんなことしないわよ」
「平和が好きなのよ」
ウィンクして顔を赤らめさせて答える妖怪達だった。
「これでも愛と平和の使者なのよ」
「美少女戦士なんだから」
「ここまでおっかない目に遭ったのははじめてなのだ」
張飛の顔が真っ青になっている。

# 第七十一話　劉備、何進を匿うのことその七

「世の中とても広いのだ」
「そうだな。おそらく私達全員で向かってもだ」
関羽も彼等を見ながら話す。
「一撃で倒されるな」
「そうね。敵でなくて何よりだわ」
黄忠もそのことに安堵している。
「そのことはね」
「あの、それでなのですが」
「南蛮象のヘソのゴマを持って来ました」
「呼んだニャ？」
猛獲が来ている。今まで舞の胸を触って遊んでいたのだ。
その頭にはその南蛮象がいる。パヤパヤだ。
「何の用ニャ？」
「パヤパヤちゃんのおヘソのゴマを欲しいんだけれど」
「いいかしら」
「いいニャ」
満面の笑みで答える猛獲だった。
「何か人を助けないといけない状況なのはわかるニャ」
「うん、だからね」
「御願いしたいの」
「御安い御用だニャ。それならニャ」
こうしてだった。あっさりとだ。南蛮象のヘソのゴマも手に入った。そしてそのうえでだ。他の薬の材料は既にあった。そうしてだ。
華陀は薬を調合した。そしてその薬を何進に飲ませる。すると。
耳はだ。元に戻っていなかった。
「どうしてじゃ、これは」
「そうか、飲むのが遅かったか」

「遅かったじゃと！？」
「ああ。猫になるのは防げた」
それはだというのだ。
「だが耳はだ」
「このままじゃというのか」
「いや、やがてなくなる」
残りはしないというのだ。一応はだ。
しかしだ。華陀はこう何進に述べた。
「一年程かかって。元の人間の耳に戻る」
「一年じゃと」
「そうだ、一年だ」
「一年もかかるというのか」
「ああ。悪いがな」
「悪いがそれでも戻るのじゃな」
何進は話をしているうちに気を取り戻した。そしてだ。
狼狽する顔から落ち着いた顔に戻ってだ。あらためて華陀に述べた。
「ならよい」
「納得してくれたか」
「少なくとも猫になることはないのじゃな」
「ああ、それはな」
「ならそれでよい」
納得した顔で言うのだった。
「それならな」
「そうニャ。美衣は猫が大好きニャ」
その猫にしか見えない猛獲が笑顔で跳ねながら話す。
「それにお姉ちゃんおっぱいが大きいニャ」
「ほほう、よい娘じゃな」
何進は『お姉ちゃん』という言葉に反応して微笑んだ。
「わらわをお姉ちゃんと呼ぶか」

「そうニャ。お姉ちゃんニャ」
「よいぞ。わらわはまだ若いのじゃ」
「そうよ。人間は三百歳からよ」
「そこからなのよ」
妖怪仙人達の言葉だ。
「人生は長いわよ」
「花の時代は凄く長いのよ」
「普通の人間はそこまで生きられぬぞ」
厳顔が突っ込みを入れる。
「三百どころか百もじゃ」
「いや、俺は百二十だが」
華陀がここでこう厳顔に話す。
「人生まだまだこれからだ」
「あの、百二十歳って」
それを聞いてだ。徐庶が目をしばたかせながら話した。

# 第七十一話　劉備、何進を匿うのことその八

「ちょっとないですけれど」
「そうか？これ位は普通だと思うが」
「そうは言えません」
とてもだという徐庶だった。
「どうやればそこまで」
「いつも身体を動かすことだ」
微笑んで答えた華陀だった。
「動物の動きを模してな。俺はいつもそれをやっている」
「それでなんですか」
「そうだ、それで俺は健康なままだ」
こう話すのだった。
「ダーリンって病気一つしないのよ」
「怪我もしないしね」
ある意味でだ。彼も妖怪達と同じ存在だった。
「あたし達もそうだけれど」
「病気とかしたことないわよ」
「病気の方が逃げていくと思うのだ」
張飛は本気で思ったのだった。
「そんな生半可な存在じゃないのだ」
「けれど病気しないのっていいわよね」
劉備は二人を見てもこう言えた。
「羨ましいわ」
「そうだ。病気の中でだ」
華陀は医者として話をはじめた。
「風邪は一番怖いからな」
「風邪がか？」
「そうだ。風邪は万病の元だ」

こう劉備達に話す。
「だからくれぐれも気をつけてくれ」
「そうよ。些細な風邪でもね」
「注意しないと駄目よ」
風邪の方から逃げる二人の言葉だ。
「毎日健康と美容に気をつけて」
「しっかりとしてね」
こんな話をしてだった。彼等は時間を過ごしていた。何はともあれ何進は猫にならずに済んだ。その彼女がどうなったかというと。
「ここにいてよいのか」
「はい、将軍がお望みとあれば」
劉備は邪気のない笑みで何進に話した。
「好きなだけここにいて下さい」
「つまり匿ってくれるというのじゃな」
「将軍は処刑されたんですよね」
「謀反人として」
「そうなっておる」
孔明と鳳統にも話す何進だった。
「わらわはいないことになっておる」
「なら。ここにいてもです」
「何の問題もありません」
こう話す孔明と鳳統だった。
「ですから将軍が望まれるなら」
「この徐州に」
「そういうことです」
また何進に話す劉備だった。
「それで。どうされますか？」
「それではじゃ」
彼女達の言葉を受けてだ。何進は述べた。
「その言葉に甘えさせてもらっていいか」

「はい、わかりました」
笑顔で応える劉備だった。
「では。これから宜しく御願いします」
「そうさせてもらう。しかしじゃ」
「しかし？」
「わらわとてここにいるだけでは駄目じゃ」
それだけではだ。気が済まないというのだ。
「何かさせてもらいたいが」
「将軍でしたし」
「なら兵のこともできますよね」
「一応はな。できんこともない」
流石にだ。大将軍だっただけはあった。
「曹操や袁紹と比べれば落ちるのはわかっておるがな」
「まあそれでもです」
「できるのなら」
「政もしておったしのう」
それもしていたというのである。
「じゃが。それ以上にじゃ」
「それ以上に？」
「といいますと」
「肉のことの方が得意じゃな」
そちらの方がだというのだ。かつての生業の話である。

# 第七十一話　劉備、何進を匿うのことその九

「料理なら全般じゃ」
「特に肉のことがですか」
「お得意ですか」
「あの頃は家の料理は全部やっておった」
そうした家だったのである。店は大きかったが貴族ではないのだ。
「だからじゃ。そちらの方がじゃ」
「わかりました。それなら」
「御料理を御願いします」
こうしてだった。何進はだ。
料理担当、とりわけ肉関係をあたることになった。兵や政のことも手伝うがだ。そちらをメインとしてやっていくことになった。
その結果だ。劉備達はかなり美味い肉料理を楽しめるようになった。
「そうだよ、これだよ」
「美味いのじゃな」
「ああ、鰐の唐揚げはこうじゃないとな」
丈がだ。何進の作った鰐の唐揚げを食べながら話すのだった。
「味付けも揚げ加減もな。凄くいいぜ」
「鰐の味は鶏肉に似ておるが癖がある」
それもわかっている何進なのだ。
「じゃから唐揚げにするのにもそこを注意せねばならん」
「だからだってんだな」
「香辛料にも気をつけた」
唐揚げに漬けるそれをだというのだ。
「それでじゃがな」
「よくわかってるな。本当にいいぜ」
ガツガツと食べながら話す丈だった。

「何進さん料理美味いんだな」
「肉料理は特にな」
自信があるというのである。
「昔取った杵柄だからのう」
「鰐も扱ってたのかよ」
「そうじゃ。肉は何でも扱っておった」
意外とだ。多彩だったのである。
「鰐だけではないぞ」
「他にはどんなのがあったんだよ」
「牛や豚や羊もあった」
まずはオーソドックスなものだった。普通の肉屋にあるものだ。
「鶏肉関係もじゃ」
「鶏もかよ」
「鴨や七面鳥とかも扱っておったぞ」
「多いな、そりゃまた」
「家鴨や鳩や雀もじゃ」
「本当に多いな」
「何でも食べられるものなら置いておった」
そうだったというのである。
「それを全部捌いておったのじゃ」
「だからか。よくわかってるんだな」
「うむ。鰐は特によかった」
その鰐の話もするのだった。
「鰐は革が高値で売れるからのう。それもよかった」
「革なあ」
「よいぞ、鰐は」
そうした意味でもだというのである。
「まことにのう」
「そうか、食ってもいいしな」
「そうじゃ。ところでじゃ」

「ああ、何だ？」
「御主何処で鰐の味を知ったのじゃ」
何進が問うのはこのことだった。
「何処でじゃ、それは」
「ああ、それな」
「何処でその味を知ったのじゃ」
「タイで知ったんだよ」
そこでだというのだ。
「俺が今やってる格闘技な」
「ムエタイとかいうものじゃな」
「それを身に着けに行った時に食ったんだよ」
「それからか」
「そうなんだよ。日本じゃこんなのないからな」
彼の祖国にはだ。ないのである。
そしてだ。あらためて食べながらまた何進に話す。

# 第七十一話　劉備、何進を匿うのことその十

「しかしあんた本当に肉料理美味いな」
「少なくとも自信はある」
「こっちでかなりいい線いくんじゃないのか？」
「そうやもな。それではじゃ」
「ああ、もう将軍には戻らないんだよな」
「最早わらわの役目は終わったようじゃしな」
怪物達に言われたことをそのまま話す。
「だからじゃ。もうよい」
「そういうことなんだな」
「ああ、それでな」
「うむ、それでじゃな」
「あんたもそうして。俺は」
「御主は？」
「戦うからな」
そうするというのだ。彼はだ。
ここで唐揚げを食べ終えた。そうしてだった。
丈は立ち上がってだ。こう言った。
「この脚と拳でな」
「御主はそれじゃな」
「ああ、頭は悪いが喧嘩は強いぜ」
自分でもだ。わかっているのだった。
「食うこととそっちには自信があるからな」
「ではそちらは任せたぞ」
「そういうことでな」
「しかし御主頭は悪いのか」
何進は丈本人のその言葉に反応を見せた。
「そうなのか」

「学校とか勉強は嫌いなんだよ」
それでだというのだ。
「字ばっかりの本とか読んでたら頭が痛くなってな」
「ううむ、それではまことに」
「まことに？何だってんだ？」
「馬鹿なのじゃな」
それだという何進だった。
「残念なことに」
「ここでそう言うのかよ」
「御主が自分で言っておるではないか」
「それはそうだけれどな」
「しかし。馬鹿なら馬鹿でよい」
何進は丈が馬鹿であることを認めた。それでいいというのだ。
「それもまた個性じゃ」
「そう言ってくれるんだな」
「わらわも大した頭ではないしのう」
笑ってだ。こんなことも言うのであった。
「実際のう」
「そうか？少なくとも俺よりはな」
「御主は自分で言うか」
「馬鹿は馬鹿って認めるさ」
そのことについてやぶさかではないというのだ。
「事実だしな」
「左様か」
「ああ、それでな」
ここで話が変わった。
「何かこのままやばいことになりそうだな」
「そうじゃな。洛陽があれではな」
「戦乱か？ひょっとして」
「その可能性は高い」

強張った顔になってだ。何進は丈に述べた。
「否定できぬ」
「そうか。ひょっとして俺達はそれでここに来たのかも知れないな」
「この世界にか」
「実際何でここに来てるかずっとわからなかったんだよ」
こう何進に述べるのである。
「けれどな。その戦乱で何かする為だってんならな」
「戦うというのじゃな」
「ああ、そうさせてもらうからな」
笑顔で話すのであった。
「それでいいな」
「存分にな。それではじゃ」
「今から身体鍛えてくるからな」
それをするというのである。
「それじゃあまたな」
「ではわらわはじゃ」
「あんたはまた料理か」
「仕込みじゃ」
それをするというのである。
「今からそれをする」
「何か生き生きとしてるな」
「そうか？別にそうは思わぬが」
「いや、何か違うな」
「少なくとも料理は好きじゃ」
微笑んで東に述べるのである。
「仕込みも含めてのう」
「それでか。それでな」
「うむ。それで何じゃ」
「今度は一体何を作るんだ？」
問うのはそのことだった。次は何を作るかである。

「また肉料理か？」
「そうじゃ、肉じゃ」
まさにだ。その肉料理だというのである。
「肉まんを作る」
「ああ、ケンスウのリクエストなんだな」
「ただ。少し思うのじゃが」
「何だよ、思うって」
「肉まんではなくピザまんとやらにしようかのう」
首を捻りながらだ。こう言うのだった。
「アンディとやらに聞いたピザを作ってそれを中に入れてじゃ」
「ああ、ピザまんか？」
「あれも美味そうじゃしの。どうじゃそれは」
「作ってもいいけれどケンスウには駄目だからな」
丈は真剣な面持ちで何進に話した。
「それはな」
「駄目なのか。何故じゃ？」
「あいつピザまん大嫌いなんだよ」
「そうじゃったのか。ピザまんは嫌いなのか」
「だから止めた方がいいな」
「わかった。では肉まんにしておこう」
話を聞いてあらためて言う何進だった。
「それではな」
「そうしてくれ。それでな」
「うむ。それでじゃな」
「俺はこれで鍛錬に入るからな。また楽しみにしてるぜ」
「うむ、そうするがいい」
笑顔で別れる二人だった。かくしてだ。
何進は劉備に匿われることになった。まずは無事終わったのだった。

第七十一話　完

2011・3・21

# 第七十二話　呂蒙、学ぶのことその一

第七十二話　呂蒙、学ぶのこと

孫尚香がだ。右京に対して尋ねていた。
彼等は今は川辺にいる。そこで鍛錬をしていた。その中でだった。
「ねえ、右京ってさ」
「何か」
「最初随分と顔色悪かったけれど」
彼女が言うのはこのことだった。
「最近かなりよくなったわよね」
「そうですね。本当によくなりましたね」
周泰もそうだと話す。彼女もいるのだ。
「最初は雪みたいに白いお顔でしたが」
「今は赤みもさしてきてるわよね」
「はい、全く違います」
周泰は孫尚香に対して話す。
「御元気になられたのですね」
「それはいいことね」
孫尚香は素直に喜んでいる。右京のその体調のことをだ。
「そういえば冥琳もね」
「はい、あの方も最近かなり顔色が」
「そのことだが」
ここでだ。当の右京が言うのだった。
「どうやら私とあの御仁とは同じ病だったようだ」
「同じ？」
「同じ病気とは」
「私は胸を患っていた」
このことを言うのだった。
「咳をしていたな」

「そういえばそうね、時々ね」
「右京さんも冥琳さんも」
「労咳だ」
病の名前も言うのだった。
「それだったのだ」
「労咳って」
「それだったのですか」
二人もその病のことは知っていた。その病はだ。
孫尚香がだ。顔を曇らせてこう話すものだった。
「あれって死ぬ病じゃない」
「そうです。かなり危険な病です」
周泰が孫尚香に話す。
「本当に助からないような」
「そんなとんでもない病だったのね」
「うちの頃もそうやったで」
あかりもいた。その彼女が話に加わってきたのだ。
「労咳なんて。ほんまかかったら終わりやったで」
「俺の頃には治る病になってるがな」
ケイダッシュは彼の時代のことを話した。
「それでもな。まずい病気だってのは変わりないな」
「で、それがどうして治ったのよ」
孫尚香は右京自身にそのことを尋ねた。
「凄くいいことだけれど」
「ええ薬でも飲んだんかいな」
あかりはそれではないかと考えた。
「けどこの時代そんなええ薬あったかな」
「なかった筈だぜ」
銃士浪がこのことを言う。
「ちょっとな。そういうのはな」
「そのことだが」

ここで話したのは右京自身だった。
彼はだ。あの男のことを話した。
「華陀という医者だが」
「あっ、あの左右に妖怪引き連れてるあいつね」
孫尚香の華陀への認識はこれに他ならなかった。
「赤い髪の」
「そうだ、あの御仁がだ」
「あんたの病を治してくれたの」
「それでなのだ」
右京はこう話す。
「私は病から解き放たれた」
「いいことね、本当に」
孫尚香はそのことを素直に喜んでいた。
そのうえでだ。彼にこうも言うのだった。

# 第七十二話　呂蒙、学ぶのことその二

「じゃああんたはもう労咳じゃ死なないのね」
「そうなった。幸いな」
「いいことよ、ただ」
「ただ。何だ」
「どうして治してもらったのよ」
孫尚香が今度尋ねるのはこのことだった。
「治ったのはいいとしてよ」
「針だ」
それだというのである。
「針で治ったのだ」
「針で？」
「そうだ。黄金の針でだ」
それで治ったというのである。
「胸に打たれてだ。それで完治した」
「なあ、ちょっと聞いてええか？」
右京の話を聞いてだ。あかりがケイダッシュに尋ねた。
「あんたの時代じゃあの病それで治るんか？」
「いや、そんなことはないけれどな」
「薬で治すんやろ？やっぱり」
「ああ、そうだ」
その通りだというのである。
「そんなので治る筈がないだろ」
「じゃあ何で治ったんや？」
「それは俺も知りたいんだよ」
ケイダッシュ自身もそうだというのである。
「どういうことなんだろうな」
「わからへんな。あの華陀って医者何者なんやろな」

「とりあえず声を聞いたらよ」
孫尚香は少し言ってはいけない話題に触れた。
「あれよね。医者王ってイメージよね」
「あんたそれ言うたらあかんで」
あかりも案の定彼女に突っ込みを入れる。
「それ言うたらあんたどれだけの世界に関わってるんや」
「まあね。シャオって結構以上に関わってるし」
「関わり過ぎやろ」
「蓮華姉様だってそうよ」
ここで次姉の名前も出す。
「もうそれこそ。結婚していたりもしたし」
「あんたもやろ」
また突っ込みを入れるあかりだった。
「だからそれ言うたらきりないで」
「ううん、うちの軍って結構そういう人多いけれど」
「ばっかりちゃうんか？」
あかりの容赦のない突っ込みは続く。
「呂蒙ちゃんかてどっかで聞いたで」
「あんたは出てなかったのね」
「うちそういう世界には縁ないみたいや」
あかり自身はそうだというのである。
「まああれや。とにかく触れたらあかん話ってあるんや」
「声の話はそうですよね」
周泰が話す。
「ちょっと以上にまずいですよね」
「そうね。まあどうしても言っちゃう話だけれど」
孫尚香はいささか開き直っている。そうした言葉だった。
「できるだけね」
「とにかく病気が治ってよかったな」
ケイダッシュは話をそこに戻した。

「それで何よりだよ」
「そうね。本当にね」
「よかったです」
孫尚香と周泰はそのことはにこりと笑って祝福した。
彼等はのどかに鍛錬を行っていた。しかしだ。
揚州の牧の周りではだ。次第に慌しくなっていた。太史慈がだ。
険しい顔で陸遜の話を聞いていた。
「そうなのか。今は」
「そうなんですよ。都が大変なことになってるんですよ」
「貴殿が言うとあまりそうは聞こえないが」
「けれど本当になんですよ」
陸遜はそののどかな口調で話すのだった。
「大将軍もおられなくなって」
「董卓殿が入ってか」
「暴虐の限りを尽くしてるんです」
「それは本当に大変だな」
太史慈はこのことは真剣に頷いた。

## 第七十二話　呂蒙、学ぶのことその三

「何とかしなければな」
「そうですよね。ただ」
「ただ。何だ」
「都からおかしな話が来てますよ」
「おかしな？」
「はい、私達は交州も治めてますよね」
陸遜が今話すのはこのことだった。
「それでなんですけれど」
「交州に何かあるのか」
「そこから南越を征伐せよとの話が来てます」
その話がだとだ。太史慈に話すのである。
「朝廷からなんですけれど」
「というと勅命か」
「はい、勅命です」
陸遜は大事を呑気に話した。
「帝からの勅命とのことですが」
「帝が直接出されたのではあるまい」
太史慈はこのことを察してそのうえで陸遜に問い返した。
「おそらく。董卓殿が」
「そうみたいです。ただ」
「今南越は我が漢王朝に忠実だ」
そうでなければ孫策が最初から征伐していた。そういうことだ。
「それでどうしてだ。兵を送れなど」
「私達の勢力を弱めたいと思います」
陸遜は軍師として董卓のその狙いを指摘した。
「そうしてそれからです」
「適当な理由をつけて我々を征伐するか」

「絶対にそうします」
「ううむ、それではだ」
「はい、この征伐は避けるべきです」
陸遜はまた軍師として話した。確かに口調は穏やかだがそれでもだ。見ているものは見ている。そのうえでの言葉なのである。
「そうしないといけませんよね」
「絶対にな。それで雪蓮様はどう御考えなのだ？」
「動かれるおつもりはないとのことです」
孫策もこう考えているというのだ。
「兵を無闇に動かすことはお嫌いな方ですし」
「戦はお好きだがな」
「はい、ですから」
孫策は動かないというのだ。彼女は確かに好戦的だがそれでもだ。無駄な出兵やそうしたことはしないのだ。牧としての節度である。
「然るべき理由をお話してお断りするとのことです」
「それがいいな」
「それにです」
陸遜はさらに話すのだった。
「出兵を命じられたのは私達だけではないですし」
「他の牧の方々もか」
「袁紹さんは高句麗征伐を命じられています」
袁紹もだというのだ。各州の牧の中でも最大勢力の彼女もだというのだ。
「曹操さんはその補佐としてやはり高句麗に」
「高句麗にか」
「そして袁術さんは南蛮に」
こう話していく。それを聞いてだ。
太史慈はだ。その顔をいよいよ曇らせてであった。
そうしてだ。こう陸遜に言うのであった。
「どの勢力も我が国に好意的な国ばかりだが」

「南蛮はもう完全に帰順していますよね」
「それでも出兵を命じるとなると」
「はい、明らかに私達の勢力を弱めることが目的です。それに」
「それに？」
「宮殿や陵墓を造るとかで」
今度は建築だった。国を衰えさせるものであることは始皇帝以前から指摘されていることだ。
「多額の献上を要求してきてもいます」
「金までか」
「そうなんです。それでも力を弱めさせて」
「最後はだな」
「はい、征伐です」
それに行き着くというのである。結局は。
「私達は全員謀反人となります」
「馬鹿な、我々は漢王朝に弓を引いたことはない」
それは絶対だとだ。太史慈は確かな顔で言い切った。
「何故その我等が征伐させるのだ」
「邪魔だからです」
またのほほんとした調子でにこりとして核心を言う陸遜だった。
「董卓さんにとって私達が」
「だからか」
「多分。董卓さんの背後にはもう一人おられますし」
「もう一人！？」
「宮廷に誰かおられるようです」
陸遜はそのことを察していた。その口調には緊張はないがそれでもだ。彼女のその読みは鋭い。軍師たるに値するものである。

# 第七十二話　呂蒙、学ぶのことその四

「張譲さんは確か亡くなられましたが」
「それでもか」
「はい、おられるみたいですね」
こう指摘するのである。
「その方が私達を弱らせようとしています」
「では。このままでは」
「協力しても征伐です」
「協力しなくても征伐か」
「どちらにしろ征伐です」
未来は一つしかないというのだ。彼女達のそれはだ。
「あちらはそのおつもりですから」
「座して死ぬのは」
「嫌ですよね」
「絶対にだ」
こう言い切る太史慈だった。
「そんな馬鹿な理由で死んでたまるものか」
「そうですね。雪蓮様もそう考えられてます」
孫策もだというのだ。彼女達の主のだ。
「それは他の牧の方も同じですよ」
「そうか。それならばだ」
「出兵の可能性がありますね」
「そうだな」
こんな話が為されていた。次第に不穏な空気が覆いはじめていた。
そんな中でだ。孫権はだ。
呂蒙に対してだ。あることを尋ねていた。
「ねえ、一つ聞きたいんだけれど」
「はい、何でしょうか」

呂蒙は孫権に対して真面目な顔で応えた。
「何かあったのですか？」
「ちょっと砕けていいわよ」
孫権は呂蒙のその真面目さに苦笑いになってだ。こうも告げた。
「そんなに深刻な話じゃないから」
「そうですか」
「ええ。貴女は前は眼鏡かけてなかったわよね」
彼女のその片眼鏡を見ての言葉だった。
「それで今かけてるけれど」
「眼鏡ですか」
「どう？よく見える？」
くすりと笑ってだ。そのうえで呂蒙に尋ねるのである。
「その眼鏡。どうかしら」
「はい、よく見えます」
やはり真面目にだ。答える呂蒙だった。
「蓮華様に買って頂いたこの眼鏡、とてもよく」
「私はいいのよ」
ここでは少し苦笑いになる孫権だった。そのうえでの返事だった。
「ただ。よく見えるのね」
「はい、とても」
「よかったわ。それじゃあね」
「はい、それでは」
「その眼鏡を使ってね」
それでだというのである。
「これからも色々なものを見てね」
「そうさせてもらいますっ」
呂蒙のその声が力んだものになっていた。
「孫家の為に」
「御願いね。そういえばだけれど」
「そういえば？」

「貴女確か袁術と知り合いだったわよね」
話が変わった。袁術が話に出て来たのだ。
「それとあの曹操のところの眼鏡の」
「あのお二人とですか」
「そう聞いたけれど。昔は袁紹とも縁があったのよね」
「ええと、それはですね」
「それは？」
「多分蓮華様と文醜殿と同じだと思います」
孫権とだ。同じだというのだ。
「御二人も縁がおありですよね」
「ああ、文醜ね」
知っているという口調だった。明らかにだ。

## 第七十二話　呂蒙、学ぶのことその五

「そうね。あの娘麻雀好きだけれど」
「同じ事務とか所とかいう組合か何かにいるとかで」
「ええ。曹操のところのあの軍師は今は別の場所にいると聞いてるけれど」
「かつては同じでした」
その呂蒙自身の言葉だ。
「他には張勲殿もでした」
「何気に強烈な顔触れが集ってる場所なのね」
「そうですね。あの関羽さんと曹操殿もどうやら」
「ううん、皆色々とあるのね」
「私もそう思います」
呂蒙もそれについて話す。
「私は一応別人になってますけれど」
「それは私もよ。それで別人の名前がね」
「もう幾つあるか」
わからなくなっている呂蒙なのだ。
「そうなりますよね」
「そうそう。どうしてもね」
「私、よく言われて困ります」
服の袖でだ。顔を気恥ずかしそうに隠しての言葉だった。
「実はエスじゃないかと」
「それねえ。私も聞いてるわ」
「蓮華様もですか」
「袁術みたいにね」
ここでも名前が出る彼女であった。少なくとも有名人なのは間違いない。
「そうなんじゃないかってね」

「濡れ衣です。私はそんな他の人を」
「貴女と他の世界の誰かと中身はそれぞれ違うのよ」
孫権が今話すのはこのことだった。
「いちいち気にしていたら仕方ないわよ」
「そうですよね。それは」
「そうそう。それでまた話を変えるけれど」
「はい」
「貴女昨日もだったのね」
こうだ。話を変えたのである。
「昨日も遅くまで書を読んでたのね」
「はい、穏殿からお借りしまして」
彼女からだ。借りてだというのだ。
「呉子を読んでいました」
「あの書をね」
「何度読んでも深い書だと思います」
語るその声にいささか熱が入ってきていた。
「あの書を読んで。もっと軍師としての素養を磨きたいです」
「いい心掛けね。けれどね」
「けれど？」
「読むべき書は多いわよ」
「そうですね。本当に」
「これからも読みなさい」
孫権は微笑んでまた呂蒙に話した。
「私もだけれどね」
「孫権様もですか」
「そうよ。私もなのよ」
微笑んでだ。孫権は話すのである。
「まだまだ。学問が足りないのよ」
「そんな、孫権様はとても」
「ああ、真名で呼んで」

生真面目な呂蒙にこう断りも入れた。
「もう。そんな他人行儀じゃなくてね」
「いいのですか」
「いいから。雪蓮姉様やシャオだってそうしてるじゃない」
「そうですね。それは」
「だからよ。真面目もいいけれど」
呂蒙の長所である。その生真面目さがだ。彼女を成長させている要因でもある。だが孫権は彼女のその真面目さにあえて言うのである。
「砕けるところは砕けてね」
「そうしてですか」
「そうよ、じゃあ実際にね」
こう話してだった。それでだった。
自分からだ。彼女の真名を呼んでみせたのである。
「亞莎、いいわね」
「はい、蓮華様」
御互いに真名で呼び合う。そうしてあらためて話すのだった。

# 第七十二話　呂蒙、学ぶのことその六

「例えば穏は凄い書が好きよね」
「あの方は本当に凄いですね」
「あの娘が立派な軍師なのはね」
「書を沢山読まれてるからですね」
「そうよ。だからよ」
それでだというのである。
「だから。あそこまでなれたのよ」
「では私も」
「御願いね。貴女はそれにね」
「それに？」
「武芸もできるから」
呂蒙はかつて親衛隊にいたのだ。甘寧の部下であったのだ。
「実戦経験はあるわね」
「少しですが」
「その経験も生きるから」
「親衛隊であった時のですか」
「実戦経験も大事よ。冥琳の場合はそちらが大きいのよ」
「あの方は常に雪蓮様と共に戦場におられたからですね」
揚州の筆頭軍師はだ。そちらだというのだ。
「その経験で」
「どちらも大事よ」
孫権はまた呂蒙に話した。
「そのどちらもあってこそ。最高の軍師になれるのよ」
「冥琳さんや穏さんみたいにですか」
「そう、だから期待してるのよ」
何処までも優しい微笑みを向ける孫権だった。
「これからもね」

「はい、学んでいきます」
直立して応える呂蒙だった。声もうわずっている。この言葉の後で一礼して孫権の前から退出したのである。そうしたのである。
そんな彼女にだ。ふとだ。
ダックにタン、ビッグベア達が彼女のところに来てだ。笑顔で声をかけてきた。
「よお、どうした？」
「にこにことしておるが」
「何かいいことがあったのか」
「あっ、それは」
彼等に対しても生真面目に返す呂蒙だった。
「ただ。蓮華様とお話していただけですけれど」
「ああ、孫権さんな」
「あの娘と話をしておったのか」
「成程な」
三人は呂蒙のその言葉を聞いて納得して頷いた。それを聞いてだ。
あらためてだ。三人で呂蒙に対して言うのであった。
「孫権さんもいい娘だからな」
「うむ。心根が大層奇麗じゃ」
「俺達にも色々と親切にしてくれるしな」
「蓮華様はとてもお優しい方です」
呂蒙もだ。そのことはよくわかっていた。
「それに真面目な方で」
「あんたもだな」
ビッグベアが笑ってその呂蒙に話した。
「あんたも真面目だな」
「私もですか」
「そうだよ。その真面目さがいいんだよ」
こう呂蒙に話すのである。
「俺達みたいじゃないからな」

「だよな。俺なんか真面目に何かしたことなんてないしな」
ダックは自分で言った。軽い調子でだ。
「テリーの奴にもあまり勝ってないからな」
「テリーさんというと」
その名前は呂蒙も聞いていた。彼は。
「確か劉備さんのところにおられる」
「そうだよ。あの帽子の奴な」
「ですよね。凄く腕が立つ方とか」
「ったくよ、強過ぎるんだよあいつは」
ダックは笑ってだ。こう呂蒙にはなす。
「お蔭で俺も苦労してるぜ」
「そうなんですか」
「俺がこうして修業してるのもな」
両手に身振りを入れて話すダックだった。

# 第七十二話　呂蒙、学ぶのことその七

「あいつに勝つ為なんだよ」
「テリーさんに勝つ為に」
「いきなり負けてな。その時からダンスだけじゃなくてそっちにも力を入れてるんだよ」
「ダックさんは踊り手でもありましたね」
「そうだよ。ダンサーな」
自分の世界の単語で言ってみせた。
「それなんだよ、俺は」
「そして格闘家でもあるんですね」
「そういうことさ。それでな」
「それで？」
「あんたを見てるとどうもな」
ダックはあらためて呂蒙を見てまた話す。
「俺も真面目にしないとなって気になるんだよ」
「私をですか？」
「そうだよ。いつも一生懸命だからな」
それは彼等から見てもなのだ。とにかく真面目な呂蒙である。
「俺の場合真面目にするのが一番難しいけれどな」
「いえ、ダックさんも」
「俺も？」
「根は凄く真面目ですよね」
こう言うのである。そのダックを見てだ。
「だって。ずっとテリーさんに勝つ為に修業されてますね」
「さもないとあいつには勝てないからな」
「真面目ではない人がそんなことしないからです」
「そうだっていうのかよ」
「はい、だからです」

これが呂蒙の見るダックだった。彼女から見るとダックは真面目なのだ。
「ダックさんは真面目です」
「そうか？俺が真面目かよ」
「まあ真面目じゃな」
横からタンも彼に言ってきた。
「御主は実は真面目じゃ」
「だといいんだけれどな」
「そうじゃ。それでじゃ」
「それで？」
「最近どうも不穏になってきたのう」
タンは右手で己の白い髭をしごきながら話した。
「戦になるかのう」
「そうですね。危険です」
呂蒙も真面目な顔になる。元々鋭い傾向の目がさらに鋭くなる。
「大きな戦になるかも知れません」
「ったくよ。都だったよな」
「はい」
呂蒙はビッグベアのぼやく感じの言葉に応えた。
「今都では大変なことになってますから」
「あの大将軍が処刑されてだよな」
「宦官達も粛清されました」
このことは呂蒙にとってはいいことだった。彼女も宦官達は好きではないのだ。
「ですが。それでもです」
「あれだよな。董卓だったよな」
「そうです、擁州の牧だった」
ダックにも話す。
「あの人が都に入って実験を掌握しました」
「それで今の暴政かよ」

「それが私達にも飛び火する形になっていまして」
「で、今かよ。洒落になってねえな」
こう言ってだ。ダックはぼやく顔になっている。
「どうなるんだよ、この国は」
「少なくともこのままではです」
呂蒙はだ。その顔に危惧するものを浮かべてだ。また話すのであった。
「国全体がおかしくなってしまいます」
「ここであれだな」
ビッグベアが言う。
「あかりとか右京が言ってた刹那だのアンブロジアとかが出て来たら最悪だな」
「そうじゃな。オロチとかのう」
タンもそれを話す。
「そういうのが出たら大変じゃな」
「只でさえ。不穏な状況ですし」
呂蒙は今度はその顔を曇らせていた。そうしての言葉だった。

# 第七十二話　呂蒙、学ぶのことその八

「最悪の事態にならないことを祈ります」
「ああ、本当にな」
「そうじゃな」
ダックとタンもそれには同意であった。彼女達はそんな話をしていた。
そして孫策もだ。周瑜に対してだ。己の執務室に座り木簡に何かを書きながらだ。鋭い顔で言うのであった。
「戦ね」
「なるというのね」
「ええ。南越征伐の話だけれど」
「受けるのかしら」
「まさか」
そのことはだ。一笑に伏して終わらせる孫策だった。
そしてだ。周瑜にあらためてこう言うのであった。
「無駄な出兵以外の何者でもないわ」
「そうね。受けたら受けたらね」
「そこで何言われるかわかったものではないわ」
周瑜もだ。それは危険だというのだ。
「私達の力をその征伐で削いで。それから適当な謀反の理由をつけてね」
「征伐されるのは私達になるわ」
「そうなるのがおちね」
「冗談じゃないわよ」
孫策は一言で言い切った。
「それがわかってるのに」
「けれど動かないとそれはそれで」
「征伐の対象になるわね」

孫策の言葉はだ。いささか面白くなさそうである。
その話をだ。さらに続けて言うのであった。
「しかも私達だけではないしね」
「そうよ。袁術もよ」
彼女もだというのだ。
「南蛮征伐なんて。無茶を言われてるわ」
「袁術は受けないでしょうね」
「張勲から文が来たけれど」
「どうせ我儘言って嫌だとか言ってるのね」
「その通りよ」
実にだ。袁術の性格をよくわかっている二人であった。
「何で益州まで出て南蛮なんか攻めないといけないのかってね」
「怒ってるのね」
「あの娘は自分の州の統治に専念したいからね」
この辺り袁術の内政志向が出ていた。
「だから余計によね」
「私だってそうよ」
孫策自身もだというのだ。今の顔は不機嫌なものだった。
「交州の牧にもなったばかりなのに」
「その州の統治をはじめないとね」
「それなのに南越なんてね」
「攻めるどころじゃないわね」
「ましてや南越はよ」
孫策もはっきりとわかっていた。その南越のことをだ。
「我が漢王朝に忠実なのに」
「何故征伐の必要があるのかしら」
「無駄な出兵どころじゃないわ」
こう言って否定する彼女達だった。
「見え見えの口実じゃない」
「そういうことね。それに」

「私達や袁術だけじゃなくてね」
「袁紹や曹操にも言ってるそうね」
「その通りよ」
周瑜は孫策に対してすぐに答えた。
「彼女達は高句麗よ」
「高句麗ねえ」
その国の名前を聞いてだ。孫策の顔に皮肉な笑みが宿った。彼女にしては珍しい笑みだがあえてその笑みを浮かべてみせたのである。
「あの国への出兵も無意味よね」
「袁紹は烏丸や匈奴に出兵したけれどね」
「あれは当然でしょ」
「そうよ。度々攻め込んできていたしね」
北の異民族への対策が国家としての最重要課題の一つであるのはこの世界の中国でも同じなのである。この国の逃れられぬ宿命である。
「征伐して当然だったわ」
「袁紹にしてみれば勢力を拡大させる要素にもなったけれどね」
「けれど高句麗はね」
その国はどうかというのである。
「あの国も南越と同じで漢王朝に忠実だから」
「攻める理由はないわね」
「どうやら董卓、その後ろに誰かいるとしても」
「どちらにしても私達全員を潰したいようね」
「冗談じゃないわね。はっきり言って」
孫策は明らかな拒否反応を見せていた。

# 第七十二話　呂蒙、学ぶのことその九

「さて、どうしたものかしら」
「挙兵の準備はできているわ」
周瑜の言葉が鋭くなる。
「いざという時はね」
「わかってるわ。ただ私達が挙兵する前にね」
どうなるかというのである。孫策はそのことを話した。
「絶対に袁紹辺りが動くわね」
「彼女がね」
「征伐とか言われてそれで切れて動くわよ」
袁紹のそうした性格はだ。彼女達もよく知っていた。
「それで私達にも来いって言うわね」
「そうね。袁紹なら間違いなくね」
「あの娘はすぐに飛び出る娘だから」
何処までもわかりやすい袁紹の性格である。
「それでその時にね」
「私達も乗りましょう」
「そうしましょう」
こんな話をしてだった。二人はこれからのことを考えるのであった。そしてだ。
孫策は今書いているものを書き終えてだ。そのうえでだ。
席を立ちだ。こう周瑜に話した。
「ちょっと。剣を振って来るわ」
「剣を？」
「鍛錬よ、鍛錬」
笑っての言葉だ。今度の笑顔は純粋な笑顔である。
「十三か誰かと一緒にね。ちょっと鍛錬をするわ」
「いいことね。鍛錬も一人でするよりはね」

「大勢でする方がいいからね」
「刺客が来ても大勢だと対処できるし」
周瑜はそのことも踏まえてそれがいいというのだった。
「だからね。ここはね」
「ええ、そうするわ」
孫策はすぐに外に出てだ。中庭で十三達と共に剣を振った。十三は巨大な金棒を振り回している。それを見て暁丸が言うのであった。
「何時見ても凄い」
「これか？」
「それで殴ったら誰でも一撃だな」
「おうよ、鬼に金棒よ」
十三は誇らしげに笑って言う。
「これさえあれば誰にでも勝てる」
「言うものね」
ジェニーが笑って十三のその言葉に反応してきた。
「それじゃああたしにも勝てるのかしら」
「おお、一撃よ」
「どうだか。当たらなければ意味はないわよ」
「当たるから大丈夫だ」
自分ではこう言う十三である。
「絶対にだ。当たるぞ」
「おいおい、何を言ってるんだよ」
ボブがそんな二人を見て言う。
「喧嘩とかそんなのは止めておいてくれよ」
「別にそんなつもりはないぞ」
「あたしもよ」
二人はそれは否定した。違うというのだ。
「これは稽古だからな」
「そういうこと。別に喧嘩とはしないから」
「だといいんだけれどね」

「それにしてもあれだな」
ここで言ったのは骸羅だった。
「この揚州ってのは落ち着く場所だな」
「そうでしょ。のどかでしょ」
孫策は剣を振るう手を止めて骸羅の言葉に応えた。
「長江は雄大に流れてるしね」
「あそこで舟遊びってのもいいのよね」
ジェニーはそのことを楽しく話す。
「海賊もしたいけれど」
「駄目駄目、あんたこの世界じゃ海賊は止めたんでしょ？」
孫策がそのジェニーに突っ込みを入れる。
「そんなことしたら捕まえるわよ」
「あら、悪いことになるのね」
「なるわよ。だからしないようにね」
「わかったわよ。じゃあ修業三昧でいくわよ」
ジェニーもそれで納得するのだった。そうしてだ。
そんな話をしながらだ。彼女はこんなことも話した。

# 第七十二話　呂蒙、学ぶのことその十

「今の修業が終わったらそれでね」
「何か食うのか？」
骸羅が尋ねる。
「あれか？御主の好きなそのステーキか？」
「ええ、それにするわ」
笑って言葉を返すジェニーだった。
「やっぱりあれよ。食べるならステーキよ」
「確かにあれはいいわね」
孫策もステーキと聞いて笑顔で応える。
「食べがいがあるしね」
「孫策さんもステーキは気に入ったみたいね」
「元々肉好きだしね」
実に孫策らしい言葉である。本人もそれは自覚している。
「ぶ厚いのにバターを乗せてよね」
「そうそう。それがいいのよ」
「じゃあ俺もだ」
骸羅も楽しげに笑って言う。
「昼はステーキにするか」
「それでいいのか？」
暁丸はその骸羅に突っ込みを入れた。
「一応僧侶ではないのか？」
「ああ、そうだがな」
それはその通りだと頷く骸羅だった。
「けれど食うぞ。ついでに酒も飲むぞ」
「どんな破戒僧だ」
思わず言ってしまった暁丸だった。
「祖父殿も怒る筈だ」

「爺様のことは言うなよ」
その話になるとだ。不機嫌なものを見せる骸羅だった。
「全く。この世界でも一緒だとはな」
「呼んだかの」
小柄な白い髭の老人が出て来た。僧服を着て頭には傘がある。そしてその手には杖がある。その老僧が不意に出て来たのである。
「何じゃ、骸羅ではないか」
「げっ、爺様かよ」
「御主、また悪さをしておるのか？」
孫にだ。こう言うのであった。
「それでも僧侶か」
「うるせえ、信仰は心なんだよ」
強引にこう言う骸羅だった。
「だからいいんだよ」
「どうせ肉でも喰らおうとしておるのじゃろう」
彼は孫の魂胆はもうお見通しであった。
「全く。いつもいつも」
「俺が肉を食って悪いってのかよ」
「思いきり悪いだろ」
こう突っ込みを入れたのは十三だった。
「こっちに遊びに来てる暁丸も言ってるだろうが」
「だから信仰は心だ」
まだ言う骸羅だった。
「肉を食ってもいいんだよ」
「まあ骸羅のその身体はね」
孫策が彼の巨体を見て言う。
「ちょっとやそっと食べたんじゃ追いつかないわよね」
「それはそうよね」
ジェニーも孫策のその言葉に頷く。
「十三もだけれど」

「そういうことね。まあ私は誰が何を食べようが特に言わないわ」
「別にいいんだな」
「そうよ。私はいいから」
骸羅自身にも言う。しかしだ。
その彼と老僧を見比べてだ。こんなことも言った。
「あんたと和狆って本当に肉親なの？」
「何だ？見えないのか？」
「ええ、大きさが違い過ぎるから」
それで見えないというのである。
「ちょっとね」
「よく言われるのう」
和狆がそのことを認めてきた。
「昔からな」
「ああ、やっぱりそうなの」
「貰った子とも言われておった」
「実際そうじゃないのか？」
こう突っ込みを入れたのはマキシムだった。
「全然似てないしな」
「俺もそう思うぞ」
それを骸羅も言う。6
「俺と爺様って本当に血がつながってるのかよ」
「まさかと思うけれど」
孫策が笑いながら話す。
「和狆って昔は大きかったとかね」
「じゃああれか？」
十三は孫策のその話を聞いて述べた。
「骸羅は歳取ったら小さくなるのか」
「おい、何処まで小さくなるんだよ」
骸羅は十三のその言葉に突っ込みを入れる。
「その方がおかしいだろ」

「そうね。まあ世の中色々あるけれど」
孫策もここでまた話す。
「気にしたらいけないこともあるみたいね」
そんな話をしながらだ。彼等は修業を続けていた。その団欒の時も楽しんでいたのである。

第七十二話　　完

２０１１・４・５

# 第七十三話　張遼、董卓を探すのことその一



洛陽でもだ。相変わらずのキムだった。

囚人達に対してだ。容赦なく蹴りを浴びせていた。

「そこ、さぼるな！」

「は、はい！」

「わかりました！」

蹴り飛ばされた囚人達が応える。見ればまたあの三人だ。

「しっかり働きやすので」

「ご勘弁を」

「この宮殿を造り終えたらだ」

次は何か。キムは話すのだった。

「それからだが」

「それからっていいやすと」

「まだあるのですか」

「そうだ。陵墓だ」

次はそれだというのだ。

「先帝のだ。これ以上はない見事な陵墓を築くのだ」

「何か建築ばかりですね」

ジョンが来てだ。キムのその話を聞いてこう述べた。

「あまりよくありませんね」

「ジョンさん、そのことを言うのは」

「いえ、これは少し妙です」

キムが止めてもだ。まだ言うジョンだった。

「建築が国を傾けさせるのはよく言われていますが」

「それはその通りです」

キムもそれは知っていた。歴史における常識である。

「しかしです。これはです」
「董卓殿が決められたことだからですね」
「我々としては働くだけしかないです」
こうジョンに言うのである。
「そう考えていますが」
「それはその通りです」
ジョンもそれはその通りだと返す。しかしであった。
ここでだ。彼はまた言うのであった。
「ですが。あまりにもです」
「董卓殿のされることではないというのですね」
「董卓殿は民を苦しめることを嫌われます」
それが董卓の考えの根幹にあるものの一つであるのだ。
「擁州でも建築なぞは殆んどありませんでしたね」
「はい、それは確かに」
「ですが都に入られてから急に建築ばかりされています」
「しかも贅沢な暮らしまで」
「董卓殿は質素でしたが」
それもだ。ジョンにとっては不可思議なことであった。
二人の顔は次第にいぶかしんでいく。そうしてだ。
今度はだ。二人のところにチャンとチョイが来て話すのであった。
「旦那達、こっちは済んだぜ」
「無事に終わったでやんす」
そうだとだ。話す二人だった。
「宮殿の建築は順調にいってるけれどな」
「後陵墓でやんすが」
「うむ、そこだな」
「そこもありますね」
キムとジョンは二人の話からそちらにも考えを及ばせた。
「あちらの監督にも行かねば」
「では後で」

「ああ、そっちは呂布ちゃんが行ってるぜ」
「陳宮ちゃんもいるでやんすよ」
「ううむ、呂布殿か」
その名前を聞いてであった。キムの顔が曇った。
「監督には向かないと思うが」
「少なくとも旦那よりはいいよな」
「そう思うでやんすよ」
二人はキムに背を向けてだ。身体をそれぞれ屈めさせてひそひそと囁く。
「旦那と一緒にいたらそれこそな」
「強制収容所でやんすよ」
「俺達前の世界から強制収容所にいるけれどな」
「絶対に出られないでやんすから」
「一体何を話しているのだ？」
その収容所の所長からの言葉だ。

## 第七十三話　張遼、董卓を探すのことその二

「私のことを言っているのか？」
「いや、特に何も」
「言ってないでやんすよ」
二人は慌ててキムに顔を向けて全力で否定した。
「ただ。あっちはもう監督がいるからな」
「旦那達はここで専念できるでやんすよ」
「そうか。それならだ」
「ここで監督を続けましょう」
「できれば寝て欲しいだけれどな」
「休まない旦那達でやんすから」
それは当人以外の誰もが思うことだった。
「とにかく。最近建築ばっかりだよな」
「修業の時間は減ってないでやんすが」
それを減らす様な二人ではないのであった。
「妙な感じだよな」
「お金は大丈夫でやんすかね」
「だよな。相当派手な宮殿になるけれどな」
「働いている人間も相当多いでやんすよ」
チャンとチョイものだ。このことに気付いてきたのだ。
「駆り出される奴は大変だよな」
「重税もかけられてるでやんすよ」
「只でさえ都は大変だったんだろ？」
「それでここまでしていいでやんすか？」
「おい、怪我人が出たぜ」
山崎である。彼も来たのである。
「柱が倒れてな。大変なことになってるぜ」
「何っ、本当か？」

「それは一大事です」
それを聞いてだ。山崎の方にだ。キムとジョンはすぐに顔を向けた。
「すぐに行きましょう」
「はい、そうしましょう」
「幸い死人は出てないけれどな」
山崎はそれはないというのだ。
「それでも。ちょっと行った方がいいな」
「わかっている、ではだ」
「行きましょう」
「怪我人も増えてきてるしな」
「このまま。もっと大変なことになりそうでやんすよ」
チャンとチョイはだ。これからのことに不安を感じているのであった。
その彼等にだ。今度は山崎が声をかけてきた。
「御前等もおかしいって思うんだな、今は」
「絶対におかしいだろ」
「董卓ちゃんのすることではないでやんすよ」
「だよな。これ本当にあのお嬢ちゃんが命じてるのか？」
山崎もだ。いぶかしみながら話すのだった。
「自分の為にこんな建築やら何やらするか？」
「しないよな、絶対に」
「堤やそうしたものはよく造ったでやんすが」
つまり民の為に造るものを造っていたのである。彼等も擁州においてはその建築に従事してだ。キムとジョンにこき使われてきたのだ。
「しかし今はよ」
「おかしなことになっているでやんすよ」
「これ、絶対にお嬢ちゃんの命令じゃないぜ」
山崎は断言した。

「他の誰かが命じてるんだぜ」
「誰か？それは誰なんだよ」
「ちょっと考えつかないでやんすよ」
「黒幕がいるんだろうな」
悪事を働いてきた人間としてだ。山崎はこう察したのだった。
「多分な」
「黒幕かよ。何か話がきな臭くなってきたな」
「宮廷にいるでやんすか」
「だろうな。そこにいるな」
山崎のその目が鋭くなっている。
「いるとすればな」
「何か俺達って洒落にならない状況の中にいるんだな」
「とんでもないでやんすよ」
そんな話をしていた。そしてであった。
その彼等にだ。キムとジョンが言ってきたのであった。

# 第七十三話　張遼、董卓を探すのことその三

「御前達も来てくれるか」
「事態は深刻です」
「ああ、じゃあな」
「俺達もそれじゃあ」
「行くでやんすよ」
三人も二人の言葉に頷いてだ。そうしてだった。
救援に向かうのだった。建築現場は大変なことになっていた。
陵墓の建築現場ではだ。
呂布が無表情で立っていた。それだけである。現場は多くの者が土を運びそして積み上げていっていた。ここも作業が行われているのだ。
呂布はその中に立っている。その彼女のところに陳宮が来た。そしてこう彼女に話したのだ。
「恋殿、状況ですが」
「どう？」
「今のところ順調です」
こう呂布に話すのである。
「皆頑張って作業してるのです」
「そう。けれど」
「けれど？」
「無理はしたら駄目」
それはだ。よくないと言うのだ。
「怪我をしたら元も子もないから」
「そうですね。それは」
「そう。こんなことで怪我をしたらよくない」
呂布はだ。今の建築をこう言うのだった。
「何にもならないから」

「あの、恋殿その言葉は」
陳宮は怪訝な顔になって呂布の今の言葉に言った。
「聞かれたらまずいのです」
「いい。これ絶対に月の命令じゃないから」
「名前は月様のものです」
「名前だけ」
既にだ。読んでいるといった感じだった。
「名前だけで。命令出しているのは別の人間」
「別の人間なのですか」
「そう。宮廷の奥深くにいる」
奇しくもだ。山崎と同じ指摘をするのであった。
「いるのは。張譲」
「張譲は処刑されたのであります」
「死体がない」
呂布はこのことを指摘した。
「そもそもそれがない」
「では。やはり」
「そう。宮廷に残っている」
張譲がだ。そうなっているというのだ。
「そして月の名を騙って動いている」
「だとすると許せないのです！」
陳宮は呂布の話を聞いて両手をあげてだ。怒った顔で話した。
「張譲を引きずり出して成敗するのです！」
「宮廷に入って？」
だが、だ。呂布はぽつりとした口調でその陳宮に返した。
「そうして？」
「うっ、それは」
「宮廷には中々入られない」
言うのはこのことだった。
「だから無理」

「ううん、困ったのです」
「だから宦官は問題」
「宮廷の奥深くから策を巡らすからなのですね」
「そう。それに月も最近出て来ない」
「そういえば都に入ってから」
陳宮はその眉を曇らせて話した。呂布に言われて気付いたのである。
「月様のお姿を見ません」
「それもおかしい。月はあれで動く娘」
行動派というのだ。それはその通りだ。
「それなのに出て来ないのは」
「確かに面妖なのです」
「詠や董白はいるけれど」
この二人はだというのだ。
「けれど肝心の月は出て来ない」
「考えれば考える程おかしなことなのです」
「おかしなことだらけ」
呂布は今のこの状況をこう言った。

## 第七十三話　張遼、董卓を探すのことその四

「何とかしないといけないけれど」
「何もできないのです」
「今できるのはこの建築で怪我人を出さないこと」
現場の話であった。それについて話すのだった。
「それをしよう」
「わかったのです。それならなのです」
「おお、二人共そこにいたか」
二人のところにだ。華雄が来た。そうして声をかけてきたのだ。
「食事の時間だ。一緒にどうだ」
「食べる」
こう答えた呂布だった。
「皆で食べると美味しい」
「そうなのです。では三人で食べるのです」
陳宮も応える。こうしてだった。
三人でだ。その場で食べはじめた。食べるのは華雄が持って来た焼き魚と餅であった。小麦を練って焼いた方の餅である。三人はその場に腰を下ろして車座になってだ。そのうえで食べはじめた。
その焼き魚と餅を食べながらだ。陳宮が華雄に話した。
「ところでなのです」
「何だ？」
「董白殿の真名は何なのです」
魚を頬張りながら華雄に尋ねる。
「ねねは教えてもらったけれど忘れたのです」
「陽というのだ」
こう答える華雄だった。
「そうか。忘れたのか」
「恥ずかしながらそうだったのです」

「だが今ので覚えたな」
「はい、それは間違いないのです」
確かにだ。覚えたというのである。
「はっきりと覚えたのです」
「いいことだ。しかしだ」
「しかしなのです？」
「私の真名は何というのだ？」
華雄は右手に持った餅を口に運びながら言った。
「それが問題だが」
「真名あるのです？」
陳宮は怪訝な顔でその華雄に問い返した。
「華雄にもそれがあるとは思えないのです」
「いや、私もそれを知りたいのだ」
彼女自身もそうだというのだ。
「あるのか？それは」
「自分で言っても困るのです」
「そうだな。私にもあると思いたいのだが」
「自分でもわからないのです」
「残念だがそうだ」
わからないというのだ。餅を食べながら陳宮に話す。
「自分の真名がわからないというのもおかしな話だが」
「確かにそうなのです」
「それに私の声だが」
今度は声の話になった。それにだ。
「あれだな。徐州の張飛と似ていると言われるが」
「そっくり」
呂布はぽつりと言った。
「同じにしか聞こえない」
「そこまで似ているか」
「ねねも」

そしてだ。陳宮についても言う呂布だった。
「揚州のあの姉妹と声が同じ」
「自分でも驚いたのです」
彼女は呂布と共に揚州に赴いた時に二人に合っているのだ。
「何でねねと同じ声なのかびっくりしたのです」
「私は似ていないと思ったが」
華雄は自分と張飛を比較して話す。
「しかしそれがだな」
「そう。よく聞くとそっくり」
「声は不思議なものだな」
「中身が大事」
呂布が指摘するのはその部分だった。
「中身と大きな関係がある」
「どうやらその様だな」
華雄も呂布の今の言葉に真剣に頷く。そのうえでの言葉だった。

## 第七十三話　張遼、董卓を探すのことその五

「世の中というものはそうした意味でも不思議なものだ」
「そう。不思議なもの」
呂布も焼き魚を食べながら頷く。
「何があるかわからない」
「全くだな。それでだが」
「それで？」
「どうしたのです？」
「声が似ている相手についてだが」
その話を続ける華雄だった。さらにであった。
「私は張飛について妙に親近感を覚える」
「ねねもなのです」
陳宮もそうなのだった。
「不思議に話も何もかもが合います」
「あれは不思議だな」
「全くなのです」
「恋にはわからない」
呂布はそれを聞いてぽつりと言った。
「どうしても」
「そうか。相手がいないとか」
「わからない話なのですか」
「そう。どうしてもわからない」
少し寂しそうに言う呂布だった。
「それが寂しい」
「ううん、それはそうだな」
「その通りなのです」
二人はその呂布の同情するものがあった。そんな話をしてだった。
彼女達は食べていく。今は腹ごしらえであった。

宮中ではだ。張遼が董白に尋ねていた。
「何や、あんたも知らんのかいな」
「残念だけれどそうなのよ」
董白は顔を顰めさせてその張遼に返していた。
「姉様のおられる場所よね」
「そや。それわからんのやな」
「わかってたら言うわよ」
こう返すのが董白だった。
「そうでしょ？言わない筈がないじゃない」
「確かに。そやな」
「宮中におられるとは聞いてるけれど」
それは確かだというのだ。
「けれど。実際に何処にいるのかはよ」
「わからへんねんな」
「こんなことってあるの？」
董白は顔を顰めさせて言った。
「宰相の居場所がわからないなんて」
「まして月ちゃんやしな」
「姉様は自分から動く人だから」
だからこそ余計にわからない二人だった。
「それがいないって」
「ほんまけったいな話やな」
「不思議なんてものじゃないわよ」
「ううん、しかも政がおかしいし」
「姉様の政じゃないし」
「宦官の政ちゃうか？」
張遼はこう指摘した。
「今のこれって」
「そうよね。あの連中は建築とか贅沢とかが専門だから」
それはだ。董白もわかっているのだった。彼女も宦官達のするこ

とがどういったものか聞いていて知っているのである。
「そっちよね」
「月ちゃんの考えには思えへんわな」
「おかしなことだらけだけれど」
董白は腕を組んで言った。
「どうなのかしらね」
「ううん、しかもや」
張遼はここでさらに話す。
「各州の牧に銭出せとか属国征伐せいとかな」
「そんな必要ないわよね」
「南越とか高句麗とか攻めて何になるんや？」
張遼はいぶかしむ顔で述べた。
「おかしなことばっかりやで」
「詠も何か」
董白は彼女の名前も出した。
「様子がおかしいしね」
「そやそや。あの娘妙によそよそしい感じやな」
「あの娘は何か知ってるのかしら」
「そやったら何知ってるんや？」
張遼はそのことを言った。

# 第七十三話　張遼、董卓を探すのことその六

「洒落にならんことやと思うんやけれどな。知ってるとなると」
「本人に聞いてみる？」
「詠にかいな」
「そうよ。ただあの娘最近かなりおかしいけれど」
「そやな。何か隠してように思えてきたわ」
董白の話を聞いてだ。張遼も言うのである。
「あの娘もな」
「とにかく姉様がおられないのは問題よ」
それが一番問題だという董白だった。
「姉様がおられるとは思えないから」
「そうやなあ。けったいな状況になったで」
「どうしたものかしらね」
こんな話をしてだった。二人はだ。
ふとだ。こんなことを話すのだった。
「なあ。どうするんや？」
「どうするって？」
「月ちゃん探さへんか？」
張遼はこう董白に提案するのだった。
「どっかにおるんやったらな」
「探すっていっても」
「宮中のどっかにおるんやろ？」
「多分ね」
それは言える董白だった。
「そうだと思うわ。ただね」
「ただ？」
「宮中を動き回るっていうの？」
董白は目を顰めさせて張遼に問い返した。

「この宮中を」
「あかんか？」
「帝の後宮になんか絶対に入られないわよ」
董白が指摘するのはそのことだった。
「そこも入るつもりなの？まさかと思うけれど」
「ああ、後宮もあったな」
「宮中ならまだ何とかなっても」
それでもだというのだ。
「あれよ。後宮はよ」
「後宮だけはあかんな」
「そうよ、許可なく入ったらそれこそ斬首よ」
流石にだ。後宮はそうなのだった。
「その覚悟があるのなら別だけれどね」
「いや、ここで死ぬ訳にはいかんな」
張遼は腕を組んでだ。いぶかしむ顔で述べたのだった。
「それだけはやな」
「そういうことよ。今貴女に死なれたら困るわ」
それを言う董白だった。
「今は少しでも人が必要だから」
「こうした状況やから余計にやな」
「その通りよ。今姉様の名前で各州の牧達に無茶言ってるけれど」
「あれ、最悪やで」
張遼はまさにそれだと言い切った。
「牧の娘等怒ってそれこそや」
「叛乱起こすでしょうね」
「特に袁紹とか曹操が叛乱起こしたらどないするんや？」
その二人ならだば。特にだというのだ。
「抑えられるんかいな」
「難しいわね」
董白も腕を組み難しい顔になって述べる。

「正直なところね」
「どっちも兵の数多いしな」
「しかも将師の質もいいわ」
どちらもだというのだ。
「そうしたのが叛乱を起こせばね」
「最悪な話はや」
「あれね。各州の牧達が一斉に叛乱を起こすことね」
「そうなったらマジでやばいで」
張遼は真剣に憂慮する顔で述べた。
「それこそこの都に全軍で押しかけてきてや」
「今度は私達全員が謀反人としてね」
「打ち首や」
今度は彼女達がだというのだ。
「貴女や華雄もいて恋もいてくれてるけれど」
「それでも敵の数が多過ぎるとや」
「数で押し切られるわよね」
「そやから今は無茶はできん筈や」
それは間違いないというのだ。張遼もわかることだった。生粋の武人である彼女だがそうした政治感覚も身に着けている様である。

# 第七十三話　張遼、董卓を探すのことその七

「けれど何でや。今のこの話は」
「過度の建築に途方もない贅沢に無茶な出兵に」
「まんま国を滅ぼす流れやないか」
「そうよ。夏とか殷が滅亡した時の流れよ」
まさにだ。そうした顔の王朝の滅亡の流れだというのだ。
「しかも姉様のものとは絶対に思えない」
「そやな。けれど月ちゃんのやることやないってのはや」
「他の牧は思わないわよね」
「民もや」
彼等もだというのだ。
「擁州の民はわかってるで」
「そうよね。私達の地元だし」
「けどそれはこの都や他の州の人間は知らん」
「私達牧の中では目立たなかったし」
董卓は袁紹や曹操達に比べれば影が薄かったのだ。これは董卓の大人しい性格故だ。しかしその性格が今はなのだった。
「それが宣伝にならなかったから」
「何か悪いことに悪いことが重なるなあ」
「本当ね。どうしたらいいのかしら」
「とりあえず宮中探すか？」
張遼の案は結局ここに落ち着いた。
「後宮には入られへんけれどや」
「そうね。それしかないわね」
董白も張遼のその案に頷いた。彼女にしても今はとにかく気持ちを落ち着かせたかったのだ。今の状況に気が滅入っているのだ。
「今はね」
「よし、ほな決定やな」

「ええ。ただね」
「ただ？やっぱりあれやな」
「そう、後宮には絶対に入らない」
董白は真剣な顔で張遼に告げた。
「それだけは注意してね」
「ああ。じゃあ宮中見て回るか」
「そうしましょう。けれど考えてみたら」
「うち等宮中のことあまり知らへんな」
「ずっと擁州にいたし」
そこが問題なのだった。彼女達は急に都に来たからだ。実は宮中はおろか都のこともあまり知らないのである。そのことにも戸惑っているのだ。
「長安なら知ってるけれど」
「ここはなあ」
「けれど見回りましょう」
董白はそれでもだというのだった。
「それでいいわね」
「ああ。ほなな」
「幸い今宦官達は後宮に閉じ篭ってるし」
何だかんだで彼等は大人しくなったのだ。張譲が死んだことになっているからだ。ただし彼女達は張譲達は死んだと思っている。
「今のうちにね」
「そうしよか」
こんな話をしてだ。そうしてであった。
二人は宮中を見回った。無論董卓を探す為である。巨大な柱や豪奢な装飾で飾られた豪壮な美があるその中を回る。しかしだった。
その中にはだ。探している相手はいなかった。全くだ。
手掛かり一つない。その中でだ。
張遼はだ。いぶかしむ顔でこう言うのであった。
「ひょっとしたらや」

「ひょっとしたら？」
「宮中に地下室とかないか？」
そうではないかというのだ。
「それでそこから秘密の抜け道とかあってや」
「それでその先になのね」
「隠し扉とか誰も知らん牢獄とかあってや」
「姉様はそこにいる」
「そうなってるんちゃうか？」
こう予想を言うのだった。
「ひょっとしたらな」
「そうね。可能性はあるわね」
董白は考える顔で述べた。
「それもね」
「そやろ。そやったらや」
「そういう部屋探す？」
「そないしよか。色々とな」
「そうね。それじゃあ」
こうしてだ。二人は今度は宮中の怪しい場所を虱潰しに探し回った。そうして色々な場所を見回った。しかしそれでもなのだった。

## 第七十三話　張遼、董卓を探すのことその八

見つかったものはなかった。全くだった。どの壁や扉を調べてもだ。無論床や天井も調べた。だがそれでも全く見つからなかった。

「あかんなあ」

「何もないわね」

「宮中には何もないんかいな」

「そうみたいね」

董白は眉を顰めさせて述べた。

「残念だけれど」

「ほな月ちゃん何処におるんや」

「わからなくなってきたわね。後宮にはいないでしょうけれど」

董白は言った。しかしだった。

ここでだ。彼女は見落としていた。そうして話すのだった。

「結局宮中にはいないってことね」

「この都のどっかにはおるやろな」

「都ね。一件一件調べていく？」

「手間かかるなあ」

「けれどそれしかないわよ」

董白もぼやく顔だがこう言うのだった。

「やっぱりね」

「そやな。今はな」

「そうしましょう」

こうしてだった。彼等は都の怪しそうな空き家を調べたり手掛かりを探し回った。人がいる家もこっそりと調べたりした。しかしであった。

手掛かり一つ見つからない。そしてその間にであった。

賈駆がだ。彼女達を集めてこう言うのであった。

「今度はそれ」

「ええ、そうよ」
賈駆は眉を顰めさせて呂布に答えた。
「そうなのよ。月の為に別邸を築くのよ」
「そんなのもうあるじゃない」
董白が眉を顰めさせて言った。
「それも二つも凄いのが」
「もう一つ築くのよ」
賈駆は眼鏡の奥の目を顰めさせて言い返した。
「そうするのよ」
「それまずいのです」
陳宮も抗議混じりに反論する。
「これ以上何かを築いたら民が余計になのです」
「そや。もうええやろ」
張遼も言う。
「建築とか。ちょっとは田畑や町に顔を向けんと」
「これ以上そんなことに金を使えるのか」
華雄も同じ考えだ。
「都の財政が破綻するぞ」
「そのことだけれど」
都の財政についてはだ。賈駆はこう話した。
「あれよ。財貨を鋳造するわ」
「そうなのです」
「そう、鉄でね」
これを聞いてだ。全員唖然となった。ただし呂布の表情は変わっていない。
まずはだ。董白が言い返した。
「鉄!?そんなので造ったらそれこそ偽の銭が出回るわよ」
「そうだ、鉄は銅よりも遥かに多くしかも鋳造しやすいのだぞ」
華雄もそのことを指摘する。
「鉄の貨幣なんてそれこそ」

「絶対にしてはならない」
「鉄は専売だから大丈夫よ」
賈駆はバツの悪い顔でこう反論する。
「統制が効くから」
「絶対無理なのです」
陳宮はまた言い返す。断言できることだった。
「そんなの。鉄だと」
「そや。無茶にも程があるで」
張遼も唖然となっている。そしてだ。
こうだ。賈駆に対して言うのだった。
「これ絶対月ちゃんの考えやないやろ」
「間違ってもそうじゃないわ」
董白も確信して言う。
「姉様がこんなことしないわよ」
「詠、あんたでもないで」
張遼はその賈駆を指差して指摘する。
「あんたもわかってる筈や。こんなアホなことしたらどえらいことになるってな」
「うっ、けれど」
「けれど？」
呂布がここでようやく動いた。そうしてだ。
無表情のままでだ。賈駆に問うのだった。
「詠、今けれどと言った」
「それがどうかしたの？」
「何か事情がある」
こう指摘するのだった。

# 第七十三話　張遼、董卓を探すのことその九

「そう、今の状況に」
「一体何が言いたいのよ」
「今のお金の話、いえ都に来てからのこと全部」
その全てがだというのだ。
「月の考えじゃない。勿論詠の考えでもない」
「月の名前になってるでしょ」
「名前になってても言っている人間がそうだとは限らない」
呂布はそこも指摘した。
「そう、月は絶対に利用されている」
「そうだな。若しそうでないというのならだ」
華雄もここで指摘した。
「月様は何処だ」
「何処だって！？」
「そうだ、今何処におられる」
「宮中にいるわよ」
「おらんかったで」
張遼がそのことを言った。
「うちと陽ちゃんで探したけど何処にもおらんかったで」
「そうよ。本当に何処にいるのよ」
董白も張れ遼に続く。
「いるって聞いても何処にもいないじゃない」
「だからそれは」
「言えないっていうの！？」
董白はその紫の目を鋭くさせて賈駆に言い返した。
「どういった事情でなのよ」
「もう一つわかることは」
呂布は全員に言われて困っているその賈駆について述べた。

「詠は今守ってる」
「姉様をなのね」
「そう、どういう事情かわからないけれど守ってる」
そうだというのである。
「少なくとも悪いことは考えてない」
「そやな。詠はそんな奴ちゃう」
張遼もいう。彼女がそうした人間でないことはもう自明の理であった。
「月ちゃんの為なら身を挺してもやからな」
「では何があったのです」
「よからぬことではないのか」
陳宮も華雄もいぶかしんで話す。
「おかしなことなのです」
「これは一体」
「今それを言っても仕方ない」
呂布はぽつりと言った。
「多分。どうしようもないから」
「それは」
「詠、それでその別邸だけれど」
「もう決まったのよ」
「建築の順番を決めればいい」
呂布はさりげなく智恵を授けた。
「そう、最初の別邸はまだ造ってるから」
「それがどうしたのよ」
「それを築いてから二番目になって」
「そこから最後だっていうのね」
「そうすればいい」
こう言うのである。
「あと宮殿と陵墓もまずは宮殿を優先させる」
「じゃあその分の人夫や予算はどうなるのよ」

「後に回せばいい。今は」
こんな話をしてだった。建築に対する民の負担はだ。最小限に抑えるというのだ。呂布はこの案を出して民の苦しみを抑えたのである。
「それでどう」
「そうね。じゃあそれでいきましょう」
呂布のその案に頷く賈駆だった。
「わかったわよ」
「これでいい」
「まあこれ以上の民の負担は避けられて何よりやで」
張遼もほっとして話す。
「それどころかそれが軽減されたわ」
「そうね。恋の機転のお陰ね」
董白は張遼と同じ顔になっている。
「本当に何よりだわ」
「そういうことね。それじゃあね」
こんな話をしてだ。話は終わったのだった。
その話の後で宮中を退出する時にだった。呂布はだ。
傍らにいる陳宮にこう話した。
「この状況だと」
「まずいのです」
「そう、まずい」
実際にだ。そうだというのだ。
「詠可哀想」
「詠殿は明らかに何かを御存知なのです」
「けれど言えない」
それがだ。できないというのだ。
「そう。だから可哀想」
「どうすればいいのです」
「まずは月を見つけ出す」

それが先決だというのだ。
「さもないとこの状況は変わらない」
「変わらないどころかこのままだとなのです」
「叛乱が起こる」
呂布はその危険を指摘した。彼女もだった。
「各州の牧達が怒る」
「そちらにも無茶を言い過ぎなのです」
「この流れはむしろ」
「むしろ？」
「叛乱を起こさせようとしている」
そうした流れだというのだ。

# 第七十三話　張遼、董卓を探すのことその十

「とんでもないことになっている」
「それはその通りなのです」
陳宮も頷くことだった。
「これでは恐ろしいことになるのです」
「そう。若し月の後ろにいる奴がそれをしようとしていたら」
国にだ。叛乱を起こさせようとしているというのならというのだ。
「そいつは許さない」
「はい、絶対になのです」
「恋、そいつを絶対に許さない」
強い目になってだ。こう言うのだった。
「何があっても許さない」
「恋殿、怒ってるのです」
「恋怒ってる」
その通りだとだ。呂布は陳宮に話した。
「そいつ見つけ出したい」
「けれど。月様は何処におられるのか」
「生きている」
呂布はまた言った。
「それは間違いない」
「そうなのです」
「ただ」
「ただ？」
「何処にいるかはわからない」
それはだというのだ。
「都の何処かにいるにしても」
「それが困るのです」
「とりあえず今は」

「今は？」
「犬や猫達の世話する」
それをするというのだ。
「そうして心を癒す」
「確かに。犬や猫達の世話をするとです」
陳宮もそれを話す。
「心が落ち着くのです」
「だからする」
また言う呂布だった。
「心が荒んだままじゃよくない」
「わかったのです。それとなのです」
「それと？」
「何か食べるのです」
呂布に顔を向けてだ。こう話すのだった。
「今ねねお菓子持ってるのです」
「お菓子」
「そうなのです。お饅頭があるのです」
あるのはそれだというのだ。
「それを一緒に食べるのです」
「皆で食べる」
「皆でなのです？」
「キム達も呼ぶ」
彼等も呼ぶというのだ。
「皆で食べるともっと美味しくなるから」
「恋殿がいつも仰っている様にですね」
「そう。その通り」
だからだというのだ。
「皆も呼ぶ。そうしよう」
「わかりましたのです。ねねもです」
陳宮は満面の笑顔で呂布に対して話した。

「恋殿と、皆と食べるのが大好きなのです」
「恋と？」
「はいなのです」
とりわけだ。彼女と共にいるとだというのだ。
「食べるものが凄く美味しくなるのです」
「そう。それならいい」
呂布は微笑んでだ。陳宮のその言葉を受けた。そうしてだ。
あらためてだ。その彼女に言った。
「恋も嬉しい」
「嬉しいのです？」
「恋、ねね大事」
彼女はだ。呂布にとってはかけがえのない存在になっているというのだ。
「そのねねと一緒にいられるから」
「ねねもです」
それは陳宮もなのだった。
「恋殿の為なら全てを賭けます」
「全てを？」
「ねねの全てをなのです」
こう言うのである。目を輝かせてだ。
「賭けていくのです」
「有り難う。ただ」
「ただ？」
「命は大事にする」
呂布が今話すのはそのことだった。
「それだけは守る」
「命は」
「ねねに何かあったら恋悲しい」
だからだというのである。
「だから。命は大事にする」

「恋殿を悲しませない為に」
「そう。それは守って欲しい」
「わかったのです」
陳宮は呂布のその言葉に頷いた。そうしてであった。
あらためてだ。二人はだった。皆を呼び饅頭を食べるのだった。
それは一人で食べるよりもだ。遥かに美味いものであった。

第七十三話　　完

２０１１・４・７

# 第七十四話　于吉、裏で蠢くのことその一

第七十四話　于吉、裏で蠢くのこと

洛陽においてだ。不穏な噂が流れていた。それは何かというと。

「わし等を皆死なせるつもりだというのか？」

「それが董卓様の御考えだというのか？」

「まさか」

市井でだ。やつれた民達が囁き合っていた。

「だからか。今こうして」

「わし等から税を搾り取り」

「宮殿やそうしたものを建てて」

「そこにも駆り立てる」

「そうしているのか」

「何という話だ」

その噂にだ。彼等はさらに不安を感じていた。

その不安な空気は洛陽に忽ちのうちに満ちていた。それを聞いてだ。

幻庵がだ。アースクエイクに話した。

「これはまずいけ」

「だよな。董卓ちゃんにとってな」

「こうした不穏な空気自体は嫌いじゃないけ」

この辺りは魔族である幻庵らしかった。

「わしは不安や不穏の空気が心地よいけ。けれど」

「それは董卓ちゃん達にとってな」

「まずいことになるけ。だからそうした意味ではよくないけ」

彼の人間としての血がそう考えさせていた。

「困ったものだけ」

「ああ。しかし何なんだよ？」

アースクエイクはその刺青を入れた顔を傾げさせて言った。

「こんな噂。幾ら何でもな」
「おかしいけ。幾ら民を苦しめてもね」
「皆殺しとかないよな」
「絶対にないけ」
有り得ない、二人にとってはそう思えるものだった。
しかし洛陽の民達は今憔悴しきっている。その彼等にとってはだ。
そうした有り得ない噂も信じられるものだった。それで噂が広まっていた。
それを見てだ。幻庵とアースクエイクはだ。こう話すのだった。
「ここはけ」
「ああ、賈駆ちゃんに話しておくか」
「それがいいけ」
こうしてだ。彼女にこのことを話すのだった。するとだ。
賈駆はだ。眼鏡の奥の顔を顰めさせてだ。こう言うのであった。
「まずいわね」
「だろ？それでな」
「わし等も報告したけ」
そうだとだ。二人は話すのだった。
「少し考えたら有り得ない話だけれどな」
「今この町の連中には信じられる話だけ」
「それだけ今皆疲れてるんだよ」
「だからけ」
「そうね。けれど今は」
賈駆は暗い顔でだ。話すのだった。
「どうしてもね」
「どうしても？」
「どうしたけ？」
「いえ、何もないわ」
己の言葉を止めてだ。こう言うのであった。
「何もね」

「？本当か？」
「そうは思えないけ」
二人は怪訝な顔で賈駆に返す。
「何かあるんじゃないのか？」
「隠していないけ？」
「べ、別にそんなのないわよ」
狼狽した顔でだ。取り繕う賈駆だった。
それでだ。また取り繕ってだ。彼女は話した。
「あんた達はまあ町を見回って」
「巡回か？」
「それをするけ？」
「見回っているだけでいいから」
それだけでいいというのである。

# 第七十四話　于吉、裏で蠢くのことその二

「そうしたらそれだけで噂をする声が消えるから」
「俺達が見回るだけでかよ」
「たったそれだけでいいけ」
「ええ。あんた達の外見だとね」
人間離れしただ。その外見ならというのだ。
「通り掛かっただけで怖いから。そうして」
「何か褒められてないよな」
「違うような気がするけ」
こう言ってだ。二人はであった。
釈然としない顔でだ。また賈駆に話した。
「しかしそれが役に立つってのか」
「それは喜んでいいけ？」
「じゃあキムとジョンに頼むけれど」
代わりに出した名前はこの二人だった。
「それでもいい？」
「あ、あの二人は止めておけよ」
「ただの見回りでは済まないけ」
彼等の名前を聞くとだった。アースクエイクも幻庵も慌てふためいてだ。
顔に汗をかきながらだ。こう言うのであった。
「ちょっと自分達の気に入らない奴見つけたらな」
「それだけで制裁の嵐だけ」
「騒動引き起こし続けるからな」
「絶対に駄目だけ」
「やっぱり駄目？」
賈駆も二人の話を聞いて言う。
「そうじゃないかって思ったけれど」

「そんなの考えればわかるだろうがよ」
「まだチャンやチョイの方がずっとましだけ」
「わかったわ。じゃああの二人には言わないから」
それはしないというのだ。
「あんた達御願いね」
「ああ、わかったぜ」
「それならけ」
こうしてだ。二人は町を巡回するのだった。そうしてだ。
町の不穏な噂を打ち消すのだった。これでまずはよしだった。
しかしだ。賈駆はだ。
浮かない顔のままだった。その顔でだ。宮廷の奥深くに入ってだ。
そこでだった。
一人の宦官と会っていた。彼はというとだ。
張譲だった。死んだ筈の彼がだ。悠然と笑ってこう言うのであった。
「何かあったのかい？」
「何もないわよ」
きっとした顔でだ。賈駆は張譲に言い返した。
「別に何もね」
「そうなんだ。ないんだ」
「ないわよ。それでよ」
「それで？」
「今日は何の用なのよ」
不機嫌そのものの顔でだ。張譲に言い返すのだった。
「一体」
「また頼みたいことがあるんだ」
「また！？」
「そう。どうも袁紹と曹操は動かないみたいだね」
張譲は賈駆とは違ってだった。悠然とした笑みでだ。こう言うのだった。

「そうみたいだね」
「貢物は出してきたわ」
それはだと。賈駆は話すのだった。
「ただ。宮殿建築の費用とかはね」
「出して来ないんだ」
「向こうも向こうでお金が必要なのよ」
賈駆はその目をきっとさせてこのことを話す。
「政に軍によ」
「そんなことにお金を使うんだ」
「じゃあ何に使うのよ」
「決まってるじゃないか。贅沢にだよ」
それが宦官の金の使い方だった。特に張譲はそうである。
「己の贅沢に使わないでどうするんだよ」
「じゃあその為に民が苦しんでもいいっていうの!?」
「何か不都合があるのかい?」
平然と返す張譲だった。
「それで」
「あんたのそういうところはね」
「好きになれないのかな」
「大嫌いよ」
全否定だった。それを露わにさせての言葉だった。

# 第七十四話　于吉、裏で蠢くのことその三

「月だってそう言うわよ」
「董卓ね。相国の」
「月は大丈夫なんでしょうね」
「安心したらいいよ。ちゃんと食べ物は食べさせているしね」
「若し月に何かあったら」
まさにだ。子猫を護る母猫の顔での言葉だった。
「その時は絶対に許さないからね」
「おや、そんなことを言っていいのかな」
ここでも悠然と返す張譲だった。
「若しそんなことを言えば董卓がね」
「だからよ。あんたにはね」
どうしてもだ。逆らえないというのだ。
賈駆は怒りに満ちた顔だった。しかしだ。
身体を震わせながらも何もできなかった。それが今の彼女だった。
そしてだ。こう言うしかなかった。
「言うことを聞くわよ。ただし月にはよ」
「安心していいよ。指一本触れないよ」
「絶対によ」
「君達が大人しく従ってくれればね」
こう告げるのだった。そしてだ。
その話が終わってからだ。またであった。賈駆にこう告げた。
「それで袁紹や曹操のことだけれど」
「向こうもお金が必要だからそれは送って来ないわよ」
「高句麗の討伐もかな」
張譲はこのことも話した。宮中の奥の暗い一室で話すのだった。
「それもしないのかな」
「高句麗にしても南越にしてもよ」

そうした国々がどうかというのだ。
「我が漢王朝にこれといって歯向かってないじゃない」
「確かにね。それはね」
「匈奴や烏丸じゃあるまいし。そうした相手をよ」
「攻めたりはしないんだね」
「断るに決まってるでしょ」
そのだ。牧達がだというのだ。
「絶対によ」
「それじゃあね」
「それじゃあ。どうするっていうのよ」
「彼等を解任しよう」
そうしようとだ。張譲は言った。
「その任をね。解任しよう」
「牧を辞めさせるっていうの！？」
「そう、そして部下達と共に都に召還する」
そうするというのだ。
「そのうえで処罰するとしよう」
「そんなことしたら大変なことになるじゃない」
賈駆は張譲の今の言葉にだ。顔色を失って反論した。
「それで向こうが従うって思ってるの！？」
「帝の言葉だよ」
張譲はその得意技を言ってみせた。
「それに逆らうのなら謀反人だよ」
「謀反人だっていう理由で征伐するっていうのね」
「幸い兵はあるしね」
その兵が何かも話すのだった。
「君達の兵がね」
「僕達を何処までも使うつもりなのね」
「じゃあ彼女がどうなってもいいのかな」
張譲はさらに反抗的になった張譲に切り札を返した。

「どうだい？」
「わかったわよ。じゃあ袁紹や曹操が歯向かっても」
「戦ってくれるね」
「ええ、そうさせてもらうわ」
賈駆は不本意ながら頷くしかなかった。それでだった。
彼女は張譲の言葉を全て受けた。そのうえでだった。
怒りに震える身体で張譲に背を向けてその場を去った。その後ろ姿をだ。張譲は悠然とした笑みで見送ってだ。そうして見送るのだった。
それが終わってからだ。彼はだ。
もう一人の来訪を受けた。それは。
于吉であった。彼が来てだ。こう張譲に言ってきた。
「いい流れですね」
「そうだね。君の思う通りの流れだね」
「はい、そうです」
まさにだ。その通りだと言う于吉だった。

## 第七十四話　于吉、裏で蠢くのことその四

「このまま民を苦しめその怨嗟の声を集め」
「怨みや苦しみを太平要術の書に込めていくんだね」
「そうすれば書の力はさらに強くなります」
そうなるというのである。
「実にいいことです」
「そして書の力でだね」
「天下を混乱させます」
そうなるというのだ。
「そしてその中での民の苦しみがさらにです」
「書の力を高める」
「全ては輪になって動くのです」
これこそがだ。于吉の願いなのだった。
「いいことです。実に」
「まあ僕にしてみればね」
張譲はその于吉にこう話した。
「己の贅を極めればいいけれどね」
「その為には他人がどうなっても構わないと」
「宦官は子孫を残せないんだ」
己の男としての象徴を切り取っているからだ。宦官は子孫を残せない。だからこそだ。彼は己の贅や権勢を追及する方に向かうのである。
特にこの張譲はだ。そうした男だった。だからこそだった。
「それだと己のね」
「贅を極めんとされますか」
「そうだよ。君達が天下を大乱に導いてもね」
「構わないと」
「好きにしたらいいよ。本当にね」

そうしたことにはだ。実際に何の興味も見せない張譲だった。
それでだ。また言う彼だった。
「じゃあ。僕はこのままね」
「陰にいてそのうえで」
「董卓は人質に取ってるんだ。彼女の勢力は意のままだよ」
「いいのですか？賈駆さんはかなり反抗的ですが」
「反抗的でも僕には絶対に逆らえないよ」
「人質がいるからこそ」
「その通りだよ。最高の切り札だよ」
まさにだ。そうだというのである。
「その切り札がある限りはね。彼女は僕には逆らえないよ」
「そうですか」
「僕が生きているとは知らないにしても」
これはだ。流石に賈駆以外は気付いていなかった。しかしだだった。
「黒幕がいるってことは気付いているみたいだね」
「それも構わないのですね」
「全く。僕がいるということなんて誰にもわからないよ」
だから平気だというのだ。
「後宮の奥深くにいる僕にはね」
「はい、まさに」
「そう。誰も僕には手を出せない」
後宮の奥深くに隠れている彼にはだ。どうしてもというのだ。
そうした話をしてだ。さらにであった。于吉が言うのであった。
「さて、各州の牧達がどう動くかな」
「動きますね」
「そうだね。謀反を起こすね」
「彼女達は彼女達の旗を掲げるでしょうが」
「何、手は幾らでもあるよ」
張譲はここでも平然としている。

「兵もあるしね」
「そうですね。では天下はさらに」
「乱れさせる。そういうことだね」
「はい、そうさせていきます」
于吉は企む笑みで話した。そうしてだった。
張譲の前から姿を消した。その彼が向かう場所は。
闇の中だった。その中に入ってだ。彼等と話すのであった。
「どうだ、張譲は」
「いいことです」
こうだ。左慈に話すのだった。
「完璧に動いてくれます」
「そうか。そこまでか」
「宦官はいいものです」
彼自身ではなくだ。宦官について話すのだった。

## 第七十四話　于吉、裏で蠢くのことその五

「己のことしか考えず。その為には手段を選びません」
「趙高の頃からな」
「ですね。そして自分も手駒とは気付かない」
「後宮にいては視野も狭くなるものだ」
「だからだ。いいものだ」
左慈はまた話した。
「実に使いやすい」
「はい。そしてです」
「各地の州牧達が動くな」
「間違いなく。そうなります」
こうも話す。
「そしてその時に」
「御前等が動くのだな」
左慈は左に顔を向けた。そのうえで闇に問うた。
すると闇の中からだ。まずはバイスとマチュアが出て来た。
そしてだ。二人はこう左慈に答えた。
「ええ、そうよ」
「その通りよ」
二人が同時に言った。
「その戦乱の時にはね」
「私達も動くわ」
「無論私もです」
青い服の牧師も出て来た。彼は。
「このゲーニッツも」
「オロチ一族は全てね」
「動くわよ」
小柄な少年とだ。目を前髪で隠した女も出て来て言うのであった。

「そうだね、社」
「動くのよね」
「ああ、いよいよその時が来たな」
あの白い髪の男も出て来た。
「クリス、シェルミー、それでいいな」
「ええ、勿論よ」
「そしてこの世界でオロチをだね」
「出させる。そうする」
「うむ。私もだ」
今度はだ。赤いタキシードの男だった。
端整な口髭に丁寧に整えたブロンドの髪を持っている。見れば左目がない。
その男も出て来てだ。言うのであった。
「このルガール＝バーンシュタインはだ」
「石像を造られるのですね」
「そうだ」
その通りだとだ。于吉の問いに答える。
「それが望みだ」
「俺はだ」
また出て来た。黒い肌に白い髪、漆黒の洋服を来た男だった。
顔は整っている。しかしえも言われぬ暗黒を身に纏いだ。闇の中から出て来たのである。
「ここに常世を出す」
「わしもそれに同意しようぞ」
小柄で不気味な老人もいた。
「さて、楽しいものになるであろうな」
「色々いるものだな」
左慈はそんな彼等を見て述べた。
「あちらの世界というのは」
「はい、その通りです」

ゲーニッツが礼儀正しく左慈に答えた。
「私達の世界はそうした楽しい世界なのです」
「いい世界ですね」
于吉もそれを聞いて言う。
「その世界が私達の世界に来てくれるのですか」
「思う存分していいかのう」
老人がここで言った。
「わし等の思うままに」
「はい、朧さん達の思われるままに」
于吉はここで老人の名前を呼んでみせた。
「そうされて下さい」
「この世界を混乱に陥らせる」
「そうすれば我々の目的が達せられますし」
于吉はだからいいというのだ。
「思う存分暴れて下さい」
「俺達もだ」
左慈がまた言った。

## 第七十四話　于吉、裏で蠢くのことその六

「当然動く」
「この世界を混乱に陥れる為にですね」
「混乱の中で流血と殺戮が起きる」
それがいいとゲーニッツにも話す左慈だった。
「その時の恐怖と絶望の心が俺達の力の糧となるのだからな」
「思えば因果なものですが」
于吉は楽しげに笑って述べた。
「だがそれがいいのです」
「俺達は妖仙人だ」
左慈は自分達が何者かということも語るのだった。
「普通の仙人とはまた違う」
「そうした負の感情を糧にしているのです」
「だからだ。この世界をだ」
「混乱のきわみに陥れます」
そうしたことを話すのであった。それが終わってからだ。
彼等は解散した。そしてであった。
社はだ。夜にだ。城壁の外の荒涼とした道を歩きながら同行しているシェルミーとクリスに話した。三人は行動を共にしていた。
「なあ」
「どうしたの？」
「さっきの会議のこと？」
「まあそうなるな」
その通りだと話す彼だった。
「あの于吉と左慈だけれどな」
「気に入らないとか？」
「そうだっていうのかな」
「いや、結構気に入った」

彼等はだ。特に問題がないというのだ。
「俺達と同じ考えだからな」
「そうね。人間の世界を破壊する」
「文明と敵対する立場だからね」
「だからいいんだよ」
目的が一致しているからだというのだ。
それを話してだ。社はだ。こうも話した。
「それでな」
「お腹空いた？」
「ひょっとしてそうかな」
「ああ、腹減ったな」
社は自分の腹を摩りながら述べた。
「ちょっとな」
「といってもね」
「今はちょっと」
シェルミーとクリスは周りを見回す。しかしなのだった。
店はおろか人影一つない。そうした状況ではだった。
「何も食べられないわよ」
「果物の木とかもないしね」
「いや、食い物はあるんだよ」
ところがだった。社はこう言うのだった。
そしてだ。己のズボンのポケットからだった。
大きな黒い鍋とインスタントラーメンの袋を出してきた。それをだった。
出して来てだ。そのうえで二人に言った。
「これな」
「鍋とインスタントラーメン」
「ポケットに入れてたんだ」
「ああ、そうなんだよ」
それで持っているというのである。

「どうだ？一緒に食うか？」
「ええ、それじゃあね」
「食べようか」
二人は社のその提案に頷いた。そしてだ。
その場に車座になって座り込んでだ。そうしてだった。
薪も社が自分のズボンのポケットから出してだ。クリスが火を点けた。そのうえで何時の間にか水が入れられている鍋にラーメンを入れてだった。
三人で食べはじめる。そうしてまた話をするのだった。
「やっぱりラーメンはこれだな」
「インスタントね」
「社本当にインスタントラーメン好きだよね」
「ああ、大好きだぜ」
その通りだとだ。笑顔で言う彼だった。

# 第七十四話　于吉、裏で蠢くのことその七

「だからこっちの世界にも持って来たんだよ」
「ポケットに入れられるのがいいね」
「そうだね」
二人はそのことには全く疑問を抱いていない。
そうしてだ。ラーメンをさらに食べ続ける。そこにだ。
朧が来た。今度は彼が言うのであった。
「おお、美味そうじゃな」
「ああ、あんたもどうだ？」
「食べる？」
社とシェルミーが彼に顔を向けて尋ねた。
「ラーメンはまだまだ一杯あるからな」
「遠慮しなくていいわよ」
「ふむ、それではじゃ」
二人の誘いを受けてだった。
朧も彼等の中に入った。そのうえで碗と箸を出して来てだ。そのラーメンを食べるのだった。それを食べてまずはこう言ったのだった。
「ふむ。これはじゃ」
「これは？」
「美味しいかな」
「美味いのう」
こうシェルミーとクリスに答えたのだった。
「御主達の時代ではこうしたものを食っておるのか」
「ああ、そうだぜ」
その通りだとだ。社は笑顔で話した。
「俺はいつも食ってるぜ」
「よい時じゃのう」

「この時でも食ってるんだよ」
そうだというのだ。
「それでだけれどな。あんたとも長い付き合いになりそうだな」
「そうじゃな。どうやらな」
「仲良くやろうぜ」
社はにこやかに笑って述べた。
「楽しくこの世界を破滅させような」
「常世をこの世に出してじゃな」
「私達はオロチを復活させてね」
「そうして破滅させるよ」
シェルミーとクリスはそうしてだというのだった。
「さて、それじゃあね」
「これから色々と楽しくなるね」
「あの于吉よ左慈もよい」
朧は彼等もいいというのだった。
「しかしそれと共にじゃ」
「司馬尉だよな」
「うむ、あの娘じゃ」
彼女だとだ。社に答えた。
「あの娘。中々いい筋をしておる」
「あいつはやるぜ」
社も楽しげに笑って話す。
「己の野心の為には人を殺すことなんて何とも思ってないな」
「そうじゃな。この世界を破滅させ」
司馬尉もだ。それを狙っているというのだ。
「そのうえで己の国を築き上げるのじゃな」
「民は人間じゃないんだな」
彼等にとってはだ。人間でなければそれでよかった。そうした意味で彼等は人間ではなかった。その心がそうであるからだ。
「そうした国を築きたいってか」

「己の国であればいいそうじゃ」
骸は司馬尉の求める国はそうしたものだというのだ。
「常世の者達でもな」
「ああ、常世な」
社は常世と聞いてだった。
少し考える顔になって述べた。
「そっちの世界ってあれだよな。死んだ奴等の世界だったよな」
「その通りじゃ」
まさにそうだと言う朧だった。
「無論この世界とは相容れぬ世界じゃ」
「言うなら地獄？」
「そうした世界なのかな」
「まあそうなるな」
まさにそうだというのであった。朧は二人に話した。
「そこにおるのは生きていた頃碌なことをしておらんかった奴等ばかりじゃからな」
「ああ、じゃああれだな」
社はその常世の話を聞いてだ。察した顔でこう述べた。

# 第七十四話　于吉、裏で蠢くのことその八

「その碌でもない奴等が司馬尉の国の民になるって訳か」
「うむ、そうなる」
「で、生きてる連中はそいつ等の糧なるんだな」
「オロチにより崩壊させられた世界でのう」
「いいな、それ」
社はその話を聞いても楽しげに笑った。
ラーメンの袋を破いてそれを鍋の中に入れてからだ。彼はまた言った。
「俺達にとって最高の世界だぜ」
「私達はオロチだからね」
「生きている人間の考えはないから」
それが大きいというのである。シェルミーとクリスも言うのだった。
「さて、じゃあね」
「これから宜しくね」
「うむ、あらためてな」
朧はそのラーメンを食べながら話した。
「楽しくやろうぞ」
「そうするか。しかしこの世界ってあれだな」
社もラーメンを食べながら言う。
「中国なんだよな」
「ええ、そうよ」
「それは間違いないよ」
シェルミーとクリスが社の今の言葉に応えて話す。
「あの三国志のね」
「その時代だけれどね」
「何か全然違うな」

社は首を傾げさせて言った。
「俺達の思ってた中国とな」
「そうね。それはね」
「僕もそう思ったよ」
二人もだ。それはその通りだというのだった。
「服装だって全然違うしね」
「食べ物なんか特にね」
「今インスタントラーメン食ってる俺達が言うのもあれだけれどな」
「普通に酢豚とか炒飯とかあるし」
「そうそう、唐辛子があったりしてね」
「この時代の中国に唐辛子なんてなかったよな」
社はそのことも話した。
「本当にわからない世界だよな」
「まあそこが面白いんだけれどね」
「だよね。僕達の世界とはまた違って」
「ふむ。そうじゃな」
朧もラーメンを食べ続けている。そうして話すのだった。
「美味いものを食えるのはいいことじゃな」
「そうだな。そう考えればいいよな」
「うむ。楽しい世界ならそれでのう」
「それで食った後でどうだ?」
社が朧にこんな提案をした。
「音楽でも聴くか?」
「音楽とな」
「そうだよ。俺達バンドやってんだよ」
彼等の元の世界での話だった。人間としてはそれを仕事にしているのだ。
「だからだ。その音楽聴くかい?」
「音楽は嫌いではないがのう」
「じゃあいいな。聴くな」

「準備は何時でもできてるわよ」
「すぐにできるからね」
シェルミーとクリスも話す。
「それじゃあ食べ終わったらね」
「演奏と歌、するからね」
「そっちの音楽はよく知らぬがじゃ」
朧はこう前置きして話した。
「しかしそれでも何か楽しそうじゃな」
「ああ、楽しいぜ」
社はまた笑って話した。その表情自体は明るく邪なものはない。
少なくとも彼等の考えの中では邪なものは全くない。
「だから聴くな」
「そうさせてもらうぞ」
彼等は打ち解けて和気藹々としていた。そのうえで人間の世界、
この世界のそれを滅ぼそうとしていた。そのことも話し合っていた
のだ。
その頃だ。華陀はだ。益州にいた。
その山の多い国の中でだ。ギース達と話していた。
「じゃああんた達はな」
「どうすればいいのだ？」
「この国では」
「とりあえず何処かで休んでいてくれ」
そうしてくれとだ。ギースとクラウザーに答えるのだった。

# 第七十四話　于吉、裏で蠢くのことその九

「俺は少し本山に用があってな」
「張魯といったな」
「ゴオオオオオオッド米道の主だったか」
「ああ、張魯様にこれまでのことをお伝えしないとならない」
そうしなければとだ。真剣な面持ちで話すのだった。
「そしてこれからのこともな」
「相談するか」
「何かと忙しいのだな」
「こう見えても結構忙しい身分なんだ」
華陀はここでは微笑んで二人に話した。
「病の者を救うだけじゃなくこの世界の為にも働いているからな」
「ダーリンって正義の味方なのね」
「まさしく医者王ね」
絶好のタイミングと言えた。
妖怪達がそれぞれ彼の左右に出て来てだ。身体をくねらせて言うのであった。
「世の為人の為」
「悪の野望を打ち砕く」
「金色の輝きを恐れなければ」
「かかって来いなのね」
「ああ、その通りだ」
まさにそうだと答える華陀だった。
「それが俺の考えでやり方だ」
「偉いわ、ダーリン」
「だから好きなのよ」
怪物達は身体をくねらせ続ける。ギース達は流石にそれを見ても平気である。しかし周囲はだ。地震が起き山が崩れていっていた。

その破壊の中でだ。彼等は言うのであった。
「そのダーリンならね」
「きっとこの世界を救えるわ」
「その前に崩壊すると思うがな」
ミスタービッグはその破壊されていく周囲を見て言った。
「これはまずいんじゃないのか？」
「あら、地震かしら」
「世界が私達の美しさに驚いているのね」
あくまこんな考えになる二人だった。
「感動しちゃうわ」
「本当にね」
「だからだ。身体をくねらせるのは止めてくれるか」
獅子王がこう二人に言った。
「さもないとだ。この辺りが本当にだ」
「そうね。私達の美しさのせいで世界が壊れるのも駄目よね」
「それもかえってよくないわね」
「じゃあこうしましょう」
「こうすればいいのよ」
くねらせるリズムを変えた。それだけでだ。
崩壊していっていた世界がビデオの巻き戻しの如くにだった。
元に戻っていく。それで終わるのだった。
それを見届けてからだ。二人は平然として話すのだった。
「これでいいわね」
「万事解決ね」
「世界を崩壊させて元に戻すか」
「完全に人間ではないな」
ギースとクラウザーは言い切った。そのことを確信してだ。
「何処まで異常だ」
「訳がわからない」
こんな話をしてだった。そのうえでだ。

華陀はあらためて仲間達に話した。
「とりあえず山に入ったら皆は適当に修業でも食事でもしていてくれ」
「ダーリンはその間になのね」
「張魯様とお話をするのね」
「ああ、その通りだ」
まさにそれだというのだ。
「そうさせてもらうからな」
「わかったわ。じゃあね」
「待たせてもらうわ」
妖怪達は彼の言葉に頷いた。
「それじゃあね」
「その間私達の美に磨きをかけるとするわ」
「自分達がそう思っているのならいいが」
刀馬も多くは言わなかった。そこまでの気力はもうなかった。
「とにかく俺達はだ」
「刀馬様は何をされますか？その間は」
「修業だな」
それをするとだ。命に答えた。
「それをしよう」
「わかりました。では私も」
「御前も修業をするか」
「はい、そうさせてもらいます」
実際にそうすると答える彼女だった。

# 第七十四話　于吉、裏で蠢くのことその十

「刀馬様と共に」
「ではそうしろ。俺は一人でもできる」
「はい、それでは」
そんな話をしてだ。彼等はだった。
山に入ったのだった。そしてそこでもだった。
「なっ、何だあの二人は!?」
「人間か!?いや、違う」
「化け物か」
「魔物か!?」
勿論あの二人を見ての話である。
「何処から出て来た!?」
「魔界からなのか」
「何処の山にいた」
「どうしてこの山に来た」
「んっ?皆どうしたんだ?」
華陀は驚く彼等に何でもないといった顔で返した。
「おかしな奴でも来たのか?」
「いえ、その二人ですが」
「華陀様の左右にいる二人です」
「その連中ですが」
彼等はこう言うのであった。その彼等を指し示してだ。
「一体何なのでしょうか」
「人間なのですか?」
「人間だが?」
その通りだとだ。華陀は落ち着いた声で答えた。
「それ以外の何に見えるんだ?」
「そ、そうですか」

「華陀様がそう仰るのならです」
「我等もそれでいいのですが」
山の者達は華陀の話を聞いてとりあえずは頷いた。山は道観があちこちに建てられ塔も見える。山全体は道観になっている感じだ。
そこには道士達がいる。その彼等が華陀に問うているのだ。
「それでお二人の名前は」
「何というのでしょうか」
「あたし貂蝉よ」
「あたしは卑弥呼よ」
二人はポージングをしてそれぞれ名乗った。するとだ。
その瞬間だ。周りで大爆発が起こった。それだけでだ。
「宜しくね」
「優しくしてね」
「名前を名乗っただけで爆発が起こっただと!?」
「どういう能力だ」
山の者達はまた驚くことになったのだった。
「ううむ、華陀様も何とも思われないのか?」
「この事態に」
「いい連中だぞ」
やはり平然として言う華陀だった。
「俺の親友だ」
「いやね、ダーリンったら」
「親友なんてものじゃないじゃない」
また言う怪物達だった。
「あたし達はもうね。心と心でつながってるじゃない」
「とても深い絆じゃない」
「そうだったな。俺達は同志だ」
華陀はこうも言い切ってみせたのだった。
「志を同じくする同志だ」
「そうよ、あたし達三人でね」

「世界を愛で満たすのよ」
「それでだが」
そんな話をしてからだった。
華陀はだ。あらためて山の者達に尋ねた。
「張魯様はおられるか？」
「あっ、はい。張魯様はです」
「本堂におられます」
その話自体はすぐに終わった。
「では今からそちらにですね」
「赴かれますか」
「そうする。それではだ」
こう話してだった。彼は本堂に向かうのだった。その彼にだ。
また怪物達がだ。華陀に声をかけてきたのだった。
「じゃあダーリン、それじゃあね」
「お話しっかりとね」
「ああ、してくる」
華陀は笑顔で二人に返した。
「その間待っていてくれ」
「そうね。エステでもしようかしら」
「美しさに磨きをかけたいわね」
「いや、それは」
「何と言うか」
山の者達はだ。そんな彼等を見てだった。
蒼白になってだ。こう言うのであった。
「美とかそういうものではなく」
「全くの正反対ではないかと」
「さて、それでだけれどね」
「いいかしら」
また話す彼等だった。山の者達の話をよそにだ。
「エステは何処かしら」

「何処でできるのかしら」
「いや、それはないですから」
道士の一人がそれはないとだ。二人に恐る恐る答える。
「ここは道教の山ですから」
「あら、残念ね」
「そういう場所はないの」
「はい、ありません」
まさにその通りだというのである。
「修業する場所です」
「そう、修業ね」
「じゃあそれをするとするわ」
話はそこに落ち着いた。落ち着きかけた。
ところがだ。彼等はだ。こんなことを言い出したのであった。
「じゃあここはね」
「修業で美を磨くとするわ」
「修業で奇麗になるのですか？」
「なるわよ。ちゃんとね」
「私達ならね」
こうだ。二人は話すのであった。
「それじゃあ。ランニングに筋トレにね」
「それと水泳をしてよ」
「この完璧なプロポーションをさらに完璧にさせるわ」
「そうするとするわ」
こんなことを言い出したのであった。そしてだ。
またしてもだ。ポージングをした。すると再びであった。
周囲で大爆発が起こった。それで山は大騒ぎになった。
そんな騒動を引き起こしながらもだ。華陀は張魯と話をするのであった。そうしてこれからの彼等の行動をだ。決めるのであった。

第七十四話　完

2011・4・9

# 第七十五話　袁紹、軍を挙げるのことその一



華陀達は山を出た。当然張魯との話の後でだ。
その彼にだ。怪物達が尋ねるのだった。
「ねえダーリン、それでね」
「あたし達のこれからはどうなるの？」
「ああ、まずはだ」
華陀は自分の左右にいるその彼等に答えて話をはじめた。
「洛陽に向かってくれとのことだ」
「都になの」
「そこになの」
「ああ、そうだ」
こう二人に話すのだった。
「ただし。すぐには入らないでくれと仰っていた」
「都に？」
「すぐにはなの」
「時が来るのを待てとのことだ」
そうしろとだ。張魯は華陀に言ったというのだ。
「そうしてくれとな」
「そうなの。じゃあ洛陽もなのね」
「入らないのね」
「それは特に止めてくれとのことだ」
都に入るのはだ。絶対に駄目だと言われたというのである。
「郊外で潜伏してくれとのことだ」
「都でダーリンとデートしたかったのに」
「それができないなんて」
二人はそのことに身をよじって悲しみを見せた。

「残念なんてものじゃないわ」
「あたし悲しくて涙が出るわ」
「何でも俺達は目立ち過ぎるからららしい」
張魯もだ。わかっていることだった。
「それで駄目らしい」
「そうね、あたし達の美じゃね」
「嫌が応でも目立つわ」
「だからだ。何処かの廃屋にでも入って潜伏してくれとのことだ」
「わかったわ。それじゃあね」
「そうさせてもらうわ」
二人は華陀のその言葉に頷いた。そんな話をしてだ。
あらためてだ。こんな話をするのだった。
「それにしても洛陽はねえ」
「怪しい雰囲気に満ちているわね」
「そうですね。私もそれを感じます」
命がだ。暗い顔で妖怪達に話す。今一行は道を歩いている。周りは荒地だ。何もない荒野ばかりが広がっている。砂漠に近い。
「洛陽の方から」
「命ちゃんはどういったものを感じるの？」
「それで」
「はい、黒い気です」
それを感じるというのだ。
「人それ自体を否定し滅ぼそうとするような」
「流石ね。それよ」
「それなのよ」
妖怪達はだ。まさにそれだと話すのだった。
「今都に満ちているのはね」
「そしてそれが国全体に拡がろうとしているわね」
「確かに」
感じながらだ。命は答えた。

「この気配は徐々に」
「さて、あたし達の相手だけじゃないわね」
「貴方達の関係者もいるわよ」
「我等のか」
刀馬がそれを聞いてだった。
その赤い目を顰めさせてだ。そうして話したのだった。
「話は色々聞いているが」
「あれなのか」
天草もいた。彼も言うのだった。
「あの邪神が。まさか」
「それはこれから確かになることよ」
「他にも大勢いるみたいだしね」
「そうだな。そういえばだ」
ここで言う華陀だった。するとだ。
一行の目の前にだ。ある男がいた。
白い服に赤い仮面の男だ。その彼の姿を見てだ。華陀が言うのだった。

# 第七十五話　袁紹、軍を挙げるのことその二

「あんた誰だ？」
「黄龍という」
仮面の男はこう華陀達に名乗った。
「おそらく。御主等と目的は同じだ」
「そうか。じゃあ話は早いな」
華陀はすぐにこう黄龍に返した。
「俺達と一緒に来てくれるか」
「そのつもりで来た」
黄龍も答える。そんな話をしてであった。
彼も華陀達の同志となった。そうしてだった。
その黄龍にだ。怪物達が声をかける。
「それでだけれど」
「貴方が来たことはね」
「むっ、まさかと思うが」
黄龍も彼等の言葉を聞いて言うのだった。
「私のことを知っているのか」
「おおよそね」
「知らない訳じゃないわ」
二人はこう彼に返したのだった。
「貴方達の世界もね」
「行く来できるから」
「そうなのか。ではこの世界についても」
「勿論知ってるわよ」
「だから来たのよ」
平然と答える。まさに何でもないといったようにだ。
「あたし達あらゆる世界を行き来できるからね」
「全然平気なのよ」

「一体どういった人間だ」
それを聞いただ。幻十郎が言う。
「前から奇怪に思ってたが」
「奇怪なんて失礼ね」
「こんな美しい乙女達を捕まえて」
「俺は男でも構わないが」
幻十郎は女だけでなく男もいけるのだ。その特技は千人斬りである。しかしだ。二人については妖怪変化を見る目で言うのであった。
「しかしだ」
「しかし？」
「しかしっていったら？」
「貴様等は止めておこう」
「美しさは罪ね」
「微笑みさえ罪ね」
相変わらずだ。勝手な、自分達にとってみれば当然の解釈をする彼等だった。そのうえでだ。彼等はまたしても言うのであった。
「誰にも手出しをさせないまでの」
「そこまでの美なのね」
「そう思うのなら思うといい」
幻十郎でさえもだ。こう言うのだった。
そうしてだ。そんな話をしてだった。
彼等は道を進んでいくのであった。彼等の道をだ。
袁紹のところにだ。彼女にとって不快な文が来ていた。それを読みだ。
彼女は己の机に座りながらだ。怒り狂った言葉を出していた。
「何ですって！？まだ言いますの！」
「あの、董卓さんからですよね」
「ひょっとしてですか？」
「そうですわ。高句麗を攻めよと」
こうだ。命令が着ていると顔良と文醜に話すのだ。

「また来ていますわよ‥
「あの、高句麗を攻めても」
「何の利益もないですよ」
それは二人も言うことだった。
「我が漢王朝に従順ですし」
「あんな寒くて土地が痩せてて」
「しかも鉄も銅も塩もありませんわ」
袁紹も言う。
「そんな何もない国、攻める必要一切ありませんわ！」
「そういえば孫策さんも南越征伐を命じられていて」
「袁術様もあれですよね。南蛮を」
「おまけに華琳はわたくしと共に高句麗ですわ」
要するに牧達の殆んど全員に命じているのだ。

# 第七十五話　袁紹、軍を挙げるのことその三

「これだけの兵を起こすとなると」
「あの、おかしいのでは？」
二人と共にいた陳琳が言ってきた。
「国力を無駄に使ってしまいます」
「まずはわたくし達ですわね」
「はい、これは」
どうかとだ。陳琳はさらに話した。
「まずは我々の国力を消耗させ」
「そのうえで、ですわね」
「はい、我々を取り潰しにかかるかと」
陳琳はここではだ。軍師として話していた。彼女は軍師としても動くことができるのだ。
「そうしてきます」
「間違いありませんわね」
袁紹も彼女のその言葉に腕を組んで頷く。その豊かな胸が腕の上に落ちる。かなりの重量を感じさせる胸である。
「それは」
「はい、確実に」
「それが狙いですわね」
「けれどですよ、麗羽様」
文醜がここで袁紹に言う。
「このまま拒否し続けたら」
「はい、解任されて都に召還されます」
顔良も話す。
「そうなれば」
「結局同じですよ」
「それが狙いかと」

また言う陳琳だった。
「董卓殿の」
「動けばやがて攻められ動かなければ処刑」
袁紹は難しい顔で述べた。
「都に召還されればそうなりますわね」
「はい、間違いなく」
そのことも言う陳琳だった。
「そうされます」
「ではわたくし達は打つ手がありませんわね」
袁紹は自分だけではないと言った。
「華琳にしても孫策にしても」
「美羽様にしても」
「そうですわ。このままでは全員同じですわ」
そうだというのである。
「動いても動かなくても」
「じゃあ今はどうすれば」
「どうします？本当に」
武の二人は深刻な顔をして主に問うた。
「待っていても仕方ないですし」
「それならいっそのこと」
「いえ、今は待つべきよ」
しかしだった。ここでだ。
陳琳はその二人に対してだ。こんなことを言ったのである。
「ここはね」
「解任されるのに？」
「それでも？」
「近いうちにその話が来るわ」
陳琳はいぶかしむ二人に冷静に話す。
「麗羽様の牧解任と都への召還の話がね」
「だから。それが来たらよ」

「まずいじゃないか」
二人はいぶかしむ顔で陳琳に言い返す。
「麗羽様が処刑されちゃうわよ」
「そうなってもいいのかよ」
「だから。その話が来たらよ」
その時にこそだというのである。
「動けばいいのよ」
「動く？」
「この場合どう動くんだよ」
「兵を挙げるのよ」
そうすればいいとだ。二人に話す陳琳だった。
「挙兵よ、挙兵」
「ちょっと待ってよ、そんなことしたら」
「それこそ最悪なことになるぜ」
顔良と文醜は驚いた顔になってまた言い返した。

# 第七十五話　袁紹、軍を挙げるのことその四

「私達謀反人になるじゃない」
「そうなってもいいのかよ」
「そうね。けれど相手はどうかしら」
自信のある笑みでだ。陳琳は話した。
「都の話は聞いてるわよね」
「董卓殿の暴虐のこと？」
「それかよ」
「そう、それよ」
まさにだ。それだというのだ。
「都で悪逆非道の限りを尽くしている董卓征伐を」
「つまりその董卓さんを征伐する為になの」
「挙兵するっていうんだな」
「そうよ。袁紹様はその董卓の理不尽な命に従わなかった」
「けれど董卓さんに解任され都で処刑されるから」
「それに対して兵を挙げる」
「そうなるのよ」
こうだ。陳琳はその場合の大義名分を話すのだった。
「どう？これで」
「いい感じね」
「そうだよな」
顔良と文醜は陳琳のその言葉に頷いた。そうしてだった。
陳琳は次にだ。袁紹に向き直ってだ。あらためて彼女に問うた。
「これで如何でしょうか」
「そうですわね。それがいいですわね」
袁紹もだ。陳琳のその言葉に頷くのだった。
そのうえでだ。彼女はこうも話した。
「それでは。今は待ちますわ」

「はい、それにです」
「まだありますの？」
「間違いなく他の牧達にも解任と召還を言います」
董卓がそうしていくというのだ。
「その方々にも檄を送りましょう」
「わたくし達だけではなくて」
「はい、全ての群雄が一つになって董卓を討伐するのです」
陳琳の中に漢の地図があった。それに描きながらだった。
「そうしてそのうえで」
「全員で董卓を倒すのですわね」
「それでどうでしょうか」
また話す陳琳だった。
「連合軍を組織するのです」
「では挙兵と共に檄文を出し」
「はい」
「そうして征伐しましょう」
そんな話をしてだった。彼女達はだ。
これからのことを考えていくのだった。実際に暫くしてだ。
袁紹のどころにだ。その文が来たのだった。
やはりだ。彼女の牧解任と都への召還のことだった。それを読み終えてだ。
袁紹は集めている家臣達と異世界からの客将達にだ。こう話した。
「来ましたわ」
「解任のお話ですね」
「そのことですね」
「その通りですわ」
袁紹は己の左右に控えている田豊と沮授に答えた。
「では。ここは」
「はい、挙兵すべきです」
「既にその用意はできています」

軍師二人はすぐに主に述べた。
「麗羽様がよしと仰ればです」
「何時でも」
「わかっていますわ。それではでしてよ」
袁紹もすぐに言う。躊躇していなかった。
彼女はだ。全員に告げた。
「挙兵ですわ」
「それではです」
「我々も」
「そして檄も出しますわ」
それも忘れていない。とりわけだった。
陳琳に顔を向けてだ。こう言うのであった。
「檄文を書くのは貴女ですわ」
「わかりました」
「名文を期待していますわ」
文にも秀でている彼女にだ。あえて告げたのである。

# 第七十五話　袁紹、軍を挙げるのことその五

こうして袁紹は挙兵しすぐに牧全員に檄を渡した。それを呼んでだ。

まずは曹操がだ。己の家臣や客将達を集めて話すのだった。

「麗羽から来たわ。董卓に対する挙兵の誘いよ」

「そうですか。麗羽殿が」

「そうされますか」

「ええ、そうよ」

まさにだ。その通りだと曹仁と曹洪に話す。

「連合軍に参加されたしとね」

「麗羽殿も牧を解任されるとのことですが」

「華琳様と同じく」

「ええ、今の牧全員がよ」

その中にはだ。やはりであった。

「私も含めてね」

「元々我々もです」

「挙兵のつもりでしたが」

夏侯姉妹もここで言う。

「麗羽殿が先にですか」

「動かれましたか」

「あの娘はせっかちだからね」

袁紹のそうした性格をよくわかっている曹操だった。

それを踏まえてだ。彼女はさらに話す。

「こうなるとは思っていたけれどね」

「それでどうされますか？」

荀？がここで曹操に尋ねた。

「華琳様としては」

「勿論挙兵よ」

曹操は即答してみせた。
「私達もね」
「わかりました。それでは」
「そして麗羽の誘いに乗るわ」
笑ってだ。それもだというのだ。
「そうするわ」
「それが宜しいかと。ただ」
荀?は連合軍に加わることはいいとした。しかしここで顔を曇らせてだ。こんなことも言うのだった。
「あの娘には会いたくありませんけれど」
「あの娘ね」
「はい、陳花にはです」
この名前を出すのであった。
「どうしても」
「まあそれは我慢して頂戴」
曹操は先程とは違う笑顔で荀?に話した。
「顔を会わさなければいいのだし」
「そうですね。それでは」
「まあ凛は嬉しいでしょうけれど」
「えっ、私ですか」
「そう。貴女はね」
今度は悪戯っぽい笑みで郭嘉を見て述べた。
「袁術に張勲も来るでしょうから」
「な、何故お二人なのですか!?」
郭嘉はその名前が出るとだ。それだけで顔を真っ赤にさせてだった。
あたふたとしてだ。己の主に言うのだった。
「私は華琳様の臣です」
「ええ、確かにね」
「どうして美羽様や七乃殿に会いたいと思うのですか。矛盾してま

す」
「姉ちゃん、真名出してるぜ」
「これ、それを言ったらいけません」
程?が頭上の人形に突っ込みを入れる。
「真実を言ったら困る人もいるから」
「おっと、そうだったねい」
「そう。禁句ですから」
「ま、待て風」
郭嘉は今度はそちらにその真っ赤になった顔を向けて言い返した。
「私はだから、その美羽様とは何も」
「接吻したし」
「あれは私がお酒を飲んで」
「しかも同じ口で同じもの食べて」
その突っ込みは実に容赦がない。
「それで何もないとは」
「言えないというの!?」
「まあえて言わないけれど」
無表情で攻める程?だった。
「けれど凛ちゃんと袁術さんは運命だと思う」
「運命!?」
「そう、中身の運命」
そういう運命だというのだ。
「それだと思うから」
「何故納得できるか自分でも不思議だけれど」
それを言ってしまったのだった。自分自身でも。

# 第七十五話　袁紹、軍を挙げるのことその六

「しかし。董卓を討伐するのならです」
「全軍で攻めるべきね」
「はい、董卓軍は強いです」
話はそこに戻った。ようやくといった感じで。
郭嘉は真面目な顔になってだ。あらためて曹操に話すのだった。
「兵が強いだけでなく将帥も揃っています」
「あの呂布もいるわね」
曹操の顔が真剣なものになっていた。そのうえでの言葉だ。
「あの娘と戦うとなると」
「はい、我々も全軍でなければ」
「ならないです」
夏侯姉妹もここで言う。
「生半可な相手ではありません」
「だからこそだと思います」
「麗羽も美羽も全軍で来るわよ」
彼女達もだというのだ。
「それに孫策もね」
「そうでなければ戦になりません」
董卓軍はだ。そこまでの相手だというのだ。郭嘉は楽観していなかった。
「だからこそ。全軍で」
「わかっているわ。それではね」
「はい、それでは」
「全軍に命じるわ」
そのだ。全軍にだというのだ。
「出陣の用意よ。然るべき場所で麗羽達と落ち合うわよ」
「御意」

「では今より」
曹操達も出陣を決意した。そうしてすぐにだった。
袁紹に使者をやってだ。話をするのであった。
「僕達も出陣するからね」
「宜しく御願いします」
許緒とだ。典韋が今まさに出陣する袁紹に対して話すのだった。
「華琳様から宜しくと」
「そう伝えてくれとのことです」
「ええ、わかりましたわ」
袁紹は馬に乗ろうとしているところだった。そのうえで二人に話すのだった。
「それでは。合流する場所は」
「何処にするの？」
「それが問題ですよね」
「許昌の西がいいですわね」
合流する場所はそこだというのである。
「そこにしましょう」
「うん、わかったよ」
「ではそこで」
「さて、話はこれで決まりですわね」
また言う袁紹だった。そうした話をするのだった。
「では」
「では？」
「あの、他に何かお伝えすることがあるのですか？」
「いえ、何もありませんわ」
それはないという。しかしなのだった。
袁紹はここでだ。こんなことを言ったのである。
「劉備さんも来られますわね」
「あっ、徐州の」
「あの方ですか」

「あの娘はこれといって董卓に言い掛かりをつけられてはいませんでしたけれど」
「袁紹さん劉備さんにも檄を送ってますよね」
「それなら来られるのでは」
「ええ、送ってますわ」
当然だ。彼女にもそうしているというのである。
「ただ。来られるかどうかは」
「わからない」
「そうなんですか」
「あの娘には直接関係ないことですし」
狙い撃ちにされたのは袁紹達である。彼女達の挙兵は仕方ないことだった。
しかしだ。劉備はというのだった。
「来られるかどうかは」
「わからないんだ」
「あの人は」
「来られればよし」
その場合は何の問題もないというのだ。

# 第七十五話　袁紹、軍を挙げるのことその七

「けれど来られなければ」
「その場合はどうするの？」
「何かされますか？」
「いえ、何も」
しないというのである。
「劉備さんとわたくしは何もありませんし」
「劉備さんを征伐とかはしないんだ」
「そういうことはですか」
「そうですわ。しませんわ」
また言う袁紹だった。
「ただ。参加して頂けないと寂しいですわ」
「ああ、確かにね」
「劉備さんって何かおられるだけで違いますから」
「そうですわ。是非参加して欲しいですわ」
それでだというのである。これが袁紹の本音だった。
そんなことを話してだった。彼女達は合流する場所も決めた。
そして劉備達のところにだった。その文が来たのである。
劉備はその文を読んですぐに全ての仲間達を集めた。そのうえで彼等の意見を聞くのだった。まずは関羽がこう言うのだった。
「前から妙に思っていましたが」
「董卓さんのことよね」
「あの方が暴虐を尽くしている」
関羽は眉を顰めさせて言う。
「そんなことは信じられません」
「私も。愛紗ちゃん達からのお話を聞くと」
劉備もだ。己の席に座り首を傾げさせて言うのだった。
「ちょっと」

「信じられませんね」
「どうしてもね」
彼女にしてもだ。そうなのだった。
「そんな娘かしら」
「おそらくですけれど」
次に話したのは孔明だった。こう劉備に言うのである。
「これは何か裏があります」
「裏が？」
「おそらく董卓さんは名前を使われているだけです」
既にだ。そこまで見抜いている孔明だった。そのうえで劉備に話すのだ。
「御姿を見せていないようですし」
「それも妙な話だ」
趙雲がいぶかしむ声で述べた。
「董卓殿は政は善政でしかもあれで行動的な方だ」
「それでお姿を見せないのはおかしいことです」
孔明はこのことも指摘するのだった。
「何かあると考える方が妥当です」
「じゃああれか？宦官でもいるのかよ」
馬超は彼等の存在を口にした。
「あの連中はもう粛清されただろ」
「そう思うのですが」
実際にだ。孔明もこう話した。
「宦官の人達はいない筈です」
「十常侍はです」
鳳統は彼等に話を区切ってきた。
「ですが他の宦官達の可能性もあります」
「そうね。宦官は彼等だけじゃないから」
黄忠は話を十常侍に限らなかった。
「他の誰か、碌でもない人がいればそれでね」

「はい、同じことになります」
鳳統はまた話した。
「その彼等が今宮中で蠢いている可能性はあります」
「だったら大変なことなのだ」
張飛が怒った顔で言った。
「そんな奴等野放しにはできないのだ」
「じゃああれ？この討伐軍に参加しろっていうの？」
馬岱はその張飛に問い返した。
「鈴々ちゃんはその考えなのね」
「そうなのだ。そんな奴等放っておいたら民が苦しむだけなのだ」
「そうよね。洛陽は実際に大変なことになってるらしいし」
「悪い奴等はやっつけないと駄目なのだ」
張飛はそのことは強く言った。
「だから鈴々はこの討伐軍に賛成なのだ」
「少なくとも動かないと何にもならないな」
テリーが言った。

# 第七十五話　袁紹、軍を挙げるのことその八

「都の人達を救えないな」
「じゃあ兄さんもあれだね」
「この話賛成なんだな」
「ああ、そうだ」
その通りだとだ。テリーはアンディと丈に答えた。
「どうもこんな話は放っておけないタチでな」
「俺達が何もしなくてもあれですけれどね」
真吾が言う。
「袁紹さんや曹操さん達が動いてますけれど、もう」
「それで自分は何もしないっていうのはないだろ」
二階堂がその真吾に話す。
「だろ？自分でやらないとな」
「ええ、それはもう」
この考えは真吾も同じだった。例え見習いにしてもだ。
それでだ。彼はまた言うのだった。
「それじゃあここは」
「さて、この度の戦じゃが」
厳顔が話す。
「桃香殿の考えはどうじゃ？」
「私はできれば戦いたくはないけれど」
劉備は顔を曇らせて俯き気味になってだ。こう話した。
「けれど。それでも都の人達が困ってるのなら」
「参加するのじゃな」
「それしかないと思うから」
それでだというのだ。
「困っているのは都の人達だから」
「うむ、ではそれで決まりじゃな」

「全軍出陣です」
劉備はまだ苦しい顔である。しかし顔を上げてこの言葉を出した。
「そうしましょう」
「了解です、それでは」
「出陣なのだ」
関羽と張飛が言う。それでだった。
劉備達も出陣することになった。こうしてだった。
彼等はすぐにその準備に取り掛かった。こうして全ての牧達が参加することになった。
無論孫策達もだ。彼女の動きも早かった。
「さて、それじゃあね」
「はい、参りましょう」
「今から」
二張がだ。今出陣する孫策に述べた。無論彼女達も出陣する。
「そしていざ都に」
「向かいましょう」
「ええ。それにしても私達もかなりの人材が揃ったわね」
今居並ぶ面々を見てだ。孫策は満足した顔で話すのだった。
「母様の時は貴女達三人だけだったのに」
「ははは、あの時は思えば静かじゃったな」
黄蓋もいる。彼女は笑いながら話す。
「三人しかおらぬのではのう」
「私も小さかったしね」
「そうじゃったな。わし等も歳を取ったものじゃ」
「実際あんた達幾つなんだ？」
十三がその黄蓋に尋ねた。
「女の人に年齢を聞くのはあれだけれどな」
「そういえば幾つじゃったかな」
随分ととぼけた感じのだ。今の黄蓋の返事だった。
「わしも知らんな」

「自分の年齢をかよ」
「まあ二十代後半と思ってくれ」
「私達もじゃ」
「そう思ってくれるようにな」
二張もその年齢にしておけというのだった。
「実際の歳は知らぬ」
「本人さえ知らん」
「随分いい加減な話だな」
十三はそこまで聞いて腕を組んで己の首を捻った。
「俺の世界じゃそんなのは流石にないけれどな」
「そういうあんたは幾つなの？」
孫策が十三に尋ねた。

# 第七十五話　袁紹、軍を挙げるのことその九

「結構歳いってる感じだけれど」
「ああ、二十七だよ」
彼は自分の年齢をしっかりと把握していた。実にあっさりと答えたのである。
「今はな」
「そう、二十七なの」
「老けてるかい？」
「そんな感じじゃないの？」
孫策はこう十三に返した。
「その外見だとね」
「これでもお嬢には結構言われるけれどな」
「ハッパなんぞ咥えてるからや」
あかりが十三に言う。
「そのハッパはあれやろが。悪球打ちのあれやろが」
「ああ、あいつな」
「どんなに古いネタやっちゅうねん」
「今も連載してるけれどな」
「はじまったん何時や」
「相当昔だけれどな」
「そやからや。どんだけ古いネタやねん」
あかりはそのことをやたらと言う。
「ほんまに。古いネタは飽きられるんや」
「じゃあ新しいネタを出せってか」
「そや。ネタは大事や」
あかりはあくまでそこにこだわる。
「新鮮かつ面白いネタや」
「何かあるか？それ」

「探せばあるのではないのか？」
甘寧が十三に言う。
「貴殿は見たところそうしたことについての才があるようだしな」
「お笑いってことか」
「うむ、そんな感じだ」
「それ元の世界でも言われてたんだよ」
十三は少し項垂れながら甘寧に話した。
「困ったことだよ」
「そうは見えへんけどな」
「だからお嬢はそこでいつも突っ込み入れるよな」
「だから言うたやろ。ぼけとつっこみや」
つまりだ。十三がぼけというのである。
「それでうちは合わせてるんや」
「全く。そんな話ばかりだよな」
「しかしまあとにかく」
今言ったのは陸遜だった。相変わらず呑気な感じだ。
「こうして皆さんで出陣となりましたね」
「ええ。ただ私達はね」
孫策がその陸遜に応える。彼女達は今船の上にいる。そうして話すのだった。
「船はあるけれどね」
「馬ですよね、問題は」
「そう。馬がないのよ」
こう話すのだった。
「それをどうしようかしら」
「馬がなくても充分に戦えるわ」
「そうね、冥琳」
孫策は笑顔で彼女に応えた。
「戦い方はもう考えてるわよね」
「勿論。それは貴女もですね」

「何となくだけれどね。歩兵は歩兵で戦い方があるからね」
孫策は笑顔でこう話した。
「さて、袁紹達と合流ね」
「袁術殿もいるな」
今話したのは孫権だった。
「また訳のわからないことをしなければいいが」
「それ絶対に無理ね」
孫尚香が笑いながら話す。
「袁術だから。絶対に何かするわよ」
「歌は歌いますね」
「それは確実ですよね」
大喬と小喬が話す。
「私達に対抗とかして」
「絶対に騒ぎ起こしますね」
「そうよね。あの娘はね」
孫策は困った笑顔で話す。
「よく言えば天真爛漫だけれど」
「悪く言えば我儘勝手だからな」
孫権がそこを指摘する。
「今回も振り回されるか」
「それは想定の範囲内だからね」
孫策はそうしたことは既に考えているというのだ。

# 第七十五話　袁紹、軍を挙げるのことその十

「まあ騒ぎに巻き込まれてあげるわ」
「それでいいのじゃな」
「いつものことだからね」
黄蓋にも話すのだった。そうしてだった。
そう話をしてだ。彼女達も合流するそこに向かうのだった。そして袁術もだった。
彼女もまた出陣していた。当然そこに張勲もいる。他の面々もだ。
彼女は馬車に乗っている。そこから隣にいる張勲に話す。馬車の手綱は張勲が握っている。
「のう七乃」
「はい美羽様、何か」
「うむ。何か妙な話じゃな」
袁術は首を傾げさせながら張勲に話した。
「董卓め、わらわ達にあえて謀反を起こさせたしかな」
「思えないと仰るんですね」
「大体じゃ。南蛮を攻めよとか金を出せとかじゃ」
「確かにそうですよね」
「そんなことを次々に言って来てしかも断ったら牧解任じゃ」
「そして都で処刑になると決まってますし」
「そんなことをされたら誰でも謀反を起こすわ」
袁術は主観に基づいてだがそれでもその通りのことを話した。
「今の様にじゃ」
「ですよね。実際にそうなってますし」
「わからん。董卓はあえて戦をしたいのか？」
「かも知れませんね」
張勲もそれを話す。
「私達全員と」

「だとすれば容赦はせぬがのう」
袁術は馬車の中で腕を組んで述べた。
「わらわも」
「戦ですし」
「そうじゃ。戦ならじゃ」
袁術はまた言った。
「何をしても勝つぞ」
「はい美羽様、ただ」
「ただ？」
「今回の討伐軍は連合軍ですから」
「むっ、姉様もおるな」
「盟主は多分袁紹さんになりますよ」
張勲はそれは断る様にして袁術に話した。
「そのことはです」
「仕方ないのう。五州の牧じゃからな」
「その通りです。ですから」
「はい、それでは」
そんな話をした。そしてであった。袁術はこんなことも話した。
「ところ七乃、曹操も来るのじゃな」
「はい、そうですね」
「うむ、また凛に会えるのじゃな」
このことにはだ。満面の笑みになる袁術だった。そのうえでの言葉だった。
「よいぞよいぞ」
「駄目ですよ、美羽様」
「何故じゃ？」
「凛ちゃんは私のものですから」
張勲はにこりと笑ってこんなことを言ってみせた。
「ですから美羽様はもう凛ちゃんとは」
「ば、馬鹿なことを申すな！」

そう言われるとだ。やはり食いつく袁術だった。
「凛はじゃ。わらわのものじゃぞ！」
「あら、そうなんですか？」
「そうじゃ。だからじゃ。七乃といえどもじゃ」
「ううん、美羽様も手強いですね」
「手強いと申すのか」
「ええ。何か」
そしてだった。張勲は笑いながらまた話した。
「黒姫みたいですね」
「むっ、その呼び名じゃがのう」
「御気に召されましたか？」
「妙に納得できるものがあるのう」
腕を組んで神妙な感じの顔になってだ。袁術は話すのだった。

# 第七十五話　袁紹、軍を挙げるのことその十一

「どういう訳かわからぬが」
「ですよね。中身の関係で」
「また中身と申すか」
「はい、中身です」
張勲は笑いながらこの話を再びする。
「特に美羽様は中身が個性的ですから」
「七乃が言えるのか？」
「私がですか」
「うむ、御主はそもそも中身の名前は幾つあるのじゃ？」
「美羽様より多いでしょうか」
「絶対多いと思うぞ」
袁術は張勲に顔を向けて述べた。眉を少し顰めさせてだ。
「あと孫策のところにおる呂蒙もじゃな」
「あの娘も結構ですよね」
「凛も結構多いがのう」
「そうですよね。まあそのお話をすると」
どうかとだ。張勲は笑いながらこのことについても話す。
「結構困ったことになる人もいますけれど」
「孫尚香も甘寧も洒落にならんまで色々出ておるからのう」
「あの人達の中身の名前は少ないですけれどね」
「わらわや七乃や凛よりはのう」
「多い人は本当に多いですから」
「全くじゃ」
そんな話をしながらだった。袁術達も合流場所に向かうのだった。
劉備達もだった。彼女は白馬に乗り軍の先頭にいた。その中でだ。
隣にいる関羽にだ。こう尋ねるのだった。
「あの、合流する場所は」

「まだ先です」
こう答える関羽だった。当然彼女も馬に乗っている。
「まだ予州にも入っていません」
「そうなのね」
「はい。ただ」
「ただ？」
「馬ですからそれ程時間はかかりません」
それは大丈夫だというのである。
「焦る必要もありません」
「それならいいけれど」
「むしろです」
ここで孔明が劉備に話す。彼女は劉備の後ろで椅子の車に乗っている。ただしだ。その車はタムタムに持たれてしまっている。
そうして吊り下げられながらだ。主に話すのである。
「焦って先に進む方がよくありません」
「そうなのね」
「袁紹さんが真っ先に来られますし」
その彼女が問題だというのだ。
「下手に先に行けば無用な騒ぎを引き起こしてしまいます」
「何でそれで騒ぎになるのだ？」
張飛がその孔明に尋ねる。彼女は劉備の横で豚に乗っている。ここでも豚である。
「袁紹より先に着たら問題なのだ」
「各州の牧の人達が集まりますけれど」
その中でだ。やはり問題になるのはだった。
「袁紹さんが最も勢力が大きいですね」
「無闇と大きいのだ」
「五州を治めておられるその権勢は第一です」
孔明はそのことを話す。五つの州を治めている袁紹のその力は侮れなかった。

「ですから。盟主となられるのは」
「あいつなのだ」
「はい、それはもう今の時点でほぼ決まっています」
流石に五州の牧であることは大きかった。それもかなりだ。
「あの方しかいません」
「そのあいつより先に来ればやばいのだ？」
「盟主である袁紹さんが真っ先に来ないと気が済まないと思います」
孔明は袁紹のそうした性格を完璧に読んでいた。まさにその通りだった。
「ですから。下手に急いで袁紹さんと先に行くとです」
「ううん、問題の多い奴なのだ」
「それが袁紹さんですから」
だから問題だというのである。
「ここは落ち着いて進軍すべきです」
「わかったのだ。とにかく今はゆっくりなのだ」
「しかし。あの人が盟主かよ」
馬超はそのことにだ。眉を顰めさせて述べた。

# 第七十五話　袁紹、軍を挙げるのことその十二

「ちと問題があるような気がするな」
「そうだな。何しろムラッ気のある方だ」
趙雲もそこを問題視して言う。
「それがどうなるかだな」
「目立ちたがり屋だしな。自分が先陣になるとか言うんじゃねえのか？」
「それは間違いない」
趙雲はそれを確信していた。まさにだ。
「ましてあの方は自分が前線に出て戦う方だからな」
「盟主が前面に出て戦うのはまずいだろ」
「そこが問題だな。無能ではないがな」
「そうね。それを止めるので一苦労しそうね」
黄忠もそのことを話す。
「さて、どうなるかしら」
「数はこちらの方が勝っています」
鳳統は連合軍のその数を話す。
「将帥も揃っていますが」
「なら問題ないんじゃないの？」
馬岱はそのことに特に危惧を覚えていなかった。
それでだ。楽観的な感じで鳳統に話すのだった。
「それで」
「普通はそうです」
「袁紹さんがおかしなことしたらまずいっていうの？」
「いえ、相手です」
鳳統はそちらを問題とするというのだ。
「董卓さんの将帥は物凄い人達が揃っています」
「呂布じゃな」

厳顔がその名前を出す。顔を曇らせてだ。
「あの者は尋常な強さではないぞ」
「天下無双の強さだというが」
魏延も呂布のその強さについて話す。
「私なら倒せる」
「いや、あの者の相手は止めておけ」
厳顔は真剣な顔で魏延に話した。
「あれはまさに化け物じゃ」
「そこまでだというのですか」
「そうじゃ。愛紗達が束にかかっても圧倒されたのじゃぞ」
その強さは厳顔も知っていた。呂布の武はだ。最早生ける伝説となっていたのだ。
そう話してだ。厳顔は魏延にさらに話すのだった。
「あの女とは絶対に一人で向かうな」
「ううむ、左様ですか」
「絶対に向かうでない」
また言う厳顔だった。
「よいな」
「わかりました」
「そしてなのですが」
鳳統がここでまた話す。
「その呂布さんの他の。異世界から来た方々もです」
「そういえばあっちにもいたな」
公孫賛が彼等のことを話した。
「あっちの世界の連中もな」
「どなたがいるかが問題です」
「ううん、どうなるか」
劉備は馬上で首を捻りながら言った。
「わからなくなってきたけれど」
「あっ、心配することはないです」

徐庶はその心配はないというのだった。
「心配し過ぎてもかえってよくないです」
「だからなのね」
「はい、平常心で行きましょう」
「そうね。それじゃあね」
劉備は徐庶のその言葉にだ。笑顔で頷くのだった。そうしてだった。
彼女達も合流場所に向かう。そしてそれでだ。一同が集うのだった。

第七十五話　完

２０１１・４・１２

# 第七十六話　群雄、一同に集うのことその一

第七十六話　群雄、一同に集うのこと

劉備達が許昌の西に来るとだ。もうそこにはだった。
袁紹の軍が布陣していた。黄色い天幕が立ち並んでいる。
それを見てだ。馬岱が驚きの声をあげた。
「うわ、やっぱり数が多いね」
「ううむ、話には聞いていたが」
魏延も唸る様にして言う。
「この数はな」
「ええと、十五万はいるかな」
「あれっ、何か思ったよりも」
しかしだった。孔明はだ。
その袁紹軍の天幕やそこに出入りする兵達の数を見てだ。意外といった顔になってだ。こう言うのだった。
「少ないですね」
「あれっ、少ないの？」
「これでか？十五万だぞ」
「袁紹さんの軍は二十万は出せる筈です」
その勢力から見ての言葉だった。
「それでこの数は」
「五万いないのね」
「それだけの数がか」
「そういえば袁紹さんは涼州も治めておられますが」
孔明は今度はこのことを話した。
「そこからも」
「っていうと？」
「涼州に何かあるのか」
「あっ、いえ」

ここからはだ。言わない孔明だった。
「確信はできませんから」
「そうなの。今は」
「そういう話だな」
「はい、とにかく袁紹さんにしては少ないですね」
またそのことを指摘する孔明だった。
「十五万ですか」
「充分多いと思いますけれどお」
その孔明のところにだ。陸遜が来た。
そしてだ。その巨大な胸を揺らしながらだ。孔明達に話すのだった。
「私達はやっと十万を動員ですから」
「あっ、陸遜さん」
「それで十五万で少ないなんてちょっとありません」
「いや、十万でも多いわよ」
馬岱がこう陸遜に話す。
「前に会ったっけ」
「馬岱さんですね」
「そうそう。陸遜さんだったわよね」
「はい、お久し振りです」
「そうね。久し振りよね」
二人共笑顔を浮かべて挨拶を交えている。
「元気みたいね」
「物凄く元気ですよ」
そんなことを話してだった。そのうえでだ。
陸遜はだ。また話をはじめた。
「十万。山越族の兵も入れてですよ」
「ああ、あの異民族の」
「はい、そこからも出しています」
「それで十万ですか」

「そうなんです」
こう事情を話すのだった。ここでだ。
馬岱はだ。こんなことを言うのだった。
「けれど揚州って広いし人も多いし」
「それを考えたら十万も出せるな」
魏延も言う。
「確かに少し辛いにしても」
「それにその山越だけじゃなくて交州もあるじゃない」
「そこも考えたらな」
「はい、確かに揚州は人も多いですし交州もあります」
それは陸遜も認めることだった。
「ただ。やっぱり十万の兵は中々辛いものがあったりしました」
「そうだったの」
「やはり十万となるとか」
「集めるだけでなく出兵もしますから」
それもあるというのだ。出兵もだ。

# 第七十六話　群雄、一同に集うのことその二

「兵糧も用意しましたし」
「兵糧ねえ。蒲公英達も苦労したしね」
「そうだな。あれをどうするかが一番厄介な話だな」
馬岱と魏延は二人で顔を少し顰めさせて話した。
「米や麦を買い入れたりしたからな」
「その問題についてはしっかりしないといけませんね」
「そうですよねえ」
陸遜が孔明に話した。
「とりあえず色々お話しましょう」
「そうですね。これから」
こんなことを話しながらだ。牧達が集っていた。その中でだ。
劉備もだった。集っている大軍を見てだ。驚きながら話すのだった。
「うわ、どれだけいるのかな」
「五十万かと」
鳳統がその劉備に話した。
「それだけいます」
「五十万、凄いね」
「対する董卓さんの軍は二十万です」
「数は二倍以上開いているのね」
「数においては圧倒的優位にあります」
それは非常に大きい。鳳統はこのことも話した。
「ただ」
「ただ？」
「やっぱりあちらに誰かがいるかが問題ですね」
それでだ。また話す鳳統だった。
「今舞さん達が調べに行っていますけれど」

「それで舞さん達は？」
「もうすぐ戻って来られます」
「そうなの」
「はい、ただ」
「ただ？」
「あまり詳しいことはわからないかも知れません」
こう劉備に話すのだった。今一つ浮かない顔で。
「これまでも何度か見てもらっていますけれど」
「そうよね。都のことって中々わからないのよね」
「舞さんは生粋の忍です」
そのことは非常に大きい。鳳統はそうした意味でだ。彼女に対して絶対の信頼を置いているのだ。それは劉備も同じである。
「ですから何かを調べることはです」
「誰よりも得意よね」
「しかし何も伝わりません」
どうしてもだというのだ。それがだ。
「何度見てもらってもです」
「そうした場所だから」
「はい、誰がいるかもわからないです」
それがだ。鳳統の心配の種だった。それを今劉備に話すのだった。
そんな話をしているとだった。その劉備達のところにだ。
灰人が来てだ。こう言ってきたのだ。
「あんた達が確か劉備さん達だよな」
「あっ、はい」
「そうです」
「うちの大将が呼んでるぜ」
こうだ。二人に言うのだった。
「それぞれの大将と軍師を集めてな。会議だってな」
「会議ですか」
「今からですね」

「そうだよ。出るよな」
二人に対して確認を取っても来た。
「呼んで来いって言われたから来たんだけれどな」
「わかりました。それなら」
「今から行かせてもらいます」
「ああ、じゃあ来てくれ」
灰人はぶっきらぼうな調子で二人に話した。
「今からな」
「じゃあ朱里ちゃんも呼んで」
「それからですね」
こうしてだ。孔明も呼んでそのうえでだった。三人でその会議の場所に向かうのだった。
そこはだ。一際大きな天幕の中だった。そこにはだ。
赤い大きな長方形の卓がありだ。そこに席がそれぞれ置かれている。そしてだ。
既に他の牧達や軍師達が集っている。彼女達を見てだ。

# 第七十六話　群雄、一同に集うのことその三

劉備はだ。深々と頭を下げて一礼した。
「皆さん、お久し振りです」
「おお、劉備ではないか」
袁術がだ。最初に彼女に声をかけた。彼女の顔を見るとすぐに明るい顔になった。
「元気そうじゃな」
「袁術さんもですね。お元気そうで何よりです」
「うむ、わらわはいつも元気じゃぞ」
袁術は己の席からだ。胸を張って言うのだった。
「こうしてじゃ。明るく楽しくやっておる」
「はい、それは何よりです」
「とにかくね」
今度は孫策が話す。
「これで全員揃ったわね」
「そうですね。何よりですね」
張勲は袁術の後ろに控えて立っている。そしてだった。
あらためてだ。こう劉備に言うのだった。
「劉備さんも来られましたし」
「さて、じゃあ話をはじめるのね」
孫策は袁紹を見て尋ねた。
「そうするのね」
「そうですわね。それでは」
「ううむ、しかしじゃ」
ここで袁術は難しい顔に名って言うのだった。
「華琳よ、よいか」
「凛のこと？」
「そうじゃ。何故ここに呼ばないのじゃ」

不機嫌そのものの顔でだ。袁術は曹操に抗議するのである。
「折角一緒になったというのにじゃ」
「だってね。あんたがそう言うからよ」
「わらわにあるというのか」
「そうよ。いつも凛のこと言うけれど」
それを言う曹操だった。
「あのね、七乃もいるし変な騒動になるからよ」
「私は平気ですよ」
張勲はにこりと笑って曹操に返す。
「ただ。美羽様はですね」
「そうなのよね。まあわかるけれどね」
曹操は袁術を見ながら話す。
「この二人の関係はね」
「中身の関係ですからね」
「ある意味どうしようもないものがあるから」
「全くですね」
「それでおるのはその猫耳軍師か」
「悪い？」
荀？が不機嫌な顔で袁術に言い返した。彼女は曹操の後ろにいる。
「私で」
「別に悪くはないが」
「じゃあ何なのよ」
「そなたの横におるのは誰じゃ？」
彼女と同じく曹操の後ろに控える大人びた外見の少女を見ての言葉だった。
「華琳の軍師じゃな」
「はい、荀攸といいます」
すぐに本人が答えた。
「宜しく御願いします」
「荀攸というのか」

「そうです。荀?殿の姪にあたります」
「姪!?」
「はい、姪です」
そうだというのだ。
「そうなのです」
「姪!?嘘じゃろ」
袁術はその言葉をだ。頭から否定した。
「絶対にじゃ」
「そう思われますか?」
「外見が違うではないか」
袁術が言うのはそのことだった。
「何処がどう似ておるのじゃ」
「あのね、無茶苦茶言ってくれるわね」
荀?が怒った顔で袁術に言ってきた。

# 第七十六話　群雄、一同に集うのことその四

「確かに似てないけれどね」
「似てないどころではないぞっ」
「それでもよ。私が叔母にあたるのよ」
「どう見ても向こうが年上じゃろうが」
「年下なのよ、向こうが」
「ううむ、そうか？」
「そうよ。私が言うんだから間違いはないわよ」
かなり強引な感じで言う荀？だった。
「全く。皆言うんだから」
「というか本当にどういう突然変異なのよ」
孫策も二人を見比べてやや唖然としている。
「何の共通点もないじゃない、外見に」
「ううん、それはそうだけれどな」
「むしろあんたとあれよ。祝福されたお人形さんの方が共通点あるじゃない」
「あっちの話ね」
「そう、カン何とかね」
何故かその話をする孫策だった。
「そっちの方がね」
「ううん、あっちの私は何か違うような」
「あっ、そっちの世界は私もですけれど」
劉備が話に加わってきた。
「縁があるような」
「そういえばそうなのよね」
荀？もその劉備を見て頷く。
「そっち凛もいたし楊州のね」
「呂蒙ちゃんもですよね」

「妙にあんたと縁があるような」
「気がしますよね」
「何か世界が混ざってません？」
張勲がさりげなく突っ込みを入れた。
「私もそれ言うと複雑ですけれど」
「というか七乃やわらわはどれだけ名前があるのじゃ」
「その呂蒙さんや凛ちゃんもですね」
「二つや三つではないからのう」
「そうですよね」
そんな話をしてだった。
ここでだ。孔明が言うのだった。
「あの、今回こうして会議を開くのは」
「ええ、こうして皆さん集まりましたから」
袁紹が孔明の言葉に応える。彼女の後ろには田豊と沮授が控えている。
「これからのことをお話したいのでしてよ」
「それまでに何でこんなに時間がかかるのよ」
孫策が苦笑いと共に言う。その間に劉備は用意されていた席に座る。孔明と鳳統は彼女の後ろに控えて立つのだった。
そのうえで会議に参加する。その中で袁紹は話していく。
「まず。わたくし達の目的ですけれど」
「董卓討伐ね」
「ええ、それですわ」
まさにそれだと。曹操に返すのだった。
「あの憎むべき大罪人を成敗しますわよ」
「さもないとやられるのは私達だからね」
曹操はこの事情も口にした。
「それに天下もどうなるかわからないしね」
「今都の民は董卓の圧政により塗炭の苦しみを味わっていますわ」
袁紹はきっとした口調で話していく。

「だからこそ。わたくし達はこうして立ち上がったのでしてよ」
「その通りね。それでよ」
孫策は袁紹の話をここまで聞いたうえであらためて彼女に問うた。
「こうして集ってね」
「ええ。それで」
「その後よ。どうするの？」
「どうするのとは？」
「だからよ。これから色々決めないといけないじゃない」
孫策からこのことを話すのだった。
「まずは盟主と戦略ね」
「盟主はもう決まりでしょ」
曹操は一番に決めないといけないそれはだというのだった。
「麗羽しかいないでしょ」
「まあね。私達の中で一番広い場所に多くの人口を治めてるし」
「あれなところもあるけれど申し分ないでしょ」
曹操がこう言うとだった。その当人が文句をつけてきた。
「あれというのは何でして、あれとは」
「話がややこしくなるからその話は後でね」
「気になりますわね、そこが」
「だからいいから。とにかく盟主は貴女で決まりよ」
「そうですのね」
「嫌なら別にいいわよ」
これは駆け引きだった。曹操のだ。

# 第七十六話　群雄、一同に集うのことその五

「したくないのならね」
「むっ、そうきますのね」
「どうするのよ、それで」
「では。わかりましたわ」
結局袁紹しか適任者がいなかった。やはり五州を治めているその実力と人望、それに一応はある資質が決め手となったのである。
そうしてだ。袁紹本人も言うのだった。
「では。務めさせてもらいますわ」
「御願いね。それで軍師は私でいいわね」
「そうね。正直私は軍師ってタイプじゃないから」
「わらわもじゃ」
孫策だけでなく袁術も言う。
「戦の策を立てるのはどうも苦手じゃ」
「それじゃあいいわね。私が軍師ね」
また言う曹操だった。
「それで決まりね」
「そうですわね。では次は」
盟主に決まった袁紹がだ。話を動かしてきた。彼女はこのことを話した。
「攻める相手は董卓、そして目指すは洛陽」
「それは決まってますよね」
「それ以外にありませんわ」
袁紹は劉備に対しても述べた。
「問題はどの様にして攻めるかですけれど」
「虎牢関をはじめとした二つの関ね」
曹操がこのことを話してきた。
「そこを抜かないといけないわ」

「その通りですわ。董卓もそこに多くの兵を配していますわ」
そのことはもう偵察をしてわかっているのだった。
「攻城用の兵器も持って来ていますし。うって出る敵を叩いた後で」
「その兵器で攻略ね」
「そうしていきますわ」
オーソドックスだが確実な戦術が採用されることだが。袁紹と曹操の間で決まった。
そしてだ。さらにだった。
孫策がだ。ここでまた話すのだった。
「で、攻める場所と攻め方も決まったけれど」
「そうじゃな。次は陣を決めぬといかんぞ」
袁術もそれについて言及した。
「どうするのじゃ、それは」
「それですわね」
袁紹の態度がだ。その話になると急に変わった。
そうしてだ。妙に楽しそうにだ。こう言うのであった。
「一番大事なのは。先陣を決めることですわね」
「それはそうだけれど」
「はじまったのじゃ」
孫策と袁術の態度がだ。やれやれといったものになった。
劉備もそれに気付いてだ。ふと自分の後ろに控えている軍師二人に尋ねるのだった。
「何か様子がおかしくなったけれど」
「はい、心配していたことが起こりました」
「こうなるって思ってましたけれど」
「こうなるって？」
劉備は軍師二人の言葉に目をしばたかせて返した。
「どういうことなの？」
「先陣ですけれど」
「袁紹さんがしたいのです」

「そうなの」
「はい、袁紹さんは何かというと前に出たがる方ですから」
「それでなんです」
それでなのだった。袁紹はだ。
にこやかに笑ってだ。他の面々に話すのだった。
「最も大事な先陣ですわね。それを務めるのは」
「あのね、麗羽」
曹操がだ。やれやれといった顔でその袁紹に話した。
「まさかと思うけれど貴女がとかは言わないでしょうね」
「むっ、いけませんの？」
「盟主が先陣なんていい訳ないでしょ」
こう言うのであった。やはりやれやれといった口調だ。
「何考えてるのよ」
「最も責任ある者が最も責任ある行動をですわ」
「それで弓矢に当たって終わりとかなったらどうするのよ」
戦場では普通に考えられることだった。曹操はそれを話すのだった。
「それで終わりじゃない」
「そんなことは有り得ませんわ」
「有り得るわよ。貴女はいつも前線に出て戦うけれど」
「それが将の務めですわ」
「だから。それで何かあったら終わりじゃない」
曹操は袁紹その悪く言えばでしゃばりなところはよく知っていた。
この場合は悪く言うべきでしかなかった。まさにそうしたことだった。

# 第七十六話　群雄、一同に集うのことその六

「全く。前から顔良や文醜達が困ってるじゃない」
「うう、ではわたくしが前線に出るのは」
「駄目に決まってるじゃない」
結論が出た。すぐにだ。
「先陣なんて論外よ。いいわね」
「うう、わかりましたわ」
何だかんだで曹操の話を聞いてだ。それでだった。
袁紹は不承不承ながら曹操の言葉に頷いた。そのうえでだ。
あらためてだ。先陣のことに話すのだった。
「それで誰にするの？」
「先陣じゃが」
また孫策と袁術がそれについて言うのだった。
「曹操も軍師だから無理よね」
「本陣におらんといかぬのう」
その袁紹のいる場所が本陣になる。袁紹はその前線を最前線に持って行こうとしていたのだ。袁紹らしいがそれが問題なのだ。
「私が出てもいいけれど」
「わらわは。どうしようかのう」
「御二人ですのね」
袁紹はその二人を見た。ここでだ。
「孫策さんは馬を持っておられませんし」
「充分戦えるわよ」
「董卓は騎兵が多いですわ。しかも重装備の」
それで有名だった。董卓の軍といえばだ」
「それで歩兵は不利ですわ」
「じゃあ私は駄目だっていうのね」
「少し難しいですわね」

それでだ。彼女は駄目だというのだ。
孫策の後ろにいる周瑜と陸遜は沈黙している。二人共ここは言うべきではないと考えてだ。見れば今はどの軍師達も何も言わない。
「それは」
「そうなの。それじゃあね」
「ええ。そういうことで」
「美羽もね」
今度は曹操が話す。やはり彼女と袁紹が話を仕切っている。もう本陣として動いている。
「攻城兵器をかなり持って来てるわよね」
「うむ、そうじゃ」
その通りだと答える袁術だった。
「七乃が得意としてるからのう」
「そうよ。まさか先陣でいきなり攻城兵器を出す訳にもいかないでしょ」
「邪魔になりますし」
紀霊がそのことを話した。
「関を攻める前に敵兵に壊されてしまいますね」
「だからね。絶対に駄目よ」
曹操はこう袁術主従に話すのだった。
「そうですか。では私達は」
「できれば後方にいて」
曹操は張勲にも話した。
「それで関を攻める時になったら宜しくね」
「うむ、わかったのじゃ」
袁術もそれで頷くのだった。そしてだ。
その彼女にだ。曹操はまた話した。
「貴女は糧食や武具の補給を御願いね」
「それもじゃな」
「ええ、ものは許昌と?にあるから」

「そこからものを運べばいいのじゃな」
「貴女のところにもあるわね」
「うむ、宛に集めてある」
袁術もそうしたことはわかっているのだ。
「あと孫策もあるのう」
「建業にね。置いてあるから」
「ではよいな。糧食等は任せておくのじゃ」
袁術は胸を張って言った。このことはあっさりと決まった。
しかしだ。肝心の先陣は決まらない。それでなのだった。
遂にだ。また袁紹が言い出した。
「仕方ありませんわね。ここはやはり」
「だから。駄目だって言ってるじゃない」
曹操が呆れながら袁紹にまた言う。
「盟主が先陣に出てどうするのよ」
「駄目ですの？やはり」
「当たり前でしょ。何度言わせるのよ」
「ううん、では誰が」
話が決まらなくなっていた。そしてだ。

# 第七十六話　群雄、一同に集うのことその七

孔明と鳳統がだ。劉備の耳元で囁くのだった。
「あの、桃香様」
「宜しいですか？」
「ええと、ここは？」
「はい、桃香様しかいません」
「ですから」
二人でだ。劉備に先陣のことを囁いていた。
「御自身で名乗りを挙げられれば」
「それで決まります」
「先陣なのね、私達が」
「天下万民の為に」
「戦われるべきです」
「わかったわ。それじゃあ」
劉備は意を決した顔になって二人の言葉に頷いた。そうしてだった。
袁紹達にだ。こう言うのだった。
「あの、それでは」
「ええ、劉備さん」
「貴女がなのね」
袁紹と曹操がそれぞれその劉備に対して応えた。
そしてだ。劉備もはっきりと言った。
「私が先陣を務めて宜しいでしょうか」
「ううん、しかしでしてよ」
「だから貴女は駄目だから」
まだ未練を見せる袁紹は曹操に止められた。
「いい加減にわかりなさい」
「仕方ありませんわね。それじゃあ」

「妥当なところね」
孫策がここでこう言った。
「劉備は騎兵も多く持ってるわよね」
「はい、まあ」
「だから適役ね。先陣にはね」
「うむ、そうじゃな」
袁術も満足している顔で頷く。
「劉備なら問題はないと思うぞ」
「決まりね」
曹操も微笑んで話す。
「一時はどうなるかと思ったけれど」
「わたくしのことですの？」
「そうよ。盟主が出るなんてよ」
それをまた言う曹操だった。
「無茶にも程があるでしょ」
「ううん、ではわたくしは第何陣に」
「後詰は決まってるからね」
袁術だ。やはり彼女だった。
「もっとも貴女後詰なんて嫌でしょ」
「将が前に出ずして何になりますの？」
また持論を展開する袁紹だった。
「違いまして？それは」
「正論ではあるけれど極端なのよ」
そこが袁紹の問題だった。自覚はしていないがだ。
「けれど先陣は決まったわね」
「わかりましたわ」
「それで第二陣は」
「雪蓮」
「ここはです」
さりげなくだ。孫策の軍師二人が囁いた。

そしてだ。孫策も頷くのだった。
「わかってるわ」
「ええ、じゃあね」
「そういうことで」
「あの、私はね」
孫策が袁紹と曹操に話した。
「第三陣を務めさせてもらうわ」
「あら、そうですの」
「第三陣なのね、孫策は」
「それでいいわよね。私のところは騎兵隊がないから」
それでだというのである。
「弓で援護するってことでね」
「ええ、歩兵ですしね」
「それが一番だしね」
二人は孫策の真意をわかってだ。それで乗った。
しかし話には出さずにだ。頷いてみせたのだった。

# 第七十六話　群雄、一同に集うのことその八

「それでは」
「第三陣御願いね」
「そういうことでね」
これでだ。残るはだった。
「では本陣は」
「第二陣よ」
曹操がすかさず袁紹に言った。
「麗羽と私の軍でよ」
「それでなのですわね」
「そうよ。貴女もそれだと文句はないでしょう？」
先陣は駄目でもだ。それでもだった。
「そうでしょう？それで」
「ええ、それでは」
袁紹も第二陣なら文句はなかった。それでだ。
自分の軍師二人にだ。ここで問うのだった。
「問題はありませんわね」
「少し陣の形が歪な気がしますが」
「それでもいいのでは？」
第二陣の数が多いことにだ。軍師二人は言った。
しかしだ。それでもなのだった。
「まあ。それでもいいと思います」
「董卓の軍が大勢で来ても戦えますから」
それでいいとする二人だった。そうした話をしてだ。
おおよその方針や陣が決まった。これで会議は終わった。
曹操は己の陣に帰ってだ。まずは溜息だった。
「全く。予想はしていたけれど」
「麗羽殿ですか」

「また前線に出ようとされていたのですね」
「そうよ。その通りよ」
曹操はありのまま夏侯姉妹に答えた。
「自分が先陣に出てよ」
「ううむ、やはり」
「そう言われましたか」
「止めたわよ。それで先陣は劉備になったわ」
彼女にだというのである。
「彼女がね」
「劉備殿がですか」
「先陣なのですか」
「そうよ、先陣になったのよ」
劉備がだと話すのだった。
「まあ妥当ね」
「そうですね。とりあえずは」
「劉備殿でいいかと」
「あの娘はあまり戦は好きではないみたいだけれど」
それでもだというのだ。
「周りの将や軍師がいいからね」
「そうですね。人材が揃っています」
「非常に」
「だから問題はないと思うわ」
また話す曹操だった。
「ただね。厄介なのは」
「麗羽様は間違いなくです」
「何かあれば」
夏侯姉妹もそれはわかっていた。袁紹のことがだ。
「前に出られようとします」
「それこそ弓矢の嵐の中でも」
「あの娘は昔からそうなのよ」

曹操は袁紹についてさらに話していく。
「すぐに前に出るから」
「将としては当然なのですが」
「極端に過ぎますね」
「どういう訳かどんな状況でも怪我一つしないけれど」
袁紹はだ。どうやらかなりの強運らしい。それでだというのだ。
「それでもよ。盟主が最前線に立つなんてしないから」
「いえ、私はそれは」
夏侯惇はここで言うのだった。
「そういう戦いですから」
「貴女はそれでいいのよ」
曹操は彼女はそれでいいとした。しかしであった。
袁紹についてはだ。あくまでこう言うのであった。
「あの娘は牧であり盟主よ。将の将だからね」
「そうですね。前線に出られてはなりません」
夏侯淵がそれを言う。
「そうおいそれとは」
「何かあれば全力で止めるから」
曹操は本気だった。
「それこそね」
「それでは私も」
夏侯淵も言うのだった。

# 第七十六話　群雄、一同に集うのことその九

「その際は」
「全く。あの娘の家臣も大変ね」
曹操はこんなことも言うのであった。
「止めるだけでも厄介だから」
「全くです」
「あの娘らしいけれどね」
しかしだった。曹操は微笑みもした。
「その自分がしないと気が済まないっていうのはね」
「幼い頃からですしね」
「あの方のそれは」
「得意でないことはとことん駄目だけれど」
これもだ。袁紹の特徴だった。何かと中庸に欠ける人物なのだ。
「やれることはやれるからね」
「そうですね。今回もですね」
「それがよい方に出ることを望みます」
こんな話をしてだった。曹操はだ。二人に対して告げた。
「では私達は二陣よ」
「そうして麗羽殿の軍と」
「共に」
「ええ。私は策の立案とあの娘の抑えに回るから」
何気にだ。非常に困難な仕事ばかりである。
「軍の指揮は御願いね」
「はい、わかりました」
「それでは」
「問題は劉備もだけれど」
劉備の話もだ。ここでする曹操だった。
「あの娘がどれだけ頑張ってくれるかね」

「それは安心していいと思います」
「劉備殿に関しては」
曹仁と曹洪がこう話してきた。
「数こそ五万と少ないですが」
「それでも兵も将帥も質がいいですから」
「そうね。じゃあ任せていいわね」
曹操も二人の言葉に納得した。しかしであった。
ここでだ。曹操はまた言うのであった。
「それでも麗羽は何かあれば絶対に前に出ようとするからね」
「何なら引っ張ってでも連れ帰られますか？」
夏侯惇がいささか強硬なことを言った。
「陣中に」
「本気でそれを検討するわ」
曹操は真顔で言った。
「何が何でもね」
「やれやれですね」
夏侯淵はいつもの口癖を出した。
「麗羽にも。まあ後であの娘の陣に行くから」
「はっ、それではその時は」
「御供します」
四天王達が言いだった。そのうえでだ。
曹操達も戦にその心を向けるのだった。
先陣を務めることになった劉備はだ。彼女達の陣に戻り主だった面々にこのことを話した。するとだ。
まずだ。張飛が満面の笑顔で言うのだった。
「それなら思う存分大暴れしてやるのだ」
「そうだな、派手にいくぜ」
馬超もその右手を拳にして言う。
「董卓軍の奴等片っ端からぶっ飛ばしてな」
「ふむ。我等の腕の見せどころだな」

趙雲は楽しげに微笑んで話す。
「では翠よ」
「んっ、あたしか？」
「戦の前にだ。共に褥に入ろうか」
「おい、何でそんな話になるんだよ」
「駄目なのか？私が相手では」
妖しげな笑みを浮かべてだ。馬超に言うのである。
「愛紗を交えてだ。三人でだ」
「だから何故そこでいつも私も入るのだ！？」
関羽が困った顔で抗議する。

# 第七十六話　群雄、一同に集うのことその十

「私はそういう趣味はないといつも言っているだろう」
「あたしもだよ。女同士でするのってよ」
「そもそも御主そういう経験はないだろう」
「それで何でそう誘えるんだ！？」
「気にするな」
強引にこう言う趙雲だった。
「まあはじめてだから余計にというのもあるが」
「それであたしかよ」
「私もなのか」
「はじめては生娘としたいのだ」
そんなことも言う趙雲だった。
「実はな」
「また妙なことを言うのう」
厳顔はそんな趙雲の言葉を聞いて首を傾げさせた。
「はじめては経験のあるおのことするものではないのか？」
「そういう考えもあるだろうが」
「それでも御主はおなごがよいのか」
「私はどちらでもいけるのだ」
男でも女でもいいというのだ。
「だが。翠や愛紗を見ているとだ」
「食指が動くか」
「いいと思う」
実際にだ。そう思うというのである。
「どちらも顔が整いだ」
「確かにな。それぞれ型は違うがかなりの美形じゃ」
「しかも髪がいい」
関羽はそれで有名だが馬超もだというのだ。

「長い髪がな。奇麗なものだ」
「同じおなごから見ても羨ましい位じゃな」
「しかも胸も輿も艶かしい」
二人を見る目がだ。次第に妖しいものになっていく趙雲だった。
「美味であることがわかる」
「だから食うってのかよ」
「私達をか」
「この反応もいい」
それも楽しんでいるのがだ。やはり趙雲だった。
「さて、それでこれからだが」
「あたしは嫌だからなっ」
「私もだ」
あくまで拒否する二人だった。
「そんなのまだな」
「まだ早いっ」
「あら、私はもう貴女達の頃には」
黄忠は優しい微笑みと共にこう言うのだった。
「あの人と一緒だったわ」
「そうじゃったな。紫苑は相思相愛だったのう」
「あの頃が懐かしいわ」
「そうじゃのう。あの頃はあの頃で楽しかったわ」
「そうね」
「それで桃香様」
彼女達がそんな妖しいやり取りをしている間にだ。魏延は。
劉備のところにそっと寄ってだ。こんなことを囁くのだった。
「まだ出陣までに時間がありますね」
「ええ、ちょっとだけれど」
「どうでしょうか。これから水浴びに」
それに誘うのだった。
「近くに泉がありますし」

「そこでなのね」
「はい、滝になっています」
そこに行こうというのである。
「如何でしょうか、今から」
「そうね。それじゃあ」
「はい、ではご一緒に」
「あの、それはちょっと」
ところがだ。ここでだった。
孔明が困った顔をしてその魏延に言うのだった。
「御二人だけで行かれるのは」
「駄目だというのか？」
「何時董卓さんの刺客が来るかわかりません」
「桃香様は私が御護りしているのだぞ」
「それでもです」
慎重に言う孔明だった。
「今は焔耶さんだけではです」
「危険だというのか」
「別の意味でも危険だし」
馬岱はこんなことを呟いた。

# 第七十六話　群雄、一同に集うのことその十一

「桃香様も」
「えっ、私が？」
「だから焔耶と二人きりっていうのは」
「馬鹿な、私は桃香様をあくまで御護りするだけだ」
それはムキになって力説する魏延だった。
「そんなことはだ」
「けれど桃香様の裸は見たいのよね」
「そうだ、その下着姿もだ」
ついつい本音を言ってしまう魏延だった。
「今日は桃だな。昨日の白もその前の薄い青もいいが桃香様はやはりだ」
「何でそこまで知ってるのよ」
「当然だ。私は桃香様の護衛役だ」
つまり親衛隊なのだ。劉備の近衛は実際に彼女が務めている。
「その着替えの時もだ」
「護ってるってのね」
「うむ、御傍でな」
「まじまじと見てるのね」
「何時見ても素晴らしい」
魏延の言葉が恍惚としたものになっている。
「やはり桃香様は最高の美女だ」
「そんなあ、言い過ぎよ」
劉備だけが気付かずに能天気に笑って言う。
「私そんなに可愛くないわよ」
「しかしあの張角にそっくりだしな」
「違うのは声だけで」
こう話すリョウとテリーだった。

「そう簡単には見分けられないな」
「声を聞かないとな」
「あのトップアイドルとだからな」
「つまりは」
可愛いというのだ。それが結論であった。
しかし当人だけはだ。こう言うのだった。
「焔耶ちゃん褒め過ぎよ」
「いえ、それは違います」
魏延は顔を真っ赤にさせた真剣な顔で言い切った。
「桃香様はです。天下一の方です」
「そうかなあ」
「私が言うのですから間違いありません」
「確かに桃香さんは可愛いけれど」
それはだ。馬岱が見ても言えることだった。
しかし彼女はだ。このこともわかっていた。それでこうも言うのだった。
「ただ。焔耶はね」
「私は。何だ」
「少し入れあげ過ぎよ」
そうだというのだ。
「もう桃香様にお熱なんだから」
「だから私にあるのは忠義だけだ」
「忠義以外にもあるでしょ」
「では何があるというのだ」
「さあ。自分が一番わかってることじゃないの？」
「だから何が言いたいのだ御前は」
「さてね」
こんなやり取りをしながらだった。彼等はリラックスして先陣としての出陣を待っていた。連合軍がだ。いよいよ始動しようとしていた。

そのことはだ。闇の中にも伝わっていた。その中でだ。
姿を消している筈の彼女がだ。こう言うのだった。
「さて、それでだけれど」
「はい、これからですね」
于吉がだ。彼女に応える。彼もまた闇の中にいるのだ。
「遂に各地の牧達が挙兵しましたね」
「ええ。それで彼女達と戦うのね」
「勿論」
その通りだと答える于吉だった。
「そしてここで彼女達をです」
「全員滅ぼすのね」
「そうすれば貴女にとっても楽ですね」
「彼女達がいなくなればもう何も恐れるものはないわ」
女はだ。楽しげな笑みを浮かべて述べていく。
「張譲も。どうということはないわ」
「彼もですか」
「所詮は宦官、宮中以外のことは何も知らないわ」
「その様な存在は貴女にとってはですか」
「倒すにあたってはまさに赤子の手を捻る様なものよ」
そうだというのである。
「何一つとして心配はしていないわ。そのことに関して」
「そしてその後で」
「王朝を築くわ。私の王朝を」
話がだ。そこに至った。
「そう、国名は」
「何にされるおつもりですか？」
「晋ね」
一言だった。それが彼女の創る国だというのだ。

# 第七十六話　群雄、一同に集うのことその十二

「人の治めない国にするわ」
「オロチの国にされますか」
「常世の国でもあるわね」
「はい、そして常に乱れています」
于吉もまた楽しげに笑って彼女に話すのだった。
「そうした国にしていきましょう」
「私にとって泰平なぞ苦痛でしかないわ」
彼女にとってはだ。そうではないというのだ。
「戦乱と殺戮こそがいいのよ」
「民の怨嗟と血が」
「ええ。それに覆われた国にしていくから」
「だからこそ我々と行動を共にされるのですか」
「その通りよ。私一人で漢王朝を滅ぼし」
つまり簒奪だ。それをしようというのである。
「そして新たな国を築くわ、その晋をね」
「いい名前ですね」
于吉はその国名にだ。微笑んで述べた。
「その破壊と殺戮を感じさせてくれる名前です」
「貴方と会ってその建国がさらに容易になりそのうえで」
「はい、異界からも」
「オロチに刹那、それに朧」
「アンブロジアもまた」
「面白い世界になるわ」
彼女にとってはだ。そうなるというのだ。
その話をしてだ。彼女はこうも言った。
「例えば私に逆らう者がいれば」
「どうされますか、その場合は」

「皆殺しにし」
そしてだ。それからだというのだ。
「そのうえでその屍で門を築くわ」
「京観ですね」
「それを築くわ」
こう言うのであった。楽しげにだ。
そうした話を闇の中でしていく。于吉はさらにだった。
彼女にだ。さらに楽しげに話していくのであった。
「ではこの戦はです」
「私は何もしなくていいのね」
「御覧になっていて下さい」
それでいいというのである。
「若しそれが失敗すればです」
「その時に出ればいいのね」
「はい、その時にです」
出ればいいというのだ。
「その時にです」
「ことが果せなかった時も考えているのね」
「勿論です。策は幾つも用意しておくものです」
「その通りね。私もそうするわ」
「流石です。貴女もまたわかっておられるとは」
「そうでなくては大きなことはできないわ」
女はだ。闇の中で笑いながら述べてみせた。
「国を。魔の国を築くことはね」
「そうですね。これをしくじってもです」
「策は幾らでもある」
「その通りです。では」
「今は落ち着いて見させてもらうわ」
女は于吉に対して述べた。
「そして楽しくね」

「そうして下さい。司馬尉殿」
女の名前をだ。ここで呼んでみせたのだった。
「司馬尉仲達殿」
「ええ、そうさせてもらうわ」
その女司馬尉も微笑んで返すのだった。それは闇の中にある、邪な漆黒の笑みであった。

第七十六話　　完

２０１１・４・１４

# 第七十七話　ビリー、丈に挑みかかるのことその一

第七十七話　ビリー、丈に挑みかかるのこと

曹操は袁紹の陣に来た。そうして彼女と話すのだった。彼女の後ろには主だった将帥達がいる。袁紹もその後ろに彼女の配下を連れている。

「とりあえずもうすぐ出陣するけれど」

「何でして？」

「兵が少ないわね」

こうだ。袁紹を見て言うのであった。

「十五万なのね。貴女が出した兵は」

「そうでしてよ」

「二十万は出せるのではなくて？」

こう袁紹に問うのである。

「違うかしら」

「わたくしのところも色々あるのでしてよ」

袁紹は思わせぶりな笑みを浮かべて曹操のその指摘に応えた。

「だからでしてよ」

「色々、ねえ」

「その通りですわ。それで五万程を予備に置いていますのよ」

「その予備は何処にいるのかしら」

曹操は袁紹に対してさらに問うてみせた。

そのうえでだ。彼女の後ろにいるその配下達を見てこう言った。

「しかも？義と審配がいないわね」

「それがどうしまして？」

「貴女の軍の武の五人衆の一人、しかもまとめ役がいないのね」

？義の袁紹軍での位置はだ。曹操も把握しているのだ。

「しかも参謀の一人であり護衛役の審配までなのね」

「事情があって来られないのでしてよ」
「留守番というのね」
「そういうことですわ」
こう強引に言う袁紹だった。
「わかりましたわね」
「そうね。一応話は聞いたわ」
曹操は見透かした様にして袁紹に言葉を返した。
「そういうことなのね」
「その通りですわ」
「とにかく。貴女の十五万と私の十万がね」
「この連合軍の主力になりますわね」
「その通りよ。共同作戦でいくわよ」
「わかっていますわ。それなら」
このこと自体は簡単に決まった。
そのうえで双方の将帥達は互いに話し合う。軍の細かいことに至るまでだ。その雰囲気はよかった。しかしである。
そうした話し合いが終わってからだ。徐晃がだ。首を捻りながらこう言ったのだった。
「あの、華琳様」
「ええ、おかしいって言うのね」
「袁紹軍の面々何か隠してません？」
こうだ。いぶかしみながら言うのである。
「本当に」
「その通りよ。？義達がいないことね」
「それに袁紹軍の兵が少ないです」
徐晃はこのことも指摘した。
「そのことをあの緑の髪の」
「文醜ね」
「あの娘に聞こうとしたらすぐに何か話そうとして」
それでだというのだ。そこからだ。

「慌ててあの黒髪の娘に口を塞がれてましたけれど」
「顔良ね。あの二人は相変わらずね」
「あの二人のそういうことを見ていたら」
どうかというのである。徐晃はそういうものを見て察したのである。
「絶対に何か隠してますね」
「歌、貴女は麗羽の軍と一緒に何かするのははじめてよね」
「はい、実は」
「そうね。それなら知らないのも無理はないわね」
曹操は徐晃にこう言うのだった。彼女に顔を向けてだ。
「麗羽はね。誰が見てもわかるようなことをあえて隠したりするのよ」
「あえてですか」
「どうせあれよ。あの二人がいないのはね」
?義と審配のことである。
「涼州の方に送っているのよ」
「では五万の兵も？」
「そうよ。私達が董卓の主力の相手をするわね」
「その隙を衝いてですか」
「董卓の本拠地擁州を五万の兵で襲うつもりなのよ」
「成程、戦略としては妥当ですね」
「それを考えてなのよ。もっともこれは内緒のことよ」
言わないというのである。連合軍の重要な戦略だからだ。

# 第七十七話　ビリー、丈に挑みかかるのことその二

「だからね」
「あえて言わないことですか」
「そういうこと。もう春蘭達はね」
「わかっています」
「長い付き合いですから」
夏侯姉妹の言葉である。
「何かを隠しているのは察しました」
「それはすぐに」
「それをあえて言わないの。董卓に漏れたらことだしね」
「わかりました。それでは」
「さて、何はともあれあの娘との打ち合わせは終わったわ」
曹操はそのことはよしとした。しかしだ。
荀?を見るとだ。彼女はだ。
異様に怒っていた。頬を膨らませている。その彼女を見て言うのだった。
「やっぱり。会いたくなかったのね」
「そうです。陳花だけは好きになれません」
こう言う荀?だった。
「あの娘と会うのは不吉そのものです」
「黒猫だからね、あの娘は」
「小さい頃から大嫌いなんです」
姉妹同士でもなのである。
「全く。私が右だと言えば左で左と言えば右で」
「とにかく正反対よね、貴女達って」
「それで声は異様に似ていて」
もっと言えば誰もが同じ声に聞こえる程である。
「服装なんてただの色違いで」

「そういうことが余計になのね」
「はい、本当に嫌いです」
両目を怒らせてだ。怒りのオーラを放ちながらの言葉だった。
「何でいるんでしょう、あの娘が」
「まあ麗羽の軍師の一人だから」
それは曹操が指摘した。
「仕方ないんじゃないかしら」
「出陣しているだけでも迷惑です」
「いや、それは嫌い過ぎだろ」
ここで覇王丸が突っ込みを入れた。彼も同行しているのだ。
「幾ら何でもな」
「とにかく嫌いなのよ」
あくまでこう言う荀?である。
「姉妹だから余計によ」
「そうなんだな」
「そういえばあんた兄弟いたかしら」
「いや、俺に家族はない」
覇王丸はだ。己の事情をこう話した。
「十兵衛さんとはまた違う事情だからな」
「むっ、おじさんとは違うの」
「そこでおじさんと呼ぶか」
その十兵衛もいる。彼は荀?に対して話すのだった。
「確かにわしはそういう歳だが」
「何かそっちの方が呼びやすいから」
「それでだというのだな」
「そうよ。それでよ」
こう話す荀?だった。
「まあとにかく。問題はね」
「姉妹の人とは絶対に会いたくないってんだな」
「もう二度とね。そうしたいものよ」

こう話してだった。荀?はだ。
とにかくその姉妹との仲の悪さを見せるのだった。そしてだ。
争っているのはだ。彼等だけではなかった。
ビリーがだ。たまたま丈を見てだ。やけに怒っていた。
「よりによってこんな場所で会うなんてな!」
「何だよ、ここでも怒るのかよ」
「当たり前だ、リリーは渡さないって言ってるだろ!」
「あのな、妹さんが大事なのはわかるけれどな」
「リリーは俺の宝だ!」
ビリーは棒を両手に持ち丈を見据えて言う。
「誰にも渡すか!ましてや手前みたいな馬鹿にはな!」
「おい、馬鹿だから渡さねえっていいうのかよ」
「じゃあ聞くぞ」
ビリーは丈を睨みながら問う。
「織田信長は何で死んだ?」
「風邪だろ?」
「やっぱり手前は馬鹿だ」
ビリーは丈の今の答えをこう評した。

# 第七十七話　ビリー、丈に挑みかかるのことその三

「それもどうしようもねえ馬鹿だ」
「だから何でそう言えるだよ」
「何処の世界に織田信長が風邪で死んだって馬鹿がいやがる！」
「っていうか御前イギリス人なのに何で織田信長知ってるんだ！」
「うるせえ！じゃあもう一回聞くぞ！」
「今度は何だ！」
「ロミオとジュリエットを書いたのは誰だ！」
今度もだ。常識の問題だった。
「誰が書いた」
「んっ？永井豪だろ」
「３０÷５は幾つだ」
「３だ」
また間違える丈だった。
「だからそんな簡単な問題出して何だってんだよ」
「簡単だと思うんだな」
「ああ、他にも出してみろよ」
「ディスイズアペン書いてみろ」
「ったくよ。簡単な問題ばかり出しやがってよ」
丈はぶつくさ言いながらビリーの質問に答え続ける。今度は足元にアルファベットを書いていく。しかしそこに書いた文字は。
「ほら、これでいいな」
「ザットアーペンになってるぞ」
「だからディスイズアペンだよ」
「全然違うだろうがよ」
「あれっ、そうか？」
「手前学校の成績どんなのだった？」
「体育以外は一だったぜ」

狙っても取れない成績である。
「体育は五だったけれどな、いつもな」
「高校ちゃんと卒業してるんだよな」
「テストは名前書いてたらそれでよかったからな」
「やっぱり駄目だ」
ビリーはその結論を出したのだった。
「幾ら何でも手前にリリーは渡せねえ」
「俺の何処が悪いってんだよ！」
「普通の頭になってから言え！」
これでもだった。ビリーも譲歩していた。
そしてだ。こう言うのだった。
「いいな、小学校レベルの成績ですらねえだろうが！」
「俺これでも高校出てるんだぞ」
「だから名前書いたら赤点じゃない学校だろうがよ」
「そういや赤点の奴いなかったな」
名前を書けばそれだけで合格ならばだ。流石にいる筈もなかった。
「皆勉強してたんだな」
「イギリス人の俺でも手前の日本での学生生活がわかるぜ」
どれだけ勉強が駄目だったがだ。わかるというのだ。
「しかも手前が学校の成績だけじゃねえ」
「何だよ。成績だけじゃねえのか」
「人間としても馬鹿だ」
とにかくだ。丈は駄目だというのである。
「あの挑発もな」
「いかしてるだろ、あの挑発」
「ケツなんぞ見せやがって」
忌々しげに言うビリーだった。彼の挑発についてもだ。
「二度とあんな挑発はするなよ」
「あんないい挑発はねえだろ」
「ああ、じゃあリリーはなしな」

ビリーも言う。
「わかったな」
「無理にでもそっちに話をもってくんだな」
「とにかく人並みの知能身に着けろ」
「だからあるってんだろ」
「自覚しねえってのかよ」
「何を自覚するってんだよ」
こんな不毛なやり取りが続くのだった。そしてだ。
彼等は次第にだ。いがみ合いを続けてだ。
やがて御互いに構えてだ。戦いに入ろうとしていた。
「どうしてもっていうんならな！」
「やるってのかよ」
「手前は何時か絶対に殺そうと思っていた」
よりによってだ。殺すというのである。

## 第七十七話　ビリー、丈に挑みかかるのことその四

「リリーにつく悪い虫は片っ端から始末してやる！」
「何かさっきと言ってること違うじゃねえか！」
「手前はそれ以前なんだよ！」
「じゃあリリーちゃんと一緒になるには手前をやっつけないと駄目なんだな！」
「リリーが欲しかったならな！」
どうかというのである。
「俺を倒してからにするんだな！」
「よし、じゃあここでだ！」
「地獄に落としてやる！」
こうして二人の戦いがはじまった。まずはだ。
ビリーが棒をだ。前に突き出したのだった。
「ヒアーーーー！！」
するとだ。棒が伸びだ。三段になった。それで中段から攻めるのだった。
だが丈はそれに対してだ。右手を下から上に大きく振ってだ。
「ハリケーーーンアッパーーーーーッ！」
「それか！」
「この技は俺の基本なんだよ！」
「どういう基本だってんだ」
「俺を使ううえで基本なんだよ！」
だから出すというのである。
「わかってると思うがな！」
「それならな！」
ビリーは今度はだった。その棒を使ってだ。
思いきり高く跳んだ。棒高跳びだ。
そこから急降下を仕掛け棒を激しく回転させつつだ。丈に襲い掛

かる。
「これでくたばりやがれ！」
「ふん、そう来るならな！」
「どうするってんだ！」
「タイガーーーーキーーーーーーーック！」
力を溜めてそれからだ。
思い切り斜め上に膝蹴りを繰り出す。全身に気をまとったうえでだ。
それでビリーのその攻撃をだ。相殺したのだった。
ビリーはあらためて着地してだ。そうして丈に言う。
「腕は落ちてないようだな」
「御互いにそうみたいだな」
「こっちの世界で遊んでるって思ってたがな」
「へっ、修業は忘れちゃいないぜ」
「だがな、俺もな！」
ビリーは棒を手にだ。一機に間合いを詰めた。
丈もそれに応えてだ。今度はだ。
接近での打ち合いになった。それもまた激しい闘いだった。
そうした激しい闘いを展開していた。それを見てだ。
関羽がだ。首を捻りながら言うのだった。
「あの二人は何をしているのだ」
「ああ、あれか」
「あの喧嘩か」
アクセルとローレンスがその関羽に話す。しかしその前にだ。
二人はだ。こう関羽に話した。
「俺はアクセル＝ホーク」
「私はローレンス＝ブラッドだ」
「むっ、そういえばだ」
その二人を見てだ。関羽はふとした感じで声をあげた。
「袁紹殿のところにいるな、貴殿達は」

「ああ、そうさ」
「今は袁紹殿のところで厄介になっている」
その通りだと話す二人だった。
「まあ適当にやってるさ」
「それでここにいる」
「成程。それでだが」
「あの二人の喧嘩か」
「そのことだな」
「あの二人はどうしてあそこまで仲が悪いのだ？」
関羽が言うのはこのことだった。
「仇敵同士なのか？」
「ビリーの妹さんにな。丈の奴が手を出そうってしてるんだよ」
「それでなのだ」
こう関羽に話す二人だった。
「ビリーは妹さんを凄く大事にしていてな」
「悪い虫が付かないようにだ」
「ふむ、それでか」
ここまで聞いてだ。関羽も頷くのだった。

# 第七十七話　ビリー、丈に挑みかかるのことその五

それでだ。まだ闘っている二人を見て言った。
「あそこまで仲が悪いのか」
「ああ、まあ放っておいていいからな」
「どうせすぐに終わる」
そうだというのである。
「それでまた明日から喧嘩になるからな」
「気にしては負けだ」
「つまり止めないのか」
「ああ。下手に止めたら怪我するしな」
「全く気にしなくていい」
「そうなのか。むっ、済まない」
急にだ。関羽はここでだ。
ふと気付いた顔になってこう二人に言うのだった。
「私の名前を名乗り忘れていた」
「関羽さんだよな」
「知っている」
二人は既にだった。彼女のその名前を知っていた。
そしてだ。こう彼女に話すのだった。
「山賊退治の黒髪の英雄だったな」
「そして今は劉備殿の第一の臣だな」
「ううむ、完璧だ」
関羽は二人のその返答にだ。感心すらしていた。
「そこまで知っていてくれるか」
「ああ。こうしてまた一緒になったのも縁だな」
「何か食べるとするか」
二人はだ。関羽をそれに誘うのだった。
「西瓜あるぜ」

「ビーフシチューがある」
「ううむ、そちらの世界の食べ物か」
「西瓜は違うだろ」
アクセルがそのことに突っ込みを入れた。
「西瓜はこっちの世界でもあるだろ」
「ビーフシチューのことだが。確かに西瓜も話に入れてしまった」
この辺りはしっかりとわきまえる関羽だった。
「それは済まない」
「別にそれはいいけれどな」
「とにかくだ。食べるか」
「甘えさせてもらっていいか」
関羽は二人に対して尋ねた。
「そうしていいか」
「よし、それじゃあな」
「共に食べるとしよう」
こうしてだった。ビリーと丈を放置してだった。関羽達は西瓜とビーフシチューを楽しみに向かうのだった。そしてその放置されている二人は。
まだ喧嘩を続けていた。彼等は。
「いい加減に死んでくれ」
「それはこっちの台詞だ」
睨み合いながら言い合う。お互い傷だらけである。
そしてそのうえでだ。御互いにだ。
棒から炎を出し特大の竜巻を出してだった。
「超火炎旋風棍！！」
「スクリューーーアッパーーーーッ！！」
この二つの超必殺技を出し合いだった。相打ちで終わるのだった。
そしてその派手な喧嘩が終わってからだ。丈は劉備の陣に戻った。
その傷だらけの有様でだ。彼は言うのだった。
「ったくよ、いい加減認めろってんだよ」

「また喧嘩してたんだな」
「相変わらずなんですね」
「ああ・・・・・って御前等来てるのか」
見ればだ。丈に声をかけてきたのはドンファンとジェイフンだった。
「元気そうだな」
「ああ、丈さんもな」
「相変わらずお元気ですね」
「ああ。ただ随分見ない間に大きくなったな」
丈は話をそれで終わらせた。かなり重要な話をだ。
「成長したんだな」
「丈さんはちょっと若返ってないか？」
「ですよね。少し」
二人もこれで終わらせる。
「まあ何はともあれな」
「こっちの世界でも宜しく御願いします」
「おう、こちらこそな」
丈は歯を輝かせて二人に応える。傷は何時の間にか完治している。
そして完治してからだ。また話す彼だった。

# 第七十七話　ビリー、丈に挑みかかるのことその六

「御前等誰のところにいるんだ？」
「袁紹さんのところだよ」
「そこにいます」
そこだと話す二人だった。
「そこで可愛い女の子と美味い食い物に囲まれてるぜ」
「修業をしています」
「そうか。ビリーの野郎のところか」
先程まで喧嘩していた相手のことを話すのだった。
「そうか」
「そのビリーさんと喧嘩してたんだよな、丈さんは」
「そうなんですね」
「そうだよ。相変わらずとんでもなく強情な奴だよ」
彼から見ればそうなのだった。
「次にあった時は地獄に叩き落としてやるぜ」
「話が何かおかしくなってるだろ」
今度はだ。ビッグベアが来たのだった。そのうえで丈に話すのだった。
「御前も少しは話し合いをしろ」
「全くだ。拳でばかり話すな」
ホア＝ジャイまで来た。
「久し振りに見たと思ったらよ」
「全然変わってないな。ある意味安心したぜ」
「んっ？御前等も来てたのかよ」
丈は彼等の姿を見て声をあげた。
「いるだとって思ってたけれどな」
「ああ、こうしてな」
「気付いたらこっちの世界にいたんだよ」

「その辺り俺と同じだな」
丈にしてもだ。実はそうなのだった。
そして今度はだ。そのことを話すのだった。
「何で俺達こっちの世界にいるんだ？」
「それだな。俺も全くわからねえ」
「俺もだ」
ビッグベアもホア＝ジャイも言うのだった。
「楽しい世界だけれどな」
「食い物は一杯あるけれどな」
「その食べ物ですけれど」
ジェイフンがその食べ物のことを話した。
「妙におかしいですよね」
「焼肉とかチヂミとか食えるってことだよな」
「はい、この時代は中国の三国時代です」
兄に対して話すジェイフンだった。
「ですが普通に食べられますし」
「炒飯とかな。唐辛子使った料理とかな」
「明らかに僕達の知っている三国時代ではないです」
それは間違いないというのだ。
「そのことが気になりますね」
「いや、それ以上にやっぱりな」
「はい、どうして僕達がこの世界に来ているかですね」
「しかも皆いるしな」
ドンファンが見てもだった。その数はかなりのものだった。
「何かおかしなことだらけだからな」
「はい、一番の謎は何故僕達がこの世界にいるのか」
「というか戻れるのかよ」
ホア＝ジャイはこのことを言った。
「元の世界にな」
「どうでしょうか」

それはだ。わからないと答えるしかないジェイフンだった。
「それはどうも」
「わからないな」
ビッグベアが難しい顔で言った。
「そう言うしかないな」
「すいません」
「謝らなくていいさ」
それはいいというのだった。
「何しろどうしてここに来たのか自体がわからないからな」
「そうなりますね」
「まあ色々な奴がいて賑やかだけれどな」
丈はこのことを話した。
「とりあえずはそれを楽しむか」
「そうするか。ってそう簡単に考えていいのか？」
「あれこれ難しく考えたって仕方ないだろ」
ホア＝ジャイに返すその言い方はまさに丈だった。

# 第七十七話　ビリー、丈に挑みかかるのことその七

「だからな。このままな」
「やってくか」
「そうしようぜ」
結局そこに行き着く彼等だった。そうしてだ。
陣の中央においてはだ。リチャードとボブがだった。
ダンスを踊っていた。リチャードはギターを鳴らしボブが踊っている。それはサンバだった。兵達はそのダンスを見て言うのだった。
「へえ、それが異界のダンスか」
「いい感じだな」
「派手でな」
「ああいうのもいいよな」
「だよな」
こうだ。各勢力の兵達が仲良く言うのだった。
「最初は何するだって思ったけれどな」
「へえ、面白いじゃないか」
「俺達も踊りたくなってきたぜ」
「そうですか？」
ボブが踊りながらだ。彼等に笑顔で言うのだった。
「皆さんも踊りたくなったんですね」
「そうだな。それじゃあな」
「俺達もよかったらな」
「一緒に踊っていいか？」
こう実際に申し出る彼等だった。こうしてだった。
彼等も実際にボブと一緒にサンバを踊ってみる。それはだ。
「うん、実際にするとな」
「難しいな」
「ええと、ここをこうやって？」

「こうするのかよ」
「はい、こうです」
ボブは頭を軸に足を大きく開いて回転しながら話す。両手は組んでいる。つまり頭で回転してみせているのである。
「こうします」
「これ、下手したら禿るだろ」
「絶対にそうなるだろ」
兵達はそのことを心配して言う。
「ボブは大丈夫なのか？」
「禿げないのか？」
「僕は禿げないんです」
それは心配ないという彼だった。陽気に笑って話す。
「だからできます」
「俺達はそれはな」
「ちょっと止めておくな」
兵達は尻込みしてだ。それはいいというのだった。
そしてだ。こうも話すのだった。
「他のにするな」
「そうするな」
こう言って彼等はそのダンスはしなかった。そしてその彼等の横でもだ。
別の催しが行われていた。それは。
「あ、そおれ」
狂死郎であった。
舞を舞う。その舞いはだ。
「いいなあ、扇と薙刀を使ったな」
「派手で華麗でな」
「いい舞だよな」
兵達は彼に対してもいいものを見出しているのだった。
そうしてだ。こう本人にも言うのだった。

「いいぜ、あんた」
「最高だよ」
「確か仕事それなんだよな」
「うむ、そうじゃ」
その通りだと答える狂死郎だった。しかしであった。
彼はだ。ここでこう言うのであった。
「だがわしはまだ」
「まだ？」
「まだっていうと？」
「親父殿は超えてはおらん」
それはだ。できていないというのだ。
「どうもじゃ。それはまだじゃ」
「えっ、それでか？」
「それでだっていうのか」
「まだできていないのか」
「そうよ。それはまだじゃ」
残念な顔でだ。彼は言うのだった。

# 第七十七話　ビリー、丈に挑みかかるのことその八

「まだできてはおらんのじゃ」
「その舞でできてないってな」
「あんたの親父さんって凄かったんだな」
「そこまでの人だったんだ」
「我が目指すものなり」
そうだというのである。
「そして必ず乗り越えたいものよ」
「生涯の目標か」
「そういうことか」
「左様、目指すものがあればさらに高みに迎えるもなのであろう」
自分でそれを分析しての。そうしての言葉だった。
「ではわしはじゃ」
「いいな、その目指すってのがな」
「それがいい結果になるぜ」
「絶対にな」
「よい結果にしてこそであろうな」
また自分で語るのだった。
「では。さらに舞うぞ」
「ああ、見させてもらうな」
「今度の舞いもな」
こうしてだった。彼等は狂死郎の舞を見ていくのだった。
他にもだ。ダックもだった。ダンスを踊っている。そのうえでこんなことを言うのであった。
「いいねえ、祭りがはじまるぜ」
「何か色々いるからな」
夜血がその彼に言うのだった。
「あんたは俺達より後の世界の人間だよな」

「そうさ、あんた日本人だな」
「ああ、そうだ」
その通りだと答える夜血だった。今はあの殺伐さはない。
「糞みてえな場所に住んでるさ」
「糞みてえなねえ」
「何時か出たいぜ」
そしてだ。こんなことを言うのであった。
「二人でな」
「二人？」
「惚れた相手がいるんだよ」
それでだというのだ。
「それでな」
「へえ、あんたにもそういう相手がいるんだな」
「ただ。何処に行くかはな」
「それは決めてないか」
「何処がいいだろうな」
こうダックに尋ねるのだった。するとそこにだ。
灰人が来てだ。こんなことを言うのだった。
「よお、それならな」
「それなら？」
「俺と一緒にある国に行かないか」
「ある国って何処だよ」
「アメリカって国だよ」
そこだと言うとだ。ダックが言うのだった。
「俺の国だな」
「何だ、あんたの国か」
「ああ、そこに一緒に行くか？」
灰人はこう夜血に話すのだった。
「そうするか」
「そうだな。あそこにいてもな」

「何もならないだろ」
「あんたもそうだな」
夜血は灰人を見て言った。
「それは」
「ああ、俺もな」
実際にだ。彼も暗い顔になって言葉を返す。
そうしてだ。こう返すのだった。
「あんな場所にあれ以上見てもな」
「仕方ないよな」
「それじゃあだな」
「あの坊さんに言われたさ」
ここで灰人のその言葉が変わった。そうしてだった。
「アメリカに行けってな」
「そう言われたんだな」
「だから俺は帰れたらな」
どうするか。そうした話になった。

# 第七十七話　ビリー、丈に挑みかかるのことその九

「アメリカに行くぜ」
「じゃあ俺もあいつを連れてな」
「三人で行くか？」
「そうするか」
そうした話をするのだった。
「そしてあんな街からな」
「出るか」
「詳しいことは知らないけれどな」
ダックはだ。二人の話を聞いてふと言った。
「それでもあんた達も色々あるんだな」
「まあな」
「それは否定しないさ」
二人はその暗い顔でダックの言葉に返す。
「俺達が生まれ育った街だけれどな」
「何の愛着もないさ」
「所詮屑の溜まり場さ」
「そう言う俺達もだけれどな」
そうした世界に住む者特有のだ。卑屈さも見せてだ。
彼等はだ。こんなことも言うのだった。
「そんな中で蔑まれて生きてるんだよ」
「この血のせいでな」
「んっ、そういえばあんた」
ダックはだ。灰人のその言葉であることに気付いた。
彼の髪や肌を見てだ。そうして彼に話した。
「純粋なアジア系じゃないな」
「ああ。俺の親父はな」
「白人か」

それだというのだ。
「それだな」
「そうだ。俺の親父は白人らしいんだよ」
「はっきりわからないんだな」
「誰かまではな」
「そうか」6
「あんたは何も思わないんだな」
灰人はダックのその何でもないという態度を見て述べた。
「俺のこのことを聞いてもな」
「それは俺だけか？」
「あんただけかって？」
「他の奴もそうだろ」
ダックはこう灰人に言い返すのである。
「そうだろ、それはな」
「そうだな。言われてみればな」
「この世界の奴も俺達の世界の奴も同じだよ、それは」
「俺の肌がどうとか髪がどうとかか」
「そんなことはどうでもいいんだよ」
そうだというのだ。
「大事なのはあんたがどう思ってどうするかだよ」
「俺がか」
「俺の肌は黒いだろ」
ダックはふとこんなことを話した。自分のことをだ。
「そうだろ、黒いだろ」
「そうだな。確かに黒いな」
「この肌の色だってな。言われたんだよ」
ダックは笑いながらだ。灰人に対して話すのである。
「肌が黒い奴はな。除け者にされたりするんだよ」
「アメリカってのはそういう国か？」
「そういう奴もいるってこそさ」

そうした人間ばかりではないとも話すのだった。
「全部が全部そうじゃないさ」
「俺の街じゃ殆んどの奴がそうだった」
「だったな。ひでえものだったな」
夜血もそれを話すのだった。
「あんたが受けてきた仕打ちはな」
「見ていたな、あんたも」
「ああ。俺はそういうのは嫌いだっていうかな」
夜血はだ。その充血している目を暗くさせてだった。
そうしてだ。彼もまただと言うのだ。
「俺も同じだったからな」
「そうだな。あんたも実の親はわからなくてな」
「へっ、親がどうとかっていうだけでだよ」
二人でだ。自嘲、いや自分達を否定している街に対してだ。嘲笑をして話すのだ。
「俺達は色々言われてきたんだよ」
「それでだ。俺達はそういう奴等を叩き斬る為にだ」
「今の剣技を身に着けた」
「そういうことがあったんだよ」
「今まではそうなんだな」
ダックは彼等の過去をだ。過去だというのだった。

# 第七十七話　ビリー、丈に挑みかかるのことその十

「そうなんだな」
「？それだけか？」
「そうなんだ、ってだけか」
「そうさ。確かに俺の肌だって黒いさ」
ダックは陽気に笑いながら二人に話していく。
「けれどそれでもな。楽しくやってるんだぜ」
「楽しくか」
「やってるんだな」
「ああ、そうだよ」
笑顔で話す彼だった。
「それ以上に楽しくやってるさ。むしろ肌の色がどうかとか言う奴なんて殆んどいないさ」
「それがアメリカか」
「そういう国なんだな」
「まあそうなるな。あんた達の時代は違うけれどな」
ダックの時代よりもだ。人種問題が露わになっている時代だったのだ。
そのことはダックもわかっていた。しかしそれでもだというのだ。
「それでもな。その街が嫌ならな」
「アメリカにか」
「行けっていうんだな」
「これからのことだよ」
それを話すのだった。彼が話すのはこのことだった。
「大事なのはあんた達がこれからどうするかだよ」
「それか」
「これからか」
「明るく楽しくな」

ここでも笑顔のダックだった。
「やっていけばいいんだよ」
「じゃあ俺達もか」
「やれるんだな」
「ああいう奴もいるしな。似た様な時代だろ」
ダックはだ。彼等のところに来るガルフォードを指し示した。彼はだ。
明るく笑って三人のところに来てだ。こう話すのだった。
「何か暗いな。どうしたんだ？」
「あんた忍者だったな」
「そうだったな」
夜血と灰人はそのガルフォードにこのことを問うた。
「一人で日本に来て身に着けたんだな」
「そうだったんだな」
「ああ、そうだよ」
その通りだとだ。ガルフォードは笑顔で三人に話すのだった。
「それで忍者になったんだよ」
「その時に色々言われなかったか？」
「肌がどうとか髪がどうとかな」
「そんなことは気にしなかったからな」
ガルフォードはだ。そうだったのである。
彼はやはり明るくだ。二人に話すのである。
「俺はそれよりも忍者になりたかったからな」
「忍者にか」
「他の国の奴なのにか」
「そうさ。目は青いけれどそれでも大和魂は身に着いたと思ってるさ」
「それだよな」
ガルフォードの話をここまで聞いてだった。ダックは言うのだった。

「結局あれなんだよ。心の持ちようなんだよ」
「それでどうしていくか」
「それか」
「街が嫌なら出て行ってな」
それはもうそうした方がいいというのであった。どうしようもないとだ。ダックは二人の話からそのことを悟ったからである。それでだ。
しかしだ。やはり彼は二人にこう言うのを忘れなかったのである。
「それでだよ」
「これからか」
「それと俺達がどう思うかか」
「それが大事だからな。しっかりとしなよ」
「まだ完全には頷けないけれどな」
「少し無理があるがな」
それはだと話す二人だった。しかしだ。
彼等はだ。少しだけ明るい顔になってだ。こう話すのだった。
「それでもな。この世界でやっていってな」
「帰られたら。考えるか」
少しだけ前向きになれたのだった。そんな二人を見てだ。

# 第七十七話　ビリー、丈に挑みかかるのことその十一

ガルフォードはだ。笑顔で言った。
「やっぱり人間前を見ないとな」
「ああ、俺だってな」
ダックもだ。明るく言うのだった。
「今度こそテリーの奴に勝つぜ」
「あんたのライバルだっていうんだな」
「ああ、そうさ」
笑ってだ。こう返すダックだった。
「やってやるぜ。俺はな」
「おっ、ダックか」
いいタイミングでだ。テリーが出て来た。
そうしてだ。彼からダックに言うのだった。
「久し振りにやるか？」
「ああ、やるか」
ダックも笑顔で返すのだった。
「それじゃあな」
「やるか」
「今度は俺が勝つぜ」
「へっ、今度も俺が勝つからな」
こんな話をしてだった。二人は明るく闘うのだった。
そんな明るい世界でもあった。そしてだ。その中でだ。
彼等は出陣の時を迎えていた。その時は確実に近付いてきていた。
だが、だ。皆こんな有様だった。
「ううむ、困った」
「そうだな」
「ここ何処なのよ」
李の言葉にだ。リックと香緋が言うのだった。

「道に迷うとはな」
「困ったわね」
「済まない、私はどうもだ」
李はだ。困った顔で二人に話すのだった。
「方向音痴なのだ」
「あまりそうは見えないがな」
「意外ね」
「さて、ここは何処だ」
李は困り果てた顔で周囲を見回す。周りには何も見えない。全くの荒野だ。
その中でだ。三人はそれぞれ周囲を見回して話すのだった。
「許昌の近辺らしいが」
「陣地も見えないが」
「本当に一体何処なのかしら」
そしてだ。ここでリックは李に対して言うのだった。
「あんたは中国人だな」
「うむ、そうだが」
「中国人なら中国の地形は知っていないのか」
「残念だが中国は広い」
李がここで言うのは中国の広大さだった。
「私も。だから」
「そうか。わからないか」
「それに私はだ」
まただ。自分のことを話す李だった。
「方向音痴なのだ」
「だからわからないか」
「こうなったのね」
香緋もここでわかったのだった。
「成程な」
「中々洒落にならないことだけれど」

「とにかく陣に戻ろう」
李は真剣な面持ちで二人に話す。
「そうするとしよう」
「そうしたいのは山々だが」
「本当に何処なのかしら」
こんなことを話しながらだった。彼等はだ。
あてもなくさすらおうとしていた。しかしここでだ。
周泰が来てだ。こう彼等に声をかけたのである。
「あれ、どうしたんですか？」
「どうしてとは」
「それは」
「はい、何かあったんですか？」
何も知らないといった顔でだ。周泰は三人にまた話した。
「こんな場所で一体」
「少し散歩していたらだ」
李が困った顔になりその周泰に話す。

# 第七十七話　ビリー、丈に挑みかかるのことその十二

「ここに来ていた」
「えっ、ここにですか」
「何故か陣を出ていた」
そうだったというのである。これは本当のことだ。
「どうしてかはわからない」
「俺もだ。一緒にいてだ」
「ここにいたのよ。気付いたら」
リックと香緋もだ。周泰にこう話す。
「それにしてもここは」
「何処なのかしら」
「ええと、迷子になられたんですね」
周泰は三人の話を聞いてだ。すぐにこのことを察した。
そしてだ。そのうえでこう話すのだった。
「それでしたら」
「それでしたら？」
「私物見からの帰りでして」
自分のことを話してのことだった。それからだった。
「今から陣に帰りますけれど」
「それだったら。悪いけれど」
香緋がその周泰に話すのだった。
「陣まで連れて行ってくれるかしら」
「はい、いいですよ」
満面の笑みで答える周泰だった。
「そうさせてもらいますね」
「済まない」
李がその周泰に礼を述べる。
「それでは。今から」

「陣は何処なのだ」
「こっちです。では一緒に」
周泰は笑顔で述べた。そうしてだった。
彼等は陣に戻った。するとである。
そこではだ。于禁がだ。皆と一緒に札での遊びをしているのだった。
「あっ、皆お帰りなの」
「はい、只今帰りました」
周泰が笑顔で応える。
「ところで皆さん何をされてるんですか？」
「ポーカーなの。それをしてるの」
「俺が教えたんだよ」
こう話すのはブラックホークだった。見れば彼が一緒にいる。
「トランプをな」
「ああ、トランプね」
香緋がそれを聞いて言った。
「それしてるの」
「これかなり面白いの」
于禁は笑顔で話すのだった。
「もう病みつきになるの」
「いや、そんなに楽しいか？」
マキシマがこうその于禁に言う。
「こんなの何でもないだろ」
「皆普通にやるぜ」
ケビンもこう言う。
「こんなのな」
「それでこんなに楽しいって」
「そうか？」
ブラックホークとマキシマがまた言う。
「俺達の世界じゃな」

「普通にやってるけれどな」
「そうなの？こんな面白いのが普通になの」
「そうだけれどな」
「普通にな」
「ううん、あっちの世界って凄いの」
于禁はあちらの世界にだ。興味を見せていた。
そしてだ。こんなことを言うのだった。
「沙和もあっちの世界に行ってみたいの」
「ほんまやな」
李典も彼女のその意見に同意して頷く。彼女もトランプに興じている。
「あっちの世界もごっついおもろいみたいだしな」
「ああ、はっきり言って面白いぜ」
「かなりな」
「そうか。面白いか」
楽進もいた。彼女も一緒に遊んでいる。

# 第七十七話　ビリー、丈に挑みかかるのことその十三

「なら一度縁があれば」
「ああ、来るといいさ」
「あっちの世界でも楽しくやろうな」
「そうするとしよう。ただ、だ」
ここで首を捻る楽進だった。そうして言う言葉は。
「貴殿達がこうしてこの国に来ている理由はわからないがな」
「どうしてだろうな、それ」
「本当にな」
それはだ。誰にもわからなかった。
ただこのことはだ。ケンスウこの言葉で終わった。
「まあそれはそのうちわかるやろ」
「そのうちか」
「わかるか」
「ああ、わかるで」
能天気に言う彼だった。
「何も理由なくてこんなに大勢来る筈ないしな」
「まあそやな」
それはその通りだと頷いたのは李典だった。
「理由なくてこんだけうじゃうじゃ来ましたってある意味怖いで」
「そやろ？そやったら今はや」
「面白おかしく過ごすのがええな」
「そういうものか？」
真面目な楽進は彼等のそうした話には眉を少しばかり顰めさせて言う。
「何故来ているのか。考えなくていいのか」
「ええって。考えてわかるもんでもなさそうやし」
だからだと返す李典だった。

「考えてわかるんやったらええけれどな」
「そうなるか。それではだ」
「ああ、トランプだけやたったらあれやし」
ケンスウが笑いながら話す。
「何か食うか？」
「では麻婆豆腐でも」
楽進が言うのはこれだった。
「食べるか」
「それかいな」
「駄目だろうか。若しくは益州風のラーメンだが」
「凪は相変わらず辛いの好きやなあ」
李典がそんな楽進に呆れた様な笑いで言う。
「こうしてトランプしながらそういうのはちょっとなあ」
「では何がいいのだ？」
「肉饅やろ」
ケンスウはそれを推した。
「それがええやろ」
「ふむ。肉饅か」
「それかサンドイッチだな」
ブラックホークはそれを出す。
「そういうのでどうだ？」
「餅もいいぞ」
リョウが言うのはこれだった。
「あれは手軽に食べられるしな」
「とにかくあれなの。トランプしながら食べられるのがいいの」
于禁はそれだというのだった。
「そういう食べ物がいいの」
「とにかく何か食おうで」
ケンスウがまた言った。
「肉饅あるか？」

「ほい、どうぞ」
李典は何処からともなくだ。皿に盛り上げられた肉饅の山を出してきた。
「食おうか」
「サンドイッチあるか？」
「これやろ？」
今度はだ。皿に盛り上げられたサンドイッチが出た。
「サンドイッチって」
「そうだよ、それだよ」
ブラックホークは笑顔でそのサンドイッチに応えた。
「それがサンドイッチなんだよ」
「そうやねんな。何か色々な食べ物があるんやな」
「あるんだよ、これがな」
ブラックホークは楽しげに笑いながら応える。
「俺達の世界にもな」
「美味いな」
楽進はそのサンドイッチを食べながら話す。
「手も汚れない。いいものだ」
「餅もどうだ？」
リョウは餅を出していた。つきたての丸いそれをだ。笑顔で食べている。
「美味いぞ」
「餅は二種類あるの」
于禁はまた話す。
「お米の餅と麦の餅なの」
「これは米の餅だけれどな」
「どっちも美味しいの」
于禁は笑顔で話しながらその米の餅を食べている。そのうえでの言葉だった。
「じゃあ食べながらなの」

「よし、トランプな」
「やろうで」
こうしてだ。出陣を前にしてリラックスしている彼等だった。その彼等にも不安はあった。だがそれ以上にだ。仲良く楽しく過ごしている彼等だった。

第七十七話　完

2011・4・17

# 第七十八話　呂布、晴れないのことその一

第七十八話　呂布、晴れないのこと

華陀はだ。再びだった。
「よし、行くか」
「そうね。まずは洛陽なのね」
「そこに行くのね」
「いや、あそこじゃない」
そこではないとだ。華陀は怪物達に答えるのだった。
「あそこよりもまずはだ」
「まずはっていうと？」
「何処に行くのかしら」
「徐州に行ってくれるだろうか」
怪物達にそこに行こうというのだ。
「そこにだ。行ってくれるか」
「徐州っていうと確か」
「劉備ちゃんの場所よね」
「ああ、そこだ」
まさにだ。そこだというのだ。
そうしてだ。そのうえでだった。華陀はこんなことも言うのだった。
「そこに用がある」
「ああ、そうね」
「そういうことなのね」
妖怪達は華陀の話からだ。すぐに察して応えた。そうしてだった。
「あの人に会ってね」
「それでなのね」
「そうだ。徐州に行ってだ」
あらためて話す彼等だった。

「あの人を連れてだ」
「そうしてなのね」
「それから」
「そう、連合軍の陣に行く」
そのうえでだ。そこに行くというのである。
「洛陽に行くのはそれからでいい」
「何ごとにも順番がある」
「わかったわ。じゃあ」
こう話してだった。彼等はだ。
まずは徐州に行った。勿論二人が華陀をそれぞれ両脇に抱えてだ。
そうして空を飛んだのである。今回の速度はマッハ五であった。
徐州に着いた華陀はだ。落ち着いた顔で言うのだった。
「今回も速いな」
「そうでしょ。お空を飛んだからね」
「速いわよ」
「すぐに移動するのはやっぱりお空よ」
「そこを飛べばすぐなのよ」
「そうだな。便利な話だ」
非常に素っ気無く、何でもないといった顔の華陀だった。
「空を飛べたらな」
「そういう話だろうか」
「違うのではないのか？」
カインとグラントが二人に対して言う。同行していたのだ。
「そもそも私達も何故か一緒に空を飛んだが」
「貴殿等の背中にくくりつけられてだ」
二人が気付けばだ。そうなっていたのだ。
そしてここに来てだ、華陀達に話すのだった。
「人間は空を飛べない筈だが」
「その理屈はどうなっているのだ」
「拳法よ」

「そこに仙術を入れたのよ」
そうしたとだ。二人は平然として答えた。
「それでああしてお空を飛べるようになったの」
「わかってくれたかしら」
「人間ではないな」
「どう考えてもな」
これがカインとグラントの結論だった。二人に対するだ。
「華陀殿には感謝しているがな」
「それでもそう思う」
「ああ、あの鉛の弾のことだな」
華陀はグラントの胸を見て話す。見ればその胸は実に逞しく見事なものだ。彼はグラントのその胸を見てそのうえで話をするのだった。
「あれか」
「よく取り除いてくれた」
礼を述べたのはカインだった。

## 第七十八話　呂布、晴れないのことその二

「我が友の死を救ってくれた」
「本当に有り難い」
グラントもこう言うのだった。
「俺はまだ戦えるのか」
「ああ、あんた達はあんた達の夢があるんだな」
「そうだ。まさに餓狼の街だ」
「その街を築こうと考えている」
それがだ。二人の夢だというのだ。
「人間は堕落してはならない」
「そう考えるが故に」
「俺はそれについては何も言わない」
二人のその考えについてはと返す華陀だった。
「ただ。病はだ」
「治すか」
「医師として」
「そういうことだ。医術は仁術だ」
これが華陀の持論だった。まさにだ。
「それを果たすだけだ」
「そうよね。ダーリンによって沢山の人が助かってるわよね」
「グラントさんだけじゃなくて」
怪物達はその華陀の横で身体を不気味にくねらせながら話す。
「お蔭で何かね」
「運命が変わった人もいるわね」
「俺の運命もか」
グラントはここで己のことをそれに当てはめて考えた。
「そしてそれで何をするか、か」
「そうなるな。私もまた」

カインもだ。そのグラントと共に話す。
「何を為すのかだな」
「あんた達はこの世界に来たのは偶然じゃない」
華陀は真剣な顔で彼等に述べた。
「必然なんだ」
「運命か」
「それもまた」
「絶対にな。知ってると思うがこっちの世界は戦乱に覆われようとしている」
華陀は今度はこのことを話した。
「そしてそれに対して俺達はだ」
「戦乱の元凶を見つけ出してね」
「やっつけちゃうのよ」
「戦い自体は構わない」
カインはだ。戦いは否定しなかった。
しかしだ。彼はここでこうも言うのだった。
「だが。それは人がより上を目指すべきのものだ」
「それだというのね」
「戦いは」
「そうだ。混沌や破壊の為の戦いは私の望む戦いではない」
カインはその美学も見せた。
「人が極限まで上を目指し、研ぎ澄まされる為のものなのだ」
「あんたの戦いは純粋だな」
華陀はそんなカインの話を聞いて述べた。
「俺の考えとは違うにしてもな」
「違っていてもいいのだな、同志になるのは」
「同志を選ぶのは俺じゃない」
「貴殿ではないのか」
「他の、俺よりも上位の存在だ」
それが何かというとだ。

「運命の神だろうな」
「その運命のか」
「ああ。俺達は運命により導かれて共にいるんだ」
「その運命を変える為に」
「そしてこの世界と。俺達が救われる為にも」
「我々がだというのか」
「俺はそう見ている」
華陀はカインの目を見て話す。確かに鋭い。しかしその目はあくまで純粋だった。その純粋な目を見てだ。そうして彼に話すのだった。
「だから多くの者がこの世界に来ているんだ」
「これは戦いの為でもあるけれどね」
「あたし達と同じくね」
怪物達も話す。

## 第七十八話　呂布、晴れないのことその三

「皆運命なのよ」
「運命に導かれているのよ」
「貴殿等は知っているな」
グラントは二人の話からそのことを察した。
「我々が何故この世界に来たのかを」
「察しの通りよ」
「全部ね」
これが化け物達の返答だった。
「あんた達の世界のよからぬ存在にね」
「あらゆる世界を行き来できる者達がついたのよ」
「それでまとめてこっちの世界に来たのよ」
「自分達の望みを果しにね」
「その為にね」
二人はだ。その事情をカインとグラントに話していく。
「あたし達はそうした存在を監視するのが役目なの」
「言うならばあらゆる並行世界の監視者なの」
それがこの怪物達だというのだ。
「それで、あたし達をそうさせている何かの意志がね」
「あんた達をこっちの世界に連れて来たの」
「そうだったのか」
カインもだ。驚愕を見せる話だった。普段は自信に満ちていて不遜なまでの誇りを見せている顔にだ。僅かだがそれが出ていた。
「それで私達はこの世界に来ているのか」
「同時にあんた達の複雑な運命や因縁もね」
「解き放つつもりなのよ」
「何故我々の運命をそうするのだ」
グラントがここで問うのはこのことだった。

「その我等の」
「あんた達がそうした運命に押し潰されるのを望まないからよ」
「だからなのよ」
それでだと話す二人だった。
「その運命を司る存在はね」
「あんた達のことをいつも気にかけているのよ」
「善意か」
カインの眉がぴくりと動いた。そのうえでの今の言葉だった。
「それは善意によってか」
「善意もあるけれど」
「それによってあんた達が為すべきことを謝ることを防いでいるのよ」
それが為だというのだ。
「事情は色々と複雑でね」
「あんた達はそれぞれやらないといけないことがあるの」
「けれど。あんた達の何人かはそれを果すにはね」
「微妙に因果を持ってるから」
それでだ。できないからだというのだ。
「それを変える為にもね」
「こっちの世界に呼ばれているのよ」
「では私は」
カインはだ。その顰めさせた眉で話すのだった。
「力により人が高みを目指す世界を築くことはまさか」
「それもわかると思うわ」
「この世界でね」
「そうなのか」
考える顔になっていた。そのうえでのカインの今の言葉だった。
「私の運命もまた」
「まあ今すぐにわかるものではないさ」
華陀がそのカインに話す。

「そういうのは最後の最後にな」
「わかるものか」
「とりあえずあんた達は俺達と一緒に来てくれるんだな」
華陀がカインに問うのはこのことだった。
「そうしてくれるんだな」
「うむ、それではだ」
「そうさせてもらう」
これが二人の返答だった。
「貴殿等といればだ」
「それがわかるだろうかな」
こんな話をしてだった。そうしてだ。
彼等はその徐州に来たのだった。そのうえでだ。

## 第七十八話　呂布、晴れないのことその四

徐州の牧の城。ここに入ってだ。彼女の前に来たのだった。
「むっ、御主は」
「ああ、久し振りだな」
「何故ここに来たのじゃ？」
「少し来て欲しいところがあるんだ」
華陀はこう彼女に話すのである。
「いいか？」
「何かあるようじゃな」
「ああ、そうだ」
その通りだというのである。
「それでだ。いいか？」
「わかった」
彼女もだ。真剣な顔で頷いた。
「それではのう」
「話はこの国、いや世界に関わっている」
「この世界にじゃな」
「そうだ。だから来てくれるな」
「御主には一度救われている」
だからだと言う彼女だった。
「それではな」
「悪いな。そう言ってくれてな」
「感謝しちゃうわ」
「もう感激よ」
「ううむ、その二人はのう」
彼女はだ。華陀の左右の怪物達にはだ。
顔を曇らせてだ。こう言うのだった。
「どうも慣れぬのう」

「慣れないって？」
「そうなの？」
「うむ、慣れん」
実際にそうだというのである。
「人間なのじゃな？」
「あら嫌ね、こんな奇麗な乙女達を捕まえて」
「あたし達傷ついちゃうわよ」
「傷つくのか？」
彼女にとってもだ。そのこと自体が疑問のことだった。
いぶかしむ目になってだ。彼等、間違っても彼女達ではないその妖怪達を見て言う。
「その姿で」
「心はデリケートなのよ」
「繊細なのよ」
「精神的にも恐ろしいまでに強いと思うがのう」
誰が見てもだ。そうとしか思えないことだった。
「しかしじゃ。何はともあれじゃ」
「ああ、来てくれるんだな」
「そうさせてもらおう」
彼女はまた華陀に対して頷いてみせた。
「是非共な」
「悪いな。それじゃあな」
「うむ、行くとしよう」
「じゃああたし達もね」
「行くわよ」
また言う妖怪達だった。
「どんな場所もひとっ飛びよ」
「簡単に行けちゃうから」
「ううむ、私もだ」
「俺もだが」

一緒にいるカインとグラントはそんな彼等、絶対に彼女達ではないを見てまた言うのであった。
「空は飛べない」
「絶対にだ」
「だから。コツなのよ」
「コツさえわかれば簡単にできるわよ」
「だからそれは人間のできることなのか？」
「絶対に違うと思うのだが」
二人が言うのは人間の常識での話だった。
「それをできるとなると」
「やはり人間ではないのだが」
「そもそも監視者というが」
「どうしてそれになったのだろうか」
「まあそれはね」
「言うと長くなるわよね」
こう言う怪物達だった。

# 第七十八話　呂布、晴れないのことその五

「実際問題あたし達ってね」
「戦国時代から生きてるし」
「中国の戦国時代か」
カインがそれを言う。
「となると何百年も前だが」
「そうよ、夏王朝の時もね」
「よく知ってるわよ」
「伏儀さんもね」
「懐かしい思い出よね」
「だから幾つなのだ」
カインはそれが気になり言う。
「貴殿等は」
「そんなに気にすることじゃない」
しかしだ。ここでも華陀はこんな調子だった。
彼は微笑んでだ。こうカイン達に話すのだった。
「俺にしても百二十歳だからな」
「待て、百二十だと！？」
女はだ。それを聞いてだ。眉を顰めさせて言うのだった。
「とてもそうは見えんぞ」
「見えないか？」
「うむ、全く見えぬ」
こう言うのだった。
「その外見で百二十というのか」
「そうだ。俺は自分の医術を自分にも行っているからな」
「それでというのか」
「そうだ。常に身体、特に朝起きた時にな」
その時にだというのだ。

「身体を動かす様にしている。独自の運動法をな」
「それでその若さか」
「後は食べるものに気をつけている」
「身体によいものばかり食しておるのか」
「あと丹薬は飲まない」
それもだというのだ。
「あれは危ないからな」
「むっ、あれは危ないというのか」
「そうだ。絶対に止めておくことだ」
丹薬についてはだ。絶対に駄目だというのだ。
「さもないと命を落とすことになりかねない」
「そこまで危ういというのか」
「ああ、あれはね」
「そうよね」
そんなものを飲んでも全く平気な面々がここで言う。
「絶対に駄目よ」
「飲んだら死ぬわ」
「そうなのか」
「水銀を使うからね」
「あれがよくないのよ」
水銀にだ。問題があるというのだ。
「あれは毒になるの」
「それこそ猛毒よ」
「そうじゃったのか」
「だからね」
「丹薬よりも他のを飲むべきなのよ」
それがいいというのである。そしてだ。
二人はだ。こんなことを言うのだった。
「あれよ。動物の肝とかね」
「椎茸もいいし」

「すっぽんに高麗人参」
「それとお野菜はたっぷりね」
「海草も身体に凄くいいし」
「後はお魚もね」
そういったものがいいというのだ。
「とにかく医食同源よ」
「そこをしっかりすればいいから」
「うむ、それはわかる」
女もだ。それはだというのだ。
「わらわも元は肉を扱っておったからのう」
「じゃあ肝のことはわかるんだな」
「あそこは栄養の塊じゃ」
まさにだ。そうだというのだ。

## 第七十八話　呂布、晴れないのことその六

「食せねばな、是非共」
「そうだな。絶対にな」
そんな彼等の話を聞いてだ。カインとグラントはだ。
あらためてだ。華陀達に話すのだった。
「そうした話もいいがだ」
「少しいいだろうか」
「ああ、用件のことだな」
それはもうわかっている華陀だった。二人に顔を向けて応える。
「この人をだな」
「そうだ。案内するのだな」
「そうすると聞いているが」
「ああ、その通りだ」
華陀は微笑んで二人に答えた。
「今からそうする」
「ではそろそろ旅立たないとだ」
「よくないのではないのか」
「ああ、それはね」
「何時でもいいのよ」
怪人達がだ。それは構わないというのだった。
「だってあたし達お空飛べるし」
「瞬間移動だってできるしね」
「だから全然気にしなくていいわ」
「許昌なんて一瞬で行けるから」
彼等にとってはだ。そうしたことはなのだった。
まさにだ。何でもないことであったのだ。
だからこそだ。平気で言うのであった。
「ノープロブレムよ」

「貴方達のお国の言葉で言うわね」
「どうやら貴殿等はアメリカも知っているな」
グラントは二人の言葉からそのことを察した。
「我が国にも行き来しているのか」
「時空超えられるからよ」
「普通にしているわ」
そうしているというのである。
「だから。移動のことはね」
「全然気にしないで」
「わかった。ではだ」
「今は何も言わないでおこう」
カインもグラントもこれで納得した。というよりは彼等の常識が全く通用しない相手だとだ。そのことがわかったのだ。
そしてなのだった。
「では今は」
「待たせてもらうか」
「何か食べない？」
「そうしたらどうかしら」
妖怪達は二人に食事を勧めるのだった。
「貴方達の好きなものをね」
「食べたらどうかしら」
「そうか。それではだ」
「そうさせてもらおう」
二人もだ。化け物達のその話に乗った。
そうしてだ。まずはカインが言った。
「アップルパイを食べよう」
「俺はビーフシチューだ」
それぞれだ。二人の好物だった。
「それはあるだろうか」
「作られるか？」

「むっ、料理か」
女がだ。料理について顔を向けた。
「それならわらわもできるが」
「自信はあるのか」
「そちらは」
「特に肉料理はな」
自信があるというのである。
「元々それを生業としておるしのう」
「そうなのか」
「肉屋だったというのか」
「待っておれ。少ししたら作る」
こうした話をしてだった。そのうえでだ。
女がだ。彼等に対してそのアップルパイとビーフシチューを作った。それをなのだった。

# 第七十八話　呂布、晴れないのことその七

カインとグラントに御馳走する。二人はそれを食べてみてだ。
納得した顔になってだ。それぞれこう言った。
「うむ、この味ならだ」
「いい」
これが彼等の感想だった。
「この時代の中国でアップルパイが食べられるとはな」
「しかもビーフシチューまでな」
「作り方がわかれば造作もないことじゃ」
女は言う。料理をすることは問題ないとだ。
「こうしてじゃ。作られるぞ」
「そうか。どうやらこの世界はだ」
「俺達の知っている中国ではないな」
二人がそれを言うとだった。またしてもだ。
怪物達がだ。彼等に説明するのだった。
「そうよ。この世界はね」
「かなり違う世界だからね」
「イレギュラーな世界なの」
「中国であって中国でないのよ」
「我々の知っている中国とは全く違う」
「そういう意味か」
二人は怪物達の話をこう解釈した。そしてだ。
妖怪達もだ。そうだと言うのだった。
「そうよ。完全な別世界」
「貴方達の世界とは全く違うからね」
「それを理解してか」
「考えていくべきか」
二人もそれがわかった。そうしてであった。

華陀や女、それに怪人達もそのアップルパイとビーフシチューを食べてだ。それからだった。
出発かと思われた。しかしだ。
「仲間達も呼ぶか」
「ええ、カインさんとグラントさんだけでなく」
「他の人達もね」
華陀にだ。妖怪達が応えた。
「そうしてね」
「皆で行きましょう」
「ああ。これからが肝心だ」
華陀も腕を組んで話す。
「だとすればだ。俺達も総力を結集してことにあたる」
「あたし達も頑張るわよ」
「世の為人の為ダーリンの為」
「一肌も二肌も脱ぐわ」
「全力であたるわよ」
こんな話をするとであった。カインとグラントがまた言うのだった。
「いや、貴殿達がいればだ」
「何の問題もない」
「それに脱ぐと言うが」
「既にだ」
半裸だというのだ。全裸よりも恐ろしい姿である。
実際に今二人を見てしまった蝿がだ。落ちた。即死していた。
それを見てだ。また言う二人だった。
「こうしたことができるのだ」
「我々は不要ではないのか」
「いや、絶対に必要だ」
これは華陀の言葉だ。
「仲間がいてこそだ。何かができるからな」

「その通りよ。だからね」
「二人も他の人達も御願いね」
それは言う怪物達だった。何はともあれだ。
そうした話をしながら彼等は進路を決めるのだった。次の動きをだ。
そしてだ。その頃だ。
洛陽でもだ。動きがあった。賈駆がだ。
主だった将帥や異邦人達を集めてだ。こう告げていた。
「じゃあいいわね。二つの関でね」
「敵を食い止めるのね」
「ええ、そうするわ」
強い顔になってだ。董白の問いに答えていた。
「ここはね。それで陽はね」
「私は？」
「都の守りを御願いね」
留守役は彼女だというのだ。
「そうしてね」
「わかったわ。それじゃあね」
「ええ。それで他の面々で二つの関を守るわ」
賈駆の話は続く。

# 第七十八話　呂布、晴れないのことその八

「数は十万、残りの五万でね」
「南への備え、そして都と擁州の守りだな」
「そうするわ」
華雄に対して述べたのだった。
「あの二つの関が大事だからね」
「ただ」
ここで呂布が言った。
「敵は東から来るだけじゃない」
「涼州のことね」
「袁紹の兵はそこにもいる」
呂布が話すのはそこもだった。
「そっちには」
「ええ、勿論兵を回しておくわ」
賈駆はその眼鏡の奥の目をやや顰めさせて述べた。
「当たり前でしょ、それは」
「わかった」
呂布はそれを聞いてこくりと頷いた。
「それならいい」
「そういうことでね。じゃあ万事整ったわね」
「では出陣なのです」
「僕も都に残るから」
賈駆もだ。留守役だというのだ。
「月もいるから」
「？待て」
そのことを聞いてであった。華雄はだ。
眉を顰めさせてだ。その賈駆に言った。
「董卓殿は出陣されないのか？」

「そうだけれど。それがどうかしたの？」
「董卓殿は確かに生粋の文官だ」
それを踏まえての話だった。
「だが。それでもだ」
「それでもって？」
「出陣されて兵を見守られるのが常だが」
牧としての義務と考えてだ。そうしているのだ。実際の指揮は華雄達が行うので問題はないのだ。
「それをされないのか」
「ちょっとね。帝に言われてね」
「その帝のお姿も見えないのだが？」
華雄はこのことも言った。
「どうされておられるのだ」
「御身体の調子が悪いのよ」
そうだと話す賈駆だった。
「だからね。帝は」
「そうなのか」
「そうよ。それでとにかくね」
賈駆は眉を顰めさせてまた言った。
「皆御願いね。それじゃあね」
「わかったのです」
陳宮が頷いた。
「それでは今から」
「出陣御願いね」
こうしてだった。呂布達が出陣に向かう。その中でだ。
山崎はだ。実に楽しそうに言うのだった。
「よし、それじゃあ暴れるか」
「ああ、そうだな」
「そうするでやんすよ」
彼の言葉にチャンとチョイが楽しそうに応える。

「やっと大暴れできるな」
「この時を待ち望んでいたでやんすよ」
「ずっとキムの旦那とジョンの旦那の修業地獄の中にいたからなあ」
「それがとりあえず終わるでやんすよ」
そのことをだ。心から喜んでいる二人だった。
そしてだ。こんなことも言うのだった。
「このまま戦死ってことになって何処かに消えるとかな」
「そういうのも悪くないでやんすよ」
「ああ、それいいな」
山崎もだ。彼等のその話に乗った。
「じゃあ適当な場所でな」
「何処かに消えるか」
「あっし等にやっと自由が戻るでやんすよ」
こんな話をしていた。しかしだった。
ここでその二人が来てだ。彼等に言うのだった。

# 第七十八話　呂布、晴れないのことその九

「ああ、三人共そこにいたか」
「喜んで下さい、朗報です」
「朗報？」
「休暇でやんすか？」
「私達は先陣になった」
「真っ先に敵と戦うことになりましたよ」
二人は笑顔で三人にこう話す。
「そして関の壁の修理もだ」
「受け持つことになりました」
強制労働まであるというのだ。
「これは働きがいがあるな」
「頑張りましょう」
「これが現実だな」
山崎は二人の話を聞いてだ。がっくりと肩を落として言った。
「所詮は見果てぬ夢なんだよ」
「そうだよな。俺達に自由なんて」
「もう絶対にないでやんすよ」
チャンもチョイもそれは同じだった。やはり肩を落としている。
「じゃあ諦めて」
「戦って働くでやんすよ」
「俺達って結局地獄にいるのと同じだよな」
「その通りだケ」
アースクェイクと幻庵も言う。
「あの二人と一緒になったばかりにな」
「修業と強制労働の日々だケ」
「では行こう」
「汗を流しに」

キムとジョンだけが機嫌がいい。こうしてだった。
彼等は先陣となり先に出陣した。二人以外にはだ。誰もが肩を落としての出陣だった。
そしてだ。呂布もだった。出陣に向かう。しかしだ。
呂布も晴れない調子だ。この彼女を見てだ。
陳宮がだ。こう彼女に言うのだった。
「あの、恋殿」
「何？」
「出陣となったのです」
「うん、なった」
「あの、それでは今から何か食べるのです」
「食べる？」
「はい、食べるのです」
呂布に笑顔を向けてだ。陳宮は言うのだった。
「御饅頭にしますか？」
「うん。それなら」
「御饅頭にするのです」
「うん、そうしよう」
恋は力ない調子で頷いて返した。
「今から」
「はいなのです」
「ねね」
呂布は陳宮の名前を呼んできた。
「それでだけれど」
「それで？」
「二人で食べる」
こう陳宮に言う。そしてそれだけではなくだ。
呂布はだ。彼女にこんなことも言った。
「できれば二人だけじゃなくて」
「他の人ともなのです？」

「月と。食べたい」
こう言うのだった。
「一緒に。食べたい」
「月様となのです？」
「そう。月は都に間違いなくいる」
呂布は茫洋とした感じで言うのだった。
「その証拠に詠は都を絶対に離れない」
「確かに。詠殿は月様を大事にされています」
「前から思っていた。だから離れない」
「そうなのです」
「そう。多分月が出て来ないのは」
「御身体が悪いのです？」
「多分悪くない」
それをだ。呂布は察したというのだ。
「これは恋の勘だけれど」
「悪くないのならどうして出てこられないのです？」
「閉じ込められているのかも知れない」
そうではないかというのだ。

# 第七十八話　呂布、晴れないのことその十

「宮廷の奥深くに」
「宮廷の」
「だから出て来られない」
そうではないかというのである。
「ひょっとしたら」
「だとしたら誰がそんなことを」
「よくあることだけれど」
ここでまた言う呂布だった。
「死んだと思ってる奴が生きている」
「死んだと思っていても？」
「そう、実は生きている」
それを言う呂布だった。
「となると」
「まさか。あいつが」
「あいつ？」
「そう、あいつ」
こう言うのである。
「あいつが生きている」
「誰なのです、一体」
「張譲」
呂布はこの男の名前を出した。
「あいつが」
「そんな筈はないのです」
陳宮はだ。その名前を聞いてだ。
驚いた声をあげてだ。呂布に対して言うのだった。
「あいつは死んだのです。処刑されたのです」
「誰が処刑した」

そのことをだ。呂布は陳宮に問うた。
「張譲を処刑したのは誰」
「月様です」
「その月の姿が見えない」
呂布はまたこのことを話した。
「ということは」
「そういえば張譲の骸も」
「誰も見ていない」
そのこともだ。指摘されるのだった。
「そう、誰も見ていない」
「では」
「あいつは後宮の奥深くにいる」
宦官の居場所にだというのだ。
「そこに潜んで今動いている」
「後宮にいるのです」
「そこには誰も入られない」
それがだ。最大の問題だった。
だからこそ宦官は厄介なのだ。最高の隠れ場所を持っているからだ。
そしてそこから皇帝に取り入りだ。張譲の様なことが実際に起こるのだ。
それをだ。呂布は今指摘するのだった。
「何処にいるかもわからない」
「ううむ。では一体どうすればいいのです」
陳宮もだ。唸るばかりだった。
軍師である彼女にもだ。これればかりはだった。
「ねねはどうしたい？」
「ねねは？」
「そう。ねねはどうしたい」
呂布はこうその呂布に尋ねるのだった。

「張譲に対して」
「絶対に許せないのです」
陳宮は両手を拳にして思いきりあげて言った。
「張譲をやっつけてやるのです」
「後宮に殴り込んで」
「流石にそれはできないのです」
そう言われるとだ。それはとてもだった。
陳宮は顔を曇らせてだ。こう呂布に答えた。
「後宮に入られるのは。誰もいないのです」
「そう。張譲には手出しできない」
呂布はあらためてこのことを指摘した。
「今は絶対に」
「ではどうすれば」
「ここで大事なのは」
「大事なのは？」
「ねねの思う通りにすること」
それがだ。大事だというのだ。

# 第七十八話　呂布、晴れないのことその十一

「恋も思う通りにする」
「恋殿もといいますと」
「これから恋達は出陣する」
そのこともだ。話された。
「それに対してどうするか」
「ここで連合軍と戦っても何にもならないです」
陳宮はこのことを話した。
「何の意味もないです」
「そう。無意味」
「無駄な血が流れるだけです」
「けれど敵は攻めて来る」
これがだ。問題だというのだ。
「恋達が守るその関に」
「来るのです。どうすればいいのです」
「時間はあまりない」
呂布はまた言った。
「それをどうするか」
「ううん、これは難題なのです」
「だからこそ。ねねはねねの思う通りにする」
あらためてだ。彼女に言うのだった。
「そうするべき」
「ううん、ねねの思う通りに」
「恋もねねも月を救いたい」
このことはだ。もう言うまでもなかった。
「だからここは思い通りにする」
「しかしそれではどうすれば」
「ねねは動かない？」

呂布は陳宮の顔を見た。そうしてだ。
彼女のそのまだ幼いがまっすぐの目を見てだ。そうして問うのだった。
「このまま動かないでいるつもり」
「そんなの絶対に嫌なのです」
その問いには首を横に振って答える陳宮だった。
「何があろうともです」
「そう。なら動く」
これが陳宮に言う言葉だった。
「そうする」
「ねねも動く」
「そう。恋はねねを信じてる」
言葉は少ないがだ。それでもなのだ。
「だから。恋はそのねねを待つから」
「わかりましたのです。それでは」
こうした話をしてだった。二人はだ。
出陣する。だがその彼等はだ。目の前の敵を見ておらずだ。真の敵を見ているのだった。
連合軍も出陣した。先陣はだ。
話通り劉備だった。彼女の緑の軍勢を見てだ。
第二陣であり総大将でもある袁紹がだ。面白くない顔をしていた。
そしてその顔でだ。こう言うのだった。
「ううむ、劉備さん達が心配ですわ」
「そう?全然大丈夫でしょ」
横にいる曹操が彼女に返す。
「あの娘ならね」
「いえ、若し何かあれば」
「何かあれば?」
「わたくしが救援に向かいますわ」
「そう言って自分が前面に出たいだけでしょ」

やれやれといった顔で突っ込みを入れる曹操だった。彼女達にしても既に出陣の用意を整えている。そのうえでだ。彼女達は劉備を見て話すのだった。

「先陣で」

「ですから大将ともあろう者が後方にいるなどとは」

「それで弓矢が額にぶすりってなったらどうするのよ」

「そんなことは絶対にありませんわ」

自分が討たれるとは夢にも思っていない袁紹だった。

「わたくしが矢に負けるなどとは」

「そう言って死んだ人間は多いわよ」

また呆れた声で言う曹操だった。

「大体総大将が先陣切って戦うって。家臣はどうなるのよ」

「皆さんも共にですわ」

「全く。そのでしゃばりは変わらないわね」

曹操の呆れた言葉は変わらない。

「本当に死ぬわよ、何時か」

「ううむ、言ってくれますわね」

「その性格は全然変わらないわね」

今度はだ。そうした話になった。

# 第七十八話　呂布、晴れないのことその十二

「子供の頃から」
「だから何だというのですの」
「それで何度秋蘭が困ったか」
曹操は困っていない。そこもまた問題だった。
「人様に迷惑をかけるのはよくないわよ」
「かく言う貴女はどうですの？秋蘭をいつも困らせてますわね」
「それはまああれよ」
「あれとは？」
「私達の仲だからいいのよ」
かなり強引にそういうことにする曹操だった。
「そういうことなのよ」
「随分と酷いことを言いますわね」
「いいのよ。夜に愉しませてあげてるから」
だからだ。いいというのだ。
「いいじゃない」
「わたくしに言われましても仕方ありませんわ」
「本人に言わないとっていうのね」
「そうですわ。とにかくわたくしは」
「何度も言うけれど先陣は劉備に任せていいから」
それは釘を刺す曹操だった。
「安心して出陣しなさい」
「ううむ、先頭で戦わない限りはどうにも」
気が済まないという袁紹だった。その彼女を見てだ。
夏侯惇はだ。納得した顔で言うのだった。
「その通りだがな」
「姉者、そこでそう言うか」
「いや、麗羽殿は正論ではないのか？」

彼女は袁紹を支持するのだった。この場合はだ。
「将ともあろう者が後ろにいてはだ」
「それはその通りだが」
「秋蘭はよくないというのか？」
「総大将だぞ。それが前に出て何かあればだ」
「困るというのか」
「その場合どうなるのだ」
夏侯淵が言うのはこのことだった。実際に姉を少し咎める顔で見ている。
「軍が瓦解してしまうぞ」
「ううむ、それではか」
「そうだ、流石にそれはよくない」
夏侯淵は慎重な彼女の考えを話す。
「気をつけねば」
「私なら真っ先に突っ込むがな」
「姉者はそれでいいのだ」
「私はか」
「そうだ。姉者はそれでいいのだ」
夏侯惇はだ。いいというのだ。
「麗羽殿は将は将でも将の将だからな」
「それならばはか」
「そうだ。おいそれと前に出るべきではない」
「将の将は」
「華琳様にしてもだ。そうおいそれと前に出られないな」
「それは我等の役目だ」
曹操の話が出るとだ。夏侯惇はすぐに強い声で言った。
「華琳様に何かあればどうするのだ」
「そういうことだ。これでわかってくれたな」
「そうなのか」
「そうだ。姉者にしてもだ」

妹は今度は姉に顔を向けて言うのだった。
「用心してくれ」
「迂闊に突っ込むなというのか」
「くれぐれも軽挙妄動は謹んでくれ」
こうだ。姉に言うのである。
「何かあれば私も悲しいし華琳様もだ」
「だからか。軽挙妄動はか」
「何があっても謹んでくれ」
「わかっているが」
「わかってないよね」
「絶対にそうだよな」
ここで顔良と文醜が言う。二人も共にいるのだ。
「夏侯惇さんって昔から頭ではわかっていても」
「身体ではわかってないんだよな」
「身体が自然に動いちゃう人だから」
「それがやばいんだよな」
「だがそれが姉者のいいところだ」
夏侯淵は微笑になってその二人に話す。
「可愛い方なのだ」
「わ、私が可愛いだと!?」
姉は妹の今の言葉に顔を真っ赤にさせて戸惑いを見せる。
「馬鹿を言え。私は生粋の武人だぞ。その私が何故可愛いのだ」
「いや、性格がな」
「可愛いんだよ」
マイケルとミッキーがそうだと話すのだった。彼等も出陣の準備をしている。その中でだ。彼等はこんな話を楽しくしているのである。
「夏侯惇さんの性格ってな」
「俺達から見てもそうだからな」
「私の性格が可愛いのか」

「外見は奇麗系なのにね」
「凛々しい感じだけれどな」
また顔良と文醜が話す。
「性格はね」
「素直で照れ屋でな」
「ううむ、そう言われたことはなかったが」
夏侯惇は困った顔で話していく。
「そうなのだろうか」
「そうだ。だから姉者はいいのだ」
夏侯淵は微笑んだままで姉に話す。
「天真爛漫なのがいいのだ」
「だといいのだがな」
口を少し尖らせ頬を赤らめさせたままで応える夏侯惇だった。そんな話をしながらだ。
連合軍も出陣するのだった。戦いは避けられない、誰もがそう見ていた。

第七十八話　完

２０１１・４・１９

# 第七十九話　呂蒙、陣を組むのことその一

第七十九話　呂蒙、陣を組むのこと

連合軍は洛陽に向かう。その進軍は予想通りだった。

「ううん、やはりわたくしが前に出なくてはいけませんわね」

「だから何でそうなるのよ」

袁紹にだ。隣にいる曹操が呆れた顔で突っ込みを入れた。

「あのね、私達は第二陣よ」

「それはわかっていますわ」

「先陣は劉備。あの娘の軍が前に出て当然でしょ」

「それはそうですけれど」

「じゃあいい加減大人しくしなさい」

ぴしゃりとした口調での言葉だった。

「いいわね。今はね」

「ううん、何かじれったい感じですわね」

顔を顰めさせて言う袁紹だった。

「どうも。戦となりますと」

「全くですね」

その袁紹に賛成したのは夏侯惇だった。彼女は二人のすぐ後ろに馬を進めている。その彼女が袁紹のその言葉に対して頷いてきたのだ。

「やはり将は垂範で」

「その通りですわ。だからこそ前線に立たなければなりませんわ」

「総大将がですか？」

勿論夏侯淵もいる。彼女は冷静に袁紹と夏侯惇に突っ込みを入れる。

「前線に立たれるのですか」

「その通りですわ」

「私はいつもそうしているではないか」

夏侯惇は己のことを引き合いにして話す。
「それが悪いのか」
「姉者はそれでいいのだ」
夏侯淵は姉はいいとした。しかし袁紹についてはだ。
困った様な光を左目に浮かべ。そうしての言葉だった。
「ですが麗羽殿は」
「わたくしも将ですわよ」
「総大将がそれでは困ります」
彼女は正論を言うのだった、
「総大将に何かあっては話になりませんしそれに」
「それに？」
「軍全体を見なければなりません」
このこともだ。袁紹に話すのだった。
「ですからあまり前線に出られては」
「ううむ、いけませんのね」
「はい、御自重下さい」
まさにそうしてくれというのである。
「どうかここはです」
「ううん、仕方ありませんわね」
「秋蘭の言う通りよ」
曹操がここでまた袁紹に話す。
「あのね、第二陣でも軍全体を見るのは難しいんだから」
「前に出るのはいけないというのですね」
「そうよ。劉備達に任せるの」
あくまでこう言うのだった。
「わかったわね」
「わかりましたわ。それでは」
ようやく納得した袁紹だった。そうしてだ。
彼女は進軍の指揮を執っていた。その指揮自体は的確だった。
「指揮自体はいいんだよな」

「そうなのよね」
文醜と顔良が袁紹の後ろで話している。
「麗羽様ってな」
「これでムラッ気とか出たがりなところさえなければ」
「最高の君主なのにな」
「どうしてこうなのかしら」
「昔からだ」
夏王淵がその二人に話す。
「麗羽様は昔からああした方だ」
「そういえば夏侯淵さんってあれだよな」
「麗羽様とは幼い頃からですよね」
「そうだ。いつも一緒だった」
このことをだ。二人に話すのである。
「何かとな」
「厄介だった」
「そうなんですね」
「ムラッ気と出たがりな方だった」
そのことは変わらないというのである。
「しかも動かれれば騒動を起こされる」
「何か子供の頃からだったんだな」
「麗羽様って本当に変わらないんですね」
「華琳様もだ」
曹操もだというのだ。

# 第七十九話　呂蒙、陣を組むのことその二

「あの方も幼い頃から同じだった」
「夏侯淵さんも大変なんだな」
「麗羽様だけでも大変なのに」
「夏侯惇さんもいるしな」
「苦労されてたんですね」
「おい、そこで私の話になるのか」
夏侯惇は二人に対して身を乗り出して抗議した。
「華琳様ではなく私なのか」
「だって。曹操さんってうちの姫とか夏侯惇さんみたいにやたら前に出ないしさ」
「騒動も起こしませんし」
「私は騒動など起こしたことはないっ」
自覚なぞ何一つとしてしていない言葉だった。
「私にあるのは華琳様に対する忠誠だけだ」
「けれど周り見えてないですよね」
「そこが問題なんですけれど」
「周り？見る必要があるのか？」
またしても言う夏侯惇だった。
「忠誠以外の何が必要なのだ」
「だから問題なんだよな」
「文ちゃんも結構そんなところあるけれど」
さりげなく相棒のことも言う顔良だった。
「けれど。夏侯惇さんの場合は」
「あたいよりやばいからな」
「うう、言われ放題ではないか」
「まあ落ち着け姉者」
妹が苦い顔になる姉に助け舟を出した。

「この戦は激しいものになる。そうなればだ」
「私の力が必要となるな」
「そうだ。その時に思う存分戦ってくれ」
こう姉に言うのだ。
「周りは私が固める」
「秋蘭、そうしてくれるのか」
「うむ、そうする」
こう言ってだ。姉をフォローするのである。
「姉者を放ってはおけないしな」
「済まないな、本当に」
「気にすることはない」
優しい微笑でだ。夏侯淵は姉に話す。
「姉者はそれでいいのだ」
「そうか。前に突き進むのがだな」
「それが姉者のいいところだ」
この言葉も姉に話すのだ。
「一途なところがな」
「一途過ぎるんだよなあ」
「あちらの世界ではブレーキがないって言うらしいけれど」
文醜と顔良がまた言う。
「けれど。確かに猪突猛進じゃない夏侯惇さんってな」
「それってらしくないよね」
「だよなあ。結局それが夏侯惇さんのいいところだよな」
「前に前にっていうのが」
そんな話をしてだった。彼女達は進軍するのだった。
そして第三陣はだ。第二陣とはまた違った賑やかさの中にあった。
休憩中にだ。第二陣からドンファンとジェイフンが来てだった。
チヂミを食べながらだ。呂蒙達に話すのである。
「まあ第二陣もそんな感じでな」
「結構大変なんですよ」

「ううん、袁紹さんと夏侯惇さんですか」
「それと茶色い猫と黒い猫な」
「あの御二人は喧嘩ばかりです」
「あの二人じゃな」
一緒にいる黄蓋がここで言った。彼女はチヂミと一緒に酒も飲んでいる。陣中であってもだ。彼女は酒を楽しんでいるのであった。
「あの二人は相変わらずじゃな」
「そうですね。顔を見合わせればですから」
「姉妹なのに仲の悪いことじゃ」
「困ったことですね」
実際に顔を暗くさせて言う呂蒙だった。
「それが軍の作戦に影響しなければいいですけれど」
「あの仲の悪さのせいでそれぞれ君主が違うのよね」
孫尚香もそのことを話す。
「袁紹さんと曹操さんのところにね」
「まあ二人共小さいし戦闘力は高くないからな」
「口喧嘩だけだけれど」
だからだとだ。キム兄弟は話すのだった。
「大ごとにはなってないけれどな」
「それでもいつも口喧嘩ですから」
「あの猫耳二人はそもそもの性格に問題があるのじゃ」
黄蓋はそのものずばりだった。

## 第七十九話　呂蒙、陣を組むのことその三

「全く。妙な奴等じゃ」
「全くだな」
凱が黄蓋のその言葉に同意して頷く。車座の中に座ってやはりチヂミを食べながらだ。彼女の話を聞いてそうしたのである。
「何か妙に軍師らしくないっていうかな」
「はっきり言えばアホじゃ」
またずばりと言う黄蓋だった。
「知識や教養があって頭は回るがじゃ」
「人間としてか」
「そういう意味だな」
ラルフとクラークが応える。
「あれだってことか」
「そういうことなんだな」
「困った奴等じゃ」
こうも言う黄蓋だった。
「全くのう」
「うちの軍だったらあの二人どうなのかしら」
孫尚香はこんなことを言った。
「正直喧嘩されたら面倒なんだけれど」
「そういえば揚州ってあれだよな」
「かなり和気藹々とした雰囲気ですね」
ドンファンとジェイフンがこのことを指摘する。
「まあこっちも何だかんだで雰囲気はいいけれどな」
「あの人達も顔を見合わせなければいいですから」
「はい、揚州の雰囲気はかなりいいと思います」
呂蒙はそのことに真面目に答えた。
「和気藹々としているというか明るいというか」

「真面目な娘も多いしな」
「そうだな」
ラルフとクラークが微笑んで話す。
「それがいいんだよな」
「孫権さんとかな」
「うむ、蓮華様は真面目な方じゃ」
黄蓋もその通りだと微笑んで話す。
「しかもとてもお優しい方じゃ」
「あの性格のよさっていいよな」
凱もそのことについて話す。
「一見するときつそうなんだけれどな」
「ですが違うんです」
呂蒙がその孫権について話した。
「蓮華様はとてもお優しい方で」
「心が美しいのだな」
鷲塚の言葉だ。彼もいるのだ。
「そういうことだな」
「うむ、揚州にはそうした者が多いぞ」
黄蓋が話す。
「何かとな」
「確かにな。周泰殿といい」
鷲塚がまた話す。
「そして呂蒙殿もな」
「私ですか！？」
自分の話が出てだった。呂蒙はだ。
戸惑った顔を見せてだ。顔を赤くさせて話した。
「私はそんな」
「何言ってるのよ、亞莎だってそうじゃない」
彼女はどうかとだ。孫尚香が微笑みながら話すのだった。
「とても真面目で優しいのに」

「そうですか？」
「いい娘じゃない」
その性格のことが話されるのだった。
「いつも夜遅くまで勉強して朝早くに起きて」
「軍師として当然のことではないですか？」
「そう普通に言うことが凄いのだ」
鷲塚の言葉だ。
「それがな」
「そうなんですか」
「そうだ。しかし本当に揚州は見事な気質のおなごが多い」
「わしはどうじゃ？」
「まあ黄蓋さんはあれだな」
今言ったのはだ。ドンファンだった。

# 第七十九話　呂蒙、陣を組むのことその四

「見事な気質のな」
「うむ、何じゃ」
「熟女だよな」
おばさんと言うようなことはしなかった。この辺りドンファンはわかっていた。
「それだよな」
「言うのう。そこでおばさんと言っておればぬしはじゃ」
「死んでたっていうんだな」
「うむ、首を絞めておった」
微笑みながらの言葉だった。
「確実にのう」
「確実にのう」
「やっぱりそうなんだな」
「まあ確かに歳は食っておる」
本人もそのことは認めた。
「それは認めるぞ」
「祭って母様の頃から我が家にお仕えしてるからね」
孫尚香が笑って話す。
「シャオが生まれる前からね」
「ははは、シャオ殿のおむつも代えたのう」
笑いながら話す黄蓋だった。
「わしが孫堅殿に仕官した頃はまだ小さな勢力じゃった」
「それが今じゃか」
「江南を治めるまでになったんだな」
「牧になるまでが大変じゃった」
こうラルフとクラークにも話すのであった。
「洒落にならんかったぞ」

「洒落にならなかったのか」
「そこまで辛かったのか」
「辛くはなかったがのう」
それとはまた違うというのだ。
「ただ。苦労したのじゃ」
「苦労なあ」
「そういう意味か」
「何でも最初に立ち上げるのは大変じゃ」
また言う黄蓋だった。
「金もなければ人もなしじゃったからのう」
「お金って大事ですから」
呂蒙もそのことについて言及する。
「実際にこの群を動かすにもかなりのお金がかかっていますし」
「あれだな。何でもただじゃないな」
今言ったのは凱だった。
「そういうことだな」
「家臣はわしを含めて三人」
二張とである。
「そして兵は百人程じゃった」
「けれどそれがか」
「二州を治めるまでになった」
「そこまでか」
「うむ、思えば遠い道のりじゃった」
黄蓋は微笑みながら話す。
「わしも歳を取った筈じゃ」
「だからあんた幾つなんだよ」
凱がまた言う。
「見たところそんなに歳取ってないけれどな」
「言うのう。では幾つに見える」
「さてな。けれどあれだよな」

「当然三十以上と言えば首を絞める」
それは絶対だというのである。
「覚悟するのじゃ」
「じゃあ聞かないさ」
「賢明じゃな」
「シャオは一応十八歳よ」
孫尚香がこんなことを言った。
「宜しくね」
「それは無理があるのではないのか？」
鷲塚がすぐに突っ込みを入れた。
「それで十八というのは」
「けれどそういう設定だから」
「どう見ても十代に入ったばかりだが」
「けれどそっちの世界じゃ高校？よね」
学校の話になる。
「そこに入られる歳よ」
「絶対に違うよな」
「そうだよね」
ドンファンとジェイフンがそれは絶対にないと話す。

# 第七十九話　呂蒙、陣を組むのことその五

「高校生でその胸ってな」
「胸は関係ないじゃない」
ドンファンが胸の話をするとだった。孫尚香はすぐにむくれて言い返した。
「そんなの何時か大きくなるわよ」
「けれど高校生だよな」
「そっちの世界じゃね」
「高校生になるとなあ」
ドンファンは腕を組んで真面目な顔で話した。
「そうそう大きくはならないぞ」
「成長期じゃない」
「それは男の話だよ」
ではだ。女はどうかというのだ。
「女の子は高校生になるとそんなにな」
「成長しないっていうの？」
「そうだよ。ましてや十八になるとな」
もう成長はしないというのだ。
そうした話をしてであった。ドンファンはさらに言った。
「そもそも絶対に十八じゃないだろ」
「まだ言うのね」
「だから見えないっての」
「兄さん、あれじゃないんですか？」
ここでジェイフンが兄に話す。
「そういうことにしないと駄目なんじゃないですか？」
「十八にしないとか」
「はい、色々な事情で」
「ってそういえばこっちの世界ってあれよな」

ドンファンもふと気付いたのだった。
「元々は」
「うむ、それは言わぬ方がよいぞ」
黄蓋が釘を刺す。
「そこまではな」
「そうだな。じゃあそういうことでな」
ドンファンもそのことに頷く。そしてなのだった。
再びチヂミを食べていく。それでだった。
ふとだ。また呂蒙が言うのだった。
「ところでシャオ様」
「何？」
「今の我が軍の陣ですが」
話すのはこのことだった。
「進軍中の陣ですよね」
「そうよね。今はね」
「そろそろ左右から敵が出て来てもおかしくないですね」
「そうじゃな。敵の中にはじゃ」
黄蓋もそのことについて言及する。目が鋭くなっている。
「張遼や華雄といった強者がおる」
「そして何よりもです」
呂蒙の顔は警戒するものになっていた。そしてだ。
彼女の名前をだ。ここで出すのだった。
「あの呂布さんがいます」
「あ奴は尋常ではないぞ」
黄蓋から見てもだ。呂布はそうなのだった。
「わし一人では絶対に勝てぬ」
「祭でも駄目なの？」
「それも弓においてじゃ」
彼女が最も得意とするだ。その弓でもだというのだ。
「呂布には勝てぬ」

「呂布さんは武芸百般の方です」
とにかくだ。武芸ならば誰にも負けないというのだ。
「弓も当然ながらです」
「そうじゃ。あの弓には勝てぬ」
黄蓋も真剣な顔で話す。
「百歩離れた場所の槍の穂先に当てることができる位じゃ」
「恐ろしい話だな」
鷲塚がそれを聞いて言った。
「弓をそこまで使うというのか」
「そうじゃ。おそらく紫苑や夏侯淵よりも遥かに上じゃ」
その二人ですらだというのだ。
「あの者が急襲を仕掛けて来れば」
「連合軍が壊滅しても不思議ではないです」
呂蒙はそのことを危惧していた。
「せめて。何時来ても対処できるようにしておかないと」
「ではそのことを進言する？」
孫尚香がそうしてはと話す。
「雪蓮姉様に」
「それがよいのう」
「私もそう思います」
黄蓋と呂蒙も孫尚香のその提案に乗った。

# 第七十九話　呂蒙、陣を組むのことその六

「是非共」
「そうさせてもらいます」
こう話してだ。そのうえでだった。
三人は孫策の場所に行きだ。そうして話すのだった。
話を聞いた孫策は馬上でだ。こんなことを言った。
「それねえ」
「すぐに陣を組み替えるべきかと」
呂蒙がまた言う。
「そうして敵が何時来ても対処できるようにです」
「それならね」
「それなら？」
「どういう陣がいいかしら」
孫策は楽しげに笑って呂蒙に話してきた。
「それならね」
「陣ですか」
「そうよ。進軍速度は落とさないでね」
「そのうえで敵の急襲に何時でも対処できる」
「そうした陣を。組めるかしら」
孫策はその笑みで呂蒙に問うのである。
「どうかしら、それは」
「さて、どうしたものか」
黄蓋は孫策が呂蒙に話すのを聞いてだ。考える顔になって述べた。
「警戒に気を取られれば進軍速度が落ちかねぬな」
「兵は神速を尊ぶよ」
また言う孫策だった。
「ましてや私達の軍は馬が少ないから」
「進軍速度に問題があるわよね」

孫尚香もここで気付いた。
「今でもちょっと」
「そう、袁紹や曹操の軍に何とか追いついてるって感じよ」
彼女達の軍は馬が多い。それならばだった。
「さて、どうするのかしら」
「それならです」
暫し考えてからだ。それからだった。
呂蒙は答えた。どういった陣にすればいいかをだ。
「まずは軍の左右にです」
「左右に？」
「弓兵を置きます」
彼等をだというのだ。
「そうしてその周辺に騎兵を配します」
「何故騎兵かしら」
「彼等は物見です」
つまりだ。偵察だというのだ。
「周辺の哨戒に当たらせます」
「そうして敵が来れば発見できるようにするのね」
「はい、そうします」
まさにだ。その通りだというのだ。
「そして中央には普通の歩兵を置きます」
「警戒を騎兵に任せて何かあれば弓で撃つのね」
「これでどうでしょうか」
「そうね。今はただの進軍の為の陣でね」
特にだ。戦の準備はしていないというのだ。
「そこまではしていないから」
「それならすぐに」
「そうするわ。それじゃあね」
こうしてだった。孫策軍の陣はその様に組まれた。元々騎兵の少ない彼等の郡の進軍速度は落ちなかった。まさに呂蒙の読み通りだ

った。
そしてだ。その陣で進軍しながらだ。孫権が姉に声をかけた。姉の馬の隣に己の馬を持って来てだ。二人並んでから話をするのだった。
「あの娘の考えを容れたのですね」
「そうよ」
「試されたのですか」
「簡単だけれどね。試験よ」
それだとだ。孫策は笑って妹に話す。
「あの娘が軍師として努力してるかどうかね」
「試験だったのですか」
「そろそろ陣を組みなおそうと思ってたし」
実はそうした事情もあったのだった。
「好都合だったわ」
「確かに。間も無く敵の関に近付いています」
「何時敵が来てもおかしくないからね」
「だからですね」
「ええ。陣を組みなおそうと思っていた時にね」
その呂蒙達が来たというのだ。そうした話をするのだった。
「正直有り難かったわ」
「試験もできてですね」
「貴女の軍師に相応しいわね」
微笑んでだ。こんなことも言う孫策だった。
「大切にしなさいよ」
「はい、そうさせてもらいます」
孫権も姉の言葉に微笑んで返す。

## 第七十九話　呂蒙、陣を組むのことその七

「その性格もいいですし」
「そうね。真面目で一途でね」
「純粋で」
「正直軍師としては素直過ぎるかも知れないけれど」
しかしだ。それが呂蒙なのだった。
「それでもね。あれがかえっていいからね」
「とてもいい娘です」
「何かうちってああいう娘多いわね」
孫策は馬を操りながら笑顔で話す。
「貴女といいね」
「わ、私もですか」
孫権はそう言われてだった。そうしてだった。
その顔を赤くさせてだ。それで姉に言い返した。
「そんな。私は」
「だってそうじゃない。素直で真面目で」
孫権のいいところである。
「一途だし」
「何かそれを言うと」
呂蒙と同じであった。そうした性格がだ。
「ですが私はあの娘みたいに」
「そこでそう言うところが同じなのよ」
「そうですか」
「まあ君主の私がこんなのだから」
孫策は今度は己のことを話した。
「真面目な娘が多いのはいいことね」
「姉上の場合はです」
孫権はその真面目さを見せるのだった。意識せずにだ。

「それでよいと思いますが」
「いいのかしら。これだけいい加減なのに？」
「いい加減というよりはです」
「というよりは？」
「おおらかさがいいのです」
孫策の気質はそれだというのだ。
「器の大きいのがです」
「器ねえ。それを言うとね」
「はい？」
「劉備の方がずっと大きいかもね」
話が変わった。劉備についての話になった。
今先陣の彼女はだ。どうかというのだ。
「あの娘の器は相当なものよ」
「姉上以上にですか」
「それはすぐにわかると思うわ。蓮華にもね」
「確かに何か。あらゆるものが入りそうな感じですが」
孫権は劉備の器をこう評した。
「それはですか」
「ええ、私よりも遥かに凄いわね」
「では。まさに」
「天下の大器ね」
劉備はそこまでだというのだ。
「さて、この戦いでは何を見せてくれるかしら」
「それもまた楽しみなのですね」
「まあ袁紹が前線に立とうとするけれどね」
このことは誰もが容易に読めることだった。
「先陣を務めて。凄いことをしてくれるでしょうね」
「そうですか。見せてくれますか」
「きっとね」
こんな話をしてであった。彼女達は進軍を続けるのだった。呂蒙

の陣を組警戒しながらだ。揚州の兵達も都に向かって進む。
そしてその劉備の先陣では。雪がだった。
守矢、そして楓と共にいた。そのうえでだった。
彼等にだ。こう言うのだった。
「楓もいるのはね」
「聞いていたんだね」
「ええ。聞いていたわ」
その通りだとだ。雪は楓に答えた。
「何時かは会うと思っていたけれど」
「そうだったんだね」
「それでね。やっぱり貴方も」
「感じているよ」
楓は少し暗い面持ちで姉に返した。

# 第七十九話　呂蒙、陣を組むのことその八

「刹那はこの世界にも来ているね」
「間違いなくね」
「そして常世をもたらそうとしている」
「だから私達はこの世界に来たのよ」
こうだ。雪は言った。
「常世を封じる為に」
「しかしだ」
守矢がここで口を開いてきた。
「雪、御前は」
「それが私の務めだから」
雪は楓のそれ以上に暗い面持ちで言葉を返した。
「だから」
「駄目だ」
守矢の言葉の調子は厳しい。
「それは駄目だ」
「駄目だというのね」
「御前は命を捨ててはならない」
彼が妹に言うのはこのことだった。
「何があってもだ」
「けれどそれでも」
「姉さん」
楓も姉に言ってきた。
「僕達が刹那を封じるから。だから」
「私は、というのね」
「命を捨てる必要はないんだ、絶対に」
「けれど。常世はそうしなければ」
「いや、方法はある」

また守矢が妹に言う。
「御前が命を捨てなくて済む方法がだ」
「あるというのね」
「そうだ、必ずある」
「それならそれは」
「誰も命を捨てる必要はない」
守矢はまずそのことから話した。
「そう、誰もだ」
「勿論僕達もさ」
楓達もだというのだ。
「命を捨てる必要はないんだ」
「ではどうするというの？」
「刹那を、そして常世の門をだ」
その二つをだというのだ。
「完全に叩き壊す」
「そうすれば。姉さんも命を捨てる必要はない筈だよ」
「それができるのかしら」
「できる」
守矢の言葉は強く短い。
「必ずだ」
「だから姉さんはね」
命を捨てる必要はない、楓も言うのだった。
「そんなことをしなくていいんだ」
「だから馬鹿な考えは捨てろ」
妹にだ。心からの言葉を告げる。
「わかったな」
「兄さん、楓・・・・・・」
「戦いは辛いものになるだろう」
守矢の話が変わった。
「しかしだ。それでもだ」

「姉さんは命を捨てることはないんだ」
「私の命は」
「己を大切にしろ」
守矢がここで最も言いたいことだった。
「いいな、何があってもだ」
「そしてこの世界で」
「戦うことだ。私達が何故この世界に来たか」
それはだ。どうしてかというと。
「おそらく刹那を倒す為だ」
「僕達以外の大勢の人達もね」
覇王丸や草薙達のことだ。
「多分。それぞれの世界での災厄がこの世界に来たからね」
「その彼等と戦う為に来ている」
「それは戦って封じる為なんだ」
それで来ているとだ。二人は雪に話す。

# 第七十九話　呂蒙、陣を組むのことその九

「決して死ぬ為ではない」
「それはわかって欲しいんだ」
「それなら」
ここまで聞いてだった。楓は。
ようやく頷いたのだった。彼女は命を粗末にはするなと頷いたのだった。
そしてだった。その三人のところにだ。
玄武の翁が来てだ。そうしてこう言ってきた。
「ふむ。そこにおったか」
「翁か」
「こちらに来られたんですか」
「そうじゃ。今休憩になった」
そのことを三人に伝えに来たというのだ。
「それでじゃが」
「それで？」
「それでといいますと」
「どうじゃ。茶でも」
翁は笑顔で三人に話した。
「それを飲むか」
「そうですね」
微笑んでだ。雪が応えた。
「それでは。お茶を」
「茶はいいのう」
翁は楽しげに笑ってもみせた。
「ずっと飲んでいきたいわ」
「ずっとですね」
「そうじゃ。雪よ」

雪にだ。話すのだった。
「御主も茶は好きじゃな」
「はい」
確かな声で翁に答える。
「とても」
「ならばずっと飲みたいな」
笑顔で雪に問うのだった。
「その茶を」
「では」
「そうじゃ。そういうことじゃ」
笑顔で話を続ける。
「そなたは生きよ。命を無駄にするでない」
「翁もそう仰るのですね」
「おそらくこの世界での戦いは刹那や常世だけではない」
「他の存在もですか」
「多くのまつろわぬ者達がおる」
その彼等の存在も話すのだった。
「オロチやアンブロジア」
「他にもいるな」
守矢がここで言った。
「元々この世界に介入しようとしている者達がな」
「感じ取っておったか」
「感じていた」
そうだというのだ。彼はまさにそれを感じていたのだ。
「実際にな」
「そうじゃ。明らかに妙な雰囲気じゃ」
この世界そのものがだというのだ。
「この世界には様々なものが渦巻いておる」
「その渦巻くもの全てをですか」
「そうじゃ。封じなければならん」

翁はまた雪に話した。
「戦い、そして倒してじゃ」
「では翁」
今度は楓が翁に尋ねた。
「僕達はこの世界にいる全てのまつろわぬ存在とですね」
「戦わなくてはならん」
まさにそうだというのだ。
「一つを封じてもどうにもならんのだ」
「わかりました。では私は」
「封じるな。戦うのじゃ」
これは雪への言葉だった。
「わかったな」
「そうなのですね。私は」
「しかし。あらゆるまつろわぬ存在が集る」
翁の目が光った。その傘の奥にある目がだ。

# 第七十九話　呂蒙、陣を組むのことその十

「その中心におる者は何者じゃろうな」
「そのことだが」
ここで来たのは嘉神だった。示現もだ。
「一つ妙な話を聞いた」
「それを話していいか」
二人でだ。こう翁達に言ってきたのだ。
そしてその二人の言葉にだ。翁も返すのだった。
「うむ、何じゃ」
「この国の都のことだが」
「董卓の他にもおかしな話を聞いた」
二人は話しながら翁達の中に入った。四霊が揃った。
「何進将軍の側近だった司馬仲達だが」
「一向に姿を見せない。だが死んだ訳でもないらしい」
「生きてるのは間違いないんだよ」
今度はガルフォードが来て話すのだった。
「ちょっと半蔵さんと調べて来たんだけれどな」
「それでなのじゃな」
「そうだ。司馬慰は生きている」
「しかし姿を見せない」
「董卓に命を狙われている為潜伏している」
守矢は腕を組んで述べた。
「そういう事情・・・・・・ではないな」
「どうも違うみたいだな」
また話すガルフォードだった。
「都にいるかどうかもわからないけれどな」
「それでもか」
「ああ、死んだ形跡は全くなかったさ」

ガルフォードはこう守矢に話す。
「何一つとしてな」
「切れ者と聞いている」
「それもかなりのだ」
嘉神と示現も話す。
「将軍の懐刀として董卓に狙われても仕方ないが」
「しかし失踪したとしてもだ」
それでもだと話していく。そうしてなのだった。
「その失踪の痕跡もない」
「足跡を調べられない」
「忍の連中総出で調べたんだけれどな」
今この世界には忍者も大勢来ている。彼等はそうしたことの専門家だ。しかしその彼等でもだ。司馬尉の足跡は何一つとしてだというのだ。
「こんなことははじめてなんだよ」
「おかしいですね。やはり」
楓がそこまで聞いて話した。
「それは」
「董卓殿と対立しているのなら」
雪も言った。
「私達に合流するのが妥当ですね」
「そうだ。ここに来ている筈だ」
「しかしそれもない」
嘉神と示現の顔に怪しむものが出ていた。
「都でのことは。どうにもだ」
「あまりにも謎が多いようだ」
「そしてその謎がそのままじゃな」
翁の目が再び光った。白の光を放つ。
「この世界の謎にもなっておるのう」
「闇に蠢いている」

嘉神も同じだった。その目の光を強くさせる。
「闇の奥深くにだ」
「そこに刹那もいる」
示現も話す。
「その他の者達もだ」
「何かあれだな。悪とかじゃないな」
ガルフォードもそう察していた。
「闇っていうかそんなのが今回の相手か」
「悪と闇は別物じゃ」
それを話す翁だった。
「また別のじゃ。別の目的で動いておるのじゃ」
「我々の相手は闇だな」
守矢が述べた。
「悪ではないか」
「悪は善の裏に過ぎん」
翁は悪をそう定義付けた。
「しかし闇はまた違うのじゃ」
「あらゆるものをその中に覆う闇か」
「そうじゃ。その闇が蠢いておるのじゃ」
そうした種類の闇だというのだ。
「善悪とは根本から違う」
「混沌ってやつか？」
ガルフォードは翁の話を聞いてこう問うた。

# 第七十九話　呂蒙、陣を組むのことその十一

「考えてみればその刹那の常世ってのもオロチもアンブロジアもそんな連中だしな」
「そうじゃな。混沌じゃ」
まさにその通りだとだ。翁も話した。
「わし等の相手は混沌じゃ」
「根本からして我等とは相容れないもの」
「そうしたものだ」
嘉神と示現が再び話す。
「それとどう戦うか」
「倒していくか」
「それが問題なのだ」
「この世界のだ」
こうした話をするのだった。そしてだ。
先陣は順調に進んでいた。劉備が左右に尋ねる。
「もうすぐなのかしら」
「はい、最初の関がです」
「近付いてきています」
その通りだとだ。孔明と鳳統が劉備に答える。
「あと三日です」
「三日で関の前に来ます」
「そう。それなら」
その話を聞いてだ。劉備は意を決した顔になった。
そしてそのうえでだ。こう二人に言うのだった。
「大変だけれど頑張らないとね」
「関を守るのは呂布さんです」
「正直に申し上げまして」
ここで軍師二人の言葉が曇る。

「あの人の強さは尋常なものではありません」
「かなり激しい戦いになると思います」
「そうよね」
そのことはだ。劉備もわかっていた。それで顔を曇らせる。
しかもだ。それに加えてだ。
徐庶もだ。劉備にこんなことを話すのだった。
「しかも。私達が戸惑っているとです」
「袁紹さんが出て来られます」
「援軍と称して」
それが問題だというのだ。軍師二人も話す。
「そうして前線に出られようとして騒動を起こされますので」
「時間をかけることもできません」
「袁紹さんって前に出たがる人なのね」
「はい、かなり目立ちたがりな方ですし」
「しかも御自身が動かれないと気が済まない方ですから」
袁紹のその性格がだ。もんぢあだというのだ。
「困ったことですけれど」
「曹操さんが何とか抑えておられますけれど」
それでもだというのだ。
「本当に私達がまごまごしていますと」
「出て来られますから」
「指揮官としては有能で兵隊さんの数も多いですけれど」
「流石に総大将が前線に出て来られるのは危険です」
問題はそこだった。とにかく袁紹は前線に出たがるのだ。元々自ら指揮して戦うタイプの将だがそれがこの場合は問題なのである。
「だからこそです」
「万全の状態で挑みましょう」
「ええと、呂布さんは」
何につけてもだ。まずは彼女のことだった。
「やっぱり。愛紗ちゃん達五人で相手をしないと駄目なのね」

「それで何とか互角かと」
「呂布さんの場合は」
とにかくだ。呂布の強さは圧倒的だった。
「ですから愛紗さん達五人で呂布さんを止めて」
「その間に他の敵兵を倒していきましょう」
「まずはそうして関の前まで至ります」
「そこから攻城戦です」
段階を踏んでいくというのである。
「基本的な作戦はこうです」
「攻城兵器は袁術さんからお借りします」
「既に袁術さんとはです」
徐庶は袁術のことを話す。
「お話をしましたので」
「えっ、もうなの」
「はい、早いうちにと思いまして」
それでだというのだ。
「それで宜しいですね」
「うん、いいよ」
劉備もそれでいいと返す。
「じゃあ。まずは呂布さんの軍を関まで退けて」
「そのうえで関を」
「陥とさないとね」
「はい。ですが」
ここでだ。徐庶はさらに話した。
「関はまだあります」
「虎牢関です」
「あの関もあります」
ここで孔明と鳳統も話す。
「むしろこちらの関の方がです」
「堅固ですから」

「ううん、辛い戦いになるのね」
劉備は顔を曇らせて述べた。
「それでも勝たないとね」
「そうです。漢王朝の為にも」
「そして民の為にも」
「わかってるわ」
こう話してだった。劉備達はこれからの戦いのことを考えるのだった。考えそのうえでだ。進軍を続けるのだった。洛陽に向かって。

第七十九話　　完

２０１１・５・７

# 第八十話　陳宮、決意するのことその一

第八十話　陳宮、決意するのこと

袁術はだ。馬車の中で御者を務めている張勲に対して言ってきた。

「のう七乃」

「はい、何でしょうか」

「今のところ敵は出ておらんな」

こうだ。馬車の中から身を乗り出して言うのだ。

「それでなのじゃが」

「蜂蜜水なら後ですよ」

張勲は袁術に対してすぐに釘を刺した。

「おやつの時間じゃないですから」

「むう、そうではない」

それを言われるとだった。袁術はむくれた顔で返した。

「また違う話じゃ」

「蜂蜜水ではあにのですか？」

「歌のことじゃ」

言うのはこのことだった。

「歌じゃ。そのことじゃ」

「歌われるんですか？」

「うむ。凛も呼んでじゃ」

ここでも彼女の名前を出すのだった。

「それでまた三人でじゃ」

「そうですね。いいですね」

「そうじゃろう。それにじゃ」

袁術の話は続く。

「張三姉妹も呼ばぬか？」

「あの三姉妹も呼ぶんですか」

「それと揚州の大小の姉妹もおるしのう」

人材は歌の方面でも豊富であった。
「どうじゃ？皆で楽しくやるか？」
「いいですね。それじゃあ」
「うむ、それではな」
「あと。少し思うんですけれど」
張勲から言ってきた。
「劉備さんのところの魏延さんですけれど」
「ああ、あの黒い奴じゃな」
「あの人もどうやら」
「そうじゃな。あれはかなり歌が上手いぞ」
袁術にもわかることだった。
「わらわ達と同じだけのう」
「そうですね。それもかなり」
「うむ、ではもう一人入れようぞ」
話を何時の間にか決めてしまっている。
「四人で歌おうぞ」
「戦いに勝ってからですね」
「勝ちたいのう」
「戦うからにはですね」
「うむ、勝つのじゃ」
戦いはだ。勝利を目指すものになっていた。そしてだった。
その中でだ。袁術はまた言う。
「そして勝って歌うのじゃ」
「そうしましょう。それとですね」
「今度は何じゃ」
「凛ちゃんですけれど」
張勲も彼女の名前を出すのだった。
「やっぱり。可愛いですよね」
「わらわは大好きじゃ」
「私もです」

「待て、凛はわらわのものじゃぞ」
曹操の配下であるがだ。この二人は取り合っているのだった。
「そのことを忘れるな」
「あら、厳しいですね」
「厳しいも何も凛とわらわは固い絆で結ばれている」
「ですからそれは私もですよ」
「いいや、わらわとの仲に比べればじゃ」
袁術はあくまで言う。
「七乃とのそれはまだまだじゃ」
「だって私達もうできてますから」
「できておらんではないか、だからわらわ達はじゃ」
こうだ。あくまで言い張る袁術だった。彼等は平和だった。
しかしだ。都ではだ。やはり不穏な空気が漂っていた。
董白がだ。曇った顔で宮廷の者達に話していた。
「こんな状況でもなのね」
「はい、宮殿の造営をです」
「せよとのことです」
「そんな余裕ないわ」
董白はその曇った顔で言った。

## 第八十話　陳宮、決意するのことその二

「生きるか死ぬかの戦争がはじまるっていうのに」
「ですがそれでもです」
「董卓様は」
「絶対に姉様じゃないわ」
董白は言い切った。
「姉様はそんなこと命じられないわ」
「ですが」
「董卓様のお名前で出された命です」
「それではです」
「やはり」
「その姉様は何処におられるのよ」
董白はきつい声でそのことを問い返した。
「私が御会いしたいと伝えて」
「ですが董卓様はです」
「誰にも合われないとのことです」
「話にならないわね」
董白の顔も声もうんざりとしたものになった。
「それじゃあね」
「とにかくです」
「宮殿の造営を」
「できないわよ、今は」
とてもだというのだ。
「戦で人を駆り出しているっていうのに」
「残った民達で」
「できるだろうと」
「宦官みたいなこと言うわね」
董白はそのことを本能的に察していた。

「姉様の言われることじゃないわね」
「ですから」
「それでも。相国であられる」
「そうね。そうなってるわね」
董白の言葉に棘が宿った。
「いいものよね。姉様のお名前を出せばいいんだから。それに」
「それに？」
「それにといいますと」
「帝はどうされているのかしら」
今度はだ。皇帝の話をするのだった。
「洛陽に入ってから一度もお顔を見てないわよ」
「帝はです」
「御身体が優れず」
「ですから」
「そうね。帝も相国もお姿を見せない」
董白はシニカルな口調で言っていく。
「有り得ないことね」
「はあ」
「それは」
「いいわ。仕方ないわ」
やはりシニカルな口調だった。
「それでだけれど」
「はい、それでは」
「宮殿の造営をです」
「御願いします」
「詠と話をしてね」
それでだというのだ。
「そうさせてもらうわ。ただ」
「ただ？」
「ただといいますと」

「遅れそうね」
口実であった。明らかにだ。
「人手がないからね」
「だからですか」
「それでなのですか」
「兵は殆んど関に出払ったわ」
彼等はだ。そうしたというのだ。
「それに若い働き手はね」
「民のですね」
「その者達については」
「同じよ。他の造営に出してるわ」
実際にその通りだが程度は話してはいない。
「だから。遅れるわ」
「何時頃になるでしょうか」
「それでは」
「さてね」
やはりはっきりと答えない董白だった。

## 第八十話　陳宮、決意するのことその三

「それはわからないわね」
「左様ですか」
「残念ですね」
「まあ。造営はするわ」
今回は言葉だけである。
「そういうことでね」
「畏まりました。それでは」
「私達はこれで」
「貴方達もね」
董白はその彼等にも話した。
「帝にもお姉様にも御会いできないのね」
「残念ですが」
「それはできません」
彼等にしてもだ。そうなのだった。
それでだ。暗い顔でこう話すのだった。
「御二人はこの宮殿におられますが」
「それでもお姿は」
「本当におかしなことね」
また言うのだった。
「国の柱が双方もというのは」
「ですね。しかし」
「御姿はどうしても」
「わかったわ」
話を切る言葉だった。
「それではね」
「はい、それでは」
「それではといいますと」

「詠と話があるから」
こう言うのであった。
「貴方達は下がっていいわ」
「わかりました。それでは」
「これでは」
こうしてだった。側近達はその場を後にするのだった。そして董白は。
彼女自身の言葉通り賈駆のところに来てだ。そのうえで彼女に問うのだった。
「姉様はどうしてもなのね」
「そうよ。まだよ」
目を怒らせて返す賈駆だった。
「今は。ちょっとね」
「ちょっとちょっとって随分経つけれど」
「仕方ないじゃない。どうしても会えないのよ」
「私でも?妹の話でも」
「そうよ。残念だけれどね」
「残念とは思ってないから」
それはないという董白だった。
「ただ。それでもよ」
「会えないことがっていうのよね」
「そうよ。姉様がこんなに人前に姿を見せないし」
しかもだというのだ。
「帝もどうされたのよ」
「御病気よ」
賈駆も言うことは同じだった。
「だから仕方ないじゃない」
「普通に考えればね」
「普通に?」
「そう、普通に考えればね」

あえてだ。董白は皮肉を装って返す。
「姉様は何かあれば率先して動かれるのに」
「それが今はっていうのね」
「ましてや各州の牧達の軍がこの洛陽に迫っているのよ」
「それはわかってるわよ」
「どうして姉様が出陣されないのよ」
「月が出陣したことなんてないでしょ」
本質的に文官である彼女はそういうことはしないのだ。
「いつも華雄達がしてくれてるじゃない」
「それにあんたもね」
董白はまたシニカルな感じで言ってみせた。

## 第八十話　陳宮、決意するのことその四

「あんたもそうするわよね」
「私もって。どういうことよ」
「あんたも何かあればいつも自ら作戦を立てるじゃない」
「軍師として当然のことよ」
「けれど今はしないわよね」
「それが変だっていうのね」
「思いきりね。おかしいわね」
まさにだ。その通りだと返す董白だった。
「あんたも今回は作戦何も立てないし」
「ねねがいるじゃない」
「あの娘に何ができるっていうのよ」
陳宮に対して侮辱とも取れる言葉だった。だがそれでもあえて言ったのだった。
「まだ小さいし。しかも恋限定の軍師じゃない」
「それでも軍師は軍師よ」
「あんたと比べたら落ちるわよね」
幼さ故にだった。未熟だというのだ。
「それに対して相手は名だたる軍師が揃っているじゃない」
「その分恋がいるわよ」
「恋だったら何でもできるって訳じゃないでしょ」
「そうね。けれどよ」
「けれど、なのね」
「そうよ。あの関にあの娘がいたら大丈夫よ」
「だといいけれどね」
「とにかくよ。あんたはあんたでね」
賈駆の方から董白に話す。
「やって欲しいことがあるから」

「この都の防衛ね」
「それを頼むわ」
呂布達が出払っている。それならばだった。
「そういうことでね」
「わかってるわ、それはね」
棘を収めてだ。董白は言葉を返した。
「それはちゃんとするから」
「なら御願いね。そっちは」
「全く。何が何かわからないわ」
董白は眉を顰めさせて話す。
「今の状況はね」
「僕にそれを言うのね」
「あんた、何か知ってるでしょ」
賈駆のその眼鏡の奥の目を見据えて問うたのだった。
「姉様のことも全部」
「何が言いたいのよ」
「ありのままよ。それで隠してるわね」
問うその目の鋭さがさらに強くなる。
「そうしてるわね」
「別に何もないわよ」
「じゃあそういうことにしておいてあげるわ」
董白はここでは矛を収めた。しかしだった。
そのうえでだ。こんなことを言うのだった。
「とりあえずはね」
「これで帰るのね」
「今話すことはこれで終わったから」
だからだというのだ。
「それじゃあね。またね」
「ええ、またね」
こうしてだった。董白は賈駆の前を後にする。だがその中にある

疑念はだ。消えないどころかさらに強まる一方だった。
そしてだ。出陣し関に入っているアースクエイクはだ。肉の塊を食いながらそのうえで共にいる幻庵に対してこう尋ねるのだった。
「なあ」
「何だケ？」
「呂布ちゃんだけれどよ」
尋ねるのは彼女についてだった。
「おかしいよな、最近」
「わしもそう思うケ」
幻庵も肉を喰らいながら彼の言葉に応える。巨大な豚肉をだ。

## 第八十話　陳宮、決意するのことその五

「暗いケ」
「だよな、どうしたんだろうな」
「この戦が気に入らないケ？」
「それか？」
「だからではないケ？」
また話す彼だった。
「まあわしは戦えればそれでいいケ」
「だよな。俺は盗みができないのは残念だけれどな」
生粋の盗賊である彼らしい言葉だった。
「それでもな。仲間が暗いのはな」
「やっぱり気になるケ」
「確かにこの戦おかしいけれどな」
アースクエイクは骨つき肉にかぶりつきながら話す。塩と胡椒をかけて焼いただけの簡単な料理だがそれでも実に美味いものだった。
「董卓さんは出て来ないしな」
「それもおかしいケ」
「おかしなことだらけだぜ。大体何で俺達洛陽に入ったんだ？」
「それで宮殿とか造ってケ」
「董白さんって贅沢とか嫌いなのにな」
「妙なことだケ」
「おかしなことだらけだよ」
アースクエイクから見てもそうなのだった。
「今回の戦はな」
「わしは覇王丸と手合わせできるのなら嬉しいケが」
「ああ、あいつ向こうにいるんだったな」
「あの生き方は泣かせるケ」
覇王丸への憧れはだ。そのまま残っている彼だった。

「だから是非だケ」
「剣を交えたいんだな」
「そういうことだケ。まあキムの旦那がいるのが残念だケが」
「あの旦那は仕方ないな」
そのことはもう諦めている二人だった。
「ジョンの旦那もな」
「あの二人はどうにもならないケ」
「一緒になったのが運の尽きだったな」
「こっちの世界で最悪の存在に遭ったケ」
「全くだよな」
キムとジョンについてはこう言う二人だった。しかしだ。
それでもだ。二人は呂布達にはこう言うのは変えなかった。
「しかし。呂布ちゃんも元気出して欲しいよな」
「女の子の暗い顔は好きだケがこの嫌な雰囲気は好きになれないケ」
こうした言葉を出すという意味で幻庵も人間だった。その人間としての感性でだ。彼もまた今のこの不穏な雰囲気に不快なものを感じていたのだ。
チャンとチョイもだ。偵察に出ながら話していた。二人の周りは荒野だ。
「この戦、凄く不愉快だよな」
「全くでやんす」
二人共不機嫌そのものの顔で話している。
「贅沢三昧の生活とかな」
「何かと問題があったでやんすよ」
「それで討伐戦仕掛けられてな」
「おかし過ぎるでやんすよ」
「これだけだと自業自得なんだよ」
「暴君が征伐を仕掛けられているということでやんす」
成り行きだけを考えればだ。そうだというのだ。
「けれどな。董卓さんってな」

「民を苦しめることはしないでやんす」
「それで何でこんなことになってんだ？」
「おかしなことだらけでやんすよ」
それがどうしてもというのだ。
「何か各州の牧を取り潰そうとしたりしてな」
「それじゃあ叛乱が起こるのは当たり前でやんす」
「で、こうして実際に戦になる」
「困るのは民達でやんす」
「董卓さんのやることか？」
「絶対に違うでやんすよ」
二人もそのことは感じ取っていた。それでなのだった。
偵察に出ながらもだ。こんな話をするのだった。

## 第八十話　陳宮、決意するのことその六

「あえて天下を乱れさせるようなことしてな」
「しかも都では贅沢三昧でやんす」
「まさに誰がいい目を見るって話だよ」
「誰も見ないでやんすな」
「ああ、君達そこにいましたか」
ここでだ。二人のところにジョンが来た。
キムも来た。四人になってまた話す彼等だった。チャンとチョイは自分達が思っていることを話す。するとキムとジョンもこう言うのだった。
「確かにだ。我々が都に入ってからだ」
「おかしなことが起こり続けています」
二人もこう思っていたのだ。
「国を意図的に乱させる」
「その様な流れですね」
「董卓殿のされることではない」
「これでは暴君の所業です」
「でしょ？あの董卓さんにしちゃ」
「変なことでやんすよ」
ここぞとばかりに二人に話すチャンとチョイだった。
「それに人前に出なくなりましたし」
「これもおかしいでやんす」
「誰か黒幕がいるのだろうか」
キムは腕を組み考える顔になって話した。
「まさかとは思うが」
「陰謀の匂いがしますね」
ジョンも言った。
「この状況は」

「正直戦うべきではないですね」
キムは真顔でジョンに話した。
「この戦いに正義はありません」
「しかもおそらくは董卓さんの御考えではありませんし」
「だとすればですね」
「戦えば過ちになります」
これが二人の考えだった。
だが、だ。二人はこんなことも言うのだった。
「しかし戦わなければ」
「それが命令ですから」
「戦うべきではない戦い」
「それをすることになりますね」
「俺だって暴れるのは好きだけれどな」
「切り刻む絶好の機会でやんすが」
何をやってもその嗜好は変わらない二人である。
「けれど気の進まない中じゃな」
「そんなことをしても面白くも何ともないでやんす」
これが二人の言葉だった。
そしてだ。あらためてだった。キムとジョンにこう話した。
「結局どうしますか？」
「今回はどうするでやんすか？」
「やることはやるしかありません」
ジョンは難しい顔で二人に答えた。
「その為にここに来ているのですから」
「結局そうですか」
「戦うしかないんでやんすね」
「ただ。状況が変われば」
どうかとだ。ジョンは話を変えてきた。
「それに乗るべきですね」
「ジョンさんの言う通りですね」

キムもジョンのその言葉に頷いた。
「そして戦うべき相手が前に出て来たならば」
「その相手を成敗しましょう」
「まあ平気で叩き潰せる相手なら俺達だってな」
「思う存分戦えるでやんすよ」
それならばだと言う二人だった。そしてだった。
彼等はとりあえずは偵察をするのだった。連合軍の姿は確認して
そのうえで氾水関に戻った。そうして陳宮に連合軍のことを話す。
話を聞いた陳宮はだ。暗い顔でこう返した。
「わかったのです」
「わかったって」
「それだけでやんすか？」
「とにかくわかったのです」
チャンとチョイにこんな風に返すだけだった。
「御疲れ様なのです」
「ううん、じゃあこれでな」
「御飯にさせてもらうでやんす」
「焼肉用意してあるです」
食事はそれだというのだ。

## 第八十話　陳宮、決意することその七

「確か四人は韓国人だったのですね」
「それはそうだが」
「その通りですが」
「ならたっぷり食べるのです」
陳宮はキムとジョンにも述べた。
「遠慮することはないのです」
「いや、遠慮しないけれどな」
「食べるのは大好きでやんすよ」
「なら。食べて来るのです」
こう言ってだ。彼女は四人を下がらせた。そのうえでだった。
呂布のところに行き偵察のことを話す。呂布は無表情で聞いているだけだ。
そしてだ。こう言うのだった。
「わかった」
「はいなのです。それならです」
「それなら？」
「ねね達もお昼にするのです」
今度は呂布に食事を勧めるのだった。
「そうするのです」
「食べる」
「そう、食べるのです」
また勧める。
「今日は恋殿の大好物の肉まんなのです」
「それなら」
「はい、食べるのです」
こうした話をしてだった。二人は小さな食堂に入り向かい合って肉まんの山を囲む。そうして食べようとするがそれでもだった。

呂布は食べようとしない。その呂布にだ。
陳宮は必死のかおになってだ。それでこう彼女に言った。
「あの、恋殿」
「何？」
「この肉まん美味しいのです」
食べながらだ。あえてこう言うのだった。
「だからどんどん食べるのです」
「恋、いい」
ところがだ。呂布はこう返すのだった。
「今はいい」
「いいのです？」
「食欲がない」
だからだというのだ。
「だからいい」
「そうなのです」
「ねねが食べればいい」
陳宮に対して言う。
「お腹一杯食べればいい」
「わかったのです」
項垂れた顔で答えるしかない陳宮だった。そしてだ。
陳宮だけ肉まんを食べた。しかしだった。
彼女も殆んど食べなかった。こうして食事は終わった。そのうえでだ。
自分の部屋に下がる。彼女も暗い顔だった。
しかしだ。その中で、であった。
陳宮はあることを決意した。そうしてまた何かが動くのだった。
その頃だ。進撃する連合軍の中でだった。馬超がだ。
隣にいる趙雲にだ。こんなことを言うのだった。
「しかし星ってな」
「どうしたのだ？」

「胸大きいよな」
こうだ。彼女の目立つ胸を見てのことだった。
「愛紗程じゃないけれどな」
「そう言う翠も結構なものではないか？」
「いや、あたしは別に」
「中々いい大きさではないか」
実際だ。馬超の胸もだ。結構以上に目立つものがある。
その胸を見ながらだ。趙雲は言うのだ。
「しかも形もいい」
「そうか？自分ではそう思わないけれどな」
「風呂場で見ているからわかる」
それでだというのだ。
「中々美味そうだ」
「おい、何でそういう話に持って行くんだよ」
「何度も言うが私はおなごも好きだ」
「じゃあひょっとしてあたしを」
「どうだ？本当に」
淫靡な笑みで馬超を見ながら言うのだった。

# 第八十話　陳宮、決意することその八

「愛紗も入れて三人でだ」
「またここで私が話に出るのだな」
いささか呆れた顔で言う関羽だった。
「星の胸へのこだわりは異常だな」
「心も見ているぞ」
「心も？」
「そうだ。二人のその心もだ」
見ているというのである。
「実にいい」
「いいか？」
「そうなのだろうか」
「素直で純情だ」
そのことは馬超も関羽も同じだった。
「そうした娘を味わうことこそいいのだ」
「そうそう、翠姉様って実はかなり女の子な性格なのよね」
馬岱も出て来て言う。
「愛紗さんもそうだけれど」
「女の子なのだ？」
「そう、女の子なのよ」
こうだ。馬岱は張飛にも話す。
「だから結構弄りがいがあるのよ」
「左様だ。翠も愛紗も弄ってこそだ」
また妖しい笑みを見せて語る趙雲だった。
「もっとも。夜に弄りたいのが本音だが」
「結局そこに話をやるか」
「いつも通りの流れにするのか」
「夜なのだ？」

張飛はわからない顔で首を傾げる。
「どうして夜がいいのだ？」
「ええと。どうしてなのかな」
馬岱もわからないといった顔である。
「夜に何かあるのかしら」
「全然わからないのだ」
「まあ二人もそのうちわかる」
趙雲はこの二人には食指を動かさなかった。そのうえでの言葉だった。
「それではだ」
「それでは？」
「それではというと？」
「今から食事だ」
それをするというのだ。
「メンマを食するとしよう」
「ああ、あのメンマ丼か」
「それを食べるのだな」
「そうだ。あれを食べる」
今度は楽しげな微笑で言う趙雲だった。
「若しくはメンマサンドだ」
「どっちにしてもメンマなんだな」
「本当に好きだな」
「メンマは全てだ」
こうまで言い切る趙雲だった。
「だからこそだ」
「それでか」
「あそこまで食するのか」
「その通りだ。メンマはいいものだ」
趙雲はまた言う。
「さて、ではメンマ丼としよう」

「好きだな、本当に」
「そうだな」
馬超も関羽もいささか呆れる程だった。
そうした話をしながらだ。彼女達は食事を摂る。そしてその頃。
関に一人の男が来た。それは山崎だった。
彼は陳宮と会ってだ。思わぬことを言った。
「同じ匂いがしたぜ」
「同じ匂い？」
陳宮は彼のその言葉ニまずは首を捻った。
「何なのです、それは」
「ああ、俺と同じ匂いって意味だよ」
そうした意味での言葉だというのだ。
「俺は実は」
「悪党ではなかったのです？」
「悪党は悪党だよ」
それはそうだと返すのは忘れない。
「けれどな。そうした意味じゃなくてな」
「違うのです？」
「実は俺はな」
山崎は真面目な顔になっていた。

## 第八十話　陳宮、決意するのことその九

そしてその顔でだ。陳宮に話すのだ。
「オロチ一族なんだよ」
「オロチ一族！？」
その単語を聞いてだ。
陳宮は首を捻った。そのうえで山崎を見上げて問うた。
「何なのです？それは」
「簡単に言えば文明とかそういうのを破壊しようっていう奴等だよ」
「山崎はその一族なのです？」
「とはいって俺はそういう話には興味ねえけれどな」
オロチであってもだ。彼はそうなのだ。
「それでその匂いをな」
「感じたのです？」
「ああ、ちょっと用があって宮廷に入ってな」
それでだ。感じ取ったというのだ。
「その時代に匂ってきたんだよ、一族の匂いがな」
「ということは」
それを聞いてだ。陳宮はだ。
すぐに察した。これまでの異様な一連の出来事の事情をだ。
そしてそのうえでだ。こう山崎に話すのだった。
「月殿はまさか」
「多分オロチに捕まってるな」
山崎も言った。
「それで名前だけ使われてるな」
「ううむ、許せないのです」
「まあ俺はそういう世界を滅亡とかは興味ないんだよ」
「ないのです？」
「だからこっちにいるんだよ」

董卓のところにいるというのである。
「まあまさかキムの野郎までいるとは思わなかったけれどな」
「キムさんのところは置いておいてです」
「ああ、それでオロチのことだよ」
その話が続けられるのだった。
「このままこっちの世界を滅亡させていいかい？」
「そんなのは論外なのです」
はっきりと言い切った陳宮だった。
「何とかするのです」
「じゃあどうするんだ？」
山崎は陳宮を見下ろしながら彼女に問うた。
「あんた呂布を救いたいんだよな」
「ねねは恋殿の軍師です」
これが返答だった。
「それなら例え火の中水の中なのです」
「じゃあ決まりだな」
「もう決めていたのです！」
両手を力瘤にしての言葉だった。
「恋殿の為です！」
「言ったな。それならな」
「それなら？」
「あんたの思うことをするんだな」
こう陳宮に話すのだった。
「あんたがしたいことをな」
「ねねは世界が滅亡するなんて絶対に嫌です」
これは誰もがだった。しかしだ。
それと共にだ。彼女はこうも言うのだった。
「けれどそれ以上になのです」
「それ以上になんだな」
「そうなのです。恋殿の悲しむ顔は見たくないのです」

まさにだ。彼女らしい言葉だった。
「何があろうともなのです」
「だな。じゃあ俺はな」
「山崎は？」
「都に案内しようか？宮廷にな」
「それでは時間がないのです」
だからだ。それはしないというのだ。
「都に行って戻ってだとここでの戦がはじまっているのです」
「明日にでも来るみたいだな」
山崎もそのことは聞いていた。
「敵軍がな」
「そうなのです。とにかく時間がないのです」
「じゃあ決まりだな」
山崎は笑顔で言った。

# 第八十話　陳宮、決意するのことその十

「行って来いよ」
「そうするのです」
「確かに俺は悪党で外道さ」
まさにそのものの言葉だった。
「けれどな」
「けれど？」
「他人が誰かの為に何かをすることを邪魔することはしないさ」
「それはないのです？」
「そういうことはしないんだよ」
また言う山崎だった。
「あとな。口は堅いぜ」
「口もなのです」
「このことは言わないさ」
笑ってだ。山崎は述べた。
「まあ帰ったら馬刺し御馳走してくれよ」
「馬刺し？ああ、馬の刺身なのですね」
「そうさ。それを御馳走させてもらうぜ」
「わかりましたのです。それなら帰ったら」
「前から妙に思ってたけれどな」
山崎はこんなことも述べた。
「何で俺達がこっちの世界に来てるのかな」
「それは誰もわからないことだったのです」
「とりあえず深く考えずに遊んでたけれどな」
「遊んではいなかったと思うのです」
「言い換えるか。強制労働と修業地獄だったな」
うんざりとした顔になってでだった。山崎は陳宮に話した。
「こっちの世界じゃな」

「それが楽しかったのです？」
「楽しいと思うか？」
「いえ、全然なのです」
それはもう言うまでもないことだった。
「凄く嫌そうだったのです」
「そうだよ。キムとジョンが一緒にいたからな」
それではだった。楽しい筈がなかった。
「洒落にならなかったな」
「それは今もなのです」
「その通りだよ。まあとにかくな」
「はいなのです」
「行って来るんだな」
陳宮に笑顔で告げた。
「それであんたの手に入れたいものを手に入れるんだな」
「そうするのです」
こうしてだった。陳宮は一人関を出た。そうしてそのうえでだった。彼女の為すべきことをせんと向かうのであった。
その頃連合軍では。また騒動が起こっていた。
ジョーカーがだ。騒いでいたのだ。
「全くねえ。何かが違うんだよね」
「そうか？」
「違うのかのう」
覇王丸と狂死郎がそのジョーカーに問い返していた。
「花札と同じだろ」
「このトランプなるものも」
「そうだ。同じだ」
ズィーガーもそれを言う。
「私も花札を知っているが」
「だから違うんだよ」
まだ言うジョーカーだった。

「何ていうかね。イカサマをしにくいんだよ」
「そんなことするなよ」
「全くだ」
覇王丸と狂死郎がこう突っ込みを入れる。
「今金とかはかけてないけれどな」
「それはいかんぞ」
「いかさまをしないと楽しくないじゃない」
しかしまだ言うジョーカーだった。
「だからここはさ。楽しくね」
「ったく、しょうがねえ奴だな」
「それが御主のやることか」
「そうだよ。だって僕は明るく楽しくだから」
それでだというのだ。

# 第八十話　陳宮、決意するのことその十一

「イカサマも楽しくね」
「イカサマは楽しくするものなのか？」
十兵衛はそのことに疑問を呈した。
「それは違うと思うが」
「ああ、俺もそう思う」
「わしもだ」
「私もだ」
覇王丸と狂死郎だけでなくズィーガーも述べる。
「そこでそう言うのがな」
「御主のいかんところだ」
「政争堂々とするべきではないだろうか」
「そこが僕の違うところなんだよ」
ジョーカーは楽しく笑って話す。
「ほら、こうしてね」
「それは」
右京もいるがだ。彼はジョーカーのその手の動きを見て思わず声をあげた。
「妖術か」
ジョーカーはその手から無数のカードを出してだ。宙に舞わせたのだ。
そしてそのうえでだ。こう言うのだった。
「それはそちらの時代の術なのか」
「ああ、違うよ」
ジョーカーはそれは否定した。相変わらずカードをまわせながら。
「これって手品なんだよ」
「手品というと」
「マジックだよ」

それだというのである。
「これは手品だよ」
「手品というのか」
「妖術はちょっと以上に超絶な術だけれどね」
「手品は違うのか」
「そうだよ。手品は違うよ」
こう右京に話すのだ。
「やるにはコツがあってね」
「コツがあるのか」
「それが手品なんだ」
「じゃああれか？」
今度は覇王丸が言ってきた。
「乱鳳とかが空を飛ぶのもあれもか」
「あれは手品じゃないね」
それはすぐに否定するジョーカーだった。
「とはいっても妖術でもないね」
「それでもないのかよ」
「あれは何なのかなあ」
ジョーカーも首を捻ることだった。
「僕もよくわからないよ」
「人は鳥ではない」
十兵衛もそれを話す。
「だからあれはな」
「面妖な話じゃ」
狂死郎もこう言う。
「普通に空を飛んでのう」
「僕もあれはわからないんだ」
手品を得意とするジョーカーもだった。
「一体何なのかなあ」
「やはり魔術なのか」

ズィーガーはこう考えた。
「あれは」
「もっと違うものじゃないかな」
ジョーカーはまた首を捻る。
「何かはわからないけれどね」
「眠兎もな」
覇王丸は彼女の名前も出した。

# 第八十話　陳宮、決意するのことその十二

「あいつも空飛ぶしな」
「離天京では普通なのか？」
「いや、普通じゃないだろ」
十兵衛にすぐに述べた。
「どう考えてもな」
「だよね。絶対に」
また話すジョーカーだった。
「人間空飛ぶことはできないよ」
「人間ではないのか」
右京はこう述べた。
「それでは」
「いやいや、おいら達人間だよ」
「そうだよ」
ここで本人達が出て来て言う。
「ちゃんとしたね」
「それ以外の何だっていうのよ」
「そうなのかな」
「そんなの見ればわかるじゃないか」
「そうそう」
二人はジョーカーに対しても言う。
「人間以外の何だっていうんだよ」
「空なんて誰も飛べるよ」
「今もできるのかよ」
覇王丸がそれを問う。
「それは」
「ああ、できるさ」
「普通にね」

こう言ってだ。実際に空を飛んでみせる二人だった。それを見てだ。

兵達がだ。仰天して言うのだった。

「な、何だ!?」

「人が空を飛んでる!?」

「おい、嘘だろ!」

「仙人か!?」

「いや、妖怪か!」

彼等にとってみればまさにそう思える光景だった。それでだ。

中には上に向かって弓を放つ者まで出る。まさに大騒ぎだった。

そしてその騒ぎを抑える為にだ。紀霊が出て来て収めるのだった。

「まあ待て、あれは乱鳳と眠兎だ」

「むっ、そういえば確かに」

「あの二人だ」

「そうですね」

「味方だ。おそらく妖術で空を飛んでいるのだ」

彼女はそう考えるのだった。

「気にするな。いいな」

「わかりました。それでは」

「今は」

「うむ。しかしな」

ここでだ。紀霊はだ。

項垂れる顔になってだ。言うのだった。

「あちらの世界の人間は。本当に色々だな」

その色々なことを見ることになった。その中でも進軍が続けられていく。

第八十話　完

2011・5・10

# 第八十一話　張飛、陳宮を庇うのことその一

第八十一話　張飛、陳宮を庇うのこと

華陀はだ。今度はだ。

怪物達と共に北の地に来ていた。そこは見渡す限りの草原だった。

緑の絨毯の中にいてだ。彼は言うのだった。

「ここだな」

「ええ、感じるわ」

「ここになるわね」

怪物達も彼のその言葉に頷く。それぞれ彼の左右を固めている。

「定軍山と赤壁もあるけれど」

「最後はここになるわね」

「運命の決戦ね」

「それになるわね」

「そうだな。ここしかない」

華陀は目を鋭くさせて話す。

「連中にとってもな」

「この国はいつも北の勢力に悩まされてきているからね」

「だからあれもあるんだし」

「万里の長城は伊達じゃないわ」

「あれを築いているのはちゃんとした理由があるのよ」

「そうだな。しかしな」

ここでまた言う華陀だった。

「それはこの時代だけじゃないんだな」

「そうよ。二十一世紀もね」

「ずっと変わらないことなのよ」

貂蝉と卑弥呼がそのこともだった。華陀に話したのだ。

「匈奴から鮮卑、突厥、遼、金」

「それでモンゴルね」
「そこからロシアになっていくのよ」
「けれど全部同じなのよ」
こう話すのである。
「北からの勢力にね。悩まされる運命なのよ」
「この国にとって北は大きな問題なのよ」
「そうか。俺達の時代だけじゃないんだな」
華陀は真面目な顔で話す。
「考えてみれば昔からだからな」
「そうでしょ。周が遷都したのも彼等のせいだったしね」
「始皇帝も悩まさせられたし」
それで長城を築いたのだ。それがはじまりだったのだ。
「この国は絶対に北からの脅威からは逃れられないわ」
「どうしてもね」
「しかしな」
ここで華陀は言うのだった。
「一応匈奴や烏丸は組み込まれたけれどな」
「袁紹さんによってね」
「そうなったわね」
それはそうなったという。
しかしだった。それでもだと貂蝉と卑弥呼は話すのだった。
「けれどよ。北はまだまだ続くから」
「この草原の北には物凄い森林地帯があるけれど」
「そこに至るまでずっと草原だから」
「それまでに一杯色々な部族がいるのよ」
「そして奴等の伏兵もだな」
華陀は言った。
「いるんだな」
「そうよ。幾らでもいるわ」
「そしてそのうえで機が来ればね」

「漢に来る」
華陀は言った。
「そうしてくるんだな」
「ええ。今の都のことはまだはじまりに過ぎないわ」
「大変なのはこれからよ」
怪物達は華陀にこう述べる。
「だから都の話を終わらせても安心しないで」
「戦いはまだまだ続くから」
「わかった。それで奴等の漢での本拠地は」
今度はその話をする華陀だった。
「定軍山なんだな」
「ええ、あそこよ」
「あそこにいるわ」
「わかった」
そのことを聞いて頷く華陀だった。
そしてそのうえでだ。彼はこうも言った。

# 第八十一話　張飛、陳宮を庇うのことその二

「それなら。都での話が終わればだ」
「そこに向かってね」
「漢での拠点を潰しておかないとね」
「次から次にそうしていくか」
華陀は真面目な顔で述べた。
「世界の為にな」
「そうそう、順序よくね」
「一つずつ進めていきましょう」
「戦いは続くんだな」
華陀は目を鋭くさせて述べた。
「都で終わらせたいと思ったんだがな」
「残念だけれどそうはならないわ」
「本当にこれからなのよ」
それはしっかりと言う妖怪達だった。
「あたし達とダーリンの関係と同じよ」
「一つずつちゃんとしていかないとね」
「そうだな。それはな」
しかもだ。華陀は彼等の言葉に平然として応える。それを見てだ。
刀馬がだ。唸る様にして述べた。
「やはりこの男は」
「違いますね」
「ああ、違う」
まさにだ。そうだというのだ。
「器が大きい。そしてそれはだ」
「それは？」
「無限だ」
彼が否定してきているだ。それだというのだ。

「それは無限だ」
「零ではありませんか」
「そうだな。無限だな」
それだというのだ。
「あの男と同じか」
「蒼志狼殿と」
「俺は若しかするとだ」
次にはだ。己のことを話す刀馬だった。
「大きな過ちを犯していたのかもな」
「過ちをですか」
「考え違いか」
それではないかというのだ。
「俺は今まで絶対を求めていたな」
「はい」
命は常に彼の傍にいる。それならばだ。
すぐにだ。言えることだった。
「その通りです」
「それは零だった」
またそれだと言うのだった。
「しかし華陀には零はあるか」
「いえ、ありません」
命は再びすぐに刀馬に答えた。
「あるのはです」
「大器だな」
それだとだ。刀馬は述べる。
「無限の大器だな」
「何もかもを入れてしまう大器ですね」
「それが華陀だ。ならば俺もだ」
「刀馬様もまた」
「その大器の中に入る」

入るというのだ。
「いや、既に入っている」
「入っていますか」
「そしてあの男の言葉を思い出した」
「蒼志狼殿の」
「あの男は言っていたな」
どうかと話すのだった。
「俺の氷河が溶けたその時に俺の大河が動き出すと」
「その通りです」
それは命が聞いている言葉だ。まさにその通りだった。
「あの方はそう仰っていました」
「ならば今か」
刀馬は言った。
「今こそその時なのか」
「刀馬様が動かれる時だというのですね」
「そうなのかもな。俺はあの男に克つ」
克つ、ではなかった。
「何よりも俺自身にだ」
「では刀馬様」
「その俺と共に来てくれるのだな」
「そうさせてもらいます」
命もだ。微笑んで頷く。

# 第八十一話　張飛、陳宮を庇うのことその三

「私はその為にいるのですから」
「そう言ってくれるか」
「是非共」
「その言葉確かに受け取った」
刀馬のその紅い目が光った。
「では共にだ」
「何処にも参りましょう」
こう話す彼等だった。そしてその彼等を見てだ。
貂蝉はだ。こんなことを言うのだった。
「そうそう、心を閉ざしても何にもならないわ」
「心は開いてこそなのよ」
卑弥呼も言う。
「折角の大器が勿体無いわよ」
「刀馬さんがあたし達と共にいるのも運命の導きなのよ」
「その氷河を大河に変える為のね」
「その為になのよ」
こう話す彼等だった。そしてであった。
彼等はだ。華陀にあらためて話した。
「じゃあダーリン」
「今はこの場所をじっくりと調べるのね」
「ああ、そしてこの場所の後は」
華陀はその草原を見ながらだ。二人の妖怪達に話す。
「定軍山とだ」
「赤壁ね」
「あの場所もね」
「この三つの場所で戦いが行われる」
それはだ。もう絶対だというのだ。

「それならだ」
「じっくりと見ておかないとね」
「その地を知らないといけないわよ」
「敵は手強い」
華陀はだ。今はそこにいない敵達を見据えて述べた。
「于吉や左慈達だけでも厄介らしいが」
「そうよ。オロチに常世の者にアンブロジア」
「他にはネスツもいるから」
「ネスツ。あの者達か」
獅子王がその名に反応を見せた。
「あの者達もこの世界に来ているのか」
「あら、知ってるのね」
「獅子王さんとも因縁があったの」
「主に真の方だがな」
彼を操っていただ。黒幕がだというのだ。
「我々の行動に何かと介入してきたのだ」
「彼等の計画に邪魔だからね」
「それでなのね」
「その通りだ。真獅子王の野望とネスツの目的は衝突するものだった」
ならばだとだ。獅子王は怪物達に話す。
「それでだった」
「あっちの世界も色々あるのよね」
「もう陰謀だらけだったわ」
「あの連中は何かが決定的に違う」
ミスタービッグも話す。
「私やギース達の様にただ裏の世界にいるだけではないからな」
「そうよ。裏ではなく闇よ」
「彼等はそっちの世界の住人よ」
裏と闇は違う。そうだというのだ。

「そこが問題なのよ」
「何かとね」
「この場合の闇は混沌だな」
華陀はそれだと察した。
「この世の全てを覆ってしまう混沌だな」
「そうなのよ。混沌の闇よ」
「それが彼等なのよ」
怪物達はまた話す。
「その混沌の闇がこの世界を覆おうとしているのよ」
「人の世でなくそうとしているのよ」
「そしてそこにですね」
命の目の光が鋭くなった。
そしてその目でだ。彼女は言うのだった。

# 第八十一話　張飛、陳宮を庇うのことその四

「あの男もいるのですね」
「そうだな。あいつもだな」
刀馬も言った。
「いるな、あちらに」
「元々あちらの世界の人間だった様ですし」
「ええ、間違いなくいるわね」
「あの男もね」
貂蝉と卑弥呼はその彼のことについても二人に話した。
「貴方達の世界のあらゆる混沌の勢力が集まっているからね」
「あの男もそっちにいるわ」
「わかった。ならばだ」
「私達は彼と」
戦うとだ。決意して話すのだった。
そう話してだった。彼等はだった。
その草原を見回っていくのだった。そうしてだ。その場のことを頭の中に叩き込んだ。そうしたのである。
連合軍はだ。遂に関の前まで着いた。そこに陣を敷いてであった。
「さて、それではです」
「皆さん宜しいでしょうか」
袁紹の左右に控える彼女の看板軍師二人がそれぞれ諸将に話す。
「いよいよ最初の汜水関です」
「その攻略をはじめます」
田豊と沮授はそれぞれ話す。
「先陣は予定通り劉備殿に務めてもらいます」
「それで宜しいですね」
「仕方ありませんわね」
何故かここで袁紹が憮然として言うのだった。

「劉備さんが務められることは決まってますから」
「はい、ですから麗羽様は本陣においてです」
「全体の指揮を御願いします」
配下の軍師達にも釘を刺される袁紹だった。
「間違っても前線には出られないで下さいね」
「第二陣にいて下さいね」
「何度も言わなくてもわかってますわ」
こうは言っても不満はその顔に出ている。
「全く。わたくしは総大将ですし」
「そうよ。貴女は私と一緒に第二陣の指揮よ」
曹操も軍師二人と同意見だった。
「そこから動かないようにね」
「わかってますわ。では劉備さんが先陣で」
ここからはまともな作戦の話し合いであった。
「迎え撃たんとする敵軍を退けてから」
「はい、それから攻城兵器を出してきてです」
「そのうえで、です」
田豊と沮授がまた話してきた。
「関を攻撃し攻略します」
「それが作戦の基本です」
「問題は左右から来るかも知れない伏兵ね」
孫策はその存在を危惧していた。
「それが出て来る危険は高いわよ」
「ですから軍の左右に偵察を多く出しています」
「そして陣の左右に弓兵や槍兵を置いていますので」
だからそれは大丈夫だと話す田豊と沮授だった。
「先陣の劉備さんの軍は野戦の為に騎兵を左右に置いてもらっていますが」
「第二陣以降はそうしてもらっています」
そのだ。伏兵に備えてであった。

「第二陣以降で先陣のフォローもしますので」
「戦いはそうして進めていきます」
「つまりあれだな」
ここで言ったのは公孫賛だった。
「伏兵に警戒しながら先陣で野戦に勝利しそこから関は攻城兵器で攻略していくのだな」
「はい、そうです」
「そういうことです」
田豊と沮授は公孫賛にまずはこう答えた。
しかしであった。二人はすぐに怪訝な顔になってだ。彼女に問うのだった。
「ですが貴女は」
「どなたなのですか？」
こう問うのだった。
「御見かけしたことはないですけれど」
「劉備さんの後ろにいますから劉備さんの配下の方なのはわかりますけれど」
「あの、本当に」
「どなたでしょうか」
「おい、御主達にも何度も会っているぞ」
公孫賛はたまりかねた口調で二人に言い返した。
「先の幽州の牧公孫賛だ。知らないのか」
「はて。幽州は麗羽様が入られるまではどなたも牧におられなく」
「劉備さんが桃家荘におられたのは知ってますが」
「何故桃香を知っていて私を知らないのだ」
いつもの展開になってきた。

# 第八十一話　張飛、陳宮を庇うのことその五

「どうしてなのだ。何度も会っていて」
「いえ、初対面ですけれど」
「間違いなく」
二人は素で答えた。
「ですから御聞きしてますけれど」
「本当にどなたですか」
「そうよね。本当に誰なの？」
曹操も目をしばたかせて尋ねる。
「貴女一体。幽州の者だって言うけれど」
「ううむ、腕はそこそこ立つようだが」
夏侯惇も言う。
「しかし誰なのかわからん」
「いや、姉者も会っているぞ」
見かねた夏侯淵がここで話す。
「この方は公孫賛殿だ」
「誰、それ」
曹操はその名を言われてもきょとんとなるだけだった。
「全然知らない名前だけれど」
「？公孫賛？」
袁紹も曹操と同じ顔になって言う。
「やはりはじめて聞く名ですわね」
「劉備さんの将は有名な方ばかりですけれど」
「それでもこの方は知らないです」
田豊と沮授がまた話す。
「新しく入られた方ですね」
「そうなのですね」
「ううん、もういい」

公孫賛はうんざりとした顔になって応えた。
「やはり私は。こういう運命なのだな」
「他の役の方が有名ですよね」
孔明がここで彼女に話した。
「あの包丁持ってる役とかふがふがという役とか」
「最近はおかみもやった」
「そちらでメジャーですからいいのでは？」
「ううむ、しかしあちらの世界ではだ」
ここで馬岱を見る。そして袁術や張勲もだ。
「どうもな。蒲公英達の方がな」
「あれ、けれど白蓮さんだって人気あるよ」
その馬岱が公孫賛に話す。
「和服のおかみだからね」
「だといいのだが」
「ああいう世界もいいよね」
馬岱はにこにことして公孫賛に話していく。
「田舎の学校って。ほのぼのとしてね」
「そうだな。いいものだな」
「蒲公英ああいう世界も大好きだよ」
こんな話もする。しかしだ。
作戦自体はあっさりと決まった。どうしても先陣に出たがる袁紹をよそにだ。作戦は決まりそのうえでだ。彼女達は解散しようとする。
「明日の朝に総攻撃の開始ですわ」
「ええ、わかったわ」
曹操が袁紹の言葉に応える。
「それならね。劉備達には検討を祈るわ」
「はい、わかりました」
その劉備が応える。こうしてだった。
解散に入ろうとする。とこがだ。

ここで天幕の中にだ。テリーが入って来てだった。そのうえで一同に話した。
「ああ、全員揃ってるな」
「あっ、テリーさん」
劉備が彼の姿を認めて声を出した。
「どうしたんですか？」
「御客さんが来てるぜ」
こうだ。テリーは気さくに話した。
「ここにな」
「御客さん？」
関羽がその御客さんという言葉に目を動かした。
「御客さんというと」
「ああ、向こうの軍師でな」
それでだというのだ。
「陳宮っていう娘だよ」
「ああ、陳宮か」
その名を聞いてだ。最初に言ったのは馬超だった。
「あいつが来たのかよ」
「宣戦布告の使者でしょうか」
鳳統はそれではないかと述べた。

# 第八十一話　張飛、陳宮を庇うのことその六

「本格的な戦いの前の」
「そうかも知れないわね」
黄忠もそう考えた。
「だとすると遂にね」
「はい、はじまりますね」
黄忠も鳳統もその目をそれぞれ険しく、不安なものにさせて話す。
「戦いがね」
「それが避けられなくなりましたね」
「それでどうするんだい？」
また一同に言うテリーだった。
「その陳宮ちゃんとな。会うのかい？」
「こちらに通しなさい」
袁紹が言った。
「使者なら会わない訳にはいきませんわ」
「そうしてその言葉を受けて」
「宣戦布告を受理されるんですね」
「ええ、そうしますわ」
その通りだとだ。袁紹は顔良と文醜に話した。
「そうしてその娘は帰ってもらいますわ」
「それではその様に」
「そうするってことで」
顔良と文醜が応える。こうしてだった。
陳宮はテリーに案内されてだ。天幕に入った。その彼女に対してだ。
袁術がだ。最初に声をかけた。
「御主が董卓軍の使者じゃな」
「あの、ねねは」

「むっ、何じゃ？」
袁術は陳宮の今の言葉に妙なものを察した。見ればだ。
陳宮は強張った顔で身体をかちこちにさせてだ。そのうえで声も震えていた。その姿は。
「どうもあの姿は」
「そうよね」
曹操陣営の筍の従姉妹達がその陳宮を見てひそひそと話す。
「宣戦布告の使者じゃないわね」
「その使者なら堂々として言って来るのに」
それでもだった。彼女はだ。
「あんなに強張って」
「妙な感じね」
「宣戦布告の使者じゃないとしたら」
「何で来たのかしら」
「陳宮よね」
今度は曹操が陳宮に問うた。
「そうよね。確か董卓の軍師の一人の」
「恋殿の軍師です」
陳宮は俯いた姿勢でこう返してきた。
「ねねは呂将軍の軍師です」
「呂布のか」
趙雲が言った。
「そうだったな。御主は呂布の軍師だったな」
「そうなのです」
「ではその呂布の軍師としてここに来たのか」
「はい、そうなのです」
また答える陳宮だった。
「ねねは恋殿の軍師としてここに来ました」
「なら一体」
陸遜が陳宮に問う。

「何の御用でしょうか」
「宣戦布告に来たのではないわね」
孫権が実際にそうではないと指摘した。
「そうね。それではないわね」
「あの、ねねは」
どうしてかとだ。身体を震わせながら言うのだった。
「ねねがここに来たのはです」
「どうしてなのだ？」
張飛が問い返す。
「どうしてここに来たのだ？」
「皆さんに御願いがあって来ました」
それでだというのだ。
「どうか。呂布将軍を助けて下さい」
「敵将を助ける！？」
曹仁が目を丸くさせて言った。
「それはまた奇妙な話ね」
「そうね。呂布は私達がこれから戦う相手なのに」
曹洪もそのことを言う。
「それで助けて欲しいって」
「どういう理屈なの？」
「実はなのです」
陳宮はだ。山崎から聞いたことをだ。劉備達に話したのだ。

# 第八十一話　張飛、陳宮を庇うのことその七

「月殿は宮廷に幽閉されているのです」
「やっぱりね」
話を聞いた曹操がすぐに言った。
「そんなことだろうと思ってたわ」
「わかっていたのです？」
「どう考えてもあの娘のやることじゃないからね」
だからだ。それはわかるという曹操だった。
「どうせ張譲でも暗躍してるんでしょ」
「そうですね。あの行動はどう見ても」
「十常侍のやり方です」
郭嘉と程？も言う。
「では彼等は生きていて」
「董卓さんを隠れ蓑にして」
「その疑いもあります」
陳宮も実際にそのことは否定しなかった。彼女も軍師だ。山崎との話の後でそのことを考えてだ。実際に疑っているのである。
「ですがそれ以上にです」
「他にも宮廷で蠢いている勢力があるというのか？」
周瑜が言った。
「だとすると誰だ、それは」
「オロチという者達とのことです」
「何っ！？」
その名を耳にしてだった。
たまたま天幕の外で警護をしていた草薙が中に飛び込んで来てだ。
陳宮に問い返してきた。
「おい、今何て言った」
「ですから。オロチです」

「オロチ、そうか」
草薙は陳宮の言葉をさらに聞いてだ。
そのうえでだ。こう言うのだった。
「張三姉妹のところにバイスとマチュアがいた時点で怪しいとは思っていたがな」
「あの三姉妹のところにいた二人ね」
曹操がすぐに述べた。
「あの二人も関係あるのね」
「あるどころかあの連中が一番問題なんだよ」
草薙の言葉にはだ。危惧が露わになっていた。
「オロチ一族はな。この世界を破滅させるつもりなんだよ」
「そういえば以前」
孔明がここではっとなった。
「草薙さんも神楽さんも言っておられましたね」
「そうだろ。あの連中は人間の文明そのものを否定しているんだ」
それがオロチ一族の考えなのだった。
「自然そのものの存在っていうかな。人間の社会とかそういうのを破壊するんだ」
「つまりあれですね」
今度は鳳統が話した。
「人間は自然を破壊する。だからその人間を」
「そういうことだ。確かに人間はそうだろうさ」
自然を破壊するものだとだ。草薙はそれはわかっていた。
しかしそれでもだとだ。彼は言い加えるのだった。
「それでもだ。人間も自然の一部だろ」
「ですね。この世界に存在するものが全て自然ですから」
「陰陽五行の中で」
孔明と鳳統は草薙のその考えに述べた。
「その人間を否定するのもまた」
「間違っていますね」

「俺は難しい話は苦手だがな」
それでもだとだ。草薙は言うのだった。
「それでもな。オロチの言うことにはいそうですかと聞けるか」
「聞いたらわらわ達は皆殺しではないか」
袁術はまさに話の核心を衝いた。
「冗談ではないぞ」
「そうですよね。そうなってしまえば」
張勲はあえて主を困らせにかかった。
「蜂蜜水は飲めませんよ」
「そ、それは困るのじゃ」
袁術は狼狽して騒ぎだした。
「しかも凛と一緒にいられぬではないか」
「だから何でそこで凛が出て来るのよ」
曹操は苦笑いでその袁術に突っ込みを入れた。
「全く。本当に好きなのね」
「そうじゃ。とにかくじゃ」
そのことに居直りながらだ。袁術はまた言うのだった。

# 第八十一話　張飛、陳宮を庇うのことその八

「わらわは滅びるなぞ嫌じゃ。絶対に嫌じゃ」
「誰だってそうさ」
草薙は袁術のその言葉に対して言う。
「相当変な奴でもないとな。滅びたくはないさ」
「結論は出てるわね」
孫策が腕を組んだうえで話した。
「そのオロチを除かないと駄目ね」
「少なくとも今回の騒ぎの黒幕ならです」
呂蒙が目を鋭くさせて述べる。
「取り除かなくてはなりません」
「ですわね。それならですわ」
総大将の袁紹もだ。決断を下した。
「董卓よりもまずオロチとやらですわ。オロチを成敗しますわ」
「はい、それではです」
「オロチを除きましょう」
田豊と沮授はそれぞれ言ってであった。
早速だ。策を練りはじめるのだった。
「オロチが宮廷深くにいます」
「それなら宮廷に誰かを忍び込ませましょう」
そうするというのだ。
「そしてそのうえで彼等を除く」
「そうしてはどうでしょうか」
「それは基本としていいですが」
しかしだ。二人の策に徐庶が言い加えてきた。
「目の前の董卓軍はどうしましょうか」
「そうなのです」
陳宮もだ。そのことを必死に訴える。

「恋殿は戦われたくないのです。今とても辛い気持ちで」
「その呂布殿を何とかしたいのだな」
「恋殿の悲しんでおられる姿は見たくないです」
その本音をだ。陳宮は関羽に述べた。
「だからこそ」
「そうだな。正直無益な戦だ」
関羽も言う。
「ましてやそのオロチが背後にいるとなればだ」
「けれどよ」
ここで荀?が言うのだった。
「考えてみれば陳宮は呂布の軍師なのよ」
「それがどうしたのだ?」
「だから。罠かも知れないわよ」
荀?は張飛に対しても述べた。
「わざわざ敵陣に一人で来るなんて怪しいでしょ」
「確かに。言われてみればな」
公孫賛も荀?のその言葉に頷く。
「オロチのことは気になってもな」
「そのオロチがいるのは間違いないわね」
荀?はそれは確かだとした。彼女にしても察しているのだ。
「けれどそれでもよ」
「それでもなのだ?」
「そうよ。董卓がそのオロチと結託しているとすれば?」
こう前置きして話すのだった。
「それでそのうえで張譲もいて」
「あの宦官もなのだ」
「そうよ。それで三者が結託しているとすればどうなのよ」
これが荀?の仮定だった。
「私達を罠に仕掛けているんじゃないかしら」
「その可能性は否定できないわね」

曹操も己の軍師の言葉に顔を向けた。
「正直。オロチの真意はわからないけれどね」
「真意を隠して董卓と結託していることも考えられます」
荀?はその可能性も指摘した。
「ですから。おいそれとは」
「ううむ、少なくとも董卓との戦は」
それはどうするか。袁紹も言及した。
「避けられませんわね」
「そうね。このまま予定通り攻撃ね」
曹操も軍師として言う。
「そして洛陽まで攻めましょう」
「では。明日は予定通り総攻撃ですわ」
袁紹はその決断も下した。

# 第八十一話　張飛、陳宮を庇うのことその九

「劉備さん、御願いしますわ」
「じゃあ陳宮」
曹操はその陳宮を見て述べた。
「呂布に伝えなさい。戦場で会おうと」
「そ、そんな・・・・・・」
「お話はこれで終わりですわ」
袁紹の口調もぴしゃりとしたものだった。
「さあ、お帰りなさい」
「そ、それでは恋殿は」
「ではどうしろというのよ」
荀？はその目を顰めさせて陳宮に問う。
「あんたの言う通りにしろっていうの？信じろっていうの？」
「ですからねねは」
「だからね。それはとてもね」
涙ぐみだした陳宮にだ。荀？はさらに言おうとする。
だがここで。張飛が叫んだ。
「いい加減にするのだ！」
「えっ！？」
「どうしたのよ急に」
「どうして皆陳宮の言っていることがわからないのだ！」
こうだ。荀？達に抗議するのだった。
「陳宮は嘘を言っていないのだ。それがわからないのだ！」
「だからどうして信じられるのよ」
荀？がその張飛に対して言い返す。場は二人に注目する。
その中でだ。関羽が義妹を止めようとしてきた。
「鈴々、それは」
「待って、愛紗ちゃん」

言おうとする彼女をだ。劉備が制止した。
「ここは」
「姉者、それでは」
「ええ、任せましょう」
微笑んでだ。次妹に言うのだった。
「鈴々ちゃんにね」
「わかりました。姉上がそう仰るのなら」
関羽もここは沈黙することにした。そうしてであった。
彼女も沈黙を守った。そうしたのだ。
今は皆張飛の言葉を見守る。彼女はさらに言った。
「陳宮を見るのだ！」
「見るって！？」
「そうなのだ、今泣いているのだ」
その通りだった。その目は涙ぐんでいる。
「この涙が何よりの証拠なのだ。陳宮は嘘を言っていないのだ！」
「涙を」
「そうなのだ。御前も見るのだ！」
陳宮を指差しながら。荀？に言うのである。
「この涙。どう思うのだ！」
「私だってね。華琳様の筆頭軍師よ」
その誇りに基いてだというのだ。
「多くの人材を見極めてきているのよ」
「ならわかる筈なのだ」
「ええ、じゃあ見させてもらうわよ」
半ば売り言葉に買い言葉であった。そのうえでだ。
荀？は陳宮のその目を見る。その涙をだ。
その目をじっと見てだ。そうしてだ。その澄んだ真剣なものを見てだ。
唇を一旦噛み締めてだ。それから張飛に答えた。
「わかったわよ」

「ではどうなのだ」
「この娘は嘘を吐いていないわ」
そのことがだ。荀?にもわかったのだ。
「間違いないわ」
「その通りなのだ。陳宮は嘘を吐いていないのだ」
「じゃあやっぱり」
「鈴々は戦は好きなのだ」
今度はこのことを話す張飛だった。
「けれど戦うべきでない相手、戦う必要のない戦はしないのだ」
「それが今だっていうのね」
「その通りなのだ」
こう言うのだった。

# 第八十一話　張飛、陳宮を庇うのことその十

「鈴々達の敵はそのオロカとやらなのだ」
「オロチな」
草薙が張飛の言い間違いを指摘する。
「そこは覚えてくれよ」
「わかったのだ。オソイなのだ」
「だからオロチな」
このやり取りはした。しかしだった。
張飛のだ。その言葉を聞いてだ。
最初にだ。孫策が言った。
「そうね。人を見極められなくてはお話にならないわね」
「その通りじゃな」
黄蓋も己の主のその言葉に頷く。
「少なくともこの陳宮は嘘を言う者ではない」
「いい娘ね」
孫策はその陳宮を見て微笑みもした。
「軍師としてはまだまだ未熟みたいだけれど」
「それはこれからじゃな」
黄蓋も陳宮の軍師としての力量は見抜いた。それでもだった。
少なくとも陳宮は信頼された。そのうえでだった。
軍議が再開された。袁紹はあらためて一同に述べた。
「では。総攻撃は見送りますわ」
「そうするのね」
曹操も袁紹のその言葉に頷いた。
「それじゃあまずは」
「オロチとやらですわ」
話はそこに移った。
「その怪しい者達を除くことですわ」

「それで陳宮」
曹操は陳宮に顔を向けて尋ねた。
「一つ聞きたいけれど」
「はいです」
「そのオロチは宮中に潜んでいるのね」
「間違いなくです」
「そうね。ただオロチが何者かは知らないけれど」
それでもだとだ。曹操は目を鋭くさせてこう述べた。
「あれね。やっぱり張譲はいるわね」
「いるのです？」
「都で行われているあの過度な華美は」
そのことをだ。曹操は指摘して言うのだった。
「張譲のやり方ね。己の贅のみを求めるあのやり方はね」
「そうですよねえ。そのオロチは人間社会自体を破壊するのが目的ですし」
陸遜もそのことについて言う。
「それならです」
「ああ、オロチの奴等は人間社会の中に溶け込んでいてもな」
ここでまたオロチについて話す草薙だった。
「それでもな。人間社会の贅沢とかには興味がないんだよ」
「それならやっぱり」
「ああ、今都でやってるっていう贅沢とかはしない」
こう張勲にも答える。
「絶対にな。それはしないな」
「なら間違いないわね」
曹操はオロチのそうした習性も見て述べた。
「宦官もいるわね」
「宦官がそのオロチと結託して董卓さんの名前を借りている」
「それが問題ですね」
孔明と鳳統も述べる。

「なら。ここはです」
「董卓さんを宮廷から救い出しましょう」
そうするというのだった。
「そしてそのうえで」
「オロチ一族及び宦官達と戦うべきです」
「だよな。少なくとも董卓は敵じゃないんだよな」
馬超もそのことに言及する。
「じゃあ。まずは董卓の姫さんを助け出さないとな」
「しかしそれは難しいぞ」
厳顔は現実を指摘した。
「宮中の奥深くに幽閉されておるのなら。そうそう容易には」
「しかも張譲は狡猾で抜け目のない相手だから」
黄忠も眉を曇らせて述べる。
「宮中だけでなく都のあちこちにも息のかかった者を置いているわね」
「しかもそのオロチもいる」
魏延も言う。
「話は容易ではないか」
「ううん、何とか都に潜り込んで董卓さんをお救いすればお話は楽ですが」
「それでも。こうなると」
孔明と鳳統も顔を曇らせる。
「どうしたものでしょうか」
「まずは都に潜り込まないと」
こう言っているとだ。また天幕に来た者がいた。それは。
「待て、都に入るというならじゃ」
「あっ」
「その声は」
孔明と鳳統はその声に顔を向けた。
「まさか。ここにですか」

「来られたのですか」
「うむ、少し言われてな」
それでだ。来たというのだ。
「それでなのじゃが」
「その声は」
「聞き覚えがあるわね」
袁紹と曹操もその声を聞いて言う。その声の主は。
黒いフードにマントで身体を覆っている。その者がだ。今一同の前に姿を現したのであった。

第八十一話

2011・5・12

# 第八十二話　周泰、都に忍び込むのことその一

第八十二話　周泰、都に忍び込むのこと

その黒いフードとマントの者がフードを取り払った。その顔を見てだ。

誰もが、劉備と彼女の周りの面々以外は。思わず声をあげてしまった。

「大将軍！？」

「生きておられたのですか！？」

「張譲に粛清されたのでは」

「違ったのですか」

「こうして生きておる」

その女何進はこう驚く一同に対して述べる。

「ちゃんとな」

「幽霊ではないのう」

袁術は真剣に見ている。

「確かに大将軍じゃな」

「しかし。どうして生きておられるのでしょうか」

張勲もだ。この時代にはこう言うのだった。

「大将軍は張譲に暗殺されたと思いましたが」

「何とか逃れたのじゃ」

こう言うのであった。

「それで華陀達に助けられたのじゃ」

「ああ、あの赤い髪の医者ね」

曹操が言う。

「今度馬鹿なこと言ったら本気で首刎ねるわ」

「一体何がありまして？」

袁紹がその曹操に対して怪訝な顔で問うた。

「貴女まさかあのべ・・・・・・」
「それは言わない約束でしょ」
曹操は憤怒の気をみなぎらせて袁紹に言う。
「そういう貴女もだし」
「た、確かにそうですわね」
「全く。どうして同じ悩みを抱え続けるのかしら」
「これも何かの縁ですわね」
「そうね」
「はて。何の話じゃ？」
何進はそんな二人の言葉に首を捻る。しかしであった。
何はともあれだ。彼女は言うのであった。
「とにかくじゃ。わらわは生き長らえて劉備に保護されておったのじゃ」
「そうだったのね」
孫策もその話には目をしばたたかせて述べた。
「何はともあれ助かって何よりだわ」
「うむ。それで華陀に言われてじゃ」
また彼であった。
「ここに参ったのじゃ」
「何かよくわかりませんが」
孫権も首を捻って述べた。
「ここに来られたのは何かしらの事情があってのことなのですね」
「うむ。そなた達は洛陽についてはよく知らぬな」
「まあそれは」
「残念だけれど」
袁紹も曹操もだ。難しい顔になって答える。
「わたくし達都のことは」
「長い間勤めていたけれどあの地の生まれではないし」
実はこの中に洛陽生まれの者はいない。
「残念ですけれど」

「詳しくはないわ」
「わらわは洛陽の生まれでそこで肉屋をやっておったのじゃ」
つまりだ。生粋の都人だというのだ。
「そして宮中にも大将軍として様々な造営に携わってきた」
「つまり細かい場所まで御存知なのですね」
「その通りじゃ」
こう劉備にも答えるのだった。
「それが役に立つとはのう」
「わかりました。ではお願いします」
「うむ。それではだ」
こうして何進も協力することになった。しかしである。
やはり劉備と彼女の周りの者以外がだ。首を捻って言うのであった。
「大将軍が生きておられるのはわかりましたけれど」
「あの、それでもです」
「そのお耳は一体」
「どうされたのですか？」
そのだ。猫耳を見て言うのであった。

# 第八十二話　周泰、都に忍び込むのことその二

「大将軍の耳は猫の耳？」
「まさか将軍は猫好きだったとか？」
「いや、大嫌いであられた筈ですよ」
「それがどうして」
「嗜好が変わられた？」
「どうなのでしょうか」
こうそれぞれ話す。とりわけだ。
またしても袁紹と曹操がだ。あれこれと話すのだった。
「まさか。大将軍にそんな趣味が」
「どうかしらね。確かに風変わりなところはあられるけれど」
「けれど。猫はありませんわね」
「御自身の外見は考慮されてないわね」
「猫は。将軍には」
「合わないと思うけれど」
「聞こえておるぞ」
何進はその二人に対して突っ込みを入れた。
「御主達から見てもおかしいか」
「御言葉ですが」
「どういった御心境の変化でしょうか」
二人は怪訝な顔を変えていない。
「あの。大将軍そのお耳は」
「本当にどうされたのですか？」
「話はかくかくしかじかじゃ」
何進はその耳の事情も話すのだった。
「何とか猫にならずに済んだがじゃ」
「それでもなのですか」
「耳だけは」

「そうじゃ。正直参っておる」
こうも言うのであった。
「どうしたものかのう」
「どうも一生のものらしいです」
「残念ですが」
孔明と鳳統がその猫耳について話す。
「ですからもう」
「諦められるしか」
「残酷な話じゃのう」
何進も諦めるしかなかった。
「それは」
「ですけれど」
何故か楽しそうに言う周泰であった。
そしてそのうえでだ。こう何進に話すのだった。
「あの、将軍」
「何じゃ？」
「その耳ですけれど」
目を輝かせてだ。何進に言うのである。
「できればですね」
「できれば。何じゃ」
「私もそうした耳が欲しくて」
「また変わったことを言うのう」
何進にしてはだ。そうとしか思えなかった。
それで眉を顰めさせてだ。周泰に返した。
「わしは嫌で仕方ないのじゃが」
「ですけれど」
「まあその話は置いておいてですね」
程?がここで言うのだった。
「とりあえずお話を進めましょう」
「そうだったわね」

曹操も程?のその言葉に顔を向ける。
「とりあえずそのオロチがいることはわかったし」
「その連中は俺が絶対にぶっ潰す」
草薙は右手を拳にして曹操に話す。
「何があってもな」
「貴方はそうした家の人だったわね」
「ああ、だからな」
それでだというのだ。しかしであった。
曹操はだ。その草薙に今はこう言うのであった。
「けれど今は焦らない方がいいわね」
「慎重にってことか」
「そうよ。そのオロチがこの世界でどういった状況なのかわからないから」
それでだというのだ。
「迂闊な動きは控えるべきね」
「じゃあどうしろっていうんだ?」
「彼等とは多分」
「多分?」
「洛陽で戦うことになるわね」
曹操は左手を己の口に当てて述べた。

# 第八十二話　周泰、都に忍び込むのことその三

「二つの関を抜けた後でね」
「じゃあその時にか」
「それまでは戦わないわ」
また言う曹操だった。
「だから焦らないで」
「わかったぜ。それじゃあな」
「ええ、慎重にね」
「そういうことか。今はか」
「それよりもよ」
曹操はあらためて話をしてきた。
「問題は。董卓よ」
「あの娘ですわね」
「看板に使われているならその看板を外すことね」
こう袁紹にも述べる。
「そうすればいいのよ」
「ではここは」
袁紹は曹操のその話を聞いてだ。
考える顔になってだ。彼女も述べた。
「都に誰かを送って董卓を連れ出すのですわね」
「そうよ。話はそういうことよ」
「看板を外して裏にあるものを露わにする」
孫権がそう言った。
「そうなればオロチも宦官の連中も困るわね」
「その通りじゃな」
袁術も言う。
「これはよいかものう」
「なら話は決まりね。これでいくわ」

曹操は軍師として諸侯に話した。
「まずは都にいる董卓を連れ出すわよ」
「それならですけれど」
劉備はそれを聞いてだった。一同に話すのだった。
「忍び込むお話になりますよね」
「そうですよね。それは」
「なりますね」
こうだ。孔明と鳳統も話す。
「でしたらあちらの世界の忍の方々が適任ですね」
「そうなりますね」
「それって結構多くないか？」
公孫賛は忍と聞いてだ。こう述べるのだった。
「忍者になると」
「多いなら多いに越したことはないわね」
孫策が微笑んで言う。
「それにうちにも適任者がいるしね」
「はい、確かに」
甘寧が右手を平、左手を拳にして合わせてから述べた。
「ここはですね」
「ええ、じゃあ御願いね」
孫策は周泰を見て微笑んで述べる。
「期待しているわよ」
「はい、やらせてもらいます」
周泰も孫策に晴れやかな笑顔で応える。
「では忍の皆さんと一緒に都に忍び込んで董卓さんを」
「御願いするわ。話はこれで決まりね」
「ちょっと派手な忍もいますけれどね」
袁紹は何気にこんなことも言った。
「火月さんや蒼月さんが」
「あの二人本当に忍なのだろうか」

「目立ち過ぎではないのか？」
夏侯姉妹が彼等のことを考えて首を捻った。
「もっとも。ガルフォードもな」
「目立つがな」
「舞も目立ち過ぎだな」
「あれ、忍んでるのか？」
関羽と馬超は彼女のことを話した。
「あまりにも服の露出が凄くてな」
「女のあたしも目のやり場に困るんだけれどな」
「まあ。そういう問題はありますけれど」
「忍としては素晴しい力量を持っておられますから」
孔明と鳳統はだからいいとするのだった。
「それじゃあ周泰さんと合わせてですね」
「陳宮さんにも御願いしたいことがありますが」
「ねねにですか？」
話を振られた陳宮はだ。まずはきょとんとした顔になった。

## 第八十二話　周泰、都に忍び込むのことその四

そしてそのうえでだ。こう二人に問い返すのだった。
「一体何を」
「陳宮さんには呂布さんにです」
「お話して欲しいのです」
「恋殿にですか」
「はい、御願いします」
「それでは」
こう話してだった。二人はだ。
陳宮に話す。そのうえでだった。こんなことも言うのだった。
「後は李典さんにもです」
「お話させてもらいます」
「そうしてそのうえで」
「無益な戦いは避けましょう」
「わたくしとしては」
孔明と鳳統の話を聞いてだ。袁紹はだ。
いささか面白くなさそうな顔をしてだ。こう言うのであった。
「やはり陣頭指揮を執って戦ってこそ」
「やっぱり本音はそれだったのね」
彼女の横にいる曹操が呆れて溜息を出した。
「全く。総大将だから駄目だって何度言えばわかるのよ」
「ううむ。駄目ですのね」
「いい加減諦めなさい。全く」
「私としてはそれでいいのだが」
「姉者ももう少し慎重にだ」
夏侯淵は呆れながら姉に言う。
「それが姉者のいいところだがな」
「そう言ってくれるか、秋蘭」

「うむ。姉者はな。それでいい」
微笑んでだ。姉に言う妹だった。
「慎重な姉者は姉者らしくないからな」
「では私は戦になれば果敢にだ」
「そうしてくれ。背中は私が受け持つ」
「そこも春蘭を甘やかさない」
曹操は夏侯淵にも言うのだった。
「全く。子供の頃から全く変わらないわね」
「まあ。無益な戦はしないならそれでいいですわね」
袁紹もだ。それは避けるというのだった。
「ではそこのはわわさんとあわわさん」
「あの、それがですか」
「私達の名前ですか」
「確かそちらの魔法使いの方はポンコツさんでしたわね」
こんなこともだ。袁紹は鳳統に言った。
「中身のお話はしませんの？」
「できればそれは」
「止めておくべきですわね」
「ええ、それはね」
止めておくことになった。そうしてであった。
何はともあれ話は進む。その流れであった。
周泰は都に向かうことになった。しかしであった。
何進にだ。こんなことをねだるのであった。
「耳ですけれど」
「またそれか」
「あの、行く前の御褒美というかそれで」
「それで？」
「耳を触っていいでしょうか」
こうだ。うずうずとしてだ。目を輝かせながら言うのである。
「できれば」

「そうですよね。できれば私も」
程？も出て来て何進に言う。
「御願いします」
「駄目じゃ」
何進の返答は一言だった。
「わらわは猫ではないぞ」
「ですがそのお耳は」
「どう見ても」
「それでも駄目じゃ」
何進はむっとした顔で二人に言い返す。
「全く。肉なら焼けるがのう」
「そうですか。じゃあ任務から帰ったら」
「お肉を皆で食べましょう」
話はそこで落ち着いたのだった。こうしてであった。

# 第八十二話　周泰、都に忍び込むのことその五

周泰と忍達が洛陽に向かうことになった。その顔触れは。
「ふむ。こうして見ればだ」
「多いわね、忍もね」
舞がだ。半蔵に対して述べる。彼等は彼等だけが通れる道を通ってだ。そのうえで都に向かっている。
その影走りの中でだ。話しているのだ。
「結構いると思ってたけれどね」
「そうだな。拙者もいれば」
「私もいるし」
「俺もだな」
「私もいますよ」
火月と蒼月の兄弟達もいる。
「まあこうして集ってるのも何かの縁だな」
「任務を遂行するだけです」
「うむ。それがしも参加させてもらっている」
影二もいる。
「この国の都はどういった場所か」
「はい、それはですね」
一同を先導する周泰が彼等に話す。
「かなり大きな町でして」
「そんなにか」
「大きいのですね」
「他の町とは全く違います」
こうだ。火月と蒼月に話すのだった。
「とにかく凄い大きさですから」
「何か楽しみになってきたな」
ガルフォードはパピーと共にいる。

「どうした町なのかな」
「けれどあれなのよね」
舞はいささか残念そうに苦笑いして言った。
「今は町では遊べないのよね」
「そうだな。都に捕らえられている董卓殿を助け出す」
半蔵が言う。
「それが我々の任務だからな」
「その通りです。それでは皆さん」
周泰がまた彼等に話す。
「宜しく御願いしますね」
「ああ、わかった」
「それならな」
火月とガルフォードが応える。そうしてだった。
彼等は先に進む。その速さは馬に匹敵する。
その中でだ。周泰はだ。
ガルフォードに対してだ。こんなことを言うのだった。
「そういえばガルフォードさんは」
「ああ、何だ？」
「アメリカ出身ですよね」
彼のだ。その出自について話すのだった。
「確かそうでしたよね」
「その通りさ」
ガルフォードは駆けながら微笑んで答えた。
「アメリカのカルフォルニア出身さ」
「アメリカ人で忍者になられたんですか」
「そうさ。忍者ってのに憧れてな」
それでだ。そうなったというのだ。
「青い目の忍者ってわけさ」
「成程、そうなんですね」
「もう一人アメリカ人の忍者がいるんだけれどな」

ガルフォードは周泰にこうも話す。
「アースクェイクっていうな」
「アースクェイク？」
「とんでもなくでかい奴でな」
それがそのアースクェイクだというのだ。
「そいつは確か張飛とか馬超と戦ってたっていうけれどな」
「こちらの世界に来てるんですか、その人も」
「そうだな。まあ姿は見ないけれどな」
「わかりました。では御会いできたらいいですね」
「色々と問題のある奴だけれどな」
さりげなくだ。ガルフォードはアースクェイクについて話した。
「泥棒する為に忍者になった奴だしな」
「それってまずいでしょ」
舞が顔を顰めさせてガルフォードに言う。

# 第八十二話　周泰、都に忍び込むのことその六

「忍術の悪用じゃない」
「何度も言ってるけれどな。聞きはしないんだ」
「全く以て困った男だ」
半蔵もだ。アースクェイクについて話す。
「どうしたものか」
「ああした人は必ず成敗されますね」
蒼月は冷めた口調で述べた。
「それか一生強制労働か」
「あいつにはいいお灸かもな」
ガルフォードもこう考えるのだった。
「それもな」
「そうした人なんですね」
「まあ懲りない奴だからな」
ガルフォードは周泰にまた話した。
「少なくともこっちの世界に来てるのは間違いないからな」
「御会いしたいけれどしたくない方ですか」
「まあそんなところだな」
こんな話をしながらだ。一行は都に向かう。
その彼等を送った連合軍の中ではだ。孔明と鳳統がだ。
李典に対してだ。こんなことを話していた。
「それではです」
「それで御願いします」
「ああ、わかったで」
笑顔でだ。李典は二人に応える。三人は今李典の天幕の中にいる。
そしてそこでだ。彼女は何かをいじりながら二人の話を聞いていた。
そのいじっているものはからくりだった。それを作ってから話すのだった。

「こんな感じでええかな」
「いえ、もっと簡単なものでいいです」
「外見がしっかりしたものなら」
「じゃあ動きは大したもんでなくてええんやな」
李典は二人にそのことを尋ねた。
「肝心なのは外見なんやな」
「はい、そうです」
「それが似ていればいいです」
「この娘やな」
鳳統がさらさらと描いたその絵を見る。そこには董卓の似顔絵があった。
その絵を見てだ。李典はまずこう言った。
「あんた絵上手いな」
「そうですか？」
「ああ、めっちゃ上手いで」
こう言って彼女を褒めるのだった。
「あれやな。揚州の呂蒙ちゃんとかも絵上手いけどな」
「私もですか」
「ああ、上手いわ」
その見事なまでに描かれた董卓の似顔絵を見ながらだ。李典は話す。
「画伯になれるで」
「画伯ですか」
「張勲ちゃんなんか凄い絵やからな」
ここでだ。李典は彼女の名前を出した。
「もうな。何て言うたらええか」
「そこまで凄いのですか」
「凄いで。口では表現できん位な」
「そうなんですか」
「あと。噂ではや」

李典は絵についてさらに話す。
「何か伝説の画伯がおってや」
「伝説ですか」
「それはもう凄い絵を描くそうや。生き物か何かわからんような」
「その人のお名前は何というのですか？」
「確か小とか林とかいうたか？」
李典は視線をやや上にやってその名前を出した。
「真名は優やったか」
「その人が伝説の画伯ですか」
「あまりにも凄い絵で大丈夫かって思われるような人らしいな」
「そこまで凄いんですか」
「そや。まあうちもその絵は一回見たけれど」
李典の顔が青くなる。そのうえでの言葉だった。
「壮絶やったな」
「壮絶ですか」
「人間ってあんな絵が描けるんやな」
こうまで言うのだった。
「つくづく思ったわ」
「そうですか」
「そや。まあとにかくや」
「はい、この絵で御願いします」
「わかったで。すぐに作るわ」
こうしてだった。二人は李典にも頼むのだった。そうしてであった。

# 第八十二話　周泰、都に忍び込むのことその七

二人はあらためてだ。李典にこんなことを話した。
「それでなんですけれど」
「お腹空きませんか？」
「ああ。もうすぐお昼やな」
早速作りはじめている李典が応える。
「ほな何か食べよか」
「ラーメンはどうでしょうか」
孔明がそれはどうかと話すのだった。
「チンさんが御馳走してくれるそうですし」
「あの太鼓腹のおっさんかいな」
「はい、お金が大好きな」
何気にかなりのことを言う孔明だった。
「あの人です」
「あのおっちゃん確かにお金には汚いけれどな」
李典もそのことはよく知っている。知ってしまったのだ。
「それでもな。悪い人やないからな」
「それにあの人はラーメンについては確かな人ですし」
「ほな。うちもな」
「はい、ラーメンですね」
「一緒にいただくわ」
笑顔で孔明に応えた。
「そうさせてもらうで」
「わかりました。それじゃあ」
こうしてであった。李典はだ。孔明達と共に昼食を食べることになった。そうして作りながら天幕を出てそこに行くとだ。そこにチンともう一人いた。
「あっ、李典ちゃんも来たっちゃね」

「よく来てくれたでしゅ」
「何や、このおっちゃんもおるんかいな」
李典は彼と一緒にいるだ。ホンフゥを見て言うのだった。
「じゃあ餃子もあるな」
「よくわかったっちゃね」
「だってあんた餃子好きやしな」
それでだ。わかったというのだ。
「実際にそやろ。餃子もあるやろ」
「焼き餃子でいいっちゃね」
「まあうちそっちの餃子も好きやし」
だからだ。いいというのである。
「こっちじゃ水餃子か蒸し餃子が普通やけれどな」
「ですよね。何かそこが違いますよね」
「こちらの世界とあちらの世界じゃ」
「いや、私達の世界でもそうした餃子の方が普通でしゅよ」
チンが三人にそのことを話す。一同は話をしながら車座になって座る。その真ん中には鍋がありだ。そして鉄板も置かれていた。
「ただホンフゥはそちらの方が好きなんでしゅよ」
「焼き餃子がかいな」
「そうなのでしゅ」
こうだ。チンは李典に話す。
「日本で焼き餃子を知ったのでしゅ」
「最初見て何だと思ったっちゃ」
ホンフゥ自身もだ。焼き餃子について口を尖らせて話す。
「けれど食ってみたらこれが」
「美味かったんやな」
「最高だったっちゃ」
そうだとだ。ホンフゥは笑顔で話す。
「だからどうだっちゃ。お嬢ちゃん達も」
「はい、それじゃあ」

「御言葉に甘えまして」
「そうさせてもらうで」
こうしてだった、三人もだ。
その餃子を食べる。そしてだ。
ラーメンも食べてみる。そのラーメンも。
「あっ、このラーメンは」
「我が国のラーメンではないですね」
「スープがちゃうで」
三人は食べてみてだ。すぐにわかった。
そしてそのうえでだ。チンにそれぞれ尋ねた。
「あの、このラーメンって」
「どうしたんですか？」
「まさかこれも」
「はい、そうでしゅ」
チンもだ。そのラーメンを勢いよくすすりながら話す。麺を箸で一気に掴んでだ。そうしてそのうえで口の中に入れてから話すのだった。
「これも日本のものです」
「これはお魚のからだしを取ったんですか」
「お魚のスープ」
「それと海草も入ってるな」
「そうでしゅ。煮干と昆布でしゅ」
チンはそのスープのだしについても話した。

# 第八十二話　周泰、都に忍び込むのことその八

「そういうことでしゅ」
「ううん、凄くあっさりしてます」
「身体にもよさそうですね」
「食べてもあまり太らへんな」
「実はダイエットの為でしゅ」
チンは三人にその理由も話した。
「見ての通り私はこの身体でしゅ」
「太り過ぎっちゃ」
ホンフゥもそのチンに言った。彼は餃子を食べつつラーメンをすすっている。その日本の中華料理を食べながら話すのである。
「一体何を食ったらそこまでなるっちゃ」
「それでなのでしゅ」
あらためて話すチンだった。
「カロリーの少ないこのラーメンにしてるでしゅ」
「健康の為だったんですね」
「それはいいことですね」
「まさに医食同源やな」
三人もそのことはいいとした。だが。
ラーメンを勢いよくすすり続けるチンにはだ。少し驚いた顔でそれぞれ言うのだった。
「それでも。そこまで召し上がられると」
「あまり意味がないのでは？」
「おっさん食い過ぎやで」
見ればラーメンだけではない。餃子もだ。
次から次に口の中に放り込んでだ。貪っている。それを見ての言葉だ。
「食べることはいいですけれど」

「限度が」
「太ったままでええんかいな」
「これまでに比べてカロリーがずっと低いからいいのでしゅ」
だから大丈夫だと話すチンだった。
「これで身体を動かすから全然平気でしゅ」
「ほな昼寝もなしっちゃよ」
「むっ、昼寝も駄目でしゅか」
「あれも太るっちゃよ」
それでだ。駄目だというのだ。
「そもそも食って寝て。何時仕事してるっちゃ」
「仕事はちゃんとしてるでしゅ」
「さもないとあそこまで金は溜められへんっちゃな」
「そうでしゅ。台湾は厳しいでしゅよ」
ことだ。金儲けについてはだというのだ。
「ちょっとでも足を止めたら終わりでしゅ」
「それでまだお金を溜めてっちゃな」
「目指すは長者番付けトップでしゅ」
相変わらずラーメンと餃子を貪りながらの言葉だった。
「まだまだ頑張るでしゅよ」
「裏の世界ともつながってっちゃな」
「むっ、何を言うでしゅか」
チンはホンフゥの今の言葉にはむっとして返す。
「私はやましいことはしていないでしゅよ」
「何を嘘言うとるっちゃ」
すぐにだった。ホンフゥは言い返した。
「裏の世界ともつながってダフ屋とかして儲けてるっちゃな」
「殺人や麻薬や強盗はやってないっちゃよ」
「当たり前っちゃ。やってたらおいが刑務所に送ってるところっちゃ」
「そんな悪いことはしてないでしゅよ」

「まあそうっちゃな。チンは根っからの悪人ではないっちゃ」
「そこがあのオロチの人とは違うでしゅ」
山崎のことである。
「そういえばあの人もここに来てるでしゅな」
「多分そうっちゃな。オロチが来てるっていうことはっちゃ」
「絶対に来てるでしゅ」
「ただあいつはオロチには組しないっちゃ」
オロチ一族であるがそれでもなのだ。山崎はオロチ一族には組しないのだ。そうした意味で彼はオロチ一族の異端なのである。
「そのことは安心できるっちゃ」
「何かと物騒な人でしゅが」
「それこそあいつは根っからの悪人っちゃ」
山崎はだ。そうなのだった。
「妙に笑えるところもあるっちゃが」
「それでも悪人でしゅ」
「それは否定できないっちゃ」
そんな話をしていた。その話を聞いてだ。

# 第八十二話　周泰、都に忍び込むのことその九

孔明はだ。今は餃子を食べながら話すのだった。
「オロチ一族もどうやら」
「一枚岩じゃない？」
鳳統も言う。
「実は」
「そうかもね。少なくともその山崎さんという人は」
「オロチでありながらオロチには協力しない」
「そうした人もいるのね」
「それにあの八神さんも」
今度はだ。彼の話になった。
「オロチの血を引いているけれど」
「オロチとは敵対している」
「できれば」
鳳統は考える顔で述べた。
「あの八神さんにも是非」
「そうよね。あの人にも協力して欲しいけれど」
「あの人は」
八神のことはだ。二人もなのだった。
わかってきていた。どういった者か。それを把握しての話だった。
「誰かに言われて何かをする人ではないから」
「私達にどうにかできる人じゃないから」
「あの人と草薙さん、それに神楽さん」
「三人の力が必要なのだけれど」
それでもだというのだった。そんな話をしてだ。
二人はラーメンを食べている。するとここでだ。
李典がだ。二人に話すのだった。
「とりあえずからくりはな」

「はい、それです」
「宜しく御願いします」
「わかってるで。ちゃっちゃっと作るわ」
そうするとだ。李典は笑顔で話すのだった。
「期待しててや」
「是非共」
「そうさせてもらいます」
二人も笑顔で応える。そちらは順調だった。
そうした話をしてであった。彼等は次の手を打っていた。そうしてだ。
張遼と華雄はだ。虎牢関においてだ。二人で話をしていた。
「ううむ、こうして待っているのはだ」
「性に合わんっちゅうんやな」
「そうだ。やはり私は出陣してこそだ」
華雄はだ。眉を顰めさせて話すのだった。
「それで戦うことこそがだ」
「気持ちはわかるけどな」
「今は落ち着けというのだな」
「そや。そんなに身体動かしたいんやったらや」
どうするか。張遼は話すのだった。
「そこいらで泳ぐなり自慢の斧振り回してこい」
「泳ぐのか」
「あんた泳ぐの好きやろ」
こう華雄に言うのである。
「水議も持ってるしな」
「あの競泳水着か」
「それ着て泳いできい。好きなだけな」
「それもいいか」
「他に走るのもええな」
「体操服になってだな」

今度はこれだった。
「あれもいいな」
「折角そんなええスタイルしとるんや」
少なくともだ。外見はいい華雄なのだ。それもかなりだ。
「目立たなしゃあないやろ」
「そうだな。そういえば御主は」
「うちが？どないしたんや？」
「体操服は持っているのか？」
張遼の顔を見ての問いだった。
「それはあるのか」
「ああ、体操服な」
「着ているのを見たことはないが」
「実は持ってへんねん」
張遼はあっさりと答えた。
「あれや。さらしと半ズボンだけで充分や」
「ブルマはないのか」
「そや。持ってへん」
やはりあっさりと答える。
「そういうのはや」
「そうか。何か味気ないな」
「ブルマはなあ。いやらしいさかいな」
張遼は腕を組んでだ。難しい顔になって華雄に述べた。

# 第八十二話　周泰、都に忍び込むのことその十

「あれって下着と同じやろ」
「そうだな。下着の上に下着を着ける様なものだ」
「めっちゃやらしいわ」
それでだというのだ。
「うちは好きにはなれん」
「上もなのか」
「あんたそれでブラもろに見られたことあるやろ」
「あったな。呂布と二人三脚の時だったな」
そのだ。天下きっての猛将と組んだ時にだというのだ。
「全力を発揮した奴に引き摺られてな」
「周り皆見てたで」
「あの時は参った」
実際にそうだったと話す華雄だった。
「引き摺られるだけではなかったしな」
「ブラ見られた方が辛かったんやな」
「私とて女だ。見せないことが目的のものを公で見られるのはだ」
「やっぱり嫌やな」
「そういうことだ。それでだ」
「ああ、それでやな」
「とにかく今はだな」
華雄は残念そうに述べた。
「待っているしかないな」
「恋がどうなるかやな」
「恋とねねか」
「まああの二人やったら滅多なことでは負けへんやろ」
張遼はそのことは安心していた。
「だからうち等もや」

「出番はないか」
「仕方ないわ。うち等はそういう運命の星の下にあるんや」
「おい、それを言うとだ」
「あかんか」
「本当に出番がなくなったらどうする」
怒った顔でだ。張遼に言う。
「只でさえ恋の方が目立っているというのに」
「あの戦闘力やさかいな」
「流石に恋には負ける」
華雄もだ。認めるしかないことだった。
「あの武芸はまさに鬼神だ」
「うち等二人同時でもあっさり負けるしな」
「あれでは。敵がどれだけ来ても」
「まあ負けへんな」
「では。やはり」
「出番ないかもな」
「仕方ないか。それも」
「まあ身体動かしてストレス発散しいや」
それはそうしろというのだった。
「それでゆっくり待っとくか」
「そうするか。それではな」
「そうしよか。それでその後でや」
「その後でか」
「酒でも飲もか」
その後はだ。それだというのだった。
「そやったらな」
「酒か。いいな」
「二人で楽しく飲もで」
張遼は明るい笑顔で華雄に話す。
「そういうことでな」

「うむ、では少し泳いで来る」
笑顔で話す華雄だった。
「それではな」
「そうするとええわ。それにしても」
「うむ。何だそれで」
「うち等今何処におんねん」
話が変わった。急にだ。
見ればだ。二人はだ。迷路の中にいた。
地下道が複雑に入り組んでいる。その中において話すのだった。
「気付いたらこんな場所にいたが」
「何で虎牢関にこんなのがあんねん」
「あれなのか。敵の侵入を防ぐ為か」
「いや、地下から来んやろ。脱出路にしてもおかしいで」
「では何の為にこの迷路はあるのだ」
「わからんな。とにかくや」
「ここを出なければな」
まずはだ。それだった。
「さもないと最悪の場合餓死だ」
「そうやな。出んとな」
「まあさか洛陽に続いているということはないな」
「それは流石にないやろ」
張遼もそれはないとした。
「そこまで広い迷宮っていうのは」
「洛陽から離れているしな」
「そこまではな。けれどそれでもや」
左右の壁と目の前の分かれ道を見てであった。
二人は眉を顰めさせてだ。それで言うのであった。
「はよ出んとな」
「うむ、確かに餓死してしまう」
「何でこんな場所に来たんやろな」

「気付けばだからな」
二人はこんな話をしながらだった。迷路の中を彷徨うのだった。
そうしてやっと関から出た時にはだ。次の日であった。二人にとってはまことに不幸なことであった。

第八十二話　　完

２０１１・５・１４

# 第八十三話　呂布、あえて騙されるのことその一



連合軍は最初の関の前まで来た。しかしだ。
攻撃には出ずにだ。集結しているだけだ。それを見てだ。
董卓の兵達はいぶかしみながら関の上で話すのだった。
「来ないな」
「総攻撃に出ると思ったが」
「見ているだけか」
「どういうことだ？」
「しかもだ」
キムがだ。その兵達に話すのだった。
「呂布殿も出陣命令を出されぬ」
「ですよね。おかしいですよね」
「呂布将軍が出陣されないとは」
「いつもまず御自身が出陣されて戦われるというのに」
「見られているだけとは」
「いえ、ここに出ても来られません」
見ればだ。そこに呂布はいなかった。そのこともだった。
彼等にとってはだ。おかしなことだった。それで話すのだった。
「御身体が悪いのでしょうか」
「御食事も殆んど召し上がられませんし」
「肝心の将軍がそれですと」
「困るのですが」
「推測を口にしてはいけませんよ」
ジョンはその兵達に述べた。
「流言となって士気に影響します」
「そうですね。それでは」

「今は冷静にですか」
「そうせよというのですね」
「そうして下さい」
ジョンは冷静な口調で彼等に話した。
「今は戦いの前ですから」
「そうだ。戦いは避けられない」
キムは腕を組んでそのことについてはこう言った。
「それならばだ」
「今は呂布さんの指示に従うべきです」
ジョンもこう言う。
「まとまって動きましょう」
「わかりました。それでは」
「今は」
こう話してだった。彼等は今はその連合軍を関の上から見るだけであった。
そしてだ。連合軍ではだ。
まずは先陣の劉備がだ。関を見上げて言うのであった。
「いよいよなのね」
「はい、いよいよです」
「策をはじめます」
こうだ。孔明と鳳統が劉備に対して話す。
「既に用意はできています」
「あとは陳宮さんがこちらに来られて」
「わかったわ」
劉備は二人のその言葉に頷いて返した。
「それなら。今は」
「はい、迂闊な動きを避けて」
「そのうえで」
軍師二人もこう話す。
「陳宮さんをお待ちしましょう」

「そうしましょう」
「そうね。それで陳宮ちゃんは」
劉備は彼女の話もした。
「どうしてるの？今は」
「今は第二陣にある本陣にです」
「そこにおられます」
こう話す二人だった。
「そこで最後の打ち合わせをしておられます」
「今回の作戦の」
「そう。最後のね」
「はい、それでなのです」
「間も無くこちらに来ると思います」
孔明と鳳統はまた話した。
「それであの関が陥ちればです」
「それでいいのですが」
「うん。無益な戦いはね」
劉備もだ。二人のその言葉に頷いて返す。
「避けたいから」
「はい、問題は呂布殿です」
「あの方ですが」
そのだ。関を守る呂布の話になった。

## 第八十三話　呂布、あえて騙されるのことその二

「あの方はただ強いだけではありません」
「非常に鋭い方です」
呂布のその動物的な直感のこともだ。孔明と鳳統は知っていた。
「ですから。若しかするとです」
「見破られるかも知れません」
「若し見破られたら」
劉備は暗い顔になって話すのだった。
「その時は」
「戦になります」
「呂布殿が怒られれば」
「そうよね。そうなったらね」
「ですがそれでもです」
「これも若しもですが」
だがここでだった。軍師二人の言うことが変わった。
そしてだった。彼女達はこう劉備に話すのだった。
「その呂布殿の勘です」
「そのことですが」
「それで気付かれるんじゃないの？」
劉備は眉を曇らせて二人に問うた。
「だから心配なんじゃ」
「はい、ですが呂布殿の勘の鋭さは尋常なものではありません」
「あの方の武芸と同じだけ凄いものがあります」
そうだというのである。
「ですから。陳宮ちゃんの心にもです」
「気付かれるかも知れません」
「陳宮ちゃんの」
呂布をあくまで慕い気遣うだ。その心にだというのだ。

「あの娘の心に」
「そうなれば。どうなるか」
「また若しかしたらですが」
「戦いは避けられるかも知れません」
「起こったならば無益なものとなる戦いをです」
「それなら余計に」
劉備の声に期待が宿った。
「成功させたいけれど」
「そうですね。本当にです」
「ここは何としても」
軍師二人の言葉もだ。期待するものになった。
そしてその声でだ。彼女達は話すのだった。
「陳宮ちゃんもそう思ってます」
「あの娘が一番」
「そうよね。陳宮ちゃんの呂布ちゃんへの思いは」
「素晴しいです」
「あそこまで大切に思えるなんて」
「確か」
劉備もだ。その陳宮のことは聞いていた。彼女はというと。
「あの娘は住んでいた村を追い出されて」
「はい、各地を転々として」
「それで呂布さんと御会いして」
「そうして助けてもらって」
「今に至ります」
「そうだったのね」
そのことを聞いてだ。劉備も話す。
「それであの娘は」
「呂布さんをお慕いしてるんです」
「それもとても強く」
「だからこそ」

劉備はまた言った。
「陳宮ちゃんは呂布ちゃんを絶対に」
「助けたいんです」
「この無益な戦いから」
「本当の敵は宦官達」
そのだ。張譲達だというのだ。
そしてだ。さらにだった。
「それとオロチよね」
「その彼等の他にです」
「どうやらです」
ここで孔明と鳳統はさらに話した。
「様々な勢力がこの世界に来ています」
「あちらの世界から」
「それは月ちゃんやミナちゃんが言っていた？」
「そうです。常世の勢力や」
「魔神アンブロジアの勢力」
そうした者達もだというのだ。

# 第八十三話　呂布、あえて騙されるのことその三

「他にもネスツやアッシュ」
「そうした勢力が来てです」
「この漢を壊そうとしているの」
「いえ、世界全体をそうしたいみたいです」
「この世界全体を破壊しようと目論んでいるようです」
軍師二人はこう劉備に話した。
「しかもそうした勢力が一つになっています」
「さらに悪いことにです」
「そうなのね。一つになっているのね」
「力がばらばらなら対処は楽ですが」
「力が一つになるとです」
どうなるか。それも問題だった。
「それだけ強くなります」
「ですから脅威です」
「そうよね。力は一つになる方がね」
それは劉備もわかった。彼女もこれまでのことからそうしたことがわかってきていた。そうした意味で彼女は普通の少女ではなくなってきていた。
「強くなるわね」
「今の私達もですが」
「そのことは」
孔明と鳳統はこの連合軍のことも話した。
「力は一つになろうとしています」
「そうなってきています」
「それでもなのね」
「はい、それでもです」
「草薙さん達のお話を聞きますと」

そのだ。あちらの世界で彼等と戦ってきた者達の話を聞いてだった。孔明も鳳統もだ。その彼等について考え検証していたのだ。
そうしてだ。二人はオロチ達にこう話した。
「かなりの力です」
「それぞれで。世界一つを脅かすまでに」
「それが幾つも集って一つになって」
「正直。かなりの強敵です」
「余程気を引き締めて戦わないと」
「それもあってなのね」
それでだとだ。話す劉備だった。
「今の戦いは何があっても」
「避けないといけないです」
「敵は呂布さんではありません」
「董卓さんの軍自体もです」
「敵ではないのです」
戦うべき相手ではない。二人は確かにそう見ていた。
だからこそだというのだ。今は。
「全ては陳宮ちゃんにかかっています」
「この関でのことは」
こう話す彼女達だった。そうしてだ。
その陳宮は李典からだ。あるものを譲り受けたのだった。
それは車椅子の上にある。車椅子自体が天幕に覆われている。その車椅子をだ。李典から譲り受けたのである。
車椅子を渡した李典はだ。こう陳宮に話した。
「ほな。これからはや」
「はい、ねねがやるのです」
強い目で李典を見上げてだ。李典に返した。
「ここは絶対に」
「それで呂布を戦わせへんのやな」
「オロチの話を聞いては余計にです」

それならばだというのだ。
「恋殿は今戦ってはならないです」
「そやな。うち等は戦うべきやあらへん」
李典も真面目な顔で話す。
「絶対にや」
「そうなのです。真の敵はオロチなのです」
「それに宦官連中やな」
「恋殿を苦しめたあの連中は許せないのです」
何処までもだ。呂布を想う陳宮だった。それは忠義を越えただ。
より強く深いものだった。
「何があってもなのです」
「呂布をそこまで想ってるんやな」
「恋殿は素晴しい方です」
陳宮は断言した。
「ねねは。恋殿に」
「だからこそや」
陳宮の目に涙が宿ったのを見てだった。
李典は彼女が泣かないうちにだ。気を使って言った。

## 第八十三話　呂布、あえて騙されるのことその四

「あんた、何があってもや」
「はいなのです」
「呂布、助けや」
こう言ってであった。李典はその車椅子を手渡して陳宮を送ったのだった。
その彼女を見てだ。荀?はふと呟いた。
「正直。成功して欲しいわね」
「貴殿もそう思うのだな」
「それはそうよ。戦いが避けられるのよ」
だからだとだ。右京に返す。
「それならそれに越したことはないじゃない」
「それはその通りだ」
右京も彼女のその言葉に頷く。
「無益な戦いはな」
「そうよ。それにね」
「それに。どうしたのだ」
「何か。私も変わったのよ」
こうだ。右京にさらに話すのだった。
「ああいうの見てたら成功して欲しいと思わざるを得なくなったのよ」
「そうなのか」
「そうよ。あの陳宮って娘呂布を必死に想ってるわ」
それでだというのだ。
「そんなあの娘が失敗したらそれはもう」
「希望はないか」
「そんなの私が許さないわよ」
いささか感情を込めて話す荀?だった。

「絶対に成功してもらわないと」
「この話はか」
「ほら。貴方の世界にいる」
荀?は話を変えてきた。
「覇王丸っているじゃない」
「あの男のことか」
「あいつ、あれなんでしょ?お静って人の気持ちをわかっていて自分自身もそうだったのに。あえて剣の道を選んだのよね」
「そうした。それがあの男だ」
「それ聞いて私言ってやったのよ」
彼と一緒に飲んでいる時にだ。実は荀?は無類の酒好きでもあるのだ。
「そんなのおかしいって。男ならね」
「男ならか」
「女でもよ。想う相手の気持ちに応えなさいって」
実際にこう言ったのだ。覇王丸自身に対して。
「それで剣もそのお静って人もよ」
「両方取るべきか」
「そうよ。私だってね」
「貴殿もか」
「軍師の力量を極めることも華琳様への想いも」
どちらもだ。荀?にとっては絶対のことだ。その両方をだというのだ。
「取るから」
「そうするのだな」
「そうよ。だからあの娘もね」
陳宮の話に戻った。
「呂布を救わないと。どうにもならないわよ」
「そうだな。それはな」
「そう思うでしょ?貴方も」

「思う。私もだ」
ここでだ。これまで聞き役に徹していた右京が話してきた。
「この世界に来るまでは己の想いを殺していた」
「貴方の想いを？」
「胸を患っていた」
それでだ。彼は苦しんできた。剣の道を極めながらもだ。
「それが為にだ」
「その好きな人への想いを捨てていたのね」
「長くは生きられない身体だった」
それを理由にしてだ。どうだったかというのである。
「それでだった」
「そう。病でだったの」
「しかしそれが治り」
華陀にだ。そうしてもらったのだ。
「そのうえで心の病も消えた」
「それでなのね」
「そうする」
右京は言った。
「若し元の世界に戻ったならば」
「そうなのね。貴方もそうしたことがあったのね」
「人はそれぞれある」
右京はこうも言った。

## 第八十三話　呂布、あえて騙されるのことその五

「私も然りだ」
「そして私も陳宮も」
「だがだ。その想いが純粋で清らかならばだ」
その場合は。どうかというのだ。
「それは最後まで果たされるべきだ」
「そうよね。本当にね」
「さて」
ここまで話してだ。右京は。
あらためてだ。荀？にこんなことを話した。
「さっきから気になっていたのだが」
「どうしたの？」
荀？は目をしばたかせて自分の左隣にいる右京を見上げて尋ねた。
「貴殿は二人いるのか」
「二人って？私は一人だけれど」
「私達の世界ではよく分家や偽者、生き別れとしてだ」
「何か色々な場合があるのね」
「それで外見は同じでただ色が違う相手がいるのだ」
「世の中にはそっくりさんが三人いるっていうけれど」
「それでだ」
そうだからだとだ。右京は話すのだった。
「今あそこにもう一人貴殿がいるが」
「私がもう一人って・・・・・・あっ！」
そのもう一人を見てだ。荀？はだ。
忽ち怒りの声をあげてだ。その黒猫に叫ぶのだった。
「ちょっと陳花！」
「あっ、桂花！」
向こうもだ。荀？に気付いて言い返した。

「あんた何でここにいるのよ！」
「それはこっちの台詞よ！」
荀？は荀？に対して叫ぶ。
「何で私の目の前にいるのよ！」
「ただ散歩していただけよ！」
「散歩は私のいないところでしなさい！」
「そういうあんたもね！」
「何だってのよ！」
「私のいるところにね！」
こんな調子で言い合う二人だった。その二人を見てだ。
右京はだ。たまたまそこに来た高覧に尋ねた。
「まさかこの二人は」
「そうよ。凄く仲が悪いの」
高覧もこう右京に話す。
「もうね。桂花はその為に麗羽様にお仕えしなかったのよ」
「そこまでなのか」
「陳花がいたから」
そのだ。荀？のことだ。
「それで曹操殿のところに行ったのよ」
「そうした理由があったのか」
「とにかくこの二人仲が悪いの」
高覧が言い合う間も喧嘩をしている二人だった。
「こっちの世界じゃかなり有名な話でね」
「困っているのだな」
「まあ二人だけのことだから」
それでだとだ。高覧は突き放して述べた。
「気にしなくてもいいけれどね」
「そういうことか」
「そう、そういうこと」
高覧の声は素っ気無い。

「通り雨の様なものだと思って」
「わかった。それならだ」
こうしてだった。右京も二人の喧嘩のことは気にしないことにした。そうしたやり取りの間にだ。
陳宮はグリフォンマスクやイワンと共にだ。関の前に来た。ここでグリフォンマスクが彼女に言って来た。
「若し何かがあればだ」
「その時はなのです？」
「貴殿は一目散に逃げることだ」
そうしろというのだ。
「私達が守るからな」
「有り難うなのです」
「何、気にすることはない」
グリフォンマスクは腕を組んで述べた。
「私は子供達のヒーローなのだからな」
「ねねはもう子供じゃないのです」
一応はこう言う陳宮だった。しかしだった。
彼女は同時にだ。グリフォンマスクにこうも話した。

## 第八十三話　呂布、あえて騙されるのことその六

「けれど」
「けれど。どうしたのだ？」
「有り難うなのです」
俯いてだ。グリフォンマスクにこう礼を述べたのだ。
「その御心、感謝するのです」
「また言うが気にすることはない」
グリフォンマスクの言葉が変わることはなかった。
「これが私の務めなのだからな」
「それでなのです」
「そうだ。そういうことだ」
こう陳宮に話すのである。
「何かあれば私が全力で守るからな」
「私もいる」
イワンも言ってきた。
「私はヒーローではないが戦う者だ」
「だからなのです」
「そうだ。だから君を守る」
そのだ。陳宮をだというのだ。
「必ずだ」
「そうしてくれるのです、イワンさんも」
「安心して自分の果たすべきことをしてくれ」
イワンの言葉はこうしたものだった。
「わかったな」
「はいなのです」
陳宮はイワンのその言葉にこくりと頷いた。
「ねねは。絶対にやるのです」
「その意気だ」

「ではじめるとしよう」
「わかりましたです」
こう二人と話してだ。それからだった。
関の前に来た。そのうえでだ。
「恋殿！」
呂布を呼ぶのだった。
「おられますか。ねねです！」
「あれっ、陳宮殿か？」
「関におられるんじゃなかったのか？」
「何でそれであそこにおられるんだ？」
「しかもあの車椅子何なんだ？」
「一体」
まずはだ。関の上にいる兵達がそれぞれ声をあげた。
「連合軍の方にいるみたいだけれどな」
「寝返った？」
「裏切った？」
こうした意見も出て来た。
「まさか。陳宮殿が」
「そんなことをするとは思えないが」
「何があったんだ？」
「しかも呂将軍を御呼びしている」
「どういうことなんだ」
兵達には訳のわからないことだった。だが陳宮のその言葉を聞いてだ。
呂布が出て来た。そのうえでだ。
関の上からだ。陳宮を見て言うのであった。
「ねね」
「恋殿・・・・・・」
「何の用？」
いつもの無表情な顔と声で陳宮に問う。

「いないと思ったら」
「関を勝手に出たのは申し訳ありません」
まずはそのことを謝罪する陳宮だった。呂布を見上げて必死な顔で話す。
「けれどなのです」
「けれど？」
「大変なことがわかったのです」
今は真実を隠してだ。そのうえで真実を話す陳宮だった。
「月殿は捕らえられていたのです」
「捕らえられていた。月が」
「はい、そうなのです」
この事実をだ。過去形で話すのだ。
「そうなのです」
「そう。じゃあ」
「そうなのです。張譲になのです」
その名前を聞いてだ。関の兵達は。
それぞれ顔を見合わせてだ。驚きの声をあげた。
「馬鹿な、宦官達は粛清されたのではなかったのか！？」
「董卓様によって」
「それで今都は董卓様が治めているのではなかったのか」
「違うのか」
「月は粛清なんかしない」
ここで呂布がこのことを言った。

# 第八十三話　呂布、あえて騙されるのことその七

「そして表に出ないなんてこともしない」
「ではやはり」
「董卓様は生きておられて」
「それで宦官達に幽閉されている」
「そうなのですか」
「そう。やっぱりそうだった」
呂布もその事実はわかった。
「月は捕まっていた」
「そうなのです」
ここでまた呂布に話す陳宮だった。
「それで月殿は」
「そこにいる」
「はい、そうなのです」
陳宮の顔が意を決したものになった。
「劉備殿達が助けて下さいました」
「劉備達が」
「月殿はここにおられます」
こう言ってだ。陳宮は車椅子の天幕を開けた。
そこに董卓がいる。しかしだった。
よく見れば違っていた。動きはしないし目も虚ろだ。それが精巧だが人形に過ぎないことは近くから見ればわかることであった。
そしてだ。呂布はその目も尋常なものではない。
その目で董卓を見てだ。すぐにわかったのだ。
だがそれと共に陳宮の真摯な顔、何よりもその目を見てだ。言うのだった。
「わかった」
「わかった！？」

「月は宦官達に捕まっていた」
これは事実だとだ。呂布にもわかったのだ。
「そして月は助け出された」
「そうなのです」
このことはあえてだ。騙されてみせたのだ。
しかし同時にだ。呂布はこうも言った。
「そして敵は劉備達じゃない」
「それでは敵は」
「誰なのですか？」
「宦官達」
彼等だとだ。呂布は左右にいる兵達に話した。
「あの連中が恋達の敵」
「ではそれなら」
「我々は」
「関を開ける」
こう言うのだった。
「今から開ける」
「えっ、それでは将軍」
「戦はどうなるのですか」
「どうされるのですか」
「月は利用されていた」
その事実を話すのだった。
「その月は助け出された」
「それではですか」
「最早戦う理由はない」
「そういうことですか」
「だからこそ」
「そう。恋は戦わない」
誰と戦わないのかも。彼女は話した。
「目の前の劉備達とは」

「左様ですか。それではです」
「関を開けて」
「そうしてですか」
「劉備達と話をする」
実はだ。呂布は袁紹のことはほぼ頭に入っていない。あくまで知り合いである劉備のことを頭に入れてだ。そのうえで話をするのである。
「そうする」
「わかりました。それではです」
「我等はこれで」
「関を開けます」
「そうします」
「うん、そうする」
こう話してであった。実際にだ。
呂布は関を開放してだ。そのうえでだ。
陳宮を介してだ。関の一室で劉備達と話すのだった。劉備は五虎将軍と二枚看板の軍師を連れてだ。呂布と話をするのだった。

# 第八十三話　呂布、あえて騙されるのことその八

それを聞いてだ。本陣の袁紹は面白くない顔をしていた。
「総大将はわたくしですわよ」
「それはそうだけれどね」
曹操がその彼女に応える。
「ただ。今回はね」
「仕方がないといいますの？」
「だって。呂布が知っているのは劉備達なのよ」
「それで、なのですね」
「そうよ。私達のことは知らないから」
それでだと話す曹操だった。
「だったら。降伏の話もね」
「劉備さん達となのですね」
「私達は報告を待っていればいいのよ」
曹操は袁紹に話した。
「ゆっくりとね」
「ううむ、何か腑に落ちませんわ」
袁紹はそれも気に入らないというのだ。
「こうした話は是非わたくしが」
「だから。本当に何でもかんでもでしゃばらないの」
曹操が言いたいことはそのことだった。
「そういうところ子供の頃から変わらないじゃない」
「確かに。そうですね」
「麗羽殿は昔からですね」
曹操の言葉に曹仁と曹洪も応えて話す。
「そうしたところは」
「何といいますか」
「悪いのでして？」

「思いきり悪いわよ」
曹操は袁紹に思い切り突っ込みを入れた。
「だから。自重しなさい」
「自重？聞き慣れない言葉ですわね」
「そういうことだから駄目なんでしょ、全く」
というようなことを言ってもだ。実は呆れていない曹操である。
それでだ。袁紹にこうも話した。
「まあいいわ」
「いい？何がでして？」
「こうしてただ待っているのも何だから」
「それでは一体」
「お茶にしましょう」
曹操は割り切った感じで提案した。
「いいわね、それで」
「ええ、それでしたら」
袁紹もだ。納得する顔で応えた。
「お茶ですわね」
「とりあえず最初の関は無事越えられるし」
「いい結果になりましたわね」
「だからよ。そのお祝いの意味でもね」
「お茶ですわね」
「飲むわよ。いいわね」
「わかりましたわ」
こんな話をしてであった。袁紹達は今は茶を飲んで話の結果を待つのだった。そうしてだ。
その一室でだ。呂布は自身の向かい側に座る劉備に言った。
「恋は劉備達とは戦わない」
「そうしてくれるんですね」
「戦う理由がないから」
それでだと話すのである。

「だからもういい」
「有り難う、呂布さん」
呂布のその言葉を受けてだ。劉備はだ。
明るい笑顔になってだ。呂布に話した。
「それならもうこれで」
「関もいい」
そこの守りもだ。放棄するというのだ。
「先に行っていい。ただ」
「ただ？」
「月には手を出さないでいて欲しい」
董卓にはだというのだ。
「月は。詠が大事にしてる娘だからな」
「それでなのだな」
「そう」
関羽の言葉にもだ。こくりと頷いて返す。

## 第八十三話　呂布、あえて騙されるのことその九

「だから」
「うむ、わかった」
関羽は呂布のその言葉にも応えて話した。
「それも約束しよう」
「後で袁紹さんにお話してみます」
「そのことも」
孔明と鳳統が応えた。
「それではそれはその様に」
「そういうことで」
「御願い。ただ恋は」
「むっ、今度は何だ」
趙雲が呂布の今の言葉に問うた。
「御主は何かあるのか」
「そう。月の傍にいたい」
それが呂布の願いだというのだ。
「そうしたい」
「ああ、董卓を守る為なんだな」
「そう」
またこくりと頷いて答える呂布だった。
「そうしたい。いいか」
「けれどあれはなのだ」
ついついだ。張飛は言いそうになった。
「実は」
「あっ、それ以上は言っちゃ駄目よ」
「むぐっ」
後ろからだ。黄忠が手を伸ばしてだ。
そのうえで張飛のその口を塞いだ。それで喋らせなかった。

そうしてだった。黄忠は呂布に対して言った。
「気にしないでね」
「何かわからないけどわかった」
無表情で応える呂布だった。
「そういうこと」
「は、はい。あまり御気に召されずに」
「そのことは」
「わかった」
呂布もこくりと頷く。そのことはすぐにだった。
そうしてからだ。あらためてだった。
呂布はだ。劉備達にこう話した。
「とにかく。それで御願い」
「はい、わかりました」
満面の笑顔で応える劉備だった、
「ではそうしよう」
「はい、ではそうでは」
「うん」
劉備に対して頷く。こうした話をしてだ。
彼女はだ。こうも話した。
「じゃあ皆と一緒に行く」
「あたし達とか」
「そう、皆と行く」
こう馬超にも話すのである。
「そこに月がいるから」
「だからなんだな」
「うん、それでいい」
「ええ、こちらこそ」
劉備が呂布のその言葉も受け入れた。そしてだ。
一連の話が袁紹に伝えられだ。彼女はすぐにだった。
「わかりましたわ」

「それではですか」
「それでいいんですね」
「ええ、いいですわ」
こうだ。お茶を飲みながら顔良と文醜にも話すのである。
「戦は終わりましたし董卓さんも謀反人ではないとわかりましたし」
「その董卓さんの配下の呂布さんもですか」
「連合軍にいていいんですか」
「宜しいですわ。元々このお話は劉備さんにお任せしていますし」
そのだ。先陣の彼女がだというのだ。
「わたくしは何も言いませんわ」
「わかりました。それでは」
「そういうことで」
笑顔で応える二人だった。その話をしてからだった。
呂布は関を明け渡し連合軍に加わった。そのうえで董卓の傍についたのだ。
その彼女を見ながらだ。張飛は言うのだった。
「ばれないかどうか不安なのだ」
「ああ、それな」
馬超も張飛のその言葉に応える。

# 第八十三話　呂布、あえて騙されるのことその十

「確かに。かなりやばいよな」
「あんな簡単な人形だとすぐにわかるのだ」
張飛は目を困らせて話す。
「若しばれれば」
「呂布怒るだろうな」
「そうならない方が不思議なのだ」
こうも話す張飛だった。
「人を騙すことだし。後ろめたいのだ」
「だよなあ。ちょっとな」
「はい、騙すことはよくありません」
それはだ。徐庶もそうだと話す。
「けれどです」
「けれど？」
「けれどっていうと？」
「呂布さんは全てわかっておられます」
徐庶が指摘するのはそのことだった。
「董卓さんのこともです」
「わかってるのだ！？」
「あの董卓が人形だってことを」
「そうです。わかっておられます」
そのことをだ。張飛と馬超に話すのである。
「それでも。陳宮さんの御心もわかって」
「それでなのだ」
「騙されたふりをしてるってのかよ」
「はい、そうです」
まさにだ。その通りだというのだ。
「呂布さんはそうされてるんです」

「ううん、じゃあ呂布は何もかも全部わかって」
「それで動いてるんだな」
「そうです。あの方も凄い方です」
徐庶は呂布を賞賛さえした。
「そのうえでなのですから」
「ただ強いだけじゃないと思ってはいたのだ」
「そうした気配りもできるんだな」
「そうさせているのは陳宮さんです」
彼女がだというのだ。
「あの方の真心がです」
「呂布をそうさせたのだ」
「そうなんだな」
「そうなります。陳宮さんは呂布さんにとって」
どうかともだ。徐庶は話した。
「本当にかけがえのない方なんです」
「心と心で結ばれている」
「そうした関係か」
「はい、まさにそうなっています」
「そうなのだ。じゃあ呂布にとって陳宮は」
「陳宮にとって呂布はだ」
まさにだ。お互いにであった。
「無二の存在なのだ」
「そこまでの相手なんだな」
そのことがだ。二人にもわかったのだった。
そうした話をしながらその呂布を見ていた。呂布は。
車椅子の傍にいる。無論陳宮も一緒だ。
その陳宮にだ。こう言うのだった。
「ねね」
「はい、恋殿」
陳宮もすぐに呂布の言葉に応える。

「何でしょうか」
「有り難う」
こう言ってだ。礼を述べるのだった。
「今回も有り難う」
「有り難う。まさか」
今の言葉でだ。陳宮も察した。
そのうえでだ。彼女に問い返した。
「恋殿は」
「これで美味しく食べられる」
呂布は答えない。その代わりにこう言うのだった。
「また。食べ物を美味しく食べられる」
「はい、それはなのです」
陳宮もだ。そのことには笑顔で応えた。
そしてだった。呂布に対してこんなことを話した。

# 第八十三話　呂布、あえて騙されるのことその十一

「では恋殿」
「うん」
「今から食べましょう」
こう話すのだった。呂布に対して。
「何がいいのです？」
「御饅頭」
それだと答える呂布だった。
「肉まん。ただ」
「ただ？」
「ねねと二人で食べたい」
そのだ。陳宮とだというのだ。
「二人で食べたい」
「そうしたいのです」
「そう。そうしたい」
また言う呂布だった。
「そうしたい。二人で」
「はい、わかったのです」
陳宮はその顔を明るくさせてだ。すぐに応えた。
「なら今すぐに二人で」
「食べよう」
「そうするのです」
こう話してだった。二人はだ。
久し振りに楽しい昼食を食べることができたのだった。それもたらふく。
二人がその昼食を食べている間にだ。陳琳は。
不意にだ。一羽の鳩を西に放ったのだった。
それを見てだ。ミッキーが彼女に問うた。

「何だ？伝書鳩か？」
「あっ、何でもないです」
こうミッキーに応えて誤魔化す彼女だった。
「気にしないで下さい」
「とか言ってもな。気にはなるだろ」
笑ってだ。ミッキーはこう陳琳に話した。
「あれか？袁紹さんの命令か」
「むっ、おわかりなのですか」
「それ以外にねえだろ」
それでだ。わかるというミッキーだった。
「違うか？それは」
「ううむ、鋭いですね」
「伊達にチャンプじゃないさ」
彼もカムバックしてだ。そうなったのだ。
「だからな。わかるさ」
「そうですか。チャンピオンになるのには勘も必要なんですね」
「まあな。とにかくな」
「はい、とにかくですか」
「鳩のことはいいさ」
それはいいというミッキーだった。
「俺達にとって悪いことじゃないのはわかるからな」
「それでなのですか」
「ああ、いいさ」
また言うのだった。
「特に気にしないさ。で、話を戻してな」
「はい、それで」
「どうだい？飯一緒に食わないか？」
陳琳をだ。それに誘うのだった。
「ジャックやジョンの旦那もいるぜ」
「皆で、ですか」

「飯は皆で食うのが美味いからな」
それでだというのだ。
「それでどうだ？」
「わかりました」
笑顔で応える陳琳だった。
「それでは皆で」
「そうしようか。それではです」
「さて、じゃあ鍋でいいな」
「鍋ですか」
「ああ、鳥鍋な」
それをだ。今から仲間達と一緒に食べるというのだ。
「思いきり濃い味にしたな」
「いいですね。御飯が進みます」
「そうしような」
「それでは」
こんな話をしてだった。彼等もだ。
食事を楽しむのだった。彼等はそんな話をしてであった。
今は食事を楽しむのだった。その中でだ。
キングもいた。そのジャックと同じ場にだ。それでだ。
彼を睨んでだ。こんなことを言うのだった。

# 第八十三話　呂布、あえて騙されるのことその十二

「まさか御前と一緒とはな」
「へっ、俺もそう言いたいぜ」
ジャックもだ。そのキングを睨んで話すのだった。
「同じ釜で飯を食うなんてな」
「とんだ話もあったものだ」
「じゃあここにいなかったらいいだろ」
「生憎だがその気にもならない」
こう返すキングだった。憮然とした顔であるがそれでもだった。
「何しろ久し振りに会う面子ばかりだからな」
「そうじゃのう。こうして会うのもじゃ」
リーもいる。
「何かの縁じゃな」
「そうだな。ただな」
ジョンはここで彼の名前を出した。
「藤堂の旦那はどうなった」
「ああ、あの人な」
ミッキーも彼のことを話した。
「そういえばいないな」
「どうしたんだ？娘さんはいるぜ」
ジャックもだ。ここで思い出したのだった。
「それでおっさんがいないっていうのはな」
「何か寂しいな」
キングも何時の間にか話に入っている。
「あの人もいないとな」
「そのうち会うんちゃうか？」
ロバートは気軽な口調だった。
「あのおっさんのことや。死んでるとかはないで」

「そうだな。そうした人じゃない」
リョウもいる。
「気付いたらあちこちにいる人だからな」
「どういう人なんですか？」
陳琳もその彼に興味を持った。
「その藤堂さんという人は」
「香澄がいるわね」
キングは彼女から話した。
「あの娘の父親なのよ」
「お父さんなんですか」
「ええ、そうよ」
そうだというのだ。
「その人なのよ」
「ではその人もですか
「そう、格闘家なの」
キングはこのことも話した。
「そうなのよ」
「そうなんですか」
「ただね」
ここからがだ。本題だった。
「すぐに何処かにいなくなる人でね」
「何ちゅうかな。隠れキャラみたいなや」
「そういう人なんだ」
ロバートもリョウもそうだと話す。
「探すのがちょっと苦労やけれどな」
「意外と色々な場所にいる人だ」
「ううん、やっぱり変わった人ですね」
陳琳は興味のある顔で述べる。
「その藤堂さんは」
「変わってるっていうかな」

「永遠の行方不明者や」
リョウとロバートはそうだというのだ。
「一体何処にいるのか」
「全然わからへんしな」
「それで何か話書けそうですね」
こんなことも言う陳琳だった。
「藤堂師範を探す香澄さんを主人公として」
「実際にそうなっているわね」
キングがここで言った。
「あの娘は」
「やっぱりそうなんですか」
「とにかく。あの人は行方がわからないのよ」
「そういえば店の経営どうなってるんだ？」
「それは奥さんがやってるぜ」
ミッキーにジャックが話す。
「あの奥さんやり手でな。店が出来た時から切り盛りしてるんだよ」
「何だ、じゃああの人いなくてもいいんだな」
「店もな」
そうだというのである。
「全然平気だったりするんだよ」
「全然立場ないんだな」
ミッキーも首を捻りながら話す。
「そう思うと気の毒な人だな」
「そうだな。謎の失踪もしてるしな」
「まあ会えたら運がいい人だ」
ジョンはこう陳琳に話す。
「そういう人もいるんだよ」
「わかりました。では御会いするその時を楽しみにしています」
笑顔で応える陳琳だった。そんな話をしてだ。
彼等は最初の関を抜けたことを喜んでいた。そして真の敵が誰な

のかもだ。次第にわかってきた。この世界自体の敵が誰なのかをだ。

第八十三話　　完

２０１１・５・１７

# 第八十四話　周泰、董卓を救うのことその一



ギースがだ。道中においてだ。
クラウザーに対してだ。こんなことを話していた。
「貴様と共にいるのもな」
「腐れ縁だというのか」
「そうだ。それだ」
まさにだ。それだというのだ。
「しかしだ」
「しかし。何だというのだ」
「私はわかってきた」
そうだというのである。
「貴様という人間がな」
「このウォルフガング＝クラウザーがか」
「貴様に好意を抱くことはない」
それは絶対にないというのだ。
「貴様とは因縁があまりにも強く深い」
「そうだな。血の因縁だな」
「それが為にそれはない」
決してだというのである。それはだ。
「しかしそれでもだ」
「私がわかってきたのか」
「貴様は悪ではない」
クラウザーはだ。そうだというのだ。
「裏の世界にいてもだ。悪ではないな」
「我がシュトロハイム家のことは知っている筈だ」
そのだ。クラウザーの家のことをだというのだ。

「我が家は欧州の裏の世界の武を司ってきた」
「要人警護等だな」
「裏の世界において和を保ってきたのだ」
そのだ。彼等の力で、である。クラウザーはギースにこのことを話す。
「その私が悪と言うのならだ」
「裏自体が悪だな」
「そうなる。私は騎士なのだ」
彼の尊ぶもの、それは騎士道精神だ。だからこその言葉だった。
「欧州においても廃れてしまっている考えだがな」
「それがわかった」
「私が騎士だということもだな」
「そういうことだ。私はこれまで貴様には憎しみしか感じていなかった」
「それが今はか」
「違う」
まさにだ。そうだというのだ。
「貴様という人間がわかってきたのだ」
「そういうことだな」
「その通りだ。そしてだ」
「貴様の命は狙いはしない」
これがギースの結論だった。
「決してだ。そしてだ」
「そしてか」
「貴様は貴様の道を歩め」
クラウザーへの言葉だった。
「我等の父のことは考えずにだ」
「我が父上か」
「父はああなる運命だった」
クラウザーの方は見ない。正面を見据えている。

そのうえでだ。右隣にいる彼に話すのだ。
「貴様が殺したのではない」
「そう言うのか」
「そうだ。父もそれを受け入れている」
断言だった。ギースはあえてそれをしたのだ。
「だからだ。貴様もだ」
「気にすることはないというのか」
「そのまま己の道を歩め」
また話すギースだった。
「私もまたそうする」
「ではあの兄弟とはどうする」
「ボガード兄弟か」
「まだ戦うのは」
「戦いはする」
それは、だというのだ。
「しかしだ。命を取ることはしない」
「それはしないのか」
「私もまた私の道を歩む」
そうするというのだ。ギースもまた、だ。

# 第八十四話　周泰、董卓を救うのことその二

「あの兄弟が私に向かって来るのなら迎え撃つ」
「しかし殺しはしないか」
「何度でも戦おう」
「それが貴様の歩む道か」
「ロックが来てもだ」
今度は我が子の名前を出した。
「同じだ」
「やはり闘うのか」
「そうするだけだ。無論貴様ともだ」
「闘うか」
「それだけだ。貴様も私と拳を交えたいか」
「私は騎士だ」
またこう言うクラウザーだった。
「騎士は戦うことがその務めだ」
「だからこそだな」
「貴様と闘うこともそのうちの一つならばだ」
「そうするか」
「そうさせてもらう。それではだ」
「うむ、この世界から戻ればだ」
そのことはだ。ギースの中では既に決まっていることだった。彼は今いる世界から彼の本来の世界に帰ることをだ。規定だと見ているのだ。
そのうえでだ。彼は話すのだった。
「その時はだ」
「戦いの中に生きるか」
「私の戦いの中にな」
「変わったのだな」

ギースの話をここまで聞いてだ。クラウザーはあらためて言った。
「貴様もまたな」
「変わったか。私は」
「暗いものが消えた」
そうだというのだ。
「貴様を覆っていたドス黒いものがな」
「それが消えたか」
「そうだ、消えた」
またギースに話すクラウザーだった。
「そして貴様本来のものが出て来たか」
「世辞か。私には世辞は効かんぞ」
ギースは己の口の端を歪ませて応えた。
「生憎だがな」
「安心しろ。それではない」
「世辞ではないか」
「私も世辞は言わない」
この辺りだ。クラウザーのその騎士としての考えが出ていた。
「事実しか言わない」
「では、か」
「貴様もまた貴様の道を歩むのだな」
「それは今言った通りだ」
「ならそうするといい。我々の道が交わることはないだろう」
「私は私、貴様は貴様だからな」
だからだというのだ。彼等もだ。
「それは決してだな」
「そういうことだ。それでだ」
「それでか」
「我々はそれぞれ生きていく」
そうだとも話していくのだった。そしてだ。
その二人を見てだ。また話す怪物達だった。

「いい感じになってるわね」
「そうね」
こう話すのである。
「あの二人もそれぞれの道に辿り着いたわね」
「本来のね」
「あの世界の住人達の中で今あたし達と一緒にいる子達はね」
「本来の道を忘れている娘が多いから」
そうだというのだ。
「だからあたし達と一緒になって」
「それで本来の道に辿り着いているのだから」
「これも全て運命ね」
「全くね」
こんな話をするのだった。そしてだ。
華陀もだ。こう話すのだった。

# 第八十四話　周泰、董卓を救うのことその三

「確かにこの国を蝕む病は深刻だが」
「それでもよね」
「少しずつだけれどね」
「元の道を見つけてきているんだな」
そのギース達を見ての言葉だ。
「いいことだな」
「そうね、本当にね」
「迷いや惑いが消えていっているわ」
「人間は迷い惑うものだからな」
こうも言う華陀だった。
「それから解き放たれていくのはいいことだ」
「この世界も惑わされようとしているけれど」
「きっとよくなるわ」
「この世界にいる娘達はどれもいい娘達だ」
華陀は言った。
「あの娘達ならな」
「きっとね」
「上手にいくわ」
「それを手助けするのが俺達だな」
華陀は言った。そのうえでだ。
「では次は赤壁だな」
「そう、あそこよ」
「あそこを見に行きましょう」
「長江だな」
華陀は赤壁のあるその場所について話した。
「あそこだな」
「ダーリンは長江のことも詳しいわよね」

「何度も行ってるから」
「ああ、季節によって逆流したりな」
華陀はまずそのことを話した。
「それに風が急に変わる」
「そう、風よ」
「それが問題なのよ」
「風が変わればそれで策も変わる」
華陀の目が鋭いものになる。
「それ次第だな」
「オロチも常世の者もアンブロジアもね」
「陰から動くからね」
それがだ。厄介だというのだ。
「そこの注意してね」
「やっていかないと駄目よ」
「そういうことだな。それを考えるとな」
「事前に場所を見ていくことはいいことよ」
「絶対にね」
怪物達も今は乙女な調子ではない。戦うおなごであった。
そのおなごとしてだ。彼等は今話すのだった。
「ダーリンはこの世界を救う大きな力だから」
「頑張ってね」
「俺は俺の果たすべきことをする」
華陀もだ。その目を強くさせて述べる。
「それだけだがな」
「その意気がいいのよ」
「だからこそなのよ」
それでこそだとだ。怪物達も話すのだった。
そしてそのうえでだった。彼等は言う。
「その赤壁もじっくり見ましょう」
「それで頭の中に叩き込むのよ」

こうした話をしながらだった。彼等も彼等の道を進むのだった。
そしてだ。連合軍においてもだった。
孫権がだ。天幕で酒を飲んでいる姉に対して話していた。
「都のことですが」
「ええ、何かわかったのかしら」
「どうやらかなり怪しい様です」
「そう。やっぱりね」
話を聞いてだ。孫策はそれを当然といった顔で受けた。
「どうせ張譲の手の者達があれこれと蠢いているのね」
「それで表から入り込むのはです」
「難しいのね」
「送り込んだ者達は表から入ることを諦めました」
話が本題に入った。

## 第八十四話　周泰、董卓を救うのことその四

「大将軍の仰ったその道を通ることになりました」
「秘密の地下道ね。ただね」
「はい、隠された道ですから」
「危ないでしょうね」
孫策は懸念する目をだ。の見ながら孫権に見せた。
「あの娘達でもね」
「それが問題ですが」
諸葛勤がここで二人に話した。
「ですがここはです」
「はい、あの者達を信じましょう」
太史慈も話す。
「明命達を」
「あの娘なら大丈夫だけれどね」
孫策も周泰には絶対の信頼を見せた。
「それにあちらの世界の忍の面々もいるし」
「あの者達ですが」
孫権もだ。彼等について話す。
「明命に劣らない者達ですので」
「安心していいわね」
「私もそう思います」
「私もです」
諸葛勤と太史慈もここで言った。
「明命達なら必ずです」
「果たしてくれます」
「その通りね。では果報をね」
どうするのか。孫策は話した。
「飲みながら待ちましょう」

「姉上、ですが」
孫権は姉をだ。心配する顔で見てこう言った。
「飲み過ぎでは？」
「そうかしら。今飲みはじめたばかりだけれど」
「最近お酒の量が過ぎます」
「気分がよくて飲んでるだけよ」
「それでもです。御気をつけ下さい」
姉をだ。真剣に気遣っての言葉だ。
「酒は薬にもなりますが毒にもなりますから」
「やれやれ。蓮華は相変わらずね」
孫策は苦笑いで応えた。
「心配性なんだから」
「姉上は飲み過ぎなのです」
「何なら蓮華もどうかしら」
そのだ。妹に逆に声をかけるのだった。
「飲むかしら」
「私一人では」
「あら、嫌なの？」
「藍里と飛翔もいますので」
彼女達もだというのだ。
「共に飲むのなら」
「そうね。じゃあ四人でね」
「一人で飲むとどうしても飲み過ぎ御身体によくありません」
ここでも姉を気遣って話すのだった。
「ですから」
「わかったわ。じゃあ貴女達もね」
こうしてだった。孫策は諸葛勤達も誘ってだ。四人で飲みはじめた。
そうしてそのうえでだ。吉報を待つのだった。
周泰達はだ。ある陵墓の前にいた。そこは土が盛り上がり下へと

続く道が見られた。
その陵墓を見てだ。半蔵が言った。
「ここだな」
「そうですね。ここですね」
周泰も半蔵のその言葉に応える。一同の目は道の入り口に集中している。
「ここから秘密の抜け道を通って」
「そのうえで向かうとしよう」
「既にです」
蒼月がここでこう話す。
「関のことは都にまで伝わっているでしょう」
「董卓さんのことですね」
「はい、その張譲という者の耳にもです」
伝わっているというのだ。
「そしてそのうえで果たして真実かどうか確めるでしょう」
「あの孔明って娘の言う様にだよな」
火月が言う。

# 第八十四話　周泰、董卓を救うのことその五

「董卓ちゃんが本当に助け出されたかどうか確めるんだな」
「人間の心理としてです」
どうなのか。蒼月は弟に話す。
「人は真実がどうなのか確めずにはいられません」
「俺達はその張譲の動きを見ていればいいんだな」
「その通りです」
蒼月もその通りだとだ。ガルフォードに話す。
「噂も流していますし」
「あの噂ね」
舞も話す。
「董卓ちゃんが妖術で豚に変えられて都に幽閉されていて」
「その術が解かれて私達に助けだされた」
周泰も話す。実はそうした風なだ。噂も流しているのだ。
「張譲は間違いなくそれに乗るでしょう」
「張譲が何処にいるのかも確めてよね」
「それはもうわかっています」
蒼月は舞にも話した。
「彼は後宮にいます」
「そこになのね」
「宦官は後宮にいるものです」
だからこそ問題なのだ。そこに入られる者は皇帝と女官の他はその宦官達しかいない。そこを隠れ場所としているからこそだ。宦官は厄介なのだ。
「そこに入ればすぐに見つかるでしょう」
「じゃあとりあえずはこの地下道を潜り抜けてだな」
ガルフォードはパピーとその子供達をあやしながら述べた。
「その宦官を見つけて後をつけて」

「そうしてです」
さらに話す蒼月だった。
「今都にいる董卓さんの配下の方々にもお話をしてです」
「今都に残っている董卓さんの配下は」
周泰が話す。そうしたところまでだ。彼女は把握しているのだ。
「軍師の賈駆さんと妹さんの董白さんですね」
「その二人にも話すのだな」
半蔵がここで言う。
「そうしてだな」
「じゃあ二手に別れましょう」
舞がこう提案した。
「後宮に忍び込んで董卓さんを救い出す面々とその賈駆さん達に事情を話す面々とね」
「そうですね。まず宮廷に入るのは」
舞の話を受けてだ。周泰は話した。
「私と舞さんと影二さんで」
「拙者もか」
「はい、御願いします」
周泰はこう影二に話すのだった。
「この三人で行きましょう」
「では残る我々がだな」
半蔵が言った。
「その董卓殿の配下に事情を話すか」
「御願いします」
「けれどあれだな。正面から都に入ることは無理だな」
ガルフォードが話した。
「何か怪しい奴等がうろうろしてるな」
「あの白装束の連中をぶっ飛ばしてもいいんだけれどな」
実に火月らしい言葉ではある。
「けれどそれやったら俺達は来たってばれるからな」

「そうなったら話は終わりだからな」
「そうです。そうなってはどうしようもありません」
実際にそうだと話す蒼月だった。
「ですから表から入ることはです」
「止めるべきだよな」
「火月、特に貴方はです」
蒼月は弟を咎めにかかってきた。
「軽挙妄動は慎むことです」
「おい、俺かよ」
「そうです。くれぐれも慎重に」
また言う蒼月だった。
「だからこそここは宮廷から入り董卓殿の配下の方々に御会いしましょう」
「そうするのが一番ですね」
蒼月の言葉にだ。周泰も頷いた。
そうした話をしてだ。そのうえであった。
一行は陵墓の中に入った。そこは中々広かった。
左右の部屋は玄室の様になっており通路が続いている。そこには柱もある。
その中を通りながらだ。ガルフォードが言うのだった。
「チャイナの墓ってでかいんだな」
「そうよ。始皇帝のお墓あるじゃない」
「ああ、あれな」
ガルフォードは舞に話に応える。
「あれと一緒か」
「流石にこのお墓はあれよりもずっと小さいけれどね」
「少なくともここは陵墓ではないな」
半蔵は周囲を見回しながら述べた。

# 第八十四話　周泰、董卓を救うのことその六

「やはり隠し通路だ」
「それを覆い隠しているのか」
影二も話す。
「陵墓ではないのか」
「そういうことか。ここは墓ではないんだな」
火月もそのことを実感した。
「それで隠し通路からだよな。宮廷に入ってくんだな」
「その通路も問題ですね」
蒼月はその通路のことも話した。
「何しろ宮廷の隠し通路です。普通に通れるものではありません」
「そうですね。様々な罠がありますね」
その通りだとだ。周泰も話す。
「例えば吊り天井とか」
「っていうとこれか？」
ここで火月が上を指差した。見ればだ。
上から天井が降りてきていた。しかもその天井には大きな針が無数にある。
それを見上げてだ。舞は言った。
「早速ね」
「言ったすぐ傍からだな」
ガルフォードも言う。皆冷静である。
その冷静さで以てだ。彼等はだ。
すぐに前に走った。やはり忍の者であるだけに速い。
その速さで前に出てだ。吊り天井は避けた。
しかし今度はだ。その足元がだった。
崩れてだ。落とし穴が牙を剥いてきたのだ。
「今度はこれか」

「さて、それではです」
半蔵も蒼月も冷静だ。それで、であった。
一行は天井に跳び落とし穴を避ける。そして空中で身体を丸めて回転しつつ反転してだ。それぞれの足で天井を蹴ってだ。
その反動で着地する。膝を屈めて衝撃を殺してだ。着地したのだ。
そうして二つの危機を逃れた一行の前にあったものは。
「ここですね」
「そうだな。ここだな」
ガルフォードが周泰に応える。そこにはだった。
壁がある。しかしその壁はだ。
何かが違っていた。そこだけ妙に白いのだ。その白い壁を見てだ。
舞がだ。その白い壁を押した。するとだった。
壁が落ちてだ。そこからだった。地下に続く道が出たのだった。
「ここを通ってなのね」
「そうですね」
今度は舞の言葉に応える周泰だった。
「ここに入ってそうして」
「宮廷に行くのね」
「ただ、ですね」
ここでもだった。問題はあるのだった。
「道もやっぱり」
「罠だらけでしょうね」
蒼月が落ち着いて言う。
「覚悟していることですね」
「水だな」
火月が嫌そうな顔になっていた。
「その音が聞こえてくるぜ」
「泳ぎますか」
こう言うのだった。周泰は冷静にだ。
「ではここは」

「俺な。泳ぐの嫌いなんだよ」
火月は今度はうんざりとした顔で話す。
「冷たいのは苦手なんだよ」
「贅沢は言っていられませんよ」
蒼月はその弟に釘を刺す。
「私達がここで行かなければ」
「そうだよな。何にもならないからな」
「ではいいですね」
蒼月はまた弟に話した。
「行きますよ」
「仕方ねえか。それじゃあな」
火月も渋々ながら納得した。そうしてだった。
そのうえでだ。彼等はだ。
地下のその道へと入った。するとそこは。
やはり水路だった。水面が広がっている。そこにだった。
一行は入ってだ。そうして泳いでいく。だが暫く泳いでいるとだ。
下からだ。何かが来た。それは。
「おい、あれってよ」
「鰐ね」
舞がガルフォードに答える。

# 第八十四話　周泰、董卓を救うのことその七

「これが罠だったのね」
「ったくよ、手が込んでるな」
「だから隠し通路なのよ」
「っていうかあんなのいたら誰も通れねえだと」
火月は下から来るその鰐を見て話す。
「あの猫耳将軍よく通れたな」
「実は悪運と頑丈さはかなりの人でして」
周泰が何進のことを説明する。
「宦官達の陰謀もことごとく」
「強い人なのですね」
「そうした意味では強い人です」
その通りだとだ。周泰は蒼月にも説明した。
「ですから鰐でも」
「そういうことですね」
「けれど。この鰐達は」
「ええ、速く泳いでさけましょう」
舞はそうすると話した。
「あまり大きい鰐達じゃないし」
「はい、そうですね」
周泰は舞の言葉にも応えた。
「それじゃあここは」
「急いでね」
こうしてだった。一行は忍びのその泳ぎの速さでだ。鰐達を振り切った。そうしてそのうえでだ。鰐という危険な罠も避けたのだった。
それを振り切るとだ。目の前にだ。
上にあがる階段があった。そこに足を踏み入れてであった。

先に進んでいく。それで難を避けたのだった。
その頃だ。張譲はだ。呂布と陳宮が関を開けて尚且つ連合軍に投降したうえで加わったと聞いてだ。後宮の奥深くで怒りを露わにしていた。
「何っ、豚だと!?」
「は、はい」
「董卓を豚に変えてです」
「そうして宮廷に閉じ込めていてです」
「その董卓を助け出したと」
「そう言っています」
「馬鹿な、そんな筈がない」
張譲はこう言ってそのことを否定する。
「董卓には妖術なそ仕掛けてはいない」
「しかしです。まさかということもあります」
「ですからここは」
「どうされますか」
「止むを得ない」
ここで言った張譲だった。
「ここはだ」
「ここは?」
「ここはといいますと」
「鏡はあるな」
こうだ。側近達に話すのだった。
「何処にある」
「は、はい。ここにです」
「ここにあります」
側近達はすぐにだ。手鏡を差し出した。張譲はその手鏡をひったくるようにして取ってだ。そうしてであった。
すぐに宮廷の奥深くに向かう。そのうえで牢獄にいる董卓を見る。
牢獄にいる彼女はだ。項垂れた顔でその場にうずくまっている。

彼女はその張譲に気付いて顔を向ける。
張譲はその彼女を見てまずはそこにいることを確めた。
「いるではないか」
「あの？」
「一体何故あの様な噂が出た」
そのことをだ。まずはいぶかしむ張譲だった。それからだった。
張譲はその彼女に鏡をやる。するとだ。
何も起こらない。それを見てだ。
「おのれ、何にもならないではないか！」
「？」
「呂布、騙されたか！」
鏡を地面に投げ付けてだ。踏みつけながら話した。
「いや、わかっていてか。あの女！」
「恋ちゃんが？」
「何でもない！」
忌々しげに董卓に言い返す。
「くそっ、まだ虎牢関がある。洛陽は守れる！」
こう言ってだ。張譲は怒りを見せたまま牢獄の前から消えた。そしてそれをだ。
陰から見てだ。周泰が舞と影二に話した。
「上手くいきましたね」
「そうね。ここまではね」
「上々だ」
舞と影二も周泰に話す。
「とりあえずあの娘を助け出しましょう」
「あの娘が董卓か」
二人はその牢獄の中にいる董卓を見て話す。

# 第八十四話　周泰、董卓を救うのことその八

「そう、あの娘よ」
「話には聞いていたが随分と小さいな」
影二はその彼女を見てこう言った。
「しかも弱々しい感じだな」
「少なくとも暴政を敷く感じではないですね」
周泰もその董卓を見て話す。
「悪い人ではないです」
「やっぱり宦官っていうか張譲が隠れ蓑にして利用していたみたいね」
「そうだな。そして先程のあの者がか」
「そうね。張譲るね」
「そういうことだな」
そのことがわかってだ。二人はまた言う。
「今ここでやっつけたいけれど」
「それは駄目か」
「はい、あの者を討つのは何時でもできます」
周泰もそれはしないというのだった。
「今はそれよりもですね」
「董卓ちゃんをね」
「助ける方が先だな」
「はい、とりあえずはですね」
こう二人に話してだ。そのうえでだった。
醜態は着物の懐からあるものを出して来た。それは。
黄色い四角いものだった。それを二人にも差し出して言うのである。
「食べましょう」
「乾パンね」

「それか」
「これって凄い食べ物ですよね」
周泰が二人にその乾パンを差し出しながら話す。
「美味しいですし保存もききますし」
「そうでしょ。私達の世界じゃこうした時にはね」
「よく食べる」
「それとこれもですね」
今度はだ。燻製も出した。肉の燻製である。ビーフジャーキーだ。
「燻製はこちらの世界にも元々ありましたけれど」
「そのビーフジャーキーはまた違うでしょ」
「美味いな」
「はい、とても」
食べながらだ。にこにこと笑って話す周泰だった。
「実はこちらの世界でこうした時に食べるものって美味しくないんですよ」
「ああ、あの丸薬みたいなのね」
「忍のあの丸薬だな」
「はい、あれよりもずっと」
いいというのである。
「それを食べてですね」
「いい感じですね」
こう話してだった。三人はまずは軽く腹ごしらえをした。それからだった。
そっとだ。牢獄に近寄る。今は番兵はいない。
「張譲を送っているんですね」
「そうだな」
舞と影二がその二人を見ながら話す。
「じゃあ今この時に」
「あの娘を救い出すか」
「そうするとしよう」

こう話してだった。そしてだった。
三人はだ牢獄にそっと近寄りだ。その中にいる董卓に声をかけた。
「あの」
「はい？」
「董卓さんですね」
周泰が彼女に尋ねる。
「御助けに参りました」
「貴方達は」
「はい、孫策様の配下周泰です」
右手を平にして左手を拳にして合わせて応える。
「お見知りおきを」
「不知火舞よ。劉備さんの配下のね」
「如月影二。曹操殿の配下だ」
舞と影二も話した。
「私達も貴女を助けに来たのよ」
「その為にここに来たのだ」
「あの、私をとは」
「詳しい話は後で」
周泰は今はそれよりもだというのだった。

# 第八十四話　周泰、董卓を救うのことその九

「では今は」
「有り難うございます。それでは」
「ここを出ましょう」
「宮廷でも蒼月達が上手くやっているわね」
「合流するとしよう」
こうしてだった。董卓はだ。
宮廷から助け出されたのだった。まずはそれは上手くいった。
それと共にだ。宮廷からだ。
蒼月達が密かに出てだ。そこからだった。
宰相の屋敷に入る。だが、だった。
そこには董卓はいない。しかしそれでもだった。
董白がいた。彼女は一人廊下を進んでいた。その彼女にだ。
半蔵がだ。そっと囁いた。
「董白殿か」
「誰！？」
「連合軍の者でござる」
「連合軍！？刺客！？」
「刺客は自分から言うことはありません」
今度は蒼月が話す。
「そうではありません」
「では何だというの？」
「あえて言うのなら貴女の味方です」
「味方ということは」
「はい、貴女の姉君のことですが」
「今俺達の仲間が助け出しているところさ」
蒼月に続いて火月も話す。その話をしてだ。
彼等は董白の前に出た。そのうえでそれぞれ名乗った。

「服部半蔵」
「蒼月です」
「火月だ」
「ガルフォード。宜しくな」
四人はこう名乗った。その名前を聞いてだ。
董白もだ。こう言うのであった。
「連合軍の。あちらの世界から来ている連中ね」
「知ってるんだな」
「名前は聞いているわ」
董白は四人に話した。
「その貴女達が姉様を助けてくれるの」
「そちらの事情はあの陳宮って娘から聞いたさ」
ガルフォードが話す。
「宦官の奴等に操られてるんだな」
「張譲ね。察してはいたけれどいるって確かだとわかったことはなかったわ」
そうだったというのだ。
「私達も後宮には入られないからね」
「それで確めようもなかったのだな」
「そうなのよ。それを知っているのは詠だけよ」
董白は彼女の名前を出した。
「あの娘だけなのよ」
「賈駆殿だな」
半蔵がまた言った。
「董卓殿の参謀の」
「あの娘は知ってるけれど」
それでもだというのだ。彼女はだ。
「あの娘にも会うの？」
「そうしたいんだけれどな」
火月がそれはだというのだ。

「出来ればな」
「ええ、わかったわ」
納得した顔でだ。頷く董白だった。
そしてそのうえでだ。周囲に話した。
「じゃあ今から詠のところに案内するわね」
「済まないな。それじゃあな」
「ええ、こっちよ」
こうしてだった。董白がだ。四人を賈駆のところに案内する。彼女は丁度自分の部屋にいた。そこでだ。
暗い顔で着替えようとしていた。そうしていたのだ。
服を脱いでいた。その彼女にだ。
四人はだ。声をかけるのだった。

# 第八十四話　周泰、董卓を救うのことその十

「よいか」
「えっ！？」
「賈駆殿だな」
またしてもだ。半蔵が声をかけるのだった。
「そうだな」
「って誰！？」
「服部半蔵」
部屋のカーテンの奥から出て来てだ。こう名乗った。
「貴殿に話があって参った」
「同じくガルフォード」
「蒼月です」
「火月だ」
そして残り三人も出て来たのだった。その四人を見てだ。
賈駆は眼鏡の奥の目をいぶかしめさせてだ。こう言うのだった。
「連合軍のあっちの世界の人間ね。僕に何の用！？」
「既に董白殿にお話している」
「あのことでな」
「月のこと？」
賈駆はすぐに半蔵とガルフォードの言葉に応えた。
「あの娘のことなのね」
「既に私達の仲間達があの人をお助けしています」
「それでこの街を出るんだよ」
「月や陽と一緒になのね」
「そうだよ。あんた達はもう宦官の連中に苦しめられることはないんだ」
こう話す火月だった。
「じゃあ今からな」

「この街を出てそれで」
「まずは都の東門にです」
蒼月が場所を話した。
「向かいましょう」
「わかったわ。じゃあ馬車と馬を用意するわ」
賈駆の決断は速い。流石に軍師であった。
そうしてだ。そのうえでだった。
「行きましょう」
「はい、じゃあ」
「今から」
こうしてだった。賈駆達もだ。
都を脱出しようとする。だがふとだった。
賈駆は気付いた。己の今の姿にだ。
着替え中である。黒のブラとショーツ、それにガーターベルトという格好だ。その格好に自分が気付いてだった。
顔を真っ赤にさせてだ。忍達に言うのだった。
「ちょ、ちょっとあんた達」
「あれっ、どうしたんだ!?」
「ちょっと、何で入って来たのよ!」
顔を真っ赤にさせてだ。ガルフォード達に抗議する。
「どうしてなのよ!」
「どうしてとは」
「そう言われても困りますが」
半蔵と蒼月はわかっていないという返事だった。
「拙者は別に」
「貴女にお話しただけですが」
「だから。僕は着替え中よ」
そのことを言う賈駆だった。
「そうなのよ。そんな時に入るなんて」
「ああ、そういえばそうだな」

「見ればだ」
火月とガルフォードも無頓着な感じである。
「これは悪いことしたな」
「ああ、じゃあ一時退室するか」
「あんた達全然平気なのね」
「平気？何がだ？」
半蔵が賈駆に問い返す。
「何が平気なのだ」
「だから。女の子の着替えを見てもよ」
そのことを言う賈駆だった。
「全然平気だっていうの！？」
「ふむ。特にどうということはない」
「全くな」
「ちょっと、それどういうことよ」
素っ気無く言われたら言われたで言う賈駆だった。
「僕の下着姿を見て何も思わないっていうの！？」
「あの、ですから」
「何だっていうんだよ」
蒼月と火月がまた言う。
「只の下着ではないですか」
「俺の褌と同じだろ」
「女の子の下着は別なのよ」
そのだ。褌とはだというのだ。
「そんなこともわからないの！？あんた達」
「俺の家って俺以外は女の子ばかりでな」
ガルフォードが話す。
「そんなの見てもな」
「慣れてるっていうの？」
「パピーもレディーだしな」
「ワン」

横にいるそのパピーが吠えて応える。
「パパーもピピーもピパーもな」
その三匹の子犬も出て来た。ガルフォードの後ろから。
「だから別にな」
「僕の下着姿は犬と同じレベルだっていうのね」
「貴殿が何を言っているのかわからぬが」
半蔵もそうだった。同じであった。
「とにかくだ。早く着替えてだ」
「それでどうしろっていうのよ」
「先程から言っている。東門だ」
何とでもないように話をそこに戻す半蔵だった。
「そこに行かねばならん」
「それね」
「董白殿と共にな」
「わかってるわ。それじゃあね」
賈駆も下着のことはとりあえず置いておいて応えた。そうしてであった。
彼等は都の脱出に取り掛かった。まずはだ。天下を悩ませる種が一つ消えたのであった。

第八十四話　完

２０１１・５・１９

# 第八十五話　命、忍達を救うのことその一



不意にだ。怪物達が言い出した。
「ちょっと出張の用事が出来たわね」
「そうね」
こうだ。赤壁に行く途中で話すのであった。
「都に行かないといけないわね」
「今はね」
「何だ？都で何かあったのか？」
華陀がその彼等に尋ねた。今彼等は道中を進んでいた。その中でのやり取りだった。
「まさかと思うが」
「ええ、董卓ちゃんが助け出されたわ」
「無事ね」
「そうか。それはいいことだな」
華陀は二人の話を聞いてだ。笑顔で頷いた。
「これで天下を悩ませる種が一つ消えたな」
「ええ、ただね」
「これからが問題なのよ」
怪物達はここでこう言うのだった。
「向こうも董卓ちゃんが助け出されたのは把握してるから」
「それで何もしてこない筈がないわ」
「そうだな」
華陀もだ。それはわかるのだった。
そのうえで頷いてだ。彼はこう言った。
「絶対に追っ手を差し向けて来るな」
「だからよ。すぐに都に向かいましょう」

「一刻の猶予もならないわ」
「ならばだ」
獅子王が二人の話を聞いて述べた。
「飛ぶのか？それとも瞬間移動か？」
「瞬間移動よ」
「それを使うわ」
二人はその超能力をだ。何でもないといった感じで話した。
「皆が行かないと今回はね」
「駄目みたいな話だからね」
「そうか。だからか」
獅子王もだ。それを聞いてあっさりと述べた。
「それで瞬間移動か」
「はい、そうしましょう」
「是非共」
こうした話をしてだった。二人はだ。
仲間達に対してだ。こうも言うのであった。
「じゃあ皆、ゲートは開いたから」
「ここから都に行きましょう」
何時の間にか空間にだ。黒い扉が出て来ていた。
その扉を開けるとだ。もうそこは都だった。暗鬱な空でだ。沈んだ雰囲気だった。
その街を扉の向こうに見ながらだ。二人は言うのだった。
「ここを通ればすぐよ」
「一瞬で行けるわよ」
「そうか、早いな」
この異常事態にもだ。平然としている華陀だった。
そしてその華陀を見てだ。ギースが問うた。
「華陀はそれでいいのだな」
「んっ、何がだ？」
「だからだ。瞬時に移動しているのだぞ」

ギースは怪訝な顔で常識を話した。
「それについては何も思わないのだな」
「便利な術だな」
本当にこれだけの華陀だった。
「俺もこうした術を身に着けたいものだ」
「そうか。本当にそれだけか」
「妖術も使いようだからな」
華陀は二人の術の一つをそれだと認識している。
「使う者の心が正しければだ」
「それでいいか」
「少なくともこの二人の心は正しい」
怪物達の外見は全く見ていない。
「だからいいのだ」
「ならいいのだがな」
ギースも遂に折れた。それでいいとだ。
そのうえでだ。華陀にこんなことを言った。このことは言わずにはいられなかった。
「しかし。この二人は正しい心を持っているのか」
「そうだ。私を消しこの世界の為に働いている」
「あら、流石はダーリンね」
「あたし達のことをよくわかってくれてるわ」
こう話す二人だった。その心正しき怪物達だ。
「そうなのよ。あたし達はこの世界を守る為に働いてるのよ」
「この世界を害する怪しい者達とね」
「怪しいか」
刀馬が怪しいと見ている者達は二人を見ていた。自分の目の前にいるだ。

# 第八十五話　命、忍達を救うのことその二

「そうだな。怪しいな」
「この美貌と天下を想う赤い心」
「あたし達にあるのはそれだけよ」
「今御主達を見た蜻蛉が落ちたのだが」
刀馬はこんなことも言った。
「それが美貌か」
「虫さえも魅了するあたし達の美貌」
「思えば罪よね」
「そう思っているのならいいのだがな」
刀馬も怪物達には返す言葉をなくした。そうした話をしてだった。
彼等は都に入った。まさに一瞬だった。
その黒い扉を潜ってからだ。また言う妖怪達だった。
「ネコ型ロボットの道具を応用して出したものだけれど」
「中々便利ね」
「そうね。あの青い猫ちゃんの使う道具はどれもね」
「凄く参考になるわ」
「青い猫か」
華陀はその奇妙な猫にも関心を向けた。
「そうした猫もいるのだな」
「そうよ。二十一世紀にいるのよ」
「凄く役に立つのよ」
「その猫とも会ってみたいな」
こんなことも話すのであった。そんな話をしてであった。
彼等は都に入った。まさに一瞬で。
その頃だ。董卓は。
周泰達と共に宮廷を出て夜の都の中を進んでいた。だがその後ろからだ。

謎の一団が襲い掛かる。その者達に舞が攻撃を浴びせる。
「花蝶扇！」
胸から扇を出してそれを投げてだ。彼等を撃つ。それで一人倒した。
しかしその一団はさらに来る。かなりの数だった。
その白い、目が幾つもある覆面の者達を見てだ。舞は言うのだった。
「何なの、この連中」
「あやかしか」
影二は接近してきた一人を蹴りで吹き飛ばしつつ言った。
「只の人間ではないようだが」
「そうですね。異様なものを感じます」
周泰もだ。刀を抜き横から来る者達を切り払いながら述べる。
「この者達は一体」
「私もよくわからないのですけれど」
董卓もだ。顔を曇らせて話す。一行は夜道の中を必死に進んでいる。その後ろから、左右からだ。その白い一団が迫って来ているのだ。
「ただ」
「ただ？」
「私を捕らえた張譲の後ろにいました」
「なら張譲の手の者でしょうか」
周泰はまずはこう考えた。
「そうなのでしょうか」
「それにしてはおかしいんじゃないかしら」
舞が周泰に対して言った。
「何かこの連中って」
「そうだな。この世界の者達ではない」
影二も言う。
「かといって我等の世界の者達でもないな」

「どっちの世界の連中ではない感じね」
「そういえば」
二人の話を聞いてだ。周泰もだった。
その者達を刀で切りつつだ。そうして言うのだった。
「何かが違いますよね」
「影に近い感じね」
「闇だな」
二人はまた言った。
「そうした感じの連中ね」
「何かよからぬ目的の為に動いているか」
「だから董卓さんに対してあの様なことをしたのでしょうか」
周泰は言う。洛陽の夜は彼等以外は誰も出ていない。不気味に静まり返った街の家々も人の気配に乏しい。何もない感じだ。
その街の中を進んでだ。それで話すのだった。
「国政を壟断する為に」
「そんな簡単な話じゃないわね」
舞がすぐに言った。
「ほら、オロチの話だけれど」
「その彼等ですか」
「あの連中が今私達を追っている連中と組んでるなら」
その可能性はかなり高いとだ。舞は考えながら話した。

## 第八十五話　命、忍達を救うのことその三

「この世界の何もかもを壊そうとしているわね」
「この世界のあらゆるものを」
「国政の壟断とかそういう生易しいものじゃないわ」
そうしたことですらだ。小事だというのだ。
「オロチが企てることはね」
「だからといってこの連中はオロチではない」
影二は白装束の者達を見てまた話した。
「別の怪しさを感じる」
「ううん、話は単純じゃないんですね」
周泰も言う。
「どんどんとんでもないことになっていますね」
「なっているわね」
「それは間違いないな」
舞も影二も周泰に話す。三人で董卓を守りながら。
「けれどもうここまで来たらね」
「最後までやるしかない」
「そうしましょう。そしてまずは」
まずはだというのだ。
「この都を出ましょう」
「董卓ちゃんを助け出してね」
「そうするとしよう」
「すいません」
その董卓が三人に礼の言葉を述べる。彼女も懸命に駆けている。
だが彼女の足は三人に比べて遅い。それがそのまま白装束の者達のつけ入る隙になっていた。
だが何とか凌ぎながらだ。彼等は進んでいた。そして遂に東門が見えた。そこにだ。

「月！」
「姉さん！」
「詠ちゃん！陽！」
董卓は二人の姿を認めて声をあげた。門の下にだ。二人が馬車を用意して待っているのだ。
「待っていてくれたの！」
「当たり前でしょ。待たなくてどうするのよ」
「話は後よ！」
董白が姉に対して言う。
「とにかく。馬車に乗って」
「急いで！」
「う、うん！」
董卓も彼女の言葉に応えてだ。そうしてだ。
馬車に向かう。そこにだった。
半蔵達も出て来た。彼等は周泰達に声をかける。
「よし、それではだ」
「都を出るか！」
「はい、そうしましょう！」
周泰が半蔵と火月の言葉に応える。
「今は急がないと」
「そうだな。しかしその連中は」
「何者ですか？」
ガルフォードと蒼月が周泰達に迫っている白装束の者達を見て問う。
「見たことのない奴等だけれどな」
「敵なのはわかりますが」
「それがよくわからないのよ」
「何者かもな」
舞と影二は戦いながら答える。
「さっきからしつこく来るけれど」

「次から次に出て来る」
「我々の敵であることは間違いないな」
半蔵は簡潔にこう判断した。
「それではだ」
「戦うか」
ガルフォードも言ってだ。そうしてだった。
彼等も白装束の一団と戦う。そうしてその者達を退かせようとする。
しかしだ。何時の間にかだった。
馬車にだ。その白装束の一団が群がって来た。そのうえでだった。
一行を襲う。戦いはさらに激しさを増す。
それを見てだ。董白は剣を手にしたままたまりかねた声で言う。
「どうしたものかしらね、ここは」
「そうそう容易に我等を出すつもりはないか」
「出すどころか」
それどころかだとだ。董白は傍らで爆炎龍を出す半蔵に対して述べた。
「皆殺しにするつもりね」
「少なくとも董卓殿以外はそうだな」
「冗談じゃないわね」
これが董白の言葉だった。
「ここまで来て。死んでたまるものですか」
「それなら何とか」
「ええ、姉様を早く馬車に乗せて」
そうしてだというのだ。

# 第八十五話　命、忍達を救うのことその四

「一刻も早くここを出ましょう」
「既に馬も用意してあります」
蒼月はそれもあるというのだ。
「ですがこのままでは」
「どうしようもねえな！」
火月は炎を刀に宿らせて振るいながら話す。
「これだけうじゃうじゃと出て来たらな！」
「本当にこの連中」
「何者なのだ」
舞と影二も拳を振るっている。
「いきなり出て来たし」
「数にも限りがないのか」
「とりあえずは今はな」
ガルフォードはパピー達と共に戦っている。
「この連中を退けてな」
「そうですね。そして」
周泰も戦っている。刀だけでなく懐から小刀を出してそれを投げてもいる。
「都を出ましょう」
「難しい状況ね」
賈駆は董卓を抱いて庇いながら話す。
「これだけ敵の数が多いと」
「けれど。姉さんは何としても」
「わかってるわよ。それはね」
すぐに答える賈駆だった。
「月だけは。絶対に」
「そうしないとね。本当にね」

それは何としてもだという二人だった。しかしだった。
白装束の者達の数は増すばかりだった。状況は危機的なものになっていた。
馬車と一行は十重二十重に囲まれている。そうなってしまってはだった。
「まずいな」
「そうですね」
火月と蒼月が言う。その囲みの中でだ。
「ここまで囲まれるとな」
「どうしたものか」
「一点に集中攻撃を浴びせるか」
半蔵は冷静に述べる。
「今は前をだ」
「それで董卓さんを馬車にお乗せして一気にですね」
周泰も半蔵の言葉に応えて言う。
「突破されますね」
「そうだ。それしかないか」
「一か八かね」
舞のその声が鋭いものになる。
「まさに命懸けになるわね」
「しかしそれしかない」
影二もだ。決断は下した。
「今はだ」
「なら姉さん、詠」
董白は二人に対して声をかける。
「早く馬車に乗って。私達が道を開くから」
「陽、けれどそれだと」
「あんた達は」
「言っておくけれど死ぬ気はないから」
心配する姉達にだ。こう言いはした。

「安心して。一緒に都を出ましょう」
「うん、じゃあ」
「御願いね」
「さて、仕掛けるとするか」
ガルフォードは二人が馬車に乗ったのを見てからその馬車の前を見据えた。
「道を開くか」
「ちょっとばかり大変そうですけれどね」
周泰も言う。
「それでもここは」
「それしかない。仕掛ける」
最後に半蔵が言った。そうしてだった。
忍達は血路を開こうとする。しかしここで。
不意にだ。四方八方からだ。
派手な爆発が起こった。それで白装束の者達が吹き飛ばされていく。
「なっ！？」
「な、何だ」
「これは一体」
「何が起こったのよ！？」
周泰達も驚いた。突如と起こった爆発にだ。
そしてだ。門の楼閣の上にだ。彼等が並んで腕を組んで立ちだ。
高らかに叫ぶのであった。
「愛と正義と美の戦士！」
「ここに見参よ！」
怪物達だ。彼等がそこにいた。
「あんた達、よく頑張ったわね！」
「義により助太刀するわ！」
「・・・・・妖怪だな」
半蔵はその彼等を見上げて言った。

# 第八十五話　命、忍達を救うのことその五

「間違いない。人間ではない」
「いや、あの不気味な辮髪の化け物は」
ガルフォードはそちらを見上げている。その彼の横ではパピー達が唸り声をあげている。
「どっかで見たな」
「どっかでって何処でだよ」
火月がそのガルフォードに問う。
「あんな目立つ化け物一回見たら忘れられないだろ」
「それはそうだけれどな」
「何処で見たのか覚えてねえのかよ」
「夢で見たか？」
その時のことを思い出したのだった。何とかだ。
「確か」
「つまり悪夢に出て来た妖怪ですね」
蒼月はそう判断した。
「あの者達は」
「そんなところだな」
「けれどとりあえずは」
舞もその上を見上げながら話す。
「私達に味方してくれるみたいだけれど」
「そうよ。その通りよ」
「あんた達は都を出なさい」
妖怪達は楼閣の上から話す。
「ここはあたし達が引き受けるから」
「早くね」
「わかったわ」
賈駆が最初に二人の言葉に頷いた。

「何処の魔界から来たのかわからないけれど。その言葉に甘えさせてもらうわ」
「そうだ。ここは俺達が引き受ける」
「ですから貴方達は都を出て下さい」
その彼等が突破しようとした前にだった。
刀馬と命が出てだ。白装束の者達を倒すのだった。
「急げ！」
「今のうちに！」
「そうね。姉さん、詠！」
董白が二人に声をかける。
「今のうちよ！」
「う、うん！」
「それじゃあ！」
二人も彼女の言葉に応える。そうしてだった。
馬車に乗る。董卓が中に入りだ。賈駆が手綱を持つ。そのうえで出発した。
馬車の前にはだ。命がいた。その彼女がだ。
薙刀を縦横に振るいだ。白装束の者達を切り伏せる。そうしながら賈駆に言う。
「今のうちに！」
「え、ええ！」
「それじゃあ！」
賈駆の横にいる董白も応える。彼女は今も剣を持っている。
「都を出るわよ！」
「早く！」
「わかりました！」
周泰も応える。彼女だけでなく他の忍達もそれぞれ馬に乗っている。
そのうえでだ。脱出にかかるのだった。
「行きましょう！」

「ええ、そうね！」
舞が応える。そうしてだった。
彼等は馬車を囲みだ。駆けだした。そうしてだった。
彼等は都を脱出した。虎口を脱したのだった。
それを見届けてからだ。怪物達はまたしても仕掛けた。
「さあ、留めよ！」
「受けるがいいわ！」
こう叫んでだ。天高く舞い上がり。
両手からだ。光を放ってだ。
白装束の者達を吹き飛ばす。そうして彼等を退けたのだった。
それが終わってから着地してだ。彼等は仲間達に言うのだった。
「じゃああたし達もね」
「戻りましょう」
「赤壁にね」
「今からね」
「わかりました」
命が二人に対して答える。
「これで終わりですね」
「ええ、お疲れ様」
「これでまた一つ悪の芽が潰えたわ」
「悪か」
刀馬は彼等のその言葉に目を向けた。既に彼等の周りの白装束の者達も退けられている。今東門にいるのは彼等だけになっている。
その中でだ。刀馬は刀を抜いたまま二人に言うのだった。

# 第八十五話　命、忍達を救うのことその六

「この連中は悪か」
「そうよ、この世界に介入しようとしているね」
「そうしてそれを己の意のままにしようとしているのを悪とするならね」
「彼等は悪になるわね」
「そうなるわ」
「知っているのだな」
二人の言葉を聞いてだ。次はだ。
刀馬はこのことを察したのだった。二人がこの白装束の者達について知っているということをだ。
「そうなのか」
「調べたのよ。ちょっとね」
「あたし達の本来の世界に戻って」
そのうえでだというのだ。
「彼等もまたなのよ」
「この世界に介入しようとしているのよ」
「この世界には様々な勢力が入り込んでいるのだな」
獅子王はそのことにだ。仮面の奥の目を鋭くさせた。
そのうえでだ。こう話すのだった。
「何故そこまで入り込むのだ」
「オロチやアンブロジア、そして常世ですね」
命は彼等の名前を出した。
「その他にもですね」
「そうよ。本当に色々来ているわ」
「貴方達のそうした存在もあらかたね」
「何故なのだ、それは」
獅子王が二人にまた問う。

「この世界にそこまで」
「多分。介入しやすいからよ」
「それでなのよ」
それでだ。彼等は来ているというのだ。
「この世界はあらゆる平行世界の中でもとりわけ変わった世界だから」
「本来の世界だと誰もが男の筈なのに女の子になっている」
「しかも文明的にも妙に進歩しているところもあるし」
「特に食文化と衣装の文化がね」
「それはあるな」
ギースもだ。この世界の食文化と服装のことについては気付いていた。
「この時代には本来ジャガイモや薩摩芋はなかったし唐辛子もない」
「そうよ。気付いてたのね」
「そのことにも」
「しかも北の方でも米を食うことができる」
ギースの指摘は続く。
「チャイナでは北と南で食生活が大きく変わる」
「北は麦、南は米だったな」
クラウザーも話す。このことをだ。
「この時代なら麦よりも稗や粟の方が多かったな」
「ええ。本来は稗や粟のお粥が主食よ」
「しかもおかずもね」
「誰もがお野菜もお肉もふんだんに食べてるわよね」
「そうなってるわよね」
「それは有り得ない筈だ」
ギースの指摘は続く。
「この世界は我々の時代並に食文化が発達している」
「服もそうだな」
ミスタービッグは服について指摘した。

「我々の時代と同じ程の服を着ているな」
「下着なんか特にそうでしょ」
「かなり凄いでしょ」
「我々の時代の下着ではないのか」
ミスタービッグはこうまで言った。
「ゴムも使っているようだ。服もかなり進歩しているな」
「そうよ。食文化と服装の文化はね」
「この世界はかなり発達しているのよ」
「もっと言えば武器もだけれど」
「本来はこの時代にはないものばかりよ」
二人は今度はだ。武器についても話した。
「蛇矛とか方天画戟とかね」
「そういうものは本来この時代にはないでしょ」
「けれどこの世界には普通にあるものよ」
「つまり。この世界はそれだけ他の世界とは変わっているのよ」
そうしたところを全て踏まえてだ。彼等は話すのであった。
「言うならば平行世界の中の特異点なのよ」
「そうした世界だからああした勢力がね」
どうかというのだ。
「介入してくるのよ」
「そういうことなのよ」
「そういうことか」
刀馬はそこまで聞いて納得した。

# 第八十五話　命、忍達を救うのことその七

「それでなのか」
「そう、多分貴方達がここに来たのはね」
「彼等と戦う為なのよ」
それが為だというのだ。
「誰かに呼ばれたのでしょうね」
「その誰かまではあたし達にもはっきりとはわからないけれど」
「神だな」
ここで出て来たのは華陀だった。彼が言うのであった。
「強いて言うならそうだな」
「ええ。あたし達は平行世界の守護者というか監視者というかね」
「それが仕事なのよ」
二人ははじめてだ。彼等のその役目も話すのだった。
「あたし達の他にもそうした人はいるけれどね」
「因果律の監視者もいれば」
「あらゆる世界を巡って戦う戦士もいるし」
「光の巨人に仮面の戦士達」
謎の存在の名前も出た。
「とにかくね。あたし達の他にも多くの人達がいるのよ」
「あらゆる世界を護る戦士達がね」
「それでこの世界に来たんだな」
ここまで話を聞いてだ。華陀は再び言った。
「そうだったのか」
「そういうこと。あたし達はこの世界を護って」
「この世界の人達がこの世界で幸せに暮らせるようにするわ」
二人はウィンクして話した。そのウィンクでだ。
周囲に再びだ。大爆発が起こった。
それをよそにだ。彼等はさらに話す。

「その為にこの世界に来ているからね」
「頑張るわよ」
「わかった。それならだ」
華陀もだ。二人の言葉に応える。そうしてだ。
彼は強い声でだ。二人に再び話した。
「及ばずながら俺もだ」
「ダーリンがいてくれたら百人力よ」
「それに皆もいてくれるし」
ギース達を見ての言葉だ。
「皆がいてくれるからね」
「あたし達も戦えるのよ」
「では我々が華陀達と共にいるのはだ」
ギースは彼等の話からだ。こんなことを言った。
「運命だったのだな」
「この世界を救って貴方達自身も救われる為にね」
「その神が呼んだのでしょうね」
「そうだったのか」
「貴方達の世界の人達は貴方達だけでは救われにくいのよ」
「運命の巡り合わせが悪くてね」
そのせいでだと言われるとだ。ギース達、しかも全員がだ。
妙に納得した顔になった。幻十郎も話す。
「俺は。碌でもない生まれをして碌でもない生き方をしてきたが」
「その貴方もこの世界に来てどうかしら」
「変わったわよね」
「変わったな」
その通りだとだ。彼もまた二人に話した。
「あちらの世界では斬り」
「あらゆる意味でね」
「斬ってきたのね」
幻十郎は女だけでなく男もいける。そうした意味でもだ。千人斬

りをしてきたのだ。
そうしてだ。その中でもだった。彼の生きてきた道は。
「斬り酒に博打に薬だ」
「そうした生活を送ってきたけれど」
「今はどうかしら」
「どれからも離れた」
そうしただ。あらゆる退廃からだ。離れたというのだ。
「だが。決して悪い気はしない」
「あたし達と一緒にいて楽しい？」
「それはどうなの？」
「つまらなくはない」
そうではないと話すのだった。
「むしろ。いい感じだ」
「それであの人とはどうなの？」
「いつも言っているあの人は」
「あの男は斬る」
覇王丸についてはだ。目を鋭くさせて述べた。

# 第八十五話　命、忍達を救うのことその八

「何としてもだ。斬る」
「それはなのね」
「変わらないのね」
「しかしそれはあの男があってこそだ」
覇王丸のことを考えながらだ。そのうえでの言葉だった。
「あの男が死ぬことは望まない」
「それは元からよね」
「そうね」
二人は幻十郎のその本心を見抜いていた。実は彼は覇王丸を憎みそのうえで斬ろうと常に考えていた。だがそれでもなのだ。
実は覇王丸が死ぬことが望んでいなかった。そうだったのだ。
そのことを言われてだ。幻十郎も言うのだった。
「俺はあの男とは生涯をかけて斬り合う」
「一生ね」
「そうしたいのね」
「それを何と言うのか」
幻十郎はそれを何と言うのか知らない。しかしそれでもだった。
「だが、だ」
「それでいいのね」
「そうなのね」
「あいつを最後に斬るのは俺だ。俺しかいない」
「なら。生涯をかけて戦うといいわ」
「そうしてね」
二人もこう話すのだった。幻十郎もだ。彼の歩むべき道を見出していた。
そんなことを話してだった。彼等もだ。
都を去る。そうしてであった。

赤壁にだ。扉を潜って入るのであった。そこを詳しく見回してだ。
華陀が言った。
「ここはまずいな」
「あら、ダーリンは気付いたのね」
「流石ね」
「ああ。風だな」
その風を受けながらだ。彼は話す。
「風が急に変わる。それが危ないな」
「しかもね。向こうには風を操る者もいるから」
「それも注意してね」
「あの男か」
風を操る男と聞いてだ。ギースがまた言った。
「吹きすさぶ風だな」
「ええ。他にも全員揃っているから」
「余計に危ないのよ」
「あの者達も全てか」
そこまで聞いてギースはその目をさらに鋭くさせた。
その鋭くなった声でだ。彼女は話した。
「ではだ。ここで戦うとなるとだ」
「彼等も一気に仕掛けて来るわよ」
「ここでの戦いはまさに正念場になるわよ」
「正念場だな」
また言う華陀だった。
「赤壁での戦いがどうなるかでこの世界はかなり決まるんだな」
「あたし達も必死に頑張るから」
「ここでは特にね」
怪物達も周囲を見回している。そのうえでの言葉だ。
こんな話をしてだ。彼等はだ。
赤壁を細かいところまで見回ってだ。この地のことも把握したのだった。

そうしてだ。彼等は彼等のやるべきことをしていっていた。その中でだ。

天草がだ。不穏なものを感じ華陀に話した。

「都に戻った方がいいな」

「都か」

「うむ。感じる」

目を剣呑なものにさせての言葉だった。

「都においてもだ」

「戦いが行われるんだな」

「それは避けられない様だ」

そうなるというのだ。

「この気配は」

「あたしも感じたわ」

「あたしもね」

怪物達もだ。感じていたのだ。

「都でもね。はじまるのね」

「それは避けられなかったみたいね」

「戦いは都でもか」

華陀もその目を険しくさせている。

# 第八十五話　命、忍達を救うのことその九

「そういうことか」
「仕方ないわね。考えてみれば彼等は都に潜んでいるのだから」
「避けられないのも道理ね」
怪物達がまた言う。
「そこから何かをするのなら」
「結局都でも戦いになるわ」
「よし、それならだ」
華陀は決断を下した。その決断は。
「また都に向かわないとな」
「そうして戦いましょう」
「あたし達もね」
こう話してだった。彼等は再び都に戻るのだった。彼等もまただ。
運命の戦いの中にいたのだ。
連合軍は虎牢関に向かっていた。その途中でだ。
孫策のところに一羽の鳩が来た。その鳩の足に括りつけられている手紙を開いてだ。孫策は満足した顔で周囲に言うのであった。
「やってくれたわ」
「明命がですか」
「やってくれたのね」
孫権と孫尚香が姉の言葉に笑顔になる。
「董卓を都から助け出したのね」
「そうしてくれたのね」
「それで今こちらに向かっているわ」
進軍を続けるだ。連合軍のところにだというのだ。
「無事ね」
「本当に何よりですね」
「これで虎牢関でも戦わなくて済むわね」

「ええ。それにね」
しかもだとだ。孫策は妹達に言葉を加えてきた。
ただしだ。ここで彼女の表情が変わった。
それまでにこやかだったものが剣呑なものになりだ。彼女は言うのだった。
「いたわよ、あいつがね」
「張譲がですか」
「やっぱりいたのね」
「ええ、そのことも書いてあったわ」
手紙にだとだ。書いてあったというのだ。
「後宮の奥深くにいたわ」
「そうなのね。予想通りね」
「生きていたの、あいつ」
「それで董卓の名前を使って色々とやっていたみたいね」
孫策は話す。
「あいつらしいって言えばあいつらしいけれどね」
「全くですね。宦官らしい」
「実にです」
張昭と張紘がここで孫策に言う。二人も主と同じく馬に乗っている。その主の後ろからだ。二人は言ってきたのである。
「陰険なやり方です」
「はっきりと言うわ」
孫策は眉を怒らせていた。今度はそうなっていた。
「私はね。ああした連中が一番嫌いなのよ」
「人の名を騙り悪を行う者がですか」
「御嫌いですね」
「ええ、大嫌いよ」
こう二張にも話す。
「薄汚い話よね」
「そうですね。それこそまさに悪です」

「後宮には残念なことに多くいますが」
「張譲は斬るわ」
本気だった。完全にだ。
「この私がね」
「わかりました。それでは」
「あの者は孫策様が」
「まあ袁紹や曹操もそう思ってるでしょうね」
ここでは少し苦笑いになって話す孫策だった。
「あの二人は宦官達とは私達よりずっと因縁があるからね」
「確かに。では張譲はお二人に譲られますか」
「そうされますか」
「私の方が譲ってもらいたいわね」
そうだというのであった。彼女の方がだ。

# 第八十五話　命、忍達を救うのことその十

「そこは何とかね」
「ですが袁紹殿も曹操殿も非常に我の強い方です」
「交渉は難航しそうですね」
「でしょうね。あの二人に袁術もいるし」
我の強い面々ばかりの連合軍であった。
「まあそこは何とかね」
「認めてもらいますか」
「張譲を斬ることは」
「そうしてもらうわ。何とかね」
こんな話をしながらだった。董卓が助け出されたことは連合軍に伝わった。このことは第二陣において本陣を構えている袁紹達にも伝わった。
そしてだ。彼女達も言うのであった。
「宜しい、では張譲の首を討つのはわたくしですわよ」
「いえ、ここは私よ」
二張の予想通りだった。やはり二人もこう言う。
「あの宦官の首は是非共」
「ちょっと、待ちなさいよ麗羽」
「華琳、貴女がというのでして？」
「そうよ。あの女には借りが散々あるのよ」
「それはわたくしもですわ」
「だから絶対にというのね」
「そうでしてよ」
こう言ってだ。袁紹も引かない。
「敵の黒幕を成敗するのは総大将の務めですわよ」
「何言ってるのよ。総大将は本陣でどっかりと座ってればいいのよ」
「軍師が自ら鎌を持つのはどうかと思いますわよ」

「儀式を取り仕切るのも軍師よ」
お互いに言い合う。そんな二人を見てだ。
夏侯淵は首を捻ってだ。こう言うのであった。
「全く。お二人は相変わらずだな」
「それがいいのではないのか？」
「悪いとは思わないが困ったことではある」
こう言うのである。
「麗羽様も華琳様も昔からだからな」
「だが張譲はだ」
「成敗して当然だというのだな」
「そうだ。ではどちらかが討たれるべきではないのか」
「そうかも知れないがそれで喧嘩をされるのはだ」
それが困ったことだというのだ。夏侯淵に言うことは正論ではあった。
「幾つになっても。そうしたところは変わられないのだな」
「そういう御主もだな」
「私もか」
「そうだ。子供の頃から心配性だな」
こう妹に言う。
「特に華琳様に対しては」
「そうかもな。それが私の役目なのだろうな」
「心配して世話を焼くことがか」
「私に対してもだな」
「姉者もだ。だが結局私がそれがいいのだろう」
自分でこう話すのだった。
「だからこうして今もここにいるのだ」
「そうだな。私も秋蘭がいないとだ」
「そう言ってくれるのだな」
「何をするにも張り合いがない」
夏侯惇もだ。妹に話す。

「いつも迷惑をかけているが」
「気にすることはない」
それはいいというのであった。姉に対して。
「姉者はいつも自分が真っ先に前に出るな」
「出ずにはいられないのだ」
「それが姉者のいいところだ」
微笑んで姉に話す妹だった。
「むしろ消極的な姉者なぞだ」
「考えられないのか？」
「袁紹殿のところで考えるとだ」
丁度だ。二人のすぐ隣にだ。袁紹のところの二人も馬に乗っていた。
「顔良が私だろうな」
「では私は文醜になるのか」
「そうなるだろうか」
「はい、私もそう思います」
その顔良も夏侯淵の話に加わってきた。

# 第八十五話　命、忍達を救うのことその十一

「結構文ちゃんには困ってますけれど」
「それでも悪い気はしないな」
「しません。むしろ前に出ない文ちゃんって」
「文醜ではないな」
「といか想像できません」
そこまで至るというのだ。
「麗羽様も暴走されない方が想像できません」
「麗羽殿は暴走できなかったのだ」
ここでこんなことを言う夏侯淵だった。
「幼い頃はな」
「そうらしいですね。あの頃の麗羽様は」
「そうだったのだ。いつもお一人だった」
こう話してだ。夏侯淵はもう一人の名前を出した。
「華琳様もそうだった」
「御二人は幼い頃は寂しかったんですね」
「華琳様は宦官の家の娘だった」
そのだ。国政を壟断する宦官の家のだというのだ。
「そして麗羽殿の母君は側室だった」
「そうですよね。だからこそ」
「御二人に声をかける者はいなかった」
それが幼い頃の曹操と袁紹だったのだ。
「馬鹿にされ爪弾きにされていたのだ」
「御二人共だったんですね、本当に」
「だからこそお互いに知り合いだ」
似た境遇同士でだ。知り合ったというのだ。
「そして我等も華琳様達のお傍に来てだ」
「それで変わられたんですか」

「そうだ。幼い頃の御二人はいつも抑圧されていたのだ」
それでは暴走なぞだ。とてもだというのだ。
「だから今はああしておられる方がいいのだろうな」
「何かと先陣に出られたがってもですが」
「そうなのだろう。確かに困りはするが」
袁紹のそのでしゃばりなところはだというのだ。
「しかしそれでもそうした麗羽殿は想像できないしな」
「曹操さんもですね」
「華琳様も実は寂しがり屋なのだ」
夏侯淵は声だけを微笑まさせて話す。
「いつも誰かと共にいたい方なのだ」
「ですね。麗羽様もそうですし」
「そして私はだ」
「私もですね」
「そうした華琳様に姉者を後ろから支えるのが仕事だ」
「私は麗羽様と文ちゃんを」
「んっ？あたい？」
ここでようやく二人の話に気付いた文醜だった。そのうえで夏侯惇に尋ねた。
「この二人一体何話してるんだ？」
「我等のことだ」
「何だよ、あたい達のことかよ」
「そうだ。要するにだ」
夏侯惇はここでいささかとんでもない解釈をしてみせた。
「我等がいてこそ。二人共は元気になるそうだ」
「だよな。斗詩ってあたいがいないとどうしようもないからな」
「何故そうなる」
「あのね、文ちゃんね」
夏侯淵と顔良が困った顔で二人に言い返す。
「私達はむしろ困っているのだが」

「全く。お気楽なんだから」
「困っているのか？」
「あたい達何かしたか？」
自覚のない二人だった。
「私の何処に困っているのだ」
「変なことはしてないつもりだけれどな」
「全く。いつもこうなんだから」
「そうだな。しかしこうしたところがな」
夏侯淵は今は微笑んで顔良に話す。
「姉者達のいいところだ」
「そうですね。そうした意味ですと」
「二人の言っていることも正しいか」
「そうなりますね」
こんな話をしてだ。二人は夏侯惇と文醜を見るのだった。そうした話をしながら虎牢関の前まで来た。洛陽を守る最後の関に。

第八十五話　完

２０１１・５・２１

# 第八十六話　董卓、赦されるのことその一



袁紹と曹操の本陣にだ。吉報が入った。
「そうですのね、上手くいきましたのね」
「やっぱり董卓はあそこにいたのね」
「はい、そうです」
「あの場所にいました」
こう曹洪と曹仁が二人に話す。
「宮廷の奥深くにです」
「そう連絡がありました」
「まさかと思ったけれどね」
曹操が二人の報告に目を鋭くさせて述べる。
「そう。それなら」
「はい、張譲めもです」
「生きているとのことです」
彼のこともだ。話されるのだった。
「後宮の奥深くにです」
「そこにいます」
「？待つのじゃ」
これまで話を聞いていた袁術が二人に尋ねた。
「帝はどうされたのじゃ？」
「そうよね。帝はどうされたのかしら」
孫策も帝のことに気付いて言及する。
「御無事なのよね」
「帝のことはです」
「特に何も」
聞いていないとだ。二人は話すのだった。

「周泰殿達も御覧になられていないようです」
「帝はです」
「まさか」
袁紹はそのことを聞いてだ。顔を曇らせた。
そしてそのうえでだ。こう言うのだった。
「帝は宦官達に」
「大丈夫よ。帝は害されてはいないわ」
それは曹操が保障した。
「帝あっての宦官達なのはわかるわね」
「ええ、だからこそ厄介なのですわ」
「後宮は帝のもの。その帝がおられなければ」
「後宮はいらなくなり。宦官達も」
「そういうことよ。それはないわ」
曹操はまた袁紹に話した。
「帝は御無事よ」
「そうなのでしてね」
「ただ。帝もお姿を見せておられないし」
そのことからだ。曹操はこのことも察した。
「おそらくはね」
「董卓と同じ様に」
「幽閉されているわね。帝は後宮におられるわね」
「後宮。厄介ね」
曹操はこう言って顔を曇らせた。
「あそこに入ることはそれこそ宦官でないとできないしね」
「あれっ、入られないのは男だけじゃなかったのか？」
凱がこう袁紹達に問うた。
「後宮ってのはそうだったのじゃないのか？」
「それはそちらの世界の話じゃ」
そうだとだ。袁術が凱に話す。
「こちらの世界では帝の奥方か夫君や宦官しか入られぬのじゃ」

「夫？ああ、そうか」
漂はすぐに察して頷いた。
「女帝も普通なんだな。この世界じゃ」
「実際に漢の高祖や武帝も女性よ」
曹操がこのことを話す。
「光武帝もね」
「そうなんだな」
「こっちの世界は全然違うのよ」
女性の位置がだというのだ。
「普通に皇帝になれるから」
「その辺りが本当に違うのだな」
王虎も首を捻っている。
「同じ国でも。世界が違えばな」
「そうね。こっちもそちらの世界の話にはかなり驚いているわ」
曹操は王虎にも話す。
「未来の話もね」
「けれど。服はあれですわね」
袁紹は自分達の服とあちらの世界の者達の服を見比べて話した。

# 第八十六話　董卓、赦されるのことその二

「妙に同じですわね」
「それもない筈なんだよ」
今話したのは丈だった。
「この時代に何で女ものの下着とか今の時代の俺達の服があるんだろうな」
「それがあまりにも妙だ」
マルコもそのことについて言及する。
「どういう世界なのか」
「そういう世界だって簡単に考えたらどうかしら」
今言ったのは孫策だった。
「確かにわからないことだけれどね。お互いにね」
「そう考えるべきじゃな」
山田十兵衛である。
「綺麗なお姉ちゃんが一杯いるとのう」
「むっ、そういえば御主」
袁術はその山田を見て怒った顔で言った。
「昨日七乃が風呂に入る時に風呂場の周りをうろうろしていたな」
「それは気のせいじゃ」
自分ではこう言う山田だった。
「わしはそんなことはしておらんぞ」
「信用できんのう」
袁術はそのことを本能的に察して述べた。
「絶対に覗こうとしておったな」
「ああ、この爺さんな」
ビッグベアが山田について話す。
「実は若くて可愛い女の子が何よりも好きなんだよ」
「おい、ここでそれを言うか」

「だからな。あんたその癖止めろよ」
ビッグベアは呆れる顔で山田に注意する。
「全く、いい歳してな」
「わしはまだ七十じゃぞ」
「わしより年上ではないのか？」
タンがその山田に言う。
「わしは六十九じゃからのう」
「ええい、人生は七十からじゃ」
「ったく、この爺さんは」
ロックも山田のその言葉に呆れる。
「歳を取っても悪い意味で元気だな」
「人間七十だともう」
「古稀だけれどな」
顔良と文醜がひそひそと話す。彼女達の世界でもだ。この時代はそうなのだ。
「それでこうって」
「ある意味凄いよな」
「わしは二百まで生きるぞ」
また言う山田だった。
「そうしてずっと女の子と一緒に遊ぶのじゃ」
「それはいいとしまして」
袁紹はその山田を醒めた目で見ながら話した。
「貴方が若しセクハラをすれば」
「セクハラとな」
「その時は容赦しませんわよ」
こうだ。山田を見据えて言うのである。
「打ち首ですわよ」
「打ち首とな」
「ええ。セクハラは死罪」
袁紹の言葉は厳しい。

「我が軍の軍律ですわ」
「ううむ、恐ろしい軍律じゃな」
「婦女子への乱暴を禁じるのは当然のことよ」
曹操も山田に話す。
「それと一緒よ」
「せちがらい世界じゃ」
「だから爺さんは爺さんらしくしろ」
ロックは今度は山田に強く忠告した。
「さもないと本当に首と銅が生き別れだぞ」
「それは困った」
「まあそれで反省する様には見えないけれどな」
「ああ、この爺さんの辞書にはそんな言葉ないからな」
ビッグベアがロックに話す。

## 第八十六話　董卓、赦されるのことその三

「そのことは安心してくれよ」
「安心することか？それは」
「まあそう考えてくれ」
「それはそうとしてじゃ」
タンがここまであれこれ雑談してからだ。袁紹達に尋ねた。
「その董卓殿じゃが」
「あの娘のことですわね」
「してどうするつもりなのじゃ？」
タンが彼女達に尋ねるのはこのことだった。
「やはりここは」
「あの娘が見てから考えますわ」
これが袁紹の今の言葉だった。
「それからですわよ」
「まさかと思うけれどな」
覇王丸が眉を顰めさせて話す。
「殺すってことはないよな」
「さて、それはどうかしら」
今度は曹操だった。彼女は思わせぶりな笑みで覇王丸に返した。
「とりあえず剣は皆磨いておいてね」
「まさか。それでは」
狂死郎の化粧の奥の顔が曇る。
「御主等、あの娘を」
「だから。あの娘がここに来てからよ」
またこう言うだあけの曹操だった。
「それでわかるわよ」
「おい、頼むから血生臭いことは止めてくれよ」
覇王丸はそのことは何としてもだというのだった。

「いいな、それはな」
「ほほう、優しいのう」
袁術がその覇王丸に言う。
「無駄な殺生は好まぬか」
「戦うならともかく無駄に人を殺すのは好きじゃないんだよ」
実際にそうだと話す覇王丸だった。
「だからな。董卓って娘もできるだけな」
「ですから。何度も申し上げますが」
袁紹がここでまた話す。
「それはあの娘が来てからですわ」
「わかるってんだな」
「その通りですわ。では今は」
今はだ。どうかと話してだった。
「虎牢関に進みますわよ」
「いよいよですよお」
陸遜がおっとりとしたその独特な口調で話す。
「最後の難関ですよ」
「やり方次第で戦わずに済みますね」
呂蒙がここで陸遜に話す。
「今度の戦いも」
「戦わずに済むのならそれに越したことはない」
柳生十兵衛はぽつりと述べた。
「何につけてもな」
「その通りだ。どうもこの戦いはおかしい」
ズィーガーはその眉を曇らせている。
「この世界にはどれだけ怪しい者達が潜んでいるのだ」
「そもそも皇帝を幽閉してるみたいだけれどな」
「それ自体が妙じゃのう」
ロックとタンがこう話す。
「その董卓って娘だけじゃなくてな」

「皇帝までとは」
「おかしなことだらけね」
曹操もこう言うのだった。
「というかおかしなこととしかないわね」
「全くですわね。この戦」
袁紹も眉を曇らせている。
「その董卓のことだけではありませんわね」
「全く。何だってんだよ」
「この世界は」
そのことさえもわからないと話をしながらだ。彼等は本陣において董卓が無事救出された報を受けていた。そうしてそのうえでだった。
その董卓は連合軍と合流できた。その彼女を迎えたのは。
「おお董卓殿来られたか」
「久し振りなのだ」
関羽と張飛がだ。彼女達を笑顔で迎えたのだ。
「何とか無事そうだな」
「何処か悪くないのだ？」
「身体の方は特に」
何もないとだ。董卓は二人に暗い顔で答える。

## 第八十六話　董卓、赦されるのことその四

そしてその暗い顔でだ。二人に話すのだった。
「ですが私は」
「とにかくだ。長い間碌なものを食べていないのだろう」
「御馳走をたらふく食べるのだ」
二人は董卓が言うより先にこう言ってきた。
「さあ、早くな」
「どんどん食べるのだ」
「あの、ちょっと」
姉の代わりにだ。妹の董白が二人に言ってきた。
「いいかしら」
「むっ、御主はまさか」
「妹なのだ？董卓の」
「ええ、そうよ」
二人にそのことから話す董白だった。
「妹の董白っていうの。宜しくね」
「そうか。妹殿がおられると聞いたが」
「それが御前だったのだ」
「そうよ。姉様と一緒にここに来たのよ」
こう二人に話すのである。
「逃げてきたのよ」
「逃げてきたというのか？」
「それは違うと思うのだ」
「いえ、逃げてきたのよ」
それは違うと言おうとする二人にまた告げる董白だった。
そのことを話してだ。二人はだ。今度はこう董白に話した。
「何はともあれだ」
「御前も一緒に食べるのだ」

「そうね。どちらにしろね」
どうなのか。董白はここでこんなことを話した。
「もうすぐ。いなくなるしね」
「いなくなるとは」
「今度は何を言うのだ」
「私達はいいけれど」
いぶかしむ二人にだ。また言う董白だった。
「詠は何の関係もないから。助けてあげてね」
「ちょっと陽、何言ってるのよ」
賈駆はだ。その董白に慌てて言ってきた。
「そんなの僕がさせないから。月も僕が守るから」
「いいのよ。私と姉様はね」
どうなるのか。董白は観念している顔で賈駆に返す。
「今度のことでは首謀者だからね」
「けれどあれは僕が伝えて」
「姉様は国相だったのよ」
こう賈駆にだ。また言う。
「そして私はその腹心よ。それならよ」
「責任は逃れられないっていうの？」
「そうよ。それじゃあどうしても」
「そもそもあれは宦官達の陰謀だし」
「利用されたのは事実よ」
董白の観念している顔は変わらなかった。その口調もだ。
「だから絶対に」
「それはだ」
「絶対にないから安心するのだ」
関羽と張飛は二人を安心させようとこう話す。
「だからだ。心を落ち着けてだ」
「今から食べるのだ」
「その言葉信じていいの？」

董白は怪訝な顔で二人に問い返した。
「本当に」
「私達がそんなことをさせない」
「お姉ちゃんも同じ考えなのだ」
「お姉ちゃん？劉備殿のこと？」
賈駆はすぐに彼女のことだと察した。
「彼女がなの」
「そうだ。姉上はわかっておられる」
「悪いのは全部宦官達なのだ」
「責があるのはあの者達だ」
「それでどうして董卓達が処刑されないといけないのだ」
「・・・・・その言葉信じさせてもらってもいいのね」
賈駆は二人の言葉を聞いてだ。警戒しながらもこう言った。
「そうさせてもらってもいいのね」
「信じてくれ、少なくともだ」
「何処かの国の鳩みたいなことは言わないのだ」
「わかったわ」
二人の強い目を見てだ。賈駆もこう言った。
そうしてだ。そのうえでだった。
董白に顔を向けてだ。こう問うた。

# 第八十六話　董卓、赦されるのことその五

「それじゃあ陽」
「ええ、姉様と一緒にね」
「申し出を受けましょう」
そうしようというのだった。
「御馳走を頂ましょう」
「そうね。考えてみれば私達最近は」
「碌に食べていなかったわ」
食べ物の話にもなったのだった。
「月なんか特にね」
「そうよね。姉様はずっと幽閉されていたから」
「では皆で一緒に食べよう」
「朱里と雛里が腕によりをかけて作ってくれているのだ」
関羽と張飛が笑顔で話してだ。そうしてであった。
二人は食事の場に案内されるのだった。無論彼女もだ。
「では董卓殿もだ」
「一緒に来るのだ」
こうだ。二人は董卓にも話すのだった。
「そうして一緒に食べよう」
「御馳走をたっぷりとなのだ」
「はい」
董卓はその二人に対して小さく頷いた。そのうえでだ。
彼女もだった。二人に案内されてだ。劉備の天幕に向かうのだった。既にその天幕ではだ。周泰や忍の者達が劉備と話をしていた。
「そう、大変だったのね」
「あの程常にだが」
「忍者だとあんなの日常茶飯事だぜ」
半蔵とガルフォードが劉備に話す。場には趙雲や馬超達もいる。

「それもむしろだ」
「ずっと董卓さんが暗かったのが気掛かりだな」
「自責だ」
趙雲は二人の話を聞いて述べた。
「そのせいだ」
「自責か」
「この度の戦乱は御自身のせいだとだ」
趙雲は影二に対しても話した。
「そう考えているのだ」
「あの人凄く責任感強いからな」
馬超が董卓のその性格について話した。
「そうなるのも無理はないよな」
「常に善政を心掛けていて民思いの人だから」
黄忠も董卓について話す。
「余計にね。そうなっているわね」
「それじゃあ危ないわね」
舞がここまで聞いて言う。
「あの娘、自分から何を言い出すか」
「処刑を願うってのかよ」
火月がこのことを危惧した。
「まさかとは思うけれどね」
「いえ、そのまさかです」
蒼月は弟の危惧にこう話した。
「彼女は。我々にそう願うでしょう」
「そんなのおかしいだろ。だってよ」
火月は少し怒った顔になって兄の言葉に抗議を返した。
「利用されていたんだぞ、あの娘は」
「しかし彼女の名前で全てのことが行われていたのは事実です」
蒼月は厳然たるその事実を話すのだった。
「ですから」

「何だよ、それってよ」
火月は兄の話に余計に怒りだした。
「滅茶苦茶じゃねえかよ」
「いや、蒼月殿の言う通りだ」
半蔵は彼が正しいと話した。
「誰かが責を負わねばならんのだ」
「だからだっていうのかよ」
「そうだ。董卓殿達は責を負わねばならん」
このことをはっきりと話す半蔵だった。
「それが政というものだ」
「何だよ、それってよ」
火月はたまりかねた口調で返した。
「滅茶苦茶じゃねえかよ」
「あの、それは」
劉備もだ。顔を曇らせて言うのだった。

# 第八十六話　董卓、赦されるのことその六

「何とかならないかしら」
「処刑のことですね」
「うん、あんまりだと思うわ」
劉備もそう思うのだった。そのことを周泰に話すのだ。
「だから。どうにかして」
「そうですね。おそらく袁紹さんも曹操さんもです」
ここで言ったのは徐庶だった。彼女は軍師の一人としてこの場に控えていた。孔明と鳳統は料理を作っていて彼女が劉備の傍にいるのだ。
その彼女がだ。こう話すのだった。
「処刑は考えておられません」
「そうなのね」
「責はあくまで宦官達にあります」
そのだ。董卓の名を使っていた彼等にだというのだ。
「それははっきりしています」
「それなら是非」
「しかしです」
希望を見出した劉備にだ。徐庶はまた話した。
「もう一方の方は」
「董卓さんは？」
「そう考えてはおられません」
「それじゃあ。自分からなの？」
「処罰を願われる筈です」
そこまで読んでだ。徐庶は話すのだ。
「是非共と」
「そんな、それじゃあ」
「袁紹殿も曹操殿も処刑をされずにはいられなくなります」

彼女自身がそう願うならだ。それではなのだ。
「ですから。結果としてです」
「そんなの駄目よ。どうして董卓さんが処刑されないといけないの」
「はい、ですからここはです」
「ここは？」
「私に考えがあります」
軍師としての言葉だった。
「ここはです？」
「ここは？」
こうしてだった。あることが実行に移されたのだった。そうしてであった。
袁紹達の本陣にだ。あるものが届けられた。それを届けた魏延がだ。右手の平に左手の拳を合わせて右膝をついてだ。袁紹達にあるものを差し出した。
それは白い布に覆われている。下の方が赤く塗れている。それを見てだ。まずは孫策がこう言うのであった。
「首ね」
「はい」
その通りだとだ。魏延は静かに答えた。
「董卓殿は自ら首を掻き切り自害されました」
「それでその首を持って来たのね」
「その通りです」
こう孫策に話すのである。
「首を。こちらに持って行って欲しいと」
「董卓自身が言ったのじゃな」
今度は袁術が言った。
「そうじゃな」
「左様です」
その通りだと話す魏延だった。
「この度の乱の責をと申されまして」

「それで自ら死にか」
袁術は目を少し左右に動かしてから述べた。
「ふむ。それでは仕方ないのう」
「自らの死で。他の者の助命も願っておられます」
魏延はまた話した。
「どうされますか」
「わかりましたわ」
袁紹が答えた。
「それでは。董卓さんの一族や家臣の者についてはです」
「責を問われませんか」
「この件での処断はそれだけですわ」
こうだ。問わないと話すのであった。
「これで終わりですわ」
「董卓は死んだわ」
曹操も言う。そしてふと笑みを浮かべてだ。こんなことも言うのだった。
「ただ。世の中似ている人間が三人はいるらしいわね」
「そうですわね。けれど別人ですわ」
袁紹も曹操の言葉に乗ってこんなことを言う。

# 第八十六話　董卓、赦されるのことその七

「全くの別人でしてよ」
「外見が似ているからといって。それで何かするのはね」
「人としてあるまじきことですわね」
「そういうことよ」
それでいいとだ。二人は言った。
そしてだ。魏延もだ。こう二人に述べるのであった。
「では。董卓の配下の者達は」
「劉備さんにお任せしますわ」
あっさりと言う袁紹だった。
「その処断は」
「煮ようか焼こうが構わないわ」
実に素っ気無くだ。曹操も話す。
「そう、何をしてもね」
「左様ですか。それでは劉備様にはそうお伝えします」
魏延は二人の言葉をありのまま聞いた。そうしてだった。
劉備のところに戻りだ。このことを伝えるのだった。
そうしてだ。話を聞いた劉備はこう言うのだった。
「あれっ、じゃあ董卓ちゃんは？」
「はい、自害したことになりました」
徐庶がこうきょとんとした顔になる劉備に話した。
「あの人形の首を差し出したことで」
「そうなのね。けれど」
「勿論皆さん御承知です」
このことも話す徐庶だった。
「ですがあえてです」
「騙されたの？」
「この度の戦は董卓さんが敵ではありませんから」

徐庶はそのことを既にわかっていた。そのうえでの言葉だった。
「敵は宦官です。それに」
「それに？」
「間違いなく他にもいます」
ここで徐庶の目が鋭くなった。そのうえでの言葉だった。
「周泰さん達からの報告を聞く限りは」
「そうそう、それよ」
同席していた舞がここで話す。
「何かね。白装束の連中が一杯出て来て」
「尚且つだ」
半蔵もいる。彼も劉備達に話すのだった。
「我等の世界の者達もだ」
「それです。考えてみればです」
徐庶は半蔵の話を聞きながら述べていく。
「舞さんや半蔵さん達が来られているのならです」
「他の人達も来て不思議じゃないのね」
「はい、そうです」
その通りだとだ。徐庶は劉備に話す。
「よからぬ人達もです」
「残念だけれど私達の世界ってね」
「よからぬ者達も多いのだ」
こうだ。舞と半蔵が話すのだった。
「オロチ一族もいればね」
「アンブロジアという邪神もいるのだ」
「そしてです」
今度は雪だ。彼女も同席しているのだ。
「常世の者達もいます」
「何か。物凄く物騒な世界なのね」
「考えようによっては私達の世界以上にですね」
徐庶も彼等の話を聞いて目を鋭くさせて述べる。

「危うい世界ですね」
「そんな人達もこの世界に来ていても」
「おかしくありません。むしろ」
どうかとだ。徐庶は話す。
「来ていると考えるべきです」
「じゃあ洛陽にはそうした人達が」
「いるな、間違いなく」
蒼志狼が言い切る。
「こっちの世界にもな」
「話がどんどんキナ臭くなってくるな」
「全くだ」
馬超と趙雲は蒼志狼の話も聞いて言う。

# 第八十六話　董卓、赦されるのことその八

「じゃああたし達あっちの世界の連中ともか」
「戦わなければならないのだな」
「厄介といえば厄介ね」
黄忠も話す。
「けれど。彼等も倒さないと」
「はい、泰平は戻りません」
徐庶はここでは言い切った。
「この戦は泰平をもたらす為の戦です」
「じゃあ。その為にもよね」
「はい、虎牢関です」
そこを何とかするかという話になった。
「あの関を抜け洛陽に向かいましょう」
「戦になるのかしら」
「それは避けられます」
大丈夫だとだ。徐庶は関のことも劉備に話した。
「あの関におられるのは華雄さんと張遼さんですね」
「うん、そうよね」
「御二人が戦われているのは董卓さんの為でしたが」
「けれど董卓ちゃんは」
「助け出されましたから」
それでだというのだ。董卓が救出されたならばだ。
彼女達も戦う理由がない。それでなのだった。
「ですから。もう」
「よかったわ。今度も戦わないで済むのね」
「無駄な戦いは避けるに越したことはありません」
徐庶は冷静に述べた。
「それでは。今は」

「うん、御馳走食べよう」
「そろそろ朱里ちゃんと雛里ちゃんのお料理ができます」
待ちに待っただ。それがだというのだ。
「では皆さんで」
「うん、食べよう」
こうした話をしてだった。そのうえでだ。
劉備達は董卓達を天幕に招いてだ。それでだった。
彼女達にもだ。御馳走を出す。その中でだ。
劉備は董卓にだ。満面の笑顔で話した。
「それじゃあ董卓ちゃん」
「は、はい」
「遠慮なく食べてね」
こう話すのだった。
「一杯あるからね」
「毒は入ってないわよね」
賈駆は董卓の横で眼鏡の奥の目を警戒させている。
「若しそうなら」
「大丈夫ですよ」
孔明はその賈駆にだ。にこやかに笑って答えた。
「そんなのを入れるのは料理じゃありませんから」
「信じていいのね」
「もう董卓さんは自害されました」
鳳統は公にはそうなっていることを話した。二人は今は白いエプロンに三角巾を装備している。その姿で賈駆に話すのだった。

# 第八十六話　董卓、赦されるのことその九

「それ以前に私達はそんなことをしません」
「そうね。言われてみればね」
賈駆は二人の目を見て述べた。
「御免なさい。疑ってしまったわ」
「気にすることはないのだ」
張飛が賈駆のその暗い気持ちを跳ね飛ばした。
「もうこれから董卓達は鈴々達の仲間なのだ」
「仲間！？」
その言葉にだ。董白が目をしばたかせて言葉を返す。
「仲間って！？私達が！？」
「はい、そうです」
その通りだとだ。劉備がまた話す。
「今日から皆さんは私達のお友達です」
「お友達って何よ」
また賈駆が言う。今度は多少唖然とした顔になっている。
「僕達は敵同士だったのよ。それでどうして」
「昨日の敵は今日の友」
関羽も今は微笑んでいる。
「そういうことでいいではないか」
「何か話が凄い勝手に進んでるけれど」
「それによ」
賈駆と董白が眉を顰めさせながら話す。
「大体月は自害したことになってるけれど」
「それでお友達だなんて」
「あれっ、確かこの娘って」
馬岱がその董卓を見て楽しげに話した。
「名前は」

「そうじゃ。董々というのじゃ」
厳顔がにこにことして話す。
「可愛い名前じゃのう」
「それが私の名前なんですか」
董卓本人は目をしばたかせていた。そのうえでの言葉だった。
「そうだったんですか」
「おや、御主は董々ではないか」
笑みを浮かべてだ。彼女自身にも言う厳顔だった。
「違ったかのう」
「そうなんですか」
「そうじゃ。では話は終わってじゃ」
「うん、それじゃあね」
劉備が満面の笑みで厳顔の言葉に応えて言う。
「食べよう。それで飲もう」
「御主達も飲むのじゃ」
また厳顔が董卓達に話す。
「楽しくな」
「じゃあ月、陽」
賈駆が姉妹に囁く。
「食べよう。僕が一緒にいるから安心して」
「うん、詠ちゃん」
「それじゃあね」
「それとよ」
賈駆は劉備達に顔を向けてだ。こう言うのだった。
「今まで言いそびれたけれど」
「はい。何でしょうか」
「有り難う」
頭を下げてだ。劉備達に言うのだった。
「月を助けてくれて有り難う」
「私も」

「助けて下さり有り難うございます」
董白に続いてだ。董卓自身も頭を下げる。そうして礼を述べるのだった。
その三人にだ。劉備は満面の笑顔で話した。
「それじゃあね」
「それではだ」
「一緒に食べるのだ」
関羽と張飛も言ってだ。そうしてだった。
皆笑顔で御馳走を食べていく。董卓達は劉備達の仲間になった。
星達はさらに集ってきていた。そうして闇に対しようとしていたのだった。

第八十六話　完

２０１１・６・７

# 第八十七話　張遼、関羽に諭されるのことその一

第八十七話　張遼、関羽に諭されるのこと

呂布は陳宮を連れてだ。劉備の前に来てだ。まずは頭を下げた。

「有り難う」

「感謝しているのです」

呂布に続いて陳宮も言うのだった。頭を下げて。

「月達を助けてくれて」

「本当に何を言ったらいいかわからないのです」

「別に。御礼は」

いいとだ。劉備は笑顔で言うのだった。

「いいから。それよりもね」

「それよりも」

「どうしたのです？」

「皆、幸せになろう」

こう言うのだった。その笑顔でだ。

「その為にもね」

「あいつ等は許さない」

「そうなのです。絶対になのです」

呂布は静かに、陳宮は激昂してこんなことを言った。

「月を幽閉していたあいつ等は」

「張譲、成敗するのです」

「真の敵は宦官達だな」

関羽もだ。こう呂布達に話す。今彼等は劉備の天幕の前にいて話しているのだ。周囲では兵達が動き回っている。無数の天幕が立ち並び旗も林立している。そうした中での話し合いだった。

「やはりな」

「それとね」

神楽が言う。

「私達の世界のよからぬ者達ね」
「オロチか」
魏延が神楽の言葉に目を鋭くさせる。
「そしてその他の闇の者達だな」
「何か洛陽に変な奴が一杯集ってるのね」
馬岱はこう考えていた。
「その連中を洛陽で一網打尽ね」
「簡単な話じゃ。敵がおれば倒すだけじゃ」
厳顔はあえて簡単に言ってみせた。
「それだけじゃ」
「そう。倒す」
呂布は一言で言った。
「悪い奴等、恋が全部倒す」
「ねねもです」
陳宮は呂布の横で両手を高く掲げて振り回している。
「あの連中、許さないのです」
「ではまずはです」
「虎牢関です」
孔明と鳳統は戦の話に移った。
「あの関を抜きましょう」
「そうしましょう」
「洛陽で決戦なのだ」
張飛が強い顔で言い切る。
「あの連中皆やっつけるなのだ」
「そうだな。悪は成敗する」
関羽もそのつもりだった。
「敵が誰であろうともだ」
「では明日再びです」
徐庶が述べる。
「進軍です。今日はじっくり休みましょう」

「若しよかったら」
「ねね達も一緒にいさせて下さい」
呂布と陳宮がだ。先陣への参加を願い出て来た。
「そうさせて欲しい」
「それは駄目でしょうか」
「私達と一緒に？」
「そう、一緒に」
「戦わせて下さい」
呂布と陳宮はさらに踏み込んで話した。
「月を助けてもらった御礼に」
「そうさせて欲しいのです」
「けれど」
劉備はその二人の言葉にだ。最初は顔を曇らせた。
そしてだ。二人にこう話した。

# 第八十七話　張遼、関羽に諭されるのことその二

「この戦いは激しいものになるけれど」
「戦いはそういうものだから」
「いいのです」
二人の返事は変わらなかった。
「いい。恋は戦いたい」
「ねねもなのです」
「桃香殿、ここはだ」
「二人の言葉受けるべきだぜ」
趙雲と馬超が左右から劉備に話す。
「そうしよう」
「断ったら駄目だ」
「そうなのね」
劉備は二人の言葉に考えをあらためてきた。ここでだ。
関羽と張飛もだ。姉に強い言葉で言った。
「姉者、二人も本気だ」
「言葉に偽りはないのだ」
二人は呂布と陳宮の言葉から彼女達の心を見ていた。そのうえで自分達の姉に話すのだった。
「だからだ。ここは是非」
「恋達も一緒になのだ」
「それじゃあ」
二人の言葉を受けてだ。遂にだった。
劉備も頷きだ。そうしてだった。
呂布と陳宮の考えを受けた。彼女達の参加を受け入れたのだった。
こうしてだ。呂布と陳宮も劉備達の仲間となったのだった。二人の参加も受けてだ。
劉備達は翌日虎牢関に向かって進軍を再開した。そしてだ。

昼には関の前に着いた。ここでまただった。
袁紹がだ。うずうずとしてこんなことを言い出していた。
「それでは。いよいよ」
「はい、私達はここで全体の指揮よ」
横から曹操が言う。
「間違っても陣頭指揮なんて言わないことね」
「うっ、ですからわたくしは総大将として」
「総大将ならどんと構えているのじゃ」
袁術もいい加減呆れてきている。
「何でそういつも前線に出たがるのじゃ」
「うう、総大将というのは辛いですわね」
「そのでしゃばりなのは全然治らないわね」
曹操もだ。当然呆れている。そのうえでの言葉だ。
「仕方ないわね。本当に」
「とにかくここは劉備に任せるのじゃ」
袁術はこう従姉に話す。
「上手くやってくれる筈じゃ」
「そういえば劉備さんにお任せしていると」
どうなるのか。袁紹もここで言う。
「全て順調にいきますわね」
「はい、不思議とです」
「何もかもが順調にいきます」
張?と高覧が話す。
「やはりこれは」
「劉備殿の資質故でしょうか」
こう言いながらだ。二人も主を何時でも止められる様身構えている。袁紹の出たがりな気質は彼女達にとっても困ったことであるのだ。
「御本人は至って穏やかな方だというのに」
「それでも。あらゆることを為されますが」

「家臣がいいのじゃ」
袁術が二人に話す。
「結局のう」
「あれよ。劉備には人を惹き付けるものがあるのよ」
曹操も看破して話す。
「それが凄いのよ、あの娘は」
「確かに。わたくしも」
袁紹もだ。感じながら話すのだった。
「劉備さんは好きですわ」
「私もよ」
「わらわもじゃ」
曹操と袁術も話すのだった。そうだとだ。
「あの娘を嫌いにはなれないわ」
「どうも。見ていると和むしのう」
「それってかなり」
「凄いことですが」
張?と高覧も話す。
「では劉備殿は」
「かなりの傑物ですか」
「そういえば漢の高祖は」
ここで言ったのは張勲だった。袁術の後ろにいるのだ。
「その魅力で天下を取られました」
「ではあの娘は」
「漢の高祖なのね」
袁紹と曹操は今は同時に言った。

# 第八十七話　張遼、関羽に諭されるのことその三

「あの天下を統一した」
「あの方だと」
「そう思います。何か凄い方ですよね」
こうだ。張勲もにこにことして話す。
「これからに期待ですね」
「うむ、穂やっとしておるがそこがまたよい」
袁術はにこりと笑って言う。
「劉備、今回もやってくれるぞ」
「ということで麗羽」
すかさずだ。曹操は袁紹に言った。
「そういうことだから」
「前に出てはいけませんわね」
「そういうことよ」
彼女達はだ。劉備を見守るのだった。そうしてだった。
その劉備率いる先陣はだ。虎牢関前に来た。するとだ。
関の前に大軍が待っていた。それを指揮するのは。
華雄と張遼だった。二人はこう劉備達に言って来た。
「いざ勝負！」
「ここは通さへんで！」
二人が言うのだった。
「この関は抜かさせん！」
「絶対にな！」
「やはりな」
「頑張っているのだ」
関羽と張飛が二人の姿を見て言う。
「ではここは」
「朱里達の言う通りにするのだ」

「はい、それではです」
「それでいきましょう」
孔明と鳳統もだ。二人に話すのだった。
「無益な戦いは避けるべきです」
「今はそれができますから」
「では董卓さん」
「御願いします」
ここでまた言う軍師二人だった。そうしてだ。
呂布達が出て来てだ。華雄達に言う。
「話聞く」
「聞いて欲しいのです」
「何や？あんた等生きてたんかいな」
「死んだのではなかったのか」
張遼と華雄は二人の姿を見てだ。目を丸くさせた。
「足はあるし」
「無事なのか」
「あれっ、投降したって聞いてなかったのか？」
そんな二人を見てだ。草薙が言った。
「若しかしてな」
「何か手違いがあったらしいな」
「向こうは呂布殿達が死んだと思っているな」
二階堂と大門が話す。
「どうやらな」
「そうなったようだ」
「何をどうやったらそんな話になるんだ？」
草薙は二人から聞いたその事態に首を捻って眉を顰めさせる。
「変なことになってるな」
「それにあの呂布さんがそう簡単にやられますかね」
真吾はこのことを怪訝な顔で話した。
「そんなのないですよね」

「あの呂布がそう簡単にやられるかっての」
「我等とて勝つのは尋常なことではない」
二階堂も大門もだ。彼女の実力は認めていた。それもかなりだ。
「あの強さは正直なところな」
「天下無双だ」
「その呂布を倒したって。俺達って凄いんだな」
今度はこんなことを言い出す草薙だった。
「はじめて知ったぜ」
「とにかく。ちょっとややこしいことになったわね」
神楽は両手を自分の腰に置いて話した。

# 第八十七話　張遼、関羽に諭されるのことその四

「この事態は。話し合いだとね」
「解決しにくいか？」
「その可能性があるわね」
神楽は戦いは避けられないことも覚悟していた。その中でだ。
華雄はだ。こんなことも言うのだった。
「呂布、無念だったのか」
「それで鬼になったんやな」
張遼も言う。この国では霊のことを鬼と呼ぶのだ。
「その無念晴らしたるで」
「そこで見ているのだ」
「恋、生きてる」
しかしだ。呂布は身構えたその二人にだ。
落ち着いてだ。こう言うのだった。彼女達は馬に乗らずだ。自分達の足で立ってだ。そのうえでお互いに向かい合っているのである。
「死んでない」
「むっ、生きているのか」
「ほんまかいな」
「そう、生きてる」
また話す呂布だった。
「だから安心していい」
「ねねもなのです」
陳宮もここで話す。
「ちゃんと生きているのです」
「では何故敵軍にいるのだ」
「捕虜になったんかいな」
「捕虜でもない」
それも違うという呂布だった。

「恋、自分からこの軍に入った」
「それで今ここにいるのです」
「それは何故だ」
「どういうこっちゃ」
「月、やっぱり捕まってだ」
呂布はこの事実を話した。
「張譲達に捕まってた」
「そのことは疑っていたが」
「証拠はあるんかいな」
「ある」
それもだ。あるというのである。
「ちゃんと今ここにある」
「では今すぐそれを出せるのか？」
「そうでもないと信じられへんで」
「月達がここにいる」
呂布の今の言葉はだ。二人にとってはだ。
唖然とするに足るものだった。それでだった。
すぐにだ。呂布に対して問う。詰め寄る顔でだ。
「ではすぐに董卓殿をこちらに」
「出してくれや」
「わかった」
呂布は頷くとだ。自分の左隣にいる陳宮に顔を向けた。
そしてそのうえでだ。こう彼女に言うのだった。
「ねね」
「はいです」
陳宮も頷いてだ。すぐにだった。
一旦軍の方に戻ってだ。その董卓を連れて来たのだった。
そこには董白達もいる。三人を見てだ。
華雄と張遼はだ。すぐにこう言った。
「間違いない、董卓様だ」

「詠も陽もおるで」
「そうよ。僕達連合軍に助け出されたのよ」
賈駆が二人に話す。
「それで今はここにいるのよ」
「一応は董卓さんは自害したことになっているけれどね」
「それでもだな」
馬岱と魏延はこっそりとこのことを話した。
「それでもまあね」
「助け出したのは事実だ」
「何と、では最早我等はこれ以上」
「戦う理由ないやないか」
「ねねがきっかけを作ってくれた」
呂布は陳宮のことを話に出した。

# 第八十七話　張遼、関羽に諭されるのことその五

「ねねが恋の為に皆に訴えてくれて恋が今ここにいて」
「そうして董卓様もか」
「助け出してもらえたんやな」
「全部つながってる」
呂布はまた話す。
「だから恋二人にも兵達にも言う」
「我等にもか」
「もう戦うことはないっていうんやな」
「そう。敵は洛陽にいる」
まさにだ。そこにだというのだ。
「後宮にいる張譲達こそが本当の敵」
「だからよ。華雄将軍も霞も」
賈駆が二人に訴える。必死の顔になっている。
「僕達と一緒に戦って」
「そうしよう、本当にね」
董白もだった。訴えるのだった。
「敵はあいつ等だからね」
「そうだな。董卓様が助け出されたなら」
「うち等この連中と戦う必要ないわ」
二人もそれで頷くのだった。
「ではだ。我々もだ」
「この関明け渡して月ちゃん達と一緒になるで」
「何っ、じゃあ俺達もか」
「連合軍に入るでやんすか」
チャンとチョイがそのことを聞いて瞬時に小躍りした。
「やったぞ！これでもうキムの旦那とジョンの旦那の修業と肉体労働の無限地獄から解放されるんだ！」

「あっし等に幸せが戻ったでやんすよ！」
「それが残念だが」
「ないと思うで」
すぐにだった。華雄と張遼が二人に言ってきた。
「キムとジョンも一緒だからな」
「肉体労働はなくなっても修業はその分増えるさかい」
「これまでと変わらない」
「そうなるで」
「なっ、俺達の地獄は変わらないってのかよ」
「そういえばあっし等が連合軍に入るってことは」
チャンとチョイもだ。衝撃の事実に気付いたのだった。
「キムの旦那とジョンの旦那も一緒かよ」
「そうなるでやんすよ」
「そうなるよな」
山崎もだ。二人のところに来て言う。
「悲しいことにな」
「うう、俺達の幸せって何だろうな」
「最近そんなのあるってわからなくなってきたでやんすよ」
さめざめと泣きながら嘆く二人だった。
「キムの旦那に強制連行されてからよ」
「途中からジョンの旦那も来てでやんす」
「そっからずっと修業地獄でよ」
「起きてから寝るまで。シゴキでやんすよ
「俺もそうなったからな」
山崎もだ。二人と同じくさめざめと泣いている。涙が止まらない。
「何でこの世界に来て最初に出会ったのがキムとジョンなんだよ」
「俺なんて気付いたら二人に捕まってたんだぞ」
「わしもだケ」
アースクェイクと幻庵も出て来た。
「何もかもが不幸だよ」

「この世界は地獄だケ」
「まあこの連中はな」
「結構自業自得の部分もあるさかいな」
華雄と張遼もあまり同情はしていない。
「しかし。何はともあれ無駄な戦いは避けられた」
「そのことはええこっちゃで」
こうしてだった。華雄と張遼達もだった。
全軍でだ。連合軍に加わった。虎牢関もだ。無血で開城してだ。
何はともあれ戦いは避けられた。そのうえでだった。
張遼はだ。まずはあちらの世界の面々と楽しく酒を酌み交わした。
その酒を飲みながらだ。ドンファンとジェイフンに対して言うのだった。
「あんた等キムの息子かいな」
「ああ、そうだよ」
「そうなのです」
二人はだ。焼肉を食べマッコリを飲みながら張遼に答える。

## 第八十七話　張遼、関羽に諭されるのことその六

「こっちの世界にも親父がいるって聞いてたけれどな」
「いる場所は違いました」
こうだ。二人は話すのだった。
「親父はそっちにいるって聞いて袁紹さんのところに入ったんだけれどな」
「まさかここで一緒になるとは」
「縁やな」
そうだとだ。張遼は話すのだった。
「それはやな。縁やな」
「縁ねえ」
「それでなのですね」
「絆って言ってもええやろな」
張遼はにこりと笑って右手に持っている木の杯の中の酒を飲んだ。
その酒は二人が飲んでいるのと同じマッコリである。右膝を立ててその姿勢で飲んでいる。肴はやはり焼肉だ。
「それやな」
「絆、か」
「父と子のですね」
「そや。親子の絆はやっぱり強いで」
張遼は楽しげに笑って二人に話す。
「あんた等こっちの世界でもお父ちゃんに会えたんや。幸せやで」
「幸せだったんだ、俺達って」
「だから兄さんはそこでそう言うから駄目なんですよ」
ジェイフンは眉を少しいぶかしめさせたドンファンに話した。
「少しはですね」
「ああ、わかったわかった」
弟の小言にだ。たまりかねて返すのだった。

「それじゃあな」
「おわかりですか」
「ああ、わかってるよ」
また言うドンファンだった。
「だからな。もうな」
「わかってるんですか、本当に」
「わかってるよ。まあ俺達の他にもな」
「そうですね。チャンさんとチョイさんもおられますし」
場にｈだ。二人もいた。二人は浮かない顔で焼肉を食べ酒を飲んでいる。
そうしてだ。張遼にこんなことを話した。
「実は俺達ってこの二人とはな」
「長い付き合いでやんすよ」
「ああ、キムの子供やさかいな」
「そうなんだよ。それこそな」
「子供の頃から知ってるでやんすよ」
「いい人達だぜ」
「とても親切ですよ」
ドンファンもジェイフンも二人については明るい顔で話す。
「いつも俺達と遊んでくれるしな」
「一緒に修業もしています」
「現在進行形なのだな」
ここで言ったのはだ。右京だった。彼も同席しているのだ。
それで酒を静かに飲みながらだ。こんなことを話した。
「貴殿等の絆は」
「絆、なあ。そういえばそうなんだよな」
「チャンさんとチョイさんの関係も」
二人もだ。そのことにも気付いた。
「俺達が会ったのも縁でな」
「それでできるのですね」

「縁は絆になる」
右京は言った。
「そういうものなのだ」
「そやな。右京ちゃんっていうたな」
「うむ」
そうだとだ。右京は張遼の言葉に頷く。
そのうえでだ。彼女にこう返した。
「しかし私をちゃん付けか」
「あかんか？あかんかったら止めるで」
「いや、別にいい」
こう張遼に返す右京だった。
「中々面白い」
「気に入ってくれたんやな」
「悪い気はしない。しかし絆だな」
「そや、絆や」
まさにその絆だとだ。張遼も話す。

# 第八十七話　張遼、関羽に諭されるのことその七

「それってやっぱり大事やで」
「そうだな。私も絆を築いていっているな」
「あんたも絆があるんやな」
「桂殿に。言うべきだな」
静かに話すのだった。
「私の想いを」
「ああ、あんた好きなんやな」
張遼は彼のその言葉からだ。そのことを察したのだった。
「その桂さんって人のこと」
「言えないでいた」
「身分かいな」
「病故だ」
彼のだ。その病故だというのだ。
「私は長い間胸の病を患っていた」
「労咳やな」
「その病で長い間苦しんでいた」
そうだったとだ。右京は話す。張遼だけでなくだ。ドンファン達にも話す。
「だが。この世界でそれが癒された」
「ええ医者に出会えたんやな」
「それも縁やな」
「そうなるな」
右京は張遼の言葉に静かに頷く。酒を飲みながらだ。
「私はその縁からだ」
「その人との絆を作るんやな」
「長く。生きられるようになった」
それならばだというのだ。

「そうしたい」
「頑張りや。ほなうちもや」
「貴殿もか」
「少しやることあるわ」
こんなことをだ。急に言い出す張遼だった。
「明日にでも行って来るわ」
「何だ？何かあるのか？」
「何かあるでやんすか？」
「あるから言うんや」
張遼は杯を手に楽しげに話す。
「折角連合軍に入ったんや。それやったらや」
「じゃあそれを思い切りやるんだな」
「それがいいですね」
ドンファンとジェイフンはその張遼に楽しげに笑って話す。
「この酒と焼肉たらふく飲み食いしてな」
「気持ちよくです」
「そやそや。何でも気持ちよくや」
実際にそうすべきだとだ。張遼自身も笑顔で話す。
「やらなあかんさかいな」
「じゃあ俺は今は焼き肉食いまくりだ」
「俺もだ」
「あっしもでやんすよ」
ドンファンにチャンとチョイも続く。
「久し振りに徹底的に食うか」
「そうするでやんすよ」
こんなことを話してだ。チャンとチョイはかなり派手に飲み食いをしだした。
そしてだ。ジェイフンもだった。
彼も酒を飲みながらだ。右京に話す。
「右京さんも」

「飲むべきか」
「もう御身体は大丈夫ですね」
「そうなった」
微笑んでだ。ジェイフンに答える。
「幸いなことにな」
「では飲みましょう」
言いながら早速だった。酒を彼の杯に注ぎ込む。マッコリを。
そうして自分も飲みこんなことを言った。
「こうして皆さんと飲めるのもまた縁ですね」
「そうそう。全部縁やで」
また張遼がそうだと話す。
「縁が絆になる。人の世の中ってええもんやで」
こんなことを話しながらその夜は楽しく過ごしてだった。次の日。
張遼は先陣の陣地に向かってだ。関羽を捜した。
相手はすぐに見つかった。丁度天幕の中で朝食の飯を食べている時だった。劉備達他の面々も一緒にその飯を食べている。
その関羽にだ。こう話すのだった。

# 第八十七話　張遼、関羽に諭されるのことその八

「ああ、食うてるんやな」
「むっ、どうしたのだ？」
「食べた後で時間あるか？」
こう関羽に言うのだった。
「それからな」
「食事の後でか」
「そっからでええわ」
笑顔で話す張遼だった。
「うちもその間にパンを食べるさかいな」
「パンをか」
「向こうの世界の包やな」
「ああ、包なのか」
「それテリーから貰ったんや」
そのだ。テリーからだというのだ。
「今からそれを牛乳と一緒に軽く食べるわ」
「ではそれからだな」
「ああ。じゃあ外で待ってるで」
「わかった。それならだ」
頷いてからだ。関羽はその飯を食べるのだった。その彼女にだ。
向かいの席に座っている張飛が言ってきた。
「楽しいことになるのだ」
「そうだな。お互いに力を尽くしたいものだ」
関羽は微笑んで妹に返した。
「是非な。そうしよう」
「それがいいのだ。では鈴々は」
「どうするのだ？」
「普段よりもずっと食べるのだ」

こう言うのだった。
「いつもの二倍食べるのだ」
「二倍か。朝からか」
「そうなのだ。お腹一杯食べるのだ」
「それはいつもではなにのか？」
「だからいつも以上に食べるのだ」
早速だ。その飯をお代わりしてだった。
食べ続ける。そうしてだった。
おかずも食べる。焼き魚をいつも以上に頬張る。そうしてだった。
今度はだ。こんなことを言うのだった。
「よく食べてよく動くのだ」
「だからそれはいつもではないか」
「いつも以上なのだ」
こんなことを話してだった。張飛は確かに食べ続ける。それに対して関羽はいつも通りだ。そうした食事を済ませてからだった。
関羽は天幕を出た。早速張遼が右手をあげて挨拶をしてきた。
「あらためておはようさん」
「おはよう」
関羽も笑顔で応える。
「それではじめるか」
「もうわかってるんやな」
「貴殿が来た時点でわかった」
こうだ。張遼に話すのである。
「既にな。それではだな」
「お互い手加減はせんでおこうで」
「手加減をして死ぬ訳でもあるまい」
「下手にそうした方が怪我するな」
「そういうことだな。それではだ」
「ここではじめるか。それとも別の場所でするかどうするんや？」
「場所はここでもいいだろう」

関羽はここでいいというのだった。
「どのみちやることは同じだ」
「そやな。ほなはじめよか」
「うむ。しかし貴殿も酔狂だな」
「酒は好きやで」
「そういう意味ではない。こうして手合わせから望むとはな」
「それが一番ええと思うてな」
それでだというのだ。

# 第八十七話　張遼、関羽に諭されるのことその九

「あかんかな、それは」
「いや、悪くはない」
それでいいと返す関羽だった。
「私でもそうしていたところだ」
「何や、同じかいな」
「そうだな。同じだな」
言葉を交えさせながらだ。二人はそれぞれ構えを取った。
そうしてだ。二人はだった。
早速勝負をはじめた。それぞれの得物で打ち合う。
朝にはじまったそれはだ。忽ち百合を超えた。
それから二百になり三百になりだ。そのうえで。
五百も超えた。何時の間にかだ。
劉備達もそれを見ていた。劉備がまず言った。
「何か凄いことになってるけれど」
「そうなのだ。お互い一歩も引かないのだ」
張飛がその劉備に話す。
「けれどこれでいいのだ」
「いいの？」
「そうなのだ。いいのだ」
心配する顔の姉にだ。張飛はしっかりとした顔で話す。
「この勝負は殺し合いではないのだ」
「それじゃあ何なの？」
「絆を築く勝負なのだ」
それだとだ。張飛は話す。
「それなのだ」
「絆をなの」
「張遼は愛紗が大好きなのだ」

そのことをだ。張飛は本能的に察していたのだ。
そしてそのうえでだ。こう話すのだった。
「だからこれでいいのだ」
「ううん、私こういうのはわからないけれど」
「安心されよ、それは今わかることだ」
今度は趙雲が劉備に話す。
「桃香殿は二人の闘いを見守っていてくれ」
「愛紗ちゃんと張遼さんの」
「これは漢の闘いなのだ」
それだとだ。趙雲は鋭くなった目で話す。
「あらゆる雑念を捨てただ。心をぶつけ合う闘いなのだ」
「そうだな。愛紗も張遼もな」
馬超もだ。二人の勝負を見て話す。彼女も一歩も動いていない。
「殺意とかは全くねえからな」
「そういえば」
ここでだ。劉備もそのことがわかったのだった。
「そうした雑念は全くないわ」
「そうだろ。二人はお互いに好きなんだよ」
「御友達としてなのね」
「そう、友達なんだよ」
それだとだ。馬超は話した。
「だからああして勝負をしてるんだよ」
「大丈夫よ」
黄忠は優しい微笑みで劉備に話す。
「二人はね」
「ですね。それじゃあ」
「愛紗ちゃんも張遼さんも」
あの二人はだ。どうかというのだ。
「心を見せ合っているから」
「そうですね。心をですね」

「だから見ていましょう」
「わかりました」
こうした話をしながらだ。劉備達は二人の闘いを見続けるのだった。
その闘いは正午、日が高くなってだ。遂にだった。

## 第八十七話　張遼、関羽に諭されるのことその十

二人共同時に倒れ込んだ。そのままお互い大の字になって横たわる。得物は己の傍に置いて。そのうえで二人で話すのだった。
「見せてもらったぞ」
「うちもや」
二人は満足している声で話す。
「御主の心、全てな」
「こっちもな。あんたの心は」
「どうなのだ？」
「ええわ。やっぱりうちが惚れただけはあるわ」
「私はおなごの趣味はないが」
こう断ってからだ。関羽も話す。その顔は満足した笑みになっている。
「だがそれでもな」
「うちのこと。好きになってくれたんか？」
「前から気に入っていた」
そうだったと話してからの言葉だった。
「だが。今はだ」
「余計にやねんな」
「そうだ。さらに好きになった」
そうなったというのである。
「御主には。全てを許せるな」
「ほな夜一緒に過ごすか？」
「それは駄目だが」
それでもだというのだ。
「だが。御主にも背中を預けられる」
「そう言うてくれるか」
「真名だが」

関羽からの言葉だった。
「いいか？」
「授けてくれるんか？」
「そうだ。言わせてもらっていいか」
「有り難いな」
心から微笑んでだ。張遼も言う。
「そやったらうちから言わせてもらうわ」
「御主からか」
「そや。うちの真名は霞」
張遼は自分の真名から話した。
「覚えておいてや」
「わかった。では私の真名はだ」
「ああ、何やったかな」
「愛紗だ」
その真名をだ。関羽は話した。
「覚えておいてくれ」
「わかったで。ほな愛紗」
「うむ、霞」
「腹減ったな」
自分の頭上にある輝く日輪を見てだ。張遼は言った。
「御昼にするか」
「そうだな。では二人でだな」
「食おうで。たっぷりとな」
「では何を食おうか」
「鍋にせえへんか？」
「鍋か」
「そや、鍋や」
それはどうかとだ。関羽に話すのだった。
「二人で。いや皆で鍋をつつかへんか？」
「いいな、それでは今からな」

「ああ、食おうで」
こうした話をしてからだ。二人は起き上がり仲間達に加わりその鍋を食べるのだった。関羽と張遼はだ。今その絆を築き確かなものにしたのだった。

第八十七話　　完

２０１１・６・９

# 第八十八話　張譲、切り捨てられるのことその一



遂にだ。怪物達もだった。
ある場所に足を進めていた。むしろ飛んでいた。
彼等は仲間達に自分達の足首を掴ませそれで何人も縦に連なってだ。そのうえで空を飛びだ。目的地に向かっていた。
眼下に広がる黄土の大陸を見ながらだ。彼女達は話すのだった。
「どれ位で着くんだ？」
「三分後よ」
「それ位よ」
こうだ。貂蝉と卑弥呼は自分達の足首を掴む華陀に対して答える。
卑弥呼が先頭で貂蝉が二番目だ。つまり華陀は貂蝉の足首を掴んでいるのだ。
そうして飛びながらだ。二人は華陀に話したのだ。
「少しだからね」
「ちょっとだけ我慢してね」
「いや、我慢する必要は感じてないからな」
そのことについてはすぐに述べる華陀だった。
「むしろ楽しいな」
「御空を飛んでることね」
「そのことよね」
「ああ、とてもいい」
華陀は実際に満足している顔である。
「出来れば俺も空を飛びたいものだな。自分の力でな」
「あら、そんなの簡単よ」
「誰でもできるわよ」
二人にとってはそうなのだった。

「こんなの初歩の初歩よ」
「歩くのと同じ感じよ」
「それは絶対に違うな」
「間違いなくな」
天草と獅子王が二人の言葉に突っ込みを入れる。
「空を飛ぶことなぞ」
「普通の人間はできはしない」
「だから。この二人は」
「そもそも何者なのだ？」
「まあ仙人でもあるわよ」
「拳法の伝承者だし」
二人の口からその謎に包まれた素性まで話される。
「古の夏の時代、いえ三皇五帝の時からね」
「この世界のことは知ってるわよ」
「やはり人間ではないな」
刀馬はその言葉からこのことを確信した。
「少なくとも常人ではない」
「仙人だと言っていますが」
命はそのこと自体を信じていない。
「妖怪変化なのかも知れません」
「悪の存在ではないが」
「しかし。それでもだ」
ギースとクラウザーはこんなことも話した。
「人間かどうか」
「不安が残るな」
「そうよね。あたし達の美はこの世のものじゃないから」
「だからね」
かなりポジティブに考えている二人だった。
「そう思われるのも当然ね」
「罪な女ね。あたし達って」

「とにかくだ」
華陀だけが動じていない。しかも全くだ。
「都では動きがあったな」
「ええ、遂にね」
「あの娘が助け出されたから」
董卓のことであるのは言うまでもない。
「あちらも動くわよ」
「連合軍も都に迫ってきているし」
「遂にだな」
華陀のその目が強いものになる。
「運命の時が来るな」
「ええ、最初の決戦よ」
「その時が来ているわ」
怪物達の目もここで光る。不気味にだ。

# 第八十八話　張譲、切り捨てられるのことその二

「あの連中、来るわ」
「それに対してどうするかよ」
「戦うしかないな」
これが華陀の結論だった。
「やはりここはな」
「そうよ。だからあたし達もね」
「この腕を見せるわよ」
「美と拳」
「その二つをね」
「ああ、頼む」
華陀はだ。ここでも何でもないといった返答だった。
「期待しているからな」
「ダーリンの期待なら応えるわよ」
「絶対にね」
「ああ。俺も戦う」
華陀もだ。そうするというのだ。
「俺には俺の戦い方があるからな」
「そういえば華陀殿は」
クラウザーがその華陀について話した。
「確か格闘は」
「悪いがあんた達程じゃない」
彼等程だ。戦えないというのだ。
「そうしたことはな」
「そうだったな。格闘はな」
「だが針は使える」
それはだ。いけるというのだ。
「これでどんな病も光となって消してだ」

「そしてだな」
「どんな悪も封じてみせる」
そうするとだ。今度はギースに話すのだった。
「必ずな」
「いや、針など使わずともだ」
ここでギースはこんなことを言った。
「貴殿は悪しきものを消せるな」
「そうなのか？」
「私はこの世界に来るまでしがらみを持っていた」
そのしがらみ故にだ。ギースはギースになったと言っていい。
そのうえで己の足首を掴んでいるクラウザーを見てだ。そうして話すのだった。
「わかるな」
「私も同じだからな」
「我等の父は同じだった」
ギースとクラウザーは腹違いの兄弟なのだ。このことは彼等をして彼等にしていると言っていい。それこそがしがらみなのである。
「それ故に憎しみ合ってきたな」
「そして力を得ようとしてきたな」
「そうだった」
まさにそうだというのだ。
「あの男とのこともその一環だった」
「ジェフ＝ボガードだな」
「知っていたか」
「知らない筈がない」
そうだとだ。クラウザーはギースに述べた。
「私と貴様は。結局はだ」
「同じだな」
「鏡なのだ」
それだとだ。お互いに話す二人だった。

「我等は鏡なのだ」
「鏡だったのだな」
「だからこそわかるのだ」
そうだとだ。クラウザーはギースに話していく。
二人はそう話し合う。そうしてお互いも自分自身も見ているのだった。
「貴様のこともな」
「そうなのだな」
「私は父を殺した」
彼等の父、その彼をだというのだ。
「それ故に。それを忘れる為にだ」
「裏の世界で生きてきたのだな」
「貴様が闇の世界に生きてきたのと同じだ」
「裏と闇か」
「ここでは言葉が違うだけだ」
実質には同じものだとだ。二人はわかっていた。
「我々はその世界で生きてきた」
「私は。その中でだ」
ギースは話を戻してきた。その話こそはだった。

# 第八十八話　張譲、切り捨てられるのことその三

「あの男を自らの手で殺した」
「ジェフ＝ボガードだな」
「それからだった。あの兄弟との因縁がはじまった」
テリーとアンディだ。ジェフの養子達だ。だが養子であってもだ。二人の絆はだ。あまりにも強く深いものであったのである。
しかしギースはその絆を切ったのだ。ジェフを殺したことによりだ。
そのことについてだ。彼は話していくのだった。
「私は悪を厭わない」
「それは変わらないな」
「あくまで私は頂点に立つ」
これはギースの本質だった。だがそれでもだった。
「しかししがらみはだ」
「断ち切るか」
「そうあるべきだったのだ」
「そうだな。私もだ」
「消すべきだ」
そのだ。しがらみをだというのだ。
「必ずな。そうする」
「あの兄弟のこともだな」
「思えばあの二人とのことも終わっているのだ」
「貴様が一度死んだ時にか」
「あの時で終わっていた。後はだ」
「貴様がそのしがらみを断ち切るだけだな」
「それだけのことだ」
ギースは強い顔で話している。
「そうだったのだ」

「私もだな」
クラウザーもだった。
「このしがらみは断ち切る」
「父のことだな」
「それを断ち切る。純粋に頂点を求めよう」
「そうするべきだな。私も貴様にはだ」
「最早何もしないか」
「貴様もその筈だ」
ギースはクラウザーにも話した。
「そうだな」
「そうだ。そうさせてもらう」
「そうなったのはだ」
何時かというのだ。それは。
「この世界に来てだ。華陀と会ってからだったな」
「そのうえでだな」
「それからだ」
まさにだ。その時にだというのだ。
「まことにな。ではだ」
「これからもこの面々と共にいるか」
「そうするとしよう」
「そうなのよね。ダーリンってね」
「特別な力が備わっているのよね」
貂蝉と卑弥呼もそのことを話す。
「人の心のしがらみや因縁を断ち切る力」
「それがあるのよ」
「俺は医者だがな」
華陀自身はそこから話す。
「だから人の心も見てきたがな」
「人の心を見て癒せるのはね」
「それは真の医者が出来ることなのよ」

そうだとだ。二人は華陀に話す。
「それができるダーリンだからこそね」
「この世界を救うことができるのよ」
「人の心を救える者は世界を救える」
天草が言った。
「そういうことだな」
「そうそう、人の心よ」
「それが一番大切なのよ」
「多分。この世に皆が来たのもね」
「そのしがらみを断ち切って新たに生きる為でもあるのよ」
そうした意味もあるとだ。彼女達は話すのであった。
「しがらみは断ち切られるもの」
「だからね」
「そうだな。誰でもな」
その心のしがらみを断ち切る男の言葉だ。
「しがらみからは解放されてな」
「新しく生きるべきよ」
「そうならないと駄目なのよ」
「人の心も。この世界も」
華陀はその世界についても話した。

## 第八十八話　張譲、切り捨てられるのことその四

「全てのしがらみは断ち切られないとな」
「それを断ち切る為にね」
「今からね」
こうした話をしてだった、一行はある場所に着いた。すると目の前にだ。
店があった。食べ物屋だった。その店の看板の肉という文字を見てだ。
命がだ。こう言うのだった。
「そういえばお昼ですね」
「そうだな。それではだ」
「何か召し上がられますか？」
「そうだな。腹も減ってきたしな」
華陀も命の言葉に応える。
「それじゃあ食べようか」
「では中に入りますか」
「そうしよう。皆はどうだ？」
「ええ、そうね」
「そうしましょう」
怪物達も話す。
「ここはね」
「皆で楽しく食べましょう」
「よし。キャビアかファグラか」
ミスタービッグは自分の好物を話に出していく。
「それか和食だな」
「キャビアやファグラはないと思うが」
獅子王がそのミスタービッグに突っ込みを入れる。
「流石にな」

「では和食にするか」
「それも普通の店にはないだろう」
また突っ込みを入れる獅子王だった。
「やはりな」
「では何を食べるべきか」
「ステーキだな」
ギースは自分の好物を話した。
「それはあるだろうか」
「それも絶対にないな」
獅子王はギースにも突っ込みを入れた。
「この国は主に豚肉だからな」
「では豚肉のステーキか」
クラウザーも好きなものはそれだった。ステーキだ。
「それになるか」
「レアでは危険よ」
「豚はね」
貂蟬と卑弥呼が突っ込みを入れる。今度は彼女達だった。
「しっかりと火を通さないとね」
「さもないと怖いからね」
「とにかく中に入ろうか」
刀馬はとにかく食べることを優先させて考えていた。
「中に入れば何か美味いものがある」
「そうですね。それでは」
「では行こう」
命に応えてだ。そのうえでだ。
まずは刀馬が店の中に入る。それからだった。
一行は店の中に入りだ。ギースとクラウザーが最初に店の親父に言った。
「ステーキはあるか」
「できれば牛肉のだ」

「何ですか、それは」
親父は目をしばたかせてその二人に問い返した。
「ステーキとは」
「むう、言葉の時点でか」
「わからないというのか」
「ですから何ですか、それは」
「つまり。それはだ」
「肉を厚く切って焼くものだ」
二人はそこから説明してだ。何とか親父を納得させてだ。
それで出て来たのはだ。やはりだった。
「豚か」
「それになるか」
「まあ当然だな」
今言ったのは華陀だった。

# 第八十八話　張譲、切り捨てられるのことその五

「牛肉はこの国ではそれ程食べはしない」
「畑に使うからね」
「それでなのよ」
怪物達がここで話す。
「牛より豚なのよ」
「ただ。乳は飲まないわよ」
「そういえばそうだな」
ミスタービッグは怪物達の話でそのことに気付いて言う。
「チャイナでは乳製品の料理は少ないな」
「というよりないな」
「全くと言っていい程な」
ギースとクラウザーもそのことについて話す。
「中華料理は何でもあるが」
「それと生ものには乏しいな」
「ああ、生ものな」
そのことについては華陀が話す。
「あれはあたるからな」
「だから火を通すのよ」
「絶対にね」
こう話す貂蝉と卑弥呼だった。
「あたらない為にね」
「そうしているのよ」
「そうか。それでか」
「それでなのだな」
ギースとクラウザーもそのことに気付いた。このことにもだった。
「中華料理というのにも特徴があるな」
「全てあるとは限らないのか」

「どの料理にも特徴はあるわよ」
「当然中華料理にもね」
貂蝉と卑弥呼は言いながらだ。豚バラ煮込みを食べている。
「肉といえば豚でね」
「それで火を通すのよ」
「日本は生ものだが」
ここで言ったのは刀馬だった。
「そこはかなり違うな」
「はい。香辛料も多いですし」
命は八宝菜を食べている。刀馬と同じものだ。
「味はかなり幅が広いです」
「それはいいことだな」
刀馬もだ。その八宝菜を箸で食べながら話す。
「あとこれは」
「生姜だな」
また華陀が言う。
「この国の料理は医食同源だからな」
「そうそう。漢方薬としてね」
「生姜やそういったものも入れるのよ」
「俺もそうしている」
華陀自身もだとだ。貂蝉と卑弥呼に続いて話す。
「だから今も身体の調子がいい」
「そういえば貴殿は百二十歳だったか」
ミスタービッグは彼の年齢を把握していた。
「二十歳に見える顔だが」
「ああ、若作りとは言われるな」
それどころではないが平気な顔で言う本人だった。
「いつも身体を動かしてしっかりとしたものを食べているからな」
「だからだな」
「それでそうなっているのか」

「そういうことだ。それで二人共」
華陀はギースとクラウザーに応えながら彼等に話す。
「そろそろ食べた方がいいぞ」
「むっ、そうだな」
「折角のステーキが冷えてしまうな」
二人もここでだ。そのことを思い出した。
そのうえで箸でステーキを食べる。そうしながら話すのだった。
「うむ、美味いな」
「見事だ」
二人共肉をかじりながら話す。
「よく焼けている」
「しかも味もいい」
「このソースは何だ？」
「あっさりとしているがコクがある」
肉にかけられているそのソースを食べながらもだ。二人は話す。
「醤油に似ているが何か違うな」
「また別の味だ」
「ああ、これはだ」
華陀がそのソースについて二人に話した。
「魚醤だ」
「あのナムプラーか」
「そう言われていたな、確か」
「そうだったな。ナムプラーはそう呼ばれていたな」
獅子王がそのことについて言った。

# 第八十八話　張譲、切り捨てられるのことその六

「そうだったな」
「ナムプラーをかけているのか」
「それでこの味なのか」
「うちの醤はそれなんですよ」
店の親父も出て来て話してきた。
「どの料理にもそれを使ってます」
「それはまたどうしてだ？」
「味のことを考えてなのか」
「はい、味をです」
その味を考えてだとだ。親父もギースとクラウザーに話す。
「かなり独特ないい味がしますよね」
「確かにな。大豆の醤油とはまた違ってだ」
「独特の味わいがある」
二人もそのことは確かだと認める。そう話している間にだ。
一枚食べ終えた。それからまた親父にそれぞれ言うのであった。
「もう一枚だ」
「焼いてくれ」
「わかりました」
親父も二人の言葉に応える。そうしてだった。
またその魚醤をかけた豚肉のステーキを焼いてだ。二人に出すのだった。
そのステーキも食べてだ。二人は満足してだ。親父にこう言った。
「見事だ」
「いい味だった」
「いやいや、そう言って頂いて何よりです」
親父も二人の礼の言葉に笑顔で返す。こうしてであった。
勘定を済ませてから一行は店を出た。そうして華陀が言うのだっ

た。
「それじゃあ行くか」
「連合軍のところにね」
「皆で行きましょう」
貂蝉と卑弥呼も仲間達に話す。
「都からは一先お別れしてね」
「そうしてね」
「とは言っても」
天草がその都の方を振り向いて述べる。
「戻るのはすぐであろうな」
「ああ、最初の戦いは間違いなくここになる」
華陀は強い声で述べた。
「それならな」
「最初の戦か」
「つまりこれで終わりではないのですね」
「それは見て回った通りだ」
そうだとだ。華陀は刀馬と命に話した。
「本当にこれからだからな」
「わかった。それではだ」
「その。最初の戦いに向かいましょう」
こうした話をしてであった。彼等はまずは都から離れた。そのうえで今向かうべき場所に向かうのだった。
その都、後宮の奥深くではだ。
張譲が苛立ちを隠せない顔でだ。周りの者に問うていた。
「では誰もがか」
「はい、皆様既にです」
「都を去られています」
そうなったとだ。身分の低い宦官達が彼に話すのだった。後宮のその部屋は暗い。張譲はその中で酒を手にして彼等の話を聞いているのだ。

そのうえでだ。彼は怒りに満ちた顔でだ。こう言うのだった。
「この状況でか」
「おそらくは。最早連合軍は間近に迫っていますし」
「人質もまた」
「何故人質の場所がわかったのだ」
張譲はそのことについても怒りを露わにさせている。
「わかる筈がないのだ」
「賊軍にはあちらの世界の者が多いです」
「その力を使ったのではないでしょうか」
「そういえば忍とかいう者達もいるそうだな」
張譲は杯を乱暴に置いた。それで嫌な音がする。
だがその音に構わずにだ。こう言うのだった。

# 第八十八話　張譲、切り捨てられるのことその七

「忍び込むことを得意として奇妙な術を使うという。その術を使ったか」
「忍術というそうですね」
「影に潜みそこから動くと聞いていますが」
「忌々しい。何だというのだ」
また言う張譲だった。
「折角の切り札がなくなってしまった」
「それで賊軍は都に迫ってきております」
「虎牢関も敵の手に落ちました」
つまりだ。最後の護りもなくなったというのだ。
「このままではです」
「我等も」
「だからだな」
また忌々しげに言う張譲だった。
「十常侍の他の者達は姿を消したのか」
「では。張譲様も」
「御早いうちに」
「わかっている」
今度は腹立たしげな声だった。
「今すぐにここを後にする」
「はい、それでは」
「御元気で」
こうしてだった。宦官達もすぐに彼の前から姿を消したのだった。
そして張譲もだ。すぐにだった。
部屋を後にしようとする。だがその彼の前にだ。
于吉が出て来てだ。こう声をかけるのだった。
「今からですか」

「そうだ。都から去る」
そうするとだ。張譲は不機嫌そのものの顔で于吉に話した。
「こうなっては仕方がない」
「手駒は全てなくなってしまいましたね」
「忌々しい。まさかあの娘を奪われるとはな」
「あの娘のことは残念でしたね」
「お蔭で兵を使えなくなった」
擁州の兵達だ。それが彼の切り札だったのだ。
しかしそれがなくなりだ。彼は危機を察していたのだった。
その中でだ。彼もなのだった。
「こうなっては仕方がない」
「落ち延びられてですね」
「また機会を窺う」
諦めてはいなかった。そこまで往生際はよくないのだ。
「そして何時か」
「貴方らしいですね」
于吉は彼の言葉を聞いてだ。微笑んで述べた。
「そうしたところは」
「褒めているのか？それとも」
「いえ、褒めているのですよ」
そうだとだ。于吉は答えてからだ。
杯、黄金のそれを差し出してだ。張譲に勧めるのだった。
「如何でしょうか」
「酒か」
「どうですか、一杯」
「生憎だが」
鋭い目になってだ。張譲は于吉に告げる。
「僕は他人の勧めた杯や料理は毒味をしないと口にはしない」
「おやおや、用心深いですね」
「後宮で宦官として生きていくには当然のことだ」

陰謀渦巻く中で生きているからこそだ。そうしたことも身に着けているのだ。

その話をしてからだ。彼は言うのであった。

「だからだ。そのままではだ」

「飲まれませんね」

「そうだ。飲まない」

きっぱりと断って言うのだった。

「どうしてもというのならだ」

「わかりました。それではです」

于吉は右手に持つその杯を己の口に近付けてだ。そのうえでだ。

一口飲んでからだ。張譲に話すのだった。

「これで如何でしょうか」

「毒はないのだな」

「はい、毒は」

それはないというのだ。毒はだ。

「御安心下さい」

「わかった。それではだ」

張譲は彼が毒味をしたのを見届けてからだ。そのうえでだ。

その杯を受け取り飲む。それからあらためて于吉に話した。

「少なくとも金はある」

「食べるのには困らないだけの」

「一生遊んで生きられるだけのだ」

それだけのものがあるというのだ。

# 第八十八話　張譲、切り捨てられるのことその八

「だからだ。今は身を隠す」
「そうされるといいですね」
「人質のことも。考えてみれば」
「考えてみれば？」
「始末する手間が省けたか」
こんなことを言うのであった。
「そう考えればいいか」
「用済みになればだったのですね」
「消すつもりだった」
彼にとっては道具でしかなかったのだ。人質という道具だったのだ。
その道具がなくなったことをだ。張譲はこう話すのだった。
「だがその手間が省けていいとすべきか」
「そう、用済みならばですね」
「その通りだ。そう考えるとしよう」
「そうそう、用済みなのですよ」
ここでだ。于吉の顔がだ。
思わせぶりな笑みになってだ。こんなことを言うのであった。
「あの娘は貴方にとって用済みになればですね」
「最初からそのつもりだった。擁州の者達を動かす手駒だった」
「用がなくなった手駒は捨てるだけですね」
「それだけだ。いつもそうしている」
「いつもですね」
「悪いことか？それが政だ」
「否定はしません。ただです」
ここでだった。于吉はその口調も変えてきたのだった。
そのうえでだ。彼は張譲にこうも話すのだった。

「それは私もなのですね」
「貴殿もだと？」
「はい、私も同じです」
こう言うのである。何かを含んだ笑みで。
「私もまた。用済みになった駒はです」
「捨てるというのか」
「貴方と違って命を奪う様なことはしませんが」
「それは僕のことか？」
話の中でだ。張譲はこのことを察してだ。
目を鋭くさせてだ。于吉に問うのだった。
「生憎だが僕はこのまま姿を消す。それともそれでもだというのか」
「はい、それでもです」
にこやかな笑みだがその目は全く笑っていない。
「私は慎重な男ですから」
「では先程の酒は」
「安心して下さい、毒はありませんから」
それはないというのだ。
「毒味もしましたね」
「ではあの酒には何が入っていた」
「鼠です」
それだというのである。
「鼠なのですよ」
「鼠！？」
「はい、あの酒には鼠になる妙薬を入れておきました」
「鼠に！？しかし御前は」
「飲む前にそれを打ち消す薬を飲んでいましたので」
「全て読んでいたというのか」
「はい」
その通りだとだ。微笑んで答える于吉だった。
「貴方がそう言ってくることは読んでいましたから」

「くっ、何ということを」
「貴方に相応しいではありませんか」
涼しげだがよく見れば悪意に満ちた笑みでだ。張譲に言うのである。
「違いますか?後宮に救う黒い鼠である貴方には」
「だから僕を鼠に」
「では。ご機嫌よう」
この瞬間にであった。張譲は。
その姿を鼠に変えていく。そうして己が今まで来ていた服の中に埋もれてだ。
そこから出て来た鼠にだ。于吉は言うのであった。
「命は奪いませんから」
「チュッ!?」
「御元気で」
こう告げてだ。何処かに消え去ろうとする鼠にこんなことを言った。
「そうそう、大将軍ですか」
「チュッ!?」
「あの方は猫になっていますね」
他ならぬだ。張譲が変えさせたのだ。
「あの方が今の貴方を御覧になられればどう思われるでしょう」
「チュッ!」
猫と鼠だ。どうなるかは言うまでもなかった。
そのことを意地の悪い笑みで告げてだった。于吉はあらためて彼に告げた。

# 第八十八話　張譲、切り捨てられるのことその九

「身を隠されることをお勧めします」
「チューーーーッ！」
張譲である鼠は慌てて姿を消すのだった。こうして後宮での話は終わった。
その何進はだ。連合軍の中でだ。
孫権にだ。こんなことを話していた。
「そもそもわらわはじゃ」
「はい。どうしたのでしょうか」
冷静な声でだ。孫権は彼女の話を聞いている。彼女達は天幕の中で茶を飲んでいる。それと菓子を食べながら話をしているのである。
「あの時は少年じゃったのじゃ」
「御心がですか」
「うむ。最初はそこからじゃった」
腕を組んで誇らしげにだ。孫権に話すのだ。
「そこから鬼にもなったし西方の金持ちにもなった」
「お金持ちにもですか」
「そうじゃ。四十人程男達を引き連れたな」
そうした金持ちになったというのだ。
「他には首を切ることが好きないかれた女にもなった」
「何か色々なのですが」
「そうじゃな。まことに色々とあった」
腕を組みながらさらに話すのだった。
「してこちらの世界においてはじゃ」
「こちらの世界では、ですか」
「あの関羽や趙雲、鳳統とは同じ事務所におるのう」
「事務所ですか」
「そう。事務所じゃ」

こんなことも話すのだった。
「曹操達も同じじゃがのう」
「あの、将軍」
呂蒙がだ。その何進に話すのだった。
「そのことをお話されますと」
「まずいかのう」
「私、袁術さんと同じ事務所ですが」
こう言うのだった。
「他にも劉備さんのところの魏延さんが」
「御主もそうした縁があるのじゃな」
「そのことお話されますと大変ですよ」
困った顔でだ。呂蒙は何進に話すのである。
「結構以上に」
「そういえば御主」
何進はその呂蒙にこんなことも話した。
「これは鳳統も同じじゃが」
「同じとは？」
「あれじゃったな。生き別れの従姉妹や姉妹が随分とおったな」
こうした話にしてしまうのであった。
「一体何人おった？」
「実際は一人もいません」
素直に言ってしまう呂蒙だった。
「実は」
「ううむ、左様か」
「はい、私は一人なんです」
顔を赤くさせてだ。呂蒙は衝撃の事実を話した。
「ですがそれは」
「そ、そうだな。私もな」
孫権もだ。狼狽しつつ話す。
「実は」

「そうですよね」
「そういえばあの張譲めもじゃった」
何進は彼の名前も出した。
「よく母親が違う名前で怪しい世界に出入りしておるとか言っていた」
「いえ、それは」
「あいつもですよ」
すぐに突っ込みを入れる呂蒙と孫権だった。
「私そこで一緒だったこともあったような」
「結構有名な話ですよ、それは」
「そうじゃのう。誰にも脛に傷がある」
「はい、言ってはいけないということで」
「ややこしいのう」
首を捻ってだ。何進は言った。

# 第八十八話　張譲、切り捨てられるのことその十

「全く以てな」
「ですが将軍」
呂蒙がその何進にまた話す。
「今は」
「むっ、今はか」
「はい、いよいよ洛陽です」
そちらに行くというのである。
「ようやくです」
「そうじゃな。まさかここまで楽に行けるとは思わなかった」
「実質一度も戦をしていませんね」
孫権はふと言った。
「幸いなことに」
「都にはもう兵はいません」
ここでこう話す陸遜だった。
「ですが」
「はい、謎の者達がいます」
周泰が怪訝な顔で話す。
「あの白装束の者達です」
「その者達はわらわも知らん」
こう話す何進だった。
「何なんじゃ？一体」
「ただ。わかることはです」
何かとだ。呂蒙が言う。
「彼等は敵です」
「間違いなくのう」
「宦官達の手の者でしょうか」
孫権はこう考えた。

「それで私達を」
「可能性はあります。ですけど」
陸遜は首を捻りながら話す。
「違う気がします」
「違うのか？」
「はい、都に行かれた方々のお話を聞くと」
こうだ。周泰を見ながら話すのだった。
「宦官ではなく別世界の人達の気がします」
「けどやで」
あかりがここで言う。彼女もこの場にいるのだ。
「うちそんなけったいな連中の話全然聞いたことないで」
「私もね」
「ええ、私も」
キャロルとミナもそうだという。
「私達の時代にはいないわ」
「私達の時代にも」
「というかうち等の世界の奴等ちゃうと思うで」
あかりはこう考えるのだった。
「何か雰囲気はちゃうわ」
「では何者じゃ？」
首を捻って言う何進だった。
「あの白装束の連中は」
「前に袁紹殿や曹操殿も襲われていたわね」
孫権はあちらから聞いた話をした。
「私達の命を狙っているのは間違いないしね」
「ですね。敵なのは間違いないです」
呂蒙もそうだと見る。
「では。都においては」
「はい、その白装束の一団との一戦になりますね」
陸遜もこう話す。こうした話をしてだった。

彼女達は都に向かうのだった。そしてその都においてだ。遂に闇の者達が姿を現すのだった。

第八十八話　　完

２０１１・６・１１

# 第八十九話　闇達、姿を現すのことその一



遂に都まで目前に来た連合軍、その本陣でだ。
袁紹がだ。またしてもであった。
「さて、それでは」
「はい、駄目ですから」
「大人しくして下さいよ」
顔良と文醜がすぐに言う。
「先陣は劉備さんなんですから」
「あの人に任せてればいいんですよ」
「むう、最後の最後もですのね」
二人に言われてだ。むっとした顔で言う袁紹だった。
「わたくしはここにいたままですのね」
「ですから。総大将がです」
「先陣とかなんてないですから」
「では仕方ありませんわね」
こう言われるとだった。袁紹もだ。
仕方なく本陣に残る。その先陣ではだ。
劉備がだ。自身の配下を天幕に集めてだ。そうして話すのだった。
「それじゃあ皆」
「はい、それではですね」
「いよいよ決戦なのだ」
関羽と張飛が強い顔で応えた。
「残っている敵と遂に」
「戦って勝つのだ」
「あの白い奴等は絶対にいる」
呂布も場にいる。そうしてぽつりと話すのだった。

「奴等と戦いになる」
「その他にもいるぜ」
草薙もここで出て来て話す。
「オロチだの何なりがな」
「そのオロチだな」
「話聞くと洒落になってねえよな」
趙雲と馬超がこう草薙に言った。
「この世界の何もかもを破壊するか」
「そういう考えの奴等か」
「それな。つまり奴等はこの世界の文明を破壊するんだよ」
それがオロチの考えだというのだ。
「人類社会ってやつをな」
「文明を破壊されたらそれこそあれだよ」
馬岱も怪訝な顔で話す。
「蒲公英達楽しいこととかなくなっちゃうよ」
「そうよね。もう今更古代の生活には戻れないわ」
黄忠も眉を潜ませて話す。
「三皇五帝に人の世が定められて以来培ってきたものは捨てられないわ」
「要するにオロチはそういうものを全て破壊しようっていうんだよ」
草薙はまたオロチについて話した。
「だからそういう奴等の好きにされたらな」
「しかし。向こうはこう言う筈だ」
魏延がここでこう言うのだった。
「人間が自然を破壊しているとな」
「そうじゃな。向こうには向こうの言い分がある」
厳顔はここで弟子の側に立って話した。
「そうした考えに至るのも考えられなくはないか」
「はい、確かに人間は自然を破壊しています」
「それは確かです」

孔明と鳳統もそれはそうだと話す。
「そうして文明を築いていきです」
「多くの生物を滅ぼしていっているのは確かです」
「そうよね。じゃあ人間は」
劉備は軍師二人の言葉を聞いて暗い顔で言う。
「私達は滅びる方が」
「それは間違っているわ」
しかしだった。その劉備にだ。神楽が言ってきた。
「人間もまた自然の一部よ」
「人間も？」
「ええ、こうした話は前にもしたような気がするけれど」
それでもだとだ。神楽はあえて話すのだった。
「人間も自然の一部で」
「じゃあその人間が築く文明も？」
「自然の一部なのよ」
こう劉備達に話す神楽だった。

# 第八十九話　闇達、姿を現すのことその二

「それを全て否定するのもまた傲慢というもよ」
「つまりあれですよね」
真吾は考える顔で首を捻りながら言う。
「そう考えるオロチはそう考える自然の神様の一人なんですか」
「ああ、そこ一柱だ」
「神はそう数えられる」
二階堂と大門が真吾に話す。
「その辺り覚えておけよ」
「学校の授業には出ないがな」
「そうなんですか。そう数えたんですか神様って」
「そうだよ。しっかりとな」
「記憶しておくのだ」
「わかりました。まあそれでオロチなんですけれど」
真吾はさらに話すのだった。
「人間と自然を完全に分けてるんですね」
「それが間違いなんだよ」
草薙は真吾を通してここにいる全ての者に説明した。
「人間と自然は対立するものじゃないんだよ」
「同じものか」
「一部か」
「そうなんですね」
「それがわかっていないのがオロチって神様なんだよ」
そしてなのだった。今度はだ。
月がだ。こう仲間達に話した。
「オロチは荒ぶる神ですが刹那はです」
「邪神ですね」
徐庶が月の話に応える。

「この世に冥府を生み出すという」
「はい、そうなります」
その通りだと話す月だった。
「刹那は邪神です」
「そっちの方が危ないって言えば危ないわね」
舞は顔を顰めさせてこう言った。
「あとアンブロジアもいたわね」
「はい、アンブロジアもまた邪神です」
そうだと話すのはナコルルだった。
「あの神もおそらくこの世界に来ています」
「刹那も。気配が強くなりわかってきました」
また刹那について話す月だった。
「彼もまたこの世界に来ていて常世を出そうとしています」
「敵も賑やかなのだ」４４
「賑やか過ぎるな」
関羽が張飛に言う。
「これでは他の者達がいても不思議ではないな」
「ああ、いるだろうな」
テリーがここで言う。
「ネスツとかな」
「ネスツ？」
「そうした怪しい勢力もいるんだよ」
テリーはいぶかしむ声を出した劉備に話した。
「簡単に言ったら悪の組織だよ」
「そうなんですか。悪の組織ですか」
「そういう奴等も来ているだろうな」
「何か何でも来ているな」
「あんた達の世界の闘える奴全員じゃないのか？」
趙雲と馬超はテリーに言った。
「そこまでいくとだ」

「いい奴も悪い奴もな」
「そうなってるのはなあ」
丈が二人に首を捻りながら話す。
「もう否定できないな」
「そうだね。ここまでくるとね」
アンディーはその丈に言った。
「皆来てるしね」
「俺もな。まさかな」
「こんなことになるなんてね」
リョウにユリも話す。
「ロバートだけじゃなくな」
「本当に皆来てるなんてないから」
「そやなあ。これやったらミスタービッグもおるやろしな」
「いや、あいつはいてもな」
「別に怪しくはないか」
ロバートはリョウに言われてこう考えなおした。
「この世界やったら悪事もできんしな」
「そうだ。だから大丈夫だ」
こう話すのだった。
「あいつに関してはな」
「そやな。まあオロチにネスツに」
「アンブロジアに刹那」
「他は誰がいるかか」
「それが問題だよな」
全員でこんな話をする。ここでだ。
天幕の中にリムルルが入って来てだ。こう言うのだった。

# 第八十九話　闇達、姿を現すのことその三

「皆、西の方だけれど」
「西？」
「西って？」
「うん、擁州って場所だけれど」
その州においてだというのだ。
「そこにね」
「擁州がどうしたの？」
劉備がそのリムルルに問うた。
「一体何が起こったの？」
「そこに袁紹さんの軍が雪崩れ込んで」
そうしてだというのだ。
「占領しちゃったんだって」
「だからですか」
「それでなのですね」
ここでだ。孔明と鳳統が言った。
「袁紹さんの軍が思ったより少なかったのは」
「審配さん達がいなかったわ」
「だからですか」
「西から擁州を攻める為だったのですか」
このことがだ。今になってわかったというのだ。
そしてだ。本陣の袁紹はだ。
満足している顔でだ。こう高笑いするのだった。
「おーーーほっほっほっほ！上手くいきましたわね」
「やっぱりそうしていたのね」
「ええ、そうですわ」
勝ち誇った感じでだ。袁紹は曹操に応えた。その右手は己の顔に添えてだ。高らかな声でだ。意気揚々と笑っているのであった。

「涼州も手中に収めているなら当然ですわ」
「そうね。西からも攻める」
「所謂分進合撃ですわ」
「それで相手を追い詰めるつもりだった」
「あの娘ではありませんでしたけれど」
それでもだというのだ。
「ですが上手くいきましたわ」
「といいたいけれどね」
しかしだとだ。ここで曹操はこう袁紹に話してきた。
「どうも勝手が違ってきたわね」
「どういうことですの、それは」
「私達の今の相手よ」
彼等のことだとだ。曹操は話すのである。
「わかるでしょ。あの連中がいるわ」
「白装束のあの」
「ええ。官渡で私達を襲ったね」
そのだ。彼等がだというのだ。
「貴女は匈奴の地でも襲われたそうだけれど」
「ええ、そういうこともありましたわ」
その通りだと答える袁紹だった。そのうえでだ。
彼女はだ。こう曹操に話した。
「では。あの者達が」
「ガルフォード達から聞いたわ」
曹操は都に入った彼等に聞いたというのだ。
「貴女はまだ聞いていなかったのね」
「今聞こうと思っていましたけれど」
「やれやれ。そういうところが抜けてるんだから」
袁紹のムラッ気が出てしまっていたのだ。彼女のそうした性格はこうした時にも出るのだった。この辺りが彼女をいささか滑稽な感じにさせている。

だがそれにめげずだ。袁紹は言うのだった。
「今わかりましたからいいですわ」
「それはそうだけれどね。とにかくね」
「その白装束ですわね」
「ええ、出て来るわ」
曹操は鋭い目になって袁紹に話した。
「それなら。わかるわね」
「ええ。それでしたら」
「攻めるわ」
一言だった。
「いいわね。遠慮なく攻めるわよ」
「わかっていますわ。官渡、そして匈奴での恨み」
袁紹も強い目になって曹操に応える。
「必ず返しますわ」
「ええ、何があろうともね」
「では華琳」
袁紹はあらためて曹操に話した。

# 第八十九話　闇達、姿を現すのことその四

「いざ都に」
「先陣はわかっているわね」
「ええ、わかっていますわ」
それでいいとだ。袁紹も応える。
「ではいざ」
「都に向かいましょう」
こう話してだった。彼女達も都に向かうのだった。
擁州が陥ちたと聞いた劉備達はだ。そのうえで。
孔明と鳳統がだ。こう彼女達に話すのだった。
「では今よりです」
「都に向かいましょう」
これが二人の提案だった。
「都はこれで完全に包囲されました」
「これはかなり有利な状況です」
「確かに。敵が何者かも数もまだ完全にはわかりませんが」
「それでも。包囲している現状はです」
「有利よね」
劉備は軍師二人の言葉に応えて頷いた。
「それじゃあこのまま」
「はい、進みましょう」
「止まる理由はありません」
また言う孔明と鳳統だった。
「そしてそのうえで」
「彼等を倒しましょう」
「ここで終わらせたいな」
草薙がこんなことを言った。
「是非な」

「そうね。戦うならね」
「そうしないと駄目ですよね」
神楽と真吾も言う。
「それなら。今から」
「行きましょう」
「では全軍このままです」
その劉備が命じた。
「都に向かいましょう」
「おそらく。その手前で」
ここで徐庶が話す。
「彼等はいます」
「都の外での野戦になるのね」
劉備は徐庶の言葉を聞いて述べた。
「それなら」
「はい、かなり大規模な戦いになります」
その通りだとだ。徐庶は劉備に応えた。
そうした話をしてだった。劉備達は連合軍の先陣として先に進むのだった。
その南で、だった。やはりだった。
「いたわ」
偵察に出ていた舞が戻って来て劉備達に話す。
「あの連中がね」
「そうなんですか。やっぱり」
「多いわよ」
その数についても話す舞だった。
「五十万ってところね」
「五十万ですか」
「ええ、ざっとそれだけはいるわ」
こう報告するのだった。
「それで他にもね」

「オロチの奴等だな」
「連中もいるのね」
「ええ、いたわ」
舞は草薙と神楽に真剣な顔で答えた。
「あの青い服の牧師もね」
「ゲーニッツ・・・・・・！」
草薙は忌々しげな顔と声でこの名前を出した。
「やっぱりいやがったか！」
「あの男がいるとなるとこの戦い」
「ああ、辛いな」
「それと。ネスツの連中もいたわ」
舞はさらに話した。
「あの白い髪の男と口髭の男がね」
「おいおい、本当にオールスターだな」
それを聞いてだ。似海道が肩をすくめさせた。
「賑やかな話だぜ」
「相手にとっては不足はなしか」
大門は細い目のまま腕を組んで述べた。
「思う存分戦えると考えるべきか」
「少なくとも遠慮はいらないみたいだな」
蒼志狼はその手の剣を見ながら言う。

# 第八十九話　闇達、姿を現すのことその五

「この戦いはな」
「数は五十万ね」
馬岱はその数から話した。
「じゃあ私達だけじゃちょっと辛いかな」
「そうじゃな。幾ら何でも数が違い過ぎるわ」
厳顔も馬岱のその言葉に頷く。
「ここは一度本軍と合流しようぞ」
「まさかここで我等だけ行けとは言わないだろう」
魏延も二人と同じ意見だった。
「ではそうするべきだな」
「そうだな。ここはそうしよう」
公孫賛も言う。
「一度本陣と合流だ」
「あれっ、公孫賛ちゃんいたのね」
マリーは彼女に気付いたといった顔だった。
「そうだったの」
「私はずっとここにいたが」
「それは嘘でしょ」
「いた、いたぞ」
少しムキになって言い返すのだった。
「それは本当だ」
「そうだったの」
「だからどうしていつもこうなのだ」
存在感のなさにだ。自分自身も嘆くのだった。
「私は全く気付かれないのだ」
「まあ気にしてもね」
「何が悪いのだ、一体」

「だから。包丁持ったら？」
これが馬岱のアドバイスだった。
「それで相手をメッタ刺しとか」
「物騒だな」
「何か白蓮さんって声を聴く限りだとね」
「目立つというのだな」
「凄くね。けれど白蓮さん自身は」
「ううん、それが悩みなのだ」
とにかく本人は全く目立たないのである。
「どうしたものか」
「白馬しかないからね」
今言ったのは舞である。
「基本として」
「白馬の方が有名だと嫌だな」
「いや、有名だろ」
「どう見ても」
「そうだよね」
テリー、丈に続いてアンディも言う。
「俺も馬の方から思い出したからな」
「実は俺もな」
「うん、白馬は目立つから」
そんな話をしながらだった。三人も公孫賛に話す。
「いっそのこと服装を変えるとかな」
「そうしたことをしてみたらどうだ？」
「かなり違うと思うけれどね」
「服か。それならだ」
公孫賛は腕を組み考える顔になってだ。こんなことを言った。
「ではメイド服でもだ」
「ゴスロリとかどうですか？」
真吾は何気なくそちらも薦めた。

「そういう感じでどうですか？」
「何か呂蒙や碧みたいではあるがな」
「じゃあ制服とかは」
真吾は今度はこれはどうかというのだ。
「ほら、日々の」
「結局はそこに話が落ち着くのだな」
「じゃあ張角さんや甘寧さんや張勲さんも呼んで」
「だからどうしてそこに話がいくのだ」
「インパクトってことで」
「そこから離れられないか、私は」
そんな話をしているうちにだった。劉備達は一旦本陣と合流したのであった。
その彼女達を見てだ。于吉は左慈に話した。
場所は闇の中だ。そこにおいて言うのであった。
「遂にはじまりますね」
「ああ、決戦だな」
「はい、ただしです」
「ただ。何だ？」
「ここで終わればいいのですがね」
こうだ。闇の中で左慈に言うのである。

# 第八十九話　闇達、姿を現すのことその六

「洛陽の戦いで」
「何だ。終わらないとでもいうのか？」
「そんな気がします」
于吉はその口元から笑みを消していた。そのうえでの言葉だ。
「どうもです」
「それでは定軍山や赤壁で、か」
「そのことも考えておくべきかと」
「ふん、どちらにしろだ」
それでもという感じでだ。左慈は話していく。
「俺達は俺達の目的を達成する」
「そうです。この世界をです」
「俺達の望むようにさせてもらう」
「例え誰が来ても」
于吉の言葉には決意があった。その決意を口にした彼にだ。
司馬尉の声がだ。こう言ってきたのだった。
「面白いわね」
「おや、来られたのですか」
「張譲は消したのかしら」
「いえ、鼠になって頂きました」
そうだとだ。左慈は司馬尉に話した。
「命を取ることはしませんでした」
「それは何故かしら」
「ははは、鼠は何処にでも出入りできますね」
思わせぶりな笑みで司馬尉に話すのである。
「そうですね」
「それでは」
「はい、連合軍の中に入ってもらいます」

「そしてその情報を手に入れさせて」
「この洛陽での戦いに役立てます」
それが于吉の今の考えだった。その考えに基いてであった。
于吉はだ。司馬尉にさらに話した。
「それで貴女は」
「私は出る訳にはいかないわ」
それはできないとだ。司馬尉は妖しい笑みで述べた。
「今は乱を避けて都にいないことになっているのだから」
「そういうことですね」
「ええ。この戦いで終わればいいけれど」
「若しそうならなかったならば」
「その時に備えさせてもらうわ」
これが司馬尉の考えだった。彼女は戦いの後のことを考えているのだった。
その考えに基いてだ。そうしての言葉だった。
「それで今の戦いだけれど」
「はい、白装束の兵達を出します」
「そして、ね」
司馬尉が言うとだった。即座にだ。
闇の中に新たな者達が出て来た。彼等は。
「ああ、俺達もな」
「出陣するわ」
「楽しませてもらうよ」
社にだ。シェルミー、クリスが出て来て言うのだった。三人共期待している笑顔である。その笑顔でだ。こう同志達に話すのだった。
「戦いは嫌いじゃない」
「派手なライブになるわね」
「向こうも必死だしね」
「私もです」
今度はだ。ゲーニッツだった。彼もまた楽しみにしている笑顔で

闇の中に出て来た。そうしてその仲間達にこう宣言するのだった。
「楽しませてもらいます」
「ああ、期待しているからな」
そうだとだ。左慈が話した。
「この戦いもな」
「有り難き御言葉」
「御前等がいれば百人力だ」
まさにそうだと話す左慈だった。
「あの連中にも負けないな」
「少なくとも負けはしません」
左慈はまた言う。
「ただ。どうもです」
「どうも。どうしたんだ？」
「星の動きはです」
「星か」
「はい、確かに我々の望む動きを見せています」
星の動きを見てこれからのことを考えているのだ。星の動きで未来を見ているのだ。

# 第八十九話　闇達、姿を現すのことその七

「ですがそれでも」
「その成就は遅いか」
「私の予想とは違いまして」
こう言うのであった。
「遅いですね」
「そうか。ではやはり」
「ですから先程も申し上げたのです」
于吉は話をそこに戻した。
「この洛陽の戦いだけでは終わらない可能性があります」
「厄介な話だな」
それを聞いてだ。左慈は顔を顰めさせて述べた。
「俺としては一気に終わらせたいんだがな」
「一気にですか」
「そうしてこの世界をさっさと壊したいんだがな」
「ええ。私達の目的は破壊と混乱です」
于吉も笑みで左慈の言葉に返す。
「だからこそ」
「しかしそうは問屋が卸さないか」
「残念ですがそれは中々なようです」
「わかった。ではここで終わらなくてもだ」
それでもだと。左慈は意を決した顔で述べた。
「戦わせてもらおう」
「そうだ。俺としてはだ」
刹那も出て来た。
「ここで終わっては面白くない」
「常世をこの世に出す為には」
「そうだ。それにはより多くの血と絶望が必要だ」

刹那は于吉に対して述べた。
「より多くのな」
「ただ。厄介なことは」
黒く長い髪を持つ切れ長の目の女がいた。長身を巫女の服で包んでいる。妖艶でそこにはこの世あらざる美貌を見せている。その女が言うのだった。
「常世も。私にも」
「そうだな。封印を施す者達が来ているな」
「四霊に四宝珠がね」
「そしてだ」
刹那はその女、羅将神ミヅキに応えながらだ。オロチ一族の面々を見た。
そしてそのうえでだ。こう彼等に言うのだった。
「御前達もだな」
「はい、そうです」
その通りだとだ。ゲーニッツが答える。
「あの三種の神器の家もまた」
「俺達も全員来てるけれどな」
社は明るい笑顔で話す。
「向こうも全員だからな」
「そうは楽にはいかないということですね」
于吉が言う。
「私達に対しても来ていますし」
「来るのはわかっていたがな」
左慈は同志の言葉にこう返した。
「あの二人はな」
「しかもこの世界にもいますし」
「あの赤い髪の医者だな」
「彼のあの術はです」
于吉の目の光が強くなった。それまでは目も笑っていたがその笑

みが消えていた。その剣呑な目でだ。彼はさらに話すのだった。
「太平要術の書を封じます」
「あれに力を蓄えさせてだったわね」
司馬尉がここで于吉に問うた。
「その力で。この世界を」
「はい、混沌と破壊の世界にします」
于吉もだ。こうだと司馬尉に答える。
「その力があの書にはあります」
「いいことよ。私にしてもね」
「貴女の王朝には秩序はありませんね」
「秩序？」
その言葉自体にだ。司馬尉は冷笑で返した。
「そんな下らないことには興味はないわ」
「破壊と混沌、怨嗟と憎悪で彩られる国ですね」
「それが私の目指す国」
司馬尉の笑みが変わった。冷笑から酷薄なものに。

# 第八十九話　闇達、姿を現すのことその八

その笑みでだ。彼女は于吉に話すのだった。
「漢の次の国よ」
「そうですね。だからこそですね」
「貴方達と共にいるのよ」
その本当の狙いをだ。司馬尉は話すのだった。
「そしてこの国にもいるのよ」
「素晴しいことです」
ゲーニッツは軽い拍手をして司馬尉に述べた。
「人の世の秩序なぞ何にもなりません」
「その通りよ。それに私は血も愛するわ」
このこともだった。司馬尉は闇の中で自ら話した。
「戦いになればその時は」
「常にですね」
「ええ、血を見させてもらうわ」
笑みにある酷薄さがだ。さらにだった。
その笑みでだ。彼女は言うのである。
「捕虜なぞ取らないわ」
「あれだな。京観だな」
左慈がこの言葉を出した。
「骸で門を作るか」
「あれを作るのは至上の喜びよ」
司馬尉にとってはだ。それが彼女の趣味なのだ。
「血が流れる骸で築くことはね」
「やはりいい趣味です」
また言うゲーニッツだった。
「その残酷さ、まさに私達の同志に相応しい」
「ゲーニッツはそういうのが好きだからね」

シェルミーは微笑んでこうゲーニッツに話した。
「だからこそね」
「はい、私は血を好みます」
仕草だけはだ。慇懃である。
「ですから」
「そういうことね。では私達もね」
「俺は血を見る趣味はないがな」
それでもだとだ。社も言うのだった。
「それでも戦いは好きだからな」
「では。皆さん」
于吉が温厚に話す。
「今から向かいましょう」
「戦場にだな」
「そうです。彼等はもう迫っています」
ここでまた左慈の言葉に応えるのだった。
「それでは」
「あの連中の相手も久し振りだな」
こうしたことも言う左慈だった。
「目立つからすぐにわかるがな」
「目立つ？ああ、あの二人だね」
クリスがすぐに気付いた顔で応えた。
「不気味なオカマ達だね」
「あれは私も驚いたわ」
ミヅキがシェルミーの言葉に続く。
「まさか。ああした外見の人間がいるとはね」
「俺は妖怪かと思ったぜ」
社は今は本気である。
「人間じゃないってな」
「まあそう思われるのもです」
「当然だけれどな」

二人はそのことを否定しなかった。
「あの外見では」
「無理もないことだ」
「そうだよな。けれど人間なんだな」
社がまた言う。
「それは間違いないのはわかったさ」
「それにしても異様だけれどね」
「見るのが辛いよ」
こんなことも言うシェルミーとクリスだった。
「まあとにかく」
「あの連中とも戦うのかな」
「おそらくは」
そうだとだ。于吉が彼等に答える。
「そうなります」
「そうですか。では何かあればです」
ゲーニッツが于吉のその言葉に頷く。そうして。
彼等は闇から去った。そのうえで戦場へと向かうのだった。
連合軍は遂に洛陽を見た。そこで孫策が言うのであった。
「都に来るのも久し振りね」
「そうじゃなあ」
黄蓋もここで言う。

# 第八十九話　闇達、姿を現すのことその九

「前に来たのは何時じゃったかのう」
「そういえばお母様が亡くなってから都を見ていないわ」
「何かと忙しかったからな」
「そうそう。揚州を治めて」
まずは政だった。全てはそこからだ。
「軍も整えて山越を下して交州も治めて」
「やることばかりじゃった」
「それで久し振りに来たわね」
「これで戦でなければ」
「まことによいのですが」
二張もいる。そのうえで孫策達に話すのだった。
「しかしそれは言ってもはじまりません」
「まずはです」
「うむ、戦じゃ」
黄蓋はその都を見ながら話す。その南には。
大軍が展開していた。その者達は。
「五十万というところじゃな」
「多いわね」
孫尚香もその敵を見て言う。
「これはちょっとやそっとじゃ勝てないかしら」
「それでだけれどね」
どうするか。孫策は妹に話す。
「ちょっと作戦会議に入るわよ」
「じゃあ行ってらっしゃい」
孫尚香は姉達を送り出そうとする。しかしだ。
ここで孫策は末妹にこう言うのだった。
「ああ、小蓮もよ」

「シャオも？」
「そう、あんたも会議に出てもらうわよ」
「またどうしてなの？」
そう言われるとだ。孫尚香は首を捻ってだ。こう言うのだった。
「シャオもって」
「今回はかなり派手な戦になるからね」
「それで意見を言えっていうのね」
「言いたければね」
そうしろというのだ。そうした話をしてからだ。
孫策はあらためてだ。末妹にこんなことも述べた。
「この戦いは激しい戦いになるわよ」
「敵の数が多いから？」
「いえ、面子もどうもね」
「何かあかり達の世界の怪しい奴等もいるみたいだけれど」
「それよ。連中は強いわよ」
孫策の顔が引き締まる。真剣なものになっての言葉だ。
「それも尋常じゃないわよ」
「オロチとか刹那よね」
「この世界をどうにかできるような奴等よ」
「ううん、そんな奴等との戦なのね」
「だからよ。相当激しい戦いになるわよ」
「ははは、腕が鳴るのう」
この中でも陽気に笑う黄蓋だった。
「わしの弓が唸るわ」
「勿論祭には思う存分戦ってもらうわ」
孫策はその黄蓋にも話す。
「頼んだだわ」
「それでは我々も」
「この力の限り」
二張も強い表情になっている。

「働かせて頂きます」
「雪蓮様と共に」
「それと冥琳もね。今ここにはいないけれど」
見れば孫策の傍にはだ。いつも共にいる彼女はいない。どうしてかというと。
「袁術との打ち合わせね」
「袁術と打ち合わせって？」
「あれよ。大喬と小喬のね」
その二人のことでだというのだ。
「舞台のことで打ち合わせなのよ」
「ああ、それでなのね」
孫尚香もそれを聞いて納得して言う。
「そういうことなのね」
「そうなのよ。まあ袁術はかなり癖が強いから」
その人格のことはあまりにも有名になっている。無論孫策も彼女のそうした性格のことは熟知している。それでこう言うのだった。

# 第八十九話　闇達、姿を現すのことその十

「だからね。結構時間がかかってるみたいね」
「そもそも袁術殿はあれじゃ」
ここでこう言う黄蓋だった。
「あまりにものう」
「性格がね」
「あれをあちらの世界ではSというそうじゃな」
まさにその通りであった。
「黒姫とかも言われておるしな」
「あとあれよね」
孫尚香はこんなことも言う。
「曹操のところの眼鏡の軍師とやけに仲がいいのよね」
「あれは運命の出会いじゃ」
黄蓋も言い切る。
「まさにじゃ」
「運命、ね」
「偶像支配者じゃったかな」
不意にだ。こうした言葉が出て来た。
「まさにあれじゃな」
「偶像支配者？」
「うむ、おそらくその縁じゃ」
そうだとだ。黄蓋は孫尚香に話す。
「それでじゃな」
「多分あれよ」
孫策もその話に乗ってきた。
「張勲も話に加わってるわね」
「その偶像に？」
「そうよ。その世界にね」

「何か知らないけれど深い関係なのね」
そのことは孫尚香もわかったのだった。
「あの三人は」
「かなりね」
まさにそうだと話す孫策だった。
「ちょっと。入られないものがあるのは確かね」
「ううん、色々と複雑なのはわかったわ」
それはだと話す孫尚香だった。
「あの三人はそっとしておかないとね」
「というか間に入ったら洒落にならないことになるわよ」
「そうじゃな。あの三人はのう」
孫策だけでなく黄蓋も話す。
「しかも三角関係だし」
「さらに困ったことにじゃ」
「何か。余計に酷い話だけれど」
「だから。そっとしておくに限るわ」
「離れた場所で見ておくことじゃ」
こう言ってだ。彼女達も三人についてはそっとしておくことにした。そしてである。
その頃張三姉妹は相変わらずのどかに旅芸人を続けていた。
馬車の中でだ。張角が言うのだった。
「ねえ、何かね」
「何か？」
「何かって？」
「曹操さんからお手紙来てるけれど」
こう妹達に言うのである。
「洛陽に来てくれって」
「ああ、そういえば曹操さん達って今」
「戦をしてるわね」
張梁も張宝も気付いて言う。

「それで洛陽に向かっていたな」
「それじゃあ洛陽に辿り着けたのね」
「よかったわよね」
張角はそのことににこりとして言うのだった。
「これで戦が終わるのかしら」
「まあ。洛陽に辿り着いたってことは勝ってることだから」
「順調にいっていることは確かね」
「そうよね。じゃあこのまま行こう」
張角はお菓子を食べながら妹達に話す。
「都にね」
「うん。じゃあ今からね」
「一緒に行こう」
「皆にも声をかけよう」
親衛隊の面々にだというのだ。

# 第八十九話　闇達、姿を現すのことその十一

「それですぐに都に行ってね」
「都に行って？」
「それで。どうなの姉さん」
「美味しいもの一杯食べよう」
ここでも張角だった。能天気にこんなことを言うのだった。
「御馳走が待ってるわよ」
「だから。姉さんはまずそこなのね」
「相変わらず食べることばかり考えてるのね」
「大丈夫、お姉ちゃん太らないから」
だからいいと話すのだ。本当に相変わらずである。
「胸にだけ栄養がいくから」
「何言ってるのよ。この前なんて」
「お菓子食べ過ぎて曹操さんに怒られて」
曹操は彼女達の統括的な管理も行っているのだ。
「走らさせられて泳がさせられたわよね」
「何日も減量させられて」
「うっ、それでもよ」
妹達に言われて強張った顔になる。しかしそれでも言うのだった。
「お姉ちゃん胸だけが大きくなるからいいのよ」
「確かに胸は小さくならないわよね」
「姉さんの胸は」
「だからいいのよ」
言ったその傍から胸が大きく揺れる。
「それでね」
「全く。本当にお気楽なんだから」
「姉さんらしいといえばらしいけれど」
「ううっ、何かお姉ちゃんボロクソ」

妹達の言葉に泣きそうな顔になる。しかしだった。それでも張角は張角でありだ。相も変わらずまだこんなことを言うのだった。
「気を取り直してね」
「気を取り直して？」
「どうするの？」
「都に向かう間にね」
どうするかというのである。
「旅行しよう」
「今度は旅行なのね」
「遊んでばかり」
「だって。人生遊ばないと駄目よ」
言うことは何をしてもだ。全く変わらないのだった。
「だから。旅行楽しもう」
「まあね。あたし達も旅行は好きだし」
「だから旅芸人に戻ったっていう面もあるから」
「じゃあいいわよね」
こんな話をしてだった。三姉妹もまた都に向かうのだったその中でだ。
実際にだ。張角は旅の中で外の風景を見ながら話すのだった。
「やっぱりこうしてお外を見るのって」
「楽しいのね」
「それだけで」
「お姉ちゃん旅大好き」
まさにそうだというのである。
「こうして旅行をするのも好き」
「やれやれ。お姉ちゃんって昔から」
「些細なことで満足できるのね」
「駄目かな、それって」
きょとんとした顔でまた妹達に尋ねる。
「だって。幸せって普通にその辺りにあるじゃない」

「それを見つけて楽しめるのがね」
「姉さんらしいのよ」
「だから。それが駄目なの？」
少しきょとんとした顔で妹達にまた問う。
「幸せを見つけて楽しむのって」
「悪いとは一言も言ってないわよ」
「私も」
二人共微笑んで長姉に話す。
「姉さんはそれでいいのよ」
「私達もそうだし」
「そうよね。幸せってあちこちにあるのよ」
それでだというのだ。
「それを見つけて楽しむのよ」
「だからいいのね」
「それで」
「そう、幸せは何処にでもあるから」
左手の人差し指を出してだ。張角は明るく話す。
「これからも楽しんで生きようね」
「そうした姉さんと一緒にいるのも」
「幸せね」
そうした話をしながらだ。三姉妹も都に向かうのだった。都に星達が集ろうとしていた。そうしてそのうえでだ。運命の戦いがはじまろうとしていた。

第八十九話　完

２０１１・６・１４

# 第九十話　孔明、秘策を授けるのことその一

第九十話　孔明、秘策を授けるのこと

連合軍は都に来た。しかしであった。

その前にいる謎の一軍を見てだ。彼等は進撃を止めてだ。そのうえでだった。

本陣の天幕に集いそのうえで。これからのことを話し合っていた。

「数は五十万」

「対することはできる数だけれど」

「敵の氏素性がわからない」

「そのことがな」

「参ったわね」

「刹那達のことならわかってるよ」

楓がこう一同に話す。

「そして常世のこともね」

「アンブロジアのこともな」

今度は覇王丸が話す。

「わかってることはわかってるぜ」

「そのことはいいのですが」

呂蒙が不安に満ちた顔で述べる。

「問題はあの白装束の一団です」

「敵の主力になってるわね」

「敵兵は殆んどがそれよ」

辛姉妹が話す。

「あの連中の正体がわからないから」

「迂闊に手出しができないわね」

「二度程戦っていますけれど」

盟主の座にいる袁紹が眉を顰めさせながら話す。

「兵というよりあれは」
「刺客ね」
曹操も言う。
「そういった感じよ」
「確かに。あれは」
「兵の動きではありませんでした」
夏侯姉妹もそのことについて頷く。
「妙に俊敏で抜け目なく」
「剣呑なものがありました」
「そうですね。あれはまさに」
「兵の動きじゃ絶対になかったよな」
顔良と文醜もこう言うのだった。
「五十万の刺客ですか」
「嫌な戦になりそうだな」
「それだけじゃねえぜ」
草薙が鋭い顔で一同に話す。
「そのオロチだよ。オロチのなかにな」
「何かいた？」
「誰かが」
「青い丈の長い服の奴いただろ」
こうこちらの世界の仲間達に問うのだった。
「顎鬚生やしていてな」
「はい、いました」
諸葛勤が答える。
「報告にあります」
「そいつな、ゲーニッツっていうんだよ」
その男の名前をだ。話すのだった。
「吹き荒ぶ風のゲーニッツな」
「私の双子の姉さんを殺した男」
神楽はその目に怨みを宿して話す。

「その男もいるのね、やっぱり」
「あいつは尋常じゃなく強い」
草薙の声は警戒するものだった。
「バケモンだ。まさにな」
「そいつまさかと思うけど」
張遼がその草薙に問う。
「うち等が束になってもって位かいな」
「あいつ一人で国潰せる位の力はあるな」
そこまでの力があるとだ。草薙は言い切った。
「呂布でも一人じゃ絶対に勝てねえな」
「嘘を言うななのですっ」
陳宮は草薙の今の言葉にすぐに反論した。その両手を拳にして顔は怒っている。
「恋殿に勝てる奴なんていないのです」
「ねね、それは違う」
だが呂布自身がだ。隣にいるその陳宮に話すのだった。
「恋より強い奴もいる」
「そんな、恋殿より強い奴なんて」
「感じる。その連中が敵にいる」
表情は変わらない。しかしその目の光は強い。
「そのゲーニッツって奴だけじゃない」
「ああ、残念だけれどな」
その通りだとだ。今度は覇王丸が話すのだった。
「そのアンブロジアの巫女のミヅキって奴もな」
「尋常でない強さなのです？」
「洒落になってねえ」
真顔で陳宮に話すのだった。

# 第九十話　孔明、秘策を授けるのことその二

「やっぱりそいつも国一つ潰せる位の強さがあるんだよ」
「洒落になっとらんな」
張遼はここまで聞いて思わず言った。
「そんなやばい奴等がごろごろってな」
「しかも刺客みたいな奴等が五十万」
「尋常でない戦いになるな」
「絶対に」
全員でこう話していく。しかしここでだ。
本陣にだ。袁紹軍の士官が一人入って来てだ。そうして報告するのだった。
「只今妖怪が二匹出て来ました」
「あいつ等ね」
曹操は話を聞いてだ。瞬時に顔を真っ青にさせて述べた。
「生きていたのね」
「死んで欲しかったのですが」
「全くです」
筍氏の叔母と甥も言うのだった。
「そうおいそれとは死にませんか」
「迷惑な話です」
「殺しても死なない連中だから」
曹操も始末することは諦めていた。無理だとわかっているからだ。
それでだ。仕方なくだ。盟主の袁紹に話すのだった。
「覚悟が必要よ」
「妖怪登場ですわね」
「そうよ。麗羽は知らなかったわね」
「貴女から聞いていますけれど」
曹操からだ。事前に情報は聞いているのである。

「それ以上ですのね」
「百聞は一見にしかずよ」
「まあ。妖怪とはいっても」
袁紹は比較的楽観していた。それが言葉にも出ている。
「大したことはありませんわね」
「あの、そう思うとです」
「大変なことになりますよ」
視覚的に記憶がある顔良と文醜が主に話す。
「多分。その妖怪達は」
「あたい達何か嫌な記憶がありますから」
「ですから。幾ら妖怪といいましても」
袁紹は二人の言葉にいぶかしむ顔で返すのだった。
「それでも別に何もかも破壊したりはしませんわね」
「あの、それはかなり甘いと思います」
周泰もその妖怪達が誰なのか察して袁紹に話す。
「おそらく。その妖怪さん達は」
「何かわかりませんが通しなさい」
袁紹は彼等について何も知らないまま命じる。
「宜しいですわね」
「覚悟しておきなさい」
袁紹だけでなく本陣にいる全員への言葉だった。
「何があっても怒らないことね」
「だから何だってんだよ」
ダックがその曹操に飄々と返す。
「妖怪が怖くて何ができるってんだよ」
「その言葉後悔するわよ」
曹操は真顔でそのダックに返す。
「それでもいいわね」
「わかんねえな、本当に」
「全くだな」

ダックにビッグベアが応えて話す。
「だから妖怪っていってもな」
「今俺達の前にいる奴等よりずっとましだろ」
「そう思っていればいいのだが」
「後悔はしないでくれ」
真顔で彼等に話す夏侯姉妹だった。そうしてだった。
彼等が将校に案内されて本陣に来た。その瞬間だった。
「あら、皆集まってるのね」
「あたし達の美貌を見に来たのね」
妖怪達はそれぞれの身体を不気味にくねらせながら話す。
「それじゃあサービスして」
「皆に。これをプレゼントよ」
こう言ってだ。妖怪達は周囲にウィンクと投げキッスを捧げる。
すると。
その瞬間にだ。天幕の中において。
大爆発が起こりだ。誰もが吹き飛ばされるのだった。天幕の中は
忽ちのうちにぼろぼろになってしまった。
その中からようやく立ち上がりだ。ガルフォードが言った。

# 第九十話　孔明、秘策を授けるのことその三

「や、やっぱりこの連中か」
「あら、アメリカのハンサム忍者ね」
「相変わらず活躍してるのね」
「そういえば思い出したぞ」
ガルフォードは彼等を指差しながら言う。
「俺がこの世界に来たての頃に。夢に出て来たな」
「枕元にいたのよ」
「そのあたりちゃんと訂正してね」
「そうだったのかよ」
枕元に来ていたと聞いてだ。ガルフォードも愕然となる。
「こいつ等、何時の間に」
「あたし達に不可能はないから」
「どんな警護も瞬間移動で突破できるのよ」
「そら人間ちゃうやろ！」
ケンスウもぼろぼろになりながらも立ち上がって言う。
「エスパーとかそんなの超えてるやろ！」
「あら、失礼な坊やね」
「こんな乙女達を捕まえて」
「あかん、会話ができん」
ケンスウも唖然となる。
「こいつ等絶対に普通の人間やないで」
「だから言ったのよ」
曹操も爆発でぼろぼろになってしまっている。
「この連中は普通じゃないのよ」
「幾ら何でもこれは」
袁紹も必死に盟主の座に戻りながら話す。
「有り得ませんわ」

「予想以上だったのね」
「ここまでの恐ろしい連中だとは」
袁紹も思いも寄らなかったのである。
「とにかく。倒さないといけませんわね」
「あら、そうすることはないわ」
「だってあたし達貴方達の味方だから」
妖怪達はこう主張するのだった。
「今白装束の連中が来ているわね」
「そうよね」
「その通りじゃ」
袁術も何か立ち直って話す。
「それでどうしようかと話しておったところじゃ」
「そうよね。実はね」
「あの連中のことは知ってるのよ」
妖怪達はあらためて彼等に話す。
「それもよくね」
「そうだったのだけれど」
「同じ妖怪だからか？」
甘寧は本気でこう思っている。
「だからなのか」
「だから。あたし達は妖怪じゃないわよ」
「絶世の美女よ」
やはり会話は通じない。
「あたし達はあらゆる並行世界の監視者なのよ」
「それがあたし達の仕事なのよ」
「並行世界？」
その言葉にだ。こちらの面々は首を捻る。しかしここでだ。
ハイデルンがだ。こう彼等に説明した。
「並行世界というのはだ」
「ええ、一体」

「何なんですか？」
「まず世界は一つではないのだ」
ハイデルンが話すのはここからだった。
「この世界があり我々の世界があるな」
「それぞれの世界がある？」
「つまりは」
「そうだ。無数の世界が同時に存在しているのだ」
そうだとだ。ハイデルンは話すのである。
「それが並行世界なのだ」
「その通りよ。世界は一つじゃないの」
「無数にあるのよ」
妖怪達も話すのだった。

# 第九十話　孔明、秘策を授けるのことその四

「それでね。あたし達はね」
「その並行世界の監視と管理が仕事なの」
「あらゆる世界の均衡が保たれるようにね」
「常に働いているのよ」
「それではだ」
タクマがその彼等に問う。
「この世界はやはり」
「ええ、均衡が脅かされているわ」
「均衡を破壊しようという連中にね」
「ではあれなのか」
孫権はここまで聞いて述べた。
「あの白装束の者達は」
「ええ、並行世界の均衡を脅かす者達よ」
「私達監視者と対立する立場にいるのよ」
「そうか。話はわかった」
孫権もここまで聞いて述べた。
「私達の世界のあらゆる異変はあの者達が黒幕だったのか」
「ええ。あちらの世界のあらゆる怪しげな勢力と手を組んでね」
「そうして彼等をこちらの世界に導いてね」
「それで。この世界を破壊しようとしているのよ」
「勿論その後であちらの世界もね」
つまりだ。二つの世界を破壊しようとしているのだ。
そのことを聞いてだ。誰もが言うのだった。
「洒落になってないな」
「そうだよな」
「これは」
「そう、一つの世界だけの問題じゃないの」

「あらゆる世界にとっての問題なのよ」
また話す怪物達だった。
「だからこそあたし達はこの世界に来てね」
「今ここにいるのよ」
「話はわかりました」
劉備が応える。
「では私達に」
「協力させてもらうわ」
「喜んでね」
二人はまたこのことを答えた。
「というよりか是非共」
「協力させて欲しいのよ」
「この世界の為にだな」
関羽が二人に尋ねた。
「そうだな」
「ええ、そうよ」
「その通りよ」
彼等にしてもそうだと返すのだった。
「あたし達の役目以上にね」
「世界もそこに住んでいる人達も守りたいのよ」
職務以上のものをだ。抱いているというのである。
「だから。本当にね」
「御願いするわ」
「わかったのだ」
強い顔で頷く張飛だった。
「では力を貸して欲しいのだ」
「御願いします」
劉備も彼等に言う。
「是非共」
「そしてだ」

ここでもう一人来た。彼は。
華陀だった。彼は真剣そのものの顔で一同に話すのだった。
「連中は太平要術の書も使っている」
「あの書ね」
「そう、あれだ」
こう曹操にも話す。
「久しいな。皆元気で何よりだ」
「そうですね。華陀さんも」
劉備がその華陀に応える。挨拶も為される。
その挨拶の後でだ。華陀はさらに話した。
「あの書は人の負の感情を集めそれを糧として力を蓄えるものだ」
「そしてその書の力でも」
「この世界を」
「そうだ。奴等は何段も手段を用意しているんだ」
華陀もだ。そのことをはっきりと把握していた。だからこその言葉だ。

# 第九十話　孔明、秘策を授けるのことその五

「この世界を滅亡させる為にな」
「オロチ、アンブロジア、常世」
「そして太平要術の書」
「本当に幾つもだな」
「何段も用意してか」
「そうしているんだな」
「用意周到なんてものじゃないな」
皆華陀の話を聞いて言う。敵のその備えの見事さをだ。
「そこまでしてこの世界を滅ぼしたいのかよ」
「そしてもう一つの世界も」
「俺達の世界もか」
「何もかもを」
「力があるなら全て使う」
華陀はここでまた言った。
「それは当然だ」
「だからそうしてきている」
「向こうもありったけの力を使ってか」
「仕掛けてきているんだな」
「それならです」
孔明だ。意を決した顔で両手を拳にして胸の前に置いてだ。そのうえで仲間達にこう話すのだった。
「私達も全ての力を使いましょう」
「そうよね。向こうもそうしてくるのなら」
鳳統も言う。
「こちらもそうしましょう」
「ええ。それで今は」
「今一番危険なのはだ」

ここでだ。また言う華陀だった。
「書だ」
「その太平要術の書」
「あの書ですね」
「あれですか」
「あの書は既に力を極限まで手に入れている」
その内包できる極限までというのだ。
「後は開放するだけだ」
「ではその力を開放したら」
「この世界は崩壊する」
「その書の力で」
「そうするつもりなんですね」
「そしてその開放を邪魔しようとする俺達を排除する為にだ」
その為にだというのだ。
「今洛陽の南に軍を置いているのだ」
「その軍にも勝たないとね」
「そうしないと駄目よ」
ここでまた話す貂蝉と卑弥呼だった。
そして書もね」
「ちゃんと封印して」
「戦はです」
その戦はどうするか。鳳統が話してきた。
「今袁紹さんの軍は擁州を奪還されましたね」
「あら、気付いていましたの」
「はい、そのことは」
「情報を手に入れたと言うべきかしら」
鳳統の軍師としての力量を考慮しての言葉だった。
「若しくは」
「それは」
「まあいいですわ。とにかくでしてよ」

「はい」
「擁州のわたくしの軍も使うのでしてね」
「あの人達には敵の後方を衝いてもらいます」
まずはだ。彼女達の軍を動かすというのだ。
「審配さん達には」
「将のことも御存知とは」
袁紹はここでも鳳統の力量を見た。そのうえで目を鋭くさせる。
「貴女、やはり」
「あの、それは」
高評価を与えられつい赤面してしまう鳳統だった。
「申し訳ありませんが」
「照れ性なのですね」
このことははじめてわかる袁紹だった。それで一旦言葉を引っ込めてあらためて鳳統に話す。
「それでわたくしの兵も使って」
「そしてそれだけではなくです」
まだだ。兵を使うというのである。

# 第九十話　孔明、秘策を授けるのことその六

「私達の兵も二手に分けましょう」
「二手に？」
「成程、そうするのですね」
郭嘉と程？がここで頷いて言った。
「主力は前から攻め」
「そして別働隊が側面から」
「はい、そうです」
まさにその通りだとだ。鳳統は曹操軍の軍師二人に応えてさらに話す。
「幸い我々は兵力では優位に立っていますし」
「そうですね。我が軍と袁紹殿の軍を合わせただけで」
「二十五万を優に超えます」
ここでまた言う郭嘉と程？だった。
「そこに孫策殿と袁術殿の兵」
「合わせて五十万を超えます」
「そこにさらに董卓殿と劉備殿の兵」
「七十万ですね」
ほぼだ。大陸中の軍が集っていると言っても過言ではない。彼等は進軍中に援軍を入れたりそうしていってだ。それだけの兵を持っているのだ。
「確かに敵は手強いですが」
「それだけの兵がありますし」
「こちらはそれを使いましょう」
兵力的に優位なことをだ。鳳統は利用しようというのだ。
「そのうえで敵を囲み殲滅します」
「そしてそこで問題になるのは」
ここで言ったのは曹操だった。

「敵を側面から衝く別働隊ね」
「はい、その別働隊ですが」
鳳統はその側面を衝く別働隊についてもすぐに話した。
「十の軍に分けます」
「十になのね」
「左右二つずつ。縦に五段にして」
そうしてだというのだ。
「その方々に側面を衝いてもらいましょう」
「わかったわ。では将を選ぶのは任せるわ」
曹操はそのことも鳳統に任せるとした。
「前から攻める主力のこともね」
「有り難うございます」
「敵軍はこれでいいわね」
曹操は戦についてはそれでいいとした。しかしだ。
そのうえでだ。このことに話をやるのだった。
「それで後は太平要術の書だけれど」
「それは俺が封印する」
そうするとだ。華陀が話す。
「任せてくれ」
「護衛はあたし達がするわ」
「任せてね」
貂蝉と卑弥呼は聞かれてもいないのに名乗り出た。
「期待していてね」
「ダーリンは絶対に守るから」
「いや、それは駄目じゃろ」
袁術は顔を顰めさせてすぐに駄目出しを告げた。
「その太平何とかの書を封印するのは密かに近付いてじゃろ」
「ええ、そうよ」
「その通りよ」
「ならそれではじゃ」

どうかというのである。
「あまりにも目立ち過ぎるではないか」
「あら、目立ち過ぎるの」
「そうなの？」
そう言われてだ。彼等はこう解釈するのだった。
「この美貌故にね」
「綺麗なのも罪なのね」
「まだ言うか、この連中は」
流石の袁術も呆れてしまった。二人のポジティブシンキングにだ。
しかしあらためてだ。こう彼等に告げるのだった。
「とにかくじゃ。御主達はじゃ」
「駄目なのね」
「ダーリンの護衛は」
「むしろその奇天烈な力を戦で使ってもらいたいのじゃが」
袁術も彼等のその桁外れの破壊力は認識していた。先程のウィンクや投げキッスだけで大爆発を起こさせたその力をだ。
「少なくとも戦には勝てるじゃろ」
「ならわかったわ」
「あたし達のこの力を戦の場で使わせてもらうわ」
今度は目を光らせ全身にオーラをまとっての言葉だった。どちらにしても不気味極まる。

# 第九十話　孔明、秘策を授けるのことその七

「じゃあダーリン、そっちはね」
「別の人に任せるわ」
「ああ、それでだが」
ここでまた話す華陀だった。
「劉備殿の剣だがな」
「私のですか」
「その剣はあっちの世界の連中」
「ほら、黄巾の乱の最後で出て来たあの黒髪の男よ」
「于吉っていうんだけれどね」
貂蝉と卑弥呼はこの男についても話した。
「あの男ともう一人。小柄な緑の髪の男がいるのよ」
「そっちは左慈っていうんだけれど」
「その連中が白装束の連中の頭目だ」
華陀も話す。
「あの連中にとって劉備殿の剣は効果があるんだ」
「それはどうしてなんですか？」
剣の持ち主が華陀に問うた。
「私の剣がどうしてその人達に効果が」
「あの連中は前にも何度かこの世界に介入していたのよ」
「その時にもね。あたし達と戦ったのよ」
「その時にあたし達が造った剣でね」
「劉備さんの御先祖様にあげたのよ」
衝撃の事実がだ。今明らかにされたのだった。
「その人はあたし達と一緒にあの連中と戦ってくれたから」
「それでなのよ」
「？まさかそれは」
周瑜は二人の話を聞いて察した顔になって言った。

「あの漢の高祖の」
「ええ、劉邦ちゃんよ」
「あの娘と一緒に戦って授けたのよ」
またしても衝撃の事実であった。
「漢王朝を統一して間も無くね」
「そうしたのよ」
「そうだったんですか」
それを聞いてきょとんとした顔になって応える劉備だった。
「御先祖様がですか」
「ええ、そうなのよ」
「事実って色々と面白いでしょ」
「というかびっくりし過ぎて」
孫策も唖然となっている。
「何て言っていいかわからないんだけれど」
「だが事情はわかってくれたわね」
「一連の事情が」
「それはね。とりあえずはね」
そうだと答える孫策だった。
「じゃあ華陀の護衛は劉備ちゃんがいいかしら」
「私がですか」
「だって。太平要術の書の傍には絶対に連中がいるわよ」
そのだ于吉達がだというのだ。
「だから。劉備ちゃんがいいじゃない」
「そうですか」
「ええ、それでどうかしら」
また言う孫策だった。
「それと関羽、張飛の二人もいれば護衛は完璧でしょ」
「いえ、まだです」
だが、だ。ここで孔明が言ってきた。
「向こうも桃香様の剣のことは御存知の筈です」

「ですよねえ。だってあの人達にとっての天敵ですから」
陸遜も話す。
「だったら余計に」
「桃香様が護衛を勤められるどころではなくなります」
劉備が集中的に狙われることによってだ。そうなるというのだ。
「最悪の場合何もかもができなくなります」
「ですが華陀さんの護衛は劉備さんが最適ですよ」
陸遜は孔明にこのことも話す。
「ですから。ここは」
「一つ仕掛けができればいいのですけれど」
こんなことも言う孔明だった。
「敵の目を欺く」
「そうしてその隙にですね」
「はい、華陀さんが書を封印されます」
孔明は己のその策を話していく。

# 第九十話　孔明、秘策を授けるのことその八

「これならどうでしょうか」
「はい、いいと思いますよ」
陸遜は穏やかかつにこやかに笑って劉備の暗に賛成した。
「つまり。劉備さんの影武者を置いて敵の目をそちらに向かわせて」
「それでその隙にです」
「ああ、そうそう」
ここでまた言う孫策だった。
「華陀は隠して行った方がいいわね」
「俺は隠れるのか」
「あんたそういう術とか使えるかしら」
「いや、残念だがそうした術は使えない」
少なくとも彼は妖術使いではないのだ。
「戦うことはできるがな」
「そうなのね」
「そうだ。悪いがな」
「いえ、まあそれはね」
どうかというのだ。孫策も何度か少し頷きながら話す。
「普通に考えれば当然だしね」
「それで劉備殿と一緒に行きか」
「それは御願いね」
「わかった。しかしやはりな」
応えながらも劉備を見てだ。彼もこのことについて言及した。
「劉備殿は狙われるな」
「天敵ですから」
それでだというのは間違いなかった。孔明もこのことについてまた話す。
「護衛としては不可欠でも。諸刃の剣です」

「危険な話なのは確かよ」
最初に言う孫策もそれは認める。
「けれど。それでもね」
「それが一番ですね」
「言っておくけれど。彼等強いわよ」
「あたし達と同じだけね」
于吉達の力については貂蝉と卑弥呼が最もよくわかっていた。
「だから。劉備さんの剣の力は必要よ」
「ダーリンが書の力を封じることを成功させる為にはね」
「ですが。本当にです」
孔明の懸念は消えない。
「ここでは相手の目を眩ます策が必要です」
「もう一人の私なのね」
劉備自身も言う。
「誰かいるかしら」
「それならです」
徐庶がここで言う人物は。
「張角さんはどうでしょうか」
「張角さん？」
「あの人？」
「はい、本当にそっくりですから」
二人のその外見についてはだ。知る者は誰もが認めることだった。
「じゃあここは張角さんの協力を得て？」
「それでか？」
「ああ、あの娘ね」
ふとだ。曹操が気付いた様に言葉を出した。
「あの娘なら今呼んでるけれど」
「ああ、そういえばな」
「そうだったよな」
ここでふと気付いたのはマイケルとミッキーだった。

「曹操さん景気付けとか勝った時の祝いにってな」
「あの三姉妹呼んでたな」
「何か好都合だよな」
「そうだよな」
「呼んだのは偶然だったけれどよかったわ」
心からだ。安堵して言う曹操だった。
「本当にね」
「はい、じゃあ張角さんとお話をして」
「そうするのね」
「それで張角さんは何時来られますか？」
孔明はこのことから話した。

# 第九十話　孔明、秘策を授けるのことその九

「来られ次第すぐに」
「皆、お待たせーーーーーーーっ」
言っている傍からだった。能天気が声がしてきた。
「元気だった？来たよーーーーー」
「何か深刻？今」
「物騒な雰囲気」
妹達も来た。三人共場に馴染んでいない。
「戦の前だから？」
「それでこんなに」
「その通りよ」
曹操が三姉妹に答える。
「それでだったんだけれどね」
「あっ、丁度よかったです」
孔明は張角を見て笑顔で話した。
「御願いがあるんですけれど」
「何？色紙？」
能天気なままの張角だった。
「じゃあ筆貸してね」
「それもありますけれど」
色紙についても忘れていない。しかし今はそれ以上にだった。
「あの、それで」
「それで？」
「詳しい話をしたいんですが」
こうしてだ。孔明は戦と策のことを張角に話した。話を聞いてだ。
張角はここでも能天気な調子でだ。明るく笑ってこう答えたのだった。
「うん、いいよ」

「いいんですね」
「だって。劉備ちゃんには黄巾の乱の時助けてもらったし」
義理があるというのだ。
「それに劉備ちゃんのことってどうしても断れないから」
「それじゃあ本当に」
「そうさせてもらうわ」
こう孔明にも言うのである。
「是非共ね」
「有り難うございます。それじゃあ」
「すぐに準備に取り掛かろう」
「私達も」
張梁と張宝も言う。
「あたし達戦うことはできないけれど」
「歌うことはできるけれど」
「歌はこの後よ」
戦いの後だとだ。曹操も言う。
「とにかくよ。張角には御願いね」
「わかってるって。私頑張るからね」
「実力は凄いんだけれど」
曹操は能天気なままの張角を見ながら不安な顔になって話した。
「ただねえ。性格がねえ」
「性格って？」
「だから。あんたのそのお気楽極楽な性格よ」
本人に対しても言う。
「あんたの個性だけれどね」
「だって私しっかりするのとか苦手だから」
「それもわかってるけれど」
把握しているうえで後援をしている曹操なのだ。
「まあ。今回は御願いね」
「うん、任せて」

「というか責任重大だから」
能天気な調子を崩さない彼女に言い続けはした。だが何はともあれだ。

# 第九十話　孔明、秘策を授けるのことその十

これで戦のことも書のこともおおよそ決まった。それからであった。

孔明は軍議の後で李典の天幕を訪れてだ。彼女にある頼みごとをしたのだった。

「あの」

「おお、孔明ちゃんか」

笑顔で孔明に声をかける李典だった。今も何かを作っている。

「さっきは見事やったな」

「いえ、私はそんな」

「そこで謙遜するのがええとこやで」

李典はにこりと笑って恥ずかしそうにする孔明に言った。

「孔明ちゃんらしいわ」

「私らしいですか」

「そや。ほんま可愛いわ」

今度はこう言う李典だった。

「で、何で来たんや？お酒ならあるで」

「いえ、お酒ではなく」

「ほなお菓子か？」

「お菓子は食べたいですけれど」

それでもだとだ。孔明は李典を言うのだった。

「実は。御願いがありまして」

「んっ？御願い？」

「はい、仮面を作って欲しいんですけれど」

「仮面っていうたら」

李典は孔明の話を聞いてだ。ふと察したことは。

「あれかいな。趙雲が付ける」

「はい、あれです」

「本人は強引にばれてないということにしてるけどな」
「まあそれは置いておきまして」
孔明は話を軌道に戻した。話が進まないと思ってだ。
「それであああした仮面は作れますか？」
「ああ、お安い御用や」
気軽な言葉で返す李典だった。
「ほな早速作ろか？」
「御願いできますか？」
「御礼はお菓子でええで」
白い歯を見せて笑って。孔明に言った。
「ケーキがええな」
「ケーキですか」
「孔明ちゃんのケーキは最高に美味しいさかいな」
だからだというのだ。
「あのチョコのケーキがええわ」
「わかりました。それじゃあ」
「この戦いが終わってからな」
何気に危険な旗が立ってしまった。
「一緒に食べよで」
「はい、一緒に」
「こんなこと言うとけったいなことになりそうやけどな」
「大丈夫ですよ。皆さん死にません」
「それは大丈夫なんかいな」
「星も見ましたが」
孔明は星から多くのものを知ることができる。軍師として占星術も身に着けているのだ。
「皆さんこの戦いではです」
「死なへんねんな」
「苦難は続く様ですが」
このことはだ。やや暗い顔で話す孔明だった。

「ですが死ぬことはないようです」
「っていうと苦難の後の大団円かいな」
「そうなると出ています」
「何や、王道やねんな」
「そうですね。王道ですね」
「そやったら安心して戦おか」
ここでも白い歯を見せて笑う李典だった。
「どうせ戦うんやったら幸せな結末が一番やさかいな」
「そうですよね。最後の最後はね」
「ハッピーエンドがええさかいな」
こんな話をしてだ。孔明はまた一つ策を用意した。こうしてこの世界の為のあらゆる策が仕掛けられだ。都の南での決戦となるのだった。

第九十話　　完

２０１１・６・１６

# 第九十一話　ゲーニッツ、暴れ回るのことその一

第九十一話　ゲーニッツ、暴れ回るのこと

都の南に集結している白装束の軍勢、その中でだ。
社は腕を組み前を見据えながら隣にいるゲーニッツに話した。
「面白い戦いになりそうだな」
「はい、まさに決戦ですね」
「暴れるよな」
「それはお互いのことかと」
礼儀正しい動作で答えるゲーニッツだった。
「貴方もですね」
「ああ、今から楽しみだぜ」
社は実際に楽しげな笑みを浮かべて言葉を返す。
「こっちの世界の連中も腕が立つしな」
「しかも私達の世界からもです」
「全員来てるからな」
「楽しみなことが実に多いです」
「で、どうやって暴れるつもりなんだ？」
社はゲーニッツにだ。どうした暴れ方をするのかも問うた。
「風を使うのは当然にしてもな」
「色々と考えています」
「色々とか」
「どうして戦うのかを考えるのもまた楽しみです」
ゲーニッツも前を見ていた。目の前にいる連合軍を見てだ。
「さて、それではです」
「いよいよ決戦だな」
「そうなります」
「若しもです」

二人のところに影の様にだ。于吉が現れて言ってきた。
「ここでことが成就せずともです」
「何だ?不吉なことを言うな」
「若しここで敗れてもですか」
「はい、それでも次の手は用意してあります」
そうだというのである。
「しかも三つです」
「あら、それはまた随分と手が込んでいるわね」
「三段の備えなんて」
バイスとマチュアもだった。影から出て来ての言葉だった。
「ここで失敗しても備えはあるなんて」
「慎重なのね」
「ことを為すにはあらゆる事態を想定していかなければなりません」
于吉は思わせぶりな笑みも浮かべてバイスとマチュアにも話す。
「既に定軍山と赤壁にです」
「西と南ね」
「それぞれなのね」
「ここから見ればそうなりますね」
定軍山と赤壁の場所、それはそこにあるということも確認される。
「定軍山には隠れる場所とあらかじめ念を集める場所を置いています」
「若しもここで敗れあの本に何かあっても」
「その場合でもなのね」
「はい、置いています」
そのだ。定軍山にだというのだ。
「そして赤壁にもです」
「あの場所は確かじゃ」
朧が言う。やはり何時の間にか出て来ていた。
「長江の。あそこじゃな」
「はい、水です」

于吉はその赤壁についても話すのだった。
「あの場所に私達がいるという話を流してです」
「成程のう。それであの者達を呼び出してじゃな」
「そこで皆殺しにします」
于吉の笑みに邪悪なものが宿る。ドス黒い、闇の笑みだ。
「その断末魔の念を集め邪魔者も消します」
「いい考えじゃ。それも置くのじゃな」
「はい、既に置いています」
赤壁にもだ。備えは置いているというのだ。
「これが二つ目です」
「で、最後は何だ？」
社がその三段目を于吉に問うた。
「山と水に続いては」
「草原です」
そこだというのだ。
「北の草原にあります」
「ほほお、それでか」
朧は于吉の今の話を聞いて面白そうに笑って述べた。

# 第九十一話　ゲーニッツ、暴れ回るのことその二

「わしをあそこに行かせたのか」
「そうです。朧さんには下地を作ってもらいました」
「ああして乱を起こしてじゃな」
「若し赤壁でことが為らなければです」
「北で起こすか」
「あの地全体に。私の世界の念を直接つなげさせています」
「それは俺がした」
左慈も出て来た。やはり影の如く。
「俺達の仲間達の力も使ってな」
「そちらの世界のじゃな」
「そうだ。そうした」
左慈は朧の問いに答える。
「赤壁でしくじったらすぐにそれをはじめてだ」
「そこで決戦を挑みです」
于吉もこのことを話す。
「彼等を消し去りこの地に負の念を送り込み」
「この世界を破壊と混沌が支配する世界にするんだな」
「はい、貴方達も望まれるそうした世界にです」
于吉は社に話すのだった。
「そのつもりです」
「俺達はあれなんだよ」
社は完全にオロチ、人とは違う存在として話すのだった。
「人間の世界、文明ってやつをな」
「否定されていますね」
「ああ、言うなら俺達は自然そのものなんだよ」
「自然、破壊と混沌ですね」
「俺達が考える自然はそれだ」

それはだ。原初であった。そうした意味での自然なのだ。
「そういうものだからな」
「だからこそですね」
「あんた達もそもそもそうだよな」
「はい、私達はそれと自然と呼びませんが」
「目指すものは同じだな」
「邪神、そうした言葉がありますが」
于吉はだ。そうした言葉も出したのだった。
「私達をそう呼ぶ言葉もありました」
「邪神か」
「ははは、よい響きの言葉です」
その邪神という言葉を喜んでさえいる于吉だった。
「人間の世界、下らない世界なぞ破壊するべきですから」
「そういうことです。文明なぞ唾棄すべきものです」
礼儀正しい。だがそこにあるものは無限の侮蔑、それがゲーニッツの言葉だった。
「人はそれを知りあらゆるものを忘れ歪んできました」
「だからなんだな」
「はい、私達はその文明を根絶します」
ゲーニッツもまたオロチとして話す。
「そしてその一環として」
「俺も働かせてもらう」
刹那だった。この男もいた。
「この世を破壊し。常世とつなげる」
「この世を冥府にされますね」
「それもまた破壊と混沌だな」
「はい、そうです」
于吉は刹那のその考えもよしとするのだった。
「その通りです」
「ではだ。そうさせてもらう」

「是非。そうして下さい」
にこやかに刹那の言葉を認めるのだった。
「それもまたよしです」
「そうね。破壊と混沌はいいもの」
ミヅキまで来た。異形の者達が揃った。
「それにこそ真実があるもの」
「さて、それではです」
「進みましょう」
こう話してだった。彼等は戦に挑むのだった。今戦いがはじまろうとしていた。そしてその彼等の上でだ。空を飛ぶ者達がいた。
アルフレドに乱鳳、それに眠兎だった。普通に空を飛びだ。白装束の軍を上から見てだ。そのうえで話をしていた。
「やっぱり多いね」
「五十万、普通にいるな」
「しかも全員揃ってるよ」
三人はそれぞれ話す。
「何か他にもいるみたいだけれどね」
「ちっ、隠れてるのかよ」
「相変わらずずるい奴等ね」
「それでもね」
アルフレドは乱鳳と眠兎にまた話す。
「この戦いには絶対に勝たないといけないからね」
「っていうか負けるのは大嫌いだからな」
「あたしもね」
責任感はないがこうした考えは持っている二人だった。
「だったら。やるか」
「陣に戻ってからね」
「よし、じゃあ戻ろう」
また言うアルフレドだった。

# 第九十一話　ゲーニッツ、暴れ回るのことその三

「まずはね」
「よし、それじゃあ本陣に戻って」
「報告しよう」
「しかし。フリーマンやそうした連中もいるなんてね」
アルフレドは赤髪の怪しい男の姿も確認していた。
「それにホワイトにルガールも」
「それにネスツとかもだろ？そっちの世界の連中も」
「一杯いたけれど」
「うん、向こうもオールスターだよ」
いい意味でのオールスターではない。逆の意味である。
「これは大変な戦いになるね。わかっていたけれど」
「楽しい戦いになるぜ」
「うん、とてもね」
アルフレドと彼等の感性は違っていた。だがそれでもだった。
彼等は一旦陣に戻りだ。そのうえで全てを報告した。ホワイトの話を聞いて怒ったのはビリーだった。
「あいつまで来ていたのかよ」
「うん、いたよ」
大地に戻っていたアルフレドは怒るビリーにさらに話す。
「勿論他にもね」
「フリーマンねえ」
ジェニーはフリーマンについて言及した。
「生きているとは思っていたけれどね」
「こっちの世界にも来ていたか」
ロックも忌々しげに話す。
「それならな」
「倒す。選択肢はこれだけよ」

ジェニーの言葉は至ってシンプルだった。
「そうしましょう」
「さて、それではだ」
関羽が一同に言う。
「出陣だ。我々は別働隊として行く」
「別働隊は劉備さんの軍全部と董卓さんの軍の精鋭だったよな」
「うむ、そうだ」
ビリーに答える関羽だった。
「そして貴殿等の世界の精鋭達もだ」
「私もそれに参加する」
「私もだ」
ギースとクラウザーだった。華陀と行動を共にする彼等も参加しているのだ。
「そうさせてもらう」
「是非な」
「まさかここでギース様と出会うなんてな」
ビリーはいささかバツの悪い顔で苦笑いを浮かべた。
「おられるとは思っていたけれどな」
「実は我々もだ」
「いたりするのだ」
サングラスの二人の男だ。一人はスキンヘッドである。
「実はギース様とだ」
「行動を共にしてたのだ」
「誰なんだよ、あんた達」
アクセルがその二人を見て怪訝な声で問うた。
「急に出て来たけれどよ」
「まさかと思うが劉備殿のところにいる」
ローレンスはよりによって彼女の名前を出す。
「あの何とかとかいう」
「ええと、西園寺だったかな」

アルフレドはこの名前を出してしまった。
「ワールドだったっけ。その人だよね」
「ああ、あの白馬に乗ってるか」
「あの人だったな」
アクセルもローレンスも彼女の名前を覚えていない。覚えられないのだ。
「何か影が薄くてな」
「いることすら気付かないが」
「そういう人っているからな」
勿論ビリーも知らない。知らないうえでの言葉だ。
そしてあらためてだ。彼は二人を一同に紹介した。
「ホッパーとリッパーっていうんだよ。俺よりもずっと古くからギース様の側近を務めているんだよ」
「では悪人なのだ」
張飛はすぐにこう断定した。ギースのことは彼女も聞いているのだ。

# 第九十一話　ゲーニッツ、暴れ回るのことその四

「悪い奴の手下なら悪い奴に決まっているのだ」
「否定はしないが」
「そこまで率直に言うのか」
「けれど悪い奴なのだ。その姿が何よりの証拠なのだ」
黒いスーツにサングラス、二人の姿は如何にもだった。これでは否定のしようがない。しかもその全身から出ているオーラもだ。そのものだった。
「出来れば懲らしめたいのだ」
「糞っ、出て来ていきなりこう言われるのか」
「これが俺達の運命か」
「しかし悪人なのは確かだ」
関羽もこのことを言う。
「それはわかる」
「悪事を一杯してきたのだ」
「それはその通りだ」
彼等の主であるギース自身が認めることだった。
「私は頂点に立つまでに様々なことをしてきた」
「そうだな。それは俺も聞いている」
ロックも言う。
「息子としてな」
「そうだったな。貴殿の父だったな」
「こいつがなのだ」
「そうさ。とはいっても実際に話したことは全くないんだよ」
そうした父子なのだ。
「こいつが俺の縁者なのも知らなかった」
「私は知っていた」
ロックの後ろにいて彼の人差し指での指し示しに応えたのはカイ

ンだ。
「それもよくな」
「俺があんたの甥にあたることもだな」
「そうだ。よくだ」
「因果な話だ」
ロックは少しバツの悪い顔になって言った。
「俺の周りはそうした話ばかりだ」
「それが君の運命なのだ」
カインはそのロックに静かに告げる。
「だがそれでも君は彼と共に行くか」
「ああ、テリーとな」
彼が選んだ選択はそちらだった。
「一緒に行かせてもらう」
「ならそうするといい。私はだ」
「あんたはどうするんだ？」
「私は私でやることがある」
こうだ。彼は遠くを見る目でロックに話す。
「それをさせてもらう」
「私もだ」
そしてだ。それがギースもだった。全身にオーラを纏い話すのだった。
「頂点に立った。だがその頂点はだ」
「権力ではなかったのだな」
「それがわかってきた」
クラウザーに、何よりも憎んできた腹違いの兄弟への言葉だった。
「無論今の権力を手放すつもりはないが」
「だが真の頂点を目指すか」
「そうする」
これがギースの今の考えだった。
「私はな」

「拳。真の力での頂点をだな」
「それを目指す」
これがだ。ギースが真に目指すものだった。彼もそのことに気付いたのだ。
「是非共な」
「やはり。同じなのだな」
クラウザーはギースの言葉を聞いてだ。彼もだというのだった。
「私もだ。目指すものはだ」
「頂点か」
「それだ」
まさにだ。それだというのである。彼もまた。
「ではだ。やがてはだ」
「再び拳を交えるか」
「その時が来ればな」
「私も。わかってきた」
次はカインだった。彼も同じだった。

# 第九十一話　ゲーニッツ、暴れ回るのことその五

「私の理想がだ」
「理想か」
「そうだ。私の理想は何か」
ロックに対しての言葉である。
「それは力が支配する。餓狼の世界を創ることではなく」
「別のものだっていうんだな」
「それがわかった」
そうだというのである。
「具体的にはそれだとはまだ言葉には出せない」
「ある程度わかってきただけだな」
「それがこの世界でわかった」
この世界に来てだ。カインも変わったのである。
「後はそれが何かをグラントと共に探す」
「そうするか」
「そうさせてもらう。さて、話はこれ位にしてだ」
「御前達を成敗するのだ」
まだホッパーとリッパーに言う張飛だった。
「さあ、覚悟するのだ」
「おい、冗談だろ」
「俺達は今味方だぞ」
「勿論本気なのだ」
しかしまだ言う張飛だった。その手には蛇矛が握られている。
「本気で冗談を言っているのだ。御前達は悪い奴でもそこから変わろうとしているのだ」
「おっ、それがわかるのか」
「ちゃんとわかるんだな」
「そうなのだ。鈴々もそういう奴はやっつけないのだ」

「人を見る目はあるんだな」
「あんた、意外と鋭いようだな」
「確かに鈴々は馬鹿なのだ」
自分でわかっていると言えた。
「けれど自分の目には自信があるのだ」
「それでわかるっていうのか」
「俺達の目は」
「そう、目がいいのだ」
その目の話をさらに続ける張飛だった。
「それこそ千里先の針まで見えるのだ」
「いや、それは無理だろ」
「人間の目ではないぞ」
ホッパーとリッパーは張飛の今の言葉にすぐに突っ込みを入れた。
「まあとにかくだ」
「そういうのはわかるんだな」
「あと御前達はそこの袴に忠誠を誓っているのだ」
今度はギースを見て言う張飛だった。
「それも絶対的なものなのだ」
「ああ、俺達の主はギース様しかいない」
「他の誰でもないさ」
そのことにも答える二人だった。
「やっぱりな。ギース様がおられないとな」
「俺達は誰にも仕えないからな」
「言うものだな。私は誰の面倒も見ないのだがな」
ギースは含み笑いで言う。
「それでも言うのか」
「言わせて頂きます」
「そして行動でも」
二人は微笑んでそのギースに答える。
「これからもお傍にいさせてもらいます」

「そして共に」
「私は幸せ者と言うべきか」
ギースは二人のことばを受けて今度は目を閉じて微笑む。そのうえでの言葉だった。
「周りに何かといるな」
「俺もいるぜ」
テリーだった。彼も来たのである。
「やっぱりこっちに来てたんだな」
「貴様もいたのか」
「ああ、来てたんだよ」
こう返すテリーだった。
「暫く見ないうちに結構丸くなったようだな」
「二度程度死んだせいか」
「それもあるかもな。けれどな」
「それに加えてこの世界に来てか」
「ああ、随分変わったみたいだな」
今のギースを見てだ。こう言うのである。
そしてだ。テリーはさらにだ。ギースにこうも言った。

# 第九十一話　ゲーニッツ、暴れ回るのことその六

「しかしな」
「今度は何だ」
「俺はあの時手前を倒した」
かつてのだ。ギースタワーでの戦いのことだ。
「俺は手を差し出したがな」
「あの時のことか」
「何で手を振り払ったんだ？」
問うのはこのことだった。
「それで落ちたんだ？」
「知れたこと。私は誰の助けも必要としない」
それでだというのだ。
「だからだ」
「それで死んでもよかったっていうんだな」
「それで死んだとしてもそれまでのことだ」
非常に素っ気なくだ。言うギースだった。
「だからだ」
「それでか」
「そうだ。ましてや貴様はだ」
「仇だっていうんだな」
「その貴様の助けなぞ借りはしない」
ギースは不敵な笑みに戻ってだ。目を閉じテリーにやや背を向けて話すのだった。
「それだけのことだ」
「へっ、そうなのかよ」
「そうだ。そしてだ」
「また闘うっていうんだな」
「何時でも来るのだ」

背を向けたままの言葉だ。
「遠慮なく倒してやろう」
「いいのか？また俺にやられるぜ」
「安心しろ。私は同じ相手に何度もやられはしない」
「だからだっていうんだな」
「特に貴様にはだ。敗れることはない」
「その言葉偽りじゃないんだな」
「そういうことだ。では待っているぞ」
こうテリーに告げてだ。そのうえでだ。
ギースはその場を去りにかかった。ホッパーとリッパーが従う。
その後姿を見てだ。テリーは言うのだった。
「相変わらずだな。ああしたところはな」
「そうなのか」
「ああ、ずっとああいう奴だ」
こうだ。関羽に軽口と共に話すのである。
「ひねくれてるっていうかねじれているというかな」
「ねじれているのだ」
張飛はそれだと断言した。
「あいつはそういう奴なのだ」
「わかるんだな」
「さっきも言ったけれど自分の目には自信があるのだ」
こうテリーにも言うのである。
「だからわかるのだ」
「それでなんだな」
「あいつは寂しい奴なのだ」
ここで張飛の目が鋭くなる。
「常に何かに餓えているのだ」
「それもわかるんだな」
「わかるのだ。とても寂しい奴なのだ。そして」
「そして？」

「御前もなのだ」
急にだ。クラウザーにも話を振る張飛だった。
「御前も寂しい奴なのだ」
「私もか」
「二人共寂しいものを宿らせているのだ。多分親のことなのだ」
「そこまでわかるのか」
「そういう奴を見たことがあるのだ」
見たものを忘れない。張飛は記憶力もよかった。
「だからわかるのだ」
「そうか。親か」
「子供は親から離れるものなのだ」
張飛の言葉はいささか説教めいたものになってきている。
「だからもうそうするのだ」
「そうだな。私もな」
クラウザーも目を閉じだ。微笑みつつ言うのだった。
「いい加減にな。前に進むべきだな」
「あの袴は悪い奴だが御前は違うのだ」
「私は悪ではないのか」
「そうだ。悪ではないのだ」
「おい、こいつはあれだぞ」
ここで言うテリーだった。クラウザーはどうかとだ。
「欧州の影の世界で生きる。裏のボディーガードなんだぞ」
「そうだよ。ドイツに代々続いているお貴族様でな」
イギリスの下町出身のビリーの言葉にはいささか悪意があるようだ。
「表向きは伯爵様だけれど裏じゃそうした護衛役をしてるんだよ」
「それで代々隠然たる力を持っていた」
ローレンスも話す。

# 第九十一話　ゲーニッツ、暴れ回るのことその七

「闇の帝王とさえ呼ばれている」
「それは住んでいる世界がそうであるだけなのだ」
しかしだ。張飛はそのことにも惑わされず言い切った。
「こいつは決して悪人じゃないのだ」
「その言葉キムに聞かせてやりたいな」
アクセルは張飛の今の言葉にしみじみとした口調で言った。
「あいつは裏の世界の護衛役っていうだけで悪ってみなしてたからな」
「あいつはなあ。偏見強いからな」
「我々も悪とみなされたからな」
そのことは三闘士も同じだった。ビリーとローレンスの今の言葉は困ったものになっている。
「悪ってみなしたら速攻で捕まってな」
「修業地獄行きだ」
「俺も危うく捕まるところだったからな」
それはアクセルも同じだった。彼も仲間達と同じ顔になっている。
「世界チャンプにカムバックして何とか助かったがな」
「俺もやばかったか？」
ここで言うのはミッキーだった。
「汚い仕事でボロ儲けしてたからな」
「ああ、あれだな」
ジョンもいた。ミッキーは当時軍にいた彼と組んで軍の武器の横流しをしていたのだ。無論悪事でありかなり儲かる仕事でもある。
「あれは確かに儲かったな」
「それってやっぱりキムから見ればだよな」
「悪だな」
テリーははっきりとミッキーに告げた。

「あんたもやばかったな、そりゃ」
「だよな。ああはなりたくねえからな」
ミッキーは真顔で言う。
「チャンやチョイみたいにはな」
「ああ、それであの連中今何処にいるんだ？」
ロックが彼等の行方について問う。
「生きてるよな」
「相変わらずだな」
テリーは彼等の行方についてこうコメントした。
「最前線でこき使われてるぜ」
「ああ、やっぱりそうなんだな」
「キムは容赦しねえからな」
「ううむ、あれはかなりな」
関羽もだ。首を捻り眉をやや顰めさせて言う。
「やり過ぎだ」
「けれど言って聞く人じゃないからな」
「そうなのか」
「昔からなんだよ。しかしギース達は変わってもな」
「それでもか」
「あの人だけは全然変わらないな」
テリーの言う通りだった。キムは今もだ。最前線でチャン達をこき使いだ。こう言っていた。
「さあ、戦いになればだ！」
「俺達が先陣っていうんですかい」
「そうでやんすね」
「そうだ。悪を討つ！」
彼だけ妙にテンションが高い。言いながら偵察をしている。
「いいな。この戦いにこの世界がかかっているのだ！」
「それはいいんですけれどね」
「あの、あっし等今は」

「むっ、どうしたのだ？」
「朝は肉体労働で」
「今偵察してるでやんすよ」
つまりだ。休むことなくこき使われているのだ。
「それで帰ったら戦場なんですか」
「凄くハードでやんすよ」
「それがどうかしたのか？」
キムだけが何でもないといった口調である。
「普通のことではないのか」
「そうですか。普通なんですか」
「旦那にとっては」
「そうだ。帰ったら昼食だ」
流石に食事は忘れない。しかしそれでもだった.
「食べたらすぐに戦場に向かうぞ」
「本当に休まない旦那だよな」
「ジョンの旦那もでやんすけれど」
見ればだ。ジョンもいた。彼は山崎達を連れてだ。同じく偵察をしている。
その中でだ。ジョンもキムと同じことを言っていた。

# 第九十一話　ゲーニッツ、暴れ回るのことその八

「さあ、帰れば食事、そして戦いです」
「だから俺達何時休めばいいんだよ」
「この旦那本当の鬼だろ」
山崎に臥龍がそれぞれ困り果てた顔で言う。
「ったくよ、こっちの世界に来ていいことなんて何もないな」
「早く帰りてえな」
「皆さん頑張りましょう」
やはりジョンだけが元気だ。
「この世界の為に」
「へいへい、わかってますよ」
「頑張らないと速攻で蹴られるしな」
そんな鬼の如きスパルタ教育が続けられるのだった。そしてだ。
遂に戦いがはじまる。まずはだ。
袁紹や曹操達が率いる主力部隊がだ。敵軍に向かって進軍をはじめた。
「全軍進撃！」
「いくわよ！」
袁紹と曹操はそれぞれ剣と鎌を掲げて指示を出す。
「この戦いに全てがかかっていますわよ！」
「天下の平穏、取り戻すわよ！」
こう言ってだ。早速だった。
袁紹は馬を飛ばそうとする。しかしそれはだった。
即座にだ。夏侯惇と夏侯淵に止められた。
「御待ち下さい」
「予想通りの行動はしないで下さい」
「むっ、今こそ私が前に出て」
「ですから。総大将ですから」

「本陣で全体の指揮を御願いします。
夏侯惇もここまでは正論だった。しかしだ。
彼女もだ。結局こう言い出すのであった。
「ここは私が先陣を務めます。ですからいざ」
「待て姉者」
夏侯淵は今度は姉を止めることになった。
「姉者は本陣の護衛だぞ。それで何故先陣を言い出すのだ」
「私が先陣でなくてどうするのだ」
まだ言う夏侯惇だった。
「やはりここはだ」
「だから留まってくれ。既に先陣は出ている」
「誰だ、それは」
「公孫賛殿だ」
彼女がだというのだ。
「それはもう決まっているではないか」
「誰だ、それは」
夏侯惇は真顔で妹に問い返した。
「聞いたこともない名前だな」
「本当に知らないのか？」
「知らぬ。先陣は夏瞬と冬瞬ではなかったのか」
「ああ、そういえばね」
「そうでしたわね」
曹操と袁紹もだ。ここで顔を見合わせて話すのだった。
「あの赤い髪の娘をね」
「どなたか存じませんが先陣を名乗り出たので」
「それで決めたわね」
「今まで夏瞬さんと冬瞬さんと思っていましたわ」
「何故御二人も御存知ないのだ」
夏侯淵もこのことには唖然だった。
「決まったというのに」

「だから誰よ、その公孫何とかって」
荀？もだ。顔を顰めさせて夏侯淵に問い返す。
「聞いたことないけれど」
「軍師の御主まで言うか」
「だから。誰の配下なのよ」
「劉備殿の客将だ。それで前の幽州の牧だった」
「劉備殿の配下なら皆知ってるけれど」
ここまでは軍師として当然のことだった。しかしだった。
「そんな名前の将知らないわよ。あっちの世界の人でもいないわよ」
「こちらの世界の者だが」
「それで幽州の牧って」
今度はこのことについて言う荀？だった。
「ずっといなくて袁紹殿がなったんじゃない」
「そうですわ。わたくしが異民族討伐の功で任じられたのですわ」
袁紹自身も眉を顰めさせながら言う。
「あの州にはそれまで牧はいませんでしたわ」
「そうよね。秋蘭もおかしなことを言うわね」
当然ながら曹操も知らないのだった。

# 第九十一話　ゲーニッツ、暴れ回るのことその九

「そもそも公孫賛って何者なのよ」
「とにかくだ。そのよくわからないのが先陣なのか」
まだ言う夏侯惇だった。
「我等は先陣にはなれないか」
「そのうち嫌でも戦うことになるわ」
曹操は残念がる夏侯惇を宥める様にして述べた。
「安心しなさい」
「わかりました。それでは」
夏侯惇もようやく大人しくなった。曹操はそれを見てから返す刀で袁紹に言うのだった。
「貴女もよ。嫌でも戦うことになるわ」
「わかりましたわ。それではですわね」
「ええ、今はどっしりと構えましょう」
曹操は前を見据えながら袁紹達に言う。
「戦いははじまったばかりよ」
「そうですね。これからですね」
荀?も頷く。そしてその目の前では。
戦いがもうはじまっていた。公孫賛は剣を手に白馬に乗りながら指揮している。
「進め！歩兵は前に進め！」
「では騎兵は！」
「どうされますか！」
「それぞれ左右から攻める！」
そうするとだ。兵達に言うのである。
「わかったな。そうするぞ！」
「了解、それでは！」
「そうしましょう！」

「この戦いで決まる」
彼女もだ。このことはわかっていた。
「だからこそだ」
「はい、それでなのですが」
「敵もまた」
来ていた。そしてその先頭にはだ。
青い服の顎鬚の男がいた。男は不敵な笑みを浮かべて呟いた。
「楽しいゲームのはじまりです」
「その通りだ」
隣にいる刹那が彼の言葉に頷く。
「好き放題やらせてもらおう」
「それではです」
ゲーニッツが左手を手首のスナップを利かせて上にやった。それと共に言う言葉は。
「そこですか!?」
それだけでだ。竜巻が起こりだ。連合軍の兵達を吹き飛ばす。
それが次々に出されてだ。連合軍を撃つ。それを見てだ。
連合軍の動きが止まった。公孫賛もその竜巻に唖然となる。
「何だ!?何が起こっているのだ!」
「将軍、あの男です!」
「あの男がです!」
士官達がすぐに驚いている彼女に言う。
「竜巻を起こしています!」
「その手首を動かしただけで!」
「そうか、あいつか!」
ここで草薙達の話を思い出す公孫賛だった。
「あいつがあのゲーニッツか!」
「ゲーニッツ!?」
「ゲーニッツといいますと」
「オロチ一族八傑集の中でも最強の四人の一人!」

それだというのだ。
「四天王、吹き荒ぶ風のゲーニッツだ！」
「それがあの男ですか」
「あの竜巻を起こしている」
「くっ、向こうはあいつが先陣か！」
公孫賛は歯噛みして言った。
「まずいな」
「大変です！兵達がです！」
「次々と吹き飛ばされています！」
公孫賛が歯噛みする間にもだ。ゲーニッツの竜巻は次々と起こりだ。
連合軍の兵達を吹き飛ばす。それを見てだ。
公孫賛は自ら馬を出そうとする。だがここでだ。
「いや、俺達が行く」
「やらせてもらうわ」
草薙と神楽だった。二人が出て来て言うのだった。
「オロチを倒すのは俺達の仕事だからな」
「ここは任せて」
「貴殿等がか」
公孫賛は馬を止めて二人に言った。
「やってくれるのか」
「最悪でも足止めにはなるぜ」
「そうさせてもらうわ」
「無理だな」
不意にだ。何者かの声がしてきた。
「御前等では無理だ」
「へっ、相変わらず絶好のタイミングで出て来るな」
「来たのね」
「あいつは好かん」
こうも言ってだ。出て来たのは。

八神だった。彼が出て来てそうして言うのだった。
「オロチ自体がだ。俺は嫌いだ」
「嫌いだからか」
「それで今はあの男と」
「俺は俺でやらせてもらう」
共闘するとは言わない。それが八神だった。
その彼がだ。さらに言うのだった。
「それでいいな」
「ああ、別にな」
「それでいいわ」
八神のことを知っている二人もだ。それでいいとした。そしてだ。
二人、それに加えて八神も前に進んでだ。ゲーニッツに向かうのだった。その彼等を見てだ。ゲーニッツも竜巻を止め楽しげな笑みで言った。

# 第九十一話　ゲーニッツ、暴れ回るのことその十

「おや、早速ですか」
「ああ、手前がいるのならな」
「戦わせてもらうわ」
草薙と神楽は二人並んでいる。無論その横には八神もい。
「オロチ一族の中でもずば抜けた強さを持つ手前はな」
「ここで封じておきたいから」
「死ね」
八神はゲーニッツを見据えて告げた。
「この俺が焼き尽くしてやる」
「おやおや、物騒なことですね」
ゲーニッツはその彼等にも楽しげな笑みを浮かべる。
「しかしそれがいいです」
「いっていうのかよ」
「戦いは最高の娯楽です」
その考えが実によく出ている言葉だった。
「それが思う存分楽しめるのですから」
「へっ、オロチは何処に行ってもオロチだな」
草薙は八神の今の言葉に目を鋭くさせる。
「戦いが好きなんだな」
「戦いは好きです」
ゲーニッツもそのことを否定しない。不敵な笑みと共に。
だがそのうえでだ。こうも言うのだった。
「しかしそれ以上にです」
「破壊か？それとも混沌か？」
「自然の。世のあるべき姿が好きなのです」
不敵なものをさらに深くさせて。そうして言うのであった。
「それが私達です」

「オロチかよ」
「そう、オロチの力をこの世界でも出しましょう」
こう言ってだ。三人が囲むのを見ながらだ。
悠然とだ。また右手をスナップさせた。するとまただった。
竜巻が起こった。それが三人を襲う。
「さあ、はじめましょう！」
「いつものことだな」
八神はその竜巻を両手でガードしつつ防ぎながら言った。
「貴様の攻撃は」
「おや、わかっているというのですか」
「一度戦えばわかる」
そうだというのだ。
「貴様のやり方もだ」
「だからこそ慣れているのですか」
「そういうことだ。ではだ」
竜巻を防ぎそのうえでだ。
八神は右手を下から上に振った。それと共にだ。
「どうした！」
この言葉を叫んだ。すると地面に青い炎が起こり。
地を走りゲーニッツに向かう。それは草薙も同じだった。
「喰らえーーーーーっ！」
彼は左手を大きく下から上に振った。彼の炎は赤い。
その二つの炎がゲーニッツに向かう。それで焼こうとする。
だがその炎はだ。二つの竜巻によって。
打ち消された。ゲーニッツも読んでいたのかすぐに竜巻を起こしたのだ。
その二つの炎を消してからだ。ゲーニッツは悠然として言うのだった。
「御見事です」
「どうやらな」

「前よりも強くなってるみてえだな」
二人はゲーニッツのその動きを見てこのことを察した。
「これはかなりな」
「殺しがいがある」
「さて、お二人の他にもですね」
ゲーニッツは神楽も見た。そのうえでまた言う。
「貴女もまた」
「姉さんの仇、いえこの世界においても」
「私を封じるというのですね」
「そうさせてもらうわ」
こう言ってだ。舞を舞う様にしてだ。
一気に間合いを詰め攻撃を繰り出す。そこに草薙と八神もだ。
「ボディがら空きだぜ！」
「ぐううおおおおおおおおっ！死ねえええええええっ！」
突進する。三人の戦いが続く。

# 第九十一話　ゲーニッツ、暴れ回るのことその十一

そしてだ。刹那にはだ。
守矢が剣を手にしてだ。そのうえで対峙していた。
「今度は月には手を汚させん」
「貴様だけでか」
「必要とあらばな。しかしだ」
「しかしか」
「私だけではない」
彼がだ。こう言うとだ。
刹那の周りに四人が来た。彼等は。
「さて、やはりいたのう」
「予想はしていた」
まずは翁と示現が言う。
「刹那、この世界でもまた」
「常世につなげるというのか」
「そうだ」
その通りだとだ。刹那も二人に言葉を返す。
「それが俺の役目なのだからな」
「それなら」
「我等も我等の役目を果たそう」
楓と嘉神が剣を構える。
「今度は。姉さんの力を借りずに」
「我等の力だけで貴様を封じる」
「それができるのか」
鋭い目で言う刹那だった。闇の光がそこにある。
「貴様等に」
「できるから言っているのだ」
嘉神は刹那を睨み返して言う。

「こうだ」
「貴様等の命でか」
「安心しろ。命をかけはしない」
「その通りじゃ。御主を完全に封じる」
「完膚なきまで倒してです」
翁と。今度は虎徹だった。
「そのうえで二度と蘇られぬようにしてじゃ」
「封じるのです」
「俺を完全に倒すか」
笑っていない。言葉も表情も。
「言うものだな」
「言葉は言うだけじゃない」
楓の髪は既に金色になっている。戦場にその輝きが映える。
「実際のものにするものでもある！」
「その通りだな。では楓」
「うん、兄さん」
楓は兄の隣に来た。そうしてだった。
「我等の力でだ」
「刹那を完全に封じる！」
彼等の戦いもはじまるのだった。
戦いは兵達の間でもだった。激戦になっていた。
「くそっ、何て数だ！」
「しかもこいつ等強いぞ！」
「影みたいな動きしやがる！」
「何者なんだ！」
「これがだ！」
高覧がだ。その彼等に言う。彼女もその得物を振り回している。
「白装束の者達だ！」
「こいつ等本当に何者なんですか」
「妙に強いですけれど」

「確かにな」
馬上から得物を繰り出しながらだ。高覧は兵達に答える。
「尋常な強さではない」
「これはまずいですかね」
「辛い戦になるんじゃ」
「なったとしてもだ」
それはだ。もう覚悟しているという言葉だった。
言いながらも得物を振るいだ。高覧は言うのであった。
「我等は勝つ」
「勝ちますか？」
「絶対にですよね」
「そうだ、絶対にだ」
その言葉にぶれはなかった。確信している言葉だった。
その言葉でだ。高覧は兵達に命じた。
「いいか、一対一では戦うな！」
「二人か三人で」
「それで一人を」
「弓も使え！」
飛び道具も忘れてはいない。
「奴等は剣だけだ。間合いを考えて攻めよ！」
「わかりました！」
「それなら！」
「剣だけならば限りがある」
攻めるのにだ。確かに彼等の剣は短い。それと兵達の槍を比べればだ。確かにそれだけでかなりの違いがあるのがわかる。
高覧もそれを見てだ。兵達に命じたのである。
「わかったな」
「ええ、それじゃあ」
「今はこうして」
「無敵の兵なぞいない」

高覧の言葉は揺るがない。
「必ず倒せる」
「ですね。それじゃあ」
「今は辛くても」
「それを覆す！」
高覧は叫んだ。
「必ず勝つぞ！」
「はい！」
連合軍の士気は高かった。そのうえでだ。彼等は戦い抜くのだった。

第九十一話　完

２０１１・６・１８

# 第九十二話　劉備、于吉を欺くのことその一

第九十二話　劉備、于吉を欺くのこと

袁術も戦場にいる。そうしてだ。

ゲーニッツと草薙達の戦いを見てだ。こう叫ぶのだった。

「な、何じゃあ奴は！」

「はい、ゲーニッツというそうです」

彼女の傍らにいる張勲が袁術に答える。

「何でもオロチ一族でも最強だとか」

「最強とかいう域ではないぞあれは！」

その暴れ回る様を見ての言葉だ。

「滅茶苦茶強いではないか！あれでは三人といえどもたんぞ！」

「そ、そうですよね」

さしもの張勲も青い顔になって応える。

「草薙さん達も頑張ってますけれど」

「ゆ、弓じゃ弓」

袁術が今言うのはこれだった。

「弓であのゲーニッツを撃て。弓なら何とかなるじゃろ」

「それ、無駄みたいですよ」

しかしだった。張勲はすぐにこう主に話した。

「どうやら」

「何故じゃ、それは」

「だって。あの人風使いますから」

今もだ。空中から襲い掛かる八神に無数の鎌ィ足を浴びせていた。

八神は空中でそれを防いだ。傷は負わなかったが攻撃はできなかった。

その鎌ィ足も見てだ。張勲は言うのである。

「多分。弓矢も」

「それではあの三人に任せるしかないのか」

「そうなるかと」
「しかしあのままではまずいぞ！？」
袁術も本気で心配している。
「しかもあ奴だけではないではないか！」
「あそこの金髪の大きな人って」
その金髪をセンターで分け口髭を生やしている。右目は義眼だ。
そしてその服は赤いタキシードだ。その姿の男がなのだった。
「何なんですかね」
「な、何じゃあ奴も！」
袁術はその赤いタキシードの男を見ても泣きそうになる。
「無茶苦茶に暴れ回っているではないか！」
「烈風けーーーーん！烈風けーーーーん！」
男がだ。叫びながら右手を下から上に大きくスイングさせてだ。
そのうえで地面に衝撃波を出し走らせて。兵達を吹き飛ばしている。
「な、何だこいつは！」
「こいつもかなり強いぞ！」
「どうなっているんだ！」
兵達もその強さに唖然となる。しかし彼等は。
何とか男に迫る。だが今度は。
男は足を大きく、回転させてきた。それは。
「ジェノサイドカッターーーーー！！」
「う、うわあああああっ！」
「だ、駄目だ！」
その蹴りでだ。接近した兵達が吹き飛ばされてしまった。
しかもだ。男はさらにだった。
今度は両手に気を込め。思いきり放ってきたのだった。
「カイザーウェイブ！」
それでだ。また吹き飛ばすのだった。その暴れる姿を見てだ。
袁術はだ。今度は顔面蒼白になった。その顔で張勲に言うのであ

る。
「あ奴、ゲーニッツとやらとどちらが強いのじゃ」
「さ、さあどちらでしょうか」
無論張勲も真っ青になっている。そのあまりもの強さを見てだ。
「けれどどちらにしてもです」
「強過ぎるのじゃ！」
「ですよね。化け物ですよあれは」
「何者じゃ、あれは」
「ルガールという」
ハイデルンがだ。袁術達の横に来て話してきた。
「ルガール＝バーンシュタインというのだ」
「ルガール？」
「それがあの男の名前ですか」
「趣味は倒した格闘家をそのまま像にすることだ」
ハイデルンはそのルガールの趣味から話す。
「それを集めることを生きがいとしている」
「な、何じゃそれは！？」
その趣味を聞いてだ。さらに驚く袁術だった。
「無茶苦茶ではないか！」
「あの、それって人間のすることですか！？」
張勲ですらだ。考えられない域の話でだ。やはり驚いている。
「生きている人間をって」
「そんなとんでもない奴があちらの世界におるのか！」
「しかもだ」
尚且つだとだ。ハイデルンは続ける。

# 第九十二話　劉備、于吉を欺くのことその二

「人を殺そうともだ」
「そんなのは平気か」
「そういう人間なんですね」
「そういうことだ。そしてだ」
「まだ何かあるのか」
「私の片目と」
その眼帯を押さえての言葉だった。
「家族、そして部下達を殺した男だ」
「で、ではじゃ」
「ハイデルンさんにとっては」
「必ず倒さなければならない相手だ」
まさにだ。そうした男だというのだ。そのルガールは。
「今から戦わせてもらう」
「うむ、それではな」
「わし等も共に行こう」
柴舟とタクマもいた。
「三人でかかればじゃ」
「あの男といえど倒せる筈だ」
「そ、そうじゃ。頼んだぞ」
袁術もだ。今はこう言うしかなかった。
「そんなとんでもない奴をこの世界でのさばらせておけるか！」
「そうですよ。そんな人まで来てたんですか」
「残念だがな」
来ていると。ハイデルンは二人に答える。
「それではだ。今からだ」
「う、うむ。頼んだぞ」
「御願いしますね。絶対に」

袁術達は三人を送り出すしかなかった。そして戦場では。
李典はドリルの槍を振り回しつつだ。于禁に言う。于禁は両手の刀を振り回している。
「そっちはどないや！」
「かなりやばいの！」
戦いながら答える于禁だった。
「こいつ等次から次に出て来るの」
「ほんまやな。こりゃ洒落にならんで」
「全くなの。辛い戦いになるっていうのはわかっていたけれど」
「予想超えてるわ」
言いながらもだ。于禁も槍を振るう。
「けれど。今我慢したらや」
「別働隊が来るの」
「そうだ、それまでの辛抱だ」
楽進は気を放ちながら二人に言う。
「堪えるぞ」
「ああ、絶対に持ち堪えるで」
「何があってもなの！」
「そうだ。間も無くだ」
楽進はさらに言う。
「劉備殿達が来てくれる」
「うち等が連中を正面に張り付けさせてや」
「そこになの」
「そうだ、我等は勝てる」
楽進は勝利を信じている。だからこそ戦うのだった。
「この戦いにもだ」
「この戦いが終わったらや」
李典はあえて気持ちをほぐす為に二人に話す。
「三人でお茶でも飲もか」
「お茶？」

「お茶なの？」
「そや。とびきり美味い茶をや」
それをだ。三人で飲むというのだ。
「張三姉妹の舞台を見ながらな」
「そうだな。それはいいな」
「最高の組み合わせなの」
「お茶と歌を楽しむ為にもや」
どうかとだ。李典はあえて楽しげな笑みを浮かべて話す。
「ここは踏ん張ろか」
「そうだな。絶対にな」
「舞台を観るの！」
「ただしや」
ここでだ。李典はこんなことも言った。

# 第九十二話　劉備、于吉を欺くのことその三

「袁紹さんの鰻は勘弁やな」
「あれはな。どうもな」
「やらされたくないの」
そのだ。胸なり何なりで鰻を掴むという袁家伝統の競技についてはこう言うのだった。
「袁紹殿はかなりお好きなようだが」
「あんなの絶対にしたくないの」
「うちは掴めるけれどな」
胸でだ。その鰻をだというのだ。
「けれどあれはな」
「うむ、例え掴めてもだ」
「いやらし過ぎるの」
「っていうか袁紹さんってほんまああいうの好きやな」
袁紹のそうした好みはだ。実によく知られているのだった。
「おかしな趣味の人やな」
「ああしたところさえなければな」
「何の問題もない人なのに残念なの」
「ほんまや。何とかならんのかいな」
「全くだな。困ったお人だ」
「仕えると大変そうなの」
そのこともよくわかることだった。そうした話をしながらだ。
彼女達も戦い続ける。その戦局を見てだ。
孔明と鳳統がだ。遂に言った。
「では皆さん」
「行きましょう」
「わかった」
「それじゃあ行こう！」

まずはだ魏延と馬岱が応える。
「先陣は我等だな！」
「やらせてもらうわね！」
「はい、まずは焔耶さんと蒲公英ちゃん！」
「御願いします！」
軍師二人も彼女達に話す。
「第一陣の左右！」
「それでは！」
「ではな！」
「行くよ！」
こう話してだ。そのうえでだった。
まずは二人が出陣する。続いては。
「第二陣左右！」
「御願いします！」
「よし、わかったで！」
「行く」
張遼と呂布だった。青い旗と紅い旗がたなびく。
その旗と共にだ。二人も出た。
「ほな、今までの鬱憤な！」
「晴らさせてもらう」
「それじゃあ御願いします」
「出陣して下さい」
「ああ、わかってるで！」
「やらせてもらうから」
最強の二人が出た。続いては。
「第三陣の左右！」
「紫苑さんと桔梗さん！」
この二人だった。
「それじゃあ！」
「出て下さい」

「久し振りね。戦うのも」
「そうじゃな。二人一緒にはじゃな」
笑顔でだ。こう言い合う二人だった。
「だから余計に」
「楽しみになってきたわ」
「では第三陣も」
「出陣して下さい！」
二人も出る。これで三陣まで出た。続いては。
「では第四陣はです」
「次は」
「行くぞ！」
「それじゃあな！」
趙雲と馬超だった。この二人が第四陣だった。
「では共にだ」
「ああ、やらせてもらおうぜ」
「では星さん、碧さん」
「御願いします」
「わかっている」
「暴れさせてもらうさ！」
この二人も出た。そして最後は。
「ではですね」
「最後は」
「行くぞ！」
「わかっているのだ！」
関羽と張飛だった。最後はこの二人だった。張飛の背には籠がある。
「それではだ！」
「暴れるのだ！」
こうしてだ。十人の豪の者達が切り込む。これを受けてだ。
戦局は一変した。その突撃によってだ。

それを見てだ。左慈が横にいる于吉に問うた。

## 第九十二話　劉備、于吉を欺くのことその四

「まずいと思うか」
「いえ、全く」
その左慈に落ち着いた声でだ。于吉は答えた。
「むしろ楽しいではありませんか」
「楽しいというのか」
「戦いにより起こる念。それもまたです」
「それもだな」
「はい、書の糧になるのですから」
だからだというのである。
「一向に構いません」
「しかしだ。奴等も気付いているぞ」
「書のことにですね」
「それでだ。書を封印しようとするのではないのか」
「そうですね。間違いなくそうしてくるでしょう」
于吉の口調は変わらない。全くである。
その変わらない口調でだ。彼はまた左慈に言う。
「しかし書だけではありません」
「そうだな。山もある」
「そして。山で駄目だったとしても」
「手は幾らでもあるな」
「要はこの世界を破壊と混沌に世界を変えることです」
彼等の共通している目的をだ。ここで話すのだった。
「ですから。あの書はです」
「道具に一つだな」
「代わりは幾らでもあります」
「人とは違うからな」
「書が封印されても。それだけです」

「そうか。ではだ」
ここまで話を聞いてだ。左慈も納得した顔になった。そうしてだ。
彼は前に出てだ。それから于吉に述べた。
「では俺もだ」
「戦いに行かれますか」
「そうしてくる。楽しんでくる」
彼にとってはだ。戦いはそうしたものだった。
その楽しみを堪能する為にだ。前に出てだった。
「一人でいけるな」
「全く問題はありません」
「ならだ。ここで勝てはよし」
それで目的が達成される。しかし若し失敗したとしてもだとだ。
左慈は于吉に顔を向けて。言うことを忘れなかった。
「しかしそうでなくともだ」
「その場合は定軍山に向かいましょう」
「落ち合い。そこでな」
「また動きましょう」
こうしたやり取りを経てだ。彼等はこの場では別れた。そうしてだった。
左慈も戦場に出た。彼と対峙したのは甘寧だった。
彼女は左慈を見てだ。そうして彼に問うた。
「貴様、まさか」
「何かに気付いたか？」
「以前雪蓮様に刺客を送って来たか」
「どうしてそう思える」
「勘だ」
それによってだとだ。甘寧は構えを取りながら彼に返した。
「私の勘だ。貴様はそうしたことを好むな」
「俺より于吉だがな」
「于吉？その者が雪蓮様に刺客を」

「俺もあいつもだ」
一人ではないというのだ。それは。
「そうしたことは得意だ」
「刺客を送ることもか」
「他にもあるがな。そして確かにだ」
「やはりそうか」
「それだけではない」
左慈の言葉に邪な笑みが宿った。その口の端にもだ。
その笑みでだ。甘寧に言うのだった。
「これでわかるか」
「まさか。貴様が大殿を」
「さてな。しかしそれに関係なくだな」
「どちらにしろ貴様は敵だ」
甘寧は身構えたまま左慈に言った。
「ここで倒す」
「あちらの世界では暗殺で死んだのだがな」
「雪蓮様がか」
「そうだ。もっともあの世界の貴様達は貴様達であって貴様達ではない」
「そのことは聞いた」
彼女達の世界とあちらの世界の違いはだ。既にあかり達から聞いている。それで知っているのだ。

# 第九十二話　劉備、于吉を欺くのことその五

「既にな」
「そうか。では話が早いな」
「そして貴様等のこともだ」
そのだ。左慈達のこともだというのだ。
「この世界をか。壊すつもりだな」
「如何にも。破壊と混沌が我等の目的だ」
「それでこの世界を。そして雪蓮様を狙い大殿を」
「ではそれを止めるか」
「止める！」
甘寧は言い切った。怒りの気が全身を包む。
その気をみなぎらせたまま。彼女はさらに言った。
「貴様をここで倒す！」
「ならば来い。相手をしてやろう」
「言われずともだ！」
「俺は陰謀だけではないということを教えてやろう」
言いながらだ。左慈も構えた。彼の気もその全身を包んだ。
甘寧は黄色、左慈は青色のだ。それぞれの気をみなぎらせてだった。
そのうえでだ。彼等は互いの拳を交えるのだった。
刀馬はだ。今は一人ではなかった。
戦場を駆け巡りながらだ。己の隣にいる男に声をかけた。
「因果なものだな」
「全くだな」
その男もだ。彼に言い返すのだった。
「貴様と共に戦うとはな」
「一つ言っておこう」
刀馬は男に言った。

「これは本意ではない」
「俺もだ」
「だが。今はだ」
「共に戦うか」
「わかっているな」
刀馬は横目で男を見て問うた。
「ここにいる」
「ああ。この戦場にな」
「思えば最初から胡散臭い男だった」
そうだったとだ。刀馬は過去を振り返りながら言うのだった。
「得体の知れぬものを漂わせていた」
「では何故だ」
男は刀馬に問うのだった。
「何故あいつ共にいた」
「知れたこと。貴様を斬る為だ」
「俺をか」
「その絶対の零によってな」
「御前が今まで目指していたものでだな」
「命に言ったそうだな」
刀馬の紅い剣が煌く。そうしてだった。
白装束の男達を斬り伏せる。剣の動きが実に速い。
そしてそれはだ。男もだった。
蒼い剣が唸りだ。やはり周りの敵を斬り倒すのだった。
そうして進みながらだ。刀馬はその男蒼志狼に言うのだった。
「俺の零の氷河が溶けた時にだ」
「そのことか」
「俺の大河は動きだすと」
「そうだ。確かに言った」
その通りだとだ。蒼志狼も話す。
「そしてそれはだ」

「今か」
「貴様は今零を目指すか」
「笑止。俺は最早零を見てはおらん」
「では何を見ている」
「絶対だ」
それだというのだ。
「絶対だが零ではない」
「そうか。それを目指しているのだな」
「貴様は無限だな」
「如何にも。その通りだ」
蒼志狼は己の剣を振るいつつ刀馬に答えた。

# 第九十二話　劉備、于吉を欺くのことその六

「俺が目指すものはそれだ」
「では無限が正しいか絶対が正しいか」
「それを確めるか」
「そうだな。その為にもな」
「今はあの男を見つけ出し」
「斬るとするか」
ここでだ。刀馬はこうも言った。
「あいつは俺を利用した」
「そうだな。最初からそれが目的だったな」
「そして命もだ」
彼女の名前もだ。ここで出すのだった。
「命も利用した。だからこそ余計にだ」
「許せぬか」
「断じてだ。では斬る」
「見つけ出してな」
「あいつを斬るのは俺だ」
その鋭い紅い目を光らせての言葉である。
「そして貴様を斬るのもだ」
「御前だっていうんだな」
「ここで死ぬことは許さん」
「言われなくても死ぬつもりはないがな」
「だが言っておく。絶対にだ」
ここでもだ。絶対だというのだった。
「死ぬな。わかったな」
「ああ、よくな」
こうした話をしながらだった。二人はその男を捜していた。戦場で敵達を斬りながらだ。彼等はひたすら前に突き進むのだった。

戦場を駆けているのは彼等だけではなかった。幻十郎もだ。
その左利きで持つ刃を振り花札を出しながらだ。覇王丸に言うのだった。
「貴様がいると聞いてだ」
「どう思ったっていうんだ？」
「貴様を斬らせぬとな」
そう思ったとだ。背中合わせになっている覇王丸に言うのである。
「そう思った」
「俺を斬る為にか」
「そうだ。貴様を斬るのは俺だ」
「そして手前を斬るのもな」
「貴様だ。俺は貴様以外に斬られはしない」
「それは絶対にだな」
「あの男。九鬼刀馬か」
ふとだ。彼の名前も出すのだった。
「あの男、俺に似ているな」
「ああ、確かにな」
その通りだとだ。覇王丸も答えた。
「あいつは御前に似ているな」
「あいつもある男を斬りたい様だが」
「その辺りも似ているな、御前と」
「そうだな。俺は斬る」
今切り捨てた白装束の者のことではなかった。
「貴様をだ。必ずな」
「相変わらずだな。それに加えてだ」
「それにか」
「いいものも身に着けたじゃねえのか？」
覇王丸は旋風烈斬を出しそれで敵を薙ぎ倒す。剣を下から上に振るい竜巻を出してだ。そのうえで吹き飛ばしているのである。
そうしながらだ。また言う覇王丸だった。

「この世界に来てな」
「あの連中と同行していた」
こう言う幻十郎だった。
「そして色々と語った」
「へえ、御前が誰かと一緒にいたのか」
「気が向いた」
それでだというのだ。
「それでそうした」
「成程な。気が向いたか」
「それで共にいた。それだけだ」
「だがそれがよかったと思うがどうだ？」
「少なくともあの連中の考えはわかった」
華陀達のだ。それはだというのだ。
そのことを話してからだ。幻十郎はさらに述べた。
「ああした考えもあるのだな」
「人間色々な考えがあるさ」
「俺は。長い間一人だった」
孤独と酔狂、それが幻十郎の生き方だった。

## 第九十二話　劉備、于吉を欺くのことその七

己の手で母を斬りそれからは一人で生き剣を振りだ。酒を飲み薬を吸い女も男も抱いてきた。その彼の生き方も語られる。

「あの寺にいた時もだ」

「懐かしいな。あの時か」

「そうだ。貴様と会ったその時だ」

まだだ。彼等が剣を持ちようやくその道を歩みはじめた時のことである。彼等はその時に会いだ。それから因縁が続いているのだ。

その因縁も思い出してだ。それで話されるのだった。

「俺は一人だった」

「そうだったな。御前は一人で酒を飲んでいたな」

「覚えている。貴様と共に飲んだことはないがな」

「誰かと一緒に飲んだことはあるのかい？」

「ない」

断言だった。それはなかったというのだ。

「興味もなかった」

「そうだな。これまでの手前はな」

「だが。あの連中とは共に飲んだ」

「そうしたんだな」

「美味いものだった。一人で飲むのもいいがな」

「大勢で飲む酒もいいだろ」

「いいものだ。それでだ」

話がだ。ここで動いた。

「この戦いが終われればだ」

「飲むか？」

「美味い酒がある」

誰と飲むかはだ。あえて言わない。お互いにだ。

だがそれでもわかったうえでだ。彼等はやり取りをするのだった。

「それを飲む」
「そうか。俺もあるぜ」
「相変わらず飲んでいるのだな」
「好きだぜ。どの世界の酒もな」
覇王丸は楽しげに笑って幻十郎に述べた。
「じゃあ。この戦いが終われば な」
「飲む」
こうしたやり取りをしてからだ。そのうえでだ。
彼等は背中合わせになったまま戦う。それが今の二人だった。
戦局は別働隊の切り込みで連合軍に傾いた。そしてだ。
それに加えてだ。新たな軍が戦場に姿を現したのだった。
「黒梅、間に合ったわね」
「間に合うようにしたのよ」
?義だった。彼女はこう審配に告げたのである。
「ちゃんとね」
「成程、そうなのね」
「そうよ。それじゃあね」
「ええ、それじゃあ」
「全軍に告ぐ!」
今度は己の率いる軍に告げる?義だった。
「このまま突撃するわよ!」
「はい!」
「それでは!」
兵達も頷きだった。こうしてだ。
二人が共に率い突き進みだ。戦場に切り込むのだった。
それを受けてだ。戦局は決定的になった。
横と後ろからも攻めはじめた連合軍は白装束の者達を圧倒しだした。それを見てだ。
袁紹も剣を手にだ。こう叫ぶのだった。
「よし、今こそですわ!」

「全軍総攻撃ね」
「ここで一気に流れを掴みますわ！」
曹操にもこう言うのである。
「いいですわね！」
「ええ、それが妥当よ」
曹操もだ。それでいいとした。そしてだ。
彼女も鎌を手にしてだ。袁紹に話す。
「ずっと我慢してもらっていたけれどね」
「それでも。今度こそは」
「ええ、前線に出ましょう」
曹操も微笑み袁紹に話す。
「そうしましょう」
「わかりましたわ。それでは」
「じゃあ麗羽」
曹操はあらためて袁紹の真名を呼んだ。そうしてだった。
「全軍に命じて」
「ええ、では」
一旦咳払いをしてからだ。袁紹は言った。

# 第九十二話　劉備、于吉を欺くのことその八

「全軍総攻撃でしてよ！」
「今こそ国を救う時よ！」
曹操も共に叫ぶ。
「今ここで！」
「勝利を手に！」
こうしてだ。袁紹は待ちに待った前線への突撃を行うのだった。
これによってだ。
戦局は決まった。白装束の者達は次々に薙ぎ倒されていく。しかしであった。
于吉はだ。その中でもだ。冷静なままでいた。
そしてその冷静な顔でだ。己が持っている書を手にして微笑み言うのだった。
「さて、もう充分に蓄積されましたね」
書から起こる邪な気配を察しながらの言葉だった。
「では。いよいよ」
「させません！」
その彼にだ。少女の声が浴びせられた。
「そんなことは！」
「おや、やはり来られましたか」
「貴女のその邪な願いは」
「もうわかってるわ！」
少女は二人だった。そこにいたのは。
孔明とだ。そして。
「貴女ですか」
「何があっても！」
緑の仮面を着けた劉備だった。彼女がいたのだ。
巨大な剣を重そうに持っている。その劉備がだ。于吉に対して言

う。
「ここでやっつけるんだから！」
「面白い。それではです」
どうかとだ。于吉はその劉備を見ながら言うのだった。
「貴女を退け。世界をです」
「破壊と混沌に陥れるというのですね」
「はい」
まさにだ。その通りだというのだ。
「そうさせてもらいます」
「何度も言うわよ！」
よく聞けばだ。微妙にだった。
声も喋り方も何かが違う。そうしての言葉だった。
「そんなことさせないから」
「確かに貴女はです」
于吉は悠然としている。しかしその余裕故にだ。
気が緩みだ。劉備の声にも喋り方にも気付かなかった。そうして彼女に言った。
「その剣で私の書を封じることができます」
「その為の剣なのね」
「はい、そうです」
その通りだというのだ。
「その剣は特別なもので。龍の鱗から造っています」
「龍の鱗から」
「それも龍達の王である四海龍王達の鱗をそれぞれ合わせ」
「四海龍王、あの」
孔明もその龍達のことは知っていた。龍達の王にして四つの海をそれぞれ治め神々だ。神としても相当な力を持っている存在だ。
「あの龍達の力をですか」
「それだけに相当な力があります。ただしです」
その剣のことをだ。左慈はさらに話した。

「その剣は誰もが使えるという訳ではなくです」
「劉家の者だけが」
「しかその中でも。とりわけ龍の血が強い者だけがです」
使えるというのである。
「龍の血を引く劉家の中でもです」
「えっ、そうだったの」
「はい、そうなんです」
孔明はようやく気付いたといった感じの劉備にすぐに話した。
「高祖様は赤龍の血を引いておられますから」
「あれ、龍の息子さんだったの！？」
この劉備も知らないことだった。
「じゃあお父さんって」
「御母上が夢の中で赤龍を宿らせたのです」
そうだと話す孔明だった。
「御母上が妊娠中に夢の中でお腹の中に赤龍が宿られるのを見られて」
「それで高祖様が生まれたんだ」
「はい、そうだったんですよ」
こう話す孔明だった。
「ですから。劉家は龍の血を引いてるんです」
「そうよね。幾ら何でもね」
「龍から人は生まれませんから」
生物学的な話も為される。

# 第九十二話　劉備、于吉を欺くのことその九

「そういうことなんです」
「そうだったのね。じゃあこの剣って」
「その通りです」
于吉もまた劉備に話す。
「貴女しか扱えないものです」
「だから私今ここにいるんだ」
「今気付かれたのですか」
「そうよ。気付いたのよ」
「鈍いことです」
余裕の笑みのままだ。于吉は告げる。
「その貴女が私をですか」
「あんたと、その書をよ」
「太平要術の書もまた」
「封じるから！」
「では。今から」
于吉は構えない。それでもだった。
その両手にだ。黒いものを宿らせてだ。
両手を前に突き出す。そこからだった。
黒い球を放った。それで劉備を撃とうとする。
劉備はその球をだ。左右に舞う様にしてかわす。その動きを見て
于吉は言った。
「ほほう、これは」
「どう？上手でしょ」
「舞の様ですね」
彼もそのことを指摘するのだった。
「思ったよりも軽やかです」
「だっていつも踊ってるから」

こう返す劉備だった。失言であるが于吉は気付かない。
「こんなの当然よ」
「当然ですか」
「そうよ。お姉ちゃんもちょっとはやらないと」
また言ってしまう。しかし于吉はその余裕故に気が緩みだ。やはり気付かないのだった。
「だからね」
「無駄だと思いますが」
「無駄じゃないよ。ほら」
于吉の傍にもだ。連合軍が来た。
その先頭に関羽と張飛がいる。二人はそれぞれの得物を手に于吉のところに来た。
「于吉、最早だ！」
「逃げられないのだ！」
「おやおや、三姉妹揃い踏みですか」
その二人にも余裕を見せる于吉だった。
「これは贅沢ですね」
「そうよ、贅沢よ」
劉備がまた于吉に言い返す。関羽と張飛はそれぞれ彼の斜め後ろに位置した。張飛はその時籠を置いた。
そのうえで于吉を取り囲みだ。そうして関羽が言う。
「于吉、ここでだ！」
「終わりだというのですか」
「貴様のその邪な企み！ここで潰える！」
「仰るものですね。しかし私もです」
「やられないというのだ？」
「そう簡単には」
「そう言うんだな」
今度は華陀が来た。そのうえで于吉に言うのだった。
「御前はあくまで」

「そういうことです。それが私達の目的ですから」
「そう言うとは思っていた」
華陀は劉備の左隣に来た。そのうえで言うのである。
「やはり。その書は」
「では。四人ですね」
「やらせてもらう！」
「行くよ！」
劉備も言ってだ。そのうえでだ。
四人で一斉に攻める。だがその四人に。
于吉は再び黒い気を両手に込めてだ。そのうえでだ。
両手の平を地面に叩きつけてだ。気を蜘蛛の巣の如く地面に這わせたのだ。
それを見てだ。四人は一斉に飛んだ。それでかわしたつもりだった。
だがそこでだ。今度はだ。
黒い気が上にあがった。蜘蛛の巣の形をしたまま地面からだ。
「何っ、気が！」
「来たのだ！」
「私の気は自由自在です」
そうだとだ。于吉は勝利を確信した笑みで言う。

# 第九十二話　劉備、于吉を欺くのことその十

「こうしたこともできるのですよ」
「くっ、このままでは！」
「まずいのだ！」
「さて、どうされますか？」
于吉は上に飛んだままの四人に問う。
「これはどうして防がれますか」
「それはだ！」
「こうするのだ！」
関羽と張飛が言ってだ。
二人は得物から白い気を放ってだ。それで于吉の黒い気を打ち消したのだ。そうして于吉の攻撃をすんでのところで防いだのである。
「ほほう、そうきましたか」
「気には気だ！」
「それが一番なのだ！」
「確かに。それはその通りです」
于吉もそのことは認めた。
「やはり。尋常な強さではありませんね」
「そしてだ！」
今度は華陀だった。彼は。
両手のそれぞれの指と指の間に黄金の針を挟んでだ。それを。
于吉が持っている書にだ。投げたのだ。その針を見てだ。
彼は一旦姿を消した。そして四人が着地した時にだ。
離れた場所に移っていた。瞬間移動だった。
「縮地法ですか」
「それですね」
戦いを見守る軍師二人が言う。
「それも使って」

「かわすなんて」
「縮地法って何なのだ？」
張飛は二人にその縮地法について尋ねた。
「聞いたことがないのだ」
「ある場所からある場所に瞬時に移動する術です」
「歩いたり走ったりすることなくです」
「何っ、それでは妖術なのだ」
「はい、仙術でもありますが」
「この方の場合はそれだと思います」
「確かに。これは妖術の一つです」
于吉もそのことは否定しなかった。
「私の術はそれになりますから」
「そうですね。妖術ですね」
「明らかに」
孔明と鳳統もそうだと言う。
「そこまでの妖術を使えるなんて」
「やっぱり貴女は」
「そう簡単には倒せませんよ」
軍師二人にもだ。于吉は余裕を見せる。
「さて、今度はどうされるのですか？」
「こうします！」
「これで決まりです！」
孔明と鳳統は強い声で于吉の問いに答えた。するとだ。
彼が左手に持っている書にだ。急にだった。
何かが突き刺さった。それは。
「なっ、これは」
「やったわね」
于吉の前に劉備がいた。彼女が両手に持っているその剣がだ。書を貫いていたのだ。
だが于吉本人までは至っていない。書の力によりそこまで通して

いないようだ。
だがそれでもだ。書を貫かれた于吉は驚愕の顔でその劉備に問うのだった。
「馬鹿な、何故貴女がここに」
「どうしてだと思う？」
「縮地法を使える筈がない」
それはもう確信していることだった。
「妖術を」
「私妖術なんて使えないから」
「では何故だ」
その驚愕の顔で劉備に問う。
「何故。ここに」
「二人いたから」
「二人？」
「そう、二人よ」
劉備は書から剣を抜いてだ。後ろに下がり間合いを開けた。その隣にだ。

# 第九十二話　劉備、于吉を欺くのことその十一

緑の仮面の劉備が来た。先程まで彼と戦っていた劉備だ。
「劉備玄徳が二人だと」
「こういうことなの」
仮面の、蝶の様な仮面を外した劉備を見る。そこにいたのは。
「何っ、あの三姉妹」
「そうだよ。天和ちゃんだよ」
張角は劉備と並んで言う。
「だって私達そっくりだから」
「こうして二人になっていたのよ」
「どうしてここに」
「あれなのだ！」
張飛は己の左斜め後ろにある籠を指差した。彼女が運んできたその籠だ。
見ればだ。その籠は蓋が開いていた。于吉はそれも見て悟ったのだった。
「そうか、あの籠で」
「籠は蒲公英ちゃんが入るだけではありません」
「桃香さんも入るものです」
孔明と鳳統がここでまた言う。
「貴方はこのことは御存知ありませんでしたね」
「そしてこうした策があることも」
「確かに。迂闊でした」
于吉の余裕は消え去っていた。歯噛みしての言葉だった。
「こうなっては」
「止めだ！」
華陀はその書に針を投げた。それは劉備が貫いたその太平要術の書に突き刺さった。そのうえで彼は高らかに叫ぶのだった。

「光になれーーーーーーーーっ！！」
「くっ、これでは！」
突き刺さった針から黄金の光が起こりだ。それが書全体を包み。
矢となって起こり消え去った時には。
書は消え去ってしまっていた。于吉の左手にはもう何もない。
その空になった己の手を見つつ。彼は忌々しげに言った。
「失敗ですか」
「そうだ、貴様の野望は潰えた！」
「ここで完全になのだ！」
「確かに。今はです」
歯噛みしつつだ。関羽と張飛の言葉に応える。
「こうなっては仕方がありませんね」
「後は貴様だけだ」
「覚悟するのだ」
「いえいえ、確かに書はなくなりました」
それでもだとだ。于吉は務めて余裕を取り戻して言うのだった。
「ですがまだ諦めてはいません」
「ではどうするのだ」
「まさかとは思うが今もなのだ？」
「そうです。退散させてもらいます」
そうさせてもらうと言ってだ。姿をゆっくりと消していくのだった。
足下から消えていきながらだ。彼は劉備達に言う。
「今回は私の負けです」
「だからだ。ここでだ！」
「鈴々達にやっつけられるのだ！」
「そうはいきません」
余裕は取り戻している。そのうえでの言葉だった。
「今は退散させてもらいましょう」
「くっ！」

「逃がさないのだ！」
関羽と張飛は最後の手段としてそれぞの得物を振るい衝撃波を飛ばしだ。消えようとする于吉を撃とうとした。
だがその二つの衝撃波は半透明になってしまっていた于吉の身体を空しく通り過ぎた。それで終わりだった。
「駄目か、最早」
「逃げられるのだ」
「また御会いしましょう」
于吉の姿は完全に消えようとしていた。
「その時まで。ご機嫌よう」
「おのれ、ここでか」
「逃げられるとは最低なのだ！」
関羽と張飛が怒りに満ちて言う。しかしその怒りも今は空しいものでしかなかった。
太平要術の書は封印され消え去った。それを見てだ。
左慈がだ。同志達に言うのだった。
「こうなってはだ」
「撤退ね」
「ここから」
「そうだ。次だ」
その次の場所に向かうというのだ。こうバイスとマチュアに話すのだ。
「次の戦いの場に移ろう」
「わかったわ。それじゃあね」
「今からね」
「さがるぞ。いいな」
「了解」
「では」
左慈達も于吉と同じ様に消えていく。それはオロチや刹那達。そして白装束の者達も同じでだ。彼等は煙の様に消えていった。

# 第九十二話　劉備、于吉を欺くのことその十二

戦場に残ったのは連合軍だった。彼等は勝った。
だが、だ劉備はその戦場に立ったままで言うのだった。
「勝ったし。書は封印したけれど」
「ああ、まだだ」
華陀がその劉備に険しい顔で話す。
「まだ戦いは終わっちゃいない」
「そうよね。まだよね」
「月並みな台詞だがな」
こう前置きしてからの言葉だった。
「俺達の戦いはこれからだ」
「あの、その言い方はです」
「止めておいた方がいいです」
孔明と鳳統が華陀のその言葉を止めた。
「それを言ったら。その」
「終わっちゃいますから」
「そうなのか？言ったらいけない言葉だったのか」
「はい、ですから」
「止めておいた方がいいです」
「そうか、わかった」
それがどうしてなのかはわからないが頷きはする華陀だった。
そのうえでだ。彼はまた劉備達に話す。
「とにかくだ。奴等が逃げた場所だが」
「もうそこはわかってるんですか？」
「おそらく。定軍山だ」
そこだというのだ。
「そこに向かった筈だ」
「定軍山、あの場所ですか」

「益州の」
孔明と鳳統がすぐにその場所について言った。
「あの山に潜んで」
「そうして」
「また。あの場所で同じことをする」
そうするとだ。華陀は言い切るのだった。
「そう考えている」
「そうよ。ダーリンの言う通りよ」
「あの山に行って同じことを企んでいるのよ」
ここで怪物達が来た。そのうえで劉備達に話すのだった。
「だからね。今度はね」
「あの山での戦いになるわよ」
「そうか。わかった」
「次はその何とか山に行くのだ」
関羽と張飛は強い顔で応えた。
「それではな」
「そうするのだ」
「はい、しかしまずはです」
「色々とやらないといけないことがあります」
孔明と鳳統は焦っていない。冷静な言葉だった。
「兵隊さん達は疲れていますし」
「それに都を解放しないといけません」
「帝もお救いして」
「そうしたことをしていかないと」
「そうだな。定軍山に向かうのは後だ」
華陀もそうするべきだというのだった。
「今は戦の後始末や山に向かう前にしないといけないことをしないとな」
「しないといけないことって？」
「はい、政です」

「それをしないといけないです」
孔明と鳳統がきょとんとした顔になった張角に話した。
「あと張角さんもです」
「舞台を御願いしますね」
「そうそう。私達その為に呼ばれたんだし」
政のことはわからないがそちらはよくわかっている張角だった。
にこやかな笑顔になってだ。そうして話すのだった。
「じゃあ早速ね」
「舞台の用意もして」
「何かと忙しくなりますから」
「そうそう。最初の戦が終わっただけよ」
「まだまだこれからなんだから」
妖怪達も華陀と同じことを言う。
「けれど今はね」
「あたし達も歌うわよ」
「何っ、御主達もか」
「歌えるのだ!?」
「そうよ。漢女の歌」
「あたし達の歌なのよ」
二人は関羽と張飛の驚きの言葉にウィンクで応える。そのウィンクでだ。
戦場だった場所がだ。派手に吹き飛んだ。ここでも爆発を起こす彼等だった。
「もう最高の歌だから」
「期待していてね」
「それは楽しみだな」
華陀だけが微笑んで二人に応える。
「二人の歌がどうしたものか楽しみだ」
「ダーリンに言われるのなら余計にね」
「あたし達頑張れるわ」

二人も華陀の言葉に乗り気になる。
「それじゃあね」
「皆楽しみにしておいてね」
「大変なことになったな」
「そうなのだ」
爆発から何とか立ち上がった関羽と張飛が話す。爆発によりあちこち黒焦げになってしまい服も髪もぼろぼろになっている。
「あの二人も歌うのか」
「どうなるのだ」
「とにかくです。まずはです」
「戦いの後です」
孔明と鳳統も何とか立ち上がりながら話す。
「それを進めていきましょう」
「暫くの間は」
戦いは終わった。だがそれはだ。次の戦いの為の備えの為の時を与えられたに過ぎなかった。戦いはまだ続くのだった。

第九十二話　完

２０１１・６・２０

# 第九十三話　孔明、司馬尉を警戒するのことその一

第九十三話　孔明、司馬尉を警戒するのこと

戦いが終わりだ。まずはだった。

群雄達は朝廷においてそれぞれの官位に任じられた。まずは」

「わたくしが左丞相ですのね」

「不服だというのかしら」

曹操がその袁紹に問う。二人は今朝廷を出てそこから町に出ようとしている。大路を馬で並んで進んでいるのだ。

「それでは」

「そして貴女が右丞相で」

「ええ、そうよ」

二人で左右の丞相となったのである。

「あらたに設けられたそれにね」

「普通に考えれば栄達ですわね」

「そうね。妾の娘に宦官の家の娘がそこまでなるのは」

考えなくともだ。それはその通りだった。

「有り得ないわよね

「それを考えますと素直に喜ぶべきですわね」

「夏蘭や冬蘭達も将軍になれたし」

当然袁紹の配下の者達もだ。

「桂花達も高官にね」

「そうですわね。孫策さん達は」

「あの娘と美麗も三公になって」

「大尉に司徒に」

二人もそれぞれ栄達したのである。

「そうしたところもよかったですけれど」

「言いたいことはわかってるわ」

ここでだ。曹操はその顔を少し忌々しげなものにさせて言った。
「あの娘よね」
「ええ、司馬尉ですわ」
彼女がだ。どうしたかというのだ。
「急に出て来てそれで」
「まさか。司空になるなんてね」
「思いも寄りませんでしたわ」
「貴女、聞いてるかしら」
ここで曹操は袁紹に問うた。
「あの娘は先の戦乱の間何処にいたのか」
「いえ、全く」
聞いていないとだ。袁紹も答える。
「行方を完全にくらましていましたわ」
「そうよ。私もね」
曹操もだというのだ。
「何処にいたのか全然知らないわ」
「貴女もですのね」
「つまりこの戦乱では何もしていないのよ」
「けれど戦乱が終われば」
即座にだったのだ。
「都にいてそれで全ての権限を掌握していて」
「宦官達を追放してね」
「あの場に居座っていますわね」
「いけ好かないわね」
曹操の眉が曇った。
「あの娘にお株を奪われた感じで」
「ええ。大体何処で何をしていたのか」
「それも気になるしね」
「全く。まだオロチだの何なのはいるというのに」
「嫌な話ね」

二人はそれぞれ国政を司る立場にまで栄達したがそれでもだ。そのことには喜べずにだ。司馬尉のことを考えだ。不機嫌な顔になっていた。

その司馬尉のことはだ。孔明もだった。この戦乱の最大の功労者であり皇室ということもあり摂政に任じられた劉備にだ。こう話していた。

「あの方ですが」

「司馬尉ちゃん？」

「どうもおかしいです」

こうだ。劉備に怪訝な顔で話すのである。

「急に出て来られて帝をお救いして」

「都の安全を確保してよね」

「はい、それで私達を迎えて」

司馬慰はそうしたのだ。これだけなら彼女の功績である。

しかしその功績についてだ。孔明は疑問符を付けて話すのだった。

「今では三公の一人です」

「それがおかしいのね」

「あの方は今まで何処で何をしておられたのか」

「この戦乱の間いなかったわよね」

「それで終わると急にです」

出て来たというのだ。

# 第九十三話　孔明、司馬尉を警戒するのことその二

「こんなおかしな話はありません」
「一体何処にいたのかしら」
「そのことですけれど」
今度は鳳統が出て来てだ。劉備に話すのだった。
「一切わからないのです」
「一切！？」
「はい、袁紹さんや曹操さんの軍師の方々が」
まずは彼女達だった。
「孫策さんや袁術さんのところの張勲さんもそのことを調べておられますが」
「全くわからないの」
「あの謀反の時に」
張譲のだ。何進追い落としのことだ。
「その時に屋敷を襲撃されましたけれど」
「その時にはもうなの」
「はい、おられませんでした」
「それからは全くでした」
「それで戦乱が終わったら急に出て来て」
「都を救った功績を手に入れられました」
孔明も眉を顰めさせ首を傾げさせて話す。
「やっぱりおかしいです」
「その功績で三公になられていますし」
「だがそのことはだ」
ここで関羽が二人の軍師に言った。
「功績もあるしだ」
「それに家柄もですね」
「司馬尉さんの」

「司馬尉殿の家は名門中の名門だ」
それこそだ。袁家や曹家に匹敵するまでのだ。
「しかも嫡流であられる」
「何進大将軍の腹心でしたし」
「その頃にはもう辣腕を振るっておられましたね」
「そうした方だから三公になるのも当然ではないのか？」
こう言う関羽だった。
「それは」
「確かに。それはです」
「その通りです」
軍師二人もそうしたことは認めた。
しかしだ。ここで徐庶がこう言うのだった。
「それでも。急に出て来られてですから」
「はい、何か腑に落ちません」
「怪しいものも感じますし」
「怪しいもの。確かに」
そう言われると関羽もだった。
眉を曇らせてだ。司馬尉のことを話した。
「あの方には妙なものを感じるな」
「何かあるような」
「そうした感じもありますし」
「確かなものはありませんが」
「どうも怪しい方です」
「名門の嫡流ならなのだ」
張飛もここでこう話す。
「普通はもっと明るい雰囲気がある筈なのだ」
「そうです。けれどあの方にはそれがありません」
「明るさがないんです」
軍師二人は司馬尉のそうしたことを見て話すのだった。
「何か。オロチやあの于吉にも似た」

「よからぬものが」
「オロチ。確かにな」
草薙がだ。そのオロチという言葉に反応を見せた。
そしてそのうえでだ。こう劉備達に話すのだった。
「あいつにはそういうものがあるな」
「そうですよね。私達も御会いして内心驚きました」
「名門特有の傲然なものに加えて」
そのだ。どす黒さもあるというのだ。
「ああした方はです」
「他にはおられません」
「あいつは気をつけた方がいいな」
草薙は真剣な顔で述べた。
「俺はそう思う」
「朝廷には宦官の他にも色々な方がおられます」
徐庶はあまりよくない意味でこう言った。
「ですから」
「ううん、それじゃあ」
劉備は首を捻りながら摂政の座から応えた。

# 第九十三話　孔明、司馬尉を警戒するのことその三

「一つ考えてみるわね」
「はい、それではどうされますか？」
「一体」
「ちょっと調べてみて」
こう孔明と鳳統に話す。
「司馬尉ちゃんのこと」
「はい、それではです」
「そうします」
二人の軍師も応えてだ。こうしてだった。
司馬尉について調べられることになった。しかしだった。
わかったことはだ。何もなかった。
「あれ、何も？」
「はい、これまでわかっていることだけです」
「名門出身で嫡流であることだけです」
「その他には何も」
「わかりませんでした」
「じゃあ怪しいところはないのかしら」
劉備は首を傾げさせながら述べた。
「あの娘は」
「いえ、やはりそれはありません」
「間違いなくです」
孔明と鳳統はそのことは確信していた。
「あの人には恐ろしい秘密があります」
「そのことは確実です」
「はい、そうです」
その通りだとだ。徐庶も話す。
「ですからこれからも」

「調べていくのね」
「ただね。どうもね」
舞が困った顔で劉備に話してきた。
「あの娘ガード固いわよ」
「ガード？」
「身辺警護のことよ」
劉備はガードという言葉を知らない。舞達の時代の話だからだ。
それでだ。舞はわかりやすく話した。
「それが尋常じゃないのよ」
「そんなに凄いの」
「もうね。いつもあの娘の兵達が護衛についていて」
「お家の兵隊さんが？」
「そう、もう何重にも囲んでいてね」
その彼等が護衛をしているというのだ。
「屋敷なんて要塞みたいだし」
「ああ、あれな」
二階堂もその舞の言葉に応えて話す。
「壁は高いし堀は深いしでな」
「この時代で言うと砦よね」
そこまでだとだ。舞はまた話した。
「あの警護じゃね」
「本当に蟻一匹入られへんで」
そうだとだ。ロバートも話す。
「あんなのどうすればええんや」
「そうなのよ。とにかく入られないのよ」
舞はまた困った顔で話す。
「屋敷にも。その周りにもね」
「今忍者の人結構多いですよね」
慎吾も首を捻っている。
「どなたも駄目なんですか」

「だから。警護は厳し過ぎて」
舞は話していく。その困っている顔で。
「どうしようもないのよ」
「書を調べてもです」
孔明も話す。彼女も困った顔で。
「わかることは表立ったことだけで」
「肝心なことは全くです」
鳳統も話していく。
「謎だらけの人です」
「というか謎しかないみたいなのだ」
張飛はこう言い切った。
「名門であそこまで知られた奴なのにおかしいのだ」
「っていうか三公だよな」
馬超もこのことを話す。

## 第九十三話　孔明、司馬尉を警戒するのことその四

「それで謎だらけの人って普通ないだろ」
「だからこそ余計に引っ掛かるな」
趙雲は推理を働かせていた。
「謎が多いということは隠さなければならないことがあるということだ」
「謎、ね。そうなるわね」
黄忠も趙雲のその言葉に頷いた。
「確かにこれは」
「少なくともはっきりしたことはだ」
大門は思慮する顔だった。元よりそうした顔だがだ。
「司馬尉と言う者は尋常な者ではない」
「ああ、調べさせないものがあるからな」
テリーも言う。
「調べて欲しくないことを山だけ持ってるのは間違いないな」
「とりあえずは」
どうするべきか。アンディは考える顔で述べた。
「彼女のやり方とか知りたいけれど」
「そうですね。それなら」
ここで孔明は考える顔、それも深い顔になりだ。
そのうえでだ。劉備に話した。
「あの人は軍のことも知っておられますし」
「それならどうするの？」
「ここは一つ考えがあります」
こう劉備に話すのだった。
「あの方に兵を率いてもらいましょう」
「では征伐に出すのか？」
魏延が孔明に尋ねる。

「叛乱か何かの」
「はい、何処かの山賊の征伐に行ってもらいましょう」
孔明は司馬尉にそうさせてだ。彼女のやり方等を見るというのだ。
「戦い方でおおよそのことはわかります」
「じゃあ。少しね」
どうするかと。劉備はここで彼女の考えを話した。
「袁紹ちゃんと曹操ちゃんにお話してみるわね」
「それがいいと思います」
鳳統もそれはいいと答えた。
「ではそうして」
「ええ、それじゃあ」
こうしてだった。劉備はだ。
袁紹達を呼んでだ。司馬尉を山賊討伐に行かせることを提案した。
するとだ。まずはだった。
曹操がだ。こう劉備に言うのだった。
「いいと思うわ」
「そう。曹操ちゃんは賛成してくれるのね」
「丁度擁州で山賊が暴れてるし」
「そこに行ってもらうのね」
「ええ。残念だけれど山賊は消えるものじゃないわ」
この時代はだ。どうしてもだった。
「だからね」
「そうですわね。わたくしも」
今度は袁紹が言った。少し考える顔で。
「賛成しますわ」
「じゃあ」
「ただね」
「どうも気になりますわ」
いぶかしむ顔でだ。袁紹は言った。
「あの娘のことは」

「袁紹ちゃんもなの」
「最初からいけ好かないと思っていますし」
「私もね」
袁紹だけでなく曹操もだった。彼女についてはだ。
個人的にだ。嫌悪感を持っていてそれで話すのだった。
「名門の嫡流でね」
「それで非の打ちどころがないっていうのはどうしてもですわ」
「そうなの？」
その話を効いてだ。劉備は。
首を傾げさせてだ。こう二人に返した。
「別にそんなことは」
「ええ、これはね」
「わたくし達の事情ですから」
二人は顔を曇らせた。宦官の家の娘や妾の娘ということは彼女達にとっては拭えないものだ。その劣等感故に司馬尉を嫌っているのだ。

# 第九十三話　孔明、司馬尉を警戒するのことその五

それを出してしまったのだ。だが劉備はそれに気付かずにだ。
二人にだ。こう言うのだった。
「仲良くとかした方が」
「少なくとも対立とかはしないから」
「それはしませんわ」
「何進大将軍は信任されていたし」
「向こうも何もしてきませんし」
少なくとも対立は避けているというのだ。二人は。
それを話してだった。再びだった。
「まあとにかくね」
「気になることはなりますわ」
「ううん、皆同じこと言うわね」
劉備は二人の話から孔明達の話を思い出した。そのうえで、であった。
話を戻した。その出兵のことだ。
「それならね」
「ええ、山賊の討伐ね」
「それに行ってもらいますわ」
こうしてだった。山賊退治自体は決まったのだった。
こうして司馬尉は兵達を率いてだ。擁州の山賊退治に赴いた。その目付けとしてだ。
曹仁と曹洪、それに田豊と沮授がついた。表向きは将、軍師である。
だが彼女達はだ。怪訝な顔であれこれと話すのだった。
「大丈夫かしら」
「ううん、司馬尉って兵を率いたことはなかったわよね」
「軍師としては参戦してたけれどね」

「それはなかったわよね」
こうだ。曹仁と曹洪が話す。
「じゃあこの戦いは」
「不安ね」
「まあ。将として貴女達がいて」
「軍師として私達がいるから」
田豊と沮授がここで二人に話す。
「相手も普通の山賊だから」
「特に不安に感じることはないんじゃ」
「そうね。私達はあの娘がどうなのか見るだけだし」
「実質的に戦ってね」
そのうえでだ。司馬尉を見るというのだ。
こうしてだった。彼女達は司馬尉を見る。今のところは。
特におかしなところはなかった。しかしだ。
急にだ。首をだ。
真後ろまで回してみせる。それに対してはだ。
曹仁達も引いた。そのことも話すのだった。
「何度見てもあれは」
「ちょっと怖いわよね」
「ええ、慣れないわよね」
「どうしても」
それはなのだった。首が背中の方まで回るのはだ。
何度見ても慣れないと話すのだった。
「梟とか狼みたいな」
「そんな感じよね」
「おい、それってやばいぞ」
二人の話を聞いてだ。ビリーが言った。彼等も同行しているのだ。
「梟とか狼っていうとな」
「剣呑な動物っていうのね」
「そうだっていうのね」

「ああ、そんな感じだからな」
それでだというのだ。ビリーは。
「只でさえ胡散臭い奴だってのにな」
「ああした奴が一番危ないんだよな」
マイケルは腕を組んで難しい顔で話す。
「裏で相当なことをするぜ」
「裏ね。その裏がわからないのよ」
「本当に全然」
田豊と沮授も言うのだった。
「わかるでしょ。警護が固いし」
「周りにはいつもあれだけ兵がいるし」
「会いに行くのにも何度も細かく調べられるし」
「調べるなんてとてもね」
「俺達にしてもな」
ダックも首を捻りながら話す。
「忍び込むことさえできないしな」
「あの兵にしてもじゃ」
タンは兵達について話した。

# 第九十三話　孔明、司馬尉を警戒するのことその六

「普通の兵ではないな」
「ああ、剣呑なことこの上ないぜ」
「只者ではない者達ばかりだ」
ビリーだけでなくリチャードも話す。
「何かな、雰囲気がな」
「あれだ。こちらの世界の白装束の者達に似ている」
「あっ、言われてみれば確かに」
「そうよね」
曹仁と曹洪も話す。
「あの連中何か影みたいな感じで」
「急に出て来たりするし」
「あの連中と似てるわね」
「雰囲気まで」
「違うのは着てる鎧とかだけじゃねえのか？」
ダックはここまで言った。
「他そっくりだろ」
「まさかと思うがじゃ」
タンは己の顎に右手を当てて話した。
「あの連中と白装束の者達は関係があるのかのう」
「まさかそれは」
「ないんじゃないかしら」
それはだ。田豊と沮授が否定した。
「幾ら何でも」
「あの娘の家はそれこそ袁家や曹家に並ぶ名門だし」
「しかもその嫡流よ」
「雲の上の名門なのよ」
「じゃあ聞くぜ」

ビリーは鋭い目で彼女達に問うた。
「その家はどうやって出て来たんだ?」
「えっ!?」
「どうやってって?」
「だから。名門になるにはなる理由や状況があるだろ」
ビリーが彼女達に問うのはこのことだった。
「例えばあれだろ?曹家は」
「ええ、漢王朝の功臣曹参がはじまりよ」
「私達は夏侯家の養子筋だけれどね」
この辺りにも宦官の家であることが影響している。
「それで袁家はね」
「袁安様からはじまって」
袁紹や袁術もその袁安からはじまっているのだ。
「高潔さや裁判の公平さが認められて世に出て」
「三公にまでなられたの」
この袁安からだ。四代三公がはじまったというのだ。
「そういうことなの」
「これでわかってくれたかしら」
「ああ、まあな」
ビリーは二つの家のことはわかった。
「そういうことだったんだな」
「それであの娘の家だけれど」
「あれっ!?そういえば」
「そうよね。何か急にね」
「出て来たわよね」
四人はだ。ここでだ。
それぞれ怪訝な顔になってだ。こう話すのだった。
「誰か何か知ってる?あの娘の家のこと」
「いえ、全然」
「そういえば何もね」

「知らないわよね」
このことにだ。気付いたのである。
「郷里から長老に推薦されてね」
「それで出て来てよね」
漢王朝の登用制度だ。まだ科挙はないのだ。
「代々高官を務めていて」
「けれどその詳しい出自は」
「ではだ」
リチャードが四人に問うた。
「曹家や袁家程その出自はか」
「はっきりしないわ」
「それはその通りよ」
こう話す彼女達だった。

## 第九十三話　孔明、司馬尉を警戒するのことその七

「実はそうなのよ」
「確かに名門だけれど」
「まあどの家もな」
ダックは一つの真理を話した。
「最初は何処にでもある家さ」
「まあね。御先祖が功を挙げて家を立ててね」
「それで立派になるものだから」
「名門ってそういうものだから」
「簡単に言えば」
「それでも怪しい家だな」
ビリーは司馬尉のその家そのものにだ。胡散臭さを感じていた。
そのうえでゆで卵を食べながら。こう言うのだった。
「随分とな」
「ううん、特にあの娘はね」
「とりわけよね」
「これは一層監視必要だな」
リチャードはこう結論を出した。
「見ていくか」
「そうね。より慎重にね」
「見ていきましょう」
曹仁達も頷くのだった。こうしてだ。
彼等は司馬尉を離れた場所から見ていた。そしてその司馬尉は。
彼女の天幕の中でだ。こう話すのだった。
「見ているわね」
「はい、曹仁殿達がです」
「見ておられます」
ビリー達が言う不気味な兵達が彼女に応える。天幕は何もかもが

白い。だが白い筈なのにだ。えも言われぬどす黒さが漂っている。
そのどす黒さの中でだ。司馬尉は話すのだった。
「それならね」
「それなら？」
「それならといいますと」
「呼んでいるから」
自信に満ちた声でだ。司馬尉は言った。
「既にね」
「御呼びだったのですか」
「あの方々を」
「そうよ。私の最も愛する妹達」
こうだ。妖しい笑みで言う司馬尉だった。
「あの娘達を呼んだわ」
「司馬師様と司馬昭様」
「あの方々を」
「ええ。私を支えてくれる彼女達をね」
呼んだというのだ。
「あの娘達がいればね」
「何の問題もありませんね」
「これからのことも」
「今回の山賊退治だけれど」
それはどうなのかもだ。司馬尉はわかっていた。
「私を見る為のものだから」
「ではここは」
「どうされますか」
「見せてあげるわ」
笑みの妖しさがさらに深まった。
「私のやり方をね」
「司馬尉様のですね」
「その戦い方も」

「あの娘達には一切触れさせないわ」
曹仁や田豊達にはというのだ。
「決してね」
「全てはですね」
「司馬尉様が」
「ええ、そうさせてもらうわ」
まただ。司馬尉は妖しい笑みで言うのだった。
「私と妹達で」
「では戦の後の処理も」
「全てですね」
「そうよ。楽しみだわ」
口元の妖しい笑みがだった。
歪み邪なものも含ませて。そこから言葉を出したのである。
「どうしてあげようかしら」
「司馬尉様の想われる様に」
「そうされるとよいかと」
「ええ、そうさせてもらうわ」
実際にそうするとだ。司馬尉自身も言う。
「山賊の生き残った数にもよるけれどね」
「では出来る限り生き残らせましょう」
「戦いにおいては」
兵達も主に言う。
「そしてその後で」
「ゆっくりと」
「血、いいものだわ」
今度はだ。目が歪んだ。

# 第九十三話　孔明、司馬尉を警戒するのことその八

「あの匂いはたまらないわ」
「そしてその血がですね」
「戦においては」
「美味なるもの。では」
どうするかというのだ。
「それを思う存分味わいましょう」
「はい、では今より」
「妹様達も御呼びして」
「それと」
さらにと。司馬尉は言葉を加えた。
「あの目付けの娘達だけれど」
「曹操や袁紹が送り込んでいるあの四人ですね」
「あの者達はどうされますか？」
兵達は彼女達をどうするかも訪ねた。
「やはりここは」
「毒で」
「いえ、それはしないわ」
毒やそうしたことはだ。しないというのだ。
「今はね」
「ではこの戦においてはですか」
「放っておきますか」
「どうせ私達のことはわからないのだから」
「泳がせておきますか」
「無駄に」
「そうさせるわ。ただし」
それでもだとだ。司馬尉はここでこうしたことも言った。
「あの娘達にはこの戦では」

「見ているだけにさせる」
「そうさせますか」
「ええ、楽しみは独占させてもらうわ」
また妖しい笑みを浮かべて。司馬尉は言う。
己の席に座っている彼女は右手にあった銀の杯の中のだ。赤い葡萄酒を飲みそこからまた兵達に話をするのであった。
「美味は私達だけでね」
「だからですね」
「そのうえで」
「ええ。外に除けておくわ」
戦には関わらせない、その考えは決まっていた。
そのうえでだった。こうも言うのだった。
「ただ」
「ただ？」
「ただといいますと」
「面白いことを考えたわ」
ここでこんなことも言ったのである。
「一つね」
「一つといいますと」
「何をされるおつもりですか？」
「一体」
「あの娘達。あちらの世界の住人達にも」
ビリー達のこともだ。把握しての言葉だった。
「見せてあげるわ」
「見せるとは」
「それは」
「芸術よ」
ここでだ。芸術と言う司馬尉だった。
「それを見せてあげるわ」
「ふむ。それではです」

「戦の後で、ですね」
「それを見せるのですね」
「あの者達に」
「そうするわ。それではね」
こう話してであった。司馬尉は。
次の日己の天幕に曹仁達を集めてだ。こう告げるのだった。
「妹達を呼ぶわ」
「妹！？」
「妹といいますと」
「おられたのですか！？」
「それも御一人ではなく」
「ええ、そうよ」
その通りだとだ。司馬尉は自分の目の前に立つ彼女達に悠然と笑って答える。今座っているのは彼女だけである。己の席に座っているのだ。
「その通りよ」
「あの、司空殿」
曹洪は戸惑う調子で彼女を官位で呼んで問うた。
「宜しいでしょうか」
「妹達のことね」
「はい、御言葉ですが」
その存在を急に聞いてだ。曹洪も驚きを隠せなかったのだ。
それでだ。彼女は問うたのである。
「おられたのですか」
「言っていなかったからね」
「だからですか」
「知らないのも無理はないわ」
そうだとだ。司馬尉は悠然とした笑みをそのままに話すのである。
「そのこともね」
「ですか」

「名前を言うわね」
妹達のその名前も話す。
「司馬師と司馬昭というのよ」
「それがお二人のですか」
「御名前ですか」
「覚えておいてね」
やはりだ。誰もがはじめて聞く名前だった。

# 第九十三話　孔明、司馬尉を警戒するのことその九

「その彼女達をこの軍に呼び」
「そしてですね」
「司空殿の補佐を」
「そうしてもらうから。宜しくね」
こうだ。曹仁達に話すのである。
このことを伝えてからだ。司馬尉は彼女達を己の天幕から下がらせた。四人は自分達の陣に戻りながらだ。こんなことを話す。
まずは沮授がだ。いぶかしむ顔で言った。
「初耳です」
「そうね。私もよ」
田豊もだ。驚きを隠せない顔だった。
「司馬尉殿に妹君がおられたとは」
「聞いていません」
「そうよね。しかも二人なんて」
「聞いたこともないわ」
曹仁と曹洪もだ。同じだった。
「司馬家は名門だというのに」
「妹君達の存在が今までわからなかった」
「これはどういうことなの！？」
「そのことさえはっきりしていないなんて」
「わかりません」
「本当に」
袁紹が誇る軍師二人にしてもだ。それは同じだった。
「一体どういうことなのか」
「偽りではないようですし」
「確かに。司馬家はね」
「謎に包まれた家みたいね」

それでもだ。このことはわかった彼女達だった。
「どういう家なのか誰も知らない」
「そのことだけはわかったわね」
「そうですね。そのことだけはです」
「それはわかりました」
袁紹の軍師二人もそのことはわかった。しかしだ。
その謎に包まれた司馬家についてはというと。
「あの、これは」
「是非共です」
「ええ、そうね」
「すぐに華琳様達にお伝えしましょう」
名門であればあるだけその家系はわかっている筈なのだ。しかし妹達の存在さえわからなかった。司馬家のその不可思議さをだというのだ。
「司馬尉仲達、それにしても」
「本当に何者なのかしら」
「はい、余計に得体が知れなくなりました」
「不気味なことに」
こうした話をしてだった。彼女達は己の天幕に戻るのだった。そしてだ。四人からその話を聞いたビリー達もそれぞれ言うのだった。
「おいおい、さらに怪しくなってきたな」
「何だよそれ妹登場かよ」
ビリーもダックも引きつった笑みで言う。
「何かよ。これってよ」
「謎が謎を呼びってやつだよな」
「というかどういう家だ？」
マイケルはその司馬家について言及した。
「妹達の存在が今までわからなかったなんてよ」
「訳がわからないな」
リチャードも真剣な顔で話す。

「この事態は」
「ううむ、ここは様子を見るべきかのう」
タンはその長く伸びた眉の下の目を考えるものにさせている。
「話がさらにわからんようになった」
「おい、話は聞いたぜ」
ホア＝ジャイがここで来た。彼は今まで偵察に出ていたのだ。
それでだ。首を傾げさせながらだ。仲間達に言うのだった。
「あの怪しい大臣さんにまた怪しい話なんだな」
「ああ、そうさ」
「妹登場さ」
「しかも二人だ」
ビリーにダック、マイケルが彼に話す。

# 第九十三話　孔明、司馬尉を警戒するのことその十

「そうビッグベアにも伝えてくれるか？」
「あいつも戻ってきてるんだよな」
「そうだな」
「ああ、ここにいるぜ」
そのビッグベア本人が出て来て彼等に応える。
「本当に謎が謎を呼びになってるな」
「俺の考えはな」
ホアは鋭い目で仲間達に話した。
「ここは用心してな」
「様子を見るか」
「そうすべきか」
「訳がわからなくなってきたからな」
だからだとだ。ホアも言うのだ。
「下手に動いたらまずいだろ」
「少なくともあの大臣さんは俺達の味方じゃねえな」
ダックは本能的にこのことを察していた。
「敵だと思っていいな」
「ああ、そうだな」
ビリーもダックの今の言葉に真剣な顔で頷く。
「ありゃ敵だな」
「オロチと関わりがあるか」
リチャードは真剣にこのことを疑っていた。
「そんな筈はないと思うが」
「気配は似ておる」
タンはそこから指摘する。
「あの戦いで感じたものとな」
「ああ、そっくりだな」

ビッグベアはタンのその言葉ニ頷いて述べた。
「不気味なところなんて特にな」
「ならば余計にじゃ」
そのオロチと似たものを感じるからこそだとだ。タンは話すのである。
「ここは様子見じゃ」
「よし、それじゃあな」
「曹仁さん達ともそれを話すか」
こうしてだった。彼等も今の方針を決めたのだった。そしてだ。
彼等の言葉を聞いてだ。その曹仁達もだった。
自分達の天幕の中で卓を囲んでだ。こう話すのだった。
「そうね。やっぱりね」
「ここはね」
「様子を見て」
「下手に動かない方がいいわ」
結論はこれだった。
「さもないとおかしなことになるわね」
「どうも。あちらもそれを狙っているみたいだし」
「それなら」
こうしてだ。彼女達は今は動かずに様子を見ることにした。それを見てだ。
司馬尉は楽しげに笑ってだ。己の兵達に話すのだった。
「狙い通りね」
「はい、これでですね」
「あの者達は動けません」
「よいことです」
「そう。こちらから何かをせずに」
向こうからだというのだ。
「動きを止めてくれたからね」
「これでこの戦はですね」

「非常にやり易いですね」
「私達の思うがままの」
闇の如き深い笑みを浮かべ。司馬尉は言った。
「ではそうしましょう」
「はい、司馬師様と司馬昭様が来られ」
「そのうえで」
「楽しみだわ。あの娘達と久し振りに会えるのね」
今度はこんなことを言う司馬尉だった。
「さて、元気かしら」
「おそらくは。そうかと」
「ではその時を待ちましょう」
「姉妹の再会を」
こうだ。司馬尉は兵達と話だ。闇を見るのだった。どす黒い闇の中で。

第九十三話　　完

２０１１・７・９

# 第九十四話　司馬尉、妹達を呼ぶのことその一

第九十四話　司馬尉、妹達を呼ぶのこと

曹仁達から司馬尉の妹達の報を受けてだ。
曹操は目を大きく見開いてだ。己の席から立って言うのだった。
「妹ですって！？」
「はい、そうです」
「その報が来ています」
韓浩と徐晃がそうだと述べる。
「何でも司馬師殿と司馬昭殿というそうです」
「その御二人が」
「馬鹿な、聞いてないわ」
曹操もだった。このことは。
「そんな話は」
「はい、それでなのです」
「夏瞬殿や冬瞬殿達も驚きを隠せないようです」
「あの娘に妹がいるなんて」
曹操は己の席から立ったままだ。また言うのだった。
「そんなことが」
「あの、それでなのですが」
「どうされますか？」
韓浩と徐晃は曹操にあらためて尋ねた。
「ここはです」
「一体」
「夏瞬達に伝えて」
決断は早い。驚いていてもこのことは顕在だった。
「今は様子を見なさい」
「動いてはならない」

「そういうことですね」
「ええ、下手に動いたらしくじるわ」
それを危惧しての言葉だった。
「だからここはね」
「わかりました。それでは」
「そうお伝えします」
「それとね」
それに加えてだとだ。曹操は言った。
「すぐに劉備の所に行くわ」
「このことをですね」
「お話されますね」
「ええ。丁度あの娘の所に行くつもりだったけれど」
そのだ。劉備の所にだというのだ。
「益州のことでね」
「あの州の牧にですね」
「劉備殿を推挙されるおつもりだったのですね」
「ええ、そのことを話すつもりだったけれど」
理由はだ。さらに増えたというのだ。
「今はそれ以上にね」
「そうですね。今は本当に」
「そのことをお話しないと」
「一体どういう家だというの！？」
曹操もだ。司馬家についてはこう言うしかなかった。
「妹達の存在が今までわからなかったなんて」
「そうですね。こんなことがあるのですか」
「信じられません」
「全くよ。有り得ないことだわ」
しかし現実だった。それでなのだった。
曹操はすぐに劉備のいる摂政の宮殿に入った。宮殿といっても小ぶりで大人しい造りなのは劉備の好みが出ているせいだろうか。

その彼女のところに向かうとだ。
入り口でだ。袁紹に孫策と鉢合わせしたのだった。彼女達は曹操の顔を見るとすぐにだ。驚きを隠せない顔でこう言うのだ。
「あの娘に妹がいたですって!?」
「それも二人も」
「そんな話聞いていませんわよ」
「どういうことなの!?」
「貴女達もなのね」
曹操は二人のその言葉も聞いて言うのだった。
「あの娘達のことは」
「ええ、辛姉妹から聞きましたわ」
「私は二張から」
それぞれの内政の懐刀からだというのだ。彼女達はそれぞれの情報収集も受け持っているのだ。だからこそ知っているのだ。
「今あちらの陣では大騒ぎだとか」
「司馬尉直率の軍以外ではそうらしいわね」
「何処までも謎ね」
「司馬尉、実はね」
孫策は眉を顰めさせながら話す。

# 第九十四話　司馬尉、妹達を呼ぶのことその二

「私あの娘のことはよく知らないのよ」
「というか全てが謎に包まれているのよ」
「何もかもがですわ」
「このことはね」
また言う曹操だった。
「とにかく劉備にもね」
「そうですわ。その為に来たのですから」
「是非共ね」
話をしようというのだ。こうして三人で劉備の場所に向かおうとすると。
そこには。今度は。
袁術がだ。慌しく駆けて来てだ。三人に言うのだ。
「大変じゃぞ！」
「ええ、司馬尉よね」
「そうなのじゃ。何と妹がいたのじゃ」
こうだ。曹操に対しても応える。
「どういうことじゃ。こんなことは初耳じゃぞ」
「だからでしてよ」
袁紹は顔を顰めさせて彼女に返す。
「これから劉備さんにそのことをお話しに行きますのよ」
「同じくね。私もよ」
孫策もここでこう言う。
「そのことで劉備のところに行くのよ」
「左様か。主等もか」
「考えることは同じね」
曹操はまた言った。
「訳がわからないにも程があるわ」

「ううむ、司馬尉と言う者」
どうなのかとだ。袁術は首を捻りながら話す。
「わからん。何だというのじゃ」
「同感よ。まあとにかくね」
その袁術に言う孫策だった。
「今は行きましょう」
「そうじゃな。劉備のところにな」
こうしてだ。袁術も入れて四人になった一行は宮殿の劉備の前に来た。彼女は丁度孔明達と話しているところだった。そこに来たのだ。
四人の姿を見てだ。劉備はすぐにこう言った。
「あのことよね」
「ええ、そうよ」
その通りだとだ。曹操が返す。
「やっぱり聞いてたのね」
「うん。信じられないけれど」
「信じられないけれど事実よ」
曹操もだ。半信半疑といった顔だった。
「あの娘には妹がいたわ」
「しかも二人よね」
「名前は司馬師に司馬昭というわ」
孫策は二人の名前を話した。
「本当にはじめて聞く名前だけれどね」
「そしてその二人が」
今度は袁紹が劉備に話す。
「司馬尉の補佐に就きますわ」
「あっという間にここまで決まったのじゃ」
袁術も劉備に話す。
「こんなことは有り得ないのじゃ」
「はい、私達にとってもです」

「寝耳に水でした」
孔明と鳳統もだった。その顔にある驚愕は消せなかった。
「まさか。司馬尉さんに妹さん達がおられるなんて」
「しかももうあちらに向かっておられます」
「私も。朱里ちゃん達からお話を聞いて」
どうかとだ。劉備も言う。
「びっくりしているところだったの」
「それで何者なのじゃ」
袁術は単刀直入に述べた。
「その司馬師に司馬昭という者は」
「今わかっているのは名前だけです」
「その他のことは」
孔明と鳳統が袁術に話す。
「全くわかりません」
「何一つとして」
「謎に包まれているのよ」
劉備も弱った顔になっている。
「あの娘達が何者なのか」
「そうね。まさかここで出て来るなんて」
「考えもしませんでしたわ」
「けれど」
それでもだと。ここで言う劉備だった。
「あの娘達は」
「ええ。よからぬものはあるわね」
曹操は顔を顰めさせて言った。

# 第九十四話　司馬尉、妹達を呼ぶのことその三

「あの娘達には」
「ではやはり今は」
どうするのか。袁紹が話す。
「様子見ですわね」
「結局それしかないみたいね」
孫策は彼女にしては珍しくはっきりしない顔で述べた。
「今のところはね」
「ではあれじゃな」
袁術も孫策と同じくはっきりとしない顔になっている。そのうえでの言葉だ。
「曹仁達にはこのまま」
「様子見を伝えるわ」
曹操もそうするというのだ。
「もっとも。向こうもね」
「あの娘達には一切関わらせないようにしますわね」
袁紹は不機嫌そのものの顔で話した。
「司馬家の面々だけで仕切りますわね」
「なら尚更見させてもらいましょう」
孫策も言う。
「どういったことをするのかをね」
「それにしても。司馬尉ちゃんって」
劉備も首を捻っている。
「ここまで謎が多いなんて」
「謎が謎を呼んでおるのじゃ」
袁術はこうまで言う。
「そして謎だらけになっておるのじゃ」
「ただいけ好かないとだけ思っていたけれど」

「得体の知れないものも感じてきましたわ」
曹操と袁紹は彼女への嫌悪をここでも話す。
「どうやら司馬家についても」
「今度さらに調べる必要がありますわね」
「そうね。それでだけれど」
孫策はここで話を変えてきた。それは。
「劉備にお話したいことがあるのよ」
「私に？」
「そう。今益州が空いてるけれど」
具体的には牧がいない。そういうことだ。
「どうかしら。その牧にね」
「私がなのね」
「丁度あそこには定軍山もあるし」
そのだ。華陀達が言っているそこだった。
「民も多いし治めないといけない場所よ」
「そういえば益州って」
ここでだ。劉備はその益州について話すのだった。
「南蛮と」
「ええ、境を接していたわね」
曹操がそのことを話す。
「貴女その南蛮に行ったことあったわよね」
「それで猛獲ちゃん達と知り合ったのよ」
そうだったというのだ。劉備の数多い出会いの一つだ。
「あそこは凄く暑くて」
「それにね」
曹操は考える顔でさらに話す。
「やっぱり定軍山があるし」
「だから余計になのね」
「ええ。最初から話に出すつもりだったけれど」
「私が益州に」

「そうして。貴女が牧に入って」
「うん、じゃあ」
「徐州に加えて益州ね」
その二つの州をだ。劉備が治めることになったというのだ。
その中でだ。さらにだった。
「あと擁州だけれど」
「あそこはどうしますの？」
袁紹が曹操に尋ねる。
「今はわたくしの軍が占拠していますけれど」
「けれど貴女五つの州を治めているわよね」
「正直。今は」
「その五つの州で手が一杯ね」
「その通りですわ」
袁紹の事情はそうだった。彼女も今治めている州のことで必死なのだ。
それでだった。袁紹は言った。
「ですから擁州は」
「そうよね。じゃあ誰が治めるべきかしら」
「同じ董家の者でいいではないか」
ここでこう言ったのは袁術だった。

# 第九十四話　司馬尉、妹達を呼ぶのことその四

「そうではないか？」
「あの家の娘になのね」
「そうじゃ。あの董白がいるぞ」
袁術は孫策にも自分の考えを話す。
「あの娘に任せればいいではないか」
「そうね。董卓はいないことになってるけれど」
この辺りは公然の秘密だった。董卓は死んだことになっているのだ。
しかし董白はいる。それならばだった。
「あの娘がいるなら」
「任せればよいではないか」
「そうね。それじゃあ」
「うむ、決まりじゃな」
こうしてだった。擁州の牧は董白がすることになった。そうなったのだ。
こうして益州と擁州のことは話が決まった。漢王朝は彼女達に支えられはじめていた。
その擁州でだ。司馬尉は。
二人の少女達にだ。こう言っていた。
「来たわね」
「はい、お姉様」
「只今参りました」
一人は絹を思わせる妖しい輝きの黒髪を持っている。その髪が腰までである。
右が前になっている白い着物に紅の袴を着ている。切れ長の睫毛の長い琥珀の目に小さな唇を持っている。顔は細く雪の様だ。
もう一人は金色の髪を短くしている。はっきりとした青い目であ

り首には逆さになった十字架をかけ黒い法衣を着ている。シスターの服だ。

二人共その背は司馬尉よりも低い。その二人がだ。彼女に対して言うのだ。

「司馬師、ここに」

「司馬昭もまた」

「ええ。貴女達がいれば」

司馬尉はどうかとだ。妖しい笑みで話すのだった。

「最早全てはなったわね」

「この戦は姉上お一人で充分では？」

「それで我等を御呼びしたのは」

「わかっている筈よ」

妖しい笑みをそのままにだ。司馬尉は言うのだった。

「見せる為よ」

「あの者達にですね」

「私達を見ている彼女達に」

「それとあの世界から来ている面々にもね」

彼等のこともだ。司馬尉は妹達に話した。

「見せる為によ」

「我等の戦の仕方と」

「そのやり方を」

「思う存分見せてあげるわ」

笑みの妖しさがさらに深まる。

「司馬家のやり方をね」

「そういうことでしたら」

「我等もまた」

「さて、では早速ね」

また妹達に言う司馬尉だった。

「軍儀を開くわよ」

「ではあの者達もですね」

「ここに呼びますね」
「いえ、呼ばないわ」
曹仁達はだ。呼ばないというのだ。
それは何故かもだ。司馬尉は話した。
「私達でやるわ」
「やはりですか」
「それされますか」
「そうよ。私達の戦だから」
それでだとだ。これが司馬尉の言葉だった。
「そうさせてもらうわ」
「後で曹操や袁紹が何か言うのでは」
「それは構いませんか」
「気にする必要があるのかしら」
司馬尉は平然として妹達に返す。
「あの娘達のことは」
「いえ、その必要はありません」
「全くです」
司馬師と司馬昭もだ。平然とした笑みで長姉に話す。

# 第九十四話　司馬尉、妹達を呼ぶのことその五

「所詮は宦官の娘に妾腹」
「それでどうして気にすることがありましょうか」
「その通りよ。私達は名門司馬家の嫡流よ」
「宦官や妾とは違います」
「何一つとして同じものはありません」
「だから。あの娘達が何を言っても」
また言う司馬尉だった。
「気にすることはないわ」
「そうですね。それでは」
「あの娘達は」
「ええ。ただ」
しかしだとだ。ここで司馬尉の言葉が止まった。
そのうえでだ。この娘の名前を出すのだった。
「劉備といったわね」
「劉備？あのですか」
「何でも皇室の血を引くという」
「あの娘ですか」
「草靴や蓆を売っていたという」
「ええ、あの娘よ」
まさにだ。その娘だというのだ。
「あの娘は気になるわね」
「ただの抜けてる娘では？」
「話を聞いていますと」
「ええ。あの娘自身はね」
そのだ。劉備はどうかというのだ。
「政も戦もね」
「どちらについてもですね」

「大したことはありませんね」
「ええ。確かに抜けているし」
それもまた事実だというのだ。
「ぼんやりとした娘よ」
「では問題にならないのでは？」
「幾ら皇室の者とはいえ」
「あの娘の周りには」
そのだ。劉備の周りがだというのだ。
「多くの優れた者達が集っているわ」
「その者達がですか」
「問題だというのですね」
「その曹操や袁紹にしても」
彼女が侮蔑しているだ。その彼女達もだというのだ。
「劉備の下に集まっているわ」
「あの二人もですか」
「その劉備の下に」
「勿論孫策や袁術もね」
彼女達のことも話される。
「彼女のところに集っているわ」
「では私達が滅ぼそうとしている者達がですか」
「あの娘の下に集っているのですか」
「では今は」
「あの娘は」
「人を惹き付けて話さないものがあるわ」
それがだ。問題だというのだ。
「それが気になるわね」
「では。我が司馬家がこれから望みを果たすには」
「その劉備がですね」
「最大の敵になりますか」
「今後は」

「そう思うわ。都に戻れば」
司馬尉の顔から余裕の笑みが消えていた。そのうえでの言葉だった。
「あの娘をね」
「はい、わかりました」
「手を打ちましょう」
「消すわ。しかも」
ここでだ。司馬尉の顔に妖しい笑みが戻った。
それでだ。こう二人に言うのだった。
「思いきりね」
「残忍な方法で、ですね」
「時間をかけて」
「人を殺すには楽しみがなければ意味がないわ」
妖しい笑みにさらにだ。酷薄なものも宿った。
そうしてだった。彼女は言うのだ。
「だから。あの娘もね」
「その劉備もですね」
「そうしますか」
「そうするわ。さて」
ここでだ。また話す司馬尉だった。

# 第九十四話　司馬尉、妹達を呼ぶのことその六

そのうえでだ。彼女達は。
闇の中に入りだ。軍議を開くのだった。
軍は司馬家の者達が動く様になっていた。それを見てだ。
曹仁は苦い顔でだ。曹洪達に言うのだった。
「どう思うかしら」
「あからさまなことをしてくれるわね」
曹洪もだ。苦い顔で応える。
「私達は完全に蚊帳の外ね」
「そうね。司馬家の面々でね」
「除け者にしてくれるのはわかっていたにしても」
「ここまで露骨にしてくれるとはね」
「全くね」
「やってくれるわ」
田豊達もここで言う。
「陣も明らかに離してくれたし」
「軍にしてもね」
とにかくだ。司馬家の者達だけでなのだった。
彼女達は率いている軍も除け者にされていた。完全に司馬家だけで話が進んでいた。
そんな中でだ。彼女達は。
「どうしたものかしらね」
「これでは。目付けにしてもやりにくいわね」
「ここまで堂々と話されるとね」
「どうしても」
これからのことに悩んでいた。しかしだ。
その彼女達にだ。ビリーが話す。
「まあいいじゃねえか？」

「よい？」
「よいと言うのですか、ビリー殿は」
「ああ、別にな」
また言うビリーだった。
「あの連中がそうしたいっていうんならな」
「よいというのですか」
「好きなようにですか」
「ああ、見ればいいんだよ」
にやりと笑ってだ。彼は曹仁達に言った。
「このままだ」
「あの者達をですか」
「司馬家の者達を」
「そうだよ。このままな」
ビリーの言葉は変わらない。そしてそれは。
ダックも同じでだ。彼もこう言うのだった。
「離れた場所から見る方がいい場合もあるだろ」
「言われてみれば確かに」
「そうですね」
曹仁達もだ。考えを変えだした。
「遠くから見てもです」
「見ることができますね」
「よし、じゃあこれで決まりだな」
マイケルも笑って言う。
「このまま見ていくか」
「司馬尉達の動きをですね」
「それを」
「それでな」
今度はホアが彼女達に話す。
「これからだけれどな」
「これから？」

「これからといいますと」
「何か食うか？」
ここでだ。こう提案したのである。
「丁度昼飯の時間だしな」
「そうね。それじゃあ」
「何食べようかしら」
「茶玉子はどうじゃ？」
タンは自分の好物を出した。
「あれはよいぞ」
「バターコーンがいいな」
「俺は目玉焼きだな」
ダックとビリーも自分達の好物を話す。
「それじゃあ今からな」
「作って食べるか」
「何か玉子が多くない？」
田豊は彼等の話を聞いて突っ込みを入れた。

# 第九十四話　司馬尉、妹達を呼ぶのことその七

「あれは食べ過ぎるとよくないって聞いたけれど」
「ああ、コレステロールな」
このことに答えるのはホアだった。
「あれが問題になるよな」
「ならそんなに食べない方がいいのじゃないかしら」
「確かに多いな」
リチャードも腕を組んでそうではないかと応える。
「それでは野菜も入れるか」
「ステーキはなしか？」
ビッグベアもビッグベアで自分の好物を話に出す。
「軽く焼いたそれを食いたいんだけれどな」
「ステーキねえ」
「あれもでしょ？」
「コレステロールが高いわよね」
「お肉自体が」
曹仁達はこのことも知ったのだ。他ならぬビリー達から話を聞いてだ。
「あまり食べ過ぎたら痛風だったかしら」
「あの病気になるって聞いてるけれど」
「私達も気になるけれど」
「貴方達もまずいのでは？」
「確かに食う量は多いけれどな」
ビリーもそのことは否定しない。笑ってこのことを話す。
「けれどそればっかり食う訳じゃないからな」
「他のものもね」
「お野菜とかもちゃんと食べるから」
「だからいいの」

「そういうことね」
「そう、偏食はしないんだよ」
それはわかっていた。よくだ。
「バランスよくな」
「食べているからな」
ビッグベアにしてもそれは同じだった。レスラーは食べるのも仕事だ。それならばバランスよく食べないとならない、そういうことだった、
それでだった。彼等もまただった。
「野菜も食ってな」
「イモも出すか」
「あとデザートに果物な」
「バランスよくたっぷりとな」
食べるという話をしてだ。彼等は実際にバランスよくかなりの量を食べた。そしてその中で。
ダックはバターコーンを食べながら曹仁達に言った。
「それで食った後ちょっとしたらな」
「あのダンスね」
「踊るのね」
「食った後は気持ちよく身体を動かさないとな」
気が済まないというのだ。
「だからだよ」
「成程、それでなのね」
「いつも踊ってるのはね」
「それが理由だったのね」
「あと練習な」
それもあるというのだ。
「俺はダンサーだからな」
「こいつ元の世界じゃ世界的に有名なんだよ」
マイケルが彼女達にこのことを話す。

「ラップダンスでな」
「あのラップというのも最初見た時はね」
「かなりね」
曹仁達が話す。
「正直何かって思ったけれど」
「見慣れると」
「いいもんだろ」
笑いながら話すダックだった。
「あのダンスも」
「ええ、そうね」
「その通りよ」
彼女達もそうだと答える。

# 第九十四話　司馬尉、妹達を呼ぶのことその八

「それをなのね」
「食べた後に」
「踊るぜ」
「さて、俺はな」
ビリーもビリーもでだ。やるというのだ。そのやることは。
「洗濯すっか」
「洗濯ねえ」
「あんた本当にそれ好きよね」
曹仁と曹洪はビリーのその言葉を聞いて首を捻りながら述べた。
「暇があったらそれしてるわよね」
「何かっていうと」
「ああ、趣味なんだよ」
実際にそうだというのだ。
「実はな」
「まあ洗剤あるしな」
「そういえば何で洗剤あるんだ？」
ダックはこのことに突っ込みを入れた。
「この時代にな」
「そうだよな。流石に洗濯機はないけれどな」
ビッグベアも話す。
「洗剤はあるからな」
「粉のな。おかしな話だよな」
「大体この世界おかしなこと多いぞ」
ビッグベアはこのことを真剣に指摘する。
「普通にジャガイモとか唐辛子とかあるしな」
「俺の好きなコーンだってな」
「この時代のこの国はないだろ」

「俺達の世界じゃそうだよな」
「服もな」
「ああ、ないからな」
とにかくだ。そうしたところが違っていた。
それでだった。彼等は四人に尋ねるのだった。
「そもそもどういう世界なんだよ」
「それすらもわからになくなってきたからな」
「訳のわからないことが多いだろ」
「もう滅茶苦茶なところが多過ぎるぜ」
ビリーにダック、マイケルにホアである。
「まあ。あの裸のおっさん達は置いておいてな」
「あそこまで考えるとどうしようもないからな」
「問題はこの世界だよ」
「どういう構造になってるんだろうな」
まさに考えれば考える程だった。そしてだ。
その彼等にだ。沮授が答えた。
「それね。私達もね」
「わからないっていうのか」
「そっちもか」
「ええ。私達の世界ではね」
そのだ。彼女達の世界ではどうかというのだ。
「洗剤は普通にあって」
「そうよね。秦代にはね」
「もうあったし」
「それに服はね」
「かなり前からこんな感じよね」
「東周時から」
そうなっているというのだ。それを聞いてだ。
タンがだ。その東周時代について話した。
「では孔子以前からじゃな」

「ええ。もうこうした服の原型はできていたわ」
「ちゃんとね」
「服や洗剤の進化が違うようだな」
リチャードもこのことに気付いた。
「おそらくそれは」
「あれか？ジャガイモとかトマトとかもうあるからな」
ビリーはこれが大きいのではないかと指摘した。
「食い物が豊富だからな」
「ああ。この世界の食生活ってな」
それはどうかとだ。マイケルも言う。
「俺達の時代と変わらないからな」
「そうだよな。本当に贅沢だよな」
「この時代じゃないからな」
「俺達の世界だと」
この辺りが全く違っていたのだった。しかもだ。

# 第九十四話　司馬尉、妹達を呼ぶのことその九

ここでだ。さらにだった。
「武器だってな」
「ああ、この時代にない武器ばかりでな」
「武器の開発も随分と進んでるよな」
「漢代末期じゃない」
「俺達の世界とは本当に違うからな」
「何もかもな」
「確かに別世界ね」
このことは田豊も認める。
「言うなら私達の世界って」
「一種の特異点かしら」
沮授は自分達の世界をそうではないかと考えた。
「それでこうした様々な違いが出ているのかしら」
「だから余計にか？」
ビッグベアは腕を組んで考えながら述べる。
「オロチだの于吉だの怪しいのが一杯来たのか」
「特異点には特異な存在が集る」
リチャードはこう考えた。
「そういうことか」
「そうでしょうね。多分ね」
「それでなのよ」
田豊と沮授もそうではないかというのだ。
「あの連中も集った」
「そういうことでしょうね」
「何かそう考えるとな」
ホアも首を捻って述べる。
「やっぱり集まるところに集るんだな」

「人は相応しい世界に集る」
「そういうことか」
「話はわかった」
ここでまた話す彼等だった。
「で、こっちの世界に元からいるのはいるか？」
「そういう奴は」
「それがまさか」
「司馬尉？」
曹仁と曹洪が話す。
「あの娘がまさか」
「そうした人間なのかしら」
「だとしたらどうする？」
「その場合は」
「その場合は倒すしかないわ」
「当然ね」
真剣な顔でだ。こう言う二人だった。
「例え誰であろうともね」
「この国を害しようとするならね」
「だって。私達が武を磨いてるのって」
「その為だから」
それでだとだ。彼女達も話す。
「オロチだの何だのが出て来てもね」
「共に倒すわ」
「その覚悟は見事だな」
ビリーは曹仁と曹洪のその考えをよしとした。
「俺なんてな。棒を身に着けたのってな」
「ああ、御前あれだったな」
「そうだよ。たまたまな」
どうだったかとだ。ビッグベアに応えて話す。
「喧嘩の時に棒を使ってな」

「そこをギースの部下にスカウトされてだったな」
「ああ、そうだったんだよ」
「そうだよな。それでギースに従ってるのも」
「俺はリリーを養わないといけないんだよ」
ビリーのその顔が鋭いものになる。
「あいつをな」
「あっ、あんた妹さんいたわよね」
「その話してたわよね」
「いるぜ。最高に可愛いのがな」
その通りだとだ。ビリーは田豊と沮授の言葉に応えて話す。
「俺の宝物だよ」
「その妹さんに丈の奴が粉かけてんだよな」
「あいつは本気で殺す」
まさに本気の言葉だった。
「この俺の手でな。始末してやる」
「そんなに嫌？あいつと妹さんがくっつくのって」
「そこまで言うの」
「ああ、リリーには幸せになって欲しいんだよ」
それでだというのだ。
「あんな馬鹿にリリーは渡せるか、絶対にな」
「まああいつは馬鹿ね」
「間違いなくね」
曹仁達が見てもだ。丈は確かにそうだった。
それでだ。ビリーの言葉に頷いてだった。
「まあ。少なくとも物騒なことはしないでね」
「言っても無駄だろうけれど」
「あいつだけは殺す」
まだ言う彼だった。
「例え何があろうともな」
「やれやれじゃな」

タンが最後にこう言うのだった。何はともあれだ。彼等は今葉静かにしているのだった。そのうえで司馬尉達の動きを見ていた。

第九十四話　　完

２０１１・７・１２

# 第九十五話　陸遜、ふと見つけるのことその一

第九十五話　陸遜、ふと見つけるのこと

司馬尉の妹達のことはだ。孫権達も話していた。

まずはだ。黄蓋が言う。彼女達は今洛陽に建てられた孫家の屋敷に集まりだ。そのうえで難しい顔になって話をしているのである。

「わしも初耳じゃ」

「私も」

「私もよ」

二張もだった。孫家の長老達も知らないというのだ。

「司馬家のことは聞いておったが」

「それでも。妹が二人もいるなんて」

「聞いていなかったわ」

「そうなのね。貴女達もなのね」

孫権は己の席に座ったままだ。腕を組んで言うのだった。

「知らなかったのね」

「わし等程長生きしておれば何かしら聞くが」

「ましてや司馬家程知られた家なら」

「姉妹のこと位は」

「しかし何も聞いておらんかった」

そうだとだ。黄蓋はまた話す。

「こんなおかしなことはない」

「妙にも程度がありますね」

太史慈もここで言った。

「司馬家自体に疑念が湧きます」

「あの家は」

孫権がまた言う。

「代々高官を出している名門だけれど」

「はい、それも朝廷のです」
「三公を光武帝が即位された時からです」
その時からだというのだ。
「それこそ四代どころではありません」
「袁家をも超える名門ですから」
二張もそうだとだ。孫権に話す。
「漢王朝の功臣の家である曹家をもです」
「超えているでしょう」
「孫家とは比較にならないわよね」
孫尚香は自分達の家のことを話に出した。
「それこそね」
「ええ、その通りよ」
そのことは孫権も認めた。そのうえでの話だった。
「あの家は別格よ」
「しかも清流にありますね」
周泰が指摘するのはこのことだった。
「宦官に対して」
「それよ。代々清潔な家として知られているわ」
孫権はこのことも話した。
「そこが曹家とは違うわ」
「宦官の家とは」
「そこが全く違いますね」
「確かに」
「しかもです」
呂蒙もここで言った。
「司馬尉殿は嫡流ですから」
「側室の娘である袁紹とはね」
「全く違うわね」
孫権だけでなく孫尚香もこのことを話す。
「当然揚州の豪族に過ぎない私達ともね」

「家柄が違う」
「忌々しいことに」
「しかも。あの娘自身が」
今度は司馬尉自身のことが話される。
「切れ者だから」
「大将軍の腹心にもなった」
「そこまでの人物だと」
「本当に何もかもを持っている娘よ」
孫権が見てもだった。そうしたことを話してだった。
孫権はこんなことも言った。
「私達孫家はそうでもないけれど」
「うむ。曹家や袁家はのう」
黄蓋が話すのはその両家のことだった。
「かなりの劣等感を持っておるな」
「そうですね。それが問題です」
諸葛勤もだ。両家が司馬家をどう思っているかはわかっていた。
それでだ。彼女はこう話すのだった。
「傍から見れば危険なまでにです」
「司馬家に対して敵対心を持っているわね」
「それがよからぬことにつながらなければいいのですが」
「私もそう思うわ」
こう思うのは孫権も同じだった。

# 第九十五話　陸遜、ふと見つけるのことその二

「無闇に憎むとね」
「目を曇らせる」
「そうなってしまいますね」
「ええ。姉様も気付いておられるだろうし」
「何かあれば止めに入りますか」
「そうしますか」
「無闇な争いは起きないに限るわ」
冷静な目でだ。孫権は見ていた。
そしてそのうえでだ。こう家臣達に述べた。
「では。私達もね」
「はい、見ていきましょう」
「これからのことを」
「難儀な話じゃ」
黄蓋も話す。
「戦が終わっても厄介なことが続くわ」
「世の中ってそういうもの？」
孫尚香は首を捻ってこんなことを言った。
「ひょっとして」
「ええ、そうよ」
その通りだとだ。姉は妹に話した。
「世の中は問題が尽きないものよ」
「一つの話が終わってもなのね」
「そうよ。次から次にね」
「そうなの」
「そしてそれを一つずつ終わらせていくのがじゃ」
そうだとだ。黄蓋は孫尚香に話す。
「政というものじゃ」

「そうなのね。じゃあ今回のこれも」
「そうよ。終わらせるわよ」
「ええ、わかったわ」
「さて。話が終わったところでじゃ」
黄蓋はそう見て早速だった。酒を出してだ。
一同にだ。笑顔で話すのだった。
「じゃあ今から飲むぞ」
「御昼ですけれどいいんですか？」
「あの、お酒って」
呂蒙と周泰がここで話す。
「今からですか」
「皆で」
「そうじゃ。楽しくやるぞ」
見ればだ。もう杯を出している黄蓋だった。
そしてそのうえでだ。飲みはじめるとだ。
くすりと笑ってだ。孫権が言った。
「じゃあ私もね」
「うむ、蓮華殿も飲まれるか」
「そうさせてもらうわ。それじゃあね」
「飲むとしようぞ」
こう話してだった。他の面々もだ。
「じゃあ飲むか」
「今から」
こうしてだった。孫家の面々も飲むのだった。とりあえず司馬家のことは忘れてだ。
しかしだ。その司馬家のことは誰もが首を傾げさせていた。それは孫家だけでなくだ。袁術も同じでだ。やはり洛陽の彼女の屋敷でだ。こう話すのだった。
「ええい、全く忌々しい話じゃ」
「司馬家のことですよね」

「そうじゃ。何じゃその司馬師と司馬昭というのは」
こう張勲にも話す。
「全く以て訳がわからん」
「はい、本当に」
「七乃も知らんかったのか」
「ええ、私もびっくりしてます」
いつもの余裕の顔はだ。張勲からは消えていた。
そのうえでだ。彼女は己の主に言うのである。
「あんな方がおられるなんて」
「しかも二人じゃ」
「ええ。それもどうやら」
「どうやら？」
「あのお二人も切れ者と思っていいみたいです」
「司馬家だからか」
「はい、司馬尉さんも切れ者ですよね」
こう言われるとだ。袁術もだ。
難しい顔でだ。こう述べるのだった。

# 第九十五話　陸遜、ふと見つけるのことその三

「忌々しいがその通りじゃ」
「そうですよね。ですから」
「妹連中も切れ者だとするとじゃ」
「厄介ですね」
「厄介なことこの上ないわ」
地団駄を踏む様にして言う袁術だった。
「我が袁家にとっても曹家にとってもじゃ」
「ええ。あとこれは」
「これは？何じゃ？」
「あくまで私の直感ですけれど」
こう前置きしてからだ。張勲は話すのだった。
「司馬尉さん、危険です」
「あの女危険か」
「はい、そう思います」
顔を曇らせだ。剣呑なものを感じながらだ。張勲は袁術に話す。
「少なくとも何故董卓さん、いえ白装束の者達やオロチとの戦いの時に」
「全く出て来なかったのう」
「一体何処に隠れていたのでしょうか」
「それじゃ。その間のことはわからんか」
「そのこともです」
全くだ。わからないというのだ。
「何処に隠れておられたのか」
「確か先の大将軍が張譲めに猫に変えられそうになった時に」
「そうです。司馬尉さんのところにも兵が向けられましたが」
「それは避けられたのじゃな」
「宦官の兵達が屋敷に入られた時にはもう」

「おらんかったか」
「おかしなお話ですよね」
「うむ、それもまた妙じゃ」
袁術は腕を組みだ。難しい顔で張勲に述べた。
「妙な話ばかりじゃ」
「そうですね。そうした話ばかりですよね」
「何もかもじゃ」
「司馬尉さんのお話は」
「一体何者なのじゃ」
袁術はまた話す。
「あの司馬尉は」
「確かに名門の嫡流で切れ者ですけれど」
「謎しかないのう」
「こんなことは有り得ないです」
「わらわが一番気になることじゃが」
袁術はここで張勲にこのことを話した。
「何故宦官達から身を避けられたのじゃ？」
「それですよね。わからないことは」
「うむ。まさか事前に危機を察して」
「そうとしか考えられませんよね」
「全く以てその通りじゃ」
「ではどうして危機を察することができるのでしょうか」
またどうしてかとだ。話す張勲だった。
「それもおかしなことですよね」
「怪しいことばかりじゃ」
「では。どうされますか？」
「見張るしかなかろう」
それしかないとだ。袁術も言った。
「さしあたってな」
「はい、そうですね」

「ではな。そうしよう」
こうした話をしてだった。袁術もだ。
司馬尉に対して警戒を持っていた、それもかなりのものだ。
そしてこの話が終わってだ。袁術は張勲にこう言った。
「さて、話は終わったし」
「それでなのですね」
「うむ。蜂蜜水じゃ」
それが欲しいとだ。満面の笑みで言うのである。
「それを持って来るのじゃ」
「はい、それでは」
彼女の話はこれで終わった。だが、だった。
司馬尉への疑念は募る一方だった。このことについてだ。
荀?がだ。その細い眉を顰めさせてだ。楓に話していた。
「似てると思うのよ」
「刹那に?」
「そう、いたわよね洛陽での戦いの時に」
「逃げられたけれどね」
「そう。あいつにね」
こう楓に話すのである。

# 第九十五話　陸遜、ふと見つけるのことその四

「外見は違うけれど雰囲気が」
「そっくりなんだね」
「悪霊？あいつは」
「そうじゃないけれど近いね」
楓は荀？の問いにこう答えた。
「この世と冥界をつなげてね」
「そこから死者を送り込むことが目的だったわね」
「そう。言うならば魔王だよ」
「魔王なのね」
「この世を滅ぼそうとするね」
「魔王としても悪質な部類ね」
ここで荀？も言った。彼女も共にいるのだ。楓だけでなく他の四霊の面々もいる。彼等は書庫の整理の合間にその中で話をしているのだ。
書が揃えられた棚に囲まれ背にしながら。彼等は話していく。
その中で荀？は言うのだ。
「これはオロチにも言えることだけれど」
「それと朧じゃな」
翁の目が光る。彼はここでも亀に乗っている。
「あの者もな」
「あいつは何者なの？」
荀？が真剣な目で翁に問う。
「刃を空に飛ばして戦っていたけれど」
「刀馬の話ではだ」
示現が話す。
「やはりこの世を害せんとする者らしい」
「それがあいつなのね」

「その様だ」
「まあ。一見して普通じゃないっていうのはわかるけれど」
「かつては忍だった」
示現はこのことも話した。
「半蔵殿と因縁があったそうだ」
「半蔵と？」
「左様。何でもかつては伊賀者だったそうだ」
「その通り」
ここでだった。影の中からだ。
その半蔵が出て来てだ。彼等に話すのだ。
「あの者はかつては伊賀の忍だった」
「それであれなのね」
荀？は半蔵のその話を察して言葉を返した。
「どうせ謀反とか考えて。忍を抜けてなのね」
「左様、幕府の転覆を企てた」
「あんた達の世界で言う漢王朝よね」
「そうしたところだ。それを企てた為」
「あんたが成敗しようとしたのね」
「だが逃げられた」
それはだ。果たせなかったというのだ。
「残念なことにだ」
「話はわかったわ。けれどあいつは」
「妖術をも身に着けた」
「それがあの刃」
「そういうことになる。あの力はあってはならない力」
「アンブロジアとかそういった連中の力ね」
荀？はその鋭い頭脳を活かしてだ。こう察してみせた。
「それよね」
「そうだと思う。あの者は秩序を嫌うようになった」
「混沌ね」

「破壊と殺戮」
そしてさらにだった。
「そして混沌だ」
「それをこの世界でやろうとしているってことね」
荀？もここでその洞察を見せた。
「迷惑な話よね」
「それだけこの世界が特異ということだ」
書の棚に背をもたれかけさせ腕を組んでいる嘉神が言った。
「そうした存在を集めてしまうのだ」
「あんた達の世界に揃っていた連中が」
「そうだ。そして話を戻すが」
「その司馬尉よね」
「あの者は油断ならん」
嘉神もだ。こう言うのだった。

# 第九十五話　陸遜、ふと見つけるのことその五

「間違いなくよからぬことを企てている」
「謀反？そしてよね」
「おそらくこの世界を破壊しようとしている」
そうだとだ。荀？に話すのである。
「そして魔性の国を築こうと考えているだろう」
「魔性のね」
「常世やオロチの世界だ」
そっくりそのままの。そうした世界だというのだ。
「そうした意味であの女と刹那やオロチの思惑は一致しているのだ」
「それじゃあ」
楓はその嘉神に問うた。
「于吉や左慈もまた」
「そうだろう。魔性の者だ」
まさしくだ。そうした存在だというのだ。
「我等から見てだ」
「わし等はそうした者達を封じておるが」
「そうだ。刹那、そして常世をだ」
「その為にこの世界にも呼ばれた」
嘉神と示現も話す。
「そしてその我等を呼んだのは」
「あの者達だ」
「ええ、それもよくわかるわ」
荀？はここで苦い顔になって話した。
「あの妖怪達よね」
「妖怪ね。確かにね」
荀？もこのことには同意だった。仲の悪い従姉妹の話とはいえ。
「あの二人は完全にそうね」

「けれどその妖怪達が」
「私達の世界を救ってくれるのね」
こう話していく従姉妹達だった。
「その為に動いてくれる」
「有り難いことね」
「僕達にしてもです」
楓は真摯な顔で彼女達に話す。
「この世界を救うことにやぶさかではありませんから」
「ええ。頼りにしてるわ」
「私達にしてもね」
それはだとだ。荀?達も応えて言う。
「正直あんな連中が山みたいに来てるし」
「これからも宜しくね」
「それでだが」
ここでだ。嘉神が二人に問うた。
「あの者達。司馬家のことだが」
「ここにその書があるかって?」
「あの家について書かれていることが」
「そうだ。そうした書はあるか」
「そんなの真っ先に探したわ」
荀?は顔を顰めさせ首を横に振ってだ。こう嘉神に答えた。
「けれどね。そうした書はね」
「なかったか」
「その素性がわかるようなのはね」
それはなかったというのだ。既に多くの者、荀?もだ。司馬家に対してその素性は表で知られていることは偽りだと察しているのだ。
それでだ。彼女も言うのだった。
「全くないわ」
「そうか。ないか」
「あれは絶対に碌な出自じゃないから」

名門というのは。まやかしだというのだ。
「司馬家はね」
「その辺り曹家や袁家とは違うのう」
「ええ、そうよ」
「全くね」
従姉妹達はそれぞれの主の家については断言できた。
「あんな怪しい家とは一緒にしないで欲しいわ」
「曹家も袁家もはっきりしている家だから」
「そうですよね。それと比べて司馬家は」
「光武帝が立たれてから三公だけれど」
「本当に急に出て来たのよ」
そうだとだ。二人は楓に対して話す。

# 第九十五話　陸遜、ふと見つけるのことその六

「もうね。それこそ闇の中からみたいな」
「そんな感じで出て来たのよ」
「それで代々なんですね」
「そういうことよ」
「そういえば今思うと」
ここで彼女達は気付いた。
「代々高潔で優れた人間を輩出してきたけれど」
「何かっていうと政敵が不穏な死を遂げているのよね」
「ええ、もう本当に都合よくね」
「今気付いたけれど」
「では余計に怪しいのう」
翁も二人の話を聞いてこう述べた。
「あの家は」
「宦官達とは対立してきたから清流って思われてきたけれど」
「実際は」
「宦官達はだ」
嘉神がその宦官達について話す。
「所詮考えていることは己のことだけだ」
「私利私欲ね」
「他のことは考えていないっていうのね」
「所詮は小悪党だ」
嘉神から見ればだ。宦官達はまさにそれだった。
「この国に巣食うな」
「言うなら寄生虫よね」
「そうした奴等よね」
「所詮はたかが知れている」
そうだというのだ。

「だが。あの家はだ」
「この国自体を壊そうとしていて」
「民も生贄に捧げようとしているのね」
「正直遥かに悪質よね」
「それを考えたら」
「そういうことだ。危険だ」
まさにそうだとだ。嘉神は指摘するのだった。
「無論あの宦官達も放ってはおけなかったが」
「だかそれ以上にだ」
示現もここで話す。
「あの家、そして刹那やアンブロジア達はだ」
「滅ぼさないと国が滅ぼされる」
「そんな相手よね」
こうした話をしてだった。彼等は書庫の中でこれからのことを考えていた。
そこにだ。陸遜が来たのだった。
その彼女を見てだ。荀?が声をかけた。
「あっ、書よね」
「はい。何かいい書はありますか?」
「そういう書ばかり置いてるけれど」
荀?にしても己が管理している書庫には自信がある。それでこう返すのだった。
「けれど具体的にはどういった書がいいかよね」
「できれば歴史書を」
それがいいというのだ。
「読みたいのです」
「ええと。それならね」
それを聞いてだ。荀?は。
彼女のすぐ隣の書庫を指し示してだ。それで陸遜に話した。
「ここよ」

「その棚ですか」
「ここから五つ縦にね」
「それが全部ですね」
「それこそ三皇五帝の頃からのがあるから」
「じゃあ西周の頃のを」
「西周！？」
西周と聞いてだ。荀？は眉を顰めさせた。
そのうえでだ。こう陸遜に話すのである。
「あの頃のことって殆んど残っていないけれど」
「そうですよね。記録が戦乱の中で燃やされて」
「それで殆んど残ってないけれど」
「それでもありますか？」
「あるにはあるわ」
ないことはないというのだ。
「けれど殆んどないから」
「それでも。御願いします」
「わかったわ。それじゃあね」
こうしてだった。陸遜は荀？に案内されてその西周時代の書を借りたのだった。そのうえでだった。

# 第九十五話　陸遜、ふと見つけるのことその七

彼女は書庫から去った。そして楓達も。
「じゃあ休憩は終わりにする？」
「そろそろそうするか」
「ええ、そうね」
荀？が楓と翁の言葉に応えて言う。
「それじゃあまた再会ね」
「それにしても書の数が多いな」
示現は早速整理にかかりながら述べた。
「宮廷の書庫だけはあるか」
「そうでしょ。私も読みがいがあるわ」
「とてもね」
従姉妹達は息のあった調子で話す。
「それじゃあ早速ね」
「これで終わらせましょう」
こうしてだ。彼達は書の整理を進めるのだった。司馬家への疑念を深めながらだ。そのうえで彼等の仕事をしていくのだった。
広場でだ。ローレンスが巨大な牛を前にしていた。その彼を見ながらだ。
紀霊がだ。蔡文姫に尋ねていた。
「都でなのね」
「はい、そうでした」
こうだ。文姫はその時のことを思い出し暗い顔で話すのである。
「私が眠っている間に屋敷に忍び込み」
「そのうえでなのね」
「気付けば。縛られ目隠しをされていて」
「匈奴に売られていたなんてね」
「袁紹様がおられなければ」

そのだ。彼女を救った袁紹がいなかったらというのだ。
「大変なことになっていました」
「そうよね。匈奴の単于の慰みものになっていたわ」
「本当に危ういところでした」
「それで誰なの？」
紀霊は文姫に尋ねた。
「あんたを誘拐して匈奴に売ったのは」
「それがわからないのです」
こう答える文姫だった。
「今に至るまで」
「宦官の奴等じゃないの？」
紀霊はローレンスが突進する牛をかわし剣を刺すのを見ながら話す。
「あんたの家って宦官連中と仲悪かったし」
「はい、父は学者でしたが」
政治にも関わっていたのだ。言うなら政治顧問だったのだ。
「そのせいでしょうか」
「そうじゃないの？」
こう考えて言う紀霊だった。
「ましてやあんたもね」
「私も？」
「凄い学識だから」
「いえ、私はそんな」
「謙遜しなくていいのよ」
そのことはだ。笑っていいとするのだった。
「実際のことだから」
「はあ」
「それでね」
さらに話す紀霊だった。
「あんたも正直宦官嫌いだったでしょ」

「あまり。ああした方々は」
「帝を惑わすし私利私欲ばかり追い求めて民から搾り取って」
「そうしたことは止めなければなりません」
文姫の美麗な顔に厳しいものが宿った。そのうえでの言葉だった。
「ですから先の帝にもです」
「何度も提案していたわよね」
「はい、宦官を排除しその力を抑えることを」
そのことをだというのだ。
「提案させてもらいましたが」
「それで睨まれてじゃないかしら」
「では宦官達が」
「そう。そうじゃないの？」
こう言うのである。
「あの連中なら普通にやるでしょ」
「確かに。謀を得手としていますから」
「正直滅茶苦茶怪しいでしょ」
こうまで言うのである。
「張譲の行方はわからないけれど」
「あの者が首謀者でしょうか」
「限りなく黒に近いと思うわ」
紀霊はこう推察していく。
「あの連中ならよ」
「そうですね。ただ」
「ただ？」
「そうしたことははっきり調べていかないと」
「言えないことだっていうのね」
「私自身もです」
そのだ。文姫もだというのだ。当人もだ。

# 第九十五話　陸遜、ふと見つけるのことその八

「確かに宦官達は怪しいです」
「そうでしょ。あからさまじゃない」
「しかし。よく調べて」
「そうして言わないといけないのね」
「そう思います」
文姫は真面目な態度で紀霊に話す。
「しかも宦官達、十常侍はです」
「全員追放されたか行方がわからないわね」
「特に首謀者の張譲がです」
「そうそう、あいつ」
十常侍の中心のだ。彼女はだというのだ。
「あいつ本当に何処に行ったのよ」
「後宮で急に姿を消したらしいですが」
「私達が来たので行方をくらましたのかしら」
「その可能性は高いですね」
「あいつは何としても行方を探って」
そうしてだというのだ。
「見つけ出してあんたのこと吐かせないとね」
「はい、絶対に」
「とにかく。宦官達は厄介よ」
話が宦官のことに移った。
「企んでばかりだし」
「そうですね。ですから今も」
「後宮も改革を進めているのね」
「それで私も」
「ああ、あんたの策で進んでるんだったわね」
「麗羽様が容れて下さいました」

「あの方がなのね」
文姫は元々袁紹の家臣だ。だからなのだ。
「それでなのね」
「はい、そうです」
「宮廷も改革されて帝もね」
「今の帝はとても素晴しい方です」
「英邁な方だと御聞きしているけれど」
「まだご幼少ですが」
それでもだというのだ。今の帝は。
「非常に素晴しい方です」
「ううん、帝がそうした方で国政は劉備さんが中心になって進めてくれて」
そうしてだというのだ。
「国政はかなりよくなってきているわね」
「はい、非常に」
「国はよくなっているわ」
また言う紀霊だった。
「後はあの怪しい連中を取り除けばね」
「この国も安泰になります」
「ええ。何だかんだであともう少しね」
「この国が本当によくなるのは」
「頑張ろう、それじゃあ」
「そうですね。あとですが」
「あと。どうしたの？」
ここで話が変わった。文姫はローレンスを見てだ。こう言うのだ。
「ローレンスさんですけれど」
「ああ、あの人ね」
「何か動きが凄いですね」
こうだ。ローレンスを見て話をするのだ。
「赤いマントっていうんですね」

「あの手に持ってるのよね」
「あれをひらひらさせて牛を挑発させて」
それでだ。さらにだというのだ。
「間一髪でかわされて剣を刺して」
「あれねえ。凄いわよね」
「あんなことできるんですね」
「あっちの世界じゃ闘牛士っていうらしいわね」
「闘牛士ですか」
「そう、マタドール」
あちらの世界の呼び名にもなる。
「それにね」
「そういえばあの人あちらの世界では」
「それだったから」
「だから今こうしてですか」
「そう。その闘牛をね」
しているというのだ。

# 第九十五話　陸遜、ふと見つけるのことその九

「それにしても。あれはねえ」
「華麗なものですね」
「そうそう、それよ」
その言葉だというのだ。
「そうした闘いよね」
「ああした闘いもあるのですね」
「まるで舞みたいよ」
まさにだ。そうした闘いだというのだ。
「そんな感じよね」
「蝶の様に舞い」
「蜂の様に刺すね」
「そんな感じよね」
「はい、そう思います」
文姫もこう紀霊に応える。
「見ていて惚れ惚れとします」
「あちらの世界じゃああしたものもあるのね」
「何か楽しい世界ですね」
「そうよね。楽しいわ」
実際に見ていてそうだというのだ。
「見がいがあるわね」
「それでなんですけれど」
ここで文姫は尋ねた。
「あの牛はどうなるのでしょうか」
「ローレンスさんが闘っているその牛よね」
「今ああして剣が次々に刺さっていますけれど」
ローレンスはかわす度にだ。剣を刺しているのだ。それを見てだった。

文姫は紀霊に尋ねたのだ。倒れた牛はどうなるかと。
「それで倒してからは」
「食べると思うわ」
「食べるんですか」
「だって。倒して終わりじゃないでしょ」
だからだというのだ。
「それじゃあやっぱりね」
「倒した牛は食べる」
「そうなるでしょ」
「そうですね。肉を捨てるということは」
「こんな勿体無い話ないでしょ」
「はい、ありません」
まさにその通りだと。文姫も言う。
「それはしてはなりません」
「だからよ。食べると思うわ」
「そういうことですね」
「じゃあ。この後は」
それもだ。楽しみだというのだ。
そのうえでだ。紀霊が文姫に尋ねる。
「何食べる？」
「牛の料理をですね」
「そうよ。あんたは何を食べたいの？」
「あの。ローレンスさんがお好きだという」
その料理はというと。これだった。
「ビーフシチューを」
「ああ、あれね」
「あれ美味しいですよね」
「ええ、とても」
まさにだと。紀霊も応える。
「湯みたいでね」

「トマトとかで味付けをしてるし」
「御肉も柔らかくて」
「とても美味しいですね」
「はい、ですから」
「あれが食べたいのね」
「内臓も美味しいですし」
彼女達は内臓も食べるのだった。
「あれも」
「そうそう。内臓もね」
「内臓はキムさん達がホルモンとして焼かれていますね」
「いいわよね、あれも」
「他にはステーキも」
これもあった。
「牛も何でも食べられますよね」
「豚は捨てるところがないけれど」
中国ではそう言われているのだ。豚はそうした肉なのだ。

# 第九十五話　陸遜、ふと見つけるのことその十

「牛もそうよね」
「もっと言えば鶏もね」
「とにかく。どんな肉もね」
「捨てることなく食べられますね」
「毒があるやつ以外はね」
そうだというのだ。食べられるというのだ。
「だからそれでね」
「ええ、食べましょう」
「はい、そうしましょう」
こうした話をしながらだ。二人はローレンスが牛を倒すのを見守るのだった。そしてその後で。実際に様々な牛料理を楽しんだ。
その夜陸遜は呂蒙とだ。こんな話をしていた。
書庫から借りたその書を読みながらだ。その内容について話すのだった。
「周が一人の女に滅ぼされたとありますよね」
「あの女にですよね」
「はい、そうです」
こうだ。呂蒙に話すのである。
「あの何をしても笑わない女によってです」
「王が惑わされ」
「幽王でしたね」
それがその王の名前だった。
「王はその妃を笑わせる為にです」
「狼煙で諸侯を集めることを続け」
その集る姿を見てだ。女が笑うからそうしたのだ。
「そしてそれによってでしたね」
「はい、そうでしたね」

呂蒙もその話は知っていた。それで応えるのだった。
「それで笑わせていましたが」
「それで遂には諸侯から信頼を失い」
そしてなのだった。遂には。
「現実に敵が攻めて来て狼煙をあげても」
「誰も信じませんでした」
「そしてそれにより」
「滅ぼされました」
そうなったのだ。これで周は一旦滅んだのだ。
「ああなりましたが」
「思えばです」
陸遜はここでこんなことも言った。
「夏も殷も同じでしたよね」
「経緯は違えど女によって惑わされ」
「はい、滅んでいます」
これが中国の歴史だった。
「そうなっていますよね」
「周もまたですね」
「ですよね。三つの王朝が女によって滅んでいます」
「奇妙な一致です」
「それでふと気付いたのですけれど」
ここで陸遜はまた言った。
「その周を滅ぼした笑わない王妃ですけれど」
「何かあったのですか？」
「その容姿について書かれていました」
そのだ。陸遜が借りた書にだ。書かれていたというのだ。
その容姿について呂蒙と話す。さらにだった。
呂蒙にもう二冊の書を出す。それは。

# 第九十五話　陸遜、ふと見つけるのことその十一

「これは夏の書と殷の書です」
「それぞれですね」
「はい、それぞれの国を滅ぼした女のことが書かれている書です」
「その書を持っておられたのですか」
「そうなんです。それで」
「それで？」
「書かれていることですけれど」
それはだ。どうかというのだ。
「その容姿なんですけれど」
「それが一体」
「同じなんです」
「同じ！？」
「はい、同じです」
そうだというのだ。その三人の女の容姿、書に書かれているものがだ。全て同じだというのだ。考えてみれば奇妙なことにだ。
「全部同じなんです」
「おかしな話ですね、それは」
「そう思われますよね」
「普通そんなことはありません」
呂蒙もこのことを言うのだった。
「有り得ないことですよね」
「そしてその容姿が」
その三人の女の容姿がだ。どうかというと。
「司馬尉さんと同じなんですけれど」
「司馬尉さんと！？」
「はい、同じです」
そうだというのだ。

「そしてさらに言うと」
「さらに？」
「殷代にはあの王后の妹が二人出ていますが」
「ああ、あの」
「そうです。あの二人です」
呂蒙の言葉に応える。二人が共に知っている名前だった。
「あの二人の容姿も」
「それもまたですか」
「司馬師さん、司馬昭さんの容姿と同じなんです」
「まさか。それでは」
「あっ、同一人物ではないと思います」
それはないとだ。陸遜は予想して述べた。
「流石にそうしたことはです」
「仙人でもない限りはですね」
「あの方々には仙骨やそういった特徴は見られませんから」
「それはないですか」
「ですが。おかしな話ですよね」
「はい、本当に」
呂蒙もだ。驚きを隠せない顔で返す。
「こんなことがあるんですか」
「本当に奇妙なことにです」
「しかし。不吉ですね」
呂蒙はあらためてこう言った。
「国を滅ぼした女と。司馬尉さんの容姿が同じとは」
「あの女達は狐だったとも言われていますね」
「九尾のあのですね」
「そうです。あの魔物です」
中国では九尾の狐は最悪の魔物の一つと呼ばれているのだ。その存在のことを脳裏に浮かべてだ。二人はさらに話すのだった。
「あの狐ですが」

「その魔物が化けた姿と同じ」
「ううん、何か余計にですね」
「はい、不吉なものを感じますね」
「全くですよね」
二人は書からこのことを知ったのだった。しかしこの時はそれまでだった。そしてこのことを孔明達に話してだ。今はそれで終わりだった。

第九十五話　完

4

2011・7・1

# 第九十六話　軍師達、狐を見るのことその一



孔明は陸遜達の話を聞いたうえでだ。こう鳳統と徐庶に尋ねた。

「雛里ちゃんと黄里ちゃんはどう思う？」

「司馬尉さんと歴史にあるあの女達」

「それが関係あるかどうかよね」

「ええ。具体的には」

どうなのか。孔明はこのことも言った。

「まさか。あの狐と司馬尉さんは」

「多分。それはないわ」

「あの人達は魔物ではないな」

それはないとだ。彼女達は言った。

そしてその証拠にだ。孔明にこのことを話した。

「だって。その影は人間だったから」

「鏡のある部屋で御会いしたこともあるけれど」

「そうよね。その際はね」

「影は人間のものだったわ」

「鏡にその姿は映ったわ」

二人はそのことを見ていたのだ。そのうえでの話だった。

「司馬尉さんは人間だと思うわ」

「紛れもなく」

「影は真の姿だし」

どれだけ巧みに化けてもだ。影は真の姿を映し出すものだというのだ。

そしてだ。鏡も。

「鏡に映るものは真の姿」

「それに映らないのは鬼」

即ちだ。霊だというのだ。
「そして魔物なら真の姿が映るから」
「だから」
鳳統と徐庶は司馬尉は人間だというのだ。
「間違っても魔物じゃないわ」
「そうした存在ではないわ」
「そうよね。あの人は人間よね」
それは確かだというのだ。
「狐じゃないわ」
「あの女達は狐だと言われてそれで」
「この国に代々害を為してきたけれど」
それがだ。その九尾の狐だったのだ。
「けれどその狐じゃないわね」
「ええ、それはね」
「違うと思うわ」
「じゃあ一体」
ここでだ。孔明は首を捻った。
そしてそのうえでだ。また言うのだった。
「あの人があの女達と姿が同じなのは」
「偶然の一致じゃないのはわかるけれど」
「けれど」
こう口ごもる彼等だった。
「仙人でもないでしょうし」
「そうした存在でも」
「仙骨がないから」
彼女達もこのことは見抜いた。
「仙人ではないわよね」
「不老不死でもない」
「それも間違いないわよね」
「つまり。司馬尉さんは」

どういった人物か。孔明は話した。
「私達と同じ寿命で生きている人間よ」
「そう。確かに怪しいけれど」
「人間であることは間違いないわ」
「けれど」
それでもだというのだ。
「姿形があの女達と同じで」
「しかも何かを企んでいる感じだから」
「怪しいことこのうえない」
「全くね」
こんな話をするのだった。そうしてだ。
孔明は二人にあらためて話した。
「それでだけれど」
「ええ、それで」
「どうしようかしら」
「まだ。もう少し」
こう言ってからだった。

# 第九十六話　軍師達、狐を見るのことその二

「見るべきだと思うわ」
「司馬尉さんのことを」
「そして妹さん達を」
「ええ、見るべきよ」
そうだというのだ。これが孔明の今の考えだった。
「さもないと見誤るから」
「そうね。あの人はとにかく謎が多いから」
「余計にね」
「そうしましょう。ここはね」
こうしてだった。二人は司馬尉達はまだ見ることにしたのだった。
その司馬尉はだ。今闇の中でだ。
妹達を連れた上でだ。于吉達と話していた。
「順調よ」
「そうですか。順調ですか」
「楽しんでいるのだな」
「ええ、そうさせてもらっているわ」
そうだとだ。于吉と左慈に対しても話すのだった。
「今はね」
「それは何よりです」
「俺達もそうしたいがな」
「それは無理よ。それにしても」
「あの狐の力はどうでしょうか」
ここでこう言う于吉だった。
「司馬家にある狐の力は」
「九尾の狐の力ね」
「今あの狐は東にいますが」
「倭にね」

「今はそこで眠っています」
その狐はだ。そうしているというのだ。
「そしてやがて時が来れば」
「目を覚ましそして」
「今度はあの国に乱を起こします」
それを企んでいるというのだ。
「そうした意味で私達と同じです」
「面白い狐ね。そして」
「はい、そしてですね」
「我が司馬家に力を与えてくれた」
「その血を飲ませることによって」
「それまで司馬家は」
どうだったかとだ。嫡流の彼女自身が話す。
「しがない豪族だったけれど」
「それが大きく変わりましたね」
「狐の血の力でね」
「妖術。それもあらゆるものを得て」
「変わったわ」
こうだ。于吉に悠然と笑って話すのである。
「光武帝に取り入って」
「そこから代々ですね」
「高官になり力を蓄え」
「そして今」
「この国を滅ぼし」
「新たな国を築かれますね」
「そうするわ。その国の名は晋」
既にだ。彼女のその国の名も決めていた。
「そこにするわ」
「破壊と混沌の国」
「その国の名よ」

「それではです」
「協力してくれるのね」
「それが私達の目的でもありますので」
そのだ。破壊と混沌こそがだというのだ。
「是非共」
「期待しているわ。そして私は」
「その司馬家の中でもですね」
「狐の力が最も強く出た者」
そうだというのだ。司馬尉こそがだ。
「そしてこの娘達も」
「殷代に現れた妹達の力がね」
「最もよく出ているのよ」
こう本人達が話すのである。
「だから。この力で」
「楽しませてもらうわ」
「頼むぞ」
彼女達には左慈が応える。
「御前達の力も必要だからな」
「この世界を破壊と混沌に陥れ」
「多くの異形の者達が闊歩する世界にする」
「その為にはね」
「私達の力も必要ね」
「はい、そうです」
まさにそうだとだ。今度は于吉が応える。

## 第九十六話　軍師達、狐を見るのことその三

「ですから余計にです」
「任せてもらうわ」
「こちらもね」
「まさか。私達が」
司馬尉は妖しい笑みと共に話した。
「狐の力を得た人間とはね」
「誰も思わないわね」
「そんなことは」
「それがいいのだ」
左慈もだ。それをよしとした。
「そうした意味でオロチと同じだからな」
「ああ、そうだ」
「その通りです」
闇の中にだ。社とゲーニッツが出て来てだった。それぞれ言ってきた。
「俺達も人間だがな」
「心はオロチですから」
そこがだ。司馬尉達と同じだというのだ。
「誰も俺達を怪しまなかったからな」
「それがよかったのです」
「身体さえ人間ならばです」
どうかとだ。于吉は話す。
「誰も気付きませんよ」
「そうだな。身体さえ人ならばだ」
左慈もそのことを言う。二人の顔は悠然とした笑みになっている。
そしてその笑みでだ。彼等はさらに話すのだった。
「それでいいのだ」

「心には気付きません」
「決してな」
「その通りよ」
司馬尉も二人に同じ笑みで返した。
「私の心は人が言う人のものではないのだから」
「はい、私達と同じですね」
「こちらの世界の住人のものだな」
「誰か言ったよな」
社は楽しげに笑いながら話す。
「俺達のいる世界は魔界だってな」
「魔界ね。そうよね」
「確かにそうなるわね」
司馬師と司馬昭も社のその言葉に乗って頷く。
「私達が目指す社会はそうしたものだし」
「一理あるわ」
「その通りよ。私達はね」
どうなのかと。また話す司馬尉だった。
「この世は今は味気ない社会だけれど」
「はい、すぐにです」
「その魔界に変えてやろう」
于吉と左慈がまた言う。そうした話をしてからだ。
左慈は司馬尉にあらためて尋ねた。その尋ねたこととは。
「それでだ」
「何かしら」
「この戦いではどうした趣向を見せてくれるのだ？」
「趣向ね」
「そうだ。ただ勝つだけではないな」
「そんなことはしないわ」
それはだ。司馬尉も怪しい笑みで笑って否定した。闇そのものの笑みで。

「決してね」
「ではどうするのだ？」
「見ていて。まずは勝つわ」
「そこからか」
「そしてそれからよ」
怪しい笑みのままでだ。司馬尉はさらに話す。
「面白いものを見せてあげるわ」
「面白いものですか」
「そうよ。面白いものをよ」
于吉にも語る。その笑みのままで。
「見せてあげるから楽しみにしていて」
「そうか。それではな」
「楽しみにさせてもらいます」
「そうして。ではね」
左慈と于吉に応えてだった。司馬尉は。
妹達にだ。こう告げるのだった。
「ではいいかしら」
「はい、お姉様」
「これからですね」
「私達三人とその軍だけでやるわ」
その戦いをだというのだ。そうするというのだ。

# 第九十六話　軍師達、狐を見るのことその四

「わかっているわね」
「はい、それはもう」
「承知しています」
「ではね。今からね」
「戦いと。その後のこととこそが」
「至上の喜びですね」
妹達も同じだった。怪しい笑みを浮かべるのだった。
そのうえでだ。彼女達は闇から消えたのだった。その消える後ろ姿を見送ってだ。
ゲーニッツがだ。こう于吉に話すのだった。
「私達は最高のパートナー同士ですね」
「はい、その通りです」
「同じ目的、同じ理念を持ち」
「共に働く同志達です」
まさにだ。彼等はそうした存在だというのだ。
「この世界に集まった」
「はい、その通りですね」
「それでなのですが」
ここで于吉は話を変えてきた。
「社さんもですが」
「何だ、俺もかよ」
「一緒に食事にしませんか」
二人をだ。それに誘うのだった。
「これからです」
「食事ですか」
「いいな。丁度そんな時間だしな」
「はい、ではその食事は」

于吉が言おうとしたそこでだ。ゲーニッツが言った。
「茸料理は如何ですか？」
「茸か」
「それですか」
茸と聞いてだ。左慈と于吉が考える顔になった。そのうえでだ。
二人はそのゲーニッツにだ。こう話した。
「そういえばあんた茸好きだったな」
「特に松茸がですね」
「はい、私の好物です」
まさにそうだとだ。ゲーニッツ自身も話す。
「茸は非常にいいものですよ」
「茸か。それじゃあな」
社は茸と聞いてだ。そうして言うことは。
「ラーメン、インスタントにな」
「そこに茸をかけてですね」
「ああ、それどうだ？」
こうその茸を出したゲーニッツに話したのだ。
「茸をあんかけで炒めてな。それをインスタントラーメンにかけるんだよ」
「いいですね。それは」
ゲーニッツは自分の顎に右手を当ててだ。楽しげに笑って応えた。
「茸ラーメンですか」
「そうだよ。美味いし身体にもいいしな」
「はい、ラーメンだけでは栄養が偏りますから」
「ではそれだな」
「はい、私達はそれで」
オロチの間ではそれで決まった。そしてそのうえでだ。
二人は于吉と左慈にだ。それはどうかと提案するのだった。
「どうだ？これで」
「茸ラーメンで」

「そうですね。それではです」
「それにするか」
二人もそれでいいというのだった。こうしてだ。
彼等は食事を決めた。それから闇から出てだ。
山奥の誰もいない筈の場所にある道観の中でだ。鍋を出してだ。
水を入れそこに火を点ける。火は于吉の妖術によってだ。
それからラーメンを入れる。三分経つとスープを入れる。茸は既に左慈が炒めていた。
碗にそれぞれ麺を入れ上から茸をかけ食べる。その味は。
「これはいいな」
「そうですね」
左慈と于吉が話す。食べながらだ。
「ラーメンは元々好きだがな」
「茸と組み合わせるとさらに」
「ああ、美味くなる」
「これはいいものです」
「そうですね。はじめて召し上がりますが」
「この組み合わせいいな」
ゲーニッツと社もそうだと話す。

# 第九十六話　軍師達、狐を見るのことその五

「これは幾らでも食べられます」
「ラーメンもっと入れるか？」
「そうするか」
左慈も二人の言葉に乗った。そして言うのだった。
「茸もまだまだあるしな」
「おっ、かなり作ったんだな」
「茸を炒めたものも」
見ればエノキや椎茸、それにエリンギとだ。色々な茸を使っている。それを炒めて香辛料で味付けをしてあんかけをしたものだ。
それも食べながらだ。社とゲーニッツは話すのだった。
「それは何よりだ」
「美味なものは多いに限ります」
そうだというのだ。そしてだ。
実際にラーメンの袋を開いて鍋に入れてだ。さらに食べるのだった。
その中でだ。左慈はこんなことを話した。
「しかし。この時代でインスタントラーメンとはな」
「時代考証ですね」
「ああ、それが滅茶苦茶だがな」
「ははは、いいではありませんか」
それもいいとだ。于吉は笑って彼に話した。
「それもまた」
「いいか」
「そうです。何しろこの世界はあらゆる並行世界の中で特異点ですから」
だからいいというのだ。
「こうしたものを食べてもです」

「構わないか」
「はい。そしてです」
「そしてか」
「デザートですが」
次はそれだった。何かというのだ。
「それはどうされますか」
「ああ、それな」
「食後のデザートですね」
社とゲーニッツがそれに応える。
「そうだな。何がいいかだな」
「色々とありますが」
「アイスクリームはどうでしょうか」
于吉が提案するのはそれだった。
「それで」
「ああ、アイスクリームな」
「あれもいいですね」
オロチの二人がそれに乗った。
「じゃあそれにするか？」
「すぐに出せますし」
彼等の力をもってすればだ。それも普通にできることだった。
「ちょっと向こうの世界に戻ってな」
「持って来ればいいだけですし」
「そうだな。じゃあバニラがいいか」
左慈が出したアイスはこれだった。
「他には何がいい？」
「そうですね。何でもいいのでは？」
于吉がその左慈に応えて言う。
「アイスですと」
「何でもいいか？」
「私はバニラでもチョコレートでも」

構わないというのだ。そのどちらでもだ。
「そしてブルーベリーもです」
「とにかくアイスは何でもか」
「好物ですので」
だからいいというのだ。こう話してだ。
そのうえでだ。二人は社とゲーニッツにも尋ねた。
「そっちはどのアイスがいいんだ？」
「このラーメンを食べ終われば買って来ますが」
「そうだな。俺はバニラか」
「私はストロベリーを」
二人はこう答えた。
「それでいい」
「それで御願いします」
「わかった。それならな」
「コンビニエンスストアで買ってきますね」
「ああ、頼むぜ。それにしてもな」
社は二人の言葉を受けてからだ。面白そうに笑いながらこんなことを言った。

# 第九十六話　軍師達、狐を見るのことその六

「こっちの世界にいてもな」
「それでもだな」
「こうしてあちらの世界のあちらの時代のものを食べられるのは」
「中々面白いな」
「どの世界や時代も行き来できるとはいえ」
そのことも楽しいというのだ。それが彼等の意見だった。
そのうえでだ。彼等はさらに話すのだった。
「あちらの世界もいずれはな」
「私達によって破壊される運命にありますが」
「ああ、この世界を破壊してからな」
「そうしましょう」
社とゲーニッツもその考えだった。
「まずはそれからだ」
「この世界からです」
こんな話をしてだ。彼等は今は食事を楽しむだった。そうしてデザートも食べてだ。これからのことも考えていくのであった。
チンもだ。店でラーメンを食べていた。その彼にだ。
五郎八がだ。難しい顔で彼に話していた。
「おい、一つ聞いていいか」
「何でしゅか？」
「御前キムのこと知ってるよな」
「はい、ジョンさんのことも」
「あいつは元からあんなのか？」
そのだ。正義一辺倒の性格はというのだ。
「あんな風に何かあれば乱舞なのかよ」
「そうでしゅよ。悪と見ればでしゅ」
「ああしてくれるのか」

「それは貴方もでしゅね」
「ああ、会っていきなりだった」
どうなったかというのだ。それでだ。
「ボコボコにされてな。それからな」
「捕まったのでしゅね」
「一回死んだ」
一言だった。
「そこからずっと修業と強制労働の日々だった」
「そうでしゅね。キムさんに会えばそれで終わりでしゅ」
「ったくよ。この世界でもな」
どうするつもりだったかとだ。彼はうどんを食べながら話す。ワフウのうどんだがそれを食べながらだ。ラーメンをすするチンに話すのである。
「好き放題しようと思ってたのによ」
「できなかったのでしゅね」
「ああ、いきなり会ったからな」
この世界に来てすぐにだったというのだ。
「それで牢屋に入ったらな」
「牢屋でしゅか」
「場所は屋敷だったがそこは牢屋だったよ」
まさにそれだったというのだ。
「何しろ逃げられねえからな」
「そうでしゅね。捕まったら逃げられないでしゅから」
「起きてから寝るまで強制労働と修業でな」
「休む時間はないのでしゅね」
「飯食う時と風呂に入る時にな」
「あとは寝る時だけでしゅね」
「他には何もないからな」
それがキムの考えたスケジュールだった。しかもそれを実行に移す。

「もう楽しみなんてな」
「ないでしゅね」
「食い物だってあれだよ」
唯一の楽しみになりそうなそれもというと。
「すげえ粗末なもんばかりでな」
「ではうどんは」
「こんなの食ったの久し振りだよ」
今食べているだ。それにしてもだというのだ。
「本当にな」
「本当に大変だったのでしゅね」
「大変なんだよ」
話は現在進行形だった。
「だったじゃねえんだよ」
「ううむ、キムさんに捕まれば」
まさにその時はだというのだ。それはチンもよくわかることだった。
「私も危ないでしゅね」
「ああ、あんたもあれだったよな」
「脛に傷が一杯あるでしゅ」
どうして金を儲けているか。それは裏から見てもなのだ。
「実はキムさんとジョンさんにはずっと目をつけられているでしゅ」
「そうだったのかよ」
「キムさんのところにならなくてよかったでしゅ」
「あの娘の陣営な」
「はい、董卓さんの」
まさにそこだった。彼女のところだ。

# 第九十六話　軍師達、狐を見るのことその七

「ならなくてよかったでしゅよ」
「ったくよ。何で俺達がキムの陣営なんだよ」
それが問題だった。五郎八にとっては。
「ついてねえぜ」
「キムさんの陣営ではないでしゅよ」
「結果として同じだよ」
キムの奴隷になっているからだ。それでそうなるというのだ。
「今だってな。実はな」
「脱走しているんでしゅね」
「抜け出てそれで食ってるんだよ」
そのうどんをだというのだ。
「そうしてるんだよ」
「脱走はできなかったのではないでしゅか？」
「それでも時々な」
「成程。そうでしゅか」
「時々無性にな。うどんとか食いたくなるだろ」
「麺類はそうでしゅよね」
「だから今こうして食ってるんだよ」
それでだというのだ。わざわざ脱走してだ。
そのうどんをひたすらすする。その中でだ。
彼はまただ。チンに話した。
「で、とにかくな」
「今はうどんを食べるのでしゅね」
「ああ、何杯でもな」
こうして実際に何杯もおかわりをしていた。そしてだ。
十杯を食べ終えてからだ。もう一杯おかわりしようとすると。
いきなりだ。その脳天にだ。

後ろからネリチャギが来た。それを受けてだ。
沈んだ彼の後ろにだ。キムが出て来た。その彼が言うのだった。
「全く何処に逃げたかと思えば」
「ここにいたのですか」
ジョンもいた。二人一緒にいた。
「修業をさぼるとはいい度胸だ」
「これはいつも以上のお仕置きが必要ですね」
「ううん、怖いでしゅね」
チンも二人を見てかなり引いている。ラーメンをすするその手が止まっている。
「踵落としからそれでしゅか」
「んっ？悪事には報いが当然ですが」
「それは違うのですか？」
「勘弁して欲しいでしゅね」
やはりだ。脛に傷があるからこそ言うチンだった。
「私としては」
「悪はこうして更正していかなければ」
「ですから」
「ううむ、そういえばこの人は」
そのだ。五郎八はというと。
「かなり酷いことをしてきたそうですが」
「はい、卑劣の極みでした」
「唾棄すべきまでのことをしてきました」
二人はだ。少なくとも嘘は言っていなかった。
「ですからこうしてです」
「更正を目指しているのです」
「山崎さん達と同じでしゅね」
彼等も相変わらず捕まっているのだ。
「やっぱり。更正させる為にでしゅね」
「はい、修業と労働です」

「その日々です」
「まあ私は入っていないからいいでしゅが」
密かに逃げに入るチンだった。
「それならそれでいいでしゅ」
「はい、それではです」
「これから修業がありますので」
二人はそのまま五郎八を引き摺っていきだ。その修業に戻るのだった。その修業はというと。
今日はただひたすら走っていた。しかも全速力でだ。そんな彼等を見てだ。
張遼もだ。都の城壁の上で胡坐をかいて酒を飲みつつだ。こう言うのだった。
「ほんまあの二人は怖いな」
「怖いのだな」
「ああ。めっちゃ怖いわ」
先頭にいるキムとジョンを見ての言葉だ。
「自分等も同じことするさかいな」
「確かにな。自分がしないということはないな」
関羽は張遼の横に立っている。そのうえで彼女と話しているのだ。
尚その右手にはいつも通り得物がある。それは離していない。

# 第九十六話　軍師達、狐を見るのことその八

「決してな」
「そこが怖いわ」
「率先垂範だな」
「人に言うのは簡単や」
それはだというのだ。
「けれどや。それを自分がやるのはや」
「難しいな」
「それが一番難しいさかいな」
「そうだな。人にあれこれ言ってもな」
「自分もそれをする奴は少ない」
どうしてもだ。人には言えても実践は難しいというのだ。
「自分に甘い者は多い」
「まああれや。愛紗みたいな娘は少ない」
「私か？」
「そんでキムやジョンみたいな男も少ない」
「どっちもだな」
「うちも自分がやれって言われたらな」
どうかとだ。張遼は少し苦笑いになって述べた。
「ちょっとなあ」
「難しいか」
「話によるけれどな」
「そうだな。実践はな」
「だからあんたは凄いんや」
関羽にまた話す。
「自分でもやるさかいな」
「私はそもそもだ」
自分自身のことをだ。関羽は話していく。

「自分が何もしないということは嫌いだ」
「それも大嫌いやな」
「そうだ。一番嫌いなことの一つだ」
毅然としてだ。張遼にも話す。
「昔からそうだった」
「愛紗は昔から愛紗やってんな」
「そうなるか」
「そや。ほなうちもや」
「貴殿も？」
「自分から率先してやろか」
こう笑顔で言うのである。
「何でもな」
「前からそうしているのではないのか？」
「まだ足らん思う」
自分を振り返っての言葉だった。
「そやからや。もっとな」
「そうか。だからこそか」
「そや。うちも頑張るで」
笑顔のまま関羽に話していく。
「この天下万民の為にな」
「そうだな。共にな」
「あんたに出会えてよかったわ」
今度はこんなことも言う張遼だった。
「それで味方にいてくれるのもな」
「私も貴殿が敵ならな」
「困ってたかいな」
「そうだ。困っていた」
そうだとだ。関羽も言うのである。
「手強い相手になっていた」
「そう言うてくれるんかいな」

「だが。味方であったなら」
話は逆説になっていた。それならばだというのだ。
「非常に頼りになる」
「そやな。うちもや」
「私が味方ならばか」
「頼りにさせてもらうで。それでや」
瓢箪を出した。その栓を開けながらだった。
「どや。一杯」
「酒か」
「飲むか？美味いで」
「そうだな。私もな」
関羽も微笑んでだ。瓢箪を出してきた。
そしてそのうえでだ。張遼にこう言葉を返した。
「どうだ、一杯」
「何や、そっちも持ってたんかいな」
「夜に飲もうと思っていた」
「そうか。それでかいな」
「少し早いが軽く飲むか」
「そうしよか」
こうしてだった。二人は互いの瓢箪を交換してだ。
そのうえで酒を楽しむ。キムの地獄の修業を眺めながら、

第九十六話　完

２０１１・７・１６

# 第九十七話　司馬尉、京観を造るのことその一

第九十七話　司馬尉、京観を造るのこと

司馬尉のことはだ。相変わらず警戒されていた。

夏侯姉妹にしてもだ。都にある曹操の屋敷の中で顔を顰めさせてこう話していた。

「ここまで怪しい話が多いとだ」

「気になるか、姉者も」

「ならない筈がない」

夏侯惇は少しムキになったような口調で妹に返した。

「謎が多いにも程があるぞ」

「そうだな。ここまで謎が多いとな」

「光武帝の頃から三公を出している」

夏侯惇は今度はこのことを話した。

「そこまでの名門なのはわかるが」

「言いたいことはわかっている」

夏侯淵も怪しむ顔で返す。

「氏素性が知れぬからな」

「そうだ。秋蘭も司馬家に入ったことはあるか？」

「いや、ない」

すぐにだ。夏侯淵も答える。

「誰も入ったことがない」

「あの屋敷には誰も呼ばれていないが」

「考えてみればこれも奇妙なことだな」

「そうだ。普通は三公ともなればだ」

どうなるかというのだ。その場合は。

「何かあると多くの者を呼ぶものだが」

「司馬家にはそうしたことはない」

「それも全くだ」

夏侯惇はいささかうわずった声で妹に話していく。
「だからあの家の中のこともだ」
「誰も一切知らない」
「我等が開く宴にも出て来ることもなかった」
宴を開くことも出ることもしないというのだ。
「まさに謎の者だ」
「まして我等の中には宴好きな者が多いしな」
「私も大好きだ」
他ならぬだ。夏侯惇もそうである。彼女は無類の酒好きで大食でもあるのだ。
「特に華琳様のお料理を召し上がるのはな」
「そうだな。しかしまことにだ」
「司馬尉、何者だ？」
「私も色々と半蔵殿達と話しているわ」
「忍の者でもわかりかねるか」
「全くだ。影一つ見つからない」
「影といえばです」
ここでだ。程？が出て来た。
「影を隠す為には」
「闇の中に入ればいいな」
夏侯淵は彼女のその言葉にすぐに返した。
「それで完全に見えなくなる」
「はい。司馬尉さんの影もです」
「闇の中にあるからか」
「見えないのだな」
「そう思います。とにかく本当に何もわかりません」
程？もその眉を顰めさせ小声になって話す。
「影が闇の中に入ったみたいに」
「怪しい奴だ」
夏侯惇はたまりかねた様にして述べた。

「それだけはわかるのだがな」
「そしてです」
程?の目が。今度は警戒するものになった。
そしてその警戒する目でだ。こう話した。
「私達の味方ではないでしょう」
「それはおかしなことだな」
夏侯惇はさらにいぶかしむ顔になってだ。程?のその言葉に応えた。
「私達は共に何進大将軍の下にいたが」
「同じ陣営にいてもです」
どうかとだ。程?はまた話す。
「敵同士であることはあります」
「そうだな。華琳様にしても麗羽殿にしても」
夏侯淵は二人と司馬尉のかつての関係を思い出しながら話した。
「あの御仁のことは常に嫌っておられる」
「そういうことです。同じ陣営においても対立はありますから」
「同じ大将軍の配下であったとしてもか」
「そう。味方とは限らないのです」
「そしてです」
もう一人来た。郭嘉だ。
「あの白装束の者達ですが」
「そうだ。あの連中だ」
「官渡でも出て来たのだ」
夏侯姉妹はかつてのことをここで言った。
「華琳様と麗羽殿を狙ってだ」
「急に出て来たのだ」
「あの者達がいて何故でしょうか」
郭嘉がここで言うこととは。
「司馬尉殿は狙われなかったのでしょうか」
「あの者達と宦官も関係があったようですが」

程?が話す。

# 第九十七話　司馬尉、京観を造るのことその二

「それなら司馬尉さんのところにもあの者達が向かっていた筈です」
「しかしそれはありませんでした」
「向かったのは普通の兵達です」
「これも思えば」
「怪しいな」
「それもまた、か」
夏侯姉妹は軍師二人の話を聞いて述べた。
「白装束の者達に狙われなかったのも」
「そのことも」
「このことは仮定に過ぎません」
こう前置きしてからだ。程?は二人に話した。
「ですが。彼等と司馬尉さんは」
「つながっていてもおかしくはない」
「そうだな」
「雰囲気も似た感じですし」
程?はこのことも指摘する。
「とにかくあの人は警戒し過ぎてもし過ぎることはないです」
「確かに黒ではありません」
郭嘉がまた話す。
「しかしそれはです」
「見えていないだけか」
「その黒が」
「はい、そうしたものですから」
怪しいというのだ。彼女達もそう見ていることだった。
そしてその彼女達をだ。呼ぶ声がした。
「ああ、そっちにいたのか」
「むっ、ガルフォードではないか」

「どうしたのだ？」
「いやな、町に出ないか？」
こうだ。彼は四人を町に誘うのである。
「今からな」
「町にか」
「そしてそこでか」
「ああ。買い物しないか？ちょっと見て欲しいものがあるんだよ」
「見て欲しいもの」
「といいますと」
軍師二人も彼のその言葉に反応を見せる。
「お酒でしょうか」
「それとも食べ物ですか？」
「ああ、パピィのな」
「ワン」
ここでそのパピィが鳴く。ここでもガルフォードと一緒なのだ。
「首輪を買おうと思ってな」
「それで我等にか」
「その首輪を選んで欲しいのか」
「パピィはレディーだからな」
それでだというのだ。
「同じレディーに選んで欲しくてな」
「しかし私はだ」
「私もだ」
夏侯姉妹がそれぞれガルフォードに応えて言う。
「そうしたことにはだ」
「あまり力になれないが」
「そうか？そうは思えないけれどな」
「我々は生粋の武人だぞ」
「その我々にそうした女の子らしいものを選んでくれと言われてもだ」

「レディーだよ、レディー」
ガルフォードはこう彼等に話す。
「女の子とはまた違うけれどな」
「いや、それでもだ」
「女の子らしいというとだ」
それでもだとだ。また話す二人だった。
「やはり。そうしたことは」
「縁がないが」
「私はどちらかといいますと」
程？もここで話す。
「猫派ですが」
「そうか。じゃあ駄目か」
「いえ、御一緒させて下さい」
だが、という感じでだ。彼女はガルフォードに話した。
「ワンちゃんも嫌いではありません」
「おっ、そうなのか？」
「はい。ですからそれでは」
「悪いな。それじゃあな」
「私も。よければ」
郭嘉もだった。名乗り出て来た。
「御供させて下さい」
「ああ、あんたも来てくれるのか」
「実は。町に出る予定もありましたから」
「これから袁術さんとデートなのです」
ひょこっと出て来た様にして言う程？だった。

# 第九十七話　司馬尉、京観を造るのことその三

「それでなのです」
「うっ、風何故それを」
「さっき袁術さんのお手紙を見て大喜びなのを見たから」
それでだというのだ。
「知ってました」
「うう、秘密にしていたのに」
「鼻血出して喜んでいたから」
わかったというのだ。
「ただのデートなのに」
「デ、デートから全てがはじまるから」
郭嘉はやけに必死の顔になってだ。両手を拳にして胸の前で縦に振りながら主張する。
「そこから美羽様とあんなことやこんなことが」
「あんなことにこんなこと？」
「接吻をしたり同じものを同時に食べたり」
「それは前にしたような」
「また。同じことを」
とにかく必死に言う郭嘉である。
「するかも知れないから」
「だからあんなに興奮して」
「私は確かに華琳様の家臣だ」
それはだというのだ。
「しかしそれと供にだ。美羽様とは心と心でつながっていて」
「こんな関係なんです」
程？はクールにガルフォードに説明する。
「今都で話題の三角関係です」
「三角関係？」

「ここにもう一人。張勲さんが入ります」
「ああ、あの人もか」
「偶像支配者とか何とか」
随分あからさまにだ。程?は話す。
「そんなお話です」
「偶像支配者って何なんだ?」
「また別の世界のお話で」
「別の世界ねえ。そういえばあんた」
「はい」
「どっかであれだよな。ホルモンだらけの世界にいたよな」
ガルフォードもガルフォードでこんなことを言う。
「そうじゃなかったか」
「記憶にあります」
程?自身もそのことを否定しない。
「中々恐ろしい世界でした」
「だよな。あんたも色々あるんだな」
「そうですね。私にしても凛ちゃんにしても」
「あんた達もだよな」
ガルフォードは夏侯姉妹も見る。
「色々な世界に縁があるよな」
「それを言ってしまうとな」
「その通りだな」
姉妹もそのことを認めて言う。
「何かとだ」
「縁はあちらこちらにある」
「じゃあそっちの縁にも協力してもらってな」
どうかとだ。ガルフォードはさらに話す。
「頼むな」
「わかった。それではだ」
「町に出るとしよう」

こうしてだ。彼等は町に出てパピィーの首輪を探しに向かった。
その中でだ。
ふとだ。郭嘉が言うのだった。
「ガルフォード殿に必要な首輪は」
「あっ、そうだよな」
「はい。お一つではありませんね」
こう彼に言うのである。
「パピィーさんのもの以外にも」
「パパー、ピピー、ピパーのものな」
「ワン」
「ワワン」
「ワワワン」
その三匹の子犬がだ。ガルフォードの周りに出て来て応える。彼等はもう賑やかな市場に出ている。左右に店が立ち並び商人の活気のいい声に行き交う者達の明るい顔も見える。そうしたものを見ながら市場を歩いている。
その中でだ。ガルフォードは話す。

# 第九十七話　司馬尉、京観を造るのことその四

「この連中も女の子だからな」
「ならばその者達の首輪もだな」
「女の子用だな」
「そうだよな。買わないとな」
こう話してだった。
「この連中の分もな」
「そうだ、それもだ」
「是非買おう」
夏侯姉妹も応えて言う。こうしてであった。
一行は市場を見回る。その中でだ。
ふとだ。彼等はだ。
ある者と擦れ違った。それは。
「なっ！？」
「ば、馬鹿な！」
「貴方がどうして」
「ここにおられるのですか」
「あら、奇遇ね」
そこにいたのは卑弥呼だった。あの姿で市場を堂々と歩いている。
そのうえでだ。右目をウィンクさせるとそれだけで。
大爆発が起こった。それによってだ。
市場は大混乱に陥った。多くの者が吹き飛ばされていた。
「な、何だ妖術か！？」
「今のは何だ！？」
「爆発だ！」
「凶悪犯が出たぞ！」
「あら、失礼ね」
本人だけが平然としている。

「こんな善良な美女を捕まえて凶悪犯だなんて」
「黙れ！何故片目を瞑っただけで爆発を起こせる！」
「貴殿、そもそもどうしてここにいるのだ」
夏侯姉妹が黒焦げになりながらも立ち上がって問い詰める。
するとだ。卑弥呼はやはり平然として答えるのだった。
「身だしなみの為よ」
「身だしなみ？」
「それでだというのか」
「あたしはこの美貌を誇るけれど」
自分ではこう言う。身体をくねらせつつ。
「もっとね。ダーリンを振り向かせる為にね」
「その為にだというのか」
「さらにか」
「そうよ。お洒落をしようと思ってね」
それでというのだ。
「いいものがあるかどうか探しているのよ」
「そうだったのですか」
「それで市場まで」
「そういうことなのよ」
軍師二人にも答える。
「それでいいアクセサリーを探してるんだけれど」
「アクセサリーか。それなら」
ガルフォードが卑弥呼の言葉に応えて言う。
「俺と同じだな」
「あら、そうなの」
「俺もパピィー達の首輪を探してるからな」
「ワン」
ここでも応えて鳴くそのパピィー達だった。
「だから一緒だな」
「そうね。首輪ね」

「いいわよね」
いつも通りだ。もう一人も急に何処からか出て来た。
「首輪で従順なのも見せて」
「ダーリンを誘惑しちゃうわよ」
「あの、首輪は幾ら何でも」
「危険過ぎます」
軍師二人も流石にそれは止めた。
「そのお姿で首輪までされると」
「大惨事が起こります」
「そうよね。ダーリンだけでなく他の人達も悩殺しちゃうから」
「大変なことになるわよね」
ここでも前向きな妖怪達である。
「そこまでしたらね」
「やり過ぎよね」
「少なくとも止めておけ」
「世の為人の為だ」
夏侯姉妹もそれを言う。

# 第九十七話　司馬尉、京観を造るのことその五

「むしろ余計なアクセサリーはだ」
「慎むべきだと思うがな」
「いや、別にいいんじゃないか？」
ガルフォードは彼女達の邪魔をした。無意識なうちに。
「お洒落はいいことだしな」
「そうよね。流石にわかってるじゃない」
「いいのは外見だけじゃないのね」
「ダーリンの次にいけてるわよ」
「最高よ」
こう言う彼等だった。
「あちらの世界にはイケメンが多いけれどね」
「貴方その中でも屈指よ」
「けれどあたし達は乙女だから」
「浮気はしないのよ」
まだ言う。
「だから御免なさいね」
「あたし達ダーリン一筋だからね」
「何かわからないけれどな」
ガルフォードは首を捻って夏侯姉妹達に話した。
「俺ってこの人達に」
「そうみたいだな。随分な」
「認められているようだな」
夏侯姉妹もそれを話す。
「顔だけでなく人間性もな」
「これはいいことだろうか」
「そうよ。とてもいいことよ」
「それは保障するわ、他ならぬあたし達がね」

また言う彼等だった。一応彼女達ではない。
「それでだけれどアクセサリーって」
「どれがいいかしら」
「まだ言うのですね」
「アクセサリーですか」
軍師達も怪物達にいささか呆れながら返す。
「ううん、そう言われましても」
「どれがいいかといいますと」
「イやリングとかブレスレットはどうかしら」
「あっ、それいいわね」
卑弥呼がパートナーに応えて頷く。
「あたし達何をつけても似合うけれどね」
「それもいいと思うわ」
「お好きなようにされては」
「そうとしか言えません」
郭嘉と程?はこう彼等にアドバイスをした。
「爆発さえ起こらなければ」
「それでいいと思います」
「爆発が起こるのもあたし達の美しさのせいよね」
「罪な女ね、あたし達って」
「そう思うのならいいが」
「少なくとも爆発は起こさないでもらいたいものだ」
夏侯姉妹は彼等に冷静に突っ込みを入れる。
「とにかく罪のないアクセサリーを選んでもらう」
「それだけを望む」
「そうね。それじゃあね」
「大人しめのを選びましょう」
「たまには慎む美もね」
「いいものだからね」
こんな話をしてだった。彼等は彼等でそうしたアクセサリーを選

びに入った。そうしてガルフォード達もであった。
パピィー達の首輪を探す。そしてだ。
「これがいいか？」
「あっ、その首輪ですね」
「それですね」
郭嘉と程？がその首輪を見て言った。黒いシンプルな首輪だ。
その地味と言ってもいい首輪を見てだ。二人はガルフォードに応える。
「それでいいと思いますが」
「この首輪に銀色で名前を入れてもらえば」
「それで充分だと思います」
「それでどうでしょうか」
「そうだな。それがいいな」
ガルフォードもだ。軍師二人のその言葉に頷いた。
そしてそのうえでだ。ガルフォードは実際にだ。
その首輪を買ってだ。銀色で名前を入れてもらいだ。早速パピィー達に付けた。その首輪を付けた彼女達を見てだ。夏侯姉妹が言った。
「ふむ、いいのではないか？」
「よく似合っている」
「そうだよな。じゃあこれでいいよな」
姉妹の言葉を聞いてだ。ガルフォードもだ。

# 第九十七話　司馬尉、京観を造るのことその六

納得する顔になってだ。それで頷いてだった。
「よし、じゃあ決まりだな」
「御勘定ですね」
「ああ。刺繍代も払うからな」
こうその首輪を売っている店の親父に話してだ。そうしてだった。
金も払った。これで決まりだった。
それが終わってからだ。一行は。
ガルフォードがだ。こう夏侯姉妹達に話した。
「じゃあこれからだけれどな」
「何か食べるか？」
「丁度この辺りにいい店があるが」
「そうか。じゃあそこにするか？」
ガルフォードは彼女達の言葉に応えて述べた。
「そこに皆で入って食うか」
「はい、それではですね」
「そうしましょう」
軍師二人も応えてだ。そのうえで、だった。
一行は夏侯淵が勧める店に入った。そこは。
洛陽に普通にあるような中華料理の店ではなかった。色々な国の料理があった。
内装もだ。様々な国のデザインが混ざっていた。その中には。
ガルフォードの祖国アメリカの旗も飾られ海賊のあの髑髏のマークもある。鷲や龍、太陽といったモチーフもある。そうしたものを見てだ。
ガルフォードはまずその星条旗を観て仲間達に話した。
「この旗はな」
「貴殿の国の旗だな」

「そうだったな」
「ああ、しかもテリー達の時代の旗だな」
その時代のアメリカの旗だった。旗にある星の数がそれだった。
「これはな」
「そうですね。星の数を見ますと」
「そうなりますね」
郭嘉と程?もこのことは既に知っていた。そのうえでの言葉だった。
「しかもこの海賊の紋章は」
「見たところ」
「ああ、いらっしゃい」
そしてここで、だった。彼等の前にだ。
一人出て来た。それは。
ジェニーだった。その周りには海賊達がいる。その彼等もだ。
ガルフォード達にだ。笑顔で挨拶をしてだ。そのうえで言ってきた。
「何を食べるんだい?」
「色々な料理があるけれどさ」
「ハンバーガーかい?それとも刺身かい?」
「どれにするんだい?」
「まさかこの店は」
「御主達がなのか」
夏侯惇と夏侯淵の姉妹達が彼等に問うた。
「経営しているのか」
「そうなのか」
「ええ、そうよ」
その通りだとだ。ジェニーが笑顔で答える。
「このお店はあたし達が全部やってるのよ」
「ああ、それでか」
ガルフォードは店の中を見回しながら話した。

「それでこんな内装なんだな」
「中々面白いでしょ」
ジェニーは楽しげに笑ってその言葉に応える。
「お店のおじさんにね。お話してね」
「ちょっと俺達も仲間に入れてもらったんだよ」
「それでこうした店になったんだよ」
ジェニーだけでなく海賊達も話す。
「それでなんだよ」
「こうした店にしてもらったんだよ」
「勿論あれよ」
また話すジェニーだった。
「元の料理も出るからね」
「それを聞いて安心した」
夏侯淵はジェニーの今の言葉にいささか安堵した声で応えた。
「店が完全に変わったかと思ってしまった」
「そうだな。ここまで変わるとな」
夏侯惇も店の内装を見回しながら述べる。
「それが大丈夫かと思ってしまった」
「別に店を占領した訳じゃないからね」
ジェニーは笑ってこう話した。

# 第九十七話　司馬尉、京観を造るのことその七

「協力させてもらってるから」
「成程。それでなんだな」
「そうよ。それで何を食べるの？」
にこりとした笑顔でガルフォード達に問う。
「何でも言ってみて」
「作られるものなら何でも作るぜ」
「そうさせてもらうからな」
「そうか。それじゃあな」
ガルフォードがだ。店のメニューを手に取ってだ。
そのうえでだ。これだと言うのだった。
「鮪のステーキ貰おうか」
「それね」
「それとシーフードサラダな」
野菜を頼むのも忘れない。
「マッシュポテト、スープはオニオンで」
「それとパンね」
「ああ、パンは食パンな」
パンはそれにした。やはりアメリカはパンだ。
「それで頼むな」
「わかったわ。じゃあそちらさん達は？」
「私はいつものを頼む」
「私もだ」
夏侯姉妹はこう言っただけだった。
「店の親父にはこれで通じる」
「それで頼む」
「ああ、あんた達常連さんか」
「そうだったんだな」

「そうだ。だからだ」
「これで充分だ」
姉妹は海賊達にも話した。
「だからそれで頼む」
「そうしてくれ」
「わかったわ。それじゃあね」
ジェニーも笑顔で頷いてだ。こうしてだった。
彼女達も決まった。しかしだった。
ジェニーが程?と郭嘉にも尋ねると。彼女達は。
「私はプリンだけでいいです」
「私は申し訳ありませんが」
こうそれぞれ言うのだった。
「今お腹は空いていませんが」
「これから予定がありますので」
特に郭嘉がだ。恥ずかしそうに言うのだった。
「ですから」
「?予定って?」
ジェニーもそれに反応を見せて目をしばたかせる。
「何かあるの?」
「そ、それは」
「逢引なのです」
程?があえて誤解するように言った。
「凛ちゃんはこれからそれをしに行くんです」
「風、そんな表現は」
「いえいえ、実はですね」
程?は無表情な顔で話していく。
「これから袁術さんと凛ちゃんで」
「だからそうした言い方は」
「ああ、袁術ちゃんとね」
だが、だった。郭嘉の予想に反してだ。

ジェニーはだ。納得した顔でこう言ったのである。
「デートね」
「あれっ、わかってたんですか」
「そりゃわかるわよ」
楽しげに笑ってだ。ジェニーは程?にも言葉を返した。
「郭嘉がそんな極端なことをね」
「凛ちゃん純情ですから」
「そうよね。想像は凄いけれど」
「凄く奥手なんですよ」
「そ、そんなことは」
郭嘉は顔を真っ赤にさせてだ。何とか否定しようとする。
「私もそうした経験は」
「全然ありません」
また言う程?だった。

# 第九十七話　司馬尉、京観を造るのことその八

「もう接吻も袁術さんとだけの」
「完全になのね」
「乙女です」
郭嘉の本質をだ。見事に指摘していた。
「純情ですから、とても」
「わ、私も一人や二人の経験は」
「華琳様もですね。あえてです」
「袁術ちゃんに譲ってるふしがあるのね」
「何しろ尋常じゃない相性のよさですから」
とにかくだ。運命的なまでの相性のいい二人なのだ。
「もうどうしようもないので」
「そうね。だから今もなのね」
「これから二人でデートなんです」
「仕方ないわね。それじゃあね」
言いながら。ジェニーは。
何処からかあるものを出してだ。それを郭嘉に投げ渡した。
「これだけ持って行って」
「これは？」
「御土産よ」
それを投げ渡してからだ。にこりと笑って言うのである。
「袁術ちゃんと一緒に楽しんできて」
「お茶でしょうか」
「ジュースよ」
それだというのだ。
「極悪ノニジュース。それをあげるわ」
「ノニジュースですか」
「凄くまずいから」

そのまずいものをだ。あえて渡すのである。
「印象に残るまずさよ」
「あの、まずいものをあえて手渡される理由は」
「度胸試しよ。っていうかね」
「というか？」
「こっちの世界じゃそうしてね」
まずいものを口にしてというのだ。
「楽しむ遊びもあるのよ」
「またおかしな遊びですね」
「あたしの国じゃね」
そのだ。イギリスではというのだ。
「もうそんなのしかないけれど」
「イギリスではですか」
「まずいもののしかないわ」
彼女自身も言うことだった。それは。
「それこそね」
「あまりイギリスという国にはな」
「行きたくないな」
それを聞いてだ。夏侯姉妹はだ。
顔を顰めさせてだ。こう言うのだった。
「まずいものしかないとなると」
「遠慮したい」
「正直あたしも驚いたから」
ジェニーはさらに話す。
「他の国の食べ物の美味しさにね」
「それでこのジュースとやらは」
郭嘉はまたジュースのことを尋ねた。
「美羽様と共にですか」
「そうよ。あえて飲んで楽しんで」
「ううむ、本当にわからない趣味ですね」

「そのうちわかるわ。美味しいものを食べることは楽しみだけれど」
そしてだ。話を裏返しにしてだった。
「まずいものを食べるのもね」
「それもですか」
「楽しみなのよ」
「とにかくですね」
郭嘉はいぶかしみながらジェニーに応える。
「美羽様とお話してです」
「それで飲んでみるのね」
「そうさせてもらいます」
今はこう言うしかできない郭嘉だった。そうしてだった。
彼女は袁術とのデートに向かおうとする。だがそこでだった。
何処からかだ。爆発音が聞こえてきた。その音を聞いてだ。
彼女だけでなく他の面々もだ。顔を顰めさせて言った。
「まさかまた」
「あの二人が」
爆発の元凶はすぐに察しがついた。

# 第九十七話　司馬尉、京観を造るのことその九

「片目を瞑るなりしたのか」
「それでなのか」
「全く恐ろしい人達です」
程?も眉を顰めさせて言う。
「それだけであそこまでの騒ぎを起こすとは」
「爆発の方角からすると」
ガルフォードは音の大きさも含めて察して述べた。
「城壁の外だな」
「そうね。人気の少ない場所ね」
ジェニーもそれを察して言う。
「被害は今回は少なそうね」
「とりあえずはよかったです」
程?も損害は軽微と見て述べた。
「あの人達はまさに存在自体が最終兵器ですから」
「一瞬ひやっとしました」
郭嘉は実際にその顔を安堵させている。
「美羽様が巻き込まれたかと思いました」
「袁術さんなら大丈夫です」
彼女のことは程?が保障した。
「そう簡単にどうにかなる人じゃありませんから」
「そうだというのね」
「そう。袁術さんも存外頑丈な方です」
程?はこのことをよく把握していた。袁術のそのことをだ。
「ですから」
「だといいのだけれど」
「じゃあ凛ちゃん」
また告げる程?だった。

「行ってらっしゃい」
「え、ええ」
こうしてだった。彼女は袁術のところに向かうのだった。そしてそのうえで、だった。
二人でデートを楽しみにだ。そして向かうのだった。
彼等が都で楽しんでいるその頃だ。擁州では。
司馬尉達がだ。いよいよだった。
山賊達のいる山にだ。攻撃を仕掛けようとしていた。
それを見てだ。曹仁が仲間達にやや忌々しげに問うた。
「やっぱりこうなったわね」
「ええ、そうね」
曹洪が彼女のその言葉に応える。
「予想していたけれどね」
「私達は蚊帳の外ね」
「司馬家だけで全てやるつもりね」
そうなっていたのだ。彼女達もその率いている兵達もだ。完全に蚊帳の外だった。
その中でだ。沮授が言った。
「問題はあの姉妹ね」
「司馬師と司馬昭ね」
「ええ、あの二人よ」
まさに彼女達だとだ。田豊にも答える。
「あの二人だけれど」
「果たして武の才覚はあるのかしら」
「多分ないわね」
曹仁がそれを察して述べた。
「自分達で武具を手にして戦うのはね」
「それは不得手よね」
「そうした者ではないわね」
こうだ。曹仁は田豊に対して答えた。

「ただ。そうでなくて」
「私達みたいな」
「そうした感じね」
袁紹の軍師二人がだ。鋭い目になって述べた。
「軍を指揮して戦う」
「そうした才覚はあるわね」
「そうね」
その通りだとだ。曹洪も言った。
「そうした才覚を持っているわね」
「それはそれで厄介だな」
これまで話を聞いていたビリーが言った。
「正直一人で戦うのと兵隊率いて戦うのは別だからな」
「ああ。それだけ範囲は広いってことだからな」
ビリーの言葉にホアも頷く。
「そういうことだからな」
「そもそもな」
どうかとだ。今度はダックが話す。
「あの司馬尉って娘は元々参謀だったよな」
「軍師か？それだな」
マイケルも言う。
「作戦を立てるのが仕事だったよな」
「それならあの妹連中もだろ」
ダックは二人のことを察してこう言った。

# 第九十七話　司馬尉、京観を造るのことその十

「洒落にならない位にな」
「切れるわね」
「だからこそあえてね」
曹仁と曹洪も腕を組み考える顔で話す。
「私達を外して」
「自分達だけでやる」
「それだけの自信があるからこそ」
「するのね」
このことがだ。わかったのだ。
「ただ除け者にするだけじゃない」
「それができるだけの自信がある」
「だからこそああして」
「自分達だけでね」
「それとね」
「まだあるわね」
田豊と沮授が目を光らせて話した。
「どうやら私達にあえてね」
「見せるつもりね」
「それならよ」
「見るしかないわね」
曹仁と曹洪は観念した顔で述べた。
「もうこうなったら」
「そうしましょう」
「結局はそうだよな」
ビッグベアもここで言った。
「まあ奴等が何をするかな」
「見るとしよう。ただじゃ」

タンの目がだ。ここで光った。
その眉の奥の目を光らせながら。それで言うのだった。
「嫌なことが起こりそうじゃな」
「そうね。そのこともね」
「覚悟しておきましょう」
田豊と沮授が応える。そうしてだった。
彼等は司馬尉達の戦を見守ることにした。その戦は。
まずは山を囲んだ。その動きは。
あまりにも迅速でありしかも山を完全に取り囲んでいた。その陣の様子を聞いてだ。
沮授がだ。唸る様にして言った。
「見事な布陣ね」
「そうよね」
田豊もだ。ここで言った。
「山を完全に囲んでいるわ」
「兵を効果的に使ってね」
「この布陣をあれだけ短い間に済ませるなんて」
「私達でも中々こうは」
いかないというのだ。そのことを話してだ。
「いかないわね」
「そうはね」
「これは」
素直な賞賛だった。相手が胡散臭いと見ている相手とはいえだ。
その布陣はこう評された。そしてだ。
ダックもだ。こんなことを言った。
「あの連中の陣見てきたけれどな」
「どうだったの？」
「それで」
「嫌な雰囲気だったな」
サングラスの奥の目を顰めさせて。それで話した。

「戦うっていうよりはな」
「それよりは？」
「どういった雰囲気なの？」
「虐殺っていうのか？ほら、あるだろ」
彼には縁のなかったことだがそのこと話として出すのだった。
「ああいう。無意味に殺してそれを楽しむ様なな」
「そういう感じ？」
「そんな雰囲気なの」
「ああ、そうだよ」
こう話すのだった。
「やばいぜ。何かな」
「まさかとは思うけれど」
「戦に出ているのだし」
そうだとだ。曹仁と曹洪は首を捻りながら話した。

# 第九十七話　司馬尉、京観を造るのことその十一

「山賊達は攻めて降伏させる」
「それがやり方だけれど」
「だよな。山賊なんてな」
ビリーもそれは当然といった感じで話す。
「懲らしめて後はな」
「ええ、とんでもない連中以外はね」
「村に戻すか兵に組み入れるか」
「そうするものだから」
「そうだろ？それで何で虐殺なんだ？」
首を捻って話すビリーだった。
「ダックよ、それちょっとおかしくないか？」
「俺もそう思うけれどな」
そしてそれはダックもだった。こう言ったのだ。
「あの連中がこれからするのは戦いだしな」
「しかし。嫌な雰囲気か」
リチャードはダックのその言葉に首を捻って話す。
「気になるな」
「全くだな」
「そうだな」
そんな話をしてだった。彼等は。
司馬尉の動きを見続ける。そしてだった。
夜にだ。山賊達が油断して寝た頃にだ。
すぐにだ。囲んだままでだ。
兵達を動かしてだ。即座にだ。
四方八方から攻め立てる。派手に鐘を鳴らし。
「さあ、このままね」
「攻めなさい」

司馬師と司馬昭がこう彼等に命じる。
「山賊達は斬るより捕らえる」
「そうしなさい」
殺しはしないというのだ。
「一人一人。出て来た者をね」
「それぞれ捕らえるのよ」
これが彼女等の策だった。そしてだった。
兵達の動きは。夜であってもだった。
まるで昼の様にだ。的確に動いてだ。
寝込みを襲われしかも夜目にまだ慣れていない山賊達をだ。個々に捕らえていくのだった。
その動きを見ながらだ。司馬師は司馬昭に話した。
「姉上はお流石ね」
「そうね」
こう二人で話すのだった。
「兵達に攻める前にじっくりと目を閉じさせ目を闇に慣れさせ」
「そのうえで攻める」
「こうすれば夜であってもね」
「普通に動けて攻められるわ」
だからいいというのだ。実際にだ。
兵達は山賊達を圧倒していく。取り囲んだうえでのその動きでだ。
山賊達は瞬く間にその殆んどが捕らえられた。討たれるよりもそうされた。
そして朝にだ。司馬尉は。
その捕らえて縛られている彼等を前にしてだ。悠然として言うのだった。
「ではね」
「はい、いよいよですね」
「これからですね」
「楽しむわ」

こうだ。妹達にも話す。そうしてだった。
山賊達を一人一人だった。
首を刎ねその首でだ。何と。
左右に二つの柱を築きだ。門にしたのだった。そしてその門を兵を引き連れ潜ってだ。
そのうえでだ。冷酷そのものの笑みを浮かべてこう言った。
「これが勝利の証よ」
その首の門を潜ってから言うのだった。それを見てだ。
曹仁達は蒼白になりだ。こう言い合った。彼女達はここで遂にだった。司馬尉の前に呼ばれそうして今はその門を見ていた。
「あれはまさか」
「京観!?」
「まさか。それを築くなんて」
「あんなことをするなんて」
「おい、何だよあれ」
ビッグベアもだ。その門を唖然として見つつだ。

# 第九十七話　司馬尉、京観を造るのことその十二

そのうえでだ。こう彼女達に問うた。
「人の首で何してるんだよ」
「京観よ」
それだとだ。田豊が話した。
「あれはね」
「京観！？それがあれの名前か」
「ええ。敵を捕らえて皆殺しにし」
そうしてだというのだ。
「ああして戦に勝ったことを祝って築くものだけれど」
「普通あんなことはしないわ」
沮授もだ。蒼白になった顔で話した。
「あまりにも残虐で」
「そう。それこそあんなことをするのは」
「本朝の歴史においても」
どうかとだ。曹仁と曹洪も話す。
「悪鬼羅刹か」
「それに値する者達だけよ」
「ってことはあの連中は」
「そうした奴等かよ」
マイケルもホアもだ。苦味に満ちた顔で言った。
「何て奴等だ」
「怪しいとは思っていたけれどな」
「これは」
「放ってはおけないわ」
曹仁と曹洪はその蒼白の顔で言ってだった。
すぐに司馬尉の前に出てだ。こう言ったのだった。
「司馬尉殿、これは幾ら何でもです」

「度が過ぎます」
「山賊達を捕らえればそれで、です」
「兵に入れるなりすればよかったのでは」
「手ぬるいわ」
血に塗れた笑みで。司馬尉は二人に返した。
「それではね」
「手ぬるい！？」
「そうだというのですか」
「そうよ。山賊達は罪人よ」
だからだというのだ。
「それでただ兵に組み入れたり村に返すのは」
「手ぬるいというのですか」
「それで」
「そうよ。こうしてね」
全員の首を刎ねだ。そしてだというのだ。
「京観を築いたのよ」
「勝った祝いの為だけでなく」
「そうされたと」
「賊は賊よ」
冷徹ではなかった。酷薄な言葉だった。
「賊は捕らえれば」
「処刑する」
「一人残らずですか」
「そうしたわ。こうしてね」
そうした話をしてだ。司馬尉は。
曹仁達にだ。また言ったのである。
「わかったわね。このことが」
「ではこれで正しいと」
「そう仰るのですね」
「その通りよ。では貴女達も」

彼女達にだ。今度はこう告げた。
「この京観をくぐるかしら」
「いえ、遠慮します」
「それは」
まずは曹仁と曹洪が断った。
そしてだ。田豊と沮授もだった。
「私達もです」
「今は」
「俺達もな」
「そんな気持ちの悪いものを傍に見るのはな」
ビリー達は四人よりもさらに不機嫌さを露わにさせてだ。それでだった。
こうだ。司馬尉に言うのだった。
「絶対に嫌だしな」
「遠慮させてもらうぜ」
「そう。じゃあいいわ」
司馬尉もだ。これ以上言わなかった。
「私達だけでね」
「勝手にしな」
ホアは京観から顔を背けさせて告げた。
「そうな」
「当たってしまったのう」
タンもだ。嫌悪を表に出して述べる。
「嫌な予感がな」
「そうだな」
リチャードはタンのその言葉に頷いた。山賊退治は誰もが、司馬尉達以外は考えもしなかった無惨な、あまりにも血生臭い結果に終わったのだった。

第九十七話　完

2011・7・18

# 第九十八話　孫策、賭けを考えるのことその一



司馬尉が山賊達を皆殺しにしその首で京観を築いたことはすぐに都にも伝わった。曹操もその話を聞いてだ。

血相を変えてだ。報告をした楽進に対して問い返した。

「それは本当なの！？」

「はい、春瞬殿達からの報告です」

「そう、それならね」

間違いないと。曹操もわかった。

「その通りね」

「しかしです」

楽進もだ。顔を驚いたものにさせてだ。己の前に座る曹操に対して述べる。

「まさか。京観なぞ」

「私も実際にしたというのはね」

「はじめてですか」

「ええ、はじめて聞いたわ」

曹操もだ。それははじめてだというのだ。

「今の乱れている世でも」

「そこまでする方は」

「いなかったわ。確かに項羽は敵の多くの者を生き埋めにしたけれど」

それでもだというのだ。

「京観までは」

「築いてはいませんでしたか」

「確かね」

こう楽進に話すのだった。

「覚えがないわ」
「しかし司馬尉殿はですか」
「それをあえてしたわ」
曹操の顔は顰められたままだった。
「恐ろしいことにね」
「華琳様から見てもですか」
「ええ。どうやらあの女」
蒼白になった顔の唇を強く噛み締めてだ。曹操は言った。
「考えていたよりも遥かに恐ろしい女の様ね」
「私もです」
楽進もだ。こう言った。
「あの様なことをするとは」
「考えていなかったわね」
「想像もしませんでした」
「私もよ。おそらく誰もがそうよ」
「そうですか。誰もがですか」
「あの娘が都から帰ったら」
どうするか。曹操はもうそのことを考えていた。
「問い詰めるわ。劉備や麗羽達と一緒にね」
そうすることを決めたのである。
楽進は曹操に司馬尉のことを報告してからだ。彼女の前を退いた。
そのうえで曹操の屋敷から出て茶店に入った。そこにだ。
李典と于禁が来てだ。晴れない顔で声をかけてきた。
「ああ、そこにおったか」
「少し探したの」
「そうか」
楽進は強張った顔で二人に返した。
「華琳様のところに行っていた」
「あのことでやな」
「そうよね」

「そうだ。信じられない話だ」
茶を片手にだ。また二人に述べた。
「京観を築くか」
「普通そんなんせんで」
「はじめて聞いたの」
二人もだ。こう言うのだった。
「皆殺しにしてその首で門築くなんてな」
「やり過ぎなの」
「しかし司馬尉殿はそれを平然とされた」
楽進はこのことを指摘する。
「やはりこれは」
「あの人普通ちゃうで」
「人を殺すことを楽しんでるの」
「おそらくな」
楽進は于禁のその言葉に頷いた。三人は卓を囲んで茶を飲みはじめている。それ自体はいつもと変わらないが表情が違っていた。
それでだ。その顔で話をするのだった。
「その様な方か」
「なあ、これめっちゃやばいで」
李典も言う。
「あの人三公やしな」
「それだけの力があるな」
「また何かあればなの」
于禁にもいつもの少女の屈託のなさがない。

# 第九十八話　孫策、賭けを考えるのことその二

「またああいうことするの」
「するな、間違いなく」
楽進もそう見ていたのだった。
「これからも」
「ほな。放っておけんで」
「何とかしないといけないの」
「そうだ。さもないとより多くの血が流れる」
司馬尉についての話が続く。
「止めなければならないが」
「ほんまやな。あそこまでとんでもない人やったとはな」
「沙和も考えなかったの」
「あんなん誰も考えんて」
「確かに。恐ろしいにも程があるの」
こう話してだった。三人は暗い顔で話してだ。
茶を飲む。だがその茶も。
「この茶は」
「味せんな」
「全然なの」
今はだ。茶の味を感じなかった。
「この店の茶は美味い筈だが」
「それでも何杯でも飲めるのにな」
「今は全然なの」
そうなのだった。今はだ。
「こんなにまずい茶やったか？」
「何か今日は特別酷いの」
「気持ちのせいだな」
そのせいだとだ。楽進は述べた。

「今の私達はな」
「そやな。うち等のせいや」
「それ以外に有り得ないの」
こうした話をしてだった。三人は司馬尉の恐ろしさを実感していた。
袁紹の屋敷でもそれは同じだった。
張?がだ。その顔を強張らせて高覧に問い返して。
「京観!?あんなものを」
「そうよ。水華達が伝えてきたわ」
「築いたというのね」
「信じられない話だけれどね」
「あんなものを築いても何の意味もないわよ」
張?もこう言うことだった。
「捕らえた山賊はどうしようもない奴以外は」
「そうよね。精々棒で打ってから」
「兵にするなり村に戻すなり」
「牢に入れたりね」
彼女達にしてもこうした処罰だけだった。
「それだけで済むことなのに」
「それでも司馬尉は」
「皆殺しにしたのね」
「そしてあれよ」
京観を築いたというのだ。
「私も信じられないわ」
「私達は多くの異民族を征伐してきたけれど」
張?は自分達のことから話した。
「それでも。匈奴達は組み入れるだけで」
「そんなことは一度もしなかったわ」
「麗羽様も私達もそうしたことは嫌いだったから」
「想像もしなかったわよ」

「それでも司馬尉は」
張?もだった。司馬尉については。
「それをあえてしたのね」
「花麗、貴女どう思う?」
高覧は張?の真名を出して問うた。
「司馬尉のことは」
「貴女と同じよ」
こう返す張?だった。
「花美とね」
「そうなのね」
「あの娘、このまま放っておくと」
「恐ろしいことになるわね」
「麗羽様にお話して」
「そうして決めないといけないわね」
彼女達もだ。司馬尉には明らかにこれまで以上の警戒を抱いた。
それでだった。
あらためてだ。張?は言った。
「取り除くこともね」
「考えないといけないというのね」
「あの娘は危険よ」
それ故にだというのだ。

## 第九十八話　孫策、賭けを考えるのことその三

「だからね」
「そうね。上手くいくかどうかはわからないけれど」
「考えてはいくべきね」
暗殺のことも考慮に入れはじめていた。司馬尉の危険さを察した故にだ。
司馬尉が戻る前にだ。既にであった。
都は大変な騒ぎになっていた。彼女のしたこと故にだ。
それでだ。劉備もだった。
唖然とした顔でだ。司馬尉について話すのだった。
「ううん、京観なんて」
「そんなの本当にやる人いるなんて」
「考えもしなかった」
馬岱と魏延が話す。
「けれどそれをやったのよね」
「あの女はな」
「恐ろしい女じゃ」
厳顔も言った。
「あそこまでするとな」
「そもそもよ」
馬岱も顔を曇らせて話す。
「山賊退治にそんなことまでするなんて」
「聞いたこともない」
それは魏延も同じだった。
「そもそも夷を制するにしてもだ」
「普通は組み込む」
厳顔はこれまでのことを踏まえて話した。
「実際に袁紹殿や孫策殿はそうしておられるしな」

「そうそう、私達もよね」
劉備もこのことはわかった。
「益州も治めるようになったし」
「はい、南蛮等の異民族をです」
ここで徐庶が出て来て話した。
「今組み入れていますので」
「そうにゃ」
その組み入れられている猛獲は実に明るい。
「美衣達もこの国が大好きにゃ」
「だから一緒ににゃ」
「ここにいるにゃ」
「それも楽しくにゃ」
トラにミケ、シャムも同じだった。
「ここで皆と楽しく遊んでにゃ」
「美味しいものとおっぱいがあればにゃ」
「それで満足だにゃ」
彼女達は確かにそれで満足していた。そしてだ。
タムタムとチャムチャムもこう話す。
「タムタム達モ」
「そうよね。向こうの世界から来たけれど」
「コウシテ受ケ入レテモラッテイル」
「それもやっぱり？」
「根は同じなんだろうな」
ロックが彼等のその言葉に応えて頷く。
「そうした異民族に対するのと」
「意識していなかったけれど」
そうだったとだ。また話す劉備だった。
「そうなの」
「そうですね。ただ今回のことは」
どうなのかと。徐庶が話す。

「全く違います」
「何の意味もないのに殺した」
「そうなるな」
馬岱と魏延は既にこのことを見抜いていた。
「山賊っていうのを口実にして」
「そうとしか思えないな」
「はい、私もそう思います」
軍師の徐庶もだ。そう見ていた。
「ですから司馬尉さんはです」
「危険じゃ。あ奴は血を好んでおる」
厳顔の目が鋭くなっていた。
「何とかせねばいかんな」
「何とか？」
「例えばじゃ」
劉備の問いにだ。厳顔はいささか以上に剣呑な言葉で答えた。

# 第九十八話　孫策、賭けを考えるのことその四

「消すのじゃ」
「消すってまさか」
「このことを咎めて処刑じゃ」
そうしてはどうかというのだ。
「無意味な殺戮としてじゃ。いけるのではないのか」
「いえ、それは幾ら何でも」
どうかとだ。徐庶が厳顔に言ってきた。
「無理があります」
「できぬか、それは」
「確かに山賊は賊ですから」
ここに厳顔の主張が難しいという根拠があった。
「その処罰はです」
「当然だというのじゃな」
「確かに京観はやり過ぎです」
このことは徐庶も認めた。その通りだとだ。
「しかしそれでもです」
「それと咎としてじゃな」
「処刑するのは無理です」
「左様か。強引か」
「そう思います」
「しかし降格とかはできないか？」
ロックがこう尋ねた。
「更迭っていうのか？このことからな」
「それもです」
「難しいか」
「とにかく。功を挙げたのは事実です」
「だからか」

「はい、功を挙げて更迭というのも」
それも難しいというのだった。
「今回のことはあくまでやり過ぎ。それで済ませてしまうことも」
「できるからかよ」
「正直手がありません」
徐庶も項垂れて言うことだった。
「私もあの方は危険だと思っていますが」
「ではこのことはわし等ではどうすることもできんな」
厳顔は唇を噛み締めて述べた。
「見ているだけしかな」
「残念ですが」
「暗殺などするのものう」
厳顔はこのことについては自分で言った。
「よくはない」
「そうね。そんなことしても」
「何にもならないな」
このことは馬岱と魏延も同じだった。二人も暗殺は好きではないのだ。
「御世辞にもいいやり方じゃないからね」
「止めておくべきだな」
「左様じゃ。それはせぬに限る」
厳顔は暗殺については完全に否定だった。
「しかしあの女は何とかせねばいかんが」
「そうです。ですが」
さらに問題があるとだ。徐庶は述べた。
「今回の功で、です」
「まだ何かあるのか」
「はい。あの方の妹さん達のことです」
こうロックに返して話すのだった。
「あの方々もです」

「そうじゃ。あの者達も功を挙げたことになる」
厳顔もこのことに気付いた。
「ではじゃ」
「高官に任じられます」
「そうじゃな。姉に続いてな」
「司馬家の権勢も強くなります」
「かえってじゃな。困ったことじゃな」
「はい、司馬家は只でさえ名門ですし」
その権勢は尋常なものではないというのだ。
「それで妹さん達も高官になられると」
「あの二人もよね」
「殺戮を楽しんでいたな」
馬岱と魏延は今度はこのことを話した。
「じゃあやっぱり」
「あの二人までとなると」
「司馬尉さんだけでも問題ですから」
だからだというのだ。

# 第九十八話　孫策、賭けを考えるのことその五

「それに加えて妹さん達までとなると」
「ううん、どうしたものかしら」
劉備も困った顔になり腕を組んで言う。
「困ったわね」
「それにな。一つ気付いたんだけれどな」
またロックがここで話した。
「今あの司馬尉は三公だよな」
「うん、そうよ」
その通りだと答える劉備だった。
「司空よ」
「それより上を目指すんじゃないのか？」
野心があるのではないかというのだ。
「袁紹さんや曹操さんとかな」
「それに、よね」
「摂政の座か」
馬岱と魏延はロックの話を聞きながら自然にだった。
劉備と彼女が座る椅子を見てだ。そうして話した。
「桃香様を蹴落として」
「そうして自身が」
「あれで野心があったら絶対にそうするな」
また話すロックだった。
「充分考えられるだろ」
「そうですね。若し司馬尉さんに野心があれば」
問題だと。徐庶も話す。
「他の三公の座や左右の宰相の座」
「それに摂政」
「その座もまた」

「やはり何とかせねばならん」
問題のある存在だと述べた厳顔だった。
「司馬家には目をつけておくか」
「そうね。あの家はね」
「信用できないからな」
こんな話をしてだった。劉備達も司馬尉、そして司馬家に対してだった。
警戒の念を抱いていた。都のどの者も彼女達に眉を顰めさせていた。
その渦中の司馬尉達が都に戻った。するとすぐにだ。
帝から労いの言葉をかけられ褒美を与えられた。そして妹達もだった。
徐庶達の予想通り高官に任じられた。司馬家は位を極めたと言ってもよかった。
しかしだった。それでもだ。
孫策はその司馬尉が帝に拝謁し言葉をかけられ褒美も与えられるのを見届け宮中を退いてからだ。己の屋敷でこう周瑜に話した。
「見事なものね」
「司馬尉のことね」
「ええ。帝の御前だというのに」
こうだ。杯を手にして己の席に座りながら話すのだった。
「何も動じてはいなかったわ」
「そうね。本当にね」
周瑜もその場にいた。だからこそ言えることだった。
「さも当然という風にね」
「帝は京観のことは何も仰らなかったけれど」
それでもだというのだ。
「御存知でない筈がないから」
「けれどそれでもね」
「その帝の御前で」

司馬尉はだ。平然としていたというのだ。
「それもあそこまでね」
「肝も相当座っているようね」
「ええ。しかもね」
孫策の言うことはさらにだった。
「妹達もね」
「同じ様に平然としていて」
「褒美を受け高官に任じられても」
そうなっていたというのだ。
そしてだ。孫策は今度はこのことも話した。
「それと。気になるのは」
「司馬尉がより上位の将軍にも任じられたことね」
「そう、それよ」
「二人の妹達も含めてね」
「兵をこれまで以上に動かせるようになったわ」
「司馬尉はこれまでも将軍に任じられていたけれど」
だから山賊退治の兵を率いることができたのだ。将軍とは即ち兵権を持っている役職だからだ。

# 第九十八話　孫策、賭けを考えるのことその六

「昇進と。妹達のことも含めて」
「軍にまで大きな権限を持つようになったわね」
「どうしたものかしら」
孫策も司馬尉について考えていた。
腕を組みだ。そのうえで周瑜に問うた。
「いい考えはある？」
「確実はものはね」
「ないのね」
「失脚させようにも」
「これといった手がないわね」
「失点がない、それどころか」
「功ばかりがあるから」
咎を理由にそうさせられないというのだ。
「風紀を粛清し民に施しを与え」
「田畑を耕し町を整える政をね」
「次々と行っているから」
それは孫策達も行っているが司馬尉もだった。彼女は確かに政においても卓越していた。
「理由をでっちあげる」
「できると思うかしら」
「無理ね」
孫策はその可能性は最初からないと見ていた。
「奇麗なやり方じゃないけれどやるにしても」
「司馬尉は冤罪を出されてもね」
「その都度それを論破するでしょうね」
「間違いなくそうするわ」
「そしてできるわ」

するとできる、この二つが一致していた。
「だからこそね」
「それもできないわ」
孫策も話すのだった。
「それに暗殺もね」
「警護があまりにも凄いわね」
「屋敷もあの娘の周りも」
それこそなのだった。
「常に多くの兵達がいてね」
「毒味も凄いと聞いたわ」
「毒味は何人もいて」
料理や酒に毒を入れて暗殺する、どの時代でもどの国でもあることだ。
「しかも料理人達も」
「それもなの」
「代々司馬家に仕えていて外に出ることはない」
「彼等を引き込むこともできないのね」
「ええ。全くね」
「とにかく何の手もないのね」
このことを認識してだ。孫策はお手上げといった感じになった。
「司馬尉に対しては」
「こちらは何もできないわ」
「全くよね」
「ええ。それでいてね」
「司馬尉自身はよね」
「こちらに色々とできるわ」
そうだというのだ。
「守りは完璧で攻めることはできる」
「こちらが圧倒的に不利ね」
「攻防だけではね。ただね」

「司馬家は司馬家だけだけれど」
「私達は一つじゃないわ」
彼女達の利点はそこだった。
「孫家、袁家、曹家」
「そして劉家ね」
「それに多くの家臣達と」
「あちらの世界から来てくれた仲間達ね」
「これだけの人材がいるわ」
それがだ。司馬家に対する最大の武器だというのだ。
「それをどうするかよ」
「使いこなしてそのうえで」
「司馬家に対するのね」
「そうするべきよ」
周瑜は確かな声で孫策に話した。
「数はこちらの方が圧倒しているから」
「後は足並みを揃えることね」
「多分。あちらは」
どうしてくるかというのだ。司馬尉達は。
「私達を仲違いさせようとしたり」
「若しくは何人か消そうとするか」
「敵だとしたらそうしてくるわ」
「そうね。敵だとね」
あくまで仮定としてだが断定して話す二人だった。
そしてだ。孫策はさらに話した。

# 第九十八話　孫策、賭けを考えるのことその七

「思えば。母様もだったわね」
「ええ、孫堅様は」
「暗殺されたわ。石弓でね」
「あのことだけれど」
周瑜はその孫堅が石弓で殺されたことについてだ。彼女の娘である孫策に対して眉を曇らせて話した。
「やはりおかしいわ」
「山越は石弓を使わないわね」
「今もね。どの山越兵を見ても」
彼等が組み入れただ。その彼等はどうかというのだ。
「石弓は使っていないわ」
「けれど母様はその山越を攻めている時にね」
「貴女も狙われたしね」
「おかしいにも程があるわね」
孫策は腕を組み述べた。
「誰が石弓を使ったのかしら」
「大殿、そして貴女に悪意を持つ何者か」
「山越以外の」
山越でないことは最早間違いなかった。
「その何者かだけれど」
「果たして誰なのかね」
「思い当たるふしは」
孫策は杯を卓の上に置きそのうえでだ。腕を組み話した。
「私達が従えさせている豪族達」
「今中央に組み入れている彼等ね」
「その中には反発している者も多いし」
「可能性はあるわね」

「他にもこっちが気付いていないだけでそう考えている面々はいるでしょうね」
「そうね。そうした相手も多いわ」
国の要職ともなれば怨まれるのも当然だった。政には利権もまた関わってくる。その利権の関係で怨まれるのもだというのだ。
それを踏まえてだ。また言う孫策だった。
「ううん、それを探し出すのもね」
「一筋縄じゃいかないわね」
「そうね」
こう周瑜に応えて言ったのだった。
「果たして誰なのかね」
「探していくわ」
「御願いできるかしら」
「私にとっても」
彼女自身にとってもどうかとだ。
周瑜はその顔を険しくさせてだ。そのうえで話す。
「仇だから」
「お母様のね」
「大殿がおられたからこそ」
それでだというのだ。
「今の私があるから」
「そうね。貴女を見出したのは」
「孫堅様よ」
その彼女だというのだ。
「だからこそね」
「尚更その仇をね」
「見つけ出し。そして」
そのうえでだというのだ。
「この手で」
「いえ、それは」

「それは？」
「私もよ」
そのだ。孫策もだというのだ。
青い炎を燃え上がらせてだ。そのうえでの言葉だった。
「それに蓮華も小蓮もね」
「そうだったわね。貴女だけじゃなかったわね」
「私達姉妹全員の仇よ」
その刺客を送った者はだ。そうだというのだ。

# 第九十八話　孫策、賭けを考えるのことその八

「実行した刺客が誰か」
「それも気になるけれどね」
「黒幕よ。大事なのは」
「それが誰かよね」
「ええ。けれど」
「けれど？」
「流石に関係ないわね」
こう前置きしてからだ。述べる孫策だった。
「お母様の刺客と司馬家は」
「どうかしら」
孫策は直感で、周瑜は洞察でそれぞれ話していた。
「それもね。有り得るわ」
「そうだというのね」
「孫家は揚州に勢力を築いていったけれど」
「その孫家に対して」
「司馬家が快く思っていないとしたら」
それならばだ。どうかというのだ。
「それもね」
「あるわね」
「まさかとは思うわ」
その可能性は低いとだ。周瑜も言う。
だがそれでもだとだ。仮定を話していくのだった。
「けれど。あの家については昔から」
「多くの政敵がね」
「不穏な死を遂げているから」
このことがあった。
「若しも。本当に孫家が」

「あの家の障害になると見なされていたら」
「お母様も」
「そうなっていてもね」
不思議ではないというのはだ。二人も考えていく。
しかしだ。今はだった。
「確かな証拠はね」
「そう。証拠はないわ」
「けれど。状況としては」
「完全に否定できないわね」
孫策の目に剣呑な光が宿る。そしてだった。
あらためてだ。周瑜にこんなことを言った。
「賭けだけれどね」
「また危険なことをするのね」
「司馬尉は私を嫌っているわね」
「それは確かね」
間違いないとだ。周瑜も言った。
「もっと言えば曹操も袁紹もね」
「袁術も含めてね。かつて大将軍の下にいた時から」
その時からだというのだ。
「私達はあの娘には嫌われていたわね」
「政敵。それも直接的な」
「だからこそね」
「司馬尉は司空で終わるつもりはないわ」
「三公の一人では」
司馬尉の野心をだ。二人はある程度見抜いていた。
「そうね。宰相、若しくは」
「摂政まで目指すわね」
「劉備の椅子までね」
「狙っているわ。だからこそね」
「私達に隙があれば」

「仕掛けてくるわ」
話す周瑜の目も光る。
「だからこそというのね」
「ええ、かなり危険な賭けだけれど」
それでもだというのだ。孫策は言うのだった。
「やってみる価値はあるわ」
「全てを確める為に」
「若し。石弓が来たら」
「その場合はね」
「間違いないと思っていいわね」
「ええ、その時はね」
どうするかというのだ。

# 第九十八話　孫策、賭けを考えるのことその九

「司馬尉は完全にね」
「私達が滅ぼす相手になるわね」
「そういうことね。ただ」
「ただ？」
「賭けは賭けだけれど」
それでもだとだ。周瑜は孫策に釘を刺したのである。
「それでも死なないようにね」
「そうね。それはね」
孫策もだ。そのことはわかっていた。確かな顔になりそのうえで周瑜の言葉に頷く。
「私もまだ死ぬ訳にはいかないし」
「貴女にはまだやるべきことはあるわ。それにね」
「それに？」
「貴女に何かあれば悲しむ者がいるわ」
熱い目で孫策を見ての言葉だった。
「だから。御願いね」
「わかってるわよ。私は絶対に死なないから」
ここでは優しい微笑みになって話す孫策だった。
「安心してね」
「絶対にね」
そんな話も為されていた。そしてであった。
司馬尉達はまた闇の中でだ。こんな話をしていた。
司馬尉は妹達にだ。こう話していた。
「随分と騒いでくれるわね」
「はい、たかが京観で」
「随分と言うものです」
妹達もこう姉に返す。

「あんなものはほんの遊戯だというのに」
「些細なことでしかないですが」
「しかしそれでもですね」
「あれだけ騒いでくれるとは」
「予想していたけれどこそばゆいわね」
その騒ぎも決して悪いものではないとだ。司馬尉は楽しげな笑みを浮かべて話した。
「悪くはないわ」
「左様ですか。それにですね」
「これからは」
「そうよ。京観どころではなく」
それ以上のことをだというのだ。
「するのだからね」
「そうですね。私達の王朝を築けば」
「その時は」
「京観なんて好きなだけ築けるわ」
その騒ぎの元もだというのだ。殺戮の象徴を。
「そうね。ただ京観を築いても面白くないから」
「今度は何を」
「何をされますか？」
「毒はどうかしら」
毒をだというのだ。
「誰かに仕込んで。苦しみ抜いて死ぬのを見るのは」
「それですね」
「今度はそれをされるというのですね」
「考えているわ」
実際にそうだというのだった。
「何かとね。では」
「はい、それでは」
「今は」

「兵を集めておいて」
司馬尉は話を変えてだ。こう妹達に告げた。
「人でなくてもいいわ」
「では于吉殿からあの石の兵達を」
「そして白装束の者達を」
「そういうのでもいいわ。それに」
「それにですね」
「さらに」
「北よ」
司馬尉の顔がさらに酷薄なものになった。
「北のあの者達もね」
「匈奴ですね」
「そして他の胡達も」
「集めるわ」
そうするというのだ。人ならざる者達や異民族の者達、少なくとも朝廷の高官にある者ならば決して集めないような兵達をというのだ。

# 第九十八話　孫策、賭けを考えるのことその十

「そうするわ」
「はい、わかりました」
「それでは」
「これまであちらの世界のからの人間が」
どうしていたのか。司馬尉はこのことも話した。
「匈奴やそうした連中に工作をしていたけれど」
「しかしその都度袁紹に潰されていましたね」
「山越にしろ孫策に」
「ええ。ただあれは遊びだったわ」
それに過ぎなかったというのだ。これまでのことは。
「叛乱を起こさせあわよくばだったけれど」
「袁紹が思いの他優れていましたし」
「孫策も自身の母親と同じだけのものが」
「あるわね。そして南蛮も劉備に従ったし」
それならばだというのだ。
「今漢王朝の周りにいる異民族は殆んど従っているわ」
そうなってしまったというのだ。
「けれどね」
「異民族はまだいる」
「そうですね」
「その彼等を使いましょう」
こう妹達に話したのだった。
そしてだ。さらにだった。
司馬尉は今度はだ。この場所の話をした。
「それで定軍山だけれど」
「そういえばあの山についても」
「劉備達は」

「気付いているわ」
そうだとだ。妹達にこのことも話したのだった。
「だからそれをね」
「逆手に取ってですね」
「そのうえで」
「ええ、そうするわ」
まさにそうだというのだ。
「それであの者達のうちの誰かを消せれば」
「御の字ですね」
「そうなれば」
「劉備やそういった者達をどうにかできなくても」
それでもだというのだ。人は彼女達だけではないのだ。
「あの娘達の重臣達の誰かでも」
「そうですね。例えば関羽や」
「夏侯姉妹ですね」
「そうした連中を消せればですね」
「いいですね」
「あの山に入った者は」
どうするか。それがだった。
「もてなしてあげましょう」
「ではその用意もですね」
「しておきましょう」
「そうしましょう。私達の王朝の時は近付いているわ」
この世のものとは違う。異形の王朝がだというのだ。
「晋がね」
「私達のその国」
「破壊と混沌の国が」
「妖狐の血が欲するその国がね」
司馬尉の目に何かが宿った。それは。
人の目にある光ではなかった。赤い禍々しい光だった。その光を

宿らせてだ。
彼女はだ。こんなことも言った。
「面白いわね。私達の祖先が九尾の狐の血を飲んだおかげでね」
「私達は今こうして」
「闇の中にいられるのですから」
「光にあるものは限られているわ」
司馬尉はこうも話した。
「けれど。闇の中にあるものは」
「無限です」
「そこにはあらゆるものがあります」
「そう。だからこそ闇の意志に従い」
そうしてだというのだ。
「この世を塗り替えるわよ」
「闇に」
「破壊と混沌に」
そうした話をしたうえでだ。三人は闇から戻った。その彼女達にだ。

# 第九十八話　孫策、賭けを考えるのことその十一

表の世界での従者達がだ。こう言ってきたのだった。
「儒者の方々がです」
「御主人様達に御会いしたいとのことです」
「そう。儒者が」
「左様です」
「是非にと」
合いたいと言っているというのだ。
「それでなのですが」
「どうされますか」
「会うわ」
司馬尉の返答は一言だった。
「あちらが会いたいというのならね」
「左様ですか。それでは」
「すぐにこちらに御呼びします」
「そうしますので」
「お茶を用意しておいて」
茶もだ。出せというのだった。
「それもね。わかったかしら」
「そしてそのお茶は」
「何にされますか？」
「黒茶がいいわね」
それがいいというのだ。所謂茶を淹れるとそこで紅茶の様に黒くなる茶だ。
その茶をだというのだ。
「それを御願いするわ」
「はい、では菓子もですね」
「それも」

「お菓子は」
何かというとだった。
「黒茶には月餅だから」
「わかりました。では月餅もです」
「出しますので」
こうしてだった。表の従者達は主の言葉に一礼してだ。彼女の前から去った。それからだった。
影からだ。彼等が出て来た。そのうえでだった。
司馬尉の前に出て控えだ。こう尋ねてきたのだ。
「では黒茶と月餅にですね」
「含ませておきますか」
「そうされますか」
「いえ、今はいいわ」
司馬尉はそれはいいとした。
そしてだ。『それ』についても言及したのだった。
「毒、若しくは操る薬ね」
「操る薬を考えていたのですが」
「それは今は」
「ええ、使わないわ」
余裕に満ちた笑みと共に述べる。
「それはね」
「左様ですか」
「今は使われない」
「そうなのですね」
「使わなくても充分よ」
また言う司馬尉だった。
「私の術も使わないわ」
「術もですか」
「それも」
「どうせ来るのは二流の儒者ばかり」

それならばだというのだ。薬も術も使う必要はないというのだ。
「そんな相手。話術で充分よ」
「わかりました。それでは」
「我々は今は」
「控えておきます」
「そうしなさい。ただ時が来れば」
その時はというのだ。そのことは確かに話した。
「わかっているわね」
「はい、その時は」
「やらせて頂きます」
「そうさせてもらいますので」
「その時も楽しみにしているわ」
残虐な楽しみを見出している笑みで。それを浮かべながらの言葉だった。
「是非ね」
「そうですね。その時が楽しみですね」
「我等の時が来る時」
「その時が」
こうした話をしてだった。司馬尉は己の口一つで儒者達の前に赴くのだった。絶対の自信と共に。

第九十八話　完

２０１１・７・２０

# 第九十九話　リムルル、狐を見るのことその一

第九十九話　リムルル、狐を見るのこと

儒者達はだ。司馬尉を前にしてだ。
黒茶に月餅を飲み食いしながら。笑顔で談笑していた。
「いや、全くですな」
「その通りです」
こうだ。何時の間にか司馬尉の言葉に完全に頷いていた。
その彼等に対してだ。司馬尉はこんなことも話した。
「思えば論語において顔回は」
「残念ですね。彼の夭折は」
「僅か三十二歳でしたから」
「孔子の嘆きもわかります」
「あれは」
「その通りですね」
知的な、学者の笑みを浮かべて言う司馬尉だった。
「人の運命はわかりませんが」
「しかし。教えを伝えるべき人物があの若さで死んでしまう」
「人はやはり長く生きなければならない」
「そう思います」
「孔子は七十まで生きました」
かなりの長命と言えた。だから古稀なのだ。
孔子はその古稀まで生きた。しかし顔回はというのだ。
「貧しい中で生き髪は白くなり」
「そして夭折した」
「そうなりましたね」
「思えばその夭折も」
どうかというのだ。その夭折自体がだ。
「彼自身が招いたことでしょう」

「顔回自身がですか」
「彼自身が招いたことなのですか」
「その夭折は」
「貧しい中で碌に飲み食いせずに学問に身を削る」
それが夭折の原因だというのだ。
「それならばです。夭折も当然です」
「そうですな。言われてみれば」
「身体を粗末にすれば早くして死ぬのも当然」
「その通りですね」
「ただ儒学を学ぶだけではいけないのです」
もっともなことをだ。今の司馬尉は言っていた。
「己の身も大事にせねばいけません」
「養生もですね」
「それも忘れてはならない」
「学問を修めんとする者はですか」
「学問だけに限りません」
その他のことにおいてもだというのだ。養生が必要なのは。
「何かを為そうとする者は必ずです」
「己の身を粗末にしてはならない」
「左様ですね」
「その通りです。そのうえで志を果たすべきなのです」
それが己の考えだとだ。司馬尉は儒者達に話した。
そしてそのうえでだ。こんなことも言うのだった。
「例えばこの茶も」
「茶もですか」
「これもまたなのですか」
「そうです。茶はただ飲むだけではありません」
そこに何があるかというのだ。
「茶は身体にもいいのです」
「そうですね。これは薬でもあります」

「茶はです」
「良薬でもありますね」
「その茶を飲みです」
そうしてだというのだ。
「今こうしてお話しようと思いまして」
「何と、そこまでお考えだったのですか」
「我等は難詰に来たというのに」
「それでもですか」
「ここまでの尽くしを用意して下さっていたのですか」
「そうだったのですね」
「心尽くしではないです」
あえて謙遜して。芝居をして言う司馬尉だった。
「家の者が気を利かせてくれたのです」
「いえいえ、それを出されたのはです」
「他ならぬ司馬尉殿です」
「それではです」
「これは司馬尉殿のお心尽くしです」
そう捉える彼等だった。そしてこれこそがだ。
司馬尉の狙いだった。だが彼女は今はあえてそれを言わずにだ。
儒者達に謙遜を見せてだった。その場にいるのだった。
儒者達は司馬尉の儒学への造詣の深さと心尽くしに感激しそのうえで彼女の屋敷を去った。それを見届けてからであった。
見送った屋敷の門から屋敷の中に戻りだ。妹達の言葉を聞くのだった。

# 第九十九話　リムルル、狐を見るのことその二

「御疲れ様です」
「何ということはありませんでしたね」
「軽いものでした」
実際にそうだと答える司馬尉だった。
「所詮は二流の儒者達ばかりです」
「書のことを知るだけで、ですね」
「それ以上のことは知らない」
「だからですね」
「どうということはなかったわ」
まさにそうだったというのだ。司馬尉にとってはだ。
「あの程度ではどうにもならないわ」
「そうですね。本当に」
「あの程度ではです」
「お姉様の相手にはなりません」
「烏合の衆です」
「私を口で破りたければ」
どうかというのだ。そうしたいのなら。
「それこそ孔子本人を連れて来ることね」
「それでようやくお姉様の相手になる」
「そうですね。まさに」
妹達も姉のその言葉を受けて笑う。
「そうでなければとても」
「お姉様の相手にはなりませんね」
「貴女達もあの程度の儒者達なら」
彼女達もだ。どうかというのだ。
「楽にあしらえるのではなくて？」
「はい、儒学ばかりしか見ていないならば」

「どうということはありません」
実際にそうだと答える二人だった。
「この世にあるのは儒学だけではありませんから」
「あれは所詮表だけの学問です」
「裏のものではありません」
「ですから」
彼女達も余裕の笑みで話していく。
「まあ。私達の相手になるのは」
「孟子か子路」
「その顔回か」
「それ位でなければ」
「顔回の段階で止まらないことね」
「はい、そうですね」
「ましてやです」
ここでだ。三人の話が変わった。
「儒学なぞ。所詮はです」
「何の役にも立ちません」
そうだというのだった。三人はここで儒学を否定したのだった。
「やはり。闇です」
「全てを支配するのは闇です」
「そう。儒教も道教も」
道教も入れた。この国の土着宗教もだった。
「光ね」
「紛れもなくです」
「光そのものです」
「ならばです。儒教も道教もまた」
「我等にとっては敵です」
そうしたものだとだ。彼女達は話すのだった。
「全ては破壊すべきもの」
「我等の国になれば」

「儒学者達は皆殺しよ」
そうするとだ。司馬尉は平然として述べた。
「晋が築かれた時にね」
「では埋めますか」
「そうされますか」
司馬師と司馬昭はここでこう提案した。
「始皇帝の様に」
「そうされますか」
「生き埋め。いいわね」
そしてだ。司馬尉もだ。
妹達のその提案にだ。乗ってこう言うのだった。

## 第九十九話　リムルル、狐を見るのことその三

「彼等にはそれが」
「はい、自分達に穴を掘らせです」
「そこから埋めて」
「地の底でもがき苦しませたうえで死なせる」
「あれもいいものです」
「生き埋めは一見あっさりしているけれど」
どうかというのだ。その殺し方は。
「死ぬまでに苦しみ抜く。いいものよ」
「そうです。ですから」
「彼等にはそうしましょう」
「始皇帝も面白いことをしたわ」
司馬尉はこの皇帝をそうした意味で肯定的に話していた。
「あの建築もまたね」
「民を苦しませる為には」
「あれもまたですね」
「この世を苦しみで満たす方法」
それについてもだ。司馬尉は楽しげに話すのだった。
「それは色々よ」
「そうですね。ああして働かせ税を搾り取るのもです」
「またいいやり方ですね」
「殺すのもいいですが」
「苦しませるのも」
またいいというのだった。そうした話をしているとだ。
そこにバイスとマチュアが来た。そしてだ。
司馬尉達にそれぞれ拍手をしてだ。それからだった。
「いいことを言うわね」
「流石ね」

こうだ。三人を褒めて話すのだった。
「ただ殺すだけではなく」
「殺し方も考えて」
「しかも苦しみまで与える」
「細かく考えているのね」
「当然ではないかしら」
司馬尉は目元と口元を微かに緩ませて返した。
「そうしたことを考えるのもまた」
「ええ、そうよ」
「実にいいわ」
そうだとだ。二人もよしというのだった。
「この世も人間達も下らないわ」
「世界にとって害にしかならないから」
「ならその害をね」
「どうして消していくか」
バイスもマチュアもだ。完全にオロチとして話をしていた。
「それをどうするかよ」
「問題はね」
「オロチの考えはいいわ」
司馬尉はその一族の考えをよしとした。
「私達の考えと同じよ」
「そうね。私達にしてもね」
「司馬家の存在は有り難いわ」
オロチにしてもだ。こう司馬尉達に話した。
「こちらの世界を中から知っている勢力があるとね」
「そして協力できるなら」
「それに越したことはないわ」
「本当にね」
つまりだ。世界を内と外からだった。
蝕みそして壊せる。だからいいというのだ。

「貴女達はそのまま楽しんで」
「そして蝕んでいって」
「私達は外から」
「この世界を侵していくから」
これがオロチ達のやることだった。
「残念なことに先の戦では失敗したけれど」
「それでもね」
それで諦めることはだ。絶対にないことだった。
「次は」
「あの山で」
「さて、どう仕掛けようかしら」
司馬尉は含んだ笑みで言った。
「あの山に誰を行かせて消えてもらおうかしら」
「それもですね」
「楽しみですね」
彼女の妹達も応えてだった。彼女達は闇の中で謀っていた。そしてそれはだ。闇から全てを覆おうとしていた。まさに闇であった。

# 第九十九話　リムルル、狐を見るのことその四

関羽はだ。張飛にだ。
呆れた様な顔でだ。こう言うのだった。
「全く。御主は」
「どうしたのだ？」
「昼飯を食べてもうか」
見れば張飛は歩きながら饅頭を食べている。二人は今洛陽の街を兵達を連れて見回っている。巡回もまた彼等の仕事なのだ。
その中でだ。関羽は言うのだった。その手には彼女の得物がある。
そしてそれは張飛も同じだ。
「食べるのか」
「お腹が空いたから仕方ないのだ」
「いや、それでもだ」
「それでもなのだ？」
「食べる量が多過ぎる」
張飛のその大食への言葉に他ならない。
「全く。朝も昼も晩も」
「食べないと動けないのだ」
「いや、それでも御主は度が過ぎている」
ずっと張飛と共にいるからこそだ。言うことだった。
「どれだけ食べれば気が済むのだ」
「いつも腹一杯なのだ」
「さもないと動けないというのだな」
「その通りなのだ」
「うん、そうよね」
ここで許緒も言う。彼女と馬超も共にいるのだ。
「やっぱり食べないと駄目だよね」
「そうだよ。腹一杯食わないと動けないだろ」

馬超も許緒のその言葉に頷く。
「愛紗だってそうじゃないのか？」
「それはその通りだが」
食べることについてはだ。関羽も否定しなかった。
「それでも御主達はまた極端だ」
「皆が少食なのよ」
「だよな」
「ほら、ジェイフンさんなんか僕並に食べるじゃない」
「チャンもな」
ここであちらの世界の人間の話も出た。
「ああしたので普通だと思うけれど」
「皆少食なんだよ」
「食べないと大きくなれないのだ」
今度はこんなことを言う張飛だった。
「だから鈴々もたっぷりと食べるのだ」
「僕もだよ」
許緒もそのことをにこりと笑って話す。
「大きくなる為にたっぷりと食べてるんだよ」
「大きくか」
「あたしだって昔は小さかったんだ」
馬超は自分のことを例えに出した。
「それが食ってな。ここまで大きくなったんだよ」
「そういえば翠さんってね」
「そうなのだ」
ここで自分達で話す許緒と張飛だった。
「背もあるし胸だってね」
「お尻の形もいいのだ」
「おい、尻もかよ」
「全体的にね。スタイル凄くいいよね」
「見たら余計に食べないといけないと思うのだ」

これが二人の結論だった。
「そしてやがては愛紗さんみたいな」
「凄いおっぱいになるのだ」
「胸？これは」
関羽はここで自分の胸を見た。見るだけで、だった。
身体が動きだ。それに合わせてだった。
その胸も揺れる。しかも派手にだ。
その胸を見てだ。張飛と許緒はさらに話した。
「やっぱりね。胸ってあれよね」
「そうなのだ。大きいと気付かないのだ」
二人の目はじとっとしたものになり関羽のその胸を横目で見るようになっていた。

# 第九十九話　リムルル、狐を見るのことその五

「自分では気付かないよね」
「大きいことの凄さがなのだ」
「翠さんや星さん位ならまだいいかなって思えるけれど」
「愛紗や桃香お姉ちゃん位になるとそれこそなのだ」
「そう思うとさ。黄忠さんとか厳顔さんって」
「黄蓋もなのだ。まさに持つ者なのだ」
話は何時しかこうしたものになってきていた。
「僕なんか幾ら食べてもこんなのなのに」
「何を食べたらあそこまでなるのだ」
「何の話をしているのだ？」
関羽は目をしばたかせてその二人に応えた。
「今は一体」
「別に」
「何もないのだ」
その問いにはこう返す二人だった。
「まあとにかくよ」
「食べていて悪いことは何もないのだ」
「それはそうだがな」
結局それで折れる関羽だった。そのうえで巡回を続ける。街は賑わいしかも平和だった。都も活気と治安を取り戻してきていた。
一行はやがて大路に出た。そこから宮城にも迎える。都において最も大事な路である。そこにおいても巡回を行おうというのだ。
その中でだった。馬超が前を見て言った。
「うっ、あの連中かよ」
「ああ、あの車は」
「司馬家のものなのだ」
許緒も張飛も前から大路を進む馬車を見て言った。三人の顔は自

然に顰められた。
　あちらの世界の言葉で西洋風に数等の馬に惹かれ洒落た箱型になっているその馬車こそ司馬家のものだ。その馬車を見てだった。
「京観なんて作る奴等だからな」
「幾ら何でもやり過ぎだよね」
「鈴々はあの連中は嫌いなのだ」
　やはりだ。あの山賊達のことから話す彼等だった。
「何か引き返したくなったけれどな」
「それでも。これが今の仕事だからね」
「仕方ないのだ」
　彼女達は嫌々ながら先に進むことにした。そこにだ。
　四人のところにだ。ふとリムルルが来たのだった。そのうえでだった。
「ああ、巡回してるんだ」
「うむ、そうだ」
　その通りだとだ。関羽は彼女に答えた。
「その通りだが」
「そう。だからここにいるのね」
「そうだが。しかし」
「しかしって？」
「あまりいい顔してないね」
　関羽達四人の顔を見ての言葉だった。
「やっぱりそれって」
「そうだ。あの馬車だ」
　関羽は一行から見て対抗線に来るその馬車を見てリムルルに話した。
「あの馬車こそは」
「あれね。司馬家のよね」
「そうだ。こう言うのは何だが」
　関羽は張飛達よりは感情を抑えていた。しかしそれでも言うのだ

った。
「司馬家の姉妹は私も」
「好きになれないのね」
「どうしてもだ」
まさにそうだというのだ。
「個人的な感情だが」
「まあ私もだけれどね」
リムルルはここで顔を曇らせた。
「何かいけ好かない感じよね」
「いけ好かないんじゃなくてな」
「嫌な感じがするよね」
「その通りなのだ」
馬超に許緒、張飛がまた言う。
「どす黒いっていうか？そんなのだよな」
「そうそう。何処か不気味なのよ」
「一緒にいたくないのだ」
「どす黒い？」
リムルルが反応を見せたのはそこだった。

# 第九十九話　リムルル、狐を見るのことその六

「どす黒いっていうの？」
「ああ、そんな感じしないか？」
「リムルルはどうなの？そこは」
「そう感じるのだ？」
「そうね。ちょっと待ってね」
リムルルはここで司馬家の馬車を見た。その馬車をだ。
そしてだ。まずは関羽に確認を取った。
「あの馬車には三姉妹全員いるのかな」
「いや、それはない」
関羽はそれは否定した。
「司馬家は権門だ。姉妹一人一人にだ」
「馬車があるのね」
「それが普通だ。そしてだ」
「そして？」
「あの護衛の兵の多さから見て」
関羽が次に見たのはこのことだった。兵の数だ。
「司馬尉殿だな」
「そういえば周りの兵隊さんの数多いよね」
「それを見るとだ」
司馬尉だというのだ。三姉妹の長女だ。
「やはりそうだと思う」
「司馬尉さん。その噂の」
「そうだ。その司馬尉殿だ」
「成程ね。あの馬車の中にいるのが」
「どうだよ。それで」
「どす黒いものを感じるのだ？リムルルも」
馬超と張飛はこうリムルルに尋ねた。

「そこんところどうだ？」
「やっぱり感じるのだ？」
リムルルのそのアイヌの巫女としての力を頭に入れての問いだった。
「オロチとかあの連中みたいなな」
「そんなのなのだ？」
「あれっ、違うよ」
ここでだ。リムルルはこう言ったのだった。
「妖しい雰囲気は同じだけれど」
「しかし違うのか」
「うん、あれは」
「あれは？」
関羽もだ。リムルルに問うた。半ば無意識のうちに。
「黒いものは感じないのか」
「見えるのは」
「何だ？」
「狐？」
それだというのだ。
「何か狐が見えるけれど」
「狐って！？」
「それも只の狐じゃないみたい」
こうだ。許緒にも話した。
「尻尾が違うわ」
「尻尾がなの」
「一、二、三で」
リムルルはその馬車に見える狐の尻尾を指差しながら数えた。
「全部で九つあるわね」
「九か」
「うん、全部で九つよ」
そうだとだ。今度は関羽に話すリムルルだった。

「九つあるわ」
「九尾の狐か」
関羽はリムルルの話を聞いてすぐにそれを話に出した。
「それだな」
「確かあの狐って」
「妖怪だ」
関羽はまさにそれだと話した。
「世を乱す妖怪だ」
「そういえば似てるな」
「そうよね」
馬超と許緒もだ。その狐と聞いてだ。
顔を顰めさせてだ。それで話すのだった。
「あの連中あの狐にな」
「同じ様な感じがするよね」
「どす黒いっていうより闇？」
今度はこんなことも話すリムルルだった。
「闇でしかも」
「あの狐か」
「何なのかしら、これって」
「司馬尉殿が狐ということだろう」
こう考える関羽だった。

# 第九十九話　リムルル、狐を見るのことその七

「それでだ」
「それでなのかな」
「そうだ。しかし九尾の狐か」
関羽はここで難しい顔になって言った。
「厄介だな」
「厄介なのね」
「さっき言ったが九尾の狐は国を乱す妖怪だ」
「妖怪の中でも特になのね」
「邪神と言ってもいい」
そこまでだと話す関羽だった。
「そうか。司馬尉殿はそこまで危険なのか」
「ううん、妖しい存在なのは確かね」
「妖しいというものではないな」
関羽はそこまでだと話した。
「やはり。放ってはおけぬか」
「しかもな」
「また来たよ」
馬超と許緒はまた顔を顰めさせることになった。見ればだ。
同じ馬車がもう二つ来た。それは。
「妹のだよな」
「そうだね。丁度二つだし」
そのだ。司馬師と司馬昭のものだというのだ。
「あの二人も一緒に来るなんてな」
「三姉妹揃い踏みだね」
「じゃあ今度はあれか？」
「尻尾が七本とか五本になるの？」
「あれっ、違うみたい」

リムルルは二人の馬車も見た。そして言うことは。
「琵琶に。何あれ」
「何を見たのだ？」
「ううんとね、頭が九つある鳥だけれど」
それを見たというのだ。
「少なくとも狐じゃないわね」
「琵琶に。またおかしな鳥だな」
関羽もその話には首を捻った。
「何だそれが」
「私に聞かれても」
知らないとだ。リムルルは困った顔で答える。
「けれどあれもやっぱり」
「妖怪だろうな」
関羽にもそれはわかった。
「しかしあの姉妹は妖怪ではない」
「うん、そういうのじゃないのははっきりわかるわ」
リムルルはそれも見て話した。
「人間は人間よ」
「そうだな。それはな」
「妖怪ってね。本当に独特の気配があるから」
そしてだ。リムルルが話す存在は。
「人間なのは確かよ」
「人間でなのか」
「狐を背負っているのだ？」
「しかも九尾の狐なんてよ」
「とんでもないの背負ってることになるけれど」
関羽達にしてもリムルルの今の言葉はわかりかねていた。
それでだ。さらにだった。
関羽はだ。首を捻って述べた。
「よくわからないが」

「それでもなのだ？」
「うむ。少なくとも司馬家の姉妹はよからぬ者達だな」
それはわかったというのだ。
「それは間違いないな」
「うん、取り憑かれてる感じでもないし」
リムルルは再び指摘して話す。
「何か心がね」
「心が！？」
「司馬尉達のなのだ！？」
「そう。あの司馬尉さん達の心が」
どうかとだ。関羽と張飛に応えて話す。
「狐とか琵琶とか鳥になってる感じ」
「じゃああれか？」
「心が化け物だってこと？」
馬超と許緒はリムルルの話からこう考えた。

# 第九十九話　リムルル、狐を見るのことその八

「さらにわからない話になってきたな」
「そうよね」
「私にしてもね」
そのだ。見たリムルルにしてもだった。
「こんなおかしなことはじめてだから」
「一度朱里達に話した方がいいのではないか？」
関羽が選んだのはこの選択だった。
「あの者達なら何かわかるかも知れない」
「そうね。あの娘達ならね」
リムルルもだ。関羽のその言葉に頷いた。
そのうえでだ。巡回の後でだ。
実際に孔明達に話した。しかしそれでもだった。
孔明も鳳統も徐庶もだった。リムルルの話を聞いてだ。場所は劉備の摂政府の一室だ。そこで卓に座り茶を飲みながら話すのだった。
それぞれきょとんとなってだ。こう言うだけだった。
「ええと、狐なのはわかったけれど」
「心が狐というのは」
「御免なさい、わからないわ」
三人共だ。こう答えたのだった。
「そんなことって。はじめて聞いたし」
「人が姿を変えているのはあるけれど」
「人間なのに心が狐や琵琶というのは」
それはだ。本当に全くなのだった。
「人間なのは事実よ」
「ええ、それはわかったわ」
孔明はリムルルの言葉に頷く。
そのうえで茶を一口飲み。また話した。

「けれど。心は」
「生物学的には人間ね」
キングがふらりと来て話した。
「そうなのね」
「ええ、それは本当にね」
リムルルはそのキングにも話した。
「人間なんだけれど」
「よく人面獣心っていうけれど」
キングがここで言うことはこのことだった。
「それになるかしら」
「獣、そういえば」
「そうなりますね」
「リムルルちゃんのお話を聞くと」
軍師三人もキングの話で気付いたのだった。
そうしてだ。三人で話すのだった。
「じゃあ。司馬尉さんの心は妖怪のもの？」
「そうなる？」
「そんなことがあるなんていうのもはじめてだけれど」
少なくともこれまで、気付いている限りでは完全な人間だけを相手にしている彼女達ではわからないことだった。どうしてもだ。
「妖怪なら」
「妖怪の心だけれど」
「そんな。人間がなんて」
「少なくとも怪しいのはわかるけれど」
「それでもね」
「何が何なのか」
わからないと話していくのだった。天下随一の軍師達にもわからないことだった。
そしてだ。このことは。
曹操や袁紹、孫策の軍師達も別の世界から来た者達もだ。全くだ

った。
わからなかった。本当に誰一人としてだ。
誰からも明確な返答を得られずだ。リムルルは。
狐、あの狐とは別の普通の狐に抓まれた顔でだ。こう姉のナコルルに話した。
今も茶を飲んでいる。そうしながらの話だった。
「邪神とかそういうのは相手をしてきたのに」
「それとはまた違う感じなのね」
「うん。とにかくわからないわ」
リムルルは今もこう言ってぼやくばかりだった。
「普通。そんな妖怪とかって」
「そんな簡単なのじゃなくて」
「もっと別の」
「何ていうのかしら」
ナコルルにさらに話していく。
「心が決定的に違っていたのよ」
「アンブロジアや壊帝とも全く違っていて」
「そう、全然異質よ」
「みたいね。ただね」
「ただ？」
「司馬尉さんも間違いなく」
どうかというのだ。その司馬尉は。
「この世界によからぬことをしようとしているわね」
「それは確実なのね」
「ええ。あの狐は私も聞いたことがあるし」
「誰から聞いたの？」
「十兵衛さんからよ」
聞いてのはだ。彼からだった。
「あの人が教えてくれたの」
「ああ、あの人が」

「あと狂死郎さんからも」
彼からも教えてもらったというのだ。
「歌舞伎の題目にもあるんだって」
「ふうん、そうなの」
「その舞台は観たことがないけれど」
それでも知っているというのだ。
「世を乱す存在だから」
「かなり悪質な妖怪というか邪神よね」
「そうした意味ではアンブロジアと同じね」
邪神という意味においてはだった。
「そうなるわね」
「ううん、厄介なのがまた出て来たわね」
「そうね。本当にこの世界は」
どうかというのだ。この世界は。
「よからぬ存在が集ってるわね」
「そうね。それは確かね」
こうした話を姉妹でもするのだった。謎はさらに深まっていたのだった。
そしてその謎はだ。彼等の知らないところで一つになっていた。
そのうえで全てを覆い尽くそうとしていた。

第九十九話　完

２０１１・７・２２

# 第百話　夏侯淵、定軍山に向かうのことその一

第百話　夏侯淵、定軍山に向かうのこと

夏侯淵がだ。曹操に命じられていた。
「それではね」
「はい、あの山にですね」
「一軍を率いて向かって」
曹操はこう彼女に告げた。
「わかったわね」
「わかりました。それでは」
夏侯淵は畏まって曹操の言葉に応える。
「すぐに」
「あの山は華陀も言っていたし」
「そうですね。ですから」
「一度見てきて」
こう言うのである。
「流琉も連れてね」
「あの娘もですか」
「後は」
曹操は考える顔でさらに言う。
「あちらの世界から何人かね」
「では秦兄弟にです」
「あの二人ね」
「はい、彼等はどうでしょうか」
「確かに性格には問題があるけれど」
曹操も秦兄弟の性格についてはよく知っていた。
「口が悪いしね」
「それが問題ではありますが」

「力は確かね。なら問題ないわ」
「はい、それでは」
「後何人か連れて行きなさい」
「では他にはレオナ殿やラルフ殿、クラーク殿も」
「そうね。彼等もいいわね」
曹操は彼等についてもいいとした。
そしてだ。あらためてだ。夏侯淵に言った。
「あと。忍者ね」
「忍者をですか」
「そうよ。忍者を一人連れて行きなさい」
「偵察の為ですか」
「いえ、違うわ」
「違うのですか？」
「その時になればわかるわ。そうなっては欲しくないけれど」
こうは言ってもだった。曹操はある程確信している顔だった。
そしてだ。こう言ったのだった。
「けれど何かあればね」
「その忍者が役に立ちますか」
「忍者は何かと役に立つしね」
「ではガルフォード殿でしょうか」
夏侯淵が名前を挙げたのは彼だった。
「犬達もいますし」
「その犬達の力も使えるわね」
「はい、ですから」
「いいと思うわ。ガルフォードもあれで口が固いし」
「口とは？」
「そうそう、言い忘れていたわ」
ここでだ。曹操はだ。
言葉を一旦切ってだ。それから夏侯淵に話してきた。
「何処に向かうかは内密よ」

「指揮官達以外にはですか」
「そうよ。その秦兄弟と軍人組」
レオナ達のことである。
「それとガルフォード以外にはね」
「そして流琉以外には」
「私もこのことは劉備と麗羽、美羽、孫策」
そうした今国を動かしている主だった面々には話すというのだ。
そしてだ。曹操は顔を顰めさせだ。この名前も出した。
「あと。司馬尉にね」
「あの方にもですか」
「仮にも三公よ。話さない訳にはいかないわ」
こう言ったのだった。

# 第百話　夏侯淵、定軍山に向かうのことその二

「だからよ」
「司馬尉殿ですか」
「まあわかるわ。後はね」
「後は？」
「麗羽達には兵を動かさないように言っておくわ」
「それは絶対にですね」
「つまり今兵を動かすのは貴女の率いる兵達だけよ」
曹操はこう話していく。そしてだ。
さらにだ。こんなことも言った。
「確かに定軍山は謎に包まれているけれど」
「はい、どういった場所か知られていません」
「けれどその周辺のことはわかっているわ」
「そうですね。あの辺りも益州になります」
益州ならばだ。どうかとだ。夏侯淵も話す。
「益州といえば」
「劉備よ。あの娘は今益州の政を進めているけれど」
「それであの辺りもわかってきたのですね」
「そうよ。地理や人口もね」
「特に人口ですね」
「あの辺りは人が多いけれど治安はかなりいいから」
そこからだ。得られる結論は。
「賊は少ないわ」
「山賊もですね」
「そうよ。少ないわ」
また言ったのだった。
「少ない筈なのよ」
「そこに一軍を向ければ」

「山賊なら簡単に征伐できるわ」
曹操は言い切った。
「ましてや貴女にはそれなり以上の軍を率いてもらうし」
「数においてですか」
「そうするわ。山賊どころか下手な叛乱を鎮圧できるだけの軍をね」
「では」
こう言ったのだった。
「その軍に対することができる相手は」
「定軍山にはいない筈。ここまで言えばわかるわね」
「はい、私はあえてですね」
「頼めるかしら。危険だけれど」
「喜んで」
夏侯淵の返事はすぐだった。
「そうさせてもらいます」
「いいわね。何かあればね」
曹操は夏侯淵を強い顔で見てだ。こう言ったのだった。
「すぐに連絡しなさい」
「すぐにですね」
「絶対に死なないことよ」
曹操は本心も出した。夏侯淵に対して。
「必ずね」
「わかりました。必ず生き残ります」
「そうしなさい。絶対によ」
こう念を押してだ。そうしてだった。
夏侯淵は密かに出陣の用意に入った。そして密かにだ。
秦兄弟にレオナ達、そしてガルフォードに声をかけた。そうして言うのだった。
「いいだろうか。場所は定軍山だ」
「ああ、わかった」
「そこですね」

まずは秦兄弟が応える。まずは二人が頷く。
「それも内密に進むか」
「そうしてですね」
「そうだ。内密にだ」
また話す夏侯淵だった。
「いいな。兵達にも詳しい場所は伏せておいてくれ」
「何か考えてるな」
「それもかなりのことだな」
ラルフとクラークが話す。
「何か面白そうだな」
「じゃあ乗るか」
「頼めるか」
夏侯淵はあらためて彼等に話した。

# 第百話　夏侯淵、定軍山に向かうのことその三

「是非共だ」
「ただ。気になるのは」
レオナは鋭い目になり夏侯淵に尋ねた。
「ここまで秘密主義に徹するのは」
「そうだよな。そこがわからないな」
「あからさまに怪しいな」
ラルフとクラークもだ。そのことについて話す。
「曹操さんも限られた人間にだけ話してるっていうしな」
「俺達にも秘密主義でいてくれってな」
「まああの山は前から噂があるけれどな」
「それもあるんだろうがな」
「華琳様は我々をあえて囮にしてだ」
夏侯淵もだ。彼等に話した。
今は密室の中だ。その中で話をしている。灯りは一本の蝋燭が中央にある。その灯りだけを頼りにしてだ。彼等は話しているのだ。
「あることを見出そうとしておられる」
「司馬尉さんですね」
ウィップが言った。彼女はすぐに察した。
「あの方をですね」
「わかるか。やはり」
「はい。あの方には謎と不審な行動が多いですから」
「そうだ。それを見極める為にだ」
その為だとだ。夏侯淵も話す。
「我等はあえて定軍山に向かうのだ」
「そうか。そこで悪党が待っていて」
「私達は戦うのですね」
「間違いなくそうなる」

夏侯淵は秦兄弟に答えた。
「それは覚悟してくれ」
「わかりました」
典韋も夏侯淵のその言葉に頷く、
「それならその時は」
「思う存分暴れてくれ。そしてガルフォード殿」
「ああ、俺だな」
「貴殿はいざという時にすぐに都に向かってくれ」
そうしてくれというのである。
「いいな。すぐにだ」
「そうしてだよな」
「都に伝えて欲しい」
「ああ、それは任せてくれ」
「貴殿ならあの山から都まですぐに行けるな」
「まあな。俺の脚ならな」
「忍の力頼らせてもらう」
それがだ。大きかった。
「むしろ貴殿にかかっているのだ」
「全員の命がだな」
「そうだ。だからこそだ」
ガルフォードに言うというのである。
「頼む」
「わかったぜ。パピー達とな」
「では話はこれで終わりだ」
夏侯淵は話が一段落したところでこう言った、
「解散しよう」
「それでですね」
「そうだ。我々は今から出陣まで無関係だ」
そういうことにすると。典韋にも話した。
「それでいいな」

「わかりました」
こうした話をだ。密室の中でしたのだった。
そのうえでだ。彼等は今は密かに出陣の用意をしていた。
そしてだ。曹操もだ。
劉備達にだ。今回の出陣のことを話したのだった。
「あの山には昔から賊がいるから」
「ふむ。そうじゃな」
ここでだ。袁術が納得した顔で頷く。言葉の中に含んでいることに対しても。
「あの山は前から噂があったしのう」
「益州も劉備が治めるようになったし」
「だからですね」
「それでいいかしら」
「はい、是非そうして下さい」
山賊の討伐ならだ。劉備もいいというのだ。ただし彼女も曹操の言葉の中にあるものは理解してそのうえで話をしているのだ。

# 第百話　夏侯淵、定軍山に向かうのことその四

そしてだ。袁紹と孫策もだった。
全てを納得してだ。こう答えたのだった。
「そうですわね。賊を放置する訳にはいきませんわ」
「だから今回は妥当ね」
二人も言うのだった。
「是非共。秋蘭さんには果たしてもらいたいですわ」
「必ずね」
「そうね。とりあえず私達はこれで決まりね」
曹操はあえて『私達』と言ってだ。
そのうえでだ。司馬尉を見てだ。問うたのだった。
「貴女はそれでいいかしら」
「私の考えなのね」
「そうよ。それでいいかしら」
「ええ、いいわ」
微笑んで言う司馬尉だった。
「私としても異存はないわ」
「今回申し訳ないけれど貴女の出番はないわ」
曹操は司馬尉への嫌味を言うことも忘れない。
「都で政務に専念していてね」
「わかっているわ」
司馬尉もだ。嫌味に受けて立つ。二人共顔は笑っている。
そのうえでだ。こう言ったのだった。
「私の仕事をね」
「擁州に言っていましたし」
袁紹もだ。曹操に加勢してきた。
「御仕事は多いですわね」
「多いわ。けれどね」

二対一でもだ。司馬慰は受けて立つのだった。
「私には何ということはないわ」
「ほう、面白いことを言うのう」
袁術も参戦してきた。
「では御主はその山の様な仕事をあっという間に終わらせられるのか」
「その通りよ」
平然と答える司馬尉だった。袁術に対しても。
「そうさせてもらうわ」
「ではどれだけで済ませられるのかしら」
孫策は直接的ではないが曹操達の援護に回っている。
「一体どれだけで」
「今日中で終わるわ」
司馬尉は余裕に満ちた顔で言い切った。
「あの程度の仕事ならね」
「言うわね。それじゃあ」
「それも見せてもらいますわ」
曹操と袁紹が同時に攻撃を仕掛ける。
「貴女の仕事をね」
「楽しみにしていますわ」
「そうじゃな。では若しできなければじゃ」
袁術は意地悪い笑みを浮かべて司馬尉に述べた。
「どうしてくれるのじゃ」
「ええ。その時は三公である司空を辞めて」
それが司馬尉の今の官職だ。司徒は袁術で太尉は孫策だ。袁家は遂に五代に渡って三公を出したということになったのである。
「故郷に隠棲するわ」
「言ったわね。ではその時はね」
「そうさせてもらうわ。何ならね」
さらにだとだ。司馬尉は笑いながら話す。

「倍の仕事をしてみせるけれど」
「そうね。丁度司空の仕事が溜まってるし」
「そうしてもらいますわ」
曹操と袁紹が言いだ。こうしてだった。
司馬尉にだ。倍の仕事が与えられた。そうなってだ。
袁術は会議の後己の屋敷に戻り自分の仕事をしながらだ。大笑いで言うのだった。
「愉快じゃ。これであの胸糞悪い女が消えるぞ」
「ああ、司馬尉殿」
「あの方ですね」
傍に控えている張勲と紀霊が応える。
「どうも山の様なお仕事を今日中にできないと」
「官を辞されて故郷に入られるとか」
「確かに言ったのじゃ。さすればじゃ」
どうなるかと。袁術は上機嫌のまま話す。
「あの女が完全にいなくなるわ」
「そうなりますか」
「これで」
「あ奴の今日の仕事の量を見た」
実際にだ。それを確めたというのだ。

# 第百話　夏侯淵、定軍山に向かうのことその五

「うむ、わらわの今している仕事の十倍はあるぞ」
「えっ、これのですか」
「銃倍もあるのですか」
「そうじゃ。十倍はあったぞ」
それだけの仕事の量だというのだ。
「あんな仕事一日で終わらん。あ奴はこれで終わりじゃ」
「そうですね。そこまでの量だと」
「幾ら何でも」
二人もだ。それだけの仕事の量になるとだった。
流石にだ。無理だというのだった。
「一日では不可能でしょう」
「どう考えても」
「そうじゃ。だからこれで終わりじゃ」
袁術はこのことを確信していた。
「後の司空は誰がいいかのう」
「そうですね。まあ董白さんでしょうか」
「董卓さんはおられないことになっていますし」
「そうじゃな。そうしたところじゃな」
こうした話をしながらだった。袁術は司馬尉の失脚を確信していた。
しかしだ。次の日である。彼女が驚愕する報が来た。
「何っ、それはまことか！？」
「はい、昨日のうちにです」
「御一人で」
「あれだけの仕事を終わらせたと申すか？」
袁術は驚きを隠せない顔で楽就と揚奉に問い返した。
「あの女一人で」

「はい、妹君達は別の仕事をしておられたので」
「御一人なのは間違いありません」
「御一人で昨日一日で、です」
「終わらせました」
「信じられん」
袁術もだ。唖然として言う。
「あれだけの仕事をするとは」
「あの、司馬尉殿は」
「果たして人間でしょうか」
楽就も揚奉もだ。唖然となっている。
そしてその唖然となった顔でだ。袁術に言うのである。
「美羽様のお話ですととても一日でできるものではありません」
「それも一人でとなると」
「そうじゃ。絶対に無理じゃ」
袁術もそれは断言する。
「どういう奴なのじゃ。あ奴は」
「只でさえ首が背中にまで曲がりますし」
「まるで狼の如く」
「あれも怪しいことじゃ」
袁術は司馬尉の首のことも話した。
「ううむ、司馬尉という者は」
「はい、まことに怪しいです」
「そうとしか思えません」
「恐ろしい奴じゃ」
袁術も歯噛みして言う。
「若しあの娘が本格的に敵となるとじゃ」
「厄介ですね」
「その時は」
そうした話をしてだった。袁術達は司馬尉に恐ろしいものを感じたのだった。

その司馬尉はだ。平然としてだった。
妹達にだ。こう話していた。
「あの程度の仕事はね」
「お姉様にとってはですね」
「どうということはありませんね」
「そうよ。私を誰だと思っているのかしら」
己の机に座りだ。その前に立っている妹達に話すのである。
「司馬尉仲達よ。次の王朝の主よ」
「その姉様ならばですね」
「あの程度のことは」
「ええ、造作もないわ」
またこう言う司馬尉だった。
「曹操や袁紹なぞ問題ではないわ」
「全くですね」
「あの娘達にしてもですね」
「あの娘達は私を敵視しているけれど」
それでもだ。司馬尉から見ればだというのだ。

# 第百話　夏侯淵、定軍山に向かうのことその六

「私にとっては彼女達はね」
「敵ではありませんね」
「全くですね」
「そうよ。何ということはないわ」
また言う司馬尉だった。
「所詮はね」
「では彼女達もですね」
「やがては」
「ええ。私が晋を築いた時に」
彼女の王朝の名は決まっていた。既にだ。
「あの娘達は真っ先に生贄になるわ」
「晋の。血の帳の中にですね」
「最初に消えますね」
「そうなるわ」
こう言うのである。
「あちらの世界の者達もね」
「どうやらあの者達ですが」
「私達を倒す為にですね」
「この世界に送り込まれた様です」
「その様です」
「そうね。どうやらね」
それはだ。司馬尉もわかっていた。
そうしてだ。こうも言うのだった。
「けれどそれでもね」
「所詮はですね」
「止められはしないわ」
とてもだ。それはできないというのだ。

「絶対にね」
「そうですね。私達と同志達」
「オロチの者達もいますし」
「それに于吉殿達も」
「求めることは同じよ」
司馬尉は言った。心でつながっているのではなくだ。欲するものが同じだからだ。彼等は今は結託して共に動いているというのである。
そのことをわかってだ。司馬師と司馬昭も話す。
「では。その同志達と共に」
「今はですね」
「定軍山で、ですね」
「あの娘達を」
「消しておきましょう」
「定軍山は我等の拠点の一つ」
それも言う司馬尉だった。
「どちらにしろ調べさせる訳にはいかないわ」
「はい、あの山は最高の霊山です」
「私達がこの世を滅ぼす力を蓄えるに最適です」
「ですから多くの結界を設けています」
「力を蓄える為の結界を」
「その結界を壊されては困るわ」
だからだというのだ。
「だからどちらにしてもね」
「はい、そこに入る者達はです」
「必ず消さねばなりません」
妹達も姉に話す。
「ではすぐにです」
「あの山に向かい」
「そうするわ。ただ」

ここでだ。司馬尉はこうも言った。
「私達はあの山には行けないわ」
「といいますと」
「何かありますか」
「ええ。都でやることがあるわ」
それでだというのだ。彼女達は都から動けないというのだ。
「都で。劉備達をね」
「失脚させる為にですね」
「謀を仕掛けますか」
「そうするわ。あの娘達に朝廷にいてもらっては」
その整った夜の世界の美貌を歪めさせて。司馬尉は言った。
「邪魔よ。どちらにしてもね」
「そうですね。ではどうして失脚させますか」
「あの娘達を」
「宦官を使うのもいいわね」
司馬尉の顔にだ。邪なものが宿った。

# 第百話　夏侯淵、定軍山に向かうのことその七

そしてその邪なものを顔に徐々に出しながらだ。妹達に話す。
「汚職をでっちあげたり」
「若しくは謀反を企てていた」
「証拠は捏造して」
「そうしてですね」
「陥れますか」
「その為にもね」
どうするかというのだ。
「今は都を離れる訳にはいかないわ」
「では。山のことは彼等に任せて」
「私達はですね」
都に残るのだった。そうしてだった。
実際に都にだ。不穏な噂が流れだしていた。
その噂を聞いてだ。関羽が顔を曇らせて孔明に言った。
「私達が謀反を企てているとだ」
「はい、近頃そうした話が出ていますね」
「姉上が皇帝になられる」
こうした話だというのだ。
「そうした噂だな」
「桃香様は皇族ですし」
かなりの傍流でもだ。劉氏は劉氏なのだ。
「それにです」
「そうだな。しかもだ」
「摂政、王の位も頂いています」
「徐州に益州の牧でもある」
「今や我が国随一の権限を持たれています」
功によりそうなったのだ。黄巾の乱と董卓の騒ぎを主に収めたこ

とと皇族であることが評価されてだ。彼女は瞬く間にそこまで至ったのだ。

だが、だ。それだからこそというのだ。

「その桃香様が謀反を企てるとなると」

「少なくとも野心を抱いてもか」

「不思議ではありません」

そう判断されても仕方ない、それが今の劉備だった。

孔明はこのことを見てだ。関羽に話すのだった。

「だからです」

「噂が出てもおかしくはないな」

「こうした話は歴史において常でした」

孔明は目を曇らせて述べた。

「皇族、若しくは王族同士の位の奪い合いは」

「そうだな。史記にも多々あるな」

「臣下が王位を狙うのは簒奪です」

聞こえが悪い。孔明は言葉にそれを含ませていた。

「それは誰もが躊躇しますが」

「同じ血筋ならばだな」

「その躊躇が大幅に消えます」

「そうだな。だからこそ皇族、王族同士での殺し合いがある」

「秦を御覧下さい」

孔明はここで漢の前にだ。この国を統一した王朝の話をした。

「始皇帝が亡くなるとすぐにでした」

「次の皇帝は兄弟、その夫や妻達までだったな」

「全て殺しました」

これこそまさに皇族同士の殺し合いだった。

「そうしたことが実際にありましたし」

「思えばあの秦の二代皇帝は」

関羽が言うのは胡亥のことだ。始皇帝の末子であった。尚兄弟姉妹の中で一番出来が悪いとも言われ宦官の傀儡にもなっている。

「本来は皇帝になる娘ではなかったな」
「はい、始皇帝は長女を皇帝に選んでいました」
「しかし宦官がそれを隠してだったな」
「彼女をたぶらかし皇帝にさせました」
全ては史記に書かれている通りだ。
「そしてこれはその時は許されました」
「皇族同士の間のことならば」
「人は批判しにくいものです」
「ましてや。今の姉上のお立場なら」
「何時でも皇帝になれます」
「では。やはり」
「はい、この噂は多くの者が信じるでしょう」
孔明は顔を曇らせて関羽に話す。
「非常に危険です」
「ではどうするべきだ」
関羽は顔を曇らせて孔明に問うた。

# 第百話　夏侯淵、定軍山に向かうのことその八

「ここは」
「はい、すぐに手を打ちましょう」
孔明もだ。今は様子見を選ばなかった。
「若しこの噂が広まればです」
「噂を信じた者が姉上を謀反人とみなし」
「帝に誤った進言をするか」
若しくはだった。
「謀反人を始末しようとしてだな」
「暗殺に至ります。そうでなくとも」
「他にもあるのか」
「桃香様を謀反人とみなし失脚させてです」
「その後釜に座るか」
「そうしたことを考える者も出るでしょう」
「司馬尉か」
関羽はすぐに言った。
「あの女がか」
「おそらく。噂を流したのも」
孔明は察した。このことも。
「あの人だと思います」
「くっ、京観を築いただけでは飽き足らずか」
「あの人は危険です」
孔明もだ。これまで以上にこのことを認識した。
「権勢欲以上のものがあります」
「姉上を追い落とし摂政になれば」
「私達、そして曹操さんや袁紹さん達もです」
彼女達もだというのだ。
「共に失脚させられます」

「そうだな。共に政を動かしている我等を」
「これは何とかしなければ」
「危険極まるな」
「すぐに雛里ちゃん達にお話します」
軍師達でだ。これからのことを決めるというのだ。
「そうしますので」
「頼むぞ。さもなければ姉上がだ」
「はい、わかっています」
こうした話をしてだった。孔明は。
すぐに他の軍師達に来てもらいだ。謀反の噂への対処を話すことにしたのだった。
都では不穏な噂が流れていた。そしてだ。
華陀達はだ。その都の状況を見て話をしていた。
「仕掛けてきたわね」
「そうね」
妖怪達が話している。彼等は今は洞窟の中で火を囲んで話をしている。
「予想はしていたけれどね」
「やっぱり仕掛けてきたわね」
「劉備さん達を失脚させてね」
「その咎で処刑して始末する」
「頭のいいやり方ではあるわね」
「悪智恵そのものね」
「そうした悠長なことを言っている場合か？」
突込みを入れたのはクラウザーだった。
「この事態はまずいぞ」
「それにだ」
ギースも怪物達に話す。
「定軍山に軍勢が向けられているのだな」
「ええ、そうよ」

「夏侯淵さん達がね」
向かっているとだ。二人はギースに答える。
「あたし達の千里眼にはわかるわ」
「そうしたこともね」
「ならこのまま見ている訳にはいくまい」
ギースはまた彼等に言った。
「あの山のこともだ」
「あの山はあの者達の拠点の一つだったな」
獅子王もこのことを指摘する。
「そこに向かうとなるとだ」
「どちらにしても何かある」
今言ったのは天草だった。
「危険ではないか」
「それもわかってるわ」
「全部ね」
二人はこのこともわかっているというのだ。
それでだ。こんなことを言うのだった。

# 第百話　夏侯淵、定軍山に向かうのことその九

「どっちもね。無事に解決するわ」
「都のことも山のこともね」
「また妖術を使うのか？」
刀馬は二人の力をそれだと認識していた。
「それでか」
「都のことはあの娘達が無事解決するわね」
「あちらは安心していいわ」
「問題はあの山」
「あそこね」
「それではどうしますか？」
命が問うた。
「ここは」
「安心して、手はね」
「考えてあるわ」
貂蝉と卑弥呼はそれぞれ答える。
「その時が来ればね」
「早速動くから」
「では安心していいのだろうか」
ここで言ったのは黄龍だった。
「とりあえずは」
「大船に乗ったつもりでいてね」
「今まで通りね」
「そうだな。下手に悲観しても何もならない」
華陀も言う。
「とはいっても事実を見ないのも駄目だが」
「そうよ。あたし達も事実を見てね」
「それで考えて動いてるから」

「何の問題もないわ」
「正直どうとでもしてみせるわ」
「山のことはわかった」
ミスタービッグはそれはよしとした。そのうえでだ。
彼は都のことを尋ねたのだった。
「都は任せていいのか」
「そう、あの娘達にね」
「そうすればいいから」
こうだ。彼女達はミスタービッグにも答えたのだった。
「謀略であの娘達を止めることはできないから」
「誰にもね」
「ならいいのだがな」
ミスタービッグは二人の話を聞いてまずは納得したのだった。
そうしてだ。今度はだった。
「それでだが」
「あら、どうしたの？」
「何かあったの？」
「もうそろそろ時間だと思うが」
こう二人に言ってきたのである。
「食事の時間ではないのか」
「そうね。もうそんな時間ね」
「時間が経つのは早いわね」
「それでは何を食べるのだ？」
ミスタービッグは何を食べるのかも尋ねた。
「今は何だ」
「ええと、何があったかしら」
「熊があったわよ」
卑弥呼が貂蝉のその問いに答える。
「さっきあたし達が倒したじゃない」
「そうだったわね。あの熊ね」

「あれ食べましょう。火はあるし」
「そうね。そうしましょう」
「またワイルドなことだな」
ギースは彼等の話に腕を組んで述べた。
「熊を焼いてそのまま食べるか」
「熊の掌もあるし」
「内臓も食べられるわよ」
「熊は声以外は食べられるから」
「毛皮も使えるし」
そうした話をしてだった。実際にだ。
「もう豚と同じでね」
「何でも使えるから」
「豚？」
しかしだった。刀馬は。
豚が何でも使えると聞いてだ。首を傾げさせて二人に問うた。
「豚はそこまで使えるのか？」
「豚はだ」
クラウザーがいぶかしむ彼に対して話す。

# 第百話　夏侯淵、定軍山に向かうのことその十

「腹や足や背だけではなくだ。他も食べられるのだ」
「そういえば」
彼の言葉でだ。刀馬もふと気付いた。
「この国では豚の耳や内臓も食べているな」
「皮も食べているな」
「そうだな。頭も食べている」
それもだった。そしてだ。
「骨でだしを取っているな」
「スープだな」
「そうだな。豚は何でも使えるのか」
「声以外は食べられる」
今言ったのは獅子王だった。
「それこそだ」
「そうなのか」
「だからこそどの国でもよく食べられる」
カインも刀馬に話す。
「当然アメリカでもだ」
「アメリカでも豚はよく食われる」
グラントも話す。
「俺は耳が好きだ」
「私は内臓もいける」
カインはそれだった。
「豚の内臓は美味だ」
「だから誰もが食べているのか」
「まああたし達が今食べるのは熊だけれどね」
「熊の内臓もいいわよ」
ここでまた貂蝉と卑弥呼が話す。

「では食べましょう」
「それじゃあね」
「ただし。気をつけることがある」
華陀が出て来て一同に話す。
「肝には注意しろ」
「肝臓よ」
「そこのことよ」
妖怪達が華陀の説明に補足を入れる。
「内臓全体じゃないから」
「それは安心してね」
「ではその肝に何がある」
無限示が尋ねた。
「熊にも毒があるのか」
「正確に言うと毒じゃない」
華陀もそれは否定する。
「しかしだ」
「しかし？」
「熊の肝にはビタミンＡだったな」
「急に我々の時代の言葉になったな」
クラウザーがすぐに突っ込みを入れた。
「妙な話だな」
「その方がわかりやすいからな。それでだ」
華陀の話が続く。
「ビタミンは本来は身体にいいのだが」
「では問題ないのではないのか？」
ギースが問うた。
「私は栄養学については詳しくないが」
「多過ぎるんだ」
そのだ。ビタミンの量がだというのだ。
「それが多過ぎて人間には毒になるんだ」

「毒にか」
「それになるか」
「ああ。何でも過ぎたるは及ばざるが如しだ」
医者ならではの言葉だった。
「熊の肝はそれが多過ぎて。猛毒になるんだ」
「絶対に食べられないのですか？」
「ああ、あまりにも多過ぎてな」
そうだと命にも話す華陀だった。
「生だと勿論駄目だ」
これはもう論外だった。
「ビタミンが破壊されないからな」
「では火を入れてはどうだ」
カインが調理法を提案した。
「煮るなり焼くなりしてだ」
「それでも多過ぎて駄目だ」
そのだ。ビタミンがだというのだ。
「食べるとショック死してしまう」
「恐ろしいな」
刀馬はここまで聞いて唸る様にして述べた。

# 第百話　夏侯淵、定軍山に向かうのことその十一

「まさに毒だな」
「そうだ。だから食べることは止めてくれ」
「けれどダーリンそれって」
「ホッキョクグマのことよ」
貂蝉と卑弥呼がその華陀に言う。
「普通の熊は別にね」
「そんなことないわよ」
「むっ、普通の熊だったのか」
「そうよ。流石にホッキョクグマはね」
「ここにはいないから」
こう華陀に話すのである。
「普通の黒い熊よ」
「だから安心して」
「そうか。ならいいんだがな」
ここまで聞いて落ち着いた顔になる華陀だった。
「なら問題ない。肝も食べていい」
「それは納得したが」
グラントが華陀のその言葉に応える。
しかしだ。ここでこう彼に問うた。
「だが何故そんなことを知っている？」
「そんなこととは？」
「ホッキョクグマのことだ」
「それがどうかしたのか？」
「この国にいるのか？」
グラントが問うのはかなり核心的なことだった。
「あれは北極にいるな」
「そうだ。だからホッキョクグマだ」

華陀もそのことは知っていた。
「それがおかしいのか？」
「若しかしてだ」
グラントはここでふと気付いたことがあった。それは。
「貴殿は北極に行ったことがあるのか」
「ある」
一言でだ。華陀は答えたのだった。
「何度かな」
「あったのか」
「ああ。ついでに北極から新しい場所に行ったこともある」
華陀は微笑みグラントに話す。
「新大陸にもな」
「私達の国か」
「そうだな」
カインとグラントは華陀の話からそのことを悟った。
そのうえでだ。顔を見合わせて話すのだった。
「アメリカ大陸か」
「あの大陸にも辿り着いていたのか」
「こう見えても百年以上生きているからな」
華陀もだ。かなりの歳なのだ。

# 第百話　夏侯淵、定軍山に向かうのことその十二

「羅馬にも行ったことがある」
「ローマにもか」
「あの国もいい国だな」
華陀はクラウザーにもこう返した。
「薔薇が咲き誇っていて美味いものが多い」
「それであのコロシウムにもね」
「ホッキョクグマが運ばれていたりしたのよ」
何気に妖怪達も知っていた。
「ローマ帝国もこの国に負けない位繁栄してるてね」」
「もうすんごいんだから」
「貴殿等はあれか」
グラントは二人が何故ローマを知っているのか推測してみせた。
「その術で行き来しているのか」
「もうローマだって一瞬よ」
「世界一周もあっという間よ」
空を飛べ瞬間移動すらできる彼等ならばだ。そんなことも朝飯前だった。
それでだ。こんなことも言うのだった。
「南極にも行ったわよ」
「あの大陸にもね」
「最早何でもありだな」
獅子王も唸る様にして呟く。
「だが。それだけの力があるからだな」
「この世界、救ってみせるわ」
「絶対にね」
「とりあえずは定軍山だな」
また言う華陀だった。

「ではあの山に向かうか」
「ええ、そうしましょう」
「今からね」
こうしてだった。彼等の方針は決まった。
しかしだ。ここでだった。
命がだ。ふと呟いたのだった。
「それにしてもどうしてなのですか？」
「どうして？」
「どうしてというと？」
「何故定軍山に軍が向かうとわかったのですか？」
彼女が気付いたのはこのことだった。
「それがわからないのですが」
「そうだな。今回は内密に動いている様だが」
「そうよ。殆んどの人が知らない出陣よ」
「そうなのよ」
こう話す二人だった。
「それをどうしてあたし達が知っているのか」
「そのことよね」
「はい。どうしてなのでしょうか」
「それは簡単よ。あたし達の目はね」
「さっきも言ったけれど」
「そうでしたね。見えておられていましたね」
そのことをだ。命は思い出したのだった。
「そうでした。すいません」
「他には千里先の針の落ちる音が聞こえたり」
「どんな匂いでも嗅ぎ分けられるわよ」
今度は鼻だった。
「もう犬にだってね」
「負けないから」
「こうした人物だからか」

ギースもわかったのだった。
「世界を救えるのか」
「力は正しいことに使うべきだから」
「そうさせてもらうわ」
二人は少なくとも邪悪ではなかった。外見はともかくだ。
そしてその力でだ。また働こうとするのだった。

第百話　完

２０１１・８・７

# 第百一話　帝、劉備を信じるのことその一

第百一話　帝、劉備を信じるのこと

都での不穏な噂は。さらに広まっていた。

劉備が皇位を狙っている、そのことがだ。今や都中で囁かれていたのだ。

「そうだな。漢中王ならな」

「あの方ならそれもできるだろう」

「何しろ今やこの国で第一の実力者だ」

「しかも多くの家臣や仲間もいる」

権勢や人材を見てだ。誰もが言うのであった。

「大将軍であり相国でもあられる」

「そのお立場ならな」

「何でもできるだろう」

「皇位を狙うことも」

「しかも」

ここでだ。もう一つ、噂の根拠になる条件が語られるのだった。

「皇族でもあられるしな」

「皇族ならば皇帝になってもおかしくはない」

「そうだ、皇帝になれる」

「例え傍流の傍流であっても」

それでもだ。皇族ならばだというのだ。

「劉氏の方ならな」

「皇帝になることができるのだ」

「では今の帝を」

「まさか」

噂が核心に入り不穏さを増していく。

「廃するのか」

「いや、表立ってしなくてもいいぞ」
「というとまさか」
「そうだ。それは」
暗くなる。その話が。
「暗殺という手もある」
「暗殺!?帝をか」
「そうされるというのか、漢中王は」
「まさか。そこまで御考えなのか」
「恐ろしいことだぞ」
都の者達はこう話していく。
「今の帝を暗殺し自身が皇帝になるなぞ」
「大罪と言っても飽き足らない」
「しかしこれまで幾つもあったことだ」
「では漢中王もか」
「そうされるのか」
こうしてだった。多くの者が劉備に対して疑惑の目を向けるようになっていた。そしてこのことはだ。
宮廷にも届いていた。それでだ。
呂蒙がだ。困惑した顔で太史慈に言うのだった。
「今はかなり危ういです」
「劉備殿のことね」
「はい、そうです」
彼女のことに他ならないとだ。呂蒙は話す。
「このままではです」
「誰も劉備殿を信用しなくなるわね」
「そしてさらにです」
「さらになの」
「はい、帝が劉備殿を危うく思われ」
帝の耳に入ればだ。そうなるというのだ。
「そしてそのうえで」

「劉備殿を」
「宮廷から排除されるか。最悪」
「死をだな」
「死罪を命じられるかも知れません」
簒奪を考えているとなればだ。それは当然のことだった。
それがわかっているからだ。呂蒙は今危惧を感じているのだ。
それでだ。こうも言うのだった。
「ですから。この噂を何とかです」
「打ち消さないといけないわね」
「はい、そうです」
その通りだとだ。太史慈に対して言う。
「さもなければ本当に危ういです」
「そうね。こうした根も葉もない噂はね」
「消さなくてはなりませんから」
「けれど。噂は」
「消そうとしても消せるものではありません」
呂蒙はまた話す。
「根拠のないものであってもです」
「正直。劉備殿は」
どうなのか。太史慈にもわかっていた。

## 第百一話　帝、劉備を信じるのことその二

「算奪やそうしたことは」
「絶対に考えたりはしません」
「ええ、間違いなくね」
「しかしです」
だが、だ。それでもだというのだ。
「市井ではそれは別です」
「そうしたことができる立場にいるからね」
「それだけで。噂は根拠ができます」
そしてだ。話され広まるというのだ。
「噂はどんな護りも抜けてしまうものですし」
「止めようがないわね」
「考えたものです」
呂蒙はその片眼鏡の奥のその目も曇らせた。
そのうえでだ。こうも言うのだった。
「噂で攻めてくるとは」
「仕掛けてきたのは誰かしら」
「司馬尉殿でしょう」
呂蒙の目が変わった。鋭くなった。
「おそらくは」
「そうね。こうした噂を流すのはね」
「そしてその噂により劉備殿が失脚して得をするのは」
「劉備殿が失脚すれば共にいる雪蓮様達も失脚します」
要するにだ。劉備達は一蓮托生なのだ。それは董卓の乱を抑えた時にもう定まっていることだ。
そしてだ。その彼女達が失脚すればだ。得をするといえば。
「あの方しかいませんから」
「状況証拠は揃い過ぎてるわね」

「あまりにも」
また言う呂蒙だった。
「ですから。司馬尉殿でしょう」
「何かやることが陰湿ね」
太史慈から見ればだ。そう見えるのだった。
「人を噂で陥れようとするなんて」
「確かに。しかし有効なやり方です」
「そうね。実際に今こんなことになってるし」
「司馬尉殿はかなり残忍な方ですし」
このこともだ。彼女達は最早よく認識していた。
「こうした陰湿なやり方もです」
「平気で使うのね」
「そうです。おそらく目的の為には手段を選ばない方です」
「増々嫌な奴ね」
「しかし。私達は今その司馬尉殿を向こうに回しています」
「厄介なことにね。とにかく今はね」
太史慈はたまりかねた調子で話した。
「この状況を何とかしないとね」
「いけません」
そうした話をしてだ。呂蒙も太史慈もだ。これからのことに憂慮を覚えていた。
そしてだ。その劉備の方でもだった。
孔明がだ。難しい顔をしてだ。いつも手にしている羽毛の扇を擦っていた。
そうしながらだ。彼女は鳳統に話した。
「正直今の状況だけれど」
「物凄くまずいわね」
「ええ。街や宮廷だけじゃなくて」
話はだ。他にも広まっているというのだ。
「兵隊さん達の間でも後宮でも」

「特に後宮でも広まっているのがまずいわね」
「帝が休まれる場所だから」
そのだ。帝の耳に入ることが危険だとだ。二人は認識していた。
それでだ。孔明は憂いに満ちた顔で鳳統に話した。
「宦官や女官達も噂をしているから」
「それが帝のお耳に入れば」
「ええ。それに」
「何時かはね」
「帝のお耳にも入るわ」
それでだ。どうなるかだった。
「帝が桃香様に疑念を抱かれれば」
「大変なことになるわ。間違いなく」
「よくて失脚」
そしてだ。悪ければ。
「死を賜ることも」
「有り得るわね」
「流石に皇族だから惨たらしい処刑はされないけれど」
これも皇族の特権だ。皇族が罪で死なねばならない時は処刑はされないのだ。毒やそういったものを贈られ自害を勧められるのだ。

## 第百一話　帝、劉備を信じるのことその三

だが死ぬことには代わりない。それでなのだった。
孔明も鳳統もだ。言うのだった。
「ここでどうにかしないと」
「今のうちに」
「けれど」
それでもだと。孔明の口調がここで変わった。
それでだ。こう鳳統に言った。
「今回は」
「ううん、私も」
鳳統もだった。孔明と同じく弱った顔を見せる。
そうしてだ。同じ口調になってだった。
「噂に対しては」
「どうしていいかわからないわ」
「どうしたものかしら」
軍師二人もだ。今回は困っていた。
しかしだ。その中でだ。
鳳統はこう孔明に提案した。
「私達二人だけでは駄目なら」
「黄里ちゃんね」
「うん、三人で考えてみよう」
これが鳳統の提案だった。
「三人いればだし」
「三人いれば張子房の知恵ね」
漢の高祖の軍師だ。稀代の知恵者として知られている。
その人物の様にだ。名案が出ると言う鳳統だった。
そして孔明もだ。彼女の言葉に頷いてだ。
静かにだ。こう応えたのだった。

「そうね。ここはね」
「それでいきましょう」
こうしてだった。二人は徐庶も交えてだ。
三人でこの問題について話していく。そしてだ。
その中でだ。徐庶が言ったのだった。
「噂に対してはね」
「噂に対しては？」
「何かあるの？」
「やっぱり。真実かしら」
こう二人に話すのだった。
「それが一番じゃないかしら」
「根も葉もない噂に対しては」
「真実だというのね」
「ええ。今回は噂に過ぎないから」
だからだ。それに対してというのだ。
「真実を明らかにすればね」
「そうね。真実ね」
「真実が公になれば」
それでいいとだ。孔明と鳳統も頷いた。
そうしてだ。また言ったのだった。
「じゃあここは」
「帝にお話したらどうかしら」
こうだ。二人は言った。
「その。帝に」
「桃香様御自身が」
「それしかないと思うわ」
徐庶もだ。二人の提案に応えてきた。
「桃香様が帝の位を簒奪しようという噂があるのなら」
「当の帝にお話すれば」
「それで疑いを晴らすべきだから」

「それでいいと思うわ」
徐庶も頷く。そうしてだった。
三人の軍師はこの噂に対する策を決めた。そのうえでだ。
三人で劉備のところに行きだ。このことを話したのだった。
話を聞いた劉備はまずはだ。目をしばたかせてこう言った。
「えっ、私が帝を？」
「まさか。桃香様は」
「御存知なかったのですか？」
「都での噂を」
「そんな噂が出てたの」
こうだ。きょとんとして三人に問うのだった。
「はじめて聞いたわ」
「そうだったのですか」
「桃香様は御存知なかったのですか」
「では」
「そんな。私が帝なんてないよ」
今度はこんなことを三人に言う。

# 第百一話　帝、劉備を信じるのことその四

「考えたこともないし」
「ですよね。本当に」
「桃香様には野心はありませんから」
「ですから」
三人はかえって力が抜けた。劉備のいつもの調子にだ。
それでほっとした顔になってだ。今度はこう言うのだった。
「実は前から噂になっていまして」
「それでどうにかしようと考えていました」
孔明と鳳統が話す。
「それでもこれといった解決案が考えつかず」
「今までこうしていました」
「ううん、噂って困るわよね」
まだおっとりした感じの劉備だった。
「根も葉もない噂ってね」
「はい、だからです」
「今回は三人で話して」
「それで決めました」
二人に加えて徐庶もだった。
三人になってだ。それで話すのだった。
「帝にこの噂のことをお話されてです」
「御自身の潔白を証明されればです」
「それで解決するかと」
「そうね。それが一番いいわね」
おっとりした調子のまま劉備は話す。
「それじゃあ」
「はい、それではです」
「帝の御前に行きましょう」

「そして身の潔白を」
明らかにすべきだとだ。三人も勧める。そうしてだ。
そのうえでだ。劉備は宮廷に向かいだ。帝の前に参上しようとした。その時だ。
ふとだ。孔明が鳳統に言った。まだ劉備の摂政府にいる。
そこを出ようとする時にだ。彼女は気付いたのだ。
「ねえ。若しもね」
「今回のことが司馬尉さんの企みなら」
「私達をあっさりと宮廷に行かせないかも知れないわね」
「そうよね」
このことにだ。鳳統も気付いた。
それでだ。すぐにだった。
馬岱を呼んでだ。こう言うのだった。
「あの、今からね」
「宮廷に行ってくれるかしら」
「宮廷に？何かあったの？」
「ひょっとしたらそこに誰かいるかも知れないから」
「兵を率いてそれでね」
「宮廷を警護してくれるかしら
「御願いできる？」
今のうちにだ。こう手を打ったのである。
「今のうちにね」
「すぐに向かって欲しいの」
「あれよね。司馬尉よね」
事情を察してだ。馬岱は目を鋭くさせて二人に返した。
「あいつが動くかも知れないっていうのね」
「うん。ひょっとしたらだけれど」
「桃香様を宮廷に行かせない為に前に兵を率いて宮廷を押さえかねないから」
「あいつならやるわね」

馬岱もだ。そのことを察した。
そうしてだ。二人にあらためて応えた。
「うん、じゃあ今からね」
「有り難う。それじゃあ」
「御願いするわ」
こう話してだった。馬岱は兵を率いてすぐに宮廷に向かった。
こうして手を打ってからだった。軍師たちは劉備に対して言った。
「では今から」
「帝の御前に参りましょう」
「そうね。それじゃあ」
劉備も応える。こうしてだった。
劉備は軍師達と共に宮廷に向かう。彼等は馬に乗り宮廷に向かうのだった。
それをだ。すぐに聞いてだ。司馬尉は。
妹達にだ。こう告げた。

## 第百一話　帝、劉備を信じるのことその五

「そう。それではね」
「このまま劉備を宮廷には行かせませんね」
「そうされますね」
「ええ。行かせないわ」
妖しいエミを浮かべてだ。彼女は妹達に言う。
「当然ね」
「そうですね。ここで行かせてはですね」
「帝に釈明をされてしまいます」
「そうなればこの話は水泡に帰するかも知れません」
「それならば」
「宮廷に兵を。理由は」
その口実は何かというと。
「そうね。劉備が帝のお命を狙っている」
「その嫌疑で、ですね」
「あえて通さず帰させる」
「そして返す刀で」
「帝にお話して」
「劉備を一気に追い落とすわ」
司馬尉はまた妖しい笑みになって話す。
「ここでね」
「一気にですね」
「我等が宮廷を抑える」
「そうしますか」
「ここで」
「宮廷を抑え。そして帝を追いやって」
そしてだ。さらにだった。
「この国を破壊と混沌で塗り替えるわよ」

「そして定軍山で夏侯淵達を消し」
「それを狼煙としてですね」
「ええ。オロチ達と一緒にね」
国を一気に自分の色に塗り替えようというのだ。司馬尉は策を一気に進めようとしていた。
それでだ。今はだった。
兵を宮廷に進ませることを決めたのだった。しかしだった。
実際に兵を率いる司馬師と司馬昭が見たものは。
何と宮廷にだ。既にだった。
兵達がいてだ。こう彼女達に言ってきたのだ。
「何故こちらに来られたのですか？」
「何の用件でしょうか」
「そ、それは」
「宮廷の警護に」
「それは私達がやることになったから」
兵達を前にして戸惑いを隠せない二人の前にだ。馬岱が出て来て言うのだった。
「心配無用よ」
「そういう訳にはいかないわ」
「帝を御守りしなければならないじゃない」
司馬師と司馬昭は必死になって馬岱に食い下がる。
「だからよ。今は」
「貴女は兵を退きなさい」
「蒲公英達帝から許しを得たんだけれど」
しかしだった。馬岱は既に先に進んでいた。食い下がってくる二人に悠然と笑ってだ。そのうえでこう言ってきてそれからだった。
懐からあるものを出してきた。それは。
「くっ、それは」
「帝の」
「これでわかったわよね」

それは帝の勅書だった。皇帝の印までである。
それも見せてだ。二人に話すのである。
「ちゃんと帝がお許しになられたのよ」
「ではここはというの」
「貴女が守るというの」
「そうだよ。だからね」
それでだとだ。二人にさらに告げる。
「あんた達はお家でゆっくりしていて」
「仕方ないわね」
「それじゃあね」
これ以上ごねては疑念を抱かれる。二人もこう考えてだった。
渋々ながら兵を退かせた。そのうえで帝に劉備の叛意を言う為に屋敷を出ていた司馬尉に対してだ。合流したうえで話した。
それを聞いてだ。司馬尉は。
忽ちのうちに苦々しい顔になってだ。場所の中から言うのだった。
馬車はあの西洋のものを思わせる馬車でだ。そこから顔を出して言うのだ。

# 第百一話　帝、劉備を信じるのことその六

「今回は退くしかないわね」
「それではですか」
「今回の噂の件はですか」
「失敗に終わりましたか」
「最早」
「ええ、失敗よ」
その通りだとだ。司馬尉はその苦々しい顔で答えた。
「まさか。先に兵を置かれるとはね」
「まさかと思いますが」
「読まれていたのでしょうか」
「そうでしょうね。読まれていたわ」
実際にそうだとだ。司馬尉は妹達にまた答えた。
「おそらくは」
「おそらくは？」
「といいますと」
「孔明と鳳統ね」
その二人にだ。読まれていたというのだ。
「それと徐庶にね」
「あの三人の軍師にですか」
「劉備の下にいる」
「ええ、あの三人はそれぞれでも厄介だけれど」
三人揃えればだ。どうかというのだ。
「三人一度になれば」
「お姉様の策も退けられる」
「そうなのですか」
「そうよ。私を出し抜くとはね」
どうかというのだ。それ自体が。

「許せないわ。この借りは必ず返すわ」
「はい、それでは」
「何時の日か」
こう話してだった。三人は今は退くのだった。
そうして劉備は軍師達と共に宮廷に入ろうとする。そこでだった。
すぐにだ。まずは魏延が劉備のところに来て言うのだった。
「桃香様、遅れて申し訳ありません」
「焔耶ちゃん？」
「任で都の不穏な者達を取り締まっていました」
そうしていたというのだ。
「それで遅れました」
「そうだったの」
「はい。愛紗達もです」
関羽達もだ。その任にあたっていたというのだ。
「今彼女達もここに来ます」
「そういえば今日焔耶ちゃん私の傍にいなかったわね」
劉備は今になってこのことに気付いたのだった。このこともだ。
「いつも私の傍にいてくれるのね」
「私にしてもです」
魏延はここでだ。実に無念そうな顔になって話した。
「桃香様のお傍を離れるのは実に辛かったです」
「そうよね。私も何か焔耶ちゃんが傍にいてくれないと」
劉備は気付かないまま彼女に言う。
「寂しいわ」
「有り難きお言葉。それだけで焔耶は満足です」
「そ、そうなの」
「それでなのですが」
劉備の何でもない言葉にだ。魏延は感涙しながら話す。
「軍師殿達に言われて都を取り締まったのですが」
「それで誰かいましたか？」

「怪しい者は」
「少なくとも私の見たところではいませんでした」
そうだとだ。魏延は孔明と鳳統に話す。
「一人もです」
「そうですか。やはり」
「一人もいませんでした」
「わしが見回ったところでもじゃ」
ここで厳顔も来た。そのうえで言ってきたのである。
「一人もおらんかった」
「そうですか。桔梗さんのところもですか」
「そうなんですね」
「うむ、おらんかった」
また言う厳顔だった。

# 第百一話　帝、劉備を信じるのことその七

「思えば面妖なことじゃな」
「いえ、そうだったと思っていました」
「今回は」
しかしだ。軍師二人はだ。
それはもう読んでいたという顔でだ。話していくのだった。
「噂話は得てしてそういうものです」
「それが意図され流されたものなら余計にです」
どうかというのだ。
「噂を流す人が誰なのかはわかりません」
「外見は普通の人が話して広まるものですから」
「その様じゃな。おそらくはな」
ここでだ。また言う厳顔だった。
「愛紗達もそう言うぞ」
「そうですね。そうなると思います」
徐庶は厳顔の言葉に頷きだった。そして言うのだった。
「噂はこれで消えるでしょうが」
「黒幕がいてもそれが誰かはか」
「推測はできますが断定はできません」
「そうじゃな。忌々しいがな」
「蜥蜴の尻尾切りどころではありませんね」
魏延も厳しい顔になって厳顔の言葉に応える。
「まるで最初からそんなことはなかった様に」
「噂を流した者達は見つからん」
「はい、何一つとして」
「厄介な話じゃ」
「それではです」
話が一段落したところでだ。孔明がだった。

一同にだ。こう言った。
「愛紗さん達も来られましたら」
「宮廷に入るのね」
「そうです。そうして桃香様はです」
劉備に対してだ。どうするべきかを話すのだった。
「帝とお話して下さい」
「二人でなのね」
「そうです。お二人でお話されるのが一番です」
考えがはっきりとした顔でだ。劉備に話す。
「私達は宮廷で待っていますので」
「劉備殿の言葉でお話して下さい」
鳳統はこう勧める。
「そうされればいいです」
「わかったわ。それじゃあ」
劉備も頷きだ。そのうえでだ。
関羽達五虎将達も来てからだ。宮廷に入ったのだった。
それから孔明達と別れてだ。そのうえで帝の前に出た。
帝は赤い幾つもの柱に支えられた広い部屋の中にいた。そこで階段の上にある豪奢な、赤と金の皇帝の座にいるまだ幼さが見られる少女の前に出た。
少女は九匹の龍に飾られた黄金色の衣を全身にまとっている。髪は黒く腰までである。黒い切れ長の奇麗な目をしている。その光は星の瞬きの如きだ。
顔はやや丸く楚々としている。歳は孔明と同じ位で背や顔立ちも同じだ。
その彼女がだ。劉備に対して言ってきた。高い少女の声でだ。
「よくぞ来られました」
「はい」
「今日朕の前に来たのは何故でしょうか」
「あの、噂話のことで」

まずはこう切り出した劉備だった。階段の下に立ちだ。そのうえで帝に話すのである。
「何か私が謀反を企んでいるとか」
「その様ですね」
「その様でといいますと」
「既に後宮で宦官や女官達が噂しています」
そうだというのだ。
「劉備が朕にとって代わろうと」
「そうした話になってるみたいね」
「朕はその噂を耳にする度にです」
どうしていたか。帝はこのことを話した。
「そうしたことを話す者達を嗜めてきました」
「そうされていたのですか」
「確かに劉備は皇族であり摂政です」
まさにだ。今のこの国の最大の実力者だ。
「皇帝になろうと思えばできます」
「そうみたいですね」
「若し劉備が実際に謀反を企ているなら」
どうするかというのだ。

# 第百一話　帝、劉備を信じるのことその八

「既に兵権を全て握っています」
「それからですか？」
「一声挙げればその兵達が一斉に動き」
それでだ。どうなるかというのだ。
「十三の州の兵で都を取り囲めばです」
「それで終わりですか」
「はい、わざわざこの都に止まらなくてもいいのです」
このことがわかってだった。帝は劉備に話すのだった。
「しかし劉備は都に止まり続けてますね」
「楽しいことも多いですし」
こうだ。如何にも劉備らしいささか能天気な調子で帝に話す。
「それに政もありますし」
「そうですね。そうした劉備が叛意を持っているか」
それはどうかというのだ。
「有り得ないことです」
「だからですか」
「はい、朕にはわかっていました」
微笑みだ。劉備に話す。
「劉備は謀反を行う様な者ではありません」
「ですか」
「はい、それに若し劉備が実際に叛意を抱いていれば」
さらに話す帝だった。
「今こうして私の前に出ません」
「ええと、ここに来たのはですね」
「その噂を否定する為ですね」
「朱里ちゃん達に言われまして」
このことも素直に話す劉備だった。

「それでお手間をかけますが」
「そうですね。それに劉備の話を実際に聞いてますと」
そこからもわかるというのだ。
「劉備は絶対に嘘は吐けません。劉備は叛意を抱いていません」
「おわかりになられるんですね」
「その目もです」
目も見ていた。帝は一つのことだけで判断してはいなかった。既にわかっていることでもだ。そうして確めることも忘れていなかった。
それでだ。全てを見たうえでだ。劉備に話すのだった。
「劉備の目は奇麗ですから」
「有り難うございます」
「澄んだ目の持ち主は嘘を吐きません」
そうだというのだ。
「目は全てを出してしまいますから」
「じゃあ私を」
「信じています」
微笑みだ。劉備に話した。
そしてだ。そのうえでだった。
再度だ。劉備に言うのだった。
「それでなのですが」
「それで？」
「今の皇帝は私ですが」
こう前置きしてからだ。劉備に話すのである。
「次の帝をもう決めていなくてはなりません」
「そうですね。太子ですね」
「はい、それを今決めます」
「えっ、今ですか」
「またああした噂が出てもおかしくありません」
こうも言うのだった。

「それでなのです」
「ええと、といいますと」
「劉備、貴女をです」
微笑んだままだ。劉備に話す。
「太子に定めます」
「私をですか」
「はい。次の皇帝は貴女です」
また劉備に告げる。
「貴女はこれから太子でもあります」
「そんな、私が次の皇帝って」
「劉氏ならばです」
問題ないというのだ。
「私には兄弟姉妹もいませんし子もいませんし」
「御子ならまた出来るのでは？」
「しかし貴女以上に相応しい人物はいません」
皇帝にだというのだ。

# 第百一話　帝、劉備を信じるのことその九

「ですから」
「私をですか」
「次の皇帝、太子に定めます」
あらためて劉備に告げた。
「では宜しく御願いしますね」
「は、はい」
劉備の言葉に応えてだ。そうしてだった。
劉備は噂を否定されただけでなくだ。太子にも定められた。このことにだ。
舞は笑ってだ。雑煮を食べながら仲間達に言うのだった。
「まさに雨降って地固まるね」
「そうだよな」
「確かにそうなったね」
テリーとアンディが彼女のその言葉に笑顔で頷く。
「あの噂が流れた時はまずいって思ったけれどな」
「それが消えただけじゃなくて」
「太子にも定められるなんてな」
「凄いことじゃない」
「それだけ劉備さんに徳があるってことよね」
舞は雑煮の餅を箸に取りながら話す。
「ああ、そうだな」
「そうなるね」
テリーはハンバーガー、アンディは納豆スパを食べながら舞の言葉に応える。
「今回は本当にな」
「最高の結末になったよ」
「そうそう。これでもうあんな噂は出ないし」

劉備が次の皇帝ならだ。それも当然のことだ。
舞もだ。そのことがわかったうえで二人に話していく。
「万々歳よ。ただね」
「ああ、あの噂を流した奴な」
「それが誰かは」
「気になるところね」
表情を鋭くさせてだ。ボガード兄弟に話す。
「そこのところはね」
「あれ誰なんだ？」
丈は鰐の唐揚げを頬張りながら問うた。
「ちょっとわからないんだけれどな」
「いや、それはわかるだろ」
「少し考えたら」
テリーとアンディはその丈にすぐに突っ込みを入れた。四人は今同じ卓で食べながら話をしているのだ。その中でのやり取りだった。
「もうな。あいつしかいないだろ」
「彼女だよ」
「彼女っていうと女か」
丈にもこのことはわかった。
「女が広めたのか」
「そうだよ。司馬尉だよ」
「あの娘だよ」
まさにだ。その司馬尉だというのだ。
「あいつが劉備さんを追い落とす為にだよ」
「噂を流したに決まってるじゃないか」
「ああ、そうなのか」
ここまで言われてだ。やっとわかった感じになる丈だった。
それでだ。彼はこう言ったのだった。
「それで自分が後釜になろうって考えてたんだな」
「そうだよ」

「やっとわかってくれたね」
「ああ。それでな」
丈はさらに言った。
「あいつこれで諦めるか？」
「それはないわね」
舞がすぐに否定してきた。
「絶対にね」
「ああ、やっぱりそうか」
「また何か仕掛けてくるわ」
「じゃあ何とかしないと駄目だろ」
「そうなのよ。司馬尉をどうするかよ」
舞がこう言うとだった。テリーとアンディもだった。
「あんな厄介なのずっと置いておいたらな」
「何時か大変なことになるからね」
「証拠はないにしても明らかにだからな」
「私達に敵意を持っているよ」
「何かそれってよ」
能天気な感じでだ。丈は言った。

# 第百一話　帝、劉備を信じるのことその十

「あれだよな。オロチと同じだよな」
「それとアンブロジアとかだな」
「骸達にしても」
「そうだよ。一緒じゃねえか」
こうボガード兄弟に話すのである。
「それだとな」
「そうよね。言われてみればね」
舞も丈のその言葉に頷く。
「あとあの于吉とかいたけれど」
「あの連中ともな」
「似てるね」
「若しもよ」
舞はさらに言う。
「あの連中が全部グルだったら？」
「最悪だよな」
丈は自分の言葉で簡単に言った。
「そうなったらな」
「そうよ。それで可能性もあるから」
「気をつけるべきだな」
「ああ。だからな」
それでだ。また言う丈だった。
「今のうちにあの連中どうにかするか？」
「どうにかって？」
「何か考えあるの？」
「今すぐにあいつの屋敷に殴り込んでな」
右手を拳にしてだ。テリーとアンディに話すのだった。
「それで叩きのめしたらいいだろ」

「いや、それは駄目でしょ」
舞がだ。丈のその考えに呆れて言った。
「証拠もないのにいきなりは」
「駄目か」
「絶対に駄目よ」
また答える舞だった。
「全く。丈さんはいつもそうなんだから」
「うだうだ考えるのは苦手なんだよ」
丈は全く反省しないまま言う。
「だからいつも突撃なんだよ」
「突撃はスラッシュキックだけにしておけよ」
「少なくとも司馬尉の屋敷に行っても何にもならないからね」
「あっ、そうなのか？」
テリーとアンディ、とりわけアンディの言葉にだ。丈は応えたのだった。
「じゃあどうすればいいんだよ」
「いや、どうするかってな」
テリーは呆れた声で丈に返す。
「今は待つしかないだろ」
「松しかないのかよ」
「そうだよ。あいつはおかしなことをしてるって証拠もないからな」
「だから証拠はあいつの屋敷にあるだろ」
「で、殴り込んでそれを抑えるんだな」
「ああ。警察みたいにな」
あちらの世界の話でだ。丈は言うのだった。
「あれだけ怪しい奴だからな」
「怪しいのは確かに口実にはなるけれど」
舞もそれは認めた。しかしだった。
首を捻ってだ。こう丈に言った。
「そもそもあの司馬尉が屋敷の中でも証拠を残す？」

「残さないか？」
「残さないわよ」
舞は司馬尉のことを頭の中で考えながら話す。
「そこまで迂闊じゃないわよ」
「じゃあ屋敷に殴り込んでもかよ」
「無駄よ。それに卑怯なやり方だけれど」
それでもだ。脳裏に浮かんだそのやり方も話す。
「証拠をでっちあげてもね」
「それも無理だろうな」
「それもね」
テリーとアンディが舞のその言葉に頷く。
「そうしても捏造を見破られてな」
「声高に言われるよ」
「そうよ。だから今はね」
どうすればいいのか。舞は言った。
「様子を見るしかできないわ」
「まだるっこしいな、おい」
「待つのも戦いのうちでしょ」
舞はこう言って焦りを見せる丈に言う。
「だから今は待ちましょう」
「ちぇっ、じゃあ今は食ってトレーニングしておくか」
こうしてだった。彼はその鰐の唐揚げを食べるのだった。今はそうしてだ。暴れられるその時を待つしか出来なかったのだった。

第百一話　完

２０１１・８・９

# 第百二話　荀？、帝を甘やかすのことその一



袁術は政務を執りながらだ。傍らに立つ張勲に言った。
「今思ったのじゃが」
「今思ったといいますと？」
「わらわは今司徒じゃな」
「はい、三公の一つの」
「そうじゃな。しかし前は司空ではなかったか？」
ふとだ。そう感じたのである。
「そうだったと思うが」
「そういえばそうですね」
「七乃もそんな気がするのじゃな」
「言われてみればそんな気もします」
「司徒と司空ではやることが違うがのう」
「孫策さんは太尉のままですけれど」
それは変わらないというのだ。
「けれど美麗様は」
「あの司馬尉と入れ替わっておるか？」
「同じ三公であってもですね」
「その辺りがわからぬが」
「そうですね。けれどいいと思いますよ」
張勲はにこりと笑って袁術に話した。
「それもまた」
「よいのか？」
「美羽様で五代に渡って三公ですから」
袁家としての話だ。
「まさに位人臣を極めておられますよね」

「そうじゃな。わらわも三公じゃ」
そう言われるとだ。素直に笑顔になる袁術だった。
「ならばそれでよしとするか」
「はい。ただ司馬尉さんは」
「あ奴はのう」
「劉備さんの噂も流してましたし」
「あれで結構陰険じゃな」
「陰険といいますか」
それとはまた別にだというのだ。
「剣呑ですね」
「剣呑か」
「はい、剣呑です」
張勲は司馬尉をこう捉えていた。
「京観のことといい今回のことといい」
「確かにそうじゃな」
「顔立ちは整っていてしかも品がある感じですが」
「実際は違うのう」
「はい、冷酷ですし陰湿です」
「して剣呑じゃな」
「ですから御気をつけ下さい」
張勲はにこやかな顔だがそれでもだ。
言葉は真剣だった。その声で主に話すのである。
「美羽様も油断していては」
「そうじゃな。そういえば麗羽姉様も曹操もじゃな」
「白装束の一団に襲われていましたそうですね」
「都での戦いでも出て来おったしのう」
「あれじゃな。于吉や左慈の部下じゃな」
「そうですね。それは間違いありません」
「また怪しい部下達じゃな」
ある意味でだ。彼等に相応しい部下達だった。

「今度出て来たら全員ぎゃふんと言わせてやるのじゃ」
「美羽様、お言葉が古いですよ」
「むっ、ナウくないか」
「それも古いですから」
「そうなのか。まあよい」
そんなことにはこだわらない袁術だった。そうしてだ。
今度はだ。こんなことを言うのだった。
「ではじゃ。今はじゃ」
「はい、今は？」
「この仕事が終われば蜂蜜水じゃ」
それを所望だというのだ。
「そしてじゃ。凛も呼んで欲しいのじゃ」
「凛ちゃんもですね」
「蜂蜜水は凛と一緒なら余計に美味なのじゃ」
「好きな相手と一緒に飲むのはですね」
「だからじゃ。凛も呼んで欲しいのじゃ」
にこにことしてだ。袁術は郭嘉もだというのだった。

# 第百二話　荀？、帝を甘やかすのことその二

そうした話をしてだった。袁術は仕事をしているのだった。
そしてだ。その郭嘉のところにだ。
袁術から声がかかった。それを聞いてだ。
今している書類の仕事を終えてだ。そのうえでだ。
袁術の屋敷にそそくさと向かおうとする。その彼を見てだ。
狂死郎がだ。こう言った。
「御主も好きよのう」
「好きとは？」
「だからよ。袁術殿が好きなのであろう」
「何かご一緒させてもらいますと」
郭嘉は頬を少し赤らめさせてズィーガーに話す。
「御互いに楽しい気持ちになれるんです」
「互いにか」
「はい。美羽様とは運命めいたものさえ感じます」
「それは中身も関係ないか？」
今こう言ったのはフランコだった。
「あんた達の場合はな」
「中身ですか」
「ああ。そう思えるんだけれどな」
「そうかも知れないですね」
郭嘉自身もだ。そのことを否定しなかった。
「私自身そう思います」
「やはりそうか」
「あと七乃さんともです」
彼女共だ。真名で呼び合う仲になっていた。
「御一緒させてもらうととても落ち着きます」
「家臣は違うのにな」

「確かに華琳さんは最高の方です」
それはそうだとだ。郭嘉も言う。
「ですがそれでもです。美羽様と七乃殿、とりわけ美羽様は」
「この前同じお菓子を一緒に食べていたわよね」
シャルロットも言う。尚彼等あちらの世界の住人達もこちらの世界の仕事を手伝ったりする。それで今も一緒にいるのである。
「端から」
「あれですか」
「最初に袁術さんが貴女に食べさせて」
そうしてからだというのだ。
「そこに袁術さんが食べついて」
「あれは。嬉しかったですが恥ずかしかったです」
郭嘉は笑みだが顔は真っ赤になっていた。
「美羽様もかなり大胆で」
「貴女もね」
シャルロットはそれは郭嘉もだと返した。
「大胆だと思うわ」
「あ、あのことですか」
「袁術さんの頬に接吻したわね」
「あれはお酒が入っているせいで」
今度はあたふたと慌てふためいて言う郭嘉だった。手もしきりに動いている。
「失敗しました」
「あれは失敗なの？」
「はい、私お酒が入るとつい」
ああなってしまうというのだ。
「困った癖ですよね」
「まあそう言えばそうなるか？」
ハヤテが郭嘉の話を聞きながら言う。
「それでも特に見苦しくもないからな」

「だからですか」
「別にいいだろ」
ハヤテはこう郭嘉に話す。
「それも」
「ですがああいうことはもう二度と」
「いや、無理だろ」
ロディがこう突っ込みを入れる。
「あんたと袁術さんのことを考えるとな」
「ですからそれをなおしていって」
「絶対に無理だ」
今度はフランコが言う。
「諦めろ」
「ううん、そこを何とか」
「それならよ」
シャルロットは何か繕おうとする郭嘉に言った。

# 第百二話　荀？、帝を甘やかすのことその三

「今はね」
「今は？」
「袁術さんのところに行かず我慢して」
「そ、そんなことはできません！」
声をうわずらせてだ。それはできないというのだ。
「折角御誘いして頂いたのに」
「そうよね。だからよ」
「無理だというのですか」
「ええ。貴女がそうした評価を拭えるのはね」
できないと言ってだ。そうしてだった。
郭嘉は袁術のところにそそくさと向かった。それを聞いてだ。
荀？は酒を飲みつつあちらの世界の者達と将棋をしつつだ。呆れた顔でこう言ったのだった。
「あの娘も相変わらずね」
「相変わらず？」
「そう言うのか」
「ええ。凛は袁術殿ともう運命的に仲がいいのよ」
こうだ。将棋をさしながらブラバーマンとガンダーラに話す。彼等は今荀？の将棋を見ながらだ。それぞれワインやカレーを口にしている。
そしてだ。彼等はこう彼女に問うた。
「それでなのか」
「ああしていつも」
「そうよ。私にしてもね」
荀？自身もだというのだ。
「結構色々なしがらみがあるから」
「あれか」

影二が言った。彼は燻製を食べている。
「祝福に帝国に」
「色々あるのよ。本当に」
こう言うのである。
「ある世界じゃ馬超と姉妹だったこともあるし」
「どっちが姉でどっちが妹なんだ？」
こおのことを問うたのはジャックだった。
「そこが知りたいんだけれどな」
「私が姉よ」
彼女の方がだというのだ。
「それで祝福の方は鳳統や呂蒙と一緒にいたし。劉備殿もおられたわね」
「何かあんたも色々あるんだな」
「あるわよ」
その通りだとだ。ブラバーマンに答える。
「人間生きていれば色々あるからね」
「いや、幾ら何でも色々あり過ぎだろ」
「そうだよな」
「あんたの場合は」
「とりわけ」
「ううん、最近は麻雀もしてるし」
今度はそれだった。
「そっちはもっと凄いから」
「何だよ、将棋じゃないのかよ」
「麻雀よ」
杯を左手に持ちだ。右手で将棋を指しながら話す。
「そっちなのよ」
「麻雀な。あれな」
「色々やってるから。ああ、そっちと祝福の方には凛もいたわ」
彼女もだ。いたというのだ。

「結構以上に面白いでしょ。私の人生も」
「それ一つの人生じゃないだろ」
将棋の相手は覇王丸だった。彼も将棋を指しながら飲んでいる。
そうしながらだ。荀?に言うのである。
「あんたの中身のそれぞれの人生だろ」
「そう言うかも知れないわね。まああれよ」
「あれって何だよ」
「中身の話をしたら凄いことになる人は一杯いるじゃない」
そうだというのだ。
「ほら、東丈だってね」
「ああ、華陀に似てるよな」
「何故か知らないけれどな」
「そっくりだよな」
「そういうことよ。言えばきりがないのよね」
自分で言う荀?だった。
「まあそういうことよ。それでね」
「むっ、そう来たか」
「さて、どうするのかしら」
悠然と笑ってだ。荀?は覇王丸に尋ねた。
「王手よ」
「くそっ、参ったなこりゃ」
「あんた将棋はあまり強くないの?」
「あまりしたことはないからな」
「そうなの。そういえばずっと剣一筋だったわよね」
「だからな。将棋はなあ」
あまり得手ではないというのだ。

## 第百二話　荀？、帝を甘やかすのことその四

「曹操さんなんか碁の達人だけれどな」
「華琳様はそうしたこともお好きだから」
「それでか」
「そうよ。華琳様は碁でも無敗よ」
ここで曹操への崇拝も見せるのだった。
「帝にも御教授されてるし」
「それはあんたもだろ」
「私も？」
「ああ、そうだよ」
覇王丸は荀？の王手に対して逆に攻めの手を打ちながら返した。
「あんたも最近帝の前に出てるよな」
「帝は素晴らしい方よ」
何故かだ。荀？の顔がにこやかになってきた。そのうえでの言葉だった。
「もうね。お奇麗で愛らしくて」
「確かに人形みたいな方だよな」
「しかも聡明で」
殆んどのろけになっていた。
「やっぱり一国の主よね」
「皇帝として相応しいか」
「そう思うわ」
何時の間にかだ。荀？はとろけそうな顔になっている。
それでだ。さらに言うのだった。
「だからこそ私もね」
「帝が好きなんだな」
「敬愛しているわ」
そこまでだというのだ。そしてだ。

「手ほどきなんかもさせてもらえたら」
「何の手ほどきからしら」
「そんなの決まってるじゃない」
シャルロットにだ。さらにとろけそうな顔になって言うのだった。
「もうね。褥でのこととか」
「褥！？」
「恐れ多いけれど」
こうは言ってもだった。
「それでも。帝が私をその御相手に選んで下さったら」
「あの帝はそういう趣味の方なのか？」
「さあ」
「どうかな」
この辺りはだ。あちらの世界の住人にはわからなかった。
「こっちの世界じゃ俺達の世界よりもそういうことに寛容らしいが」
「だよな。だからか」
「荀？さんもこんなこと言うのか」
「そうなのか」
「だから。普通じゃない」
実際にこう荀？だった。
「女同士でもね」
「他の世界ではどうだったんだよ」
覇王丸が荀？に問い返す。
「あんたやっぱり相手は女だけだったのか？」
「ま、まあそれはね」
そう問われるとだった。弱る荀？だった。
「こっちの世界じゃ男に触れられるのも嫌だったけれど」
「別の世界じゃ違うんだな」
「だから。中身は色々な世界を行き来できるから」
この辺りはかなり複雑だった。
「その辺りはこうした時に言うとね」

「難しくなるんだな」
「そう。まあ今は帝国とか祝福は置いておいて」
実際にだ。話がややこしくなると判断してだった。
「将棋にお酒よね」
「げっ、また王手かよ」
「あんた本当に将棋は大したことないのね」
「っていうかあんた強いな」
「軍師よ、私は」
だからだとだ。荀?は言うのだった。
「だからこうしことが強くないとね」
「駄目だよな」
「そう。将棋にしてもね」
強くなくてはならないというのだ。
「そういうことよ。さて、今度はどうするかしら」
「こうしてやるよ」
覇王丸はまた手を打った。今度もだった。
攻める。それを見て荀?はまた言った。

# 第百二話　荀？、帝を甘やかすのことその五

「あんた、本当に守らないわね」
「俺らしいだろ」
「そういえばあんた剣でもよね」
「ああ、攻める」
それが覇王丸だった。
「一撃必殺、我流なんだよ」
「将棋も我流ね。荒削りよ」
「それでも弱いか」
「弱いっていうか。だから荒削りよ」
言いながらだ。荀？は覇王丸のその攻めに対してきた。
「攻めてばかりでも駄目よ」
「守るのは好きじゃないからな」
「それは時と場合によるから」
軍師らしくだ。荀？は言った。
「剣でそれはよくてもね」
「将棋じゃ駄目か？」
「攻めるのもいいけれど守ることも大事よ」
こう言うのである。
「けれどあんたは守らないわね」
「だから俺の流儀じゃないからな」
「だからなのね」
「ああ、俺は攻める」
あくまでそうだというのだ。
「絶対にな」
「まあそれもね」
「いいよな、それで」
「特にないわ」

荀？もそれで悪いとは言わなかった。
それどころかだ。こう言い加える程だった。
「というかあんたがね」
「俺が？」
「積極的じゃなかったら怖いわよ」
むしろその方がいいというのである。
「何でも攻めないとね」
「やっぱり俺は攻めか」
「かといっても陸遜の言う攻めとか受けじゃないから」
そうした怪しい話ではないというのだ。
「というかあれが腐女子っていうのよね」
「らしいな。草薙とかの時代だとな」
「わかるけれど趣味じゃないから」
荀？にはそうした趣味はなかった。
「私はあくまで華琳様一筋だから」
「そっちの趣味はないってか」
「そういうことよ。だからあんたはね」
「俺は？」
「そのよ。あんたを想ってる人のことよ」
「お静か」
「その人にもそうしなさい」
酒を飲みつつまた一手打つ。
「いいわね」
「それか。ちょっとな」
「お静さんにはそうしないの？」
「俺は剣一筋だからな」
だからだ。それはだという覇王丸だった。
「お静のことはな」
「あのね、剣も女の人もなのよ」
荀？の言葉が厳しいものになった。

「どっちも手に入れてなのよ」
「随分と厳しいな」
「厳しいも何も当たり前じゃない」
また言う荀?だった。
「どれか一つなんてケチなこと言わないの」
「どっちもか」
「そう、どっちも手に入れなさい」
荀?の言葉は半ば命令になっていた。
「いいわね。そうしなさい」
「また凄いことになってるな」
「そうだよな」
周りの面々は荀?が覇王丸にかなり強く言っているのを聞いてひそひそと話す。

# 第百二話　荀？、帝を甘やかすのことその六

「というか荀？さんってな」
「何か覇王丸のことになるとな」
「随分真剣に言うよな」
「男嫌いだってのに」
「確かに男は嫌いよ」
それは否定しない荀？だった。顔が必死なものになっている。
「けれどね。覇王丸の話を聞いていると」
「聞いてると？」
「それでか？」
「そうよ。お静さんのことが気になるし」
まずは彼女のことだった。そしてだ。
「覇王丸にしても。そこまで剣に一途って凄いじゃない」
「それが俺の生きる道だからな」
「だから。そう言えるのが凄いのよ」
それこそがだというのだ。
「あんた、このままいきなさいよ」
「このままか」
「そうよ。それで剣もお静さんもね」
「手に入れろっていうのか」
「そうしなさい」
こう言ってだった。また覇王丸に一手打つのだった。しかしだ。
勝負は決着がつかないまま、覇王丸も攻めたままだ。
時間になりだ。荀？は完全に落ちた部屋の水時計を見て立ち上がった。
「それじゃあね」
「今から行くのか」
「ええ、行くわ」

まさにそうだというのだ。
「そうさせてもらうわ」
「じゃあ勝負はまただな」
「ええ、またね」
「今回も中々楽しかったな」
「っていうかこの将棋って」
「中将棋だったな」
「普通のより大きいせいかやりがいがあるわね」
その大きな盤と多くの駒を見ながらだ。荀?は言う。
「駒の動きもそれぞれ独特だし」
「普通の将棋よりもな」
「面白く感じるわね」
「そうだよな」
そうした話をしてだった。覇王丸も今は将棋を止めるのだった。
そのうえでだ。荀?は宮廷に向かった。その門でだ。
今日もだ。馬岱が待っていてそのうえで言ってきた。
「ああ、今からなのね」
「そうよ。帝にね」
「御会いしに行くのね」
「そうなの。それであんたは」
「今日もここで番をしてるんだよ」
笑顔でだ。馬岱は荀?に答えた。
「司馬尉がまた来るかわからないしね」
「あいつね。言われてみればね」
「何時何してくるかわからないから」
「ええ。わかってるわ」
荀?もだ。司馬尉は全く信じていなかった。
「じゃあ御願いね」
「任せて。それにしても荀?ってさ」
「私が?どうしたの?」

「帝のこと大好きだよね」
少し探る様な笑みでだ。荀?に言ってきたのだった。
「それもかなり」
「べ、別にそんなことないわよ」
そう言われるとだ。荀?はすぐに慌てふためく顔を見せてきた。
「帝に御会いできるってそれだけでも名誉なことじゃない」
「けれどあんたの家は元々名門だし」
荀もだ。司馬氏程ではないが代々清流の名門なのだ。
「帝に御会いできるだけの官職にもあるし」
「それでもよ。帝よ」
何故か必死にだ。荀?は馬岱に言う。
「帝に御会いできるって素晴らしいことじゃない」
「名誉だっていうのね」
「そうよ。ましてよ」
ここからが本音だった。

## 第百二話　荀？、帝を甘やかすのことその七

「あんなによ」
「可愛いから？」
「物凄くね。だからよ」
それでだというのだ。
「まだ御幼少なのに。将来は絶対に」
「この国でも指折りの美人さんになられるよね」
「そうよ。だからよ」
それでだというのだ。
「今から。お世話をさせてもらって」
「あんた好みの美人さんになってもらうのね」
「そういう訳じゃないけれど」
言葉ではこう言っても顔は違っていた。
「けれど。私は帝の教育係でもあるし」
「それも自分で志願してよね」
「一目見てよ」
ついつい本音を言っていく荀？だった。
「この方はきっと、って思って」
「何か荀？がわかってきたわ」
「わかってきたって何がよ」
「いいから。帝がお待ちだよ」
馬岱は突っかかる荀？を軽くあしらって返した。
「早く行こうよ」
「そ、そうね」
言われてだ。荀？もふと気付いた。
「それじゃあね」
「行きましょう」
こうした話をしてだった。何はともあれ荀？は宮廷に入り帝の前

に出た。そのうえでだ。一礼してすぐにだった。
帝に対してあるものを出してきた。それは。
「それは」
「はい、本日お教えさせて頂く書と」
まずはそれを見せたのだった。
「今日のお茶とお菓子です」
「はじめて見るお菓子ですね」
「西洋のお茶とお菓子でして」
「西洋の？」
「はい、羅馬のお菓子です」
そこからのものだというのだ。
「西域から来た料理人とあちらの世界の者達に作らせました」
「何と、あちらの世界の者達まで入れてですか」
「そうです。いけなかったでしょうか」
「いえ、有り難うございます」
喜びを隠せない顔でだ。帝は荀?に返した。
「朕の為にそこまで」
「帝の為ならです」
その為にはと。荀?も言う。
「この程度のことは」
「ですが貴女はいつも」
こうしてだ。珍妙な菓子を持って参上してきているのだ。
それでだ。帝も感謝の気持ちを禁じ得ないのだ。それで言うのだった。
「いつも本当に」
「当然のことですから。それでは」
「はい、それではですね」
「学問をはじめましょう」
にこりと笑ってだ。帝に言ってだった。
そのうえでだ。彼女は帝に学問を教えるのだった。

その間だ。始終だった。
帝に手取り足取りだった。文字通り。
そうしてからだ。荀?は学問が終わってからだった。
帝にだ。こんなことも言うのだった。
「それではです」
「最後はですね」
「疲れた御身体を癒す為に」
「御風呂に入りですね」
「そうして全てを癒しましょう」
「身体を清める為にもですね」
「はい。それで僭越ながら」
にこにことして、かついそいそとしてだった。
荀?は帝を宮廷の風呂場に誘う。当然彼女も一緒だ。
それで二人で一糸まとわぬ姿になりだ。その背を流しながら言うのだった。

# 第百二話　荀？、帝を甘やかすのことその八

「あの、何処かかゆい場所はありませんか？」
「あっ、特に」
「ないのですね」
「ありません。では今度は私が」
「いえ、そんな恐れ多いことは」
帝が自分の身体を洗おうとするとだった。流石にだ。
荀？もそれはいいと言う。しかし帝の身体はだ。
隅から隅まで洗ってだ。そのうえで奇麗にしたのだった。
それでなのだった。荀？は帝の前から退いたのだった。
それが終わってから曹操に全てを報告する。しかしだった。
全て聞いた曹操は。少し呆れながら彼女に言った。
「幾ら何でもね」
「いけませんか？」
「やり過ぎでしょ」
こう荀？に言ったのである。
「そこまでやると」
「そうでしょうか」
「というかね。桂花の帝への態度は」
「確かに。あまりにもです」
「べたべたとし過ぎています」
曹操の傍らにいる曹仁と曹洪も言う。
「確かに帝は我が国の主ですが」
「そこまでいくと」
「お菓子まではいいわ」
そこまではいいというのだ。曹操もだ。
「けれど。お風呂はね」
「お風呂は？」

「それは」
「そうよ。お風呂はやり過ぎよ」
こう荀?に言うのである。
「一緒に入るのは」
「ですが学問で疲れたお身体も御心も癒し」
「そしてその御身体を清めるのに」
「お風呂は最適ですから」
だからいいとだ。荀?も言う。
「ですから最後に」
「まあね。桂花は元々帝に忠義が深いし」
彼女の家のそれもあるのだ。
「だから予想はしていたけれど」
「帝はとても聡明な方です」
荀?は確かに帝を敬愛している。しかしだ。
その目は曇ってはいなかった。それでこう言えたのだ。
「ですから。このまま学問を続けていかれれば」
「立派な帝になられるわね」
「はい、なります」
まさにだ。そうなるというのだ。
「ですから。学問はこのまま」
「続けていけばいいわね」
「そう思いますが」
「私もそう思うわ」
曹操自身もだ。そう見ていた。しかしだった。
そのうえでだ。彼女は言うのだった。
「それでもなのよ」
「それでもなのですか?」
「今の桂花はべたべたし過ぎよ」
帝をだ。そうし過ぎだというのだ。
「猫じゃないんだから」

「そういえばだ」
ここでだ。彼女の隣にいた夏侯惇が言ってきた。
「御主の耳だが」
「この耳？」
「それは猫の耳だな」
「それは見ればわかるでしょ」
「猫が好きなのだな」
「ええ、好きよ」
それはその通りだとだ。荀？も答える。

# 第百二話　荀？、帝を甘やかすのことその九

「その通りよ」
「猫だから猫可愛がりするのか？」
「帝はを可愛がるって恐れ多い言葉でしょ」
「そうだが。しかしだ」
まだ言う夏侯惇だった。
「貴殿は少し深過ぎるぞ」
「深いかしら」
「かなりな。だから少し自重しろ」
「それは」
「少し待て」
また言う夏侯惇だった。
「わかったな」
「だから私は特に」
「まあね。もう一人の教師の陸遜もねえ」
曹操は彼女のことも言ってだ。難しい顔になる。
「教師としては優れているけれど」
「はい、彼女は彼女で」
「問題があります」
「そうなのよね。すぐに怪しい話をはじめるし」
曹仁と曹洪に応えながらだ。曹操はさらに難しい顔になる。
「すぐに受けとか攻めとか」
「私はそんなこと絶対にお教えしません」
「貴女は直接だから」
直接的な行動自体が怪しいというのだ。
「それはそれで問題なのよ」
「ううん、そうなのですか」
「とにかく自重しなさい」

首を刺す曹操だった。
「わかったわね」
「私はそんなことはしていませんけれど」
「だからだ。せめて最後のお風呂は止めろ」
夏侯惇は直接的に言った。
「わかったわね」
「わかったわよ。それじゃあ」
「全く。桂花もね」
どうかとだ。曹操は難しい顔で述べる。
「そうしたところがあるから」
「それさえなければ」
「完璧なのですが」
曹仁も曹洪もだった。荀?のそうした猫可愛がりぶりには困っていた。
しかしだ。その中でだった。
もう一人の教育役もだ。決まったのだった。
白羽の矢を立てられたのはだ。孔明だった。
彼女は劉備からその話をされてだ。最初は驚きを隠せなかった。
「はわわ、私がですか」
「ええ、そうよ」
にこりと笑ってだ。劉備はその孔明に話す。
「頑張ってね」
「あの、私は」
「私は?何かあるの?」
「帝とは」
歳がだ。同じなのだ。
「御歳が同じですし」
「あっ、そうだったの」
「まさか。同じ歳で教育役とは」
「けれどね。帝御自身がね」

「帝がですか」
「朱里ちゃんのお話も聞いてみたいって仰ってるのよ」
「はわわ、帝御自身がですか」
そう言われるとだ。孔明もだった。
動きを止めてだ。そうして言うのだった。
「それなら」
「引き受けてくれるかしら」
「わかりました」
意を決した顔でだ。劉備に答えた。

# 第百二話　荀？、帝を甘やかすのことその十

「そうさせてもらいます」
「これで教育役が三人で揃ったわね」
「あれは三人と決まっていたのでしょうか」
「何か。鼎と同じで」
祭祀に使うだ。それとだというのだ。
「三人が理想らしいのよ」
「大抵のものがそうですね」
中国ではだ。三は昔からそうした数字なのだ。
「それでなのですか」
「そうみたい。それじゃあね」
「わかっています。では慎んで」
その役を引き受けると答える孔明だった。こうしてだった。
彼女も帝の教育役になるのだった。そうなればだ。
彼女も熱心に帝に教えることになった。そうしてだった。
帝はだ。劉備に笑顔でこう話すのだった。
「近頃ですが」
「朱里ちゃんのことでしょうか」
「彼女と」
そしてだった。他には。
「荀？と陸遜です」
「三人共ですか」
「三人に色々と教えてもらって」
満足している笑顔でだ。劉備に話すのである。
「朕もこの国を治めていけそうです」
「それだけのものが帝に」
「備わってきていると思います」
そうなっているとだ。劉備に話すのだった。

「彼女達のお陰で」
「そうですか。ではその御言葉は」
「彼女達に伝えていいでしょうか？」
「そうして下さい」
帝は笑顔のままだった。
「是非共」
「はい、それでは」
「それにしても。今は大変な時期ですが」
戦乱は終わったがだ。まだ不穏な者達は残りだ。
しかもまだ国は安定していない。それは間違いなかった。
「それでも。人は多いですね」
「はい、あちらの世界からも来てくれていますし」
「では。劉備よ」
帝は劉備にも声をかけた。
「これからも宜しく御願いしますね」
「わかりました」
笑顔で応える劉備だった。
「私もやらせてもらいます」
「そうして下さい」
こうしたやり取りも行われるのだった。帝も今大きく羽ばたこうとしていた。
しかしそれを聞いてだ。司馬尉はというと。
苦い顔になりだ。己の屋敷でこう言うのだった。
「帝は暗愚であって欲しいけれど」
「帝が暗愚であればですね」
「そこに付け込めるからですね」
「その通りよ」
まさにそうだとだ。妹達にも話す。
「だからだけれど」
「しかし今はです」

「我等は宮廷に警戒されていますし」
もっと言えば劉備達にだ。そうなっているのだ。
「ですから仕掛けられません」
「忌まわしいですが」
「そうね。今は様子見しかないわ」
苦い顔でだ。司馬尉もこう言うしかなかった。
「そうするわよ」
「はい、それでは」
「そうしましょう」
「それならそれでやることがあるし」
これだけで諦める司馬尉ではなかった。それでだ。
妹達にあらためてだ。こんなことを言ったのだった。
「定軍山よ」
「あの山ですね」
「あの山において」
「まずはあの者達を消しましょう」
このことにだ。重点を置くというのだ。
「そうするわ。いいわね」
「わかりました。それでは」
「手を打っておきましょう」
「既に網は仕掛けているわ」
司馬尉の顔に笑みが宿った。冷酷な笑みがだ。
その笑みでだ。こう話したのだった。
「けれどその網をね」
「さらにですね」
「幾重にも仕掛けていくのですね」
「そうするわ。そうして確実にね」
「あの者達を消すのですね」
「まずは」
「堤を崩すには」

どうするのか。司馬尉は例え話をはじめた。
「まずは穴を少し開けるのよ」
「さすればそこから水が入りですね」
「堤全体を脅かしやがては」
「堤を全て壊す」
「そうなるからですね」
「今がまさにそれよ」
そのだ。巨大な堤に穴を開ける時だというのだ。
「わかったわね」
「はい、それでは」
「その穴を確実に開けましょう」
こうした話をだ。三姉妹は密かに話していた。
そのうえでだ。また怪しい動きがはじまろうとしていたのだった。

第百二話　完

２０１１・８・１１

# 第百三話　公孫賛、やはり忘れられるのことその一

第百三話　公孫賛、やはり忘れられるのこと

夏侯惇は都の兵達の訓練にあたっていた。そこにだ。
高覧も来てだ。こう彼女に尋ねてきた。
「寂しいみたいね」
「そうだな。どうもな」
難しい顔になってだ。彼女自身もそのことは否定しなかった。
そのうえで槍を整然と突き出して訓練をしている兵達を見てだ。
こう言うのだった。
「秋蘭がいないとな」
「やはりそうなのね」
「そうだ。よくあることだが」
一方が出陣してもう一方が残ることはだ。二人ではだ。
「しかし何度経験してもだ」
「寂しさは消えない」
「帰ったら飲む」
夏侯惇は言った。
「二人でな」
「それで再会を祝するというのね」
「そうする。絶対にな」
こう高覧に話すのだった。
「いつも通りだ」
「いいことね。姉妹の親睦を深めるのは」
「確かにね」
張?も来てだ。話に加わる。
「夏侯姉妹は相変わらず仲がいいようね」
「しかし喧嘩もするぞ」

それもあるとだ。夏侯惇は張?達に話す。
「いつも仲がいい訳ではないぞ」
「あら、そうなの」
「喧嘩をする時もあるの」
「そうだ。ある」
その通りだとだ。夏侯惇は二人にまた話した。
「どうしてもな」
「そうなのかしら」
「本当に」
「あるぞ。前もだ」
何があったのか。二人にさらに話す。
「些細なことで喧嘩をしたしな」
「些細なこと?」
「というと?」
「何でもない。昼飯に餃子がいいか焼売がいいのか」
そのどちらがだというのだ。
「それで喧嘩をしたのだ」
「本当に些細な理由ね」
「確かにね」
その通りだとだ。高覧と張?も言う。
「そんなのどっちでもいいんじゃないかしら」
「私はそう思うけれど」
「そうだ。それで喧嘩をしてだ」
どうなったかというのだ。それから。
「華琳様に叱られた。下らないことで喧嘩をするなとな」
「当然ね。曹操さんが怒るのも当然よ」
「怒って当然よ」
「そうだ。それで仲直りとしてだ」
それはちゃんとしたというのだ。
「二人で買い物に行ったのだ」

「で、そこでまた喧嘩をしたのね」
「服か何かで」
「わかったのか」
二人にそう言われてだ。夏侯惇はまずは目を少し見開いた。
そのうえでだ。こう二人に返した。
「よくわかったな」
「何かね。お決まりの展開だから」
「予想はついたわ」
「そうか。予想通りか」
「それでどうなのよ」
「服なの？それとも装飾品？」
「服だ」
それで揉めたとだ。夏侯惇は二人に答えた。
「華琳様に合うのはどの服かということでな」
「曹操さんも大変ね」
「本当にね」
そんなことでまた喧嘩になったと聞いてだ。二人はだ。
呆れてだ。こうそれぞれ言うのだった。

# 第百三話　公孫賛、やはり忘れられるのことその二

「折角の仲直りの買いものでまた揉めるって」
「本末転倒じゃない」
「華琳様に合うのは黒か青か」
服の色で揉めたというのだ。
「どちらがいいのかだ」
「で、それでなの」
「喧嘩が再発したのね」
「今度はだ」
服屋で喧嘩をしているそこでだというのだ。
「たまたま店に麗羽様が来られた」
「って私達の主じゃない」
「麗羽様がなの」
「そうだ。それで私達の喧嘩を止められてだ」
そうして。それからだった。
「どちらも買われて私達に手渡してくれた」
「つまりどっちも曹操さんに似合う」
「そういうことね」
「しかも私達の手柄にしてくれた」
袁紹が気を利かせてだ。そうしたというのだ。
「それで喧嘩は終わった」
「何ていうかね。それってね」
「子供みたいだけれど」
高覧も張?もだ。夏侯惇の話を聞き終えてこう言った。
「そんな下らない喧嘩をするのね、貴女達って」
「そういうことがあるのね」
「だからいつも仲がいいという訳ではない」
まさにそうだという夏侯惇だった。

「これでわかってくれたか」
「ええ、わかりたくはないけれどね」
「わかったわ」
高覧と張?はさらに呆れた声で応えた。
「まあ喧嘩する程ね」
「そういうことね」
「そういう訳ではないが」
それは否定しようとする夏侯惇だった。しかしだった。
ここでだ。ふとだった。張?が言ったのだった。
「あれっ、兵の動きがいいわね」
「そうね」
高覧もそのことに気付いた。彼女達が見てもだ。
「私達三人の受け持ちの兵達だけじゃなくて」
「他の兵も」
「黒梅姉さんがいるにしてもね」
「その他の兵達の動きもいいじゃない」
彼等もだ。そうだというのだ。
「特に騎兵の動きが」
「白馬も多いし」
「あれも黒梅姉さんかしら」
「姉さんが訓練しているのかしら」
「呼んだかしら」
しかしだ。ここでだった。
その?義が来てだ。三人に言ってきたのだった。
「何か私のこと話してたわよね」
「ええ、そうだけれど」
「騎兵を動かしてるのは姉さんなの?」
「いえ、違うわ」
?義がそのことを否定する。
「あの白馬の騎兵達よね」

「そう、あの白馬の騎兵達は」
「姉さんが訓練してると思ったけれど」
「違ったのね」
「そうだったのね」
「そうよ。私は今は騎兵は動かしてないから」
また別の兵達の訓練をしているというのだ。
「あれは違うわね」
「じゃあ一体誰が？」
「誰が動かしてるのかしら」
「あれではないのか？」
ここでだ。夏侯惇がだ。

# 第百三話　公孫賛、やはり忘れられるのことその三

騎兵達の先頭にいるだ。赤い髪と服の女を指差した。
彼女を指差してだ。三人に尋ねた。
「あの白馬に乗っている女ではないのか？」
「あれ誰？」
「誰かしら」
「知らないわね」
？義はだ。誰も彼女を知らなかった。
それでいぶかしむ顔になってだ。こう言うのだった。
「見たことないわよね」
「指揮は上手みたいだけれど」
「名のある人物かも知れないけれど」
「誰なのかしら」
「華琳様の家臣ではないな」
夏侯惇はこのことは断言できた。
「あの様な者は知らん」
「我が陣営でもないわね」
？義が言う。
「見たことのない顔ね」
「じゃあ一体誰なのかしら」
「一体」
彼女達は誰も知らなかった。そしてだ。
訓練全体を見ている董白と軍師役の諸葛勤もだ。こう言う始末だった。
「あの白馬の隊を率いてるのは誰かしら」
「私も知らないです」
諸葛勤はその女を見ながら董白に答える。
「優れているのですが」

「かなり位の高い士官ね」
董白にもそれはわかった。
「けれど。あそこまでの隊を率いる士官ともなると」
「他の陣営の方でも」
「知らない筈がないけれど」
「誰なのでしょうか」
どうしてもわからずにだ。彼女達も首を捻るのだった。
そしてだ。それは。
後でその話を聞いた厳顔もだ。こう言ったのだった。
「あの訓練で白馬を率いていたのは誰じゃ」
「ああ、あの話じゃな」
「そう、あの話じゃ」
こうだ。すっかり親しくなった黄蓋にも話す。二人は今孫策の屋敷の中で酒を飲みながら話している。
「赤い髪に白い鎧の女というが」
「ううむ、知らんな」
「御主も知らんな」
「聞いたこともない」
黄蓋もだ。いぶかしむ顔で言う。
「そうした者はな」
「そうじゃな。全くのう」
「そうした者がいるのか？」
「隊を率いるまでの者に」
二人も全く気付いていないのだった。そしてこの話はだ。
何時しか都市伝説になってだ。あちらの世界から来た者達の間でも話題になっていた。
守矢はだ。こう主張した。
「悪霊だな、それは」
「悪霊が出てるってんだな」
「そうだ」

その通りだとだ。漂に話す。二人は今は札をして遊んでいる。そうしながらだ。彼は漂に対して自分の説を主張するのだった。
「おそらく前の戦で死んだ者がだ」
「化けて出てなんだな」
「軍を率いているのだ」
そうしているというのだ。
「おそらくはまだこの世に未練がある」
「兵を率いたいんだな」
「若しくは戦をしたいか」
真剣な顔でだ。守矢は最悪の事態を想定し述べていく。
「そう考えてのことだ」
「まずいな、そりゃ」
話を聞いてだ。漂も珍しく深刻な顔になる。
「悪霊だったらな」
「成敗するか」
「それが一番だろうな」
漂は真面目な顔で話す。
「何かしてからじゃ遅いからな」
「うむ、その通りだ」
「あの、ですが」
その二人にだった。響が話してきた。見ればあかりも一緒だ。

## 第百三話　公孫賛、やはり忘れられるのことその四

「本当に悪霊でしょうか」
「そんな感じはせんで」
あかりも言う。
「全然な」
「違うのか」
「悪霊じゃないのか」
「かといっても妖怪の気配も感じへん」
それもないというのだ。
「そやからどっちでもないで」
「では何だ」
「悪霊でも妖怪でもないってなるとな」
「普通の人ちゃうか？」
あかりはこう見立てた。
「それが何か気付かれてへんだけちゃうか？」
「だとしたら誰だ」
「随分と影の薄い奴だな」
守矢と漂は気付かないまま話していく。
「それなりに優れている者だな」
「それでも誰も気付かないなんてな」
「普通は有り得ないことだが」
「だよな。この世界にいる奴で影の薄い奴なんていないだろ」
二人も気付いていないのだった。
「本当に誰なんだろうな」
「一体な」
二人はだ。全くだった。
誰なのか気付いていない。それでだ、
響もだ。こう言うのだった。

「あの、誰でしょうか」
「それが謎や」
あかりは推理も働かせたがだ。それでもだった。
彼女にしても腕を組んでいぶかしむ顔になってだ。首を捻るだけだった。
「どの陣営の人も知らんちゅうし」
「私達の世界の誰でもないみたいだから」
響はこのことについても言及した。
「そうなると」
「わからへんな。こっちの世界に来てる奴ってな」
誰もがだ。どうかというと。
「濃い奴ばかりやさかいな」
「わからない筈がない」
「そういうことだよな」
守矢も漂もだった。彼等の世界から考えても見当がつかなかった。
「誰なのか」
「結局謎は謎のままか？」
「まさかうちでもわからんてな」
あかりにとってもだ。戸惑いを隠せないことだった。
「こんな謎な話他にないで」
「刹那やオロチが関わっている筈もない」
「やっぱり謎は謎のままだよな」
こう言ってだ。守矢も漂もだった。
謎を解明できなかった。そしてだ。
郭嘉もだ。自分で捜査をしながらだ。眼鏡の奥の目を妙なものにさせるばかりだった。
「わからないわ。本当に誰なのか」
「そうですよね。もう謎が謎を呼んで」
一緒にいる張勲も顔はにこやかだが声は少し困惑していた。
「わからないですよね」

「赤い髪で白い鎧の女ですよね」
「目撃された姿ではそうですよね」
「そんな人いますか？」
「私は全然知らないです」
「私もです」
それぞれの陣営の軍師達もこう言うのだった。
「こちらの世界の方でもあちらの世界の方でもない」
「しかも目撃例自体は多いですし」
「都の各地に出没していますね」
「それがさらにわかりません」
二人は都の中を歩いていた。そうして手掛かりを集めながら話しているのだ。
「美羽様は今もお化けだと言っておられます」
「左様ですか」
「それで怖がってお部屋から出られようとしません」
相変わらずだ。袁術はそうした存在を恐れているのだ。

# 第百三話　公孫賛、やはり忘れられるのことその五

「御不浄に行かれたりお風呂の時は」
「どうされていますか？」
「私がいつも付き添っています」
何だかんだでだ。張勲は忠臣であるのだ。
それでだ。そうしているというのだ。
「御休みの時も同じ褥にいますよ」
「えっ、それは酷い」
郭嘉はここまで話を聞いてだ。驚愕した顔になってだ。
そのうえでだ。こう張勲に言ったのである。
「私がいますから。そうしたことは」
「駄目ですよ。凛さんは曹操さんの家臣ですよね」
「ですがそれでも」
「美羽様は私の主ですから」
独占するとだ。張勲はにこやかな顔で主張する。
「私が御護りしますので」
「私も。できれば」
郭嘉は必死にだ。張勲に主張する。
「美羽様を御護りしたいのですが」
「どうしてもですか？」
「どうしてもです」
言い切った。見事にだ。
「私達はそれこそ心で一つになっていますから」
「けれど凛ちゃんは私とも」
話がさらに複雑なものになる。
「できてるじゃないですか」
「あの、そうした表現をされると」
「美羽様がですね」

「怒られますので」
実際にだ。袁術の郭嘉への独占欲は尋常なものではない。
それでだ。郭嘉も言うのだった。
「ですから」
「わかってます。冗談ですから」
「冗談ですか」
「美羽様ってすぐに慌てられるから可愛いんですよ」
にこりと笑って嗜虐性を見せている言葉だった。
「ですからあえてですね」
「趣味が悪くないですか？」
「そうですか？別にそうは思わないですけれど」
「私はそうしたことは」
しない。それが郭嘉だった。
「何かこうですね」
「一緒に遊んでいたいのですね」
「はい、そうです」
まさにそうだというのだ。
「美羽様とは本当に運命めいたものを感じますし」
「そうですね。私達もですね」
「七乃殿と私もですか」
「私と美羽様もです」
にこにことしながらだ。こう話す張勲だった。
「非常にいい感じで」
「ううむ、言われてみれば確かに」
「それなら三人で楽しみませんか」
「楽しむべきですか」
「そうしませんか？」
これが張勲の郭嘉への提案だった。
「こちらの世界でも」
「こちらの世界でもといいますと」

「多分。私達は色々な世界で一緒ですから」
「そういえば美羽様とは」
そのだ。彼女はというと。
「ずっと一緒だった様に思えます」
「私もです、田舎町でも」
「それと舞台では特に」
「三人揃うと特にですね」
「何かずっと一緒にいたような」
そうした感じだというのだ。そうした話もしつつだ。
その謎の女を捜す。しかしだった。
二人は結局見つけられなかった。そしてだ。
程?は安楽椅子に座りながら寝ていた。そしてだ。
起きてからだ。こう言ったのだった。
「そんな人は知りません」
「知らないのね」
「はい、心当たりもありませんし」
韓浩への言葉だ。

# 第百三話　公孫賛、やはり忘れられるのことその六

「それにです。赤い髪に白い鎧ですね」
「目撃例ではそうなってるわね」
「それで隊を率いるだけの方になると」
「普通に見つかるけれど」
「しかし心当たりがありません」
程？の頭の中でもだった。
「推理をしようにもです」
「しようがないのね」
「ただ。悪霊やそうした存在ではないですね」
このことは確かだというのだ。
「それならば確かにあかりちゃんやミナさんが動かれますから」
「それじゃあ一体」
「どうしてもわからないのです」
程？もだ。眉を顰めさせるしかなかった。
「そうした方がおられるかどうか」
「ううん、何か謎が謎を呼んでるわね」
「全くです。こんなことがあるとは」
「世の中ってわからないわね」
「事実は小説より奇ですね」
「まあそれでよ」
ここでだ。今度は程？の頭の人形が言ってきた。
「話はこれ位にしてよ」
「どうするというのですか？」
程？は己の頭上の彼を見上げながら尋ねた。
「これから」
「一杯やらねえか？」
こんなことを提案するのだった。

「ちょいとよ。暇だしな」
「今はお昼ですよ」
「酒は夜だってのか」
「はい。昼から飲んではいけません」
程?はいつもの顔になって宝?に話す。
「今はです」
「じゃあ何を飲むんでい」
「お茶ですね」
それだというのだ。
「皆さんと一緒にお茶にしましょう」
「そうかい。じゃあ茶にしようか」
「はい。ではです」
「あのね。前から思ってたけれど」
一応二人になっている程?達を見てだ。韓浩は突っ込みを入れた。
「腹話術でしょ」
「違いますよ」
あくまでしらを切る程?だった。
「宝?はあくまで宝?です」
「そうなの?」
「おっ、この姉ちゃん疑ってるのかい?」
「そうみたいですね」
完全に二人になって話をする。
「困ったことです」
「その方針でいくのね」
「方針じゃないですよ」
程?は不満そうな目でそれを否定する。
「私達は別の人格なんですよ」
「よくわかってくれよ」
「じゃあそういうことにしておくわ」
韓浩も深く突っ込むことは止めた。

「それでとりあえずだけれど」
「お茶ですね」
「時間のある面々も呼んでよね」
「はい、そうしましょう」
「じゃあね。皆で飲みましょう」
このことはまとまってだ。そうしてだ。
程？達はお茶を飲みはじめた。しかしだ。
そのお茶会においてだ。またしてもだった。
文醜がだ。怪訝な顔で言い出した。
「なあ。さっきから思ってるんだけれどな」
「そうだよな。何かな」
「一人多くないですか？」
火月と蒼月も言う。

# 第百三話　公孫賛、やはり忘れられるのことその七

「席一つ多いよな」
「明らかに」
「なあ程？」
文醜は主催者に対して尋ねた。
「誰か間違えて呼んだってことはないよな」
「ない筈ですけれど」
程？自身もだ。こう言うのだった。
「ですが」
「それでも席一つ多いよな」
「不思議です」
程？はここでも目を顰めさせる。
「何故席が一つ多いのでしょうか」
「こんな話がありますよ」
真吾が言い出す。
「皆いる筈なのに席が一つ多い。つまりは」
「怪談ね」
顔良は彼のその話に突っ込みを入れた。
「それでその席によね」
「あれですよ。死んだ筈の人がって」
「んっ？じゃああれかよ」
文醜がここで言う。
「今ここにお化けか幽霊がいるのかよ」
「そうじゃないんですか？」
「だからそれお嬢が違うって言ってるだろ」
十三がそのことは違うと話す。
「今都に化け物とか幽霊はいないってな」
「あっ、そうですね」

言われてだ。それに気付いた真吾だった。
「それじゃあどうして今」
「まさか」
董白がここで気付いた。
「華雄がいるのかしら」
「私のことか？」
ここでその華雄が出て来た。
「今から都の見回りなので茶会にはいないが」
「あら、そうだったの」
「そうだ。だから席は最初からないが」
そうだというのだ。
「それは言っている筈だが」
「そうなのね。そういえば華雄は」
彼女はどうなのか。董白は言った。
「正直目立つことは目立つから」
「そうだ。私は長生きするしな」
「何だかんだで生き残るしね」
「だから問題ない」
そうだというのだ。
「しかし。私が見てもな」
「席が一つ多いわね」
「おかしい」
真剣な顔で言う華雄だった。
「これは何かあるな」
「そうよね。前からこんな話になってるけれど」
「やはり都では怪異が起こっている」
「あのオロチやアンブロジアでないことが救いですが」
程？は彼等でないだけましだと言った。
「しかしおかしなことです」
「全くだぜ。今もこうして席が多いしな」

「妙な話です」
また言う火月と蒼月だった。
「誰がいるのか」
「それが問題ですね」
こうした話をしてだった。彼等は茶を飲んでいた。
しかしその一つ多い席についてはだ。誰もが不思議に思っていた。
そしてだ。このことはだ。
劉備達の間でもだ。話題になっていた。
馬岱がだ。こう張飛に話していた。
「不思議よね。誰も知らない赤い髪の女って」
「誰なのだ？」
張飛もだ。このことについて言う。
「本当にお化けかも知れないのだ」
「そういえばさ」
ここでこんなことを言う馬岱だった。

# 第百三話　公孫贇、やはり忘れられるのことその八

「あっちの世界には透明人間っているらしいけれど」
「それなのだ？」
「けれど赤い髪と白い鎧だから」
「姿は見えるみたいなのだ」
「だから透明人間じゃないの？」
馬岱は首を捻っていた。
「姿を自由に出したり消せる」
「むう、そんな奴がいるのだ」
「だから見えないとか」
こう言い出すのだった。
「そんな感じじゃないかしら」
「まずいのだ。そんな奴がいるとなると」
どうなるか。張飛は困った顔になってこんなことを言いだした。
「鈴々の御飯やおやつをこっそりと取られるのだ」
「覗きとかされたら大変だし」
馬岱はこのことを心配した。
「透明人間なんてどうすればいいのよ」
「姿が見えない相手なのだ」
「そうよ。だから厄介よ」
「ううむ、しかしなのだ」
「しかしって？」
「姿は見えなくても気配は感じる筈なのだ」
彼等ならばだ。それも感じられることなのだ。
「だから気配を感じたその時に」
「やっつければいいのね」
「そうするべきなのだ」
こう話すのだった。しかしだ。

気配もだ。誰も感じなかった。
呂布もだ。陳宮にこう話す。
「こんなこと有り得ない」
「ええと、数は足りてますよね」
「けれど一人気配を感じない」
こうだ。宮廷で帝の前に一同が揃っている時に話すのだった。
「確かに官位を持っている人間は皆いる」
「はい、そうですよね」
「けれど一人気配を感じない」
「どういうことでしょうか」
「だから有り得ない」
また言う呂布だった。
「本当に」
「ううん、また謎が増えてますね」
「謎は一つ」
呂布は言う。
「多分ここに赤い髪の女がいる」
「あの女がいるのにですね」
「そう、いる」
それは間違いないというのだ。しかしだった。
「けれど」
「姿が見えないのです」
「ねねにも見えない？」
「見えないです」
陳宮は必死に目を凝らす。だがそれでもだった。
姿が見えずにだ。こう言うのだった。
「恋殿もですね」
「そう。見えない」
呂布にもだ。その赤い髪の女が何処にいるのかわからなかった。
「本当に有り得ないこと」

「そうですよね」
「若しかして本当に」
呂布はここで言った。
「透明人間」
「それかも知れないのです」
彼女もこう言うのだった。とにかくだ。
その謎の女の存在はわからなかった。だがその中でだ。
劉備はだ。ある者に声をかけていた。
「ねえ白々ちゃん」
「だから私は白蓮だ」
こう返す公孫賛だった。
「全く。何度間違えるのだ」
「あっ、そうだったの」
「そうだ。しかし最近だ」
公孫賛は腕を組んで言う。

# 第百三話　公孫賛、やはり忘れられるのことその九

「どうも妙な噂が広まっているな」
「そうみたいね」
劉備もその話はちらりと聞いていた。
「誰なのかしら」
「全くだ。訳がわからない」
また話すのだった。
「しかしだ」
「怪しい人間がいるのなら」
「見つけ出して誰なのかはっきりしないとな」
「やっぱり問題よね」
「そうだ。本当に誰なのだ」
このことにだ。疑問を感じながらだ。二人は話すのだった。
しかしだ。噂はさらに広まりだった。
都中でだ。誰もが噂する様になっていた。
そうした話の中でだ。リョウが話す。
「ひょっとして藤堂のおっさんじゃないのか？」
「ああ、そういやあのおっさんどうしてるんや？」
ロバートは彼のことを今思い出した。
「こっちの世界に来てるんか？」
「いや、それは知らないけれどな」
こう返すリョウだった。
「けれど俺達も全員来ているからな」
「あのおっさんが来ててもやな」
「不思議じゃないだろ」
これがリョウの見立てだ。
「あの人が来ててもな」
「そやな。わい等がおるんやったら」

「いるだろ、多分」
「けれどよ」
ここでユリがこのことを話す。
「赤い髪の女の人よ」
「あっ、そうだったな」
「そういう話やったわ」
リョウとロバートはこのことを思い出した。
「だったら違うか？」
「藤堂のおっさんやないか」
「じゃあ本当に」
「何処の誰や」
「誰かいたわ」
キングが言う。
「ほら、幽州に誰かいたでしょ」
「いたか？」
「記憶にないで」
リョウもロバートもだ。幽州と聞いてもだった。
首を捻りだ。こう言うばかりだった。
「確かあそこは袁紹さんが治めてるだろ」
「わい等もおったけれどな」
「誰かいなかったかしら」
また言うキングだった。
「本当に」
「いました？」
ユリも首を捻る。
「本当に誰か」
「いたような気がするのよ」
キングはこう言うが何処の誰かはわからなかった。
「本当にね」
「その誰かか？」

「今回の騒ぎの元凶は」
それは薄々感じていた。しかしだった。
どうしてもわからずだ。彼等も首を捻るばかりだった。
わからないままだ。結局だった。
この騒動はうやむやのうちに消えた。そうして。
公孫賛はだ。ふとだ。
夏侯惇にだ。こうぼやくのだった。
「全く。最近な」
「誰だ、貴殿は」
「だから公孫賛だ」
名乗らなければならなかった。彼女は。

# 第百三話　公孫賛、やはり忘れられるのことその十

「だから覚えていないのか」
「いや、最初から知らないのだが」
「何故だ。前の訓練も一緒だったではないか」
「そうだったのか」
言われてもだ。どうしてもぴんと来ない夏侯惇だった。
それでだ。また言うのだった。
「それで何なのだ？」
「最近怪しい噂が出ているが」
「うむ、赤い女だな」
「そうだ。赤い髪の女だが」
「何者なのだ、一体」
「見れば貴殿は」
夏侯惇はここでその公孫賛を見た。見ればだ。
その髪はだ。赤かった。それを見て言うのだった。
「まあ違うな」
「違う？」
「いや、貴殿は今こうしてここにいるしな」
「だから違うというのか」
「そうだろうな。しかしおかしな話だった」
「赤い髪の。謎の女だな」
「正体不明だった」
夏侯惇が言った。
「結局都から消えた様だな」
「ううむ、私も噂は聞いたが」
「わからなkったか」
「全くだ」
そうした話で収まったのだった。結局赤い髪の女の正体はわから

なかった。
そしてだ。張飛は能天気に馬超に話した。
「そういえばなのだ」
「んっ、どうしたんだよ」
二人で飲み食いしながらだ。話していた。
「公孫賛の髪は赤いのだ」
「ああ、そうだよな」
「しかも鎧は白なのだ」
「あれ結構似合ってるよな」
二人で餃子や焼売を食べながら話す。
「あの人にな」
「全くなのだ。それで胸も大きいのだ」
「だよな。結構スタイルもよくてな」
「けれど何故かなのだ」
「あの人目立たないんだよな」
「どうしてなのだ？あれは」
「やっぱりあれだろ」
馬超が言う。
「個性がないんだろうな」
「個性なのだ？」
「だからだろうな」
馬超は今はラーメンをすすっている。
「実際にいても気付かないだろ」
「そういえばそうなのだ」
「何かな。本当に個性がないんだよ」
「そういえば確かになのだ」
「あたしとか馬鹿だからな」
ある程自覚はしているのだった。
「それで筋肉だけだしな」
「鈴々もなのだ」

「それはそれで目立つんだけれどな」
「けれどええと、白何なのだ？」
「白香じゃなかったか？」
二人は公孫賛の真名を忘れてしまっていた。
「何かそういう名前だったよな」
「よく覚えてないのだ」
「まあとにかくあれだよ」
馬超はここでは少し強引に張飛に話した。
「地味っていうかな」８
「個性がないのだ」
「そうだよ。やっぱり個性って大事だよな」
このことは正しかった。真名を忘れていても。
「人間覚えてもらわないとどうしようもないしな」
「結局はそれなのだ？」
「だろうな。しかし赤い髪の女ってな」
「誰だったのだ？一体」
「あたしにはわかんね」
「鈴々もなのだ」
二人にも気付かないことだった。
「誰なのだ？本当に」
「急に出て来て急に消えたけれどな」
「本当に謎の奴なのだ」
「全くだよな」
こうした話をしてだった。二人はいぶかしむばかりだった。誰もがその赤い髪に白い鎧の女についてはわからずじまいだった。

第百三話　　完

2011・8・13

# 第百四話　あかり、闇を感じるのことその一

第百四話　　あかり、闇を感じるのこと

夏侯淵率いる軍はだ。まずはだ。
洛陽から北に向かった。しかしだ。
その途中でだ。彼女は全軍に命じたのだった。
「よし、あの道に入るぞ」
「えっ、あの道かよ」
「あの道は確か」
ラルフとクラークが彼女が向かうという道を見て言った。
「南西に行くんだろ？」
「北じゃない筈だけれどな」
「詳しいな」
夏侯淵は二人がその道について知っているのを見てだ。こう言った。
「この道について既に知っていたか」
「ああ、この国の地理はな」
「おおよそ頭に入れた」
そうしたとだ。二人は夏侯淵に話す。尚二人は徒歩で夏侯淵は馬上にある。そのうえで上と下から言葉を交えさせているのである。
「だからな。この道もな」
「わかるのさ」
「流石だな」
夏侯淵は二人の言葉を聞いて納得した様に頷いた。
そのうえでだ。こう言うのだった。
「だが決まっていたのだ」
「最初からか」
「都を出る前にもうなんだな」

「そうだ、決まっていた」
「だったな。確かにな」
「それが今なんだな」
二人はここで思い出したのだった。あのことを。
それでだ。二人は納得した。
そしてだ。レオナもこう言うのだった。
「わかりました」
「貴殿もそれでいいのだな」
「わかっていましたので」
だからだ。納得しているというのだ。
「作戦のことは」
「作戦。そうだな」
「面白い作戦になりそうですね」
秦兄弟もここで言う。
「今度の作戦もな」
「実に興味深いです」
「貴殿等もそれでいいな」
夏侯淵は二人にも尋ねた。
「それで」
「だからここにいる」
「そうでなければ帰っています」
何気に毒舌を発揮する崇秀だった。そうしてだ。
典韋もだ。夏侯淵に微笑んでこう話す。
「では秋蘭様、今からですね」
「いよいよ向かうとしよう」
「そうしましょう、あの山に」
「それでだが」
典韋に話してからだ。夏侯淵は。
ガルフォードに顔を向けてだ。こう言ったのだった。
「では。若しもの時はだ」

「ああ、一気に駆けてだな」
「そうしてくれるな」
「わかってるさ」
端整な微笑みで。ガルフォードは夏侯淵の言葉に応えた。
そのうえでだ。こう言うのだった。
「じゃあ行こうか」
「うむ。ではな」
「しかしな。この顔触れもな」
「中々独特だな」
その道に入り進みながらだ。ラルフとクラークが話す。
「夏侯淵さんに典韋ちゃんだけでなくな」
「俺達もいるからな」
「そうだな。面白い顔触れだ」
「退屈はしません」
崇雷も崇秀も悪意はない。
「料理の振るいがいもある」
「後で皆で杏仁豆腐はどうでしょうか」
「杏仁豆腐ですか」
杏仁豆腐と聞いてだ。典韋は。
少し考える顔になってからだ。こう仲間達に話した。
「それでは今度ですけれど」
「今度？」
「今度というと？」
「はい、次のお食事の時でもいいですけれど」
今度といっても暫く先とは限らなかった。
「その時にでも一緒に作りませんか」
「ああ、面白いな」
崇雷が彼女の話に乗った。

## 第百四話　あかり、闇を感じるのことその二

「では今夜にでもな」
「二人で凄い杏仁豆腐を作りましょう」
「料理には自信がある」
崇雷の特技である。
「少なくともジェニーやビリーには負けないからな」
「あの二人はな」
二人の話にはだ。夏侯淵も顔を曇らせて言うのだった。
「あれだな。姉者や麗羽様に似たものを感じるな」
「あと関羽ちゃんだな」
「あの娘も料理はな」
こちらの世界の人間ではこの三人が最凶だった。
「壮絶なものがあるな」
「尋常じゃないものがあるからな」
「確かビリー殿とジェニー殿は」
どうなのかとだ。夏侯淵は話す。
「イギリスという国に生まれているな」
「俺達の時代で料理が最もまずい国だ」
「最悪の国です」
秦兄弟の今の言葉は毒舌ではなく事実だった。
「どんないい素材でも完全に殺してしまう」
「料理の才能は皆無です」
「そうした国なのか」
「ああ、俺達アメリカ人もあまり人のことは言えないだろうがな」
「あの国はダントツだな」
ラルフにクラークも太鼓判を押した。悪い意味で。
「とにかくな」
「あの国に美味いものは滅多にないからな」

「俺の時代でもそうだったな」
ガルフォードも言う。
「あの国に美味いものはなかったらしいな」
「ううむ、イギリスとはどういう国なのだ」
夏侯淵は仲間達の話を聞いて馬上で眉を顰めさせる。
「美味い料理はないのか」
「軍の携帯食もです」
今度はレオナが話す。
「食べられたものではありません」
「あの。普通進軍中の食事はです」
それはどうなのかとだ。典韋が話す。
「粗食が普通ですが」
「それすらない場合もある」
夏侯淵も話す。
「糧食は重要だがな。なくなる場合もあるからな」
「そうですよね。ですから」
「その糧食もか」
「酷いものです」
レオナはまたイギリス軍のその携帯食について話す。
「あれを食べる位ならアメリカ軍のレーションセットの方がずっとましです」
「あれも酷いけれどな」
「イギリス軍は別格だからな」
ラルフとクラークはそのレーションについても話す。
「とにかくイギリスもイギリス人もな」
「舌は壊死してるようなものだからな」
「あの連中に料理の才能はない」
「正直。お薬だけを飲んでいればいい位です」
秦兄弟も辛辣に話していく。
「サプリメントだったな」

「あれを飲んで済ませた方が味がいいです」
薬以下だというのだ。イギリスの料理は。
そうした評価を聞いていってだ。夏侯淵はあらためてこう言った。
「若しかすると姉者以上なのか。イギリス人は」
「否定はしないな」
「その通りだからな」
「そうした国もあるのだな」
ラルフとクラークの話も聞きながらだ。夏侯淵はそうしたことも知った。
そのうえで彼等は定軍山に向かうのだった。
その彼等をだ。あの白装束の者達が影から見ていた。そうしてだった。
そこから消えてだ。すぐにだった。
闇の中でだ。于吉達に報告するのだった。
「やはりです」
「定軍山に向かっています」
「一見北に向かうと見えましたが」
「進路を変えました」
それを聞いてだ。于吉とそして彼と共にいる左慈はだ。
邪な笑みを浮かべながらだ。こう言ったのだった。
「予想通りですね」
「そうだな」
二人でこう言い合う。

## 第百四話　あかり、闇を感じるのことその三

「そうすると思っていましたが」
「やはりあの山に向かうか」
「それではですね」
「まずはあの連中からだ」
そしてだった。二人は。
それぞれ顔を見合わせてだ。こんなことも言った。
「司馬尉さんにお話しますか」
「あちらの世界の連中にもな」
「そうしてですね」
「それから」
こう話してだった。彼等は闇の中から一旦消えた。そしてだ。
すぐにだ。まずは刹那がだ。山の中で言うのだった。
「この山だな」
「ああ、そうだ」
社が彼の横に来て話す。
「前から俺達が根城にしてるここだよ」
「そうか。この山でだな」
「ここに来る奴等を始末するってことだ」
「わかった」
ここまで聞いてだ。刹那は静かに頷いた。
そのうえでだ。こうも言うのだった。
「では来た奴等をだ」
「斬るんだな」
「そうする」
表情はなく口調も淡々としている。しかしだ。
そこから出ているものはひらすら邪悪だった。その邪悪の中でだ。
彼はだ。こうも言うのだった。

「そしてその命を生贄にしてだ」
「常世を出すんだな」
「出す機会は何時でもいい」
時は選ばないというのだ。
「出せるその時に出す」
「だったよな。あんたはな」
「オロチは違っていたな」
「こっちはタイミングが大事なんだよ」
社は口の端を歪めさせて応える。
「戦い、殺し合ってその気が満ちた時にな」
「オロチを人の身体に降ろすか」
「そうするんだよ。それでその身体はな」
「あいつか」
「ああ、クリスだ」
彼だというのだ。その身体を持っている者は。
「あいつがそうなる」
「そうか。わかった」
「じゃあそういうことでな」
社は笑いながら話す。
「俺のところは時間がかかるからな」
「そこが違うな」
「アンブロジアもそうだろ」
ここでもう一つの異形の存在の話が出た。
「あっちは確か」
「そうよ」
二人の側にだ。不気味な、禍々しい紫の影が出て来てそれが実体化してだ。そうしてだった。
そこにだ。ミヅキが出て来た。足下にはあの奇怪な犬もいる。
その彼女が出て来てだ。こう二人に話すのだった。
「アンブロジアもね」

「時間がかかるよな」
「そうよ。恐怖と絶望と憎悪」
陰惨な微笑みを浮かべてだ。ミヅキは二人に話していく。
「そうしたものが世に満ちてからよ」
「アンブロジアは降臨できるんだったよな」
「その時にこそね」
まさにだ。そうなるというのだ。
「だから今はまだよ」
「この国が全てだな」
刹那もミヅキに声をかける。
「そうしたものに覆われてからだな」
「ええ、そうよ」
「そういうことだな」
ミヅキに続いて社も話す。

## 第百四話　あかり、闇を感じるのことその四

「けれどこの山での戦いは」
「その序章みたいに楽しませてもらうか」
「奴等を斬り」
刹那の目にだ。また鋭いものが宿る。
「その時の負の感情がこの山の結界に集っていくのだな」
「そういうことだな。ただ逆に言えばな」
社は刹那にこんなことも話す。
「この山の結界を壊されたら今まで溜め込んでいた人間の負の感情が全部消えちまうからな」
「そうなっては最初からやりなおしね」
「ああ。だから絶対にな」
どうするべきかと。社の目に燃えるものが宿る。
「ここは絶対に仕留めないとな」
「楽しみだけでなく義務もあるか」
「そこはわかってくれよ」
「わかっている」
「私もね」
刹那だけでなくミヅキも言ってだ。そうしてだった。
彼等は夏侯淵達が来るのを待っていた。そしてだった。
夏侯淵は定軍山の前に着いた。その彼等を見てだ。
クリスがだ。物見に立っている木の上からだ。シェルミーに話した。
「来たよ」
「そう。いよいよなのね」
「はじまるよ。ゲームが」
「さて。どう相手してあげようかしら」
二人は夏侯淵達を見ながら楽しげに話す。

「もう僕待ち遠しくて仕方ないけれど」
「私もよ。だからね」
「思いきり遊ぶからね」
「クリスもそうするのね」
そんな話をしてだった。彼等は。
夏侯淵達が山に入るのを見ていた。やがてだった。
その夏侯淵がだ。全軍に命じたのだった。
「ではだ」
「はい、いよいよですね」
「まずは軍で山を囲む」
そのだ。定軍山をだというのだ。
「そのうえでだ」
「山に入るんですね」
「山での戦となるとだ」
典韋にだ。冷静に話していく。
「集結させては動けないからな」
「それぞれの小さな隊に分かれてですね」
「それで山に入る進んでいく」
「わかりました。それじゃあ」
「私は私の隊を率いる」
夏侯淵も自ら入るというのだ。
「では流琉達もだ」
「それぞれですね」
「小さな隊を率いて山に入る」
そしてそれはだった。
「当然ラルフ殿達もそうしてくれ」
「ああ、わかってるぜ」
「それじゃあな」
ラルフとクラークが微笑んで答える。
「今から行くか」

「そうしてな」
「そういうことで頼む」
夏侯淵の話は続く。
「ただしお互いに見える距離で動いていく」
「さもなければだな」
「敵に個々に撃破されますね」
「その通りだ」
秦兄弟にも話していく。
「まして相手は白装束の一団になるだろう。それではだ」
「彼等は神出鬼没ですね」
レオナはこれまでの戦いからわかっていた。白装束の者達のことを。
「だからこそ余計に」
「山での戦いは元々散らばるものです」
それは典韋もわかっていた。夏侯淵に教えられたのだ。

# 第百四話　あかり、闇を感じるのことその五

「ですが特に今は」
「その中で連絡を取り合わないと」
「危険だと思います」
典韋も察していた。この山での戦いのことあ。
それでだ。今こう言うのだった。
「油断すると各個に叩かれます」
「敵は各個撃破すべし」
「兵法の基本ですね」
秦兄弟も把握している口調である。
「もっとも俺達はそう簡単にやられはしないが」
「それでも用心は必要ですね」
「そういうことだ。それではだ」
ここまで話してだ。彼等はだ。
遂にだ。山に入るのだった。散開し小さな隊に分かれてだ。
暫くは敵もなく順調に進めた。しかしだ。
山の中腹に来たところでだった。夏侯淵の前にだ。
クリスが出て来てだ。こう言うのだった。
「ようこそって言うべきかな」
「御前は確か」
「そう。オロチの人間だよ」
まさにそうだとだ。山の木々の中でだ。夏侯淵達を斜面の少し下に見て話した。
「オロチ一族八傑衆四天王のね」
「そのうちの一人か」
「そう。クリスっていうんだ」
「同じくシェルミー」
「社っていうからな。覚えておいてくれよ」

そしてだ。この二人もだった。
影から出て来てだ。夏侯淵に言ってきた。
「私達三人がね」
「あんたをここで殺すからな」
「三人がかりだというのだ」
それを見てだ。夏侯淵は弓をつがえながらだ。こんなことを言った。
「私を何としても消すつもりか」
「そうだよ。まずは頭を潰したらね」
「楽になるから」
「そういうことにしたんだよ」
「それでなのか。オロチの者が三人も私の前に来たのは」
夏侯淵もそのことを察した。
「この軍を率いる私をまずはか」
「うん、じゃあ僕の炎で死んでもらうから」
「雷で真っ黒にしてあげるわ」
「地震は山でも起こるんだぜ」
「相手にとって不足はない」
彼等を前にしてもだ。夏侯淵は冷静でありしかも怯えてもいなかった。
だが弓は置きだ。こう三人に言った。
「しかし今はだ」
「あれっ、弓は使わないんだ」
「拳で戦うつもりか」
「貴殿等三人を一度に相手にするならば」
その場合はだ。どうかというのだ。
「この方がいい」
「まさかと思うけれど」
「拳での戦いも自信があるのかしら」
「拳だけではないしな」

こう言ってだ。剣も抜いて構える。
「もっともこちらは姉者程ではないがな」
「面白いね。この状況で諦めないなんてな」
社は満足した顔で話す。
「流石って言うべきか」
「よし、じゃあね」
「はじめましょう」
「では来い」
夏侯淵は剣を構えたままま言う。
「三人一度に来るか」
「ああ、それはないからな」
三人一度についてはだ。社は返した。
「あんたそう思ってるみたいだけれどな」
「違うというのか」
「俺達の戦いは違うんだよ」
「では一対一か」
「ああ、一対一で戦ってな」
それでだというのだ。
「負けたらまた一人出て来るからな」
「そういうことだからね」
「安心してね」
悠然とだ。シェルミーとクリスも言う。

## 第百四話　あかり、闇を感じるのことその六

そしてだ。社は夏侯淵にさらに問うた。
「じゃあ誰と戦いたいんだ？」
「御主達のうちの誰かとか」
「そうだ。選べばいいさ」
余裕綽々といった態度でだ。社は夏侯淵に言う。
「そうして戦えばな」
「わかった。それではだ」
構えたままだ。夏侯淵は。
シェルミーを見てだ。こう言ったのだった。
「御主にしよう」
「私なのね」
「その雷には興味がある」
だからだ。彼女だというのだ。
「どういったものかな。そしてだ」
「そして。何かしら」
「その雷を見極めてだ」
そしてだ。どうするかというのだ。
「華琳様にお伝えする」
「私の力をなのね」
「言っておくが私は死ぬつもりはない」
「この状況でも生きるつもりかしら」
「そうだ」
その通りだというのだ。
「わかったな。それではだ」
「では。戦いましょう」
シェルミーは楽しげに笑ってだ。そうしてだった。
夏侯淵の前に来てだ。己の後ろにいるクリスと社に話した。

「手出しは無用よ」
「楽しむんだね」
「この戦いを」
「オロチも戦いが激しければ激しいだけ楽しむから」
そのだ。オロチの習性を話しての言葉だった。
「だからよ」
「わかってるよ。僕達もね」
「そういう無粋なことはしないさ」
二人もだ。楽しげに笑ってシェルミーの言葉に応える。
「じゃあシェルミーはね」
「その戦いを楽しみな」
「そうさせてもらうわ」
こう話してだった。夏侯淵の前に出てだ。拳を打ち合わせるのだった。
ラルフ達もだ。既にだ。
白装束の一団と戦いだ。その中でだった。
それぞれだ。こう言い合うのだった。
「倒しても倒してもな」
「出て来るな」
こうだ。ラルフとクラークは背中合わせになって話をしていた。
「よくもまあこんなにな」
「数が尽きないものだな」
こう話してだ。そうしてだ。
二人は共に戦うレオナに対して言った。彼女もまた二人と背中合わせになっている。そうしてそのうえで彼女に対して言うのだった。
「おい、いいな」
「この戦いでもだ」
「死ぬな、ですね」
こうだ。レオナも二人に返す。
「そういうことですね」

「ああ、そうだ」
「絶対に死ぬな」
二人はまたレオナに告げた。
「ったくよ、鞭子がいなくてな」
「やばい状況にいる奴が少なくてよかったぜ」
「確かに」
その通りだとだ。レオナも言う。
「ましてやこの戦いはです」
「オロチだしな」
「まあ何か出て来ると思ってたけれどな」
「そのオロチですが」
オロチについてだ。さらに話すレオナだった。
「ここに力を蓄えているようです」
「ここにか」
「この山にか」
「どうやら山に多くの結界を置いています」
今話すのはこのことだった。

## 第百四話　あかり、闇を感じるのことその七

「先程その一つを破壊しました」
「そうか。この山で力を蓄えてだな」
「その力でこの世界をか」
「破壊するつもりか」
「考えることは同じだな」
世界が変わってもだ。そうだというのだ。
そうした話をしながらだ。三人は襲い来る白装束の者達にだ。
拳を繰り出しだ。退けていく。
レオナはだ。両手を上から下に振り下ろしてだ。
一気にだ。彼等を切り裂く。しかしだった。
倒すその側から来る。それを見てだ。
ラルフがだ。また言う。
「とりあえず粘りに粘るけれどな」
「その粘りが限界に来たらだな」
「その時にどうするか」
こうクラークに言うのである。
「それが問題だな」
「そうだな。ただな」
「ただ？」
「ああ。ガルフォードはもう行ったよな」
忍者である彼の話をするのだった。
「都に伝えにな」
「もう行っただろう」
クラークもだ。白装束の者の一人を。
捕まえだ。そうしてだ。
フランケンシュタイナーで吹き飛ばす。そうしながらだ。ラルフに返す。

こんな話をしながらだ。彼等は戦っていた。その都では。
あかりとミナがだ。南西の方を見てだ。
そうしてだ。不吉な顔で話すのだった。
「だからな」
「助っ人を待つか」
「粘りに粘ってな」
「感じるやろ」
「ええ、感じるわ」
その通りだとだ。ミナも答える。
「しかも南西だけではなく」
「南東からもやな」
そこからもだ。感じるというのだ。
「何ちゅうかな」
「邪悪そのものね」
「しかも強さが桁外れや」
「それと北ね」
そこからも感じるというのだ。
「北からも感じるわ」
「北っていうたらや」
そこに何がいるのか。これについては。
ナコルルもいた。その彼女の言葉だ。
「匈奴だったわよね。この国の北にいるのは」
「そうよ。北の異民族よ」
ミナがその匈奴について話す。
「馬に乗るね」
「その騎馬民族の地といえば」
「話あったなあ」
あかりは眉を顰めさせながら二人に話す。
「あそこに朧っちゅうのがおった筈や」
「朧といえば」

「確か」
ミナとナコルルがここで話す。
「命と一緒に裏天京にいて」
「暗躍していた」
「そいるや。そいつがおった」
そのだ。匈奴の地にだ。
「やっぱり何かあるわな」
「そう考えるのが普通ね」
ミナはあかりにぽつりと話した。
「じゃあ南西だけではなく」
「南東と北も」
ミナだけでなくナコルルも言う。

## 第百四話　あかり、闇を感じるのことその八

「三方に問題があるのね」
「しかも北が一番力が強いわ」
感じられるだ。その力がだというのだ。
「あそこで何があるんやろうな」
「シーサーを送っても」
「私も。ママハハを送ったことがあったけれど」
北への偵察はだ。既にしていたというのだ。
「けれど。何も」
「見えなかったそうだけれど」
「うちもや。式神を送ってもや」
どうなったかというと。
「全然わからん。何がどうなっとるんや」
「深い霧がかかっていて」
「何も見えないそうだから」
「その霧が問題やな」
それはわかるというのだ。
「ほんまな。何があるんやろな」
「それが問題ね」
「北は」
そのだ。北についての謎もわからなくなってきていた。
そうしてだ。あかりはだ。今度はこう言うのだった。
「で、南西や」
「あそこね」
「定軍山の」
「すぐに話が来るで」
南西への空を見つつだ。二人に言うのである。
「秋蘭さん達のな」

「無事だといいけれど」
ミナは顔を少し曇らせて呟いた。
「あの地での戦いに」
「ああ。で、あそこに刹那がおったら」
その場合はどうかとだ。あかりは顔をさらに曇らせて言った。
「雪に気をつけんとな」
「雪さんに？」
「あの娘の仕事はあいつを封じることや」
それはだ。絶対だというのだ。
「そやからや。それに対してや」
「命を賭けるかも知れないのね」
「そこあんたと同じやな」
あかりはナコルルの言葉に返してだ。こう言ったのだった。
「あんたもそやろ」
「私は」
「わかるわ。自分を犠牲にしてでも何かをしようとする」
こうだ。ナコルルを見つつ言うのである。
「そういう娘やからな」
「若しかしてあちらの世界でも？」
「そうしようとしたわ」
実際にだ。そういうことがあったというのだ。
「黄龍のおいちゃんがおらな実際どうなってたか」
「じゃあ刹那がいたら」
「止めなあかん」
あかりは強い声で答えた。
「その場合はや」
「ナコルルもね」
ミナはここでナコルルを見てだ。彼女に話した、
「気をつけて欲しいわ」
「私も」

「そう。ナコルルもそうするから」
彼女のそうした性格もわかってのことだった。
「自分を犠牲にするから」
「私はそれが」
「務めとは言わないこと」
それはだ。絶対にだというのだ。
「生きること。それは絶対に」
「わかってはいるけれど」
「そう。それは皆で止めるから」
ナコルルについてもだ。そうだというのだ。
「だから気をつけてね」
「ええ、そのことは」
「悪い奴を倒すのはええんや」
あかりは両手を腰にやって胸を張ってだ。

## 第百四話　あかり、闇を感じるのことその九

そのうえでだ。こう言ったのだった。
「けれどそれで自分を犠牲にするのはあかんのや」
「悪を封じて自分も生き残る」
「それでなければ」
「あかんのや」
こうした話をだ。ナコルルに話すのだった。
そこまで話すとだ。急にだ。
あかりの前の前にだ。十三が出て来た。
それでだ。こう彼女に言うのだった。
「お嬢、ここにいたのか」
「何や、急に出て来たな」
「俺が急に出て来て悪いか？」
「でかいのが急に出て来たらや」
十三のその巨体を見上げながら。小柄なあかりは言った。
「誰かてびっくりするわ」
「俺がでかいのが悪いのか」
「めっちゃ悪いわ」
実際にそうだとだ。十三に返す。
「ほんま。何でそんなにでかいんや」
「生きてたら急に大きくなったからな」
十三にとってはそれだけのことだった。
「何ていうかな」
「そうなんか」
「そうだ。それでだ」
「それで？」
「ちょっと来てくれないか？」
あらためてあかりに話す。

「いいか？」
「それで一体何や」
「これから花札しないか」
遊びの話だった。
「今からな」
「花札？面子は誰や」
「山崎に臥龍とその子分だけれどな」
十三とあかりを入れて五人だった。
「やるか？今から」
「山崎もかいな」
「ああ。あいつが言い出したんだけれどな」
「絶対に止めた方がええな」
あかりは山崎が言い出したと聞いてだ。
それでだ。こう言うのだった。
「絶対に途中でキムとジョンが出て来ておじゃんになるで」
「あの二人出て来るのか？」
「絶対に出て来るわ」
確信してだ。あかりは言うのだった。
「あの二人はな」
「そうか。まずいか」
「そうなったらうち等も鳳凰脚や」
キムの容赦のない超必殺技だ。最早折檻用の技になっている。
「あれ喰らいたいんか？」
「いや、あんな痛そうな技は俺も」
「そやろ。そやったらや」
「今は止めておこうか」
「絶対にな。そうしとくべきや」
こうした話をしてだった。十三は花札は止めた。
それでだ。今度はこんなことをだ。あかりに話した。
「じゃああの三人だけでやることになるか」

「どうせ金かけてやってや」
花札となればだ。予想できる展開だた。
「そこに絶対にキムとジョンが登場するさかいな」
「あの二人いつも出て来るからな」
「地獄耳に千里眼や」
二人はその二つの力を備えているのだ。
「悪人を探知することができるさかいな」
「だからああしていつも出て来るんだな」
「あいつ等は敵に回したらあかん」
あかりをしてだ。二人はこう言わしめるものがあった。
「敵に回したら佐渡金山送りやで」
「佐渡金山かあ。あの生きて帰れないっていうあそこか」
「生きたいか？あそこに」
彼等の世界ではだ。佐渡金山はまさにそうした場所だった。

# 第百四話　あかり、闇を感じるのことその十

生きては帰れぬ佐度金山、その名は伊達でないのだ。
それでだ。十三も言うのだった。
「行くのはあの連中だけでいいよな」
「あの連中は元々悪者やさかいな」
山崎達の悪事は彼等は直接知らないが既に有名になっていた。
「まあちょっと心根を叩き直されるのもええやろ」
「そうだよな。あの連中はな」
しかしだった。こんな話をしていると。
今度はチャンとチョイが来てだ。二人に抗議するのだった。
「そんなのな、一生続くってなるとな」
「言えないでやんすよ」
こうだ。血の涙を流しながら主張するのだった。
「俺達なんてな。旦那達に捕まってからな」
「修業地獄の無限ループでやんすよ」
「仕事は洒落にならない重労働ばかりだしな」
「休み時間もないんでやんすよ」
「あの二人ほんまに鬼やな」
ある意味においてあかりも驚嘆するものだった。
「休み時間なしかいな」
「飯食う時間だって限られてるしな」
「食べ終わったらすぐに強制労働か修業再開でやんす」
「起きたら準備体操してすぐだぜ」
「真夜中に風呂入って終わりでやんすよ」
「きっついなあ、それは」
「一度体験入隊してみろ」
「一日で二度とって思うでやんすから」
こうだ。必死に主張するのである。

そしてそんな話をしているとだった。彼等の後ろから。
その鬼達のだ。声が聞こえてきた。
「おい、食べ終わったか？」
「では修業の再開です」
「げっ、もう来たのかよ」
「旦那達食べるの早過ぎでやんすよ」
チャンとチョイはその声を聞いただけでぎくりとした顔になる。
それでだ。こんなことを言うのだった。
「それこそよ。今からな」
「また地獄でやんすよ」
「しかし。本当にその地獄って終わらないんだな」
十三がその二人に対して言う。
「永遠のものか」
「そうだよ。旦那達もそう言ってるしな」
「この世界でも同じでやんすよ」
「世界が変わってもそれでもな」
「あっし等の運命は変わらないでやんすよ」
「それを考えるとな」
どうかとだ。十三は言った。
「山崎も可哀想か？」
「そやけどあいつはあまりも悪事がタチ悪いからな」
あかりが指摘するのはこのことだった。
「そやからしゃあないやろ」
「そうなるか？」
「因果応報や」
ここであかりが言うのはこのことだった。
「悪事には絶対に報いがあるんや」
「だからこの二人もか」
「それでも幾ら何でも酷過ぎるだろ」
「あんまりでやんすよ」

当事者達からしてみればそうだった。
「もうよ。俺達なんてよ」
「地獄から出られないんでやんすよ」
「俺達人なんて殺してねえよ」
「そこまでしないでやんすよ」
「それであそこまでかいな」
その凄さにだ。あかりも呆然となる。
それでだ。こう言うのだった。
「やり過ぎや思うけれどな」
「けれどアースクェイクや幻庵になると」
ミナは二人について話す。
「仕方ないところもあるけれど」
「まあなあ。あの二人はな」
「尋常じゃない危険さがあるでやんすから」
「結構お笑いなんだけれどな」
「それでもあれは」
仕方ないというのだ。チャンとチョイから見ても。
そうした話をしながらだ。二人は。
肩を落としてキムとジョンのところに行く。そうしてだった。
「遅いぞ！」
「でははじめましょう」
こうだ。その二人に言われてから地獄の中に入るのだった。
そんな彼等を見てだ。またナコルルが話す。
「やっぱり。物凄いですね」
「よくあれで死なんもんや」
「全くね」
そうだとだ。あかりとミナも続く。今は都もだ。不穏なものが見られだしていた。

第百四話　完

2011・8・16

# 第百五話　ガルフォード、駆けるのことその一

第百五話　ガルフォード、駆けるのこと

秦兄弟もだ。白装束の者達に囲まれていた。
だが二人はだ。その彼等に拳を振るいだ。
次々に倒していく。そうしてだ。
共にいて戦っているガルフォードにだ。こう言うのだった。
「今のうちにだ」
「行って下さい」
「それでだな」
ガルフォードはプラズマブレードを放ちながら二人に言う。
「都まで行って」
「皆を呼んできてくれ」
「手筈通りに」
「わかった」
ガルフォードは二人の言葉に応えた。そうしてだった。
すぐにだ。
傍らにいるパピィ達にだ。こう声をかけた。
「じゃあパピィ、行くか」
「ワオン」
パピィが応えてだった。すぐにだ。
足下に煙玉を投げて。その煙と共に消えてだった。
都に向かう。それを見てだ。
秦兄弟はそれぞれ言うのだった。
「ではな」
「後はあの人にお任せしましょう」
二人は背中合わせになりだ。互いを護りながら話す。
「あの人ならいけるだろうしな」

「そうですね。色々とあっても」
ガルフォードを信頼していた。だからこそ言えることだった。
そうしてだ。彼等は今は戦うのだった。
だが都でだ。その動きは。
闇に浮かぶ水晶玉に映っていた。その水晶玉を見ながら。
于吉がこう言うのだった。
「予想通りですね」
「そうか、あの忍者が動いたか」
「はい」
そうだとだ。左慈に話す。
「そしてです」
「都に向かっているな」
「援軍を頼む為に」
「それで援軍は間に合いそうか？」
于吉から少し離れた場所、水晶玉は見ていないが彼を見てだ。左慈は尋ねた。
「それは」
「間に合いますね」
于吉はこう左慈に答えた。
「やはり忍者は早いです」
「そうか。間に合うか」
「都の方でも想定しているのか」
「出陣準備を整えているな」
「彼が都に辿り着けば」
于吉は水晶玉に映るガルフォードを見ながら言う。見れば彼は山道をパピィ達と共に駆けている。その速さはまさに青い稲妻だ。
左右の木々を潜り抜け駆ける彼を見てだ。于吉は話すのだった。
「すぐに山に来ますね」
「このまま行かせるか？」
「いえ」

于吉は微笑んで左慈に話した。
「それは有り得ません」
「そうだな。それではか」
「今彼を止められるのは」
誰かというと。
「あの方々に行ってもらいましょう」
「ミヅキか？」
「もう一人です」
いるというのだ。
「刹那さんですね」
「二人がかりか」
「一人なら振り切られます」
そのことも想定して話す于吉だった。
「ですからここはです」
「刹那にも行ってもらうか」
「二人なら問題ありません」
また言うのだった。

## 第百五話　ガルフォード、駆けるのことその二

「仕留められないまでも足止めをしてくれます」
「足止めをしてくれるのならな」
「それで万事解決です」
彼等にとってはだ。そうだというのだ。
「ですから。そうしましょう」
「わかった。では司馬尉にも伝えるか」
「そうします」
司馬尉に伝えるのは確実に行うというのだ。
「都での足止めはできそうにもありませんが」
「警戒されているな」
「彼等も愚かではありません」
司馬尉の不穏さにだ。彼等も気付いているというのだ。
「あの方が幾ら司空だといっても」
「司徒だった気もするがな」
「ですが三公です」
役職はともかくその要職にあるのは間違いないことだ。
「ですから」
「権限はあるのだがな」
「そうです。しかし今は」
「迂闊に動けないな」
「全ての方々から警戒されていますので」
まさにだ。全員からなのだ。これが司馬尉の今の難点だった。
「それは期待しない方がいいです」
「では足止めだけでいいか」
「はい、その通りです」
「それに足止めだけで充分だな」
左慈はこう判断した。

「それではな」
「はい、お二人に連絡して」
「やっていくか」
こうした話をしてだった。彼等は。
闇の中から手を打ったのだった。そうしてだ。
駆けるガルフォードの前にだ。出て来たのだ。
二人、それは。
「むっ？」
「ワン？」
ガルフォードとパピィ達が二人を見てだ。すぐに脚を止めた。
そのうえで構え唸り声をあげながら。二人に対峙するのだった。
そうしてだ。こう二人に返した。
「羅将神ミヅキともう一人は確か」
「刹那だ」
自ら名乗りながらだ。剣を抜くのだった。
そのうえでだ。ガルフォードに対して話してきた。
「常世の者だ」
「楓達が言っていた奴だな」
「如何にも。四神は俺の敵」
まさにそうだというのだ。
「そして奴等を倒し」
「それから常世をか」
「この世に現わす」
己の野心もだ。話していく。
「今俺がいる世界にだ」
「そして」
今度はミヅキがガルフォードに話す。傍らの魔犬の目が不気味に光る。
「ここにこうしているのは」
「俺への足止めだな」

「如何にも」
まさにそうだというのだ。
「ここでこうしてだ」
「都に行かせないっていうんだな」
「貴様に行ってもらっては困る」
また話す刹那だった。
「できればここで死んでもらう」
「覚悟はできているかしら」
「生憎だが俺も」
ガルフォードの背中の忍者刀を抜きだ。
そうして構えてだ。二人に返すのだった。
「そのつもりはない」
「そうであろう。ぬしとてな」
「行かなければならないからな」
「そういうことさ。じゃあ行かせてもらうか」
できれば二人をここで倒そうと考えてだ。そうしてだった。
パピィと共に向かおうとする。しかしだった。
突如だ。両者の間に。
またあの者達が出て来た。出て来たその瞬間に大爆発が起こる。

# 第百五話　ガルフォード、駆けるのことその三

「愛と正義の使者参上！」
「義によって助太刀するわよ！」
貂蝉と卑弥呼がだ。こう叫ぶのだった。
「さあ、貴方は先に行きなさい」
「いいわね」
「なっ、あんた達か」
ガルフォードは二人の姿を見てまずは唖然とした。
すぐにそこから立ち直りだ。こう二人に言い返した。
「どうしてここに」
「あたし達は神出鬼没よ」
「瞬間移動もできるのよ」
そうだというのだ。
「この世界で言う縮地法ね」
「それができるのよ」
「まさか。それで」
「ええ。しかも千里眼に地獄耳だから」
「こうしたことは全然平気よ」
まさにだ。怪物の如き能力である。
そしてその能力を使ってだ。出て来てだというのだ。
「わかったわね」
「じゃあ今からね」
「行けっていうんだな」
あらためて尋ねるガルフォードだった。
「俺に」
「そうよ」
「だから早くね」
二人の言葉を聞いてだ。ガルフォードも。

すぐにだ。頷いてだ。パピィ達に対して言った。
「それならな」
「ワン！」
「あたし達なら大丈夫だから」
「例えどんな相手でも」
いけるというのだ。こう言ってガルフォード達を行かせたのだった。
ガルフォードは駆ける。しかしその前にまた。
今度はだ。バイスとマチュアだった。
「生憎だけれどね」
「まだいるのよ」
こう言ってだ。ガルフォードの前に出て来てだ。
そうして前を遮ろうとする。だがだった。
ここでもだ。彼等が出て来たのだった。
「何っ！？」
「まさか御前達が！」
「そうだ。気が向いてだ」
「私は騎士道に従ったまでのこと」
ギースとクラウザーだった。二人がバイスとマチュアの前に出て来たのだ。
そのうえでだ。彼等もガルフォードに話す。
「さて、ここは我々に任せてだ」
「先に行くのだ」
「あんた達もそれでいいんだな」
「私は狼としてこの連中と戦う」
「私もそうなるだろう」
二人はだ。自分達を狼だというのだ。
その狼がだ。青い忍者に言う。
「狼は己を認める者の為に戦う」
「それはわかるな」

「華陀さんか」
「あの者。大器だ」
「必ずこの世を救う」
二人にはわかっていた。華陀の器とその果たすことを。
その為だ。彼等もまた。
「面白い。乗ろう」
「そうさせてもらう」
「そうか。じゃあ頼んだ」
ガルフォードは彼等の言葉も受けてだった。
前に進みだ。一気に駆ける。すると。
その横にだ。今度は。
華陀だった。彼はガルフォードの横に来たのだ。
恐ろしい速さだった。忍者と同じ速さだ。その速さを見てだ。
ガルフォードもだ。驚きを隠せない顔で彼に尋ねた。

# 第百五話　ガルフォード、駆けるのことその四

「あんたが出て来たのはいいが」
「この速さで駆けていることか」
「それはどうしてできるんだ？」
問うのはこのことだった。
「よかったら教えてくれないか？」
「医術だ」
それを使ってだというのだ。
「足に針を打てばだ」
「速く走られるのか」
「そのツボを刺した」
そうしてだというのだ。
「これを使えば僅かな時間だが」
「速く走られるんだな」
「馬も超える速さだ」
「成程な。それは凄いな」
「それをあんたに話す為にここに来た」
華陀はその事情も話した。
「今こうしてだ」
「そうか。じゃあ悪いがな」
「刺すな」
「頼む」
ガルフォードの返答は即座にだった。そうしてだ。
その速さでだ。華陀も。
黄金の針を出してだ。その針を。
「光になれえええええええええええええええっ！！」
「むっ！？」
「キャンッ！？」

ガルフォード達だけでなくパピィ達もだ。ツボを打たれた。
それによってだ。彼等は。
これまで以上にない速さになりだ。進めるようになった。それはまさに風だった。
その風になった彼等がだ。また華陀に言った。
「済まない、これならだ」
「ワオン！」
「いける、すぐに都に行ける！」
「ワオオオン！」
「そうだ、急ぐぞ！」
華陀はこう彼等に返す。
「都に！」
「ああ。急ぐ！」
まさにだ。そうすると応えてだ。
ガルフォードは風になり進む。一路都に。
そうして進みながらだ。彼等は。
またただ。華陀に尋ねた。
「ところでだ」
「ワン」
「何だ？」
「今あんたは光になれと言ったな」
華陀の針を繰り出す時の掛け声だ。
「あれはあの場合よかったのか？」
「何だ。何処かおかしいか？」
「光になれ、は病気を治す時だな」
「ああ、そうだ」
それはその通りだとだ。華陀も答える。
「俺は医者だからな」
「ならこの場合は違うんじゃないのか？」
ガルフォードは少し怪訝な顔になって華陀に言う。

「足を速くするんだからな」
「そういえばそうか？」
ここまで言われてやっとそうかも知れないと考えだした華陀だった。
「そういえばな」
「そうだろう？この場合は何て言うべきか」
「ふむ、では風になれか」
「その方がいいんじゃないのか？」
こう話すガルフォードだった。
「だったらな」
「それもそうだな」
「光に風か」
ガルフォードはこのことに微笑んでだ。そのうえでだった。
「まさに正義だな」
「ああ。光に風は」
その二つについてだ。華陀も話す。

# 第百五話　ガルフォード、駆けるのことその五

「正義の象徴になるものだな」
「俺は病を倒す」
ここでも医者である華陀だった。
「それが正義ならだ」
「まさに正義だな」
「この世の病も倒す」
即ちだ。于吉達もだというのだ。
「そうするからな」
「ああ。それじゃあな」
「そうする」
こうした話をしてだった。彼等は。
都に突き進む。まさに風だった。
その風が向かっている都では。今司馬尉は。
苦い顔でだ。妹達にこんな話をしていた。
「本当はね。都でもね」
「邪魔をしていたいところでしたけれど」
「援軍を出すことに対して」
「理由や口実は幾らでも作られるわ」
それはだとだ。しっかりと言う司馬尉だった。
「けれどそれでもね」
「今の状況じゃ」
「とても」
「流言蜚語も流せないわ」
先に仕掛けたそれもだというのだ。
「あれも今では」
「確かに。これだと」
「どうしようもないわね」

「様子を見守るしかないわね」
これが司馬尉の結論だった。
「私達はね」
「既に援軍を出す準備はできているわ」
「まさに全軍」
曹操達がだ。それを進めているのだ。
「それに都の留守も固めようとしているし」
「隙がないわね」
「隙を作らない」
司馬尉は妹達にこうも言った。
「兵法の基本だけれど」
「こうしてここまで完璧にされると」
「敵ながら見事ね」
「そうよ。劉備達は敵よ」
このことはだ。はっきりと認識している司馬尉だった。
そうしてだ。彼女はこんなことも言った。
「私達の野心の前に立つね」
「野心の前にいるならば敵」
「そういうことだから」
「その通りよ。敵よ」
また言ったのだった。
「その敵がここまで厳重しているとなると」
「手がありませんね」
「それも全く」
「ならいいわ」
それならそれでだとだ。司馬尉の話が転換した。
そしてだ。妹達にこう言うのだった。
「それならね」
「ええ。それなら」
「姉様、どうするの？」

「次の備えをしておきましょう」
ここで言うのはこのことだった。
「今のうちに」
「そうですか。今からですか」
「次の策をですか」
「仕掛けておきますか」
「赤壁よ」
そこだとだ。司馬尉は言った。
「あの場所に仕掛けておくわ」
「わかりました。それでは」
「あの場所に兵を向かわせましょう」
「密かに」
「そうするわ。あの場所なら」
どうかというのだ。赤壁ならばだ。
「どれだけ大軍が来てもね」
「そうですね。一気に倒せます」
「あの場所なら」
「そうよ。于吉やあちらの世界の住人達にも伝えて」
そうしろとだ。司馬尉は妹達にまた話した。
「次の場所は赤壁よ」
「そうですね。しかしです」
ここでだ。司馬師はだ。
いぶかしむ顔になりだ。姉に尋ねた。

# 第百五話　ガルフォード、駆けるのことその六

「ですが姉様」
「何かしら」
「今の策が破綻したにしても」
どうかというのだ。そうなってもだ。
「ですがそれでも」
「私があの策につながっていることはね」
「それは知られないのでは」
「ないと思いますが」
実際にそうだとだ。司馬師は言うのである。
「違うでしょうか」
「そうね。普通はね」
公になるものではないとだ。司馬尉も言う。
しかしだ。それでもだった。
司馬尉はだ。こう言ったのだった。
「けれど劉備はともかくとして」
「他の者はですね」
「鋭いわ。そして劉備の下の軍師達も」
劉備にはその彼女達がいるというのだ。
「鋭いわ」
「では私達のことも」
「勘付くと」
「そうだと」
司馬師だけでなく司馬昭も言う。しかしだ。
司馬尉はだ。こう言ったのだった。
「既に勘付いているのかもね」
「確かに。そういえば近頃」
「前よりも増して」

妹達も姉の話を聞いてだ。察した。
そしてだ。彼女達の周囲のことを思い出して述べた。
「私達の周りに人がいます」
「では」
「おそらく。暫くしたら問い詰めてくるわ」
そうしてくるというのだ。
「定軍山からあの娘達が帰って来ればね」
「ではその時にはですね」
「この都を去り赤壁に入る」
「そうしてですか」
「あの場所において」
「倒すわ」
凄惨な笑みを浮かべてだ。司馬尉は妹達に述べた。
「わかったわね」
「はい、それでは」
「その時には」
「都からは何時でも出られるわ」
このことについてはだ。司馬尉は全く何の心配もしていなかった。
「そしていざとなればね」
「あの術をですね」
「使われますね」
「そうよ。私のあの切り札」
笑みにあるその凄惨さがさらに増す。
「あれを使うわ」
「わかりました。では」
「姉様と共に」
「手は幾らでも打っておくことよ」
司馬尉はこんなことも言った。
「あらゆる事態を考えてね」
「お流石ですね」

「そうして動かれるのは」
「私は司馬尉仲達」
己の名前もだ。言ってみせた。
「その名にかけて。あらゆることで誰にも負けはしないわ」
「そしてこの世をですね」
「我等のものに」
妹達も応えてだ。そのうえで今は一連の動きを見るのだった。そしてだ。
ガルフォードは華陀と共に都に辿り着いた。着くとすぐにだった。
曹操の屋敷に入りだ。すぐに彼女の前に出た。
曹操は彼の姿を見てだ。まずは目を鋭くさせた。
そのうえでだ。彼に尋ねた。
「やはり来たのね」
「ああ、来た」
ガルフォードも曹操に答える。肩で息をしながら。

## 第百五話　ガルフォード、駆けるのことその七

「仕掛けて来た」
「わかったわ。それにしても」
「速かったっていうんだな」
「忍の動きはわかっているわ」
それはだ。ガルフォードだけでなく半蔵や他の面々を見てわかっていた。
だがそれでもだ。今のガルフォードの到着は曹操が考えていたよりも遥かに速かったのだ。それで今彼に問うたのである。
「それでも速過ぎるわ」
「ああ、それはな」
「俺が協力させてもらった」
ここでだ。華陀が出て来た。しかし彼は汗一つかいていない。
その華陀がだ。曹操に話すのである。
「俺の針を使ってな」
「脚を速くしたのね」
「そうだ。それで一気にここまで来た」
そうだというのだ。
「ことは一刻を争うからな」
「そうね。早いに越したことはない話だから」
曹操もだ。このことはよくわかっていた。だからこそ忍であるガルフォードに対して頼んだのだ。
そのうえでだ。彼女は言うのだった。
「有り難う、今回も」
「礼はいい。それよりもだ」
「わかっているわ」
すぐに答えた曹操だった。
「出陣の用意はもうできているわ」

「わかった。それならな」
「先鋒に伝えておくわ」
ただ出陣するだけでなくだ。先鋒も決めているというのだ。
「張遼に馬超達にね」
「そうか。それじゃあな」
「ええ。すぐに私達も出るわ」
曹操の言葉が次から次に出される。
「劉備、そして麗羽達にも伝えるわ」
「わかった。それならな」
「都の留守はもう置いてあるし」
それの備えもしてあるというのだ。
「安心して出陣できるわ」
「そうか。それは何よりだ」
華陀は曹操の話を全て聞いてだ。そのうえでだ。
安心した笑みになりだ。また話すのだった。
「では俺も行こう」
「貴方も？」
「言った筈だ。俺は国の病も治す」
だからだというのだ。
「その為にだ」
「いいのね。かなりの強行軍になるけれど」
「構わない。俺は脚には自信がある」
「伊達に医者王という訳じゃないのね」
「ああ、そうだ」
その通りだとだ。華陀は曹操に対して微笑みで返した。
それでだった。彼は。
ガルフォードにだ。こう尋ねたのだった。隣にいる彼に顔を向けて。
「大丈夫か？犬達も」
「ああ、大丈夫だ」

見ればだ。パピィ達はだ。
ガルフォードの足下で尻尾を振って干し肉を食べている。実に美味そうに。
それを見ながらだ。ガルフォードは華陀に話した。
「よかったら水もくれないか？」
「そうか。それだけの食欲があればな」
「いけるからな」
「ならいい。犬達にとってもかなり激しい疾走だったからな」
それだけ急いだからだというのだ。
「疲れていなくて何よりだ」
「さて、じゃあ」
曹操はさらに話す。

# 第百五話　ガルフォード、駆けるのことその八

「既に山までの道に兵糧や武器は置いてあるし」
「そんなことまでしていたのか」
「孔明が手配してくれていたのよ」
彼女がだ。そうしていたというのだ。
「いざという時に備えてね。兵を迅速に進められる様にね」
「兵糧や武器は戦には欠かせないが」
華陀が言う。彼もこのことは熟知しているのだ。
「軍を動かす際には重しになるからな」
「だから。進む途中に手配しておいたのよ」
そうしたというのだ。孔明がだ。
「あの山への道だけでなく各地にね」
「いざとなれば何処でも迅速に動ける様にか」
「そういうことよ。つまりは」
「じゃあ今から全速力で駆けてか」
「山に向かうわ」
曹操はまた華陀に話した。
「じゃあ行くわよ」
「よし、わかった」
「なら行くか」
華陀だけでなくガルフォードも応える。こうしてだった。
彼等はすぐに兵を出した。まずは先陣だった。
張遼達がだ。馬を駆けさせる。その全てが騎兵だ。
そしてだ。彼等は。
武器も鎧も備えていない。身軽なまま全速で駆ける。その中でだ。
馬超がだ。張遼に尋ねる。
「あの山に行くんだよな」
「そや、定軍山や」

こうだ。張遼も馬超に答える。二人は馬をありったけの速さで駆けさせている。
その中でだ。張遼は馬超に話す。
「飯に武器とか鎧は途中に置いてるさかいな」
「食って途中で身に着けてだな」
「あの山に向かうんや」
そうするというのだ。
「それはもうわかってるな」
「わかってるさ。問題は馬だよな」
「うち等の馬はいける」
彼女達の馬はそれぞれ名馬だ。かなりのことでも息をあげない。
しかしだ。兵達の馬はだ。どうかというのだ。
「そやけど兵の馬はや」
「大丈夫かよ。あの山まで全速で駆けてもよ」
「馬も用意してある」
糧食や武具だけではないというのだ。
「そやから馬の息があがったらや」
「すぐに乗り換えてか」
「あの山まで行くんや」
とにかくだ。それは絶対だった。
「急がなしゃあないからな」
「だよな。あたし達が最初に山に入って」
「秋蘭ちゃん達助けるで」
「あの連中はそう簡単にやられないだろうけれどな」
それでもだ。油断はできなかった。
それがわかっているからだ。馬超も言うのだった。
「急ぐか」
「ああ、うちも進軍の速さには自信があるけどな」
「あたしもな」
この辺りはだ。馬の扱いに長けている彼女達ならではだった。

だがそれでもだ。そのことに油断はしていなかった。
そのまま全速力で進み続ける。その中でもだ。
夏侯惇はだ。とりわけだった。
「進め！一刻も早く山に辿り着くぞ！」
「は、はい！」
「了解です！」
兵達は彼女の言葉に応えてだ。そして突き進んでいた。
だが夏侯惇はだ。その彼等にまだ言うのだった。
「いいか、若し遅れればだ」
「その時はですか」
「援軍が遅れれば」
「秋蘭達を救う！」
妹をだ。そうするというのだ。

# 第百五話　ガルフォード、駆けるのことその九

「だからだ。急げ！」
「りょ、了解です！」
「では！」
「遅れた者は置いていく！」
夏侯惇はこうも叫ぶ。
「置いていかれたくなければだ！」
「わかっています、ついていきます！」
「御安心下さい！」
「安心はしない！」
しかしだった。夏侯惇はだ。
今度もこんなことを言ってだ。さらに駆けてだ。
そうしながらだ。兵達に言うのである。
「秋蘭達を助け出すまでは！」
「おい、春蘭ちゃんちょっとな」
「落ち着けよ」
張遼と馬超がだ。その彼女の左右に来てだ。
そうしてだ。宥めにかかったのだった。
「確かに急がなあかんし」
「気持ちもわかるけどな」
「そやけどあんまり焦ったらあかん」
「周りも見て進めよ」
「わかっている」
それはだ。夏侯惇も承知しているというのだ。一行は駆けながら進む。
「しかしだ」
「それでもやな」
「前にか」

「そうだ。進む」
そうすることはだ。変えようとしない夏侯惇だった。
「一直線にだ」
「ほな周りはな」
「あたし達が見てやるよ」
実際にだ。二人はだ。
それぞれ夏侯惇の左右についてだ。周囲を見回す。
そうしながらだ。彼女のフォローをするのだった。
「周りは任せとき」
「だからあんたはな」
「済まない」
夏侯惇はその彼等に礼を述べた。だがその目は。
あくまで前を見据える。そうしながらだ。
軍を山に向かわせるのだった。
都から軍が慌しく出陣していた。それを見送るのだ。
蔡文姫達だった。彼女はこう同じく留守居役である韓浩に話した。
「問題はやはり」
「ええ、司馬尉達ね」
韓浩は警戒する顔で蔡文姫の言葉に応えた。
「あの娘達よね」
「果たして何をしてくるか」
「いえ、ここはね」
「ここは？」
「何もさせないことよ」
韓浩が言うのはこうだった。
「それが大事よ」
「何もさせないことね」
「そうよ。絶対に企んでいるから」
このことはもう確実だというのだ。
「だから何もさせないことよ」

「そうね。じゃあ」
「何か策があるのかしら」
「策はないわ」
こう答える蔡文姫だった。しかしだ。
彼女はだ。策はないと答えたうえでだ。こう韓浩に話した。
「ただ。備えをね」
「固めるのね」
「今都には十万の兵があるわ」
大軍である。それだけの数があるのだ。
「だからその彼等をね」
「要所要所に置いて」
「特に宮廷にね」
置くというのだ。
「そうして固めましょう」
「そうね。そうすれば如何に司馬尉達といえども」
「動けないわ」
だからこそだ。そうするというのだ。
「それでどうかしら」
「いいと思うわ」
韓浩はこう蔡文姫に答えて頷いた。

# 第百五話　ガルフォード、駆けるのことその十

「それでね」
「そうね。それじゃあね」
「策はなくとも的確なことをすれば」
「ことは成るわ」
これが蔡文姫の考えでありやり方だった。
「だからね」
「そういうことね。じゃあそうして」
「麗羽達を待ちましょう。それにね」
「それに？」
「いつも一緒にいましょう」
蔡文姫はその韓浩を見てだ。こう提案したんのだった。
「青珠達は最初からそうしているからいいけれど」
「ああ、あの娘達も留守を守っているわね」
「そうだからね」
「私達もあの娘みたいに一緒にいるようにするというの？」
「善光は黒檀とね」
陳琳もだ。そうすればいいというのだ。
「そうしていつも一緒にいるようにしましょう」
「それは何故かしら」
「私が以前攫われて匈奴のところに送られたのは知ってるわね」
蔡文姫が言うのはこのことだった。
「そうね」
「ええ、あのことね」
「ずっと考えていたのよ」
顔を顰めさせてだ。蔡文姫は韓浩に話す。
「私を攫ったのは誰なのか」
「まさかそれは」

「司馬尉かも知れないわ」
こう言ったのである。
「私のお母様はあの頃司馬氏の政敵みたいな立場にいたから」
「同じ清流だったのに？」
「清流の中でも官職の取り合いになるから」
朝廷の官職には限りがある。二人が同じ官職を望めばそれだけで衝突になる。そうなるというのである。そしてそれでだというのだ。
「だからね」
「それで貴女のお母様と司馬氏は」
「お母様は私の提案を参考にしてくれたし」
つまりだ。彼女は母の参謀でもあったというのだ。
「その私がいなくなれば」
「徳をするのは司馬氏ね」
「ええ。だからね」
そうしたことを考えてだというのだ。
「司馬氏が私を攫わせて匈奴に送って」
「そのうえで」
「お母様は私がいなくなって」
そしてだというのだ。彼女がいなくなってから。
「官職は司馬氏が手に入れ」
「そうしてなのね」
「私が戻った時にはもうお母様は」
「殺されていた」
「急死していたそうよ」
歯噛みしてだ。蔡文姫は話した。
「そうなっているわ」
「急死、ね」
「夜にお酒を飲んで急に亡くなられたのよ」
「毒殺ね」
韓浩は事情をすぐに察して述べた。

「それね」
「おそらくは」
「司馬氏ね」
すぐにだ。韓浩は話した。
「あの連中がやったのでしょうね」
「ええ。そして」
「貴女を攫ったのも」
「間違いないでしょうね」
こうだ。蔡文姫は推理して話したのだった。
「私をそうして。お母様を暗殺して」
「よくある話ね。政敵を排除する手段としては」
「だから。いつも一緒にいましょう」
蔡文姫はあらためて韓浩に提案した。

# 第百五話　ガルフォード、駆けるのことその十一

「わかったわね」
「若しも一人になればその時は」
「司馬尉は牙を剥くわ」
司馬尉をそうした女だと見ての言葉だった。
「だからそうしましょう」
「ええ。じゃあ」
「残っている皆もそうしてね」
司馬尉に隙を見せないというのだ。実際にそうしてだった。
彼女達は隙を見せないのだった。寝食も入浴も共にする。
その中でだ。風呂の中でだ。
蔡文姫は湯舟の中でだ。共にいる韓浩に尋ねる。
「ねえ。いつも感じるでしょ」
「確かにね」
真剣な顔でだ。韓浩も答える。
「狙っているわね」
「だからね。一人になればね」
「その時に来るわね」
「来るわ」
蔡文姫の言葉もだ。にこりともしていない。
周囲を警戒しながらだ。それで話すのだった。
「確実にね」
「そうね。そう思うと」
「二人でいるのは」
「正解ね」
こう話すのだった。
「まさにね」
「そうね。とりあえずは華琳様が都に戻られるまでは」

「一緒にいましょう」
「それとだけれど」
ここでだ。韓浩はこうも話した。
「司馬尉への警戒だけれど」
「彼女の屋敷の前には兵達を多く置いているわ」
そうしているというのだ。
「何しろ。何をするかわからないから」
「露骨に謀反を企てたりはしなくともね」
「謀反ね」
蔡文姫の目がここで光った。それで言うのだった。
「そこまで考えているのかしら」
「謀反を起こし己が皇帝に」
「まさかと思うけれど」
「けれど華琳様達を全て排除したら」
そうなればだ。どうなるかというのだ。
「最早阻むものはないわ」
「その場合はというのね」
「皇帝になれるわ」
摂政であり太子にもなった劉備まで排除すればというのだ。
「そう、なれることが問題だから」
「劉氏以外の者が」
「司馬尉が謀反を起こしそれが成功したならば」
「皇帝になりこの国を牛耳る」
「それは防がないといけないわ」
韓浩は湯舟の中でだ。己の側にいる蔡文姫に話した。
「そう思うと貴女の策は見事よ」
「うふふ、有り難う」
韓浩の言葉にだ。蔡文姫はにこりと笑って応えた。
「そう言ってもらえると嬉しいわ」
「流石は麗羽殿の幕僚の一人ね」

「軍師達は水蓮達が主だけれどね」
袁紹の軍師といえば田豊達だ。このことは絶対と言っていい。しかしだ。
この蔡文姫も知略と内政手腕で袁紹を助け続けている。だから韓浩も今言うのだ。
「それでもなのね」
「貴女も頑張ってるじゃない。だから」
「だから？」
「ちょっと今は羽目を外して遊ばない？」
くすりと笑ってだ。蔡文姫に言ったのである。
「御風呂の中でね」
「御風呂の中でって」
「今二人だし」
急にだ。韓浩の目に妖しいものが宿る。
「だから。二人きりだから」
「貴女そっちの趣味だったの」
「だって。華琳様にお仕えしているから」
女以外は寝屋に入れない曹操だというのだ。
「それに麗羽殿だってそうでしょう？」
「そうよ。あの方もね」
「それならよ。お互いにね」
「悪くないわね。けれどね」
「けれど？」
「今は止めておきましょう」
くすりと笑ってだ。蔡文姫は韓浩に言った。
「今はね」
「気が乗らないのかしら」
「御風呂の中でそういうことをしたら」
どうかというのだ。
「熱くてゆだっちゃうじゃない」

「だからなのね」
「一緒に寝るから」
蔡文姫が言うのはこのことだった。
「その時にね」
「そうね。身体を奇麗にしてからね」
「肌を重ね合いましょう」
そうした話をしてだった。二人は今は遊ばなかった。
そうして風呂から上がり褥の中でだ。二人は共に遊ぶのだった。

第百五話　完

２０１１・８・１８

# 第百六話　夏侯惇、妹を救うのことその一

第百六話　夏侯惇、妹を救うのこと

定軍山での戦いは続いていた。
ラルフもクラークもだ。拳を振るい続けている。
その中でだ。白装束の者達を次々に薙ぎ倒す。しかしだった。
「おい、まだ減らないな」
「ああ。どれだけ出て来るんだ」
クラークがラルフの言葉に応える。
「減らないどころかな」
「増えるか？」
「そう思うけれどな」
クラークはそう見ていた。
「余計にな」
「都での戦いの時もえげつなかったがな」
「今回もあれだな」
「ああ、洒落にならないな」
「百人位じゃ何とかなってもな」
クラークはその蹴りで白装束の者を一人吹き飛ばしてから言う。
「千人も二千人にもとなるとな」
「辛いなんてものじゃないな」
「楽しくはあるがな」
クラークは何とか余裕を見せようとする。しかしだ。
その顔に笑みはない。ラルフもだ。
次第に疲れが見えてきていた。その二人にだ。
レオナがだ。こう言ったのだった。
「あの」
「んっ、何だ？」
「どうしたんだ？」

「これをどうぞ」
こう言ってだ。二人に投げ渡したものは。
干し肉だった。それを渡してからだった。
「食べて下さい」
「これを食ってか」
「戦い続けろっていうんだな」
「食べるとそれだけで過度の緊張がほぐれます」
だからだというのだ。食べろと。
「それに空腹は戦いの最大の敵です」
「そうだな。暫く戦ってばかりだしな」
「食うのも大事だな」
「はい、では」
レオナもだ。その手にだった。
干した果物を出してだ。食べるのだった。
そして食べながらだ。両手から鎌ィ足を出して白装束の者達を撃つのだった。
そうしてだった。彼等は戦いながら食べそして生き残ろうとしていた。
その彼等のところにだ。秦兄弟が来た。彼等もまただった。
「おい、無事だったか」
「足はありますか？」
「そりゃ日本の幽霊の話だな」
クラークがリラックスした笑顔で彼等に応えた。
「アメリカの幽霊には足があるぜ」
「まあそれは中国の幽霊もだけれどな」
「鬼はそうですね」
中国では霊は鬼と呼ぶ。この言葉も出て来ていた。
「まあ日本の話だな」
「鬼に足がないのは」
「だよな。けれど生きてることは間違いないからな」

ラルフが笑って話す。
「じゃあ最後の最後までな」
「ああ、絶対にな」
「生き残りましょう」
秦兄弟も応えてだ。彼等もだった。
戦い生き残ろうとする。その中でだ。
夏侯淵はだ。オロチの三人と戦い続けていた。
クリスと戦いながらだ。彼女は言った。
「小さいこともだ」
「そうだよ。武器だよ」
悪戯っぽく笑いながら。クリスは夏侯淵に返す。
「色々攻められるからね」
実際にだ。突進してだった。
「下です」
「来たか」
夏侯淵の足下を狙う。その攻撃を。
夏侯淵は上に跳んでかわした。しかしその足下にだ。
クリスの青い炎があった。その技は。
「草薙の」
「そうだよ。大蛇薙だよ」
大蛇を倒すだ。その技だというのだ。

# 第百六話　夏侯惇、妹を救うのことその二

「僕も炎を使えるからね」
「だから出せるというのか」
「そう。これを受けたら誰でも消し炭になるから」
今着地する夏侯淵を見上げていた。血を楽しむ笑みで。
「さあ、死んで下さい」
「くっ、まずい」
夏侯淵も今はだ。死を覚悟した。着地の瞬間はどうしようもない。
とりあえず両手を交差させそこに気を込めて防ごうとする。だが
それでも絶望的だった。
しかしここで。その彼女を。
何か跳んで来たものが抱き締めてだ。そうしてだった。
炎の下から救い出した。それは。
「流琉か」
「大丈夫ですか、秋蘭様」
典韋だった。彼女がその小さい身体で己より背の高い夏侯淵を抱き締めていた。
そうしてだ。その彼女が言うのだった。
「本当に危ないところでしたね」
「そうだな。済まない」
「御礼はいいです」
それはいいと応えてだ。典韋は。
立ち上がりクリス達を見てだ。こう言うのだった。
「私も貴方達と戦う」
「あら。じゃあ三対一じゃなくて」
「三対二よ」
強い目でだ。シェルミーに返す。
「秋蘭様はやらせないから」

「面白いことを言う娘ね」
典韋の話を聞いてだ。シェルミーは。
目は髪の毛に隠れて見えない。だが口元はにこやかにさせてだ。
こう応えたのだった。
「なら貴女の相手はね」
「貴女ですね」
「そうよ。荒れ狂う稲光のシェルミー」
己のその名も名乗ってみせた。
「私が相手をするわ」
「おいおい、俺の出番はまだかよ」
社がシェルミーの名乗りを聞いて肩を竦めさせて話した。
「ったくよ。退屈な話だな」
「生憎だけれど今は社はね」
「出番はないと思うよ」
シェルミーだけでなくクリスもだ。その社ににこやかに笑って話す。
「だからここではね」
「ラーメンでも食べて観ていてよ」
「ちっ、ラーメンって言ってもな」
今度は苦笑いで応える社だった。
「ここには火も鍋もないしな」
「じゃあ他のものを食べておいて」
「干し肉でも包でもね」
「じゃあこれでも食うか」
社は何処からかパンを出してきた。それをだ。
食べながらだ。戦いを観ることにしたのだった。
夏侯淵は再びクリスと対峙する。そうしてだ。
あらためてだ。彼に言うのだった。
「今度は不覚を取るつもりはない」
「そうだろうね。お姉さん強いし」

クリスもだ。余裕の表情だがそれでも言う。
「二度同じ手は通用しないね」
「その通りだ。そしてだ」
「僕を倒すんだね」
「そうさせてもらう」
こう返してだ。夏侯淵はクリスとの間合いを一気に詰めた。
そうしてだ。その顔に左足の回し蹴りを出した。
それでだ。クリスを倒そうとする。だがその蹴りを。
クリスは右手で受け止めてだ。言うのだった。
「見事な蹴りだね」
「防いだか」
「凄いよ。お姉さんやっぱり強いよ」
「御主もな。私の今の蹴りを防いだのはだ」
「はじめてかな」
「姉者だけだ」
夏侯惇、彼女だけだというのだ。
「今の蹴りを防いだ者はいなかった」
「お姉さん以外にはだね」
「そうだ。見事だと褒めておこう」
言いながらだ。夏侯淵は足を収めた。次は。
右手から拳を次々に繰り出す。それも防ぐクリスだった。
防ぎつつ己も技を繰り出す。夏侯淵はそれも防ぐ。

# 第百六話　夏侯惇、妹を救うのことその三

その中でだ。クリスは。
楽しげに笑い。こんなことを言った。
「お姉さんってさ」
「何だ？」
「大人だけれど純情だね」
こんなことを言ってきたのだ。
「清純派だよね」
「何故そう言う？」
「白だから」
旧にだ。クリスは色を話に出してきた。
「下着、見えたよ」
「さっきの蹴りでか」
「うん、見るつもりはなかったけれどね」
「戦いの中でそんなことを気にはしない」
「見えてもいいんだ」
「見られて恥ずかしくない筈がない」
頬を微かに赤らめさせてだ。夏侯淵は答えた。
「だがそれでもだ」
「戦いの中ではだね」
「気にしてはいられない」
そういうことだった。
「どうしても見られたくないなら下にさらに穿く」
「ズボンを？」
「そちらの世界ではスパッツというのか」
話が急にあちらの世界めいてきた。
「それを穿けばいい」
「ああ、あれね」

「しかしあれは邪道だ」
スパッツを穿くということはだ。そうだというのだ。
「好きになれない」
「じゃあ見える場合は」
「見るがいい。私もこうした場合に見られても怒りはしない」
「普段は？」
「見た者は成敗する」
その場合はだ。そうするというのだ。
「そういうことだ」
「成程ね」
「あと一つ言っておく」
攻防を続けながら。今度はだ。
夏侯淵はこんなことをだ。クリスに告げた。
「私の下着だが」
「それのこと？」
「清純と言ったがいつも同じだ」
「色は白なんだ」
「白が一番いい」
何気に自分の下着の趣味を話している。
「そう思っている」
「確かにね。似合ってるよ」
「白でいいな」
「うん。大人が白なのもいいね」
「戦いの中なら見ればいい。そうしろ」
「そうさせてもらうね」
こうしたやり取りをしながらだった。彼等は闘っていた。そしてだ。
闘いは続きだ。その中でだ。
夏侯淵の軍は少しずつ追い詰められていっていた。山の中でだ。
一人、また一人と倒れていきだ。囲まれていっていた。

兵達がだ。槍や剣を手にだ。白装束の者達と戦いながら話していた。
「援軍はまだか？」
「ああ、まだだ」
来ていないというのだ。援軍は。
「ガルフォードさんが呼びに行ったけれどな」
「それでもまだか」
「援軍を呼んですぐに来れるものじゃない」
やはり到着まで時間がかかる。そういうことだった。
「だからだ」
「今はか」
「耐えるしかない」
これが結論だった。
「仕方ない」
「そうか。辛いな」
辛いともだ。彼等は言葉を漏らした。
だがそれでもだった。敵は。
まだ出て来ていた。彼等の戦いは続きだ。
兵の一人の槍が折れた。そこにだ。
白装束の者達が襲い掛かる。だがここで。
何かが一閃して。それでだ。
白装束の者達が真っ二つにされる。その一閃の主が。

# 第百六話　夏侯惇、妹を救うのことその四

兵達の前にいた。それは。
「間に合ったな」
「えっ、張遼様！？」
「まさかもう」
「来られたのですか」
「そや、間に合って何よりや」
にやりと笑ってだ。張遼は自分の背にいる兵達に話した。
「危ういところやったで」
「有り難うございます」
「いや、本当に危ないところでした」
「ただ」
「何でうちがこんなにはよ来れたかやな」
話はそこだった。張遼もわかっていた。
それでだ。彼女はその得物を縦横に振るいながら兵達に話したのだった。
「用意しとったさかいな」
「だからですか」
「それでこんなに早くですか」
「来られたんですか」
「道中に飯や武具や馬を用意しといて山の手前まではただひたすら駆けたんや」
駆けながらだ。食べもしていたことを彼等にも話した。
「山のすぐ側に武具を置いてあったしな」
「だからですか」
「こんなに早くですか」
「援軍に来られたんですか」
「そや。要は速さや」

張遼は兵達に楽しげに笑って話した。
「速いに越したことはないで」
「そういうことだ！」
今度はだ。華雄だった。
彼女は斧を振るいだ。白装束の者達を薙ぎ倒している。そうしながらだ。
彼女はだ。こう話すのだった。
「備えてあればこうして間に合わせることもできるのだ」
「そういうこっちゃな。しかし華雄ちょっとええか？」
「何だ？」
「あんた先陣におったんか？」
こう華雄に尋ねるのだった。
「姿見んかったで」
「私は最初からいたが」
「そうやったか？」
「そうだ。気付かなかったのか」
「ちょっとな。あんたとは長い付き合いやけれどな」
それでもだ。気付かなかったというのだ。
「今回は気付かへんかったんや」
「ううむ、そうだったのか」
「済まん」
張遼は素直に謝罪した。
「気付かんかってな」
「いい。私は長寿であればいいのだからな」
「それでええんかいな」
「そうだ。ではこの戦いもだ」
「ああ、勝ってな」
「生き残るとしよう」
こうしてだった。二人は並んで戦いだ。白装束の者達を薙ぎ倒していくのだった。

馬超は刹那、そしてミヅキと戦っていた。その槍を何度も突き出しだ。
二人を寄せ付けない。しかしだ。
刹那が防ぎながらだ。こう言ってきたのだった。
「確かに強いが」
「強くてもってのかよ」
「貴様は今一人だ」
刹那が言うのはこのことだった。
「だからだ。やがてはだ」
「負けるっていうのかよ、あたしが」
「そうだ。我等は二人」
ミヅキと合わせてだ。二人だった。
「貴様はやがて力尽き敗れる」
「生憎だけれどな」
馬超は一旦後ろに跳んだ。そのうえで間合いを取り直してだ。
それからだ。二人に言うのだった。

# 第百六話　夏侯惇、妹を救うのことその五

「あたしだけじゃないんだよ」
「貴様だけではないというのか」
「ああ、そうさ」
不敵に笑って応えるとだった。彼女の横に。
「間に合ったな！」
「ああ、丁度いいところだよ」
紅の蝶の仮面の女がすくっと立っていた。それは。
「愛と正義の戦士華蝶仮面！」
「主は確か」
ミヅキがだ。その華蝶仮面とやらを見て言った。
「趙雲といったな」
「そうだったな。その服に髪型」
刹那にもわかることだった。
「それならだば」
「間違いないな」
「そんな者は知らんが」
当人はあくまでシラを切る。
「誰だ、その趙雲というのは」
「おい、もうばれてるからな」
馬超も彼女に言う。
「無駄だぞ」
「さて、何のことなのか」
「木陰に入って覆面取って来い」
馬超は華蝶仮面にまた話す。
「いいな」
「ふむ。ではだ」
彼女はどこかに消えてだ。そうしてだった。

趙雲が出て来た。そのうえで刹那達にあらためて言うのだった。
「趙雲子龍参上」
「わかった」
刹那がその名乗りに応える。
そうしてだ。こう言うのだった。
「先程の妖怪達は何処かに消えたが」
「確かに。面妖なことに」
ミヅキもあの怪物達のことに言及する。見れば彼等がこれまで戦っていた筈のあの妖怪達は何処かに消え去ってしまっていた。
「その代わりにこの二人というわけね」
「相手にとっては不足か」
それはだ。不満があると言う刹那だった。
「二人ではな」
「確かに。この二人では」
「我等二人の相手にはならない」
「敵ではない」
こう言う彼等だった。
「所詮はな」
「確かにな。この連中の力は」
「尋常ではない」
それはだ。馬超も趙雲も認めた。
「あたし達二人でもな」
「片方を相手にすることも難しいだろう」
「わかっているのね」
ミヅキはその彼等の言葉を聞いて述べた。
「一応は」
「わかってはいる」
趙雲が言葉を返す。
「それはだ」
「なら話は早い。このまま」

「死ぬことだな」
ミヅキだけでなく刹那も構えに入る。しかしだ。
馬超と趙雲の後ろからだ。彼等が来たのだった。
「よし！」
「間に合ったのだ！」
関羽と張飛がだ。二人の横に来て言う。
「本陣も到着した！」
「共に戦うのだ！」
「よし、来てくれたな」
「これで話が変わった」
馬超と趙雲は二人を左右に見てだ。それで言うのだった。

# 第百六話　夏侯惇、妹を救うのことその六

「それじゃあな」
「これで五対二だな」
「五人？」
その数詞にだ。ミヅキは眉を動かした。
そのうえでだ。四人をあらためて見て言った。
「嘘を言っている訳でも愚かでもないようだな」
「そうだ、何故ならだ」
「もう一人来るのだ！」
こう言うとだ。四人の後ろからだ。
黄忠が来た。その手には弓がある。
彼女は四人のところに来てだ。そのうえで刹那とミヅキに言った。
「こういうことよ」
「そういうことね」
話を聞いてだ。ミヅキは言った。
「だから五人と言ったのね」
「そうよ。貴女達の強さは知っているわ」
黄忠は刹那とミヅキを見据えながら言葉を返した。
「だからよ。私達五人で」
「相手をする！」
関羽も言う。それを受けてだ。
ミヅキはだ。悠然とした笑みを浮かべた。その笑みでだ。
五人にだ。こう問うたのだった。
「話はわかったわ。けれど」
「けれど。何なのだ」
「私達の強さを知っているのなら」
そのだ。彼等の強さならどうかというのだ。
「それなら五人で私達の相手になるのかしら」

「無理だ」
刹那もそれを言う。
「我等二人を五人で相手にするにはだ」
「精々私か刹那のどちらか」
それで五人をだというのだ。
「どちらを相手にするかね」
「少なくとも五対二では貴様等に勝てはしない」
このことも言う二人だった。
「相手にするのなら異存はないが」
「どうするのかしら」
「言った筈よ」
黄忠もだ。悠然とした笑みになりだ。
それでだ。こう二人に返したのだった。
「本陣が到着したのよ」
「何っ！？」
「ここに来るのは私達だけじゃないわ」
「そうか」
刹那は黄忠の言葉を受けてだ。それでだった。
納得した声を出してだ。そのうえで話したのだった。
「そういうことか」
「さあ、来たのだ」
張飛が言うとだった。今度は。
五人来た。彼等は。
「貴様の相手はだ」
「我等だ」
示現と嘉神がだ。刹那に告げる。
「今ここでだ」
「貴様を封印させてもらう」
「そういうことか」
刹那の表情は変わらない。

「俺の相手は貴様等か」
「姉さんを犠牲にはしない」
「主はここで我等だけで封じる」
楓と翁もいる。
「それなら」
「今からじゃ」
「そしてだ」
守矢もいた。彼はだ。
楓のところに来てだ。こう彼に告げた。
「私も戦わせてもらう」
「兄さんもまた」
「そうだ。雪はここには来させていない」
「そうしてくれたんだね」
「そうだ。劉備殿達にもお話した」
そうしたというのだ。

# 第百六話　夏侯惇、妹を救うのことその七

「だからだ。今はだ」
「僕達だけで」
「倒し、封じることができる」
倒す、それが即ち封じることだった。
「ではだ」
「うん、やろう」
兄弟はそれぞれ左右になりだ。剣を構えた。
そうしてだった。嘉神がだ。
その守矢にだ。こう告げたのだった。
「守るものの為に戦うか」
「そうだ」
まさにだ。その通りだとだ。守矢はその嘉神に返した。
「私の守るものはだ」
「妹、そして弟だな」
「その為に私は戦う」
また言う守矢だった。
「だから今ここにいる」
「わかった」
それを聞いてだ。嘉神も。
構える。そうしてだった。
彼等が刹那に向かう。戦いはこちらの方が先にはじまった。
そしてだ。馬超達もだった。
「じゃあはじめるぜ！」
「いいわ」
ミヅキは槍を構える馬超に対して返した。
「それなら来ることね」
「行くぜ！」

「うむ、行くのだ！」
馬超にだ。蛇矛を構えた張飛が応える。そうしてだった。
黄忠がだ。弓を放ったのだった。それが合図になりだ。
四人は一斉に跳びだ。ミヅキに襲い掛かった。
それに対して。ミヅキは。
その手に持っている祈祷の棒でだ。まずはだ。
張飛の蛇矛を受けたのだった。
「何っ、受け止めたのだ」
「見事ではあるわ」
こうだ。張飛にだ。その悠然とした笑みで返したのだった。
「ただ」
「くっ、鈴々の矛を受け止めてそれなのだ」
「そうよ。私を倒すには至らないわ」
「ああ、わかってるさ！」
馬超は最後まで言わせなかった。それでだ。
今度は彼女が槍を繰り出す。幾度も幾度もだ。
だがそれもだ。ミヅキは。
その棒で受け止めてみせる。そして。
返す刀でだ。同時に来た趙雲の槍もだ。
平気で受け止める。そうしたのだ。
そのうえでだ。
関羽にはだ。凶犬を差し向ける。その犬の相手をしてだ。
関羽はだ。言うのだった。
「この犬もまた」
「そうね」
黄忠は関羽の援護をしながら彼女に応えた。
「手強いわね」
「だから我等もだ」
「油断してはならないわね」
「油断すればだ」

「やられるのは私達ね」
「その通りよ」
ミヅキはだ。三人の相手を同時にしながら返す。
「さあ、必死に楽しむころね」
「ふん、それならな！」
「その言葉！」
「乗ってやるのだ！」
馬超に趙雲、張飛はだ。一先着地してそのうえで態勢を立て直し。
それからだ。再び攻撃を仕掛ける。それを繰り返してだ。
ミヅキと戦う。彼女達の戦いは激しいものだった。
そしてその隣では。楓達がだった。
それぞれの剣を振るい戦い。今刹那の剣を受けたのは。
示現だった。剣を受け止めた上で彼に返す。
「強さは健在か。むしろ」
「わかるのだな」
「強くなっている」
このことをだ。示現は見抜いていた。

# 第百六話　夏侯惇、妹を救うのことその八

「さらにな」
「常世の力は強まっている」
だからだ。その化身である刹那もだというのだ。
「そしてその力でだ」
「この世界を常世に変えるか」
翁も仕掛けた。だがだ。
刹那は微かに動いただけでだ。翁の攻撃をかわしてみせた。そしてだ。
それからだ。さらにだった。
その剣を一閃させてだ。闇を繰り出しだ。五人を襲う。
「死ね」
「甘い！」
「この位なら！」
守矢と楓が同時に叫ぶ。そしてだ。
その攻撃をかわした。五人共だ。
跳びそこから刹那の前に五人並んで着地してからだ。翁が言った。
「これは尋常なやり方では倒せぬのう」
「わかってはいる筈だ」
嘉神が翁に返す。
「このことは」
「そうじゃな。常世を封じるのは容易ではない」
封じる役目を担うからこそだ。このことは誰よりもわかっていた。
それでだ。翁はさらに言うのだった。
「ではじゃ」
「うむ、わかった」
「それじゃあ」
嘉神と楓が応えてだ。それでだ。

五人は刹那を囲んでだ。そうしてだった。
再び攻撃を浴びせる。彼等も果敢に戦っていた。
戦局自体はだ。大きく変わろうとしていた。やはり本陣の到着が大きかった。
孫策がだ。馬から降り自ら剣を抜いて指示を出していた。
「山を囲め！そのうえで十人一組になってだ！」
「十人一組になってですか」
「そうしてですか」
「そうだ。山を登り敵を倒せ！」
小さな隊に分かれてだ。それぞれそうしろというのだ。
「そしてだ。仲間達を救出する！」
「了解です！」
「わかりました！」
孫策の言葉に応えてだ。兵達は、
山を囲んだうえで進んでいく。そうして白装束の者達を倒していった。
白装束の者達は暗躍する。しかしだ。
それでもだ。その数と戦術に圧倒されてだ。
山の頂上に追い詰められていく。その中で。
特にだ。曹操がだ。
鎌を振るいながらだ。周りの兵達に問うていた。
「秋蘭は！？」
「までです」
「何処におられるかわかっていません」
兵達は曹操にすぐに答えた。
「今必死に捜索中です」
「この山の中を」
「わかったわ」
話を聞いてだ。曹操はだ。
前、山の上の方を見据えてだ。そして言うのだった。

「なら今はね」
「少しずつですね」
「進んでですね」
「そのうえで」
「秋蘭達を見つけ出すわよ」
そのうえで助け出す。それが曹操の考えだった。その彼女のところにだ。
袁紹が来た。彼女も手に剣を持っている。その彼女が曹操に言う。
「華琳、いい知らせよ」
「秋蘭が見つかったの！？」
「ええ。今春蘭が向かっていますわ」
そうだというのだ。
「そしてラルフさんや秦兄弟も」
「見つかったの！？」
「合流しましたわ」
見つかりだ。そうしたというのだ。

# 第百六話　夏侯惇、妹を救うのことその九

「後は」
「秋蘭ね」
「確かに大変な状況ですけれど」
戦局は有利になっている。それでもだった。
「秋蘭は生きていますわ」
「そうね。だから春蘭も向かっているし」
「心配無用ですわ」
これが袁紹の曹操への言葉だった。
「だから私達も」
「ええ。少しずつ先に進んで」
この戦いに勝つ、このことを言ってだった。
戦いを続けていた。指揮をしながら。
夏侯淵と典韋はだ。クリス、そしてシェルミーと戦い続けていた。
その戦いは五分と五分のまま進んでいた。
だが次第にだ。二人はだ。
肩で息をしだしていた。それを見てだ。
社はだ。楽しげに笑ってこう言った。
「そろそろやばいか？」
「ふん、この程度！」
「何ともありません！」
こうだ。二人は弱気を見せず言い返した。
「貴様等は必ず倒す！」
「そして生き残ります！」
「生きるねえ。生きるのは大変だよな」
社は笑いながら二人に返す。
「じゃあまあ。楽しんでくれよ」
「いえ、そういう訳にはいきません」

社の言葉にだ。不意にだ。
于吉が来てだ。そして言ってきたのだった。
「時間がありません」
「そういえば山の下の方が騒がしいな」
「敵の援軍が来ました」
そうだというのだ。
「ですからここはです」
「何だ。帰るのか」
「その前にです」
戦う夏侯淵達を見ながらだ。社に話すのである。
「彼女達は消していきましょう」
「おい、それは俺達がやるぜ」
「ですから時間がないのです」
于吉が言うのはこのことだった。
「ここは私に任せて欲しいのですが」
「何だ？戦いを止めろっていうのか」
「はい」
まさにだ。その通りだというのだ。于吉は社に言い切った。
「その通りです」
「今は敵を少しでも減らすことか」
「既にこの山の放棄が決定しています」
それが決まったというのだ。
「山に何があるかも。彼等に知られましたし」
「こうして敵も来たしか」
「はい、この山を出ます」
于吉は社に話す。
「そうします」
「わかった。なら次の場所だな」
「赤壁に向かいましょう」
「赤壁！？」

その言葉にだ。クリスと戦っている夏侯淵は。
眉をぴくりと動かした。しかしそれ以上言う余裕はなかった。
彼女達にだ。于吉は。
兵馬妖の弓兵達を出してきた。そうしてだった。
「さて、覚悟して下さい」
「ううん、もう少し楽しみたかったけれど」
「こうなっては仕方ないわね」
クリスもシェルミーもその彼等を見てだ。
引き下がった。そうして言うのだった。
「それならね」
「于吉に任せてね」
「はい、お下がり下さい」
二人に告げた。それを受けて。
二人がだ。まず闇の中に姿を消したのだった。
それを見てだ。社もだった。

# 第百六話　夏侯惇、妹を救うのことその十

「じゃあ俺もな」
「それでは」
「釈然としないがいいさ」
受け入れるというのだった。
「あんたに任せるさ」
「そうして頂けると何よりです」
「まあ次もあるしな」
「はい、では」
「赤壁で会おうぜ」
そうしましょう。
こうしたやり取りの後でだった。社も闇の中に消えた。それを見届けてからだ。
于吉はだ。夏侯淵達を見てだ。そうしてだ
そのうえでだ。兵馬妖達に言うのだった。
「さて、まずは彼女達をです」
「・・・・・・・・・」
「倒して下さい」
こう言ってだった。それでだ。
弓で狙わせる。それで倒そうとする。
既に彼等は四方八方から迫っている。その彼等を見てだ。
典韋はだ。夏侯淵に言うのだった、
「どうしますか」
「どうするもないだろう」
これが夏侯淵の返答だった。
「最早な」
「じゃあここで」
「潔く散ろう」

こうだ。夏侯淵はその典韋に話した。
「このままな」
「わかりました」
こう答えてだった。典韋もだ。
覚悟を決める。今まさに無数の弓が放たれようとしている。
だが、だ。ここでだ。
「秋蘭！流琉！」
「！？まさか」
「この声は！」
「どけ！」
夏侯惇だった。彼女がだ。
その大剣を手にだ。兵馬妖達を薙ぎ倒しだ。
そのうえで二人のところに駆け付けてだ。こう言うのだった。
「間に合ったな！」
「姉者、来てくれたのか」
「春蘭さんが」
「そうだ、助けに来た」
まさにだ。その通りだというのだ。
その彼女がだ。二人にさらに言う。
「そしてだ」
「そして？」
「そしてといいますと」
「私だけではない！」
こうだ。二人に高らかに言うとだ。
「季衣！」
「はい、春蘭様！」
「遠慮はいらん。思う存分やれ！」
「わかりました！」
許緒の声が応えてだ。そうしてだった。
あの巨大な鉄球がだ。兵馬妖達の中で荒れ狂いはじめた。それで

だ。
彼等を完膚なきまで粉砕していく。それを見てだ。
「くっ、私の兵馬妖達が」
「そうだ、これで終わりだ！」
于吉は歯噛みしだ。夏侯惇が言い返す。
「貴様のここでの目論見はな！」
「無念ですね」
「そしてここで死ね！」
今度はだ。こう返す夏侯惇だった。
「貴様は私が倒す！」
「姉者、私も行こう」
夏侯淵は弓を手にしてだ。姉に告げた。
「姉者だけでは。あの男は厄介だろう」
「そうだな。この男の力は」
「尋常なものではない」
それはだ。二人の目からはすぐにわかることだった。腕が立つからこそだ。相手の力量も見極められる、そういうことなのだ。

## 第百六話　夏侯惇、妹を救うのことその十一

「だからだ。ここはな」
「うむ、二人で戦おう」
こうしてだ。姉妹二人でだ。于吉に向かおうとする。
だが于吉はその二人に対してだ。
悠然とした笑みでだ。こう告げたのだった。
「生憎ですが」
「まさかここでもか」
「逃げるというのか」
「そうなりますね」
逃げると言われてもだ。彼はそこに恥を見出してはいなかった。
それでだ。その笑みのままでだ。二人に言うのだった。
「ではこれで」
「逃がすか！」
夏侯淵が矢を放つ。しかしそれは。
于吉の前でだ。壁に当たったかの如く弾き返され折れてしまった。
「何っ、弓を」
「貴様、まさか」
「確かに貴女の弓は素晴らしいです」
于吉は驚く夏侯姉妹に対して話す。
「ですが私の結界の前にはです」
「効かぬというのか」
「私の弓も」
「そうです。残念でしたね」
「それなら！」
「僕達が！」
典韋と許緒も仕掛けようとする。だがだった。
夏侯惇がだ。その二人に告げた。

「無駄だ」
「無駄っていいますと」
「じゃあ僕達の攻撃も」
「あの男の結界に防がれる」
そうなってしまうというのだ。
「だからだ。止めておけ」
「わかりました」
「それじゃあ今は」
「行かせるしかない」
今度は夏侯淵が言う。
「忌々しいがな」
「ではまた御会いしましょう」
于吉は目だけは笑わせずに話した。
そして一礼してからだ。彼も闇の中に消えたのだった。かくしてだ。
戦いは終わった。白装束の者達はかなりの数が倒されたが于吉の撤退と共に彼等も姿を消してだ。残ったのは漢の兵達だけだった。

# 第百六話　夏侯惇、妹を救うのことその十二

その中でだ。劉備が孔明達に尋ねた。
「あの、勝つには勝ったけれど」
「はい、山も制圧しました」
「夏侯淵さん達も救出できました」
孔明と鳳統の顔は晴れない。
「ですがそれでもです」
「肝心のことがまだ」
「わからなかったわよね」
こうだ。劉備も浮かない顔で話す。
「肝心のことは」
「そうです。オロチや刹那を倒せませんでしたし」
「于吉も消えました」
手懸りになるだ。彼等がだというのだ。
だがそれでもだ。ここで徐庶が話した。
「ですがそれでもです」
「それでもっていうと？」
「戦いの目的は果たせましたし」
劉備に話す。夏侯淵達を助け出し山を制圧したことだ。
「結界も全て壊しました」
「それはいいのね」
「そうです。そしてその結界の欠片からです」
そこからだというのだ。
「調べれば色々と出るでしょうし」
「全てはこれからなのね」
「そうです。焦ることはありません」
これが徐庶の言葉だった。
「これからじっくりとです」

「そうなるのね」
「今は」
「そうよ。だから浮かない顔をすることはないから」
徐庶は孔明と鳳統にも話す。
そのうえでだ。二人にこうも話した。
「それにわかってるわよね」
「この話の本番は」
「これからよね」
「そう。都に戻ってからよ」
全てはだ。そこからだというのだ。
「司馬尉さんが」
「ええ。間違いなく」
「この戦いのことを御存知だから」
「夏侯淵さん達がこの山に向かうことを知っていた人は」
誰なのか。徐庶は話していく。
「桃香様に袁紹さんと曹操さん」
「そして三公の方々」
「軍師の私達だけ」
そこまでだ。隠蔽したことだったのだ。
だがそれでもだ。夏侯淵達はオロチ達に襲われた。そのことからだ。
徐庶はだ。言うのだった。
「となると」
「うん。司馬尉さんがこの山に軍を手配した」
「そしてあの人は」
話がだ。つながっていく。
「オロチ達とつながっている」
「そうなってくるわね」
「その通りよ。だから」
徐庶は孔明と鳳統にさらに話す。

「だから今は」
「まずは都に戻って」
孔明も鳳統もだ。話を進めていく。
「そして司馬尉さんから」
「お話を聞くことになるのね」
「お話っていうけれど」
劉備はだ。少しきょとんとなってだ。
そのうえでだ。三人の軍師に尋ねたのだった。
「そう簡単にいくかしら」
「いえ、間違いなくです」
「簡単にはいきません」
孔明と鳳統はその劉備の言葉にすぐに答えた。
「司馬尉さんによからぬものがあるからです」
「素直に話される筈がありません」
「ですから。都に戻ればです」
「また騒動になります」
「そうなの。それは避けられないのね」
劉備は二人の話を聞いてだ。顔を曇らせた。
そのうえでだ。こう言ったのだった。
「けれどそれでも」
「はい、やるしかありません」
「この世界の為に」
軍師二人は曇った顔になった劉備を励ましてだ。そうしてだった。
彼女にだ。あらためてだ。こう話したのだった。
「では戦いは終わりましたし」
「後の処理が終われればです」
「そうね。帰ろう」
劉備もだ。このことはわかっていた。
それでだ。彼女達にこう言ったのだった。
「都に」

「はい、そうしましょう」
「まずは」
こうしてだった。戦いの処理が進められてだ。そうしてだった。
夏侯淵達を救出した彼等は都に戻る。だがそれはだ。戦いの後の第二の舞台の幕開けでしかないのだった。戦いはまだ続くのだった。

第百六話　完

２０１１・８・２０

# 第百七話　曹操、司馬尉に詰め寄るのことその一

第百七話　曹操、司馬尉に詰め寄るのこと

夏侯淵を救った劉備達は定軍山を徹底的に洗った。既にオロチ達は何処かに姿を消している。

森の緑の木々の中を進みながら。馬岱が眉を顰めさせながら隣にいる張飛に言った。

「いつもながら逃げ足速いよね、あいつ等」

「全くなのだ」

その通りだとだ。張飛も頷いて返す。

「今度こそはと思ったのに残念なのだ」

「そうよね。今度見つけたら」

「成敗してやるのだ」

「そうだよな。今度こそはな」

二人のところに二階堂が来て言う。

「あの連中に止めさすぜ」

「ああ、そういえば二階堂さんってあっちの世界でもよね」

「あの連中と戦っていたのだ」

「最初はほら、いただろ」

自分に顔を向けてきた馬岱と張飛に二階堂はこんなことを話した。

「あのルガールって奴な」

「片目で金髪のでかいおっさんよね」

「あの馬鹿みたいに強い奴のことなのだ？」

「あいつと戦ったんだよ」

話は最初のキングオブファイターズの頃のことだった。

「いや、洒落にならない強さだったぜ」

「そうよね。烈風拳にカイザーウェイブ出してきて」

「近寄るとジェノサイドカッターなのだ」

「あいつと戦って倒したんだよ」
「それがはじまりで？」
「それからオロチだったのだ」
「ああ、ネスツとも戦ったしな」
二階堂にとってはどの戦いも忘れられないものだ。
その戦いのことをだ。二人の少女に話していく。
「思えば連中とも長い腐れ縁だぜ」
「正直有り難くない縁よね」
「遠慮したいものがあるのだ」
「ああ、俺もな」
実際にだ。彼もそう思っているのだった。
それでだ。こうも言う彼だった。
「それでこっちの世界でもだしな」
「二階堂さん達も大変ね」
このことは馬岱にもよくわかりだ。それで頷いてだ。彼に言う。
「戦ってばかりで」
「それはお互い様だしな。それにしてもな」
「それにしても？」
「事実がわかってきたな」
二階堂の顔がここで真剣なものになる。その顔でだ。
彼はだ。二人にこうも話した。
「夏侯淵さんがこの山に来たのはあれだろ」
「そうなのだ。最初は桃香お姉ちゃん達だけが知ってることだったのだ」
「知ってたのはその劉備さんと」
二階堂の目が鋭くなる。その目でだ。
彼は話す。そのことは。
「袁紹さんに曹操さん、袁術さんに孫策さんに」
「あの女なのだ」
張飛の顔に嫌悪が入った。その顔での言葉だった。

「司馬尉なのだ」
「ってことはだ」
「あの女が仕組んだことなのだ」
「その話を聞いてオロチとかをこの山に先回りさせてたってことだな」
このことがだ。明らかになったというのだ。
「それにこの山自体がな」
「あちこちに結界あったしね」
今度は馬岱が言う。
「気を溜めている結界がね」
「あの結界もおかしいのだ」
「おかしいなんてものじゃないわよ」
馬岱は眉を顰めさせて張飛に話す。
「明らかに。よからぬ目的の為に集めてたから」
「あの気もな」
ここで二階堂はまた二人に話した。
「青紫の炎が傍に幾つも燃えてただろ」
「あの炎って確か」
「八神やオロチの奴の炎なのだ」
「そうさ、八神家は実際にオロチの血が入ってるんだよ」
八神家の呪われた宿命の一つだ。このことが彼の運命を操っていると言っても過言ではない。

## 第百七話　曹操、司馬尉に詰め寄るのことその二

「奴自身はオロチが来たら容赦しないけれどな」
「そのオロチの炎が燃えている」
「ということはなのだ」
「ああ、司馬尉とオロチの奴等は間違いなくグルだ」
このこともはっきりしてきたというのだ。
「他の刹那なりアンブロジアなりもな」
「二階堂さん達の世界のあらゆる連中が司馬尉と一緒になって」
「この国をおかしくしようとしているのだ」
「やばい奴等がてんてこ盛りだな」
二階堂はこんなことも言った。
「こりゃ激しい戦いになるぜ」
「それはもうどんと来いなのだ」
張飛は自分の左手でその胸をどんと叩いて言い切った。右手には蛇矛があり立てられている。
「オロチでも何でもやっつけてやるのだ」
「そうね。都に戻ったら」
馬岱も張飛と同じ考えである。
「司馬一族をぎゃふんと言わせてやるわ」
「あの一族と決戦だな」
二階堂もこのことについて言う。
「さて、都に帰ったら大勝負だな」
「ええ、そこでも頑張りましょう」
「やってやるのだ」
山は隅から隅まで調べられそのうえでだ。
結界は全て壊された。それが終わってから軍は都に引き返した。
その途中でだ。孫策は袁術に囁いた。孫策は馬に乗り袁術は張勲が操る馬車に乗っている。その馬車のところに来てであった。

「ねえ、いいかしら」
「どうしたのじゃ？」
「正直夏侯淵達は無事だったけれどね」
「それでもじゃな」
袁術もだ。眉をひそませてだ。孫策に応える。声は自然と小声になっている。
「あちらの世界の者達は」
「あの集めていた気のことをね。穏に聞いたのよ」
「それで陸遜は何と言っておるのじゃ？」
「あの気は。人の怨念や悲しみや憎しみを集めたものらしいわよ」
孫策は剣呑な顔で袁術にこう囁く。
「そうしたものを集めていけば巨大な負の力になるそうよ」
「それでは太平要術の書と同じではないか」
「そうよね、同じよね」
「あの山は元々霊力が強いと聞くが」
「穏はそのことも言ってたわ」
この辺りは流石だった。陸遜の学識は尋常なものではない。
「山は元々霊力が集る場所だけれど」
「あの山は特にじゃな」
「そうよ。負の力でも集めやすいから」
「成程、だからですね」
馬車の手綱を握る張勲も話に加わってきた。
「あの山に結界を置いて」
「それでよからぬ気を集めて」
「その気で碌でもないことをしようと考えていたのね」
「司馬尉は何のつもりなのじゃ？」
孫策の話を聞いてだ。袁術は。
腕を組み難しい顔になって言った。
「わらわ達を失脚させるにしては大掛かりに過ぎるぞ」
「ううん、そうよね。過ぎてるわよね」

「これではあれではないか」
ここでだ。袁術の勘が働いた。
「この国を破滅させるとかそういう類ではないか」
「あっ、確かに」
袁術の話を聞いてだ。張勲もだ。
はたと気付いた顔になってだ。こう言った。
「美羽様達を追い落とすだけなら謀だけでいいですから」
「そこまでして何をするかというとじゃ」
袁術は腕を組んだままさらに言う。
「そんな碌でもないことしか思いつかんぞ」
「司馬尉はそもそもかなり冷酷な奴だしね」
孫策はその司馬尉に嫌悪を見せていた。
「それもかなりね」
「あの京観はあまりじゃろう」
「実際にあんなことをした人間ははじめて見たわ」
孫策はさらに話す。

# 第百七話　曹操、司馬尉に詰め寄るのことその三

「史書には時々あるけれどね」
「何か。楽しんでいる感じですね」
張勲も今は笑顔でなくだ。
こうだ。その事実を言うのだった。
「殺戮を」
「その女がよからぬことを考えている」
「明らかに危険ですね」
「都に戻れば勝負よ」
孫策は今は剣を抜いていない。しかしだ。
剣を構えだ。そして言うのだった。
「いいわね、都に戻ってからが本番よ」
「ええ、わかっています姉様」
「あの女許さないんだから」
孫策の後ろでそれぞれ馬、白虎に乗る孫権と孫尚香が応える。
「妖しげな策謀もこれで、です」
「終わりになるのね」
「帝の御前での詰問かのう」
袁術も言う。
「そうして申し開きができぬ様にしてからじゃな」
「そういう手筈になっているわ」
「もう決まっておるのか？」
「袁紹と曹操がね」
この二人の名を出してだ。孫策は話す。
「もう決めてるわよ」
「姉様達がか。相変わらず早いのう」
「けれどそれでいいでしょ」
「というよりそれしかないであろうな」

袁術は首を捻りながら述べる。
「司馬尉を追い詰めるには」
「そもそも司馬尉の家自体もね」
孫策はここでこんなことも言った。
「どうした家なのかよくわかっていないし」
「ですね。そういえば」
言われてだ。張勲も頷く。そのうえで述べる彼女だった。
「名門であることは確かですけれど」
「そのはじまりを知る者はいないわよね」
「そうした家もあまりありませんね」
孫権もだ。そのことには不審なものを感じて述べる。
「大抵は何かしらのルーツがはっきりしていますから」
「はじまりがわからない家というのも怪しいわね」
孫尚香から見てもだ。そのことはだった。
「一体どういう家なのかしらね」
「その辺りもわかればいいですね」
孫権は妹の話を聞いたうえで姉に話した。
「司馬氏自体のことも」
「ええ、そう思うわ」
そうした話をしながらだった。一同は都に戻る。その中でだ。
ナコルルは都の方を見てだ。怪訝な顔になっていた。その彼女を見てだ。
ミナがだ。こう言った。
「感じるのね」
「はい、邪な気が高まっています」
「でjはやっぱり司馬尉は」
「間違いないと思います」
ナコルルはその怪訝な顔で話す。
「妖人です」
「あの羅将神ミヅキをも超える」

「この国、いえこの世界を全て覆う様な」
まさにだ。そこまでだというのだ。
「そうした方です」
「危ういわね」
ミヅキはこうも言った。
「その彼女と対峙するとなると」
「劉備さんがですね」
「私達も行くべきね」
そしてだ。ミナはここでこう言った。
「尋常ではない力の持ち主なら」
「そうですね。ただ」
「ええ、彼等はいないわね」
こんなことも話す二人だった。都にそうしたものも感じてのやり取りだった。
「アンブロジアやオロチは」
「他の地に去ってしまった様ですね」
「他の地。それは何処か」
「おそらくこの世ではないでしょう」
ナコルルはそう見ておりだ。実際に言った。
「何処かはわかりませんが」
「彼等の潜む場所といえば」
ミナは探った。そうしての言葉だった。

# 第百七話　曹操、司馬尉に詰め寄るのことその四

「闇の中かしら」
「そこでしょうか」
「闇の中ならどうしようもないわね」
「そうですね。私達の決して行けない世界ですから」
「それなら。封じる場所は」
何処か。二人で考えていく。
そしてだ。辿り着いた答えは。
「この世界しかないわね」
「また。戦いになりますね」
「それなら。戦場において」
「あの人達を封じましょう」
こう話してだった。彼女達は都に戻るのだった。そしてだ。
都に戻った。帰還の行軍をすぐに終えるとだ。
曹操はだ。己の屋敷に戻りすぐに周りに告げた。
「いい、今からすぐにね」
「帝の御前にですね」
「赴かれるのですね」
「ええ、もう麗羽達も用意しているわね」
「袁紹殿でしたら」
郭嘉が曹操のその問いに答える。
「御自身のお屋敷に戻られて」
「それで大急ぎで、なのね」
「はい、用意に取り掛かられているようです」
「あの娘はせっかちだからね」
曹操はこう言って微笑みもした。
「もう急いで宮廷に向かってよね」
「そして他の方々も」

「劉備は？」
曹操は彼女の動静も尋ねた。
「あの娘は摂政のうえ太子だから一番大事なのだけれど」
「劉備殿もです」
韓浩が答えてきた。
「既に御自身のお屋敷に戻られてです」
「ならいいわ。まずは私達が先に朝廷に入ってね」
「そのうえで、ですね」
「司馬尉を」
「ええ、問い詰めるわ」
鋭い顔でだ。こう言うのだった。
「定軍山のことをね」
「間違いなくですね」
ここでだ。郭嘉の目の光が強くなる。
その目でだ。彼女は曹操に話す。
「司馬尉はあの山のことに関わっています」
「あの山に秋蘭達の軍を向けることを知っていたのは私達だけだったから」
これはだ。曹操の仕掛けた策だったのだ。
「そう、摂政と左右の宰相に」
「それに三公の」
「私達が秋蘭の命を狙うことは有り得ないわ」
それは決してだった。そうしたことも全てわかっていてなのだ。
曹操は仕掛けた。そうしてなのだ。
「決してね」
「だからこそですね」
「だとすれば仕掛けたのは一人しかいないわ」
「司馬尉仲達」
「前からいけ好かない女だったわ」
曹操は大鏡の前で身だしなみを整えながら話す。

「名門であることを鼻にかけていて」
「あの、華琳様そのお話は」
「あまり」
郭嘉と韓浩は気遣う顔になってだ。曹操に言った。
「されるべきではないかと」
「ですから」
「そうね。それはわかっているわ」
それはだと答える曹操だった。
「けれど。私は宦官の家の娘、麗羽は妾腹」
このことはだ。彼女達にとってはどうしても拭えないものなのだ。
しかしそれでに対してだ。司馬尉はどうかというのだ。
「名門の嫡流とは違うわ」
「だからですか」
「司馬尉は元々」
「好きではなかったわ。けれど」
それでもだとだ。曹操の言葉に剣が宿る。
そしてその剣を宿したままだ。曹操は話していく。

## 第百七話　曹操、司馬尉に詰め寄るのことその五

「今は余計にね。秋蘭のことは許せないわ」
「だからこそですか」
「朝廷に急いで入り」
「問い詰めて。返答次第ではね」
大鎌も持つ。その鎌が剣呑な光を放つ。
そしてその鎌の光を己自身に帯びさせてだ。曹操は宮廷に向かうのだった。
既に宮廷はだ。多くの兵達に護られている。その彼等の間を通ってだ。曹操は馬で宮廷に入った。
すぐ後ろには夏侯姉妹に曹仁、曹洪の姉妹が控えている。その四人にだ。
曹操はだ。こう言うのだった。
「正念場よ」
「はい、司馬尉とのですね」
「決着の時ですね」
「絶対に許さないわ」
曹操の目がさらに鋭いものになる。
その目で夏侯姉妹を見てだ。彼女は言うのである。
「秋蘭を殺そうとしたことは」
「華琳様・・・・・・」
夏侯淵は主のその言葉にだ。思わず頭を垂れた。
そしてだ。そのうえで言うのだった。
「勿体ない御言葉」
「勿体なくはないわ」
しかしだ。曹操はこう夏侯淵に返した。
「貴女は私にとってかけがえのない娘の一人だから」
「だからですか」

「ええ。だからよ」
こう曹操は言うのだった。
「いいのよ」
「華琳様・・・・・・」
「いい？絶対に死んでは駄目よ」
曹操の言葉は続く。
「死んだら私が許さないから」
「はい」
夏侯淵は微笑みだ。曹操に応えた。
「私は何があっても死にません」
「安心しろ、私もいる」
夏侯惇もここで言ってきた。
「秋蘭を死なせはしない」
「姉者も言ってくれるか」
「当然だ。私達はいつも六人だった」
今ここにいる五人と袁紹だ。彼女達は幼い頃から共にいる。
だからだ。六人だというのだ。
それでだ。夏侯惇は話した。
「その六人が欠けることはない」
「そうだな。ではこれからも」
「私達は死なない」
強い声でだ。夏侯惇は言い切った。
「わかったな」
「わかった。それではな」
こうした話をしてだった。彼女達は朝廷に入った。そのうえでだ。
朝廷のあらゆる場所を固めた。それからだ。
司馬尉を待つ。帝の前には劉備達五人と側近達が集っている。そしてだ。
そこからだ。彼女達の前に来る女を待っていた。その中でだ。
関羽、劉備と共にいる彼女がだ。こう言うのだった。

「思えばだ」
「司馬尉だな」
「ああ、あの女はやはりだ」
こうだ。趙雲に話すのだった。
「よからぬ者だったか」
「よからぬどころではないな」
それに留まらないというのだ。趙雲は司馬尉についてこう話す。
「あの女は」
「よからぬどころではない？」
「そうだ。あの女はどうやらだ」
ここでだ。司馬尉についてだ。趙雲は言った。
「ただの人間ではない」
「ただの？」
「そうだ、ただのだ」
人間ではないと話すのだ。

# 第百七話　曹操、司馬尉に詰め寄るのことその六

「異形の者の血が入っているのだろうな」
「何っ！？ではあの女は」
「そもそもがオロチやアンブロジアに近いのだ」
それが司馬尉だというのだ。
「つまりだ。ここに来てもだ」
「妖術とか使ってきてもおかしくはないってんだな」
馬超がだ。眉を顰めさせて行った。
「それがあいつかよ」
「そう思っていい。だが妖術ならだ」
「はい、その時のことも既に考えています」
鳳統がここで彼女達に言う。
「ですからこの場にです」
「うち等がおるんや」
あかりが関羽達に不敵な笑みを浮かべて応える。
「あの女が何をしてもや」
「封じます」
月もいる。その顔は。
既に戦う顔だ。その顔で言うのだった。
「私達全員の力を使って」
「おそらくはだけれど」
神楽もだ。その顔には緊張がある。
「司馬尉は尋常な相手じゃないわ」
「妖気っていうんやな」
あかりもだ。既に戦いの前の顔になっている。
「それが洒落にならんまでに高いやろな」
「妖気がかよ」
「そや、魔物とかいうのやないで」

あかりがまた話す。
「邪神っていう感じやな」
「それではオロチやアンブロジアと同じではないか」
関羽はその話を聞いて言った。
「完全にだ」
「そう思います、私も」
ナコルルもだ。そのことについて言った。
「あの人はおそらくは尋常な方ではありません」
「そうした相手とこれから対峙するか」
「尋常な話じゃなくなるな」
趙雲と馬超もだ。ナコルル達の話を聞いてあらためてだ。
身構えた。まだ司馬慰は来ていないがそれでもだ。
そうしてだ。司馬尉を待つ。やがて。
一行のところにだ。周泰が来て報告した。
「来ました」
「わかりました」
劉備がだ。真剣そのものの顔で彼女の言葉に頷く。
「それではです」
「いい？ここからが正念場よ」
曹操もだ。いよいよだった。
司馬尉を待つ。そしてその司馬尉がだ。
帝の前に来た。供は二人の妹達だ。彼女達を後ろに従えさせてだ。
堂々と宮廷に来た。そのうえで帝の前に妹達と共に参上してそのうえでだ。膝を折って拝謁してそれからだ。平然とした顔でこう言った。
「物々しいですね」
「聞きたいことがあるわ」
曹操だが。司馬尉に対して最初に言った。
「定軍山への出兵だけれど」
「そのことが何か」

「夏侯淵が襲われたのよ」
「そうなの」
「ええ、そのことだけれど」
こうだ。司馬尉に対してさらに問い詰める。帝の前であるがだ。
それでも誰もが緊張しきった空気の中にあった。帝の前なので摂政であり太子でもある劉備以外は剣を持っていない。それでもだ。
誰もが何かあれば戦おうとだ。身構えていた。その中でもだ。
司馬慰は平然としてだ。こう言ったのだった。
「あの娘達は兵達に襲われたのよ」
「兵に？」
「白装束の者達にね」
そのことをだ。話に出した。
「それにオロチや刹那といった連中にね」
「あの都での戦いで出たという彼等ね」
「そう、そして」
曹操の言葉がさらに鋭いものになる。

# 第百七話　曹操、司馬尉に詰め寄るのことその七

「夏侯淵達があの山に行くということを知っていたのは」
帝の前なので真名では呼ばずそうしている。そうしながらだ。
曹操はさらにだった。司馬尉を見据えて問う。
「摂政であり太子にもなった劉備殿と」
「わたくしと」
袁紹もここで出て来て司馬尉に言う。これで二対一だ。
「袁術さん、孫策さんと」
「貴女だけだったわ」
この事実をだ。二人で司馬尉に突きつけてみせた。
「夏侯淵は当然知っていたけれど他の将は知らなかったわよ」
「それで私をというのね」
「思えば不思議ですわね」
袁紹はいささか嫌味を込めて司馬尉に言った。
「貴女は董卓さんの乱の時何処にもおられませんでしたわね」
「身の危険を感じて身を隠していたのよ」
「何処に？」
「私の隠れ家に」
そこにだと。やはり平然として答える司馬尉だった。そこには悪びれたものも卑屈なものも一切ない。そうした中で言うのだった。
「そこが何処かも言うべきかしら」
「是非聞きたいわね」
また曹操が問う。間合いは離れてはいるがまさに一触即発だった。
花火を散らしながらだ。お互いに言うのだった。
「一体何処にいたのかしら」
「お話して頂けるかしら」
「そうね。では」
悠然とさえした笑みを浮かべてだった。司馬尉は。

ゆっくりと口を開いて。こう言ったのであった。
「闇の中に」
「闇！？」
「やはり」
ミナとナコルルがだ。それを聞いてだ。
すぐに血相を変えてだ。身構えてだ。
周囲にだ。こう告げた。
「彼女はやはり」
「異形の存在です」
「只者ではないわ」
「間違いなく」
「そうよ。司馬家は狐の血を飲んだのよ」
司馬尉はこのことをだ。ここで言ってみせたのだった。
「九尾の狐の血をね」
「九尾の狐！？」
「あの商と周を滅ぼした」
それを聞いてだ。誰もがだ。
驚きを隠せずだ。蒼白になり身構えた。
その彼等の中にいてもだ。司馬尉は態度を変えない。それでだ。
余裕を保ったままだ。彼女はまた言ってみせた。
「そうして絶大な力を手に入れたのよ」
「闇の力やな」
あかりはその力をこう表現した。
「あの狐は最悪の魔神の一つやからな」
「そちらの世界でもあの狐はいるのね」
「そうや、あの狐は只者やないで」
まさにそうだとだ。あかりはまた話す。
「国を幾つも滅ぼしたまさに魔神や」
「その魔神の血を飲みそれでなのよ」
「力を手に入れたんか」

「司馬家のことがこれでわかったかしら」
「そういうことね。話はわかったわ」
曹操はここまで聞いてだ。それでだ。
あらためてだ。こう司馬尉に述べた。
「貴女達はその力を使って代々この国の高官でいてそうしてなのね」
「機会を窺っていたわ」
「この国を滅ぼすのをなのね」
「察しがいいわね。そうよ」
司馬尉はこのことも隠さなかった。
「魔神の血だけじゃないわ。私自身もね」
「それを望んでいますのね」
袁紹はこの時帝の前であることを残念に思った。何故かというとだ。

# 第百七話　曹操、司馬尉に詰め寄るのことその八

今すぐに司馬尉を斬り捨てたいと思ったからだ。だがそれが出来ずにだ。

あえてだ。劉備に対して言うのだった。

「貴女自身も」

「言っておくわ。私はオロチや白装束の者達とも手を結んでいるわ」

「言ったわね」

「もう隠すことはしないわ」

またそうだというのである。

「隠す必要はないから」

「では。いいわね」

「その言葉、全て謀反を見なしますわ」

曹操と袁紹が共に言いだ。

それでだ。二人は周囲に顔を向ける。そこには当然ながら劉備もいる。そして孫策に袁術もだ。彼女の家臣達にあちらの世界の者達もだ。

その彼等にだ。二人は言うのだった。

「司馬家の者達は謀反を起こしているわ」

「そのことが今はっきりとしましたわ」

それならだというのだ。そしてだ。

劉備もだ。孔明と鳳統に話す。

「桃香様、それではです」

「摂政ですから」

国の第一の者としてだというのだ。

「ここはです」

「ご決断を」

「ええ」

そしてだ。劉備もだ。

力強く頷きだ。そのうえでだ。
周囲にだ。こう告げたのであった。
「謀反人を捕まえて下さい」
「わかりました。それでは」
「今すぐになのだ！」
「帝、こちらに」
劉備はすぐにだ。あの剣を抜いてだ。
そのうえで皇帝の玉座の前に立つ。彼女の周りを五虎達が護る。
それで護りを万全にしたうえでだ。今度は孔明がだ。
あの羽毛の扇を手にしてだ。言うのだった。
「司馬家の人達を全員捕まえて下さい」
「必要とあらば殺しても構わないわ」
「責任はわたくし達が取りますわ」
曹操と袁紹はこう言い切る。
「できれば捕まえて色々聞きたいけれど」
「仕方ないのならそうしなさい」
「わかりました！」
「それなら！」
顔良と文醜もだ。応えてだ。
他の者達も司馬三姉妹に殺到する。しかしだ。
彼女の前にだ。あの二人の男達がだ。不意に出て来た。それは。
「于吉！？」
「左慈！」
「はい、司馬尉さんをお助けに参りました」
「それで来た」
こうだ。二人は言うのだった。
「危ういところだった様ですね」
「だが俺達が来たから安心だな」
「いえ、大丈夫よ」
しかしだ。司馬尉はだ。

二人の仲間達にもだ。悠然と笑って言うのだった。
「私はこの程度の状況では何ともないわ」
「ではあの術をですね」
「使うつもりか」
「私のあの術は場所を選ばないのよ」
そうだとだ。司馬尉は言っていく。
「例え部屋の中であろうともね」
「そうでしたか。では私達の出る幕はなかった様ですね」
「勇み足だったか」
「いえ、そうではないわ」
それもまた違うとだ。司馬尉は言う。
それでだ。彼女はだ。
あらためてだ。劉備達に言うのだった。彼女達を完全に取り囲む。
「貴女達は運がいいわ」
「運がいい!?」
「どういうことだよ、そりゃ」
「ここで運がいいって」
「どういう意味なの?」
「私の術を見られるのだから」
それでだ。運がいいというのだ。
「本当に運がいいわ」
「こりゃ相当やばい術やな」
あかりはここでも言った。
「ほんまとことんやばい女やねんな」
「やばいというのかしら」
「あんた、今不気味な妖気ぷんぷんさせてるで」
あかりにはわかることだった。それも充分にだ。

## 第百七話　曹操、司馬尉に詰め寄るのことその九

「正体を出したんやな」
「正体というのかしら。自分を出しているだけよ」
「それを正体っていうんやけれどな」
「見解の違いね」
「さて、何の術や？」
あかりもだ。前に出てだ。そのうえで司馬尉に問う。
「あんたの術は」
「見て驚くことはないわ」
司馬尉はそのあかりに言い返す。
「何故ならね」
「その術を見たら死ぬんやな」
「さあ、見るのね」
こう言ってだ。そしてだった。
司馬尉はだ。その右手を挙げようとした。その彼女にだ。
骸羅がだ。飛び掛かろうとする。
「させるか！」
「よせ、骸羅！」
だがその彼をだ。祖父の和狆が言う。
「前に出るでない」
「何っ、何かあるのかよ」
「左に跳ぶのじゃ！」
咄嗟にだ。そうしろというのだ。
「よいな、そっちじゃ！」
「！？それなら」
骸羅も祖父の言葉に応えだ。そうしてだった。
左に跳んだ。するとそれまで彼がいた場所にだ。
落雷が来た。宮廷の中だというのにだ。

それを見てだ。誰もが唖然となった。
「何っ!?雷!?」
「雷が落ちただと!?」
「宮廷の中で!」
「これが我が術」
それだとだ。司馬尉は凄惨な笑みで言った。
「落雷の術よ」
「全員散開しろ」
ここでだ。ハイデルンが全員に言った。
「集っていては危険だ」
「そうですね。ここは散開してですね」
「雷を避けましょう」
ラルフとクラークが応える。そうしてだ。
まずは彼等が散開した。続いてだ。
他の者達もそうする。そのうえで司馬尉達を囲む。
だが彼等はそのまま悠然と立っている。そうしてだ。
司馬尉は彼等にだ。こう言うのだった。
「私の雷を防げると思っているのかしら」
「予想以上に難儀な術やな」
それは言うあかりだった。
「一発受けたらお陀仏やな」
「俺もか?」
十三があかりに突っ込みを入れる。
「直撃受けたらやっぱりか」
「そや、天麩羅や」
こう言うところがあかりの時代だった。
「そうなりたいか?」
「そんな訳あるか、天麩羅は食うものだろ」
「そういうこっちゃ。そやったらや」
「この女早いうちに」

「そうしたいんやけれどな」
あかりは司馬尉を見据えながら十三にさらに話す。
「隙ないわ、見事なまでや」
「隙を作るつもりもないわ」
司馬尉の方もだ。こう言うのだった。
「言っておくけれど今ここで全員に雷を落とすこともできるのよ」
「それだけ自由自在に操れるということね」
「その通りよ」
曹操にも答えるのだった。
「さあ、死にたいかしら」
「生憎だけれど死ぬのは貴女よ」
曹操はだ。素手でも司馬尉を見据えて言った。
「私達じゃないわ」
「そう言うのね」
「言うわ。事実だから」
あくまでだ。曹操は引かない。
「雷をどれだけ出してもね」
「おやおや、相変わらずですね」
于吉がここで返した。
「私達の術を見ても平気ですか」
「そんなものを今更見ても何ともありませんわ」
袁紹も言う。

# 第百七話　曹操、司馬尉に詰め寄るのことその十

「例え貴女がどんな術を使ったとしても」
「臆することはないのね」
「その通りしでしてよ」
袁紹も曹操と同じだった。それでだ。
彼女も司馬尉に対して前に出る。そしてだ。
玉座の前の劉備にだ。こう言うのだった。
「帝は御願いしましたわ」
「は、はい」
劉備も応える。しかしだ。
その劉備を見てだ。司馬尉はまた言った。
「そうね。皇帝をここで殺せばいいわね」
「帝を！？」
「まさかここで」
「それもいいわね」
司馬尉の笑みがだ。より凄惨なものになった。
その笑みだ。帝を見てだ。
右手を挙げようとする。それを見てだ。
劉備がだ。すぐに玉座の帝を見上げて叫んだ。
「お逃げ下さい！」
「いえ、私はここにいます」
「ですがそれは」
「太子達がここにいるのです」
そのだ。戦いの場にだ。
「それでどうして私だけ逃げられましょう」
「ではここで」
「私もいます」
逃げないとだ。毅然として言うのである。

「司馬尉なぞに背は向けません。それに」
「それに？」
「私はここにいることで戦います」
そうするとだ。己を殺そうとする司馬尉を見据えて言った。
「この女と」
「！？まさか」
ここでだ。司馬尉は皇帝を見てだ。
そのうえでだ。気付いた様に言った。
「この状況では」
「！？姉様一体」
「何があったのですか？」
「よくないわね」
周囲を見てだ。それで言ったのだった。
今だ。司馬尉達の周りにはだ。北に翁とズィーガー、東に楓と十兵衛がいた。

# 第百七話　曹操、司馬尉に詰め寄るのことその十一

そして南には嘉神に覇王丸、西に示現と狂死郎が位置していた。
そのうえだ。
「三種の神器、巫女達も揃っているわね」
「これだけの力に囲まれて本気にならなければ」
「危ういですか」
「特にあの娘ね」
月を見てだ。司馬尉は言った。
「あの娘の力は常世さえ封じるものだから」
「だからですね」
「今は」
「そうよ。今は下手に動いたら封じられるわね」
こう言うのだった。妹達に。
「だから。ここは退きましょう」
于吉も言う。
「それが賢明です」
「わかったわ。それじゃあね」
こうだ。彼等の中で話してからだ。
そのうえでだ。司馬尉は劉備達に言った。
「気が変わったわ。帰るわ」
「随分と勝手なことを言ってくれるな」
関羽がその司馬尉を見据えて言う。
「これだけのことをしてくれてか」
「言っておくわ。やがてこんなものでは済まなくなるわ」
悠然とした笑みを戻してだ。司馬尉は言うのだった。
「けれど今はね」
「逃げるというのだな」
「そうよ。逃げるわ」

平然と笑ってだ。司馬尉は言い返してだ。
そのうえでだ。己の前に黒い渦を出してだ。その中に向かう。その中でだ。
彼女はだ。劉備達に言った。
「また会いましょう。その時こそはね」
「終わりよ、全てね」
「その時こそが」
司馬師と司馬昭も言う。しかし。
その二人にだ。陳宮と華雄が飛び掛かる。
「行かせないのです！」
「貴様等だけでも！」
「待つ」
しかしだ。その二人にだ。
呂布がぽつりと言った。その瞬間にだ。
二人は動きを止めた。すると今向かおうとしたその場所にだ。
巨大な火柱があがり無数の氷の刃が起こった。それを見てだ。
陳宮も華雄もだ。蒼白になって言った。
「な、何なのですこの炎は」
「まさかあの二人も」
「当然よ。私達も狐の血が入っているのよ」
「術は使えるわ」
二人もだ。姉と同じくだった。
その悠然とした笑みを浮かべだ。言ってきたのである。
「私は炎」
「私は氷よ」
司馬師と司馬昭がそれぞれ言う。
「それが使えるのよ」
「こうしてね」
「あのむかつく姉だけちゃうんやな」
張遼はそのことに歯噛みしながら述べた。

「ほんま難儀な奴等やな」
「そやな。何処まで嫌な奴等やねん」
ロバートも言う。話し方は張遼と似た感じになっている。表情も。
「おまけにそこの眼鏡にチビもおる」
「ははは、于吉といいますので」
「左慈だ」
「そんなもんわかっとるわ」
二人の名前自体は覚えているというのだ。
「御前等のその胡散臭さを言うとるんや」
「そうよね、一体何なのよあんた達」
「今だに正体不明なんだがな」
ユリにリョウも続く。
「こっちの世界の人間でもないし私達の世界の人間でもないし」
「では何なのだ」
「それはあの方々がお話してくれます」
「俺達から言うことはない」
こう言ってだった。二人はだ。
やはり何も言わずだ。それでだ。
その場から消えたのだった。司馬尉の妹達もだ。
それぞれ自分達の前に黒い渦を出して姉と同じ様にして消えた。
それからだ。
彼等は姿を消した。そうして都から姿を消したのだった。かくして司馬尉は宮廷から消えだ。謀反人と正式に定められたのだった。
だがそれは終わりではなかった。今度も戦いのはじまりでしかなかった。

第百七話　　完

2011.9.7

# 第百八話　怪物達、世界を語るのことその一

第百八話　怪物達、世界を語るのこと

宮廷での司馬尉達との対峙の後にすぐだ。劉備達は。
司馬尉の屋敷に兵をやりだ。あらゆるものを押さえにかかった。
しかしだ。
そこにあったものは。何もなかった。
「くっ、既にか」
「全て消しているか」
甘寧と太史慈がその宮殿の如き豪奢な宮殿の中で言う。
「人一人いないとはな」
「消えた時に同時にか」
「証拠になるものも何もないな」
黄蓋も言う。
「やってくれおるわ」
「そうですね。これではです」
諸葛勤もいる。そして彼女も屋敷の中を見回りながら話す。
「彼女達が何処に逃げたのかもわかりません」
「それが問題ですね」
呂蒙もこの状況には困った顔でいる。
「一体何処に逃げ去ったのか」
「この国の中にいればいいがな」
今言ったのは魏延だ。
「国の外に逃げたとなると厄介だな」
「それは考えられますね」
呂蒙は魏延のその言葉にこう返した。
「彼等はどんな場所でも自由自在に行ける様ですし」
「あの渦の中に入ってだな」

「はい、それで」
まさにそれだとだ。呂蒙は魏延に話す。
「ですから。国の外に出てそこで力を蓄えてまた攻められるとなると」
「厄介なことになるな」
「例えばですが」
諸葛勤は危惧する顔で話した。
「羅馬、大秦ですね」
「西にあるあの大国か」
「あの国を乗っ取ってそれで攻めて来るとなると」
「他には波斯という国もあります」
呂蒙は羅馬の宿敵であるその国の名前を出す。
「その国もかなりの力がありますし」
「そうした国から攻めて来れば厄介だな」
「そう思います」
「非常に」
孫策の軍師二人が魏延に話す。しかしここでだ。
黄蓋はだ。この国の名を出した。
「それよりも匈奴じゃ」
「あの国ですか」
「北の」
「匈奴の強さは大秦や波斯の比ではない」
匈奴は民全員が馬に乗り戦うことができる。そして生まれついてそうしてきている。まさに国の全てが軍と言っていい国なのだ。
その国をだ。司馬尉達が使えばというのだ。
「漢に近いしそれを考えればじゃ」
「匈奴が最も危ういか」
「わしはそう思う」
黄蓋は魏延にも話した。
「どちらにしても用心が必要じゃな」

「そうか。しかし何もないな」
魏延も屋敷の中を見回しだ。そして言ったのだった。
「宝も何も残してはいないか」
「本当に全て持ち去ってしまいましたね」
「驚くだけ早く」
諸葛勤と呂蒙は感嘆すらしている。
「司馬尉仲達、その術も頭も」
「恐ろしいものがありますね」
結局だ。司馬尉の側近達も何処に行ったかといった様な手掛かりも全く見つからなかった。彼等は仕方なく屋敷を去るしかなかった。
その話を聞いてだ。劉備は己の机で眉を曇らせて言った。
「そう。何もなのね」
「予想はしていましたけれど早いですね」
「消え去るのが」
彼女の両脇にいる孔明と鳳統も主と同じ顔になって言う。
「早く見つけ出して何とかしたいですけれど」
「難しいみたいですね」
「何処に消えたのかしら」
劉備もこのことが気になって仕方がなかった。

# 第百八話　怪物達、世界を語るのことその二

「本当に」
「まずは国の各地に人をやり探しましょう」
「そして見つけたならです」
軍師二人はここで劉備に献策をした。
「そのうえで兵を向けてです」
「決着を着けましょう」
「そうね。それが一番ね」
劉備もだ。二人の言葉に頷く。
そのうえでだ。とりあえずの方針は決まったのだった。
しかし暫くは何の手掛かりも入らなかった。その中でだ。
文醜は顔良達と卓を囲みながら言うのだった。
「ったくよ、あの姉妹はとんでもない奴等だよな」
「そうね。狐の血を飲んでいたなんて」
顔良は司馬家のその祖先のことから話す。
「それはちょっと」
「予想していなかったぜ」
文醜は麻雀の牌を持ちながら言った。
「怪しい奴とは思っていたけれどな」
「麗羽様も嫌っておられたし」
高覧もいる。
「それに私達もね」
「所詮あたいは馬賊の出だからな」
文醜ははじまりはそれだった。
「そんな奴から見ればああした名門そのものの奴って嫌なんだよ」
「それは私もよ」
今度言ったのは張?だった。この四人が卓を囲んでいるのだ。
その中でだ。張?は言うのだった。

「麗羽様にしても曹操殿にしてもね」
「そうだろ?あいつみたいに文句なしって訳じゃないんだよ」
どうしてもだ。彼女達にはその出自がついて回る。その二人に加えてだ。
「孫策さんだって。言ったらあれだけれど揚州の地方豪族だしな」
「出自は司馬家とは比べものにならないわよね」
「そうだよ。まあ袁術さんは袁家の嫡流だけれどな」
それでもだ。司馬尉の様なことはないのだ。
それでなのだった。袁紹配下の彼女達は。
「ああした高慢ちきな奴って嫌いだったんだよ」
「それに加えて狐の力を持っていてね」
「謀反まで考えていたとなると」
「手加減する必要はないわね」
袁紹軍の五将のうちの四人がそれぞれ言い合う。
「ならよ、あいつ見つけたらそれこそな」
「ええ、やることは一つね」
「斬る。絶対にね」
「そうしましょう」
そんな話をして麻雀をして。そこでだった。
急にだ。文醜が言った。
「ほい、大三元」
「えっ、何時の間に!?」
「またなの!?」
「しかも今度はそれって」
他の三人は文醜のそれに驚きの声をあげた。
しかしだ。当の文醜は平然として言うのだった。
「あたいはこれでも食える位からだからな」
「博打には強いっていうの?」
「まさか」
「そうだよ、強いんだよ」

高覧と張?にも誇らしげな笑顔で返す。
「元々な」
「けれど文ちゃんの強いのって」
それは何かとだ。顔良が話す。
「麻雀だけよね」
「んっ、そうか?あのトランプだって強いぜ」
「本当に?」
「そうだよ。アクセルの旦那達とやり合っても負け知らずだぜ」
「呼んだか?」
ここでそのアクセルが出て来て言う。
「俺はラジコンの方が好きだけれどな」
「あっ、アクセルの旦那」
文醜は笑顔でアクセルに応える。
「また今度あのトランプやろうな」
「ああ、今度な」
アクセルの返答は今一つはっきりしないものだった。それでだ。
そんな話をしながらだ。チンが来るとだ。こう彼に言った。

# 第百八話　怪物達、世界を語るのことその三

「あんた本当にやるのか？」
「そうでしゅ。麻雀は徹夜でやってこそでしゅ」
これがチンの言葉だ。
「だからでしゅ。やるでしゅよ」
「そうか。徹夜か」
「アクセルさんは徹夜は苦手でしゅか」
「ボクサーだから健康管理はしっかりしてるんだよ」
だからだというのだ。
「マイケルもセコンドについてな」
「ああ、だからな」
そのマイケルが出て来てだ。彼もチンに話す。
「徹夜ってのはいただけないな」
「それはあまり面白くないでしゅね」
「遊びは程々にだよ」
アクセルはまたチンに言った。
「それで身体壊したら何にもならないだろ」
「麻雀は一晩やってこその麻雀でしゅが」
「全く。変わっておらんのう」
タンがだ。ひょっこり出て来てチンに述べた。
「麻雀をするからと呼ばれてみればそれか」
「あっタン先生お久し振りでしゅ」
「昨日会ったところじゃろうが」
「そうでしゅたか」
「そうじゃ。しかしチンよ」
師としてだ。彼に話すのだった。
「今は何時戦になるかわからん」
「戦でしゅか」

「戦の前には身体は休めておくものじゃ」
言いながらだ。タンは白い眉の奥のその目を光らせる。そしてそのうえでだ。弟子に対して話すのだ。
「だから麻雀もよいがじゃ」
「程々にでしゅか」
「そうじゃ。どうで」
その目でだ。チンをさらに見ての言葉だった。
「一晩かけて金を巻き上げるつもりじゃろう」
「うっ、それは」
「全く。相変わらずじゃな」
呆れた声でだ。チンに話していくのだった。
「こと金のことについてはがめつい」
「お金は命でしゅ」
あくまでこう言うチンだった。
「だからいいのでしゅ」
「あんたまさかと思うが」
マイケルが真剣に疑う顔でチンに問うた。
「結構汚いこともしてないか？」
「それは主観の違いでしゅ」
「ああ、このおっさんはな」
ここでまた話すアクセルだった。
「裏の世界にも顔が利くからな」
「じゃあ悪い奴か」
「とはいっても根っからの悪人という訳でもないのじゃ」
タンはこのことはしっかりと保障した。
「殺人や麻薬や臓器売買はやってはおらん」
「私はそんな外道はことはしないでしゅよ」
それは自分でも必死に主張するチンだった。
「精々裏カジノやそうしたこと位でしゅ」
「あと八百長じゃな」

タンがまた弟子に突っ込みを入れる。
「まあそんなところじゃな」
「とにかく殺人とかは大嫌いでしゅよ。人を殺したこととかはないでしゅ」
「ああ、そうなのか」
それを聞いてだ。マイケルも何とか納得した。
「殺人とか麻薬をやってないなら救いはあるな」
「だからおいも捕まえたりしないっちゃよ」
ホンフゥまで出て来た。
「金に汚いわ趣味が悪かだけれど捜査には協力してもらってるっちゃ」
「ホンフゥさんは向こう見ずで困るでしゅよ」
今度は二人で話す。
「全く。無鉄砲とはホンフゥさんのことでしゅ」
「悪人を捕まえるのに遠慮はいらないっちゃ」
「死んでもいいでしゅか？」
「おいはそう簡単には死なんっちゃよ」
「いや、死ぬ時は死ぬぞ」
アクセルはこのことはしっかりと言う。

# 第百八話　怪物達、世界を語るのことその四

「だから気をつけろよ」
「うっ、アクセルは厳しいっちゃね」
「あんたも親がいるだろ？だったら悲しませる様なことはするなよ」
「だからっちゃ」
「そうだよ。特に母親は大事にしろよ」
母親思いのアクセルらしい言葉だ、
「いいな、そこはな」
「そうっちゃな。親孝行も大事っちゃな」
「それは忘れるなよ」
「じゃあ今度餃子でも御馳走するっちゃ」
ホンフゥの好物である。
「蒸し餃子のフルコースっちゃ」
「餃子か」
「それなのか」
「そうっちゃ。餃子っちゃ」
それのことをだ。アクセルとマイケルに話してだ。
さらにだ。二人に対しても言うのだった。
「どうっちゃ？今から」
「餃子か。いいな」
「中華街でよく食ったぜ」
「では私もお邪魔するでしゅ」
食べると聞いてだ。チンも乗ってきた。
「ラーメンは私が御馳走するでしゅよ」
「あれっ、あんたがか？」
「自分の金出すっていうのか？」
「食べることは皆で食べてこそでしゅ」
だからだというのだ。

「遠慮することはないでしゅよ」
「そうか、じゃあな」
「一緒に食べるか」
「茶玉子も出すぞ」
タンはこれだった。
「身体によいしあっさりとして美味い」
「あれっちゃな。朝に食うと最高っちゃな」
ホンフゥは茶玉子にも乗った。
「じゃあ食べるっちゃよ」
「よし、それじゃあな」
「麻雀じゃなくて食うか」
こう話してだった。彼等は食べることに専念するのだった。
彼等の多くは今はリラックスしていた。その中でだ。
董卓は劉備のところでメイドとして働いていた。一応死んだことになっているからだ。
その彼女が働きながらだ。同じ部屋にいて手伝ってくれている陳宮に尋ねた。
「あの」
「何なのです？」
「少し考えたんだけれど」
少しおどおどした感じのいつもの調子でだ。董卓は話す。
「司馬尉仲達と一緒にいたあの二人は」
「于吉と左慈なのです？」
「うん。あの人達ってこちらの世界の住人でも私達の世界の住人でもないらしいけれど」
「そうなのです。そこなのです」
陳宮も董卓のその言葉に頷いて言う。そしてだ。
一緒の部屋にいてやはり手伝ってくれているリムルルに尋ねた。
「リムルルも知らないのです？」
「うん、悪いけれど」

リムルルもだ。こう言うだけだった。
「僕達の世界にもあの二人はいなかったよ」
「やっぱりそうなのです」
確めなおしてだ。それから頷く陳宮だった。
「どちらの世界の人間でもないのです」
「じゃあ第三の世界の人間になるわ」
常に董卓といる賈駆の言葉だ。
「その世界は一体」
「何処なのかしら」
董卓も首を捻る。ここでだ。
不意にだった。何故か部屋にだ。
華陀が出て来た。それで一同に言うのだった。
「ああ、于吉や左慈のことだな」
「あっ、華陀さん」
「どうしてこの部屋に？」
「瞬間移動で来た」
あっさりとそれとだ。華陀は董卓とリムルルに話す。

# 第百八話　怪物達、世界を語るのことその五

「あの二人の術でな」
「相変わらず非常識な術ね」
賈駆はこのことにはもう慣れているがそれでもだ。
いささか呆れた顔でだ。華陀に言った。
「しかも僕達の話を聞いていたのも」
「ああ、地獄耳だ」
何でもないといった調子で華陀はまた答える。
「俺も針を使ってそれができるんだ」
「そのツボを知っているのが流石よね」
「ダーリンはやっぱり凄いわ」
いつもの怪物達も普通にいきなり出て来る。
「それができるからこそよ」
「最高の名医よね」
「そういえば」
この二人を見てだ。賈駆はふと思った。
それでだ。こう彼等に尋ねたのだった。
「あんた達もこちらの世界の人間でもリムルル達の世界の人間でもないわね」
「その前に人間なのです？」
陳宮はそもそもこのこと自体を疑っている。
「御前達は外見も能力もその限界を超えているのです」
「あら、失礼なことを言うわね」
「こんなに奇麗な乙女を捕まえて」
「何処が乙女なのです」
まだこう言う陳宮だった。
「ねねは御前達みたいなのははじめて見たのです」
「こんな美貌は見たことがないのね」

「だったらよく見なさい」
挙句にはポージングまでする二人だった。
「さあ、あのエジプトのクレオパトラをも凌駕するね」
「この美貌をね」
「うう、気分が悪くなったのです」
いい加減だ。陳宮もそうなってきた。
「とにかくこの連中がどちらの世界の人間でもないことはよくわかったのです」
「そう、それよ」
まさにそれだとだ。賈駆はここで言った。
「ということはよ」
「あっ、そうなのです」
ここでだ。陳宮もはっと気付いた。
それを顔に出してだ。彼女は賈駆に話した。
「ではこの二人は」
「若しかしたらあの連中のことを知っているかも知れないわ」
「ええ、あの白装束の一団ね」
「それとあの二人ね」
怪物達もだ。そのことについて応えてきた。
そしてだ。こう言うのだった。
「知ってるわよ、実際に」
「あの連中のことはね」
「じゃあ聞かせてもらえるかしら」
賈駆の眼鏡の奥の目が光る。それでだ。
二人に対してだ。強く尋ねたのだった。
「あの連中のことを」
「まずはあたし達のことから話すわね」
「そうさせてもらっていいかしら」
「そうだな。まずはそれからだな」
華陀もだ。二人の言葉に頷く。

そうしてだ。二人もそれを受けて言うのだった。
「最初はそこからね」
「お話させてもらうわね」
「それでは御願いします」
董卓は怪物達に対しても礼儀正しい。
「そのお話を」
「ええ、じゃあ他の皆にも来てもらってね」
「それでお話させてもらうわ」
「では部屋も変えよう」
華陀がそれを仕切ってだ。こうしてだった。
董卓やリムルル達だけでなく二つの世界の面々がだ。宮廷の大広間に集められてだ。そこで二人の話を聞くことになった。
程なくだ。一同が集められた。そうしてだ。
二人は華陀を挟んで一同を前にしてだ。それで話を話した。
「あたし達は並行世界と時空の守護者なのよ」
「あらゆる世界のね」
それが彼女達だというのだ。

## 第百八話　怪物達、世界を語るのことその六

「だからあらゆる世界、あらゆる時空を超えられるの」
「そういう存在なのよ」
「それではあれか」
ケイダッシュが二人の話を聞いて言った。
「あんた達は神様か」
「神様とは違うのよ」
「守護者なのよ」
そこは違うというのだ。
「並行世界にも時空にもそれぞれ司る神様がいるのよ」
「あたし達はその神様達にお仕えしているのよ」
「つまりあれだな」
華陀がここで二人の話を補足してきた。
「この二人は天帝に仕える天界の官吏だ」
「そうそう、天帝がおられるわ」
「あたし達の一番上にはね」
二人はこのことも話した。
「最高位の神様よ」
「その方がおられるのよ」
こう話してだった。二人は天界のことも話すのだった。
「あたし達はその方々の指示で動いているのよ」
「仕事をしているの」
「そうだったのですね」
孔明はここまで聞いてだ。こくこくと頷き眉を少し顰めさせて言った。
「天界の存在は多くの書に出てきますし神様達もおられるのはわかっていましたけれど」
「まあ仙人って呼んでもいいわ」

「仙女になるわね」
まだこんなことも言う二人だった。
しかしだ。そのことよりもだ。二人は今はこのことを話し続ける。
「とにかくあたし達は少し力を授かっただけよ」
「そうした存在なのよ」
「その力は少しではないわね」
マリーが突っ込みを入れるのはこのことだった。
「貴方達の基準ではそうかも知れないけれど」
「そこ、貴女達にしておいて」
「あたし達は乙女なんだから」
「まだ言うことは認めるわ」
マリーもだ。流石に呆れ果ててしまった。
それで今は黙ってだ。それでだった。
二人はだ。また話すのだった。
「で、並行世界と時空を自分達の思いのままにしようっている者達がいるのよ」
「それがつまり」
「あいつ等」
呂布はぽつりと述べた。
「白装束の一団」
「そう、あの連中はあらゆる世界に介入しようとしているの」
「自分達の思うようにする為にね」
「思うようにってのが問題なんだよな」
漂はこのことを指摘した。
「まあ連中のこれまでの行動見てたら世界を破壊して自分達の望む世界、まあ掟とか決まりが何もない滅茶苦茶な世界を築きたいんだろうな」
「その通りよ。あの連中は混沌を望んでいるのよ」
「破壊のうえでのね」
「やはりそうか」

マキシマもこのことを聞いて納得して頷く。
「そして俺達の世界の連中と手を結んだか」
「ええ、彼等はあちらの世界でそれぞれ世界を破壊しようとしていたわね」
「どの者達も」
「オロチというのはね」
神楽がだ。オロチについて話す。
「あれなのよ。自然の神の、荒ぶる神の一柱で」
「人類の文明を好まない」
「徹底的に破壊したいと思っているのね」
「そうよ。その通りよ」
「そうした神もいるのよ」
「自然を司る神の中にはね」
二人はこのこともわかっていた。
「オロチはそうした神なのよ」
「自然の神様の中でも」
「そうした意味では破壊と混沌と同じね」
神楽はまた言った。
「自然には文明がない、つまり法律も何もないから」
「そう、オロチは人間の文明も自然の中にあると思っていないのよ」
「自然と文明は対立するものと思っているから」
だからだ。人類を滅亡させようとしているというのだ。

# 第百八話　怪物達、世界を語るのことその七

「そこが問題なのよ」
「オロチはね」
「そしてアンブロジアですね」
ナコルルは彼等について述べた。
「あの神は」
「あれは邪神よ」
「邪な意志が強大な力を得たものなのよ」
二人はアンブロジアについても知っていた。それでだ。
この神についてもだ。話すのだった。
「悪意を以てこの世を破壊する」
「そうした神なのよ」
「悪意ですか」
「元になるのは同じだけれど目的は白装束やオロチと同じね」
「そこはね」
「そうなりますね」
ナコルルは二人のその言葉にうなずいた。
「破壊と混沌を望みますから」
「それであのミヅキという巫女は操られているのよ」
「あの神にね」
「ふうむ。ではあのミヅキは真の敵ではないな」
狂死郎は考える顔で述べた。
「敵はあくまでアンブロジアじゃな」
「そう、その神よ」
「そこは注意してね」
「わかった。ではアンブロジアを封じるとしよう」
狂死郎は四宝珠の一つの持ち主として述べた。
「要はそこじゃな」

「そういうことよ。敵はしっかりと把握しないとね」
「間違えてしまうから」
「うむ、その通りじゃ」
ここで大きく見得を切る狂死郎だった。彼は今も歌舞伎役者なのだ。
次にはだ。命が二人に尋ねた。
「あの朧というのは」
「そうだ。あの老いぼれは元は忍だったな」
命に続いて刀馬も言う。
「けれど一体」
「何故あの者達に与している」
「彼も又目指すものが同じなのよ」
「他の連中とね」
その朧もだとだ。二人は話す。
「そういうことよ」
「だから一緒になっているのよ」
「では私達と共にいたのも」
「我等を利用する為だったか」
「あの時に一度斬られて死んだからよかったのよ」
「せめてね」
離天京においてだ。そうなったのはというのだ。
「それであの世界でのあの男の計画が頓挫したから」
「あの時はね」
「けれど蘇りこの世界に来た」
「この世界でその欲望を満たす為にか」
「そうなるの。どうやら貴方達の世界は破壊と混沌を望む者が多いわね」
「刹那も含めて」
「刹那ですね」
その刹那のことはだ。月が言った。

「あの男は常世の使者ですが」
「使者、いえ常世の具現化ね」
「あれはそうした存在よ」
使者どころではないというのだ。
「だからこの世界にも常世をつなげようとしているのよ」
「そう目論んでいるのよ」
「そうですか。だからあれだけの力を持っているのですか」
「あの刹那もやっぱり破壊と混沌を望む形になっているから」
「常世とこの世を結び付けて完全に常世にするつもりだから」
そのことはだ。月もよく知っていることだ。無論四霊の者達もあかりも守矢もだ。このことはわかっている。
こうしてだった。あらゆることが今結びついて語られた。
しかしだった。ここでだ。草薙が二人に尋ねた。

# 第百八話　怪物達、世界を語るのことその八

「で、何で俺達の世界の奴等がこっちの世界にあれだけ来てるんだ？」
「あと俺達は何でこの世界に来たんだ？」
テリーも尋ねる。
「この二つが一番気になるんだがな」
「それはどうしてなんだ？」
「まずは白装束の者達はこの世界を破壊して自分達の望む様にしようとしたのよ」
「それでね」
さらにだというのだ。
「貴方達の世界でそれを果たせなかった彼等を見てね」
「こちらの世界に誘ったのよ」
「そうだったのか」
ここまで聞いてだ。多くの者が悟った。
「それで皆この世界に来てか」
「事情がわかった」
「そうなのか」
「つまりは」
「そう。そしてね」
「貴方達をこの世界に呼んだのは私達よ」
ここで話す二人だった。
「この世界を何とかする為にね」
「悪いけれど呼んだのよ」
「そういうことだったんだな」
「これで全てはわかったな」
「ええ、本当にね」
「全てのことだ」

双方の世界の者達がだ。話し合う。彼等はここに至り全ての事情を理解した。
そしてだ。そのうえでだった。
劉備がだ。二人に尋ねた。
「それでなんですが」
「連中の今の居場所ね」
「そして倒し方ね」
「何処にいるんですか？今は」
「赤壁よ」
「そこにいるわ」
そこだとだ。二人は話した。
「あそこは独特の磁場があってね」
「そこで力を蓄えているのよ」
「またか」
関羽はそれを聞いて目を鋭くさせた。
「懲りない者達だ」
「あそこに潜んで隙を窺っているわ」
「注意してね」
「わかりました」
ここまで聞いてだ。劉備は。
強い顔でこくりと頷きだ。それからだった。
今ここにいる全員にだ。こう言ったのだった。
「では今からです」
「はい、今からですね」
「これからなのだ」
「出陣の準備に入ります」
そうするというのだ。
「赤壁に向けて」
「わかりました。では今より」
「戦の準備なのだ」

関羽と張飛が応えてだった。
そうしてだ。彼等は出陣の用意に入った。全軍がだ。
その中でだ。黄蓋が周りに話す。
「その赤壁じゃがな」
「ああ、揚州だったよなあそこは」
「そうじゃ」
その通りだとだ。彼女はダックに話した。
「そこにある」
「水だよな」
「そうじゃ。じゃから水軍が重要になる」
「船の上での戦いか」
「それは経験があるか？下手をすれば酔うぞ」
「ああ、そういうのもあるぜ」
ダックは気軽にこう黄蓋に話した。
「戦う場は色々だったからな」
「ふむ、そうだったのか」
「私がイタリアで修業をしていた時のことだけれどね」
アンディが出て来て話す。
「船の上で戦ったりもしていたから」
「あれはあれで楽しかったよな」
ダックは笑ってアンディに応える。
「揺れるのがまたな」
「雰囲気が出ていて」
「そういうことだからな。皆経験はあるぜ」
「それはよいことじゃ」
それを聞いてだ。黄蓋は満足した笑みで述べた。

# 第百八話　怪物達、世界を語るのことその九

「では御主達は安心してよいな」
「泳げるしいざという時にもな」
「大丈夫だよ」
「ならよい。しかし問題はじゃ」
ここでだ。黄蓋は眉を顰めさせた。
そうしてだ。こう言うのだった。
「あの地にはあの地で風土病があるからのう」
「それなら任せておいてくれるかのう」
今度出て来たのはリーだった。
「わしの漢方医学に」
「おお、御主がおったな」
「左様。薬のことなら任せてくれるか」
こうだ。中華服の広い袖の中に手を入れ腕を組み一礼してから述べた。
「あの地の風土病についても」
「頼めるか。それではじゃ」
「うむ、それではじゃな」
「あの地の風土病については穏が詳しい」
「はい、御呼びですか？」
その陸遜も出て来た。
「あの場所の書もありますから」
「それを読んでじゃな」
「何しろ地元です」
陸遜はこのことも話す。
「ですから」
「詳しいのじゃな」
「はい、そうです」

だから大丈夫だというのだ。よく知っているというのである。
「では今からじっくりとですね」
「薬のことをじゃな」
「お話して作りましょう」
こうして風土病対策についても進められていくのだった。しかしだ。
黄蓋は難しい顔でこのことも話した。
「病のことはこれでよいがじゃ」
「んっ、まだ何かあるのかよ」
「水じゃ」
またダックにこのことを話した。
「水だからじゃ」
「チャイナは確か」
アンディはこの国のことから話す。
「北は馬で南が船だったね」
「そうじゃ。わし等はよいのじゃが」
揚州にいる彼女達はという。しかしだ。
ここでだ。黄蓋は言った。
「じゃが北の連中はどうじゃ」
「北か。袁紹さんや曹操さん達か」
「それに董卓さん達だね」
「うむ。御主達あちらの世界の者達は船に慣れておると聞いた」
だからだ。彼等自体はいいというのだ。
しかしだ。黄蓋は彼等だけを見ていない。今見ている相手は。
「しかしあの者達はのう」
「馬だからな」
「そこが問題だね」
「そうじゃ。船での戦は知らん」
慣れていないどころではないというのだ。
「果たしてどうなるかのう」

「そのことも問題ですね」
陸遜も少し困った顔で話す。
「どうするべきか」
「わし等だけで白装束の連中やオロチだけを相手にできるか」
「難しいですね」
すぐにだ。陸遜は言った。
「数が足りません」
「数は力じゃ」
リーもこのことについて指摘する。
「じゃから北の者達も必要じゃぞ」
「そうじゃ。まさか陸に置く訳にもいくまい」
袁紹や曹操の兵達をだというのだ。

# 第百八話　怪物達、世界を語るのことその十

「三十万を超える兵を使わん手はないぞ」
「どうしたものでしょうか」
「中には泳ぎを知らない奴もいるよな」
ダックは腕を組んで述べた。
「そういう奴を水の上に出して戦えっていうのも酷だぜ」
「とりあえず泳ぎだけでも教えるか」
また言う黄蓋だった。
「それだけで随分違うしのう」
「準備も結構かかりそうだしね」
アンディは出陣の準備についても言及した。
「その間に時間を見て」
「そうするとするか。水着を用意しておくか」
水着の話にもなる。かくしてだ。
泳げない者達に水泳を教えることにもなった。その中でだ。
兵達は半ば強制的に泳がさせられる。そうして口々に言うのだった。
「水苦手だよ」
「俺もだよ」
こうだ。口々に言うのである。
「泳げないのにな」
「それでこれってな」
「別に泳げなくてもいいのにな」
「嫌な話だぜ」
「全くだよ」
「不平を言ってはならない！」
しかしだ。ここでだ。
コーチをしているキムがだ。彼等を叱咤したのだった。

そのキムも見てだ。兵達は悲嘆にくれたのだった。そして言うことは。
「せめて教えてくれる人位な」
「女の将軍にしてくれよ」
「何でキムさんなんだよ」
「しかもジョンさんまで一緒かよ」
コーチの人事には何の容赦もなかった。
「しかも泳ぎもいけるって手を挙げてきてだよな」
「難儀な話だよ」
「いつもいつもな」
「困った人達だよ」
おまけに志願だった。キムとジョンはだ。そのことがだ。兵達を余計に鬱にさせていた。しかもその教育があまりにもだった。
「これから一刻休みなしで泳ぐ！」
「それから滝を昇ります」
「素潜りは十分を気が済むまでする」
「食事は水の中でします」
「死ぬって、それ」
兵達が唖然としながら言う。
「何処までえげつないんだよこの人達」
「こりゃ俺達死ぬかもな」
「水魏のお姉さんもいないしな」
このことが最も大きくだ。彼等は。
暗澹としながら泳ぎの訓練をだ。出陣の用意の間受けていた。尚出陣の用意もしながらだ。泳ぎの訓練も受けさせられていたのだ。
それを見てだ。臥龍は唖然としながら自分の子分にこう言った。
「いや、俺は今な」
「何でやんすか？親分」
「今程泳げることに感謝したことはないぜ」
「泳げないとあれでやんすからね」

子分もしごかれまくる兵達を見て言う。
「水地獄でやんすよ」
「地獄は労働と修業だけで充分だよ」
彼等が今受けている二つの地獄である。
「ここで水まで来た日にはな」
「最悪でやんすね」
「そうだよ。だからだよ」
それでだというのだ。
「いや、感謝することしきりだよ」
「全くでやんすね」
「まあ旦那の御先祖様もいるしな」
「従兄弟もでやんすよ」
キム一族の血は濃い。
「だから気を抜かずに真面目に働くか」
「さもないとやっぱり袋でやんすよ」
それは変わらないのだった。こうしてだ。
臥龍達は泳げることに幸せを感じながらだ。出陣の用意をしていた。
そしてだ。彼等はだった。
出陣の用意を進めていくのだった。決戦の為の。

第百八話　完

２０１１・９・９

# 第百九話　張三姉妹、呼ばれるのことその一

第百九話　張三姉妹、呼ばれるのこと

出陣の準備が進められる。その中でだ。
孫策も孫権も木簡にだ。次々に決裁を書いていた。その中でだ。
孫策は大きく背伸びをしてだ。こう言ったのだった。
「もういい加減ね」
「御疲れですか？」
「元々私こうした仕事は好きじゃないのよ」
こう言うのだった。
「座ってする仕事はね」
「それは私も知っていますが」
「それでもだというのね」
「はい、今は我慢して下さい」
孫権はこう姉に話す。
「しないといけないことですから」
「わかってるわ。けれどね」
「それでもですか」
「やれやれよね」
苦笑いを浮かべながらだ。木簡に書いていく。
「本当にね」
「それでもこれが終わればです」
「あれよね。出陣よね」
「はい、そうです」
だからだとだ。妹は姉に話す。
「戦ですから」
「そうね。戦ね」
ここでだ。孫策の目が光る。

そしてだ。彼女はこう言ったのだった。
「あの忌々しい連中と思う存分戦えるのね」
「ですからそれを待ってです」
「今は我慢ね」
「その仕事をされて下さい」
机に座っての仕事をだというのだ。
「じっくりと」
「そうさせてもらうわ。仕方ないわね」
「そうです。それにしても」
「それにしても？」
「姉上は机のお仕事は嫌いだと仰いますが」
それでもだというのだ。
「中々。速いですね」
「仕事がだというのね」
「それに正確ですね」
ただ速いだけではないというのだ。
「御嫌いだと言っても」
「雪蓮様はやればできる方なのです」
「そうなのです」
ここで話したのは二張だった。丁度姉妹の補佐役なのだ。
その孫家の長老達、黄蓋と並ぶ彼女等が話すのだった。
「そうした政についてもです」
「戦と同じく」
「それでどうして」
「だから。せせこましい仕事は好きじゃないの」
孫策が言うのはこのことだった。
「だからなのよ」
「そう仰いますか」
「どうしても」
「子供の頃からね。小さなことより大きなことをがつんとやりたい

のよ」
実に孫策らしい言葉をだ。孫策自身が言う。
「だからなのよね」
「全く。そのことは変わりませんね」
「御幼少の頃から」
「それは婆や達もじゃない」
孫策は少し苦笑いになって二張に返す。
「全く。私が赤ん坊の頃からお母様と一緒にいたのよね」
「はい、祭殿と共に」
「大殿様とも」
「私や蓮華が赤ん坊の頃からずっといてくれて」
そしてだ。その頃からだというのだ。
「口煩いんだから」
「諫めるのも臣下の務めです」
「ですから」
「はいはい、わかってるわよ」
二人にはだ。孫策も弱い。

# 第百九話　張三姉妹、呼ばれるのことその二

それでだ。仕事を続ける。その中でまた言う彼女だった。
「ただ。それにしてもね」
「それにしても」
「休まれるのは少し後にして下さい」
「そうじゃなくて。何か気分転換が欲しいのよ」
孫策が今言うのはこのことだった。
「なにかしらのね」
「気分転換ですか」
「それをですか」
「ええ。何かないかしら」
孫策は書きながら首を少し捻って言う。
「楽しいことがね」
「では歌でも聴かれますか？」
「袁術殿の」
「それもいいけれどね」
袁術の歌は定評がある。だからそれは望むというのだ。
しかしだ。それと共にだった。孫策はこんなことも言った。
「ただ。あの娘の歌以外にもね」
「お聴きになりたい」
「左様ですか」
「誰かいたわよね」
ここでだ。孫策が言うとだった。
孫権がだ。彼女達の名前を出してきた。
「それではですが」
「蓮華は誰か心当たりがあるの？」
「はい、あの三姉妹はどうでしょうか」
こう名前を出すのだった。

「張三姉妹は」
「ああ、あの娘達ね」
「今は確か長安の方にいます」
国のあちこちを回っている彼女達はだ。今はそこにいるというのだ。
「そこから呼びますか」
「そうね。長安でやることが終わったらこっちに来てもらえるかしら」
実際にだ。孫策もこのことを望んで述べた。
「そうしてね」
「はい、気分転換に」
「確かに。三姉妹の歌には絶大な力がありますし」
「兵達の癒しにもなりましょう」
二張もだ。三人のことは知っていた。
だからだとだ。賛成したのだった。
「ですから」
「いいと思います」
「わかったわ。じゃあ劉備にも話してね」
摂政である彼女に話してだというのだ。
「そうしましょう」
「ではその様に」
「話を進めていきましょう」
こう話してだった。三姉妹を呼ぶことがだ。劉備にも伝えられた。
そうして話を聞いた劉備もだ。
笑顔でだ。こう言うのだった。
「いいことよね」
「はい、そう思います」
魏延、いつも劉備を護る彼女が最初に頷く。
「桃香様も最近お疲れですし」
「私が？」

「そうです。近頃は出陣の準備にかかりきりですね」
「書いてるだけだけれど」
「それがかなりの量になっています」
劉備にだ。両手を前にやって動かしながら話す魏延だった。
「朝から夜まで働いておられますし」
「ううん、それはそうだけれど」
「ですから。ここはです」
「三姉妹を都に呼んで？」
「はい、音楽を聴きましょう」
こう言うのである。
「是非共」
「ううん、ちょっと」
「焔耶さんは」
しかしだ。ここでだった。
孔明と鳳統はだ。難しい顔になって言うのだった。
「何気に何を出されているんですか？」
「その服は」
「ステージ衣装だ」
そうだとだ。魏延はその手にやたらと派手で露出の多い服を持っている。それを手にしながらだ。劉備に熱い視線を向けているのだ。
そのうえでだ。こう言うのだった。

# 第百九話　張三姉妹、呼ばれるのことその三

「桃香様にも歌って頂きだ」
「やっぱりそうですか」
「桃香様にも」
「駄目か、それは」
まだ言う彼女だった。
「私としてはだ。桃香様のお歌も」
「それを言うなら炎耶さんもです」
「折角ですから」
軍師二人はここで言う。
「歌われてはどうですか？」
「歌と踊り得意ですよね」
「いた、私はいい」
何故かだ。魏延本人はだ。
あまり浮かない顔でだ。こう言うのだった。
「あれだな。袁術殿や郭嘉殿と組んでだな」
「それか張勲さんですね」
「その方々とは」
「私とて歌って踊りはしたい」
それはだとだ。魏延長も言うには言う。
しかしだ。それでもこうも言うのだった。
「だがそれは狙い過ぎではないか？」
「まあそうですけれど」
「それは」
「そうだ。だからそれは止めたい」
そしてこうも言うのだった。
「どうせなら桃香様と共にだ」
「やっぱりそこですか」

「歌うのならですね」
「私のささやかな願いだが駄目か」
「ううん、何といいますか」
「余計に妖しいので」
駄目だと話してだった。軍師二人はそのデュエットには難色を示すのだった。
そのやり取りからだった。魏延は。
困った顔でだ。また言うのだった。
「私の衣装も用意していたのだがな」
「男ものですよね、それって」
「あの、余計に妖しいので」
「何っ、あちらの世界の宝塚は駄目か」
それだった。言うのは。
「宝塚は駄目か」
「ですから妖しいのは遠慮して下さい」
「困りますから」
こう話してだった。軍師二人は何とか魏延は止めたのだった。
しかしだ。三姉妹を呼ぶことはだ。二人も言うのだった。
「ですが三姉妹はです」
「是非呼びましょう」
「あの歌は素晴らしいです」
「ですから」
「そうよね。それじゃあね」
劉備も笑顔で応える。こうしてだった。
三姉妹を都に呼ぶことが正式に決まった。そうしてすぐにだ。
使者の舞が長安に向かう。そこにだ。
三姉妹はいた。しかし今丁度だった。
「あれっ、出発するところだったの」
「うん、そうなの」
張角がだ。舞に答える。三人は下喜達の助けを借りてだ。

そのうえで次の旅に出ようとしていた。舞はそこに来たのだ。
それでだ。丁度何もかもをしまっている最中だったのだ。
車にあらゆるものを入れている。その彼女達を見てだ。
舞はだ。こう言うのだった。
「次は何処に行くの？」
「あっ、実はね」
それはどうかとだ。舞は答える。
「決まっていないの」
「あら、そうなの」
「そうなの。だから何処に行くかは」
「これから決めるとことだったのよ」
張梁が言ってきた。
「東に行くか西に行くかね」
「身支度が出来たところで」
「そこに舞さんが来たの」
張宝も来て話す。
「何かいい場所を知ってるかしら」
「私は賑やかなところに行きたいけれど」
張角はそうした場所がいいと言う。
「何処がいいかな」
「じゃあ大きな町よね」
「そうなるわね」
妹達も姉に対して言う。

## 第百九話　張三姉妹、呼ばれるのことその四

「じゃあ許昌とか南皮とか」
「そうしたところかしら」
「建業もいいし」
「成都も」
「成都かなあ」
張角は視線を上にやって少し考える顔になって言った。
「それじゃあ」
「そうよね。あそこの料理って辛くて凄く美味しいらしいし」
「それならね」
「じゃあそこね」
「今から向かいましょう」
「そういうことだから」
張角は笑って舞に述べた。
「今から成都に行くから」
「劉備さんに宜しく言っておいて」
「あの人は確か益州の牧でもあられるから」
そうした伝言もだ。三姉妹は舞に伝えた。しかしだ。
その舞がだ。三姉妹に言った。
「ここまで話してだけれど」
「うん、何かあるの？」
「洛陽は一つも出てないわよね」
舞が言うのはこのことだった。
「それどうしてなのかしら」
「あっ、そういえばそうね」
「言われてみれば」
ここでだ。張梁と張宝も気付いた。舞に言われてだ。
「そういえば最近洛陽にも行ってないし」

「都には」
「だからどうかしら」
舞は笑顔で話す。
「都にね。来てくれる？」
「別にいいけれど」
張角は特に思うことなく答えた。
「成都には何時でも行けるし」
「決まりね。実はね」
「都で私達に来て欲しい理由があるのね」
張宝はいつもの淡々とした調子で舞に尋ねた。
「歌で元気を出して欲しいとか」
「具体的に言えばそうよ」
まさにそうだとだ。舞は答えた。
「隠すつもりはなかったけれど言うのが遅れたわね」
「それは別にいいわよ」
張梁がそれはいいとした。
「ただね」
「ただ？」
「あれよね。あたし達を都に呼んで歌わせて」
張梁も察していた。呼ばれる理由を。
「大きなことの前に士気を鼓舞するのね」
「えっ、じゃあそれって」
それを聞いてだ。張角がだ。
おっとりとしているが驚きも入った声でだ。こう言ったのだった。
「まさか戦があるとか」
「そうじゃないの？何か都であって」
「そのせいで」
「ああ、気付いたわね」
舞は三姉妹がそれぞれ言うのを聞いて自分からも言った。
「まあね。ちょっと出陣があるのよ」

「やっぱりそうなの」
「ひょっとしてって思ったけれど」
「そうなのね」
「そうよ。それであんた達の歌でね」
三姉妹の歌には絶大な威力がある。それは黄巾の乱において証明されている。しがない旅芸人だったことはもう過去のことだ。
「もう士気を全開にしてね」
「戦に向かうのね」
「そうしたいのよ。どうかしら」
あらためてだ。舞は三姉妹に尋ねた。
「劉備さん達も他の皆もね」
「来て欲しいのね」
張宝が言う。

# 第百九話　張三姉妹、呼ばれるのことその五

「皆が」
「ううん、何か物騒な状況みたいだけれど」
張梁は腕を組み少し難しい顔で述べた。
「それでも。劉備さんに呼ばれてるのならね」
「そうよ。劉備さんお姉ちゃんにそっくりだし」
張角が言うのはこのことからだった。
「それじゃあ是非助けないと」
「お姉ちゃんにそっくりなのは理由にならないんじゃないの？」
「確かに声以外本当にそっくりだけれど」
「性格も似たところあるし」
「違うのは中の人だけかしら」
「はい、中のお話は禁句ね」
舞はそれは止めさせた。
「言い出すと皆ダメージが出てしかも終わらないから」
「確かに。あたしも結構」
張梁もこのことには心当たりがあったりする。
「くるものがあるし」
「そういうことよ。私だってナコルルやキングさんと似てるって言われるしね」
それは舞もであった。彼女自身もなのだ。
「だからよ。終わらせてね」
「そうするのがいいわ」
張宝も頷く。
「それじゃあ」
「来てくれるかしら」
「だから劉備さんの御願いなら」
「喜んでよ」

「都に行かせてもらうわ」
三姉妹の返答は決まっていた。こうしてだった。
彼女達は下喜達を連れて洛陽に向かうことにした。舞は彼女達より前に都に戻る。そうしてすぐに劉備に対して報告したのだった。
その報告を聞いてだ。劉備は笑顔で言った。
「よかったわ。それじゃあね」
「舞台の用意ね」
「うん、その用意しよう」
笑顔でこう言うのである。
「早速ね」
「はい、では今からすぐに」
「舞台の用意をはじめます」
劉備の左右に控える孔明と鳳統が言う。
「張三姉妹の人達だけでなく」
「他の人達も歌えるものを」
「じゃあ袁術ちゃん達よね」
劉備はすぐに彼女の名前を出した。
「あの娘達が」
「はい、郭嘉さんと張勲さんもです」
「あの方々にも」
「あの娘達歌凄く上手だから」
「郭嘉さんなんかもう歌手でも大成功間違いなしだと思います」
「張勲さんの本気は最強です」
彼女達の歌にも定評があるのだ。
「袁術さんは音に慣れるまでに少し時間がかかりますが」
「あの人も」
とにかくだ。三人の歌唱力はかなりのものだ。
それでだ。この三人もだというのだ。
「ちょっと。袁術さんと張勲さんが郭嘉さん取り合ってますけれど」
「郭嘉さんは袁術さんが大好きですし」

「関係がかなり妖しいですけれど」
「それが楽しいですけれど心配にもなります」
「何か薄い絵本が出てるっていうけれど」
劉備は三人についての噂を口にした。
「陸遜ちゃんが凄く嬉しそうに読んで集めてるのは」
「はい、本当です」
「陸遜さんが御自身でも描いておられます」
そうしたこともしているというのだ。陸遜は。
「私達も楽しませてもらってます」
「最高の書です」
「どうした書なのかしら」
劉備はその薄い書については全く知らない。それで目をしばたかせながら言うのだった。
「気になるけれど」
「あっ、それはですね」
「また今度のお話ということで」
軍師二人は失態に気付いて慌てて取り繕った。

# 第百九話　張三姉妹、呼ばれるのことその六

「とにかくですね。他にもです」
「歌える人はいますし」
「多いのね。歌える人」
「呂蒙さんも歌えますよ」
「あの人もかなり」
「他にも夏侯惇さんと夏侯淵さんも」
この姉妹もだった。
「孫策さんと孫権さんもお見事ですし」
「曹操さんもですね」
「歌える娘って多いのね」
劉備もこのことを認識することになった。
「ううん、意外っていうか」
「そうですね。私達もですね」
「歌えますし」
孔明と鳳統もだった。
「五虎の方もですし」
「ああ、大喬さんに小喬さんもですね」
「周泰さんもですし」
「呉の方々も」
「冥琳ちゃんもだったわよね」
劉備は彼女の真名を出しながら話した。
「何かもう大会出来る位に多いわよね」
「あちらの世界にもおられると思いますし」
「それではですね」
二人はここで閃いた。
「いっそのこと大会を開かれますか」
「歌の大会を」

「そうね。面白そうね」
劉備もだ。それに乗ろうと思った。それでだ。
舞にもだ。尋ねたのだった。
「舞ちゃんはどう思うかしら」
「私もね。面白い音楽知ってるわよ」
舞も笑顔で劉備の言葉に応える。
「ヘビメタだけれどね」
「ヘビメタ？」
「そう、それが好きなのよ」
笑顔で自分の音楽の趣味を話す彼女だった。
「ヘビメタがね」
「どんな音楽なの、それって」
「ええと、楽器はここの世界にないわね」
それは仕方なかった。時代も国も違うからだ。
「だからアレンジはするけれど」
「けれど舞ちゃんも歌うの」
「よかったらね」
あくまで許可を得ればだというのだ。
「歌っていいかしら」
「もうこうなったら徹底的に楽しくしない？」
今度は劉備がだった。笑顔で提案する。
「皆で歌い合って」
「そうですね。折角ですし」
「出陣の前の余興として」
それでだとだ。孔明と鳳統も乗ってだ。
そうしてだった。話は決まったのだった。
三姉妹の到着と合わせて歌の大会が開かれることが決まった。それを聞いてだ。
まずはしゃいだのはだ。やはり郭嘉だった。
話を聞いていきなりだ。妄想を爆発させた。

「ああ美羽様いけません」
「またなのね」
「妄想状態に突入ね」
そんな彼女を見ていささか唖然として言う曹仁と曹洪だった。
「私は華琳様の忠実な家臣。ですから」
「いや、目が喜んでるし」
「顔は真っ赤だし」
実際にだ。手は拒むふりをしているが顔は笑みである。
その笑顔でだ。郭嘉は続ける。
「せめて接吻で許して下さい。その頬の」
「もうやってるじゃない」
「酔ってね」
「他にももう感性で袁術殿が何を言うかわかるとか」
「何処まで仲がいいのよ」
「それに七乃殿、人がいますので」
郭嘉は彼女とも仲がいいのだ。

# 第百九話　張三姉妹、呼ばれるのことその七

「そこまで積極的になられると困ります」
「だから中身出し過ぎよ」
「何処まで出てるのよ」
「華琳様お許し下さい、私はいけない家臣です」
「見ているだけで面白いからいいけれどね」
当の曹操もいるが彼女は至って冷静である。
むしろそんな郭嘉を見て楽しみながらだ。こう言うのだった。
「歌の大会ね。面白そうね」
「では華琳様もですね」
「参加されますね」
「そのつもりよ。それでだけれど」
ここでだ。曹操はさらに話す。
「あちらの世界の面々も歌える者が多いわよね」
「んっ、呼んだか？」
ここでだ。不意にだ。丈が出て来た。
それでだ。嬉しそうに曹操達に言うのだった。
「俺も歌えるぜ」
「東殿の好きな音楽ですが」
「何なのでしょうか」
曹仁と曹洪はその丈に尋ねた。
「あちらの世界の音楽ですね」
「どういった音楽でしょうか」
「貴方はあの華陀と声が似ているけれど」
さりげなくこんなことも言う曹操だった。
「華陀も歌えたわよね」
「ああ、確かな」
「じゃあ貴方も歌えるわよね」

「俺は演歌だ」
自信満々にだ。丈は言った。
「演歌が好きなんだよ」
「演歌って？」
「ああ、こんな感じなんだよ」
ここで実際にだ。丈は拳を入れて身振りまで入れて熱唄する。それを聞いてだ。
曹操もだ。納得した顔で言うのだった。
「結構いい感じね」
「ああ、気に入ってくれたか」
「というか貴方結構歌上手いわね」
「はい、確かに」
真面目に戻った郭嘉も頷いて言う。
「御見事です」
「俺の他にも歌える奴いるしな」
「そう。じゃあ貴方達にも期待させてもらうわね」
「是非共な。そうしてくれよ」
「大会があらためて楽しみになってきたわ」
曹操は期待している笑みで述べる。しかしだ。
その中でだ。ふとこうも思って言うのだった。
「けれど。気になるのは」
「気になるのは。何だよ」
「リョウよ。彼何か音楽は苦手だっていうけれど」
曹操は既にそのことを聞いていた。
「どうなのかしら」
「ああ、あいつ音楽はわからないってな」
「やっぱりそうなのね」
「とりあえずあいつは今回はなしな」
最初から数に入れるなというのだ。
「あとアンディもな。静寂がいいっていうしな」

「彼らしいわね」
「ただダックは別な」
「確かに。ダック殿は我等もわかる」
「あの御仁の舞は見事だ」
曹仁も曹洪も彼のラップダンスは何度か見て知っている。彼は時間があるといつもその見事なダンスを披露しているからである。
「それもあるか」
「尚更いいな」
「俺達の世界の人間も多彩だからな」
それでいいというのだ。
「俺も楽しみにしているからな」
「ええ、お互いに楽しみましょう」
こうしてだった。曹操達も大会のことを期待していた。その中においてだ。
怪物達はまだ都にいた。そして姿を現わすだけでだ。
その都度大爆発を引き起こしていた。都ではいらぬ騒乱も起こっていた。
その騒乱の中でだ。彼女達は話す。
「何か面白いことになってきたわね」
「そうね」
こう話しているのだ。
「張三姉妹だけじゃなくて皆が歌うって」
「最高の催しよ」
「それじゃあ是非ね」
「あたし達もね」
話があってはならない方向に向かう。

# 第百九話　張三姉妹、呼ばれるのことその八

「参加させてもらいましょう」
「是非ね」
「そうだな。誰もが参加できる大会みたいだしな」
そしてだ。華陀の器は無意味なまでに大きい。
「二人も参加するんだな」
「ええ、そうしたいと思ってるわ」
「実際にね」
「ああ、じゃあ参加するべきだ」
華陀は彼女達のテロ、それも無差別のそれを容認した。
「俺はどうもその暇はないみたいだがな」
「ダーリンは都の人達の怪我や病を癒すのに忙しいからね」
「そちらに専念してなのね」
「ああ、俺はそちらだ」
医師としてだ。治療に専念するというのだ。
「だから観にも行けないが」
「頑張ってね。それじゃあ」
「ダーリンの本分をまっとうしてね」
「是非ね」
「そうする。それにしても」
ここでだ。華陀は言った。
「あちらの世界の医学は凄いな」
「特に未来のね」
「それがなのね」
「ああ、リーさんにも教えてもらったが」
リー＝パイロンである。
「かなりのものだな」
「ダーリンの針とどちらが凄いかしらね」

「果たして」
「俺のものよりも凄いな」
華陀はこのことを素直に認めた。
「あれはな。俺もまだまだだ」
「そこでそう言うのが凄いのよ」
「ダーリンはね」
二人はそんな華陀を褒めて言う。
「己を知りさらに学ぶ」
「だからこそ医者王なのね」
「俺はまだ登りはじめたばかりだ」
ここで熱血にもなる。
「この医者坂という果てしない坂をな」
「ここで未完になるのよ」
「そこ重要だから」
「ああ、永遠の未完だ」
華陀も乗る。実に乗りがいい。
「だからこそ俺は登るんだ」
「じゃああたし達もね」
「一緒に登るわ」
「ダーリンと同じ坂を」
「何処までも」
「悪いな」
ここでも器の大きい華陀だった。
「なら俺達もだ」
「ええ、歌いましょう」
「芸術をね」
こうしてだ。彼等も参加すると言うのである。しかしだ。
今は誰もこのことを知らない。それでだった。
関羽はだ。困った顔で張飛に話していた。
「ううむ、困った」

「何が困ったのだ？」
「義姉上に言われたのだが」
「お姉ちゃんも歌うのだ？」
「そうだ、そう言われた」
劉備にだ。言われてはだった。
「出るがだ」
「それでもなのだ？」
「私が歌っていいのだろうか」
こう言ってだ。関羽は難しい顔をしているのだ。
そしてだ。彼女はこんなことも言った。
「しかしだ」
「しかしなのだ？」
「私なぞよりもだ」
こう言ってだ。出す名前は。
「やはり袁術殿や郭嘉殿の方が」
「それと張勲なのだ」
「あの方々の方が凄い」
やはり歌といえば彼女達だった。
「しかし私なぞはだ」
「お姉ちゃんも歌は上手いのだ」
「そうか？私は」
「大丈夫なのだ。お姉ちゃんはいけるのだ」
「そうだといいのだが」
「自信を持つのだ。お姉ちゃんは歌もいけるのだ」
張飛はこう言って次姉に太鼓判を押す。

# 第百九話　張三姉妹、呼ばれるのことその九

「何の心配もいらないのだ」
「そうだといいのだが」
「ついでに言うと鈴々も歌うのだ」
「そうだ、御主と義姉上と私でだ」
「三人で歌うのだ」
この組み合わせがもう決まっているのだ。
「だから頑張るのだ」
「そうだな。ではそうしよう」
「後は朱里と雛里も二人で歌うのだ」
彼女達はそうなっているのだ。
「ただ朱里は他にもなのだ」
「確か翠ともだったな」
「あと孫権と三人なのだ」
「妙に弱い顔触れだな」
その三人の顔触れについて関羽はこうも言った。
「何かな」
「弱いのだ？」
「受けというのか？」
関羽はまた言う。
「そうした感じだが」
「ううん、よくわからない話なのだ」
「ついでに言えば私もだ」
関羽もだというのだ。
「御主、姉上と共にだ」
「他の組み合わせもあるのだ？」
「そうだ、星に曹操殿に」
そしてだ。もう一人は。

「恋とだ」
「何か妙に攻撃的な顔触れに思えるのだ」
「そうだな。しかし私はだ」
関羽自身はどうかというとだ。
「その中に入っていいのだろうか」
「少なくともね」
キングがひょっこり出て来てその関羽に話す。
「関羽はその中ではましね」
「ましなのか」
「ええ、ましよ」
こう言うのである。
「所謂サドね」
「確かそれは」
「そう、好きな相手を責めて喜ぶ人を言うのよ」
それがサドだとだ。キングは関羽に話す。
「逆に責められて喜ぶのは」
「何というのだ？」
「マゾというのよ」
キングは真顔で張飛にも答える。
「馬超達はマゾね」
「それは何となくわかるな」
関羽はキングの説明に納得した顔で頷いて述べた。
「翠に朱里もな」
「確かに。あの二人はそっちなのだ」
「孫権殿もな」
「孫権ちゃんはしっかりした娘だけれど」
キングは腕を組み微笑んで話す。
「それでも結構ね」
「うむ、真面目が昂じてな」
「何処かそうしたところがあるのだ」

「可愛い娘ね」
キングは微笑んでだ。孫権についてこう言った。
「性格が」
「可愛いのか」
「そうなのだ」
「ええ、そうよ」
まさにそうだというのである。
「ああした娘は私も嫌いではないわ」
「そういえばキング殿はその話だとだ」
「サドになるのだ」
「私はそちらなのね」
「優しいがそれでもな」
「シャルロットや舞もそうなのだ」
この二人もそうだというのだ。
「それにマリー殿もな」
「そちらになるのだ」
「今気付いたが貴殿等の声は似ているな」
「あとナコルルもなのだ」
彼女達の声からだ。そう言われていく。
「ううむ、声には何かあるのか」
「サドやマゾにもなのだ」
「私は最初男で通していたしね」
キングは笑ってこんなことも言った。
「結構女の子にももてたし」
「そうなのか。おなごにか」
「もてたのだ」
「男と思われていた時も」
そしてだった。さらに。

# 第百九話　張三姉妹、呼ばれるのことその十

「今もね」
「今もか」
「女の子にもてもてなのだ」
「そうなのよ。シャルロットもそうみたいだけれど」
そしてだ。キングはこの話を出した。
「宝塚みたいと言われるわ」
「宝塚？ああ、貴殿等の世界のか」
「女だけでやるお芝居なのだ」
「ええ、それにね」
見られ言われるというのだ。
「背も高いこともあって」
「そうなのだ。おまけに胸も大きいのだ」
キングはスタイルもいい。
「羨ましいのだ」
「胸の話もするのね」
「鈴々は大きなおっぱいが欲しいのだ」
彼女にとっては実に切実な願いである。
「だからなのだ。羨ましいのだ」
「胸、ね。そういえば」
ここでキングは彼女達の名前を出していく。
「馬超も趙雲も立派な胸ね」
「何をどうしたらああした胸になるのだ」
「黄忠さんに厳顔さんも」
「あれはもう反則なのだ」
憮然としながら言っていく張飛だった。
「あんな胸が欲しくて仕方ないのだ」
「劉備さんなんかも」

彼女の名前も出した。
「かなり立派よね」
こう言ってだ。さらにだ。
関羽も見る。当然胸をだ。そのうえでの言葉だった。
「関羽の胸はかなり」
「肩が凝って仕方がないのだ」
そうだとだ。関羽は困った顔で答える。
「義姉上達もそうだというが」
「胸が大きいと肩が凝るのだ？」
「そうだ、凝る」
こう言うのである。
「私の悩みの一つだ」
「どんな悩みなのだ」
そう言ってもだ。張飛は。
憮然とした顔になる。それで言うのだった。
「胸が大きいと肩が凝るなんてないのだ」
「しかしだ。実際に私は」
「じゃあお姉ちゃんもなのだ？」
「そうだ。当然義姉上もだ」
肩が凝るというのだ。
「よく言っておられるぞ」
「そこまで胸が大きかったら悩みにならないのだ」
「私の胸の話が出たけれど」
ふとだ。キングがまた言ってきた。
「舞なんか凄いわね」
「あれはもうバインバインなのだ」
また不機嫌な顔で言う張飛だった。
「暴力なのだ」
「胸が大きいのは暴力なの」
「そう、暴力に他ならないのだ」

「胸か。そういえば」
ここで関羽はあることに気付いて言う。
「よく呂蒙殿や郭嘉殿が言われるが」
「あの二人は中身ね」
「それと袁術殿もだ」
彼女の名前も出る。
「胸が大きいことを自慢する者は駄目だと」
「あの三人最近貧乳教の幹部になったそうね」
「それはどうなのだ」
「あの三人が正しいのだ」
張飛は彼女達の側につく。

# 第百九話　張三姉妹、呼ばれるのことその十一

「胸が大きいことはそれだけで駄目なのだ」
「中もそうなるのか？」
「無論なのだ。中の人も大事なのだ」
張飛の主張はここにも及ぶ。しかしだ。
中の話ではだ。関羽はこう言うのだった。
「私はそれを言えばだ」
「どうなのだ？」
「低いぞ」
そうだというのだ。
「意外に思うかも知れないがだ」
「そうなのだ？そうは見えないのだ」
「一五四程だ」
「こちらの世界の単位ではね」
「そうだ。私はあまり大きくはないぞ」
関羽は自分のことをこう話す。
「それとだ」
「それとなのだ？」
「義姉上はより小さい」
劉備もだ。中はそうだというのだ。
「私よりもさらにだ」
「ううむ、そういえば呂蒙も」
「あの御仁も中はそうだ」
「あとは曹操のところの猫耳軍師もなのだ？」
「そうだな。かなりな」
「胸だけでなく背もあるのだ」
中の話はさらに続く。
「けれど背はあれなのだ」

「どうだというのだ？それは」
「意外と甘寧が大きそうなのだ」
「そうだな。甘寧殿はどうやらだ」
どうかとだ。関羽は話す。
「あちらの世界で言うと百七十はあるな」
「女にしては大きいのだ」
「中の話をすると止まらないわね」
キングは苦笑いと共に述べた。
「さっきは私の話だったし」
「ううむ。胸や背の話もだな」
「どうしてもそうなるのだ」
そんな話もする彼女達だった。彼女達にとってみれば切り離せない話だった。
しかしその中でだ。闇の中では。
ゲーニッツがだ。笑いながら言うのだった。
「どうやら気付かれた様ですね」
「この赤壁にですね」
「俺達がいることがだな」
「はい、どうやら」
こうだ。彼は于吉と左慈に話す。
「それで今出陣の用意をしています」
「ではですね」
「俺達もだな」
「はい、楽しむ用意をしましょう」
ゲーニッツはまた言った。
「私の術を見せましょう」
「風だな」
左慈が言う。
「あんたのその術を使ってか」
「ああ、今回はな」

「私達もね」
「思いきり楽しませてもらうよ」
社にだ。シェルミー、クリスまで出て来て言う。
「その私達の力を使ってです」
「ここに来る連中を一人残らずな」
「倒すわ」
「そうするよ」
これがオロチ一族四天王の決定だった。
「私はです」
ゲーニッツの目が蛇のものになる。その青い不気味な目になりだ。
彼はだ。こう言うのだった。
「あちらの世界もこちらの世界も嫌いではありません」
「楽しんでいますね」
「はい、そうです」
まさにそうだとだ。ゲーニッツは左慈に答える。
「これでも楽しむ性格です」
「そうですね。貴方はそうした方ですね」
「オロチは何かを楽しむものです」
自分達のそうした性質についても話すのだった。
「それが戦いであってもです」
「楽しみそうしてですね」
「目的を達成するものです」
「俺もあれだぜ」
社も言う。
「旅は楽しんでだな」
「その旅で私達を見つけてきたのよね」
「それが目的だったしね」
シェルミーとクリスは笑って社に応える。
「けれどその旅行もね」
「楽しんでいたよね、社は」

「俺達は確かに普通の人間じゃないさ」
それは違うことはだ。自覚している。
しかしだ。それでもだと社は話すのだ。
「けれどな。半分は人間だからな」
「半分はですか」
「あれだぜ。半分は人間で半分はってやつさ」
「楽しむところは人間ですね」
笑ってだ。于吉は話す。
「そういうことですね」
「それだよ。オロチは楽しむからな」
「もっとも。山崎はね」
「僕達には絶対につかないけれど」
「まあ一人位はああいう奴もいるさ」
社は彼についてはこれで終わらせる。
「それでも俺達は大抵そうさ」
「生きることは楽しんでか」
「そこはちゃんと言うぜ」
こんな話もする彼だった。そんな話をしてだ。
彼等はだ。赤壁での戦のことをだ。楽しみにしていた。
闇の者達も動いていた。そうしてだった。戦いの用意はだ。少しずつ進められていっていた。お互いに。

第百九話　完

２０１１・９・１２

# 第百十話　八神、都に来るのことその一

第百十話　八神、都に来るのこと

張三姉妹が都に着く。するとだ。
忽ちのうちにだ。応援団が来てだ。
「天和ちゃーーーーーん！」
「地和ちゃーーーーーん！」
「人和ちゃーーーーーん！」
熱い声を送る。それに応えて。
三人もだ。手を振って言う。
「皆大好きーーーーーーーー！」
「皆の妹ーーーーーーーー！？」
「とっても可愛い」
いつもの言葉だった。それが余計にだ。
応援団を熱狂させる。そしてそこには。
于禁もいる。彼女は既に法被を着ている。そのうえでだ。
応援団達にだ。こう言うのである。
「声が小さいですの！」
「は、はい！」
「すいません！」
「愛が足りないですの！」
だからだ。怒っているのだった。
「より大きく！愛を見せるの！」
「わかりました、隊長！」
「それでは」
こうしてだった。彼等はさらにだ。
応援の声を激しくさせる。その彼等を見てだ。
楽進は難しい顔になりだ。李典に問うた。
「前から思っていたが」

「三姉妹の応援かいな」
「沙和もだ」
于禁も見てのことだった。
「何故あそこまで熱狂的になれるのだ」
「まあ楽しいからやな」
「楽しいからか」
「そや。あんたもこういうの好きやろ」
「確かに。嫌いではないが」
楽進もそのことは否定しなかった。
「だがそれでもだ」
「それでもかいな」
「あの面々の熱狂には引く」
実際に引いている。
「どうもな」
「まあええやろ。とにかくや」
「私達もか」
「そや、応援しようで」
李典は陽気に笑って楽進に話す。
「うち等もな」
「ううむ。しかし凄い熱気だな」
まだ言う彼女だった。しかしその熱気の中にだ。彼女も入ったのだった。
歌の大会がはじまろうとしていた。それについてだ。
公孫賛はだ。こう馬岱に話していた。
「私は出るのか？」
「誰？あんた」
馬岱は少しきょとんとした顔で公孫賛に問い返した。
「何回か見たことがあるけれど」
「公孫賛だ。知らないのか？」
「聞いたことないし」

馬岱はまた返す。
「だから誰よ、あんた」
「ううん、またしても覚えてもらえないのか」
馬岱にもそう言われてだ。公孫賛は。
困惑した顔でそれでだった。
「私はいつもそうなるのか」
「ええと。公孫賛さんよね」
「そうだ。それで真名は白蓮だ」
「真名まで教えてくれるの」
「長い付き合いだからな」
「だから蒲公英あんた知らないけれど」
馬岱は少しきょとんとした顔のまま公孫賛に話す。
「全然よ」
「では今から覚えておいてくれ」
譲歩してだ。公孫賛は言った。
「ではな」
「そうするね。それで何なの？」
「歌だ」
このことを言ったのだった。

# 第百十話　八神、都に来るのことその二

「私も歌会に出たいのだが」
「じゃあ出れば？」
「しかし私はだ」
どうかというのだ。彼女自身は。
「相手がいない」
「相手ねえ」
「何故か張角殿と相性がよさそうだが」
「ううん、向こうは大人気だしね」
「大人気だからか」
「あんた目立たないから」
馬岱も容赦がない。
「だから。いっそのことね」
「どうすればいいんだ、私が目立つには」
「言うことを全部ふがふがとかにするとか」
馬岱はいきなり話のハードルを上げた。
「包丁持って暴れ回るとか」
「おい、包丁とは何だ」
「それか弟さんを溺愛に走るとか」
「どれも変態ではないのか？」
「というか全部心当たりあるでしょ」
「残念だがある」
公孫賛もそのことを否定しない。
「というかそれを言えばきりがないぞ」
「まあそうだけれどね」
「他にはないのか？特に包丁は止めたい」
「けれどもう代名詞になってるじゃない」
「私のか」

「というか中身と」
そちらでだ。そうなっているというのだ。
「そっちだったら張角さんとも一緒になってもね」
「ううむ、結局私は何なのだ」
公孫賛は困った顔で腕を組んで言った。
「何かこう目立ちたいのだが」
「だから包丁持てば」
「ううむ、それに頼るしかないのか」
「張角さんはそれ言ったら中に誰もいませんよがあるけれどね」
「そっちの方が目立たないか？」
「確実に目立つわね」
二人で組んでもだ。それでもだった。
相手の方が目立つ。結果としてそうだった。
それでだった。公孫賛は言うのだった。
「ううむ。困ったことだ」
「一人でもいいから出たら？」
「やはりあの張角には勝てないか」
「無理でしょ」
実際にそうだとだ。馬岱は容赦なく返す。
「蒲公英だってあんたのこと知らなかったし」
「そこで知らなかったというのか」
「だって。記憶にあったから忘れたって言うんじゃない」
馬岱はそのことも指摘する。
「最初から知らない場合はよ」
「知らない、ということか」
「そういうことよ。とは言っても蒲公英もね」
「出るのか？御主は」
「多分出ないわ」
馬岱はそうするというのだ。
「だって。歌ないから」

「そうか。だからか」
「何なら二人で隠し芸でもする？中に誰もいませんよ、って」
「だからそれは張角だろう？それにあれは」
公孫賛は馬岱に話しながらその顔を急に曇らせる。
そしてだ。こう言うのだった。
「私が腹を割かれるではないか」
「もう黒い血をどばって吹き出してね」
「そうだ。目が白目になってだ」
まさに人が死ぬその一部始終である。
「死ぬではないか」
「あれねえ。無修正だと凄いから」
「黒が赤になってだな」
「どう？やってみる？」
「断る」
公孫賛の反論は一つだった。
「絶対にだ」
「やれやれ。そこを勇気を出してよ」
「勇気を出して断る」
自分が死ぬ話だからだ。こう言うのも当然だった。

## 第百十話　八神、都に来るのことその三

「とにかくだ。私はどうしてもか」
「目立てないわね、正直」
「せちがらい話だ」
「やっぱり目立つには命を賭けないと」
「命を賭けても目立てないのだが」
「それはもうどうしようもないわね」
そんな話をしてだった。結局だ。
公孫賛は出られなかった。ついでに言えば誰もこのことに気付かない。
その頃袁紹はというと。また何かをしでかそうとしていた。
そうしてだ。辛姉妹に相談するのだった。
「思いつきましたわ」
「またですか」
「思いつかれたんですか」
それを言われてだ。姉妹は瞬時に暗い顔になった。
そしてだ。こう主に言ったのだった。
「できればです。その思いつかれたことはです」
「忘れて下さい」
「わたくしがよからぬことをするといいますの？」
「違いますか？それは」
「いつもではないですか」
「そんな自覚はありませんわ」
袁紹は二人にはっきりと言い切る。
そしてだ。こんなことを言うのであった。
「ギースさんをですね」
「ああ、あの人も来ていますね」
「そういえば」

「あの方の好きな音楽ですけれど」
袁紹は何かを企む笑みで言っていく。やけににこやかだ。
「ゴッドファーザー愛のテーマを」
「その曲をどうするのですか？」
「一体」
「都全体にかけそのうえで」
さらにだった。袁紹は言った。
「そうして」
「さらにですか」
「まだあるんですか」
「歌だけではありませんわ」
それに留まらなかった。よくも悪くも袁紹は派手好きだ。
その彼女がだ。今高らかに言うのだった。
「鰻ですわ」
「鰻ですか」
「またですか」
「そうですわ。鰻に海鼠に納豆に」
ぬるぬるしたものばかりだ。
「山芋に」
「そうしたものをどうされるんですか？」
「揃えられて」
「勿論。そのぬるぬるの中で鰻や海鼠を掴んで」
さらにだった。袁紹のにこやかな笑みは続く。
「全身納豆や山芋にまみれて食べるのですわ」
「あの、凄く匂いがしそうなんですけれど」
「しかも痒そうですね」
「女の子が全員ぬるぬるになって」
「白く汚れたりして」
「如何でして？」
袁紹は得意満面でまた姉妹に問うた。

「この企画は」
「はい、却下です」
「絶対に止めて下さい」
二人は何の容赦もなく主に駄目出しをした。そしてこう言うのだった。
「陳琳ちゃんに文を書いてもらいましょう」
「蔡文姫もいますし」
それでだというのだ。
「それで済ませましょう」
「如何でしょうか」
「地味ですわね」
二人の提案にだ。袁紹は極めて不機嫌な顔になる。
それでだ。こう言うのだった。

# 第百十話　八神、都に来るのことその四

「そんなことをしても面白くも何もありませんわ」
「あの、ですがそれはです」
「ぬるぬるして汚れて」
「女の子達限定ですよね、しかも」
「幾ら何でも淫靡に過ぎます」
「いいと思いましたのに」
袁紹は難しい顔で話していく。
「けれどそれはですわ」
「私達の提案はですか」
「受け入れてもらえませんわ」
「いえ、それは採用させてもらいますわ」
姉妹のそうした袁紹から見て大人しい考えはというのだ。
「ただですわ」
「それでもなんですね」
「そのいつものぬるぬるは」
「どうしても駄目ですのね」
不機嫌そのものの顔で二人を見て問うた。
「それは」
「はい、何度も申し上げますがお止め下さい」
「何でしたら華琳様とも御相談になって」
「華琳は絶対に反対しますわ」
それはわかっていた。既にだ。
「全く。あの娘も」
「問題があると仰るのですか」
「あの方が」
「そうですわ。いい考えをいつも」
「曹操殿に深く感謝します」

「いつも麗羽様を止めて頂いて」
「困ったことですわ」
袁紹にとってはそうだった。まさに。
「全く。ではわたくしは何をすれば宜しいのですの？」
「歌われないのならお静かに御願いします」
「御馳走でも召し上がられて」
「そうですわね。ではその御馳走は」
何なのか。袁紹は話す。
「皆さんで召し上がられるということで」
「そうですね。それがいいです」
「今回は召し上がられることに専念されて下さい」
「では。あちらの世界の御料理を主体にして」
ここでの御馳走はそれだった。
「そう致しますわ」
「正直ほっとしています」
「今とても」
姉妹は心から言った。
「どうか本当にです」
「大人しくして下さい」
「わかりましたわ」
こうしてだ。袁紹はだ。
今回は大人しくなった。何とか止められた。
それぞれがあれこれ考え用意する中にだ。この男も来た。
八神は洛陽の門にいた。その彼を見てだ。
門番の兵達がだ。ぎょっとした顔で彼に問うた。
「八神庵！？まさか」
「一体何をしに来た」
「また草薙君と戦いに来たのか」
「その為にここに来たのか」
「それならば」

彼等は一斉に槍を手にしてだ。そうしてだ。
八神を取り囲もうとする。しかしだ。
彼はその兵達にだ。臆することなくこう返した。
「安心しろ。俺は今はだ」
「今は!?」
「今はというと」
「何をしに来た」
「聞いた」
まずはこの言葉からだった。
「また戦いがあるな」
「だからだ。草薙君とか」
「また殺しに来たというのだろう」
「違うのか、それは」
「あいつとの闘いの前にだ」
八神は言う。
「倒しておく奴等がいる」
「倒しておく奴等?」
「ではそれは一体」
「誰だ」
「何処のどいつだというのだ」
「オロチだ」
彼等だとだ。八神は言った。
「そしてネスツもいるな」
「あの連中と戦うのか」
「そうだというのか」
「だからここに来た」
八神は何も動じないまま言っていく。時折その右手が動く。

# 第百十話　八神、都に来るのことその五

「オロチを倒す為にだ」
「では草薙君とは闘わないのか？」
「まさかとは思うが」
「奴との決着の前にだ」
どうするか。八神は言う。
「俺に何かと言ってきて利用しようとしたあの連中をだ」
「倒すのか」
「そう言うのか」
「俺は誰からも利用されない」
八神の信念の一つだ。
「そして利用してくれた奴はだ」
「殺す、か」
「そう言うのか」
「そうだ。殺す」
まさに一言だった。その一言にだ。
八神は全てを入れてだ。そして言ったのである。
「そうする」
「だからここに来たのか」
「オロチ達と戦う為に」
「その為にか」
「わかったらどけ」
今度は兵達に告げた。
「それとも貴様等が俺と戦いたいのか」
「いや、それはいい」
「貴様の様な危険な奴とは決してな」
「戦えば命が幾つあっても足りない」
「それではだ」

こう言ってだ。兵達は慌ててだ。
八神を取り囲むそれを外してだ。そうしてだった。
道を空けた。八神は無言で彼等の横を通り過ぎてだ。そのうえで。
劉備達の前に出て来た。言ったのだった。
「オロチ達は俺がやる」
「ええと。それって」
それを聞いてだ。劉備は。
きょとんとした顔になりだ。目の前にいる八神に問い返した。
「私達と一緒に？」
「それは違う」
「違うって」
「俺はオロチ達と戦うだけだ」
あくまでそうだとだ。八神は劉備に話す。
「貴様等と共に戦うつもりはない」
「そうなの」
「俺は誰とも馴れ合うことはしない」
彼にとっては共闘とはそういうことなのだ。だから言ったのである。
「俺は俺だけで戦う。そうするだけだ」
「じゃあここにいるのは」
「そうだ。ここにいればオロチと戦うことになる」
そうなるとだ。八神は言う。
「だからここにいる」
「そうなの」
「安心しろ。京とは今は闘わない」
八神はこのこともだ。劉備に話した。
「まずは奴等だ」
「そうなの。じゃあ」
「戦いの時になったら言え」
「ええ。じゃあその時に」

「奴等は俺が倒す」
こう言ってだった。そのうえで。
八神は劉備達のところに入った。そうしたのだ。
だがだ。その八神にだ。ビリーと影二はだ。
わざわざ彼のところに来てだ。睨み据えて言うのだった。
「よく来れたな」
「あの時のことは覚えているな」
「俺は何かあると忘れることはない」
こうだ。八神も二人に返す。
「あの時はただの後始末だ」
「後始末で俺達にああしてくれたのか」
「随分な礼だったな」
「俺は貴様等と仲間になった覚えはない」
ここでも八神だった。あくまで。

# 第百十話　八神、都に来るのことその六

「最初からああするつもりだった」
「ちっ、何て野郎だ」
「裏切りなぞ我とてしない」
「裏切り。俺は裏切ったつもりもない」
影二にだ。こうも返した八神だった。
「言った筈だ。只の後始末をしただけだ」
「じゃあ俺が今ここで手前を潰してもな！」
「それは後始末になるな」
二人の気がだ。いよいよ危険なものになっていく。
「ここで殺してやる！」
「容赦はしない」
「いいだろう。振り掛かる火の粉は払う」
八神も変わらない。そうしてだった。
彼はそのだ。獣を思わせる独特の構えを取りだ。
そのうえで二人と対峙しようとする。しかしだった。
その両者の間にだ。今は。
関羽が入りだ。こう言った。
「待て、私闘は禁じられている」
「んっ、関羽かよ」
「何だというのだ」
ビリーと影二がだ。その関羽に問い返す。
「これはな。俺達にとっちゃな」
「絶対にしなければならないことだ」
「過去のことだな」
関羽はあらためて二人に言った。
「確か御主達は」
「ああ、こいつに最後の最後でな」

「いきなり暫くは立ち直れないだけの傷を受けた」
その過去のことをだ。二人は忌々しげに話す。
「その借りをここでな！」
「返させてもらう」
「言いたいことはわかった」
関羽は二人の話を聞いたうえで静かに言った。
そのうえでだ。彼女もまた構えて言うのだった。
「しかしだ。それでもだ」
「私闘は駄目だっていうのかよ」
「どうしてもか」
「そうだ。ここで戦っても何にもなりはしない」
その巨大な得物を手にだ。関羽は鋭い目で言う。
「だからだ。今は双方収めるのだ」
「収めない場合はか」
「関羽殿が我等の相手になるというのか」
「そうだ」
いよいよだ。関羽の言葉が険しくなる。
「それならば好きなだけするがいい。遠慮はいらん」
「俺はあんたとは何もねえんだよ」
「私もだ」
二人は関羽のその目を見て言った。
「無闇に喧嘩をする訳でもねえしな」
「だからだ」
「今は矛を収めるか」
あらためてだ。二人に問うた。
「そうするか」
「ああ、今のところはな」
「引かせてもらう」
こうしてだった。二人はその場は引いた。そのうえで飲みに行った。その後に残った八神を見てだ。関羽は彼にはこう言ったのだっ

た。
「御主もだ」
「無闇に戦うなというのか」
「そうだ。それは止めておくことだ」
「俺は自分からは戦わない」
こう言うのである。彼は。
「俺が殺すと決めた相手以外とはな」
「しかし今は」
「火の粉を払おうとしただけだ」
こう返すだけだった。関羽に対しても。
「それだけだ」
「そう言うのか」
「事実だからだ」
素っ気無くさえあってだ。八神は関羽に返す。

# 第百十話　八神、都に来るのことその七

「それだけだ」
「では誰も何もしなければか」
「何もしない。そしてだ」
「そして？」
「御前にも言っておく」
鋭い目をそのままに関羽に告げたのだ。
「俺はここにいるが誰の下にもついてはいない」
「そして誰とも仲間にはか」
「なってもいない」
あくまでだ。彼は一人だというのだ。
「俺は今までもそうだった」
「そして今もだというのだな」
「これからもだ」
過去も現在も未来もだというのだ。
「俺は誰ともつるまず犬にもならない」
「そうだな。御主の目を見ればわかる」
八神のだ。その鋭い誰も寄せつけない目を見ての言葉だ。
「御主は狼だな」
「俺もまた、か」
「テリーやギース殿とはまた違う」
そうした狼だというのだ。
「まさに一匹狼だ」
「少なくとも犬ではない」
「その狼だからか」
「俺はあくまで俺だ」
「そうしてオロチと戦うのだな」
「殺す」

剣呑な言葉こそがだ。八神だった。
「それだけだ」
「その為にここに来たというのだな」
「それだけのことだ。これでわかったな」
「わかった。しかし御主は」
「今度は何だ」
「確かに人は殺すが」
そのことはだ。その殺気を見ればだ。関羽でなくともわかることだった。
その湧き上がる青い殺気を見てだ。王は話していく。
「弱き者は害さぬか」
「俺は弱い者をいたぶることはしない」
それは否定するのだった。
「そうした意味での暴力はだ」
「好まないのだな」
「八神の拳は殺人拳だ。人を殺す為だけにある」
「そしてその拳はか」
「俺に喧嘩を売る愚か者に京に対してのものだ」
「成程な。御主という人間はおおよそわかった」
関羽もだ。鋭い目になり八神を見ながら言う。
「好きにはなれぬが信念はあるな」
「俺を嫌おうとも認めずともそれはどうでもいい」
「それもいいのか」
「それだけだ。ではだ」
八神はゆっくりと前に出て。そうして。
関羽にだ。今度は自分から言った。その言葉は。
「金だが」
「あるのか？」
「俺にはこれがある」
何処からかだ。楽器、それも彼の世界のギターを出して言った。

「これと歌で金を稼いでいる」
「では飯はか」
「俺の食い扶持はある。余計な気遣いは無用だ」
「わかった。ではそれもしない」
「俺は俺で動く」
あくまでそうするというのだ。
「それだけだ」
「わかった。ところでだ」
「何だ、今度は」
「御主の好きな食べものは何だ」
ふとだ。このことを尋ねたのである。
「それを聞きたいが」
「肉だ」
八神はすぐにこう答えた。

# 第百十話　八神、都に来るのことその八

「肉が好きだ」
「そうか。肉が好きか」
「京は焼き魚だったな」
「そうだ。よく食べている」
「だが俺は肉だ」
「生肉ではないな」
ふとだ。八神の野生を見てだ。関羽は尋ねた。
「やはり焼くか」
「生なら刺身で食う」
「それか。日本の料理だったな」
「確か中国、漢でもあった筈だが」
「あることはあるがだ」
「それ程よく食われてはいないか」
「そうだ。あまりな」
「それもわかった。それではだ」
こう話してだった。八神は自分のギターで金を稼ぎそのうえで飯を食い宿を取っていた。そのうえで己の出陣の時を待つのだった。
その彼のことは草薙も聞いていた。その彼にだ。
二階堂と大門がだ。深刻な顔で言うのだった。
「おい、まさかと思うけれどな」
「ここで闘うつもりか」
「向こうがそのつもりならな」
こう限定して返す草薙だった。彼等は今は天幕の中で飯を食っている。出陣の準備の中でだ。今はそこで休んでいるのである。
三人と真吾がいる。その四人で話しているのだ。
その中でだ。草薙はこう言ったのである。
「やるさ」

「その場合はか」
「逆に言えばあ奴が何もしなければか」
「ああ。俺は戦わないさ」
そうするというのだ。
「俺もあいつもな。今はな」
「オロチやネスツの方が先だな」
「倒すのは」
「そういうことだ。まずはあいつ等だ」
草薙は真剣な顔で言った。
「絶対に封じるさ」
「じゃあ俺達もな」
「既に決めている通りだ」
「その御前に協力するぜ」
「これもまた運命だ」
「運命、そうだな」
草薙は二人、とりわけここでは大門の言葉に頷いて。そうしてだった。
こうだ。こうも言ったのだ。
「これは運命だな」
「オロチと闘うことがだな」
「そして封じることが」
「ああ、そうさ」
まさにその通りだとだ。草薙は言うのだった。
「あとネスツの奴等もな」
「あの連中はケイダッシュ達がやるみたいだな」
「だから我等はだ」
「オロチに専念できますね」
真吾が笑って草薙に話す。
「白装束の連中もいますけれど」
「けれど俺達の相手はだ」

「あくまでオロチだ」
彼等が第一の敵だとだ。二階堂と大門は真吾に話す。
「奴等を封じてこそだからな」
「この世界での役割を果たすことになる」
「あのおっさん、いや美女達か」
草薙はあえて怪物達をこう呼んだ。気遣い故にだ。
「あの人達が言ってたことで全部わかったからな」
「本当にな。何もかもな」
「二つの世界のことがな」
二階堂と大門も草薙の言葉に頷く。
「こちらの世界で奴等はそれぞれの考えを実現させるつもりだった」
「そして今は赤壁にいてだ」
「そこで俺達と戦うか」
「そうするということもな」
「じゃあ俺はやってやるさ」
草薙は確かな笑みを浮かべて言った。

# 第百十話　八神、都に来るのことその九

「俺のやるべきことをな」
「じゃああれですかね」
ここでまた言う真吾だった。
「八神さんもですね。草薙さんもそうですし」
「そうだろうな」
草薙は真吾のその言葉に頷いて述べた。
「だからあいつもここに来たんだよ」
「八神さんの運命を果たす為に」
「そういうことになるな。それじゃあな」
「はい、じゃあですね」
「出陣して奴等に会ったその時こそな」
笑ってだ。仲間達に話すのである。
「この世界でやるべきことをやるさ」
「ああ、俺達もな」
「そうするとしよう」
二階堂も大門も頷き。そうしてだった。
彼等は戦いに赴こうとしていた。その中の夜のことだった。
しかし夜は長い。それでだった。
急にだ。彼等の天幕の中にだ。神楽が来て言うのだった。
「あら、四人共起きていたのね」
「ん？何だ？」
草薙が彼女に顔を向けて問い返す。
「飲むっていうのかよ、今から」
「ええ、どうかしら」
微笑みだ。四人に言ってくる。
「よかったらね」
「そうだな。何か寂しいところだったしな」

「それならだ」
二階堂と大門も応える。そうしてだった。
その彼等にだ。神楽はまた言った。
「じゃあ。今から皆で飲みましょう」
「よし、それじゃあな」
「我等もつまみを持って行くとしよう」
「鰯持って行きますね」
真吾はそれだった。
「やっぱり酒には鰯ですよね」
「君は本当に鰯が好きね」
神楽は相変わらず鰯好きな真吾に少し苦笑いになった。
「おうどんか鰯しかないのかしら」
「あれっ、けれど鰯って美味いですよ」
「おうどんもね」
「ですからいいじゃないですか」
特に思うことなくだ。真吾は言う。
「鰯におうどんで」
「それも冷凍うどんよね」
「何でこの時代のこの世界にあるかは謎ですけれど」
「それを言えばジャガイモも唐辛子もね」
「まあそれでも。あるからにはですね」
「食べるに越したことはないわね」
「はい、それじゃあ」
こう話してだった。そのうえでだ。
四人は神楽と共に酒も飲むのだった。その飲んでいる場は広場だった。全員で車座になって飲んでいる。そしてそこにいたのは。
呂布だった。彼女がビリーの話を聞いている。ビリーは酔いながら言っていた。
「俺はよ、それこそな」
「妹さんを」

「そうだよ、ずっと手塩にかけて育ててきたんだよ」
「ビリー一人で」
「親父もお袋も早くに死んでな」
「それはねねと同じなのです」
常にだ。陳宮は呂布と共にいる。それはここでも同じでだ。
ビリーの話を聞いてだ。納得した顔で頷くのだった。
「ねねも。両親が」
「そうか。あんたもなんだな」
「けれどビリーは悪いこともしながら」
「悪いことだけ余計だよ」
すぐにむっとした顔で陳宮に返す。しかしそれでもだ。
彼は陳宮にもだ。こう言うのだった。

# 第百十話　八神、都に来るのことその十

「けれど俺一人がそうなってあいつが幸せになれるんならな」
「いい」
「ああ、それでもいいさ」
こうだ。達観した顔で呂布に答える。
「俺は別にいいんだよ」
「そう。ビリーのそういうところは認める」
「けれどなんだな」
「そう。やっぱり悪いことはよくない」
こう言うのである。
「これからはいいことをした方がいい」
「まあそれはリリィも気付いてるみたいでな」
「リリィ？」
「それは誰なのです？」
「妹だよ」
そのだ。彼の妹だというのだ。
「俺のな」
「そう。それが妹さんの名前」
「そうなのです」
「それでそのリリィが言うんだよ」
ビリーは酒を目玉焼きと一緒にやりながら話していく。
「人間真面目にやってこそだってな」
「それでビリーは今何をしているのです？」
「クリーニング屋だよ」
そこに務めているというのだ。あちらの世界ではだ。
「洗濯が好きだからな」
「じゃあそれを真面目になる」
「それが妹さんの為なのです」

「ストリートファイトや大会に出たりもしながらな」
それも続けているというのだ。
「で、あいつの花嫁姿も見たいと思ってるさ」
「だから俺がな」
呼んでもいないのに丈が出て来て自分を指差しながら言う。
「妹さんを幸せにする。楽しみにしていろ」
「なあ、ビリーちょっとええか？」
張遼もいる。その彼女が出て来た丈を横目に見ながらビリーに囁く。
「妹さんあんたそっくりか？」
「俺に似合わず清楚可憐で可愛い系だぜ」
「そやったらこいつは止めとくんやな」
こう丈を横目に見ながらビリーに囁くのである。
「いや、妹さんがどんな人でもな」
「こいつはだな」
「ああ、こいつはアホや」
丈を一言で表す張遼だった。
「いや、馬鹿って言うべきやろか」
「俺もわかってるさ。こいつにはな」
ビリーは丈を敵意と憎悪に満ちた目で見ながら話す。
「リリィはやれないからな」
「そや。絶対に止めとくんや」
「俺は人種的偏見はないつもりだ」
少なくともビリーにそうした悪癖はない。
しかしだ。それでも彼はこう言うのだった。
「けれどこいつだけはな」
「頭の中カラッポやからな」
「馬鹿には嫁にやれるか」
ビリーは強い口調で言い切った。
「それだけは決めているからな」

「何だよ。ひでえこと言うな」
丈はそんなビリーに反論した。むっとした顔になって。
「俺は浮気もしねえし悪事もしねえ。しかも無敗で収入だってあるぜ」
「じゃあ聞くな」
ビリーは敵意と憎悪に満ちた目のまま丈にこう言ってきた。
「太平洋戦争はじまったのは何年だ？」
「一九七五年だろ」
「一九四一年だよ」
すぐに言い返すビリーだった。
「御前の国に合わせて出した問題だったんだぞ」
「そうだったのかよ」
「じゃあワインは何から造るんだ？」
ビリーは今度はこの問題を出した。
「言ってみろ。何からだ？」
「米だろ」
「やっぱこいつアホや」
横で聞いている張遼も呆れてしまっている。
「後の問題は誰でもわかるやろ」
「あれっ、ワインって米から造るんじゃないのか？」
「こんな馬鹿は見たことないケ」
幻庵も覇王丸と飲みながら唖然となっている。
「最強の馬鹿だけ」
「そうだな。こいつはもうどうしようもないだろ」
アースクェイクも逆の意味で太鼓判である。

# 第百十話　八神、都に来るのことその十一

「というか何を勉強してきたんだよ」
「御前学校の成績どういう感じだったんだ？」
ビリーは禁断の質問をした。
「一体な。どうだったんだ」
「あん！？体育以外は全部一だったけれどな」
「五段階でか？」
「十段階でもだよ」
ダントツだったというのだ。
「あとテストはな」
「全部赤点かよ」
「二桁取ったことはねえな」
「百点満点で、だよな」
「ああ。まあそれでも生きるのには困らないな」
「絶対に駄目だな」
ビリーはあらためて結論を出した。
「手前もうリリィに近寄るな」
「おい、何でそうなるんだよ」
「多少の馬鹿なら俺だって許す」
ただしだ。こうしてから許すというのだ。
「半殺しにしてからな」
「そこで半殺しかよ」
「大事な妹を渡すんだ、当然の権利だろうが」
「おい、それで死んだらどうするんだよ相手が」
「死んだらそれまでのことだろうが」
ビリーも負けていない。
「ついでに言うがリリィを悲しませたら本当に殺すからな」
「物騒な兄貴だな、おい」

「ああ、俺はそういう兄貴なんだよ」
「たまにはその棒しまえよ」
「棒なかったら何もできねえだろうが」
ビリーはそうだ。そんな話をだ。丈と睨み合いながら言いだ。
やはりだ。結論はこれだった。
「とにかく御前は二度とリリィに近寄るな」
「結局それかよ」
「ああ、そうだよ」
「この禿頭、ちったあ柔軟になりやがれ」
「おい、誰が禿だ」
丈が言った瞬間にだ。ビリーの額に血管が浮き上がった。
そのうえでだ。彼はまた丈に言う。
「俺は髪の毛あるんだよ。言っておくがな」
「じゃあ何でいつもバンダナしてんだよ」
「これはファッションなんだよ」
「それでかよ」
「そうだ。よく覚えておけ」
「あと俺のこれだけれどな」
アクセルが西瓜を食いながら言ってきた。自分の頭を指し示しつつ。
「剃ってるだけだからな」
「ああ、それは知ってるからな」
「わかってくれたらいいからな」
丈の返答にだ。アクセルは満足した。そんなやり取りからだ。
まだだ。丈はビリーに言う。
「とにかくだな」
「リリィは渡さないからな」
「まだ言うのかよ」
「何度も言うからな」
「糞っ、何て頭の固い奴だ」

「そらちゃうからな」
張遼はビリーの側に立って言う。
「あんた、ちょっとあかんやろ」
「駄目だって何がだよ」
「頭がや」
身も蓋もない言葉である。
「駄目過ぎや」
「こいつ凄まじい馬鹿なのです」
陳宮もこう言う。

# 第百十話　八神、都に来るのことその十二

「とりあえず学校に行くのです」
「俺はちゃんと学校は出てるんだよ」
「嘘なのです」
「京と違うんだよ。俺はちゃんと学校は出てるんだよ」
「いや、その俺も」
ここで草薙達が来たのだ。そうしてだ。
草薙は真剣そのものの顔でだ。丈に対して言った。
「出席日数足りてないだけで成績は普通だから」
「じゃあ俺は違うってのか」
「悪いけれどな」
草薙は席を見つけて座りながら答える。
「丈さんはちょっとな」
「天下一の大馬鹿なのです」
また言う陳宮だった。
「人間頭も大事なのです」
「そうだよ。だからだよ」
ビリーは援軍を得て勢い付いていた。そのうえでの言葉だ。
「御前は絶対に駄目だ」
「じゃあ駆け落ちしてやるよ」
丈も負けていない。今度はこう言う始末だった。
「リリィちゃんと二人でな」
「ああ、そうしたらそれこそな」
「どうだってんだよ」
「タイでも日本でも追い掛けてな」
完全に本気である。今のビリーは。
「手前を殺してやるからな」
「おいおい、殺すのかよ」

「手前はそうしてやる」
目がだ。本当にそう言っていた。
「そうなったらな」
「本気」
呂布はビリーを見抜いた。
「今のビリー本気」
「まあ好きにしろと言うだけなのです」
「随分投げやりだな」
草薙は陳宮に対してこう突っ込みを入れた。
「本当に殺しかねないけれどいいのかよ」
「丈はそう簡単に死なないのです」
だからだ。いいというのが陳宮の考えだった。
「適当にやり合って遺恨がない様にするのです」
「まあなあ。この二人も結構な腐れ縁だしな」
草薙もだ。丈とビリーのことは知っていた。
「最初のキングオブファイターズの頃からだしな」
「あの頃はサウスタウンだけでやってたんだよ」
丈がその頃のキングオブファイターズについて話す。
「一対一でな」
「あの頃はあれだったな」
ビリーもそのキングオブファイターズについて話しだした。
「移動するのも楽だったな」
「結構今大変ですからね」
真吾が知っているのは今のキングオブファイターズのことだ。そのことをだ。
思い出してだ。こう言うのだった。
「世界各地を行き来してですから」
「けれどそれもまた楽しいからな」
草薙は濁り酒を飲みながら笑って話す。
「闘いの前後は観光旅行もできるしな」

「まあそれはそうですけれど」
「イタリアなんかよかったな」
「イタリアですか」
「ああ、パスタもピザもあってな」
草薙は焼き魚だけではない。そうしたものも食べるのだ。
「紅丸なんかもうな」
「俺は刺身とパスタに目がないんだよ」
自分から言う二階堂だった。
「まあ刺身はイタリアじゃカルパッチョになるけれどな」
「けれどあれも嫌いじゃないだろ」
「結構好きだぜ」
実際にそうだとだ。二階堂は笑って話す。
「あと大門もだよな」
「うむ、イタリアのデザートは美味だ」
大門も二階堂のその言葉に頷いて言う。
「チョコレートサンデーもあるからな」
「チョコレートサンデーっておい」
「意外過ぎるのです」
大門の好物についてはだ。張遼と陳宮がすぐに突っ込みを入れた。
「五郎ちゃん甘いもの好きなんか」
「お酒好きそうなのにびっくりです」
「実際にこうして飲むが」
その通りだった。大門は今酒を飲んでいる。
しかしそれでもだとだ。彼は言うのである。
「だがそれでもだ」
「甘いものも好きやねんな」
「そうなのです」
「何でもバランスよく食べるようにしている」
この辺りは流石オリンピック選手だった。
「それが身体にいいからな」

「そう。何でも均等に食べる」
呂布も言う。
「身体にいい」
「じゃあねねも均等にたっぷり食べると」
どうなのか。陳宮はここで自分のことを思い詰める顔で言った。
「背も高くなるし胸も大きくなるのです」
「ねねはこれから」
呂布はぽつりと答えた。
「頑張る」
「はい、頑張るのです」
こう答えてだ。陳宮はこれからのことに意を決するのだった。
そんな話をしながら歌勝負、そして出陣に備えていた。そこからまた騒動が起ころうとしていた。

第百十話　完

２０１１・９・１５

# 第百十一話　怪物達、また騒動を起こすのことその一

第百十一話　怪物達、また騒動を起こすのこと

歌の大会が開かれる日が来た。その朝にだ。
程?は共に朝食を食べる郭嘉に対してこう言った。
「凛ちゃんは一人で出るの?」
「いや、私は一人ではなく」
「三人で」
「そう、美羽様と七乃殿と三人で」
「いつもの組み合わせなのね」
「やっぱりあのお二人とは相性がよくて」
それでだ。共に歌うというのだ。
「それで三人で」
「成程。けれど」
「けれど?」
「若し時間があれば」
どうかとだ。郭嘉に言うのである。
「私とも一緒に歌って欲しい」
「風と」
「駄目?」
朝食の米の粥を食べながら郭嘉に問う。
「二人で」
「いや、それは」
狼狽した様な口調になりだ。郭嘉は言葉を返す。
「風も歌えるの」
「一応は」
「そうなの。それじゃあ」
断わることはだ。どうにもなのだ。

郭嘉はできない。それでこう答えた。
「私でよかったら」
「有り難う」
「けれど風も歌えたの」
「意外だった？」
「ううん、何ていうか」
「結構歌える人も多いから」
程？はこんなことも言った。
「私もその一人」
「ううん、本当に今まで知らなかったわ」
「後は」
「後は？」
「呂蒙ちゃんも歌えるから」
彼女もだというのだ。
「一回聴いてみればいいから」
「呂蒙殿も。そういえば」
「凛ちゃん何処かの世界で一緒だった筈」
「そうだったわ。あの娘とは」
「実は私も」
そしてそれは程？もだった。
「知らない間柄じゃないから」
「確かに。思えば呂蒙殿は」
郭嘉は己の中身の記憶から話していく。
「人形使いだったわね」
「凛ちゃんは剣士だった」
「結構方向音痴で」
「あれは結構どころじゃないと思う」
「それで風も」
「そう、学生さんだったから」
彼女にしてもそうした縁でだ。呂蒙を知っているのだった。

「知っている」
「そうだったわね。では呂蒙殿も」
「出られるから」
こうした話をしてだった。二人はだ。
朝食の後で呂蒙のところに来てだ。大会に誘った。
それを言われてだ。呂蒙は驚いた顔で返した。
「あの、私もですか」
「そうです、呂蒙殿もです」
「参加するべきだから」
「ですが私は」
どうなのかと。呂蒙は難しい顔で答えた。
「歌は」
「ですが呂蒙殿は絵だけでなく歌も見事です」
「自信を持っていいです」
「いえ、ですから」
どうしてもだ。呂蒙は自分に自信を持てない。この辺り性格が出ている。

# 第百十一話　怪物達、また騒動を起こすのことその二

それでだ。断ろうとした。
「申し訳ありませんが」
「そうですか。それでは」
「仕方ありませんね」
郭嘉も程?も断ろうとする。しかしだ。
ここでだ。孫権が出て来た。そうして言うのだった。
「いいじゃない」
「蓮華様」
呂蒙は彼女の姿を見てすぐに掌と拳を合わせて礼をする。その彼女にだ。
孫権は笑顔でだ。こう言ったのだった。
「亞莎、貴女も歌会に出なさい」
「いいんですか。私も」
「ええ、貴女に足りないのは」
微笑んでだ。孫権はその呂蒙に言う。
「自信だから」
「自信ですか」
「貴女は頭もいいし」
そしてだというのだ。
「それに絵も上手だし」
「絵はその」
「歌も聴いてるから」
それもだ。孫権は知っているというのだ。
「あの歌なら大丈夫よ」
「そうでしょうか」
「ええ、自信を持って出ていいわ」
「その自信ですか」

「自信は上手くいけばできるものなのよ」
孫権はこのことを呂蒙に話していく。
「だから安心して出なさい」
「蓮華様がそう仰るのなら」
「私も出るし」
ひいてはだ。彼女自身もだというのだ。
「明命とね」
「そうですか。明命殿と」
「穏や小蓮達とも出るし」
彼女は二つだった。
「結構忙しいのよ」
「そういえば蓮華様は」
「これでも歌は好きなの」
孫権の意外な趣味だった。
「だからね」
「そうですか。では」
「ええ、お互いにね」
「頑張りましょう」
「その頑張るという言葉も」
その言葉自体もだ。どうかと話す孫権だった。
「貴女が言うと説得力があるのよ」
「私が言えばですか」
「そうよ。貴女が言えばね」
それでどうかというのだ。
「それは非常に大きな意味があるのよ」
「それはどうしてでしょうか」
「誠意よ」
これが大事だというのだ。
「誠意があるからよ」
「私に誠意がですか」

「不誠実な人間はいるわ」
孫権もわかっていた。これまで多くの人間を見てきて。
「そうした人間が同じことを言ってもね」
「何の説得力もないんですね」
「その通りよ。亞莎はそこも違うから」
呂蒙の誠実で生真面目な性格は広く知られる様になっていた。彼女の軍師としての才覚も絵や歌の資質もだ。その気質故なのだ。
それがいいとだ。孫権は言うのである。
「だからその言葉は言っていいの」
「私だから」
「そういうことよ」
こう話してだった。孫権は呂蒙の後押しをしたのだった。そうしてだ。
彼女自身も大会に出る。かなりの人間が出ることになっていた。しかしだ。
袁紹はだ。観客席、わざわざ自分専用の見事な席を作らせてだ。憮然とした顔でそこに座りだ。そうして顔良達にこんなことを言っていた。

# 第百十一話　怪物達、また騒動を起こすのことその三

「不満ですわ」
「あの、そもそも麗羽様歌われませんし」
「別にいいんじゃないんですか？」
「歌は宜しいですわ」
別にだ。自分は歌えずともだというのだ。
「こうして聴ければいいですわ」
「ではあれですか」
「鰻ですか」
「あれが認められなかったのが残念ですわ」
こう言うのである。
「華琳も駄目だと言いますし」
「そんなこと当然ですよ」
「曹操さんが正しいですよ」
顔良と文醜が正論である。しかし今の袁紹は。
憮然としてだ。駄々をこねるのだった。
「ではあの鰻と納豆と海鼠と山芋はどうしてもなのですね」
「それに蛸もですよね」
「追加されようとしてましたね」
「そうですわ。ぬるぬるに触手ですわ」
その触手がだ。蛸なのだ。
「最高の組み合わせになると思っていたのに」
「取りやめになってよかったです」
「本当に」
こう言ってであった。顔良と文醜は胸を撫で下ろした。しかしだ。
袁紹はまだだ。憮然としていた。それでも馳走を食べながらだ。
大会がはじまるのを待っていた。尚舞台設定等は彼女が行っている。
その舞台についてだ。張飛がこう述べた。

「相変わらず無意味に派手なのだ」
「だよな。袁紹さんらしいよな」
馬超が張飛のその言葉に頷く。
「大きくて派手なことばかり好きだよな」
「で、また鰻できないからすねているのだ」
「あれはちょっと無理だろ」
「というか鰻を好き過ぎるのだ」
二人にとってはどうしても受け入れられないものだった。しかしだ。
その二人にだ。孔明が言ってきた。
「あの」
「何なのだ？」
「もう準備かよ」
「そうです。お二人共舞台衣装に着替えて下さい」
そうしてくれと。二人に言ってきたのである。
「そろそろはじまりますから」
「わかったのだ。それなら」
「今から着替えるな」
「服は色々ありますから」
「問題はどんな服があるかだよな」
馬超は困った顔になった。ここで。
「あたしな、結構色々な服着させられるからな」
「だって翠さん奇麗ですから」
だからだとだ。孔明はその馬超に話す。
「それも当然ですよ」
「当たり前なのか？」
「はい、お顔だけでなくスタイルもいいですから」
「スタイルなあ。そんなにいいか？」
「いいです」
断言だった。今の孔明は。

「私なんか胸はないし背も小さいし」
「そうか？朱里も可愛いだろ」
「けど。胸が」
孔明は暗い顔になっていた。彼女にとって最大の悩みであるのだ。
「ないですから」
「その通りなのだ。格差社会なのだ」
張飛も珍しく弱々しい顔になる。
「愛紗なんかそれこそ富める者なのだ」
「あと桃香様もです」
孔明は劉備もそうだと指摘した。
「何かもう見ているだけで辛くなります」
「まあそれを言ったら話がまとまらないからな」
馬超はここでは二人を慰めにかかった。そのうえでの言葉だった。
「とにかく今はな」
「はい、舞台の用意です」
「とりあえず服を選ぶのだ」
こうしてだ。三人は衣装合わせに向かった。そうしたのだ。
遂に大会がはじまった。まずは。
アテナが歌う。その後ろには。
テリーにナコルル、草薙、そして彼もいた。

# 第百十一話　怪物達、また騒動を起こすのことその四

その彼の姿を見てだ。誰もが呆然となった。
荀？は衣装に金髪の桂、それに緑と白のドレスを着てからだ。舞台を見て言った。
「嘘、あの男が草薙君と一緒なんて」
「草薙君？」
許緒、ピンクのドレスで髪を下ろした彼女はそこに突っ込みを入れた。
「何で草薙君なのよ」
「あっ、まあ飲んでるうちに仲良くなって」
それでだというのだ。
「こう呼んでるんだけれど」
「またお酒なんだ」
「お酒は人間の永遠の友達よ」
荀？にすればだ。それに他ならないのだ。
「何だかんだであっちの世界の面子ともよく飲むし」
「男の人ともね」
「やっぱり偏見はよくないわ」
荀？もそのことを知ったのである。彼等との交流で。
「確かに私は華琳様一筋だけれどね」
「華琳様一筋っていう割には」
「何なのよ」
「それ何処の国の女王陛下の服なのよ」
許緒は荀？の今の服を見て言う。
「あっちの世界の服でもないみたいだし」
「ちょっと。エイリスって国のね」
「エイリス？」
「そこの国の女王様の服なのよ」

「それまた中身のことでしょ」
「他にはメイド服もあったけれど」
それもあったと話す荀?だった。
「これにしたのよ」
「ううん、中身って大事よね」
「とにかく。衣装はこれでいくから」
荀?は決めたというのだ。中身との関係もあり。
「別にいいわよね」
「うん、そっくりだしいいんじゃないかな」
許緒はにこやかに笑って答えた。
「世の中色々あるし」
「けれどよ。八神庵が草薙君と一緒なんて」
そのことがだ。どうしてもと言う荀?だった。しかしだ。
八神は草薙と息の合った演奏をはじめている。それを見てだ。
荀?はあらためてこう言った。
「けれど」
「そうだね。演奏自体はね」
「上手いしそれに」
「草薙さんと息が合ってるよね」
「あの二人ってまさか」
ここで荀?は気付いた。そのことに。
「相性はいいんじゃないかしら」
「相性は?」
「ええ。確かに殺し合う関係だけれど」
そのことはだ。こちらの世界の面々もわかっている。
「けれどそれでもね」
「相性はいいのかな」
「そうじゃないかしら」
こう言うのである。
「そうではないとあそこまで息の合った演奏はできないわ」

「じゃああれかな」
許緒は考える顔になり荀?に述べた。
「ライバルなのかな」
「あれよね。強敵と書いて」
「ともと呼ぶね」
「あちらの世界の言葉だったわね」
「馬鹿みたいな戦争の後の世界で出て来る言葉らしいね」
ある意味において伝説の言葉である。その世界も。
「それじゃないかな」
「確かに。言われてみれば」
荀?もだ。頷くのだった。
「あの二人はそんな感じよね」
「八神さんって確かに怖いけれど」
許緒から見てもだ。その殺気はそうしたものだった。
「けれどこっちから何もしないとね」
「あっちからは仕掛けてこないから」
「そうなのよね。確かに物凄い殺気で」
軍師であり武器も持たない荀?ですらだった。

# 第百十一話　怪物達、また騒動を起こすのことその五

「何人も殺してるのはわかるわ」
「あの人結構殺してるよ」
流石に今は許緒も顔を曇らせる。
「目だけでわかるから」
「そうなのよ、あの目」
「あの目って普通に生きてたらならないから」
「鋭くてしかも」
尚且つなのだ。
「剣呑な光出してね」
「だから桂花さんも絶対に喧嘩したら駄目だよ」
「というか私格闘とかできないから」
「あれっ、けれど今剣持ってるじゃない」
見れば今の荀？の腰にはそれがある。柄は白だ。
「それは飾り？」
「飾りよ。女王陛下だから」
「ただ持ってるだけなの」
「そう、指揮に使うだけだから」
それだけの剣だというのだ。
「別に何も」
「そういうものなのね」
「そうよ。だから特に」
また言う荀？だった。
「気にしなくてもいいわ」
「何だ。桂花さんも戦えるのかって思ったけれど」
「私そういう役少ないわよ」
「そうだよね。結構腹黒いロリだよね」
「何でそこでそうなるのよ」

「だって自分でも言ってるじゃない」
無邪気そのものの笑顔でだ。許緒は話す。
「得意なのはそういう役だって」
「まあそれはそうだけれど」
「けれど大人にもなれるんだね」
「女王になったのははじめてだったかしら」
荀?は自分で振り返りながら言う。
「多分だけれど」
「そんなに中身が同じ人多いの?」
「それは貴女も同じじゃないの?」
「あはは、そうかも」
こんな話をする二人だった。その二人の前でだ。
八神はだ。ベースを演奏していた。その演奏は。
草薙のギターと見事に合っていた。そのうえでアテナのヴォーカルを支えている。
その演奏を聴いてだ。誰もが言った。
「あの八神の演奏凄いよな」
「ああ、ここまで演奏できるってな」
「あいつ才能あるよな」
「天才じゃないのか?」
「こんな演奏滅多にないぜ」
こうだ。兵達も民衆も言う。しかしだ。
八神はあくまで冷静だった。それでだ。
こうだ。彼は演奏の合間に言った。
「今日は調子がよくない」
「そうか?」
「凄い演奏だと思いますけれど」
「指の動きが今一つだ」
こうだ。テリーとナコルルに話すのである。テリーはドラム、ナコルルはキーボードだ。この配置は前から全く変わってはいなかっ

た。
その中でだ。彼は言うのだった。
「だからだ」
「おいおい、その演奏でか」
「そう言われるのですか」
「俺にはわかる」
八神自身にはだというのだ。
「それはな」
「確かにな」
ここで言ったのは草薙だった。丁度茶を飲んでるところだった。
そこでだ。草薙は言ったのである。
「今日は今一つだな」
「わかるか。それが」
「わかるさ。御前のベースはいつも聴いてたからな」
「だからか」
「で、俺の演奏はか」
「ふん。いつも通りだな」
そうだとだ。草薙に対して言う八神だった。
「貴様の指は」
「これでもいつも練習してるしな」
そのだ。ギターをだというのだ。

# 第百十一話　怪物達、また騒動を起こすのことその六

「普段から動かせる様にな」
「鍛錬か」
「いや、趣味さ」
それだというのだ。草薙は。
「作詞のついでにな」
「貴様の作詞は駄目だ」
それにはこう言う八神だった。
「あれだけでは駄目だ」
「へっ、そう言うのかよ」
「そうだ。それに対して俺の作曲はだ」
「御前の作曲も滅茶苦茶だろうが」
「そう言うか」
「実際そうだろ。違うのかよ」
こう話すのだった。お互いにだ。
そのことを言い合いながら。しかしだった。
その二人のやり取りを聞いてだ。曹操が言うのだった。
「つまりあれね」
「あれとは？」
「あれといいますと」
「草薙の作詞と八神の作曲を合わせたらいいのよ」
こう夏侯姉妹に話すのだった。
「草薙の作曲と八神の作詞は知らないけれど」
「その二人を合わせればですか」
「それでいいと」
「そうあるべきよ。あの二人はあれでね」
曹操の目ではだ。わかることだった。
「相性がいいわね」

「そうですか？常に殺し合っていますが」
「あの剣呑な雰囲気にあってもですか」
「あれでお互いを認めているのよ」
そうだとだ。曹操は話す。
「そういうものなのよ」
「ううん。そうなのですか」
「あの二人は」
「そうよ。確かに殺し合っているわ」
このことは否定できなかった。曹操にしても。
「けれどそれでもなのよ」
「認め合っている」
「御互いに」
「強敵ね」
曹操もだ。この言葉を出した。
「まさにね。だから」
「だから？」
「だからといいますと」
「あの二人はどちらかがいなくなったら」
そうなればどうなるかというのだ。
「物凄く寂しくなるわ」
「寂しくですか」
「そうなりますか」
「ええ、なるわ」
曹操は二人の関係をここまで見ていた。
「どちらかが生き残ってもね」
「そうですか。草薙君も八神も」
「二人はそうした関係ですか」
夏侯惇は何気にだ。草薙を君付けだった。
そしてだ。それはだ。
夏侯淵もだ。こう言ったのだった。

「草薙君はそうした素振りは見せませんが」
「表にはね」
「そうですね。出しません」
「草薙はあれで結構繊細なのよ」
曹操は微笑んでその草薙のことを話す。
「八神もね」
「八神もですか」
「繊細ですか」
「そう。そして素直じゃないのよ」
曹操の指摘が続く。
「二人共ね」
「そうですか。そう言われると」
「あの二人は似ているのですか」
「全くの正反対に思えて」
「そうなのですか」
「そうよ。日と月は一対よ」
正反対の存在ではないというのだ。

# 第百十一話　怪物達、また騒動を起こすのことその七

「一対のものだから」
「だからこそですか」
「草薙君と八神は」
「そういうことよ。それにしても」
ここでだ。曹操は姉妹に対して言った。
「貴女達草薙を君付けで呼んでるわね」
「あっ、そうですね」
「そういえば」
言われてだ。そのことに気付く二人だった。
「どうも。彼には見るべきものを感じますし」
「それに親しみも」
「さて、その彼ならね」
草薙ならだ。どうかともいうのだ。
「オロチも封じられるわ」
「八神と神楽も入れてですね」
「三人で」
「確かに殺し合う間柄だけれど」
だがそれでもだというのだ。
「あの三人はいざとなれば一つになるわ」
「そうして共に戦う」
「それが彼等ですね」
「そういうことよ。それじゃあ」
あらためて微笑んでだ。曹操は二人に言った。
「私達の出番よ」
「はい、それでは」
「今から」
二人は瞬時にだ。衣装に着替えた。その衣装は。

夏侯惇は赤、夏侯淵は青のだ。脚がはっきり出ているフリルの衣装だった。その衣装を見てだ。

曹操は一瞬目が点になった。それから言うのだった。

「何、その衣装は」

「はい、アテナを基にしたのですが」

「いけませんか」

「アテナは十代だからできるけれど」

しかしだ。二人はというのだ。

「貴女達が着ると」

「似合わないでしょうか」

「駄目でしょうか」

「駄目ではないわ」

そうではないというのだ。見ればその露出の多い、肩も胸も結構出ている衣装は二人に似合っている。だがそれでもだとだ。曹操は言うのだ。

「それでも」

「それでも？」

「では」

「かえっていやらしいのよ」

そうだというのだ。アテナの様な服を二人が着ると。

「それで舞台に出たら皆もう大変よ」

「兵達が騒ぎますか」

「そうなると」

「なるわ。けれどそれも一興ね」

曹操は笑顔になって述べた。

「じゃあその服で出なさい」

「はい、では華琳様も」

「御着替え下さい」

「わかったわ。じゃあ」

いつもの服の右肩を取って一気に脱ぐと。そこには。

黒いやはり派手なドレスだった。彼女はそれだった。
曹操達が歌い董卓達、孫権達も歌う。孫権はとりわけ。
ピンクの衣装でだ。こう周泰に言った。
「じゃあ貴女もね」
「はい、予定通りですね」
「二人で歌いましょう」
こう周泰に言うのである。
「今夏侯姉妹が歌っているけれど」
「次は雪蓮様と冥琳さんで」
「そして次は曹操のところの軍師二人でね」
郭嘉達のことだ。
「それで私達よ」
「はい、それじゃあ」
「私は貴女についてもね」
呂蒙だけでなくだ。周泰もだというのだ。
「歌えると思っていたから」
「私もですか」
「ええ、だからね」
それでだ。誘ったというのだ。

# 第百十一話　怪物達、また騒動を起こすのことその八

「一緒に歌いましょう」
「有り難きお言葉。それでは」
「二人でね」
こう話してだった。二人も歌うのだった。彼女達の後は。
今度はだ。呂布だった。彼女は傍らにいる陳宮に言った。
「ねね」
「はい、恋殿」
こうだ。陳宮は呂布に対して答えた。
「では今から」
「歌う。歌はいい」
「恋殿は歌もお好きなのですね」
「歌はいい」
無表情だがそれでも言う呂布だった。
「歌うとそれだけで」
「心がよくなるのです」
「だから歌う」
それでだと答える呂布だった。そうしてだった。
二人も歌う。その後は関羽達が出てだ。
一斉に歌う。彼女達もだった。
歌いだ。場は進んでいく。そして遂にだった。
「おい、いよいよだな」
「ああ、いよいよだ」
「今呂蒙さんで次が」
「ええと、これ誰だ？」
「誰なんだよ」
歌手の出番の順番が書かれている紙を見てもだ。誰もが首を捻る。
そこに書かれているのは公孫賛だった。しかしだ。

彼女の名前を見てもだ。誰もが首を捻るばかりだった。
「公孫賛？知らないな」
「そうだよな。こんな人いたか？」
「誰も知らない娘出すなんてな」
「新人か？」
「そうじゃないのか？」
こうまで言う者すらいた。
「っていうかさっきの孔明ちゃんと鳳統ちゃんもよかったよな」
「やっぱり着ぐるみっていいよな」
「ああした小さな女の子が着ると最高だよ」
「張飛ちゃんもだけれどな」
張飛はここでも着ぐるみだった。そして他には。
「馬超将軍はやっぱり黒だろ」
「あのゴスロリか？あれ最高だよな」
「趙雲将軍の仮面メイドもよかったけれどな」
「あと関羽将軍の中華ドレス」
「胸が最高だよな」
こう話していく。そうしてだ。
その中でだ。彼等はさらに話していく。
「あと呂蒙殿のメイド？あれもよかったよな」
「あの人可愛いんだな」
「っておい、あんな可愛い人そういないだろ」
「性格も真面目で懸命で」
何をするにも必死なのが呂蒙である。それが出ているのだ。
「あんないい人そういないって」
「胸がないのが余計にいいんだよ」
貧乳派もいた。彼等も健在だった。
そんなことを話しながらだ。彼等は。
ふとだ。こう言うのだった。
「で、三姉妹との勝負は袁術様達か」

「偶像支配な。変わった名前だよな」
「何でこの名前にしたんだろうな」
「あの三人の場合は」
袁術に郭嘉、張勲の三人の組み合わせの名前はこうなったのだ。
その組み合わせの名前についてだ。彼等は言うのである。
「まあ袁術様が決めたんだろうけれどな」
「あの人結構以上に変なところがあるからな」
「今回もなんだろうな」
何故か袁術のことはこう言って皆納得する。そうしてだった。
三姉妹が歌いその偶像支配が歌う。一曲ごとに入れ替わりだ。
「皆大好きーーーーーーーーーーっ！！」
「わらわ達の歌を聴くのじゃーーーーーっ！！」
こうそれぞれ言って歌い合う。場は最高潮になってきていた。
その彼女達を見てだ。劉備は言うのだった。
「うわあ、やっぱりあの娘達凄いわ」
「そうね。確かにね」
曹操がその劉備の言葉に頷く。この二人も一緒に歌ったのだ。

# 第百十一話　怪物達、また騒動を起こすのことその九

その二人が舞台を観ている。ここでだ。
劉備がだ。言うのだった。
「あの娘達を呼んでよかったのね」
「正解ね。ただね」
「ただ？」
「ええ。あの娘達はいいけれど」
彼女達はいいというのだ。三姉妹や袁術達は。
曹操も出演者のその順番の最後を見る。そこには。
謎とだけある。それを見て言うのだ。
「最後の最後は誰なのかしら」
「ええと。何か紙が配られたら書いてたのよ」
劉備は少しきょとんとした顔になり右手の人差し指を己の顎に当てて曹操に答えた。
「こうね」
「そもそもこの紙って誰が書いたの？」
「それもわからないし」
「不吉ね」
曹操は顔を曇らせて言った。
「これは」
「不吉って」
「何か空もね」
曹操はここで空を見上げた。その空は。
「確かに青いけれど」
「何か妙な雲があるけれど」
不気味なまでにドス黒い、そうした雲だった。
劉備もだ。その雲に気付いて言った。
「あの雲って何かしら」

「何かが起こる前触れね」
曹操は目を顰めさせて言った。
「それは間違いないわ」
「何かがなの」
「そう、何かが」
だがそれが何かはわだ。今は彼女にもわからなかった。しかし舞台は進む。その中でだ。
公孫賛は自分も舞台を観ながらだ。溜息をついてある男に言っていた。
「どうもな」
「どうしたのだ？」
見れば黒髪に口髭の男だ。着物に赤胴だ。
その彼がだ。公孫賛の話を聞いている。
「一体」
「私があの三姉妹の様になれる日が来るのだろうか」
こうだ。舞台の華やかな三姉妹を見て言うのだ。彼女達は舞台の上で朗らかに歌いそのうえで華麗な舞もそこで見せている。
公孫賛も歌った。しかしだったのだ。
「私は拍手一つなかった」
「誰だ、という感じだったな」
「いつもこうだ。私は目立たないのだ」
溜息をついての言葉だった。
「何をやってもだ」
「気持ちはわかる。しかしだ」
ここで男は彼女に言った。
「出番があるだけましなのだ」
「出番？」
「そうだ。あるだけましなのだ」
こう言うのである。公孫賛に対して。
「わしなぞ出番一つないのだ」

「そうなのか？」
「わしは最初に出て後は失踪扱いだ」
見ればだ。男は泣いていた。腕を組み舞台を観ながらだ。涙を流していた。
そうしてだ。彼は言うのだった。
「背景にいるだけだぞ」
「何っ、そこまで酷いのか」
「娘にも会えない」
「そういえば貴殿は」
公孫賛はここで男の横顔を見た。するとだ。
「藤堂香澄に似ているな」
「香澄にか」
「気のせいか、似ているな」
「そうだろう。わしは香澄の」
「香澄の？」
何故かだ。こう言ったところでだ。
男は姿を消していた。後には誰もいなかった。
「今のは一体」
公孫賛も首を捻る。全く以て謎の男だった。
何はともあれだ。舞台は進み。
三姉妹もその偶像支配も歌い終えた。そうして。
採点が行われる。優勝は。
何とだ。同時優勝だった。
「えっ、三姉妹と偶像支配が！？」
「互角とは」
劉備と関羽がそれぞれ驚きの声をあげる。

# 第百十一話　怪物達、また騒動を起こすのことその十

「確かにあの娘達がずば抜けてたけれど」
「しかし同時優勝とは」
「けれどです」
ここで徐庶が驚きを隠せない二人に言う。
「これは妥当です」
「そうよね。言われてみれば」
「実力は伯仲していた」
「皆上手でしたけれど」
これは参加者全員への評価だ。
「それでもです」
「あの娘達は本当に互角だった」
「だから」
「そういうことなのね」
「だからお互いにか」
「はい、そうです」
まさにそうだとだ。徐庶は言った。
「確かに決着はつかない感じですが」
「けれど歌だから」
「それもよしか」
「そうなります」
徐庶がこう言うとだ。その彼女達もだ。
腑に落ちない感じだがそれでもだ。こうそれぞれ言うのだった。
「優勝じゃないのね」
「折角だから単独優勝といきたかったけれど」
「けれど」
姉達に続いて張宝がこう言った。
「充分歌いきったし」

「そうよね。これもね」
「いっか、別に」
「歌だからいい」
また言う張宝だった。
「戦じゃないから」
「うん、じゃあこの後は」
「都の御馳走食べ放題ね」
彼女達はこれで終わった。そして。
袁術達もだ。こう言うのだった。
「ううむ、ぶっちぎりでいけると思ったがのう」
「あの娘達また歌が上手になってますね」
「それに踊りも」
少し残念そうな袁術に張勲と郭嘉が言う。
「けれど私達は歌いきりましたし」
「もういいと思います」
「そうじゃな」
そしてだ。二人に言われてだった。
袁術も納得してだ。こう言ったのだった。
「まあよいか」
「はい、ではそういうことで」
「後は二人で」
郭嘉は袁術をだ。熱い視線で見て声をかけた。
「蜂蜜水を」
「そうじゃな。凛と一緒ならいいのじゃ」
袁術も郭嘉に言われるとにこりとなる。
「もうずっと一緒にいたいのじゃ」
「あら、では私も」
張勲がさりげなくそんな二人の中に入る。
「御一緒させてもらいますね」
「うう、凛と一緒におる時は七乃にはあまり」

「お嫌ですか？」
「凛は渡さん」
これが袁術の言いたいことだった。
「それはわかっておるな」
「あらあら。我儘はいけませんよ」
こんなやり取りをする三人だった。今は平和だった。
筈だった。しかしだ。
誰もいなくなった舞台にだ。突如としてだった。
彼女達が出て来た。その瞬間に。
舞台では大爆発が起こった。それで何もかもが破壊された。それを見て。
兵達も民達もだ。驚いて言った。

# 第百十一話　怪物達、また騒動を起こすのことその十一

「な、何だ！？」
「何が起こったんだ！？」
「舞台に化け物がいるぞ！」
「何だあいつ等！」
「真打登場！」
「皆待たせたわね！」
その破壊された舞台にだ。彼女達はすくっと立っていた。
そうしてだ。こう言ったのである。
「愛と正義の美少女戦士！」
「月に代わってお仕置きよ！」
「黙れ妖怪！」
「そうだ、ふざけたこと言うなってんだ！」
あの三人組が怒ってだ。その舞台に飛び上がってきた。
そうしてだ。怪物達に言うのである。
「手前等、一体何者だ！」
「折角の舞台を最後の最後で台無しにしやがって！」
「ゆ、許せない」
「あら、何が許せないのかしら」
「意味がわからないわ」
貂蝉と卑弥呼だけがこう思っている。
「あたし達みたいな絶世の美女を捕まえて妖怪だなんて」
「失礼しちゃうわ」
「じゃあ聞くが御前等何者だよ」
そのいつものリーダー格が抗議する。
「いきなり出てきやがってよ」
「ぜ、絶対人間じゃない」
でかいのも言い切る。

「妖怪としか思えない」
「だから妖怪じゃないわよ」
「絶世の美少女よ」
彼女達は身体を不気味にくねらせて主張し。そうして。
名乗った。その名は。
「貂蝉よ」
「卑弥呼よ」
ウィンクして恥らいながら名乗った。すると。
それだけでだ。また大爆発が起こった。その爆発でだ。
三人組は吹き飛ばされた。まさに戦略兵器だ。
しかもだ。戦略兵器はまだあった。
怪物達は恐ろしいことを言い出した。
「じゃあ舞台のトリでね」
「歌わせてもらうわ」
「えっ、歌えたの」
曹操もそれを聞いて驚く。
「あの怪物達」
「そうみたいですね。どうやら」
「信じられませんが」
夏侯姉妹が曹操に応える。
「では一体どうされますか」
「ここは」
「どうすると言われても」
曹操もだ。彼女にしては珍しく釈然としない顔になる。
それでだ。こう言うのだった。
「あの二人はどうしようもないわ」
「はい、何しろ仙人ですから」
「おそらく前身は恐ろしい怪物だったのでしょうが」
つまりだ。妖怪仙人だというのだ。
「あの者達がすることはです」

「最早誰にも」
「ええ。見守るしかないわ」
こう言ってだ。曹操もだ。
見守るしかなかった。他の面々もだ。
袁紹もだ。憮然として言うのだった。自分の席で。
「せめてここで見守りますわ」
「そうされますか」
「残られるんですね」
「兵達と民達は安全な場所にまで避難させなさい」
こうだ。顔良と文醜に告げた。そのうえでだ。
己の席に座ったままでだ。言うのだった。
「最後の最後までここにいますわ」
「わかりました。では」
「あたい達も皆を逃がしてここに残ります」
彼女達も覚悟を決めていた。こうしてだった。

# 第百十一話　怪物達、また騒動を起こすのことその十二

兵達と民達を逃がした劉備達は見守る。何が起こるのかを。
その貂蝉と卑弥呼がだ。遂に言った。
「では歌うわよ」
「あたし達の歌を」
「全員耳栓をしろ！」
その話を聞いてだ。関羽が即座に叫んだ。
「死ぬな。最後まで耐えよ！」
「あたし達の美唱を聴くと悶え死ぬわよ」
「さあ、死になさい」
妖怪達だけが言いだ。そうしてだった。
彼女達は歌った。その歌がはじまると。
これまでにない大爆発が舞台はおろか観客席でも次々に起こり。
そして嵐が起き雷が次々と落ち。地震になり。
吹雪が荒れ狂いだ。あらゆる天変地異が起こった。それが歌の間続き。
歌い終わった時、最早そこに立っている者はいなかった。
死屍累々たるその惨状を見てだ。妖怪達は満足した笑みを浮かべて言うのだった。
「あたし達って罪よね」
「そうよね」
その破壊に満足している言葉ではなかった。
「歌で魅了されて皆気を失って」
「倒れるなんて」
「もう悶絶って感じよね」
「本当に罪だわ。あたし達って」
こう認識しているのだった。
「もう自分の歌に卒倒しようよ」

「あまりにも素晴らしくて」
こう言うのだった。そして。
彼女達はだ。空を飛んだ。そうして何処かへと消え去っていた。
「また会いましょう」
「会うべき時にね」
「二度と来るな！」
その彼女達に叫んだのはジャックだった。
「手前等何だったんだ！」
「よせ、もう聞こえないぞ」
ジョンがそのジャックに言う。彼女達が消えたその空を二人で見て。
もう空は奇麗になっていた。それまでの嵐や雷、吹雪が嘘の様に。
その青空を見ながらだ。ジョンはジャックに言ったのである。
「何処かに消えちまった」
「ちっ、あいつ等本当に仙人か？」
「連中が言うにはそうだろうな」
「化け物だろ」
ジャックは内心思っていることを今出した。
「絶対に」
「まあ仙人とは何か違うよな」
「どう見てもそうだろ」
こんなことをだ。ジャックはジョンに言った。そうして。
皆何とか立ち上がりだ。黒焦げになった姿でそれぞれ言う。
「最後の最後でこうなるなんて」
「何てこった」
「とりあえずだけれど」
劉備もだ。立ち上がりながら言った。
「皆今日はこれでお開きってことで」
「はい、では体力が戻ったら出陣です」
「そうしましょう」

孔明と鳳統も言い。そうしてだった。

とりあえず舞台が終わったことを確かめ合うのだった。何が何なのかわからないまま舞台は終わった。後に廃墟を残したうえで。

第百十一話　完

２０１１・９・１７

# 第百十二話　一同、赤壁に出陣するのことその一



歌の大会の後でだ。遂にだった。
劉備達は出陣する。その中でだ。
張角が言うのだった。
「私達も一緒なのね」
「ええ、歌で皆を元気付けて欲しいから」
「それで」
その張角に張梁と張宝が話す。
「同行することになったのよ」
「勿論報酬は弾んでくれたわ」
金の話も自然に出る。
「おまけに出陣の間御馳走どんどん出るみたいだし」
「悪い条件じゃないわ」
「ですから私達もです」
下喜達親衛隊の面々もここで言う。
「御一緒させて頂くことになりました」
「その様に」
「わかったわ」
その話をだ。張角はすんなりと受け入れた。
そうしてそのうえでだ。彼女達も出陣に同行するのだった。
その彼女達を見てだ。兵達は早速だ。
テンションを上げてだ。こう言うのだった。
「よし、三姉妹も同行だ！
「ずっと歌が聴けるんだな！」
「よし、頑張るぞ！」
「それなら！」

こう言ってだ。彼等の士気は今からかなりのものだった。その高い士気でだ。

全軍意気揚々と洛陽に向かう。しかしその先陣では。

「おーーーーーーーーっほっほっほっほっほ！」

「全く。言い出したら聞かれないから」

「困ったことね」

田豊達袁紹の軍師の面々が溜息をついていた。何故なら。

先陣は袁紹だからだ。高笑いをする主達を見て言うのだった。

「先陣は自分だって言い張られて」

「本当にでしゃばりなんだから」

「先陣は将の誉れですわ」

こうだ。袁紹は誇らしげに笑って言うのだった。その彼女達に。

「それを受け持つよう声をあげるのは」

「当然だっていうんですか」

「それで今も」

「そうですわ。わたくし達の軍で」

何をするかというのだ。袁紹は。

「オロチでもアンブロジアでも何でも倒しますわ」

「ですから。迂闊に前に出られたら」

「的にされますよ」

「麗羽様はただでさえ目立つのに」

「それで出られては」

「安心なさい」

袁紹は胸を張って言い切った。

「わたくしには弓矢も槍も当たりませんわ」

「こんなことを言われるから心配なんですよ」

「本当に向こう見ずなんですから」

こう言ってだ、彼女達は今から心配することしきりだった。だが何はともあれだ。

彼女達は順調に進んでいる。それは確かだった。

都を出て数日でだ。一行は揚州まで暫くの場所まで来た。そこでだ。

一旦休止に入りだ。その中でだ。

こうだ。孫策が一同に話した。

「揚州のことなら任せておいてね」

「そうよね。地の利はあるわよね」

こうだ。孫策の言葉に凛が頷いた。

「孫策さん達は元々この地で育ったし」

「そうよ。だからよく知っているわ」

それでだというのだ。

「だからその赤壁もね」

「知ってるってことか」

「そうなるな」

夜血と灰人も彼女の言葉を聞いて頷く。

「じゃあここはな」

「任せていいな」

「ええ、陣を敷く場所もその布陣もね」

そうしたことまでだというのだ。

「もう任せてもらっていいわ」

「そうよね。それじゃあね」

リムルルが孫策のその言葉に頷いた。

「孫策さん、御願いね」

「任せておいて。じゃあ今はね」

「今は？」

「今はっていうと」

「もうこの辺りじゃ売ってるのよ」

急にだ。孫策の顔が笑顔になった。そのうえでの言葉だった。

# 第百十二話　一同、赤壁に出陣するのことその二

「揚州の酒がね」
「それってまさか」
キングがここで自分の左手を見た。そこでは。
黄蓋が飲んでいた。それも実に美味そうに。
その酒を飲んでいる彼女を見てだ。キングは孫策に言うのである。
「あれ？黄蓋さんが飲んでる」
「そうそう、あれよ」
まさにだ。その酒であった。
「祭ってもう飲んでるのね。相変わらずよね」
「っていうかあの人何処でも飲んでるだろ」
凱がその酒を見て言う。
「もう今更って感じだよな」
「うむ、やはり美味じゃ」
その黄蓋の言葉だ。既に顔が赤くなっている。
「揚州の酒はよい」
「そうですね。確かに」
何故かここで鳳統もいてだ。彼女も飲んでいる。
「このお酒いけます」
「ってあんた飲むんやな」
あかりがその鳳統に気付いて突っ込みを入れた。
「それもかなり」
「お酒。好きですから」
「甘いものだけやないんやな」
「何か。中から求めるんです」
そのだ。酒をだというのだ。
「それで」
「ううん、またしても中身かいな」

「何といいますか」
「まあええけどな」
あかりもそれでよしとした。それでだ。
あらためてだ。鳳統は。
さらに飲む。しかも瓶ごとだ。
ごくごくと飲みだ。瓶を一つ開けてしまった。それを見てだ。
覇王丸もだ。唖然として言う。
「思った以上に飲むな」
「何かどれだけ飲んでも酔えなくて」
「いや、それは半端じゃねえな」
「そうでしょうか」
「ああ、凄いな」
覇王丸ですらこう言う程だった。
「隠れた酒豪だな」
「ふむ。見所があるのう」
黄蓋もその鳳統には太鼓判だった。
「これは将来が楽しみじゃ」
「確かにな」
覇王丸もそれは同じだった。
「ここまで飲めるとな」
「わしも負けてはおれん」
黄蓋は自然にこうした感情にも向かった。
「ではより飲むか」
「よし、俺もだ」
こうして鯨飲に向かう彼等だった。他の面々もだった。
その揚州の酒を楽しむ。それは張飛も同じだった。
食べるだけでなく飲みもしてだ。満足した顔で言うのである。
「やっぱり酒は最高なのだ」
「それ何かやばい言葉だな」
一緒に飲む馬超が突っ込みを入れる。

「酒を子供にしたらな」
「もうそれだけでよね」
それは馬岱も言う。
「最高に危ない言葉になるわよね」
「そうだよな」
「それでもいいのだ」
しかしそれでもだ。張飛は飲めればよかった。
それで酒を大盃で飲みながらだ。顔を赤らめさせて言うのである。
「酒はあればあるだけ飲むのだ」
「っていうか食うだけじゃなくてか」
「飲むのね」
「翠と蒲公英も飲むのだ」
「ああ、飲んでるぜ」
「最初からね」
それは彼女達も同じだった。やはりかなり飲んでいる。しかしである。

# 第百十二話　一同、赤壁に出陣するのことその三

夏侯淵はしんみりとしてだ。顔良と共にだ。公孫賛の話を聞いていた。

そしてだ。こう言ったのである。

「わかる、よくわかる」

「本当にです」

顔良もだった。

「私もだ。姉者があれでだ」

「もう文ちゃんって本当に」

「そうだな。何かと前に出るから」

「もうフォローが大変で」

「桃香はだ」

公孫賛が言うのは彼女のことだった。

「いつも緩い感じでだ。おっとりしていてだ」

「それに巻き込まれてだな」

「そうしてなのね」

「しかもあの胸だ」

劉備の武器だ。彼女の自覚していない。

「あの胸でだ。全てを蹂躙するのだ」

「まあ私は胸はな」

「すいません、私も」

しかしだった。二人はだ。

胸についてはこう言うのだった。

「それなりにあるからな」

「ですから」

「私も実際にない訳ではないが」

見れば公孫賛も胸はある。それなりに。あくまで普通に。

「しかしあの胸は最早兵器だ」

「目立つな、確かに」
「お顔も可愛いですし」
「その天然にいつも振り回されてだ」
しかもだった。それに加えて。
「私は結局だ」
「目立たないのだな」
「忘れられるんですね」
「あの荀？もだ」
言わずと知れた曹操の筆頭軍師だ。
「私のことを完全に知らなかったのだぞ」
「あれは許してやってくれ」
夏侯淵がこのことを公孫賛に言った。
「桂花も悪気はないのだ」
「それはわかるが」
「本当に知らなかったのだ」
そうだとだ。公孫賛に話すのである。
「悪意やそうしたものは一切ないのだ」
「わかっている。わかっているが」
「それでもか」
「本当に私は知られていないのだな」
公孫賛が残念に思うのはこのことだった。
「どうしてもそうなるのだな」
「そういえば荀？さんは」
彼女はどうなのかとだ。顔良は話題を変えてきた。
「変わりましたよね」
「そうだな。言われてみればな」
「随分丸くなりましたよね」
「以前は極端な男嫌いだった」
今でもその傾向があるがそれでもだというのだ。
「しかしあちらの世界の面々と話したりしてだ」

「変わりましたよね」
「特に覇王丸殿と話してだ」
彼と話したことが大きかったというのだ。
「あの御仁のことに非常に感銘を受けてな」
「覇王丸さん。確かにあの人のお話は」
「そうそうできるものではない」
夏侯淵もだ。飲みつつ会心した顔で述べた。
「想いを封じて。そうして剣のみに生きるのは」
「お静さんも覇王丸さんをお慕いして」
「それを知っていて。応えたいが」
「それでも剣をなのですね」
「剣の道に女は不要」
覇王丸が常に己に言い聞かせていることだ。そのことをだ。
夏侯淵はだ。強い顔で言った。
「それを貫く為にだ」
「あえてですから」
「漢だ」
夏侯淵もだ。覇王丸を認めた。
「まさにな」
「その漢を見たからか」
公孫賛も言った。
「荀?も変わったか」
「あれだけのものを見れば」
「そうですよね。どんな男嫌いでも」
「認める様になる。桂花は確かに困ったところもあるが根っからの悪人ではないのだ」
少なくともだ。荀?はそうした人間ではなかった。
それがわかっているからだ。夏侯淵も今言えた。

# 第百十二話　一同、赤壁に出陣するのことその四

「認めるものは認めるのだ」
「だからか。変われたのか」
「それはあちらもだな」
「覇王丸もか」
「そうだ。あの御仁も決めた様だ」
そのだ。何を決めたかというと。
「若しもあちらの世界に帰ればその時は」
「お静殿とか」
「共に生きる。それを決めた様だ」
「漢ですね、本当に」
顔良はそんな覇王丸についてこう言った。
「その覇王丸さんだからこそ」
「剣の道を極めそうして」
「お静さんもですね」
「幸せにできる」
こうだ。覇王丸についての話もしたのだった。その覇王丸は。
彼もまた飲んでいた。その彼にだ。
関羽が来てだ。そしてこう声をかけた。
今彼は星空を見ながら飲んでいた。その無限に広がる星空をだ。
無数に瞬く星達が夜空を照らす。その星達を友に飲んでいるのだ。
その彼に関羽がだ。来てこう尋ねたのだ。
「何か考えているのか？」
「ああ、少しな」
「私は今一つそうしたことに疎いが」
前置きしてからだ。覇王丸に話した。
「お静殿のことか」
「俺は今まで逃げていた」

そうだとだ。覇王丸は星空を見上げながら関羽に答えた。
「お静からな」
「剣に理由をつけてか」
「ああ、そうだった」
こうだ。澄んだ顔で言うのである。
「幻十郎とのことも理由に過ぎなかった」
「あの御仁のことは聞いているが」
「俺とあいつは殺し合う関係だ。しかしだ」
「実際にはだな」
「御互いに目指しているものは同じだ。侍だ」
「まことの意味での侍だな」
「俺達は殺し合い、いや勝負の中で」
お互いに全てを賭けて斬り結ぶ。その中でだというのだ。
「その侍の道に辿り着こうとしていた」
「そうしていたのだな」
「そこには他のものは不要だと」
そうしてだ。お静もだというのだ。
「理由を付けてお静から逃げていただけだった」
「しかしこれからは違うか」
「俺はお静を幸せにする」
それをだ。今言った。
「必ずな」
「そうか。そうするか」
「この世界に来て決めることができた」
まさにだ。この世界でだというのだ。
「俺もだ」
「そうか。この世界に来たのはそうした意味もあったのだな」
「不思議だな。元の世界ではそこまで考えられなかった」
だが、だ。この世界ではというのだ。
「俺はそこまで至れた」

「何よりだな」
「他の奴等もそうだと思う」
そしてそれはだ。覇王丸だけではないというのだ。
「俺以外にもだ」
「やはり運命だったのだろうな」
関羽はこんなことも言った。
「貴殿達はこの世界に来たのは」
「俺達全てがか」
「その迷い、手に入れたくても自分で拒んでいたそれをだ」
「手に入れる為にか」
「この世界に来た。そうした意味もあったのだろう」
「本当に不思議なことだな」
関羽の話を聞いてだ。覇王丸は。
微笑みになりだ。夜空を見上げたまま述べた。
「この世界で。色々な奴がそうしたものを手に入れられるなんてな」
「全くだ。私もだ」
ここでだ。関羽は微笑んでみせた。それは包容力のある大人の女の笑みだった。
「御主達と出会えてよかった」
「あんたもかい？」
「そうだ。多くの。かけがえのないものを見られた」
だからだというのだ。

# 第百十二話　一同、赤壁に出陣するのことその五

「私達も。御主達がいなければだ」
「どうなっていたかっていうんだな」
「醜い戦を。果てしなく続けていた」
そうなっていたというのだ。
「だが御主達と出会えたからだ」
「だからか」
「そうだ。私達は一つになり。この世界の為に、民達の為に動こうとしている」
それはこの世界の誰もが、今劉備の下に集う誰もが想っていたことだった。
しかしそれが一つになることはだ。彼女達だけではできなかったというのだ。
だが覇王丸達が来てだ。それでだというのだ。
「御主達と出会い見て。多くのものを得たからだ」
「それでなれたんだな」
「そうだ。私達にとっても運命だ」
まさにそれだというのだ。
「感謝しているぞ」
「いい笑顔だな」
今の関羽の笑顔は曇りのない。清らかでにこやかなものだった。
その笑顔を見てだ。
覇王丸もだ。微笑みそうして言ったのだ。
「若しお静がいないとな」
「どうだというのだ？」
「あんたに惚れていたな」
「そうか。その言葉は」
「何だ？」

「やはり私はそうしたことには疎い」
こう前置きしてからだ。関羽は微笑みに戻りまた述べた。
「だがそれでもだ。わかる」
「そうなんだな」
「今の言葉は最上の褒め言葉だ」
女であるだ。関羽にとっては。
「特に御主の様な漢に言われるとだ」
「俺はあくまでお静だけだ」
その言葉に偽りはなかった。何処までも。
「だからだ。あんたはな」
「そうだな。私も御主がお静殿を見ていなければ」
「あんたはあんたで。相応しい相手を見つけてくれ」
「うむ、そうさせてもらう」
こうした話をする彼等だった。その覇王丸の他にもだ。
夜血と灰人もだ。こんな話をしていた。
「そうか、もうか」
「ああ、その国に行く」
灰人は車座になって飲み合いながら話していた。灰人が言っていた。
「亜米利加って国にな」
「御前の親父か?それがいる国だったな」
「みたいだな。それでもな」
「そこに行っても結構あるだろうな」
「それでもこれ以上離天京にいてもな」
仕方ないというのだ。
「だからそこに行くさ」
「そうか。じゃあ俺もな」
夜血もだ。ここで言うのだった。
「一緒に行っていいか?」
「御前も来るのか」

「俺はあいつと一緒に暮らしたいんだ」
夜血は飲みながら確かな顔になって言った。
「ずっとな。これからな」
「あいつとか。ずっとか」
「もうこれ以上あんなところにいても何もなりゃしないさ」
「それはその通りだな」
「だからな。俺もな」
彼もだというのだ。夜血は。
「離天京を出てそうしてな」
「じゃああいつと一緒に来い」
「那美乃とな」
「御前一人だと抜ける時に生きられるのは御前だけだ」
灰人はその現実を言った。
「しかしな。俺も一緒だとな」
「あいつも無事出られるな」
「俺もな」
ひいてはだ。灰人自身もだというのだ。

# 第百十二話　一同、赤壁に出陣するのことその六

「無事に出られるからな」
「よし、それじゃあな」
「元の世界に。若し戻ったらな」
まさにだ。その時にだというのだ。
「一緒に行くか」
「その亜米利加に」
「俺もそうさせてもらう」
二人と共に飲むだ。銃士浪も言ってきた。
「俺もあの国に残ってもな」
「ああ、あんたの理想もな」
「あの時の日本じゃな」
いてもだ。仕方ないというのだ。
銃士浪も最初はそう思っていた。しかしだ。
彼等から見て未来の者達の話を聞いてだ。考えを変えた。それでだ。
「あの国が自由の国ならな」
「そこに行ってか」
「あんたの理想を」
「そうだ。そうする」
こう言うのである。
「亜米利加で生きる」
「それならか」
「俺達もそこで生きるか」
「空は広いんだ」
銃士浪は言った。
「そこにだけいても仕方ないからな」
「だからか。亜米利加の空で」

「そこでか」
「ああ、生きるとしよう」
こんなことを話してだった。彼等は。
これからのことを考えるのだった。彼等自身のことを。
右京もだ。沙耶に話していた。
「私も決めた」
「貴方の道を歩むのね」
「そうする。圭殿に」
そのだ。想い人にだというのだ。
「私の想いを伝えたい」
「そうね。それがいいわ」
「華陀殿には深く感謝している」
ひいてはだ。彼にだというのだ。
「あの方のお陰でそれが果たせるのだからな」
「貴方の胸が」
「そうだ。癒された」
そうなったからだというのだ。
「あの苦しめられていた病が消えたのだ」
「有り難いことにね」
「それならばだ。私はだ」
「一歩前に出られる様になったのね」
「それなら前に出る」
決意はだ。自然に言葉になって出ていた。
「どうなろうともだ」
「そうね。私達はあの世界にいるままだと」
「ただ。その生涯を終えていただけだった」
「それが大きく変わったわ」
微笑みだ。こう言ったのである。
「人生においてね」
「そうだ。それなら」

「私もね」
ひいてはだ。沙耶もだとだ。彼女も言った。
「この世界で多くのことを知ったわ」
「貴殿と私は住んでいる時代は違う」
「けれどそれでもね」
「こうして会い語り合い」
「そして共に戦い」
そうしてだった。
「よくわかったわ」
「様々なことがだな」
「私の生きている時代にも色々なことがあるけれど」
「その全てが」
「よく見えて。落ち着いて考えるようになったわ」
「そのうえで。元の世界に戻られれば」
「生きていくわ。私のやり方でね」
「大河は一つではない」
こんなこともだ。右京は言った。

# 第百十二話　一同、赤壁に出陣するのことその七

「無数の大河がある」
「人それぞれに」
「私は私の大河を進み」
「私もまたね」
「そうして生きるべきだな」
「それぞれね」
こうした話をしてだった。彼等もまただった。
進むべき道を見つけ歩もうとしていた。全てが大きく変わろうとしていた。
そんな中でだ。彼等は赤壁に向かう。周瑜はだ。
孫策にだ。こんなことを話していた。
「今のところは順調ね」
「順調過ぎる位ね」
「脱落者もこれといってなく進んでいるわ」
赤壁にまでだ。進軍は順調だというのだ。
「病もないし」
「ええ。そろそろ風土病が気になりだすけれど」
「リーさんが頑張ってくれているから」
リー＝パイロンのことである。
「薬のこともね」
「それに兵糧もあって」
「万事順調よ。けれど」
「そう、問題はね」
どうかとだ。孫策はここで目の力を強くさせた。
そうしてだ。こう言うのだった。
「あまりにも順調過ぎるということよ」
「将兵の気が緩むこともあるし」

「あと。その赤壁にしても」
「あの地についてのことは今も調べているわ」
周瑜は軍師として言う。揚州なので元からよく知っている。しかしだ。
そのうえでさらに調べ上げてだ。そして言うのだ。
「何度もね」
「そうしてくれているのね。それで赤壁のことで新しいことはあるのかしら」
「いえ、ないわ」
「私達のよく知る赤壁のまま、ということね」
「風は北西から南東に流れているわ」
風のことも話される。
「だから私達としてはね」
「その北西、長江の北岸に布陣して」
「そのうえで戦えばいいわね」
「敵はどうやら長江の南岸にいるわ」
周瑜は敵のことについても述べた。
「民達が何人か。怪しい者達を見たとも言っているし」
「間抜けね。と言いたいところだけれど」
「あえて見せているでしょうね」
「ええ、私達にあえて北岸に布陣させるつもりね」
「私達は北岸に布陣して風を背にして攻めるわ」
これが彼等の基本的な戦術構想だった。
「それで絶対に勝てるわ」
「筈だけれど」
「私も。あの連中がどう考えているか気になるわ」
「あの連中のこれまでを思い出すと」
孫策は険しい顔になって周瑜に述べた。
「間違いなく企んでいるわね」
「今回もね」

「ええ、風を背にして攻める私達に対してね」
「どうするべきかしら」
孫策は己の軍師であり親友でもある周瑜に問うた。
「ここは」
「そうね。まずは北岸に来て布陣して」
「そのうえで考えるというのね」
「まずはね。そうするべきかしら」
こう言うのだった。孫策は。
「北岸に着いてからよ」
「船だけれど」
「船は。どうしようかしら」
「我が軍には船酔いする兵達が多いわ」
周瑜が懸念していることの一つだ。
「袁紹や曹操の兵の殆んどがね」
「あの娘達の兵は馬だからね」
「それは仕方ないことだけれど」
「今回。船に慣れない兵が多いのが」
「足枷になっているわね」
「さて、どうしたものかしら」
孫策は首を捻りながら言った。
「一体」
「戦の前に色々と考えることが多いわね」
「今回は特にね」
「敵には」
周瑜はまた考える顔になりだ。今度はこう言った。

# 第百十二話　一同、赤壁に出陣するのことその八

「色々な術を使える者がいるから」
「そうね。それもかなりね」
「司馬尉にしても雷を使うから」
このことは宮中におけることはだ。よくわかっていた。
「船に落雷なんて仕掛けられたらそれこそね」
「洒落にならないわね」
「それはどうしたものかしら」
孫策は真剣そのものの顔で周瑜に問うた。
「やっぱり。結界ね」
「そうね。結界を張らないとね」
「司馬尉の雷を封じないと戦を決められてしまうわ」
それだけでだというのだ。
「負ける訳にはいかないし」
「軍師の面々を集めて話したいわね」
周瑜もだ。真剣な顔で述べた。
「是非共ね」
「わかったわ。じゃあそれはね」
「任せてくれるかしら」
「任せるわ。そしてその後でね」
「ええ。決まったことを話すから」
こうしてだった。周瑜はだ。
軍師達を己の天幕に集めてだ。こう切り出した。
「問題は雷よ」
「落雷ね」
「それね」
田豊と沮授がまず応えた。
「司馬尉のあれね」

「確かに。船があれを受けると」
どうなるか。もう言うまでもなかった。
「あっという間に燃えて何もかも終わりよ」
「陸地に陣を置いても同じよ」
「雷には勝てないわ」
「あれにはね」
「ええ、そうよ」
その通りだとだ。周瑜も袁紹の軍師二人に話す。
「だから今こうして集ってもらったのよ」
「落雷の術をどうして封じるか」
「それですね」
今度は陸遜と呂蒙が言う。
「あれは妖術ですから」
「封じるには特別の方法が必要ですが」
「さて、どうしたものか」
今言ったのは程?だった。
「妖術には妖術ですけれど」
「妖術?」
「毒を制するには毒なのよ」
程?は自分の隣で声をあげた郭嘉にも返した。
「例えば桂花ちゃんには陳花ちゃん」
「むう、ああいうことか」
「ああいうことっていうのは何よ」
「こんなのと一緒にしないでよ」
二人のやり取りに白猫と黒猫が文句を言ってきた。
「大体ね、国と民の為じゃないとこんなのと一緒にいないわよ」
「そうよ、全く幾つになっても胸がないんだから」
「胸がないのはあんたもでしょ」
「そっちこそ。全然成長しないじゃない」
「こういうことです」

程？は会議の場でも仲の悪い二人を横目で見ながら言った。
「ですから妖術には妖術、胸には胸です」
「ううむ、そういうことなら」
「凛ちゃんには袁術さんで」
今度はこんなことも言う程？だった。
「七乃さんは中身も胸が大きいのでここは外も中も胸の小さい同士にしてみました」
「それはいい組み合わせだよな」
程？の頭の人形も言う。
「まあ二人共脚はいいけれどな」
「脚には脚で」
程？はまた言った。
「で、やっぱり妖術には妖術です」
「妖術、ですか」
「あの、それですと」
孔明と鳳統はすぐにだ。こう言いだした。
その表情も口調も暗くなってだ。それで言うのだった。
「またあの人達なんですけれど」
「最近そのパターンばかりじゃないですか？」
「そうね。言われてみれば」
諸葛勤も妹達の言葉に暗い顔で頷く。

# 第百十二話　一同、赤壁に出陣するのことその九

「歌の大会も最後はそれだったし」
「できればです」
「他の人いませんか？」
「あかりに頼むのです」
陳宮はすぐに解決案を出した。
「あかりは巫女ですから妖術には強い筈なのです」
「そうね。あかりの他にもね」
賈駆も陳宮の言葉に頷いて言う。
「巫女やそうした娘が多いから」
「あの娘達の力を借りるのです」
「結界を張るのですね」
蔡文姫もこの場にいる。そして言うのだった。
「軍全体に」
「そうですね。あかりちゃんだけでなく」
「ナコルルさんにリムルルちゃんもいますし」
孔明と鳳統の顔が少し明るくなった。そうして二人は言うのだった。
「月さん、命さん、神楽さんと」
「大勢おられますし」
「楓や覇王丸達もいいわね」
周瑜は彼等の名前も出した。
「何かしらの力の持ち主も借りましょう」
「その方々に陣の四方八方にいてもらい」
「そうして軍全体に結界を張りましょう」
孔明と鳳統の考えがさらに進んだ。
「そうすればです」
「落雷は防げます」

「そして妖術全体もね」
周瑜はこのことも話した。
「防げるわね」
「そうなんですよ。妖術は落雷だけじゃないんですよ」
陸遜はここでもおっとりとした口調のままである。
「下手すれば芋虫みたいな神様だって出て来ますよ」
「そっちの世界の話は止めておくべきね」
周瑜はその話は止めた。
「言っておくけれど私は北の国の女の子じゃないから」
「私は白い軍服着てますよね」
「だから。そっちの話はするときりがないから」
「わかりました」
「とにかくですね」
郭嘉がまた話す。
「ここは結界で対抗しましょう」
「そうね。それがいいわね」
荀攸も郭嘉のその言葉に頷いた。
「ただ。空のことだから」
「空？」
「ええ。空も飛べる面々もいるじゃない」
「その連中の話はもう止めるのです」
陳宮が荀攸の話を止めようとしてきた。
「言って来ると何処からともなく湧いて出て来て爆発起こしやがるのです」
「ああ、私は人間のことを話してるから」
「人間なのです？」
「そうよ。それは安心して」
荀攸はこう陳宮に話した。
「だから。アルフレド達よ」
「あの連中なのです」

「乱鳳に眠兎もいるじゃない」
そのだ。空を飛べる面々はだというのだ。
「あの連中なら空を飛んでそれで雷雲だって壊せるわよね」
「それは人間のできることかというと疑問ですけれど」
呂蒙は常識の観点から言及した。
「ですがそれでもですね」
「それもするとまた違うわ」
こう言う荀攸だった。
「まあオロチに雷を使うのがいるけれど」
「あれは問題ないわ」
周瑜はシェルミーについてはこう他の面々に話せた。
「確かにあの女もとんでもない力を持っているけれど」
「はい、あの人は正面から雷を出します」
「御自身から」
孔明と鳳統もそのことを指摘する。
「雷を出す範囲は限られています」
「落雷みたいに全体に落とすものではありません」
「ですから結界を張るまでではです」
「そこまでは至らないです」
「そういうことね。あの女はそこまでじゃないわ」
周瑜はまた言った。シェルミーについて。

# 第百十二話　一同、赤壁に出陣するのことその十

「今の問題はあくまで落ちる雷よ」
「それを結界を張り防いで」
「戦に向かう」
「そのことは決まったわね」
周瑜は結界を張ることが決まったと述べた。
「それじゃあすぐにね」
「はい、今から結界を張りましょう」
「軍全体に」
「そして空もです」
「常に警戒しましょう」
こうしてだった。進軍中からだ。
月やあかり達により結界が張られ。さらにだった。
空にもだ。常にアルフレド達が飛びだ。落雷に備えられた。その中でだ。
眠兎がだ。大空を舞いつつ乱鳳に言った。
「ちょっといい？」
「んっ、何だよ」
「若し雷が落ちたらどうなるのかな」
眠兎が尋ねるのはこのことだった。
「軍は」
「決まってるだろ。全員黒焦げだろ」
「黒焦げ？」
「そうだよ。雷だぜ」
それが落ちればだと言う乱鳳だった。
「そんなの当たり前だろ」
「そういえばそうか」
「俺達は雷が落ちただけじゃ死なないけれどな」

それでもだというのだ。
「他の奴等は違うからな」
「雷に打たれて死ぬなんて弱いんだね」
それを言われてもだ。眠兎はだ。こう言うだけだった。
「普通の人間って」
「そうだよな、雷なんてどうってことないのにな」
「本当にね」
「まあ僕達はあれだからね」
アルフレドもだ。空を舞いながら二人のところに来て話に加わってきた。
「空を飛んでれば雷なんてね」
「ああ、受けるのは普通だからな」
「全然平気よ」
「けれど他の人達は違うから」
やはりだ。アルフレドも只の人間ではなかった。
「雷を受けたら死ぬんだよね」
「だから俺達はこうしてか」
「空に雷雲が出たらすぐに壊す」
「そのことを言われたんだな」
「こうして空を飛んで」
「そうだよ。あとこうして時々空を飛んで遠くまで見ることもね」
そのことも言われたのである。
「してくれってね」
「そうか。まあ空を飛ぶのは好きだからな」
「別にいいけれどね」
乱鳳も眠兎もだ。それでいいとした。彼等にとってみれば空を飛ぶことができればそれでよかった。そうした話をしながらだった。
彼等は空を飛び続ける。その彼等を見上げて。
ここでもだ。怪物達が言うのだった。
「皆わかってるわね」

「ええ。いざという時はあたし達が一肌脱ぐつもりだったけれど」
既に裸でもこう言うのである。
「こうして知恵を出し合い力を合わせていたら」
「あたし達の出る幕はないわね」
「というか出て来たらまずいだろ、あんた達は」
リョウがその彼等に突っ込みを入れる。
「出て来たらそれで爆発起こすだろうが」
「あら、あたし達だって結界は張れるから」
「この軍全部位なら平気よ」
そうしたこともできるというのだ。
「だから安心して」
「そうしたこともね」
「いや、俺が言ってるのはな」
リョウは平然としている彼等に唖然としながらもまた突っ込みを入れる。
「そういうのじゃなくてな」
「っていうと？」
「どうだっていうのかしら」
「つまりな。劇薬だってんだよ」
もっと言えば猛毒だった。
「あんた達はな」
「そうよね。この美貌じゃね」
「魅了されて虜になっちゃう人も多いわよね」
「けれどあたし達はあくまでダーリン一筋」
「それは許されないことなのよ」
「まあそう思ってるのならそれでいいけれどな」
リョウもそれ以上は言わなかった。言う気力はもうなかった。
「とにかくあんた達今回出番はねえからな」
「それは残念ね」
「なければ作るだけだけれど」

「それは止めてくれ」
リョウは今度は本気で突っ込みを入れた。
「冗談抜きで戦どころじゃないからな」
「何はともあれよ。いいかしら」
「この度の戦はかなり大事よ」
「それはもうわかってるけれどな」
それはだとだ。リョウはまた述べた。

# 第百十二話　一同、赤壁に出陣するのことその十一

「何はともあれだ。決戦だな」
「キングオブファイターズでいうと準決勝よ」
「正念場よね」
「準決勝！？」
そう聞いてだ。リョウは。
二人にだ。それは何故かすぐに問い返した。
「何でそこで準決勝なんだ？」
「あっ、それもまたわかるわ」
「おいおいね」
「また思わせぶりなことを言うな」
「謎は後からわかるものよ」
「伏線はね」
怪物達はここでも身体をくねらせて話す。
「もっとも。謎というかね」
「ストーリー展開だけれどね」
「相変わらず訳のわからないことを言うな」
リョウはそれ程愚かではない。だがその彼も首を傾げさせることだった。
しかしだ。彼はそれと共にだ。こんなことも怪物達に言った。
「ただな」
「ただ？」
「ただっていうと？」
「あんた達の歌な」
それはどうかというのだ。
「かなりいいよな」
「あら、あたし達の歌のよさがわかってくれてるのね」
「いいセンスしてるわね」

「よかったらまた聴かせてくれるか？」
リョウは音楽はわからない。それで言うのだった。
「今ここでな」
「ええ、それじゃあ今から」
「演歌バージョンも入れるわよ」
「ああ、頼む」
リョウはにこりと笑ってまた頼み。それを受けて。
またあの恐怖の歌がはじまった。その歌の前に。
七色のスポットが何処からか来た。世界は急に暗闇になる。
光が怪物達に集り。そしてだった。
その光に照らし出される中。妖怪達は。
空を舞い空中できりもみ回転してだ。そのうえで。
着地しそしてだ。高らかに歌いはじめた。その瞬間に。
世界は終わった。天から降り注いだ二人の化け物達によって。
この騒ぎの後でだ。ユリはこんなことを言った。
「本当にお兄ちゃんってね」
「音楽全然わからへんな」
ロバートがそのユリに応えて言う。
「何一つとしてな」
「お陰でこんなことになったわ」
何十万もの大軍がだ。見事なまでに壊滅していた。今全ての将兵達が何とか立ち上がり陣を整えていた。その中で話している彼等だった。
ユリがだ。こう言うのだった。
「っていうか戦い前にこんなことになるなんて」
「予想外やな」
「死んだ人はいないけれど」
「司馬尉の落雷より酷いんちゃうか」
「ええと、旗はこっちで」
「天幕立て直してや」

こんなことを話しながらだ。彼等は何とか復活していた。そのうえでだ。
赤壁に向かう。それはもう目と鼻の先だった。
その彼等を闇の中から見つつだ。于吉が言った。
「さて、雷は封じられましたね」
「そうね」
于吉にだ。司馬尉が応える。彼女も闇の中にいたのだ。
「私の雷はね」
「このことは予想されていましたか？」
「ええ、ただ」
「ただ？」
「今の私の力ではあの封印には対抗できないけれど」
それでもだとだ。司馬尉は怪しい笑みで于吉に言うのである。

# 第百十二話　一同、赤壁に出陣するのことその十二

「もう少ししたらそれもね」
「変わりますね」
「ええ、間も無く私の力はさらに大きくなるわ」
だからだというのだ。
「その時はね」
「あの結界も破られる」
「赤壁だけじゃないから、戦いは」
司馬尉は奇しくも怪物達と同じことを言った。
「そしてそこでね」
「雷を落とされますね」
「そうするわ。さて」
ここまで話してだった。于吉は。
やはり闇の中にいる社達にだ。こう声をかけたのである。
「貴方達の出番ですね、今回は」
「ああ、わかってるさ」
「そのことは既に」
社とゲーニッツがその言葉に応える。
「今回は俺達が暴れさせてもらうぜ」
「それも思う存分」
「特に重要なのは」
于吉はここでゲーニッツを見た。そのうえでだ。
その彼にだ。笑みを浮かべてこう言った。
「貴方ですが」
「私の風を操る力があればです」
「はい、彼等を赤壁で倒すことができます」
それが可能だというのだ。
「私の風と」

「僕の炎を組み合わせてね」
クリスも出て来てだ。無邪気な笑みと共に述べた。
「それによってです」
「赤壁で決着をつけるから」
「俺も協力させてもらうぜ」
社もだ。楽しみを前にした笑みで言った。
「オロチの為にな」
「頼もしいですね、実に」
于吉は仲間達のその言葉を聞いてだ。
満足した笑みになりだ。こうも言うのだった。
「オロチ一族、盟友に選んで正解でした」
「そう言ってくれるのね」
シェルミーも出て来てだ。彼女も話に加わる。
「勿論私も仲間に入れてもらうけれど」
「ああ、これでバンドが揃ったな」
社は『人間』としての趣味からこんなことを言った。
「いいぜ。それじゃあな」
「皆でね。楽しもう」
「オロチ一族で」
「さて、それでなのですが」
ゲーニッツはオロチのほかの三人に対して問うた。ここでだ。
「貴方達はそれぞれ役目がありますね」
「バンドのだな」
「そうです。しかし私も入るとなると」
その場合はだ。どうなるかというのだ。
「演奏する楽器は何になるでしょうか」
「キーボードなんてどうだ？」
社が提示した楽器はそれだった。
「あんたピアノとか好きだろ」
「教会でいつも使いますので」

「だよな。じゃあそれどうだ？」
「確かに。ピアノとキーボードは近いところがありますし」
「それにするか」
「その機会があれば」
ゲーニッツは恭しく応えて話した。そんな話をしながらだ。
彼等もまただ。策を練っていた。そうしてだ。
戦に備えていた。赤壁での決戦に。

第百十二話　完

２０１１・９・１９

# 第百十三話　甘寧、敵陣を見るのことその一



遂にだ。劉備達は赤壁に着いた。そこに来るとだ。
まずは北岸を見回してからだ。そのうえでだ。
北岸に布陣をはじめた。そうして。
船もだ。長江中から呼び寄せ。
川も固める。その中でだ。
孫権がその川を埋め尽くす船達を見て言った。
「まずは見事と言うべきか」
「はい、兵も人もです」
「全て揃いました」
孫権の後ろからニ張が答える。
「後は敵を迎え撃つ」
「それだけです」
「ええ、そうね」
孫権は二人の話を聞いて頷く。しかしだ。
川を埋める船達を見てだ。こうも言うのだった。
「船は木だから」
「火ですか」
「それが気になるというのですね」
「空気が乾いていて風も強いわね」
言ったその瞬間にだ。風がたなびき。
孫権のその紫の髪が揺らぐ。その中でだ。
憂いの顔でだ。孫権は二張にまた言う。
「風によっては火刑で大変なことになるわね」
「ですからこうして風上に布陣しているのです」
「火刑を避ける為に」

「そうね。じゃあ杞憂かしら」
孫権は自分のそうした心配性なところにも言及した。
「私の」
「確かに敵は怪しい者達です」
「何をしてくるかわかりません」
それはこれまでのことでわかっていた。しかしだった。
「ですが今は備えもしています」
「結界も張っていますし」
仮に妖術で来られてもだというのだ。
「そうそう簡単には敗れはしません」
「後は敵の内情を調べてです」
「数と装備ね」
孫権は具体的に述べた。
「それに何処にいるのか。布陣も」
「それについてはすぐにです」
「物見を出しましょう」
「ええ、じゃあここは」
こうしてだった。まずは偵察を出すことになった。その人間はというと。
ジェニーだった。彼女が手下達と共に出る。その中でだ。
一緒に出ているロックがだ。ジェニーに尋ねた。
「長江のことは知っているのか？」
「長江も何度か入ったことがあるわ」
そうだとだ。ジェニーは船の甲板からその海の如き河を見つつ答えた。
「知らない訳じゃないわ。けれど」
「けれど？どうしたんだ？」
「この時代の長江は孫策さんのところでお世話になった時に少し回っただけよ」
それだけだというのだ。

「正直あまり知らないわ」
「そうだったのか」
「ええ、実はね」
「長江でも時代によって違うんだな」
「海も川も全部そうよ」
ジェニーは船の上でロックに話す。
「時代によって違うのよ。いえ」
「いえ？」
「一年、一ヶ月でも変わってくるものなのよ」
「生き物みたいだな。そりゃ」
「そうよ。海も川も生きてるのよ」
ジェニーは真顔でロックに話す。
「だからこの時代の長江のことはね」
「よくわからないか」
「だからこれでも慎重に船を進めているのよ」
そうだともだ。ジェニーはロックに話す。
「よく知らない河だから」
「その辺りはよくわかってるんだな」
「ええ。ただね」
「ただ？」
「今は先導役の人がいてくれてるからそれは安心してるわ」
「甘寧さんか」
見ればジェニー達の船の前にもう一艘ある。そこには甘寧がいる。

# 第百十三話　甘寧、敵陣を見るのことその二

その彼女を見ながらだ。ジェニーはまたロックに話した。
「あの人が先導してくれているからね」
「難破とかはしないか」
「そうよ。大丈夫よ」
ジェニーはここでは微笑んでみせる。
「さて、それでだけれど」
「対岸は遠い」
二人と共にいる牙刀がここで言った。
「長江は大河だからな」
「そうよね。本当に海みたい」
ほたるもだ。このことを今肌で感じていた。彼女も共にいる。
「黄河も凄かったけれど」
「ええ。ただね」
「ただ？」
「この時代のこの世界もどうやら」
ジェニーはこう話すのだった。
「長江は比較的穏やかな河みたいね」
「穏やかですか」
「ええ。黄河は暴れ河なのよ」
ほたるにこのことも話す。
「それと比べるとね。長江はかなり大人しいのよ」
「じゃあ急に激流が来たりはしないか」
「建業の辺りでは逆流もあるけれど」
少なくともだ。この赤壁の辺りはだというのだ。
「ここは大丈夫ね」
「安定してるんですね。流れが」
「そうよ。それじゃあね」

ここでまた言う彼女だった。
「とりあえず何か食べる？お腹空いたでしょ」
「ああ、じゃあステーキでも焼くか」
ロックが仲間達に言った。
「どうだい？トムヤンクンも作ってな」
「それはいいことだ」
牙刀はトムヤンクンと聞いてこう言った。
「では頼む」
「ああ、じゃあ早速作るな」
「船の上だから揺れるのには気をつけないといけませんね」
「安心しろ。幾ら揺れても失敗する様なへまはしないさ」
ロックは微笑んでジェニーに述べて。そうしてだった。
船の中に入ってそうして調理に入った。それでだ。
船の上に作った料理を持って来た。四人はそこでテーブルに着き。
食事をはじめる。ステーキにトムヤンクンだ。
そのステーキを食べながらだ。ジェニーが言った。
「あれよね。やっぱりね」
「ステーキを食えることがか」
「ええ、これがいいのよ」
こうだ。ジェニーはフォークとナイフを使いながら笑顔で話す。
「人間肉を食べているうちは負けないわよ」
「魚は駄目か」
牙刀はトムヤンクンの中の魚を食べながら言った。
「それは」
「別にいいでしょ。食べられれば」
「そうか」
「とにかくお腹一杯食べているうちはね」
どうかというのだ。そうであれば。
「人間負けないわよ」
「そうだな。人間食えればそれで違うからな」

このことはロックも頷く。
「逆に言えば餓えれば終わりだ」
「そのことは問題ないですよね」
ほたるもステーキを食べながら問う。
「我が軍は」
「補給はしっかりしているからね」
そのことをジェニーも言う。
「都からだけじゃなくて長江も使ってだし」
「あと許昌からもだったな」
「補給は万全よ」
それはもう孔明達が最初に考えて万全の態勢を敷いたのである。
「後はどうやって勝つかよ」
「それでその為にだな」
「ええ、偵察よ」
ジェニーは笑ってロックに応える。そうしてだ。
一枚食べ終えテーブルの真ん中にうず高く積まれている肉を一枚取ってだ。それも食べはじめる。それからまたロックに対して言った。
「敵の数に布陣とね」
「それと装備とかもだな」
「ええ、全部見ないとね」
それが目的だというのだ。

## 第百十三話　甘寧、敵陣を見るのことその三

「勝つ為にね」
「では美味いものを食べながらだ」
牙刀が落ち着いて話す。
「敵を探して調べるとしよう」
「ええ、それじゃあ」
こんな話をしながらだ。彼等は長江の南岸を目指す。それは甘寧達もだった。
彼女は傍らにいる諸葛勤にだ。こう尋ねた。
「さて、敵だが」
「この辺りの地形だけれど」
諸葛勤は地図を開きながら甘寧に応える。
「敵が布陣しそうな場所は」
「ここだろうか」
「ええ、ここね」
比較的なだらかになっている場所を見ながらだ。二人は話した。
「ここに布陣している可能性が高いわね」
「ではここに向かうか」
「ええ。ただ」
それでもだとだ。ここでまた言う諸葛勤だった。
「敵の陣に近付くとなると」
「向こうもだな」
「相当な数が集っているから」
それでだというのだ。
「迂闊に近寄ってはやられるわ」
「そのことはわかっている」
甘寧は真剣な顔で諸葛勤に応える。
「敵の場所を遠場から確認してだ」

「それからどうするかよね」
「一旦離れる」
甘寧は己の考えを諸葛勤に述べた。
「それからだが」
「正直。河から観るのは危険ね」
諸葛勤はここで周りを見回す。そこは。
見渡す限り河だ。見るのを阻むものは何もない。
その中でだ。諸葛勤は言うのである。
「敵にも見つかるし」
「そうだ。そこが問題だ」
甘寧も言う。
「それは夜でも同じだ」
「夜のうちはいいけれど」
「それでも朝になれば」
「すぐに見つかる。それでは意味がない」
「ではどうするべきかね」
「とりあえずは遠場から敵の布陣の場所を見る」
場所を確認してだ。それからだというのだ。
「後は丘にあがるか」
「そうして丘から敵の陣に近付きそのうえで」
「詳しく調べる。それでどうだろうか」
「危険ね」
諸葛勤は甘寧の考えにまずはこう言った。
「敵の陣に近付くことも」
「しかしだ。そうでもしなければだ」
「敵の詳しいことはわからないわね」
「だからだ。どうだろうか」
「危険だけれどそれでも」
諸葛勤の目が鋭くなった。その整った目がだ。
「そうでもしないとね」

「そうだ。わからない」
それでだとだ。甘寧も言う。
「だからこそだ。そうしよう」
「そうね。じゃあジェニー達とも話してね」
「決めるとしよう」
すぐにだ。二人はジェニーの船に向かいだ。彼女達と話をした。
そうしてだ。
ジェニーがだ。二人にこう答えた。
「それがいいと思うわ」
「賛成してくれるか」
「この案に」
「私だって海賊よ。水のことはよくわかるわ」
それでだというのだ。
「何も遮るものがない場所から見るのはね」
「危険極まる」
「丸見えだから」
「近くには寄れないわ」
ジェニーも真面目な顔で話す。

# 第百十三話　甘寧、敵陣を見るのことその四

「そこが問題になるから」
「だからだ。丘の上から近付きだ」
「敵をよく見ようということでね」
「決まりね。確かにそれも危険だけれど」
それでもだというのだ。ジェニーも。
「河から見るよりはずっと安全ね」
「問題は船を何処に泊めるかだ」
牙刀はそのことに言及する。
「若しその泊めている船が見つかれば我々は帰られなくなる」
「何処かいい場所はないのか？」
ロックは甘寧と諸葛勤に尋ねた。
「南岸の方に」
「もう見つけてある」
「その場所はね」
甘寧と諸葛勤はロックのその問いにすぐに答えた。
「敵がいると思われる場所からは少し離れているがだ」
「ここなら問題はないわ」
「ここですか」
二人は四人にも地図を見せていた。その南岸の入り組んでいる場所が指差される。ほたるはその場所を見て言うのだった。
「ここはかなり入り組んでいますね」
「リアス式ね」
その複雑に入り組んだ場所を見てだ。ジェニーは言った。
「隠れるにはもってこいの場所ね」
「しかもここはね」
諸葛勤がその場所についてさらに話す。
「山場になっていて木も多いから」

「船を余計に隠しやすいわね」
「ええ。ここならどうかしら」
「いいと思うわ」
ジェニーが真剣な顔で答えた。
「その場所ならね」
「よし、じゃあ決まりだな」
ここでだ。ロックも頷きだ。こうしてだ。
話が決まった。まずはだ。
その敵が布陣していると思われる南岸のある場所に近付いた。そこは。
広くなっている。そして。
岸辺には旗や天幕が林立し船が埋め尽くしている。それを見てだ。
ジェニーがだ。不敵な笑みを浮かべて言った。
「数は多いわね」
「そうだな。しかもだ」
牙刀もその敵陣を見て言う。
「見事な布陣だな」
「あの司馬尉だな」
ロックはその布陣を敷いたのが誰かすぐに察した。
「あいつが陣を敷いたな」
「そうですね。敵に陣を敷ける人は」
「あいつか妹達だけでしょうね」
ほたるの言葉にジェニーが応える。敵の陣は陸も河もかなり整然としており無駄がない。遠目から見ても全く隙のないものである。
その陣を見てだ。彼等は話すのだった。
「于吉とかオロチとかじゃ間違ってもないわ」
「戦術も心得ている」
牙刀がまた言う。
「やはり容易な相手ではないな」
「さて、それじゃあね」

ここまで話してだ。ジェニーは。
三人と手下達にだ。こう告げた。
「すぐにここから離れるわよ」
「あっちに見つからないうちにだよな」
「ええ。奴等目も勘もいいから」
そのことがよくわかってのことだった。
「だからよ。すぐにね」
「了解です。それじゃあ」
「すぐにここを去りやしょう」
手下達も応えてだ。そうしてだった。
船はすぐにその場から消える。そして。
甘寧達の船もだ。敵の場所を確めると。
すぐにだ。その場を離れるのだった。甘寧はその中で言った。
「ではあの場所に向かおう」
「ええ、それでだけれど」
「それで？」
「あちらには見つかっていないな」
このことをだ。甘寧は言うのだった。

# 第百十三話　甘寧、敵陣を見るのことその五

「まだ」
「少なくとも見つからないうちにだ」
「去るべきだな」
こう話してだった。彼女等もだ。
その場を去る。そしてだ。
二艘の船はその入り組んだ場所に入った。それでだ。その中でとりわけ深く木々に囲まれた場所に入りだ。その中に潜んだうえでだ。
六人はまずは船を出た。そしてだ。
甘寧と諸葛勤がだ。ジェニー達に言う。
「この辺りの地理もだ」
「もうわかっているから」
大丈夫だというのである。見れば諸葛勤の手には今も地図がある。
「我々の後についてきてくれ」
「今回もね」
「わかってるわ。それにしても」
ジェニーは周りを見回す。そこは水辺だが山でもある。その木々の中も見回してだ。彼女は甘寧と諸葛勤に話した。
「ここはいい場所ね」
「そうだな。船や我々が隠れるにはだ」
「絶好の場所よね」
「船を隠すのはこうしたところに限るわ」
ジェニーは満足した笑みを浮かべてこうも言った。
「複雑に入り組んだ場所がね」
「そうしたことがわかるのも海賊には必要なんだな」
「バイキングよ」
ジェニーはその笑みでロックに答える。
「バイキングはノルウェーにいたでしょ」

「ああ、あそこか」
「ノルウェーの海岸もこんなのなのよ」
「フィヨルドだったな」
「あそこに隠れて。船を置いておいたのよ」
そしてそこから出入りしていたのだ。これは歴史にある通りだ。
「それと同じよ。海賊は隠れるものだから」
「だからか」
「私も最初はここで河賊をしていた」
甘寧も言う。
「それでだ。こうした場所についてはだ」
「よく知っているのだな」
「そうだ。こうしたことも昔取った杵柄だ」
甘寧は牙刀にこうも話した。
「よくわかっている」
「ではこの場所に船を置き」
ここでだった。彼も周りを見回す。
「そしてだな」
「そうだ。ことが終わればだ」
「すぐにここから去るわ」
「わかった。では行こう」
こう話してだった。彼等はだ。
岸からだ。敵の陣に向かう。その際林の中を進む。
その中ではだ。敵はいなかった。
「何か拍子抜けだな」
「そうですね」
ロックとほたるがその林の中で話す。林の中には敵はいない。敵陣に近くともだ。
「敵はここにいてもおかしくないんだがな」
「それがいないですね」
「わざとそういう道を選んでいるのだ」

先頭を進む甘寧がまた話す。
「だからだ。この道は誰も知らない」
「私達以外はね」
「やっぱり持つべきものは土地勘のある友達ね」
ジェニーはそんな二人にまた笑って言った。
「いや、本当に」
「この地図本当によくできてるから」
諸葛勤も感嘆する。その地図を見て。
「道まで描かれているのよ」
「林の中のか」
「ええ、そうなのよ」
こう牙刀にも話す。
「とてもよくできているわ」
「誰の地図なの？その地図は」
「穏が持っていた地図なの」
諸葛勤は今度はジェニーに話した。

# 第百十三話　甘寧、敵陣を見るのことその六

「それを借りてね」
「あの娘本当に色々なもの持ってるわね」
「ええ。元は揚州の長老が書き残したもので」
「長老ね。やっぱりこうしたことは」
「そうですね。そこに長く住んでいればこそです」
諸葛勤も言う。
「色々とわかっています」
「そしてそれが今私達に役立ってくれてるのね」
「そうなります」
「じゃあ思いきり役に立ってもらいましょう」
ジェニーは笑ってこう言いだ。仲間達と共に先に進んでいく。そうして。
遂にその敵陣の近くまで来た。森の中に隠れてその陣を見ると。
「敵の数は百万か」
「そういうところね」
甘寧と諸葛勤が話す。
「それに白装束の者達ばかりだな」
「兵はやっぱりあの連中なのね」
「武器はこれといって変わりはないか」
「弓がかなり多いけれど」
「弓か」
弓と聞いてだ。牙刀が言う。
「ではその弓矢をどうにかすればいいな」
「どうにかって？」
「使えなくするか減らすかだ」
具体的にはそうするとだ。彼は妹に答える。
「そうすればいい」

「弓がなければこっちはかなり楽になるからな」
ロックもそのことを言う。
「じゃあ何らかの方法で減らしていくか」
「そうするべきだな」
「それでだけれど」
また諸葛勤が言ってきた。
「敵の布陣はやっぱり」
「隙がない」
甘寧が目を鋭くさせてこう評した。
「寸分の隙もだ。全くない」
「迂闊に攻めることはできないわね」
「そうだな。これはかなりな」
「司馬尉、やっぱり只者ではないわね」
「いい意味でも悪い意味でもな」
「後は」
諸葛勤は甘寧と話しながらその陣をさらに見る。さらにわかったことは。
柵の中の闇の色の天幕と旗が林立する中に白装束の者達が短剣と弓矢で武装しているのが見える。しかしそれを率いる者達は。
「将は少ないわね」
「やはり于吉達やオロチの者達か」
「それに司馬尉達でしょうね」
「将が少なくしかも戦う者が主体か」
「司馬尉がいるにしても」
それでもだというのだ。二人は敵に将が少ないことに気付いた。
それでだ。こう言ったのだった。
「そこを衝けば」
「互角以上に戦えるな」
「数は互角だから」
こちらもだ。百万の大軍がいるからだ。数は充分だった。

「ただ。白装束の者達は一人一人が手強いから」
「刺客の強さだ」
「武具は弓以外は短剣しかないわ」
「じゃあそこを衝いて」
戦おうというのだ。
「こちらは斧に槍もある」
「それに弓矢もね」
「後は敵の弓矢をどうにかして使えなくするか減らす」
「そうすればいいわね」
「よし、わかった」
ここまで見てだ。甘寧は確かな顔で頷いた。
それからだ。一同にこう言うのだった。
「ではここを去ろう」
「目的は察したわね」
「そうだ。これ以上の長居は危険だ」
戦いの中で生きてきたからこそだ。直感で感じ取れることだった。
それでだ。仲間達にまた言った。
「帰るぞ」
「ええ、それじゃあ」
こう話してだった。彼等は。
そこから去る。しかしだ。
その彼等の前にだ。あの女達がいた。
バイスとマチュアだ。二人が立っていた。そうしてだ。

# 第百十三話　甘寧、敵陣を見るのことその七

危険な笑みを浮かべながらだ。六人に言ってきた。
「見事ね。ここまで来るなんて」
「そうして私達の陣を見るなんて」
「見たいものは全部見させてもらったわ」
ジェニーが二人に悠然と笑って返す。
「だからもう帰るわ」
「生憎だけれど帰ってもらう訳にはいかないわ」
「陣を見られたからにはね」
「何か化け物の正体を見た時みたいな言い方だな」
二人のそうした言葉を聞いてだ。ロックが二人を鋭い目で見返す。
それからだ。一歩前に出て言葉でも返した。
「御前等の陣はそこまでのものか？」
「ええ。戦いに勝って私達の目的を果たすにはね」
「陣のことは見られたら困るのは当然でしょう？」
「確かにな。それならか」
「あんた達だけじゃないでしょ」
ジェニーが二人を見返すとだ。ここでだ。
六人の周りにだ。白装束の一団が出て来た。そのうえで彼等を囲みだした。
「ほら、出て来たわね」
「さて、それではね」
「死んでもらうわ」
「いつものパターンももう飽きたな」
ロックは囲まれてもだ。それでもだ。
冷静なままでだ。バイスとマチュアにこう言った。
「じゃあ後はな」
「脱出するというのね」

「この中から」
「ああ。俺はまだカインに聞きたいことがあるからな」
だからだというのだ。
「俺の母さんのことをな」
「あのギース＝ハワードの妻」
「あの女のことね」
「御前等は母さんのことは知らないよな」
「私達のこととは関係ないことだから」
「悪いけれど知らないわ」
そうだとだ。二人もそれは知らないと返す。
「だから貴方のお母さんのことを知りたいのなら」
「私達のこの輪から脱出することね」
「じゃあそうさせてもらうわ」
ロックも応えてだ。そうしてだった。
ロックが最初にだ。攻撃を放った。
右手に青白い気を溜めてだ。地面に叩きつけて走らせる。
「喰らえ、烈風拳！」
「！？その技は」
牙刀がその技を見て声をあげた。
「父と同じ技か」
「そうだ。俺は親父とテリーの技を使う」
それでだ。烈風拳もだというのだ。
「これならだ」
それでだ。白装束の者達を倒す。それと共に。
バイスに向かいだ。拳を次々に繰り出す。
二人の闘いがはじまる。そして。
牙刀もだ。マチュアに向かい闘いはじめた。
「貴様の相手は俺だ」
「面白いわね。貴方の拳もまた」
「どうだというのだ」

「お父さんそっくりね」
「!?親父はまさか」
「ええ、いるわ」
闘いながらだ。マチュアは答える。
「私達と一緒にね」
「貴様等にはあらゆる闇の連中が集っているのか」
「そうよ。そうなっているわ」
その通りだとだ。マチュアは牙刀に答える。
「そしてその闇の力で」
「戯言を言う」
牙刀はこう言ってだ。目を鋭くさせて。
蹴りを繰り出す。しかしその蹴りは。
マチュアに防がれる。そうして今度は。
マチュアが投げにかかる。だが牙刀は寸前で受身を取り。
すぐにだ。足払いをかける。二人の攻防も続く。
他の者達は白装束の者達と戦う。だが敵は次から次に出て来る。

# 第百十三話　甘寧、敵陣を見るのことその八

「相変わらず数で来るか」
「そうね」
諸葛勤もだ。何とか手の扇を使っている。だが殆んど戦力になっていない。
だがそれでもだ。彼女も戦いだ。その中で甘寧に応えていた。
「このままだとね」
「数に押し潰されるな」
「何とか囲みを突破したいけれど」
「やるか」
ここでだ。甘寧は。
剣を構え。仲間達に言った。
「ロック、牙刀」
「ああ、一気にか」
「一点を突破してか」
「すぐにここから去る」
こう二人にも告げる。
「私が先頭になり一気に突っ切る」
「わかった。それじゃあな」
「俺達が後ろを受け持つ」
バイス、マチュアと闘っている二人がだというのだ。
「頼むぜ。突破はな」
「それは任せる」
「わかった。ではだ」
甘寧は剣を構えたまま全身に力を込め。そのうえで。
「はあっ！！」
前に跳んでだ。そこにいる白装束の者達を斬る。それに続いて。
ジェニーとほたるが諸葛勤を挟んで、駆ける。

「今よ！」
「一気にいきましょう！」
「ええ、後は」
「ロック！牙刀！」
「後ろは御願いします！」
「そういうことだ。悪いがな」
「ここで退かせてもらう」
二人は今闘っているバイスとマチュアに言い。そのうえで。
「喰らえ！」
「これでどうだ！」
それぞれ超必殺技を放ち。それを最後にして。
彼等も戦場を離脱する。そのまま一気に駆ける。
超必殺技を防ぎそれで怯みはしたがだ。すぐにだ。
バイスとマチュアは態勢を立て直しだ。白装束の者達に言った。
「すぐに追うわよ」
「逃がしてはいけないわ」
白装束の者達は二人の言葉に無言で頷き。そのうえで。
追撃にかかる。今度は撤退戦だった。
甘寧達は全速で森の中を駆けていく。その横、後ろからだ。
白装束の者達が襲い掛かる。その彼等を薙ぎ倒しつつ先に進む。
その中でだ。諸葛勤が地図を見ながら言う。
「ここはね」
「帰った道を引き返すべきだな」
「知っている道を通る方がいいわ」
それでだというのだ。
「ここは道が入り組んでいるから」
「下手に知らない道を通ればな」
どうなるか。甘寧もわかっていた。
「道に迷ってしまう」
「だからよ。ここはね」

慎重策でいく。そういうことだった。
それでだ。彼等は来た道を引き返していた。その中でだ。
ロックはだ。己の左に烈風拳を放ちながらほたるに言った。
「この連中もどうやら」
「この道のことは知っているみたいですね」
「ああ、だからな」
それでだというのだ。
「こうして横からも来るんだな」
「まるで獣みたいに来ますね」
ほたるもだ。襲って来たその敵を拳で退けながら応える。
「次から次に」
「けれどな。それでもな」
どうかとだ。ロックは戦いながら言う。
「帰るぞ。いいな」
「はい、何があっても」
「親父もいる」
牙刀は自身とほたるの父のことを話した。

# 第百十三話　甘寧、敵陣を見るのことその九

「親父は。絶対に」
「兄さん、やっぱり」
「幸い目はなおった」
確かにだ。彼の目は見えている。しかしだというのだ。
「聞きたいことはある。山程な」
「なら私も」
ほたるもだ。兄の言葉に決意した顔になり言った。
「兄さんと一緒に」
「戦うか」
「そうするしかないのなら」
そうするとだ。言うのである。
「そうするわ」
「そうか」
「だから兄さん、全部背負わなくていいから」
「御前も背負うというのか」
「兄妹じゃない」
妹が言う根拠はそこにあった。
「だからね」
「そうか。だからか」
「ええ、だから」
「わかった。それならだ」
「私も戦っていいのね。お父さんと」
「兄妹だ」
牙刀もだ。こう言うのだった。
「それならばだ」
「有り難う」
「礼はいい。それならだ」

「ええ。今はここを切り抜けて」
「生きる」
兄妹もだ。共に戦いながら先に進む。ジェニーもまた。
懸命に戦い駆けつつだ。先を見ていた。
道筋を見てだ。仲間達にこう言うのだった。
「もうすぐよ。この森を抜けたら！」
「よし、行くぞ！」
「このまま！」
甘寧と諸葛勤が応えだ。森を一気に抜けにかかる。六人は今森を抜けた。
そのまま船の場所に向かおうとする。しかしそこに。
白い服にだ。ピエロを思わせるメイクをして杖を持った不気味な男が立っていた。それは。
「あんた、まさか」
「そうだよ。ホワイトだよ」
男は悠然とした動作で前に来てだ。ジェニーに答えた。
「僕もこの世界にいるんだ」
「俺もだ」
今度は紅い長い髪に細い蛇の様な身体の男が出て来た。
「ここにいる」
「フリーマン、あんたも」
「僕達はここでね」
「于吉達と共にいる」
そうしてだというのだ。
「で、今は君達を帰さない為にね」
「ここにいる」
「くっ、後ろからはまだ来ているぞ」
「また囲まれたわね」
甘寧と諸葛勤が後ろと周りを見回しながら言う。
「そう簡単には帰させはしない」

「司馬尉らしいわね」
「司馬尉さんはとてもいい人だよ」
「俺達と考えが同じだからな」
ホワイトとフリーマンにとってはそうだというのだ。
「さて、その司馬尉さんの御願いをね」
「ここで適えさせてもらおう」
「ふん、そう簡単に適えさせてたまるか」
ロックがだ。その二人の前に来て言った。
「俺は性格が悪くてな。人の願いを簡単に適えさせる趣味はないんだよ」
「へえ、じゃあ君が僕達の相手をするんだ」
「御前との勝負も久し振りだな」
「おい」
背にしている仲間達にだ。ロックは声をかけた。
「俺がこの連中を引き受ける。御前等はだ」
「その間にか」
「船に戻れっていうのね」
「そうだ。早く行け」
ロックは牙刀とジェニーにも言った。

# 第百十三話　甘寧、敵陣を見るのことその十

「いいな、俺は絶対に戻るからな」
「いいのか。後ろからオロチの二人も来た」
「一度に四人も相手にするとなると」
「安心してくれ。俺は絶対に死なない」
これがロックの返答だった。
「だからだ。ここはだ」
「面白いわね。私達四人を一人で相手にするっていうのね」
「流石はギース＝ハワードの息子かしら」
「俺は俺だ」
前に来たバイスとマチュアにもだ。ロックは言う。
「ロック＝ハワードだ」
「ならそのロック＝ハワードの戦いを」
ホワイトは手にしているその杖を弄りながらロックに応える。
「見せてもらうよ」
「行くぞ」
ロックは構えを取った。そうしてだ。
仲間達の為に戦おうとする。彼は覚悟を決めていた。
仲間達はその彼の心を受けて彼に任せようとした。そこでだ。
空からだ。何かが来た。そうして。
白装束の者達を薙ぎ倒しだ。ホワイト達に奇襲を仕掛けた。
「!?君達は」
「まさか」
「久し振りだね、ホワイト」
アルフレドがだ。攻撃を浴びせながらホワイトに言う。
「君もここに来ているとはね」
「予想していたんじゃないのかい？」
「していたさ。けれど僕がここに来ることは予想してたかな」

「全く」
それはしていないというのだ。ホワイトは着地したアルフレドとの戦闘に入りながら応えた。
「けれどこうして会えたのなら」
「闘うんだね」
「そうさせてもらうよ」
こう言ってだった。彼等が闘いだ。
乱鳳と眠兎はだ。暴れ回り。
白装束の者達を倒していく。その彼等がだ。甘寧達に言う。
「ほら、今のうちにさ」
「逃げる！とっとと帰る！」
「わかった。それではだ」
「今のうちに」
甘寧と諸葛勤がすぐに決断を下した。そうしてだ。
二人はすぐにだ。仲間達に叫んだ。
「船まで一気に駆ける！」
「そうして帰るわ！」
「僕達も空から戻るから」
「河の上で合流だぜ！」
「それまで美味しいお菓子ぶりぶり用意する！」
「わかった、それではだ！」
「船の上でね！」
また甘寧と諸葛勤が応えてだった。
彼女達もだ。一気に突破する。ロック達もだ。
それを見てだ。フリーマンが言う。
「逃げられたか」
「残念ね。折角ここでって思ったけれど」
「逃げられるとはね」
こうだ。バイスとマチュアも言う。
「けれどそれでもね」

「またやり方があるからね」
「仕方ないなあ。じゃあ少し楽しんでから」
ホワイトはアルフレドと闘い続けながら応える。
「帰ろうか」
「ええ、そうしましょう」
「ここはね」
こうしてだ。暫く戦いだ。彼等は姿を消した。それを見てだ。
乱鳳がだ。アルフレドに尋ねる。
「戦い終わったけれどどうするんだ？」
「あっさり消えたけれど」
「うん、少し回りを見回してから」
用心の為だ。アルフレドはそうすると言ってだ。
そのうえでだ。実際に周りを見回してあkら。彼は二人に言った。
「じゃあ僕達もね」
「ああ、帰ってな」
「お菓子食う、たっぷり食う」
こんなことを言ってだ。彼等も空に飛び立った。

# 第百十三話　甘寧、敵陣を見るのことその十一

甘寧達は船に辿り着いた。そこからだ。
一気に船を出る。その時には。
「敵は来ないわね」
「流石にここまでは来ないみたいだな」
ジェニーにロックが応える。
「それならだ」
「ええ、一気にね」
出航してそうしてだというのだ。
「陣に帰りましょう」
「そうだな。長居は無用だ」
「敵のことはわかったわ」
ジェニーは確かな笑みでロックに述べた。
「その陣や武装のこともね」
「上出来と言うべきか？」
ロックは出航に向けて動きだす船の中で言った。
「この状況は」
「そう思っていいわね」
「そうか、上出来か」
「敵のことはわかったからね」
「敵の数までな」
「ええ、それに」
ここでだ。ジェニーは目を厳しくさせてだった。
その目でだ。ロックに話した。
「あいつがいることもね」
「フリーマンか」
「あいつ以外にも多分まだいるわ」
「だろうな。ネスツの奴等もいるみたいだしな」

「だから。そうしたこともわかったから」
「大きいな」
「ええ、かなりね」
こうロックに言うのだった。そうしてだ。
彼等の乗る舟は出航してだ。また長江に出た。そうしてだ。
長江に出て暫くしてだ。船にアルフレド達が来た。そのうえでロック達にこう言ってきた。
「じゃあ約束通りね」
「お菓子くれよ」
「ぶりぶり食べる」
「ああ、わかってるさ」
ロックが微笑んで彼等に応える。
「もう焼いてるぜ」
「焼いてるって？」
「ホットケーキどうだ？」
ロックは笑ってアルフレドにその菓子を提示した。
「シロップをたっぷりかけてな」
「あっ、ホットケーキ作ったんだ」
「こう見えても料理は得意なんだよ」
ロックの隠れた特技の一つである。
「だから焼いたんだけれどな」
「ロックの料理は絶品よ」
ジェニーも笑ってこのことを保証する。
「だからあんた達も食べなさいよ」
「ああ、じゃあな」
「何枚でも食べさせてもらうから」
「遠慮は無用だからな」
ロックは乱鳳と眠兎にも話した。
「どんどん食えよ」
「よし、それじゃあな」

「腹一杯食う」
こう言ってだった。彼等はロックの焼いたそのホットケーキを食べるのだった。そうしてそのうえでだ。仲間達のところに戻るのだった。
敵のことはわかった。そのことを把握してだ。
孔明はだ。意を決した顔で劉備に進言した。
「あの、武器で一番の問題はです」
「弓よね」
「はい、妖術やそうしたことは別にしてです」
「弓が問題になるわよね」
「それを減らすべきです」
孔明は劉備に話す。
「何とかして」
「けれど。何とかするって言っても」
どうかとだ。劉備は難しい顔になり孔明に返した。
「どうやって減らすの?敵の弓矢を」
「はい、私に考えがあります」
孔明は言った。
「まずはですね」
「ええ、まずは?」
孔明は話をはじめた。そうしてそのうえでだ。彼女は敵の弓矢を減らす策を仕掛けるのだった。

第百十三話　完

２０１１・９・２２

# 第百十四話　孔明、弓矢を奪うのことその一



孔明にだ。鳳統が尋ねていた。
二人は今陣中にいる。その中で孔明に尋ねたのである。
「敵の弓矢を奪うの」
「そう考えてるの」
孔明もこう鳳統に返す。
「そうして敵の戦力を少しでも削いでおきたいから」
「そうね。これからの決戦のことを考えると」
「敵の戦力は削いでおかないと」
まさに軍師の言葉だった。
「だからね」
「わかったわ。それじゃあ」
「雛里ちゃんも協力してくれるの」
「だって私達友達じゃない」
それ故にだと答える鳳統だった。
「それでだけれど」
「有り難う。それじゃあ」
「うん、二人で考えましょう」
まずは二人になった。そしてその二人のところにだ。
袁紹が来てだ。こんなことを言ったのである。
「劉備さんににお願いがありますの」
「はい、何でしょうか」
「何かあったのですか？」
「まずは劉備さんのところに案内してくれます？」
「私もね」
曹操もいた。袁紹と同じくだ。

「ちょっと軍のことでね」
「お話したいことがありまして」
「あっ、別に鰻さんじゃないんですね」
「いつものおかしな催しじゃないんですね」
「おかしい？わたくしの素晴らしい催しが？」
二人にそう言われてだ。袁紹は思わず顔を強張らせた。
そうしてだ。むっとした様子で二人に言うのだった。
「鰻は身体にいいですし女の子の身体にぬるぬるとまとわりついて最高でしてよ」
「それが駄目なのよ」
曹操が溜息と共に力説する袁紹に述べる。
「全く。目を離せばおかしなことするんだから」
「袁家の伝統ですわ。催しは」
「じゃあ美羽みたいに歌でも歌えばいいじゃない」
袁術はすっかりそちらになっていた。
「とにかくよ。劉備にお話しましょう」
「そうでしたわ。それでは」
何だかんだと話をしてだった。二人はだ。
孔明と鳳統に案内されて劉備のところに来た。丁度そこには五虎もいた。
その彼女達も前にしてだ。二人は劉備に話すのだった。
「弓矢が足りませんの」
「十万程ね」
「十万、それはまた」
十万と聞いてだ。まず声を出したのは黄忠だった。
「多いわね」
「兵の数が多くてですの」
「だからそれ位さらに欲しくなったのよ」
「木を伐採してそれを弓矢に当てることもできますけれど」
「結構時間がかかるから」

それでだというのだ。二人は。
「劉備さんに何かいい御考えはありまして？」
「私達も今それぞれの軍師達に考えてもらっているけれど」
「十万となるとだ」
今度は関羽が首を捻りながら話す。
「そうおいそれと調達できるものではないが」
「だよな。流石にそこまでの数となるとな」
「兵をかなり使って作らなければ駄目だ」
こうだ。馬超と趙雲も話す。
「何日かかる？総動員して」
「弓を作ることのできる兵達を全て使って」
「その間に敵が来たら大変なのだ」
張飛も困った顔になって述べる。
「その辺りも考えないと駄目なのだ」
「だからわたくし達も軍師達も悩んでいますの」
「どうしたらいいのかね」
「あっ、それなら」
「そうよね」
だがここでだ。孔明と鳳統がだ。
はっきりとした顔になってだ。こう劉備達に言ったのである。
「私達が今からです」
「弓矢を調達してきて宜しいでしょうか」
「どうしますの？」
袁紹が怪訝な顔になり二人に尋ねた。

# 第百十四話　孔明、弓矢を奪うのことその二

「一口に十万本といっても結構ありますわよ」
「そうよ。かなりね」
曹操もここでも言う。
「それを調達するのは」
「できれば船を用意して欲しいのですけれど」
「それを藁で覆った案山子もです」
二人はすぐに話していく。
「そうして欲しいのですが」
「宜しいでしょうか」
「わかりましたわ」
首を捻り難しい顔をしながらもだ。袁紹は答えた。
「それでは」
「はい、それではです」
「すぐにかかります」
「出来るだけ早いうちにお願いするわね」
曹操は期限について言及した。
「敵が何時来るかわからないから」
「わかりました。ではすぐに」
「取り掛かります」
こうした話をしてだった。早速だ。
船と藁で覆った案山子達が用意された。そのうえでだ。
孔明は船を操る兵達と共にだ。彼等も集めたのだった。
まずは火月がだ。こう二人に尋ねた。
「俺が来ていいのか？」
「はい、火月さんは絶対にです」
「来て欲しいと思っていました」
「何でなんだ？」

いぶかしみながらだ。火月はまた二人に尋ねた。
「俺水の上での戦いは特に得意じゃないぜ」
「俺もだぜ」
今度は草薙が出て来て言う。
「特にな。火は得意だけれどな」
「火攻めでもするのだろうか」
クラウザーもいる。
「そこがわからないが」
「俺もか」
見れば八神までいる。
「訳がわからないな」
「見れば火を使う奴ばかりじゃねえか」
また言う火月だった。
「こっちの世界の連中はな」
「その通りだな」
彼等と共にいる周瑜も言う。彼女は船を操る役目だ。軍師だがそれにも長けているからだ。
「ここまで火を使う面々ばかり揃えるとな」
「おいも思うっちゃよ」
ホンフゥも言う。
「火攻めにするっちゃってな」
「それならそれでいいんだけれどな」
ビリーは孔明達のその考えには賛成だった。ただし彼女達の真意には気付いていない。
「けれどそれでもな」
「弓矢集めるんだよな」
草薙がいぶかしみながら問うた。
「それで何で火なんだ？」
「そこがわからぬ」
半蔵も言う。

「何なのかがだ」
「まずは敵陣に近付きましょう」
「それも早朝に」
二人はいぶかしむ彼等にこう言うばかりだった。
「そしてそこで、です」
「お話させてもらいます」
「早朝の奇襲か？」
ビリーは首を捻りながらまた述べる。
「まあそれも有効だけれどな」
「弓矢を手に入れるのはどうするつもりだ」
周瑜もその辺りがわかりかねていた。
「敵から・・・・・むっ」
「あっ、内緒で」
「御願いします」
軍師二人はすぐに周瑜の口止めに入った。
「肝心のことですから」
「このことは」
「わかった。だがだ」
「だが？」
「だがといいますと」
「流石だな」
微笑みだ。二人にこんなことを言ったのである。
「水鏡先生の愛弟子達だけはある」
「いえ、私達はそんな」
「特にそんなことは」
「謙遜しなくてもいい」
二人の気質を知っていての言葉ではある。だがそれでも周瑜は言った。
「事実だからな」
「はわわ、そんなこと言われると恥ずかしいです」

「私もです」
周瑜の言葉に顔を赤くさせて恥ずかしがる二人だった。その二人にだ。

# 第百十四話　孔明、弓矢を奪うのことその三

周瑜はさらにだ。こんなことを言うのだった。
「貴殿等は敵に回したくはないな」
「私達をですか？」
「そんな。私達なんて」
ここでまたいつもの調子でだ。二人は周瑜に返した。
「身体は小さいですし力はないですし」
「喧嘩とか全然できませんけれど」
「私が言っているのは頭だ」
そのことだというのである。
「貴殿等の頭は敵に回すと恐ろしい」
「そうなんですか」
「私達の頭がですか」
「味方であって何よりだ」
そしてこんなことも言う周瑜だった。
「実に頼もしい」
「ええと、とりあえずです」
「私達のできることをするだけですから」
こう話す二人だった。そしてだ。
二人はだ。今度は仲間達にこんなことを話した。
「では今からです」
「御飯にしませんか？」
「ああ、そうっちゃな」
ホンフゥが最初に二人の言葉に応える。
「もういい時間っちゃな」
「もう御飯は用意できていますので」
「早速食べましょう」
「それで何なんだ？」

ビッグベアが二人についてメニューを尋ねる。
「一体」
「ちょっと簡単なんですけれど」
「御饅頭と干し魚です」
そうしたものだというのだ。
「その二つです」
「それでいいですか？」
「ああ、別にいいぜ」
ビリーが何でもないといった口調で応える。
「船の上だしな。かえって簡単なものの方がいいさ」
「俺は肉の方がいいが」
八神がこう言うとだった。孔明と鳳統はこう二人に答えた。
「はい、干し肉もあります」
「それもです」
二人はその八神に答える。
「あと蜜柑もありますので」
「栄養は充分かと」
「ああ、蜜柑もあるのか」
ビッグベアはそれを聞いて笑顔になりだ。こんなことを話した。
「ビタミンも補給できるな」
「そちらの世界での栄養ですよね」
「色々な食べ物に含まれている」
「そうだよ。人間ただ食うだけじゃ駄目なんだよ」
プロレスラーだけあってだ。健康には気を使っているのだった。
「ステーキばかり食っても身体に悪いんだよ」
「確かにお肉ばかりでも身体がだるくなりますよね」
「偏食はよくないです」
「だからな。そうした野菜とか果物も食べないとな」
「はい、では蜜柑もです」
「皆さん召し上がって下さい」

「さて、では腹ごしらえだな」
周瑜も微笑みながら言う。
「戦の前のな」
こう話してだった。彼等は食事に入った。その中でだ。
火月がだ。仲間達にこんなことを話した。
「俺はあれなんだよ」
「あれっていいますと」
「どうしたんですか？」
「抜け忍だったんだよ」
こう孔明と鳳統にも話す。
「実はな」
「忍の村を抜けられたんですか」
「そうだったのですか」
「ああ、それは聞いてたんだな」
二人の話を聞いて頷く火月だった。
「そのことは」
「はい、舞さんから御聞きしました」
「そうした人が昔はいたと」
「俺はその昔の人間だからな」
舞から見てそうなるのだった。火月は江戸時代の人間だからだ。

# 第百十四話　孔明、弓矢を奪うのことその四

「まさにその抜け忍だったんだよ」
「何故忍を抜けたのだ？」
周瑜が干し魚を手に取り口で引き千切り噛みながら問うた。
「理由があってだと思うが」
「妹を助けたくてな」
それでだと答える火月だった。彼も干し魚を食べている。
「それで忍を抜けて力を手に入れてな」
「そうしてですか」
「妹さんを」
「で、それは何とかなったんだ」
妹は助かった。そうなったというのだ。
しかしここでだ。火月はたまりかねた顔になってこんなことを言った。
「けれどな。兄貴がな」
「ああ、蒼月さんな」
草薙がこう言った。
「あの人か」
「そうだよ。兄貴が追っ手だったんだよ」
抜け忍には追っ手が来る。そういうことだ。
「で、妹を助けたと思ったその瞬間にな」
「殺されたか」
八神は鋭い目でぽつりと言った。
「そうだったのだな」
「おい、ころされてたら俺は今ここにいねえぞ」
火月は即座に八神に突っ込み返した。
「じゃあ今の俺は幽霊かよ」
「それは違うな」

「そうだよ。俺は幽霊なんかじゃねえ」
そのことを力説する。そして彼はこんなことも言った。
「よく見ろよ」
「足はあるな」
八神はまたぽつりと言った。
「確かにな」
「足のある幽霊は普通っちゃよ」
ホンフゥがこう突っ込みを入れる。
「というかそれは日本だけじゃないっちゃ？」
「そうだったのか」
「我が国でもそうですし」
「幽霊、鬼には足があります」
孔明も鳳統もそのことは話す。
「何か日本で画家の人が絵にお茶を溢してそうなったとか」
「そう聞いていますけれど」
「そうか。わかった」
それを聞いて頷く八神だった。彼のことはそれで終わった。
そしてそれが終わってからだ。火月はまた話した。
「それでだよ。そこで兄貴に思いきり一撃喰らってな」
「それで一体」
「どうなったんですか？」
「忍の組織には死んだってことになったんだよ」
その組織にはだというのだ。
「で、妹と二人で暮らしてるんだよ」
「けれどそれでもこの世界ではですね」
「お兄さんと再会されたんですね」
「全く。どういう因果なんだよ」
困った顔になってまた言う火月だった。
「糞兄貴とまた一緒なんてな」
「それは私もだ」

ここでだ。クラウザーが話に入って来た。
「私のことは知ってるな」
「確かギース＝ハワードさんとでしたね」
「ご兄弟でしたね」
「母親は違う」
クラウザーは孔明と鳳統にこのことを話した。
「だが、だ。兄弟であることは事実だ」
「そしてその兄弟だからこそ」
「因縁がですか」
「互いの存在を知った時から憎み合ってきた」
それが二人だったのである。
「何度も戦ってきた」
「はい、お話は聞いています」
「そういう御関係だったと」
「だが今は共にいる」
華陀と巡り会いだ。そうなったというのだ。
「因果なことだ。しかしだ」
「それでもだな」
「そうだ。これもまた私にとっての運命だったのだ」
クラウザーは周瑜にも話した。

# 第百十四話　孔明、弓矢を奪うのことその五

「あの男と共にいることもな」
「それで何かわかったか？」
草薙がクラウザーに尋ねる。干し魚は自分の炎で焼いてそれから食べている。
「あんた自身にとってそれがどういったことなのか」
「まだよくわからない」
クラウザーは顔は伏せてはいない。声もだ。
だがそれでもだ。彼にしてはいささか晴れない、毅然としていない言葉を出したのだった。
その言葉でだ。クラウザーは話すのだった。
「しかしそれでもだ」
「それでもなんだな」
「我等兄弟は最早争うことはないだろう」
こう話すのだった。
「それだけは確かな」
「そうですか。少なくともそういうことはですか」
「なくなったんですね」
「それだけでも大きいな」
二人と周瑜はクラウザーのその言葉に微笑んで述べた。
そしてクラウザーもだ。こう言うのだった。
「私も。しがらみを捨ててだ」
「そのうえで、ですね」
「あちらの世界に戻られても」
「父上のことから離れて生きよう」
二人の対立のはじまりとなっただ。それともだというのだった。
そうした話をしているうちに夜になりだ。船団はだ。
遂に敵陣の前に来た。しかし周りはまだ暗い。その朝が来る直前

でだ。
　ホンフゥがだ。こう孔明に尋ねた。
「で、どうするっちゃよ」
「ここからですね」
「そうっちゃ。もうすぐ朝っちゃよ」
「はい、明け方になれば」
　つまりだ。間も無くだというのだ。
　何をするか。孔明がここで遂に仲間達に話した。
「皆さんの火の術を水面にぶつけて下さい」
「それも立て続けにです」
「おい、そんなこととしてもよ」
　どうなるか。ビリーが首を捻りながら話す。
「ただ蒸気が起こるだけだぜ」
「ああ、本当にそれだけだよ」
　ビッグベアもビリーに続いて言う。
「それで何になるってんだよ」
「とにかくです。炎を何度も水面に打ちつけて下さい」
「それぞれの船からです」
「まあ俺達の炎ってな」
　それ自体はどうかとだ。草薙が話す。
「かなり強いけれどな」
「そうですね。それこそかなりの熱があります」
「だからです」
　また言う二人だった。
「長江の水面にこれでもかとぶつけて下さい」
「とにかくありったけです」
「そうしてくれればいい」
　周瑜もいぶかしむ仲間達に話す。
「作戦はそれで成功する」
「何か知らないけれどわかったっちゃ」

ホンフゥが最初に応える。こうしてだった。
彼等は孔明の言う様に炎をだ。明け方になると共に次々に打ちつけた。それを続けているうちにだ。
霧が起こった。そしてその霧はというと。
「随分濃いな」
「ああ、普通の霧よりもずっとな」
「かなり濃くなってるな」
「これはまたな」
「あっ、もう炎はいいです」
「これでいいです」
二人は仲間達に炎を使うことを止めてもらった。ここでだ。
そのうえでだ。あまりにも深い霧になったところでこう言ったのである。
「後は船の中に入りましょう」
「急がないといけません」
「余計に話がわからなくなってきたな」
火月もだ。いぶかしみながら言うのだった。

# 第百十四話　孔明、弓矢を奪うのことその六

「火を水に打ちまくって霧が出たら船の中に入るのかよ」
「はい、そうです」
「そうして下さい」
「よくわからねえがわかったぜ」
釈然としないながらも答える火月だった。そうしてだ。
彼等は二人の言う通りそれぞれの船の中に入る。するとだ。
その彼等の船に向けてだ。凄まじい音がしてきた。そええを聞いて。
「!?何だこれは」
「はい、弓矢です」
「敵の弓矢の音です」
まさにそれだとだ。孔明と鳳統は同じ船に乗っている草薙に話した。今彼等は船の中にいる。そうして自分達の身を守っているのである。
その中でだ。二人は笑顔で草薙に話す。
「朝には霧が出ますよね」
「水面に熱がかかって」
「!?それでか」
ここでだ。草薙もわかった。はっとした顔になって二人に話す。
「水面をああして。俺達の炎で打ってか」
「そうです。それで普通の霧より濃いものにしてです」
「敵の目を欺いてです」
そのうえでだというのだ。
「敵に弓矢を撃たせています」
「こうして」
「それでだ」
周瑜もいる。その彼女も草薙に話す。

「敵の弓矢を奪いそのうえで我々の弓矢を手に入れているのだ」
「それで藁で覆った案山子も用意しました」
「矢を撃たせて集める為に」
よく見えないことを利用した的だというのである。
「折角弓矢を手に入れるなら敵から手に入れるべきですし」
「敵の力も削げます」
「考えたものだな」
二人の話を聞いてだ。草薙は考える顔になり腕を組んで言った。
「そういうやり方もあるんだな」
「はい、兵法に敵の力を利用するというものがありまして」
「それを使いました」
「そうなんだな」
話を聞きながらしきりに頷く草薙だった。
その間にも敵の弓矢はひっきりなしに来る。それが暫く続いたところでだ。
孔明と鳳統は周瑜に述べた。
「もういいと思います」
「そろそろ霧も晴れますし」
「そうだな。霧が晴れれば策もばれてしまう」
周瑜も言ってだ。それでだった。
彼女は船を動かさせた。そのうえでだ。
敵陣から離れる。そうして離れてから甲板に出て案山子や船を見てみると。
弓矢がこれでもかという程突き刺さっている。それはどの船もだった。
その無数の弓矢を見てだ。軍師二人は満足した笑顔で言うのだった。
「これでいいですね」
「十万本はありますね」
「おいおい、本当に集めるなんてな」

実際に見てまた驚きの言葉を挙げる草薙だった。
「すげえな、これはまた」
「全くだ。私も考えられなかった」
周瑜も感嘆の言葉を述べる。
「ここまでのことはな」
「まさに天才軍師だな」
草薙もこう言うのだった。
「この二人がいるだけで全然違うぜ」
「ですからそう言うことを言われると」
「恥ずかしいです」
ここでまた顔を赤らめさせる二人だった。そしてそれを見てだ。
草薙は少し落ち着いてからだ。こう言ったのだった。
「じゃあこれで止めておくな」
「優しいのだな」
「俺は人の嫌がることはしない主義なんだよ」
微笑んでだ。草薙は周瑜にも話した。
「だからな」
「それでなんですか」
「ああ、そうだよ」
また話す草薙だった。
「それじゃあ帰るか」
「はい、そうしましょう」
「目的は達しましたし」
こうしてだった。孔明と鳳統は意気揚々と陣に戻った。そうして十万本の弓矢を劉備達に見せる。船や案山子に突き刺さったままであるが。
その弓矢を見てだ。袁紹は思わず唸った。そのうえで言うのだった。
「この発想はありませんでしたわ」
「ええ、私もよ」

彼女の傍にいる曹操も唸る顔だった。

# 第百十四話　孔明、弓矢を奪うのことその七

「こんなやり方があるのね」
「華琳も考えられませんでしたの」
「発想の外にあったわ」
曹操ですらそうだったというのだ。
「そしてそれはね」
「貴女のところの軍師の娘達もでしてね」
「麗羽の娘達もよね」
「とりわけ水華と恋花ですけれど」
田豊達である。まさに袁紹の誇る知の二枚看板だ。
その彼女達についてだ。袁紹はここでは誇らしげに述べる。
「まさに張良、陳平に匹敵するわ」
「子房ならうちにもいるわよ」
曹操も負けじと言う。
「桂花に木花、それに凛に風とね」
「郭嘉さんは美羽のところに行ったのではなくて？」
「最近いつもあの娘のところにいるけれど私の陣営にいたままよ」
この辺りは微妙なことになっているのだ。
「とにかくね。あの娘達はどれも張良に匹敵するわ」
「それでもですわね」
「十万本の弓矢は揃えることはできても」
それでもだというのである。
「ああしたやり方は考えられないわね」
「全くですわ。ただ」
「ええ、それでもね」
「味方であってよかったですわ」
このことにはだ。二人は心から安堵していた。
そうしてだ。こう言い合うのだった。

「あの娘達が敵なら今頃ね」
「わたくし達は負けていましたわね」
「可愛い顔をしてるけれどその謀は鬼の如くよ」
「太公望はこちらにいましたのね」
この世界でもこの国では伝説となっている軍師である。その軍師の話もしてだった。
袁紹も曹操も孔明達の智謀には唸っていた。しかしだった。
その軍師二人は策が成功してもだ。まだこう言うのだった。
「それでも敵はです」
「まだ多くの武器があります」
こう言ってだ。警戒を怠っていなかった。
「ですから油断は禁物です」
「あちらからの謀にも気をつけましょう」
「ああ、それだよ」
二階堂がだ。二人の言葉に応える。今は劉備陣営の者達が会議を行っていた。二階堂は自分の席から二人に応えたのである。
そのうえでだ。彼は敵についてこう話した。
「連中は闇の世界の連中だからな」
「それだけに謀やそうしたことはですね」
「得意だというのですね」
「あと暗殺もな」
それにも気をつけろと言う二階堂だった。
「本当に急に来るからな」
「では主な将帥の方々にですね」
「これからはより一層の警護を」
「俺達もいるからな」
二階堂はここで言った。
「警護は任せてくれよ」
「義姉上ならだ」
関羽が鋭い顔になって述べてきた。

「私がお護りする」
「そうなのだ」
張飛もだ。真剣な顔で言う。二人で劉備の左右を護りながらだ。
「鈴々だっているのだ」
「例えオロチが総出で来てもだ」
「絶対に何もさせないのだ」
「はい、確かに桃香様はです」
「一番狙われると思います」
孔明も鳳統もそのことは既に考えていた。
それでだ。二人はこうも言った。
「ですから愛紗さんと鈴々ちゃんはです」
「桃香様を宜しくお願いします」
「うむ、わかった」
「そうするのだ」
関羽と張飛も軍師二人の言葉に応える。そうしてだ。
軍師二人はさらに言おうとする。しかしだった。
ここで魏延が出て来てだ。必死の顔で言い出した。

# 第百十四話　孔明、弓矢を奪うのことその八

「ま、待ってくれ」
「あっ、焔耶さん」
「そういえばこの人がいました」
孔明と鳳統もここではっとなった。
「桃香様といえばやっぱり」
「どうしてもなんですね」
「桃香様は私が命にかえても御護りする」
こう実際に強く主張しだす。
「そう。例え仮に何があろうともだ」
「待て焔耶、それはもう決まったぞ」
「そうなのだ」
さしもの関羽と張飛もいきり立たんばかりの今の魏延には戸惑いを隠せない。
しかしだ。何とかこう返す彼女達だった。
「我々が御護りする」
「そうするのだ」
「いや、ここは護衛役の私が」
あくまでこう言う魏延だった。
「是非共。それが役目なのだから」
「ううん、何かややこしくなりましたね」
「焔耶さんも引かないでしょうし」
「こうしてはどうだ？」
ここで言ったのは趙雲だった。
「焔耶は近衛隊長だな」
「そうだ」
その通りだとだ。魏延は趙雲にも言葉を返す。
「そのことはもうわかっている筈だ」

「無論だ。それならだ」
また言う趙雲だった。
「焔耶、御主は桃香様の背中を護れ」
「背中をか」
「そしてだ」
趙雲はさらにだ。関羽と張飛の顔を見て話す。
「二人は桃香様の左右をだ」
「護ればいい」
「そうなのだ」
「そうだ。それでどうだ」
ここまで話してだ。趙雲はあらためて三人に問い返した。
「焔耶にとってもいいし桃香様の護衛も確かなものになる」
「そうですね。名案です」
「ではそうしましょう」
軍師二人も明るい顔で応えてだ。このことは決まった。
しかしだ。今度はだ。猛獲とその家臣達が出て来てだった。
彼女達は笑顔になってだ。こんなことを言うのだった。
「おっぱいを護るにゃ」
「そうにゃ。ミケ達もにゃ」
「そうするにゃ」
「頑張るにゃ」
こう言って劉備の太腿の上に乗ってきた。あっという間にだ。
「お姉ちゃんのおっぱいは最高だにゃ」
「このおっぱいに何かあったら大変だにゃ」
「だからこうしてこれからはいつも一緒にいるにゃ」
「そうするにゃ」
「おい待て」
しかしここでだった。その魏延が猛獲達に言う。むっとした顔で。
「桃香様は私が御護りするのだぞ」
「焔耶は背中だけにゃ」

何故かここでは鋭い猛獲だった。
「おっぱいは含まれていないにゃ」
「何っ、私は桃香様と寝食を共にするつもりだ」
魏延は本音を言った。
「御休みになられる褥も共にしてだ」
「おい、言い切ったな」
馬超が魏延のその言葉に突っ込んだ。
「わかってたにしても露骨過ぎるだろ」
「ううん、こうなったら止まらないのよね」
馬岱も流石に今はどうしようもない。
「焔耶はね」
「そうだな。では私はだ」
趙雲はすすす、とその馬超と馬岱のところに来てだ。
そっと二人の間に入り抱き寄せてからこんなことを言った。

# 第百十四話　孔明、弓矢を奪うのことその九

「御主達と共にいよう」
「おい、それは何でだよ」
「まさか星さん姉様だけでなく蒲公英も？」
「熟れた身体もいいがまだ青い身体もいい」
その二人の肢体を妖しい目で見ている。
「どうだ。三人で風呂にでも」
「待て、あたしはそんな」
「蒲公英はいいけれど」
従姉妹でそれぞれ違う反応を見せる。馬超は狼狽を隠せず馬岱はにこにことしている。やはり馬岱は趙雲にとっては可愛い妹分なのだった。だから応えているのだった。
その馬岱はだ。趙雲にこんなことを言う。
「じゃあこれからはですよね」
「うむ、寝食を共にしようぞ」
「絶対に何かするよな」
「何かとは何だ？」
趙雲はその妖しい目でそっと馬超に身体、特に胸を摺り寄せて問う。
「どういうことか教えて欲しいものだ」
「待て、人がいるんだぞ」
「そうだな。では三人になった時にだ」
「だから何するつもりなんだよ」
こんなやり取りも行われていた。そしてだ。
魏延と猛獲達はだ。劉備の前でまだ言い争っていた。
「桃香様は常に私がいる。だから御主等は不要だ」
「そうはいかないにゃ。おっぱいを保護するにゃ」
「だから焔耶は背中だけにするにゃ」

「おっぱいは譲れないにゃ」
「そうさせてもらうにゃ」
「うう、まだ言うのか」
こんな彼女達を見てだ。厳顔は楽しげに笑って言うのだった。
「やれやれじゃな」
「そうね。焔耶ちゃんも変わらないわね」
黄忠も笑って厳顔に応える。
「ああしたところは」
「そうじゃな。だが桃香様のことを心から想っておる」
このことは間違いなかった。
「だからあ奴は絶対にやる」
「桃香様を無事ね」
「護っていってくれる」
だから安心だというのである。そうしてだ。
大門もだ。ここで言った。
「では我々もだ」
「ああ、そうだな」
「これからは単独行動は出来るだけ避けないとな」
草薙と二階堂がその大門に応える。

# 第百十四話　孔明、弓矢を奪うのことその十

「それで劉備さん達を護衛しよう」
「まだ俺達は襲われないだろ」
二階堂は状況も考えながら話す。
「やっぱり狙われるのはな」
「劉備さん達ですね」
ここで言ったのは真吾だった。
「他には曹操さん達も」
「狙うのは頭なんだよ」
二階堂はまた言った。
「頭を潰せばそれで終わりだからな」
「どんな巨大な生物も頭を潰せば倒れる」
大門も腕を組んで言い切る。
「それは軍も同じだ」
「政治もな」
二階堂は大門の言葉に言い加えた。
「政治の方もそうなるからな」
「うむ、だからこそ劉備殿達が狙われる」
大門はこう断言した。
「それとだ」
「それと？」
「それとっていうと？」
「あの者達、オロチなり常世なりアンブロジアなりだ」
大門はここで草薙や神楽を見た。
「あの者達を封じられる者達が余計にだ」
「狙われるな」
それはだ。草薙も自覚してだ。表情を険しくさせる。
「覇王丸さんとかな。楓もだよな」

「楓もそうだけれど雪だな」
二階堂は彼女のことを念頭に置いて述べた。
「ほら、神楽さんの双子の」
「ええ。姉さんはだからゲーニッツに」
神楽は沈痛な顔になりそのことを話した。
「我が神楽家は封じる力を持っているから」
「封印をしなければあの者達は幾らでも甦る」
大門はまた言い切る。
「それ故にだ」
「何かとややこしいことになるかも知れないがな」
それでもだとだ。二階堂は話す。
「勝つぜ。絶対にな」
「はい。じゃあ気分転換に怪談でも」
「それは止めろ」
関羽が蒼白になって真吾の怪談は止めさせようとする。
「あんなもの心臓に悪い」
「あれっ、駄目なんですか」
「止めろ。怖い」
つい本音を言ってしまう関羽だった。
「夜寝られないではないか」
「そんなに怖いですかね、俺の怪談」
「怖いにも程がある」
張飛も同じだった。こう言うのだった。
「絶対に止めるのだ」
「何か面白くないですけれど」
「いや、怪談は面白くはない」
「ただ怖いだけなのだ」
二人はあくまで真吾に話す。だが何はともあれだ。護衛のことはまとまったのだった。

第百十四話　完

2011・10・7

# 第百十五話　鷲塚、小次郎を気遣うのことその一



孔明と鳳統の提案でだ。要人達に警護がつけられた。
当然曹操も同じでだ。左右に夏侯姉妹がいる。後ろには曹姉妹だ。
四人に囲まれてだ。曹操はこう言うのだった。
「何か同じね」
「これまでとですか」
「同じだというのですね」
「ええ、同じね」
こうだ。少し笑って四人に言うのである。
「貴女達が私の護衛をするのならね」
「流琉達も申し出たのですが」
ここで夏侯淵が言う。
「しかしそれでもです」
「やはりここは私達がです」
「やらねばならないと思いまして」
それでだとだ。曹仁と曹洪が曹操に述べる。
「ですからこうしてです」
「我等四人で」
「有り難う。けれどね」
それでもだと言う曹操だった。ここでだ。
「わかっているわね。軍の指揮はね」
「はい、お任せ下さい」
そのこともわかっているとだ。夏侯惇が話す。
「そのことも」
「頼むわよ。それで私はいいとして」
いいとしてそのうえでだというのだ。曹操は言う。

「麗羽達はどうなのかしら」
「まず袁術殿ですが」
夏侯淵がここで袁術のことを話す。
「張勲殿がおられます」
「張勲？あの娘が」
「そして出張という形で凛が願い出ていますが」
「いいわ」
苦笑いでだ。曹操はいいとした。
「行かせなさい。全く仲がいいんだから」
「ではその様に」
「全く。凛もぴったりと離れないわね」
袁術からだ。そうなっているのだ。
「困った娘だわ」
「ですが袁術殿もこれで大丈夫です」
それはいけるというのである。
「あちらの世界の面々は個性的な者ばかりですが」
「美羽のところは数は少ないけれどそうなっているわね」
袁術のところにはだ。確かにそうした面々が揃っている。
「あのジョーカーにしても」
「ジョーカーですか」
「何か掴めない人物よね」
「確かに」
夏侯淵もそのことに頷く。
「あの御仁は道化です」
「敵じゃないのはわかるけれどおかしな人物ね」
「そうですね」
「まあ凛のことはいいわ」
また言う曹操だった。
「凛のことが気になるのなら風もですね」
「行かせますか」

「こちらの軍師の仕事を果たしてくれるのならね」
そうした条件をつけながらもだ。曹操は郭嘉を袁術のところに行かせた。こうして彼女は袁術と常に一緒にいるようになった。そうして今はであった。
得体の知れない水を袁術に飲ませてだ。慌てふためく袁術を見てだ。
どや、という顔で笑っている。その彼女を見てだ。
張勲がだ。にこにことして言うのだった。
「あら、凛ちゃんも互角になってきましたね」
「美羽様とですね」
「はい。美羽様はかなり手強い方ですが」
「波長が合ってそれで」
「互角になってきたんですね」
「そうですね。美羽様のことは何でもわかってきました」
まさにそうだというのだ。
「とにかくです」
「後ですが」
「後は？」
「陽子殿はどうされてますか？」
そのだ。袁術がいつも遊んでいる娘はというのだ。

## 第百十五話　鷲塚、小次郎を気遣うのことその二

「やはり相変わらずですか」
「そうですね。陽子ちゃんではですね」
「美羽殿には勝てませんか」
「弄られ倒しています」
張勲はにこりとしてその陽子のことを話す。
「陽子ちゃんが黄色で美羽さんが桃色で」
「何かの戦う五人みたいですね」
「まあそれは置いておいて」
強引に話を勧める張勲だった。
「とにかく美羽様の御相手をできるようになるということはです」
「凄いことなんですか」
「凛ちゃんもその域に達しました」
こう言うのである。
「おめでとうございます」
「有り難うございます」
「いや、凄かったのじゃ」
何とか立ち直った袁術がここで言う。
「こんなまずいとは思わなかったのじゃ」
「極悪のに水です」
それがその水の名前だった。
「とにかくまずいと評判で」
「噂には聞いていたがじゃ」
「最悪だったのじゃ」
「お楽しみ頂けましたか」
「いや、死ぬかと思ったのじゃ」
本当にそうだと言う袁術だった。
「ううむ。世の中凄いものがあるのう」

「毒味はしていますので」
このことは断る郭嘉だった。
「そしてこれからもです」
「わらわの食事はじゃな」
「はい、常にそうさせてもらいます」
袁術に確かな顔で話す。
「何があっても御護りしますので」
「済まぬのう」
袁術は郭嘉に心から礼の言葉を述べた。
「わらわには七乃もおるしな」
「当然私もですよ」
いつも通りにこにことして話す張勲だった。
「美羽様には何もさせませんから」
「うむ。宜しく頼むぞ」
「偶像支配は永遠です」
郭嘉も言い切る。
「ですからオロチが来ても刹那が来てもです」
「美羽様は私達が御護りします」
「では宜しく頼むぞ」
まずい自ら立ち直り笑顔で応える袁術だった。彼女の護衛もしっかりしていた。
袁紹もだ。彼女もだ。その左右にだ。
顔良と文醜がいる。その二人が彼女に言うのである。
「本当に何時誰が来るからわかりませんから」
「警戒しないと駄目ですよ」
こう自分達の主に言うのである。
「麗羽様は只でさえすぐに前に出られますし」
「突拍子もないことしますからね」
「突拍子もないというのは余計ですわ」
袁紹は文醜の言葉にはむっとして返す。今彼女は彼女自身の天幕

にいる。その後ろには審配がいる。
その彼女もだ。袁紹に強い声で言う。
「私もいますので」
「護ってくれるのでして？」
「そうさせてもらいます」
こう言いながら己の短剣も見る。腰に吊られているそれを。
「ですから御安心下さい」
「わたくしには貴女達がいますわね」
ここでだ。袁紹はふとこんなことを言った。
「ですが問題は」
「月さんや命さんですね」
審配が答える。
「あの方々が」
「ええ。封じる力を持つ娘達ですけれど」
「単独行動はしていません」
まずはこう答える審配だった。

# 第百十五話　鷲塚、小次郎を気遣うのことその三

「常に何人もいて、です」
「そうしてですわね」
「そして陣中にいますので」
陣外に偵察等にも出ていないというのだ。
「ですから余程のことがあっても」
「大丈夫ですわね」
「はい、御安心下さい」
「確かに白装束の者達も厄介ですけれど」
ここで言う袁紹だった。
「ですがやはり」
「あの連中ですね」
「あっちの世界から来た」
「ああいうのを邪神と言いますわ」
まさにそれだとだ。袁紹は顔良と文醜にも話した。
「封じなくてはそれこそ」
「この世界がですよね」
「本当に司馬尉の望む通りになっちゃいますわね」
「それだけは避けなければなりません」
審配も言う。
「ですから花麗や林美達も警護していますから」
「ええ。刺客は一人も入れてはなりませんわ」
袁紹の言葉は強かった。他に孫策も警護が固い。しかしだ。
この人物についてはだ。本当に誰もついていなかった。
公孫賛はたまりかねた口調で董卓と董白の姉妹に愚痴を言っていた。外で車座になって座りながら。
「どういうことなのだ、一体」
「あの、どうされたんですか？」

その彼女に董卓が怪訝な顔で問い返す。
「御気分が優れない様ですが」
「今要人達には警護がついているな」
「はい」
「それは貴殿にもだ」
見れば董卓にもだ。妹の董白に呂布にいつも傍にいる娘に張遼がいる。あと影が薄そうな将も。
「五人もいるではないか」
「六人なのです」
陳宮だった。確かに彼女も入れると六人だ。
「ねねも忘れるななのです」
「むっ、それは済まない」
「それでどうかしたの？」
董白がその公孫賛に問い返す。
「そもそも貴女見ない顔だけれど」
「その通りなのです。ねねもこんな奴知らないのです」
「ほんま誰やあんた」
張遼も怪訝な顔で公孫賛に問う。
「怪しい奴やないのは何となくわかるけれどな」
「何者なのよ、本当に」
董卓から離れない賈駆も言う。
「どっかで見た気がするんだけれど」
「思い出せないのです」
また言う陳宮だった。
「御前、本当に何処の誰なのです」
「ううん、何故いつもこう言われるんだ」
公孫賛も遂に泣きだした。
「私はそんなに影が薄いのか」
「公孫賛」
呂布がぽつりと言った。

「確か」
「何っ、それがこの者の名か」
華雄ですら言う。
「そうだったのか」
「そう。確か幽州にいた」
呂布はさらに言う。
「それがこの人」
「そうか。死っていてくれたか」
呂布の話にだ。公孫賛も満面の笑顔になる。
そうしてだ。呂布を抱きしめんばかりにして言うのだった。
「そうなのだ。私は公孫賛なのだ。かつては幽州の牧だったのだ」
「確か幽州の牧って袁紹殿だったんじゃ？」
董白はまだ気付いていない。
「四州の牧だって誇ってるけれど」
「だから前の牧だったんだ」
公孫賛は何とか力説する。
「何故それが忘れられるんだ」
「影が薄いんやろ」
張遼はさらりと核心を衝く。

# 第百十五話　鷲塚、小次郎を気遣うのことその四

「今にも消えそうな感じやしな」
「とにかく影が薄いにも程があるのです」
「そうよ。あんた本当に影薄いのよ」
陳宮に賈駆も続く。
「ある意味凄いわよ。そこまで影薄いって」
「ううん、呂布だけか知っていてくれたのは」
「中身は違うと思いますけれど」
董卓は少しおどおどと述べる。
「確か麻雀御存知ですよね」
「うむ、知らない訳ではない」
「私その場で貴女に似た方を見た気がします」
「私もだ」
この辺りは二人共だった。董卓も公孫賛も。
「他にもここにいる面々が揃っているな」
「はい、かなり多いですよね」
「私は何故か他の世界では目立つ様なのだ」
公孫賛も中身の話に応じる。
「これでもだ。結構出ているのだぞ」
「それ私もだから」
賈駆も同じだった。それは。
「表より裏の方がどうしてもね」
「目立っているのだな」
「あんたと同じね。それは」
こうした話をしながらだった。とりあえず公孫賛の影は薄いままだった。
それでだ。ここで新撰組の二人が来てもだった。
鷲塚も小次郎もだ。董卓達には気付いた。

「どうも」
「御元気そうですね」
こう彼女達には挨拶する。それもそれぞれ。
だが公孫賛には気付かずだ。そのまま素通りする。その二人にだ。
公孫賛は慌てて声をかける。彼女も必死だ。
「待ってくれ、私はどうなのだ」
「むっ、貴殿は確か」
鷲塚が最初に彼女に気付いた。続いて小次郎が。
そのうえで二人で彼女に顔を向けだ。そして言おうとした。
しかしだ。どうしても名前が出ずにだ。
お互いで顔を見合わせてだ。こう言い合うのだった。
「何処のどなただったのか」
「思い出せないな」
「我々の世界の者でもない様だが」
「一体何者なのだろうか」
「公孫賛だ。やはり知らないのか」
「ううむ。聞かない名前だ」
「こちらの世界の御仁なのはわかったが」
二人がわかるのはそこまでだった。それ以上はだ。
どうしてもわからずだ。こう言うのだった。
「まことにわからん」
「何処の誰なのか」
「またか。私はこうなる運命なのか」
「それでどうなのだ？一体」
「我々に何か用があるのか」
「もういい」
公孫賛はがっくりと肩を落として言った。
「私はどうせ。殆ど誰からも」
「気にしない」
呂布はその彼女の肩を叩きながら慰める。

「人は必ず見せ場がある」
「あるのだろうか」
「包丁を持てばいい」
だがだった。呂布は天然だった。
それでだ。ついこんなことを言ってしまったのだった。
「後は弟」
「弟は大好きだが」
「それかフガフガ言うか。そうすればいい」
「そちらの方がどうしても有名になるのか」
嬉しくもあり悲しい公孫賛だった。その彼女はともかくとしてだ。
鷲塚と小次郎がだ。一行に言う。
「それで我等は今こうしてだ」
「陣中を見回っているのだ」
「やっぱりあれよね」
その彼等に賈駆が応える。

# 第百十五話　鷲塚、小次郎を気遣うのことその五

「刺客を気につけてよね」
「うむ。他にはキム殿もそうされている」
「やはり見回っておられる」
「あいつとジョンやな」
張遼はキムもそうしていると聞いて少し嫌そうな顔になった。
そうしてだ。こう言うのだった。
「またチャンとかチョイとか連れてやな」
「うむ、そうしてだ」
「時間があればそうされている」
「修業と強制労働はそのままでやな」
その為の時間は絶対に削らないのがキムとジョンである。
「連れて行かれる連中がほんま可哀想や」
「何というかな。我々から見てもだ」
「キム殿とジョン殿は鬼だ」
まさにそれだというのだ。鬼だとだ。
「強制労働に修業もだからな」
「しかも深夜でも見回っている」
「ほんま鬼やな」
張遼はかなり引きながら真顔で言う。
「何であの二人は同じことやって平気やねん」
「恐ろしく頑丈な身体らしい」
「その為だな」
それ故にだと話す二人だった。そうしてだ。
彼等はあらためてだ。董卓達に述べた。
「ではこれからもだ
「巡回を続けさせてもらう」
「御願いするのです」

陳宮がその彼等に励ましの声をかける。
「そうして刺客を見つけたら頼むのです」
「承知した。それではだ」
「また」
二人は別れの挨拶をしてから一行と離れる。そうして兵達を連れたまま陣中を巡回していく。そうしながらだ。鷲塚は自分の隣にいる小次郎にこう声をかけるのだった。
「こうしているとだ」
「どうしたのだ？鷲塚殿」
「うむ、新撰組の頃を思い出す」
こう言うのだった。
「あの頃のことをな」
「そうだな。私も貴殿もよくこうして京の都を見回っていたな」
「そして攘夷の者達と戦っていた」
「今となってはいい思い出だ」
こうも言う鷲塚だった。
「あの頃のことは」
「あの後幕府は滅ぶか」
小次郎はこちらで彼等から見て未来から来た者達の話を思いだしながら述べる。
「我等はあくまで守りたかったが」
「いや、守るべきものはまだある」
「あれか」
「そうだ。誠だ」
それだとだ。鷲塚は言うのだった。
「我々が守るべきはだ。それだ」
「誠。人としての誠」
「それは永遠に変わらぬ。だからだ」
「そうだな。私もまた」
「だが真田君、君は」

「私は真田小次郎だ」
鷲塚が何を言いたいのかを察してだ。小次郎は自分から言った。
「新撰組零番隊隊長だ」
「だからか」
「私もまた剣を持つ」
こう言うのだった。
「それは変わらない」
「そう言うのだな」
「それは変わらぬ。そしてだ」
さらにだというのである。
「私はこの世界でも誠を守ろう」
「わかった」
鷲塚は小次郎の話を受けてだ。強い声で応えた。
「では私もそうしよう」
「それは局長も言われる筈だ」
近藤勇、彼もだというのだ。
「誠は人と共に常にあり」
「我々はそれを守るべきだとだな」
「そう思う」
小次郎は小次郎として話していく。
「私もまた」
「そうだな。しかしだ」
ここでだ。不意にだ。鷲塚は話を変えてきた。
そうしてだ。彼のことを言うのだった。
「紫鏡のことは聞いたか」
「孫策殿への刺客なりだな」
「そうだ。処刑された」
そうなったことをだ。彼はここで小次郎に話したのである。

# 第百十五話　鷲塚、小次郎を気遣うのことその六

「そうなった」
「話は聞いている」
小次郎もだ。知っていると返した。
「だが出来ればだ」
「御主のその手でか」
「決着をつけたかった」
歯噛みをしながらだ。小次郎は述べた。
「この私がだ」
「だがあの男は死んだ」
鷲塚は前を見ながらその小次郎に告げる。
「最早御主の願いは果たされたのだ」
「そう思っていていいのだな」
「そうだ。だから忘れるのだ」
鷲塚への気遣いだった。その気遣いを見ながら。
そうしてだ。巡回を続ける。その中でだった。
陣中には兵達がいる。彼等はそれぞれ訓練をしたり雑用をしたりしている。中には休息を取っている者もいる。何処もおかしなところはない普通の陣中である。
だがその陣中にだ。小次郎は見たのだった。
「!?」
「どうしたのだ?」
「いた」
こう言ったのである。
「確かにいた。あの男が」
「あの男、まさか」
「そうだ。あの男だ」
こうだ。小次郎は強張った顔でその場所を見ながら鷲塚に返す。

「あの男がいた。間違いなく」
「まさかと思うが」
「刹那もまたこの世界に来ている」
小次郎はこのことから考えて述べる。
「そうだとすればだ」
「あの男もまた」
「そうだ。甦っていても不思議ではない」
「確かに。常世の力を使えばその程度のことはだ」
「容易だ」
小次郎はまた言う。
「刺客としてまた使うことも」
「そうだな。今まで何故そのことに気付かなかった」
「危険だ」
小次郎はその整った顔をさらに強張らせて述べた。
「このままでは」
「うむ、すぐに皆に知らせよう」
「既に刺客が入り込んでいる」
強張った顔でだ。小次郎は言っていく。
「あの男だけとは限らない」
「結界を破りそうしたというのか」
「結界は術に関するものだけだ」
「ではか」
「常世に対する結界は張っていなかった筈だ」
それが問題だったというのだ。それでだ。
鷲塚と小次郎はすぐに劉備達にそのことを報告した。それを受けてだ。
劉備はすぐに兵達を含めて警戒態勢にさせた。そのうえで刺客を見つけ出そうというのだ。
だが、だった。彼等は容易に見つからない。その陣中でだ。
月がだ。憂いのある顔でだ。こう守矢と楓に告げていた。

「刹那を何とかしなければならないわね」
「それはその通りだ」
まずは守矢が妹に答える。
「だがそれでもだ」
「それでも、なのね」
「月、命を粗末にするな」
守矢は鋭い顔で妹に告げる。
「御前はこの世界では死んではならない」
「僕もそう思うよ」
楓もだ。姉を気遣う顔で見てだ。
そのうえでだ。彼女に告げたのである。
「姉さんは。この世界では絶対に」
「けれど封印を施さなければ」
どうなるかとだ。月が言うのはこのことだった。
「この世界自体が」
「御前一人が背負うものではない」
守矢はその月に話す。
「決してだ」
「ではどうすればいいの？」
「御前は一人ではない」
守矢は妹にさらに言う。

# 第百十五話　鷲塚、小次郎を気遣うのことその七

「私がいる」
「そして僕も」
「私達以外にもいる。御前一人が背負わなくてもいいのだ」
「では私は」
「戦うことはいい」
それはいいとだ。守矢は言う。
それと共にだった。妹に言うことは。
「だが命は粗末にするな」
「では。あの男は」
「私達全ての力で封じる」
そうしてだ。月の命を救うというのだ。
「御前一人では御前が犠牲になる」
「けれど僕達全員の力ならどうかな」
楓もだ。妹に話す。
「そうなる」
「少し考えさせて」
月は即答しなかった。それでもだった。
兄弟の言葉を受けてだ。考えを変えていっていた。
その彼女にだ。楓も言うのだった。
「姉さんは昔からだったね」
「昔から」
「そう。優しくて自分のことをいつも犠牲にして」
それが月だった。彼女は幼い頃からそうした心根だったのだ。
「けれどそこでね」
「そこで？」
「姉さんのことを気遣う人のことも覚えておいて」
そうして欲しいというのである。

「だから。自分一人で背負わないで欲しいんだ」
「それでなんだ」
「そう。姉さんが犠牲にならずに済む方法があるから」
だからこの世界ではだというのだ。
「僕達にも任せて」
「案ずるな。御前はこの世界では死なない」
また言う守矢だった。
「何があろうともな」
「兄さん、楓・・・・・・」
「わかったのなら今は休もう」
「何か食べようよ」
楓は少し明るくなって姉に提案した。
「餅でもどうかな」
「米の餅だ」
あの麦の餅ではなくそちらだというのだ。
「それを食べるとしよう」
「そうね。お餅をね」
「じゃあ皆も呼んでね」
楓はさらに明るい調子で姉に告げた。
「楽しくやろうよ」
「わかったわ。それじゃあ」
月も微笑みになった。そうしてだった。
彼女は考えを少しずつだが変えようとしていた。犠牲というその考えを。
孫権はあかりにだ。自分の天幕の中で常世についての話を聞いていた。
そうしてだ。こう言ったのである。
「つまり冥府というのね」
「それも地獄やな」
それが常世だとだ。あかりは孫権に話す。

「生きてる間碌でもないこととしてた奴等が行く世界や」
「そうよね。それって完全にそれよね」
共にいる孫尚香も言う。
「悪人が行く場所なんだから」
「若しもですよ」
周泰もあかりの話を聞いて言う。
「常世と私達の世界がつながったらそれこそ」
「そや、周泰ちゃんの言う通りや」
あかりは周泰の心配する顔に応えてまた言う。
「悪霊がわんさと来るようになるんや」
「世界は終わりじゃな」
そこまで聞いてだ。黄蓋も顔を強張らさせている。
「絶対に許してはならんのう」
「ああ。だから月さんも必死なんだよ」
十三もそのことを話す。
「あの刹那を封じようってな」
「事情はわかったわ。それでだけれど」
「それでっちゅうと？」
あかりは孫権の話に応える。

# 第百十五話　鷲塚、小次郎を気遣うのことその八

「以前姉様を狙った紫鏡という男は」
「あれは只のゴロツキなんだよ」
彼のことは漂が話す。
「新撰組くずれのな」
「新撰組はあれよね」
孫尚香がまた問うた。
「鷲塚のおじさんとか小次郎とかの」
「ああ。まあ壬生狼っていってな」
漂はここから話す。
「京の都を取り締まる。そんな連中なんだよ」
「うち等の時代から先の。草薙とかの世界でいうとや」
どうかとだ。あかりが説明する。
「あれやな。ちょっと強い警察っていうか」
「憲兵っていうのか？あれは」
十三はそうした組織も話に出す。
「そうした連中だな」
「何となくはわかりました」
呂蒙が応える。
「兵達の中での監視役ですね」
「そうなるだろうな」
漂は少し考えてからまた述べる。
「新撰組についてはな」
「それでよね」
新撰組の話を聞き終えてからまた言う孫尚香だった。
「あいつ悪いことしてその新撰組を追い出されたのよね」
「そや。あんな碌でもない奴やからな」
あかりは顔を顰めさせてこう述べた。

「非道の限りを尽くしとったんや」
「それでどうして姉様を狙ったのかしら」
そこがだ。孫権が最も考えることだった。
「それがわからないけれど」
「多分あれや。あいつの気付かんうちに于吉とかに雇われたんや」
あかりはそう読んでいた。
「そんで孫策さんの命を狙ったんやな」
「わかったわ、あの連中のなのね」
「他にも怪しい話あるで」
「あれじゃな」
ここでだ。黄蓋がその流麗な眉を鋭くさせた。
「孫堅様の時じゃな」
「あっ、確かに山越は石弓は使っていません」
「今に至るまで」
周泰も呂蒙もはっとなった。
「孫策様に対しても使ってきましたが」
「あの時も彼等からは石弓は見つかっていないです」
「ではやはり」
「刺客は」
「そや。山越やないで」
あかりは断言した。
「あの連中やないとするとや」
「于吉、あの男ですね」
「間違いなく」
「そう思うのが妥当だろうな」
漂も珍しく真剣な面持ちで話す。
「それにだよ」
「ほら、紫鏡だよ」
十三はその彼の話に戻した。
「あいつは只の小悪党にしてもな」

「小悪党の後ろには黒幕がいる」
孫権はこの考えに至った。
「そういうことね」
「その黒幕は誰だと思う？」
「刹那じゃないの？」
孫尚香は腕を組み考える顔になって述べた。
「あいつでしょ、多分」
「うちもそう思ってる」
あかりはまさにその通りだと答えた。
「あいつはそういうの得意やからな」
「冥界の存在ね」
孫権はまた述べる。
「間違いなく人間ではない」
「封印せんとあかん」
あかりはこのことは絶対だと言い切る。

# 第百十五話　鷲塚、小次郎を気遣うのことその九

「問題はそれが月の命に関わることや」
「四霊の者達だけでは無理なのじゃな」
黄蓋は眉を顰めさせて述べた。
「あの者達だけでは」
「封印してもそこに蓋をしないと駄目だろ？」
漂は料理に例えて話す。
「そうだろ。蓋が必要だろ」
「確かに。封じてもそれで終わりではないわね」
「そういうことだよ。だから月ちゃんが犠牲にならないと駄目なんだよ」
こう孫権に話すのだった。
「絶対にな」
「そこを何とかしないといけないわね」
孫尚香は腕を組んで考える顔のまま話す。
「冗談抜きでね」
「そちらの世界ではともかくです」
「この世界では月さんを死なせる訳にはいきませんね」
呂蒙と周泰も言う。
「その為にはどうするべきか」
「そうですね」
「あっ、そういえば」
ここでだ。呂蒙はふと気付いた。それは。
「あかりさん以前仰っていましたけれど」
「ああ、黄龍のおっちゃんやな」
「月さんの保護者だったという」
その彼のことがここで話に出たのである。
「あの方の御力を借りることができれば」

「あの人一回死んでるしな」
あかりは困った顔になり呂蒙に答えた。
「それにこの世界に来てるにしてもや」
「見つけて御力をというのは」
「今すぐは難しいやろな」
「ことは焦眉の急だからね」
孫権は現実から話した。
「その黄龍さんのお力をすぐに借りたいけれど」
「運よく急に出て来たらいいんだけれどな」
漂は冗談交じりに述べた。
「まあ刹那をどうにかしないといけないのも一つの問題だな」
「本当にね」
孫権は頷きだ。そうしてだった。今の刺客のことについてまた言った。
「紫鏡は間違いなく来るわね」
「雪蓮姉様ね」
孫尚香も前の騒動から述べる。
「絶対に狙って来るわね」
「ええ。それを何とか防がないと」
こう言うとだった。周泰と黄蓋がだ。
それぞれ孫権と孫尚香の傍に寄り添って来て言うのだった。
「蓮華様は私が御護りします」
「小蓮様、わしでよいだろうか」
「ええ、有り難う」
「祭がいてくれたら安心できるわ」
姉妹でそれぞれ言う。
「後は姉様だけれど」
「雪蓮姉様の護衛は？」
「甘寧ちゃんとあのおっぱいのお姉ちゃんがおるやろ」
あかりがすぐに述べた。

「孫策さん自身腕立つしそんなに心配いらん思うけれどな」
「万が一ということがあります」
呂蒙は真剣な顔で述べた。
「何かあってはなりません」
「うちもやらせてもらうで」
あかりもだ。真剣な顔で呂蒙の言葉に応える。
「あんた等は友達や。友達の為には一肌も二肌も脱ぐね」
「わし等はいい友を多い得たのう」
黄蓋はあかりのその言葉を受けて満足した微笑みで言った。
「多少風変わりじゃがな」
「ははは、まあ宜しくな」
「やるからには頑張らせてもらうからな」
漂と十三が笑顔で応えてだった。そうしてだ。
彼等は決意を新たにしていた。そのうえで刺客を防ごうともしていた。仲間達が一つになり。
それは小次郎達も同じだった。鷲塚、それに響がだった。
小次郎が孫策の天幕の入り口に座って寝ているのを見てだ。こう声をかけたのである。もう真夜中になっており空には白い満月がある。小次郎の新撰組の服が月の灯りの中に浮かび上がっている。
鷲塚がだ。こう声をかけたのである。
「孫策殿の護衛か」
「あの男は必ず来る」
小次郎は顔を上げて鷲塚の言葉に応える。

# 第百十五話　鷲塚、小次郎を気遣うのことその十

「間違いなくだ」
「そうだな。あの男は執念深い」
「そのことはわかっているな」
「よくな」
知っているとだ。鷲塚も返す。
「あの男ならば来る」
「だからこうして待っている。それにだ」
「それにですね」
「孫策殿をやらせはしない」
小次郎は今度は響に対して述べた。
「それ故にもここにいる」
「休んではいるか」
「うむ、こうしてだ」
言いながらだ。毛布を出してだ。
それで身体をくるみだ。二人に話すのだった。
「休んでいる」
「わかった。しかしそれでもだ」
「無理はするなというのだな」
「そうすることだ。いいな」
こうした話をしてだった。小次郎は孫策の天幕の前で護衛の役も務めているのだった。あの男が来るのを待っていたのである。
刹那が闇の中でだ。于吉達に話していた。
「今のところは順調だ」
「順調なのですね」
「潜伏できているか」
「そうだ。できている」
こうだ。彼は于吉と左慈に述べる。

「何時仕掛けても問題はない」
「それにですね」
「あの男なら何があってもだな」
「所詮は捨て駒だ」
刹那は実に冷酷に述べた。
「どうなろうと知ったことではない」
「そうですね。所詮はですね」
「それ以外には使い方がない」
于吉も左慈もだ。刹那の話に対して率直に返した。
「成功しても失敗してもいい」
「まさにそういうことだな」
「所詮はその程度だ」
また言う刹那だった。
「生きている頃からそうだったしな」
「我々の崇高な目的も理解できていませんし」
「それ程の頭もないしな」
「そうした方の使い道は本当に一つしかありません」
「捨て駒だ」
こう素っ気無く述べてだった。彼等は刹那の策を見ていた。
その彼にだ。ゲーニッツが述べてきた。
「ただ。気になることがあります」
「あの男か」
「はい、出てきました」
そうなったというのだ。
「どうされますか、一体」
「どうということはない」
刹那はゲーニッツの言葉にもやはり素っ気無い。
「滅ぼすだけだ」
「この世界自体と同じくですね」
「そうだ。滅ぼすだけだ」

「かなりの強敵でもですね」
「俺の目的は決まっている」
例え何者が立ちはだかってもだというのだ。
「この世界に常世を実現させるだけだ」
「常世。実に素晴らしい世界です」
「邪な死者の世界とはな」
于吉も左慈もそうした世界については笑顔で応える。
「では今回はお任せしました」
「どうなるか見せてもらう」
「そうするといい」
こう話してだった。彼等は状況を見守るのだった。刹那の仕掛ける策のそれを。

第百十五話　完

２０１１・１０・１０

# 第百十六話　小次郎、仇を取るのことその一

第百十六話　小次郎、仇を取るのことふとだ。孫策が共にいる二張に言った。彼女は今は己の天幕にいる。

その中でだ。こう言ったのである。

「小次郎は今は見回りに行っているわね」

「はい、今日も励んでおられます」

「鷲塚殿と共に」

そうしているとだ。二人も主に話す。

「怪しい者を実際に御覧になったらしく」

「そうされています」

「真面目ね。相変わらず」

孫策は二人からそうしている聞いて微笑んだ。

そうしてだ。二人に今度はこんなことを言った。

「ところでね」

「ところで？」

「ところでといいますと」

「あの娘について何か気付いたかしら」

「？何をですか？」

「一体」

「私の今の言葉を」

笑みがだ。さらに楽しげなものになっていた。

「あの『娘』と言ったわね」

「？ではあの方は」

「殿方ではなかったのですか」

「ええ。あくまでそう見せているけれどね」

だが実際はどうかというのだ。

「あの娘は違うのよ」

「またどうしてその様なことを」
「男装の麗人とは」
二張はいぶかしんで主に問うた。
「新撰組が女人禁制だったとは聞いていますが」
「そもそもどうして新撰組に」
「その詳しい事情は知らないけれど」
孫策は知らない。知っているのは本人と鷲塚だけだ。
「けれど。何か目的があってね」
「そうしてですか」
「そのうえで、なのですね」
「ああして。男であることを通しているのよ」
何か目的があるのはわかっていた。それがどういったものかはわからないにしても。
その中でだ。また言う孫策だった。
「ああいう娘もいいわね」
「あの、まさかと思いますが」
「小次郎殿を褥に」
「それはしないわ」
そのことはだ。孫策はすぐに否定した。
そうしてだ。こう述べるのだった。
「ただ。応援したくなるのよ」
「その目的が果たされることをですね」
「そのことを」
「そうよ。期待しているわ」
こう話すのだった。小次郎のことを。
その小次郎は今日もだった。鷲塚と共に見回りにあたっている。
甘寧や馬岱も同行している。
その中で甘寧がだ。馬岱に尋ねる。
「ところで劉備殿の護衛だが」
「姉様達と焔耶がいるからね」

「貴殿は特にか」
「だからこうして見回りをしているのよ」
「そうか。実は私もだ」
「甘寧さんもなの」
「本来私は蓮華様の近衛隊長なのだ」
その役割を馬岱に話す。
「だが今は雪蓮様の護衛になっている」
「で、こうして見回りにもなのね」
「そうだ。出ているのだ」
「蒲公英は桃香様の護衛が六人もいるから」
「一杯になってか」
「そう。だから見回り専門になってるの」
そうだというのだ。
「特に焔耶が桃香様から離れなくてね」
「魏延殿だな」
「あいつ桃香様のこと大好きだから」
それで離れない、いつもの魏延である。
「一緒の褥でお休みするしお風呂だって一緒だし」
「よくそれで何もないな」
「桃香様はあんなのだしね」
つまり極端に天然だというのだ。
「それに焔耶はあれで奥手だし」
「そうなのか。意外だな」
「桃香様から誘わない限り動かないから」
そうしたところでは弱気の魏延なのだ。意外なことにだ。

## 第百十六話　小次郎、仇を取るのことその二

「皆安心して見てるわ」
「ふむ。事情はわかった」
「そういうことなの。ところでね」
甘寧に色々と事情を話してからだ。馬岱は今度は小次郎達に声をかけた。
「小次郎さん達新撰組っていつも見回っていたのよね」
「そうだ。京の都をだ」
「そうしていた」
小次郎だけでなく鷲塚も答える。
「だからこうして今見回っていてもだ」
「慣れている」
実際に慣れたものだった。陣中の見回りの。
「怪しい者は今のところ見当たらない」
「先にはいたのだが」
「あの男か」
新撰組の二人の話を聞いてだ。甘寧の顔が険しいものになる。
そうしてだ。こう述べるのだった。
「紫鏡。あちらの世界では貴殿等と共にいた」
「そうだ。あの男だ」
「あの男がいる」
まさにそうだとだ。二人も答える。
「私は見た。あの男をだ」
「小次郎は嘘は吐かない」
鷲塚は盟友として知っていた。小次郎の誠を。
そうしてだ。その誠について言うのだった。
「決してだ」
「そうだな。小次郎殿はな」

「物凄く誠実な人だもんね」
甘寧も馬岱もそのことはその通りだと頷く。
「何をされるにしても非常に真面目だ」
「こんな誠実な人いないからね」
「いや、私は」
しかしだ。その小次郎はだ。
二人のその評価にだ。顔を暗くさせたのだった。そのうえで言ったのである。
「誠実ではない」
「いや、それは謙遜だ」
「そうよ。小次郎さんが誠実じゃなかったら誰が誠実なのよ」
「嘘を吐いている」
「嘘を？」
「どういう嘘を？」
「それは言えない」
二人の問いにだ。目を伏せさせる。
そうしてだ。今度はこう言ったのである。
「だが。それでもだ」
「誠実ではないか」
「そうなのね」
「そうだ。私は嘘を吐いている」
また言う小次郎だった。
「その私が誠実などとは」
「誠にも様々な誠がある」
だがここでだ。鷲塚が小次郎に話した。
「真田君、君の誠もまた誠だ」
「そう言ってくれるのか」
「そうだ。言える」
鷲塚は何のやましさも見せずに告げる。
「確かにだ」

「それならいいが」
小次郎は鷲塚の言葉に少し心を晴れやかにさせた。ここでだ。
馬岱がだ。鷲塚の今の言葉に対してこんなことを言った。
「それにしてもさ。君付けとか君って表現だけれど」
「新撰組独特のものだったな」
甘寧も言う。
「中々いいものだな」
「格好いいのね」
「我々の時代からはじまったものらしい」
そうした呼び名や二人称はだとだ。鷲塚は二人に話した。
「そしてそれからの時代も残っている」
「成程な。そうなのか」
「新撰組ってそうしたことも流行らせたんだね」
「流行らせたと言うのか」
二人の表現にだ。鷲塚は考える顔になった。
そうしてだ。こんなことも言うのだった。
「定着したと言うのか」
「定着か」
「そうなったんだ」
「そう思っていいだろう」
こう話してだった。鷲塚はさらに述べた。

# 第百十六話　小次郎、仇を取るのことその三

「それがしもいつも局長に君付けで呼ばれている」
「ああ、あの人ね」
馬岱もその局長が誰なのか聞いている。
「近藤勇さんだったよね」
「虎徹だったな」
甘寧は彼の持っていた剣のことに言及した。
「剣だけでなくかなりの腕前だったそうだが」
「そうだ。人間的にも器の大きな方だった」
鷲塚の目が遠くを見るものになる。そうしてだ。
そこに悲しさも漂わせてだ。こんなことも言ったのである。
「だが。無念だったろう」
「何か話を聞いたらあれだよね」
馬岱もだ。目を伏せさせて応える。
「幕府は潰れて。その近藤さんも」
「切腹ならよかった」
それなら納得できたとだ。鷲塚は述べる。
「しかし。首を斬られるとは」
「武士の世界では屈辱だったな」
甘寧もその話を聞いていた。あちらの世界の武士のことを。
「切腹ではなく首を斬られることは」
「武士は切腹することが名誉だ」
実際にそうだとだ。鷲塚は言い切る。
「あれだけの方がそうなるとは」
「世の中って。残酷だよね」
「時としてな」
「儚いものだ」
鷲塚はその世界についてこうも言う。

「だがそれでもだ」
「誠はあるんだ」
「その惨く儚い世においても」
「誠が消えることはない」
また断言する鷲塚だった。
「例え何があろうともだ」
「その通りだ」
このことは小次郎も同意して頷く。
「私にはないものだがな」
「それがどうしてもわからないがな」
「蒲公英もね」
二人にはどうしてもわからなかった。小次郎がその様なことを言うのか。だが小次郎はそのことについて何も言うことなくだ。見回りを続けていくのだった。
その時は何も見えなかった。しかしだ。
小次郎はその中でもだ。険しい顔で呟くのだった。
「必ずいる」
「あの男がですね」
「そうだ、いる」
見回りが終わった時にだ。響に言ったのである。
「私は見たのだ。あの男を」
「死して尚も出てくるということは」
「間違いなくあの力だ」
二人の脳裏にだ。刹那の闇が浮かんだ。
その闇を感じ取りだ。小次郎はまた言った。
「若しそうだとすれば」
「その時は」
「闇をここで払う」
そうするというのだった。
「必ずだ」

「わかりました。では私もまた」
小次郎の言葉を聞きだ。響もだった。
「及ばずながら」
「力を貸してくれるか」
「はい」
こくりと頷きだ。響は小次郎の言葉に応えた。
「そうさせてもらいます」
「済まない。しかしだ」
「しかし？」
「あの男が一人なら」
その場合はというのだ。
「私は一人で闘う」
「そうしてですね」
「斬る」
一言でだ。こうも言い切ってみせる。

# 第百十六話　小次郎、仇を取るのことその四

「私のこの手でだ」
「新撰組の裏切り者をですか」
「そうだ。そして」
響の声にだ。何かが宿った。
「仇を」
「仇？」
「あっ、いや」
言ってしまったことに気付いてだ。即座にだった。
小次郎はその言葉を収めてだ。こう言い繕ったのだった。
「何でもない」
「左様ですか」
「そうだ。私は裏切り者を斬る」
あくまでそういうことにしたのである。
「新撰組零番隊隊長としてだ」
「わかりました」
その言葉に頷いてだった。響は小次郎に応えたのである。鷲塚はその小次郎を後ろから見守っている。
こうした話があった次の日の夜だった。孫策の天幕にだ。
二人の怪しい男達が近付いていた。彼等は闇の中でこんな話をしていた。
「ではいいな」
「へへへ、いいぜ」
身体を屈め顔を包帯で覆った男が闇の男の言葉に応える。
「あんたの言う通りにな」
「動け。そしてだ」
「俺は執念深い男なんだよ」
これが包帯の男の言葉だった。

「紫鏡様のな」
「今はその名前だったか」
「ああ、骸だったな」
自分でこう言い返す見ればだ。
骸のその顔、包帯から見えるその顔は無気味な紫色だ。あちこちが爛れており腐っている。その紫は腐敗した紫、腐った汁まで滴らせている程度だった。
その彼がだ。闇の男、刹那の言葉に応えるのだった。
「そういやそうだったな」
「そうだ。では骸よ」
「何だ？」
「孫策は貴様がやれ」
こう告げたのである。その骸に対して。
「そして怨みを晴らせ」
「そうさせてもらうからな。ところでな」
今度は骸からだ。刹那に問うた。
「あんたは何をするんだ？ここで」
「俺か」
「何もなくてここに来たんじゃないだろ？」
「巫女達を始末しに来た」
その為にだとだ。刹那は答えた。
「そうしてそのうえでだ」
「どうするんだよ。巫女をあらかた殺して」
「我々を封印出来る者達を一人残らず消す」
そうするというのだ。
「これでわかったな」
「何か大掛かりな話だな」
「大掛かりではない」
それは違うというのである。
「俺は何時かそうしようと思っていた」

「そうか」
「そうだ。では行くがいい」
こう告げてだった。刹那は闇の中に消えた。そうしてだった。
骸は孫策の天幕に音もなく近寄る。その中でだ。
その腐っていく顔にだ。下卑た笑みを浮かべて言うのだった。
「へへへ、じゃあやらせてもらうか」
「何をだ？」
「決まってるだろ。あの女を殺すんだよ」
不意に来た声にこう返しもする。
「前に殺せなかったあの女をな」
「そうか。では紫鏡よ」
「今は骸だぜ」
「骸か。死して尚そう言うのか」
「ああ。俺は死んでも諦めねえんだよ」
身体を屈めさせ。天幕を見ながらまた言う骸だった。
「あの女を。絶対に」
「話は聞いた」
それはだと。声は返した。

# 第百十六話　小次郎、仇を取るのことその五

「それではだ」
「？そういえば」
ここでようやくだ。骸も気付いたのだった。
彼に声をかけてくる者、それは何者か。その考えに至ったのだ。
それでだ。周囲を見回してだ。声の主を探して問うた。
「手前、何者だ」
「私の声を忘れたのか」
「！？まさか」
「そうだ、そのまさかだ」
応えながらだ。声の主は骸の前に出て来た。それは。
新撰組の服を着た中性的な顔の者だった。その顔を見てだ。骸は驚きの声を挙げた。
「真田小次郎、手前生きていやがったのか」
「そうだ。そしてだ」
「そういやどうしてこの世界に来ていやがるんだ」
「貴様と同じだ。私も縁あってこの世界に来たのだ」
「けっ、そうかよ」
「そしてだ」
小次郎は腰の剣を抜いた。そうして身構えてだった。
彼はだ。こうも言ったのである。
「隊の規律を乱し裏切った者を成敗する」
「手前まだそんなことを」
「覚悟するのだ」
言いながらだ。そうしてだった。
小次郎は骸に斬りかかる。それを受けてだ。
骸も両手にある刃を振るう。二人の闘いがはじまった。
小次郎は一刀でだ。骸を両断しようとする。だが骸は。

両手の刃を野獣の様に振りだ。斬ろうとする。しかしだった。
小次郎はその刃を的確にかわしながらだ。骸を狙う。その小次郎の動きを見てだ。
「ちっ、何て速さだ」
「貴様の動きは見切った」
そうだとだ。小次郎は骸に言うのである。
「私とて伊達に生きて来た訳ではない」
「それは死んだ俺へのあてつけか？」
「違う」
それは否定する小次郎だった。
「生きて来て。そうして」
「生きて来て何だってんだ」
「貴様を倒す為に剣を磨いてきた」
こう言ってだった。そのうえでだ。
骸の一瞬の隙を衝いてだった。彼の首を刎ねた、剣を横に一閃したのだ。
骸の首は飛び地面に落ちた。腐った身体が倒れ込む。
だが首はだ。落ちて転がってからもだ。こう小次郎に言うのだった。
「手前、わかったぜ」
「わかった。何をだ」
「手前、真田小次郎じゃねえな」
こう言ったのである。
「女だな」
「・・・・・・・・・」
小次郎は答えない。その問いには。
「そういえば聞いたことがあるな。あいつに妹がいたってな」
「言いたいことはそれだけか」
ここでだ。もう一人の声がした。そうしてだ。
声の主は骸の首のところに来た。そうして言うのだった、

「ではもう喋る必要はないな」
「なっ、手前は」
骸は横目、彼から見て上を見た。そこには鷲塚がいた。
その鷲塚を見てだ。また驚きの声をあげたのである。
「鷲塚、手前も来ていやがったのか」
「死しても尚妄執を抱いているとはな」
鷲塚は嫌悪を込めて骸の首を見下ろして言う。
「浅ましい奴だ」
「だからどうしたってんだよ」
「消えろ」
こう告げてだった。骸の頭に剣を刺してだ。
そこに気を込めてだ。一気に吹き飛ばしたのである。これで骸は完全に終わった。
始末をつけてからだった。鷲塚は小次郎に顔を向けて言うのだった。
「奴も気付いたか」
「それは」
「前から言おうと思っていた」
どうかとだ。彼は小次郎、闘いを終えたその剣士に告げる。
「御主は本来は」
「そのことは」
「闘うべきでない。何故なら」
そしてだ。この名でだ。小次郎を呼んだのである。

# 第百十六話　小次郎、仇を取るのことその六

「あかり、兄の仇もこれで取ったな」
「兄上はあの男に殺された」
その紫鏡、骸にだというのだ。
「その仇を今は取った」
「ならばだ」
「いや、私はあかりではない」
ここでだ。小次郎はこう言ったのである。
「真田小次郎だ」
「だがもう仇は」
「言わないでくれ」
鷲塚の心遣いをだ。今はあえて振り払ってだった。
「私は新撰組零番隊隊長真田小次郎だ」
「あくまでそう言うのか」
「そうして生きていく」
決意をだ。彼女は言ったのだった。
「兄上に代わってだ」
「・・・・・わかった」
鷲塚もだ。その決意を見てだ。こう応えたのだった。
「では御主の道を進むがいい」
「誠の道を歩んでいいのだな」
「御主には誠がある」
鷲塚にはわかっていた。彼女の誠が。
「ならばそうするのだ」
「済まない」
「礼はいい。後ろはそれがしに任せろ」
「うむ」
こうした話をしてだった。彼等はだ。

骸を斬ったことを孫策に告げにだ。天幕の中に入ったのである。
その頃だ。ナコルルの前にだ。刹那が来てだった。
いきなり剣を振るう。そうして言うのだった。
「死んでもらおう」
「貴方は」
「そうだ。死んでもらう」
こう言ってだった。さらに斬ろうとする。ナコルルはそれに対してだった。
己の小刀にママハハでだ。懸命に防ぐ。しかしだった。
刹那の斬撃は強い。ナコルルは次第に押されていっていた。
だがここでだ。リムルルが来てだ。姉の助太刀に入った。
「姉様、危ない！」
「！？リムルル」
咄嗟にだ。氷を放ってだ。刹那の攻撃を防いだのである。
そのうえで姉の横に来てだ。こう言うのだった。
「孫策様のところに刺客が来たわ」
「やはり。そうだったのね」
「けれどその刺客は小次郎さんが退けたから」
「そうか」
その話を聞いてだ。刹那は何とでもないという様に呟いた。
そうしてだ。こう言うだけだった。
「所詮は屍、果たせなかったか」
「何言っているのよ。死んだ人を甦らせてまた戦わせるなんて」
リムルルはその刹那に対して言い返す。
「とんでもないことなのよ」
「何ということはない」
しかしだった。刹那はこうリムルルに返すだけだった。
「所詮は捨て駒だ」
「そう言うのね」
「俺の目的は貴様等巫女全てをだ」

どうするかと言いながら。剣を構えてだ。
二人同時相手にしようとする。だがここで。
今度は弓矢が来た。ミナだった。
彼女は離れた場所から弓を構えてだ。刹那に言うのである。
「やらせない」
「三人目か」
「三人やないで」
もう一人いた。それは。
あかりだった。彼女もまた来ていたのだ。そうして刹那に言うのだった。
「やっぱりあの新撰組くずれは囮やったんやな」
「そういうことになる」
「そんでその囮にうち等が気を取られてるうちにかい」
「そうだ。貴様等を一人ずつ始末するつもりだった」
まさにそうだとだ。刹那は彼女達に答えた。

# 第百十六話　小次郎、仇を取るのことその七

「だが。四人も一度に来るとはな」
「誰が四人て言うてん」
しかしだ。ここでだった。あかりは刹那に不敵に笑って告げた。
「そんなん言うとらんやろ」
「ではまさか」
「そや。出てきい」
あかりがこう言うとだった。彼女の左右にだ。
神楽、そして月、命が出て来た。これで七人だった。
七人の巫女達を見てだ。刹那は言った。
「一人なら何ということはない」
「けれど七人一度はどうかしら」
「退こう」
こうだ。刹那は神楽に返した。
「そうさせてもらう」
「随分と都合のいいことを言うわね」
「私もそう思うわ」
月と命が眉を顰めさせて言い返した。
「私達を殺しに来たと言って」
「七人一度だと逃げるというの」
「そうだ」
刹那は臆面もなく答える。
「そうさせてもらう」
「あんたもう二度とこの陣には来れんで」
あかりは強い目で刹那を見据えて告げる。
「うち等が結界張っとくさかいな」
「結界か」
「あんたみたいに。っちゅうかあんたやな」

他ならぬだ。刹那自身の為のものだというのだ。
「怨霊とか悪霊退散のお札たんまり用意してや」
「俺を陣に入れぬというのか」
「そや。そんで戦いの場で決着つけたるわ」
あかりはこう刹那に対して言う。
「楽しみにしときや」
「貴様等を始末すれば封印する者はいなくなる」
刹那は巫女達を鋭い目で見据えながら告げる。
「その時のことを楽しみにしておく」
「戦いの場では！」
「あんた絶対に倒すからね！」
ナコルルとリムルルの姉妹がその刹那に言った。
「一対一であろうとも」
「負けないわ！」
「無理だな。俺は一人では倒せない」
だが刹那はまだ言う。
「俺の力にはだ」
「言いたいことはそれだけかしら」
神楽は声に不機嫌なものを込めて刹那に告げた。
「これ以上いると封じさせてもらうわ」
「ふん。では去ろう」
ここまで言ってだった。刹那は闇の中に消えた。そうしてだった。骸と刹那は退けられた。孫策や巫女達は無事だった。しかしである。
彼等冥界の存在が陣中に入ったことにだ。劉備は深刻な顔でこう言ったのである。
「何とかしないといけないわよね」
「はい、それで今あかりさん達がです」
徐庶がその劉備に話す。
「御札を書いています」

「御札？幽霊に対する？」
「そうです。怨霊退散の御札です」
まさにそれだというのだ。
「それを今物凄く書いておられます」
「じゃあその御札を？」
「陣中のあらゆる場所に貼ります」
そうするというのである。
「そうして彼等の再度の侵入を防ぎます」
「妖術に続いて幽霊もなのね」
「そうですね。相手が相手ですから」
そうしたことになるのも仕方ないとだ。徐庶は劉備に話す。

# 第百十六話　小次郎、仇を取るのことその八

「ですから」
「わかったわ。それじゃあね」
「御札は出来た傍から貼られています」
既に動いているというのだ。
「これで大丈夫だと思います」
「何か。決戦前に」
どうかとだ。劉備は困った顔で腕を組んで述べる。
「色々あるわね」
「そうですね。この戦いは」
「それだけ向こうも必死なのね」
劉備はこう認識した。
「だから仕掛けて来るのよね」
「敵が色々仕掛けて来る時はです」
まさにその時はどうなのか。徐庶も話す。
「それだけ追い詰められているということです」
「じゃあやっぱり」
「はい、こちらはその打つ手を潰してです」
「そうしてなのね」
「痺れを切らした敵を倒せばいいのです」
「それが何時まで続くのかしら」
劉備は腕を組みいささか困った顔になって述べた。
「暗殺なり何なりが続いてるけれど」
「もうそろそろ終わりだと思います」
敵のそうした仕掛けて来る策はだとだ。徐庶は劉備に話す。
「暗殺は最後の手段ですから。政において」
「最後の手段だからなのね」
「そろそろ向こうから仕掛けてきます」

徐庶はそう読んでいた。
「そしてその時にです」
「いよいよなのね」
「はい、決戦です」
徐庶のその声が強いものになった。
「そして勝ちましょう」
「わかったわ。戦うからにはね」
「勝たないといけません」
「若し負けたら」
どうなるか。劉備はこのことも話した。
「この世界は終わりよね」
「オロチや常世の支配する世界になります」
つまりだ。滅亡するというのだ。世界そのものが。
「ですから勝たなければいけません」
「わかってるわ」
劉備もだ。彼女にとっては珍しくだ。
強い声になりだ。そうして言うのだった。
「負けない。絶対に」
「その意気です」
徐庶は微笑んでその主に応える。こうしてだった。劉備達は今度は札で刹那達を退けにかかったのである。その作業は総出であった。
その中でだ。張三姉妹があちこちに札を貼りながらだ。まずは張角が言うのだった。
「何かね」
「どうしたの？」
「姉さん、何かあったの？」
「うん、この御札の文字って」
それはどうかというのだ。その札の字がだ。
「あまり読めないけれど」
「そうね。確かに我が国の言葉だけれど」

だがそれでもだというのだ。張宝が言う。
「御世辞にも奇麗な字じゃないわね」
「これ誰の字よ」
「多分あかりちゃん」
張宝はこう張梁に答える。
「あの娘の字ね」
「何よ、あかりって字が汚いの」
「そうみたい」
まさにそうだとだ。張宝は話す。
「どうやら」
「他の娘の字は奇麗みたいね」
張宝は他の札も見ながら話す。

# 第百十六話　小次郎、仇を取るのことその九

「特に神楽さんの字は」
「ああ、これね」
張梁は手にしているうちの一枚を見て言う。
「この御札が神楽さんのね」
「そう」
その通りだとだ。張宝は次姉に答える。
「あの人が書いた御札よ」
「何かあれよね。御札も個性が出るのね」
張角は今それを知ったのだった。
「その人それぞれで」
「けれどあかりちゃんって法力？そういう魔に対する力凄く強いわよ」
このことは最早言うまでもなかった。あかりの陰陽師としての力はかなりのものだ。
「分身だってできるし」
「そうよね。けれど字はなのね」
「そうみたい。けれどあかりちゃんの力で」
それでだとだ。張宝が話す。
「刹那達を退けられるから」
「だったらそれでいいわね」
張角は彼女らしく感嘆に考えて述べた。
「字が読めなくても魔を退けられるのなら」
「姉さんってそういうところお気楽よね」
張梁はそんな姉に少し呆れて突っ込みを入れた。
「字の読める読めないじゃなくて魔を祓えるかどうかって」
「けれどその通り」
張宝は長姉の考えに賛同した。

「幾ら字が奇麗でも御札は御札だから」
「ううん、確かにそうだけれどね」
張梁は少し考えてからだ。何だかんだという感じで姉の考えに傾いた。
「御札って使えないと意味がないから」
「何か御札を書いてる人達の力ってどれもね」
どうかというのだ。彼女達の力は。
「お姉ちゃんにもわかるから」
「まあね。あたし達一応妖術も使えるしね」
「少しだけれど」
妹達もここで妖術のことを話す。
「こういうの多少だけれどわかるし」
「感じ取れるから」
「これだけの力があれば怪しい存在は中に入って来られないわね」
「じゃあ連中はいよいよ手がないかしら」
「決戦、遂に」
「ううん。何となくだけれど」
ここでだ。張角は少し考える顔になり言った。
「もっと歌いたいけれど」
「歌ならそれこそ好きなだけ歌ってるじゃない」
「また舞台があるから」
「それはそうだけれど」
それでもだというのだった。そうしてだ。
張角は再びだ。妹達に話した。
「何か派手で思い切り奇麗な舞台をしたいけれど」
「じゃあまた偶像支配と勝負する？」
「大喬、小喬姉妹とも」
「それもいいかしら」
そんな話をしながらだ。三姉妹はかなり気楽に札を貼っていた。
そんな彼女達を見てだ。

テリーがだ。笑いながらアンディと丈に話した。
「あの三人も欠かせない娘達だな」
「あれっ、兄さんアイドル好きだったの？」
「初耳だぜ、そりゃ」
「いや、そうした意味じゃなくてな」
ファンやそうした意味でのことではないというのだ。
「あれだよ。このとんでもない戦いにだよ」
「あの娘達の力が必要だっていうんだね」
「そういうことか」
「ああ、そうだよ」
まさにその通りだとだ。テリーは二人に話す。
「歌の力も凄いしな」
「確かに。黄巾の乱の時は凄かったしね」
「歌だけであれだけのことができたからな」
「歌の力って凄いんだよ」
テリーは断言さえした。
「あの娘達の歌にしろな」
「じゃあその歌の力であの娘達も」
「戦いを終わらせる力になるか」
「そうなるさ。だからな」
ここでまた言うテリーだった。微笑んで。
「俺も音楽の方でも頑張るか」
「ああ、ドラムね」
「そっちか」
テリーはドラムもやっている。そちらでも知られている。
だからだ。彼はそれにも力を入れるというのである。
「やるさ。そっちもな」
「ううん、私はどうも音楽は弱いけれど」
「俺は演歌専門だしな」
アンディは静寂を好む。丈は演歌一筋だ。それぞれ音楽の好みは

かなり違う。
「だから兄さんのそうしたことには何も言えないね」
「ドラムで演歌は無理だしな」
「ああ、無理だ」
実際にそうだと断言するテリーだった。演歌については。
「悪いな、それは」
「いや、わかるからいいさ」
丈もそれはいいとした。
「まあとにかくな」
「ドラムもやっていいな」
「それで戦いに勝てるんならな」
「頑張ってくれてね」
「ああ、そうさせてもらうな」
テリーは笑って応えてだった。ドラムの方にも力を入れることを決意したのだった。音楽もまた、だ。この大きな戦いにおける力になっていたのであった。

第百十六話　完

２０１１・１０・１２

# 第百十七話　社、三姉妹と競うのことその一



社はだ。彼等の陣中においてこんなことを言い出した。
「何か打つ手打つ手がしてやられてるけれどな」
「忌々しいことにな」
左慈が実際に忌々しげな口調で返す。
「あの連中も小賢しい」
「それでそろそろと考えています」
于吉は冷静に社に返す。
「戦いを」
「いや、ちょっと待ってくれ」
ここでだ。社はこう切り出した。
「まだそれには早いだろ？」
「早いといいますか」
「ああ。それよりもな」
ここで笑ってだ。彼はこんなことを言った。
「俺も遊びたくなってきたんだよ」
「遊びですか」
「何をする気だ？」
「暫く楽器に触ってなかったからな」
それでだというのである。
「ちょっと派手に演奏してみたくなってな」
「そうか。音楽か」
音楽と聴いてだった。左慈は述べた。
「それであの連中をかき乱すか」
「決戦前に少し戦力を削っておかないか？」
楽しげな笑みのままだ。社は言うのである。

「連中との戦いの前にな」
「そうですね。面白いですね」
于吉は微かに笑って社の言葉に応えた。
「それではです」
「ああ、ちょっとやらせてくれよ」
「はい、どうぞ」
こう話してだった。彼はすぐにだ。シェルミーとクリスに声をかけた。二人も彼の言葉を聞いてだ。
楽しげに笑ってだ。こう話したのだった。
「いいわね。それじゃあね」
「楽しくやろうよ」
これが二人の言葉だった。
「じゃあギターもあるし」
「社のドラムもあるよ」
「ああ、じゃあ三人でやるか」
社はいつもの三人でいこうと思った。ところがここでだ。
バイスとマチュアも来てだ。それで言うのだった。
「私達も入れてくれるかしら」
「同じオロチの誼でね」
「別にいいけれどな」
特に悪くないとだ。社はまずは二人の申し出を受け入れた。
しかしそれと共にだ。彼はこうも言った。
「けれどな」
「私達が楽器を使えるかね」
「そのことよね」
「ああ、そっちは大丈夫か？」
こう二人に尋ねたのである。楽器のことをだ。
「本当にな」
「ダンスじゃ駄目かしら」
「それは」

「ああ、それがあったな」
「そうよ。歌に演奏だけじゃないでしょ」
「その他のものもあるじゃない」
こうだ。二人は楽しげな笑みで社に話すのだった。
「そうでしょ？だからね」
「私達はそれでいきたいんだけれど」
「いいぜ」
社はあらためて笑顔で応えた。
「じゃあ五人でいくか」
「こちらは五人ね」
シェルミーが楽しげに言った。
「何か面白い感じになるわね」
「五人か」
「うん。向こうにもオロチはいるけれどね」
クリスは彼等のことに言及した。
「山崎とレオナだね」
「こちらにはゲーニッツもいるわ」
シェルミーはゲーニッツについて話す。

# 第百十七話　社、三姉妹と競うのことその二

「とはいってもね」
「私は今回は遠慮させてもらいます」
そのゲーニッツが出て来て笑顔で話す。
「音楽は聴く方です」
「ああ、いいのか」
「はい。教会の音楽は好きですが」
この辺りは牧師としてである。
「ですが今はそうさせてもらいます」
「わかったぜ。じゃあ五人で行くな」
「見守らせて頂きます」
こう話してだった。彼等は船に乗りだ。劉備達連合軍の陣地に向かった。そうしてだ。
船の上からだ。楽器を使い演奏をはじめたのだった。それと共にだ。
クリスが歌い。バイスとマチュアがダンスをはじめる。すると。
急にだ。連合軍の兵達が浮き足立ってきた。
「な、何だ!?」
「あの船の連中オロチの奴等だよな」
「そいつ等が何をするんだ!?」
「歌ってるけれどよ」
「舞も舞ってるし」
「あれ何だ!?」
「あっちの世界の音楽か!?」
誰もが戸惑いを見せる。そしてだ。
出陣しようにもだ。彼等は。
急に動きを止める。それを見てだ。猛獲が驚きの声をあげた。
「大変だニャ！皆動かなくなったニャ！」

「これどういうことなの！？」
猛獲と共にいるチャムチャムも驚いている。
「何か皆急におかしくなって」
「アノ音楽ノセイ」
ここでタムタムが言う。
「おろちノ奴等ノ音楽ノセイ」
まさにそのせいだとだ。猛獲達に話す。
「コノママダト大変ナコトニナル」
「じゃあどうすればいいニャ！」
「このままだと大変なことになるけれど」
猛獲もチャムチャムも動かなくなった兵達を見ながらタムタムに問う。
「何か今度はお互いに睨み合いだしたニャ」
「喧嘩しそうだけれど」
「タムタム思ウ」
具体的にどうかとだ。タムタムは話した。
「音楽ニハ音楽」
「音楽ニャ！？」
「それしかないのね」
「タダシちゃむちゃむハ駄目」
自分の妹にはこう話す。
「歌下手ダカラ駄目」
「ううん、僕歌いたかったのに」
チャムチャムは兄に言われ残念な顔になる。しかしだった。
何はともあれ対策は決まった。こうしてだった。
劉備達はすぐに集まりだ。誰を歌わせるか話した。
すぐにだ。袁術が名乗り出る。
「ここはわらわが行くのじゃ」
「そうですね。美羽様が出られるのなら」
「私も是非」

すぐに張勲と郭嘉も名乗り出る。
「偶像支配で対抗しますか？」
「私達三人で」
「いえ、ちょっと待って」
ここで言ったのは荀？だった。見れば怪訝な顔になっている。
「今軍全体が浮き足立っているから」
「そちらですか」
郭嘉もすぐに察して返した。
「兵達の動揺を抑える為に」
「というか沈静化させないといけないから」
荀？が言うのはこのことだった。
「だからね」
「ううむ。ではわらわ達はそちらに向かうか」
袁術も荀？の話を聞いて素直に頷いた。
「このままでは同士討ちになってしまうしのう」
「それとなのです」
今度言ったのは陳宮だった。

# 第百十七話　社、三姉妹と競うのことその三

「軍全体を抑えるにはもっと人手が必要なのです」
「それならニ喬もいるわね」
孫策がすぐに述べた。
「この娘達にも働いてもらいましょう」
「わかりました」
「それなら私達も」
こうしてだった。二人も歌うことになった。その他にもだった。
「とにかく軍全体が浮き足立っているのは問題よ」
「それなら私達も総動員ですね」
劉備は孫策の言葉に続いた。
「私達も陣の各所で歌って」
「とにかく歌える人間は総動員ね」
曹操も言った。
「私も一応歌えるし」
「それなら私も」
「私もね」
劉備に孫権も続くのだった。とにかくだ。
歌える面々が次々と挙げられる。別の世界の面々もだ。
アテナもだった。ケンスウに推挙される。
「それで私も？」
「そや。気合入れていくんや」
ケンスウは力瘤を入れてアテナに告げる。
「ええな。派手にいけや」
「じゃあまたするのね。バンドオブファイターズ」
「そや、まさにあれや」
こう言ってだ。ケンスウはアテナの背中を押したのだった。そしてだ。

彼女も出ることになった。その他にもだった。
テリーにナコルル、草薙もだ。出るのだった。
この四人ならばだった。草薙は八神を見て尋ねた。
「御前はどうするんだ？」
「俺か」
「ああ。ベースは持っているよな」
「無論だ」
この世界においてもだ。八神はベースを持っていた。
そしてだ。そのベースを実際に出して言うのだった。
「こいつは俺の身体の一部だ」
「そう言うんだな」
「それでどうするんだ？」
「オロチは俺を利用しようとした」
八神は表情を崩さず述べた。
「そのことは何があろうと忘れない」
「それならか」
「そうだ。奴等が動くのなら俺も動く」
そうするというのである。
「必ずだ」
「わかった。それならな」
こうして八神も加わった。これでいつもの五人になった。
その五人に加えてだった。劉備が笑顔で言った。
「張三姉妹も欠かせないわよね」
「あっ、やっぱり出してくれるんだ」
「今自分から言おうって思ってたけれどね」
「劉備さんから言ってくれるなんて」
「だって歌なのよ」
劉備は天真爛漫そのものの口調で話す。
「歌だったら張三姉妹が出ないとね」
「有り難う。やっぱり劉備さんよね」

「あたし達のこといつも応援してくれてるし」
「こうして推挙もしてくれるのは嬉しいわ」
こうしてだった。三人も出ることになった。こうしてオロチ達の音楽に総員で対抗することになった。しかしだ。
ここでだ。出て欲しくない連中が出て来たのだった。
「じゃあ出番ね」
「あたし達の出番なのね」
出た瞬間でまたしても爆発が起こった。天幕が瞬く間に焦土になる。
だがその中でだ。妖怪達だけは言うのだった。
「あたし達の歌なら誰もが悩殺されるわ」
「さあ、聴いて頂戴」
「はっきり言わせてもらうわ」
曹操は何とか起き上がりながらだ。怪物達に返す。
「あんた達はいいから」
「あら、どうしてなの？」
「絶世の美女二人の歌を聴きたくないの？」
「どう言えばいいのかしら」
曹操はこっそりと荀？に囁く。

## 第百十七話　社、三姉妹と競うのことその四

「あの二人に納得してもらう言い方は」
「ええと、ここはですね」
荀？もだ。あちこち煤だらけになりながらも何とか起き上がりつつ応える。
「あの二人には敵陣にでも行ってもらってですね」
「そこで歌ってもらうのね」
「あの二人の歌が若し陣中で歌われると」
それならどうなるか。想像に難くなかった。
「軍はそれだけで全滅します」
「そうね。確実にね」
「全滅で済めばいいです」
こう言うのだった。
「戦力の九割は失われます」
「そうね。それだけは防がないと」
「はい。ですから」
こうした話をしてだった。曹操はだ。
怪物達にだ。レトリックの限りを尽くして話した。
「是非お願いしたいところだけれどね」
「そうよね。だからね」
「今から歌わせてもらうわ」
「何かね。敵も聴きたいらしいのよ」
こう言い繕うのだった。
「だから。敵陣で歌ってくれるかしら」
「ううん、敵もあたし達の美しさに魅了されたのね」
「敵でさえ魅了する。あたし達って本当にね」
「罪な女ね」
「全くだわ」

「だからお願いできるかしら」
曹操は究極の戦略兵器を敵に打ち込もうともしていた。
「そちらでね」
「ええ、わかったわ」
「それならね」
二人も快諾してだ。そのうえでだ。
瞬間移動で消えた。それを見届けてからだ。曹操は安堵した顔で言った。
「これでいいわね」
「はい、敵軍は大混乱に陥ります」
「ええ、確実にね」
そのことをいいとしてだ。荀？に話す。
「私達の陣は守られてね」
「そして敵軍はです」
「大混乱に陥るわ」
「本当に危ないところでした」
荀？は心から安堵していた。そうしたやり取りの中でだ。
曹操はあらためてだ。三姉妹に話した。劉備と同じく。
「じゃあいいわね」
「うん、いいわ」
「それじゃあ頑張らせてもらうからね」
「歌うわ」
三姉妹も快諾してだ。そのうえでだ。
舞台の設定にかかる。それも陣の至るところでだ。それを進めながら袁紹が言う。
「さて、舞台の設置が終わりましたら」
「鑑賞ですね」
「その舞台の」
「ええ、そうしますわ」
こう辛姉妹にも答える。その中でだ。

全ての舞台の演出を担当しているだ。蔡文姫に問うたのだった。
「ところでなのですけれど」
「はい、先程のお話ですね」
「あの男でしたのね」
「間違いありません」
蔡文姫も真剣な顔で袁紹に答える。
「あの首は間違いなく。腐っていたとはいえ」
「貴女を攫い匈奴に売った男ですのね」
「紫鏡、屍といいましたが」
その男のことだった。
「あの男こそが私を都から攫って」
「それでは、ですわね」
袁紹はその話を聞いて眉を顰めさせた。そうして言うのだった。
「貴女を攫わせたのもまた司馬尉か于吉かの策略でしたのね」
「オロチや常世とも考えられますが」
「どちらにしても同じですわ」
彼等が結託しているからだ。それでだというのだ。
「貴女を都から遠ざけたことは変わりませんわ」
「そのことですが」
「考えられることはです」
ここでもだ。田豊と沮授が袁紹に言ってきた。

## 第百十七話　社、三姉妹と競うのことその五

「名家の出身で教養も豊かな藍玉殿を司馬尉達が疎ましく思ったのでしょう」
「それで都から遠ざけたのかと」
「そういうところですわね」
袁紹も察しながら述べる。
「この娘は先の帝の憶えも目出度く宦官達も一目置いてましたし」
「大将軍も側近にされようとしていましたし」
「ですから」
「司馬尉にとっては邪魔以外の何者でもありませんでしたわ」
袁紹は今言った。
「それ故に、ですわね」
「そう考えられます」
「憶測ですが」
「いえ、確かですわ」
それはだ。間違いないと答える袁紹だった。
「藍玉がいなくなり司馬尉は大将軍に一気に接近しましたし」
「だからこそですか」
「あの男を使って拉致を」
「司馬尉のしそうなことですわ」
袁紹はこうも言った。
「若しあそこでわたくしがこの娘を見つけていなければ」
「はい。あのまま匈奴のところで虜囚になっていたままでした」
「あの最果ての地で」
「私もそう思います」
蔡文姫自身もだ。そう思っているのだった。
「あの時麗羽様に見つけて頂けなければ」
「もっと早く気付くべきでしたわ」

袁紹は眉を顰めさせたまま述べる。
「貴女のことも司馬尉のことも」
「どちらもですか」
「そうすればあの女をより早く除けましたのに」
「申し訳ありません、我々もです」
「気付けませんでした」
田豊と沮授が謝罪する顔と声で袁紹達に述べる。
「あの司馬慰の正体にです」
「全く以て」
「仕方ありませんわ。これはわたくしの不明」
だからいいというのだ。袁紹は歯噛みしつつ述べる。
「あの女のことは常に意識していたというのに」
「そして今ですね」
蔡文姫がここで言う。
「あの女は異形の者達と共に」
「ええ、あの場所にいますわ」
袁紹は見た。対岸にある敵陣の方を。
「必ず。勝ちますわ」
「そうして天下を救いましょう」
「あの者達を滅ぼして」
田豊と沮授も応えてだった。まずは舞台を整える。社達の演奏は続き陣中の不穏な空気が増していたのでだ。舞台の設置は急に進められていた。それを見てだ。
社達は船の上からだ。楽しそうに話す。休憩の中でだ。
「いいねえ。向こうもやる気だよ」
「そうだね。それこそ総動員でね」
「私達に対抗する気ね」
クリスとシェルミーも応える。
「まずは陣中の混乱を抑えるんだ」
「そして私達にも戦力を向けるみたいね」

「あの三姉妹が来るわね」
「私達が利用していた」
バイスとマチュアは彼女達に注目していた。見れば港に設置されていく舞台のところに三姉妹がいた。そして彼女達以外にもだ。あの面々もいるのだった。
「それに草薙京と八神庵」
「あの二人もね」
「へっ、あの二人は何だかんだいってよく一緒にいるな」
社も彼等の姿を見て楽しそうに言う。
「他の連中もいるしな」
「麻宮アテナにテリー＝ボガード」
「それにナコルルだったわね」
「ああ。あの五人は音楽に力があるからな」
そのうえでの五人だというのだ。

# 第百十七話　社、三姉妹と競うのことその六

「それで一緒になってるからな」
「で、僕達と争うんだ」
「そうするのね」
シェルミーとクリスも楽しそうに話す。
「三姉妹とあの五人」
「数ではこちらが劣勢ね」
「音楽は数じゃねえよ」
社は数についてはあっさりと受け流した。
「心なんだよ」
「そうだね。どれだけ人の心を操れるか」
「そうした話だからね」
「ああ。だからやるぜ」
社はまた言う。
「勝負をな」
「よし、それなら」
「再開ね」
こうしてだった。オロチの彼等は再び演奏に入る。それと同時にだ。
三姉妹もだ。舞台ができたのを見てだ。そこにあがる。アテナ達も既に自分達の舞台でスタンバイしている。そのアテナと張角がだ。それぞれの舞台から話をする。
「それではですね」
「うん。歌は替わりばんこでね」
「歌いましょう」
「そうしようね」
お互いににこりと笑ってだ。そうしてである。
まずはだ。張角が妹達に告げる。

「じゃあ地和ちゃん、人和ちゃん」
「ええ姉さん、歌うわよ」
「思いきりね」
「あの時のことは忘れてないんだから！」
張角はきっとした顔でオロチの船を見て言う。特にバイスとマチュアを見て。
「私だって騙されたら怒るんだから！」
「そうよ、よくもやってくれたわね！」
「許さない」
張梁と張宝も言う。こうしてだった。
三人は三人の歌を歌う。その時にだ。
陣の至る場所でだ。歌える面々が歌っていた。
「わらわ達の歌を聴くのじゃーーーーーーーーっ！」
「では皆の者行くぞ！」
「しかと聴くのだ！」
袁術も関羽も張飛もだ。それぞれの舞台から兵達に告げる。それをはじまりとして。
それぞれ歌いだ。オロチの術に対する。そして。
そのオロチ達にだ。三姉妹とアテナ達が向かう。お互いに一曲ずつ交代しながらオロチの歌に対する。それに対してオロチは常に彼等だけで向かっていた。
その交代で攻めるやり方がだ。次第に功を奏してきた。
「あれっ、いけてる！？」
「そうね。奴等押されてるわ」
「私達の歌に」
三姉妹は自分達の歌を歌い終えてアテナ達の歌を聴きながらオロチ達を見て言う。
「何かオロチの歌が押されてきてるよね」
「少しずつだけれどね」
「勢いは私達に傾いてるわ」

三人にもそのことが次第にわかってきた。
「ううんと。交代で歌ってるせいかな」
「あたし達とアテナ達は大体互角だし」
「それにオロチとも」
実力が互角ならばだ。後は体力勝負だった。そしてそうなるとだった。
「私達は交代でやってるから体力には余裕があるから」
「連中は常に歌わないといけないし体力使ってるわね」
「その分だけこちらが有利」
そういうことだった。社が否定した数の差が出ていた。
アテナ達が歌い終わりまた三姉妹の歌と舞がはじまる。それに対してだ。
クリスは歌いながらだ。苦しいものを感じていた。それで言うのだった。
「ううん、少しずつだけれど」
「そうね。向こうがね」
「押してきてるな」
「どうする、社」
彼はここでドラムの社に尋ねた。

# 第百十七話　社、三姉妹と競うのことその七

「何か分が悪いよ」
「それに陣の兵隊の奴等も術が解けてきてるな」
「うん、そうなってきてるね」
「まずいな、こりゃ」
社は情勢を冷静に見て述べた。
「このままじゃ策は失敗だな」
「ならここは一気に」
「切り札を出すの？」
バイスとマチュアはダンスを続けながら社に尋ねる。
「オロチを降臨させて」
「その力で」
「いや、それにはまだ力が全然足りないんだよ」
だからだ。それはできないというのだ。
「まだこれからだよ」
「じゃあ今はなのね」
「凌ぐしかないのね」
「とりあえず体力勝負でも自信はあるけれどな」
伊達にオロチではない。それはあった。
「暫くは辛い戦いになるな」
「それは仕方ないわね」
シェルミーも演奏をしながら少し残念そうに述べた。
「けれど凌いでいって」
「ああ、音楽で反撃するぜ」
こう言ってだ。社は今は耐えようとした。そうして一刻程彼等にとって苦しい戦いを続けた。
その間連合軍の全ての舞台で歌い続けている。曹操は彼女と劉備の曲を歌い終えて少し休憩を取る中でだ。こんなことを呟いた。

「そろそろだと思うけれど」
「そろそろって？」
「あの妖怪達が暴れる頃よ」
鋭い目でだ。劉備に話すのだった。
「そうなったらいよいよよ」
「ええと。妖怪って」
「ほら、あの無気味なオカマ二匹よ」
完全に人間扱いしていない。
「あの連中が敵陣に向かったでしょ」
「はい。大爆発の後で」
「奴等が仕掛けるわ」
こう言うのである。
「だからそれが起こるから」
「じゃあこの歌も」
「終わるわ」
その終わり方はどういったものかというと。
「私達の勝ちよ」
「兵隊さん達もこれで」
「完全に元に戻るわ」
「もうすぐなんですね」
劉備はそのことがわかってだ。笑顔になって言う。
「皆が助かるのは」
「そうよ。それにしても」
曹操は劉備のその天真爛漫な笑顔を見てだ。少し苦笑いになって述べた。
「貴女は勝つことよりも兵達のことが心配なのね」
「ええと。勝つことは確かにとても大事ですけれど」
「それでもなのね」
「はい。兵隊さん達が無事で勝てたら最高です」
「そういうことなのね」

「曹操さんは違うんですか？」
逆にだ。劉備は少しきょとんとした顔になって曹操に尋ねた。
「兵隊さん達が無事なのは嬉しくはないんですか？」
「確かに大事よ」
曹操もそのことは否定しない。
「けれどそれでもね」
「戦いに勝つことがですか」
「ええ。それが第一と思っていたわ」
言葉は既に過去形だった。曹操が気付かないうちにそうなっていた。
「その為には必要ならね」
「兵隊さん達はですか」
「多くの犠牲も仕方ないと思っていたわ」
軍略家としてだ。そう思っていたのだ。
「けれど貴女を見ていると」
「私をですか」
「甘いと思うわ」
こうも言った。それは否定できなかった。

# 第百十七話　社、三姉妹と競うのことその八

「それでもね。あえて兵達の心配をする」
「そのことがですか」
「違うわね。貴女みたいな考えには中々なれないわ」
今度は優しい笑みになって言う曹操だった。
「けれどそういう貴女だから」
「私だから」
「何かができるのね」
こう言ってだ。心の中で劉備を認めるのだった。彼女達は今はあくまで歌い続ける。
そしてだ。その戦いが遂に終わる時が来た。歌い続ける社達のところにだ。
朧が姿を現しだ。こう囁いたのである。
「すぐに陣に戻ってくれるかのう」
「何かあったのかよ」
「うむ、あの怪物共が現れた」
そうなったというのである。
「そして連中の歌でじゃ」
「何だ？陣がとんでもないことになっておるのか」
「左様じゃ。兵達が次々に吹き飛ばされておる」
歌によってだ。そうなっているというのだ。
「歌には歌じゃ。頼めるか」
「仕方ねえな」
その話を聞いてだ。社は歯噛みしながら述べた。
そうしてだ。オロチの同胞達に告げるのだった。
「おい、残念だがな」
「撤退だね」
「ここで」

「ああ、そうするぜ」
こう彼等に告げるのである。
「忌々しいがな」
「仕方ないね。流石に陣を壊されたらね」
「戦いは負けよ」
クリスとシェルミーはさばさばした感じで言う。
「それなら今はね」
「帰りましょう」
「今日のところは奴等の勝ちにしておくさ」
社は三姉妹やアテナ達を見て述べた。
「あくまで今日のところはな」
「ええ。けれど次はね」
「こうはいかないわ」
「そろそろ余興は終わりだな」
社はバイスとマチュアの話にも応えながら話す。
「本番をはじめるか」
「僕達の力を最大限に使ってね」
「それでなのね」
「奴等はあそこで天麩羅になるぜ」
社はいつもの楽しげな笑みになって言う。劉備達の陣を見ながら。
「木ばかりだからよく燃えるだろうな」
「それに風があればね」
クリスは右手を前に掲げ手の平を上にやった。そこに青い火の玉が沸き起こる。
「確かに妖術は封じられたけれどね」
「俺達の力は自然の力だからな」
「術では防げないわよ」
社もシェルミーも楽しげに笑いながらだ。今は水平線の彼方に消えていく。
彼等が消えたのを見てだ。草薙は鋭い目で述べた。

「とりあえずは、だな」
「奴等は諦めが悪い」
八神もだ。同じ目で続く。
「すぐに来る」
「その辺りは御前と同じだな」
「俺とか」
「何かっていうと俺につっかかってくるだろ」
「俺はつっかかりはしない」
八神はそれは否定する。
「俺は貴様の命を狙っている。それだけだ」
「それだけだってんだな」
「そうだ。奴等とは違う」
あくまでオロチとは違うというのだ。ここに八神とオロチの決定的な違いがあった。

# 第百十七話　社、三姉妹と競うのことその九

「そのことは言っておく」
「確かにな。執念深くてもな」
「奴等は滅ぼすだけだ。自然とやらの我儘でな」
「自然の我儘かい」
「奴等の意志は自然の総意ではない」
八神は見抜いていた。オロチとはどういったものか。
「オロチは自然を司る神の一柱に過ぎないのだからな」
「人間は自然の敵じゃないってんだな」
「人間もまた自然の一部だ」
八神は一言で看破してみせた。
「奴等はそれがわかっていないだけだ」
「成程な。じゃあ奴等はあれなんだな」
草薙も八神の話を聞いてだ。理解したのだった。
「妄執でしかないんだな」
「俺には妄執はない」
八神のそのことは否定する。
「それは言っておく」
「わかったぜ。じゃあ俺達はその妄執をだな」
「焼き尽くす」
それが八神の考えだった。オロチに対する。
「オロチは。確かにな」
「俺もそうするけれどな」
「勝手にしろ」
草薙に対してはこう言う八神だった。
何はともあれ戦いは終わった。今回の戦いは。
兵達の虚脱も喧騒も終わりだ。陣は元に戻った。三姉妹はそのことを明るく喜んでいた。

「やったわね。勝ったわよ」
「ええ。あたし達の歌の勝利よ」
「やったわね」
「それじゃあね」
張角が元気よく言う。
「お祝いに御馳走食べようよ」
「孔明ちゃんや鳳統ちゃんにお願いしてね」
「それと曹操さん達にも」
三人はここぞとばかりに言う。
「あとあの秦兄弟の青い方にもね」
「舞ちゃんもお料理上手だしね」
「ロック君にもお願いして」
こうしてだった。三姉妹は彼等の御馳走をねだる。それを受けてだ。
典韋がだ。巨大な中華鍋を操りだ。料理を作っている。それを見てだ。
隣にいる黄蓋もだ。エプロン姿で言う。
「勝ったら勝ったでのう」
「忙しくなりますね」
「全くじゃ。歌で出番がないと思うていたらじゃ」
「まさか。料理での出番になるとは思いませんでしたね」
「うむ。しかしじゃ」
だがここでだ。黄蓋は笑ってこんなことを言った。
「悪い気はせん」
「御祝いのお料理ですから」
「作る方も楽しい」
それでだというのだ。
「望むところじゃ」
「そうですね。孔明ちゃん達も頑張ってますし」
「わし等も励むぞ」

「はい」
典韋も笑顔で応える。リチャードとボブもだ。料理を作っている。
それを見てだ。
孔明がだ。驚きながら言う。鳳統も一緒だ。
「へえ、何か凄いですね」
「美味そうか？」
「お肉をそのままぶっすりとやってですか」
「ああ。それで焼くんだ」
そうした料理だというのだ。
「シェラスコという」
「シェラスコですか」
「ブラジルの料理だ」
「リチャードさんのお国の」
「そうです。パオパオカフェの人気メニューの一つです」
それがそのシェラスコだというのだ。今はボブが話した。

# 第百十七話　社、三姉妹と競うのことその十

「とても美味しいですよ」
「とにかく肉をたらふく食べることだ」
リチャードは陽気に笑って話す。
「祝いだからな」
「ではどんどん焼いていきますよ」
ボブは笑顔で話す。
「鰐の肉もありますから」
「あっ、丈さん用ですね」
鳳統は鰐と聞いてすぐに察した。
「鰐は」
「勿論唐揚げもあります」
丈の好物のだ。それもだというのだ。
「とにかく色々なものをふんだんに作りますので」
「それで祝おうな」
「そうですね。そしてです」
「そろそろ決着の時ですし」
孔明と鳳統はここでこんなことも言った。
「この赤壁で決めましょう」
「是非共」
「というかですね」
ここでボブは肉を焼きながら二人に言った。
「何か連中もしつこいですね」
「そうだな。それもかなりな」
リチャードも弟子のその言葉に応えて述べる。
「あの手この手で来るしな」
「しかも陰湿なやり方ばかりです」
「暗殺や扇動、そうしたことばかりだ」

「それは彼等が陰の世界の存在だからかと」
「そのせいだと思います」
軍師二人はこうボブ達に話した。
「例えばボブさんは陰謀とかお嫌いですね」
「はい、嫌いです」
そのことははっきりと答えるボブだった。
「私の性分ではありません」
「そういうことです。人にはそれぞれ属性があります」
「陰陽、それに五行で」
この国独特の陰陽五行の思想に基くというのだ。
「ボブさんは陽でそして火です」
「それなら極端に明るくなります」
「そうなるんですね」
「はい、そしてそれに対してあの人達はです」
「陰です」
彼等はそれだというのだ。
「白装束の者達もオロチも常世もです」
「まず陰があります」
そしてだ。その陰もだというのだ。
「それもかなり深い」
「闇の深遠にある様な」
「深遠か」
リチャードはそれを聞いてだ。目を曇らせた。
そのうえでだ。こう言うのだった。
「だからか」
「はい、ああした策ばかり仕掛けてくるのです」
「闇ですから」
「大体わかりました」
それでわかったとだ。ボブは答えた。
そうしてだ。肉を突き刺した長い鉄の串を出しながら孔明と鳳統

に答えた。
「それなら僕達はその彼等とですね」
「はい、ボブさんのやり方で向かうべきです」
「私達のやり方で」
「同じことをしては駄目なのですね」
「それをすれば私達も闇に堕ちます」
「そうなってしまってはどうしようもありません」
それでだというのだ。
「私達のやり方で向かいましょう」
「そして勝ちましょう」
「では今はだ」
リチャードもその肉を刺した串を出して言う。
「祝いをしよう」
「はい、それでは」
「皆で楽しみましょう」
孔明と鳳統はその肉の塊を見て笑顔になる。それは澱みのない少女の笑みだった。

第百十七話　完

２０１１・１０・１４

# 第百十八話　程?、猫を愛でるのことその一



社達は急いで彼等の陣に戻った。するとそこは。
かなり荒れていた。あちこちが破壊されている。その陣を見てだ。
社は目を顰めさせてだ。于吉達に尋ねた。
「やっぱりあれか?」
「はい、あの二人によってです」
「ここまでやられた」
その通りだとだ。于吉と左慈が彼の問いに答える。
「いきなり出て来てまずは爆発が起こりです」
「陣がかなりやられた」
まずは登場の時のいつものそれによってだというのだ。
「そして歌を歌うとです」
「爆発がさらに起こった」
「陣は半壊してです」
「兵の損害は二割を超えている」
「おいおい、そりゃまた凄いな」
社も話を聞いていささか引いている。真顔と苦笑いが混ざったそんな顔でだ。
「登場と歌だけでか」
「はい、それだけで」
「この有様が」
「あの無気味な連中だよな」
これだけで話がわかる。
「ピンクのビキニに辮髪のおっさんと褌にタキシードの髭のおっさんの二人だよな」
「恐ろしい歌だった」

左慈ですら言うことだった。
「聴いた兵達が次々に悶絶し死んでいった」
「それも瞬く間にです」
「俺達ですら倒れそうになった」
「そうした歌でした」
「聴かなくてよかったな」
社はここでは真顔で話した。
「聴いてたら俺も危なかったか」
「主な同志達に死者も倒れた方もいませんが」
「兵達の犠牲が多い」
「少し戦力を立て直さないといけません」
「戦いを挑む時をずらす」
「仕方ないね」
クリスもそのことを弁えて述べた。
「じゃあ暫くの間はここで大人しくしてだね」
「はい、待ちましょう」
「今はな」
こう話してだった。彼等は戦力の立て直しに取り掛かった。そしてそのことをだ。
他ならぬ怪物達がだ。劉備の前に出て来て言った。
ようやく混乱を収めて落ち着いてきた彼等のところにだ。いきなり出て来てだ。
またしても大爆発を起こしてからだ。誇らしげに言うのだった。
「あたし達の最高の歌で魅了してきたわ」
「皆悶絶死していたわ」
「敵ながら同情するで」
張遼はあちこちを黒焦げにしながら立ち上がって述べた。
「あんた達の歌受けたんかいな」
「そうよ。もう瞬く間にどんどん死んでいってね」
「凄かったんだから」

「どんな歌なんや」
李典には想像できないものだった。無論彼女もあちこち爆発の影響でッ黒焦げになっている。それは他の面々も同じである。
「あんた達の歌はうちのからくりなんてもんやないな」
「というかあれなのか？」
楽進は真剣に言った。
「あちらの世界のあの」
「核兵器か？」
ロックが楽進の話に応える。
「あれのことか？」
「はい、あれの様なものでしょうか」
「近いな」
実際にそうだと答える楽進だった。
「そうじゃないと敵陣をそこまで潰せない」
「実はなのです」
于禁は恐ろしい話をした。
「敵陣の方から茸みたいな形をした雲が起こるのを見ました」
「それ、確実だぜ」
ロックは于禁の話を聞いて間違いないと返した。
「この連中の歌は戦略兵器だよ」
「戦略兵器ですか」
「ああ。それこそ一発で国だって潰せるな」
彼等の世界の彼等の時代のその兵器のことをだ。ロックは楽進に話す。

# 第百十八話　程？、猫を愛でるのことその二

「それだよ」
「ううむ、恐ろしい話ですね」
楽進も流石に唖然となる。
「この方々は生きるそれなのですか」
「ああ、まさに生きる戦略兵器だ」
そこまでだというのだ。
「人間核弾頭とかよく言われたけれどな、俺の世界じゃ」
「実際にそうだって奴はいなかったぜ」
凱も唖然となっている。
「ったくよ。リアルで化け物だな」
「本当に人間なのかよ」
「人間離れした美貌よ」
「凄いでしょ」
あくまでこう言う二人だった。
「どう？今だってたっぷりお化粧してるから」
「悩殺されるでしょ」
二人で身体をくねらしウィンクさえする。その攻撃を受けて卒倒しそうになりながらだ。ハーマンがこうその二人に尋ねたのだった。
「とにかくだ。敵はかなりの損害を受けたんだな」
「ええ、そうよ」
「陣は半壊、敵兵は二割ね」
「完璧にやっつけたから」
「一曲歌ってね」
「わかった」
ハーマンは二人の話を聞いて頷いた。
そしてそのうえでだ。同志達にこう話した。
「なら敵は暫くは動けないな」

「そうだな。そこまでやられればな」
関羽もハーマンのその話にうなずく。
「当分は戦力の立て直しに忙しい」
「なら今のうちにこちらも備えよう」
これがハーマンの提案だった。
「船の配置は布陣をな」
「実はその船なんだけれど」
孫尚香がその船の話をする。
「今のところ繋いでいるのよ」
「それで陣にしているのよ」
孫策もこのことを話す。
「河北や河南出身の兵も多いから船酔いするからね」
「けれど。その人達も慣れたみたいだから」
「船を離していくわね」
「それがいいですね」
徐庶は孫姉妹のその提案に賛成の言葉を述べた。
「さもないと火計を仕掛けられた時に船があっという間に全部燃えてしまいます」
「只でさえ連中には火を使う奴がいるんだ」
草薙がこのことを指摘する。
「そいつにやられたらことだからな」
「ああ、あの小さいのね」
董白はそれが誰かすぐにわかった。
「クリスとか言ったわね」
「あいつはオロチ一族の中で火を司るんだ」
「青い炎を使ってたわね、確か」
「あの火は特別なんだよ。オロチの火だからな」
「だからこそなのね」
「火計を仕掛けられたらまずい」
草薙は真顔でこう話していく。

「船は離しておいた方がいいな」
「わかったわ。じゃあ離しておくわね」
孫策は草薙のその言葉も受け入れて述べた。
「危ないから」
「今の季節は空気が乾燥しています」
徐庶は空気のことも話した。この場の。
「ですから火計を仕掛けられたらそれこそ」
「ひとたまりもないわね」
孫権も眉を顰めさせて言う。
「特に風が起こったら」
「風はね。今の時期北西から南東に吹くけれどね」
孫策は風についてはこう話した。
「だからこっちから敵に流れていくけれど」
「それでも用心は必要かと」
「ええ、わかってるわ」
孫策は真剣な面持ちで次妹の話に頷く。こうしてだった。

# 第百十八話　程?、猫を愛でるのことその三

陣、とりわけ船団が再び整えられだ。火計に用心したものにされていく。その中でだ。

程?は周泰と共に陣中を見回りながらだ。こんなことを話していた。

「この子はですね」

「その頭のですね」

「はい、私の友達なんです」

あくまでこう主張するのだった。

「凛ちゃんと同じく私と共にいてくれる」

「そうした方なんですか」

「そうなんです」

こう言ってだ。己の頭上のその人形を見上げる。

「時々知恵も授けてくれます」

「っていうかよ」

程?はここで腹話術を使った。人形が話す様に見せる。

「俺がいつもこいつの策考えてるからな」

「それは言い過ぎです」

彼女自身の声も出す。

「私も考えてますから」

「どれ位だ?」

「半分位です」

そうだとやり取りをするのだった。

「努力もしていますよ」

「だったらいいんだけれどな」

「ううん、何か凄いですね」

純粋な周泰は程?のその悪戯を信じていた。そうしてだ。

その純粋な笑顔でだ。こう言ったのである。

「私も何かそうしてですね」
「御友達をですか？」
「はい、欲しいです」
そうだというのである。
「是非共」
「これは特別な友達でして」
まだ言う程？だった。
「そう簡単にはできません」
「お友達だからですか」
「そうですね。友達はできない時は中々できません」
「はい。縁のものですしね」
「縁はこの世で最も難しいものの一つです」
程？は真面目な顔で話す。
「どうなっているか非常にわかりにくいです」
「縁はですか」
「もっと言えば人間ですね」
「そうです。人間です」
「人間はわかりにくい」
「それも非常にです」
そうしたものだというのだ。
「そして戦もです」
「人と人のですね」
「はい、だからこそ難しいのです」
「あれですか。人を攻めるという」
「孫子ですね。城を攻めることは誰にもできます」
それは容易だというのだ。まだ。
「ですが人を攻めることはです」
「難しいと」
「今回もです。私達も彼等も互いに陣地を攻めているものではありません」

「お互いに人を」
「若し相手が陣を攻めれば」
そうなればどうかというのだ。
「そこに付け込むことができます」
「陣をですか」
「そこで人を攻めればいいのです」
程?は感情の乏しい口調で淡々と話していく。
「そうすればこの戦いは勝てます」
「それなら私達も」
「陣を攻めてはいけません」
逆に言えばだ。彼女達もそうだというのだ。
「人を攻めるのです」
「そうして勝利を収める」
「はい、そうあるべきです」
これが程?の考えだった。周泰に話していくのだった。その彼等のところにだ。
ヘビィ=D、ラッキー、ブライアンのアメリカチームが前から来た。ラッキーが陽気に手を振ってだ。二人に対してこう言ったのである。
「よお、見回りかい?」
「はい、そうです」
その通りだとだ。周泰がにこりと笑って答える。
「火計への備えはどうなっているか」
「今のところ万全です」
程?は微笑んでラッキー達に話した。
「水もあちこちにありますし」
「火には水だからな」
このことはブライアンが言う。

# 第百十八話　程？、猫を愛でるのことその四

「備えておいて問題はないぜ」
「そうですね。水があれば火は簡単に消せます」
程？はブライアンにも話す。
「蒼月さんもおられますし」
「水を使える方がおられるのも心強いです」
周泰はにこりと笑って話した。
「対策は万全になりそうです」
「その時間ができたことが大きいです」
また言う程？だった。
「備えをする時間ができました」
「そうだな。備えができたことが大きいよな」
ヘビィ＝Ｄも笑って話す。
「お陰で連中の計略にも対応できるよな」
「火が一番怖いですからね」
周泰がまた話す。
「それを防げる時ができました」
「それでも油断は禁物だけれどな」
今言ったのはラッキーだった。
「あの連中はどんなことでもしてくるからな」
「ですがいよいよ痺れを切らしてきます」
程？はそう読んでいた。
「私達は彼等の策を常に跳ね返してしかも今仕掛けることはできなくなりましたから」
「気付いていないうちに焦るな」
ブライアンは冷静に見て述べた。
「アメフトでもそうだ。痺れを切らして仕掛けてきたらな」
「そこが狙い目ですね」

「焦りってのは冷静なプレイをさせないんだよ」
フットボーラーとしてだ。彼は話す。
「それを敵に見抜かれたら終わりなんだよ」
「そうですね。彼等は冷静でいるつもりですが内心焦りだしています」
程？はまた言う。
「おそらく立て直したならすぐに来ます」
「そこを衝くか」
「はい、逆にやり返すべきです」
ヘビィ＝Dにも話す。
「そうしていくべきです」
「わかったぜ。じゃあ俺達はクールにいこうな」
ラッキーは陽気に述べた。
「美味いものでも食ってな」
「煮豆ですね」
周泰はラッキーの好物を知っていた。
「それを召し上がられてですね」
「ああ。豆は身体にいいしな」
ラッキーも周泰のその話に乗る。
「食うか。またな」
「はい。ではお昼に煮豆を作りますので」
「マッシュポテトもですよ」
程？は微笑んでブライアンの好物を出した。
「食べましょうね」
「ミルクもあるよな」
ヘビィ＝Dはそれだった。
「まあ毎日骨太はないにしてもな」
「濃い牛乳はありますよ」
周泰はそれはあると話す。
「この前顔にかかって大変なことになりました」

「牛乳は後で匂うことが困ります」
程？も目を困らせて話す。
「何というか独特の匂いですから」
「まあそれはな」
「かからないようにしてな」
アメリカチームの面々は牛乳についてはこう話す。
「そうすればいいからな」
「用心ってことでな」
「そうですね。お乳を飲むことは」
周泰はこのこと自体について言及した。
「我が国にはなかったですし」
「だよな。チャイナにはないよな」
「色々食うのに乳製品はないよな」
「昔からな」
「匈奴達は飲みますけれど」
だがそれでもだった。そうした乳の系統は。
「飲むこともないですし食べません」
「酪や醍醐ですが」
程？もその乳製品について話す。
「あれは本当に変わった料理ですし」
「珍味になります」
「ですから我が国では乳製品は一般的な食べ物ではありません」
「珍味の中の珍味です」
「けれど俺達がこっちに来てからな」
「皆飲み食いするようになったよな」
「俺達もそうしてるしな」
アメリカチームはこう話す。
「これもやっぱりあれか」
「異文化交流か？」
「そうなるのか？」

「そうですね。そうなると思います」
実際にそうだと答える程？だった。

# 第百十八話　程?、猫を愛でるのことその五

「世界は違うにしても」
「どうだい?実際に牛や山羊の乳は美味いだろ」
「そういうのはな」
「馬のお乳もいいですよね」
周泰はそちらに言及する。
「流石に人のものとはいきませんけれど」
「十八歳以上は駄目になりますから」
「けれどお乳を飲むのも」
「いいと思います」
それはいいとだ。周泰は言った。
「身体にいいですから」
「まあ身体にいいのは色々さ」
ヘビィ＝Dは笑って述べる。
「だから牛乳もな」
「はい、それでは」
「飲みましょう」
周泰だけでなく程?も応えてだった。
そのうえでだ。彼等は昼食に入った。その煮豆にマッシュポテト、それと牛乳だ。そうしたものを食べながらだ。程?が言った。
「それでなんですが」
「どうしたんだ?」
「はい、見て下さい」
見るとだ。彼等の周りにだ。
猫達が来ていた。その猫達を見てだ。程?は目を細めさせていた。
そのうえでだ。ヘビィ＝D達に言うのである。
「この子達にも食べものをあげましょう」
「はい、それではですね」

周泰が満面の笑顔で応えてだ。すぐに何処からか煮干を出してきた。
そのうえで皿の上にそれを置いてだ。猫達に差し出して言う。
「はい、どうぞ」
「周泰さんもなのですね」
程?は目を細めさせたまま周泰に言う。
「猫ちゃん達が」
「はい、猫様大好きです」
何と様付けだった。
「こんな可愛い生き物ないですよね」
「猫は神様です」
程?もここまで言う。
「いてくれるとそれだけで」
「違いますよね」
「心が和みます」
実際に目尻を思いきり垂らしてだ。程?は言う。
「まさに神様です」
「猫様が一杯になれば」
周泰は猫達に煮干をやりながらさらに言う。
「天下泰平になります」
「その通りです」
これが二人の意見だった。そしてだ。
ヘビィ=Dも皿を幾つか出して来てそれぞれにだ。ミルクを出した。しかしそれは。
「ああ、牛乳じゃないな」
「違うやつだな」
「猫用のミルクだ」
こうラッキーとブライアンに答える。
「それだよ」
「猫には人間用のミルクは駄目だからな」

「牛乳とかはな」
「猫は繊細なんだよ」
ヘビィ＝Dはこのことを強く言う。
「だからな。こうしてな」
「ちゃんと猫用のミルクを飲ませる」
「そうするんだな」
「実際に今もそうしてるしな」
ヘビィ＝Dはまた言った。
「俺の猫にもな」
「あっ、そういえばヘビィ＝Dさんって」
「可愛い猫ちゃんを飼ってますね」
「ああ、こっちの世界に来た時に一緒だったんだ」
そうだったとだ。彼は周泰と程?にも話す。
「これも何かの縁だな」
「あの猫様ってそうだったんですね」
「ヘビィ＝Dさんの守護猫だったのですか」
「ははは、そうだな」
程?の守護猫という言葉にだ。彼は笑って返した。
「あいつがいないとな。俺は寂しくてやっていけないからな」
「それが猫ちゃんです」
また言う程?だった。

# 第百十八話　程？、猫を愛でるのことその六

「いればそれだけで人を幸せにしてくれます」
「まあ確かに猫はいいけれどな」
「それは確かだな」
ラッキーもブライアンもそのことは認めた。猫の偉大さを。
だがそれでもだとだ。二人は言うのだった。
「しかし。ちょっとな」
「猫好きが過ぎないか？」
「そうでしょうか」
周泰は二人のその話にきょとんとした顔で返した。
「私は別に」
「思いませんけれど」
周泰だけでなく程？も言う。
「猫様はもう神様なんですよ」
「神様を崇めるのに過ぎるということはないです」
「御前等ももっと猫を可愛がるんだな」
ヘビィ＝Ｄは明らかに普段の彼ではなかった。
「そうすれば幸せになれるからな」
「まあ。猫好きがそうならいいけれどな」
「俺達は何も言わないさ」
二人はそこまで無粋ではなかった。しかしだ。彼等はこの男の名前を出したのだった。
「けれどガルフォードとかな」
「あいつは完全に犬派だからな」
「犬は犬でいいさ」
ヘビィ＝Ｄにしても犬派を否定したりはしなかった。
「賢いしやっぱり愛嬌があるしな」
「俺はどちらかというと犬か？」

ブライアンは考える顔になり述べた。
「犬は人間の友達だからな」
「俺はどっちとも言えないか」
ラッキーはどちらでもなかった。
「まあどっちも嫌いじゃないけれどな」
「狂死郎さんにアンディさんは犬が苦手でしたね」
ふとだ。程？は彼等のことを思い出した。
「残念なことに」
「あの連中はちょっとな」
ラッキーも彼等については少し苦笑いになって話す。
「色々さ。人間もな」
「ワンちゃんに噛まれたことがあるんでしょうか」
周泰は二人の犬嫌いはそこに原因があるのではないかと考える。
「けれどそれは」
「ああ、猫だってな」
ヘビィ＝Dは何処からか出した猫じゃらしで猫達と遊びながら言った。
「噛んだりするけれどな」
「そうですよね。けれどそれは」
「愛嬌です」
猫派二人娘にとってはそれすらもだった。
「噛んだり引っ掻いたりするのも」
「猫神様の御愛嬌です」
「ああ、全くだ」
そしてだ。ヘビィ＝Dも同じ考えだった。
「猫の全てを愛する。それが猫好きってやつだ」
「漢だねえ」
「全くだ」
ラッキーとブライアンはそんなリーダーの器を認め賞賛の言葉を出した。

「だから俺達もリーダーに選んだんだがな」
「そうした奴だからな」
「俺は特に器の大きい男じゃないさ」
ヘビィ＝Ｄはそのことは否定した。
「ただの猫好きだ」
「自分で大器とか言う奴は小者に決まってるさ」
「自分で言うものじゃない」
「そういうところが御前の器なんだよ」
「強さだけじゃなくて人間のな」
「だといいがな」
ヘビィ＝Ｄは二人の言葉に少し照れ臭そうに笑った。
「本当にな」
「さあ、どんどんです」
「食べて飲んで下さい」
周泰と程?は猫達にさらに煮干とミルクを出す。そうしてだ。
猫達を愛でていた。陣中にはそんな和やかさもあった。
その中でだ。ナコルルもだ。陣の中でだ。
多くの動物達に囲まれてだ。孫尚香と談笑していた。

# 第百十八話　程？、猫を愛でるのことその七

「やっぱりいいですよね」
「動物ってね」
「純粋でありのままで」
「飾らないのがいいのよ」
そしてだ。孫尚香はこんなことも言った。
「シャオってあれなのよ」
「あれとは？」
「結構他の世界じゃ色々あるからね」
「色々ですか」
「純粋って訳にはいかないのよ」
何故かこんなことをだ。ナコルルに話したのである。
「ちょっとね」
「そうなんですか」
「これでも色々と他の世界と縁があるのよ」
「ああ、中身がですね」
ナコルルもここで彼女の事情がわかった。
「そういうことですね」
「言えない様なこともあったし」
「ですよね。こうした世界は」
「そうそう。それは皆もだけれど」
だがその中でだ。孫尚香は。
「特にうちってそういう娘多いからね」
「確か孫権さんも呂蒙さんも」
ナコルルはとりわけ呂蒙について言う。
「呂蒙さんのお名前って幾つあるんですか？」
「五十近いんじゃないの？」
孫尚香は考える顔になりだ。両手の指を使って数えはじめた。そ

して言った数字は。
「四十七？もっとある？」
「物凄く多いですよね」
「あの娘自身覚えきれてないかも」
「ですよね。多過ぎて」
「あと実は袁術のところの張勲も名前多いし」
呂蒙だけではなかった。名前が多いのは。
「シャオは名前自体は少ないけれどね」
「関わっている世界がですね」
「多いのよね」
「あっ、後は」
ナコルルはさらに気付いたことがあった。孫策陣営のことで。
「甘寧さんも黄蓋さんも」
「多いでしょ。凄く」
「はい。ああした世界の常連さんですよね」
「そうよ。姉様達もそうだし」
「内緒ですけれどね。一応」
「シャオだって表と裏はそれぞれ違う人ってことになってるから」
誰もがわかっていてもだ。そうだというのである。
「難しい話よね」
「秘密にしないといけないことですから」
「というか違うってことになってる話だから」
「その辺りは」
「そういうことでね。まあ話を戻して」
「はい」
ここでだ。やっとだった。動物の話に戻った。
孫尚香は自分が乗っている白虎を見てだ。言うのだった。
「この子とはずっと一緒にいるけれどね」
「賢い虎ですね」
「そうよ。全然怖くないのよ」

孫尚香にとってはである。
「けれど皆びっくりするのを。最初に見たら」
「わかります。私もですから」
「ナコルルもなのね」
「この子達はどうしても」
見ればナコルルの周りには犬や猫や狐達だけでなくだ。狼や豹、熊までいる。鷲やそうした猛禽類まで彼女の周りに集まっている。
その彼等の頭を撫でながらだ。ナコルルは寂しそうに言うのである。
「怖がらせてしまいます」
「猛獣だからね」
「心が通い合えば」
それならばだった。
「違うのですが」
「けれどね。そういうのってね」
「できにくいものみたいですね」
「人も生き物で」
「自然の中にあります」
「それがわからないのね」
孫尚香はそのことには悲しい顔を見せる。

# 第百十八話　程？、猫を愛でるのことその八

「だから。それで」
「生き物達ともこうしてできないのですね」
「シャオこの子達のことわかるわ」
孫尚香はだった。
「それでナコルルもね」
「はい。ただ」
「それでもよね」
「オロチとは違います」
彼女達とオロチは違う。このことはだった。
「彼等は自然は自然でも」
「荒ぶる自然？何か違う？」
「自然の中にある独善、そしてエゴです」
「そうした感じよね」
「自然といっても常にいいものではなく」
「邪なのもあるよね」
「ですからオロチにはです」
どうかというのだ。そのオロチは。
「邪なものが感じられるのです」
「独善故になのね」
「そう思います」
「そうね。前から妙に思ってたのよ」
孫尚香は腕を組み眉を顰めさせながら述べる。
「オロチって自然の一部にしてもね」
「純粋なものはありませんね」
「連中からは邪悪なものを感じてたのよ」
「ですかああして常世や司馬尉仲達といった面々とも手を組む」
「そうしてるのね」

そのことをだ。彼女達は今わかったのである。
「そういうことなのね」
「はい、自然の中に存在している邪なものです」
「それがオロチなのね」
「言うならば災害です」
ナコルルはオロチはそれだと指摘した。
「彼等はそうした存在です」
「少なくとも人間どころかこの子達も」
孫尚香はまた動物達を見ながら言う。
「巻き添えにしてもね」
「何とも思わないですね」
「連中は自然を護るとか考えてないわよね」
「何もかもを壊してしまうつもりです」
「完璧に邪神じゃない」
孫尚香も言い切る。
「それじゃあね」
「はい、彼等はです」
「そうした存在だと考えて戦うべきね」
「若し彼等が勝てば」
どうなるのかもだ。ナコルルは言う。
「この世界の全てがです」
「破滅するわね」
「人間だけでなく」
ナコルルもだ。他の生き物達を見て話す。
「この子達もまた」
「皆殺されちゃうわね」
「全ての命が」
「そうなっちゃうわね」
「ですから」
「っていうかね。何なのかしらね」

孫尚香は不機嫌そのものの顔になってだ。そうしてだった。
「ああした。自分達だけが正しいっていうのは」
「間違っています」
「それが独善なのね」
このことをだ。孫尚香も悟った。
「自分達だけを正しいとして」
「他の考えを否定しますから」
「それでね。ああしてね」
「はい、全てを破壊しようとしています」
「そうしたら自然も何もないじゃない」
孫尚香は言う。
「全部破壊されちゃうんだから」
「ですから」
「そうね。それにしても」
孫尚香はそのだ。ナコルルの周りの生物達も見た。

# 第百十八話　程？、猫を愛でるのことその九

そうしてだ。こう言うのだった。
「どの子も可愛いわね」
「はい、そうですね」
「この子達の為にもね」
「勝ちましょう」
「それとナコルルは何が好きなの？」
屈託のない笑みになってだ。ナコルルに問うた。
「食べものは」
「食べものですか」
「シャオはお肉が好きだけれど」
「はい、私もお肉は好きです」
「あっ、そうなの」
「他には鮭や山菜も」
そうしたものが好きだというのだ。
「塩等で簡単に味付けしたものが」
「それがなのね」
「アイヌ料理です」
それがナコルルの好きな食べものだというのだ。
「美味しいですよ」
「何か簡単だけれど素材を活かした？」
「はい、それがアイヌ料理です」
「和食はお醤油で」
孫尚香はあちらの世界の面々の話から考えていって話す。
「それでアメリカはケチャップとかマスタードよね」
「中華は色々ですよね」
「我が国は色々なの食べるからね」
それで色々だった。

「まあ色々あるわよね」
「フランスはチーズでメキシコはタコスで」
「で、アイヌ料理はそれだけなのね」
「はい、お塩や動物の脂だけで」
「素材勝負なのね」
「匂いがきついかも知れませんが」
「ああ、匂いはいいわ」
それは特にだというのだ。
「そんなのはね」
「いいんですか？」
「匂いは味が美味しいとそれでいい匂いになるから」
だからいいというのだ。
「そういうものだからね」
「そうですか」
「そうよ。じゃあ今度御馳走してくれるかしら」
「はい、河魚等でいいでしょうか」
「いいわよ。シャオ河魚も大好きだから」
「何か色々なのがお好きなんですね」
「嫌いな食べものはないのよ」
こう笑ってナコルルに話す。
「だからね」
「それでなんですか」
「楽しみにしてるわね」
「はい、では今度」
こうした話をする二人だった。陣中は今のところ平穏だった。
しかしだ。そんな中でもだ。華陀は。何故か曹操に追いかけられていた。
曹操の手には鎌がある。それで彼を斬らんとだ。追っているのだ。
「待ちなさい！」
「待て、俺が何かしたのか！」

「何で私の秘密を知ってるのよ！」
「便秘のことか。まだ治ってなかったんだな」
「何でそのことを知ってるのよ！」
「顔を見ればわかる」
それでだとだ。名医として見抜いたというのだ。
「そんなことはだ！」
「えっ、顔で」
「その顔色の悪さ、間違いない」
便秘だというのだ。
「だからだ。是非共後ろの穴からぶすりとだ」
「そんなの出来る筈ないでしょ？」
余計に怒る曹操だった。そう言われて。
「私は攻め専門よ。しかも後ろの穴なんて！」
「何だ？夜の秘めごとか？」
そうしたことに気付かない華陀はまた言ってしまった。

# 第百十八話　程?、猫を愛でるのことその十

「最近毎日だな」
「それもわかるっていうの!?」
「腰の動きでわかる」
今度はそれでわかるというのだ。
「それからだ」
「くっ、何でもお見通しだというのだ」
「だからだ。動きでわかるんだ」
華陀は逃げながら言う。
「そういうことは」
「それならよ」
「今度は何だ」
「凛もそうだっていうの?」
「凛?ああ、郭嘉殿のことか」
「あまりにも美羽と仲がいいから」
確かに曹操公認でもだ。それでもだというのだ。
二人はもう立ち止まってだ。それで話をしちえた。
「まさかと思うけれど」
「安心しろ。接吻はあったな」
「ええ、美羽の頬にね」
郭嘉がした。このことはもう誰でも知っている。
「けれどそれでなの」
「止まっているな。郭嘉殿の腰の動きはいつも変わらない」
「だといいけれど」
「美羽殿もだ。あの二人は意外と奥手みたいだな」
「美羽はまだ子供だしね」
何だかんだでそうなのだ。袁術もまだ幼いのだ。
「それじゃあなの」

「そうだ。それにしても曹操殿」
「何よ」
「貴殿の病気は何とかなるぞ」
この話に戻った。そうして言う華陀だった。
「確かに後ろからは効果があるがな」
「若しそんなことしてみなさい」
曹操の目が真っ赤になり身体を殺意の波動が覆う。
「貴方、首ないわよ」
「おいおい、本気なんだな」
「完全に本気よ」
こう言うのだった。
「若し言ったら」
「だがもう夏侯惇殿や夏侯淵殿は」
「もっと言えば麗羽も知ってるわよ」
幼馴染みの面々はだというのだ。
「ちゃんとね。けれどね」
「それでもなのか」
「他言無用よ。けれどよ」
「わかっている。患者のことは話さない」
それは確かに答える華陀だった。いつものきりっとした顔に戻ってもいる。
「安心してくれ」
「わかったわ。それにしてもよ」
「治るかどうかだな」
「それは本当なのね」
「画期的な方法が見つかった」
「画期的!?」
「それを実践してみよう」
華陀のその話を聞いてだ。曹操は怪訝な顔になりだ。
こうだ。彼に対して尋ねたのだった。

「お腹切るとか？」
「それとはまた違う」
華陀はそのことも否定した。
「刃の類は一切使わない」
「お尻にもよね」
「そうだ。まあ口からだからな」
「とりあえずお願いするわ」
曹操にしても何とかしたかった。そうしてだった。
曹操は華陀の治療を受けることになった。それはこの国にはなかったものを使ったものだった。

第百十八話　　完

２０１１・１０・１６

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4863p/

恋姫伝説　ＭＡＲＫ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＦＬＯＷＥＲＳ

2011年11月30日01時46分発行